

一 唱法華題目抄

文応元年五月 三十九歳御作

於鎌倉名越

有る人予に問うて云く世間の道俗させる法華經の文義を弁へず
とも一部一卷・四要品自我偈一句等を受持し或は自らもよみかき
若しは人をしてもよみかかせ或は我とよみかかざれども經に向い
奉り合掌礼拝をなし香華を供養

し、或は上の如く行ずる事なき人も他の行ずるを見てわづかに
随喜の心ををこし國中に此の經の弘まれる事を

悦ばん、是体の僅かの事によりて世間の罪にも引かれず彼の功德に
引かれて小乗の初果の聖人の度度人天に生れ

て而も悪道に堕ちざるがごとく常に人天の生をうけ終に法華經を
心得るものと成つて十方浄土にも往生し又此の

おい そくしんじょうぶつ

土に於ても即身成仏する事有るべきや委細に之を聞かん、答えて

云くさせる文義を弁えたる身にはあらざれども

ほけきよう ねはんぎよう てんだい みようらくく しゃく

法華経・涅槃経並に天台・妙楽の釈の心をもて推し量るにかりそめ

にも法華経を信じて聊も謗を生ぜざらん人は余の悪にひかれて

悪道に墮つべしとはおぼえず、但し悪知識と申してわづかに権教を

知れる人・智者の由をして法華経

を我等が機に叶い難き由を和げ申さんを誠と思いて法華経を随喜

せし心を打ち捨て余教へうつりはてて一生さ

て法華経へ帰り入らざらん人は悪道に墮つべき事も有りなん、仰せ

に付いて疑はしき事侍り実にてや侍るらん法華経

に説かれて候とて智者の語らせ給いしは昔三千塵点劫の当初

大通智勝仏と申す仏います其の仏の凡夫にて

いましける時十六人の王子をはします、彼の父の王仏にならせ給ひ

おほい

あき

て一代いちだい聖教しやうきやうを説き給たまいいき十六人の王子おうじも亦また
出家しゅっけして其その仏ぶつの御弟子おんでしとならせ給たまいいけり、大通智勝だいつうちしやうぶつ・法華ほけきやう經きやうを
説とき畢おわらせ給たまいいて定じやうに入いらせ給たまいいしかば十六人
の王子おうじの沙弥しやみ其その前まへにしてかはるがはる法華ほけきやう經きやうを講こうじ給たまいいけり、
其その所説しよせつを聴聞ちやうもんせし人ひと・幾千いくせん万まんといふ事ことをしらず
当座とうざに悟さとをえし人は不退ふたいの位ゐに入りいにき、又法華ほけきやう經きやうをおろかに
心得こころうる結縁けちえんの衆しゆもあり其その人人ひとびと・当座とうざ中間ちゆうげんに不退ふたいの

位に入らずして三千塵点劫をへたり、其の間又つづぶさに六道・四生に
 輪廻し今日・釈迦如来の法華経を説き給うに不退の位に入る所謂・
 舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり猶猶信心薄き者は当ても覺らず
 して未来無数劫を経べきか知らず我等も大通智勝仏の十六人の
 結縁の衆にもあるらん此の結縁の衆をば天台・妙楽は名字觀行
 の位にかなひたる人なりと定め給へり名字觀行の位は一念三千の
 義理を弁へ十法成乗の觀を擬し能義理を弁えたる人なり
 一念隨喜・五十展転と申すも天台・妙楽の釈のごときは皆觀行
 五品の初隨喜の位と定め給へり博地の凡夫の事にはあらず然るに
 我等は末代の一字・一句等の結縁の衆一分の義理をも知らざらん
 は豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや是れ偏えに理深解微の故に
 教は至つて深く機は実に浅きがいたす処なり只弥陀の名号を唱え
 て順次生に西方極樂世界に往生し西方極樂世界に永く不退の

無生忍を得て阿弥陀如来・観音・勢至等の法華經を説き給わん時間
いて悟を

得んには如かじ然るに弥陀の本願は有智・無智・善人・悪人・持戒・

破戒等をも扱はず只一念唱うれば臨終に必ず弥陀如来・本願の故

に来迎し給ふ是を以て思うに此の土にして法華經の結縁を捨て浄土

に往生せんとをもふは億千世界の慶点を経ずして疾法華經を悟

るがためなり法華經の根機にあたはざる人の此の穢土にて法華經

にいとまをいれて一向に念仏を申さざるは法華經の証は取り難く

極樂の業は定まらず中間になりて中中法華經をおろそかに

する人にてやおはしますらんと申し侍るは如何に、其の上只今承り

候へば僅に法華經の結縁計ならば三惡道に墮ちざる計にてこそ候へ

六道の生死を出るにはあらず、念仏の法門はなにと義理を知らざ

れども弥陀の名号を唱え奉れば浄土に往生する由を申すは遙か

に法華經ほけきょうよりも弥陀みだの名号なごうはいみじくこそ聞え侍はべれ、答えて云いわく誠まことに仰おほせめでたき上智者ちしゃの御物語おんものがたりにも侍はべるなればさこそと存ぞうじ侯うへども但ただし若もし御物語おんものがたりのごとく侍はべらばすこし不審ふしんなる事侍はべり、大通だいつう結縁けちえんの者をあらあらうちあてがい申まをすには名字ななづか觀行くわんぎょうの者とは釈しゃくせられて侍はべれども正ただしく名字ななづか即すなはちの位の者と定められ侍はべる上退大取たいだいしゅじょう小せうの者として法華經ほけきょうをすてて權教ごんぎょうにうつり後のちには惡道あくだうに墮おちたりと見えたる上正まさしく

法華經を誹謗して之を捨てし者なり、設え義理を知るようなる者
なりとも謗法の人にあらん上は三千塵点無量塵点も経べく侍るか、
五十展転一念隨喜の人人を觀行初隨喜の位の者と釈せられたるは
未代の我等が隨喜等は彼の隨喜の中には入る可からずと仰せ侯か、
是を天台・妙樂・初隨喜の位と釈せられたりと申さるるほどにては
又名字即と釈せられて侍る釈はすてらるべきか、所詮仰せの御義を
委く案ずればをそれにては侯へども謗法の一分にやあらん
ずらん其の故は法華經を我等未代の機に叶い難き由を仰せ侯は
未代の一切衆生は穢土にして法華經を行じて詮無き事なりと仰せ
らるるにや、若しさやうに侍らば未代の一切衆生の中に此の御詞
を聞きて既に法華經を信ずる者も打ち捨て未だ行ぜざる者も行ぜ
んと思ふべからず隨喜の心も留め侍らば謗法の分にやあるべかるら
ん、若し

ほうぼう 謗法の者に一切衆生なるならば、いかに念仏を申させ給うとも御
おうじょう 往生は不定にこそ侍らんずらめ又弥陀の名号を唱へ極樂世界に
おうじょう 往生をとぐべきよしを仰せられ侍るは何なる経論を証拠として此
の心はつき給いけるやらん正くつよき証文侯か若しなくば其の義
たのもしからず、前に申し候いつるがごとく法華経を信じ侍るはさ
せる解なけれども三悪道には墮すべからず侯六道を出る事は一分
のさとりなからん人は有り難く侍るか、但し悪知識に値つて
ほげきようずいき 法華経隨喜の心を云いやぶられて侯はんは力及ばざるか又仰せに
付いて驚き覺え侍り其の故は法華経は末代の凡夫の機に叶い難き
よし ちしゃもう 由を智者申されしかばさかと思ひ侍る処に只今の仰せの如くなら
ば弥陀の名号を唱うとも法華経をいゐうとむるとがによりて往生
をも遂げざる上悪道に墮つべきよし承る はゆゆしき大事にこそ
はべ 侍れ、抑 大通結縁の者は謗法の故に六道に回るも又名字即の

浅位せんいの者ものなり又一いち念ねん随喜ずいき五十展じゅうご転てんの者ものも又また名字みょうじ觀行くわんぎょう即すくの位ゐと申まをす
釈しやくは何いすれの処ところに候そうらうやらん委くわし承たまわり候そうらはばや、又また義理ぎりをも知しらざる者もの
僅わずかに法華經ほけきょうを信はじ侍べるが惡智識あくちしきの教きょうによて法華經ほけきょうを捨すてて權教こんきょうに
移うつるより外ほかの世間せけんの惡業あくごうに引ひかれては惡道あくどうに墮おつべからざる由よし申まをさ
るるは証拠しょうこあるか、又また無智むちの者ものの念仏ねんぶつ申まをして往生おうじょうすると何いかに見みえ
てあるやらんと申まをし給たまうこそよに事ことあたらしく侍はれ、雙觀經そうくわんきょう等の
浄土じょうどの

さんぶぎょう ぜんどう わじょう

三部経・善導和尚等の経釈に明かに見えて侍らん上はなにとか疑

い給うべき、答えて曰く大通結縁

たいだいしゆしよつ ほうぼう みようじそく

の者を退大取小の謗法・名字即の者と申すは私の義にあらず

てんだいだいし もんく

天台大師の文句第三の巻に云く「法を聞いて未だ度せず而して世世

あ しよもんじ いわ

に相い値うて今に声聞地に住する者有り即ち彼の時の結縁の衆な

しやく たまい はべ みようちくだいし じよき すなわ

り」と釈し給いて侍るを、妙楽大師の疏記第三に重ねて此の釈の心

たまい いわ ほん とも けちえん

を述べ給いて云く「但全く未だ品に入らず、俱に結縁と名づくるが

ゆえ だいづつ けちえん

故に「文・文の心は大通結縁の者は名字即の者となり、又天台大師の

げんぎ だいづつ けちえん しゃく けちえん

玄義の第六に大通結縁の者を釈して云く「若しは信若しは謗因つて

いわ も けちえん

倒れ因つて起く喜根を謗すと雖も後要らず度を得るが如し「文・文

いづつ けちえん さいぜんじんてん ほうぼう

の心は大通結縁の者の三千塵点を経るは謗法の者なり例せば勝意

びく きこん ぼさつ ほう けちえん

比丘が喜根菩薩を謗せしが如しと釈す五十展転の人は五品の初め

の初随喜の位と申す釈もあり、

しよずいき

又初しよ隨喜ずいきの位の先みよの名字うじそく即と申す積もあり疏記じよき第十じゆに云いく「初はつめに法ほう会えにして聞きく是これ初しよ品ほんなるべし第五ご十人じゆ人は必かならず隨喜ずいきの位の初はつめに在ある人ひとなり「文ぶん・文ぶんの心こころは初しよ会え聞もん法ぼうの人ひとは必かならず初しよ隨喜ずいきの位の内うち第五ご十人じゆ人は初しよ隨喜ずいきの位の先みよの名字うじそく即と申す積もなり。

其その上うへ五種ごしゆほっし法師ぼうしにも受持じゆじ・読よみ・誦じゆ・書写しよしやの四人にじりは自行じぎやうの人ひと・大經だいぎやう

九人くの先まへの四人にじりは解げ無なき者ものなり解げ説せつは化け他た後ごの五人ご人は解あ有ある人と

証たまたし給たまへり、疏記じよき第十じゆに五種ごしゆほっし法師ぼうしを積しやくするには「或あるは全ぜんく未いまだ品しんに

入いらず「又また云いく「一向いっこう未いまだ凡位ぼんいに入いらず「文ぶん・文ぶんの心こころは五種ごしゆほっし法師ぼうしは

観行かんぎやう五品ごほんと積しやくすれども又また五品ごほん已前いぜんの名字みよ即との位ゐとも積しやくするなり、

此等これらの積しやくの

如ごとくんば義理ぎりを知らざる名字みよ即との凡夫ぼんぶが隨喜ずいき等の功徳くどくも經文きやうもんの

一偈いちげ・一句いっく・一念いちねん隨喜ずいきの者もの五十展ごじゆ転てん等の内うちに入いるかと覺おぼえ候う、

何いかにに況いわんや此この經きやうを信しんぜざる謗法ぼうぼうの者ものの罪業つみごころみは譬喻ひゆぼん品しんに委くわくとかれ

たり持經者じきょうを謗ぼうずる罪つみは法師品ほうしほんにとかれたり、此の經を信しんずる者ものの功德くどくは分別功德品ぶんべつくどく隨喜功德品ずいきくどくに説せつけり謗法ぼうぼうと申まをすは違背いはいの義ぎなり隨喜ずいきと申まをすは

隨順ずいじゆんの義ぎなりさせる義理ぎりを知らざれども一念いちねんも貴たうとき由よし申まをすは違背いはい隨順ずいじゆんの中なかには何いすれれにか取とられ候まうべき、又末代まつだい無智むちの者もののわづかの供養くよう隨喜ずいきの功德くどくは經文きやうもんには載のせられざるか如何いかに、其その上天台てんだい・妙樂みょうりやくの積しやくの心こころは他たの人師にんしありて

法華經の乃至童子戲・一偈・一句五十展轉の者を爾前の諸經のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば謗法の者と定め給へり、然るに我が釈を作る時機を高く取りて末代造悪の凡夫を迷はし給わんは自語相違にあらずや故に妙樂大師五十展轉の人を釈して云く「恐らくは人謬りて解せる者初心の功德の大なる事を測らず而して功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行浅く功深き事を示して以て経力を顕わす」文・文の心は謬つて法華經を説かん人の此の経は利智精進・上根・上智の人のためといはん事を仏をそれて下根・下智・末代の無智の者のわづかに浅き隨喜の功德を四十余年の諸經の大人上聖の功德に勝れたる事を顕わさんとして五十展轉の隨喜は説かれたり、故に天台の釈には外道・小乗・權大乘までたくらべ来て法華經の最下の功德が勝れたる由を釈せり、所以に阿竭多仙人は十二年が間恒河の水を耳に留め耆兔仙人

は一日の中に大海の水をすいほす此くの如き得通の仙人は小乗
 阿含經の三賢の浅位の一通もなき凡夫には百千万倍劣れり、
 三明六通を得たりし小乗の舍利弗・目連等は華嚴・方等・般若等
 の諸大乘經の未断三惑の一通もなき一偈・一句の凡夫には
 百千万倍劣れり華嚴・方等・般若經を習い極めたる等覺の
 大菩薩は法華經を僅かに結縁をなせる未断三惑・無惡不造の末代
 の凡夫には百千万倍劣れる由釈の文顯然也、而るを当世の念仏宗
 等の人・我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は方等・般若の時
 の二乗のごとく自身をはずしめてあるべき処に敢えて其の義なし、
 あまつさへ世間の道俗の中に僅かに觀音品自我偈などを讀み適
 父母孝養な
 んどのために一日經等を書く事あればいゝさまたげて云く善導
 和尚は念仏に法華經をまじうるを雜行と申し百の時は希に一二を

得^{とく}千^{せん}の時^{とき}は希^{まれ}に三五^{さんご}を得^えん乃^な至^{いた}千^{せん}中^{ちゆう}無^む一^{いつ}と仰^{おほ}せられたり、
何^{いか}に況^{いわん}や智^ち慧^え第一^{だいいち}の法^{ほう}然^{ねん}上人^{しょうにん}は法^ほ華^け經^{きやう}等^{とう}を行^{おこな}ずる者^{もの}をば祖^そ父^ふの履^{くつ}
或^{ある}は群^{ぐん}賊^{ぞく}等^{とう}にたとへられたりなんどいゐうとめ侍^{はべ}るは是^{かく}くの如^{ごと}く
申^{もう}す師^しも弟子^{でし}も阿^あ鼻^びの焰^{ほのお}をや招^{まね}かんずらんと申^{もう}す。
問^{もん}うて云^{いわ}く何^{いか}なるすがた並^{なら}に語^{ことば}を以^{もつ}てか法^ほ華^け經^{きやう}を世^せ間^{けん}にいゐう
とむる者^{もの}には侍^{はべ}るやよにおそろしくこそおほ

え候へ、おんものがたり 答えて云く始めに智者の申され候と御物語候いつるこそ
ほけきょう 法華經をいゑうとむる悪知識の語にて侍れ、まつだい 末代に法華經を失う
べき べき者は心には一代いちだい 聖教を知りたりと思いて而も心にはごんじつ 権実二經
わきまえ を弁へず身には三衣一鉢を帶し・或は阿練若あれんにや に身をかくし・或は
せけん 世間の人にいみじき智者と思はれて而も法華經をよくよく知る
よし 由を人に知られなんとして世間の道俗どうぞく にはさんみょうろくつう 三明六通の阿羅漢の
ごと ごとく如く貴ばれて法華經を失うべしと見えて候。
いわ 問うて云く其の証拠如何、いわ 答えて云く法華經勸持品かんじほん に云く「諸の
むち 無智の人悪口罵詈およ 等し及び刀杖とうじょう を加うる者有らん我等皆われらみなまさ 當に忍ぶ
べし べし」文・妙樂大師・此の文の心を釈して云く「初めの一行は通じて
じゃにん 邪人を明す、すなわ 即ち俗衆ぞくしゆう なり」文・文の心は此の一行は在家の俗男・
ぞくじよ 俗女が權教の比丘等にかたははれて敵をすべしとなり、經に云く
あくせ 「悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲てんこく に未だ得ざるを為得たりと

おもがまん 謂い我慢の心充滿せん、文妙樂大師、此の文の心を釈して云く、「次
の一行は道門増上慢の者を明す、文の心は悪世末法の権教の
もろもろびく 諸の比丘我れ法を得たりと慢じて法華經を
行ずるものの敵となるべしといふ事なり、經に云く、「或は阿練若に
のうえ 納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤す
る者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説き世に恭敬せ
らるる事六通の羅漢の如くならん是の人悪心を懷き常に世俗の事
おも を念い名を阿練若に仮りて好んで我等が過を出さん而も是くの
こと 如き言を作さん此の諸の比丘等は利養を貪るを為つての故に外道
ろんぎと 論義を説き自ら此の經典を作りて世間の人を誑惑す名聞を
も 求むるを為つての故に分別して是の經を説くと、常に大衆の中に在
りて我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余
の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人外道の論議

を説くと謂わん「已上妙樂大師・此の文を釈して云く「三に七行は
僭聖増上慢の者を明す「文・經並に釈の心は悪世の中に多くの比丘
有つて身には三衣一鉢を帯し阿練若に居して行儀は大迦葉等の
三明六通の羅漢のごとく在家の諸人にあふがれて一言を吐けば
如来の金言のごとくをもはれて法華經を行ずる人をいゝやぶらん
がために国王・大臣等に向ひ奉つて此の人は

邪見じやくけんの者ものなり法門ほうもんは邪法じやくほうなりなんどいゐうとむるなり。

上かみの三人さんにんの中に第一だいいちの俗衆ぞくしゆうの毀そしりよりも第二にの邪智じやくちの比丘びくの毀そしり

は猶なほしのびがたし又第二にの比丘びくよりも第三にの大衣あれんにやの阿練若あれんにやの僧そうは

甚はなはだし、此こゝの三人さんにんは当世とうせの權教こんきやうを手本てほんとする文字もんじの法師ほうし並ならに諸經しよきやう

論ろんの言語道斷ごんごどうだんの文ぶんを信あんぜんずる暗禪あんぜんの法師ほうし並ならに彼等かれらを信あんぜんずる在俗等ざいぞく

四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきやうと法華經ほけきやうとの權實こんじつの文義もんぎを弁わきまえへざる故ゆゑに、華嚴けごん

方等ほうとう・般若等はんんにやの心仏衆生しんじゆう・即心是仏そくしんぜぶつ・即往十方西方等そくおうじゅうほうの文ぶんと

法華經ほけきやうの諸法しよほう實相じつそう即往そくおう十方西方じゅうほうさいほうの文ぶんと語ことばの同じおなじきを以もつて義理ぎりの

かはれ

るを知らず・或あるは諸經しよきやうの言語道斷ごんごどうだん・心行所滅しんぎやうしよめつの文ぶんを見て一代いちだい

聖教しよきやうには如來にょらいの實事じつじをば宣のべべられざりけりなんどの邪念じやくねんをおこ

す、故ゆゑに惡鬼あくき此こゝの三人さんにんに入まつて末代まつだいの諸人しよにんを損しんじ国土こくどをも破やぶるなり

故ゆゑに經文きやうもんに云いく「濁劫惡世じやくこうあくせの中には多おほく諸もろの恐怖こふ有あらん惡鬼あくき其その

身に入つて我を罵詈し毀辱せん乃至仏の方便随宜所説の法を知らず「文文の心は濁悪世の時比丘我が信ずる所の教は仏の方便随宜の法門ともしらずして権実を弁へたる人出来すれば詈り破し

なんどすべし、是偏に悪鬼の身に入りたるをしらずと云うなり、されば末代の愚人の恐るべき事は刀杖・虎狼・十悪・五逆等よりも三衣一鉢を帯せる暗禅の比丘と並に権經の比丘を貴しと見て実經の人をにくまん俗侶等なり。

故に涅槃經二十二に云く「悪象等に於ては心に恐怖する事無かれ悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ何を以ての故に是悪象等は唯能く身を壞りて心を破ること能わず悪知識は二俱に壞るが故に乃至悪象の為に殺されては三趣に至らず悪友の為に殺されては必ず三趣に至らん」文 此文の心を章安大師宣べて云く「諸の悪象等は但是れ悪縁にして人に悪心を生ぜしむる事能わず悪知識は甘

談さん詐さ媚び巧こう言げん令れい色しよくもて人を牽ひいて悪なを作なさしむ悪なを作なすを以もつて
の故ゆえに人の善ぜん心しんを破やぶる之これを名なづけて殺なと為なす即すなわち地じ獄ごくに墮だす、
文ぶんの心こころは悪あく知識ちしきと申もうすは甘あまくかたらひ詐いつわり媚こび言ことばを巧たくみにして愚ぐ癡ち
の人の心こころを取とつて善ぜん心しんを破やぶるといふ事ことなり、総ねじて涅槃ねはん經ぎやうの心こころは
十じゆ悪うあく・五ご逆ぎやくの者ものよりも謗ほう法ぽう闡せん提だいのものをおそるべしと誠いましめたり
闡せん提だいの人と申もうすは法ほ華け經きやう・涅槃ねはん經ぎやうを云いうとむる者ものと見みえたり、
当とう世せの念ねん仏ぶつ者もの

等・法華經を知り極めたる由をいふに因縁譬喩をもて釈しよくよく知る由を人にしられて然して後には此の經のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ強き弓重き鎧かひなき人の用にたたざる由を申せば無智の道俗さもと思いて実には叶うまじきごんきよう權教に心移して僅かに法華經に結縁しぬるをもひるが翻えし又人の法華經を行ずるをもずいき隨喜せざる故にしていと師弟俱にほうぼう謗法の者となる。

之れに依つてほうぼう謗法の衆生・國中にじゅうまん充滿してたまたま適ぶつぼう仏事をいとなみ法華經をくよう供養しついぜん追善を修するにもねんぶつ念仏等を行ずるほうぼう謗法のじゃし邪師の僧まっだい末代の機にかな叶いがた難き由を示す、故にせしゆ施主もそ其の説を實と信じてあるとわ問訪るる過去かこの父母ふぼ夫婦兄弟等はきようだい彌いよいよ地獄じごくの苦を増こうし孝子はふこう不孝ほうぼう謗法の者となりちようもん聽聞の諸人はじゃほう邪法をずいき隨喜しあくま惡魔の眷屬となる、

日本國中の諸人はぶつぼう仏法を行ずるに似てぶつぼう仏法を行ぜずたまたま適・ぶつぼう仏法を

知る智者は国の人に捨てられ守護の善神は法味をなめざる故に
威光を失ひ利生を止此の国をすて他方に去り給い、悪鬼は便りを
得て国中に入り替り替り大地を動かし悪風を興し一天を悩し五穀を損
ず故に飢渴出来し人の五根には鬼神入つて精気を奪ふ是を疫病と
名く一切の諸人
善心無く多分は悪道に墮つることひとへに悪知識の教を信ずる故な
り、仁王経に云く「諸の悪比丘多く名利を求め国王・太子・王子の
前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして
此の語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず是れを破仏・破国
の因縁と為す」文、文の心は末法の諸の悪比丘国王・大臣の御前に
して国を
安穩ならしむる様にして終に国を損じ仏法を弘むる様にして還つて
仏法を失うべし、国王・大臣此の由を深く知し食さずして此の言を

信受しんじゆする故ゆゑに国を破り仏教を失うしなうと云いう文なり。此の時・日月度にちがつどを失うしなひ時節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は悪風あくふう吹き赤あかきにちがつい
日月出で望朔ぼうさくにあらずして日月蝕にちがつし或あるは二つ三つ等の日出來しゅつたいせん
大火たいか・大風たいふう・彗星すいせい等をこり飢饉ききん疫病等えきびょうあらんと見えたり、国を損あじ
人あくとを悪道あくどうにをとす者は悪知識あくちしきに過すぎたる事なきか。

問いうて云いく始めちしやに智者おんものがたりの御物語ちしやとて申もうしつるは所詮しよせん後世こうせいの事ことの
疑うわしき故ゆゑに善悪ぜんあくを申もうして承うけたまわらんとためなり、

彼の義等は恐ろしき事にあるにこそ侍るなれ一文不通の我等が
如くなる者はいかにしてか法華經に信をとり候べき又心ねをば何様
に思い定め侍らん、答えて云く此の身の申す事をも一定とおぼしめ
さるまじきにや其の故はかやうに申すも天魔・波旬・悪鬼等の身に
入つて人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん一切は
賢きが智者にて侍るにや。

問うて云く若しかやうに疑い候はば我身は愚者にて侍り万の智者
の御語をば疑いさて信ずる方も無くして空く一期過し侍るべきに
や、答えて云く仏の遺言に依法不依人と説かせ給いて候へば經の
如くに説かざるをば何にいみじき人なりとも御信用あるべからず
候か、又依了義經不依不了義經と説かれて候へば愚癡の身にして
一代聖教

の前後浅深を弁えざらん程は了義經に付かせ給い候へ了義經

ふりようぎきょう 不了義經も多く候阿含・小乘經は不了義經・華嚴・方等・般若・

じょうど 淨土の觀經等は了義經、又四十余年の諸經を法華經に對すれば

ふりようぎきょう 不了義經 法華經は了義經、涅槃經を法華經に對すれば法華經は

りようぎきょう 了義經 涅槃經は不了義經、大日經を法華經に對すれば大日經は

ふりようぎきょう 不了義經法華經は了義經なり、故に四十余年の諸經並に涅槃經を

打ち捨てさせ給いて法華經を師匠と御憑み候へ法華經をば國王・

ふほ 父母・日月・大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば関白

だいじん 大臣・公卿乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべ

し、我等が身は末代造悪の愚者・鈍者・非法器の者、國王は臣下よ

りも人をたすくる人父母は他人よりも子をあはれむ者日月は衆星

より暗を照らす者 法華經は機に叶わずんば況や余經は助け難しと

おぼしめせ、又

釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・觀音・勢至・普賢・文殊

等いっさいの一切しよぶつの諸ぼさつ仏われら・菩薩じひは我等ふが慈悲ぼの父母ぼさつ・此しゆじやうの仏ぼさつ菩薩しゆじやうの衆生しゆじやうを
教化きやうけする慈悲じひの極理ごくりは唯ただ法華經ほけきやうにのみとどまれりとおぼしめせ、
諸經しよきやうは悪人あくにん・愚者ぐしや・鈍者どんしや・女人にょにん・根欠等こんけつの者ものを救すくふ秘術ひじゆつをば未いまだ
説とき顯あらわさずとおぼしめせ法華經ほけきやうの一切いっさい經きやうに勝すぐれ候そう故ごは但ただ此この
事ことに侍はべり、而しかるを当世とうせの学者がくしや・法華經ほけきやうをば一切いっさい經きやうに勝すぐれたりと讚ほめ
て、而しかも末代まつだいの機かなに叶あわずと申もうすを皆みな信まずる事こと豈あに謗ほう法ぽうの人ひとに侍はべら
ずや、

ただ只一口におぼしめし切らせ給い候へ所詮法華經の文字を破りさきな
んどせんには法華經の心やぶるべからず、又世間の悪業に對して
云いとうとむるとも人人用ゆべからず只相似たる權經の義理を以て
云いとうとむるにこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云く、或智者の申され候しは四十余年の諸經と八箇年の
法華經とは成仏の方こそ爾前は難行道・法華經は易行道にて候へ
往生の方にては同事にして易行道に侍り法華經を書き讀みても
じゅつぽう じょうどあみだぶつ どうじ いぎょうどう はく ほけきょう
十方の浄土阿弥陀仏の国へも生るべし觀經等の諸經の付いて弥陀
の名号を唱えん人も往生を遂ぐべし只機縁の有無に随つて何をも
あらそ 争ふべからず、但し ただ
弥陀の名号は人ごとに行じ易しと思いて日本国中に行じつけたる
事なれば法華經等の余行よりも易きにこそと申されしは如何、答
えて云く仰せの法門はさも侍るらん又世間の人も多くは道理と思

いたりげに侍り但し身には此の義に不審あり、其の故は前に申せしが如く末代の凡夫は智者と云うともたのみなし世こそりて上代の智者には及ぶべからざるが故に愚者と申すともいやしむべからず
經論の証文顯然ならんには抑無量義經は法華經を説くが為の序分なり、然るに始め寂滅道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで其の年月日数を委く計へ挙げれば四十余年なり、其の間の所説の經を挙るに華嚴・阿含・方等・般若なり所談の法門は三乘・五乘・所習の法門なり

り修行の時節を定むるには宣説菩薩歴劫修行と云ひ隨自意、隨他意を分つには是を隨他意と宣べ四十余年の諸經と八箇年の所説との語同じく義替れる事を定めるには文辭一と雖ど義各異るととけり成仏の方は別にして往生の方は一つなるべしともおぼえず華嚴・方等・般若・究竟最上の大乘經・頓悟・漸悟の法門・皆

未み顕けん真しん実じつと説せつかれたり此この大部たふぶの諸しよ經きやうすら未み顕けん真しん実じつなり何いかに況いはんや
淨じよ土どの三さん部ぶ經きやう等とうの往お生うじやう極ごく樂らくばかり未み顕けん真しん実じつの内うちにもれんや其その上うへ

・經きやう經きやう

ばかりをいだ出すのみにあらず既すでに年ねん月げつ日に数すうをいだ出すをや、然しかれば華け嚴こん・
方ほう等とう・般はん若に等やの弥み陀だ往お生うじやう已すでに未み顕けん真しん実じつなる事こと疑ぎい無むし、觀かん經きやうの
弥み陀だ往お生うじやうにあ限げんつて豈あ多た留りう難なん故この内うちに入いらざらんや、若もし隨ず自じ意いの
法ほ華け經きやうの往お生うじやう極ごく樂らくを隨ず他た意いの

観經の往生極樂に同じて易行道と定めて而も易行の中に取つても
猶觀經の念仏往生は易行なりと之を立てられれば権実雜亂の失大
謗法たる上一滴の水漸漸に流れて大海となり一塵積つて須弥山と
なるが如く漸く權經の人も実經にすすまず実經の人も權經にお
ち權經の人・次第に国中に充滿せば法華經隨喜の心も留り國中
に王なきが如く人の神を失えるが如く法華・真言の諸の山寺荒れ
て諸天善神・竜神等・一切の聖人国を捨てて去らば悪鬼便りを得
て
乱れ入り悪風吹いて五穀も成らしめず疫病流行して人民をや亡さ
んずらん、此の七八年が前までは諸行は永く往生すべからず善導
和尚の干中無一と定めさせ給いたる上選択には諸行を抛てよ行ず
る者は群賊と見えたりなれど放語を申し立てしが、又此の四五年度の
後は選択集の如く人を勧めん者は謗法の罪によつて師檀共に無間

地獄じじくに

墮おつべしと経に見えたりと申もうす法門出来ほうもんしゅつたいしたりげに有りしを、始め

は念仏者ねんぶつこそぞりて不思議ふしぎの思いをなす上念仏ねんぶつを申もうす者無間地獄むげんじじくに

墮おつべしと申もうす悪人外道あくにんげどうありなんどののしり候ねんぶつしが念仏者ねんぶつ・無間むげん

地獄じじくに墮おつべしと申もうす語ごに智慧ちえつきて各せんちやくしゆう選択集せんたくしゅうを委くわしく披見ひけんする程ほど

にげにも謗法ぼうほうの書しよとや見けんなしけん千中無せんちゆうむいつ一の悪義あくぎを留とどめて諸行しよぎやう

往生おうじやうの由よしを念仏者ねんぶつ毎ごとに之これを立たつ、然しかりと雖いえども唯ただ口くちにのみゆるして

心こころの中なかは猶本なほの千中無せんちゆうむいつ一の思しいなり在家ざいけの愚人ぐにんは内心ないしんの謗法ほうほう

なるをばしらずして諸行しよぎやう往生おうじやうの口くちにはかされて念仏者ねんぶつは法華經ほけきやうを

ば謗ぼうぜざりけるを法華經ほけきやうを謗ぼうずる由よしを聖道門しやうどうもんの人の申もうされしは

僻事ひがごとなりと思おもへるにや、一向いっかう諸行しよぎやうは千中無せんちゆうむいつ一ひとと申もうす人ひとよりも謗法ほうほう

の心こころはまさりて候とがなり失しなき由よしを人ひとに知しらせ而しかも念仏計ねんぶつばかりを亦また弘ひろ

めんとたばかるなり偏ひとえに天魔てんまの計ばかりことなり。

問うて云く天台宗の中の人の立つる事あり天台大師爾前と法華
と相對して爾前を嫌うに二義あり、一には約部四十余年の部と
法華經の部と相對して爾前はなり法華は妙なりと之を立つ二には
約教・教に 妙を立て華嚴・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙
と歎じ華嚴・方等・般若等の三乘歴別の修行の法門をば前三教と
名づけてなりと嫌へり円頓速疾の方をば嫌わず法華經に同じて
一味の法門とせりと申すは如何、答えて云く此の事は不審に

もする事侍るらん然る可しと・をばゆ天台・妙楽より已来今に論
有る事に侍り天台の三大部六十卷総じて五大部の章疏の中にも
約教の時は爾前の円を嫌ふ文無し、只約部の時ばかり爾前の円を
押ふさねて嫌へり、日本に二義あり園城寺には智証大師の釈より起
つて爾前の円を嫌ふと云い山門には嫌はずと云う互に文釈あり俱に
料簡あり然れども今に事ゆかず、但し予が流の義には不審晴れて
おぼえ候、其の故は天台大師四教を立て給うに四の筋目あり、
一には爾前の経に四教を立つ二には法華経と爾前と相對して爾前の
円を法華の円に同じて前三教を嫌う事あり、三には爾前の円をば
別教に撰して前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前の
円をば
法華に同ずれども但法華経の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙に
は同ぜず、此の四の道理を相對して六十卷をかんがうれば狐疑の

氷こおり解けたり一一の証文じょうもんは且かつつは秘ひし且かつつは繁しげき故ゆえに之これを載のせず、
又また法華經ほけきょうの本門ほんもんにしては爾前にぜんの円えんと迹門しやくもんの円えんと・を嫌きらう事ふしん不審ふしんな
き者ものなり、爾前にぜんの円えんをば別教べつきょうに撰せんして約教やくきょうの時ときは前三ぜんさん為いそ
為妙いみょうと云いふなり此こゝの時ときは爾前にぜんの円えんは無量義經むりょうぎきょうの歴劫修行りきやくしゆぎょうの内うちに入い
りぬ、又また伝教大師でんぎょうだいしの註釈ちゆしやくの中なかに爾前にぜんの八教はつきょうを挙あげて四十余年よんじゅうよねん・
未顕みけん真實しんじつの内うちに入れ・或あるは前三教ぜんさんきょうをば迂回うゑと立て爾前にぜんの円えんをば
直道じきどうと云いふ無量義經むりょうぎきょうをば大直道じきどうと云いふ委細いさいに見みる可べし。
問いうて云いわく法華經ほけきょうを信いぜん人は本尊ほんぞん並ならびに行儀ぎぎ並ならびに常じょうの所行しゆぎやうは
何いかにてか候あべき、答こたえて云いわく第一だいいちに本尊ほんぞんは法華經ほけきょう八卷はつゑん・一卷いっゑん・一品いっぴん
・或あるは題目だうぎを書かいて本尊ほんぞんと定さだむ可べしと法師品ほうしほん並ならびに神力品じんりきぼんに見みえた
り、又またたへたらん人は釈迦しゃか如来にょらい・多宝たぼう仏ぶつを書かいても造たつても法華經ほけきょう
の左右さうに之これを立たて奉たてまつるべし、又またたへたらんは十方じゆつぱうの諸しよ仏ぶつ普賢ふげん菩薩ぼさつ
等らうをもつくり

かきたてまつるべし、行儀ぎょうぎは本尊ほんぞんの御前おんまえにして必ず坐立行ざりつぎょうなるべし
道場だうじょうを出いでては行住ぎょうじゅう坐臥ざがをえらぶべからず、常じょうの所行しよぎょうは題目だいもくを
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となうべし、たへたらん人は一偈いちげ・一句いっくをも読み
奉たてまつる可べし助縁じょえんには南無釈迦牟尼仏なむしゃかむにぶつ・多宝仏たほうぶつ・十方諸仏じゅっほうしよぶつ・一切いっさいの諸
菩薩ぼさつ・二乘にじょう・天人てんにん・竜神りゅうじん・八部等心はちぶに随したがうべし愚者ぐしゃ多き世となれば
一念三千いちねんさんぜんの觀かんを先とせず其その志こころざし あらん人は必ず習学しよくして之これを觀
ずべし。

問うて云く只題目計を唱うる功德如何、答えて云く釈迦如来。

法華經をとかんとおぼしめして世に出で、ましまししかども

四十余年の程は法華經の御名を秘しおぼしめして御年三十の比よ

り七十余に至るまで法華經の方便をまうけ七十二にして始めて

題目を呼び出させ給へば諸經の題目に是を比ぶべからず、其の上

法華經の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法

の二字におさまれり、天台大師・玄義十巻を造り給う第一の巻には

略し

て妙法蓮華經の五字の意を宣べ給う、第二の巻より七の巻に至る

までは又広く妙の一字を宣べ八の巻より九の巻に至るまでは法蓮華

の三字を釈し第十の巻には經の一字を宣べ給へり、經の一字に華嚴・

阿含・方等・般若・涅槃經を収めたり妙法の二字は玄義の心は

百界・千如・心仏衆生の法門なり止觀十巻の心は一念三千・

ひやつかいせんによ さんぜんせけん
百界千如三千世間

心仏衆生三無差別と立て給う、一切の諸仏菩薩十界の因果
じゅつぼう そつまく がりやく みょうぼう
十方の草木瓦礫等妙法の二字にあらざると云う事なし、華嚴

阿含等の四十余年の経経小乗経の題目には大乘経の功德を
あこん よんじゅうよねん きんぎょう しょうぎょう だいもく だいじょうきょう くだく

収めず又大乗経にも往生を説く経の題目には成仏の功德をおさ
おさ だいじょうきょう おうじょう だいもく じゅうぶつ くだく

めず又王にては有れども王中の王にて無き経も有り仏も又経に
したが たぶつ くだく あれ おうちゅう

随つて他仏の功德をおさめず平等意趣をもつて他仏自仏とをな
たぶつ くだく びょうどういしゅ たぶつ じぶつ

じといひ或は法身平等をもて自仏他仏同じといふ、実には一仏に
ある ほっしんびんぼう じぶつ たぶつ

一切仏の

功德をおさめず今法華経は四十余年の諸経を一經に収めて十方
くどく ほけきょう よんじゅうよねん じきんぎょう おさ じゅつぼう

世界の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる
せかい さんじんえんまん しょぶつ しゃか ぶんじん しょぶつ だん

故に一仏一切仏にして妙法の二字に諸仏皆収まれり、故に
ゆえ いっさいぶつ みょうぼう しょぶつ みなおさ ゆえ

妙法蓮華経の五字を唱うる功德莫大なり諸仏諸経の題目は
みょうぼうれんげきょう ごじ とな くどく ばくだい しょぶつ しょきょう だいもく

法華經ほけきょうの所開しょかいなり妙法みょうほうは能開もうかいなりとしりて法華經ほけきょうの題目だいもくを唱となうべし。

問いわうて云いく此こゝの法門ほうもんを承うけたまわつて又また智者ちしやに尋たずね申もうし候たえば法華經ほけきょうの
いみじき事ことは左右さうに及およばず候た但ただし器量きりょうならん人は唯ただ我われが身計みかりは
然しかべ可べし、末代まつだいの凡夫ほんぶに向むかつてただちに機きをも知らず爾前にぜんの教けうを
云いうとめ法華經ほけきょうを行いぜよと申もうすはとしごろの念仏ねんぶつなどをば打
ち捨て又また法華經ほけきょうには未いまだ功こうも入いれず有ありにも無なきもつかぬようにてあ
らんずらん、又また機きも知らず法華經ほけきょうを説たまかせ給たまはば信しんずる者は左右さう
に及およばず若もし謗ぼうずる者ものあらば定じめて地獄じごくに墮おち候そうはんず

らん、其の上そ仏も四十余年の間・法華經を説き給はざる事は
にやくたんさんぶつじよう しゅじよう ぼつざいく
若但讚なげ仏乘・衆生没在苦の故なりと在世ざいせいの機なすら猶然ななり
いかにいわんやまつたいたい ほんぶ
何に況や末代の凡夫をや、されば譬喩品には「仏・舍利弗に告げて
のたま ち
言わく無智の人の中に此の經を説くことなかれ」と云云此等の道理を
もう
申すは如何いかんが候べき、答えて云く智者の御物語と仰せ承り候へば
しよせんまつたいたい ほんぶ
所詮末代の凡夫には機
をかがみて説け左右なく説いて人に謗ぼうぜさする事なかれとこそ候な
れ、彼人さやうに申もうされ候はば御返事候べきやうは抑おさ
にやくたんさんぶつじよう ないし む ち にんちゆう
若但讚なげ仏乘・乃至無智人中等の文を出し給はば又一經の内に凡有ほんぬ
しよけん がじんきようなんじら ふぎよう ぼさつ じようもくがしゃく
所見・我深敬汝等等と説いて不輕菩薩の杖木瓦石をもつて・うち
られさせ給たまいしをば顧みさせ給はざりしは如何と申もうさせ給へ。
問うて云く一經の内に相違の候なる事こそよに得心がたく侍はべれ
ばくわしく承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の

経を説くべしと見え不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべしと見え侍り一經の前後水火の如し、然るを天台大師会して云く「本已に善有るは釈迦小を以て之を將護し本未だ善有らざるは不輕大を以て之を強毒す」文・文の心は本と善根ありて今生の内に得解すべき者の為には直に法華經を説くべし、然るに其の中に猶聞いて謗すべき機あらば暫く權經をもてこしらえて後に法華經を説くべし、本と大の善根もなく今も法華經を信ずべからずなにとなくとも惡道に墮ちぬべき故に但押し法華經を説いて之を謗ぜしめて逆縁ともなせと會する文なり、此の釈の如きは末代には善無き者は多く善有る者は少し故に惡道に墮ちんこと疑い無し、同くは法華經を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成す可きか然らば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事争い無き者をや、法華經の方便品に五千の

上慢あり略開三顯一を聞いて広開三顯一の時・仏の御力をもて座

をたたしめ給ふ後に涅槃経並に四依の辺にして今生に悟を得せし
め給うと、諸法無行経に喜根菩薩・勝意比丘に向つて大乘の法門を
強いて説ききかせて謗ぜさせしと、此の二の相違をば天台大師会し
て云く「如来は悲を以ての故に発遣し喜根は慈を以ての故に強説
す」文・文の心は仏は悲の故に後のたのしみをば闇いて当時・法華経
を謗じて地獄にをちて苦にあう

べきを悲み給いて座をたたしめ給いき、譬えば母の子に病あると知れども当時の苦を悲んで左右なく灸を加へざるが如し、喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへりみず後の樂を思いて強いて之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病あるを見て当時の苦をかへりみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、又仏在世には仏・法華經を秘し給いしかば四十余年の間等覺不退の菩薩名をしらず、其の上じゆりようほん 壽量品は法華經八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき末代の凡夫には左右なく如何がきかしむべきとおぼゆる処を妙樂大師釈して云く「みようらくだいししやく 仏世は当機の故に簡ぶ末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給へり文の心は仏在世には仏一期の間多くの人不退の位にのぼりぬべき故に法華經の名義を出して謗ぜしめず機をこしらへて之を説く仏滅後には当機の衆は少く結縁の衆多きが故に多分に就いて左右なく法華經を説くべしと云う釈なり是体の多くの

品あり又末代まつだいの師は多くは機を知らず機を知らざらんには強しいて
但実經じつぎょうを説くべきかされば天台大師てんだいだいしの釈いに云く「等こしく是れ見ざ
れば但大を説くに咎とが無し」文・文の心は機をも知らざれば大を説く
に失とがなしと云う文なり又時の機を見て説法せつぽうする方もあり皆國中みなくにじゅうの
諸人しよにん・權經こんぎょうを信じて実經じつぎょうを謗あながちもちし強あに用いざれば彈呵だんかの心をもて説
くべきか時に依よつて用否ようひあるべし。

問いうて云く唐土もろこしの人師にんしの中に一分一向いちぶんいつこうに權大乘こんだいじょうに留とどま
入いらざる者はいかなる故か候、答えて云く仏世いに出いでましまして先
ず四十余年よんじゅうよねんの權大乘こんだいじょう・小乘しょうじょうの經を説き後には法華經ほけきょうを説いて言のたまわ
く「若にやく以小乘いしょうじょう化か乃至ないし於一人おひとりにん・我則墮慳貪がそくだけんどん・此事しじ為不可いふかと文・文の心
は仏ほとけ但爾前ぜんの經許ばかりを説いて法華經ほけきょうを説き給たまはずは仏慳貪けんどんの失とがあ
りと説かれたり、後に屬累品ぞくるいほんにいたりて仏右の御手みてをのべて三たび
諫いさめをなして三千大千世界さんぜんたいせんせかいの外い・八方はつぱう・四百万億那由他なゆたの国土こくどの諸しよ

菩薩ぼさつの頂いただきをなでて未來みらいには必ず法華經ほけきょうを説くべし、若し機もたへずば余あまの深法じんぼうの四十余年よんじゅうよねんの經を説いて機をこしらへて法華經ほけきょうを説くべしと見えたり、後に涅槃經ねはんきょうに重ねて此の事を説いて仏滅後ぶつめつに四依しえの菩薩ぼさつありて法を説くに又法の四依しえあり実經じつきょうをついに弘ひろめずんば天魔てんまとしるべきよしを説かれたり故ゆえに如来にょらいの滅後めつご・後の五百年・九百年

の間に出で給いし竜樹菩薩・天親菩薩等 如来の聖教を弘め

給うに天親菩薩は先に小乗の説一切有部の人・俱舍論を造つて

阿含十二年の経の心を宣べて一向に大乘の義理を明さず次に

十地論・撰大乘論・釈論等を造つて四十余年の権大乘の心を宣べ

後に仏性論・法華論等を造りて粗実大乘の義を宣べたり竜樹菩薩

亦然なり天台大師・唐土

の人師として一代を分つに大小・権実顯然なり余の人師は僅かに

義理を説けども分明ならず又証文たしかならず但し末の論師並

に訳者・唐土の人師の中に大小をば分つて大にをいて権実を分たず

或は語には分つといへども心は権大乘のをもむきを出でず此等は

不退諸菩薩・其数如恒沙・亦復不能知とおぼえて候なり。

疑つて云く唐土の人師の中に慈恩大師は十一面観音の化身牙よ

り光を放つ、善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の人師

通を現げんじ徳をほどこし三昧さんまいを発得ほつとくする人。世に多しなんぞ権実ごんじつ二經

を弁わきまえへて法華經ほけきょうを詮せんとせざるや、答えて云く阿闍多仙人あがたせんじん外道げどうは十

二年の間・耳の中に恒河の水をとどむ婆藪仙人ばそせんじんは自在じざい在天となりて三

目を現げんず、唐土の道士の中にも張階ちようかいは霧をいだし鸞巴らんぱは雲をはく

第六天の魔王は仏滅後に比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばい

・阿羅漢あらかん・辟支仏ひやくしぶつの形を現げんじて四十余年の經を説くべしと見えたり

通力つうりきをもて智者愚者をばしるべからざるか、唯ただ仏の遺言ゆいごんの如く一向いっこう

に權教ごんきょうを弘ひろめて実經じつきょうをつゝに弘ひろめざる人師にんしは權教ごんきょうに宿習しゆくじゆくありて

実經じつきょうに入らざらん者は、或あるは魔まにたばらかされて通げんを現げんずるか、

但ただし法門ほふもんをもて邪正じやせいをただすべし利根りこんと通力つうりきとはよるべからず。

文応元年ぶんおうげんねん太歳庚申五月二十八日

日蓮にちれん

花押かおう

鎌倉名越かまくらなこえに於おいて書き畢おわんぬ

ほうじょうときより

北条時頼書

於鎌倉

17P

りよきやく

旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで天変地天・飢饉

えきれい あまねくてんか

なげ

いわ

きんねん

きんじつ

いた

てんべん

ちよう

ききん

疫癘・遍く天下に満ち広く地上に迸る牛馬巷に斃れ骸骨路に充て

まね

ともがらすで

たいはん

こ

こ

やからあえて

たおれ

がいこつ

みち

あ

り死を招くの輩 既に大半に超え悲まざるの族敢て一人も無し、

しか

ある

りけん

こ

もつばら

さいど

きようしゆ

みな

とな

ある

然る間・或は利剣即是の文を専にして西土教主の名を唱え・或は

しゆつびよう

しつじよ

たも

とうほう

にょらい

ずし

ある

びよう

そくし

しょうめつ

衆病悉除の願を持ちて東方如来の経を誦し、或は病即消滅・

ふるう

ふし

ことば

あお

ほっけ

しんじつ

みよう

もん

あがめ

ある

ひちなん

そくめつ

不老不死の詞を仰いで法華真実の妙文を崇め・或は七難即滅・

ひちぶく

そくせい

ひやくざ

ひやく

こう

ことの

あ

ひみつ

しんごん

七福即生の句を信じて百座百講の儀を調べ有るは秘密真言の経に

よつ

因て

こびよう

そそぎ

あ

ざぜん

にゆう

じよう

の儀を

まじ

とつ

くう

かん

の月を

すま

五瓶の水を灑ぎ有るは坐禅入定の儀を全して空観の月を澄し、

もし

きじん

な

せんもん

押し

もし

は

い

ご

だ

い

ち

の

かたちを

若くは七鬼神の号を書して千門に押し若くは五大力の形を図して

ばんこ 万戸に懸け若くは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て若くは
ばんみんひやくせい 万民百姓を哀んで国主・国宰の徳政を行う、然りと雖も唯肝胆を
くだく 推くのみにして弥飢疫に逼られ乞客目に溢れ死人眼に満てり、
ふ 臥せる屍を觀と為し並べる戸を橋と作す、觀れば夫れ二離壁を
合せ五緯珠を連ぬ三宝も世に在し百王未だ窮まらざるに此の世早
おとろそ 衰え其の法何ぞ廢れたる是れ何なる 禍に依り是れ何なる誤り
よ に由るや。

主人の曰く独り此の事を愁いて胸臆に憤す客来つて共に嘆く
しばしばだんわ 屢談話を致さん、夫れ出家して道に入る者は法に依つて仏を期す
るなり而るに今神術も協わず仏威も驗しなし、具に当世の体を
観るに愚にして後生の疑を發す、然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み
ほうざい 方載に俯して慮を深くす、倩ら微管を傾け聊か経文を披きた
よみなまさにとそむき るに世皆正に背き、人悉く悪に歸す、故に善神は国を捨てて相去り

聖人しょうにんは所じを辞じして還かえりたまわず、是これを以もつて魔ま来きり鬼き来きたり災さい起おこり難なん起おこる言のたまわずんばある可べからず恐おそれずんばある可べからず。

客いの曰いわく天下てんかの災わざわい・国くに中じゆうの難なん・余よ独ひとり嘆なげくのみあらに非あらず衆しゆう皆みな悲かなむ、今いま蘭らん室しつに入いつて初はつめて芳ほう詞しを承うけるに神じん聖せい去いり

辞し災難並び起るとは何れの経に出でたるや其の証拠を聞かん。

主人の曰く其の文繁多にして其の証弘博なり。

金光明経に云く「其の国土に於て此の経有り」と雖も未だ嘗て

流布せしめず捨離の心を生じて聴聞せん事を樂わず亦供養し

尊重し讚歎せず四部の衆・持経の人を見て亦復た尊重し乃至供養

すること能わず、遂に我れ等及び余の眷属無量の諸天をして此の

甚深の妙法を聞くことを得ざらしめ甘露の味に背き正法の流を

失い威光及び勢力有ること無からしむ、悪趣を増長し人天を

損減し生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん、世尊・我等四王並びに

諸の眷属及び薬叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の

心無けん、但だ我等のみ是の王を捨棄

するに非ず必ず無量の国土を守護する諸天善神有らんも皆悉く

捨去せん、既に捨離し已りなば其の国当に種種の災禍有つて国位を

喪失すべし、一切の人衆皆善心無く唯繫縛殺害瞋諍のみ有つて
 互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星數ば出で
 両日並び現じ薄蝕恒無く黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ
 地動き井の内に声を発し暴雨・悪風・時節に依らず常に飢饉に遭つ
 て苗実成らず、多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱
 を受け土地所樂の処有ること無けん已上。

大集經に云く「仏法實に隱没せば鬚髮爪皆長く諸法も亦忘失せ
 ん、當の時虚空の中に大なる声有つて地を震い一切皆遍く動かんこ
 と猶水上輪の如くならん城壁破れ落ち下り屋宇悉く圻け樹林
 の根・枝・葉・華・葉・菓・葉尽きん唯淨居天を除いて欲界の一切処の
 七味・三精氣損減して余り有ること無けん、解脱の諸の善論當の時
 一切
 尽きん、所生の華菓の味い希少にして亦美からず、諸有の井泉池・

一切いっさい尽ことごとく枯涸こかくし土地とち悉ことごとく鹹鹵かんろし裂てきれつして丘澗きゅうかんと成ならん、諸山しよざん皆みな燃しょうねんして天竜てんりゅう雨あめを降くださず苗稼みょうけも皆みな枯死かじし生なずる者もの皆みな死しし尽つき
余よそ草更そうまに生なぜず、土つちを雨あめらし皆みな昏闇こんあんに日月にちがつも明あを現げんぜず四方しほう皆みな
亢旱こうかんして数しばしば諸惡瑞しよあくずいを現げんじ、十不ふぜん善業ぜんごうの道みち貪とん・瞋じん・癡ち・倍はい・増ぞうして衆生しゆじよう
父母ふぼに於おけ

これを観ること。鹿の如くならん、衆生及び寿命・色力・威樂減
じ人天の樂を遠離し皆悉く惡道に墮せん、是くの如き不善業の惡王
・惡比丘我が正法を毀壞し天人の道を損減し、諸天善神王の衆生
を悲愍する者。此の濁惡の國を棄てて皆悉く余方に向わん」已上。
仁王經に云く「國土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に
万民乱る賊來つて國を却かし百姓亡喪し臣・君・太子・王子・百官共
に是非を生ぜん、天地怪異し二十八宿・星道・日月時を失い度を
失い多く賊起ること有らんと、亦云く「我今五眼をもつて明に三世
を見るに一切の國王は皆過去の世に五百の仏に侍えるに由つて
帝王主と為ることを得たり、是を爲つて一切の聖人羅漢而も為に
彼の國土の中に来生して大利益を作さん、若し王の福尽きん時は
一切の聖人皆為に捨て去らん、若し一切の聖人去らん時は七難必
ず起らん」已上。

薬師經に云く「若し刹帝利・灌頂王等の災難起らん時所謂人衆
疾疫の難・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿变怪の難・日月薄蝕
の難・非時風雨の難・過時不雨の難あらん已上。

仁王經に云く「大王吾が今化する所の百億の須弥・百億の日月・

一一の須弥に四天下有り、其の南閻浮提に十六の大国五百の中国

十千の小国有り其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王

是を難と為すが故に、云何なるを難と為す日月度を失い・時節

返逆し・或は赤日出で・黒日出で・二三四五の日出で・或は日蝕

して光無く・或は日輪一重・二三四五重輪現ずるを一の難と為す

なり、二十八宿度を失い金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・

星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星・是く

の如き諸星・各各・変現するを一の難と為すなり、大火国を焼き

万姓焼尽せん・或は鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火

あらん是^{かく}くの如^{ごと}く変怪^{へんげ}するを三^{さん}の難^{なん}と為^なすなり、大水^{ひやくせい}百姓^{ひやくせい}を没^{ひようもつ}し時^じ節^{せつ}返逆^{ほんぎやく}して冬^{ふゆ}雨^{あめ}ふり夏^{なつ}雪^{ゆき}ふり冬^{ふゆ}時^{とき}に雷^{らい}電^{でん}霹^{へきれき}し六月^{りくごつ}に氷^{ひょう}霜^{そう}雹^{はく}を雨^ふらし赤^{せき}水^{すい}・黒^{こく}水^{すい}・青^{せい}水^{すい}を雨^ふらし土^ど山^{ざん}・石^{せき}山^{ざん}を雨^ふらし沙^さ礫^{りやく}石^{せき}を雨^ふらす江^{かう}河^か逆^かに流^{なが}れ山^{やま}を浮^うべ石^{いし}を流^{なが}す是^{かく}くの如^{ごと}く変^かずる時^{とき}を四^よの

難なんと為なすなり、大風たいふう・万姓ばんしやうを吹殺ふきころし国土こくど・山河さんが・樹木じゆもく・一時いちじに滅没めつぼつ
 し、非時ひじの大風たいふう・黒風こくふう・赤風せきふう・青風せいふう・天風てんふう・地風ちふう・火風かふう・水風すいふうあらん
 是かくの如ごとく変かずるを五ごの難なんと為なすなり、天地てんち・国土こくど・亢陽かうやうし
 炎火えんか洞燃どうねんとして・百草ひやくそう亢旱かうかんし・五穀ごこく登のらず・土地とち赫燃かくねんと万姓ばんしやう滅尽めつじんせ
 ん是かくの如ごとく変かずる時ときを六ろくの難なんと為なすなり、四方しほうの賊来ぞくつて国を侵
 し内外ないげの賊起ぞくり、火賊かぞく・水賊すいぞく・風賊ふうぞく・鬼賊きぞくありて百姓ひやくせい荒乱かうらんし・刀兵とうひやう劫
 起おこらん是かくの如ごとく怪むあやしする時ときを七しちの難なんと為なすなり「大集経だいじつきやうに云いわく
 「若もし国王こくおう有あつて無量世むりやうせに於おいて施戒慧せかいえを修しやうすとも我が法の滅めつせんを
 見て捨すてて擁護おうえいせずんば是かくの如ごとく種くさねゆる所の
 無量むりやうの善根ぜんこん悉ことごとく皆滅失みなめつしつして其その国当まさに三さんの不祥ふしやうの事有あるべし、一いちに
 は穀貴こくき・二にには兵革ひやうかく・三さんには疫病えきびやうなり、一切いっさいの善神ぜんじん悉ことごとく之これを捨離しやりせ
 ば其その王教令おうきやうすとも人随従ずいじゆうせず常に隣国りんこくの侵しんする所と為なら
 ん、暴火横ほうかに起おこり悪風雨多あくふうあめく暴水増長ほうすいぞうちやうして人民じんみんを吹ふき・内外ないげの

親戚其れ共に謀叛せん、其の王久しからずして当に重病に遇い
壽終の後、大地獄の中に生ずべし、乃至王の如く夫人・太子・大臣・
城主・柱師・郡守・宰官も亦復た是くの如くならん已上。

夫れ四経の文朗かなり万人誰か疑わん、而るに盲瞽の輩迷惑の
人妄に邪説を信じて正教を弁えず、故に天下世上・諸仏・衆經に
於て捨離の心を生じて擁護の志無し、仍て善神聖人国を捨て所
を去る、是を以て悪鬼外道災を成し難を致す。

客色を作して曰く後漢の明帝は金人の夢を悟つて白馬の教を得、
上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す、爾しより来た
上一人より下万民に至るまで仏像を崇め経巻を專にす、然れば
則ち叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道・仏經は星の
如く羅なり堂宇雲の如く布けり、子の族は則ち鷲頭の月を觀じ
鶴勒の流は亦鷄足の風を伝う、誰か一代の教を徧し三宝の跡を

廃はいすと謂いんや若もし其その証しやう有あらば委くわしく其その故ゆえを聞きかん。
主人しゆじん諭さとして曰いく仏閣ぶつかく薨いらを連れね経蔵きやうぞう軒のきを並ならべ僧そうは竹葦ちくいの如ごとく侶りよ
は稻麻とうまに似にたり崇重すうちやう年ねん旧ふるり尊貴そんき・日ひに新あらたなり、

但し法師は諂曲にして人倫を迷惑し王臣は不覺にして邪正を弁ずること無し、仁王經に云く「諸の悪比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん、其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作つて仏戒に依らず是を破仏・破国の因縁と為す」已上。

涅槃經に云く「菩薩悪象等に於ては心に恐怖すること無かれ悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ・悪象の為に殺されては三趣に至らず悪友の為に殺されては必ず三趣に至る」已上。

法華經に云く「悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞の道を行はずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣の与めに法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん、乃至常に大衆の中に在つて我等を

毀らんと欲するが故に国王・大臣婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん、濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん悪鬼其の身に入つて我を罵詈し毀辱せん、濁世の悪比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず悪口して鬻蹙し数数擯出せられん」と已上。

涅槃經に云く「我れ涅槃の後・無量百歲四道の聖人悉く復た涅槃せん、正法滅して後・像法の中に於て當に比丘有るべし、持律に似像して少く經を讀誦し飲食を貪嗜して其の身を長養し袈裟を著すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行くが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く唾法を受けたる婆羅門等の如し、實には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」と已上。

文に就いて世を見るに誠に以て然なり悪侶を誡めずんば豈善事

を成さんや。

客なおいきどおり猶な憤いりて曰いわく、明王みんおうは天地てんちに因よつて化を成し、聖人しょうにんは理非りひを

察みんおうして世を治おさむ、世上せじょうの僧侶そうりよは天下てんがの歸する所なり、悪侶あくりよに於おいては

明王みんおう信べず可べからず、聖人しょうにんに非あらずんば賢哲けんてつ仰あおぐ可べからず、今賢聖けんせいの

尊そんちよう重じゆうせるを以もつて則すなわち竜象りゆうぞうの輕

からざるを知んぬ、何ぞ妄言を吐いて強ちに誹謗を成し誰人を以て悪くあくびくと謂うおもや委細いさいに聞かんと欲すほ。

主人いわの曰く、後鳥羽院ごとばいんの御宇ぎよつに法然ほうねんと云うもの有り 選択集せんちやくしゅう

をつくすなわ いちだいの 聖教しやうきやうを破しはく十方じふじやうの衆生しゆじやうを迷わす、其その

選択せんちやくに云く道どう綽ちやく禅師ぜんぜん・聖道しやうどう浄土じやうどの二門にもんを立て聖道しやうどうを捨てて

正しくまさ浄土じやうどに帰するの文、初に聖道門しやうどうもんとは之これに就ついて二有りふた乃至な

之これに準じゆんじ之これを思うおもふに密大みつだい及びおよび実大じつだいをも存ぞんすべし、然しかれば則すなわち

今いまの真言しんごん仏心ぶつしん・天台てんだい・華嚴けごん・三論さんろん・法相ほつそう・地論ちろん・撰論じゆろん・此等これらの八家はっけの意い

正しくまさ此こゝに在あるなり、曇鸞どんらん法師ほふし往生論おうじやうろんの注しゆに云く謹つしんで竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつ

の十住じゆじゆ毘婆沙びばしやを案あずるに云く菩薩ぼさつ阿毘跋致あびぼちを求もとむるに二種の道どう

有り一ひとには難行道なんぎやうどう二ふたには易行道いぎやうどうな

り、此こゝの中なか難行道なんぎやうどうとは即すなわち是これ聖道門しやうどうもんなり易行道いぎやうどうとは即すなわち是これ

浄土門じやうどもんなり、浄土宗じやうどしゆの学者がくしや先すべく須すべらく此こゝの旨しめを知るべし設たい先いより

聖道門しやうだうもんを学まなぶ人ひとなりと雖いえども若もし浄土門じやうどもんに於おいて其そのの志し有あらん者は
 須すべからく聖道しやうだうを棄すてて浄土じやうどに歸かへすべし又いわく善導ぜんどう和尚わじやう正雜しやうざの二行にぎやうを
 立たて雜行ざぎやうを捨すてて正行しやうぎやうに歸かへするの文ぶん、第一だいいちに読誦どくじゆ雜行ざぎやうとは上かみの
 觀經等かんぎやうとうの往生おうじやう浄土じやうどの經ぎやうを除のぞいて已外いげ・大小乘しやうじやう・顯密けんみつの諸經しよぎやうに於おいて
 受持じゆぢ・読誦どくじゆするを悉すく読誦どくじゆ雜行ざぎやうと名なく、第三だいさんに礼拝らいはい雜行ざぎやう
 とは上かみの彌陀みだを礼拝らいはいするを除のぞいて已外いげ一切いっさいの諸仏しよぶつ・菩薩等ぼさつ及および諸もろの
 世天等せてんとうに於おいて礼拝らいはいし恭敬きやうけいするを悉すく礼拝らいはい雜行ざぎやうと名なく、私ひそに云いく此こ
 の文ぶんを見るみるに須すべからず雜ざを捨すてて專せんを修しゆすべし豈あにひやくそくひやくしやうせんしゆ百生ひやくじやうの專修せんしゆ
 正行しやうぎやうを捨すてて堅けんく千中せんちゆう無む一の雜修ざしゆ雜行ざぎやうを執しゆせんや行者ぎやうじや能よく
 之これを思量しじやうせよ、又いわく貞元ていげん入藏にゆうざう録ろくの中ちゆうに始はめ大般若經だいにがやんぎやう六百卷はんにやくきやうより
 法常ほつじやう住經じゆうぎやうに終しゆうるまで顯密けんみつの大乗だいにがやう經ぎやう總しゆうじて六百三十七部はんにやくきやう二千八
 百八十三卷ひやくはちじゆうさんなり、皆須みなすべく讀誦どくじゆ大乘だいじやうの一句いっくに撰せんすべし、当まに知しるべし
 隨他ずいたの前まへには暫しばらく定散じやうさんの門もんを開ひらくと雖いえども隨自ずいじの後のちには還かへり定散じやうさんの

門を閉ず、一たび開いて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なりと、又云く念仏の行者必ず三心を具足す可きの文、觀無量寿經に云く

同經の疏に云く問うて曰く若し解行の不同・邪雜の人等有つて外邪異見の難を防がん或は行くこと一分二分にして群賊等喚廻すとは即ち別解・別行・悪見の人等に喩う、私に云く又此の中に一切の別解・別行・異学・異見等と

言うは是れ聖道門を指す已上、又最後結句の文に云く「夫れ速かに生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闔きて選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛ちて選んで応に正行に歸すべし」已上。

之に就いて之を見るに曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道・淨土・難行・易行の旨を建て法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷・一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道・難行・雜行等に撰して、或は捨て或は閉じ或は闔き或は抛つ此の四字を以て多く一切を迷わし、剩え三国の聖僧十方の仏弟を以て皆群賊と号し併せて罵詈せしむ、近くは所依の浄土の三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終つて阿鼻獄に入らん」の誠文に迷う者なり、是に於て代末代

に及び人聖人に非ず 各冥衢に容つて並びに直道を忘る悲いかな
瞳瞭を たず痛い

かな徒に邪信を催す、故に上国王より下土民に至るまで皆経は

浄土三部の外に経無く仏は弥陀の三尊の外に仏無しと謂えり。

仍つて伝教・義真・慈覚・智証等 或は万里の波濤を涉つて渡せし

所の聖教 或は一朝の山川を廻りて崇むる所の仏像若しくは高山

の巔に華界を建てて以て安置し若しくは深谷の底に蓮宮を起てて

以て崇重す、釈迦・薬師の光を並ぶるや威を現当に施し虚空地蔵の

化を成すや益を生後に被らしむ、故に国王は郡郷を寄せて以て

灯燭を明にし地頭は田園を充てて以て供養に備う。

而るを法然の選択に依つて則ち教主を忘れて西土の仏馱を貴び

付属を抛つて東方の如来を閣き唯四巻・三部の教典を専にして

空しく一代五時の妙典を抛つ是を以て弥陀の堂に非ざれば皆供仏

の志こころざしを止め念仏ねんぶつの者ものに非あらざれば早く施僧せそうの懐おもいを忘わする、故ゆえに
仏閣ぶつかく零落れいらくして瓦松かわらまつの煙けむり老おい僧房そうぼう荒廢こうはいして庭草にわくさの露つゆ深こし、然しかりと
雖いえども各護惜ごしやくの心を

捨てて並びに建立の思を廃す、是を以て住持の聖僧行いて歸らず
守護の善神去つて來ること無し、是れ偏に法然の選択に依るなり、
悲しいかな数十年の間・百千万の人・魔縁に蕩かされて多く仏教に
迷えり、傍を好んで正を忘る善神怒を為さざらんや円を捨てて
偏を好む悪鬼便りを得ざらんや、如かず彼の万祈を修せんよりは
此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、我が本師釈迦文浄土の三部經を説きた
まいて以来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に歸し、
道綽禪師は涅槃の広業を闇きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は
雜行を抛つて専修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて念仏の
一行を宗とす、弥陀を貴重すること誠に以て然なり又往生の人
其れ幾ばくぞや、就中法然聖人は幼少にして天台山に昇り十七
にして六十卷に涉り並びに八宗を究め具に大意を得たり、其の外

いっさい 一切の経論・七遍反覆し章疏伝記究め看ざることなく智は日月に

ひと 齊しく徳は先師に越えたり、然りと

いえど 雖も猶出離の趣に迷いて涅槃の旨を弁えず、故に、く覲悉く鑑み深

く 思い遠く慮り、遂に諸経を抛ちて専ら念仏を修す、其の上一夢の

霊応を蒙り四裔の親疎に弘む、故に、或は勢至の化身と号し、或は

善導の再誕と仰ぐ、然れば

則ち十方の貴賤頭を低れ一朝の男女歩を運ぶ、爾しより来た

春秋 推移り星霜相積れり、而るに忝くも釈尊の教を疎にして

恣に 弥陀の文を譏る何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ強ちに

先師を毀り更に聖人を罵るや、毛を吹いて疵を求め皮を剪つて血

を出す昔より今に至るまで此くの如き悪言未だ見ず惶る可く慎む

可し、罪業至つて重し科条争か遁れん对座猶以て恐れ有り杖に携わ

れて則ち帰らんと欲す。

主人しゅじんえ咲み止めてとど曰くいわ辛きことをた蓼の葉たにな習ならい臭くきことをか溷わ廁やに忘
るぜんげん善言ぜんげんを聞きいてあくげん悪言あくげんと思おもいほうしや謗者ほうしやを指さしてしやうにん聖人しやうにんと謂おもいしやうし正師しやうしを疑うつて
悪侶あくりよに擬ぎす、其その迷誠まよいまことに深ふかく其その罪つみ浅あさからず、事ことの起おこりを聞きけ
委くわしく其その趣そを談だんぜん、釈尊しゃくそん説法せつぽうの内うち一代いちだい五時ごじの間まに先せん後ごを立たて
てごんじつ権実ごんじつを弁べんず、而しかるに曇鸞どんらん道どう綽せんと善導ぜんどう既すでにつ権つに就ついてつ実じつを忘わすれ先まに
依よつ

後を捨ついま未だぶつきよう仏教の淵底をえんでい探らざる者なり、就なかなずく中法ほうねん然そは其の流
 を酌くむと雖いえども其の源を知らず、所以ゆえんは何んいか大乘だいじようきよう經の六百三十七部
 二千八百八十三卷並びに一切いっさいの諸しよぶつ仏・菩薩及び諸の世天等をもつ以て
 捨閉閣しやへい拋かくほうの字を置いて一切衆生の心をかつ薄かろんず、是れ偏ひとえに私曲しきよくの詞ことば
 を展のべて全くぶきよう仏經の説を見ず、妄語もうごの至り悪口あくくの科言とがうても比無し
 責めても余り有り人皆其の妄語を信じことごと悉く彼の選せん択ちやくを責とつとぶ、故ゆえに
 浄土じようどの三經を崇あがめめて衆經しゆきようを拋なげうち極樂ごくらくの一あ仏を仰あおいで
 諸しよぶつ仏を忘る、誠こに是れ諸しよぶつ・諸經しよききうの怨敵おんてき聖僧せいそう衆人の讎敵しゆつてきなり、此
 の邪教じやくきよう広ひろく八荒はつこつに弘あまねまり周じゆく十方じゆほうに遍へんす、抑そも近年そもの災難さいなんを以て
 往代べを難なんずるの由あなが強こちに之を恐る、聊いさか先例せんれいを引なんじいて汝なんじが迷まを悟
 す可べし、止觀しかん第二にに史記しきを引いわて云いく、「周の末ひはつに被髮たんしん・袒身れい・礼度れいどに
 依よらざる者有り」弘決くけつの第二にに此の文を釈しゃくするに左伝さでんを引いわて曰いく
 「初め

平王の東に遷りしに伊川に髪を被にする者の野に於て祭るを見る、
識者の曰く、百年に及ばじ其の礼先ず亡びぬ」と、爰に知んぬ徵前
に顕れ災い後に致ることを、又阮藉が逸才なりしに蓬頭散帶す後に
公卿の子孫皆之に教いて奴苟相辱しむる者を方に自然に達すと云い
節兢持する者を呼んで田舎と為す是を司馬氏の滅する相と為す
已上。

又慈覚大師の入唐巡礼記を案ずるに云く、「唐の武宗皇帝・会昌
元年勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て弥陀念仏の教を伝
え令む寺毎に三日巡輪すること絶えず、同二年回鶻国の軍兵等唐
の堺を侵す、同三年河北の節度使忽ち乱を起す、其の後大蕃国
更た命を拒み回鶻国重ねて地を奪う、凡そ兵乱秦項の代に同じく
災火邑里の際に起る、何に況んや武宗大に仏法を破し多く寺塔を
滅す乱を撥ること能わずして遂に以て事有り」取意

此れを以て之を惟うに法然は後鳥羽院の御宇・建仁年中の者なり、彼の院の御事既に眼前に在り、然れば則ち大唐に例を残し吾が朝に証を顕す、汝疑うこと莫かれ汝怪むこと莫かれ唯須く凶を捨てて善に歸し源を塞ぎ根を截べし。

客聊いささかか和いわぎて日いく未いまだ淵底えんでいを究きわめざるに数しばしば其その趣しゆを知る但ただし
華洛からくより柳營りゆうえいに至いたるまで釈門しゃくもんに枢すうけん在ぶり仏家ぶつかけに棟梁とうりょう在しり、然しかる
に未いまだ勘状かんじょうを進まいらせず上奏じょうそうに及およばず汝賤身なんじいやしみを以もつて輒たやすく莠言ゆうげんを吐はく
其その義余より有あり其その理謂いわれ無なし。
主人しゅじんの曰いわく、予少量な為なりと雖いえども忝かたじけなくも大乘だいじょうを学まなぶ蒼蠅驥尾そうようきびに
附つして万里ばんりを渡わたり碧蘿松頭へきらしやうとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶ、弟子でし一仏いっふつの子と生なず
れて諸經しよきやうの王わうに事ことう、何なんぞ仏法ぶつぽうの衰微すいびを見て心情しんじやうの哀惜あいせきを起おこさざ
らんや。

其その上涅槃經ねはんぎやうに云いく「若もし善比丘ぜんびくあつて法はを壞やぶる者ものを見て置おき
て呵責かしかくし駈遣くけんし拳処こんじょせずんば当まさに知しるべし是この人は仏法ぶつぽうの中ちゆうの
怨あだなり、若もし能よく駈遣くけんし呵責かしかくし拳処こんじょせば是これ我が弟子でし真しんの声聞しやうもんな
り」と、余善比丘ぜんびくの身み為ならずと雖いえども「仏法ぶつぽう中ちゆう怨おんの責せきを遁のがれんが為ために
唯大綱ただたいこうを撮とつて粗一端そほんを示しす。

其の上そ去いぬる元げん仁にん年中にんねんに延えん曆りやく・興こう福ふくの両りょう寺じより度た度び奏そう聞もんを經へ。
勅ちよく宣せん御み教きょう書しよを申もう下くだして、法ほう然ねんの選せん択ちやくの印いん板ばんを大だい講こう堂どうに取とり上上げ。
三さん世ぜの仏ぶつ恩おんを報ほうぜんが為ために之これを燒や失くせしむ、法ほう然ねんの墓ぼ所じよに於おいては
感かん神じん院いんの犬つ神め人そうに仰おおせ付つけて破は却やくせしむ其その門もん弟てい・隆りゅう觀かん・聖せい光こう・
成じよう覺かく・薩さつ生しよう等とうは遠えん國こくに配はい流りゅうせらる、其その後い未まだ御おん勸かん氣きを許ゆるされず
豈あ未いまだ勸かん狀じようを進まいらせずと云いわんや。

客すなわ則すなわち和いわぎて曰いく、經くを下くだし僧そうを謗ぼうすること一人ひとりには論がじ難たし、
然しかれども大だい乘じよう經きよう六ろく百ひゃく三さん十じゆ七しち部ぶ二に千せん八はち百ひゃく八はち十じゆ三さん卷くわん並ならびに一いつ切さいの
諸しよ仏ぶつ・菩ぼ薩さつ及および諸もろの世せ天てん等とうを以もつて捨しゃ閉へい閣かく拋ほうの四し字じに載のす其その詞ことば
勿もち論ろんなり、其その文けん顯ねん然ねんなり、此この瑕か瑾きんを守まもつて其その誹ひ謗ぼうを成せいせども
迷まうて言ことうか覺さとりて語かるか、賢けん愚ぐ弁べんぜず是ぜ非ひ定ていめ難がし、但ただし災さい難なんの
起おりは

選せん択ちやくに因よるの由よし、其その詞ことばを盛さに弥いよ其その旨しを談だんず、所しよ詮せん天てん下が泰たい平へい

国土安穩は君臣の樂う所土民の思う所なり、夫れ国は法に依つて昌え法は人に因つて貴し国亡び人滅せば仏を誰か崇む可き法を誰か信ず可きや、先ず国家を祈りて須く仏法を立つべし若し災を消し難を止むるの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず唯經文に就いて聊か所存を述べん、抑も治術の旨内外の間其の文幾多ぞや具に挙ぐ可きこと難し、但し仏道に入つて数ば愚案を廻すに謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば國中安穩にして天下泰平ならん。

即ち涅槃經に云く「仏の言く唯だ一人を除いて余の一切に施さば皆讚歎す可し、純陀問うて言く云何なるをか名けて唯除一人と為す、仏の言く此の經の中に説く所の如きは破戒なり、純陀復た言く、我今未だ解せず唯願くば之を説きたまえ、仏純陀に語つて言く、破戒とは謂く一闡提なり其の余の在所一切に布施すれば皆

讃歎すべく大果法を獲ん、純陀復た問いたてまつる、一闍提とは
其の義何ん、仏言わく、純陀若し比丘及び比丘尼・優婆塞・
優婆夷有つてそ惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造つて永く
改悔せず心に懺悔無らん、是くの如き等の人を名けて一闍提の道に
趣向すと為す、若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの
如き重事を犯すと知れども而も心に初めより怖畏懺悔無く肯て
發露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀皆輕賤して言
に過咎多からん、是くの如き等の人を亦た一闍提の道に趣向すと
名く、唯此くの如き一闍提の輩を除いて其餘に施さば一切讚歎
せん」と。

又云く「我れ往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作れり名を
仙予と曰いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心純善に・惡嫉・
有ること無し、善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の

ほうとう 方等を誹謗するを聞き聞き已つて即時に其の命根を断ず、善男子
この 是の因縁を以て是より已来地獄に堕せず」と、又云く「このかたじごく如来昔国王
と為りて菩薩の道を行ぜし時爾所の婆羅門の命を断絶す」と、又
いわ 云く「殺に三有り謂く下中上なり、下とは蟻子乃至一切の
ちくしょう 畜生なり唯だ菩薩の示現生の者を除く、下殺の因縁を以て地獄・
ちくしょう 畜生・餓鬼に堕して具に下の苦を受く、何を以ての故に是の諸の
ちくしょう 畜生に微善根有り是の故に殺す者は具に罪報を受く、中殺とは
ほんぶ 凡夫の人より阿那含に至るまで

是を名けて中と為す、是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に中の苦を受く上・殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり阿鼻大地獄の中に墮す、善男子若し能く一闍提を殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮せず、善男子彼の諸の婆羅門等は一切皆是一闍提なり」已上。

仁王經に云く「仏波斯匿王に告げたまわく是の故に諸の国王に付屬して比丘・比丘尼に付屬せず何を以ての故に王のごとき威力無ければなり」已上。

涅槃經に云く「今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付屬す、正法を毀る者をば大臣四部の衆當に苦治すべし」と。

又云く「仏の言く、迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀劍・弓箭・鉾槊を持すべし」と、

又云く「若し五戒を受持せん者有らば名けて大乘の人となす事を
得ず、五戒を受けざれども正法を護るを為て乃ち大乘と名く、
正法を護る者は当に刀劍器仗を執持すべし刀杖を持すと雖も
我是等を説きて名けて持戒と曰わん」と。

又云く「善男子過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたま
うこと有りき歡喜增益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世
に住すること無量億歳なり余の四十年・佛法の末、爾の時に一の
持戒の比丘有り名を覺徳と曰う、爾の時に多く破戒の比丘有り
是の説を作すを聞きて皆悪心を生じ刀杖を執持し是の法師を
逼む、是の時の国王名けて有徳と曰う是の事を聞き已つて護法の為
の故に即便ち説法者の所に往至して是の破戒の諸の悪比丘
と極めて共に戦鬪す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王
爾の時に於て身に刀劍鉾槩の瘡を被り体に完き処は芥子の如き

許ばかりも無し、爾その時に覺徳尋かくとくついで王わうを讚ほめて言いわく、善よきかな善よきか
な王おう今いま真まに是これ正しょう法ほうを護まもる者ものなり当とう來らいの世よに此この身み当まさに無む量りょうの
法ほう器きと為なるべし、王わう是この時に於おいて法ほうを聞きくことを得え已おつて心こころ大おに
歡かん喜ぎし尋ついで

すなわ 命終して阿 仏の国に生ずるも彼の仏の爲に第一の弟子と
作る、其の王の將 從 人民 眷屬 戰鬪有りし者 歡喜有りし者
一切菩提の心を退せず 命終して悉く阿 仏の国に生ず、覺徳比丘
却つて後壽終つて亦阿 仏の国に往生することを得て彼の仏の
爲に声聞 衆中の第二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲するこ
と有らん時当に是くの如く受持し擁護すべし、迦葉爾の時の王とは
即ち我が身是なり、説法の比丘は迦葉仏是なり、
迦葉正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん、是の因縁
を以て我今日に於て種種の相を得て以て自ら莊嚴し法身不可壞の
身を成す、仏迦葉菩薩に告げたまわく、是の故に法を護らん優婆塞
等は心に刀杖を執持して擁護すること是くの如くなるべし、
善男子我涅槃の後濁悪の世に国土荒乱し互に相抄掠し人民飢餓
せん、爾の時に

多く飢餓きがの爲ゆえの故ゆえに発心しゅっけ出家しゅっけするもの有あらん是かくくの如ごときの人ひとを名なけて禿人とくにんと爲なす、是この禿人とくにんの輩やからしうほう正法しょうほうを護持ごじするを見て駈逐くちくして出いださしめ若もしくは殺ころし若もしくは害がいせん、是かくの故ゆえに我今じかい持戒じかいの人ひと諸もろもろの白衣びやくえの刀杖とうじょうを持つ者ものに依よつて以もつて伴侶はんりよと爲なすことを聴ゆるす、刀杖とうじょうを持じすと雖いえども我是等われこれらを説わいて名なけて持戒じかいと曰いわん、刀杖とうじょうを持じすと雖いえども命いのちを断きずべからず」と。

法華經ほけきょうに云いわく「若もし人信まぜずして此この經きょうを毀謗きぼうせば即すなわち一切世間いっさいせけんの仏種ぶつしゆを断だんぜん、乃至其なの人命終みまうじゆうして阿鼻獄あびごくに入いらん」と已上じじやう。

夫それ經文きょうもん顯然けんねんなり私わがの詞何ことばぞ加くわえん、凡おほそ法華經ほけきょうの如ごとくんば大乘經典だいじやうきんを謗ほうずる者ものは無量むりやうの五逆ごぎやくに勝すぐれたり、故ゆゑに阿鼻大城あびだいじやうに墮だして永いく出いずる期き無なけん、涅槃經ねはんきやうの如ごとくんば設たといい五逆ごぎやくの供くわを許ゆるすと

も謗法ほうほうの施ゆるを許ゆるさず、蟻子ありを殺ころす者ものは必かならず三惡道さんあくどうに落おつ、謗法ほうほうを禁こずる者ものは不ふ退たいの位ゐに登のぼる、所謂いわゆる覺德かくとくとは是これ迦葉かしょう仏ぶつなり、有德うとくとは

すなわしやく
則ち釈迦文なり。

法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり其の禁・実に重し誰か
歸仰せざらんや、而るに謗法の族・正道を忘るの

人・剩あまつさええ法然ほうねんの選択せんちやくに依よつて弥いよよ愚癡ぐちの盲瞽もうこを増ます、是これを以もつて

或あるは彼の遺体いたいを忍しのびて木画もくえの像あらかに露あらし、或あるは其そのの妄説もうせつを信まじて

莠言ゆうげんを模かたぎに彫これり之これを海内かいないに弘ひろめ之これを外かがいに翫もてあそぶ、仰あおぐ所すなわは則すなわち

其そのの家風かふう施ほどこす所すなわは則そち其そのの門弟もんていなり、然しかる間ある或あるは釈迦しゃかの手しゆ指しを切き

つて弥陀みだの印相いんそうに結すなわび、或あるは東方とうほう如来にょらいの鴈宇がんうを改あらためて西土さいど教主きゆうしゆの

鵝王がおうを居すえ、或あるは

四百余回によほつきようの如法經じよほうぎやうを止とどめて西方淨土さいほうじようどの三部經さんぶぎやうと成なし、或あるは

天台大師てんだいだいしの講こうを停とどめて善導講ぜんどうと為なす、此かくの如ごとき群類ぐんるい其そのれ誠まことに

尽つくし難がたし是破は仏ぶつに非あらずや是破は法ほうに非あらずや是破は僧そうに非あらずや、此この

邪義じゃぎ則すなわち選せん択ちやくに依よるなり。

嗟呼ああ悲あしいかな、如來誠諦にょらいじようたいの禁言きんげんに背そむくこと、哀あわれなるかな愚侶ぐりよ

迷惑めいわくの語ごに随したがうこと、早てんく天下てんがの静謐せいひつを思おもわば須すく国中こくにちゆうの謗法ほうほう

を断たつべし。

客の曰く、若し謗法の輩を断じ若し仏禁の違を絶せんには彼の
経文の如く斬罪に行う可きか、若し然らば殺害相加つて罪業何ん
が為んや。

則ち大集経に云く、「頭を剃り袈裟を著せば持戒及び毀戒をも、
天人彼を供養す可し、則ち我を供養するに為りぬ、是れ我が子な
り若し彼を打する事有れば則ち我が子を打つに為りぬ、若し彼
を罵辱せば則ち我を毀辱するに為りぬ、料り知んぬ善悪を論ぜず
是非を扱ふこと無く僧侶為らんに於ては供養を展ぶ可し、何ぞ其の
子を
打辱して忝くも其の父を悲哀せしめん、彼の竹杖の目連尊者を害
せしや永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや久し
く阿鼻の焰に咽ぶ、先証斯れ明かなり後毘最も恐あり、謗法を
誡むるには似たれども既に禁言を破る此の事信じ難し如何が意得

んや。

主人しゅじんの云いく、客明あきらに経文きやうもんを見て猶斯なほこの言ごを成なす心こころの及およばざるか
理りの通とほぜざるか、全ぜんく仏子ぶつしを禁いましむるには非あらず唯偏ただひとえに謗法ぼうぼうを悪にくむな
り、夫それ釈迦しゃかの以前いぜん仏教ぶつぎやうは其その罪つみを斬きると雖いえども能忍のうにんの以後いご経説きやうせつは
すなわそち其その施しを止とむ、然しかれば則すなち四海しかいばん万邦ばんぼう一切いっさいの四衆ししゆう其その悪あくに施ほさ
ず皆みな此こゝの善ぜんに帰かへせば何いかなる難なんか並ならび起おこり何いかなる災わざか競きい来きらん。

客則ち席を避け襟を刷いて日く、仏教斯く区にして旨趣窮め

難く不審多端にして理非明ならず、但し法然聖人の選択現在なり

諸仏・諸経・諸菩薩・諸天等を以て捨閉閣抛と載す、其の文顕然な

り、茲れに因つて聖人国を去り善神所を捨てて天下飢渴し世上

疫病すと、今主人広く経文を引いて明かに理非を示す、故に妄執

既に翻えり

耳目数朗かなり、所詮国土泰平・天下安穩は一人より万民に至る

まで好む所なり楽う所なり、早く一闡提の施を止め永く衆僧尼の

供を致し仏海の白浪を収め法山の緑林を截らば世は羲農の世と成

り国は唐虞の国と為らん、然して後法水の浅深を斟酌し仏家の

棟梁を崇重せん。

主人悦んで日く、鳩化して鷹と為り雀変じて蛤と為る、悦しき

かな汝蘭室の友に交りて麻畝の性と成る、誠に其の難を顧みて

専ら此の言を信ぜば風和らぎ浪静かにして不日に豊年ならん、
但し人の心は時に随つて移り物の性は境に依つて改まる、譬えば猶
水中の月の波に動き陳前の軍の剣に靡くがごとし、汝当座に信ず
と雖も後定めて永く忘れん、若し先ず国土を安んじて現当を祈らんと
欲せば速に情慮を回らしで対治を加えよ、
所以は何ん、薬師経の七難の内五難忽に起り二難猶残れり、所以
他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の三災の内二災早く顕れ
一災未だ起らず所以兵革の災なり、金光明経の内の種種の災禍
一一起ると雖も他方の怨賊国内を侵掠する此の災未だ露れず此の
難未だ来らず、仁王経の七難の内六難今盛にして一難未だ現ぜず
所以
四方の賊来つて国を侵すの難なり 加之 国土乱れん時は先ず鬼神
乱る鬼神乱るるが故に万民乱ると、今此の文に就いて具さに事の

情を案ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡ぶ先難是れ明かなり後災
何ぞ疑わん若し残る所の難悪法の科に依つて並び起り競い来らば
其の時何んが為んや、帝王は国家を基として天下を治め人臣は田園
を領して世上を保つ、而るに他方の賊来つて其の国を侵逼し
自界叛逆して其の地を掠領せば豈驚かざらんや豈騒がざらん
や、国を失い家を滅せば何れの所にか世を遁れん汝須く一身の
安堵を思わば先ず四表の静謐をらん者か、

なかんずく

就 中人の世に在るや各後生を恐る、是を以て或は邪教を信じ、或

は謗法を貴ぶ各是非に迷うことを悪むと雖も而も猶佛法に歸する

ことを哀しむ、何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞を崇め

んや、若し執心翻らず亦曲意猶存せば早く有為の郷を辞して必ず

無間の獄に墮ちなん、所以は何ん、大集經に云く「若し国王有つて

無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護

せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失し、乃至

其の王久しからずして当に重病に遇い寿終の後大地獄に生ずべ

し王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡主・宰官も亦復是くの

如くならんこと。

仁王經に云く「人・仏教を壞らば復た孝子無く六親不和にして

天竜も祐けず疾疫悪鬼日に來つて侵害し災怪首尾し連禍縱横し死

して地獄・餓鬼・畜生に入らん、若し出て人と為らば兵奴の果報な

らん、響ひびきの如ごとく影かげの如ごとく人の夜書よがくに火かは滅めつすれども字そんは存ぞんする
が如ごとく、三界さんがいの果報かほうも亦復またまた是かくくの如ごとしと。

法華經ほけきょうの第二にに云いわく、若もし人信じんじんぜずして此この經きょうを毀謗きぼうせば乃ない至し

其その人命終みよじつちゆうして阿鼻獄あびごくに入いらんと、同第七どうだいしちの卷ぶき不輕品ふきように云いわく

「千劫阿鼻地獄せんじゆうあびじごくに於おいて大苦惱たいくのうを受うく」と、涅槃經ねはんきょうに云いわく、「善友ぜんゆうを遠離おんり

し正法しやうほうを聞きかず惡法あくほうに住すせば是この因緣いんねんの故ゆえに沈没ちんぼつして阿鼻地獄あびじごくに

在あつて、受うくる所しよの身形しんぎやう・縱横じゆうおう八万四千由延はちまんしよせんならんと。

廣ひろく衆經しゆきやうを披ひきたるに專もら謗法ぼうほうを重おもんず、悲あいかな皆みな正法しやうほうの

門いを出いでて深こく邪法じやほうの獄ごくに入いる、愚おろかな各あつ各あつ惡教あくきやうの網あみに懸かつて

鎖とに謗教ぼうきやうの網あみに纏まつる、此この朦霧もうむの迷彼まよいの盛焰じやうえんの底すに沈しずむ豈あ愁あえ

ざらんや豈あ苦あまざらんや、汝なんじ早あやく信仰しんじゆうの寸心すんしんを改あらめて速すみに實乘じつじやうの

一善いちぜんに歸かへせよ、然しかれば則すなち三界さんがいは皆みな仏國ぶつこくなり仏國ぶつこく其それ衰おとろえ

十方じふじやうは悉しつく

ほ^うど^ど 宝^ほ土^うなり 宝^ほ土^ど何^{なん}ぞ 壊^{やぶ}れんや、国^{こく}に衰^{すい}微^び無^{なく}く土^どに破^は壊^え無^{なく}んば身^みは
是^これ安^{あん}全^{ぜん}・心^{こころ}は是^これ禅^{ぜん}定^{じやう}ならん、此^{こゝ}の詞^{ことば}此^{こゝ}の言^{ことば}信^{まこと}ず可^べく崇^{あが}む
可^べし。

客^{きやく}の曰^{いわ}く、今^{こん}生^{じやう}後^ご生^{じやう}誰^{たれ}か慎^{つし}まざらん誰^{たれ}か和^{なご}わざらん、此^{こゝ}の經^{きやう}文^{もん}
を披^{ひら}いて具^{つぶ}に仏^{ぶつ}語^ごを承^{うけたま}るに誹^ひ法^{ぽう}の科^{とが}至^{いた}つて

重く毀法の罪・誠に深し、我一仏を信じて諸仏を抛ち三部経を仰いで諸経を闇きしは、是れ私曲の思に非ず則ち先達の詞に随いしなり、十方の諸人も亦復是くの如くなるべし、今の世には性心を勞し来生には阿鼻に墮せんこと文明かに理詳かなり疑う可からず、弥よ貴公の慈誨を仰ぎ益愚客の癡心を開けり、速に対治を回して早く泰平を致し先ず生前を安じて更に没後を扶けん、唯我が信ずるのみに非ず又他の誤りをも誠めんのみ。

三 立正安国論奥書 文応元年太歳庚申之を勘う正嘉より之を始め文応元年に勘え畢る。

去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戌亥の尅の大地震を見て之を勘う、其の後文応元年太歳庚申七月十六日を以て宿屋・禅門に付して故最明寺入道殿に奉れり、其の後文永元年太歳甲子七月五日

だいみょうじょう

大明星の時 弥 此の災の根源を知る、文応元年太歳庚申より文永五

年太歳戊辰後の正月十八日に至るまで九ヶ年を経て西方大蒙古国自ら

我が朝を襲う可きの由牒状之を渡す、又同六年重ねて牒状

之を渡す、既に勘文之に叶う、之に準じて之を思うに未来亦然る

可きか、此の書は徴有る文なり是れ偏に日蓮が力に非ず法華経の

真文の感応の至す所か。

文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。

四 安国論御勘由来

正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥の時 前代に超え大に地振す、同二

年戊午八月一日大風・同三年己未大飢饉・正元元年己未大疫病同二年庚

申四季に亘つて大疫已まず万民既に大半に超えて死を招き了んぬ、

而る間国主之に驚き内外典に仰せ付けて種種の御祈 有り、爾り

と雖もいへど いちぶんの驗しるしも無く還かえつて飢疫等きえきを増長ぞうちようす。

日蓮世間の体にちれんせけんを見て粗ほほ一切経いつさいきようを勘かんうるに御祈請きしやう驗しるし無く還かえつて

凶悪きようあくを増長ぞうちようするの由道理どうり・文証もんしょう之これを得お了わんぬ、終すまひに止とどむこと無く

勘文かんもん一通いつつうを造つくり作つくして其その名なを立正安国論りっしょうあんこくろんと号なづす、文応元年ぶんおうげんねん申まを七月しちがつ

十六日じゅうろくにち時とき屋戸野やどや入道にゅうどうに付けて

さいみよつじにゆつじ

古最明寺入道殿に奏進申し了んぬ此れ偏に国土の恩を報ぜんが為

なり、其勘文の意は日本国・天神七代・地神五代

百王百代人王第卅代欽明天皇の御宇に始めて百濟国より仏法此の

国に渡り桓武天皇の御宇に至つて其の中間五十余代・二百六十余

年なり、其の間一切経並びに六宗之れ有りと雖も天台・真言の二

宗未だ之れ有らず、桓武の御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に

最澄と云う小僧有り師と号す、已前に渡る所の六宗並に禅宗之を

極むと雖も

未だ我が意に叶わず、聖武天皇の御宇に大唐の鑒真和尚渡す所の

天台の章疏四十余年を経て已後始めて最澄之を披見し粗仏法の

玄旨を覚り了んぬ、最澄・天長地久の為に延暦四年叡山を建立

す桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と号し六宗の御帰依を捨て

一向に天台円宗に帰伏し給う。

えんりやく

同延暦十三年に長岡の京を遷して平安城を建つ、同延暦廿一

年正月十九日高雄寺に於て南都・七大寺の六宗の碩学・勤操・

長耀等の十四人を召し合せ勝負を決談す、六宗の明匠・一問答に

も及ばず口を閉ざること鼻の如し華嚴宗の五教・法相宗の三時・

三論宗の二蔵・三時の所立を破し了んぬ但自宗を破らるるのみに

非ず皆謗法の者為ることを知る、同じき廿九日皇帝勅宣を下して

之を詰る、十四人謝表を作つて皇帝に捧げ奉る、其の後代代の皇帝

叡山えいざん

の御帰依は孝子の父母に仕うるに超え黎民の王威を恐るるに勝れ

り、或御時は宣明を捧げ、或御時は非を以て理に処す等云云、

殊に清和天皇は叡山の惠亮和尚の法威に依つて位に即き帝王の外

祖父・九条右丞相は誓状を叡山に捧げ、源の右將軍は清和の

末葉なり鎌倉の御成敗是非を論ぜず叡山に違背す天命恐れ有る者

か。

然るに後鳥羽院の御宇・建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢
の者有り悪鬼其の身に入つて国中の上下を誑惑し代を挙げて念仏
者と成り人毎に禅宗に趣く、存の外に山門の御帰依浅薄なり国中
の法華・真言の学者棄て置かれ了んぬ、故に叡山守護の天照太神・
正八幡宮・山王七社・国中守護の諸大善神法味をわすして威光
を失い国土を捨て去り了んぬ、悪鬼便りを得て災難を致し結局
他国より此の国を破る可き先相勘うる所なり、又其の後文永

元年がんねん甲子きのえね七月五日すいせいとうほう彗星すいせい東方とうほうに出いで余よ光大こうたい一国土いこくどに及およぶ、此これ又

世よ始はまりてより已このかた来きた無なき所ところの凶きよう瑞ずいなり内ない外げ典てんの学がく者しゃも其その凶きよう瑞ずい

の根こん源げんを知らしらず、予いよいよ弥ひたんよ悲ひ歎たんを増ぞう長ちようす、而しかるに勘かん文もんを捧さげて已い後ご

九くヶ年ねんを經へて今年ことし後ごの正ただい月げつ大たい蒙もう古こ国こくの国こく書しよを看みるに日にち蓮れんが勘かん文もんに

相あ叶いうこと宛あたかも符ふ契けいの如ごとし、仏しる記きして云いく「我わが滅めつ度どの後ご・一ひ百ひゃく余よ

年ねんを經へて阿あ育そか大だい王おう出し世せし我わが舍しゃ利りを弘ひろめんと、周しゅうの第だい四し昭しょう王おうの

御ぎ宇う・大たい史し蘇そ由ゆうが記きに云いく、「一いっ千せん年ねんの外がい声せい教きやう此この土つちに被ひららしめんと

と、聖しょう德とく太たい子しの記きに云いく「我わが滅めつ度どの後ご二に百ひゃく余よ年ねんを經へて山やま城しろの国こくに

平へい安あん城じやうを立たつ可べし」と、天てん台だい大だい師しの記きに云いく「我わが滅めつ後ご二に百ひゃく余よ年ねんの

已い後ご東とう国こくに生なれて我わが正しょう法ぽうを弘ひろめんと等ひら云い云い、皆みな果みして記き文もんの

如ごとし。

日にち蓮れん正しょう嘉かの大地だいち震しん同どうじく大たい風ふう同どうじく飢き饑きん・正が元んねん元ん年ねんの大だい疫えき等とうを

見みて記きして云いく他た国こくより此この国こくを破やぶる可べき先せん相そうなりと、自じ讚さんに似にた

りいえども若もし此この国こ土どを毀き壞えせば復またた仏ぶつ法ぽうの破は滅めつ疑ぎい無なき者しやなり。
而しかに当とう世せの高こう僧そう等とう謗ぼう法ぽうの者しやと同意どういの者しやなり復またた自じ宗しゆの玄げん底ていを
知らざる者しやなり、定ちやくめて勅ちやく宣せん御み教きやう書しよを給たまいて此この凶きやう惡あくを祈き請しやうす
か、仏ぶつ神しん弥いよ瞋しん恚にを作なし国こ土どを破は壞えせん事じ疑ぎい無なき者しやなり。

日に蓮ちん復また之これを対たい治じするの方これ之これを知らる叡えい山ざんを除のいて日に本ほん国こくには但一
人ひとなり、臂たええば日に月がの二につ無なきが如ごとく聖しやう人じんにん肩かたを並なべぎるが故ゆゑなり、
若もし此この事じ妄もう言げんならば日に蓮ちんが持もつ所しよの法ほ華け經きやう守しゆ護ごの十じゆ羅う刹らの治ち罰ばつ
之これを蒙こうらん、但ひ偏へんに国この為ため・法ほの為ため・人ひとの為ためにして身みの為ために之これを申もうさ
ず、復また禅ぜん門もんに對たい面めんを遂とぐ故ゆゑに之これを告こぐ之これを用もちいざれば定ちやくめて後こう悔かい
有ある可かし、恐きやう恐きやう謹きん言げん。

ぶんえい
文永五年太歳戊辰四月五日

ほうがんごぼう
法鑑御房
にちれんかおう
日蓮花押

あんこくろん
安国論別状

立正安国論りっしょうあんこくろんの正本とぎどの、富木殿とぎどのに候に、かきて給たまひ候まうはん、ときどのか、
又。五月廿六日 日蓮にちれん花押かおう

六 守護国家論

正元元年

三十八歳御作

36P

夫れ以んみればそ おも偶たまたま十方微塵じゅうほうみじんの三悪さんあくの身を脱まぬかれて希まれに閻浮日本えんぶにほんの爪上そうじょうの生を受け亦閻浮日域またえんぶにちいき・爪上そうじょうの生を捨てて十方微塵じゅうほうみじん・三悪さんあくの身を受けんこと疑しい無なき者ものなり、然しかるに生を捨てて悪趣あくしゆに墮おつるの縁ゆかり・一ひとに非あらず・或ある妻子さいし・眷属けんぞくの哀憐いれんに依より・或あるは殺生せつじゅうあくぎやく・悪逆あくぎやくの重業じゅうぎょうに依より・或あるは国主こくしゅと成なつて民衆みんしゅうの歎なげきを知らざるに依より・或あるは法の邪正じゃせいを知らざるに依より・或あるは悪師あくしを信あずるに依よる、此この中に於おいても世間せけんの善悪ぜんあくは眼前がんぜんに在あり愚人ぐにんも之これを弁わきまうべし仏法ぶつぽうの邪正じゃせい・師しの善悪ぜんあくに於おいては証果しょうかの聖人しょうにん・尚なお之これを知らず況いわんや末代まつだいの凡夫ぼんぶに於おいておや。

しかのみならず仏ぶつ・日にち・西山しんざんに隠かくれ余光よこう・東域とういきを照てしてより已来このかた・四依しえの慧灯えとうは日にちに滅めつじ三蔵さんぞうの法流ほつりゅうは月げつに濁じよくる実教じつきょうに迷まよえる論師ろんし

は真理しんりの月に雲を副そえ権經ごんきょうに執しゅうする訳者やくしゃは実經じつきょうの珠たまを碎くだきて
権教ごんきょうの石いと成なす、何いかに況いわんやや震旦しんたんの人師にんしの宗義しゅうぎ其その誤あやまり無なからんや
何いかに況いわんやや日本にほん辺土まがの末学まつがく誤あやまりは多おほく実まは少すくき者ものか、随したがつて其その教を
学まなぶ人数にんずうは

竜鱗りゅうりんよりも多おほく得道とくどうの者ものは鱗角りんかくよりも希まれなり、或あるは権教ごんきょうに依よる
が故ゆえに、或あるは時機じき不相ふ相そうの教をに依よるが故ゆえに、或あるは凡聖ぼんせいの教をを弁わえざ
るが故ゆえに、或あるは権實ごんじつ二教にを弁わえざるが故ゆえに、或あるは権經ごんきょうを實教じつきょうと
謂おもうに依よるが故ゆえに、或あるは位ゐの高下こうげを知らざるが故ゆえに、凡夫ぼんぶの習ならひ
仏法ぶつぽうに就おいて生死しじょうじの業ごうを増ますこと其その縁えん・一いつに非あらず。

中昔ちゅうしやく・邪智じゃちの上人じやうにん有あつて末代まつだいの愚人ぐにんの為ために一切いっさいの宗義しゅうぎを破はして
選せん集ちやく一卷いっくわんを造つくる、名なを鸞らん・綽しやく・導だうの三師さんしに依よつて一代いちだいを二門にもんに分わけ
ち実教じつきょうを録ろくして権經ごんきょうに入れ法華ほつげ・真言しんごんの直道じきどうを閉しじて浄土三部じやうどの
隘路あいろを開ひらく、亦また浄土三部じやうどの義ぎにも順したがはずして権實ごんじつの謗法ぼうぽうを成なし永えい

くししやう四聖の種を断じて阿鼻あびの底しずに沈む可べき僻見びやっけんなり、而しるに世人しやうじん之
にしたが順うこと譬たとえば大風たいふうの小樹しょうじゆの枝を吹くが如ごとく門弟もんてい此こゝの人を重おもん
ずること天衆てんしゆうの帝釈たいしゃくを敬うやまうに似たり。

此の悪義を破らんが為に亦多くの書有り所謂・浄土決義鈔・

彈選択・摧邪輪等なり、此の書を造る人・皆碩徳の名一天に弥ると

雖も恐くは未だ選択集 謗法の根源を顕わさず故に還つて悪法の

流布を増す、譬えば盛なる早ばつのに小雨を降せば草木 弥 枯れ

兵者を打つ刻に弱兵を先んずれば強敵 倍 力を得るが如し。

予此の事を歎く間・一卷の書を造つて選択集 謗法の縁起を顕わ

し名づけて守護国家論と号す、願わくば一切の道俗一時の世事を

止めて永劫の善苗を種えよ、今経論を以て邪正を直す信謗は仏説

に任せ敢て自義を存する事無かれ。

分ちて七門と為す、一には如来の経教に於て権実二教を定むる

ことを明し、二には正像末の興廢を明し、三には選択集の謗法の

縁起を明し、四には謗法の者を対治すべき証文を出すことを明し、

五には善知識並に眞実の法には値い難きことを明し、六には法華・

涅槃に依る行者の用心を明し、七には問に随つて答うることを明す。

大文の第一に如来の經教に於て權實二教を定むることを明すとは此れに於て四有り、一には大部の經の次第を出して流類を撰することを明し、二には諸經の浅深を明し、三には大小乘を定むることを明し、四には且らく權を捨てて實に就くべきことを明す。

第一に大部の經の次第を出して流類を撰することを明せば、問うて云く仏・最初に何なる經を説きたまうや、答えて云く華嚴經なり、問うて云く其の証如何、答えて云く六十華嚴經の離世間淨眼品に云く「是の如く我聞く一時・仏・摩竭提国・寂滅道場に在つて始めて正覺を成ず」と、法華經の序品に放光瑞の時・弥勒菩薩・十方世界の諸仏の五時の次第を見る時・文殊師利菩薩に問うて云く、「又諸仏聖主師子の經典の微妙第一なることを演説し給うに

其の聲しようじやう 清淨じやうじやう に柔軟じゆうなんの音おんを出だして諸もろの菩薩ぼさつを教たえ給たまうこと無む数ず億いふ
万まんなることを觀みる亦また方便ほうべん品へんに仏ぶつ、自みづから初しよじやう成じやう道どうの時ときを説いいて云いく
「我わが始しよめ道場どうじやうに坐まし樹じゆを觀かんじ亦また經きやう行ぎやうす、乃ない至し爾その時ときに諸もろの梵ぼん王おう
及および諸しよてんたいしやく天帝たいてん釈じやく護ご世せ四してん天の王う及および

自在じざいてん在天並に余の諸もろもろてんしゅうの天衆けんぞく・眷属せんまん百千万きようけいがっしゅう・恭敬きやうけい合掌がっしやうし礼して我に
転法輪てんぽうりんを請しやうずと此等これらの説ほは法華經ほけきやうに華嚴經けこんきやうの時ときを指さす文ぶんなり、
故ゆえに華嚴經けこんきやうの第一だいいちに云いわく毘沙門天王びしゃもんてんのう略が月天子がつてんし略が日天子にってんし略が釈提桓因しゃくだいかんにん略
大梵略摩醯首羅等略まけいししゅら已上。

涅槃經ねはんぎやうに華嚴經けこんきやうの時ときを説いわいて云いく「既すでに成道じやうどうし已あつて梵天ぼんでん勸請かんじやう
すらく唯願ただわくば如来にやらい当いまに衆生しゆじやうの爲ために広ひろく甘露かんろの門かどを開ひらき給たまうべ
し、乃至ないし・梵王ぼんのう復また言いわく世尊せそん・一切衆生いっさいしゆじやうに凡およそ三種さんしゆ有あり所謂いわゆる・利根りこん・
ちゆうこん・どんこん
中根ちゆうこん・鈍根どんこんなり利根りこんは能よく受うく唯願ただわくば爲ために説たまき給たまえ、仏言いわく
梵王ぼんのう諦あきらかに聴かけ我今いま当いまに一切衆生いっさいしゆじやうの爲ために甘露かんろの門かどを開ひらくべし」亦また三十
三さんに華嚴經けこんきやうの時ときを説いわいて云いく「十二部經じふにぶきやう・修多羅しゆたらの中の微細びさいの義ぎを
我先すに已すでに諸もろもろの菩薩ぼさつの爲ために説いわくが如ごとし」。
此かくの如ごときの文ぶんは皆諸みなしよぶつ仏ぶつ・世せいに出いで給たまいて一切經いっさいきやうの初はつめには必
ず華嚴經けこんきやうを説たまき給たまいし証文しやうもんなり。

問うて云く無量義經に云く「初めに四諦を説き、乃至次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」此くの如き文は般若經の後に華嚴經を説くと相違如何、答えて云く浅深の次第なるか、或は後分の華嚴經なるか、法華經の方便品に一代の次第浅深を列ねて云く「余乗有ること無し若は二若は三」と此の意なり。

問うて云く華嚴經の次に何の經を説き給うや、答えて云く阿含經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序品に華嚴經の次の經を説いて云く「若し人・苦に遭うて老病死を厭うには為に涅槃を説く」方便品に云く「即・波羅奈におもむ、乃至五比丘の為に説く」涅槃經に華嚴經の次の經を定めて云く「即・波羅奈国に於て正法輪を轉じて中道を宣説す」此等の經文は華嚴經より後に阿含經を説くなり。

問うて云く阿含經の後に何の經を説き給うや、答えて云く方等經

なり、問うて云く何を以てのを知るや、答えて云く無量義經に云く
「初に四諦を説き乃至次に方等十二部經を説く」涅槃經に云く
「修多羅より方等を出す」

問うて云く方等とは天竺の語、此には大乘と云う華嚴・般若・
法華・涅槃等は皆方等なり何ぞ独り方等部に限り方等の名を立つ
るや、答えて云く実には華嚴・般若・法華等皆方等なり然りと雖も
今方等部に於て別して方等の名を

立つることは私の義に非ず無量義經・涅槃經の文に顯然たり、阿含の証果は一向小乗なり次に大乘を説く方等より已後皆大乘と云うと雖も大乘の始なるが故に初に従つて方等部を方等と云うなり、例せば十八界の十半は色なりと雖も初に従つて色境の名を立つるが如し。

問うて云く方等部の諸經の後に何の經を説き給うや、答えて云く般若經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く涅槃經に云く「方等より般若を出す」

問うて云く般若經の後に何の經を説き給うや、答えて云く無量義經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く仁王經に云く「二十九年中」無量義經に云く「四十余年」問うて云く

無量義經には般若經の後に華嚴經を列ね涅槃經には般若經の後に涅槃經を列ぬ、今の所立の次第は般若經の後に無量義經を列ぬる

そうい いかん
相違如何、答えて云く涅槃經第十四の文を見るに涅槃經已前の
諸經を列ねて涅槃經に對して勝劣を論じ而も法華經を挙げず、第
九の卷に於て法華經は涅槃經より已前なりと之を定め給う、
法華經の序品を見るに無量義經は法華經の序文なり、無量義經に
は般若の次に華嚴經を列ぬれども華嚴經を初時に遣れば般若經の
後は無量義經なり。

問うて云く無量義經の後に何の經を説き給うや、答えて云く
法華經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて
云く法華經の序文に云く「諸の菩薩の爲に大乘經の無量義經・
菩薩法・仏所護念と名ずくるを説き給う、仏・此の經を説き已つて
結跏趺坐し無量義処三昧に入る」
問うて云く法華經の後に何の經を説き給うや、答えて云く普賢經
を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢

經いわに云いく、「かえつ却かて後ご・三月さんげつ・我われ当あたに般はん涅槃ねはんすべし、乃すなは至いた・如に來よ昔い・
耆き闍しゃ崛くつ山せん及および余よの住じゅう処しよに於おいて已すでに広ひろく一いち実じつの道みちを分ぶん別べつし今いまも此この
處ところに於おいてす」

問いうて云いく普ふ賢げん經きんのの後ごに何いの經きんを説とき給たまうや、答こたえて云いく涅槃ねはん經きん
を説とき給たまうなり、問いうて云いく何いを以もて之これを

知るや、答えて云く普賢經に云く「卻て後・三月・我当に般涅槃すべし」涅槃經三十に云く「如来何が故ぞ二月に涅槃し給うや、亦・如来は初生・出家・成道・轉法輪皆八日を以てす何ぞ仏の涅槃独り十五日なるやと云う」と大部の經・大概是くの如し此より已外諸の大・小・乘・經は次第不定なり、或は阿含經より已後に華嚴經を説き法華經より已後に方等・般若を説く皆義類を以て之を収めて一処に置くべし。

第二に諸經の浅深を明さば、無量義經に云く「初に四諦を説き次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き菩薩の歴劫修行を宣説す」亦云く「四十余年には未だ眞実を顯わさず」又云く「無量義經は尊く過上無し」此等の文の如くんば四十余年の諸經は無量義經に劣ること疑い無き者なり。

問うて云く密嚴經に云く「一切經の中に勝れたり」大雲經に云く

「諸經の転輪聖王なり」金光明經に云く「諸經の中の王なり」と
此等の文を見るに諸大乘經の常の習なり何ぞ一文を瞻て
無量義經は四十余年の諸經に勝ると云うや、答えて云く教主釈尊
若し諸經に於て互に勝劣を説かずんば、大小乗の差別・権実の
不同有るべからず、若し実に差別無きに互に差別浅深等を説かば
諍論の根源・悪業・起罪の因縁なり、爾前の諸經の第一は縁に随つ
て不定なり、或は小乗の諸經に對して第一と、或は報身の寿を説
くに諸經の第一なり、或は俗諦・真諦・中諦等を説くに第一なりと
一切の第一に非ず、今の無量義經の如きは四十余年の諸經に對し
て第一なり。

問うて云く法華經と無量義經と何れが勝れたるや、答えて云く
法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く
無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に

嫌きらわられて今説こんせつの中に入るなり。

問いうて云いく法華經ほけきょうと涅槃經ねはんきょうと何いれが勝すぐれたるや、答いえて云いく法華經ほけきょう勝まるるなり、問いうて云いく何を以もつて之これを知るや、答いえて云いく涅槃經ねはんきょうに自みずか如法華中等にょほつけちゅうと説とき更無所作こうむしよきと云いう、法華經ほけきょうに当説とうせつを指さして難信難解なんげと云いわざるが故ゆなり。

問いうて云いく涅槃經ねはんきょうの文ぶんを見るに涅槃經ねはんきょう已前いぜんをば皆邪見みなじゃけんなりと云いう如何いか

今正こんしょう是其時ぜじ・然善男子ねんぜんなんし・我実成仏がじつじょうぶつ已来いらい・等とと説いく、但ただし諸經しよきょうの勝劣しょうれつに於おては仏みずか、自みずか・我しよせつきょうてんむりょうせんまん所説經典無量千萬億しよせつきょうてんむりょうせんまん・なりと挙あげ了あつて

已説いせつ・今説こんせつ・当説とうせつ・等とと説いく時とき、多宝仏たほうぶつ・地ちより涌現ゆげんして皆か是い眞実しんじつと

定め分身ふんじんの諸仏しよぶつは舌相ぜつそうを梵天ぼんてんに付たま給たまう是かくくの如ごとく諸經しよきょうと法華經ほけきょう

との勝劣しょうれつを定め了あわぬ、此この外しや・釈迦しやか一いち仏ぶつの所説しよせつなれば先せん後ごの

諸經しよきょうに對たいして法華經ほけきょうの勝劣しょうれつを論ろんずべきに非あざるなり、故ゆに涅槃經ねはんきょう

に諸經を嫌う中に法華經を入れず法華經は諸經に勝る由之を
顯わす故なり、但し邪見の文に至つては法華經を覺知せざる一類の
人。涅槃經を聞いて悟を得る故に迦葉童子。自身並に所引を指して
涅槃經より已前を邪見等と云うなり經の勝劣を論ずるには非ず。
第三に大小乘を定むることを明さば、問うて云く大小乘の
差別如何、答えて云く常途の説の如くんば阿含部の諸經は小乘
なり華嚴・方等・般若・法華・涅槃等は大乘なり、或は六界を明す
は小乘。十界を明すは大乘なり、其の外法華經に対して実義を
論ずる時法華經より外の四十余年の諸大乘經は皆小乘にして
法華經は大乘なり。

問うて云く諸宗に亘て我所擲の經を實大乘と謂い余宗所擲の經
を權大乘と云うこと常の習いなり末学に於ては是非定め難し、未だ
聞知せず法華經に対して諸大乘經を小乘と稱する証文如何、

答えて云く宗宗の立義互に是非を論ず就中末法に於て世間出世に就て非を先とし是を後とす自らは非を知らず愚者の歎くべき所なり、但し且く我等が智を以て四十余年の現文を觀るに此の言を破する文無ければ人の是非を信用すべからざるなり、其の上・法華經に對して諸大乘經を小乗と稱することは自答を存すべきに非ず、法華經の方便品に云く「仏は自ら大乘に住し給えり、乃至自ら無上道大乘平等の法を証しき若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我即ち慳貪に墮せん、此の事は為て不可なり」此の文の意は法華經より外の諸經を皆小乗と説けるなり、亦壽量品に云く「小法を樂う」と此等の文は法華經より外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるなり、天台・妙樂の釈に於て四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも他師之を許すべからず故に但經文を出すなり。

第四に且らく權教を闡いて実經に就くことを明さば、問うて
 云く証文如何、答えて云く十の証文有り法華經に云く「但
 大乘經典を受持することを樂て乃至余經の一偈をも受けざれ」
 涅槃經に云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」、是二法華經に
 云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦
 然なり是の如き人は諸仏の歎めたもう所なり、是れ則ち勇猛なり
 是れ則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く」末代に
 於て四十余年の持戒無し、三涅槃經に云く「乘に緩なる者に於ては
 乃ち名けて緩と為す戒緩の者に於ては名けて緩と為さず菩薩
 摩訶薩・此の大乗に於て心懈慢せずんば是を奉戒と名づく正法を
 護らんが為に大乘の水を以て而も自ら澡浴す是の故に菩薩・破戒
 を現すと雖も名づけて緩と為さず」戒を流通する文なり是四法華經
 第四に云く「妙法華經・乃至・皆是真實」の証明なり法華經第八

普賢菩薩の誓に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」法華經第七に云く「我が滅度の後、このごひやくさいの後の五百歳の中に閻浮提に於て断絶せしむること無けん」釈迦如来の誓なり法華經第四に多宝並に十方諸仏来集の意趣を説いて云く「法をして久しく住せしめんが故に此に来至し給えり」是八法華經第七に法華經を行ずる者の住処を説いて云く「如来の滅後に於て心に一心に受持・読・誦・解説・書写して説の如く修行すべし所在の国土に乃至・若は經卷所住の処若は園の中に於ても若は林中の中に於ても若は樹の下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣の舎にても若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても是の中に皆塔を起て供養すべし所以は何ん当に知るべし是の処は即ち是れ道場なり諸仏此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得給う」是九法華經の流通たる涅槃經の第九に云く「我涅槃の後正法未だ滅せず余の八十年・爾時

に是この經閻浮提えんぶだいに於おいて當まさに廣るく流布ふすべし是この時まさ當まさに諸もろもろの惡あく比丘びく
有あるべし是この經きを抄しょうりやく掠りやくして分わかつて多たぶん分ぶんと作なし能なく正しょう法ほうの香しき美こう味み
を滅めつじよす是この諸もろもろの惡あく人にん復また是この如ごとき經き典てんを讀どく誦じゆすと雖いえども如に來らい深じん密みつの
要よう義ぎを滅めつじよ除じよして世せ間けん莊そつ嚴こんの文ぶんを安あん置ちし無む義ぎの語ことばを飾こり前ぜんを抄まて後ご
に著つけ後ごを抄まて前ぜんに著つけ前ぜん後ごを中ちゆうに著つけ中ちゆうを前ぜん後ごに著つけん當まさに知しる
べし是かくくの

如き諸の悪比丘は是・魔の伴侶なり、乃至・譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるが如く諸の悪比丘も亦復是の如し雑るに世語を以てし錯りて是の経を定む多くの衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬することを得ざらしむ是の悪比丘は利養の爲の故に是の経を広宣流布すること能わず分流すべき所少く言うに足らず彼の牧牛の貧窮の女人展転して乳を売るに乃至糜と成して乳味無きが如し、是の大乗經典・大涅槃經も亦復是の如く展転薄淡にして気味有ること無し気味無しと雖も猶余經に勝る是れ一千倍なること彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝る
と爲すが如し何を以ての故に是の大乗經典・大涅槃經は声聞の經に於て最上首爲り」是十。

問うて云く不了義經を捨てて了義經に就くとは、大円覚修多羅了義經・大仏頂如来密因修証了義經是の如き諸大乗經は皆

了義經なり依用と為す可きや、答えて云く了義。不了義は所対に
随つて不同なり二乘・菩薩等の所説の不了義に對すれば一代の仏説
皆了義なり仏説に就て小乘經は不了義・大乘經は了義なり
大乘に就て又四十余年の諸經は不了義經・法華・涅槃・大日經等は
了義經なり而るに円覺・大仏頂等の諸經は小乘及び歴劫修行
の不了義經に對すれば了義經なり法華經の如き了義には非ざるな
り。

問うて云く華嚴・法相・三論等の天台・真言より已外の諸宗の
高祖・各其の依憑の經經に依つて其の經經の深義を極めたりと
おもへり是れ爾る可しや如何、答えて云く華嚴宗の如きは華嚴經に
依つて諸經を判じて華嚴經の方便と為すなり、法相宗の如きは
阿含・般若等を卑しめ華嚴・法華・涅槃を以て深密經に同じ同じく
中道教と立つると雖も亦法華・涅槃は一類の一乘を説くが故に

ふりようぎきょう 不了義経なり深密経には五性各別を論ずるが故に了義経と立つる

なり、三論宗の如きは二蔵を立てて一代を撰し大乘に於て浅深を

論ぜず而も般若経を以て依憑と為す、此等の諸宗の高祖・多分は

四依の菩薩なるか定めて所存有らん是非に及ばず。

然りと雖も自身の疑を晴らさんが為に且らく人師の異解を

闍いて諸宗の依憑の経経を開き見るに華嚴経は旧訳は五十・六十

・新訳は八十・四十・其の中に法華・涅槃の如く一代聖教を集めて

方便と為すの文無し、四乗を説くと雖も其の中の仏乘に於て

十界互具・久遠実成を説かず但し人師に至つては五教を立てて先の

四教に諸経を収めて華嚴経の方便と為す、法相宗の如きは三時教

を立てる時・法華等を以て深密経に同ずと雖も深密経五巻を開き

見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。

三論宗の如きは二蔵を立てる時・菩薩蔵に於て華嚴・法華等を

おさ はんによきよう
収め般若経に同ずと雖も新古の大般若経を開き見るに全く大般若
もつほつけねはん
を以て法華・涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教・法華は漸教等と
にんし いぎよう
は人師の意樂にして仏説に非ざるなり。

ほけきよう
法華経の如きは序分・無量義経に慥に四十余年の年限を挙げ
けこん ほつとう はんによ
華嚴・方等・般若等の大部の諸経の題名を呼んで未顕真実と定め
しやうじゆつ
正宗の法華経に至つて一代の勝劣を定むる時我が所説の經典・

むりようせんまん
無量千万億・已説・今説・当説の金言を吐いて、而も其の中に於て此
ほけきよう
の法華経は最も難信難解なりと説き給う時・多宝仏・地より湧出し
みようほうれんげきよう かいせしんじつ
妙法蓮華経皆是真実と証誠し分身の諸仏・十方より悉く一処に
集つて舌を梵天に付け給う。

今・此の義を以て余推察を加うるに唐土・日本に渡れる所の五千
しよきよう
七千余巻の諸経・以外の天竺・竜宮・四王・天・過去の七仏等の
しよきよう
諸経並に阿難の未結集の経・十方世界の塵に同ずる諸経の勝劣

浅深・難易・掌 中に在り無量千万億の中に豈釈迦如来の所説の諸経を漏らす可けんや已説・今説・当説の年限に入らざる諸経之れ有るべきや願わくば末代の諸人且らく諸宗の高祖の弱文無義を閣きて釈迦・多宝・十方諸仏の強文有義を信ず可し、何に況や諸宗の末学・偏執を先と為し末代の愚者人師を本と為して経論を抛つ者に依憑すべきや、故に法華の流通たる雙林最後の涅槃經に仏迦葉童子菩薩に遺言して言く、「法に依つて人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云。

予世間を見聞するに自宗の人師を以て三昧発得智慧第一と称すれども無徳の凡夫として実經に依つて法門を信ぜしめず不了義の觀經等を以て時機相応の教と称し了義の法華・涅槃を閣いて譏つて理深解微の失を付け如来の「遺言に背いて」人に依つて法に依らざれ

・語ことばに依よつて義ぎに依よらざれ・識しに依よつて智ちに依よらざれ・不ふ了りょう義ぎ經きょうに
 依よつて了りょう義ぎ經きょうに依よらざれと談だんずるに非あらずや、請こい願ねがわくば心こころ有あら
 ん人ひとは思し惟ゆいを加くえよ如に來らいの人に滅めつは既すでに二に千せん二に百ひゃく余あまりの星せい霜そうを送おくれり
 文もん殊じゆ・迦か葉しょう・阿あ難なん・經きょうを結けつ集じゆして已い後ご・四し依えの菩ぼ薩さつ重かさねて出し世じゆし論ろんを
 造つくり經きょうの意いを申まをす末すえの論ろん師しに至いたつて漸ようく誤あやり出し來くわいす亦また訳やく者しやに於おいて
 も梵ぼん漢かん未み達だつの者もの・權けん教きょう宿じやく習じゆのにん有あつて實じつの經きょう論ろんの義ぎを曲まげて權けん
 の經きょう論ろんの義ぎを存ぞんせり、之これに就おいて亦また唐たう土どのにん師し・過か去この權けん教きょうの宿じやく習じゆ
 の故ゆゑに權けんの經きょう論ろん心しんに叶かなう間ま・實じつ經きょうの義ぎを用もちいず・或あるは少すくし白はく義ぎに違ちが
 う文ぶん有あれば理りを曲まげて會え通つうを構かえ以もつて自じ身しんの義ぎに叶かなわしむ、設たい後ご
 に道だう理りと念ねんうと雖いえど・或あるは名み利りに依より・或あるは檀だん那なの歸き依えに依よつて
 權けん宗しゆを捨すてて實じつ宗しゆに入いらず、世せ間けんの道だう俗ぞく亦また無む智ちの故ゆゑに理り非ひを弁わきま
 ず但た・人ひとに依よつて法ぽうに依よらず設たい惡あく法ぽうたりと雖いえど多た人にんの邪じや義ぎに隨したがつ
 て一人ひとりの實じつ說せつに依よらず、而しかるに衆しゆ生じゆの機き多たくは流る轉てんに隨したがう設たい

出離しゆつりを求むとも亦また多分たぶん

は權教ごんきやうに依るよ、但恨うらむらくは惡業あくじゆの身み・善ぜんに付け惡あくに付け生死しじゆを離

れ難がたきのみ、然しかりと雖いえども今の世よの一切いっさいの凡夫ぼんぶ設たい今こん生じゆを損しんすと

雖いえども上うに出いだす所の涅槃經ねはんきやう第九くの文ぶんに依よつて且しばらく法華ほつげ・涅槃ねはんを信しんぜ

よ其そのの故ゆえは世間せけんの浅事せんじすら展轉てんでん多たき時は虚こゝろは多たく實じつは少すくし況いはんやや

仏法ぶつぽうの深義じんぎに於おいてをや、如來にょらいの滅後めつご一いち千せん余ご年の間かん・仏法ぶつぽうに邪義じやぎを

副そえ來きり万ばんに一いちにも正義せいぎ無なきか一いち代だいの聖教しやうきやう多た分ぶんは誤あやり有あるか、

所以ゆえんに心地觀經しんじかんきやうの法爾無漏ほうにむろの種子しゆし・正法華經ほつげきやうの屬累ぞくゑいの經末きやうまつ・

婆沙論ばしゃろんの一十六字じゅうろくじ・撰論じゆろんの識しの八九はつじゆ・法華論ほつげろんと妙法華經みやうほつげきやうとの相違さうい・

涅槃論ねはんの法華煩惱ほつげぼんのう所汚ほつそうしゆの文法ぶんぽう相宗さうしゆの定性じやうじゆつむじゆ・無性むじやうの不成じやうぶつ・撰論宗じゆろんしゆ

の法華經ほつげきやうのほつげきやう一稱なむ南無なむの別時意趣べつじいしゆ・此等これらは皆みな訳者やくしや人師にんしの誤あやりなり、此

の外ほつげきやうに亦また四よん十じゆ余ご年の經經きやうきやうに於おいて多たくの誤あやり有あるか設たいほつげげ・涅槃ねはん

に於おいて誤あやまり有あるも誤あやまり無なきも四よん十じゆ余ご年の諸經しよきやうを捨すてて法華ほつげ・涅槃ねはん

に隨う可し其の証・上に出し了んぬ況や誤り有る諸經に於て信心を致す者・生死を離るべきや。

大文の第二に正像末に就て佛法の興廢有ることを明すとは、之に就て二有り、一には爾前四十余年の内の諸經と淨土の三部經と末法に於て久住・不久住を明す、二には法華・涅槃と淨土の三部經並に諸經との久住・不久住を明す。

第一に爾前四十余年の内の諸經と淨土の三部經と末法に於て久住・不久住を明すとは、問うて云く如來の教法は大小・淺深・勝劣を論ぜず但時機に依つて之を行ぜば定めて利益有るべきなり、然るに賢劫・大術・大集等の諸經を見るに仏滅後・二千余年已後は佛法皆滅して但・教のみ有つて行証有るべからず、隨つて傳教大師の末法灯明記を開くに我延曆二十年辛巳一千七百五十年歳ニ説なり）延曆二十年より已後亦四百五十余歳なり既に末法に入

れり、設たいいききようほうつつと雖いえども行証ぎようしようう無しけん、然しからに於おいおはは仏ぶつつ法ほううを行おくくる者し。方かが一いつも得道とくど有あり難がきか、然しからに雙觀そうかん經きょううの「当とうらいいの世せ・經道きやうどう滅めつじんんに我じひあいかんんを以もつつひひと特とり此この經きを留とどめ止とどめ住じうじせんんこと百ひゃく歳さいならん其それ衆生しゆじゆうの斯この經きに値あつつこと有あらん者しは意いの所願しよがんに隨したがつつてみなとくどう皆得道べす可べし」等らの文ぶんを見みるに釈迦しゃか如によらいいちだいの聖教しようきやうう皆滅みなめつじんの後のち。唯ただ特ひとり雙觀そうかん教きやうの念仏ねんぶつのみを留とどめて衆生しゆじゆうを利益やくす可べしと見みええ了おわわぬ。

此この意趣いししよよに依よつつて粗淨ぼじゆう土家どの諸師しよしの釈しゃかを勸かんがつつるに其その意無いきに非あらず、道どうう綽せくぜん禪師ぜんは「当とうらいい今こん末法まつほうは是これ五濁ごじゆく悪世あくせなり唯淨ただじゆう土どの一門いっの門もんのみ通入み入いるべき路ぢなり」と書かき、善導ぜんだうは尚じやうは「万まんねん年に三寶さん滅めつして此この經きのみ住すむること百年ひゃくなり」と宣のべる、慈恩じおんだいしは「末法まつほうは万まんねん年に余經よきう悉じつく滅し弥陀みだの一教いっりもつつひひと偏へんに増まさんと定ぢめ、日本にほんこくの叡山えいざんの先德せんとくえしん心しん僧都そうずは一いちだいしようきやうの要文ようぶんを集あつつめて末代まつだいの指南しなんを教おしよるる往生おうじようしようしの要集ようしゆの

序に云く「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり道俗貴賤
誰か歸せざる者あらん但し顕密の教法は其の文一に非ず事理の
業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと為す予が如き頑魯
の者豈敢てせんや」乃至・次下に云く「就中念仏の数は多く末代
經道滅尽の後の濁悪の衆生を利する計りなり」と、總じて諸宗の
学者も此の旨を存す可し殊に天台一宗の学者誰か此の義に背く
べけんや如何、答えて云く爾前四十余年の經經は各時機に随つて
而も興廢有るが故に多分は浄土の三部經より已前に滅尽有る可き
か、諸經に於ては多く三乘現身の得道を説く故に末代に於ては
現身得道の者之少きなり十方の往生浄土は多くは末代の機に
蒙らしむ、之に就て西方極樂は娑婆隣近なるが故に最下の浄土な
るが故に日輪東に出で西に没するが故に諸經に多く之を勸む、随つ
て浄土の祖師のみ独り此の義を勸むるのみに非ず天台・妙樂等も

またにぜん
亦爾前の經に依るの日は且らく此の筋あり、亦ひとり人師のみに非ず
りゆつじゆ
てんじん
竜樹・天親も此の意有り、是れ一義なり、亦仁王經等の如きは
じょうど
さんぶきよう
浄土の三部經より尚久く末法万年の後・八千年住す可しとなり、
ゆえ
にぜん
故に爾前の諸經に於ては一定すべからず。

第二に法華・涅槃と浄土の三部經との久住・不久住とを明さば、
問うて云く法華・涅槃と浄土の三部經と何れが先に滅すべきや、答
えて云く法華・涅槃より已前に浄土の三部經は滅す可きなり、問う
て云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經に四十余年の大部
の諸經を挙げ了つて未顕眞実と云う故に雙觀經等の「ひとり此の經
を留む」の言は皆方便なり虚妄なり、華嚴・方等・般若・觀經等の
速疾歴劫の往生成仏は無量義經の実義を以て之を檢うるに無量
むへんふか
しぎ
あそぎ
こつ
無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを
得ず、乃至・險き逕を行くに留難多きが故にと云う經なり、往生

成仏俱じょうぶつともに別時べつじ意趣いしゆなり、大集だいしつ・雙觀經等そうかんきやうの住滅じゆめつの先後せんごは皆隨宜みなずいきの
一説こうかなり、法華經ほけきやうに來らざる已前いぜんは彼の外道げどうの説ごに同じ、譬たとえば
江河かうがの大海たいかいに趣おもむかず民臣みんしんの大王だいうわうに隨したがわわざるが如ごとし、身みを苦しめ行ぎやうを
作たくすとも法華ほつげ・涅槃ねはんに至いたらずんば一分いちぶんの利益りやく無なくく有ゆう因いん無む果かの外道げどう
なり、在世滅ざいせめつ後ご俱ともに教有きやうゆうつて人無なくく・行有ぎやうゆうつて証無しやうむきなり諸木しよぼは枯から
ると雖いえども松しゆじゆ柏はくは萎しぼまず衆草しゆじゆは散ちると雖いえども鞠竹かむらけは變かぜず法華經ほけきやう
も亦復またまた是たくの如ごとし釈尊しやくそんの三説さんせつ・多宝たほうの証しやう明みやう・諸仏しよぶつの舌相ぜつそう偏ひとえに令法りやうほう
久住くじゆうに在あるが故ゆゑなり。

問いうて云いく諸經滅尽しよきやうめつじんの後ひと特とくり法華經ほけきやうのみ留とどめる可べき証文しやうもん如何いかん、答こた
えて云いく法華經ほけきやうの法師品ほうしほんに釈尊しやくそん自ら流通しやくそんみずかせしめて云いく「我が所説しよせつの
經典きやうてん無量むりやう千万億せんまん已すでに説とき今説ことき當まさに説とかん而しかも其その中に於おいて此この
法華經ほけきやう最もも為なれ難信難解なんしんなんげなり」と云いふ、文ぶんの意いは一代いちだい五十年ごじゅうねんの
已今當いこんとうの三説さんせつに於おいて最第一さいだいいちの經きやうなり、八万はちまん聖教しやうきやうの中に殊ことに未み來らいに

留めんと欲して説き給えるなり、故に次の品に多宝如来は地より
涌出し分身の諸仏は十方より一処に來集し釈迦如来は諸仏を
御使として八方・四百万億那由佗の世界に充滿せる菩薩・二乘・
人天・八部等を責めて多宝如来並に十方の諸仏・涌出來集の意趣
は偏に令法久住の為なり、各三説の諸經滅尽の後・慥に未來五濁
難信の世界に於て此の經を弘めんとの誓言を立てよと云える時に二
万の菩薩・八十万億那由佗の菩薩・各誓状を立てて云く「我身命を
愛せず但無上道を惜む」と、千世界の微塵の菩薩・文殊等皆誓つて
云く「我等・仏の滅後に於て、乃至・當に広く此の經を説くべし」と云
云、其の後・仏十喩を挙げ給う、其の第一の喩は川流江河を以て
四十余年の諸經に譬え法華經を以て大海に誓う、末代濁惡の無慚
無愧の大早・の時・四味の川流江河は渴ると雖も法華經の大海は減
少せず等と説き了つて、次下に正しく説いて云く「我滅度の後・

このごひやくさい
後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」と定め了んぬ。

倩文の次第を案ずるに我滅度後の次の後の字は四十余年の

諸経滅尽の後の後の字なり、故に法華經の流通たる涅槃經に云く

「心に無上の佛法を以て諸の菩薩に付すべし諸の菩薩は善能く問答

するを以てなり是くの如き法宝は則ち久住することを得・無量千

世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」已上此の如き等の文は

法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆ可からざる經なり、此の義を知らざ

る世間の学者・大集権門の五五百歳の文を以て此の經に同じ浄土の

三部經より已前に滅尽す可しと存ずる立義は一經の先後起尽を忘

れたるなり。

問うて云く上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師は皆

法華・真言等の諸經に於て末代不相応の釈を作る之に依つて源空並

に所化の弟子・法華・真言等を以て雜行と立て難行道と疎み、
行者をば群賊・惡衆・惡見の人等と罵り、或は祖父が履に類し
語・或は絃歌等にも劣ると云うの語其の意趣を尋ぬれば偏に時機
不相応の義を存するが故なり、此等の人師の釈をば如何に之を
會すべきや、答えて云く釈迦如来一代五十年の説教・一仏の金言に
於て權實二教を分ち權經を捨てて實經に入らしむる仏語顯然た
り、此に於て若但讚仏乘・衆生没在苦の道理を恐れ且らく四十二
年の權經を説くと雖も若以小乘化・乃至於一人・我則墮慳貪の失
を脱れんが為に入大乘為本の義を存し本意を遂げ法華經を説き
給う。

然るに涅槃經に至つて我滅度せば必ず四依を出して權實二教を
弘通せしめんと約束し了んぬ、故に竜樹菩薩は如来の滅後八百年
に出世して十住毘婆沙等の權論を造りて華嚴・方等・般若等の意

を宣べ大論を造りて若法華の差別を分ち、天親菩薩は如来の滅後
 ・九百年に出世して俱舍論を造りて小乗の意を宣べ唯識論を造り
 て方等部の意を宣べ最後に仏性論を造りて法華・涅槃の意を宣べ
 了教 不了教を分ちて敢て仏の遺言に違わず、末の論師並に訳者の
 時に至つては一向に権經に執するが故に実經を會して権經に入れ
 権實雜乱の失・出来せり、亦人師の時に至つては各依憑の經を以て
 本と為すが故に余經を以て権經と為す是より彌・仏意に背く。
 而るに淨土の三師に於ては鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依つ
 て難易・聖淨の二道を立つ若し本論に違して法華真言等を以て難易
 の内に入れれば信用に及ばじ、随つて淨土論註並に安樂集を見るに
 多分は本論の意に違わず、善導和尚は亦淨土の三部經に依つて弥陀
 称名等の一行一願の往生を立つる時・梁・陳・隋・唐の四代の撰論
 師総じて一代聖教を以て別時意趣と定む、善導和尚の存念に違す

るが故に撰論師を破する時・彼の人を群賊等に誓う順次生の功德
を賊するが故に其の所行を難行と称することは必ず万行を以て
往生の素懷を遂ぐる故に此の人を責むる時に千中無一と嫌えり、
是の故に善導和尚も雜行の言の中に敢えて法華・真言等を入れず。
日本国の源信僧都は亦叡山第十八代の座主・慈慧大師の御弟子
なり多くの書を造れることは皆法華を弘めんが為なり、而るに
往生要集を造る意は爾前四十余年の諸経に於て往生・成仏の二
義有り成仏の難行に對して往生易行の義を存し往生の業の中に
於て菩提心觀念の念仏を以て最上と為す、故に大文第十の問答
料簡の中・第七の

諸行勝劣門に於ては念仏を以て最勝と爲し次下に爾前最勝の念仏を以て法華經の一念信解の功德に對して勝劣を判ずる時、一念信解の功德は念仏三昧より勝るる百千万倍なりと定め給えり、当に知るべし往生要集の意は爾前最上の念仏を以て法華最下の功德に對して人をして法華經に入らしめんが爲に造る所の書なり、故に往生要集の後に一乘要決を造つて自身の内証を述ぶる時、法華經を以て本意と爲すなり。

而るに源空並に所化の衆、此の義を知らざるが故に法華・真言を以て三師並に源信所破の難聖雜並に往生要集の序の顕密の中に入れて三師並に源信を法華・真言の謗法の人と爲す、其の上、日本国の一切の道俗を化して法華・真言に於て時機不相応の旨を習わしめ在家・出家の諸人に於て法華・真言の結縁を留む豈仏の記し給う所の悪世中比丘邪智心諂曲のの人に非ずや、亦則ち一切世間の仏種

を断ずの失を免る可けんや。

其上・山門・寺門・東寺・天台並に日本国中に法華・真言を習う

諸人を群賊・悪衆・悪見の人等に誓うる源空が重罪何れの劫にか

其の苦果を経尽す可きや、法華經の法師品に持經者を罵る罪を説

いて云く「若し悪人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前

に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若し人・一つの悪言を以て

在家・出家の法華經を讀誦する者を毀せん其の罪甚だ重し

經文一人の持者を罵る罪すら尚是くの如し況や書を造り日本国の

諸人に罵らしむる罪をや、何に況や此の經を千中無一と定めて

法華經を行ずる人に疑を生ぜしむる罪をや、何に況や此の經を

捨てて觀經等の権經に遷らしむる謗法の罪をや、願わくば一切の

源空が所化の四衆頓に選択集の邪法を捨てて忽に法華經に遷り

今度阿鼻の炎を脱れよ。

問うて云く正しく源空が法華經を誹謗する証文如何、答えて
云く法華經の第二に云く「もし人信ぜずして斯の經を毀謗せば則
一切世間の仏種を断ぜん」經文不信の相貌は人をして法華經を捨
てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を釈して
云く「もし大乗に憎背する者、此は是れ一闡提の因なり衆生をし
て此の法を捨てし

むるを為の故に「論文謗法の相貌は此の法を捨てしむるが故なり、

せんちやくしゅう 選択集 は人をして法華經を捨てしむる書に非ずや閣抛の二字は

ぶつしゅうろん 仏性論の憎背の二字に非ずや、亦法華經誹謗の相貌は四十余年の

しよせきじゆん 諸經の如く小善成仏を以て別時意趣と定むる等なり。

ゆえ 故に天台の釈に云く「若し小善成仏を信ぜずんば則世間の仏種

を断ずるなり」妙樂重ねて此の義を宣べて云く「此の經は遍く六道

の仏種を開す若し此の經を謗せば義・断に当るなり」釈迦・多宝・

十方の諸仏・天親・天台・妙樂の意の如くんば源空は謗法の者なり

所詮 選択集 の意は人をして法華・真言を捨てしめんと定めて書き

了んぬ謗法の義 疑い無き者なり。

大文の第三に 選択集 謗法の縁起を出さば、問うて云く何れの

証拠を以て源空を謗法の者と称するや、答えて云く 選択集 の現文

を見るに一代 聖教 を以て二つに分つ一には 聖道・難行・雜行・二

には淨土・易行・正行なり、其の中に聖・難・雜と云うは華嚴・阿含
 ほうとう はんには ほうけ ねはん だいにちきよう 取意
 方等・般若・法華・涅槃・大日經等なり淨・易・正とは淨土の三部經
 しちうみちうねんぶつ
 の称名・念仏等なり取意聖・難・雜の失を判ずるには末代の凡夫之を
 行ぜば百の時に希に一二を得・千の時に希に三五を得ん・或は千が
 中に一も無し・或は群賊・惡衆・邪見・惡見・邪雜の人等と定むるな
 り、淨・易・正の得を判ずるには末代の凡夫之を行ぜば十は即十生
 し百は即百生せん等なり謗法の邪義是なり。
 問うて云く一代聖教を聖道・淨土・難行・易行・正行・雜行
 と分ち其の中に難・聖・雜を以て時機不相応と称すること源空一人
 の新義に非ず曇鸞・道綽・善導の三師の義なり、此亦此等の入師の
 私案に非ず其の源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり、
 も げんくう ほうほう げんくう ほうほう げんくう ほうほう げんくう ほうほう
 若し源空を謗法の者と称せば竜樹菩薩並に三師を謗法の者と称す
 るに非ずや、答えて云く竜樹菩薩並に三師の意は法華已前の

よんじゅうよねん 四十余年の経経に於て難易等の義を存す、而るに源空より已来
りゅうじゆ 竜樹並に三師の難行等の語を借りて法華・真言等を以て難・雑等
の内に入れぬ、所化の弟子・師の失を知らずして此の邪義を以て正
義と存じ此の国に流布せしむるが故に国中の万民悉く法華・真言に
おい 於て時機不相応の想を作す、其の上世間を貧る天台・真言の学者
世の情に随わんが為に法華・真言に於て時機不相応の悪言を吐いて
せんちやくしゆう 選択集の邪義を扶け、一旦の欲心に依つて釈迦・多宝並に十方
しよぶつ 諸仏の御評定の「令法久住・於閻浮提広宣流布」の誠言を壊り一切
しゆじゆう 衆生をして三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せしむ、偏に是れ
あくせ 悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為得たりと
おも 謂い、乃至・悪鬼其の身に入り仏の方便随宜所説の法を知らざる故
なり。

問うて云く竜樹菩薩並に三師は法華・真言等を以て難・聖・雑の

中に入れざりしを源空私に之を入るとは何を以て之を知るや、
答えて云く遠く余処に証拠を尋ぬ可きに非ず即選択集に之を見
たり、問うて云く其の証文如何、答えて云く選択集の第一篇に
云く道綽禅师・聖道・浄土の二門を立て而して聖道を捨てて
正しく浄土に帰するの文と約束し了つて、次下に安樂集を引いて私
の料簡の段に云く「初に聖道門とは之に就て二有り・一には大乘・
二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等の不同有りと雖も今
・此の集の意は唯顕大及び権大を存す故に歴劫迂回の行に当る
之に準じて之を思うに応に密大及び実大をも存すべし」已上
選択集の文なり、此の文の意は道綽禅师の安樂集の意は法華
已前の大小乗經に於て聖道・浄土の二門を分つと雖も我私に法華
・真言等の実大・密大を以て四十余年の権大乘に同じて聖道門と
称す「準之思之」の四字是なり、此の意に依るが故に亦曇鸞の難易

の二道にどうを引く時またひそか亦私ほっけに法華しんこん・真言もつを以て難行道なんぎょうどうの中なに入れ善導ぜんどう
和尚わじょうの正雜しじょうぞう二行にぎょうを分わかつ時またひそかも亦私ほっけに法華しんこん・真言もつを以て雜行ぞうぎょうの内うちに入い
る総せんぢやくしゅうじて選せんぢやくしゅう択集たくしゅうの十六段じゅうろくだんに亘わたつて無量むりょうの謗法ぼうぼうを作なす根源こんげんは偏ひとえに此
の四字しじより起おこる誤あやまりれるかな畏おそろししきかな。

爰こゝに源空げんくうの門弟もんてい・師しの邪義じゃぎを救すくつて云いわく諸宗しよしゅうの常ならの習たといきい設しやうろんい經論きんろん
の証文しじぶん無なしと雖いえども義類ぎるいの同おつじきを聚あつめて一処いつしよに置おく而しかも選せんぢやくしゅう択集たくしゅう
の意いは法華ほっけ・真言しんこん等らを集あつめて雜行ぞうぎょうの内うちに入れ正行しやうぎょうに對たいして之これを捨す
つ偏ひとえに經きんの法ほつ体を嫌きらうに非あらず但たゞ風勢ふうせい無なき末代まつだいの衆生しゆじやうを常没じやうぼつの凡夫ぼんぶ
と定め此こゝの機きに易行いぎやうの法ほつを撰せんぶ時とき・称名しやうみやうの念仏ねんぶつを以もつて其そのの機きに
當あたり易行いぎやうの法ほつを以もつて諸教しよきやうに勝まさると立つ樞実しゆじつ淺深せんじんの勝劣しやうりやくを詮せんずるに
非あらず、雜行ぞうぎょうと云いうも嫌きらつて雜ざと云いうに非あらず雜ざと云いうは不純ふじゆんを雜ざと
云いう其そのの上うへ諸しよの經論きんろん並ならに諸師しよしも此こゝの意無いきに非あらず故ゆゑに叡山えいざんの先徳せんとく
の往生おうじやう要集いやくしゅうの意偏いへんに是こゝの義ぎなり。

所以ゆえんに往生おうじょう要集ようじゅうの序ついでに云いわく「頭密けんみつの教法きょうほうは其その文ぶんに非あらず
 事理じりの業因ごういん其その行こ惟これ多おほし利智りち精進しじょうじんの人ひとは未いまだ難がたしと為せず予よが
 如ごとき頑魯がんろの者もの豈あに敢あえててせんや是かくの故ゆえに念仏ねんぶつの一門ひとえに依よる」と云云われら、此
 の序ごの意えいは慧心えしん先徳せんとくも法華ほっけ・真言しんごん等を破さするに非あらず但偏ひとえに我等
 頑魯がんろの者ものの機きに当あたつて法華ほっけ・真言しんごんは聞きき難がたく行かたじ難がたきが故ゆえに
 我身がしん鈍根どんこんなるが故あえてなり敢あえてて法体ほつたいを嫌きらうに非あらず、其その上序いげより已外
 正宗しやうじゆうに至いたるまで十門じゅうもん有あり大文だいぶん第八だいぱちの門もんに述いわべて云いわく「今念仏ねんぶつを
 勸すすむることこ是これ余あまの種種しじゆうしゆしゆの妙行めうぎやうを遮しやするに非あらず只是ただこれ男女なんによ・貴賤きせん・
 行住坐臥ぎやうじゆうざがを簡えらばず時处じしよしよえん諸縁しよえんを論ろんぜず之これを修しゆうするに難なんからず乃ないし至し・
 臨終りんじゆうには往生おうじゆうを願求がんくするに其その便宣びんせんを得えること念仏ねんぶつには如しかず」
 已上これら此等ふどうの文ぶんを見るみるに源空げんくうの選択集せんたくしゆうと源信げんしんの往生要集おうじゆうしゆうと一卷いっけん・三
 卷さんの不同ふどう有ありと雖いえども一代いちだい聖教しやうきやうの中なかには易行いぎぎやうを撰まつて末代まつだいの愚人ぐにん
 を救すくわんと欲ほする意趣いしゆは但ただ同じ事ごとなり、源空げんくう上人しやうじん・法華ほっけ・真言しんごんを

難行と立てて悪道に墮せば慧心先徳も亦此の失を免るべからず
如何、答えて云く汝師の謗法の失を救わんが為に事を源信の
往生要集に寄せて謗法の上に弥重罪を招く者なり其の故は
釈迦如来五十年の説教に総じて先き四十二年の意を無量義経に定
めて云く「險逕を行くに留難多き故に」と無量義経の已後を定めて
云く「大直道を行くに留難無きが故に」と仏、自ら難易・勝劣の
二道を分ちたまえり、仏より外等覚已下末代の凡師に至るまで
自義を以て難易の二道を分ち此の義に背く者は外道魔王の説に同
じきか、随つて四依の大士・竜樹菩薩の十住毘婆沙論には法華
已前に於て難易の二道を分ち敢て四十余年已後の経に於て難行の
義を存せず、其の上若し修し易きを以て易行と定めば法華経の
五十展転の行は称名念仏より行じ易きこと百千万億倍なり、若し
亦勝を以て易行と定めば分別功德品に爾前四十余年の八十万億劫

の間の檀・戒・忍・進・念仏三昧等先きの五波羅蜜の功德を以て
法華經の一念信解の功德に比するに一念信解の功德は念仏三昧等
の先きの五波羅蜜に勝る事百千万億倍なり、難易・勝劣と云い
行浅功深と云い觀經等の念仏三昧を法華經に比するに難行の中の
極難行・劣が中の極劣なり。

其の上悪人・愚人を扶くこと亦教の浅深に依る阿含十二年の
戒門には現身に四重五逆の者に得道を許さず、華嚴・方等・般若
雙觀經等の諸經は阿含經より教深き故に勸門の時は重罪の者を
撰すと雖も猶戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず、然りと
雖も決定性の二乗・無性の闡提に於て誠勸共に之を許さず、法華・
涅槃等には唯五逆・七逆謗法の者を撰するのみに非ず亦定性無性
をも撰す、就中末法に於ては常没の闡提之多し豈觀經等の
四十余年の諸經に於て之を扶く可けんや無性の常没・決定性の

二乗は但法華・涅槃等に限り、四十余年の經に依る人師は彼の經の機と取る此の人は未だ教相を知らざる故なり。

但し往生要集は一往序分を見る時は法華・真言等を以て顯密の

内に入れて殆ど末代の機に叶わずと書すと雖も文に入つて委細に一

部三卷の始末を見るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣

を定むる時・觀仏三昧・般舟三昧・十住毘婆沙論・寶積・大集等の

爾前の經論を引いて一切の万行に對して念仏三昧を以て王三昧と

立て了んぬ、最後に一つの問答有り爾前の禪定・念仏三昧を以て

法華經の一念信解に對するに百千万億倍劣ると定む、復問を通ず

る時念仏三昧を万行に勝ると云うは爾前の当分なりと云云、

當に知るべし慧心の意は往生要集を造つて末代の愚機を調べて

法華經に入れんが為なり、例せば仏の四十余年の經を以て權機を

調え法華經に入れ給うが如し。

故に最後に一乗要決を造る其の序に云く「諸宗の権実は古来の
 争いなり俱に経論に拠て互いには是非を執す、余皆方便の歳冬十
 月病中に歎いて云く仏法に遇うと雖も仏意を了せず若し終に手を
 空うせば後悔何ぞ追わん、爰に経論の文義・賢哲の章疏・或は人を
 して尋ねしめ・或は自ら思忖し全く自宗・他宗の偏党を捨つる時・
 専ら権智実智の深奥を深ぐるに終に一乗は眞実の理・五乗は方便
 の説を得る者なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の恨を残さんや」
 已上此の序の意は偏に慧心の本意を顕すなり、自宗他宗の偏党を捨
 つるの時浄土の法門を捨てざらんや一乗は眞実の理と得る時専ら
 法華經に依るに非ずや、源信僧都は永観二年甲申の冬十一月
 往生要集を造り寛弘二年丙午の冬十月の比・一乗要決を作る
 其の中間二十余年なり権を先にし実を後にする宛も仏の如く亦
 竜樹・天親・天台等の如し、汝往生要集を便りとして師の謗法

の失を救わんと欲すれども敢えて其の義類に似ず義類の同じきを以て一処に聚むとならば何等の義類同なるや、華嚴經の如きは二乗界を隔つるが故に十界互具無し方等・般若の諸經は亦十界互具を許さず觀經等の往生極樂も亦方便の往生なり成仏往生俱に法華經の如き往生に非ず皆別時意趣の往生成仏なり。其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易き故に念仏を以て易行と云い四威儀に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行ずるに普賢菩薩並に多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云く「散心に法華を誦し禅三昧に入らず坐立行・一心に法華の文字を念ぜよ」已上此の釈の意趣は末代の愚者を撰せんが為なり散心とは定心に対する語なり誦法華とは八卷・一卷・一字・一句一偈・題目一心一念隨喜の者五十展轉等なり坐立行とは四

威儀を嫌わざるなり一心とは定の一心に非ず理の一心に非ず散心の
中の一心なり念法華文字とは此の経は諸經の文字に似ず一字を
誦すと雖も八万宝蔵の文字を含み一切諸仏の功德を納むるなり
天台大師玄義の八に云く「手に巻を執らざれども常に是の経を読み
口に言声無けれども衆典を誦し仏説法せざれども恒に梵音
を聞き心に思惟せざれども普く法界を照す」已上此の文の意は手に
法華經一部八巻を執らざれども是の経を信ずる人は昼夜十二時の
持經者なり口に誦經の声を出不さざれども法華經を信ずる者は日日
・時時・念念に一切經を読む者なり。

仏の入滅は既に二千余年を経たり然りと雖も法華經を信ずる者
の許に仏の音声を留めて時時・刻刻・念念に我死せざる由を聞かし
む心に一念三千を觀ぜざれども・十方法界を照す者なり此等の
徳は偏に法華經を行ずる者に備わるなり、是の故に法華經を信ず

る者は設たい臨終りんじゆうの時・心に仏を念ねんぜず口くちに経を誦じゆせず道場どうじやうに入いら

ざれども心こころ無なくして法界ほっかいを照てし音ねん無なくして一切いっさい経きやうを誦じゆし卷軸けんじゆうを取とら

らずして法華經ほけきやう八卷はつけんを拳にぎる徳とく之これ有あり是これならば豈あにごん権教けんきやうの念ねん仏者ぶつしやの臨終りんじゆう

正念しやうねんを期ねんして・十念じゆねんの念ねん仏ぶつを唱となえんと欲ほする者しやに・百千万倍勝ひやくせんまんばいまさる

易行いぎやうに非あらずや、故ゆえに天台大師てんだいだいし文句もんくの十じゆに云いく「都すて諸教しよきやうに勝まさるる

が故ゆえに隨喜ずいき功德品くどくと云いう「妙樂みやうらく大師だいいしの法華經ほけきやうは諸經しよきやうより浅機あさきを取とる

而しかるを人師にんし此この義ぎを弁わえざる故ゆえに法華經ほけきやうの機きを深ふかく取とる事ことを

破はして云いく「恐おそらくは人謬あやまつて解げする者しよしん初心しよしんの功德くどくの大おほなることを

測はからずして

功こうを上位じゆうゐに推おしり此この初心しよしんを蔑あなどむ故ゆえに今彼いまの行ぎやうは浅あさく功こうは深ふかきこと

を示しして以もつて経力けんりきを顯あらわす「已上いじやう以もつて顯あらわす経力けんりきの積しやくの意趣いしゆは法華經ほけきやうは觀經かんきやう

等の權經ごんきやうに勝すぐれたるが故ゆえに行ぎやうは浅あさく功こうは深ふかし浅機あさきを撰おさむる故ゆえな

り、若もし慧心えしんの先徳せんとく・法華經ほけきやうを以もつて念ねん仏ぶつより難行なんぎやうと定さだめ愚者ぐしや頑魯がんろ

の者を撰せんせずと云わば恐らくは逆路伽耶陀ぎやくろがやだの罪つみを招まねかざらんや、
恐人くじん謬解みょうげの内に入らざらんや。

総じて天台てんだい・妙楽みょうらくの三大部たいぶの本末ほんまつの意には華經けきよつは諸經しよきよつに漏れた
る愚者ぐしや・悪人あくにん・女人にょにん・常没闡提等じやうぼつせんたいたうを撰せんし給う他師たし・仏意ぶつゐを覺さとらざる
故ゆえに法華經ほけきよつを諸經しよきよつに同じおなじ・或は地住ぢじゆうの機きを取りある凡夫ほんぶに於おいても
別時意趣べつじいしゆの義ぎを存ぞんず、此等これらの邪義じゃぎを破はして人天にんてん四惡しよを以もつて法華經ほけきよつ
の機きと定さだむ、種類しゆるゐ相對そつたいを以もつて過去かこの善惡ぜんあくを收おさむ人天にんてんに生あずる人あに豈あに
過去かこの五戒ごかい・十善じしゆぜん無なからんや等らうと定さだめ了らぬ、若もし慧心えしん此この義ぎに背そむ
かば豈あに天台宗てんだいしゆうを知しれる人にんならんや、而しかるを源空げんくう深く此この義ぎに迷まよう
が故ゆえに往生要集おつじようしゆつに於おいて僻見びやくけんを起おこし自ら失あち他たをも誤あやまり、
適あ宿善しゆくぜん有あつて実教じつきやうに入りながら一切衆生いっさいしゆじゆうを化くわして權教こんきやうに還かえら
しめ刺あえ実教じつきやうを破はせしむ豈あに惡師あくしに非あらずや、彼の久遠下種くおんげしゆ・大通だいつう
結縁けちえんの者ものの如ごとき五百さんぜん・三千さんぜんの塵劫じんこつを經へるが如ごときは法華ほつげの大教だいこつを捨すて

て爾前の権小に遷るが故に後に権經を捨てて六道を回りぬ不輕
輕毀の衆は千劫阿鼻地獄に墮つ、権師を信じ実經を弘むる者に
誹謗を作したるが故なり。

而るに源空我が身唯実經を捨てて権經に入るのみに非ず人を
勸めて実經を捨てて権經に入らしめ亦権人をして実經に入らしめ
ず剩え実經の行者を罵るの罪永劫にも浮び難からんか。

問うて云く十住毘婆沙論は一代の通論なり難易の二道の内に
何ぞ法華・真言・涅槃を入れざるや、答えて云く一代の諸大乘經に
於て華嚴經の如きは初頓後分有り初頓の華嚴は二乗の成不成を
論ぜず方等部の諸經には一向に二乗・無性闡提の成仏を斥う
般若部の諸經も之に同じ総じて四十余年の諸大乘經の意は法華・
涅槃・大日經等の如くには二乗・無性の成仏を許さず、此等を以て
之をうるに爾前・法華の相違は水火の如し滅後の論師・竜樹・天親

も亦また俱ともに千部の論師ろんしなり所造しよぞうの論ろんに通別つうべつの二論に有り通論つうろんに於おいても亦また二有よんじゅうよねんり四十余年つうろんの通論いちだいと一代ごじゅうごねん五十年つうろんの通論つうろんとなり、其その差別さべつを分わけつに決定けつじよう性の二乗にじよう・無性闡提むじようせんたいの成じようぶじよう・不成もつを以もつて論ごんじつの權實ごんじつを定さだむるなり、而しかるに大論だいろんは竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの造らじゆうさんぞう・羅什三蔵らじきんさんざうの訳やくなり此このろんの論ろんにも亦また二乗にじよう作さぶつを許ゆるさず之これを以もつて知しんぬ法華ほつけ已前いぜんの諸大乗しよだいじようきよう・經きやうの意いを申のべたる論ろんなることを。

問いうて云いわく十住じゆうじゆう毘婆沙論びばしやろんの何処どこに二乗にじよう作さぶつを許ゆるさざるの文ぶん出いでたるや、答こたえて云いわく十住じゆうじゆう毘婆沙論びばしやろんの第五ごに云いわく「若もし声聞しやうもん地ち及びおよ辟支ひやくし仏地ぶつちに墮だする是これを菩薩ぼさつの死しと名なく則すなわち一切いっさいの利りを失しす若もし地獄じじよくに墮だすとも是かくの如ごとき畏おそれを生なぜじ若もし二乗にじよう地ちに墮だすれば則すなわち大怖ふい畏なと為なす地獄じじよくの中ちゆうに墮だすとも畢竟ひつぎきようして仏ぶつに至いたることを得とく若もし二乗にじよう地ちに墮だすれば畢竟ひつぎきようして仏道ぶつどうを遮しやす「已上いじやう此このの文ぶん二乗にじよう作さぶつを許ゆるさず宛あたか淨名じやうみやう等のおぶつほうちゆういにてよはいしゆ於お仏法ぶつぽう中以もつ如敗種にほはいしゆの文ぶんの如ごとし。

問うて云く大論は般若經に依つて二乗作仏を許さず法華經に
依つて二乗作仏を許すの文如何、答えて云く大論の一百に云く「問
うて云く更に何の法か甚深にして般若に勝れたる者あれば而も
般若を以て阿難に属累し余經を以て菩薩に属累するや、答えて云く
般若波羅蜜は秘密の法に非ず而るに法華等の諸經は阿羅漢の受決
作仏を説く所以に大菩薩能く受けて持用す譬えば大藥師の能く毒
を以て藥と為すが如し」と、亦九十三に云く「阿羅漢の成仏は論義
者の知る所に非ず唯仏のみ能く了し給う」已上此等の文を以て之を
思うに論師の権実は宛も仏の権実の如し而るを権經に依る人師
猥りに法華等を以て觀經等の権説に同じ法華・涅槃等の義を仮り
て浄土三部經の徳と作し決定性の二乗・無性の闡提・常没の往生
を許す権実雜亂の失脱れ難し、例せば外典の儒者・内典を賊みて
外典を莊るが如し謗法の失免れ難きか仏、自ら権実を分ち給う

其の詮を探るに決定性の二乗・無性有情の成・不成是なり、而るに
此の義を弁えざる訳者・爾前の経経を訳する時・二乗の作仏・
無性の成仏を許す此の義を知る訳者は爾前の経を訳する時・二乗
の作仏無性の成仏を許さず、之に依つて仏意を覺らざる人師も亦
爾前の経に於て決定性・無性の成仏を明すと見て法華と爾前と同
じき思ひを作し、或は爾前の経に於て決定無性を嫌う文を見、此の
義を以て了義経と為し法華・涅槃を以て不了義経と為す共に仏意
を覺らず権実二経に迷えり、此等の誤りを出さば但源空一人に限
るのみに非ず天竺の論師並に訳者より唐土の人師に至るまで其の
義有り、所謂地論師・撰論師の一代の別時意趣・善導・懐感の
法華経の一名南無仏の別時意趣・此等は皆権実を弁えざるが故に
出来する所の誤りなり、論を造る菩薩・経を訳する三蔵・三昧発得
の人師猶以て是くの如し況や末代の凡師に於てをや。

問うて云く汝末学の身として何ぞ論師並に訳者人師を破するや、答えて云く敢えて此の難を致すこと勿れ撰論師並に善導等の積は権実二教を弁えずして猥りに法華経を以て別時意趣と立つ故に天台・妙楽の積と水火を作す間・且らく人師の相違を閣いて経論に付て是非をうる時・権実の二教は仏説より出でたり天親・竜樹重ねて之を定む、此の義に順ずる人師をば且らく之を仰ぎ此の義に順ぜざる人師をば且らく之を用いず敢て自義を以て是非を定むるに非ず但相違を出す計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出さば、此れに二有り、一には仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明し、二には正しく謗法の人・王地に処るをば対治す可き証文を明す、第一に仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明さば、仁王経に云く「仏・波斯匿王に告わく、乃至是の故に諸の国王に

付属して比丘比丘尼・清信男・清信女に付属せず何を以ての故に王の威力無きが故に、乃至此の經の三宝をば諸の国王・四部の弟子に付属す已上大集經二十八に云く「若し国王有つて我が法の滅せんことを見て捨てて擁護せずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失し其の国に三種の不祥の事を出さん、乃至命終して大地獄に生ぜん已上

仁王經の文の如くならば佛法を以て先ず国王に付属し次に四衆に及ぼす王位に居る君・国を治むる臣は佛法を以て先と為し国を治む可きなり、大集經の文の如くならば王臣等・仏道の為に無量劫の間・頭目等の施を施し八万の戒行を持ち無量の佛法を学ぶと雖も国に流布する所の法の邪正を直さざれば国中に大風・旱・大雨の三災起りて万民を逃脱せしめ王臣定めて三惡に墮せん、又雙林最後の涅槃經の第三に云く「今正法を以て諸王・大臣・宰相・

比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付属す、乃至・法を護らざる者をば
とくこじ ならず いわ 「善男子・正法を護持せん者は五戒を受けず
秃居士と名く」又云く
威儀を修せずして応に刀劍・弓箭・鉞槩を持つべし」又云く「五戒を
受けざれども正法を護るを為て乃ち大乘と名く正法を護る者は
まさはら とうけん きじょう しゆうじ ますま とうけん きゆうせん むさく
應に刀劍 器杖を執持すべし」云云四十余年の内にも 梵網 等の戒
の如くならば国王・大臣の諸人等も一切刀杖・弓箭・矛斧鬪戦の
具を畜うることを得ず、若し此を畜うる者は定めて現身に国王の
位・比丘・比丘尼の位を失い後生は三悪道の中に墮つ可しと定め
了んぬ。

而るに今の世は道俗を択ばず弓箭・刀杖を帯せり梵網經の文
の如くならば必ず三悪道に墮せんこと疑無き者なり、涅槃經の文
なく いかん
無くんば如何にしてか之を救わん亦涅槃經の先後の文の如くなら
ば弓箭・刀杖を帯して悪法の比丘を治し正法の比丘を守護せん者

は先世せんぜの四重しじゆう五逆ごぎやくを滅めつして必ず無上道むじやうだうを証あかしせんと定め給たまう。

亦また金光明經こんこうみやうきやうの第六だいろくに云いく「若もし人有にんつて其その国土こくどに於おいて此この經きやう

有ありと雖いえど未いまだ嘗かつてて流布るふせず捨離しゃりの心こころを生なじ聽聞ちやうもんせんことを樂ねがわ

ず亦また供養くやうし尊重そんちやうし讚歎さんたんせず四部よんぶの衆しゆの持經じきやうの人ひとを見て亦復またまた尊重そんちやう

し乃至ないし供養くやうすること能あたわず、遂つひに我等われら及び余あまたの眷屬けんぞく・無量むりやうの諸天しよてんを

して此この甚深じんじんの妙法みやうほうを聞きくことを得えざらしめん甘露かんろの味あじに背そむき

正法しやうほうの流れなれを失うしない威光いこう及び勢せい力りよく有あること無なく惡趣あくしゆを増長ぞうちやうし

人天にんてんを損滅そんめつし生死しじゆじの河かに墜おちて涅槃ねはんの路みちに乖そむかん世尊せそん・我等われら四王しおう並なら

に諸もろの眷屬けんぞく及び葉叉やしや等たがひ斯かくの如ごとき事ことを見て其その国土こくどを捨すて擁護おうえ

の心こころ無なからん但我等われらのみ是この王わうを捨棄しゃきするに非あらず亦無量むりやうの国土こくどを

守護しゆごする諸大善神しよだいぜんじん有あらんも皆悉みなことごとく捨去すてせん既に捨離しゃりし已おりなば

其その国当まさに種種しじゆじゆの災禍さいか有あつて国位こくゐを喪失そうしつすべし一切いっさいの人衆にんしゆう皆善心みなぜんしん

無なけん唯繫縛ただけいばく殺害さつがい瞋諍しんじやうのみ有あつて互たがひに相讒あいざん諂てんし枉まげげて辜無つみきに

および、疫病流行し彗星数出で兩日並び現じ薄蝕恒無く
黒白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を発し暴雨
悪風時節に依らず常に飢饉に遭いて苗実も成らず多く他方の怨賊
有つて国内を侵掠し人民諸の苦悩を受け土地所樂の処有る事無
けん已上。

此の経文を見るに世間の安穩を祈るとも而も国に三災起らば
悪法流布する故なりと知る可し而るに当世は随分国土の安穩を祈
ると雖も去る正嘉元年には大地・大に動じ同二年に大雨大風苗実
を失えり定めて国を喪うの悪法此の国に有るかと勘うるなり、
選択集の或る段に云く「第一に読誦雑行とは上の觀経等の
往生浄土の経を除いて已外・大小・顯密の諸経に於て受持・読
誦する悉く読誦雑行と名く」と書き了つて次に書いて云く「次に二
行の得失を判ぜば法華・真言等の雑行は失・浄土の三部経は得な

り「次下に善導和尚の往生礼讃の十即十生・百即百生・
千中無一の文を書き載せて云く「私に云く此の文を見るに弥よ雑を
捨てて専を修すべし豈百即百生の専修正行を捨てて堅く
千中無一の雑修雑行を執せんや行者能く之を思量せよ」已上、
此等の文を見るに世間の道俗豈諸経を信ず可けんや、次下に亦書
して法華経等の雑行と念仏の正行と勝劣難易を定めて云く「一
には勝劣の義・二には難易の義なり初に勝劣の義とは念仏は是れ
勝・余行は是れ劣なり次に難易の義とは念仏は修し易く諸行は修
し難し」と、亦次下に法華・真言等の失を定めて云く「ゆえ
諸行は機に非ず時を失う念仏往生のみ機に当り時を得たり」亦
次下に法華・真言等の雑行の門を閉じて云く「ずいた
定散の門を開くと雖も随自の後には還つて定散の門を閉ず一度開
て以後永く閉じざるは唯・是れ念仏の一門なり」已上最後の述懐に

いわ 云く「そ すみやかしょうじ 夫れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且らく
 じょうどうもん 聖道門を閣いて撰んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば正雑
 さしお 二行の中に且らく諸の雑行を抛つて撰んで応に正行に帰すべし」
 もんてい 已上門弟此の書を伝えて日本六十余州に充滿するが故に門人・世間
 むち 無智の者に語つて云く「上人は智慧第一の身と為て此の書を造り
 しんじつ 眞実の義と定め法華・眞言の門を閉じて後に開くの文無く抛つて後
 かえり に還て取るの文無し」等と立つる間世間の道俗一同に頭を傾け其の
 かにじ もつせんちやく 義を訪う者には仮字を以て選択の意を宣べ・或は法然上人の物語
 しる を書す間・法華・眞言に於て難を付けて・或は去年の曆・祖父の履に
 たと ある ほけきょう 譬え・或は法華経を読むは管絃より劣ると是くの如き悪書・国中に
 じゅうまん 充滿するが故に法華・眞言等国に在りと雖も聴聞せんことを樂わ
 たまたま ず偶 行ずる人有りと雖も尊重を生ぜず一向念佛者・法華経の
 けちえん な 結縁を作すをば往生の障と成ると云う故に捨離の意を生ず、此

の故に諸天・妙法を聞くことを得ず法味を嘗めざれば威光勢力
 有ること無し四天王並に眷属・此の国を捨て日本国守護の善神捨離
 し已るが故に、正嘉元年に大地大に震い同二年に春の大雨苗を失い
 夏の大旱に草木を枯し秋の大風に菓実を失い飢渴忽に起りて
 万民を逃脱せしむること金光明経の文の如し豈選択集の失に
 非ずや、仏語虚しからざる故に悪法の流布有り既に国に三災起れ
 り而も此の悪義を対治せずんば仏の所説の三悪を脱がる可けんや、
 而るに近年より予「我身命を愛せず但無上道を惜む」の文を瞻る
 間・雪山常啼の心を起し命を大乘の流布に替え強言を吐いて云く
 選択集を信じて後世を願わん人は無間地獄に墮つ可しと、爾時に
 法然上人の門弟選択集に於て上に出す所の悪義を隠し・或は
 諸行往生を立て・或は選択集に於て法華・真言を破らざる由を
 称し、或は在俗に於て選択集の邪義を知らしめざる為に妄語を

構かまえて云いわく日蓮にちれんは念仏ねんぶつを称かなうる人は三惡道さんあくどうに墮たせんと云いうと。

問とうて云いわく法然ほうねん上人じょうにんの門弟もんてい・諸行往生しよぎやうおうじやうを立たつるに失とが有りや否いな

や、答こたえて云いわく法然ほうねん上人じょうにんの門弟もんていと称しよし諸行往生しよぎやうおうじやうを立たつるは逆路ぎやくろ

伽耶陀がやだの者たなり当世とうせも亦また諸行往生しよぎやうおうじやうの義ぎを立たつ而しかも内心ないしんには一向いっこう

念仏往生ねんぶつおうじやうの義ぎを存ぞんし外がいには諸行不謗しよぎやうふぼうの由よしを聞きかしむるなり、抑おさ

此この義ぎを立たつる者は選せん択たく集じふの法華ほつげ・真言しんごん等に於おいて失とがを付つけ捨しや閉へい

閣かく抛ほう・群ぐん賊ぞく邪見じやくけん・惡見あくけん・邪じやく・雜人ぞうにん・千中無せんちゆうむ一いつ等の語ことばを見みざるや否いなや。

第二だいに正まさしく謗ほう法人ほうじんの王地おうちに処おるを対治たいじす可べき証文しよもんを出いださば、

涅槃經ねはんぎやう第三だいに云いわく「懈怠けたいにして戒けいを破はし正しよ法ほうを毀そしる者おうじや

大臣だいじん・四部よんぶの衆しゆに苦治くじすべし善男子ぜんなんし是この諸もろの國王こくおう及びよんぶ四部よんぶの衆しゆは

当まさに罪有つみあるべきや不いななり・世尊せそん・善男子ぜんなんし是この諸もろの國王こくおう及びよんぶ

四部よんぶの衆しゆは尚なお、罪有つみあること無なし」と、又また第十二じふにに云いわく「我むかし昔しよを念おもう

に閻浮提えんぶだいに於たいて大國たいこくの王わうと作つくり名なを仙せん予よと日いいき大乗經典だいじやうきやうてんを愛念あいねん

し敬重し其の心純善にして、そあくしつとおしまあ有ること無かりき、乃至ないし善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず、ばらもん婆羅門の方等を誹謗するを聞き、おわ聞き已つて即時に其の命根を断ちき、ぜんなんしこ善男子是の因縁を以て是より已来地獄に墮せず、このかたじこく已上。

問うて云く、ほんもうきよう梵網經の文を見るに比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪なり而るに源空が謗法の失を顕わすは、あにあび豈阿鼻の業に非ずや、いわ答えて曰く、ねはんぎよう涅槃經の文に云く、かしようぼさつ迦葉菩薩・せそん世尊に言さく、にやらい如来何が故ぞ彼当に阿鼻地獄に墮すべしと記するや、ぜんなんし善男子・ぜんしやう善星比丘は多く眷属有り皆善星は是れ阿羅漢なり是れ道果を得つと謂えり我・あくじゃ彼が悪邪の心を壞らんと欲するが故に彼の善星は放逸を以ての故に地獄に墮せりと記す、いじこく已上此の文に放逸とは謗法の名なり源空も亦彼の善星の如く謗法を以ての故に無間に墮すべし、しよけ所化の衆此の邪義を知らざるが故に源空を以て一切智人と号し、ある或は勢至菩薩

ある ぜんどう けしん
 或は善導の化身なりと云う彼が悪邪の心を壊らんが為の故に謗法
 の根源を顕わす 梵網經の説は謗法の者の外の四衆なり 仏誡めて
 云く「謗法の人を見て其の失を顕わさざれば 仏弟子に非ず」と、
 故に涅槃經に云く「我涅槃の後其の方面に随い持戒の比丘有つて
 威儀具足し 正法を護持せば 法を壊ぶる者を見て即ち能く 駢遣し
 呵責し 徴治せよ 当に知るべし 是人は福を得んこと 無量にして 称計
 す可からず」亦云く「若し善比丘あつて法を壊る者を見て 呵責し
 駢遣し 拳処せずんば 当に知るべし 是の人は 仏法の中の 怨なり 若し
 能く 駢遣し 呵責し 拳処せば 是我弟子 眞の 声聞なり」已上。
 予 仏弟子の一分に入らんが為に 此の書を造り 謗法の失を顕わし
 世間に 流布す 願わくば 十方の 仏陀 此の書に於て 力を 副え 大悪法の
 流布を 止め 一切衆生の 謗法を 救わしめたまえ。
 大文の 第五に 善知識並に 眞実の法に 値い 難きことを 明さば 之に

付いて三有り、一には受け難き人身値い難き仏法なることを明し、
二には受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も悪知識に
値うが故に三悪道に墮する
を明し、三には正く末代凡夫の爲の善知識を明す。

第一に受け難き人身値い難き仏法なることを明さば、涅槃經三
十三に云く「爾の時に世尊・地の少土を取つて之を爪上に置き迦葉
に告げて言く、是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏
に白して言く、世尊・爪上の土は十方所有の土に比べず善男子・人
有り身を捨てて還つて人身を得・三悪の身を捨てて人身を受くるこ
とを得・諸根完く具して中国に生れ正信を具足して能く道を
修習し道を修習し已つて能く正道を修し正道を修し已つて
能く解脱を得・解脱を得已つて能く涅槃に入るは爪上の土の如く、
人身を捨て已つて三悪の身を得・三悪の身を捨てて三悪の身を得・

諸根具せずして辺地に生じ邪倒の見を信じ邪道を修習し解脱
常樂の涅槃を得ざるは十方界の所有の地土の如し經文此の文は多
く法門を集めて一具と為せり人身を捨てて還つて人身を受くるは
爪上の土の如し人身を捨てて三惡道に墮るは十方の土の如し三惡
の身を捨てて人身を受くるは爪上の土の如く三惡の身を捨てて
三惡の身を得るは十方の土の如し人身を受くるは十方の土の
如く人身を受けて六根欠けざるは爪上の土の如し人身を受けて
六根を欠けざれども辺地に生ずるは十方の土の如く中国に生ず
るは爪上の土の如し中国に生ずるは十方の土の如く仏法に値う
は爪上の土の如し、又云く「一闡提と作らず善根を断ぜず是の
如き等の涅槃の經典を信ずるは爪上の土の如し乃至一闡提と作
りて諸の善根を断じ是の經を信ぜざる者は十方界所有の地土の
如し」經文此の文の如くんば法華・涅槃を信ぜずして一闡提と作るは

じゅっぽう
十方の土の如く
ごと
法華
ほっけ
ねはん
涅槃を

信ずるは爪上の土の如し。此の經文を見て、彌感涙押え難し。今、日本国の諸人を見聞するに、多分は權教を行はず。設い身口は實教を行はず。雖も心には亦權教を存ず。

故に天台大師摩訶止觀の五に云く、「其の癡鈍なる者は毒氣深く

入つて本心を失う。故に既に其れ信ぜざれば、則ち手に入らず、乃至、

大罪聚の人なり、乃至、設い世を厭う者も、下劣の乘を翫び、枝葉に

攀付し、狗・作務に狎れ、猴を敬うて、帝釈と為し、瓦礫を崇んで、是れ

明珠なりとす。此黒闇の人、豈道を論ず可けんや。已上、源空並に所化

の衆深く、三毒の酒に酔うて、大通結縁の本心を失う。法華・涅槃に於て

不信の思を作し、一闡提と作り、觀經等の下劣の乘に依て、方便稱名

の瓦礫を翫び、法然房の猴を敬うて、智慧第一の帝釈と思ひ、法華

・涅槃の如意珠を捨てて、如來の聖教を徧するは、權實二教を弁えざ

るが故なり。

故に弘決の第一に云く、「此の円頓を聞いて崇重せざる者は良に
近代大乘を習う者の雑濫に由るが故なり」大乘に於て権実二経を
弁えざるを雑濫と云うなり、故に末代に於て法華経を信ずる者は
爪上の土の如く法華経を信ぜずして権教に墮落する者は十方の
微塵の如し、故に妙楽歎いて云く「像末は情澆く信心寡薄にして
円頓の教法蔵に溢れ函に満れども暫くも思惟せず便ち瞑目に至る
徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛しきや」已上此の釈は偏に妙楽大師
権者たるの間・遠く日本国の当代を鑒みて記し置く所の未来記な
り。

問うて云く法然上人の門弟の内にも一切経蔵を安置し法華経
を行ずる者有り何ぞ皆謗法の者と称せんや、答えて云く一切経を
開き見て法華経を読み難行道の由を称し選択集の悪義を扶けん
が為なり経論を開くに付て弥謗法を増すこと例せば善星の十二

部た經い・提だ婆い達だ多だが六万蔵たの如ごし智ち者しの由よを称しするは自じ身しんを重しくし
悪あく法ほうを扶たけんが為なり。

第二に受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も悪知識に
値うが故に三悪道に墮することを明さば仏藏經に云く「大莊嚴仏
の滅後に五比丘あり一人は正道を知つて多億の人を度し四人は
邪見に住す此四人命終の後阿鼻地獄に墮つ仰ぎ伏し伏し左脇
に臥し右脇に臥すこと各九百万億歳なり、乃至若し在家・出家の
此の人に親近せしもの並に諸の檀越凡そ六百四万億の人あり此の
四師と俱に生じ俱に死して大地獄に在つて諸の燒煮を受く大劫
若し尽くれば是の四悪人及び六百四万億の人・此の阿鼻地獄より
他方の大地獄の中に転生す已上涅槃經三十三に云く「爾時に城中
に一の尼乾有り名を苦得と曰う、乃至善星・苦得に問う答えて
曰く我食吐鬼の身を得・善星諦に聴け、乃至爾の時に善星即ち我
所に還つて是の如き言を作す世尊・苦得尼乾は命終の後に三十三
天に生ぜん、乃至爾時に如来即ち迦葉と善星の所に往き給う

善星比丘遙に我來るを見・見已つて即ち惡邪の心を生ず惡心を以ての故に生身に陥ち入つて阿鼻地獄に墮す「已上善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり仏に隨い奉り出家して十二部經を受け欲界の煩惱を壞り四禪定を獲得せり然りと雖も惡知識たる苦得外道に値い仏法の正義を信ぜざる

に依つて出家の受戒・十二部經の功德を失い生身に阿鼻地獄に墮す苦岸等の四比丘に親近せし六百四万億の人は四師と俱に十方の大阿鼻地獄を經るなり、今の世の道俗は選択集を貴ぶが故に源空の影像を拜して一切經難行の邪義を讀む例せば尼乾の所化の弟子が尼乾の遺骨を礼して三惡道に墮せしが如く願わくば今の世の道俗選択集の邪正を知つて後に供養恭敬を致せ爾らずんば定めて後悔有らん。

故に涅槃經に云く「菩薩摩訶薩惡象等に於て心に怖畏すること

無くなく悪知識あくちしきに於ておいは怖畏ふいの心を生ぜよ何を以てもつの故ゆえに是この悪象等あくぞう
は唯ただ能くよ身を壊りてやぶ心を壊る能あたわずあくちしき悪知識あくちしきは二俱ともに壊る故ゆえに、
是この悪象等あくぞうは唯ただ一身を壊りやぶ悪知識あくちしきは無量むりようの善身むりよう無量むりようの善心ぜんしんを壊るやぶ
是この悪象等あくぞうは唯ただ能くよ不浄ふじようの臭き身を破壊はえすあくちしき悪知識あくちしきは能くよ浄身じようしん
及およびじようしん浄心を壊るやぶ是この悪象等あくぞうは能くよ肉身を壊りやぶ悪知識あくちしきは法身ほつしんを
壊るやぶ悪象あくぞうの為ために殺されては三趣さんしゆに至らずいた悪友あくゆうの為ために殺されては必
ずず

三趣に至る是の悪象等は但身の怨と為り悪知識は善法の怨と為らん是の故に菩薩常に當に諸の悪知識を遠離すべし已上。

請い願わくば今の世の道俗設い此の書を邪義と想うと雖も且ら

く此の念を抛つて十住毘婆沙論を開き其の難行の内に法華經の

入不入をがえ選択集の準之思之の四字を案じて後に是非を致

せ謬つて悪知識を信じ邪法を習い此の生を空うすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の為の善知識を明さば、問うて云く

善財童子は五十余の善知識に値いき其の中に普賢・文殊・觀音・弥勒

等有り常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子

夫人に値い奉りて生死を離れたり此等は皆大聖なり仏世を去つて

後是の如きの師を得ること難しとなす滅後に於て亦竜樹・天親も

去りぬ南岳・天台にも値わず如何が生死を離る可きや、答えて云く

末代に於て眞実の善知識有り所謂法華・涅槃是なり、問うて云く人

を以て善知識と為すは常の習いなり法を以て知識と為すに証有り
や、答えて云く人を以て知識と為すは常の習いなり然りと雖も末代
に於て真の知識無ければ法を以て知識と為すに多くの証有り、
摩訶止觀に云く「或は知識に従い。或は經卷に従い上に説く所の
一実の菩提を聞く」已上此の文の意は經卷を以て善知識と為す、
法華經に云く「若し法華經を閻浮提に行じ受持すること有らん者は
應に此の念を作すべし皆是れ普賢威神の力なり」已上此の文の意は
末代の凡夫法華經を信ずるは普賢の善知識の力なり、又云く「若し
是の法華經を受持し読誦し正憶念し修習し書写すること有らん
者は当に知るべし是の人は即ち釈迦牟尼仏を見るなり仏、口より
此の經典を聞くが如し当に知るべし是の人は釈迦牟尼仏を供養す
るなり」已上此の文を見るに法華經は即ち釈迦牟尼仏なり法華經を
信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り此の經を信ずる者の前

には滅後めつご為りなりと雖もいえども仏の在ざい世せいなり。

又云く「若し我成じやうぶつ仏して滅度めつどの後ご十方じゆつぱうの国土こくどに於おいて法華ほけきやう經を説

く処ところ有らば我が塔とう廟びやう是の經を聴かんが為もつての故ゆえに其その前に涌現ゆげんし

為ために証しょうみやう明みやうを為なさん已上じじやう此の文の意は我等われら・法華ほつげの名号みやうごうを唱となえて

多宝たほう如来本願にらいほんがんの故ゆえに必ず来りたまう、又云く「諸仏しよぶつの十方じゆつぱう世界せかいに

在あつて法を説くを尽ことごとく還かえし一処いつしよに集あめたまう已上じじやう釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱう

の諸しよぶつ佛ぶつ・普賢ふげん菩薩ぼさつ等らは我等われらが善ぜん知ち識しきなり若もし此の義ぎに依よらば我等われら

は亦また宿善しゆくぜん・善財ぜんざい・常啼じやうたい・班足はんそく等らにも勝すぐれたり彼はこんきやう權經ごんきやうの知識ちしきに値あい

われら我等じつきやうは實經じつきやうの知識ちしきに値あえばなり彼はごんきやう權經ごんきやうの菩薩ぼさつに値あい我等われらは

實經じつきやうの佛ぶつ・菩薩ぼさつに値あい奉たてまればなり。

涅槃ねはん經きやうに云く「法ほつげに依よつて人に依よらざれ智ちに依よつて識しきに依よらざれ」

已上じじやう依法いほつと云うは法華ほつげ・涅槃ねはんの常住じやうじゆうの法ほつげなり不依人ふえにんとは法華ほつげ・涅槃ねはん

に依よらざる人ひとなり設たいい佛ぶつ・菩薩ぼさつ為りなりと雖もいえども法華ほつげ・涅槃ねはんに依よらざる佛ぶつ

菩薩は善知識に非ず況や法華・涅槃に依らざる論師・訳者・人師に於てをや、依智とは仏に依る不依識とは等覺已下なり、今の世の世間の道俗・源空の謗法の失を隠さんが為に徳を天下に挙げて権化なりと称す依用すべからず、外道は五通を得て能く山を傾け海を竭すとも神通無き阿含經の凡夫に及ばず羅漢を得・六通を現ずる二乗は華嚴・方等・般若の凡夫に及ばず華嚴・方等・般若の等覺の菩薩も法華經の名字・觀行の凡夫に及ばず設い神通智慧有りと雖も權教の善知識をば用うべからず、我等常没の一闡提の凡夫法華經を信ぜんと欲するは仏性を顕わさんが為の先表なり。

故に妙樂大師の云く「内薫に非ざるよりは何ぞ能く悟を生ぜん故に知んぬ悟を生ずる力は真如に在り故に冥薫を以て外護と為すなり」已上法華經より外の四十余年の諸經には十界互具無し十界互具を説かざれば内心の仏界を知らず内心の仏界を知らざれ

ば外の諸仏も顕われず故に四十余年の権行の者は仏を見ず設い仏
を見るも雖も他仏を見るなり、二乗は自仏を見ざるが故に成仏無
し爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば二乗界の成仏を見ず
故に衆生無辺誓願度の願も満足せず故に菩薩も仏を見ず凡夫も亦
十界互具を知らざるが故に自身の仏界も顕われず、故に阿弥陀
如来の来迎も無く諸仏如来の加護も無し譬えば盲人の自身の影を
見ざるが如し。

今法華經に至つて九界の仏界を開くが故に四十余年の菩薩・二乗
六凡始めて自身の仏界を見る此の時・此の人の前に始めて仏・菩薩
・二乗立ち給う此の時に二乗・菩薩始めて成仏し凡夫も始めて往生
す、此の故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經是なり、
常途の天台宗の学者は爾前に於て自分の得道を許せども自義に
於ては猶自分の得道を許さず然りと雖も此の書に於ては其の義を

つく 尽くさず略して之を記すれば追つて之を記すべし。

大文だいぶんの第六だいろくに法華ほっけ・涅槃ねはんに依るよ行者ぎやうじやの用心ようじんを明あかさば、一代いちだい教門きやうもん

の勝劣しょうりやく・浅深せんじん・難易なんい等に於ておは先の段だんに既にすで之これを出いだす、此この一段いちだんに

於ておは一向いっこうに後世ごせうを念おもう末代まつだい常没じやうぼつの五逆ごぎやく謗法ぼうぼう一闡いつせん提等だいてうの愚人ぐにんの

為ために之これを注つす、略りやくして三有さんうり、一いちには在家ざいけの諸人しよにん正法しやうぼうを護持ごじする

を以もつて生死ししやうじを離あくほつれ悪法あくほつを持もつに依よつて三惡道さんあくどうに墮だす可べきことを

明あかし、二にには但法華經ほっけきやうの名字みやうじ計けりを唱となえて三惡道さんあくどうを離べる可べきことを

を明あかし、三さんには涅槃經ねはんぎやうは法華經ほっけきやうの為ための流通りゆうつうと成なることを明あかす。

第一だいいちに在家ざいけの諸人しよにん正法しやうぼうを護持ごじするを以もつて生死ししやうじを離あくほつれ悪法あくほつを持もつ

に依よつて三惡道さんあくどうに墮だす可べきことを明あかさば、涅槃經ねはんぎやう第三だいさんに云いく「仏ぶつ・

迦葉かしょうに告つげたく能よく正法しやうぼうを護持ごじするの因緣いんねんを以もつての故ゆえに是この金剛身こんかうしん

を成就じやうじゆすることを得えたり」と亦また云いく「時ときに國王こくおう有りあり名なを有あり徳とくと

曰いう、乃至ないし・法まを護まもらんが為もつてゆえの故ゆえに、乃至ないし・是この破戒はかいの諸もろもろの惡あく比丘びくと

極めて共に戦闘す、乃至・王是の時に於て法を聞くことを得已つて
心大に歡喜し尋で即ち命終して阿・仏の国に生ずる已上此の文の
如くならば在家の諸人別の智行無しと雖も謗法の者を対治する
功德に依つて生死を離る可きなり。

問うて云く在家の諸人、佛法を護持す可き様如何、答えて云く
涅槃經に云く「若し衆生有つて財物に貪著せば我当に財を施し
然して後に是の大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし、乃至・先に
愛語を以て其の意に随い然る後に漸く当に是の大乗大涅槃經を
以て之を勧め讀ましむべし若し凡庶の者には當に威勢を以て之に
逼りて讀ましむべし若し・慢の者には我當に其れが爲に僕使と作り
其の意に随順し其れをして歡喜せしめ然して後に復當に大涅槃を
以て之を教導すべし、若し大乘經を誹謗する者有らば當に勢力
を以て之を推きて伏せしめ既に摧伏し已つて然して後に勧め大

ねはん 涅槃を讀ましむべし、
も 若し大乗經を愛樂する者有らば我、
みずか 躬ら
まさ ゆ 當に往いて恭敬し
きょうけい 供養し
くやう 尊重

し讚歎すべし」已上。

問うて云く今の世の道俗偏に選択集に執して法華・涅槃に於ては自身不相応の念を作すの間・護惜建立の心無く偶邪義の由を称する人有れば念仏誹謗の者と称して悪名を天下に雨らす斯れ等
は如何、答えて云く自答を存す可きに非ず仏、自ら此の事を記して云く、仁王經に云く「大王我が滅度の後・未来世の中の四部の弟子諸の小国の王・太子・王子乃ち是れ三宝を住持して護る者転更に三宝を滅破せんこと師子の身中の虫の自ら師子を食うが如くならん外道には非ざるなり多く我仏法を壊り大罪過を得ん正法衰薄し民に正行無く漸く悪を為すを以て其の寿日に減じて百歳に至らん人、仏法を壊りて復孝子無く六親不和にして天神も祐けず疾疫悪鬼日に来りて侵害し災怪首尾し連禍縦横して地獄・餓鬼・畜生に入らん」亦次下に云く「大王未来世の中の諸の小国の王四部の

弟子自ら此の罪を作らん破国の因縁、乃至諸の悪比丘多く名利を
求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を
説かん其の王別えずして此の語を信聴し、乃至其の時に當つて
正法將に滅せんこと久しからず已上。

余 選択集を見るに敢て此の文の未來記に違わず、
法華・真言等の正法を定めて雜行・難行と云い末代の我等に於て
は時機相應せず之を行ずる者は千が中に一も無く仏、還つて法華
等を説くと雖も法華・真言の諸行の門を閉じて念仏の一門を開く
末代に於て之を行ずる者を群賊等と定め当世の一切の道俗に此の
書を信ぜしめ此の義を以て如来の金言と思えり、此の故に世間の
道俗に仏法建立の意無く法華・真言の正法の法水忽ちに竭き天人
減少して三悪日に増長する偏に選択集の悪法に催されて起る所
の邪見なり、此の經文を伝記して「我滅度後」と云えるは正法の末

八十年ぞうほう像法の末八百年まつほう末法の末八千年せんちやくしゅうなり
選せん集ちやくしゅうの出る時は
像ぞうほう法の末まつほう・末法の始はじめなれば八百年の内うちなり
仁にん王おう經きやうの記しるする所の
時じ節せつに当あれり、諸もろの小こ国こく王おうの王おうとは日本にほん国こくの王おうなり
中ちゆう下げ品ぽんの善ぜんは
粟ぞく散さん王おう是これなり「如ごと師し子し身しん中ちゆう虫ちゆう」とは仏ぶつ弟てい子しの源げん空くう是これなり
諸しよ悪あく比ひ丘きゆうと
は所しよ化けの衆しゆ是これなり「説は破ふつ仏ぶつ法ぽう因いん縁ねん・破は国こく因いん縁ねん」とは上あに挙あぐる所の
選せん集ちやくしゅうの

ことばこれ
語是なり「其王不別信聽此語」とは今の世の道俗邪義を弁えずし
て猥りに之を信ずるなり。

お願い願わくば道俗法の邪正を分別して其の後正法に就て後生を
願え今度人身を失い三惡道に墮して後に後悔すとも何ぞ及ばん。

第二に但法華經の題目計りを唱えて三惡道を離る可きことを

明さば、法華經の第五に云く「文殊師利是の法華經は無量の國中に

於て乃至名字をも聞くことを得べからず」第八に云く「汝等但能く

法華名を受持する者を擁護する福量る可らず」提婆品に云く「妙

法華經の提婆品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は

地獄・餓鬼・畜生に墮ちず」大般涅槃經名字功德品に云く「若し

善男子・善女人有つて是の經の名を聞いて惡趣に生ずと云わば是の

処有ること無けん」涅槃經は法華經の流通たるが故に引けるなり。

問うて云く但法華の題目を聞くと雖も解心無くば如何にして三

悪趣あくしゆを脱まぬかれんや、答こたえて云いく法華經ほけきやう流布るふの国くにに生なれて此この經きやうの題名だいめいを聞きき信しんを生なずるは宿善しゆくぜんの深厚しんこうなるに依たれり設たい今こん生じやうは悪人あくにん無智むちなりと雖いえども必かならず過か去この宿善しゆくぜん有あるが故ゆえに此この經きやうの名なを聞きいて信しんを致いたす者ものなるが故ゆえに惡道あくだうに墮だせず。

問とうて云いく過か去この宿善しゆくぜんとは如何いかに、答こたえて云いく法華經ほけきやうの第二だいにに云いく「若もし此この經法きやうぽうを信受しんじゆすること有あらん者は是この人は已すに曾かつて過か去この仏ぶつを見みたてまつり恭敬きやうけいし供養くやうし亦また此この法ぽうを聞きけるなり」法師品ぽうしほんに云いく「又如い如来滅度にょらいめつどの後のち若もし人有にん有あつて妙法華經みやうほけきやうの乃至ないし・一偈いちげ・一句いっくを聞きいて一念いちねんも随喜ずいきせん者は、乃至ないし・当まさに知るべし是この諸人等しよにん已すに曾かつて十萬億じゆうまんの仏ぶつを供養くやうせしなり」流通りつうたる涅槃經ねはんぎやうに云いく「若もし衆生しゆじやう有あつて熙連河沙等きれんがしやの諸佛しよぶつに於おいて菩提心ぼだいしんを發おし乃すなち能よく是この惡世あくせに於おいて是この如かくき經典きやうてんを受持じゆじして誹謗ひぼうを生なぜず善男子ぜんなんし若もし能よく一恒沙等いっしやの諸佛しよぶつ・世尊せそんに於おいて菩提心ぼだいしんを發おすこと有あつて然しかる後のちに乃すなち

能く悪世の中に於て是の法を謗せず是の典を愛敬せん已上。經文。
此等の文の如くんば設い先に解心無くとも此の法華經を聞いて
謗ぜざるは大善の所生なり、夫れ三悪の生を

受くること大地微塵より多く人間の生を受くるは爪上の土より少
し、乃至四十余年の諸経に値うことは大地微塵よりも多く法華・
涅槃に値うことは爪上の土より少し上に挙ぐる所の涅槃経の三十
三の文を見るに設い一字・一句なりと雖も此の経を信ずる者は
宿縁多幸なり。

問うて云く設い法華経を信ずと雖も悪縁に随わば何ぞ三悪道に
墮せざらんや、答えて云く解心無き者権教の悪知識に遇うて実教
を退せば悪師を信ずる失に依つて必ず三悪道に墮す可きなり、彼の
不軽・輕毀の衆は権人なり大通結縁の者の三千塵点を經しは
法華経を退して権教に遷りしが故なり、法華経を信ずる輩は
法華経の信を捨てて権人に随わんより外は世間の悪業に於ては
法華の功德に及ばざる故に三悪道に墮つ可からざるなり。

問うて云く日本国は法華・涅槃有縁の地なりや否や、答えて云く

法華經第八に云く「如來の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ
 断絶せざらしむ」七の卷に云く「広宣流布して閻浮提に於て断絶せ
 しむること無けん」涅槃經第九に云く「此の大乗經典大涅槃經も
 亦復是の如し南方の諸の菩薩の爲の故に當に広く流布すべし」已上
 經文
 三千世界広しと雖も仏、自ら法華・涅槃を以て南方流布の処と
 定む、南方の諸国の中に於ては日本国は殊に法華經の流布す可き
 処なり。
 問うて云く其の証如何、答えて云く肇公の法華翻經の後記に
 云く羅什三蔵・須利耶蘇摩三蔵に値い奉りて法華經を授かる時の
 語に云く「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に
 有縁なり汝慎んで伝弘せよ」上東北とは日本なり西南の天竺より
 東北の日本を指すなり、故に慧心の一乗要決に云く「日本一州
 円機純一なり朝野遠近同じく一乘に歸し緇素貴賤悉く成仏を

期す^{こす}「已上願わくば日本国の道俗選択集の久習を捨てて法華^{ほっけ}・涅槃^{ねはん}の現文に依り肇公慧心の日本記を待みて法華修行の安心を企てよ。

問うて云く法華経修行の者何の浄土を期す可きや、答えて云く法華経二十八品の肝心たる寿量品に云く「我常に此の娑婆世界に在り」亦云く「我常に此処に住し」亦云く「我が此土は安穩」文此の文の如くんば本地久成の円仏は此の世界に在り此の土を捨てて何の土を願う可きや、故に法華経修行の者の所住の処を浄土と^{いづれ}思う可し何ぞ煩^べしく他処を求めんや、故に神力品に云く「若し^{きようかんしよじゆう}経巻所住の処^{とこ}・若は園中に於ても若は林中に於ても若は樹下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣舎にても若は殿堂に在つても若は^{せいんこく}山谷曠野にても、乃至^{ないし}・当に知るべし是の処は即ち是道場なり」^{ねはんぎよう}涅槃經に云く「善男子是の大涅槃微妙の經典流布せらるる処は

ま
當に知るべし其の地は即ち是れ金剛なり此の中の諸人も亦金剛の
こと
如し「已上法華・涅槃を信ずる行者は余処に求む可きに非ず此の經
を信ずる人の所在の処は即ち淨土なり。

問うて云く華嚴・方等・般若・阿含・觀經等の諸經を見るに兜率・

さいほう じゅつぽう じょうど すす せい
西方・十方の淨土を勸む其の上・法華經の文を見るに亦兜率・西方

・十方の淨土を勸む何ぞ此等の文に違して但此の瓦礫荆棘の穢土

を勸むるや、答えて云く爾前の淨土は久遠実成の釈迦如来の所現

の淨土にして實には皆穢土なり、法華經は亦方便壽量の二品なり

壽量品に至つて實の淨土を定むる時・此の土は即ち淨土と定め

了んぬ、但し兜率・安養・十方の難に至つては爾前の名目を改めず

して此の土に於て兜率安養等の名を付く、例せば此の經に三乘の

名有りと雖も三乘有らざるが如し「不須更指觀經等也」の釈の意

是なり、法華經に結縁無き衆生の当世西方淨土を願うは瓦礫の土

をねが樂ほけきう者よなり、法華經ほけきを信しんぜ

ざる衆生しゆじゆは誠まことに分ぶん添その淨土じゆつ無なき者ものなり。

第三だいさんに涅槃ねはん經ぎやうは法華經ほけき流通りゆうつうの爲ために之これを説とき給たまうことを明あかさば、

問もんうて云いわく光宅こうたくの法雲ほつうん法師ほつし並どうじやうに道場どうじやうの慧觀えいかん等の碩德せきとくは法華經ほけきを

以もつて第四時だいじゆの經ぎやうと定め無常むじやうの熟蘇じゆくそみ味みと立つ、天台てんだい智者ちしやだいし大師だいしは法華ほつけ・

涅槃ねはん同味どうみと立つと雖いえども亦また・拾しゆの義ぎを存ぞんす一師いつし共ごんげに權化ごんげなり互たがいに

徳行とくぎやうを具ぐせり何なにを正ただとして我等われらの迷心まよいを晴はらす可べきや、答こたえて

曰いわく設たいといろんしやくしやなと雖いえどもぶつぎやう・仏教ぶつぎやうに違たがひごんじつして權實ごんじつ二教にぎやうを判はんぜずんば

且しばらく疑うたがいいをかう可べし何いかに況いわんやもろこし・人師にんしたる天台てんだい・南岳なんがく・光宅こうたく

慧観・智儼・嘉祥・善導等の釈に於てをや、設い末代の学者為りと雖も依法不依人の義を存し本經・本論に違わずんば信用を加う可し。

問うて云く涅槃經の第十四卷を開きたるに五十年の諸大乘經を挙て前四味に譬え涅槃經を以て醍醐味に譬う諸大乘經は涅槃經より劣ること百千万倍なりと定め了んぬ、其の上迦葉童子の領解に云く「我今日より始て正見を得たり此よりの前は我等悉く邪見の人と名く」と此の文の意は涅槃經已前の法華等の一切の衆典を皆邪見と云うなり、当に知るべし法華經は邪見の經にして未だ正見の仏性を明らめず、故に天親菩薩の涅槃論に諸經と涅槃と勝劣を定むる時、法華經を以て般若經に同じて同じく第四時に撰したり豈正見の涅槃經を以て邪見の法華經の流通と為んや如何、答て云く法華經の現文を見るに仏の本懷残すこと無し、方便品に

云く「今正しく是れ其時なり」寿量品に云く「毎に自ら是の念を
作す何を以てか衆生をして無上道に入ることを得・速かに仏身を
成就することを得せしめん」と神力品に云く「要を以て之を言えば
如来の一切の所有の法、乃至・皆此の經に於て宣示顯説す」已上此等
の現文は釈迦如来の内証は皆此の經に尽くし給う其上・多宝並
に十方の諸仏来集の庭に於て釈迦如来の已今当の語を証し
法華經に如く經無しと定め了んぬ、而るに多宝諸仏・本土に還るの
後に但釈迦一仏のみ異変を存じて還つて涅槃經を説いて法華經を
卑まば誰人か之を信ぜん、深く此の義を存ぜよ、随つて涅槃經の第
九を見るに法華經を流通して説いて云く「是の經・世に出ること彼の
菓実の一切を利益し安樂する所多きが如く能く衆生をして仏性を
見わさしむ法華の中の八千の声聞の記を授かるを得て大果実を
成ずるが如く秋收冬蔵して更に所作無きが如し」と。

此の文の如くんば法華經邪見ならば涅槃經も豈に邪見に非ず
や、法華經は大収・涅槃經は拾なりと見えんぬ、涅槃經は
自ら法華經より劣るの由を称す法華經の当説の文敢て相違無し、
但し迦葉の領解並に第十四の文は

法華經を下す文に非ず迦葉の自身並に所化の衆・今始めて法華經の
所説の常住・仏性・久遠実成を覺る故に我が身を指して此より
已前は邪見なりと云う、法華經已前の無量義經に嫌わるる諸經を
涅槃經に重ねて之を挙げて嫌うなり法華經を嫌うには非ざるなり、
亦涅槃論に至つては此等の論は書付くるが如く天親菩薩の造・菩提
流支の訳なり經文に違すること之多し涅槃論も亦本經に違す当に
知るべし訳者の誤りなり信用に及ばず。

問うて云く先の教に漏れたる者を後の教に之を承け取つて得道せ
しむるを流通と称せば阿含經は華嚴經の流通と成る可きや、乃至
法華經は前四味の流通と成る可きや如何、答えて曰く前四味の
諸經は菩薩・人天等の得道を許すと雖も決定性の二乗・無性闡提
の成道を許さず、其の上仏意を探りて実を以て之をうるに亦
菩薩・人天等の得道も無し十界互具を説かざるが故に久遠実成無

きが故に、問うて云く証文如何、答えて云く法華經方便品に云く
「もし小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我則ち慳貪に
墮せん此の事は為て不可なり」已上此の文の意は今選択集の邪義を
破せんが為に余事を以て詮と為す故に爾前得道の有無の実義は
これを出さず追つて之をうべし、但し四十余年の諸経は実に凡夫
の得道無きが故に法華經は爾前の流通と為らず法華經に於て
十界互具・久遠実成を顕わし了んぬ故に涅槃經は法華經の為に
流通と成るなり。

大文の第七に問に随つて答うとは、若し末代の愚人上の六門に
依つて万が一も法華經を信ぜば權宗の諸人、或は自惑に依り、或は
偏執に依つて法華經の行者を破せんが為に多く四十余年並に涅槃
等の諸経を引いて之を難ぜん、而るに權教を信ずる人は之多く
或は威勢に依り、或は世間の資縁に依り人の意に随つて世路を

亘らんが爲に、或は権教には学者多く、実教には智者少し、是非に就て万が一も実教を信ずる者有るべからず、是の故に此の一段を撰んで権人の邪難を防がん。

問うて云く諸宗の学者難じて云く「華嚴經は報身如来の所説・七

処・八会・皆、頓極頓証の法門なり、法華經は応身如来の所説・

教主既に優劣有り、所説の法門に於て何ぞ浅深無からん随つて

対告衆も法慧・功德林・金剛幢等なり、永く一乘を雑えず、法華經は

舍利弗等を以て対告衆と爲す、宗難、法相宗の如きは解深密經を

以て依憑と爲し難を加えて云く「解深密經は文殊・觀音等を以て

対告衆と爲す、勝義生菩薩の領解には一代を有、空・中と詮す其の

中の中とは華嚴・法華・涅槃・深密等なり、法華經の信解品の五時の

領解は四大声聞なり、菩薩と声聞と勝劣天地なり、「浄土宗の如き

は道理を立てて云く「我等は法華等の諸經を誹謗するに非ず、彼等

の諸経しよぎょうは正ただいには大人だいにんの為ため傍かたわらには凡夫ぼんぶの為ためにす断惑証理だんなくしゅうり・理深りじんの教きょうに
 して末代まつだいの我等われら之これを行なずるに千人せんにんの中に一人ひとりも彼の機きに当あらず
 在家ざいけの諸人しよにん多た分ぶんは文字もんじを見みず亦また華嚴けごん・法相ほつそう等らの名なを聞きかず況いはんやや
 其その義ぎを知ららんや、浄土宗じょうつねの意いは我等われら凡夫ぼんぶは但ただ口くちに任まかせて六字りくじの
 名号みやうごうを称しょうすれば現在げんざいに阿弥陀如来あみだにょらい二十五にじふごの菩薩ぼさつ等らを遣つかわし身みに影かげ
 の随したがう如ごとく百重千重ひゃくじゆうせんじゆうに行な行者いんにょうを困繞こんじょうして之これを守まもり給たまう、故ゆえに現世げんせいに
 は七難即滅ひちなんそくめつ・七福即生ひちふくそくしじゆう乃至な臨終りんじゆうの時ときは必かならず来迎らいじゆう有あつて観音かんのんの
 蓮台れんだいに乗のり須臾しゆゆの間に浄土じよつどに至いたり業ごうに随したがつて蓮華れんげ開ひらけ法華經ほけきやうを聞きい
 て実相じつそうを覺さとる何なんぞ煩わづらいしく穢土えいどに於おいて余行よぎやうを行なじて何いずれの詮あか有ある
 但ぜん万事ばんじを抛なげつて一向いっこうに名号みやうごうを称しょうせよと云いふ、禅宗ぜんじゆう等らの人ひと云いく
 『一代いちだい聖教しじょうきやうは月つきを指さす指さし・天地日月等てんちにちがつも汝等なんじらが妄心もうしんより出いでたり
 十方じゅうぽうの浄土じよつども執心しじゆしんの影像えいざうなり釈迦しゃか十方じゅうぽうの仏陀ぶつだは汝なんじが覺心かくしん
 所しよへん変もんじ・文字もんじに執しじゆうする者ものは株くしげを守まもる愚人ぐにんなり我だるが達磨大師だるまだいしは文字もんじを

立てず方便を仮らず一代聖教の外に仏迦葉に印して此の法を伝

う法華經等は未だ眞實を宣べず已上。

此等の諸宗の難一に非ず如何ぞ法華經の信心を壞らざる可し

や、答て云く法華經の行者は心中に「四十余年已今当皆是眞實・

依法不依人」等の文を存し而も外に語に之を出さず難に隨て之を

問うべし抑所立の宗義は何の經に依るや、彼、經を引かば引くに

隨つて亦之を尋ねよ、一代五十年の間の說の中に法華經より先か後

か同時なるか亦先後不定なるかと、若し先と答えば未顕眞實の文

を以て之を責めよ敢えて彼の經の說相を尋ぬること勿れ、後と答え

ば當說の文を以て之を責めよ、同時と答えば今說の文を以て之を

責めよ、不定と答えば不定の經は大部の經に非ず一時一会の說にし

て亦物の數に非ず其の上、不定の教と雖も三說を出でず、設い百千

万の義を立つと雖も四十余年の文を載せて虚妄と稱せざるより外

は用うべからず、仏の遺言に不依不了義經と云うが故なり。

亦また智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立て難なんずと雖いえども法華・涅槃ねはんに違いする人師にんしに於おては用うべからず依法不依人の金言きんげんを抑おぐが故ゆなり。

亦また法華經を信ぐぜん愚者ぐしゃの爲ために二種の信心しんじんを立つ、一には仏おに就おて

信おを立て二には經おに就おて信おを立つ、仏おに就おて信おを立つとは權宗ごんしゅうの

學者がくしゃ来きり難なんじて云わん善導ぜんどう和尚わじょうは三昧さんまい發得はつとくの人師にんし・本地ほんち弥陀みだの

化身けしんなり慈恩じおん大師だいしは十一面じゅういちめん觀音くわんおんの化身けしん亦また筆端ひつたんより舍利しゃりを雨ふらす

此等これらの諸人しよにんは皆彼彼の經經きんぎょうに依よつて皆証みな有り何なんぞ汝彼なんじの經きんぎょうに

依よらず亦また彼の師しの義ぎを用もちいざるや、答こたえて云いく汝聞なんじけ一切いっさいの權宗ごんしゅう

の大師だいし先德せんとく並とくに舍利しゃり弗ほつ・目連もくれん・普賢ふげん・文殊もんじゆ・觀音くわんおん乃至なんじ阿弥陀あみだ・藥師やくし・

釈迦しゃか如來にょらい・我等われら並とくに十方じゅうつぽうの諸人しよにんの前に集あまりて説ほいて法華經ほけきょうは

汝等なんじらが機きに叶かなわず念ねん仏等ぶつどうの權經ごんぎょうの行ぎやうを修しゆして往生おうじやうを遂とげ後に

法華經を覺ると云わん是の如き説を聞くと雖も敢えて用う可からず、其の故は四十余年の諸の經には法華經の名字を呼ばず何れの處にか機の堪不堪を論ぜん、法華經に於ては釈迦・多宝・十方諸仏一處に集りて撰定して云く法をして久住せしむ如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ、此の外に今・仏出来して法華經を末代不相応と定めば既に法華經に違す知んぬ此の仏は涅槃經に出す所の滅後の魔・仏なり之を信用す可からず、其の已下の菩薩・声聞・比丘等は亦言論するに及ばず此等是不審無し涅槃經に記する所の滅後の魔の所變の菩薩等なり、其の故は法華經の座は三千大千世界の外四百万億阿僧祇の世界なり其の中に充滿せる菩薩・二乘・人天・八部等皆如来の告勅を蒙むり各各所在の国土に法華經を弘む可きの由之を願いぬ、善導等若し権者ならば何ぞ竜樹・天親等の如く権教を弘めて後に法華經を弘めざ

るほけきやよつ法華經の告ごつち勅ちよくの数に入らざるや何なんぞごと仏の如ごとくしんき權教きやうをひろ弘めて後
に法ほけき華經よつをひろ弘めざるや、若もし此こゝの義ぎ無なくんばた設たいい仏な為なりといえ雖ともこれ之を
信べず可べからず今は法ほけき華經よつの中のい仏を

信ず故に仏に就て信を立つと云うなり。

問うて云く釈迦如来の所説を他仏之を証するを実説と称せば
何ぞ阿弥陀経を信ぜざるや、答えて云く阿弥陀経に於ては法華経
の如き証 明無きが故に之を信ぜず、問うて云く阿弥陀経を見るに
釈迦如来の所説の一日七日の念仏を六方の諸仏舌を出し三千を
覆うて之を証 明せり何ぞ証 明無しと云うや、答えて云く阿弥陀
経に於ては全く法華経の如き証 明無く但釈迦一仏、舍利弗に向つ
て説いて言く我、一人阿弥陀経を説くのみに非ず六方の諸仏舌を出
し三千を覆うて阿弥陀経を説くと云う此等は釈迦一仏の説なり
敢えて諸仏来りたまわず、此等の権文は四十余年の間は教主も
権仏の始覚の仏なり、仏、権なるが故に所説も亦権なり故に
四十余年の権仏の説は之を信ず可からず、今の法華・涅槃は久遠
実成の円仏の実説なり十界互具の実言なり亦多宝・十方の諸仏来

りて之を証明し給う故に之を信ずべし阿弥陀經の説は無量義經の
みけんしんじつ ことば やぶ おわん しゃかいちぶつ ことば しよみよう
未顕眞実の語に壞れ了ぬ全く釈迦一仏の語にして諸仏の証明に
は非ざるなり。

二に經に就て信を立つとは、無量義經に四十余年の諸經を挙げて
みけんしんじつ ねはんぎよう いわ によらい こもう いえと も
未顕眞実と云う、涅槃經に云く「如来は虚妄の言無しと雖も若し
衆生・虚妄の説に因つて法利を得と知れば宜しきに随つて方便して
すなわため これと たま いわ 了義經に依つて不了義經に依らざ
則ち為に之を説き給う」又云く「了義經に依つて不了義經に依らざ
れ」已上是の如きの文一に非ず皆四十余年の自説の諸經を虚妄・
ほうべん ふりようぎ ませつ しよう こ みな して其の經を捨てて法華・
ねはん 方便・不了義・魔説と称す是れ皆人をして其の經を捨てて法華・
涅槃に入らしめんが為なり、而るに何の恃み有つて妄語の經を留め
て行儀を企て得道を期するや、今權教の情執を捨て偏に実經を
信ず故に經に就て信を立つと云うなり。

問うて云く善導和尚も人に就て信を立て行に就て信を立て何の

差別有らんや、答えて云く彼は阿弥陀経等の三部に依つて之を立て
一代の経に於て了義不了義経を分たずして之を立つ、故に法華・
涅槃の義に対して之を難ずる時は其の義壞れ了んぬ。 守護国家

論

七

災難対治抄

正元二年 三十九歳御作

78P

国土に大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の種種の災難の起る根源を知りて対治を加う可きの勅文。

金光明経に云く「もし人王有りて其の国土に於て此の経有りといえども未だ嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず亦

雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず亦

供養し尊重し讚歎せず四部の衆の持経の人を見て亦復尊重し

乃至供養すること能わず遂に我等及び余の眷属無量の諸天をして

此の甚深の妙法を聞くことを得ず甘露の味に背き正法の流を失い

威光及び勢力有ること無らしむ悪趣を増長し人天を損滅し

生死の河に墜ちて涅槃の路に背かん、世尊・我等四王並に諸の眷属

及び葉叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無けん

但我等是の王を捨棄するのみに非ず亦無量の国土を守護する諸天

善神有らんも皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の国に當に種種の災禍有つて国位を喪失すべし、一切の人衆皆善心無けん唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星數ば出で兩日並び現じ薄蝕恒無く黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を発し暴雨・悪風・時節に依らず常に飢饉に遭い苗実も成らず多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地に所樂の処有ること無けん」と。

大集経に云く「若し国王有つて我が法の滅せんを見て擁護せずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の中に三種の不祥の事を出さん、乃至命終して大地獄に生ぜん」と。

仁王経に云く「大王・国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るるが故に万民乱ると、亦云く大王・我今五眼をもつて明に三世を見るに一切の国王は皆過去世に五百の仏に侍うるに由つて帝王主と為る

ことを得たり、是^{これ}をもつて

一切の聖人羅漢而も為に彼の国土の中に來生して大利益を作さん
若し王の福尽きん時は一切の聖人皆捨て去ることを為さん若し
一切の聖人去らん時は七難必ず起ること。

仁王經に云く「大王吾今化する所の百億の須弥・百億の日月・一

一の須弥に四天下有り其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千
の小国有り其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王是の

難の為の故に、云何なるを難と為す日月度を失い時節返逆し或は
赤日出で黒日出で二三四五の日出づ或は日蝕して光無く或は

日輪一重二三四五重輪現ずるを一の難と為すなり、二十八宿度を
失い金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・星・南斗・北斗・

五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百宦星・是くの如き諸星・各各
・変現するを一の難と為すなり、大火・国を焼き万姓焼尽し或は

鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火・是くの如く変怪する

を三の難と為すなり、大水・百姓を漂没

して時節返逆し冬・雨ふり夏・雪ふり冬・時に雷電霹靂し六月に冰

霜雪を雨らし赤水・黒水・青水を雨らし・土山・石山を雨らし沙礫石

を雨らし江河逆まに流れ山を浮かべ石を流す是くの如く変ずる時

を四の難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土の山河・樹木・一時

に滅没して非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風・

是くの如く変ずる時を五の難と為すなり、天地・国土亢陽し

炎火洞然として百草亢旱し五穀登らず土地赫然として万姓滅尽せ

ん是くの如く変ずる時を六の難と為すなり、四方の賊来りて国を

侵し内外の賊起り火賊・水賊・風賊・鬼賊あつて百姓荒乱し刀兵

劫起せん是くの如く怪する時を七の難と為すなり」と。

法華経に云く「百由旬の内をして諸の衰患無からしめん」と。

涅槃経に云く「是の大涅槃微妙の經典・流布せらるる処は当に

知るべし其その地は即すなわち是これ金剛こんごうなり是この中しよの諸人しよにん亦また金剛こんごうの如ごとし」と。

仁王經にんのうきぎょうに云いわく、「是この經きは常じょうに千せんの光明くわうみやうを放はなちて千里せんりの内うちをして七難ひちなん起おこらざらしむと、又また云いわく諸もろもろの惡あく比丘びく多く

名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作り
仏戒に依らず是を破仏・破国の因縁と為すと。

今之を勘うるに法華經に云く「百由旬の内諸衰患なからしむ」と

仁王經に云く「千里の内に七難不起らしむ」と、涅槃經に云く「當に

知るべし其の地は即ち是れ金剛、是の中の諸人亦金剛の如し」と文。

疑つて云く今此の国土に種種の災難起ることを見聞するに

所謂建長八年八月自り正元二年二月に至るまで大地震非時の大風

・大飢饉・大疫病等種種の災難連連として今に絶えず大体国土の

人数尽く可きに似たり、之に依つて種種の祈請を致す人之多しと

雖も其の驗無きか、正直捨方便・多宝の証明・諸仏出舌の

法華經の文の令百由旬内・雙林最後の遺言の涅槃經の其地金剛の

文、仁王經の千里の内に七難不起の文皆虚妄に似たり如何。

答えて云く今愚案を以て之を勸うるに上に挙ぐる所の諸大乘經
国土に在り而も祈請と成らずして災難起ることは少し其の故有る
か、所謂 金光明經 に云く其の国土に於て此の經有り而も雖も未だ
嘗つて流布せず捨離の心を生じて聽聞せんことを樂わず我等四王
皆悉く捨て去り其の国當に種種の災禍有るべし、大集經に云く
「若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば其の
国内三種の不祥を出さんと、仁王經に云く「仏戒に依らざる是を
破仏・破国の因縁と為す若し一切の聖人去る時は七難必ず起らん」
已上、此等の文を以て之を勸うるに法華經等の諸大乘經・国中に
在りと雖も一切の四衆捨離の心を生じて聽聞し供養するの志
を起さざる故に国中の守護の善神・一切の聖人・此の国を捨て去
り守護の善神聖人等・無きが故に出来する所の災難なり。
問うて曰く国中の諸人・諸大乘經に於て捨離の心を生じて供養

する 志こころざしを生ぜざる事は何いずれの故ゆゑより之おこ起るや。

答えて曰いわく仁王経にんのうきょうに曰いわく「諸もろもろの悪比丘あくびく多く名利みょうりを求め国王こくおう・太子たいし

王子みこの前に於おいて自ら破みずか仏法はぶつぽうの因縁いんねん・破国はこくの因縁いんねんを説そかん其その王わきま

別わかえずして此ことばの語ことばを信聴しんちやうし横よこしまに法制ほうせいを作りて仏戒ぶつがいに依よらず」と、

法華経ほけきょうに云いわく「悪世あくせの中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんしやくに未いまだ得えざるを

これ得えたりと謂おもい我慢がまんの心充満じゆうまんせん是この人悪心あくしんを懐いだき国王こくおう・大臣だいじん・

婆羅門ばらもん・居士こじ及び余おまの諸もろもろの比丘びくに向むかつて誹謗ひぼうして我が悪あくを説いいて

是これ邪見じゃけんの人ひと・外道げどうの論議ろんぎを説いくと謂いわん悪鬼あくき其その身みに入るいると等と

云云。

此等これらの文ぶんを以もつて之これを思おもうに諸もろもろの悪比丘あくびく国中こくにじゆうに充満じゆうまんして破国はこく・

破は仏法ぶつぽうの因縁いんねんを説いく国王こくおう並なに国中こくにじゆうの四衆ししゆう弁わきまえずして信聴しんちやうを加くわう

るが故ゆゑに諸大乗経しのだいじやうきやうに於おいて捨離ししゃりの心こころを生なざるなり。

問いうて曰いわく諸もろもろの悪比丘あくびく等と・国中こくにじゆうに充満じゆうまんして破国はこく・破は仏戒ぶつがい等との

因縁いんねんを説くことは仏弟子ぶつでしの中に出来しゅつたいす可べきか外道げどうの中に出来しゅつたいす可べきか。

答えて曰く仁王經にんのうきやうに云く「三宝さんぼうを護まもる者にして転うたた更に三宝さんぼうを滅し破らんこと師子ししの身中の虫の自らみずか師子ししを食うが如ごとし外道げどうには非あらずと文。

此の文の如ごとくんば仏弟子ぶつでしの中に於おいて破国はこく・破仏法はぶつぽうの者出来しゅつたいす可べきか、問うて曰く諸もろの悪比丘あくびく・正法しょうぽうを壊やぶるに相似そうじの法を以もつて之を破こらんか当まさに亦また悪法あくほうを以もつて之を破やぶるべしとせんか、答えて曰く小乗じょうじゆを以もつて権大乘こんだいじやうを破はし権大乘こんだいじやうを以もつて実大乘じつだいじやうを破はし師弟共していに謗法破国ほうぽうはこくの因縁いんねんを知らざるが故ゆえに破はぶつ戒かい・破国はこくの因縁いんねんを成はこして三惡道さんあくどうに墮だするなり。

問うて曰く其その証拠しょうこ如何いかに、答えて曰く法華經ほけきやうに云く仏ぶつの方便ほうべん・隨宜ずいぎ所説しよせつの法を知らずして惡口あくくして顰蹙ひんじゆくし数数しばしば擯出ひんずいせられんと。

涅槃經ねはんぎょうに云いく我涅槃ねはんの後ご当たうに百千無量むりようの衆生しゆじよう有あつて誹謗ひぼうして是この大涅槃ねはんを信しんぜざるべし三乘さんじようの人ひとも亦また復また是この如ごとく無上むじようの大涅槃だいなはん経ぎょうを憎そう悪おせん已上いじやう。

勝意しょうい比丘びくの喜根きこん菩薩ぼさつを謗ぼうじて三惡道さんあくどうに墮おちし尼思にし仏ぶつ等の不輕ふぎよう菩薩ぼさつを打うつて阿鼻あびの炎えんを招まねくも皆みな大小だいしやう・權實ごんじつを弁わえ

ざるより之起れり十悪・五逆は愚者皆罪為ることを知る故に輒く破国・破仏法の因縁を成ぜず、故に仁王經に云く「其の王別えずして此の語を信聴す」と、涅槃經に云く「若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知り而も心に初より怖畏・懺悔無くして肯て発露せず」已上。

此くの如き等の文は謗法の者は自他共に子細を知らざる故に重罪を成して国を破し仏法を破するなり。

問うて曰く若爾らば此の国土に於て權教を以て人の意を取り實教を失う者之有るか如何、答えて曰く爾なり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法然上人所造等の選択集是れなり今其の文を出して上の經文に合せ其の失を露顯せしめん若し対治を加えば国土を安穩ならしむ可きか、選択集に云く「道綽禪師・聖道・浄土の二門を立て聖道を捨てて正しく浄土に歸するの文初に

聖道門とは之に就て二有り一には大乘二には小乘なり大乘の中
に就いて顕密・権実等の不同有りと雖も今・此の集の意は唯顯大
及及び権大を存す故に歴劫迂回の行に当る之に準じて之を思うに
密大及び實大を存すべし、然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・
三論・法相・地論・撰論此等の八家の意正しく此れに在るなり、
曇鸞法師の往生論の注に云く「謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を
案ずるに云く菩薩・阿毘跋致を求むるに二種の道有り一には
難行道二には易行道なり、此の中に難行道とは即ち是れ聖道門
なり易行道とは即ち是れ浄土門なり、浄土宗の学者先ず須く此の
旨を知るべし設い先ず聖道門を学する人と雖も若し浄土門に於て
其の志有らん者は須く聖道を棄てて浄土に歸すべし」文、又云く
「善導和尚正雜二行を立て雜行を捨てて正行に歸するの文、
第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生浄土の經を除いて已外、

大小乗・顯密の諸經に於て受持・讀・誦するを悉く讀誦雜行と名く、第三に禮拜雜行とは上の弥陀を禮拜するを除いて已外一切諸余の仏・菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜恭敬するを悉く禮拜雜行と名く、

私に云く此の文を見るに須く雜を捨てて專を修すべし豈百即百生の專修 正行を捨てて堅く千中無一の雜修 雜行を執せんや行者能く之を思量せよと。

又云く貞元入藏録の中・始め大般若經六百卷より 法常住經に終るまで顯密の大乘 經総じて六百三十七部二千八百八十三卷なり皆須く讀誦大乘の一句に撰すべし当に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉づ一たび開きて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なり文、又最後結句の文に云く 夫れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中

に且く聖道門を闍て選んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば
正雜二行の中に且く諸の雜行を抛て選んで正行に歸すべし、已
上 選択集 の文なり。

今之をるに日本国中の上下万人深く法然上人を信じて此の書を

もてあそぶゆえ

ぶ故に無智の道俗此の書の中の捨閉閣抛等の字を見て浄土の

さんぶきよう 阿弥陀仏より外は諸經・諸仏・菩薩・諸天善神等に於て

三部經・阿弥陀仏より外は諸經・諸仏・菩薩・諸天善神等に於て

しやへい かくほう 捨閉閣抛等の思を作し彼の仏經等に於て供養受持等の志を起さ

ず還つて捨離の心を生ず故に古の諸大師等の建立せし所の鎮護

国家の道場零落せしむと雖も護惜建立の心無し護惜建立の心無

きが故に亦読誦供養の音絶え守護の善神も法味を嘗めざるが故に

国を捨てて去り四依の聖人も来らざるなり、偏に金光明・仁王等

の一切の聖人去る時は七難必ず起らん我等四王皆悉く捨去せん

既に捨離し已れば其の国当に種種の災禍有るべしの文に当れり豈

諸悪比丘多く名利を求め、悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲の人に非ずや。

疑つて云く国土に於て選択集を流布せしむるに依つて災難起ると云わば此の書無き已前は国中に於て災難無かりしか、答えて曰く彼の時も亦災難有り云く五常を破り仏法を失いし者之有りしが故なり所謂周の宇文・元嵩等是なり、難じて曰く今の世の災難五常を破りしが故に之起ると云わば何ぞ必ずしも選択集流布の失に依らんや、答えて曰く仁王経に云く「大王・未来の世の中に諸の小国王・四部の弟子諸の悪比丘横に法制を作りて仏戒に依らず亦復仏像の形・仏塔の形を造作することを聴さず七難必ず起らんと、金光明経に云く「供養し尊重し讚歎

せず其の国に當に種種の災禍有るべし。涅槃經に云く、「無上の
だいねはんきょう ぞうお 等に云云、豈弥陀より外の諸仏・諸經等を供養
し禮拜し讚歎するを悉く雜行と名くると云うに當らざらんや、難
じて云く仏法已前国に於て災難有るは何ぞ謗法の者の故ならんや、
答えて云く仏法已前に五常を以て国を治むるは遠く仏誓を以て国
を治むるなり禮義を破るは仏の出したまえる五戒を破るなり、問
うて云く其の証拠如何、答えて曰く金光明經に云く、「一切世間の
所有る善論は皆此の經に因ること、法華經に云く、「若し俗間の經書
治世の語言・資生の業等を説かんも皆正法
に順ず」と普賢經に云く、「正法をもつて国を治め人民を邪枉せず
是れを第三懺悔を修すと名く」と、涅槃經に云く、「一切世間の外道
の經書は皆是れ仏説なり外道の説に非ず」と、止觀に云く、「若し深
く世法を識れば即ち是れ仏法なり」と、弘決に云く、「禮樂前に駢せ

て眞道後に啓く」と、広釈に云く「仏三人を遣して且く震旦を化す
五常以て五戒の方を開く昔は大宰・孔子に問うて云く三皇・五帝は
是れ聖人なるか孔子答えて云く聖人に非ず又問う夫子是れ聖人
なるか亦答う非なり又問う若し爾らば誰か聖人なる、答えて云く
吾聞く西方に聖有り釈迦と号く」と文。

此等の文を以て之を勘うるに仏法已前の三皇・五帝は五常を以て
国を治む夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼義を破りて国を喪すは遠く
仏誓の持破に当れり。

疑つて云く若し爾らば法華・真言等の諸大乘経を信ずる者は
何ぞ此の難に値えるや、答えて曰く金光明経に云く「枉げて辜無
きに及ばん」と、法華経に云く「横に其の殃に羅る」と云云、此等
の文を以て之を推するに法華真言等を行ずる者も未だ位深からず
信心薄く口に誦すれども其の義を知らず一向名利の為に之を誦す

せんじょう 先生の謗法の失未だ尽きず外に法華等を行じて内に選択の心を
せんじやく
存す此の災難の根源等を知らざる者は此の難を免れ難きか。

うたがい 疑つて云く若し爾らば何ぞ選択集を信ずる謗法者の中に此の

なん 難に値わざる者之有りや、答えて曰く業力不定なり順現業は

ほけきよう 法華經に云く此の人現世に白癩の病乃至諸の悪重病を得んと、

にんのうききょう 仁王經に云く「人・仏教を壞らば復孝子

なく 六親不和にして天神祐けず疾疫悪鬼日に來りて侵害し災怪
 首尾し連禍せん」と、涅槃經に云く「若し是の經典を信ぜざる者有
 らば若は臨終の時、或は荒亂に値い刀兵競い起り帝王の暴虐、
 怨家の讎隙に侵逼せられん」已上、順次生業は法華經に云く「若し人
 信ぜずして此の經を毀謗せば其の人命終して阿鼻獄に入らん」
 と、仁王經に云く「人・仏教を壞らば死して地獄・餓鬼・畜生に入
 らん」已上、順後業等は之を略す。
 問うて曰く如何にして速かに此の災難を留む可きや、答えて曰く
 速に謗法の者を治す可し若し爾らずんば無尽の祈請有りと雖も
 災難を留む可からざるなり、問うて曰く如何が対治す可き、答えて
 曰く治方亦經に之有り涅槃經に曰く仏言く唯一人を除いて余の
 一切に施せ正法を誹謗して是の重業を造る唯此くの如き一闡提
 の輩を除いて其の余の者に施さば一切讚嘆すべし已上、此の文の如

んば施を留めて対治す可しと見えたり此の外にも亦治方はれ多く
具に出すに暇あらず、問うて曰く謗法の者に於て供養を留め苦治を
加うるは罪有りや不や、答えて曰く涅槃經に云く、今無上の正法
を以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼に付属す正法を毀る者は
王者・大臣・四部の衆當に苦治すべし尚罪有ること無けん已上。
問うて曰く汝僧形を以て比丘の失を顕すは罪業に非ずや、答え
て曰く涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて
呵責し駟遣し拳処せざれば當に知るべし是の人は仏法の中の
怨なり若し能く駟遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子眞の聲聞な
り」已上、予此の文を見るが故に仏法中怨の責を免れんが為に見聞
を憚からずして法然上人並に所化の衆等の阿鼻大城に墮つ可き
由を称す、此の道理を聞き解く道俗の中に少少は廻心の者有り
若し一度高覽を経ん人は上に拳ぐる所の如く之を行ぜずんば

だいしつきょう
大集經の文の若し國王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざ
れば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の内に
三種の不祥を出さん乃至命終して大地獄に生ぜんとの記文を免
かれ難きか、仁王經に云く「若し王の福尽きん時は七難必ず起ら
ん」と、此の文に

云く「無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失す」等と云云、此の文を見るに且く万事を闇いて先ず此の災難の起る由を勘う可きか若し爾からざれば弥亦重ねて災難起る可きか、愚勘是くの如し取捨は人の意に任す。

八 念仏者追放せしむる宣旨御教書五篇に集列す

勘文状 正元元年 三十八歳御作 八六P

夫れ以みれば仏法流布の砌には天下静謐なり神明仰崇の界に
は国土豊饒なり、之に依つて月氏より日域に覃んで君王より人民に
至るまで此の義改むること無き職として然り。

爰に後鳥羽院の御宇に源空法師と云う者あり道俗を欺くが故に
専修を興して顕密の教理を破し男女を誑かすが故に邪義を構えて

仏神の威光を滅し常に四衆を誘うて云く、浄土三部の外は衆経を棄置すべし唱名一行の外は余行を廢退すべし矧んや神祇冥道の恭敬に於ておや況や孝養報恩の事善に於ておや之を信ぜざる者は本願を疑うなりと、爰に頑愚の類は甚深の妙典を輕慢し無智の族は神明の威徳を蔑如す、就中止觀遮那の学窓に臨む者は出離を抑ゆる癡人なり三論法相の稽古を励む者は菩提を塞ぐ証人なりと云云。

之に依つて仏法日に衰え迷執月に増す然る間南都北嶺の明徳奏聞を経て天聴に達するの刻源空が過咎遁れ難きの間遠流の宣を蒙むり配所の境に赴き畢んぬ、其の後門徒猶勅命を憚からずして弥專修を興すること殆ど先代に超えたり違勅の至り責めても余り有り故に重ねて專修を停廢し源空の門徒を流罪すべきの由綸言頻に下る又関東の御下知勅宣に相添う。

門葉等は遁るべきの術を失い・或は山林に流浪し・或は遠国に
逃隠す、爾してより華夷・称名を抛ちて男女・正説に歸する者なり
然るに又近來先規を弁えざるの輩・仏神を崇めざるの類・再び専修
の行を企て猶邪惡を増すこと甚し。

にちれんふしゅう 日蓮不肖なりと雖も且は天下の安寧を思うが為且は仏法の繁昌
を致さんが為に強ちに先賢の語を宣説し称名の行を停廃せんと
欲し又愚懐の勘文を添え頗る邪人の慢幢を倒さんとす、勘注の文
繁くして見難し知り易からしめんが為に要を取り諸を省き略して
五篇を列ぬ、委細の旨は広本に在くのみ。

奏状篇

詮を取りて之を注す委くは広本に在り

南都の奏状に云く。

一、 謗人謗法の事

右源空・顕密の諸宗を軽んずること土の如く沙の如く智行の
高位を蔑ろにすること蟻の如く螻の如し、常に自讃して曰く広く
一代聖教を見て知れるは我なり能く八宗の精微を解する者は我
なり我諸行を捨つ況や余人に於ておやと、愚癡の道俗之を仰ぐこと
仏の如く弟子の偏執遙に其の師に超え檀那の邪見 弥本説に倍し

いつてんしかいようやもつ 一天四海漸く以て し事の奇特を聞くに驚かずんば有る可からず
その中殊に法華の修行を以て専修の讐敵となす、或は此の経を
読む者は皆地獄に墮すと云い、或は其の行を修せん者は永く生死に
留まると云い、或は僅に仏道の結縁を許し、或は都て浄土の正因を
嫌う、然る間、本八軸十軸の文を誦し千部万部の功を積める者も永
く以て廃退し、剩、え前非を悔ゆ、捨つる所の本行の宿習は實に
深く企つる所の念仏の薰習は未だ積まず中途に天を仰いで歎息す
る者多し、此の外般若・華嚴の歸依真言・止觀の結縁十の八九皆
棄置す之を略す。

一、靈神を蔑如する事

右、我が朝は本是れ神国なり百王、彼の苗裔を承けて四海其の
加護を仰ぐ、而るに専修の輩永く神明を別えず権化・実類を論ぜ
ず宗廟・祖社を恐れず若し神明を憑まば魔界に墮すと云云。

実類の鬼神に於ては置いて論ぜざるか権化の垂迹に至つては既に
是れ大聖なり、上代の高僧皆以て帰伏す行教和尚・宇佐の宮に参
るに釈迦三尊の影月の如くに顕れ仲算大徳・熊野山に詣ぬるに
飛滝千仞の水・簾の如くに巻く、凡そ行基・護命・増利・聖宝・空海
・最澄・円珍等は皆神社に於て新に靈異を感ず是くの若きは源空に
及ばざるの人か又魔界に墮つ可きの類か之を略す。

山門の奏状に云く。

一、一向専修の党類神明に向背する不当の事。

右我が朝は神国なり神道を敬うを以て国の勤めと為す謹んで
百神の本を討ぬるに諸仏の迹に非ること無し、所謂伊勢大神宮・
八幡・加茂・日吉・春日等は皆是れ釈迦・薬師・弥陀・観音等の示現
なり各宿習の地を卜め専ら有縁の儀を調う乃至其の内証に随い
て彼の法施を資け念誦読経神に依つて事異なり世を挙げて信を取

り人毎に益を被る、而るに今專修の徒・事を念仏に寄せて永く神明を敬うこと無し、既に国の礼を失い仍神を無するの咎あり、当に知るべし有勢の神祇定めて降伏の眸を回らして睨みたまわん之を略す。

一、一向專修和漢の例・快からざる事

右・慈覚大師の入唐巡礼記を按ずるに云く唐の武宗皇帝・会昌元年章敬寺の鏡霜法師に勅令して諸寺に於て弥陀念仏の教を伝え寺毎に三日巡輪して絶えず同じく二年・廻鶻国の軍兵等・唐の界を侵す同じく三年河北の節度使・忽ち乱を起す其の後大蕃国更に命を拒む廻鶻国重ねて地を奪いぬ、凡そ兵乱秦項の代に同じく災火邑里の際に起る何に況や武宗大に仏法を破し多く寺塔を滅す撥乱すること能わずして遂に以て事有り已上取意、是れ則ち恣に浄土の一門を信じて護国の諸教を仰がざるに依つてなり而るに吾

あしたいつこうせんしゅう
朝一向専修を弘通してより以来・国衰微に属し俗多く艱難す已上
これ之を略す、又云く音の哀樂を以て国の盛衰を知る詩の序に云く治世の
音は安んじて以て樂しむ其の政和げばなり乱世の音は怨んで以て怒
る其の政乖けばなり亡国の音は哀んで以て思う其の民困めばな
りと云云、近代念仏

の曲を聞くに理世撫民の音に背き已に哀慟の響を成す是れ亡国の音なる可し（ベ） 是四、已上奏状（ソウジヤウ）。

山門の奏状詮を取る此の如し（コト）。

又大和の莊の法印俊範・宝地房の法印宗源・同坊の永尊豎者（ヤマト）

並に題者なり等源空が門徒を対治せんが為（タメ）に各各子細を述べ其の文（ソ）。

広本に在り、又諸宗の明德面に書を作りて選択集を破し専修（コト）

を対治する書籍世に伝う（タイジ）。

宣旨篇（センジ）

南都北嶺の訴状に依つて専修を対治し行者を流罪す可きの由（ナント）

度度の宣旨の内、今は少を載せ多を省く委くは広本に在り（タビタビ）。

永尊豎者の状に云く弾選扱等上送せられて後・山上に披露す（エイソン）

弾選扱に於ては人毎に之を翫び頭選扱は諸人之を謗ず法然上人（ダンセンタク）

の墓所は感神院の犬神人に仰付て之を破卻せしめ畢んぬ其の後（ボシヨ）

奏聞そうもんに及んで裁許さいきょを蒙り畢おわぬ、七月の上旬に法勝寺ほうじょうじの御八講の次
山門さんもんより南都なんとに触れて云く清水寺しみずでら祇園ぎおんの辺南都山門なんとさんもんの末寺まつじたるの
処ところに専修せんしゅうの輩やから身を容れし草菴そうあんに於ては悉く破卻はきやくせしめ畢おわぬ
其その身に於ては使庁ししやうに仰せて之を搦め取らるるの間・礼讚らいざんの声
黒衣こくいの色・京洛きやうらくの中に都て以て止め畢おわぬ、張本ちやうほん三人流罪るざいに定め
らると雖も逐電いえど ちくでんの間・未だ配所はいしよに向わず山門さんもん今に訴え申し候なり。
此こゝの十一日の僉議せんぎに云く法然房ほうねんぼう所造しよぞうの選択せんちやくは謗法ほうぼうの書なり天下てんが
に之を止め置く可からず仍つて在在所ざいざいしよしよの所持しよじ並に其の印板いんばんを
大講堂だいくどうに取り上げ三世さんぜの仏恩ぶつおんを報ほうぜんが為ために焼失やうしつすべきの由・奏聞そうもん
仕り候い畢おわぬ重ねて仰せ下され候か、恐恐きようきよう。

嘉禄三年十月十五日

専修せんしゅう念仏ねんぶつの張本ちやうほん成覚じやうかく法師ほっし讚岐さぬきの大手嶋おおてじまに経回きやうかいすと云云じつび実否
分明ぶんみやうならず慥たしかに知けんちを加えらる可べきの由・山門さんもんの

ひとびともう あいたずら もう
人人申す相尋ね申さしめ給う可きの由・殿下の御気色候う所なり
よ 仍つて執達件の如し。
かろく

嘉禄三年十月二十日

参議範輔在り判
さんぎのりすけ

修理権亮殿
しゅりごんのすけ

関東より宣旨の御返事
かんとく せんじ ごへんじ

隆寛律師の事、右大弁宰相家の御奉書披露候い畢んぬ、件の
りゅうかんにりっし うだいべんさいそう ごほうしょひろう おわ くだん
りっし いぬ うずき げこう かまくら きようかい いえど

律師去る七月の比・下向せしむ鎌倉近辺に経回すると雖も京都の
せいふ まか ねんぶつ ついはう おうしゅう るろう おわ

制符に任せ念仏者を追放せらるるの間奥州の方へ流浪せしめ畢ん
ぬ云云、早く在所を尋ね捜して仰せ下さるるの旨に任せ対馬の嶋に
おいやるべ

追遣可きなり、此の旨を以て言上せしむ可きの状鎌倉殿の仰せに
よ 仍つて執達件の如し。
しつたつくだん ごと むね もつこんじょう べ おお

依つて執達件の如し。

嘉禄三年十月十五日

嘉禄三年十月十五日

むさしのかみ
武蔵守在り判

さがみのかみ
相模守在り判

かもんのすけ
掃部助殿

しゅうりのすけ
修理亮殿

せんしゅうねんぶつ
専修念仏の事、
ていはい
停廢の宣下重
せんげちようじよう
疊の上
ひそ
儉かに尚興行するの条

くげ
更に公家の知しめす所にあらず
ひとえ
偏に有司の怠慢たり早く先符に

まか
任せて禁遏せらる可し、
そ
其の上衆徒の蜂起に於ては宜く制止を加え

たま
しめ給うべし
てんき
天氣に依つて言上件
の如し、
のぶもり
信盛
とんしゆき
頓首恐惶謹言

かろく
嘉禄三年六月二十九日

さえもん
左衛門権佐信盛奉

てんだいざす
進上天台座主大僧正御房政所

べんかん
右弁官下す

早く僧の隆寛・幸西・空阿弥陀仏の度縁を取り進すべき事の書。
ごんだいなごんまなもとのあそんまさちか ちよく せんぼう
権大納言源朝臣雅親・勅を宣奉するに件の隆寛等の坐せらるる
はいるよろし
こと配流宜く彼の寺に仰せて度縁を取り進せしむべし、者れば宜く
承知して宣に依つて之を行ふべし違失ある可からず。

嘉禄三年七月六日

左太史小槻

宿禰在り判

左少弁藤原

朝臣在り判

大政官の符・五畿内の諸国司まさに宜く専修念仏の興行を停廃
し早く隆寛・幸西・空阿弥陀仏等の遺弟の留まる処に禁法を犯す
所の輩を捉え搦むべきの事。

弘仁聖代の格条・眼に在り左大臣・勅を宣奉し宜く五畿・七道に
課せて興行の道を停廃し違犯の身を捉え搦むべし、者れば諸国司

よろし しょうち
宜く承知して宣に依つて之を行え符 到らば奉行を致せ。

嘉禄三年七月十七日

修理右宮城使正四位下行

うちゅうべんふじわらあそん
右中弁藤原朝臣

しゅり とうだいじ だいぶつちようかん
修理東大寺大仏長官正五位下左大史兼備

おつぎすくね
前権介小槻宿禰

せんしゅうねんぶつ(げん)まう
専修念仏興行の輩停止す可きの由五畿・七道に宣下せられ候

おわ
い畢んぬ、且つは御存知有る可く候、者れば論言此の如し之を悉に

よしたか せいきよう(とん)しゅきんげん
せよ、頼隆・誠恐頓首謹言。

かろく
嘉禄三年七月十三日

うちゅうべんよりたか
右中弁頼隆在り判

てんだいざす そつじよう(ご)ぼう(まんどころ)
進上 天台座主大僧正御房政所

りゅうかん つしま
隆寛・対馬の国に改めらる可きの由宣下せられ畢んぬ、其の由

こけちあ べ むねおあ
御下知有る可きの旨仰せ下さる所に候なり此の趣を以て申し入れ

しめ給^{たま}う可^べきの状^{じょう}件^{くだん}の如^{ごと}し。

頼隆^{よりたか}在^あり判^{はん}

右中弁^{うちゅうべん}

中納言律師御房

隆寛律師專修の張本たるに依つて山門より訴え申すの間、陸奥に配流せられ畢んぬ而るに衆徒尚申す旨有り仍つて配所を改めて対馬の嶋に追い遣らる可きなり、当時東国の辺に経回すと云云不日に彼の島に追い遣らる可きの由関東に申さる可し、者れば殿下の御気色に依つて執達件の如し。

嘉禄三年九月二十六日

参議在り判

修理権亮殿

專修念仏の事、京畿七道に仰せて永く停止せらる可きの由先日宣下せられ候い畢んぬ、而るに諸国に尚其の聞え有りと云云、宣旨の状を守りて沙汰致す可きの由、地頭守護所等に仰付けらる可きの由、山門訴え申し候、御下知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さし

め給^{たま}う可^べきの由^{でんか}・殿下^{みけしき}の御^{そうとう}気色^{ところ} 候^{なり}所^よ なり、仍^しつて執^た達^つ件^{だん}の如^{ごと}し。

嘉^か禄^{ろく}三年^く十月^く十日

参^{さん}議^ぎ在^{ざい}り判^{はん}

武^む蔵^{ざう}守^し殿^{だん}

嵯^さ峨^がに下^げされし院^{いん}宣^{せん}

近^{きん}頃^{けい}破^は戒^{かい}不^ふ善^{ぜん}の輩^{やくら}・嚴^{げん}禁^{きん}に拘^かわらず猶^な専^{せん}修^{しゅう}念^{ねん}仏^{ぶつ}を企^くつるの由^だ

其^その聞^きえ有^あり、而^{しか}るに先^{せん}師^し法^{ほう}眼^{げん}存^{ぞん}日^{じつ}の時^{とき}・清^{せい}涼^{りょう}寺^じの辺^{へん}に多^{おほ}く以^もて止^と

住^すすと云^い云^{えい}、遺^い跡^{せき}を相^あ継^いぎて若^もし同^{どう}意^い有^あらば彼^かの寺^じの執^{しつ}務^む縦^{じゆう}い

相^{そう}承^{じゆう}の理^りを帯^たすとも免^{めん}許^{きょ}の義^ぎ有^ある可^べからざるなり、早^{はや}く此^この旨^{むね}を

存^{ぞん}して禁^{きん}止^しせしめ給^{たま}う可^べし院^{いん}宣^{せん}此^この如^{ごと}し仍^よつて執^{しつ}達^{たつ}件^{だん}の如^{ごと}し。

建^{けん}保^ぽ七年^{ねん}二^に月^{げつ}四^じ日

按^あ察^ぜ使^ち在^{ざい}

り判

治^じ部^ぶ卿^{きやう}律^{りつ}師^し御^ご房^{ぼう}

謹つしんで請こう

院いん宣せん
一
紙

右当寺四至の内に破戒不善の専修念仏の輩法に任せて制止ある可く候更に以て芳心有る可からず候、若し猶寺家の力に拘わらずんば事の由を申し上ぐ可く候、謹んで請くる所件の如し。

建保七年閏二月四日

権律師良暁

左弁官下す 綱所

まさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき事。

右左大臣勅を宣奉す、専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、仍つて去る建永二年の春、嚴制五箇条の裁許を以てせる官符の施行先に畢んぬ、傾く者は進んでは憲章を恐れず退いては仏勅を憚からず。或は梵宇を占め、或は聚落に交わる破戒の沙門党を道場に結んで、偏に今按の伴を以てす仏号を唱えんが為に妄りに邪音を作し將に

蕩して人心を放逸にせんとす、見聞満座の処には賢善の形を現ず
と雖も寂寞破の夕には流俗の睡りに異ならず是れ則ち発心の
修善に非ず濫行の奸謀を企つるなり豈仏陀の元意僧徒の所行と
謂わんや。

宜しく有司に仰せて慥に糾断せしむべし若し猶違犯の者は罪科
の趣き一に先符に同じ但し道心修行の人をして以て仏法違越の者
に濫ぜしむること莫れ更に弥陀の教説を忽せにするに非ず只釈氏
の法文を全からしめんとなり、兼ては又諸寺執務の人五保監行の
輩聞知して言わずんば与同罪會つて寛宥せざれ、者れば宜しく
承知して宣旨に依つて之を行ふべし。

建保七年閏二月八日

太史

おつぎすくね
小槻宿禰在り判

謹んで請く 綱所

宣旨一通載せらるるはまさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の
輩を糾断せしむべき事。右宣旨の状に任せ諸寺に告げ触る可きの
状謹んで請くる所件の如し。

けんぽ 建保七年閏二月二十二日之これを行う。

けいねん 頃年以來無慚の徒・ふほう 不法の侶・かいきょう 如如の戒行を守らず処処のげんせい 嚴制

を恐れず恣ほしいままねんぶつに念仏べつしゅうの別宗を建て猥みだりりに衆僧しゅうそうの勤学きんがくを謗ぼうず、しかの

みならず内には妄執もうしゅうを凝こらして仏意ぶつゐに乖そむき外には哀音あいおんを引いて

じんしん 人心を蕩とろかす遠近おんこん併しかながせんしゅうら専修せんしゅうの一行いっぎょうに歸かへりし緇素しそ殆たいていんど顕密けんみつの両教

を褊さみす仏法ぶつぽうの衰滅すいめつ而も斯よに由よる自由じゆうの奸惡かんあく・誠に禁かぎじても余あまり有

り。

これ 是を以もつて教雅法師きょうがほふしに於おいては本源ほんげんを温たずねて遠流おんるし此この外たうごう・同行どうぎょうの

よとう 余党よとう等慥たしかかに其その行ぎょうを帝土ていどの中に停廢ていはいし悉ことごとく其その身みを洛陽らくやうの外がわに

追つい卻きやくせよ但ただし・或あるは自行じぎょうの為ため・或あるは化他けたの為ために至心ししん專念せんねん如法にょぼう修行しぎょうの

輩やからに於おいては制せいの限かぎりに在あらず。

てんぶく 天福二年六月晦日

ふじわらちゅうなごん 藤原中納言

ごんべん 権弁奉たてまつる

天福二年文曆と改む四條院の御宇後堀河院の太子なり、武蔵前司入道殿の

御時。

祇園の執行に仰せ付けらるる山門の下知状。

大衆の僉議に云く専修念仏者天下に繁昌す是れ則ち近年山門無沙汰の致す所なり、件の族は八宗仏法の怨敵なり円頓行者の順魔なり、先ず京都往返の類・在家称名の所に於ては例に任せつめそつに仰せて宜しく停止せしむべし云云、者れば大衆僉議の旨斯くの如し早く先例に任せ犬神人等に仰せ含めて専修念仏者を停止せしめ給う可し云云、恐恐謹言。

延応二年五月十四日 公文勾当審賢

四條院の御宇武蔵前司殿の御時。 謹上 祇園の執行法眼

御房

逐つて申す、去る夜・大衆僉議して先ず此の異名に於て殊に犬神人

に付けて之^{これ}を責む^せ可^べきの由^お仰^おせ含^めめぬ^よ仍^よつて

実名これ之を獻けんず、専修せんしゅう念仏ねんぶつの張本ちやうほんの事こと。唯ゆい仏ぶつ・鏡きやう仏ぶつ・智願ちがん・定真ていしん。
円真えんしん・正阿弥陀あみだぶつ仏ぶつ・名阿弥陀あみだぶつ・善慧ぜんね・道弁どうべん・真如堂しんによ・狼藉ろうぜきの張本ちやうほんなり
已上から、唐橋油小路はしのおぶらうじ並ならに八条大御堂おおみどう六波羅ろくはらの総門そうもんの向むかいの堂どう・已上いじやう。
当時たうじ興行きやうぎやうの所ところなり。

延曆寺えんりやう 別院べついん 雲居寺うんごじ 早く一向いっこう専修せんしゅうの悪行あくぎやうを禁断きんだんす可べき

事

右頃年けいねん以来いらい、愚蒙ぐもうの結党けつどう・の会衆えしゅうを名なけて専修せんしゅうと曰いい 間てんりよに

あま 旁あまねし心こころに一分いちぶんの慧解えげ無なく口くちに衆罪しゅうざいの悪言あくげんを吐はき言ことばを一念いちねん十声じしゆの

ひが 悲願ひがんに寄よせて敢あえてて三毒さんどく五蓋ごがいの重悪じゅうあくを憚はばからず盲暝もうみやうの輩やから是非ぜひを

わきま 弁わきまえず唯情ただに順したがずるを以もつて多おほく愚誨ぐかいに信伏しんぷくす、持戒修善じかいしゅうぜんの人ひとを笑

うて之これを雜行ぞうぎやうと号なづし鎮国護王ちんこくごおうの教しゆを謗そしりて之これを魔業まぎやうと称しょうす諸善しよぜんを

ひんき 擯棄ひんきし衆悪しゅうあくを選せん択たくし罪つみを山岳さんがくに積たみ報ほうを泥梨ないりに招まねく毒氣どくけ深ふかく入いつ

て禁かぎじても改かむること無なく偏ひとえに欲樂よくらくを嗜たしなんで自みら止とどむこと能あたわず、

猶蒼蠅の唾の為に黏さるるが如く、何ぞ狂狗の雷を逐うて走るに異ならん、恣ままに三寸の舌を振いて衆生の眼目を抜き五尺の身を養わんが為に諸仏の肝心を滅す、併ら只仏法の怨魔と為り専ら緇門の妖怪と謂う可し。

是を以て邪師存生の昔は永く罪条に沈み、滅後の今は亦屍骨を剋らる其の徒・住蓮と安樂とは死を原野に賜い成覚と薩生とは刑を遠流に蒙りぬ此の現罰を以て其の後報を察す可し、方に今且は釈尊の遺法を護らんが為且は衆生の塗炭を救わんが為に宜く諸国の末寺・莊園・神人・寄人等に仰せて重ねて彼の邪法を禁断すべし

縦い片時と雖も彼の凶類を寄宿せしむ可からず縦い一言と雖も其の邪説を聴受す可からず、若し又山門所部の内に専修興行の輩有らば永く重科に処して寛宥有ること勿れ、者れば三千衆徒の僉議に依つて仰す所件の如し。

延^{えん}応^{おう}二年
山^{さん}門^{もん}申^{しん}状^{じょう}

近來二つの妖怪有り人の耳目を驚かす所謂達磨の邪法と念仏の哀音となり。

頭密の法門に属せず王臣の祈請を致さず誠に端拱にして世を蔑り暗証にして人を軽んず小生の浅識を崇めて見性成仏の仁となし耆年の宿老を笑うて螻蟻の類に擬す論談を致さざれば才の長短を表さず決択に交らざれば智の賢愚を測らず、唯牆壁に向うて独り道を得たりと謂い三依纒に紆い七慢専ら盛なり長く舒卷を抛つ附仏法の外道吾が朝に既に出現す、妖怪の至り慎まずんばあるべからず何ぞ強ちに亡国流浪の僧を撰んで伽藍伝持の主と為さんや。

御式目に云く右大将家以後代代の將軍並に二位殿の御時に於ての事一向に御沙汰を改ること無きか、追加の状に云く嘉禄元年より仁治に至るまで御成敗の事正嘉二年二月十日評定、右自今以後に

於ては三代の將軍並に二位家の御成敗に準じて御沙汰を改むるに及ばずと云云。

念仏停廢の事、宣旨御教書の趣き南都北嶺の状粗此くの如し、

日蓮弱為りと雖も勅宣並に御下知の旨を守りて偏に南北明哲の

賢懷を述べ猶此の義を棄置せらるるに非ずんば綸言徳政を故らる

可きか將た御下知を仰せらるる可きか、称名念仏の行者又賞翫

せらると雖も既に違勅の者なり関東の御勘氣未だ御免許をも蒙ら

ず何ぞ恣に関東の近住を企てんや、就中武蔵前司殿の御下知に

至りては三代の將軍並に二位家の御沙汰に準じて御沙汰を

改むること有る可からずと云云。

然るに今、念仏者何の威勢に依つてか宣旨に背くのみならず

御下知を輕蔑して重ねて称名念仏の専修を結構せん人に依つて

事異なりと云う此の謂在るか、何ぞ恣に華夷縦横の経回を致さ

勘文篇 かんもんんや。

念仏者追放宣旨御教書の事 ねんぶつ ついほう せんじ みきようじよ

九 念仏無間地獄抄

建長七年

三十四歳御作

念仏は無間地獄の業因なり法華経は成仏得道の直路なり早く
 浄土宗を捨て法華経を持ち生死を離れ菩提を得可き事・法華経第
 二譬喩品に云く「若人信ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間
 の仏種を断ぜん、其の人命終して阿鼻獄に入らん、一劫を具足し
 て劫尽きなば更生れん、是くの如く展転して無数劫に至らん」云云
 此の文の如くんば方便の念仏を信じて眞実の法華を信ぜざらん者
 は無間地獄に墮つ可きなり念仏者云く我等が機は法華経に及ばざ
 る間・信ぜざる計りなり毀謗する事はなし何の科に地獄に墮つ可き
 か、法華宗云く信ぜざる条は承伏なるか、次に毀謗と云うは即

不信なり信は道の源 功德の母と云へり菩薩の五十二位には十信
を本と爲し十信の位には信心を始と爲し諸の悪業煩惱は不信を本
と爲す云云、然ば譬喩品の十四誹謗も不信を以て体と爲せり今の
念仏門は不信と云い誹謗と云い争か入阿鼻獄の句を遁れんや、其の
上浄土宗には現在の父たる教主釈尊を捨て他人たる阿弥陀仏を
信ずる故に五逆罪の咎に依つて必ず無間・大城に墮つ可きなり、經
に今此の三界は皆是我有なりと説き給うは主君の義なり其の中の
衆生悉く是れ吾子と云うは父子の義なり而るに今此の処は諸の
患難多し、唯我一人能く救護を爲すと説き給うは師匠の義なり
而して釈尊付属の文に此法華經をば付属有在と云云何れの機か
漏る可き誰人か信ぜざらんや、而るに浄土宗は主師親たる教主
釈尊の付属に背き他人たる西方極樂世界の阿弥陀如来を憑む故に
主に背けり八逆罪の凶徒なり違勅の咎遁れ難し即ち朝敵なり

争いかでか咎とが無なけんや、次に父ちちの釈尊しやくそんを捨すつる故ゆえに五逆罪ごぎやくざいの者ものなり豈あに
無間地獄むげんじごくに墮おちざる可べけんや、次に師匠ししやうの釈尊しやくそんに背そむく故ゆえに七逆罪しちぎやくざい
の人ひとなり争いかでか悪道あくどうに墮おちざらんや此こゝの如ごとく教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんは娑婆世界しやばせかいの
衆生しゆじやうには主師親しゆししんの三徳さんとくを備そなへて大恩だいおんの仏ぶつにて御坐まします此こゝの仏ぶつを捨すて
他方たほうの仏ぶつを信まじ弥陀みだ

やくし だいにち たの たてまつ 薬師・大日等を憑み奉る人は二十逆罪の咎に依つて悪道に墮つ可き
なり、浄土の三部経とは釈尊一代五時の説教の内第三方等部の内
より出でたり、此の四巻・三部の経は全く釈尊の本意に非ず三世
諸仏出世の本懐にも非ず唯暫く衆生誘引の方便なり譬えば塔をく
むに足代をゆふが如し念仏は足代なり法華は宝塔なり法華を説給
までの方便なり法華の塔を説給て後は念仏の足代をば切り捨べき
なり、然るに法華経を説き給うて後念仏に執著するは塔をくみ立
て後足代に著して塔を用ざる人の如し豈違背の咎無からんや、然れ
ば法華の序分・無量義経には四十余年
みけん しんじつ 未顕真実と説給て念仏の法門を打破り給う、正宗 法華経には
しょうじきしやほうべん 正直捨方便 但説無上道と宣べ給て念仏三昧を捨て給う之に依て
あみだ 阿弥陀経の対告衆長老・舍利弗尊者・阿弥陀経を打捨て法華経に
きぶく 帰伏して華光如来と成り畢んぬ、四十八願付属の阿難尊者も浄土

の三部経を抛て法華経を受持して山海慧自在通王仏と成り畢んぬ、
阿彌陀經の長老舍利弗は千二百の羅漢の中に智慧第一の上首の
大声聞・閻浮提第一の大智者なり肩を並ぶる人なし、阿難尊者は
多聞第一の極聖・釈尊一代の説法を空に誦せし広学の智人なり、
かかる極位の大阿羅漢すら尚往生成仏の望を遂げず仏在世の
祖師此くの如し祖師の跡を踏む可くば三部経を抛ちて法華経を信
じ無上菩提を成ず可き者なり仏の滅後に於ては祖師先徳多しと
いへど だいとうようしゅう ぜんどう わじょう もろこし だいいち こうそ
雖も大唐楊州の善導和尚にまさる人なし唐土第一の高祖なり云
云、始は楊州の明勝と云える聖人を師と為して法華経を習たり
しが道綽禪師に値つて浄土宗に移り法華経を捨て念仏者と成れり
一代聖教に於て聖道・浄土の二門を立てたり法華経等の諸
大乘経をば聖道門と名く自力の行と嫌えり聖道門を修行して
成仏を願わん人は百人にまれに一人・二人千人にまれに三人五人

とくどう 得道する者や有んずらん乃至千人に一人も得道なき事も有るべし
かんきょう 観經等の三部經を浄土門と名け此の浄土門を修行して他力本願
を憑んで往生を願わん者は十即十生・百即百生とて十人は十
人百人は百人決定往生す可しとすすめたり、観無量壽經を所依
と爲して四卷の疏を作る玄義分・序分義・定善義・散善義是なり、
其の外・法事讚上下・般舟讚・往生礼讚・觀念法門經此等を九帖の
疏と名けたり、善導念仏し給へば口より仏の出給うと云つて称名
念仏一遍を作すに三体づつ口より出給けりと伝へたり、毎日の所作
には阿弥陀經六十卷・念仏・十万遍是を欠く事なし、諸の戒品を持
つて一戒も破らず三依は身の皮の如く脱ぐ事なく鉢 は両眼の
如く身を離さず精進潔斎す女人を見ずして一期生不眠三十年な
りと自歎す、凡そ善導の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に
齧まず手に取らず未來の諸の比丘も是くの如く行ずべしと定めた

り、一度酒を飲み肉を食い五辛等を食ひ念仏申さん者は三百万劫
が間地獄に墮す可しと禁しめたり、善導が行儀法則は本律の制に
過ぎたり、法然房が起請文にも書載たり、一天四海善導和尚を
以て善知識と仰ぎ貴賤上下皆悉く念仏者と成れり。但し一代聖教
の大王三世諸仏の本懐たる法華の文には若し法を聞くこと有らん
者は無一不成仏と説き給へり、善導は法華經を行ぜん者は千人に
一人も得道の者有る可からずと定む何れの説に付く可きか、
無量義經には念仏をば未顕眞実とて実に非ずと言ふ法華經には
正直捨方便。但説無上道とて正直に念仏の觀經を捨て無上道の
法華經を持つ可しと言ふ此の両説水火なり何れの辺に付く可きや
善導が言を信じて法華經を捨つ可きか法華經を信じて善導の義を
捨つ可きか如何、夫れ一切衆生。皆成仏道の法華經、一たび
法華經を聞かば決定して菩提を成ぜんの妙典善導が一言に破れて

千中無一虚妄の法と成り、無得道教と云はれ平等大慧の巨益は
虚妄と成り多宝如来の皆是真実の証 明の御言妄語と成るか
十方諸仏の上至梵天の広長舌も破られ給ぬ、三世諸仏の大怨敵
と為り十方如来成仏の種子を失う大謗法の科甚重し大罪報の
至り無間・大城の業因なり、之に依つて忽に物狂いにや成けん所居
の寺の前の柳の木に登りて自ら頸をくくりて身を投げ死し畢んぬ
邪法のたたり踵を回さず冥罰爰に見たり、最後臨終の言に
云く此の身厭う可し諸苦に責められ暫くも休息無しと即ち所居の
寺の前の柳の木に登り西に向い願つて曰く仏の威神以て我を取り
観音・勢至来つて又我を扶けたまえと唱え畢つて青柳の上より身を
投げて自絶す云云、三月十七日くびをくくりて飛たりける程にく
くり縄や切れけん柳の枝や折れけん大旱魃の堅土

の上に落て腰骨を打折て、二十四日に至るまで七日七夜の間・悶絶
びやくち 壁地しておめきさげびて死し畢んぬ、さればにや是程の高祖をば
おつじょう 往生の人の内には入れざるらんと覚ゆ此事全く余宗の誹謗に非ず
ほうけしゅう 法華宗の妄語にも非ず善導和尚自筆の類聚伝の文なり云云、而も
く 流を酌む者は其の源を忘れず法を行ずる者は其の師の跡を踏む
べ 可し云云浄土門に入つて師の跡を踏む可くば臨終の時善導が如く
じがいあ 自害有る可きか、念仏者として頸をくくらずんば師に背く咎有る
べ 可きか如何。

にほんこく 日本国には法然上人浄土宗の高祖なり十七歳にして一切経を
ならいきわ てんだい 習極め天台六十巻に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得
てんまそ たりとののしり、天下無雙の智者山門第一の学匠なり云云、然る
てんだいしゅう てんないしゅう 到天魔や其の身に入にけん広学多聞の智慧も空く諸宗の頂上た
うちす はつしゅう る天台宗を打捨て八宗の外なる念仏者の法師と成りにけり大臣・

くぎょう

公卿の身を捨て民百姓と成るが如し、選択集と申す文を作つて

いちだい

一代五時の聖教を難破し念仏往生の一門を立てたり、仏説

ほうめつじんきょう

法滅尽經に云く五濁悪世には魔道興盛し魔沙門と作つて我が道を

えらん

壊乱し悪人転た海中の沙の如く善人甚だ少くして若は

もし

一人若は二人ならん云云即ち法然房是なりと山門の状に書かれた

り、

我が浄土宗の専修の一行をば五種の正行と定め権実・顕密の

しょだいじょう

諸大乘をば五種の雑行と簡て浄土門の正行をば善導の如く

けつじょうおうじょう

決定往生と勧めたり、観經等の浄土の三部經の外・一代顕密の諸

だいじょうきょう

大乘經・大般若經を始と為して終り法常住經に至るまで貞元

録に載する所の六百三十七部・二千八百八十三卷は皆是千中無一

いたずらもの

の徒物なり永く得道有る可からず、難行・聖道門をば門を閉じ

これを

之を抛ち之を闇き之を捨て浄土門に入る可しと勧めたり、一天の

きせん

貴賤首を傾け四海の道俗掌を合せ或は勢至の化身と号し或

は善導ぜんどうの再誕さいたんと仰あおぎ一天いつてん四海しかいになびかぬ木草もくそうなし、智慧ちえは日月にちがつの
如ごとく世間せけんを照てりして肩かたを並ならぶる人ひとなし名徳めいとくは一天いつてんに充みちて善導ぜんどうに
超こえ曇鸞どんらん・道綽どうしやくにも勝すぐれたり貴賤きせん・上下じやうげ・皆みな選せん択たく集しゆを以もつてつ佛法ぶつぽうの
明鏡めいぎやうなりと思おもい道俗どうぞく・男女なんによこ悉ことごとく法然ほうねん房ぼうを以もつて生身しょうしんの弥陀みだと仰あおぐ、
然しかりと雖いえども恭敬きやうけい供養くやうする者ものは愚癡ぐち迷惑めいわくの在俗ざいぞくの人ひと・帰依きえ渴仰かつごうする
人は無智むち

ほういつ 放逸の邪見の輩なり、権者に於ては之を用いず賢哲又之に随うと無し。

然る間・斗賀尾の明慧房は天下無雙の智人・広学多聞の明匠なり、摧邪輪三巻を造つて選択の邪義を破し、三井寺の長吏・実胤大僧正は希代の学者・名誉の才人なり浄土決疑集三巻を作つて専修の悪行を難じ、比叡山の住侶・仏頂房・隆真法橋は天下無雙の学匠・山門探題の棟梁なり彈選択上下を造つて法然房が邪義を責む、しかのみならず南都・山門・三井より度度奏聞を経て法然が選択の邪義亡国の基為るの旨訴え申すに依つて人王八十三代・土御門院の御宇・承元元年二月上旬に専修念仏の張本たる安楽・住蓮等を捕縛え忽ちに頭を刎ねられ畢んぬ、法然房源空は遠流の重科に沈み畢んぬ、其の時・摂政左大臣家実と申すはこのえどの近衛殿の御事なり此の事は皇代記に見えたり誰か之を疑わん。

しかのみならず法然房死去の後も又重ねて山門より訴え申すに
よ 依つて人皇八十五代・後堀河院の御宇嘉禄三年京都六箇所の本所よ
ほうねんほう せんちやくしゅう
り 法然房が選択集・並に印版を責め出して大講堂の庭に取り上げ
さんぜん たいしゅうかいこう さんぜ ぶつおん ほう たてまつ
て 三千の大衆会合し三世の仏恩を報じ奉るなりとて之れを焼失
ほうねんほう ぼしよ つのめそう おお
せしめ法然房が墓所をば犬神人に仰せ付けて之れを掘り出して
かもがわ
鴨河に流され畢んぬ。

宣旨・院宣・関白殿下の御教書を五畿・七道に成し下されて、六十
せんじ いんせん かんぱくでんか みきようしよ ごき しちどう
六箇国に念仏の行者・一日片時も之れを置く可からず対馬の島に
ねんぶつ ねんぶつ やじにや かつとき こ つしま
追遣る可きの旨諸国の国司に仰せ付けられ畢んぬ、此等の次第・
ろくはら ちゅうしんじょう かんとうさがみのかみ うげがみ めいきよう
両六波羅の注進状・関東相模守の請文等明鏡なる者なり。

嘉禄三年七月五日に山門に下さるる宣旨に云く。

専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、茲に因つて代代の御門・頻に
せんしゅうねんぶつ しよしゅうすいび こと せんじ いわ
厳旨を降され殊に禁遏を加うる所なり、而るを頃年又興行を構へ

さんもん
山門訴え申さしむるの間・先符に任せて仰せ下さるること先に畢ん
め、^そ其上且は^{かつ}仏法^{ぶっほう}の^{りょうい}陵夷

を禁ぜんが為かつ。且は衆徒しゅうとの鬱訴うつそを優やわらに依つて其その根本こんぽんと謂おもうを
もつりゆうかん じょうかく くうあみたぶつ そ
以て隆寛りゆうかん・成覚じょうかく・空阿弥陀仏等くうあみたぶつ とう其その身みを遠流おんりゅうに処しょせしむ可べきの由よし。
ふじつ せんげ
不日に宣下せんげせらるる所ところなり、余党よとうに於おいては其その在所ざいしょを尋たずね搜たずして
ていど ついきやく べ
帝土ていどを追却ついきやくす可べきなり、此この上うへは早く愁訴しゅうそを慰やすんじて蜂起ほうきを停止ていしす
可べきの旨むね・時刻じこくを回まわさず御下知ごけちあ有ある可べく候こう、者ていれ・論言りんげん此この如ごとし頼隆よりたか
・誠恐せいきょう・頓首とんしゅ謹言きんげん。

七月五日酉刻

右中弁うちゅうべん

よりたか
頼隆奉よりたかわる

進上天台座主大僧正御房政所しんじょうてんだいざす そうじょうごぼうまんどころ同七月十三日山門さんもんに下くださるる
せんじ いわ
宣旨せんじに云いく。

専修念仏興行せんしゅうねんぶつこうぎょうの輩やからを停止ていしす可べきの由よし・五畿ごき・七道しちどうに宣下せんげせられ
おわ 畢おわんぬ、且御存知ごぞんじあ有ある可べく候こう・論言りんげん此この如ごとく之これを悉つまびらかにす・頼隆よりたか・
せいぎょう とんしゅ きんげん
誠恐せいぎょう・頓首とんしゅ謹言きんげん。

七月十三日

右中弁頼隆奉わる

進上天台座主大僧正御房政所殿下御教書

專修念仏の事、五畿・七道に仰せて永く停止せらる可きの由・

先日宣下せられ候い畢んぬ、而るを諸国に尚其の聞え有り云云、

宣旨の状を守つて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰せ付けらる

可きの旨・山門訴え申し候、御存知有る可く候、此の旨を以て沙汰

申さしめ給う可き由・殿下の御気色候所なり、仍て執達件の

如し。

嘉禄三年十月十日

参議範輔在り判

武蔵守殿

永尊賢者の状に云く、此の十一日に大衆僉議して云く法然房

所造の選択は謗法の書なり天下之を止め置く可からず、仍て

在在所所の所持並に其の印板を大講堂に取り上げて三世の仏恩を

報ぜんが為に之を焼失せしめ畢ん

ぬ、又云く法然上人の墓所をば感神院の犬神人に仰せ付けて破却

せしめ畢んぬ。

嘉禄三年十月十五日・隆真法橋 申して云く専修念仏は亡国の

本為る可き旨文理之有りと。

山門より雲居寺に送る状に云く、邪師源空・存生の間には永く

罪条に沈み滅後の今は且死骨を勿ねられ、其の邪類・住蓮・安樂・

死を原野に賜い成覚・薩生は刑を遠流に蒙る殆ど此の現罰を以て

其の後報を察す可し云云。

嗚呼世法の方を云えば違勅の者と成り帝王の勅勘を蒙り今に御

赦免の天気之れ無し心有る臣下万民・誰人か彼の宗に於て布施供養

を展ぶ可きや、仏法の方を云えば正法誹謗の罪人為り無間地獄の

業類なり何れの輩か念仏門に於て恭敬礼拝を致す可きや、庶幾

くまっだいばなげう末代今の浄土宗・仏ざいせ在世の祖師・舍利弗しゃりほつ・阿難あなん等の如ごとく浄土宗じょうどを抛なげうつて法華經ほけきょうを持ちたも菩提ぼだいの素懷そかいを遂とぐ可べき者か。

日蓮
花押かおう

一〇 当世念佛者無間地獄事

104P

安房の国・長狭郡・東条花房の郷・蓮華寺に於て
浄円房 に対して日蓮阿闍梨之を註るす、文永元年

甲子九月二十二日。

問うて曰く当世の念佛者無間地獄と云う事其の故如何、答えて
云く法然の選択に就いて云うなり、問うて云く其の選択の意
如何、答えて曰く後鳥羽院の治・天下建仁年中に日本国に一の慧星
出でたり名けて源空・法然と曰う選択一卷を記して六十余紙に及べ
り、科段を十六に分つ第一段の意は道綽禅師の安樂集に依つて
聖道・浄土の名目を立つ、其の聖道門とは浄土の三部経等を除い
て自余の大小乗の一切経殊には朝家帰依の大日経・法華経・
仁王経・金光明経等の顕密の諸大乘経の名目阿弥陀仏より

いげ 以外の諸仏・菩薩・朝家御帰依の真言等の八宗の名目之を挙げて
じよりてりもん なす 聖道門と名く、此の諸経諸仏諸宗は正像の機に値うと雖も末法
に入つて之を行ぜん者は一人も生死を離る可からずと云云、又
どんらん ほつし 曇鸞法師の往生論註に依つて難易の一行を立つ第二段の意は善導
わじょう 和尚の五部九卷の書に依つて正雜二行を立つ、其の雜行とは道綽
の聖道門の料簡の如し、又此の雜行は末法に入つては往生を得
る者の干中

に一も無きなり、下の十四段には、或は聖道・難行・雜行をば小
ぜんこん 善根隨他意有上功德等と名け念仏等を以ては大善根隨自意無上
くどく 功德等と名けて、念仏に對して末代の凡夫此れを捨てよ此の門を閉
じよ之を閣けよ之を抛てよ等の四字を以て之を制止す、而て
にほんこくじゅう 日本國中の無智の道俗を始めて大風に草木の従うが如く皆此の義
したが 隨つて忽に法華・真言等に隨喜の意を止め建立の思を廃す、而る

間人毎ひとごとに平形ひらがたの念珠ねんじゆを以もつて弥陀みだの名号みょうごうを唱となえ、或あるは毎日まいにち三万遍さんまんべん・六万遍ろくまんべん・十万遍じゅうまんべん・四十八万遍はちまんべん・百万遍ひゃくまんべん等ごと・唱なる間ま・又また他の善根ぜんこんも無なく念仏堂ねんぶつだうを造つくること稻麻竹葦とうまちくいの如ごとく、結句けっくは法華真言ほつげしんごん

等の智者とおぼしき人人も皆、或は帰依を受けんが為に、或は往生極楽の為に皆、本宗を捨てて念仏者と成り、或は本宗にして念仏の法門を仰げるなり。

今云く日本国中の四衆の人人は形は異り替ると雖も、意根は皆一法を行じて悉く西方の往生を期す、仏法繁昌の国と見えたる処

に一の大きな疑を発する事は念仏宗の亀鏡と仰ぐ可き智者達念仏宗の大檀那と為る大名・小名並びに有徳の者多分は臨終思う

如くならざるの由之を聞き之を見る、而るに善導和尚十即十生と定め十遍乃至一生の間念仏者は一人も漏れず往生を遂ぐ可しと

見えたり人の臨終と善導の釈とは水火なり。
爰に念仏者会して云く往生に四つ有り、一には意念往生・般舟

三昧経に出でたり、二には正念往生・阿弥陀経に出でたり、三には無記往生群疑論に出でたり、四には狂乱往生觀経の下品下生に

出でたり、詰つて曰く此の中の意。正の二は且く之を置く無記往生
は何れの経論に依つて懷感禅師之を書けるや、経論に之無くば
信用取り難し、第四の狂乱往生とは引証は觀經の下品下生の文
なり、第一に悪人臨終の時妙法を覚れる善知識に値つて覚る所の
諸法実相を説かして之を聞く者正念存し難く十悪・五逆具諸
不善の苦に逼め被れて覚ることを得ざれば善知識実相の初門と
為る故に称名して阿弥陀仏を念ぜよと云うに音を揚げて唱え了ん
ぬ、此れは苦痛に堪え難くし
て正念を失う狂乱の者に非るか狂乱の者争か十念を唱う可き、
例せば正念往生の所撰なり全く狂乱の往生には例す可からず、
而るに汝等が本師と仰ぐ所の善導和尚は此の文を受けて転教口称
とは云えども狂乱往生とは云わず、其の上汝等が昼夜十二時に祈
る所の願文に云く願くは弟子等命終の時に臨んで心顛倒せず心

錯乱さくらんせず心しん・失念しつねん

せず身心しんしん諸もろの苦痛くつう無く身心しんしん・快樂がいらく・禪定ぜんじょうに入るが如ごとし等とう云云、此この

中に錯乱さくらんとは狂乱きやうらんか而しかるに十悪じゅうあく・五逆ごぎやくを作つくらざる当世とうせの念仏ねんぶつの

上人じやうじん達たつ・並ならに大檀那だんだな等の臨終りんじゆうの悪瘡あくそう等の諸もろの悪あく重病じゆうびゆう並ならに臨終りんじゆうの

狂乱きやうらんは意いを得えざる事ことなり、而しかるに善導ぜんどう和尚わじゆうの十即じゅうじやく十生じゅうじゆうと定め又また

・定得じやうとく往生おうじゆう等の釈しゃくの如ごときは疑うたがひ無なきの処ところに十人じゅうにんに九人くわにん往生おうじゆうすと

雖いえども一人ひとり往生おうじゆうせざれば猶なほ不審ふしん発おこる可べし、何いかに況いわんやや念仏宗ねんぶつじゆうの長者ちやうじや

為なる善慧ぜんね・隆觀りゆうくわん・聖光せいこう・薩生さつじゆう南無なむ・真光しんこう等ら皆みな悪瘡あくそう等の重病じゆうびゆうを受け

て臨終りんじゆうに狂乱きやうらんして死しするの由これ之を聞きき又また之を知しる、其その已下いかの

念仏者ねんぶつの臨終りんじゆうの狂乱きやうらん其その数かずを知らず、善導ぜんどう和尚わじゆうの定じやうむる所ところの

十即じゅうじやく十生じゅうじゆうは闕かけて嫌きらえる所ところの千中せんちゆう無な一いつと成なんぬ、千中せんちゆう無な一いつと定め

られし法華ほつげ・真言しんごんの行者ぎやうじやは粗ぼぼ臨終りんじゆうの正念しやうねんなる由これ之を聞きけり、

念仏ねんぶつの法門ほうもんに於おては正像末しやうざうまつの中には末法まっぽうに殊ことに流布りゅうふす可べし、利根りこん・

鈍根・善人・悪人・持戒・破戒等の中には鈍根悪人破戒等殊に往生す可しと見えたり、故に道綽禪師は唯有浄土一門と書かれ、善導和尚は十即十生と定め往生要集には濁世末代の目足と云えり、念仏は時機已に叶えり行ぜん者空しかる可からざるの処に是くの如きの相違は大なる疑なり、若し之に依つて本願を疑わば仏説を疑うに成んぬ進退惟谷れり此の疑を以て念仏宗の先達並びに聖道の先達に之を尋るに一人として答うる人之れ無し、念仏者救うて云く、汝は法然上人の捨閉閣抛の四字を謗法と過むるか汝が小智の及ばざる所なり、故に上人此の四字を私に之を書くと思えるか、源曇鸞・道綽・善導の三師の釈より之を出したり、三師の釈又私に非ず、源浄土の三部経竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出ず、

雙觀經の上卷に云く設い我仏を得乃至十念等と云云、第十九の願

に云くいわ設たい我われ仏ほとけを得もて諸もろの功もろ徳くどくを修ほめ菩ぼ提だい心しんを發おす等と云云おこ、下
 卷いわに云いく乃ない至し一いち念ねん等と云云おこ、第じ十じゅう八ぱちの願げん成じょう就じゆの文ぶんなり、又また下した卷まきに
 云いく其その上うへ・輩はい者しや 一いつ向こう專せん念ねん・輩はい者しや 一いつ向こう專せん念ねん其そ下した輩はい者しや 一いつ向こう
 專せん念ねんと云云おこ、此これは十じゅう九きゅう願げん成じょう就じゆの文ぶんなり、觀かん無む量りやう壽じゆ經ぎやうに云いく「仏
 阿あ難なんに告こぐ汝なんじ好こうく是この語ごを持たて是この語ごを持たつ者ものは即すなち是これ
 無む量りやう壽じゆ佛ぶつの名なを持もつ等と云云おこ、阿あ彌み陀だ經ぎやうに云いく小せう善ぜん根こんを以もつて
 可べからず乃ない至し一いち日じつ七しち日じつ等と云云おこ、先まづ雙そう觀くわん經ぎやうの意いは念ねん佛ぶつ往おう生じやう
 諸しよ行ぎやう往おう生じやうと説せつけども一いつ向こう專せん念ねんと云いつて諸しよ行ぎやう往おう生じやうを捨あて了あんぬ、
 故ゆえに彌み勒ろくの付ふ属ぞくには一いつ向こうに念ねん佛ぶつを付ふ属ぞくし了あんぬ、觀かん無む量りやう壽じゆ經ぎやうの十
 六ろく觀くわんも上かみの十じゅう五ごの觀くわんは諸しよ行ぎやう往おう生じやう、下げ輩はい一いつ觀くわんの三さん品ひんは念ねん佛ぶつ往おう生じやうな
 り、仏あ難なん尊そん者じやに念ねん佛ぶつを付ふ属ぞくするは諸しよ行ぎやうを捨あつる意いなり、阿あ彌み陀
 經ぎやうには雙そう觀くわん經ぎやうの諸しよ行ぎやう觀くわん無む量りやう壽じゆ經ぎやうの前まへ十じゅう五ご觀くわんを束たばねて、小せう善ぜん根こんと名
 け往おう生じやうを得えざるの法おと定あめ畢あんぬ、雙そう觀くわん經ぎやうの念ねん佛ぶつをば無む上じやう

功德くどくと名けて彌勒みろくに付屬ふぞくし、觀經かんきょう・念仏ねんぶつをば芬陀利華ふんたりけと名けて阿難あなん
 に付屬ふぞくし、阿彌陀經あみだの念仏ねんぶつをば大善根ぜんこんと名けて舍利弗しゃりほつに付屬ふぞくす、終
 の付屬ふぞくは一經いつきょうの肝心かんじんを付屬ふぞくするなり又一經いつきょうの名を付屬ふぞくするな
 り、三部經さんぶきょうには諸もろもろの善根ぜんこん多しと雖いえども其その中に念仏ねんぶつ最さいなり、故ゆえに題目
 には無量壽經むりょうじゆきょう・觀無量壽經かんむりやうじゆきょう・阿彌陀經あみだ等らと云いえり、釈摩訶衍論しゃくまかえんろん・
 法華論等ほつげろんの論を以て之れを勸かんがつるに一切經いつさいきょうの初はつには必ず南無なむの二
 字じ有り、梵本ぼんほんを以て之を言のたまわば三部經さんぶきょうの題目だいもくには南無なむ之れ有り、
 雙觀經そうかんきょうの修諸しゆもろもろの二字にに念仏ねんぶつより外ほかの八万はちまん聖教しやうきやう残のこる可べからず、
 觀無量壽經かんむりやうじゆきょうの三福九品等とくじゆだいじやうの誦誦いっく大乗だいじゆの一句いっさいきやうに一切經いつさいきやう残のこる可べから
 ず、阿彌陀經あみだの念仏ねんぶつの大善根ぜんこんに對たいする小善根ぜんこんの語ことばに法華經等ほけきやう漏もる
 可べきや、總しよじて淨土じやうどの三部經さんぶきやうの意いは行者ぎやうじやの意樂いぎやうに隨したがわんが為ために
 暫しばしく諸行しよぎやうを擧あぐと雖いえども、再び念仏ねんぶつに對たいする時は諸行しよぎやうの門かどを閉しじて
 捨閉閣拋しやへいする事か顕然けんねんなり、例たとせば法華經ほけきやうを説ためかんが為ために無量義經むりやうぎきやう

を説くよんじゆつよねんの時に四十余年の経を捨てて法華ほつげの門を開くが如し、

竜樹菩薩りゆじゆぼさつじゆうじゆう十住毘婆沙論びしゃもんろんを造つて一代聖教いちだいしやうきやうを難易なんいの二道にどうに分て

り、難行道なんかうどうとは三部經さんぶきやうの外ほかの諸行しよぎやうなり易行道いぎやうどうとは念仏ねんぶつなり、經論きやうろん

此かくの如ごとく分明ふんみやうなりと雖も震旦いえどの人師しんたん此にんしの義を知らず唯善導ただぜんどう一師いっし

のみ此の義を發得ほつとくせり、所以ゆえんに雙觀經そうかんきやうの三輩さんばいを觀念かんねん法門ほふもんに書いて

云いわく「一切衆生いっさいしゆじゆう根性こんじやう不同ふどうにして上中下じやうちゆうげ有り其その根性こんじやうに隨したがつて仏

皆無量壽みなむりやうじゆぶつ佛ぶつの名を專念せんねんすることを勸すすむ」等云云、此の文の意は發

菩提心ぼだいしん修諸功德しゆしよくどく等の諸行しよぎやうは他力本願たりにきほんがんの念仏ねんぶつに値あわざりし以前いぜんに

修する

事ことよと有りけるを忽たちまちに之を捨てよと云うとも行者かうぎ用もちゆ可べからず

故ゆえに暫しばしく諸行しよぎやうを許ゆるすなり、實まことには念仏ねんぶつを離はなれて諸行しよぎやうを以もつて往生おうじやう

を遂とぐる者もの之これ無なしと書きしなり、觀無量壽經かんむりやうじゆきやうの仏告阿難ぶつこうあなん等の文を

善導ぜんどうの疏じよの四しに之これを受けて曰いわく「上來じやうらいに定散じやうさん兩門りやうもんを説いくと雖いえども

仏の本願に望めば意・衆生の一向に専ら阿弥陀の名を称するに在り云云、定散とは八万の権実・顕密の諸経を尽して之を撰して念仏に対して之れを捨つるなり、善導の法事讚に阿弥陀經の大小善根の故を釈して云く「極樂は無為涅槃界なり隨縁の雜善恐らくは生じ難し故に如来要法を選んで教えて弥陀專修を念ぜしむ」等と云云、諸師の中に三部經の意を得たる人は但導一人のみ、如来の三部經に於ては是くの如く有れども正法・像法の時は根機猶利根の故に諸行往生の機も之有りけるか。

然るに機根衰えて末法と成る間・諸行の機漸く失い念仏の機と成れり、更に阿弥陀如来・善導和尚と生れて震旦に此の義を顕し、和尚日本に生れて初は叡山に入つて修行し後には叡山を出でて一向に專修念仏して三部經の意を顕し給いしなり、汝捨閉閣抛の四字を謗法と咎むる事未だ導和尚の積並びに三部經の文を窺わざ

るか、狗いぬの雷かみを齧かむが如ごとく地獄じじくの業ごうを増なす汝なんじ知らずんば浄土じょうど家のちしや智者ちしやに問とえ。

不審ふしんして云いわく上かみの所立しよりゆうの義ぎを以もつて法然ほつねんの捨閉閣しゃへい抛かくほうの謗言ぼうげんを救すくう

か実じつに浄土じょうどの三師さんし並なりに竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつ・仏説ぶつせつにより此こゝの三部經さんぶきやうの文ぶんを開ひらく

に念仏ねんぶつに對たいして諸行しよぎやうを傍ぼうと為なす事粗經文ほぼきやうもんに之これ見えたり、經文きやうもんに

嫌きらわれし程ほどの諸行しよぎやう念仏ねんぶつに對たいして之これを嫌きらわんこと過あむ可べきに非あらず、

但不審ふしんなる処ところは雙觀經そうかんきやうの念仏ねんぶつ已外いげの諸行しよぎやう觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの念仏ねんぶつ以外いがい

の定散じやうさん・阿彌陀經あみだの念仏ねんぶつの外ほかの小善根せんこんの中に法華ほつげ・涅槃ねはん・大日經だいにちきやう等とう

の極大乗ごくだいじやうきやう經きやうを入れ念仏ねんぶつに對たいして不往生ふじやうじやうの善根ぜんこんぞと仏ぶつの嫌きらわせ

給たまいけるを竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつ三師さんし並なりに法然ほつねん之これを嫌きらわば何いずれの失有しつらん但た

三部經さんぶきやうの小善根せんこん等の句くに法華ほつげ・涅槃ねはん・大日經だいにちきやう等とうは入いる可べしとも覺おぼえ

ざれば三師さんし並なりに法然ほつねんの積ちを用もちいざるなり、無量義經むりやうぎきやうの如ごときは

四十余年よんじゆつよねん・未顯真實みけんしんじつと説ほついて法華八箇年ほつげはちかねん

を除きて以前四十二年に説く所の大小・権実の諸経は一字一点も
未顕眞実の語に漏る可しとも覺えず、しかのみならず四十二年の
間に説く所の阿含・方等・般若・華嚴の名目之を出だせり、既に
大小の諸経を出して生滅無常を説ける諸の小乗経を阿含の句
に撰し、三にして無差別の法門を説ける諸大乘経を華嚴海空の句
に撰し、十八空等を説ける諸大乘経を般若の句に撰し、彈呵の意
を説ける諸大乘経を方等の句に撰す、是くの如く年限を指し經の
題目を挙げ無量義經に依つて法華經に對して諸経を嫌い・嫌える所
の諸経に依れる諸宗を下すこと天台大師の私に非ず、汝等が浄土
の三部經の中には念仏に對して諸行を嫌う文は之有りと嫌わる
る諸行は浄土の三部經よりの外の五十年の諸経なりと云う現文は
之無し、又無量義經の如く阿含・方等・般若・華嚴等をも挙げず誰
か知る三部經には諸の小乗経並に歴劫修行の諸経等の諸行を

仏・小善根と名け給うと云ふ事を、左右無く念仏よりの外の諸行を
小善等と云えるを法華・涅槃等の一代の教なりと打ち定めて捨閉
閣抛の四字を置きては仏意にや乖くらんと不審する計りなり、例
せば王の所従には諸人の中諸国の中の凡下等一人も残る可からず
民が所従には諸人諸国の主は入る可からざるが如し、誠に浄土の
三部経等が一代超過の経ならば五十年の諸経を嫌うも其の謂れ
之有り

なん三部経の文より事起つて一代を撰す可しとは見え、但一機
一縁の小事なり何ぞ一代を撰して之を嫌わん、三師並に法然此の
義を弁えずして諸行の中に法華・涅槃並に一代を撰して末代に於て
之を行ぜん者は千中無一と定むるは近くは依経に背き遠くは仏意
に違う者なり、但し竜樹の十住毘婆沙論の難行の中に法華・
真言等を入ると云うは論文に分明に之有りや、設い論文に之有り

とも慥なる經文之無くば不審の内なり、竜樹菩薩は権大乘

の論師為りし時の論なるか、又訳者の入れたるかと思得可し、

其の故は仏は無量義經に四十余年は難行道・無量義經は易行道と

定め給う事・金口の明鏡なり、竜樹菩薩・仏の記文に當つて出世し

て諸經の意を演ぶ豈仏説なる難易の二道を破つて私に難易の二道

を立てんや、随つて十住毘婆沙論の一部始中終を開くに全く

法華經を難行の中に入れたる文之無く只華嚴經の十地を釈するに

第二地に至り畢つて宣べず、又此の論に諸經の歴劫修行の旨を

挙ぐるに菩薩難行道に墮し二乘地に墮して永不成仏の思を成す由

見えたり法華已前の論なる事疑無し、竜樹菩薩の意を知らず

して此の論の難行の中に法華・真言を入れたりと料簡するか、

浄土の三師に於ては書釈を見るに難行・雜行

・聖道の中に法華經を入れたる意・粗之有り、然りと雖も法然が

こと ほうげん これな
如き放言の事之無し、しかのみならず仏法を弘めん輩は教機時国
きようほうる ふ ぜんし かんが べ
教法流布の前後を む可きか。
にょらいざいせ

如來在世に前の四十余年には大小を説くと雖も説時至らざるの
ゆえ ほんかい の たま
故に本懷を演べ給わず、機有りと雖も時無ければ大法を説き給わ
りようぜん
ず、靈山八年の間、誰か円機ならざる時も来る故に本懷を演べた
もうに権機移つて実機と成る、法華經の流通並に涅槃經には実教
を前とし権教を後とす可きの由見えたり、在世には実を隠して権
を前にす滅後には実を前として権を後と為す可き道理顯然なり、
しか いえど てんじくこく ししょうほう
然りと雖も天竺国には正法一千年の間は外道有り、一向小乗の
国有り、又一向大乘の国有り、又大小兼学の国有り、漢土に仏法
わた ても 又天竺の如し、日本国に於ては外道も無く小乗の機も
なく ただだいじょう き にほんこく おい げどう なく しょうじょう
無く唯大乘の機のみ有り、大乘に於ても法華よりの外の機無し、
ただ ぶつぼう にほん わた
但し仏法・日本に渡り始めし時、暫く小乗の三宗権大乘の三宗を

ひろ 弘むと雖も桓武の御宇に伝教大師の御時六宗・情を破つて天台宗
と成りぬ、俱舎・

成実・律の三宗の学者も彼の教の如く七賢三道を経て見思を断じ

二乗と成らんとは思わず、只彼の宗を習つて大乘の初門と為し彼

の極を得んとは思わず、権大乘の三宗を習える者も五性各別等の

宗義を捨てて一念三千・五輪等の妙觀を窺う、大小・権実を知ら

ざる在家の檀那等も一向に法華・真言の学者の教に随つて之を供養

する間・日本一洲は印度震旦には似ず一向純円の機なり、恐くは

靈山八年の機の如し、之を以て之を思うに浄土の三師は震旦・

権大乘の機に超えじ、法然に於ては純円の機純円の教・純円の国

を知らず、権大乘の一分為る觀經等の念仏、

権実をも弁えざる震旦の三師の積之を以て此の国に流布せしめ

実機に権法を授け、純円の国を権教の国と成し醍醐を嘗むる者に

蘇^そ味^みを^を与^よう^うる^るの^の失^と誠^がに^に甚^はは^はだ^だだ^だ多^たし^し。

題目 弥陀名号 勝劣事

111P

南無妙法蓮華經と申す事は唱えがたく南無阿弥陀仏・南無薬師
如来など申す事は唱えやすく又文字の数の程も大旨は同けれど
も功德の勝劣は遙に替りて候なり、天竺の習ひ仏出世の前には二
天三仙の名号を唱えて天を願ひけるに仏世に出させ給いては仏の
御名を唱ふ、然るに仏の名号を二天三仙の名号に対すれば天の名
は瓦礫のごとし仏の名号は金銀如意宝珠等のごとし、又諸仏の
名号は題目の妙法蓮華經に対すれば瓦礫と如意宝珠の如くに侍る
なり、然るを仏教の中の大小・権実をも弁へざる人師などが
仏教を知りがほにして仏の名号を外道等
に対して如意宝珠に譬へたる経文を見又法華經の題目を如意宝珠

に譬へたる經文と喩の同きをもつて念仏と法華經とは同じ事と思へるなり、同じ事と思う故に又世間に貴と思う人の只弥陀の名号計を唱うるに随つて皆人一期の間・一日に六万遍・十万遍などと申せども法華經の題目をば一期に一遍も唱へず、或は世間に智者と思はれたる人人外には智者氣にて内には仏教を弁へざるが故に念仏と法華經とは只一なり南無阿弥陀仏と唱うれば法華經を一部よむにて侍るなんと申しあへり是は一代の諸經の中に一句一字もなき事なり、設ひ大師先徳の釈の中より出たりとも且は觀心の釈か且はあて事かなんど心得べし、法華經の題目は過去に十萬億の生身の仏に値ひ奉つて功德を成就する人初めて妙法蓮華經の五字の名を聞き始めて信を致すなり、諸仏の名号は外道・諸天・二乗・菩薩の名号にあはすれば瓦礫と如意宝珠の如くなれども法華經の

題目だいもくに対すれば又瓦礫がりやくと如意宝珠にょいほうじゆとの如ごとし、当世とうせの学者がくしゃは法華經ほけきやう
の題目だいもくと諸仏しよぶつの名号みょうごうとを功德くどくひとしと思ひ又同じ事と思へるは
瓦礫がりやくと如意宝珠にょいほうじゆとを同じと思ひ一ごとと思ふが如ごとし、止觀しかんの五いに云いわく
「たといたとい設たといい世いを厭いとう者しも下劣げれつの乗もてを翫あそび枝葉しやうに攀付はんぶし狗作務いぬさむに狎なれ
みこつ
・みこつ猴みこつを敬みこついて

帝たいしやく釈なと為がし瓦礫がを崇あめて是み・明珠みなりとす此くの黒闇くの人あ豈に道を論ろん
ず可べけんやら等ら云云、文の心は設たひ世をいとひて出家し遁世ゆして山林さん
に身をかくし名利み名聞りをたちて一向い後世こうを祈いのる人人ひとも法華ほ經けの
大乘だいじようをば修行しゆぎやうせずして權教ごんきやう下劣げの乗のりにつきたる名号み等らを唱となうる
を瓦礫がを明珠みなどと思おもいたる僻人びやくにんに譬たとへ闇くらき惡道あくどうに行くべき者
と書かれて侍はるなり、弘決くの一いつには妙樂み大師たう・善住ぜん天子てん經しきをかたら
せ給たまいて法華ほ經けの心こころを顯あはして云いく「法ほを聞きいて謗ほうを生おこし地獄じじくに
墮だするは恒沙ごうの仏ぶつを供養くする者ものに勝まさる等ら云云、法華ほ經けの名なを聞き
てそしる罪つみは阿弥あ陀だ仏ぶつ・釈迦しゃ仏ぶつ・藥師やくし佛ぶつ等の恒河沙ごうの佛ぶつを供養くし
名号みを唱となうるにも過すぎたりされば当世とうの念ねん佛ぶつ者の念ねん佛ぶつを六万遍ろくまん
乃至ないし十萬遍じじゅうまん申まうすなんと云いへども彼かにては終ついに生死しじうをはなるべから
ず、法華ほ經けを聞きくをば千中せんちゆう無む一いつ・雜行ぞうぎやう・未み有う一人いちにん得者とくしやなど名なけて
或あるは抛なげうてよある・或あるは門かどを閉しよなんと申まうす謗法ほうこそ設たひ無間むげん・大城だいじよう

に墮おちるとも後に必生死じふじは離れ侍はべらんずれ、同くは今生こんじふに信をなしたらば、いかによく候なほなん。

問もんう世間せけんの念仏ねんぶつ者ものなんどの申もうす様ようは此身こゝろにて法華經ほけきようなんどを破はする事ことは争いかにか候なほべき念仏ねんぶつを申もうすもとくとく極樂世界ごくらくせかいに参まゐりて法華經ほけきようをさとらんが為ためなり、又また或あるは云いわく法華經ほけきようは不淨ふじようの身みにては叶あひがたし恐れおそれもあり念仏ねんぶつは不淨ふじようをも嫌きらはねばこそ申もうし候なほへなんど申もうすはいかん、答こたえて云いわく此こゝろの四五年しごねんの程ほどは世間せけんの有智うち・無智むちを嫌きらはず此こゝろの義ぎをば・さなんめりと思おもいて過すくる程ほどに日蓮にちれん一代いちだい聖教しやうきやうをあらあら引き見るにいまだ此こゝろの二義にぎの文ぶんを勘かんへ出いささず・詮せんずるところところ近來きんらいの念仏ねんぶつ者もの並ならに有智うちの明匠めいしやうとおぼしき人人ひとびとの臨終りんじゆうの思おもうやうにならざるは是こゝろ・大謗法ほうほうの故ゆゑなり、人ひとごとに念仏ねんぶつ申もうして淨土じゆつどに生なれて法華經ほけきようをさとらんと思おもう故ゆゑに穢土えどにして法華經ほけきようを行なざる者ものをあざむき又また・行なざる者ものもすて念仏ねんぶつを申もうす心こゝろは出い来るきたなりと覺おぼゆ・謗法ほうほう

の根本こんぽん此こゝの義ぎより出いたり、法華經ほけきょうこそ此こゝの穢えび土つどより浄土じよつどに生なずる
正じやう因いんにては侍はべれ念ねん仏ぶつ等はら未み顕けん真しん実じつの故ゆゑに浄土じよつどの直ちよく因いんにはあらず、
然しかるに浄土じよつどの正じやう因いんをば極ごく樂らくにして後のちに修しゆ行ぎやうすべき物ものと思おもひ極ごく樂らくの
直ちよく因いんにあらざる念ねん仏ぶつをば浄土じよつどの正じやう因いんと思おもう事こと僻びやく案あんなり、浄土じよつど門もん
は春沙しゆんさを田でんに蒔まいて秋米しゆまいを求もとめ天月てんげつをすてて

水に月を求るに似たり人の心に叶いて法華經を失ふ大術此の義に
はずぎず、次に不淨念仏の事・一切念仏者の師とする善導和尚・
法然上人は他事にはいわれなき事多けれども此の事にをいてはよ
くよく禁められたり、善導の觀念法門經に云く酒肉五辛を手に取
らざれ口にかまざれ手にとり口にもかみて念仏を申さば手と口に
悪瘡付くべしと禁め法然上人は起請を書いて云く、酒肉五辛を服
して念仏申さば予が門弟にあらずと云云、不淨にして念仏を申すべ
しとは当世の念仏者の大妄語なり。
問うて云く善導和尚・法然上人の釈を引くは彼の釈を用るや否
や、答えて云く、しからず念仏者の師たる故に彼がことば己が祖師
に相違するが故に彼の祖師の禁めをもて彼を禁るなり、例せば世間
の沙汰の彼が語の彼の文書に相違するを責るが如し、問うて云く
善導和尚・法然上人には何事の失あれば用いざるや、答えて云く仏

の御遺言には我が滅度の後には四依の論師たりといへども法華經に
たがはば用うべからずと涅槃經に返す返す禁め置かせ給いて侍るに
法華經には我が滅度の後・末法に諸經失せて後・殊に法華經流布す
べき由・一所二所ならずあまたの

所に説かれて侍り、随つて天台・妙樂・伝教・安然等の義に此事
分明なり、然るに善導・法然・法華經の方便の一分たる四十余年の
内の未顕眞実の觀經等に依つて仏も説かせ給はぬ我が依經の讀誦
大乘の内に法華經をまげ入れて還つて我が經の名号に對して讀誦
大乘の一句をすつる時・法華經を抛てよ・門を閉じよ・千中無一な
んど書いて侍る僻人をば眼あらん人は是をば用うべしやいなや。
疑つて云く善導和尚は三昧發得の大師・本地・阿彌陀仏の化身・
口より化仏を出せり、法然上人は本地・大勢至菩薩の化身既に
日本國に生れては念仏を弘めて頭より光を現ぜり争か此等を

僻人びやくにんと申もうさんや、又また善導ぜんどう和尚わじょう・法然ほうねん上人しょうにんは汝なんじが見みる程ほどの法華經ほけきょう並ならに一切いっさい經きょうをば見み給たまはざらんや定さだめて其そのの故ゆえ是これあらんか、答こたえて云いく汝なんじが難なんずる處ところをば世間せけんの人人ひとびと定さだめて道理どうりと思おもはんか、是これ偏ひとえに法華經ほけきょう並ならに天台てんだい・妙樂みょうらく等らの実經じつきょう・実義じつきぎを述たべ給たまへる文義もんぎを捨すて善導ぜんどう・法然ほうねん

等の謗法の者にたばらかされて年久くなりぬるが故に思はする処
なり、先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか。或る外道は
大海を吸干し。或る外道は恒河を十二年まで耳に湛えたり第六天
の魔王は三十二相を具足して仏身を現ず、阿難尊者・猶魔と仏とを
弁へず善導・法然が通力いみじしというとも天魔・外道には勝れず、
其の上・仏の最後の禁しめに通を本とすべからずと見えたり、次に
善導・法然は一切経並に法華経をばおのれよりも見たり
なんどの疑ひ是れ又謗法の人のためには。さもと思ひぬべし、然り
といへども如来の滅後には先の人とは多分賢きに似て後の人は大旨は
はかなきに似たれども又先の世の人の世に賢き名を取りて。はか
なきも是あり、外典にも三皇・五帝・老子・孔子の五経等を学びて
賢き名を取れる人も後の人に。くつがへされたる例是れ多きか、
内典にも又かくの如し、仏法・漢土に渡りて五百年の間は明匠・国

に充滿せしかども光宅の法雲道場の慧観等には過ぎざりき、

此等の人人は名を天下に流し智水を國中にそそぎしかども天台

智者大師と申せし末の人・彼の義どもの僻事なる由を立て申せしか

ば初には用ひず、後には信用を加えし時・始めて五百余年の間の

人師の義どもは僻事と見えしなり、日本国にも仏法渡りて二百余

年の間は異義まちまちにして何れを正義とも知らざりし程に伝教

大師と申す人に破られて前二百年の間の私義は破られしなり、

其の時の人人も当時の人の申す様に争か前前の人は一切経並に

法華經

をば見ざるべき、定めて様こそあるらめなんと申しあひたりしかど

も叶はず経文に違ひたりし義どもなれば終に破れて止みにき、

當時も又かくの如し此の五十余年が間は善導の千中無一・法然が

捨閉閣抛の四字等は権者の釈なればゆへこそあらんと思ひてひら信

じに信じたりし程に日蓮が法華經の・或は惡世末法時・或は
於後末世・或は令法久住等の文を引きむかへて相違をせむる時・我
が師の私義破れて疑いあへるなり、詮ずるところ後・五百歳の
經文の誠なるべきかの故に念仏者の念仏をもて法華經を失ひつる
が還つて法華經の弘まらせ給うべきかと覺ゆ、但し御用心の御為に
申す世間の惡人は魚鳥鹿等を殺して世路を渡る、此等は罪なれど
も佛法を失ふ縁とはならず懺悔

をなさざれば三悪道にいたる、又魚鳥鹿等を殺して売買をなして
善根を修する事もあり、此等は世間には悪と思はれて遠く善とな
る事もあり、仏教をもつて仏教を失ふこそ失ふ人も失ふとも思は
ず只善を修すると打ち思つて又そばの人も善と打ち思つてある程
に思はざる外に悪道に墮つる事の出来候なり、当世には念仏者なん
どの日蓮に責め落されて我が身は謗法の者なりけりと思つる者も是
あり、聖道の人人の御中にこそ実の謗法の人人は侍れ
彼の人人の仰せらるる事は法華經を毀る念仏者も不思議なり
念仏者を毀る日蓮も奇怪なり、念仏と法華とは一体の物なり、さ
れば法華經を読むこそ念仏を申すよ念仏申すこそ法華經を読むに
ては侍れと思つ事に候なりと、かくの如く仰せらるる人人・聖道の
中にあまたをはしますと聞ゆ、随つて檀那も此の義を存じて日蓮
並に念仏者をおこがましげに思へるなり、先日蓮が是れ程の事をし

らぬと思へるははかなし。

仏法ぶつぽう・漢土かんどに渡りわた初めし事は後漢ごかんの永平えいへいなり渡りわたとどまる事は唐たうげんせんそうそうこうこうてい

の玄宗皇帝げんそうこうてい・開元十八年げんそうこうていなり、渡れるところの経きやうぎやう・律りつ・論ろん・五千四十

八卷やくしや・訳者やくしや一百七十六人そ其の経きやうぎやうの中に南無阿弥陀なむあみだぶつは即南無

妙法蓮華みやうほうれんげきやう経きやうなりと申もうす経は一卷いっけん・一品いっぴんもおはしまさざる事ことなり、

其の上阿弥陀あみだぶつの名を仏ぶつ・説とき出し給たまう事は始め華嚴けごんより終り

般若經はんげきやうに至るいたまで四十二年しにじふにねんが間に所ところに説とかれたり、但ただし阿含あこん經きやう

をば除いく一代いちだい聽聞しんもんの者もの是これを知しれり、妙法蓮華みやうほうれんげきやう經きやうと申もうす事は仏の御

年ねん

七十二しじふに成道じやうだうより已来このかた四十二年しにじふにねんと申もうせしに靈山りやうぜんにましまして

無量むりやう義ぎ処しよ三昧さんまいに入り給たまいし時とき、文殊もんじゆ・弥勒みろくの問答もんたうに過去かこの

日月にちげつ燈明とうみやう仏ぶつの例れいを引ひいて我われ・燈明とうみやう仏ぶつを見るみる乃至な法華ほふけ經きやうを説とかんと

欲ほすと先例せんれいを引ひきたりし時ときこそ南閻浮提えんぶだいの衆生しゆじやうは法華ほふけ經きやうの御名みなを

ば聞き初めたりしか、三の巻の心ならば阿弥陀仏等の十六の仏は
昔大通智勝仏の御時・十六の王子として法華經を習つて後に正覺を
ならせ給へりと見えたり、弥陀仏等も凡夫にてをはしませし時は
妙法蓮華經の五字を習つてこそ仏にはならせ給ひて侍れ、全く南無
阿弥陀仏と申して正覺をならせ給いたりとは見え、妙法蓮華經
は能開なり南無阿弥陀仏は所開なり、能開所開を弁へずして南無
阿弥陀仏こそ南無妙法蓮華經よ

と物知りものしりがほに申し侍はべるなり、日蓮にちれん幼少ようしょうの時とき・習ならいそこなひの
天台宗てんだいしゅう・真言宗しんごんしゅうに教しんへられて此この義ぎを存ぞんじて数十年じゅうじゅうねんの間ありしな
り、是これ存外ぞんがいの僻案びやくあんなり但ただし人師にんしの釈しゃくの中に一いつ体たいと見えたる釈しゃくど
もあまた侍はべる、彼は觀心くわんじんの釈しゃくか・或あるは仏ぶつの所証しよしやうの法門ほうもんにつけて述のた
るを今いまの人ひと弁わきまえへずして全体ぜんたい・一いつなりと思おもいて人ひとを僻人びやくにんに思おもうなり、
御おん迹けいせきあるべきなり、念仏ねんぶつと法華經ほけきやうと一いつつならば仏ぶつの念仏説ねんぶつせかせ
給たまいし觀經等くわんきやうとうこそ如来出世にょらいしゅつせの本懐ほんかいにては侍はべらめ、彼かをば本懐ほんかいとも
をばしめさずして法華經ほけきやうを出世しゅつせの本懐ほんかいと説せかせ給たまうは念仏ねんぶつと一いつ体
ならざる事こと明白めいぱくなり、其そのの上うへ多くの真言宗しんごんしゅう・天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとに値あひ
奉たてまりて候もちし時とき・此この事ことを申しければ、されば僻案びやくあんにて侍はべりけりと
申もちす人ひと是これ多おし、敢あて証文しやうもんに經文きやうもんを書かいて進すぜず候もちはん限かぎりは御
用もちひ有あるべからず、是こそ謗法ぼうぼうとなる根本こんぽんにて侍はべれ、あなかしこ・あ
なかしこ。

日蓮

花か押おう

一一一 法華淨土問答抄

117P

理即 りそく

名字即 みょうじそく

觀行即 かんぎようそく

三諦の名を聞く さんたい

五品を明す ごほん

八十八使の見惑を断ず けんわく

八十一品の思惑を断ず しわく

九品の塵沙を断ず じんしゃ

四十一品の無明を断ず むみょう

一品の無明を断ず むみょう

中品戒行世善等 ちゅうほんかいぎょう

法華宗立六即 ほっけしゆつ

穢土 えど

報土 ほうど

穢土 えど

相似即 そうじそく

分真即 ぶんしんそく

究竟即 くきようそく

理即 りそく

淨土下品 じようどげほん

浄土宗の所立

報土

名字即
観行即
相似即
分真即
究竟即

弁成べんじょうの立た、我が身み叶かない難がたきが故ゆえに且しばらく聖道しょうどうの行ぎやうを捨しゃ閉へいし閣かく抛ほうし
浄土じょうどに歸かへりし浄土じょうどに往おう生じょうして法華ほっけを聞きいて無生むじょうを悟さとることを得うべき
なり。

日蓮にちれん難なんじて云いわく、我が身み叶かない難なんければ穢えど土どに於おいて法華ほっけ經きやう等とう・教主きやうしゆ
釈尊しゃくそん等とうを捨しゃ閉へいし閣かく抛ほうし浄土じょうどに至いたつて之これを悟べる可べし等とう云云いすれ、何いすれれの
經文きやうもんに依よつて此かくの如ごとき義ぎを立たつるや、又また天台宗てんだいしゆうの報土ほうどは分ぶん真しん即そく・
究竟くきやうそく即そく・浄土宗じやうどしゆうの報土ほうどは名み字じ即そく乃至ないしく究竟くきやうそく等とうとは何いすれれの經きやうもん・論ろん釈しゃく
に出いでたるや、又また穢えど土どに於おいては法華ほっけ經きやう等とう・教主きやうしゆ釈尊しゃくそん等とうを捨しゃ閉へいし
閣かく抛ほうし浄土じょうどに至いたつて法華ほっけ經きやうを悟べる可べしとは何いすれれの經文きやうもんに出いでたる
や。

弁成べんじょうの立たに、余ほの法華ほっけ等とうの諸行しよぎやう等とうを捨しゃ閉へいし閣かく抛ほうして念ねん仏ぶつを用もちゆ
る文もんは觀經かんきやうに云いわく、「仏あなん・阿難あなんに告なんじぐ汝なんじ好こく是この語ことばを持たもて是この語ことばを
持すつ者すなわは即こち是これ無量むりやうじゆぶつ壽じゆ佛ぶつの名なを持もつ文もん、浄土じやうどに往おう生じょうして法華ほっけを

聞くと言ふ事は文に云く「観世音・大勢至・大悲の音声を以つて
其れが為ために広く諸法実相・除滅罪法を説く、聞き已おわつて歡喜かんきし時に
應おこじて即そく菩提ぼだいの心を発おこす、文、余は繁しげき故ゆえに且しばらく之これを置く。

又日蓮難にちれんなんじて云いわく、觀無量壽經かんむりようじゆきようは如来成道にょらいじようどう四十余年よんじゅうよねんの内なり

法華經ほけきようは後八箇年はちかねんの説なり如何いかんんが已説いせつの觀經かんきように兼かねて未説みせつの

法華經ほけきようの名を載のせて捨閉閣拋しゃへいかくほうの可説かせつと為なす可べきや、随したがつて「仏告ぶつこう

阿難あなん」等の文いたに至いたつては只彌陀念仏ただみだねんぶつを勸進かんじんする文いなり未いまだ法華經ほけきようを

捨閉しゃへいし閣拋かくほうすることを聞いかず、何いかに況いわんや無量義經むりようぎきように法華經ほけきようを説いかん

が為ために先なず

四十余年よんじゅうよねんの已説いせつの經經きようきようを挙あげて未み顕けん眞實しんじつと定あめ畢おわんぬ、豈あに未み顕けん

眞實しんじつの觀經かんきようの内いに已い顕けん眞實しんじつの法華經ほけきようを挙あげて捨なて乃な至い之これを拋なげてと

為なす可べきや、又い云いわく、「久いしく此この要もとを黙もくして務つとめて速すみかに説いかず」等

云云す、既すでに教主きようしゆ釈尊じやくそん・四十余年よんじゅうよねんの間ま法華ほつの名字みょうじを説いかず何なんぞ已い説せつ

観經かんきやうの念仏ねんぶつに対して此こゝの法華經ほけきやうを抛なたんや、次つぎに「下品下生げぶんげしやう・諸法実相しよほうじつそつ・除滅罪法等じよめつざいほう」云云そ、夫それ法華經ほけきやう已前いぜんの实相じつそつ其その数すう・一いちに非あらず先まず外道げどうの内うちの長爪ちやうそつの实相じつそつ・内道ないどうの内うちの小乘しやうじやう乃ないし至爾前にぜんの四教しきやう皆みな所詮しよせんの理りは实相じつそつなり、何なんぞ必かならずしも已說いせつの觀經かんきやうに載のする所ところの实相じつそつのみ法華經ほけきやうに同おなじと意得いじやくべきや、

このたびはたしか今度慥なる証文を出して法然上人の無間の苦を救わるべきか。

又弁成の立に、觀經は已説の經なりと雖も未來を面とする故に

未來の衆生は未來に有る所の經卷之を讀誦して淨土に往生すべ

し、既に法華等の諸經未來流布の故に之れを讀誦して往生すべき

か、其の法華を捨閉閣抛し觀經の持無量壽仏の文に依つて法然

かくの如く行じ給うか、觀經の持無量壽仏の文の上に諸善を説き

一向に無量壽仏を勸持せる故に申せしめ候、実相に於いても多く有

りと云う難、彼は淨土の故に此の難来るべからず、法然上人聖道

の行機堪え難き故に未來流布の法華を捨閉閣抛す、故に是れ慈悲

の至進なれば此の慈悲を以て淨土に往生し全く地獄に墮すべから

ざるか。

日蓮難じて云く、觀經を已説の經なりと云云、已説に於ては

承伏か、觀經の時未だ法華經を説かずと雖も未來を鑒みて捨閉

かくほう

閣抛すべしと法然上人は意得給うか云云、仏・未来を鑒みて已説の

經に未來の經を載せて之を制止すと云わば已説の小乗經に未説

の大乗經を載せて之を制止すべきか、又已説の權大乘經に未説

の實大乘經を載せて未來流布の法華經を制止せば、何が故に仏

爾前經に於て法華の名を載せざる由、之を説きたまうや。

法然上人慈悲の事、慈悲の故に法華經と教主釈尊とを抛つなり

と云わば所詮上に出す所の証文は未だ分明ならず慥なる証文

を出して法然上人の極苦を救わる可きか、上の六品の諸行往生

を下の三品の念仏に対して諸行を捨つ豈法華を捨つるに非ずや等

云云、觀無量壽經の上六品の諸行は法華已前の諸行なり、設い下

の三品の念仏に対して上六品の諸行・之を抛つとも但法華經は

諸行に入らず何ぞ之を閣かんや、又法華の意は爾前の諸行と觀經

の念仏と共に之を捨て畢りて如来出世の本懷を遂げ給うなり、

にちれん
日蓮管見を以て一代聖教並びに法華經の文を勘うるに未だ之を
見ず、法華經の名を挙げて或は之を抛ち或は其の門を閉ずる等
と云う事を、若し爾らば法然上人の憑む所の弥陀本願の誓文並び
に法華經の入阿鼻獄の釈尊の誠文如何ぞ之を免る可けんや、法然
上人無間獄に墮せば

所化しよけの弟子でし並びに諸檀那しよだんな等共らに阿鼻大城あびだいじょうに墮おちんか、今度このたび分明ぶんめいなる証文しやうもんを出しして法然上人ほうねんしやうにんの阿鼻あびの炎えんを消けさる可べし云い云い。文永ぶんえい九

年太歳壬みずのえさる 申正月十七日

日蓮

花押かおう

弁成べんじよう

花押かおう

一三 法華真言勝劣事ほっけしんごんしやうれつ

120P

東寺とうじの弘法大師こうぼうだいし空海くうかいの所立しよりゅうに云いわく法華経ほけきやうは猶華嚴経なわけこんきやうに劣おとれり

何に況や大日経等に於いてをやと云云、慈覚大師・円仁・智証大師・
 円珍・安然和尚等の云く法華経の理は大日経に同じ印と真言との
 事に於ては是れ猶劣れるなりと云云其所釈は余。空海は大日経
 菩提心論等に依つて十住心を立てて顕密の勝劣を判ず、其の中に
 第六に他縁大乘・心は法相宗・第七に覺心不生心は三論宗・第八
 に如実一道心は天台宗・第九に極無自性心は華嚴宗・第十に秘密
 莊嚴心は真言宗なり、此の所立の次第は浅き従り深きに至る、
 其の証文は大日経の住心品と菩提心論とに出づと云えり、然るに
 出す所の大日経の住心品を見て他縁大乘・覺心不生・極無自性を
 尋ぬるに名目は経文に之有り、然りと雖も他縁・覺心・極無自性の
 三句を法相・三論・華嚴に配する名目は之無し、其の上覺心不生と
 極無自性との中間に如実一道の文義共に之無し、但し此の品の初
 に「云何なるか菩提謂く如実に自心を知る」等の文之有り、此の文

を取つて此の二句の中間ちゆうげんに置いて天台宗てんだいしゆうと名づけ華嚴宗けこんしゆうに劣るの由これ、之そんを存じゆうす、住心品じゆうしんほんに於ては全く文義もんぎ共に之これな無し、有文ゆうもん有義うぎ・
むもんうぎ 無文むぶん有義うぎの二句を虧かく信用しんように及およばず、菩提心論ぼだいしんろんの文ぶんに於おても法華ほっけ・
けこん 華嚴けこんの勝劣しょうれつ都て之これを見ざる上、此このの論ろんは竜猛りゆうもう菩薩ぼさつの論ろんと云いう事こと
じょうこ 上古じょうこより諍論じょうろん之れ有り、此このの諍論じょうろん絶えざる已前いぜんに龜鏡きつきやうに立つる事こと
は堅義けんぎの法ほふに背そむく、其その上善ぜん無畏むゐ・金剛智等こんごうち評定ひやうじやう有あつて大日經だいにちぎやうの
じよ 疏じよ・義積ぎしゃくを作つくれり一行阿闍梨あじやりの執筆しつぴつなり、此このの疏義積じよぎしゃくの中ちゆうに諸宗しよしゆうの
しよつれつ 勝劣しょうれつを判はざるに法華經ほふけきやうと大日經だいにちぎやうとは広略こうりやくの異いなりと定め畢おわぬ、
くうかい 空海くうかいの徳貴とくとしと雖いも争いかか先師せんしの義ぎに背そむく可べきやと云いう、難なん此これれ強ちやうし
こ 此これれ安然あんねんの難なんなり、之これに依よつて空海くうかいの門人もんじん之これを陳ちんずるに旁かたがた陳答ちんたう之これ有あり
ある 或あるは守護經しゆご・或あるは六波羅蜜經ろくはらみつぎきやう・或あるは楞伽經りやうがきやう・或あるは金剛頂經こんごうちやうぎやう等
に見ゆと多く会通えつうすれども総なんぜいじて難勢なんぜいを免まぬれず、然しかりと雖いも東寺とうじ
まつがく 末学まつがく等大師だいしの高徳こうとくを恐おそるるの間あなが・強ちやうちに会通えつうを加かえんとすれども

けつくえつう　じゆつけい　これなくもんどう
結句会通の術計之無く問答の法に背いて伝そむ　教大師最澄でんきようだいしさいちようは弘法こうぼう
だいし　でし
大師の弟子なりと云云、又宗論しゆろんの甲乙等こうおつ旁論かたがたずる事之有りと云云。

にちれん　いわ　けこんしゆう　とじゆん　ちこん　ほうぞう　ほけきよう　しけん　こんけん
日蓮案じて云く、華嚴宗の杜順・智嚴・法蔵等・法華經の始見今見
の文に就いて法華・華嚴・齊等の義之を存す、其の後澄・觀・始・今・の文
よ　さいとう　そん　そし　たがい　そ　いちおう
に依つて齊等の義を存すること祖師に違せず、其の上一往の弁を加
ほつ　けこん　さいとう　ほけきよう　ほけきよう　しゆつせ
えて法華と華嚴と齊等なりと云えり、但し華嚴は法華經より先な
けこんきよう　さいしよ　ほうえくとく　ただ　けこん　ほけきよう　ほけきよう　しゆつせ
り、華嚴經の時・仏最初に法慧功德林等の大菩薩に對して出世の
ほんかいこれ　と　しか　にじよう　げせん　ほんぶ　こんき　みじゆく　ゆえ
本懷之を遂ぐ、然れども一乘並に下賤の凡夫等根機未熟の故に
これ　もち　あこん　ほうとう　ほんにや　ちようじゆく　よ　けこんきよう
之を用いず、阿含・方等・般若等の調　熟に依つて還つて華嚴經に入
らしむ、此れを今見こんけんの法華經ほけきようと名づく、大陣だいじんを破るやぶに余残よざん・堅から
ざる等の如し、然れば實に華嚴經けこんきよう・法華經ほけきように勝すぐれ
たり等と云云、本朝ほんちように於て勤操等きんそうに値あいて此の義を習学しゆがくす後に

てんだい しんごん
天台・真言を学すと雖も旧執改まらざるが故に此の義を存するか、
いか いわんやけこんぎよう ほけきよう まさ
何に況や華嚴經・法華經に勝るの由は陳隋より已前・南三北七皆
此の義を存す、天台已後も又諸宗此の義を存せり但だ弘法一人に
あら 非ざるか、但し澄観・始見今見の文に依つて華嚴經は法華經より
まさ 勝ると料簡する才覚に於ては天台智者大師・涅槃經の「是經出世
ないし ないしによほつけちゆう
乃至如法華中」等の文に依つて法華・涅槃齊等の義を存するのみに

非あらず、又勝劣しょうれつの義ぎを存ぞんするは此この才覚さいかくを学まなびて此この義ぎを存ぞんするか
此この義ぎ若もし僻案びやくあんならば空海くうかいの義ぎも又僻見びやくけんなる可べきなり、天台てんだい・
真言しんごんの書しよに云いわく法華經ほけきようと大日經だいにちきようとは広略こうりやくの異いなり、略りやくとは法華經ほけきよう
なり、大日經だいにちきようと齊等さいとうの理りなりと雖いへども印・真言しんごん之これを略りやくする故ゆゑなり、広
とは大日經だいにちきようなり、極理ごくりを説とくくのみに非あらず印・真言しんごんをも説とくく故ゆゑなり、
又法華經ほけきようと大日經だいにちきようとに同劣どうれつの二義にぎ有あり、謂いわくく・理同事劣りどうじれつなり、又二
義有あり一ひとには大日經だいにちきようは五時ごじゆの撰せんなり是れ与この義ぎなり、二ふたには
大日經だいにちきようは五時ごじゆの撰せんに非あらず是れ奪だつの義ぎなり、又云いわく法華經ほけきようは譬たとえば
裸形らきようの猛者もさの如ごとし大日經だいにちきようは甲冑かちゆうを帯たいせる猛者もさなり等と云云、又
云いわく印・真言しんごん無なきは其その仏ぶつを知る可べからず等と云云。
日蓮にちれん不審ふしんして云いわく、何なにを以もつて之これを知る、理ほけきようは法華經ほけきようと大日經だいにちきようと
齊等さいとうなりと云いう事ことを、答こたへて云いわく疏じよと義積ぎしゃく並ならに慈覺じかく・智証ちしよう等との所積しよしゃく
に依よるなり。

求めて云く此等の三蔵大師等は又何を以て之を知るや。理は斉等の義なりと、答えて云く三蔵大師等をば疑う可からず等と云云、難じて云く、此の義・論義の法に非ざる上、仏の遺言に違背す慥に經文を出す可し、若し經文無くんば義分無かる可し如何、答う威儀形色經・瑜祇經・觀智儀軌等なり、文は口伝す可し、問うて云く法華經に印・真言を略すとは仏よりか經家よりか訳者よりか、答えて云く或は仏と云い或は經家と云い或は訳者と云うなり、不審して云く仏より真言・印を略して法華經と大日經と理同事勝の義之有りと云わば此の事何れの經文ぞや、文証の所出を知らず我意の浮言ならば之を用ゆ可からず、若し經家・訳者より之を略すといわば仏説に於ては何ぞ理同事勝の積を作る可きや、法華經と大日經とは全躰齊なり能く能く子細を尋ぬ可きなり。

私に日蓮云く、威儀形色經・瑜祇經等の文の如くば仏説に於ては

法華經に印・真言有るか、若し爾らば經家・訳者之を略せるが、
六波羅蜜經の如きは經家之を略す、旧訳の仁王經の如きは訳者
之を略せるか、若し爾らば天台・真言の理同事異の釈は經家並に
訳者の時より法華經・大日經の勝劣なり、全く仏説の勝劣に非ず
此れ天台・真言の極なり、天台宗の義勢才覚の爲に此の義を難ず、
天台・真言の僻見此くの如し、東寺所立の義勢は且く之を置く
僻見眼前の故なり、抑天台・真言宗の所立・理同事勝に二難有
り、一には法華經と大日經と理同の義其の文全く之無し、法華經と
大日經と先後如何、既に義釈に二經の前後之を定め畢つて法華經
は先き大日經は後なりと云へり、若し爾らば大日經は法華經の
重説なる流通なり、一法を兩度之を説くが故なり若し所立の
如くば法華經の理を重ねて之を説くを大日經と云う、然れば則ち
法華經と大日經と敵論の時は大日經の理之を奪つて法華經に付く

可し、

但し大日経の得点は但・印真言計りなり、

印契は身業・真言は口業

なり身口のみにして意無くば印・真言有る可からず、手口等を奪つ

て法華経に付けなば手無くして印を結び口無くして真言を誦せば

虚空に印・真言を誦結す可きか如何、裸形の猛者と甲冑を帯せる

猛者との譬の事、裸形の猛者の進んで大陣を破ると甲冑を帯せる

猛者の退いて一陣をも破らざるとは何れが勝るるや、又猛者は

法華経なり甲冑は大日経なり、猛者無くんば甲冑何の詮か之有

らん此れは理同の義を難ずるなり、次に事勝の義を難ぜば法華経

には印・真言無く大日経には印・真言之有り

云云、印契真言の有無に付て二経の勝劣を定むるに大日経に印・

真言有つて法華経に之無き故に劣ると云わば、阿含経には世界

建立賢聖の地位是れ分明なり、大日経には之無し、彼の経に有る

事が此の經に無きを以て勝劣を判ぜば大日經は阿含經より劣るか、雙觀經等には四十八願是れ分明なり大日經に之無し、般若經には十八空是れ分明なり大日經には之無し、此等の諸經に劣ると云う可きか、又印・真言無くんば仏を知る可からず等と云、今反詰して云く理無くんば仏有る可からず、仏無くんば印契真言一切徒然と成るべし。

彼難じて云く、賢聖並に四十八願等をば印・真言に對す可からず等と云云、今反詰して云く最上の印真言之無くんば法華經は大日經等よりも劣るか、若し爾らば法華經には二乗作仏・久遠実成・之有り大日經には之無し印真言と二乗作仏久遠実成とを對論せば天地雲泥なり、諸經に印真言を簡わざるに大日經に之を説いて何の詮か有る可き

や、二乗若し灰断の執を改めずんば印・真言も無用なり、一代の
聖教に皆二乗を永不成仏と簡い随つて大日経にも之を隔つ、皆
成仏までこそ無からめ三分が二之を捨て百分が六十余分得道せず
んば仏の大悲何かせん、凡そ理の三千之有つて成仏すと云う上には
何の不足か有る可き成仏に於てはなる仏・中風の覚者は之有る
べからず、之を以て案ずるに印・真言は規模無きか、又諸経には
始成正覚の旨を談じて三身相即の無始の古仏を顕さず、本無今有
の失有れば大日如来は有名無実なり、寿量品に此の旨を顕す
釈尊は天の一月諸仏・菩薩は万水に浮べる影なりと見えたり、委細
の旨は且く之を置く。

又印・真言無くんば祈有る可からずと云云、是れ又以ての外
の僻見なり、過去・現在の諸仏・法華経を離れて成仏す可からず
法華経を以て正覚を成じ給う、法華経の行者を捨て給わば諸仏

還かえつて凡ほん夫ぶと成なりり給たまうべし恩おんを知らざる故ゆゑなり、又また未み来らいの諸しよ仏ぶつの中ちゆうの二に乘じやうも法ほ華け經きやうを離はなれては永とこく枯こ木ぼく敗はい種しゆなり、今いまは再さい生じやうの華け果かなり、他た經きやうの行ぎ者じやと相そう論ろんを為なす時ときは華げ光こう如に来よらい・光こう明みやう如に来よらい等らは何いれずの方まさに付く可べきや、華け嚴こん經きやう等らの諸しよ經きやうの仏ぼつ・菩ぼ薩さつ・人にん天てん乃ない至し四し惡あく趣しゆ等らの衆しゆは皆みな法ほ華け經きやうに於おいて一いち念ねん三さん千せん・久く遠おん実じつ成じやうの説せつを聞きいて正じやう覺かくを成じやうず可べし何いれずの方まさに付く可べきや、真しん言ごん宗しゆ等らと外げ道どう並なに小しよ乘じやう・權こん大だい乘じやうの行ぎ者じや等らと敵そう対ろん相ろん論ろんを為なすの時ときは甲こう乙おつ知ちり難がたし、法ほ華け經きやうの行ぎ者じやに對たいする時ときは竜りゆうと虎こと師し子しと兔ととの鬪たういの如ごとく諍じやう論ろん分ぶん絶ぜつえたる者ものなり、慧えり亮りやう腦のうを破やぶりし時とき・次しだい第だい位いに即すなはち相そう心しん加か持じする時とき・真しん濟さいの惡あく靈りやう伏ふくせらるる等ら是これなり、一いつ向かう・真しん言ごんの行ぎ者じやは法ほ華け經きやうの行ぎ者じやに劣おとれる証しやう拠こ是これなり、問いわうて云いく義ぎ釈しゃくの意いは法ほ華け經きやう・大だい日じつ經きやう共に二に乘じやう作さ仏ぶつ・久く遠おん実じつ成じやうを明あきかすや如い何いかん、答こたえて云いく共に之これを明あきかす、義ぎ釈しゃくに云いく「此こゝの經きやうの心しんの實じつ相そうは彼かの經きやうの

諸法実相なり」と云云、又云く「本初は是れ寿量の義なり」等と云云。

問うて云く華嚴宗の義に云く華嚴經には二乗作仏・久遠実成之を明かす、天台宗は之を許さず、宗論は且く之を

置く人師を捨てて本經を存せば華嚴經に於ては二乗作仏・久遠実成の相似の文之有りと雖も實には之無し、之を以て之を思うに

義釈には大日經に於て二乗作仏・久遠実成を存すと雖も實には之無きか如何、答えて云く華嚴經の如く相似の文之有りと雖も

実義之無きか、私に云く二乗作仏無くば四弘誓願満足す可からず、四弘誓願満たずんば又別願も満す可からず、総別の二願満せずん

ば衆生の成仏も有り難きか能く能く意得可し云云。問うて云く大日經の疏に云く大日如来は無始無終なり遙に五百塵点到勝れた

りと如何、答う毘盧遮那の無始無終なる事・華嚴・浄名・般若等の

諸大乘經に之を説く独り大日經のみに非ず、問うて云く若し爾ら

ば五百塵点是際限有れば有始有終なり無始無終は際限無し、然れ

ば則ち法華經は諸經に破せらるるか如何、答えて云く他宗の人は

此の義を存す天台一家に於て此の難を会通する者有り難きか、今

大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の無始無終なり三身の

無始

無終に非ず、法華經の五百塵点是諸大乘經の破せざる伽耶の始成

之を破りたる五百塵点なり、大日經等の諸大乘經には全く此の

義無し、宝塔の涌現・地涌の涌出・弥勒の疑・寿量品の初の

三誠四請・弥勒菩薩領解の文に「仏・希有の法を説きたもう昔より

未だ曾つて聞かざる所なり」等の文是なり、大日經六卷並に供養法

の卷金剛頂經・蘇悉地經等の諸の真言部の經の中に未だ三止四請

三誠四請・二乗の劫国名号・難信難解等の文を見ず。

問うて云く五乗の真言如何、答う未だ二乗の真言を知らず四諦・
十二因縁の梵語のみ有るなり、又法身平等に会すること有らんや。
問うて云く慈覚・智証等理同事勝の義を存す争か此等の大師等
に過ぎんや、答えて云く人を以て人を難ずるは仏の誠なり何ぞ汝
仏の制誠に違背するや但經文を以て勝劣の義を存す可し、難じて
云く末学の身として祖師の言に背かば之を難ぜざらんや、答う末学
の祖師に違する之を難ぜば何ぞ智証・慈覚の天台・妙楽に違する
を何ぞ之を難ぜざるや、問うて云く相違如何、答えて云く天台
妙楽の意は已今当の三説の中に法華經に勝れたる經之れ有る

べ可からず、若し法華經に勝れたる經之有りといわば一宗の宗義
これ之を壞る可きの由之を存す、若し大日經・法華經に勝るといわば
てんだい・妙樂の宗義忽に破る可きをや。

問うて云く天台・妙樂の已今當の宗義証拠經文に有りや、答え

て云く之れ有り法華經・法師品に云く「我が所説の經典は無量千万

億已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為

れ難信難解なり」と云云、此の經文の如くんば五十余年の釈迦

所説の一切經の内には法華經は最第一なり、難じて云く眞言師の

云く法華經は釈迦所説の一切經の中に第一なり、大日經は大日

如来所説の經なりと、答えて云く釈迦如来より外に大日如来

閻浮提に於て八相成道して大日經を説けるかは一、六波羅蜜經に

云く過去・現在並に釈迦牟尼仏の所説の諸經を分ちて五蔵と為し

其の中の第五の陀羅尼蔵は眞言なりと眞言の經・釈迦如来の所説に

非あらずといわば・經文きやうもんに違いす是二、我所說經典がしよせつきやうてん等の文は釈迦しやか如來にょらいの
 正直捨方便しちうじきしやほうべんの説なり大日如來だいにちにょらいの証しよつみよふんじん明分身しよぶつこうちようぜつそうの諸しよぶつ佛こつと廣長舌相くわうちうじつさうの
 經文きやうもんなり是三、五佛ごぶつの章ちやう盡じゆんく諸佛しよぶつ皆みな法華經ほけきやうを第一だいいちなりと説たまき給たまう
 是四、「要もつを以て之を言のたまわば如來にょらいの一切いっさいの所有しようの法ほけきやう乃至皆此ないしみなの經に
 於おいて宣示顯說せんじけんせつす」と云云、此の經文きやうもんの如ごとくならば法華經ほけきやうは釈迦しやか
 所說しよせつの諸經しよきやうの第一だいいちなるのみに非あらず、大日如來だいにちにょらい・
 十方無量諸佛じゆつぼうむりようしよぶつの諸經しよきやうの中ほけきやうに法華經だいいち第一だいいちなり、此の外いちぶつ一佛いちぶつ・二佛にぶつの
 所說しよせつの諸經しよきやうの中ほけきやうに法華經ほけきやうに勝すぐれたるの經これあ之有これありと云しんようわば信用しんようす
 可べからず是五、大日經等だいにちきやうの諸もろもろの真言經しんごんきやうの中ほけきやうに法華經ほけきやうに勝すぐれたる由
 の經文きやうもん之れ無きやうもんこし是六、一佛いっふつより外ほかの天竺てんじく・震旦しんたん日本國にほんこくの論師ろんし・人師にんしの
 中てんだいだいしに天台大師てんだいだいしより外ほかの人師にんしの所しよしゃく積しよしゃくの中いちなんさんぜんに一念三千いちなんさんぜんの名な目め之無これなし、
 若もし一念三千いちなんさんぜんを立てざれば性惡しようあくの義これな之無これなし性惡しようあくの義これな之無これなくんば
 一・菩薩ぼさつの普現色身ふげんしきしん・不動愛染等ふどうあいぜんの降伏かうふくの形じゆつかい・十界じゆつかいの曼荼羅まんたら・三十七

尊等・本無今有の外道の法に同じきか是七。

問うて云く七義の中に一一の難勢之有り然りと雖も六義は且く
之を置く第七の義如何、華嚴の澄觀・真言の一行等皆性惡の義を
存す何ぞ諸宗に此の義無しと云うや、答えて云く華嚴の澄觀・
真言の一行は天台所立の義を盗ん

で自宗じしゅうの義ぎと成なるか、此こゝの事こと余よ処ところに勘かんえたるが如ごとし、問いうて云いく
てんだいだいし げんぎ
天台大師てんだいだいしの玄義げんぎの三さんに云いく「法華ほっけは衆經しゅうきょうを総括そうかつす乃至ないし舌口しやくせん中に
爛ただる人情にんじやうを以もつ彼おほの大虚おほを局かぎること莫なれ」と云いふ、釈籤しゃくせんの三さんに
云いく「法華宗極ほっけしゅうの旨むねを了りせしめて聲聞しょうもんに記しる事相じしやうのみ華嚴けごん・
般若はんにやの融通無礙ゆうずうむげなるに如しかずと謂おもう諫曉かんぎやうすれども止とまず舌ただの爛ただれ
んこと何なんぞ疑うたわん、乃至ないし已い今当こんとうの妙茲めうしに於おて固まく迷まえり舌爛ただれて
止とまざるは猶なお為これ華報かほうなり謗法ほうぼうの罪苦長劫ざいくちやうこくに流ながる」と云いふ、若もし
てんだい みやうたらく
天台てんだい・妙樂みやうたらくの釈實しゃくじつならば南三なんさん・北七ほくひち並ならびに華嚴けごん・法相ほっそう・三論さんろん・東寺とうじの
弘法等こうぼう・舌爛ただれんこと何うたの疑うた有あらんや、乃至ないし苦流長劫くりゆうちやうこくの者ものなる
か、是こゝは且しく之これを置おく慈覺じかく・智証等ちしやうの親まのあた此こゝの宗義しゆぎを承うけたる者もの・
法華經ほっけきやうは大日經だいにちきやうより劣せうの義ぎ存ぞんす可べし、若もし其その義ぎならば此こゝの人人ひとびと
の舌爛ぜつらん口中くちゆう苦流長劫くりゆうちやうこくは如何いかん、答こたえて云いく此こゝの義ぎは最上さいじやうの難なんの義ぎ
なり口伝くでんに存ぞんり云いふ。

ぶんえいがんねんきのえね
文永元年甲子

にちれん
日蓮

かおう
花押

しる
七月二十九日之を記す。

一四 真言七重勝劣事

文永七年 四十九歳御作

与富木常忍

128P

法華・大日二經の七重勝劣の事。

戸那・扶桑の人師・一代聖教を判ずるの事。

鎮護国家の三部の事。

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

天台宗に歸伏する人人の四句の事。

今經の位を人に配するの事。

三塔の事。

日本国仏神の座席の事。

法華・大日二經の七重勝劣の事。

已今当第一

本門第一

ほけきょう だいいち
法華經第一

「やくおう なんじ
薬王今汝に告ぐ・諸經の中に於いて最も其の上

り」 しゃくもん
逆門第二

ねはんぎょう
涅槃經第二 「是經出世」
しゆつせ

むりょうぎきょう
無量義經第三 「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く
ま かのん にや けごん かいくう

しんじつじんじん しんじつじんじん
眞実甚深・眞実甚深」

けごんぎきょう
華嚴經第四

はんじぎきょう
般若經第五

蘇悉地經第六 上に云く「三部の中に於て此の經を王と為す、

中に云く「猶成就せずんば當に此の法を作す

べし決定として成就せん、所謂乞食・精勤・念誦

大恭敬・巡八聖跡・礼拝行道なり、或は復大

般若經七遍・或は一百遍を転読す、下に云く

「三時に常に大乘般若等の經を讀め」

大日經第七 三国に未だ弘通せざる法門なり。

尸那・扶桑の人師一代聖教を判ずるの事

華嚴經第一

涅槃經第二 南北の義 晋・齊等五百余年・三

百六十余人光宅を以て長と為す。

法華經第三

般若經第一

吉蔵の義

梁代の人なり。

ほけきょう だいいち
法華經第一

ねはんきょう
涅槃經第二

の人なり。

けこんきょう
華嚴經第三

じんみつ だいいち
深密經第一

ほけきょう
法華經第二

ぎょう
御宇の人なり。

はんじやきょう
般若經第三

けこんきょう だいいち
華嚴經第一

ほけきょう
法華經第二

そくてんこうこう
則天皇后の御宇の人なり。

ねはんきょう
涅槃經第三

なんがく おんでし
南岳の御弟子なり。

てんだいちしゃだいいし
天台智者大師の御義

ちんずい
陳隋二代

みょうらく これ
妙楽等之を用う。

げんじょう
玄奘の義 唐の始め太宗の

ほつぞう ちようかん
法蔵・澄観等の義 唐の半ば

だいにちきようだいいち
大日経第一

ほけきよう
法華経第二

なり。

しききよう

諸経第三

ほけきようだいいち

法華経第一

ねはんぎよう

涅槃経第二

さが
嵯峨の御代の人、

ひえいざんえんりやく
比叡山延暦寺なり。

しききよう
諸経第三

だいにちきようだいいち

大日経第一

けこんぎよう

華嚴経第二

とうじ

東寺・高野等なり。

ほけきよう

法華経第三

だいにちきようだいいち

大日経第一

ぜんむい
善無畏
ふくう
不空等の義

とう
唐の末
げんそう
玄宗の御宇の人

でんぎよう
伝教の御義
おんぎ
人王五十代桓武の御宇及び
へいじよう
平城

こうぼう
弘法の義
にんおう
人王五十二代嵯峨
じゆんな
淳和二代の人、

法華經第二

感覚の義

善無畏を以て師と為す、仁明

文徳・清和の三代、叡山講堂総持院なり。

諸経第三

鎮護国家の三部の事

智証之に同ず、園城寺なり。

法華経

密厳経

不空三蔵

大曆に法華寺に之を置く、大曆二

年護摩寺を改めて法華寺を立つ、中央に法華経・

仁王経

脇士に両部の大日なり。

法華経・浄名経

聖徳太子

人王三十四代推古天皇の御宇、

四天王寺に之を置く摂津の国・難波郡・仏法最初

勝鬘經 しょうまんほげきよう

法華經 ほげきよう

金光明經 こんこうみんきよう

延曆寺止観院 えんりやくしかん

に之を置く、年分得度者一人は

仁王經 にんのうきよう

大日經 だいにちきよう

金剛頂經 こんごうこんぎやう

比叡山東塔の西総持院に之を置かる、御本尊は大日

蘇悉地經 そしつちきよう

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

神璽 しんじ 国の手験なり。

宝剣 ほうけん 国敵を禦ぐ財なり、平家の乱の時に海に入りて見え

の寺なり。

伝教大師 人王五十代桓武天皇の御宇、比叡山

遮那業一人は止観業なり。

慈覚大師 人王五十四代仁明天皇の御宇、

如来、金蘇の二疏十四卷安置せらる。

ず。

ないじどころ 内侍所 天照太神影を浮かべ給う神鏡と云う、左馬頭頼茂に

打たれて焼失す。

てんだいしゅう 天台宗に帰伏する人人の四句の事

しんしんとも 一に身心俱に移る

さんろん 三論の嘉祥大師

けこん 華嚴の澄観法師

しんごん 真言の善無畏・不空

二に心移りて身移らず

けこん 華嚴の法蔵

ほっそう 法相の慈恩

じかくだいし 慈覚大師

三に身移りて心移らず

四に身心俱に移らず

智証大師
弘法大師

今經の位を人に配するの事

征夷將軍 鎌倉殿

無量義經

摂政

涅槃經

院

迹門十四品

天子

本門十四品

三塔の事

中堂 伝教大師の御建立

止観・遮那の二業を置く、御本尊

は薬師如来なり、延暦年中の御建立・王城の

丑寅に当る、桓武天皇の御崇重、

天子本命の道場と云う。

止観院 本院

天竺には靈鷲山と云い震旦には

てんだい
天台山と云い扶桑には比叡山と云う、三国伝灯

の仏法此に極まれり。

こうどう 講堂 じかくだいし 慈覚大師の建立 こんりゆう 総持院 ちんこつか 鎮護国家の道場と云う、御本尊は

だいにちによらい 大日如来なり、承和年中の建立、止観院の西

しんごん に真言の三部を置き是を東

たつと云うなり、伝教の御弟子第三の座主なり。

西塔

しやか 釈迦堂 ほうどういん 宝幢院 えんちよう 円澄の建立

でんぎよう 伝教の御弟子なり。

かんのん 観音堂 横川 じかく 慈覚の建立

りようごんいん 楞嚴院

にほんこくぶつしん ざせき
日本国仏神の座席の事

問う吾が朝には何れの仏を以て一の座と為し何れの法を以て一の座と為し何れの僧を以て一の座と為すや、答う觀世音菩薩を以て一の座と為し真言の法を以て一の座と為し東寺の僧を以て一の座と為すなり。

問う日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は山寺種種なりといえど延暦寺を以て天子本命の道場と定め鎮護国家の道場と定む、然して日本最初の本尊釈迦を一の座と為す然らずんば延暦寺の薬師を以て一の座と為すか、又代代の帝王起請を書いて山の弟子とならんと定め給ふ故に法華経を以て法の一の座と為し延暦寺の僧を以て一の座と為す可し、何ぞ仏を本尊とせず菩薩を以て諸仏の一の座と為すや、答う尤も然る可しと雖も慈覚の御時・叡山は真言になる東寺は弘法の真言を建立す故に共に真言師な

り、共に真言師しんごんしなるが故ゆえに東寺とうじを本として真言しんごんを崇あがむ真言しんごんを崇あがむ
る故ゆえに觀音かんのんを以もつ本尊ほんぞんとす真言しんごんには菩薩ぼさつをば仏ぶつにまされりと談だんず
るなり、故ゆえに内裏だいりに毎年正月八日の内道場うちじょうの法ほふ・行ぎやうわる東寺とうじの一いちの
長者ちやうじやを召めして行ぎやうわる若もし一いちの長者ちやうじや暇有あそびらざれば二にの長者ちやうじや行ぎやううべ
し三さんまでは及およぼす可べからず云云、故ゆえに仏ぶつには觀音かんのん・法ほふには真言しんごん・僧そうに
は東寺法師とうじほふしなり、比叡山ひえいざんをば鬼門きもんの方かたとて之これを下くだす譬たとえば武士ぶしの
如ごとしと云いうて崇あがめざるなり故ゆえに日本国にほんこくは亡国ぼうこくとならんとするなり。
問とう神かみの次第しだい如何いかに、答こたう天照太神てんじやうだいじんを一いちの座ざと為なし八幡大菩薩はちまんたいぼさつを
第二だいじの座ざと為なす是こゝより已下いかにの神かみは三千二百三十二社さんぜんにひゃくにじゅうに社しゃなり。

一五 真言天台勝劣事

文永七年四十九歳御作

134P

問う何なる經論に依つて真言宗を立つるや、答う大日經・金剛
頂經・蘇悉地經並びに菩提心論此の三經一論に依つて真言宗を
立つるなり、問う大日經と法華經と何れか勝れたるや、答う
法華經は或は七重或いは八重の勝なり大日經は七八重の劣な
り、難じて云く驚いて云く古より今に至るまで法華より真言劣る
と云う義都て之無し之に依つて弘法大師は十住心を立てて法華は
真言より三重の劣と釈し給へり覺鑿は法華は真言の履取に及ばず
と釈せり打ち任せては密教勝れ顯教劣るなりと世挙つて此を許す
七重の劣と云う義は甚珍しき者をや、答う真言は七重の劣と云

う事珍しき義なりと驚かるるは理なり、所以に法師品に云く
「すでに説き今説き当に説かん而も其の中に於て此の法華經は最も為
れ難信難解なり」云云、又云く「諸經の中に於て最も其の上在り」
云云、此の文の心は法華は一切經の中に勝れたり此其の一、次に
無量義經に云く「次に方等十二部經摩訶般若・華嚴海空を説く」云
云、又云く「眞実甚深甚深甚深なり」云云、此の文の心は無量義經
は諸經の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり然れども法華の序分
にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るなり此其二、次
に涅槃の九に云く「是の經の世に出ずるは彼の果実の利益する所多
く一切を安樂ならしむるが如く能く衆生をして仏性を見せしむ、
法華の中の八千の声聞記を得授するが如く大果実を成じ
秋収冬蔵して更に所作無きが如し」云云、簸の一に云く「一家の義
意謂く一部同味なれども然も涅槃尚劣る」云云、此の文の心は

涅槃經も醍醐味だいごみ法華經も醍醐味だいごみ同じ醍醐味だいごみなれども涅槃經ねはんぎょうは尚なお
 劣るなり法華經ほけきょうは勝すぐれたりと云へり、涅槃經ねはんぎょうは既に法華ほっけの序分じょぶんの
 無量義經むりょうぎきょうよりも劣り醍醐味だいごみなるが故ゆえに華嚴經けこんきょうには勝すぐたり此其三だいごみ、次
 に華嚴經けこんきょうは最初頓說さいしよとんせつなるが故ゆえに般若はんんにゃには勝すぐれ涅槃經ねはんぎょうの醍醐味だいごみには
 劣れおと

り此其四、次に蘇悉地経に云く「猶成ぜざらん者は、或は復大般若経を転読すること七遍云云、此の文の心は大般若経は華嚴経には劣り蘇悉地経には勝ると見えたり此其五、次に蘇悉地経に云く「三部の中に於て此の経を王と為す云云、此の文の心は蘇悉地経は大般若経には劣り大日経・金剛頂経には勝ると見えたり此其六、此の義を以て大日経は法華経より七重の劣とは申すなり法華の本門に望むれば八重の劣とも申すなり。

次に弘法大師の十住心を立てて法華は三重劣ると云う事は安然の教時義と云う文に十住心の立様を破して云く五つの失有り謂く一には大日経の義釈に違する失、二には金剛頂経に違する失、三には守護経に違する失、四には菩提心論に違する失、五には衆師に違する失なり、此の五つの失を陳ずる事無くしてつまり給へり、然る間法華は真言より三重の劣と釈し給へるが大なる僻事なり

謗法ほうぼうに成りぬと覺ゆおぼ、次に覺鑿かくばんの法華ほっけは眞言しんごんの履はきもの取とりに及およばずと
 舍利講じやりこうの式しきに書かかれたるは舌したに任まかせたる言ことなり証拠しょうこ無なき故ゆえに専もっぱら
 謗法ほうぼうなる可べし、次に世あを挙あげて密教みつぎょう勝すぐれ顯教けんぎょう劣くわると此ゆるを許ゆるすと云
 う事こと是これ偏ひとえに弘法こうぼうを信しんじて法ほっけを信しんぜざるなり、所以ゆえんに弘法こうぼうをば
 安然あんねん和尚わじょう五失ごしつ有ありと云いうて用もちいざる時は世間せけんの人は何様いかように密教みつぎょう
 勝まさると思おもふ可べき抑おさ密教みつぎょう勝すぐれ顯教けんぎょう劣くわるとは何れいずれの經きやうに説ときたる
 や是しやうこ又また証拠しょうこ無なき事ことを世あを挙あげて申もうすなり、猶なほ難なんじて云いわ大日だい經にちきやう等とう
 は是だい中央ちやう大日だい法身ほっしん無む始し無む終しゆうの如來にやらい法界ほっけ宮みやう・或あるは色しき究きゆう竟きやう天てん他た化け
 自在じざいてん在天たいてんにして菩薩ぼさつの為ために眞言しんごんを説とき給たまへり法華ほっけは釈迦しやか応おう身じん靈りやう山ぜんに
 して二乘にじやうの為ために説とき給たまへり・或あるは釈迦しやかは大日だいの化身けしんなりとも云いへり、
 成道じやうだうの時ときは大日だいの印可いんかを蒙もうて・字じの觀くわんを教けうえられ後夜ごやに仏ぶつになる
 なり大日だい如來にやらいだにもましまさずば争いかでか釈迦しやか佛ぶつも佛ぶつに成なり給たまうべき
 此等これらの道理どうりを以もつて案あずるに法華ほっけより眞言しんごん勝すぐれたる事ことは云いうに及およば

ざるなり、答て云く依法不依人の故にい恥やうにも経説のやうに
依る可きなり、大日経は釈迦の大日となつて説き給へる経なり故に
金光明と最勝王経との第一には中央釈迦牟尼と云へり又金剛
頂経の第一にも中央釈迦牟尼仏と云へり大日と釈迦とは一つ中央
の仏なるが故に大日経をば釈迦の説とも云うべし大日の説とも云
うべし、又毘慮遽那と云う

は天竺てんじくの語大日だいじつと云うは此この土つちの語ことばなり釈迦しやくか牟尼むにを毘盧遮那びるしゃなと名づくなづくと云う時は大日だいじつは釈迦しやくかの異名いみょうなり加之しかのみならずくやく旧訳きうやくの經きやうに盧舍那るしゃなと云うをば新訳しんやくの經きやうには毘盧遮那びるしゃなと云う然しかる間かん・新訳しんやくの經きやうの毘盧遮那びるしゃな法身ほふしんと云うは旧訳きうやくの經きやうの盧舍那るしゃな他受用身たじゆゆうしんなり、故ゆえに大日だいじつ法身ほふしんと云うは法華經ほふけきやうの自受用報身じじゆゆうほふしんにも及およばず況いはんや法華經ほふしんの法身ほふしん如来にょらいにはまして及およぶ可べからず法華經ほふけきやうの自受用身じじゆゆうしんと法身ほふしんとは真言しんごんには分ぶん・絶たつえて知らざるなり法報不分ほふほうぶん二三莫弁たんだいしゆうと天台宗てんだいしゆうにもきらはるなり、随したがつて華嚴經けこんきやうの新訳しんやくには、或あるは釈迦しやくかと稱あはづけ、或あるは毘盧遮那びるしゃなと稱あはくと説せつけり故ゆえに大日だいじつは只是ただ釈迦しやくかの異名いみょうなりなにしに別べつの仏ぶつとは意得こころうべ可べきや、次に法身ほふしんの説法せつぽうと云う事こと何いずれれの經きやうの説せつぞや弘法大師こうぼうだいしの二教論にけうろんには楞伽經りやうがきやうに依よつて法身ほふしんの説法せつぽうを立て給たまへり、其その楞伽經りやうがきやうと云うは釈迦しやくかの説せつにして未顕みけん真實しんじつの權教こんきやうなり法華經ほふけきやうの

自受用身に及ばざじじゆゆうしん およ

れば法身の説法とはいへどもいみじくもなし此の上に法は定んで説ほっしん せつぽう

かず報は二義に通ずるの二身の有るをば一向知らざるなり、故にだいにかい ほうしん せつぽう

大日法身の説法と云うは定んで法華の他受用身に当るなり、次にだいにかい ほうしん せつぽう

大日無始無終と云う事既に「我昔道場に坐して四魔を降伏す」ともだいにかい むし むしゆう

宣べ又「四魔を降伏し六趣を解脱し一切智智の明を満足す」等云のべ

云、此等の文は大日は始めて四魔を降伏して始めて仏に成るとこそ見えこれら

たれ全く無始の仏とは見えず、又仏に成りて何程を経るむし

と説かざる事は権經の故なり実經にこそ五百塵点等をも説きたごんきよう

れ、次に法界宮とは色究竟天か又何れの処ぞや色究竟天・或はほっかい

他化自在天は法華宗には別教の仏の説処と云うていみじからぬ事たけ じざいてん ほうけししゆう

に申すなり又菩薩の為に説くとも高名もなし例せば華嚴經は一向もう

菩薩の為なれども尚法華の方便とこそ云はるれ、只仏出世の本意ぼさつ

は仏に成り難き二乗の仏に成るを一大事とし給へりされば大論には
二乗の仏に成るを密教と云ひ二乗作仏を説かざるを顕教と云へ
り、此の趣ならば真言の三部経は二乗作仏の旨無きが故に還つて
顕教と云ひ法華は二乗作仏を旨とする故に密教
と云う可きなり、随つて諸仏秘密の蔵と説けば子細なし世間の
密教勝ると云うはいかやうに意得たるや但し若し顕教に於て
修行する者は久く三大無数劫を經_ふ等と云えるは既に三大無数劫
と云う故に是三蔵四阿含經を

指して顕教けんきょうと云いいて権大乘ごんたいじょうまでは云いわらず況いわんやや法華実大乘ほつけじつたいじょうまでは都すべて云いわざるなり。

次に釈迦しゃかは大日だいにちの化身けしん字おんじを教しやえられてこそ仏ぶつには成なりりたれと

云いう事こと此こは偏ひとえに六波羅蜜經ろくはらみつぎようの説せつなり、彼の經きん一部いちぶ十卷じゅうけんは是これ釈迦しゃか

の説せつなり大日だいにちの説せつには非あらず是これ未顕真実みけんしんじつの権教ごんきょうなり随したがつて成道じょうどうの

相さむも三蔵教さんぞうの教主きやうしゆの相さむなり六年くわん苦行くぎようの後の儀式ぎしなるをや、彼の

經説きやうせつの五味てんだいを天台てんだいは盗たうみ取とつて己おのれが宗しゆに立たつると云いう無実むじつを云い

付つけらるるは

弘法大師こうぼうだいしの大おほなる儼事ひがごとなり、所以ゆえんに天台てんだいは涅槃經ねはんぎように依よつて立たて給たまへ

り全ぜんく六波羅蜜經ろくはらみつぎようには依よらず況いわんや天台てんだい死去しきよの後のち百九十年ひやくきゅうじゅうねんあつて

貞元じやうげん四年よんねんに渡わたる經きんなり何なにとして天台てんだいは見み給たまうべき不実ふじつの過とが弘法こうぼう

大師だいしにあり、凡およそ彼の經説きやうせつは皆みな未顕真実みけんしんじつなり之これを以もつて法華經ほけきようを下くだ

さん事こと甚はなはだだ荒量あなはらなり、猶難なかなんじて云いく如何いかにに云いうとも印しんごん・真言しんごん・三

摩耶まや尊形そんぎようを説く

事だいは大日にちぎよう経程ほけきよう法華ほけきよう經には之これ無く事理じりぐみつ俱密ぐみつの談しんごんは眞言しんごんひとりすぐれ
たり、其その上しんごん眞言さんぶきようの三部さんぶきよう經は釈迦しゃか一代いちだい五時ごじの撰しんごん屬ぞくに非あらずされば
弘法こうぼう大師だいしの宝鑰ほうやくには釈摩しゃくま詞衍まかえん論ろんを証拠しやうことして法華ほつげは無明むみようの辺域へんいき・
戲論けろんの法しやくと釈たまたし給たまへり、爰ここを以もつて法華ほつげ劣せうり眞言しんごん勝まさると申もうすなり、答
う凡およそ印相いんそう尊形そんぎようは是これ權經ごんきようの説じつきようにして実教じつきようの談あひに非あらず設たい之これを
説ゆえくとも權實ごんじつ大小だいしやうの差別さべつ淺深せんじん有あるべし、所以ゆえんに阿含あこん經等きようとうにも印相いんそう
有あるが故ゆえに必ほつげず法華ほつげに印相いんそう尊形そんぎようを説ゆえくことを得これずして之これを説ゆえかざ
るに非あらず説ゆえくまじければ是これを説ゆえかぬにこそ有あれ法華ほつげは只ただ三世さんぜ十方じゆつぱう
の仏ほんの本意ほんいを説ゆえいて其形そのかたちがとあるかうある

とは云べう可べからず、例せせば世界せかい建立こんりゆうの相さうを説ゆえかねばとて法華ほつげは
俱舍ぐしゃより劣せうるとは云べう可べからざるが如ごとし、次に事理じりぐみつ俱密ぐみつの事ほつげ・法華ほつげ
は理り秘密ひみつ・眞言しんごんは事理じりぐみつ俱密ぐみつなれば勝まさるとは何いずれれの經きんに説ゆえけるや抑そもも

法華の理秘密とは何様の事ぞや、法華の理とは迹門・開権顕実の理
か其の理は真言には分絶えて知らざる理なり、法華の事とは又久遠
実成の事なり此の事又真言になし真言に云う所の事理は未開会の
権教の事理なり何ぞ法華に勝る可きや、次に一代五時の撰属
に非ずと云う事是れ往古より諍なり唐決には四教有るが故に
方等部に撰すと云へり、教時義には一切智智・一味の開会を説くが
故に法華の撰と云へり、二義の中に方等の撰と云うは吉き義なり、
所以に一切智智・一味の

文を以て法華の撰と云う事甚だいはれなし彼は法開会の文にして
全く人開会なし争か法華の撰と云わるべき、法開会の文は方等
般若にも盛んに談ずれども法華に等き事なし彼の大日經の始終を
見るに四教の旨具にあり尤も方等の撰と云う可し、所以に
開権顕実の旨有らざれば法華と云うまじ一向小乘三蔵の義無け
れば阿含の部とも云う
可からず、般若畢竟空を説かねば般若部とも云う可からず、大小
四教の旨を説くが故に方等部と云わずんば何れの部とか云わん、
又一代五時を離れて外に仏法有りと云う可からず若し有らば二仏
並出の失あらん、又其の法を釈迦統領の国土にきたして弘む
可からず、次に弘法大師釈摩訶衍論を証拠と為て法華を無明の
辺域戲論の法と
云う事はれ以ての外の事なり、釈摩訶衍論は竜樹菩薩の造なり、

是は釈迦如来の御弟子なり争か弟子の論を以て師の一代第一と
仰せられし法華經を押下して戲論の法等と云う可きや、而も論に
其の明文無く随つて彼の論の法門は別教の法門なり權經の法門な
り是円教に及ばず又実教に非ず何にしてか法華を下す可き、其の
上彼の論に幾の

經をか引くらんされども法華經を引く事は都て之無し權論の故な
り、地体弘法大師の華嚴より法華を下されたるは遙に仏意にはく
ひ違いたる心地なり、用ゆべからず用ゆべからず。

日蓮

花押

一六 真言諸宗違目

文永九年五月五十一歳御作

139P

与富木常忍

土木殿等の人人御中

日蓮

空に読み覚えよ老人等は具に聞き奉れ早々に御免を蒙らざ
る事は之を欺く可からず定めて天之を抑うるか、藤河入道を
以て之を知れ去年流罪有らば今年横死に値う可からざるか彼
を以て之を惟うに愚者は用いざる事なり、日蓮が御免を蒙ら
んと欲するの事を色に出す弟子は不孝の者なり、敢て後生を
扶く可からず、各各此の旨を知れ。

真言宗は天竺より之無し開元の始に善無畏三蔵・金剛智三蔵・

ふくうさんぞう 不空三蔵等・天台大師己証の一念三千の法門を盗んで大日経に入
れて之を立て真言宗と号す、華嚴宗は則天皇后の御宇に之を始
む、澄観等天台の十乗の観法を盗んで華嚴経に入れて之を立て
華嚴宗と号す、法相・三論は言うに足らず、禅宗は梁の世に達磨
大師楞伽経等を以てす大乘の空の一分なり、其の学者等大慢を
成して教外別伝等と称し一切経を蔑如す天魔の所為なり、浄土宗
は
善導等・観経等を見て一分の慈悲を起し撰地二論の人師に向つて
一向専修の義を立て畢んぬ、日本の法然之をあやまれり天台・
真言等を以て雑行に入れ末代不相応の思いを為して国中を誑惑し
て長夜に迷わしむ、之を明めし導師は但日蓮一人なるのみ。
涅槃経に云く「若し善比丘法を壊る者を見て置いて呵嘖し駈遣し
拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等云云、

かんちようしうあんだいしいわ
漢頂章安大師云く「ぶつぼう
てつり親しむは即ち是れ彼が怨なり彼が為に悪を除くは即ち是れ
いっわ すなわこ こ あだ ため なく
彼が親なり」等云云、法然が捨閉閣抛・禅家等が教外別伝・若し
ぶつこい ぶつぼう えらん ぶつぼう あだ なく
仏意に叶わ

ずんば日蓮は日本国の人の為には賢父なり聖親なり導師なり、
これのたまを言のたまわざれば一切衆生の為ために「むじさしんそくぜ」の重禍脱れ
難がたし、日蓮既に日本国の王臣等の為ためには「為彼除悪即是彼親」に当
れり此の国既に三逆罪を犯す天豈之を罰せざらんや、涅槃經に
云く「爾その時に世尊せそん・地の少しの土を取つて之を抓つめの上に置いて迦葉
に告のたまげて言のたまわく是の土多きや十方世界じゅうほうせかいの地土多きや、迦葉菩薩
仏もうに白もうして言もうさく世尊せそん抓つかの上の土は十方所有じゅうほうしゅうの土の比ならざるな
り○四重禁じゅうきんを犯おかし五逆罪ごぎやくざいを作つて○一闍提いっせんたいと作つて諸もろの善根ぜんこんを断
じ是の經を信こぜざるものは十方界じゅうほうかい所有しゅうの地土ちどの如ごとし○五逆罪ごぎやくざいを作
らず○一闍提いっせんたいと作せんらず善根ぜんこんを断だんぜず是かくの如ごとき等の涅槃ねはん經典きんを信
ずるは抓つかの上の土ちどの如ごとし」等云云、經文きやうもんの如ごとくんば当世とうせ・日本国にほんこくは
十方じゅうほうの地土ちどの如ごとく日蓮にちれんは抓つかの上の土ちどの如ごとし。
法華經ほけきやうに云いわく「諸もろの無智むちの人あつく有めりつて悪口罵詈あつくめり」等云云、法滅尽經ほつめつじんきやう

に云く「吾般泥の後・五逆濁世に魔道興盛なり魔沙門と作つて
吾が道を壊乱す 悪人転た多くして海中の沙の如し劫尽きんとす
る時・日月転た短く善者甚だ少くして若しは一若しは二人」等云
云、又云く「衆魔の比丘・命終の後・精神当に無択地獄に墮つべし」
等云云、今道隆が一党・良觀が一党・聖一が一党・日本国の一切の
四衆等は是の経文に当るなり、法華經に云く「たとい劫焼に乾れ
たる草を担い負いて中に入つて焼けざらんも亦未だ難しとせず我が
滅度の後に若し此の経を持つて一人の爲にも説かん是れ則ち爲れ
難し」等云云、日蓮は此の経文に当れり、「諸の無智の人有つて
悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者あらん」等云云、仏陀記して
云く後の五百歳に法華經の行者有つて諸の無智の者の爲に必ず
悪口罵詈・刀杖瓦礫・流罪・死罪せられん等云云、日蓮無くば釈迦
多宝・十方の諸仏の未来記は当に大妄語なるべきなり。

うたがい 疑つて云く汝当世の諸人に勝ることは一分爾る可し真言・華嚴
さんろん 三論・法相等の元祖に勝るとは豈に慢過慢の者に非ずや過人法と
これ は是なり汝必ず無間・大城に墮つ可し、故に首楞嚴經に説いて
いわ 云く「たと 譬えば窮人妄りに帝王と号して自ら誅滅を取るが如し況ん
またほうおう 復法王如何ぞ妄りに竊まん因地直からざれば果紆曲を招かん」
なん 等云云、

涅槃經ねはんぎょうみ云いわく、「云何いかなる比丘びくか過人かにんぼう法だに墮たする 未いまだ四沙門しやもん果を得いず云何いかんぞ当まさに諸もろの世間もろせけんの人をして我すは已すでに得たりとい謂いわしむべきき」等云云、答いえて云いわく法華經ほけきょうに云いわく、「又大梵天王だいぼんてんのうの一切衆生いっさいしじゆじやうの父ちちの如ごとく又云いわく、「此この經きやうてんは 諸經しよきやうの中ちゆうの主もつともなり最もつとも為なれ第一だいいちなり能よく是この經典きやうてんを受持じゆじすること有またらん者または亦復また是この如ごとく一切衆生いっさいしじゆじやうの中ちゆうに於おいて亦また為なれ第一だいいちなり」等云云、伝教大師でんきやうだいしの秀句しゆきうに云いわく、「天台てんだい法華宗ほけしやうの諸宗しよしやうに勝すぐれたるは所宗しよしゆじゆの經きやうに拠よるが故ゆゑなり自讚毀他じさんきたならず庶ねがわくは有智うちの君子くんし經きやうを尋たずねて宗しゆを定めよ」等云云、星ほしの中ちゆうに勝すぐれたる月つき・星月ほしづきの中ちゆうに勝すぐれたるは日輪にちりんなり、小国しやうこくの大臣だいじんは大国たいこくの無官むかんより下くだる傍例ぼうれいなり、外道げどうの五通ごつうを得えるより仏弟子ぶつでしの小乘しやうじやうの三賢さんけんの者ものの未いまだ一通いつつうを得えざるは天地てんち猶勝なほまさる、法華經ほけきやうの外ほかの諸經しよきやうの大菩薩だいぼさつは法華ほけの名字なみざう即すなはち凡夫ぼんぶより下くだれり何なんぞ汝なんじ始めて之これを驚おどろかんとや教おしに依よつて人ひとの勝劣しやうりやくを定さだむ先まづず經きやうの勝劣しやうりやくを知らしらば何なんぞ人

の高下を論ぜんや。

問うて云く汝法華經の行者為らば何ぞ天汝を守護せざるや、

答えて云く法華經に云く「悪鬼其の身に入る」等云云、首楞嚴經

に云く「修羅王有り世界を執持して能く梵王及び天の帝釈四天と

權を請う此の阿修羅は變化に因つて有り天趣の所持なり」等云云。

能く大梵天王・帝釈・四天と戦う大阿修羅王有りて禅宗・

念仏宗・律宗等の棟梁の心中に付け入つて次第に国主国中に遷り

入つて賢人を失う、是くの如き大悪は梵釈も猶防ぎ難きか何に

況んや日本守護の小神をや但地涌千界の大菩薩・釈迦・多宝・諸仏

の御加護に非ざれば叶い難きか、日月は四天の明鏡なり諸天定め

て日蓮を知りたまうか日月は十方世界の明鏡なり諸仏も定めて

日蓮を知りたまうか、一分も之を疑う可からず、但し先業未だ

尽きざるなり日蓮流罪に当れば教主釈尊衣を以て之を覆いたま

わんか、去年こぞ九月十二日の夜中には虎口ここうを脱まぬかれたるか「必ず心の固
きに仮かりて神の守り即すなわち強し」とは是これなり、汝等なんじ努力ゆめゆめ疑うたがうこと
なかれけつじょう
勿れ決定して疑うたがい有ある可べからざる者なり、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

五月五日

日蓮 かおう
花押 もつしよにん

此の書を以て諸人に触れ示して恨を残すこと勿れ。

土木殿

一七 真言見聞

文永九年七月五十一歳御作 与三位

房日行 142P

問う真言亡国とは証文何なる経論に出ずるや、答う法華誹謗
正法向背の故なり、問う亡国の証文之無くば云何に信ず可きや、
答う謗法の段は勿論なるか若し謗法ならば亡国墮獄疑い無し、
凡そ謗法とは謗仏・謗僧なり三宝一体なる故なり是れ涅槃經の文

なり、爰を以て法華經には「即ち一切世間の仏種を断ず」と説く
これすなわ いっせんたい 即ち一切世間の仏種を断ず
是を即ち一闡提と名づく涅槃經の一と十と十一とを委細に見る
可きなり、罪に輕重有れば獄に淺深を構えたり、殺生・偷盜等
ないし さんぜんせかい しゆじょう さつがい せんじん かま せつじょう ちゆうとう
乃至一大三二世世界の衆生を殺害すれども等活黒繩等の上七
大地獄の因として無間に墮つることは都て無し、阿鼻の業因は經論
の掟は五逆・七逆・因果撥無・正法誹謗の者なり、但し五逆の中に
一逆を犯す者は無間に墮つと雖も一中劫を経て罪を尽して浮ぶ、
一戒をも犯さず道心堅固にして後世を願うと雖も法華に背きぬれ
ば無間に墮ちて展転無數劫と見えたり、然れば即ち謗法は無量の
五逆に過ぎたり、是を以て国家を祈らんに天下將に泰平なるべし
や、諸法は現量に如かず承久の兵乱の時關東には其の用意もな
し国主として調伏を企て四十一人の貴僧に仰せて十五壇の秘法を
行はる、其の中に守護經の法を紫宸殿にして御室始めて行わる七日

に満ぜし日・京方負け畢んぬ亡国の現証に非ずや、是は僅に今生の
小事なり権教 邪法に依つて悪道に墮ちん事浅・かるべし。

問うもん権教こんきょう邪宗じやしゅうの証文しゅうもんは如何いかん既にすで真言教しんごんきょうの大日だいにち覺王かくおうの秘法ひほうは
即身そくしん成仏じょうぶつの奥蔵おうぞうなり、故ゆえに上下一じょうげ同ごに是この法ほに歸かへし天下てんが悉ことごとく大法だ
を仰あおぐ海内かいないを静しずめ天下てんがを治おさむる事こと偏ひとえに真言しんごんの力ちからなり、権教こんきょう・邪法じやほう
と云いう事こと如何いかん、答こたへ権教こんきょうと云いう事こと・四教しきょう含蔵がんぞう方便ほうべんの説せつなる經文きょうもん
顯然けんねんなり、然しかれば四味しきの諸教しよきょうに同おなじて久遠くおんを隱かくし二乘にじょうを隔へたつ況いわん
やじんぎ尽形じんぎ寿じゆうの戒等けいどう

を述しよぶれば小乘しよじょう権教こんきょうなる事こと疑うたがい無し、爰こを以もつて遣唐とうの疑問ぎもんに
禅林ぜんりん寺じの広修こうしゅう・国清こくせい寺じの維ゆいの決けつ判ばん分明ふんみょうに方等ほうとう部ぶの撰せんと云いうな
り、疑うたがいいつて云いく經文きょうもんの権教こんきょうは且しばらこれ之これを置おく唐決とうけつの事ことは天台てんだいの
先徳せんとく・円珍えんちん大師だいし之これを破はす、大日だいにち經きょうの指歸しちききょうに「法華ほっけすら尚なお及およばず況いわんや
自余じよの教きょうをや」云いふ、既すでに祖師そしの所判しよはんなり誰たか之これに背そむく可べきや、決けつ
に云いく「道理どうり前ぜんの如ごとし」依え法ほう不ふ依え人にんの意いなり但ただし此この積ちきを智証ちしじょうの積ちき
と云いう事こと不審ふしんなり、其そのの故ゆえは授決じゆけつ集じゆの下したに云いく「若もし法華ほっけ・華嚴けごん・

涅槃 ねはん

等の經に望めば是れ撰引門しゅういんもんと云へり、広修維こうしゅういを破はする時は

法華尚及ほっけなおおよばずと書き授決集じゅけつしゅうには是れ撰引門しゅういんもんと云つて二義相違そごいせ

り指帰えんちんが円珍えんちんの作ちしゅうならば授決集じゅけつしゅうは智証ちしゅうの釈あに非あらず、授決集じゅけつしゅうが実

ならば指帰ちしゅうは智証ちしゅうの釈ちしゅうに非あじ、今・此の事を案あずるに授決集じゅけつしゅうが

智証ちしゅうの釈ちしゅうと云う事天下てんがの人皆みな之これを知る上、公家くげの日記にっきにも之これを

載のせたり指帰ちしゅうは人多おほく

之これを知らず公家くげの日記にっきにも之これ無し、此を以つて彼を思おもうに後の人作

つて智証ちしゅうの釈ちしゅうと号なづするが能よく能よく尋たずぬ可べき事ことなり、授決集じゅけつしゅうは正ただし

き智証ちしゅうの自筆じひつなり、密家みっけに四句しごの五蔵ござうを設たけて十住じゅうじゅう心を立たて論ろんを

引き伝たを三國さんごくに寄よせ家家けいけいの日記にっきと号なづし我が宗しゆんを嚴げんるとも皆みな是これ

妄語胸臆もうごくおくの浮言うかれごとにして莊嚴そうごん己義こぎの法門ほつもんなり、所詮しよせん法華經ほけきやうは大日經だいにちきやう

より三重さんじゆうの

劣戯論けろんの法にしてしやくそん釈尊は無明纏縛むみょうてんばくの仏と云う事・慥たしかなる如来にょらいの
金言きんげんきようもん經文を尋ぬ可たずし、証文しょうもんなく無くんば何と云うとも法華誹謗ほっけひぼうの罪過つみ
を免まぬかれず此の事・当家の肝心かんじんなり返す返す忘失もうしつする事勿なかれれ、何いずれれの
宗にも正法誹謗しょうほうひぼうの失之有これあり対論たいろんの時は但此の一段に在りぶつほう仏法は
自他宗じた・異ると雖もいえども翫もてあそぶ本意ほんいは道俗貴賤どうぞくきせん共に離苦得楽りくとくらくげんとう現当二世
の為なり、謗法ほうほう
に成り伏して悪道あくどうに墮おつ可くば文殊もんじゆの智慧ちえ・富楼那ふるなの弁説べんせつ一分も
無益むやくなり無間むげんに墮おつる程じやほうの邪法じゃほうの行人こつかにて国家こつかを祈きとうせんはに將はた
善事ぜんじを成べす可よきや、顯密けんみつたいはん対判たいはんの釈しほは且これらく之を置けこんく華嚴けごんに法華ほっけ劣
ると云う事能よく能よく思惟しゆいす

可きなり、華嚴經の十二に云く四十華嚴なり「又彼の所修の一切功德六分の一常に王に属す 是くの如く修及び造を障る不善所有の罪業六分の一還つて王に属す」文、六波羅蜜經の六に云く「若し王の境内に殺を犯す者有れば其の王便ち第六分の罪を獲ん偷盜・邪行及び妄語も亦復是くの如し何を以ての故に若しは法も非法も王為れ根本なれ

ば罪に於いても福に於いても第六の一分は皆王に属するなり」云云、最勝王經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来り国人喪乱に遭わん」等云云、大集經に云く「若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の声聞の弟子を恼乱し若しは以て毀罵し刀杖もて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難

を作す者有らば、我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ

および自の国土にも亦兵起・疫病・饑饉・非時風雨・鬪諍言訟せしめ

又其の王久しからずして復当に己が国を亡失すべからしむ云云、

大三界義に云く「爾の時

に諸人共に聚りて衆の内に一の有徳の人を立て名けて田主と為して

各所収の物六分の一を以て以て田主に貢輸す一人を以て主と為し

政法を以て之を治む、茲に因つて以後・刹利種を立て大衆欽仰して

恩率土に流る復・大三末多王と名づく「已上俱舍に依り之を出すなり。

顕密の事、無量義経十功德品に云く「第四功德の下」「深く諸仏秘密

の法に入り演説す可き所違無く失為し」と、抑大日の三部を密説

と云ひ法華経を顕教と云う事金言の所出を知らず、所詮真言を

密と云うは是の密は隠密の密なるか微密の密なるか、物を秘する

に二種有り一には金銀等を蔵に籠むるは微密なり、二には疵・片輪

等を隠すは隠密なり、然れば即ち真言を密と云うは隠密なり

其の故は始成と説く故に長寿を隠し二乗を隔つる故に記小無し、
此の二は教法の心髓・文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、然れば
即ち文に云く四の卷法師品に云く「葉王此の経は是れ諸仏秘要の
蔵なり」と云云、五の卷安樂行品に云く「文殊師利・此の法華経は
諸仏如来秘密の蔵なり諸経の中に於て最も其の上在り」と云云、
寿量品に云く「如来秘密神通之力」と云云、如来神力品に云く「如来
一切

ひよのぞう 秘要之蔵と云、しかのみならず真言の高祖竜樹菩薩・法華經を
ひみつ 秘密と名づく二乗作仏有るが故にと釈せり、次に二乗作仏無きを
ひみつ 秘密とせずば真言は即ち秘密の法に非ず、所以は何ん大日經に
いわ 云く「仏不思議真言相道の法を説いて一切の聲聞・縁覺を共にせず
またせそんあまね 亦世尊普く一切衆生の為にするに非ず」と云云、二乗を隔つる事
ぜんしみ 前四味の諸教に同じ、随つて唐決には方等部の撰と判ず經文には
しきようがんぞう 四教含蔵と見えたり、大論第百卷に云く第九十品を釈す「問うて曰く
いすれ 更に何れの法か甚深にして般若に勝れたる者有つて般若を以て阿難
ぞくろい に囑累し而も余の經をば菩薩に囑累するや、答えて曰く般若
はらみつ 波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華等の諸經に阿羅漢の受決作仏を
説いて大菩薩能く受用す譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが
ごと 如し」と等云云、玄義の六に云く「たと 譬えば良医の能く毒を変じて薬と
な 為すが如く二乗の根敗反た復すること能わず之を名づけて毒と

為す今經に記を得るは即ち是れ毒を變じて藥と為す、故に論に云く余經は秘密に非ずとは法華を秘密と為せばなり、復本地の所説有り諸經に無き所、後に在つて當に広く明すべしと云云、籤の六に云く「第四に引証の中論に云く等と言うは大論の文証なり秘密と言うは八經の中の秘密には非ず但是れ前に未だ説かざる所を秘と為し開し已れば外無きを密と為す」文、文句の八に云く「方等・般若に実相の蔵を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず亦未だ發迹顕本せず頓漸の諸經は皆未だ融會せず故に名づけて秘と為す」文、記の八に云く「大論に云く法華は是れ秘密諸の菩薩に付すと、今の下の文の如きは下方を召すに尚本眷屬を待つ驗けし余は未だ堪えざることを」云云、秀句の下に竜女の成仏を釈して「身口密なり」と云えり云云、此等の經論釈は分明に法華經を諸仏は最第一と説き秘密教と定め給へるを經論に文証も無き妄語を吐

き法華を顕教と名づけて之を下し之を謗す豈大謗法に非ずや。

ほつけ
けんきょう

き法華を

顕教と名づけて

之を下し之を

謗す豈大謗法に

非ずや。

ほつけ
ほうほう

に非ずや。

あら

抑も唐朝の善無畏・金剛智等・法華經と大日經の兩經に

理同事勝の釈を作るは梵華兩國共に勝劣か、法華經も天竺には十

六里の宝蔵に有れば無量の事有れども流沙・葱嶺等の險難・五万八

千里・十万里の路次容易ならざる間・枝葉をば之を略せり、此等は

併ながら訳者の意樂に随つて広を好み略を惡む人も有り略を好み

広を惡む人も有り、然れば即ち玄奘は広を好んで四十卷の

般若經を六百卷と成し、羅什三蔵は略を好んで千卷の大論を百卷

に縮めたり、印契・真言の勝ると云う事は以て弁え難し、羅什

所訳の法華經には是を宗とせず不空三蔵の法華の儀軌には印・真言

之有り、仁王經も羅什の所訳には印・真言之無し不空所訳の經には

之を副えたり知んぬ是れ訳者の意樂なりと、其の上法華經には

「為説実相印」と説いて合掌の印之有り、譬喩品には「我が此の法印

世間を利益せんと欲するが為の故に説く云云、此等の文如何只
広略の異なるか、又舌相の言語皆是れ真言なり、法華經には「治生
の産業は皆実相と相違背せず」と宣べ、亦是れ前仏經中に説く所
なり」と説く此等は如何、真言こそ有名無実の真言未顯真実の
權教なれば成仏得道跡形も無く始成を談じて久遠無ければ性徳
本有の仏性も無し、三乗が仏の出世を感ずるに三人に二人を捨て
三十人に二十人を除く、「皆令入仏道」の仏の本願満足す可からず
十界互具は思いもよらずまして非情の上の色心の因果争か説く
可きや。

然らば陳隋二代の天台大師が法華經の文を解りて印契の上に立
て給へる十界互具・百界千如・一念三千を善無畏は盗み取つて我が
宗の骨目とせり、彼の三蔵は唐の第七玄宗皇帝の開元四年に来る
如来入滅より一千六百六十四年か、開皇十七年より百二十余年な

り何ぞ百二十余年已前に天台の立て給へる一念三千の法門を盗み
取つて我が物とするや、而るに己が依経たる大日経には衆生の中
に機を簡ひ前四味の諸経に同じて二乗を簡へり、まして草木成仏は
思いもよらずされば理を云う時は盗人なり、又印契真言何れの経
にか之を簡える若し爾れば大日経にを説くとも規模ならず、一代
に簡われ諸経に捨てられたる二乗作仏は法華に限れり、二乗は
無量無辺劫の間千二百余尊の印契真言を行ずとも法華経に値わ
ずんば成仏す可からず、印は手の用・真言は口の用なり其の主が
成仏せざれば口と手と別に成仏す可きや、一代に超過し三説に
秀でたる二乗の事をば物とせず事に依る時は印真言

を尊む者・劣謂勝見の外道なり。

無量義經說法品に云く「四十余年・未顕眞實」文、一の卷に云く

「世尊は法久くして後要ず当に眞實を説きたもうべし」文、又云く

「一大事の因縁の故に世に出現したもう」文、四の卷に云く「薬王今

汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一

なり」文、又云く「已に説き今説き当に説かん」文、宝塔品に云く「我

仏道を爲つて無量の土に於て始より今に至るまで広く諸經を説く

而も其の中に於て此の經第一なり」文、安樂行品に云く「此の

法華經は是れ諸の如来第一の説なり諸經の中に於て最も爲甚深な

り」文、又云く「此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に

於て最も其の上在り」文、薬王品に云く「此の法華經も亦復是く

の如し諸經の中に於て最も爲其の上なり」文、又云く「此の經も

亦復是くの如し諸經の中に於て最も爲其の尊なり」文、又云く「此

の経も亦復是の如し諸経の中の王なり「文、又云く「此の経も亦復
かくは是の如し一切の如来の所説若しは菩薩の所説若しは声聞の所説
もろもろきよほう諸の経法の中に最為第一なり」等云云、玄の十に云く「又・已今当
の説に最も為れ難信難解前経は是れ已説なり」文、秀句の下に
云く「謹んで案ずるに法華経・法師品の偈に云く薬王今汝に告ぐ我
が所説の諸経あり而も此の経の中に於て法華最も第一なり」文、又
云く「当に知るべし已説は四時の経なり」文、文句の八に云く「今
法華は法を論ずれば」云云、記の八に云く「鋒に当る」云云、秀句の
下に云く「明かに知んぬ他宗所依の経は是れ王中の王ならず」云
云、釈迦・多宝・十方の諸仏・天台・妙楽・伝教等は法華経は眞実・
華嚴経は方便なり、「未だ眞実を顕さず正直に方便を捨てて余経
の一偈をも受けざれ」若し人信ぜずして乃至其の人・命終して
阿鼻獄に入らんと云云。

弘こう法ほう大師だいしは「法ほ華っけは戲け論ろん・華け嚴ごんは真しん実じつなり」と云云、何いれずれを用う
可べきや、宝ほう鑰やくに云く「此かの如ごとき乘じ乘ちようは自じ乘ちように名なを得れども後ごに
望ぼうめば戲け論ろんと作るな文ぶん、又また云いく「謗ぼう人じん謗ぼう法ほうは定じめて阿あ鼻び獄ごくに墮だせん」
文ぶん、記きの五ごに云く「故ゆえに

実相じつそうの外みは皆みな戲論けろんと名なづく「文ぶん、梵網經ぼんもつぎょうの疏じゆに云いわく」第十じゅうじに
謗ぼう三寶さんぼう戒かい亦または謗ぼう菩薩ぼさつ戒かいと云いい。或あるは邪見じゃけんと云いふ。謗ぼうは是これ乖背けはいの名な
なり。是すべれ解こ。理りに称かなわらず言ことは實じつに當あたらずして異解いげして説せつく者ものを
皆みな名なづけて謗ぼうと為なすなり「文ぶん、玄げんの三さんに云いく」「文証もんしやう無なき者ものは悉ことごとく
是これ邪偽じゃい。彼かの外道げどうに同おなじ「文ぶん、弘くわうの十じゅうに云いく」「今いまの人ひと。他たの所引しよいん
經論きやうろんを信まじて謂おもいて憑たのみ有ありと為なして宗しゆの源げんを尋たずねず謬誤あやまり何なんぞ
はなはだ

甚しんしき「文ぶん、守護章しゆご上じやうの中ちゆうに云いく」「若もし所説しよせつの經論きやうろん明文めいぶん有あらば
權實けんじつ・大小だいしやう・偏円へんえん・半満はんまんを簡かん択たくす可べし「文ぶん、玄げんの三さんに云いく」「広くわうく經論きやうろん
を引ひいて己義こぎを莊嚴そうごんす「文ぶん」。

抑おさ弘法こうぼうの法華經ほふけきやうは真言しんごんより三重さんじゆうの劣けろん。戲論けろんの法ほふにして尚な華嚴けげんに
も劣あると云いふ事こと大日經だいにちきやう六卷りくくわんに供養法くやうほふの卷くわんを加くえて七卷しちくわん・三十一品さんじゅういちひん

或あるは三十六品さんじゅうろくひんには何いれの品ひん何いれの卷くわんに見みえたるや、しかのみなら
ず蘇悉地經そしつちきやう三十四品さんじゅうしひん・金剛頂經こんごうぢやうきやう三卷さんくわん・三品さんひん。或あるは一いち卷くわんに全ぜんく見みえ

ざる所なり、又大日経並びに三部の秘経には何れの巻何れの品に
か十界互具之有りや都て無きなり、法華経には事理共に有るなり、
所謂久遠実成は事なり一乗作仏は理なり、善無畏等の理同事勝は
臆説なり信用す可からざる者なり。

凡そ真言の誤り多き中

一、十住心に第八法華・第九華嚴・第十真言云云何れの経論に
出でたるや。

一、善無畏の四句と弘法の十住心と眼前違目なり何ぞ師弟敵対
するや。

一、五蔵を立つる時・六波羅蜜経の陀羅尼蔵を何ぞ必ず我が家の
真言と云うや。

一、震旦の人師争つて醍醐を盗むと云う年紀何ぞ相違するや、
其の故は開皇十七年より唐の徳宗の貞元四年戊辰の歳に至るま

で百九十二年なり何ぞ天台入滅百九十二年の後に渡れる
六波羅蜜經の醍醐を盗み給う可きや顯然の違目なり、若し爾れ
ば謗人謗法定墮阿鼻獄といふは自責なるや。
一、弘法の心經の秘鍵の五分に何ぞ法華を損するや能く能く尋ぬ
可き事なり。

真言七重難。

一、真言は法華經より外に大日如来の所説なり云云、若し爾れば
大日の出世成道説法利生は釈尊より前か後か如何、対機説法の仏
は八相作仏す父母は誰れぞ名字は如何に娑婆世界の仏と云はば世
に二仏無く国に二主無きは聖教の通判なり、涅槃經の三十五の卷
を見る可きなり、若し他土の仏なりと云はば何ぞ我が主師親の
釈尊を蔑にして他方・疎縁の仏を崇むるや不忠なり不孝なり逆路
伽耶陀なり、若し一体と云はば何ぞ別仏と云うや若し別仏ならば
何ぞ我が重恩の仏を捨つるや、唐堯は老い衰へたる母を敬ひ
虞舜は頑なる父を崇む「是一」、六波羅蜜經に云く「所謂過去無量
劫沙の諸仏・世尊の所説の正法・我今亦当に是の如き説を作すべ
し所謂八万四千の諸の妙法蘊なり 而も阿難陀等の諸大弟子をし
て一たび耳に聞いて皆悉く憶持せしむ」云云、此の中の陀羅尼蔵を

弘法我が真言と云える若し爾れば此の陀羅尼蔵は釈迦の説に
非ざるか此の説に違す是二、凡そ法華経は無量千万億の已説・今説・
当説に最も第一なり、諸仏の所説菩薩の所説声聞の所説に此の経
第一なり諸仏の中に大日漏る可きや、法華経は正直無上道の説・
大日等の諸仏長舌を梵天に付けて真実と示し給う是三、
威儀形色経に「身相黄金色にして常に満月輪に遊び定慧智拳の印
法華経を証誠す」と、又五仏章の仏も法華経第一と見えたり是四、
「要を以て之を云わば如来の一切所有の法乃至皆此の経に於て宣示
顕説す」云云、此等の経文は釈迦所説の諸経の中に第一なるのみ
に非ず三世の諸仏の所説の中に第一なり此の外一仏・二仏の所説の
経の中に法華経に勝れたる経有りと云はば用ゆ可からず法華経は
三世不壞の経なる故なり是五、又大日経等の諸経の中に法華経に
勝るる経文之無し是六、釈尊御入滅より已後天竺の論師二十四人

の付ふ法ほう蔵ぞう其その外ぐわい大だい権けんの垂すい迹じやく震しん旦たんの人にん師し南なん三さん・北ほく七しちの十じゅう師し三さん論ろん・法ほう相そう
の先せん師しの中ちゆうに天てん台だい宗しゆうより外ぐわいに十じゅう界かい互ご具ぐ・百ひゃく界かい千せん如にょ・一いち念ねん三さん千せんと
談だんずる人にん之これ無なし、若もし一いち念ねん三さん千せんを立たてざれば性しやう惡あくの義ぎ之これ無なし性しやう惡あく
の義ぎ無なくば仏ぼつ・菩ぼ薩さつの普ふ現げん色しき身しん真しん言ごん兩りやう界かいの漫まん荼だ羅ら五ご百ひゃく七しち百ひゃくの諸しよ尊そん
は本ほん無む今こん有ぬの外げ道どうの法ぽうに同どうぜんか、若もし

十界互具・百界・千如を立てば本経何れの経にか十界皆成の旨
これ之を説けるや、天台円宗見聞の後・邪智莊嚴の為に盗み取れる
法門なり、才芸を誦し浮言を吐くには依る可からず正しき経文
金言を尋ぬ可きなり是七。

涅槃經の三十五に云く「我処処の経の中に於て説いて言く一人
出世すれば多人利益す一国土の中に二の転輪王あり一世界の中に
二仏出世すといわば是の処有ること無し」文、大論の九に云く
「十方恒河沙の三千大千世界を名づけて一仏世界と為す是の中に
更に余仏無し実には一りの釈迦牟尼仏なり」文、記の一に云く「世に
は二仏無く国には二主無し一仏の境界には二の尊号無し」文、持
地論に云く「世に二仏無く国に二主無く一仏の境界に二の尊号無
し」文。

七月日

日蓮 花押

一八 蓮盛抄

建長七年 三十四歳御作

150P

禅宗云く涅槃の時・世尊座に登り拈華して衆に示す迦葉・破顔
 微笑せり、仏の言く吾に正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の
 法門有り文字を立てず教外に別伝し摩訶迦葉に付属するのみと、
 問うて云く何なる経文ぞや、禅宗答えて云く大梵天王問仏決疑経
 の文なり、問うて云く件の経何れの三蔵の訳ぞや貞元・開元の録の
 中に曾つて此の経無し如何、禅宗答えて云く此の経は秘経なり故に
 文計り天竺より之を渡す云云、問うて云く何れの聖人何れの人師
 の代に渡りしぞや跡形無きなり此の文は上古の録に載せず中頃よ
 り之を載す此の事禅宗の根源なり尤も古録に載すべし知んぬ偽文

なり、ぜんしゆう禅宗云くねはんぎよう涅槃經の二に云く「我今しよう所有の無上むじようの正法しようほう悉くもつ摩訶まか迦葉かしようにふぞく付屬すこ云云此の文いかん如何、むじよう答えて云く無上の言むじようはだいじよう大乘だいじように似たりといえど雖も是れ小乘しようじようを指すなりげどう外道の邪法じやほうに対すればしようじよう小乘をも

正法しやうぼうといはん、例せば大法東漸だいほうとうぜんと云えるを妙楽みょうらく大師だいし解釈げしやくの中に
「通じてぶつぎやう仏教を指す」と云いてい大小だいしやう・権實ごんじつをふさねてだいほう大法と云うな
り云云、外道げどうに對すればしやうじやう小乘も大乘だいじやうと云われ下臆げろくなれども分
は殿たんでんと云はれ上臆じやうおつと云はるるがごとし、涅槃經ねはんぎやうの三さんに云くい「若しも
法宝ほうぼうを以て阿難あなん及び諸もろもろの比丘びくに付屬ふぞくせば久住くじゆうを得じ何を以ての
故ゆえに一切いっさいの聲聞しやうもん及び大迦葉かしやうは悉ことごとく當まに無常むじやうなるべし彼の老人らうじんの他
の寄物きもつを受くるが如ごとし、是かくの故ゆえに心まさに無上むじやうの佛法ぶつぼうを以て諸もつの菩薩ぼさつに
付屬ふぞくすべし諸もろもろの菩薩ぼさつは善能問答ぜんねんもんたうするを以て是もつくの如ごときの法宝ほうぼう則すなち
久住くじゆうすることを得むりやう・無量千世むりやうせんじ増益熾盛ぞうやくしじやうにして衆生しゆじやうを利安りやあんせん彼の
壯すなわなる人ひとの他の寄物きもつを受くるが如ごとし是この義ぎを以ての故ゆえに諸しよだい大菩薩ぼさつ
乃すなわち能よく問うのみごに云云、大小だいしやうの付屬ふぞく其ごれ別べつなること分明ぶんみやうなり、
同經どうきやうの十じゆに云くい「汝等なんじ・文殊もんじゆ當まさに四衆ししゆうの為ためにだいほう広く大法を説くべし
今いま・此この經法きやうぼうを以て汝もつに付屬ふぞくす乃至迦葉ないしかしやう・阿難あなん等も来またらば復また當まさに

かくの如きこと正法しやうぼうを付属ふぞくすべしこと云云故ゆえに知んぬもんじゆかしやう文殊迦葉だいはうに大法だいほうを
付属ふぞくすべしと云云、仏より付属ふぞくする処ところの法しやうは小乘せうじやうなり悟性論ごしやうろんに
云く「人心じんしんをさとる事ことあれば菩提ぼだいの道みちを得る故ゆえに仏と名づく」菩提ぼだい
に五あり何れの菩提ぼだいぞや得道とくたう又種種しゆじゆなり何れの道みちぞや余経よきやうに明す
所ところは大菩提ほだいにあらざ又無上道むじやうたうにあらざ経きやうに云く「四十余年よんじゆうよねん・未顕みけん
眞実しんじつと云云。

問うて云く法華ほつげは貴賤男女何れの菩提ぼだいの道みちを得べきや、答えて
云く「乃至ないし一偈いちげに於ても皆かいじやう成仏うたがひ疑うたがひい無し」云云、又云く「正直しやうじきに
方便ほうべんを捨て但無上道むじやうたうを説く」云云、是に知んぬ無上菩提むじやうぼだいなり「須臾しゆゆ
も之これを聞いて即ち阿耨菩提あのくぼだいを究竟くきやうすることを得るなり」此の菩提ぼだいを
得ん事須臾しゆゆも此の法門ほうもんを聞く功德くどくなり、問うて云く須臾しゆゆとは三十
須臾しゆゆを一日一夜と云う「須臾しゆゆ聞之もんし」の須臾しゆゆは之これを指すか如何いかん、答う
件くだんの如ごとし天台止觀てんだいしかんの二にに云く「須臾しゆゆも廢はいすること無かれ」云云、

弘決ぐけつに云いわく「暫しばらくも廃はいすることを許ゆるさざる故ゆえに須臾しゆゆと云いう」故ゆえに須臾しゆゆは刹那せつななり。

問とうて云いわく本分ほんぶんの田地でんちにもとづくを禅ぜんの規模きもとす、答こたう本分ほんぶんの田地でんちとは何者なにものぞや又何いすれれの經きやうに出いでたるぞや法華經ほけきやうこそ人天にんてんの福田ふくでんなればむねと人天にんてんを教化きやうけし給たまふ故ゆえに仏ぶつを天人てんにんしと号なづす此この經きやうを信しんずる者は己身こしんの仏ぶつを見るのみならず過あや現げん・末まの三世さんぜの仏ぶつを見る事じ・淨頗梨じやうはりに向むかふに色像しきざうを見るが如ごとし、經きやうに云いく「又また淨明鏡じやうみやうきやうに悉ことごとく諸しよの色像しきざうを見るが如ごとし」と云いふ。

禅宗ぜんしゆう云いく是心即仏ぜしんそくぶつ・即身是仏そくしんぜぶつと、答こたえて云いく經きやうに云いく「心こは是これ第一だいいちの怨あだなり此この怨あだ・最もも悪なと為なす此この怨あだ・能よく人ひとを縛しばり送おくつて閻羅えんらの処ところに到いたる汝なんじ独ひとり地獄じこくに焼あかれて悪業あくごうの為ために養たむ所ところの妻子さいし兄弟きやうだい等ら・親屬しんぞくも救すくふこと能あたわじ」と云いふ、涅槃經ねはんきやうに云いく「願ねがつて心この師しと作つくつて心こを師しとせざれ」と云いふ、愚癡無懺ぐちむざんの心こを以もつて即心即仏そくしんそくぶつと立たつ

つ豈未得謂得・未証謂証の人に非ずや。

問う法華宗の意如何、答う經文に「具三十二相乃是眞実滅」云

云、或は「速成就仏身」云云、禪宗は理性の仏を尊んで己れ仏に

均しと思ひ増上慢に墮つ定めて是れ阿鼻の罪人なり、故に法華經に

云く「増上慢の比丘は將に大坑に墜ちんとす」禪宗云く毘盧の

頂上をむと、云く毘盧とは何者ぞや若し周遍法界の法身なら

ば山川・大地も皆是れ毘盧の身土なり是れ理性の毘盧なり、此の

身土に於ては狗野干の類も之をむ禪宗の規模に非ず若し實に

仏の頂をまんか梵天も其の頂を見ずと云えり薄地争でか

之をむ可きや、夫れ仏は一切衆生に於いて主師親の徳有り若し

恩徳広き慈父をまんは不孝逆罪の大愚人・悪人なり、孔子の

典籍尚以て此の輩を捨つ況んや如來の正法をや豈此の邪類邪法

を讚めて無量の重罪を獲んや云云、在世の迦葉は頭頂禮敬と云う

滅後の闇禪は頂上をむと云う恐る可し。

禪宗云く教外別伝不立文字、答えて云く凡そ世に流布の教に三

種を立つ、一には儒教此れに二十七種あり、二には道教此れに二

十五家あり、三には十二分教天台宗には四教八教を立つるなり

此等を教外と立つるか、医師の法には本道の外を外経師と云う人間

の言には姓のつづかざるをば外戚と云う仏教には経論にはなれた

るをば外道と云う、涅槃經に云く若し仏の所説に順わざる者有ら

ば当に知るべし是の人は是れ魔の眷属なり云云、弘決

九に云く「法華已前は猶是れ外道の弟子なり」と云云、禅宗云く
仏祖不伝云云、答えて云く然らば何ぞ西天の二十八祖東土の六祖
を立つるや、付属摩訶迦葉の立義已に破るるか自語相違は如何、
禅宗云く向上の一路は先聖不伝云云、答う爾らば今の禅宗も
向上に於ては解了すべからず若し解らずんば禅に非ざるか凡そ
向上を歌つて以て 慢に住し未だ妄心を治せずして見性に奢り
機と法と相乖くこと此の責尤も親し 旁がた化儀を妨ぐ其の失
転多し謂く教外と号し剩さえ教外を学び文筆を嗜みながら文字
を立てず言と心と相応せず豈天魔の部類外道の弟子に非ずや、仏は
文字に依つて衆生を度し給うなり、問う其の証拠如何、答えて云く
涅槃經の十五に云く「願わくは諸の衆生悉く皆出世の文字を受持
せよ」と文、像法決疑經に云く「文字に依るが故に衆生を度し菩提を
得」と云云、若し文字を離れば何を以てか仏事とせん禅宗は言語を

以て人に示さざらんや若し示さずといはば南天竺の達磨は四巻の楞伽經に依つて五巻の疏を作り慧可に伝うる時我漢地を見るに但此の經のみあつて人を度す可し汝此れに依つて世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せんや、次に不伝の言に至つては冷煖二途唯自覺了と云つて文字に依るか其れも相伝の後の冷煖自知なり是を以て法華に云く「悪知識を捨て善友に親近せよ」文、止觀に云く「師に値わざれば邪慧日に増し生死月に甚し稠林にまがいき曲木を曳くが如く出づる期有こと無けん」と云云、凡そ世間の沙汰尚以て他人に談合す況んや出世の深理寧ろ輒く自己を本分とせんや、故に經に云く「近きを見る可からざること人の睫の如く遠きを見る可からざること空中の鳥の跡の如し」と云云、上根・上機の坐禅は且く之を置く当世の禅宗は瓮を蒙つて壁に向うが如し、經に云く「盲冥にして見る所無し大勢の仏及び断苦の法を求めず深く諸の

邪見じゃけんに入いつて苦くを以もて苦くを捨すてんと欲ほすと云いふ、弘決くげつに云いふ、「世間せけんの
顯語けんご尚なお識しらず況いわんや中道ちゆうどうの遠理おんりをや円常えんじょうの密教みつぎょう寧むしろ當まさに識しる
可べけんやと云いふ、当世とうせの禪者ぜんしや皆みな是これ大邪見じゃけんの輩やからなり、就な中なか三さん惑なく
未断みだんの凡夫ほんぶの語録ごろくを用もちいて四智えんみょう円明にょらいの如來げんきようの言教げんきようを輕かんずる返へ
す返かへす過あてちる者ものか、疾しやくの前まへに藥やくなし機きの前まへに教きやくなし等覺とうかくの菩薩ぼさつすら
尚なお教きやくを用もちい

き底下ていげの愚人ぐにんなん何ぞ経を信ぜざる云云、是を以て漢土に禅宗興ぜしかば其の国忽ちに亡びき本朝の滅す可き瑞相に闇証の禅師充滿す、止観しかんに云く「此れ則ち法滅の妖怪なり亦是れ時代の妖怪なり」云云。

禅宗云く法華宗は不立文字の義を破す何故ぞ仏は一字不説と説き給うや、答う汝楞伽經の文を引くか本法自法の二義を知らざるか学ばずんば習うべし其の上彼の經に於いては未顕眞実と破られ畢んぬ何ぞ指南と爲ん。

問うて云く像法決疑經に云く「如来の一句の法を説きたもうを見ずと云云如何、答う是は常施菩薩の言なり法華經には「菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除く千二百の羅漢悉く亦当に作仏すべし」と云つて八万の菩薩も千二百の羅漢も悉く皆列座し聽聞随喜す、常施一人は見えす何れの説に依る可き法華の座に挙ぐる菩薩の

上首の中に常施の名之無し見えずと申すも道理なり、何に況や
次下に「然るに諸の衆生出没有るを見て法を説いて人を度す」云
云、何ぞ不説の一句を留めて可説の妙理を失う可き、汝が立義一
一大僻見なり 執情を改めて法華に帰伏す可し、然らずんば豈無
道心に非ずや。

十九 八宗違目抄

文永九年二月五十一歳御作 与

富木常忍

154P

記の九に云く「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず若し顕本
し已れば本迹各三なり」文句の九に云く「仏三世に於て等しく
三身有り 諸教の中に於て之を秘して伝えず」

法身如来

正因仏性

仏

報身如來
ほうしんにょらい
応身如來
おうしんにょらい

衆生
しゅじょう

了因仏性
りょういんぶつしょう
縁因仏性
えんいんぶつしょう

衆生の仏性

小乘經には仏性の有無を論ぜず。

華嚴・方等・般若・大日經等には衆生本より

正因仏性有つて了因縁因無し。

法華經には本より三因仏性有り。

文句の十に云く「正因仏性」法身の性なりは本當に通互す、縁了

仏性は種子本有なり今に適むるに非ざるなり」

今此の三界は皆是れ我が有なり

主國王世尊なり

其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

去華經第二に云く

而も今此の処は諸の患難多し

導師なり

唯我一人のみ能く救護をなす

壽量品に云く我も亦為世の父文 主 國王 報身如來

親師 法身如來

五百問論に云く「若し父の壽の遠を知らずして復父統の邦に迷

わば徒らに才能と謂うとも全く人の子に非ず又云く「但恐らくは

才一國に当るとも父母の年を識らざらんや」

古今・仏道論衡道宣の作に云く「三皇已前は未だ文字有らず但

其の母を識つて其の父を識らず禽獸に同じなり」等云云、慧遠法師周の武帝を詰る語なり

俱舎宗

成実宗

一向に釈尊を以て本尊と為す爾りと雖も但

応身に限る。

律宗

華嚴宗

三論宗

報身は有始無終 應身は有始有終なり。 釈尊を以て本尊と為すと雖も法身は無始無終

法相宗

義に云く大日如来は釈迦の法身なり。

真言宗

義に云く大日如来は釈迦の法身には非ず。 一向に大日如来を以て本尊と為す二義有り

但し大日経には大日如来は釈迦牟尼仏なりと見えたり人師よりの僻見なり。

浄土宗一向に阿弥陀如来を以て本尊と為す。

法華宗より外の真言等の七宗並に浄土宗等は釈迦如来を以て父と為すことを知らず、例せば三皇已前の人・禽獸に同ずるが如し鳥の中に 鷓鴣鳥 も鳳凰鳥も父を知らず獸の中には兔も師子も父を知らず、三皇以前は大王も小民も共に其の父を知らず天台宗よりの外・真言等の諸宗の大乗宗は師子と鳳凰の如く小乗宗は鷓鴣と兔等の如く共に父を知らざるなり。

華嚴宗に十界互具・一念三千を立つること澄観の疏に之有り。

真言宗に十界互具・一念三千を立つること大日経の疏に之を出す。

天台宗と同異如何、天台宗已前にも十界互具・一念三千を立つ

るや、記の三に云く「然るに衆積を攢むるに既に三乗及び一乗

三一俱に性相等の十有りと許す何すれぞ六道の十を語らざるや」

三 蔵等の法華經に依る者一念三千の名 目を立てざるか。

問うて云く華嚴宗は一念三千の義を用いるや後の御宇に之を立つ、答

えて云く澄觀の疏三十三國師に云く「止觀の第五に十法成乘を明

す中の第二に真正發菩提心 釈して云く然も此の經の上下の發心

の義は文理淵博にして其の撮略を見る故に取つて之を用い引いて

之を証とすと、二十九に云く「法華經に云く唯仏与仏等と天台

云く 便ち三千世間を成すと彼の宗には此れを以つて実と為す

一家の意理として通ぜざる無しと文。

華嚴經に云く「覺林菩薩之を説くと、弘決には如来林菩薩と引く「心は工なる画師

の種類の

五陰を画くが如く一切世間の中に法として造らざること無し心の

ごと
如く 仏も亦爾なり 仏の如く 衆生も然なり 心と仏と及び衆生と
またしか
ごと
是の三差別無し 若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば 当に是く
さべつ
も
さんぜいつさい
りょうち
ほつ
まさ
かく
の如く 観ずべし 心は諸の如来を造ると」
もろもろによらい

法華經ほけきょうに云くいわ「なり此は略開三の文なり」所謂い諸法しよほうとは如よ是相ぜそう・如よ是性ぜしやう・

如よ是體ぜたい・如よ是力ぜりき・如よ是作ぜさ・如よ是因ぜいん・如よ是緣ぜえん・如よ是果ぜか・如よ是報ぜほう・如よ是本末ほんまつ

究竟等くきやう又云くいわ「唯ゆい一いち大事だいじの因緣いんねんを以もつての故ゆえに世しよに出現しゆつげんしたもう

諸しよ仏ぶつ・世尊せそんは衆生しゆじやうをしてぶつちけん仏知見ぶつちけんを開ひらかしめんと欲ほす」蓮華れんげ三昧さんまい經

に云くいわ「本覺ほんがく心法ほっしん身常みじやうに妙法みやうほうの心蓮台しんれんだいに住すして本ほんより來きたた三身さんじんの

徳とくを具足ぐそくし三十七尊三十七尊「七尊金剛界の三十なり」心城しんじやうに住すしたまえるを歸命きみやうしたてま

つる心王しんのう大日だいにち遍照尊へんしやうそん・心数恒沙しんすこうしや・諸もろもろの如來にやらいも普門ふもん塵數じんじゆ諸もろもろの三昧さんまい

因果いんがを遠離おんりし

て法然ほうねんとして具ぐす無辺むへんの徳海とくかい・本ほんより円満えんまん還かえつて我心わがこころの諸しよ仏ぶつを

頂禮ちやうらいす、仏藏ぶつぞう經きやうに云くいわ「仏い一切衆生いっさいしゆじやう心中しんちゆうに皆みな如來にやらい有ありして

結跏趺坐けゆかふざすと見みそなわす」文ぶん。

問もんうて云くいわ真言宗しんごんしゆうは一念三千いちねんさんぜんを用もちいるや、答こたえて云くいわ大日經だいにちきやうの

義ぎ積智しやくち不空ふくう一行いっけうに云くいわは伝でん教きやう・弘法こうぼう之これを見みず智証ちしやう之これを渡わたす「此この經きやうは是これ

ほうおう ひほう 法王の秘宝なり妄りに卑賤の人に示さざれ釈迦出世して四十余年
に舍利弗の慇懃なる三請に因りて方に為に略して妙法蓮華の義を
説きたまいしが如し、今此の本地の身又是れ妙法蓮華最深の秘処
なるが故に、寿命品に云く常在 靈鷲山 及余諸住処乃至我浄土
不毀而衆見焼尽と即ち此の宗の瑜伽の意ならくのみ又補処の菩薩
の慇懃の三請に因つて方に為に之を説けりと、又云く「又此の經の
宗は横に一切の仏教を統ぶ唯蘊無我にして世間の心を出で蘊の中
に住すと説くが如きは即ち諸部の小乘三蔵を撰す、蘊の阿頼耶を
観じて自心の本不生を覺ると説くが如きは即ち諸經の八識・三性・
無性の義を撰す、極無自性心と十縁生の句を説くが如きは即ち
華嚴・般若の種種の不思議の境界を撰して皆其の中に入る、
如実知自心を一切種智と名づくると説くが如きは則ち仏性「なり」
一乘「なり」如來秘蔵「なり」皆其の中に入る種種の聖言に於て其の精

要すを統すべざること無し、毘盧遮那經

の疏じょ「伝でん教ぎょう・弘こう法ぼう之これを見る」第七の下に云いわく天台てんだいの誦じゆ經きやうは是これ円頓えんどんの数息すそくなりと謂おもう是これ此の意なり」と。

大宋たいそうの高僧こうそう伝卷でんの第二十七の含光くわんこうの伝でんに云いわく「代宗たいそう光こうを重いんずること含光くわんこうは不空ふくう三蔵さんざうの弟子でしなり不空ふくうを見るが

如し勅委して五台山に往いて功德を修せしむ、時に天台の宗学湛然
〔第六の師なり〕禅觀を解了して深く智者〔天台なり〕の膏腴を得たりと、
嘗つて江淮の僧四十余人と清涼の境界に入る、湛然・光と相見て
西域伝法の事を問う、光の云く一国の僧空宗を体得する有りと問
うて智者の教法に及ぶ梵僧云く曾て聞く此の教邪正を定め偏円を
曉り止觀を明して功第一と推す再三光に囑す、或は因縁あつて重ね
て至らば為に唐を翻して梵と為して附し来れ、某願くは受持せ
んと屢屢手を握つて叮囑す、詳かにするに其の南印土には多く
竜樹の宗見を行ず故に此の流布を願うこと有るなりと、菩提心義
の三に云く一行和上は元是れ天台一行三昧の禅師なり能く天台
円満の宗趣を得たり故に凡そ説く所の文言義理動もすれば天台に
合す、不空三蔵の門人含光天竺に歸るの日天竺の僧問わく伝え聞
く彼の国に天台の教有りと理致・須ゆ可くば翻訳して此の方に将来

せんや云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す、今或る阿闍梨の云く
真言を学せんと欲せば先ず共に天台を学せよと而して門人皆瞋る
云云。

問うて云く華嚴經に一念三千を明すや、答えて云く「心仏及
衆生」等云云、止観の一に云く「此の一念の心は縦ならず横ならず
不可思議なり但己のみ爾るに非ず仏及び衆生も亦復是くの如し、
華嚴に云く心と仏と及び衆生と是の三差別無しと当に知るべし
己心に一切の法を具することを「文、弘の一に云く「華嚴の下は引
て理の齊きことを証す、故に華嚴に初住の心を歎じて云く心の如く
仏も亦爾なり仏の如く衆生も然り心と仏と及び衆生と是の三
差別無し諸仏は悉く一切は心に從つて転ずと了知したまえり、若し
能く是くの如く解すれば彼の人真に仏を見たてまつる、身亦是れ心
に非ず心も亦是れ身に非ず一切の仏事を作すこと自在にして

未曾有なり、人若し三世一切の仏を知らんと欲求せば、まさ是かくの如ごとき観なを作すべし。心諸もろもろの如によらい來をを造すと、若もし今家の諸もろもろの円文の意なく無なくくんば彼の經の偈の旨むね・理として實に消し難なんからん」と。

三蔵教 小乗の四阿含経 心生の六界 心具の六界

明さず。

通教

別教

大乘

思議の十界

爾前華嚴等の円

円教

法華の円

止の五に云く「華嚴に云く心は工なる画師の種種の五陰を造るが

如く一切世間の中に心より造らざること莫しと種種の五陰とは前

の十法界の五陰の如きなり」と又云く「又十種の五陰一一に各十法を

具す謂く如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり」と文、

又云く「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百

法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の

世間を具す此の三千一念の心に在り、文、弘の五に云く「故に大師
かくいさんまいかんじん 覚意三昧観心食法及び誦經法小止観等の諸の心観の文に但自他
等の観を以て三仮を推せり並びに未だ一念三千具足を云わず、
ないし かんじん 乃至観心論の中に亦只三十六の問を以て四心を責むれども亦
いちねんさんぜん 一念三千に涉らず、唯四念処の中に略して観心の十界を云うのみ、
ゆえ 故に止観に正しく観法を明すに至つて並びに三千を以て指南と為せ
り、乃ち是れ終窮究竟の極説なり、故に序の中に説己心中所行
ほうもん 法門と云う良に以有るなり請う尋ね読まん者心に異縁無かれ、止
の五に云く「此の十重の観法は横豎に収束し微妙精巧なり初は則ち
境の真偽を簡び中は則ち正助相添い後は則ち安忍無著なり、意円
かに法巧みに該括周備して初心に規矩し將に行者を送つて彼の薩雲
に到らんとすなり闇証の禪師誦文の法師の能く知る所に非ざるな
り、蓋し如来積劫の懃求したまえる所・道場の妙悟し

たまえる所身子の三請する所。法譬の三たび説く所。正しく茲に在るに由るから、弘の五に云く「四教の一十六門乃至八教の一期の始終に遍せり今皆開顯して束ねて一乗に入れ遍く諸經を括りて一実に備う、若し当分を者尚偏教の教主の知る所に非ず況んや復た世間闇証の者をや、蓋し如来の下は称歎なり十法は既に是れ法華の所乘なり是の故に還つて法華の文を用いて歎ず迹の説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し寂滅道場を以て妙悟と為す若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟と為す、本迹二門只是れ此の十法を求悟せるなり、身子等とは寂場にして説かんと欲するに物の機未だ宜からず其の苦に墮せん事を恐れて更に方便を施す四十余年種種に調熟し法華の会に至つて初めて略して権を開するに動執生疑して慇懃に三請す五千起ち去つて方に枝葉無し四一を点

示して五仏の章を演べ上根の人に被るを名づけて法説と爲し、中根は未だ解せざれば猶譬喩をう下根は器劣にして復た因縁を待つ、
仏意聯綿として茲の十法に在り、故に十法の文の末に皆大車に譬えたり今の文の憑る所意此に在り、惑者は未だ見ず尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて而して彼の部の兼帯の説に昧し、全く法華絶待の意を失つて妙教独頭の能を貶挫す、迹本の二文を驗して五時の説をうれば円極謬らず何ぞ須らく疑を致すべけん是の故に結して正しく茲に在るかと言ふ、又云く「初に華嚴を引くことを者重ねて初に引いて境相を示す文を牒す前に心造と云うは即ち是れ心具なり故に造の文を引いて以て心具を証す、彼の経第十八の中に功德林菩薩の偈を説いて云うが如く心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世界の中に法として造らざること無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と是の三

差別無し、若し人三世の一切の仏を知らんと欲求せば応に是くの
如く観ずべし心は諸の如来を造ると今の文を解せずんば如何ぞ偈
の心造一切三無差別を消せん、文、諸宗の是非之を以て之を糾明
す可きなり、恐恐謹言。

二月十八日

日蓮 在御判

一一〇 早勝問答

文永八年

161P

五十歳御作浄土宗問答。

問う六字の名号は善悪の中には何ぞや、答う一義に云く今問う所の善悪は世出の中には何ぞや、一義に云く云う所の善悪を治定せば墮獄治定なるか、一義に云く名号悪と治定せば墮獄治定なるか、一義に云く念仏・無間治定して其の上に善悪を尋ぬるか、一義に云く汝が依経は権実の中には何れぞや。

問う念仏・無間と云わば法華も無間なり、答う一義に云く法華無間とは自義なるか経文なるか、一義に云く念仏・無間をば治定して法華無間と云うか、一義に云く祖師の謗法を治定して法華も無間と云うか、一義に云く汝が云う所の法華は超過の法華か又

弥陀成仏の法華か。

問うて云く念仏・無間の証拠二十八品の中には何れぞや、答う一義に云く二十八品の中に証拠有らば墮獄治定なるか、一義に云く法華を誹謗するを証拠とするなり、一義に云く法華の文を尋ぬるは信じて問うか信ぜずして問うか、一義に云く直に入阿鼻獄の文を出すなり、一義に云く妙法蓮華經其の証拠なり、一義に云く弥陀の本誓に背く故なり、一義に云く弥陀の命を断つ故なり、一義に云く有縁の釈尊に背く故なり念仏・無間は三世諸仏の配立なり。

問う止観の念仏の事、答う一義に云く法然所立の念仏は墮獄治定して止観を問うか、一義に云く西方の念仏と一なるか異なるか、一義に云く止観の念仏は法華を誹謗するか、一義に云く彼に文段を問う可し、一義に云く止観に依つて浄土宗を建立するか。

問う 觀經は法華已後の事、答う 一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く已前ならば無間は治定なるか、一義に云く汝が謗法は無間をば治定して問うか。

問う 觀經と法華と同時なり、答う 一義に云く同時なる故に法華を謗ずるか、さては返つて觀經をも謗ずるなり。

問う 先師の謗法は一往なり且くの字を置く故なり、答う 一義に云く且く謗ぜよとは自義か經文か、一義に云く始終共に謗ぜば墮獄は治定なるか。

問う 未顕眞實は往生に非ず成仏の方なり、答う 一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く余經は無得道と云う人は僻事か。

問う 法華本迹の阿弥陀をば如何、答う 一義に云く法華の弥陀は法華經を謗せんと誓い給いしか、一義に云く法華の弥陀と三部經と同じきか異なるか、異ならば無間治定なるか。

問う一称南無仏と何んぞ称名を無益と云わんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く法華を信じて問うか信ぜずして問うか。

問う法華に「諸の如来に於て」「諸仏を恭敬す」と何ぞ弥陀を捨つるや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか「大旨上の如し。」

問う「余の深法中に示教利喜す」と何ぞ余経を謗するや、答う一義に云く此の故に法華を謗するや、一義に云く汝が誹謗は治定して問うか又自義か経文か「大旨上の如し。」

問う普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり何ぞ余の仏菩薩を捨てんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く此の觀音は法華を謗するか、一義に云く此の品に依つて念仏を立つるか、私に云く彼が経文釈義を引かん時は先ず文段を一一問う可し、大段万事の問には誹謗の言を先とす可きなり、前の当家の

云。

ぜんしゅうもんどう

禅宗問答。

問う 禅天魔てんまの故如何いかにん、答う 一義いちぎに云く 仏經ぶきょうに依よらざる故なり、

一義いちぎに云く 一代いちだい聖教しやうきやうを誹謗ひびやうする故なり。

問う 禅ぜんとは三世さんぜ諸仏しよぶつ成道じやうどうの始たまは坐禅ざぜんし給たまへり如何いかにん、答う 一義いちぎに

云く 汝なんじが坐禅ざぜんは仏ぶつの出世しゅつせに背そむかば 天魔てんま治定ちぢやうなるか、又坐禅ざぜんは大小だいしやう

の中には何れぞや、一義いちぎに云く 仏ぶつの端座たんざ六年ろくにんは法華ほっけに無益むやくと云う

か。

問う 禅法ぜんぽうには仏説ぶつせつ無益むやくなり、答う 一義いちぎに云く 是自義じぎなるか 經文きやうもん

なるか、一義いちぎに云く やがて是これが天魔てんまの所為しよゐなり。

問う 經文きやうもんには「是法不可示ぜぽうふかじ」と如何いかにん、答う 一義いちぎに云く 此の文は

法華無益ほっけむやくと云う 文なるか、一義いちぎに云く 爾しからば法華ほっけに依よるか、一義いちぎに

云く 文段もんだんを以もつて責せむ可べきなり。

問う 竜女は坐禅の成仏なり其の故は経文に「深く禅定に入つて諸法に了達す」と説き給へり、知んぬ法華無益と云うことを、答う一義に云く此の義は自義なるか経文なるか、一義に云く若し法華の成仏ならば天魔治定なるか、一義に云く文殊海中の教化は論説妙法と宣べたり如何。

問う 常に坐禅を好み深く禅定に入つて常に坐禅を貴ぶとも説けり如何、答う 一義に云く文段を以て責む可し、一義に云く此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く此の文を以て禅宗を建立するか。

問う 唯独り自のみ明了にして余人の見ざる所と云う故に禅宗ひとり真性を見て余人は見ずと云うなり、答う 一義に云く文段を以て責む可し経文を見る可し、問う 像法決疑経に云く「一字不説」と爾らば一代は未顕眞実と聞きたり眞実は只迦葉一人教の外に

別伝べつでんし給たまへり如何いかに、答こたう此こゝの文ぶんは仏説ぶつせつか若もし仏説ぶつせつならば汝なんじ此こゝの文ぶんに依よる故ゆゑに自語じご相違そういなり、一義いちぎに云いく言いう所ところの迦葉かしょうは何いかなる經きやうもんにて成じやうぶつ仏ぶつするや、一義いちぎに云いく言いう所ところの經文きやうもんは三說さんせつの中なかには何いれぞや、一義いちぎに云いく楞伽經りやうがきやうは佛說ぶつせつなるか。

問う三大部に観心之有り何ぞ禅天魔と云うや、答う一義に云く汝は三大部にて宗を立つるか、一義に云く三大部の観心は汝が禅と同じきか、一義に云く汝は天台を師とするか、一義に云く三大部の観心は諸経を捨つるか。

問う雙非の禅の事如何、答う一義に云く一度は法華に依り一度は法華無益なり、一義に云く二義共に天魔なり一義に云く此の義に背かん者は僻事なるか。

問う法華宗は妙法の道理を知るや、答う一義に云く汝は天魔を治定して問うか、一義に云く汝は法華を信じて問うか、一義に云く妙法を知つて問うか知らずして問うか、一義に云く汝が問う所の妙法は今經に付いて百二十の妙有り其の品を問うか、一義に云く汝は此の妙法に依つて禅を建立するか。天台宗問答。

問う天台宗を無間という証拠如何、答う一義に云く法華を誹謗

する故なり、一義に云く経文に背く故なり。

問う余経無益と云う事は、を判ずる一往の意なり再往の日は

諸乘一仏乗と開会す何ぞ一往を執して再往の義を捨つるや、答う

一義に云く今言う所の開会とは何れの教の開会ぞや、一義に云く

今経に於て本・迹の十妙の下に各二十の開会あり亦教行人理の四

一開会の中には何れぞや、一義に云く能開所開の中には何れぞや、

一義に云く開会の後善悪無しと云うか、一義に云く天台宗は法華

を信ずるか、一義に云く開会の後諸宗を簡ばすと云わば天台大師

僻事なるか其の故は南三・北七云云 伝教大師は六宗と云云、一

義に云く天台宗は悪行をも致す可きか性悪不断と云うが故に

自語相違なりと責む可きなり、一義に云く開会の後に権実を立つ

る人は僻事なるか爾らば薬王の十喻法師の三説超過云云、一義に

云く此の故に開会の心を以て慈覚は法華を謗ずるか、一義に云く

汝なんじは慈覺じかくの弟子でしなるか爾しからば謗法ぼうぼう治定ちぢょうなるか。

問もんう善惡ぜんあく不二ふに・邪正じゃしょう一如いちによの故ゆえに強あながちに善惡ぜんあくを云いう可べからず元意げんいの重こ是これなり、答こたえて云いく天台てんだいの出世しゅっせは惡あくを息やめ

んが為か又悪を増さんが為か、一義に云く悪事を致せとは法華經二十八品の中には何れの処に見えたるや。

問う絶待妙の事、答う一義に云く先ず文段を問う可し、一義に云く何れの教の絶待ぞや、一義に云く此の故に慈覚は法華を謗ずるか。

問う相待は一往絶待は再往と見えたり如何、答う自義なるか
經文なるか、一義に云く相待妙一往と云うは二十八品の中には何れに見えたるや、一義に云く相待妙は法華に明すか余經に明すか若し法華に明さば法華は一往なるか。

問う約教・約部の故に約部の日は一往爾前の円を嫌うなり、答う一義に云く言う所の約教は天台の判釈の四種の約教の中には何れぞや、一義に云く約部は落居の釈なるか、一義に云く約部を捨つ可きか、一義に云く約教の時・爾前の円を嫌わば墮獄は治定なる

か、一義に云く約教の辺にて今昔円同じとは法華經二十八品の中
何れぞや、一義に云く玄文の第一の施開廢の三重の故に開會の後も
余經を捨つると云う文をば知るか知らざるか。

山門流の眞言宗問答

問う法華第一と云うは顯教の門なり眞言に對すれば第一とは云
う可からず、答う自義なるか經文なるか爰を以て慈覺大師を無間
と申すなり、一義に云く眞言に對して法華第一ならば亡國治定な
るか、一義に云く眞言は已今當の中には何れぞや、若し外と云わば
一機・一縁の一往にして秘密とは云わる可からざるなり。

問う法華と眞言とは理同事勝の故に眞言に對すれば戲論の法と
云うか、答う一義に云くさてこそ汝は無間治定なれ、一義に云く
さては慈覺は眞言をも謗するなり其の故は理同の法華を謗する故
なり。

問うでんぎよう伝教の本理大綱集たいこうの文を以ても顕密同と云う事、答う一義に
云くいわ此の書はでんぎよう伝教の御作に非ざるなり、一義に云くいわ此の書に依つて
法華ほっけを慈覚じかくはほう謗ずるか。

とうじ 東寺流の問答。

問う真言は釈尊の説と云う事其の証拠如何、答う若し真言釈尊の説ならば亡国は治定なるか、若し然なりと云わば弘法大師五蔵を立つる時・法華を六波羅蜜經の五蔵の第四般若波羅蜜藏第五の陀羅尼藏をば真言と建立し給へり如何。

問う真言宗を末顯真實とは言うべからず其の故は釈迦の説の外に建立する故なり如何、答えて云く若し釈尊の説教ならば亡国は治定なるか、一義に云く六波羅蜜經は釈迦の説なるか大日の説なるか、若し釈迦の説ならば末顯真實は治定なるか、他云く釈迦所説の顯教無益なりと。

尋ねて云く六波羅蜜經は顯教・密教の中には何れぞや、他云く六波羅蜜經は雜部の真言なり我が家の三部は純説の真言なり、答う助証正証と云う事全く弘法の所判に見えず若し弘法の義ならば

墮獄は治定なるか、他云く真言は速疾の教、顯教は迂回歴劫の教なり云云、自ら云く自義なるか、經文なるか、他云く五秘密教に云く「若し顯教に於て修行する者は久しく三大無数劫を經」と説け是れ其の証拠なり如何、答う、さて此の經は釈迦の説なるか、大日の説なるか、若し釈迦の説ならば未顯真實は治定なるか。

問う法華宗は何れの經に依つて仏の印契相好を造るや、顯教には無し、但真言の印を盜むと覺えたり如何、答う之に依つて法華を謗ずるか、一義に云く汝盜むの義相違せば、亡國は治定なるか、一義に云く汝法華宗の建立する所の大段の妙法蓮華經をば本尊と落居して問うか、一義に云く釈尊を三部に依つて建立する故に驢牛の三身と下すか、若し爾なりと云わば返つて汝は真言を誹謗する者なりと責む可し、一義に云く三世の諸仏の印契相好實に妙法蓮華經に依つて具足するの義、落居せば亡國は治定なるか、又

ぬすびと 盗人は治定なるか、一義に云く竜女靈山に即身に印契相好具足し
なんぼう 南方に成道を唱えしは真言に依つて建立するか若し爾なりと云わ
ただち きようもん ば直に經文を出せと責む可き

なり。

問う亡国の証拠如何、答う法華を誹謗する故なり云云、一義に云く三徳の釈尊に背く故なり云云、一義に云く現世安穩・後生善処の妙法蓮華經に背き奉る故に今生には亡国後生には無間と云うなり、一義に云く法華經第三の劣とは經文なるか自義なるか若し爾らば亡国治定なるか。

他云く密教に対すれば第三の劣なり、答う一義に云く此の義經文なるか自義なるか、一義に云く顯教の内に法華第一なる事落居するか、若し爾なりと云はばさては弘法は僻事なり顯教の内にして法華を華嚴に対して第二・真言に対して第三と云う故なり、一義に云く真言に対して第一ならば亡国は治定なるか。

他云く印・真言を説かざるが故に第三の劣と云うなり、答う此の故に劣とは經文なるか自義なるか、一義に云く若し法華に説かば

亡国は治定なるか。

他云く大日・釈迦各別なり、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く若し一仏ならば亡国は治定なるか、一義に云く各別なれば劣とは経文なるか自義なるか。

他云く顕教は応身密教は法身の説なり此の故に法華は第三の劣なり、自ら云く応身の説の故に法華劣とは経文なるか自義なるか、一義に云く法華法身の説ならば亡国治定なるか、一義に云く真言は応身の説ならば亡国は治定なるか。

他云く五智五仏の時は北方は釈迦中央は大日と見えたり如何、答う一義に云く中央釈迦ならば亡国治定なるか、一義に云く北方釈迦と云う事は三部の内に無し不空の義なり仏説に非ず。

他云く法華は穢土の説なり真言は三界の外の法界宮の説なり、答う一義に云く真言は三界の内の説ならば亡国治定なるか義釈の

文。

他云く顕教の内にて大日・釈迦一体と説くとも密教の内にては

二仏各別なり名は同じけれども義異なるなり如何、

答う此の故に亡国と云うなり、一義に云く此の如く云う事直に

経文を出す可きなり。

他云く竜女は真言の成仏・法華には三密闕くる故なり、答う

自義なるか経文なるか。

他云く経文なり「陀羅尼を得・不退転を得たり」と云云、陀羅尼は

三密の加持なり、答う、此の陀羅尼を真言と云うは自義なるか

経文なるか、一義に云くさては弘法の僻事なり其の故は此の

陀羅尼を戯論第三の劣と下すなり、一義に云く自語相違なり法華

に印有る故なり。

他云く守護経の文に依れば釈迦は大日より三密の法門を習いて

成仏するなり、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く此の文

は三説の内なるか外なるか、一義に云く此れに相違せば亡国は治定なるか。

他云く法華經には「合掌を以て敬心し具足の道は聞かんと欲す」と云へり何ぞ印・真言を捨つるや、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く自義なるか経文なるか、一義に云く此の故に真言を捨てずとは経文なるか、一義に云く此の文は真言を持つと云う文なるか、一義に文段を以て責む可し。

他云く弘法大師を無間と云うは経文なるか自義なるか、答う経文なり。

他云く二十八品の中には何れぞや、答う二十八品の中に有らば墮獄治定なるか、他云く爾なり、答う法華を誹謗すること治定なるか若し爾らば経文を出して責む可きなり

一一一 宿屋入道への御状

文永五年八月 四十七歳御

作 与宿屋光則 於鎌倉 169P

其の後は書・絶えて申さず不審極り無く候、抑去る正嘉元年
丁巳八月二十三日戌亥の刻の大地震、日蓮諸経を引いて之を勘え
たるに念仏宗と禅宗等とを御帰依有るが故に日本守護の諸大
善神瞋恚を作して起す所の災なり、若し此れを対治無くんば他国
の為に此の国を破らる可きの由勘文一通之を撰し正元二年庚申七
月十六日御辺に付け奉つて故最明寺入道殿へ之を進覧す、其の後
九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之有る由・風聞す等云云、
経文の如くんば彼の国より此の国を責めん事必定なり、而るに
日本国の中には日蓮一人当に彼の西戎を調伏するの人たる可しと

兼ねて之を知り論文に之を勸う、君の為・国の為・神の為・仏の為・内
奏を経らる可きか、委細の旨は見参を遂げて申す可く候、
謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮 花押

宿屋左衛門入道殿

一一一 北条時宗への御状

169P

謹んで言上せしめ候、抑も正月十八日・西戎大蒙古国の
牒状到来すと、日蓮先年諸経の要文を集め之を勸えたること
立正安国論の如く少しも違わず普合しぬ、日蓮は聖人の一分に当
れり未萌を知るが故なり、然る間重ねて此の由を驚かし奉る急ぎ

けんちやうじ けんちやうじ けんちやうじ けんちやうじ けんちやうじ
建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿等の御歸依を
止めたまえ、然らずんば重ねて又四方より責め来る可きなり、速か
られん事日蓮に非ざれば叶う可からざるなり、諫臣国に在れば
則ち其の国正しく争子家に在れば則ち其の家直し、国家の安危は
政道の直否に在り仏法の邪正は經文の明鏡に依る。

そ 夫れ此の国は神国なり神は非礼を稟けたまわず天神七代
地神五代の神神其の外諸天善神等は一乘擁護の神明なり、然も
法華經を以て食と為し正直を以て力と為す、法華經に云く諸仏救
世者・大神通に住して衆生を悦ばしめんが為の故に無量の神力を現
すと、一乗棄捨の国に於ては豈善神怒を成さざらんや、仁王經に
云く「一切の聖人去る時七難必ず起る」と、彼の呉王は伍子胥が
詞を捨て吾が身を亡し、桀紂は竜比を失つて国位を喪ぼす、今・

日本国既に蒙古国に奪われんとす豈歎かざらんや豈驚かざらん
や、日蓮が申す事御用い無くんば定めて後悔之有る可し、日蓮は
法華經の御使なり經に云く「則ち如来の使如来の所遣として如来の
事を行ず」と、三世諸仏の事とは法華經なり、此の由方方へ之を驚
かし奉る一所に集めて御評議有つて御報に予かる可く候、所詮は
万祈を抛つて諸宗を御前に召し合せ仏法の邪正を決し給え、澗底
の長松未だ知らざるは良匠の誤り闇中の錦衣を未だ見ざるは愚人
の失なり。

三國仏法の分別に於ては殿前に在り所謂阿闍世・陳隋・桓武是なり、敢て日蓮が私曲に非ず只偏に大忠を懐く故に身の為に之を申さず神の為・君の為・国の為・一切衆生の為に言上せしむる所なり、
恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押

一三三 宿屋左衛門光則への御状

170P

先年勘えたるの書安国論に普合せるに就て言上せしめ候い畢んぬ、抑正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来すと、之を以て之を按ずるに日蓮は聖人の一分に当り候か、然りと雖も未だ御尋に予らず候の間重ねて諫状を捧ぐ、希くば御帰依の寺僧を停止せられ宜しく法華經に帰せしむべし、若し然らずんば後悔何ぞ追わん、此の趣を以て十一所に申せしめ候なり定めて御評議有る可く候か、偏に貴殿を仰ぎ奉る早く日蓮が本望を遂げしめ給え、十一箇所と申すは平の左衛門尉殿に申せしむる所なり委悉申し度く候と雖も上書分明なる間省略せしめ候、御気色を以て御披露庶幾せし

むる所に候、恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年 辰十月十一日日

にちれん 日蓮 花押

きんじょう 謹上 宿屋入道殿

二四 平左衛門尉頼綱への御状

171P

もうこ 蒙古国の牒状 到来に就いて言上せしめ候い畢んぬ、抑先年

にちれん 日蓮立正安国論に之を勘えたるが如く少しも違わず普合せしむ、

しか 然る間重ねて訴状を以て愁鬱を発かんと欲す爰を以て諫旗を公前に

に飛ばし争戦を私後に立つ、併ながら貴殿は一天の屋梁為り万民

の手足為り争でか此の国滅亡の事を歎かざらんや慎まざらんや、早

く須く退治を加えて謗法の咎を制すべし。

そ 夫れ以れば一乗・妙法蓮華経は諸仏正覚の極理・諸天善神の威

食なり之を信受するに於ては何ぞ七難来り三災興らんや、剩え

此の事を申す日蓮をば流罪せらる争でか日月・星宿罰を加えざら
 んや、聖徳太子は守屋の悪を倒して仏法を興し秀郷は將門を挫いて
 名を後代に留む、然らば法華經の強敵為る御歸依の寺僧を退治し
 て宜く善神の擁護を蒙るべき者なり、御式目を見るに非擲を制止
 すること分明なり、争でか日蓮が愁訴に於ては御叙い無らん豈御
 起請の文を破るに非ずや、此の趣を以て方方へ愚状を進らす、
 所謂鎌倉殿・宿屋入道殿・建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏殿・長樂寺
 ・多宝寺・淨光明寺・弥源太殿並びに此の状合せ十一箇所なり、各
 各御評議有つて速かに御報に預るべく候、若し爾らば卞和が璞磨
 いて玉と成り法王髻中の明珠此の時に顕れんのみ、全く身の為に
 これを申さず、神の為・君の為・国の為・一切衆生の為に言上せしむ
 るの処なり件の如し、恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日
 日蓮
 花押

平左衛門尉殿 さえものじょう

一二五 北条弥源太への御状 ほつじょうやげんた

172P

去ぬる月、御来臨急ぎ急ぎ御帰宅本意無く存ぜしめ候い畢んぬ、
抑蒙古国の牒状到来の事上一人より下万民に至るまで驚動
極り無し然りと雖も何の故なること人未だ之れを知らず、日蓮
兼ねて存知せしむるの間既に一論を造つて之を進覽せり徴先達つ
て顕れ則ち災必ず後に来る、去ぬる正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥
の刻の大地震是併ながら此の瑞に非ずや、法華経に云く如是相と
天台大師云く「蜘蛛下りて喜事来り・鵲 鳴いて行人来る」と、易に
云く吉凶動に於て生ずと此等の本文豈替るべけんや、所詮諸宗の
帰依を止めて一乗妙経を信受せしむべきの由勘文を捧げ候、
日本亡国の根源は浄土・真言・禅宗・律宗の邪法悪法より起れり

諸宗を召し合せ諸経勝劣を分別せしめ給え、殊に貴殿は相模の
守殿の同姓なり根本滅するに於ては枝葉豈栄えんや、早く蒙古国
を調伏し国土を安穩ならしめ給え、法華を謗ずる者は三世諸仏の
大怨敵なり、天照太神・八幡大菩薩等・此の国を放ち給う故。
大蒙古国より牒状来るか、自今已後各各生取と成り他国の奴と
成る可し、此の趣き方方へ之れを驚かし愚状を進ぜしめ候なり、
恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年辰戌十月十一日

日蓮 花押

謹上

彌源太入道殿

二一六 建長寺道隆への御状

173P

夫れそ仏閣軒ぶつかくのきを並べ法門屋ほうもんいえに拒いたる仏法ぶつぽうの繁榮はんえいは身毒支那けんどくに超過ちょうかし
僧宝そうぼうの形儀かたがたは六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとし、然しかりと雖いえども一代いちだい諸經しよきやうに於おいて未いまだ
勝劣しょうりやく・浅深せんじんを知らず併あがら禽獸きんじゆうに同じおなじ忽たちまち三徳さんとくの釈迦しやくか如来にょらいを抛なげつ
て、他方たほうの仏ぶつ・菩薩ぼさつを信まず是あにぎ逆路ぎやくろ伽耶陀がやだの者ものに非あらずや、念仏ねんぶつは
無間地獄むげんじごくの業ごふ・禅宗ぜんしゆうは天魔てんまの所為しよゐ・真言しんごんは亡国ぼうこくの悪法あくほう・律宗りつしゆうは国賊そく
の妄説もうせつと云云、爰こゝに日蓮にちれん去ぬる文応元年ぶんおうがんねんの比勘かんえたるの書を
立正安国論りつしやうあんこくろんと名け宿屋入道やどやにゆうどうを以もつて故最明寺殿さいみやうじに奉たてまつ
所詮しよせんは念仏ねんぶつ・真言しんごん・禅ぜん・律等りつどうの悪法あくほうを信まずる故ゆゑに天下てんがに災難さいなん頻しきりに
起あまりあまつさええ他国たこくより此こゝの国責こくせきめらる可べきの由ゆゑ之これを勘かんえたり、然しか
に去いぬる正月十八日ちがつじゅうはちとうび牒状にちれん到来かんがすと日蓮にちれんが勘かんえたる所に少すこしも

たが 違わず 普合せしむ、諸寺・諸山の祈 威力滅する故か将又悪法の故
なるか 鎌倉中の上下万人道隆 聖人をば仏の如く之を仰ぎ良観
聖人をば羅漢の如く之れを尊む、其の外寿福寺・多宝寺・浄光明寺
・長樂寺・大仏殿の長老等は「我慢の心充滿し、未だ得ざるを得た
りと謂う」の増上慢の大悪人なり、何ぞ蒙古国の大兵を調伏せし
む可けんや、 刺 え日本国中の上下万人悉く生取と成る可く今世
には国を亡し後世には必ず無間に墮せん、日蓮が申す事を御用い
なく 無くんば後悔之れ有る可し此の趣鎌倉殿・宿屋入道殿・平の
左衛門の尉殿等へ之を進状せしめ候、一処に寄り集りて御評議有る
可く候、敢て日蓮が私曲の義に非ず只経論の文に任す処なり、
具には紙面に載せ難し併ながら対決の時を期す、書は言を尽さず
言は心を尽さず、 恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年 辰戌 十月十一日 日蓮 花押
にちれん かおう

進上しんじょう

建長寺道隆けんちょうじどうりゅう

証人侍者御中おんちゆう

二七 極楽寺良観への御状 ごくらく しょうかん

174

さいじょうだいもうここくかんちよう

西戎大蒙古国簡牒の事に就て鎌倉殿其の外へ書状を進ぜしめ

にちれんいぬ

ぶんおうがなんねん

かんが

候、日蓮去る文応元年の比勘え申せし立正安国論の如く毫末計り

りつしょうあんこくろん

も之に相違せず候、此の事如何、長老忍性速かに嘲哂の心を

そうい

いかにん

ちようろう

すみや

ちようろう

ひるがえり 翻えし早く日蓮房に帰せしめ給え、若し然らずんば人間を軽賤

する者

びやくえ

ため

とがまぬか

がた

えほう

ふえ

にんげん

の金言なり、良観聖人の住処を法華經に説て云く、或は阿練若

きんげん

りょうかんしょうにん

じゅうしよ

ほけきよう

いわ

ある

あれんにや

に有り納衣にして空閑に在り」と、阿練若は無事と翻ず争か日蓮を

ざんそう

のうえ

くうげん

そうい

あれんにや

はん

いかで

にちれん

讒奏するの条住処と相違せり併ながら三学に似たる矯賊の聖人

せんしろう

じょうじよ

そうい

あれんにや

はん

いかで

にちれん

しょうにん

なり、僭聖増上慢にして今生は国賊・来世は那落到墮在せんこと

せんしろう

ぞうじよ

こうじよう

そく

らいせ

たざい

しょうにん

必定なり、聊かも先非を悔いなば日蓮に帰す可し、此の趣き鎌倉殿

いささか

く

にちれん

べ

かまくら

を始め奉り建長寺等其の外へ披露せしめ候、所詮本意を遂げんと

たてまつ

けんちようじ

そ

ひろう

しよせん

ほんい

と

と

を始め奉り建長寺等其の外へ披露せしめ候、所詮本意を遂げんと

たてまつ

けんちようじ

そ

ひろう

しよせん

ほんい

と

と

を始め奉り建長寺等其の外へ披露せしめ候、所詮本意を遂げんと

たてまつ

けんちようじ

そ

ひろう

しよせん

ほんい

と

と

欲せば対決に如かず、即ち三蔵浅近の法を以て諸経中王の法華に
向うは江河と大海と華山と妙高との勝劣の如くならん、蒙古国
調伏の秘法定めて御存知有る可く候か、日蓮は日本第一の法華経
の行者蒙古国退治の大將為り「於一切衆生中亦為第一」とは是な
り、文言多端理を尽す能わず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押 謹上

極楽寺長老良觀聖人御所

二八 大仏殿別当への御状

174P

去る正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来し候い畢んぬ、
其の状に云く大蒙古国皇帝日本国王に書を上る大道の行わるる
其の義・たり信を構え睦を修す其の理何ぞ異ならん乃至至元三年
丙寅正月日と、右此の状の如くんば返牒に依つて日本国を襲う

可きの由分ぶん明めいなり、日蓮にちれん兼ねて勘かんえ申まをせし立正安国論りっしょうあんこくろんに少しも相違そういせず急すみかに退治たいぢを加かえ給たまえ、然しかれば日蓮にちれんを放はなて之これを叶かなう可べからず、早く我慢がまんを倒たして日蓮にちれんに帰かへすべし、今生こんじょう空くうしく過すぎなば後悔こうかい何なんぞ追おわん委くわしく之これを記しるすこと能あたわず、此こゝの趣方かたがた方かたへ申まをせしめ候こゝろ、一いつ処じょに聚集じゅじゅうして御調ごてう伏有ふくある可べく候こゝろか。

文永五年十月十一日

日蓮花押 謹上 大仏殿別当御房

二九 寿福寺への御状

175P

風聞かぜきこの如ごとくんば蒙古国もうちこの簡牒かんぢょう・去いぬる正月十八日じつしやうあんこくろん慥たしかに到来とうらい候こゝろい畢おわんぬ、然しかれば先年せんねん日蓮にちれんが勘かんえし書かきの立正安国論りっしょうあんこくろんの如ごとく普合ふごうせしむ、恐おそくは日蓮にちれんは末萌みぼうを知る者ものなるか、之これを以もて之これを按あんずるに念仏ねんぶつ

眞言・禅・律等の悪法・一天に充滿して上下の師と為るの故に此の
如き他国侵逼の難起れるなり、法華不信の失に依つて皆一同に後生
は無間地獄に墮す可し早く邪見を翻し達磨の法を捨てて一乘
正法に帰せしむ可し、然る間方方へ披露せしめ候の処なり、早早
一処に集りて御評議有る可く候、委くは対決の時を期す、恐恐
謹言。

文永五年十月十一日
御中

日蓮花押 謹上 寿福寺侍司

三〇 浄光明寺への御状

175P

大蒙古国の皇帝日本国を奪う可きの由牒状を渡す、此の事先
年立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内内日本第一

の勸賞に行わる可きかと存ぜしめ候の処ところ 刺あざ え御称しよつたん 歎なげに預らず
候こ、是れ併ながら鎌倉中著かまくら じゃくその類律宗・禅宗等が「向国王・大臣こくおう だいじん
ひぼう 誹謗説我悪ごすの故なり、早く二百五十戒を抛つて日蓮にちれんに帰して成仏じようぶつ
を期こすす可べし、若もし然しからずんば墮ださい在むげんの根源こんげんならん、此の趣おもむき方かた方がた
へ披露ひろうせしめ候い畢おわんぬ、早く一処いつしよに集りて対決を遂とげしめ給たまえ
日蓮にちれん・庶幾しよきせしむる処ところなり、敢あえてて諸宗しよしゆうを蔑如べつじよするに非あざるのみ、
法華ほつげの大王戒だいうに対して小乘しよじゆうもんみょうかい 戒かい・豈あに相对そうたいに及およばんや、笑べう可べし
笑べう可べし。

ぶんえい 文永五年十月十一日

にちれんかおう 日蓮花押

きんじよう 謹上 浄光明寺侍者御中
おんちゆう

たほう 多宝寺への御状

176P

にちれん 日蓮・故最明寺殿に奉りたるの書・立正安国論御披見候か未萌を
知つて之を勘え申す処なり、既に去る正月蒙古国の簡牒到来す
何ぞ驚かざらんや、此の事不審千万なり縦い日蓮は悪しと雖も
勘うる所の相当るに於ては何ぞ用いざらんや、早く一所に集りて御
評議有る可し、若し日蓮が申す事を御用い無くんば今世には国を
亡し後世は必ず無間・大城に墮す可し、此の旨方々之を申せしめ
しなり敢て日蓮が私曲に非ず委しく御報に預る可く候、言は心を
尽さず書は言を尽さず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。〃
ぶんえい 文永五年十月十一日
にちれん 日蓮
かおう 花押
きんじょう 謹上
たほう 多宝寺侍司
おんちゆう 御中

三二一

ちようらくじ 長楽寺への御状

176P

蒙古国調伏の事に就いて方方へ披露せしめ候い畢んぬ、既に日蓮
立正安国論に勘えたるが如く普合せしむ、早く邪法邪教を捨て
実法実教に帰す可し、若し御用い無くんば今生には国を亡し身を
失い後生には必ず那落に墮す可し、速かに一処に集りて談合を遂げ
評議せしめ給え日蓮庶幾せしむる所なり、御報に依つて其の旨を存
ず可く候の処なり敢て諸宗を蔑如するに非ず但此の国の安泰を
存する計りなり、恐恐謹言。

文永五年十月十一日 日蓮花押

謹上 長樂寺侍司 御中

三三三 弟子・檀那中への御状

177P

大蒙古国の簡牒到来に就いて十一通の書状を以て方方へ申せし

め候、定めて日蓮が弟子・檀那・流罪・死罪一定ならん少しも之を
驚くこと莫れ方々への強言申すに及ばず是併ながら而強毒之の故
なり、日蓮庶幾せしむる所に候、各各用心有る可し少しも妻子・
眷属を憶うこと莫れ権威を恐ること莫れ、今度生死の縛を切つて
仏果を遂げしめ給え、鎌倉殿・宿屋入道・平の左衛門尉・弥源太・
建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿・長楽寺十一箇所
仍つて十一通の状を書いて諫訴せしめ候い畢んぬ、定めて子細有る
可し、日蓮が所に來りて書状等披見せしめ給え、恐恐謹言。

ぶんえい 文永五年辰十月十一日

にちれんかおう 日蓮花押

にちれん 日蓮弟子・檀那中

三四 問注得意抄

ぶんえい 文永六年五月 四十八歳御作

178P

与富木入道外二人

土木入道殿

日蓮

今日召し合せ御問注の由承り候、各各御所念の如くならば三千年に一度花さき菓なる優曇華に値えるの身か、西王母の蘭の桃。九千年来に三度之を得たる東方朔が心か一期の幸何事か之に如かん、御成敗の甲乙は且らく之を置く前立つて鬱念を開発せんか、但し兼日御存知有りと雖も駿馬にも鞭うつつの理之有り、今日の御出仕。公庭に望んでの後は設い知音為りと雖も傍輩に向つて雑言を止めらるべし両方召し合せの時。御奉行人。訴陳の状之を読むの尅何事に付けても御奉行人の御尋ね無からんの外一言を出す可からざるか、

たといてきじん 設い敵人等悪口を吐くと雖も各各当身の事一二度までは聞かざる
が如くすべし、三度に及ぶの時・顔貌を変ぜず・言を出さず・語を
以て申す可し各各は一処の同輩なり私に於ては全く遺恨無きの由
之を申さる可きか、又御供雑人等に能く能く禁止を加え喧嘩を
出す可からざるか、是くの如き事書札に尽し難し心を以て御斟酌
有る可きか、此等の矯言を出す事恐を存すと雖も仏経と行者と
檀那と三事相応して一事を成さんが為に愚言を出す処なり、
恐恐謹言。

五月九日

日蓮花押

三人御中

二五 行敏御返事 文永八年七月 五十歳御作 与浄土

僧行敏 179P

二六 行敏初度の難状

179P

未だ見参に入らずと雖も事の次を以て申し承るは常の習に候か、抑風聞の如くんば所立の義尤も以て不審なり、法華の前に説ける一切の諸経は皆是妄語にして出離の法に非ずと是一、大小の戒律は世間を誑惑して悪道に墮せしむるの法と是二、念仏は無間地獄の業為と是三、禅宗は天魔の説若し依つて行ずる者は悪見を増長すと是四、事若し実ならば仏法の怨敵なり、仍て対面を遂げて悪見を破らんと欲す、将又其の義無くんば争でか悪名を痛ませられざらんや、是非に付き委く示し賜わる可きなり、恐恐謹言。

七月八日 僧行敏花押

にちれんあじやりごぼう
日蓮阿闍梨御房

三二七 聖人御返事

179P

条条御不審の事私の問答は事行き難く候か、然れば上奏を經ら
れ仰せ下さるるの趣に随つて是非を糾明せらる可く候か、此の
如く仰せを蒙り候条尤も庶幾する所に候、恐恐謹言。

七月十三日

にちれんかおう
日蓮花押

ごぼうごへんじ
行敏御房御返事

三三 行敏訴状御会通

文永八年 五十歳御作

1

80P

とうせ にほんだいいち
当世・日本第一の持戒の僧・良観聖人並びに法然上人の孫弟子
あみだぶつ どうあみだぶつ
念阿弥陀仏・道阿弥陀仏等の諸聖人等日蓮を訴訟する状に云く早
く日蓮を召し決せられて邪見を摧破し正義を興隆せんと欲する事
云云、日蓮云く邪見を摧破し正義を興隆せば一眼の龜の浮木の穴
に入るならん、幸甚幸甚。

彼の状に云く右八万四千の教乃至一を是として諸を非とする理
あに し かべ
豈に然る可けんや云云、道綽禪師云く当今末法は是五濁悪世なり
ただじょうど
唯浄土の一門のみ有つて路に通入す可し云云、善導和尚云く
せんちゆうむいつ
千中無一云云、法然上人云く捨閉閣抛云云、念阿上人等の云く一
を是とし諸を非とす謗法なり云云、本師三人の聖人の御義に相違

す豈あにに逆路ぎやくろ伽耶陀がやだの者に非あらずや、将はたまた又忍性りょうじやう良觀らんくわん聖人しょうにん彼等かれらの立義りつぎに
与力よりきして此これを正義せいぎと存ぞんせらるるか、又い云わく而しかるに日蓮にちれん偏ひとえに法華ほっけ
一部い部に執しゆうして諸余しよよの大乗だいじやうを誹謗ひぼうす云云、無量義經むりやうぎきやうに云いく四十余年よんじゆうよねん・
未顯みけん真實しんじつ・法華經ほっけきやうに云いく要當說真實やうとうせつしんじつと・又い云わく宣示顯說せんじけんせつと・多寶たほう仏ぶつ
証しやうみやう明みやうを加いえて云いく皆是真實かいぜしんじつと十方じゆつぱうの諸しよぶつ佛ぶつは舌相せつさう至梵天ほんてんと云いう云
云、已今當いこんとうの三說さんせつを非毀ひさして法華經ほっけきやう一部い部ぶを讚歎さんたんするは釈尊しゃくそんの金言きんげん
なり諸佛しよぶつの傍例ぼうれいなり敢あえてて日蓮にちれんが自義じぎに非あらず、其その上うへ此こゝの難なんは去いぬる
延曆えんりやく・大同だうとう・弘仁こうにんの比ひ・南都なんとの徳とく一いつ大師だいしが伝でん教きやう大師だいしを難破なんせし言いな
り、其その難なん已すでに破われて法華宗ほっけしゆうを建立こんりゆうし畢あんぬ。

又い云わく所謂いわゆるほつけ諸經しよきやうは皆みな是こゝれ妄語もうごなりと云云此にちれん又日蓮にちれんが
私わの言いに非あらず、無量義經むりやうぎきやうに云いく未いまだ真實しんじつを顯あらさず妄語わうごの異名いなり
法華經ほっけきやう第二にに云いく寧むしろ虚妄こもう有ありや不あなり云云、第六にに云いく此こゝの
良医りやうい虚妄こもうの罪つみを説いくや不いなや云云、涅槃經ねはんきやうに云いく如來にやらい虚妄こもうの言い無なし

と雖も若し衆生虚妄の説に因ると知れば云云、天台云く則ち為
 如来綺語の語云云、四十余年の経経を妄語と称すること又日蓮
 が私の言に非ず、又云く念仏は無間の業と云云法華経第一に云く
 我れ則ち慳貪に墮せん此の事為不可なり云云、第二に云く其の
 人命終して阿鼻獄に入らん云云、大覺世尊但觀經・念仏等の
 四十余年の経経を説て法華経を演説したまわずんば三悪道を
 脱れ難し云云、何に況や末代の凡夫・一生の間・但自らも念仏の一
 行に留り他人をも進めずんば豈無間に墮せざらんや、例せば民と
 子との王と親とに随わざるが如し、何に況や道綽・善導・法然上人
 等念仏等を修行する輩法華経の名字を挙げて念仏に对当して
 勝劣難易等を論じ未有一人得者・十即十生・百即百生・
 千中無一等と謂うは無間の大火を招かざらんや、又云く禅宗は
 天魔波旬の説と云云、此又日蓮が私の言に非ず彼の宗の人人の云く

教外別伝と云云、仏の遺言に云く我が経の外に正法有りといわば
天魔の説なり云云、教外別伝の言豈此の科を脱れんや、又云く
大小の戒律は世間誑惑の法と云云、日蓮が云く小乗戒は仏世す
ら猶之を破す其の上月氏国に三寺有り、所謂一向小乗の寺と
一向大乘の寺と大小兼行の寺となり云云、一向小と一向大とは
水火の如し將又道路をも分隔せり、日本国に去る聖武皇帝と孝謙
天皇との御宇に小乗の戒壇を三所に建立せり、其の後桓武の
御宇に伝教大師之を責め破りたまいぬ、其の詮は小乗戒は末代
の機に当らずと云云、護命景深の本師等其の諍論に負くるのみに
非ず六宗の碩徳各退状を捧げ伝教大師に帰依し円頓の戒体を伝
受す云云、其の状今に朽ちず汝自ら開き見よ、而るを良觀上人
当世・日本国の小乗は昔の科を存せずという、又云く年来の本尊
弥陀・観音等の像を火に入れ水に流す等云云、此の事慥なる証人

を指し出し申す可し若し証拠無くんば良観上人等自ら本尊を取り出して火に入れ水に流し科を日蓮に負せんと欲するか委細は之を糾明せん時其の隠れ無らんか、但し御尋ね無き間は其の重罪は良観上人等に譲り渡す、二百五十戒を破失せる因縁此の大妄語に如かず無間・大城の人他処に求ること勿れ、又云く凶徒を室中に集むと云云、法華経に云く、或は阿練若に有り等云云、妙楽云く東春云く輔正記云く此等の経釈等を以て当世・日本国に引き向うるに汝等が挙る所の建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・大仏殿・長楽寺・浄光明寺等の寺寺は妙楽大師の指す所の第三最甚の悪所なり、東春に云く即ち是れ出家処に一切の悪人を撰す云云、又云く両行は公処に向う等云云、又云く兵杖等云云、涅槃経に云く天台云く章安云く妙楽云く法華経守護の為の弓箭杖は佛法の定れる法なり例せば国王守護の為に刀杖を集むるが如し、但し良観

上人等弘通する所の法。日蓮が難脱れ難きの間既に露頭せしむ
可きか、故に彼の邪義を隠さんが為に諸国の守護地頭雑人等を相
語らいて言く日蓮並びに弟子等は阿弥陀仏を火に入れ水に流す汝
等が大怨敵なりと云云、頸を切れ所領を追い出せ等と勸進するが
故に日蓮の身に疵を被り弟子等を殺害に及ぶこと数百人なり、此れ
偏に良観・念阿・道阿等の上人の大妄語より出たり心有らん人人
は驚く可し怖る可し云云、毘瑠璃王は七万七千の諸の得道の人を
殺す、月氏国の大族王は卒都婆を滅毀し僧伽藍を廃すること凡そ
一千六百余処乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき、毘盧釈迦王
は釈種九千九百九十万人を生け取りて並べ従えて殺戮す積屍莽
の如く流血池を成す、弗沙弥多羅王は四兵を興して五天を回らし
僧侶を殺し寺塔を焼く、説賞迦王は仏法を毀壞す、訖利多王は僧
徒を斥逐し仏法を毀壞す、欽明・敏達・用明の三王の詔に曰く炳然

としてよろし宜ぶつぼうくぶつぼう仏法を断みずかずべし云云、二臣もつ自たつら寺たつに詣たつで堂塔しやくたつを斫倒しやくたつし
仏ぶつ像ぞうを毀破きはし火はなを縦これつて之これを焼ぶつぞうき所ぶつぞう焼ぶつぞうの仏像ぶつぞうを取むちつて難波なんの堀江むちに
棄すて三尼よを喚よび出そして其その法服なを奪ならい並むちびに笞むちを加むちう云云、大唐だいとうの
武宗ぶそうは四千六百よそ余めつしつ処めつしつを滅失そうにげんぞくして僧尼そうにげんぞく還俗むちする者かそ計かそうるに二十六万
五百人いぬなり、去いぬる永保年中おんじようじには山僧おんじようじ・園城寺おんじようじを焼おんじようじき払おんじようじう云云、御願
は十五所いぬ堂院じしようは九十所いぬ・塔婆たつぽは四基しき・鐘楼しゆろうは六宇ろくう・経藏きやうざうは二十所
神社じんじやは十三所じしよう・僧坊そうぼうは八百余さんぜん宇舍宅うしやくは三千余さんぜん等とう云云、去いぬる治承じしよう四
年十二月二十二日ししようじつ・太政入道たうていにちゆうだう浄海じやうかい・東大とうだい・興福きやうふくの両寺りやうじを焼失ししようじつして
僧尼そうに等を殺ころす、此等これらは仏記ぶつぎにいわく此等これらの悪人あくにんは仏法ぶつぼうの怨敵おんてきには
非あらず三明六通さんみんりくつうの羅漢らかんの如ごとき僧侶等そうりよが我が正法ししようぼうを滅失めつしつせん、所謂いわゆる
守護しゆご經きやうに云いく・涅槃ねはん經ぎやうに云いく。日蓮にちれん花押かおう

二八 一昨日御書

ぶんえい 文永八年九月 五十歳御作

とらひ 与平左衛門尉頼綱

183P

一昨日見参に罷入候の条悦び入り候、抑人の世に在る誰か後世を思わざらん仏の出世は専ら衆生を救わんが為なり、爰に日蓮比丘と成りしより旁法門を開き已に諸仏の本意を覚り早く出離の大道を得たり、其の要は妙法蓮華経是なり、一乗の崇重三国の繁昌の儀・眼前に流る誰か疑網を貽さんや、而るに専ら正路に背いて偏に邪途を行ず然る間聖人国を捨て善神瞋を成し七難並びに起つて四海閑かならず、方今世は悉く関東に歸し人は皆土風を貴ぶ、就中日蓮生を此の土に得て豈吾が国を思わざらんや、仍つて立正安国論を造つて故最明寺入道殿の御時宿屋の入道を

もつ 以て見参に入れ畢んぬ、而るに近年の間、多日の程、犬戎浪を乱し
いてき 夷敵国を伺う、先年勘え申す所近日符合せしむる者なり、彼の太
うかが 公が殷の国に入りしは西伯の礼に依り張良が秦朝を量りしは漢王
かなが 公の誠を感じればなり、是れ皆時に當つて賞を得、謀を帷帳の中に
めく 回らし勝つことを千里の外に決せし者なり、夫れ未萌を
せんり 知る者は六正の聖臣なり法華を弘むる者は諸仏の使者なり、而る
ほっけ ひろ にちれんかたじけな も驚嶺・鶴林の文を開いて鵝王・烏瑟の志を覚り
あまつさえ 刺 え将来を勘えたるに粗符合することを得たり先哲に及ばずと
いえど 雖も定んで後人には希なる可き者なり、法を知り国を思うの志
もつと 尤も賞せらる可きの処、邪法邪教の輩、讒奏讒言するの間久しく
おも 大忠を懐いて而も未だ微望を達せず、刺 え不快の見参に罷り入
ひとえ なん ること偏に難治の次第を愁うる者なり、伏して惟みれば泰山に昇ら
しんごく ずんば天の高きを知らず深谷に入らずんば地の厚きを知らず、

仍よつて御存知ごぞんじの爲ために立正安国論りつしょうあんこくろん一巻これ之を進覽しんらんす、勘かんえ載がする所のの文
は九牛こつぎゅうの一毛いちぼうなり未いまだ微志いしを尽つくさざるのみ、抑おさ貴き辺へんは当時とうじ天下てんか
の棟梁とうりょうなり何なんぞ国中こくちゆうの良材りやうざいを損そんせんや、早はやく賢慮けんりょを回めぐらして須すく
異敵いてきを退たいくべし世よを安やすじ国くにを安やすずるを忠ちゆうと為なし孝かうと為なす、是これ偏へんに
身みの爲ために之これを

述いっさいしゆじょうべためず君しんじょうの為しんじょう仏しんじょうの為しんじょう神しんじょうの為しんじょう一切衆生しんじょうの為しんじょうに言上しんじょうせしむる所しんじょうなり、
恐きよう恐きよう謹言きんげん。

文永八年九月十二日

日蓮花押

謹上

平左衛門殿

三九 強仁状御返事

建治元年十二月

五十四歳御作

与真言僧強仁

184P

強仁上人十月二十五日の御勘状同十二月二十六日に到来す、
此の事余も年来鬱訴する所なり忽に返状を書いて自他の疑氷を
釈かんと欲す、但し歎ずるは田舎に於て邪正を決せば暗中に錦を服
して遊行し澗底の長松・匠を知らざるか、兼ねて又定めて喧嘩出来
の基なり、貴坊本意を遂げんと欲せば公家と関東とに奏聞を経て

露点を申し下し是非を糾明せば上一人咲を含み下万民疑を散ぜんか、其の上大覚世尊は仏法を以て王臣に付属せり世出世の邪正を決断せんこと必ず公場なる可きなり、就中当時我が朝の体為る二難を盛んにす所謂自界叛逆難と他国侵逼難となり、此の大難を以て大蔵經に引き向えて之を見るに定めて国家と佛法との中に大禍有るか、仍つて予正嘉文永二箇年の大地震と大長星とに驚いて一切經を聞き見るに此の国の中に前代未起の二難有る可し所謂自他叛逼の両難なり、是れ併ながら真言・禅門・念佛・持齋等・権小の邪法を以て法華真実の正法を滅失する故に招き出す所の大災なり、只今他国より我が国を逼む可き由兼ねて之を知る故に身命を仏神の宝前に捨棄して刀剣・武家の責を恐れず昼は国主に奏し夜は弟子等に語る、然りと雖も真言・禅門・念佛者・律僧等・種種の誑言を構え重重

の讒訴を企つるが故に叙用せられざるの間処処に於て刀杖を加えられ兩度まで御勘氣を蒙る剩え頭を刎ねんと擬する是の事なり、夫れ以れば月支漢土の仏法の邪正は且らく之を置く大日本国亡国と為る可き由来之を勘うるに真言宗の元祖たる東寺の弘法天台山第三の座主慈覚・此の両大師・法華經と大日經との勝劣に迷惑し日本第一の聖人なる伝教大師の正義を隠没してより已來叡山の諸寺は慈覚の邪義に付き神護七大寺は弘法の僻見に隨う其れより已來王臣邪師を仰ぎ万民僻見に歸す、是くの如き諂曲既に久しく四百余年を経歴し国漸く衰え王法も亦尽きんとす彼の月支の弗沙弥多羅王の八万四千の寺塔を焚焼し無量仏子の頸を刎ねし、此の漢土の会昌天子の寺院四千六百余所を滅失し九国の僧尼還俗せしめたる此等大悪人為りと雖も我が朝の大謗法には過ぎず、故に青天は眼を瞶らして我が国を睨み黄地

は憤いきどおりを含んで動やもすれば天ようげつを発おこす、国主こくしゅ聖主せいしゅに非いれば謂いわれ
之これを知らしず諸臣しよじん儒家じゆけに非いれば事これ之をを勘かんえず、剩あまつさえ此この災天さいてんを消くさ
んが為ために真言師しんごんしを渴仰かつごうし大難だいなんを卻しりぞけんが為ために持齋じさい等を供養くようす、
譬たとえば火たきぎに薪たきぎを加こえ氷こおりに水みづを増こすが如ごとく悪法あくほうは弥いよいよ貴たまれ大難だいなん
は益々た来るただ只今ただ此この国滅亡こくめつじやうせんとす。

予ほ粗ぼ先ほず此この子細しさいを勘かんうるの間ま身命しんみよつを捨棄しやきし国恩こくおんを報はせんと
す、而しかるに愚人ぐにんの習ならい遠とほきを尊あなび近ちかきを蔑あなるか将はた又また多人たふ人を信しんじて
一人ひとりを捨すつるか故ゆえに終ついに空むなしく年ねん月げつを送おくる、今幸いまちやうに強仁じやうにん上人じやうにん・御
勘状かんじやうを以もつて日蓮にちれんを曉諭せうごす然しかる可べくは此この次ついでに天聰てんちやうを驚おどかし
奉たてまつて決きせん、誠まことに又また御勘文かんもんの体たい為な非ひを以もつて先まと為なし若もし上人じやうにん
黙止もくしして空むなしく一生いぢよを過あせば定さだめて師檀しだん共ともに泥梨ないりの大苦だいこを招まかん、
一期いちよの大慢だいまんを以もつて永劫えいこつの迷因まよいを殖なかなれははやばや勿なれ速速すみすみ天奏てんそうを經へて疾疾しやくしやく
対面たいめんを遂とげ邪見じゃけんを翻ひるがえりえし給たまえ、書かは言ことを尽つくさず言ことは心こころを尽つくさず

悉しつ悉しつ公こう場じょうを期ごす、恐きょう恐きょう謹きん言げん。

十二月廿六日

日蓮

花押かおう

強仁上人座下じょうにん

四〇 開目抄上

文永九年（1172年）二月 五十一歳

御作 与門下一同 於佐渡塚原 186P

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又
習学すべき物三あり、所謂儒外内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王・此等を天尊と号す諸臣の頭目・万民の
橋梁なり、三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ず五帝已後は父母
を弁て孝をいたす、所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ沛公
は帝となつて大公を拜す、武王は西伯を木像に造り丁蘭は母の形を
きざめり、此等は孝の手本なり、比干は殷の世のほろぶべきを見て
しみて帝をいさめ頭をはねらる、公胤といぬし者は懿公の肝をと
つて我が腹をさき肝を入れて死しぬ此等は忠の手本なり、尹寿は

堯王ぎょうおうの師し・務成むせいは舜王しゅんおうの師し・大公望たいこうぼうは文王ぶんおうの師し・老子らうしは孔子こうしの師しなり此等これらを四聖ししやうとがうす、天尊てんそん・頭こづへをかたづけ万民ばんみん・掌たなごころをあわす、此等これらの聖人しやうじんに三墳さんぶん・五典ごてん・三史等さんしの三千余卷さんぜんの書しよあり、其その所詮しよせんは三玄さんげんをいはず三玄さんげんとは一いつには有あの玄げん・周公等しゆく此れを立つ、二にには無なの玄げん・老子等らうし・三さんには亦有やくう亦無やくむ等とう・莊子しやうしが玄げんこれなり、玄げんとは黒くろなり父母ふぼ・末生まうせい・已前いぜんをたづぬれば、或あるは元氣げんきよりして生なじ、或あるは貴賤きせん・苦樂くらく・是非ぜひ・得失とくしつ等は皆自然等みなじねん云云。

かくのごとく巧たくみに立つといえども、いまだ過去かこ・未来みらいを一分いちぶんもしらず、玄げんとは黒くろなり幽ゆうなりかるがゆへに玄げんという但現在げんざい計りしれるにたり、現在げんざいにをひて仁義にぎを制して身をまほり国を安んず此こゝに相違さういすれば族やからをほろぼし家を亡ぼす等とういう、此等これらの賢聖けんせいの人人ひとびとは聖人しやうじんなりといえども過去かこを・しらざること凡夫ほんぶの背そを見ず、未来みらいを・かがみざること盲人めしいの前まえをみざるがごとし、但現在げんざいに家を治め孝をいたし堅

く五常ごじやうを行いずれば傍輩ほうはいも・うやまい名も国にきこえ賢王もこれを召
して或あるは臣となし・或あるは師とたのみ・或あるは位をゆづり天も来て守り
つかう、所謂いわゆる周の武王には五老きたりつかえ後漢ごかんの光武には二十八
宿来つで二十八将となりし此なり、而しかりといえども過去かこ・未来みらいをし
らざれ

ば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり・まことの賢聖にあらず。孔子が此の土に賢聖なし西方に仏図という者あり此聖人なりといひて外典を仏法の初門となせしこれなり、礼楽等を教て内典わたらば戒定慧をしりやすからせんがため・王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝の高きをしらしめ師匠を教て帰依をしらしむ、妙樂大師云く「仏教の流化実に茲に頼る礼楽前に馳せて真道後に啓く」等云云、天台云く「金光明經に云く一切世間所有の善論皆此の經に因る、若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云、止観に云く「我れ三聖を遣わして彼の真丹を化す」等云云、弘決に云く「清浄法行經に云く月光菩薩彼に顔回と称し光浄菩薩彼に仲尼と称し迦葉菩薩彼に老子と称す天竺より此の震旦を指して彼と為す」等云云。

二には月氏の外道・三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天・此の二天を

ば一切衆生の尊父・悲母・又天尊・主君と号す、迦毘羅・樓僧ぎや、
勒姿婆・此の三人をば三仙となづく、此等は仏前八百年・已前已後
の仙人なり、此の三仙の所説を四韋陀と号す六万蔵あり、乃至・仏
・出世に當つて六師外道・此の外経を習伝して五天竺の王の師とな
る支流・九十五六等にもなれり、一一に流流多くして我慢の瞳高
きこと非想天にもすぎ執心の心の堅きこと金石にも超えたり、
其の見るの深きこと巧なるさま儒家には・にるべくもなし、或は過去
・二生・三生・乃至七生・八万劫を照見し又兼て未来・八万劫をし
る、其の所説の法門の極理・或は因中有果・或は因中無果・或は
因中亦有果・亦無果等云云、此れ外道の極理なり所謂善き外道は
五戒・十善戒等を持つて有漏の禪定を修し上・色・無色をきわめ
上界を涅槃と立て屈歩虫のごとく・せめのぼれども非想天より返つ
て三悪道に墮つ一人として天に留るものなし而れども天を極むる者

は永くかへらずとをもちり、各各・自師の義をうけて堅く執するゆ

へに・或は冬寒に一日に三度・恒河に浴し

・或は髪をぬき・或は巖に身をなげ・或は身を火にあぶり・或は五

処をやく・或は裸形・或は馬を多く殺せば福をう・或は草木をやき

・或は一切の木を礼す、此等の邪義其の数をしらず師を恭敬する

事・諸天の帝釈をうやまい諸臣の皇帝

を拝するがごとし、しかれども外道の法・九十五種・善惡につけて
一人も生死をはなれず善師につかへては一生・三生等に惡道に墮ち
悪師につかへては順次生に惡道に墮つ、外道の所詮は内道に入る即
最要なり。或外道云く、「千年已後・仏出世す」等云云、或外道云く
「百年已後・仏出世す」等云云、大涅槃經に云く、「一切世間の外道の
經書は皆是れ仏説にして外道の説に非ず」等云云、法華經に云く
「衆に三毒有りと示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便し
て衆生を度す」等云云。

三には大覺世尊は、此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船
師・大福田等なり、外典・外道の四聖・三仙其の名は聖なりといえど
も実には三惑未断の凡夫・其の名は賢なりといえども実に因果を
弁えざる事嬰兒のごとし、彼を船として生死の大海をわたるべし
や。彼を橋として六道の巷こえがたし。我が大師は變易・猶をわ

たり給へり。況や分段の生死をや元品の無明の根本猶をかたぶけ
給へり。況や見思枝葉の麤惑をや、此の仏陀は三十成道より八十御
入滅にいたるまで五十年が間・一代の聖教を説き給へり、一字・
一句皆真言なり一文一偈・妄語にあらず外典・外道の中の聖賢の
言すらいふことあやまりなし事と心と相符へり況や仏陀は無量
曠劫よりの不妄語の人・されば一代・五十余年の説教は外典外道に
対すれば大乘なり大人の実語なるべし、初成道の始より泥の夕に
いたるまで説くところの所説・皆真実なり。

但し仏教に入て五十余年の経経・八万法蔵を勘えたるに小乘
あり大乘あり権経あり実経あり顕教・密教・語・麤語・実語・
妄語・正見・邪見等の種種の差別あり、但し法華経計り教主釈尊の
正言なり三世・十方の諸仏の真言なり、大覺世尊は四十余年の
年限を指して其の内の恒河の諸経を未顕真実・八年の法華は

要よう当とう説せつ真しん実じつと定ため給くしかば多た宝ほう仏ぶつ大だい地ちより出しゅつ現げんして皆かい是ぜ真しん実じつと
証しょう明みょうす、分ぶん身じんの諸しよ仏ぶつ来らい集じゅうして長ちやう舌ぜつを梵ぼん天てんに付く此この赫かく赫かくたり
明めい明めいたり。晴せい天てんの日にちよりもあきらかに夜よ中ちゆうの満まん月げつのごとし仰あおいで
信しんぜよ伏ふくして懷おもうべし。

但し此の經に二箇の大事あり俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・
三論宗等は名をもしらず華嚴宗と真言宗との二宗は偷に盗んで
自宗の骨目とせり、一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の
文の底にしづめたり、竜樹・天親・知つてしかもいまだひろいいだ
さず但我が天台智者のみこれをいだけり。

一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界
を立てて十界をしらず況や互具をしるべしや、俱舍・成実・禅宗等
は阿含經によれり六界を明らかに四界をしらず、「十方唯一仏」と
云つて一方有仏だにもあかさず、一切有情・悉有仏性とこそと
かざらめ。一人の仏性猶ゆるさず、而るを律宗・成実宗等の十方
有仏・有仏性など申すは仏滅後の人師等の大乘の義を自宗に盗
み入れたるなるべし、例せば外典・外道等は仏前の外道は執見あさ
し仏後の外道は仏教をききみて自宗の非をしり巧の心・出現して

ぶつぎょう 仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もつとも・ふかし、附仏教・
がくぶつぽうじょう 学仏法成等これなり、外典も又又かくのごとし漢土に仏法いまだ・
わたらざりし時の儒家・道家は・

いういうとして嬰兒のごとく・はかなかりしが後漢・已後に釈教わ
たりて対論の後・釈教やうやく流布する程に釈教の僧侶・破戒の
ゆへに・或は還俗して家にかへり・或は俗に心をあはせ儒道の内に
しやくきょう 釈教を盗み入れたり。止觀の第五に云く「今世多く悪魔の比丘有
つて、戒を退き家に還り駈策を懼畏して更に道士に越濟す、復
た名利を邀めて狂老を誇談し、仏法の義を以て偷んで邪典に安き、
高を押し下きに就け、尊を推いて卑しきに入れ概して平等ならし
むしと云云。弘に云く「比丘の身と作つて仏法を破滅す。若しは戒を
退き家に還るは、衛の元嵩等が如し、即ち在家の身を以て仏法を
破壊す、此の人正教を偷して邪典に助添す、高きを押しして」等

とは道士どうしの心を以て二教の概さかきと為し邪正じゃせいをして等しからしむ。義こ是の理無し、曾かつて仏法ぶつぽうに入つて正を偷ぬすんんで邪を助け八万・十二の高はちまんきを押し、五千二篇の下つきに就つけ用もつて彼の典てんの邪鄙じゃひの教きやうを釈しゃくするを推尊すいそん入卑にゆうひと名なく、等云なす云、此の釈しゃくを見るべし次上つぎのかみの心なり。

仏教ぶつぎやう又かくのごとし、後漢ごかんの永平えいへいに漢土かんどに仏法ぶつぽうわたりて、邪典じゃてんやぶれて内典ないてん立つ。内典ないてんに南三なんざん・北七ほくひちの異執いしゆちを

こりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師にうちやぶられて仏法
ふたたぐんるい
二び群類をすくう。其の後・法相宗・真言宗・天竺よりわたり
けごんしゆう しゅつたい
華嚴宗又出来せり、此等の宗宗の中に法相宗は一向・天台宗に敵
ほうもんすいか
を成す宗・法門水火なり、しかれども玄奘三蔵・慈恩大師・委細に
てんだい
天台の御釈を見ける程に自宗の邪見ひるがへるかのゆへに自宗をば
すてねども其の心天台に帰伏すと見へたり、華嚴宗と真言宗とは
ごんきよう ごんしゆう
本は権経・権宗なり善無畏三蔵・金剛智三蔵・天台の一念三千の
ぜんむいさんそう ごんこうちさんそう てんだい いちねんさんぜん
義を盗みとつて自宗の肝心とし其の上に印と真言とを加て超過の心
じしゆう かんじん そ
ををこす、其の子細をしらぬ學者等は天竺より大日経に一念三千
そ じさい がくしゃ てんじく だいにかきよう いちねんさんぜん
の法門ありけりと・うちをもつ、華嚴宗は澄観が時・華嚴経の
ほうもん
心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷み入れたり、人これ
しんによく えし
をしらず。

日本・我朝には華嚴等の六宗・天台・真言已前にわたりけり、
にほん けごん ろくしゆう てんだい しんごん いぜん

けしん さんろん 法相・三論・法相・諍論水火なりけり、伝教大師・此の国にいでて

ろくしゅう じゃけん 六宗の邪見をやぶるのみならず真言宗が天台の法華經の理を盗

じしゅう み取て自宗の極とする事あらはれをはんぬ、伝教大師・宗宗の

いしゅう じんし 人師の異執をすてて専ら經文を前として責めさせ給しかば六宗の

こうとく 高徳・八人・十二人・十四人・三百余人・並に弘法大師等せめをとさ

にほんこく れて日本国・一人もなく天台宗に帰伏し南都・東寺・日本一州の山

みなえいざん 寺・皆叡山の末寺となりぬ、又漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して

ほうぼう とが 謗法の失を・まぬかれたる事もあらはれぬ、又其の

てんたい 後やうやく世をとろへ人の智あさく・なるほどに天台の深義は習う

たしゅう しないぬ、他宗の執心は強盛になるほどにやうやく六宗・七宗に

てんたいしゅう 天台宗をとされてよわりゆくかのゆへに結句は六宗・七宗等に

ぜんしゅう をもよばず、いづくにかいなき禅宗・浄土宗にとされて始めは

だんな 檀那やうやくかの邪宗にうつる、結句は天台宗の碩徳と仰がる

ひとびと

人人みな・をちゆきて彼の邪宗をたすく、さるほどに六宗・八宗

の田畠・所領みなたをされ

正法失せはてぬ

天照太神・正八幡

山王等・諸の守護の諸大善神も

法味をなめざるか

國中を去り給う

かの故に悪鬼・使を得て

国すでに破れなんとす

此に予愚見をもつて前四十余年と

後八年との相違をかんがへみる

に、其の相違多しといえども先ず世間の学者もゆるし、我が身にも

さもやとうちをぼうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。法華経

の現文を拜見するに、舍利弗は華光如来・迦葉は光明如来・須菩提

は名相如来・迦施延は閻浮那提金光如来・目連は多摩羅跋耨檀

香仏・富楼那は法明如来・阿難は山海慧自在通王仏・羅喉羅は蹈七

宝華如来・五百・七百は普明如来、学・無学二千人は宝相如来・摩訶

波闍波提比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は、一切衆生喜見如来・具足

千万光相如来等なり、此等の人人は法華経を拜見したてまつるには

尊きやうなれども、爾前の経経を披見の時興はけをさむる事どもをほし。其の故は仏・世尊は実語の人なり故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは実語につけたる名なるべし此等の人人に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは申すぞかし、此の大人唯一大事因縁故・出現於世となのらせ給いて「未だ真実を顕さず・世尊は法久しうして後・要らず当に真実を説くべし・正直に方便を捨て」等云云、多宝仏・証明を加え分身・舌を出す等は舍利弗が未来の華光如来・迦葉が光明如来等の説をば誰の人が疑網をなすべき。

而れども爾前の諸経も又仏陀の実語なり・大方広仏華嚴經に云く「如来の知慧・大薬王樹は、唯二処に於て生長して利益を為すこと能わず、所謂二乗の無為広大の深坑に墮つると、及び善根を壞る非器の衆生は大邪見・貧愛の水に溺るとなり」等云云、此

の經文きやうもんの心は雪山せつせんに大樹たいじゆあり無尽根むじんこんとなづく。此を大藥王樹やくおうと号す、閻浮提えんぶだいの諸木しよの中の大王だいおうなり此の木の高さは十六万八千由旬ゆじゆんなり、一閻浮提えんぶだいの一切いっさいの草木そうもくは此の木の根ざし枝葉しやう・華菓けかの次第しだいに随したがつて華菓けかなるなるべし、此の木をば仏ぶつの仏性ぶつじやうに譬たとへたり一切衆生いっさいしゆじやうをば一切いっさいの草木そうもくにたとつ、但ただし此の大樹たいじゆは火坑かきやうとすいりん水輪すいりんの中に生長せいぢやうせず、二乗にじやうの心中しんちゆうをば火坑かきやうにたとえ一闍提人いっせんたいの心中しんちゆうをば水輪すいりんにたとえたり、此の二類にるいは永く仏ぶつになるべからずとも申もうす經文きやうもんなり、大集經だいじききやうに云いく、「二種にしゆの人にん有り、必ず死しして活くわきず、ひつきやう畢竟ひつきやうして恩おんを知り恩おんを報ほうずること能あたわらず。一いちには声聞しやうもん、二にには縁覺えんかくなり、譬たとえば人にん有りて深坑じんこうに墜だつし、是この人にん自みら利りし他たを利りすること能あたわざるが如ごとく、声聞しやうもん・縁覺えんかくも亦また復また是この如ごとく、解脫げだつの坑あなに墜だして自みら利りし及および他たを利りすること能あたわらずし等ら云いふ、外典げてん・

三千余卷さんぜんの所詮しよせんに二つあり所謂いわゆる孝と忠となり忠も又孝の家よりいでたり、孝と申もうすは高なり天高けれども孝よりも高からず又孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず、聖賢せいけんの二類にるいは孝の家よりいでたり何いかに況いわんやや仏法ぶつぽうを学せん人・知恩報恩ちおんほうおんなかるべしや、
仏弟子ぶつでしは必ず四恩しよんをしつて知恩報恩ちおんほうおんをいたすべし、其の上舍利弗しゃりほつ・迦葉等かしようの二乗にじよつ

は二百五十戒さんぜん三千の威儀いぎ・持整じせいして味・淨・無漏むろの三静慮さんじようりよ・阿含經あこんきようをきわめ三界さんがいの見思けんじを尽せり。知恩報恩ちおんほうおんの人の手本てほんなるべし、然しかるをふちおん不知恩ふちおんの人なりと世尊せそん定め給ぬ、其の故そのゆえは父母ふぼの家を出いでて出家しゆつの身となるは必ず父母ふぼをすくはんがためなり、二乗にじよつは自身じしんは解脱げだつとをもえども利他りたの行たかけぬ。設たといい分い分の利他りたありといえども父母ふぼ等を永不成仏ようぶじようぶつの道みちに入いるれば、かへりて不知恩ふちおんの者ものとなる。

維摩經ゆいまきように云いく「維摩詰ゆいまきつ、又文殊師利もんじゆしりに問とう、何等なんらをか如来にょらいの種しゆと

為す、答えて曰く一切塵勞の疇は如来の種と為る、五無間を以て
具すと雖も、猶能く此の大道意を發す等云云。又云く「譬えは
族姓の子・高原陸土には青蓮芙蓉の衡華を生ぜず卑湿汚田に乃ち
此の華を生ずるが如し」等云云、又云く「已に阿羅漢を得て心真と
為る者は終に復道意を起して仏法を具すること能わざるなり、
根敗の士・其の五樂に於て複利すること能わざるが如し」等云云、
文の心は貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし殺父等の五逆罪は
仏種となるべし高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべ
からず、いう心は二乗の諸善と凡夫の悪と相對するに凡夫の悪は仏
になるとも、二乗の善は仏にならじとなり、諸の小乘経には悪を
いましめ善をほむ、此の経には二乗の善をそしり凡夫の悪をほめた
り、
かへつて仏経ともをばへず外道の法門のやうなれども詮するところ

は二乗にじようの永不成よふじようぶつ仏ぶつをつよく定めさせ給たまうにや、方等ほうとう陀羅尼だらに經にに云いわく
「文殊もんじゆ・舍利弗しゃりほつに語かたらく猶なほ枯樹こじゆの如ごとく更またに華はなを生なずるや不いなや。亦また山さん
水みづの如ごとく本もと処ところに還かえるや不いなや。折石しゃくせき還かえつて合あうや不いなや。焦種いれるたね芽めを生な
ずるや不いなや。舍利弗しゃりほつの言いわく不いななり、文殊もんじゆの言いわく若もし得うべからずんば
云なん何なんぞ我われに菩提ぼだいの記きを得えるを問とうて、心こころに歡喜かんきを生なずるや」等な云い
云い、文ぶんの心こころは枯かられたる木き・華はなさかず山水さんすい・山さんにかへらず

破れたる石あはず、いれる種をいず、二乗またかくのごとし、仏種をいれり等となん。

大品般若経に云く、諸の天子今未だ三菩提心を発さずんば、応に

発すべし、若し声聞の正位に入れば、是の人能く三菩提心を発さざ

るなり、何を以ての故に生死の為に障隔を作す故、等云云、文の

心は二乗は菩提心ををこさざれば、我随喜せじ、諸天は菩提心をを

こせば、我随喜せん。首楞嚴経に云く、「五逆罪の人、是の首楞嚴

三昧を聞いて、阿耨菩提心を発せば、還つて仏と作るを得。世尊、

漏尽の阿羅漢は猶破器の如く、永く是の三昧を受くるに堪忍せず、

等云云。浄名経に云く、「其れ汝に施す者は福田と名けず。汝を

供養する者は三悪道に墮す、等云云。文の心は迦葉・舍利弗等の

聖僧を供養せん、人天等は必ず三悪道に墮つべしとなり、此等の聖僧

は、仏陀を除きたてまつりては、人天の眼目、一切衆生の導師とこそ。

をもひしに幾許いくばくの人天にんてん・大会たいえの中にして・かう度たびたび度お・仰おほせられしは
本意ほんいなかりし事ことなり只詮ただせんするところは我が御弟子おんでしを安めころさん
とにや、此この外牛驢ごうろの二乳にじう・瓦器がき・金器きんき・螢火けいか・日光等
の無量むりようの譬たとえをとつて二乗にじようを呵嘖かしゃくせさせ給たまき、一言二言ならず一日・
二日ならず一月・二月ならず一年・二年ならず一經二經ならず、
四十余年よんじゆつよねんが間ま・無量むりよう・無辺むへんの經經ききょうに無量むりようの大会たいえの諸人しよにんに對して一
言もゆるし給たまう事もなく・そしり給たまいしかば世尊せそんの不妄語もうごなりと我
もしる人もしる天もしる地もしる、一人・二人ならず百千万人ばんにん・
三界さんがいの諸天しよてん・竜神りゆうじん・阿修羅あしゆら・五天ごてん・四洲ししゆ・六欲りくよく・色しき・無色むしき・十方世界じゆつほうせかい
より雲集うんじゆつせる人天にんてん・二乘にじよう・大菩薩等だいぼさつ皆みなこれをしる又皆みなこれをきく、
各各かくかく・国国こくこくへ還かえりて娑婆世界しやばせかいの釈尊しやくそんの說法せつぽうを彼れ彼れの国国こくこくにして
一一いちいちにかたるに十方無辺じゆつほうむへんの世界せかいの一切衆生いっさいしゆじよう・一人もなく迦葉かしよう・
舍利弗等しやりふは永不成仏えいふじふつの者もの・供養くやうしては・あしかりぬべしと・しりぬ。

而しかるを後八年の法華經ほけきょうに忽たちまちに悔くいかえ還かへして、二乗作にじょうさぶつ仏ぶつすべしと仏陀ぶつだ
とかせ給たまはんたんに、人天大会にんてんたいえ・信仰しんこうをなすべしや、用もちゆべからざる上うへ・
先せん後の經經きょうきょうに疑網ぎもうをなし、五十余年せじきゅうの説教せつきょう・皆虚妄みなこもうの説せつとなりな
ん、されば四十余年よんじゅうよねん・未顯みけん眞實しんじつ等の經文きょうもんはあらませしか天變てんべんの
仏陀ぶつだと現げんじて後八年の經をばとかせ給たまうかと疑網ぎもうするところに・
實じつげにげに・しげに

劫国・名号と申して二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の
 弟子などを定めさせ給へば、教主釈尊の御語すでに一言になり
 ぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者と咲いし
 こと・これなり。人天大会けをさめて・ありし程に、爾の時に東方・
 宝浄世界の多宝如来・高さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大七
 宝塔に乗じて教主釈尊の人天・大会に自語相違をせめられて・との
 べ・かうのべ、さまざまに宣べさせ給いしかども、不審猶をはるべし
 とも・みへず・もてあつかいて・をはせし時・仏前に大地より涌現して
 虚空にのぼり給う、例せば暗夜に満月の東山より出づるがごとし
 七宝の塔・大虚にかからせ給いて大地にも・つかず大虚にも付かせ
 給はず・天中に懸りて宝塔の中より梵音声を出して証明して云く
 「爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて云く、善き哉善き哉
 釈迦牟尼世尊・能く平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華経を

もつたいしゆつ たため 以て大衆の爲に説きたもつ、是くの如し是くの如し、釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞実なり」等云云、又云く「爾の時に世尊・文殊師利等の無量百千万億・旧住娑婆世界の菩薩・乃至人非人等一切の衆の前に於て大神力を現じたもつ、広長舌を出して上み梵世に至らしめ一切の毛孔より乃至十方世界・衆の宝樹の下の師子の座の上の諸仏も亦復是くの如く、広長舌を出し無量の光を放ちたもつ」等云云、又云く「十方より来りたまえる諸の分身の仏をして各本土に還らしめ、乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊・初成道の時・諸仏・十方に現じて釈尊を慰諭し給う上・諸の大菩薩を遣しき、般若經の御時は釈尊・長舌を三千にをほひ千仏・十方に現じ給い・金光明經には四方の四仏現せり、阿弥陀經には六方の諸仏・舌を三千にををう、大集經には十方の諸仏・菩薩・大宝坊にあつまれり、此等を法華經に引合せて

・かんがうるにおうしゃく黄石と黄金と白雲と白山と白はくひょう氷と銀鏡と黒色と青色とをばえいがん翳眼の者・みょうもく眇目の者・一眼の者・邪眼じやがんの者は・みたがへつべし、けこんきよう華嚴經にはせんご先後の經なければぶつご仏語相違なしないに・つけてかだいぎ大疑いで来べき、だいしつきよう大集經・だいほん大品經・こんこう金光明經・あ阿弥み陀經は諸しょう小乗しょうじょう經の二乗を弾だんか呵せんがためにじゅうほう十方に浄土じょうどをとほんぶき凡夫・菩薩ぼさつをこんぼ欣慕せしめ二乗にじょうをうづらわらはずらは

す、小乗經と諸大乘經と一分の相違あるゆえに、或いは或は
十方に仏現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし、或は十方
世界にも此の經をとくよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり
給う、或は釈尊、舌を三千にをほひ、或は諸仏の舌をいだす、よし
をとかせ給う、此ひとえに諸小乗經の十方世界、唯一仏とと
かせ給いしをもひを、やぶるなるべし、法華經のごとくに先後の諸
大乘經と相違、出来して舍利弗等の諸の声聞、大菩薩、人天等に
將非魔作仏とをものはれさせ給う大事にはあらず、而るを華嚴・
法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、彼の經經と法華經とは同
じとうちをもへるは、つたなき眼なるべし。

但在世は四十余年をすてて法華經につき候ものもや、ありけん、
仏滅後に此の經文を開見して信受せんこと、かたかるべし、先ず一
つには爾前の經經は多言なり法華經は一言なり爾前の經經は多

經なり此の經は一經なり彼彼の經は多年なり此の經は八年なり、もつこ仏は大妄語の人・永く信ずべからず不信の上に信を立てば爾前にぜんの經ききつじは信ずる事もありなんほけきよう法華經は永く信ずべからず、当世とうせもほけきよう法華經をば皆信じたるやうなれどもほけきよう法華經にては・なきなり、そのゆえ其の故はほけきよう法華經とだいにちきよう大日經とほけきよう法華經とけこんきよう華嚴經とほけきよう法華經とあみだ阿彌陀經と一なるやうを・とく人をば悦んでよろこ歸依し別別なるなんと申す人をもちば用いずたとい用ゆれどもほんい本意なき事と・をもへり。

にちれんいわ日蓮云く日本にぶつぼう仏法わたりて・すでに七百余年・但でんぎようだいし傳教大師・一人計り、ほけきよう法華經をよめりと申すをば諸人これをもち用いず、但ほけきよう法華經に云く「若し須弥を接つて他方の無数の仏土に擲置かんも亦未だ為難しとせず、乃至若しぶつめつ仏滅後にあくせ悪世中に於て能く此の經を説かん是れ則ち為難しし等云云、にちれん日蓮がごうぎ強義・きようもん經文にふじつ普合せりほけきよう法華經の流通たるねはんぎよう涅槃經にまつだいじよくせ末代濁世にほうほう謗法の者は十方の地のごとししよくほう正法の

者は爪上そつじやうの土のごとしと・とかれて侯そつらは・いかんがし侯べき、日本にほんの
諸人しよにんは爪上そつじやうの土か日蓮にちれんは十方じゆつぱうの土かよくよく思惟しゆいあるべし、賢王けんおう
の世には道理どつりかつべしの世に非道ひだう・先をすべし、聖人しやうにんの世に法華ほけき經の
実義じつぎ顯あらわるべし等と心こころうべし、此こゝの法門ほうもんは迹門しやくもんと爾前にぜんと相對そつたいして爾前にぜん
の強つよき

やうに・をばゆもし爾前にぜんつよるならば舍利弗等の諸もろもろの二乗にじょうは
永不成仏ようふじょうぶつの者なるべし・いかなが・なげかせ給たまうらん。

二には教主釈尊きよつしゆじやくそんは住劫・第九の滅・人壽百歳の時・師子頰王ししきやうおうに
は孫・淨飯王じやうはんには嫡子・童子悉達太子どうじしたたいし・一切義成就菩薩いっさいじじょうじゆぼなつこれなり、
御年十九の御出家しゆつかけ・三十成道の世尊じじうどう・始め寂滅道場じやくめつどうじやうにして実報じつほう
けおう
華王の儀式けぎしを示現じげんして十玄・六相・法界ほっかい・円融えんゆう・頓極微妙とんごくみみょうの大法だいほうを
と
説き給たまい十方じゆつほうの諸仏しよぶつも顕現けんげんし一切いっさいの菩薩ぼさつも雲集うんしゆせり、土といひ機き
といひ諸仏しよぶつといひ始めといひ何事なにごとにつけてか大法だいほうを秘たまし給たまうべき、さ
れば經文きやうもんには顕現けんげん自在じざい力ちから・演説えんぜつ円満經等えんまん云云、一部六十卷は一字
一点えんまんもなく円満經えんまんなり、譬たとへば如意宝珠にょいほうじゆは一珠たまも無量珠むりやうも共に同
じ。一珠たまも万宝ばんぼうを尽つして雨ふらし万珠ばんじゆも万宝ばんぼうを尽つすがごとし、華嚴經けこんきやうは
一字ばんじも万事ばんじも但同事だんどうじなるべし、心仏しんぶつ及衆生じゆじやうの文ぶんは華嚴宗けこんしゆの肝心かんじんな
るのみならず法相ほつそう・三論さんろん・真言しんごん

てんだい 天台の肝要とこそ申し候へ此等程いみじき御經に何事をか隠すべ

き、なれども二乘闡提不成仏ととかれしは珠のきずとみゆる上

三処まで始成正覺となのらせ給いて久遠実成の寿命品を説きか

くさせ給いき、珠の破れたると月に雲のかかれると日の蝕したるが

ごとし不思議なりしことなり、阿含方等般若大日經等は仏説

なればいみじき事なれども華嚴經にたいすればいうにかいなし、

彼の經に秘せんこと此等の經經にとかるべからず、されば雜

阿含經に云く初め成道等云云、大集經に云く如来成道始め十

六年等云云、淨名經に云く始め仏樹に坐して力めて魔を

降す等云云、大日經に云く我昔道湯に坐して等云云、仁王

般若經に云く二十九年等云云。

此等は言うにたらず只耳目ををどろかす事は無量義經華嚴經

の唯心法界方等般若經の海印三昧混同無二等の大法をかきあ

げてある・或は未顕みけん眞実しんじつ・或は歴劫りやく修行等しゆぎやう・下す程の御経に我先きに
道場菩提樹どうじやうぼだいじゆの下に端坐すること六年、阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを成ず
ることを得たりと初成道しゆじやうたうの華嚴經けこんきやうの始成しじやうの文に同せられし不思議ふしぎ
と打ち思うところほけきに此は法華經ほけきの序分じよぶんなれば正宗しやうじゆうの事をいはずも
あるべし、法華經ほけきの正宗しやうじゆう・略開三・広開三の御時おんとき・唯仏与仏ゆいぶつよぶつ・
乃能究尽ないのうくじん・

諸法実相等・世尊法久後等・正直捨方便・多宝仏・迹門八品を指し
て皆是其实と証明せられしに何事をか隠すべきなれども久遠
寿命をば秘せさせ給いて我始め道場に坐し樹を觀じて亦経行す等
云云、最第一の大不思議なり、されば弥勒菩薩・涌出品に四十余年
の未見今見の大菩薩を仏・爾して乃ち之を教化して初めて道心を發
さしむ等と・とかせ給いしを疑つて云く「如来太子為りし時・釈の
宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して
あのくたらさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり、是より已來始め
て四十余年を過ぎたり世尊・云何ぞ此の少時に於て大いに仏事を
作したまえる」等云云、教主釈尊此等の疑を晴さんがために
じゅりょうぼん
寿命品を・とかんとして爾前・迹門のきを挙げて云く「一切世間
てんにんおよあしゅらみな
の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏・釈氏の宮を出でて伽耶城
を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまえ

りおもと謂まえりまと等まと云ま云ま、正ましく此この疑うたがいを答こえて云いく、「然ぜんるに善ぜん男子なんし・我わ實じつに成じょう仏ぶつしてより已この來かた無む量りょう無む辺へん・百せん千まん万まん億億・那な由ゆ佗た劫じやくなり」等云云。

華け嚴こん・乃ない至し般はん若にや・大だい日にち經きやう等とうは二に乘じやう作さぶつ仏ぶつを隱いんすのみならず、久く遠おん實じつ成じやうを説ときかくさせ給たまへり、此こ等らの經きやう經きやうに二につつの失とがあり、一一には「行ぎやう布ふを存そんするが故ゆえに、仍なお未いまだ權けんを開ひらけずとて迹しやく門もんの一いち念ねん三さん千せんをかくせり、二二には始しじやう成じやうを言いうが故ゆえに尚な未いまだ迹おこを發はつせずとて本ほん門もんの久く遠おんをかくせり、此こ等らの二につつのだい法ほうは一いち代だいの綱かう骨こつ・一いつ切さい經きやうの心しん髓ずいなり、迹しやく門もん方ほう便べん品ひんは一いち念ねん三さん千せん・二に乘じやう作さぶつ仏ぶつを説いて爾に前ぜん二に種しゆの失とが・一一つを脱まぬれたり、しかりと・いいええども・いいままだ發ほつ迹しやく頭けん本ほんせぜざれば・ままこと実の一いち念ねん三さん千せんもああららはれれず・二に乘じやう作さぶつ仏ぶつも定じやうままららず、水すい中ちゆうの月げつを見るがごとし・根こんなし草そうの波なみの上うへに浮うべるににたり、本ほん門もんににたりて始しじやう成じやう正しじやう覺かくをややぶれば四しき教きやうの果くわをややぶる、四しき教きやうの果くわをややぶれば四しき教きやうの因いん

やぶれぬ、爾前・迹門の十界の因果を打ちやぶつて、本門の十界の因果をとぎ顕す、此即ち本因・本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し

仏界も無始の九界に備りて、眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし、かうて、かへりみれば華嚴經の台上十方・阿含經の小釈迦方等・般若の金光明經の阿彌陀經の大日經等の権仏等は、此の寿命の仏の天月しばらく影を

だいじょう

大小の器にして浮べ給うを・諸宗の学者等・近くは自宗に迷い遠く

ほけきょう じゅうりょうほん

は法華經の寿量品をしらず水中の月に実の月の想いをなし・或は

ある

入つて取らんと・をもひ・或は繩を・つけて・つなぎとどめんとす、

てんだいいわ

天台云く「天月を識らず但池月を觀ず」等云云。

にちれん

日蓮案じて云く「一乗作仏すら猶爾前づよにをばゆ。久遠実成は

にじょうさぶつ

又なるべくも・なき爾前づりなり、其の故は爾前・法華相對するに

なおいぜん

猶爾前こわき上・爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず、

ほんもん

本門十四品も涌出・寿量の二品を除いては皆始成を存せり、雙林

さいご

最後の大般涅槃經・四十卷・其の外の法華・前後の諸大經に一字・

いっく

一句もなく法身の無始・無終はとけども応身・報身の顯本はとかれ

むし

ず、いかんが広博の爾前・本・迹・涅槃等の諸大乘經をばすてて但

ゆじゆつ

涌出・寿量の二品には付くべき。

じゅうりょう

されば法相宗と申す宗は、西天の仏滅後・九百年に無著菩薩と

ほうそうしゅう

もう

せいてん

ぶつめつ

むちやくぼさつ

申す大論師有しき、夜は都率の内院にのぼり、弥勒菩薩に対面して
一代聖教の不審をひらき、昼は阿輸舎国にして法相の法門を弘
め給う。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日
大王・頭をかたづけ五天幢を倒して此れに帰依す、尸那国の玄奘
三蔵・月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国国を見ききて、
諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして、太宗皇帝と申す賢王
にさづけ給い、肪・尚・光・基を弟子として大慈恩寺並に三百六十余
箇国に弘め給う。日本国には人王三十七代・孝徳天皇の御宇に道慈
・道昭等ならいわたして山階寺にあがめ給へり、三国第一の宗なる
べし、此の宗の云く始め華嚴經より終り法華・涅槃經にいたるまで
無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず、仏語に一言な
し一度・永不成仏と定め給いぬる上は日月は地に落ち給うとも、
大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。されば法華經・涅槃經

の中にも爾前の経経に嫌いし無性有情・決定性を正しくついで成仏すとはとかれず。まづ眼を閉じて案ぜよ。

法華経・涅槃経に決定性・無性有情・正く仏になるならば無著・

世親ほどの大論師・玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師これをみざるべし

や、此をのせざるべしや、これを信じて伝えざるべしや、弥勒菩薩に

聞いてたてまつるべしや、汝は法華経の文に依るやうなれども、

天台・妙楽・伝教の僻見を信受して其の見をもつて経文をみるゆ

えに爾前に法華経は水火なりと見るなり。華嚴宗と真言宗は法相

・三論にはにるべくもなき超過の宗なり、二乗作仏・久遠実成は

法華経に限らず華嚴経・大日経に分明なり、華嚴宗の杜順・智儼・

法蔵・澄観・真言宗の善无畏・金剛智・不空等は天台・伝教には・

にるべくもなき高位の人なり、其の上善无畏等は大日如来より系み

だれざる相承あり、此等の権化の人いかでかあやまりあるべき、

したが 随つて華嚴經には「或は釈迦・仏道を成じ已つて不可思議劫を経るを見る」等云云、

大日経には「我れは一切の本初なり」等云云、何ぞ但久遠実成・

寿命品に限らん、譬へば井底の蝦が大海を見ず山左が洛中を・

らざるがごとし、汝但寿命の一品を見て華嚴・大日経等の諸経を

しらざるか、其の上月氏・戸那・新羅・百濟等にも一向に二乗作仏・

久遠実成は法華經に限るといふか。

されば八箇年の経は四十余年の経経には相違せりといふとも

先判・後判の中には後判につくべしといふとも、猶爾前づりにこそを

ぼうれ。又、但在世計りならば・さも・あるべきに滅後に居せる論師

・人師・多は爾前づりにこそ候へかう法華經は信じがたき上、世も

やうやく末になれば聖賢はやうやく・かくれ迷者はやうやく多し。

世間の浅き事すら猶あやまりやすし。何に況や出世の深法・なか

るべしや、犢子・方広が聡敏なりし猶を大小乗經にあやまてり、

無垢むくまとうが利根りこんなりし、権實こんじつ・二教を弁えず、正法しょうほう一千年の内、

在世ざいせいも近く月氏の内なりしすでにかくのごとし、況いはんや尸那しな・日本等

は国もへだて音こえもかはれり。人の根も鈍なり寿命じゅみょうも日あさし

貪とん・瞋じん・癡ちも倍增ばいぞうせり、仏世を去つてとし久し、仏經ぶつきょうみなあやまれ

り、誰の智解ちげか直かるべき、仏涅槃經ねはんぎきょうに記して云く「末法まっぼうには正法しょうほう

の者は爪上そじょうの土ほつち・謗法ぼうぼうの者は十方じゅうぼうの土ちとみへぬ、法滅尽經ほつめつじんきょうに云く

「謗法ぼうぼうの者は恒河沙こうがしゃ・正法しょうほうの者は一二のち小石せうせきと記しをき給たまう、千

年ねん・五百年に一人なんども正法しょうほうの者ありがたからん、世間せけんの罪つみに

依よつて悪道あくどうに墮おちる者は爪上そじょうの土ち・佛法ぶつぽうによつて悪道あくどうに墮おちる者は

十方じゅうぼうの土ち・俗じやくよりも僧そう・女にょより尼に多く悪道あくどうに墮おつべし。

此こゝに日蓮案にちれんじて云く、世よすでに末代まつだいに入つて二百余年にひゃくにじゅうねん・辺土へんちに生

をうけ、其その上下げせん賤せん・其その上うへ貧道ひんどうの身みなり。輪廻りんね六趣りくしゆの間ま・人天にんてんの

大王だいおうと生れて、万民ばんみんをなびかす事・大風たいふうの小木の枝を吹くがごとく
せし時も仏にならず、大小乗だいしょうじょう経の外凡・内凡の大菩薩ぼさつと修しゅうしあがり一劫いつくわう・二劫にこう・無量劫むりょうくわうを経て菩薩ぼさつの行を立て、すでに不退ふたいに入りぬべかりし時も・強盛じょうじょうの悪縁あくえんにおとされて仏にもならず、しらず大通だいつう結縁けちえんの第三類さんるいの在世ざいせいをもれたるか久遠くおん五百の退転たいてんして今に來れるか、法華經ほけきょうを行ぜし程に世間せけんの悪縁あくえん・王難なん・外道げどうの難なん・小乘しょうじょう經の難なん・なんどは忍しのびし程に権大乘こんだいじょう・実大乘經じつだいじょうきょうを極きわめたるやうなる道どう・綽てうしゆく・善導ぜんどう・法然等ほうねんがごとくなる悪魔あくまの身に入りたる者・法華經ほけきょうをつよくほめあげ、機きをあながちに下くだし「理深解微りじんげみ」と立て、
未有みいう一人得者いちにんとくしゃ、「千中無一等せんちゅうむいっとう」とすかししものに、無量生むりょうじうが問もん・恒河沙こうがしゃの度すかされて権經こんきょうに墮おちぬ権教こんきょうより小乘經しょうじょうきょうに墮おちぬ外道げどう・外典げてんに墮おちぬ結句けっくは悪道あくどうに墮おちけりと深く此れをしれり、日本国にほんこくに此れをしれる者は但日蓮にちれん一人なり。

これを一言も申出いすならば父母ふぼ・兄弟けいだい・師匠ししょうに国主こくしゅの王難わなん必ず来
るべし、いはずば・慈悲じひなきに・たりと思惟しゆいするに法華經ほけきょう・涅槃經ねはんきょう
等に此この二辺にへんを合せ見るに・いはずば今生こんじょうは事なくとも後生ごじょうは必
ず無間地獄むげんじごくに墮おつべし、いうならば三障さんしょう四魔しよま必ず競きそい起おこるべしとし
りぬ、二辺にへんの中には・いうべし、王難わなん等とう・出来しゅつたいの時は退轉たいてんすべくは
一度ひとたびに思おもひ止とるべしと、且しくやすらいし程ほどに宝塔品ほうとうぼんの六難なん九易くよくこれ
なり、我等われら程ほどの小力せうりきの者もの・須弥山しゆみせんはなぐとも、我等われら程ほどの無通むつうの者もの・乾
草けんそうを負おうて劫火ごうかには・やけずとも我等われら程ほどの無智むちの者もの・恒沙ごうしゃの經きょう經ぎょう
をば・よみをばうとも、法華經ほけきょうは一句いっく一偈いちげも末代まつだいに持たちがたとしと、
とかるるは・これなるべし、今度このたび強盛ごうじょうの菩提心ぼだいしんを・をこして退轉たいてんせ
じと願ねがしぬ。

既すでに二十余年にじゅうごねんが間ま・此この法門ほうもんを申もうすに日日にじつ・月月げつげつ・年年ねんねんに難なんかさ
なる、少少せうせうの難なんは・かずしらず大事だいじの難なん・四度しどなり二度にどは・しばらく

・をく王難すでに二度にをよぶ、今度は・すでに我が身命に及ぶ
其の上弟子といひ檀耶といひ・わづかの聴聞の俗人なんと来て
重科に行わる謀反なんどの者のごとし。

法華經の第四に云く「而も此經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、
況や滅度の後をや」等云云、第二に云く「經を讀誦し書持すること
有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云、第五に云く
「一切世間、怨多くして信じ難し」等云云、又云く「諸の無智の人の
悪口罵詈する有らん」等、又云く「國王・大臣・婆羅門・居士に向つて
誹謗し我が悪を説いて、是れ邪見の人なりと謂わん」と、又云く
「数数擯出見れん」等云云、又云く「杖木瓦石もて之を打擲せん」
等云云、涅槃經に云く「爾の時に多く無量の外道有つて、和合して共
に摩訶陀の王・阿闍世の所に往き、今は唯一の大悪人有り瞿曇沙門
なり、一切世間の悪人利養の爲の故に其の所に往集して眷屬と爲つ

て、

能く善を修せず、呪術の力の故に迦葉及び舍利弗・目・連を調伏

す」等云云、天台云く「何に況や未来をや。理化し難きに在るなり」

等云云、妙楽云く「障り未だ除かざる者を怨と為し、聞くことを喜

ばざる者を嫉と名く」等云云。南三・北七の十師・漢土無量の学者・

天台を怨敵とす、得一云く「咄いかな智公・汝は是れ誰が弟子ぞ。

三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を謗する」等云云、東春

に云く「問う在世の時許多の怨嫉あり仏滅度の後此経を説く時・何

が故ぞ亦留難多きや、答えて云く俗に良薬口に苦しと云うが如く、

此経は五乗の異執を廃して一極の

玄宗を立つ、故に凡を斥け聖を呵し、大を排い小を破り天魔を銘づ

けて毒虫と為し、外道を説いて悪鬼と為し、執小を貶して貧賤と

為し、菩薩を挫きて新学と為す、故に天魔は聞くを悪み、外道は耳

に逆い二乗は驚怪し、菩薩は怯行す、此くの如きの徒、悉く留雖を
為す多怨嫉の言、豈唐しからんや」等云云、顯或論に云く「僧統奏
して曰く、西夏に鬼弁婆羅門有り。東土に巧言を吐く禿頭沙門あ
り、此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す」等云云、論じて曰く「昔
齊朝の光統に聞き今は本朝の六統に見る、実なるかな法華に何況
すつをや」等云云、秀句に云く「代を語れば則ち像の終り未の始
め、地を尋ぬれば則ち唐の東、羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・
鬪争の時なり、経に云く猶多怨嫉・況滅度後と。此の言、良に
以有るなり」等云云。夫れ小児に灸治を加れば必ず母をあだむ。
重病の者に良薬をあたられば定んで口に苦しとうれう、在世猶
をしかり、乃至像末辺土をや、山に山をかさね波に波をたたみ難に
難を加へ非に非をますべし、像法の中には天台一人・法華經・一切經
をよめり。南北これをあだみしかども、陳隋・二代の聖主・眼前に

是非を明めしかば敵ついに尽きぬ、像の末に伝教一人・法華經。
一切經を仏説のごとく読み給へり、南都・七大寺蜂起せしかども
桓武・乃至嵯峨等の賢主・我と明らめ給いしかば又事なし、今末法
の始め二百余年なり況滅度後のしるしに鬪諍の序となるべきゆへ
に非理を前として濁世のしるしに召合せられずして流罪乃至寿にも
をよばんとするなり、

されば日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ
事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は、をそれをもいだし
ぬべし、定んで天の御計いにもあづかるべしと存ずれども、一分のし
るしもなし。いよいよ重科に沈む、還つて此の事を計りみれば我が
身の法華經の行者にあらざるか、又諸天・善神等の此の国をすてて
去り給えるか、かたがた疑はし、而るに法華經の第五の卷・勸持品
の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば、ほとをど世尊は大

妄語の人・八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし、
經に云く「諸の無智の人あつて・悪口罵詈し・刀杖瓦石を加う」等云
云、今の世を見るに日蓮より外の諸僧たれの人か法華經につけて
諸人に悪口罵詈られ刀杖等を加えらるる者ある、日蓮なくば此の
一偈の未來記は妄語となりぬ、「悪世の中の比丘は・邪智にして心
諂曲と又云く「白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること、六通
の羅漢の如し」此等の經文は今の世の念仏者・禅宗・律宗等の法師
なくば世尊は又大妄語の人、常在大衆中・乃至向国王・大臣・
婆羅門・居士等、今の世の僧等・日蓮を譏奏して流罪せずば此の
經文むなし、又云く「数数見擯出」等云云、日蓮・法華經のゆへに
度度ながされずば数数の二字いかんがせん、此の二字は天台・伝教
もいまだ・よみ給はず況や余人をや、末法の始のしるし恐怖悪世中
の金言の・あふゆへに但日蓮一人これをよめり、例せば世尊が

付法蔵經に記して云く、「我が滅後・一百年に阿育大王という王あるべし」摩耶經に云く「我が滅後・六百年に竜樹菩薩という人・南天竺に出ずべし」大悲經に云く「我が滅後・六十年に末田地という者・地を竜宮につくべし」此れ等皆仏記のごとくなりき、しからずば誰か仏教を信受すべき、而るに仏・恐怖悪世・然後末世・末法滅時・後・五百歳など正妙の二本に正しく時を定め給う、当世・法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん、

南三・北七・七大寺等・猶像法の法華經の敵の内・何に況や当世の禅律・念佛者等は脱るべしや、經文に我が身・普合せり御勘氣をかほれば、いよいよ悦びをますべし、例せば小乗の菩薩の末断惑なるが願兼於業」と申して・つくりたくなき罪なれども父母等の地獄に墮ちて大苦を・うつくるを見てかたのごとく其の業を造つて願つて

地獄じじくに墮おちて苦くるが同じ苦くるに代しろれるを悦よろこびとするがごとし、此これも又
かくのごとし当時とうじの責せはたうべくもなけれども未み来らいの悪あく道どうを脱だつす
らんとをもえば悦よろこびなり。

但ただし世せ間けんの疑うたがいといる、自じ心しんの疑うたがいと申もうし、いかでか天た扶すけ給たまわ
ざるらん、諸しよ天てん等とんの守しゆ護ご神しんは仏ぶつ前ぜんの御ぎ誓せい言ごんあり法ほけ華きやう經ぎやうの行ぎ者じやには、
さるになりとも法ほけ華きやう經ぎやうの行ぎ者じやとがうして早ぶつぜん早ぶつぜんに仏ぶつぜん前ぜんの御ぎ誓せい言ごんをと
げんとこそをばすべきに其その義ぎなきは我わがが身み・法ほけ華きやう經ぎやうの行ぎ者じやにあら
ざるか、此うたがの疑うたがは此うたがの書かの肝かん心しん・一いち期きの大事だいじなれば処しよ処じよにこれをか
く上うたが疑うたがを強つくして答こたをかまうべし。

季札きさつといひし者ものは心こころのやくそくをたがへしと、王わうの重おも宝たうたる劍けんを
徐君じゆくんが塚つかにかく・王尹わういんと云いひし人ひとは河かの水みづを飲のみんで金かねの鷺がも目めを水みづに
入れ・公胤こういんといひし人ひとは腹はらをさいて主君しゆくんの肝かんを入いる・此これ等らは賢人けんじんな
り恩おんをほうずるなるべし、況いわんや舎利弗しゃりふ迦葉か等らの大聖たいせいは・二に百ひやく五ご十じゆ戒かい

三千の威儀・一もかけず見思を断じ三界を離れたる聖人なり、
梵帝・諸天の導師・一切衆生の眼目なり、而るに四十余年が間、
永不成仏と嫌いすてはてられてありしが法華經の不死の良薬をな
めて・種の生い、破石の合い・枯木の華菓などならんとせるがご
とく仏になるべしと許されて・いまだ八相をとなえず・いかでか此の
經の重恩をば・ほうぜざらん、若しほうぜざれば彼彼の賢人にも・を
とりて不知恩の畜生なるべし、毛宝が龜はあをの恩をわすれず
昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中にささげたり、
畜生すら猶思をほうぜず何に況や大聖をや、阿難尊者は斛飯王の次
男・羅喉羅尊者は淨飯王の孫なり、人中に家高き上証果の身とな
つて成仏を・をさへられたりしに八年の靈山の席にて山海慧・蹈七
宝華なんと如来の号をさづけられ給う、若し法華經ましまさずば、
いかに・いえたかく大聖なりとも誰か恭敬したてまつるべき、夏の桀

殷いんのちゆうの紂ちゆうと申まをすは万乘ばんじやうの主しゆ・土民どみんの帰依きいなり、しかれども政せいあしくして世よをほろぼせしかば今いまに・わるきものの手本てほんには桀紂けつちゆう・桀紂けつちゆうとこそ申まをせ、下賤げせんの者もの・癩病らいびやうの者ものも桀紂けつちゆうのごとしといはれぬればられたりと腹はらたつなり、千二百せんにひゃく・無量むりやうの声聞しやうもんは法華經ほけきやうましまさずば誰か名なをも・きくべき其その音こえをも習ならうべき、一千いちせんの声聞しやうもん・一切經いっさいきやうを結集けつじゆうせりとも見る人ひとよもあらず、まして此等これらの人人ひとびとを繪像えいざう・木像ぼざうにあらはして本尊ほんぞんと仰あおぐべしや、此これ偏へんに法華經ほけきやうの御力おんちからによつて一切いっさいの羅漢らかん歸依きいせられさせ給たまうなるべし、諸もろの声聞しやうもん・法華ほつげを・はなれさせ給たまいなば魚いさなの水みづをはなれ猿さるの木きをはなれ小兒しやうにの乳ちちをはなれ民たみの王わうを・はなれたるが・ごとし、いかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをすて給たまうべき、諸もろの声聞しやうもんは爾前にぜんの經經きやうきやうにては肉眼にくげんの上に天眼てんげん・慧眼えげんをう。法華經ほけきやうにして法眼ほうげん・仏眼ぶつげん備そなわれり。十方じゆうぽう世界せかいすら猶照見なおしやうけんし給たまうらん、何いかに況いわんや此この娑婆世界しあばせかいの中法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを知見ちけんせられざるべ

しや、設にちれんい日蓮・悪人あくにんにて一言・一言・一年・二年・一劫・二劫・乃至百
せんまん 千万億劫・此等これらの声聞しやうもんを悪口あくく・罵詈めりし奉り刀杖たてまつとうじやうを加えまいらす
色なりとも法華經ほけきやうをだにも信仰しんじやうしたる行者ぎやうじやならばすて給たまうべから
ず、譬たとへば幼おさなきもの稚の父母ふぼをのる父学ふがくこれを・すつるや、梟きやうちやう鳥が母を
食う、母これをすてず・破鏡父はけいをがいす父これにしたがふ、畜生ちくじやうす
ら猶なほかくのごとし大聖たいせい・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを捨つべしや、されば四大
しやうもん 声聞しやうもんの領解りやうげの文ぶんに云いく「我等われら今は真まことに是こゝれ声聞しやうもんなり仏道ぶつどうの声を
もつゝいささい 以て一切いっさいをして聞きかしむ我等われら今は真まことに阿羅漢あらかんなり諸もろもろの世間せけん天人てんにん・魔
・梵おんに於おて普あまねく其そのの中に於おて・心こゝろに供養くやうを受うくべし、世尊せそんは大恩おほいまい
ます希有けうの事を以もつて憐愍れんみん教化きやうして我等われらを利益りやくし給たまう、無量億劫むりやうに
も、誰たれか能よく報むかずる者ものあらん。手足てあしをもつて供給くきやうし頭頂かぶたかみをもつて礼
敬けいし一切いっさいをもつて供養くやうすとも伴報ばんばうずること能あたわじ、若もしは以もつて
頂戴ちやうだいし両肩りやうけんに荷負かおして恒沙劫こつじやに於おいて心を尽きして恭敬きやうけいし又美膳びぜん・

むりょう 無量の宝衣、及び諸の臥具・種種の湯薬を以てし、牛頭梅檀、及び
もろもろ ちんぼう もろもろ ちんぼう 諸の珍宝を以て塔廟を起て宝衣を地に布き斯くの如き等の事を
もつ もつ 以て供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わじ」等云
云。

もろもろ しょうもん 諸の声聞等は前四味の経経にいはくぞの呵嘖を蒙り人天・
たいえ 大会の中に於て恥辱がましき事・其の数をしらず、しかれば迦葉
そんじや ていきゆう 尊者の淳泣の音は三千をひびかし、須菩提尊者は亡然として手の
いちばつ 一鉢をすつ。舍利弗は餌食をはき富楼那は画瓶に糞を入ると嫌わ
る。世尊、鹿野苑にしては阿含経を讚歎し二百五十戒を師とせよな
んど懇懃にほめさせ給いて、今又いつのまに我が所説をばかうはそ
しらせ給うと二言・相違の失とも申しぬべし、例せば世尊・提婆達多
なんじぐにん 汝愚人・人の唾を食うと罵詈せさせ給しかば毒箭の胸に入るが
ごとく・をもひて・うらみて云く「瞿曇

は仏陀にはあらず我は斛飯王の嫡子・阿難尊者が兄・瞿曇が一類なり、いかにあしき事ありとも内内・教訓すべし、此等程の人天・大会に此程の大禍を現に向つて申すもの大人・仏陀の中にあるべしや、されば先先は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生生世世に大怨敵となるべしと誓いしぞかし、此れをもつて思うに今諸の大^{おんてき}声聞は本と外道・婆羅門の家より出でたり、又諸の外道の長者なりしかば諸王に帰依せられ諸檀邦にたつとまる、或は種姓・高貴の人もあり、或は富福・充滿のやからもあり、而るに彼彼の栄官等をうちすて慢心の瞳を倒して俗服を脱ぎ壊色の糞衣を身にまとひ白^{びやくはつ}・弓^{きやうせん}・箭等をうちすて一鉢を手ににぎり貧人・乞^{こうがい}丐^{しんみょう}なんどの・ご^ごとくして世尊につき奉り風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりし・ありさまなるに五天・四海・皆外道の弟子・檀那なれば仏すら九横の大難にあひ給ふ、所謂提婆が大石を

とばせし阿闍世王の酔象を放ちし、阿耨多王の馬麦・婆羅門

城のこんづ・せんしや婆羅門女が鉢を腹にふせし、何に況や所化の
弟子の數難申す計りなし、無量の釈子は波瑠璃王に殺され千万の
眷属は醉象にふまれ、華色比丘尼は提婆にがいせられ迦虞提尊者
は馬糞にうづまれ、目・尊者は竹杖にがいせらる、其の上六師同心
して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云く「瞿曇は閻浮第一の大悪人
なり、

彼がいたる処は三災・七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の
衆木をあつめたるがごとし、瞿曇がところには衆悪をあつめた
り、所謂迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり、人身を受けたる者は忠
孝を先とすべし、彼等は瞿曇にすかされて父母の教訓をも用いず、
家をいで王法の宣旨をもそむいて山林にいたる、一国に跡をとどむ
べき者にはあらず、されば天には日月・衆星・変をなす地には衆天
さかんなりなんと。うつたう、堪べしとも。おぼえざりしに又うちそ

うわざわいと仏陀にもうちそい。がたくて。ありしなり、人天大会の衆会の砌にて時時呵嘖の音を

ききしかば。いかにあるべしとも。おぼへず只あわつる心のみなり、

其の上大の大難の第一なりしは。浄名経の「其れ汝に施す者は

福田と名けず。汝を供養する者は三悪道に墮す」等云云、文の心は

仏・庵羅苑申すところ。に。をはせしに梵天・帝釈・日月・四天・三界

諸天・地神・竜神等。無数恒沙の大会の中にして云く須菩提等の

比丘等を供養せん天人は三悪道に墮つべし、此等をうちきく天人。

此等の声聞を供養すべしや、詮ずるところは仏の御言を用つ

て諸の二乗を殺害せさせ給うかと思ゆ、心あらん人人は仏をも。う

とみぬべし、されば此等の人人は仏を供養したてまつりしついでに。

こそ。わづかの身命をも扶けさせ給いしか、されば事の心を案ずる

に四十余年の経経のみとかれて、法華八箇年の所説なくて、御

入滅にゆうめつならせ給たまいたらましかば、誰これらの人か此等の尊者そんじやをば供養くようし奉たてまつるべき現身げんしんに餓鬼道がきにこそをばすべけれ。

而しるに四十余年よんじゅうよねんの経経きやうぎやうをば東春だいにちりんの大日輪だいにちりん・寒氷しやうめつを消滅しょうめつするが

ごとく無量むりやうの草露そうろうを大風たいふうの零落れいらくするがごとく一言いちじ一時いちじに未顕みけん眞実しんじつ

と打ちけし、大風たいふうの黒雲くろぐもをまき大虚おおそらに満月まんげつの処しよするがごとく青天せいてんに

日輪にちりんの懸かり給たまうがごとく「世尊せそんは法久ほうく後ご、要当やうとう説眞実せつしんじつと照てらさせ給たまい

て、華光げこう如来にやらい・光明くわうみやう如来にやらい等らと舍利しゃり弗ほつ・迦葉かしよう等らを赫赫かくかくたる日輪にちりん・明明みやうみやう

たる月輪げつりんのごとく鳳文ほうぶんにしるし、龜鏡きつきやうに浮うべられて侯そつらへばこそ如来にやらい

滅後めつごの人天にんてんの諸檀那しよだんな等らには仏陀ぶつたのごとくは仰あおがれ給たましか。水みづすまば

月影げつえいををしむべからず風かぜふかば草木そうもくなびかざるべしや、法華ほけきやう経きやうの

行者ぎやうじやあるならば此等これらの聖者せいじやは大たい火かの中なかをすぎても大石おおいしの中なかを

をりてもとぶらはせ給たまうべし、迦葉かしようの人定にんぢやうもことにこそよれ、いか

にと・なりぬるぞ。

いぶかしとも申すばかりなし、「後・五百歳」のあたらざるか「広宣
流布」の妄語となるべきか是が法華經の行者ならざるか、法華經を
教内と下して別伝と称する大妄語の者をまほり給うべきか、捨閉
閣抛と定めて法華經の門をとぢよ巻をなげすてよと・ゑりて法華堂
を失える者を守護し給うべきか、仏前の誓いはありしかども濁世の
大難のはげしさをみて諸天下り給わざるか、日月・天にまします
須弥山いまもくづれず海潮も増減す四季もかたのごとく・たがは
ず・いかになりぬるやらんと大疑いよいよ・つもり候。

又諸大菩薩・天人等のごときは爾前の經經にして記別を・うる
やうなれども水中の月を取らんと、するがごとく影を体とおも
うがごとく・いろかたちのみあつて実義もなし、又仏の御恩も深く
深からず、世尊初成道の時はいまだ説教もなかりしに法慧菩薩・
功德林菩薩・金剛幢菩薩　金剛蔵菩薩等なんと申せし六十余の

大菩薩・十方の諸仏の国土より教主釈尊の御前に来り給いて賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請にをもむいて十住・十行・十回向・十地

等の

法門を説き給いき、此等の大菩薩の所説の法門は釈尊に習いたて

まつるにあらざ、十方世界の諸の梵天等も来つて法をとく又釈尊

にならいたてまつらざ、総じて華嚴会座の大菩薩・天竜等は釈尊

以前に不思議解脱に任せる大菩薩なり、釈尊の過去・因位の

御弟子にや有るらん・十方世界の先仏の御弟子にや有るらん、

一代教主・始成の正覚の仏の弟子にはあらず、阿含・方等・般若の

時・四教を仏の説き給いし時こそ・やうやく御弟子は出来して候へ

此も又・仏の自説なれども正説にはあらず、ゆへ・いかなとなれば

方等・般若の別・円三教は華嚴經の別・円・二教

の義趣ぎしゆをいはず、彼の別べつ・円えん・二教にぎょうは教主きょうしゅ釈尊じやくそんの別べつ・円えん・二教にぎょうにはあ
らず、法慧等ほうえの別べつ・円えん・二教にぎょうなり、此等こゝらの大菩薩ほさつは人目ひとめには仏ぶつの御弟子おんでし
かとは見ゆれども仏ぶつの御師おんしともいぬべし、世尊せそん彼の菩薩ほさつの所説しよせつ
を聴聞ちやうもんして智發ちふつして後か・重ねて方等ほうとう・般若はんんにやの別べつ・円えんをとけり、色もか
わらぬ華嚴經けこんぎやうの別べつ・円えん・二教にぎょうなり、されば此等こゝらの大菩薩ほさつは釈尊じやくそんの師
なり、華嚴經けこんぎやうに此等こゝらの菩薩ほさつをかずへて善知識ぜんちしきととかれしはこれな
り、善知識ぜんちしきと申すは一向いっかう・師しにもあらず一向いっかう・弟子でしにもあらずある
事なり、蔵・通・二教にぎょうは又別べつ・円えんの枝流えだりゅうなり別べつ・円えん・二教にぎょうをしる人必
ず蔵・通・二教にぎょうをしるべし、人の
師しと申すは弟子でしのしらぬ事を教しゆえたるが師しにては侯うなり、例せば仏
より前の一切いっさいの人天にんてん・外道げどうは二天にてん・三仙さんせんの弟子でしなり、九十五種きゅうじふごしゆまで
流派りゅうはいしたりしかども三仙さんせんの見みを出いでず、教主きょうしゅ釈尊じやくそんもかれに習ならい伝
えて外道げどうの弟子でしにてましませしが苦行くぎやう・樂行らくぎやう・十二年じふにねんの時とき・苦く・空くう・

無常・無我の理をさとり出してこそ外道の弟子の名をば離れさせ
給いて無師智とはなのらせ給いしか、又人天も大師とは仰ぎまいら
せしか、されば前四味の間は教主釈尊・法慧菩薩等の御弟子なり、
例せば文殊は釈尊九代の御師と申すがごとし、つねは諸経に不説
一字と・とかせ給うも・これなり。

仏・御年・七十二の年・摩竭提国・靈鷲山と申す山にして
無量義経を・とかせ給いしに、四十余年の経経をあげて、杖葉をば
其の中におさめて四十余年・未顕真実と打消し給うは此なり、此の
時こそ諸大菩薩・諸天人等はあはてて実義を請せんとは申せしか、
無量義経にて実義と・をばしき事一言ありしかども・いまだまこと
なし、譬へば月の出でんとして其の体東山にかくれて光り西山に及
べども諸人月体を見ざるがごとし、法華経・方便品の略開三顯一
の時・仏略して一念三千・心中の本懷を宣べ給う、始の事なればほ

ととぎすの初音をねをびれたる者の一音ひとこえききたるがやうに月の山の半はを出いでたれども薄雲のをほへるがごとくかそかなりしを舍利弗等・驚おどろいて諸天・竜神・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等しやりほつ其その数恒沙こつじやの如し仏を求むる諸の菩薩ほさつ大数八万有り・又諸の万億もろもろほさつ国の転輪聖王てんりんじやうおうの至いたれる合掌がっじやうして敬心を以て具足もつぐそくの道を聞かんと欲ほす等とは請しよぜしなり、文の心は四味・三教よんじゆうよねん・四十余年の間

いまだ・きかざる法門ほうもんうけ給たまはらんと請しよつぜしなり、この文ぶんに具足ぐそくの
 道みちを聞きかんと欲ほすと申もうすは大教だいけうに云いく「薩さつとは具足ぐそくの義ぎに名なく」等
 云云、無依むゑむとくだいじよ無得むとくだいじよ大乘だいじよ四論げんぎ玄義げんぎ記きに云いく「沙さとは訳わけして六ろくと云いう胡法こほう
 に六ろくを以もつて具足ぐそくの義ぎと為なすなり」等云云。吉蔵きちぞうの疏じよに云いく「沙さとは
 翻ほんじて具足ぐそくと為なす」等云云、天台てんだいの玄義げんぎの八はちに云いく「薩さつとは梵語ほんご、
こ此こに妙めうと翻ほんずるなり」等云云、付法蔵ふほうぞうの第十三真言しんごん・華嚴けごん・諸宗しよしゆつの
 元祖げんそ・本地ほんちは法雲ほううんじざい自在じよらい王如来にょらい・迹りゆもに竜猛りゆも菩薩ぼさつ・初他たいせいの大聖たいせいの
 大智度論だいちどろん千卷せんけんの肝心かんじんに云いく「薩さつとは六ろくなり」等云云、妙法蓮華經みよほうれんげきよと
 申もうすは漢語かんごなり、月支がつしには薩達磨さだるま分陀利伽蘇多覽ぶんたれきやそたらんと申もうす、善無畏ぜんむゐ
 三蔵さんぞうの法華經ほけきよの肝心かんじん真言しんごんに云いく「曩謨三曼陀沒駄南阿暗惡のうまくさんまんたぼだなんあんなく
 さるばほだきのう さきしゆびや ぎやぎやのうさんそば 如虛あらきしやに 離塵さつり だるま
 薩縛勃陀枳攘知娑乞菊毘耶見さつぱくはつたしじやうきやくばんこく 曩三姿縛空性羅乞叉のうさんそば 如虛 離塵
 浮陀哩迦蘇駄覽經惹吽ふんだりきやそたらんきよじやうばんこく 発喜縛日羅固羅乞叉はつぎふざら 堅固 羅乞叉 護吽無願娑婆詞成就ごん 護 無願 娑婆 詞成就」
 此の真言しんごんは南天竺てんじくの鉄塔てつたつの中の法華經ほけきよの肝心かんじんの真言しんごんなり、此の真言しんごん

の中に薩哩達磨と申すは正法なり薩と申すは正なり正は妙なり妙は正なり正法華・妙法華是なり、又妙法蓮華經の上に南無の二字を・をけり南無妙法蓮華經これなり、妙とは具足・六とは六度万行、諸の菩薩の六度万行を具足するやうを・きかんとをも、具とは十界互具・足と申すは一界に十界あれば当位に余界あり満足まんぞくの義なり、此の經一部八卷

・二十八品・六万九千三百八十四字・一一に皆妙の一字を備えて三十二相・八十種好の仏陀なり、十界に皆己界の仏界を顕す妙樂いわ云く「尚仏果を具す、余果も亦然り」等云云、仏此れを答えて云く、「衆生をして仏知見を開か令めんと欲す」等云云、衆生と申すは舍利弗・衆生と申すは一闍提・衆生と申すは九法界・衆生無邊誓願度・此に満足す、「我本誓願を立つ一切の衆をして我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す我が昔の願せし所の如き今

は已すに満足まんぞくしぬと等と云い云い。

諸しよ大だい菩薩ぼさつ・諸しよ天てん等と

此このの法門ほうもんををきひて

領解りょうげして

云いく

「我等われら昔むかしより

来数このかたしばしば 世尊せそんの説せつを

聞ききたてまつれども未いまだ曾かつて

是かくの如ごとき

深妙しんめうの上のうへ

法はふを開ひらかずと等と云い云い、

伝教でんぎょう大師だいし云いく

「我等われら昔むかしより

来数このかたしばしば

世尊せそんの説せつ

を聞きくと謂おもうは

昔法華經ほけきょう

の前・華嚴等の大法を説くを聞けども・となり、未だ曾て是くの
如き深妙の上法を開かずと謂うは未だ法華經の唯一仏乗の教を聞
かざるなりと等云、華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸
大乘経はいまだ一代の肝心たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗
作仏・久遠実成等をいまだきかずと領解せり。

四一 開目抄下

210P

又、今よりこそ諸大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主釈尊の
御弟子にては侯へ、されば宝塔品には、此等の大菩薩を仏・我が
御弟子等とをばすゆへに諫曉して云く「もろもろしたいしゅう
滅度の後、誰か能く此の経を護持し読誦する今・仏前に於て自ら

誓言を説け」とは。したたかに仰せ下せしか、又諸大菩薩も「譬えば
大風の小樹の枝を吹くが如し」等と吉祥草の大風に随い河水の
大海へ引くがごとく仏には随いまいらせしか。

而れども靈山日浅くして夢のごとく。うつつならずありしに

証前の宝塔の上に起後の宝塔あつて十方の諸仏。来集せる皆我が

分身なりとなのらせ給い宝塔は虚空に釈迦。多宝坐を並べ日月の青

天に並出せるが如し、人天大会は星をつらね分身の諸仏は大地の

上宝樹の下の師子のゆかにまします、華嚴經の蓮華蔵世界は十方

・此土の報仏。各各に国国にして彼の界の仏。此の土に來つて分身と

なのらず此の界の仏。彼の界へゆかず但法慧等の大菩薩のみ互いに

来会せり、大日經。金剛頂經等の八葉九学三十七尊等。大日如来

の化身とはみゆれども其の化身。三身円満の古仏にあらず、大品經

の千仏。阿弥陀經の六方の諸仏いまだ来集の仏にあらず大集經の

来集らいじゅうの仏ぶつ・又分身ふんじんならず、金光明經こんこうみょうきょうの四方しほうの四仏しぶつは化身けしんなり、総そうじて一切經いっさいきょうの中に各修かくしゅう・各行かくぎょうの三身さんじん円満えんまんの諸仏しよぶつを集めて我が分身ふんじんと

はとかれず、これじゆりようほん 寿命量品の遠序おんじよなり、始成しじよつ四十余年よんじゆつよねんの釈尊しゃくそんが一劫いつこう・十劫等じじゆ・已前いぜんの諸仏しよぶつを集めて分身ふんじんととかる。さすが平等びやうどう意趣いしゆにもじゆつぼうにじゆつまんずをじゆつまんびただしくをじじよつどろかし、又始成しじよつの仏ぶつならば所化しよけ・十方じじゆつぼうにてんたいい充満ちゆうまんすべからざれば分身ふんじんの徳とくは備そなわりたりとも示現じげんして益えきなし、天台てんたい云いく「分身ふんじん既に多まさし当まさに知るべし成仏じじよぶつの久くしきことをたいえ等云云、大会たいえのをたいえどろきし意いをかたいえかれたり。

其その上に地涌じゆせんがい千界せんがいの大菩薩ぼさつ・大地だいちより出来しゆつたいせり釈尊しゃくそんに第一だいいちの御弟子おんでしとをおんでしぼしき普賢ふげん・文殊もんじゆ等とうにもおんでしにおんでしるべくもなし、華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんや・法華ほけきよう經きやうの宝塔ほうとう品ほんにほうとう来集らいじゆつする大菩薩ぼさつ・大日だいにち經きやう等とうの金剛こんかう薩さつ・等とうの十六じふろくの大菩薩ぼさつなんども此こゝの菩薩ぼさつにぼさつ対当たいとうすればみこうの群ぐんる中ちゆうに帝釈たいしゃくの来きたり給たまうが如ごとし、山人やまかつに月郷げつけい等とうのまじはるにたまたことならず、補処ふしよのみろく彌勒なほめいすら猶なほ迷惑めいわくせり何いかに況いわんやや其いの已下いをいや、此こゝの千世界せかいの大菩薩ぼさつの中ちゆうに四人たいせいの大聖たいせいまします所謂いわゆる・上行じよつぎやう・無辺行むへんぎやう・淨行じよつぎやう・安立行あんりちうぎやう

なり、此の四人は虚空・靈山の諸菩薩等・眼もあはせ心もよばず、華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の十六大菩薩等も此の菩薩に対すれば翳眼のもの、日輪を見るが如く海人が皇帝に向い奉るが如し、大公等の四聖の衆中にありしにたり、商山の四皓が忠節に仕えしにことならず、巍巍堂堂として尊高なり、釈迦・多宝・十方の分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし、弥勒菩薩・心に念言すらく、我は仏の太子の御時より三十成道・今の靈山まで四十二年が間・此の界の菩薩・十方世界より来集せし諸大菩薩皆しりたり、又十方の淨穢土に或は御使い・或は我と遊戯して其の国に大菩薩を見聞せり、此の大菩薩の御師などはいかなる仏にてや・あるらん、よも此の釈迦・多宝・十方の分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそ、をはずらめ、雨の猛を見て竜の大なる事をしり華の大なるを見て池のふ

かきことは・しんぬべし、此等これらの大菩薩ぼさつの来る国・又誰たれと申もつす仏にあ
いたてまつり・いかなる大法だいほうをか習修しゅうじゅうし給たまうらんと疑うたがいいし、あま
りの不審ふしんさに音こえをもいだすべくもなけれども仏力ぶつりきにやありけん、
彌勒みろく菩薩ぼさつ疑うたがいつて云いわく「無量むりょう千万億せんまんの大衆たいしゅうの諸もろもろの菩薩ぼさつは昔いまより
未いまだ曾かつて見みざる所ところなり是この諸もろもろの大威徳いたく

の精進しんじゆんに菩薩衆ぼさつしゆは誰か其その爲ために法ほふを説といて教化きやうけして成就じゆじゆせる、誰
に従したがつてか初めて発心ほつしんし何れいすれの仏法ぶつぽうをか称揚しやうやうせる、世尊せそん・我昔われむかしより
来このかた未だ曾かつて是この事ことを見ず、願ねがは其その所従しよじゆの国土こくどの名号みやうごうを
説ときたまえ、我常しやうじくに諸国しよこくに遊あそべども未だ曾かつて是この事ことを見ず、我れ
此この衆しゆの中に於おいて乃いまし一人ひとりをも識しらず忽然こつねんに地ちより出いでたり願ねがく
は其その因縁いんねんを説ときたまえ」等云とん云ん、天台てんだい云いく「寂場じやくじやうより已降このかた今座
已往いおう十方じゆつぽうの大士だいし来会らいえ絶たえず限くる可べからずと雖いへども我補处ふしよの智力ぢりよくを
以もつつて悉しつく見悉けんく知る、而しかども此この衆しゆに於おいて一人ひとりをも識しらず然しか
に我れ十方じゆつぽうに遊戯ゆうげして諸仏しよぶつに奉たいし衆しゆに快たいく識知しちせらる」等云
云ん、妙楽みやうらく云いく「智人ちじんは起たちを知る蛇じやは自ら蛇じやを織みる」等云云、經釈きやうしやく
の心こころ分明ぶんめいなり詮せんずるところは初成道しよじやうどうよりこのかた此この土十方じゆつぽう
にて此等こゝらの菩薩ぼさつを見たてまつらず・きかずと申まうすなり。

仏・此この疑うたがいいを答こたへて云いく「阿逸多あいつた・汝等なんじら昔むかしより未だ見いざる所ところの

者は我是この袈婆しゃば世界せかいに於おいて阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを得おわ已こつて是この
諸もろもろの菩薩ぼさつを教化きょうけし示導じどうして其その心こころを調伏じょうぶくして道みちの意いを發おこさしめ
たりこ等ら、又また云いく「我伽耶城ががや菩提樹下ぼだいじゆげに於おいて坐まして最正覺しようかくを成じやうずる
ことを得むじょうて無上ぼうりんの法輪ぽんを転しかじ爾すなわこれして乃きち之これを教化きょうけして初はつめて道心どうしんを
發はつさしむ今いま皆みな不退ふたいに任まかせり、乃至な至いた我久遠くおんより来こ是等これらの衆しゆを教化きょうけ
せりこ等ら云いく、此こに弥勒みろく等らの大菩薩だいぼさつ大だいに疑うたがいをもう、華嚴經けこんきやうの時とき・
法慧等ほうえの無量むりやうの大菩薩だいぼさつあつまるいかなる人人ひとびとなるらんとをもへば
我われが善知識ぜんちしきなりとをほせられしかば、さもやとうちをもひき、
其その後の大宝坊びやくろち・白鷺池びやくち等の来会らいえの大菩薩だいぼさつも・しかのごとし、此この大
菩薩ぼさつは彼等かれらにはにるべくもなき・ふりたりげにまします定じやうめて釈尊しゃくそん
の御師匠ししやうかなんどおぼしきを令し初發道心しつはつどうしんとて幼稚ようちのものども・なり
しを教化きょうけして弟子でしとなせりなんど・をほせあれば・大なる疑うたがなる
べし、日本にほんの聖德太子しやうとくたいしは人王第三十二代にんおうだいじふにじふにだい・用明ようめい

天皇の御子なり、御年六歳の時・百濟・高麗・唐土より老人どもものわたりたりしを六歳の太子・我が弟子なりと・をほせありしかば彼の老人ども又合掌して我が師なり等云云、不思議なりし事なり、外典に申す・或者道をゆけば路のほとりに年三十計りなる・わかもののが八十計りなる老人を・とらへて打ちけり、いかなる事ぞと・とえ
ば此の

老翁おとうは我が子なりなんど申すと・かたるにもにたり、されば弥勒みろく
 菩薩ぼさつ等うたが疑いつて云く「世尊せそん・如来太子にょらいたいし為りし時しやく・釈しやくの宮みやを出いで伽耶城がやじょう
 を去ること遠とほからずして道場どうじょうに坐まして阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを成じょうず
 ることを得たま給たまえり、是こより已この来かた始めて四十余年よんじゅうよねんを過すぎたり、世尊せそん・
 云何なんぞ此この少時せうじに於おいて大おいに仏事ぶつじを作なし給たまえる」等云云、一切いっさいの
 菩薩ぼさつ始はめ華嚴經けこんきようより四十余年よんじゅうよねん・会くわい会くわいに疑うたがをまうけて一切衆生いっさいしゆじょうの
 疑網ぎもうをはらす中に此この疑うたが・第一だいいちの疑うたがなるべし、無量義經むりょうぎきようの大おほ
 莊嚴等そうごんの八万はちまんの大士だいにし・四十余年よんじゅうよねんと今いまとの歴劫りゃくごう・疾成しつじょうの疑うたがにも超過ちようか
 せり、觀無量壽經くわんむりょうじゆきように韋提希夫人いだいけふじんの阿闍世王あじゃせが
 提婆だいばにすかされて父ちちの王わうをいましめ母ははを殺ころさんとせしが耆婆月光ぎばがっこうに
 ・をどされて母ははをはなちたりし時とき・仏ぶつを請しよじたてまつて・まづ第一だいいちの
 間に云く「我れ宿むかし何なにの罪つみあつて此この悪子あくこを生なむ世尊せそん・復またた何等なんらの
 因縁いんねん有あつて提婆達多だいばだつたと共に眷属けんぞくとなり給たまう」等云云、此この疑うたがの中

に「世尊復た何等の因縁有つて」等の疑は大なる大事なり、輪王は敵と共に生れず帝釈は鬼とともならず仏は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨と共にはまします還つて仏にはまします。

ざるかと疑うなるべし、而れども仏答え給はず、されば觀經を讀誦せん人・法華經の提婆品へ入らずば、いたづらごととなるべし、大涅槃經に迦葉菩薩の三十六の問もこれには及ばず、されば仏・此の疑を晴させ給はずば、一代の聖教は泡沫にどうじ一切衆生は疑網にかかるべし、壽量の一品の大切なるこれなり。

其の後・仏・壽量品を説いて云く、「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給えりと謂えり」等云云、此の經文は始め寂滅道場より終り法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり、「然るに善男子・我れ

實じつに成じやう仏ぶつしてより

已この來かた・無む量りやう無む辺へん百せん千まん萬まん億いふ那な由ゆ佗た劫かなりり等とう云うん云ん、此この文ぶんは華け嚴こん經きやうの

「三さん処じよの始し成じやう正しやう覺かく阿あ含こん經きやうに云いく、初じゆ成つみ淨じよ名み經きやうの始し坐ざ仏ぶつ樹じゆ

大だい集じつ經きやうに云いく、始し十じゆ六ろく年ねん大だい日にち經きやうの我わ昔せき坐ざ道だう場じやう等とう・仁にん王わう經きやうの二

十じゆ九く年ねん無む量りやう義ぎ經きやうの我わ先せん道だう場じやう法ほ華け經きやうの方ほう位い品ひんに云いく、我わ始し坐

道だう場じやう等とうを一言いちごんに大だい虚こ妄もうなりと・やぶるもんなり。

此の過去常顯るる時・諸仏皆釈尊の分身なり爾前・迹門の時は

諸仏・釈尊に肩を並べて各修・各行の仏なり、かるがゆへに諸仏を

本尊とする者・釈尊等を下す、今華嚴の台上・方等・般若・大日經

等の諸仏は皆釈尊の眷属なり、仏三十成道の御時は大梵天王・

第六天等の知行の袈婆世界を奪い取り給いき、今爾前・迹門にして

十方を淨土とがうして此の土を穢土ととかれしを打ちかへして此

の土は本土なり十方の淨土は垂迹の穢土となる、仏は久遠の仏な

れば迹化・他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり、一切經の中に

此の壽量品ましまさずば天に日月の・国に大王

の・山河に珠の・人に神のなからんがごとくして・あるべきを華嚴

・真言等の權宗の智者と・をばしき澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往

・權宗の人人・且は自の依經を讚歎せんために・或は云く「華嚴經の

教主は報身・法華經は応身」と・或は云く「法華壽量品の仏は

むみょう へんいき だいにちきょう 無明の辺域・大日経の仏は明の分位と等云云、雲は月をかくし・臣
けんじん 賢人をかくす人讚すれば黄石も玉とみへ諛臣も賢人かとをば
じよくせ がくしゃ 彼等の語義に隠されて寿量品の玉を翫ば
てんだいしゅう ひとびと ず、又天台宗の人人もたほらかされて金石・一同のをもひをなせ
ひとびと 人人もあり、仏・久成にましまさずば所化の少かるべき事を
わきまう 弁うべきなり、月は影を慳ざれども水なくばうつるべからず、仏
ししゅう 衆生を化せんとをばせども結縁うすければ八相を現ぜず、例せ
もろもろしゅうせん ししゅう ば諸の声聞が初地・初住にはのぼれども爾前にして自調自度なり
みらい しかば未来の八相をごするなるべし、しかれば教主釈尊始成なら
ほか ば今・此の世外の梵帝・日月・四天等は劫初より此の土を領す
よんじゅうよねん ぶつでし れども四十余年の仏弟子なり、靈山・八年の法華結縁の衆今まい
しゆくん りの主君にをもひつかず久住の者にへだてらるるがごとし、今久遠
じつじょう 実成あらはれぬれば東方の薬師如来の日光・月光・西方阿弥陀如来

の観音・勢至・乃至十方世界の諸仏の御弟子大日・金剛頂等の両
部の大日如来の御弟子の諸大菩薩・猶教主釈尊の御弟子なり、
諸仏・釈迦如来の分身たる上は諸仏の所化申すにをよばず何に況や
此の土の劫初より・このかたの日月・衆星等・教主釈尊の
御弟子にあらずや。

而るも天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舎・成実・

律宗は三十四心・断結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が

迷惑して我が身は民の子とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗・

三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり、法相・三論は勝心身に

にたる仏を本尊とす天王の太子・我が父は侍とをもうがごとし、

華嚴宗・真言宗は釈尊を下げて慮舎那の大口等を本尊と定む天子

たる父を下げて種姓もなき者の法王のごとくなるに・つけり、

浄土宗は

釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもうて教主をすてたり、

禅宗は下賤の者・一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、仏をさげ

経を下す此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらず人皆

禽獸に同ぜしが如し、寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ

不知恩の者なり、故に妙楽云く「一代教の中未だ曾て遠を顕さず、

父母の寿知らずんばある可からず若し父の寿の遠きを知らずんば復父統の邦に迷う、徒に才能と謂うとも全く人の子に非ず」等云云、妙楽大師は唐の末・天宝年中の者なり三論・華嚴・法相・真言等の諸宗・並に依経を深くみ広く勘えて寿量品の仏をしらざる者は父統の邦に迷える才能ある畜生とかけるなり、徒謂才能とは華嚴宗の法蔵・澄觀・乃至・真言宗の善無畏三蔵等は才能の人師なれども子の父を知らざるがごとし、伝教大師は日本顕密の元祖・秀句に云く「他宗

所依の経は一分仏母の義有りと雖も然も但愛のみ有つて嚴の義を闕く、天台法華宗は嚴愛の義を具す一切の賢聖・学・無学及び菩薩心を發せる者の父なり」等云云、真言・華嚴等の経経には種熱脱の三義・名字すら猶なし何に況や其の義をや、華嚴・真言経等の一生初地の即身成仏等は経は権経にして過去をかくせり、種をしら

ざる脱なれば超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗宗・互たがいに程を諍あらそう予此をあらそはず但經に任まかすべし、法華經の種よに依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり、華嚴經・乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子・皆一念三千なり天台智者大師・一人・此の法門を得給えり、華嚴宗の澄觀・此の義を盗んで華嚴經の心如工画師の文のた神とす、真言・大日經等には二乗

さぶつ くおんじつじょう いちねんさんぜん ほうもん
 作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし、善無畏三蔵・震旦に来つ
 て後 天台の止観を見て智發し大日經の心実相 我一切本初の文の
 神に天台の一念三千を盗み入れて真言宗の肝心として其の上に印
 と真言とをかざり法華經と大日經との勝劣を判ずる時 理同事勝
 の釈をつくれり、両界の漫荼羅の二乗作仏・十界互具は一定
 大日經にありや第一の誑惑なり、故に伝教大師云く「新來の真言
 家は則ち筆受の相承を泯じ、旧到の華嚴家は則ち影響の規模を隠
 す」等云云、俘囚の嶋ななどにわたてほのぼのといううたはわれ
 よみたりなんと申すはえぞていの者は
 さこそとをもうべし、漢土日本の学者又かくのごとし、良和尚
 云く「真言・禅門・華嚴・三論乃至若し法華等に望めば是接引門」等
 云云、善無畏三蔵の閻魔の責にあづからせ給しは此の邪見による後
 に心をひるがへし法華經に帰伏してこそこのせめをば脱させ給い

しか、其その後善無畏・不空等ほけきよう・法華經を兩界の中央にをきて大王の
ごとくし胎藏たいそうの大日經だいにちきよう・金剛こんこうの金剛頂經こんこうちようきようをば左右の臣下しんかのごとく
せし・これなり、日本にほんの弘法こうぼうも教相きょうそうの時は華嚴宗けこんしゅうに心をよせて
法華經ほけきようをば第八はちにをきしかども事相じそうの時ときには実慧じつて・真雅しんが・円澄えんちよう・
光定みつただ等の人人ひとびとに伝え給たまいし時とき・兩界りうがいの中央ちゆうおう
に上かみのごとく・をかれたり、例せば三論さんろんの嘉祥かじようは法華ほけ玄十卷げんじゅうに
法華經ほけきようを第四時だいじゆし・会二破えにぱ二と定めども天台てんだいに歸伏きふくして七年ななとしつかへ
廢講はいこう散衆さんしゆして身を肉橋にくきようとなせり、法相ほっそうの慈恩じおんは法苑林ほうおんりん・七卷しちげん・十二
卷じふにげんに一乘方便いちじようほうべん・三乘真實さんじようしんじつ等の妄言もうげん多し、しかれども玄賛げんざんの第四だいじに
は故亦また兩存等りうぞんとうと我が宗しゆを不定じようていになせり、言ことは兩方りうほうなれども心こころは
天台てんだいに歸伏きふくせり、
華嚴けこんの澄觀ちようかんは華嚴けこんの疏じよを造けこんて華嚴ほけ・法華ほうけ・相對そうたいして法華ほけを方便ほうべんとか
けるに似れども彼の宗これ之もを以なて実なと為なす此なの宗りつぎの立義りつぎ・理通りつぎぜざる

こと無し等とかけるは悔い還すにあらずや、弘法も又かくのごとし、
龜鏡なければ我が面をみず敵なければ我が非をしらず、真言
等の諸宗の学者等、我が非をしらざりし程に伝教大師にあひたて
まつて自宗の失をしるなるべし。

されば諸経の諸仏・菩薩・人天等は彼彼の経経にして仏になら
せ給うやうなれども実には法華經にして正覺なり給へり釈迦諸仏
の衆生無辺の総願は皆此の經にをいて満足する今者已満足の文こ
れなり、予事の由ををし計るに華嚴・觀經・大日經等をよみ修行
する人をばその経経の仏・菩薩・天等・守護し給らん疑あるべ
からず、但し大日經・觀經等をよむ行者等、法華經の行者に敵対
をなさば彼の行者をすてて法華經の行者を守護すべし、例せば
孝子・慈父の王敵となれば父をすてて王にまいる孝の至りなり、
仏法も又かくのごとし、法華經の諸仏・菩薩・十羅刹・日蓮を守護し

たま 給う上・浄土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩・真言宗の千二百等・
七宗の諸尊・守護の善神・日蓮を守護し給うべし、例せば七宗の
守護神・伝教大師をまほり給いしが如しと・をもう、日蓮案じて
云く法華經の二処・

三会の座にましましし、日月等の諸天は法華經の行者出来せば
磁石の鉄を吸うがごとく月の水に遷るがごとく須臾に来つて
行者に代り仏前の御誓をはたさせ給べしとこそをばへ候にいままで
日蓮をとぶらひ給はぬは日蓮・法華經の行者にあらざるか、されば
重ねて經文を勘えて我が身にあてて、身の失をしるべし。

疑て云く当世の念仏宗・禅宗等をば何なる智眼をもつて
法華經の敵人・一切衆生の悪知識とはしるべきや、答えて云く私の
言を出すべからず經釈の明鏡を出して謗法の醜面をうかべ其の
失をみせしめん生盲は力をよばず、法華經の第四宝塔品に云く

「爾その時に多宝たほう・宝ほう塔とうの中に於おいて半座はんざを分わかち釈迦しやくか牟尼むに・仏ぶつに与よう、
爾その時に大衆たいしゆう・如來にょらいの七宝しちほうの塔たつの中の師し子しの座ざの上に在いまして
結跏趺坐けつかふざし給たまうを見みたてまつる、大音聲おんじやうを以もつて普あまねく四衆ししゆうに告つげ
給たまわく、

誰たれか能よく此こゝの娑婆しゃば・国こく土どに於おいて広ひろく妙法華經みやうほけきやうを説とかん、今いま正ただしく是こゝれ
時ときなり、如來にょらい久ひさしからずして当まさに涅槃ねはんに入いるべし、仏ぶつ・此こゝの妙法華經みやうほけきやう
を以もつて付屬ふぞくして在あること有あらしめんと欲ほす」等ら云い云ふ、第一だいいちの勅宣ちやくせんな
り。

又また云いく「爾その時に世尊せそん・重かさねて此こゝの義ぎを宣のべんと欲ほして偈げを説といて
言いく、聖主せいしゆ・世尊せそん・久ひさしく滅度めつどし給たまうと雖いえども宝塔ほうとうの中に在いまして尚なほ法ほふの
為ために來きり給たまえり、諸人しよにん如何いかんぞ勤つとめて法ほふに為むかわざらん、又また我われが分身ふんじんの
無量むりやうの諸しよ・佛ぶつ・恒沙こうしや等の如ごとく來きれる法ほふを聽きかんと欲ほす、各おのおの・妙みよなる土つち
及および弟子でし衆しゆ・天てん人にん・竜りゆう神じん・諸もろもろの供養くやうの事ことを捨すてて法ほふをして久ひさしく住すま

んが故に此に來至し給えり、譬えば大風のたいふう小樹の枝を吹くが如し、
是の方便を以て法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ我が
滅度の後誰か能く此の経を護持し誦誦せん今、仏前に於て自ら誓言
を説け、第二の鳳詔なり。

「多宝如来および我が身集むる所の化仏当に此の意を知るべし、
諸の善男子・各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく大
願を發こすべし、諸余の經典數・恒沙の如し此等を説くと雖も未だ
為れ難しとするに足らず、若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ
置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅後・惡世の中に於て能く
此の経を説かん是則ち為れ難し、仮使劫焼に乾れたる草を担い負
うて中に入つて焼けざらんも亦未だ為れ難しとせず、我が滅度の後
に若し此の経を持ちて一人の爲にも説かん是則ち為れ難し、諸の
善男子・我が滅後に於て誰か能く此の経を護持し誦誦せん、今、

仏前に於て自ら誓言を説け、等云云、第三の諫勅なり、第四・第五の二箇の諫曉・提婆品にあり下にかくべし。

此の経文の心は眼前なり青天に大日輪の懸がごとし白面に鷹のあるにいたり、而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のものと各謂自師の者・辺執家の者はみがたし万難をすてて道心あらん者にししとどめてみせん、西王母がそのものも・輪王出世の優曇華よりもあいがたく沛公が項羽と八年・漢土をあらそいし頼朝と宗盛が七年・秋津嶋にたたかひし修羅と帝釈と金翅鳥と竜王と阿耨池に争ふるも此にはすぐべからずとしるべし、日本国に此の法顕ること二度なり伝教大師と日蓮となりとしれ、無眼のものは疑うべし力及ぶべからず此の経文は日本・漢土月氏・竜宮・天上・十方世界の一切経の勝劣を釈迦・多宝・十方の仏・來集して定め給うなるべし。

問うて云く華嚴經・方等經・般若經・深密經・楞伽經・大日經・

涅槃經等は九易の内か六難の内か、答えて云く華嚴宗の杜順・智儼

・法蔵・澄觀等の三蔵大師。読んで云く華嚴經と法華經と六難の

内。名は一經なれども所説。乃至理これ同じ四門觀別。見真諦同の

ごとし、法相の玄奘三蔵・慈恩大師等。読んで云く深密經と

法華經とは同く唯識の法門にして第三時の教。六難の内なりし三論

の吉蔵等読んで云く般若經と法華經とは名異体同。二經一法な

り。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等。読んで云く大日經と

法華經とは理同じ、をなじく六難の内を経なり、日本の弘法。読ん

で云く大日經は六難。九易の内にあらず大日經は釈迦所説の

一切經の外。法身。大日如来の所説なり、又。或る人云く華嚴經

は報身如来の所説。六難。九易の内にはあらずし、此の四宗の元祖

等かやうに読みければ其の流れをくむ数千の学徒等も又此の見を

いでず、日蓮にちれんなげいて云いわく上の諸人しよにんの義ぎを左右さうなく非ひなりといはば
 当地しよにんの諸人しよにん面おもてを向むくべからず非ひに非ひをかさね結句けつこは国王こくおうに讒奏ざんそうし
 て命いのちに及およぶべし、但ただし我等われらが慈父じふ・雙林そうりん最後さいごの御遺言ゆいごんに云いわく「法ほふに
 依よつて人ひとに依よらざれ」等云云、不依人等ふえとは初依ふ・二依に・三依さん・第
 四依し・普賢ふげん・文殊等もんじゆの等覺とうかくの菩薩ぼさつが法門ほふもんを説とき給たまうとも經きやうを手にに
 ぎらざらんをば用もちゆべからず、「了義經りやうぎきやうに依よつて不ふ了義經りやうぎきやうに依よらざ
 れ」と定さだめて經きやうの中ちゆうにも了義りやうぎ・不ふ了義經りやうぎきやうを糾明きゆうめいして信受しんじゆすべきこそ
 侯そうらいぬれ、竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつの十住じゆじゆ毘婆沙論びはしゃもんろんに云いわく「修多羅しゆたら黒論くろろんに依よらず
 して修多羅しゆたら白論びやくろんに依よれ」等云云、天台大師てんだいだいし云いわく「修多羅しゆたらと合あう者は
 録ろくして之これを用もちいよ文ぶん無なくき義ぎ無なきは信受しんじゆすべからず」等云云、伝教でんきやう
 大師だいし云いわく「仏説ぶつせつに依え憑びやうして口伝くでんを信しんずること其それ」等云云、円珍えんちん
 智証ちしやう大師だいし云いわく「文ぶんに依よつて伝でんうべし」等云云、上かみにあぐるところの
 諸師しよしの釈しやく皆みな一分いちぶん・經論きやうろんに依よつて勝劣しやうれつを弁わきまうやうなれども皆みな自宗じしゆ

を堅く信受し先師の謬義をたださざるゆへに曲会私情の勝劣なり
莊嚴己義の法門なり・仏滅後の犢子・方広・後漢已後の外典は仏法
外の外道の見よりも三皇・五帝の儒書よりも邪見・強盛なり邪法・
巧なり、華嚴・法相・真言等の人師・天台宗の正義を嫉ゆへに実經
の文を会して權義に順ぜしむること強盛なり、しかれども道心あ
らん人・偏党をすて自他宗をあらそはず人をあなづる事なかれ。
法華經に云く「已今当」等云云、妙樂云く「縦い經有つて諸經の
王と云うとも已今当説最為第一と云わず」等云云、又云く「已今当
の妙茲に於て固く迷う謗法の罪苦長劫に流る」等云云、此の經釈
にをどろいて一切經・並に

人師にんしの疏釈じゆを見るに狐疑こぎの氷こおつとけぬ今真言しんげんの愚者ぐしゃ等・印・真言しんげんのあ
るを・たのみて真言宗しんげんしゆつは法華經ほけきやうにすぐれたりとをもひ慈覺大師じかくだいし等
の真言勝しんげんすくれたりとをはせられぬれば・なんと・をもえるは・いうに
甲斐あひないなき事なり。

密藏經みつこんきやうに云く「十地華嚴等じちうちげこんと大樹たいじゆと神通勝鬘じんつうしやうまんおよ及び余經よきやうと皆此みなの
經よ従り出いでたり、是かくの如ごときの密藏經みつこんきやうは一切經いつさいきやうの中に勝すくれたり」等
云云、大雲經だいうんきやうに云く「是この經きは即是そくぜ諸經しよきやうの轉輪聖王てんりんじやうおうなり何を以もつて
の故ゆえに是この經典きやうてんの中に衆生じゆじやうの実性じつじやう・仏性ぶつじやう・常住じやうじやうの法藏ほつぞうを宣說せんぜつする
故ゆえなり」等云云、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうに云く「所謂過去無量いわゆるかこむりやうの諸しよ仏ぶつ・所說しよせつの
正しやう法ほつ及び我今説われいまとく所の所謂いわゆる八万四千はちまんしよせんの諸しよの妙法めうほつ蘊おんなり、撰せんして五
分なと為なす一なには索咀纜そたらん・二なには毘奈耶びなや・三なには阿毘達磨あびだま・
四なには般若波羅蜜はんにははらみつ・五なには陀羅尼門だらにとなり此この五種ごしゆの藏ざうをもつて
有情うじやうを教化きやうけす、若もし彼の有情うじやう契經がいきやう調伏じやうぶく対法たいほつ般若はんにはを受持じゆじすること

あた 能わ^ず。或は復有情諸の悪業。四重・八重・五無間罪方等経を謗^{はう}ず
る一闡提等の種種の重罪を造るに銷滅して速疾に解脱し頓に涅槃
を悟ることを得せしむ、而も彼が為に諸の陀羅尼蔵を説く、此の五
の法蔵譬えば乳・酪・生蘇・熟蘇及び妙なる醍醐の如し、総持門とは
譬えば醍醐の如し醍醐の味は乳・酪・蘇の中に微妙第一にして能^よ
く諸の病を除き諸の有情をして身心安樂ならしむ、総持門とは契経
等の中に最も第一と為す能く重罪を除く
に等ニ云云、解深密経に云く「爾の時に勝義生菩薩復仏に白して云く
世尊・初め一時に於て波羅 仙人墮処施鹿林の中に在て唯声聞
乘を発趣する者の為に四諦の相を以て正法輪を転じ給いき、是
甚だ奇にして甚だ此れ希有なり一切世間の諸の天人等先より
能く法の如く転ずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於て転じ
給う所の

法輪は有上なり有容なり是れ未了義なり是れ諸の諍論安足の
処所なり、世尊在昔第二時の中に唯発趣して大乘を修する者の
為にして一切の法は皆無自性なり無性無滅なり本来寂静なり自性
涅槃なるに依る隱密の相を以て正法輪を転じ給いき、更に甚だ
奇にして甚だ為れ希有なりと雖も、彼の時に於て転じ給う所の
法輪亦是れ有上なり容受する所有り猶未だ了義ならず、是れ諸の
評論安足の処所なり、世尊今第三時の中に於て普く一切乗を発趣
する

者の為に一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・自性涅槃にして無自性の性なるに依り顯了の相を以て正法輪を轉じ給う、第一はなはだ甚だ奇にして最も為れ希有なり、今に世尊轉じ給う所の法輪・無上無容にして是れ眞の了義なり諸の評論安息の処所に非ず」等云云、大般若經に云く「聽聞する所の世・出世の法に随つて皆能く方便して般若甚深の理趣に会入し諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に会入し一事として法性を出ずる者を見ず」等云云、大日經第一に云く「秘密主大乘行あり無縁乗の心を發す法に我性無し何を以ての故に彼往昔の如く修行せし者の如く蘊の阿頼耶を觀察して自性幻の如しと知る」等云云、又云く「秘密主彼是くの如く無我を捨て心主自在にして自心の本不生を覺す」等云云、又云く「所謂空性は根境を離れ無相にして境界無く諸の戲論に越えて虚空に等同なり乃至極無自性」等云云、又云く「大日尊

秘密主に告げて言く秘密主云何なるか菩提・謂く実の如く自心を知るに等云云、華嚴經に云く「一切世界の諸の群生声同乗を求めんと欲すること有ること」し縁覚を求むる者・轉・復少し、大乘を求むる者甚だ希有なり大乘を求むる者猶為れ易く能く是の法を信ずる為れ甚だ難し、況や能く受持し・正憶念し・説の如く修行し眞実に解せんをや、若し三千大千界を以て頂戴すること一劫身動ぜざらんも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、大千塵数の衆生の類に一劫諸の樂典を供養するも彼の功德未だ為れ勝れず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、若し掌を以て十仏刹を持ち虚空の中に於て住すること一劫なるも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、十仏刹塵の衆生の類に

一劫諸の樂典を供養せんも彼の功德未だ勝れりと為さず是の法を

信こずるは為しれ殊勝しようなり、十せつじん仏刹塵もろもろの諸にの如ら来いを一いつこ劫きやう恭敬きやうけいして供養くよう
せん若もし能よく此この品じゆじを受持じゆじせん者くどくの功德くどく彼なよりも最勝さいしやうと為なす」等
云云ねはんぎやう、涅槃經いわに云こく、「是もろもろの諸だいじやうの大乗ほうとう方等きやうてん經典また復むりやう無量くどくの功德じやうじゆを成就
すと雖いえども是この經いに比ひせんと欲ほするに喩たとえを為なすを得えざること百倍千
倍ひやくせんまんばい、乃至ないし算數さんじゆ譬喻ひゆも及あぶこと能あたわざる所なり、善男子ぜんなんし
譬たとえば牛よ従より乳にを出し乳よ従より酪にを出し酪よ従より生蘇しやうそを出し

生蘇しよつそよ従り熟蘇じゆくそよを出し熟蘇じゆくそよ従り醍醐だいごを出し醍醐だいごは最上さいじよつなり、若もし服ふくすること有ある者は衆病しゆうびよう皆除みなき所有しようの諸薬しよやくも悉ことごとく其の中そのに入るがごとし、善男子ぜんなんし仏またかくも亦是たかくくの如ごとし仏よ従り十二部經じふにぶきやうを出し十二部經じふにぶきやうに従り修多羅しゆたらを出し修多羅しゆたら従り方等經ほうとうきやうを出し方等經ほうとうきやう従り般若波羅蜜はんにはやはらみつを出し般若波羅蜜はんにはやはらみつ従り大涅槃ねはんを出し猶なほ醍醐だいごの如ごとし醍醐だいごと言ことうは仏性ぶつじように喩たとうと等たう云いふ。

此等これらの經文きやうもんを法華經ほけきやうの已今当いこんたう・六難なん九易くわいに相對そつたいすれば月に星せいをならべ九山くわんざんに須弥しゆみを合せたるににたり、しかれども華嚴宗けこんしゆうの澄觀ちやうかん・法相ほつさう・三論さんろん・真言等しんごんの慈恩じおん・嘉祥かじやう・弘法等こうほうの仏眼ぶつげんのごとくなる人ひと・猶なほ此の文このぶんにまどへり、何いかに況いや盲眼めうげんのごとくなる当世たうせの学者等がくしや・勝劣しやうれつを弁わかうべしや、黑白こくびやくのごとく・あきらかに須弥しゆみ・芥子けしのごとくなる勝劣しやうれつなを・まどへり・いはんや虚空こくうのごとくなる理りに迷まわざるべしや、教けんの浅深せんじんをしらざれば理りの浅深せんじんを弁わかうものなし卷まきをへだて文

前後すれば教門の色弁えがたければ文を出して愚者を扶けんとを
もう、王に小王・大王・一切に少分・全分・五乳に全喩・分喩を弁うべ
し、六波羅蜜經は有情の成仏あつて無性の成仏なし何に況や久遠
実成をあかさず、

猶涅槃經の五味にをよばず何に況や法華經の迹門・本門にたいすべ
しや、而るに日本の弘法大師・此の經文にまどひ給いて法華經を第
四の熟蘇味に入れ給えり、第五の總持門の醍醐味すら涅槃經に
及ばずいかにし給いけるやらん、而るを震旦の人師争つて醍醐を盗
むと天台等を盗人とかき給へり惜い哉古賢醍醐を嘗めず等と自歎
せられたり、此等はさてをく我が一門の者のためにしるす他人は信
ぜざれば逆縁なるべし、一をなめて大海のしををしり
一華を見て春を推せよ、万里をわたたて宋に入らずとも三箇年を
經て靈山にいたらずとも竜樹のごとく竜宮に入らずとも無著

菩薩ぼさつのごとく彌勒みろく菩薩ぼさつにあはずとも二所三会に値あわずとも一代いちだいの
勝劣しょうれつはこれをしれるなるべし、蛇じやは七日が内の洪水をしる竜の
眷属けんぞくなるゆへ鳥は年中の吉凶きしうをしれり過去かこに陰陽師おんようしなりしゆへ鳥
はとぶ徳人とくにすぐ
れたり。

にちれん じまきまう じまじわつ 日蓮は諸経の勝劣をしること華嚴の澄観・三論の嘉祥・法相の
じおん しんこん こうほう 慈恩・真言の弘法にすぐれたり、天台・伝教の跡をしのぶゆへなり、
ひとびと てんだい でんぎよう 彼の人人は天台・伝教に帰せさせ給はずば謗法の失脱れさせ給う
とうせ にほんこく べしや、当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華経
にたてまつり名をば後代に留べし、大海の主となれば諸の河神・皆
したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華経の六難
くわい わきまう 九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし。
ほうたうほん 宝塔品の三箇の勅宣ちゆくせんの上に提婆品に二箇の諫曉あり、提婆達多
いっせんたい てんのうによらい は一闡提なり天王如来と記せらる、涅槃経四十卷の現証は此の品
ぜんしやう あじやせ があり、善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあ
げ万ををさめ枝をしたがふ、
いっさい こぎやく 一切の五逆・七逆・謗法・闡提・天王如来にあらはれ了んぬ毒薬変じ
かんろ 甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず

いっさいにょにん 一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗経には成仏・往生をゆるすやうなれども・或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、拳一例諸と申して竜女が成仏は未代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし、儒家の孝養は今生にかる未来の父母を扶けざれば外家の聖賢は有名無実なり、外道は過未をしれども父母を扶くる道なし仏道こそ父母の後世を扶くれば聖賢の名はあるべけれ、しかれども法華経已前等の大小乗の経宗は自身の得道猶かなひがたし何に況や父母をや但文のみあつて義なし、今法華経の時こそ女人成仏の時・悲母の成仏も顕われ・達多の悪人成仏の時・慈父の成仏も顕われ、此の経は内典の孝経なり、二箇のいさめ了んぬ。

已上五箇の鳳詔にをどろきて勸持品の弘経あり、明鏡の経文

を出して当世とうせの禅・律・念佛者ねんぶつ・並びに諸檀那しよだんなの謗法ほうぼうをしらしめん、
日蓮にちれんといひし者は去年こぞ九月十二日子丑うしの時に頸うしろはねられぬ、此れは
魂魄こんぱく・佐土の国にいたりて返年かえるとしの二月・雪中ゆきなかにしるして有縁うえんの弟子でし
へを贈くればを畏そろしくて・を拍そろしからず・みん人いかに・をぢぬら
む、此れは釈迦しゃか・多宝たぼう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつの未来みらい日本にほん・当世とうせをうつし
給たまう明鏡めいきやうなりかたみともみるべし。

勸持品に云く「唯願くは慮したもつべからず仏滅度の後恐怖
悪世の中に於て我等当に広く説くべし、諸の無智の人の悪口罵詈
等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし、悪世の中の
比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の
心充滿せん、或阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行
ずと謂つて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の
与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の
如くならん、是の人悪心を懐き常に世俗の事を念い名を阿練若に
飯て好んで我等が過を出さん、常に大衆
の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣・婆羅門・居士
及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人外道の
論議を説くと謂わん、濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん
悪鬼其身に入つて我を罵詈毀辱せん、濁世の悪比丘は仏の方便隨宜

の所説の法を知らず悪口し顰蹙し数数擯出せられん」等云云、記の八に云く「文に三初に一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可し次の者は前に過ぎたり第三最も甚だし後後の者は転識り難きを以ての故に」等云云、東春に智度法師云く「初に有諸より下の五行は第一に一偈は三業の悪を忍ぶ是れ外悪の人なり次に悪世の下の一偈は是上慢出家の人なり第三に・或有阿練若より下の三偈は即是出家の処に一切の悪人を撰す」等云云、又云く「常在大衆より下の兩行は公処に向つて法を毀り人を謗す」等云云、涅槃經の九に云く「善男子・一闍提有り羅漢の像を作して空処に住し方等大乗經典を誹謗せん諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢は大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「爾の時に是の經闍浮提に於て當に広く流布すべし、是の時に

當まさに諸しよの惡あく比丘びく有くつて是この經きやうを抄しやう略りやくし分ぶんちて多た分ぶんと作なし能よく正せい法ぽう
の香しき美こう味みを滅めつすべし、是この諸もろの惡あく人にん復また是この如ごとき經きやう典てんを誦どく誦じゆ
すいと雖えいも如に來よの深じん密みつの要よう義ぎを滅めつ除じよして世せ間けんの莊そう嚴ごんの文もん飾しき無む義ぎの語ご
を安あん置ちす前ぜんを抄しやうして後ごに著つけ後ごを抄しやうして前ぜんに著つけ前ぜん後ごを中ちゆうに著つけ
中ちゆうを前ぜん後ごに著つく當まさに知しるべし是この如ごときの諸しよの惡あく比丘びくは是これ魔まの
伴はん侶りよなり」等と云いふ、六ろく卷まきの般はん泥ない・經きやう

に云く「阿羅漢に似たる一闍提有つて悪業を行ず、一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん羅漢に似たる一闍提有りとは是の諸の衆生方等を誹謗するなり、一闍提に似たる阿羅漢とは声聞を毀些し広く方等を説くなり衆生に語つて言く我れ汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有る故に然も彼の衆生一闍提なりと謂わんと等云云、涅槃經に云く「我涅槃の後乃至正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし持律に似像して少かに經を讀誦し飲食を貪嗜し其の身を長養す、袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現わし内には貪嫉を懷かん啞法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」と等云云。

夫れ鷲峯・雙林の日月・毘湛・東春の明鏡に当世の諸宗並に国

中の禅・律念仏者が醜面を浮べたるに一分もくもりなし、妙法華經に云く「於仏滅度後恐怖惡世中」安樂行品に云く「於後惡世」又云く「於末世中」又云く「於後末世法欲滅時」分別功德品に云く「惡世末法時」藥王品に云く「後五百歲」等云云、正法華經の勸說品に云く「然後末世」又云く「然後來末世」等云云、添品法華經に云く等、天台の云く「像法の中の南三北七は法華經の怨敵なり」、傳教の云く「像法の末・南都・六宗の學者は法華の怨敵なり」等云云、彼等の時はいまだ分明ならず、此は教主釈尊・多宝仏・宝塔の中に日月の並ぶがごとく十方分身の諸仏・樹下に星を列ねたりし中にして正法一千年・像法一千年・二千年すぎて末法の始に法華經の怨敵三類あるべしと八十万億那由他の諸菩薩の定め給いし虚妄となるべしや、当世は如來滅後二千二百余年なり大地は指ばはづるとも春は花はさかずとも

さんるい てきじん にほんこく
三類の敵人・必ず日本国にあるべし、さるにてはたれたれの人人か
さんるい だれびと ほけきよう ぎようじや
三類の内なるらん又誰人か法華經の行者なりとさされた
るらんをぼつかなし、彼の三類の怨敵に我等入りてやあるらん又
ほけきよう ぎようじや
法華經の行者の内にてやあるらんをぼつかなし、周の第四昭王の
ぎよう きのえとら
御宇二十四年甲寅・四月八日の夜中に天に五色の光氣・南北に亘り
て昼のごとし、大地・六種

に震動し雨ふらずして江河・井池の水まさり一切の草木に花さき

葉なりたりけり不思議なりし事なり、昭王・犬に驚き大史・蘇由

・占つて云く「西方に聖人生れたり」昭王問て云く「此の国いかん」

答えて云く「事なし一千年の後に彼の聖言此の国にわたつて衆生を

利すべし」彼のわづかの外典の一毫未断・見思の者・しかれども一干

年のことをしる、はたして仏教・一千一十五年と申せし後漢の第二

・明帝の永平十年丁卯の年・仏法・漢土にわたる、此は似るべくもな

き釈迦多宝十方分身の仏の御前の諸菩薩の未来記なり、当世・

日本国に三類の法華經の敵人なかるべしや、されば仏付法蔵經等に

記して云く「我が滅後に正法一千年が間・我が正法を弘むべき人・

二十四人・

次第に相續すべし」迦葉・阿難等はさてをきぬ一百年の脇比丘・六百

年の馬鳴・七百年の竜樹菩薩等・一分もたがはずすでに出で給い

ぬ、此の事いかんがむなしかるべき此の事相違せば一經・皆相違すべし、所謂舍利弗が未来の華光如来・迦葉の光明如来も皆妄語となるべし、爾前返つて一定となつて永不成仏の諸声聞なり、犬野干をば供養すとも阿難等をば供養すべからずとなん、いかんがせんいかんがせん。

第一の有諸無智人と云うは經文の第二の悪世中比丘と第三の納衣の比丘の大檀那と見へたり、随つて妙樂大師は「俗衆」等云云、東春に云く「公処に向う」等云云、第二の法華經の怨敵は經に云く「悪世中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たり」と謂い我慢の心充滿せん」等云云、涅槃經に云く「是の時に當に諸の悪比丘有るべし乃至是の諸の悪人復是くの如き經典を讀誦すといえど如来深密の要義を滅除せん」等云云、止觀に云く「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす、若し智

無むきは増ぞう上じょう慢まんを起おこし己おのれ仏ぶつに均ひとしと謂おもうと等と云い云わ、道どう綽しやく禪ぜん師しが
云いくと「一いつに理り深じん解げ微みなるに由よると等と云い云わ、法ほう然ねん云いくと「諸しよ行ぎは機きに非
ず時ときを失うしなな等と云い云わ、記きの十じゆに云いくと「恐おそくは人あ謬まり解げせん者しよ初しよ心しんの
功こう徳とくの大だいなることを識しらずして功こうを上じやう位いに推おり此この初しよ心しんを蔑ないにせ
ん故ゆゑに今いま彼かの行ぎやう浅せんく功こう深しんきことを示しして以もつて経けい力りきを顕あらわせ等と云い云わ、
伝でん教ぎやう大だい師し云いくと「正しやう像ざう稍しやう過かぎ已おわつて末まつ法ぽう太たはだ近ちかきに有あり

法華一乗の機今正しく是其の時なり何を以て知ることを得る
安樂行品に云く末世法滅の時なり」等云云、慧心の云く「日本一州
円機純一なり」等云云、道綽と伝教と法然と慧心といづれ此を信
ずべしや、彼の一切経に証文なし此れは正しく法華経によれり、其
の上・日本国・一同に叡山の大師は受戒の師なり何ぞ天魔のつける
法然に心をよせ我が剃頭の師をなげすつるや、法然智者ならば
何ぞ此の釈を選択に載せて和合せざる人の理をかくせる者なり、
第二の悪世中比丘と指さるるは法然等の無戒邪見の者なり、
涅槃経に云く「我れ等悉く邪見の人と名く」
等云云、妙楽云く「自ら三教を指して皆邪見と名く」等云云、止観
に云く「大経に云く此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり、邪
に云く「大経に云く此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり、邪
豈悪に非ずや」等云云、弘決に云く「邪は即ち是れ悪なり是の故に
当に知るべし唯円を善と為す、復二意有り、一には順を以つて善と

為し背を以つて悪と為す相待の意なり、著を以つて悪と為し達を以つて善と為す相待。絶待俱に須く悪を離るべし円に著する尚悪なり。況や復余をや^{いわん また}等云云、外道の善悪は^{げどう ぜんあく}小乘経^{しょうじょうきょう}に對すれば皆悪道^{みなじゃあく}。小乘の善道。乃至四味三教は法華経に對すれば皆邪悪但法華のみ。正善なり、爾前の円は相待妙なり、絶待妙に對すれば猶悪なり。前三教に撰すれば猶悪道なり、爾前のごとく彼の經の極理を行ずる猶悪道なり、況や觀經等の猶華嚴。般若經等に及ばざる小法を本として法華経を觀經に取り入れて還つて念仏に對して閣拋閉捨せるは法然並びに所化の弟子等檀那等は誹謗正法の者にあらずや、釈迦・多宝・十方の諸仏は法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給えり、法然並に日本國の念仏者等は法華経は末法に念仏より前に滅尽すべしと豈三聖の怨敵にあらずや。

第三は、法華經に云く、「或は阿練若に有り納衣にして空閑に在つて乃至白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん」等云云、六卷の般泥經に云く、「羅漢に似たる一闍提有つて悪業を行じ一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん、羅漢に似たる一闍提有りとは是諸の衆生の方等を誹謗するなり

一闍提に似たる阿羅漢とは声聞を毀訾して広く方等を説き衆生に語つて言く我汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有るが故に然かも彼の衆生は一闍提と謂わん」等云云、涅槃經に云く「我れ涅槃の後・像法の中に当に比丘有るべし持律に似像して少かに經典を誦誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懐く唾法を受けたる婆羅門等の如く実には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」

等云云、妙樂云く「第三最も甚し後後の者転識り難きを以つての故に」等云云、東春云く「第三に或有阿練若より下の三偈は即是出家の処に一切の悪人を撰す」等云云、東春に「即是出家の処に一切の悪人を撰する」とは当世・日本国には何れの処ぞや、叡山か園城

か東寺とうじか南都なんとか建仁寺けんじんか寿福寺しゅふくか建長寺けんちやうじか・よくよく・たづぬべし、
延曆寺えんりやくじの出家しゆつげの頭かちゆうに甲冑かうきゆうをよろうをさすべきか、園城寺おんじやうじの五分ごぶん
法身ほっしんの膚がひに鎧がいろ杖じやうを帯おびせるか、彼等かれらは経文きやうもんに納衣のうえ在ざい空閑くうかんと指さすには
にいず為せ世所きやうけい恭敬きやうけい如ろく六通ろくつう羅漢らかんと人ひとをもはず又また転難てんなん識故しこといふべしや
華洛からくには聖せい一等いっとう・鎌倉かまくらには良觀りやうかん等ににたり、人ひとをあだむことなかれ
眼まなこあらば経文きやうもんに我われが身みをあわせよ、止觀しかんの第一だいいちに云いく「止觀しかんの明みん
静しやうなることは前代ぜんだい未だ聞きかず」等云と云い、弘くわの一いっに云いく「漢みんていの明帝みんてい夜や
夢よめみし自より陳朝ちんてうにぶぶまで禅門ぜんもんに予あずかり厠まじわりて衣鉢いはつ傳授でんじゆする者もの」等云と
云い、補注いに云いく「衣鉢いはつ傳授でんじゆとは達磨だるまを指さす」等云と云い、止との五ごに云いく
「又一種いの禅人ぜんじん・乃至な至盲跛しの師徒しと二俱にともに墮落だらくす」等云と云い、止との七しちに
云いく「九くの意世間せけんの文字もんじの法師ほっしと共ともならず、事相じさうの禅師ぜんしと共ともなら
ず、一いっ種しゆの禅師ぜんし」
は唯觀心ただかんじんの一いっ意いのみ有あり・或あるは浅あく・或あるは偽いつわる余あの九くは全ぜんく此こ無なし

虚言そらごとに非もじ後賢けん眼有がんらん者は当まさに証知しすべきなり、弘ぐの七しちに云いく
「文字もんじ法師ほっしとは内ないに觀解かんげ無なくくして唯ただ法相ほっそうを構かう事相じそうの禪師ぜんしとは境智きょうち
を閑ならわず鼻膈びかくに心こころを止とむ乃至な根本こんぽん有う漏定ろうじょう等とうなり、一師いっし唯ゆ有いう觀心かんじん一
意等いとうとは此こゝは且ひくと与よて論ろんを為なす奪すなえば則すなち觀解かんげ俱ともに闕かく、世間せけん
の禪人ひと偏ひとえに理觀りくわんを尚なおぶ既すでに教きょうを諳そらんぜず觀くわんを以もつて經きやうを消しょうし八
邪や八風はつふうを数かずえて丈六じやうりくの仏ぶつと為なし五陰ごいん三毒さんどくを合あして名なけ

て八邪と為し六入を用いて六通と為し四大を以つて四諦と為す、
此くの如く経を解するは偽の中の偽なり何ぞ浅くして論ず可けん
や」等云云、止觀の七に云く「昔洛の禪師名河海に播き住すると
きは四方雲の如くに仰ぎ去るときは阡陌群を成し隱隱轟轟亦何の
利益か有る、臨終に皆悔ゆ」等云云、弘の七に云く「洛の禪師と
は相州に在り即ち齊魏の都する所なり、大に仏法を興す禪祖
の一其の地を王化す、時人の意を譲りて其の名を出さず洛は即ち
洛陽なり」等云云、六卷の般泥経に云く「究竟の処を見ずとは彼
の一闡提の輩の究竟の悪業を見ざるなり」等云云、妙楽云く「第
三最も甚だし転識り難きが故に」等、無眼の者・一眼の者・邪見の者
は末法の始の三類を見るべからず一分の仏眼を得るもの此れをし
るべし、向国王・大臣・婆羅門・居士等云云、東春に云く「公処に向い
法を毀り人を謗ず」等云云、夫れ昔像法の末には護命・修円等・

奏状をささげて伝教大師を讒奏す、今末法の始には良観・念阿等

偽書を注して將軍家にささぐ・あに三類の怨敵にあらずや。

当世の念仏者等・天台法華宗の檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等

に向つて云く「法華経は理深我等は解微妙は至つて深く機は至つて

浅し」と等と申しつとむるは高推聖境・非己智分の者にあらずや、

禅宗の云く「法華経は月をさす指・禅宗は月なり月をえて指なにかせん、

禅は仏の心・法華経は仏の言なり仏・法華経等の一切経を

とかせ給いて後・最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく、其の

しるしに仏の御袈裟を迦葉に付属し乃至付法蔵の二十八・六祖まで

に伝う」と等云云、此等の大妄語國中を誑酔せしめてとしひさし、又

天台・真言の高僧等名は其の家にえたれども我が宗にくらし、貪欲

は深く公家・武家を・をそれて此の義を証伏し讚歎す、昔の多宝・

分身の諸仏は法華経の令法久住を証明す、今天台宗の碩徳は

理り深じん解げ微みを証しやう伏ふくせり、かるがゆへに日本にほん国こくに但た法ほ華け經きやうの名なのみあつて得とく道どうの人ひと・一人ひとりもなし、誰たれをか法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやとせん、寺じ塔とうを焼やいて流る罪ざいせらるる僧そう侶りよは、かかずをしらず、公く家け・武ぶ家けに諛へつらうてにくまるる高こう僧そうこれ多おほし、此こ等とうを法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやといいうべきか。

ぶつじ
仏語むなしからざれば三類さんるいの怨敵おんてきすでに国中こくちゆうに充滿じゆうまんせり、金言きんげん

のやぶるべきかのゆへに法華經ほけきやうの行者ぎやくじやなし・いかがせん・いかがせん、
そもそも

抑おさたれやの人か衆俗しゆうじやくに悪口罵詈あくくめりせらるる誰たれの僧そうか刀杖とうじやうを加へら

るる、誰たれの僧そうをか法華經ほけきやうのゆへに公家くげ・武家ぶげに奏そうする・誰たれの僧そうか

さくさくけんひんずい
数数見擯出たびたびと度度たびたびながさるる、日蓮にちれんより外ぐわいに日本国にほんこくに取り出いださん

とするに人なし、日蓮にちれんは法華經ほけきやうの行者ぎやくじやにあらず天てんこれをすて給たまう

ゆへに、誰たれをか当世とうせの法華經ほけきやうの行者ぎやくじやとして仏語ぶつじを実語じつじ

とせん、仏ぶつと提婆だいばとは身みと影かげのごとし生生しんじゆうにはなれず聖徳太子しんてくたいしと

もりや
守屋もりやとは蓮華れんげの花華けがら・同時どうじなるがごとし、法華經ほけきやうの行者ぎやくじやあらば必ず

さんるい
三類さんるいの怨敵おんてきあるべし、三類さんるいはすでにあり法華經ほけきやうの行者ぎやくじやは誰たれなるら

む、求めて師しとすべし一眼いっげんの龜かめの浮木うきぎに値あうなるべし。

あ
有ある人ひと云いく当世とうせの三類さんるいはほほ有あるにいたり、但ただし法華經ほけきやうの行者ぎやくじや

なし汝なんじを法華經ほけきやうの行者ぎやくじやといはんとすれば大おほなる相違そういあり、此こゝの經きやう

に云く「天の諸の童子以て給使を為さん、刀杖も加えず、毒も害すること能わざらん」又云く「若し人悪罵すれば口則閉塞す」等、又云く「現世には安穩にして後・善処に生れん」等云云、又「頭破れて七分と作ること阿梨樹の杖の如くならん」又云く「亦現世に於て其の福報を得ん」等又云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過悪を出せば若しは実にもあれ若しは不実にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん」等云云、答え

て云く汝が疑い大に吉しついでに不審を晴さん、不輕品に云く「悪口罵詈」等、又云く「或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、涅槃經に云く「若しは殺若しは害」等云云、法華經に云く「而かも此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し」等云云、仏は小指を提婆にやぶられ九横の大難に値い給う此は法華經の行者にあらずや、不輕菩薩は一乗の行者といはれまじきか、目連は竹杖に殺さ

るほけきょう法華經記きの後のちなり、付つ法蔵ぼうぞうの第十四じゅうしの提婆菩薩だいばぼさつ・第二十五にじゅうごの師し子し尊そん者じゃの二人ふたりは人ひとに殺ころされぬ、此こゝ等らは法華經ほけきょうの行者ぎやうじやにはあらざるか、竺じくの道生どうじやうは蘇山そざんに流ながされぬ法道ほうどうは火印かなやきを面おもてにやいて江南かんとんにうつさる。此こゝ等らは一乘いちじやうの持者じしやにあらざるか、外典げてんの者ものなりしかどもはつきよい白居易はつきよい北野きたのの天神てんじんは

遠流せらる賢人にあらざるか、事の心を案ずるに前生に法華經・
誹謗の罪なきもの今生に法華經を行ずこれを世間の實によせ・或
は罪なきをあだすれば忽に現罰あるか・修羅が帝釈を射る金翅鳥
の阿耨池に入る等必ず返つて一時に損するがごとし、天台云く「今
我が疾苦は皆過去に由る今生の修福は報・将来に在り」等云云、
心地觀經に曰く「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ
未來の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」等云云、不輕品に
云く「其の罪畢已」等云云、不輕菩薩は過去に法華經を謗し給う罪・
身に有るゆへに瓦石をかほるとみへたり、又順次生に必ず地獄に
墮つべき者は重罪を造るとも現罰なし一闍提人これなり、涅槃經
に云く「迦葉菩薩
・ 仏に白して言く世尊・ 仏の所説の如く大涅槃の光一切衆生の毛孔
に入る」等云云、又云く「迦葉菩薩・ 仏に曰して言く世尊云何んぞ

未だ菩提の心を発さざる者・菩提の因を得んと等云云、仏此の問を
答えて云く「仏迦葉に告わく若し是の大涅槃経を聞くこと有つて我
菩提心を発すことを用いずと言つて正法を誹謗せん、是の人即時に
夜夢の中に羅刹の像を見て心中怖畏す羅刹語つて言く咄し善男子
汝今若し菩提心を発さずんば当に汝が命を断つべし是の人惶怖し
寤め已つて即ち菩提の心を発す当に是の人は是れ大菩薩なりと知る
べし」等云云、いたうの大悪人ならざる者
が正法を誹謗すれば即時に夢みて・ひるがへる心生ず、又云く「枯
木・石山」等、又云く「憔悴甘雨に遇うと雖も」等、又「明珠淤泥」
等、又云く「人の手に創あるに毒薬を捉るが如し」等、又云く「大雨
空に住せず」等云云、此等多くの譬あり、詮ずるところ上品の
一闡提人になりぬれば順次生に必ず無間獄に墮つべきゆへに現罰な
し例せば夏の桀・殷の紂の世には天変なし重科有て必ず世ほろぶべ

きゆへか、又守護神しゅしん此国をすつるゆへに現罰げんばちなきか

謗法ぼうほうの世をば守護神しゅごしんすて去り諸天しよてんまほるべからずかるがゆへに

正法しやうほうを行いずるものにしるしなし還かえつて大難だいなんに値あうべし金光明経こんこうみやうきやうに

云いく「善業ぜんごうを修しゆする者しやは日日じつじつに衰減すいげんす」等云云、悪国・悪時あくじこれなり

具くさには立正安国論りっしやうあんこくろんにかんがへたるがごとし。

詮せんずるところは天もすて給たまえ諸難しよなんにもあえ身命しんめいを期まとせん、

身子しんしが六十劫ろくじやくの菩薩ぼさつの行ぎやうを退たいせし乞ぎ眼がんの婆羅門ばらもんの責せきを堪たえざるゆ

へ久遠大通くおんたいつうの者ものの三五さんごの塵ちりをふる悪知識あくちしきに値あうゆへなり、善ぜんに付つ

け悪あくにつけ法華經ほふきやうをすつるは地獄じじやくの業ごうなるべし、大願たいがんを立てん

日本国こほんこくの位ゐをゆづらむ、法華經ほふきやうをすてて觀經等かんきやうについて後生ごせいをこせ

よ、父母ふぼの頸けいを刎わん念仏ねんぶつ申まをさずば、なんどの種種しじゆの大難たいなん・出来こすと

も智者ちしやに我義わがぎやぶられずば用もちいじとなり、其その外ほかの大難たいなん・風かぜの前まへの

塵ちりなるべし、我日本こほんの柱はしらとならむ我日本こほんの眼目がんもくとならむ我日本こほんの大

船ふねとならむ等らうとちかいし願ねがやぶるべからず。

疑うたがひつて云いくいかにとして汝なんじが流罪りゆうざい・死罪等しざいを過去かこの宿習しゆくじゆとし

らむ、答こたえて云いく銅鏡どうきやうは色形しきけいを顕あわす秦王しんのう・駿偽けんぎの鏡きやうは現在げんざいの罪つみ

を顕あわす仏法ぶつぽうの鏡きやうは過去かこの業因ごういんを現げんず、般泥はんぢ・經きやうに云いく「善男子ぜんなんし

過去かこに曾かつて無量むりやうの諸罪種種しよざいしじゆの悪業あくごうを作るつくに是この諸しよの罪報ざいほうは・或あるは

輕易せられ・或は形状醜陋・衣服足らず・飲食ソソ・財を求むるに
利あらず貧賤の家邪見の家に生れ・或は王難に遭い及び余の種種
の人間の苦報あらん現世に軽く受るは斯れ護法の功德力に由るが
故なりニ云、此の經文日蓮が身に宛も符契のごとし狐疑の氷とけ
ぬ千万の難も由なし一の句を我が身にあわせん、或被輕易等云
云、法華經に云く「輕賤憎嫉」等云云・二十余年が間の輕慢せら
る、或は形状醜陋又云く
衣服不足は予が身なり飲食ソソは予が身なり求財不利は予が身な
り生貧賤家は予が身なり、或遭王難等・此の經文疑うべしや、
法華經に云く「数数擯出せられん」此の經文に云く「種種」等云云、
斯由護法功德力故等とは摩訶止觀の第五に云く「散善微弱なるは
動せしむること能わず今止觀を修して健病 ぎれば生死の輪を動
ず」等云云、

又云く「三障四魔紛然として競い起る」等云云我れ無始より。このか
た悪王と生れて法華經の行者の衣食・田畠等を奪いとりせしこと。
かずしらず、当世・日本国の諸人の法華經の山寺をたうすがごと
し、又法華經の行者の頸を刎こと其の数をしらず此等の重罪はた
せるもあり。いまだはたさざるも。あるらん、果すも余残いまだ。
つきず

生死しじゆうを離はなるる時は必ず此この重罪じゆうざいをけしはてて出離しじゆうすべし、功德くどくは浅軽せんけいなり此等これらの罪つみは深重じんじゆうなり、権経こんきんぎょうを行おこなぜしには此この重罪じゆうざいいまだをこらくろがねず鉄てつを熱あつにいたうきたわざればきず隠かくれてみえず、度度たびたびせむればきずあらはる、麻子あまのみをしばるにつよくせめざれば油少あぶらすくきがごとし、今日こんにち蓮れん・強盛じゆうじゆうに国土こくどの謗法ほうほうを責せむれば此この大難だいなんの来きるは過去かこの重罪じゆうざいの今生こんじゆうの護法ごぼうに招まねき出でだせるなるべし、鉄てつは火かに値あわざれば黒くろし火かと合あいぬれば赤あかし木きをもつて急はやきながれ流ながれをかけば波なみ山やまのごとし睡ねむれる師子ししに手てをつくれれば大おほいに吼ほゆ。

涅槃ねはんぎよう経きんぎょうに曰いわく「たと譬たとえば貧女ひんによの如ごとし居家じか救護きうごの者あ有あること無なくく加かうるに復また病びやう苦く飢渴けいかつに逼せめられて遊行ぎゆうぎ乞丐きがいす、他たの客舍きやくしゃに止とり一子いつしを寄生きじゆうす是この客舍きやくしゃの主しゆ駟逐ふちじやくして去さらしむ、其その産うんで未いまだ久ひさしからず是この児こをけいほうして他国たこくに至いたらんと欲ほつし、其その中路ちゆうぢうに於おいて悪風あくふう雨うに遇あつて寒苦なんら並ならび至いたり多おほく蚊虻ぶんぼう蜂ほう毒虫どくぢゆうのすい食いう所ところとなる、恒河かうがに

けいゆ 由し児を抱いて渡る其の水漂疾なれども而も放ち捨てず是に
おい 於て母子遂に共俱に没しぬ、是くの如き女人慈念の功德
みょうじゆう 命終の後梵天に生ず、文殊師利若し善男子有つて正法を護らんと欲せば彼の貧女の恒河に在つて子を愛念するが為に身命を捨つるが如くせよ、善男子護法の菩薩も亦是くの如くなるべし、寧ろ身命を捨てよ是くの如きの人解脱を求めずと雖も解脱自ら至るこ
ひんによ 彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが如しと等云云、此の經文は章安大師・三障をもつて釈し給へり、それをみるべし、
ひんじん 貧人とは法財のなきなり女人とは一分の慈ある者なり、
えとど 客舎とは穢土なり一子とは法華經の信心了因の子なり舎主駈逐とは流罪せらる其の産して未だ久しからずとはいまだ信じてひさしからず、悪風とは流罪の勅宣なり蚊虻等とは諸の無智の人有り
あつくめり 悪口罵詈等なり母子共に没すとは終に法華經の信心をやぶらずし

て頸はねを刎はらるるなり、梵天ぼんてんとは仏界ぶつがいに生るるをいうなり引業いんごうと
申もうすは仏界ぶつがいまでかはらず、日本にほん・漢土かんどの万国しよにんの諸人しよにんを殺すとも五逆ごぎやく
・謗法ほうぼうなければ無間地獄むげんじごくには墮おちず、余あの悪道あくどうにして多歳たさいをふべし、
色天しきてんに生るること万戒たもを持てども万善ばんぜんを修しゆすれども散善さんぜんにては生
れず、又梵天ぼんてん王わうとなる事・有漏うろうの

引業いんごうの上に慈悲じひを加えて生なずべし、今・此こゝの貧女ひんによが子を念おもうゆへに

梵天ぼんてんに生なる常じょうの性相しやうそうには相違そういせり、章安しやうあんの二はあれども詮せんずると

ころは子を念おもう慈念じねんより外ほかの事ことなし、念ねんを一境じきやうにする、定じやうに似にたり

專もつぱら子を思しう又慈悲じひにも・にたり、かるがゆへに他事たじなけれども天

に生なるるか、又仏ぶつになる道みちは華嚴けごんの唯心ゆいしん法界ほつかい・三論さんろんの八不はつふ・法相ほつそうの

唯識ゆいしき・真言しんごんの五輪親等ごりんしんとうも実まことには叶かなうべしともみへず、但てんだい天台てんだいの

一念いちねん三千さんぜんこそ仏ぶつになるべき道みちとみゆれ、此こゝの一念いちねん三千さんぜんも我等われら一分いちぶんの

慧解えげもなし、而しかれども一代いちだい経経きやうきやうの中なかには此こゝの経計きやうけいり一念いちねん三千さんぜんの玉たまを

いだけり、余経よきやうの理りは玉たまに・にたる黄石おうじやくなり沙さをしぼるに油あぶらなし石

女むすめに子のなきがごとし、諸経しよきやうは智者ちしや・猶なほ仏ぶつにならず此こゝの経きやうは愚人ぐにんも

仏因ぶつゐんを種うゆべし

不求解脫ぶくげだつ・解脱げだつ自至等じじとうと云云いふいふ、我われ並びに我われが弟子でし・諸難しよなんありとも

疑うたがう心こゝろなくば自然じねんに仏界ぶつがいにいたるべし、天てんの加護かごなき事を疑うたがはざ

れ現世の安穩ならざる事をなげかざれ、我が弟子に朝夕教えしかども・疑いををこして皆すてけんつたなき者のならひは約束せし事を・まことの時は・わするるなるべし、妻子を不便と・をもうゆへ現身にわかれん事を・なげくらん、多生曠劫に・したしみし妻子には心とはなれしか仏道のために・はなれしか、いつも同じわかれなるべし、我法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返てみちびけかし。

疑つて云く念仏者と禅宗等を無間と申すは諍う心あり修羅道にや墮つべかるらむ、又法華經の安樂行品に云く「樂つて人及び經典の過を説かざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ」等云云、汝此の經文に相違するゆへに天にすてられたるか、答て云く止觀に云く「夫れ仏に両説あり一には撰・二には折・安樂行に不称長短という如き是れ撰の義なり、大經に刀杖を執持し乃至首を斬れという

是れ折この義ぎなり与よ奪だつ・途みちを殊ことにすと雖いも俱とに利益りやくせしむと等と云い
云い、弘決くけつに云いく「そ夫それ仏ぶつに両説りょうせつあり等ととは大經だいきように刀杖とうじようを執持しゅうじすと
は第三だいさんに云いく正法しょうぼうを護まもる者ものは五戒ごかいを受けず威儀いぎを修しゅうせず、乃至ないし下
の文ぶん予国せんよこく王等おうとうの文ぶん、又新医禁しんいじて云いく若もし更なに為なすこと有あれば
当まさに其その首くびを断たつべし是かくくの如ごとき等との文ぶん並ならびに是これ破法はぼうの人ひとを
折伏しゃくぶくするなり一切いっさいの經論きょうろん此この二ふたを出いでずと等と云い、文句もんくに云いく「問
う大經だいきようには

くおう 国王に親付し弓を持ち箭を帯し悪人を摧伏せよと明す、此の経は
おんり 豪勢を遠離し謙下慈善せよと剛柔碩いに乖く云何ぞ異ならざらん、
だいぎよう 答う大経には偏に折伏を論ずれども一子地に住す何ぞ曾て撰受
ひとえ 無からん、此の経には偏に撰受を明せども頭破七分と云う折伏無
あらの おのの きに非ず各一端を挙げて時に適う而已等云云、涅槃經の疏に
いわけ 「出家在家法を護らんに其の元心の所為を取り事を棄て理を
まさ 存して匡に大経を弘む故に護持正法と云うは小節に拘わらず故に
ふしゆう 不修威儀と云うなり、昔の時は平にして法弘まる応に戒を持つべし
なかれ 杖を持つこと勿れ今の時は嶮にし
かか 法翳る応に杖を持つべし戒を持つこと勿れ、今昔俱に嶮ならば
とも 俱に杖を持つべし今昔俱に平ならば俱に戒を持つべし、取捨宜きを
いっこう 得て一向にす可からず等云云、汝が不審をば世間の学者多分
どうり 道理とをもう、いかに諫曉すれども日蓮が弟子等も此のをもひを

すてず一闡提人のごとくなるゆへに先づ天台・妙楽等の釈をい
だしてかれ

が邪難をふせぐ、夫れ摺受・折伏と申す法門は水火のごとし火は

水をいとう水は火をにくむ、摺受の者は折伏をわらう折伏の者は

摺受をかなしむ、無智・悪人の国土に充滿の時は摺受を前とす

安樂行品のごとし、邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす

常不輕品のごとし、譬へば熱き時に寒水を用い寒き時に火をこのむ

がごとし、草木は日輪の眷属・寒月に苦をう諸水は月輪の所従・熱

時に本性を失う、末法に摺受・折伏あるべし所謂悪国・破法の

両国あるべきゆへなり、日本国の当世は悪国か破法の国かと・する

べし。

問うて云く摺受の時・折伏を行ずると折伏の時・摺受を行ずる

と利益あるべしや、答えて云く涅槃經に云く「迦葉菩薩・仏に白して

言く如来の法身は金剛不壞なり未だ所因を知ることも能わず云何、
仏の言く迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を
成就することを得たり、迦葉我護持正法の国縁にて今是の金剛身
常住不壞を

成就することを得たり、善男子正法を護持する者は五戒を受けず
威儀を修せず心に刀劍弓箭を持つべし、是くの如く種種に法を説
くも然も故師子吼を作すこと能わず非法の悪人を降伏すること
能わず、是くの如き比丘自利

し及び衆生を利すること能わず、当に知るべし是の輩は懈怠懶惰
なり能く戒を持ち浄行を守護すと雖も当に知るべし是の人は
能く為す所無からん、乃至時に破戒の者有つて是の語を聞き已つ
て咸共に瞋恚して是の法師を害せん是の説法の者設い復命終すと
も故持戒自利利他と名く等云云、章安の云く「取捨宜きを得て
一向にす可からず」等、天台云く「時に適う而已」等云云、譬へば秋
の終りに種子を下し田畠をかえさんに稲米をうるることかたし、建仁
年中に法然・大日の二人・出来して念仏宗・禅宗を興行す、法然
云く「法華経は末法に入つては未有一人得者千中無一」等云云、
大日云く「教外別伝」等云云、此の両義国土に充滿せり、天台・
真言の学者等・念仏・禅
の檀那を・へつらいをづる事犬の主にを・をふり・ねづみの猫を・をそ
るるがごとし、国王・將軍に・みやつかひ破仏法の因縁・破国の因縁

を能く説き能くかたるなり、天台・真言の学者等今生には餓鬼道に
墮ち後生には阿鼻を招くべし、設い山林にまじわつて一念三千の觀
をこらすとも空閑にして三密の油をこぼさずとも時機をしらず
摺折の二門を弁へずばいかでか生死を離るべき。

問うて云く念仏者・禅宗等を責めて彼等に・あだまれたる。いか
なる利益があるや、答えて云く涅槃經に云く「もし善比丘法を壞
者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は
仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子
眞の声聞なり」等云云、「仏法を壞乱するは仏法中の怨なり慈無く
して詐り親しむは是れ彼が怨なり能く糾治せんは是れ護法の声聞
眞の我が弟子なり彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり能く
呵責する者は是れ我が弟子駈遣せざらん者は仏法中の怨なり」等
云云。

そ
夫られい法じ華くわ經きやうのの宝ほう塔とう品ぽんをを拜はい見けんするに釈しや迦か・多た宝ほう・十じ方ふ分ぶん身しんのの諸しよ仏ぶつ
のの来らい集じつははななにに心しんぞぞ「しよ法ほ久く住じゆ・故こ来らい至し此こゝ」等とん云ん云ん、三さん仏ぶつのの未み来らいに
法ほ華け經きやうをを弘ひろめて未み来らいのの一い切きやうのの仏ぶつ子しににああたたええんと・おおぼぼししめめすす御ご心しんの
中ちゆうををすすいいするるにに父ふ母ぼのの一い子しのの大だい苦くにに値あうを見けんるるよよりも強じやう盛せいににここそ
みみへへたたるるをを法ほ然ねんいたはししとと・ももおおももははでで未ま法ぼうににはは法ほ華け經きやうのの門もんをを堅けんく
閉へいじてて人にんをを

入れじとせき狂児をたばらかして宝をすてさするやうに法華經を
なげすて

抛させける心こそ無慚に見へ候へ、我が父母を人の殺さんに父母

につげざるべしや、悪子の酔狂して父母を殺すをせいせざるべし

や、悪人寺塔に火を放たんにせいせざるべしや、一子の重病を灸

せざるべしや、日本の禅と念仏者とをみて制せざる者はかくのごと

し「慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり」等云云。

日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり一切天台宗の人は彼等が

大怨敵なり「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親」等云云、無道心

の者生死をはなるる事はなきなり、教主釈尊の一切の外道に大

悪人と罵詈せられさせ給い天台大師の南北並びに得一に三寸の舌

もつて五尺の身をたつと伝教大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都

を見ず」等といはれさせ給いし皆法華經のゆへなればはぢならず

愚人にほめられたるは第一のはぢなり、日蓮が御勘気を。

かほれば天台・真言の法師等悦ばしくやをもうらん。かつはむざん
なり。かつはきくわいなり、夫れ釈尊は娑婆に入り羅什は秦に入り
伝教は尸那に入り提婆師子は身をすつ薬王は臂をやく上宮は手の
皮をはぐ釈迦菩薩は肉をうる樂法は骨を筆とす、天台の云く
「ちやくじにい 適時而已」等云云、仏法は時によるべし日蓮が流罪は今生の小苦
なればなげかしからず、後生には大樂をつくべければ大に悦ばし。

四一 如来滅後五百歲始觀心本尊抄

本朝沙門

日蓮撰

238P

摩訶止觀第五に云く世間と如是と一なり開合の異なり

文永十

年 五二歳御作)

夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、比の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議と為す意此に在り

問うて云く玄義に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く其の妙樂の釈如何、答えて

て曰く未だ一念三千と云わず等云云、問うて曰く止観の一二三四等に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く之れ無し、問うて曰く其の証如何、答えて曰く妙楽云く「故に止観に至つて正しく観法を明かす並び三千を以て指南と為す」等云云、疑つて曰く玄義第二に云く「又一法界に九法界を具すれば百法界千如是」等云云、文句第一に云く「一人に十法界を具すれば一界又十界なり十界各十如是あれば即ち是れ一千」等云云、観音玄に云く「十法界交互なれば即ち百法界有り千種の性相冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然として具足す」等云云、問うて曰く止観の前の四に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙楽云く明さず、問うて曰く其の釈如何、答う弘決第五に云く「若し正観に望めば全く未だ行を論ぜず亦二十五法に歴て事に約して解を生ず方に能く正修の方便と為すに堪えたり是の故に前

の六あきらをば皆みな解なに属ぞくす、等さんぜん云云、又い云わく
明あきらかすに至いたつて並ならびに三さん千ぜんを以もつて指し南なんと
故ゆえに止し観かんの正まさしく観かん法ぼうを

な すなわこ しゆうくくきよう
為す乃ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に「説己心中所行
ほうもん
法門」と云う良に以所有るなり請う尋ね読まん者心に果縁無れ」等
云云、

そ ちしや こうほう
夫れ智者の弘法三十年二十九年の間は玄文等の諸義を説いて五

はつきよう ひやつかいせんによ
時・八教・百界・千如を明かし前き五百余年の間の諸非を責め並び

てんじく ろんしいま
に天竺の論師未だ述べざるを顕す、章安大師云く「天竺の大論尚

そ たぐい あら しんたん にんしなん わすら
其の類に非ず震旦の人師何ぞ勞わしく語るに汲ばん此れ誇耀に

あら ほつそう しか
非ず法相の然らしむるのみと等云云、墓ないかな天台の末学等華嚴

しんこん がんそ ぬすびと いちねんさんぜん
・真言の元祖の盗人に一念三千の重宝を盗み取られて還つて彼等が

もんか しょうあんだいしか
門家と成りぬ章安大師兼ねて此の事を知つて歎いて言く「斯の言

も お
若し墜ちなば将来悲む可しと云云。

いわ ひやつかいせんによ いちねんさんぜん さべつ いかん
問うて曰く百界千如と一念三千と差別如何、答えて白く

ひやつかいせんによ うじよう いちねんさんぜん ひじよう わた ふしん
百界千如は有情界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く

非情に十如是亘るならば草木に心有つて有情の如く成仏を為す
 可きや如何、答えて白く此の事難信難解なり天台の難信難解に二
 有り一には教門の難信難解・二には觀門の難信難解なり、其の
 教門の難信難解とは一仏の所説に於て爾前の諸經には一乘闡提・
 未來に永く成仏せず教主釈尊始めて正覺を成じ法華經迹本二門
 に来至し給い彼の二説を壞る一仏二言水火なり誰人か之を信ぜん
 此れは教門の難信難解なり、觀門の難信難解は百界千如
 ・一念三千・非情の上の色心の二法十如是なり、爾りといえども
 木画の二像に於ては外典内典共に之を許して本尊と為す其の義に
 於ては天台一家より出でたり、草木の上に色心の因果を置かずんば
 木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり、疑つて云く草木国土
 の上の十如是の因果の二法は何れの文に出でたるや、答えて曰く
 止觀第五に云く「国土世間亦十種の法を具す所以に悪国土・相・性・

体・力_レ等と云云、釈詮第六に云く、「相は唯色_{ゆいしき}に有り性は唯心_{ゆいしん}に在り
体・力_レ作・縁は義色心_{しきしん}を兼ね因果_{いんが}は唯心_{ゆいしん}・報は唯色_{ゆいしき}にあり」等云云、
金_{こんべいろん}論_いに云く、「乃_{すなわ}ちは是れ一草・一木・一礫_{いちじん}・一塵_{いちじん}・各一仏性_{ぶつじょう}・各一
因果_{いんが}あり縁_{えんりよう}了_りを具足_{ぐそく}す」等云云。

問うて曰く出処既に之を聞く観心の心如何、答えて曰く観心とは我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり、譬えば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設い諸経の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華経並びに天台大師所述の摩訶止観等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて云く法華経は何れの文ぞ天台の釈は如何、答えて曰くほけきようだいちほうべん「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」法華経第一方便品に云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、寿命品に云く「是くの如く我成仏してより已来甚大に久遠なり寿命・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云此の経文は仏界所具の

九界なり、経に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云地獄所具

の仏界なり、経に云く「一を藍婆と名け乃至汝等但能く法華の名

を護持する者は福量るべからず」等云云、是れ餓鬼界所具の十界な

り、経に云く「竜女乃至成等正覚」等云云此れ畜生界所具の十界

なり、経に云く「婆稚阿修羅王乃至一偈・一句を聞いて、

阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云云修羅界所具の十界なり、経に

云く「若し人・仏の為の故に乃至皆已に仏道を成ず」等云云此れ

人界所具の十界なり、経に云く「大梵天王乃至我等も亦是くの

如く・必ず当に作仏することを得べし」等云云此れ天界所具の十界

なり、経に云く「舍利弗乃至華光如来」等云云此れ声聞界所具の

十界なり、経に云く「共の縁覚を求むる者・比丘・比丘尼乃至合掌

を以て敬心し具足の道を聞かんと欲す」等云云、此れ即ち縁覚界

所具の十界なり、経に云く「地湧千界乃至真浄大法」等云云此れ

すなわ ぼさつしよく じゅつかい
即ち菩薩所具の十界なり、
すなわ ぶっかいしよく じゅつかい
經に云く「或説己身・或説他身」等云云
即ち仏界所具の十界なり。

問うて曰く自他面の六根共に之を見る彼此の十界に於ては未だ
これ いかん これ
之を見ず如何が之を信ぜん、
「なんしんなんげ ほうとうほん
難信難解」宝塔品に云く「六難九易」等云云、
「なんしんなんげ ほうとうほん
難信難解」宝塔品に云く「六難九易」等云云、
天台大師云く「一門
悉く昔と反すれば難信難解」

なり「章安大師云く」仏此れを將て大事と為す何ぞ解し易きことを
得可けんや」等云云、伝教大師云く「此の法華經は最も為れ
難信難解なり随自意の故に」等云云、夫れ在世の正機は過去の
宿習厚き上、教主釈尊・多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界・
文殊・弥勒等之を扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者之れ有り五
千・席を去り人天移さる況や正像をや何に況や末法の初をや汝
之を信ぜば正法に非じ。

問うて曰く經文並に天台章安等の解釋は疑網無し但し火を
以て水と云い墨を以て白しと云う設い仏説為りと雖も信を取り
難し、今數ば他面を見るに但人界に限つて余界を見ず自面も亦復
是くの如し如何が信心を立てんや、答う數ば他面を見るに或時は
喜び・或時は瞋り・或時は平に・或時は貪り現じ・或時は癡現じ
或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なる

は修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり他面の色法に於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れざれども委細に之を尋ねば之れ有る可し。

問うて白く六遣に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに以たり、四聖は全く見えざるは如何、答えて白く前には人界の六道之を疑う、然りと雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしなり四聖も又爾るに可きか試みに道理を添加して万か一之をのべん所以に世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無顧の悪人

も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し九界を具するを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の文に人界を説いて云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」涅槃經に云く「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す」等云

云、まつだい末代の凡夫ほんぶしゅつしやう出生して法華經ほけきやうを信ずるは人界にんかいに仏界ぶつがいを具足ぐそくする
故なり。

問うて曰くいわ十界互具じゅっかいごぐの仏語ぶつご分明ぶんみやうなり然りと雖もいえど我等われらが劣心れっしんに
仏法界ぶつぽうがいを具ぐすること信を取り難がたき者なり今時これ之を信ぜずば必ず
一闡提いつせんたいと成らん願いだくば大慈悲じひを起して之これを信ぜしめ阿鼻あびの苦を
救護くごしたまえ。

答えて曰く汝既に唯一大事因縁の經文を見開して之を信ぜざれば釈尊より已下四依の菩薩並びに末代理即の我等如何が汝が不信を救護せんや、然りと雖も試みに之を云わん仏に値いたてまつて覺らざる者・阿難等の辺にして得道する者之れ有ればなり、其れ機に二有り一には仏を見たてまつり法華にして得道す二には仏を見たてまつらざれども法華にて得道するなり、其の上仏教已前は漢土の道士月支の外道・儒教・四韋陀等を以て經と為して正見に入る者之れ有り、又利根の菩薩・凡夫等の華嚴・方等・般若等の諸大乘經聞きし縁を以て大通久遠の下種をする者多々なり例せば独覺の飛花落葉の如し教外の得道是なり、過去の下種結縁無き者の権小に執着する者は設い法華經に値い奉れども小権のを見を出でず、自見を以て正義と為るが故に通つて法華經を以て或小乘經に同じ或は華嚴・大日經等に同じ

ある 或は之を下す、此等の諸師は儒家外道の賢聖より劣れる者なり、
これら 此等は且らく之を置く、十界互具之を立つるは石中の花・木中の花
信じ難けれども縁に値うて出生すれば之を信ず人界所具の仏界
は水中の火・火中の水最も甚だ信じ難し、然りと雖も竜火は水よ
り出で竜水は火より生ず心得られざれども現証有れば之を用ゆ、
既に人界の八界之を信ず、仏界何ぞ之を用いざらん堯舜等の
聖人の如きは万民に於て偏頗無し人界の仏界の一分なり、不輕
菩薩は所見の人に於て仏身を見る悉達太子は人界より仏身を成ず
此等の現証を以て之を信ず可きなり。

問うて曰く 教主釈尊は此れより三惑已断の仏なり又十方世界の国主一切
の菩薩・二乘・人天等の主君なり行の時は梵天左に在り帝釈右に
侍り四衆・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵を演説して一切
衆生を得脱せしむ是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心に住せ

しめんや、又迹門しやくもん・爾前にぜんの意を以て之を論ずればきようしゆしゃくそん教主釈尊しじようは始成しじよう
正覚しやうかくの仏なり、過去かこの因行いんぎやうを尋ね求ればあるのうせたいし・或能施太子ある・或は儒童じゆどう
菩薩ぼさつ・或は戸毘王しびおう・或は薩た王子さつ おうじ・或は三祇さんぎ・百劫ひやくけつ、或はある
動塵劫どうゆちり・或は無量阿僧祇劫むりやうあそぎこ・或は初発心時しよほつしん・或は三千塵点等の間さんぜんじんてん
七万・五千・六千・七千等の仏を供養くやうし劫を積み

行満じて今の教主釈尊と成り給う、是くの如き因位の諸行は皆
われらこしんしよけん 我等が己身所見の菩薩界の功德か、果位を以て之を論ずれば教主
釈尊は始成正覚の仏四十年の間四教の色身を示現し爾前・迹門・
涅槃等を演説して一切衆生を利益し給う、所謂華蔵の時・十万台
上の虞舎那・阿含經の三十四心・断結成道の仏、方等・般若の千仏
等、大日・金剛頂の千二百余尊、並びに迹門宝塔品の四土色身、
涅槃經の或は丈六と見る、或は小身大身と現じ、或いは虞舎那と
見る、或いは身虚空に同じと見る四種の身乃至八十御入滅舍利を
留めて正像末を利益し給う、本門を以て之を疑わば教主釈尊
は五百塵点已前の仏なり因位も又是くの如し、其れより已来十方
世界に分身し一代聖教を演説して塵数の衆生を教化し給う、
本門の所化を以て迹門の所化に比較すれば一たいと大海と一塵と
大山とな、本門の一菩薩を

しやくもんじゆうまんせかい 十万世界の文殊・観音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に比
迹門 十方世界の文殊・観音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に比
するに尚及ばず、其の外十方世界の断惑証果の二乗並びに梵天・
帝釈・日月・四天・四輪王・乃至無間・大城の大火等比等は皆我が
一念の十界か己身の三千か、仏説為りといえども之を信ず可から
ず。

此れを以て之を思うに爾前の諸経は実事なり実語なり、華嚴經
に云く「究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と仁王經に
云く「源を窮め性を尽して妙智存せり」金剛般若經に云く「清淨の
善のみ有り」馬鳴菩薩の起信論に云く「如来蔵の中に清淨の功德
のみ有り」天親菩薩の唯識論に云く「請く余の有漏と劣の無漏と種
は金剛喩定が現在前する時極円明純淨の本識を引く彼の依に非
ざるが故に皆永く喜捨す」等云云、爾前の経経と法華経と之を
校量するに彼の経経は無数なり時説既に長し一仏二言彼に付

く可^べし、馬鳴菩薩^{めみょうぼさつ}は律法蔵^{ほつぞう}第十一^{じゅういち}にして
仏^{ぶつ}記^きに之^これ有り天親^{てんじん}は千部^{せんぶ}の論師^{ろんし}・四依^{しえ}の大士^{だいし}なり、天台大師^{てんだいだいし}は
辺鄙^{へんび}の小僧^{こそう}にして一論^{いちろん}をも宣^{のたま}はず誰^{たれ}か之^{これ}を信^まぜん、其^{その}の上^{かみ}多^{おほ}を捨^すて
小^{せう}に付^つくとも法華經^{ほけきょう}の文^{ぶん}分^{ぶん}明^{めい}ならば少^{せう}し恃^じ怙^こ有^あらんも法華經^{ほけきょう}文^{ぶん}に
何^{なに}れの所^{ところ}にか十界^{じゅうかい}互^{あひ}具^ぐ・百界^{ひゃくかい}・千如^{せんにょ}・一^{いち}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}の分^{ぶん}明^{めい}なる証^{しやう}文^{ぶん}之^これ
有^ありや、随^まつて經文^{きやうもん}を開拓^{かいたく}するに「断^{だん}諸^{しよ}法^{ほふ}中^{ちゆう}惡^{あく}と等^{とん}云^ん云^ん、天親^{てんじん}菩薩^{ぼさつ}

法華論・堅慧菩薩の宝性論に十界互具之れ無く漢土南化の諸大
人師・日本七寺の末師の中にも此の義無し但天台一人の僻見なり
傳教一人の謬伝なり、故に清涼国師の云く「天台の謬りなり」
憲苑法師の云く「然るに天台は小乘を呼んで三蔵教と為し其の名
謬濫するを以て」等云云、了洪が云く「天台独り未だ華嚴の意を
尽さず」等云云、得一が云く「咄いかな智公汝は是れ誰が弟子ぞ、
三寸に足らざる舌根を以て覆面説の所説の教時を謗ず」等云云、
弘法大師の云く「震旦の大師等争つて醍醐を盗んで各自宗に名く」
等云云、夫れ一念三千の法門は一代の権実の名目を削り四依の
諸論師其の義を載せず漢土日域の大師も之を用いず、如何が之を
信ぜん。

答えて曰く此の難最も甚し最も甚し但し諸経と法華との
相違は経文より事起つて分明なり未顕と已顕と証明と舌相と

二乗の成不と始成と久成と等之を顕わす、諸論師の事、天台大師云く「天親・竜樹・内鑑冷然たり外には時の宜きに適い各権に拠る所あり、而るに人師偏に解し学者苛も執し遂に矢石を興し各一辺を保ちて大に聖道に乖けり」等云云、章安大師云く「天竺の大論尚其の類に非ず真旦の人師何ぞ勞わしく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然なり然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べざるか、人師に於ては天台已前は或は珠を含み或は一向に之を知らず已後の人師或は初に之を破して後に歸伏する人有り或は一向用いざる者も之れ有り但し断諸法中惡の經文を会す可きなり、彼は法華經に爾前の經文を載するなり往いて之を見るに經文分明に十界互具之を説く所謂「欲令衆生開仏知見」等云云、天台此の經文を承けて云く「若し衆生に仏の

ちけん 知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん当に知るべし仏の知見衆生に
うんざい 蘊在することを云

云、章安大師の云く、「衆生に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する
所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す所あらんや」等云云。

但し会し難き所は上の教主・釈尊等の大難なり、此の事を仏遮会
して云く、「已今当説最為難信難解」と次下の六難九易是なり、
天台大師云く、「一門・悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉾に当
るの難事なり」章安大師の云く、「仏此れを將つて大事と為す。何ぞ
解し易きことを得可けんや」伝教大師云く、「此の法華経は最も為れ
難信難解なり。隋自意の故に」等云云。夫れ仏より滅後に至る一千
八百余年。三国に経歴して但三人のみ有つて始めて此の正法
を覚知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教此の三
人は内典の聖人なり、問うて曰く竜樹・天親等は如何、答えて曰く

これら此等の聖人は知つて之を言わざる仁なり、或は迹門の一分之を
 宣べて、本門と觀心とを云わず。或は機有つて時無きか、或は機
 と時と共に之れ無きか、天台・伝教已後は之を知る者多なり。二
 聖の智を用ゆるが故なり所謂三論の嘉祥・南三・北七の百余人・
 華嚴宗の宝蔵・清涼等・法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等・真言宗
 の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等、律宗の道宣等、初には
 反逆を存し、後には一向に歸伏せしなり。
 但し初の大難を遮せば無量義経に云く「譬えば国王と夫人と新た
 に王子を生ぜん若は一日若は二日若は七日に至り若は一月若は二
 月若は七月に至り若は一歳若は二歳若は七歳に至り復国事を領理
 すること能わずと雖も已に臣民に宗敬せられ諸の大王の子以て
 はなりよ伴侶と為らん、王及び夫人の愛心偏に重くして常に与共に語らん
 ゆえん所以は、何ん稚小なるを以ての故にと云うが如く、善男子是の持経

者も亦復またまた是かくの如ごとし、諸しよ仏ぶつの国こく王おうと是この經きやうの夫ふ人じんと和わ合ごうし

て共もに是この菩ぼ薩さつの子こを生なず若もし菩ぼ薩さつ是この經きやうを聞きくことを得えて若もしは

一い句く若もしは一いち偈げ若もしは一いち轉てん若もしは一いち轉てん若もしは十じゆ若もしは百ひやく若もしは千せん

若もしは万まん若もしは億いふ万まん恒こつ河が沙しゃ・無む量りやう無む数じゆ轉てんせば復また真しん理りんの極ごくを体たいする

こと能あたわらずと雖いえども、乃ない至し已すでに一切いっさいの四し衆じゆ・八はち部ぶに宗おほ仰おほせられ諸もろの大だい

菩ぼ薩さつを以もつて眷けん屬ぞくと為なし乃ない至し常じやうに諸しよ仏ぶつに護ご念ねんせられ慈じ愛あい偏ひとえに覆おほわれ

ん新しん学がくなるを所しよての故こなり」等と云いふ、普ふ賢けん經きやうに云いふ、此だいの大だい乘じやう經きやう典てん

は諸しよ仏ぶつの宝ほう藏ぞう十じゆ万まん三さん世せいの諸しよ仏ぶつの眼がん目もくなり乃ない至し三さん世せいの諸もろの如もろ來らいを

出しゆつ生じやうする種しゆなり乃ない至し汝に大だい乘じやうを行いじて仏ぶつ種しゆを断だんぜざれ」等と云いふ、

又い云いふ、此この方ほう等と經きやうは是これ諸しよ仏ぶつの眼まなこなり諸しよ仏ぶつ是こに因よつて五ご眼がんを

具ぐすることを得え・仏ぶつの三さん種しゆの身みは方ほう等と従じゆり生なず是これ大だい法ぽう印いんにして

涅ね槃はん海かいに印いんす此この如ごとき

かいちゅうよ

海中能く三者の仏の清浄身を生ず此の三種の身は人天の福田な

り」等云云。

夫れ以れば・釈迦如来の一代・顕密・大小の二教・華嚴・真言等の

諸宗の依経往いて之を勘うるに・或は十方台葉・毘盧遮那仏・大集

雲集の諸仏如来・般若染浄の千仏示現・大日・金剛頂等の千二百

尊・但其の近因近果を演説して其の遠因果を顕さず、速疾頓成

之を説けども三五の速化を亡失し化導の始終跡を削りて見えず、

華嚴経・大日経等は・一往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往

之を勘うれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因

之れ無し何を以てか仏の種子を定めん、而るに新訳の訳者等漢土に

来入するの日・天台の一念三千の法門を見聞し

て・或は自ら所持の経経に添加し・或は天竺より受持するの由

之を称す、天台の学者等・或は自宗に同ずるを悦び・或は遠きを

とつと 貴んで近きを蔑みし・或は旧を捨てて新を取り魔心・愚心出来す、
しか 然りと雖も詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・
もくえ 木画二像の本尊は有名無実なり。

問うて曰く上の大難未だ其の会通を開かず如何。

答えて曰く無量義經に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと
いえど 雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云、法華經に云く「具足の道を聞
かん」と欲す」等云云、涅槃經に云く「薩とは具足に名く」云云、竜樹
菩薩云く「薩とは六なり」等云云、無依無得大乘四論・玄義記に
いわ 云く「沙とは訳して六と云う胡法には六を以て具足の義と為すな
り」吉蔵疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」天台大師云く「薩とは
ほんこ 梵語なり此には妙と翻ず」等云云、私に会通を
加え ば本文を黷が如し爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳の二
法は 妙法蓮華經の五字に具足す我等・此の五字を受持すれば自然

に彼の因果の功徳を譲り与え給う、四大声聞の領解に云く「無上
宝聚・不求自得」云云、我等が己心の声聞界なり、「我が如く等く
して異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ一切衆生
を化して皆仏道に入らしむ」。妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の
功徳は骨髓に非ずや、宝塔品に云く「其れ能く此の經法を

護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を供養するなり、乃至亦復
諸の来り給える化仏の諸の世界を莊嚴し光飾し給う者を供養す
るなり」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を
紹繼して其の功德を受得す「須臾も之を聞く・即ち
阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得ん」とは是なり、寿命品に
云く「然るに我実に成仏してより已来、無量無辺百千万那由佗劫な
り」等云云、我等が己心の釈尊は五百塵点劫乃至所顯の三身にして
無始の古仏なり、経に云く「我本菩薩の道を行じて、成ぜし所の
寿命、今猶未だ尽きず・復上の数に倍せり」等云云、我等が己心の
菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり、例せば
大公・周公旦等は周武の臣下・成王幼稚の眷属・武内の大臣は
神功皇后の棟梁仁徳王子の臣下なるが如し、上行・無辺行・
浄行・安立行等は我等が己心の菩薩なり、妙薬大師云く「当に知

るべし身土一念の三千なり故に成道の時・此の本理に称うて一身
一念法界に遍し」等云云。

夫れ始め寂滅道場・華蔵世界より沙羅林に終るまで五十余年の

間・華蔵・密巖・三變・四見等の三土四土は皆成劫の上の無常の土に

變化する所の方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・密巖等なり能變の

教主涅槃に入りぬれば所變の諸仏随つて滅尽す土も又以て是くの

如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土な

り仏既に過去にも滅せず未來にも生ぜず所化以て同體なり此れ

即ち己心の三千具足・三種の世間なり迹門十四品には未だ之を説

かず法華經の内に於ても時機未熟の故なるか。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊・藥王

等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召し

て八品を説いて之を付属し給う、其の本尊の爲体本師の袈裟の上
に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・
釈尊の脇土上行等の四菩薩・文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として
末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣
月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を
表する故なり、是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の
間にも但八品に限る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・
阿難を脇土と爲し権大乘並に涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・
普賢等を以て脇土と爲す此等の仏をば正像に造り画けども未だ
寿量の仏有さず、末法に來入して始めて此の仏像出現せしむ可き
か。

問う正像二千余年の間は四依の菩薩並びに人師等余仏・小乗・
権大乘・二爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども本門寿量品

の本尊並びに四大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由
之を申す、比の事粗之を聞くと雖も前代未聞の故に耳目を驚動し
心意を迷惑す請う重ねて之を説け委細に之を聞かん。

答えて白く法華經一部八卷・二十八品・進んでは前四味・退いては

涅槃經等の一代の諸經惣じて之を括るに但一經なり始め寂滅
道場より終り般若經に至るまでは序分なり無量義經・法華經普賢

經の十卷は正宗なり涅槃經等は流通分なり、正宗十卷の中にお

いて亦序正流通有り無量義經並に序品は序文なり、方便品より
分別功德品の十九行の偈に至るまで十五品半は正宗分なり、分別

功德品の現在の四信より普賢經に至るまでの十一品半と一卷は
流通分なり。

又法華經等の十卷に於ても二經有り各序正流通を具するなり、

無量義經と序品は序分なり方便品より人記品に至るまでの八品は

正しやうしゆつぶん宗しゆつぶん分なりなり、法ほうしほん師ほうしほん品ほうしほんより安あんらくぎやうぼん樂らくぎやうぼん行ぎやうぼん品ぎやうぼんに至いたるまでの五ごぼん品ごぼんは流るつう通つう分なりなり、其その教きやうしゆ主しゆを論ろんずれば始しじやう成しやうかく・正しやうかく覺かくの仏ぼんむこんぬ・本ほんむこんぬ無むこんぬ今こんぬ有ひやつかいせんによの百ひやつかいせんによ界かいせんによ・千せんによ如によを説いこんとういて已いこんとう今ちやうか当ちやうかに超ずいじい過なんしんなんげせる随なんしんなんげ自なんしんなんげ意なんしんなんげ・難なんしんなんげ信なんしんなんげ難なんしんなんげ解なんしんなんげの正しやうほう法しやうほうなり、過かこ去この結けちえん縁けちえんを尋たいつうれば大だいつう通たいつう十じゆ六ろくの時とき・仏ぶつ果かの下げしゆ種くたを下くだし進しんんでは華けこんきやう嚴げんきやう經きやう等どうの前ぜん四し味みを以もつて助すけ經きやうと為なして大だいつう通たいつうの種しゆし子しを覺かく知ちせしむ、此これは仏ほんいの本あら意いに非あらず但どくほつ毒どくほつ發はつ等どうの一分いちぶんなり、二にじやうぼんぶ乘じやうぼんぶ凡ぼんぶ夫ぶ等どうは前ぜん四し味みを縁なと為なし漸ぜんぜん漸ぜんぜんに法ほつ華けに來らい至しして種しゆし子しを躡あらわし開あ頭らを遂とぐるの機きこれ是これなり、又ざいせ在ざい世せいに於おて始おめて八はつ品ひんを聞きく人にん天てん等どう・或あるは一い句く一いち偈げ等どうを聞きて下げしゆ種しゆとし・或あるは熟あし・或あるは脱だつし・或あるは普ふ賢げん・涅ね槃はん等どうに至いたり・或あるは正しやうぞう像ざう未み等どうに小しやう權けん等どうを以もつて顔なと為なして法ほつ華けに入いる例れいせば在ざい世せいの前ぜん四し味みの者ものの如ごとし。

又本門十四品の一經に序正流通有り涌出品の半品を序分となし、其の教主を論ずれば始成正覺の積尊に非ず所説の法門も亦天地の如し十界久遠の上に国土世間既に顕われ一念三千殆んど竹膜を隔つ、又迹門並びに前四味・無量義經・涅槃經等の三説は悉く随他意の易信易解・本門は三説の外の難信難解・随自意なり。

又本門に於て序正流通有り過去大通仏の法華經より乃至現在の華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十余年の諸經・十方三世諸仏の微塵の經經は皆壽量の序分なり一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名く、其の機を論ずれば徳薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ずるなり、爾前・迹門の円教尚仏因に非ず何に況や大日經等の諸小乗經をや何に況や華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば

ぜんさんきょう
前三教を出でず奪つて之を云えば蔵通に同ず、設い法は甚深と
しやう
称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは
これ
是なり、皆えは王女たりと雖も畜種を懷妊すれば其の子旃陀羅に
おと
劣れるが如し、此等は且く之を閤く迹門十四品の正宗の八品は
これ
二往之を見るに二乗を以て正と為し菩薩・凡夫を以て傍と為す、
さいおうこれ
再往之を勸うれば凡夫・正像末を以て正と為す正像末の三時の中
まっぽう
にも末法の始を以て正が中の正と為す、問うて曰く其の証如何ん、
答えて
いわ
曰く法師品に云く「しか
めつど
滅度の後をや「宝塔品に云く「法をして久住せしむ乃至來れる所の
けぶつまさ
化仏当に此の意を知るべし」等、勸持安樂等之を見る可し迹門是く
ごと
の如し、本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て正機と
な
為す所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門
い
わゆるいちおうこれ
も
つ
げ
し
ゆ
な
だ
い
つ
う
ぜ
ん
し
み
し
ゃ
く
も
ん

を熟と為して本門に至つて等妙に登らしむ、再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通俱に末法の始を以て経と為す、在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

問うて白く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く「爾の時に他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し我等に仏の滅後に於て娑婆世界に在つて勤加精進して是の經典を護持し誦誦し書写し供養せんことを聴し給わば当に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給わく止ね善男子・汝等が此の経を護持せんことを須いじし等云云、法師より已下五品の经文前後水火なり、宝塔品の未

に云く「大音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て

広く妙法華經を説かんものなる」等云云、設い教主一仏為りと
雖も之を奨勤し給わば薬王等の大菩薩・梵帝・日月・四天等は之を
重んず可き処に多宝仏・十方の諸仏客仏と為て之を諫曉し給う、
諸の菩薩等

は此の慇懃の付属を聞いて「我不愛身命」の誓言を立つ、此等は偏に
仏意に叶わんが為なり、而るに須臾の間に仏語相違して過八恒沙の
此の土の弘経を制止し給う進退惟れ谷まり凡智に及ばず、天台
智者大師前三後三の六釈を作つて之を会し給えり、所詮迹化他方の
大菩薩等に我が内証の寿量品を以て授与すべからず末法の初は謗
法の国にして悪機なる故に之を止めて地湧千界の大菩薩を召して
寿量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の
衆生に授与せしめ給う、又迹化の大衆は釈尊初発心の弟子等に
非ざる故なり、天台大師云く「是れ我が弟子なり応に我が故を弘む

べし」妙樂云く「子父の法を弘む世界の益有り」、輔正記に云く「法
是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」等云云。

又弥勒菩薩疑請して云く経に云く「我等は復仏の髓宜の所説、仏
所出の言未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給えりと

信ずと雖も、然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於て、若し是の語
を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯

然り世尊、願わくは為に解説して我等が疑を除き給え及び
未来世の諸の善男子此の事を聞き已りならば、亦疑を生ぜじ」云

云。文の意は寿量の法門は滅後の為に之を請ずるなり、寿量品に
云く「或は本心を失える。或は失わざる者あり。乃至、心を失わざ

る者は比の良薬の色香、俱に好きを見て即便之を服するに病尽く。
除癒ぬ」等云云、久遠下種大通結縁乃至前四味迹門等の一切の

菩薩・二乘人天等の本門に於て得道する是なり、経に云く「余の心

を失^うえる者は其^その父^{ちち}の来^きれるを見て亦^{また}歡喜^{かんぎ}し、問訊^{もんしん}して病^{びょう}を治^{ちやう}せん
ことを求^{もと}むと雖^{いえど}も、然^{しか}も其^その藥^{やく}を与^よつるに而^{しか}も肯^{けん}えて服^{ふく}せず、所以^{ゆえん}
は何^{いか}ん。毒氣^{どくけ}深^こく入^いつて本心^{ほんしん}を失^うえるが故^{ゆえ}に此^この好^よき色香^{しきかう}ある藥^{やく}に
於^{おい}て美^{うま}からずと謂^{おも}えり。乃至^{ないし}、我^{われ}今^{いま}当^{まさ}に方便^{ほうべん}を設^{たて}け此^この藥^{やく}を服^{ふく}せし
むべし、乃至^{ないしかく}是^この好^よき良藥^{りやうやく}を今^{いま}留^{とど}めて此^こに在^あり汝^{なんじ}取^とつて服^{ふく}す可^べし、
差^いじと憂^{うれ}うること勿^なかれ、是^この教^{きやう}を作^なし已^おつて、復^{また}他^た国^{こく}に至^{いた}つて使^しを
遣^{つか}わして還^{かえ}つて告^つぐ等^ら云^いふ、分^{ぶん}別^{べつ}功^く徳^{とく}品^{ひん}に云^いく、「悪^{あく}世^せ末^{まつ}法^{ぽう}の時^{とき}」等^ら
云^いふ。

問^とうて曰^いく此^この經^{きやう}文^{もん}の遣^{けん}使^し還^{げん}告^{こう}は如^い何^{かん}、答^{こた}えて曰^いく四^し依^えなり
四^し依^えに四^し類^{るい}有^あり、小^{しょう}乘^{じやう}の四^し依^えは多^た分^{ぶん}は正^{しやう}法^{ぽう}の前^{まへ}の
五^ご百^{ひゃく}年^{ねん}に出^{しゅつ}現^{げん}す、大^{だい}乘^{じやう}の四^し依^えは多^た分^{ぶん}は正^{しやう}法^{ぽう}の後^{のち}の五^ご百^{ひゃく}年^{ねん}に出^{しゅつ}現^{げん}
す、三^{さん}に迹^{しやく}門^{もん}の四^し依^えは多^た分^{ぶん}は像^{ざう}法^{ぽう}一^{いつ}千^{せん}年^{ねん}・少^{しょう}分^{ぶん}は
末^{まつ}法^{ぽう}の初^{はつ}なり、四^しに本^{ほん}門^{もん}の四^し依^えは地^じ涌^ゆ千^{せん}界^{がい}末^{まつ}法^{ぽう}の始^{はつ}に必^しず出^{しゅつ}現^{げん}す

可し今の遣使還告は地湧なり是好良薬とは寿量品

の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華經是なり、此の良薬をば仏

猶迹化に授与し給わず何に況や他方をや。

神力品に云く「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出

せる者皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を胆仰して仏に白して言さ

く世尊・我等・仏の滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の処に於て

当に広く此の經を説くべし」等云云、天台の云く「但下方の發誓のみ

を見たり」等云云、道暹云く「付属とは此の經をば唯下方涌出の

菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の

人に付す」等云云、夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の

弟子觀音は西方無量壽仏の弟子・藥王菩薩は日月淨明德仏の弟子

・普賢菩薩は宝威仏の弟子なり一往釈尊の行化を扶けん為に袈裟

世界に來入す又爾前・迹門の菩薩なり本法所持の人に非れば末法

の弘法こうぼうに足らざる者か、經いに云わく「爾その時に世尊せそん乃至ないし一切いっさいの衆しゆの前に大神力じんりきを現げんじ給たまう広長舌こうちやうぜつを出して上梵世じやうぼんに至いたらしめ乃至ないし十方じふじやう世界せかい衆しゆの宝樹ほうじゆの下師子げししの座ざの上じやうの諸仏しよぶつも亦復またまた是この如ごとく広長舌こうちやうぜつを出し給たまう」等云たまたま、夫それ顯密二道けんみつにどう・一切いっさいの大小乘經だいしやうじやう

の中に釈迦諸仏・並び坐し舌相梵天に至る文之無し、阿弥陀經の
廣長舌相三千を覆うは有名無実なり、般若經の舌相三千光を放つ
て般若を説きしも全く証明に非ず、此は皆兼帶の故に久遠を覆相
する故なり、是くの如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字
を囑累して云く、經に曰く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告
げ給わく諸仏の神力は是くの如く無量無辺不可思議なり若し我れ
是の神力を以て無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て囑累の為
の故に此の經の功德を説くとも猶尽すこと能わじ要を以て之を
言わば如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の
一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事・皆此の經に於て宣示顯説
す」等云云、天台云く「爾時・仏告上行より下は第三結要付属な
り」云云、伝教云く「又神力品に云く以要言之・如来一切所有之法
乃至宣示顯説經文明かに知んぬ果分の一切の所有の法・果分の一切

の自在の神力・果分の一切の秘要の蔵・果分の一切の甚深の事・皆
法華に於て宣示顕説するなり」等云云、此の十神力は妙法蓮華經の
五字を以て上行・安立行・淨行・無辺行等の
四大菩薩に授与し給うなり前の五神力は在世の爲後の五神力は
滅後の爲なり、爾りと雖も再往之を論ずれば一向に滅後の爲なり、
故に次下の文に云く「仏滅度の後に能く此の經を持たんを以ての
故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云。
次下の囑累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起つて大
神力を現じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至
今以て汝等に付屬す」等云云、地涌の菩薩を以て頭と爲して
迹化他力乃至・梵釈・四天等に此の經を囑累し給う・十方より來
る諸の分身の仏各本土に還り給う乃至多宝仏の塔還つて故の如く
し給う可し等云云、藥王品已下乃至涅槃經等は地涌の菩薩去り

あわ
了つて迹化の衆他方の菩薩等の為に重ねて之を付屬し給う
いそくこれ
遺囑是なり。
うたがい
疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の

疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の
經を流通するや、答えて曰く爾らず、驚いて云く法華經並びに
ほんもん
本門は仏の滅後を以て本と為して先ず地涌に之を授与す何ぞ正像
しゆげん
に出現して此の經を弘通せざるや、答えて云く宜べず、重ねて問う
いわ
て云く如何、答う之を宣べず、又重ねて問う如何、答えて曰く之を
いっさいせけん
の宣ぶれば一切世間の諸人、威音王仏の末法の如く又我が弟子の中に
も粗之を説かば皆誹謗を為す可し黙止せんのみ、求め
いわ
て云く説かずんば汝慳貪に墮せん、答えて曰く進退惟れ谷れり試
ほほこれ
みに粗之を説かん、法師品に云く「況んや滅度の後をや」寿量品に
いわ
云く「今留めて此に在く」分別功德品に云く「惡世末法の時」藥王品
いわ
に云く「後の五百歳閻浮提に於て広宣流布せん」涅槃經に云く「譬え

ば七子あり父母平等ならざるに非ざれども然れども病者に於て心
すなわひとえ
則ち偏に重きが如し」等云云、已前の明鏡を以て仏意を推知するに
仏の出世は靈山八年の諸人の為に非ず正像末の人の為なり、又
正像二千年の人の為に非ず末法の始め予が如き者の為なり、然れ
ども病者に於いてと云うは滅後・法華經誹謗の者を指すなり、
「今留在此」とは「於此好色香藥而謂不美」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざることは正法一千年の間は小乘
権大乘なり機時共に之れ無く四依の居士小権を以て縁と為して
在世の下種之を脱せしむ謗多くして熟益を破る可き故に之を説か
ず例せば在世の前四味の機根の如し、像法の中末に觀音・藥王・
南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏
と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事
行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず

所詮しよせん円えん機き有あつて円えん時じ無なき故ゆゑなり。

今いま末まつ法ぽうの初はじ小めを以もつて大だいを打うち権けんを以もつて実じつを破はし東とう西せい共こに之これを
失うしないてんちてんどう
失うし天地てんち顛てん倒とうせり迹し化やの四し依えは乱みだれて現げん前ぜんせず諸しよ天てん其その国こくを棄すて
之これを守護しゆごせず、此こゝの時とき地ぢ湧ゆうの菩ぼ薩さつ始はじめて世よに出現しゆげんし但たゞ妙みよ法ぽう蓮れん華げ經きやう
の五ご字じを以もつて幼よう稚ぢに服ふくせしむ「因だ謗あく墮だ悪あく必かならず因だ得とく益やく」とは是これなり、我われ
が弟子でし之これを推おもえ地ぢ涌ゆう千せん界がいは教き主しゆ釈しやく尊そんの初しよ発ほつ心しんの弟で子しなり寂じやく滅めつ
道どう場じやうに來きらず林そ・最さい後ごにも訪ふわず不ふ孝こうの失とが之これ有あり迹しやく門もんの十四じやくもん
品ひんにも來きらず本ほん門もんの六りく品ひんには座ざを立たつ但たゞ人にん品ひんの問もんに來ら還げんせり、

かく
是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初に
いで給わざる可きか、当に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は
賢王と成つて愚王を誠責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を
弘持す。

問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く「後の五百歳閻浮提に於て
広宣布せん」と、天台大師記して云く「後の五百歳遠く妙道に
沾おわん」妙薬記して云く「末法の初冥利無きにあらず」伝教大師
云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、末法太有近
の釈は我が時は正時に非ずと云う意なり、伝教大師・日本にして
末法の始を記して云く「代を語れば像の終り末の初・地を尋れば唐
の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・鬪諍の時なり経に云く
猶多怨嫉・況滅度後と此の言良とに以有るなり」

此の釈に鬪諍の時と云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指

すなり、此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一
閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し月支震旦に未だ此の本尊有さ
ず、日本国の上宮・四天王寺を建立して未だ時来らざれば阿弥陀
・他方を以て本尊と為す、聖武天皇・東大寺を建立す、華嚴經の
教主なり、未だ法華經の実義を顕さず、伝教大師粗法華經の実義
を顕す然りと雖も時未だ来らざるの故に東方の鵝王を建立して
本門の四菩薩を顕わさず、所詮地涌千界の為に此れを譲り与え
給う故なり、此の菩薩・仏勅を蒙りて近く大地の下に在り正像に
未だ出現せず末法にも又出で来り給わずば大妄語の大士なり、三
仏の未来記も亦泡沫に同じ。

此れを以て之を惟うに正像に無き大地震・大彗星等出来す、
此等は金翅鳥・修羅・竜神等の動変に非ず偏に四大菩薩を出現せ
しむ可き先兆なるか、天台云く「雨の猛きを見て竜の大なるを知り

花の盛なるを見て池の深きことを知る」等云云、妙楽云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得可きか。

一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏み末代幼稚の首に懸けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護し給わんこと大公・周公の文王を撰扶し四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者なり。

文永十年卯月二十五日

日蓮之を註す

四三 観心本尊抄送状

帷一つ・墨三長・筆五官給び候い了んぬ、観心の法門少少之を

注して大田殿・教信御房等に奉る、此の事日蓮身に当たたる大事なり
之を秘す、無二の志を見れば之を開せらる可きか、此の書は難
多く答少なし未聞の事なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に
及ぶとも三人四人座を並べて之を讀むこと勿れ、仏滅後・二千二百
二十余年未だ此の書の心有らず、国難を顧みず五五百歳を期して
之を演説す乞い願くば一見を歴来の輩は師弟共に靈山浄土に
詣でて三仏の顔貌を拜見したてまつらん、恐恐謹言。

文永十年太齋卯月二十六日

富木殿御返事

日蓮 花押

四四

撰時抄

建治元年

五十四歳御作

256P

釈子

日蓮述ぶ

そ
夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去の大通
ちしょうぶつ しゅうせい
智勝仏は出世し給いて十小劫が間・一経も説き給はず経に云く一
坐十小劫又云く「仏・時の未だ至らざるを知り請を受けて黙然とし
て坐す」等云云、今の教主釈尊は四十余年の程法華経を説き給は
ず経に云く「説く時未だ至らざるが故」と云云、老子は母の胎に
処して八十年、弥勒菩薩は兜率の内院に籠らせ給いて五十六億七
せんまん
千万歳をまち給うべし、彼の時鳥は春ををくり鶏鳥は暁をまつ
ちくしょう
畜生すらなをかくのごとし何に況や仏法を修行せんに時を糾ざる
べしや、寂滅道場の砌には十方の諸仏示現し一切の大菩薩集会

し給たまい梵ぼん帝たい・四天してんは衣いを・ひるがへし竜りゅう神じん・八部はちぶは掌たなごころを合せ凡ほん夫ぶ
大根性こんじょうの者は耳みみをそばだて生身しょうしん得忍とくになの諸しよ菩薩ぼさつ・解脫げだつ月がつ等とう請しょうをな
し給たまいしかども世尊せそんは二乗にじょう作さ仏ぶつ・久遠くおん実成じつじょうをば名み字じをかくし
即身そくしん成じょう仏ぶつ・一念いちねん三千さんぜんの肝心かんじん、其義のべを宣たまへ給たまはず、此等これらは偏ひとえにこれ機き
は有いまりしかども時の来いたらざればのべさせ給たまはず經いに云いく、「説く時
未いまだ至いたらざる故こと等とう云いふ、靈山りゅうせん会上みぎりの砌みには閻浮えんぶ第一だいいちの不孝ふこうの人
たりし阿闍あじや世せ大王だいおう座ざにつらなり、一代いちだい謗法ぼうぼうの提婆だいば達多だつた
には天王てんのう如来にょらいと名なをさづけ五障ごしやうの竜女りゅうにょは蛇身じゃしんをあらためずして仏
になる、決定けつじょう性の成じょう仏ぶつは焦い種れるたねの花はなさき果くわなり久遠くおん実成じつじょうは百歳ひゃくさいの
おきな
與い・二十五いちねんさんぜんの子ことなれるかと・うたがふ、一念いちねん三千さんぜんは九界くじゅう即そく仏界ぶつがい・
仏界ぶつがい即そく九界くじゅうと談だんず、されば此これの經きの一字いちじは如意にょい宝珠ぼうじゆなり一句いっくは
諸しよ仏ぶつの種子しゆしとなる此等これらは機きの熟じゆく不熟ふじゆくはさてをきぬ時ときの至いたれるゆへ
なり、經きに云いく「今正こしく是そのれ其そのの時ときなり決定けつじょうして大乘だいじょうを説いかん」

等云云。

問うて云く機にあらざるに大法を授けられれば愚人は定めて誹謗をなして悪道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、答えて云く人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・薬を病人にあたう病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか、尋ねて云く法華經の第二に云く「無智の人の中に此の經を説くこと莫れ」同第四に云く「分布して妄りに人に授与すべからず」同第五に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經の中

に於て最も其の上になり長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等云云、此等の經文は機にあらずば説かざれというか、今反詰して云く不輕品に云く「而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等云云四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り、悪口罵詈して言く是の無智の比丘 又云く衆人・或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、

勸持品かんじほんに云く「諸もろの無智むちの人の悪口あくくち罵詈めり等らし及びおよ刀杖とうじょうを加くわうる者
有あらん」等云云、此等これらの經文きやうもんは悪口あくくち罵詈めり乃な至いた打擲うちやくすれ

どもととかれて候は説く人の失とがとなりけるか、求めて云く此この両説りやうせつ

は水火すいかなり・いかんが心こころうべき答こたえて云く天台てんだい云く「時に適かなうのみ」

章安しやうあん云く「取捨しゆしや宜よろきを得て一向いっかうにすべからず」等云云、釈しゃくの心こころは或ある

る時は謗ぼうじぬべきにはしばらくとかず・或る時は謗ぼうずとも強しいて説く

べし・或る時は一機いちぎは信しんずべくとも万機まんぎ謗ぼうべくばとくべからず・或る

時は万機まんぎ一同いどうに謗ぼうずとも強しいて説くべし、初成道しよじやうだいの時は法慧ほうえ・功德林くどく

・金剛幢こんかう・金剛藏こんかう・文殊もんじゆ・普賢ふげん・弥勒みろく・解脱げだつ月等がつの大菩薩ほさつ

・梵帝ぼんたい・四天等してんの凡夫ぼんぶ・大根性こんじやうの者ものかずをしらず、鹿野苑ろくやあんの苑そのには

俱鄰等くりんの五人ごにん・迦葉等かしょうの二百五十人にひゃくごじゅうごにん・舍利弗等しゃりほつの二百五十人にひゃくごじゅうごにん・八万

の諸天しよてん、方等大会ほうとうたいえの儀式ぎしには世尊せそんの慈父じふの淨飯大王じやうばんだいおうねんごろに恋

せさせ給たまいしかば仏宮ぶつぐうに入いらせ給たまいて觀かん仏三昧ぶつさんまい經きやうをとかせ給たまい、

ひも 悲母の御ために とうりえん 利天に九十日が間籠らせ給いしには摩耶経をとかせ給う、慈父悲母などにはいかなる秘法か惜ませ給うべきなれども法華経をば説かせ給はずせんずるところ機にはよらず時いたらざればいかにもとかせ給はぬにや。

問うて云くいかなる時にか小乗・権経をとときいかなる時にか法華経を説くべきや、答えて云く十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで時と機とをば相知りがたき事なり何に況や我等は凡夫なりいかでか時機をしるべき、求め

て云くすこしも知る事あるべからざるか、答えて云く仏眼をかつて
時機をかながへよ仏・日を用て国土をてらせ、問うて云く其の心
如何、答えて云く大集経に大覺世尊・月蔵菩薩に対して未來の時を
定め給えり所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固・次の五百
年には禅定堅固一千年・次の五百年には読誦多聞堅固・次の五百年に
は多造塔寺堅固二千年・次の五百年には我法の中に於て鬪諍言訟して
白法隠没せん等云云、此の五の五百歳二千五百余
年に人人の料簡さまざまなり、漢土の道綽禪師が云く正像二千・
四箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし末法に入つて
は彼等の白法皆消滅して浄土の法門・念仏の白法を修行せん人
計り生死をはなるべし、日本国の法然が料簡して云く今日本国に
流布する法華経・華嚴経並びに大日経諸の小乗経・天台・真言・
律等の諸宗は大集経の記文の正像二千年の白法なり末法に入つ

ては彼等の白法は皆滅尽すべし設い行ずる人ありとも一人も生死を

はなるべからず、十住毘婆沙論と曇鸞法師の難行道道綽の

未有一人得者・善導の千中無一これなり、彼等の白法隱没の次には

浄土三部經・弥陀・称名の一行ばかり大白法として出現すべし、

此を行ぜん人人はいかなる悪人・愚人なりとも十即十生・百即

百生唯浄土の一門のみ有つて路に通入すべしとはこれなり、され

ば後世を願はん人人は叡山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸

寺・諸山の御帰依をとどめて彼の寺山によせをける田畠郡郷をうば

いとつて念仏堂につけば決定往生南無阿弥陀仏とすすめければ我

が朝一同に其の義になりて今に五十余年なり、

日蓮此等の悪義を難じやぶる事はことふり候いぬ、彼の大集經の

白法隱没の時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の

びやくほうおんもつ
白法隱没の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の
えんぶだい
一閻浮提の内八万の国あり其の国に八万の王あり王王ごとに
しんかなら ばんみん
臣下並びに万民までも今日本国に弥陀称名を四衆の口口に唱う
るがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我が
めつど
滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむ
ること無けん」等云云、經文は大集經の白法隱没の次の時をとか
たま
せ給うに広宣流布と云云、同第六の卷に云く「悪世末法の時能く
こ
是の經を持つ者」等云云又第五の卷に云く「後の末世の法滅せんと
する時」等又第四の卷に云く「而も此經は如来現在にすら猶怨嫉多
し況や滅度の後をや」又第五の卷に云く「一切世間怨多くして信じ
がた
難し」又第七の卷に第五の五百歳・鬪諍堅固の時を説いて云く
「あくま まみん もろもろてんりゆう やしゃ くはん だ そ たより
悪魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便を得ん」大集經に

云く「我が法の中に於て鬪諍言訟せん」等云云、法華經の第五に

云く「悪世の中の比丘」

又云く「或は阿蘭若に有り」等云云又云く「悪鬼其身に入る」等云

云、文の心は第五の五百歳の時悪鬼の身に入る大僧等・国中に充滿

せん其時に智人・一人出現せん彼の悪鬼の入る大僧等時の王臣

万民等を語て悪口罵詈・杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・

多宝・十方の諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・日月・

四天等に申しくだされ其の時・天変地天盛なるべし、国主等其のい

さめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の悪王

・悪比丘等をせめらるるならば前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起る

べし其の時・日月所照の四天下の一切衆生、或は国ををしみ或

は身ををしむゆへに一切の仏・菩薩にいのりをかくともしるしなく

ば彼のにくみつる一の小僧を信じて無量の大僧等八万の大王等、

いっさい ばんみんみなごうへ
一切の万民皆頭を地につけ 掌 を合せて一同に南無妙法蓮華經
ととなうべし、

じんりきほん
例せば神力品の十神力の時・十方世界の一切衆生一人もなく
しやばせかい
娑婆世界に向つて大音聲をはなちて南無釈迦牟尼仏・南無
しやかむにぶつ なむ みようほうれんげきよう
釈迦牟尼仏・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同にさげびし
がごとし。

いわ きようもん ふんみよう
問うて曰く經文は分明に候・天台・妙楽・伝教等の未來記の言
はありや、答えて曰く汝が不審 逆なり釈を引かん時こそ經論は
いかにとは不審せられたれ經文に分明ならば釈を尋ぬべからず、
さて釈の文が經に相違せば經をすてて釈につくべきか如何、彼云く
どうりしやく
道理至極せり、しかれども凡夫の習・經は遠し釈は近し近き釈・
ぶんみよう
分明ならばいますこし信心をますべし、今云く汝が不審ねんごろ
なれば少少釈をいだすべし天台大師云く「このこひやくさい
後の五百歳遠く妙道に

づるお みょうらく だいし いわ 末法の初め みょうり 冥利無きにあらず でんぎょう 伝教大師
 沾わん い 妙樂大師云く ま 末法の初め みょうり 冥利無きにあらず でんぎょう 伝教大師
 云く い 「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今 ま
まさ 正しく是れ其の時なり、何を以て知ることを得る、安樂行品に あんらくぎょうほん
い 云く末世法滅の時なり」又云く い 「代を語れば則ち像の終り末の初 すなわ
ま め地を尋ぬれば唐の東 かう 羯の西 こ 人を原ぬれば五濁の生 とつじょう 鬪諍の時
な なり、經に云く猶多怨嫉 き 況滅度後と此の言良に以有るなり」云云、
そ 夫れ釈尊の出世は住劫第九の滅 にんじゅう 人壽百歳の時なり百歳と十歳と
ちゅうげんざいせ の中間在世五十年滅後二千年と一万年となり、其の中間に法華經 ほけきょう
る の流布の時 い 二度あるべし所謂在世の八年 めつこ 滅後には末法の始の五
 百年なり、而に天台 しかるにてんだい 妙樂 みょうらく 伝教等は進んでは在世法華經の時にも
 ・もれさせ給いぬ、退いては滅後末法の時にも生れさせ給はず たま 中間 ちゅうげん
 なる事をなげかせ給いて末法の始をこひさせ給う御筆なり、例せば
あ 阿私陀 だ

仙人せんじんが悉達しつた太子たいしの生なれさせ給たまいしを見て悲あはんで云いく現生げんせいには九十こじゅうにあまあまり太子たいしの成道じやうだうを見るべからず後生ごじやうには無色界むじくがいに生なれて五十年ごじゅうねんの説法せつぽうの坐ざにもつらなるべからず正像しやうざう末まつにも生なるべからずとなげきしがごとし、道心どうしんあらん人人ひとびとは此こゝを見みききて悦よろこばせ給たまえしよじようぞう正像しやうざう二千年にせんねんの大王だいおうよりも後世ごじやうををもはん人人ひとびとは末法まつぽうの今いまの民たみにてこそあるべけれ此こゝを信しんぜざらんや、彼の天台てんだいの座主ざすよりも南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となうる癩人らいにんとはなるべし、梁りやうの武帝ぶていの願がんに云いく「寧むしろ提婆達多だいばだつたとなて無間地獄むげんじごくには沈しずむとも鬱頭羅弗うずらんぼつとはならじ」と云いふ。

問いうて云いく竜樹りゆうじゆ・天親てんじん等の論師ろんしの中に此こゝの義ぎありや、答こたえて云いく竜樹りゆうじゆ・天親てんじん等は内心ないしんには存ぞんぜさせ給たまうといえども言いには此こゝの義ぎを宣のたまへ給たまはず、求もとめて云いくいかなる故ゆゑにか宣のたまへ給たまざるや、答こたえて云いく多くの故ゆゑあり一いちには彼の時ときにも機きなし二にには時ときなし三さんには迹化しやくけなれ

ば付嘱せられ給はず、求めて云く願くは此の事よくよくきかんとを
もう、答えて云く夫仏の滅後二月十六日よりは正法の始なり迦葉
尊者・仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十年
次に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十年、已
上一百年が間は但小乗經の法門をのみ弘通して諸大乘經は
名字もなし何に況や法華經をひろむべしや、次には弥遮迦・仏陀
難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢

等の四五人、前の五百余年が間は大乗經の法門少少出来せしかども

とりたてて弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ、已上

大集經の先五百年解脱堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年

が前其の中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・

羅・尊者・僧・難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闇夜那・盤陀・摩奴羅・

鶴勒夜那・師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次には

小乗經をきわめ後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんざん

に破し失ひ給いき此等の大士等は諸大乘經をもつて諸小乗經を

ば破せさせ給いしかども諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にか

かせ給はず、設い勝劣をすこしかかせ給いたるやうなれども本・迹

の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・百界千如

・一念三千の肝要の法門は分明ならず、但・或は指をもつて月をさ

すがごとくし、或は文にあたりてひとし計りかかせ給いて化導の

始終しじゆう・師弟していの遠近おんこん・得道とくどうの有無うむはすべて一分いちぶんもみへず、此等これらは正法しきやうほうの後の五百年だいしつきやう・大集經ぜんじやうけんこの禪定堅固ぜんじやうけんこの時にあたれり、正法しきやうほう一千年の後は月氏がっしに仏法ぶつぽう充滿じゅうまんせしかども、或あるは小をもて大を破はし、或あるは權經こんきやうをもつて実經じつきやうを隱没おんもつし、仏法ぶつぽうさまざまに乱みだれしかば得道とくどうの人やふやくすくなく、仏法ぶつぽうにつけて惡道あくどうに墮おちる者ものかずをしらず、正法しきやうほう一
千

年の後そちほう・像法ぞうほうに入いつて一十五年と申まをせしに、仏法ぶつぽう東あづまに流ながれて漢土かんとに入いりにき、像法ぞうほうの前まへ五百年の内うち・始はじの一百余年ひゃくねんが間は漢土かんとの道士どうしとがつし、月氏ぶつぽうの仏法ぶつぽうと諍論じやうろんして、いまだ事ことさだまらず、設たい定ぢやうまりたりしかども、月氏ぶつぽうの仏法ぶつぽうと諍論じやうろんして、いまだ事ことさだまらず、設たい定ぢやうまりたりしかども、も仏法ぶつぽうを信しんずる人の心こころいまだふかからず、而しかに、佛ぶつ法ぽうの中ちゆうに大小だいしきやう・權實こんじつ・顯密けんみつをわかつたらば、聖教しきやうきやう一同いつどうならざる故ゆゑ・疑うたがいをこりてかへりて外典げてん

とともになう者ものもありぬべし、これらのをそれあるかのゆへに摩騰まつとう・

竺蘭じくらんは自みづかは知しつて而しかも大小だいしやうを分わけず權實ごんじつをいはずしてやみぬ、其その後のち・魏ゑい・晉しん・齊せい・宋そう・梁りやうの五代ごだいが間ま・仏法ぶつぽうの内に大小だいしやう・權實ごんじつ・顯密けんみつをあらそひし程ほどにいづれこそ道理どうりともきこえずして上かみみ一人ひとりより下したも万民ばんみんにいたるまで不審ふしんすくなからず南三なんざん・北七ほくひちと申もうして仏法ぶつぽう十流じゅうりゆうにわかれぬ所謂いわゆる南なんには三時さんじ・四時しじ・五時ごじ・北ほくには五時ごじ・半滿はんまん・四宗しじゆう・五宗ごじゆう・六宗りくじゆう、一宗いちじゆうの大乗だいじやう一音等いちおんとう・各各義かくかくぎを立て辺執へんしつ水すい火くわなり、しかれども大綱たいこうは一同いちどうなり所謂いわゆる一代いちだい聖教しやうきやうの中なかには華嚴經けこんきやう第一だいいち・涅槃經ねはんきやう第二にぱんきやう・法華經ほけきやう第三ほけきやうなり法華經ほけきやうは阿含あこん・般若はんんにや・

じようみょう

淨名・思益等の經經 に対すれば真実なり了義經・正見なりしか

りといへども涅槃經に對すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云、

漢より四百余年の末へ五百年に入つて陳隋二代に智ちんずいと申す小僧一

人あり後には天台智者大師と号したてまつる、南北の邪義をやぶり

て一代聖教の中には法華經第一・涅槃經第二・華嚴經第三なり等

云云、此れ像法の前・五百歳・大集經の讀誦多聞堅固の時にあひあ

たれり、像法の後・五百歳は唐の始・太宗皇帝の御宇に玄奘三蔵・

月支に入つて十九年が間、百三十箇国の寺塔を見聞して多くの論師

に値いたてまつりて八万聖教・十二部經の淵底を習いきわめしに

其の中に二宗あり所謂法相宗・三論宗なり、此の二宗の中に法相

・大乘は遠くは弥勒・無著近くは戒賢論師に伝えて漢土にかへりて

太宗皇帝にさづけさせ給う、此の宗の心は仏教は機に隨うべし

一乗の機の

ためには三乘方便・一乘真実なり所謂法華経等なり、三乗の機のために三乘真実・一乘方便所謂深密経・勝鬘経等此れなり、天台智者等は此の旨を弁えず等云云、而も太宗は賢王なり当時名を一天にひびかすのみならず三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき漢土を手ににぎるのみならず高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし内外を極めたる王ときこへし賢王の第一の御帰依の僧なり、天台宗の学者の中にも頭をさしいだす人一人もなし、而れば法華経の実義すでに一國に隠没しぬ、同じき太宗の太子・高宗・高麗の継母・則天皇后の御宇に法蔵法師といふ者あり法相宗に天台宗のをそわるところを見て前に天台の御時せめられし華嚴経を取出して一代の中には華嚴第一・法華第二・涅槃第三と立てけり、太宗・第四代玄宗皇帝の御宇開元四年同八年に西天・印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日経・金剛頂経・

蘇悉地經そしつちきようを持たもて渡わたり真言宗しんごんしゅうを立たつ、此の宗の立義りつきに云いく教くわうに二種にあり一いには釈迦しゃかの顯教けんきよう所謂いわゆるけごん華嚴ほっけ・法華等ほっけ、二にには大日だいにちの密教みつきよう所謂いわゆるだいにちきようなり、法華經ほっけきようは顯教けんきようの第一だいいちなり此の經は大日だいにちの密教みつきように対たいすれば極理ごくりは少すくし同どうじごけれども事相じそうの印契いんけいと真言しんごんとはたえてみへず三密相さんみつそう應おうせざれば不ふ了りょう義經等ぎきんどう云云、已上いじょう法相ほっそう・華嚴けごん・真言しんごんの三宗さんしゅう一同いつどうに天台法華宗てんだいほっけしゅうをやぶれども天台大師程てんだいだいしの智人ちじん・法華宗ほっけしゅうの中なになかりけ

るかの間・内内はゆはれなき由は存じけれども天台のごとく公場
にして論ぜられざりければ上国王・大臣・下一切の人民にいたるま
で皆仏法に迷いて衆生の得道みなとどまりけり、此等は像法の後
の五百年の前二百余年が内なり、像法に入つて四百余年と申しける
に百済国より一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわた
る、漢土の梁の末・陳の始にあひあたる、日本には神武天王よりは
第三十代欽明天王の御宇なり、欽明の御子・用明の太子に上宮
王子・仏法を弘通し給うのみならず並びに法華経・浄名経・
勝鬘経を鎮護国家の法と定めさせ給いぬ、其の後・人王
第三十七代に孝徳天王の御宇に三論宗・成実宗を觀勒僧正・百濟
国よりわたす、同御代に道昭法師・漢土より法相宗・俱舎宗をわ
たす、人王第四十四代元正天王の御宇に天竺より大日経をわたし
て有りしかども而も弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏

三蔵といひ、人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大徳・新羅国より華嚴宗をわたして良弁僧正・聖武天王にさづけたてまつりて東大寺の大仏を立てさせ給えり同御代に大唐の鑒真和尚・天台宗と律宗をわたす、其の中に律宗をば弘通し小乗の戒場を東大寺に建立せしかども法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了んぬ、其後人王第五十代像法八百年に相当つて桓武天王の御宇に最澄と申す小僧出来せり後には伝教大師と号したてまつる、始には三論・法相・華嚴・俱舍・成実・律の六宗並びに禅宗等を行表僧正等に習学せさせ給いし程に我と立て給える国昌寺・後には比叡山と号す、此にして六宗の本経・本論と宗宗の人師の釈とを引き合せて御らむありしかば彼の宗宗の人師の釈・所依の経論に相違せる事多き上僻見多にして信受せん人皆悪道に墮ちぬべしとかんがへさせ給う其の上法華経の実義は宗宗の人人

・我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其の義なし、此れを
申すならば喧嘩出来すべしもだして申さずば仏誓にそむきなんと
をもひわづ

らはせ給いしかども終に仏の誠ををそれて桓武皇帝に奏し給いしか
ば帝・此の事ををどろかせ給いて六宗の碩学に召し合させ給う、
彼の学者等始めは慢幢山のごとし悪心・毒蛇のやうなりしかども
終に王の前にしてせめ

をとされて六宗・七寺一同に御弟子となりぬ、例せば漢土の南北の諸師・陳殿にして天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし、此れはこれ円定・円慧計りなり其の上天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八大徳に梵網經の大乗・別受戒をさづけ給うのみならず法華經の円頓の別受戒を叡山に建立せしかば延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず仏の滅後・一千八百余年が間身毒尸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の八戒・日本国に始まる、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹・天親にもこえ天台・妙楽にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東寺・園城・七大寺・諸国の八宗・浄土・禅宗・律宗等の諸僧等誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子にたれども円頓一同の戒場は漢土に

なければ戒にをいては弟子とならぬ者もありけん、この日本国は
伝教大師の御弟子にあらざる者は外道なり悪人なり、而れども
漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は大師心中には存知せさせ給い
けれども六宗と天台宗のごとく公場にして勝負なかりけるゆへ
にや、伝教大師已後には東寺・七寺・園城の諸寺日本一州一同に
真言宗は天台宗に
勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをばしめしをもえり、し
かれば天台法華宗は伝教大師の御時計りにぞありける此の伝教
の御時は像法の末・大集経の多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法
中・鬪諍言訟・白法隱没の時にはあたらす。
今末法に入つて二百余歳・大集経の於我法中・鬪諍言訟・白法
隱没の時にあたりり仏語まことならば定んで一閻浮提に鬪諍起る
べき時節なり、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六十余州はす

でに蒙古国に打ちやぶられぬ華洛すでにやぶられて徽宗・欽宗の両
帝・北蕃にいけどりにせられて韃靼にして終にかくれさせ給いぬ、
徽宗の孫・高宗皇帝は長安をせめをとされて田舎の臨安行在府に落
ちさせ給いて今に数年が間京を見ず、高麗六百余国も新羅百濟等
の諸国等も皆大蒙古国の皇帝にせめられぬ、今の日本国の壱岐
対馬並びに九国のごとし鬪争堅固の伝語

地に墮ちず、あたかもこれ大海のしをの時をたがへざるがごとし、
是をもつて案ずるに大集經の白法隱没の時に次いで法華經の大
白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべからざ
るか、彼の大集經は仏説の中の権大乘ぞかし、生死をはなるる道
には法華經の結縁なき者のためには未顕眞実なれども六道・四生・
三世の事を記し給いけるは寸分もたがはざりけるにや、何に況や
法華經は釈尊・要當説眞実となのらせ給い多宝仏は眞実なり
と御判をそへ十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し示
し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて後・五百歳
に一切の仏法の滅せん時・上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたし
めて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと梵帝・日月・四天・
竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや、大地は反覆すとも
高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月は

地に落つるとも此の事は一定なるべし、此の事一定ならば鬪諍とつじょう

堅固けんこの時・日本国にほんこくの王臣おうしんと並びに万民ばんみん等が仏の御使おんつかいとして南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを流布るふせんとするを・或は罵詈あゐりし・或は悪口あくぐちし・或は

流罪るざいし・或は打擲あつちやくし弟子眷属でしけんぞく等を種種しゅじゆの難なんにあわする人人ひとびといかで

か安穩あんのおんにては候べき、これをば愚癡ぐちの者は咒詛じゅうそすともをひぬべし、

法華經ほけきょうをひろむる者は日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじょうの父母ふぼなり章安大師しょうあんだいし

云く「彼が為ために悪を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、されば

日蓮にちれんは当帝の父母ふぼ・念仏者ねんぶつ・禅衆ぜんしゆ・真言師等しんごんしが師範しはんなり又主君しゅくんなり、

而る

を上かみいちにん一人より下万民ばんみんにいたるまであだをなすをば日月にちがついかでか

彼等かれらが頂いただきを照し給うべき地神てらいかでか彼等かれらの足を戴いたき給うべき、

提婆達多だいばだつたは仏を打ちたてまつりしかば大地だいち揺動ようどうして火炎かえんいでにき、

檀弥羅王だんみらは師子尊者ししそんじゃの頸を切りしかば右の手・刀とともに落ちぬ、

徽宗皇帝は法道が面にかなやきをやきて江南にながせしかば半年
が内にゑびすの手にかかり給いき、蒙古のせめも又かくのごとくな
るべし、設い五天のつわものをあつめて鉄圀山を城と

せりともかなふべからず必ず日本国の一切衆生・兵難に値うべし、
されば日蓮が法華經の行者にてあるなきかはこれにても見るべし、
教主釈尊記して云く末代悪世に法華經を弘通するものを悪口
罵詈等せん人は我を一劫が間

あだせん者の罪にも百千万億倍すぎたるべしと・とかせ給へり、
而るを今の日本国の国主・万民等・雅意にまかせて父母・宿世の敵
よりもいたくにくみ謀反・殺害の者よりもつよくせめぬるは現身に
も大地われて入り天雷も身をさかざるは不審なり、日蓮が法華経
の行者にてあらざるか・もししからばを・をきになげかし、今生に
は万人に・せめられて片時もやすからず後生には悪道に墮ん事あさ
ましとも申すばかりなし、又日蓮・法華経の行者ならずばいか
なる者の一乗の持者にてはあるべきぞ、法然が法華経をなげすて
よ善導が千中無一・道綽が未有一人得者と申すが法華経の行者に
て候か、又弘法大師の云く法華経を行ずるは戲論なりとかかれた
るが法華経の行者なるべきか、经文には能持是經・能説此經なん
どこそとかれて候へよくとくと申すはいかなるぞと申すに於諸經中
最在其上と申して大日經・華嚴經・涅槃經・般若經等に法華経は

すぐれて候なりと申す者をこそ經文には法華經の行者とは

とかれて候へもし經文のごとくならば日本国に仏法わたて七百余

年、伝教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし、

いかにいかにとをもうところにて頭破作七分口則閉塞のなかりけるは

道理にて候いけるなり、

此等は浅き罰なり但一人・二人等のことなり、日蓮は閻浮第一の

法華經の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人は

閻浮第一の大難にあうべし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の

大地震一天を罰する文永の大彗星等なり、此等をみよ仏滅後の後、

仏法を行ずる者にあだをなすといへども今のごとくの大難は一度も

なきなり、南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人・一人もな

し、此の徳はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

疑つて云く設い正法の時は仏の在世に對すれば根機劣なりと

も像末もちに対すれば最上さいじょうの上機じょうきなり、いかでか正法しやうほうの始はじめに法華經ほけきやうを
ば用もちいざるべき随したがつて馬鳴めみやう・竜樹りゆうじゆ・提婆だいば・無著むちやく等も正法しやうほう一千年の内
にこそ出現しゆつげんさせ給たまへ天親てんじん菩薩ぼさつは千部の論師ろんし・法華論ほつげろんを造りて
諸經しよきやうの中第一だいいちの義ぎを存そんす真諦しんたい三蔵さんざうの相伝さうでんに云いわく月支がつしに法華經ほけきやうを
くつう
弘通くわうつうせる家け・五十余家ごじゅうよけ・天親てんじんは其そのの一也いつたと已上しやうほう・正法しやうほうなり、像法ざうほうに
入いつては天台大師てんだいだいし・像法ざうほうの半なかばに漢土かんどに出現しゆつげんして玄げんと文ぶんと止やめんとの三

十

卷つを造りて法華經ほけきょうの淵底えんていを極めたり、像法ぞうほうの末すえに伝教大師でんきょうだいし・日本にほんに出現しゅつげんして天台大師てんだいだいしの円慧えんね・円定えんていの二法にほふを我が朝あしたに弘通くつうせしむるの
みならず円頓えんどんの大戒場だいかいを叡山えいざんに建立こんりゅうして日本にほん一州いちしゅう皆みな同じく円戒えんけいの
地ちになして上かみ一人ひとりより下した万民ばんみんまで延曆寺えんりやくじを師範しおんと仰おほがせ給たまう豈あにに
像法ぞうほうの時とき・法華經ほけきょうの広宣流布こうせんるふにあらずや、答こたえて云いわく如来にょらいの教法きょうほうは
必ず機きに随したがうという事は世間せけんの学者がくしゃの存知ぞんじなり、しかれども仏教ぶつぎょう
はしからず・上根じょうこん・上智じょうちの人のために必ず大法だいほうを説たまくならば初成道しじょうどう
の時ときなんぞ法華經ほけきょうをと給たまはざる正法しやうほうの先さき五百年ごひゃくねんに大乘經だいじやうきやうを
弘通くつうすべし、有縁うえんの人に大法だいほうを説たまかせ給たまうならば浄飯大王じやうばんたいおう・摩耶まや
夫人ふじんに觀仏三昧經くわんぶつさんまい・摩耶經まやをとくべからず、無縁むえんの悪人あくにん謗法ぼうほうの者に
秘法ひほうをあたえずば覺徳比丘かくとくびくは無量むりやうの破戒はかいの者に涅槃經ねはんきやうをさづくべ
からず、不輕菩薩ふきやうぼさつは誹謗ひぼうの四衆ししじゅうに向つていかに法華經ほけきやうをば弘通くつうせさ
せ給たまいしぞ、されば機きに随したがつて法ほうを説たまくと申もうすは大なる僻見びやくけんなり。

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、答えて云く宣べ給はず、問うて云く何なる教をか宣べ給いし、答えて云く華嚴・方等・般若・大日經等の權大乘・顯密の諸經をのべさせ給いて法華經の法門をば宣べさせ給はず、問うて云く何をもつてこれをしるや答えて云く竜樹菩薩の所造の論・三十万偈而れども尽して漢土・

日本にわたらざれば其の心しりがたしといえども漢土にわたれる十住毘婆娑論・中論・大論等をもつて天竺の論をも比知して此れを知るなり。

疑つて云く天竺に残る論の中にわたれる論よりも勝れたる論やあるらん、答えて云く竜樹菩薩の事は私に申すべからず仏記し給う我が滅後に竜樹菩薩と申す人・南天竺に出ずべし彼の人の所詮は中論という論に有るべしと仏記し給う、随つて竜樹菩薩の流

天竺てんじくに七十家あり七十人とともに大論師ろんしなり、彼の七十家の人人ひとびとは皆中論みなを本

とす中論四卷・二十七品の肝心かんじんは因縁いんねん所生法しよしよほうの四句の偈げなり、此の四句の偈げは華嚴けごん・般若等はんによの四教三諦しきようさんたいの法門ほうもんなりいまだ法華開會ほっけかいえの三諦さんたいをば宣のべべ給たまはず。

疑うたがいつて云いわく汝なんじがごとくに料簡りょうけんせる人ありや、答いえて云いわく天台てんだい云いわく「中論を以て相比もつすること莫なかれ」と又云いわく「天親てんじん・竜樹りゆうじゆ内鑿りま冷然しかして外は時の宜よろしきに適かなう」と等云云、妙樂云いわく「破会を論いまぜば未ほっけだ法華ほっけに若しかざる故ゆえに」と云云、從義じゆぎの云いわく「竜樹りゆうじゆ・天親てんじん未てんだいだ天台てんだいに若しかず」と云云、問いうて云いわく唐たうの末ふくうに不空三蔵ふくうさんぞう一卷の論をわたす其その名を菩提心論ぼだいしんろんとなづく竜猛りゆうもう菩薩ぼさつの造つくなり云云、弘法大師こうぼうだいし云いわく「此このの論ろんは竜猛りゆうもう千部の中の第一肝心だいいちかんじんの論」と云云、答いえて云いわく「此このの論ろん一部七丁あり竜猛りゆうもうの言ことばならぬ事処じよじよ処じよに多おほし故ゆえに目録もくろくにも

あるりゆうもうあるふくう
或は竜猛。或は不空と両方にいまだ事定まらず、其の上此の論文
いちだい
は一代を括れる論にもあらず荒量なる事此れ多し、先ず唯真言法
かんじん
中の肝心の文あやまりなり其の故は文証・現証ある法華經の
そくしんじょうぶつ
即身成仏をばなきになして文証も現証もあとかたもなき真言經
そくしんじょうぶつ
に即身成仏を立て候又唯と唯という唯の一字は第一のあやまりなり、事
ふくうさんぞうひそか
のていを見るに不空三蔵の私につくりて候を時の人にをもくせさせ
りゆうもう
んがために事を竜猛によせたるか其の上不空三蔵は誤る事かず
いわゆるほけきょうかんちぎきじゆりょうほんあみだぶつ
をほし所謂法華經の觀智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかける眼
びやっけんだらにほんじんりきほん
の前の大僻見陀羅尼品を神力品の次にをける属累品を経末に下せ
これら
る此等はいつかひなし、さるかとみれば天台の大乗戒を盗んで代宗
こうていせんじもう
皇帝に宣旨を申し五台山の五寺に立てたり、而も又真言の教相に
てんだいしゅう
は天台宗をすべしといえりかたがた誑惑の事どもなり、他人の訳な
もち
らば用ゆる事もありなん此の人の訳せる經論は信ぜられ

ず、総じて月支より漢土に経論をわたす人・旧訳・新訳に一百八十

六人なり羅什三蔵一人を除いてはいづれの人人もらざるはなし、

其の中に不空三蔵は殊に誤多き上誑惑の心顯なり、疑つて云く

何をもつて知るぞや羅什三蔵より外の人人はあやまりなりとは汝

が禅宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず漢土・日本にわたる

一切の訳者

を用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一の秘事なり委細

には向つて問うべし、但しすこし申すべし羅什三蔵の云く我漢土の

一切経を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此の事を顯すべき、

但し一の大願あり身を不浄になして妻を帯すべし舌計り清浄にな

して仏法に妄語せじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼けるなら

ば我が経をすてよと常に高座こうざにしてとかせ給たましなり、上一人かみいちにんより下
万民ばんみんにいたるまで願いわじて云く願たまくは羅什三蔵らじゆつさんぞうより後に死しせんと、
終ついに死たまし給たまう後焼せいれんげきたてまつりしかば不浄ぶじやうの身みは皆灰みなとなりぬ御
舌計はかり火中に青蓮華せいれんげ生そて其の上そのうへにあり五色ごしきの光明くわうみやうを放はなちて夜は昼
のごとく昼にちりんは日輪みこの御光みこをうばい給たまいき、さてこそ一切いっさいの訳人いっさいの
経経ききやうきは軽かろくなりて羅什三蔵らじゆつさんぞうの訳たまし給たまえる 経経ききやうき 殊ことに法華経ほけきやうは
漢土かんどにやすやすとひろまり給たまいしか。

疑うたがつて云いわく羅什らじゆつ已前いぜんはしかるべし已後いごの善無畏ぜんむい不空ふくう・等は
如何いかん、答こたえて云いわく已後いごなりとも訳者やくしやの舌の焼けるをば・ありけりと
するべしされば日本国にほんこくに法相宗ほうそうしゆのはやりたりしを伝でん教大師きやうだいし責めさ
せ給たまいしには羅什三蔵らじゆつさんぞうは舌焼げんじやうけず玄奘げんじやう・慈恩じおんは舌焼げんじやうけぬとせめさせ
給たまいしかば桓武天王かむむは道理どうりと・をばして天台法華宗てんだいほつげしゆへはうつらせ
給たまいしなり、涅槃経ねはんきやうの第三・第九等くわうじゅうをみまいらすれば我が仏法ぶつぽうは

月支がつしより他国たこくへわたらん時、多くの謬誤あやまりしゅつたい出来して衆生しゅじやうの得道とくどううすかるべしととかれて候、されば妙楽みょうらく大師だいしは並びに進退しんたいは人ひとに在り何ぞ聖旨むねにかかわ関らんことこそあそばされて候へ今の人人ひとびといかに経きやうぎやうのままに後世ごせいをうねがうともあやまれる経経きやうぎやうのままにねがはば得道とくどうもあるべからず、しかればとて仏ぶつの御ごとがにはあらしとかかれて候、仏教ぶつぎやうを習うふ法ほふには大小だいしやう・権実こんじつ・顕密けんみつはさてをくこれこそ第一だいいちの大事だいじにては候そうじやうらめ。

疑うたがいつて云いわく正法しやうほふ一千年いちせんねんの論師ろんしの内ない心しんには法華ほふけ經ぎやうの実義じつぎの顕密けんみつの諸經しよきやうに超過ちやうかしてあるよしはしらしめしながら外ぐわいには宣説せんせつせずして但た権大乘こんだいじやう計けいりを宣のべさせ給たまうことはしかるべしとはをばへねども其その義ぎはすこしきこえ候そうほふいぬ、像法ぞうほふ一千年いちせんねんの半なかばに天台てんだい智ち者しゃ大師だいし出現しゅつげんして題目だいもくの妙法みやうほふ蓮華れんげ經ぎやうの五字ごじを玄義げんぎ十卷じゆくわん・一千枚いちせんまいにかきつくし、文句もんく

十卷には始め如是我聞より終り作礼而去にいたるまで一字・一句に
因縁・約教・本・迹・觀心の四の釈をならべて又一千枚に尽し給う已
上玄義・文句の二十卷には一切經の心を江河として法華經を大海に
たとえ十方界の佛法の露一も漏さず妙法蓮華經の大海に入れ
させ給いぬ、其の上天竺の大論の諸義・一点ももらさず漢土・南北
の十師の義

破すべきをばこれをはし取るべきをば此れを用う、其の上止観十卷
を注して一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千につづめたり、
此の書の文体は遠くは月支・一千年の間の論師にも超え近くは尸那
・五百年の人師の積にも勝れたり、故に三論宗の吉蔵大師・南北一
百余人の先達と長者らをすすめて天台大師の講經を聞けと勸むる
状に云く「千年の興五百の実復今日に在り乃至南岳の叡聖・天台の
明哲・昔は三業住持し今は二尊に紹係す豈止甘呂を震旦に灑ぐの
みならん亦当に法鼓を天竺に震うべし、生知の妙悟魏晉以来典籍風
謡實に連類無し乃至禅衆一百余の僧と共に智者大師を奉請す」等
云云、修南山の道宣律師・天台大師を讚歎して云く「法華を照了
すること高輝の
幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり
仮令文字の師・千羣万衆ありて彼の妙弁を数め尋ぬとも能く窮むる

者無し、乃至ないし義月を指すに同じ乃至宗一極に歸す云云、華嚴宗の
ほうぞうほうぞう だいし 天台を讚して云く「思せ 禅師智者等の如ごとき神異じんいに感通して
法蔵大師・天台を讚して云く「思せ 禅師智者等の如ごとき神異じんいに感通して
しゃく
迹登位まじに参まじわる靈山りょうぜんの聴法憶いい今いまに在あり」等云云、真言宗しんごんしゅうの不空ぶくう
さんぞう
三蔵・含光法師等師弟共しんごんしゅうに真言宗しんごんしゅうをすてて天台大師てんだいだいしに歸伏きふくする
ものがたり
物語ものがたりに云く高僧こうそう伝でんに云く「不空三蔵ぶくうさんぞうと親まのあたり天竺てんじくに遊あそびたる
かこ
に彼かに僧そう有り問とうて曰いわく大唐だいとうに天台てんだいの迹教まき有あり最もも邪正じゃせいを簡えらび
へんえん
偏円へんえんを曉あきらむるに堪たえたり能よく之これを訳まして將まさに此土しどに至いたらしむ可べき
やゝ等云云、此ものの物語ものがたりは含光みょうらくが妙樂みょうらく大師だいしにかたり給たましなり、妙樂みょうらく
だいし
大師だいし・此ものの物語ものがたりを聞きいて云く「豈あに中国ちゆうごくに法うしなを失こいて之これを四維しゐに求もとむ
るに非あらずや而しかも此方このかた識しること有ある者もの少すくし魯人ろじんの如ごときのみ」等云云、
けんどく
身毒国けんどくの中
てんだい
に天台てんだい三十卷さんじゅうのごとくなる大論だいろんあるならば南天なんてんの僧そういかでか漢土かんど
てんだい
の天台てんだいの釈しゃくをねがうべき、これあに像法ぞうぼうの中なかに法華經ほけきょうの実義じつぎ顕あらわ

南閻えんぶだい浮提こつせんに広宣流布るふするにあらずや、答えて云いわく正法しほう一千年。
像法そうほうの前四百年・已上ぶつめつ仏滅後・

一千四百余年にいまだ論師ろんしの弘通くつうし給たまはざる一代超過いちだいちょうかの円定えんね・円慧えんね
を漢土かんどに弘通くつうし給たまうのみならず其その声月氏ながつしまでもきこえぬ、法華經ほけきょう
の広宣流布こつせんにはたれどもいまだ円頓えんどんの戒壇かいだんを立てられず小乘しょうじょうの
威儀いぎをもつて円じの慧定じぎに切りつけるはすこし便たよりなきにたり、例せ
ば日輪にちりんの蝕くするがごとし月輪げつりんのかけたるに似たり、何いかにいわうや
天台てんだい

大師だいしの御時おんときは大集經だいしつきょうの読誦どくじゆたぶんけんじ多聞堅固たもんけんこの時にあひあたていまだこうせん広宣くわいせん流布るふの時にあらず。

問もんうて云いわく伝でん教大師きょうだいしは日本国にほんこくの土つちなり桓武かんむの御宇ぎよに出世しゆつせして

欽明きんめいより二百余年にひゃくにじゅうごねんが間の邪義じやぎをなんじやぶり天台大師てんだいだいしの円慧えんね・円定えんぢやう

をせんじ給たまうのみならず、鑒真かんじん和尚わじやうの弘通くわつうせし日本にほん小乘しょうじやうの三処さんぢよ

戒壇かいだんをなんじやぶり叡山えいざんに円頓えんどんの大乗別受戒だいじやうべつじゆかいを建立こんりじゆせり、此こゝの

大事だいじは仏滅後ぶつめつ・一千八百年いっせんぱちひゃくねんが間の身毒けんどく・戸那しな・扶桑ふそう乃至ないし一閻浮提えんぶだい

第一だいいちの奇事きじなり、内証ないしやうは竜樹りゅうじゆ・天台等てんだいには、或あるは劣あるにもや、或あるは

同じくもやあるらん、仏法ぶつぽうの人ひとをすべて一法いつぽうとなせる事は竜樹りゅうじゆ・

天親てんじん

にもこえ南岳なんがく・天台てんだいにも、すぐれて見えさせ給たまうなり、総じては如来にょらい

御入滅にゆうめつの後のち・一千八百年いっせんぱちひゃくねんが間ま・此こゝの二人ふたりこそ法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてはを

はずれ、故ゆえに秀句しゆくに云いわく「經きやうに云いわく若もし須弥しゆみを接とつて他方たほう無数むすうの仏ぶつ

土に擲なげ置まかんも亦また未いまだこれ難がたしとせずない乃至し若もし仏めつどの滅あく度せ惡せ世せの
中おに於いて能よく此この經きやうを説せかん是すなわ則すなわちこれ難がたし云い云い、此こ經きやうを積しゃくして
云いく浅いは易やすく深がたは難がたしとは釈しゃ迦かの所しよ判はんなり浅いを去さて深がたに就つくは
丈夫じやうぶの心こころなり天台てんだい大師だいしは積しんじゆんに信しん順じゆんし法ほつ華けしゆう宗しゆうを助たすけて震しん旦たん
に敷ふ揚ようし叡えい山ざんの一家いっかは天台てんだいに相そう承じやうし法ほつ華けしゆう宗しゆうを助たすけて日本にほんに弘くつ通つうす
云い云い、釈しやくの心こころは賢けん劫ごつ第九じゆうの滅めつ・人にん寿じゆ百ひやく歳さいの時ときより如によ來び在い世せい五ご十じゆ年ねん
滅めつ後ご・一いち千せん八はち百ひやく余よ年ねんが中ちゆう間げんに高たかさ十じゆ六じゆ万まん八はち千せん由じゆ旬じゆん・六りく百ひやく六りく十じゆ二に
万まん里りの金あ山るひとを有あ人ひと五ご尺じやくの小せう身しんの手てをもつて方か一いつ寸すん・二に寸すん等とうの瓦かわら礫れき
をにぎりて一いつ丁てい二に丁ていまでなぐるがごとく雀すずめ鳥めのとぶよりもはやく
鉄てつ困こん山せんの外がへなぐる者ものはありとも法ほつ華けしゆう經きやうを仏ぶつのとかせ給たまいしやうに
説だいかん人にんは末まつ法ぽうにはままれなるべし、天台てんだい大師だいし・伝でん教きやう
大師だいしこそ仏ぶつ説せつに相そう似じしてとかせ給たまいたる人にんにてををはすれとなり、
天てん竺じくの論ろん師しはいまだ法ほつ華けしゆう經きやうへゆゆきつき給たまはず漢かん土どの天てん台だい已い前ぜんの人にん師し

は、或あるはすぎ、或あるはたらず、慈恩じおん・法蔵ほうぞう・善無畏ぜんむい等は東を西といゐ、天
を地と申せる人ひとなり、此等これらは伝教でんぎょう大師だいしの自讚じざんにはあらず、去いぬる
延暦えんりやく二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝かんむこうてい行幸ろくしゅうなりて六宗
七大寺ななだいじの碩徳せきとくた

善議ぜんぎ・勝猷しょう・奉基ほうき・寵忍ちゆうにん・賢玉けんぎよ・安福あんぷく・勤操こんそう・
修円しゆえん・慈誥じご・玄耀げんよう・歳光さいこう・道証どうしやう・光証こうしやう・觀敏等くわんびんの十有余人、最澄さいちやう法師ほふし
と召よし合せられて宗論しゆろんありしに、或あるは一言いちごんに舌を巻いて、二言三言に
及およばず皆みな一同いっとうに頭こづへをかたづけ手をあざう、三論さんろん

の二蔵・三時・三転法輪・法相の三時・五性・華嚴宗の四教・五教・
根本枝末・六相・十玄・皆大綱をやぶらる、例せば大屋の棟梁のを
れたるがごとし十大徳の慢幢も倒れにき、爾の時・天子大に驚かせ
給いて同二十九日に弘世・国道の両吏を勅使として重ねて七寺・六宗
に仰せ下れしかば各各歸伏の状を載せて云く「竊に天台の玄疏を見
れば総じて釈迦一代の教を括つて悉く其の趣を顕すに通ぜざる所
無く独り諸宗に逾え殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり
七箇の大寺・六宗の学生昔より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所
なり三論・法相久年の諍い渙焉として
氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るが
ごとし聖徳の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の經論其の
数多く彼此理を争えども其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の
円宗未だ闡揚せず蓋し以て此の間の羣生未だ円味に応わざるか、

伏して惟れば聖朝久しく如来の付を受け深く純円の機を結び一妙の義理始めて乃ち興顯し六宗の学者初めて至極を悟る此の界の含靈今より後悉く妙円の船に載り早く彼岸に済る事を得ると謂いつべし、乃至善議等牽れて休運に逢い乃ち奇詞を閲す深期に非ざるよりは何ぞ聖世に託せんや、等云云、彼の

漢土の嘉祥等は百余人をあつめて天台大師を聖人と定めたり、今日本の七寺二百余人は伝教大師を聖人とがうしたてまつる、仏の滅後二千余年に及んで兩國に聖人・二人出現せり其の上

天台大師の末弘の円頓大戒を叡山に建立し給う此れ豈像法の末に法華經広宣流布するにあらずや、答えて云く迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・竜樹・提婆天親等の弘通せる事前の難に顕れたり、又竜樹・天親等の流布し残し給える大法天台大師の弘通し給う

事又難なんにあらはれぬ、又天台智者大師てんだいちしやだいしの弘通くつうし給たまはざる円頓えんどんの
大戒だいかいを伝教大師でんぎやうだいしの建立こんりゆうせさせ給たまう事又顯然けんねんなり、但ただし詮ふしんと不審ふしんな
る事むちやくは仏てんじんは説ないしき尽てんし給たまえども仏滅ぶつめつ後に迦葉かしよう・阿難あなん・馬鳴めみよう・竜樹りゆうじゆ・
無著むちやく・天親てんじん乃至ないし天台てんだい・伝教でんぎやうのいまだ弘通くつうしましまさぬ最大の深密じんみつ
の正しやう法ほう經文きやうもんの面めんに現前げんぜんなり、此こゝの深法じんぼう・今末法まっぽうの始はじめ五五百歳ごひやくさいに一
閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふすべきやの事ふしん不審極ふしんきわまり無なきなり。

問ういかなる秘法ひほうぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の
事もし実事じつじならば釈尊しゃくそんの二度世にゅうげんに出現たまし給うか上行菩薩じょうぎょうぼさつの重ねかさ
て涌出ゆじゆつせるかいそぎいそぎ慈悲じひをたれられよ、彼の玄奘げんじやう三蔵さんざうは六
生へを経て月氏がつしに入りて十九年・法華ほっけ一乘いちじやうは方便教ほうべん・小乘しょうじやう・阿含經あこんきやう
は眞実教しんじつ、不空三蔵ふくうさんざうは身毒けんどくに返りて寿量品じゆりやうほんを阿弥陀あみた仏ぶつとかかれた
り、此等これらは東を西という日を月とあやまてり身を苦めてなにかせん
・心に染そめてようなし、幸われら我等末法まつぽうに生れて一步いっぺんをあゆまず
して三祇さんぎをこゑ頭こゑづこを虎にかわずして無見頂相むけんぢやうそうをゑん、答えて云く
此の法門ほうもんを申もうさん事は經文きやうもんに候へばやすかるべし但ただし此の法門ほうもんに
は先ず三の大事だいじあり大海たいかいは広けれども死骸たいがいをとどめず大地だいちは厚け
れども不孝ふこうの者をば載のせす、仏法ぶつぽうには五逆ごぎやくをたすけ不孝ふこうをばすく
う但ただし誹謗ひぼう一闡提いっせんたいの者持戒じかいにして第一だいいちなるをばゆるされず、此の
三のわざは

ひとは所謂念仏宗と禅宗と真言宗となり、一には念仏宗は
日本国に充滿して四衆の口あそびとす、二に禅宗は三衣一鉢の
大慢の比丘の四海に充滿して一天の明導とをもへり、三に真言宗
は又彼等の二宗にはにるべくもなし叡山・東寺・七寺・園城・或官主
・或は御室・或は長吏・或は檢校なりかの内侍所の
なりしかども大日如来の宝印を仏鏡とたのみ宝剣・西海に入りしか
ども五大尊をもつて国敵を切らんと思へり、此等の堅固の信心は
設い劫石

はひすらぐとも・かたぶくべしとはみへず大地は反覆すとも 疑心
をこりがたし、彼の天台大師の南北をせめ給いし時も此の宗はいま
だわたらず此の伝教大師の六宗をしゑたげ給いし時ももれぬ、か
たがたの強敵をまぬがれてかへつて大法をかすめ失う、其の上伝教
大師の御弟子慈覚大師・此の宗をとりたてて叡山の天台宗をかすめ

をとして一向・真言宗になししかば此の人には誰の人か敵をなすべ
き、かかる僻見のたよりをえて弘法大師の邪義を
もとがむる人もなし、安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども只
華嚴宗のところ計りとがむるににてかへて法華経をば大日経に對し
て沈めはてぬ、ただ世間のたて入の者のごとし。

問うて云く此の三宗の謬如何答えて云く浄土宗は斉の世に
曇鸞法師と申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の十住毘婆娑論
を見て難行道・易行道を立てたり、道綽禪師という者あり唐の世
の者本は涅槃経をかうじけるが曇鸞法師が浄土にうつる筆を見て
涅槃経をすてて浄土にうつて聖道・浄土二門を立てたり、又道綽
が弟子に善導という者あり雜行・正行を立つ、日本国に末法に入
つて二百余年・後鳥羽院の御宇に法然というものあり一切の道俗を
すすめて云く仏法は時機を本とす法華経・大日経・天台・真言等の

はつしゅう 八宗・九宗一代の大小・顕密・権実等の諸宗等は上根・上智の

正像二千年の機のためなり、末法に入りてはいかに功をなして行ず

るとも其の益あるべからず、其の上・弥陀

念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生すべからず此れわたくし

に申すにはあらず竜樹菩薩・曇鸞法師は難行道となづけ、道綽は

未有一人得者ときらひ善導は千中無一とさだめたり、此等是他宗

なれば御不審も・あるべし、慧心・先徳にすぎさせ給へる天台・真言

の智者は末代にをはすべきか彼の往生要集には顕密の教法は予

が死生をはなるべき法にはあらず、又三論の永観が十因等のみよさ

れば法華・真言等をすてて一向に念仏せば十即十生・百即

百生とすすめければ、叡山・東寺・園城・七寺等始めは諍論する

やうなれども、往生要集の序の詞・道理かとみへければ顕真座主

落ちさせ給いて法然が弟子となる、其の上設い法然が弟子とならぬ

人々も弥陀念仏は他仏ににるべくもなく口ずさみとし心よせにを
もひければ日本国・皆一同に法然房の弟子と見へけり、此の五十年
が間・一天四海・

一人もなく法然が弟子となる法然が弟子となりぬれば日本国一人
もなく謗法の者となりぬ、譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害
せば千人共に五逆の者なり一人阿鼻に堕ちなば余人堕ちざるべし
や、結句は法然・流罪をあだみて悪霊となつて我並びに弟子等をと
がせし国主山寺の僧等が身に入つて、或は謀反を、をこし、或は悪事
をなして皆関東にほろぼされぬ、わづかにのこれる叡山・東寺等の
諸僧は俗男・俗女にあなづらること猿猴の人にわら
はれ、俘囚が童子に蔑如せらるるがごとし、禅宗は又此の便を得
て持斎等となつて人の眼を迷かし、たつとげなる気色なれば、いか
に、ひがほうもんを、いゝくるへども失とも、をばへず、禅宗と申す

宗は教外別伝と申して釈尊の一切経

の外に迦葉尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禅宗をしらず
 して一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影を
 とるにいたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすてら
 れ無礼なる故に、主君にかんどうせられあるいは若なる法師等の
 学文にもものうき遊女のものぐるわしき本性に叶る邪法なるゆへに皆
 一同に持斎になりて国の百姓をくらう蝗虫となれり、しかれば天
 は天眼をいからかし地神は身をふるう、真言宗と申す
 かみ
 は上の二のわざはひには、にるべくもなき大僻見なりあら此れ
 を申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・金剛智三蔵
 ふうくうさんぞう だいにちきよう こんこうちようきよう そしつちきよう がっし
 ・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす、此の
 せつそう ふんみょう そ こくり たず えにはに いちじようそ
 三経の説相分明なり其の極理を尋ぬれば会二破二の一乗其の相
 を論ずれば印と真言と計りなり、尚華嚴・般若の三一相對の一乗
 およ ぜん べつえん なあけこん はんにかや そうたい いちじよう
 にも及ばず天台宗の爾前の別円程もなし但蔵通二教を面とするを

善無畏ぜんむい三蔵さんぞうをもはく此こゝの經文きょうもんをあらわにいい出いだす程ほどならば

華嚴けごん・法相ほつそうにもをこつこつかれ天台宗てんだいしゅうにもわらはれなん大事だいじとして月支がっし

よりは持たもち来りぬ・さてもだせば本意ほんいにあらずとやをもひけん、

天台宗てんだいしゅうの中に一行げん禪師ぜんといい僻人びやくにん一人ありこれをかたらひて漢土かんと

の法門ほうもんをかたらせけり、一行阿闍梨あじゃりうちぬかれて三論さんろん・法相ほつそう・華嚴けごん

等をあらあらかたるのみならず天台宗てんだいしゅうの立てられけるやうを申もつし

ければ善無畏ぜんむいをもはく天台宗てんだいしゅうは天竺てんじくにして聞ききしにもなをうちす

ぐれてかさむべきやうもなかりければ善無畏ぜんむい一行げんをうち

ぬひて云いわく和僧わそうは漢土かんどにはござかしき者ものにてありけり、天台宗てんだいしゅうは神

妙めうの宗そうなり今いま真言宗しんごんしゅうの天台宗てんだいしゅうにかさむところは印いんと真言しんごんと計ばかりな

りといいひければ一行げんさもやと・をもひければ善無畏ぜんむい三蔵さんぞう一行げんにかた

て云いわく、天台大師てんだいだいしの法華經ほけきょうに疏じよをつくらせ給たまへるごとく大日經だいにちきょうの疏じよ

を造つくりて真言しんごんを弘通くつうせんともう汝なんじかきなんやと・いいひければ一

行が云く

やすう候、但しいかやうにかき候べきぞ天台宗はにくき宗なり

諸宗は我も我烽いあらそいをなせども一切に叶わざる事一あり、

所謂法華經の序分に無量義經と申す經をもつて前四十年の

經經をば其の門を打ちふさぎ候いぬ、法華經の法師品・神力品を

もつて後の經經をば又ふせがせぬ肩をならぶ經經をば今説の文

をもつてせめ候

だいにちきよう

大日経をば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ爾その

時ぜんむいさんぞうに善無畏三蔵大たくらに巧たくらんで云いわく大日経に住心品じゅうしんほんという品あり

むりむりりりようききぎきききようきよんじじゅうじううよねんん 無量義経むりりようぎきようの四十余年よんじゅうよねんの経経きようぎきようを打ちはらうがごとし、大日経だいにちきようの入

漫陀羅い羅か已下しよの諸品しよは漢土かんどにては法華経ほけきよう・大日経だいにちきようとて二本ふたなれども

天竺てんじくにては一経いつきようのごとし、釈迦しゃか仏ぶつは舍利弗しゃりほつ弥勒みるくに向つて大日経だいにちきようを

法華経ほけきようとなづけて印しんごんと真言しんごんとをすてて但理計ばかりをとけるを羅什らじきゅう

三蔵さんぞう此れをわたす天台大師てんだいだいし此れをみる、大日如来だいにちによらいは法華経ほけきようを

大日経だいにちきようとなづけて金剛薩こんごうさつたに向つてとかせ給たまう此れを大日経だいにちきようとな

づく我わがまのあたり天竺てんじくにしてこれを見る、されば汝なんじがかくべきや

うはうはは大日経だいにちきようと法華経ほけきようとをば水と乳とのやうに一味いちみとなすべし、もし

しからば大日経だいにちきようは已今当いこんとうの三説を

ばみな皆法華経ほけきようのごとくうちをとすべし、さて印しんごんと真言しんごんとは心法しんぽうの

一念いちねん三千さんぜんに莊嚴そうごんするならば三密相応そうおうの秘法ひぽうなるべし、三密相応そうおうす

一念いちねん三千さんぜんに莊嚴そうごんするならば三密相応そうおうの秘法ひぽうなるべし、三密相応そうおうす

る程ならば天台宗は意密なり真言は甲なる將軍の甲鎧を帯して
きゆうせん
弓箭を横たへ太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計りなれ
ば甲なる將軍の赤裸なるがごとくならんといふければ、一行
あじやり
阿闍梨は此のやうにかきけり、漢土三百六十箇国には此の事を知る
人なかりけるかのあひだ始めには勝劣を諍論しけれども善無畏等
は人からは重し天台宗の人人は軽かりけり、又天台大師ほどの智
ある者もなかりければ但日日に真言宗になりてさてやみにけり、
年ひさしくなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくかくれて候いけ
り、日本国の伝教大師漢土にわたりて天台宗をわたし給うついで
しんごんしゆう
に真言宗をならべわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ真言宗
ろくしゆう
を六宗の大徳にならばせ給う、但し六宗と天台宗の勝劣は入唐
いぜん
已前に定めさせ給う、入唐已後には円頓の戒場を立てう立て
じの論の計りなかりけるかのあひだ敵多くしては戒場の一事成りが

たしとやをぼしめしけん、又末法にせめさせんとやをぼしけん皇帝
の御前おんまえにしても論ぜさせ給はず弟子等にもはかばかしくかたらせ
給はず、但し依憑集と申す一卷の秘書あり七宗の人人の天台てんだいに落
ちたるやうをかかれて候文なり、かの文の序に真言宗しんごんしゅうの誑惑おおわく一筆
みへて候弘法大師は同じき延暦年中に御入唐青竜寺の慧果けいこに値い
給いて真言宗しんごんしゅうをならはせ給へり、御帰朝きちようの後・一代いちだい

の勝劣を判じ給いけるに第一真言・第二華嚴・第三法華とかかれ
て候、此の大師は世間の人人もつてのほかにも重ずる人なり、但し
仏法の事は申すにをそれあれどももつてのほかにもあらき事どもはん
べり、此の事をあらあら・かんがへたるに漢土にわたらせ給いては但
真言の事相の印・真言計り習いつたえて其の義理をばくはしくもさ
はぐらせ給はざりけるほどに日本にわたりて後大に世間を見れば
天台宗もつてのほかにかさみたりければ、我が重ず
る真言宗ひろめがたかりけるかのゆへに本日本国にして習いたりし
華嚴宗をとりいだして法華經にまされるよしを申しけり、それも常
の華嚴宗に申すやうに申すならば人信ずまじとやをぼしめしけん
すこしいろをかえて此れ
は大日経・竜猛菩薩の菩提心論善無畏等の実義なりと大妄語をひ
きそへたりけれども天台宗の人人いたうとがめ申す事なし。

問うて云く弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰二教論に云く「此くの如き乗乗自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」又云く「無明の辺域にして明の分位に非ず」又云く「第四熟蘇味なり」又云く「震旦の大師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、此等の釈の心如何、答えて云く予此の釈にをどろいて一切経並びに大日の

三部経等をひらきみるに華嚴経と大日経とに對すれば法華経戲論
六波羅蜜經に對すれば盜人守護經に對すれば無明の辺域と申す
經文は一字一句も候はず此の事はいとほかなき事なれども此の
三四百余年に日本國のそこばくの智者どもの用いさせ給へば定めて
ゆへあるかとももひぬべし、しばらくいとやすきひが事をあげて
余事のはかなき事をしらすべし、法華経を醍醐味と稱することは
陳隋の代なり六波羅蜜經は唐の半に般若三藏此れをわたす、

ろくはらみつきよう 六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世には・わたりてあらばこそ天台大師は
しんこん 真言の醍醐をば盗ませ給はめ、傍例あり日本の得一が云く
てんだいだいし 天台大師は深密經の三時教をやぶる三寸の舌をもつて五尺の身を
たつべしとののしりしを伝教大師此れをただして云く深密經は唐
げんじよう の始玄奘これをわたす天台は陳隋に人・智者御入滅の後・数箇年
しんみつ あつて深密經わたれ

り、死して已後にわたれる経をば、いかでか破り給うべきとせめさせ給いて候いしかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し候いぬ、これは彼にはにるべくもなき悪口なり、華嚴の法蔵三論の嘉祥法相の玄奘・天台等・乃至南北の諸師・後漢より已下の三蔵・人師を皆をさえて盗人とかかれて候なり、其の上又法華経を醍醐と称することは天台等の私の言にはあらず、仏涅槃経に法華経を醍醐と・とかせ給いて天親菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれて候、竜樹菩薩は法華経を妙薬となづけさせ給う、されば法華経等を醍醐と申す人盗人ならば釈迦・多宝・十方の諸仏竜樹・天親等は盗人にてをはずべきか、弘法の門人等乃至日本の東寺の真言師如何に自眼の黑白はつたなくして弁へずとも他の鏡をもつて自禍をしれ、此の外法華経を戲論の法とかかること大日経・金剛頂経等にたしかなる経文をいだされよ、設い彼彼

の経きやうに法華ほけを戯論けろんととかれたりとも訳者やくしやの事こともあるぞかしよくよく思慮しりょのあるべかりけるか、孔子こうしは九思一言しゅういげん、周公旦しゅうこうたんは沐ゆあみには三さんにぎり食たには三さんはかれけり外書がいしよのはかな

き世間せけんの浅あき事を習ならう人ひとすら智人ちじんはかう候まうぞかし、いかにかかるあさましき事ことはありけるやらん、かかる僻見びやくけんの末すえへなれば彼の伝法院でんぼういんの本願ほんがんとがうする聖覚しょうかく房ぼうが舍利講しやりかうの式しきに云いく、「尊高そんかうなる者は不二ふじ摩訶衍まかえんの仏ぶつなり驢牛ろごの三身さんじんは車くるまを扶たすくこと能あたはず秘奥ひおくなる者はくつ両部漫陀羅りやうぶまんたらの教きやうなり顕乘けんじやうの四法しほつは履はきを採とるに堪たへず」と云云いんいん、顕乘けんじやうの四法しほつと申まうすは法相ほつさう・三論さんろん・華嚴けこん・法華ほつけの四人にん、驢牛ろごの三身さんじんと申まうすは法華ほつけ・華嚴けこん・般若はんや・深密經じんみつの教主きやうしゆの四仏しほつ、此等これらのしんしん仏僧ぶつそうは真言師しんごんしに対たいすれば聖覚しょうかく弘法こうぼうの牛飼うしかひ・履物取者はきものとりにもたらぬ程ほどの事ことなりとかいて候まう、彼の月氏がつしの大慢婆羅門だいまんばらもんは生知なまじの博学はくがく顕密けんみつ二道にどう胸むねにうかべ内外ないがいの典籍てんじやく・掌たなこににぎる、されば王臣頭おうしんとうをかたづけ

万人師範と仰ぐあまりの

慢心に世間に尊崇する者は大自在天・婆薻天・那羅延天・大覺世尊

此の四聖なり我が座の四足にせんと座の足につくりて坐して法門を

申しけり、当時の真言師が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて

灌頂する時敷まんだらとするがごとし、禪宗の法師等が云く此の

宗は仏の頂をふむ大法なりというがごとし、而るを賢愛論師と申

せし

こそぞ

おうしんばんみん

小僧あり彼をただすべきよし申せしかども王臣万民これをもち

ず、けつく結句は大慢が弟子等だんな檀那等に申しつけて無量の妄語をかまへて

あつくちちゆうちやく

悪口打擲せしかどもすこしも命もをしまずののしりしかば帝王ていおう

けんあい

賢愛をにくみてつめさせんとし給いしほどにかへりて大慢がせめら

れたりしかば、大王だいおう天に仰ぎ地に伏してなげひての給はく朕はま

のあたり此の事をきひて邪見をはらしぬ先王はいかに此の者にたば

らされて阿鼻地獄あびじごくにをはすらんと賢愛論師けんあいろんしの御足にとりつきて悲涙

せさせ給いしかば、賢愛の御計いとして大慢を驢うまにのせて五竺おもてに面

をさらし給いければいよいよ

あくしんさかん悪心盛になりて現身げんしんに無間地獄むげんじごくに堕ちぬ、今の世の真言しんごんと禅宗ぜんじゆう等

とは此これにかわれりや、漢土かんとの三階さんかい禅師ぜんしの云いわく教主きやうしゆ釈尊しやくそんの法華ほけき経きやう

は第一だいいち第二階だいにがいの正像しやうざうの法門ほふもんなり末代まつだいのためには我がつくれる普ふ経きやう

なり法華ほけき経きやうを今の世に行ぜん者は十方じゆうぱうの大阿鼻あび獄じごくに堕おつべし、

末代まつだいの根機こんきにあたらざるゆへなりと申もうして、六時の礼懺らいざん・四時の坐禅ざぜん・生身しょうしん仏ぶつ

のごとくなりしかば、人多く尊たつみて弟子でし万余人ありしかどもわづかの小女こにむすめの法華經ほけきょうをよみしに・せめられて当坐とうざには音こえを失うしない後のちには大蛇だいじやになりてそこばくの檀那だんな弟子でし並びに小女こにむすめ処女ぢよ等らをのみ食くいしなり、今の善導ぜんどう・法然ほつぜん等らが千中せんちゆう無む一の悪義あくぎもこれにて候まうなり、此等これらの三大事だいじは・すでに久ひさくなり候まうへばいやしむべきにはあらねども申もうさば信しんずる人もやありなん、これよりも百千万億倍せんまん・信しんじがたき最大の悪事あくじはんべり、慈覚じかく大師だいしは伝教でんぎょう大師だいしの第三だいさんの御弟子おんでしなり・しかれども上かみ一人いちにんより下万民げばんみんにいたるまで伝教でんぎょう大師だいしには勝すぐれてをはします人ひとなりとをもひり、此こゝの人真言宗しんごんしゅうと法華宗ほつけしゅうのじつぎ実義じつぎを極きわめさせ給たまいて候まうが真言しんごんは法華經ほけきょうには勝すぐれたりとかかせ給たまへり、而しかるを叡山えいざん三千人さんぜんの大衆たいしゆう・日本にほん一州いちしゅうの学者等がくしゃ・一同きふくの帰伏きふくの義ぎ

なり、弘法こうぼうの門人もんじん等は大師だいしの法華經ほけきょうを華嚴經けこんきょうに劣るとかかせ給えたまるは、我がかたながらも少し強きやうなれども、慈覺大師じかくだいしの釈しやくをもつてをもうに真言宗しんごんしゅうの法華經ほけきょうに勝すぐれたることは一定なり、日本国にほんこくにして真言宗しんごんしゅうを法華經ほけきょうに勝まさると立つるをば叡山えいざんこそ強きかたきなりぬべかりつるに慈覺じかくをもつて三千人さんぜんの口をふさぎなば真言宗しんごんしゅうはをもうごとし、されば東寺第一とうじだいいちのかたうど慈覺大師じかくだいしにはすぐべからず、例せば

じょうどしゅう ぜんしゅう

にほんこく

えんりやくじ

浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも日本国にしては延暦寺の

ゆるされなからんには無辺劫はふとも叶うまじかりしを安然和尚

もつ えいざん だいいち

じょうろん もつ

あんねん わじょう

と申す叡山第一の古徳・教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てら

だいいち しんこんしゅう

ぜんしゅう

てんだい ほつけしゅう

けこんしゅう

れたるに第一真言宗・第二禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等

みょうしやく

ぜんしゅう

にほんこく じゅうまん

ぼうこく

云云、此の大謬 釈につひて禅宗は日本国に充滿してすでに亡国

とならんとはするなり法然が念仏宗のはやりて一國を失わんとす

いんねん

おうじょうようしゅう

ねんぶつしゅう

しし

る因縁は慧心の往生要集の序よりはじまれり、師子の身の中の虫

しし

くら

たま

の師子を食うと仏の記し給うはまことなるかなや。

てんぎよう だいいし

にほんこく

てんだい しんこん

伝教大師は日本国にして十五年が間 天台・真言等を自見せさせ

たま

みょうじ

たま

せけん ふしん

給う生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間の不審

かん

かんど

わた

てんだい しんこん

たま

をはらさんがために漢土に亘りて天台・真言の二宗を伝へ給いし時

漢土の人人はやうやうの義ありしかども我が心には法華は真言に

すぐれたりとをばしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ

すくれたりとをばしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ

すくれたりとをばしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ

すくれたりとをばしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ

すくれたりとをばしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ

たまい てんたいしゅう
給いて天台宗の止観・真言等かかせ給う、十二年の年分得度の者二
人を・をかせ給い、重ねて止観院に法華經・金光明經・仁王經

の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を申し下し永代日本国の

第一の重宝・神璽・宝剣・内侍所とあがめさせ給いき、叡山第一の

座主・義真和尚・第二の座主・円澄大師までは此の義相違なし、第

三の慈覚大師・御入唐・漢土にわたりて十年が間・顕密二道の勝劣

を八箇の大徳にならひつたう、又天台宗の人人広修・惟・等になら

はせ給いしかども心の内にをぼしけるは真言宗は天台宗には勝れ

たりけり、我が師・伝教大師はいまだ此の事をばくはし

く習せ給わざりけり漢土に久しくもわたらせ給わざりける故に此

の法門はあらうちを・をはしけるやと・をぼして日本国に帰朝し

叡山東塔止観院の西に総持院と申す大講堂を立て御本尊は金剛界

の大日如来・此の御前にして大日經の善無畏の疏を本として金剛

頂經ちやうきやうの疏七卷じよ・蘇悉地經の疏七卷じよ・已上十四卷をつくる、此の疏じよの
肝心かんじんの釈いに云く、「教いに二種有り一は顯示教謂おもえらさんじやうく三乗教せぞくなり世俗せぞくと
勝義いと未だ円融えんゆうせざる故ゆえに、二は秘密教謂おもえらいちじやうく一乗教せぞくなり世俗せぞくと勝
義いと一体にして融ゆうする故ゆえに、秘密教ひみつの中に亦また二種有り一には理秘密りひみつ
の教諸もろもろの華嚴けごん・般若維摩法華はんによ・涅槃等ねはんなり但

だ世俗せぞくと勝義じやくみつとの不二ふじを説いいて未だ真言密印しんごんの事を説いかざる故ゆえに、
二には事理俱密教じりくみつ謂おもく大日教おもちうだいにち・金剛頂經こんごうちょうきょう・蘇悉地經そしつちきょう等もなり亦世俗またせぞく
と勝義との不二ふじを説いき亦真言密印またしんごんの事を説いく故ゆえに「等云云、釈しゃくの心
は法華經ほけきょうと真言しんごんの三部さんぶとの勝劣しょうれつを定めさせ給たまうに真言しんごんの三部經さんぶきょうと
法華ほっけとは所詮しよせんの理りは同じおなじく一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんなり、しかれども密印と
真言等しんごんの事法ほけきょうは法華經ほけきょうかけてをはずせず法華經ほけきょうは理秘密りひみつ・真言しんごんの
三部經さんぶきょうは事理俱密じりくみつなれば天地雲泥てんちうんदैなりとかかれたり、しかも此の
筆は私の釈しゃくにはあらず善無畏三蔵ぜんむいさんぞうの大日經だいにちきょうの疏じよの心なりと・をば
せどもなをなを二宗の勝劣しょうれつ不審ふしんにやありけん、はた又他人たにんの疑うたがひい
をさんぜんとやをばしけん、大師だいし覺かくの伝でんに云いく「大師だいし二經じよの疏じよを
造つくり功こうを成おし已畢おつて心中しんちゆう独ひとり謂おもらく此の疏じよ仏意ぶつに通つうずるや否いなや
若もし仏意ぶつに通つうぜざれば世に流伝るでんせし仍よつて佛像ぶつぞうの前に安置あんちし七日七
夜

深誠にちりんを翹企ぎょうきし祈請きしよつを勤修しんしゆつす五日ごにちの五更ごごうに至いたつて夢ゆめみらく正午しやうごんに當あつて日輪にちりんを仰あおぎ見弓けんきゆうを以もつて之これを射そる其その箭や日輪にちりんに當あつて日輪にちりん即すなはち轉動てんどうす夢覺さめての後のち深く仏意ぶつゐに通達つうたつせりと悟さとり後世ごしよつに伝つたうべし等ら云い云い、慈覺じかく大師だいしは本朝ほんちようにしては伝でん教ぎやう・弘法こうぼうの両家りやうけを習ならいきわめ異朝いちちようにしては八大徳だいたく並ならび南天なんてんの宝月ほうげつ三蔵さんざう等に十年じゆんねんが間ま最大だいいち大事だいじの秘法ひほうをきわめさせ給たまえる上じやう二經にきやうの疏じよをつくり了り了り重かさねて本尊ほんぞんに祈請きしよつをなすに智慧ちゑの矢やすでに中道ちゆうどうの日輪にちりんにあたりてうちをどろかせ給たまい、歡喜かんきのあまりに仁明じんみやう天王てんわうに宣旨せんじを申もうしそへさせ給たまい天台てんだいの座主ざすを真言しんごんの官主くわんしゆとなし真言しんごんの鎮護ちんご国家こくがの三部さんぶとて今いまに四百余年しよひやくねんが間ま・碩学せきがく稻麻いなまのごとし渴仰かつじやう竹葦ちくゑいに同じ、されば桓武かんむ・伝教でんぎやう等らの日本国にほんこく建立こんりゆうの寺塔じとうは一宇いちうもなく真言しんごんの寺てらとなりぬ公家くげも武家ぶけも一同いっしんに真言師しんごんしを召まして師匠ししやうとあをぎ官くわんをなし寺てらをあづけ給たまふ、仏事ぶつじのもくえ木画かいげんの開眼くわいげん供養くわうやうは八宗はつしゆつ一同いっしんに大日だいにち仏眼ぶつげんの印いん・真言しんごんなり。

疑うたがひ つて云いわく法華經ほけきようを真言しんごんに勝まさると申もうす人は此こゝの釈しやくをばいかがせ
ん用もちうべきか又またすつべきか、答こたへう仏ぶつの未來みらいを定さだめて云いわく「法ほふに依よつて
人ひとに依よらざれ」竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつの云いわく「修多羅しゆたらに依よれるは白びやく論ろんなり
修多羅しゆたらに依よらざれば黒論こくろんなり」天台てんだいの云いわく「復また修多羅しゆたらと合あせば録ろくし
て之これを用もちゆ文ぶん無なく義ぎ無なきは信受しんじゆすべからず」伝でん教大師きやうだいし云いわく「仏説ぶつせつに
依憑えひようして

口伝くでんを信ずること莫なれ等云云、此等これらの經論きやうろん積しやくのごときんば夢を
本もとにはすべからずただついさして法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとの勝劣しょうれつを分明ぶんみやう
に説ときたらん經論きやうろんの文ぶんこそたいせちに候ただしはめ、但ただし印いん・真言しんごんなくば
木画もくえの像ざうの開眼かいげんの事こと・此れ又またをこの事ことなり真言しんごんのなかりし已前いぜんには
木画もくえの開眼かいげんはなかりしか、天竺てんじく・漢土かんど・日本にほんには真言宗しんごんしゆう已前いぜんの木画もくえ
の像ざうは、或あるは行き、或あるは説法せつぽうし、或あるは御物語おんものがたりあり、印いん・真言しんごんをもて仏
を供養くやうせしより、このかた利生りしやうもかたがた失うせたるなり、此れは常じやうの
論談ろんだんの義ぎなり、此の一事いちじにをひては但ただし日蓮にちれんは分明ぶんみやうの証拠しやうこを余所よそ
に引くべからず慈覚じかく大師だいしの御釈あおを仰おほいで信じて候ただしなり。

問いうて云いく何いかにと信いぜらるるや、答こたえて云いく此の夢こんげんの根源こんげんは真言しんごん
は法華經ほけきやうに勝まさると造定つくりめての御ゆめなり、此の夢吉夢じかくならば慈覚じかく
大師だいしの合せたま給たまうがごとく真言勝しんごんまさるべし、但にちりん日輪にちりんを射やるとゆめに
みたるは吉夢ないてんなりといふべきか、内典ないてん五千ごせん・七千余卷ななせんじゆげん外典げてん三千余卷さんぜんじゆげん

の中に日を射るとゆめに見て吉夢なる証拠をうけ給たまわるべし、少少
此これ

より出し申もうさん阿闍世王あじゃせは天より月落るとゆめにみて耆婆大臣ぎばだいじんに
合せさせ給しかば大臣だいじん合せて云く仏の御入滅にゆうめつなり須拔多羅天しゅばつたらてんより
日落るとゆめにみる我とあわせて云く仏の御入滅にゆうめつなり、修羅は
帝釈たいしゃくと合戦の時まづ日月をいたてまつる、夏かのけつの桀いんのちゆう・殷いんの紂ちゆうと申せし
悪王あくおうは常に日をいて身をほろぼし国をやぶる、摩耶夫人まやふじんは日をはら
むとゆめ

にみて悉達太子しつたたいしをうませ給たまう、かるがゆへに仏のわらわなをば日種
という、日本国にほんこくと申もうすは天照太神てんしょうたいじんの日天にってんにてましますゆへなり、さ
れば此のゆめは天照太神てんしょうたいじん・伝教大師でんぎょうだいし・釈迦仏しゃかぶつ・法華経ほけきょうをいたてまつ
れる矢にてこそ二部の疏じよは候なれ、日蓮にちれんは愚癡ぐちの者なれば経論きんろんも
しらず但此の夢をもつて法華経ほけきょうに真言しんごんすぐれたりと申もうす人は今生こんじょう

には

国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候、
今現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を行
ひ候へば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりと・おもひ候な
ん、但し承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候しが調伏せら
れ給し権の大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐の国へ御子の天子
は佐渡

の嶋嶋へ調伏じょうぶくしやりまいらせ候いぬ、結句けつくは野干やかんのなきの身にをう
なるやうに還著げんちやく於本人おほんにんの経文きょうもんにすこしもたがはず叡山えいざんの三千人さんぜんか
まくらにせめられて一同どうじにしたがいはてぬ、しかるに今はかまくら
の世さかんなるゆへに東寺とうじ・天台てんだい・園城おんじょう・七寺しちじの真言師等しんごんしと並びならに
自立じりつをわすれたる法華宗ほっけしゅうの謗法ぼうぼうの人人ひとびと・関東かんとくにをちくだりて頭こづへを
かたづけひぎをかがめやうやうに武士ぶしの心こころをとりて、諸寺しよじ・諸山しよざんの
別当べつどうとなり長吏ちやうりとなりて王位おういを失うしないし悪法あくほうをとりいだして国土安穩こくどあんのん
といのれば、將軍家しやうぐん並びならに所従しよじゆうの侍已下いしかは国土こくどの安穩あんのんなるべき事こと
なんめりとうちをもひて有あるほどに法華經ほっけきやうを失うしなう大禍たいかの僧そうどもを
用もちいらるれば国定こくぢやうめてほるびなん、亡国ぼうこくのかなしさ亡身ぼうしんのなげかし
さに身命しんみやうをすて

て此こゝの事をあらわすべし、国主世こくしゅせを持つべきならばあやしと・おも
ひてたづぬべきところ_にただざんげんのことばのみ用もちいてやうやうの

あだをなす、而るに法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天地神等は
古の謗法をば不思議とはをばせども此れをしれる人なければ一子
の悪事のごとくうちゆるして、いつわりをろかなる時もあり又すこ
しつみしらする時もあり、今は謗法を用いたるだに不思議なるにま
れまれ諫曉する人をかへりてあだをなす、一日

・一日・一月・二月・一年・二年ならず数年に及ぶ、彼の不輕菩薩の
杖木の難に値いしにもすぐれ覺徳比丘の殺害に及びしにもこえた
り、而る間・梵釈の二王・日月・四天・衆星・地神等やうやうにいか
り度度いさめらるれどもいよいよあだをなすゆへに天の御計いと
して隣国の聖人にをほせつけられて此れをいましめ大鬼神を国に入
れて人の心をたばらかし自界叛逆せしむ、吉凶につけて瑞大なれ
ば難多かるべきことわりにて仏滅後・二千二百三十九年
が間いまだいでざる大長星いまだふらざる大地しん出来せり、漢土

日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度度ありしかどもいまだ
日蓮ほど法華經のかたうどして国土に強敵多くまうけたる者なき
なり、まづ眼前の事をもつて日蓮は閻浮提第一の者とするべし、
仏法日本にわたて七百余年一切経は五千・七千宗は八宗・十宗
智人は稲麻のごとし弘通は竹葦にいたり、しかれども仏には
阿弥陀仏諸仏の名号には弥陀の名号ほどひろまりてをはする

は候はず、此の名号を弘通する人は慧心は往生要集をつくる
日本国三分が一は一同の弥陀念仏者・永観は十因と往生講の式を
つくる扶桑三分が二分は一同の念仏者法然せんちやくをつくる
本朝一同の念仏者、而れば今の弥陀の名号を唱うる人人は一人が
弟子にはあらず、此の念仏と申すは雙観経・観経・阿弥陀経の題名
なり 権大乘経の題目の広宣流布するは 実大乘経の題目の流布
せんずる序にあらずや、心あらん人は此れをすひしぬべし、権経
流布
せば実経流布すべし 権経の題目流布せば実経の題目も又流布す
べし、欽明より当帝にいたるまで七百余年いまだきかずいまだ見
南無妙法蓮華経と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし、
日出でぬれば星かくる賢王来れば愚王ほろぶ 実経流布せば権経の
とどまり 智人南無妙法蓮華経と唱えば愚人の此れに随はんこと影

と身と声ひびきと響ひびとのごとくならん、日蓮にちれんは日本にほん第一だいいちの法華ほけきょう經ぎやうの行者ぎやうじや
なる事えんぶだいあえて疑うたがいひなし、これをもつてすいせよ漢かんど土月支がっしにも一
閻浮提えんぶだいの内にも肩をならぶる者は有あるべからず。

問いうて云いわく正嘉しょうかの大地だいちしん文永ぶんえいの大慧だいゑい星せいはいかなる事すいせいによつて
出来しゅつたいせるや答いえて云いわく天台てんだい云いく「智人ちじんは起おこを知り蛇じやは自みずから蛇じやを
識しる」と等と云いふ、問いて云いく心こころいかに、答いえて云いく上行じやうぎやう菩薩ぼさつの大地だいちより
出現しゅつげんし給たまいたりしをば弥勒みろく菩薩ぼさつ・文殊もんじゆ師し利り菩薩ぼさつ・觀くわん世ぜ音おん菩薩ぼさつ・藥やく王おう
菩薩ぼさつ等の四十一品むみよつの無明むみやうを断たんぜし人人ひとびとも元品がんぼんの無明むみやうを断たんぜざれば
愚ぐ人にんといはれて寿量じゆりやう品ぼんの南無なむ妙法みやうほう蓮華れんげ經きやうの末法まつほうに流布るふせんずるゆ
へに、此こゝの菩薩ぼさつを召まし出いだされたとはしらざりしという事
なり、問いうて云いく日本にほん・漢土かんど月支がっしの中に此こゝの事ことを知る人ひとあるべし
や、答いえて云いく見思けんじを断たんじんし四十一品むみよつの無明むみやうを尽つせる大菩薩ぼさつだに
も此こゝの事ことをしらせ給たまはずいかにいわうや一毫いちごうの惑たんをも断たんぜぬ者ものども

の此の事を知るべきか、問うて云く智人なくば、いかでか此れを
対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば人必ず死
す、此の災の

根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡びん事疑いなき
か、あらあさましやあらあさましや、答えて云く蛇は七日が内の
大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる此れ則ち大竜の所従又久学の
ゆへか、日蓮は凡夫なり、此の事

をしるべからずといえども汝等にほぼこれをさとさん、彼の周の
平王の時禿にして裸なる者出現せしを辛有といゐし者うらなつて
云く百年が内に世ほろびん同じき幽王の時山川くづれ大地ふるひ
き白陽と云う者勘えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、
今の大地震大長星等は国王・日蓮をにくみて亡国の法たる禅宗と
念仏者と真言師をかたふどせらるれば天いからせ給いていださせ
給うところの災難なり。

問うて云くなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く最勝王経
に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨
皆時を以て行われずと等云云、此の経文のごときんば此国に悪人の
あるを王臣此れを帰依すという事疑いなし、又此の国に智人あり
国主此れをにくみてあだすという事も又疑いなし、又云く「三十
三天の衆咸忿怒の心を生じ変怪流星墮ち二の日俱時に出で他方の

怨賊来りて国人喪乱に遭わんと等云云、すでに此の国に

天変あり地天あり他国より此れをせむ三十三天の御いかり有こと

又疑いなきか、仁王経に云く「諸の悪比丘多く名利を求め国王・

太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其王

別ずして信じて此語を聴く」等云云、又云く「日月度を失い時節

反逆し・或は赤日出で・或は黒日出で二三四五の日出で・或は日蝕

して光無く・或は日輪一重二重四五重輪現ず」等云云、文の心は

悪比丘等・国に充滿して国王・太子・王子等をたばらかして破仏法・

破国の因縁をとかは其の国の王等・此の人いたばらかされてをぼす

やう、此の法こそ持仏法の因縁持国の因縁とをもひ此の言を・をさ

めてをこなうならば日月に変あり大風と大雨と大火等出来し次に

は内賊と申して親類より・大兵乱お

こり我がかたうどしぬべき者をば皆打ち失いて後には他国に・せめ

られて、或は自殺し、或はいけどりにせられて、或は降人となるべし。
是れ偏に仏法をほろぼし、国をほろぼす故なり、守護経に云く、「彼の
釈迦牟尼如来所有の教法は一切の天魔・外道悪人五通の神仙皆
乃至少分をも破壊せず、而るに此の名相の諸の悪沙門皆悉く毀滅し
て、余り有ること無からしむ。須弥山を佞使三千界の中の草木を尽し
て、薪と為し、長時に焚焼すとも一毫も損すること無し。若し劫火

起りて火内従り生じ須臾も焼滅せんには灰燼をも余す無きが
如し^{ごと}等云云、蓮華面経に云く、「仏阿難に告わく譬えば師子の
命終^{みようじゆう} せん^もに若しは空若しは地若しは水若しは陸所有の衆生敢て
師子の身の穴を食わず唯師子自ら諸の虫を生じて自ら師子の穴を
食うが如し阿難我が之の仏法は余の能く壊るに非ず是れ我法の中
の諸の悪比丘我が三大阿僧祇劫積行勤苦し集むる所の仏法を破ら
ん^{きり}等云云、経文の心は過去の迦葉仏釈迦如来の末法の事を
訖哩枳^{きりき}

王にかたらせ給い釈迦如来の仏法をばいかなるものがうしなうべ
き、大族王の五天の堂舎を焼き払い十六大国の僧尼を殺せし漢土
の武宗皇帝の九国の寺塔四千六百余所を消滅せしめ僧尼二十六万
五百人を還俗せし等のごとくなる悪人等は釈迦の仏法をば失うべ
からず、三衣を身にまとひ一鉢を頸にかけ八万法蔵を胸にうかべ十

二部経を口にずうせん僧侶が彼の仏法を失うべし、譬へば須弥山は金の山なり三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿してつみこめて一年・二年百千万億年が間やくとも一分も損ずべからず、而るを劫火をこらん時須弥の根より豆

計りの火いでて須弥山をやくのみなならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十宗・八宗・内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや、小乗の俱舎・成実・律僧等が大乗をそねむ胸の瞋恚は炎なり真言の善无畏・禅宗の三階等浄土宗の善導等は仏教の師子の肉より出来せる蝗虫の比丘なり、伝教大師は三論・法相・華嚴等の日本の碩徳等を六虫とかかせ給へり、日蓮は真言・禅宗・浄土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覚・安然・慧心等は法華経伝教大師の師子の身の中の三虫なり。

此等これらの大謗法ほうぼうの根源こんげんをただす日蓮にちれんにあだをなせば天神てんじんもをしみ
地祇ちぎもいからせ給たまいて災天あいたも大おおに起おこるなり、されば心うべし一
閻浮提えんぶだい第一だいいちの大事だいじを申もうすゆへに最第一さいだいいちの瑞相ずいそう此れをこれり、あわれ
なるかなや・なげかしきかなや日本にほん国こくの人皆無間みなむげん・大城だいじょうに墮おちむ事
よ、悦たのしきかなや・楽のしいかなや不肖ふしょうの身みとして今度このたび心田こゝろに仏種ぶつしゆをう
えたる、いまにしもみよ大蒙古国だいもうここく・数万艘じゅうばんの兵船へいせんをうかべて日本にほんを
せめば上かみ一人いちにんより下万民ばんみんにいたるまで一切いっさいの仏寺ぶつじ一切いっさい

の神寺をばなげすてて各各声をつるべて南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經と唱え 掌 を合せてたすけ給え、日蓮の御房日蓮の
御房とさげび候はんずるにや、例せば月支のいう大族王は幻日王に
たなごころ 掌 をあはせ日本の宗盛はかぢわらをうやまう、大慢のものは敵
に随うという・このことわりなり、彼の輕毀大慢の比丘等は始めに
は杖木をととのへて不輕菩薩を打ちしかども後には 掌 をあはせて失をくゆ
だいばだった 提婆達多は釈尊の御身に血をいだししかども 臨終の時には南無と
とな 唱えたりき、仏とだに申したりしかば地獄には墮つべからざりしを
業ふかくして但南無とのみとなへて仏とはいはず、今・日本国の高僧
等も南無日蓮聖人ととなえんとすとも南無計りにてやあらんずら
んふびんふびん。
外典に曰く未萌をしるを聖人という内典に云く三世を知るを

しよつにん

聖人という余に三度のかうみようあり一には去し文応元年太藏庚申七月

十六日に立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時宿谷の入道

に向つて云く禅宗と念仏宗とを失い給うべしと申させ給へ此の事

を御用いなきならば此の一門より事をこりて他国にせめられさせ

給うべし、一には去し文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向

つて云く日蓮は日本国の棟梁なり予を失なうは日本国の

柱礎を倒すなり、只今に自界反逆難とてどしうちして他国侵逼難と

て此の国の人人他国に打ち殺さるのみならず多くいけどりにせらる

べし、建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏・長樂寺等の一切の念仏者・禅僧

等が寺塔をばやきはらいて彼等が頸をゆひのはまにて切らずば

日本国必ずほろぶべしと申し候了ぬ、第三には去年文永十一月四月八日

左衛門尉に語つて云く、王地に生れたれば身をば随えられたてまつ

るやうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄

禅てんの天魔まの所しよ為いなる事ことは疑うたがいなし、殊ことに真言宗しんごんしゅうが此この国土こくどの大
なるわざはひにては候あなり大蒙古もうちを調じょうぶく伏ふくせん事こと真言師しんごんしには仰おほせ付
けらるべからず若もし大事だいじを真言師しんごんし調じょうぶく伏ふくするならばいよいよいそい
で此この国くにほろぶべしと申ませしかば頼綱あみ問もんうて云いくいつごろよせ候あべ
き、予い言わく經文きやうもんにはいつとはみへ候あはねども天てんの御氣色みけしき

いかりすくなからず・きうに見へて候よも今生はすごし候はじと
語りたりき、此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず只偏に
釈迦如来の御神・我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも
悦び身にあまる法華経の一念三千と申す大事の法門はこれなり、
経に云く所謂諸法如是相と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が
第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う、智人は起をしる蛇み
づから蛇をしるとはこれなり、衆流あつまりて大海と
なる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華経を信じ始めしは
日本国には一・一微塵のごとし、法華経を二人・三人・十人・百千万
億人・唱え伝うるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃の大海
ともなるべし仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ。
問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにと
して我をそんなせば自他のいくさをこるべしとはしり給うや、答う

だいしつきょう 大集經十に云く「若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の声聞
の弟子を悩乱し若しは以て毀罵し刀杖をもて打斫し及び衣鉢
種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を作す者有らば我等彼を
して自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自界の国土にも亦兵起
り飢疫飢饉非時の風雨・鬪諍言訟譏謗せしめ、又其の王をして久
しからずして復当に己れが国を亡失せしむべし」等云云、夫れ諸經
に諸文多しといえども此の經文は身にあたり時にのぞんで殊に尊
くをぼうるゆへにこれをせんしいだす、此の經文に我等とは梵王
と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天竜等な
り、此等の上主・仏前に詣して誓つて云く仏の滅後・正法・像法
末代の中に正法
を行ぜん者を邪法の比丘等が国主にうつたへば王に近きもの王に心
よせなる者・我がたつとしとをもう者のいうことなれば理不尽に

是非ぜひを糾たださず・彼の智人ちじんをさんざんとはぢにをよばせなんどせば、
其そのの故ゆえともなく其そのの国こくににわかしゆかに・大兵乱ひょうらん・出現しゆげんし後ごには他国たこくに・
せめらるべし其そのの国主こくしゆもうせ其そのの国もほろびなんずととかれて候、
いたひとかゆきとはこれなり、予が身みには今生こんじやうにはさせとがせる失とがなし但
国をたすけんがため生国の恩をほうぜんと申せし

を御用いなからんこそ本意にあらざるに、あまさへ召し出して
法華經の第五の巻を懷中せるをとりいだしてさんざんとさいな
み、結句はこうぢをわたしなんとせしむば申したりしなり、日月天に
処し給いながら日蓮が大難にあうを今度かわらせ給はずば一つに
は日蓮が法華經の行者ならざるか忽に邪見をあらたむべし、若し
日蓮・法華經の行者ならば忽に国にしるしを見せ給へ若ししからず
ば今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉る大妄語の
人なり、提婆が虚誑罪・俱伽利が大妄語にも百千万億倍すぎさせ
給へる大妄語の天なりと声をあげて申せしかば忽に出来せる
自界叛逆難なり、されば国土いたくみだれば我身はいうにかひなき
凡夫なれども御經を持ちまいらせ候分齊は当世には日本第一の
大人なりと申すなり。

問うて云く慢煩惱は七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教に明

すところの大慢だいまんにも百千万億倍せんまんすぐれたり、彼の徳光論師とくこうろんしは弥勒みろく
菩薩ぼさつを礼せず・大慢婆羅門だいまんばらもんは四聖しじょうを座とせり、大天おほてんは凡夫ほんぶにして
阿羅漢あらかんとななるる無垢論師むくろんしが五天第一だいいちといいるし、此等これらは皆阿鼻みなあびに墮おち
ぬ無間むげんの罪人ざいにんなり汝なんじいかでか一閻浮提第一えんぶだいいちの智人ちじんとなのれる地獄じごく
に墮おちざるべしやおそろしおそろし、答こたえて云いく汝なんじは七慢・九慢・
八慢等はつまんどうをばしれりや大覺世尊だいかくせそんは三界第一さんがいだいいちとなのらせ給たまう
一切いっさいの外道げどうが云いく只ただ今天けんじつに罰ばつせらるべし大地だいちわれて入りなんと、
日本国にほんこくの七寺しちじ・三百余人さんひやくにじゅうにんが云いく最澄法師さいじやうほっしは大天おほてんが蘇生そせいか鉄腹てつぷくが
再誕さいたんか等云どういふ、而しかりといえども天てんも罰ばつせずかへて左右さうじゆうを守護しゆごし地ちも
われず金剛こんかうのごとし、伝でん教大師けんきやうだいしは叡山えいざんを立て一切衆生いっさいしじゆうの眼目がんもくとな
る結句けつこ七大寺ななだいじは落ちて弟子でしとなり諸国しよこくは檀那だんなとなる、されば現げんに
勝すぐれたるを勝すぐれたりという事は慢まんににて大功徳くどくなりけるか、伝でん教けんきやう
大師だいし云いく「天台法華宗てんだいほつげしゆうの諸宗しよしゆうに勝すぐれたるは所依しよえの經きやうに拠よるが

ゆえ 故に自讚毀他ならずじさんきた等云云ほけきよう法華經第七に云くい衆山の中に須弥山しゅみせん

これ第一だいいちなり此この法華經ほけきようも亦復またまたかくの如ごとし諸經しよきようの中に於おいて最もこ

れ其その上かみなりそ等云云とうせつ、此この經文きようもんは已說いせつの華嚴けごん・般若はんには・大日經だいにちきよう等、

今說こんせつの無量義經むりようぎきよう、當說とうせつの涅槃經ねはんきよう等の五千・七千月支竜宮がっしりゆうぐう・四王しおう・天

利天とうりてん日月にちがつの中うちの一切いっさい經きよう尽じん十方界じゅうほうがいの諸經しよきようは土山てつちせん・黒山くろざん・小鉄圍山せうてつゐざん

大鉄圍山てつちせん

のごとし日本国にわたらせ給える法華経は須弥山のごとし。

又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是くのごとし、一切衆生の中に於て亦これ第一なり」等云云、此の経文をも

つて案ずるに華嚴経を持てる普賢菩薩・解脱月菩薩等・竜樹菩薩・

馬鳴菩薩・法蔵大師・清凉国師・則天皇后・審祥大徳・良弁僧正・

聖武天皇・深密・般若経を持てる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥

大師・玄奘三蔵・太宗・高宗・觀勒・道昭・孝徳天皇、真言宗の

大日経を持てる金剛薩・竜猛菩薩・竜智菩薩・印生王・善無畏

三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗・代宗・慧果・弘法大師・慈覚

大師、涅槃経を持てる迦葉童子菩薩・五十二類・曇無讖三蔵、光宅

寺の法雲南三・北七の十師等よりも末代悪世の凡夫の一戒も持た

ず一闡提のごとくに人には思はれたれども、経文のごとく已今

当にすぐれて法華経より外は仏になる道なしと強盛に信じて而も

いちぶん 一分の解ひとびとなからん人人は、彼等かれらの大聖たいせいには百千万億倍せんまんのまさりな
りもうと申きょうもんす経文きょうもんなり、彼ひとびとの人人は、或あるは彼の経経きょうきょうに且しばらく人を入れて
ほけきよう 法華経ほけきようへうつさんがためなる人もあり、或あるは彼の経きょうに著あをなして
ほけきよう 法華経ほけきようへ入あらぬ人もあり、或あるは彼の経経きょうきょうに留逗とどまるのみならず彼の
きようぎよう 法華経ほけきようへ入あらぬ人もあり、或あるは彼の経経きょうきょうに留逗とどまるのみならず彼の
経経きょうきょう を深く執しゆうするゆへに法華経ほけきようを彼の経きょうに劣あるといふ人もあり、
されば今いま法華経ほけきようの行者ぎやうじやは心こころうべし、譬たとえば「一切いっさい
せんる 川流江河せんるの諸水しよすいの中に海うみこれ第一だいいちなるが如ごとく法華経ほけきようを持つ者も
またまたかく 亦復またまた是ことくの如ごとし、又衆星しゆうせいの中に月天子がつてんし最さいもこれ第一だいいちなるが如ごとく
ほけきよう 法華経ほけきようを持つ者も亦復またまた是ことくの如ごとし、等とうと御心ごしんえあるべし、当世とうせい・
にほんこく 日本国にほんこくの智人ちじん等は衆星しゆうせいのごとし日蓮にちれんは満月まんげつのごとし。

問いうて云いく古いにしへへかくのごとくいえる人ありや、答こたえて云いく伝教でんきやう
だいし 大師だいしの云いく「当まさに知るべし他宗たしゆう所依しよえの経いは未いまだ最さい為さい第一だいいちならず其その
よ 能よく経きょうを持つ者またいまも亦未またいまだ第一だいいちならず天台てんだい法華宗ほつげしゆうは所持しよじの経きょう最さい為さい

第一だいいちなるが故ゆえに能よく法華ほっけを持つ者ものも亦また衆生しゅじょうの中に第一だいいちなり、已すでに
仏説ぶつせつに拠よる豈あに自歎じたんならんや、等と云いふ、夫それ麒麟きりんの尾おにつけるだにの
一日いちにちに千里せんりを飛ぶといふ、転王てんおうに随つえる劣夫れっぶの須臾しゅゆに四天してん下げをめぐ
るといふをば難なんずべしや、疑うたがいふべしや、豈あに自歎じたん哉やの釈しゃく

は肝にめいずるか若し爾らば法華經を經のごとくに持つ人は梵王に
も・すぐれ帝釈たいしゃくにもこえたり、修羅しゆらを随へば須弥山しゆみせんをもになひぬべ
し竜をせめつかはば大海たいかいをもくみほしぬべし、伝教大師でんぎようだいし云く
「讚ほむる者は福を安明あんみように積み誇る者は罪つみを無間むげんに聞く」等云云、
法華經ほけきように云く「經を讀誦し書持どくじゆすること有らん者を見て輕賤きようせん憎嫉ぞうじつ
して結恨けつこんを懷いだか
ん乃至ないしそ其の人命終みようじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」等云云、教主きようしゆう釈尊しやくそんの金言きんげん
まことならば多宝仏たぼうぶつの証しょうみよう明たがずば十方じゆっぽうの諸仏しよぶつの舌相ぜつそついちじよう一定なら
ば今にほんこく・日本國いっさいの一切しじゆうの衆生むげんじこく無間地獄おに墮ちん事うたがい疑うべしや、
法華經ほけきようの八の卷いわに云く「若し後の世もに於て是の經典きようてんを受持じゆじし讀誦どくじゆ
せん者は乃至ないししよ諸願むな虚なしからず、亦現世またげんせに於て其の福報あを得ん」又
云く「若し之これを供養くようし讚歎さんたんする」と有らん者は当まさに今世あに於て現げん
果報かほうを得べし」等云云、此の二つの文の中に亦於現世またでんせ・得またそのふくほうをえん其福報あの

まさにごんぜにおいてげんのかほうをえん

八字・当於今世・得現果報の八字・已上一六字の文むなしくして

日蓮今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の

証明は俱伽利が妄語に異ならし、謗法は一切衆生も阿鼻地獄に

墮つべからず、三世

の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心みに法華經のごとく

身命もおしままず修行して此の度仏法を心みよ、南無妙法蓮華經・

南無妙法蓮華經。

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」

涅槃經に云く「譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他国に

奉るに寧ろ身命を喪うとも終に王所説の言教を匿さざるが如し

智者も亦爾なり凡夫中に於て身命を惜まずかならず大乘方等

如来の秘蔵一切衆生に皆仏性有りと宣説すべし」等云云、いかやう

な事のあるゆへに身命をすつるまでにてあるやらん委細にうけ給わ

り候はん、答えて云く予が初心の時の存念は伝教・弘法・慈覚・
智証等の勅宣を給いて漢土にわたりし事の我不愛身命にあたる
か、玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに六生が間・身命をほろぼ
ししこれ等か、雪山童子の半偈のために身をなげ、薬王菩薩の七万
二千歳が間・臂をやきし事かなんどもひしほどに経文のごときん
ば此等にはあらず、経文に我不愛身命と申すは上に三類の敵人を
あげて彼

等がのりせめ刀杖に及んで身命をうばうともみへたり、又涅槃經の文に寧喪身命等ととかれて候は次下の經文に云く「一闍提有り羅漢の像を作し空処に住し方等經典を誹謗す、諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、彼の法華經の文に第三の敵人を説いて云く「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在つて乃至世に恭敬せらるること六通の羅漢の如き有らん」等云云、般泥 經に云く「羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行ず」等云云、此等の經文は正法の強敵と申すは惡王惡臣よりもげどうまおうも破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし、されば妙樂大師かいて云く「第三最も甚し後後の者は轉識り難きを以ての故なり」等云云、法華經の第五の卷に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり、諸經の中に於て最も其上に在り」等云云、此の經文に最在其上の四文あり、されば此の

経文のごときんば法華経を一切経の頂にありと

申すが法華経の行者にてはあるべきか、而るを又国王に尊重せら

る人人あまたありて、法華経にまさりてをはする 経経 まします

と申す人にせめあひ候はん時、かの人は王臣に御帰依あり法華経の

行者は貧道なるゆへに、国こそつてこれをいやしみ候はん時、不軽

菩薩のごとく賢愛論師がごとく申しつをらば身命に及ぶべし、此れ

が第一

の大事なるべしとみて候此の事は今の日蓮が身にあたれり、予が

分齊として弘法大師・慈覚大師・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵

などを法華経の強敵なり経文まことならば無間地獄は疑なし

なんと申すは裸形にて大火に入るはやすし須弥を手にとてなげん

はやすし大石を負うて大海をわたらんはやすし日本国にして此の

法門を立てんは大事なるべし云云。

りよつぜんじょうど
靈山淨土の教主きやうしゆ・積尊じやくそん・宝淨ほうじやう・世界の多宝たほう・十方じゆうぽう・分身ぶんじんの諸しよ仏ぶつ・
地じ涌ゆ千界せんがいの菩薩ぼさつ等ら・梵ぼん釈しやく・日月にちがつ・四天してん等ら・冥みやうにた加ました・顯けんにた助すけけた給たまはずば・
一いち時じ一いち日じつも安穩あんのんなるべしや。

四五

報恩抄 ほうおん日蓮之を撰す にちれんこれ

293P

夫れ老狐は塚をあとにせず白亀は毛宝が恩をほうず畜生すらか
そ ろうこ はくき もうほう
 くのごとしいわうや人倫をや、されば古への賢者予讓といるし者は
じんりん いにしえ けんじゃよじょう
 剣をのみて智伯が恩にあてこう演と申せし臣下は腹をさひて衛の
いこう きも ぶんきやう しんか えい
 懿公が肝を入れたり、いかにいわうや仏教をならはん者父母・師匠
いこう きも ぶんきやう しんか えい
 国恩をわするべしや、此の大恩をほうぜんには必ず仏法をならひき
ちしや たと ぶつぽう いきめくら
 はめ智者とならで叶うべきか、譬へば衆盲をみちびかんには生盲の
きやうが わきま
 身にては橋河をわたしがたし方風を弁えざらん
しや しやうが
 大舟は諸商を導きて宝山にいたるべしや、仏法を習い極めんとを
ぶつぽう なら きわ
 もはばいとまあらずば叶うべからずいとまあらんとをもはば父
かな
 母・師匠・国主等に随いては叶うべからず是非につけて出離の道を
ししやう くにぬし したが かな べひ しちり

わきまへざらんほどは父母・師匠・等の心に随うべからず、この義は諸人をもはく頭にもはづれ冥にも叶うまじとをもう、しかれども外典の孝経にも

父母・主君に随はずして忠臣孝人なるやうもみえたり、内典の仏經に云く「恩を棄て無為に入るは眞実報恩の者なり」等云云、比干が王に随わずして賢人のなをとり悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。

かくのごとく存して父母・師等に随わずして佛法をうかがひし程に一代聖教をさとるべき明鏡十あり、所謂る俱舍・成実・律宗・法相・三論・眞言・華嚴・浄土・禅宗・天台法華宗なり此の十宗を明師として一切経の心をしるべし世間の学者等おもえり此の十の鏡はみな正直に仏道の道を照せりと小乗の三宗はしばらくこれを、をく民の消息の是非につけて他国へわたるに用なきがごとし、大乘

の七鏡こそ生死しよつじの大海たいかいをわたりて浄土じよつどの岸につく大船なれ

ば此ならを習ならいほどひて我がみも助け人をもみちびかんと・おもひて

習いちだいひみるほどに大乘だいじようの七宗いづれもいづれも自讚じさんあり我が宗こそ

一代いちだいの心はえたれえたれ等云云、所謂いわゆる華嚴宗けこんしゆうの杜順とじゆん・智儼ちこん・法蔵ほうぞう・

澄観ちようかん等、法相宗ほうそうしゆうの玄奘げんじよう・

慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・
金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等、禪宗の達磨・慧可・慧能等、
浄土宗の道綽・善導・懷感・源空等、此等の宗宗みな本經・本論に
よりに我も我も一切經をさとれり仏意をきはめたりと云云、彼の
ひとびといわ一切經の中には華嚴經第一なり法華經・大日經等は臣下
のごとし、真言宗の云く一切經の中には大日經第一なり余經は
衆星のごとし、禪宗が云く一切經の中には楞伽經第一なり乃至
余宗かくのごとし、而も上に挙ぐる諸師は世間の人人・各各おもえ
り諸天の帝釈をうやまひ衆星の日月に隨うがごとし我等凡夫はい
づれの師師なりとも信ずるならば不足あるべからず仰いでこそ信
ずべけれども日蓮が愚案はれがたし、
世間をみるに各各・我も我もといへども国主は但一人なり二人とな
れば国土おだやかならず家に一の主あれば其の家必ずやぶる

一切経も又かくのごとくや有るらん何の経にてもをはせ一経こそ
一切経の大王にてはをはすらめ、而るに十宗・七宗まで各各・諍論
して随はず国に七人・十人の大王ありて万民をだやかならじ・いかな
がせんと疑うところに一の願を立つ我れ八宗・十宗に随はじ
天台大師の専ら経文を師として一代の勝劣をかながへしがごとく
一切経を開きみるに涅槃経と申す経に云く「法に依つて人に依らざ
れ」等云云依法と申すは一切経・不依人と申すは仏を除き奉りて
外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸の人師な
り、此の経に又云く「了義経に依つて不了義経に依らざれ」等云云、
此の経に指すところ了義経と申すは法華経・不了義経と申すは
華嚴経・大日経・涅槃経等の已今当の一切経なり、されば仏の遺言
を信ずるならば専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべき
か。

随したがつて法華經ほけきょうの文を開たてまき奉たてまれば「此この法華經ほけきょうは諸經しよきょうの中なかに於おいて最さいも其その上かみに在あり」等ら云い此この經文きょうもんのごとくば須弥山しゆみせんの頂いただきに帝釈たいしやくの居あるがごとく輪王りんおうの頂いただきに如意宝珠にょいほうじゆのあるがごとく衆木しゆぼくの頂いただきに月のやどるがごとく諸仏しよぶつの頂いただきに肉髻にくけいの住すませるがごとく此この法華經ほけきょうは華嚴經けこんきょう・大日經だいにちきょう・涅槃經ねはんきょう等らの一切經いっさいきょうの頂上ちようじょうの如意宝珠にょいほうじゆなり。

されば専ら論師・人師をすてて經文に依るならば大日經・
華嚴經等に法華經の勝れ給えることは日輪の青天に出現せる時眼
あきらかなる者の天地を見るがごとく高下宛然なり、又大日經・
華嚴經等の一切經をみるに此の經文に相似の經文・一字・一点も
なし、或は小乘經 に対して勝劣をとかれ、或は俗諦に対して
真諦をとき、或は諸の空仮に対して中道をほめたり、譬へば小国の
王が我が国の臣下に対して大王というがごとし、法華經は諸王に対
して大王等と云云、但涅槃經計りこそ法華經に相似の經文は候へ
されば天台已前の南北の諸師は迷惑して法華經は涅槃經に劣と云
云、されども専ら經文を開き見るには無量義經のごとく華嚴・
阿含・方等・般若等の四十余年の經經をあげて涅槃經に対して我
がみ勝るとひとひて又法華經に対する時は是の經の出世は乃至法華
の中の八千の声聞に記

を授くることを得て大菓実を成ずるが如き秋收冬蔵して更に所作無きが如し等と云云、我れと涅槃經は法華經には劣るとける經文なり、かう經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷うて有りし經文なれば末代の学者能く能く眼をとどむべし、此の經文は但法華經・涅槃經の勝劣のみならず十方世界の一切經の勝劣をもしりぬべし、而るを經文にこそ迷うとも天台・妙樂・傳教大師の御れうけんの後は眼あらん人人はしりぬべき事ぞかし、然れども天台宗の人たる慈覺・智証すら猶此の經文にくらし。いわうや余宗の人人をや。

或る人疑つて云く漢土・日本にわたりたる經經にこそ法華經に勝たる經はをはずとも月氏・竜宮・四王・日月・利天・都率天などには恒河沙の經經ましますなれば其中に法華經に勝れさせ給う御經やましますらん、答て云く一をもつて万を察せよ庭戸を

出いでずして天下てんがをしるとはこれなり、癡人ちじんが疑うたがつて云いく我等われらは南天なんてんを見て東西北とうせいほくの三空さんくうを見ず彼の三方さんぱうの空くうに此こゝの日輪にちりんより別べちの日ひやましますらん、山さんを隔へだて煙えんの立つを見て火ひを見ざれば煙えんは一定いっぺんなれども火ひにてやなかるらん。かくのごとくいはん者は一闡提いっせんたいの人ひととしるべし生盲いきめくらにことならず、法華經ほけきやうの法師品ほうしほんに釈迦しゃか如来にょらい金口きんくの誠言せいげんをもつて五十余年いっせいきやうの一切經いっさいきやうの勝劣しょうりやくを定めて云いく、「我われ所説しよせつの經典きやうてんは無量千万億むりようせんまんにして

すでに説き今説き當に説ん而も其の中に於て此法華經は最も為
難信難解なり」等云云、此の經文は但釈迦如来・一仏の説なりとも
等覺已下は仰いで信ずべき上・多宝仏・東方より來りて眞実なりと
證明し十方の諸仏集りて釈迦仏と同く広長舌を梵天に付け給て
後・各各・国・国へ還らせ給いぬ、已今當の三字は五十年並びに十方
三世の諸仏えの御經、一字一点ものこさず引き載せて法華經に對し
て説せ給いて候を十方の諸仏・此座にして御判形を加えさせ給い各
各又自國に還らせ給いて我弟子等に向わせ給いて法華經に勝れたる
御經ありと説せ給はば其の所化の弟子
等信用すべしや、又我は見ざれば月氏・竜宮・四天・日月等の宮殿
の中に法華經に勝れさせ給いたる経や・おはしますらんと疑いを
なすはされば梵釈・日月・四天・竜王は法華經の御座にはなかりけ
るか、若し日月等の諸天・法華經に勝れたる御經まします汝はし

らずと仰せあるならば大誑惑の日月なるべし、日蓮せめて云く日月は虚空に住し給へども我等が大地に処するがごとくして墮落し給はざる事は上品の不妄語戒の力ぞかし、法華經に勝れたる

御經ありと仰せある大妄語あるならば恐らくはいまだ壞劫にいたらざるに大地の上にとつとおち候はんか無間・大城の最下の堅鉄に
あらずばとどまりがたからんか、大妄語の人は須臾も空に処して
四天下を廻り給うべからずとせめたてまつるべし、而るを華嚴宗の
澄觀等真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等の大智
の三蔵大師等の華嚴經・大日經等は法華經に勝れたりと立て給わ
ば我等が分齊には及ばぬ事なれども大道理のをすところは豈諸仏
の大怨敵にあらずや、提婆・瞿伽梨もものならず大天・大慢・外
もとむべからず、かの人人を信ずる輩はをそろしをそろし。

問て云く華嚴の澄觀・三論の嘉祥・法相の慈恩・真言の善無畏

乃至ないし・弘法こうぼう・慈覚じかく・智証等ちしょうを仏の敵との給たまうか、答えて云いわく此大なる
難なんなりほけきよう仏法ぶつぼうに入りて第一だいいちの大事だいじなり愚眼ぐがんをもつて経文きょうもんを見るには
法華經ほけきように勝すぐれたる經ありといはん人は設たといいかなる人なりともほうぼう謗法
は免まぬかれじと見えて候、而しるを經文きょうもんのごとく申もうすならばいかにか此
の諸人しよにん

仏敵たらざるべき、若し又恐をなして指し申さずは一切経の勝劣
むなしかるべし、又此人人を恐れて末の人人を仏敵といはんとすれ
ば彼の宗宗の末の人人の云く法華経に大日経をまさりたりと申す
は我れ私の計にはあらず祖師の御義なり戒行の持破・智慧の勝劣
・身の上下はありとも所学の法門はたがふ事なしと申せば彼人人に
とがなし、

にちれんこ

又日蓮此れを知りながら人人を恐れて申さずは寧喪身命

ふわくきようしや

不匿教者の仏陀の諫暁を用いぬ者となりぬ、いかにせん・いはん

とすれば世間をそろし止とすれば仏の諫暁のがれがたし進退此に

きわまれ

谷り、むべなるかなや、法華経の文に云く「而かも此経は如来の

げんざい

現在にすら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや」又云く一切世間怨多く

して信じ難し等云云、釈迦仏を摩耶夫人はらませ給いたりければ

だいろくてん

第六天の魔王・摩耶夫人の御腹をとをし見て我等が大怨敵・

ほけきょう　もう　りけん
法華經と申す利劍をはらみたり事の成ぜぬ先にいかにしてか失うべ
き、だいろくてん第六天の魔王・大医と變じて淨飯王宮に入り御産安穩の良藥
をもちそつぞう持候　大医ありとののしりて毒を后にまいらせつ、初生の時は
石をふらし乳に毒をまじへ城を出でさせ給いしには黒き毒蛇と變じ
て道にふさがり乃至提婆瞿伽利波瑠璃王阿闍世王等の悪人の身に
入りてある或は大石をなげて仏の御身より血をいだしある或は釈子をこ
ろしある或は御弟子等を殺す、此等の大難は皆遠くは法華經を仏
世尊に説かせまいらせじとたばかりし如来現在猶多怨嫉の大難ぞ
かし、これら此等は遠き難なり近き難には
舍利弗・目連・諸大菩薩等も四十余年が間は法華經の大怨敵の内ぞ
かし、きょうめつご況滅度後と申して未来の世には又此の大難よりもすぐれて
をそろしき大難あるべしととかれて候、仏だにも忍びがたかりける
大難だいなんをば凡夫ほんぶはいかでか忍ぶべきいわうや在世ざいせより大なる大難だいなんにて

あるべかんなり、いかなる大難か提婆が長三丈広一丈六尺の大石
阿闍世王の醉象にはすぐべきとはおもへども彼にもすぐるべく候
なれば小失なくとも大難に度度値う人をこそ滅後の法華經の行者
とはしり候はめ、付法蔵の人人は四依の菩薩・仏の御使なり提婆
菩薩は外道に殺され師子尊者は檀弥羅王に頭を刎ねられ仏陀密多
・竜樹菩薩等は赤幡を七年十二年さしとをす馬鳴菩薩は金銭三
億がかわりとな

り如意論師はにょいろんしおもひじにに死す。

此れ等はこ正法しやうほう一千年の内なり、像法ぞうほうに入つて五百年・仏滅後ぶつめつ・一

千五百年と申せし時漢土かんとに一人の智人ちじんあり始は智ちぎ・後には智者ちしや

大師だいしとがうす、法華經ほけきやうの義をありのままに弘通くつうせんと思い給しに

天台てんだい已前いぜんの百千万の智者よろずちしやしなじなに一代いちだいを判ぜしかども詮して十

流いわゆるとなりぬ所謂いわゆる南三なんさん・北七ほくひちなり十流ありしかども一流さいをもて最とせ

り、所謂

南三なんさんの中の第三こつたくの光宅寺ほうとうんほつしの法雲法師ほつしこれなり、此の人いちだいは一代の

仏教ぶつぎやうを五ごにわかつ其その五ごの中に三經さんぎやうをえらびいだす、所謂いわゆる華嚴經けこんぎやう・

涅槃經ねはんぎやう・法華經ほけきやうなり一切いっさい經ぎやうの中には華嚴經けこんぎやう第一だいいち・大王だいおうのごとし

涅槃經ねはんぎやう第二だいに・撰政せんせい関白かんぱくのごとし第三だいさん法華經ほけきやうは公卿等くぎやうのごとし此れ

よりい已下かは万民ばんみんのごとし、此の人ちしやは本より智慧ちえかしこき上えい・慧觀えいかん・慧

嚴そにゆう・僧柔そうじゆう・慧次えいじなど申せし大智者ちしやより習ならひ伝え給るのみならず南

北の諸師しよしの義をせめやぶり山林さんりんにまじわりて法華經ほけきよつ・涅槃經ねはんぎよつ・

華嚴經けこんきよつの功こうをつもりし上・梁の武帝ぶてい召し出して内裏だいりの内に寺を立て

光宅寺こうたくとなづけて此こゝの法師ほっしをあがめ給たまう、法華經ほけきよつをかうぜしかば天

より花はなふること在世ざいせのごとし、天鑒てんかん五年に大旱魃かんぱつありしかば此こゝの

法雲法師ほつうんほっしを請しょうじ奉たてまつりて法華經ほけきよつを講こうぜさせまいらせしに藥草やくそう喻品ゆほんの

其雨こうふとつ普等しほうくげ・四方しほうくげ俱下けいげと申もうす一句いっくを講こうぜさせ給たまいし時とき・天あめより甘雨かんう下

たりしかば天子てんしぎよかん御感ごかんのあまりに現げんに僧正そうじよつになしまいらせて諸天しよてんの

帝釈たいしやくにつかえ万民ばんみんの国王こくおうを・をそるるがごとく我われとつかへ

給たまいし上あ・或人ある夢ゆめみら此人こゝは過去かこの灯明とうめい仏ぶつの時ときより法華經ほけきよつをかうぜ

る人ひとなり、法華經ほけきよつの疏じよ四卷しよあり此こゝの疏じよに云いく「此經こゝ未いまだ碩然せきねんなら

ず」亦また云いく「異まの方便ほうべん」等な云いふ、正まさしく法華經ほけきよつはいまだ仏理ぶつりをきわめざ

る經きやうと書かかれて候あ、此こゝの人の御義おんぎ仏意ぶついに相あひ叶あひ給たまいければこそ天

より花はなも下ふり雨あめもふり候あけらめ、かかるといみじき事ことにて候あしかば

かんど ひとびと
漢土の人人

さては法華経ほけきょうは華嚴経けこんきょう・涅槃経ねはんきょうには劣なにてこそあるなれと思おもいし上う・

新羅しらぎ・百濟くだら・高麗こま日本にほんまで此この疏じよひろまりて大体だいたい一同いつどうの義ぎにて候こうし

に法雲ほううん法師ほっし御死しきよ去きありていくばくならざるに梁りやうの末まつ・陳ちんの始しに

智ちぎ法師ほっしと申もうす小僧こぞう出来しゅつせり、南岳なんがく大師だいしと申もうせし人の御弟子おんでしなり

しかども師しの義ぎも不審ふしんにありけるかのゆへに一切いっさい経藏きやうざうに入いつて度度たびたび

御らん

ありしに華嚴經・涅槃經・法華經の三經に詮じいだし此の三經の中
に殊に華嚴經を講じ給いき、別して礼文を造りて日に功をなし
給いしかば世間の人もわく此人も華嚴經を第一とおぼすかと思
えしほどに法雲法師が一切經の中に華嚴第一・涅槃第一・法華第三
と立てたるがあまりに不審なりける故にことに華嚴經を御らんあ
りけるなり、かくて一切經の中に法華第一・涅槃第一・華嚴第三と
見定めさせ給いてなげき給うやうは如来の聖教は漢土に
わたれども人を利益することなしかへりて一切衆生を惡道に導び
くこと人師のにんし によれり、例せば国の長とある人東を西といひ天
を地といひいだしぬれば万民はかくのごとくに心うべし、後にいや
しき者出来して汝等が西は東汝等が天は地なりといはば、もちう
ることなき上、我が長の心に叶わんがために今の人をのりうちなん
どすべしいかんがせんとはおぼせしかども、さてもだすべきにあらね

ば光宅寺こうたくの法雲法師ほつうんほつしは謗法ぼつぽうによつて地獄じじくに墮おち

ぬとののしられ給たまう、其そのときの時南北しよしの諸師しよしはちのごとく蜂起ほうきし。から

すのごとく烏合うごうせり、智ちぎ法師ほつしをば頭こづえをわるべきか国くにを。をうべき

かなんぞ申せし程ほどに陳主ちんしゆ此これをきこしめして南北なんぼくの数人かずびとに召まし合せ

て我われと列座れつざしてきかせ給たまい、法雲ほつうん法師ほつしが弟子でし等の慧栄ええい・法歳ほうさい・慧曠えこう

・慧えこう なんと申せし僧正そうじやう・僧都そうず・已上ひとびとの人人ひとびと百余人ひやくにじゆじんなり各各あつく悪口あくぐちを

先まなことし眉まゆをあげ眼まなこをいからし手をあげ柏子ひやうしをたたき、而しかれども

智ちぎ法師ほつしは末座まつざに坐まして色いろを変かへず言ことをあやまらず威儀いぎ

しづかにして諸僧しよそうの言ことを一一いちいちに牒たてをとり言ことにせめかえず、をし

かへして難なんじて云いわく抑おさも法雲ほつうん法師ほつしの御義おんぎに第一だいいち華嚴けごん・第二にせ涅槃ねはん・

第三さん法華ほつけと立たさせ給たまいける証文しやうもんは何いずれれの経きやうぞ慥たしかかに明あきらかなる

証文しやうもんを出だださせ給たまえとせめしかば各各ごうごう頭こづえをうつぶせ色いろを失うしないて一

言ことの返事へんじなし。

かさ
重ねてせめて云く無量義經に正しく次説方等十二部經・摩訶般若
けこんかいこう
華嚴海空等云云、仏・我と華嚴經の名をよびあげて無量義經に対
みけんしんじつ
して未顕眞実と打ち消し給う法華經に劣りて候・無量義經に華嚴經
ほけきよう
はせめられて候ぬいかに心えさせ給いて華嚴經をば一代第一とは候
たまい
けるぞ各各・御師の御かたうとせんと・をばさば此の經文をやぶり
けこんきよう
て此れ

に勝れたる経文を取り出だして御師の御義を助け給えとせめたり。

又涅槃經を法華經に勝ると候けるはいかなる経文ぞ涅槃經

の第十四には華嚴・阿含・方等・般若をあげて涅槃經に対して勝劣

は説れて候へどもまつたく法華經と涅槃經との勝劣はみへず、次上

の第九の卷に法華經と涅槃經との勝劣分明なり、所謂経文に云く

「是の經の出世は乃至法華の中の八千の声聞・記を受くることを

得て大菓実を成ずるが如き秋・收・冬・蔵して更に所作無きが如し」等

云云、経文に諸經をば春夏と説かせ給い涅槃經と法華經とをば

菓実の位とは説かれて候へども法華經をば秋・收・冬・蔵の大菓実の位

涅槃經をば秋の末・冬の始・拾の位と

定め給いぬ、此の経文正く法華經には我が身劣ると承伏し給い

ぬ、法華經の文には已説・今説・当説と申して此の法華經は前と並

きんじぎょう

との経経きんじぎょうに勝れたるのみならず後に説かん経経きんじぎょうにも勝るべしと

仏定め給うたま、すでに教主釈尊きょうしゆしやくそんかく定め給いぬれば疑うたがいうべきにあ

らねども我が滅後めつごはいかんと疑うたがいいおぼして東方宝浄世界とうほうほうじようせかいの

多宝仏たぼうぶつを証人に立て

給たまいしかば多宝仏大地たぼうぶつだいちよりをどり出でて妙法華経みょうほけきょう・皆是真実かいぜしんじつと証し

十方分身じゅうぽうふんじんの諸仏重しよぶつかさねてあつまらせ給い広長舌こうちやうぜつを大梵天ほんでんに付け又

教主釈尊きょうしゆしやくそんも付け給うたま、然しかして後多宝仏たぼうぶつは宝浄世界ほうじようせかいえかへり十方じゅうぽう

の諸仏各各本土しよぶつにかへらせ給いて後多宝分身たぼうふんじんの仏もおはせざらん

に教主釈尊きょうしゆしやくそん・涅槃経ねはんぎょうをといて法華経ほけきょうに勝ると仰せあらば御弟子等おんでし

は信ぜさせ給うたまべしやとせめしかば日月の大光明にちがつの修羅しゆらの眼まなこを照てら

らすかごとく漢王の剣の諸侯しよの頸しよにかかりしがごとく両眼りやうげんを

とぢ一頭うなだを低れたり、天台大師てんだいだいしの御気色みけしきは師子王ししの狐兔こことの前に

吼ほえたるかごとし鷹鷲たかの鳩雉はとをせめたるにいたり、かくのごとくあ

りしかばさては法華経は華嚴経・涅槃経にもすぐれてありけりと
震旦一國に流布するのみならず・かへりて五天竺までも聞へ月氏
大小の諸論も智者大師の御義には勝れず教主釈尊・両度出現し
ましますか仏教二度あらはれぬとほめられ給いしなり。

其の後天台大師も御入滅なりぬ陳隋の世も代わりて唐の世とな
りぬ章安大師も御入滅なりぬ、天台の仏法やうやく習い失せし程
に唐の太宗の御宇に玄奘三蔵といぬし人・貞觀三年に始めて月氏
に入りて同十九年にかへりしが月氏の仏法尋ね尽くして法相宗と
申す宗をわたす、此の宗は天台宗と水火なり而るに天台の御覽な
かりし深密経・瑜伽論・唯識論等をわたして法華経は一切経には
勝れたれども深密には劣るといふ、而るを天台は御覽なかりしかば
天台の末学等は智慧の薄きかのゆへにさもやとおもふ、又太宗は
賢王なり玄奘の御帰依あさからず、いふ

べき事ありしかどもいつもの事なれば時の威をおそれ申す人なし、法華經を打ちかへして三乘眞実・一乘方便・五性各別と申せし事は心うかりし事なり、天竺よりはわたれども月氏の外道が漢土にわたれるか法華經は方便・深密經は眞実といひしかば釈迦・多宝・十方の諸仏の誠言もかへりて虚くなり玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

其後則天皇皇后の御宇に天台大師にせめられし華嚴經に又重ねて新訳の華嚴經わたりしかば、さきのいきどをりはたさんがために新訳の華嚴經をもつて天台にせめられし旧訳の華嚴經を扶けて華嚴宗と申す宗を法蔵法師と申す人立てぬ、此の宗は華嚴經をば根本法輪法華經をば枝末法輪と申すなり、南北は一華嚴・二涅槃・三法華・天台大師は一法華・二涅槃・三華嚴・今の華嚴宗は一華嚴・二法華・三涅槃等云云。

其の後玄宗皇帝の御宇に天竺より善無畏三蔵は大日経・蘇悉地経をわたす、金剛智三蔵は金剛頂経をわたす、又金剛智三蔵の弟子あり不空三蔵なり、此の三人は月氏の人・種姓も高貴なる上・人がらも漢土の僧ににず法門もなにとはしらず後漢より今にいたるまでなかりし印と真言という事をあひそいてゆゆしかりしかば天子かうべをかたぶけ万民掌をあわす、此の人人の義にいわく華嚴・深密・般若・涅槃・法華経等の勝劣は顕教の内・釈迦如来の説の分なり、今の大日経等は法王の勅言なり彼の経経は民の方言・此経は天子の一言なり、華嚴経・涅槃経等は法王の言に梯を立ても及ばず但法華経計りこそ大日経には相似の経なれ、されども彼の経は釈迦如来の説・

民の正言・此の経は天子の正言なり言は似れども人から雲泥なり、
譬へば濁水の月と清水の月のごとし月の影は同じけれども水に清濁
ありなると申しければ、此の由尋ね顕す人もなし諸宗皆落ち伏し
て真言宗にかたぶきぬ、善無畏・金剛智・死去の後・不空三蔵又
月氏にかへりて菩提心論と申す論をわたしいよいよ真言宗盛りな
りけり、

但し妙楽大師といふ人あり天台大師よりは二百余年の後なれども
智慧かしこき人にて天台の所釈を見明めてありしかば天台の釈の
心は後にわたれる深密経・法相宗又始めて漢土に立てたる華嚴宗・
大日経・真言宗にも法華経は勝れさせ給いたりけるを、或は智の
をよばざるか、或は人に畏るるか、或は時の王威をおづるかの故に
いはざりけるか、かくてあるならば天台の正義すでに失なん、又
陳隋已前の南北が邪義にも勝れたりとおぼして三十巻の末文

をつく
を造り給う所謂弘決・釈籤・疏記これなり、此の三十卷の文は本書
の重なるをけづりよわきをたすくるのみならず天台大師の御時
なかりしかば御責にものがれてあるやうなる法相宗と華嚴宗と
真言宗とを一時にとりひしがれたる書なり。

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十
三日に百済国より一切経・釈迦仏の像をわたす、又用明天皇の御宇
に聖徳太子佛法をよみはじめ和氣の妹子と申す臣下を漢土につか
はして先生所持の一卷の法華経をとりよせ給いて持経と定め、其の
後人王第三十七代孝徳天王の御宇に三論宗・華嚴宗・法相宗・
倶舎宗・
成実宗わたる、人王第四十五代に聖武天王の御宇に律宗わたる已
上六宗なり、孝徳より人王五十代の桓武天皇にいたるまでは十四
代一百二十余年が間は天台・真言の二宗なし、桓武の御宇に最澄

と申すもつ小僧こそうあり山階寺やましなでらの行表ぎよつひよつそつじよつ僧正しんじやうの御弟子おんでしなり、法相宗ほうそうしゆうを始め
として六宗ろくしゆうを習ならいきわめぬ而しかれども仏法ぶつぽういまだ極きわめたりともおほ
えざりし

に華嚴宗けこんしゆうの法蔵法師ほうぞうほつしが造つくりたる起信論きしんろんの疏じよを見給たまうに天台大師てんだいだいしの
釈しやくを引きのせたり此この疏じよこそ子細しさいありげなれ此この国くにに渡わたりたるか
又またいまだわたらざるかと不審ふしんありしほどに有人あるひとにとひしかば其その人
の云いく大唐だいたうの揚州竜興寺やうしゆりやうきやうじ

の僧鑒真和尚は天台の末学道暹律師の弟子天宝の末に日本国にわたり給いて小乗の戒を弘通せさせ給いしかども天台の御釈持来りながらひろめ給はず人王第四十五代聖武天王の御宇なりとかたる、其の書を見んと申されしかば取り出だして見せまいらせしかば一返御らんありて生死の酔をさましつ此の書をもつて六宗の心を尋ねあきらめしかば一一に邪見なる事あらはれぬ、忽に願を發て云く日本国の人皆謗法の者の檀越たるが天下一定乱れなんずとおぼして六宗を難ぜられしかば七大寺・六宗の碩学蜂起して京中烏合し天下みなさわぐ、七大寺・六宗の諸人等悪心強盛なり、而るを去ぬる延暦二十一年正月十九日に天王高雄寺に行幸あつて七寺の碩徳十四人善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人を召し合わす、華嚴・三論・法相等の人人各各我宗の元祖が義にたが

さいちゆうしゅうにん ろくしゅう ひとびと しじゅう

ちゅう

ほんきょう

はず最澄上人は六宗の人人の所立・一一に牒を取りて本經・
本論・並に諸經諸論に指し合わせてせめしかば一言も答えず口をし

て鼻のごとくになりぬ、天皇をどろき給いて委細に御たづねありて

重ねて勅宣を下して十四人をせめ給いしかば承伏の謝表を奉りた

り、其書に云く「七箇の大寺・六宗の学匠乃至初て至極を悟る」等

云云又云く「聖徳の弘化より以降今に二百余年の間、講ずる所の

經論其数多し、彼此理を争うて其の疑未だ解けず而も此の最妙

の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、又云く「三論法相・久年の諍

渙焉と

して氷の如く解け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見

るがごとし」云云、最澄和尚十四人が義を判じて云く「各一軸を

講ずるに法鼓を深壑に振り賓主三乗の路に徘徊し義旗を高峰に

飛す長幼三有の結を摧破して猶未だ歴劫の轍を改めず白牛を門外

に混あず、豈あ善く初あ発の位あに昇あり阿あ茶だを宅あ内に悟あらんやあ等あ云云、
ひろよまずな弘あ世あ真あ綱あ二あ人の臣あ下あ云あく「あ霊あ山あの妙あ法あを南あ岳あに聞あき総あ持あの妙あ悟あを
てんあだいあひらあいちあじあょうあごんあたいあなげあさんあたいあみけんあ
天あ台あに關あく一あ乗あの権あ滞あを慨あき三あ諦あの未あ頭あを悲あしむあ等あ云云、又あ十
四あ人の云あく「あ善あ議あ等あ牽あれて休あ運あに逢あて乃あち奇あ詞あを閱あす深あ期あに非あるよ
りあは何あぞ聖あ世あに託あせんやあ等あ云云、此あの十あ四あ人あは華あ嚴あ宗あの法あ蔵あ・
しんあじあょうあさんあろんあしあゆうあかあじあょうあかんあろくあほうあそうあしあゆうあじあおんあ
審あ祥あ・三あ論あ宗あの嘉あ祥あ・觀あ勒あ・法あ相あ宗あの慈あ恩あ・道あ昭あ・律あ宗あの道あ宣あ・
かんあじんあかんあどあにあほんあがあんあそあほうあもんあ・
鑒あ真あ等あの漢あ土あ・日あ本あ元あ祖あ等あの法あ門あ・

瓶はかはれども水は一なり、而るに十四人彼の邪義をすてて伝教
の法華經に歸伏しぬる上は誰の末代の人か華嚴・般若・深密經等は
法華經に超過せりと申すべきや、小乗の三宗は又彼の人人の所学
なり大乘の三宗破れぬる上は沙汰のかぎりにあらず、而るを今に
子細を知らざる者六宗はいまだ破られずとをもへり、譬へば盲目
が天の日月を見ず聾人が雷の音をきかざるゆへに天には日月なし
空に声なしとをもうがごとし。

真言宗と申すは日本・人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇
に善無畏三蔵・大日經をわたくして弘通せずして漢土へかへる、又
玄・等大日經の義積十四卷をわたくす又東大寺の得清大徳わたくす、
此等を伝教大師御らんありてありしかども大日經・法華經の勝劣
いかながとおぼしけるほどにかたがた不審ありし故に去る延暦二
十三年七月御入唐西明寺の道邃和尚・仏滝寺の行滿等に値い奉り

止観円頓の大戒を伝受し靈感寺の順 暁和尚に値い奉り

て真言を相伝し同延暦二十四年六月に帰朝して桓武天王に御対面

・宣言を下して六宗の学生に止観・真言を習はしめ同七大寺にをか

れぬ、真言・止観の二宗の勝劣は漢土に多く子細あれども又

大日経の義釈には理同事勝とかきたれども伝教大師は善無畏

三蔵のあやまりなり、大日経は法華経には劣りたりと知しめして

八宗とはせさせ給はず真言宗の名をけづりて法華宗の内に入れ

七宗となし大日経をば法華天台宗の傍依経となして華嚴・大品・

般若・

涅槃等の例とせり、而れども大事の円頓の大乗別受戒の大戒壇を

我が国に立う立じの諍論がわずらはしきに依りてや真言・天台の二

宗の勝劣は弟子にも分明にをしえ給わざりけるか、但依憑集と

申す文に正しく真言宗は法華天台宗の正義を偷みとりて大日経

に入れてりどう理同とせり、されば彼の宗は天台宗てんだいしゅうに落ちたる宗なり、い

わうや不空ふくう

さんぞう

三蔵は善無畏ぜんむい・金剛智入滅こんごうちにゆうめつの後がっし・月氏がっしに入りてありしに竜智菩薩ぼさつに

値あい奉りたてまつし時がっし・月氏がっしには仏意ぶつゐをあきらめたる論釈ろんしゃくなし、漢土かんどに天台てんだい

という人の釈じやくこそ邪正じゃせいをえらび偏円へんえんをあきらめたる文にては候な

れ、あなかしこ・あなかしこ・月氏がっしへ渡わたし給たまえとねんごろにあつらへし

事を不空ふくうの弟子でし含光こんこうといふし者が妙楽大師みょうらくだいしにかたれるを記の十の

末に

引き載せられて候をこの依憑集に取り載せて候、法華經に大日經は劣るとしろしめす事伝教大師の御心顕然なり、されば釈迦如来・天台大師・妙楽大師・伝教大師の御心は一同に大日經等の一切經の中には法華經はすぐれたりという事は分明なり、又真言宗の元祖という竜樹菩薩の御心もかくのごとし、大智度論を能く能く尋ぬるならば此の事分明なるべきを不空があやまれる菩提心論に皆人ばかされて此の事に迷惑せるか。

又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云う人あり後には弘法大師とがうす、去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりては金剛智・善無畏の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といひし人に両界を伝受し大同二年十月二十二日に御帰朝平城天王の御宇なり、桓武天王は御ほうぎよ平城天王に見参し御用いありて御歸依・他にことなりしかども平城ほどもなく嵯峨に世をとられさせ給いし

かば弘法ひき入れてありし程に伝でんきょうだいし教大師は嵯峨天王

の弘仁十三年六月四日御入滅、同じき弘仁十四年より弘法大師

王の御師となり真言宗を立てて東寺を給真言和尚とがうし此よ

り八宗始る、一代の勝劣を判じて云く第一真言・大日經第二

華嚴第三は法華・涅槃等云云、法華經は阿含・方等・般若等に対す

れば真実の經なれども華嚴經・大日經に望むれば戲論の法なり

教主釈尊は仏なれども大日如来に向うれば無明の辺域と申して

皇帝と俘囚との如し、天台大師は盗人なり真言の醍醐を盗んで

法華經を醍醐というなどかかれしかば法華經はいみじとをもへ

ども弘法大師にあひぬれば物のかずにもあらず、天竺

の外道はさて置きぬ漢土の南北が法華經は涅槃經に対すれば邪見

の經といぬしにもすぐれ華嚴宗が法華經は華嚴經に対すれば枝末

教と申せしにもこへたり、例ば彼の月氏の大慢婆羅門が自在天

那羅延天・婆藪天・教主釈尊の四人を高座の足につくりて其の上
のぼつて邪法を弘めしがごとし、伝教大師御存生ならば一言は
出されべかりける事なり、又義真・円澄・慈覚・智証等もいかに御
不審はなかりけるやらん天下第一の凶なり、慈覚大師は去ぬる
承和五年に御入唐・漢土にして十年が間・天台・真言の二宗をなら
う、法華・大日經の勝劣を習いしに

法全げんじょう・元政等の八人の真言師しんごんしには法華經ほけきょうと大日經だいにちきょうは理同事勝等りどうじしょう云い、天台宗てんだいしゅうの志遠しおん・広修こうしゅう・維ゆい・等けんに習ならいしには大日經だいにちきょうは方等部ほうとうぶの撰等しきりょう云云、同じき承和十三年九月十日に御歸朝きちよう・嘉祥元年六月十四日に宣旨せんじくだる下、法華ほっけ・大日經だいにちきょう等の勝劣しょうれつは漢土かんどにしてしりがたかりけるかのゆへに金剛頂經こんごうちきょうききょうの疏七卷蘇悉地經そしつちききょうの疏七卷已上十四卷此疏じよの心は大日經だいにちききょう・金剛頂經こんごうちききょう・蘇悉地經そしつちききょうの義ぎと法華經ほけききょうの義ぎは其その所詮しよせんの理は一同なれども事相じそうの印と真言しんごんとは真言しんごんの三部經さんぶききょうすぐれたりと云云、此これは偏ひとえに善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ぶくうの造りたる大日經だいにちききょうの疏じよの心のごとし、然しかれども我が心に猶なお不審ふしんやのこりけん又心にはとけてんけれどもも人の不審ふしんをはらさんとやおぼしけん、此この十四卷の疏じよを御本尊ごほんそんの御前おんまえにさしをきて御祈請きしきりょうありき・かくは造りて候へども仏意計ぶつゐいばかりがたし大日だいにちの三部さんぶやすぐれたる法華經ほけききょうの三部さんぶやまされると御祈念きねん有ありしかば五日ごにちと申もうす五更ごごうに忽たちまちに夢想むそうあり、青天せいてんに

大日輪だいにちりんかかり給たまへり矢をもてこれを射ければ矢飛んで天にのぼり

にちりん

日輪の中に立ちぬ日輪動転してすでに地に落んとすとをもひてう

ちさめぬ、悦よろこんで云いわく我吉夢あり法華經に真言勝れたりと造りつる

ぶつ

ふみは仏意いに叶かないけりと悦よろこばせ給たまいて宣旨せんじを申し下くだして日本国にほんこくに

くつ

弘通あり、而も宣旨せんじの心に云いわく「遂に知んぬ天台の止觀と真言しんごんの法

義とは理冥あに符あえりと等と云云、祈請きしょうのごときんば大日經だいにちきょうに法華經ほけきょう

は劣なるやうなり、宣旨せんじを申し下くだすには法華經ほけきょうと大日經だいにちきょうとは同じ

等云云。

ちしょう

智証大師だいいしは本朝ほんちようにしては義真和尚ぎしんわじょう・円澄大師えんちようだいいし・別当べつとう・慈覚じかく等の

弟子でしなり、顕密けんみつの二道にどうは大体だいたい此の国こくにして学がくし給たまいけり天台てんだい・真言しんごん

の二宗の勝劣しょうれつの御不審ふしんに漢土かんどへは渡り給けるか、去仁寿二年にんじゆに御

にゆうとう

入唐漢土かんとうにしては真言宗しんごんしゅうは法全げんじよう・元政等げんじようにならばせ給たまい大体だいたい

だいにちきょう

大日經だいにちきょうと法華經ほけきょうとは理同事勝りどうじしやう・慈覚じかくの義のごとし、天台宗てんだいしゅうは良

和わ尚じょうにならひ給たまい真しん言ごん・天台てんだいの勝しょう劣れつ・大だい日にち経きょうは華け嚴えん・法ほ華っけ等とうには
及およばず等とう云云、七年しちねんが間ま・漢かん土どに經へて去いぬる貞じょう觀くわん元げん年ねん五ご月げつ十じゅう七しち日にちに
御おん歸ぎ朝ちよう、大だい日にち經きょうの旨しき歸きに云いわく、「法ほ華っけ尚なお及およばず況いわんや自じ余よの教きょうをや」等
云云、此こ積じきは法ほ華っけ經きょうは大だい日にち經きょうには劣せうる等とう云云、又また授じゆ決けつ集しゅうに云いわく
「真しん言ごん・禅ぜん門もん乃ない至し若じやくし華け嚴えん・法ほ華っけ・涅槃ねはん等とうの經きょうに望むれば是これ
撰しん引ぎん門もん」等とう云云、普ふ賢げん經きょうの記き・論ろんの記き

に云く同じ等云云、貞観八年丙戌四月廿九日壬申・勅宣を申し
下して云く「聞くならく真言・止観・両教の宗同じく醍醐と号し俱に
深秘と称す」等云云、又六月三日の勅宣に云く「先師既に両業を開
いて以て我が道と為す代代の座主相承して兼ね伝えざること莫し
在後の輩豈旧迹に乖かんや、聞くならく山上の僧等専ら先師の義
に違いて偏執の心を成ず殆んど余風を扇揚し旧業を興隆するを
顧みざるに似たり、凡そ厥の師資の道一を闕きても不可なり伝弘の
勤め寧ろ兼備せざらんや、今より以後宜く両教に通達するの人を
以て延暦寺の座主と為し立てて恒例と為すべし」云云。
されば慈覚・智証の二人は伝教・義真の御弟子、漢土にわたりて
は又天台・真言の明師に値いて有りしかども二宗の勝劣は思い定め
ざりけるか、或は真言すぐれ、或は法華すぐれ、或は理同事勝等云
云、宣旨を申し下すには二宗の勝劣を論ぜん人は違勅の者といま

しめられたり、此れ等は皆自語相違といぬべし他宗の人はよも
もち用いじとみえて候、但二宗齊等とは先師・伝教大師の御義と宣旨に
引き載せられたり、抑も伝教大師いづれの書にかかれて候ぞ
や此の事よくよく尋ぬべし、慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事
を不審申すは親に値うての年あらずひ日天に値い奉りての目くらべ
にては候へども慈覚・智証の御かたふどをせさせ給はん人人は分明
なる証文をかまへさせ給うべし、詮ずるところは信をとらんがため
なり、玄奘三蔵は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし天竺にわたら
ざりし宝法師にせめられにき、法護三蔵は印度の法華経をば見た
れども囑累の先後をば漢土の人みねどもとい
ひしぞかし、設い慈覚・伝教大師に値い奉りて習い伝えたりとも
ちしよう・義真和尚に口決せりといふとも伝教・義真の正文に相違せば
あに不審を加えざらん、伝教大師の依憑集と申す文は大師第一の

秘書なり、彼の書の序に云く、「新来の真言家は則ち筆授の相承を泯
くとうの華嚴家は則ち影響の軌範を隠し、沈空の三論宗は彈訶の
屈恥を忘れて称心の酔を覆う、著有の法相は撲揚の帰依を非し青
竜の判経を撥う等、乃至謹んで依憑集の一巻を著わして

同我が後哲に贈る某の時興ること日本第五十二葉・弘仁の七・丙申の歳なり云云、次ぎ下の正宗に云く「天竺の名僧大唐天台の教迹最も邪正を簡ぶに堪えたりと聞いて渴仰して訪問す云云、次ぎ下に云く「豈中国に法を失つて之を四維に求むるに非ずや而かも此の方に識ること有る者少し魯人の如きのみ」等云云、此の書は法相・三論・華嚴・真言の四宗をせめて候文なり、天台・真言の二宗同一味ならばいかでかせめ候べき、而も不空三蔵等をば魯人のごとしなんどかかれて候、善無畏・金剛智・不空の真言宗いみじくばいかでか魯人と悪口あるべき、又天竺の真言が天台宗に同じきも又勝れたるならば天竺の名僧いかでか不空にあつらへ中国に正法なしとはいふべき、それはいかにもあれ慈覚・智証の二人は言は伝教大師の御弟子とはなのらせ給ども心は御弟子にあらず、其の故は此の書に云く「謹で依憑集一卷を著わし

て同我どうがの後哲ごうてつに贈るくわう」等云云、同我どうがの二字は真言宗しんこんしゅうは

てんたいしゅう

天台宗てんたいしゅうに劣るとならひてこそ同我どうがにてはあるべけれ我わがと申し下さる

せんじ

の宣旨せんじに云くいわ「専もっぱら先師せんしの義ぎに違へんい偏執へんしゅうの心を成す」等云云、又

いわ

云くいわ「凡おほそ厥師そのし資しの道みち一いつを闕かいても不可ふかなり」等云云、此この宣旨せんじの

ごとくならば慈覚じかく・智証ちしょうこそ専もっぱら先師せんしにそむく人ひとにては候まうへかうせ

め候まうもをそれにては候まうへども此これをせめずば大日經だいにちぎきょう・法華經ほけきょうの

しょうれつ

勝劣しょうれつ

やぶれなんと存じていのちをまとにかけてせめ候まうなり、此この二人ふたりの

ひとびと

人人ひとびとの弘法大師こうぼうだいしの邪義じゃぎをせめ候まうはざりけるは最もも道理どうりにて候まういけ

るなり、されば糧米ろうまいをつくし人をわづらはして漢土かんどへわたらせ給たまは

んよりは本師ほんし・伝教大師でんきょうだいしの御義おんぎを・よくよく・つくさせ給たまうべかりけ

るにや、されば叡山えいざんの仏法ぶつぼうは但ただ伝教大師でんきょうだいし・義真ぎしん和尚わじょう・円澄えんちよう大師だいし

の三代計ぼかりにてやありけん、天台座主てんたいざすすでに真言しんこんの座主ざすにうつりぬ

名と所領とは天台山其の主は眞言師なり、されば慈覺

大師・智証大師は已今当の經文をやぶらせ給う人なり、已今当の

經文をやぶらせ給うは・あに釈迦・多宝・十方の諸仏の怨敵にあら

ずや、弘法大師こそ第一の謗法の人とおもうに、これはそれにはに

るべくもなき僻事なり、其の故は水火天地なる事は僻事なれども

人用ゆる事なければ其の僻事成ずる事なし、弘法大師の御義はあ

まり

僻事ひがごとなれば弟子等でしも用もちゆる事じなし事相計じそうばかりは其その門家もんかなれども
其その教相きょうそうの法門ほうもんは弘法こうぼうの義ぎいみにくきゆへに善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくう
慈覚じかく・智証ちしょうの義ぎにてあるなり、慈覚じかく・智証ちしょうの義ぎこそ真言しんごんと天台てんだいとは
理り同おなじなりなんと申せば皆人みなさもやとをもう、かうをもうゆへに事勝じしよう
の印しんごんと真言しんごんとにつひて天台宗てんだいしゅうの人人ひとびと・画像えいざう・木像もくざうの開眼かいげんの仏事ぶつじを・ね
らはんがために日本にほん一同いどうに真言宗しんごんしゅうにおちて天台宗てんだいしゅうは一人もなきな
り、例せば法師ほうしと尼にと黒くろと青あおとは・まがひぬべけれ
ば眼まなこくらき人はあやまつぞかし、僧そうと男おとこと白しろと赤あかとは目めくらき人
も迷まよわず、いわうや眼まなこあきらかなる者ものをや、慈覚じかく・智証ちしょうの義ぎは
法師ほうしと尼にと黒くろと青あおとがごとくなるゆへに智人ちじんも迷まよい愚人ぐにんもあやま
り候まをて此こゝの四百余年よひにが間は叡山えいざん・園城おんじょう・東寺とうじ・奈良なら・五畿ごき・七道しちだう・
日本にほん一州いっしゅう皆みな謗法ぼうぼうの者ものとなりぬ。
抑おさも法華經ほけきょうの第五ごだいに「文殊師利もんじゆしり此こゝの法華經ほけきょうは諸仏しよぶつ如来にょらいの秘密ひみつの蔵

なり諸經の中に於て最も其の上在り云云、此の經文のごとくならば法華經は大日經等の衆經の頂上に住し給う正法なり、さるにては善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等は此の經文をばいかんが会通せさせ給うべき、法華經の第七に云く「能く是の經典を受持する

こと有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經文のごとくならば法華經の行者は川流江河の中の大海・衆山の中の須弥山・衆星の中の月天・衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王なり、伝教大師の秀句と申す書に云く「此の經も亦復是くの如し乃至諸の經法の中に最も為第一なり能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」已上經文なりと引き入れさせ給いて次下に云く「天台法華玄に云く」等云云、已上玄文とかかせ

給たまいて上かみの心こころを積しやくして云いわく「当まさに知るべし他宗たしゅう所依しよえの經きやうは未いまだ
もつともこれ だいいち
最も為なれ第一だいいちならず其その能よく經きやうを持もつ者ものも亦また未いまだ第一だいいちならず、
てんだいほつけしゅうしよじ ほけきよよう もつともこれ だいいち
天台てんたい法華宗ほっけしよじ所持ほけきよようの法華經ほっけきよようは最もつとも為なれ第一だいいちなる故ゆえに能よく法華ほっけを持もつ
者ものも亦また衆生しゆじやうの中なかの第一だいいちなり已すでに仏説ぶつせつに拠よる豈あに自歎じたんならん哉や」等云
つぎしも
云、次下つぎしもに讓あきらむる釈しやくに云いわく「委曲えひよくの依憑えひよつ具ぐさに別卷べつけんに有あるなり」等云
えびよう
云、依憑集えひようしゆに云いわく「今吾いまわが天台大師てんだいだいし法華經ほっけきよようを説とき法華經ほっけきよようを積しやく

すること群ぐんに特秀とくしゅうし唐とうに独歩あきらかす明みやうに知んぬ如來にょらいの使つかなり讚たたうる者は
 さいわい 福あんみょうを安明あんみょうに積しみ謗そしる者は罪つみを無間むげんに開ひらく等ら云い云い、法華ほけきょう經ぎょう・天台てんだい
 みょうりく 妙樂でんぎょう・傳教きょうしやくの經ぎょう釈しやくの心こころの如ごとくならば今いま・日本にほん国こくには法華ほけきょう經ぎょうの
 妙樂でんぎょう・傳教きょうしやくの經ぎょう釈しやくの心こころの如ごとくならば今いま・日本にほん国こくには法華ほけきょう經ぎょうの
 行者ぎょうじちは一人もなきぞかし、月がつし氏しには教主きょうしやく釈尊しやくそん・宝塔ほうとう品ほんにして一切いっさい
 の仏ぶつをあつめさせ給たまへて大地だいちの上に居ゐせしめ大日だいにち如來にょらい計けいり宝塔ほうとうの中ちゆう
 南なんの下座げざにすへ奉たてまつりて教主きょうしやく釈尊しやくそんは北きたの上座じやうざにつかせ給たまへ、此こゝの大日だいにち
 によらい 如來だいにちは大日だいにち經ぎょうの胎藏たいざう界がいの大日だいにち・金剛こんごう頂ちゆう經ぎょうの金剛こんごう界がいの大日だいにちの
 しやくん 主君しやくんなり、両部りやうぶの大日だいにち如來にょらいを郎らう從等じゆうとうと定めたる多宝たぼう仏ぶつの上座じやうざに
 きようしやくそん 教主きょうしやく釈尊しやくそん居ゐせさせ給たまへ此こゝれ即すなわち法華ほけきょう經ぎょうの行者ぎょうじちなり天竺てんじくかくのご
 とし、漢土かんとには陳帝ちんていの時とき・天台てんだい大師だいし・南北なんぼくにせめかちて現身げんしんに大師だいしと
 なる群ぐんに特秀とくしゅうし唐とうに独歩あきらかす」といふこれなり、日本にほん国こくには法華ほけきょう經ぎょうの
 だいしろうくしゅう 大師だいし六宗りくしゅうにせめかちて日本にほんの始だいいち第一だいいちの根本こんぽん大師だいしとなり給たまへ月氏がつし・
 かんど 漢土にほん・日本にほんに但ただ三人さんにん計けいりこそ於お一切いっさい衆生しゆじやう中ちゆう亦また為なる第一だいいちにては候まちへさ

れば秀句しゅうくに云いわく「浅あきは易やすく深ふかきは難がたしとは釈迦しやくかの所判しよはんなり

浅あきを去さつて深ふかきに就つくは丈夫じゆうぶの心こころなり天台大師てんだいだいしは釈迦しやくかに信順しんじゆんし

て法華宗ほつげしゆうを助たすけて震旦しんたんに敷揚ふよつし叡山えいざんの一家いっけは天台てんだいに相承そうじゆうして

法華宗ほつげしゆうを助たすけて日本にほんに弘通くつうす等云云ぶつめつ、仏滅後ぶつめつ・一千八百余年いっせんぱひやくねんが間

に法華經ほけきよつの行者ぎきうじや漢土かんとに一人ひとり・日本にほんに一人ひとり已上いじやう二人ふたり釈尊しやくそんを加たへ奉たてまつり

て已上いじやう三人さんにんなり。

外典げてんに云いわく聖人しやうにんは一千年いっせんねんに一ひとたび出いで賢人けんじんは五百年ごひゃくねんに一ひとたび出いづ、

黄河くわいは渭いながれをわけて五百年ごひゃくねんには半ななかば・河かすみ千年せんねんには共ともに清

むと申もうすは一定じやうていにて候まをけり、然しかるに日本にほん国こくは叡山えいざん計はかりに伝教大師でんきやうだいいし

の御時おんとき・法華經ほけきよつの行者ぎきうじやましましけり、義真ぎしん・円澄えんちやうは第一だいいち第二だいいちの座主ざす

なり第一だいいちの義真計ぎしんはかり伝教大師でんきやうだいいしにたり、第二だいいちの円澄えんちやうは半ななかばは伝教

の御弟子おんでし・半ななかばは弘法こうぼうの弟子でしなり、第三だいいちの慈覚大師じかくだいいしは始めは伝教

大師だいいしの御弟子おんでしにたり、御年おんねん四十しじゆにて漢土かんとにわたりてより名なは

伝でん教ぎょうの御おん弟でし其そのの跡あとをばつがせ給たまえども法ほう門もんは全ぜんく御おん弟でし子しにはあらず、而しかれども円えん頓どんの戒げ計けいりは又また御おん弟でし子しにたり蝙蝠へんぷく鳥とりのごとし鳥とりにもあらず・ねずみにもあらず梟きょう鳥ちゆう禽きん・破は鏡けい獸じゆうのごとし、法ほ華け經きょうの父ちちを食くらい持じ者しゃの母ははをかめるなり日ひをいとゆめにみしこれなり、されば死し去きょの後のちは墓はかなくてやみぬ、智ち証しやうの門もん家か・園おん城じやう寺じと慈じ覺かくの

門家・叡山と修羅と悪竜と合戦ひまなし園城寺をやき叡山をやく、
智証大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ慈覚大師の本尊・大講堂もやけ
ぬ現身に無間地獄をかんぜり、但中堂計りのこれり、弘法大師も
又跡なし弘法大師の云く東大寺の受戒せざらん者をば東寺の長者
とすべからず等御いましめの状あり、しかれども寛平法王は仁和
寺を建立して東寺の法師をうつして我寺には叡山の円頓戒を持ざ
らん者をば住せしむべからずと宣旨分明なり、され
ば今の東寺の法師は鑒真が弟子にもあらず弘法の弟子にもあらず
戒は伝教の御弟子なり又伝教の御弟子にもあらず伝教の法華經
を破失す、去る承和二年三月二十一日に死去ありしかば公家より
遺体をばほうぶらせ給う、其の後誑惑の弟子等集りて御入定と
云云、或はかみをそりてまいらするぞといひ、或は三鉢をかんどの
りなげた

りといふ。或は日輪夜中に出でたりといふ。或は現身に大日如来となりたりといひ。或は伝教大師に十八道をしへまいらせ給うといふて、師の徳をあげて智慧にかへ我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり、又高野山に本寺伝法院といひし二の寺あり本寺は弘法のたてたる大塔・大日如来なり、伝法院と申すは正覚房の立てし金剛界の大日なり、此の本末の二寺昼夜に合戦あり例せば叡山・園城のごとし、誑惑のつもりて日本に二の禍の出現せるか、糞を集めて梅檀となせども焼く時は但糞の香なり大妄語を集めて仏とがうすとも但無間・大城なり、尼が塔は数年が間利生広大なりしかども馬鳴菩薩の礼をうけて忽にくづれぬ、鬼弁婆羅門がとばりは多年・人をたばらかせしかども阿縛沙菩薩にせめられてやぶれぬ、留外道は石となつて八百年・陳那菩薩にせめられて水となりぬ、道士は漢土をたばらかすこと数百年・摩騰

竺蘭にせめられて仙經もやけぬ、趙高が国をとり

し王莽が位をうばいしがごとく法華經の位をとて大日經の所領と

せり、法王すでに国に失せぬ人王あに安穩ならんや、日本国は慈覺

・智証・弘法の流なり一人として謗法ならざる人はなし。

但し事の心を案ずるに大莊嚴仏の末一切明王仏の末法のごと

し、威音王仏の末法には改悔ありしすら猶

せんごう 千劫・阿鼻地獄に墮つ、いかにいわうや日本国の真言師・禅宗・念佛
いちぶん 者等は一分の廻心なし如是展転至無數劫 疑なきものか、かかる
ほうほう 謗法の国なれば天もすてぬ天すつればふるき守護の善神も・ほこら
じやうく をやひて寂光の都へかへり給いぬ、但日蓮計り留り居て告げ示せば
こくしゆ 国主これをあだみ数百人の民に・或は罵詈・或は悪口・或は杖木・或
とうけん 是は刀剣・或は宅宅ごととにせき・或は家家ごととにをう、それになは
ねば我と手をくだして一度まで流罪あり、去ぬる文永八年
きんじゆ 九月の十二日に頸を切らんとす、最勝王経に云く「悪人に
ぜんにん 善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等
だいしつきよう 云云、大集経に云く「若しは復諸の刹利国王有つて諸の非法を作し
せそん て世尊の声聞の弟子を悩乱し、若しは以て毀罵し刀杖をもつて
ちようしやく 打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、若しは他の給施せんに留難を
な 作さば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん及び自ら

の国土も亦兵起り病疫・飢饉し非時の風雨・鬪諍言訟せしめん、又
其の王をして久しからずして復当に己が国を亡失せしめん、等云
云、此等の経文のごときは日蓮この国になくば仏は大妄語の人・
阿鼻地獄はいかで脱給うべき、去ぬる文永八年九月十二日に平の
左衛門並び

に数百人に向て云く日蓮は日本国のはしらなり日蓮を失うほどな
らば日本国のはしらをたをすになりぬ等云云、此の経文に智人を
国主等若は悪僧等がざんげんにより若は諸人の悪口によつて失にあ
つるならば、にはかにいくさをこり又大風吹き他国よりせめらるべ
し等云云、去ぬる文永九年二月のどしいくさ同じき十一年の四月の
大風・同じき十月に大蒙古の来りしは偏に日蓮がゆへにあらざや、い
わうや前よりこれをかながへたり誰の人か
疑うべき、弘法・慈覚・智証の国に年久し其の上禅宗と

念ねんぶつしゅう仏宗とのわざわい・あいをこりて逆風に大波をこり大地震だいじしんのかさ
なれるがごとし、さればやふやく国をとろう太政入道たいていりゅうだうが国をおさ
へ承久じゅうきゅうに王位つきはてて世・東にうつりしかども但国中たにくにちゆうのみだれに
て他国たこくのせめはなかりき、彼は謗法ぼうほうの者はあれども又天台てんだいの正法しやうほう
も・すこし有り、其その上ささへ顕あらわす智人ちじんなし・かるがゆへになのめ
なりき、譬たとへば師子ししのねぶれるは手をつけざれば・ほへず迅はやき

流は櫓をささへざれば波たかからず盗人はとめざればいからず火
は薪を加えざればさかならず、謗法はあれどもあらわす人なけ
れば王法もしばらくはたえず国もをだやかなるにいたり、例せば
日本国に仏法わたりはじめて候いしに始はなに事もなかりしかども
守屋・仏をやき僧をいましめ堂塔をやきしかば天より火の雨ふり国
にはうさうをこり兵乱つづきしがごとし、此れはそれにはにるべく
もなし、謗法の人人も国に充満せり、日蓮
が大義も強くせめかかる修羅と帝釈と仏と魔王との合戦にもをと
るべからず、金光明経に云く「時に鄰国の怨敵是くの如き念を
興さん当に四兵を具して彼の国土を壊るべし」等云云、又云く「時に
王見已つて即四兵を厳いて彼の国に発向し討罰を為んと欲す我等
爾の時に當に眷属無量無辺の薬叉諸神と各形を隠して為に護助を
作し

彼の怨敵おんてきをして自然じねんに降伏こうふくせしむべし等云云、最勝王經の文又か
くのごとし、大集經云云・仁王經云云、此等これらの經文のごときんば
正法しょうぼうを行なざるものを国主こくしゆあだみ邪法じゃぼうを行なざる者のかたうどせば
大梵天王だいぼんてんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天等してん・隣国りんこくの賢王けんおうの身に入りかわりて其そ
国をせむべしとみゆ、例せば訖利多王きりたを雪山せつせん山下王のせめ大族王だいぞくおうを幻
日王の失うしない
しがごとし、訖利多王きりたと大族王だいぞくおうとは月氏がっしの仏法ぶつぼうを失うしないし王ぞかし、
漢土かんとにも仏法ぶつぼうをほろぼしし王みな賢王けんおうに・せめられぬ、これは彼かしこ
はにるべくもなし仏法ぶつぼうのかたうどなるようにて仏法ぶつぼうを失うしななう法師ほふし
を扶たすくと見えて正法しょうぼうの行者ぎやうじやを失うしなうゆへに愚者ぐしゃはすべてしらず智者ちしや
なんども常ちじんの智人ちじんはしりがたし、天も下劣げれつの天人てんにんは知らずもやあ
るらん、されば漢土かんと・月氏がっしのいにしへのみだれよりも大きなるべし。
法滅尽經ほうめつじんぎやうに云いわく「吾般泥わつぱいおんの後ご・五逆濁世ごぎやくじよくせに魔道興盛まどうきやうせいし魔沙門しゃもん

と作なつて吾わが道みちを壊えらんせん、乃至ないし悪人あくにん転多うたく海中かいちゆうの沙いさの如ごとく
善者ぜんしゃ甚はなはだだ少せうして若もしは一若もしは二に云いふ、涅槃經ねはんぎように云いく「是かくの
如ごとき等の涅槃經ねはんぎよう典てんを信しんずるものは爪上そうじゆうの土つちの如ごとく乃至ないし是この經きんを信
ぜざるものは十方界じゆつぽうかいの所有しゆうゆうの地土ちどの如ごとしに等とう云いふ、此この經文きんぶんは時
に当たうりて貴きとく予よが肝かんに染そみぬ、当世とうせ日本国にほんこくには我われも法華經ほけきんを信
じたり信しんじたり、諸人しよじんの語ごのこときんば一人ひとりも謗法ぼうぼうの者ものなし、此

の經文きやうもんには末法まっぽうに謗法ぼうほうの者もの・十方じゅうほうの地土ちど・正法しょうぼうの者もの爪上そつじやうの土等つと云い、經文きやうもんと世間せけんとは水火すいかなり、世間せけんの人ひと云いく日本にほん国こくには日蓮にちれん一人ひとり計ばかり謗法ぼうほうの者等ものら云云いふいふ、又また經文きやうもんには大地だいちより多おほからんと云云いふいふ、法滅ほうめつ盡じん經きやうには善者ぜんしや一人ひとり、涅槃ねはん經きやうには信者しんじや爪上そつじやう土等つと云云いふいふ、經文きやうもんのごとくならば日本にほん国こくは但ただ日蓮にちれん一人ひとりこそ爪上そつじやう土等つと二人ふたりにては候まうへされば心こころあらん人人ひとびとは經文きやうもんをか用もちゆべき世間せけんをか用もちゆべき。問いて云いく涅槃ねはん經きやうの文ぶんには涅槃ねはん經きやうの行者ぎやうじやは爪上そつじやうの土等つと云云いふいふ、汝なんじが義ぎには法華ほけきやう經きやう等ら云云いふいふ如何いかん、答こたえて云いく涅槃ねはん經きやうに云いく「法華ほけきやうの中なかの如ごとし」等ら云云いふいふ、妙樂みょうらく大師だいし云いく「大經だいきやう自らみづか法華ほけきやうを指さして極ごくと為なす」等ら云云いふいふ、大經だいきやうと申まうすは涅槃ねはん經きやうなり涅槃ねはん經きやうには法華ほけきやう經きやうを極ごくと指さして候まうなり、而しかるを涅槃ねはん宗しゆの人ひとの涅槃ねはん經きやうを法華ほけきやう經きやうに勝まさると申まうせしは主しよをしよ従じゆといいふ

下郎げらうを上郎じやうらうといいふし人ひとなり、涅槃ねはん經きやうをよむと申まうすは法華ほけきやう經きやうをよむ

を申すなり、譬へば賢人は国主を重んずる者をば我をさぐれども
悦ぶなり、涅槃経は法華経を下て我をほむる人をばあながちに敵
とにくませ給う、此の例をもつて知るべし華嚴経・觀經・大日経等
をよむ人も法華経を劣とよむは彼れ彼れの経經の心にはそむくべ
し、

此れをもつて知るべし法華経をよむ人の此の経をば信ずるような
れども諸経にても得道なるとおもうは此の経をよまぬ人なり、例
せば嘉祥大師は法華玄と申す文十卷造りて法華経をほめしかども
妙樂かれをせめて云く「毀其の中に在り何んぞ弘讚と成さん」等云
云、法華経をやぶる人なり・されば嘉祥は落ちて天台につかひて
法華経

をよまず我れ経をよむならば悪道まぬかれがたしとて七年まで身
を橋とし給いき、慈恩大師は玄賛と申して法華経をほむる文十卷あ

りでんぎょうだいし伝教大師せめて云く「法華經をほ讚むると雖もいえど還てかえり法華の心を死ころす」等云云、此等をもつておもつに法華經をよみ讚歎する人人の中ひとびとに無間地獄は多く有るなり、嘉祥・慈恩すでに一乘誹謗の人ぞかいちじょうひぼうし、

弘法・慈覚・智証あに法華經蔑如の人にあらずや、嘉祥大師のごとかじょうだいしく講を廃し衆を散じて身を橋となせしも猶な已前の法華經誹謗の罪つみやきへざるらん、例せば不輕輕毀の衆は不輕菩薩に信伏随従せしふきようほさつかども重罪こゝろいまだのこり

て千劫阿鼻に墮ちぬ、されば弘法・慈覚・智証等は設い・ひるがへす
心ありとも尚法華經をよむならば重罪きへがたし・いわうや・ひる
がへる心なし、又法華經を失い真言教を昼夜に行い朝暮に伝法せ
しをや、世親菩薩・馬鳴菩薩は小をもつて大を破せる罪をば舌を切
らんとこそせさせ給いしか、世親菩薩は仏説なれども阿含經をば・
たわふれにも舌の上にかじとちかひ、馬鳴菩薩は懺悔のために起
信論をつくりて小乘をやぶり給き、嘉祥大師は天台大師
を請じ奉りて百余人の智者の前にして五体を地になげ遍身にあせ
をながし紅のなんだをながして今よりは弟子を見じ法華經をか
うぜじ弟子の面をまほり法華經をよみたてまつれば我力の此の經
を知るにいたりとて・天台よりも高僧老僧にておはせしがわざと人
のみるときをひまいらせて河をこへかうざにちかづきて・せなか
にのせまいらせて高座にのぼせたてまつり結句御臨終の後には隋の

皇帝にまいらせて小児が母にをくれたるがごとくに足ずりをして、
なき給いしなり、嘉祥大師の法華玄を見るにいたう法華経を謗じた
る疏にはあらず但法華経と諸大乘経とは門は浅深あれども心は
一とがきてこそ候へ此れが謗法の根本にて候か。

華嚴の澄観も真言の善無畏も大日経と法華経とは理は一とこそ

かかれて候へ嘉祥大師とがあらば善無畏三蔵も脱がたしされば

善無畏三蔵は中天の国主なり位をすてて他国にいたり殊勝・招提

の二人にあひて法華経をうけ百千の石の塔を立てしかば法華経の

行者とこそみへしか、しかれども大日経を習いしよりこのかた

法華経を

大日経に劣るとやおもひけん、始はいたう其の義もなかりけるが

漢土にわたりて玄宗皇帝の師となりぬ、天台宗をそねみ思う心つ

き給いけるかのゆへに、忽に頓死して一人の獄卒に鉄の縄・七すぢ

えんまおうきゆう

つけられて閻魔王宮にいたりぬ、命いまだ・つきずと・いゐてかへされ

ほけきよう

しに法華経を謗ずるとやおもひけん真言の観念・印・真言等をば・な

ぼう

しんこん

かんねん

しんこん

げ

ほけきよう

こんしさんがい

とな

すてて法華経の今此三界の文を唱えて縄も切れかへされ給いぬ、又

あめ

雨のいのりをおほせつけられたりしに忽に雨は下たりしかども大風

たちまちあめ

ふり

たいふう

吹きて国をやぶる、結句死し給いてありしには弟子等集りて臨終い

けっく

たまい

でし

りんじゆう

みじきやうを・

ほめしかども無間・大城に墮ちనికి、問うて云く何をもつてかこれをしる、答えて云く彼の伝を見るに云く「今畏の遺形を觀るに漸く

加縮小し黒皮隱隱として骨其露なり」等云云、彼の弟子等は死

後に地獄の相の顕われたるをしらずして徳をあぐなどをもへども、かきあらはせる筆は畏が失をかけり、死してありければ身やふやく

つづまり・ちひさく皮はくろし骨あらはなり等云云、人死して後・色

の黒きは地獄の業と定むる事は仏陀の金言ぞかし、善無畏三蔵の地獄の業はなに事ぞ幼少にして位をすてぬ第一の道心なり、月氏

五十余箇国を修行せり慈悲の余りに漢土にわたれり、天竺・震旦・日本一閻浮提の内に真言を伝へ鈴をふる此の人の徳にあらずや、い

かにして地獄に墮ちけると後生をおもはん人人は御尋ねあるべし。

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり、金剛頂經を漢土に

わたす其の徳善無畏のごとし、又互いに師となれり、而るに金剛智
さんぞうちよくせん
三蔵勅宣たまによりて雨の祈りありしかば七日が中に雨下る天子大に
よろこ
悦ばせ給うほどに忽に大風吹き来る、王臣等けうさめ給いき使をつ
けて追はせ給たまいしかども、とかうのべて留りしなり、結句は姫宮の御
しきよ
死去

ありしに、いのりをなすべしとて御身の代に殿上の二女七歳になり
しを薪たきぎにつみこめて焼き殺せし事こそ無慚にはおぼゆれ、而れども
ひめみや
姫宮もいきかへり給たまはず不空三蔵は金剛智と月支より御ともせり、
これら
此等の事を不審とやおもひけん畏と智と入滅の後、月氏に還りて竜
智あに値たてまつし奉り真言を習ならいなをし天台宗に帰伏してありしが心計り
は帰えれども身はかへる事なし、雨の御いのりうけ給たまわりたりしが
三日と申もうすに雨下る、天子悦ばせ給たまいて我れと御布施ふせひかせ給たまう、
しゅう
須臾ありしかば大風落ち下りて内裏をも吹きやぶり雲閣月卿の宿

所一所も・あるべし

ともみへざりしかば天子大に驚きて宣旨なりて風をとどめよと

仰せ下さる且らくありては又吹き又吹きせしほどに数日が間やむ

ことなし、結句は使をつけて追うてこそ風もやみてありしか、此の三

人の悪風は漢土・日本の一切の真言師の大風なり。

さにてあるやらん去ぬる文永十一年四月十二日の大風は阿弥陀堂の加賀法印・東寺第一の智者の雨のいのりに吹きたりし逆風なり、善無畏・金剛智・不空の悪法をすこしもたがへず伝えたりけるか心にくし・心にくし。

弘法大師は去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに先には守敏・

祈雨して七日が内に雨を下す但京中にふりて田舎にそそがず、次に

弘法承取て一七日に雨気なし二七日に雲なし三七日と申せしに

天子より和氣の真綱を使者として御幣を神泉苑にまいらせたりし

かば天雨下事三日、此れをば弘法大師並に弟子等・此の雨をうばひ

とり我が

雨として今に四百余年・弘法の雨という、慈覚大師の夢に日輪をい

しと弘法大師の大妄語に云く弘仁九年の春・大疫をいのりしかば夜

中に大日輪出現せりと云云、成劫より已来・住劫の第九の滅・已上

二十九劫が間に日輪夜中に

出でしという事なし、慈覚大師は夢に日輪をいるという内典五千・

七千・外典三千余巻に日輪をいるとゆめにみるは吉夢という事有り

やいなや、修羅は帝釈をあだみて日天をいたてまつる其の矢かへり

て我が眼にたつ、殷の紂王は日天を的にいて身を亡す、日本の神武

天皇の御時・度美長と五瀬命と合戦ありしに命の手に矢たつ、命

の云く我はこれ日天の子孫なり日に向い奉りて弓をひくゆへに日天

のせめをかをほれりと云云、阿闍世王は邪見を

ひるがえして仏に歸しまいらせて内裏に返りてぎよしんなりしが、

おどろいて諸臣に向て云く日輪・天より地に落つとゆめにみる諸臣

の云く仏の御入滅か云云、須跋陀羅がゆめ又かくのごとし、我国は

殊にいむべきゆめな

り神をば天照という国をば日本という、又教主釈尊をば日種と

申す摩耶夫人日をはらむとゆめにみて・まうけ給える太子なり、
慈覚大師は大日如来を叡山に立て釈迦仏をすて真言の三部経をあ
がめて法華経の三部の敵となせしゆへに此の夢出現せり。

例せば漢土の善導が始は密州の明勝といふし者に値うて法華経
をよみたりしが後には道綽に値うて法華経をすて觀經に依りて疏
をつくり法華経をば千中無一・念仏をば十即十生・百即百生と
定めて此の義を成ぜんがために

あみだぶつ おんまえ
阿弥陀仏の御前にして祈誓をなす、仏意に叶うやいなや毎夜夢の中

に常に一りの僧有りて来て指授すと云云、乃至一經法の如くせ

よ乃至觀念法門經等云云、法華經には「若し法を聞く者有れば一

として成仏せざる無し」と善導は「千の中に一も無し」等云云、

法華經と善導とは水火なり善導は觀經をば十即十生・百即

百生・無量義經に云く「觀經は未だ眞實を顯さず」等云云、

無量義經と楊柳房とは天地なり此れを阿弥陀仏の僧と成りて来つ

て汝が疏は眞なりと証し給わんは・あに眞事ならんや、抑阿弥陀

は法華經の座に來りて舌をば出だし給はざりけるか、觀音・勢至は

法華經の座にはなかりけるか、此れをもつて・をもへ慈覺大師の御

夢は・わざわひなり。

問うて云く弘法大師の心經の秘鍵に云く「時に弘仁九年の春

天下大疫す、爰に皇帝自ら黄金を筆端に染め紺紙を爪掌に握りて

般はん若にや心しん經きょう 一いつ卷まきを書し写やし奉たてり給たまう予よ、講こう読どくの撰えんに範のつとりて經きょう旨しの宗しゆを綴つづる未いまだ結くわい願がんの詞ことばを吐つかざるに蘇そ生せいの族やから途たにイいずむ、夜や変へんじて而しかも日にっ光くわく赫かくたり是これ愚ぐ身しんの戒かい徳とくに非あらず金きん輪りん御ご信しん力りきの所しよ為いなり、但ただし神しん舎しゃに詣もつでん輩やからは此この秘ひ鍵けんを誦じゆし奉たてれ、昔むかし予よ鷲じゆ峰ぶつ説せつ法ぽうの筵むしろに陪まのして親あり其その深ふか文ぶんを聞ききたてまつる豈あに其その義ぎに達たつせざら

んや」等と云いふ、又また孔くわん雀せき經きょうの音おん義ぎに云いふ「弘こう法ぽう大だい師し歸き朝ちゆうの後ご真しん言げん宗しゆを立たてんと欲しよし諸しよ宗しゆうを朝てい廷ていに群ぐん集じつす即そく身しん成じやう仏ぶつの義ぎを疑うたがひ、大だい師し智ち拳けんの印いんを結むすびて南なん方ぽうに向むかうに面めん門もん俄がに開ひらいて金きん色しきの毘び盧る遮しゃ那なと成なり即すな便わち本ほん体たいに還げん歸きす、入い我が・

我わが入いの事こと・即そく身しん頓とん証しやうの疑うたがひ・此この日にっ釈しやく然ぜんたり、然しかるに真しん言げん瑜ゆ伽がの宗しゆ・秘ひ密みつ曼まん荼た羅らの道だう・彼かの時ときより建こん立りしぬ、又また云いふ「此この時ときに諸しよ宗しゆうの学がく徒た大だい師しに歸きして始はめて真しん言げんを得えて請しやう益やくし習しゆ学がくす三さん論ろんの道だう昌しやう・法ほつ相そうの源げん仁じん・華け嚴えんの道だう雄ゆう・天てん台だいの円えん澄ちやう等とう皆みな其その類たぐひなり、弘こう法ぽう大だい師し

の伝に云く「帰朝泛舟の日、発願して云く我が所学の教法若し
感応の地有らば

此三鈷其の処に到るべし仍て日本の方に向て三鈷を抛げ上ぐ遙か
に飛んで雲に入る十月に帰朝す云云、又云く「高野山の下に入定
の所を占む乃至彼の海上の三鈷今新たに此に在り」等云云、此の
大師の徳無量なり其の両三を示すかくのごとくの大徳あり。いかな
が此の人を信ぜずしてかへりて阿鼻地獄に墮といはんや、答えて
云く

予も仰いで信じ奉る事かくのごとし但古の人人も不可思議の徳ありしかども仏法の邪正は其にはよらず、外道が或は恒河を耳に十二年留め、或は大海をすひほし、或は日月を手ににぎり、或は釈子を牛羊となしなんどせしかども、いよいよ大慢を、をこして生死の業とこそなりしか、此れをば天台云く「名利を邀め見愛を増す」とこそ釈せられて候へ、光宅が忽に雨を下し須臾に花をさかせしをも妙樂は「感応此の如くなれども猶理に称わず」とこそかかれて候へ、されば天台大師の法華經をよみて「須臾に甘雨をふら下せてんぎようだいし、かんろ教大師の三日が内に甘露の雨をあめふらしておはせしも其をもつてぶつ仏意に叶うとはをほせられず、弘法大師いかなる徳ましますとも法華經をけろん戯論の法と定めしゃかぶつ釈迦仏をむみよう無明の辺域とかかせ給へる御ふではちえ智慧かしこからん人は用ゆべからず、いかにいわうや上にあげられて候徳どもはふしん不審ある事なり、「こうにん弘仁九年の春天下大疫」

等云云、春は九十日・何の月・何の日ぞ是一、又弘仁

九年には大疫ありけるか是二、又「夜変じて日光赫赫たり」と云云、

此の事第一の大事なり弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり左史右史の

記に載せたりや是三、設い載せたりとも信じがたき事なり成劫二

十劫・住劫九劫・已上二十九劫が間にいまだ無き天変なり、夜中に

日輪の出現せる事如何又如来一代の聖教にもみへず未来に夜中

に日輪出ずべしとは三皇・五帝の三墳・五典にも載せず仏經のごと

きんば壞劫にこそ二の日・三の日乃至・七の日は出ずべしとは見えた

れどもかれは昼のことぞかし夜日出現せば東西北の三方は如何、

設い内外の典に記せ

ずとも現に弘仁九年の春何れの月何れの日何れの夜の何れの時に

日出ずるといふ公家・諸家・叡山等の日記あるならばすこし信ずる

へんもや、次ぎ下に「昔予鷲峰説法の筵に陪して親り其の深文を聞

く「等云云、此の筆を人に信ぜさせしめんがためにかまへ出だす大
もつこ
妄語か、されば靈山りょうぜんにして法華ほっけは戯論けろん・大日經だいにちきようは眞実しんじつと仏の
と
説き給けるを阿難あなん・文殊もんじゆがあやまりて妙法華經みょうほけきようをば眞実しんじつとかけるかい
かん、いつにかいななき姪女はかい・破戒はかいの法師等ほっしが歌をよみて雨ふらす雨あめを三
七日ふらまで下さざりし人はかかる徳あるべしや是四くじやく、孔雀經くじやくの音義に
いわ
云く「だいしちけん
大師智拳の印を結ん

で南方なんほうに向うに面門めんもん俄かに開いて金色きんいろの毘盧遮那びるしゃなと成るなり等云云、
此れ又何れいすれの王何れいすれの年時ねんじぞ漢土かんとには建元けんげんを初とし日本にほんには大宝たいほう
を初として緇素しその日記にっき大事だいじには必ず年号ねんごうのあるが、これほどの大事だいじ
にいかでか王も臣も年号も日時にちじもなきや、又次ぎに云く「三論さんろんの
道昌どうしょう・法相ほつそうの源仁げんじん・華嚴けごんの道雄どうゆう・天台てんだいの円澄えんちよう等云云、抑も円澄えんちよう
は寂光じやくこう大師だいし・天台第二てんだいの座主ざすなり、其の時何ぞ第一だいいちの座主ざす・義真ぎしん
根本こんぽんの伝教でんぎよう大師だいしをば召さざりけるや、円澄えんちようは天台第二てんだいの座主ざす
伝教でんぎよう大師だいしの御弟子おんでしなれども又弘法こうぼう大師だいしの弟子でしなり、弟子でしを召さん
よりは三論さんろん・法相ほつそう・華嚴けごんよりは天台てんだいの伝教でんぎよう・義真ぎしんの二人ふたりを召すべか
りけるか、而も此しかの日記にっきに云く「真言しんごん瑜伽ゆいがの宗しゆ・秘密ひみつ曼荼羅まんたら彼の時
よりして建立こんりゆうす等

云云、此の筆は伝教でんぎよう・義真ぎしんの御存生おんしんじようかとみゆ、弘法こうぼうは平城へいぜいてんのう天皇てんのう・大
同二年どうにねんより弘仁こうにん十三年じゅうさんねんまでは盛さかんに真言しんごんをひろめし人なり、其の時そのときは

此の二人現げんにおはします又義真ぎしんは天長十年までおはせしかば
其そのときの時ときまで弘法こうぼうの真言しんごんは、ひろまらざりけるか。かたがた不審ふしんあり、
孔雀くじやうく経きやうの疏じよは弘法こうぼうの弟子でし・真濟しんざいが自記じきなり信しんじがたし、又邪見じゃけん者しやけんが
公家くげ・諸家しよ・円澄えんちやうの記きをひかるべきか、又道昌だうしやう・源仁げんじん・道雄だうゆうの記きを
尋たずぬべし、「面門めんもん俄にわかに開ひらいて金色きんしきの毘盧遮那びるしやなと成なる」等云云、面門めんもん
とは口くちなり口くちの開ひらけたりけるか眉間みけん開ひらくとかかんとしけるが、りて
面門めんもんとかけるか、ぼう書しよをつく
るゆへにかかるあやまりあるか、「大師だいし智拳ちけんの印いんを結むすんで南方なんぼうに向
うに面門めんもん俄にわかに開ひらいて金色きんしきの毘盧遮那びるしやなと成なる」等云云、涅槃ねはん経きやうの五
に云いく「迦葉かじやう・仏ぶつに白まして言いさく世尊せそん・我わが今いま是この四種ししゆの人ひとに依よらず何
を以もつ故ゆゑに瞿師羅くしら経きやうの中ちゆうの如ごとき仏ぶつ・瞿師羅くしらが為ために説ときたまわく
若もし天魔てんま梵ぼん破壊はえせんと欲ほするが為ために變たじて仏ぶつの像なと為なり三十二相さんじふにさう・
八十種しじゆしゆ好こうを具ぐ足そくし莊嚴そうごんし円光えんまん一尋いつしゆん面部えんまん円満えんまんなること猶なほ月の盛明せいめいな

るが如く眉間の毫相白きこと珂雪に踰え乃至左の脇

より水を出し右の脇より火を出す等云云、又六の卷に云く「仏

迦葉に告げたまわく我般涅槃して乃至後是の魔波旬漸く当に我が

正法を沮壞す乃至化して阿羅漢の身及仏の色身と作り魔王此の

有漏の形を以て無漏の身と作り我が正法を壞らん等云云、弘法

大師は法華經を華嚴經・大日經に對して戲論等云云、而も仏身を

現ず此れ涅槃

經には魔有漏の形をもつて仏となつて我が正法をやぶらんと記し
給う、涅槃經の正法は法華經なり故に經の次ぎ下の文に云く「久く
已に成仏す、又云く「法華の中の如し」等云云、釈迦・多宝・十方
の諸仏は一切經に對して「法華經は眞実大日經等の一切經は不
眞実」等云云、弘法大師は仏身を現じて華嚴經・大日經に對して
「法華經

は戲論」等云云、仏説まことならば弘法は天魔にあらずや、又三鈷
の事殊に不審なり漢土の人の日本に來りてほりいだすとも信じがた
し、已前に人をやつかわしてうずみけん、いわうや弘法は日本の
人・かかる誑乱其の数多し此等をもつて仏意に叶う人の証拠とはし
りがたし。

されば此の眞言・禪宗・念仏等やうやくかさなり來る程に人王八
十二代・尊成・隱岐の法皇・權の太夫殿を失わんと年ごろはげませ

給たまいけるゆへに大王だいおうたる国主こくしゅなれば・なにとなくとも師子しし王の兔うを

伏たするがごとく、鷹たかの雉きじを取るやうにこそあるべかりし上・叡山えいざん・

東寺とうじ・園城おんじょう・奈良ななだいじ・七大寺てんしやうだいじん・天照太神かも・加茂かすが・春日等あに数年が間ある・或

は調伏じょうぶく・或あるは神かみに申もうさせ給たまいしに二日三日だにもささへかねて佐渡さど

国・阿波国あき・隠岐国等うせにながし失つて終つひに

かくれさせ給たまいぬ、調伏じょうぶくの上首御室じようしゆおむろは但東寺とうじをかへらるるのみな

らず眼まなこのごとくあひせさせ給たまいし第一だいいちの天童てんどう・勢多伽せいたかが頸切けいぎられ

たりしかば調伏じょうぶくのしるし還著げんちやく於本人おほんにんのゆへとこそ見へて候へこれは

・わづかの事なり此の後定んで日本国にほんこくの諸臣しよ万民ばんみん一人もなく乾草かれくさを

積みて火を放つがごとく大山のくづれて谷をうむるがごとく我が国たこく

・他国たこくにせめらるる事出来すべし、此の事日本国にほんこくの中に但日蓮にちれん一

人計ばかりしれり、いゝいだすならば殷いんのちゆうの紂王の

比干ひかんが胸をさきしがごとく夏かのけつの桀王の竜蓬りゆうほうが頸を切りしがごとく

檀弥羅王の師子尊者が頸を刎ねしがごとく竺の道生が流されしが
ごとく法道三蔵のかなやきをやかれしがごとくならんずらんとは
かねて知りしかども法華経には「我身命を愛せず、但無上道を惜
しむ」とかれ涅槃経には「寧身命を喪うとも教を匿さざれ」とい
さめ給えり、今度命をおしむならばいつの世にか仏になるべき、又
何なる世にか父母・師匠をもすくひ奉るべきと。

ひとへにをもひ切りて申し始めしかば案にたがはず。或は所をおひ

或はのり。或はうたれ。或は疵をかうふるほどに去ぬる弘長元年

辛酉五月十二日に御勘気をかうふりて伊豆の国・伊東にながされ

ぬ、又同じき弘長三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。

その後 弥菩提心強盛にして申せばいよいよ大難かさなる事

大風に大波の起るがごとし、昔の不輕菩薩の杖木のせめも我身につ

みしられたり覺徳比丘が歡喜仏の末の大難も此れには及ばじとを

ぼゆ、日本六十六箇国・嶋二の中に一日片時も何れの所にすむべき

やうもなし、古は二百五十戒を持ちて忍辱なる事。羅云のごとくな

る持戒の聖人も富樓那のごとくなる智者も日蓮に値いぬれば悪口

をはく正直にして魏徵・忠仁公のごとくなる賢者等も日蓮を見て

は理をまげて非とをこなう、いわうや世間の常の人人は犬のさるを

みたるがごとく獵師が鹿を。

こめたるににたり、日本国の中に一人として故こそあるらめという人なし道理なり、人ごとに念仏を申す人に向うごとに念仏は無間に墮つるといふゆへに、人ごとに真言を尊む真言は国をほろぼす悪法といふ、国主は禅宗を尊む日蓮は天魔の所為といふゆへに我と招けるわざわひなれば、人ののるをもとがめずとがむとても一人ならず、打つをもいたまず本より存ぜしがゆへにかういよいよ身もをしまず力にまかせてせめしかば禅僧数
百人・念仏者・数千・人・真言師・百千・人・或は奉行につき、或はきり人につき、或はきり女房につき、或は後家尼御前等について無尽のざんげんをなせし程に最後には天下第一の大事、日本国を失わんと咒する法師なり、故最明寺殿・極楽寺殿を無間地獄に墮ちたりと申す法師なり御尋ねあるまでもなし但須臾に頸をめせ弟子等をば又頸を切り、或は遠国につかはし、或は籠に入れよと尼ごぜんたちいから

せ給たまいしかばそのまま行われけり。

去いぬる文永八年辛ぶんえい 未九月十二日の夜は相模さがみの国たつの口にて切
らるべかりしが、いかにしてやありけん其その夜はのびて依智えちというところへつきぬ、又十三日の夜はゆりたりとどどめきしが又いかにや
ありけん佐渡・さどの

国までゆく、今日切るあす切るといひしほどに四箇年というに結句
は去ぬる文永十一年太歳甲戌二月十四日に・ゆりて同じき三月二
十六日に鎌倉へ入り同じき四月八日平の左衛門の尉に見参してやう
やうの事申したりし中に今年は蒙古は一定よすべしと申しぬ、同じ
き五月の十二日にかまくらをいでて此の山に入れり、これはひとへ
に父母の恩師匠の恩・三宝の恩・国恩をほうぜんがために身をやぶ
り命をすつれども破れざればさでこそ候へ
又賢人の習い三度国をいさむるに用いずば山林にまじわれというこ
とは定まるれいなりに、此の功德は定めて上三宝・下梵天・帝釈・日月
までもしろしめしぬらん、父母も故道善房の聖霊も扶かり給うら
ん、但疑い念うことあり目連尊者は扶けんと・おもいしかども母の
青提女は餓鬼道に墜ちぬ、大覚世尊の御子なれども善星比丘は
阿鼻地獄へ墜ちぬ、これは力のまま・すくはんと・をぼせども

自業自得果のへんはすくひがたし、故道善房はいたう弟子なれば
日蓮をばにくしとはをばせざりけるらめどもきわめて臆病なりし
上・清澄をはなれしと執せし人

なり、地頭景信がおそろしさといふ。提婆・瞿伽利にことならぬ円智

・実成が上と下とに居てをどせしをあながちにをそれていとをしと

をもうとしごろの弟子等をだにもすてられし人なれば後生はいか

んがと疑わし、但一の冥加には景信と円智・実成とが・さきにゆき

しこそ一のたすかりとは・をもへども彼等は法華經十羅刹のせめを・

かほりてはやく失ぬ、後にすこし信ぜられてありしは・いさかひの後

のちぎりきなり、ひるのともしびなにかせん其の上いかなる事あれ

ども子・弟子などという者は不便なる者ぞかし、力なき人にもあら

ざりしが・さどの国までゆきしに一度もとぶらはれざりし事は

法華經を信じたるにはあらぬぞかし・それにつけても・あさましけれ

ば彼の

人の御死去しきよときくには火にも入り水にも沈みはしりたちてもゆ

ひて御はかをも・たたいて経をも一卷読誦どくじゆせんとこそおもへども

賢人けんじんのならひ心には遁世とんせいとは・おもはねども人は遁世とんせいとこそおも

らん・ゆへもなく・はしり出いずるならば末へも・とをらずと人おも

ひぬべし、さればいかにおもひたてまつれども・まいるべきにあら

ず、但

し各各二人は日蓮が幼少の師匠にて・おはします、勤操僧正・
ぎょうひょうそうじょう 行表 僧正の伝 教大師の御師たりしがかへりて御弟子とならせ
給たまいしがごとし、日蓮が景信にあだまれて清澄山を出いでしにかくし
おきてしのび出いでられたりしは天下第一てんがだいいちの法華經ほけきょうの奉公こうこうなり後生ごしょう
は疑うたがいおぼすべからず。

問いうて云いく法華經ほけきょう一部八卷・二十八品の中に何物なにものか肝心かんじんなるや、

答こたえて云いく華嚴經けこんきょうの肝心かんじんは大方広ほうとう仏華嚴經ぶつせつむりょう・阿含經あこんきょうの肝心かんじんは仏說ぶつせつ

中阿含經ちゅうあこんきょう・大集經だいじつきょうの肝心かんじんは大方等ほうとう・大集經だいじつきょう・般若經はんにやきょうの肝心かんじんは摩訶まか

般若波羅蜜經はんにやみつ・雙觀經そうかんきょうの肝心かんじんは仏說無量壽經ぶつせつむりょう・觀經くわんきょうの肝心かんじんは仏說

觀無量壽經くわんむりょうじゆきょう・阿彌陀經あみだの肝心かんじんは仏說阿彌陀經あみだ・涅槃經ねはんきょうの肝心かんじんは

大般涅槃經だいぱんねはんきょうかくのごとくの一いっ切經さいきょうは皆如是我聞みなによぜがもんの上かみの題目だいもく其その經

の肝心かんじんなり、大だいは大だいにつけ小せうは小せうにつけて題目だいもくをもつて肝心かんじんと

す、大日經だいにちきょう・金剛頂經こんごうちようきょう・蘇悉地經そしつちきょう等またまた亦復またまたかくのごとし、仏も又か

くのごとし大日如来・日月燈明仏・燃燈仏・大通仏・雲雷音王仏
これら
是等の仏も又名の内に其の仏の種種の徳をそなへたり、今の法華経
も亦もつてかくのごとし、

如是我聞の上の妙法蓮華経の五字は即一部八卷の肝心、亦復
一切経の肝心一切の諸仏・菩薩・二乗・天人・修羅・竜神等の頂上
の正法なり、問うて云く南無妙法蓮華経と心もしらぬ者の唱うる
と南無大方広仏華嚴経と心もしらぬ者の唱うると齊等なりや浅深
の功德差別せりや、答えて云く浅深等あり、疑て云く其の心
如何、答えて云く小河は露と涓と井と渠と江とをば収むれども
大河ををさめず大河は露乃至小河を撰むれども大海ををさめ
ず、
阿含経は井江等露涓ををさめたる小河のごとし、方等経・阿弥陀
経・大日経・華嚴経等は小河ををさむる大河なり、法華経は露

たまりみず

涓・井・江・小河・大河・天雨等の一切の水を一てきももらさぬ

大海なり、譬えば身の熱者の大寒水の辺にいねつれば、すずしく小

水の辺に臥ぬれば、苦きがごとし、五逆謗法の大きなる一闍提人。

阿含・華嚴・觀經・大日經等の小水の辺にては大罪の大熱さんじが

たし、法華經の大雪山の上に臥ぬれば、五逆・誹謗・一闍提等の大熱

忽に散ずべし。されば患者は必ず法華經を信ずべし、各各經經の

題目は易き事同じといへども患者と智者との唱うる功德は天地

雲泥なり、譬へば大綱は大力も切りがたし、小力なれども小刀をもつ

てたやすくこれをきる、譬へば堅石をば鈍刀をもてば大力も破が

たし、利劍をもてば小力も破りぬべし、譬へば薬はしらねども服す

れば病やみぬ食は服すれども病やまず、譬へば仙薬は命をのべ凡薬

は病をいやせども命をのべず。

疑

つて云く二十八品の中に何か肝心ぞや、答えて云く、或は

云く品品皆事に随いて肝心なり、或は云く方便品・寿量品・肝心なり、或は云く方便品肝心なり、或は云く寿量品肝心なり、或は云く開示悟入肝心なり、或は云く実相肝心なり。

問うて云く汝が心如何答う南無妙法蓮華經肝心なり、其の証如何・阿難・文殊等如是我聞等云云、問うて云く心如何、答えて云く阿難と文殊とは八年が間・此の法華經の無量の義を一句・一偈・一字も残さず聽聞してありしが仏の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに先づはじめに妙法蓮華經とかかせ給いて如是我聞と唱えさせ給いしは妙法蓮華經の五字は一部八卷・二十八品の肝心にあらずや、されば過去の燈明仏の時より法華經を講ぜし光宅寺の法雲法師は「如是とは將に所聞を伝えんとす前題に一部を挙ぐるなり」等云云、靈山にまのあたり・きこしめしてありし天台大師は「如是とは所聞の法体なり」等云云章安

大師だいしの云いわく記者しやく釈しゃくして曰いわく「蓋けだし序王じよおうとは経きやうの玄意げんいを叙じよし玄意げんいは文ぶん心しんを述じゆつす」等云云、此この釈しゃくに文心ぶんしんとは題目だいもくは法華經ほけきやうの心しんなり妙樂みょうらく大師だいし云いわく「一いち代だいの教法きやうほうを収おさむること法華ほつけの文心ぶんしんより出いず」等云云、
天竺てんじくは七十箇国しちじゅうしちこくなり総名そうめいは月氏国がつし・日本にほんは六十箇国ろくじゅうしちこく・総名そうめい
は日本国にほんこく月氏がつしの名なの内に七十箇国しちじゅうしちこく乃至な人畜にんちく・珍宝ちんぼうみなあり、日本にほんと
申もうす名なの内に六十六箇国ろくじゅうろくこくあり、出羽おうしゆうの羽うも奥州おくしゆうの金かねも乃至な至国しこくの
珍宝ちんぼう・人畜にんちく乃至な至塔しじとうも神社しんじやもみな日本にほんと申もうす二字にじの名なの内に撰あさまれ
り、天眼てんげんをもつては日本にほんと申もうす二字にじを見て六十六国ろくじゅうろくこく乃至な至人畜しにんちく等を
みるべし法眼ほうげんをもつては人畜にんちく等の此こゝに死かしこし彼かに生なるをもみるべし
譬たとへば人の声こゑをきいて体たいをしり跡あとをみて大小だいしやうをしる蓮はちすをみて池いけの
大小だいしやうを計ばかり雨あめをみて竜ぶんざいの分齊ぶんざいをかんがう、これはみな一ひとに

いっさいの有りことわりなり、阿含經の題目には大旨一切はあるやう
なれども但小釈迦・一仏のみありて他仏なし、華嚴經・觀經・
大日經等には又一切有るやうなれども二乘を仏になすやうと久遠
實成の釈迦仏いませず、例せば華さいて菓ならず雷なつて雨ふ
らず鼓あつて音なし眼あつて物をみず女人あつて子をうまず人あ
つて命なし又神なし、大日の真言・藥師の真言・阿弥陀の真言・
觀音の真言等又かくのごとし、彼の經經にしては大王・須弥山・
日月・良藥・如意珠・利劍等のやうなれども法華經の題目に対すれ
ば雲泥の勝劣なるのみならず皆各各当体の自用を失ふ、例せば
衆星の光の一の日輪にうばはれ諸の鉄の一の磁石に値うて利性
のつき大劍の小火に値て用を失ない牛乳・驢乳等の師子王の乳に
値うて水となり衆狐が術・一犬に値うて失い、狗犬が小虎に値うて
色を變ずるがこ

とし、南無妙法蓮華經と申せば南無阿彌陀仏の用も南無大日真言の用も觀世音菩薩の用も一切の諸仏・諸經・諸菩薩の用皆悉く妙法蓮華經の用に失なはる、彼の經經は妙法蓮華經の用を借ずば皆いたづらのものなるべし當時眼前のことはりなり、日蓮が南無妙法蓮華經と弘むれば南無阿彌陀仏の用は月のかくるがごとく塩のひるがごとく秋冬の草のかるるがごとく氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

問うて云く此の法実にいみじくばなど迦葉・阿難・竜樹・馬鳴・無著・天親・南岳・天台・妙楽・伝教等は善導が南無阿彌陀仏とすすめて漢土に弘通せしがごとく、慧心・永觀・法然が日本国を皆阿彌陀仏になしたるがごとく、すすめ給はざりけるやらん、答えて云く此の難は古の難なり今はじめたるにはあらず、馬鳴・竜樹菩薩等は仏の滅後・六百年・七百年等の大論師なり、此の人人世にい

て大乘経を弘通せしかば諸諸の小乗の者疑つて云く迦葉・阿難
等は仏の滅後二十年・四十年住寿し給いて正法をひろめ給いしは
如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか、而るに此の人人は但苦空・
無常・無我の法門をこそ詮とし給いしに今馬鳴・竜樹等かしこしと
いふとも迦葉・阿難等にはすぐべからず是一、迦葉は仏にあひまい
らせて解をえたる人なり、此の人人は仏にあひたてまつらず是二、
外道

は常樂我淨と立てしを仏・世に出でさせ給いて苦・空・無常・無我と
説かせ給いき、此ののどもは常樂我淨といへり、されば仏も御
入滅なり又迦葉等もかくれさせ給いぬれば第六天の魔王が此の
のどもが身に入りかはりて佛法をやぶり外道の法となさんとする
なり、されば佛法のあだをば頭をわれ頸をきれ命をたて食を止め
よ国を追へと諸の小乗の人人申せしかども馬鳴・竜樹等は但・一
二人なり昼夜に悪口の声をきき朝暮に杖木をかうふりしな
り、而れども此の一人は仏の御使ぞかし、正く摩耶經には六百年に
馬鳴出で七百年に竜樹出でんと説かれて候、其の上楞伽經等にも
記せられたり又付法藏經には申すにをよばず、されども諸の小乗
ののどもは用いず但めくらせめにせめしなり、如来現在猶多怨嫉
・況滅度後の經文は此の時にあたりて少しつみしられけり、提婆
菩薩の外道にころされ師子尊者の頸をきらられし此の事をもつてお

もひやらせ給へ。^{たま}

又仏滅後・一千五百余年にあたりて月氏がっしよりは東に漢土かんどといふ国

あり陳隋ちんずいの代に天台大師出世す、此の人の云く如来にょらいの聖教しよつきよつに大あ

り小あり顕けんあり密あり権あり実あり、迦葉かしよう・阿難等あなんは一向いっこうに小を弘ひろ

め馬鳴めみよう・竜樹りゆうじゆ・無著むちやく・天親等てんじんは権大乘こんだいじようを弘ひろめて実大乘じつだいじようの法華經ほけきよつをば

ある。或は但指あるをさして義あるをかくし。或は經の面あるをのべて始中終しちゆうじゆうをのべ

ず、或は迹門あるをしやくもんのべて本門ほんもんをあらはさず、或は本ある・迹あるあつて觀心かんじん

なしといひしかば、南三なんざん・北七ほくひちの十流じゆりゆうが末数千万人ばんにん・時ときを

つくりどつとわらふ、世の末よのすえになるまままに不思議ふしぎの法師ほふしも出現しゆつげんせ

り、時にあたりて我等われらを偏執へんしやくする者ものはありとも後漢ごかんの永平十年えいへいじゆん

丁卯ひのとつの歳としより今陳隋ちんずいにいたるまでの三蔵さんぞう・人師にんし・二百六十余人にひやくろくじゆをも

のもしらずと申もうす上謗法ほつぽうの者ものなり惡道あくどうに墜おちつるといふ者もの出来しゆつせり、

あまりの・ものくるはしさに法華經ほけきよつを持もて来きり給たまへる羅什三蔵らじゆつさんぞうをも

もの

しらぬ者と申すなり、漢土はさてもをけ月氏の大論師竜樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給はずといふなり、此をころしたらん人は鷹をころしたるものなり鬼をころすにもすぐべしとのしりき、又妙樂大師の時・月氏より法相真言わたり漢土に華嚴宗の始まりたりしを・とかくせめしかばこれも又さはぎしなり。

にほんこく 日本国には伝教大師が仏滅後・一千八百年にあたりていでさせ
給たまいてんだい 給たまいしかば在ざい世せいのげどうのげどうのげどうのげどうの六宗をせ
め給たまいしかば在ざい世せいのげどうのげどうのげどうのげどうの六宗をせ
仏滅後・一千八百年が間・月氏・漢土・日本にほんになかりし円頓えんどんの大戒だいかいを
立てんというのみならず、西国かんのんの観音寺かんのんの戒壇かいだん・東国とうこく下野しもつけの小野寺
の戒壇かいだん・
中国ちゆうごく大和やまとの国こく・東大寺とうだいじの戒壇かいだんは同どうく小乘しょうじょう臭糞しゆうふんの戒がいなり瓦石がしやくのご
とし、其それを持もつ法師ほっし等は野干やかん・猿猴えんこう等とうのごとしとありしかばあら
不思議ふしぎや法師ほっしにたる大蝗虫いなむし国こくに出現しゆつげんせり仏教ぶつぎやうの苗いちじにうせな
ん、殷いんの紂ちゆう・夏かのの桀けつ・法師ほっしとなりて日本にほんに生まれたり、後周こうしゆうの宇文うぶん・
唐たうの武宗ぶそう・二たび世せいに出現しゆつげんせりぶつほうも但た今いま失しせぬべし国こくもほろびな
んと大乗だいじやう・小乘しょうじやうの二類にるいの法師ほっし出現しゆつげんせば修羅しゆらと帝釈たいしやくと項羽こううと高祖こうそ
と一国いつこくに並ならべるなるべしと、諸人しよじん手てをたたき舌したをふるふ、在世ざいせい

には仏と提婆たいてばが二の戒壇かいだんありてそこばくの人人死ひとびとにき、されば他宗たしゅうにはそむくべし我が師てんだいだいし。天台大師てんだいだいしの立て給たまはざる円頓えんどんの戒壇かいだんを立つべしという不思議ふしぎさよ。あらおそろし。おそろしと。ののしりあえりき、されども經文きょうもん分明ぶんみょうにありしかば叡山えいざんの大乗戒壇だいじょうかうがいすでに立てさせ給たまいぬ、されば内証ないししょうは同じけれども法の流布るふは迦葉かしょう・阿難あなんよりも馬鳴めみょう・竜樹りゅうじゆ等はすぐれ馬鳴めみょう等よりも天台てんだいはすぐれ天台てんだいよりも伝教でんきょうは超こえさせ給たまいたり、世末よしまつになれば人の智ちはあさく仏教ぶつぎょうはふかくなる事なり、例せば輕病けいびょうは凡藥ぼんやく・重病じゅうびょうには仙藥せんやく・弱人じやくじんには強たかきかたうど有りて扶たすくるこれなり。

問いうて云いく天台てんだい・伝教でんきょうの弘通くわつうし給たまわざる正法しやうぼうありや、答こたえて云いく有り。求もとめて云いく何物なにものぞや、答こたえて云いく三さんあり、末法まっぼうのために仏ぶつ留とどめ置き給たまう迦葉かしょう・阿難あなん等馬鳴めみょう・竜樹りゅうじゆ等天台てんだい・伝教でんきょう等の弘通くわつうさせ給たまはざる正法しやうぼうなり、求もとめて云いく其その形ぎやうみやう貌い如何いか、答こたえて云いく一いつには

にほんないし 日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂

宝塔の内の

しゃか

たほうほか

しよぶつ

じようぎやう

ほさつきやうじ

ほんもん

多宝外の諸仏

並に上行等の四菩薩脇士となるべし、二には

漢土月氏

一閻浮提に人ごとに有智

無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし、

かいだん

三には日本乃至

漢土月氏

一閻浮提に人ごとに有智

無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし、

此の事いまだひろまらず一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年

むち

無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし、

此の事いまだひろまらず一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年

が間一人も唱えず日蓮一人南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経等

と声

と声

と声

もをしまとず唱となうるなり、例せば風したに随したがつて波だの大小だいしやうあり薪たきぎによつて火こうの高下こうげあり池したに随したがつて蓮はちすの大小だいしやうあり雨あめの大小だいしやうは竜りゆうによる根ねふかければ枝えだしげし源みなもと遠とほければ流ながながしといふこれなり、周しゆうの代の七百年は文王ぶんわうの礼孝らいこうによる秦しんの世よほどもなし始皇しやうわうの左道さだうによるなり、日蓮にちれんが慈悲じひ曠くわう大だいならば南無なむ妙法蓮華みやうほうれんげ経きやうは万年まんねんの外みらい未来みらいまでもながるべし、日本にほん国こくの一切いっさい衆生しゆじやうの盲目もつめくをひらける功德くどくあり、無間むげん地獄じじくの道をふさぎぬ、此この功德くどくは伝でん教天台きやうたいにも超こへ竜樹りゆうじゆ迦葉かあつにもすぐれたり、極樂ごくらく百年ひゃくねんの修行しゆぎやうは穢土えどの一日いちにちの功德くどくに及およばず、正像しやうざう二千年にせんねんの弘通くわうつうは末法まつぽうの一時いちじに劣こるか、是これひとへに日蓮にちれんが智ちのかしこきにはあらず時ときのしからしむる耳のみ、春はるは花はなさき秋あきは菓くわなる夏なつはあたたかに冬ふゆはつめたし時ときのしからしむるに有あらずや。

「我滅度めつどの後ご、後このの五百歳ひゃくさいの中ちゆうに広宣流布かうせんるふして閻浮提えんぶだいに於おいて断絶だんぜつ

して悪魔・魔民・諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便りを得せしむ
 ること無けん」等云云、此の経文若しむなしくなるならば舍利弗は
 華光如来とならじ迦葉尊者は光明如来とならじ目は多摩羅跋
 梅檀香仏とならじ阿難は山海慧自在通王仏とならじ摩訶波闍波提
 比丘尼は一切衆生喜見仏とならじ耶輸陀羅比丘尼は具足千万光相
 仏とならじ、三千塵点も戲論となり五百塵点も妄語となりて恐ら
 くは教主釈尊は無間地獄に墮ち多宝仏は阿鼻の炎にむせび十方
 の諸仏は八大地獄を栖とし一切の菩薩は一百三十六の苦をうくべ
 し。いかでかその義候べき、其の義なくば日本国は一同の南無
 妙法蓮華経なり、されば花は根にかへり真味は土にとどまる、此の
 功德は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし、南無妙法蓮華経。
 南無妙法蓮華経。

建治二年太歳丙子七月二十一日

之^{これ}を記^{しる}す甲州波木井郷身延山より安房の国・東条^{とうじょう}の郡・清澄山・
浄顯房^{ぼう}・義成房^{ぼう}の許^{もと}に奉送す

四六 報恩抄送文

330P

御状給り候畢おわんぬ、親疎しんそと無くなく法門ほうもんと申もうすは心こころに入れぬ人ひとにはいはぬ事ことにて候まいるぞ御心ごころ得候えへ、御本尊ごほんぞん図ずして進候まいる。此こゝの法華經ほけきょうは仏ぶつの在世ざいせよりも仏ぶつの滅後めつご・正法しょうぼうよりも像法ぞうぼう・像法ぞうぼうよりも末法まっぽうの初はじめしだい次第しだいに怨敵おんてき強おんてきくなるべき由よしをだにも御心ごころへあるならば日本国にほんこくに是こゝより外ほかに法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなし・これを皆人みな存ぞんじ候まいるぬべし、道善どうぜん御房ごぼうの御死去しきよの由よし・去いぬる月粗承ほぼうけたまわり候まいる、自身じしん早はやと参上まゐりし此こゝの御房ごぼうをも・やがてつかはすべきにて候まいるしが自身じしんは内心ないしんは存ぞんぜずといへども人目ひとめには遁世とんせいのやうに見みえて候まいるへばなにとなく此こゝの山やまを出いでず候まいる、此こゝの御房ごぼうは又内内またうちうち・人ひとの申もうし候まいるしは宗論しゅうろんやあらんずらんと申もうせしゆへに十方じゅうぱうにわかて經論きょうろん等を尋たずねしゆへ

に国^{こく}の寺^{てら}寺^{てら}へ人^{ひと}をあまたつかはして候^{こう}に此^{こゝ}の御房^{ごぼう}はするがの国^{こく}へ。
つかはして当時^{とうじ}こそ来て候^{こう}へ又^{また}此^{こゝ}の文^{ぶん}は随分^{ずいぶん}大事^{だいじ}の大事^{だいじ}どもをか
きて候^{こう}ぞ詮^{せん}なからん人^{ひと}人^{ひと}にきかせなばあしかりぬべく候^{こう}、又^{また}設^たいさ
なくともあまたになり候^{こう}はば、ほかさまにもきこえ候^{こう}なば御^ごため又^{また}
このため安穩^{あんのおん}ならず候^{こう}はんか、御^ごまへと義成房^{ぎせいのぼう}と二人^{ふにん}。此^{こゝ}の御房^{ごぼう}を
よみてとして膏^{かさ}がもりの頂^{いただき}にて二三遍^{さんべん}又^{また}。故道善御房^{こどうぜんごぼう}の御^ごはかに
て一遍^{いっぺん}よませさせ給^{たま}いては此^{こゝ}の御房^{ごぼう}にあづけさせ給^{たま}いてつねに御^ご
聴聞^{ちやうもん}候^{こう}へたびたびになり候^{こう}ならば心^{こゝろ}づかせ給^{たま}う事^{こと}候^{こう}なむ、恐^{きやう}恐^{きやう}
謹言^{きんげん}。

七月二十六日

日蓮

花押^{かおう}

清澄御房^{ぼう}

四七

法華取要抄

文永十一年五月 五十三歳御作

与富木常忍

於身延

331P

扶桑沙門

日蓮之を述ぶ

夫れ以れば月支・西天より漢土・日本に渡来する所の経論・五千

七千余卷なり、其中の諸経論の勝劣・浅深・難易・先後・自見に

任せて之を弁うことは其の分に及ばず、人に随い宗に依つて之を知

る者は其の義紛紜す、所謂華嚴宗の云く「一切経の中に此の経

第一」と、法相宗の云く「一切経の中に深密経第一」と、三論宗の

云く「一切経の中に般若経第一」と、真言宗の云く「一切経の中に

大日の三部経第一」と、禅宗の云く「或は云く「教内には楞伽経

第一」と、或は云く「首楞嚴経第一」と、或は云く「教外別伝の宗

なり」と、浄土宗の云く「一切経の中に浄土の三部経末法に入りて

は機教相応して第一なり」と、俱舍宗・成実宗・律宗云く「四阿含

並に律論は仏説なり華嚴経・法華経等は仏説に非ず外道の経なり」

或は云く或は云く、而に彼れ彼れ宗宗の元祖等・杜順・智儼・

法蔵・澄観・玄奘・慈恩・嘉祥

・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣・鑒真・曇鸞・道綽・善導・達磨・

慧可等なり、此等の三蔵大師等は皆聖人なり賢人なり智は日月に

齊く徳は四海に弥れり、其の上各各に経・律・論に依り更互に証拠

有り随つて王臣国を傾け士民之を仰ぐ末世の偏学設い是非を加う

とも人信用を致さじ、爾りと雖も宝山に來り登つて瓦石を採取し

梅檀に歩み入つて伊蘭を懷き取らば悔恨有らん、故に万人の謗りを

捨て猥りに取捨を加う我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫れ諸宗の人師等或は旧訳の経論を見て新訳の聖典を見ず

ある 或は新訳の経論を見て旧訳を捨置き。或は自宗の曲に執著して
己義こぎに随したがい愚見ぐけんを注とどし止めて後代こうだいに之これを加添くわいせす、株杭くわいせに驚おどろき騒さわぎ
て兎獸うさぎを尋たずね求め智円扇ちえんせんに発あおして仰あおいで天月てんげつを見る非ひを捨すて理りを
取とるは智人ちじんなり、今末こんまつの論師ろんし・本の人師にんしの邪義じやぎを捨すて置おいて専せんら
本経ほんきょう・本論ほんろんを引き見る

に五十余年の諸經の中に法華經第四法師品の中の已今当の三字最も第一なり、諸の論師・諸の人師定めて此經文を見けるか、然りと雖も、或は相似の經文に狂い、或は本師の邪会に執し、或は王臣等の歸依を恐るるか、所謂金光明經の「是諸經之王」密嚴經の「一切經中勝」六波羅蜜經の「總持第一」大日經の「云何菩提」華嚴經の「能信是經・最為難」般若經の「会入法性・不見一事」大智度論の「般若波羅蜜最第一」涅槃論の「今者涅槃理」等なり、此等

の諸文は法華經の已今当の三字に相似せる文なり然りと雖も、或は梵帝・四天等の諸經に對當すれば是れ諸經の王なり、或は小乘經に相對すれば諸經の中の王なり、或は華嚴・勝鬘等の經に相對すれば一切經の中に勝れたり全く五十余年の大小・權實・顯密の諸經に相對して是れ諸經の王の大王なるに非ず所詮所對を

見て経経きやうぎやうの勝劣しやうれつを弁わうべきなり、強敵こつてきを臥伏ふせふするに始はて大力たからを
 知見ちけんする是これなり、其その上うへ諸経しよきやうの勝劣しやうれつは釈尊しやくそん一仏いちぶつの浅深せんじんなり全ぜんく
 多宝分身たほうぶんじんの助言すけごんを加くわうるに非あらず私説しせつを以もつて公事こうじに混まざる事こと勿なかれ、
 諸経しよきやうは、或あるは二乘凡夫にじやうほんぶに對揚たいやうして小乘経しやうじやうきやうを演説えんぜつし、或あるは文殊もんじゆ・
 解脱月げだつがつ・金剛薩こんごうさつた等の弘伝くいでんの菩薩ぼさつに對向たいかうして全ぜんく地涌千界じゆせんがいの上じやうぎやう行ぎやう
 等らうには非あらず、今法華経ほけきやうと諸経しよきやうとを相對そつたいするに一代いちだい
 に超過ちやうかすること二十種にじふしゆ之これ有あり、其その中なか最要さいやう二有ふたり所謂いわゆる三五さんごの二法にぽう
 なり三さんとは三千塵点劫さんぜんじんてんてつなり諸経しよきやうは、或あるは釈尊しやくそんの因位いんいを明あすこと
 或あるは三祇さんぎ・或あるは動逾塵劫どうゆじんこつ・或あるは無量劫むりやうこつなり、梵王ほんのう云いく此この土つちには
 二十九劫にじふくにちより已來このかた知行ちぎやうの主ちゆうなり第六天だいろくてん・帝釈たいしやく・四天王等してんのうも以もつて是かくく
 の如ごとし、釈尊しやくそんと梵王等ほんのうと始はめて知行ちぎやうの先後せんご之これを諍論じやうろんす爾しかりと雖いえども
 一指いちを挙あげて之これを降伏かうふくしてより已來このかた梵天ほんてん・頭あたまを傾かたけ魔王まおう掌たなこころを合あせ
 三さん界がいの衆生しゆじやうをして釈尊しやくそんに歸伏きふくせしむる是これなり、又また諸仏しよぶつの因位いんいと

釈尊しゃくそんの因位いんいと之これを糾明きゆうめいするに諸仏しよぶつの因位いんいは、或あるは三祇さんぎ・或あるは五劫いっさい等しやくそんなり、釈尊しゃくそんの因位いんいは既すでに三千塵点劫さんせんじんてんこつより已来娑婆世界このかたしやばせかいの一切いっさい衆生しゆじようの結縁けちえんの大士だいしなり、此せかいの世界せかいの六道ろくどうの一切衆生いっさいしゆじようは他土たどの他の菩薩ぼさつに有縁うえんの者もの一人も之これな無し、法華經ほけきように云いわく、「爾その時に法ほを聞きく者ものは各諸仏しよぶつの所ところに在あり」と等云云とんたういんわ、天台云てんだいいわく、「西方さいほうは仏ぶつ・別に縁異ゆえんり故ゆえに子父しやふの義成ぎじやうせず」と等云云とんたういんわ、妙樂みょうらく云いく、「弥陀みだ・釈迦しやくか一仏いっふつ既すでに殊ことなりいわんやむかし況けいや宿昔しゆくしやくの縁別ゆえんべつにして化導けだう同じおなじからざるをや結縁けちえんは生ことの如ごとく成熟じやうじゆくは

養よの如ごとし生な養よ縁えん異いれば父ふ子し成なぜず等とう云うん云ん、当とう世せ・日に本ほん国こくの一切いっさい
 衆しゆ生じやう弥み陀だの来ら迎いようを待まちつは譬たとえば牛うしの子こに馬まの乳ちちをを含こめ瓦わの鏡かみに
 てんげつ 天てん月げつを浮うぶるが如ごとし、又また果くわ位いを以もつて之これを論ろんずれば諸しよ仏ぶつ如に来よ・或あるは十
 劫せんとく・百ひやく劫せんとく・千せん劫せんとく已こ来かの過か去この仏ぶつなり、教きやう主しゆ釈しやく尊そんは既すでに五ご百ひやく塵ちん点てん劫こよ
 り已こ来か妙みやう覺かく果か滿まんの仏ぶつなり大だい日にち如に来よ・阿あ弥み陀だ如に来よ・葉やく師し如に来よ等とうの尽じん
 じゆつぽう 十じゆ方ぽうの諸しよ仏ぶつは我わが
 等とうが本ほん師し教きやう主しゆ釈しやく尊そんの所しよ從じゆ等とうなり、天てん月げつの万ばん水すいに浮うぶ是これなり、
 けこんきやう 華け嚴えん經きやうの十じゆ方ぽう台たい上じやうの毘び盧る遮しゃ那な・大だい日にち經きやう・金こん剛かう頂てい經きやう・両りやう界かいの大だい日にち
 によらい 如に来よは宝ほう塔たつ品ぽんの多た宝ほう如に来よの左さ右うの脇きやう士じなり、例れいせば世よの王わうの両りやう臣しん
 ごと 的ごと如ごとし此この多た宝ほう仏ぶつも寿じゆ量りやう品ぽんの教きやう主しゆ釈しやく尊そんの所しよ從じゆなり、此この土どの
 われらしむじやう 我わが等とう衆しゆ生じやうは五ご百ひやく塵ちん点てん劫こより已こ来か教きやう主しゆ釈しやく尊そんの愛あい子しなり不ふ孝こうの失しつに
 よ 依よつて今いまに覺かく知ちせずと雖いへども
 たほう 他た方ほうの衆しゆ生じやうには似にる可べからず、有う縁えんの仏ぶつと結けち縁えんの衆しゆ生じやうとは譬たとえば

てんげつ 天月の清水に浮ぶが如く無縁の仏と衆生とは譬えば聾者の雷の声を聞き盲者の日月に向うが如し、而るに或る人師は釈尊を下して大日如来を仰崇し、或る人師は世尊は無縁なり阿弥陀は有縁なり、或る人師の云く小乗の釈尊と或は華嚴經の釈尊と或は法華經迹門の釈尊と此等の諸師並びに檀那等釈尊を忘れて諸仏を取ることは例せば阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付きしが如し、二月十五日は釈尊御入滅の日乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌なり、善導・法然・永觀等の提婆達多に誑されて阿弥陀仏の日と定め畢んぬ、四月八日は世尊御誕生の日なり薬師・仏に取り畢んぬ、我が慈父の忌日を他仏に替るは孝養の者なるか如何、寿量品に云く「我も亦為れ世の父狂子を治する為の故に」等云云、天台大師云く「本此の仏に従つて初めて道心を発す亦此の仏に従つて不退地に住す乃至猶百川の海に潮

すべきが如く縁に牽かれて応生すること亦復是くの如し等云云。
問うて云く法華経は誰人の為に之を説くや、答えて曰く方便品よ
り人記品に至るまでの八品に二意有り上より下に向て次第に之を
読めば第一は菩薩第二は二乗・第三は凡夫なり、安樂行より勸持・
提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す
在世の衆生は傍なり滅後を以て之を論ずれば正法一千年・像法一
千年は傍な

り、末法を以て正と為す末法の中には日蓮を以て正と為すなり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く況滅度後の文是なり、疑つて云く日蓮を正と為す正文如何、答えて云く「諸の無智の人有つて、悪口罵詈等し、及び刀杖を加うる者」等云云、問うて曰く自讃は如何、答えて曰く喜び身に余るが故に堪え難くして自讃するなり、問うて曰く本門の心如何、答えて曰く本門に於て二の心有り一には涌出品の略開近顯遠は前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり、二には涌出品の動執生疑より一半並びにじゅうりょうぼん 分別功德品の半品已上一品一半を広開近顯遠と名く一向に滅後の為なり、問うて曰く略開近顯遠の心如何、答えて曰く文殊・弥勒等の諸大菩薩・梵天・帝釈・日月・衆星・竜王等初成道の時より般若經に至る已来は一人も釈尊の御弟子に非ず此等の菩薩・天人は初成道の時、仏未だ説法したまわざる已前に不思議解脱に

住して我と別円二教を演説す。釈尊其の後に阿含・方等・般若を宣説し給う。然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず、既に別円二教を知りぬれば、蔵通をも又知れり。勝は劣を兼ねる是なり。委細に之を論ぜば、或は釈尊の師匠なるか善知識とは是なり。釈尊に隨うに非ず、法華經の迹門の八品に來至して始めて未聞の法を聞いて此等の人人は弟子と成りぬ。舍利弗・目連等は鹿苑より已來初發心の弟子なり、然りと雖も權法のみを許せり、今法華經に來至して實法を授与し、法華經本門の略開近顯遠に來至して華嚴よりの大菩薩・二乘・大梵天・帝釈・日月・四天・竜・王等は位・妙覺に隣り又妙覺の位に入るなり、若し爾れば今我等天に向つて之を見れば、生身の妙覺の仏本位に居して衆生を利益する是なり。

問うて曰く、誰人の為に広開近顯遠の寿命品を演説するや、答えて曰く、寿命品の一品二半は始より終に至るまで正しく滅後衆生の

為なり滅後めつごの中には末法まっぽう今時の日蓮等にちれんが為なり、疑うたがいつて云く此の
法門前代ほうもんぜんだいに未だいま之を聞かず經文きょうもんに之れ有りや、答えて曰く予が智
前賢ぜんけんに超えこず設たといい經文きょうもんを引くと雖も誰人だれびとか之を信ぜんべんか和が
啼泣ていきゅう・伍子胥ごししよが悲傷こ是なり、然りと雖も略開近顯遠りやくかいこんけんのん・動執生疑どうしゅうししょうぎの
文いに云く「然も諸しかの新発意もろもろしんほつちの菩薩ぼさつ・仏の滅後めつごに於て若し是の語こを

聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん、等云云、文の心は寿量品を説かずんば末代の凡夫皆悪道に墮せん等なり、寿量品に云く、「是の好き良薬を今留めて此に在く、等云云、文の心は上は過去の事を説くに似たる様なれども此の文を以て之れを案ずるに滅後を以て本と為す先ず先例を引くなり、分別功德品に云く、「悪世末法の時、等云云、神力品に云く、「仏滅度の後に能く是の経を持たんを以つての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う、等云云、薬王品に云く、「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん、等云云、又云く、「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり、等云云、涅槃經に云く、「譬えば七子の如し父母平等ならざるに非ざれども然も病者に於て心則ち偏に重し、等云云、七子の中の第一第二は一闡提

謗法の衆生なり諸病の中には法華經を謗するが第一の重病なり、諸薬の中には南無妙法蓮華經は第一の良薬なり、此の一間浮提は縦広七千由善那八万の国之れ有り正像二千年の間未だ広宣流布せざるに法華經当世に當つて流布せしめずんば釈尊は大妄語の仏・多宝仏の証 明は泡沫に同じく十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。

疑つて云く多宝の証明・十方の助舌・地涌の涌出此等は誰人の

為ぞや、答えて曰く世間の情に云く在世の爲と、日蓮云く舍利弗

・目等は現在を以て之を論ずれば智慧第一・神通第一の大聖な

り、過去を以て之を論ずれば金竜陀仏・青竜陀仏なり、未來を以て

之を論ずれば華光如来、靈山を以て之を論ずれば三惑頓尽の大

菩薩、本を以て之を論ずれば内秘外現の古菩薩なり、文殊・弥勒等

の大菩薩は過去の古仏・現在の応生なり、梵帝・日月・四天等は

初成いぜん已前たいせいの大聖たいせいなり、其の上その・前ぜん四味しきよ・四教しきよ一言いに之これを覚さとりぬ仏ぶつの
在ざい世せいには一人ひとりに於おいても無む智ちの者もの之これ無なし誰だれ人ひとの疑うたがいを晴はさんが
為ために多た宝ほう仏ぶつの証しょう明みやうを借かり諸しよ仏ぶつ舌したを出だし地じ涌ゆの菩ぼ薩さつを召まさんや
方かたがたももついで謂いわれ無なき事ことなり、經文きやうもんに随したがつて「況きやう滅めつ度ど後ご・令りやう法ほう久く住じゆう」等
云云これら、此等きやうもんの經文きやうもんを以もつて之これを案ひとえずるに偏われらに我等われらが為なり、随したがつて
天台大師てんだいだいし当世だうせいを指さして云いわく「このごひやくさい
後ごの五百ごひやく歳さい遠えんく妙道みやうだうに沾うるわんん」伝教でんきやう
大師だいし当世だうせいを記しるして云いわく「正像しょうざう稍過しやうぎ已おつて末法まっぽう太はなだ近ちかきに有ある

り」等云云、「末法太有近」の五字は我が世は法華經流布の世に非ずと云う釈なり。

問うて云く如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・伝教の残した

まえる所の秘法は何物ぞや、答えて云く本門の本尊と戒壇と題目の

五字となり、問うて曰く正像等に何ぞ弘通せざるや、答えて曰く

正像に之を弘通せば小乗・権大乘・迹門の法門一時に滅尽す

可きなり、問うて曰く仏法を滅尽するの法何ぞ之を弘通せんや、答

えて曰く末法に於ては大小・権実・顕密共に教のみ有つて得道無し

一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の為には但妙法蓮華經

の五字に限る、例せば不輕品の如し我が門弟は順縁なり日本国は

逆縁なり、疑つて云く何ぞ広略を捨て要を取るや、答えて曰く

玄奘三蔵は略を捨てて広を好み四十巻の大品經を六百巻と成す

羅什三蔵は広を捨て略を好む千巻の大論を百巻と成せり、日蓮は

こうりやく
広略を捨てて肝要を好む所謂上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字
なり、九包淵が

馬を相するの法は玄黄を略して駿逸を取る支道林が經を講ずるに
は細科を捨てて元意を取る等云云、仏既に宝塔に入つて二仏座を並
べ分身来集し地涌を召し出し肝要を取つて未代に當てて五字を
授与せんこと当世異義有る可からず。

うたがい
疑つて云く今世に此の法を流布せば先相之れ有りや、答えて

いわ ほけきょう 「によぜそうないしほんまつききょう
曰く法華經に「如是相乃至本末究竟等」と云云、天台云く「蜘蛛掛りて

喜び事来たり 鵲鳴いて客人来る小事猶以て是くの如し何に況や

だいじ 大事をやと取意、問うて曰く若し爾れば其の相之れ有りや、答えて

いわ い 曰く去ぬる正嘉年中の大地震・文永の大彗星其より已後今に種種

の大なる天変・地天此等は此先相なり、仁王經の七難・二十九難・

むりょう 無量の難、金光明經・大集經・守護經・藥師經等の諸經に挙ぐる所

の諸難しよなん皆みな之これ有あり但ただし無なき所ところは二三四五の日出ひる大難だいなんなり、而しかるを
今年ことし佐渡さどの国くにの土民どみんは口口くくに云いう今年ことし正月しょうげつ廿三日にじふにちの申しんの時とき西せいの方かた
に二にの日出ひ現げんす或あるは云いく三さんの日出ひ現げんす等らう云いふ、二月にがつ五日ごにちには
東方とうほうに明星めいせい二につ並ならび出いでず其そのの中ちゆう間げんは三寸さんすん計ばかり等らう云いふ、此このの大難だいなんは
日本にほん国こく先代せんだいにも未いまだ之これ有あらざるか、最勝さいしやう王おう経きやうの王法おうほふ正論せいろん品ひんに云いく
「へんか
変化へんかの流星りゅうせい」

落ち二の日俱時に出で他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う等云云、
首楞嚴經に云く、「或は二の日を見し、或は兩つの月を見す」等、
薬師經に云く、「日月薄蝕の難」等云云、金光明經に云く、「彗星數ば
出で兩つの日並び現じ薄蝕恒無し」大集經に云く、「佛法實に隱没せ
ば乃至日月明を現ぜず」仁王經に云く、「日月度を失い時節返逆し
或は赤日出で黒日出で二三四五の日出ず、或は日蝕して光無く
或は日輪一重二三四五重輪現ぜん」等云云、此の日月
等の難は七難二十九難無量の諸難の中に第一の大惡難なり、問う
て曰く此等の大中小の諸難は何に因つて之を起すや、答えて曰く
「最勝王經に曰く非法を行ずる者を見て当に愛敬を生じ善法を
行ずる人に於て苦楚して治罰す」等云云、法華經に云く涅槃經に
云く金光明經に云く、「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に
星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、大集經に云く、「佛法實

におんもつ隱没し乃至是ないしかくくの如ごとき不善業ふぜんごうの悪王あくおう・悪比丘あくびく我が正法しょうぼうを

毀壞きえす等、仁王經にんのきょうに云いわく「聖人しょうにん去る時ひちなん七難しちなん必ず起おこる」等、又云いわく

「法あらに非あらず律あらに非あらず比丘びくを繫縛けいばくすること獄囚ごくこの法ごとの如ごとくす爾その時に

當ほうめつつて法滅ほうめつせんこと久ちしからず等、又云いわく「諸もろもろの悪比丘あくびく多く名利みょうりを

求こくおうめ国王こくおう・太子たいし・王子みこの前に於おいて自みずから破はぶつほう仏法はぶつほうの因縁いんねん・破国はこくの因縁いんねんを

説そかん其その王わき別わきまえずして此この語ごを信しんちやう聴ちやうせん」等云云、此等これらの

明鏡めいきやうを齎もつて当時とうじの日本にほん国こくを引ひき向むかうるに天地てんちを浮うぶること宛あたかも

符契ふけいの如ごとし眼まなこ有あらん我が門弟もんていは之これを見よ、当まさに知しるべし此この国こに

悪あく比丘びく等有あつて天子てんし・王子みこ・將軍しょうぐん等らに向むかつて讒訴ざんそを企くわだて聖人しょうにんを失うしなう

世よなり、問いわうて曰いく弗ほつ舍しゃ密みつ多た羅ら王おう・会昌えいしやう・

天子てんし・守屋もりや等は月支がつし・真旦しんたん・日本にほんの仏法ぶつほうを滅失めつしつし提婆菩薩だいばぼさつ・師子尊者ししそんじや

等を殺害さつがいす其そのの時とき何なんぞ此この大難だいなんを出いささざるや、答こたえて曰いく災難さいなん

は人したに随したがつて大小だいしやう有ある可べし正像しょうざう二千年にせんねんの間あく悪王あくおう・悪比丘あくびく等は或ある

げどう 外道を用い、或は道士を語らい、或は邪神を信ず、ぶつぼう 仏法を滅失するこ
と大なるに似たれども、そ 其の科尚浅きか、とがな 今当世の悪王・あくおう 悪比丘の
ぶつぼう 仏法を滅失するは、もつ 小を以て大を打ち、もつ 権を以て実を失う、うしな 人心を削て
身みを失わず、じとう 寺塔を焼き、ちようか 尽さずして、じねん 自然に之を喪す、とがぜん 其の失前代に
ちようか 超過せるなり、い 我が門弟之を見て、ほけき 法華經を信用せよ、い 目を瞋らして
鏡に向え、い 天瞋るは、とが 人に失有ればなり、に 二の日

なら
並び出るは一国に二の国王並び相なり、王と王との鬪争なり、星
の日月を犯すは臣王を犯す相なり、日と日と競い出るは四天下の
同の争論なり、明星並び出るは太子と太子との争論なり、是くの
如く国土乱れて後に上行等の聖人出現し本門の三つの法門之を
建立し一四天・四海一同に妙法蓮華經の広宣流布疑い無からん
者か。

ぶんえい
文永十一年五月

在御判

四八 四信五品抄

建治三年四月十日 五十六歳

御作 与富木常忍

338p

青鳧一結送り給ひ候い了おんぬ。

今こ來そんの学がく者しや一いっ同どうの御ご存ぞん知じに云いく、在ざい世せい滅めつ後ご異いなりと雖いも法ほつ華けを修しゆ行ぎやうするには必かならず三さん学がくを具ぐす一いっを欠かいても成なぜず云云ふ。

余あ又また年ねん來らい此この義ぎを存ぞんする処ところ一いっ代だい聖せい教きやうは且しらく之これを置おく法ほつ華け經きやうに入いつて此この義ぎを見けん聞もんするに序しよ正せいの二に段だんは且しらく之これを置おく流る通つうの一段いちだんは末まつ法ぽうの明めい鏡きやう尤もつと依え用ようと為なすべし、而しかして流る通つうに於おいて二に有あり一いっには所い謂わ迹い門もんの中ちゆうの法ほつ師し等とうの五ご品ほん二には所い謂わ本ほん門もんの中ちゆうの分ぶん別べつ功く徳とくの半はん品ぽんより經きやうを終しゆうるまで十じゅう一いち品ぽん半はんなり、此この十じゅう一いち品ぽん半はんと五ご品ほんと合あせて十じゅう六ろく品ぽん半はん此この中ちゆうに末まつ法ぽうに入いつて法ほつ華けを修しゆ行ぎやうする相そう貌みやう分ぶん明めいなり是こに尚なほ事じ行ぎやうからずんば普ふ賢けん經きやう・涅ね槃はん經きやう等とうを引ひき来きりて之これを糾きう明めいせんに其その隱いんれ無なきか、其その中ちゆうの分ぶん別べつ功く徳とく品ぽんの四し信しんと五ご品ほんとは法ほつ華けを修しゆ行ぎやうするの大だい要やう・在ざい世せい滅めつ後ごの龜き鏡きやうなり。

荊けい谿けいの云いく「一いっ念ねん信しん解げとは即すなち是これ本ほん門もん立た行ぎやうの首はじめ」と云いふ、

そ 其の中に現在げんざいの四信の初いちねんしんげの一念信解いちねんさんぜんと滅後めつごの五品ごぼんの第一だいいちの初随喜しよずいき
と此の二処にょは一同ひやつかいせんによに百界千如いちねんさんぜん・一念三千ほつきやうじゆつぽうさんぜの宝篋ほうきやう十方三世じゆつぽうさんぜの諸仏しよぶつ
の 出る門もんなり、天台てんだい・妙楽みやうらくの二ふたりの聖賢せいけん此の二処にょの位ゐを定さだむるに三
の 積有いわずり所謂ある・或あるは相似そうじ・十信じゆつしん・鉄輪てつりんの位ゐ・或あるは勸行こんぎやう五品ごぼんの初品しよぼんの位ゐ
・未断見思みだんけんじ・或あるは名字みやうじそく即すくの位ゐなり、止観しかんに其その不定ふじやうを会えして云いわく
「ぶつぶつい仏意ぶつ知り難がたし機きに赴おもむきて異説いす此こを借かつて開解げせば何なんぞ勞わざらわしく
ねんころあらず
苦くるに諍しやうわんんと云い云い等とう。

予よが意いに云いく、三釈しやくの中ちゆう名字みやうじそく即すくは經文きやうもんに叶かなうか滅後めつごの五品ごぼんの初
の 一品いっぴんを説いいて云いく「しか而しかも毀き皆きせずして随喜ずいきの心こころを起おこす」と若もし此
の 文相そうじ似にの五品ごぼんに渡わたらば而に不ふ毀き皆きの言ことばは便たよりならざるか、就なかんずく中
じゆりやうぼん
寿量品じゆりやうぼんの失心しつしん不ふ失心しつしん等とうは皆みな名字みやうじそく即すくなり、涅槃經ねはんぎやうに「若信ぶしん若不信ふしん
ないしきれん
乃至乃至熙連しぜん」とあり之これを勸かんがえよ、又また一念信解いちねんしんげの四字しじの中ちゆうの信しんの一字いっじは
四信ししんの初しゆめに

居し解の一字は後に奪わるる故なり、若し爾らば無解有信は四信の初位に当る経に第二信を説いて云く「略解言趣」と云云、記の九に云く「唯初信を除く初は解無きが故に」随つて次下の随喜品に至つて上の初随喜を重ねて之を分明にす五十人は皆展転劣なり、第五十人に至つて二の釈有り一には謂く第五十人は初随喜の内なり二には謂く第五十人は初随喜の外なりと云うは名字即なり、教弥よ実なれば位弥よ下れりと云う釈は此の意なり、四味三教よりも円教は機を撰し爾前の円教よりも法華経は機を撰し迹門よりも本門は機を尽すなり教弥実位弥下の六字心を留めて案ず可し。

問う末法に入つて初心の行者必ず円の三学を具するや不や、答えて曰く此の義大事たる故に経文を勘え出して貴辺に送付す、所謂五品の初二三品には仏正しく戒定の二法を制止して一向に慧の一分に限る慧又勘ざれば信を以て慧に代え・信の一字を詮と

な
為す、不信は一闡提謗法の因。信は慧の因。名字即の位なり、天台
云く「若し相似の

益は隔生すれども忘れず名字勸行の益は隔生すれば即ち忘る。或
は忘れざるも有り忘るる者も若し知識に値えば宿善還つて生ず
若し悪友に値えば則ち本心を失う云云、恐らくは中古の天台宗の
慈覚・智証の両大師も天台・伝教の善知識に違背して心・無畏・不空
等の悪友に遷れり、末代の学者慧心の往生要集の序に誑惑せられ
て法華の本心を失ひ弥陀の権門に入る退大取小の者なり、過去を
以て之を推するに未来無量劫を経て三悪道に処せん若し悪友に値
えば即ち本心を失うとは是なり。

問うて曰く其の証如何答えて曰く止観第六に云く「前教に其の位
を高うする所以は方便の説なればなり円教の位下きは眞実の説
なればなり」弘決に云く「前教と云うより下は正しく権実を判ず教

弥いよいよよ実いよいよなれば位いよいよ弥いよいよよ下ひくく教いよいよ弥いよいよよ権いよいよなれば位いよいよ弥いよいよよ高いよいよき故いよいよに「と、又
記いよいよの九いよいよに云いよいよく「位いよいよを判いよいよずることをいいよいよわば觀いよいよ境いよいよ弥いよいよよ深いよいよく実いよいよ位いよいよ弥いよいよよ下いよいよき
を顯あらわす」と

云いよいよ云いよいよ、他いよいよ宗いよいよは且いよいよらく之いよいよを置いよいよく天いよいよ台いよいよ一いよいよ門いよいよの学いよいよ者いよいよ等いよいよ何いよいよぞ実いよいよ位いよいよ弥いよいよ下いよいよの積いよいよ
を閣いよいよいて慧いよいよ心いよいよ僧いよいよ都いよいよの筆いよいよを用いよいよゆるや、畏いよいよ・智いよいよ・空いよいよと覺いよいよ証いよいよとの事いよいよは追いよいよつ
て之いよいよを習いよいよえ大いよいよ事いよいよなり大いよいよ事いよいよなり一いよいよ閻いよいよ浮いよいよ提いよいよ第いよいよ一いよいよの大いよいよ事いよいよなり心いよいよ有いよいよらん人いよいよ
は聞いよいよいて後いよいよに我いよいよを外いよいよめ。

問いよいようて云いよいよく末いよいよ代いよいよ初いよいよ心いよいよの行いよいよ者いよいよ何いよいよ物いよいよをか制いよいよ止いよいよするや、答いよいよえて曰いよいよく檀いよいよ
戒いよいよ等いよいよの五いよいよ度いよいよを制いよいよ止いよいよして一いよいよ向いよいよに南いよいよ無いよいよ妙いよいよ法いよいよ蓮いよいよ華いよいよ經いよいよと称いよいよせしむるを一いよいよ念いよいよ
信いよいよ解いよいよ初いよいよ隨いよいよ喜いよいよの氣いよいよ分いよいよと為いよいよすなり是いよいよれ則いよいよち此いよいよの經いよいよの本いよいよ意いよいよなり、疑いよいよつて
云いよいよく此いよいよの義いよいよ未いよいよだ見いよいよ聞いよいよせす心いよいよを驚いよいよかし耳いよいよを迷いよいよわす明いよいよかに証いよいよ文いよいよを引いよいよ
て請いよいよう苦いよいよに之いよいよを示いよいよせ、答いよいよえて云いよいよく經いよいよに云いよいよく「須いよいよく我いよいよが為いよいよに復いよいよた塔いよいよ寺いよいよ
を起いよいよて及いよいよび僧いよいよ坊いよいよを作り四いよいよ事いよいよを以いよいよて衆いよいよ僧いよいよを供いよいよ養いよいよすることをもちいざ

れ、此の經文明かに初心の行者に檀戒等の五度を制止する文なり、疑つて云く汝が引く所の經文は但寺塔と衆僧と計りを制止して未だ諸の戒等に及ばざるか、答えて曰く初を挙げて後を略す、問て曰く何を以て之を知らん、答えて曰く次の第四品の經文に云く「況や復人有つて能く是の經を持ちて兼ねて布施持戒等を行ぜんをや」と云云、經文分明に初二三品の人には檀戒等の五度を制止し第四品に至つて始めて之を許す後に許すを以て知んぬ初に制する事を、問うて曰く經文一往相似たり將た又疏釈有り

や、答えて曰く汝が尋ぬる所の釈とは月氏四依の論か將た又漢土にほんにほんの人の師の書か本を捨て末を尋ね体を離れて影を求め源を忘れて流を費ぶ分明なる經文を闇いて論釈を請い尋ぬ本經に相違する末釈有らば本經を捨てて

末すえ釈しやくに付つく可べきか然しかりと雖いえども好このみに随これて之これを示しさん、文もん句くの九くに
云いく「初しよ心しんは縁えんに紛ま動どうせられて正しやう業ぎやうを修しゆするを妨おげんことを畏おそる直
ちちに専せんら此この経きやうを持もつ即すなち上う供く養やうなり事じを廢はいして理りを存ぞんするは
所しよ益やく弘く多たなり」と、此この釈しやくに縁えんと云いうは五ご度たうなり初しよ心しんの者か兼かねて五
度たうを行いずれば正しやう業ぎやうの信しんを妨まぐるなり、譬たとえば小せう船せんに財さいを積たんで海
を渡わたるに財さいと俱ともに没ぼつするが如ごとし、直じき専せん持じ此こ経きやうと云いうは一いつ経きやうに亘わた
に非あらず専せんら題だい目もくを持もつて余あま文ぶんを雜まじえず尚なお一いつ経きやうの読どく誦じゆだも許ゆるさず
何いかに況いわんや五ご度たうをや、廢はい事じ存ぞん理りと云いうは戒がい等とうの事じを捨すてて題だい目もくの理り
を専せんらにす云い云い、所しよ益やく弘く多たとは初しよ心しんの者しよ諸しよ行ぎやうと題だい目もくと並ならび行いずれ
ば所しよ益やく全ぜんく失うしなうと云い云い。

文もん句くに云いく「問もんう若し爾にらば経きやうを持もつは即すなち是これ第一だい一いち義ぎの戒がいなり
何いかんが故こぞ復また能よく戒がいを持もつ者しやと云いうや、答たうう此こは初しよ品ぽんを明あかす後ごを
以もつ難なんを作なすべからず」等とう云い云い、当とう世せの学がく者しや此この釈しやくを見みずして末まつ代だい

の愚人を以て南岳・天台の二聖に同ず誤りの中の誤りなり、妙樂
重ねて之を明して云く「問う若し爾らば若し事の塔及び色身の骨を
須いず亦須く事の戒を持つべからざるべし乃至事の僧を供養するこ
とを須いざるや」等云云、伝教大師の云く「二百五十戒
忽に捨て畢んぬ」唯教大師一人に限るに非ず鑿真の弟子・如宝・道
忠並びに七大寺等一同に捨て了んぬ、又教大師・未来を誡めて云く
「末法の中に持戒の者有らば是れ怪異なり市に虎有るが如し此れ誰
か信ず可き」云云。

問う汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せず唯題目許りを唱えしむ
るや、答えて曰く日本の二字に六十六国の人畜財を撰尽して一も
残さず月氏の兩字に豈七十七ヶ国無からんや、妙樂の云く「略して
経題を挙ぐるに玄に一部を収む」又云く「略して界如を挙ぐるに
具さに三千を撰す、文殊師利菩薩・阿難尊者・三会八年の間の仏語

これ之を挙げて妙法蓮華經と題し次下に領解して云く「如是我聞」と云。

問う其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱うるに解義の功德を具するや否や、答う小兒乳を含むに其の味を知らざれども自然に身を益す耆婆が妙藥誰か弁えて之を服せん水心無けれども火を消し火物を焼く豈覺有らんや竜樹・天台皆此の意なり重ねて示す可し。

問う何が故ぞ題目に万法を含むや、答う章安の云く「蓋し序王とは經の玄意を叙す玄意は文の心を述す文の心は迹本に過ぎたるは莫し」妙樂の云く「法華の文心を出して諸教の所以を弁ず」云云、濁水心無けれども月を得

て自ら清めり草木雨を得豈覺有つて花さくならんや妙法蓮華經の五字は經文に非ず其の義に非ず唯一部の意なるのみ、初心の行者

其の心を知らざれども而も之を行ずるに自然に意に当るなり。
問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称す
其の位如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人
に超過するのみに非ず將た又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・威・
宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり、請う國中の諸人・我
が末弟等を軽ずる事勿れ進んで過去を尋ぬれば八十万億劫に供養
せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや退いて未來を論ずれば八
十年の布施に超過して五十の功德を備う可し天子の襁褓に纏れ大
竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ、
妙樂の云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ
供養すること有る者は福十号に過ぐ」と、優陀延王は寶頭盧尊者
を蔑如して七年の内に身を喪失し相州は日蓮を流罪して百日の内
に兵乱に遇えり、經に云く「若し復是の經典を受持する者を見て

其の過悪を出さん若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人現世に
白癩の病を得ん乃至諸悪重病あるべし又云く「当に世世に眼無
かるべし」等云云、明心と円智とは現に白癩を得道阿弥は無眼の
者と成りぬ、国中の疫病は頭破七分なり罰を以て徳を推するに我
が門人等は福過十号疑い無き者なり。

夫れ人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りし以来桓武の御宇
に至るまで二十代二百余年の間六宗有りと雖も仏法未だ定らず、
爰に延暦年中に一りの聖人有つて此の国に出現せり所謂傳教
大師是なり、此の人先きより弘通する六宗を糾明し七寺を弟子
と為して終に叡山を建てて本寺と為し諸寺を取つて末寺と為す、
日本の仏法唯一門なり王法も二に非ず法定まり国清めり其の功を
論ぜば源已今当の文より出でたり其の後弘法・慈覚・智証の三
大師事を漢土に寄せて大日の三部は法華經に勝ると謂い剩さえ教

大師だいしの削くずる所の真言宗しんごんしゅうの宗しゅうの一字いちじ之これを副そえて八宗はつしゅうと云云、三人さんにん・一同いちどうに勅宣ちよくせんを申もう下くだして日本にほんに弘通くわつうし寺毎てらごとに法華經ほけきやうの義ぎを破やぶる是偏ひとえに已今当いこんとうの文ぶんを破やぶらんと為なして釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの大怨敵おんてきと成なりぬ、然しかして後ご・仏法漸ぶつぽうじやうく廃すたれれ王法次第しだいに衰おとろえ天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しょうはちまんくじゆうの久住くじゆうの守護神しゆごしんは力ちからを失うしない梵帝ぼんたい・四天してんは国くにを去すつて已すでに亡国ぼうこくと成ならんとす情有じやうららん人誰なげか傷やみ嗟なげかざらんや、所詮しよせん三大師だいしの邪法じゃほうの興おこる所ところは所謂いわゆる東寺とうじと叡山えいざんの総持院そうじいんと園城寺おんじやうじとの三所さんしよなり禁止きんしせずんば国土こくどの滅亡めつわうと衆生しゆじやうの悪道あくどうと疑うたがい無なき者ものか予粗此ほほの旨むねを勸かんえ国主こくしゆに示しすと雖いえども敢あえてて叙用じよゆう無なし悲あはむ可べし悲あはむ可べし。

四九

下山御消息しよせちめく

建治三年六月

五十六歳御代作

例時に於ては尤も阿弥陀経を読まる可きか等云云此の事は仰せ
 候はぬ已前より親父の代官といひ私の計と申し此の四五年が間は
 退転無し、例時には阿弥陀経を読み奉り候しが去年の春の末へ夏の
 始めより阿弥陀経を止めて一向に法華経の内・自我偈読誦し候又同
 くば一部を読み奉らむとはげみ候これ又偏に現当の御祈の為な
 り、但し阿弥陀経・念仏を止めて候事は此れ日比・日本国に聞へさせ
 給う日蓮聖人去る文永十一年の夏の比同じき甲州飯野・御牧・
 波木井の郷の内身延の嶺と申す深山に御隠居せさせ給い候へば、さ
 るべき人人・御法門承わる可きの由候へども御制止ありて入れられ
 ずおぼろげの強縁ならではかなひがたく候しに有人見参の候と申し
 候しかば信じまいらせ候はんれうには参り候はず、もの様をも見
 候はんために閑所より忍びて参り御庵室の後に隠れ人人の御不審

に付きてあらあら御法門ほうもんとかせ給たまい候い候き。

法華經と大日經・華嚴・般若・深密・楞伽・阿弥陀經等の經經の
勝劣・浅深等を先として説き給いしを承り候へば法華經と阿弥陀經
等の勝劣は一重二重のみならず天地雲泥に候けり、譬ば帝釈と
猿猴と鳳凰と烏鵲と大山と微塵と日月と螢炬等の高下勝劣なり、
彼彼の經文と法華經とを引き合せてたくらべさせ給いしかば愚人
も弁えつ可し白白なり赤赤なり、されば此の法門は大体人も知れ
り始めておどろくべきにあらず又仏法を修行する法は必ず經經
の大小・權實・顯密を弁うべき上よくよく時を知り機を鑑みて申す
べき事なり、而るに当世・日本国は人毎に阿みだ經並に弥陀の名号
等を本として法華經を忽諸し奉る世間に智者と仰がるる人人・我も
我も時機を知れり知れり
と存ぜられげに候へども小善を持て大善を打ち奉り權經を以て
實經を失ふとがは小善還つて大惡となる藥變じて毒となる親族

かえ 還つて怨敵と成るが如し難治の次第なり、又仏法には賢なる様なる
人なれども時に依り機に依り国に依り先後の弘通に依る事を弁へ
ざれば身心を苦めて修行すれども験なき事なり、設い一向に
小乗流布の国に

は大乗をば弘通する事はあれども一向大乘の国には小乗經を
あながちにいむ事なり・しめてこれを弘通すれば国もわづらひ人も
悪道まぬかれがたし、又初心の人には二法を並べて修行せしむる事
をゆるさず月氏の習いには一向小乗の寺の者は王路を行かず
一向大乘の僧は左右の路をふむ事なし井の水・河の水・同じく飲む
事なし何に況や一
房に栖みなんや、されば法華經に初心の一向大乘の寺を仏説き
給うに「但大乘經典を受持せんことを樂つて、乃至余經の一偈をも
受けざれ」又云く「又声聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に

親しんこん近じんせせざざれれ又い云わくく亦また問もん訊じんせせざざれれ等た云と云い、設たいい親しん父ふたたれれども一い向っこう
小しょう乘じょうのの寺じにに住じゆうすするる比ひ丘きゆう・比ひ丘きゆう尼にををばば一い向っこう大だい乘じょうのの寺じのの子し息そくここれれをを
礼らい拜はいせせずず親しん近こんせせずず何いかにに況いわわんんやや其し法ぽうをを修しゆ行ぎやうせせんんやや大だい小しょう兼けん行ぎやうのの寺じはは後ご
心こころのの菩ぼ薩さつななりり。

今いま・日に本ほん国こくはは最さい初しよにに仏ぶつ法ぽう渡わたりりてて候こうしし比ひ・大だい小しょう兼けん行ぎやうににてて候こうししがが人にん
王わう四し十じゆ五ご代だい聖せい武ぶ天てん皇わうのの御ぎ宇よにに唐たうのの揚やう州しゆう竜りゆう興きやう寺じのの鑑かん真しん和わ尚しやうとと申まをせせしし
人にん漢かん土どよよりり我あしたがが朝あしたにに法ほ華け經きやう・天てん台だい宗しゆうをを渡わたしし給たまいいてて有ありりししがが円えん機き
未み熟じゆくととややおおぼぼししけけんんのの法ほ門もんををばば

己心こしんに収めて口にも出だし給はず、大唐だいたうの終南山しゅうなんざんの豊徳寺ぶとくじの
道宣律師どうせんりつしの小乗戒しょうじょうかいを日本国にほんこくの三所さんじよに建立こんりゆうせり此これ偏ひとえに法華宗ほっけしゆうの
流布るぶすべき方便ほうべんなり、大乘出現だいじゆうしゆつげんの後には肩かたを並べて行ぜよとは
あらず例せば儒家じゆけの本師ほんしたる孔子こうし・老子等らうしの三聖さんせいは仏おんづかいの御使ごしとし
て漢土かんとに遣されて内典ないてんの初門じよもんに礼楽れいがくの文ぶんを諸人しよにんに教えたりき、止觀しかん
に経きやうを引いて云く「我三聖わさんせいを遣して彼の震旦しんたんを化す」等云云、妙樂みやうりやく
大師だいし云く「礼楽れいがく前に馳はせ真道しんどう後に啓ひらく」と云云、仏ぶつは大乗だいじゆうの初門じよもんに
且またらく小乗しょうじょう戒かいを説き給たまいしかども時ときすぎぬれば禁いましめて云く
涅槃經ねはんぎやうに云く「若し人有にやういつて如来にやうらいは無常むじやうなりと言のたまわん
云何いかんぞ是この人舌墮だらく落らくせざらん」と等云云、其その後人王ごうじん第五十代
桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎよいうに伝教大師でんぎやうだいしと申せし聖人しやうにん出現しゆうげんせり始めには華嚴けごん・
三論さんろん・法相ほつそう・俱舍くしゃ・成実じやうじつ・律りやくの六宗ろくしゆうを習ならひ極きわめ給たまうのみならず、達磨だるま・
宗そうの淵底えんていを探り究きわめ給たまひ剩あまつぎへいまだ日本国にほんこくに弘通くわつうせざる天台てんだい・真言しんごん

の二宗をも尋ね顕わして浅深勝劣を心中に究竟し給へり、
いぬるえんりやく

去延曆二十一年正月十九日に桓武皇帝・高雄山に行幸なり給い、
なんと なただいじ ちようじや ぜんぎ ごんそう

南都・七大寺の長者・善議・勤操等の十四人を教大師に召し合せて
ろくしゆう

六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに六宗の碩学宗宗毎に我
いちだいちょうか

宗は一代超過の由各各に立て申されしかども教大師
ばんじ わ おわ そ ころていかさ

の一言に万事破れ畢んぬ、其の後皇帝重ねて口宣す和氣弘世を
おんつかい かんせき なただいじ ろくしゆう せきがく

御使として諫責せられしかば七大寺・六宗の碩学一同に謝表を
たてまつ おわ がんりよう いまよりのちこととみょうえん

奉り畢んぬ、一十四人の表に云く「此界の含靈而今而後悉く妙円
の船に載り早く彼岸に済ることを得」云云、教大師云く「二百五十
たちま

戒忽ちに捨て畢んぬ」云云、又云く「正像稍過ぎ已つて末法ただ近
きに有り」又云く「一乗の家には都て権を用いず」又云く「穢食を
もつ

以て宝器に置くこと無し」又云く「仏世の大羅漢已に此の呵嘖を被
むれり滅後の小蚊虻何ぞ此れに随わざらん」云云、此れ又私の責め
めつこ もんもうなん こ

たがわ

らかんすで

かしやく

にはあらずほけきょう法華經には「正直しちうじきに方便ほうべん

を捨て但無むじゆうだう上道を説くねはんぎょう云云涅槃經には「邪見じゃけんの人に等云云、邪見じゃけん

方便ほうべんと申すは華嚴けごん・大日經だいにちきよう・般若經はんにはやきよう・阿彌陀經あみだ等の四十余年よんじゆうよねんの

經經ききょうなり、捨とは天台てんだいの云く「廢すてるなり」又云く「謗そむとは背そむくな

り「正直しちうじきの初心しんしんの行者ぎきうじやの法華經ほけきようを修行しゆぎきようする法は上にあ挙あぐるところ

の經經ききょう・宗宗そうそうを抛なげうつて一向いっこうに法華經ほけきようを行ほけきようずるが真しんの正直しちうじきの行者ぎきうじや

にては候なり、

しかを初心の行者深位の菩薩の様に彼彼の経と法華経とを並べて行ずれば不正直の者となる、世間の法にも賢人は二君に仕へず貞女は両夫に嫁がずと申す是なり、又私に異議を申すべきにあらず。

如来は未来を鑑みさせ給いて我が滅後・正法一千年・像法一千年・末法一万年が間我が法門を弘通すべき人人並に経経を一一にきりあてられて候、而るに此を背く人・世に出来せば設い智者賢王なりとも用うべからず、所謂我が滅後の次の日より正法五百年の間は一向小乗経を弘通すべし迦葉・阿難乃至富那奢等の十余人なり、後の五百年には権大乘経の内華嚴・方等深密・般若・大日経・觀經・阿みだ経等を弥勒菩薩・文殊師利菩薩・馬鳴菩薩・竜樹菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の四依の大菩薩等の大論師弘通すべしと云

云、此れ等の大論師は法華經の深義を^{しるしめ}知し食さざるに^{しかも}あらず然而
 法華經流布の時も^{ほけきようるふ}来らざる上^{しゃくそん}釈尊より^{おほ}も仰せ付けられざる大法
 なれば心には^{じつぎ}存じて口^{のべ}に宣べ給はず^{たま}。或時は^{ある}粗口^{ほほ}に轉る様なれども
 實義をば^{いっこう}一向に^{かく}隠して演べ給はず、^{そつほう}像法一千年の内に^{たま}入りぬれば
 月氏の^{がつし}仏法漸く^{ぶつほうようや}漢土^{かんど}・日本^{にほん}に^{わた}渡り来る^{せそん}世尊眼前^{がんぜん}に^{やくおうぼさつ}葉王菩薩等の迹
 化他方^{けた}の大菩薩^{ぼさつ}に^{ほけきよう}法華經の半分^{しゃくもん}・迹門^{じやくもん}十四品を^{ゆず}譲り給う、これは
 又
 地涌^{じゆ}の大菩薩^{ぼさつ}末法の^{まっぼう}初めに^{しゆつげん}出現せさせ給いて^{たま}本門^{ほんもん}寿量品^{じゆりようぼん}の^{かんじん}肝心た
 る南無^{なむ}妙法蓮華經^{みょうほうれんげきよう}の^{ごじ}五字を一^{えんぶだい}閻浮提^{いっさいしじよう}の^{とな}一切衆生^{いっさいしじゆ}に^{たま}唱えさせ給うべ
 き先序^{きせん}のためなり、^{いわゆる}所謂迹門^{しやくもん}弘通^{くわうつう}の衆^{なんがく}は南岳^{てんだい}・天台^{みょうたく}・妙楽^{でんぎよう}・伝教^{でんぎよう}等
 是なり、^{これ}今の時は^し世す^かでに^ぐ上行菩薩^{じやうぎやうぼさつ}等の^{しゆつげん}御出現^{みでん}の時^{じこく}剋^{あいた}に^あ相当^あれ
 り、^し而るに^か余愚眼^{ぐがん}を^{もつ}以て^{せんそつ}これを^{せんそつ}見るに^{せんそつ}先相^{せんそつ}す^{せんそつ}で^{せんそつ}に^{せんそつ}あらは^{せんそつ}れたるか、
 而るに^し諸宗^{しよしゆつしよえ}所依^{しよえ}の^{けこん}華嚴^{けこん}・大日^{だいにち}・阿^あみだ^{あみだ}経^{けい}等は^そ其^その^そ流布^{るふ}の時^ふを^ふ論^ふずれ

ば正法一千年の内、後の五百年乃至像法の始めの諍論の

経経なり、而るに人師等経経の浅深勝劣等に迷惑するのみな

らず仏の譲り状をもわすれ時機をも勘へず猥りに宗宗を構え像末

の行となせり、例せば白田に種を下だして玄冬に穀をもとめ下弦に

満月を期し夜中に日輪を尋ぬる如し、何に況や律宗なんど申す宗

は一向小乗なり月氏には正法一千年の前の五百年の小法又

日本国にては像法の中比・法華経・天台宗の流布すべき前に且らく

機を調養せむがためなり、例せば日出でんとて明星前に立ち雨

下ら

むとて雲先おこるが如し、日出雨下て後の星雲はなにかせん而るに
今は時過ぬ又末法に入りて之を修行せば重病に軽薬を授け大石
を小船に載するが如し修行せば身は苦く暇は入りて験なく華のみ
開きて菓なからん、故に教大師・像法の末に出現して法華經の
迹門の戒定慧の三が内・其中・円頓の戒壇を叡山に建立し給いし
時二百五十戒忽に捨て畢んぬ、随つて又鑑真の末の南都・七大寺の
一十四人・三百余人も加判して大乘の人となり一國挙つて小律儀
を捨て畢んぬ、其の授戒の書を見る可し分明なり。
而るを今邪智の持斎の法師等昔し捨てし小乗經を取り出して
一戒もたもたぬ名計りなる二百五十戒の法師原有つて公家・武家
を誑惑して国師とのしる刺我慢を発して大乘戒の人を破戒・
無戒とあなづる、例せば狗犬が師子を吠え猿猴が帝釈をあなづる
が如し、今の律宗の法師原は世間の人人には持戒実語の者の様には

見ゆれども其の實を論ぜば天下第一の大不實の者なり、其の故は

彼等が本文とする四分律・十誦律等の文は大小乗の中には一向

小乗・小乗の中にも最下の小律なり、在世には十二年の後方等

大乘へうつる程の且くのやすめ言滅後には正法の前の五百年は

一向小乗の寺なり此れ亦一向大乘の寺の毀謗となさんがためな

り、されば日本国には像法半に鑑真和尚大乘の手習とし給う教

大師彼の宗を破し給いて人をば天台宗へとりことし宗をば失うべ

しといへども後に事の由を知らしめんがために我が大乘の弟子を

遣してたすけをき給う、而るに今の学者等は此の由を知らずし

て六宗は本より破れずして有りとおもへり墓無し墓無し、又一類の

者等天台の才学を以て見れば我が律宗は幼弱なる故に漸漸に

梵網經へうつり結句は法華經の大戒を我が小律に盗み入れて還つて

円頓の行者を破戒無戒と咲へ

ば、こくしゅ国主はとうじ当時の形ぎょうみょう貌のたばら貴げなる気色にたばらかされ給たまいて
てんだいしゅう天台宗の寺に寄せたるでんぱた田畠等を奪い取つて彼等かれらにあたへばんみん万民は又
いっこうだいじょう一向大乘の寺のきえ帰依をなげう抛ちて彼の寺につつる、手づから火をつけざ
にほんれども日本一国のだいじょう大乘の寺をうしな焼き失ばつもくちゅうい抜目鳥にあらざれども
いっさいしゅじょう一切衆生のまなこ眼をしる抜きぬたま仏の記し給あらかんふ阿羅漢に似たるせんだいこれ闡提是なり、
ねはんぎょう涅槃經にいわ云く「我

涅槃の後・無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後
像法の中に於いて当に比丘有るべし、持律に似像し少く経を誦
し飲食を貪嗜して其の身を長養せん、乃至袈裟を服すと雖も猶
獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し
内には貪嫉を懷き唾法を受けたる婆羅門等の如く実に沙門に非ず
して沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん等云云、此の
經文に世尊未來を記し置き給う。抑釈尊は我等がためには
賢父たる上明師なり聖主なり、一身に三徳を備へ給へる仏の仏眼を
以て未來惡世を鑑み給いて記し置き給う記文に云く「我涅槃の後・
無量百歳と云云仏滅後・二千年已後と見へぬ、又「四道の聖人悉く
復涅槃せん」と云云、付法蔵の二十四人を指すか、「正法滅後」等云
云像末の世と聞えたり、当に比丘有るべし持律に似像し」等云云今
末法の代に比丘の似像を撰び出さば日本国には誰の人をか引き出

して大覺世尊をば不妄語の人とし奉るべき、俗男・俗女・比丘尼をば此の經文に載たる事なし但比丘計なり比丘は日本国に數を知らず、然るに其の中に三衣一鉢を身に帶せねば似像と定めがたし唯持齋の法師計相似たり一切の持齋の中には次下の文に持律とけり律宗より外は又脱ぬ、次下の文に「少し經を讀誦す」云云相州鎌倉の極樂寺の良觀房にあらざれば誰を指し出だし經文をたすけ奉るべき、次下の文に「猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷く」等云云両火房にあらざれば誰をか三衣一鉢の獵師伺猫として仏説を信ず可し、哀れなるかな当時の俗男・俗女・比丘尼等檀那等が山の鹿・家の鼠となりて獵師・猫に似たる両火房に伺われ・たばらかされて今生には守護国土の天照太神・正八幡等にすてられ他国の兵軍にやぶられて猫の鼠を捺え取るが如く獵師の鹿を射死が如し、俗男・武士

等は射伏・切伏られ俗女は捺え取られて他国へおもむかん王昭君・
楊貴妃が如くになりて後生には無間・大城に一人もなく趣くべし。
而るを余・此の事を見る故に彼が檀那等が大悪心をおそれず
強盛にせむる故に両火房・内内諸方に讒言を企てて余が口を
塞がんとはげみしなり、又経に云く「汝を供養する者は三悪道に
墮つ」等云云、在世の阿羅漢を供養せし人尚三悪道まぬかれがた
し、何に況や滅後の誑惑の小律の法師原をや、小戒の大科をばこれ
を以て知んぬ可し、或は又驢乳にも譬えたり還つて糞となる、或
は狗犬にも譬えたり大乘の人の糞を食す、或は猴・或はは
瓦礫と云云、然れば時を弁へず機をしらずして小乗戒を持たば
大乘の障となる、破れば又必ず悪果を招く其の上今の人人
小律の者どもは大乘戒を小乗戒に盗み入れ驢乳は牛乳を入れて
大乘の人をあざむく、大偷盗の者大謗法の者其のとがを論ずれば

提婆達多も肩を並べがたく瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の
大悪人なり帰依せん国土安穩なるべしや、余・此の事を見るに自身
だにも弁へなばさでこそあるべきに日本国に智者とおぼしき人人・
一人も知らず国すでにやぶれなんとす、其の上仏の諫曉を重んず
る上一分の慈悲に・もよをされて国に代りて身命を捨て申せども
国主等彼にたばらかされて用ゆる人・一人もなし譬へば熱鉄に冷水
を投げ睡眠の師子に手を触るが如し、爰に
両火房と申す法師あり身には三衣を皮の如くはなつ事なし、一鉢は
両眼をまほるが如し二百五十戒堅く持ち三千の威儀をととのへた
り、世間の無智の道俗国主よりはじめて万民にいたるまで地藏尊者
の伽羅陀山より出現せるか迦葉尊者の靈山より下来するかと疑
ふ、余・法華經の第五の巻の勸持品を拜見したてまつれば末代に入
りて法華經

の大怨敵おんてきさんるい三類さんるいあるべし其その第三だいさんの強敵じやうてきは此こゝの者かと見畢みおわんぬ、便宜びんぎあらば国敵こくてきをせめて彼かれれが大慢だいまんを倒たふして仏法ぶつぽうの威験いげんをあらはさんと思おもう処ところに両火房りやうぼう常に高座こうざにして歎なげいて云いわく「日本国にほんこくの僧尼そうにには二百五十戒にひゃくごじう・五百戒ごひゃく・男女なんよには五戒ごかい・八齋戒はっしやくかい等を一同いどうに持もたせんとおもうに、日蓮にちれんが此こゝの願ねがひの障さわりとなる」と云云、余案いわじて云いわく「現証げんしやうに付つて

事を切きらんと思おもう処ところに、彼常あめに雨あめを心こゝろに任まかせて下くだす由よし披露ひろうあり、
古いにしへへも又また雨あめを以もつて得失とくしつをあらはす例ためしこれ多おほし、所謂いわずゆるでんぎやうだいし傳でん教きやう大師だいしと
護命ごみやうと守敏しゆびんと弘法こうぼうと等ひらなり、此こゝに両火房りやうぼう上かみより祈雨きうの御ごいのりを
仰おほせ付つけられたりと云云、此こゝに両火房りやうぼう祈雨あめあり去いぬる文永ぶんえい八年はちねん六月りくごつ
十八日じゅうはちにちより二十四日にじゅうよんにちなり、此こゝに使つかを極樂寺ごくらくじへ遣つかす年来とこしよの御歎なげきこれ
なり」

七日が間に若一雨も下らば御弟子となりて二百五十戒具さに持た
ん上に、念仏・無間地獄と申す事ひがよみなりけりと申すべし余だ
にも歸伏し奉らば我弟子等をはじめて日本国大体かたぶき候なん
と云云、七日が間に三度の使をつかはす、然れどもいかんがしたり
けむ一雨も下らざるの上、頽風・風・旋風・暴風等の八風・十二時
にやむ事なし 剩一七日まで一雨も下らず風もやむ事なし、され
ば此の事は何事ぞ和泉式部と云いし色好み・能因法師と申せし無戒
の者・此は彼の両火房がいむところの三十一文字ぞかし、彼の月氏
の大盜賊南・無仏と称せしかば天頭を
得たり、彼の両火房並に諸僧等の二百五十戒・眞言・法華の小法・
大法の数百人の仏法の靈験いかなれば姪女等の誑言・大盜人が称仏
には劣らんとあやしき事なり、此れを以て彼等が大科をばしらるべ
きにさはなくして還つて讒言をもちゐらるるは実とはおぼへず所詮

日本国・亡国となるべき期来るか、又祈雨の事はたとひ雨下らせりとも雨の形貌を以て祈る者の賢不賢を知る事あり雨・種種なり・或は天雨・或は竜雨・或は修羅雨・或は雨・或は甘雨・或は雷雨

等あり、今の祈雨は都て一雨も下らざる上二七日が間前よりはるかに超過せる大旱魃・大悪風・十二時に止む事なし、両火房真の人ならば忽に邪見をもひるがへし跡をも山林にかくすべきに其の義なくして面を弟子・檀那等にさらす上 剩 讒言を企て日蓮が頸をきらせまいらせんと申し上・あづかる人の国まで状を申し下して種をたたんとする大悪人なり、而るを無智の檀那等は恃怙して現世には国をやぶり後生には無間地獄に堕ちなん事の不便さよ、起世経に云く「諸の衆生有りて放逸を為し清浄の行を汚す故に天雨を下さず」又云く「不如法あり慳貪・嫉妬・邪見・顛倒なる故に

天則ち雨を下さず、又経律異相に云く、「五事有て雨無し一二三之を略す四には雨師姪乱、五には国王理をもつて治めず雨師瞋る故に雨ふらずと云云、此等の経文の龜鏡をもて両火房が身に指し当て見よ少もくも

りなからん、一には名は持戒ときこゆれども実には放逸なるか二には慳貪なるか三には嫉妬なるか四には邪見なるか五には姪乱なるか此の五にはすぐべからず、又此の経は両火房一人には限るべからず昔をかがみ今を

もしれ、弘法大師の祈雨の時二七日の間・一雨も下らざりしもあやしき事なり、而るを誑惑の心強盛なりし人なれば天子の御祈雨の雨を盗み取て我が雨と云云、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵の祈雨の時も小雨は下たりしかども三師共に大風連連と吹いて勅使をつけてをはれしあさましさと、天台大師・伝教大師の須臾と三日が間に帝釈雨を下らして小風も吹かざりしもたとくぞおぼゆるおぼゆる。

法華經に云く、或は阿練若に納衣にして空閑に在りて、乃至利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如きもの有らんと又云く、常に大衆の中に在て我等を毀らんと欲するが故に国王大臣婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説き乃至惡鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せんと、又云く「濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らずして

悪口あつくして鬻ひんじゆく盛しげし数数しばしば擯ひん出いせられんと等と云い云い、涅槃ねはん經ぎよふに

云いく「一闡いつせん提だい有たいつて羅漢らかんの像なを作くし空処くうじよに住はうし方等ほうとう大乘だいじよ經典ぎよふてんを

誹謗ひぼうす諸もろもろの凡夫人ぼんぶ見あわ已おつて皆真みなの阿羅漢あらかん是これ大菩薩ぼさつなりと謂おもえり」

等云云と、今予ほけきよ法華經ほはんぎよと涅槃經ねはんぎよとの仏鏡ぶつくしゆをもつて当時とうじの日本國にほんこくを浮うべ

て其影しかげをみるに誰たれの僧そうか國主こくしゆに六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくたとまれて而しかも

法華經ほけきよの行者ぎよじやを讒言ざんげんして頸くをきらせんとせし、又またいづれの僧そうか万民ばんみん

に大菩薩ぼさつとあをがれたる、誰たれの智者ちしやか法華經ほけきよの故ゆえに度たび度たび処じよ処じよを追お

はれ頸くをきられ弟子でしを殺ころされ兩度りうどまで流罪るざいせられて

最後さいごに頸くに及およばんとせし、眼まなこ無なく耳みみ無なきの人は除まなこく眼まなこ有あり耳みみ有あら

ん人は經文きよもんを見聞けんもんせよ、今の人人ひとびとは人毎ひとごとに經文きよもんを我われもよむ我われも

信しんじたりといふ只ただにくむところは日蓮にちれん計けいなり經文きよもんを信しんずるならば

慥たしかにのせたる強敵かうてきを取とり出して經文きよもんを信しんじてよむしるしとせよ、若もし

爾しからずんば經文きよもんの如ごとく読誦どくじゆする日蓮にちれんをいかれるは經文きよもんをいかれ

るにあらざ

や仏の使をかるしむるなり、今の代の両火房ほうが法華經ほけきよつの第三だいさんの強敵かうてきとならずば釈尊しゃくそんは大妄語もうごの仏多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつは不実ふじつの証しやうみよう明みなり、又經文きやうもんまことならば御歸依ごきえの国主こくしゆは現在げんざいには守護しゆごの善神ぜんじんにすてられ国は他の有あとなり後生ごしやうには阿鼻地獄あびじこく疑ぎなし、而しかるに彼等かれらが大惡法だいくぼうを尊とうとまるる故ゆえに理不盡りふじんの政道しやうたう出来こす彼の国主こくしゆの僻見びやくけんの心こころを推すいするに日蓮にちれん

は阿弥陀仏あみだぶつの怨敵おんてき・父母ふぼの建立こんりゆうの堂塔どうとうの讎敵しゅつてきなれば仮令たとい政道せいどうをま
げたりとも仏意ぶつゐには背そむかじ天神てんじんもゆるし給たまうべしと・をもはるる
か、はかなしはかなし委細いさいにかたるべけれどこも此これは小事しょうじなれば
申もうさず心こころ有あらん者もの推おして知しんぬべし上に書あく挙あぐるより雲泥うんでい大事だいじなる
日本にほん第一だいいちの大科だいか此この国くにに出来しゅつたいして年とし久ひさくなる間ま、此この国くに既すでに梵釈ぼんしゃく
にちがつ 日月にちげつ・四天してん・大王だいうおう等の諸天しよてんにも捨すてられ守護しゆごの諸大善神しよだいぜんじんも還かえつて大
怨敵おんてきとなり法華經ほけきやう守護しゆごの梵帝ぼんたい等鄰国りんこくの聖人しやうにんに仰おほせ付けて日本にほんこくを
治罰ちばつし仏前ぶつぜんの誓状せいじやうを遂とげんとおぼしめす事ことあり。

(三五二)

頁)

夫それ正像しやうざうの古いにしへへは世濁世じよくせに入いるといへども始めはじめなりしかば国土こくど
さしも乱みだれず聖賢せいけんも間ま間ま出現しゆつげんし福徳ふくとくの王臣おうしんも絶たえざりしかば政道せいどう
も曲まぐる事ことなし万民ばんみんも直ちかりし故ゆゑに小科せうかを対治たいじせんがために
三皇さんかう・五帝ごてい・三王さんわう・三聖さんせい等出現しゆつげんして墳典ふんでんを作りて代いを治ちす、世よしば

らく治りたりしかども漸漸にすへになるままに聖賢も出現せず福徳の人もすくなければ三災は多大にして七難・先代に超過せしかば外典及びがたし、其の時治を代えて内典を用いて世を治す随つ

て世且くはおさまるされども又世末になるままに人の悪は日日に

增長し政道は月月に衰減するかの故に又三災・七難先よりいよいよ

增長して小乗戒等の力験なかりしかば其の時治をかへて小乗の

戒等を止めて大乘を用ゆ、大乘又叶わねば法華經の円頓の大戒壇

を叡山に建立して代を治めたり、所謂伝教大師・日本三所の

小乗戒並に華嚴・

三論・法相の三大乗戒を破失せし是なり、此の大師は六宗をせめ

落させ給うのみならず禅宗をも習い極め剩え日本国にいまだひろ

まらざりし法華宗・真言宗をも勸え出して勝劣鏡をかけ顕密の

差別黑白なり、然れども世間の疑を散じがたかりしかば去る

えんりやく

延暦年中に御入唐漢土の人人も他事には賢かりしかども法華經・

だいにちきよう てんだい

大日經・天台・

しんごん

真言の二宗の勝劣・浅深は分明に知らせ給はざりしかば、御歸朝

しんごん

の後・本の御存知の如く妙樂大師の記の十の不空三蔵の改悔の言

ごんごう

を含光がかたりしを引き載せて天台勝れ真言劣なる明証を依憑集

ごんごう

に定め給う剩え真言宗の宗の一字を削り給う、其の故は善無畏・

ごんごう

金剛智・不空の三人・一行阿闍梨をたばらかして本はなき大日經に

てんだい

天台の己証の一念

さんぜん ほうもん 三千の法門を盗み入れて人の珍宝を我が有とせる大誑惑の者なり
と心得給へり、例せば澄観法師が天台大師の十法成乗の観法を
華嚴に盗み入れて還つて天台宗を末教と下せしが如しと御存知あ
て宗の一字を削りて叡山は唯七宗たるべしと云云、而るを弘法大師
と申し天下第一の自讚毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後対論
なくして公家をかすめたてまつりて八宗と申し立てぬ、然れども
本師の跡を紹継する人人は叡山は唯七宗にてこそあるべき
に教大師の第三の弟子・慈覚大師と叡山第一の座主・義真和尚の末
弟子・智証大師と此の二人は漢土に渡り給いし時・日本国にて一国
の大事と諍論せし事なれば天台・真言の碩学等に値い給う毎に
勝劣・浅深を尋ね給う、然るに其の時の明匠等も或は真言宗
勝れ或は天台宗勝れ或は二宗齊等し或は理同事異といへども
俱に慥の証文をば出さず、

二宗の学者等併しながら胸臆の言なり然るに慈覚大師は学極めず
して帰朝して疏十四卷を作れり所謂金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經
の疏七卷なり此の疏の体たらくは法華經と大日經の三部經とは理
は同く事は異なり等云云、此の疏の心は大日經の疏と義釈との心
を出すがなを不審あきらめがたかりけるかの故に本尊の御前に疏
を指し

置いて此の疏仏意に叶へりやいなやと祈せいせし処に夢に日輪を射る
と云云、うちをどろきて吉夢なり真言勝れたる事疑なしと・おも
ひて宣旨を申し下す日本国に弘通せんとし給いしがほどなく疫病
やみて四ヶ月と申せしかば跡もなくうせ給いぬ、而るに智証大師は
慈覚の御為にも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し下し
給う所謂・
真言・法華齊等なり譬ば鳥の二の翼・人の両目の如し又叡山も

はっしゅう

八宗なるべしと云云、此の兩人は身は叡山の雲の上に臥すといへども心は東寺里中の塵にまじはる本師の遺跡を紹繼する様にて還つて聖人の正義を忽諸し給へり、法華經の於諸經中最在其上の上の字をうちかへして大日經の下に置き先づ大師の怨敵となるのみならず存外に釈迦・多宝・十方分身・大日如来等の諸仏の讎敵となり給う、されば慈覺大師の夢に日輪を射ると見しは是なり仏法の

大科此れよりはじまる日本国・亡国となるべき先兆なり、棟梁たる法華經既に大日經の椽杓となりぬ、王法も

げこくじよう
下剋上して王位も臣下に随うべかりしを其の時又一類の学者有り
て堅く此の法門を諍論せし上座主も両方を兼ねて事いまだきれ
ざりしかば世も忽にほろびず有りけるか、例せば外典に云く「大国
には諍臣七人・中国には五人・小国には三人諍論すれば仮令政道
に謬誤出来すれども国破れず乃至家に諫子あれば不義におち
ず」と申すが如し仏家も又是くの如し、天台・真言の勝劣・浅深事
きれざりしかば少少の災難は出来せしかども青天にも捨てられず
黄地にも犯されず一国の内の事にてありし程に人王七十七代・後白
河の法皇の御宇に当りて天台座主明雲・伝教大師
の止観院の法華経の三部を捨てて慈覚大師の總持院の大日経の三
部に付き給う、天台山は名計りにて真言の山になり法華経の所領
は大日経の地となる天台と真言と座主と大衆と敵対あるべき
序なり、国又王と臣と諍論して王は臣に随うべき序なり一国乱れ

て他国に破らるべき序なり、然れば明雲は義仲に殺されて院も清盛にしたがひられ給う、然れども公家も叡山も共に此の故としらずし

て世静ならずする程に災難次第に増長して人王八十二代

隱岐の法皇の御宇に至つて一災起れば二災起ると申して禅宗・

念仏宗起り合いぬ、善導房は法華経は末代には千中無一とかき、

法然は捨閉閣抛と云云、禅宗は法華経を失はんがために教外別伝

・不立文字とののしる、此の三の大悪法鼻を並べて一国に出現せし

が故に此の国すでに梵釈・二天・日月・四王に捨てられ奉り守護の

善神も還つて大怨敵とならせ給う然れば相伝の所従に責随えられ

て主上・上皇共に夷島に放たれ給い御返りなくしてむなしき島の

塵となり給う詮ずる所は実経の所領を奪い取りて権経たる真言

の知行となせし上・日本国の万民等・禅宗・念仏宗の悪法を用いし

故に天下第一・先代未聞の下剋上出来せり而るに相州は謗法の人

ならぬ上・文武きはめ尽せし人なれば天許し国主となす随つて世
且く静なりき、然而又先に王法を失いし真言漸く関東に落ち下る
存外に崇重せらるる故に鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧・禅僧・
念仏僧の檀那と成りて新寺を建立して旧寺を捨つる故に天神は眼
を瞋らして此の国を睨め地神は憤を含めて身を震ふ長星は一天
に覆ひ地震は四海を動かす余此等の災天に

おどろ 驚いて粗内典五千・七千・外典三千等を引き見るに先代にも希な
る天変地天なり、然而儒者の家には記せざれば知る事なし仏法は
自迷なればこころへず此の災天は常の政道の相違と世間の謬誤よ
り出来せるにあらざり定めて仏法より事起るかと勘へなしぬ、先ず
大地震に付て去る正嘉元年に書を一卷注したりしを故最明寺の
入道殿に奉る御尋ねもなく御用いもなかりしかば国主の御用いな
き法師なればあやまちたりとも科あらじとやおもひけん念仏者並
に檀那等又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし夜中に日蓮が
小庵に数千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかんがしたりけ
ん其の夜の害もまぬかれぬ、然れども心を合せたる事なれば寄せ
たる者も科なくて大事の政道を破る日蓮が未だ生きたる不思議な
りとして伊豆の国へ流しぬ、されば人のあまりに、にくきには我がほろ
ぶべきとがをも、かへりみざるか御式目をも破らるるか御起請文を

見るに梵釈・四天・天照太神・正八幡等を書きのせたてまつる、余存外の法門を申さば子細を弁えられずば日本国の御帰依の僧等に召し合せられて其れになを事ゆかずば漢土・月氏までも尋ねらるべし、其れに叶わずば子細ありなんとて且くまたるべし、子細も弁えぬ人人が身のほろぶべきを指をきて大事の起請を破らるる事心へられず。三五五頁

自讚には似たれども本文に任せて申す余は日本国の人人には上天子より下は万民にいたるまで三の故あり、一には父母なり二には師匠なり三には主君の御使なり、経に云く「即如來の使なり」と又云く「眼目なり」と又云く「日月なり」と章安大師の云く「彼が為に悪を除くは則ち是彼が親なり」等云云、而るに謗法一闡提・

國敵の

法師原が讒言を用いて其義を弁えず左右なく大事たる政道を曲げ

らるるは・わざとわざはひをまねかるるか墓はかな無し墓はかな無し、然しかるに事
しづまりぬれば科とがなき事は恥はずかしきかの故ゆえにほどなく召返されしか
ども故さいみよつじ最明寺じゆめいじの入道にゅうだう殿も又早くかくれさせ給たまいぬ、当御時おんときに成り
て或あるは身に疵きずをかふり、或あるは弟子でしを殺され、或あるは所所ところを追おれ、或あるは
やどをせめしかば一日片時かたときも地上ちじょうに栖すむべき便たよりりなし、是に付け
ても仏は一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしんと説き置き給たまう諸もろもろの菩薩ぼさつは

がふあいしんみようたんしゃくむじようどう

我不愛身命まか但惜無上道るざいと誓へり、加刀とうじよう杖瓦石数数見擯出がしゃくさくさくけんひんずいの文に

任せて流罪るざいせられ刀のさきにかかりなば法華經ほけきよう一部よみまいらせ

たるにこそと。おもひきりてわざと不輕菩薩ふぎようぼさつの如く覺徳比丘かくとくびくの様に

竜樹菩薩りゅうじゆぼさつ・提婆菩薩だいばぼさつ・仏陀密多ぶつだ・師子尊者ししそんじやの如く彌強盛いよいよじようじように申しは

る、今度このたび・法華經ほけきようの大怨敵おんてきを見て經文きようもんの如く父母ふぼ・師匠ししじよう・朝敵ちやうてき・

宿世すくせの敵ことの如く散散ことに責るならば定めて万人ばんにんもいかり国主こくしゆも讒言ざんげん

を収いれるて流罪るざいし頸およにも及ばんずらん、其時そのとき・仏前ぶつぜんにして誓状せいじようせし梵釈ぼんしゃく

にちがつ
・日月・

四天してんの願しゆゆゆをもはたさせたてまつり法華經ほけきようの行者ぎきやうじやをあだまんものを

須臾しゆゆゆものがさじと起請きしきようせしを身みにあてて心こころみん、釈尊しゃくそん・多宝たほう・十方じゆつぱう

分身ふんじんの諸仏しよぶつの或あるは共に宿むかし、或あるは衣おほを覆おほはれ、或あるは守護しゆごせんとねん

ごろに説たまかせ給たまいしをも実まことか虚言そらごころかと知しんじんつて信心しんじんをも増長ぞうちようせんと

退転たいてんなくはげみし程ほどに案いぬにたがはず去ぶんえいる文永八年九月十二日に

すべいちばん
都て一分の科もなくして佐土の国へ流罪せらる、外には遠流と聞え
しかども内には頸を切ると定めぬ余又兼て此の事を推せし
ゆえでし
故に弟子に向つて云く我が願既に遂ぬ悦び身に余れり人身は受けが
たくして破れやすし、過去遠遠劫より由なき事には失いしかども
ほけきよう
法華經のために命をすてたる事はなし、我頸を刎られて師子尊者が
絶えたる跡を継ぎ天台・伝教の功にも超へ付法蔵の二十五人に一
を加えて二十六人となり不輕菩薩の行にも越えて釈迦・多宝・十方
の諸仏に

いかがせんとなげかせまいらせんと思ひし故に言をもおしまず已前
にありし事後に有るべき事の様を平の金吾に申し含めぬ此の語し
げければ委細にはかかず。

抑も日本国の主となりて万事を心に任せ給へり何事も両方を
召し合せてこそ勝負を決し御成敗をなす人のいかなれば日蓮一人

に限つて諸僧等に召合せずして大科に行わゆるらん是れ偏にただ事
にあらざたとひ日蓮は大科の者なりとも国は安穩なるべからず、
御式目を見るに五十一箇条を立てて終りに起請文を書載せたり、
だいいち

第一 第二

は神事・仏事乃至五十一等云云、神事・仏事の肝要たる法華經を手
ににぎれる者を讒人等に召合せられずして彼等が申すままに頸に
及ぶ然れば他事の中にも此の起請文に相違する政道は有るらめど
も此れは第一の大事なり、

にちれん
日蓮がにくさに国をかへ身を失はんとせらるるか魯の哀公が忘事わすること
の第一だいいちなる事を記せらるるには移宅わたましに妻をわすると云云、孔子の
云く身をわする者あり国主と成りて政道を曲ぐるなり是云云、
将又国主は此の事を委細いさいには知らせ給はざるか、いかに知らせ給は
ずとのべらるとも法華經の大怨敵と成給いぬる重科じゅうかは脱のがるべし
や、多宝・十方の諸仏の御前おんまえにして教主釈尊の申す口として未代
とうせ
当世の事を説かせ給たまいしかば諸の菩薩記して云く「悪鬼其の
身に入つて我を罵詈毀辱せん、乃至数数擯出せられん」等云云、又
四仏釈尊の所説しよせつの最勝王經さいしやうおうきやうに云く「悪人に愛敬あいぎやうし善人を治罰ちばつす
るに由るが故ゆえに、乃至他方の怨賊来つて国人喪乱そうらんに遭わん」等云云、
たとい日蓮をば輕賤きやうせんせさせ給うとも教主釈尊の金言きんげん・多宝・十方
の諸仏の証しよぶつ明は空かるべからず一切の真言師・禅宗・念佛者等の
ほうほうの悪比丘あくびく

をば前より御歸依ありしかども其の大科を知らせ給はねば少し天
も許し善神もすてざりけるにや、而るを日蓮が出現して一切の人
を恐れず身命を捨てて指し申さば賢なる国主ならば子細を聞き
給うべきに聞きもせず用いられざるだにも不思議なるに剩へ頭に
及ばむとせし事は存外の次第なり、然れば大悪人を用いる大科
正法の大善人を耻辱する大罪・二悪・鼻を並べて此の国に出現せ
り、譬ば修羅を恭敬し日天を射奉るが如し故に前代未聞の大事
此の

国に起るなり、是又先例なきにあらず夏の桀王は竜蓬が頭を刎ね
殷の紂王は比干が胸をさき二世王は李斯を殺し優陀延王は寶頭盧
尊者を蔑如し檀弥羅王は師子尊者の頸をきる武王は慧遠法師と
諍論し憲宗王は白居易を遠流し徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印を
さす、此等は皆諫暁を用いざるのみならず還つて怨を成せし人人

現世げんせには国を亡し身を失うひ後生ごしょうには悪道あくどうに墮おつ是れ又人をあなづり讒言ざんげんを納いれて理を尽さざりし故なり、而しるに去いぬる文永十

一年二月に佐土の国より召返されて同四月の八日に平金吾たいめんに對面

して有りし時・理不りふじん尽の御勘氣ごかんきの由委細いさいに申もうし含めぬ、又恨うらむらく

は此の国すでに他国たこくに破われん事ことのあさましさよと歎なげき申せしかば

金吾わが云いわく何いつの比ころか大蒙古もうこは寄せ候べきと問いいしかば経文きょうもんには

分明ぶんみやうに年月ねんげつを指さしたる事はなけれども天あまの御氣色みけしきを拜見はいけんし奉たてまつるに

以もつ
以ての外もつに此

の国を睨みさせ給うか今年は一定寄せぬと覺ふ若し寄するならば
一人も面を向う者あるべからず此れ又天の責なり、日蓮をば
和殿原が用いぬ者なれば力及ばず、穴賢穴賢・真言師等に
調伏行わせ給うべからず若し行わするほどならいよいよ悪かるべ
き由申付けてさて歸りてありしに上下共に先の如く用いさりげに
有る上・本より存知

せり国恩を報ぜんがために三度までは諫曉すべし用いずば山林に
身を隠さんと・おもひしなり、又上古の本文にも三度のいさめ用い
ずば去れといふ本文にまかせて且く山中に罷り入りぬ、其の上は
国主の用い給はざらんこくしゅもちに其れ已下そに法門申して何かせん申したりと
も国もたすかるまじ人も又仏になるべしともおぼへず。

又念仏・無間地獄・阿弥陀経を読むべからずと申す事も私の言に
はあらず、夫れ弥陀念仏と申すは源と釈迦如来の五十余年の説法

の内、前四十余年の内の阿弥陀経等の三部経より出来せり、然れども如来の金言なれば定めて眞実にてこそあるらめと信ずる処に後八年の法華経の序分たる無量義経に仏・法華経を説かせ給はんために先づ四十余年の経経並に年紀等を具に数へあげて未顕眞実・乃至終不得成・無上菩提と若干の経経並に法門を唯一言に打ち消し給う事譬えば大水の小火をけし大風の衆の草木の露を落すが如し、然後に正宗の法華経の第一巻に至つて世尊法久後・要当説眞実又云く正直捨方便・但説無上道と説き給う譬へば闇夜に大月輪の出現し大塔立て後足代を切り捨つるが如し、然実義を定めて云く、「今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を爲す、復教詔すと雖も而も信受せず、乃至経を誦讀し書き持つこと有らん者を見て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん、

其の人 命終 して阿鼻獄に入らん、等云云、經文の次第普通の
性相の法には似ず常には五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定め
て候に此れはさにては候はず在世滅後の一切衆生・阿弥陀經等の
四十余年の經經を堅く執して法華經へうつらざらんとたとひ
法華經へ入るとも本執を捨てずして彼彼の經經を法華經に並て
修行せん人と又自執の經經を法華經に勝れたりといはん人と
法華經を

法の如く修行すとも法華經の行者を恥辱せん者と此れ等の諸人を指しつめて其人命終入阿鼻獄と定めさせ給いしなり、此の事はただ釈迦一仏の仰なりとも、外道にあらずば疑うべきにてはあらねども已今当の諸經の説に色をかへて重き事をあらはさんがために宝淨世界の多宝如来は自はるばる来給いて証人とならせ給う、釈迦如来の

先判たる大日經・阿弥陀經・念仏等を堅く執して後の法華經へ入らざらむ人人は入阿鼻獄は一定なりと証明し、又阿弥陀仏等の十方の諸仏は各々の国を捨てて靈山虚空会に詣で給い宝樹下に坐して広長舌を出し大梵天に付け給うこと無量無辺の虹の虚空に立ちたらんが如し、心は四十余年の中の觀經・阿弥陀經・悲華經等に法蔵比丘の諸菩薩・四十八願等を発して凡夫を九品の淨土へ来迎せんと説く事は且く法華經已前のやすめ言なり、實には彼

れ彼れの経経きんぎんぎんの文の如くごと十方西方への来迎らいいようはあるべからず実と
おもふことなかれ釈迦しゃか仏の今説ことき給うが如し実まことには釈迦しゃか・多宝たほう・
十方の諸仏しよぶつじゆりようほんの肝要かんようたる南無妙法蓮華經の五字ごじを信ぜしめ
んが為なりと出し給うたま広長舌こうちやうぜつなり、我等われらと釈迦しゃか仏とは同じ程の仏
なり釈迦しゃか仏は天月の如し我等われらは水中の影の月なり釈迦しゃか仏の本土ほんどは
実まことには娑婆世界しよばせかいなり天月てんげつ動き給はずたまば我等われらもうつるべからず此の
土に居住して法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを守護しゆごせん事・臣下しんかが主上しゆじやうを仰あおぎ
奉らたてまつん

が如くごと父母ふぼの一子を愛するが如くごとならんと出し給うたま舌なり、
そのときそこのときあみだぶつ
其の時阿弥陀仏あみだぶつの一二の弟子でし・観音かんのん・勢至等せいしは阿弥陀仏あみだぶつの塩梅あんばいなり
つばさつばささう
雙翼じゆうよくなり左右の臣しんなり両目の如しごと、然而しかして極樂世界ごくらくせかいよりはるばると
御供ごくうし奉りたてまつたりしが無量義經むりやうぎきやうの時・仏あみだの阿弥陀經等あみだの四十八願等しじゅうはちがんでんは
未顕みけん真實しんじつ・乃至ないし法華經ほけきやうにて一名阿弥陀あみだと名をあげて此等これらの法門ほうもんは

眞実しんじつならずと説とき

給たまいしかば実まこととも覺おぼへざりしに阿弥陀仏あみだぶつ正まさく来きりて合点がてんし給たまいし

をうち見てさては我等われらが念仏者等ねんぶつを九品の浄土じょうどへ来迎らいごうの蓮台れんだいと

合掌がっしょうの印いんとは虚むなしかりけりと聞定めてさては我等われらも本土ほんどに還かえりて

何かせんとて八万二万の菩薩ぼさつのうちに入り、或あるは觀音品かんのんに遊あそぶ

娑婆世界しゃばせかいと申もうして此の土の法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを守護しゆごせんとねんごろに

申もうせしかば、日本国にほんこくより近ちかき一閻浮提えんぶだいの内うち・南方なんぼう・補陀落山ふだらくさんと申もうす

小所しよかぶつを釈迦仏しやくかぶつより給たまいて宿所しゆくじよと定め給たまふ、阿弥陀仏あみだぶつは左右さうじやうの臣下しんか

たる観音・勢至に捨てられて西方世界へは還り給はず此の世界に
留りて法華經の行者を守護せんとありしかば此の世界の内・欲界
第四の兜率天・弥勒菩薩の所領の内・四十九院の一院を給いて
阿弥陀院と額を打つておはするとこそうけ給はれ、其の上阿弥陀經
には仏・舍利弗に対して凡夫の往生すべき様を説き給ふ、舍利弗・
舍利弗・又舍利弗

と二十余処までいくばくもなき經によび給いしかまびすしかりし
事ぞかし、然れども四紙の一巻が内すべて舍利弗等の諸声聞の
往生成仏を許さず法華經に來りてこそ始て華光如來・光明如來と
は記せられ給いしか一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら淨土の
三部經にて往生成仏の跡をけづる、まして末代の牛羊の如くなる
男女・彼彼

の經經にて生死を離れなんや、此の由を弁へざる末代の学者等並

に法華經を修行する初心の人人かたじけなく阿弥陀經を読み念仏
を申して、或は法華經に鼻を並べ、或は後に此れを読み法華經の
肝心とし功德を阿弥陀經等にあつらへて西方へ回向し往生せんと思
ふは譬へば飛竜が驢馬を乗物とし師子が野干をたのみたるか将又
日輪出現の後の衆星の光大雨の盛 時の小露なり、故に教大師
云く「白牛を賜う朝には三車を用いず、家業を得る夕に何ぞ
除糞を須いん」、故に經に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」
又云く「日出でぬれば星隠れ巧を見て拙を知る」と云云、法華經
出現の後は已今当の諸經の捨てらるる事は勿論なりたとひ修行
すとも法華經の所從にてこそあるべきに今の日本国の人人道 綽が
未有一人得者・善導が千中無一・慧心が往生要集の序・永觀が十
因・法然が

捨閉閣抛等を堅く信じて、或は法華經を抛ちて一向に念仏を申す

者もあり、或は念仏を本として助けに法華經を持つ者もあり。或は
彌陀念仏と法華經とを鼻を並べて左右に念じて二行と行ずる者も
あり。或は念仏と法華經と一法の二名なりと思いて行ずる者もあ
り、此れ等は皆教主釈尊の御屋敷の内に居して師主をば指し置き
奉りて阿彌陀堂を釈迦如來の御所領の内に国毎に郷毎に家家毎に
並べ立て。或は一万・二万。或は七万返。或は一生の間。一向に修行
して主師親をわすれたるだに不思議なるに、剩へ親父たる教主
釈尊の御誕生後入滅の両日を奪い取りて、十五日は

阿弥陀仏の日・八日は薬師・仏の日等云云、一仏誕生の両日を東西
二仏の死生の日となせり是豈に不孝の者にあらずや逆路七逆の者
にあらずや、人毎に此の重科有りてしかも人毎に我が身は科なしと
おもへり無慚無愧の一闡提人なり、法華經の第二の卷に主と親と師
との三大事を説き給へり一經の肝心ぞかし、其の經文に云く「今・
此の三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾が子なり、
而も今・此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す
と等云云、又此の經に背く者を文に説いて云く「復教詔すと雖も
而も信受せず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云、さ
れば念仏者が本師の導公は其中衆生の外か唯我一人の經文を破
りて千中無一といいし故に現身に狂人と成りて楊柳に登りて身を投
げ堅土に落ちて死にかねて十四日より二十七日まで十四日が間
顛倒狂死し畢んぬ、又真言宗の元祖善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空

さんぞう
三蔵等は親父を兼ねたる教主釈尊・法王を立下て大日

たぶつ
他仏をあがめし故に善無畏三蔵は閻魔王のせめにあづかるのみな

ら
らず又無間地獄に墮ちぬ、汝等・此の事疑あらば眼前に閻魔堂

の画を見よ、金剛智・不空の事はしげければかず、又禅宗の三階

信行禅師は法華経等の一代聖教をば別教と下だす我が作れる経

をば普経と崇重せし故に四依の如くなりしかども法華経の

持者の優婆夷にせめられてこえを失ひ現身に大蛇となり数十人の

弟子を呑み食う。

今・日本国の人人はたとひ法華経を持ち釈尊を釈尊と崇重し

奉るとも真言宗・禅宗・念仏者をあがむるならば無間地獄はまぬ

がれがたし、何に況や三宗の者共を日月の如く渴仰し我が身にも

念仏を事とせむ者をや心あらん人人は念仏・阿弥陀経等をば父母・

師君・宿世の敵よりもいむべきものなり、例せば逆臣が旗をば官兵

は指す事なし寒食の祭には火をいむぞかし、されば古への論師。
てんじん ぼさつ しょうじょうきょう けんじや きちぞう
天親菩薩は 小乘経を舌の上に置かじと誓ひ、賢者たりし吉蔵

だいし
大師

ほけきょう

は法華経をだに読み給はず、此等のもと小乘経を以て大乘経を

はしつ ほけきょう

破失し法華経を以て天台大師を毀謗し奉りし謗法の重罪を消滅

せんがためなり、今日本国の人人は一人もなく不輕輕毀の如く

くがん しょうい こと ばんにん みな
苦岸勝意等の如く一国万人皆

むげんじごく 無間地獄に墮つべき人人ぞかし、仏の涅槃經に記して末法には
ほけきようひぼう 法華經誹謗の者は大地微塵よりもおほかるべしと記し給いし是な
り、而に今法華經の行者出現せば一國万人、皆法華經の誦誦を
とどめて吉蔵大師の天台大師に隨うが如く身を肉橋となし不輕輕毀
の還つて不輕菩薩に信伏隨從せしが如く仕うるとも、一日・二日・
一月・二月・二年二年・一生二生が間には法華經誹謗の重罪は尚な
をし滅しがたかるべきに其の義はなくして当世の人人は四衆俱に一
慢

をおこせり、所謂念仏者は法華經を捨てて念仏を申す日蓮は
ほけきよう 法華經を持といへども念仏を持たず我等は念仏を持ち法華經をも
信ず戒をも持ち一切の善を行ず等云云、此等は野兔が跡を隠し
こんちちよう 金鳥が頭を穴に入れ、魯人が孔子をあなづり善星が仏ををどせ
しにことならず鹿馬迷いやすく鷹鳩変じがたき者なり、墓無し

墓無し、当時は予が古へ申せし事の漸く合かの故に心中には如何せ

んとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり悪口せし事が

忽に翻がたくて信ずる由をせず、而も蒙古はつよりゆく、如何

せんと宗盛・義朝が様になげくなり、あはれ人は

心はあるべきものかな孔子は九思一言・周公旦は浴する時は三度

にぎり食する時は三度吐給う賢人は此の如く用意をなすなり世間

の法にもはふにすぎばあやしめといふぞかし、国を治する人なん

どが人の申せばとて委細にも尋ねずして左右なく科に行はれしは

あはれくやしかるらん夏に夏の桀王が湯王に責められ呉王が越王に

生けどり

にせられし時は賢者の諫暁を用いざりし事を悔ひ阿闍世王が悪瘡

身に出で他国に襲はれし時は提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓い、

乃至宗盛がいくさにまけ義経に生けどられて鎌倉に下されて面をさ

らせし時は東大寺とうだいじを焼き払はらはせ山王さんのうの御輿たてまつを射奉りし事を歎なげきし
なり、今の世も又一いちぶん分もたがふべからず日蓮にちれんを賤いやしみ諸僧しよそうを貴たび
給たまう故ゆえに自然じねんに法華經ほけきようの強敵かうてきとなり給たまう事を弁わかまへず、政道せいどうに背そむき
て行いはるる間ま・梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天してん・竜王りゆうおう等らの大怨敵おんてきとなり給たまう、
法華經ほけきよう守護しゆごの釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱう分身ふんじんの諸仏しよぶつ・地涌じゆせん千界せんがい・迹化けた他方た・
二聖にじゆう・二天にてん・十羅刹女じゆつせつにょ・鬼子母神きしもじん・他国たこくの賢王けんおうの身みに入り代りて国主こくしゆ
を罰し国をほろぼさんとするを知らず、眞の天のせめにてだにも
あるならばたとひ鉄圍山てつちせんを日本にほん

国に引回し須弥山を蓋として十方世界の四天王を集めて波際に
立て並べてふせがするとも法華經の敵となり教主釈尊より大事な
行者を法華經の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち十巻共に引き
散して散散にふみたりし大禍は現当二世にのがれがたくこそ候はん
ずらめ日本守護の天照太神正八幡等もいかでかかかる国をばた
すけ給うべきいそぎいそぎ治罰を加えて自科を脱がれんとこそ
はげみ給うらめをそく科に行う間日本国の諸神ども四天王にい
ましめられてやあるらん知り難き事なり教大師云く「竊に以れば
菩薩は国の宝なること法華經に載せ大乘の利他は摩訶衍の説なり
弥天の七難は大乗經に非ずんば何を以てか除くことを為ん、未然
の大災は菩薩僧に非ずんば豈冥滅することを得んや」等云云、而る
を今大蒙古国を調伏する公家武家の日記を見るに、或は五大尊
或は七

仏薬師やくし・或は仏眼ぶつげん・或は金輪等云云ある、此れ等の小法は大災を消すべ

しや還著於本人げんちやくおほんにんと成りて国忽たちまちに亡びなんとす、或は日吉あるの社ひよしにし

て法華ほっけの護摩まもを行うといへども不空三蔵ぶくうさんぞうがあやまれる法を本として

行う間祈きとうの儀ぎにあらず、又今の高僧等こうそうは、或は東寺あるの真言しんごん・或は

天台てんだいの真言しんごんなり東寺とうじは弘法大師こうぼうだいし・天台てんだいは慈覚じかく・智証ちしょうなり、此の三人

は上に申もうすが如ごとく大謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、其れより已外いげの諸僧等しよそうは、或

は東大寺とうだいじの戒壇かいだんの小乗しょうじょうの者ものなり、叡山えいざんの円頓戒えんどんは又慈覚じかくの謗法ほうぼう

に曲まがげられぬ彼の円頓戒えんどんも迹門しやくもんの大戒だいかいなれば今の時の機きにあらず

旁かたがたかな叶かたがたかなうべき事ことにはあらず、只今ただ国土こくどやぶれなん後悔こうかいさきにたたじ

不便ふびん不便ふびんと語り給たまいしを千万せんまんが一ひとを書き付けて参まらせ候まう。

但ただし身みも下賤げせんに生なれ心こころも愚おろかに候まうへば此この事ことは道理どうりかとは承うけたり

候まうへども国主こくしゅも御用もちいなきかの故ゆえに鎌倉かまくらにては如何いかにが候まうけん不審ふしんに

覚おぼえ候まう、返かへす返かへすも愚意おろかに存ぞんじ候まうはこれ程ほどの国くにの大事だいじをば、いかに

御尋ねもなくして両度の御勘気には行はれけるやらんと聞食しほど
かせ給はぬ人人の。或は道理とも。或は僻事とも仰せあるべき事と
は覚え候はず、又此の身に阿弥陀経を読み候はぬも併ら御為父母
の為にて候、只理不尽に読むべき由を仰せを蒙り候はば其の時重ね
て申すべく候、いかにも聞食さずしてうしろの推義をなさん人人の
仰せをばたとひ身は随う様に候え

ども心は一向いっこうに用もちいまいらせ候まじ、又恐れにて候へども兼かねてつみ
しらせまいらせ候、此この御房ごぼうは唯ただ一人おはします若もしやの御事おんことの
候そうちはん時は御後悔ごうかいや候そうちはんずらん世間せけんの人人ひとびとの用もちいねばとは一旦いったん
のをろかの事かみなり上の御用かみあらん時は誰人だれびとか用もちいざるべきや、
其そのの時は又用もちいたりとも何かせん人を信じて法を信ぜず、又世間せけん
人人ひとびとの思おもいて候は親には子は是非ぜひに随したがうべしと君臣くんしん・師弟していも此かくの
如ごとしと此これ等は外典げてんをも弁わえず内典ないてんをも知らぬ人人ひとびとの邪推よこしまなり
外典げてんの孝經こうきやうには子父こふ・臣君しんきん争あらそうべき段もあり、内典ないてんには恩を棄すて
無む為いに入るは真実しんじつに恩を報ずる者なりと仏定め給たまいぬ、悉達しつた太子たいし
は閻浮第一えんぶだいいちの孝子こうしなり父の王の命を背そむきてこそ父母ふぼをば引導いんごうし
給たまいしか、比干ひかんが親父紂王しゆうわうを諫かんぎ暎ようして胸をほられてこそ賢人けんじんの名を
ば流せしか、賤いやみ給たまうとも小法師ほっしが諫かんぎ暎ようを用たまひ給たまはずば現当げんとうの御
歎なげきなるべし、此これは親の為ために読よみまいらせ候はぬ阿弥陀經あみだきやうにて候

へばいかにも当時は叶うべしとはおぼへ候はず、
恐恐申し上げ候。

建治三年六月日 僧 日永

下山兵庫五郎殿御返事
しもやま ごへんじ

五〇

本尊問答抄

弘安元年九月

五十七歳御作

与

淨顯房日仲

365P

問うて云く末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし、問うて云く何れの經文何れの人師の釈にか出でたるや、答う法華經の第四法師品に云く「薬王在在处处に若しは説き若しは読み若しは誦し若しは書き若しは經卷所住の処には皆応に七宝の塔を起てて極めて高広嚴飾なら令むべし復舍利を安んずることを須いじ所以は何ん此の中には已に如来の全身有す」等云云、涅槃經の第四如来性品に云く「復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に如来恭敬供養す法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり」云云、

てんだいだいし ほんけさんまい いわ 道場の中に於て好き高座を敷き
天台大師の法華三昧に云く、
法華經一部を安置し亦必ずしも 形像舍利並びに余の經典を安く
べからず 唯法華經一部を置けと等云云。

うたがい 疑つて云く 天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の御本尊は
あみだぶつ 阿彌陀仏なり、不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は釈迦・多宝を以て
ほけきよう 法華經の本尊とせり、汝何ぞ此等の義に相違するや、答えて云く
これら 是れ私の義にあらず上に出だすところの經文並びに天台大師の御
きようもんなら 釈なり、但し摩訶止觀の四種三昧の本尊は阿彌陀仏とは彼は常坐・
じようぎよう 常行・非行・非坐の三種の本尊は阿彌陀仏なり、文殊問經・般舟
ひぎよう ひざ 三昧經・請觀音經等による、是れ爾前の諸經の内・未顕真實の
さんまい 經なり、半行半坐三昧には二あり、一には方等經の七仏・八菩薩等
ほんぞん を本尊とす彼の經による、二には法華經の釈迦・多宝等を引き奉れ
ほつけさんまい ども法華三昧を以て案ずるに法華經を本尊とすべし、不空三蔵の

法華儀軌は宝塔品の文によれり、此れは法華經の教主を本尊とす
法華經の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方
の諸仏の御本尊法華經の行者の正意なり。

問うて云く日本国に十宗あり所謂俱舎・成実・律・法相・三論・
華嚴・真言・浄土・禅・法華宗なり、此の宗は皆本尊まちまちなり
所謂俱舎・成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり、法相・三論の二
宗は大釈迦仏を本尊とす華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦如来、
真言宗は大日如来、浄土宗は阿弥陀仏、禅宗にも釈迦を用いた
り、何ぞ天台宗に
ひとり法華經を本尊とするや、答う彼等は仏を本尊とするに是は經
を本尊とす其の義あるべし、問う其の義如何仏と經といづれか勝れ
たるや、答えて云く本尊とは勝れたるを用うべし、例せば儒家には
三皇・五帝を用いて本尊とするが如く仏家にも又釈迦を以て本尊と
すべし。

問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の
題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの經釈を見給へ私の

義にはあらず 釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり、末代今の日蓮も仏と天台との如く法華經を以て本尊とするなり、其の故は法華經は釈尊の父母・諸仏の眼目なり 釈迦大日・総じて十方の諸仏は法華經より出生し 給へり故に今能生を以て本尊とするなり、問う其証拠如何、答う普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり 十方三世の諸仏の眼目なり 三世の諸の如來を出生する種なり」等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり 諸仏は是に因つて五眼を具することを得たまえり 仏の三種の身は方等より生ず 是れ大法印にして涅槃海を印す 此の如き海中より能く三種の仏の清淨の身を生ず 此の三種の身は人天の福田 応供の中の最なり」等云云、此等の經文 仏は所生 法華經は能生 仏は身なり 法華經は神なり、然れば則ち木像・画像の開眼供養は唯法華經にかぎるべし

し 而るに今木画の二像をまうけて大日仏眼の印と真言とを以て開眼
供養をなすはもとも逆なり。

問うて云く法華経を本尊とすると大日如来を本尊とするといづ

れか勝るや、答う弘法大師・慈覚大師・智証大師の御義の如くなら

ば大日如来はすぐれ法華経は劣るなり、問う其の義如何、答う

弘法大師の秘蔵宝鑰 十住心に云く「第八法華・第九華嚴・第十

大日経」等云云是は浅きより深きに入る、慈覚大師の金剛頂経の

疏・蘇悉地経の疏

智証大師の大日經の旨歸等に云く「大日經第一・法華經第二」等

云云、問う汝が意如何、答う釈迦如来・多宝仏・総じて十方の

諸仏の御評定に云く已今当の一切經の中に法華最為第一なり云

云、問う今・日本国中の天台・真言等の諸僧並びに王臣万民疑つ

て云く日蓮法師めは弘法・慈覚・智証大師等に勝るべきか如何、答

う日蓮反詰して云く弘法・慈覚・智証大師等は釈迦・多宝・十方の

諸仏に勝るべきか是一、今日本の国王より民までも教主釈尊の御

子な

り釈尊の最後の御遺言に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、

法華第一と申すは法に依るなり、然るに三大師等に勝るべしやと

の給ふ諸僧・王臣・万民乃至所従牛馬等にいたるまで不孝の子にあ

らずや是二、問う弘法大師

は法華經を見給はずや、答う弘法大師も一切經を読み給へり、其の

中に法華經・華嚴經・大日經の浅深・勝劣

を読み給うに法華經を讀給う様に云く文殊師利・此の法華經は

諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の下に在り、又讀み

給う様に云く薬王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の

中に於て法華最第三云云、又慈覺・智証大師の讀み給う様に云く

諸經の中に於て最も其の中に在り又最為第一等云云、釈迦如来・

多宝仏・大日如来・一切の諸仏・法華經を一切經に相對して説いての

給はく法華最第一、又説いて云く法華最も其の上に在り云云、所詮

釈迦十方の諸仏と慈覺・弘法等の三大師といづれを本とすべきや、

但し事を日蓮によせて釈迦十方の諸仏には永く背きて三大師を本

とすべきか如何。

問う弘法大師は讃岐の国の人勤操僧正の弟子なり、三論・法相

の六宗を極む、去る延暦二十三年五月桓武天皇の勅宣を帯びて

かんど 漢土に入り順宗皇帝の勅に依りて青竜寺に入りて慧果和尚に
しんこん 真言の大法を相承し給へり慧果和尚は大日如来よりは七代になり
たま 給う人はかはれども法門はをなじ譬えば瓶の水を猶瓶にうつすが
ごとし、大日如来と金剛薩・竜猛・竜智・金剛智・不空・慧果・
こうぼう 弘法との瓶は異なれども所伝の智水は同じ真言なり此の大師・彼の
しんこん 真言を習いて三千の波濤をわたりて日本国に付き給うに平城・嵯峨
じゅんな 淳和の三帝にさづけ奉る、去る弘仁十四年正月

十九日に東寺を建立すべき勅を給いて真言の秘法を弘通し給う
然らば五畿・七道・六十六箇国・二の島にいたるまでも鈴をとり杵
をにぎる人たれかこの末流にあらざるや。

又慈覚大師は下野の国の人・広智菩薩の弟子なり、大同三年御歳
十五にして伝教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年の間
六宗を習い法華・真言の二宗を習い伝え承和五年御入唐・漢土の
会昌天子の御宇なり、法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台
・真言の碩学に値い奉りて顕密の二道を習い極め給う、其の上殊に
真言の秘教は十年の間功を尽し給う大日如来よりは九代なり嘉祥
元年仁明天皇の御師なり、仁寿・斉衡に金剛頂経・蘇悉地経の二
経の疏を造り叡山に総持院を建立して第三の座主となり給う天台
の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐の国の人天長四年御年十四・叡山に登り義真

和尚の御弟子となり給う、日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習い伝え去る仁寿元年に文徳天皇の勅を給いて漢土に入り宣宗皇帝の大中年中に法全良和尚等の諸大師に七年の間顕密の二教習い極め給いて去る天安二年に御帰朝・文徳・清和等の皇帝の御師なり、何れも現の為当の為月の如く日の如く代代の明主・時時の臣民・信仰余り有り帰依怠り無し故に愚癡の一切偏に信ずるばかりなり誠に法に依つて人に依らざれの金言を背かざるの外は争か仏によらずして弘法等の人によるべきや、所詮其の心如何、答う夫れ教主釈尊の御入滅一千年の間月氏に弘法の弘通せし次第は先五百年は小乗後の五百年は大乗・小大・権実の争はありしかども顕密の定めはかすかなりき、像法に入りて十五年と申せしに漢土に仏法渡る始は儒道と釈教と争論して定めがたかりきされども仏法やうやく弘通せしかば小大・権実

の諍論じやうろんいできたる、されどもいたくそつの相違さういもなかりしに、漢土かんどに
ぶつぼつほうほうわたわたららるるてて六ろく百ひゃく年ねん・玄宗げんそう皇帝こうていの御宇ぎよう・善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくうの三三さんさん蔵ざう
ががつつしし・月氏げつしより入り給たまいて後真言宗しんごんしゆうを立てしかば、華嚴けごん・法華ほっけ等の諸宗しよしゆう
ももつつは以ての外がわいにくだされき上かみ一人いちにん自り下万民ばんみんに至いたるまで真言しんごんには
ほほけけききようようはは雲泥うんでいなりと思おもいしなり、其その後ご・徳宗とくそう皇帝こうていの御宇ぎように妙樂みょうらく
だいだいしし大師だいしと申もうす人にん

真言しんごんは法華經ほけきょうにあながちに・をとりたりとおぼしめししかども、いたく立てる事もなかりしかば法華ほっけ・真言しんごんの勝劣しょうれつを弁わえる人なし。

日本国にほんこくは人王じんおう三十代さんじゅうだい欽明きんめいの御時おんとき・百济国ひゃくせいこくより仏法ぶつぽう始めて渡りた

りしかども始はは神かみと仏ぶつとの諍論じょうろんこわくして三十余年さんじゅうねんはずぎにき、

三十四代さんじゅうしだい推古天皇すいこてんのうの御宇ぎように聖徳太子しょうとくたいし始めてはじめて仏法ぶつぽうを弘通くわつうし給たまう慧觀えいがん

觀勒かんろくの二ふたの上人じょうにん百济国ひゃくせいこくよりわたりて三論宗さんろんしゅうを弘ひろめ、孝徳きょうとくの御宇ぎように

道昭だうしやう・禅宗ぜんしゅうをわたす文武ぶんぶの御宇ぎように新羅国しんらこくの智鳳ちほう・法相宗ほうそうしゅうをわたす

第四十四代だいじゅうしじだい元正天皇げんてんのうの御宇ぎように善無畏ぜんむい三蔵さんざう・大日經だいにちぎきょうをわたす然しかる而に

弘ひろまらず、聖武しょうむの御宇ぎように審祥しんじやう大徳だいとく・朗弁らうべん僧正そうじやう等らう・華嚴宗けこんしゅうをわた

す人王じんおう四十六代しじゅうろくだい孝謙天皇きうけんてんのうの御宇ぎように唐代たうたいの鑒真和尚がんじんわじやう・律宗りつしゅうと法華經ほけきょう

をわたす律りつをばひろめ法華ほっけをば弘ひろめず、第五十代だいごじゅうだい桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎよう

に延暦えんりやく二十三年にじゅうさんねん七月しちがつ伝教大師でんきやうだいしちやくせん勅宣たふまいを給たまいて漢土かんとに渡りわた妙楽みょうらく大師だいし

の御弟子おんでし・道邃どうずい・行滿ぎやうまんに値あい奉たてまつりて法華宗ほっけしゅうの定慧ていゑを伝え道宣律師どうせんりつしに

菩薩戒を伝え順 暁和尚と申せし人に真言の秘教を習い伝えて
日本国に帰り給いて、真言・法華の勝劣は漢土の師のおしへに依り
ては定め難しと思食しければ、ここに於て大日経と法華経と彼の釈
と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ給いしに大日経は法華経に劣
りたるのみならず大日経の疏は天台の心をとりに我が宗に入れた
りけりと勘え給へり。

其の後弘法大師・真言経を下されける事を遺恨とや思食しけむ
真言宗を立てんとたばかりて法華経は大日経に劣るのみならず
華嚴経に劣れりと云云、あはれ慈覚・智証・叡山・園城にこの義を
ゆるさずば弘法大師の僻見は日本国にひろまらざらまし、彼の両
大師・華嚴・法華の勝劣をばゆるさねど法華・真言の勝劣をば永く
弘法大師に

同心せしかば存外に本の伝教大師の大怨敵となる、其の後日本国

の諸しよ碩せき徳とく等各ちえ智慧ちえ高く有あるなれども彼の三だい大師だいしにこえざれば今四
百余年の間日本にほん一同いっとうに真言しんごんは法華ほけきよう經きやうに勝すぐれけりと定め畢おわんぬ。た
またま天台てんだい宗しゆうを習しゆへる人人ひとびとも真言しんごんは法華ほつげに及およばざるの由存しゆぜども
天台てんだいの座主ざす・御室おむろ等の高貴こうきにおそれ申もうす事ことなし。あるは又そ其その義ぎ
をもわきまへぬ

かのゆへにからくして同の義をいへば一向・真言師はさる事おもひも
よらずとわらふなり。

然らば日本國中に数十万の寺社あり皆真言宗なりたまたま
法華宗を並ぶとも真言は主の如く法華は所従の如くなり若しくは
兼学の人も心中は一同に真言なり、座主・長吏・檢校・別當・一向に
真言たるうへ上に好むところ下皆したがふ事なれば一人ももれず
真言師なり、されば日本國・或は口には法華經最第一とはよめども
心は最第二・最第三なり、或は身口意共に最第二三なり、三業相應
して最第一と読める法華經の行者は四百余年が間・一人もなしま
して能持此經の行者はあるべしともおぼへず、如來現在・猶多怨嫉・
況滅度後の衆生は上一人より下万民にいたるまで法華經の大怨敵
なり。

然るに日蓮は東海道十五箇國の内第十二に相當る安房の國長狹

の郡・東条の郷・片海の海人が子なり、生年十二同じき郷の内・
清澄寺と申す山にまかり登り住しき、遠国なるうへ寺とはなづけて
候へども修学の人なし然而随分諸国を修行して学問し候いしほど
に我が身は不肖なり人はおしへず十宗の元起勝劣たやすくわきま
へがたきところに、たまたま仏菩薩に祈請して一切の経論を勸て
十宗に合せたるに俱舎宗は浅近なれども一分は小乗経に相当す
るに似たり、成実宗は大小兼雜して謬あり律宗は本は小乗
中比は権大乘・今は一向に大乘宗とおもへ
り又伝教大師の律宗あり別に習う事なり、法相宗は源
権大乘経の中の浅近の法門にてありけるが次第に增長して権実
と並び結句は彼の宗宗を打ち破らんと存ぜり譬えば日本国の將軍
將門・純友等のごとし下に居て上を破る、三論宗も又権大乘の空
の一分なり此れも我は実大乘とおもへり、華嚴宗は又権大乘と云

ひながら余宗にまされりよしゅう

たとたと譬えば摂政せつしやう関白かんぱくのごとししかるに然而ほけきやう法華經ほけきやうを敵となして立てる宗なる

ゆえゆえ故に臣下しんかの身を以て大王もつに順だいおうぜんとするがごとし、浄土宗じやうどししゅうと申もうす

もも権大乘こんだいじやうの一分いちぶんなれども善導ぜんどう・法然ほうねんがたばかりかしこくして諸經しよきやう

をばを上げかんきやう觀經くわんきやうをば下くだし正像しやうぞうの機きをば上げまっぼう末法の機まっぼうをば下くだして

末法まっぼうの機きに相叶あひあはえる念仏ねんぶつを取り出してし機きを以てもつ經きを打ちいちだい一代いちだいの

聖教しやうきやうを失うしないて念仏ねんぶつ

の一門いちもんを立てたり譬たとえば心かしくして身みは卑いやしき者が身みを上げて
心こころはかなきものを敬けんじんいて賢人けんじんをうしなふがごとし、いちだいししよきよつ 禅宗ぜんしゆつと申もうすは
一代いちだい 聖教せいぎやうの外ほかに真実しんじつの法ほふ有りと云云たつ譬たとえばををやを殺ころして子こを用もちい
主しゆを殺ころせる所しよじゆつ従じゆのしかも其その位ゐにつけるがごとし、しんこんしゆつ 真言宗しんごんしゆつと申もうす
は一向いっごうに大妄語たうぼうごにて候まうごが深く其その根源こんげんをかくして候まうごへば浅機あさきの人ひとあ
らはしがたし一向いっごうに誑惑おほわくせられて数年ねんを経て候まうご先へず天竺てんじくに真言宗しんごんしゆつ
と申もうす宗しゆなし然しかれども有りと云云たつ、其その証拠しやうこを尋たずぬ可べき
なり所詮しよせん大日經だいにかきよつここにわたれり法華經ほふけきよつに引き向まうけて其その勝劣しやうれつを見
候まうご処ところに大日經だいにかきよつは法華經ほふけきよつより七重下劣げれつの經きやうなり証拠しやうこ彼の經きやう・此この經きやう
に分明ぶんめいなり此こに之これを引ひかずしかるを・或あるは云いく法華經ほふけきよつに三重しゆくの主君しゆくん・或ある
は二重しゆくの主君しゆくんなりと云云たつ以もての外ほかの大僻見びやくけんなり、譬たとえば劉聰りゆうそうが下劣げれつ
の身みとして愍帝びんていに馬うまの口くちをとらせ超こ高たかが民たみの身みとして横よこに帝位ていゐにつ
きしがごとし又また彼の天竺てんじくの大慢婆羅門だいまんばらもんが釈尊しやくそんを床しやうとして坐ませしが

ごとし漢土にも知る人なく日本にもあやしめずしてすでに四百余年をおくれり。

是くの如く仏法の邪正乱れしかば王法も漸く尽きぬ結句は此の

国・他国にやぶられて亡国となるべきなり、此の事日蓮独り勘え知

れる故に仏法のため王法のため諸経の要文を集めて一卷の書を造

る仍つて故最明寺入道殿に奉る立正安国論と名けき、其の書にく

はしく申したれども愚人は知り難し、所詮現証を引いて申すべし

抑人王八十二代隱岐の法王と申す王有き去ぬる承久三年太

歳辛巳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まします鎌倉の義時を

うち給はむとの門出なり、やがて五畿・七道の兵を召して相州

鎌倉の権の太夫義時を打ち給はんとし給う

ところに還りて義時にまけ給いぬ、結句我が身は隱岐の国にながさ

れ太子二人は佐渡の国・阿波の国にながされ給う公卿七人は忽に

頸をはねられてき、これはいかにとしてまけ給いけるぞ国王の身と
して民の如くなる義時を打ち給はんは鷹の雉をとり猫の鼠を食む
にてこそあるべけれこれは猫のねずみにくらはれ鷹の雉にとられた
るやうなり、しかのみならず調伏力を尽せり所謂天台の座主・慈円
僧正・真言の長者・仁和寺の御室・園城寺の長吏・総じ

て七なな大だい寺じ・十五じゅうご大だい寺じ・智慧ちえ戒かい行ぎょうは日にち月がつの如ごとく、秘ひ法ほうは弘こう法ぼう・慈じ覺かく等らの三だい大だい師しの心しん中ちゆうの深じん密みつのだい法ほう・十五じゅうご壇だんの秘ひ法ほうなり、五ご月げつ十九じゅうきゅう日にちよ
り六ろく月げつの十四じゅうし日にちにいたるまであせをながしなづきをくだきて行いき
最さい後ごには御おむろ室むろ・紫し宸しん殿でんにして日に本ほん国こくにわたりていまだ三さん度たまでも行いき
はぬだい法ほう・六ろく月げつ八はち日にち始はじめて之これを行いう程ほどに、同どうじき十四じゅうし日にちに關かん東とうの兵へい
軍ぐん・宇う治ぢ勢せい多たをおしわたして洛らく陽やうに打うち入いりて三さん院いんを生なけ取とり奉たてり
て九ここの重えに火ひを放はなちて一いち時じに焼しょう失しつす、三さん院いんをば三さん国こくへ
流る罪ざいし奉たてりぬ又また公く卿きやう七しち人にんは忽たちち頸かみをきる、しかのみならず御おむろ室むろの
御ご所しよに押おしし入いりて最さい愛あいの弟でし子しの小しょう兒に勢せい多た伽かと申まをせしをせめいだして
終ついに頸かみをきりにき御おむろ室むろ思おもいに堪たえずして死しに給たまい畢おわんぬ母ははも死しす童どう
も死しす、すべて此こゝのいいのりをたのみし人ひといく千せん万まんといふ事ことをしらず
死しにきたまたままいきたるもかひなし、御おむろ室むろ祈いのりを始はじめ給たまいし六ろく月げつ八はち
日にち

より同じき十四日までなかをかぞふれば七日に満じける日なり、此の十五壇の法と申すは一字金輪・四天王・不動大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼六字・金剛童子・尊星王・太元守護経等の大法なり此の法の詮は国敵王敵となる者を降伏して命を召し取りて其の魂を密蔵浄土へつかはすと云う法なり、其の行者の人人も又軽からず天台の座主・慈円東寺御室三井の常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百余人なり云云、法と云ひ行者と云ひ又代も上代なりいかにとしてまけ給いけるぞたとひかつ事こそなくとも即時にまけおはりて・かかるはぢにあひたりける事、いかなるゆへといふ事を余人いまだしらず、国主として民を討たん事・鷹の鳥をとらながとし・たとひまけ給うとも一年・二年十年二十年もささうべきぞかし五月十五日におこりて六月十四日にまけ給いぬわづかに三十余日なり、権の大夫殿は此の事を兼てしらねば祈もなし

まへもなし。

然しかるに而に日蓮小智を以て勘もえたるに其そのの故あり所謂彼の真言しんごんの邪法じゃほう
の故なり僻事ひがごとは一人なれども万国のわづらひなり一人として行ず
とも一國・二國やぶれぬべし況いやわんやや三百余人をや国主こくしゅとともに法華經ほけきょう
の大怨敵おんてきとなりぬいかでかほろびざらん、かかる大悪法だいくほうとしをへて
やうやく関東かんとくにおち下りて諸堂しよどうの別当供僧べつどうくそうとなり連連と行えり本
より辺域へんいき

の武士ぶしなれば教法ききほうの邪正じやせいをば知らずただ三宝さんぼうをばあがむべき事とばかり思ふゆへに自然じねんとしてこれを用もちいきたりてやうやく年数を経る程たこくに今他国のせめをかうふりて此の国すでにほろびなんとす、
関東かんとう八箇国のみならず叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじょう・七寺等の座主ざす・別当べつとう・皆みな関東かんとうの御おんはからひとなりぬるゆへに隱岐おきの法皇ほうこうのごとく大悪法だいあくほうの檀那だんなと成なりまり給たまいぬるなり、国主こくしゅとなる事は大小皆だいしやうみな・梵王ほんのう・帝釈たいしやくにちがつしてんおんはから
・日月にちがつ・四天してんの御計おんはからいなり、法華經ほけきやうの怨敵おんてきとなり定まり給たまはば忽たちまちに治罰ちばつすべきよしを誓ちかい給たまへり、随したがつて人王いちだい八十一代安徳天皇てんのうに太政入道にゆうどうの一門いちもん与力よりきして兵衛佐頼朝ひやうえのすけよりともを調伏じょうぶくせんがために、叡山えいざんを氏寺さんと定め山王さんを氏神しんとたのみしかども安徳は西海に沈み明雲は義仲いちもんに殺ころさる一門いちもん皆みな一時いちじにほろび畢おわんぬ、第二度このたびなり今度は第三度このたびにあたるなり。

日蓮にちれんがいさめを御用もちいなくて真言しんごんの悪法あくほうを以もつて大蒙古もうこを調伏じょうぶくせら

れば日本国還つて調伏せられなむ還著於本人と説けりと申すなり、然らば則ち罰を以て利生を思うに法華經にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり現世の祈は兵衛佐殿・法華經を讀誦する現証なり。

此の道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば父母はすでに過去し給い畢んぬ、故道善御房は師匠にて・おはしまししかども法華經の故に地頭におそれ給いて心中には不便とおぼしつらめども外にはかたきのやうにくみ給いぬ、後にはすこし信じ給いたるやうにきこへしかども臨終にはいかにやおはしけむおぼつかなし地獄までは

よもおはせじ又生死をはなるる事はあるべしともおぼへず中有にやただよひましますらむとなげかし、貴辺は地頭のいかりし時・義城房とともに清澄寺を出でておはせし人なれば何となくともこれを

法華經の御奉公とおぼしめして生死をはなれさせ給うべし。

此の御本尊は世尊説きおかせ給いて後二千二百三十余年が間・一
閻浮提の内^{えんぶだい}にいまだひろめたる人候はず、漢土^{かんど}の天台日本^{てんだいにほん}の伝教^{でんぎょう}
ほぼしろしめしていささかひろめさせ給はず当時こそひろまらせ
給うべき時にあたりて候へ

經には上行じよみじやう・無辺行等むへんぎやうこそ出でてひろめさせ給たまうべしと見へて候へどもいまだ見へさせ給はず、日蓮にちれんは其その人に候はねどもほぼこころえて候へば地涌じゆの菩薩ぼさつの出いでさせ給たまうまでの口ずさみにあらあら申もうして況滅度後きやうめつたごのほこさきに当り候なり、願わくは此の功德くどくを以てもつ父母ふぼと師匠ししやうと一切衆生いっさいしゆじやうに回向えこうし奉たてまつらんと祈請きしやう仕り候、其その旨むねをしらせまいらせむがために御不審ふしんを書きおくりまいらせ候に他事たじをすてて此の御本尊ごほんぞんの御前おんまえにして一向いっこうに後世ごしやうをもいのらせ給たまい候へ又これより申もうさんと存じ候、いかにも御房ごぼうたちはからい申もうさせ給たまへ。

日蓮にちれん

花押かおう

五一

諸宗問答抄

けんちよう

建長七年

三十四歳御作与

三位房日行

375P

問うて云く抑法華宗の法門は天台・妙楽・伝教等の御釈をば
御用い候や如何、答て云く最も此の御釈共を明鏡の助証として立
て申す法門にて候、問て云く何を明鏡として立てられ候ぞや彼の御
釈共には爾前権教を簡び捨てらる事候はず、随つて初後仏慧・円頓
或は・義斉とも・或は此妙彼妙・妙義殊なること無しとも釈せられ
て華嚴と法華との仏慧同じ仏慧にて異なること無しと釈せられ候、
通教・別教の仏慧も法華と同じと見えて候何を以て偏に法華勝れ
たりとは仰せられ候や意得ず候如何、答て云く天台の御釈を引か
れ候は定て天台宗にて御坐候らん、然る

に天台の御釈には教道・証道とて二筋を以て六十巻を造られて候、
教道は即教相の法門にて候証道は即内証の悟の方にて候、只今引
れ候釈の文共は教証の二道の中には何れの文と御得意候て引かれ
候ぞや、若し教門の御釈にて候わば教相には三種の教相を立て
爾前・法華を釈して勝劣を判ぜられ候、先づ三種の教相と申すは
何にて候ぞやと之を尋ぬ可し、若し三種の教相と申すは一には
根性の融不融の相・二には化導の始終不始終の相・三には師弟の
遠近不遠近の相なりと答へばさては只今引かれ候、御釈は何れの
教相の下にて引かれ候やと尋ぬ可きなり、若し根性の融不融の下
にて釈せらると答へば又押し返して問う可し根性の融不融の下に
は約教・約部とて一の法門あり何れぞと尋ぬ可し、若し約教の下と
答へば又問う可し約教・約部に付いて与奪の二の釈候只今の釈は与
の釈なるか奪の釈なるかと之を尋ね可し、若し約教・約部をも与奪

をも弁わえきまずと云いわはばさてはさてはさては天台宗てんだいしゅうのほうもんは堅固けんこにぶさたに
て候あけり、尤ももとてんだいほっけは法華ほっけのほうもんは教相きょうそうをもつしよぶつの御本意ごほんいを宣ら
れたり若しも教相きょうそうに闇くしてほっけのほうもんを云いん者はすいさんほけきようげんし
法華ほっけ心しんとて法華ほっけのこを殺すと云いう事にて候あ、其その上「若もしも余よ経きやうを弘
むるに教相きょうそうを明らあき

めざるも義に於て傷ること無し若し法華を弘むるに教相を明さざれば文義闕くること有り」と釈せられて殊更教相を本として天台の法門は建立せられ候、仰せられ候如く次第も無く偏円をも簡ばず邪正も選ばず法門申さん者をば信受せざれと天台堅く誠しめられ候なり、是程に知食さず候けるに中々天台の御釈を引かれ候事あさましきおんことと。き御事なりと責む可きなり、但し天台の教相を三種に立てらるる中に根性の融不融の相の下にて相待妙・絶待妙とて二妙を立て候、相待妙の下にて又約教・約部の法門を釈して仏教の勝劣を判ぜられて候、約教の時は一代の教を蔵通・別円の四教に分つて之に付いて勝劣を判ずる時は前三為後・一為妙とは判ぜられて蔵通別の三教をば教と嫌ひ後の一教をば妙法と選取せられ候へども此の時もなほ爾前権教の当分の得道を許し且く華嚴等の仏慧と法華

のぶつて 仏慧とを等ひとし から令し めて只ただ 今の初ぶつて 後えんどん 仏慧ぎさい 円頓ぎさい 義さい 齊等さい の与い の積せき を
 作つく られ候こう なり、然しか りと雖いえど も約やく 部の時とき は一いち 代だい の教きょう を五ご 時に分わか つて五ご 味み
 に配け し華けこん 嚴部げこん 阿あ 含部ごん 方ほう 等部とうぶ 般はん 若部にやぶ 法ほつ 華部け と立た たられ前ぜん 四し 味み
 為い 後ご 一いち 為い 妙みょう と判はん じて奪だつ の積せき を作つく られ候こう なり、然しか れば奪だつ の積せき に
 云い く細さい 人じん 人じん 二に 俱く 犯はん 過か 從じゅう 過か 邊へん 說せつ 俱く 名な 人じん と、此し 積せき の意い は華け 嚴げ
 部ぶ にも別べつ 円えん 二に 教きょう を説せつ かれて候こう へば円えん の方ほう は仏ぶつ 慧え と云い わるるなり、
 方ほう 等部とうぶ にも蔵ぞう 通つう 別べつ 円えん の四し 教きょう を説せつ れたれば円えん の方ほう は又また 仏ぶつ 慧え なり
 般はん 若部にやぶ にも通つう 別べつ 円えん の後ご 三さん 教きょう を説せつ いて候こう へば其そ れも円えん の方ほう は仏ぶつ 慧え な
 り、然しか りと雖いえど も華け 嚴げ は別べつ 教きょう と申もう すえせ物もの をつれて説せつ れたる間ま わる
 き物もの につれたる仏ぶつ 慧え なりとて簡かん わるるなり方ほう 等部とうぶ の円えん も前ぜん 三さん 教きょう のえ
 せ物もの をつれたる仏ぶつ 慧え なり般はん 若部にやぶ の円えん も前ぜん 二に のえせ物もの をつれたる
 仏ぶつ 慧え なり、然しか る間ま 仏ぶつ 慧え の名な は同おな じと雖いえど も過か の邊へん に從したが いてと云い われ
 てわるき円えん 教きょう

のぶつて仏慧と下され候なり、之よつてに依て四教しきようにても真実しんじつの勝劣しょうれつを判ずる
時いちおうは一往は三蔵さんぞうを名なて小乗しょうじようと為し再往さいおうは三教さんきやうを名なて小乗しょうじようと為す
と釈しゃくして一往いちおうの時ときは二百五十戒等あごんさんぞうの阿含三蔵教ほうもんの法門ほうもんを総じて
小乗しょうじようの法ほふと簡かんい捨てらるれども、再往さいおうの釈しゃくの時ときは三蔵教さんぞうと大乘だいじようと
云いいつる通教つうきやうと別教べつきやうとの三教さんきやう皆みな小乗しょうじようの法ほふと本朝ほんちようの智証ちしやう大師だいしも
法華論ほつげろんの記きと申もつす文ぶんを作つくつて判釈はんしゃくせられて候あなり。

次に絶待妙と申すは開会の法門にて候なり、此の時は爾前権教
とて嫌ひ捨らるる所の教を皆法華の大海におさめ入るるなり、随つ
て法華の大海に入りぬれば爾前の権教とて嫌わるる者無きなり、
皆法華の大海の不可思議の徳として南無妙法蓮華經と云う一味に
たたきなしつる間・念仏・戒・真言・禅とて別の名言を呼び出す可き
道理會て

無きなり、随つて釈に云く「諸水入海・同一鹹味・諸智入如実智・失
本名字と等と釈して本の名字を一言も呼び顯す可らずと釈せられて
候なり、世間の人天台宗は開会の後は相待妙の時斥い捨てられし
所の前四味の諸經の名言を唱うるも又諸仏・諸菩薩の名言を
唱うるも皆是法華の妙体にて有るなり大海に入らざる程こそ各別
の思なりけれ大海に入つて後に見れば日來よしわるしと嫌ひ用ひけ
るは大僻見にて有りけり、嫌はるる諸流も用ひらるる冷水も源

はただ大海より出でたる一水にて有りけり、然れば何の水と呼びたりとてもただ大海の一水に於て別別の名言をよびたるにてこそあれ、各別各別の物と思つてよぶにこそ科はあれ只大海の一水と思つて何れをも心に任せて有縁に従つて唱え持つに苦しかる可からずとて念仏をも真言をも何れをも心に任せて持ち唱うるなり。

今云う此の義は与えて云う時はさも有る可きかと覺れども奪つて云う時は随分墮地獄の義にて有るなり、其の故は縦ひ一人此の如く意得何れをも持ち唱るとても万人・此の心根を得ざる時は只例の偏見・偏情にて持ち唱えれば一人成仏するとも万人は皆地獄に墮す可き邪見の悪義なり、爾前に立てる所の法門の名言と其の法門の内に
談ずる所の道理の所詮とは皆是・偏見・偏情によりて入邪見稠林・若有若無等の権教なり、然れば此等の名言を以て持ち唱へ此等の

所詮しよせんの理を觀みずれば偏ひとえに心得こころえたるも心得こころえざるも皆みな大地獄だいじごくに墮おつべし、心得こころえたりとて唱たもへ持ちたらん者は牛蹄ぎゆうていに大海たいかいを納おさめたる者の如ごとし是僻見びやくけんの者なり、何ぞ三惡道さんあくどうを免まぬがれん又心得こころえざる者の唱たもへ持たは本迷惑めいわくの者なれば邪見じゃけん權教こんきやうの執心しゅうしんによつて無間むげん・大城だいじやうに入らん事こと疑うたがひい無なき者なり、開會かいえの後のちも教きやうとて嫌きらい捨すてし惡法あくほうをば名言みげんをも其その所詮しよせんの極理ごくりをも唱たもへ持つて交まじはるべからずと見えて候ぐけつ弘決くわつに云いく「相待あひたい・絶待ぜつたい俱ともに須すべからすべから惡あくを離はなるべ

し円じやくに著なする尚な悪ななり況いわんやまたや復また余またをや云また云また、文またの心または相また待また妙またの時またも
 絶また待また妙またの時またも俱ともに須すべからく悪あく法ほうをば離はなるべし円じやくに著なする尚な悪なし況いわんやまたや復また
 余またの法ほうをやと云またう文またなり、円えんと云またうは満まん足ぞくの義ぎなり余またと云またうは
 闕けつ減げんの義ぎなり、円えん教きょうの十じゅう界かい平へい等とうに成じょう仏ぶつする法ほうをすら著じやくしたる方かた
 を悪あくぞと嫌きらふ、況いわんやまたや復また十じゅう界かい平へい等とうに成じょう仏ぶつせざるあくほうの悪あく法ほうの闕かけたるを
 以もつて執しやく 著しやくをなして朝ちやう夕せき・受じゆ持じ・読どく誦じゆ・解げ説せつ・書しよ写しゃせんをや、設たひ
 爾に前ぜんの円えんを今いまの法ほう華けに開かい会えし入いるるとも爾に前ぜんの円えんは法ほう華けの一いち味みと
 なる事こと無なし、法ほう華けの体たい内ないに開かい会えし入いれられても体たい内ないの権けんと云われて
 実じつとは云わざるなり、体たい内ないの権けんを体たい外がいに取と出しして且しかばらおいちぶつじよう
 分ぶん別べつ説せつ三さんする時とき・権けんに於おいて円えんの名なを付つて三さん乘じようの中ちゆうの円えん教きょうと云われ
 たるなり、之これに依よりて古いにしへも金こん杖じようの譬たとえを以もつて三さん乘じようにあてて沙さ汰たす
 る事ことあり、譬たとへば金こんの杖じようを三さんに打うちをりて一いちづつ三さん乘じようの機き根こんに与よへて
 何いれも皆みな金こんなり然しかれば何なんぞ同おじ金こんに於おいて差さ別べつの思しをなして勝しやう劣れつを

判ぜんやと談合だんごうしたり、此はうち聞く所はさもやと覺おぼえたれ

ども悪く学者がくしゃの得心こころえたるなり、今云う此の義は譬たとへば法華の体内の

権の金杖こんじょうを仏・三根にあてて体外たいげに三度うちふり給たまへる其その影を

機根きこんが見付ずして皆みな眞実しんじつの思を成して己おのが見まかに任せたるなり、其その

眞実には金杖こんじょうを打折うちおりて三になしたる事が有らばこそ今の譬たとえは合譬がっぴ

とはならぬ、仏は権の金杖こんじょうを折らずして三度ふり給たまへるを機根きこんあ

りて三に

成りたりと執しゆじやく 著こころえし得心こころえたる返す返す不得心こころえの大邪見じゃけんなり大邪見じゃけん

なり、三度振りたるも法華ほっけの体内の権の功德くどくを体外たいげの三根に配して

三度振りたるにてこそ有あれれ、全く妙体みょうたい不思議ふしぎの円実えんじつを振りたる

事無ことなきなり、然しかれば体外たいげの影の三乗さんじょうを体内の本の権の本体かいいへ開かい会

し入るれば本の体内の権と云われて全く体内の円とは成らざるな

り、此の心を以もつて体内たいげ体外こんじつの権実ほうもんの法門こころえをば得意こころえ弁わきまふべき者なり。

次に禅宗の法門は、或は教外別伝・不立文字と云ひ、或は
仏祖不伝と云ひ修多羅の教は月をさす指の如しとも云ひ、或は
即身成仏とも云つて文字をも立てず仏祖にも依らず教法をも
修学せず画像・木像をも信用せずと云うなり、反詰して云く
仏祖不伝にて候はば何ぞ月氏の二十八祖東土の六祖とて相伝せら
れ候や、其の上・迦葉尊者は何ぞ一枝の花房を釈尊より授けられ
微笑して心の一法を靈山にして伝えたりとは自称するや、又祖師
無用ならば何ぞ達磨大師を本尊とするや、又修多羅の法無用なら
ば何ぞ朝夕の所作に真言陀羅尼をよみつるぞや、首楞嚴經・金剛
經・円覚經等を、或は談し、或は読誦するや、又仏・菩薩を信用せず
んば何ぞ南無三宝と行住坐臥に唱うるやと責む可きなり、次に聞
き知らざる言を以て種種申し狂はば云う可し、凡そ機には上中下
の三根あり随つて法門も三根に与へて説事なり、禅宗の法門にも

理致・機関・向上として三根に配て法門を示され候なり、御辺は
某が機をば三根

の中には何れと得意で聞知せざる法門を仰せられ候ぞや、又理致の
分か機関の分か向上の分に候かと責む可きなり、理致と云うは
下根に道理を云いきかせて禅の法門を知らする名目なり、機関と
は中根には何なるか本来の面目と問へば庭前の柏樹子なんと答え
たる様の言づかひをして禅法を示す様なり、向上と云うは上根の
者の事なり此の機は祖師よりも伝えず仏よりも伝えず我として禅
の法門を悟る機なり、迦葉靈山微笑の花に依て心の一法
を得たりと云う時に是れ尚中根の機なり、所詮禅の法門と云う事
は迦葉一枝の花房を得しより已来出来せる法門なり、抑も伝え
し時の花房は木の花か草の花か五色の中には何様なる色の花ぞや
又花の葉は何重の葉ぞや委細に之を尋ぬ可きなり、此の花をあり

のままに云い出したる禅宗有らば実に心の一法をも一分得たる者と知る可きなり、設ひ得たりとは存知すとも眞実の仏意には叶う可からず如何となれば法華經を信ぜざるが故なり、此の心は法華經の方便品の末長行に委く見えたり 委は引て拝見し奉る可きなり、次に禅の法門何としても物に著する所を離れよと教えたる法門にて有るなり、さと云へば其れも情なりかうと云うも其れも情なりとあなたこそなたへ

すべりとごまらぬ法門にて候なり、夫れを責む可き様は他人の情に著したらん計りをば沙汰して己が情量に著し封ぜらる所をば知らざるなり、云うべき様は御辺は人の情計りをば責むれども御辺情を情と執したる情をばなど離れ得ぬぞと反詰すべきなり、凡そ法として三世諸仏の説きのこしたる法は無きなり 汝仏祖不伝と云つて仏祖

よりも伝えずとなのらばさては禅法は天魔の伝うる所の法門なり
如何いかん、然しかる間なんじだんじょう汝断常の二見を出いでず無間地獄むげんじごくに墮だせん事うたがい疑無し
と云つて何度もかれが云う言にてややもすれば己おのがつまる語ことばなり、
されども非学匠ひがくしやうは理につまらずと云つて他人たにんの道理どうりをも自身の
道理どうりをも聞き知らざる間あんしやう暗証の者とは云うなり、都て理におれざ
るなり譬たとえば行く水にかずかくが如ごとし。

次に即身即仏そくしんそくとは即身即仏そくしんそくなる道理どうりを立てよと責む可べし其その
道理どうりを立てずして無理に唯即身即仏ただそくしんそくと云わば例てんまの天魔てんまの義ぎなりと
責む可べし但即身即仏そくしんそくと云う名目みょうもくを聞くに天台法華宗てんだいほっけしゆうの即身成仏そくしんじやうぶつの
名目みょうもくつかひを盗み取せんしゆうて禅宗ぜんしゆうの家につかふと覺おぼえたり、然しかれば法華ほっけ
に立つる様なる即身即仏そくしんそくなるか如何いかんとせめよ、若もし其その義ぎ無なく押おし
て名目みょうもくをつかはばつかはるる語ことばは無障礙しむつげの法たなり譬たとえば民の身と
して国王こくおうと名乗こくおうる者の如ごとくなり如何いかんに国王こくおうと云うとも言いに

は障り無し己が舌の和かなるままに云うとも其の身は即土民の
卑しく嫌われたる身なり、又瓦礫を玉と云う者の如し石瓦を玉と
云いたりとも會て石は玉にならず、汝が云う所の即身即仏の名目
も此くの如く有名無実なり不便なり不便なり。

次に不立文字と云う所詮文字と云う事は何なるものと得心此く
の如く立てられ候や、文字は是一切衆生の心法の顯れたる質なり

されば人のかける物を以て其の人の心根を知つて相する事あり、
およ凡そ心と色法とは不二の法にて有る間かきたる物を以て其の人の
貧福をも相するなり、然れば文字は一切衆生の色心不二の
質なり汝若し

文字を立てざれば汝が色心をも立つ可からず汝六根を離れて禅
の法門一句答へよと責む可きなり、さてと云うもかうと云うも有と
無との二見をば離れず無と云わば無の見なりとせめよと有と云わ

ば有の見なりとせめよ、何れも何れも叶わざる事なり。

次に修多羅の教は月をさす指の如しと云うは月を見て後は

徒者と云う義なるか若其義にて候わば御辺の親も徒者と云う義

か又師匠は弟子の為に徒者か又大地は徒者か又天は徒者か、如何

となれば父母は御辺を出生するまでの用にこそあれ御辺を

出生して後はなにかせん、人の師は物を習い取るまでこそ用なれ

習い取つて後は無用なり、夫れ天は雨露を下すまでこそあれ雨ふり

て後は天無用なり大地は草木を出生せんが為なり草木を出生し

て後

は大地無用なりと云わん者の如し、是を世俗の者の譬に喉過ぬれ

ばあつさわすれ病愈えぬれば医師をわすると云うらん譬に少も

違わず相似たり、所詮修多羅と云うも文字なり文字は是れ三世

諸仏の気命なりと天台釈し給へり、天台は震旦・禅宗の祖師の中に

入れたり、何ぞ祖師の言を嫌はん其の上・御辺の色心なり凡そ一切
衆生の三世不断の色心なり、何ぞ汝本来の面目を捨て不立文字と
云うや、是れ昔し移宅しけるに我が妻を忘れたる者の如し、眞実の
禅法をば何としてか知るべき哀なる禅の法門かなと責む可し。

次に華嚴・法相・三論・俱舍・成実・律宗等の六宗の法門いかに花

をさかせても申しやすく返事すべき方は能能いはせて後・南都の

帰伏状を唯読みきかす可きなり、既に六宗の祖師が帰伏の状をか

きて桓武天皇に奏し奉る、仍て彼帰伏状を山門に納められぬ其外

内裏にも記せられたり諸道の家家にも記し留めて今にあり、其より

已来・華嚴宗等の六宗の法門・末法の今に至るまで一度も頭をさ

し出さず何ぞ唯今・事新しく捨られたる所の権教・無得道の法にをい

て眞実の思をなし此くの如く仰せられ候ぞや心得られずとせむべ

し。

次に真言宗の法門は先ず真言三部經は大日如来の説か釈迦
如来の説かと尋ね定めて釈迦の説と言はば釈尊・五十年の説教に
をいて已今当の三説を分別せられたり、其の中に大日經等の三部
は何れの分にをさまり候ぞと之を尋ぬ可し、三説の中にはいづくに
こそおさまりたりと云はば例の法門にてたやすかるべき問答なり、
若法華と
同時の説なり義理も法華と同じと云はば法華は是純円一実の教に
て會て方便を交へて説く事なし、大日經等は四教を含有したる經な
り何ぞ時も同じ義理も同じと云わんや謬りなりとせめよ、次に大日
如来の説法と云はば

大日如来だいにちによらいの父母ふぼと生なぜし所ところと死しせし所ところを委くわく沙汰さたし問とうべし、一句いっく
一偈いちげも大日だいにちの父母ふぼなし説せつ所ところなし生し死じの所ところなし有ゆう名めい無む実じつの大日如来だいにちによらい
なり然しかる間かん殊ことに法ほう門もんせめやすかるべきなり若もし法ほう門もんの所しよ詮せんの理りを云い
はば教主きよしゆの有う無むを定じやうめて説せつ教きやうの得とく不得ふとくをば極きくわむ可べき事ことなり、設たひ
至し極ごくの理り密みつ・事じ密みつを沙さ汰たすとも訳やく者しゃに虚こ妄もう有ゆうり法ほう華けの極ごく理りを盗たうみ
取とて事じ密みつ真しん言げんととか立たてらられてあるやらん不ふ審しんなり、之これに依よりて法ほうの
所しよ談だんは教きよ主しゆの有う無むに随きて沙さ汰た有ある可べきなりと責せむ可べきなり、次つぎに
大日如来だいにちによらいは法ほう身しんと云いはば法ほう華けよりも未み顕けん真しん実じつと嫌きらい捨すてらられたる
爾に前ぜん権こん教きやうにも法ほう身しん如に来よららいと説せつたり何なんぞ不ふ思し議ぎなるべきやと云いう可べき
なり、若もし無む始し無む終しゆの由よしを云いて、いみじき由よしを立たて申もうさば必たい大日如来だいにちによらい
にらず我われ等ら・一いっ切さい衆しゆ生じやう・螻ろう蟻ぎもん等らにたるまでみな無む始し無む終しゆの
色しき心しんなり、衆しゆ生じやうにたて有始しゆ有しゆ終しゆと思おもふは外げ道どうの僻びや見けんなり汝なんじ外げ道どうに
同いず如い何かんと云いう可べきなり。

次に念仏は是浄土宗所用の義なり、此れ又權教の中の權教なり
り譬えば夢の中の夢の如し有名無実にして其の実無きなり一切
衆生願て所詮なし、然れば云う所の仏も有為無常の阿弥陀仏なり
何ぞ常住不滅の道理にしかんや、されば本朝の根本大師の御釈に
云く「有為の報仏は夢中の權果無作の三身は覺前の実仏」と釈して
阿弥陀仏等の有為無常の仏をば大にいましめ捨てをかれ候なり、
既に憑む所の阿弥陀仏有名無実にして名のみ有つて其の体
なからんには往生す可き道理をば委く須弥山の如く高く立て大海
の如くに深く云とも何の所詮有るべきや又經論に正き明文ども有
と云はば明文ありとも未顕真實の文なり、浄土の三部經に限らず
華嚴經等より初て何の經・教・論釈にか成仏の明文無らんや、然れ
ども權教の明文なる時は汝等が所執の拙きにてこそあれ經論に
無き僻事なり、何れも法門の道理を宣べ蔽り依經を立てたりとも

夢中の権果ごんかにて無用の義むように成る可べきなり返す返す。

五二一

ときじょうにん

一生成仏抄

けんちょう

建長七年

三十四歳御作

与富木常忍

383P

夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思
はばすべからく衆生本有の妙理を觀ずべし、衆生本有の妙理とは
妙法蓮華經是なり故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば衆生本有の
妙理を觀ずるにてあるなり、文理真正の經王なれば文字即実相な
り実相即妙法なり唯所詮一心法界の旨を説き顯すを妙法と名く
故に此の經を諸仏の智慧とは云うなり、一心法界の旨とは十界
三千の依正色心非情草木虚空刹土いづれも除かずちりも残らず
一念の心に収めて此の一念の心法界に満するを指して万法とは
云うなり、此の理を覺知するを一心法界

とも云うなるべし、但し妙法蓮華經と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらざる法なり、法は今經にあらざる今經にあらざれば方便なり權門なり、方便權門の教ならば成仏の直道にあらざる成仏の直道にあらざれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがたし、故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と名くるぞと深く信心を發すべきなり。

都て一代八万の聖教三世十方の諸仏・菩薩も我が心の外に有りとはゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を觀ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し、然れば天台の釈の中には若し心を觀ぜざれば重罪滅せずとて若し心を觀ぜざれば無量の苦行となると判

ぜり、故ゆえにかくの如ごときの人をば仏ぶつ法ぽうを学がくして外げ道どうとなると恥はじしめ
られたり、爰ここを以もつて止しかん観かんには雖すい学がく仏ぶつ教きょう・還げん同どう外げ見けんと釈しゃくせり、然しかる間かん
・仏おさの名なを唱なへ經きょう卷かんをよみ華けをちらし香かうをひねるまでも皆みな我がが一いち念ねん
に納おさめたる功く徳とく善ぜん根こんなりと信しん心じんを取とるべきなり、之よに依よつて
浄じょう名みょう經きょうの中ちゆうには諸しよ仏ぶつの解げ脱だつ

を衆生の心行に求めば衆生即菩提なり生死即涅槃なりと明せり、
又衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて浄土と
云ひ穢土と云うも土に二の隔なし只我等が心の善悪による見え
たり、衆生と云うも仏と云うも亦此くの如し迷う時は衆生と名
け悟る時をば仏と名けたり、譬えば閻鏡も磨きぬれば玉と見ゆる
が如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず
法性真如の明鏡と成るべし、深く信心を發して日夜朝暮に又
懈らず磨くべし何様にしか磨くべき只南無妙法蓮華經と唱へたて
まつるを是をみかくとは云うなり。

そもそ

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心不思議なる処を妙と

は云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば
すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとす
れば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふ

べきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の

二の心も

及ばず有無に非ずして而も有無にして中道一実の妙体にして

不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云

うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて

蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る

処を妙経とは云うなり、然ればすなはち善悪に付いて起り起る

処の念心の当体を

指して是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云

うなり、此の旨を深く信じて妙法蓮華経と唱へば一生成仏更に

疑あるべからず、故に経文には「我が滅度の後に於て応に斯の経

を受持すべし是の人・仏道に於て決定して疑有る事無けん」とのべ

たり、努努不審をなすべからず穴賢穴賢、一生成仏の信心南無

妙みよ法う蓮れん華げき經よ

南な無む妙みよ法う蓮れん華げき經よ。

日にち蓮れん

花か押おう

385P

釈迦しゃかぶつ仏は我等われらが為ためには主なり師なり親なり一人してすくひ護まもる
 と説とき給たまへり、阿弥陀あみだぶつ仏は我等われらが為ためには主ならず親ならず師なら
 ず、然しかれば天台大師てんだいだいし是これを釈しゃくして日いわく「西方さいほうは仏・別べつにして縁異えんいなり
 仏・別べつなるが故ゆえに隱頭おんけんの義成ぎせうぜず縁異えんいなるが故ゆえに子父こふの義成ぎせうぜず、
 又此またの經きやうの首末しゆまつに全く此こゝの旨無むねし眼まなこを閉せまじて穿鑿せんさくせよ」と実まことなる
 かな釈迦しゃかぶつ仏は中天竺てんじくの淨飯じやうばん大王だいおうの太子たいしとして十九じゅうじゅうの御年ごねん家けを出いで
 給たまいて檀特山だんとくせんと申もうす山やまに籠こもらせ給たまひ、高峯たかねに登のぼつては妻木つまぎをとり
 深谷しんこくに下くだつては水みづを結び難行なんぎやう苦行くぎやうして御年ごねん三十さんじゅうと申まをせしに仏ぶつにな
 らせ給たまいて一代いちだい聖教しやうきやうを説とき給たまいしに、上うわへ
 には華嚴けごん・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにや等の種種しじゆの經經きやうきやうを説たまかせ給たまへども内心ないしん

には法華經を説かばやおぼしめされしかども衆生の機根まぢま
ちにして一種ならざる間・仏の御心をば説き給はで人の心に隨ひ
よるず万の經を説き給へり、此くの如く四十二年が程は心苦しく思食しか
ども今法華經に至つて我が願既に満足しぬ我が如くに衆生を仏に
なさんと説き
給へり、久遠より已來・或は鹿となり・或は熊となり・或時は鬼神の
為に食われ給へり、此くの如き功德をば法華經を信じたらん衆生
は是れ真仏子とて是実の我が子なり此の功德を此の人に与へんと
説き給へり、是れ程に思食したる親の釈迦仏をばないがしろに思ひ
なして唯以一大事と説き給へる法華經を信ぜざらん人は争か仏に
なるべきや能く能く心を留めて案ずべし。

二の卷に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の
の仏種を断ず乃至余經の一偈をも受けざれ」と文の心は仏にならん

ため
には唯ただ法華經ほけきょうを受持じゅじせん事を願ねがつて余經よきょうの一偈いちげ・一句いっくをも受けざ
れと、三の卷まきに云いく「飢国けこくより来きつて忽たちまち大王だいおうの膳ぜんに遇あうが如ごとし」と
文の心は飢えたる国より来きつて忽たちまち大王だいおうの膳ぜんにあへり心は犬野干いぬやかん

の心を致いたすとも迦葉かしやう・目連等もくれんの小乘しよぼうの心をば起さざれ破われたる石
 は合あうとも枯木からに花はさくとも二乗にじやうは仏になるべからずと仰おほせら
 れしかば須菩提しゆぼだいは茫然ぼうぜんとして手の一鉢いちぱつをなげ迦葉かしやうは涕泣ていじゆうの声大
せんがい千界ひびきを響ひびすと申もうして歎なげき悲なげみしが今法華經ほけきやうに至いたつて迦葉尊かしやうそんじや者は
こうみやうにやらい光明きくへつ如来きくへつの記きを授まかかりしかば目連もくれん・須菩提しゆぼだい
まかかせんねん摩訶迦旃延等まかかせんねんは是これを
 見みて我等われらも定さだめて仏になるべし飢うえたる国くにより来きつて忽たちまちに大王だいおうの膳
 にあへるが如ごとしと喜よろこびし文ぶんなり、我等われら衆生しゆじやう・無始曠劫むしうじゆうより
このかたみやうほうれんげきやう已来いらい妙法蓮華經みよほうれんげきやうの如意宝珠にょいほうじゆを片時かたときも相離あいはなれざれども無明むみやうの酒しゆにた
 ぼらかされて衣えの裏うらにかけたりとしらずして少すこきを得えて足たりりぬと思おもひ
 ひぬ、南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうとだに唱となえ奉たてまつりたらましかば速すみやに仏ぶつに成なるべ
 かりし衆生しゆじやうどもの五戒ごかい・十善等じゆづぜんのわづかなる戒かいを以もつて、或あるは天てんに生あり
 れて大梵天ぼんてん・帝釈たいしゃくの身みと成なつていみじき事ことと思おもひ、或ある時は人ひとに生あれて
 諸もろもろの

くおう だいじん くきょう
国王・大臣・公卿 殿上人等の身と成つて是れ程のたのしみなしと思
ひ少きを得て足りぬと思ひ悦びあへり、是を仏は夢の中のさかへま
ぼろしのたのしみなり唯法華經を持ち奉り速に仏になるべしと説き
給へり、又四の巻に云く「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し
況や滅度の後をや」云云。

しゃかぶつ しし きょうおう
釈迦仏は師子頬王の孫・淨飯王には嫡子なり十善の位をすて

てんじく だいち
五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすてて十九の御年出家し

つと たまい
て勤め行ひ給いしかば三十の御年・成道し御坐して三十二相・八十

しゅこう おんすがた みゆき
種好の御形にて御幸なる時は大梵天王・帝釈左右に立ち多聞・持

してんのう せんごいによう
国等の四天王・先後圍繞せり、法を説き給ふ御時は四弁・八音の

せつぼう ぎおんしやうじや
説法は祇園精舎

しがい
に満ち三智五眼の徳は四海にしけり、然れば何れの人か仏を悪むべ
きなれども尚怨嫉するもの多し、まして滅度の後・一毫の煩惱をも

断だんぜず少しの罪つみをも弁わきまえへざらん法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを悪にくみ嫉ねたむ者多おほから
ん事ことは雲霞うんかの如ごとくならんと見えたり、然しかれば則すなわち末代まつだい悪世あくせに此この
經きやうを有ありのままに説とく人には敵た多おほからんと説とかれて候まに世間せけんの人人ひとびと

我も

持たちたり我も讀よみ奉たてまつり行いじ候まに敵たなきは仏ぶつの虚言そらごとか法華經ほけきょうの實まな
らざるか、又實まの御經ごきやうならば当世とうせの人人ひとびと・經きやうをよみまいらせ候まは
虚そらよみか實まの行者ぎょうじやにてはなきか如何いかん能よく能よく心得こころえべき事ことなり明あきらむ
べき物ものなり、四の卷まきに

たほうにやらい 多宝如来は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給ふに、初には
けこんきよう 華嚴經と申す経を十方華王のみぎりにして別円頓大の法輪・法慧・
くどくりん 垢徳林・金剛幢・金剛蔵の四菩薩に對して三七日の間説き給いしに
たま も来り給はず、其の二乗の機根叶はざりしかば瓔珞細の衣をぬ
そべいくに ぎすて 弊垢膩の衣を著・波羅奈国・鹿野苑に趣いて十二年の間・
じじめしいたい 生滅四諦の

ほうもん 法門を説き給ひしに阿若俱鄰等の五人証果し八万の諸天は無生忍
あにやくりん を得たり、次に欲色二界の中間大宝坊の儀式・浄名の御室には三
ちゆうげん 万二千の牀を立て般若・白鷺池の辺・十六会の儀式・染浄虚融の旨
はんによ 万のべ給いしにも来り給はず、法華經にも一の卷乃至四の卷・
たまい 人記品までも来り給はず宝塔品に至つて初めて来り給へり。
にんきぼん 釈迦仏・先四十余年の経を我と虚事と仰せられしかば人用うる
しゃかぶつ 事なく法華經を眞実なりと説かせ給へども仏と云うは無虚妄の人
ほけきよう 事なく法華經を眞実なりと説かせ給へども仏と云うは無虚妄の人
しんじつ

とて永く虚言し給はずと聞きしに一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年・二年ならず四十余年の程まで虚言したり仰せられしかば又此の経を實と説き給うも虚言にやあらんずらんと不審なししかば此の不審釈迦一人しては舍利弗を始め事はれがたかりしに此の多宝・宝浄世界よりはるばると来らせ給いて法華経は皆是れ眞実なりと証明し給いしに先の四十余年の経を虚言と仰せらるる事實の虚言に定まるなり、又法華経より外の一切経を空に浮べて文・文・句句・阿難尊者の如く覺り富樓那の弁舌の如くに説くとも其れを難事とせず、又須弥山と申す山は十六万八千由旬の金山にて候を他方世界へつづてになぐる者ありとも難事には候はじ、仏の滅度の後・当世・末代・悪世に法華経を有りのまに能く説かん是を難しとすと説かせ給へり、五天竺・第一の大力なりし提婆達多も長三丈五尺・広一丈二尺の石をこそ仏にな

げかけて候いしか又漢土第一の大力・楚の項羽と申せし人も九石入
の釜に水満ち候いしをこそひさげ候いしか其れに是は須弥山をばな
ぐる者は有りともし此の経を説の如く読み奉らん人は有りがたしと
説かれて候に人ごとことに此の経をよみ書き説き候、経文を虚言そらごとに成
して当世とうせの人人ひとびとを皆法華経みなほけきょうの行者ぎょうじやと思ふべきか能く能く御心得ごこころえ
有るべき事なり、五の卷提婆品だいはに云く「もし善男子・

善女人有りて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑
を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮せずして十方の仏前に生
ぜんこと、此の品には二つの大事あり一には提婆達多と申すは阿難
尊者には兄・斛飯王には嫡子・師子頰王には孫・仏にはいとこにて有
りしが仏は一閻浮提第一の道心者にてましまししに怨をなして我は
又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓つて万の悪人を語いて仏
に怨をなして三逆罪を作つて現身に大地破れて無間・大城
に墮ちて候いしを天王如来と申す記を授けらるる品にて候、然れ
ば善男子と申すは男此の經を信じまひらせて聴聞するならば
提婆達多程の悪人だにも仏になる、まして末代の人はたとひ重罪
なりとも多分は十悪をすぎずまして深く持ち奉る人・仏にならざ
るべきや、一には娑竭羅竜王のむすめ竜女と申すは八歳のくちな
は仏に成りた

る品にて候此の事めづらしく貴き事にて候、其の故は華嚴經には
「にょにん女人は地獄じじくの使なり能くよ仏種子ぶつしゆを断ず外面は菩薩ぼさつに似て内心は
やしゃやしや夜叉じこの如し」と、文の心は女人にょにんは地獄じじくの使・よく仏の種をたつ外面は
ぼさつぼさつ菩薩ぼさつに似たれども内心ないしんは夜叉やしやの如しと云へり、又云く「ひとたび一度女人を
見る者はよく眼まなこの功德くどくを失ふうしな設たひ大蛇だいじやをば見るとも女人にょにんを見るべ
からず」と云いい、又有る経あには「しよつ所有の三千界さんぜんかいの男子もろもろの諸もろもろの煩惱ぼんのうを
合せ集めて一人の女人にょにんの業障ごうじやうと為す」と三千大千
せかいせかい世界せかいにあらゆる男子もろもろの諸もろもろの煩惱ぼんのうを取り集めて女人にょにん・一人の罪つみとすと
云へり、或経あるには「さんぜ三世の諸しよぶつ仏まなこの眼めは脱ぬげて大地だいちに墮おつとも女人にょにんは仏
に成るべからず」と説とき給たまへり、此の品の意は人畜じんちくをいはば畜生ちくじやうた
る竜女りゆうにょだにも仏に成れりまして我等われらは形のごとく人間にんげんの果報かほうなり、
彼の果報かほうにはまさされり争いかでか仏にならざるべきやと思食おほしめすべきなり。
中にも三悪道さんあくどうにおちずと説かれて候其の地獄じじくと申すは八寒八熱

乃至八大地獄の中に初め浅き等活地獄を尋ねれば此の一閻浮提の
下一千由旬なり、其の中の罪人は互に常に害心をいだけりもしたま
たま相見れば獵師が鹿にあへるが如し各各鉄の爪を以て互につか
み・さく・血肉皆尽きて唯残つて骨のみあり・或は獄卒棒を以て頭
よりあなうらに至るまで皆打ちくだく身も破れくだけて猶沙の
如し、焦熱なんと申すは譬えん・かたなき苦なり鉄城四方に回つ

て門を閉じたれば力士も開きがたく猛火高くのぼつて金翅のつばさ
もかけるべからず、餓鬼道と申すは其の住処に二あり一には地の下
五百由旬の閻魔王宮にあり、二には人天の中にもまじはれり其の
相種種なり。或は腹は大海の如くのんどは鍼の如くなれば明けても
暮れても食すともあくべからず、まして五百生・七百生など
飲食の名

をだにもきかず。或は己が頭をくだきて脳を食するもあり。或は一
夜に五人の子を生んで夜の内に食するもあり、万菓林に結び取ら
んとすれば悉く剣の林となり万水・大海に流入りぬ飲んとすれば猛
火となる如何にしてか此の苦をまぬがるべき、次に畜生道と申すは
其の住所に二あり根本は大海に住す枝末は人天に雑れり短き物は
長き物に

のまれ小き物は大きなる物に食はれ互に相食んでしばらくもやすむ

事なし、ある 或は鳥 ちゆうじゆう 獸と生れ ある 或は牛馬と成つても重き物をおほせら

れ西へ行かんと思へば東へやられ東へ行かんとすれば西へやらる山野

に多くある水と草をのみ思いて余は知るところなし、然るに善男子

ぜんによんにん 善女人此の法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱え奉らば此の三罪

を脱るべしと説き給へり何事か是にしかんたのもしきかなたのも

しきかな、又五の卷に云く「我れ大乘經を聞いて

苦の衆生を度脱す」と心はわれ大乘の教をひらいてと申すは

法華經を申す苦の衆生とは何ぞや地獄の衆生にもあらず餓鬼道の

衆生にもあらず只女人を指して苦の衆生と名けたり、五障三従と

申して三つしたがふ事有つて五つの障りあり竜女我女人の身を受け

て女人の苦をつみしれり然れば余をば知るべからず女人を導かんと

誓へり、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 にちれん
花押 かおう

五四

いちだいしゅうきょうたいい
一代聖教大意

しょうか
正嘉二年二月 三十

七歳御作

390P

四教しきょうは一には三蔵教さんぞう・二には通教つうきょう・三には別教べつきょう・四には円教えんきょうなり。

始はじめに三蔵さんぞうとは阿含經あこんきょうの意いなり・此こゝろの經きょうの意いは六道ろくだうより外あかを明あかさず但ただし六道ろくだう修人にんてん天てんの内の因果いんがの道理どうりを明あかす、但ただし正報しょうほうは十界じゅうかいを明あかすなり地ち・餓う・畜ちく・修しゅう・人にんてん・天てん・声聞しょうもん・縁覺えんかく・菩薩ぼさつ・仏ぶつなり依報えほうが六むにて有あれれば六界ろっかいと申もうすなり、此こゝろの教きょうの意いは六道ろくだうより外あかを明あかさざれば三界さんがいより外あかに浄土じょうどと申もうす生処せいじょありと言いわず又また三世さんぜに仏ぶつは次第しだい・次第しだいに出世しゅっせすと

は云いへども横よこしまに十方じゅうぽうに並ならべて仏ぶつ有りとも云いわず、三蔵さんぞうとは一いちには

きょうぞう

経蔵

亦云
定蔵

一には律蔵

亦云
戒蔵

三には論蔵

亦云
慧蔵

なり但し

経

律

論の定

戒慧

かいじょうえ

戒定慧

・慧定戒と云う事あるなり、

戒蔵とは

五戒

・八戒

・十善戒

・二

百五十戒

・五百戒なり

・定蔵とは

味

禅定

名

浄

禅

・無漏

禅なり

慧蔵と

は苦

・空

・無常

・無我の

智慧なり、

戒定慧の

勝劣と云うは

但上の

戒

計り

を持つ者は

三界の内

の欲界

の人

天に

生を受くる

凡夫

なり、

但し

上の

定計り

を修する

人は

戒を

持たざれども

定の

力に

依つ

て上の

戒を

具する

なり、

此の

定の

内に

味

禅

・浄

禅は

三界

の内

・色

無色界

へ生ず

無漏

禅は

声聞

・縁

覚と成つて

見思

を断じ

尽し

灰身

滅智

する

なり、

慧は

又

苦

・空

・無常

・無我

と我が

色心

を

観ず

れば

上の

定を

自然に

具足

して

声聞

・縁

覚とも

成る

なり、

故に

戒より

定は

勝れ

定より

慧は

勝れたり、

而れども

此の

三蔵

教の

意は

戒が

本

体にて

あ

る

なり、

されば

阿含

経を

総結

する

遺教

経

には

戒を

説ける

なり、

此

の教

の意

は

依報

には

六界

・正

報

には

十界

を

明せ

ども

而も

したが、ろっかい六界を明す経と名なくるなり、又正報しよほうに十界じゆっかいを明せども縁覚えんかく・菩薩ぼさつ・仏ぶつも声聞しやうもんの悟ごに過すぎざれば但声聞教しやうもんとも申もうす、されば仏も菩薩ぼさつも縁覚えんかくも灰身滅智けしんめつちする教なり、声聞しやうもんに付いて七賢七聖の位あり、六道むくわうは凡夫ほんぶなり。

三賢 さんけん

一に五停心

二に別想念処 ねんじよ

外凡

三に総想念処 ねんじよ

七賢 智と云う事なり

一に法

四善根 ぜんこん

二に頂法

内凡

三に忍法

四に世第一法 だいいち

此の七賢の位は六道の凡夫より賢く生死を厭ひ煩惱を具しながら
煩惱を発さざる賢人なり、例せば外典の許由巢父が如し。

一に数息息を数えて散乱を治す すそく

二に不浄身の不浄を觀じて貪欲を治す ふじよう

三に慈悲慈悲を觀じて嫉妬を治す じひ

四に因縁十二因縁を觀じて愚癡を治す いんねん

五停心

五に界方便ほうべん

地水火風空識すいかふうくうしの六界ろっかいを觀かんじて障道しょうどうを治じす

又は念仏ねんぶつと云いう

一に身

外道げどうは身を淨じゆんと言いい仏ぶつは不淨ふじようと説とき給たまう

別想念ねんじよ処

二に受

外道げどうは三界さんがいを樂らくと言いい仏ぶつは苦くと説とき給たまう

三に心

外道げどうは心しんを常じやうと言いい仏ぶつは無常むじやうと説とき給たまう

四に法

外道げどうは一切衆生いっさいしゆじやうに我有いりと云いい仏ぶつは無我むがと

説とき給たまう

外道げどうは常心樂受じょうしん我法わつぽう淨身じやうしん仏ぶつは苦く・不淨ふじやう・無常むじやう・無我むがと説く総想念そうねんじゆ処じよと
 は先の苦く・不淨ふじやう・無常むじやう・無我むがを調練てうれんして觀くわんずるなり 法ほふは智慧ちえの火か・
 煩惱ぼんのうの薪たきぎを蒸たぎせば煙えんの立つなり故ゆえに法ほふと云いう、頂法いただきは山の頂いたに
 登のぼつて四方しほうを見るに雲ぐも無なきが如ごとし、世間せけん出世間せけんの因果いんがの道理どうりを委くわく
 知しつて闇くらき事こと無なきに譬たとえたるなり、始め五停心ごていしんより此この頂法いたに至いたる
 まで退位たいゐと申もうして惡縁あくえんに値あへば惡道あくどうに墮おつ而しかれども此この頂法いたの善根ぜんこん
 は失なせずと習ならうなり、忍法にんぽうは此この位ゐに入る人ひとは永とこく惡道あくどうに墮おちず、
 世第一だいいち法ぽうは此この位ゐに至いたる賢人けんじんなり但今しやうにん聖人しやうにんと成なる可べきなり。

- 一に見道 二 隨信行 鈍根どんこん

- 正と云う事なり 信解しんげ 隨法行 利根りこん

- 七聖三 三 見得 鈍根どんこん

- 二に修しゆ道だう 身証 利鈍りどんに亘わたる

三に無学道

俱解脱利根

見・思の煩惱ぼんのうを断ずる者を聖と云う、此の聖人しよじんに三道あり、見道と
は見思けんじの内の見惑けんわくを断じ尽くす、此の見惑けんわくを尽くす人をば初果しよかの
聖者せいじやと申す、此の人は欲界よっかいの人天にんてんには生るれども永く地・餓・畜・
修しゆの四惡趣しあくしゆには墮おちず、天台てんだい云く「見惑けんわくを破やぶるが故ゆえに四惡趣しあくしゆを離
る」文、此の人は未だ思惑しわくを断だんぜず貪とん・瞋じん・癡ち有り、身に貪欲とんよくある
故ゆえに妻めかけを帯もつ、而しかれども他人たにんの妻めかけを犯しんさず、瞋恚しんにあれども物を殺
さず、鋤すきを以もつて地ちをすけば虫自然じねんに四寸しよさ去さる、愚癡ぐちなる故ゆえに我が身
・初果しよかの聖者せいじやと知らず、婆娑論ばしやろんに云く「初果しよかの聖者せいじやは妻めかけを八十一度ひとたひ・
一夜いちやに犯とすと」取意てんたい天台てんだいの解釋げしやくに云く「初果しよか地ちを耕かすに虫四寸しよさを離り
るは道共どうくの力ちからなり」と、第四果だいしよの聖者せいじや・阿羅漢あらかんを無学むがくと云ひ亦または
不生ふしよと云う、

永く見思を断じ尽して三界六道に此の生の尽きて後生すべからず

見思の煩惱無きが故なり、又此の教の意は三界六道より外に処を

明さざれば生処有りと知らず・身に煩惱有りともしらず又生因な

く但灰身滅智と申して身も心もうせ虚空の如く成るべしと習う、

法華經にあらざれば永く仏になるべからずと云うは二乗是なり、此の

教の修行の時節は声聞は三生鈍根六十劫利根又一類の最上利根の

声聞一生の内に阿羅漢の位に登る事あり、縁覚は四生鈍根百劫

利根菩薩は一向凡夫にて見思を断ぜず而も四弘誓願を発し

ろくどまんぎょう六度万行を修し三僧祇・百大劫を経て三蔵教の仏と成る

仏と成る時始めて見思を断尽するなり、見惑とは一には身見と云う

二には辺見常見と云う三には邪見と云う四には見取見勝見と云う五には

戒禁取見計道見と云うなり見惑は八十八有れども此の五が根本にて

有るなり、思惑とは一には貪・二には瞋・三には癡・四には慢なり

亦非因計因非道

亦撥無見

亦劣謂

亦我見

と云う

と云う

と云う

と云う

思惑しわくは八十一あれ有れども此こゝの四よが根本こんぽんにて有あるなり、此こゝの法門ほうもんは
 阿含經あこんきょう四十卷しじゅうし・婆沙論ばしゃろん二百卷にひゃくし・正理論しやうりろん・顯宗論けんしゆろん・俱舍論くしゃに具つぶさに明あせ
 り、別べつして俱舍宗くしゃしゆしゆと申まうす宗しゆ有り又諸もろもろの大乗だいじやうに此こゝの法門ほうもん少せう明めいす事じ
 あり、謂おもく方等部ほうとうぶの經きやう・涅槃經ねはんきやう等とうなり但ただし華嚴けこん・般若はんにか・法華ほつげには此こゝの
 法門ほうもん無なし。

次つぎに通教つうきやうとは大乗だいじやうの始はじなり又戒定慧かいじやうえの三学さんがくあり、此こゝの教きやうの意いのお
 きて大旨おほねは六道ろくどうを出いでず少分利根りこんなる菩薩ぼさつ六道ろくどうより外ぐわいに推おし出いす
 ことあり、声聞しやうもん・緣覺えんかく・菩薩ぼさつ共に一いつの法門ほうもんを習ならい見思けんじを三人さんじん共に断た
 じ而しかも声聞しやうもん・緣覺えんかく・灰身滅智けしんめつちの意いに入いる者しやうもあり入いらざる者しやうもあ
 り、此こゝの教きやうに十地じじゆちあり。

- 一 乾慧地 三賢 さんけん
- 二 性地 四善根 ぜんこん
- 三 八人地 見道位聖人 けんじん

四
見地

見惑けんわくを断たず
初果しょがの聖人しょうにん

十地 じゅうち

五 薄地

六 離欲地

思惑を断ず

七 已弁地

阿羅漢 見思を断じ尽す

八 辟支仏

地習気を尽す

九 菩薩地

誓つて習を扶けて生ずるなり

十 仏地 見思を断じ尽す

此通教の法門は別して一經に限らず方等經・般若經・心經・觀經

・阿彌陀經・雙觀經・金剛般若等の經に散在せり、此通教の修行の

時節は動踰塵劫を経て仏に成ると習うなり、又一類の疾く成ると

云う辺もあり・已上・上の藏通二教には六道の凡夫本より仏性あり

とも談ぜず始めて修すれば声聞・緣覺・菩薩・仏とおもひおもひに

成ると談ずる教なり。

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞・

縁覚えんかくを雑まじえず、菩薩戒ぼさつとは三聚淨戒じゆじよつがいなり五戒ごかい・八戒はちかい・十善戒じゆじぜんかい・二百

五十戒ごじうかい・五百戒ごひやくかい 梵網ぼんもつきやうの五十八の戒ごじはちのかい 瓔珞ようらくの十無尽戒じゆじぜんかい・華嚴けげんの十戒じゆじぜんかい

・涅槃經ねはんぎやうの自行じぎやうの五支戒ごしだ・護陀だの十戒じゆじぜんかい・大論だいろんの十戒じゆじぜんかい・是等これらは皆菩薩みなぼさつの

三聚淨戒じゆじよつがいの内うち・撰律儀戒せつりつぎかいなり、撰善法戒せつぜんぼうかいとは八万四千はちまんの法門ほうもんを

撰せつす、饒益じやうやく有情戒じやうじやうとは四弘誓願しごせいがんなり定ぢやうぢやうとは觀練熏修かんれんくんじゆうの四種しゆしゆの

禪定ぜんぢやうなり慧ゑいとは心生十界じゆしゆかいの法門ほうもんなり、五十二位ごじにまいを立つ五十二位ごじにまいと

は一いちに十信じゆしん・二にに十住じゆじゆ・三さんに十行じゆじゆ・四しに十回向じゆちとうかく・五ごに十地等覺じゆちとうかく一位いちまい

妙覺みやうかく二位にまいなり、已上いじやう。

十信じゆしん 退位たいまい 凡夫菩薩ぼんぶぼさつ未だ見思けんじを断だんぜず

十住じゆじゆ 不退位ふたいまい 五十二位ごじにまい

十行じゆじゆ 十回向見思じゆちとうかくけんじ・塵沙ちんさを断だんぜる菩薩ぼさつ

五十二位ごじにまい

十地 じゅうち 無明を断ぜる菩薩 むみょうだんぼさつ

等覺 とうかく

妙覺 みょうかく 無明を断じ尽せる仏なり むみょうむじしんせるぶつなり

此の教は大乗なり戒定慧を明す・戒は前の蔵通二教に似ず尽
未來際の戒・金剛宝戒なり、此の教の菩薩は三悪道を恐しとせず
二乗道を恐る地・餓・畜等の三悪道は仏の種子を断ぜず二乗の道は
仏の種子を断ずればなり、大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も
大菩提を障えず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」と、
此の教の習は眞の悪道とは三無為の火 なり眞の悪人とは二乗を
云うなり、されば悪を造るとも二乗の戒をば持たじと談ず、故に
大般若経に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙なる五欲を受くると
も菩薩戒に於ては猶犯と名けずと若し一念二乗の心を起さば即ち
名けて犯と為す」文、此の文に妙なる五欲とは色・声・香・味・触の五

欲なり・色欲とは青黛・珂雪・白齒等声欲とは絲竹管絃・香欲とは沈檀芳薰・味欲とは猪鹿等の味・觸欲とは膚等なり、此に恒河沙劫に著すれども菩薩戒は破れず一念の二乗の心を起すに菩薩戒は破ると云える文なり、太賢の古迹に云く「貪に汚さるる

と雖も大心尽きざるをもつて無余の犯無し起せども無犯と名く文、一一乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり華嚴・般若・方等總じて爾前の經にはあながちに二乗をきらうなり定慧此れを略す、梵網經に云く「戒をば謂いて大地と為し定をば謂いて室宅と為す智慧は為灯明なり」文、此の菩薩戒は人・畜・黃門・二形の四種を嫌わず但一種の菩薩戒を授く、此の教の意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を

積しゆんで須み弥せ山んと成ごすが如とし、華け嚴ごん・方ほう等とう・般はん若にや・梵ぼん網もう・瓊よう瑠ら等らの經くに
此むの旨ふん分み明みなり、但ただし二に乘じよう界かいの此この戒けいを受うくる事じを嫌きらふ、妙み樂らの
釈いに云わく「あまねくほつけいぜんの諸しよ經きようを尋たぬるに実じに二に乘じよう作さ仏ぶつの文ぶん無むし」
文。

えんきよう

えんきよう

にぜん

にぜん

ほっけ

次に円教とは此の円教に二有り・一には爾前の円・二には法華・

ねはん

にぜん

かいじょうえ

にぜん

涅槃の円なり、爾前の円に五十二位・又戒定慧あり、爾前の円とは

けこんきよう

ほっかいゆいしん

ほうもん

に云く

「初発心の時便ち正覚を成ずと」

すなわ しょうかく じよう

華嚴經の法界唯心の法門文に云く、初発心の時便ち正覚を成ずと」

いわ

又云く「円満修多羅」文、

浄名經に云く

「無我無造にして受者無

けれども善悪の業敗亡せず」文、般若經に云く「初発心より即ち

けれども善悪の業敗亡せず」文、

般若經に云く

「初発心より即ち

道場に坐す」

道場に坐す」

道場に坐す」

道場に坐す」

かんきよう

に云く

「韋提希・時に応じて即ち無生法忍を得」文、

梵網經に云く「衆生・仏戒を受くれば位大覚に同じ即ち諸仏の位

に入り真に是れ諸仏の子なり」文、此は皆爾前の円の証文なり、此

の教の意は又五十二位を明す名は別教の五十二位の如し但し義は

かはれり、其の故は五十二位が互に具して浅深も無く勝劣も無し、

凡夫も位を経ず

とも仏にもなり又往生するなり、煩惱も断ぜざれども仏に成る

とも仏にもなり又往生するなり、

煩惱も断ぜざれども

仏に成る

とも仏にもなり又往生するなり、煩惱も断ぜざれども仏に成る

障り無く一善一戒を以ても仏に成る少少開会の法門を説く処もあり、所謂浄名經には凡夫を会し煩惱悪法も皆会す但し二乗を會せず、般若經の中には二乗の所学の法門をば開會して二乗の人と悪人をば開會せず、觀經等の經に凡夫一毫の煩惱をも断ぜず往生すと説くは皆爾前の円教の意なり、法華經の円經は後に至つて書く可し已上四教。

次に五時、五時とは一には華嚴經 結經 梵網經 別円二教を説く、二には阿含 結經 遺教經 但三藏教の小乗の法門を説く、三には方等經・宝積經 觀經等の説時を知らざる 權大乘經 なり 結經 瓔珞經、但し藏通・別円の四教を皆説く、四には般若經 結經 仁王經 通教・別教・円教の後三教を説く三藏教を説かず、華嚴經は三七日の間の説・阿含經は十二年の説・方等・般若は三十年の説、已上華嚴より般若に至る四十二年なり、山門の義には方等は説時定ま

らず説処せつしよ定まらず般若はんによ經三十年と申す、寺門じもんの義には方等ほうとう十六年
般若はんによ十四年と申す、秘藏ひぞうの大事だいじの義には方等ほうとう般若はんによは説時せつじ三十年。
但し方等ほうとうは前ただ般若はんによは後と申すなり、仏は十九出家しゅつけ・三十成道じゅうどうと定
むる事はだいろん大論に見えたり、一代いちだい聖教しやうきやう五十年と申す事は涅槃ねはん經に見
えたり、法華ほけき經已前いぜん四十二年と申す事は無量むりやう義經に見えたり、
法華ほけき經八箇年はちかねんと申す事は涅槃ねはん經の五十年の文と無量むりやう義經の四十二
年の文の間を勘かんうれば八箇年はちかねんなり、已上じやう十九出家しゅつけ・三十成道じゅうどう・五十
年の転法輪てんほうりん・

八十入滅と定む可し、此等の四十二年の説教は皆法華經の汲引の
方便なり、其の故は無量義經に云く「我先に道場菩提樹下に端坐
すること六年阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり 方便力
を以てす、四十余年には未だ眞實を顯さず初に四諦を説き阿含經な
り次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」文。
私に云く説の次第に順ずれば華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃
なり、法門の浅深の次第を列ぬれば阿含・方等・般若・華嚴・涅槃
法華と列ぬべし、されば法華經・涅槃經には爾くの如く見えたり
華嚴宗と申す宗は智嚴法師・法藏法師・澄觀法師等の大師・華嚴經
に依つて立てたり、俱舍宗・成実宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等
の大師・阿含經に依つて立てたり、法相宗と申す宗は玄奘三蔵・
慈恩法師等・方等部の内に上生經・下生經・成仏經・解深密經・
瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立てたり、三論宗と申す宗は

般若經・百論・中論・十二門論・大論等の經論に依つて吉藏大師立
て給へり、華嚴宗と申すは華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ余
は皆劣と云うなる可し、法相宗には解深密經と華嚴・般若・法華・
涅槃は同じ程の經と云う、三論宗とは般若經と華嚴・法華・涅槃は
同じ程の經なり、但し法相の依經諸の小乘經は劣なりと立つ、
此等は皆法華已前の諸經に依つて立てたる宗なり、爾前の円を極
として立てたる宗どもなり、宗宗の人人の諍は有れども經經に
依つて勝劣を判ぜん時はいかにも法華經は勝れたるべきなり、人師
の釈を以て勝劣を論ずる事無し。

五には法華經と申すは開經には無量義經一卷法華經八卷結經には
普賢經一卷上の四教・四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經を
知らん為なり、法華經の習としては前の諸經を習わずしては永く
心を得ること莫きなり、爾前の諸經は一經一經を習うに又余經

を沙汰せざれども苦しからず、故に天台の御釈に云く「若し余経を弘むるには、

教相を明さざれども義に於て傷むこと無し若し法華を弘むるには教相を明さずんば文義闕くること有り「文、法華経に云く「種種の道を示すと雖も其れ實には仏乗の爲なり」文、種種の道と申すは爾前一切の諸経なり仏乗の

為とは法華經の爲に一切の經を説くと申す文なり。

問う諸經の如きは、或は菩薩の爲、或は人天の爲、或は聲聞、

緣覺の爲機に随つて法門もかわり益もかわる此の經は何なる人の

為ぞや、答う此の經は相伝に有らざれば知り難し所詮惡人・善人・

有智・無智・有戒・無戒・男子・女子・四趣・八部総じて十界の衆生の

爲なり、所謂惡人は提婆達多・妙莊嚴王・阿闍世王・善人は韋提希

等の人天の人・有智は舍利弗・無智は須利槃特・有戒は聲聞・菩薩・

無戒は畜畜なり女人は童女なり、総じて十界の衆生・円の一法を

覺るなり此の事を知らざる學者・法華經は我等凡夫の爲には有ら

ずと申す仏意恐れ有り、此の經に云く「一切の菩薩の

阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に属せり」文、此の文の菩薩とは九

界の衆生・善人・惡人・女人・男子・三蔵教の聲聞・緣覺・菩薩・

通教の三乘・別教の菩薩爾前の円教の菩薩皆此の經の力に有ら

ざれば仏に成るまじと申す文なり、

又此の經に云く「葉王多く人有りて在家・出家の菩薩の道を行ぜん

に若し是の法華經を見聞し読誦し書持し供養することを得ること

能わずんば当に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し

是の經典を聞くことを得ること有らば乃ち能く菩薩の道を行ずる

なりと云、此の文は顯然に權教の菩薩の三祇・百劫・動踰塵劫・

無量阿僧祇劫の間の六度万行・四弘誓願は此の經に至らざれば

菩薩の行には有らず善根を修したるにも有らずと云う文なり、又

菩薩の行無ければ仏にも成らざる事も顯然なり。

天台・妙樂の末代の凡夫を勸進する文、文句に云く「好堅・地に

処して牙已に百困せり頻伽に在つて声衆鳥に勝れたり」文、此の

文は法華經の五十展轉の第五十の功德を積する文なり、仏苦に

校量を説き給うに權教の多劫の修行又大聖の功德よりも此の經

の須臾しゆゆ・結縁けちえんの愚人ぐにんの随喜ずいきの功德くどく百千万億せんまん勝すぐれたる事経に見えつれば此こゝろの意いを大師だいし譬たとえを以もつて顯あらわし給たまえり、好堅樹こうけんと申もうす木は一日に百困くわんにて高くをう、頻伽ひんかと申もうす鳥は幼おさなきだも諸もろもろの大小だいしょうの鳥の聲こゑに勝すぐれたり、權教ごんきょうの修行しゆぎょうの久ひさきに諸もろもろの草木そうもくの遅おそく生長せいじやうするを譬たとへほっけ法華ほっけの行ぎやうの速すみやに仏ぶつに成なる事ことを一日に百困ひゃくくわんなるに

譬へたと権教ごんきょうの大小だいじょうの聖人しやうにんをば諸鳥しよに譬へたと法華ほっけの凡夫ぼんぶのはかなきをか

の聲こゑの衆鳥しゅうちように勝るまさるに譬たとつ、妙樂みょうらく大師だいし重かさねてしやく積たくしてい云わく「恐おそら

くば人あやま謬げりて解げせる者しよしん初心くどくの功德くどくの大おほなることを測はからずして功こうを

上位ゆずに推おり此しよしんの初心あなどを蔑ゆえる故ゆえに今いま彼かの行ぎやう浅あく功こう深ふかきことを示しして

以もて經きやう力をあらわ顕あらすこ文ぶん、未代まつだいの愚者ぐしやは法華ほっけ經きやうは深理じんりにしていみじけれ

ども我等われらが下機きに叶かなわずと言いつて法ほをあ拳こげ機きを下くだして退たいする者ものを

積しやくする文ぶんなり。

又また妙樂みょうらく大師だいし未代まつだいに此この法ほの捨すてられん事ことを歎なげいて云いく「此この円頓えんどん

を聞ききて崇重すうちゆうせざる者まことは良よに近代だいじように大乘だいじようを習まえる者ものの雜濫ぞうらんするに

由よるが故ゆゑなり、況いはんやや像末うすに情澆しんじんく信心しんじん寡薄かはくに円頓えんどんの教きやう・法蔵ほうぞうに溢あふれ

函はこに盈みつれども暫しばらくも思惟しゆいせず便すなわち目めを瞶ふさぐに至いたる・徒いたに生いたじ徒いたに死し

す一ひとに何なんぞ痛いたましきや有ある人ひと云いく聞きいて行ぎやうぜずんば汝なんじに於おいて何なんぞ

預こらん此これは未いまだ深くく久遠くおんの益えきを知らず、善住ぜんじゆう天子てんし經きやうの如ごとき文殊もんじゆ

舍利弗に告ぐ法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは恒沙

の仏を供養する者に勝れたり地獄に墮つと雖も地獄より出でて還つ

て法を聞くことを得ると、此れは仏を供し法を聞かざる者を以て

校量と為り聞いて謗を生ずる尚遠種と為す況や聞いて思惟し勤め

て修習せんをやと、又云く「一句も神に染ぬれば咸く彼岸を資く

思惟修習永く舟航に用いたり随喜見聞恒に主伴と為る、若は取・

若は捨・耳に経て縁と成り・或は順・或は違・終に斯れに因つて脱す

と文、私に云く若取・若捨・或順・或違の文は肝に銘ずるなり。

法華翻經の後記に云く 釈僧筆記 什羅 什三 藏なり姚興王に対して

曰く予昔天竺国に在りし時、五竺に遊びて大乘を尋討し大師

須梨耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の経を属累し

て言く、仏・日西に隠れ遺光東北を照らす茲の典東北諸国に有縁な

り汝慎んで伝弘せよと文、私に云く天竺よりは此の日本は東北の

州なり慧心の一乗要決に云く「日本一州円機純熟朝野遠近・
同じく一乗に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す唯一師等あつて若し
信受せず権とや為ん実とや為ん権為らば責む可し」浄名に云く
「衆の魔事を覚知して其行に随わず善力方便を以て意に随つて度す
と実為らば憐む可し」此經に云く「当来世の悪人は仏説の一乗を聞
いて迷惑して信受せず法を破し

て悪道に墮つ文。

妙法蓮華經 妙は天台玄義に云く「言う所の妙とは妙は不可思議
に名くるなり」と、又云く「秘密の奥蔵を発く之を称して妙と為す」
と、又云く「妙とは最勝・修多羅・甘露の門なり故に妙と言うなり」
と、法は玄義に云く「言う所の法とは十界・十如・権実の法なり」、
又云く「権実の正軌を示す故に号して法と為す」と、蓮華は玄義
に云く「蓮華とは権実の法に譬うるなり」、又云く「久遠の本果を指
す之を喩うるに蓮を以てし不二の円道に会す之を譬うるに華を
以てす」文、経は又云く「声仏事を為す之を称して経と為す」文、
私に云く法華以前の諸経に小乗は心生ずれば六界・心滅すれば
四界なり、通教以て是くの如し、爾前の別円の二教は心生の十界
なり小乗の意

は六道・四生の苦樂は衆生の心より生ずと習うなりされば心滅す

れば六道の因果は無きなり、大乘の心より十界を生ず、華嚴經に云く「心は工なる画師の如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざること無し」文、造種種五陰とは十界の五陰なり仏界をも心法をも造ると習う心が過去・現在・未来の十方の仏と顕ると習う

なり、華嚴經に云く「もし人三世一切の仏を了知せんと欲せば当に是くの如く觀すべし心は諸の如来を造ると法華已前の經のおきては上品の十悪は地獄の引業・中品の十悪は餓鬼の引業・下品の十悪は畜生の引業・五常は修羅の引業・三歸・五戒は人の引業・三歸・十善は六欲天の引業なり、有漏の坐禅は色界・無色界の引業・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の觀は声聞・緣覺の引業・五戒・八戒乃至三聚淨戒の上に六度四弘の菩提心を發すは菩薩なり仏界の引業なり、蔵通二教には

ぶつしよう 仏性の沙汰なし但菩薩の発心を仏性と云う、
べつえん 別円二教には衆生に仏性を論ず但し別教の意は二乗に仏性を論
ぜず、爾前の円教は別教に附して二乗の仏性の沙汰無し此等は皆
そほう 法なり、今の妙法とは此等の十界を互に具すと説く時・妙法と
もう 申す、十界互具と申す事は十界の内に一界に余の九界を具し十界
たがいぐ 互に具すれば百法界なり、玄の二に云く「又一法界に九法界を具す
すなわ れば即ち

百法界有り、文、法華經とは別の事無し十界の因果は爾前の經に明
す今は十界の因果互具をおきてたる計りなり、爾前の經意は菩薩
をば仏に成るべし声聞は仏に成るまじなると説けば菩薩は悦び
声聞はなげき人天等はおもひもかけずなるとある經もあり、或
は二乗は見思を断じて六道を出でんと念い菩薩はわざと煩惱を
断ぜず六道に生れ

て衆生を利益せんと念ふ、或は菩薩の頓悟成仏を見、或は菩薩
の多俱低劫の修行を見、或は凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞の
為には有らずと見て人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が
成仏・凡夫の往生は我が往生・聖人の見思断は我等凡夫の見思断
とも知らず四十二年をば過ぎしなり。

然るに今經にして十界互具を談ずる時、声聞の自調自度の身に
菩薩界を具すれば六度万行も修せず多俱低劫も経ぬ声聞が諸の

菩薩ぼさつのからくして修しゆしたりし無量無辺むりやうむへんの難行道なんぎやうどうが声聞しやうもんに具くする間まをもはざる外げに声聞しやうもんが菩薩ぼさつと云いわれ人をせむる獄卒ごくそつ・慳貪けんどんなる凡夫ほんぶも亦また菩薩ぼさつと云いはる、仏ぶつも又また因位いんいに居こして菩薩界ぼさつに撰せんせられ妙覺みやうかくながら等覺とうかくなり、藥草やくそう喩品ゆほんに声聞しやうもんを説いいて云いく「汝等なんじが所行しよぎやうは是れ菩薩ぼさつの道どうなり」と、又また我等われら六度りくはらみつをも行いぜざるが六度りくはらみつ満足まんぞくの

菩薩ぼさつなる文ぶん・經きやうに云いく「未いまだ六波羅蜜りくはらみつを修行しゆぎやうすることを得えずと雖いへども六波羅蜜りくはらみつ自然ぜんぜんに在前ぜんぜんしな」と、我等われら一戒いつがいをも受うけざるが持戒じがいの者ものと云いはるる文ぶん・經きやうに云いく「是則すなわち勇猛ゆうもうなり是則すなわち精進しやうじんなり是則これを戒がいを持たち頭陀ずだを行いずる者ものと名なく」と文ぶん。

問もんうて云いく諸經しよきやうにも悪人あくにんが仏ぶつに成なる華嚴經けこんきやうの調達ちやうたつの授記じゆき・普超經ふちやうきやうの闍王じゃおうの授記じゆき・大集經だいしゆきやうの婆藪天子ばそてんしの授記じゆき・又また女人にょにんが仏ぶつに成なる胎經たいきやうの釈女じやくにょの成仏じやうぶつ・畜生じゆくしやうが仏ぶつに成なる阿含經あこんきやうの鵠雀こくさくの授記じゆき・二乘にじやうが

仏に成る方等ほうとうだらに經・首楞嚴經しゅりょうこんきょう等らなり、菩薩ぼさつの成仏じょうぶつは華嚴經けこんきょう等ら・具縛くばくの凡夫ほんぶの往生おうじょうは觀經かんきょうの下品下生等げぶんげじょう・女人にょにんの女身をに轉ころずる等ら・雙觀經そうかんきょうの四十八願しじゅうはちがんの中の三十五の願これら此等こゝらは法華經ほけきょうの二乘にじょう・竜女りゅうにょは提婆菩薩だいばぼさつの授記じゆきに何いかなるかわりめかある、又また設たいといいかわりめはありとも諸經しよきょうにても成仏じょうぶつはうたがひなし如何いかに、答こたう予よの習ならい伝つうる處ところの法門ほうもん・此の答こたに顯あらわわるべし此の答こたに法華經ほけきょうの諸經しよきょう

超過し又諸經の成仏を許し許さぬは聞うべし秘蔵の故に顕露に書さず。

問うて曰く妙法を一念三千と言う事如何、答う天台大師・此の法門を覺り給うて後・玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念処・次第禪門等の多くの法門を説き給いしかども此の一念三千をば談義し給はず、但十界・百界・千如の法門ばかりにておはしませしなり、御年五十七の夏四月の比荊州の玉泉寺と申す処にて御弟子・章安大師と申す人に説ききかせ給いし止觀十卷あり、上の四帖に猶をしみ給いて但六即・四種三昧等・計の法門にてありしに五の卷より十境・十乘を立てて一念三千の法門を書き給へり、此れを妙樂大師末代の人に勸進して言く「並に三千を以て指南と為す 請うらくは尋ね読まん者心に異縁無かれ」文、六十卷三千丁の多くの法門も由無し但

此の初の二三行を意得可きなり、止観の五に云く「そ夫れ一心に十
ほっかい法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種
せけんの世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千
いちねん一念の心に在り」文、妙樂承け釈して云く「まさ当に知るべし身土一念
さんぜんの三千なり故に成道の時此の本理に称て一身一念法界にあまねし」
にほん文、日本の伝教
だいしひえいざんこんりゅう大師比叡山建立の時こんぼんちゅうどう根本中堂の地を引き給いし時たま地中より舌
かぎ八つある鑰を引き出したり、此の鑰を以て入唐の時に天台大師よ
みょうらくだいしり第七代妙樂大師の御弟子道邃和尚に値い奉りて天台の法門を伝
たまへ給いし時、天機秀発の人たりし間道邃和尚悦んで天台の造り給へ
きりうそうる十五の経蔵を開き見せしめ給いしに十四を開いて一の蔵を開か
そのときでんぎようだいしず、其時伝教大師云く師此の一蔵を開き給えと請い給いしに邃
わじょういわ和尚云く「此の一蔵は開く可き鑰無し天台大師自ら出世

して開き給う可しと云云其の時伝教大師・日本より隨身の鑰を
もって開き給いしに此の経蔵開けたりしかば経蔵の内より光室に満
ちたりき、其の光の本を尋ねれば此の一念三千の文より光を放ち
たりしなりありがたき事なり、其の時邃和尚は返つて伝教大師を
礼拝し給いき、天台大師の後身と云云、依つて天台の経蔵の所積
は遺り無く日本に亘りしなり、天台大師の御自筆の観音経・章安
大師の自筆の止観・今比叡山の根本中堂に収めたり。

一 自性じしやう 自力じりき 迦毘羅外道かびらげどう

四性計 二 他性たけい 他力たうりき 樓僧伽外道ろうそうぎやげどう

三 共性きやう 共力きうりき 勒娑婆外道ろくしやばげどう

四 無因性むいんけい 無因力むいんりき 自然外道じねんげどう

外道げどうに三人あり、一にはぶつぼうほか 仏法外げどうの外道げどう九きゆう十じゆう五ご種しゆの外道げどう二ふにぶつぼう 附ぶつぼう 仏法ぶつぼう

成じりきの外道げどう 小乘しょうじやう 三じりきには学ぶつぼう 仏法ぶつぼうの外道げどう 大乘だいじやうの外道げどうなり。今ほけきやうの法華經ほけきやうは

自力じりきも定じりきめて自力じりきにじりきあらずじりき十界じじゅうがいの一切いっさい衆生じゆじやうを具ぐする自じりきなる故ゆえに我われ

が身ぶつがいに本ぶつがいより自ぶつがいの仏界ぶつがい一切いっさい衆生じゆじやうの他ぶつがいの仏界ぶつがい我ぶつがいが身ぶつがいに具ぶつがいせり、され

ば今たうりき・仏たうりきに成たうりきるに新たうりき 仏たうりきにあらずたうりき又たうりき他力たうりきも定たうりきめて他力たうりきに非たうりきず他たうりき 仏たうりきも

我等われら凡夫ぼんぶの自具ゆえなるが故ゆえに又たぶつ 他たぶつ 仏たぶつが我われら等ことが如げんどうく自げんどうに現げんどう同げんどうするな

り、共げんどうと無げんどう因げんどうは略げんどうす。

法華經ほけきやう已前いぜんの諸經しよきやうは十界じじゅうがい互具あかを明あかさざればあか 仏あかに成あからんと願あかうに

は必ずあか 九界くじうがいを厭いとう九界くじうがいをぶつがい 仏界ぶつがいに具ぶつがいせざるが故ゆえなり、されば必ずあか 惡あか

を滅し煩惱ぼんのうを断じて仏には成ると談だんず凡夫ぼんぷの身を仏に具ぐすと云わ
ざるが故ゆえに、されば人天悪人にんてんあくにんの身を失うしないて仏に成ると申もうす、此れを
ば妙樂みょうらく大師だいしは厭離断九おんりの仏と名なくされば爾前にぜんの經ぎょうの人人ひとびとは仏の九
界の形を
現げんずるをば但た仏の不思議ふしぎの神変しんぺんと思おもひ仏の身に九界くがいが本もとよりあり
て現げんずるとは言いわず、されば実じつを以もつてさぐり給たまうに法華經ほけきよつ已前いぜんには
但た権者ごんしゃの仏のみ有あつて実じつの凡夫ぼんぷが仏に成なりたりける事は無なきなり、
煩惱ぼんのうを断ことじ九界くがいを厭いとうて仏に成ならんと願ねがうは実じつには九界くがいを離はなれた
る仏無なき故ゆえに往生おうじょうしたる実じつの凡夫ぼんぷも無なし、人界にんがいを離はなれたる菩薩界ぼさつ
も無なき
故ゆえに但た法華經ほけきよつの仏の爾前にぜんにして十界じゅうがいの形を現あらわして所化しよけとも能化のうけと
も悪人あくにんとも善人ぜんにんとも外道げどうとも言いわれしなり、実じつの悪人あくにん・善人ぜんにん・外道げどう・
凡夫ぼんぷは方便ほうべんの権ごんを行おこなじて真実しんじつの教きょうとうち思おもいなしてすぎし程ほどに

ほけきょう 法華經に來つて方便にてありけり、實には見思無明も断ぜざりけり
おうじょう 往生もせざりけりなんと覺知するなり、一念三千は別に委く書す
可し。

そつたいみょう 此の經には二妙あり釈に云く「此の經は唯二妙を論ず」と一には
ぜつたいみょう 相待妙なり、相待妙の意は前の

四時の一代聖教に法華經を對して爾前と之を嫌い、爾前をば当分
と言ひ法華を跨節と申す、絶待妙の意は一代聖教は即ち法華經
なりと開會す、又法華經に二事あり一には所開二には能開なり
開示悟入の文、或は皆已成仏道等の文、一部・八卷・二十八品・六万
九千三百八十四字・一一の字の下に皆妙の文字あるべしこれ能開の
妙なり、此の

法華經は知らずして習い談ずる者は但爾前の經の利益なり、
阿含經開會の文は經に云く「我が此の九部の法は衆生に隨順して
説く大乘に入るに為本なり」と云云、華嚴經・開會の文は一切世間
・天人及び阿修羅は皆謂えり今の釈迦牟尼仏等の文、般若經開會
の文は安樂行品の十八空の文、觀經等の往生安樂・開會の文は
此に於て命終し

て即ち安樂世界に往く」等の文、散善開會の文は「一たび南無仏と

称せし皆已に仏道を成じき」の文、一切衆生開会の文は「今・此の
三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」、
外典開会の文は「若し俗間經書治世語言資生の業等を説かんも皆
正法に順ぜん」文、兜率開会の文・人天所開会の文しげきゆへにい
ださず。

此の經を意得ざる人は經の文に此の經を読んで人天に生ずと説
く文を見或は兜率・利などにいたる文を見或は安養に生ず
る文を見て穢土に於て法華經を行ぜば經はいみじけれども行者
不退の地に至らざれば穢土にして流転し久しく五十六億七千万歳
の農を期し或は人畜等に生れて隔生する間・自の苦しみ限り
無しなんと云云
或は自力の修行なり難行道なり等云云、此れは恐らくは爾前
法華の二途を知らずして自ら癡闇に迷うのみに非ず一切衆生の

ぶつげん 仏眼を閉ずる人なり、兜率とそつを勧めたる事はしようじようきよう小乗經に多し少しは

だいじようきよう 大乘經にも勧めたり西方さいほうを勧めたる事はだいじようきよう大乘經に多し此等これらは皆みな

しよかい 所開の文なり、法華經ほけきようの意は兜率とそつに即して十方じゆつぽう仏土中さいほう西方に即

して十方じゆつぽう仏土中にんてん・人天

に即して十方じゆつぽう仏土中と云云、法華經ほけきようは悪人あくにんに対しては十界じゆつかいの悪を

説くは悪人あくにん・五眼を具しなんどすれば悪人あくにんのきわまりを救い、女人にょにん

に即して十界じゆつかいを談だんずれば十界じゆつかい皆女人にょにんなる事を談だんず、何いかにも法華ほつけ

円実えんじつの菩提心ぼだいしんを發おこさん人は

円実えんじつの菩提心ぼだいしんを發おこさん人は

迷まよの九界くじうへ業力ごうりきに引ひかるる事こと無なきなり。

此この意いを存ぞんじ給たまいけるやらん法然上人ほうねんしやうにんも一向念仏いっごうねんぶつの行者ぎやうじやながら選せん択たくと申まうす文ぶんには雜行ぞうぎやう難行道なんぎやうどうには法華經ほけきやう・大日經等だいにちぎやうをば除はか
れたる処ところもあり委くわしく見みよ又また慧心えしんの往生要集おうじやうしゆつにも法華經ほけきやうを除はきた
り、たとい法然上人ほうねんしやうにん・慧心えしん・法華經ほけきやうを雜行ぞうぎやう・難行道なんぎやうどうとして末代まつだいの機き
に叶かなわずと書かき給たまうとも日蓮にちれんは全ぜんくもちゆべからず、一代いちだい聖教しやうきやうの
おきてに違たがい三さん世ぜ

十方じゅうほうの仏陀ぶつたの誠言せいげんに違ちがひする故ゆゑにいわうやそのぎなし、而しかるに後のちの
人ひとの消息しやうそくに法華經ほけきやうを難行道なんぎやうどう・經きやうはいみじけれど末代まつだいの機きに叶かなわ
ず謗そしらばこそ罪つみにてもあらめ、浄土じやうどに至いたつて法華經ほけきやうをば覺さとるべしと
云云にちれん、日蓮にちれんが心こころは何いにも此この事ことはひが事ことと覺おぼゆるなりかう申まうすもひ
が事ことにや有あらん、能よく能よく智人ちじんに習ならう可べし。

正嘉二年二月十四日 日蓮撰

五六

いちねんさんぜん
一念三千理事

しょうか
正嘉二年三十七歳御作

4006P

十二因縁いんねん、問う流転るてんの十二因縁いんねんとは何等なんらぞや答う一には無明むみょう・
俱舎くしゃに云くいわ「宿惑しゆくわくの位は無明むみょうなり」と文、無明むみょうとは昔愛欲ぼんのうの煩惱ぼんのう起り
しを云うなり、男は父に瞋いかりを成して母に愛を起す、女は母に瞋いかりを
成して父に愛を起すなり俱舎くしゃの第九に見えたり、一には行・俱舎くしゃに
云くいわ「むかしむかし宿の諸業しよを行と名なく」と文、昔の造業ぞうぎょうを行とは云うなり業に
二有り一には牽引けんいんの業なり我等われらが正まさく生を受く可べき業を云うな
り、二には円満えんまんの業なり余の一切いっさいの造業ぞうぎょうなり所謂いわゆる足を折り
手を切る先業せんごうを云うなり是は円満えんまんの業なり、三には識・俱舎くしゃに云く
「識まさしとは正まさしく生を結する蘊おんなり」と文、正まさしく母の腹の中に入る時の五

蘊おんなり、五蘊おんとは色・受・想・行・識またごおんなり亦五陰とも云うなり、四に
は名色みょうじき・俱舍くしゃに云く「六処むろの前は名色みょうじきなり」文、五には六処くしゃ・俱舍くしゃに
云く「眼等の根を生ずるより三和の前は六処むろなり」文、六処とは眼・
耳・

鼻・舌・身・意の六根ろっこん出来するを云うなり、六には触そく・俱舍くしゃに云く
「三受の因ことの異なるに於て未だいま了知りょうちせざるを触なすと名く」文、火は熱
しとも知らず水は寒しとも知らず刀は人を切る物とも知らざる時
なり、七には受くしゃ・俱舍くしゃに云く「婬愛いんあいの前に在るは受なり」文、寒熱を
知つて未だいま婬欲いんよくを發おこさざる時なり、八には愛くしゃ・俱舍くしゃに云く「資具と
婬とを貪むさほるは愛なり」文、女人にょこんを愛して婬欲いんよく等を發おこすを云うなり、
九には取くしゃ・俱舍くしゃに云く「諸もろもろの境界きょうがいを得んが為ために」云く
馳求せきぐするを取と名く「文、今世あに有る時世間せけんを嘗たみて他人たにんの物を
貪むさほり取る時を云うなり、十には有くしゃ・俱舍くしゃに云く「有いは謂いわく正まさしく

能く当有の果を牽く業を造る「文、未来又此くの如く生を受く可き業を造るを有とは云うなり、十一には生・俱舎に云く「その当の有を結するを生と名く「文、未来に正く生を受けて母の腹に入る時を云うなり、十二には老死・俱舎に云く「その当の受に至るまでは老死なり」文、生老死を受くるを老死憂悲苦惱とは云うなり。

問う十二因縁を三世兩重に分別する方如何、答う無明と行とは
過去の二因なり識と名色と六入と触と受とは現在の五果なり愛と
取と有とは現在の三因なり生と老死とは未来の兩果なり、私の
略頌に云く過去の二因無明行現在の五果識名色六入触受現在の三因愛
取有未来の兩果生老死と、問う十二因縁流轉の次第如何、答う無明は
行に縁たり行は識に縁たり識は名色に縁たり名色は六入に縁たり
六入は触に縁たり触は受到縁たり受は愛に縁たり愛は取に縁たり
取は有に縁たり有は生に縁たり生は老死憂悲苦惱に縁たり是れ
其の生死海に流轉する方なり此くの如くして凡夫とは成るなり、問
う還滅の十二因縁の様如何答う無明滅すれば則ち行滅す行滅す
れば則ち識滅す識滅すれば則ち名色滅す名色滅すれば則ち六
入滅す六入滅すれば則ち触滅す触滅すれば則ち受滅す受滅すれ
ば則ち愛滅す愛滅すれば則ち取滅す取滅すれば則ち有滅す有滅す

すなわ しょうめつ しょうめつ すなわ ろうしゅうひくのう

れば則ち生滅す生滅すれば則ち老死憂悲苦恼滅す、是れ其の還滅

の様なり仏は還つて煩惱を失つて行く方なり私に云く中有の人には

十二因縁具に之無し又天上にも具には之無く又無色界にも具には

之無し。

一念三千理事 十如是とは如是相は身なり 可し文籤六に云く相は唯色に在り文、

如是性は心なり 改めず文籤六に云く性は唯心に在り文、如是体は身と心となり

玄二に云く主質を 玄二に云く性以て内に拠る自分 玄二に云く相以て外に拠る覺て別つ文、

り 止に云く建立 因と為す亦名けて業となす 文 如是作は身と心とな

を助くるに由る文、如是果 止に云く果は剋獲を果と為す文、如是報 止に云く報は酬

本末究竟等 為し後ちの報を末と為す文、三種世間とは五陰世間に五陰世間と

名くるなり文、衆生世間を得る故に 衆生世間と名くるなり文、国土世間にて

国土世間と称す文、五陰とは新訳

には五蘊と云うなり陰とは聚集の義なり一に色陰・五色是なり二

に受陰・領納りょうのう是これなり・三に相陰・俱舍くしゃに云いわく想は像を取るを体と
為なすと文・四に行陰・造作ぞうさく是行なり・五に識陰・了別りょうべつ是これ識なり止の
五に婆沙を引いいて云いわく識・先ず了別りょうべつ次に受は領納りょうのうし・相は相貌そうみょうを
取り・行は違いじゆう従じゆうを起し・色は行に由よつて感かんずと。

ひやつかい・せんによ さんぜんせけん

百界・千如・三千世間の事、十界互具即百界と成るなり、地獄

衆生世間 十如は五陰世間は国土世間 十如は宮殿 声聞 十如は五陰世間 十如是 国土世間 同居士、菩薩 十如是 五陰世間 十如是

十如是 五陰世間 是 国土世間 下 赤鉄、 餓鬼 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 十如是 地、 水陸空 修羅 十如是 五陰世間 十如是

地下 畜生 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 十如是 須、 天 十如是 五陰

十如是 畜生 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 十如是 須、 天 十如是 五陰

国土世間 海畔底、 人間 十如是、 五陰世間 十如是 国土世間 弥四州、 天 十如是 五陰

世間 十如是 国土世間 十如是 宮殿 声聞 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 同居士、

縁覚 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 同居士、 菩薩 十如是 五陰世間 十如是

縁覚 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 同居士、 菩薩 十如是 五陰世間 十如是

国土世間 方便実報、 仏 十如是 五陰世間 十如是 国土世間 寂光土。

止観の五に云く「心縁と合すれば則ち三種世間・三千の性相皆

心より起る「文、弘の五に云く「故に止観に正しく観法を明すに至つ

て並びに三千を以て指南と為す、乃ち是れ終窮究竟の極説なり

故に序の中に説己心中所行の法門と云う良に以有るなり、請う

尋ねて読まん者心に異縁無かれ「文、又云く「妙境の一念三千を

明さずんば如何ぞ一に一切を撰ることを識る可けん、三千は一念

明さずんば如何ぞ一に一切を撰ることを識る可けん、三千は一念

明さずんば如何ぞ一に一切を撰ることを識る可けん、三千は一念

明さずんば如何ぞ一に一切を撰ることを識る可けん、三千は一念

の無明を出でず是の故に唯苦因苦果のみ有り文、又云く「一切の
 諸業十界・百界・千如・三千世間を出でざるなり」文、籤の二に云く
 「仮は即ち衆生・実は即ち五陰及び国土・即ち三世間
 なり千の法は皆三なり故に三千有り」文、弘の五に云く「一念の心
 に於て十界に約せざれば事を収むること 　　からず三諦に約せざれ
 ば理を撰ること周からず十如を語らざれば因果備わらず三世間無
 んば依正尽きず」文、記の一に云く「若三千に非ざれば撰ることか
 らず若し円心に非ざれば三千を撰せず」文、玄の二に云く「但衆生
 法
 はただ広く仏法はただ高し初学に於て難と為し心は則ち易しと
 為す」文、弘の五に云く「初に華嚴を引くことは心の工なる画師の
 如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざること無し、
 心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心仏及び衆生是の

三差別さべつ無しも若し人三世一切さんぜいっさいの仏を求め知らんと欲ほつせば当まさに是かくの
如ごとく観くわんずべし心は諸もろもろの如来にょらいを造ると、金こんべいろん論ろんに云いわく「じつそう実相じつそうは必ず
諸法しよほう・諸法しよほうは必ず十如じゆっかい・十如じゆっかいは必ず十界じゆっかい・十界じゆっかいは必ず身土しんど
なり」

三身さんじん釈しゃくの事、先まづ法身ほっしんとは大師だいし大經だいきやうを引ひいて、「一切いっさいの世諦せたいは若もし如來にょらいに於おいては即すなわち是第一だいいち義諦ぎたいなり衆生しゆじやう顛倒てんたうして仏法ぶつぽうに非あらずと謂おもえり」と釈しゃくせり、然しかれば則すなわち自他じた・依正えしやう・魔界まかい・仏界ぶつかい・染淨せんじやう・因果いんがは異ことなれども悉ことごとく皆諸みな仏しよぶつの法身ほっしんに背そむく事ことに非あらざれば善星ぜんしやう比丘びくが不信ふしんなりしも楞伽りやうが王わうの信心しんじんに同おなじく般若はんが蜜外みつぐわい道どうが意いの邪見じやくけんなりしも須達すだつち長者ちやうじやが正見せいけんに異ことらず、即すなわち知しんぬ此この法身ほっしんの本ほんは衆生しゆじやうの当体とうたいなり、十方じゆつぱう諸しよ仏ぶつの行願ぎやうがんは實じつに法身ほっしんを証しゆするなり、次つぎに報身ほうしんとは大師だいしの云いく「法如ほつに如じゆの智ち如じゆ真實しんじつの道どうに乗のり來きつて妙覺みやうかくを成じやうず智如ちじゆの理りに稱かなう理りに従したがつて如ごとく名なけ智ちに従したがつて來きと

名なく即すなわち報身ほうしん如來にょらいなり盧舍那るしゃなと名なけ此こには淨滿じゆんまんと翻はんず」と釈しゃくせり、此これは如ごとく法性ほつしやうの智ち・如ごとく真實しんじつの道どうに乗のりて妙覺みやうかく究竟きやくきやうの理り智ち・法界ほつがいと冥合めいごうしたる時とき・理りを如ごとく名なく智ちは來きなり。

五五 十如是一事

正嘉二年 三十七歳御作

四一〇頁

我が身が三身即一の本覚の如来にてありける事を今経に説いて
云く如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・
如是果・如是報・如是本末究竟等文、初めに如是相とは我が身の色
形に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は
仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身
如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我
が此の身体なり是を法身如来とも又は中道とも法性とも寂滅と
も云うなり、されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三
如是が三身如来にておはしましけるをよそに思ひ

へだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを
法華經ほけきょうをさとれる人とは申もうすなり此の三如是によぜを本として是よりの
こりの七つの如是によぜはいでて十如是じゆのぜとは成りたるなり、此の十如是じゆのぜが
百界にも千如にも三千世間さんぜんせけんにも成りたるなり、かくの如く多くの
法門ほうもんと成りて八万法蔵はちまんほうぞうと云はるれどもすべて只ただ一つの三諦さんたいの法にて
三諦さんたいよ

り外ほかには法門ほうもんなき事なり、其の故そのゆえは百界と云うは仮諦けたいなり千如と
云うは空諦くうたいなり三千と云うは中諦ちゆうたいなり空と仮と中とを三諦さんたいと云う
事なれば百界ひゃつかい・千如せんによ・三千世間さんぜんせけんまで多くの法門ほうもんと成りたりと云へど
も唯一ただ一つの三諦さんたいにてある事なり、されば始の三如是さんたいの三諦さんたいと終の七
如是さんたいの三諦さんたいとは唯一ただ一つの三諦さんたいにて始と終と我が一身の中の理にて唯ただ
一物ひとものに

て不可思議ふかしぎなりければ本と末とは究竟くきやうして等しとは説き給たまへるな

り、是これを如によぜ是本末究竟等とは申もつしたるなり、始の三如によぜ是を本とし終
の七如によぜ是を末として十の如によぜ是にてあるは我が身の中の三諦さんたいにてある
なり、此の三諦さんたいを三身如來さんじんによらいとも云へば我が心身より外には善惡ぜんあくに付
けてかみずぢ計ばかりの法もなき物をされば我が身が頓やがて三身即一の
本覺ほんがくの如來によらいにてはありける事なり、是これをよそに思うを衆生しゅじょうとも迷まよい
いと凡夫ほんぶとも云うなり、是これを我が身の上と知りぬ

るを如来にやらいとも覺さとりとも聖人しよじんとも智者ちしやとも云いふなり、かう解さとり明あきらかに
觀かんずれば此の身頓やがて今生こんじようの中に本覺ほんがくの如来にやらいを顯けんはして即身成そくしんじようぶつ仏ぶつと
はいはるるなり、譬たとえば春夏しゆんか・田でんを作りうへつれば秋冬しゆつとうは蔵ぞうに収おさめ
て心のままに用もちうるが如ごとし春はるより秋あきをまつ程ほどは久ひさしき様さまなれども
一年いちねんの内に待まちち得えるが如ごとく此の覺さとりに入いつて仏ぶつを顯けんはす程ほどは久ひさしき
様さまなれども一いつ生の内に顯けんはして我が身みが三身さんじん即すなはち一の仏ぶつとなりぬる
なり。

此の道みちに入いぬる人ひとにも上じやう中ちゆう下げの三根さんこんはあれども同どうじく一いつ生の内うち
に顯けんはすなり、上根じやうこんの人ひとは聞きく所ところにて覺さとりを極きくめて顯けんはす、中根ちゆうこんの
人ひとは若もしは一日いちにち・若もしは一月いちげつ・若もしは一年いちねんに顯けんはすなり、下根げこんの人ひとはのび
ゆく所ところなくてつまりぬれば一生いちじゆうの内うちに限かぎりたる事ことなれば臨終りんじゆうの時とき
に至いたりて諸もろのみえつる夢ゆめも覺さとてうつつになりぬるが如ごとく只今ただいままでみ
つる所ところの生死しじゆう妄想ぼうそうの邪思じあひがめの理ことはあと形かたちもなくなりて本覺ほんがくのう

さとり

ほっかい

みなじやうじゆ

じくらく

つつの覚にかへりて法界をみれば皆寂光の極楽にて

ひころいやし

さんじん

ほんがく

にょらい

日来賤と思ひし我が此の身が三身即一の本覚の如来にてあるべきな

り、秋のいねには早と中と晩との三のいね有れども一年が内に収む

るが如く、此れも上中下の差別ある人なれども同じく一生の内に

諸仏如来と一体不二に思い合せてあるべき事なり。

しよぶつによらい

じよちゆめつげ

さへつ

諸仏如来と一体不二に思い合せてあるべき事なり。

みよつほつれんげきよ

妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは何様なる体にておはし

ますぞと尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてありける

事なり、されば我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば

經の名にてはあらずしてはや我が身の体にてありけると知りぬれ

ば我が身頓て法華經にて法華經は我が身の体をよび顯し給いける

仏の御言にてこそありければやがて我が身三身即一の本覚の如来に

てあるものなり、かく覚ぬれば無始より已来今まで思い

ならわしし・ひが思いの妄想は昨日の夢を思いやるが如く・あとかた

もなく成りぬる事なり、是これを信じて一遍いっぺんも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと申せば法華經ほけきょうを覚さとて如法さつぽうに一部いちぶをよみ奉たてまつるにてあるなり、十遍は十部・百遍は百部・千遍は千部を如法さつぽうによみ奉たてまつるにてあるべきなり、かく信しんずるを如説修行にょせつじゆぎやうの人ひととは申もうすなり、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう。

五七

一念三千法門

正嘉二年 三十七歳御作

412P

法華經ほけきょうの余經よきょうに勝すぐれたる事なにごと何事なにごとぞ此こゝの經きょうに一心いっしん三觀さんくわん・一念三千いちねんさんぜんと云いう事ことあり、藥王菩薩やくおうぼさつ・漢土かんどに出世しゅつせして天台大師てんだいだいしと云いわれ此こゝの法門ほうもんを覺さとり給たまいしかども先まず玄義げんぎ十卷じゅうくわん・文句もんく十卷じゅうくわん・覺意三昧かくいさんまい・小止觀しょうじくわん・淨名疏じょうみやうじょ・四念處ねんじょ・次第禪門しだいぜんもん等の多おほくの法門ほうもんを説ときしかども此こゝの一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをば談たまじ給たまはず百界ひゃっかい・千如せんじよの法門ほうもん計ばかりなり、御年ごねん五十七ごじちしちの夏四月ごしちごの比ころ・荊州玉泉寺けいしゅうぎよくせんじと申もうす處ところにて御弟子章安大師おんでししやうあんだいしに教たまえ給たまふ止觀しかんと申もうす文十卷ぶんじゅうくわんあり、上四帖じやうしじふていに猶秘なほし給たまいて但六即たんにろくじやく・四種三昧等計ししゆざんまいばかりなり、五の卷くわんに至いたつて十境じゅうけい・十乘じじゆ・一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを立たて夫れ一心いっしんに具ぐす等とと云云いふいふ是こゝより二百年にひゃくにじゅうねん後に妙樂大師みやうりやくだいし釈しゃくして

云く「いまま」ま當に知るべししん身土ど一念いの三千さんなり故ゆに成道じの時じ此の本理ほんに
称なて一身いち一念ねん法界ほっに遍へんし」と云云、此この一念い三千さん・一心い三觀さんの法門ほっ
は法華經ほのけのいのつ卷まのき十じ如じ是ぜより起おり、文ぶんの心こころは百界ひゃ千如せん・三さん千せん
世間せ云云、さて一心い三觀さんと申もうすは余宗よは如に是よとあそそばば是これひがこ事こと
にて二義にかかけたり天台てん・南岳なんの御義おんを知ららざる故ゆなり、されば当宗た
には天台てんの所し釈しの如ごとく三遍よ読どに功徳くまささる、第一だに是に相如じと相性じ
体力たい以下いの十じゅうを如ごとくと云いふ如ごとくは空くうの義ぎなるが故ゆに十法界じゅう皆みな
空諦くうなり是これを讀よみ觀くわんずる時ときは我わがが身即そく・報身ほう如來になり八万四千はち又また
は般若はんとも申もうす、第二にに如に是よ相そう
是これ我わがが身みの色形いろ顯あれたる相さうなり是これ皆みな仮かなり相性じ体力たい以下いの十
なれば十法界じゅう皆みな假諦かと申もうして仮かの義ぎなり是これを讀よみ觀くわんずる時ときは我わが
身即そく・応身おう如來になり又は解脫げとも申もうす、第三にに相如に是よと云いふは
中道ちゅうと申もうして仏ぶつの法身ほっの形かたちなり是これを讀よみ觀くわんずる時ときは我わが身即そく・

法身ほっしん如来にょらいなり又は中道ちゅうどうとも法性ほっしょうとも涅槃ねはんとも寂滅じやくめつとも申もうす、此
の三ほっぼうを法報ほうほう応おうの三身さんじんとも空仮中くうけちゅうの三諦さんたいとも法身ほっしん・般若はんにか・解脱げだつの三徳さんとく
とも申もうす此さんじんの三身にょらい如来にょらい全く外ほんがくになし我が身そく即さん・三徳さん究竟とくきようの体たいにて
三身さんじん即そく一身いっしんの本覚ほんがくの仏ぶつなり、是これをしるを如来にょらいとも聖人しょうにんとも悟ごとも
云いう知らざるを凡夫ぼんぷとも衆生しゆじようとも迷まよいとも申もうす。

十界の衆生・各互に十界を具足す合すれば百界なり百界に各各
十如を具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土世間・五陰
世間を具すれば三千なり、百界と顕れたる色相は皆総て仮の義な
れば仮諦の一なり千如は総て空の義なれば空諦の一なり三千世間
は総じて法身の義なれば中道の一なり、法門多しと雖も但三諦な
り此の三諦
を三身如来とも三徳究竟とも申すなり始の三如是は本覺の如来な
り、終の七如是と一体にして無二無別なれば本末究竟等とは申す
なり、本と申すは仏性・末と申すは未顕の仏・九界の名なり究竟等
と申すは妙覺究竟の如来と理即の凡夫なる我等と差別無きを究竟
等とも平等大慧の法華經とも申すなり、始の三如是は本覺の如来
なり本覺の
如来を悟り出し給へる妙覺の仏なれば我等は妙覺の父母なり仏は

われらわが所生しよの子なり、止との一いに云いく、「止とは則すなわち仏ぶつの母ぼ・觀くわんは即そく仏ぶつの父ふなり」と云いふ、譬たとえば人ひと十じゆ人にんあらんずるが面めん面めんに蔵ざう蔵ざうに宝ほうをつみ我が蔵ざうに宝ほうのある事ことを知らずかつへ死ししここへ死しす、或あるは一人ひとり・此こゝの中なかにかしこき人ひとありて悟いり出だすが如ごとし九く人は終つひに知らず、然しかるに

或あるは

教くわうえられて食くし、或あるはくくめられて食くするが如ごとし、弘くわうの一いつの止し觀くわんの二に字じは正まさしく聞もん體たいを示しす聞もんかざる者ものは本ほん末まつ究きゆう竟きやう等とうも徒いたらか、子こなれども親おやにまさる事こと多おほし重ちゆう華かうはかたくなはしき父ちちを敬けいいて賢けん人じんの名なを得えたり、沛はい公こうは帝てい王おうと成なつて後あとも其その父ちちを拜そす其その敬けいわれし父ちちをば全ぜんく王わうといはず敬けいいし子こをば王わうと仰おほぐが如ごとし、其それ仏ぶつは子こなれども賢けんくましまして悟いり出だし給たまへり、凡ぼん夫ぶは親おやなれども愚ぐ癡ちにして未いまだ悟いらず委くわしき義ぎを知らざる人ひと・毘び盧るの頂ちゆう上じやうをふむなんど悪あく口くちす大だいなる僻ひが事ことなり。

一心三觀いっしんさんかんに付いて次第しだいの三觀さんかん・不次第しだいの三觀さんかんと云う事あり委くわしく申もうすに及およばず候こう、此この三觀さんかんを心得こころえすまし成就じゅうじゆしたる処ところを華嚴經けこんぎやうに三界唯さんがいただ一心いっしんと云云てんだい、天台てんだいは諸水しよすい入海いりうみとのぶ、仏ぶつと我等われらと総いっさいて一切いっさい衆生じゆじやう・理性りしやう一いつにて・へだてなき

を平等びやうどう大慧たいえと云うなり、平等びやうどうと書いてはおしなべてと讀む、此この一心三觀いっしんさんかん・一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん・諸經しよきやうにたえて之これな無し法華經ほけきやうに遇あわざれば争いかにか成じやうぶつ仏ぶつす可べきや、余經よきやうには六界八界ろっかいより十界じゆっかいを明あきせどもさら

に具あきを明あきかさず、法華經ほけきやうは

ねんねん 一念に一心三觀・一念三千の謂を觀ずれば我が身本覺の如來なる
こと悟り出され無明の雲晴れて法性の月明かに妄想の夢醒て本覺
の月輪いさぎよく父母所生の肉身・煩惱具縛の身・即本有常住の
如來となるべし、此を即身成仏とも煩惱即菩提とも生死即涅槃と
も申す、此の時法界を照し見れば悉く中道の一理にて仏も衆生も
一なり、され

ば天台の所釈に「一色一番中道に非ざること無し」と釈し給へり、
此の時は十方世界皆寂光淨土にて何れの処をか弥陀薬師等の
淨土とは云わん、是を以て法華經に「是の法は法位に住して世間の
相常住なり」と説き給ふさては經をよまずとも心地の觀念計りに
て成仏す可きかと思いたれば一念三千の觀念も一心三觀の觀法も
妙法蓮華經の五字に納れり、妙法蓮華經の五字は又我等が一心に
納りて候けり、天台の所釈に「此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵

三世さんぜの如来にょらいの証得しょうとくしたもう所ところなり」と釈しゃくしたり、さて此このの妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうを唱となうる時とき心中しんちゆうの本覺ほんがくの仏ぶつ顯あらわる我等われらが身みと心こころをば蔵くらに譬たとへ妙たつの一字いちじを印いんに譬たとへたり、天台てんだいの御釈ごしゃくに「秘密ひみつの奥蔵おくぞうをひらく之これを稱しょうして妙たつと為なす・権実こんじつの正軌しょうきを示しす故ゆえに号なづけて法はふと為なす、久遠くおんの本果ほんがを指さす之これを喩たとうるに蓮れんを以もつてす、不二ふたふたの円道えんどうに會あはす之これを譬たとうるに華けを以もつてす、声仏ぶつじ事を為なす之これを稱しょうして經きやうと為なす」と釈しゃくし給たまう、又また「妙たつとは不可思議ふかしぎの法はふを褒美ほうびするなり又妙たつとは十界じゅうかい・十如じゅうにょ・権実こんじつの法はふなり」と云云いふこと、經きやうの題目だいもくを唱となうると觀念かんのんと一ひとなる事こと心得こころえがたしと愚癡ぐちの人は思おもひ給たまふべし、されども天台てんだい止との二ふたに而に於お説せつ默もくと云へり、説せつとは經きやう・默もくとは觀念かんのんなり、又四教義しきやうぎの一ひとに云いく、「但功だんこうの唐捐とうけんならざるのみに非あらず亦また能よく理あに契あうの要えいなるをや」と云云、天台大師てんだいだいしと申もうすは藥王菩薩やくおうぼさつなり此このの大師だいしの説せつ而に觀かん而に釈しゃくし給たまふ元もとより天台てんだいの所ところ釈しゃくに因縁いんねん・約教やくきやう・本ほん・迹せき・觀心かんじんの四種ししゆの御釈ごしゃくあり四種ししゆ

の重を知らずして一しなを見たる人・一向本・迹をむね

とし一向觀心を面とす、法華經に法譬因縁と云う事あり法説の段

に至つて諸仏出世の本懐・一切衆生・成仏の直道と定む、我のみな

らず一切衆生・直至道場の因縁なりと定め給いしは題目なり、さ

れば天台玄の一に「衆善の小行を会して広大の一乗に歸す」と広大

と申すは残らず引導し給うを申すなり、仮使釈尊一人本懐と宣べ

給う

とも等覺とうかく以下は仰あおいで此の経を信べず可いし況いわんやや諸しよ仏ぶつ出世しゅつせの本懐ほんかいなり、
禅宗ぜんしゆうは觀心かんじんを本懐ほんかいと仰あおぐとあれども其は四種ししゆの一面いぺんなり、
いちねんさんぜん いっしんさんかん
一念三千・一心三觀等の觀心計りが法華經の肝心かんじんなるべくば題目だいもくに
じゆのぜ
十如是を置くべき処ところに題目だいもくに妙法蓮華經と置かれたる上は子細しさいに
および、又当世とうせの禅宗ぜんしゆうは教外別伝きょうげべつでんと云いい給たまうかと思おもへば又捨すられ
たる円覺經等の文を引かるる上は実經じつぎやうの文ぶんに於おいて御綺おいろえに及およぶべか
らず候ちしや、智者ちしやは読誦とくじゆに觀念かんねんをも並なぶべし愚者ぐしやは題目計だいもくばかりを唱なふ
とも此の理りに會あう可べし、此の妙法蓮華經みようほうれんげきやうとは我等われらが心性しんしよ・總すべじては
いっさいしゆじやう しんしよはちやう びやくれんげ
一切衆生の心性八葉の白蓮華の名なり是を教たま給たまふ仏の御詞ごことばな
り、無始むしより以來いらい・我が身中の心性しんしよに迷まよひて生死しやうじを流轉るてんせし身今ことば・此
の經きやうに値あひ奉たてまつて三身さんじん即すなはち一の本覺ほんがくの如來にょらいを唱となうるに顯あらわ
ないしし・成じやう仏ぶつするを即身成そくしんじやうぶつ仏ぶつと申まうす、死すれば光こを放はなつ是れ外用ごの
成じやう仏ぶつと申まうす

来世得作仏とは是なり、略拳経題・玄収一部とて一遍は一部云云、
妙法蓮華経と唱うる時心性の如来顕る耳にふれし類は無量
阿僧祇劫の罪を滅す一念も随喜する時即身成仏す縦ひ信ぜざれど
も種と成り熟と成り必ず之に依て成仏す、妙樂大師の云く「若は
取・若は捨・耳に経て縁と成る、或いは順・或いは違終いに斯れに
因つて脱す」と云云、
日蓮云く若取・若捨・或順・或違の文肝に銘ずる詞なり法華経
に若有聞法者等と説れたるは是か、既に聞く者と説れたり観念
計りにて成仏すべくば若有觀法者と説かるべし、只天台の御料簡
に十如是と云うは十界なり此の十界は一念より事起り十界の
衆生は出来たりけり、此の十如是と云は妙法蓮華経にて有けり此
の娑婆世界は耳根得道の国なり以前に申す如く当知身土と云云、
一切衆生の身に百界・千如・三千世間を納むる謂を明が故に是を

耳に触るる一切衆生は功德を得る衆生なり、一切衆生と申すは
草木・瓦礫も一切衆生の内なるか、有情、抑草木は何ぞ金論に
云く、「一草一木・一礫一塵・各一仏性・各一因果・具足縁了」等と云
云、法師品の始に云く「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・
迦楼羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼、妙法蓮華經
の一偈・一句を聞いて乃至一念も随喜せん者は我皆
阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」と云云、非人とは総じて人界
の外一切有情界とて心

あるものなり況や人界をや、法華經の行者は如説修行せば必ず一
生の中に一人も残らず成仏す可し、譬えば春夏田を作るに早晚あ
れども一年の中には必ず之を納む、法華の行者も上中下根あれど
も必ず一生の中に証得す、玄の一に云く「上中下根皆記を与う」
と云云、觀心計りにて成仏せんと思ふ人は一方かけたる人なり、
況や教外別伝の坐禅をや、法師品に云く「薬王多く人有て在家・
出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し読誦し
書持し供養すること得ること能わずんば當に知るべし是の人は未だ
善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くこと得ること有らば
乃ち能善菩薩の道を行ずるなり」と云云、觀心計りにて成仏すべく
んば争か見聞読誦と云わんや、此の經は専ら聞を以て本と為す凡
此の經は悪人・女人・二乘・闍提を簡はず故に皆成仏道とも云ひ又
平等大慧とも云う、善悪不二・邪正一如と聞く処にやがて内証

成仏じやうぶつす故ゆえに即身そくしん成仏じやうぶつと申し一生しやうじふに証得しやうとくするが故ゆえに一生しやうじふ妙覺みやうかくと

云ふ、義ぎを知らざる人ひとなれども唱なふれば唯ゆい仏ぶつと仏ぶつと悦よろこび給たまふ我そく即

歡喜かんき・諸しよ仏ぶつ亦やく然ねん云云ん、百千ひやくせん合あせたる藥やくも口くちにのまざれば病い愈いえず蔵

に宝たからを持もつても開ひらく事ことをしらずしてかつへ懷たもに藥やくを持もつても飲のみまん事ことを

しらずして死しするが如ごとし、如意にょい宝珠ほうじゆと云いう玉たまは五百ごひやく弟子でし品の此この

經きやうの徳とくも又また此かくの如ごとし、觀かん心しんを並ならべて読よめば申もうすに及およばず觀かん念ねんせず

と雖いえども始はじめに申もうしつることことく所謂いわゆる諸しよ法ほう如ごとし相あ如ごと云云んと読よむ時ときは如ごとし

空くうの義ぎなれば我われが身みの先業せんごうにうくる所ところの相性さうじやう体力たいりき其そのの

具ぐする所ところの八十八はちじゅうはち使しの見惑けんわく・八十一はちじゅういち品しんの思惑しわく・其そのの空くうは報身ほうしん如來にょらいな

り、所謂いわゆる諸しよ法ほう如ごとし相あ云云んとよめば是これ仮かの義ぎなれば我われが此この身み

先業せんごうに依よつて受うけたる相性さうじやう体力たいりき云云ん其そのの具ぐしたる塵沙じんじやの惑わ悉じつく

即身そくしん即身おうじん如來にょらいなり、所謂いわゆる諸しよ法ほう如ごとしと読よむ時ときは是これ中道ちゆうどうの義ぎに順したがじ

て業ごうに依よつて受うくる所ところの相性さうじやう等とう云云ん、其そのに隨したがいたる無明むみやう皆みな退しりぞいて

即そく身しん法ほつ身しんの如に来よと心こころを開ひらく、此こゝの十じ如ゆ是ぜ・三さん転てんによまるる事こと・三さん身しん
即そく一いつ身しん・一いつ身しん即そく三さん身しんの義ぎなり三さんに分わかるれども一いつなり一いつに定さだまれど
も三さんなり。

二乗三界を出でざれば即ち十法界の数量を失う云云、問う
 十界互具を知らざらん者六道流轉の分段の生死を出離して變易の
 土に生ず可きや、答う二乗は既に見思を断じ三界の生因無し底に
 由つてか界内の土に生る事を得ん是の故に二乗永く六道に生ぜず、
 故に玄の第二に云く「夫れ變易に生るに則ち三種有り三蔵の二乗・
 通教の三乗・別教の三十心」已上此の如き等の人は皆通惑を断じ
 變易の土に生ずることを得て界内分段の不淨の国土に生ぜず。
 難じて云く小乗の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の
 六界を談ずるに非ず、是の故に二乗は六界を顯さず心具を談ぜず

云何ぞ但六界の見思を断じて六道を出ず可きや、故に寿量品に云
える一切世間天人阿修羅と

は爾前・迹門・兩教の二乗・三教の菩薩並に五時の円人を皆天人・

修羅と云う豈に未断見思の人と云うに非ずや、答う十界互具とは

法華の淵底此の宗の冲微なり四十余年の諸経の中には之を秘して

伝えず、但し四十余年の諸の経教の中に無数の凡夫見思を断じて

無漏の果を得能く二種の涅槃の無為を証し塵数の菩薩・通別の惑を

断じ頓に二種の生死の縛を超ゆ、無量義経の中に四十余年の諸経

を挙げて未顕真実と説くと雖も而も猶爾前・三乗の益を許す、

法華の中に於て正直捨方便と説くと雖も尚見諸菩薩授記作仏と説

く此くの如き等の文爾前の説に於て当分の益を

許すに非ずや、但し爾前の諸経に二事を説かず謂く実の円仏無く

又久遠実成を説かず故に等覺の菩薩に至るまで近成を執する思い

有り此の一辺に於て天人と同じく能迷の門を挙げ生死煩惱・一時に
断壊だんねすることを証せず故ゆえに唯ただ未み顕けん真しん実じつと説けり、六界ろっかいの互具を
明あかさざるが故ゆえに出でず可べからずとは此の難なん甚はなはだだ不可ふかなり、六界ろっかい互
具すなわせば即すなわち十界じゅうかい互具ごす可べし何となれば権果ごんかの心生とは六凡ろっかいの差別さべつ
なり心生を觀なんずるに何ぞ四聖ししやうの高下こうげ無なからんや。

第三重の難なんに云いわく所立しよりつの義誠ぎじやうに道理どうり有あるに似にたり委くわしく一代いちだい聖教しようきやうの前後ぜんごをかんがうるに法華本門ほっけほんもん並ならに觀心かんじんの智慧ちえを起おこさざればえんぶつ円仏えんぶつと成ならず、故ゆえに実まことの凡夫ほんぶにして權果ごんかだも得えず所以ゆえんに彼かれの外道げどう五ご天竺てんじくに出いでて四顛倒てんどうを立たつ、如來出世にょらいしゆつせして四顛倒てんどうを破やぶせんが為ために苦く・空等くうとうを説とく此これ則すなわち外道げどうの迷情まよいを破やぶせんが為ためなり、是かくの故ゆえに外道げどうの我見わがみを破やぶして無我むがに住すするは火かを捨すてて以もつて水みづに隨したがうが如ごとし堅むがく無我むがを執しゆうして見思けんじを斷ろくじ六道ろくだうを出いずると謂おもえり、此これ迷まよいの根本こんぽんなり故ゆえに色心俱滅しきしんの見みに住す大集等だいしつの經經きやうきやうに斷常だんじやうの二見にみと説とくは是これなり、例れいせば有漏外道うろげどうの自みずからは得道とくたうすと念ねんえども無漏むろ智ちに望のぞむれば未いまだ三界さんがいを出いでざるが如ごとし、仏教ぶつぎやうに値あわずして三界さんがいを出いずるといいわば是この処ところ有あること無なし小乘しようじやうの二乘にじやうも亦また復また是かくの如ごとし、鹿苑施小ろくおんせしよの時外道げどうの我わがを離はなれて無我むがの見みに住す此この情あたらを改あらためずして四十余しじゆ

年草庵に止宿するの思い暫くも離るる時無し、又大乗の菩薩に於て心生の十界を談ずと雖も而も心具の十界を論ぜず、又・或る時は九界の色心を断尽して仏界の一理に進む是の故に自ら念わくさんなく三惑を断尽して変易の生を離れ寂光に生るべしと、然るに九界を滅すれば是れ則ち断見なり進んで仏界に昇れば即ち常見と為す九界の色心の常住を滅すと欲うは豈に九法界に迷惑するに非ずや、又妙樂大師の云く「但し心を観ずと言わば則ち理に称わず」文、此の釈の意は小乗の観心は小乗の理に称わざるのみ、又天台の文句第九に云く「七方便並に究竟の滅に非ず」已上、此の釈は是れ爾前の前三教の菩薩も実には不成仏と云えるなり、但し未顕眞実と説くと雖も三乗の得道を許し正直捨方便と説くと雖も而も見諸菩薩授記作仏と云うは、天台宗に於て三種の教相有り第二の

化導けどうの始終しじゆうの時

過去かこの世よに於おいて法華結縁ほっけけちえんの輩やから有り爾前にぜんの中に於おいて且しばらく法華ほっけのためために三乘さんじやうとうぶん当分とくどうの得道とくどうを許ゆるす所謂いわゆる種熟脱しゆじゆくたつの中の熟益じゆくやくの位ゐなり是は為なに三乘さんじやうとうぶん当分とくどうの得道とくどうを許ゆるす尚迹門なほしやくもんの説せつなり、本門ほんもん觀心かんじんの時ときは是れ實義じつぎに非あらず一往いちおう許ゆるすのみ、其その實義じつぎを論ろんずれば如來久遠にやらいくおんの本ほんに迷まよい一念いちねん三千さんぜんを知らざれば永えいく六道ろくだうの流轉るてんを出です可べからず、故ゆえに釈いに云いく「円乘えんじやうの外がを名なけて外道げどうと為なす」文ぶん、又また「諸善男子しよぜんなんし・樂ぎやう於お小法しやうぽう・德薄垢重者とくはつくじゆう」と説せつく若もし爾しかれば經釈きやうしやく共ともに道理どうり必然ひつぜんなり、答こたう執難しつなん有ありと雖いえど其その義ぎ

ふか 不可なり、所以は如来の説教は機に備りて虚からず是を以て頓等の四教蔵等の四教八機の為に設くる所にして得益無きに非ず、故に無量義経には「是の故に衆生の得道差別あり」と説く、誠に知んぬ「終に無上菩提を成ずる

ことを得ず」と説くと雖も而も三法・四果の益無きに非ず、但是れ速疾頓成と歴劫迂回との異なるのみ、是れ一向に得道無きに非ざるなり、是の故に或は三明六通も有り或は普現色身の菩薩も有り縦い一心三觀を修して以て同体の三惑を断ぜずとも既に析智を以て見思を断ず何ぞ二十五有を出でざらん、是の故に解釈に云く「若し衆生に遇うて小乗を修せしめば我則ち慳貪に墮せん此の事不可なりとして祇二十五有を出す「已上、当に知るべし此の事不可と説くと雖も而も出界有り但是れ不思議の空を觀ぜざるが故に不思議の

空智くうちを顯あらわさずと雖いえども何なんぞ小分せうぶんの空解くうげを起おこさざらん、若もし空智くうちを以もつて見思けんじを断だんぜずと云いわば開善かいぜんの無声聞むしやうもんの義ぎに同おなずるに非あらずや、況いはんやや今の

経しやうじきは正直捨權しやうじきしやけん・純円じゆんえん一実いちじつの説しやうもんなり諸もろもろの爾前にぜんの声聞しやうもんの得益とくやくを拏あげて諸漏しよるす已つに尽つきて復煩悩またぼんのう無なし」と説とき又と「實じつに阿羅漢あらかんを得え・此この法ほふを信しんぜず是この処こゝ有あること無なし」と云いい又また「三百由旬ひやくゆじゆんを過すぎて一城いちじやうを化け作さす」と説とく、若もし諸もろもろの声聞しやうもん全ぜんく凡夫ぼんぶに同おなぜば五百由旬ひやくゆじゆん一歩いっぽも行いく可べからず。

又また云いく「自みら所得しよとくの功德くどくに於おいて滅度めつどの想まを生まじて当まさに涅槃ねはんに入いるべし、我余国われこに於おいて作仏さぶつして更いに異名いみょう有あらん是この人滅度めつどの想まを生まじて涅槃ねはんに入いると雖いえども而しかも彼かの土ちに於おいて仏ぶつの智慧ちえを求もとめて是この経きやうを聞きくことを得えん」已上すで、此この文既すに証果しやうかの羅漢らかん・法華ほふけの座ざに來きらずして無余涅槃ねはんに入いり方便土ほふべんに生まじて法華ほふけを説とくを聞きくと見みえたり、

若し

爾しからば既すでに方便ほうべん土つちに生なじて何いかんぞ見思けんじを断だんぜざらん是かくの故ゆえに天台てんだい・

妙樂みょうらくも「彼土得聞」と釈しゃくす、又爾前にぜんの菩薩ぼさつに於おいて「始めて我が身を

見我が所説しよせつを聞きいて即すなわち皆信受みなしんじゆし如来慧にょらいに入りいるにき」と説ゆえく、故ゆえに

知んぬ爾前にぜんの諸もろもろの菩薩ぼさつ三惑さんかくを断除だんじよして仏慧ぶつてに入るいることを、故ゆえに解げ釈しゃく

に云いく「初後しよごの仏慧ぶつて円頓えんどんの義ぎ齊しし」已上いじやう。

或あるは云いく「故ゆえに始終しじゆうを挙あぐるに意い・仏慧ぶつてに在あり」と若もし此等これらの

説相せつしやう 經釈きやうしゃく 共に非義ひぎならば正直捨権しよくしやくけんの説せつ・唯ゆい以一い

大事の文・妙法華經・皆是眞実の証・誠皆以て無益なり皆是眞実の
言は豈一部八卷に亘るに非ずや、釈迦・多宝・十方分身の舌相・至
梵天の神力・三世諸仏の誠諦・不虛の証・誠・空く泡沫に同ぜん、
但し小乗の断常の二見に至つては且く大乘に對して小乗を以て
外道に同ず小益無きに非ざるなり、又七方便並に究竟の滅に
非ざるの釈・或は復但し心を觀ずと言わば則ち理に稱わずとは又
是れ円実の大益に對して七方便の益を下して並に非究竟滅・即不稱
理と釈す
るなり。

第四重の難に云く法華本門の觀心の意を以て一代聖教を
按ずるに菴羅果を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん迹門の
大教起れば爾前の大教亡じ・本門の大教起れば迹門・爾前亡じ・
觀心の
大教起れば本迹爾前共に亡ず此れは是れ如来所説の聖教

・從淺至深して次第に迷を転ずるなり、然れども如来の説は一人の爲にせず此の大道を説きて迷情除かざれば生死出で難し、若し爾前の中に八教有りとは頓は則ち華嚴・漸は則ち三昧・秘密と不定とは前四味に亘る・蔵は則ち阿含・方等に亘る・通は是れ方等・般若・円別は是れ則ち前四味の中に鹿苑の説を除く、此くの如く八機各各不同なれば教説も亦異なり四教の教主亦是れ不同なれば当教の機根余仏を知らず、故に解釈に云く「各各仏独り其の前に在すと見る」已上。

人天の五戒・十善・二乗の四諦・十二・菩薩の六度・三祇・百劫・或は動逾塵劫・或は無量阿僧祇劫・円教の菩薩の初発心時・便成正覚・明かに知んぬ機根別なるが故に説教亦別なり、教別なるが故に行も亦別なり行別なるが故に得果も別なり此れ即ち各別の得益にして不同なり。

然しかるに今いま法ほつ華け方便ほうべん品へんに「衆しゆじゆう生じゆうをして仏ぶつ知ち見けんを開ひらかしめんと欲ほす」と説とき給たまう爾その時とき八はち機き並ならびに悪あく趣しゆの衆しゆじゆう生じゆう悉ことごとく皆みな同おなじく釈しゃ迦か如に来よと成なりり互たがいに五ご眼がんを具そし一いち界かいに十じゆう界かいを具そし十じゆう界かいに百ひやく界かいを具そせり、是この時とき・爾に前ぜんの諸しよ經きやうを思し惟ゆいするに諸しよ經きやうの諸しよ仏ぶつは自じ界かいの二に乘じやうを二に乘じやうも又また菩ぼ薩さつ界かいを具そせず三さん界かいの人にん天てんの如ごときは成じやう仏ぶつの望のぞ絶ぜえて二に乘じやう・菩ぼ薩さつの断だん惑なく即すち是これ

自身じしんの断惑だんわくなりと知らず、三乘さんじょう四乘しじょうの智慧ちえは四悪趣しあくしゆを脱のがるるに似
たりと雖いえども互たがいに界界がいがいを隔へたつ而しかも皆みな是これ一いつ体たいなり、昔むかしの経きやうは二乘にじょうは
但ただ自界けんじの見思けんじを断除だんじよすると思おもうて六界ろっかいの見思けんじを断たずることを知しら
ず菩薩ぼさつも亦また是かくの如ごとし自界さんなくの三惑だんじんを断尽だんじんせんと欲ほすと雖いえども六界ろっかい
にじょうさんなく二乗にじょうの三惑さんなくを断たずることを知しらず、真実しんじつに証しする時は一衆生しじゅうじやうそく即十
衆生じじゅうじやうそく・十衆生しじゅうじやうそく即一衆生しじゅうじやうそくなり、若もし六界ろっかいの見思けんじを断だんぜざれば二乗にじょうの
見思けんじを断たず可べからず是かくの如ごとく説いくと雖いえども迹門しやくもんは但ただ九界くがいの情じやうを
改あらため十界じじゅうかい互具いごを明ゆえす故ゆえに即すなわち円仏えんぶつと成なるなり、爾前にぜん当分とうぶんの益えきを嫌きら
うこと無ゆえきが故ゆえに「三界さんがいの諸漏しよろ已すでに尽つき三百由旬ひやくゆじゆんを過すぎて始はめて
わがみ我身わがみを見る」と説いけり又爾前にぜん入滅にじゆめつの二乘にじょうは実じつには見思けんじを断だんぜず
故ゆえに六界ろっかいを出いでずと雖いえども迹門しやくもんは二乗にじょう作仏さぶつが本懐ほんかいなり故ゆえに「彼の土ゆえ
に於こいて是この経きやうを聞きくことを得えくと説いく、既すでに「彼の土ゆえに聞きくことを
得えくと云いふ故ゆえに知しんぬ爾前にぜんの諸経しよきやうには方便ほうべん土無ゆえし故ゆえに実じつには実報じつほう並

に常寂光も無し、菩薩の成仏を明す故に実報・寂光を仮立
す然れども菩薩に二乗を具す二乗成仏せずんば菩薩も成仏す
可からざるなり、衆生無辺誓願度も満せず二乗の沈空尽滅は即ち
是れ菩薩の沈空尽滅なり凡夫六道を出でざれば二乗も六道を出ず
可からず、尚下劣の方便土を明さず況や勝れたる実報・寂光を
明さんや、実に見思を断ぜば何ぞ方便を明さざらん菩薩實に実報・
寂光に至らば何ぞ方便土に至ること無らん、但断無明と云うが
故に仮りに実報・寂光を立つと雖も而上の二土無きが故に同居の
中に於て影現の実報・寂光を仮立す、然るに此の三百由旬は實には
三界を出ずること無し迹門には但是れ始覺の十界互具を説きて
未だ必ず本覺本有の十界互具を明さず故に所化の大衆能化の円仏
皆是れ悉く始覺なり、若し爾らば本無今有の失何ぞ免るることを
得んや、当に知るべし四教の四仏則ち円仏と成るは且く迹門の

所談しよたんなり是かくの故ゆえに無始むしの本仏ほんぶつを知らず、故ゆえに無始無終むしむしゆうの義欠けて
具足ぐそくせず又無始むし・色心常住しきしんじやうじゆうの義無ぎなし但ただし是この法ほうは法位ほういに住すと説
くことは未來みらい常住じやうじゆうにして是これ過去かこ常に非あらざるなり、本有ほんぬの
十界互具じゆつかいごを顕あらわさざれば本有ほんぬの大乗菩薩だいじやうぼさつ界無なきなり、故ゆえに知んぬ
迹門しやくもんの二乗にじやうは未いまだ見思けんじを断だんぜず迹門しやくもんの菩薩ぼさつは未いまだ無明むみゆうを断だんぜず
六道ろくだうの凡夫ほんぶは本有ほんぬの六界ろっかいに住せざれ

ば有名無実なり。

故に涌出品に至つて爾前・迹門の断無明の菩薩を「五十小劫・半

日の如しと謂えり」と説く是れ則ち寿命品の久遠円仏の非長非短・

不二の義に迷うが故なり、爾前・迹門の断惑とは外道の有漏断の

退すれば起るが如し未だ久遠を知らざるを以て惑者の本と為すな

り、故に四十一品断の弥勒・本門立行の發起・影響・当機・結縁の

地涌千界の衆を知らず、既に一分の無始の無明を断じて十界の

一分の無始の法性を得れば何ぞ等覚の菩薩を知らざらん、設い

等覚の菩薩を知らざるも争でか当機・結縁の衆を知らざらん乃ち

不識一人の文は最も未断三惑の故か、是を以て本門に至つては則ち

爾前・迹門に於て随他意の釈を加え又天人・修羅に撰し「貪著五欲

・妄見網中・為凡夫顛倒」と説き、釈の文には「我坐道場不得・一法」

と云う蔵通両仏の見思断も別円二仏の無明断も並に皆見思無明を

断ぜず故に随他意と云う、所化の衆生三惑を断ずと謂えるは是れ
実の断に非ず答の文に開善の無声聞の義に同ず

とは汝も亦光宅の有声聞の義に同ずるか、天台は有無共に破し

給うなり、開善は爾前に於て無声聞を判じ光宅は法華に於て有

声聞を判ず故に有無共に難有り、天台は「爾前には則ち有り今經

には則ち無し所化の執情には則ち有り長者の見には則ち無し」

此くの如きの破文皆是れ爾前・迹門相對の釈にて有無共に今の難

には非ざるなり、

「但し七方便並に究竟の滅に非ず又但し心を觀ずと云わば則ち理に

稱わず」との釈は円益に対し当分の益を下して「並非究竟滅・

即不称理」と云うなりと云うは金論には「偏に清淨の真如を指

す尚小の真を失えり仏性安んぞ在らん」と云う釈をば云何が会す

可き、但し此の尚失小真の釈は常には出だす可からず最も秘藏す

可し、但し、

妙法蓮華經皆是真實の文を以て迹門に於て爾前の得道を許すが

故に爾前得道の義有りと云うは此れは是れ迹門を爾前に対して

眞実と説くか、而も未だ久遠実成を顕さず是れ則ち彼の未顕眞実

の分域なり所以に無量義經に大莊嚴等の菩薩の四十余年の得益を

挙ぐるを仏の答えたもうに未顕眞実の言を以てす、又涌出品の中に

弥勒疑つて

云く「如来太子為りし時積の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、乃至四十余年を過ぐ」已上仏答えて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得たりと謂えり我実に成仏してより以来」已上、我実成仏とは寿量品已前を未顕真実と云うに非ずや是の故に記の九に云く「昔七方便より誠諦に至るまでは七方便の権と言うは且く昔の権に寄す若し果門に対すれば権実俱に是れ隨他意なり」已上、此の釈は明かに知んぬ迹門をも尚隨他意と云うなり、じゆりようほんの皆実不虚を天台釈して云く「円頓の衆生に約すれば迹本二門に於て一実一虚なり」已上、記の九に云く「故に知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり」已上、迹門既に虚なること論に及ぶ可からず但し皆是真実とは若し本門に望むれば迹は是れ虚なりと雖も一座の内に於て

虚実を論ず故に本・迹両門俱に真実と言ふなり、例せば迹門法説の時の譬説因縁の二周も此の一座に於て聞知せざること無し故に名けて顕と為すが如し、記の九に云く「若し方便教は二門俱に虚なり因門開し竟りて果門に望むれば則ち一実一虚なり本門顕れ竟れば則ち二種俱に実なり」已上、此の釈の意は本門未だ顕れざる以前は本門に對

すれば尚迹門を以て名けて虚と為す若し本門顕れ已りぬれば迹門の仏因は即ち本門の仏果なるが故に天月水月本有の法と成りて本・迹俱に三世常住と顕るるなり、一切衆生の始覚を名けて迹門の円因と言ひ一切衆生の本覚を名けて本門の円果と為す修一円因感一円果とは是なり、是くの如く法門を談ずるの時迹門爾前は若し本門顕れずんば六道を出でず何ぞ九界を出でんや。

五九

爾前一乘菩薩不作仏事

正元元年三十八

歳御作

424P

問うて云く二乗永不成仏の教に菩薩の作仏を許す可きや、答えて云く楞伽經第二に云く「大慧何者か無性乘なる、謂く一闍提なり・大慧・一闍提とは涅槃の性無し何を以ての故に解脱の中に於て信心を生ぜず涅槃に入らず、大慧一闍提とは二種あり何等をか二と為す一には一切の善根を梵焼す、二には一切衆生を憐愍して一切衆生界を

尽さんとの願を作す大慧・云何が一切の善根を梵焼する謂く菩薩蔵を謗じて是くの如きの言を作す、彼の修多羅・毘尼・解脱の説に随順するに非ず諸の善根を捨つと是の故に涅槃を得ず、大慧・

衆生を憐愍して衆生界を尽さんと願を作す者は菩薩と為す、

大慧菩薩は方便して願を作す若し諸の衆生の涅槃に入らざる者あ

らば我も亦涅槃に入らずと是の故に菩薩摩訶薩涅槃に入らず、

大慧・是を二種の一闍提無涅槃性と名く是の義を以ての故に決定

して一闍提の行を取る、大慧菩薩・仏に白して言く世尊此の二種の

一闍提何等の一闍提か常に涅槃に入らざる、仏、大慧に告げたまわ

く菩薩摩訶薩の一闍提は常に涅槃に入らず何を以ての故に能善く

一切諸法本来涅槃なりと知るを以て是の故に涅槃に入らず一切の

善根を捨つる闍提には非ず、何を以ての故に大慧彼れ一切の善根を

捨つる闍提は若し諸仏・善知識等に値いたてまつれば菩提心を発し

諸の善根を生じて便ち涅槃を証す」と等と云云、此の經文に「若し

諸の衆生涅槃に入らざれば我も亦涅槃に入らじ」と等云云。

前四味の諸經に二乗作仏を許さず之を以て之を思うに四味

諸經しよききょうの四教しきょうの菩薩ぼさつも作仏さぶつ有り難がたきか、華嚴經けこんきょうに云いわく、「衆生界しよじょう尽つき
ざれば我が願まがねも亦また尽つきず」と云いふ、一切いっさいの菩薩ぼさつ必かならず四弘誓願しぐせいがんを
發おこす可べし其その中なかの衆生しよじょう無む辺へん誓願度せいがんどの願ねがひ之これを満みたせざれば無上むじょう菩提ぼだい
誓願証せいがんの願ねがひ又また成なじ難がたし、之これを以もて之これを案あずるに四十余年よんじゅうよねんの文ぶん二乘にじょう
に限かぎらば菩薩ぼさつの

願又成じ難きか。

問うて云く二乗成仏之無ければ菩薩の成仏も之無き正証文

如何、答えて云く涅槃經三十六に云く「仏性は是れ衆生に有りと

信ずと雖も必ず一切に皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と

為すと三十六本三十一、此の文の如くんば先四味の諸菩薩は皆一闍提

の人なり二乗作仏を許さず一乗の作仏を成ぜざるのみに非ず、

将又菩薩の作仏も之を許さざる者なり、之を以て之を思うに

四十余年の文二乗作仏を許さずんば菩薩の成仏も又之無きなり、

一乗要決の中に云く「涅槃經三十六に云く仏性は是れ衆生に有り

と信ずと雖も必ず一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と

為すと三十六本三十一、第三十一に説く一切衆生及び一闍提に悉く

仏性有りと信ずるを菩薩の十法の中の第一の信心具足と名くと、三

十六本第三十、一切衆生悉有仏性を明すは是れ少分に非ず、若し猶堅

く少分の一切なりと執せば唯経に違するのみに非ず亦信不具なり
何に因つてか楽つて一闡提と作るや此れに由つて全分の有性を許す
べし理亦一切の成仏を許すべし

慈恩の心経玄賛に云く「大悲の辺に約すれば常に闡提と為る大

智の辺に約すれば亦当に作仏すべし、宝公の云く大悲闡提は是れ

前経の所説なり前説を以て後説を難ず可からざるなり諸師の釈

意大途之に同じ「文、金の註に云く「境は謂く四諦なり百界三千

の生死は即ち苦なり此の生死即ち是れ涅槃なりと達するを衆生

無辺誓願度と名く百界三千に三惑を具足す此の煩惱即ち是れ菩提

なりと達するを煩惱無辺誓願断と名く生死即涅槃と円の仏性を証

するは即ち仏道無上誓願成なり、惑即菩提にして般若に非ざるこ

と無ければ即ち法門無尽誓願知なり、惑智無二なれば生仏体同じ

苦集唯心なれば四弘融攝す一即一切なりとは斯の言徴有り「文、

慈覚大師の速証位集に云く「第一に唯今經の力用仏の下化衆生の願を満す故に世に出でて之を説く所謂諸仏の因位・四弘の願・利生断惑・知法作仏なり然るに因円果満なれば後の三の願は満ず、利生の一願甚だ満じ難しと為す彼の華嚴の力十界皆仏道

を成じやうずること能あたわらず阿含あこん・方等ほうとう・般若はんやも亦また爾なりなり後番ごばんの五味ごみ・皆かい成じやう
 仏道ぶつどうの本懐ほんかいなる事能あたわらず、今いま此この妙経みょうきやうは十界じゅうかい皆かい成じやう仏道ぶつどうなること
 分明ぶんみやうなり彼の達多だつた・無間むげんに墮だするに天王てんわう仏ぶつの記きを授おづけ竜女りゆうにょ成じやう仏ぶつし
 十羅刹じしやく女にょも仏道ぶつどうを悟わり阿修羅あしゆらも成じやう仏ぶつの總記そうきを受け人天にんてん・二乘にじやう・三
 教きやうの菩薩ぼさつ・円妙えんみょうの仏道ぶつどうに入る、經きやうに云いく我が昔しやうの所願じやくわんの如ごときは今いま者ま
 已すでに満足まんぞくしぬ一切いっさい衆生じゆじやうを化くわして皆みな仏道ぶつどうに入いらしむと云いふ、衆生界じゆじやう
 尽つきざるが故ゆえに未いまだ仏道ぶつどうに入いらざる衆生じゆじやう有いりと雖いえども然しかれども十界じゆじやう
 皆みな成じやう仏ぶつすること唯ただ今いま經きやうの力りきに在あり故ゆえに利生りじやうの本懐ほんかいなり」と云いふ。
 又いわく「第一だいいちに妙経みょうきやうの大意たいいを明あかさば諸しよ仏ぶつは唯ゆ一い大事だいじの因縁いんねんを
 以もつての故ゆえに世よに出現しゆつげんし一切いっさい衆生じゆじやう悉しつ有ゆう仏性ぶつじやうと説とき聞もん法ぽう・觀行かんぎやう・皆みな
 當まさに作さすべし、抑そも佛何ぶつなんの因縁いんねんを以もつて十界じゆじやうの衆生じゆじやう悉しつく三因さんいん佛性ぶつじやう
 有ありと説ときたもうや、天親てんじん菩薩ぼさつの仏性ぶつじやう論ろん縁起えんぎ分の第一だいいちに云いく如來にやらい
 五種ごしゆの過失こしゆを除くき五種ごしゆの功德くどくを生ためざるが為ために故ゆえに一切いっさい衆生じゆじやう・悉しつ有ゆう

ぶつしよう 仏性と説きたもつ 已上 謂く五種の過失とは一には下劣心・二には
こうまんしん 高慢心・三には虚妄執・四には真法を謗じ・五には我執を起すな
り、
ごしゆ 五種の功德とは一には正勤・二には恭敬・三には般若・四には闍那・
だいひ 五には大悲なり、生ずること無しと疑うが故に大菩提心を発すこ
あた と能わざるを下劣心と名け、我に性有つて能く菩提心を発すと謂え
いっさい るを高慢と名け、一切の法無我の中に於て有我の執を作すを虚妄
しゆう 執と名け一切諸法の清淨の智慧功德を違謗するを謗真法と名け
いたおのれ 意唯己を存して一切衆生を憐むことを欲せざるを起我執と名く此
ほんたい の五に翻対して定めて性有りと知りて菩提心を発す」と。

にちれん 日蓮
かおう 花押

六〇

十法界明因果抄

文応元年五月三十九歳

御作沙門

日蓮撰

427P

八十華嚴經六十九に云く「普賢道に入ることを得て十法界を了知

す」と、法華經第六に云く「地獄声・畜生声・餓鬼声・阿修羅声比丘

声・比丘尼声人道天声天道声聞声辟支仏声・菩薩声・仏声」と已上十

法界名 目なり。

第一に地獄界とは觀仏三昧經に云く「五逆罪を造り因果を撥無

し大衆を誹謗し四重禁を犯し虚く信施を食するの者・此の中に墮

す」と獄なり、正法念經に云く「殺盜・婬欲・飲酒・妄語の者・此の中

に墮す」と獄なり、正法念經

に云く「昔酒を以て人に与えて酔わしめ已つて調戲して之を翫び彼

をして羞恥せしむるの者。此の中に墮す」と獄叫喚地なり、正法念經に云く
「殺生・偷盜・邪淫の者。此の中に墮す」と獄衆合地なり、涅槃經に云く「殺
に三種有り謂く下中上なり 下とは蟻子乃至一切の畜生乃至下殺
の因縁を以て地獄に墮し乃至具に下の苦を受く」文。

問うて云く十悪・五逆等を造りて地獄に墮するは世間の道俗皆
これを知れり謗法に依つて地獄に墮するは未だ其の相貌を知らざる
如何、答えて云く堅慧菩薩の造・勒那摩提の訳・究竟一乘宝性論に
云く「樂て小法を行じて法及び法師を謗じ 如来の教を識らずして
説くこと修多羅に背いて是真實義と云う」文、此の文の如くんば
小乗を信じ
て真實義と云い大乘を知らざるは是れ謗法なり、天親菩薩の説・
真諦三蔵の訳・仏性論に云く「若し大乘に憎背するは此は一闡提
の因なり衆生をして此の法を捨てしむるを為すの故に」文、此の文

の如くごとんばだいしやう大小流布の世ぶに一向いつこうに小乘しやうじやうを弘ひろめ自身じしんも大乘だいじやうに背そむき
人におい於おても大乘だいじやうを捨すてしむる是これを謗法ぼうぼうと云いうなり、天台大師てんだいだいしの
梵網經ぼんむつきやうの疏じよに

云いく「謗こは是これ乖背けはいの名な・て是これ解げ・理りに称かなわらず言實ごんじつに当あらず
異解いげして説せく者しやを皆みな名なけて謗なと為なすなり己おのが宗しゆに背そむくが故ゆえに罪つみを
得えて文ぶん、法華經ほけきやうの譬喻品ひゆほんに云いく「も若もし人信しんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせ
ば則すなわち一切世間いっさいせけんの仏種ぶつしゆを断だんぜん

ないしそ 乃至其の人命終みょうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らんこころ文、此の文の意はしょうじゆう小乗の
 さんけん いぜん 三賢さんけん已前いぜん・大乘だいじょうの十信じゆっしん已前いぜん・末代まつだいの凡夫ほんぶの十惡じゆうあく・五逆ごぎやく・不孝ふこう父母ふぼ
 によん 女人等にょにんを嫌きらわず此等これら法華經ほけきょうの名字みょうじを聞きいて・或ある題名だいめいを唱となえ一字いちじ
 一句いっく・四句しく・一品いっぴん・一卷いっくわん・八卷等はつくわんとうを受持じゆじし読誦どくじゆし乃至ないし亦上またかみの如ごとく行ことぜ
 人にん人を隨喜ずいきし讚歎さんたんする人は法華經ほけきょうよりの外いちだい、一代いちだいの聖教しょうきょうを深こく
 習ならい義理ぎりに達たつし堅けんく大小乘だいしじょうじょうの戒たもを持もてる大菩薩ほさつの如ごとき者しよより勝すぐれ
 て往生おうじうじうじう成仏じやうぶつを遂とぐ可べしと説とくくを信しんぜずして還かえつて法華經ほけきょうは地住じじゆう
 已上ほさつの菩薩ぼさつの為ため・或あるは上根じょうこん・上智じょうちの凡夫ほんぶの為ためにして愚人ぐにんあくにん・女人にょにん
 末代まつだいの凡夫ほんぶ等の為ためには非あらずと言のたまわん者は即すなわち一切衆生いっさいしゆじゆうの成仏じやうぶつの種しゆ
 を断あびごくじて阿鼻獄あびごくに入る可べしと説とくける文ぶんなり、涅槃經ねはんきょうに云いく「仏ぶつの
 しょうほう 正法しょうほうに於おいて永えいく護惜ごしやく建立こんりゆうの心こころ無なし」文、此の文の意こころは此こゝろの
 だいねはんきょう 大涅槃經だいねはんきょうの大法世間だいほうせけんに滅尽めつじんせんを惜おしまざる者は即すなわち是こゝれ誹謗ひぼうの者もの
 なり、天台大師てんだいだいし

法華經の怨敵を定めて云く「聞く事を喜ばざる者を怨と為す」文、
謗法は多種なり大小流布の国に生れて一向に小乗の法を学して
身を治め大乘に遷らざるは是れ謗法なり、亦華嚴・方等・般若等の
諸大乘經を習える人も諸經と法華經と等同の思を作し人をして
等同の義を学ばしめ法華經に遷らざるは是れ謗法なり、亦偶
円機有る人の
法華經を学ぶをも我が法に付けて世利を貪るが為に汝が機は
法華經に当らざる由を称して此の經を捨て権經に遷らしむるは
是れ大謗法なり、此くの如き等は皆地獄の業なり人間に生ずるこ
と過去の五戒は強く三惡道の業因は弱きが故に人間に生ずるなり、
亦当世の人も五逆を作る者は少く十惡は盛に之を犯す亦偶後世
を願う人の十惡を犯さずして善人の如くなるも自然に愚癡の失に
依つて身口は善く意は悪しき師を信ず、但我のみ此の邪法を信ず

るに非あらず国ちぎよつを知行しする人じんみん。人民じんみんを聳すすめて我が邪法じゃほうに同おなぜしめ妻子さいし・眷属けんぞく・所従しよじゆうの人ひとを以もつて亦聳またすめ従したがえ我が行ぎやうを行なせ

しむ、故ゆえに正法しやうほうを行なせしむる人ひとに於おいて結縁けちえんを作なさず亦また民じん・所従しよじゆう等

に於おいても随喜ずいきの心こころを至いたさしめず、故ゆえに自他じた共ともに謗法ぼうほうの者ものと成なりて

修善しゆぜん止悪しよくの如ごとき人ひとも自然じねんに阿鼻あび地獄じごくの業まねを招まねくこと末法まっぽうに於おいて

多分たぶん之これ有あるか。

阿難あなん尊者そんじやは淨飯王じやうばんの甥こくはんのう・斛飯王こくはんのうの太子たいし・提婆達多だいばだつたの舍弟しゃてい・釈迦しゃか

如来にょらいの従子いとこなり、如来にょらいに仕たてえ奉たてつて二十年にじゅうねん覺意かくい

さんまい 三昧を得て一代 聖教を覚れり、仏入滅の後・阿闍世王・阿難を
きえ 帰依し奉る、仏の滅後四十年の此阿難尊者一の竹林の中に至るに
ひと 一りの比丘有り一の法句の偈を誦して云く「もし人生じて百歳なり
とも水の潦涸を見ずんば生じて一日にして之を覩見することを得
るに如かず」已上、阿難此の偈を聞き比丘に語つて云く此れ仏説に
あらず 非ず汝修行す
べか 可らず爾時に比丘阿難に問うて云く仏説は如何、阿難答えて云く
もしひと 若人生じて百歳なりとも生滅の法を解せずんば生じて一日にして
これ 之を解了することを得んには如かず已上此の文仏説なり、汝が唱う
る所の偈は此の文を謬りたるなり、爾の時に比丘・此の偈を得て
ほんし 本師の比丘に語る、本師の云く我汝に教うる所の偈は眞の仏説な
り 阿難が唱う
る所の偈は仏説に非ず阿難年老衰して言錯謬多し信ず可らず、此

の比丘びく亦阿難またあなんの偈げを捨てて本の謬あやまりたる偈げを唱となう阿難あなん又竹林あなんに入いりて之これを聞きくに我が教けうる所の偈げに非あらず重かさねて之これを語かたるに比丘びく信用しんようせざりき等云云と、仏の滅後めつご四十年しじゅうねんにさえ既に謬あやまり出来しゅつたいせり何いかに況いわんや仏の滅後めつご既に二千余年にんせんねんを過ぎたり、仏法ぶつぽう天竺てんじくより唐土もろこしに至り唐土もろこしより日本にほんに至る論師ろんし三蔵さんぞう・人師にんし等伝来でんらいせり定めて謬あやまり無なき法ほは万が一なるか、何いかに況いわんや当世とうせいの学者がくしゃ偏執へんしゅうを先と為なして我慢がまんを挿さし火ひを水みづと諍あらそい之これを糾たださず偶たまたま仏の教ことの如ごとく教のを宣のぶる学者がくしゃをも之これを信用しんようせず故ゆえに謗法ぼうぼうならざる者は万が一なるか。

第二だいにに餓鬼道がきだうとは正しょう法ほう念經ねんきやうに云いく「昔財むさぼを貪むさぼりて屠殺とさつせるの者もの此むくいの報むくいを受うく」と、亦また云いく「丈夫じゆうぶ自ら美食みずかをい妻子くわいさいしに与たまえず・或あるは婦人みずか自ら食のみして夫子ふしに与たまえざるは此むくいの報むくいを受うく」と、亦また云いく「名利みょうりを貪むさぼるが為ために不淨ふじよう説法せつぽうする者もの此むくいの報むくいを受うく」と、亦また云いく「昔酒さけをつるに水みづを加くわうる者もの此むくいの報むくいを受うく」と、亦また云いく「若もし人勞わづらわして

すこしく

少物を得たる

を誑惑おおわくして之これを取り用もちいける者・此の報むくいを受く」と、亦また云く「昔行

路人の病苦ありて疲極ひこくせるに其その売うりものを欺き取り直あたを与あたうるこ

薄少なりし者・此の報むくいを受く」と、又云く「昔刑獄けいこくを典主つかさどり・人の

飲食おんじきを取りし者・此の報むくいを受く」と、亦云く「昔陰涼樹おんりょうじゆを伐り及および

衆僧しゆじゆの園林えんりんを伐りし者・此の報むくいを受く」と文、法華經ほけきやうに云く「若し

人信ぜずして此の

経を毀謗せば 常に地獄に処すること 園觀に遊ぶが如く 余の惡道に在ること己が舍宅の如し 文、慳貪・偷盜等の罪に依つて 餓鬼道に墮することは 世人知り易し、慳貪等無き諸の善人も 謗法に依り亦謗法の人に親近し 自然に其の義を信ずるに依つて 餓鬼道に墮することは 智者に非ざれば 之を知らず 能く能く 恐る可きか。

第三に畜生道とは 愚癡無慙にして 徒に信施の他物を受けて之を償わざる者。此の報を受くるなり、法華經に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば 當に畜生に墮すべし」文已上三惡道なり。

第四に修羅道とは 止觀の一に云く「若し其の心念念に常に彼に勝らんことを欲し耐えざれば 人を下し 他を輕しめ 己を珍ぶこと 鷄の高く飛びて 下視が如し 而も外には 仁・義・礼・智・信を掲げて 下品の善心を起し 阿修羅の道を行ずるなり」文。

第五に人道とは 報恩經に云く「三歸五戒は 人に生る」文。

第六に天道とは二有り、欲天には十善を持ちて生れ色無色天に
は下地は苦障・上地は静妙離の六行觀を以て生ずるなり。

問うて云く六道の生因は是くの如し抑同時に五戒を持ちて

人界の生を受くるに何ぞ生盲・聾・陋・背偃・貧窮・

多病・瞋恚等無量の差別有りや、答えて云く大論に云く「若は衆生

の眼を破り若は衆生の眼を屈り若は正見の眼を破り罪福無しと

言わん是の人死して地獄に墮し罪畢つて人と為り生れて従り盲な

り、若は復仏塔の中の火珠及び諸の灯明を盗む是くの如き等の

種種の先世の業・因縁をもて眼を失うなり 聾とは是れ先世の

因縁師父の教訓を受けず行ぜず而も反つて瞋恚す是の罪を以ての

故に聾となる、復次に衆生の耳を截り若は衆生の耳を破り若は

仏塔僧塔諸の善人・福田の中の 椎・鈴・貝及び鼓を盗む故に此の

罪を得るなり、先世に他の舌を截り・或は其の口を塞ぎ・或は惡藥

を^そ与えて^{かた}語ることを得^あざらしめ、或^{ある}は師の教・父^ふ母^ぼの教^き勅^{ょうちよく}を聞^きき
其^その語^{ことば}を断^つ

世に生れて人と為り唾にして言うこと能わず 先世に他の坐禅を破

り坐禅の舎を破り諸の咒術を以て人を咒して瞋らし鬪諍し姪欲

せしむ今世に諸の結使厚重なること婆羅門の其の稻田を失い其の

婦復死して即時に狂発し裸形にして走りしが如くならん、先世に仏

・阿羅漢・辟支仏の食及び父母所親の食を奪えば仏世に値うと雖も

猶故飢渴す罪の重きを以ての故なり、先世に好んで

鞭杖・拷掠・閉繫を行じ種種に悩すが故に今世の病を得るなり

先世に他の身を破り其の頭を截り其の手足を斬り種種の身分を破

り或は仏像を壊り仏像の鼻及び諸の賢聖の形像を

毀り或は父母の形像を破る是の罪を以ての故に形を受くる多く

具足せず、復次に不善法の報身を受くること醜陋なり「文、法華経

に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば 若し人と為ることを

得ては諸根闇鈍にして盲・聾・背偃ならん 口の氣常に臭く鬼魅に

著せられん貧窮下賤にして人に使われ多病瘠瘦にして依怙する所

なく

若は他の叛逆し抄劫し竊盜せん是くの如き等の罪横に其の殃に

羅らん文。

又八の巻に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡

を出さん若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人は現世に白癩の

病を得ん若し之を輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎欠

醜き脣・平める鼻・手脚繚戾し眼目角に身体臭穢にして惡瘡

膿血・水腹・短氣諸の惡重病あるべし」文、問うて云く何なる業

を修する者が六道に生じて其の中の王と成るや、答えて云く大乘

の菩薩戒を持して之を破る者は色界の梵王・欲界の魔王・帝釈・四

輪王・禽獸王・閻魔王等と成るなり、心地觀經に云く「諸王の受く

る所の諸の福樂は往昔會つて三の淨戒を持し戒德薰修して招き感

ずる所・人天の妙果王の身を獲

中品に菩薩戒を受持すれば福德

自在の転輪王として心の所作

に随つて尽く皆成じ無量の人天悉く遵奉す、下の上品に持すれば

大鬼王として一切の非人咸く率伏す戒品を受持して欠犯すと雖も

戒の勝るに由るが故に王と為ることを得、下の中品に持すれば

禽獸の王として一切の飛走皆歸伏す清浄の戒に於て欠犯有るも

戒の勝るに由るが故に王と為ることを得、下の下品に持すれば

魔王として地獄

の中に処して常に自在なり禁戒を毀り悪道に生ずと雖も戒の勝るに由るが故に王と為る事を得 若し如来の戒を受けざる事有れば終に野干の身をも得ること能わず何に況んや能く人天の中の最勝の快樂を感じて王位に居せん文、安然和尚の広釈に云く「菩薩の大戒は持して法王と成り犯して世王と成る而も戒の失せざることを譬え

ば金銀を器と成すに用ゆるに貴く器を破りて用いざるも而も宝は失せざるが如し」亦云く「無量寿觀に云く劫初より已来八万の王有つて其の父を殺害すと此則ち菩薩戒を受けて国王と作ると雖も今、殺の戒を犯して皆地獄に墮れども犯戒の力も王と作るなり」大仏頂經に云く「発心の菩薩罪を犯せども暫く天神・地祇と作る」と、大隨求に

云く「天帝・命尽きて忽ち驢の腹に入れども隨求の力に由つて還つて

天上てんじょうに生なずと、尊勝そんしょうに云いく「善住天子ぜんじゅうてんし・死し後ご七返ちくしゅう畜生ちくじゅうの身みに墮だすべきを尊勝そんしょうの力ちからに由よつて還かえつて天てんの報むくいを得えたり」と、昔こくおう國王こくおう有あり千車せんしやをもて水みづを運きび仏塔ぶつとうの焼やくるを救きうう自みづから心こころを起おこして阿修羅あしゅら王わうと作なる、昔むかし・梁りやうの武帝ぶてい五百ごひゃくの袈裟けさを須弥山しゆみせんの五百ごひゃくの羅漢らかんに施ほどこす、誌公しこう云いく「往い五百ごひゃくに施ほどこすに一ひとりの衆しゆを欠かけり罪つみを犯おかして暫しばらく人王にんわうと作なる即すなわち武帝ぶてい是これなり、昔むかし國王こくおう有あつて民たみを治おさむることひとし等ひとしからず今いま・天王てんわうと作なれども大鬼王だいきわうと為なる、即すなわち東南西とうなんせいの三天王さんてんわう是これなり拘留孫くゐるそんの末すえに菩薩ぼさつと成なりて発誓はつせきし現げんに北方毘沙門びしゃもんと作なる是これなり」と云いふ、此これ等らの文ぶんを以もつて之これを思おもうに小乘しょうじやう戒かいを持もつて破やぶる者ものは六道ろくどうの民たみと作り大乗戒だいじやうかいを破やぶする者ものは六道ろくどうの王わうと成なり持もつて破やぶる者ものは仏ぶつと成なる是これなり。

第七だいしちに声聞道しやうもんどうとは此こゝの界がいの因果いんがをば阿含あがん・小乘しょうじやう・十二年じふにねんの經きやうに分明ぶんみやうに之これを明あせり、諸大乗經しよだいじやうきやうに於おいても大おほい對たいせんが為ために亦また之これをば

明せり、しやうせん声聞おひに於て四種有り一には優婆塞うばそく・俗男ぞくなんなり五戒ごかいを持し苦
空むじやう・無常む・無我むがの觀しゆうを修し自調じちやうじと自度じとの心強あえてくして敢けて化た他の意い
無なくく見思けんじを断だんじん尽じんして阿羅漢あらかんと成かる此ことの如ごとくする時じねん自然じねんに髪かみを
剃そるに自みずから落おつ

、二には優婆夷うばい・俗女ぞくじよなり五戒ごかいを持し髪かみを剃そるに自みずから落おつること男
の如ごとし三には比丘僧びくなり二百五十戒具足戒なりを持もつて苦く・空むじやう・無常むじやう・
無我むがの觀しゆうを修しゆうし見思けんじを断だんじんじて阿羅漢あらかんと成かる此ことの如ごとくするの時とき
髪かみを剃そらざれども生なぜず、

四に比丘尼なり五百戒を持す余は比丘の如し、一代諸経に列座せる舍利弗・目連等の如き声聞是なり永く六道に生ぜず亦仏・菩薩とも成らず灰身滅智し決定して仏に成らざるなり、小乗戒の手本たる尽形寿の戒は一度依身を壞れば永く戒の功德無し、上品を持すれば二乗と成り中下を持すれば人天に生じて民と爲る之を破れば三悪道に墮して罪人と成るなり、安然和尚の広釈に云く、「三善は世戒なり因生して果を感じ業尽きて悪に墮す譬えば楊葉の秋至れば金に似れども秋去れば地に落つるが如し、二乗の小戒は持する時は果拙く破る時は永く捨つ譬えば瓦器の完くして用うるに卑しく若し破れば永く失するが如し」文。

第八に縁覚道とは二有り一には部行独覚・仏前に在りて声聞のごとく小乗の法を習い小乗の戒を持し見思を断じて永不成仏の者と成る、二には鱗喻独覚・無仏の世に在りて飛花落葉を見て苦空・

無常・無我の觀を作し見思を断じて永不成仏の身と成る戒も亦
声聞の如し此の声聞・縁覺を二乗とは云うなり。

第九に菩薩界とは六道の凡夫の中に於て自身を輕んじ他人を重

んじ惡を以て己に向け善を以て他に与えんと念う者有り、仏・此の

人の為に諸の大乗經に於て菩薩戒を説きたまえり、此の菩薩戒に

於て三有り一には摂善法戒・所謂八万四千の法門を習い尽さんと願

す、二には饒益有情戒・一切衆生を度しての後に自ら成仏せんと

欲する是なり

り、三には摂律儀戒一切の諸戒を盡く持せんと欲する是なり、

華嚴經の心を演ぶる梵網經に云く「仏諸の仏子に告げて言く十重

の波羅提木叉有り若し菩薩戒を受けて此の戒を誦せざる者は菩薩

に非ず仏の種子に非ず我も亦是くの如く誦す一切の菩薩は已に

學し一切の菩薩は當に學し一切の菩薩は今學す「文、菩薩と云うは

にじよう

二乗を除いて

いっさい

うじよう

しょうじよう

こと

したが

ぼさつ

一切の有情なり、

いっさい

しょうじよう

こと

したが

異なるなり、

ぼさつ

戒は

爾らず

いっさい

いっさい

じゆうきん

さず

いっかい

じ

を一分の

いちぶん

菩薩と云い

い

つぶさ

を具足の

ぼさつ

と名く、

故に

瓔珞經に

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

十分

なるを具足の

受戒と云う

文。

云く

「いちぶん

の戒を受くること

有れば

一分の菩薩

と名け

乃至

二分

三分

問うて云く二乗を除くの文如何、答えて云く梵網經に菩薩戒を受くる者を列ねて云く「若し仏戒を受くる者は國王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼・十八梵天・六欲天子・庶民・黃門・婬男・婬女・奴婢・八部・鬼神・金剛神・畜生・乃至變化人にもあれ但法師の語を解するは尽く戒を受得すれば皆第一清淨の者と名く」文、此の中に於て二乗無きなり、方等部の結經たる瓔珞經にも亦二乗無し、問うて云く二乗所持の不殺生戒と菩薩所持の不殺生戒と差別如何、答えて云く所持の戒の名は同じと雖も持する様並に心念永く異なるなり、故に戒の功德も亦浅深あり、問うて云く異なる様如何、答えて云く二乗の不殺生戒は永く六道に還らんとせず故に化導の心無し亦仏菩薩と成らんとせず但灰身滅智の思を成すなり、譬えば木を焼き灰と為しての後に一塵も無きが如し故に此の戒をば瓦器に譬う破れて後用うること無きが故なり、菩薩は爾らず

饒益有情戒を發して此の戒を持するが故に機を見て五逆・十惡を造り同く犯せども此の戒は破れず還つて彌弥戒体を全くす、故に瓔珞經に云く「犯すこと有れども失せず未來際を尽くす」文、故此の戒をば金銀の器に譬う完くして持する時も破する時も永く失せざるが故なり、問うて云く此の戒を持する人は幾劫を経てか成仏するや、答えて云く瓔珞經に云く「未だ住前に上らざる 若は一劫二劫三劫乃至十劫を経て初住の位の中に入ることを得」文、文の意は凡夫に於て此の戒を持するを信位の菩薩と云う、然りと雖も一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し十劫を経て不退の位に入り永く六道の苦を受けざるを不退の菩薩と云う未だ仏に成らず還つて六道に入れども苦無きなり。

第十に仏界とは菩薩の位に於て四弘誓願を發すを以て戒と為す

三僧祇の間・六度万行を修し見思・塵沙・無明の三惑を断尽して仏
と成る、故に心地観經に云く「三僧企耶大劫の中に具に百千の諸の
苦行を修し功德円満にして法界に遍く十地究竟して三身を証す」
文、因位に於て諸の戒を持ち仏果の位に至つて仏身を莊嚴す三十二
相・八十種好は即ち是の戒の功德の感ずる所なり、但し仏果の位に
至れば戒体失す譬えば華の果と成つて華の形無きが

如し、故に天台の梵網經の疏に云く「仏果に至つて乃ち廃す」文、問うて云く梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れると並に決定性の二乗とを許すや、答えて云く梵網經に云く「若し戒を受けんと欲する時は師・問い言うべし汝現身に七逆の罪を作らざるやと、菩薩の法師は七逆の人の与に現身に戒を受けしむることを得ず」文、此の文の如くんば七逆の人は現身に受戒を許さず、大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙の五欲を受くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けず若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と爲す」文、大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障らず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」文、此等の文の如くんば六凡に於ては菩薩戒を授け二乗に於ては制止を加うる者なり、二乗戒を嫌うは二乗所持の五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌うに非ず彼の戒は菩薩も持す可し但二乗の心念を嫌う

なり、夫れ以みれば持戒は父母・師僧・国王・主君の一切衆生・三宝の恩を報ぜんが為なり、父母は養育の恩深し一切衆生は互に相助くる恩重し国王は正法を以て世を治むれば自他安穩なり、此に依つて善を修すれば恩・重し主君も亦彼の恩を蒙りて父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を養う、設い爾らずと雖も一身を顧る等の恩・是重し師は亦邪道を閉じ正道に趣かしむる等の恩・是深し仏恩は言うに及ばす是くの如く無量の恩分之有り、而るに二乗は此等の報恩皆欠けたり故に一念も二乗の心を起すは十悪・五逆に過ぎたり一念も菩薩の心を起すは一切諸仏の後心の功德を起せるなり、已上四十余年の間の大小乗の戒なり、法華經の

戒と言うは二有り、一には相待妙の戒二には絶待妙の戒なり、先ず相待妙の戒とは四十余年の大小乗の戒と法華經の戒と相對し

て爾前にぜんを戒そかいと云いい法華經ほけきょうを妙戒みょうかいと云うて諸經しよきょうの戒かいをば未顕みけん眞實しんじつの戒かい・歴劫りやくじやく修行しゆぎょうの戒かい・決定性けつじやうの二乗戒にじやうと嫌きらうなり、法華經ほけきょうの戒かいは眞實しんじつの戒かい・速疾頓成そくしつとんじやうの戒かい・二乗にじやうの成仏じやうぶつを嫌きらわざる戒等かいどうを相對そつたいしてそみよう妙みょうを論ろんずるを相對そつたい妙みょうの戒かいと云うなり。

問もんうて云いわく梵網經ぼんもうきやうに云いわく衆生しゆじやう・仏戒ぶつがいを受うくれれば即すなわち諸佛しよぶつの位ゐに入る位大覺だいかくに同じ已すでに實じつに是諸佛しよぶつの子みこなり。文。

けごんきょう 華嚴經に云く「しょほつしん 初発心の時便ち正覺を成ず」文、だいほん 小品經に云く
「しょほつしん 初発心の時即ち道場に坐す」文、これら 此等の文の如くんば四十余年の
だいじょうかい 大乘戒に於て法華經の如く速疾頓成の戒有り何ぞ但歴劫修行の
戒なりと云うや、答えて云く此れに於て二義有り一義に云く
よんじゅうよねん 四十余年の間に於て歴劫修行の戒と速疾頓成の戒と有り法華經
に於ては但一つの速疾頓成の戒のみ有り、其の中に於て四十余年の
りやうしゅうぎょう 間の歴劫修行の戒に於ては法華經の戒に劣ると雖も四十余年の
そくしつとんじょう 間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ、故に上に出す所の
しゅうかい 衆生・仏戒を受けば即ち諸仏の位に入る等の文は法華經の須臾
もんし 間之・即得究竟の文に之同じ、但し無量義經に四十余年の経を挙げ
りやうしゅうぎょう て歴劫修行等と云えるは四十余年の内の歴劫修行の戒計りを嫌
うなり速疾頓成の戒をば嫌わざるなり、一義に云く四十余年の間
の戒は一向に

りやうしつしゆぎよう

歴劫修行の戒・法華經の戒は速疾頓成の戒なり、但し上に出す所

よんじゆうよねん

しよきよう

そくしつとんじよう

おひ

ほんぶ

そくしつとんじよう

の四十余年の諸經の速疾頓成の戒に於ては凡夫地より速疾頓成

あら

ほんぶ

むりよう

むりようこう

へ

さいご

するに非ず凡夫地より無量の行を成じて無量劫を経・最後に於て

ほんぶ

そくしんじようぶつ

ゆえ

さいご

そくしつとんじよう

おひ

凡夫地より即身成仏す、故に最後に從えて速疾頓成とは説くな

いしつ

これ

りやうしつしゆぎよう

しよしよう

ゆえ

むりようぎきよう

おひ

り、委悉に之を論ぜば歴劫修行の所撰なり、故に無量義經には総

よんじゆうよねん

て四十余年の經を

あ

むりようぎきよう

そくしつとんじよう

せんせつぼさつ

りやうしつしゆぎよう

きら

むら

挙げて仏・無量義經の速疾頓成に対して宣説菩薩・歴劫修行と嫌

いたまえり、大莊嚴菩薩の此の義を承けて領解して云く「無量無辺

ふかしぎ

あそぎこう

すく

つひ

むじようぼだい

むりようむへん

不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず、

もつ

ゆえ

ぼだい

じきどう

ゆえ

けんぎよう

るなん

何を以ての故に菩提の大直道を知らざるが故に陰逕を行くに留難

多きが故に、乃至大直道を行くに留難無きが故に「文、若し

よんじゆうよねん

ないし

じきどう

るなん

ゆえ

も

四十余年の間

むりようぎきよう

ほけきよう

こと

そくしつとんじよう

こ

あれ

みだり

に

に無量義經・法華經の如く速疾頓成の戒之れ有れば仏猥りに

四十余年の实義を隠し給うの失之れ有り云云、二義の中に後の義を作る者は存知の義なり、相待妙の戒是なり、次に絶待妙の戒とは法華經に於ては別の戒無し、爾前の戒即ち法華經の戒なり其の故は爾前の人天の楊葉戒・小乘・阿含經の二乗の瓦器戒・華嚴・方等般若・觀經等の

歴劫菩薩の金銀戒の行者・法華經に至つて互に和会して一同と成る、所以に人天の楊葉戒の人は二乗の瓦器・菩薩の金銀戒を具し菩薩の金銀戒に人天の楊葉二乗の瓦器を具す余は以て知んぬ可し、三惡道の人^{さんあくどう}は現身^{げんしん}に於て戒^{がい}

無し過去かこに於おて人天にんてんに生なれし時人天にんてんの楊葉ようよう・二乗にじようの瓦器がき菩薩ぼさつの
金銀戒こんこんかいを持たち退たいして三惡道さんあくどうに墮だす、然しかりと雖いえども其その功德くどく未いまだ失しませ
ず之これあり三惡道さんあくどうの人ひと・法華經ほけきように入いる時其その戒けい之これを起たす故ゆえに三惡道さんあくどう
にも亦また十界じゆつかいを具ぐす、故ゆえに爾前にぜんの十界じゆつかいの人ひと・法華經ほけきように來らい至しすれば皆みな
持戒じかいなり、故ゆえに法華經ほけきように云いく「是これを持戒じかいと名なく」文ぶん、安然和尚あんなんわじようの
廣こう釈じやくに云いく「法華ほつげに云いく能よく法華ほつげを説しく是これを持戒じかいと名なく」文ぶん、
爾前經にぜんきようの如ごとく師しに隨したがつて、戒じを持たせず但此ただの經きようを信すまずるが即すなわち
持戒じかいなり、爾前にぜんの經きようには十界じゆつかい互あか互あか具あを明あさず故ゆえに菩薩ぼさつ無量劫むりようこつを經へて
修行じゆぎやうすれども二乘にじよう・人天等にんてんの余戒よけいの功德くどく無なく但一界ただの功德くどくを成じようず
故ゆえに一界くどくの功德くどくを以もつて成つ仏ぶつを遂とげず、故ゆえに一界くどくの功德くどくも亦また成なぜず、
爾前にぜんの人ひと・法華經ほけきように至いたりぬれば余界よがいの功德くどくを一界くどくに具ぐす、故ゆえに爾前にぜん
の經きよう即すなわち法華經ほけきようなり法華經ほけきよう即すなわち爾前にぜんの經きようなり、法華經ほけきようは爾前にぜんの經きよう
を離はなれず爾前にぜんの經きようは法華經ほけきようを離はなれず是これを妙法みようほうと云いふ、此この覺さとり起

りて後は行者・阿含・小乗經を讀むとも即ち一切の大乗經

を讀誦し法華經を讀む人なり、故に法華經に云く「聲聞の法を

決了すれば是諸經の王なり」文、阿含經即ち法華經と云う文な

り、「一仏乘に於て分別して三と説く」文、華嚴・方等・般若即ち

法華經と云う文なり、「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等

を説かんも皆正法に順ず」文、一切の外道・老子・孔子等の經は

即ち法華經と云ふ文

なり、梵網經等の權大乘の戒と法華經の戒とに多くの差別有り、

一には彼の戒は二乗七逆の者を許さず一には戒の功德に仏果を具

せず三には彼は歴劫修行の戒なり是くの如き等の多くの失有り、

法華經に於ては二乗七逆の者を許す上・博地の凡夫・一生の中に仏

位に入り妙覺至つて因果の功德を具するなり。

正元二年庚申四月二十一日

花^か
押^お
う

日^に
蓮^ち
れん

六一

教機時国抄

弘長二年二月十日 四十一歳

御作

438P

本朝沙門

にちれんこれ しる
日蓮之を註す

一に教とは釈迦如来所説の一切の経・律・論・五千四十八卷・四百

八十帙・天竺に流布すること一千年・仏の滅後・一千一十五年に當つ

て震旦国に仏経渡る、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の

玄宗皇帝開元十八年庚午に至る六百六十四歳の間に一切経渡り

畢んぬ、此の一切の経・律・論の中に小乗・大乘・権経・実経・

顕経・密経あり此等を弁うべし、此の名目は論師・人師よりも

出でず仏説より起る十方世界の一切衆生一人も無く之を用うべ

し之を用いざる者は外道と知るべきなり、阿含経を小乗と説く事

ほうとう はんにはや ほうけ ねはん しまだいじょうきよう
は方等 般若 法華 涅槃等の諸大乘経より出でたり、法華経には
いっこう しょうじょう とう
一向に小乗を説きて法華経を説かざれば仏慳貪に墮すべしと説き
たもう、涅槃経には一向に小乗経を用いて仏を無常なりと云わ
ん人は舌口中に爛るべしと云云。

き ぶつきよう ひろ ぎこん
二に機とは仏教を弘むる人は必ず機根を知るべし舍利弗尊者は
ぶじよう かんえ すそく
金師に不浄観を教え浣衣の者には数息観を教うる間九十日を経て
しよけ ぶつぼう いちぶん さと かえ じゃけん
所化の弟子仏法を一分も覺らずして還つて邪見を起し一闡提と成
おわ
り畢んぬ、仏は金師に数息観を教え浣衣の者に不浄観を教えたも
ゆえ しゆゆゆ さと ちえ だいいち しゃりほつ なおき
う故に須臾の間に覺ることを得たり、智慧第一の舍利弗すら尚機
を知らず
いか いわんやまつだい ほんしき なた ぎ ほんし しょうけ
何に況や末代の凡師機を知り難し但し機を知らざる凡師は所化の
でし いっこう ほけきよう いたわ むち
弟子に一向に法華経を教うべし、問うて云く無智の人の中に於て此
の経を説くこと莫れとの文は如何、答えて云く機を知るは智人の

説法せっぽうする事ことなり又また謗法ぼうぼうの者もの

に向むかつては一向いっこうに法華經ほけきょうを説とくくべし毒鼓どくこの縁ゆかりと成なさんが為ななり、例れいせば不輕菩薩ぶきょうぼさつの如ごとし亦また智者ちしやと成なる可べき機きと知しらば必かならず先まづ小乘しょうじょうを教おしえ次に権大乘こんだいじょうを教おしえ後に実大乘じつだいじょうを教おしう可べし、愚者ぐしやと知しらば必かならず先まづ実大乘じつだいじょうを教おしう可べし信謗しんぼう共に下種げしゆと為なればなり。

三に時とは仏教を弘めん人は必ず時を知るべし、譬えば農人の
秋冬・田を作るに種と地と人の功勞とは違わざれども一分も益
無く還つて損す一段を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損
なり、春夏耕作すれば上中下に随つて皆分分に益有るが如し、仏法
も亦復是くの如し、時を知らずして法を弘めば益無き上還つて悪道
に墮するな

り、仏出世したもつて必ず法華經を説かんと欲するに縦い機有れど
も時・無きが故に四十余年には此の經を説きたまわず故に經に云く
「説時未だ至らざるが故なり」と云云、仏の滅後の次の日より
正法一千年は持戒の者は多く破戒の者は少し正法一千年の次の
日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し、像法一千年
の次の日より末法一万年は破戒の者は少く無戒の者は多し、正法
には破戒・無戒を捨てて持戒の者を供養すべし像法には無戒

を捨てて破戒の者を供養すべし、末法には無戒の者を供養すること
仏の如くすべし但し法華經を謗ぜん者をば正像末の三時に亘りて
持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも共に供養すべからず、
供養せば必ず国に三災・七難起り供養せし者も必ず無間・大城に墮
すべきなり、法華經の行者の権經を謗ずるは主君・親・師の所従・
子息・弟子等を

罰するが如し、権經の行者の法華經を謗ずるは所従・子息・弟子
等の主君・親・師を罰するが如し、又当世は末法に入つて二百一十
余年なり、権經・念仏等の時か法華經の時か能く能く時刻を勘うべ
きなり。

四に国とは仏教は必ず国に依つて之を弘むべし国には寒国・熱国
・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国・一向偷盗国・一向殺生国・
一向不孝国等之有り、又一向小乗の国・一向大乘の国・大小兼学

の国も之有り、而るに日本国は一向に小乗の国か一向に大乘の国
か大小兼学の国なるか能く之を勸うべし。

五に教法流布の先後とは未だ仏法渡らざる国には未だ仏法を聴
かざる者あり既に仏法渡れる国には仏法を信ずる者あり必ず先に
弘まれる法を知つて後の法を弘むべし先に小乗・權大乘弘らば
後に必ず実大乘を弘むべし先に実大乘弘らば後に小乗・權大乘
を弘むべからず、瓦礫を捨てて金珠を取るべし金珠を捨てて瓦礫を
取ること勿れ。

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可き
か所以に法華経は一切経の中の第一の経王なりと知るは是れ教を
知る者なり、但し光宅の法雲・道場の慧観等は涅槃経は法華経に
勝れたりと、清涼山の澄観・高野の弘法等は華嚴経・大日経等は
法華経に勝れたりと、嘉祥寺の吉蔵・慈恩寺の基法師等は般若・
深密等の二経は法華経に勝れたりと云う、天台山の智者大師只一
人のみ一切経の中に法華経を勝れたりと立つるのみに非ず
法華経に勝れたる経之れ有りと云わん者を諫曉せよ止まずんば
現世に舌口中に爛れ後生は阿鼻地獄に墮すべし等と云云、此等の
相違を能く能く之を弁えたる者は教を知れる者なり、当世の千万
の学者等一一之に迷えるか、若し爾らば教を知れる者之れ少き
か教を知れる者之れ無ければ法華経を読む者之れ無し法華経を讀
む者之れ無ければ国師となる者無きなり、国師となる者無ければ

國中の諸人・一切経の大・小・権・実・顕・密の差別に迷うて一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は謗法の者と成り法に依つて阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵よりも多く法に依つて生死を離るる者は爪上の土よりも少し、恐る可し恐る可し、日本国の一切衆生は桓武皇帝より已来

四百余年一向に法華経の機なり、例せば靈山八箇年の純円の機為るが如し大師安然和尚慧心等の記に之有り是れ機を知れるなり、而るに当世の学者の云く日本国は一向に称名念仏の機なり等と云云、例せば舍利弗の機に迷うて所化の衆を一闡提と成せしが如し。

日本国の当世は如来の滅後二千二百一十余年後・五百歳に當つて妙法蓮華経広宣流布の時刻なり是れ時を知れるなり、而るに日本国の当世の学者、或は法華経を抛ちて一向に称名念仏を行じ、或は小乗の戒律を教えて叡山の大僧を蔑り、或は教外を立てて

法華ほっけの正法しょうぼうを軽かろしむ此等これらは時まよに迷いえる者ものか、例せば勝意しょうい比丘びくが喜根きこん菩薩ぼさつを謗ほうじ徳光とくこう論師ろんし

が弥勒みろく菩薩ぼさつを蔑あなずりて阿鼻あびの大苦だいこを招まきしが如ごとし、日本国にほんこくは一向いっこうに

法華ほっけ經きょうの国こくなり例せば舍衛国しゃえいこくの一向いっこうに大乘だいじょうなりしが如ごとし、又天竺てんじく

には一向いっこうに小乘しょうじょうの国こく一向いっこうに大乘だいじょうの国こく・大小兼学だいしょうけんがくの国こくも之これ有あり、

日本国にほんこくは一向いっこう大乘だいじょうの国こくなり大乘だいじょう

の中にも法華經の国為る可きなり瑜伽論肇公の記聖德太子伝教大師安然等の記之有り是れ国を知れる

者なり、而るに当世の学者日本国の衆生に向つて一向に小乗の戒

律を授け一向に念仏者等と成すは、譬えば宝器に穢食を入れたる

が如し、等云云の守護章に在り、日本国には欽明天皇の御宇に仏法百濟

国より渡り始めしより桓武天皇に至るまで二百四十余年の間、此の

国に小乗・権大乘のみ弘まり法華經有りと雖も其の義未だ顕れ

ず、例せば震旦国に法華經渡つて三百余年の間、法華經有りと雖も

其の義未だ顕れざりしが如し、桓武天皇の御宇に伝教大師有して

小乗・権大乘の義を破して法華經の実義を顕せしより已来又

異義無く純一に法華經を信ず、設い華嚴・般若・深密・阿含・大小の

六宗を学する者も法華經を以て所詮と為す、況や天台・真言の

学者をや何に況や在家の無智の者をや、例せば崑崙山に石無く

蓬萊山に毒無きが如し、建仁より已来今に五十余年の間、大日・

仏陀・禅宗を弘め、法然・隆寛・浄土宗を興し実大乘を破して
権宗に付き一切経を捨てて教外を立つ、譬えば珠を捨てて石を取
り地を離れて空に登るが如し

此は教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誠めて云く「悪象に値うとも悪知識に値わざれ」等と云云、

法華經の勸持品に後の五百歳二千余年に當つて法華經の敵人・三類

有る可しと記し置きたまえり当世は後・五百歳に當れり、日蓮

仏語の実否を勘うるに三類の敵人之有り之を隠さば法華經の行者

に非ず之を顕さば身命定めて喪わんか、法華經第四に云く「而も此

の経は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等と云云、

同じく第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」と、又

云く、「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、同第六に云く「自ら

身命を惜まず」と云云、涅槃經第九に云く「譬えば王使の善能談論

し方便ほうべんに巧たくみなる命たこくを他国たこくに奉うけ寧むしろ身命しんみょうを喪うしなうとも終ついに王おうの
所説しよせつの言教げんきょうを匿かくさざるが如ごとし、智者ちしやも亦爾またしかなり凡夫ほんぶの中に於おいて
身命しんみょうを惜おしまずして要必かならずだいじょう大乘方等ほうとうを宣説せんぜつすべしと云云、章安大師しやうあんだいし
釈しゃくして云いわく「寧喪身命にやうそつしんみょう不匿教ふのくきやうとは身は軽かろく法は重おもし身を死しして法
を弘ひろめよ」と等らと云云、此等これらの本文ほんぶんを見れば三類さんるいの敵人てきじんを

あらわ
顕あさらずわんらばわ法ほ華け經きのよ行ぎ者よにう非じずや之あをら顕こすれはあ法ら華わ經わのほ行け者きなりよ、
しか
而しれかどもら必らずば身し命んをみ喪うわしんなか、例れせば師し子し尊そ者ん・提だ婆い菩ぼ薩さ等つの
ごと
如ごとくらならんらんら云らんら云らんら。

二月十日

日蓮にちれん

花押かおう

にちれん
日蓮撰

ほんぢやうしやもん
本朝沙門

第一だいいちに八大地獄だいいじこくの因果いんがを明あかし、第二だいいちに無間地獄むげんじこくの因果いんがの軽重けいちようを明あかし、第三だいいちに問答料簡もんどうりようけんを明あかし、第四だいいちに行者弘経ぎやうじやくきやうの用心ようじんを明あかす。

第一だいいちに八大地獄だいいじこくの因果いんがを明あかさば、

第一だいいちに等活地獄とうかつじこくとは此こゝの閻浮提えんぶだいの地ちの下した・一千由旬ゆじゆんにあり此こゝの

地獄じじこくは縦じゆつ広齊等かうさいとうにして一万由旬ゆじゆんなり、此こゝの中の罪人ざいにんはたがいに害

心こゝろをいだく若もしたまたま相見あひまれば犬いぬと、とのあえるがごとし、各かく鉄てつ

の爪つめをもて互たがいにつかみさく血肉けつにく既すでに尽つきぬれば唯骨ただのみあり、或ある

は獄卒手に鉄杖を取つて頭より足にいたるまで皆打くだく身体く
だけで

沙のごとし、或は利刀をもつて分分に肉をさく然れども又よみが

へり・よみがへりするなり此の地獄の寿命は人間の昼夜五十年をも

つて第一四王・天の一日一夜として四王・天の天人の寿命五百歳な

り、四王・天の五百歳を此れ等活地獄の一日一夜として其の寿命五

百歳なり、此の地獄の業因をいはば・ものの命をたつもの此の地獄

に墮つお

蝮蟻蚊等の小虫を殺せる者も懺悔なければ必ず此の地獄に墮つ

べし、譬へばはりなれども水の上にをけば沈まざることなきが如し、

又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を作れば後の懺悔には此

の罪きえがたし、譬へばぬすみをして獄に入りぬるものしばらく

経て後に御免を蒙りて獄を出ずれども又重ねて盗をして獄に入り

ぬれば

出ゆるされがたきが如し、されば当世の日本国にほんこくの人は上かみ一人より
下万民ばんみんに至まで此の地獄じごくをまぬがる人は一人もありがたかるべ
し、何いかに持戒じかいのをばへをとれる持律じりつの僧そうたりとも蟻虱ありしらみなどを殺
さず蚊あぶをあやまたざる

べきか、況いや其外山野いの鳥鹿わんやぎ。江海ちよつろくの魚鱗うろくずを日日にに殺すものをや、
何いかに況いや牛馬い人等わんやぎを殺す者をや。

第二にに黒繩こくじょう地獄じごくとは等活とうかつ地獄じごくの下したにあり縦じゆう広かうは等活とうかつ地獄じごくの
如ごとし、獄卒ごくそつ・罪人ざいにんをとらえて熱鉄ねつてつの地ちにふせて熱鉄ねつてつの繩じゆうをもつて身みに
すみうつて熱鉄ねつてつの斧おのをもつて繩じゆうに随したがつてきり・さきけづる又また鋸のこぎりを
もつてひく又また左右さうに大おほなる鉄てつの山やまあり山やまの上うへに鉄てつの幢はたぼこを立て
くろがね鉄てつの繩じゆうをはり罪人ざいにんに鉄てつの山やまををせて繩じゆうの上うへよりわたす繩じゆうよ
り落ちおちてくだけ或あるくろがね鉄てつのかなえに墮たし入れてにらる此この苦くるしみは上かみの
とうかつじごく等活とうかつ地獄じごくの苦くるしみよりも十倍じゅうばいなり、人間にんげんのひゃくさいは第二にの利天とりてんの
一日いちにち一夜いちやなり其その寿じゆう一せんさい千歳せんさいなり此この天てんの寿じゆう一せんさい千歳せんさいを一日いちにち一夜いちやとし
て此この第二にの地獄じごくの寿命じゆうめい一せんさい千歳せんさいなり、殺生せつじゆうの上うへに偷盜ちゆうたうとて・ぬす
みをかさねたるもの此この地獄じごくにをつ、当世とうせの偷盜ちゆうたうのもの・ものをぬ
すむ上うへ・物の主しゆうを殺すもの此この地獄じごくに墮おつべし。

第三に衆合地獄とは黒繩地獄の下にあり縦じゆうじゆう広かみは上の如ごとし多くの
鉄くろがねの山ざいにん二つづつに相向かへり、牛頭こず・馬頭めず等の獄卒ごくそつ手に棒を取つて
罪人ざいにんを駈かりて山の間に入らしむ、此の時・両の山迫り来て合せ押す
身体しんたいくだけで血ち流れて地ちにみつ、又種しゆじゆ種の苦くあり、人間にんげんの二百歳を
第三の夜・摩天まてんの一日一夜として此の天の寿とし二千歳なり此の天の寿
を一日一夜として此の地獄じじくの寿命じゆみよう二千歳なり、殺生せつじよう・偷盜ちゆうとうの罪つみの
上じやいんに邪じや姪いんとて他人たにんのつまを犯す者・此の地獄じじくの中に墮おつ
べし、而しかるに当世とうせの僧そう・尼に・士し・女にょ・多た分ぶんは此の罪つみを犯す殊ことに僧そうにこの
罪つみ多たし、士女しにょは各各互たがいにまほり又人目をつつまざる故ゆえに此の罪つみを・
をかさず僧そうは一人ある故ゆえに姪欲いんよくとぼしきところところに若もし有身みこもれば父た
だされ・あらはれぬべきゆへに独にょにんある女人にょにんを・をかさず、もしや・か
くると他人たにんの妻つまをうかがひ・ふかく・かくれんとをもうなり、
当世とうせのほか・たうとげなる僧そうの中にことに此の罪つみ又多くあるらんと

をぼゆ、されば多分は当世・たうとげなる僧此の地獄に墮つべし。
第四に叫喚地獄とは衆合の下にあり縦広前に同じ獄卒悪声出
して弓箭をもつて罪人をいる、又鉄の棒を以て

頭こづへを打つて熱鉄の地をはしらしむ、ある或は熱鉄のいりだなにうちかへし。うちかへし此の罪人ざいにんをあぶる、ある或は口を開てわける銅のゆを入るれば五臟やけて下より直に出ただちず、寿命じゅみやうをいはば人間にんげんの四百歳を第四の都率天とそつの一日一夜とす、又都率天の四千歳せんさいなり都率天とそつの四千歳せんさいの寿を一日一夜として此の地獄じごくの寿命じゅみやう四千歳せんさいなり、此の地獄じごくの業因ごういんをいはば・殺生偷盜せつしょうちゆうたう・邪淫じやいんの上に飲酒おんじゆとて酒のむもの此じごくの地獄じごくに墮おつべし、当世とうせの比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばいの四衆ししゆうの大酒なる者・此の地獄じごくの苦免まぬかれがたきか、大論だいろんには酒に三十六の失とがをいだし梵網經ぼんもつきやうには酒盃さかずきをすすめる者五ひやくしやう百生ひやくしやうに手なき身みと生ると・とかせ給たまう人師にんしの釈しやくにはみみずていの者と・なるとみへたり、況いわんやや酒をうりて人にあたえたる者をや何いかに況いわんやや酒に水を入れいてうるものをや・当世とうせの在家ざいけの人人ひとびとこの地獄じごくの苦まぬがたし。

第五に大叫きやうかんじしよく喚地獄きよつがんとは叫喚きよつかんの下したにあり縦じゆう広前かうぜんに同おなし、其その苦の

相は上の四の地獄の諸の苦に十倍して重くこれをうく、寿命の
長短を云わば人間の八百歳は第五の化楽天の一日一夜なり此の天
の寿八千歳なり此の天の八千歳を一日一夜として此の地獄の寿命
八千歳なり、殺生・偷盗・邪淫・飲酒の重罪の上に妄語とてそらご
とせる者此の

地獄に墮つべし、当世の諸人は設い賢人・上人などいはるる人人
も妄語せざる時はありとも妄語をせざる日はあるべからず、設い日
はありとも月はあるべからず設い月はありとも年はあるべからず
設い年はありとも一期生・妄語せざる者はあるべからず、若ししか
らば当世の諸人一人もこの地獄をまぬがれがたきか。

第六に焦熱地獄とは大叫喚地獄の下にあり縦広前にをなじ、此
の地獄に種種の苦あり若し此の地獄の豆計りの火を閻浮提にをけ
らんに一時にやけ尽きなん況や罪人の身のなることわたのごと

くなるをや、此の地獄じじくの人は前の五つの地獄じじくの火を見る事・雪の
ごと、譬たとへば人間にんげんの火の薪たきぎの火よりも鉄銅の火の熱じこきが如ごとし、
じゆみょう ちようたん
寿命じゆみょうの長短ちようたんは

人間にんげんの千六百歳を第六の他化天たけてんの一日一夜として此の天の寿じゆみょう千六
百歳なり此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄じじくの寿じゆみょう一千
六百歳なり、業因しごういんを云わば殺生せつしよつ・偷盜ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうごの上・邪見じゃけん
とて因果いんがなしという者・此の

中に墮つべし、邪見とは有人の云く人飢えて死ぬれば天に生るべし
等と云云、総じて因果をしらぬ者を邪見と申すなり世間の法には
慈悲なき者を邪見の者という、当世の人人此の地獄を免れがたき
か。

第七に大焦熱地獄とは焦熱の下にあり縦広前の如し、前の六つ
の地獄の一切の諸苦に十倍して重く受るなり、其の寿命は半中劫
なり、業因を云わば殺生・偷盗・邪淫・飲酒・妄語・邪見の上に淨戒
の比丘尼ををさせるもの此の中に墮つべし、又比丘・酒をもつて
不邪淫戒を持てる婦女をたばらかし或は財物をあたへて犯せるも
の此の中に墮つべし、当世の僧の中に多く此の重罪あるなり、
大悲經の文に末代には士女は多くは天に生じ僧尼は多くは地獄に
墮つべしととかれたるはこれにていふ事か、心あらん人人ははづべし。
はづべし。

総じて上の七大地獄の業因は諸経論をもつて勘え当世・日本国の
四衆にあて見るに此の七大地獄をはなるべき人を見ず又きかず、
涅槃經に云く末代に入りて人間に生ぜん者は爪上の土の如し
三悪道に墮つるものは十方世界の微塵の如しと説かれたり、若
爾らば我等が父母・兄弟等の死ぬる人は皆上の七大地獄にこそ墮ち
給いては候らめ・

あさましともいうばかりなし、竜と蛇と鬼神と仏・菩薩・聖人をば
未だ見ずただをとにのみ・これをきく当世に上の七大地獄の業を造
らざるものをば未だ見ず又・をとにも・きかず、而るに我が身より
はじめて一切衆生・七大地獄に墮つべしと・をもえる者・一人もな
し、設い言には墮つべきよしを・さえづれども心には墮つべしとも・
をもわず、

又僧尼・士女・地獄の業をば犯すとは・をもえども・或は地蔵菩薩等

の菩薩ぼさつを信じ、或あるは阿彌陀あみたぶつ仏等の仏たのを恃たのみ、或あるは種種しゆじゆの善根ぜんこんを修しゆしたる者ものもあり、皆みなをもはく我われはかかる善根ぜんこんをもてれば、なんどうちをもひて地獄じじくをもをぢず、或あるは宗宗しゆじゆを習ひとびとへる人人ひとびとは各各ちふんの智分ちぶんをたのみて又地獄じじくの因いんををぢず、而しかに仏菩薩ぼさつを信しんじたるも愛子あいし・夫婦ふうふなんどをああいし父母ふぼ・主君しゆくんなんどをうやまうには雲泥うんでいなり、仏ぼさつ・菩薩ぼさつ等をば・かろくをもえるなり、されば当世とうせの人人ひとびとの仏ぼさつ・菩薩ぼさつを恃たのめれば宗宗しゆじゆを学がくしたれば地獄じじくの苦くはまぬがれなんなんどをもえるは僻案びやくあんにや心こころあらん人人ひとびとはよくよく

はかりをもつべきか。

第八に大阿鼻地獄とは又は無間地獄と申すなり欲界の最底・
大焦熱地獄の下にあり此の地獄は縦広八万由旬なり、外に七重の
鉄の城あり地獄の極苦は且く之を略す前の七大地獄並びに別処
の一切の諸苦を以て一分として大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり、此
の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事他化自在天の楽みの
如し、此の地獄の香のくさを人かくならば四天下・欲界・六天の
天人皆ししなん、されども出山・没山と申す山・此の地獄の臭き
気を・をさへて人間へ来らせざるなり、故に此の世界の者死せずと見
へぬ、若し仏・此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聴いて血をはいて
死すべき故にくわしく仏説き給はずとみへたり、此の無間地獄の
寿命の長短は一中劫なり一中劫と申すは此の人寿無量歳なりし
が百年に一寿を減じ又百年に一寿を減ずるほどに人壽十歳の時に

減ずるを一減と申す、又十歳より百年に一寿を増し又百年に一寿を増する程に八万歳はちまんに増するを一増と申す、此の

一増一減の程を小劫として二十の増減を一中劫とは申すなり、此の地獄じじくに墮おちたる者これ程久しく無間地獄むげんじじくに住して大苦をうくるなり、業因ごういんを云わば五逆罪ごぎやくざいを造る人、此の地獄じじくに墮おつべし、五逆罪ごぎやくざいと申すは一に殺父しごふ・二に殺母しも・三に殺阿羅漢あらかん・四に出仏身血すいぶつしんけつ・五に破和合僧はわごうそうなり、今の世には仏ましまさず、しかれば出仏身血すいぶつしんけつあるべからず、

和合僧わごうそうなければ破和合僧はわごうそうなし、阿羅漢あらかんなければ殺阿羅漢あらかんこれなし、但殺父しごふ・殺母しもの罪つみのみありぬべし、しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに此の罪つみをかしがたし、若爾もししからば当世とうせには阿鼻地獄あびじじくに墮おつべき人すくなし但し相似ただの五逆罪ごぎやくざいこれあり木画もくえの仏像ぶつぞう・堂塔どうとう等をやき、かの仏像等ぶつぞうの寄進きしんの所をうばいとり率兜婆等そとばをきりやき

智人^{ちじん}を殺しなんどするもの多し、此等^{これら}は大阿鼻地獄^{あびじごく}の十六の別処^{べつこ}に墮^おつべし、されば当世^{とうせ}の衆生^{しゅじやう}十六の別処^{べつこ}に墮^おつるもの多きか又^{また}謗法^{ぼうぼう}の者^{もの}この地獄^{じごく}に墮^おつべし。

第二^{だいじ}に無間地獄^{むげんじごく}の因果^{いんが}の軽重^{けいちやう}を明^{あか}さば、問^とうて云^いく五逆罪^{ごぎやくざい}より外^{ほか}の罪^{つみ}によりて無間地獄^{むげんじごく}に墮^{おち}んことあるべし

や、答えて云く誹謗正法の重罪なり、問うて云く証文如何、答えて云く法華經第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と等と云云、此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見へたり、問うて云く五逆と謗法と罪の輕重如何、答えて云く大品經に云く「舍利弗・仏に白して言く世尊五逆罪と破法罪と相似するや、仏・舍利弗に告わく相似と云うべからず所以は何ん若し般若波羅蜜を破れば即ち十方諸仏の一切智一切種智を破るに為んぬ、仏宝を破るが故に法宝を破るが故に僧宝を破るが故に三宝を破るが故に即ち世間の正見を破す世間の正見を破れば則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得已つて則ち無量無辺阿僧祇の憂苦を受るなり」と文又云く「破法の業・因縁集るが故に無量百千萬億歲大地獄の中に墮つ、此の破法人の輩一大地獄より一大地獄に至る若し劫火起る時は他方の大地獄の

中に至る、是くの如く十方にいたくして彼の間にかくのごと劫火起る故にじゅつぽう

彼より死し破法の業はほう・因縁未だ尽きざるが故に是の間の大地獄の中いんねんいま

に還来すかんらいと等と云云、法華経第七に云くほけきょう「四衆の中に瞋恚を生じ心いわ

不浄なる者有り悪口罵詈あつくして言いわく是れ無智の比丘と、或は杖木あつ

瓦石を以て之れを打擲すちようちやく乃至千劫阿鼻地獄ないしせんごうあびじごくに於て大苦惱を受くおい

等と云云、此の経文の心は法華経の行者を悪口ほけきょうし及び杖を以てあつく

打擲せる

もの其の後に懺悔せりといえども罪つみいまだ滅せずして千劫阿鼻地獄せんごうあびじごく

に墮ちたりと見えぬ、懺悔せるざんげ・謗法の罪ほうぼうすら五逆罪ごぎやくざいに千倍せり況やいわんや

懺悔せざらんざんげ・謗法ほうぼうにをいては阿鼻地獄あびじごくを出いずる期かたかるべし、

故に法華経第二に云くゆえ「経を誦誦し書持どくじゆすること有らん者を見てしよじ

軽賤憎嫉きようせんぞうしつして結恨けつこんを懐いだかん乃至其の人命終なにしそして阿鼻地獄みようじゆうに入りあびごく

一劫を具足いっごうして劫尽くそくきなば更生またうまれん、是くの如く展転てんでんして無数劫むじゆじゆうに

至らんと等と云云。

第三に問答料簡を明さば問うて云く五逆罪と謗法罪との輕重
はしんぬ謗法の相貌如何、答えて云く天台智者大師の梵網經の疏
に云く謗とは背なり等と云云、法に背くが謗法にてはあるか天親
の仏性論に云く若し憎は背くなり等と云云、この文の心は正法を
人に捨てさせるが謗法にてあるなり、問うて云く委細に相貌をし
らんと

をもうあらあら・しめすべし、答えて云く涅槃經第五に云く「若し人有りて如来は無常なりと言わん云何ぞ是の人舌墮落せざらん」等云云、此の文の心は仏を無常といはん人は舌墮落すべしと云云、問うて云く諸の小乗經に仏を無常と説かるる上又所化の衆皆無常と談じき若爾らば仏・並に所化の衆の舌墮落すべしや、答えて云く小乗經の仏を小乗經の人が無常ととき談ずるは舌ただれざるか、大乘經に向つて仏を無常と談じ小乗經に對して大乘經を破するが舌は墮落するか、此れをもつて・をもつてのれが依經には隨えども依經よりすぐれたる經を破するは破法となるか、若爾らば設い觀經・華嚴經等の權大乘經の人人・所依の經の文の如く修行すともかの經にすぐれたる經に隨はず又すぐれざる由を談ぜば謗法となるべきか、されば觀經等の經の如く法をえたりとも觀經等を破せる經の出来したらん時其の經に隨わずば破法

となるべきか、小乗經を以てなぞらえて心うべし。

問うて云く雙觀經等に乃至十念。即得往生なんととかれて候が

彼のけうの教の如く十念申して往生すべきを後の經を以て申しや

ぶらば謗法にては候まじきか、答えて云く仏觀經等の四十余年の

經經を束て未顯真實と説かせ給いぬれば此の經文に随つて乃至

十念。即得往生等は實には往生しがたしと申す此の經文なくば

謗法となるべし、問うて云く或人云く無量義經の四十余年。未顯

真實の文はあえて四十余年の一切の經經並に文文・句句を皆

未顯真實と説き給にはあらず、但四十余年の經經に処処に決定

性の二乗を永不成仏ときらはせ給い釈迦如来を始成正覺と説き給

しを其の言ばかりをさして未顯真實とは申すなりあえて余事には

あらず、而るをみだりに四十余年の文を見て觀經等の凡夫のため

に九品往生なんぞを説きたるを妄りに往生はなき事なりなど

押し申すあに・

をそろしきほうほう謗法の者にあらずやなんと申すはいかに、答えて云く此

の料簡りょうけんは東土とうどの得とく一いちが料簡りょうけんに似たり、得一いっが云く未顕みけん真実しんじつとは

決定性けつじやうの二乗にじやうを仏にぜん・爾前にぜんの経けいにして永不成ようふじやうぶつ仏ぶつととかれしを未顕みけん真実しんじつ

とは嫌きらはるるなり前ぜん四味しのみの一切いっさいには亘わたるべからずと申もうしき、伝でん教きやう

大師だいしは前ぜん四味しのみに亘わたりて文ぶん・句句みくくに未顕みけん真実しんじつと立て給たまいき、されば

この料簡りょうけん

は古の謗法者の料簡に似たり、但し且く汝等が料簡に随て尋ね
明らめん、問う法華已前に二乗作仏を嫌いけるを今未顕真實とい
とならば先ず決定性の二乗を仏の永不成仏と説かせ給し処処の
經文ばかりは未顕真實の仏の妄語なりと承伏せさせ給うか、さて
は仏の妄語は勿論なり若し爾らば妄語の人の申すことは有無共に
用いぬ事にてあるぞかし、決定性の二乗・永不成仏の語ばかり妄語
となり若し余の菩薩・凡夫の往生・成仏等は実語となるべきなら
ば信用しがたき事なり、譬へば東方を西方と妄語し申さん人は西方
を東方と申すべし二乗を永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆ
るすも又妄語にあらずや、五乗は但一仏性なり二乗の仏性をかく
し菩薩・凡夫の仏性をあらはすは返つて菩薩・凡夫の仏性をかくす
なり。

有人云く四十余年・未顕真實とは成仏の道ばかり未顕真實なり

往生等は未顕真実にはあらず、又難じて云く四十余年が間の説の
成仏を未顕真実と承伏せさせ給はば雙觀經に云う不取正覺
成仏已來凡歷十劫等の文は未顕真実と承伏せさせ給うか、若し
爾らば四十余年の經經にして法藏比丘の阿彌陀仏になり給はず
ば法藏比丘の成仏すでに妄語なり、若し成仏妄語ならば何の仏か
行者を迎え給うべきや、又かれ此の難を通して云ん四十余年が間
は
成仏はなし阿彌陀仏は今の成仏にはあらず過去の成仏なり等と
云云、今難じて云く今日の四十余年の經經にして実の凡夫の成仏
を許されずば過去遠遠劫の四十余年の權經にても成仏叶いがたき
か、三世の諸仏の説法の儀式皆同きが故なり、或は云く不得疾成
無上菩提ととかるれば四十余年の經經にては疾くこそ仏にはな
らねども遅く

劫を経てはなるか、難じて云く次下の大莊嚴菩薩等の領解に云く「不可思議無量無辺阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずることを得ず」と等と云云、此の文の如くならば劫を経ても爾前の經計りにては成仏はかたきか。

有は云う華嚴宗の料簡に云く四十余年の内には華嚴經計りは入るべからず、華嚴經にすでに往生成仏。此ありなんぞ華嚴經を行じて往生成仏をとげざらん、答えて云く四十余年の内には華嚴經入るべからずとは華嚴宗の人師の

義なり、無量義經には正しく四十余年の内に華嚴海空と名目を呼び出して四十余年の内にかずへ入れられたり、人師を本とせば仏に背くになりぬ。

問うて云く法華經をはなれて往生成仏をとげずば仏世に出させ給ては但法華經計をこそ説き給はめ、なんぞわづらはしく四十余年の經經を説かせ給うや、答えて云く此の難は仏、自ら答え給えり若し但仏乘を讃せば衆生苦に没在して法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちなんゝ等の經文これなり、問うて云くいかなれば爾前の經をば衆生謗せざるや、答えて云く爾前の經經は万差なれども束ねて此れを論ずれば隨他意と申して衆生の心をとかれ

てはんべり故に違する事なし、譬へば水に石をなぐるにあらそうことなきがごとし又しなじなの説教はんべれども九界の衆生の心

を出いでしゅじやうず衆生の心は皆善みなにつけ悪いにつけて迷まよを本とするゆへに仏ぶつにはならざるか、問いうて云いく衆生しゅじやう謗ぼうずべきゆへに仏ぶつ・最初さいしよに法華經ほけきやうをたま給たまはずして四十余年よんじゅうよねんの後に法華經ほけきやうをたま給たまはば汝なんじなんぞ当世とうせに權經けんきやうをたまば・とあかずして左右さうなく法華經ほけきやうをたまいて人ひとに謗ぼうをなさせてあくどう悪道あくどうに墮だすや、答いえて云いく仏ぶつ在世ざいせには仏ぶつ・菩提樹ぼだいじゆの下したに坐まし給たまいて機きをかがみ給たまうに当世とうじ・法華經ほけきやうを説しくならば衆生しゅじやう謗ぼうじて悪道あくどうに墮おちぬべし、四十余年よんじゅうよねんすぎて後あとにとかば謗ぼうせずして初住しよじゆ不退ふたい・乃至な妙覺みやうかくにのぼりぬべしと知見ちけんし・ましましき、末代まつだい濁世じやくせには当機とうきにして初住しよじゆの位ゐに入るべき人は万ばんに一人もありがたかるべし、又能化のうけの人ひとも仏ぶつにあらざれば機きをかがみん事こともこれかたし、

されば逆縁ぎやくえん・順縁じゆんえんのために先まず法華經ほけきやうを説しくべしと仏ぶつゆるし給たまへり、但ただし又滅後めつごなりとも当機衆とうきしゅになりぬべきものには先まず權教けんきやうを

とく事も・あるべし、又悲を先とする人は先ず権經をとく釈迦の
ごとし慈を先とする人は先ず実經をとくべし不輕菩薩のごとし、
又末代まつだいの凡夫ぼんぶはなにとなくとも悪道を免れんまぬかことはかたかるべし同
じく悪道に

墮おちるならば法華經を謗ぜさせて墮すならば世間の罪をもて墮ちた
るには・にるべからず、聞法生謗・墮於地獄・勝於供養・恒沙仏者等
の文のごとし、此の文の心は法華經をはうじて地獄に墮ちたるは
釈迦仏・阿彌陀仏等の恒河沙

の仏を供養し、歸依渴仰する功德には百千万倍すぎたりととかれたり。

問うて云く上の義のごとくならば華嚴・法相・三論・真言・浄土等

の祖師はみな謗法に墮すべきか、華嚴宗には華嚴經は法華經には雲泥超過せり法相・三論もてかくのごとし、真言宗には日本国に二

の流あり東寺の真言は法華經は華嚴經にをとれり何に況や大日經

にをいてをや、天台の真言には大日經と法華經とは理は齊等なり印

真言等は

超過せりと云云、此等は皆惡道に墮つべしや、答えて云く宗をたて

經經の勝劣を判ずるに二の義あり、一は似破・二は能破なり一に

似破とは他の義は吉とをもえども此をはすかの正義を分明にあら

はさんがためか、一一に能破とは実に他人の義の勝れたるをば弁えず

して迷うて我が義すぐれたりとをもひて心中よりこれを破するを

ば能破のうは

という・されば彼の宗宗の祖師そしに似破じは・能破のうはの二の義あるべし、
心中しんちゆうには法華経ほけきようは諸経しよきように勝すぐれたりと思えども且しく違たがして法華経ほけきようの
義ぎを顕あらわさんとをもひてこれをはする事あり、提婆達多だいばだつた・阿闍世王あじゃせ・
諸もろもろの外道げどうが仏のかたきとなり

て仏徳あらかわを顕あらわし後あきには仏に歸せしがごとし、又実ほんぶの凡夫ぼんぶが仏のかたき
となりて悪道あくどうに墮おつる事ことこれ多し、されば諸宗しよしゆうの祖師そしの中ちゆうに回心えしんの
筆ふでをかかずば謗法ぼうぼうの者もの悪道あくどうに墮おちたりとしるべし、三論さんろんの嘉祥かじよう・
華嚴けこんの澄觀ちようかん・法相ほっそうの慈恩じおん・東寺とうじの弘法こうぼう等は回心えしんの筆ふでこれあるか、よ
くよく尋たずねならうべし。

問いうて云いくまことに今度このたび生死しじゆうじをはなれんと・をもはんになにも
のをか・いとひなにものをか願ねがうべきや、答こたう諸もろもろの経文きやうもんには女人にょにん等
をいとうべしとみへたれども雙林そうりん最後さいごの涅槃經ねはんきやうに云いく「菩薩ぼさつ是この身

に無量の過患具足充滿すと見ると雖も涅槃經を受持せんと欲する
を為すの故に猶好く將護して乏少ならしめず、菩薩惡象等に於て
は心に
恐怖すること無れ惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ、何を以ての
故に是れ惡象等は唯能く身を壞りて心を壞る事能わず、惡知識は
二俱に壞るが故に、惡象の若きは唯一身を壞る惡知識は無量の身。
無量の善心を壞る、惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に
殺されては三趣に至る」と等と云云此の經文の心は後世を願はん人
は一切

の悪縁あくえんを恐るべし一切いっさいの悪縁あくえんよりは悪知識あくちしきを・をそるべしとみえたり。

されば大莊嚴だいそうごん仏ぶつの末すえの四よの比丘びくは自ら悪法あくぼうを行じて十方じゅうぽうの大阿鼻地獄あびじごくをふ経つるのみならず、六百億人りくおくにんの檀那等だんならうをも十方じゅうぽうの地獄じごくに墮だしぬ、鶯堀摩羅おうくつまらは摩尼跋陀まにばつだが教しやうに随したがつて九百九十九人くひやくくじゅうじゅうくにんの指さしをきり結句けっく・母はは並ならに仏ぶつをがいせんとぎす、善星比丘ぜんじやうびくは仏ぶつの御子ごし・十二部じふにぶ経きやうを受持じゆじし四禅定ぜんじやうをえ欲界よっかいの結むすを断たじたりしかども苦得くたくげ外道げどうの法ぽうを習ならうて生身しやうしんに阿鼻地獄あびじごくに墮おちぬ、提婆だいばが六万蔵むつばん・八万蔵はちまんを暗そらんじたりしかども外道げどうの五法ごぽうを行じて現げんに無間むげんに墮おちにき、阿闍世王あじゃせの父ちちを殺ころし母ははを害がいせんと擬なせし大象だいざうを放はなつて仏ぶつをうしないたてまつらんとせしも悪師あくし・提婆だいばが教しやうなり、俱伽利比丘くぎやりびくが舍利弗しゃりほつ・目連もくれんをそしりて生身しやうしんに阿鼻あびに墮だせし、大族王だいぞくおうの五竺ぶつぽうの仏法僧ぶつぽうをほろぼせし、大族王だいぞくおうの舍弟しゃてい

は

かしゆみらくく

加 弥羅国の王となりて健駄羅国の率都婆・寺塔・一千六百所をう

しなひし、金耳国王の仏法をほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万

の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王の仏法を滅し

ぼだいじゆ

菩提樹をきり根をほりし、後周の宇文王の四千六百余所の寺院を

うしない

失ひ二十六万六百余の僧尼を還俗せしめし、此等は皆悪師を信じ

あつきそ

悪鬼其の身に入りし故なり。

問うて云く

天竺・震旦は外道が仏法をほろぼし小乗が大乗をや

ぶるとみえたり、此の日本国も

しかるべきか、答えて云く月支・戸那

には外道あり

小乗あり此の日本国には外道なし小乗の者なし、

紀典博士等これあれども仏法の敵となるものこれなし、小乗の三

宗これあれども彼宗を用て生死をはなれんと・をもはず但大乘を

心うる才覚

さいかく

心うる才覚

心うる才覚

とをもちり、但し此の国には大乘の五宗のみこれあり人人皆をも
えらく彼の宗宗にして生死をはなるべしとをもう故にあらそいも多
くできたり、又檀那の歸依も多くあるゆへに利養の心もふかし。
第四に行者・仏法を弘むる用心を明さば、夫れ仏法をひろめん
とをもちはんものは必ず五義を存して正法をひろむべし、五義とは
一には教・二には機・三には時・四には国・五には仏法流布の前後な
り、第一に教とは如来一代五十年

の説教は大小・権実・顕密の差別あり、華嚴宗には五教を立て一代
 を・をさめ其の中には華嚴・法華を最勝とし華嚴・法華の中に
 華嚴経を以て第一とす、南三・北七並に華嚴宗の祖師日本国の東寺
 の弘法大師・此の義なり、法相宗は三時に一代を・をさめ其の中に
 深密法華経を一代の聖教にすぐれたりとす、深密・法華の中
 法華経は了義経
 の中の不了義経・深密経は了義経の中の了義経なり、三論宗に又
 二蔵・三時を立て三時の中の第三中道教とは般若・法華なり、般若
 ・法華の中には般若最第一なり、真言宗には日本国に一の流あり
 東寺流は弘法大師十住心を立て第八法華・第九華嚴・第十真言・
 法華経は大日経に劣るのみならず猶華嚴経に下るなり、天台の
 真言は慈覚大師等大日経と法華経とは広略の異法華経は理秘密・
 大日経は事理俱密なり、浄土宗には聖道・浄土・難行・易行・

雑行・正行を立てたり浄土の三部経より外の法華経等の一切経
は難行・聖道・雑行なり、禪宗には二の流あり一流は一切経・
一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・
如来の口輪の方便なり禪師は如来の意密
言説にをよばず教外の別伝なり、俱舍宗・成実宗・律宗は小乗宗
なり天竺・震旦には小乗宗の者大乘を破する事これ多し日本国に
は其の義なし。
問うて云く諸宗の異義区なり一一に其の謂れありて得道をなる
べきか又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか、答えて
云く異論相違ありといえども皆得道なるか、仏の滅後四百年にあ
たりて健駄羅国の迦式色迦王・仏法を貴み一夏・僧を供し仏法をと
いしに一一の僧・異義多し此の王不審して云く仏説は定て一ならん
と終に

脇尊者きょうそんじやに問うもんう、尊者そんじや答て云くいわ金杖こんじょうを折つて種種しゅじゆの物につくるに形は別なれども金杖こんじょうは一なり形かたちの異なるをば争うあらしといへども金こがねたる事をあらそはず、門門ふどう不同なればいりかどをば争えども入理は一なり等と云云、又求那跋摩くなばつまいわ云く諸論しよろん各異端いたんなれども修行しゆぎやうの理は二無し偏執へんしゆに是非ぜひ有りとも達者は違争いじやう無し等と云云、又五百羅漢らかんの真因各異ことなれども同く聖理をえたり、大論だいろんの四悉檀ししつたんの中の対治悉檀たいじしつたん・撰論じようろんの四意趣いしゆの中の衆生しゆじやう意樂意趣いぎやういしゆ・此等これらは此の善を嫌きらい

此の善をほむ、檀戒進等一一にそしり一一にほむる皆得道をなる、
此等を以てこれを思うに護法・清弁のあらそい智光・戒賢の空中・
南三・北七の頓漸不定・一時・二時・三時・四時・五時・四宗・五宗・
六宗・天台の五時・華嚴の五教・真言教の東寺・天台の諍・浄土宗
の聖道・浄土・禅宗の教外・教内、入門は差別せりということとも実理
に入る事は但一なるべきか。

難じて云く華嚴の五教・法相・三論の三時・禅宗の教外・浄土宗
の難行・易行・南三・北七の五時等・門はことなりといへども入理・
一にして皆仏意に叶い謗法とならずといはば謗法という事あるべか
らざるか謗法とは法に背くという事なり法に背くと申すは小乗は
小乗經に背き大乘は大乘經に背く法に背かばあに謗法となら
ざらん謗法とならばなんぞ苦果をまねかざらん、此の道理にそむ
くこれひとつ、大般若經に云く「般若を謗ずる者は十方の大

あびじごく 阿鼻地獄に墮つべし、法華經に云く、「若し人信ぜずして乃至其の人
 みようじゆう 命終して阿鼻獄に入らんと涅槃經に云く、「世に難治の病三あり
 一には四重・二には五逆・三には謗大乘なり」此等の經文あにむな
 しかるべき、此等は証文なり、されば無垢論師・大慢婆羅門・熙連
 ぜん すうりようほつし 禪師・嵩靈法師等は正法を謗じて現身に大阿鼻地獄に墮ち舌口中
 ただ 爛れた
 げんしやう りこれは現証なり、天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘經を
 てんじんぼさつ はしき、後に無著菩薩に対して此の罪を懺悔せんがために舌を切ら
 むちやくぼさつ んとくしい給いき、謗法もし罪とならずんばいかんが干部の論師懺悔
 ほうほう つみ せんだい をいたすべき、闡提とは天竺の語此には不信と 翻す不信とは
 てんじく ことばこい ふしん ひるがえり 一切衆生悉有仏性を信ぜざるは闡提の人と見へたり。
 いっさいしゆじゆうしつうぶつしやう 不信とは謗法の者なり恒河の七種の衆生の第一は一闡提・謗法
 ふしん ほつほう 常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法ををそ
 ほつほう 常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法ををそ
 だいきく 常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法ををそ
 ほつほう 常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法ををそ

れざらん、答えて云く謗法とは只由なく仏法を謗ずるを謗法とい
うか我が宗をたてんがために余法を謗ずるは謗法にあらざるか、
撰論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは仮令人ありて一生の間、
一善をも修せず但

悪を作る者あり而るに小縁にあいて何れの善にてもあれ一善を
修せんと申す。これは随喜讚歎すべし、又善人あり

一生の間ただ一善を修す而るを他の善えうつさんがためにそのぜ
 んをそしる、一事の中に於て或は呵し或は讚すといふこれなり、
 大論の四悉檀の中の対治悉檀又これをなじ、浄名經の彈呵と
 申すは阿含經の時ほめし法をそしるなり、此等を以てをもふに或
 は衆生多く小乗の機あれば大乘を謗りて小乗經に信心をまし
 或は衆生多く大乘の機なれば小乗をそしりて大乘經に信心をあつくす、或は
 衆生・弥陀仏に縁あれば諸仏をそしりて弥陀に信心をまさしめ、
 或は衆生多く地藏に縁あれば諸菩薩をそしりて地藏をほむ、或
 は衆生多く華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經をほむ、或
 は衆生・大般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經をほむ、
 或は衆生・法華經・或は衆生・
 大日經等同く心うべし、機を見て或は讚め或は毀る共に謗法と

ならず而るを機をしらざる者みだりに、或は讚め、或は皆るは謗法
となるべきか、例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・淨土等の
諸師の諸經をはして我が宗を立つるは謗法とならざるか。

難じて云く宗を立てんに諸經・諸宗を破し仏・菩薩を讚むるに仏

菩薩を破し他の善根を修せしめんがために、この善根をはする、く

るしからずば阿含等の諸の小乘經に華嚴經等の諸大乘經をは

したる文ありや、華嚴經に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる

文これありや、答えて云く阿含・小乘經に諸大乘經をはしたる

文はなけれども

華嚴經には二乘大乘・一乘をあげて二乘大乘をはし涅槃經には諸

大乘經をあげて涅槃經に対してこれをはす、密嚴經には一切經中

王ととき無量義經には四十余年・未顕眞実ととかれ阿彌陀經には

念仏に対して諸經を小善根ととかる、これらの例一にあらず故に

又彼の經經きんぎょう による人師にんし皆此の義を存せり、此等これらをもつて思うに宗を立つる

方は我が宗に対して諸經しよきやうを破るはくるしからざるか、難なんじて云く
華嚴經けこんきやうには小乘しやうじやう・大乘だいじやう・一乘いちじやうとあげ密嚴經みつこんきやうには一切經いっさいきやう中王と
かれ涅槃經ねはんきやうには是諸大乘しよだいじやうとあげ阿彌陀經あみだには念仏ねんぶつに対して諸經しよきやうを
小善根ぜんこんとはとかれたれども無量義經むりやうぎきやうのごとく四十余年よんじゅうよねんと年限ねんげんを指
して其その間の大部たいぶの諸經しよきやう・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにか・華嚴等けこんの名をよびあげ
て勝劣しやうりやくを

とける事これなし、涅槃經の是諸大乘の文計りこそ雙林最後の經
として是諸大乘ととかれたれば涅槃經には一切經は嫌はるか
をばうれども是諸大乘經と挙げて次ぎ下に諸大乘經を列ねたる
に十二部・修多羅・方等・般若等とあげたり無量義經・法華經をば
載せず、但し無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含・方等
般若・華嚴經をあげたり、いまだ法華經・涅槃經の勝劣はみへず
密嚴に一切經中王とはあげたれども一切經をあぐる中に華嚴
勝鬘しやうまん

等の諸經の名をあげて一切經中王ととく故に法華經等とはみへず、
阿彌陀經の小善根は時節もなし善根の相貌もみへず、たれかする
小乘經を小善根というか又人天の善根を小善根というか又觀經
・雙觀經の所説の諸善を小善根というか
小善根ぜんこんというとはきこえず。

又大日經・六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも一代の一切経を嫌

うてその経をほめたる文はなし、但し無量義経計りこそ前四十年

の諸経を嫌い法華経一経に限りて已説の四十余年・今説の

無量義経・当説の未来にとくべき涅槃経を嫌うて法華経計りをほめ

たり、釈迦如来・過去・現在・未来の三世の諸仏世にいで給いて各各

一切経を説き

給うにいづれの仏も法華経第一なり、例せば上郎・下郎不定なり

田舎にしては百姓・郎従等は侍を上郎といふ、洛陽にして源平等

已下を下郎といふ三家を上郎といふ、又主を王といはば百姓も宅

中の王なり地頭・領家等も又・村・郷・郡・国の王なりしかれども

大王にはあらず、小乗経には無為涅槃の理が王なり小乗の

戒定等に対して智慧

は王なり、諸大乘経には中道の理が王なり又華嚴経は円融相即

の王はんにやきよう・般若経は空理の王だいしつきよう・大集経は守護しゅご正法の王しよほう・薬師経は薬師やくし
によらい如来の別願べつがんを説く経の中の王だいにちきよう・雙觀経は阿弥陀仏あみだぶつの四十八願そつかんきようを説
 く経の中の王だいにちきよう・大日経は印真言しんごんを説く経の中の王いちだい・一切経いっさいきようの
 王にはあらず、法華経ほけきようは真諦しんたい・俗諦ぞくたい・空仮中印真言くうけちゆう・無為むいの理しんごん・十二
 大願いっさいしよきよう・四十八願いっさいしよきよう・一切諸経いっさいしよきようの所説しよせつの所詮しよせんの法門ほうもんの大王だいおうなり、これ教
 をしれる者しなり而るしかを善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくう・法蔵ほうぞう・澄觀ちよつかん・慈恩じおん・
 嘉祥かじよう・南三なんざん・北七ほくひち・曇鸞どんらん・道綽どうしゆく・善導ぜんどう・達磨たつま等の我しよりゆうが所立しよりゆうの依経えきようを
いちだいいいち一代第一いちだいいいちといえるは教をしらざる者ただなり、但し一切いっさい

の人師の中には天台智者大師一人教をしれる人なり、曇鸞・道綽等の聖道・浄土・難行・易行・正行・雜行は源と十住毘婆沙論に依る彼本論に難行の内に法華・真言等を入ると謂は僻案なり、論主の心と論の始中終をしらざる失あり慈恩が深密經の三時に一代ををさめたる事、又本經の三時に一切經の擐らざる事をしらざる失あり、法蔵・澄觀等が五教に一代ををさむる中に法華經・華嚴經を円教と立て又華嚴經は法華經に勝れたりとをもえるは所依の華嚴經に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小久成ありとをもひ華嚴よりも超過の法華經を我經に劣ると謂うは僻見なり、三論の嘉祥の二蔵等又法華經に般若經すぐれたりとをもう事は僻案なり、善無畏等が大日經は法華經に勝れたりといふ法華經の心をしらざるのみならず大日經をもしらざる者なり。

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く

ほうぼう じゅうちゅうげ
ほうぼう じおん かじょう ちゅうかん
ほうぼう
ほうぼう じしん ほうぼう
たし
ぜひ
にまされる経を劣と

をもうてこれをはす・これは悪能破なり、又現にをとれるをはす・
これ善能破なり、但し脇尊者の金杖の譬は小乗経は多しといえ
ども同じ苦空・無常・無我の理なり、諸人同く此の義を存じて十
はちぶ 八部・二十部相ひ諍論あれども但門の諍にて理の諍にはあらず
ゆえ 故に共に謗法とならず、外道が小乗経を破するは外道の理は
じゅうじゅうり 常住なり小乗経の理は無常なり空なり故に外道が小乗経を
はするは謗法となる、大乘経の理は中道なり小乗経は空なり
じゅうじゅうり 小乗経の者が大乘経をはするは謗法となる大乘経の者が

しやうじやうきやう

小乗経を・はするは破法とならず、諸大乘経の中の理は未開会

の理いまだ記小久成これなし法華経の理は開会の理・記小久成これ

あり、諸大乘経の者が法華経を・はするは謗法となるべし法華経

の者の諸大乘経を謗するは謗法となるべからず、大日経・

真言宗は未開会・記小久成なくば法華経已前なり開会・記小久成

を許さば涅槃経とをなじ、但し善無畏三蔵・金剛智・不空・一行等

の性悪の法門・一念三千の法門は天台智者の法門をぬすめるか、

若し爾らば善無畏等の謗法は似破か又雑謗法か五百羅漢の真因は

小乗 十二因縁の事なり無明行等を縁として空理に入ると見へた

り、門は諍えども謗法とならず撰論の四意趣・大論の四悉檀等は

無著菩薩・竜樹菩薩滅後の論師として法華経を以て一切経の心を

えて四悉四意趣等を用いて爾前の経経の意を判ずるなり未開会

の四意趣・四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を同ぜば、あに謗法にあ

らずや此等をよくよくしるは教をしれる者なり、四句あり一に
信而不解・二に解而不信・三に亦信亦解・四に非信・非解、問うて
云く信而不解の者は謗法なるか答えて云く法華經に云く「信を以つ
て入ることを得」等と云云、涅槃經の九に云く難じて云く涅槃經
三十六に云く我契經の中に於て説く二種の人有り仏法僧を謗す
と、一には不信にして瞋恚の心あるが故に二には信ずと雖も義を
解せざるが故に善男子若し人信心あつて智慧有ること無き是の人
は則ち能く無明を増長す若し智慧有つて信心あること無き是の人
は則ち能く邪見を増長す善男子・不信の人は瞋恚の心あるが故に
説いて仏法僧宝有ること無しと言わん、信者は慧無く顛倒して義を
解するが故に法を聞く者をして仏法僧を謗せしむ等と云云、
此の二人の中には信じて解せざる者を謗法と説く如何、答えて云く
此の信而不解の者は涅槃經の三十六に恒河の七種の衆生の第二の

者を説くなり、此の第二の者は涅槃經の一切衆生悉有仏性の説を聞いて之を信ずと雖も又不信の者なり。

問うて云く如何ぞ信ずと雖も不信なるや、答えて云く一切衆生悉有仏性の説を聞きて之を信ずと雖も又心を爾前の經に寄する一類の衆生をば無仏性の者と云うなり此れ信而不信の者なり問うて云く証文如何、答えて云く恒河第二の衆生を説いて云く經に云く「是くの如き大涅槃經を聞くことを得て信心を生ず是を名けて出と為す」と又云く「仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ずしも一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」文此の文の如くんば口には涅槃を信ずと雖も心に爾前の義を存する者なり又此の第二の人を説いて云く「信ずる者に

して慧なく無てんどうく顛倒して義を解するが故に「等と云云、顛倒解義とは
実經の文を得て權經の義を覺る者なり。

問うて云く信而不解得道の文如何、答えて云く涅槃經の三十二
に云く「是れ菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば已に
摂尽す」文九に云く「此の經を聞き已つて悉く皆菩提の因縁と作る
法声光明毛孔に入る者は必定して当に阿耨多羅三藐三菩提を
得べし」等と云云、法華經に云く「信を以て入ることを得」等と云
云、問うて云く解而不信の者は如何、答う恒河の第一の者なり、問
うて云く証文如何、答えて云く涅槃經の三十六に第一を説て
云く「人有りて是の大涅槃經の如来常住無有變易常樂我淨を聞
くとも終に畢竟して於涅槃の一切衆生悉有仏性に入らざるは
一闡提の人なり方等經を謗し五逆罪を作り四重禁を犯すとも必
ず當に菩提の道を成ずることを得べし須陀の人・斯陀含の人・

阿那含の人・阿羅漢の人・辟支仏等必ず当に阿菩提を成ずることを得べし是の語を聞き已つて不信の心を生ず」と云云。

問うて云く此の文不信とは見えたり解而不信とは見えず如何、答えて云く第一の結文に云く「もし智慧有つて信心有ること無き是の人は則ち能く邪見を増長す」と文。

御作 461P

抑も希に人身をうけ適ま仏法をきけり、然るに法に浅深あり
 人に高下ありと云へり何なる法を修行してか速に仏になり候べき
 願くは其の道を聞かんと思ふ、答えて云く家家に尊勝あり国に
 高貴あり皆其の君を貴み其の親を崇むといへども豈國王にまさるべ
 きや、爰に知んぬ大小・権実は家家の諍ひなれども一代・聖教の中
 には法華独り勝れたり、是れ頓証菩提の指南・直至道場の車輪な
 り、疑つて云く人師は経論の心を得て釈を作る者なり然ら
 ば則ち宗宗の人師・面面・各各に教門をしつらい釈を作り義を立て
 証得菩提と志す何ぞ虚しかるべきや、然るに法華独り勝ると候

はば心せばくこそ覚え候へ、答えて云く法華独りいみじと申すが心

せばく候はば釈尊程心せばき人は世に候はじ何ぞ誤りの甚しき

や、且く一経・一流の釈を引いて其の迷をさとらせん、無量義経に

云く「種種に

法を説き種種に法を説くこと方便力を以てす四十余年未だ真実を

顯さず」云云、此の文を聞いて大莊嚴等の八万人の菩薩・一同に

「無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずる

ことを得ず」と領解し給へり、此の文の心は華嚴・阿含・方等・般若の

四十余年の経に付いていかに念仏を申し禅宗を持ちて仏道を願ひ

無量無辺・

不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも無上菩提を成ずる事を得じと云へ

り、しかのみならず方便品には「世尊は法久くして後要・当に真実

を説きたもうべし」ととき、又唯有一乘法・無二亦無三と説きて此

の経ばかりまことなりと云い、又二の巻には「唯我一人のみ能く
救護くごを為なす」と教へ「但ねが樂がいて大乗だいじょうきょうてん經典じんを受持じゆじして乃至ないしよきよう余經いちげの一偈いちげ
をも受け

ず」と説とき給たまへり、文の心はただわれ一人してよくすくひ・まもる
事をなす、法華ほけきよう經をうけたもたん事をねがひて余經よきようの一偈いちげをもう
けざれと見えたり、又云いわく「も若し人信ぜずして此の經を毀謗きぼつせば
則すなわち一切いっさいせけん世間のぶつしゆ仏種ぶつしゆを

断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、此の文の心
は若し人此の経を信ぜずして此の経にそむかば則ち一切世間の仏
のたねをたつものなり。その人は命をはらば無間地獄に入るべしと
説き給へり、此等の文をうけて天台は將非魔作仏の詞正く此の文
によれりと判じ給へり、唯人師の釈計りを憑みて仏説によらずば
何ぞ仏法
と云う名を付くべきや言語道断の次第なり、之に依つて智証大師は
經に大小なく理に偏円なしと云つて一切人によらば仏説無用なり
と釈し給へり、天台は「若し深く所以有り復修多羅と合せるをば
録して之を用ゆ無文無義は信受す可からず」と判じ給へり、又云く
「文証無きは悉く是れ邪の謂い」とも云へり、いかが心得べきや。
問うて云く人師の釈はさも候べし爾前の諸経に此の経第一とも
説き諸経の王とも宣べたり若し爾らば仏説なりとも用うべからず

候か如何いかに、答えて云くいわ設たい此この經こんぎょう第一だいいちとも諸經しよきょうの王おうとも申もうし候まなへ皆みな是これ權教こんぎょうなり其その語ごによるよるべからず、之こに依よつては「了義經りょうぎきょうによりて不ふり了りょう義經ぎきょうによらざれ」と説とき妙樂みょうらく大師だいしは「縦たい經き有りて諸經しよきょうの王おうと

云うとも已い今こん当とう説さい最さい為い第一だいいちと云とわざれば兼けん但たん對たい帶たい其その義ぎ知ちんぬ可べし」と釈しやくし給たまへり、此この釈しやくの心こころは設たひ經きありて諸經しよきょうの王おうとは云とうとも前に説ときつる經きにも後ごに説とかんずる經きにも此この經きはまされりと云とはずば方便ほうべんの經きとしれと云とう釈しやくなり、されば爾前にぜんの經きの習ならいとして今こん説せつく經きより後ごに又また經きを説とくべき由よしを云とはざるなり、唯ただ法華經ほけきょう計ばかりこそさいご最後の極説さいごなるが故ゆえに已い今こん當とうの中ちゆうに此この經き獨ひとり勝すぐれたりと説とかれ候まうへされば釈しやくには「唯ただ法華ほけに至いたつて前教ぜんきょうの意いを説といて今教こんきょうの意いを顯あらわす」と申もうして法華經ほけきょうにて如來にょらいの本意ほんいも教化きょうげの儀式ぎしも定さだりたりと見み

えたり、之に依つて天台は「如来成道四十余年未だ眞実を顕さず
法華始めて眞実を顕す」と云へり、此の文の心は如来世に出でさせ
給いて四十余年が間は眞実の法をば顕さず法華經に始めて仏にな
る実の道を顕し給へりと釈し給へり。

問うて云く已今当の中に法華經勝れたりと云う事はさも候べし、

但し有人師の云く四十余年未顕眞実と云うは法華經にて仏になる
声聞の爲なり爾前の得益の菩薩の爲には未顕眞実と云うべからず
と云う義をばいかが心得

候べきや、答えて云く法華經は二乗の為なり菩薩の為にあらざ、されば未顕眞実と云う事二乗に限る可しと云うは徳一大師の義か
此れは法相宗の人なり、此の事を伝教大師破し給うに「現在の
食者は偽章数巻を作りて、法を謗じ人を謗ず何ぞ地獄に墮せざら
んや」と破し給ひしかば徳一は其の語に責められて舌八にさけてう
せ給い
き、未顕眞実とは二乗の為なりと云はば最も理を得たり、其の故は
如来布教の元旨は元より二乗の為なり一代の化儀・三周の善巧・
併ら二乗を正意とし給へり、されば華嚴經には地獄の衆生は仏に
なるとも二乗は仏になるべからずと嫌い、方等には高峯に蓮の生ざ
るように二乗は仏の種をいりたりと云はれ、般若には五逆罪の者は
仏になるべし二乗は叶うべからずと捨てらる、かかるあさましき
捨者の仏になるを以て如来の本意とし法華經の規模とす、之に依つ

て天台の云く「華嚴大品も之を治すること能わず唯法華のみ有りて能く無学をして還つて善根を生じ仏道を成ずることを得せしむ所以に妙と称す、又闡提は心有り猶作仏す可し二乗は智を滅す心生ず可からず法華能く治す復稱して妙と為す」と云云、此の文の心は委く申すに及ばず誠に知んぬ華嚴・方等・大品等の法薬も二乗の重病をばいやさず又三悪道の罪人をも菩薩ぞと爾前の経にはゆるせども二乗をばゆるさず、之に依つて妙樂大師は「余趣を實に会すと諸経に或は有れども二乗は全く無し故に菩薩に合して二乗に対し難き

に従つて説く」と釈し給えり、しかのみならず二乗の作仏は一切衆生の成仏を顕すと天台は判じ給へり、修羅が大海を渡らんをば是れ難しとやせん、嬰兒の力士を投ん何ぞたやすしとせん、然らば

すなわ ぶつじょう

則ち仏性の種あるものは仏になるべしと爾前にも説けども未だ

しようじゆ

焦種の者作仏すべしとは説かず、かかる重病をたやすくいやす

はひとり法華の

りよやく

良薬なり、只須く汝仏にならんと思はば慢のはたほこをたをし

いか

忿りの杖をすてて偏に一乘に歸すべし、名聞名利は今生のかざり

がまん

我慢偏執は後生のほだしなり、嗚呼恥づべし恥づべし恐るべし恐る

べし。

問うて云く一を以て万を察する事なればあらあら法華のいわれ

を聞くに耳目始めて明かなり、但し法華経を

ば・いかように心得候てか速に菩提の岸に到るべきや、伝え聞く
いちねんさんぜん おおそら 一念三千の大虚には慧日くもる事なく一心三觀の広池には智水に
ごる事なき人こそ其の修行に堪えたる機にて候なれ、然るに南都
の修学に臂をくだく事なかりしかば瑜伽唯識にもくらし北嶺の学
文に眼をさらさざりしかば止觀玄義にも迷へり、天台・法相の両
宗はほとぎを蒙りて壁に向へるが如し、されば法華の機には既に
れて候にこそ何んがし候べき、答えて云く利智精進にして
觀法修行するのみ法華の機ぞと云つて無智の人を妨ぐるは当世の
がくしゃ 学者の所行なり是れ還つて愚癡邪見の至りなり、一切衆生 皆成
ぶつどう 仏道の教なれば上根・上機は觀念・觀法も然るべし下根・下機は唯
信心肝要なり、されば經には「淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者
は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き給へ
り、いかにも

信じて次の生の仏前ぶつぜんを期すこすべきなり、譬たとえば高き岸の下に人ありて登ることあたはざらんに又岸の上にに人ありて繩をおろして此の繩にとりつかば我れ岸の上にに引き登さんと云はんに引く人の力を疑うたがい繩の弱からん事をあやぶみて手を納おさめて是これをとらざらんが如ごとし争いかでか岸の上にに登る事をうべき、若もし其その詞ことばに随したがひて手をのべ是これをとらへば即すなわち登る事をうべし、唯我一人ゆいがいちにん・能為救護のういくこの仏の御力おんちからを疑うたがい以信得入いしんとくにゆうの法華經ほけきょうの教への繩をあやぶみて決定無有けつじょう疑うたがの妙法みょうほうを唱へ奉たてまつらざらんは力及およばず菩提ぼだいの岸にに登る事難なんかるべし、不信ふしんの者は墮だ在泥梨だざいないりの根元すなわなり、されば經あくとつには疑おを生じて信ぜざらん者すなわは則まち当まさに惡道あくどうに墮おつべしと説いかれたり、受けがたき人身じんしんをうけ値あいがたき仏法ぶつぽうにあひて争いかでか虚むなしくて候まべきぞ、同じく信を取とるならば又だい大小だいしやう・權實ごんじつのある中に諸仏しよぶつしゆつじやう出生ほんいの本意しゆじきうじにきうじぶつ・衆生成仏しゆじきうじにきうじぶつの直道じきだうの一乘いちじやうをこそ信まずべけれ、持もつ処ところの御經ごきやうの諸經しよきやうに勝すぐれてまし

ませば能く持つ人も亦諸人にまされり、爰を以て経に云く「能く
是の経を持つ者は一切衆生の中に於て亦為第一なり」と説き給へり
大聖の金言疑ひなし、然る
に人此の理をしらず見ずして名聞・狐疑・偏執を致せるは墮獄の
基なり、只願くは経を持ち名を十方の仏陀の願海に流し誉れを
三世の菩薩の慈天に施すべし、然れば法華経を持ち奉る人は天竜・
八部・諸大菩薩を以て我が眷属と

する者なり、しかのみならず因身の肉団に果満の仏眼を備へ有為の凡膚に無為の聖衣を著ぬれば三途に恐れなく八難に憚りなし、七方便の山の頂に登りて九法界の雲を払ひ無垢地の園に花開け法性の空に月明かならん、是人於仏道決定無有疑の文憑あり唯我一人能為救護の説疑ひなし、一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ五十展転

の随喜は八十年の布施に勝れたり、頓証菩提の教は遙に群典に秀で顕本遠寿の説は永く諸乘に絶えたり、爰を以て八歳の竜女は大海より来つて經力を刹那に示し本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顯す言語道断の經王心行所滅の妙法なり、然るに此の理をいるかせにして余經にひとしむるは謗法の至り大罪の至極なり、譬

を取るに物なし、仏の神変にても何ぞ是を説き尽きん菩薩の智力に

ても争いかか是これを量はかるべき、されば譬ひ喩ゆ品ほんに云いく、「若もし其その罪つみを説せかば劫きを窮きむとも尽つきず」と云いへり文ぶんの心こころは法ほ華け經きやうを一ひと度たびもそむける人の罪つみをば劫きを窮きむとも説とき尽がし難がしと見みえたり、然しかる間かん三さん世ぜの諸しよ仏ぶつの化け導どうにももれ恒こ沙しゃの如に来よの法ほ門もんにも捨すてられ冥くらきより冥くらきに入いつ

て阿あ鼻び大だい城じやうの苦く患かん争いか免まれん誰たか心こころあらん人ひと・長ちやう劫きやうの悲ひみを恐おそれ

ざらんや、爰ここを以もて經きやうに云いく、「經きやうを讀と誦じゆし書しよ持じすること有あらん者ものを

見みて輕きやう賤せん憎そう嫉じつして結け恨こんを懷いだかん其その人ひと命みやう終じゆうして阿あ鼻び獄ごくに入いらん」

と云いふ、文ぶんの心こころは法ほ華け經きやうをよみたもたん者ものを見みてかろしめ・いやし

み・にくみ・そねみ・うらみをむすばん其その人ひとは命いのちをはりて阿あ鼻び大だい城じやう

に入いらん

と云いへり、大たい聖せいの金きん言げん誰たれか是これを恐おそれざらんや正しやう直じき捨しゃ方ほう便べんの明めい文ぶん豈あ

是これを疑うたがいいうべきや、然しかるに人ひと皆みな經きやう文ぶんに背そむき世こゝろ悉ことごとく法ほ理りに迷まよへり汝なんじ

何ぞ悪友なんあくゆうの教へしたがに随はんや、されば邪師じやしの法を信じ受くる者を名けて毒を飲む者なりと天台てんだいは釈しゃくし給たまへり汝能く是これを慎つつしむべし。是これを慎つつしむべし。

情じやうら世間せけんを見るに法をば貴とおとしと申せども其その人をば万人ばんにん是これをにくむなんじよよ悪む汝能く能く法の源みなもとに迷まよへり何いかにと云うに一切いっさいの草木そうもくは地より出生しゅっしゆせり、是これを以て思うに一切いっさいの仏法ぶつぽうも又人によりて弘ひろまるべし之よに依よつて天台てんだいは仏世なほすら猶人なほを以て法を躡まはず未代まっだいいづくんぞ法は貴けれども人は賤せんしと云はんやとこそ釈しゃくして御坐候おわしへされば持た

るる法だに第一だいいちならば持つ人随したがつて第一だいいちなるべし、然しからば則すなわち其その
人そしりを毀そるは其その法そしりを毀そるなり其その子そを賤すなわしむるは即すなわち其その親そを
賤そしむなり、爰こゝに知こゝんぬ当とう世せの人は詞ことばと心こゝろと総くわてあはず孝こゝろ経ぎやうを以もつ
て其その親そを打うつが如ごとし豈あに冥めいの照てい覧らん恥ちかしからざらんや地じ獄じやくの苦くるみ
恐おそるべし恐おそるべし慎つつしむべし慎つつしむべし、上じやう根こんに望のぞめても卑ひ下げすべから
ず下げ根こんを捨すてざるは本ほん懐かいなり、下げ根こんに望のぞめても慢まんまんまんまならざれ上じ根こん
ももるる事ことあり心こゝろをいたさざるが故ゆゑに凡おほそ其その里さとゆかし
けれども道みちたえ縁ゆかりなきには通とほふ心こゝろもをろそかに其その人ひと恋こしけれど
も憑たのめず契ちぎらぬには待まちつ思おももなをざりなるやうに彼かの月げ卿けい雲うん閣かくに
勝すぐれたる靈りやう山せん浄じやう土どの行いきやすきにも未いまだゆかず我が即そく是ぜ父ふの柔じやうな
の御ごすがた見み奉たてまつるべきをも未いまだ見み奉たてまつらず、是これ誠まことに袂たもとをくだし胸むね
をこがす歎なげきならざらんや、暮くれ行ゆく空そらの雲うんの色いろ・有あり明あけ方がたの月つきの光あかりまでも
心こゝろをもよほす思おもひなり、事ことにふれをりに付けても後こゝろ世うを心こゝろにかけ花はなの

春雪の朝も是を思ひ風さはぎ村雲まよふ夕にも忘るる

隙なかれ、出ずる息は入る息をまたず何なる時節ありてか毎自

作是念の悲願を忘れ何なる月日ありてか無一成仏の御経を持た

ざらん、昨日が今日になり去年の今年となる事も是れ期する処の

余命にはあらざるをや、総て

過ぎにし方をかぞへて年の積るをば知るといへども今行末にをいて

一日片時も誰か命の数に入るべき、臨終已に今にありとは知りな

がら我慢偏執・名聞利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は志

の程無下にかひなし、さこそは皆成仏道の御法とは云いながら此の

人争でか仏道にものうからざるべき、色なき人の袖にはそぞろに

月のやどる事かは、又命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功德

と説き給へり、若し是れ一念三念を期すと云はば平等大慧の本誓

頓教一乘皆成仏の法とは云はるべからず、流布の時は末世法滅

に及び機は五逆・謗法をも納めたり、
故に頓証菩提の心におきてられて狐疑執・著の邪見に身を任する
事なかれ、生涯幾くならず思へば一夜のかりの宿を忘れて幾くの
名利をか得ん、又得たりとも是れ夢の中の栄へ珍しからぬ楽みな
り、只先世の業因に任せて営むべし世間の無常をさとらん事は眼
に遮り耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみ

きく、露つゆとや消え煙とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三笠の雲と思ふべき春の花の風に随したがひ秋の紅葉もみじの時雨あめに染まる、是れ皆みなながらへぬ世の中のためしなれば法華經ほけきょうには「世皆牢固みなならざること水沫泡焰ほのおの如ごとし」とすすめたり「以何令衆生得入無上道」の御心のそこ順縁逆縁ぎやくえんの御ことのは已すでに本懐ほんかいなれば暫しばらくも持つ者も又

本意ほんいにかなぬ又本意ほんいに叶はば仏の恩を報ずるなり、悲母深重ひもじんじゆうの經文きょうもん心安ければ唯我一人の御苦みもかつかつやすみ給たまうらん、釈迦一仏の悦び給うのみならず諸仏出世の本懐ほんかいなれば十方三世の諸仏も悦び給うべし「我即歡喜・諸仏亦然」と説かれたれば仏悦び給うのみならず神も即ち随喜ずいきし給うなるべし、伝教大師是を講こうじ給たまいしか

ば八幡大菩薩は紫の袈裟けさを布施ふせし、空也上人是を読み給たまいしかば

まつお 松尾の大明神は寒風をふせがせ給う、されば「七難即滅」
ひちふくそくしやう 七福即生」と祈らんにも此の御経第一なり現世安穩と見えれば
たこくしんびつ なん じかいほんぎやく 難 自界叛逆の難の御祈 にも此の妙典に過ぎた
るはなし、令百由旬内無諸衰患と説かれたればなり。

然るに当世の御祈 はさかさまなり先代流布の権教なり未代
る 流布の最上真実の秘法にあらざるなり、譬えば去年の暦を用ゐ
からすをう 烏を鵜につかはんが如し是れ偏に権教の邪師を費んで未だ実教の
明師に値わせ給はざる故なり、惜いかな文武の不和があら玉何くに
おさ か納めけん、嬉しいかな釈尊出世の髻の中の明珠今度我身に得た
る事よ、十方諸仏の証 誠としてゐるがせならず、さこそは「一切
せけん 世間・多怨難信」と知りながら争か一分の疑 心を残して決定
無有 疑の仏にならざらんや、過去遠遠の苦みは徒らにのみこそ
うけこしか、などが暫く不変常住の妙因をうへざらん未来永永の

樂みはかつかつ心を養ふとしめてあながちに電光朝露の名利をば
貪るべからず、「三界無安・猶如火宅」は如来の教へ、「所以諸法・
如幻如化」は菩薩の詞なり、寂光の都ならずは何くも皆苦なるべ
し

本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき、願くは「現世安穩・後生
善処」の妙法を持つのみこそ只今生の名聞・後世の弄引なるべけれ
須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ他をも勸んのみこそ
今生人界の思出なるべき、

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 花押

六四 木絵二像開眼之事

文永元年 四十三歳

御作 468P

仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終り無見頂相
に至るまでの三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし
梵音声の一相は不可見無対色なれば書く可らず作る可らず、仏滅
後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に
非ず又心法かけたり、生身の仏と木画の二像を対するに天地雲泥
なり、何ぞ涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德
齊等なりといふや又大瓔珞経には木画の二像は生身の仏に

はをとれりととけり、木画の二像の仏の前に経を置けば三十二相
具足するなり、但心なければ三十二相を具すれども必ず仏にあら
ず人天も三十二相あるがゆへに、木絵の三十一相の前に五戒経を置
けば此の仏は輪王とひとし、十善論と云うを置けば帝釈とひとし、
出欲論と云うを置けば梵王とひとし全く仏にあらず、又木絵二像
の前

に阿含経を置けば声聞とひとし、方等般若の一時一会の共般若を
置けば縁覚とひとし、華嚴・方等般若の別円を置けば菩薩とひとし
全く仏に非らず、大日経・金剛頂経・蘇悉地経等の仏眼・大日の
印真言は名は仏眼・大日といへども其の義は仏眼・大日に非ず、例せ
ば仏も華嚴経は円仏には非ず名にはよらず三十一相の仏の前に
法華経を置き

たてまつれば必ず純円の仏なり云云、故に普賢経に法華経の仏を

説て云く、「仏の三種の身は方等より生ず」文、是の方等は方等部の
方等に非ず法華を方等といふなり、又云く、「此の大乗経は是れ
諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得る」等云云、
法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたち
とあらはし

ほんおんじょう

ぬれば顯形の二色となれるなり、滅せる梵音声かへつて形をあらは

して文字もんじと成つて衆生しゅじょうを利益りやくするなり、人の声を出いだすに二つあり、

一には自身じしんは存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす

是は随他意ずいたいの聲、自身じしんの思を声にあらはす事ありされば意が声と

あらはる意は心法・声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて

心を知る色法が心法を顯あらわすなり、色心不二しきしんふになるがゆへに而二とあ

らはれて仏の御意みいんあらはれて法華の文字もんじとなれり、

文字もんじ變じて又仏の御意みいんとなる、されば法華經をよませ給たまはむ人は

文字もんじと思食事おほしめすことなかれすなわち仏の御意みいんなり、故ゆえに天台の釈てんだいに云いわく

「請しやうを受けて説く時は只是ただこれ教の意を説く教の意は是れ仏意ぶつゐ、

即是そくこれ仏智ぶつちなり、仏智ぶつち至いたつて深し是故ゆえに三止四請さんしししやうす、此この如ごとき艱難かんなん

あり余經よきやうに比するに余經よきやうは則易やすし、文此ぶんの釈しやくの中に仏意ぶつゐと申もうすは色

法ををさへて

心法といふ釈なり、法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に
印すれば木絵二像の全体・生身の仏なり、草木成仏といへるは是な
り、故に天台は「一色一香無非中道」と云云、妙樂是をうけて釈に
「然るに亦俱に色香中道を許せども無情仏性は耳を惑わし心を
驚かす」云云、華嚴の澄觀が天台の一念三千をぬすみて華嚴にさ
しいれ法華・華嚴ともに一念三千なり、但し華嚴は頓頓・さきなれ
ば法華は漸頓のちなれば華嚴は根本さきをしぬれば法華は
枝葉等といふて我理をえたりとおもへる意・山の如し・然りと雖も
一念三千の肝心・草木成仏を知らざる事を妙樂のわらひ給へる事
なり、今の天台の学者等我一念三千を得たりと思ふ、然りと雖も
法華をもつて、或は華嚴に同じ、或は大日經に同ず其の義を論ずる
に澄觀の見を出でず善無畏不空に同ず、詮を以て之を謂わば今の
木絵二像を

真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして権仏なり権仏にも
非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木なり、又本の非情の
草木にも非ず魔なり鬼なり、真言師が邪義・印真言と成つて木絵二
像の意と成れるゆへに例せば人の思變じて石と成り俱留と黄夫石が
如し、法華を心得たる人・木絵二像を開眼供養せざれば家に主のな
きに盗人が入り人の死するに其の身に鬼神入るが如し、今真言を以
て日本の仏を供養すれば鬼入つて人の命をうばふ鬼をば

奪命者だつみょうしやといふ魔入まつて功德くどくをうばふ魔まをば奪功徳者くどくといふ、鬼おにをあ
がむるゆへに今生こんじやうには国くにをほろぼす魔まをたとむゆへに後生ごじやうには無間むげん
獄ごくに墮だす、人死にんしすれば魂たま去さり其その身に鬼神きじん入り替かつて子孫しそんを亡なぼ
す、餓鬼がきといふは我われをくらふといふ是これなり、智者ちしやあつて法華經ほけきやうを
讃歎さんたんして骨の魂たまとなせば死人しにんの身みは人身じんしん・心こころは法身ほっしん・生身得忍しやうしんとくにんとい
へる

ほうもんこれ
法門ほうもん是これなり、華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんにかの円えんをさとれる智者ちしやは死人しにんの骨こつを
じみじんとくにん
生身得忍しやうしんとくにんと成なす、涅槃經ねはんぎやうに身みは人身じんしんなりと雖いえども心こころは仏心ぶつしんに同おなずと
いへるは是これなり、生身得忍しやうしんとくにんの現証げんじやうは純陀じゆんだなり、法華ほっけを悟さとれる智者ちしや・
しこつ 死骨しこつを供養くやうせば生身即法身しやうしんそくほっしん・是これを即身そくしんといふ、さりぬる魂たまを取り
返かへして死骨しこつに入れて彼の魂たまを変かへて仏意ぶつゐと成なす成仏じやうぶつ是これなり、即身そくしん
の二字にじは色法じきほふ・成仏じやうぶつ
の二字にじは心法しにん・死人しにんの色心しきしんを変かへて無始むしの妙境みやうぢ・妙智みやうちと成なす是れ

すなわ 則ち即身成仏なり、故に法華經に云く「所謂諸法如是相死人の身
如性同く心如是体同く色心等云云、又云く「深く罪福の相に達して
く十方を照したまう微妙の淨き法身・相を具せること三十二」
等云云、上の二句は生身得忍・下の二句は即身成仏・即身成仏の
手本は竜女是なり生身得忍の手本は純陀是なり。

六五

女人成仏抄

文永二年四十四歳御作

470P

提婆品に云く「仏告諸比丘未来世中乃至蓮華化生」等云云、此の
提婆品に二箇の諫曉あり所謂達多の弘經釈尊の成道を明し又
文殊の通經・竜女の作仏を説く、されば此の品を長安宮に一品切

り留^{とど}めて二十七品を世に流布^{るふ}する間・秦の代より梁の代に至^{いた}るまで
七代の間の王は二十七品の経を講読す、其^その後満法師^{ほっし}と云^いいし人・
此の品法華^{ほけきよう}経になき由^{よし}を讀み出^{いだ}され候いて後・長安城より尋^{たず}ね出し
今は二十八品にて弘^{ひろ}まらせ給^{たま}う、さて此の品に淨心^{じょうしん}信敬の人

の事を云うに一には三悪道に墮せず二には十方の仏前に生ぜん
三には所生の処には常に此の経を聞かん四には若し人天の中に生
ぜば勝妙の樂を受けん五には若し仏前に在らば蓮華より化生せん
となり、然るに一切衆生は法性真如の都を迷い出でて妄想顛倒の
里に入りしより已来身口意の三業になすところ善根は少く悪業は
多し、されば経文には一人一日の中に八億四千念あり念念の中に
作す所皆是れ三途の業なり等云云、我等衆生三界二十五有
のちまたに輪回せし事鳥の林に移るが如く死しては生じ生じては
死し車の場に回るが如く始め終りもなく死し生ずる悪業深重の
衆生なり、爰を以て心地観経に云く「有情輪回して六道に生ずる
こと猶車輪の始終無きが如く、或は父母と為り男女と為り生生世世
互いに恩有り」等云云、法華経二の卷に云く「三界は安きこと無し猶
火宅の如く衆苦充滿せり」云云、涅槃経二十一に云く「菩薩摩訶薩

諸の衆生を觀ずるに色香味觸の因縁の爲の故に昔無量無数劫より
以來常に苦惱を受く、一一の衆生一劫の中に積る所の身の骨は
王舎城の毘富羅山の如く飲む所の
乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く
父母・兄弟・妻子・眷屬の命終に涕泣して出す所の目淚は四大海の
水より多し、地の草木を尽くして四寸の籌と爲して以て父母を数
うるに亦尽くすこと能わじ、無量劫より已來或地獄・畜生・餓鬼
に在つて受くる所の行苦稱計す可からず亦一切衆生の骸骨をや
云云、是くの如くいたづらに命を捨るところの骸骨は毘富羅山より
も多し恩愛あはれみの淚は四大海の水よりも多けれども佛法の
爲には一骨をもなげず、一句一偈を聽聞して一滴の淚をもおと
さぬゆへに三界の籠樊を出でずして二十五
有のちまたに流轉する衆生にて候なり、然る間如何として三界を

離るべきと申すに仏法修行の功力に依つて無明のやみはれて法性
眞如の覺を開くべく候、さては仏法は何なるをか修行して生死を
離るべきぞと申すに但一乗・妙法にて有るべく候、されば慧心僧都
・七箇日・加茂に参籠して出離生死は何なる教にてか候べきと祈請
申され候いしに明神御託宣に云く「釈迦の説教は一乗に留まり
諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の得道

は此の經に在り云云、普賢經に云く、「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する種なり云云、此の經より外はすべて成仏の期有るべからず候上殊更女人成仏の事は此の經より外は更にゆるされず、結句爾前の經にてはをびただしく嫌はれたり、されば華嚴經に云く、「女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」云云、銀色女經に云く、「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無し」云云、或は又女人には五障三従の罪深しと申す、其れは内典には五障を明し外典には三従を教えたり、其の三従とは少くしては父母に従ひ盛にしては夫に従ひ老いては子に従ふ一期身を心に任せず、されば栄啓期が三樂を歌ひし中にも女人と生れざるを以て一樂とす、天台大師云く、「他經には但菩薩に記して二乘に記せず但男に記して女に記せず」とて全

余経には女人の授記これなしと釈せり、其上釈迦・多宝の二仏
 塔中に並坐し給ひし時・文殊・妙法を弘めん為に海中に入り給ひ
 て・仏前に歸り参り給ひしかば宝浄世界の多宝仏の御弟子・智積
 菩薩は竜女成仏を難じて云く、「我釈迦如来を見たてまつれば
 無量劫に於て難行苦行し功を積み・徳を累ね・菩薩の道を求むること
 と未だ曾つて止息したまわず、三千大千世界を觀るに乃至芥子の
 如き許りも是れ菩薩の身命を捨てたもう処に非ざること有ること
 無し、衆生の為の故なり」等云云、所謂智積
 ・文殊・再三問答いたし給う間は八万の菩薩・万二千の声聞等何れ
 も耳をすまして御聴聞計りにて一口の御助言に及ばず、然るに
 智慧第一の舍利弗・文殊の事をば難ずる事なし多くの故を以て
 竜女を難ぜらる所以に女人は垢穢にして是れ法器に非ずと小乘
 権教の意を以て難ぜられ候いしかば文殊が竜女成仏の有無の

現証げんじょうは今・仏前ぶつぜんにして見え候みえこうべしと仰おほせられ候こういしに、案あんにたがはず八歳はつさいの竜女りゅうにょ蛇身じやしんをあらためずして仏前ぶつぜんに参詣さんけいし価直あたいさんぜんだいせんせかい
三千大千世界さんぜんだいせんせかいと説せつかれて候こう如意宝珠にょいほうじゆを仏ぶつに奉たてまつりしに、仏悦ぶつえつんで
是これを請取うけとり給たまいしかば此こゝの時とき智積菩薩ちしゃくぼさつも舍利弗しゃりほつも不審ふしんを開ひらき女人にょにん
成仏じょうぶつの路みちをふみわけ候こう、されば女人にょにん成仏じょうぶつの手本てほん是こゝより起おこつて候こう。
委細いさいは五の巻ごのまきの経文きやうもん之これを讀よむ可べく候こう、

伝教大師の秀句に云く「能化の竜女歴劫の行無く所化の衆生も
歴劫の行無し能化所化俱に歴劫無し妙法経力・即身成仏す」天台
の疏に云く「智積は別教に執して疑いを為し竜女は円を明して
疑いを釈く身子は三蔵の権を挾んで難ず竜女は一実を以て疑
いを除く」海竜王経に云く「竜女作仏し国土を光明国と号し名を
ば無垢証如来と号す」云云、法華已前の諸経の如きは縦い人中・
天上の女人なりといふとも成仏の思絶たるべし、然るに竜女・
畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして即身成仏せし事は
不思議なり、是を始として釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼
等・勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り・羅羅の母・
耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼道
の女人たる十羅刹女も成仏す、然れば尚殊に女性の御信仰あるべ
き御経にて候、抑此の経の一文一句を読み一字一点を書く尚

出離生死・証大菩提の因なり、然れば彼の字に結縁せし者・尚炎魔
の庁より帰され六十四字を書し人は其の父を天上へ送る、何に
況や阿鼻の依正は極聖の自心に処し地獄・天宮皆是れ果地の如来
なり、毘盧の身土は凡下の一念を逾ず遮那の覺体も衆生の迷妄を
出でず妙文は靈山浄土に増し六万九千の露点は紫磨金の輝光を
副え給うべし、殊に過去聖靈は御存生の時より御信心他に
異なる御事なりしかば今日講經の功力に依つて仏前に生を受け
仏果菩提の勝因に登り給うべし云云、南無妙法蓮華經、南無
妙法蓮華經。

六六

聖愚問答抄上

おろかもんどう
 ぶんえい
 上文永二年 四十四歳御作

474P

夫れ生を受けしより死を免れざる理りは賢き御門より卑き民に
 至るまで人ごとに是を知るといへども實に是を大事とし是を歎く者
 千万人に一人も有がたし、無常の現起するを見ては疎きをば恐れ
 親きをば歎くといへども先立つははかなく留るは、かしこきやうに
 思いて昨日は彼のわざ今日は此の事とて徒らに世間の五慾にほださ
 れて白駒のかけ過ぎやすく羊の歩み近づく事をしらずして空しく
 衣食の獄につながれ徒らに名利の穴にをち三途の旧里に帰り六道の
 ちまたに輪回せん事心有らん人誰か歎かざらん誰か悲しまざらん。
 嗚呼・老少不定は娑婆の習ひ会者定離は浮世のことはりなれば始

めて驚くべきにあらねども正嘉の初め世を早うせし人のありさま
を見るに或は幼き子をふりすて或は老いたる親を留めをき、いま
だ壮年の齡にて黄泉の旅に趣く心の中さこそ悲しかるらめ行くも
かなしみ留るもかなしむ、彼楚王が神女に伴いし情を一片の朝の
雲に残し

劉氏が仙客に値し思いを七世の後胤に慰む予か如き者底に縁つて
愁いを休めん、かかる山左のいやしき心なれば身には思のなかれか
しと云いけん人の古事さへ思い出でられて末の代のわすれがたみに
もとて難波のもしほ草をかきあつめ水くきのあとを形の如くしるし
をくなり。

悲しいかな痛しいかな我等無始より已来無明の酒に酔て六道・
四生に輪回して或時は焦熱大焦熱の炎にむせび或時は紅蓮・
大紅蓮の氷にとぢられ或時は餓鬼飢渴の悲みに値いて五百生の

間おんじき飲食の名をも聞かず、ある或時は畜生ちくしよつ・残害の苦みを受けて小さきはある大きなるに・のまれ短きは長きにまかる是これを残害の苦と云う、ある或時は修羅しゆら・鬪争とうじやうの苦をうけ、ある或時は人間にんげんに生れて八苦をうく生ある・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等なり、ある或時は

天上てんじよつ

に生れて五衰すいをうく、此こくの如ごとく三界さんがいの間を車輪くるまわのごとく回めぐり父子ふしの中にも親おやの親おやたる子この子こたる事ことをさとらず夫婦ふうふの会あ遇あるも会あ遇あたる事ことをしらず、迷まよへる事ことは羊目やぎめに等おなしく暗くらき事ことは狼眼ろうがんに同おなじ、我われを生なる母ははの由ゆ来らいをも

しらず生なを受けたる我われが身みも死しの終はりをしらず、嗚呼ああ受け難がたき人界にんがいの生なをうけ値あい難がたき如ごと来の聖教しようきように値あい奉たてまつる一ひと眼まなこの龜かめの浮木うきぎの穴あなにあへるがごとし、今度このたび若もし生な死しのきづなをきらず三界さんがいの籠ろう樊はんを出いでざらん事ことかなしかるべしかなしかるべし。

爰こゝにある或あるる智人ちじん来きりて示しして云いく汝なんじが歎なげく所しよ實じつに爾しかなり此この如ごとく無常むじようの事ことはりを思おもひ知しり善心ぜんしんを發おこす者ものは麟角りんかくよりも希まれなり、此この事ことはりを覺さとらずして悪心あくしんを發おこす者ものは牛毛うしげよりも多おほし、汝なんじ早はやく生な死しを離はなれ菩提心ぼだいしんを發おこさんと思おもはば吾われ最さい第一だいいちの法はふを知しれり志こころざしあらば汝なんじが為ために之これを説といて聞きかしめん、其その時とき愚人ぐんじん座ざより起たつて

たなごころ

掌を合せて云く我は日來外典を學し風月に心をよせていまだ

仏教と云う事を委細にしらず願くば上人。我が為に是を説き給へ

其の時上人の云く汝耳を伶倫が耳に寄せ目を離朱が眼にかつて

心をしづめて我が教をきけ汝が為に之を説かん夫れ仏教は八万の

聖教多けれども諸宗の父母たる事。戒律にはしかずされば天竺に

は世親馬鳴等の薩唐土には慧曠道宣と云いし人は是を重んず、我

が朝には人皇四十五代。聖武天皇の御宇に鑒真和尚此の宗と

天台宗と両宗を渡して東大寺の戒壇之を立つ爾しより已來当世に

至るまで崇重年旧り尊貴。日に新たなり、就中極樂寺の良觀

上人

は上一人より下万民に至るまで生身の如來と是を仰ぎ奉る彼の

行儀を見るに実に以て爾なり、飯嶋の津にて六浦の関米を取つては

諸国の道を作り七道に木戸をかまへて人別の錢を取つては諸河に橋

を渡す慈悲は如来に齊しく徳行は先達に越えたり、汝早く生死を
離れんと思はば五戒・二百五十戒を持ち慈悲をふかくして物の命を
殺さずして良観上人の如く道を作り橋を渡せ是れ第一の法なり、
汝持たんや否や。

愚人弥掌を合せて云く能く能く持ち奉らんと思ふ具に我が
為に是を説き給へ抑五戒・二百五十戒と云う事は我等未だ存知せ
ず委細に是を示し給へ智人云く汝は無下に愚かなり五戒・二百五
十戒と云う事をば孩児も是をしる然れども汝が為に之を説かん、
五戒とは一には不殺生戒二には不偷盜戒三には不妄語戒四には不
邪淫戒五には不飲酒戒是なり、二百五十戒の事は多き間之を略す、
其の時に愚人礼拝恭敬して云く我今日より深く此の法を持ち奉る
べし。

爰に予が年来の知音・或所に隱居せる居士一人あり予が愁歎を

訪とむらわんため為ために来れるが始はじめには往事むかし渺茫びようぼうとして夢ゆめに似にたる事ことをかたり
終ついには行末ゆきすえの冥冥めいめいとして弁わえ難がたき事ことを談だんず鬱うつを散ちし思しをのべて後あと
予よに問いうて云いく抑おさ人の世よに有ある誰たれか後生ごしょうを思しはざらん、貴き辺へん何いかな
る仏法ぶつぽうをか持たちて出離しゆつりをねがひ又また亡者もうじやの後世ごしょうをも訪とむらい給たまうや、予答よた
えて云いく一日いちにち・或あるる上人しょうにん来きつて我われが為ために五戒ごかい・二百五十戒にひゃくごじゅうごかいを授たまけ
給たまへり実まことに以もつて心肝しんかんにそみて貴とおと、我われ深こく良觀りょうかん上人しょうにんの如ごとく及およばぬ
身みにもわろき道みちを作り深こき河がには橋はしをわたさんと思おもへるなり、
其そのの時とき居士こじ示しして云いく汝なんじが道心どうしん貴とうときに似にて愚おろかなり、今談だんずる処ところ
の法はは浅あましき小乘しょうじやうの法はなり、されば仏ぶつは則すなち八種はつしゆの喩たとえを設たけ
文殊もんじゆは又また十七種じちしゆの差別さべつを
宣のべたり・或あるは螢火けいか日光にっこうの喩たとえを取り・或あるは水精すいしやう・瑠璃るりの喩たとえあり爰ここを
以もつて三國さんこくの人師にんしも其そのの破文はぶん一いつに非あらず、次つぎに行者ぎやうじやの尊重そんちやうの事こと必ず人
の敬よふに依よつて法はの貴たきにあらず・されば仏ぶつは依法えほう不依ふえ人と定め

給へり、我伝え聞く上古の持律の聖者の振舞は殺を言い収を言うに
は知浄の語有り行雲廻雪には死屍の想を作す而るに今の律僧の
振舞を見るに布絹・財宝をたくはへ利銭・借請を業とす教行既に
相違せり誰か是を信受せん、次に道を作り橋を渡す事還つて人の
歎きなり、飯嶋の津にて六浦の関米を取る諸人の歎き是れ多し
諸国七道の木戸。是も旅人のわづらい只此の事に在り眼前の事なり
汝見ざるや否や。

愚人色を作して云く汝が智分をもつて上人を謗し奉り其の法を
誹る事謂れ無し知つて云うか愚にして云うかおそろしおそろし、
其の時居士笑つて云く嗚呼おろかなりおろかなり彼の宗の僻見を
あらあら申すべし、抑教に

大小有り宗に権実を分かつて鹿苑施小の昔は化城の戸ぼそに導くといへども驚峯開顕の筵には其の得益更に之れ無し、其の時愚人茫然として居士に問うて云く文証・現証実に以て然なり・さて何なる法を持つてか生死を離れ速に成仏せんや、居士示して云く我れ在俗の身なれども深く仏道を修行して幼少より多くの人師の語を聞き粗経教をも聞き見るに末代我等が如くなる無悪不造のためには念仏往生の教にしくはなし、されば慧心の僧都は夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり」と云ひ法然上人は諸經の要文を集めて一向専修の念仏を弘め給ふ中にも弥陀の本願は諸仏超過の崇重なり始め無三悪趣の願より終り得三法忍の願に至るまでいづれも悲願目出けれども第十八の願殊に我等が為に殊勝なり、又十悪・五逆をもきらはず一念・多念をもえらばずされば上一人より下万民に至るまで此の宗をもてなし給う事他に異

なり又往生おつじやうの人それ幾いくばくぞや。

其そのときぐにんの時愚人いわの云く実あらに小を恥はじじて大を慕したひ浅あさきを去すてて深つくに就つくは

仏教ぶつぎやうの理りのみに非あらず世間せけんにも是これ法はなり我わが早く彼の宗しゆにうつらん

と思おもふ委細いさいに彼の旨むねを語かたり給たまへ彼の仏ぶつの悲願ひがんの中に五逆ごぎやく・十悪じゆうあくを

も簡えらばずと云いへる五逆ごぎやくとは何等なんらぞや十悪じゆうあくとは如何いかに、智人ちじんの云いく

五逆ごぎやくとは父を殺ころし母を殺ころし阿羅漢あらかんを殺ころし仏身ぶつしんの血ちを出だし和合僧わごうそうを

破やぶす是これを五逆ごぎやくと云いうなり、十悪じゆうあくとは身みに三・口に四・意いに三なり身

に三とは殺ころ・盜ぬす・婬いん・口くちに四とは妄語もうご・綺語きご・惡口あくくち・兩舌りやうぜつ・意いに三

とは貪とん・瞋じん・癡ち・是これを十悪じゆうあくと云いうなり、愚人ぐにん云いく我わが今いま解げしぬ今日きやうより

は他力たうりき往生おつじやうに憑たのみを懸かくべきなり、爰こゝに愚人ぐにん又また云いく以もつての外ほか盛さかんにい

みじき密宗みつしゆの行人ぎやうじんあり是こゝも予よが歎なげきを訪とむらわんが為ために來臨らいりんして始はじに

は狂言きやうげん綺語きごのことはりを示しし終つひには顯密けんみつ二宗にしゆの法門ほうもんを談だんして予よに問と

うて云いく抑おさ汝なんじは何いかなる仏法ぶつぽうをか修行しゆぎやうし何いかなる經論きやうろんをか読誦どくじゆし

奉るや、

予答えて云く我一日ある或る居士こじの教に依つて浄土じょうどの三部經さんぶきょうを読み
奉り西方極樂の教主きょうしゅに憑たのみを深く懸かくるなり、行者ぎょうじやの云く仏教ぶつぎょうに
二種にしゆ有り一には顕教けんきょう二には密教みつぎょうなり顕教けんきょうの極理ごくりは密教みつぎょうの初門じよもんに
も及およばずと云云、汝なんじが執心しゅうしんの法を聞けば釈迦しゃかの顕教けんきょうなり我が
所持しよじの法は大日だいにか覚王かくおうの秘法ひほうなり、實まことに三界さんがいの火宅くわたくを恐れ寂光じやくくわうの宝
台たいを願ねがはば須すべからけんきょう顕教けんきょう

を捨てて密教につくべし。

愚人驚いて云く我いまだ顕密二道と云う事を聞かず何なるを

顕教と云ひ何なるを密教と云へるや、行者の云く予は是れ頑愚に

して敢て賢を存ぜず然りと雖も今一二の文を挙げて汝が矇昧を挑

げん、顕教とは舍利弗等の請に依つて応身如来の説き給う諸教な

り密教とは自受法樂の為に法身大日如来の金剛薩を所化として

説き給う処の大日經等の三部なり、愚人の云く実に以て然なり先

非を・ひるがへして賢き教に付き奉らんと思ふなり。

又爰に萍のごとく諸州を回り蓬のごとく県県に転ずる非人の

それとも知らず来り門の柱に寄り立ちて含笑語る事なし、あやしみを

をなして是を問うに始めには云う事なし後に強て問を立つる時・彼

が云く月蒼蒼として風忙忙たりと、形質常に異に言語又通ぜず

其の至極を尋れば当世の禅法是なり、予彼の人の有様を見其の

言語を聞き

て仏道の良因を問う時、非人の云く修多羅の教は月をさす指・教網は是れ言語にとどこほる妄事なり我が心の本分におちつかんと出立法は其の名を禅と云うなり、愚人云く願くは我聞んと思ふ、非人の云く実に其の志深くば壁に向い坐禅して本心の月を澄ましめよ爰を以て西天には二十八祖系乱れず東土には六祖の相伝明白なり、汝是を悟らずして教網にかかる不便不便、是心即仏・即心是仏なれば此の身の外に更に何にか仏あらんや。

愚人此の語を聞いてつくづく諸法を觀じ閑かに義理を案じて云く仏教万差にして理非明らめ難し宜なるかな常啼は東に請い善財は南に求め薬王は臂を焼き樂法は皮を剥ぐ善知識実に値い難し、或は教内と談じ或は教外と云う此のことはりを思うに未だ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懐き人師を見る族は

薄氷うすらいの心を成せ

り、爰ここを以て金言きんげんには依法えほつ不依人ふえと定め又爪上土そうじょうの譬たとえあり若し

仏法ぶつぽうの真偽まがひをしる人にんあらば尋ねて師たすとすべし求めて崇そべし、夫れ

人界にんがいに生を受くるを天上てんじょうの糸いとにたとへぶつぽう仏法の視聴しきやうは浮木うきぎの穴あなの類たぐひ

せり、身を軽くして法を重おもんずべしと思おもうに依よつて衆山しゅうざんに攀よじ歎なげきに

引ひれて諸寺しよじを回まわる足あしに任まかせて一つの巖窟いんくつに至いたるに後のちには青山せいざん峨が峨がと

して松風

・常樂我淨を奏し前には碧水湯湯として岸うつ波・四徳波羅蜜を
響かす深谷に開敷せる花も中道実相の色を躡し広野に綻ぶる梅も
界如三千の薫を添ふ言語道断・心行所滅せり謂つ可し商山の
四皓の所居とも又知らず古仏経行の迹なるか、景雲朝に立ち靈光
夕べに現ず嗚呼心を以て計るべからず詞を以て宣ふべからず、予此
の砌に沈吟と

さまよひ彷徨とたちもとをり徙倚とたたずむ、此処に忽然として
一の聖人坐す其の行儀を拝すれば法華読誦の声深く心肝に染み
て閑の戸ほそを伺へば玄義の牀に臂をくだす、爰に聖人予が求法
の志を酌知て詞を和げ予に問うて云く汝なにに依つて此の
深山の窟に至れるや、予答えて云く生をかるくして法をおもくす
る者なり、聖人問て

云く其の行法如何、予答えて云く本より我は俗塵に交りて未だ出離

を弁わきまえず、適たま善知識ぜんちしきに値て始には律・次には念仏・真言並に禅
此等これらを聞くといへども未いまだ真偽まきまを弁えず、聖人しょうにん云く汝なんじが詞ことばを聞
くに実に以て然もつなり身しかをかるくして法をおもくするは先聖せんしやうの教へ
予が存ずるところなり、抑そもそも上は非想の雲の上、下は那落の底まで
も生を受けて

死をまぬかるる者やはある、然しかれば外典げてんのいやしきをしえにも朝あした
に紅顔有つて世路せじに誇るとも夕には白骨と為なつて郊原こうげんに朽ちぬと云
へり、雲上に交つて雲のびんづらあざやかに廻雪かいせつたもとをひるがへ
すとも其その樂みをおもへば夢の中の夢なり、山のふもと蓬よもぎがもと
はつゐの栖すみかなり玉の台うつな・錦にしきの帳とほりも後世ごしやうの道にはなにかせん、小野
の小町

・衣通そとありひめ姫が花の姿も無常むじやうの風に散り・攀はんかい・張良ちやうりやうが武芸に達せしも
獄卒ごくそつの杖をかなしむ、されば心ありし古人こじんの云いわくあはれなり鳥べの

ゆづけむり

山の夕煙をくる人とてとまるべきかは、末のつゆ本のしづくや世の中のをくれさきたつためしなるらん、先亡後滅の理り始めて驚くべきにあらず願ふても願ふべきは仏道求めても求むべきは経教なり、抑汝が云うところの法門をきけば、或は小乗・或は大乗・位の高下は且らく之を置く還つて悪道の業たるべし。

爰に愚人驚いて云く如来一代の聖教はいづれも衆生を利せんが為なり、始め七処・八会の筵より終り跋提河の儀式まで何れか釈尊の所説ならざる設ひ一分の勝劣をば判ずとも何ぞ悪道の因と云べきや、聖人云く如来一代の

聖教しんぎょうに権有り実有り大有り小有り又顯密二道相分ち其の品一けんみつにどうに
あらすべからそず、須だいとく其の大途を示して汝なんじが迷まよいを悟らしめん、夫それ三界さんがいの
教主きょうしゅ釈尊しゃくそんは十九歳にして伽耶城がやじょうを出て檀特山だんとくせんに籠りて難行なんぎょう苦行くぎょう
し三十成道じゅうどうの刻きざみに三惑頓さんなくとみに破はし無明むみょうの大夜爰こゝに明あかしかば須すべからく本願ほんがん
に任まかせて一乘いちじょう・妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを宣のぶべしといへども機縁きえん万差まんのさにして
其の機き仏乘ぶつじょうに堪たえず、然しかれば四十余年よんじゅうよねんに所被しよべきの機縁きえんを調ととへて後
八箇年はちかねんに至いたつて出世しゅつせの本懐ほんかいたる妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを説とき給たまへり、然しかれば仏
の御年ごねん七十二歳にして序分じよぶん・無量義經むりょうぎきょうに説とき定いめて云いわく「我先われきに
道場だうじょう菩提樹ぼだいじゆの下に端坐ぼんざすること六年じゅうろくねんにして阿耨多羅三藐三菩提あくとらさんみやくさんぼだいを
成じやうずることを得たり、仏眼ぶつげんを以もつて一切いっさいの諸法しよほうを觀せんずるに宣説せんぜつす
可べからず、所以ゆえんは何ん諸もろの
衆生しゆじやうの性慾ぶどう不同ふどうなるを知しれり性慾ぶどう不同ふどうなれば種種しゆじゆに法しゆじゆを説しゆじゆく種しゆじゆ種しゆじゆ
に法しゆじゆを説しゆじゆくこと方便ほうべんの力ちからを以もつてす四十余年よんじゅうよねんには未いまだ眞實しんじつを顯あらわさ

ず「文、此の文の意は仏の御年三十にして寂滅道場菩提樹の下に坐
して仏眼を以て一切衆生の心根を御覽ずるに衆生成仏の直道た
る法華經をば説くべからず、是を以て空拳を挙げて嬰兒をすかす
が如く様様のたばかりを以て四十余年が間ははまだ眞実を顕わさ
ずと年紀をさして青天に日輪の出で暗夜に満月のかかるが如く
説き定めさせ給へり、此の文を見て何ぞ同じ信心を以て仏の虚事と
説かるる法華已前の権教に執著して、
めずらしからぬ三界の故宅に歸るべきや、されば法華經の一の卷
方便品に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」文、此の文の意
は前四十二年の經經 汝が語るところの念仏・眞言・禪・律を正直
に捨てよとなり、此の文明白なる上重ねていましめて第二の卷
譬喩品に云く「但樂つて大乘經典を受持し乃至余經の一偈をも受
けざれ」文、此の文の意は年紀かれこれ煩はし所詮法華經より

自余じよの経きやうをば一偈いちげをも受うくべからずとなり、然しかるに八宗はつしゆの異義いぎ
蘭菊らんぎく

に道俗じゆうぞく形かたちを異ことにすれども一同いつどうに法華ほけきやう經きやうをば崇あがむる由よしを云いう、さ
れば此等ここれらの文ぶんをばいいかが弁わきまえへたる正直しやうじきに捨すてよと云いつて余經よきやうの
一偈いちげをも禁いましむるに或あるは念仏ねんぶつ・或あるは眞言しんごん・或あるは禪ぜん・或あるは律りつ・是これ余經よきやう
にあらずや、今いま此この妙法蓮華みよほうれんげきやう經きやうとは諸仏出世しよぶつしゆっせの本意ほんい・衆生しゆじやう成じやう仏ぶつの
直道じきどうなり、されば釈尊しやくそんは付屬ふぞくを宣のべ多宝たほうは証しやう明みやうを遂とげ諸佛しよぶつは
舌相げしやうを梵天ぼんでんに付つけて

皆かいぜんじつ是の眞實たまと宣たまべ給たまへり、此この經きやうは一字いちじも諸しよ仏ぶつの本懐ほんかい・一点いちてんも多生たじやうの

助すけなり一言いちごん一語いちごも虚妄こもうあるべからず此この經きやうの禁きんを用もちいざる者は

諸しよ仏ぶつの舌しやうをきり賢聖けんせいをあざむく人に非あらずや其その罪實つみに怖おそるべし、さ

れば二にの卷くわんに云いく「若もし人信じんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせば則すなわち一切いっさい

世間せけんの仏種ぶつしゆを断たず「文ぶん、此この文ぶんの意いは若人にやくにん此經しきやうの一偈いちげ・一句いっくをも背そむ

かん人は過去かこ・現在げんざい・未来みらい三世さんぜ十方じゆつぱうの仏ぶつを殺ころさん罪つみと定さだむ、經教きやうきやう

の鏡きやうをもつて当世とうせにあてみるに法華經ほけきやうをそむかぬ人は實まことに以もつて有あり

がたし、事ことの心こころを案あずるに不信ふしんの人ひと・尚なほ無間むげんを免まぬかれず況いはんやや念ねん仏ぶつの

祖師そし・法然ほうねん上人しやうにんは法華經ほけきやうをもつて念ねん仏ぶつに對たいして抛なげうてよと云いふ、五千ごせん

・七千しちせんの經教きやうきやうに何いれの処ところにか法華經ほけきやうを抛なげうてよと云いふ文ぶんありや、

三昧さんまい發得はつとくの行者ぎやうじや・

生身しんみだの彌陀みだ仏ぶつとあがむる善導ぜんどう和尚わじやう・五種ごしゆの雜行ざうぎやうを立てて法華經ほけきやうを

ば千中せんちゆう無む一いつとて千人せんじん持もちつとも一人ひとりも仏ぶつになるべからずと立てたり、

経文には若有聞法者無一不成仏と談じて此の経を聞けば十界の

依正

皆仏道を成ずと見えたり、爰を以て五逆の調達は天王如来

の記に予り非器五障の竜女も南方に頓覺成道を唱ふ況や復

の六即を立てて機を漏らす事なし、善導の言と法華經の文と実

に以て天地雲泥せり何れに付くべきや就中其の道理を思うに諸仏

衆經の怨敵聖僧衆人の讎敵なり、経文の如くならば争か無間

を免るべきや。

爰に愚人色を作して云く汝賤き身を以て恣に莠言を吐く悟つて

言うか迷つて言うか理非弁え難し、忝なくも善導和尚は弥陀善逝

の応化・或は勢至菩薩の化身と云へり、法然上人も亦然なり善導

の後身といへり、上古の先達たる上・行徳秀発し解了・底を極めたり

何ぞ悪道に墮ち給うと云うや、聖人云く汝が言然なり予も仰いで

信を取ること此くの如し但し仏法は強ちに人の貴賤には依るべから

ずただきよもん只經文を先きとすべし身の賤いやしきをもつて其その法を

軽うにんらくしよあくしんずる事なかれ、有人樂生うにんらくしよあくし惡死うにんらくしよあくし・有人樂死うにんらくしよあくし惡生うにんらくしよあくしの十二字を唱へし

毘あがめ摩あがめ大あがめ国の狐あがめは帝あがめ釈あがめの師あがめと崇あがめめられ諸あがめ行あがめ無あがめ常あがめ等あがめの十六字を談あがめぜし

鬼神あがめは雪山あがめ童子あがめに貴あがめまる是あがめれ必あがめず狐あがめと鬼神あがめとの貴あがめきあがめに非あがめずあがめ只あがめ法あがめ

を重あがめんずる故あがめなり、されば我あがめ等あがめが慈あがめ父あがめ・教あがめ主あがめ釈あがめ尊あがめ・雙あがめ林あがめ最あがめ後あがめの御あがめ

遺あがめ言あがめ・涅槃あがめ經あがめの第六あがめには依あがめ法あがめ不あがめ依あがめ人あがめとて普あがめ賢あがめ・文あがめ殊あがめ等あがめの等あがめ覺あがめ已あがめ還あがめの

大あがめ薩あがめ・法あがめ門あがめ

を説き給ふとも經文を手に把らずば用ゐざれとなり、天台大師の云く「修多羅と合する者は録して之を用いよ文無く義無きは信受すべからず」文、釈の意は經文に明ならんを用いよ文証無からんをば捨てよとなり、伝教大師の云く「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」文、前の釈と同意なり、竜樹菩薩の云く「修多羅白論に依つて修多羅黒論に依らざれ」と文、意は經の中にも法華已前の權教をすてて此の經につけよとなり、經文にも論文にも法華に対して諸余の經典を捨てよと云う事分明なり、然るに開元の録に挙る所の五千・七千の經卷に法華經を捨てよ乃至抛てよと嫌ふことも又雜行に撰して之を捨てよと云う經文も全く無し。されば慥の經文を勘へ出して善導・法然の無間の苦を救はるべし、今世の念仏の行者・俗男・俗女・經文に違するのみならず又師の教にも背けり、五種の雜行とて念仏申さん人のすつべき日記。

ぜんどう 善導の積之れ有り、其の雜行とは選択に云く「第一に読誦雜行と
かみ 是上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小乘・顯密の諸經
おゝい に於て受持・読・誦するを悉く読誦雜行と名く乃至第三に礼拝
ぞうぎよう 雜行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切諸余の仏菩薩等及
もろもろ 諸の世天に於て礼拝恭敬するを悉く礼拝雜行と名く、第四に
しやうみやうぞうぎよう 稱名 雜行とは上の弥陀の名号を稱するを除いて已外自余の
いっさいぶつぼさつ 一切仏菩薩等及諸の世天等の名号を稱するを悉く稱名 雜行と
なす 名く、第五に讚歎供養雜行とは上の弥陀を除いて已外一切諸余
の仏菩薩等及諸の世天等に於て讚歎し供養するを悉く讚歎供養
ぞうぎよう 雜行と名く」文。

此の積の意は第一の読誦雜行とは念仏申さん道俗男女読むべき
經あり読むまじき經ありと定めたり、読むまじき經は法華經・
仁王經・藥師經・大集經・般若心經・轉女成仏經・北斗壽命經こと

さらうち任せて諸人読まるる八巻の中の観音經此等の諸經を一句
一偈も読むならばたとひ念仏を志す行者なりとも雜行に撰せ
られて往生す可からず云云・予愚眼を以て世を見るに設ひ念仏
申す人なれども此の經經を読む人は多く師弟敵対して七逆罪と
なりぬ。

又第三の禮拜雜行とは念仏の行者は弥陀三尊より外は上に
挙ぐる所の諸仏菩薩・諸天善神を礼するを禮拜

雑行ぞうぎょうと名け又之これを禁しず、然しかるを日本にほんは神国しんこくとして伊奘諾伊奘册いざなぎいざまみの尊みこと・此の国を作り天照大神垂迹御坐てんしょうだいじんすいじゃくおわして御裳濯河みもすそかわの流れ久しくして今にたえず豈あに此の国に生を受けて此の邪義じゃぎを用もちゆべきや、又普天ふてんの下に生れて三光の恩を蒙いこむりながら誠に日月・星宿せいしゆくを破はする事尤も恐れ有り。

又第四の称名しやうめい 雑行ぞうぎょうとは念仏ねんぶつ申まうさん人は唱となうべき仏菩薩ぼつさつの名あり、唱となうべき仏菩薩ぼつさつの名とは弥陀三尊みださんそんのなごう、唱となうまじき仏菩薩ぼつさつのなごうとは釈迦しゃか・薬師やくし・大日等だいにちの諸仏しよぶつ、地蔵じぞう・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月星にちがつ、二所と三嶋と熊野と羽黒と天照大神てんしょうだいじんとはちまんだいぼさつ、これら八幡大菩薩はちまんたいぼさつと此等これらの名を一いっぺん遍となも唱となえん人は念仏ねんぶつを十じゅう万遍まん・百ひゃく万遍まん申まうしたりとも此の仏菩薩ぼつさつ・日月神等にちがつの名を唱となうる過とがに依よつて無間むげんにはおつとも往生おうじやうすべからずと云云、我世間せけんを見るに念仏ねんぶつを申まうす人も此等これらの諸仏菩薩しよぶつぼさつ・諸天善神しよてんぜんじんの名を唱となうる故ゆえに是れ又師の教しよに背そむけ

り。

第五の讚歎供養雜行とは念仏申さん人は供養すべき仏は弥陀
さんそん 三尊を供養せん外は上に挙ぐる所の仏菩薩・諸天善神に香華のすこ
しをも供養せん人は念仏の功は貴とけれども此の過に依つて雜行
に撰すと是をきらふ、然るに世を見るに社壇に詣でては幣帛を捧げ
堂舎に臨みては礼拝を致す是れ又師の教に背けり、汝若し不審な
らば選択を見よ其の文明白なり、又善導和尚の觀念法門經に云く
「酒肉五辛誓つて発願して手に捉らざれ口に喫まざれ
も 若し此の語に違せば即ち身口俱に悪瘡を著けん」と願ぜよ「文、此の
文の意は念仏申さん男女・尼法師は酒を飲まざれ魚鳥をも食わざ
れ其の外にらひる等の五つのからくくさき物を食わざれ是を持た
ざる念仏者は今生には悪瘡身に出で後生には無間に墮すべしと云
云、然るに念仏申す男女・尼法師此の誠をかへりみず恣に酒をのみ

魚鳥を食ふ事・剣を飲む譬にあらざや。

爰に愚人の云く誠にはれ此の法門を聞くに念仏の法門実に往生
すと雖も其の行儀修行し難し況や彼の憑む所の経論は皆以て權説
なり往生す可からざるの条分明なり、但真言を破する事は其の
謂れ無し夫れ大日経とは大日覚王の秘法なり大日如来より系も乱
れず善無畏・不空之を伝え弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、
尊高三十七尊・秘奥なるものなり然るに顕教の極理は尚密教の
初門にも及ばず爰を以て後唐院は法華尚及ばず況や自余の教をや
と釈し給へり此の事如何が心うべきや。

聖人示して云く予も始は大日に憑を懸けて密宗に志を寄す
然れども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり汝が云う所
の高野の大師は嵯峨天皇の御宇の人師なり、然るに皇帝より仏法
の浅深を判釈すべき由の宣旨を給いて十住心論十卷之を造る、

此の書こうはく広博なる間要を取つて三卷に之を縮め其の名を秘蔵宝鑰と
号す始異生牴羊心はじめいしょうていようしん

より終秘密莊嚴心に至るまで十に分別し、第八法華・第九華嚴・第
十真言と立てて法華は華嚴にも劣れば大日經には三重の劣と判じ
て此くの如きの乗乘は自乘に仏の名を得れども後に望めば戲論
と作ると書いて法華經を狂言綺語と云い釈尊をば無明に迷へる仏
と下せり、仍て伝法院建立せし弘法の弟子正覺房は法華經は
大日經のはきものとりだいにちきように及ばず・釈迦しやくか仏はだいにち大日如来の牛飼にも足
らずと書けり、汝心を静めて聞け一代五千・七千の經教・外典
三千余卷にも法華經は戲論三重の劣・華嚴經にも劣り釈尊は無明
に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも足らずと云う慥なる文あり
や、設たとひさる文有りと云うとも能く能く思案あるべきか。

經教は西天より東土にほす時・訳者の意樂に随つて經論の文

不定なり、さて後秦の羅什三蔵は我漢土の仏法を見るに多く梵本
に違せり我が訳する所の経若し誤りなくば我死して後・身は不浄な
れば焼くると云えども舌計り焼けざらんと常に説法し給いしに焼
き奉る時・御身は皆骨となるといへども御舌計りは青蓮華の上に
光明を放つて日輪を映奪し給いき有り難き事なり、さてこそ殊更・
彼の三蔵所訳の法華経は唐土にやすやすと弘まらせ給いしか、然れ
ば延暦寺の根本大師・諸宗を責め給いしには法華を訳する三蔵は
舌の焼げざる験あり汝等が依経は皆誤れりと破し給ふは是な
り、涅槃経にも我が仏法は他国へ移らん時誤り多かるべしと説き
給へば経文に設ひ法華経

はいたざら事・じやくそん 積尊をば無明に迷へる仏なりとありともごんきょう 権教・
じつきょう 大乘・だいじょう 小乘・しょうじょう 説時の前後・せつじ ぜんし 訳者能く能く尋ぬべし、やくしゃよ よ たず 所謂老子
実教・じつきょう 大乗・だいじょう 小乘・しょうじょう 説時の前後・せつじ ぜんし 訳者能く能く尋ぬべし、やくしゃよ よ たず 所謂老子
孔子は九思一言・三思一言・周公旦は食するに三度吐き沫するに
三度にぎる外典のあさき猶是くの如し況や内典の深義を習はん人
をや、其の上此の義・そ ぎょうろん 経論に迹形もなし人を毀り法を謗じては
悪道に墮つべしとは弘法大師の釈なり必ず地獄に墮んことあくどう お 疑い無
き者なり。
爰に愚人・こゝ ぐにん ぼうぜん 茫然とほれ忽然となげひて良久しうして云く此の大師
は内外の明鏡・ないげ めいきょう しゅうじん 衆人の導師たり德行世に勝れ名譽普く聞えて・ある 或
は唐土より三鉢を八万余里の海上をなぐるに即日本に至り・もろこし さんこ はちまん 或は
心經の旨をつづるに蘇生の族・しんきょう むね やから 途にイむ、然れば此の人ただ人に
あらず大聖権化の垂迹なり仰いで信を取らんにはしかじ、たいせいこんげ すいじやく ああ 聖人
云く予も始めは然なり但し仏道に入つて理非を勘へ見るに仏法の
いわ

邪正は必ず得通自在にはよらず是を以て仏は依法不依人と定め給へり前に示すが如し、彼の阿伽陀仙は恒河を片耳にただへて十二年・耆兔仙は一日の中に大海をすひほす張階は霧を吐き欒巴は雲を吐く然れども未だ仏法の是非を知らず因果の道理をも弁へず、異朝の法雲法師は講経勤修の砌に須臾に天華をふらせしかども妙楽大師は感応斯くの如きも猶理に称わずとていまだ仏法をばしらずと破し給う、夫れ此の法華経と申すは已今当の三説を嫌つて已前の経をば未顕真実と打破り肩を並ぶる経をば今説の文を以てせめ已後の経をば当説の文を以て破る実に三説第一の経なり、第四の巻に云く「薬王今汝に告ぐ我所説の經典而かも此の経の中に於て法華最第一なり」文、此の文の意は靈山会上に薬王菩薩と申せし菩薩に仏・告げて云く始・華嚴より終・涅槃経に至るまで無量無辺の経・恒河沙等の

かずおほし其の中には今の法華經最第一と説かれたり、然るを弘法
大師は一の字を三と読まれたり、同巻に云く「我仏道の為に無量の
土に於て始より今に至るまで広く諸經を説く而も其の中に於て此
の經第一なり」と、此の文の意は又釈尊無量の国土にして或は
名字を替え或は年紀を不同になし種種の形を現して説く所の
諸經の中には此の法華經を第一と定められたり、同き第五卷には
最在其上

と宣^{のへ}べて大日^{だいにちぎょう}經^{こう}・金剛^{こんごう}頂^{ちやう}等の無^{むりょう}量^{りやう}の經^{きやう}の頂^{いただき}に此^{こゝ}の經^{きやう}は有^あるべしと
説^{せつ}かれたるを弘^{こう}法^{ぼう}大師^{だいし}は最^{さい}在^{ざい}其^{その}下^げと謂^{おも}へり、釈^{しゃく}尊^{そん}と弘^{こう}法^{ぼう}と法^ほ華^{けきやう}經^{きやう}
と宝^{ほう}鑰^{やく}とは実^{じつ}に以^{もつ}て相^{そう}違^いせり釈^{しゃく}尊^{そん}を捨^{すて}奉^{たて}つて弘^{こう}法^{ぼう}に付^つくべきか、
又^{また}弘^{こう}法^{ぼう}を捨^{すて}て釈^{しゃく}尊^{そん}に付^つ奉^{たて}るべきか、又^{また}經^{きやう}文^{もん}に背^{そむ}いて人^{にん}師^しの言^{ごん}に
随^ずふべきか人^{にん}師^しの言^{ごん}を捨^{すて}て金^{きん}言^{げん}を仰^{あお}ぐべきか用^{よう}捨^{すて}・心^{こゝろ}に有^あるべし、
又^{また}第七^{だいなな}

の卷^{やく}薬^{やく}王^{おう}品^{ほん}に十^{じゅう}喻^ゆを挙^あげて教^{たう}を歎^{たん}ずるに第一^{だいいち}は水^{すい}の譬^{たと}なり江^{かう}河^かを
諸^{しよ}經^{きやう}に譬^{たと}へ大^{たい}海^{かい}を法^ほ華^けに譬^{たと}へたり、然^{しか}るを大^だ日^{にち}經^{きやう}は勝^{すぐ}れたり法^ほ華^け
は劣^{おと}れりと云^いう人^{ひと}は即^{そく}大^{たい}海^{かい}は小^{せう}河^かよりもすくなしと云^いわん人^{ひと}な
り、然^{しか}るに今^{いま}の世^よの人^{ひと}は海^{うみ}の諸^{しよ}河^かに勝^{まさ}る事^{こと}をば知^しるといへども
法^ほ華^け經^{きやう}の第一^{だいいち}なる事^{こと}をば弁^わ弁^まえず、第二^{だいに}は山^{さん}の譬^{たと}なり衆^{しゆ}山^{ざん}を諸^{しよ}經^{きやう}
に譬^{たと}へ須^{しゆ}弥^み山^{せん}を法^ほ華^けに譬^{たと}へたり須^{しゆ}弥^み山^{せん}は上^{じやう}下^げ十六^{じふ}万^{まん}八^{はち}千^{せん}由^ゆ旬^{じゆん}の山^{さん}な
り何^いれ^ずの山^{さん}か肩^{かた}を並^{なら}ぶべき法^ほ華^け經^{きやう}を大^だ日^{にち}經^{きやう}に劣^{おと}ると云^いう人^{ひと}は富^ふ士^し

山は須弥山しゅみせんより大なりと云わん人なり、第三は星月の譬たとえなり諸経しよきやうを星に譬たとへ法華経を月に譬たとえふ月と星とは何れ勝りたりと思へるや、
乃至次下には此の経も亦復是くの如し一切の如来の所説若しは
菩薩ぼさつの所説若しは声聞しやうもんの
所説諸の経法の中に最も為れ第一とて此の法華経は只釈尊一代ただしやくそんいちだい
の第一と説き給うのみにあらず大日及び薬師・阿弥陀等の諸仏しよぶつ・
普賢・文殊等の菩薩の一切の所説・諸経の中に此の法華経第一と説
けり、されば若し此の経に勝りたりと云う経有らば外道天魔の説げどうてんま
と知るべきなり、其上・大日如来と云うは久遠実成の教主釈尊きやうしゆしやくそん
・四十二年・和光同塵して其の機に應ずる時・三身即一の如来暫く
毘盧遮那と示せり、是の故に開顕実相の前には釈迦の応化と見えた
り、爰を以て普賢経には釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名け
其の仏の住処を常寂光と名くと説けり、今法華経は十界互具・

いちねんさんぜん さんたいそくぜ
一念三千・三諦即是・四土不二と談ず其の上に一代聖教の骨髓たる
にじょうさぶつ くおんじつじょう
二乗作仏・久遠実成は今經に限れり、汝語る所の大日經・
こんじつちまう
金剛頂等の三部の秘經に此等の大事ありや善無畏不空等此等の
だいじ ほうもん
大事の法門を盗み取つて己が經の眼目とせり本經・本論には迹形も
おおわく
なき誑惑なり急ぎ急ぎ是を改むべし。

そもそもだいにちきよつ
抑大日經とは四教含蔵して尽形寿戒等を明せり唐土の人師は
ほうとうぶ
天台所立の第三時方等部の經なりと定め

たる権教ごんきょうなりあさまし・あさまし、汝なんじ実に道心どうしんあらば急いで先非
を悔くゆべし夫それ以おもんみれば此この妙法蓮華經みょうほうれんげきょうは一代いちだいの觀門かんもんを一いち念ねんにすべ
十界じゅうがいの依正えしやうを三千さんぜんにつづめたり。

六六一二

聖愚問答抄下

しょうぐもんどうしやう

爰こゝに愚人ぐにん聊いか和あいで云いく經文きやうもんは明鏡めいきやうなり疑慮ぎりよをいたすに及およばず
但ただし法華經ほけきやうは三說さんせつに秀ひいで一代いちだいに超いちちゆるといへども言說ごんせつに拘かはらず
經文きやうもんに留とどまらざる我等われらが心こゝろの本分ほんぶんの禪ぜんの一法いちぽうにはしくべからず
凡およそ方法ほつぽうを弘ほつけんして言語ごんごの及およばざる処ところを禪法ぜんぽうとは名なけたり、され
ば跋提河ぱつたいがの辺へり沙羅林しゃらりんの下もとにして釈尊しゃくそん・金棺きんくわんより御足ごそくを出いし拈華ねんげ

微笑びしょうして此この法門ほうもんを迦葉かしょうに付属ふぞくありしより已来このかた・天竺てんじく二十八祖二十八祖・系みだ乱れず唐土もろこしには六祖しだい次第ぐつうに弘通くつうせり、達磨だるまは西天せいてんにしては

二十八祖とどこおの終とうとど・東土とうとどにしては六祖こくその始だいなり相伝そうてんをうしなはず教網しやうぼうに

滞とどこおるべからず、爰こゝをを以もつて大梵天王だいぼんてんのうもん問ぶつ仏決疑經けつぎきやうに云いわく「吾われに正法眼蔵しやうほうげんそう

の涅槃ねはん妙心みやうしん実相じつそう無相むそう微妙みみやうの法門ほうもん有り教外きやうげに別に云いう文字もんじを立てず

摩訶迦葉まかしょうに付属ふぞくす」とて迦葉かしょうに此この禅ぜんの一法いつぽうをば教外きやうげに伝つたふと見え

たり、都すべして修多羅しゆたらの經教きやうきやうは月つきをさす指さし・月つきを見て後ごは指何さしなにかはせ

ん心ほんぐんの本分ほんぶん禅ぜんの一理いつりを知しつて後ごは仏教ぶつぎやうに心こゝろを留とどむべしや、されば古こ

人の云いく十二部經じふにぶきやうは総こて是これ閑文字もんじと云いふ、

仍よつて此この宗そうの六祖ろくそ慧能えのの壇經だんきやうを披見ひけんするに実まことに以もつて然しかなり、言下ごんげ

に契会けいゑして後ごは教きやうは何なにかせん此この理り如何いかんが弁わえんや、聖人しやうにん示しして

云いく汝なんじ先まづ法門ほうもんを置おいて道理どうりを案あんぜよ、抑おさ我われ一いち代だいの大途だいたを伺うかわ

ず十宗じゅうそうの淵底えんていを究きめずして国くにを諫いさめ人を教しふべきか、汝なんじが談だんずる

所の禅は我最前になら習きわい極めて其の至極しごくを見るに甚はなはだだもつ以て僻事ひがごとなり、禅に三種あり所謂いわゆる如来禅にょらいと教禅と祖師そし禅となり、汝なんじが言う所の祖師そし禅等の一端これ之を示さん聞きいて其の旨むねを知れ若し教を

離れて之を伝うといわば教を離れて理なく理を離れて教無し理全
く教・教全く理と云う道理汝之を知らざるや拈華微笑して迦葉に
付属し給うと云うも是れ教なり不立文字と云う四字も即教なり
文字なり此の事・和漢兩國に事旧りぬ今いへば事新きに似たれど
も一両の文を勘えて汝が迷を払はしめん、補註十一に云く又復
若し言説に滞ると
謂わば且く娑婆世界には何を將つて仏事と為るや、禪徒豈言説を
もつて人に示さざらんや、文字を離れて解脱の義を談ずること無し
豈に聞かざらんや乃至次ぎ下に云く豈に達磨西来して直指人心・
見性成佛すと而るに華嚴等の諸大乘經に此の事無からんや、
嗚呼世人何ぞ其れ愚かなるや汝等当に仏の所説を信ずべし諸仏
如来は言虚妄無し、此の文の意は若し教文にとどこほり言説にかか
はるとて教の外に修行すといはば此の娑婆国にはさて如何がして

仏事善根を作すべき、さように云うところの禅人も人に教ゆる時は
言を以て云はざるべしや其の上仏道の

解了を云う時文字を離れて義なし、又達磨西より来つて直に人心

を指して仏なりと云う是程の理は華嚴・大集・大般若等の法華已前

の権大乘經にも在在處處に之を談ぜり是をいみじき事とせんは

無下に云いがひなき事なり嗚呼今世の人何ぞ甚ひがめるや只

中道実相の理に契当せる妙覺果満の如来誠諦の言を信すべきな

り又妙樂大師の弘決の一に此の理を釈して云く「世人・教を蔑に

して理觀を尚ぶは誤れるかな」と、此の文の意は今

の世の人人は觀心觀法を先として經教を尋ね学ばず還つて教をあ

なづり經をかるしむる是れ誤れりと云う文なり、

其の上当世の禅人・自宗に迷へり、続高僧伝を披見するに習禅の初

祖達磨大師の伝に云く教に藉つて宗を悟ると、如来一代の聖教の

道理どうりを習学しゅうがくし法門ほうもんの旨むね・宗宗そうそうの沙汰さたを知るべきなり、又達磨だるまの弟子でし・六祖りくその第二祖だいにそ慧可えかの伝でんに云いく達磨だるま禅师ぜんしん四卷しきんの楞伽りょうがを以もつて可えかに授けて云いく「我漢わがわんの地ちを觀みるに唯ただ此こゝの經きやうのみ有あり仁者にぢや依行いぎやうせば自みづから世よを度たする事ことを得えん」と、此こゝの文ぶんの意いは達磨だるま大師だいし天竺てんぢくより唐土たうどに來きつて四卷しきんの楞伽りょうが經きやうをもつて慧可えかに授けて云いく我わが此こゝの国こくを見るに是こゝの經殊きやうじゆに勝すぐれたり汝なんじ持ぢち修行しゆぎやうして仏ぶつに成なれとなり、此等こゝらの祖師そし既すでに經文きやうもんを前まへとす若もし之こゝに依よつて經きやうに

依ると云はば大乘か小乗か権教か実教か能く能く弁ふべし、
或は経を用いるには禅宗も楞伽經 首楞嚴經 金剛般若經等に
よる是れ皆法華已前の権教・覆蔵の説なり、只諸經に是心即仏・
即心是仏等の理の方を説ける一函の文と句とに迷いて大小・権実・
顕露・覆蔵をも尋ねず、只不二を立てて而二を知らず謂己均仏の
大慢を成せり、彼の月氏の大慢が迹をつぎ此の尸那の三階禅師が古
風を追う然りと雖も大慢は生ながら無間に入り三階は死して大蛇
と

成りぬ・をそろしをそろし、釈尊は三世了達の解了・朗かに妙覺
果満の智月潔くして未来を鑒みたまい像法決疑經に記して云く
「諸の悪比丘・或は禅を修する有つて經論に依らず自ら己見を
逐つて非を以て是と為し是邪是正と分別すること能わず
く道俗
に向つて是くの如き言を作さく我能く是を知り我能く是を見ると

ま
當に知るべし此の人は速かに我法を滅すと、此の文の意は諸
あくびく
惡比丘あつて禅を信仰して經論をも尋ねず邪見を本として法門の

是非

をば弁えずして而も男女・尼法師等に向つて我よく法門を知れり人

はしらずと云つて此の禅を弘むべし、當に知るべし此の人は我が

正法を滅すべしとなり、此の文をもつて当世を見るに宛も符契の

如し汝慎むべし汝畏るべし、先に談ずる所の天竺に二十八祖有つ

て此の法門を口伝すと云う事其の証拠何に出でたるや仏法を相伝

する人・二十四人・或は二十三人と見えたり、然るを二十八祖と立

つる事・所出の翻訳何にかある全く見えざるところなり、

此の付法蔵の人の事・私に書くべきにあらず如来の記文分明なり、

其の付法蔵伝に云く「復比丘有り名けて師子と曰う 寶国に於て

大に仏事を作す、時に彼の国王をば彌羅掘と名け邪見熾盛にして心

に敬信なく無くけいひんこく 賓国おひに於て塔寺を毀壞きえし衆僧しゆそうを殺害さつがいす、即ち利劍すなわりけんを
以て用いてもち師子ししを斬る頸の中血なく無くただ唯乳のみ流出いだす法を相付する
人おひ是に於て便すなわち絶えん、此の文の意は仏、我が入涅槃ねはんの後に我が法
を相伝そうてんする人、二十四人あるべし、其その中に最後さいご・弘通くつうの
人に当るをば師子しし比丘びくと云わん、賓国けいひんこくと云う国にて我が法を弘ひろ
むべし彼の国の王をば檀弥羅王たんみらと云うべし邪見じゃけん放逸ほういつにして仏法ぶつぽうを信
ぜず衆僧しゆそうを敬とうとうはず堂塔どうとうを破り失うしなひ劍をもつて諸僧しよそうの頸を切るべし
即師子比丘そくししびくの頸をきらん時

に頸の中に血無く只乳のみ出ずべし、是の時に仏法を相伝せん人絶
ゆべしと定められたり、案の如く仏の御言違わず師子尊者・頸をき
られ給う事實に以て爾なり、王のかいな共につれて落ち畢んぬ、二
十八祖を立つる事甚以て僻見なり禅の僻事はより興るなるべし、
今慧能が壇經に二十八祖を立つる事は達磨を高祖と定むる時師子
と達磨との年紀遥かなる間三人の禅師を私に作り入れて天竺より
来れる付法蔵系乱れずと云うて人に重んぜさせん
為の僻事なり此の事異朝にして事旧りぬ、補註の十一に云く「今家
は二十三祖を承用す豈有らんや、若し二十八祖を立つるは
未だ所出の翻訳を見ざるなり、近來更に石に刻み版に鏤め七仏二
十八祖を図状し各一偈を以て伝授相付すること有り嗚呼仮託何ぞ
其れ甚だしきや識者力有らば宜しく斯の弊を革むべし」是も二十
八祖を立て石にきざみ版にちりばめて伝うる事甚だ以て誤れ

り此の事を知る人あらば此の誤あやまりをあらためなをせとなり、祖師そし禪はなはだ甚ひがごとだ僻事ひがごとなる事是にあり先に引く所の大梵天王問仏決疑經だいぼんてんのうもんぶつけつぎきようの文を教外別伝の証拠しょうこに汝之なんじこれを引く既に自語相違じごそういせり、其の上此の經は説相權教せつそうこんきようなり又開元貞元かいげんじょうげんの再度の目錄にも全く載のせずこれろくがい録外の經なる上・權教こんきようと見えたり、然れば世間の學者せけんがくしゃ用ゐざる

とところなり証拠しょうことするにたらず。

抑そもそも今の法華經ほけきようを説かるる時・益をうる輩やから・迹門界如三千の時しゃくもんかいによさんぜん

・敗種ばいしゆの二乗にじよう・仏種ぶつしゆを萌きざす四十二年の間は永不成仏ようぶじようぶつと嫌きらはれて在在しよしよ処しゆうえの集会しゆいにして罵詈誶めりひぼうの音こえをのみ聞き人天大会にんてんたいえに思しいうとまれ

て既に飢え死ぬべかりし人人も今の經に來つて舍利弗しゃりほつは華光如来げこうにょらい・目連もくれんは多摩羅跋旃檀香如来たまらばせんたんこうにょらい・阿難あなんは山海慧自在通王さんかいえじざいつうおうぶつ・羅羅ららは

七宝華如来ほうげにょらい・

五百の羅漢らかんは普明如来ふみようにょらい・二千の声聞しやうもんは宝相如来ほうそうにょらいの記きにあずか予る・

けんぽんおんじゆ
顕本遠寿の日は微塵数の菩薩増道損生して位大覺に鄰る、されば
てんだいだいし
天台大師の釈を披見するに他経には菩薩は仏になると云つて二乗
とくどう
の得道は永く之れ無し、善人は仏になると云つて悪人の成仏を
ぜんにん
ぜんにん
あか
明さず男子は仏になると説いて女人は地獄の使と定む人天は仏に
にょにん
じしよく
なるると云つて畜類は仏になるといはず、然るを今の経は是等が皆仏
まっただいじよくせ
になるると説くたのもしきかな末代濁世に生を受くといへども提婆

が如くに五逆をも造らず三逆をも犯さず、而るに提婆猶天王如来の記を得たり況や犯さざる我等が身をや、八歳の竜女既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す況や人界に生を受けたる女人をや、只得難きは人身値い難きは正法なり汝早く邪を翻えし正に付き凡を転じて聖を証せんと思はば念仏・真言・禅・律を捨てて此の一乗妙典を受持すべし、若し爾らば妄染の塵穢を払つて清淨の覚体を証せん事疑なかるべし。

爰に愚人云く今聖人の教誡を聴聞するに日來の矇昧忽に開けぬ天真發明とも云つべし理非顯然なれば誰か信仰せざらんや、但し世上を見るに上一人より下万民に至るまで念仏・真言・禅・律を深く信受し御座すさる前には国土に生を受けながら争か王命を背かんにや、其上我が親と云い祖と云い旁念仏等の法理を信じて他界の雲に交り畢んぬ、又日本には上下の人数・幾か有る、然りと

雖もいえど權教ごんきょう・權宗ごんしゅうの者は多く此この法門ほうもんを信まずる人は未いまだ其その名を
も聞きかず、仍よつて善ぜん処じょ・惡あく処じょをいはず邪じゃ法ほう・正しょう法ほうを簡えらばず内典ないてん五千ごせん・
七千ななせんの多おほきも外典げてん三千さんぜん余あま卷まきの広ひろきも只ただ主君しゅくんの命いのちに随したがひ父母ふぼの義ぎに
叶かなうが肝心かんじんなり、されば教主きょうしゅ釈尊しゃくそんは天竺てんじくにして孝養報恩こうようほうおんの理りを
説とき孔子こうしは大唐だいたうにして忠功孝高ちゅうこうこうこうの道みちを示しす師しの恩おんを報はずる人は肉
をさき身をなく主しゅの恩おんをしる人は弘演こうえんは腹はらをさき予讓よじやうは劍けんをのむ
親おんの恩おんを思しいし

人は丁蘭ていらんは木きをさぎみ伯瑜はくゆは杖じょうになく、儒にう・外がい・内ない・道だうは異いなりとい
へども報恩謝德ほうおんしゃとくの教きょうは替かわる事ことなし然しかれば主師親しゅししんのいまだ信まぜざる
法理ほうりを我われ始めて信まぜん事既すでに違背いはいの過とがに沈しずみなん法門ほうもんの道理だうりは
經文きやうもん明白めいぱくなれば疑網ぎもう都すて尽つきぬ後生ごしやうを願ねがはずば来世らいせ・苦くるに沈しずむべ
し進退しんたい惟ただ谷やれり我われ如何いかにがせんや、聖人しやうにん云いく汝なんじ此この理りを知しりながら
猶是なほこの語ごをなす理りの通とぜざるか意いの及およばざるか我われ釈尊しゃくそんの遺法いほうを

まなびぶつぽう仏法に肩を入れしより已この来かた知ち恩おんをもて最ほつとし報おん恩

をもて前とす世に四恩あり之これを知るを人倫じんりんとなづけ知らざるを

畜生ちくじょうとす、予父母ふぼの後世ごじょうを助け国家こっかの恩徳おんとくを報ぜんと思ゆえうが故に

身命しんみょうを捨あえてつる事敢たじて他事たじにあらず唯知恩ただちおんを旨むねとする計ばかりなり、先

ず汝目なんじをふさぎ心を静めて道理どうりを思へ我は善道ぜんどうを知りながら親と

主との悪道あくどうにかからんを諫いさめざらんや、又愚心ぐしんの狂くるひ酔よつて毒どくを服

せんを我

知りながら是をいましめざらんや、其の如く法門の道理を存じて火
・血・刀の苦を知りながら争か恩を蒙る人の悪道におちん事を歎か
ざらんや、身をもなげ命をも捨つべし諫めても・あきたらず歎きて
も限りなし、今世に眼を合する苦み猶是を悲む況や悠悠たる冥途
の悲み豈に痛まざらんや恐れても恐るべきは後世慎みても慎むべき
は来世なり、而るを是非を論ぜず親の命に随ひ邪正を簡はず主の
仰せに順はんと云う事愚癡の前には忠孝に似たれども賢人の意に
は不忠不孝是に過ぐべからず。

されば教主釈尊は転輪聖王の末師子・天王の孫・浄飯王の嫡
子として五天竺の大王たるべしといへども生死無常の理をさと
りしめつりげだつ
出離解脱の道を願つて世を厭ひ給しかば浄飯大王是を歎き四方に
四季の色を顕して太子の御意を留め奉らんと巧み給ふ、先づ東には
霞たなびくたえまより・かりがねこしぢに帰り、梅の香・玉簾の

中にかよひ・でうでうたる花の色・ももさへづりの鶯つぐいす・春の気色を

頭しのだはせり、南には泉の色いろしろ白たへにしてかの玉川の卵の華・

信太の森のほととぎす夏のすがたを頭はせり、西には紅葉もみじ・常葉ときわに

交ればさながら錦をおり交えまじ荻おぎふく風かぜ・閑のどかにして松の嵐ものすこ

し過ぎすにし夏のなごりには沢辺にみゆる螢の光・あまつ空なる星か

と誤みあやまり・松虫・鈴虫の声声・涙を催せり、北には枯野からの色いつしか

ものうく池の汀なぎせにつららみて谷の小川も・をとさびぬ、かかるあり

さまを造つて御意みこころをなくさめ給たまうのみならず四門に五百人づつの兵

を置いて守護しゆごし給たまいしかども終ついに太子たいしの御年十九

と申せし二月八日の夜半の比・車しゃ匿かくを召して金泥駒こんじくに鞍置くらかせ伽耶がや

城だんどくせんを出て檀特山だんとくせんに入り十二年高山こうせんに薪たきぎをとり深谷しんこくに水を結んで

難行なんぎょう苦行くぎょうし給たまひ三十成道じじゆじゆの妙果めうくわを感得かんとくして三界さんがいの独尊いちだ・一代いちだいの

教主きよしゆと成つて父母ふぼを救たひ群生ぐんじゆを導たまひ給たまいしをばさて不孝ふこうの人と

申もうすべきか、仏ぶつを不孝ふこうの人と云いいしは九十五種きゅうじゅうごしゆの外道げどうなり父母ふぼの命めいに背そむいて無為むゐに
入いり還かえつて父母ふぼを導ほくは孝てほんの根本げんぽんなる事こと・仏そ其そのの証しようこ拠こなるべし、彼
の淨蔵じやうざう・淨眼じやうげんは父ちちの妙莊嚴王みょうそうごん・外道げどうの法はふに著じやくして仏法ぶつぽうに背そむき給たまいし
かども二人ふたりの太子たいしは父ちちの命めいに背そむいて雲雷音王うんらいおんのうぶつ・佛おんの御弟子おんでしとなり終ついに
父ちちを導ほいて沙羅樹王しゃらじゆ

仏と申す仏になし申されけるは不孝の人と云うべきか、経文には
棄恩入無為・眞実報恩者と説いて今生の恩愛をば皆すてて仏法の
実の道に入る是れ実に恩をしれる人なりと見えたり、又主君の恩の
深き事汝よりも能くしれり汝若し知恩の望あらば深く諫め強い
て奏せよ非道にも主命に随はんと云う事・佞臣の至り不忠の極りな
り、殷の紂王は悪王・比干は忠臣なり政事理に違ひしを見て強て
諫めしかば即比干は胸を割かる紂王は比干死して後・周の王
に打たれぬ、今の世までも比干は忠臣といはれ紂王は悪王といは
る、夏の桀王を諫めし竜蓬は頭をきられぬ・されども桀王は悪王
・竜蓬は忠臣とぞ云う主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交れと
こそ教へたれ何ぞ其の非を見ながら黙せんと云うや、古の賢人・世
を遁れて山林に交りし先蹤を集めて聊か汝が愚耳に聞かしめん、
殷の代の太公望は 溪と云う谷に隠る、周の代の伯夷・叔斉は首陽

山と云う山に籠る、秦の綺里季は商洛山に入り漢の巖光は孤亭に居し、晋の介子綏は懸上山に隠れぬ、此等をば不忠と云うべきか愚かなり汝忠を存ぜば諫むべし孝を思はば言うべきなり。

先ず汝権教・権宗の人は多く此の宗の人は少し何ぞ多を捨て

少に付くと云う事必ず多きが尊くして少きが卑きにあらず、賢善の

人は希に愚悪の者は多し麒麟鸞鳳は禽獸の奇秀なり然れども是

は甚だ少し牛羊・烏鴿は畜鳥の拙卑なりされども是は転多し、

必ず多きがたつとくして少きがいやくしくば麒麟をすてて牛羊をと

り鸞鳳を閣いて烏鴿をとるべきか、摩尼・金剛は金石の靈異なり、

此の宝は乏しく瓦礫・土石は徒物の至り是は又巨多なり、汝が

言の如くならば玉などをば捨てて瓦礫を用ゆべきか・はかなし・

はかなし、聖君は希にして千年に一たび出で賢佐は五百年に一たび

顕る摩尼は空しく名のみ聞く麟鳳誰か実を見たるや世間出世・

善よき者は乏しく悪よき者は多おほき事。眼がん前ぜんなり、然しかれば何なんぞ強あなちに少すくきを・おろかにして多おほきを詮せんとするや土沙どしゃは多おほけれども米穀まいこくは希まれなり木皮もくわは充満じゅうまんすれども布絹ふけんは些少さしよなり、汝なんじ只ただ正理せいりを以もつて前まへとすべし別わかして人の多おほきを以もつて本もととすることなかれ。

爰こゝに愚人ぐにん席せきをさり袂たもとをかいつくろいて云いわく誠まことに聖教しんぎょうの理りをき
くに人身じんしんは得難えがたく天上てんじょうの絲筋いとすじの海底かいぞうの針はりに貫くわんけるよりも希まれに仏法ぶつぽう
は聞き難かたくして一眼いっげんの龜かめの浮木うきぎに遇あうよりも難がたし、今既すでに得難がたき
人界にんがいに生なをうけ値あい難がたき仏教ぶつぎょうを見聞けんもんしつ今生こんじょうを・もだしては又また
何れいずれの世よにか生死しじゆうじを離はなれ菩提ぼだいを証あかしすべき、夫それ一劫いっくわう受生じゆうじの骨ほねは山
よりも高たかけれども仏法ぶつぽうの為ためにはいまだ一骨ひとほねをもすてず多生たじゆう恩愛おんあいの
涙なみだは海うみよりも深ふかけれども尚後世なおごしじゆうの為ためには一滴ひとしずくをも落おささず、拙つたなきが
中ちゆうに拙つたなく愚おろかなるが中ちゆうに愚おろかなり設たひ命いのちをすて身みをやぶるとも生な
を軽かろくして仏道ぶつどうに入り父母ふぼの菩提ぼだいを資たすげ愚身ぐしんが獄縛ごくばくをも免まぬらるべし
能よく能よく教きょうを示しめし給たまへ。

抑おさ法華經ほふけきょうを信しんずる其その行相いっかん如何ごしゆ・五種ごしゆの行ぎやうの中ちゆうには先いず何れいずれ
行ぎやうをか修しゆすべき丁寧ていねいに尊教そんぎょうを聞きかん事ことを願ねがう、聖人しやうにん示しめして云いわく汝なんじ
蘭室らんしつの友ともに交まつて麻畝まほの性しやうと成なる誠まことに禿樹禿とくじゆかふるに非あらず春はるに遇あつて榮さかえ

華からさく枯から草から枯からるに非あらず夏あさに入つて鮮あざかに注つふ、若もし先く非くを悔いて正ち理りに入らば湛たん寂じやくの潭たんに遊あそ泳ぶして無む為いの宮みやに優あそ遊ぶせん事こと疑うたなかるべし、抑そもももぶつぼう
抑おさ 仏ぶつ法ぽうを弘くわつ通つうし群ぐん生せいを利り益やくせんには先まず教き機き時とき国こく教きやう法ぽう流りゆう布ふの前ぜん後ごを弁わふべきものなり、所ゆえん以んは時ときに正しやう像ざう未まあり
法ぽうに大だい小しやう乘じようあり修しゆ行ぎやうに撰しん折せあり撰しん受じゆの時とき・折せ伏ふくを行なずるも非ひなり折せ伏ふくの時とき・撰しん受じゆを行なずるも失しなり、然しかるに今いま世よは撰しん受じゆの時ときか折せ伏ふくの時ときか先まづ是これを知るべし撰しん受じゆの行ぎやうは此こゝの国こくに法ぽう華け一いつ純じゆんに弘ひろまりて邪じや法ぽう・邪じや師し一人ひとりもなしといはん、此こゝの時ときは山さん林りんに交まつて観かん法ぽうを修しゆし五ご種しゆ・六りく種しゆ乃至ないし・十じゆ種しゆ等とうを行なずべきなり、折せ伏ふくの時ときはかくの如ごとくならず經きやう教きやうのおきて蘭らん菊きくに諸しよ宗しゆのおぎる誉ほまれを擅ほんにし邪じや正せい・肩かたを並ならべ大だい小しやう先せんを争あはん時ときは万ばん事じを闇さしおいて謗ぼう法ぽうを責せむべし是こゝれ折せ伏ふくの修しゆ行ぎやうなり、此こゝの旨むねを知らずして撰しん折せ途とに違ちがはば得とく道どうは思おももよらず悪あく道どうに墮おつべしと云いふ事こと・法ぽう華け・涅槃ねはんに定ぢやうめ置おき天てん台だい・

妙樂みょうらくの解げ釈しゃくにも分ぶん明みやうなり是これ仏ぶつ法ぽう修しゆ行ぎやうの大事だいじなるべし、譬たとえば文
武ぶ兩りやう道だうを以もつて天てん下がを治ちるに武ぶを先せんとすべき時ときもあり文ぶんを旨むねとすべ
き時ときもあり、天てん下が無む為いにして国こく土ど静じやうかならん時ときは文ぶんを先せんとすべし東
夷あし・南なん蛮まん・西さい戎じやう・北ほく狄てき・蜂ほう起きして野や心しんをさしはさまんには武ぶを先せんとす
べきなり、文ぶん武ぶのよき事じ計けいりを心こころえて時ときをもしらず万ばん邦ぽう・安あん堵どの思し
をなし

て世間無為ならん時甲冑をよるひ兵杖をもたん事も非なり、又
王敵起らん時戦場にて武具をば闇いて筆硯を提ん事も亦時に
相応せず撰受・折伏の法門も亦是くの如し正法のみ弘まつて邪法
・邪師無からん時は深谷にも入り閑静にも居して読誦・書写をもし
観念工夫をも凝すべし、是れ天下の静なる時筆硯を用ゆるが如し
権宗・謗法

国にあらん時は諸事を闇いて謗法を責むべし是れ合戦の場に兵杖
を用ゆるが如し、然れば章安大師・涅槃の疏に釈して云く「昔は時
平かにして法弘まる応に戒を持すべし杖を持すること勿れ今は時
嶮しくして法翳る応に杖を持すべし戒を持すること勿れ今昔俱に
嶮しくば俱に杖を持すべし今昔俱に平かならば応に俱に戒を持す
べし、取捨宜きを得て一向にす可からず」と此の釈の意分明なり、
昔は世もすなをに人もただしくして邪法邪義・無かり

き、されば威儀をただし穩便に行業を積んで杖をもつて人を責めず
邪法をとがむる事無かりき、今の世は濁世なり人の情もひがみゆが
んで權教謗法のみ多ければ正法弘まりがたし此の時は読誦・書写
の修行も觀念・工夫・修練も無用なり、只折伏を行じて力あらば
威勢を以て謗法をくだき又法門を以ても邪義を責めよとなり、
取捨其旨を得て一向に執する事なかれと書けり、今の世を見るに
正法一純に弘まる国が邪法の興盛する国が勸ふべし、然るを
浄土宗の法然は念仏に對して法華經を捨閉閣抛とよみ善導は
法華經を雜行と名け剩へ千中無一とて千人信ずとも一人得道の者
あるべからずと書けり、真言宗の弘法は法華經を華嚴にも劣り
大日經には三重の劣と書き戲論の法と定めたり、正覺房は法華經
は大日經のはきものとりにも及ばずと云ひ釈尊をば大日如来の牛
飼にもたらずと判せり、禪宗は法華經を吐たる・つばき・月をさ

す指・教網しじょうなんど下す、小乗じょう律等りつとうは法華ほけき經きょうは邪教じやく・天魔てんまの所説しよせつと名けたり、此等これら豈あに謗法ぼうぼうにあらずや責めても猶なおあまりあり禁いましめても亦またたらず。

愚人ぐにん云いわく日本にほん六十余州ある・人替あり法異あるりといへども・或あるは念仏ねんぶつ者者・或あるは真言師しんごんし・或あるは禪あ・或あるは律あ・誠まことに一人ひとりとして謗法ぼうぼうならざる人はなし、然しかりと雖いえども人の上沙汰さたしてなにかせん只ただ我が心中しんちゆうに深く信受しんじゆして人の誤あやまりをば余所よその事に

せんと思ふ、聖人示して云く汝言う所実にしかなり我も其の義を
存ぜし処に経文には或は不惜身命とも或は寧喪身命とも説
く、何故にかやうには説かるやと存ずるに只人をはばからず
経文のままに法理を弘通せば謗法の者多からん世には必ず三類の
敵人有つて命にも及ぶべしと見えたり、其の仏法の違目を見ながら
我もせめず国主にも訴へずば教へに背いて仏弟子にはあらずと説か
れたり、涅槃經第三に云く「若し善比丘あつて法を壞らん者を
見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の
中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子真の
声聞なり」と、此の文の意は仏の正法を弘めん者・経教の義を悪
く説かんと聞き見ながら我もせめず我が身及ばずば国主に申し上
げて是を対治せずば仏法の中の敵なり、若し経文の如くに人を
もはばからず我もせめ国主にも申さん人は仏弟子にして真の僧な

りと説かれて候、されば仏法中怨の責を免れんとて。

かやうに諸人に悪まるれども命を釈尊と法華經に奉り慈悲を一切

衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす、

汝實に後世を恐れば身を輕しめ法を重んぜよ是を以て章安大師

云く「寧ろ身命を喪ふとも教を匿さざれとは身は軽く法は重し身

を死して法を弘めよ」と、此の文の意は身命をば・ほろぼすとも

正法をかくさざれ、其の故は身はかるく法はおもし身をばころす

とも法をば弘めよとなり、悲いかな生者必滅の習なれば設ひ長寿

を得たりとも終には無常をのがるべからず、今世は百年の内外の程

を思へば夢の中の夢なり、非想の八万歳未だ無常を免れず・利の一

千年も猶退没の風に破らる、況や人間・閻浮の習は露よりも・あや

うく芭蕉よりも・

もろく泡沫よりもあだなり、水中に宿る月のあるかなきかの如く

草葉くさばにをく露つゆのをくれ・さきだつ身みなり、若もし此この道どう理りを得ば後ご世しょう
を一大事だいじとせよ歡かん喜き仏ぶつの末すえの世よの覺かく徳とく比ひ丘きう・正しょう法ほうを弘めしに無む量りょう
の破は戒かい此この行ぎょう者じやを怨みて責あめて責あめしかば有う徳とく国こく王おう・正しょう法ほうを守る故ゆえに
謗ほう法ほうを責めて終ついに命みよ終じゆうして阿あ・仏ぶつの国こくに生なれて彼かの仏ぶつの第だい一いちの
弟で子しとなる、大だい乘じようを重おもんじて五ご百ひやく人にんの婆ば羅ら門もんの謗ほう法ほうを誡めし仙予ぜんよ
国こく王おうは不ふ退たいの位ゐに登のぼる、憑たのしいかな正しょう法ほうの僧そうを重おもんじて邪じや惡あく

の侶を誡むる人かくの如くの徳あり、されば今の世に摂受を行ぜ
ん人は謗人と俱に悪道に墮ちん事 疑い無し、南岳大師の四
安楽行に云く「若し菩薩有つて悪人を將護し治罰すること能わず
乃至其の人命終して諸悪人と俱に地獄に墮せん」と、此の文の意
は若し仏法を行ずる人有つて謗法の悪人を治罰せずして觀念思惟
を専らにして邪正権実をも簡ばず詐つて慈悲の姿を現ぜん人は
諸の悪人と俱に悪道に墮つべしと云う文なり、今真言・念仏・禪・律
の謗人をたださずいつはつて慈悲を現ずる人・此の文の如くなるべ
し。

爰に愚人意を竊にし言を躑にして云く誠に君を諫めて家を正しく
する事先賢の教へ本文に明白なり外典此くの如し内典是に違うべか
らず、悪を見ていましめず謗を知つてせめずば経文に背き祖師に
違せん其の禁め殊に重し今より信心を至すべし、但し此経を修行

し奉らん事叶いがたし若し其の最要あらば証拠を聞かんと思ふ、
聖人示して云く今汝の道意を見るに鄭重・慇懃なり、所謂諸仏の
誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の五字なり、
檀王の宝位を退き竜女が蛇身を改めしも只此の五字の致す所な
り、夫れ以れば今の經は受持の多少をば一偈・一句と宣べ修行の
時刻をば一念随喜と定めたり、凡そ八万法蔵の広きも一部八卷の
多きも只是の五字を説かためなり、靈山の雲の上・鷲峯の霞の
中に釈尊要を結び地涌付属を得ることありしも法体は何事ぞ只此
の要法に在り、
天台・妙樂の六千張の疏・玉を連ぬるも道邃行滿の数軸の釈・金を
並ぶるも併しながら此の義趣を出でず、誠に生死を恐れ涅槃を
欣い信心を運び渴仰を至さば遷滅無常は昨日の夢・菩提の覺悟は
今日のうつつなるべし、只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せ

ぬ罪つみやあるべき来らぬ福あや有るべき、眞実しんじつなり甚深じんじんなり是これを信受しんじゆすべし。

愚人ぐにん掌たなごころを合せ膝ひざを折いつて云いわく貴命きめい肝かんに染そみ教訓きょうくん意いを動うぜり然しかりと雖いえども上能兼下じやうにんけんげの理ことわりなれば広ひろきは狭せまきを括くくり多おほきは少すくを兼あぬ、然しかる処かところに五字ごじは少すくく文言ぶんごうは多おほし首題しゆだいは狭せまく八軸はつじやくは広ひろし如何なんぞ功德くどく齊等さいとうならんや、聖人せいじん云いく汝愚なんじおろかなり捨少取多しせうとくたの執しゆ・須弥しゆみよりも高たかく輕狭重広けいせうじゆうかうの情めい・溟海めいかいよりも深ふかし、今の文の初後しよごは必ず多おほきが尊たかく少すくきが卑いやしき

にあらざる事・前に示すが如し、爰に又小が大を兼ね、一が多に
勝ると云う事之を談ぜん彼の尼拘類樹の実は芥子・三分が一のせい
なりされども五百輛の車を隠す徳あり是小が大を含めるにあらず
や、又如意宝珠は一あれども万宝を雨して欠・処之れ無し是れ又
少が多を兼ねたるにあらずや、世間のことわざにも一は万が母とい
へり此等の道理を知らずや、所詮実相の理の背契を論ぜよ強ちに多
少を執する事なかれ、汝至つて愚かなり今一の譬を仮らん、夫れ
妙法蓮華経とは一切衆生の仏性なり仏性とは法性なり法性とは
菩提なり、所謂釈迦・多宝・十方の諸仏・
・上行・無辺行等・普賢・文殊・舍利弗・目連等、大梵天王・
釈提桓因・日月・明星・北斗・七星・二十八宿・無量の諸星・天衆・地
類・竜神・八部・人天・大会・閻魔法王・上は非想の雲の上・下は那落
の炎の底まで所有一切衆生の備うる所の仏性を妙法蓮華経とは

なす
名くるなり、されば一遍此の首題を唱へ奉れば一切衆生の仏性が
みな
皆よばれて爰に集まる時・我が身の法性の法報応の三身ともにひ
かれて顕れ出ずる是を成仏とは申すなり、例せば籠の内にある鳥
の鳴く時空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の内の鳥も出で
んとするが如し。

ここ
爰に愚人云く首題の功德・妙法の義趣・今聞く所詳かなり但し此
ししゅ
の旨趣正しく経文に是をのせたりや如何、聖人云く其の理詳かな
らん上は文を尋ぬるに及ばざるか然れども請に随つて之れを示さ
ん法華経第八陀羅尼品に云く「汝等但能く法華の名を受持せん者
を擁護せん福量るべからず」此の文の意は仏・鬼子母神・十羅刹女の
ほけきよう
法華経の行者を守らんと誓い給うを讃むるとして汝等・法華の首
題を持つ人を守るべしと誓ふ、其の功德は三世了達

ちえ
の仏の智慧も尚及びがたしと説かれたり、仏智の及ばぬ事何かある

べきなれども法華の題名受持の功德ばかりは是を知らずと宣べたり、法華一部の功德は只妙法等の五字の内に籠れり、一部八巻・文ごとに二十八品・生起かはれども首題の五字は同等なり、譬ば日本の二字の中に六十余州・島二つ入らぬ国やあるべき籠らぬ郡やあるべき、飛鳥とよべば空をかける者と知り走獸といへば地をはしる者と心うる一切名の大切なる事蓋し以て是くの

ごと 如し、天台は名詮自性・句詮差別とも名者大綱とも判ずる此の謂れ
なり、又名は物をめす徳あり物は名に応ずる用あり法華題名の
くどく 功徳も亦以て此くの如し。

くんにんわ 愚人云く 聖人の言の如くば 実に首題の功莫大なり 但し知ると知
らざるとの不同あり、我は弓箭に携り 兵杖をむねとして未だ
ぶっほう 仏法の真味を知らず 若し然れば 得る所の功徳何ぞ其れ深からん
や、聖人云く 円頓の教理は 初後全く不二にして 初位に後位の徳あ
り一行・一切行にして 功徳備わらざるは 之れ無し 若し汝が言の
ごとく 如くば 功徳を知つて 植えずんば 上は等覚より下は名字に至るまで
とくやく 得益更にあるべからず、今の経は 唯仏与仏と談ずるが故なり、
ひゆほん 譬喩品に云く、「汝舍利弗尚此の経に於ては 信を以て入ることを得
たり 況や余の 声聞をや」文の心は大智・舍利弗も 法華経には 信を
もつ 以て入る 其の 智分の力には ならず 況や 自余の 声聞をやとなり、さ

れば法華經に來つて信ぜしかば永不成仏の名を削りて華光如來となり嬰兒に乳をふくむるに其の味をしらずといへども自然に其の身を生長す、

醫師が病者に薬を与うるに病者薬の根源をしらずといへども服すれば任運と病愈ゆ若し薬の源をしらずと云つて醫師の与ふる薬を服せずば其の病愈ゆべしや薬を知るも知らざるも服すれば病の愈ゆる事以て是れ同じ、既に仏を良医と号し法を良薬に譬へ衆生を病人に譬ふされば如来一代の教法を擣 和合して妙法一粒の良薬に丸ぜり豈知るも知らざるも服せん者 煩惱の病愈えざるべしや病者は薬をもしらず病をも弁へずといへども服すれば必ず愈ゆ、行者も亦然なり法理をもしらず煩惱をもしらずといへども只信ずれば見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて実報・寂光の台にのぼり本有三身の膚を磨かん事 疑いあ

るべからず、されば伝でん教ぎょう大師だいし云いく、能のう化け所しよ化け俱ともに歴りやう劫ごう無なくく妙みよ法ほう經きやうの力りき即そく身しん成じやう仏ぶつす」と法ほけ華き經きやうの法ほ理りを教しへん師し匠じやうも又また習じゆはん弟で子しも久くしからずして法ほけ華き經きやうの力りきをもつて俱ともに仏ぶつになるべしと云いう文ぶんなり、
天てん台だい大師だいしも法ほけ華き經きやうに付ついて玄げん義ぎ・文もん句く・止しかん觀かんの三十さんじゆ卷まきの釈しやくを造つくり
給たまう、妙みよ樂らく大師だいしは又また釈しやく籤せん・疏じよ記き・輔ふぎ行きやうの三十さんじゆ卷まきの末ま文ぶんを重かさねて
判はん釈しやくす、天てん台だい六十だじゆ卷まきとは是これなり、玄げん義ぎには名な体たい宗しゆ用う教けうの五ご重じゆ玄げん

を建立して妙法蓮華經の五字の機能を判釈す、五重玄を釈する
中の宗の釈に云く「綱維を提ぐるに目として動かざること無く衣の
一角を牽くに縷として来らざる無きが如し」と、意は此の
妙法蓮華經を信仰し奉る一行に功德として来らざる事なく善根と
して動かざる事なし、譬ば網の目無量なれども一つの大綱を引く
に動かざる目もなく衣の糸筋巨多なれども一角を取るに糸筋とし
て来らざることなきが如しと云う義なり、さて文句には如是我聞よ
り作礼而去まで文句・文句に因縁・約教・本・迹・觀心の四種の釈を
設けたり、次に止觀には妙解の上に立てる所
の觀不思議境の一念三千是れ本覺の立行・本具の理心なり、今爰に
委しくせず、悦ばしいかな生を五濁惡世に受くといへども一乘の
眞文を見聞する事を得たり、熙連恒沙の善根を致せる者・此の經に
あい奉つて信を取ると見えたり、汝今一念隨喜の信を致す

かんがいそうおうかのうどうこうたがい
函蓋相應感応道交 疑い無し。

ぐにんこうべ

た

あ

いわ

いちじつ

じゆじ

愚人頭を低れ手を挙げて云く我れ今よりは一実の経王を受持し

三界の独尊を本師として今身自り仏身に至るまで此の信心敢て

退転無けん、設ひ五逆の雲厚くとも乞ふ提婆達多が成仏を続ぎ

十悪の波あらくとも願くは王子覆講の結縁に同じからん、聖人

云く人の心は水の器にしたがふが如く物の性は月の波に動くに似た

り、故に汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻へさん魔来り鬼

来るとも騒乱する事なかれ、夫れ天魔は仏法をにくむ外道は内道

をきらふ、されば猪の金山を摺り衆流の海に入り薪の火を盛んに

なし風の求羅をますが如くせば豈好き事にあらずや。

夫れそ以んおもみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん
 人は如来によらいの在世ざいせより猶多怨嫉ゆたおんしつの難なん甚はなはだしかるべしと見えて候なり、
 そのゆえに在ざい世せは能化のうけの主は仏なり弟子でし又大菩薩阿羅漢ほさつあらかんなり、人天にんてん・
 四衆ししゆう・八部はちぶ・人非人等にんびにんなりといへども調機調養ちようきちようようして法華経ほけきやうを聞かし
 め給たまふ猶怨嫉なのおんしつ多し、何いかに況いわんや末法まっぼう今の時は教機時刻きじこく当来とうらいすといへ
 ども其その師たすを尋ぬれば凡師ほんしなり、弟子でし又鬪諍とうじやう堅固けんこ・白法びやくほう隱没おんもつ・
 さんどくさんどく・ごうじやうごうじやう・あくにんあくにん・ゆえゆえ・ぜんしぜんし・おんりおんり・あくしあくし・しんじんしんじん、
 三毒さんどく強盛ごうじやうの悪人等あくにんなり、故ゆえに善師ぜんしをば遠離おんりし悪師あくしには親近しんじんす、
 其の上そ眞実しんじつの法華経ほけきやうの如説修行によせつしゆきやうの行者ぎやうじやの師弟していだんな檀那だんなとならんには
 さんるいさんるい・てきじんてきじん・けつじやうけつじやう・ちようもんちようもん
 三類さんるいの敵人てきじん決定けつじやうせり、されば此の経を聴聞ちようもんし
 始めん日ひより思おもひ定むべし況滅度後きやうめつどごの大難だいなんの三類さんるい甚はなはだしかるべし

と、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難來る
時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか
経文を先として猶多怨嫉・況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は
是なり予が或は所ををわれ・或は疵を蒙り・或は兩度の御勘氣
を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあ
らざる物をや。

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の
強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華經の御為に今度九横の
大難に値ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り
竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者
は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は
六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者とし
て而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を如説修行の人と云わ

ずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今の世は鬪諍
堅固・白法隱没なる上・悪国・悪王・悪臣・悪民のみ有りて正法を
背きて邪法・邪師を崇重すれば国土に悪鬼乱れ入りて三災・七難
盛に起れり、かかる時刻に日蓮仏勅

を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ経文に任せて権実二教のいくさを起し忍辱の鎧を着て妙教の剣を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕真実の弓をはり正直捨権の箭をはげて大白牛車に打乗つて権門をかつぱと破り・かしくへおしかけここへおしよせ念仏・真言・禅・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返し・せめをとしすれどもかたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし、法華折伏・破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなくせめをとして法王の家人となし天下万民諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壤を砕かず、代は羲農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の

ことわり
理 頭れん時を各各御覽ぜよ現世安穩の証文 疑い有る可からざる者なり。

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣・浅深ある事なし、念仏を申すも真言を持つも禅を修行するも総じて一切の諸經並びに仏・菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり等云云、予が云く然らず所詮佛法を修行せんには人の言を用う可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道の始より法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟なりしかば先ず權教たる方便を四十余年が間説きて後に眞実たる法華經を説かせ給いしなり、此の經の序分・無量義經にして權実のはうじを指て

方便ほうべん・眞実しんじつを分け給たまへり、所謂いわゆる以方便力ほうべん・四十余年よんじゅうよねん・未顕みけん眞実しんじつ是これなり、
大莊嚴そうごん等の八万はちまんの居士こゝし・施権せけん・開権かいごん・廢権はいごん等のいはれを心得こころえ分け給たまい
て領解りょうげして言いわく法華經ほけきょう已前いぜんの歴劫りやくこつ修行しゆぎやう等の諸經しゆきやうは終不得しゆふとくじやう成むじやう・無上むじやう
菩提ぼだいと申もうしきり給たまひぬ、然しかして後ご・正宗しやうしゆつの法華ほっけに至いたつて世尊せそん・
法久後ほうくご・要當說眞実やうとうせつしんじつと説とき給たまいしを始めはじめとして

無二亦無三除やくむ仏方便ぼつべん說正直捨方便しよつじきしやほうべん乃至不受余經ないしふじゆよきよ一偈いちげと禁め給へり、是より已後はいこ唯一ゆい一いち乘じゆの妙法みようほうのみ一切衆生いつさいしゆじよをい仏ぶつになす大法だいほうにて法華經ほけきよより外ほかの諸經しよきよは一分いちぶんの得益とくやくもあるまじきに末法まつぽうの今のがくしやいずれ學者何れも如来にょらいの說教せつぎょうなれば皆得道みなとくだうあるべしと思ひて、或は眞言しんごんあるねんぶつ念ねん仏ぶつ、或はある禪宗ぜんしゆ、三論さんろん、法相ほつそう、俱舍ぐしや、成実じようじつ、律等りつとうの諸宗しよしゆしゆきよ諸經しよきよを、或はしゆじゆ念ねん仏ぶつ、或はある禪宗ぜんしゆ、三論さんろん、法相ほつそう、俱舍ぐしや、成実じようじつ、律等りつとうの諸宗しよしゆしゆきよ諸經しよきよを取取しゆじゆに信しんずるなり、是かくのくの如ごとき人をば若人にやくにんぶしん不信毀謗きぼり、此經しきよ即斷すくだん、一切世間いつさいせけん、仏種ぶつしゆ、乃至ないし其人命終こにんみようじゆう、入阿鼻獄にゆうあびごくと定め給へり、此等これらのをきての明鏡めいきやうを本として一分いちぶんもたがえず唯一ゆい乘法いちじよと信しんずるを、如說修行によせつしゆきよの人とはい仏ぶつは定めさせ給へり。

難なんじて云いく左様さやうに方便ほうべん權教けんぎょうたる諸經しよきよ諸仏しよぶつを信しんずるを法華經ほけきよと

云いはばこそ、只ただ一經いつきよに限りて經文きよもんの如ごとく五種ごしゆの修行しゆきよをこらし

安樂行あんらくぎやう品の如ごとく修行しゆきよせんは如說修行によせつしゆきよの者ものとは云いわれ候まじきか

如何いかに、答こたえて云いく凡おほ仏法ぶつぽうを修行しゆきよせん者はい撰折せんせつ二門にもんを知るべ可べきな

一切の経論此の二を出でざるなり、されば国中の諸学者等。
 佛法をあらあら学すと云へども時刻相應の道をしらず四節・四季。
 取取に替れり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春
 種子を下して秋菓を取るべし秋種子を下して春菓を取らんに豈取
 らる可けんや、極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はな
 にかせん、涼風は夏の用なり冬はなにかせん、佛法も亦復是くの如
 し小乗の流布して得益あるべき時もあり、権大乘の流布して得益
 あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに
 正像二千年は小乗・権大乘の流布の時なり、末法の始めの五百
 年には純円一実の法華経のみ広宣流布の時なり、此の時は鬪諍
 堅固・白法隠没の時と定めて権実雜乱の砌なり、敵有る時は刀杖
 弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん、今の時は
 権教即実教の敵と成るなり、一乘流布の時は権教有つて敵と成

りてまぎらはしくば、じつきょう実教より之を責む可し、是をしやうじやく摂折二門の中に
はほけきやう法華經の折伏しやくぶくとは申すなり、天台云く、「ほっけしやくぶく法華折伏・はこんもんり破権門理」と
まことに故あるかな、然るにしよじゆ摂受たる四安樂の修行しゆぎやうを今の時行ず
るならば冬しゆし種子を下して春このみ菓を求る者にあらずや、鷄とりの曉に鳴く
は用なり宵よいに鳴くは物怪もつけなり、ごんじつぞうらん権実雜乱の時・ほけきやう法華經の御敵を責め
ずして山林さんりんに閉じ籠りこも、しよじゆ摂受を修行しゆぎやうせんは豈あにほけきやうしゆぎやう法華經修行の時を

失う物怪にあらざや、されば末法今の時・法華經の折伏の修行を
ば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にも坐せ諸經は無得道墮
地獄の根源法華經独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて
諸宗の人法・共に折伏して御覽ぜよ三類の強敵来らん事 疑い無
し。

我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三
十余年伝教大師は二十余年今日蓮は二十余年の間・権理を破す
其の間の大難数を知らず、仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知ら
ず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値い給い
し事なし、彼は只悪口怨嫉計りなり、是は両度の御勘気遠国に流罪
せられ竜口の頸の座頭の疵等其の外悪口せられ弟子等を流罪せら
れ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし、是等の
大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき、されば如説修行の

法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へされ
ば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・
傳教の三人は・

さてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子・檀那等是なり、
我等を如説修行の者といはずば釈尊・天台・傳教等の三人も
如説修行の人なるべからず、提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・
善導・法然・良觀房等は即ち法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・
傳教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべ
し、法華經は方便權教と云はれ念仏等の諸經は還つて法華經とな
るべきか、東は西となり西は東となるとも大地は持つ所の草木共に
飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるた
めしはありともいかでか此の理あるべき。

哀なるかな今・日本国の万民日蓮並びに弟子・檀那等が三類の

強敵こつてきに責められ大苦あに値あうを見て悦よろこんで笑ふとも昨日は人の上。
今日きょうは身の上なれば日蓮にちれん並びに弟子でし・檀那だんな共に霜露そうろの命の日影を待
つ計ばかりぞかし、只今ただ・仏果ぶつかに叶かないて寂光じやくこうの本土ほんどに居住して自受じじゆ法楽ほうらく
せん時なんじ、汝等なんじが阿鼻あび大城だいじょうの底に沈みて大苦あに値あわん時 我等われら何計いかばかり
無慚むざんと思はんずらん、汝等なんじ何計いかばかりうらやましく思はんずらん、一期いちよこ
を過すぐる事程も無ければ、いかに強敵こつてき重なるともゆめゆめ退する

心なかれ恐るる心なかれ、縦ひ頸をば鋸にて引き切り・どうをば
ひしほこを以てつつき足にはほだしを打って・きりを以てもむとも、
命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱へ
死に死るならば釈迦・多宝・十方の諸仏靈山会上にして御契約な
れば須臾の程に飛び来りて手をと肩に引懸けて靈山へ・はしり
給はば二聖・二天十羅刹女は受持の者を擁護し諸天善神は天蓋を
指し旛を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべき
なり、あらうれしや・あらうれしや。

文永十年癸酉五月日 日蓮在御判

人々御中へ 此の書御身を離さず常に御覧有る可く候

六八

顯仏未来記

沙門

日蓮

之を勸う

50

法華經ほけきょうの第七ななに云いく「我が滅度めつどの後ご・後の五百歳ごのひゃくさいの中に閻浮提えんぶだいに
 広宣流布こうせんるふして断絶だんぜつせしむること無なけん」等云云、予一たびは歎なげいて
 云いく仏滅後ぶつめつ既すでに二千二百二十余年ふたにふたにひゃくにじゅうごねんを隔へたつ何いかなる罪業ざいごうに依よつて仏の
 在世ざいせいに生なれず正法しよほうの四依像法しえぞうほうの中ちゆうの天台てんだい・伝教等でんきようにも値あわざるや
 と、亦また一たびは喜よろこんで云いく何いかなる幸さいあつて後ご・五百歳ひゃくさいに生なれて此この
 真文しんもんを拜見はいけんすることぞや、在世ざいせいも無益むやくなり前四味ぜんしのみの人は未いまだ
 法華經ほけきょうを聞きかず正像しよざうも又由またし無なし南三なんざん・北七ほくしち並びに華嚴けこん・真言等しんごん
がくしやの学者がくしやは法華經ほけきょうを信しんぜず、天台大師てんだいだいし云いく「このごひゃくさい
 後の五百歳ごのひゃくさい遠とほく妙道みょうどうに
 沾うるおわん」等云云広宣流布こうせんるふの時ときを指さすか、伝教大師でんきようだいし云いく「正像しよざう
ややす稍過しやうかぎ已おつて末法まっぽう太はなだ近ちかきに有あり」等云云末法まっぽうの始はじめを願がん樂りやくするの
 言ことなり、時代じだいを以もつて果報かほうを論ろんずれば

竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るるなり。

問うて云く後・五百歳は汝一人に限らず何ぞ殊に之を喜悦せしむるや、答えて云く法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」文、天台大師云く「何に況や未来をや理化し難きに在り」文、妙樂大師云く「理在難化とは此の理を明すこと有意・衆生の化し難きを知らしむるに在り」文、智度法師云く「俗に良薬口に苦しと言うが如く此の經は五乘の異執を廢して一極の玄宗を立つ故に凡を斥ぞけ聖を呵し大を排し小を破る乃至此の如きの徒悉く留難を為す」等云云、伝教大師云く「代を語れば則ち像の終り末の始・地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・鬪諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」等云云、

此の伝教大師の筆跡は其の時に当るに似たれども意は當時を指す

なり正像しやうざう稍過しやうかぎ已おつて末法まつぽう太はなだ近ちかきに有ありの積こは心こころ有あるかな、經きやうに云いく「悪あく魔ま・魔ま民みん・諸しよ天てん竜りゆう・夜や叉しや・鳩く槃はん茶だ等そ其その便たりよりを得えん」云いふ、言いう所ところの等らとは此この經きやうに又また云いわく「若もしは夜や叉しや・若もしは羅ら刹せつ・若もしは餓が鬼き・若もしは富ふ单たん那な・若もしは吉きつ遮しや・若もしは毘び陀だ羅ら・若もしは馱けん・若もしは烏う摩ま勒りやく伽が・若もしは阿あ跋ばつ摩ま羅ら・若もしは夜や叉しや吉きつ遮しや・若もしは人にん吉きつ遮しや」等ら云いふ、此この文ぶんの如ごときは先生せんしやうに四し味み三さん教きやう・乃な至いた外がい道だう人にん天てん等らの法ぽうをじとく持も得とくして今こん生じやうに惡あく魔ま・諸しよ天てん・諸しよ人にん等らの身みをけんもん受うけるたる者ものが円えん実じつの行ぎやう者じやを見けんもん聞もんして留る難なんをいたすべき由よしをしやく説せつくなり。

疑うたがつて云いく正像しやうざうの二に時ときを末法まつぽうに相そう對たいするに時ときと機きと共ともに正像しやうざうは殊ことに勝まさるるなり何なんぞ其そのの時とき機きを捨すてて偏ひるにえ当とう時じを指さすや、答こたえて云いく仏意ぶつゐ測そくり難がたし予未いまだ之これを得えず試しみに一いつ義ぎを案あんじ小乘しやうじやう經きやうを以もつて之これを勸かんづるに正法しやうぽう千年せんねんは教行証きやうぎやうじやうの三さんつ具ぐさに之これを備そなへる像法ざうぽう千年せんねんには教行きやうぎやうのみ有あつて証無じやうむし末法まつぽうには教きやうのみ有あつて行証無ぎやうじやうむし

等云云、法華經

を以て之を探るに正法千年に三事を具するは在世に於て法華經に
結縁する者か、其の後正法に生れて小乗の教行を以て縁と為し
小乗の証を得るなり、像法に於ては在世の結縁微薄の故に小乗
に於て証すること無く此の人権大乘を以て縁と為して十方の浄土
に生ず、末法に於ては大小の益共に之無し、小乗には教のみ有つ
て行証無し

だいじょう 大乘には 教行きやうぎやう

のみ有つて 冥顕みやうけん

の証之無し、

其の上正像じやうざう

の時のとき

しよりゆう

所立の権小ごんしょう

の二宗漸漸末法ぜんぜんまつぽう

に入て 執心しゆしん 弥い 強盛きやうせい

にして小を以てもつ

大を打ち権を以て実を破り

国土に大体謗法だいたいぼうぽう

の者充滿じゆうまんするなり、

ぶつきやう

仏教に依つて悪道あくだう

に墮だ

する者は大地微塵だいちみじん

よりも多く正法しやうぽう

を行じて

ぶつごう

仏道を得る者は爪上そりじやう

の土よりも少きなり、

此の時に當つて諸天しよてん

ぜんじんそ

善神其の国を捨離しやり

じやてん 邪天・邪鬼等有つて

王臣おうしん・比丘びく

比丘尼びくに等の身心しんしん

に入住にゆうじゆう

し法華經ほけきやう

しみさんきやう

の行者を罵詈毀辱めりきにく

せしむべき時なり、

爾りしかり

と雖も仏の滅後めつご

に於て

じゆせんがい

四味三教等の邪執じやしゆつ

を捨て実大乘じつだいじやう

の法華經ほけきやう

に帰せば諸天善神しよてんぜんじん

並びに

ほんもん

地涌千界等の菩薩ぼさつ

・法華ほつげ

の行者ぎやうじや

を守護しゆごせん此の人しゆご

は守護しゆごの力を得

ほんもん

て本門の本尊ほんぞん

・妙法蓮華經みやうぽうれんげきやう

の五字ごじ

を以て閻浮堤えんぶ

に広宣流布かうせんるふ

せしめん

か、

例せば

威音王いおんおう

・仏の像法ぞうぽう

の時とき

・不輕菩薩ふぎやうぼさつ

・我深敬等がじんきやう

の二十四字にじゅうしじ

を以てもつ

彼の土に広宣流布し一国の杖木等の大難を招きしが如し、彼の二
十字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ彼の像法
の末と是の末法の初と全く同じ彼の不輕菩薩は初隨喜の人・日蓮は
名字の凡夫なり。

疑つて云く何を以て之を知る汝を末法の初の法華經の行者な
りと為すと云うことを、答えて云く法華經に云く「況んや滅度の後
をや」又云く「諸の無智の人有つて悪口罵詈等し及び刀杖を加うる
者あらん」又云く「数数擯出せられん」又云く「一切世間怨多くして
信じ難し」又云く「杖木瓦石をもつて之を打擲す」又云く「悪魔・
魔民・諸天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」等云云、此の明鏡
に付いて仏語を信ぜしめんが為に、日本国中の王臣・
四衆の面目に引き向えたるに、予よりの外には一人も之無し、時を
論ずれば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮無くんば仏語は

虚妄と成らん、難じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禅
比丘にも超えたり如何、答えて云く汝日蓮を蔑如するの重罪。又
提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり、我が言は大慢に似たれど
も仏記を扶け如来の実語を顕さんが為なり、然りと雖も日本国中
に日蓮を除いては誰人を取り出して法華經の行者と為さん汝日蓮
を謗らんとして仏記を虚妄にす豈大悪人に非ずや。

疑うたがい つて云いわく如来にょらいの未来みらい記き汝なんじに相当あいたれり、但ただし五天竺てんじく並びに漢土かんど等らにも法華ほけき經きょうの行者ぎやうじや之あ有あるか如何いかに、答こたえて云いわく四天下してんげの中に全ぜんく二にの日ひ無なし四海しかいの内うち豈あに兩主りやうしゆ有あらんや、疑うたがい つて云いわく何を以もつて汝なんじ之これを知る、答こたえて云いわく月は西せいより出いでて東とうを照てらし日は東とうより出いでて西せいを照てらす仏法ぶつぽうも又また以もつて是かくの如ごとし正像しょうざうには西せいより東とうに向むい未法まいぽうには東とうより西せいに往むかひ、妙樂みょうらく大師だいしの云いわく「豈あに中国ちゆうごくに法ぽうを失うしないて之これを四維しいに求もとむるに非あらずや」等云云、天竺てんじくに仏法ぶつぽう無なき証文しやうもんなり漢土かんど

に於おいて高宗こうそう皇帝こうていの時とき北狄ほくてき東京とうきんを領りやうして今いまに一百五十ひゃくごじゅうご余年ねん・仏法ぶつぽう王法おうぽう共ともに尽つき了おわらんぬ、漢土かんどの大蔵だいざうの中ちゆうに小乘じょうじやう經きょうは一向いっこう之これ無なく大乘だいじやう經きょうは多分たぶん之これを失うしなす、日本にほんより寂照じやくしやう等ら少少せうせう之これを渡わたす然しかりと雖いえども伝持でんじの人ひと無なれば猶木石なほぼくせきの衣鉢いはつを帶持たいじせるが如ごとし、故ゆえに遵式じゆんしきの云いわく「始西なほより伝なほう猶月なほの生なずるが如ごとし今復東またより返かへる猶日なほの昇ある

るが如しごと」等云云、此等これらの釈しゃくの如ごとくんば天竺てんじく漢土かんどに於おいて佛法ぶつぽうを失せ
ること勿論もちろんなり、問うて云く月氏がつし漢土かんどに於おいて佛法ぶつぽう無きこと

は之これを知れり、東西北の三洲ぶつぽうに佛法ぶつぽう無き事は何を以て之これを知る、答

えて云く法華經いわの第八ほけきように云く「如来にやらいの滅後めつごに於おいて閻浮提えんぶだいの内に広

流布るせしめて断絶だんぜつせざらしめん」等云云、内の字あざは三洲さんしゅうを嫌きらう文な

り、問うて曰いわく仏記ぶつき

既すでに此かくの如ごとし汝なんじが未来記みらいき如何いかん、答えて曰いわく仏記ぶつきに順したがじて之これを

勘かんうるに既すでに後ご・五百歳ごひゃくざいの始あひあたに相当あてあれり佛法ぶつぽう必ず東土とうどの日本にほんより出

づべきなり、其その前相ぜんさう必ず正像しやうざうに超過ちやうかせる天変地天てんべんちちやう之これ有あるか、

所謂いわゆる仏生ぶつじやうの時とき・転法輪てんぽうりんの時とき・入涅槃ねはんの時とき・吉瑞きしゆざい凶瑞きゆうざい共に前後ぜんごに絶え

たる大瑞だいずいなり、仏ぶつは此これ聖人しやうにんの本もとなり 経經きやうきやうの文ぶんを見るみるに仏ぶつの御

誕生たんにしんの時ときは五色ごしきの光氣くわうき四方しやうほうに遍あまねくして夜よも昼ひるの如ごとし仏ぶつ御入滅にやうめつの時とき

には十二じふにの白虹はくこう・南北なんぼくに亘わたり大日輪だい にちりん光くわうり無なくして闇夜やみよの如ごとくなり

し、其その後正像しょうぞう二千年の間・内外ないげの聖人しょうにん・生滅しょうめつ有あれども此だいの大瑞だいずいには如しかず、而しかるに去いぬる正嘉年しょうか中

より今年ことしに至いたるまで・或あるは大地震だいじしん・或あるは大天変てんべん・宛あたかも仏陀ぶつだの

生滅しょうめつの時の如ことし、当まさに知るべし仏ぶつの如ことき聖人しょうにん生なれたまわんか、

大虚おほそらに亘わたつて大慧ほつきほし星出しんれつづ誰たれの王臣おうしんを以もつて之これに對たいせん、当瑞とうずい大地だいちを

傾動けいどうして三たび振裂しんれつす何いれの聖賢せいけんを以もつて之これに課おせん、当まさに知るべし

通途つうず世間せけんの吉凶きつきようの大瑞だいずいには非あらざるべし惟これ偏ひるえに此だいの大法興廢だいほうこうはいの

大瑞だいずいなり、天台てんだい云いく

「あめ雨の猛たけきを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを知る」等云云、妙樂みょうらくの云く「ちじん智人は起を知り蛇じゃは自ら蛇やを識しる」等云云、日蓮にちれん此の道理どうりを存して既すでに二十一年なり、日来ひごろの災・月来なんの難・此の両三年の間すての事既しに死罪しざいに及およばんとす今年・今月万が一も脱だつがれ難がたき身命しんみょうなり、世の人疑うたがいい有らば委細いさいの事は弟子でしに之これを問え、幸なるかな一生の内むしに無始むしの謗法ぼうぼうを消滅しょうめつせんことを悦よろこばしいかな未いまだ見聞けんもんせざる教主きょうしゅ釈尊しやくそんに侍つかえ奉たてまらんことよ、願ねがは我を損こくしゆずる国主こくしゆ等をば最初さいしよに之これを導みちびかん、我を扶たすくる弟子でし等をば釈尊しやくそんに之これを申もうさん、我を生なめる父母ふぼ等には未いまだ死せざる已前いぜんに此の大善だいぜんを進すすめん、但ただし今・夢ゆめの如ごとく宝塔品ほうたつじんの心こころを得えたり、此の経きやうに云いく「も若し須弥しゆみを接とつて他方たほうの無数むすうの仏土ぶつちに擲なげ置おかんも亦また未いまだ為難かたしとせず乃至な若し仏の滅後めつごに悪世あくせの中に於おいて能よく此の経きやうを説こかん是これ

すなわ 則ち為難しと等云云、伝教大師云く「浅きは易く深きは難しとは
しゃか 釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師
しゃか は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に
そうじょう 相承し法華宗を助けて日本に弘通すと等云云、安州の日蓮は恐くは
さんし 三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて
さんごくしし 三国四師と号く、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。
ぶんえい 文永十年太歳癸酉後・五月十一日 桑門日蓮之を記す

問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち
 妙法蓮華經の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も
 妙法の全体なりと云わる可きか、答う勿論なり經に云く「所謂
 諸法乃至本末究竟等」云云、妙樂大師釈して云く「實相は必ず諸法
 ・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」と云云、天台
 云く「十如十界三千の諸法は今經の正体なるのみ」云云、南岳大師
 云く「云何なるを名けて妙法蓮華經と為すや答う妙とは衆生妙な
 るが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に」云云、又天台釈して
 云く「衆生法妙」と云云。

問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因・

業果も皆是れ妙法の体なるや、答う法性の妙理に染淨の二法有
り染法は熏じて迷と成り淨法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり
迷は即ち衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の
一理なり、譬えば水精の玉の日輪に向えば火を取り月輪に向えば
水を取る玉の体

一なれども縁に隨て其の功同じからざるが如し、真如の妙理も亦復
かくのごとく是くの如し一妙真如の理なりと雖も惡縁に遇えば迷と成り善縁に
遇えば悟と成る悟は即ち法性なり迷は即ち無明なり、譬えば人夢
に種種の善惡の業を見夢覺めて後に之を思えば我が一心に見る所
の夢なるが如し、一心は法性真如の一理なり夢の善惡は迷悟の
無明法性なり、是くの如く意得れば惡迷の無明を捨て善悟の法性
を本と為す可きなり、大円覺・修多羅・了義經に云く「一切
諸の衆生の無始の幻無明は皆諸の如來の円覺の心従り建立す」云

云、天台大師の止觀に云く、「無明癡惑本是れ法性なり癡迷を以ての
故に法性變じて無明と作る」と云云、妙樂大師の釈に云く、「理性体無
し全く無明に依る無明体無し全く法性に依る」と云云、無明は所断の
迷・法性は所証の理なり何ぞ体一なりと云うやと云える不審を
ば此等

の文義を以て意得可きなり、大論九十五の夢の譬・天台一家の玉
 の譬・誠に面白く思うなり、正く無明法性其の体一なりと云う
 証拠は法華經に云く「是の法は法位に住して世間の相常住なり」
 云云、大論に云く「明と無明と異無く別無し是くの如く知るをば
 是を中道と名く」云云、但真如の妙理に染淨の二法有りと云う事
 証文之れ多し
 と雖も華嚴經に云く「心仏及衆生是三無差別」の文と法華經の
 諸法実相の文とは過ぐ可からざるなり南岳大師の云く「心体に
 染淨の二法を具足して而も異相無く一味平等なり」云云、又明鏡
 の譬・真実に一一なり委くは大乗止觀の積の如し又能き積には
 籤の六に云く「三千理に在れば同じく無明と名け三千果成すれば
 咸く常樂と称す三千改むること無ければ無明即明・三千並に常な
 れば俱体俱用なり」文、此の積分明なり。

問う一切衆生 皆悉く妙法蓮華經の当体ならば我等が如き愚癡

閻鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ多しと

雖も二人を出でず謂ゆる權教の人実教の人なり而も權教方便の

念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の

法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体 是なり涅槃經に

云く一切衆生

大乘を信ずる故に大乘の衆生と名く文、南岳大師の四安樂行に

云く大強精進經に云く衆生と如来と同共一法身にして清淨妙

無比なるを妙法華經と称す文、又云く法華經を修行するは此の

一心一學に衆果普く備わる一時に具足して次第入に非ず亦蓮華の

一華に衆果を一時に具足するが如し是を一乘の衆生の義と名く

文、又云く

一乘・声聞及び鈍根の菩薩は方便道の中の次第修學なり利根の

菩薩ぼさつは正直しやうじきに方便ほうべんを捨て次第行しだいを修しゆせず若もし法華三昧ほっけさんまいを証しすれば衆果しゆつか悉ことごとく具足ぐそくす是これを一乘いちじやうの衆生しゆじやうと名なく文ぶん、南岳なんがくの釈しゃくの意いは次第行しだいの三字さんじをば当世とうせの学者がくしやは別教べつきやうなりと料簡りやうけんす、然しかるに此この釈しゃくの意いは法華ほっけの因果具足いんがぐそくの道みちに對して方便道ほうべんを次第行しだいと云いう故ゆえに爾前にぜんの円えん・爾前にぜんの諸大乘しよだいじやうきやう經きやう並びに頓漸とんぜん大小だいしやうの諸經しよきやうなり証しやうこ拠こは無量義經むりやうぎきやうに云いく「次に方等ほうとう十二部經じふにぶきやう・摩訶般若まかはんにか・華嚴けごん海空かいくうを説といて菩薩ぼさつの歴劫修行りやくしゆじやうを宣說せんせつす」文ぶん、利根りこんの菩薩ぼさつは正直しやうじきに方便ほうべんを捨てて次第行しだいを修しゆせず若もし法華經ほっけきやうを証しする時は衆果しゆつか悉ことごとく

具足す是を一乗の衆生と名くるなり此等の文の意を案ずるに
さんじょう 三乗・五乘・七方便・九法界・四味三教・一切の凡聖等をば大乘の
しゅじょう みょうほうれんげ 衆生妙法蓮華の当体とは名く可からざるなり、設い仏なりと雖も
こんぎょう 權教の仏をば仏界の名言を付く可からず權教の三身は未だ無常
まぬか を免れざる故に何に況や其の余の界界の名言をや、故に正像二千
こくおう 年の国王・大臣より

も末法の非人は尊貴なりと釈するも此の意なり、南岳釈して云く
まつほう 一「一切衆生法身の蔵を具足して仏と一にして異り有ること無し」、
かくのゆえ 是の故に法華經に云く「父母・所生・清淨・常眼・耳・鼻・舌・身・意
またまたによぜ 亦復如是と文、又云く「問うて云く仏何れの經の中に眼等の諸根を
説いて名けて如来と為や、答えて云く大強精進經の中に衆生と
にょらい 如来と同じ

共に一法身にして清淨妙無比なるを妙法蓮華經と稱すと文、

他経たきように有りいとどと雖もくだし下文だきようしやうじんきよう顕あわれ已あわれば通ならじて引そうてん用すすることを得ほけきようるなり

り、大強精進だいぎやうしやうじんきよう経きようの同共なの二字ふどうに習ねんぶつい相すて伝ぶつしやうほっしんするなり法華ほけきよう経きように同共な

して信にやらいずる者そむは妙經みやうきようの体みなり不同共ふどうの念ねんぶつ仏すて者ぶつしやうほっしん等は既すに仏性ぶつしやうほっしん法身ほっしん

如来にやらいに背そむくが故ゆえに妙經みやうきようの体みに非あらざるなり、所詮しよせん妙法蓮華みやうほうれんげの当体とうたいと

は法華ほけきよう經きようを信ほずる

日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等の父母ふぼ所生しよしやうじの肉身こゝろ是これなり、正直しやうじきに方便ほうべんを捨すて

但法華ほけきよう經きようを信ほじ南無なむ妙法蓮華みやうほうれんげきよう經きようと唱となうる人ほんのうは煩悩ぼんのう・業ごう・苦くの三さん道だう

法身ほっしん・般若はんんにや・解脱げだつの三さん徳とくと転さんかんじて三觀さんたいそくいっしん・三諦さんたいそくいっしん即あ一心いっしんに顯あらわれ其その人の

所住しよじやうの処とこは常寂光土じやうじやうくわうどなり、能居のうこ・所居しよじやうこ・身土しんど・色心しきしん・俱体くたい俱用くたいくゆう・無作むさ

三身さんじんの本門ほんもん・寿量じゆりやうの当体とうたい蓮華れんげの仏ぶつとは日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等なの中ちゆうの事こと

なり是これ即すなわち法華ほっけの当体とうたい自在じざい神力じんりきの顯あらわす所ところの功能くんのうなり敢あえてて之これを

疑うたがう可べからず之これを疑うたがう可べからず、問てんだいだいしう天台大師みやうほうれんげ・妙法蓮華みやうほうれんげの

当体とうたい・譬喩ひゆの二義にぎを積しゃくし給たまえり爾しかれば其その当体とうたい・譬喩ひゆの蓮華れんげの様ようは

如何、いかに答う譬喻ひゆの蓮華れんげとは施開廢せかいはいの三積委くわしく之これを見るべし、
当体蓮華とうたいれんげの積げんぎは玄義第七げんぎに云く「蓮華れんげは譬えたとに非ず当体とうたいに名を得類とくろい
せば劫初こつしよに万物名無し聖人しょうにん。理かんを觀じて準則じゆんそくして名を作るが如し」
文、又云く「今蓮華れんげの称こは是れたとえ喻かを仮あらるに非ず乃すなわち是れ法華ほつげの
法門ほつもんなり法華ほつげの法門ほつもんは清淨しよじよにして因果微妙いんがみみよなれば此ほつもんの法門ほつもんを名
けて蓮華れんげと為す即すなわち是れ法華ほつげ三昧さんまいの当体とうたいの名にして譬喻ひゆに非あらざる
なり」又云く「問う蓮華れんげ定めて是れ法華ほつげ三昧さんまいの蓮華れんげなりや定めて
是れ華草けそうの蓮華れんげなりや、答う定めて是れ法蓮華ほうれんげ

なり法蓮華解し難し故に草花を喩と為す利根は名に即して理を
解し譬喩を仮らず但法華の解を作す中下は未だ悟らず譬を須いて
乃ち知る易解の蓮華を以て難解の蓮華に喩う、故に三周の説法有つ
て上中下根に逗う上根に約すれば是れ法の名・中下に約すれば
是れ譬の名なり三根合論し雙べて法譬を標す是くの如く解する者
は誰とか
争うことを為さんやと云云、此の釈の意は至理は名無し聖人・理を
観じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法之れ有り之を
名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を
具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果同時に之を得るな
り、聖人・此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・俱時
に感得し給うが故に妙覺果満の如來と成り給いしなり、故に伝教
大師云く「一心の妙法蓮華とは因華・果台・俱時に增長す三周各各

とうたい 譬喩有り、総じて一經に皆当体・譬喩あり別して七譬・三
びょうぼう 平等・十無上の法門有りて皆当体蓮華有るなり、此の理を詮ずる
みょうぼうれんげきょう 教を名けて妙法蓮華經と為す云云、妙樂大師の云く「須く七譬を
もつ 以て各蓮華樞実の義に対すべし 何者蓮華は只是れ為實施樞
かいこんけんじつ 開権顕実七譬皆然なり」文、又劫初に華草有り聖人・理を見て号し
れんげ なす て蓮華と名く

けそう いんがくじ 此の華草・因果俱時なること妙法蓮華に似たり故に此の華草同じく
れんげ なす 蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の蓮華是なり、
ひゆ りんげ 譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の
みょうぼうれんげ みょうぼう 妙法蓮華を顕す天台大師の妙法は解し難し譬を仮りて顕れ易し
しやく と釈するは是の意なり。

こつしょ このかた 問う劫初より已來何人が当体の蓮華を証得せしや、答う釈尊・
ごひやくじんでんこう そのかみ 五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に

成道じやうだうを唱となえ能証のうじやう・所証しよじやうの本理ほんりを顕あらわし給たまえり、今日きよう又また・中天竺てんじく・

摩訶陀国まかたこくに出世しゅつせして此こゝの蓮華れんげを顕あらわさんと欲ほすに機き無く時とき無し

故ゆゑに一法いちぽうの蓮華れんげに於おいて三さんの草華そうけを分別ぶんべつし三乘さんじやうの權法ごんぽうを施ほどこし擬宣ぎぎ

誘引ゆういんせしこと四十余年よんじゅうよねんな

り、此こゝの間まは衆生しゆじやうの根性こんじやう万差ばんさなれば種種しゆじゆの草華そうけを施ほどこし設たてけて終ついに

妙法蓮華みやうほうれんげを施ほどこしたまわざる故ゆゑに、無量義經むりやうぎぎやうに云いく「我先われに道場どうじやう

菩提樹下ぼだいじゆげ乃至ないし四十余年よんじゅうよねん未いまだ真実しんじつを顕あらわさず「文ぶん、法華經ほけきやうに至いたつて

四味三教しみさんきやうの方便ほうべんの權教ごんきやう・小乘しよじゆ・種種しゆじゆ

の草華を捨てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の妙法蓮華を顕す時、四味三教の権人に初住の蓮華を授けしより始めて開近顕遠の蓮華に至つて二住・三住・乃至・十住・等覚・妙覚の極果の蓮華を得るなり。

問う法華經は何れの品何れの文にか正しく当体・譬喩の蓮華を説き分けたるや、答う若し三周の声聞に約して之を論ぜば方便の一品は皆是当体蓮華を説けるなり、譬喩品・化城喩品には譬喩蓮華を説きしなり、但方便品にも譬喩蓮華無きに非ず余品にも当体蓮華無きに非ざるなり、問う若し爾らば正しく当体蓮華を説きし文は何れぞや答う方便品の諸法実相の文是なり、問う何を以て此の文が当体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、答う天台・妙楽今の文を引て今經の体を釈せし故なり、又伝教大師釈して云く「問う法華經は何を以て体と為すや、答う諸法実相を以て体と

な
為す「文、此の積分ぶんみょう明みやうなりに此の文の名を妙法蓮華と曰う義なり、又現証げんじょうは
ほうとうほん さんじんこ げんじょう
宝塔品の三身是れ現証

なり、或あるは涌出ゆじゆつの菩薩ぼさつ竜女りゆうにょの即身成仏そくしんじょうぶつ是これなり、地涌じゆの菩薩ぼさつを
げんじょう な
現証げんじょうと為す事は経文きやうもんに如蓮華にょれんげ在水ざいすいと云う故ななり、菩薩ぼさつの当体とうたいと聞
りゆうにょ しょうこ な
たり竜女りゆうにょを証拠しょうこと為す事は靈鷲山りやうじゆせんに詣もつで千葉ちぢばの蓮華れんげの大いさ車
輪この如ごとくなるに坐ましと説とき

たまう故ななり、又妙音みやうおん・観音かんのんの三十三・四身しよんなり是これをば解釈げしやくには
ほっけさんまい ふしぎ 自在じざいの業しよくを証得しよくとくするに非あらざるよりは安いずくぞ能よく
法華三昧ほつげさんまいの不思議ふしぎ・自在じざいの業しよくを証得しよくとくするに非あらざるよりは安いずくぞ能よく
此この三十三身さんじんを現げんぜんと云云うんうん、或あるは「世間相常住せけんじやうじゆう」文ぶん、此等こゝらは皆みな
とうせ がくしゃ かんもん しか いかど にちれん ほうべん じんりきほん
当世とうせの学者がくしゃの勸文かんもんなり、然しかりと雖いえども日蓮にちれんは方便品ほうべんの文ぶんと神力品じんりきほんの
にょらい いたさい しやう
如来にょらい・一切所有いっさいしやう之法等しやくの文ぶんとなり、此この文ぶんをば天台大師てんだいだいしも之これを引
こんきやう こじゆうげん しゃく ことさら
て今經こんきやうの五重玄ごじゆうげんを釈しゃくせしなり、殊更ことさら此この一文いっもん正ただしき証文しやうもんなり。

問つぎう次上つぎに引く所もんしやうの文証げんじょう・現証げんじょう・殊勝しゆじやうなり何なんぞ神力じんりきの一文いっもんに

執するや、答う此の一文は深意有る故に殊更に吉なり、問う其の
深意如何、答う此の文は釈尊・本眷属地涌の菩薩に結要の五字の
当体を付属すと説きたまえる文なる故なり、久遠実成の釈迦如来
は我が昔の所願の如き今は已に満足す、一切衆生を化して皆仏道
に入ら令むとて御願已に満足し、如来の滅後・後・五百歳中・広宣
流布の付属を説かんが為地涌の菩薩を召し出し本門の当体蓮華を
要を以て付属し給える文なれば釈尊出世の本懐・道場所得の秘法
末法の我等が現当二世を成就する当体蓮華の誠証は此の文な
り、故に末法今時に於て如来の御使より外に当体蓮華の証文を知
つて出す人都て有る可からざるなり真実以て秘文なり真実以て
大事なり真実以て尊きなり、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經
爾前の円の菩薩等の今經に大衆八万有つて
具足の道を聞かんと欲す云云、是なり、問う当流の法門の意は諸宗の人來つて
とうたいれんげ
当体蓮華の証文を問わん時は法華經何れの文を出す可きや、答う

二十八品の始に妙法蓮華經と題す此の文を出す可きなり、問う何
 を以て品品の題目は当体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、
 故は天台大師・今經の首題を釈する時・蓮華とは譬喩を挙ぐると
 云つて譬喩蓮華と釈し給える者をや、答う題目の蓮華は当体・譬喩
 を合説す天台の今の釈は譬喩の辺を釈する時の釈なり、玄文第一
 の本・迹の六譬は此の意なり同じく第七は当体の辺を釈するなり、
 故に天台は題目の蓮華を以て当体・譬喩の両説を釈する故に失無
 し、問う何を以て題目の蓮華は当体・譬喩合説すと云う事を知るこ
 とを得んや、南岳大師も妙法蓮華經の五字を釈する時「妙とは
 衆生妙なるに故に法とは衆生法なる故に蓮華とは是れ譬喩を借る
 なり」文、南岳・天台の釈既に譬喩蓮華なりと釈し給う如何、答う
 南岳の釈も天台の釈の如し云云、但当体・譬喩合説すと云う事
 經文分明ならずと雖も南岳・天台既に天親・竜樹の論に依て合説

の意を判釈せり、所謂法華論に云く「妙法蓮華とは二種の義有り一
 には出水の義、乃至泥水を出るをば諸の声聞・如来大衆の中に入
 つて坐し諸の菩薩の如く蓮華の上に坐して如来・無上智慧・清淨の
 境界を説くを聞いて如来の密蔵を証するを喩うるが故に二に
 華開とは諸の衆生・大乘の中に於て其心怯弱にして信を生ずるこ
 と能わず故に如来の淨妙法身を開示して信心を生ぜしめんが故
 なり」文、諸の菩薩の諸の字は法華已前の大小の諸菩薩・法華經に
 来つて仏の蓮華を得ると云う事・法華論の文分・明なり、故に知ぬ
 菩薩処処得入とは方便なり、天台此の論の文を釈して云く今論の
 意を解せば若し衆生をして淨妙法身を見せしむと言わば此れ
 妙因の開發するを以つて蓮華と爲るなり、若し如来大衆に入るに
 蓮華の上に坐すと言わば此は妙報の国土を以て蓮華と爲るなり、
 又天台が当体・譬喩合説する様を委細に釈し給う時大集經の我今・

仏の蓮華を敬礼すと云う文と法華論の今の文とを引証して釈して
云く「若し大集に依れば行法の因果を蓮華と為す菩薩上に処すれ
ば即ち是れ因の華なり仏の蓮華を礼すれば即ち是れ果の華なり、
若し法華論に依れば依報
の国土を以て蓮華と為す復菩薩・蓮華の行を修するに由つて報・
蓮華の国土を得・当に知るべし依正因果悉く是れ蓮華の法なり、
何ぞ譬をもつて顯すことをもちいん鈍人の法性の蓮華を解せざる
為の故に世の華を挙げて譬と為す亦何の妨げかあるべき」文、又
云く若し蓮華に非んば何に由つて遍く上来の諸法を喩えん法譬
雙べ弁ずる故に
妙法蓮華と稱するなり、次に竜樹菩薩の大論に云く「蓮華とは法譬
並びに挙ぐるなり」文、伝教大師が天親・竜樹の二論の文を釈して
云く「論の文但妙法蓮華經と名くるに二種の義あり唯蓮華に二種

の義有りおもと謂おもうには非あらず、凡およそ法ほう喻ゆとは相あい似にたるを好なしと為なす
若もし相あい似にずんば何もつを以もつてか他たを解げせしめん、是かくのゆえの故ゆえに釈しゃく論ろんに法ほう喻ゆ

並ならび

挙あぐ一いっしん心の妙みょう法ほう蓮れん華げは因いん華が・果か台だい・俱ぐ時じに増ぞう長ちようす此この義ぎ解げし難がたし

喻たとえを仮たれば解げし易やすし此この理り教きやうを詮せんずるを名なけて妙みょう法ほう蓮れん華げ經きやうと

為なすこ文ぶん、此これら等らの論ろん文ぶん釈しゃく義ぎ分ぶん明みやうなり文ぶんに在あつて見みる可べし包ほう蔵ぞうせざる

が故ゆえに合あ説せつの義ぎ・極ごく成じやうせり、凡およそ法ほう華け經きやうの意いは譬ひ喻ゆ即そく法ほう体たい・法ほう体たい即そく

譬ひ喻ゆなり、故ゆえに伝でん教きやう大だい師し釈しゃくして云いく、今こん經きやうは譬ひ喻ゆ多たしと雖いえども大だい喻ゆ

は是これ七しち喻ゆなり

此この七しち喻ゆは即すなわち法ほう体たい法ほう体たいは即すなわち譬ひ喻ゆなり、故ゆえに譬ひ喻ゆの外ほかに法ほう体たい

無なく法ほう体たいの外ほかに譬ひ喻ゆ無なし、但ただし法ほう体たいとは法ほう性じやうの理り体たいなり譬ひ喻ゆとは

即すなわち妙みょう法ほうの事じ相さうの体たいなり事じ相さう即そく理り体たいなり理り体たい即そく事じ相さうなり故ゆえに法ほう譬び

一いつ体たいとは云いうなり、是これを以もつて論ろん文ぶん山さん家かの釈しゃくに皆みな蓮れん華げを釈しゃくするには

法譬並べ拳ぐ等云云、釈の意分明なる故重ねて云わず。

門う如来の在世に誰か当体の蓮華を証得せるや、答う四味三教

の時は三乗・五乗・七方便・九法界・帯権の円の菩薩並びに教主

乃至法華迹門の教主総じて本門寿量の教主を除くの外は本門の

当体蓮華の名をも聞かず何に況んや証得せんをや、開三顯一の

無上菩提の蓮華尚四十余年には之を顯さず、故に無量義經に

終不得成・無上菩提とて迹門開三顯一の蓮華は爾前に之を説かず

と云うなり、何に況んや開近顯遠・本地難思・境智冥合・本有無作

の当体蓮華をば迹化弥勒等之を知る可きや、問う何を以て爾前の

円の菩薩・迹門の円の菩薩は本門の当体蓮華を証得せずと云う事

を知ることを得ん、答う爾前の円の菩薩は迹門の蓮華を知らず

迹門の円の菩薩は本門の蓮華を知ら

ざるなり、天台云く「権教の補処は迹化の衆を知らず迹化の衆は

ほんげ 本化の衆を知らず「文、伝教大師云く「是直道なりと雖も大直道ならず」云云、或は云く「いま未だ菩提の大直道を知らざるが故に」云云

此の意なり、爾前・迹門

の菩薩は一分断惑証理の義分有りと雖も本門に対するの時は当分の断惑にして跨節の断惑に非ず未断惑と云わるるなり、然れば

菩薩処得入と釈すれども二乗を嫌うの時一往得入の名を与うるなり、故に爾前・迹門の大菩薩が仏の蓮華を証得する事は本門

の時なり真実の断惑は寿量の一品を聞きし時なり、天台大師

涌出品の五十小劫・仏

の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむの文を釈して

云く「解者は短に即して長・五十小劫と見る惑者は長に即して短・半

日の如しと謂えり」文、妙樂之を受けて釈して云く「菩薩已に無明

を破す之を称して解と為す大衆仍お賢位に居す之を名けて惑と

な
為す^レ文、釈の意分明なり爾前・迹門の菩薩は惑者なり地涌の
菩薩のみ独り

解者なりと云う事なり、然るに当世天台宗の人の中に本・迹の同異

を論ずる時異り無しと云つて此の文を料簡するに解者の中に迹化

の衆入りたりと云うは大なる僻見なり經の文釈の義分明なり

何ぞ横計を為す可けんや、文の如きは地涌の菩薩・五十小劫の間

如来を称揚するを靈山迹化の衆は半日の如く謂えりと説き給え

るを天台は

解者惑者を出して迹化の衆は惑者の故に半日と思えり是れ即ち

僻見なり、地涌の菩薩は解者の故に五十小劫と見る是れ即ち正見

なりと釈し給えるなり、妙樂之を受けて無明を破する菩薩は解者

なり未だ無明を破せざる菩薩は惑者なりと釈し給いし事文に在つ

て分明なり、迹化の菩薩なりとも住上の菩薩は已に無明を破する

菩薩なりと云わん学者は無得道の諸経を有得道と習いし故なり、
爾前・迹門の当分に妙覺の位有りと雖も本門寿量の真仏に望むる
時は惑者仍お賢位に居ると云わるる者なり權教の三身未だ無常を
免れざる故は夢中の虚仏なるが故なり、爾前と迹化の衆とは未だ
本門に至らざる時は未断惑の者と云われ彼に至る時正しく初住に
叶うなり、妙樂の釈に云く「開迹顯本皆初住に入る」と文、仍賢位に
居すの釈之を思い合すべし、爾前迹化の衆は惑者未だ無明を破せ
ざる仏・菩薩なりと云う事真實なり真實なり、故に知ぬ本門寿量
の説顯れての後は靈山一会の衆皆悉く当体蓮華を証得せしな
り、二乘・闡提・定性・女人・惡人等も本仏の蓮華を証得するな
り、伝教大師一大事の蓮華を釈して
云く「法華の肝心一大事の因縁は蓮華の所顯なり、一とは一実相な
り大とは性広博なり事とは法性の事なり一究竟事は円の理教・

智行、円の身。若・達なり一乘・三乘・定性・不定性・内道・外道。
阿闍・阿顛・皆悉く一切智地に到る是の一大事仏の知見を開示し
悟入して一切成仏す女人・闍提・定性・二乗等の極悪人靈山に
於て当体蓮華を証得するを云うなり。

問う末法今時誰れ人か当体蓮華を証得せるや、答う当世の体を
見るに大阿鼻地獄の当体を証得する人之れ多しと雖も仏の蓮華を
証得せるの人之れ無し其の故は無得道の権教方便を信仰して
法華の当体真実の蓮華を毀謗する故なり、仏説いて云く「若し人信
ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至其の
人命終して
阿鼻獄に入らん」文、天台云く「此の経は六道の仏種を開く若
此の経を謗せば義断ずるに当るなり」文、日蓮云く此の経は是れ
十界の仏種に通ず若し此の経を謗せば義是れ十界の仏種を断ずる

に当る是の人無間に於て決定して墮在す何ぞ出ざる期を得んや、
然るに日蓮が一門は正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直
に正法・正師

の正義を信ずる故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を
あらわ顯す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱う
るが故なり、問う南岳・天台・伝教等の大師・法華經に依つて一乘
円宗の教法を弘通し給うと雖も未だ南無妙法蓮華經と唱えたま
わざるは如何、若し爾らば此の大師等は未だ当体蓮華を知らず又
証得したまわずと云うべきや、答う南岳大師は觀音の化身・
天台大師は薬王の化身なり等云云、若し爾らば靈山に於て本門
寿量の説を聞きし時は之を証得すと雖も在生の時は妙法流布の
時に非ず、故に妙法の名字を替えて止觀と号し一念三・千一心三觀
を修し給いしなり、但し此等の大師等も南無妙法蓮華經と唱うる

事を自行真実の内証と思食され

しなり、南岳大師の法華懺法に云く「南無妙法蓮華經」文、

天台大師の云く「南無平等大慧一乘・妙法蓮華經」文、又云く

「稽首妙法蓮華經」云云、又「歸命妙法蓮華經」云云、伝教大師の

最後臨終の十生願の記に云く「南無妙法蓮華經」云云、問う文証

分明なり何ぞ是くの如く弘通したまわざるや、答う此れに於て二

意有り一には時の

至らざるが故に二には付屬に非ざるが故なり、凡そ妙法の五字は

末法流布の大白法なり地涌千界の大士の付屬なり是の故に南岳・

天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲りて弘通し給わざ

りしなり。

問う当体の蓮華解し難し故に譬喩を仮りて之を顯すとば経文に
 証拠有るか、答う経に云く「世間の法に染まらざること蓮華の水に
 在るが如し地より而も涌出す」云云、地涌の菩薩の当体蓮華なり、
 譬喩は知るべし以上後日に之を改め書すべし、此の法門は妙経
 所詮の理にして釈迦如来の御本懐地涌の大士に付属せる末法に
 弘通せん経の肝心なり、国主信心あらん後始めて之を申す可き
 秘蔵の法門なり、日蓮最蓮房に伝え畢んぬ。

日蓮

花押

七一 小乘大乘分別抄 文永十年 五十二歳御作 与

ときじょうにん
富木常忍

520P

夫れ小大定めなし一寸の物を一尺の物に對しては小と云い五尺

の男に對しては六尺七尺の男を大の男と云う、外道の法に對しては

一切の大小の仏教を皆大乘と云う大法東漸通指仏教以為大法等

と釈する是なり、仏教に入つても鹿苑十二年の説・四阿含經等の

一切の小乘經をば諸大乘經に對して小乘經と名けたり、又

諸大乘經には大乘

の中にとりて劣る教を小乗と云う華嚴の大乗經に其餘樂小法

と申す文あり、天台大師はこの小法といふは常の小乘經にはあら

ず十地の大法に對して十住・十行・十回向の大法を下して小法と

名くと釈し給へり、又法華經第一の卷方便品に若以小乘化乃至

おいちにん もつ
於一人と申す文あり天台・妙楽は阿含経を小乗と云うのみにあ
らず華嚴経の別教・方等・般若の通別の大乗をも小乗と定め
給う、又玄義の第一に会小帰大、是漸頓混合と申す釈をば智証大師
は

初め華嚴経より終り般若経にいたるまで四教八教の權教諸
大乘経を漸頓と釈す混合とは八教を会して一大円教に合すとこ
そことはられて候へ又法華経の寿量品に樂於小法・徳薄垢重者と

申す文あり、天台大師は此経文に小法と云うは小乗経にもあら
ず又諸大乘経にもあらず久遠実成を説かざる華嚴経の円・乃至

方等・般若・法華経の迹門十四品の円頓の大法まで小乗の法な
り、又華嚴経等の諸大乘経の教主の法身・報身・毘盧遮那・盧舍那

・大日如来等をも小仏なりと釈し給ふ、此の心ならば涅槃経・
大日経等の一切の大小・権実・顕密の諸経は皆小乗経 八宗の

中には俱舍宗・成実宗・律宗を小乗と云うのみならず華嚴宗・
法相宗・三論宗・真言宗等の諸大乘宗を小乗宗として唯天台の
一宗計り実大乘宗なるべし、彼彼の大乗宗の所依の経經には絶
えて二乗作仏・久遠実成の最大の法をとかせ給はず、譬えば一尺二
尺の石を持つ者をば大力といはず一丈二丈の石を持つを大力と云
うが如し、華嚴經の法界・円融

四十一位・般若經の混同無二・十八空・乾慧地等の十地・瓔珞經の五十二位・仁王經の五十一位・藥師經の十二の大願・雙觀經の四十八願・大日經の眞言・印契等此等は 小乘經 に対すれば大法秘法なり、法華經の二乗作仏・久遠実成 に対すれば 小乘の法なり、一尺二尺を一丈二丈に對するが如し、又二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用にして諸經に

對すれば奇たりと云へども法華經の中にてはいまだ奇妙ならず
いちねんさんぜん もう ほうもん
一念三千と申す法門こそ奇が中の奇・妙が中の妙にて華嚴・大日經
等に分絶たるのみならず、八宗の祖師の中にも眞言等の七宗の
にんし
人師・名をだにもしらず天竺の大論師竜樹菩薩・天親菩薩は内には
たま
珠を含み外には書きあらはし給はざりし法門なり、雨衆が三徳・
べいさい
米斉が六句の先仏の

教を盗みとれる様に華嚴宗の澄觀・眞言宗の善無畏等は天台大師

いちねんさんぜん ほうもん
の一念三千の法門を盗み取って我が所依の經の心仏及衆生の文の
じつそう とう
心とし心実相と申す文の神とせるなり、かくのごとく盗み取って
たまし
我が宗の規模となせるが又還つて天台宗を下し華嚴宗・真言宗に
おと かも
は劣れる法なりと申す、此等の入師は世間の盗人にはあらねども
ぶつぼう むすびと
仏法の盗人なるべし、此等をよくよく尋ね明むべし。
たず あきら

せけん てんだいしゅう
又世間の天台宗の学者並びに諸宗の人人の云く法華經は但二乗
さぶつ くおんじつじょうばか
作仏・久遠実成計りなり等云云、今反詰して云く汝等が承伏に付
にじょう さぶつ くおんじつじょうばか
いて但二乗作仏と久遠実成計り法華經にかぎつて諸經になくば
こ
此れなりとも豈奇が中の奇にあらずや、一乗作仏・諸經になくば仏
おんでし ず だ だいいち かしょう ちえ だいいち しゃりほつ じんつう だいいち もくれん
の御弟子・頭陀第一の迦葉・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等
でし
の十大弟子・
らかん
千二百の羅漢・万二千の声聞・無数億の二乗界・過去遠劫より
しゅうもん しょうもん じじょう
みらい むしゅじょう ほうききょう あ にかじょう
未来無数劫にいたるまで法華經に値いたてまつらずば永く色心俱に
しきしんとも

滅して永不成仏の者となるべし豈大なる失にあらざや、又二乗界・
仏にならずば迦葉等を供養せし梵天・帝釈・四衆・八部・比丘・
比丘尼等の二界・八番の衆はいかんがあるべき、又久遠実成が此の
経に限ら

ずんば三世の諸仏・無常遷滅の法に墮しなん、譬えば天に諸星あり
とも日月ましまさずんば、いかんがせん地に草木ありとも大地なく
ばいかんがせん、是は汝が承伏に付いての義なり実をもつて勘へ
申さば二乗作仏なきなら

ば九界の衆生・仏になるべからず、法華經の心は法爾のことはりとして一切衆生に十界を具足せり、譬えば人・一人は必ず四大を以てつくれり一大かけなば人にあらじ、一切衆生のみならず十界の依正の二法非情の草木一微塵にいたるまで皆十界を具足せり、二乗界・仏にならずば余界の中の二乗界も仏になるべからず又余界の中の二乗界

仏にならずば余界の八界仏になるべからず、譬えば父母ともに持ちたる者兄弟九人あらんか一人は凡下の者と定められば余の七人も必ず凡下の者となるべし、仏と經とは父母の如し九界の衆生は實子なり声聞・縁覺

の二人・永不成仏の者となるならば菩薩・六凡の七人あに得道をゆるさるべきや、今此の三界は皆是我が有なり其の中の衆生は悉く是吾子なり乃至唯我一人的み能く救護を為すの文をもつて知るべ

し、又菩薩と申すは必ず四弘誓願をおこす第一衆生無辺誓願度の願・成就せずば第四の無上菩提誓願証の願も成就すべからず、前四味の諸経

にては菩薩・凡夫は仏になるべし二乗は永く仏になるべからず等云、而るをかしこげなる菩薩もはかなげなる六凡も共に思へり我等・仏になるべし二乗は仏にならざれば・かしこくして彼の道には入ざりけると思ふ、二乗はなげきをいたき此の道には入るまじかりし者と恐れかなしみしが今法華經にして二乗を仏になし給へる時二乗・仏になるのみならずかの九界の成仏をも・ときあらはし給へり、諸の菩薩・此の法門を聞いて思はく我等が思ひは・はかなかりけり爾前の經經にして二乗・仏にならずば我等もなるまじかりける者なり、二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあらざりけり我等も同じなげきにてありけりと心うるなり。

又じゆりようぼん 寿量品の久遠くおんじつじょう 実成にぜん が爾前きよつぎよう の經經てんが になき事を以て思ふに爾前にぜん には久遠くおんじつじょう 実成だいいち なきのみならずだいいち 仏は天下てんが 第一だいいち の大妄語もうご の人なるべし、
爾前にぜん の大乘だいじよう 第一だいいち たる華嚴經けこんきよう ・大日經だいにちきよう 等に始めて正覺しやうかく を成じ我昔にぜん 道場だうじやう に坐す等云云、眞實しんじつじんじん 甚深しやうじきしやほうへん 正直捨方便むりようぎきよう の無量義經ほけきよう と法華經しやくもん の迹門じやくもん には我先どうじやう に道場どうじやう にして・我始め道場どうじやう に坐すと説れたり、此等これら の經文きんぶん は寿量品じゆりようぼん の然しか るに我實じじつ に成仏じやうぶつ してより已來このかた 無量無辺むりようむへん なりの文より思い見ればもうご あに大妄語もうご にあらずや、仏の一身いつしん ずで

に大妄語おほむじごの身なり一身に備えたる六根ろくこんの諸法しよほうにあ実なるべきや、大

冰こほりの上に造れる諸舎しよしゃは春をむかへては破れわざるべしや水中の満月まんげつは

実に体ありや、爾前にぜんの成仏じやうぶつ往生等じやうじやうは水中の星月の如し爾前にぜんの成仏じやうぶつ

往生等おうじやうは体に随ふ影かげの如し、本門ほんもん寿量品じゆりやうぼんをもつて見れば寿量品じゆりやうぼん

の智慧ちえをはなれては諸経しよきやうは跨節かせつ当分の得道とくどう共に有名無実ゆうめいむじつなり、

天台大師てんだいだいし此の法門ほうもんを道場どうじやうにして独り覚知ひとかくちし玄義げんぎ十卷もんく・文句もんく十卷もんく・

止観しかん十卷等しよきやうかきつけ給うたまに諸経しよきやうに二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじやう絶えてなき

由よしを書きたまをき給ふたま、是は南北なんぼくの十師じゆしが教相きやうそうに迷つて三時さんじ・四時しじ・五

時し・四宗しよしゆ・五宗ごしゆ・六宗ろくしゆ・一音いちおん・半滿はんまん・三教さんきやう・四教等しきやうを立てて教の浅深せんじん

勝劣しやうれつに迷いまよし此等これらの非義ひぎを破らんが為ためにまず眼前がんぜんたる二乗作仏にじやうさぶつ・

久遠実成くおんじつじやうを

もつて諸経しよきやうの勝劣しやうれつを定め給いたましなり、然りと云つて余界よかいの得道とくどうを

ゆるすにはあらず、其その後華嚴宗けこんしゆの五教ごきやう・法相宗ほふさうしゆの三時さんじ真言宗しんこんしゆの

けんみつ 頭密五蔵 十住 心義釈の四句等は南三・北七の十師の義よりも尚
あやま れる 教相なり。

これら 此等は他師の事なればさてをきぬ又自宗の学者が天台・妙楽・

伝 教大師の御釈に迷うて爾前の 経経 には二乗作仏・久遠実成

計りこそ無けれども余界の得道は有りなんと申す人人・一人・二人

ならず日本国に弘まれり、他宗の人人是に便を得て弥 天台宗を

失ふ此等の学者は譬えば野馬の蜘蛛の網にかかり渴る鹿の陽炎を

おふよりもはか

なし例せば頼朝の右大將家は泰衡を討たんが為に泰衡を誑して

義経を討たせ、太政入道清盛は源氏を喪して世をとらんが為に我

が伯父平馬介忠正を切る義朝はたばらかされて慈父為義を切るが

如し、此等は墓なき人人のためしなり、天台大師・法華経より外の

経経 には二乗作仏・久遠実成は絶えてなしなんと釈し給へば菩薩

の作仏さぶつ・

凡夫ほんぶの往生おうじょうはあるなんめりとうち思われらいて我等にじょうは一乗いちじょうにもあらざれば爾前にぜんの経経ききんにても得道とくたうなるべし此おもの念しんい心中しんちゅうにさしはさめり、
其その中なかにも観經かんきんの九品往生おうじょうはねがひやすき事ことなれば法華經ほけきょうをば
なげすて念仏ねんぶつ申まをして浄土じょうどに生なれて観音かんのん・勢至せいし・阿彌陀仏あみだぶつに値あいたて
まつて成仏じふつを遂とぐべし云云とんげん、当世とうせの天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとを始はじとして諸宗しよしゅう
の学者がくしゃ皆みな此ことの如ごとし実義じつぎをもつて申まをさば一切衆生いっさいしゆじょうの成仏じふつのみなら
ず六道ろくどうを出いで十方じふぱうの浄土じょうどに往生おうじょうする事はかならず法華經ほけきょうの

力なり、例せば日本国の人・唐土の内裏に入らん事は必ず日本の
こくおう 国王の勅定ちようくじよう によるべきが如し穢土えどを離れて浄土じようどに入る事は必ず
ほけきよう 法華經の力なるべし、例せば民の女むすめ・乃至閼白ないしかんぱく・大臣だいじんの女むすめに至るま
だいおう で大王の種くだを下せば其その産る子王となりぬ、大王だいおうの女むすめなれども
しんか 臣下の種かいにんを懷妊そせば其の子王とならざるが如し、十方じゆっぽうの浄土じようどに生
 るる者は三乗・
にんてん 人天・畜生等ちくじようまでも皆王みなの種姓すじようと成つて生るべし皆仏みなとなるべきが
 故なり、阿含經あこんきようは民の女むすめの民を夫とし華嚴けこん・方等ほうとう・般若等はんにかは臣の
むすめ 女の臣むすめを夫とせるが如し、又華嚴經けこんきよう・方等ほうとう・般若はんにか・大日經等だいにちきようの
えんきよう 円教ぼさつの菩薩等だいおうは大王の女むすめの臣下しんかを夫とせるが如し、皆浄土みなじようどに生る
 べき法にはあらず、又華嚴けこん・阿含あこん・方等ほうとう・般若等はんにかの經經きようきようの間に六道ろくどう
 を出づる人あり
 是は彼彼かれがれの經經きようきようの力には非あらず過去かこに法華經ほけきようの種を殖えたりし人

げんざい ほけきょう
現在に法華經を待たずして機すむ故に爾前の經經を縁として
かこ ほけきょう
過去の法華經の種を發得して成仏往生をとぐるなり、例せば縁覺
むぶっせ
の無仏世にして飛花落葉を觀じて獨覺の菩提を証し孝養父母の者
ほんてん
の梵天に生るるが如し飛花落葉孝養父母等は獨覺と梵天との修因
には

あらねどもかれを縁として過去の修因を引きおこし彼の天に生じ
どっかく ぼだい
獨覺の菩提を証す、而るに尚過去に小乗の三賢四善根にも入らず
うろ ぜんじゆう
有漏の禪定をも修せざる者は月を觀じ花を詠じ孝養父母の善を
しゆう
修すれども獨覺ともならず色天にも生ぜず、過去に法華經の種を
うえ
殖ざる人は華嚴經の席に侍りしかども初地・初住にものぼらず、
ろくおんせつきょう
鹿苑説教

みぎり
の砌にても見思をも断せず觀經等にても九品の往生をもとげ
だいしゅう
ず、但大小の賢位のみに入つて聖位にはのぼらずして法華經に来つ

て始めて仏種ぶつしゆを心田こたに下くだして一生しよじに初地しよじゆつ・初住しよじゆつ等に登のぼる者ものもあり、
又涅槃ねはんの座ざへさがり乃ない至滅しめつ後ご未來みらいまでゆく人もあり、過去かこに法華經ほけきやう
の種しよごゆりを殖ひとびとたる人人ひとびとは結縁けちえんの厚薄こうはくに随したがつて華嚴經けこんきやうを縁しよじとして初地しよじ・
初住しよごゆりに登のぼる人もあり、阿含經あこんきやうを縁しよじとして見思けんじを断きじて二乘にじやうと成なる
者ものもあり、觀經かんきやう等の九品くこの行業げんごうを縁しよじとして往生おうじやうする者もの
もあり、方等ほうとう・般若はんんにやも此これをもつて知んぬべし、此等これらは彼彼かれがれの經經きやうきやう
の力ちからにはあらず偏ひろえに法華經ほけきやうの力ちからなり譬たとえば民たみの女むすめに王わうの種くたを下くだせ
るを人ひとしらずして民たみの子こと思おもひ大臣だいじん等の女むすめに王わうの種くたを下くだせるを人ひと
しらずして臣下しんかの子こと思おもへ

ども大王より是を尋ぬれば皆王種となるべし、爾前にして界外へ
いたる人を法華經より之を尋ぬれば皆法華經の得道なるべし、又
過去に法華經の種を殖えたる人の根鈍にして爾前の經經に発得せ
ざる人人は法華經にいたりて得道なる、是は爾前の經經をばめ
ととしてきさき腹の太子・王子と云うが如くなるべし、又仏の滅後
にも正法一千年が間は在世の如くこそなければども過去に法華經の
種を殖えて法華・涅槃經にて覺りをとぐる者もありぬ現在・在世に
て種を下せる人人も是多し。

又滅後なれども現に法華經ましませば外道の法より小乘經に
うつり小乘經より權大乘にうつり權大乘より法華經にうつる人
数をしらず、竜樹菩薩・無著菩薩・世親論師等是なり、像法一千
年には正法のほどこそ無けれども又過去・現在に法華經の種を殖え
たる人人も少少之有り、而るを漸漸に仏法澆薄になる程に宗宗も

へんしゆう 偏執・石の如くかたく我慢山の如く高し、像法の末に成りぬれば
ぶつぼう 仏法によつて諍論興盛して仏法の合戦ひまなし、世間の罪よりも
ぶつぼう 仏法の失に依つて無間地獄に墮つる者・数をしらず。

今は又末法に入つて二百余歳・過去・現在に法華經の種を殖えたりし人人もやうやくつきはてぬ、又種をうへたる人人は少少あるらめども世間の大悪人・出生の謗法の者数をしらず国に充満せり、譬えば大火の中の小水・大水の中の小火・大海の中の水・大地の中の金なんどの如く悪業とのみなりぬ、又過去の善業もなきが如く現在の善業

もしるしなし、或は弥陀の名号をもつて人を狂はし法華經をすてしむれば背上向下のとがあり、或は禪宗を立てて教外と称し仏教をば眞の法にあらざと蔑如して増上慢を起し、或は法相・三論・華嚴宗を立てて法華經を下し、或は眞言宗・大日宗と称し

て法華経は釈迦如来の顕教にして真言宗に及ばず等云云、而るに
自然に法門に迷う者も

あり、或は師師に依つて迷う者もあり、或は元祖・論師・人師の迷
法を年久しく真実の法ぞと伝へ来る者もあり、或は悪鬼天魔の身
に入りかはりて悪法を弘めて正法ぞと思ふ者もあり、或ははづか
の小乗一途の小法をしりて

大法だいほうを行いずる人はしからずと我慢がまんして我が小法せうほうを行いぜんが為ために
大法だいほう秘法ひほうの山寺さんじをおさへとる者ものもあり、或あるは慈悲じひ魔まと申もうす魔身まみに
入いつて三衣さんえ一鉢いちぱつを身みに帯たいし小乘せうじやうの一法いちぽうを行いずるやからはづかの
小法せうほうを持たちて國中こくちゆうの棟梁とうりやうたる比叡山ひえいざん竜象りゆうじやうの如ごとくなる智者ちしやどもを
一分いちぶん我が教けうにたがへるを見て邪見じやくんの者もの悪人あくにんなんどうち思おもへり、此この
悪見あくけんをもつて

国主こくしゆをたばらかし誑惑おあわくして正法しやうほうの御帰依ごきえをうすうなしかへつて
破国はこく破仏はぶつの因縁いんねんとなせるなり、彼の妹己ばつき・妲己だつき・褒ほうと申まうせし后きさき
は心もおだやかに・みめかたちも人にすぐれたりき、愚王ぐおうこれを愛あい
して国をほろぼす因縁いんねんとなす、当世とうせの禅師ぜんし・律師りっし・念佛ねんぶつ者ものなんど
申まうす聖せい一いつ・道隆だうりやう・良観りやうかん・道阿弥だうあみ・念阿弥ねんあみ・念阿弥ねんあみなんど申まうす法師ほうしどもは
鳩鴿いへばとが糞土ふんどを食くするが如ごとし西施せいしが呉王ごわうをたばらかししに似にたり、
或あるは我が小乘せうじやうの臭糞しゆうふん・驢乳ろの戒かいを持たて。

止観同異決

日蓮撰527P

とうせてんだい きょうほう しゅうがく やから かんじんしゆぎょう とうと ほっけ
 当世天台の教法を習学するの輩多く観心修行を貴んで法華

本・迹二門を捨つと見えたり、今問う 抑観心修行と云うは

てんだいだいし まかし かん せつこしんちゆうしよぎょうほうもん いっしんさんかん いちねんさんぜん
 天台大師の摩訶止観の説己心中所行法門の一心三観・一念三千の

観に依るか、将又世流布の達磨の禅観に依るか、若し達磨の禅観

に依るといわば教禅は未顕眞実妄語方便の禅観なり法華経妙禅の

時には正直捨方便

と捨てらるる禅なり、祖師達磨禅は教外別伝の天魔禅なり、共に

是れ無得道妄語の禅なり仍て之を用ゆ可からず、若し天台の止観

一心三観に依るとならば止観一部の廢立・天台の本意に背く可か

らざるなり、若し止観修行の觀心に依るとならば法華經に背く
可からず止観一部は法華經に依つて建立す一心三觀の修行は
妙法の不可得な

るを得得せんが為なり、故に知んぬ法華經を捨てて但だ觀を正とす
るの輩は大謗法大邪見天魔の所為なることを、其の故は天台の
一心三觀とは法華經に依つて三昧開發するを己心証得の止観とは
云う故なり。

問う天台大師止観一部並びに一念三千・一心三・觀己心証得の
妙觀は併しながら法華經に依ると云う証拠如何、答う予反詰して
云く法華經に依らずと見えたる証文如何、人之を出して云く「此の
止観は天台智者己心中所行の法門を説く、或は又故に止観に至つ
て正しく觀法を明かす並に三千を以て指南と為す乃ち是れ終窮究竟
の極説なり

ゆえ 故に序の中に説己心中せつこしんちゆう所行法門しよぎようほうもんと云えり良まことに以有ゆゑるなり、文、難なんじ
て云いわく此の文は全く法華經ほけきように依よらずと云う文ぶんに非あらず既すでに説己心中せつこしんちゆう
所行しよぎようの法門ほうもんと云うが故ゆゑなり天台てんだいの所行しよぎようの法門ほうもんは法華經ほけきようなるが故ゆゑに
此の意いは法華經ほけきように依よると見えたる証文しやうもんなり但ただし他宗たしゆうに對するの時
は問答大綱もんどうたいこうを存ぞんす可べきなり、所謂いわゆる云う可べし若もし天台てんだいの止觀しかん・法華經ほけきよう
に

依らずといわば速かに捨つ可きなりと、其の故は天台大師兼ねて
約束して云く「修多羅と合せば録して之を用いよ文無く義無きは
信受す可からず」云云、伝教大師の云く「仏説に依憑して口伝を信
ずること莫れ」文、竜樹の大論に云く「修多羅に依るは白論なり
修多羅に依らざるは黒論なり」文、教主釈尊云く「依法不依人」
文、天台は
法華經に依り竜樹を高祖にしながら經文に違し我が言を翻じて
外道邪見の法に依つて止觀一部を釈する事全く有る可からざるな
り、問う正しく止觀は法華經に依ると見えたる文之有りや、答う余
りに多きが故に少少之を出さん止觀に云く「漸と不定とは置いて論
ぜず今經に依つて更に円頓を明かさん」文、弘決に云く「法華經の
旨を擯て
不思議・十乘・十境・待絶・滅絶・寂照の行を成ず」文、止觀大意に

云く「今家の教門は竜樹を以て始祖と為す慧文は但内観を列ねて
視聴するのみ南岳・天台に及んで復法華三昧陀羅尼を發するに因つ
て義門を開拓して観法周備す、

若し法華を釈するには彌彌須く權実本・迹を曉了すべし方に行

を立つ可し此の経独り妙と称することを得方まさに此ここに依つて以て観

意を立つ可し、五方便及び十乘軌行と言すなわは即ち円頓止観全もつく

法華に依る円頓止観は即ち法華三昧の異名なるのみもんく文、文句の記

に云く「観と經と合すれば他の宝を数うるに非ず方まさに知んぬ止観一

部

は是れ法華三昧の筌せんていなり若し斯この意を得れば方まさに經旨きょうしに會かなう云

云、唐土の人師・行滿の釈せる学天台宗法門大意いに云く「摩訶止観

一部たいいの大意は法華三昧ほつげさんまいの異名いみょうを出いでず經よに依つて観しゅうを修す文、

此等の文証分明これらなり、誰か之これを論ぜん、問う天台四種の釈つくを作る

の時観心の釈に至つて本・迹の釈を捨て見えたり、又法華経は漸

機の

為に之を説き止観は直達じきたつの機きの為ために之を説くと如何いかん、答こたう漸機ぜんきの

為ために説とけば劣とんきり頓機とんきの為ために説とけば勝まさるとならば今の天台宗てんだいしゅうの意いは

華嚴けごん・真言しんごん等の経けいは法華経ほけきょうに勝すぐれたりと云いう可べきや、今の天台宗てんだいしゅうの

浅あさましさは真言しんごんは事理じり俱密くみつの教けうなる故ゆえに法華経ほけきょうに勝すぐれたりと謂おもえ

り、故ゆえに止観しかんは法華ほっけに勝まさると云いえるも道理どうりなり道理どうりなり。

次に観心かんじんの釈しゃくの時とき・本ほん・迹しやくを捨てと云いう難なんは法華経ほけきょう何れいずれの文人師にんし

の釈しゃくを本ほんと為なして仏教ぶつぎょうを捨てよと見えたるや設たい

てんだい
天台の積なりとも 釈尊の金言に背き法華經に背かば全く之を用ゆ
べ
可からざるなり、依法不依人の故に竜樹・天台・伝教元よりの御
やくそく
約束なるが故なり、其上天台の積の意は迹の大教起れば爾前の大
教亡じ本の大教興れば迹の大教亡じ觀心の 大教興れば本の大教亡
ずと釈するは本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めての上
に修行を

立つるの時、今像法の修行は觀心修行を詮と為るに迹を尋ぬれば
迹・広し本を尋ぬれば本・高うして極む可からず、故に末学機に叶い
難し但己心の妙法を觀ぜよと云う積なり、然りと雖も妙法を捨て
よとは釈せざるなり若し妙法を捨てば何物を己心と為して觀ず
べ
可きや、如意宝珠を捨て瓦石を取つて宝と為す可きか、悲しいかな
とうせてんだいしゅう
当世天台宗

の学者は念仏・真言・禅宗等に同意するが故に天台の教釈を習い

失つて法華經に背き大謗法の罪を得るなり、若し止觀を法華經に
勝ると云わば種種の過之有り止觀は天台の道場所得の己証な
り、法華經は釈尊の道場所得の大法なり是一釈尊は妙覺果滿の仏
なり天台は住前未証なれば名字・觀行・相似には過ぐ可からず四

十二重の劣なり是二

法華は釈尊乃至諸仏出世の本懷なり止觀は天台出世の己証なり是

三法華經は多宝の証明あり來集の分身は広長舌を大梵天に付く

皆是真實の大白法なり是四止觀は天台の説法なり是くの如き等の

種種の相違之有れども仍お之を略するなり、又一つの問答に云く

所被の機・上機なる故に勝ると云わば実を捨てて権を取れ天台云く

「教彌彌權なれば位彌彌高し」と釈し給う故なり所被の機下劣なる

故に劣ると云わば権を捨てて実を取れ、天台の釈には教彌彌實な

れば位彌彌下しと云う故なり、然而して止觀は上機の為に之を

と説き法華は下機の為に之を説くと云わば止観は法華に劣れる故に
機を高く説くと聞えたり実にさもや有るらん、天台大師は靈山の
聴衆として如来出世

の本懐を宣べたもうと雖も時至らざるが故に妙法の名字を替えて
止観と号す迹化の衆なるが故に本化の付属を弘め給わず正直の
妙法を止観と説きまぎらかす故に有のままの妙法ならざれば
帯権の法に似たり、故に知んぬ天台弘通の所化の機は在世帯権の
円機の如し、本化弘通の所化の機は法華本門の直機なり、止観法華
は全く体同

と云わん尚人師の釈を以て仏説に同ずる失甚重なり、何に況や
止観は法華經に勝ると云う邪義を申し出すは但是れ本化の弘經と
迹化の弘通と像法と末法と迹門の付屬と本門の付屬とを末法の
行者に云い顯わさせん為の仏天の御計いなり、爰に知んぬ当世
天台宗の中に此の義を云う人は祖師・天台の為には不知恩の人な
り豈其の過を免れ

んや、夫れ天台大師は昔靈山に在ては薬王と名け今漢土に在ては
天台と名け日本国の中にては伝教と名く三世の弘通俱に妙法と
名く、是くの如く法華經を弘通し給う人は在世の釈尊より外は三
国に其の名を聞かず有り難く御坐します大師を其の末学其の教釈
を悪く習うて失無き天台に失を懸けたてまつる豈大罪に非ずや。
今問う天台の本意は何法ぞや碩学等の云く「一心三觀是なり」今
云く一実円満の一心三觀とは誠に甚深なるに似たれども尚以て

ぎよつじやしゆぎよう

行者修行の方法なり三観とは因の義なるが故なり慈覚大師の釈に

云く「三観とは法体を得せしめんが為の修観なり」云云、伝教大師

云く「今・止観修行とは法華の妙果を成ぜんが為なり」云云、故に

知んぬ

一心三観とは果地・果徳の法門を成ぜんが為の能観の心なることを

何に況や三観とは言説に出でたる法なる故に如来の果地・果徳の

妙法に對すれば可思議の三観なり。

問う一心三観に勝れたる法とは何なる法ぞや、答う此の事誠に

一大事の法門なり唯仏与仏の境界なるが故に我等が言説に出す

可からざるが故に是を申す可らざるなり、是を以て經文には「我

が法は妙にして思い難し言を以て宣ぶ可からず」云云妙覺果満の仏

すら尚不可説・不思議の法と説き給う何に況や等覺の菩薩已下

乃至凡夫をや、

問う名字みょうじを聞かざれば何を以て勝法しやうほう有りもつと知ることを得んや、答
う天台てんだい己証こじやうの法こゝろとは是これなり、当世とうせの学者がくしゃは血脈相承けちみやくそうじやうを習ならい失うしなう
故ゆゑに之これを知らざるなり故ゆゑに相構あいかまええ相構あいかまええて秘かまえす可かく秘かす可べき法門ほうもん
なり、然しかりと雖いゑども汝なんじが志しころもじ 神妙
なれば其その名なを出いだすなり一言ひとことの法こゝろ是これなり伝教でんぎやう大師だいしの一心三觀いっしんさんかん一
言ひとことに伝たうと書かき給たまう是これなり、問とう未いまだ其その法体ほつたいを聞きかず如何いかん、答
う所詮しよせん一言ひとこととは妙法みやうほう是これなり、問とう何を以もつて妙法みやうほうは一心三觀いっしんさんかんに勝すぐれ
たりと云いう事ことを知ることを

得るや、答う妙法は所詮の功德なり三観は行者の観門なる故なり
此の妙法を仏説いて言く「道場所得法我法妙難思是法非思量不可
以言宣と云云、天台の云く「妙は不可思議言語道断・心行所滅なり
法は十界十如・因果不二の法なり」と、三諦と云うも三観と云うも
三千と云うも共に不思議法とは云えども天台の己証天台の御思慮
の及ぶ所の法門なり、此の妙法は諸仏の師なり今の経文の如くな
らば久遠実成の妙覚極果の仏の境界にして爾前・迹門の教主
諸仏・菩薩の境界に非ず経に唯仏与仏乃能究竟とは迹門の界如
三千の法門をば迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなり、本地難思
の境智の妙法は迹仏等の思慮に及ばず何に況や菩薩・凡夫をや、
止観の二字をば観名仏知・止名仏見と釈すれども迹門の仏智・
仏見にして妙覚極果の知見には非ざるなり、其の故は止観は天台
己証の界如三千・

さんたいさんかん
三諦三觀を正と為す迹門の正意是なり、故に知んぬ迹仏の知見な
りと云う事を但止觀に絶待不思議の妙觀を明かすと云えども只
いちねんさんぜん 一念三千の妙觀に且らく与えて絶待不思議と名けるなり。

問う天台大師真実に此の一言の妙法を証得したまわざるや、答
う内証爾らざるなり、外用に於ては之を弘通したまわざるなり、
所謂内証の辺をば秘して外用には三觀と号して一念三千の法門を
示現し給うなり、問う何が故ぞ知り乍ら弘通し給わざるや、答う
時至らざるが故に付屬に非ざるが故に迹化なるが故なり、問う
天台此の一言

の妙法を証得し給える証拠之有りや、答う此の事天台一家の秘事
なり世に流布せる学者之を知らず灌頂玄旨の血脈とて天台大師
自筆の血脈一紙之有り、天台御入滅の後は石塔の中に之有り
伝教大師御入唐の時八舌の鑰を以て之を開き道邃和尚より伝受

し給たまう血脈けちみやくとは是これなり、此の書いに云いわく、「一言の妙旨むね一教の玄義げんぎ」

文、伝教大師でんぎようだいしの

けちみやく

い

そ

み

り

ち

血脈けちみやくに云いく「夫それ一言の妙法みとは両眼りを開ひいて五塵ちの境けいを見る時

ず

り

ふ

は随縁真如ずいえんしんによなるべしべし両眼りを閉しじて無念むねんに住する時は不変真如ふへんしんによなる

べし、故ゆえに此の一言を聞きくに万法まんぽう茲こゝに達たし一代いちだいの修多羅しゆたら一言に含

すす文、此の両大師だの血脈けちみやくの如ごとくならば天台大師てんだいだいしの血脈相承けちみやくそうじょうの最

要いの法ぽうは妙法みの一言いなり、一心三觀いっしんさんかんとは所詮しよせん妙法みを成就じやうじゆせん為

の修行しゆぎやうの方法

なり、三観さんかんは因いんの義ぎ妙法みょうほうは果くわの義ぎなり但た因いんの処ところに果くわ有り果くわの処ところ
に因いん有り因果いんがくじ俱く時の妙法みょうほうを觀くわんずるが故ゆえに是かくの如ごとき功く能のうを得とるな
り、爰こゝに知ちんぬ天台てんだい至し極ごくの法門ほうもんは法華ほっけ本ほん・迹しやく未み分ぶんの処ところに無念むねんの止觀しがん
を立てて最秘さいひの大法だいほうとすと云いえる邪義じやぎ大だいなる僻見びやくけんなりと云いう事ことを
四依しえ弘經くぎきょうの大薩ださつたは既すでに仏經ぶつきょうに依よつて諸論しよろんを造つくる天台てんだい何なんぞ佛說ぶつせつに
背そむいて無念むねんの止觀しがんを立てたまわんや、若もし此こゝの止觀しがん・法華經ほっけきょうに依よら
ずといわば天台てんだいの止觀しがん教外きょうがい別傳べつでんの達磨だるまの天魔てんまの邪法じやほうに同おなぜん都すべ
然しかる可べからず哀あはれなり哀あはれなり。

傳でん教ぎょう大師だいしの云いく「國主こくしゆの制せいに非あらざれば以もつて遵行じゆんぎやうする無なくく法王ほうおう
の教きょうに非あらざれば以もつて信受しんじゆすること無なけん」と文ぶん、又いわく「四依論しえろんを
造つくるに權けん有り実じつ有り三乘さんじやう旨むねを述のぶるに三有さんじゆ一有いちじつ、所以ゆえんに天台てんだい
智ち者は三乘さんじやうの旨むねに順したがひて四教しきやうの階かゝを定さだめ一実いちじつの教きょうに依よつて一佛乘いちぶつじやう
を建たつ、六度りくどに別べつ有り、戒度かいど何なんぞ同おなじからん受法じゆほう同おなじからず威儀いぎ豈あに

同じからんや、是の故に天台の伝法は深く四依に依り亦仏經に
したが、順う、文、本朝の天台宗の法門は伝教大師より之を始む
も、若し天台の止観・法華經に依らずと云わば日本に於ては傳教の
こうそ、高祖に背き漢土に於ては天台に背く両大師の伝法既に法華經に
依る豈其の末学之に違せんや、違するを以て知んぬ当世の天台家の
ひとびとそ、人人其の名を天台山に借ると雖も所学の法門は達磨の僻見と
ぜんむい、善無畏の妄語とに依ると云う事、天台・傳教の解釈の如くんば
己心中の秘法は但
みようほう、妙法の一言に限るなり、然而当世の天台宗の学者は天台の石塔の
けちみやく、血脈を秘し失う故に天台の血脈相承の秘法を習い失いて我と
いっしんさんかん、一心三觀の血脈とて我意に任せて書を造り錦の袋に入れて頸に
か、懸け箱の底に埋めて高直に売る故に邪義国中に流布して天台の仏法
はしつ、破失するなり、天台の本意を失い釈尊の妙法を下す是れ偏えに

だるま きょうくんぜんむい すすめ
達磨の教訓善無畏の勸なり、故に止観をも知らず一心三観・一心
さんたい いちねんさんぜん
三諦をも知らず一念三千の觀をも知らず本・迹二門をも知らず相
待

ぜったい
絶待の二妙をも知らず法華の妙觀をも知らず教相をも知らず
ごんじつ しきよう はつきよう
権実をも知らず四教・八教をも知らず五時・五味の施化をも知ら
ず、教機・時・国・相応の義は申すに及ばず実教にも似ず権教にも
似ざるなり道理なり道理なり。

てんだい でんぎよう 天台・伝教の所伝は法華経は禅・真言より劣れりと習う故に達磨
の邪義・真言の妄語と打ち成つて権教にも似ず実教にも似ず二途
に撰せざるなり、故に大謗法罪顕れて止観は法華経に勝ると云う
邪義を申し出して過無き天台に失を懸けたてまつる故に高祖に背く
不孝の者法華経に背く大謗法罪の者と成るなり。

夫れ天台の観法を尋ねれば大蘇道場に於て三昧開發せしより
已来目を開いて妙法を思えば随縁真如なり目を閉じて妙法を思
えば不変真如なり此の兩種の真如は只一言の妙法に有り我妙法
を唱うる時方法茲に達し一代の修多羅一言に含す、所詮迹門を
尋ねれば迹広く本門を尋ねれば本高し如かじ己心の妙法を觀ぜ
んにはと思食されしなり、当世の学者此の意を得ざるが故に天台
己証の妙法を習い失いて止観は法華経に勝り禅宗は止観に勝れた
りと思いて法華経を捨てて止観に付き止観を捨てて禅宗に付くな

り、禅宗の一門云く松に藤懸る松枯れ藤枯れて後如何上らずして
一枝なんど云える天魔の語を深く信ずる故なり、修多羅の教主は
松の如く其の教法は藤の如し
各各に諍論すと雖も仏も入滅して教法の威徳も無し爰に知んぬ
修多羅の仏教は月を指す指なり禅の一法のみ独妙なり之を觀ず
れば見性得達するなりと云う大謗法の天魔の所為を信ずる故な
り、然而法華經の仏は壽命無量・
常住不滅の仏なり、禅宗は滅度の仏と見るが故に外道の無の見
なり、是法住法位世間相常住の金言に背く僻見なり、禅は法華經
の方便無得道の禅なるを眞実常住法と云うが故に外道の常見な
り、若し与えて之を言わば仏の方便三蔵の分齊なり若し奪つて之を
言わば但外道の邪法なり与は当分の義・奪は法華の義なり法華の
奪の義を以ての故に禅は天魔・外道の法と云うなり、問う禅を天魔

の法と云う証拠如何、
答う前前に申すが如し。

七三

立正観抄送状

文永十二年二月

五十四歳御作

与最蓮房日淨

534P

このたび おんつかい
今度の御使い誠に御志の程顕れ候い畢んぬ又種種の御志慥に
たびそうら おわ
給候い畢んぬ。

そもそもつけたま
抑承わり候、当世の天台宗等止観は法華経に勝れ禅宗は止観
まさ
に勝る、又観心の大教興る時は本・迹の大教を捨つと云う事先ず
てんだい
天台一宗に於て流流各別なりと雖も慧心檀那の両流を出でず候な
えしん
り、慧心流の義に云く止観の一部は本・迹二門に亘るなり謂く止観
いわ
の六に云く「観は仏知と名く止は仏見と名く念念の中に於て止観
げんぜん
現前す乃至三乗の近執を除く、文、弘決の五に云く「十法既に是れ
ほっけ
法華の所乘なり是の故に還つて法華の文を用いて歎ず、若し
かくのゆえ
かえ
ほっけ
もち
たん
も

迹説しやくせつに約すなわせば即だいち大通ちしう智勝しやう仏ぶつの時ときを指しして以もつて積劫しやくくわうと為なし寂滅じやくめつ
道場だうじやうを以もつて妙悟みやうこと為なす、若もし本門ほんもんに約すせば我本行菩薩道がほんぎやうぼさつどうの時ときを指し
して以もつて積劫しやくくわうと為なし本成仏じやうぶつの時ときを以もつて妙悟みやうこと為なす本・迹二門ただ只是
此この十法じふぽうを求悟もとむす「文、始まの一文いちぶんは本門ほんもんに限かると見みえたり次つぎの文ぶんは
正ただしく本・迹こに亘わたると見みえたり、止觀しかんは本・迹こに亘わたると云いふ事こと文証もんしやう
此こに依よるな

りりと云いえり、次つぎに檀那流だんななには止觀しかんは迹門しやくもんに限かると云いふ証しやう拠こは弘決くけつ
の三さんに云いく「還かえつて教味かうみを借かつて以もつて妙円みやうえんを顯あらわす 故ゆゑに知しんぬ一いち部ぶ
の文ぶん共に円成えんじやうの開権かいこん妙觀みやうかんを成じやうずるを「文、此この文ぶんに依よらば止觀しかんは
法華ほつげの迹門しやくもんに限かると云いふ事こと文ぶんに在ありて分ぶん明めいなり兩流りやうりゆうの異義いぎ替かれど
も共に本・迹ほんしやくを出いでず当世とうせの天台宗てんだいしやう何いくより相承そうじやうして止觀しかんは
法華經ほつげきやうに勝まさると云いふや、但ただし予よが所存しよぞんは止觀しかん法華ほつげの勝劣しやうれつは天地てんち
雲泥うんでいなり。

若し与えて此を論ぜば止観は法華迹門の分齊に似たり、其の故
てんだいだいし こしょう
は天台大師の己証とは十徳の中の第一は自解仏乘第九は玄悟法華
えんい れいおうでん
円意なり、靈応伝の第四に云く「法華の行を受けて二七日境界す」
しかん いわ
文、止観の一に云く「此の止観は天台智者己心中に行ずる所の法門
を説く」文、弘決の五に云く「ゆえ 故に止観に正しく観法を明すに至つて
なら さんぜん もつ しなん な ゆえ
並びに三千を以て指南と為す 故に序の中に云く己心中に行ずる
所の法門を説く」文、己心所行の法とは一念三千・一心三観なり
さんたいさんかん ようらく にんのう
三諦三観の名義は瓔珞・仁王の二經に有りと雖も一心三観
いちねんさんぜん こしんしよぎよう ほうもん しかくもん じつそう
一念三千等の己心所行の法門をば迹門十如実相の文を依文とし
て积成し給い畢んぬ。

爰に知んぬ止観一部は迹門の分齊に似たりと云う事を若し奪つ
こゝに しかん しかくもん ぶんざい
て之を論ぜば爾前権大乘・即別教の分齊なり其の故は天台己証の
しかん にぜんごんだいじよう そくべつきよう ぶんざい そのゆえ てんだいこしょう
止観とは道場所得の妙悟なり所謂天台大師・大蘇の普賢道場に

おい さんまいかいほつ
 於て三昧開發し証を以て師に白す師の曰く法華の前方便陀羅尼な
 りと靈心伝の第四に云く「智ちぎ・師に代つて金字經を講ず一心具足
 まんぎよう ところ 疑うたがい有り思し・為ために釈しゃくして曰く汝なんじが疑うたがいう所は
 万行の処に至つて・疑うたがい有り思し・為ために釈しゃくして曰く汝なんじが疑うたがいう所は
 すなわたいほんしだい
 此乃ち大品次第の意なるのみ未だ是法華円頓の旨むねにあらざるなり
 文、講ずる所の經既にすで権大乘經ごんだいじようきようなり又次第と云えり故ゆえに別教な
 り、開發せし陀羅尼又法華前方便と云えり故ゆえに知んぬ爾前帶權の
 經・別教べつきようの分齊ぶんさいなりと云う事を己証こしようすで既に前方便ほうべんの陀羅尼だらになり止觀しかん
 とは己心中こしんちゆう所行じゆぎやうの法門ほうもんを説くと云うが故ゆえに、明あきらかに知んぬ法華の
 迹門しやくもんに及およばずと云う事を何いかに況いわんや本門ほんもんをや、若もし此の意を得ば
 檀那流だんなの義もつと尤も吉となり此等これらの趣もつを以て止觀しかんは法華ほうけに勝まさると申もうす
 邪義じゃぎをば問答もんどう有ある可かく候か、委細いさいの旨むねは別べつに一卷書まいき進まらせ候かな
 り、又日蓮相承にちれんそうじようの法門ほうもん血脈けちみやく慥たしかに之これを註たてまつし奉たてまつる、恐恐きようきよう謹言きんげん
 ぶんえい きのと
 文永十二乙亥二月二十八日 日蓮 花押

さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事

七四

顯立正意抄

ぶんえい

文永十一年十二月

五十三歳御

作 536P

にちれんいぬ 日蓮去る正嘉元年太歳丁巳八月二十三日大地震を見て之を勘え
 ちれんいぬ 日蓮去る正嘉元年太歳丁巳八月二十三日大地震を見て之を勘え
 しょうかがんねん 定めて書ける立正安国論に云く「薬師経の七難の内五難忽ちに起つ
 しょうかがんねん 定めて書ける立正安国論に云く「薬師経の七難の内五難忽ちに起つ
 ひのともし 二難猶残れり所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の
 ひのともし 二難猶残れり所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の
 いわ 三災の内二災早く顕れ一災未だ起らず、所以兵革の災なり、
 いわ 三災の内二災早く顕れ一災未だ起らず、所以兵革の災なり、
 やくし 金光明経の内の種種の災過一一起ると雖も他方の怨賊国内を
 やくし 金光明経の内の種種の災過一一起ると雖も他方の怨賊国内を
 ひちなん 侵掠する此の災未だ露われず此の難未だ来らず、仁王経の七難の
 ひちなん 侵掠する此の災未だ露われず此の難未だ来らず、仁王経の七難の
 なんたちま 内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方より賊来つて国を侵す
 なんたちま 内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方より賊来つて国を侵す
 これ 此の文に就て具さに事の情を案ずるに百鬼
 これ 此の文に就て具さに事の情を案ずるに百鬼

早く乱れみだ万民多く亡びぬ先難是れ明なり後災何ぞ疑わん若し残るも
所の難なん・悪法の科あくほうに依つて並び起り競い来らば其の時何為や、帝王ていおう
は国家を基として天下を治む、人臣は田園を領して世上を保つ、
しかるに他方より賊来つて此の国を侵逼し自界叛逆して此の地を
掠りやくりよつ領せば豈驚かざらんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば
何れの所にか世を遁れんいすれ」等云云已上 立正安国論 の言なり。
今日蓮重ねて記して云く大覚世尊記して云く「苦得外道七日有つ
て死す可し死して後食吐鬼に生れん苦得外道の言く七日の内には
死す可からず我羅漢を得て餓鬼道に生れじと」等云云、瞻婆城の
長者ちようじやの婦懐妊す六師外道の云く「女子を生まん」仏記して云く「男
子を生まん」等云云、仏記して云く「却て後三月あつて我当に般涅槃
す
べし」等云云、一切の外道云く「是れ妄語なり」等云云、仏の記の

ごと
如く二月十五日に般涅槃し給う、法華經の第二に云く「舍利弗汝
みらいせ
未来世に於て無量無辺不可思議劫を過て乃至当に作仏するを
う
得べし号をば華光如来と曰わん」等云云、又第三の卷に云く「我が
でし
此の弟子摩訶迦葉未来世に於て当に三百万億に奉觀することを
う
得べし乃至最後

身に於て仏と成ることを得ん名をば光明如来と曰わん等云云、又
第四の巻に云く「又如來滅度の後に若し人有つて妙法華經の乃至
一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には我亦阿耨多羅三藐三菩提
の記を与え授く」等云云、此等の經文は仏・未來世の事を記し
給う、上に挙ぐる所の苦得外道等の三事・符合せずんば誰か仏語を
信ぜん・設い多宝仏証・明を加え分身の諸仏・長舌を梵天に付くと
も信用し難きか、今亦以て是くの如し設い日蓮富樓那の弁を
得て目連の通を現ずとも勘うる所・当らずんば誰か之を信ぜん、
去ぬる文永五年に蒙古国の牒状渡來する所をば朝に賢人有らば
之を怪む可し、設い其れを信ぜずとも去る文永八年九月十二日
御勘氣を蒙りしの時・吐く所の強言次の年二月十一日に符合せし
む、情有らん者は之を信ず可し何に況や今年既に彼の国災兵の上
二箇国を奪い取る設い木石為りと雖も設い禽獸為りと雖も感ず可

く驚く可きに偏えに只事に非ず天魔の国に入つて酔えるが如く狂
えるが如く歎く可し哀む可し恐る可し厭う可し、又立正安国論に
云く「若し執心翻えらずして亦曲意猶存せば早く有為の郷を辞し
て必ず無間の獄に墮せん」等云云、今符合するを以て未来を案ず
るに日本国の上下方人阿鼻
大城に墮ちんこと大地を的と為すが如し、此等は且らく之を置く
日蓮が弟子等又此の大難脱れ難きか彼の不輕輕毀の衆は現身に
信伏随従の四字を加れども猶先謗の強きに依つて先ず阿鼻大城に
墮して干劫を経歴して大苦悩を受く、今日蓮が弟子等も亦
是くの如し。或は信じ。或は伏し。或は随い。或は従う。但だ名のみ
之を仮りて心中に染ま
ざる信心薄き者は設い干劫をば経ずとも。或は一無間。或は二無間
乃至十百無間。疑無からん者か是を免れんと欲せば各薬王。

ぎよつぼう
樂法の如く臂を焼き皮を剥ぎ雪山国王等の如く身を投げ心を仕
えよ、若し爾らずんば五体を地に投げ、身に汗を流せ、若し爾らず
んば珍宝を以て仏前に積め若し爾らずんば奴婢と為つて持者に奉え
よ若し爾らずんば、等云云、四悉檀を以て時に適うのみ、我弟子等
の中にも信心薄淡き者は臨終の時阿鼻獄の相を現ず可し其の時
我を恨む可からず等云云。

ぶんえい
文永十一年太歳甲戌十二月十五日 日蓮之を記す

七五

上行菩薩結要付属口伝

建治元年

五十

四歳御作 於身延 538P

みょうほうれんげきようけんほうとうぼん
妙法蓮華經見宝塔品第十一「爾の時に仏前に七宝の塔有り」と云
云、又云く「即時に釈迦牟尼仏神通力を以て諸の大衆を接して皆

虚空こくうに在おたもつ、大音声おんじゆうを以もつて普あまねく四衆しじゆうに告つげたまわく誰たか能よく

此この娑婆しゃは国土こくどに於おいて廣ひろく妙法華經みょうほけきやうを説まかん今いま正ただしく是これ時ときなり如來にょらい

久ひさしからずして当まさに涅槃ねはんに入いるべし仏ぶつ・此この妙法華經みょうほけきやうを以もつて付屬ふぞくし

て在あること有あらしめんと欲ほす云云いわ、又云いわ、又云いわ、諸余しよよの教典きやうてん数恒じうじや沙さの

如ごとし」と云云いわ、又云いわ、諸もろもろの大衆たいしゆうに告つぐ我滅度めつどの後のちに誰たか

能よく斯この經きやうを護持ごじし読誦どくじゆせん今いま・仏前ぶつぜんに於おいて自みずか誓言せいごんを説まけ」と又

云いわ、此この經きやうは持たち難がたし若もし暫しばらも持もつ者は我すなわ即かち歡喜かんきす諸しよ佛ぶつも亦また

然しかなり是かくの如ごときの人ひとは諸佛しよぶつの歎ほめ給たまう所ところなり」と云云いわ、妙法蓮華經みょうほうれんげきやう

勸持品第十三かんじほん爾時やくあう葉王菩薩はつさつ摩訶薩まかざつ及および大樂說菩薩摩訶薩ほさつまかざつ二万よろずの

菩薩眷屬ぼさつけんぞくと俱ともに皆みな佛前ぶつぜんに於おいて是この誓言せいごんを作なさく唯な・願ねがはば世尊せそん以もつて

慮うし、たもつべからず我等われら・佛ぶつの滅後めつちに於おいて當まさに此この經典きやうてんを奉持ほうじし読誦どくじゆし

説ときたてまつるべし、後あの惡世あくせの衆生しゆじゆうは善根ぜんこん轉うた少すくくして増上慢ぞうじやうまん

説ときたてまつるべし、後あの惡世あくせの衆生しゆじゆうは善根ぜんこん轉うた少すくくして増上慢ぞうじやうまん

多く利供養を貪り不善根を増し解脱を遠離せん教化すべきこと
難しと雖も我等当に大忍力を起して此の経を読誦し持説し書写し
種種に供養して身命を惜まざるべし、爾の時に衆中の五百の
阿羅漢の

授記を得たる者・仏に白して言さく世尊・我れ等亦自ら誓願すらく
異の国土に於て広く此の経を説かんと、復学無学の八千人の授記を
得たる者有り座従り起て合掌し仏に向いたてまつりて是誓言を
作さく世尊・我等亦当に他の

国土に於て広く此の経を説きたてまつるべし・所以は何ん是の
娑婆国の中は人・弊悪多く増上慢を懐き功德浅薄に瞋濁詔曲にし
て心不実なるが故に」と云云、又云く「爾の時に世尊・八十万億
那由他の諸の菩薩摩訶薩を視す

是の諸の菩薩は皆是阿惟越致なり、即時に諸の菩薩俱に同く声を
發して偈を説いて言さく、唯願くは慮したもうべからず仏の滅度
の後・恐怖惡世の中に於て我等当に広く説くべし諸の無智の人の
惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし、
惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと
謂い我慢の

心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞の道を行
ずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣
の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん
是の人惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで
我等の過を出ださん、濁世の惡比丘は仏の方便・隨宜所説の法を知
らずして惡口して鬻聲蹙し数数擯出せられん」と云云。

文句の八に云く「初めに一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、

次に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、故に此の三の中初めは忍ぶ可し次は前に過ぐ第三は最も

甚し」と云云。

涌出品に云く「爾の時に他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩八

恒河沙の数に過ぎたり、大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して

仏に白して言く、世尊若し我等に仏の滅後に於て此の娑婆世界に

在つて勤加精進し是の經典を護持し読誦し書写し供養せんことを

聴したまわば當に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の

時に仏

諸の菩薩摩訶薩衆に告く止みね善男子汝等が此の経を護持せんこ

とを須いじ所以は何ん我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩

摩訶薩有り、一一の菩薩各六万恒河沙の眷属有り是の諸人等能く

我が滅後に於て護持し読誦し広く此の経を説かん」と云云五卷畢。

ぞく^るい^{ほん} 属累品に云く「爾^{もつ}の時^{むりよう}に釈迦牟尼^{しゃかむに}仏法座^{ぶつほうざ}従^{じゆ}り起^{おこ}つて大神力^{じんりき}を現^{げん}じ
たもう右^{みぎ}の手^てを以^{もつ}て無量^{むりよう}の菩薩摩訶薩^{ぼさつまかさつ}の頂^{いただき}を摩^なでて是^この言^{ごん}を
作^なしたまわく我^{われ}無量^{むりよう}百千万億^{せんまん}・阿僧祇劫^{あそぎこう}に於^{おい}て是^この得^{がた}難^{がた}き
阿耨多羅三藐三菩提^{あのくたらさんみやくさんぼだい}の法^{ほふ}を修習^{しゆうしゆう}せり今^{いま}以^{もつ}て汝等^{なんじ}に付属^{ふぞく}す汝等^{なんじ}
当^{まさ}に一心^{いっしん}に此^この法^{ほふ}を流布^{るふ}して広^{ひろ}く増益^{ぞうやく}せしむべし、是^{かく}の如^{ごと}く三^{さん}た
び諸^{もろもろ}の菩薩摩訶薩^{ぼさつまかさつ}の

いただき頂なを摩なでて是この言なを作なしたまわく我むりよう無量せんまん百千万億あそぎこう・阿僧祇劫に於こて是この得がた難あき阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいの法しゆうしゆうを修し習じゆせり今もつ以なんじて汝等ふぞくに付な属んじす、汝等なんじ当まさに受持じゆじ読誦どくじゆし広のべく此いっさいしゆじようの法のべを宣いべて一切衆生いっさいしゆじようをして普あまねく聞知もんちすることを得えせしむべし所以ゆえんは何いかん如来にやらいは大慈悲有じひつて諸もろの慳けんりんなく亦また畏おそるる所なく無よく能しゆじようく衆生しゆじように仏ちえの智慧にやらい・如来にやらいの智慧ちえ・自然じねんの智慧ちえを与よう如来にやらいは一切衆生いっさいしゆじようの大施主せしゆなり汝等なんじ亦また随したがつて如来にやらいの法をを学べしぶべし慳けんりんを生なずること勿なれ」と云云。
文句もんくの九みずかに云おのく品い下い下い「如来にやらい之これを止とどめたもうに凡およそ三義有なんじり、汝等なんじ各各たほうに自みずから己おのが任し有けちえんり若もし此せんじゆの土ほに住いせば彼いの利益いを廢きせん、又また他方たほうは此し土し結縁けちえんの事すなわ浅せんし宣授せんじゆせんと欲ほすと雖いも必いず巨益きよやく無なからん又も若もし之これを許ゆるさば則すなわち下めを召めすことを得えず下も若もし来こらずんば迹あとを破やぶすることを得えず遠あを躡あすことを得えず是これを三義さんぎもつて如来にやらい之これを止とどめたもうと為なす、下方かたを召めして来こらしむるに亦また三義有さんぎり是これ我

が弟子なり我が法を弘むべし縁深広なるを以て能く此の土に遍じて益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益す、又開近顯遠することを得是の故に彼を止めて下を召すなり」と云云。

記に云く「問う諸の仏・菩薩は共に未熟を熟す何の彼此有らん分身散影して普く十方に遍す而るを己任及び魔彼と言うや、答う諸の仏・菩薩は実に彼此無し但機に在無有り無始法爾なり故に第二の義を以て初の義を顯わして結縁事浅と云う、初め此の仏・菩薩に従つて結縁し還つて此の仏・菩薩に於て成就す」と云云、又云く「子父の法を弘むるに世界の益有り」と云云、記の八に云く「因葉王とは本葉王に託し茲に因せて余に告ぐ此れ流通の初なり先に八万の大土に告ぐとは、大論に云く法華は是秘密なれば諸の菩薩に付すと、下の文に下方を召すが如きは尚本眷属を待つ驗し余は未だ堪えず」と云云、問う何が故ぞ他方を止めて本眷属を召す

や、答う私の義有る可らず靈山の聴衆天台の所判に任す可し、疏
に云く「涌出に三と為す一には他方の菩薩弘経を請す。二には如来
許したまわず。三には下方の涌出なり、他方の菩薩は通経の福の大
なることを聞いて咸く願を發し此の土に住して弘宣

んと欲するが故に請ず、之が為に如来を止めたもう」と等と云云。
結要付属の事

初に称 歎付属 爾時仏告 猶不能尽

結要勸持四 一に結要付属以要言之 宣示顯説

三に正勸付属是故汝等起塔供養

四に釈勸付属所以者何而般涅槃

疏の十に云く「爾時仏告 上行 の下は是れ第三に結要付属なり」と

云云、又云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ仏法なり此

は一切皆妙名を結するなり一切力とは通達無礙にして八自在を

具す此れは妙用を結するなり一切秘蔵とは一切処に遍して皆是れ

実相なり此れは妙体を結するなり一切深事とは因果は是れ深事

なり此は

妙宗を結するなり、皆於此經宣示顯説とは総じて一經を結する唯

四ならくのみ其^{すうへい}枢柄^とを撮^とつて之^{これ}を授^{じゅ}与^よす」と云云、記^いに云^わく「^けつ^ちよう^う結要

有^あり四^し句^くとは本^{ほん}・迹^じ二^に門^{もん}に各^{かく}宗^{しゆ}用^{よう}有^あり二^に門^{もん}の体^{たい}は両^{りやう}処^{じょ}殊^{じゆ}なら^らず」と云^わく

云^い輔^ふ正^{しやう}記^きに云^いく付^ふ属^{ぞく}とは此^この経^{きやう}は唯^{ただ}下^げ方^{ぱう}涌^ゆ出^{しゆつ}の菩^ぼ薩^{さつ}に付^つす何^{なに}を

以^{もつ}ての故^{ゆえ}に爾^{しか}る法^こ是^これ久^く成^{じやう}の法^{ぱう}なるに由^よるが故^{ゆえ}に久^く成^{じやう}の^{こと}人^{にん}に付^つす

云云。

付^ふ属^{ぞく}

一 正^{しやう}く

を^{しや}釈^くす

初^{はつ}に付^ふ属^{ぞく}に三^{さん}

一 如^に来^らの付^ふ属^{ぞく}

二 付^ふ属^{ぞく}

三 付^ふ属^{ぞく}を

誠^{いまし}む余^{じん}の深^{ぼう}法^{ほう}の中^{ちゆう}の下^げなり

属^{ぞく}累^い品^{ほん}の文^{ぶん}段^{だん}に二^に有^あり

二 菩^ぼ薩^{さつ}の領^{りやう}受^{じゆ}

三 事^じ畢^ひて唱^{てう}散^{さん}す

余

次に時衆の歡喜^{かんき}

説是語時の下三行

大集經の五箇五百歳とは

第一の五百歳 解脱堅固

第二の五百歳 禅定堅固

第三の五百歳 読誦多聞堅固

第四の五百歳 多造塔寺堅固

第五の五百歳 鬪諍堅固

夫れそ 仏滅度の後二月十六日より正法しよほうなり、迦葉かしょう 仏の付属ふぞくを請うけ

次に阿難尊者・次に商那和修・次に優婆多・次に提多迦だいたか此の五人

各各二十年にして一百年なり、其の間は但小乗經しょうじようきようの法門ほうもんのみ

弘通して諸大乘經は名字もなし何に況や法華經をや、次に弥遮迦

・仏陀難陀・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の五人は五百年の間・大乘

の法門ほうもん 少出来すと雖も取立てて弘通せず但小乗經しょうじようきよう を正と為す

已上大集經の前の五百年解脱堅固に当れり、正法の後の五百

年には馬鳴・竜樹乃至師子等の十余人の人人始には外道の家に入

り次には小乗經を極め後には諸大乘經を以て散散に小乗經等を破失しき、然りと雖も權大乘と法華經との勝劣未だ分明ならず淺深を書かせ給いしかども本迹の十妙二乗作仏久遠実成已今当等百界千如一念三千の法門をば名をも書き給わず此大集經の禪定堅固に当れり、次に像法に入つては天竺は皆權實雜亂して地獄に墮する者數百人ありき、像法に入つて一百余年の間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論未だ事定らざる故に仏法を信ずる心未だ深からずまして權實を分くる事なし、摩騰竺法蘭は自は知りて而も大小を分たず權實までは思いもよらず、其の後魏晉宋・齊・梁の五代の間漸く仏法の

中に大小・權實・顯密を諍いし程に何れをも道理とも聞えず
南三・北七の十流・我意に仏法を弘む、爾れども大に分つに一切經
の中には一には華嚴・二には涅槃・三には法華と云云、爾れども像法

の始の四百年に當つて天台大師震旦に出現して南北の邪義・一一に
これを破し畢んぬ、此大集經の多聞堅固の時に當れり、像法の後の五
百年には

さんろん 三論・法相 乃至 眞言等を各三蔵将来す、像法に入つて四百余年あ
つて日本国へ百済国より一切経並に釈尊の木像僧尼等を渡す梁の
末・陳の始めに相当る日本国には神武天皇より第三十代欽明天皇の
御宇なり、像法の後の五百年に三論・法相等の六宗面々の異義あ
り爾れども各邪義なり、像法八百年に相当つて伝教大師・日本に
出でて彼の六宗の義を皆責め伏せ給えりと云云、伝教已後には
東寺・園城寺等の諸寺日本一同に云く「眞言宗は天台宗に勝れ
たり」と云云、此大集経の多造塔寺堅固の時なり今末法に入つて
仏滅後・二千二百二十余年に当りて聖人出世す是は大集経の鬪諍
言訟白法隱没の時なり云云、夫れ釈迦の御出世は住劫第九の滅
人壽百歳の時なり百歳と十歳との中間は在世は五十年・滅後は
正像二千年と末法一万年となり、其の中間に法華経流布の時二度
之れ有る可し、所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり。

夫れそ仏法ぶつぽうを学する法には必ず時を知る可べきなり過去かこの大通だいづう
智勝ちしょう仏は出世しゅつせし給たまいて十小劫じゅうじょうが間いちげ一偈これも之を説いわかず經きやうに云いく、「一坐いっざ
十小劫じゅうじょう」と云云、又云いく、「仏・時未じだ至いたらずと知ししめして請じゆうを受け
默然もくねんとして坐ましたまえり」と、今の教主きやうしゆ釈尊しやくそんも四十余年よんじゆうねんの間は
法華經ほけきやうを説ときたまわず經きやうに云いく、「説時未せつじだ至いたらざるが故ゆなり」等云
云、老子らうしは母の胎しよに処しして八十年みろくぼさつ・弥勒菩薩とそつは兜率とそつの内院ないえんにして五
十六億七千万歳せんまんを待まちたもう仏法ぶつぽうを修行しゆぎやうする人人ひとびと時を知らざ
らんや、爾しからば末法まつぽうの始はじめには純円じゆんえん一実いちじつの流布るとは知らざれども
經文きやうもんに任まかするに「我が滅度めつどの後ごの五百歳ごのひやくさいの中に閻浮提えんぶだいに広宣かうせん
流布るして断絶だんぜつせしむること無なけん」と云云、誠まことに以もつて分ぶん明みやうなり。

七六

法華初心成仏抄

建治三年

五十六歳御

作 与岡宮妙法尼

544P

問うて云く八宗・九宗・十宗の中に何か釈迦仏の立て給へる宗な
るや、答えて云く法華宗は釈迦所立の宗なり其の故は已説・今説・
当説の中には法華経第一なりと説き給う是れ釈迦仏の立て給う処
の御語なり、故に法華経をば仏立宗と云い又は法華宗と云う又
天台宗とも云うなり、故に伝教大師の釈に云く天台所釈の法華の
宗は釈迦世尊所立の宗と云へり、法華より外の経には全く已今当の
文なきなり已説とは法華より已前の四十余年の諸経を云う
今説とは無量義経を云う当説とは涅槃経を云う此の三説の外に
法華経計り成仏する宗なりと仏定め給へり、余宗は仏涅槃し給い

て後ある・或あるは菩薩ぼさつ・或あるは人師にんし達の建立こんりゅうする宗しゆなり仏の御定ごていを背そむきて菩薩ぼさつ・人師にんしの立たてたる宗しゆを用もちゆべきか菩薩ぼさつ・人師にんしの語ことばを背そむきて仏の立たて給たまへる宗しゆを用もちゆべきか又何いずれれをも思おもひ思おもひに我われが心こころに任まかせてじやうだつ

志し あらん経法きやうぽうを

持もつべきかと思おもう処ところに仏ぶつ是これを兼かねて知しり召めして末法まつぽう濁悪じやくあくの世よに眞實しんじつの道心だうしんあらん人ひと人の持もつべき経きやうを定さだめ給たまへり、經きやうに云いく「法ぽうに依よつて人ひとに依よらざれ・義ぎに依よつて語ごに依よらざれ知ちに依よつて識しに依よらざれ・了りやう義經ぎきやうに依よつて不ふ了りやう義經ぎきやうに依よらざれ」文ぶん、此こゝの文ぶんの心こころは菩薩ぼさつ・人師にんしの言ことには依よるべからず仏の御定ごていを用もちいよ華嚴けごん・阿含あこん・方等ほうとう・般若經はんによぎきやう等の眞言しんごん・禅宗ぜんしゆ・念仏ねんぶつ等の法ぽうには依よらざれ了りやう義經ぎきやうを持もつべし了りやう義經ぎきやうと云いうは法華經ほけきやうを持もつべしと云いう文ぶんなり。

問もんうて云いく今いま・日本国にほんこくを見るみるに当時とうじ五濁ごじやくの障重さわりしげく鬪争とうじやう堅固けんこにして瞋恚しんにの心こころ猛たけく嫉妬しつとの思おもひ甚はなはだしかかる国くにかかる時ときには何いずれれの經きやうを

か弘ひろむべきや、答こたえて云いく法華經ほけきょうを弘ひろむべき国くになり、其そのの故ゆえは法華經ほけきょうに云いく「閻浮提えんぶだいの内うちに広ひろく流布りゅうふせしめて断絶だんぜつせざらしめん」等云とら云い、瑜伽論ゆいがには丑寅うしとらの隅すみに大乘だいじょう・妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの流布りゅうふすべき小国せうこくありと見えたる

り、安然和尚あんねんわじょう云いく「我が日本国にほんこく」等云とら云い、天竺てんじくよりは丑寅うしとらの角すみに此こゝの日本国にほんこくは当あたるなり、又また慧心僧都えしんそうずの一乘いちじょう

要決ようけつに云いわく、「日本にほん一州えんきじゆんいつ円機えんきじゆんいつ純じゆん一いつにして朝野あそん遠近えんきじゆん同どうく一乘いちじやうに歸かへし
緇素しそ貴賤きせん悉じつく成じやう仏ぶつを期こせん」云云、此の文の心は日本にほん国こくは京鎌倉かまくら・
筑紫つくし・鎮西ちんせいみちをく・遠とほきも近ちかきも法華ほつけい一乘いちじやうの機きのみ有りて上も下
も貴たかも賤ひそも持戒じがいも破戒はかいも男おとこも女めづめも皆みなおしなべて法華ほつけい經きやうにて成じやう仏ぶつす
べき国こくなりと云いう文ぶんなり、譬たとえば崑崙山こんろんに石いしなく蓬萊山ほうらいざんに毒どくなき
が如ごとく日本にほん国こくは純じゆんに法華ほつけい經きやうの国こくなり、而しかるに法華ほつけい經きやうは元もとよりめでた
き御經みぎきやうなれば誰たれか信しんぜざると語ことばには云いうて而しかも昼夜ちゆうや朝暮ちやうぼ
に弥陀念仏みだねんぶつを申もうす人は藥くすりはめでたしとほめて朝夕ちやうせき毒どくを服のむする者ものの
如ごとし、或あるは念ねん仏ぶつも法華ほつけい經きやうも一いつなりと云いはん人は石いしも玉たまも上じやう臈らうも
下臈げらうも毒どくも藥くすりも一いつなりと云いわん者ものの如ごとし、其そのの上うへ法華ほつけい經きやうを怨あだみ
嫉ねたみ悪にくみ毀そしりり輕かろしめ賤いやしむ族やからのみ多おほし、經きやうに云いく「一切いっさい世間せけん・多た怨おん
難なん信しん」又また云いく「如來にらい現げん在ざい・猶ゆた多おほ怨おん嫉しつ・況きやう滅めつ度ど後ご」の經きやう文もん少すくしも違ちがはず
当あたり、され

ば伝でん教ぎょう大師だいしの釈しやくに云いく「代しろよを語かたれば則すなわち像しやくの終しゆうり末まつの初しうめ地ちを
尋たずぬれば唐たうの東かづ・羯かつの西せい・人たずを原たずぬれば則すなわち五ご濁じやくの生せい・鬪たう諍じやうの時じな
り経けいに云いく猶ゆた多た怨おん嫉しつ・況きやう滅めつ度ど後ごと此この言まこと良ゆえあに以もつ有あるなり」と、此これら等
の文ぶん釈しやくをもつて知しるべし、日本にほん国こくに法ほ華け經きやうより外ほかの真しん言ごん・禪ぜん・律りつ宗しゆう・
念ねん仏ぶつ宗しゆう等の經きやう教ぎょう 山さん山さん寺じ寺じ朝あ野おん遠おん近しんに弘ひろまるといへども正まさしく国こくに
相そ応おうして仏ぶつの御ご本ほん意いに相あ叶あひ生せい死じを離はなるべき法ほにはああらあざるなり。
問いうて云いく華け嚴げん宗しゆうには五ご教きやうを立たて余いの一切いっさいの經きやうは劣おとれり華け嚴げん經きやう
は勝まさると云いひ、真しん言ごん宗しゆうには十じゆう住じゆう心しんを立たて余いの一切いっさいの經きやうは顯けん經きやうなれ
ば劣おとるなり真しん言ごん宗しゆうは密みつ教きやうなれば勝すくれたりと云いう、禪ぜん宗しゆうには余いの
一切いっさいの經きやうをば教きやう内ないと簡かんいて教きやう外がい別べつ伝でん・不ふ立りつ文ぶん字じと立たて壁かべに向むかいて悟ごれ
ば禪ぜん宗しゆう独どくり勝すくれたりと云いう、淨じやう土ど宗しゆうには正しやう雜ざう二に行ぎやうを立たて法ほ華け經きやう
等とうの一切いっさいの經きやうをば捨しゃ閉へい閣かく抛たうし雜ざう行ぎやうと簡かんひ淨じやう土どの三さん部ぶ經きやうを機きに叶あひめ
でたき正しやう行ぎやうなりと云いう、各かく各かく・我が慢まんを立たて互たがいに偏へん執しやくを作なす何いれか

釈迦しやくが仏ぶつの御本意ごほんいなるや、答えて云いく宗宗各別かくべつに我が経こそすぐれた
れ余経よきようは劣おとれりと云いいて我が宗よきと云いう事は唯是ただこれ人師にんしの言にて
仏説ぶつせつにあらず、但ただし法華経計ほけきよつばかりこそ仏五味たとえの譬たとえを説ときて五時の教
に当あたりて此の経の勝すぐれたる由よしを説とき、或あるは又已いこんとう今当の三説さんせつの中に仏
になる道は法華経ほけきよつに及およぶ経なしと云いう事は正ただしき仏の金言きんげんなり、
然しかるに

我が経は法華経に勝れたり我が宗は法華宗に勝れたりと云はん人は下臈が上臈を凡下と下し相伝の従者が主に敵対して我が下人なりと云わんが如し何ぞ大罪に行なはれざらんや、法華経より余経を下す事は人師の言にあらざり經文分明なり、譬えば国王の万人に勝れたりと名乗り侍の凡下を下臈と云わんに何の禍かあるべきや、此の経は是れ仏の御本意なり天台・妙楽の正意なり。

問うて云く釈迦一期の説法は皆衆生のためなり衆生の根性万差なれば説法も種種なり何れも皆得道なるを本意とす、然れば我が有縁の経は人の為には無縁なり人の有縁の経は我が為には無縁なり故に余経の念仏によりて得道なるべき者の為には觀經等はめでたし法華経等は無用なり、法華によりて成仏得道なるべき者のためには余経は無用なり法華経はめでたし、四十余年・未顕眞実と説くも雖示種種道・其実為仏乗と云うも正直捨方便・但説無上道

と云うも法華得道の機の前の事なりと云う事・世こそつてあはれ
然るべき道理かななんと思へり如何心うべきや、若し爾らば大乘・
小乗の差別もなく權教・実教の不同もなきなり何れをか仏の
本意と説き何れをか成仏の法と説き給えるや甚・だいぶかし、い
ぶかし、答えて云く凡そ仏の出世は始めより妙法を説かんと思し
食ししかども

衆生の機縁万差にしてととのをらざりしかば三七日の間思惟し
四十余年の程・こしらへおおせて最後に此の妙法を説き給う、故に
「も若し但仏乘を讃せば衆生苦に没在し是の法を信ずること能わ
ず、法を破して信ぜざるが故に三悪道に墜ちん」と説き「世尊の法
は久くして後要らず当に眞実を説きたまうべし」とも云へり、此の
文の意

は始めより此の仏乘を説かんと思し食ししかども仏法の気分もな

き衆生は信ぜずして定めて謗りを至さん、故に機をひとしなに誘へ
給うほどに初めに華嚴・阿含・方等・般若等の経を四十余年の間とき
最後に法華経をとき給う時、四十余年の座席にありし身子・目連等
の万二千の声聞・文殊・弥勒等の八万の菩薩・万億の輪王等・梵王・
帝釈等の無量の天人各爾前に聞きし処の法をば如来の無量の知見
を失えりと云云、法華経を聞いては無上の宝聚求め

ざるに自ら得たりと悦び給ふ、されば「我等昔より来 数世尊の

説を聞きたてまつるに未だ曾つて是くの如き深妙の上法を聞かず」

とも、「仏希有の法を説き給う昔より未だ曾つて聞かざる所なり」

とも説き給う、此等の文の心は四十余年の程若干の説法を聴聞せ

しかども法華經の様なる法をば総てきかず又仏も終に説かせ給は

ずと法華經を讚たる文なり四十二年の聴と今經の聴とをばわけた

くらぶべからず、然るに今經をそれ法華經得道の

人の為にして爾前得道の者の為には無用なりと云う事大なる誤り

なり、をのづから四十二年の經の内には一機・一縁の為にしつらう

処の方便なれば設い有縁無縁の沙汰はありとも法華經は爾前の

經經の座にして得益しつる機どもを押しさねて一純に調べて説き

給いし間・有縁無縁の沙汰あるべからざるなり、悲しいかな大小・

権実みだりがわしく仏の本懐を失いて爾前得道の者のためには

法華經無用なりと云へる事を能能慎むべし・恐るべし、古の徳一
大師と云いし人・此の義を人にも教へ我が心にも存して・さて法華經
を読み給いしを伝教大師・此の人を破し給ふ言に「法華經を讚すと
雖も還つて法華の心を死す」と責め給いしかば徳一大師は舌八にさ
けて失せ給ひき。

問うて云く天台の釈の中に菩薩処処得入と云う文は法華經は但
二乗の爲にして菩薩の爲ならず菩薩は爾前の經の中にして也得道な
ると見えたり若し爾らば未顕眞実も正直捨方便等も総じて
法華經八卷の内皆以て二乗の爲にして菩薩は一人も有るまじきと
意うべきか如何、答えて云く法華經は但二乗の爲にして菩薩の爲な
らずと云う事は天台より已前・唐土に南三・北七と申して十人の
学匠の義なり、天台は其の義を破し失て今は弘まらず若し
菩薩なしと云はば菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除くと云える豈

是れ菩薩の得益なしと云わんや、それに尚鈍根の菩薩は二乗とつれ
て得益あれども利根の菩薩は爾前の經にて得益すと云はば「利根・
鈍根等しく法雨を雨す」と説き、「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提
は皆此經に属せり」と説くは何に、此等の文の心は利根にてもあれ
鈍根

にてもあれ持戒じがいにてもあれ破戒はかいにてもあれ貴もあれ賤もあれ一切いっさい
の菩薩ぼさつ・凡夫ほんぶ・二乗にじょうは法華經ほけきょうにて成仏得道じょうぶつとくどうなるべしと云う文なるを
や、又法華得益ほつげとくやくの菩薩ぼさつは皆鈍根みなどんこんなりと云はば普賢ふげん・文殊もんじゆ・弥勒みろく・藥王やくおう
等の八万はちまんの菩薩ぼさつをば鈍根どんこんなりと云うべきか、其その外げんに爾前にぜんの經にて
得道とくどうする利根りこんの菩薩ぼさつと云うは何様いかようなる菩薩ぼさつぞや、抑そもそも爾前にぜんに菩薩ぼさつ
の得道とくどうと云うは法華經ほけきょうの如き得道とくどうにて候か、其ほかならば法華經ほけきょうの得道とくどう
にて爾前にぜんの得分いこんとうにあらず、又法華經ほけきょうより外ほかの
得道とくどうならば已今当いこんとうの中には何れいずれぞや、いかさまにも法華經ほけきょうならぬ
得道とくどうは当分とうぶんの得道とくどうにて真実しんじつの得道とくどうにあらず、故ゆえに無量義經むりようぎきょうには
「かくのゆえかの故ゆえに衆生しゆじやうの得道とくどう差別さべつせり」と云い又「終ついに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずる
是この故ゆえに衆生しゆじやうの得道とくどう差別さべつせり」と云へり、文ぶんの心こころは爾前にぜんの經經きやうきやうには得道とくどうの差別さべつを説く
と云へども終ついに無上菩提むじやうぼだいの法華經ほけきょうの得道とくどうはなしとこそ仏とは説き給たまひ
て候へ。

問うて云く当時は釈尊入滅の後・今に二千二百三十余年なり、
一切経の中に何の経が時に相應して弘まり利生も有るべきや
大集経の五箇の五百歳の中の第五の五百歳に当時はあたれり、
其の第五の五百歳をば鬪諍堅固・白法隱没と云つて人の心たけく
腹あしく貪欲・瞋恚・強盛なれば軍・合戦のみ盛にして仏法の中に
先き先き弘りし所の真言・禅宗・念仏持戒等の白法は隱没すべし
と仏説き給へり、第一の五百歳・第二の五百歳・第三の五百歳・第四
の五百歳を見るに成仏の道こそ未顕真実なれ世間の事法は仏の
御言一分も違はず是を以て之を思うに当時の鬪諍堅固・白法隱没
の金言も違つ事あらじ、若爾らば末法には何の法も得益あるべか
らず何れの仏・菩薩も利生あるべからずと見えたり如何、さてもだ
して何の仏・菩薩にもつかへ奉らず何の法をも行ぜず憑む方なくし
て候べきか、後世をば如何が思い定め候べきや、答えて云く末法

とうじ ときはくおんじつじょう 当時は久遠実成の釈迦仏・上行菩薩・無辺行菩薩等の弘めさせ
たま 給うべき法華經二十八品の肝心たる南無妙法蓮華經の七字計り此
ひろ の国に弘まりて利生得益もあり上行菩薩の御利生盛んなるべき時
そのゆえ なり、其の故は經文明白なり道心堅固にして 志 あらん人は委く
これ たず 是を尋ね聞くべきなり。

じょうどじゅう ひとびとまっほうまんねん よきょうことごと

浄土宗の人人末法万年には余経悉く滅し弥陀一教のみと云ひ又

とうこん まっほう こくじやく あくせただじょうど いちもん

当今末法は是れ五濁の悪世唯浄土の一門のみ有て通入す可き路な

りと云つて虚言して大集経に云くと引ども彼の経に都て此文なし、

そ 其の上あるべき様もなし仏の在世の御言に当今末法五濁の悪世に

は但浄土の一門のみ入るべき道なりとは説き給うべからざる道理

けんねん ほんきょう とうびい きちぢめつじん ひと

顯然なり本経には「当来の世経道滅尽し特り此の経を留めて止住

する事百歳ならん」と説けり、末法一万年の百歳

とは全く見えず、然るに平等覚経・大阿弥陀経を見るに仏滅後・一

千年の後の百歳とこそ意えられたれ、然るに善導が惑へる釈をば

もつとどうり みな しゃびやくあん ぜんどう ただ

尤も道理と人皆思へり是は諸僻案の者なり、但し心あらん人は

せけん 世間のことはりをもつて推察せよ、大旱魃のあらん時は大海が先に

ひるべきか小河が先にひるべきか仏を説き給うには法華経は大海

なり

観經・阿弥陀經等は小河なり、されば念仏等の小河の白法こそ先にひるべしと經文にも説き給いて候ひぬれ、大集經の五箇の五百歳の中の第五の五百歳・白法隱没と云と雙觀經に經道滅尽と云とは但一つ心なり、されば末法には始めより雙觀經等の經道滅尽すと聞えたり經道滅尽と云は經の利生の滅すと云う事なり、色の經卷有るにはよるべからず、されば當時は經道滅尽の時に至つて二百歳に余れり、此の時は但法華經のみ利生得益あるべし。

されば此經を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉るべしと見えたり薬王品には「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなけん」と説き給ひ、天台大師は「後の五百歳遠く妙道に沾んと釈し、妙樂大師は「且らく大經の流行す可き時に拠る」と釈して後の五百歳の間には法華經弘まりて其の後は閻浮提の内に絶え失せる事有るべからずと見えたり、安樂行品に云く「後の末世の

ほうめつ 法滅せん と 欲せん 時に 於て 斯の 經典 を 受持し 読誦せん者 文
じんりき 神力品に 云く 「爾の 時に 仏・上行 等の 菩薩大衆 に 告げたまわく
ぞくるい 属累の 為の 故に 此の 經の 功德 を 説くと
な お も 猶 尽す こと 能わじ、 要を 以て 之を 云わば 如来の 一切の 所有の 法
に よらい 如来の 一切の 自在の 神力・如来の 一切の 秘要の

蔵・如来の一切の甚深の事 皆此経に於て宣示顕説すと云云、此等の文の心は釈尊入滅の後第五の五百歳と説くも来世と云うも濁悪世と説くも正像二千年過ぎて末法の始二百余歳の今時は唯法華経計り弘まるべしと云う文なり、其の故は人既にひがみ法も実にするしなく仏神の威験もましまさず今生後生の祈りも叶はず、かからん時

はたよりを得て天魔・波旬乱れ入り国土常に飢渴して天下も疫癘し他国侵逼難・自界叛逆難とて我が国に軍合戦常にありて、後には他国より兵どもをそひ来りて此の国を責むべしと見えたり、此の如き鬪争堅固の時は余経の白法は験し失せて法華経の大良薬を以て此の大難をば治すべしと見えたり。

法華経を以て国土を祈らば上一人より下万民に至るまで悉く悦び栄へ給うべき鎮護国家の大白法なり、但し阿闍世王・阿育大王

は始めは悪王なりしかども耆婆大臣の語を用ひ夜叉尊者を信じ
給いて後にこそ賢王の名をば留め給いしか、南三・北七を捨てて知
法師を用ひ給いし陳主・六宗の碩徳を捨てて最澄法師を用ひ給い
し桓武天皇は今に賢王の名を留め給へり、知法師と云うは後には
天台大師と号し奉る最澄法師は後には伝教大師と云う
是なり、今の国主も又是くの如し現世安穩・後生善処なるべき此の
大白法を信じて国土に弘め給はば万国に其の身を仰がれ後代に
賢人の名を留め給うべし、知らず又无边行菩薩の化身にてやまし
すらん、又妙法の五字を弘め給はん智者をば・いかに賤くとも
上行菩薩の化身か又釈迦如来の御使かと思ふべし、又薬王菩薩・薬
上菩薩・観音・
勢至の菩薩は正像二千年の御使なり此等の菩薩達の御番は早過
たれば上古の様に利生有るまじきなり、されば当世の祈を御覽せ

よ一切叶はざる者なり、末法今の世の番衆は上行・無辺行等にて
をはしますなり此等を能能明らめ信じてこそ法の驗も仏・菩薩の
利生も有るべしとは見えたれ、譬えばよき火打とよき石のかどと・
よきほくちと

此の三寄り合いて火を用ゆるなり、祈も又是くの如しよき師とよき
檀那とよき法と此の三寄り合いて祈を成就し国土の大難をも払ふ
べき者なり、よき師とは指したる世間の失無くして聊のへつらうこ
となく小欲知足にし

て慈悲有らん僧の經文に任せて法華經を読み持ちて人をも勧めて
持たせん僧をば仏は一切の僧の中に吉第一の法師なりと讚められ
たり、吉檀那とは貴人にも・よらず賤人をも・にくまず上にもよら
ず下をもいやしまず一切・人をば用いずして一切經の中に法華經を
持たん人をば一切の人の中に吉人なりと仏は説給へり吉法とは此の
法華經を

最為第一の法と説かれたり、已説の經の中にも今説の經の中にも
当説の經の中にも此の經第一と見えて候へば吉法なり、禪宗・
真言宗等の經法は第二・第三なり殊に取り分けて申せば真言の法
は第七重の劣なり、然るに日本国には第二・第三・乃至・第七重の劣
の法をもつて御祈・あれども末だ其の証拠をみず、最上第一の
妙法をもつて御祈・あるべきか、是を正直捨方便・但説無上道・
唯此一事實と云へり誰か疑をなすべきや。

問うて云く無智の人来りて生死を離るべき道を問わん時は何れの經の意をか説くべき仏如何が教へ給へるや、答えて云く法華經を説くべきなり所以に法師品に云く「若し人有つて何等の衆生か未来世に於て当に作仏することを得べきと問わば応に示すべし、是の諸人等・未来世に於て必ず作仏することを得ん」と云云、安樂行品に云く「難問する所有らば小乗の法を以て答えず但大乘を以て而も為に解説せよ」と云云、此等の文の心は何なる衆生か

仏になるべきと問わば法華經を受持し奉らん人必ず仏になるべしと答うべきなり是れ仏の御本意なり、之に付て不審あり衆生の根性区にして念仏を聞かんと願ふ人もあり法華經を聞かんと願ふ人もあり、念仏を聞かんと願ふ人に法華經を説いて聞かせんは何の得益かあるべき、又念仏を聞かんと為に請じたらん時にも強て

法華經を説くべきか、仏の説法も機に随いて得益有るをこそ本意とし給うらんと不審する人あらば云うべし、元より末法の世には無智の人に機に叶ひ叶はざるを顧みず但強いて法華經の五字の名号を説いて持たすべきなり、其の故は釈迦仏・昔不輕菩薩と云はれて法華經を弘め給いしには男女・尼・法師がおしなべて用ひざりき、
或は罵られ毀られ或は打れ追はれ一しなならず、或は怨まれ嫉まれ給いしかども少しもこりもなくして強いて法華經を説き給いし故に

今の釈迦しやくか仏ぶつとなり給たまいしなり、不ふ輕ぎよ菩薩ぼさつを罵ののりまいらせし人は口も
ゆがまず打たち奉たてりしかいなもすくまず、付ふ法ほう蔵ざうの師し子そん尊じゃ者げも外げ道どう
に殺ころされぬ、又また法ほう道どう三さん蔵ざうも火かな印なを面かにあてられて江南かに流ながされ給たまい
しぞかし、まして末ま法ほうにかひなき僧ほけきの法ほう華け經きやうを弘ひろめんにはかかる難なん
あるべしと經き文ぶんに正まさしく見みえたり、されば人これ是これを用もちひず機きに叶あはず
と云いへども強しいて法ほう華け經きやうの五ご字じの題だい名めいを聞きかすべきなり、是これならで
は仏ぶつになる道みちはなきが故ゆゑなり、又また或ある人ふしん不ふ審しんして
云いく、機きに叶あはずる法ほう華け經きやうを強しいて説といて謗ほうぜさせて・惡あく道どうに人ひとを
墮ださんだよりは、機きに叶あへる念ねん仏ぶつを説といて・発ほつ心しんせしむべし、利り益やくもな
く謗ほうぜさせて返かへつて地じ獄じやくに墮ださんは法ほう華け經きやうの行ぎやう者じやくにもあらず邪じゃ見けん
の人ひとにてこそ有あるらめと不ふ審しんせば、云いうべし經きやう文ぶんには何なに体たいにもあれ
末ま法ほうには強しいて法ほう華け經きやうを説とくべしと仏ぶつの説とき給たまへるをばさていかが
心こころうべく候あや、釈しやく迦か仏ぶつ・不ふ輕ぎよ菩ぼ薩さつ・天てん台だい・妙みよ樂らく・伝でん教ぎやう等はらさて邪じゃ見けんの

人外道にておはしまし候べきか、又悪道にも墮ち

ず三界の生を離れたる二乗と云う者をば仏の給はく設ひ犬野干

の心をば発すとも二乗の心をもつべからず五逆・十悪を作りて

地獄には墮つとも二乗の心をばもつべからずなどと禁められし

ぞかし、悪道におちざる程の利益は争でか有るべきなれども其れを

ば仏の御本意とも思し食さず地獄には墮つるとも仏になる法華経

を耳にふれぬれば是を種として必ず仏になるなり、されば天台

妙樂も此の心を以て強いて法華経を説くべしとは釈し給へり

譬えば、人の地に依りて倒れたる者の返つて地をおさへて起が如し、

地獄には墮つれども疾く浮んで仏になるなり、当世の人何となく

とも法華経に背く失に依りて地獄に墮ちん事疑いなき故に、とて

もかくても法華経を強いて説き聞かすべし、信ぜん人は仏になるべ

し謗ぜん者は毒鼓の縁となつて仏になるべきなり、何にとしても仏

の

種ほけきは法華經よより外にななきなり、權教をもつてをもつて仏になる由だにあら
ば、なにしにかは強いて法華經を説いて謗ずるも信ずるも利益ありあ
るべしと説き我が不愛身命とは仰せらるべきや、よくよく此等を道心としん
ましまさん人は御心得あるべきなり。

問うて云く無智の人も法華經を信じたらば即身成仏すべきか、
又何れの淨土に往生すべきぞや、答えて云く法華經を持つにおいて
は深く法華經の心を知り止觀の坐禅をし一念三千・十境・十乘の
觀法をこらさん人は實に即身成仏し解を開く事もあるべし、其の
外に法華經の心をもしらず無智にしてひら信心の人は淨土に必ず
生べしと見えたり、されば生十方仏前と説き或は即往安樂世界
と説き、是の法華經を信ずる者の往生すと云う明文なり、
之に付いて不審あり其の故は我が身は一にして十方の仏前に生る
べしと云う事心得られず、何れにてもあれ一方に限るべし正に何れ
の方をか信じて往生すべきや、答えて云く一方にさだめずして
十方と説くは最もいはれあるなり、所以に法華經を信ずる人の
一期終る時には十方世界の中に法華經を説かん仏のみもとに生る
べきなり、余の華嚴・阿含・方等・般若經を説く淨土へは生るべから

ず、浄土十方じゆつぽうに多くして声聞しやうもんの法を説く浄土じゆつどもあり辟支仏ひやくしぶつ

の法を説く浄土じゆつどもあり、或あるは菩薩ぼさつの法を説く浄土じゆつどもあり、法華經ほけきやうを

信ずる者は此等これらの浄土じゆつどには一向いっかう生れずして法華經ほけきやうを説き給たまう浄土じゆつど

へ直ちに往生おつじやうして座席ざせきに列りて法華經ほけきやうを聴聞ちやうもんしてやがてに仏にな

るべきなり、然しかるに今世いまにして法華經ほけきやうは機きに叶あはずと云いうとめて

西方浄土さいほうじゆつどにて法華經ほけきやうをさとるべしと云いはん者は阿彌陀あみだの浄土じゆつどにても

法華經

をさとるべからず十方じゆつぽうの浄土じゆつどにも生るべからず、法華經ほけきやうに背そむく咎とが

重おもきが故ゆゑに永とこく地獄じじよくに墮おつべしと見えたり、其人こゝにん命終みやうじゆう入阿鼻獄にゆうあびじよくと云

へる是これなり。

問いわうて云いく即往安樂世界そくおうあんらくせかい・阿彌陀あみだ仏ぶつと云云、此の文の心は法華經ほけきやう

を受持じゆじし奉たてまつらん女人にょにんは阿彌陀あみだ仏ぶつの浄土じゆつどに生るべしと説とき給たまえり

念ねん仏ぶつを申もうしても阿彌陀あみだの浄土じゆつどに生るべしと云ふ、浄土じゆつど既すでに同おなじ念ねん仏ぶつ

も法華經も等と心え候べきか如何、答えて云く觀經は權教なり
ほけきよう じつきよう
法華經は實教なり全く等しかるべからず其の故は仏世に出でさせ
たまい よんじゆうよねん
給いて四十余年

の間・多くの法を説き給いしかども二乗と悪人と女人とをば簡ひ。
はてられて成仏すべしとは一言も仰せられざりしに此の經にこそ敗
種の二乗も三逆の調達も五障の女人も仏になるとは説き給い候つ
れ、其の旨經文に見えた

り、華嚴經には「女人は地獄の使なり仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と云へり、銀色女経には三世の諸仏の眼は抜けて大地に落つるとも法界の女人は永く仏になるべからずと見えたり、又経に云く「女人は大鬼神なり能く一切の人を喰う」と、竜樹菩薩の大論には一度女人を見れば永く地獄の業を結ぶと見えたりと云

れば実にてやありけん善導和尚は謗法なれども女人をみずして一期生と云はれたり、又業平が歌にも律をいてあれたるやどのうれたきはかりにも鬼のすだくなりけりと云うも女人をば鬼とよめるにこそ侍れ、又女人には五障三従と云う事有るが故に罪深しと見えたり、五障とは一には梵天王・二には帝釈・三には魔王・四には転輪聖王・五には仏にならずと見えたり、又三従とは女人は幼き時は親に従いて心に任せず、人となりては男に従いて

心にまかせず、年よりぬれば子に従いて心にまかせず加様に幼き時より老耄ろうもうに至るいたまで三人に従て心にまかせず思ふ事をもいはず見たき事をもみず聴問したき事をもきかず是これを三従とは説くなり、されば榮啓期えいけいきが三樂を立てたるにも女人にょにんの身と生れざるを一の樂みといへり、加様に内典ないてん・外典げてんにも嫌きらはれたる女人にょにんの身なれども此の経を

読まねどもかかねども身と口と意とにうけ持ちて殊ことに口に南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱へ奉る女人たてまつは在世ざいせいの竜女りゅうにょ・曇弥きょうどんみ・耶輸陀羅女やしゅたらにょの如ごとくにやすやすと仏になるべしと云う經文きょうもんなり、又安樂世界あんらくせかいと云うは一切いっさいの淨土じよつどをば皆安樂みなあんらくと説くなり、又阿弥陀あみだと云うも觀經かんきょうの阿弥陀あみだにはあらず、所以ゆえんに觀經かんきょうの阿弥陀あみだは法蔵比丘ほうぞうびくの阿弥陀あみだ・四十八願しじゅうはちがんの主十劫成道じようじやくじょうどうの仏なり、法華經ほけきょうにも迹門しやくもんの阿弥陀あみだは大通だいつう智勝ちしやうの十六王子じゅうろくおうじの中の第九くわいじゅうの阿弥陀あみだにて法華經大願ほけきょうだいがんの主の仏な

り、本門の阿弥陀は釈迦分身の阿弥陀なり随つて釈にも「須く更に
観経等を指すべからざるなり」と釈し給えり。

問うて云く経に難解難入と云へり世間の人此の文を引いて
法華経は機に叶はずと申し候は道理と覚え候は如何、答えて云く
謂れなき事なり其の故は此の経を能も心えぬ人の云う事なり、
法華より已前の経は解り難く

入り難し法華の座に來りては解り易く入り易しと云う事なり、されば妙樂大師の御釈に云く「法華已前は不了義なるが故に故に難解と云う即ち今の教には咸く皆實に入るを指す故に易知と云う」文、此の文の心は法華より已前經にては機つたなくして解り難く入り難し、今の經に來りては機賢く成りて解り易く入り易しと釈し給へり、其の上難解難入と説かれたる經が機に叶はずば先念仏を捨てさせ給うべきなり、其の故は雙觀經に「難きが中の難き此の難に過ぎたるは無し」と説き阿彌陀經には難信の法と云へり、文の心は此の經を受け持たん事は難きが中の難きなり此れに過ぎたる難きはなし難信の法なりと見えたり。

問うて云く經文に「四十余年未だ眞實を顯さず」と云い、又「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずるところを得じ」と云へり、此の文は何体の事にて候や、答えて云く此の文

の心は釈迦仏・一期五十年の説法の中に始めの華嚴經にも眞実をと
かず中の方等・般若にも眞実をとかず、此の故に禅宗・念仏・戒等
を行ずる人

は無量無辺劫をば過ぐとも仏にならじと云う文なり、仏四十二年
の歳月を経て後・法華經を説き給ふ文には「世尊の法は久くして後
に要らず当に眞実を説き給うべし」と仰せられしかば、舍利弗等の
千二百の羅漢・万二千の声聞・弥勒等の八万人の菩薩・梵王・帝釈
等の万億の天人・阿闍世王等の無量無辺の国王・仏の御言を領解す
る文に

は「我等昔より来　数世尊の説を聞きたてまつるに未だ曾つて
是くの如き深妙の上法を聞かず」と云つて、我等・仏に離れ奉らずし
て四十二年若干の説法を聴聞しつれども　いまだ是くの如き貴き
法華經をばきかずと云へる、此等の明文をば　いかが心えて世間の

人は法華經と余經と等しく思ひ剩へ機に叶はねば闇の夜の錦・こそ
の曆なんど云ひて、適持つ人を見ては賤み輕しめ悪み嫉み口をす
くめなんどする是れ併ら謗法なり争か往生成仏も・あるべきや、
必ず無間地獄に墮つべき者と見えたり。

問うて云く凡そ佛法を能く心得て仏意に叶へる人をば世間に
是を重んじ一切是を貴む、然るに当世法華經を持つ

ひとびと
人人をば世こぞつて悪み嫉み軽しめ賤み或は所を追ひ出し、或は
流罪し供養をなすまでは思いもよらず怨敵の様ににくまるるは、い
かさまにも心わろくして仏意にもかなはず、ひがさまに法を心得た
るなるべし、経文には如何が説きたるや、答えて云く経文の如く
ならば末法の法華経の行者は人に悪まるる程に持つを實の大乗の
僧と

す、又経を弘めて人を利益する法師なり、人に吉と思はれ人の心に
したがとおと
随いて責しと思はれん僧をば法華経のかたき世間の悪知識なりと
思うべし、此の人を経文には獵師の目を細めにして鹿をねらひ猫の
爪を隠して鼠をねらふが如くにして在家の俗男・俗女の檀那をへつ
らい・いつわり・たばらかすべしと説き給へり、其の上勸持品には
ほけきょう
法華経

の敵人三類を挙げられたるに、一には在家の俗男・俗女なり此の

俗男ぞくなん・俗女ぞくじょは法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを憎み罵り打ちはりきり殺し所を追ひ

出だししゅっけ・或は上あるへ讒奏ざんそうして遠流おんるしなさけなくあだむ者なり、二には

出家しゅっけの人なり此の人は慢心まんしん高くして内心ないしんには物も知らざれども

智者ちしやげにもてなして世間せけんの人に学匠がくしやうと思はれて法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを見

ては怨みあだ

嫉みねた輕かろしめ、賤みいやし犬野干いぬやかんよりも・わるきようを人に云いいうとめ

法華經ほけきょうをば我、一人心得こころえたりと思おもうう者なり、三には阿練若あれんにやの僧そうなり

此の僧そうは極きわめて貴とうとき相さうを形かたちに顯あらわし三衣さんね一鉢いちぱつを帶たいして山林さんりんの閑しずかな

る所に籠こもり居ゐる在世ざいせの羅漢らかんの如ごとく諸人しよじんに貴たかまれ仏ぶつの如ごとく万人ばんにんに仰あお

がれて法華經ほけきょうを説との如ごとくに読よみ持たもち奉たてまつらん僧そうを見ては憎み嫉あんで

云いく大愚癡くち

の者もの大邪見じやくけんの者ものなり総じゆて慈悲じひなき者もの・外道げどうの法ほふを説とくなんど云いわ

ん、上一人かみいちにんより仰あおいで信しんを取とらせ給たまはば其その已下いかばんにん万人ばんにんも仏ぶつの如ごとくに

くよう
供養をなすべし、法華經を説の如くよみ持たん人は必ず此の三類の
てきじん
敵人に怨まるべきなりと仏説き給へり。

問うて云く仏の名号を持つ様に法華經の名号を取り分けて持つ
べき証拠ありや如何、答えて云く經に云く「仏諸の羅刹女に告げた
まわく善き哉善き哉汝等但能く法華の名を受持する者を擁護せ
ん福量る可からず」と云云此の文の意は十羅刹の法華の名を持つ人
を護らんと誓言を立て給うを大覺世尊讚めて言く善き哉善き哉汝

等

南無妙法蓮華經と受け持たん人を守らん功德いくら程とも計りが

たく・めでたき功德なり神妙なりと仰せられたる文なり、是れ我等

衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと云う文なり。

凡そ妙法蓮華經とは我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と

舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と三世の諸仏の解の

妙法と一体不二なる理を妙法蓮華經と名けたるなり、故に一度

妙法蓮華經と唱うれば一切の仏・一切の法・一切の菩薩・一切の

声聞・一切の梵王・帝釈・閻魔法王・日月・衆星・天神・地神・乃至・

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人天一切衆生の心中の仏性を唯一音に

喚び顕し奉る功德・無量無辺なり、我が己心の妙法蓮華經を本尊

とあがめ奉りて我が己心中の仏性・南無妙法蓮華經とよびよばれ

て顕れ給う処を仏とは云うなり、譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ

鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出で

んとするが如し口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必
ず顕れ給ふ、梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏・
菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ、されば「若し暫くも持つ者は我れ
則ち歡喜す諸仏も亦然なり」と説き給うは此の心なり、されば三世
の諸仏も妙法蓮華經の五字を以て仏に成り給いしなり三世の諸仏
の出世の本懐・一切衆生・皆成仏道の妙法と云うは是なり。是等
の趣きを能く能く心得て仏になる道には我慢偏執の心なく南無
妙法蓮華經と唱へ奉るべき者なり。日蓮在御判

七七 三世諸仏總勘文教相廢立 弘安二年十月

五十八歳御作日蓮之を撰す 558P

夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切經とは言
うなり、此れを分ちて二と為す一には化他・二には自行なり、一に
は化他の經とは法華經より前の四十二年の間説き給える諸の
經教なり此れをば權教と云い亦は方便と名く、此れは四教の中
には三藏教・通教・別教の三教なり五時の中には華嚴・阿含・方等・
般若なり法華より前の四時の經教なり、又十界の中には前の九
法界なり又夢と寤との中には夢中の善悪なり又夢をば權と云い寤
を

ば実と云うなり、是の故に夢は仮に有つて体性無し故に名けて權と

云うなり、寤は常住にして不變の心の体なるが故に此れを名けて
 実と為す、故に四十二年の諸の經教は生死の夢の中の善惡の事を
 説く故に權教と言ふ夢中の衆生を誘引し驚覺して法華經の寤と
 成さんと思食しての支度方便の經教なり故に權教と言ふ、斯れ
 に由つて文字の読みを糾して心得可きなり、故に權をば權と讀む權
 なる事の手本には夢を以て本と為す又實をば實と讀む實事
 の手本は寤なり、故に生死の夢は權にして性体無ければ權なる事
 の手本なり故に妄想と云う、本覺の寤は實にして生滅を離れたる
 心なれば眞實の手本なり故に真相と云う、是を以て權實の二字を
 糾して一代聖教の化他の權と自行の實との差別を知る可きなり、
 故に四教の中には前の三教と五時の中には前の四時と十法界の中に
 は前の九
 法界は同じく皆夢中の善惡の事を説くなり故に權教と云う、此の

教相きやうそうをば無量義經むりやうぎきやうに四十余年よんじゅうよねん・未顕みけん眞実しんじつと説き給たまう已上こゝ、未顕みけん眞実しんじつの諸經しよきやうは夢中の権教こんきやうなり故ゆゑに釈籤しゃくせんに云いわく「性しやう・殊ことなること無しと雖いえども必ず幻げんに藉よりて幻の機きと幻の感かんと幻の応おうと幻の赴ふとを發おこす能よく所化しよけと並ならびに権実こんじつに非あらず已上こゝ、此これ皆みな夢幻むげんの中ちゆうの方便ほうべんの教きやうなり性雖無殊しよつすいむしゆ

等とは夢見る心性しんせうと寤うの時の心性しんせうとは只ただ一の心性しんせうにして総て異なること無しと雖も夢の中の虚事そらごとと寤うの時の実事じじと二事一の心法なるを以て見ると思ふも我が心なりと云う釈ゆえなり、故に止觀しかんに云く、「前の三教の四弘・能も所も混みす已上、四弘とは衆生の無辺なるを度せんと誓願せいがんし煩惱ぼんのうの無辺なるを断だんせんと誓願せいがんし・法門ほうもんの無尽なるを知らんと誓願せいがんし無上菩提むじょうぼだいを証せんと誓願せいがんす此を四弘と云う、能とは如来にょらいなり所とは衆生しゆじやうなり此の四弘は能の仏も所の衆生も前三教は皆夢中の是非ぜひなりと釈しゃくし給えるなり、然れば法華以前の四十二年の間の説教せつきやうたる諸經しよきやうは未顕真實みけんしんじつの權教こんきやうなり方便ほうべんなり、法華に取寄る可き方便ほうべんなるが故ゆえに眞實しんじつには非あらず、此れは仏みずか、自ら四十二年の間説とき集め給たまいて後に、今法華經を説かんと欲して先ず序分じよぶんの開經くわいけいの無量義經むりやうぎきやうの時・仏みずか、自ら勸文かんもんし給たまえる教相きやうそうなれば人の語ことばも

入る可からず不審をも生す可からず、故に玄義に云く「九界を権と
為し仏界を実と為す」已上、九法界の権は四十二年の説教なり
仏法界の実は八箇年の説・法華經是なり、故に法華經をば仏乗と
云う九界の生死は夢の理なれば権教と云い仏界の常住は寤の理
なれば実教と云う、故に五十年の説教・一代の聖教・一切の諸經
は化他の四十二年の権教と自行の八箇年の実教と合して五十年な
れば権と実との二の文字を以て鏡に懸けて陰無し。

故に三蔵經を修行すること三僧祇・百大劫を歴て終りに仏に成
らんと思えば我が身より火を出して灰身入滅とて灰と成つて失せ
るなり、通教を修行すること七阿僧祇・百大劫を満てて仏に成ら
んと思えば前の如く同様に灰身入滅して跡形も無く失せぬるな
り、別教を修行すること二十二大阿僧祇・百千万劫を尽くして終
りに仏に成りぬと思えば生死の夢の中の権教の成仏なれば本覺の

寤うつの法華經ほけきょうの時ときには別教べつきょうには実じつ仏無ぶつし夢中むちゆうの果ぐわなり故ゆえに別教べつきょう

の教道きょうだうには実じつの仏無ぶつしと云いうなり、別教べつきょうの証道しやうだうには初地しよじに始めて

一分いちぶんの無明むみょうを断とじて一分いちぶんの中道ちゆうだうの理りを顕あらわし始めて之これを見れば別教べつきょう

は隔きやくりやく歴不融れきふじゆうの教きょうと知しつて円教えんきょうに移いり入いつて円人えんじんと成なり已おつて

別教べつきょうには留とどまらざるなり上中下三根じやうちゆうげの不同ふどう有あるが故ゆえに初地しよじ・二地

・三地な乃至ないし・等覺とうかくまでも円人えんじんと成なる故ゆえに別教べつきょうの面めんに仏無ぶつきなり、

故ゆえに有教無人うきやうむにん

と云うなり、故に守護国界章に云く、「有為の報仏は夢中の権果前三教の修行の仏

無作の三身は覺前かくぜんの實じつぶつ仏さんじんなり觀心の仏又云く「權教しんきょうの三身さんじんは未だ

無常むじょうを免れず前三教の修行の仏實教じつきょうの三身さんじんは俱く体たい俱く用ようなり後の円教の觀心の仏此こゝの積を

能よく能よく意得いじつじゆ可くきなり、權教しんきょうは難行なんぎやう苦行くぎやうして適たまたま仏ぶつに成なりぬと思

えば夢中の權の仏ほんがくなれば本覺ほんがくの寤うの時じつぶつには實じつぶつ無むきなり、極果ごくか

の仏ぶつ無むければ有教うきょう無む人にんなり況いや教法きほう實じつならんや之これを取とつて修行しゆぎやうせ

んは聖教しやうきやうに迷まよえるなり、此こゝの前ぜん三教さんきやうには仏ぶつに成ならざる証しやうじ拠こを

説とき置たまき給たまいて末代まつだいの衆生しゆじやうに慧解えげを開あかしむるなり九界しゆじやうの衆生しゆじやうは

一念いちねんの無明むみやうの眠みの中に於おいて生死しやうじの夢むに溺ほんがくれて本覺ほんがくの寤うを忘われ夢むの

是非ぜひに執しゆして冥くらきより冥くらきに入る、是かくのゆえの故にに如來にょらいは我等われらが生死しやうじの夢

の中ちゆうの入いつて

顛倒てんたうの衆生しゆじやうに同どうじて夢中むちゆうの語ごを以もて夢中むちゆうの衆生しゆじやうを誘しい夢中むちゆうの善惡ぜんあく

の差別さべつの事ことを説ぜんぜんいて漸漸ぜんぜんに誘引ゆういんし給たまうに、夢中むちゆうの善惡ぜんあくの事こと重ちゆう置じし

て様様に無量無辺なれば先ず善事に付いて上中下を立つ三乗の法
是なり、三三九品なり、此くの如く説き已つて後に又上・上品の
根本善を立て上中下・三三九品の善と云う、皆悉く九界生死の夢
の中の

善悪の是非なり今是をば総じて邪見外道と為す搜要の意、此の上
上・上品の善心は本覺の寤の理なれば此れを善の本と云うと説き
聞かせ給し時に夢中の善悪の悟の力を以ての故に寤の本心の実相
の理を始めて聞知せられし事なり、是の時に仏説いて言く夢と寤と
の二は虚事と実事との二の事なれども心法は只一なり、眠の縁に
値いぬれ

ば夢なり眠去りぬれば寤の心なり心法は只一なりと開会せらるべ
き下地を造り置かれし方便なり此れは別教の中道の理是の故に未だ十界互具・円融
相即を顕さざれば成仏の人無し故に三蔵教より別教に至るまで四

十二年の間の八教は皆悉く方便・夢中の善悪なり、只暫く之を用いて衆生を誘引し給う支度方便なり此の權教の中にも分分に皆悉く方便と眞実と有りて權實の法闕けざるなり、四教一一に各四門有つて差別有ること無し語も只同じ語なり文字も異なること無し斯れに由つて語に迷いて權實の差別を分別せざる時を仏法滅すと云う是の方便の教は唯穢土に有つて総じて淨土には無きなり法華經に云く「十方の仏土の中には唯一乘の法のみ有つて二無く亦三も無し仏の方便

の説をば除く「已上、故に知んぬ十方の仏土に無き方便の教を取つて往生の行と爲し十方の浄土に有る一乗の法をば之を嫌いて取らずして成仏す可き道理有る可しや否や一代の教主釈迦如来一切経を説き勸文し給いて言く三世の諸仏同様に一つ語一つ心に勸文し給える説法の儀式なれば我も是くの如く一言も違わざる説教の次第なり云云、方便品に云く「三世の諸仏の説法の儀式のごとく如く我も今亦是くの如く無分別の法を説く」已上、無分別の法とは一乗の妙法なり善悪を簡ぶこと無く草木・樹林・山河・大地にも一微塵の中にも互に各十法界の法を具足す我が心の妙法蓮華經の一乗は十方の浄土に周して闕くること無し十方の浄土の依報・正報の功德莊嚴は我が心の中に有つて片時も離ること無き三身即一の本覺の如来にて是の外には法無し此の一法計り十方の浄土に有りて

余法有ること無し故に無分別法と云う是なり、此の一乗・妙法の
行をば取らずして全く浄土には無き方便の教を取つて成仏の行と
為さんは迷いの中の迷いなり、我仏に成りて後に穢土に立ち還り
て穢土の衆生を仏法界に入らしめんが為に次第に誘引して方便の
教を説くを化他の教とは云うなり、故に權教と言ひ又方便とも云
う化他の法門の有様大體略を存して斯くの如し。

二に自行の法とは是れ法華經八箇年の説なり、是の經は寤の
本心を説き給う唯衆生の思い習わせる夢中の心地なるが故に夢中
の言語を借りて寤の本心を訓る故に語は夢中の言語なれども意
は寤の本心を訓ゆ法華經の文と釈との意此くの如し、之を明め知
らずんば經の文と釈の文とに必ず迷う可きなり、但し此の化他の
夢中の法門も寤の本心に備われる徳用の法門なれば夢中の教を取
つて寤の心に撰むるが故に四十二年の夢中の化他方便の法門も

妙法蓮華經の寤の心に撰まりて心の外には法無きなり此れを
法華經の開会とは云うなり、譬えば衆流を大海に納むるが如きな
り仏の心法妙・衆生の心法妙と此の二妙を取つて己心に撰むるが
故に心の外に法無きなり己心と心性と心体との三は己身の本覺の
三身如来なり是を經に説いて云く「如是相如是性如来如是体
如来」此れを三如是

と云う、此の三如是の本覺の如來は十方法界を身體と爲し十方
法界を心性と爲し十方法界を相好と爲す是の故に我が身は本覺
三身如來の身體なり、法界に周して一仏の徳用なれば一切の法
は皆是佛法なりと説き給ひし時其の座席に列りし諸の四衆・八部・
畜生・外道等一人も漏れず皆悉く妄想の僻目・僻思・立所に散止し
て本覺の寤に
還つて皆仏道を成ず、仏は寤の人の如く衆生は夢見る人の如し
故に生死の虚夢を醒して本覺の寤に還るを即身成仏とも平等大慧
とも無分別法とも皆成仏道とも云う只一つの法門なり、十方の仏
土は区に分れたりと雖も通じて法は一乘なり方便無きが故に無
分別法なり、十界の衆生は品品に異りと雖も実相の理は一なるが
故に無分別な
り百界千如・三千世間の法門殊なりと雖も十界互具するが故に無

分別ぶんべつなり、夢むつと寤ごと虚こと実じつと各別かくべつ異いなりと雖いえども一心いっしんの中の法ほふなるが故ゆゑに無分別ぶんべつなり、過去かこと未来みらいと現在げんざいとは三さんなりと雖いえども一念いちねんの心中しんちゆうの理りなれば無分別ぶんべつなり、
一切いっさい經きやうの語ごは夢中むつちゆうの語ごとは譬たとえば扇せんと樹じゆとの如ごとし法華ほふけ經きやうの寤ごの心こころを顯あらわす言ことばとは譬たとえば月げつと風ふうとの如ごとし、故ゆゑに本覺ほんがくの寤ごの心こころの月輪げつりんの光くわうは無明むみやうの闇やみを照てらし実相じつさう般若はんにかの智慧ちゑの風ふうは妄想もつさうの塵ちりを払はらう故ゆゑに夢むつの語ごの扇せんと樹じゆとを以もつて寤ごの心こころの月げつと風ふうとを知らしむ是かくのゆゑの故ゆゑに夢むつの余波よゐを散ちりじて寤ごの本心ほんしんに歸かへせしむるなり、故ゆゑに止觀しゝかんに云いく「月・
重山じゆうざんに隠かくる
れば扇せんを挙あげて之これに類るし風大虚ふうおほぞらに息いきみぬれば樹じゆを動うごかして之これを訓おしゆるが如ごとし「文、弘決くわくけつに云いく「真常性まんだうじやうの月・煩惱ぼんのうの山やまに隠かくる煩惱ぼんのう一いつに非あらず故ゆゑに名なけて重おもと為なす円音教おんのんぎやうの風ふうは化くわを息いきめて寂じやくに歸かへす寂理じやくり無礙むげなること猶大虚なほおほぞらの如ごとし

四依しえの弘教くきょうは扇せんと樹じゆとの如ごとし乃至ないし月げつと風ふうとを知らしむるなり已上、
夢中の煩惱ぼんのうの雲うん・重ちゆう置じせること山の如ごとく其その数かず八万四千はちまんしよせんの塵勞じんろうに
て心性しんしよほんがく本覺ほんがくの月輪げつりんを隠かくす扇せんと樹じゆとの如ごとくなる經論きやうろんの文字言語もんじごんごの教きょう
を以もつて月げつと風ふうとの如ごとくなる本覺ほんがくの理りを覺知かくちせしむる聖教しやうきやうなり
故ゆえに文ぶんと語ごとは扇せんと樹じゆとの如ごとし「文、上じやう積じきは一往いちおうの積じきとて実義じつぎに
非あらざるなり

月の如ごとくなる妙法みやうほうの心性しんしよの月輪げつりんと風ふうの如ごとくなる我が心の般若はんにかの
慧解えげとを訓しんえ知らしむるを妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと名なず、故ゆえに釈籤しゃくせんに云いわく

「声色しやくしきの近名きんめいを尋たずねて無相むさうの極理ごくりに至いたる」と已上、声色しやくしきの近名きんめいとは
扇せんと樹じゆとの如ごとくなる夢中むちゆうの一切いっさい經論きやうろんの言說ごんじやくなり無相むさうの極理ごくりとは月
と風との如ごとくなる寤ごの我が身の心性しんしよの寂光じやくくわうの極樂ごくらくなり、此こゝの極樂ごくらく
とは十方じゆうぽう法界ほうがいの正報しやうほうの有情うじやうと十方じゆうぽう法界ほうがいの依報えほうの国土こくどと和合わがくわして
一いっ体たい・三身さんじん即じつ一いっなり、四土しど不二ふじにして法身ほふしんの一いち仏ぶつなり十界じじゆがいを身みと

為すは法身なり十界を心と為すは報身なり十界を形と為すは応身
なり十界の外に仏無し仏の外に十界無くして依正

不二なり身土不二なり一仏の身体なるを以て寂光土と云う是の故

に無相の極理とは云うなり、生滅無常の相を離れたるが故に無相

と云うなり法性の淵底玄宗の極地なり故に極理と云う、此の無相

の極理なる寂光の極樂は一切

有情の心性の中に有つて清淨無漏なり之を名けて妙法の心蓮台

とは云うなり是の故に心外無別法と云う此れを一切法は皆是仏法

なりと通達解了すとは云うなり、生と死と二つの理は生死の夢の

理なり妄想なり顛倒なり本覺の寤を以て我が心性を糾せば生ず

可き始めも無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心

法に非ずや、

劫火にも焼けず水災にも朽ちず劔刀にも切られず弓箭にも射られ

ず芥子けしの中に入るれども芥子けしも広からず心法しんぽうも縮まらず虚空こくうの中
に満みつれども虚空こくうも広からず心法しんぽうも狭せまからず善ぜんに背そむくを悪あくと云い
悪あくに背そむくを善ぜんと云いう、故ゆえに心しんの外がわに善ぜん無なく悪あく無なし此この善ぜんと悪あくとを離り
るるを無む記きと云いうなり、善ぜん悪あく無む記き 此この外がわには心しん無なく心しんの外がわには
法ぽう無なきな

り故ゆえに善ぜん悪あくも浄じやう穢さいも凡ぼん夫ぶ・聖しやう人にんも天てん地ちも大だい小しやうも東とう西せいも南なん北ぺいも四し維い
も上じやう下げも言ごん語ご道どう断だんし心しん行ぎやう所しよ滅めつす心しんに分ぶん別べつして思あい言ごんい顯あらわ
れば心しんの外がわには分ぶん別べつも無む分ぶん別べつも無なし、言ごんと云いうは心しんの思しいを響ひびか
して声こゑを顯あらわすを云いうなり凡ぼん夫ぶは我わがが心しんに迷まいりて知しらさず覺さらざるな
り、仏ぶつは之これを悟あり顯あらわして神しん通つうと名なくるなり神しん通つうとは神しんの一切いっさいの法ぽう
に通つうじて

礙ぎ無なきなり、此この自じ在ざいの神しん通つうは一切いっさいの有う情じやうの心しんにて有あるなり故ゆえに狐こ
狸りも分ぶん分ぶんに通つうを現げんずること皆みな・心しんの神しんの分ぶん分ぶんの悟ありなり此この心しんの一いっ法ぽう

より国土世間も出来する事なり、一代聖教とは此の事を説きた
るなり此れを八万四千の法蔵とは云うなり是れ皆悉く一人の身
中の法門にて有るなり、然れば八万四千の法蔵は我身一人の日記文
書なり、此の八万法蔵を我が心中に孕み持ち懐き持ちたり我が身
中の心を以て仏と法と浄土とを我が身より外に思い願ひ

求むるを迷まよいとは云うなり此の心が善悪ぜんあくの縁に値あうて善悪ぜんあくの法を
ば造つくり出せるなり、華嚴經けこんきょうに云く「心は工たくみなる画師えしの種しゅじゆ種の五陰ごおん
を造るが如ごとく一切世間いっさいせけんの中に法として造らざること無し心の如ごとく
仏またしも亦爾またしなり仏の如ごとく衆生しゅじょうも然しかなり三界唯さんがいただ一心いっしんなり心の外べちに別べち
法無しんぶつし心仏しんぶつ及び衆生しゅじょう是の三差別無さべつし「已上、無量義經むりようぎきょうに云く「無相むそう
不相ふさうの

一法むりようより無量義むりようを出生しゅつじゆす「已上、無相むそう・不相ふさうの一法いっさいしゅじょうとは一切衆生いっさいしゅじょう
の一念いちねんの心是これなり、文句もんくに釈しゃくして云く「生滅無常しじゆめつむじょうの相無ゆえきが故ゆえに
無相むそうと云うなり二乗にじょうの有餘ゆう・無余むよの二つの涅槃ねはんの相を離ゆえるが故ゆえに不
相と云うなり「云云、心の不思議ふしぎを以て經論きやうろんの詮要せんやうと為なすなり、此
の心を悟り知るを名けて如来にょらいと云う之を悟り知つて後は十界じじゅうがいは我
が身なり

我が心なり我が形ほんがくなり本覺ほんがくの如来にょらいは我が身心しんしんなるが故ゆえなり之これを知

らざる時を名けて無明と為す無明は明かなること無しと読むなり、我が心の有様を明かに覺らざるなり、之を悟り知る時を名けて法性と云う、故に無明と法性とは一心の異名なり、名と言とは二なりと雖も心は只一つ心なり斯れに由つて無明をば断ず可からざるなり夢の

心の無明なるを断ぜば寤の心を失う可きが故に總じて円教の意は一毫の惑をも断ぜず故に一切の法は皆是れ仏法なりと云うなり、法華經に云く「如是相本覺の心身如來如是性本覺の報身如來如是體本覺の法身如來」此の三如是

より後の七如是出生して合して十如是と成れるなり、此の十如是は十法界なり、此の十法界は一人の心より出で八万四千の法門と成るなり、一人を手本として一切衆生平等なることは是くの如し、三世の諸仏の總勘文にして御判慥かに印たる正本の文書なり仏の

御判とは実相の二印なり印とは判の異名なり、余の一切の經には
実相の印無け

れば正本の文書に非ず全く実の仏無し実の仏無きが故に夢中の
文書なり浄土に無きが故なり、十法界は十なれども十如是一な
り譬えば水中の月は無量なりと雖も虚空の月は一なるが如し、九
法界の十如是は夢中の十如是なるが故に水中の月の如し仏法界の
十如是は本覺の寤の十如是なれば虚空の月の如し、是の故に仏界
の一つの十如是顯れぬれば九法界の十如是の水中の月の如きも一
も闕減無く同時に皆顯れて体と用と一具にして一体の仏と

成る、十法界を互に具足し平等なる十界の衆生なれば虚空の本
月も水中の末月も一人の身中に具足して闕くること無し故に
十如是は本末究竟して等しく差別無し、本とは衆生の十如是なり
末とは諸仏の十如是なり諸仏は衆生の一念の心より顕れ給えば
衆生は是れ本なり諸仏は是れ末なり、然るを經に云く「今・此の
三界は皆是我が有なり其の中の衆生は悉く是吾が子なり」と已上、
仏成道の後に化他の為の故に迹の成道を唱えて生死の夢中にして
本覺
の寤を説き給うなり、智慧を父に譬え愚癡を子に譬えて是くの如
く説き給えるなり、衆生は本覺の十如是なりと雖も一念の無明眠
りの如く心を覆うて生死の夢に入つて本覺の理を忘れ髮筋を切る
程に過去・現在・未来の三世の虚夢を見るなり、仏は寤の人の如く
なれば生死の夢に入つて衆生を驚かし給える智慧は夢の中にて

父母ふぼの如ごとく

夢の中なる我等われらは子息しそくの如ごとくなり、此の道理どうりを以て悉是しつせ吾子ごしと言い給たまうなり、此の理りを思しい解げけば諸しよ仏ぶつと我等われらとは本ほんの故ゆゑにも父子ふしなり末ゆゑの故ゆゑにも父子ふしなり父子ふしの天性てんせいは本末ほんまつ是れ同じ、斯これに由よつて己心こしんと仏心ぶつしんとは異いならずと觀くわんずるが故ゆゑに生死しじうの夢むを覺さまして本覺ほんがくの寤うに還かへるを即身成仏そくしんじやうぶつと云いうなり、即身成仏そくしんじやうぶつは今いま・我が身みの上かみの天性てんせい

地ち体たいなり煩わづらいも無なく障さりも無なき衆生しゆじやうの運命うんめいなり果報かほうなり冥加みやうがなり、夫それ以もつれば夢むの時ときの心こゝろを迷まよいに譬たとえ寤うの時ときの心こゝろを悟さとりに譬たとう之これを以もつて一いち代だい聖教しやうきやうを覺悟かくごするに跡形あとかたも無なき虚夢こむを見て心こゝろを苦くるしめ汗あせみ水みづと成なつて驚おどろきぬれば我身わがみも家いへも臥所ふしども一ひと所ところにて異いらず夢むの虚うつらと寤うつらの実じつとの二事ふたことを目めにも見み・心こゝろにも思おもへども所ところは只ただ一ひと所ところなり身みも只ただ一ひと身みにて二ふたの虚うつらと実じつとの事こと有あり之これを以もつて知しんぬ可べし、九界くきうの

生死しよつじの夢見る我が心も仏界常住ぶつがいじょうじゆうの寤うつつの心も異ならず九界生死しよつじ
の夢見る所が仏界常住ぶつがいじょうじゆうの寤うつつの所にて変らず心法も替かわらず在所ざいしよも
差たがわざれども夢は皆虚事みなそらごとなり寤うつつは皆実事みなじつじなり止觀しかんに云く「昔莊周そうしゆう
と云うもの有り夢に胡蝶こちようと成つて一百年を経たり苦は多く樂は少
く汗水あせみずと成つて驚おどろきぬれば胡蝶こちようにも成らず百年をも経へず苦も無なくく
樂も無なくく皆虚事みなそらごとなり皆妄想みなもうそつなり」取意已上、弘決くけつに云く「無明むみようは夢の蝶ちようの
如ごとく三千は百年の如ごとし一念実無いちねんきは猶蝶なちちように非あらざるが如ごとく三千も
亦無やくむきこと年を積むに非あらるが如ごとし已上、此の積は即身そくしん

成仏の証拠なり夢に蝶と成る時も莊周は異ならず寤に蝶と成
らずと想う時も別の莊周無し、我が身を生死の凡夫なりと想う時
は夢に蝶と成るが如く僻目僻思なり、我が身は本覺の如来なりと
想う時は本の莊周なるが如し即身成仏なり、蝶の身を以て成仏
すと云うに非ざるなり蝶と想うは虚事なれば成仏の言は無し
沙汰の外の事なり、無明は夢の蝶の如しと判ずれば我等が僻思は
猶昨日の夢の如く性体無き妄想なり誰の人か虚夢の生死を信受し
て疑を常住涅槃の仏性に生ぜんや、止觀に云く「無明の癡惑本
より是れ法性なり癡迷を以ての故に法性變じて無明と作り諸の
顛倒の善・不善等を起す寒来りて水を結べば變じて堅氷と作るが
如く又眠来りて心を変ずれば種種の夢有るが如し今当に諸の顛倒
は即ち是法性なり一ならず異ならずと体すべし、顛倒起滅するこ
と旋火輪の

如しと雖も顛倒の起滅を信ぜずして唯此の心但是れ法性なりと信ず、起は是れ法性の起、滅は是れ法性の滅なり其れを体するに実には起滅せざるを妄りに起滅すと謂えり只妄想を指すに悉く是れ法性なり、法性を以て法性に繫け法性を以て法性を念ず常に是れ法性なり法性ならざる時無し「已上、是くの如く法性ならざる時の隙も無き理の法性に夢の蝶の如く無明に於て実有の思を生じて之に迷うなり、止觀の九に云く「譬えば眠の法・心を覆うて一念の中に無量世の事を夢みるが如し乃至寂滅真如に何の次位か有らん、乃至一切衆生即大涅槃なり復滅す可からず何の次位高下・大小有らんや、不生不生にして不可説なれども因縁有るが故に亦説くことを得可し十因縁の法生の為に因と作る虚空に画き方便して樹を種るが如し一切の位を説くのみ「已上、十法界の依報・正報は法身の仏・一体・三身の徳なりと知つて一切の法は皆是れ

ぶつぼう 仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より
そくしんじょうぶつ 即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し・故に玄義に云く
「まつだい 末代の学者多く経論の方便の断伏を執して

じょうごん 諍闘す水の性の冷かなるが如きも飲まずんば安んぞ知らん「已上、
てんだい 天台の判に云く、「次位の綱目は仁王・瓔珞に依り断伏の高下は大品
智論に依る「已上、仁王・瓔珞・大品・大智度論是の経論は皆法華
いぜん 已前の八教の経論なり、

權教ごんぎょうの行ぎょうは無量劫むりょうじつを経て昇進しょうじんする次位じだいなれば位の次第しだいを説せつけり今いま法華ほっけは八教はつぎょうに超こえたる円えんなれば速疾頓成そくじつとんじょうにして心しんと仏ぶつと衆生しゅじょうと此この三さんは我が一念いちねんの心中しんちゆうに撮おさめて心の外がいに無なしと觀くわんずれば下根げこんの行者ぎやうすら尚なお一生いっさいの中に妙覺みょうかくの位ゐに入る・一ひとと多おほと相即そうそくすれば一位いに一切いっさいの位ゐ皆是みなこれ具足ぐそくせり故ゆえに一生いっさいに入るなり、下根げこんすら是この如ごとし況いはんやや中根ちゆうこんの者ものをや何いかに況いはんやや上根じやうこんをや実相じつそうの外がいに更べち別の法ぽう無なし実相じつそうには次第しだい無なきが故ゆえに位ゐ無なし、總いっさいじて一代いちだいの聖教しやうぎやうは一人ひとりの

法ぽうなれば我が身みの本体ほんたいを能よく能よく知る可べし之これを悟ごるを仏ぶつと云い之をに迷まようは衆生しゅじょうなり此これは華嚴經けごんぎやうの文ぶんの意いなり、弘決ぐけつの六むに云いく「此この身みの中に具くさに天地てんちに倣ならうことを知る頭こつへの円えんかなるは天まどかに象かたどり足あの方かたどなるは地かたどに象かたどると知り身みの内うちの空種うつろなるは即すなわち是これ虚空こくうなり腹はらの温ぬかなるは春夏しゆんかに法のつとり背そむの剛こきは秋冬しゆうつに法のつとり四

体は四時に法とり大節の十二は十二月に法とり小節の三百六十は三百六十日に法とり、鼻の息の出入は山沢溪谷の中の風に法とり口の息の出入は虚空の中の風に法とり眼は日月に法とり開閉は昼夜に法とり髪は星辰に法とり眉は北斗に法とり脈は江河に法とり骨は玉石に法とり皮肉は地土に法とり毛は叢林に法とり、五臓は天に在つては五星に法とり地に在つては五岳に法とり陰陽に在つては五行に法とり世に在つては五常に法とり内に在つては五神に法とり行を修するには五徳に法とり罪を治むるには五刑に法とる謂く墨・・・宮・大辟此の五刑は人を様様に之を備ましむ其の数三千の罰有り此を五刑と云う

首領には五官と為す五官は下の第八の巻に博物誌を引くが如し謂く苟萌等なり、天に昇つては五雲と曰い化して五竜と為る、心を朱雀と為し腎を玄武と為し肝を青竜と為し肺を白虎と為し脾を勾陳と為す又云く「五音・五明・六藝・皆此れより起る亦復当に内

治の法を識るべし、覺心内に大王と為つては百重の内に居り出でては
則ち五官に侍衛せ為る、肺をば司馬と為し、肝をば司徒と為し、脾を
ば司空と為し、四支をば民子と為し、左をば司命と
為し、右をば司録と為し、人命を主司す、乃至臍をば太一君等と為す
と、禪門の中に広く其の相を明す、已上、人身の本体委く検すれば
是くの如し、然るに此の金剛不壞の身を以て生滅無常の身なりと
思ふ、儼思は譬えば莊周が夢の

蝶ちようの如ごとしと釈しゃくし給たまえるなり、五行ごこうとは地水すいか火風くわふう空くうなり五大種ごだいしゆとも五蘊ごおんとも五戒ごかいとも五常ごじやうとも五方ごほうとも五智ごちとも五時ごじとも云ただう、只ただ一物きつ・経きやう・經きやうの異説いせつなり内典ないてん・外典げてん名目なみよくの異名いみやうなり、今經こんきやうに之これを開あしいつさいしゆじやうて一切衆生いっさいしゆじやうの心中しんちゆうの五ご・仏性ぶつじやう・五智ごちの如來にょらいの種子しゆしと説しけり是則すなわちて一切衆生いっさいしゆじやうの心中しんちゆうの五ご・仏性ぶつじやう・五智ごちの如來にょらいの種子しゆしと説しけり是則すなわちて妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじなり、此この五字ごじを以もつて人身じんしんの體たいを造つくるなりほんぬじやうじゆう本有常住ほんぐなり本覺ほんかくの如來にょらいなり是これを十如じゆのぜ是ぜと云いう此こを唯ゆい・佛ぶつ・與よ・佛ぶつ・乃能究尽ないのうくじんと云いう、不退ふたいの菩薩ぼさつと極果ごくかの二乘にじやうと少分せうぶんも知しらざる法門ほうもんなり

な

り然しかるを円頓えんどんの凡夫ほんぶは初心しんしんより之これを知しる故ゆえに即身成仏そくしんじやうぶつするなりこんごう金剛不壞こんごうの體たいなり、是これを以もつて明あきかに知しんぬ可べし天崩てんぱうれば我わがが身みも崩くる可べし地裂ちれつけば我わがが身みも裂く可べし地水火風滅亡すいかせば我わがが身みも亦また滅亡めつわうすべし、然しかるに此この五大種ごだいしゆは過去かこ・現げん在ざい・未み來らいの三さん世せいは替かわるといえど雖いも五大種ごだいしゆは替かわること無なし、正法しやうぽうと像法ざうぽうと末法まつぽうとの三時さんじ殊ことなりと

雖も五大種は是れ一にして盛衰轉變無し、藥草喩品の疏には円教

の理は大地なり円頓の教は空の雨なり亦三蔵教・通教・別教

の三教は三草と二木となり、其の故は此の草木は円理の大地より生

じて円教の空の雨に養われて五乗の草木は栄うれども天地に依つ

て我栄えたりと思知らざるに由るが故に三教の人天・二乗・菩薩を

ば草木に譬えて不知恩と説かれたり、故に草木の名を得・今法華に

始めて五乗の草木は円理の母と円教の父とを知るなり、一地の

所生なれば母の恩を知るが如く一雨の所潤なれば父の恩を知るが

如し、藥草喩品の意是くの如くなり。

釈迦如来・五百塵点劫の当初凡夫にて御坐せし時・我が身は地

水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の為

に世世番番に出世成道し在在処処に八相作仏し王宮に誕生し樹下に

成道して始めて仏に成る様を衆生に見知らしめ四十余年に方便教

を儲け衆生を誘引す、其の後方便の諸の經教を捨てて正直の
妙法蓮華經の五智の如來の種子の理を説き顯して其の中に四十二
年の方便の諸經を丸かし納れて一仏乗と丸し人・一の法と
名く一人が上の法なり、多人の綺えざる正しき文書を造つて慥か
な御判の印あり三世諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられ
し時に三千三百萬億那由佗の国土の上の虚空の中に満ち塞がれる
若干の菩薩達の頂を摩で

尽して時を指して末法まつぽう近來きんらいの我等われら衆生しゆじやうの爲ために慥たしかかに此このの由よしを説とき
聞きかせて仏ぶつの讓ゆずり状じやうを以もつて末代まつだいの衆生しゆじやうに慥たしかかに授じゆよ与べす可べしと慇懃おんこん
に三度さんどまで同おんこんじ御語ごごに説とき給たまいしかば若干そこばくの菩薩ぼさつ達だつ・各数ごすうを尽しして
を曲まげ頭こゝろを低うなれ三度さんどまで同おんこんじ言ごに各ご・我われも劣せうらじと事請じしやうを申もつし
給たまいしかば仏ぶつ・心安おほしめく思食しほくして本覺ほんがくの都みやこに還かへり給たまう、三世さんぜの諸しよ仏ぶつ
の説法せつぽうの儀式ぎし・作法さくぱには只同ただじ御言みことばに時ときを指さしたる末代まつだいの讓ゆずり状じやうな
れば只ただ一向いっかうに後ご・五百歳ごひゃくさいを指さして此この妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを以もつて成仏じやうぶつす
可べき時ときなりと讓ゆずり状じやうの面おもてに載のせられたる手繼てしゆぎ証文しやうもんなり。
安樂行あんらくぎやう品ひんには末法まつぽうに入いつて近來このころ・初心しよしんの凡夫ぼんぶ・法華經ほけきやうを修行しゆぎやうして
成仏じやうぶつす可べき様やうを説とき置おかれしなり、身みも安樂行あんらくぎやうなり口くちも安樂行あんらくぎやう
なり意いも安樂行あんらくぎやうなり自行じぎやうの三業さんごうも誓願せいがん安樂あんらくの化け他たの行ぎやうも同おんこんじく後ご
の末世おゝいに於おいて法の滅めつせんと欲ほする時ときと云いふ、此こは近來きんらいの時ときなり已上いじやう
四所しよに有あり藥王品やくおうひんには二所にに説とかれ勸發品かんほつひんには三所さんに説とかれたり、

みなきんらい
皆近來を指して譲り置かれたる正しき文書を用いずして凡夫の言
に付き愚癡の心に任せて三世諸仏の譲り状に背き奉り
永く仏法に背かば三世の諸仏・何に本意無く口惜しく心憂く歎き悲
しみ思食すらん、涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ」と云云、
痛ましいかな悲しいかな末代の學者・仏法を習學して還つて仏法を
滅す、弘決に之を悲しんで曰く「此の円頓を聞いて崇重せざること
は良に近代大乘を習う者の雜濫に由るが故なり況や像末情澆く
信心寡薄・円頓の教・法蔵に溢れ函に盈つれども暫くも思惟せず
便ち目を瞑ぐに至る徒らに生し徒らに死す一に何ぞ痛ま
しき哉と已上、同四に云く「然も円頓の教は本と凡夫に被むらしむ
若し凡を益するに擬せずんば仏・何ぞ自ら法性の土に住して法性
の身を以て諸の菩薩の為に此の円頓を説かずして何ぞ諸の法身の
菩薩の与に凡身を示し此の三界に現じ給うことを須いんや、乃至

いっしん ほん
一心凡に在れば即ち修習す可し已上、所詮己心と仏身と一なり
と観ずれ

ば速かに仏に成るなり、故に弘決に又云く「一切の諸仏己心は仏心
と異ならずと観し給うに由るが故に仏に成ることを得る」と已上、
此れを観心と云う実に己心と仏心と一心なりと悟れば臨終を礙わ
る可き悪業も有らず

生死しじゆつじに留とどまる可べき妄まが念ねんも有あらず、一切いっさいの法ほふは皆みな是これ仏ぶつ法ほふなりと知しりぬれば教きやう訓くんす可べき善ぜん知ち識しも入いる可べからず思おもうと思おもい言いうと言いい為なすと為なし儀ふるまいと儀ふるまう行ぎやう住じゆ坐ざ臥がの四い威ぎ儀ぎの所しよ作さは皆みな仏ぶつの御ご心しんとわわ合ごうして一いつ体たいなれば過とがも無なく障さわりも無なき自じ在ざいの身みと成なる此これを自じ行ぎやうと云いう、此かくの如ごとく自じ在ざいなる自じ行ぎやうの行ぎやうを捨あて跡あと形かたも有あらざるむむみみやうやうももつつそそうう無む明めい妄まが想さうなる僻ひが思おもひの心しんに住すして三さん世ぜの諸しよ仏ぶつの教きやう訓くんに背そむき奉たてまま冥くらきより冥くらきに入り永とこく仏ぶつ法ほふに背そむくこと悲かなしむ可べく悲かなしむ可べし、
只ただ今いま打うち返かへえし思おもひ直ただし悟さとり返かへさば即すく身しん成じやう仏ぶつは我われが身みの外ぐわいには無なしと知しりぬ、我われが心しんの鏡きやうと仏ぶつの心しんの鏡きやうとは只ただ一いつ鏡きやうなりと雖いえども我われ等らは裏うらに向むかつて我われが性じやうの理りを見みず故ゆゑに無む明めいと云いう、如に来よは面めんに向むかつて我われが性じやうの理りを見みたままえり故ゆゑに明めいと無む明めいとは其その体たい只ただ一いつなり鏡きやうは一いつの鏡きやうなりと雖いえども向むかい様さまに依よつて明めい昧まいの差さ別べつ有あり鏡きやうに裏うら有ありと雖いえども面おもての障さわりと

成らず只向い様に依つて得失の二つ有り相即融通して一法の二義なり、化他の法門は鏡の裏に向うが如く自行の觀心は鏡の面に向うが如し化他の時の鏡も自行の時の鏡も我が心性の鏡は只一にして替ること無し鏡を即身に譬え面に向うをば成仏に譬え裏に向うをば衆生に譬う鏡に裏有るをば性悪を断ぜざるに譬え裏に向う時、面の徳無きをば化他の功德に譬うるなり衆生の仏性の顯れざるに譬うるなり、自行と化他とは得失の力用なり玄義の一に云く「薩婆悉達・祖王の弓を彎て満るを名けて力と為す七つの鉄鼓を中り一つの鉄困山を貫ぬき地を洞し水輪に徹る如きを名けて用となす用なり諸の方便教は力用の微弱なること凡夫の弓箭の如し何となれば昔の縁は化他の二智を稟けて理を照すこと遍からず信を生ずること深からず疑を除くこと尽さず化他、今の縁は自行の二智を稟けて仏の境界を極め法界の信を起し円妙の道を増し根本の

惑を断じへんにやく變易の生を損す、但ただ生身及び生身得忍の兩種の
菩薩ぼさつとも俱やくに益するのみに非あらず法身ほっしんと法身ほっしんの後心との兩種の菩薩ぼさつも亦また
以て俱ともに益やくす化の功広大に利潤弘深なる蓋けだし茲この經の力用なり
自行じぎょうと化他けたとの力用勝劣しょうれつふんみょう分明めいなること勿論もちろんなり能よく能よく之これを
見よ一代いちだい聖教しやうきやうを鏡に懸かたる教相きやうそうなり、極仏境界ききやうがいとは十如是じゆしかいの
法門ほうもんなり十界じゆつかいに互たがいに具足ぐそくして十界じゆつかい・十如の因果いんが・権實こんじつの二智にち・二境にきやう
は我が

身の中に有つて一人も漏るること無しと通達し解了し仏語を悟り
極むるなり起法界信とは十法界を体と為し十法界を心と為し十
法界を形と為したまえりと本覺の如来は我が身の中に有りけりと
信ず増円妙道とは自行と化他との二は相即円融の法なれば珠と光
と宝との三徳は只一の珠の徳なるが如し片時も相離れず仏法に
不足無し一生の

中に仏に成るべしと慶喜の念を増すなり、断根本惑とは一念無明の
眠を覚まして本覺の寤に還れば生死も涅槃も俱に昨日の夢の如く
跡形も無きなり、損变易生とは同居土の極樂と方便土の極樂と
実報土の極樂との三土に往生せる人彼の土にて菩薩の道を修行し
て仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて次第に進み昇り劫
数を経て

成仏の遠きを待つを变易の生死と云うなり、下位を捨つるを死と

い云い上位に進むをば生と云う是くの如く変易する生死は浄土の
くおう 苦惱にて有るなり、爰に凡夫の我等が此の穢土に於て法華を修行
すれば十界互具・法界一如なれば浄土の菩薩の変易の生は損し
ぶつどう 仏道の行は増して変易の生死を一生の中に促めて仏道を成ず故に
しんじゅうしんおよ 生身及び生身
とくにん 得忍の兩種の菩薩・増道損生するなり、法身の菩薩とは生身を捨
てて実報土に居するなり、後心の菩薩とは等覺の菩薩なり但し
じやくもん 迹門には生身及び生身得忍の菩薩を利益するなり本門には法身
と後身との菩薩を利益す但し今は迹門を開して本門に摂めて一の
みまろほつ 妙法と成す故に凡夫の我等穢土の修行の行の力を以て浄土の十地
とじかく 等覺の菩薩を
りやく 利益する行なるが故に化の功広大なり徳用の、利潤弘深とは徳用円頓
の行者は自行と化他と一法をも漏さず一念に具足して横に十方

法界ほっかいに遍へんするが故ゆえに弘ひろきなり豎たてには三世さんぜに亘わたつて法性ほっしょうの淵底えんていを
極きわむるが故ゆえに深ふかきなり、此この經きょうの自行じきようの力用りきよう此この如ごとし化他けたの
諸經しよきようは自行じきようを具ぐせざれば鳥とりの片翼ぺんよくを以もつて空くうを飛とばざるが如ごとし故ゆえに
成仏じよぶつの人も無なし今いま法華經ほっけきようは自行化他じきようけたの二行にぎょうを開會かいえして不足ふそく無なきが
故ゆえに鳥とりの二翼によくを以もつて飛とぶに障さり無なきが如ごとく成仏じよぶつ滞とどり無なし、
藥王品やくおうほんには十喻じゆうゆを以もつて自行じきようと化他けたとの力用りきようの勝劣しやうれつを判はぜり第一だいいちの
譬たとえに云いく諸經しよきようは諸水しよすいの如ごとく法華ほっけは大海たいかいの如ごとし云云取意とんぎ、實じつに自行じきよう
の法華經ほっけきようの大海たいかいには化他けたの諸經しよきようの衆水しよすいを入いるること昼夜じゆあに絶たえず
入いると雖いも増まぜず減げぜず

ふかしぎ 不可思議の徳用を顕す、諸經の衆水は片時の程も法華經の大海を
い 納るること無し自行と化他との勝劣是くの如し一を以て諸を例せ

よ、上來の譬喩は皆仏の所説なり人の語を入れず此の旨を意得れ

ば一代聖教鏡に懸けて陰り無し此の文釈を見て誰の人が迷惑せん

や、三世の諸仏の總勘文なり敢て人の会釈を引き入る可からず

三世諸仏の

出世の本懐なり一切衆生成仏の直道なり、四十二年の化他の經を

以て立る所の宗宗は華嚴・真言・達磨・浄土・法相・三論・律宗・俱舍

・成実等の諸宗なり此等は皆悉く法華より已前の八教の中の教な

り皆是方便なり兼・但・対・帯の方便誘引なり、三世諸仏の説教の

次第なり此の次第を糾して法門を談ず若し次第に違わば仏法に

非ざるなり、一代教主の釈迦如來も三世諸仏の説教の次第を糾し

て一字も違わず我も亦是くの如しとて・經に云く「三世諸仏の説法

の儀式ぎしの如ごとく我われも今いま亦是またかくのごとく如ごとく無ぶんべつ分別ぶんべつの法ほふを説とくく「已い上じやう、若もし之これに違ちがえば永えいく三世さんぜの諸しよ仏ぶつの本意ほんいに背そむく他宗たしゆうの祖師そし各かく・我われが宗しゆを立て法華宗ほつげしゆうと諍あらそうことあやまりの中なかの迷まよいの中なかの迷まよいなり。

徴ちゆう佗学たがくの決けつに之これを破はして云いくさん山王院のういん凡およそ八万法蔵はちまんほうぞう其そのの行相ぎやうさうを

統すぶるに四教しきやうを出いでず頭辺しゆうへんに示しすが如ごとし蔵通ぞうつう・別円べつえんは即すなわち声聞しやうもん

縁覺えんかく・菩薩ぼさつ・仏乘ぶつじやうなり真言しんごん・禪門ぜんもん・華嚴けごん・三論さんろん・唯識ゆいしき・律業りつごふ・成俱じやうくの二

論等ろんとうの能所にやうじよの教理争きやうりいでか此こゝの四しを過すぎん若もし過すぐると言いわば豈あに

外邪げじやに非あらずや若もし出いでずとの言たまわば便すなわち他たの所期しよきを問とい得えよ即ち四乗の果ぐわなり、

然しかして後のちに答こたへ

随したがつて極理ごくりを推たずせせめよ我われが四教しきやうの行相ぎやうさうを以もつて並ならべかんが検けんえて決けつじやう定じやうせ

よ彼かの所期しよきの果ぐわに於おいて若もし我われと違ちがわば随したがつて即すなわち之これを詰しぼめよ、且しから

華嚴けごんの如ごときは五教ごきやうに各各かくかくに修因しゆいん・向果きやうぐわ有あり初はつ・中ちゆう・後のちの行ぎやう一いつならず

一教いつきやう一果いつぐわ是こゝれ所期しよきなるべし

若しも蔵通ぞうつう・別円べつえんの因いんと果くわとに非あらざれば是これ仏教ぶつぎょうならざるのみ、三種さんしゆの法輪ほうりん・三時さんじの教等きやうとう・中ちゆうに就おて定ぢやうむ可べし汝なんじ何者なにものを以もてか所期しよきの乗じやうと為なるや若しも仏乘ぶつじやうなりと言のたまわば未いまだ成じやう仏ぶつの觀行かんぎやうを見みず若しも菩薩ぼさつとのたま言のたまわば此これ亦また即そく離りの中道ちゆうどうの異ことなるなり、汝なんじ正ただしく何いずれれを取とるや設もし離りの辺へを取とらば果くわとして成じやうず可べき無なし如もし即そく是ぜを要よせば仏ぶつに例れいして之これを難なんぜよ謬あやまつて真言しんごんを誦じゆすとも三觀さんかん一心いっしんの妙趣めうしゆを会えせずんば恐おそくは別人べつにんに同おなじて妙理めうりを証しやうせし所以ゆえんに他たの所期しよきの極ごくを

逐おうて理じゆんに準じゆんじて理我が宗のなり徴せむべし、因明どうりの道理げどうは外道げどうと対す多くは
小乘しよつじよう及びおよ別教べつきように在もり若ほし法華ほつげ・華嚴けこん・涅槃ねはん等の經きやうに望ねむれば接
引門かなり權きりに機きに對たいして設たけたり終ついに以もつて引進いんしんするなり邪小じやせうの
徒たをして會えして真理しんりに至いたらしむるなり所以ゆえんに論ろんずる時は四依し擊えき目もく
の志しを存ぞんして之これを執着しやくすること莫なれ又須すべらく他たの義ぎを將もつて
自義じぎに對たい檢けんし
て随したがつて是非ぜひを決けつすべし執しして之これを怨あだむこと莫なれ大底他は多く三教に在り
円旨至つて少きのみ
先徳せんとく大師だいしの所判しよはん是ことの如ごとし、諸宗しよしゆの所立しよりつ鏡かうに懸かけて陰くもり無なし末代まつだいの
学者がくしや何なんぞ之これを見みずして妄みだりに教門きやうもんを判はんぜんや大綱たいかうの三教さんきやうを能よく
能よく学まなす可べし、頓とんと漸ぜんと円えんとは三教さんきやうなり是これ一いち代だい聖教しやうきやうの總さんの三諦さんたい
なり頓とん・漸ぜんの二には四十二年しよじふにねんの説せつなり円教えんきやうの一いちは八箇年はちかねんの説せつなり合あ
し
て五十年ごじゆんねんなり此この外がに法無ほふし何いかに由よつてか之こに迷まよわん、衆生しゆじやうに

有る時には此れを三諦と云い仏果を成ずる時には此れを三身と云う一物の異名なり之を説き顯すを一代聖教と云い之を開会して只一の總の三諦と成ずる時に成仏す此を開会と云い此を自行と云う、又他宗所立の宗宗は此の總の三諦を分別して八と為す各各に宗を立つるに依つて円満の理を闕いて成仏の理無し是の故に余宗には実の仏無きなり故に之を嫌う意は不足なりと嫌うなり、
円教を取つて一切諸法を觀すること円融・円満して十五夜の月の如く不足無く満足し究竟すれば善惡をも嫌わず折節をも撰ばず静処をも求めず人品をも択ばず一切諸法は皆是れ佛法なりと知りぬれば諸法を通達す即ち非道を行うとも仏道を成ずるが故なり、天地水火風は是れ五智の如来なり一切衆生の身心の中に住在于して片時も離ること無きが故に世間と出世と和合して心中に有つて心外には全く別の法無きなり故に之を聞く時立所に速かに仏果

を成じょうずること滞とどり無なき道理どうり至し極ごくなり、總さんの三諦さんたいとは譬たとえば珠たまと光
と宝たからとの如ごとし此この三德さんとく有あるに由よつて如意に宝珠ほうじゆと云いふ故ゆゑに總さんの三諦さんたいに
譬たとう若もし亦また珠たまの三德さんとくを別べつ別べつに取り放はなさば何なにの用もちにも叶かなう可べからず
隔きやく別べつの方ほう便べん教きやうの宗しゆ宗しゆも亦また是かくの如ごとし珠たまをば法ほう身しんに譬たとえ光くわをば報ほう身しん
に譬たとえ宝たからをば応おう身しんに譬たとう此この總さんの三德さんとくを分ぶん別べつして宗しゆを立たつるを
不ふ足そくと嫌きらうなり之これを丸がんじて一なと為なすを總さんの三諦さんたいと云いふ、此この總さんの
三諦さんたいは三身さんじん即すなはち一いつの本ほん覺がくの如に來よらなり又また寂じやく光くわうをば鏡かみに譬たとえ同居どうきよ

と方便ほうべんと実報じつぽうの三土さんどをば鏡うつに遷うつる像たに譬たとう四土しども一土いちどなり三身さんじんも
 一仏いちぶつなり今は此この三身さんじんと四土しどと和合わごうして仏ぶつの一体いつたいの徳とくなるを寂光じやくかう
 の仏ぶつと云いう寂光じやくかうの仏ぶつを以もつて円教えんきやうの仏ぶつと為なし円教えんきやうの仏ぶつを以もつて寤うの
 実じつ仏ぶつと為なす余あの三土さんどの仏ぶつは夢中むちゆうの権ごん仏ぶつなり、此これは三世さんぜの諸しよ仏ぶつの
 只ただ同じことば語ごに勘文かんもんし給たまへる総きやうの教相きやうなれば人ひとの語ごも入こらず会釈こたばも
 有もらず若もし之これに違たがわば三世さんぜの諸しよ仏ぶつに背そむき奉たてまつる大罪たいざいの人ひとなり天魔てんま・
 外道げどうなり永とこく仏法ぶつぽうに背そむくが故ゆえに之これを秘藏ひそうして他人たにんには見みせざれ
 若もし秘藏ひそうせずして妄みだりに之これを披露ひろうせば仏法ぶつぽうに証理しやうり無なく二世にに冥加みやうが
 無なからん謗ぼうずる人しゆつたい出来しゆつたいせば三世さんぜの諸しよ仏ぶつに背そむくが故ゆえに二人ふたり乍なら俱ともに
 悪道あくどうに墮おちんと識しるが故ゆえに之これを誠いましむるなり、能よく能よく秘藏ひそうして深ひく此
 の理りを証しんし三世さんぜの諸しよ仏ぶつの
 御本意ごほんいに相あい叶かない一聖いっせい・二天にてん・十羅刹じゆうらせつの擁護おうえを蒙こうむり滞とどり無なく
 上じやう・上品じやうひんの寂光じやくかうの往生おつじやうを遂とげ須臾しゆゆの間とに九界しよくうじ生死しよくうじの夢むの中に還かえり

来つて身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内

よりは勧發し外よりは引導し内外相應し因縁和合して自在神通の

慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず。

三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給え

り一とは法華なり大とは華嚴なり事とは方等・般若なり已上一代の總の

三諦なり、之を悟り知る時・仏果を成ずるが故に出世の本懐成仏

の直道なり因とは一切衆生の身中に總の三諦有つて常住不變な

り此れを総じて因と云うなり縁とは三因・仏性は有りと雖も善知識

の縁に値わざれば悟らず知らず顕れず善知識の縁に値えば必ず

顕るるが故に縁と云うなり、然るに今・此の一と大と事と因と

縁との五事・和合して値い難き善知識の縁に値いて五仏性を顕さん

こと何の滞りか有らんや春の時来りて風雨の縁に値いぬれば無心の

草木も皆悉く萌え出生して華敷き栄えて世に値う気色なり秋の時

に至りて月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟して一切の有情
を養育し寿命を続き長養し終に成仏の徳用を顕す之を疑い
之を信ぜざ

る人有る可しや無心の草木すら猶以て是くの如し何に況や人倫に
於てをや、我等は迷の凡夫なりと雖も一分の心も有り解も有り
善悪も分別し折節を思知る然るに宿縁に催されて生を仏法流布の
国土に受けたり善知識の縁に

あ 値いなば因果を分別して成仏す可き身を以て善知識に値うと雖も
なおそうもく 猶草木にも劣つて身中の三因仏性を顕さずして黙止せる謂れ有る
べ 可きや、此の度必ず必ず生死の夢を覚まし本覚の寤に還つて生死
きすな の継を切る可し今より已後は夢中の法門を心に懸く可からざるな
さんぜ り、三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華経を修行し障りなく
かいご 開悟す可し自行と化他との二教の差別は鏡に懸けて陰り無し、三世
しよぶつ の諸仏の勘文是くの如し秘す可し秘す可し。

弘安二年己卯十月 日

日蓮 花押

七八

諫曉八幡抄 はちまん

576P

夫れ馬は一歳二歳の時は設たいつがいのび・まるすねにすねほそく
うでのびて候へども病あるべしとも見えず、而れども七八歳なん
どになりて身もこへ血ふとく上かち下をくれ候へば小船に大石をつ
めるがごとく小き木に大なる菓このみのなれるがごとく多くのやまい
出来しゅたいして人の用にもあわず力もよわく寿もみじかし、天神等も又
かくのごとし成劫じゆじやくの始には先生せんしやうの果報かほういみじき衆生しゆじやう生れ来る上・
人の悪も候はねば身の光もあざやかに心もいさぎよく日月にちがつ
のごとくあざやかに師子象ししじやうのいさみをなして候いし程に成劫じゆじやくやうや
くすぎて住劫じゆじやくになるままに前の天神等てんじんは年かさなりて下旬の月の
ごとし今生こゝに来れる天神てんじんは果報衰減かほうすいげんし下劣げれつの衆生しゆじやう多分たぶんは出来しゅたいす、

然る間・一天に三災やうやくをこり四海に七難粗出現せしかば
一切衆生始めて苦と楽とををもち知る。

此の時・仏出現し給いて仏教と申す薬を天と人と神とにあたへ
給いしかば燈に油をそへ老人に杖をあたへたるがごとく天神等
還つて威光をまし勢力を増長せし事・成劫のごとし仏教に又五味
のあぢわひ分れたり在世の衆生は成劫ほどこそなかりしかども
果報いたうをとるへぬ衆生なれば五味の中に何の味をもなめて
威光勢力をままし候き

、仏滅度の後正像二千年過て末法になりぬれば本の天も神も
阿修羅大竜等も年もかさなりて身もつかれ心もよはくなり又今生
れ来る天人・修羅等は或は小果報・或は悪天人等なり、小乗・
権大乘等の乳・酪・生蘇・熟蘇味を服すれども老人に食をあたへ
高人に麦飯等を奉るがごとし、而るを当世此を弁えざる学人等古

にならいて日本国にほんこくの一切いっさい

の諸神等しよの御前おんまえにして阿含經あこんきやう・方等ほうとう・般若はんには・華嚴けこん・大日經等だいにちきやうを法樂し

俱舍ぐしや・成実じやうじつ・律ほつそう・法相さんろん・三論けこん・華嚴じやうど・淨土じやうど・禅等ぜんとうの僧ごじを護持ごじの僧とし

給たまえる唯老人ただろうじんに食しじきを与たまへ小兒しょうにに強飯こわきはんをくくめるがごとし、何いかに

況いわんやや今いまの小乘經しょうじやうきやうと小乘宗しょうじやう

と大乘經と大乘宗とは古の小大乘の經宗にはあらず、天竺よ
り仏法漢土へわたりし時小大の經經は金言に私言まじはれり、宗
宗は又天竺・漢土の論師・人師、或は小を大とあらそい、或は大を小
という、或は小に大をかきまじへ、或は大に小を入れ、或は先きの經
を後とあらそい、或は後を先とし、或は先を後につけ、或は顯經を
密經といひ密經を顯經という譬へば乳に水を入れ薬に毒を加うる
がごとし、涅槃經に仏・未來を記して云く「爾の時に諸の賊・醍醐を
以ての故に之に加うるに水を以てす、水を以てする事多きが故に
乳酪醍醐一切俱に失す」等云云、阿含・小乘經は乳味のごとし
方等・大集經・阿弥陀經・深密經・楞伽經・大日經等は酪味のごと
し、般若經等は生蘇味の如く華嚴經等は熟蘇味の如く法華・涅槃經
等は醍醐味の如し、設い小乘經の乳味なりとも仏説の如くなら
ば争でか一分の薬とならざるべき、況や諸の大乗經をや何に況や

ほけきょう
法華經をや。

然るに月氏より漢土に經を渡せる訳人は一百八十七人なり其の

中に羅什三蔵一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ

ひとびと

薬に毒を入たる人人なり、此の理を弁へざる一切の人師・末学等

たといいつさいきょう

設い一切經を讀誦し十二分經を胸に浮べたる様なりとも生死を離

る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の

祈とは成る可からず魔王・魔民等守護を加えて法に験の有様なり

とも終には其の身も檀那も安穩なる可からず譬ば旧医の薬に

毒を雜へてさしをけるを旧医の弟子等・或は盗み取り・或は自然

に取りて人の病を治せんが如し・いかでか安穩なるべき、当世・

日本国の真言等の七宗並に浄土・禅宗等の諸学者等、弘法・慈覚・

智証等の法華經最第一の醍醐に法華第二・第三等の私の水を入れ

たるを知らず仏説の如くならば・いかでか一切俱失の大科を脱れ

ん、大日経は法華経よ

り劣る事七重なり而るを弘法等・顛倒して大日経最第一と定めて

日本国に弘通せるは法華経一分の乳に大日経七分の水を入れたる

なり水にも非ず乳にも非ず大日経にも非ず法華経にも非ず而も

法華経に似て大日経に似たり大覚世尊此の事を涅槃経に記して

云く「我が滅後に於て正法將に滅尽せんと欲す爾の時に多く悪を

行ずる比丘有

らん、乃至ないし牧牛女の如ごとく乳を売るに多利を貪らんと欲するを爲もつて
の故ゆえに二分の水を加う、乃至此の乳・水多し、爾その時に是の経
閻えんぶだい浮提おひに於まさて当るに広く流布すべし、是の時こに当まさに諸の悪比丘有くて
是の経を鈔とり略りし分たぶんて多分と作なし能よく正法しょうほうの色香美味を滅しきこうのみすべし、
是の諸の悪人復もろもろあくにん是またかくの如ごとき經典きょうてんを讀誦どくじゆすと雖いえども如来にょらいの深密じんみつの要義ようぎ
を滅除めつじよせん、乃至前ないしを鈔とりて後に著つけ後ごを鈔とりて前ぜんに著つけ前後ぜんごを中ちゆうに
著つけ中ちゆうを前後ぜんごに著つけん当まさに知るべし是かくのの如ごときの諸もろもろあくびくの悪比丘あくびくは是これ
魔まの伴侶はんりよなりと等と云ん云ん。

今いま日本国にほんこくを案あずるに代始すまりて已すでに久ひさしく成なるりぬ旧ふるき守護しゆごの
善神ぜんじんは定さだめて福ふくも尽つき寿しゆも滅めつじ威光いこう勢力せうりよくも衰おとろえぬらん、仏法ぶつぽうの味あじ
をなめてこそ威光いこう勢力せうりよくも増長ぞうちようすべきに仏法ぶつぽうの味あじは皆みなたがひぬ齡やわいは
たけぬ争いかでか国の災わざを払い氏子ししをも守護しゆごすべき、其その上うへ謗法ぼうほうの国くにに
て候まをを氏神しんなればとて大科だいかをいましめずして守護しゆごし候まをへば仏前ぶつぜんの

起請きしょうを毀そりる神たましいなり、しかれども氏子うぢこなれば愛子いとこの失とがのやうにすて

ずして守護しゅごし給たまいぬる程ほどに法華經ほけきょうの行者ぎょうじやをあだむ国主こくしゅ・

国人等こくにんを対治たいじを加くわえずして守護しゅごする矢やに依よりて梵釈ぼんしゃく等らのためには

八幡等はちまんは罰ばつせられ給たまいぬるか此事このことは一大事いちだいじなり秘ひすべし秘ひすべし、

有ある經きやうの中に仏ぶつ・此この世界せかいと他方たほうの世界せかいとの梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天してん・

竜神等りゆうじんを集あめて我が正像しょうざう末まつの持戒じかい・破戒はかい・無戒むかい等らの弟子等でしを

第六天だいろくてんの魔王まおう・悪鬼神等あくきじんが人王じんみん・人民等じんみんの身みに入りて惱乱のうらんせんを見

乍なら聞きき乍なら治罰ちばつせ

ずして須臾しゆゆもすこすならば必ず梵釈ぼんしゃく等らの使つかをして四天王してんのうに仰おおせつ

けて治罰ちばつを加くわうべし、若もし氏神うぢじん・治罰ちばつを加くわえずば梵釈ぼんしゃく・四天等してんも

守護神しゅごじんに治罰ちばつを加くわうべし梵釈ぼんしゃく又またかくのごとし、梵釈ぼんしゃく等は必ず此この

世界せかいの梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天等してんを治罰ちばつすべし、若もし然しからずんば三世さんぜの

諸仏しよぶつの出世しゆつせに漏もれ永とこく梵釈ぼんしゃく等らの位ゐを失うしないて無間むげん・大城だいじやうに沈しずむべし

と釈迦しやくか・多宝たぼう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの御前おんまえにして起請きしやうを書き置れたり。
今これ之を案ずるに日本にほん小国しやうこくの王となり神となり給たまうは小乘しやうじやうには
三賢さんけんの菩薩ぼさつ・大乘だいじやうには十信じゆっしん・法華ほつげには名字みやうじ五品ごほんの菩薩ぼさつなり、何いかなる
氏神むじん有りて無尽むじんの功德くどくを修しゆすとも法華經ほけきやうの名字みやうじを聞きかず一念いちねん三千さんぜん
の觀法かんぽうを守護しゆごせずんば退位たいゐの

菩薩と成りて永く無間・大城に沈み候べし、故に扶桑記に云く「又
伝教大師・八幡大菩薩の奉為に神宮寺に於て、自ら法華経を講ず、
乃ち聞き竟て大神託宣すらく我法音を聞かずして久しく歳年を歴
る幸い和尚に値遇して正教を聞くことを得たり兼て我がために
種種の功德を修す至誠随喜す何ぞ徳を謝するに足らん、兼て我が
所持の法衣有りと即ち託宣の主・自ら宝殿を開いて手ら紫の袈裟一
つ紫の衣一を捧げ和尚に奉上す大悲力の故に幸に納受を垂れ給え
と、是の時に禰宜・祝等各歎異して云く元來是の如きの奇事を見ず
聞かざるかな、此の大神施し給う所の法衣今山王院に在るなり」云
云、今謂く八幡は人王第十六代・応神天皇なり其の時は仏經無かり
しかば此に袈裟衣有るべからず、人王第三十代欽明天皇の治三十
二年に神と顕れ給い其れより已來弘仁五年までは禰宜・祝等次第に
宝殿を守護す、何の王の時・此の袈裟を納めけると意へし而して

禰宜等云く元来見ず聞かず等云云、此の大菩薩いかにしてか此の袈裟衣は持ち給いけるぞ不思議なり不思議なり。

又欽明より已来弘仁五年に至るまでは王は二十二代・仏法は二

百六十余年なり、其の間に三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律宗・

禅宗等の六宗・七宗・日本国に渡りて八幡大菩薩の御前にして經

を講ずる人人、其の数を知らず、又法華經を讀誦する人も争でか無

からん、又八幡大菩薩の御宝殿の傍には神宮寺と号して法華經等の

一切經を講ず

る堂・大師より已前には是あり、其の時定めて仏法を聴聞し給いぬら

ん何ぞ今始めて我法音を聞かずして久しく年歳を歴る等と託宣し

給ふべきや、幾くの人人か法華經・一切經を講じ給いけるに何ぞ此

の御袈裟衣をば進らさせ給はざりけるやらん、当に知るべし伝教

大師已前は法華經の文字のみ読みけれども其の義はいまだ顕れざ

りける

か、去いぬる延えんりやく暦二十年十一月の中旬の比でんぎようだいしひえいざん伝た教けきよう大師たいし比叡ひえい山ざんにして
南都なんと・七なな大寺だいいじの六宗ろくしゆうの碩德せきとく十余人じふじゆうにんを奉請ぶじようして法華ほけきよう經きようを講こうじ給たまいし
に、弘世ひろよまずな・真綱まづな等の二人ふたりの臣下しんか此こゝの法門ほうもんを聴聞ちようもんしてなげいて云いく
「いちじよう一乘ごんたいの權滯なげを慨さんたいき三諦みけんの末頭まげんを悲あしむら又い云わく、長幼ちやう三有さんの結むすを
摧破さいはし猶なおいま未りやうだ歴劫りやくこつの轍てつを改あらめずら等ら云云と、其その後のち延えんりやく暦二十一年正

月十九日

に高雄寺に主上・行幸ならせ給いて六宗の碩徳と伝教大師とを召
し合はせられて宗の勝劣を聞し食ししに南都の十四人皆口を閉ぢ
て鼻のごとくす、後に重ねて怠状を捧げたり、其の状に云く、「聖徳
の弘化より以降た今に二百余年の間講ずる所の經論其の数多し、
彼れ此れ理を争い其の疑未だ解けず而も比の最妙の円宗猶未だ
闡揚せず」等云云、比れをもつて思うに伝教大師已前には法華經の
御心いまだ顕れざりけるか、八幡大菩薩の見ず聞かずと御託宣有
りけるは指なり指なり白なり白なり。

法華經第四に云く「我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經
を説かん、当に知るべし是の人は則ち如来の使なり乃至如来則ち衣
を以て之れを覆い給うべし」等云云、当來の弥勒仏は法華經を説き
給うべきゆへに釈迦仏は大迦葉尊者を御使として衣を送り給ふ、又
伝教大師は仏の御使として法華經を説き給うゆへに八幡大菩薩を

使として衣を送り給うか、又此の大菩薩は伝教大師已前には加水
の法華經を服してをはしましけれども先生の
善根に依つて大王と生れ給いぬ、其の善根の余慶・神と顕れて此の
国を守護し給いけるほどに今は先生の福の余慶も尽きぬ、正法の
味も失せぬ謗法の者等・国中に充滿して年久しけれども日本国の
衆生に久く仰がれてなじみせし大科あれども捨てがたくをぼしめ
し老人の不幸の子を捨てざるが如くして天のせめに合い給いぬる
か、又

此の袈裟は法華經最第一と説かん人こそ・かけまいらせ給うべきに
伝教大師の後は第一の座主・義真和尚・法華最第一の人なればかけ
させ給う事其の謂あり、第二の座主・円澄大師は伝教大師の
お弟子なれども又弘法大師の弟子なりすこし謗法にいたり、此の
袈裟の人には有らず、第三の座主・円仁慈覚大師は名は伝教大師

の御弟子なれども

心は弘法大師の弟子・大日経第一・法華経第二の人なり、此の袈裟

は一向にかけがたし、設いかけたりとも法華経の行者にはあらず、

其の上又当世の天台座主は一向・真言の座主なり、又当世の八幡の

別当は、或は園城寺の長吏、或は東寺の末流なり、此れ等は遠くは

釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵、近くは伝教大師の讐敵なり、

譬へば

提婆達多が大覺世尊の御袈裟をかけたるがごとし、又獵師が仏衣を被て師子の皮をはぎしがごとし、当世叡山の座主は伝教大師の八幡大菩薩より給て候し御袈裟をかけて法華經の所領を奪ひ取りて真言の領となせり、譬へば阿闍世王の提婆達多を師とせしがごとし。

而るを大菩薩の此の袈裟をはぎかへし給わざるは第一の大科なり、此の大菩薩は法華經の御座にして行者を守護すべき由の起請をかきながら数年が間・法華經の大怨敵を治罰せざる事不思議なる上、たまたま法華經の行者の出現せるを来りて守護こそなさざらめ、我が前にして、国主等の怨する事・犬の猿をかみ蛇の蝦をのみ鷹の雉を師子王の兎を殺すがごとくするを一度もいましめず、設いしましむるやうなれども、いつわりをろかなるゆへに梵釈・日月・四天等の

せめを八幡大菩薩かほり給いぬるにや、例せば欽明天皇・敏達天皇
よめいてんのう

用明天皇已上三代の大王・物部大連・守屋等がすすめに依りて
せんじくだ

宣旨を下して金銅の釈尊を焼き奉り堂に火を放ち僧尼をせめしか
しゃくそん たてまつ そうに

ば天よ

り火下て内裏をやく、其上・日本国の万民とがなくて悪瘡をや
くだり だいり にほんこく ばんみん あくそう

み死ぬること大半に過ぎぬ、結句三代の大王・二人の大臣・其の外
たいはん す けつく だいおう だいじん そ

多くの王子・公卿等・或は悪瘡・或は合戦にほろび給いしがごとし、
おうじ くぎよう ある あくそう ある たまい

其のとき・日本国の百八十の神の栖給いし宝殿皆焼け失せぬ釈迦仏に
そのとき にほんこく ももやそ すみたまい ほうでんみな しゃかぶつ

敵する者を守護し給いし大科なり、又園城寺は叡山已前の寺なれ
しゆご たまい だいか おんじょうじ えいざん いぜん

ども智証大師

の真言を伝えて今に長吏とがうす叡山の末寺たる事疑いなし、
しんこん ちようり えいざん まつじ うたがい

而るに山門の得分たる大乘の戒壇を奪い取りて園城寺に立てて
しか さんもん わか だいじよう かいだん おんじょうじ

叡山に随わじと云云、譬へば小臣が大王に敵し子が親に不幸なるが
えいざん したがわ たと たいおう

ごとし、かかる悪逆あくぎやくの寺を新羅大明神しらぎだいみょうじんみだれがわしく守護しゆごするゆへに度度たびたび・山門さんもんに宝殿ほうでんを焼る、此のごとし、今八幡大菩薩はちまんだいぼさつは法華經ほけきょうの大怨敵おんてき

守護しゆごして天火てんかに焼かれ給たまいぬるか、例せば秦の始皇の先祖せんぞ・襄王じやおうと申せし王わう・神かみとなりて始皇等しやうわうとうを守護しゆごし給たまいし程ほどに秦の始皇大慢だいまんをなして三皇さんこう・五帝ごていの墳典ふんでんをやき三聖さんせいの孝經こウキョウ等を失うしないしかば沛公はいこうと申もうす人劍じんけんをもつて大蛇だいじやを切り死ころぬ秦皇の氏神うぢかみ是これなり、其その後秦こうしんの代しろほどなくほろび候こいぬ此これも又かくのごとし、安芸の国あきのくにいつく島しまの大明神だいみょうじん

は平家の氏神なり平家をををこらせし失に伊勢太神宮・八幡等に神
うちに打ち失われて其の後平家ほどなくほろび候いぬ此れも又か
くのごとし。

法華經の第四に云く「仏滅度の後能く其の義を解せんは是れ諸の
天人・世間の眼なり」等云云、日蓮が法華經の肝心たる題目を
日本国に弘通し候は諸天・世間の眼にあらずや、眼には五あり
所謂・肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の五眼は法華經より
出生せさせ給う故に普賢經に云く「此の方等經は是れ諸仏の眼
なり諸仏是れに因て五眼を具する事を得給う」等云云、此の方等經
と申すは法華經を申すなり、又此の經に云く「人天の福田・応供の
中の最なり」等云云、此等の經文のごとくば妙法蓮華經は人天の
眼・二乗・菩薩の眼諸仏の御眼なり、而るに法華經の行者を怨む人
は人天の眼をくじる者なり、其の人を罰せざる守護神は一切の

にんてん まなこ
人天の眼をくじる者を結構し給う神なり、而るに弘法・慈覚・智証
等は正しく書を作りて法華経を無明の辺域にして明の分位に非ず
後に望れば戯論

な およ
と作る力者に及ばず履者とりにたらずとかきつけて四百余年、
にほんこく かみいちにん
日本国の上一人より下万民にいたるまで法華経をあなづらせ一切
しゅごう まなこ
衆生の眼をくじる者を守護し給うはあに八幡大菩薩の結構にあ
らずや、去ぬる弘長と又去ぬる文永八年九月の十二日に日蓮一分
とが
の失なくして南無妙法蓮華経と申す大科に国主のはからいとして
はちまんだいぼさつ
八幡大菩薩
おんまえ
の御前にひきはらせて一国の謗法の者どもにわらわせ給いしはあに
はちまんだいぼさつ
八幡大菩薩の大科にあらずや、其のいましめとをぼしきはただど
しうちばかりなり、日本国の賢王たりし上・第一・第二の御神なれ
はちまん すく
ば八幡に勝れたる神は

よもをはせじ、又偏頗へんげはよも有らじとは、をもへども一切いっさい経並きやうに
法華ほけきやう經のをきてのごときんば、この神はだい大科かの神たましいなり、日本にほん六十六
箇国あ二つの島一万一千三十七の寺のみな仏は皆、或はある画像、或はある木像
・或はある真言しんこん已前いぜんの寺もあり、或はある已後いごの寺もあり、此等これらのみな仏は皆
法華ほけきやう經より出生しゅっしやうせり、法華ほけきやう經をもつて眼まなことすべし、所謂いわゆる「此の
方等ほうたう經は是れ諸しよ仏ぶつの眼まなこなり」等云云、妙樂みやうらく云く「しか
常住じやうじゆう 仏性ぶつしやうを以て咽喉いんこうと為し一乘いちじやうの妙行を以て眼目がんもくと為し再生さいしやう敗
種を以て

心腑しんぶと為なし顯本遠寿けんほんおんじゆを以もつて其の命と為なす、等云云、而しかるを日本国にほんこくの
習ならい真言師しんごんしにもかぎらず諸宗しよしゆう一同いどうに仏眼ぶつげんの印いんをもつて開眼かいげんし大日だいにとち
の真言しんごんをもつて五智ごちを具ぐすと云云此等これらは法華經ほけきようにして仏ぶつになれる
衆生しゆじやうを真言しんごんの権經こんきやうにて供養くやうすれば還かえつて仏ぶつを死ころし眼まなこをくじり
壽命じゆみやうを断ことち喉のどをさきなんどする人人ひとびとなり、提婆だいばが教主きやうしゆ釈尊しゃくそんの身
より血ちを出だし阿闍世王あじゃせの彼の人を師しとして現罰げんばちに値あいしにいかでか
をとり候まをべき、八幡大菩薩はちまんだいぼさつは応神天皇てんのう・小国しよこくの王わうなり
阿闍世王あじゃせは摩竭まかつ大國たいこくの大王だいおうなり天と人と王と民との勝劣しやうりやくなり、
而しかれども阿闍世王あじゃせ・猶な釈迦あしや仏ぶつに敵あかをなして惡瘡あくそう身に付き給たまいぬ、
八幡大菩薩はちまんだいぼさついかでか其その科かを脱のがるべき、去いぬる文永ぶんえい十一年じゆいちねんに大蒙古ちやうもんこ
よりよせて日本国にほんこくの兵へいを多くほろぼすのみならず八幡はちまんの宮殿みやてんすでに
やかれぬ、其そのの時とき何なんぞ彼の国の兵へいを罰たまし給たまはざるや、まさを知るべ
し彼の

国の大王は此の国の神に勝れたる事あきらけし、襄王と申せし神は漢土の第一の神なれども沛公が利劔に切られ給いぬ。

此れをもつてをもうべし道鏡法師・称徳天皇の心よせと成りて国王と成らんとせし時清丸・八幡大菩薩に祈請せし時八幡の御託宣に云く「夫れ神に大小好悪有り乃至彼は衆く我は寡し邪は強く正は弱し乃ち当に仏力の加護を仰て為めに皇緒を紹隆すべし」等云云、当に知るべし八幡大菩薩は正法を力として王法を守護し給いけるなり、叡山・東寺等の真言の邪法をもつて権の大夫殿を調伏せし程に権の大夫殿はかたせ給い隠岐の法皇はまけさせ給いぬ還著於本人此れなり。

今又日本国・一万一千三十七の寺並に三千一百三十二社の神は国家安穩のためにあがめられて候、而るに其の寺寺の別当等・其の社の社主等はみなみなあがむるところの本尊と神との御心に

相違せり、彼れ彼れの仏と神とは其の身異体なれども其の心同心
に法華經の守護神なり、別当と社主等は或は眞言師、或は念仏者
・或は禅僧、或は律僧なり皆一同に八幡等の御かたきなり、謗法
不孝の者を守護し給いて正法の者を、或は流罪、或は死罪等に行な

わするゆへに天のせめを被り給いぬるなり、我が弟子等の内・謗法の余慶有る者の思いていわく此の御房は八幡をかたきとすと云云、これいまだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるといふ事を存知せざる者の思いなりに付法蔵經と申す經に大迦葉尊者の因縁を説いて云く「時に摩竭國に婆羅門有り尼俱律陀と名づく過去の世に於て久しく勝業を修し、多く財宝に饒かにして巨富無量なり摩竭王に比するに千倍勝れりと為す、財宝饒かなりと雖も子息有る事無し自ら念わく老朽して死の時將に至らんとす庫蔵の諸物委付する所無し、其の舎の側に於て樹林神有り彼の婆羅門子を求むるが為の故に即ち往て祈請す年歳を経歴すれども微心無し、時に尼俱律陀大に瞋忿を生じて樹神に語て曰く、我汝に事てより来已に年歳を経れども都て一の福応を垂るるを見ず今当に七日至心に

汝に事うべし、若し復驗無ければ必ず相焼剪せん、樹神聞き已て
甚だ愁怖を懐き四天王に向つて具さに斯の事を陳ぶ、是に於て
四王往て帝釈に白す。帝釈閻浮提の内を觀察するに。福德の人の彼
の子と為るに堪ゆる無し即ち梵王に詣で広く上の事を宣ぶ、爾の時
に梵王・天眼を以て觀見するに梵天の当に命終に臨む有り而て之
に告げて曰く

汝若し神を降さば宜しく当に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ずべ
し、梵天對て曰く婆羅門の法惡邪見多し我今其子と為る事能ざる
なり、梵王復言く彼の婆羅門大威徳有り閻浮提の人往て生ずるに
堪ゆる莫し汝必ず彼に生ぜば吾れ相護りて終に汝をして邪見に
入らしめざらん、梵天曰く諾敬て聖教を承けん、是に於て帝釈
即樹神に向つ

て斯の如き事を説く樹神歡喜して尋て其の家に詣で婆羅門に語らく

汝なんじ今復恨またうらみを我れに起す事なかれ卻しりぞけて後七日当まさに卿が願を満すべし、七日に至いたつて已すでに婦身あむ事有るを覚おぼえ十月を満まんぞくして一男児を生なめり乃至ないし今の迦葉かしよう是なりこれに云云、時に応じて尼俱律陀にくりだ大おおに瞋しんぶん忿ふんを生なずこんじように等云云、常のごときんば氏神うぢがみに向いて大瞋恚しんにを生なせん者は今生こんじようには身をほろぼし後世ごしようには悪道あくどうに墮おつべし然しかりと雖いえども尼俱律陀にくりだ長者ちちようじや・氏神うぢがみに向て大悪口あつく大瞋恚しんにを生なじて大願じようを成就じゆし賢けん子をまうけ給たまいぬ、当まさに知るべし瞋恚しんには善悪ぜんあくに通とざる者なり。

いまにちれん
今日蓮は去ぬる 建長五年癸丑四月二十八日より今年弘安二年太歳

庚辰十一月にいたるまで二十八年が間又他事なし、只妙法蓮華經の

七字五字を日本國の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり、

此れ即母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり此れ又時の当

らざるにあらざり既に仏記の五五百歳に当れり、天台・伝教の御時は

時いまだ来らざりしかども一分の機ある故に少分流布せり、何に

況や今は已に時いたりぬ設とひ機なくして水火をなすともいかでか

弘通せざらむ、只不輕のごとく大難には値うとも流布せん事疑な

かるべきに真言・禅・念仏等の讒奏に依り

て無智の国主等・留難をなす此を対治すべき氏神八幡大菩薩・彼等

の大科を治せざるゆへに日蓮の氏神を諫曉するは道理に背くべし

や、尼俱律陀長者が樹神をいさむるに異ならず、蘇悉地經に云く

本尊を治罰する事鬼魅を治するが如し」等云云、文の心は経文の

ごとく所願しよがんを成つぜんがために数年が間ま・法ほふを修行しゆぎやうするに成就じゆじゆせざれば本尊ほんぞん

をある・或あるはしばり・或あるは打ちなんどせよととかれて候さう、相応そつおう和尚わじやうの

不動明王ふどうみやうおうをしばりけるは此こゝの経文きやうもんを見たりけるか、此こゝは他事たじには

ににほんこくるべからず日本にほん国こくの一切いっさいの善人ぜんにんは、或あるは戒たもを持ち、或あるは布施ふせを行

じ、或あるは父母等ふぼの孝養こやうのために寺塔じとうを建立こんりやうし、或あるは成仏じやふぶつ得道とくどうの為ために

妻子さいしをやしなうべき財さいを止とどめて諸僧しよそうに供養くやうをなし候さうに、諸僧しよそう謗法ぼうぼうの

者ちぎりたるゆへに謀反ぼうはんの者ものを知しらずしてやどしたるがごとく不孝ふこうの者ものに

契ちぎりをなせるがごとく今生こんじやうには災難さいなんを招まき後生ごじやうも悪道あくだうに墮おち

候さうべきを扶たすけんとする身みなり而しかるを日本にほんこくの守護しゆゑの善神等ぜんじん・彼等かれらに

くみして正法しやうぼうの敵てきとなるゆへに此こゝをせむるは経文きやうもんのごとし道理どうりに

任まかせたり、我が弟子等でしが愚案ぐあんにをもわく我が師しは法華ほけきやう経きやうを弘通くわつうし

給たまうとてひろまらざる上うへ・大難だいなんの来きれるは真言しんごんは国くにをほろぼす念仏ねんぶつ

は無間地獄・禅は天魔の所為・律僧は国賊との給うゆへなり、例せば
道理有る

問注に悪口のまじわれるがごとしと云云、日蓮我が弟子に反詰して
云く汝若し爾らば我が問を答えよ一切の真言師・一切の念仏者・
一切の禅宗等に向て南無妙法蓮華経と唱え給えと勸進せば彼等の
云く我が弘法大師は法華経と釈迦仏とを戲論無明の辺域・力者は
き物とり及ばずと・かかせ給いて候、物の用にあわぬ法華経を
読誦せ

んよりも其その口に我が小呪を一反も見つべし一切いっさいの在家ざいけの者の云いわく
善導ぜんどう和尚わじょうは法華經ほけきょうをば千中無一せんちゆうむいつ・法然上人ほうねんしやうにんは捨閉閣拋しゃへいかくほう・道綽どうしゆく・綽せ・
善導ぜんどう和尚わじょうは法華經ほけきょうをば千中無一せんちゆうむいつ・法然上人ほうねんしやうにんは捨閉閣拋しゃへいかくほう・道綽どうしゆく・綽せ・
は未有みういちにんとくしや一人得者と定めさせ給たまへり汝なんじがすすむる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは
我が念仏ねんぶつの障さわりなり我等われら設たい悪いをつくるともよも唱となえじ一切いっさいの
禅宗ぜんしゆうの云いわく我が宗しゆは教外別伝きやうげべつでんと申もうして一切經いっさいきやうの外がいに伝でんへたる最上さいじやう
の法門ほうもんなり一切經いっさいきやうは指さしのごとし禅ぜんは月のごとし天台等てんだいの愚人ぐにんは指
をまほつて月を亡うしないたり法華經ほけきやうは指さしなり禅ぜんは月なり月を見
て後は指さしは何のせんか有あるべきなんど申もうす、かくのごとく申もうさん時
はいかにとじてか南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの良薬りやうやくをば彼れ等かが口には入
べき仏ぶつは且まらく阿含經あこんきやうを説たまい給たまいて後ご・彼の行者ぎやうじやを法華經ほけきやうへ入れん
と・たばかり給たまいしに一切いっさいの声聞等しやうもん・只阿含經ただあこんきやうに著じゃくして法華經ほけきやうへ入
らざりしをばいいかやうにか・たばからせ給たまいし、此こをば仏説ぶつせついて
云いわく

「たとひ五逆罪は造るとも五逆の者をば供養すとも罪は仏の種とはな
るとも彼れ等が善根は仏種とならじ」とこそ説かせ給しか、小乗・
大乘はかわれども同じく仏説なり大が小を破して小を大となすと
大を破して法華經に入ると大小は異なれども法華經へ入れんと思
う志は是一つなり、されば無量義經に大を破して云く未顕眞実
と法華經に云く「此の事は爲て不可なり」等云云、仏、自ら云く「我
世に出でて華嚴・般若等を説きて法華經をとかずして入涅槃せば愛
子に財を・をしみ病者に良薬をあたへずして死にたるがごとし仏、
自ら地獄に墮つべし」と云云、
不可と申すは地獄の名なり況や法華經の後・爾前の經に著して
法華經へうつらざる者は大王に民の従がはざるがごとし親に子の
見へざるがごとし、設い法華經を破せざれども爾前の經經をほむ
るは法華經をそしるに当たれり妙樂云く「もし昔を称歎せば豈に

今を毀るに非ずや「文、又云く「発心せんと欲すと雖も偏円を簡ばず誓の境を解らざれば未來法を聞くと何ぞ能く謗を免れん」等云云、真言の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等は設とい法華經を大日經に相對して勝劣を論ぜずして大日經を弘通すとも滅後に生まれたる三蔵・人師なれば謗法はよも免れ候はじ、何に況や善無畏等の三三蔵は法華經は略説・大日經は広説と同じて而かも法華經の行者を

だいにちきょう
大日経えすかし入れ、弘法等の三大師は法華經の名をかきあげて
けるん
戲論なんどかかれて候大科を明らめずして此の四百余年一切衆生
みなほうぼう
を皆謗法の者となせり、例せば大莊嚴仏の末の四比丘が六百万億
なゆた
那由佗の人を皆無間地獄に墮せると、師子音王仏の末の勝意比丘
むりようむへん
が無量無辺の持戒の比丘・比丘尼うばそくうばいを皆阿鼻大城に
導きしと、今の三大師の教化に随いて日本国四十九億九万四千八百
二十八人、或は云く日本紀に行基の人数に云く男女四十五
はちまん
億八万九千六百五十九人云云の一切衆生又四十九億等の人人四
ひとびと
百余年に死して無間地獄に墮ちぬれば其の後他方世界よりは生れ
て又死して無間地獄に墮ちぬ、かくのごとく墮つる者は大地微塵よ
だいぢみじん
りも多し此れ皆三大師の科ぞかし、此れを日蓮此に大に見ながらい
こ
つわりをろかにして申さずば俱に墮地獄の者となつて一分の科なき
もつ
身が十方の大阿鼻獄を経めぐるべしいかでか身命をすててよばわ
あびごく
しんみょう

らざるべき涅槃經に云く、「一切衆生異の苦を受くるは悉く是如来一人の苦なり」等云云、日蓮云く「一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の苦と申すべし。」

平城天皇の御字に八幡の御託宣に云く「我は是れ日本の鎮守

八幡大菩薩なり百王を守護せん誓願あり」等云云、今云く人王八

十一・二代隱岐の法皇・三・四・五の諸王已に破られ畢んぬ残の二十

余代今捨て畢んぬ、已に此の願破るるがごとし、日蓮料簡して

云く百王を守護せんというは正直の王・百人を守護せんと言

給う、八幡の御誓願

に云く「正直の人の頂を以て栖と為し、諂曲の人の心を以て

亭ず」等云云、夫れ月は清水に影をやどす濁水にすむ事なし、王と

申すは不妄語の人・右大將家・権の大夫殿は不妄語の人正直の頂

八幡大菩薩の栖む百皇の内なり、正直に二あり一には世間の正直

王と申すは天人地の三を串くを王と名づく、天・人・地の三は横なりたつ

てんは縦なり、王と申すは黄帝・中央の名なり、天の主・人の主・地の主を王と申す、隱岐の法皇は名は国王・身は妄語の人なり横人なり、権の大夫殿は名は臣下・身は大王・不妄語の人・八幡大菩薩の願い給う頂きなり、二には出世の正直と申すは爾前・七宗等の経論釈は妄語・法華経・天台宗は正直の経釈なり、本地は不妄語の経の釈迦仏・

迹には不妄語の八幡大菩薩なり、八葉は八幡・中台は教主釈尊なり、四月八日・寅の日に生まれ八十年を経て二月十五日申の日に隠れさせ給う、豈に教主の日本国に生まれ給うに有らずや、大隅の正八幡宮の石の文に云く「昔し靈鷲山に在つて妙法華經を説き今正宮の中に在て大菩薩と示現す」等云云、法華經に云く「今此三界」等

云云、又「常に靈鷲山に在り」等云云、遠くは三千大千世界の一切衆生は釈迦如来の子なり、近くは日本国・四十九億九万四千八百二十八人は八幡大菩薩の子なり、今日本国の一切衆生は八幡をたのみ奉るやうにもてなし釈迦仏をすて奉るは影をうやまつて体をあなづり子に向いて親をのるがごとし、本地は釈迦如来にして月氏国に出で

て正直捨方便の法華經を説き給い、垂迹は日本国に生れては

正直しょうじきの頂いただききにすみ給たまう、諸もろの権化ごんげの人人ひとびとの本地ほんちは法華經ほけきょうの一いつ実相じつそうなれども垂迹すいじゃくの門かどは無量むりょうなり、所謂いわずる跋俱羅尊者はくくらそんじゃは三世さんぜに不殺生戒ふさつしょうかいを示し、鷲峯摩羅おうくつまらは生生せつじょうに殺生せつじょうを示す、舍利弗しゃりほつは外道げどうとなり是かくの如ごとく門かど門かど不同ふどうなる事は本凡夫ほんんぶにて有りし時の初發得道はつとくの始はじめを成仏じやぶつの後のち・化他門けたに出いで給たまう時とき・我が得道とくだうの門かどを示すなり、妙樂大師みょうらくだいし云いく「若し本もとに従したがて説まかば亦是またこれ昔殺等むかしころの悪あくの中に於おいて能よく出離しゆつりするが故ゆゑなり是かくの故ゆゑに迹中またに亦殺またを以もつて利他りたの法門ほうもんと為なす」等云云はちまんだい、今八幡大菩薩ほんちは本地ほんちは月支がつしの妄語もうごの法華經ほけきょうを迹あとに日本国にほんこくにして正直しょうじきの二字ふたごとなして賢人けんじんの頂いただききにやどらんと云云も、若し爾しからば此こゝの大菩薩ほさつは宝殿ほうでんをやきて天あまにのぼり給たまうとも法華經ほけきょうの行者ぎょうじゃ・日本国にほんこくに有あるならば其その所ところに栖すみ給たまうべし。

法華經ほけきょうの第五ごに云いく諸天しよてん昼夜しよてんに常に法ほの為ための故ゆゑに而しかも之これを衛護えいまも

す、きようもん経文の如くんば南無妙法蓮華經と申す人をば大梵天・帝釈ほんてん たいしゃく・にちがつ日月・四天等昼夜に守護すべしと見えたり、又第六の巻に云く「或あるは己身を説き・或は他身を説き・或は己身を示し・或は他身を示し・或は己事を示し・或は他事を示す」文觀音尚三十三身を現じ妙音又三十四身を現じ給ふ教主釈尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや天台云く「てんだい即是れ形を十界に垂れて種種の像を作す」等云云。てんじくこく天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をにほんこく日本国と申すあに聖人出で給わざらむ、月

は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より
出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかなら
ず在世は但八年なり、日は光明・月に勝れり五百歳の長き闇を
照すべき瑞相なり、仏は法華經謗法の者を治し給はず在世には無
きゆへに、末法には一乗の強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れな
り、

各各・我が弟子等はげませ給へはげませ給へ。

弘安三年太歳庚辰十二月日

日蓮 花押

七九

一二乗作仏事

589P

爾前得道の旨たる文、經に云く見諸菩薩等云云、又云く始見

わがみ 我身等、此等の文の如きは菩薩初地・初住に叶う事有ると見えたるなり、故に見諸菩薩の文の下には而我等不預斯事と・又始見の文の下には除先修習等云云、此れは爾前に二乗作仏無しと見たる文なり。

問う 顕露不定教には二乗作仏を許すや 顕露不定教には之を許すか
秘密には之を許すか 爾前の円には二乗作仏を許すや 別教には之を許すか、答う 所詮は重重の問答有りと 雖も皆之を許さざるなり、
所詮は二乗界の作仏を許さずんば 菩薩界の作仏も許さざるか 衆生
無辺誓願度の願の闕くるが故なり、 釈は菩薩の得道と見たる 經文
を消する許りなり、 所詮華・方・般若の円の菩薩も 初住に登らず 又
凡夫二乗は 勿論なり 化一切衆生・皆令入仏道の文の下にて 此の事
は 意得可きなり。

問う 円の菩薩に向つては二乗作仏を説くか、 答う 説かざるなり

未會向人説如此事の釈に明かなり。

問う華嚴經の三無差別の文は十界互具の正証なりや、答う次下の經に云く如来智慧の大藥王樹は唯二所を除きて生長することを得ず所謂声聞と縁覺となり等云云二乗作仏を許さずと云う事分明顯なり、若し爾らば本文は十界互具と見えたれども實には二乗作仏無ければ十界互具を許さざるか、其の上爾前の經は法華經を以て定む可し既に除先修習等云云と云う華嚴は二乗作仏無しと云う事分明顯なり方等般若も又以て此くの如し。

惣じて爾前の円に意得可き様二有り、一には阿難結集の已前に仏は一音に必ず別円二教の義を含ませ一一の音に必ず四教三教を含ませ給えるなり、故に純円の円は爾前經には無きなり故に円と云えども今の法華に対すれば別に撰すと云うなり、籤の十に又一の位に皆普賢行布の二門有り故に知んぬ兼ねて円門を用いて別に

撰すと

釈するなり此の意にて爾前に得道無しと云うなり、一には阿難

結集の時・多羅葉に注す一段は純別・一段は純円に書けるなり

方等・般若も此くの如し、此の時は爾前の純円に書ける処は粗

法華に似たり、住中多明円融之相等と釈するは此の意なり。

天台智者大師は此の道理を得給いし故に他師の華嚴など惣じて

爾前の經を心得しには、たがい給えるなり、此の二の法門をば如何

として天台大師は心得給いしぞとさぐれば法華經の信解品等を以

て一の文字別円の菩薩及び四教・三教なりけりとは心得給いしな

り、又此の智恵を得るの後にて彼等の經に向つて見る時は一向に別

一向

に円等と見えたる処あり、阿難結集の後のしはざなりけりと見

給えるなり、天台一宗の学者の中に此の道理を得ざるは爾前の円

と法華の円と始終同の義を思う故に一処のみの円教の經を見て一

卷・二卷等に純円の義を存ずる故に彼の經等に於て往生成仏の

義理を許す人人是れ多きなり、華嚴・方等・般若・觀經等の本文に

於て阿難・円教の

卷を書くの日に即身成仏云云即得往生等とあるを見て一生乃至

順次生に往生成仏を遂げんと思いたり、阿難結集已前の仏口よ

り出す所の説教にて意を案ずれば即身成仏即得往生の裏に歴劫

修行・永不往生の心含めり、句の三に云く撰論を引いて云く

了義經・依文判義等と云う意なり、爾前の經を文の如く判ぜば

仏意に乖く可しと云う

事は是なり、記の三に云く法華已前は不了義なる故と云えり此の心を釈せるなり、籤の十に云く「唯此の法華のみ前教の意を説き今經の意を顯す」と釈の意は是なり。

抑 他師と天台との意の殊なる様は如何と云うに他師は一一の

經經 に向つて彼の 經經 の意を得たりと謂へり、天台大師は

法華經に仏四十年の 經經 を説き給へる意をもつて諸經を釈す

る故に阿難尊者の書きし所の諸經の本文にたがひたる様なれども

仏意に相叶いたるなり、且らく觀經の疏の如き經説には見えざれ

ども一字に於て四教

を釈す、本文は一処は別教・一処は円教・一処は通教に似たり、

釈の四教に亘るは法華の意を以て仏意を知りたもう故なり、阿難

尊者の結集する經にては一処は純別・一処は純円に書き別円を一

字に含する義をば法華にて書きけり、法華にして爾前の經の意を知

らしむるなり、若し爾らば一代聖教は反覆すと雖も法華經無くんば一字も諸

經の意を知るべからざるなり、又法華經を讀誦する行者も此の意を知らずんば法華經を讀むにては有る可からず、爾前の經は深經なればと云つて淺經の意をば顯さず淺經なればと云つて又深義を含まざるにも非ず、法華經の意は一一の文字は皆爾前の意を顯し法華經の意をも顯す故に一字を讀めば一切經を讀むなり一字を讀まざるは

一切經を讀まざるなり、若し爾らば法華經無き国には諸經有りと雖も得道は難かる可し、滅後に一切經を讀む可き様は華嚴經にも必ず法華經を列ねて彼の經の意を顯し觀經にも必ず法華經を列ねて其の意を顯すべし諸經も又以て此くの如し、而るに月支の末の論師及び震旦の人師此の意を弁えず一經を講して各我得たりと

おも 謂い又超過諸經の謂いを成せるは會て一經の意を得ざるのみに
あら 非ず謗法の罪に墮するか。

問う天竺の論師震旦の人師の中に天台の如く阿難結集已前の
ぶつく 仏口の諸經を此くの如く意得たる論師・人師之有るか、答う無著
ぼさつ 菩薩の撰論には四意趣を以て諸經を釈し、竜樹菩薩の大論には
ししつたん 四悉檀を以て一代を得たり、此れ等は粗此の意を釈すとは見えた
れども天台の如く分明には見えず、天親菩薩の法華論も又以て
か 此くの如し、震旦国に於ては天台以前の五百年の間には一向に此の
ぎな 義無し、玄の三に云く「天竺の大論尚其の類に非ず」云云、籤の三
いわ に云く「一家の章疏は理に附し教に憑り凡そ立つる所の義他人の
そ 其の所弘に随い偏に己が典を讚するに同じからず、若し法華を弘む
ひとえ るに偏に讚せば尚失なり況や復余をや」文、何となれば既に
かいこんけんじつ 開権顕実と云う何ぞ一向

に権を毀る可きや、華嚴經の心仏及衆生。是三無差別の文は華嚴
の大師。此の文に於て一心覺不覺の三義を立つるは、源と起信論の
名目を借りて此の文を釈するなり、南岳大師は妙法の二字を釈す
るに此の文を借りて三法妙の義を存せり、天台智者大師は之を
依用す此に於て天台宗の人は華嚴・法華同等の義を存するか、又
澄觀・心仏及
衆生の文に於て一心覺不覺の義を存するのみに非ず性惡の義を存
して云く、澄觀の釈に「彼の宗には此れを謂つて実と為す此の宗の
立義・理通ぜざる無し」等云云、此等の法門許す可きや否や、答えて
云く弘の一に云く「若し今家の諸の円文の意無くんば彼の經の偈の
旨理実に消し難し」同じく五に云く「今文を解せずんば如何ぞ心造
一切三無差別を消解せん」文、記の七に云く「忽ち都て未だ性惡の名
を聞かずと云えり、此等の文の如くんば天台の意を得ずんば彼の經

の偈げの意がた・知り難がたきか、又震旦しんたんの人師にんしの中には天台てんだいの外ぐわいには性惡しやうあくの
名目みやうもくあらざりけるか、

又法華經ほけきやうに非あらずんば一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん・談だんずべからざるか、天台てんだい已後いご
の華嚴けこんの末師むら並びに真言宗しんこんしゆうの人にん・性惡しやうあくを以もつて自宗じしゆうの依經えきやうの詮せんと
為なすは天竺てんじくより伝でんわりたりけるか祖師そしより伝でんわるか、又天台てんだいの
名目みやうもくを偷ぬすんで自宗じしゆうの内証ないしゆうと為なすと云いへるか、能よく能よく之これを驗けんす
可べし。

問しやうあくう性惡しやうあくの名目みやうもくは天台てんだい一家いけに限かぎる可べし諸宗しよしゆうには之これ無なし、若もし
性惡しやうあくを立てずんば九界いんがの因果いんがを如何いかんが仏界ぶつがいの上じやうに現げんぜん、答こたう
義例ぎれいに云いわ性惡しやうあく若断等じやくたんとう云云うんうん、問もんう円頓止觀えんどんしかんの証拠しやうこと一念三千いちねんさんぜんの
証拠しやうこに華嚴經けこんきやうの心仏及衆生しんぶつぎきゆうしゆじゆう是三無差別さんむさべつの文ぶんを引ひくは彼の經けいに円頓えんどん
止觀しかん及び一念三千いちねんさんぜんを説とくといふか、答こたえて云いわ天台宗てんだいしゆうの人にんの中に
は爾前にぜんの円えんと法華ほっけの円えんと同どうの義ぎを存ぞんず、問もんう六十卷ろくじゆうの中に前三教ぜんさんきやう

の文を引いて円の義をしやく積せるは文を借ると心得こころえ、爾前にぜんの円の

文を引いて法華の円の義を積するをば借らずと存ぜんや、若し爾らば三種の止觀の証文に爾前の諸經を引く中に円頓止觀の証拠に華嚴の菩薩於生死等の文を引けるをば、妙樂積して云く「還つて教味を借て以て妙円を顯す」とは此の文は諸經の円の文を借ると積するに非ずや、若し爾らば心仏及衆生の文を一念三千の証拠に引く事は之を借れるにて有るべし、答う当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざる事を云うか、華嚴宗の意は法華と華嚴とに於て同勝の二義を存ず、同は法華・華嚴の所詮の法門之同じとす、勝には二義あり、古の華嚴宗は教主と對菩薩衆等の勝の義を談ず、近代の華嚴宗は華嚴と法華とに於て同勝の二義有りと云云、其の勝に於て又二義あり、迹門は華嚴と同勝の二義あり華嚴の円と法華迹門の相待妙の円とは同なり彼の円も判。此の円も判。故なり、籤の二に云く「故に須らく二妙を以て三法を妙ならしむべ

し故に諸味の中に円融有りえんゆうと雖も全く二妙無しいえど私志記ししきに

云く「昔の八の中の円は今の相待の円と同じ」と云へり是は同なり記
の四に云く「法界を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無しぶつて仏慧を以て
之を論ずれば法華に非ざる無しあら」云云、又云く「応に知るべし華嚴
の尽末際は即ち此みらいすなわ

の経の常在靈山なりじにけいじゆいりやうじん」云云、此等の釈は爾前の円と法華の相待妙

とを同ずる釈なり、迹門の絶待開会は永く爾前の円と異なり、

籤の十に云く「此の法華経は開権顕実・開迹顕本の此の両意は永く

余経に異なり」と云えり、記の四に云く「もしも若しぶつて仏慧を以て法華と

為さば即そくと等と云云、此の釈は仏慧を明すは爾前にぜん・法華に亘り開会

は唯法華に限るただほっけ

と見えたり是は勝なり、爾前にぜんの無得道なる事は分明ぶんみやうなり其の故は

二妙を以て一法に妙ならしむるなり、既に爾前にぜんの円には絶待ぜつたいの一妙

を闕く衆生も妙の仏と成る可からざる故に籤の三に云く妙變為の積是なり、華嚴の円變じて別と成ると云う意なり。

本門は相待・絶待の二妙俱に爾前に分無し又迹門にも之無し、

爾前・迹門は異なれども二乗は見思を断じ菩薩は無明を断ずと

申すことは一往之を許して再往は之を許さず、本門寿量品の意は

爾前・迹門に於て一向に三乘俱に二惑を断ぜずと意得可きなり、

此の道理を弁えざるの間天台の学者は爾前・法華の一往同の積を

見て永異の積を忘れ結句名は天台宗にて其の義分は華嚴宗に墮ち

たり、華嚴宗に墮ちるが故に方等般若の円に墮ちぬ、結句は善導

等の積の見を出でず、結句後には謗法の法然に同じて師子身中の

虫の自ら師子を食うが如し文、仁王經「仁王我が

滅度の後・未来世の中に四部の弟子・諸の小国の王・太子・王子乃ち

是れ三宝を住持し護れる者・転た更に三宝を滅破すること師子身

中の虫の自らみずか師子ししを食くらうが如ごとし、外道げどうには非あらず多く我が仏法ぶつぽうを
壊やぶりて大罪過だいざいかを得いたん云云、籤せんの十じゅうに云いく「始め住前じゅうぜんより登住とうじゅうに
至いたるこのかた全べちく是れ円の義ぎ・第二住だいにしゆより次の第七住しちしゆに至いたる文相ぶんさう
次第しだいして又別の義ぎに似にたり、七住しちしゆの中に於おいて又一多相そつそく即自在じざいを
弁べんず、次の行向地ぎやうこうじ又是これ次第しだい差別さべつの義ぎなり、又一一の位いちのゐに皆普賢行みなふげん
布ふの二門にもん有あり故ゆえに知しんぬ兼かねて円門えんもんを用もちいて別べつに撰せんずることを」

華嚴 けごん
阿含 あこん

大日經 だいにちきよう

真言宗 しんごんしゅう

觀經等 かんきよう

淨土宗 じょうどしゅう

方等 ほうとう

深密經等 じんみつ

法相宗 ほうそうしゅう

小乘 しょうじょう

般若 はんによ

楞伽經 りょうがきよう

禪宗 ぜんしゅう

無量義經 むりようぎきよう

三論宗 さんろんしゅう

法華經迹門十四品 ほけきようしやくもん

本門藥王品已下の六品並びに普賢 ほんもんやくおうほんいか

涅槃經等 ねはんぎよう

応身 おうじん

劣応身 あうじん

小仏

報身ほうしん

勝応身おうじん

華嚴經けこんぎょうるさな仏

大日經だいにちぎょう等びるさな仏

並びならに迹門しやくもん涅槃經ねはんぎょう等の仏

阿逸

汝なんじまさ当なに知るべし是この諸もろもろの大菩薩ほさつ

序出二云云。

無數劫よりこのかたの智慧を修習す、悉く是れ我が所化なり大道心を発さしむ此等は是れ我が子なり是の世界に依止せり、玄の七に云く「六に本説法妙とは経に言く此等我所化・令発大道心・今皆住不退と我所化とは正しく是れ説法して大道心を発さしむるは小説に簡非するなり、此れ本時の説を指して迹説を簡非するなり迹説・多種なれども若し涅槃に依れば」等云云、華嚴經の寂滅是なり始成正覺。

迹仏。増一阿含經の十に云く「仏・摩竭國に在し道樹の下にして爾時に世尊得道未だ久からず」浄名經に云く「始め仏樹に坐して力て魔を降す」大集經に云く「如来成道始めて十六年なり」大日經に云く「我昔道場に坐し四魔を降伏す」仁王般若經に云く「大覺世尊先ず我が爲に二十九年」無量義經に云く「我先に

どうじょう ぼだいじゆげ

ないしよんじゆうよねん

ほけきよう

ほうべん

道場菩提樹下に端坐する事六年乃至四十余年「法華經の方便品

に云く「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行し三七日

の中に於て是くの如き事を思惟す「籤の七に云く「大乘の融通

過ぎたること無し「華嚴經の初に云く「菩提道場にして始めて

正覚を成ず、故に知んぬ大小識成皆近なり「寿量品に云く

爾時に世尊・諸の菩薩の三たび請じて止まざるを知らしめして

之に告げて言たまわく汝等諦かに聴け如来の秘密神通の力を

一切世間の天人

及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去

ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと

謂えり、然るに善男子・我実に成仏してより已来無量無辺百千万

億那由佗劫なり「等云云、文句の九に云く「仏三世に於いて等く

三身有り諸教の中に於いて之を秘して伝えず・故に一切世間の

天人・修羅は今の仏は是に始まると謂えるなり、此の三身を得る故に近に執して遠を疑う「寿量品に云く「諸の善男子・如來は諸の衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては是の人の為に我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く、然るに我實に成仏してより已來久遠なること斯くの若し」文句の九に云く「一日約往 一約往 二約往 現在 三約往 三約 修行 四・果門に約せば近成の小を聞かんと樂う者は釈氏の宮を出で始めて菩提を得たりとし長大久遠の道を聞かん事を樂欲せず故に樂小と云う」此等の小心は今日に始まるに非ず若し先に大を樂わば仏即ち始成を説かず始成を説くことは皆小法を樂う者の為のみ、又云く「諸の衆生・小法を樂う者とは所見の機なり」華嚴に云く「大衆 清淨 なりと雖も其の余の樂 小法の者は或は疑悔を生じ長夜に衰悩せん此れを愍むが故に黙す」偈に云く「其の余の久

く行ぜざるは智慧未だ明了ならず識に依つて智に依らず聞き
已つて憂悔を生じ彼將に惡道に墮ちんとす此れを念うが故に説か
ずと、彼の經を案ずるに声聞・二乘無し但不久行の者を指して
樂小法の

人と為すのみ、師の云く「樂小は小乘の人に非ざるなり乃ち
是れ近説を樂う者を小と為すのみ」文句の九に云く「徳薄とは
縁了の二善功用微劣なれば下の文に諸子幼稚と云うなり垢重と
は見思未だ除かざるなり」記の九に云く「徳薄垢重とは其の人
未だ実教の二因有らざる故なり下の文に諸子幼稚と云うは下の
医子の譬の文
を指す尚未だ円を聞くに堪えず況んや遠を聞かんをや、見思未
除とは且く譬の中の幼稚の言を消す定めて未だ遠を知らず」玄
の一に云く「厚く善根を殖えて此の頓説を感ず」文、籤の一に云く

「住は総じて別円を以て厚と為す」五百問論に云く「一經の中に本門を以て主と為す」云云、又云く「一代教の中に未だ曾て遠を顯さず父母の寿は知らずんばあるべからず始めて此の中に於いて方に遠本を顯す、乃至但恐る才一國に當るも父母の年を知らざれば失う所・小と謂うも辱むる所至つて大なり、若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷う徒に才能と謂うも全く人の子に非ず」文句の九に云く「菩薩に三種有り下方と他方と旧住となり」玄義の七に云く「若し迹因を執して本因と為さば斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり天月を識らずして但池月を觀るが如し、弘迹顯本せば即ち本地の因妙を知る影を撥つて天を指すが如し云何ぞ盆に臨んで漢を仰がざる嗚呼聾駭なんすれぞ道を論ぜんや」又云く「若し迹果を執して本果と為す者は斯れ迹

を知らず亦^{また}本を識^しらざるな

り、本より迹を垂るるは月の水に現げんずるが如ごとく迹を払はらうて本を
 顕あらわすは影かげを撥はらうて天を指すが如ごとし、当まさに始成しじょうの果のぞを撥はらげば皆みな是れ
 迹果いせなるべく久成くじょうの果のぞを指すは是れ本果ほんこなり又い云わく「諸土しよは
 悉ことごとく迹土しやくどなり一には今・仏ぶつの所栖しよせいの故ゆえに二には前後ぜんご修立しゅうりゆうの故ゆえに
 三には中間ちゆうげん所しよ弘こうの故ゆえに若もし是れ本土ほんどは今・仏ぶつの所栖しよせいに非あらず、今・
 仏ぶつの所栖しよせいは即すなわち迹土しやくどなり、若もし是れ本土ほんどは一土いっさい一切土いっさいにして前後ぜんご
 修立しゅうりゆうなるべからず浅深せんじん不同ふどうなり、迹しやくどを執しやくどして本ほんと為なす者は
 此これ迹しやくどを知らず亦また本ほんを識しらざるなり、今迹しやくどを払はらつて本ほんを指すと
 きは本時ほんじ所栖しよせいの四土しどは是れ本国こくど土ど妙めうなり」

蔵因ざんぎん 三祇百劫菩薩さんぎひやくけつぼさつ 未断見思みだんけんじ

通因つういん 動喻塵劫菩薩どうゆじんけつぼさつ 見思断けんじだん

迹しやくど 別因べついん 無量劫菩薩むりょうけつぼさつ 十一品断無明じゅういちひんだんむみょう

円因えんいん 四十一品断無明しじゅういちひんだんむみょう

迹ぶ仏つ果か

法ほ報ほう身しん
身しん

勝しょう劣りゆう心しん
心しん

果

円 別

通 蔵

〔蓮れん華げ座〕十一品断無明むみょうの仏
〔虚空こくう座〕四十二品断無明むみょうの仏

〔草座〕三十四心断結じよつどく成道
〔天衣〕三十四心見思けんじ・塵沙じんしゃ断の仏

八一 日月の事 にちがつ

599

P

誓耶后

麻利支天女 まりしてん

大日天 だいにち

乘輅車

九曜

毘誓耶后

七曜

二十八宿

大月天 がってん

乘鷲

十二宮

こたごつみみょうきょう 金光明經に云く「日の天子乃以び月天是の經典を聞き精氣充
さいしやうおうきやう 実す「最勝王經に云く「日出でて光を放ち無垢炎清淨なり此の經
より 王の力に由て流暉四天を遶る「仁王經に云く「日月度を失い」等、
だいしつきやう 大集經に云く「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是の如き不善業惡王・

悪比丘我が正法を毀壞す仁王經に云く「非法非律にして比丘を
繫縛すること獄囚の法の如くす」法華經に云く「色力乃び智恵此等
皆減少す」華嚴經に云く大集經に云く。

段食・法食・喜食・禅悦食。

三力、一切衆生力・法力・自身功德力。

戒光 清淨也

日光 定光 定也

惠光 也

人天 にんてん 三学

小乘 しょうじょう 三学

大乘 だいじょう 三学

権大乘 こんだいじょう 三学

実大乘 じつだいじょう 三学

純円 じゆんえん 三学

法身光 ほっしん 般若光 ぼんにゃ 解脱光 げだつ

十信 じゆつしん 十住 じゆうじゆう 十行 じゆうぎやう 十廻向 じゆうけう 十地 じゆうち 等妙 とうめう

初地三惑断 しよじさんなく 初住三惑断 しよじゆうさんなく 此天は初地 しよじ 或は十廻向なり ある じゆうけう

北辰

梵帝积 たいしゃく 日月 にちがつ 四天等 してん

梵帝积 たいしゃく 日月 にちがつ 四天等 してん

衆星 しゅうせい

一切の四天下の衆生の眼目 いっさいしてんげしゅじょうがんもく

衣食 いしょく
壽命 じゅみょう
肉眼 にくげん
天眼 てんげん
恵眼 けいがん

法眼 ほうげん
仏眼 ぶつげん
仏眼 仏眼

有あらに非あらず地を離るが故ゆえに、空あらに非あらず有あを照てらすが故ゆえに有あ、辺あらに非あらずして中ちゆうに処しよするが故ゆえに、而しかも空くうに処しよするが故ゆえに、而しかも有あを養やううが故ゆえに、来きらずして北きたに至いたるが故ゆえに、而しかも来きりて南なんに来きるが故ゆえに、一いつならず四州ししゆうを照てらすが故ゆえに、異いならず一いつ日じつなるが故ゆえに、断たんならず常じゆうなるが故ゆえに、常じゆうならず一いつ処しよに住すませざるが故ゆえに。

記きの三さんに云いく部方ほうほう等とうと雖いえど義ぎは円極えんごくなる故ゆえに、故ゆえに今これ之これを引ひく、

八二

和漢王代記

602p

伏羲

小昊

三皇

神農

三墳・五典

黃帝

五帝

帝

堯王

男九人女一人

舜王

夏殷

第一文王

第二武王

周公旦

第三成王

第四昭王之御宇二十四年甲寅に当る五色の光氣南北に亘る大史・

蘇由之を占う四月八日は仏の御誕生なり

中間七十九年なり

第五穆王の五十二年壬申に當る

二月十五日御入滅

十二の虹南

北に亘る大史慮多之を占う

三十七有り或は八

一 儒教 五常 文武等なり

周 三教

二 道教 仙教「孔丘」「顔回」

三 釈教 一代五十余年「老子」

始皇

儒教 じゆきよう

秦 次生皇

三教

道教 だうきよう

釈教 しやくきよう

前漢 十四代

仏の滅後一千一十五年に当るなり

漢 又周の第四の昭王二十四年より後漢の第二光武

に至る いた 一千一十五年に当るなり

後漢 ごかん 光武帝永平十年丁卯 ひのとう

一千一十五年に当て摩騰迦竺法蘭の二人の聖人 しんぎうにん

四十二生經 しやうじふじゆうきやう 小乗經 じゆうじゆう 十住断結經 けつぎやう 大乘經 だいじゆうきやう 經を

以て白馬に負せて漢土に渡す はくば

魏 雙觀經 そうかんきやう 渡る わた

西晋

正法華經 ほけきやう 十卷 わた 渡る わた 法護三蔵 まもさんぞう 巨す

妙法華經 みやうほけきやう 渡る わた

七卷 ある 或は八卷

羅什三蔵 らじゆうさんぞう 巨

晋 す

後秦 こうしん

宋

四宗^五

五宗^六

六宗^七

三論宗 さんろんしゅうわた
渡る

阿弥陀經 あみだわた
亘る

華嚴經 けこんきょうわた
亘る

觀經 かんきょうわた
亘る

大涅槃經 だいなはんきょうわた
亘る

三時・四時・五時

五時^一

一音^二

半滿^三

三教^四

末

感通伝に出ず」

始

南三なんざん北七ほくひち「江南なり」の十師「江北なり」

曇鸞どんらん法師淨土宗ぼつしじょうとしゅうを立つ

禅宗ぜんしゅう渡るうわた 達摩だいまし大師だいしなり

撰論じょうろん巨わたるる 南北

地論ちろん巨わたるる 南北

別時べつじ意趣いしゆの法門ほうもん出来しゅつす

南岳なんがく大師だいし亦また惠思ゑいし禅師ぜんしと云いう「観音かんのんの化身けしんなり道宣どうせんの

六根ろくこん淨じゆんの人にほん日本にほんの淨宮じゆんぐう太子たいし是これなり
天台てんたい大師だいしの御師おんしなり

日本にほんに伝でん教ぎょう大師だいしと生せいる

天台大師 てんだいだいし

亦智者と云い またちしゃ

亦智と云い また

亦徳安と云い また

此の御時・南三・北七並びに前五百余年の おんとき なんざん ほくひちなら 人師・三蔵・

所立の十師の義を破し始めて五時・八教・三觀・六即・ しよりゆう は はつきよう さんかん そく

十境・十乗を立て小釈迦と号す、進では天竺の論師にも じよ しゃか てんじく ろんし

超え退ては震旦の人師に勝るなり、玄義の三に云く こ しんたん にんし まさ げんぎ いわ

故に章安大師の云く「天竺の大論尚其の類に非ず震旦 ゆえ しょうあんだいし てんじく だいろんなおそ たくい あら しんたん

の人師何ぞ勞しく語るに及ばん にんしなん わずらわ かつた およ

此これ誇こ耀ように非あらず法ほ相そうの然しかるのみ又ち智し証しょう大だい師し 授じゅ決けつ集しゅう也や
云いわく「天てん台だい世せいに出いで仏ぶつ意い快かいく暢ちやうぶ豈あん万まん教きやう再さいび世せ間けんに演えん

るに非あらずや」

笈きく多たと崛くつ多たの両さん三そう蔵ざう添てん品ほん法ほ華け經きを渡わたす

道どう綽しゅく善ぜん導どう此この世せいに在ざいり

華け嚴えん宗しゅう

後こ漢かんの世よ自より唐とうの神しん武ぶ皇かう帝ていの開かい元げん十じゅう八ぱち年ねん庚かう申しんに至いたる六りく

百ひゃく六りく十じゅう四し載ざいに渡わたす所ところの經きやう・律りつ・論ろん・五ご千せん四し十じゅう八ぱち卷くわん

訳やく者しゃ百ひゃく七しち十じゅう六りく人にんなり妙みょう樂らくは是この世せいの人にんなり

法ほ相そう宗しゅうは玄げん奘じやう三さん蔵ざう西せい天てん自じり之これを渡わたす

真しん言こん宗しゅうは善ぜん無む畏い三さん蔵ざう・金こん剛かう智ち三さん蔵ざう之これを渡わたす

法ほ相そう宗しゅう 真しん言こん宗しゅうの二に宗しゅうは天てん台だい之これを見みず妙みょう樂らく大だい師し

之これを見みて天てん台だい宗しゅうに對たい当とうして勝しょう劣りやくを論ろんず又また日に本ほん國こくの

天台の玄義の十に南北の十師を破して云く「但聖意幽隱にして
教法 彌難し、前代の諸師、或は粗名匠に承け、或は思い袖衿よ
り出ず阡陌縱横なりと雖も孰か是なるを知ることを莫し、然るに
義雙立せず理兩存すること無し若し深く所以有り復修多羅と
合する者は録して而て之を用ゆ文無く義無きは信受すべからず」
籤の十に云く「一として全く是なること無きを以ての故に一一に
難破す」玄の三に云く「輕慢止まざれば舌口中に爛る」又云く
「法華は衆經を總括す」籤の三に云く「已法華已前華阿方般等の
一切經今無量義經なり当涅槃經等の法華已後の一切經なりの妙
茲に於て固く迷えば舌爛れて止まざるも猶華報と為す謗法の
罪苦長劫に流る」南三北七並び

けこんしゅう ほうぞう ちんかん しんこんしゅう こうほう ほうきよう
に華嚴宗の法蔵・澄観・真言宗の弘法等は法華経よりも華嚴経
を勝るとするなり、又三論の嘉祥は法華経よりも般若経を勝る
とす、又法相の慈恩等は法華経よりも深密経を勝るとす、又
真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は法華経よりも
大日経を勝るとするなり、此等の宗宗の相違如何相違如何。

授決集に云く 円 珍智 証大師

文は大経に出でたり人の之を会する無し、光・盲の前に在れど
も他に於ては無用なり、仏分明に五味の喩を説き五時の教に喩
えたもう云云、訳ありてより来講者・路に溢るれども未だ會て五味
を談ずるの義を解せず己が胸臆に任せて趣爾嚙語す何ぞ象に触る
衆盲の者に異らんや、天台世に出で仏意快く暢ぶ豈に万教再び世間
に演るに非ず

や、南北の講匠経論を釈する者・各教時を立つれども百にして一も

是なること無し只教部の前後頓漸権実大小の妙・寛狭・進否に

迷うに縁りてなり・大教の網を張りて法界の海を亘し人天の魚を

済て涅槃の岸に置く斯くの如く

するすら其の遺漏を恐る況や諸師の輩羅の一目なり何れの時か

其の鳥を得ん、若し万蔵を暗ずと雖も此の理趣を会せざれば年を

終るまで他の宝を計りて自ら半銭の分無く虚しく諍論を益し長水

に水を添うのみ。

授決集に法相宗の慈恩大師を破して云く、五性宗に云く未熟

には須く此の義を以て正と為すべし若し爾らずんば経を破し論を

破し罪五逆に過ぎたり基公を除きて外は人の彼の不熟の義を伝う

る無し、若し強て之を執せば公私十方の信施消し難し消し難し

若し

若し

消せずんば何ぞ三途を免れん爾を供養せん者は三惡道に墮せん
誹法の罪報は法華般若の諸大乘經に一切明かに説けり智者披く
可し、爾これを信受す可し無間を招く莫れ。

授決集 円 珍真 言の 諸宗 を徴して云う

眞言・禪門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等、若し法華・

涅槃等の經に望むれば是れ撰引門なり文、又云く大底他は多く三
教在り円の旨至て少きのみ弘法大師の二教論に喩して曰く今斯の
經文に依るに仏五味を以て五蔵に配当す、總持を醍醐と稱し四味
を四蔵に譬う震旦の人師等争つて醍醐を盗み各自宗に名く。

一 俎多覽「乳」 「アナン」 經

二 毘那耶「酪」 「ウハリ」 律

小乘

六波羅經五蔵 三阿毘達磨「生」 「カセンエン」 論

四般若はんにや

「熟」

はら蜜蔵

「文珠」

大乘だいじょう

五惣持そうじ

「醍醐」

だらに蔵

「金剛蔵」

一 姐多覽「乳」

二 毘那耶「酪」

三 阿毘達磨「生」

弘法大師こうぼうだいし・此の経に

依つて五蔵を立つ

華 方 般

四般若はんにや

はら蜜「熟」

法華ほっけ

涅槃ねはん

大日だいにちの三部經さんぶきょう

五だら尼蔵

「醍醐」

大日だいにちの三部經さんぶきょう

二教論きょうろんに云いく加か以のずみ釈教しゃくぎょう東夏とうかに漸ぜんし微よ自より著よに至いたり漢明かんめいを始はじ

めと為し周文を後と為す、其の中間 翻伝する所皆是れ 顯教なり
玄宗代宗の時・金智広智の日・密教鬱として起り 盛に秘趣を談ず、
新薬日に浅くして旧痼未だ除かず 楞伽の如きに至つては法仏説法の
文智度性身妙色なり 句 憶に馳せ而も文を会して自宗を驅り而も
義を取る 惜いかな 古賢醍醐を嘗めず
日本

神代十二代

天神 七代

地神 五代

人代 百王

第一神武天皇

之を略す

第十四仲哀

八幡大神の父なり

第十五神功皇后

八幡大菩薩の母なり

第十六応神天皇

今の八幡大菩薩なり

略

第三十欽明天皇 きんめいてんのう

歴記に云く欽明天皇の治天下十三年己申 いわ きんめいてんのう てんが

歳冬十月一日百濟国聖明王自り仏像經 く たら せいめいおうよ ぶつぞう

等始めて日本国に送る にほんこく

第三十一敏達天皇 びんたつてんのう

厩戸王子 四天王寺を造る おうじ してんのう

第三十二用明 ようめい

聖德太子は用明の御子也 しょうとくたいし ようめい

つ南岳大師の後身なり救世観音の垂迹なり なんがくだいし かのん すいじゃく

第三十三崇峻 すしゅん

上宮太子守屋を切り四十九院を立 じょうぐうたいしもりや

第三十四推胡

女帝

第三十五舒明

第三十六皇極

第三十七孝德

第三十八齐明

第三十九天智

第四十天武

第四十一持統

第四十二文武

第四十三元明

第四十四元正

女帝

女帝

俱舍宗
くしやししゅう

律宗
りっしゅう

成実宗
じやうじつしゅう

六宗
ろくしゅう

第四十五聖武しやうむ

法相宗ほうそうしゆう

三論宗さんろんしゆう

華嚴宗けこんしゆう

亦また禅宗ぜんしゆう有なり並びならに一切いっさい経きやう有あり

聖武しやうむ天皇てんのう東大寺とうだいじの大だい仏ぶつを造つくりる

欽明きんめい自より聖武しやうむに至いたるまで二百四十よんじゆうよねん余年ねんなり、

震旦しんたん国こく自より鑿真がんじん和尚わじやう渡わたり律宗りっしゆうを亘わたす、次に

天台宗てんだいしゆうの玄文げんもん止等しとうを渡わたす、又また東大寺とうだいじの小乘しやうじやう

戒壇かいだんを立たつ

聖武しやうむの女むすめ

廢帝はいてい

孝謙こうけん又また即位そく也なり

桓武かんむの父ちちなり

- 第四十六孝謙こうけん
- 第四十七淡路
- 第四十八称徳
- 第四十九光仁

第五十

欽明きんめい自り二百六十余年に及ぶ

桓武かんむ延曆えんりやく三年に奈良の都よ自り長岡ながおかの京うつに遷り、延曆十

三年長岡ながおかの京よ自り平の京うつに遷る、延曆二十五年御崩えんりやく。

去延曆四年叡山えいざんを立つ伝教大師 最澄なり延曆二十年叡山えいざん八講を

始め南京なの十人を請しやうず、延曆二十一年の正月十九日

高雄たかに於おて南京なの十四人と最澄さいしやうと宗論しゆろんあり、同二十

九日六宗ろくしゆうの十四人謝表しやひやうを桓武聖王かんむに奉たてまつる、延曆二十

三年入宋にんそう同二十四年御歸朝きちやう、此の時始めて伝教大師でんぎやうだいし。

天台宗てんだいしゆうを立て四十余年よんじゆうよねんの文を以て六宗ろくしゆうを破り始めて

法華ほふけの実義じつぎ之を顯あらわし、欽明自り二百余年きんめいの邪義じやぎ之を改

む、又六宗ろくしゆうの碩德せきとくたる勤操こんそう・徳円とくえん・長耀ちやうよう等の十四人。

桓武皇帝かんむに謝表しやひやうを奉たてまつりて邪見しやけんを翻ひるがえす。弘法大師こうぼうだいし。
空海くうかいは延曆二十三年御入宋えんりやく・大同元年たうとうげん御歸朝きちやう、伝教でんぎ。
大師だいしは山階寺やましのでらの行表ぎやうひやう僧正そうじやうの御弟子おんでし・弘法大師こうぼうだいしは石淵いしづち。
の勤操こんそう僧正そうじやうの御弟子おんでしなり。

第五十一平城へいぜい

第五十二嵯峨さが弘仁こうにん十三年六月四日でんぎよう伝だいし教だいし大師だいし御入滅にゅうめつ同十一日

「慈覚じかく大師だいし」戒壇かいだんを立つ。

第五十三淳和じゆんな

衆

秀句しゅうくに云いわく「法華經ほけきょうを賛えすと雖いえども還かえつて法華ほっけの心こころを死しす」文。

選択集せんたくしゅうに云いわく法ほう然ねん造捨閉閣拋しゃへいかくほう、善導ぜんどう礼讚れいざんに云いわく「十即じゅうじゅう十生じゅうじゅうしやう」

百即ひやくそく百生ひやくじやうと又云いわく「百ひやくの時ときに希まれに二にを得とく千せんの時ときに希まれに三五さんごを得とく」

又云いわく「千中せんちゆう無む一いつ」道綽どうしやくの安樂集あんらくしゆうに云いわく大集月だいしゅうげつ蔵經ざうきやうを引ひく「我が末法まつぽうの時ときの

中ちゆうの億億いっぺいの衆生行しゆうじやうぎやうを起おこし道みちに臨のぞむも未いまだ一人いちにんの得とくる者もの有あらず、

当今たうこん末法まつぽうは是こゝ五濁ごじやくの悪世あくせなり唯淨土ただじよつどの一門いちもんのみ有ありて通入とうにゅうす可べき

の路みちなり「惠心えしんの往生おうじやう要集ようしゆうに云いわく「利智りち精進しやうじんの人ひとは未いまだ難がたしと

為なさず予こゝが如ごとき頑魯がんろの者もの豈敢あにあえててせんや」

根本大師こんぽんだいし

伝教大師でんきやうだいし

山家さんか

天台てんだいの後身ごしんなり

守護章しゆごしやうに「正像しやうざう稍過しややすぎ已おわつて末法まつぽう太なだ近ちかきに有あり法華ほっけ一乘いちじやうの機き今いま

正ただに是こゝれ其そのの時ときなり「又云いわく「一乘いちじやうの家いへには都すべて用もちいざれこゝ四十年しよじゅうねんなり

但ただし開あし已おつて助道もに用もちいたるを除く」

於総州

大論だいろんに云いく十九出家しゅっけ三十成道じようだうと

権大乘こんだいじょう

華嚴經けこんきやう 「三七日」

華嚴宗けこんしゅう

戒

定ちこん 智儼ちこん

杜順とじゆん

法蔵ほうぞう

「二七日」

小乘しやうじょう

俱舍宗くしゃしゅう

慧ちよつかん 澄觀ちよつかん

阿含あこん 「十二年」

成実宗じゆじつしゅう

戒定慧かいじょうえ

律宗りつしゅう

戒定慧かいじょうえ

鑒真かんじん和尙わじやう

玄奘 げんじょう

慈恩 じおん

方等 ほうとう

善導 ぜんだう

權大乘 こんだいじょう

三十年

大集經 だいしゅうぎょう

深密經 じんみつ

楞伽經 りょうがぎょう

觀經 かんぎょう

雙觀經 そうかんぎょう

阿彌陀經 あみだ

金剛頂經 こんごうちょうぎょう

大日經 だいにちぎょう

蘇悉地經 そしつちぎょう

法相宗 ほつそうしゅう

禪宗 ぜんしゅう

淨土宗 じょうどじゅう

真言宗 しんごんしゅう

戒定慧 かいじょうえ

戒定慧 かいじょうえ

百論「提婆菩薩造」

権大乘

中論「竜樹菩薩造」

般若

十二門論

同

三論宗

戒定慧

大論

同

嘉祥寺

吉蔵大師

無量義經に云く「方便力を以て四十余年には未だ真実を顕さず、

又云く無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ず

ることを得ず所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行

くに留難多きが故に」と、又云く「大直道を行くに留難無きが故に」

と。

法華經「八箇年」 法華宗

天台宗

戒定慧

世尊は法久しくして後かならず当に真実を説き給うべし、種種の

道を示すと雖も其れ実には仏乗の為なり、正直に方便を捨てて但

無上道を説く、今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は
悉く是れ我が子なり而も今此の処は諸の患難多し唯我一人のみ
能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず、若し人信ぜずし
て此の経を毀謗
せば則ち一切世間の仏種を断ぜん 其の人命終して阿鼻獄に入
らん、將に魔の仏と作りて我が心を悩乱するに非ずや
妙法華経 皆是れ真實明の文

ざれ

ねはんぎよう

涅槃經六に出ず

ざれ

ざれ

一日一夜

ふりようぎきよう
不了義經に依らざれ

ねはんぎよう
涅槃經

てんだい
天台等

にゆうめつ
八十八滅

ろっこん
六根

法に依つて人に依ら

義に依つて語に依ら

智に依つて識に依ら

法四依

りようぎきよう
了義經に依つて

ごぼん
五品

初依

人四依

第二依

初地已上

竜樹菩薩等

第三依

第四依

等覺菩薩

天竺 十四五六卷

十住毘婆沙論に云く

竜樹 菩薩造羅 什三 藏訳

難行道

譬えば陸路を歩行せば苦なれども

不退地

易行道

水道を船に乗れば則ち楽なるが如し

十仏 百三十余菩薩並に阿弥陀仏等

曇鸞法師「齊世」本三論宗の人なり浄土論註二卷を作る

道 綽禪師「唐世」善導の師なり安樂集二卷を作る

安樂集に云く「大集月藏経に云く我が末法の時の中の億億の

衆生起行修道すとも未だ一人も得る者有らじ

当今末法は是れ五濁の悪世なり唯浄土の一門のみ有つて通入す

べき路なり」と

唐世たうじ

善導ぜんどう

玄義げんぎ

一卷・序分義じよぶんぎ

一卷・定善義ていぜんぎ

一卷・散善義さんぜんぎ

一卷・觀念かんねん

法門ほうもん

一卷・往生禮讚おうじょうらいざん

一卷・般舟讚はんじゆ

一卷・法事讚ほうじざん

上下已上

九卷

隱岐院の御宇建仁年中今に五十余年なり

法然ほうねん

源空げんくう

選択集せんちやくしゆ

一卷

未だ一人も得る者有らず千の中に一も無し

淨土三部經を除くの外法華經等の一切阿弥陀仏を除く一切

の仏・菩薩・一切の神祇等

難行なんぎやう

聖道せいどう

雜行ざぎやう

天台法華宗等八宗を捨閉し閣拋す

易行いぎやう

淨土じゆつど

正行しやうぎやう

あみだぶつ じゆつそくじゆつじゆつ ひやくそくひやくしよつ
阿弥陀仏は十即十生・百即百生

六百三十七部二千八百八十三卷

しゃへいかくほう
捨閉閣抛

そつかんきよう いわ たいわれほとけ じゆつほう じゆつほう じんぎよう
雙觀經に云く「設い我仏を得んに十方の衆生至心に信樂し我

が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺を取らじ唯

五逆と誹謗正法とを除く」と、道綽の未有一人得者、善導の

千中無一・法然の捨閉閣抛・此等は豈謗法に非ずや、法華經第二

譬喩品に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の

仏種を断ぜん・或は復鬻蹙して而も疑惑を懷かん汝当に此の人の

罪報を説くを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後に其れ斯の

如き

經典を誹謗すること有らん経を讀誦し書持すること有らん者を見
て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん此の人の罪報汝今復聽け其の人
命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば更生れん
是くの如く展轉して無數劫に至らん地獄從り出ては當に畜生に
墮つべし」涅槃經第十に云く「問う一闡提とは其の義云何、仏云く
純陀若し比丘
及び比丘尼・優婆塞・優婆夷有つて・惡の言を發し正法を誹謗し
是の重業を造りて永く改悔せず心に慚愧無からん是くの如き等の
人を名けて一闡提の道に趣向すと為す、若し四重を犯して五逆罪を
作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知つて而も心に初より
怖畏慚愧無く肯て發露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く
毀些輕賤して言過咎多からん、是くの如き等の人も亦一闡提の道
に趣向すと名く、若し復説いて仏法衆無しと云わん是くの如き等の

人も亦一闍提の道に趣向すと名く、唯此くの如き一闍提の輩を除きて其の余に施さば一切讚歎すべしと。

上品は地獄に墮つ

一 殺生

下殺は螻蛄蚊

中品は餓鬼に墮つ

二 偷盜

中殺は凡夫人及び前

三果の聖人

下品は畜生に墮つ

三 邪淫

上殺は阿羅漢・辟支仏

菩薩父母等

四 妄語

五 綺語

八 貪

六 悪言

九 瞋

七 両舌

十 癡

殺生

一 殺父

養

父母

上人しんじん 四重しじゆう

偷盜ちゆうたう

五逆ごぎやく

二 殺母ししも

凡夫ほんぶ

邪淫じゃいん

三 殺阿羅漢あらかん

木画像もくえ

等

妄語もうご

四 出仏身血すいぶつしんけつ
五 破和合僧はわごうそう

四

人已上凡夫僧ほんぶ

此等これらは皆みな一業引いちごういん一い生せいなり故ゆえに一度ひとたび悪道あくどうに墮だすれば還かえつて二度ふたたび

悪道あくどうに墮だせず、謗法ほうぼうは一業引いちごういん多生たせいなれば一度ひとたび三宝さんぼうを破はすれば度たび度たび悪道あくどうに墮だする是これなり、伝教でんぎょう大師だいしの守護章しゆごに云いく「不正義せいぎの一切いっさい学がく

人は信受しんじゆすべからず所以ゆえんは何いかん其その師しの墮だする所で弟子でしも亦また墮おち

檀那も亦墮つ金口の明説何ぞ慎まざるべけんや慎まざるべけんや」と。

鎌倉の人人

第一弟子 「長樂寺多念」 隆観 「南無房一切

第一 「こさか」 善慧房 「当院洛中

一切諸人

法然

第一聖光 「筑紫九国一切諸人」

一条覚明 今之道阿弥等

成覚 一念

法本 一念

已上弟子八十余人

乃至日本国の一切念佛者並に檀那等、又一切の天台・真言等の諸宗の人人又法然が智分を出でず各各其の宗を習えども心は皆一

同ねんぶつに念ねんぶつ仏ぶつ者しやなり、法ほけき華き經きやうを讀よめども真しんごん言ごんを行なずれども皆みな助すけ業ごうとな
し念ねんぶつ仏ぶつを以もつて正しやう業ごうと為なす謗ほう法ぽうの失とが脱だつるべからず。

八四 一代五時図

618P

大論竜樹菩薩造いわに云く十九出家浄飯王の太子たいし 三十成道じょうどう 悉達太子したいたいし

権大乘ごんだいじょう

六十卷

杜順法師としゆんほつし
智儼法師ちこんほつし

華嚴經けこんきやう

華嚴宗けこんしゆう

八十卷

三七日

法蔵大師ほつぞうだいし
澄觀法師ちようかんほつし

増一阿含經あこんきやう

俱舎宗くしやしゆう

世親菩薩せじんぼさつ
玄奘げんじやう

三蔵さんぞう

小乘經しやうじやうきやう

中阿含經あこんきやう

阿含經 あこんきょう

長阿含經 あこんきょう

成実宗 じょうじつ

迦梨跋

摩

十二年

雜阿含經 あこんきょう

律宗 りっしゅう

道宣律師 どうせんりっし

二百五十

戒僧

小乘戒 しょうじょう

五百戒

尼

五戒 ごがい

男女 なんよ

八齋戒

男女 なんよ

瑜伽論 ゆいが百卷

弥勒菩薩造 みろくぼさつ

玄奘三蔵
げんじょうさんぞう

慈恩大師
じおんだいし

曇鸞法師
どんらんほつし

淨土三部經
じょうどさんぶきょう

道綽禪師
どうしやくぜん

善導和尚
ぜんどうわじょう

深密經
五卷

大集經
だいしゅうきょう

唯識論
ゆいしきろん

雙卷經

觀經
かんきょう

阿彌陀經
あみだ

世親菩薩造
せじんぼさつ

法相宗
ほうそうしゅう

淨土宗
じょうどしゅう

法然房
ほうねんぼう

大日經
だいにちぎょう

七卷

善無畏三藏
ぜんむいさんぞう

權大乘
こんだいじょう

金剛頂經
こんごうちょうぎょう

三卷

金剛智三藏
こんごうちさんぞう

方等部
ほうとうぶ

蘇悉地經
そしつちぎょう

三卷

真言宗
しんごんじゅう

不空三藏
ふくうさんぞう

慧果和尚
けいかわじょう

弘法大師
こうぼうだいし

慈覺大師
じかくだいし

智証大師ちしょうだいし

三十年

達摩大師だいまし

慧可えいか

僧

道信

求忍

楞伽經りやうがきやう

四卷

十卷

百論

提婆菩薩造たいばぼさつ

禅宗ぜんしゆつ

中論

竜樹菩薩造

権大乘 こんだいじょう

慧能 えの

般若 はんにや

十二門論

同

三論宗 さんろんしゅう

興皇 こうこう

四十卷

大智度論 だいちどろん

同

嘉祥大師 かじょうだいし

無量義經 むりょうぎきょう

七十二歳

吉蔵 きちざう

四十年 よんじゅうよねん

未だ真実を顕さず、

方便の力を以て

四十年に

未だ真実を顕さず、

無量無辺不可思議

阿僧祇劫を過れども

終に無上菩提を成ずることを得ず、

所以は何ん菩提の大直道を

知らざるが故に、

知らざるが故に、

留難多きが故に、

大直道を行くは

留難無きが故に。

るなん
じつだいじょう

実大乘

けんろしじゅう
顕露宗

ほけきよ
法華經

ひみつ
最秘密宗

はちかねん
八箇年

ぶつりゅうしゅう
仏立宗

ほつけしゅう
法華宗

てんだいししゅう
天台宗

せそん
世尊は法久しくして後に要当に真実を説き給うべし正直に

ほうひさ
方便を捨てて但無上道を説く種種の道を示すと雖も其れ實には

ぶつじょう
仏乗の為なり、今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生

ことごとこ
は悉く是れ吾が子なり而も今此の処は諸の患難多し唯我れ一

よ
人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず、若し人信

ぜず

して此の経を毀謗せば則一切世間の仏種を断ぜん、或は復蹙

きほう
いっさいせけん
ぶつしゆ
だん
ある
またひんしゆく

して疑惑を懐かん汝当に此の人の罪報を説くことを聴くべし
若しは仏の在世若しは滅度の後其れ斯の如き經典を誹謗するこ
と有らん経を誦誦し書持する有らん者を見て輕賤憎嫉し而も
結恨を懐かん此の人の罪報を汝今復聴け其の人命終して
阿鼻獄に

入らん一劫を具足して劫尽きなば更生じ是の如く展転して
無数劫に至らん此に於て死し已つて更に隣身を受けん其の形・長
大にして五百由旬ならん、若し是の善男子・善女人・我が滅度の
後に能く竊に一人の爲にも法華經の乃至一句を説かん当に知るべ
し是の人は則・如来の使なり如来の所遣として如来の事を行ずる
な

り、薬王若し悪人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前
に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若人・一の悪言を以て在家

出家しゅつけの法華經ほけきょうを讀誦どくじゆする者を毀き皆しせば其その罪つみ甚はなはだだ重おもし藥王やくおう
今なんじ汝なんじに告つぐ我が所説しよせつの諸經しよきょう而しかも此この經きの中ちゆうに於おいて法華最ほつげも第一だいいち
なり我が所説しよせつの經典きやうてん無量千萬億むりやうせんまんにして已すでに説とき今と説とき當まさに説とか
ん而そも其その中ちゆうに於おいて此この法華經ほけきょう最もつともも難なん信しん難なん解げなり若もし法師ほつしに
親近しんこんせば速すみやかに菩薩ぼさつの道みちを得とん是この師しに隨順ずいじゆんして学まなせば恒沙ごうしゃの
仏ぶつを見上たてまつることを得とん、爾その時ときに宝塔ほうとうの中ちゆうより大音聲おんじやうを出いして
歎ほめて言のたまわく善哉よきかな善哉よきかな釈迦牟尼世尊しゃかむにせそんよ能よく平等びやうどう大慧教だいゑ菩薩法ぼさつほう仏所ぶつしよ
護念ごねんの妙法華經みやうほけきょうを以もつて大衆たいしゆづの爲ために説とき給たまう是かくの如ごとし是かくの如ごとし
釈迦牟尼世尊しゃかむにせそんの所説しよせつの如ごときは皆みな是これ眞實しんじつなり・諸余しよよの經典きやうてん數
恒沙ごうしゃの如ごとし此等これらを説とくと雖いえども未いまだ難がたしと爲なす

に足らず若し須弥を接つて他方無数の仏土に擲げ置かんも亦
未だ難しと為さず若し仏の滅度に悪世の中に於て能く此の経を説
かん是れ則ち難しと為す、諸の無智の人の悪口罵詈訾等し及び
刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし悪世の中の比丘は
邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心
充満

せん或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと
謂いて人間を軽賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の
与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん
常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲する故に国王・大臣・
婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて
是れ邪見

の人外道の論議を説くと謂わん・濁劫悪世の中には多く諸の恐怖

有らん悪鬼あつき其身みに入いつて我われを罵詈めりし毀辱きにくせん・濁世じよくせの悪比丘あくびくは仏ぶつの方便ほうべん随宜ずいき所説しよせつの法ほふを知らず悪口あつくして 蹙しぼし数数しばしば擯ひん出しせられん、大神力じんりきを現あらわし広長舌こうちやうぜつを出いして上梵世じやうぼんに至いたらしむ諸仏しよぶつも亦復またまた是これの如ごとく広長舌こうちやうぜつを出たま給たまう。

菩薩ぼさつ・

善導ぜんどう等らなり

涅槃ねはんぎ經きやう 一日一夜いちじついちや

八十入滅はちじゅうめつ

依報えほう不依人ふえにん

文殊もんじゆ・普賢ふげん・觀音かんのん・地藏じぞう・等竜樹りゆうじゆ
善無畏ぜんむい・弘法こうぼう・慈覺じかく・法蔵ほつぞう・嘉祥かじやう・

依義えぎ不依語ふえご

依智えち不依識ふえし

依了義經えりやくぎきやう

不依不了義經ふえふりやくぎきやう

法華經ほけきやう

觀經かんにき等ら

大日經たいにちき等ら

深密經しんみつき等ら

華嚴經けわげんき等ら

般はん若にや經きよ等とう

八五

一代いちだい五時鷄凶

623P

壽命じゅみやう三百年

羅什らじゆつ訳

百論

法雲ほううん自在じざい王にやらい如來

觀くわん自在じざい王にやらい如來

千卷

仏滅ぶつめつ後ご六七八

大論だいろんに云いく十九じゅうじゅう出家しゅつけ三十じゅう成道じやうどう

三十万卷

竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつ

第十一馬鳴めみやう菩薩ぼさつの御弟子おんでし

付法藏ふほうぞうの第十三

大悲だいひ方便ほうべん論

十じゅう万まん卷

猛

大心論

十じゅう万まん卷

大無畏論

十じゅう万まん卷

実大乘じつだいじやう

華嚴經 けこんきょう

權大乘 ごんだいじょう

二七日
三七日

華嚴宗 けこんしゅう

立五教摂尽一代 しゅうごうじんいちだい

香象大師 だいし

賢首法師 けんしゅほっし

結經梵網經 けつきょうぼんもうきょう

華嚴和尚 けこんわじょう

大乘戒之を出す だいじょうかいこれいだす

杜順和尚 とじゆんわじょう

智儼法師 ちごんほっし

法蔵大師 ほうぞうだいし

小乘 しょうじょう

十二年

阿含經 あこんきょう

長阿含 あこん

中阿含 あこん

增一阿含 あこん

雜阿含 あこん

小乘戒之を出す これ

律宗 りつしゅう

成実宗 じょうじつしゅう

俱舍論 くしゃろん

定 じょう

或云法華已前 ある

或云法華已後 ある

深密經 じんみつ

五卷

瑜伽論 ゆいが

或十六年 ある

或八箇年 ある

卷 まき

無著菩薩筆 むちやくぼさつ

方等部 ほうとうぶ

世親菩薩造 せじんぼさつ

權大乘 こんだいじょう

結經遺教經 けつぎょうゆいきょう

大乗 だいじょう

或說時不定 ある

彌勒菩薩說 みろくぼさつ

唯識論
ゆいしきろん

三十頌

を撰尽す
しょうじん

玄奘三蔵
げんじょうさんぞう

慈恩大師
じおんだいし

有相宗
ゆうそう

三時を立て一代
さんじをたていちだい

法相宗
ほうそうしゅう

六經十一論

瓔珞經
ようらく

結經
けつ

般若經 はんんにゃきょう

或は大円覚經 ある えんかく

或は首楞嚴經 ある しゅりょうごんきょう

楞伽經 りょうがきょう
或は諸法無行經 ある しよほうむぎょうきょう
禪宗 ぜんしゅう

或は金剛 ある こんごう
達磨大師 だるまだいし

教外別伝 きょううげべつでん

或は云く一切經 ある いっさいきょう

或は云く ある いわ

竜樹造 りゅうじゆぞう

菩提心論 ぼだいしんろん

一卷七枚

或云 ある

不空造 ぶくうぞう

大日經 だいにちきょう

〔七卷〕

或云 ある

善無畏三蔵 ぜんむいさんぞう

金剛頂經 こんごうぢょうぎょう

〔三卷〕

真言宗 しんごんしゅう

顕密二道を分ち五蔵を立て或は十住心を立つ

蘇悉地經 「三卷」

金剛智三蔵 不空三蔵 一行阿闍梨

或は云く方等部

或は云く華嚴部

或は云く般若部

或は云く法華部

或は云く涅槃部

或は一代諸經の外

雙觀經

曇鸞法師

觀經

淨土宗

道綽禪師

善導ぜんどう和わ尚じょう

感ぜ禪せん師

小ほ康っし法師

照

三
十
年

或あるは云いわく二十二年

阿あ弥み陀だ經

難なん行ぎょう

易い行ぎょう

聖しよ道どう
淨じよ土ど
雜ぞう行ぎょう
正しよ行ぎょう
諸しよ行ぎょう
念ねん仏ぶつ

惠

法

造

或は云く十四年ある いわ

大品般若だいほんほんにや

光讚般若こうさんほんにや

金剛般若こんこうほんにや

天王問般若てんおうもんほんにや

摩訶般若まかほんにや

般若經ほんにやきょう

仁王般若にんのうほんにや

「結經」けつきょう

百論

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

中論

同

十二門論

同

大論だいろん

同

三論宗

或は四論宗という

淨影 興皇

嘉祥寺の吉蔵大師

或は法性宗と云う

或は無相宗と云う

道朗

三時を立て一代を撰尽す、或は

二蔵を立て或は三転法輪を立つ

華嚴三七日阿含十二年方等般若

三十年已上四十二年なり

法界性論に四十二年

無量義経に云く方便力を以ての故に四十余年には未だ真実を

顕さず、又云く無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過るも終に無上

菩提を成ずるを得ず、所以は何ん菩提の大直道を知らず險逕を

行くに留難多きが故に、又云く大直道を行けば留難無きが故に。

諸宗依憑宗 しよしゆうえびよつ

ぶつりゆうしゆう

仏立宗

前四教しきようぜんし前四味みと云うなり、

てんだいしゆう

天台宗

ほつけしゆう

法華宗

法華經 ほけきよう

秘密宗 ひみつ

顯露彰灼宗 あらわ

一仏乘 いちぶつじよつ

普賢經 ふげん

結經 けつきよう

叡山戒壇 えいざんかいだん

世尊法久後・要当説眞実 せそんほうくご ようとうせつしんじつ

廢也

或は前三教ある ぜんさんきようと云い

或はある

或は先の三教あるの円教えんきよう

に撰尽するを云う。

正直捨方便しやうじきしやほうべん・但説無上道たんせつむじやうどう

四時・七教・五時・八教 はつきよう

雖示種種道すいじしゆじゆ・其実為仏乘こじつゝいぶつじよう

將非魔作仏・惱乱我心耶 しやうひまさぶつ のうらんわがこころ

久默此要。不務速説

唯

楞伽經・小品經・般若經等

華嚴經・大日經・深密經・

無量義經

涅槃經等

「我が所説の經典は無量千万億にして已に説き今説き當に説か
ん而も其の中に於て此の法華經最も為難信難解なり」、記の六に
云く「縦い經有つて諸經の王と云うとも已今當説最為第一と云わ
ず、兼但对帶其の義知んぬべし」、玄の三に云く「舌口中に爛る」、
籤の三に云く「已今當の妙此に於て固く迷えば舌爛れて止まざ
るは猶華報と為す謗法の罪苦長劫に流る」、又云く「諫曉止ま
ず」

人四依

法四依第六卷

結經

依法不依人

像法決疑經 ぞうほうけつぎきょう

涅槃經 ねはんぎょう

八十御入滅 にゅうめつ

爾前の經 にぜん

不了義經 ふりょうぎきょう

修羅天 しゆら

天

梵天 ぼんてん

第六天 だいろくてん

主

主上

天尊

世尊 せそん

法王 ほうおう

國王 こくおう

「一日一夜」

七十九・八十・八十一
八十二・百五・百二十

依義不依語 いぎふいご

仏智 ぶつち

菩薩等識 ぼさつどうし

依智不依識 いちふいし

法華經 ほっけきょう

依了義經不依 りょうぎきょうふい

二天

魔

毘紐 びちゆう

大

帝たいしやく釈天

師し子し類きょう王おう

人にん王わう
天てん王わう

浄じょう飯ひん王わう

八はち虐にょくに違いす

震しん旦たん

三さん皇こう

帝てい
積しやく尊そん

師し

三さん王わう等とう

師し匠しょう

日に本ほん国こく

七しち逆ぎやくに違いす

武ぶ天てん皇こう

涅ね槃はん疏じよ云うん

章しょう安あん积せき

外げ道どう師し

迦か毘び羅ら

神しん

天てん竺じく

一体の仏主師親しゅしんと作るな

親
五逆ごぎやくに違いす

六親ろくしん

三仙

六師ぼくし
外げ典師てんし

四聖

周しゅう公こう旦たん
孔子こうし
顔回がんかい

樓僧伽

勒沙婆

尹喜

務成

老

呂望

世尊 三界特尊

二十五有

理性の子 結縁の子

今此三界 皆是我有

其中衆生 悉是吾子

文句の五に云く一切

衆生等しく仏性有

り仏性同じきが故に

等しく是れ子なり

而今此処 多諸患難

唯我一人能為救護

玄の六に云く本此の仏に従つて初めて

道心を発し亦此の仏に従つて不退の地に住す

文句の六に云く「旧は西方の無量寿仏を以て長者に合す今は之を

用いず、西方は仏別に縁異り仏別なる故に隠顕の義成ぜず縁異なる

故に子父の義成ぜず又此の経の首末全く此の旨無し眼を閉し穿鑿

せよ、舎那の著脱近く尚知らず弥陀は遠きに在り何ぞ嘗て変換せ

んニ云、記の六に云く「西方等とは弥陀・釈迦の二仏既に殊なり豈
弥陀をし

て珍玩の服を隠さしめ乃ち釈迦をして弊垢の衣を著せ使めん状、

釈迦珍服の隠す可き無く弥陀唯勝妙の形なるに当る、況や宿昔の

縁別に化導同じからざるをや、結縁は生の如く成就是養の如し生

養の縁異れば父子成ぜず、珍弊途を分ち著脱殊に隔る消経・事

闕けて調熟の義乖く当部の文永く斯の旨無し、舎那著脱等とは

舎那の動ぜずして

而も往くに迷う、弥陀の著弊は諸経に文無し、若し平等意趣を

論ぜば彼此奚ぞ嘗て自ら矜らん、縦い他を我が身とするも還つて我

が化を成す。我他の像を立つれば乃ち他の縁を助く人之を見ざれ

ば化縁便ち乱る、故に知んぬ夫の結縁とは並に応身に約することを

我昔曾て二万億等と云うが如し、況や十六王子始縦り今に至つて

機き感かん相そ成じょうし任にん運うんに分解ぶんかいす、是かくの故のに彼かのの弥み陀だを以もつて此このの変換へんかんと
為なす可べからず」

種しゆ熟じゆく 東方とうほう有う縁えん
第だい一いち阿あ 仏ぶつ

師 主

大通だいつうの太子たいし
十六王子じゅうろくおう

脱だつ種しゅ熟じやく西方さいほう有う縁えん
第九阿弥陀仏くじゅうあみだぶつ

沙弥いよいよ

脱だつ

種しゅ熟じやく娑婆世界しゃばせかい

第十六积迦牟尼仏じゅうじやくかむにぶつ

脱だつ

親しん主しゅ師し親しん
親しん師し主しゅ親しん

記きの九くに云いく「初はつ・此こゝの仏菩薩ぼつさつに從したがつて結縁けちえんし還また此こゝの仏菩薩ぼつさつに於おいて

成熟じょうじゅくす、玄げんの六ろくに云いく「仏尚なほ自みら分段ぶんぶんに入いつて仏事ぶつじを施な作なす有縁うえん

の者もの何なんぞ来きらざるを得えん譬たとえば百川ひゃくせんの海うみに潮しほす応須おうじゆが如ごとし縁えんに

牽ひかれて応生おうせいすること亦復またまた是かくの如ごとし、又また云いく「本もと此こゝの仏ぶつに從したがつて初はつ

めて道心どうしんを發おこし亦また此こゝの仏ぶつに從したがつて不退地ふたいに住す」

本尊ほんそん

劣お心う身しん积じやく迦か如に来らい

俱舍宗くしゃしゆう

戒寔宗けいじつしゆう

律宗りつしゆう

盧舎那報身るしゃなほうしん

勝心しょうしんに当る

釈迦しゃか如來にょらい勝心しょうしんに当る

勝心しょうしんに当る

釈迦しゃか如來にょらい胎藏界たいざうかい

法身ぼうしん胎藏界たいざうかい

大日だいにてち如來にょらい金剛界こんごうかい

報身ほうしん金剛界こんごうかい

華嚴宗の本尊けごんしゅうほんぞん

法相宗の本尊ほうそうしゅうほんぞん

三論宗の本尊さんろんしゅうほんぞん

真言宗の本尊しんごんしゅうほんぞん

天台は応身

劣応 勝劣

阿弥陀仏

浄土宗の本尊

善導等は報身

五百問論に云く「若し父の寿の遠きを知らず復父統の邦に迷わば

徒に才能と謂うとも全く人の子に非ず、三皇已前は父を知らず人

皆禽獸に同じ」

華嚴のるさな真言の大日等は皆此の仏の眷属たり

久遠実成実修実証の仏

天台宗の御本尊

釈迦如来

応身

有始有終

始成の三身

報身

有始無終

真言の大日等

くじょう さんじん
久成の三身

ほうしん おうじん
法身 応身

むしむしゆう
無始無終

ほうしん
報身

むしむしゆう
無始無終

けごんしゆう
華嚴宗

しんごんしゆう
・真言宗

むしむしゆう
の無始無終

さんじん
の三身

を立つるは天台の名目を盗み取

つて自の依経に入れしなり。

八六

釈迦一代五時繼図

633P

大論だいろんに云いわく十九出家しゅっけ・三十成道じょうどう・八十入滅文にゅうめつ、此このの論ろんは竜樹りゅうじゆ
 菩薩ぼさつの造じゆみ・寿命じゆみ三百年・三十万偈げの論師ろんしなり、付法蔵ふほうぞうの第十三ぶつめつ仏滅
 後七百年の人なり。

処八会

説処せつじよは中天竺摩竭提国てんじくまかだこくの寂滅道場菩提樹下じやくめつどうじよぼだいじゆげ・七

仮立実報土けりゆうじつぽうど・別円べつえんの二教を説く

三七日の説なり「三七日は法華ほっけの説二七日は

華嚴けごんの説」

華嚴經けごんきよう

兼なすと名なく

権大乘ごんだいじようなり乳味にゅうみと名なく頓大とんだいの機きの為ために説く
 頓教とんきようと名なく「亦秘密教またひみつ有あり亦不定教またふじよう有あり」擬宜

結けつ經ぎょうは梵ぼん網もう經ぎょうなり

馬め鳴みょう菩ぼ薩さつ

起き信しん論ろんを造ぞうる

天てん竺じく

天てん親じん菩ぼ薩さつ

十じゅう地ち論ろんを造ぞうる

竜りゅう樹じゆ菩ぼ薩さつ

十じゅう住じゅう毘び婆しゃ沙もん論ろんを造ぞう

華け嚴ごん宗しゅう祖そ師し

漢かん土ど

杜と順じゆん和わ尚じょう
法ほう蔵ぞう大だい師し
智ち嚴ごん法ほう師し
澄ちよう觀かん法ほう師し

此の華嚴教といふは所謂いわゆる 仏摩訶陀まかだこくじやくめつどうじょう 寂滅道場ぼだいじゆげ 菩提樹下ぼだいじゆげ にして始めて正覺しじやくかく を成じたまいし時・七処八会しちじよはくわい に於て法惠ほうえ・功德林くどくごん・金剛幢こんじゆたう・金剛藏こんじゆざう の四菩薩しほさつ に加して頓大とんだい の根性こんじょう の為ため に因陀羅網いんだら・無障礙土むざうがい の相げん を現じ別円べつえん の両教りやうきやう・住行向地じゆかうじ の功德くどく・法界唯心ほつかいゆいしん の理と を説き給うたま いわゆるけこんきやう 所謂華嚴經しゆわいげん なり、此の經には四十一位しじゆじゆ を明す謂くいわ 十住じゆじゆ・十行じゆじゆ・十迴向えいじゆ・十地じゆち・仏果ぶつか なり

り、此の經には新古しんこ の二訳に 有り六十華嚴けこん は旧訳くやく なり八十華嚴けこん は新訳しんやく なり、梵網經ぼんじゆきやう を以て華嚴けこん の結經けつきやう と為す、此の華嚴けこん は化儀けぎ は頓部とんぶ 化法けほう は別円べつえん なり、成道じやうどう の最初さいしよ に此の教と を説き給うたま 譬たと えば日出い でて先づ高山こうざん を照てり すが如ごと し厚殖こうじき

善根ぜんこん は斯こ の頓説とんせつ を感か ず、頓説本とんせつほん と小ちひ の為ため にせず彼の初分しよぶん に於ては永えい く声聞しやうもん 無し後分ごぶん には即すなわ ち有あ り復また た坐ざ に在あ りと雖いえど も聾つんぼ の如ごと く如ごと し、經文きやうもん に云い く「即すなわ ち傍人ぼうにん を遣つか わして急いそ に追お うて將まさ に還かへ さんとす

乃至悶絶して地にたおる二云一。

説せつしよ処は波羅奈国鹿野苑ろくやおん・同居土の説

但さんぞう三蔵教を説く・但なすと名なく

十二年しふじふに小乗を説く・酪味らくみと名なく

三乗さんじようの根性こんじようの為ために説く・漸教ぜんきようと名なく「亦秘密教有またひみつり

阿含經あこんきよう
亦不定教有またふじようり」

誘引ゆういんと名なく

結經けつきようは遣教經けんきようなり

俱舍宗くしやしゆう・成実宗じようじつ・律宗りつしゆう

此あこんの阿含は是しよ小乗教しよじようなり、仏ぶつ・成道じようだい五十七日ごじちにちをへ経へてぼんのう梵王ぼんのうの請しよつに

赴おもむき波羅奈国はらなの鹿野苑ろくやおんに於おいて陳如等ちんによの五人ごにんの為ために三蔵教さんぞうの四諦しだいの

法論ほつろんを説とき給たまう、謂おもく四阿含等あこんの小乗經しよじようきようを説とくなり、増一阿含あこん

には人天にんてんの因果いんがを明あかし、長阿含あこんには邪見じゃけんを破はし、中阿含あこんには真寂しんじやくの

深義じんぎを明あかし、雜阿含あしんには禪定ぜんじょうを明あす、遣教經けんぎょうを以もつて結經けつきょうと為なす、
化儀けぎは漸ぜんの部

の初め化法は三蔵教なり、三乗の根性の為に此の阿含教を説く經の次第に依れば日の次に幽谷を照すが如し、浅行を偏えに明せば当分に漸を解る三蔵本大の為ならず座に在りと雖も多 婆和す、經に云く「將に其の子を誘引せんと欲して方便を説く密かに二人の形色憔悴せる威徳無き者を遣わす」と云。

説処は欲色二界の中間大宝坊同居土の説なり

蔵通 別円の四教を説く

十六年の説なり三井寺の義説時不定なり 山門の義権大乘

生蘇味

対と名く

四教の機の為に説く漸教と名く亦秘密教有り亦不定教有り

弾訶と名く

結経は瓔珞経なり

ほうとうぶ
方等部

じんみつ
深密經

ほうそうしゅう
法相宗

げんじょうさんぞう
玄奘三蔵慈恩大師

りょうがきょう
楞伽經

ぜんしゅう
禪宗

だるま
達磨

どらんほっし
曇鸞法師

かんきょう
觀經

どうしゆくぜん
道綽禪師

そうかんきょう
雙觀經

じょうどしゅう
淨土宗

そし
祖師

ぜんどうわじょう
善導和尚

あみだ
阿彌陀經

ほうねんしょうにん
法然上人

だいにちきょう
大日經

ぜんむいさんぞう
善無畏三蔵

こんこうちきょう
金剛頂經

しんこんしゅう
真言宗

そし
祖師

こんこうちきょう
金剛智三蔵

そしちきょう
蘇悉地經

ふくうさんぞう
不空三蔵

此の方等教は謂く鹿苑の後般若の前四教の機に對し処処に四教の法を説いて唯だ二乗を彈呵し菩薩を稱揚す、所謂密嚴經・厚嚴經・思益經・方等經・楞伽經・淨名經等なり、瓔珞經を以て結經と爲す、化儀は漸部の中・化法は四教なり、説教の次第に依れば日の次ぎに平地を照すが如し影万水に臨み器の方円を逐い波の動靜に随つて一

仏土を示すに淨穢不同ならしめ一身を示現するに巨細各異なり、一音の説法・類に随つて各解なり、恐畏し歡喜し厭離し斷疑す神力不共の故に見に淨穢有り聞に褒貶有り嗅に胆葡と不胆葡と有り華に著身と不著身と有り淨名方等の如し、經文に云く「是を過ぎて已後、心相体信じて入出難り無し」文。

説処は鷲峯山・白鷲池等の四处十六会・同居土の説な

権大乘なりごんだいじょう

帯と名なすく

熟蘇味と名なすく

十四年の説なり「三井寺の義」三十年の説「山門の義」さんもん

漸ぜんと名なすく「亦秘密教有またひみつり亦不定教有またふじょうり」

淘汰と名なすく

結経は仁王経なりけつきょう にんのうきょう 已上四十二年なり

百論

中論さんろんしゅう 三論宗さんろんしゅう 祖師そし 嘉祥大師かじょうだいし

十二門論じふにもんろん 吉蔵大師きちぞうだいし

此の大般若経は唐とうの玄奘三蔵げんじょうさんぞうの所訳しよやく是れ新訳しんやくなり、此の経は一部六百卷・二百六十五品こぼん・六十億四十万字・一万

六百三十八紙なり、此の般若経は方等の後・法華の前四処十六会の

中に於て後三教の機^きの爲^{ため}に広く諸部^{しよ}の般若を説く、所謂^{いわゆる}光讚

般若経・文殊問般若経・金剛般若経・能断金剛般若経・小品

般若経・小品般若経・放光般若経・天王問般若経・大般若経等な

り、仁王般若経を以て結経と爲す、唯だ化儀は漸教の後・化法は

通別円なり、此の般若経の時も二乗の念処道品は皆是れ摩訶衍と

説いて亦身子・須菩提をして菩薩の爲に般若を転教せしむ。

玄義に云く「大人は其の光用を蒙り嬰兒は其の精明を喪う夜遊

の者は伏匿し作務の者は興盛す」故に文に云く「但菩薩の爲に其の

実事を説いて我が爲に此の真要を説かず、三人俱に学すと雖も二乗

は証を取る具に小品等の如し」経文に云く「爾の時に窮子即ち教勅

を受けて衆物を領知し乃至而も一^{いち}を取するの意無し」云云。

仏・自ら四十余年の諸経を破し給う事、無量義経説法品に云く

「我先に道場菩提樹下に端座すること六年にして
阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり仏眼を以て一切の諸法
を觀るに宣説すべからず所以は如何諸の衆生の性欲不同なること
を知れり性欲不同なれば種種に法を説き種種に法を説くことは
方便力を以てす四十余年には未だ眞實を踴わさず」云云、又云く
「文辞は一なりと雖も義は各異なり」云云、伝教大師の無量義經の

注釈に云く

「性欲不同なれば種種に法を説くとは是れ能被の教を挙ぐるなり
釈迦一代四十余年の所説の教略して四教及び八教あり所謂樹王の
華嚴・鹿苑の阿含・坊中の方等・鷲峯等の般若・演説一乘・大小の
菩薩の歴劫修行・小乗の三蔵教・
大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・不定教・
秘密教是くの如き等の前四味各各不同なり是の故に名けて種種の

説法せつぽうと為すなと云云、又云く「但ただ随他ずいたの五種ごしゆ性等じやうとう門外もんがいの方便ほうべん・差別さべつの
權教こんきやう・帶權たいこんの一乘いちじやうを説いて未いまだ随自ずいじ一仏乘等いちぶつじやうとう・露地ろじの眞實しんじつ・平等びやうとう
の直道じきどう・捨權しゃこんの一乘いちじやうを顯あらわさず是かくの故ゆえに説いて方便ほうべん力を以て
四十余年未よんじゆうよねんいまだ眞實しんじつを顯あらわさ
ずと言むりようう」と云云、無量義經むりようぎきやうに云く「若もし衆生有しゆじやうつて是この經を聞きく
ことを得すなわば則こち為なれ大だい利りなり所以ゆえんは如い何か若もし能よく修しゆ行ぎやうすれば必かなず
疾はやく無む上じやう菩ぼ提だいを成じやうずることを得えればなり、其それ衆生有しゆじやうつて聞きくこ
とを得えざる者まは当まさに知しるべ

し是等は為れ大利を失えるなり、無量無辺不可思議阿僧祇劫を
 過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず所以は如何菩提の大
 直道を知らざる故に險逕を行くに留難多きが故に云云、注釈に
 云く「疾く無上菩提を成ずることを得ずとは未だ直道一乗の海路
 を解せず未だ純円六度の固船に乗らず未だ実相方便の順風を得ず
 是の故に横道の三乗嶮路の歩行留難多き処・勲苦妄想夢裏の大河
 なり是の故に説いて疾く無上菩提を成ずることを得ずと言うなり」
 云云、秀句の下に云く「法華経を讚むと雖も還つて法華の心を死す」
 云云、無量義経に云く「次に方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を
 説いて菩薩の歴劫修行を宣説せしかども」云云、伝教大師秀句の
 下巻に云く「謹しみ
 て無量義経を案ずるに云く方等十二部経とは法相宗所依の経なり
 摩訶般若とは三論宗の所依の経なり華嚴海空とは即ち華嚴宗の

所依しよえの經きやうなり但じやう歴劫りきやく修行しゆぎやうを説いいて未いまだ大直道じきだうを知ららずこ云い云ん、
天台大師てんだいだいしげんぎ玄義げんぎの五ごに云いく「成道じやうだうより以い来らい四十しじゆ余年よねん未いまだ真実しんじつを顕あらわ
さほずけ法華ほっけに始はめて真実しんじつを顕あらわすこ相伝そうでんに云いくい仏ぶつの年ねん七十二じふに歳さいにして
法華經ほっけきやうを説いくと云い云ん、慧心僧都えしんそうずの一乘要決いちじやうようけつの下したに云いく「仏既すでに説い
て言いく法華真実ほっけしんじつなり前まへは未いまだ真実しんじつを顕あらわさほず何なんぞ強あながちに仏教ぶつぎやうに
背そむいて法華ほっけの怨嫉おんしつと為なるやこ云い云ん、記きの八はちに云いく「略りやくして經題きやうだいを
挙あげて玄はるかに一いつ部ぶを収おさむ故ゆえに仏欲ぶつとく以い此こ妙法めうほう等とうと云いうなりこ」釈籤しゃくせん一いつに
云いく「次きに經題きやうだいを釈しゃくす初しよめには妙法めうほうの兩字りやうじは通とじて本ほん・迹せきを詮せんす
蓮華れんげの兩字りやうじは通とじて本ほん・迹せきを譬たとうこ」

説処せつじよは靈山りやうぜん虚空こくうの二処じつ三會さんげ実報じつぽう土どの説せつ

実大乘じつだいじやう
はちかねん

八箇年はちかねんの説せつ

又開會かいえの妙典みやうてんとも純円じゆんえん一実いちじつの説せつとも一円機いちげんきの説せつとも云い

う
ほけき
ほう
華
きょう
経

だ
い
ご
み
醍
醐
味
えんき
よう
円
教

頓不定と秘密無し

とんぷじょう ひみつ

結経は普賢経

けつきょう ふげん

仏立宗

ほつげしゅう

法華宗

てんだいしゅう

天台宗

一に靈山会

じよぼん

序品より法師品に至る十

ほうしほん いた

品

二処三会の儀式

二に虚空会

ほうとうぼん

宝塔品より神力品に至る十

じんりきぼん いた

一品

三に靈山会

りょうぜん

嘱累品より勸発品に至る

ぞくるい かんほつぼん いた

七品

本・迹の両門

じよぼん

序品より十四品は迹門なり

しやくもん かいこんけんじつ

と名く

ゆじゅつぼん

涌出品より十四品は本門なり

ほんもん かいこんけんのん

名く

此の法華経は第五時の教なり、無量義経を開経と為し観普賢経を
結経と為す、化儀は会漸帰頓・会三帰一・化法は純円なり、般若の
後・雙林の前・純ら一の円機に對して眞実を説くなり、日光普ねく
照すに土圭の測影縮ならず盈ならざるが如し低頭拳手・皆仏道を
成ず汝は實に我が子・我は實に汝が父・唯だ如來の滅後を以て
之を滅度す、此の第

五時の教は是れ日中にして四時に非ず是醍醐にして四味に非ず
是れ定にして不定に非ず是れ顕露にして秘密に非ず三乗・五乗・七
方便・九法界を會して一仏乘に入らしむ所以に迹門には二乗初住
の位に叶て無生忍を得・成仏の記を受く八歳の竜女は男子に變成
して即身に無垢の成道を唱う、本門には二世の弟子増道損生の益
を得・凡そ三周

四説不可思議なり方便品に云く「世尊の法久くして後要ず當に眞実

を説くべし」と又云く「未だ曾て説ざる所以は説時未だ至らざるが故
なり今正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」と云云、又
云く「乃至一偈に於ても皆成仏すること疑無し十方仏土の中唯
一乗の法のみ有つて二も無く亦三も無し仏の方便の説を除く」と又
云く「諸仏世

に出る唯此の一事のみ実なり余の二は則ち真に非ず、普賢經の記に云く「故に正説に云く唯此の一事のみ實にして余の二は則ち真に非ずと斯れに多義有り、一には非頓非漸の妙法を指して一事実と爲し而頓而漸を余二の權

と爲す、二には三教の仮名を呼びて非真と爲し一円の実理を指して一実と爲す、三には四味を以て非真と爲し

醍醐を以て一実と爲す」と、方便品に云く「終に小乗を以て衆生

を濟度せず」云云、又云く「若小乗を以て化すること乃至一人に

於てもせば我則ち慳貧に墮せん此の事不可と爲す」又云く「正直に

方便を捨てて但だ無上道を説く」と、玄の九に云く「廢三頭一とは

此れ正しく教を廢す其の情を破すと雖も若し教を廢せざれば樹想

還つて生ず教を執して惑を生ず是の故に教を廢す正直に方便を捨

てて但だ無上道を説く十方仏土の中唯だ一乗の法のみ有り

二も無く亦三も無しと云云、玄義の一に云く「華落は権を廃するを
たとえ蓮成は実を立するを譬うと文に云く「正直に方便を捨てて
但だ無上道を説く」云云、伝教大師の顕戒論に云く「白牛を賜う
朝には三車を用いず家業を得る夕べには何ぞ除糞を用いん」故に經
に云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」と、方便品に云く
「我が昔の所願の如く今己に満足す」云云。
玄義の十に云く「即ち方便の一乗を廃して唯だ円実の一乗なり
故に云く我本と誓願するが如き今己に満足す」方便品に云く
「とうらいせ 悪くにん 仏一乗を説き給うを聞いて迷惑して信受せず法を
破して悪道に墮せん」と云云、又云く「法を聞き歡喜し讚めて乃至
一言を発す則ち為れ已に一切三世の仏を供養するなり」譬喩品に
云く「今此の三界
は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今

此の処ところは諸もろの患難げんなん多し唯我一人のみ能く救護くごを為す云云、文句もんく
の六むに云くいわ「旧もとは西方さいほうの無量寿むりょうじゆぶつ仏を以て、以て長者ちやうじやに合がす今これ之を
用もちいず西方さいほうの仏別べつに縁ゆゑ・異ちがなり仏別べつなり故ゆゑに隱顯おんけんの義ぎ・成なぜず縁
異ことなるが故ゆゑに子父しよふの義ぎ・成なぜず又此の經しやまの首末しゆまつ全ぜんく此の旨むね無なし閉眼へいがん
穿鑿せんさくせよ、疏記じよきの六むに云くいわ「弥陀みだ・釈迦しやか二仏にぶつ既すでに殊ことなり況いや宿昔しよくの
縁ゆゑ・別べつに化導けだう同どうじからざるをや結縁けちえんは生ことの如ごとく成熟じよつじゆくは養ことの如ごとし

生養の縁異なれば父子成ぜず珍幣途を分ち著脱殊に隔たる消経
事闕け調熟義乖く当部の文永く斯の旨無し云云、又云く「往昔
は大小の両縁俱に釈迦に在りとし今は尊特垢衣俱に弥陀に在りと
せば更に笑う可きことを成ず云云、涅槃經の疏の一に云く「無救
無護無所宗仰とは此れは無主の苦を釈す貧窮孤露・一旦遠離・
無上世尊とは此れは無親の苦を釈す設有疑惑・當復問誰とは此は
無師の苦を釈す云云、涅槃經の四に云く「我又閻浮提の中
に示現し疫病劫起多く衆生有つて病に悩む所と爲んに去つて医薬
を施し然して後に爲に微妙の法を説いて其をして無上菩提に安住せ
しむ云云、涅槃經の一に云く「我等今より救護有ること無く宗仰
する所無く貧窮孤露なり、一旦無上世尊に遠離したてまつらば設
疑惑有りといえども當に復た誰にか問うべし」と同一に云く「主無く
親無ければ家を亡し国を亡す」又云く「一体の仏を主師親と作す」

譬喩品に云く「一切衆生、皆是吾が子なり」云云、

寿量品に云く「我常に此の娑婆世界に在つて説法教化す亦余処の

百千万億那由佗阿僧祇の国に於ても衆生を導利す」云云、大論に

云く「十万恒河沙等の三千の国土を名けて一仏国土と為す是の中

に更に余仏無し実に一りの釈迦仏のみなり」云云、寿量品に云く

「我も亦為れ世の父諸の苦患を救う者なり」云云、宝塔品に云く

「よく能く来世

に於て此の経を読み持たんは是れ眞の仏子なり」云云、譬喩品に

云く「若し人あつて信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の

仏種を断ず其の人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫尽き

て更に生じ是くの如く展転して無数劫に至らん」又云く「但

大乘經典を受持することを樂つて乃至余経の一偈をも受けざれ」

妙楽大師の五百

問論に云く「況や彼の華嚴は但福を以て比す此の經の法を以て之を
比するに同じからず、故に云く乃至不受余經一偈と人之を思わす
徒らに引く何んの益あらん」玄義の五に云く「究竟の大乗は華嚴・
大集・小品・法華・涅槃に過ぐる無し」妙樂の釈籤の十に云く「請う
有眼の者委悉に之を尋ねて法華は漸円・華嚴の頓極に及ばすと云う
こと勿れ当に知るべし法華は部に約するときは則ち尚華嚴・般若を
破し教に約するときは則ち尚別教の後心を破す」

譬喩品に云く「初め仏の所説を聞いて心中大いに驚疑す將に魔・仏
と作つて我が心を悩乱するに非ずや」宝塔品に云く「爾の時に宝塔
の中より大音声を出して歎めて言く善哉善哉善哉釈迦牟尼世尊能く
平等大慧教菩薩法仏所護念の妙法蓮華經を以て大衆の為に説き
給うことは是の如し是の如し釈迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ
眞実なり」と又云く「釈迦牟尼仏・快く是の法華經を説き給え我是の
經を聴かんが爲の故に而かも此に來至せり」と云云、又云く「大
音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く
妙法華經を説かん今正しく是れ時なり如來久しからずして當に
涅槃に入り給うべし仏・此の妙法華經を以て付屬して在ること有ら
しめんと欲す」法師品に云く「藥王
若し人有つて何等の衆生か未來世に於て當に作仏することを得べし
と問わば応に示すべし、是の諸人等・未來世に於て必ず作仏するこ

とを得んと何を以ての故に善男子・善女人・法華經の乃至一句に
於て受持し誦誦せん云云、宝塔品に云く「諸余の經典數恒沙の
如くならん、此等を説くと雖も未だ難しと爲るに足らず若し仏の
滅後惡世の中に於て能く此の經を説く是則ち難しと爲すと提婆品
に云く「仏諸の比丘に告げ給わく未來世の中に若し善男子・
善女人有つて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑
を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生
ぜん、所生の処には常に此の經を聞き若し人天の中に生れば
勝妙の樂を受け若し仏前に在らば蓮華より化生せん又云く
「當時の衆會皆竜女の忽然の間に變じて男子と成つて菩薩の行を具
して即ち南方無垢世
界に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好あつて
普く十方一切衆生の爲に妙法を演説するを見る又云く「爾の時

に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼の
龍女の成仏して普く時の会の人天の為に法を説くを見て心大いに
歡喜し悉く遙かに敬礼す。分別功德品に云く、「阿逸多是の善男子・
善女人は我が為に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧
に供養することを須いず、所以は如何是の善男子・善女人是の經典
を受持し誦誦する者は已に塔を起て僧坊を造立し衆僧を供養すと
為す、則ち為れ仏舍利を以て七宝の塔を起て

高げん広げん漸ぜん小せうにして梵ぼん天てんに至いたる」と云い云わ、神じん力りき品ぼんに云いく「仏ほと滅け度めつのご後ごに能よく是この經きやうを持もたんとを以もつての故ゆえに諸しよ仏ぶつ皆みな歡かん喜きす」云い云わ、又また云いく「我わがが滅めつ度どのご後ごに於おいてこに斯この經きやうを受じゆ持じすべし是この人にん・仏ぶつ道どうに於おいて決けつ定じやうして疑うたがいあ有あること無なけん」云い云わ、藥やく王おう品ぼんに云いく「能よく是この經きやう典てんを受じゆ持じすること有あらん者ものも亦また復かくのご如ごとし一切いっさい衆しゆ生じやうの中ちゆうに於おいて亦また第一だいいちと為なす」云い云わ、普ふ賢げん經きやうに云いく「煩ぼん惱のうを断だんぜず五ご欲よくを離りれず三さん昧まいに入いらざれども但じゆ誦じゆ持じするが故ゆえに」云い云わ、又また云いく「其それ大だい乘じやう方ほう等とう經きやう典てんを讀どく誦じゆする有あらば当まさに知しるべし此この人にんは仏ぶつの功く徳とくを具ぐして諸しよ惡あく永えいく滅めつして仏ぶつ慧えより生なずるなり」云い云わ、一い經きやうの始しめめの如に是よぜがもん我わが聞もんを積しやくする文もん句くの一いに云いく「如に是よぜとは所しよ聞もんの法ほつ体たいを拳あぐ」と則すなわ妙みやう法ほう蓮れん華げ經きやう是こなり。

一日一夜の説

権大乘

涅槃經

説処は跋提河の辺

常住四教を説く

同醍醐味

結経は像法決疑経

此の涅槃經は一日一夜の説三蔵教・通教・別教・円教を明す、亦

は醍醐味とも名く、釈尊拘尸那城・力士生地・阿利羅跋提河・

沙羅雙樹の間に於て二月十五日の晨朝・面門より種種の光を放ち

給う十二由旬の内十方の大衆を集めて涅槃經を説き給う即ち三

十六の涅槃經旧訳の四十の涅槃經なり、像法決疑経を以て結経と

為す、亦拾教と

名け亦扶律顕常と云う、化儀は漸部・化法は四教なり法華の時猶

未解の輩有り更に後番五味を以て余残の機を調熟し給う、涅槃

の時・四教の機同く・仏性を見る秋収冬蔵の如し、唯四機有り

俱ともに常住じやうじゆうを知る故ゆえに法華ほつけと合あして同醍醐味だいごみと為なすなり、凡およそ一往いちおう
此かくの如ごとく配立いへどすと雖いえども万差まんさの機縁きえんに随したがつて時節じせつの長短ちやうたん不同ふどうなり
或あるは華嚴けごんの時長じちやうは涅槃ねはんの時いたに至いたる阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにかも亦爾またしかなり云
云、涅槃經ねはんきやうの六むに「法ほつに依よつて人ひとに依よらざれ義ぎに依よつて語ごに依よらざれ
智ちに依よつて識しに依よらざれ了義經りやうぎきやうに依よつて不ふ了義經ふりやうぎきやうに依よらざれ」と云
云、又また亦如来随宜にょらいずいぎの方便所説ほうべんしよせつの法ほつの中に執着じつじやくを生なぜざる是これを了義りやうぎ
と名なく不ふ了義りやうぎとは經きやうの中ちゆうに一切いっさい燒然しやうねんなり一切いっさい無常むじやうなり一切いっさい皆苦みななり
一切いっさい皆空みななり一切いっさい無我むがなり
りなと説せつくが如ごとく是これを不ふ了義りやうぎと名なく何なにを以もつての故ゆえに是かくの如ごときの義ぎ
を了りやうすること能あたわざるを以もつての故ゆえに諸もろもろの衆生しゆじやうをして阿鼻獄あびごくに墮だせ
しむこニ云い云わ、十七じちの卷まきに云いく「如来にょらいは虚妄こもつの言無ごんむしと雖いえども若もし衆生しゆじやう
の虚妄こもつの説せつに因よつて「文ぶん、又また云いく「虚妄こもつの法則すなわち是これ罪つみと為なす是この
罪つみを以もつての故ゆえに地獄じごくに墮だすこニ云い云わ。

一、小乗の戒を破する事

涅槃經の三の卷に云く「仏迦葉に告げ給わく能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得・迦葉我往昔に於て護法の因縁を以て今是の金剛身を成就することを得て常住にして壊せず、善男子正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀劍・弓箭・鉞槊を保持して持戒清淨の比丘を守護すべし」云云、同十七に云く「仏性を見るが故に大涅槃を得是を菩薩の清淨の持戒にして世間の戒には非ずと名く」と云云、又云く

「是の經を受持して戒を毀る者は則ち是れ衆生の大悪知識なり我が弟子に非ず是れ魔の眷屬なり」云云、法師品に云く「若し是の深經声聞の法を決了する是れ諸經の王なることを聞いて」云云、安樂行品に云く「又声聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に

親近しんこんせざれ亦また問訊もんじんせざれ若もしは坊中ぼうちゆうに於おいても若もしは経行けいぎやうの処ところ若もしは講堂こうどうの中に在あても共に住止じゆぢせざれと云いふ、伝教でんぎやう大師だいしの顯戒論けんかいろんの中に云いふ「貧人ひんじんの食こは是これ輪王りんわうの毒どくなるが如ごとし、故ゆえに二乗にじやうの者ものに云いふ「貧人ひんじんの食こは是これ輪王りんわうの毒どくなるが如ごとし、故ゆえに二乗にじやうの者ものの持戒じかい精進しやうじんは即すなわち菩薩ぼさつの破戒はかい懶惰らんだなり故ゆえに応まさに親近しんこんすべからず、来たらば為ために法ほふを説とけ親使りやう・利養きやうけい・恭敬けいけいをわざれ」と云いふ、秀句しゆくの下したに云いふ「小乘しやうじやうの持戒じかいは則すなわち菩薩ぼさつの煩惱ぼんのうなりと云いふ、宝塔品ほうとうぼんに云いふ「此この經きやうは持たち難がたし若もし暫しばらくも持もつ者ものは我すなわ則すなわち歡喜かんきす諸しよ仏ぶつも亦また然しかなり、是かくの如ごときの人ひとは諸しよ仏ぶつの歎なげめ給たまはう所ところなり是すなわ則すなわち勇猛ゆうもうなり是すなわ則すなわち

精進しやうじんな

り是これを戒たもを持ち頭陀ずだを行なすずる者と名なく、則すなわち疾はやく無上むじょうの仏道ぶつどうを得とく
と為なす能よく来世らいせに於おいて此この經きやうを讀よみ持もたんは是これ眞まことの仏子ぶつしなり云い
云い、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの大論だいろんに云いく、「自法愛染あいでんの故ゆゑに他人たにんの法ほふを毀きす持戒じかい
の行人いへんと雖いへども地獄じごくの苦くるしみを脱まぬれず云い云い、涅槃經ねはんきやうの十二じふにに云いく、「仏
迦葉かしょうに告たまげ給たまはる若もし菩薩ぼさつ有あつて破戒はかいの因縁いんねんを以もつて則すなわち能よく人ひとを
して大乘經典だいじやうきやう

を受じゆ持じし愛樂あいらくせしむることを知しつて又また能よく其それをして經卷きやうかんを讀誦どくじゆ
し通利つうりし書寫しよしやし廣ひろく人たの爲ために説あひて阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいを退轉たいてんせ
ざらしめんと、是かくの如ごとき爲ゆゑの故ことに故ことさらに戒やぶを破やぶることを得え云い
云い、安然あんねんの広釈くわうしやくに云いく、「能よく法華經ほふききやうを説これ是これを持戒じかいと名なく律儀りつぎを
持じすと雖いへども善法いへんぽうを撰せんせざれば猶木石なほぼくせきの衣鉢いはつを帶持たいじせるが如ごとし云い
云い、弘決くわつの四しに大論だいろんの十九じゅうじゅうを引ひいて云いく、「諸もろの比丘びく・仏ぶつに問といたてま
つる阿蘭若あれんにやの比丘死びくしぬ今何いずれの処ところにか生あずる・仏ぶつの言いわく阿鼻獄あびごくに

生もろもろず諸びくの比丘大おどろいに驚おどろく、坐ざぜん禅持じかい戒かいするに便すなわち爾しかるを至いたすや仏答いた
えて言いわく多たもん聞もん・持じかい戒かい・禅いま未ろじんだ漏ろじん尽じんの法ほつを得えず云云、伝でんぎ教ぎょう大師だいし云いわく
「今いまより已い後ご声聞しやうもんの利益りやくを受けうけず菩ぼ薩さつは二百五十戒ほさつを捨あわて畢おわんぬ」
云云、涅槃ねはん經ぎやうの四しに云いわく「我ねはん涅槃ねはんの後ご・無むりやう量りやう百ひゃく歳さいに四し道だうの聖しやう人にんも
悉ことごとく復また涅槃ねはんせん正しやう法ほつ滅めつして後ご・像ぞう法ほつの中ちゆうに於おいて當まさに比び丘く有あべし貌かたち
持じりつ律りつに像にて少すくしく經きやうを讀どく誦じゆし飲おん食じきを貪とん嗜しし其その身みを長ちやう養りやうし袈け裟さを
服いすと雖いも猶な獵りやう師しの如ごとく細こめに視みて徐ひそかに行いくこと猫ねずの鼠みを伺うが
が如ごとし、常じやうに是この言ごんを唱となう我ら羅らん漢かんを得えたりと、諸もろもろの病びやう苦く多たく糞ふん穢えに
眠みん臥ぶす外ぐわいには賢けん善ぜんを現げんし内ないには貪とん嫉しつ
を懷いだく唾あほ法ほつを受けうけたる婆ば羅らん門もん等ごの如ごとし、実じつに沙しゃ門もんに非あらずして沙しゃ門もんの
像あらわを現げんし邪じゃ見けん熾しじやう盛じやうにして正しやう法ほつを誹ひ謗ぼうし及および甚じん深じん秘ひ密みつの教ぎやうを壞やぶり
各かく自じ意いに隨したがつて反したつて經きやう律りつを説せつく云云、同どう九くに云いわく「善ぜん男子なんし・
一いつ闡せん提だい有いり羅らん漢かんの像なを作くわし空くう処じよに住すして方ほう等とう大だい乘じやう經ぎやう典てんを誹ひ謗ぼうす

諸の凡夫人・見已つて皆眞の阿羅漢なり是れ大菩薩摩訶薩なりと
おも
謂えり」

一、善導和尚自害の事

類聚伝に云く「導・此の身諸苦に逼迫せられて情偽反易し暫くも
きゆうそく
休息すること無し、乃ち所居の寺の前の柳樹に登つて西に向て願
つて云く仏の威神驪以て我を摂し観音・勢至も亦来て我を助け
たま
給え、此の心をして正念を失わ

ざらしめ驚怖きょうふを起さず弥陀みだの法ほふの中に於おいて以もつて退墮たいだを生なぜざらんと願ねがいし畢おわつて其その樹きの上に極いたり身みを投なじて自みずから絶たえぬ」

一、仏自害じがい・断食だんじき・身根不具しんこんぶくを禁こずる事

涅槃ねはんの七しちに云いく「若もし説いいて言いえること有あらん常じょうに一いつの脚あしを翹あげて寂じやくとして言いわす淵ふちに投なじて火ひに赴おもむき自みずから高巖こうがんより墜おち嶮難けんなんを

避さげず毒どくを服くし食じきを断たじ灰土はいどの上に臥ふし自みずから手足しゆじゆを縛しばつて衆生しゆじゆを

殺害さつがいせん、方道ほうだう・咒術じゆじゆつ・旃陀羅せんだらの子こ・無根むこん・二根にこん及びおよび不定根ふじようこん

身根不具しんこんぶくならん、是かくの如ごとき等とうの事こと・如来にょらい悉ことごとく出家しゆつけして道みちを為なすこ

とを聴ゆるし給たまうといわば是これを魔説ませつと名なく「云云いんいん、涅槃經ねはんぎやうの六むに云いく

「大乗だいじやうを学まなぶ者は肉眼にくげん有ありと雖いえども名なけて仏眼ぶつげんと為なす耳鼻じび五根ごこんも

例れいして亦また是かくの如ごとし「云云いんいん、像法決疑經ぞうほふけつぎきやうに云いく「諸もろもろの悪比丘あくびく我が意い

を解げせず己おのが所見しよけんを執しゆつて十二部經じふにぶきやうを宣説せんせつし文ぶんに随したがつて義ぎを取り

決けつ定の説しやくと作なさん、当まさに知しるべし此この人は三世さんぜの諸仏しよぶつの怨あだなり速すみか

に我が法を滅せん」

云云、涅槃經の十四に云く「如来・世尊は大方便有り無常を常と説き・常を無常と説き・楽を説いて苦と爲し・苦を説いて楽と爲し・不淨を淨と説き・淨を不淨と説き・我を無我と説き・無我を我と説き・非衆生に於て説いて衆生と爲し・實の衆生に於て非衆生と説き・非物を物と説き・物を非物と説き・非實を實と説き・實を非實と説き・非境を境と説き・境を非境と説き・非生を生と説き・生を非生と説き・乃至無明を明と説き・明を無明と説き・非色を色と説き・色を非色と説き・非道を道と説き・道を非道と説く」云云。

父は月淨轉輪王鼓音声陀羅尼經の説な

り

浄土宗の阿弥陀

誓願は執持名号往生極樂

正覺は十劫已來なり

法華宗の阿弥陀

父は大通智勝仏なり

誓願は常樂の説是妙法蓮華経なり

正覚は三千塵点劫なり

薬王品に云く「若し女人有つて是の經典を聞いて説の如く修行せ

ば此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏大菩薩衆の圍繞せる

住処に往き蓮華の中宝坐の上に生ず云云、疏記の十に云く「若し

女人有つて等とは此の中只是の経を聞くことを得、説の如く修行

すと云う即ち浄土の因更に觀経等を指すことを須いざるなり、問

う如何が

修行する答う既に如説修行と云う即ち経に依て行を立つ具さに

分別功德品の中直ちに此の土を觀ずるに四土具足するが如し故に

此の仏身即三身なり云云、自在所欲生云云、方便品に云く

「舍利弗・如来但一仏乘を以ての故に衆生の為に法を説く余乘の

若しは二若しは三有ること無しと云云、安樂行品に云く、無量の國中に於て乃至

名字を聞くことを得可からず陀羅尼品に云く、汝等但能く法華の

名を受持せし者を擁護せんすら福量る可からず、釈籤の一に云く

「名は即ち是体・文字解脱なり」と又云く、「次に経題を釈す初めには

妙法の両字は通じて本・迹を詮す蓮華の両字は通じて本・迹を誓

う疏記の一に云く、「妙法の唱は唯だ正宗のみに非ず二十八品

俱に妙法と名くが

故に、故に品品の内に咸く体等を具し句句の下に通じて妙名を結

すと云云、薬王品に云く、「若し復人有つて七宝を以て三千大千世界

に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん是の人の得る所

の功德此の法華經の乃至一

四句偈を受持する其の福最も多きに如かずと又云く「能く是の經典

を受持じゆじすること有らん者も亦復また是この如ごとし一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦また為これ第一だいいちなり又云いわく「此の經は能よく一切衆生いっさいしゆじやうを救う者なり此の經は能よく一切衆生いっさいしゆじやうをして諸もろもろの苦惱を離れしむ此の經は能よく大いに一切衆生いっさいしゆじやうを饒益じやうやくして其その願を充満じゆうまんす」と勸發品かんほつぽんに云いわく「若もし復また是この經典きやうてんを

受持じゆじする者を見て其その過惡かあくを出いださば若もしは實も・若もしは不實ふじつにもあれ此この人は現世げんせに白癩びやくらいの病を得ん、若もし之これを

きょうじつ

軽笑 すること有らん者は当に世世に牙齒疎き欠け

しゆつしんびょうぶじゆきやくりようらい

がんもくかくらい

あくそつのうけつ

醜脣平鼻・手脚繚戻し眼目角

しゆうえ

ふげんも

あくそつ

短気・諸の悪重病あるべし、是の故に普賢若し是の經典を受持す

かくのゆえ

ふげんも

きょうてん

じゆじ

る者を見ては当に起つて遠く迎えて当に仏を敬うが如くすべし

ねはんぎよう

いわ

そ

むか

まさ

うやも

ごと

涅槃經の十三に云く「我爾の時に於て思惟し坐禅し無量歳を経れど

またによびいしゆつせ

だいじょうぎ

も亦如来出世の大乗經

の名有ることを聞かず「文句の五に云く」所以は經に出でたり人の

ことば

なかれ

いわ

いわ

い

語を信ずること勿れ「同三に云く」たとい百千種の師あつて一の

な

こ

い

師・百千種の説を作すとも是れ権ならざるは無し、如来の所説有る

なおまたこ

いわんやまたにんし

むし

あら

い

尚復是れ権なり況や復人師をや、寧ろ権に非ざることを得んや前に

いた

こと

みな

出す所の如きは悉く皆権なり

ねんぶつ

ほうぼうつみ

つく

ほうねん

せんちやく

いわ

い

一、念仏者謗法罪を作る事

法然の選択に云く

道綽禪師・聖道

い

・浄土の二門を立て聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文、初めに

聖道門と云うは之に就いて二有り、乃至之に准じて之を思うに密大及実大を存すべし、然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論此等の家の意正しく此に在り、浄土宗の学者先ず須らく此の旨を知るべし、設い先ず聖道門を学するの人なりと雖も若し浄土門に於て其の志有らん者は須らく聖道を棄てて浄土に皈すべし、善導和尚・正雜二行を立て雜行を捨てて正行に皈するの文、第一に読誦雜行と云うは上の觀經等の往生浄土の經を除いて已外・大小乘・顯密の諸經に於て受持し読誦するを悉く読誦雜行と名く、乃至第三に礼拝雜行と云うは上の弥陀を礼拝するを除いて已外・自余一切諸余の仏菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝し恭敬するを悉く礼拝雜行と名け、第四に称名雜行とは上の弥陀の名号を称するを除いて已外自余一切の仏菩薩等及び諸の世天等の名号を称するを悉く称名雜行と名け、第五に

讃歎供養雜行と云うは上の弥陀仏を除いて已外一切諸余の仏菩薩
及び諸の世天等に於て讃歎し供養するを悉く讃歎供養雜行と
名く、乃至、此の文を見るに彌須らく雜を捨てて專を修すべし、
豈百即百生の專修の正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行
を執せんや、又云く貞元入蔵録の中に始め大般若經

六百卷より終り 法常住經 に至るまで顯密の大乗 經惣べて六百

三十七部・二千八百八十三卷なり皆須らく読誦大乘の句に撰すべ

し夫れ速かに生死を離れんと欲せば二種の勝法の中且らく聖道門

を闔いて選んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば正雜二行の

中に且らく諸の雜行を抛つて選んで正行に皈すべしと云云、大論

に云く「自

法愛染の故に他人の法を毀皆す持戒の行人と雖も地獄の苦を脱れ

ずと云云、法華經に云く「当來世の惡人は仏の一乘を説き給うを聞

いて迷惑して信受せず法を破して惡道に墮せん」又云く「法を破して

信ぜざるが故に三惡道

に墜ちなん」雙觀經に云く「設い我仏を得るも十方衆生の至心に

信樂して我が國に生ぜんと欲して乃至十念せんに若し生ぜずんば

正覺を取らじ唯五逆と誹謗正法を除く」譬喩品に云く「若し人あ

つて信ぜずして此の経を

毀謗きぼうするときすなわは則ち一切世間のいっさいせけん仏種ぶつしゆを断ず其人命終して阿鼻獄あびごくに

入り一劫いっこうを具足して劫尽きて更に生ぜん是くかくの如く展転てんでんして

無数劫むしゆじゆうに至らんいた文句もんくに云く「今經こんきやうに小善成仏しょうぜんじやうぶつを明あきらかす此の縁因えんいん

を取つてぶつしゆ仏種なと為す、若し小善成仏しょうぜんじやうぶつを信ぜずんば則ち一切世間の

仏種ぶつしゆを断ずるなり云云。

一、真言師しんごんし謗法罪ぼうほうつみを作る事つくく

秘蔵宝鑰ひぞうほうやくの上に云く十住心じゅうじゆうとは、

- 一 異生羝羊心ていしやう 凡夫惡人ほんぶあくにん
- 二 愚童持齋心ぐどうじさい 凡夫ほんぶ

善人ぜんにん

- 三 嬰童無畏心えいどうむゐ 外道げどう
- 四 唯蘊無我心むゐが 声聞しやうもん

- 五 拔業因種心へつごういん 縁覺えんかく
- 六 他緣大乘心たいじやう

- 七 覺心不生心かくしんふしやう 三論宗さんろんしゆう
- 八 如實一道心にょじついちどうしん

法華宗 ほっけしゅう

九

極無自性心 ごくむじしやうしん

華嚴宗 けこんしゅう

十

秘密莊嚴心 ひみつそうこん

真言宗 しんごんしゅう

又云くい「他縁い以後ごは大乗だいじょうの心こころなり大乗だいじょうにおいて前まへの二ふたは菩薩乘ぼさつじょう・後のちの二ふたはぶつじょう仏乘ぶつじょうなり此こゝくの如ごときの乗じょう乗じょうはじじょう自乘じじょうには

仏の名を得れども後に望むれば戲論と作る「云云、又云く「人を
謗じ法を謗ずれば定めて阿鼻獄に墮ちて更に出ずる期無し、世人
斯の義を知らずして舌に任せて輒すく談じて深害を顧みず寧ろ日
夜に十悪・五逆を作るべしとも一言一語も人法を謗ず可からず」云
云、大日経に云く「仏不思議の真言相道の法を説くに一切の声聞
縁覚を共

にせず亦普く一切衆生の為にするに非ず」法華経の二に云く「汝
等若し能く此の語を信受せば一切皆当に仏道を成ずることを
得べし是の乗微妙にして清淨第一なり」云云、又云く「此の法華経
は是れ諸の如来第一の説・諸説
の中に於て最も甚深為り」又云く「此の法華経は諸仏如来の秘密の
蔵・諸経の中に於て最も其の上在り」六波羅蜜経に五蔵五味を説
く、私に云く此の経は天台御入滅已後百余年に天竺より漢土に來

れり爾しかれば見ざる經の醍醐だいごを盗むと書くは謬失みょうしつなり弘法こうぼうの二教論の下いに云く「さと諭して日いく今斯この經文きょうもんに依よらば仏五味を以て五蔵に配当

し惣持そうじを醍醐だいごと称しょうし四味を四蔵に譬たとえ給たまえり、振旦しんたんの人師にんし等醍醐だいごを諍あらそい盗んで各自宗じしゅうに名なく若もし斯この經を鑿かんがみば則すなわち掩耳えんにの智割割かつぼうを待たじい云云、又云く「いびるしゃなな毘盧遮那經の疏じょに順あじじば阿字あじを釈しゃくすい云

云、私ひそかに云く毘盧遮那經びるしゃな

疏供養法の卷は竜樹入滅りゅうじゆにゆうめつ已後八百年の造疏じょなり、而しかるに菩提心論ぼだいしんろんに此の事を引き載のせたり故ゆえに知んぬ菩提心論ぼだいしんろんは竜樹りゅうじゆの釈あらざなり又云く「いただしんこんな唯真言法の中そくしんじようぼうにのみ即身成仏そくしんじようぼうするが故ゆえに是三摩地さんまじの法を説く諸教しよきょうの中おに於かて闕あらざいて書せずい云云。

一、真言しんこんは別べつ仏ぶつの説せつに非あらざる事

大日經だいにちきょうの一の卷の五だいにちによらいいは中央は中央は大日如来だいにちにょらいと説く同五卷の五だいにちによらいいは

中央は毘盧遮那と説く第一の卷の五仏は中央は釈迦牟尼仏と説く、文句の九に云く普賢觀は法華を結成す文に云く釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名くと、乃ち是れ異名なり別体なるに非ざるなり、安然の教時義に云く「真言宗の本地毘盧遮那は即ち天台宗の妙法蓮華經・最深密処同仏なり」、智証大師の授決集に云く「真言禪門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等は若し法華・涅槃經等

の經に望むれば是れ摂引の門なり云云、金剛頂經に云く
「婆伽梵釈迦牟尼如来一切平等に善く通達するが故に一切方を
平等に觀察して四方に坐し給う不動如来・宝生如来・觀自在王
如来・不空成就如来」云云、大日經普通真言藏品の四に云く「時に
釈迦牟尼世尊宝処三昧に入つて自心及び眷属の真言を説き給う」
文、大日經の第二に云く

「我昔道場に坐して四魔を降伏し大勤勇の声を以て衆生の怖畏を
除く、是の時梵天等心喜共に称説す此れに由つて諸の世間号して大
勤勇と名く我本不生を覺る」云云、前唐院金剛頂經の疏に云く
「成仏已來甚大久遠なり未だ所經の劫数を説かざる所以は經に
於て各傍正の義有り故に彼の法華の久遠の成仏も亦是れ此の經の
毘盧遮那仏

と異解す可からず云云、仏法伝來の次第に云く「大師智拳・印を結

びて南方なんぽうに向かう面門めんもん俄にわかに開けて金色きんいろの毘盧遮那びるしゃなと成りすなわち即便すなわちち
本体ほんたいに還歸げんきす「云云、涅槃經ねはんぎょうの七の卷まきに仏迦葉かしょうに告たまげ給たまわく「我
般涅槃はんねはんして七百歳しちひゃくさいの後ご是この摩波旬まはしゆん漸ようく当まさに我わが正法しやうほうを壊え乱らんすべ
し、乃至ないし化くわして阿羅漢あらかんの身み及びおよ仏ぶつの色身しきしんと作つくらん魔王まおう此この有漏うろうの形
を以もつて無漏むろの身みと作りて我わが正法しやうほうを壊やぶらん「云云。

一、禪宗ぜんじゆう謗罪ぼうざいを作なす事こと

円覺經えんかくに云いく「修多羅しゆたらの教くわうは月げつを標さす指さしの如ごとし「文方便品ほんぶんに云いく
「或あるは修多羅しゆたらを説しく衆生しゆじゆうに隨順ずいじゆんして説だいく大乘だいじゆうに入るこに為なれ本ほんな
り」梵天ぼんてん王おう問もん仏ぶつ決疑經けつぎきょうに云いく「梵天ぼんてん・靈山りやうぜん会上じゆうに至いたつて金色きんいろの沙羅
華わを以もつて仏ぶつに獻たり仏ぶつ群生ぐんじゆうの為ために法ほふを説とき給たまえと請しやうす世尊せそん坐ざに登のぼり
華わを拈ねんして衆しゆに示しして青蓮せいれんの目めを瞬まばたき天人てんにん百ひゃく万まん悉しつく皆みな措おくこと
罔なし独ひとり

金色きんいろの頭陀ずだ破は顔がん微笑びしやうす、世尊せそんの言いわく吾わがに正法しやうほう眼蔵げんざう・涅槃ねはん妙心みやうしん・

実相微妙じつそう みみょうの法門ほうもん有り文字もんじを立てず教外別伝きょうげべつでん・摩訶迦葉まか かしように付属ふぞくす云
云、是てんじくは中天竺てんじくなり仏にゆうめつの御入滅ごにゅうめつは北天竺てんじく拘尸那城くしなじょうなり、涅槃經ねはんぎょうの
一いちに云いわく「爾その時に閻浮提えんぶだいの中の比丘びく・比丘尼びくに・一切いっさい皆集みなる唯尊ただそん者じゃ
摩訶迦葉まか かしよう・阿難あなんの二衆にしゆを除のぞく同經どうぎょうの三さんに云いわく「若もし法寶ほうほうを以て
阿難あなん及および諸もろの比ひ
丘ふぞくに付属ふぞくし給たまう久住くじゆうすることを得えず何を以ての故ゆえに一切いっさい声聞しょうもん及および
大迦葉かしようは悉ことごとく当まさに無常むじようなるべし彼の老人らうじんの他の

寄物を受くるが如し、是の故に無上の仏法を以て諸の菩薩に付属すべし云云、像法決疑經に云く「諸の悪比丘・或は禅を修すること有るも経論に依らず、自ら己見を逐うて非を以て是と為し是れ邪是れ正を分別すること能わず、遍く道俗に向つて是くの如き言を作さん我能く是を知り我能く是を見ると、当に知るべし此の人は速かに我

が法を滅せん乃至地獄に入ること猶箭を射るが如し云云、弘決一の下に云く「世人多く坐禅安心を以て名けて発心と為す、此の人都て未だ所縁の境を識らず所期の果無ければ全く上求無し大悲を識らざれば全く下化無し、是の故に発心は大悲より起るなり云云、天台の止観の五に云く「又一種の禅人他の根性に達せずして純ら乳菓を教ゆ体心踏心和融覚覓若しは泯若しは了斯れ一轍の意なり障難万途紛然とし

て識しらず纔ひそかに異相いそうを見て即すなわち是れ道こと判みず自ら法器ほうぎに非あらず復また他たに匠しょうたるを闕かく盲跛もうはの師徒とも二にり俱ともに墮落だらくす瞽瞍こけつの夜遊はなはだ甚れんだ憐愍れんみんす可べしニ云ニ云ニ、

弘決くけつの一に云いく「世人せいじん・教を蔑ないがしろにし理觀りくわんを尚あやまぶ者もの・れるかなあやま・れ
るかなほうべん「方便品ほうべんに云いく「諸法しよほう実相じつそう・所謂しよゐしよほう諸法しよほう・如是相によぜそう・如是性によぜしよう・
如是体によげたい・如是力によげりき・乃至ないし・如是本末究竟等によげほんまつくきやうニ云ニ云ニ、妙樂みやうらく大師だいしの金こんべいろん・論ろん
に云いく「実相じつそうは必ず諸法しよほう・諸法しよほうは必ず十如じゆっかい・十如じゆっかいは必ず十界じゆっかい・十界じゆっかい
は必ず身土しんどなりニ云い云ニ、疏記じよきの十に云いく「直ちちに此この土ちを觀かんずるに
四土具足ぐそくす故ゆゑに此この仏身ぶつじん即すなわち三身さんじんなりニ云い云ニ、

一、權実証拠ごんじつしよきの事こと

玄義げんぎの二に云いく「則すなわち百法界ほっかい・千如是によぜ有たり東たねて五差なと為なす一に
惡あく・二に善ぜん・三に二乘にじよう・四に菩薩ぼさつ・五に仏ぶつなり、判はんじて二法にほふと為なす前まへ
の四よは是これ權法ごんほう・後ごの一ひとは是これ実法じつほうニ云い云ニ、釈籤しやくせんの二に云いく「九界くかい

を権なと為なしぶつ仏界かいをな実なと為なすな云な云な、秀句しゅうくの下したにい云いくく「じ定性じょうじょうと不定ふじょう性じょうは位こうの高下げに依より成じょう仏ぶつと不成じょう仏ぶつは經きんの権こん實じつに依よるも文句もんくの九くにい云いくく漸頓ぜんとん云いくく」

の益えきは虚こなりなり云い云い、記きの九くにい云いくく「く権くを稟りやうけて界がいをな出しと為なすな云い云い、玄義げんぎの九くにい云いくく「く化け他たの因いん果がはほ仏ぶつ菩ぼ提だいをいた致いたすことこと能あたわなずな是かくの故ゆえに取とりて並もちべ用もちいいずず化け他たの権こん實じつも亦また他たをいたして極いたに至いたらししむること能あたわなず亦また取とるる」

べか 応らず云云、止観の三に云く、「権の権は実の権に非ず実の権と成ることを得可し権の実は実の実に非ず実の實と成ることを得べからず」云云。

一、権実分別の事

一に玄義の「一に云く、「蓮の爲の故に華・実の爲に権を施すを譬う、権は即ち是れ苗文に云く種種の道を示すと雖も其れ實には仏乗の爲なり」云云、一に又云く、「華敷は権を開するを譬う蓮現は實を顕すを譬う権実共に稻なり文に云く方便の門を開いて眞実の相を示す」云云、三に又云く、「華落は権を廃するを譬う蓮成は實を立つるを譬う実独り真米なり文に云く正直に方便を捨てて但無上の道を説く」云云、釈籤の「一に云く、「開廢俱時なり開の時已に廢するが故なり」云云、又云く、「開の時即ち廢す」又云く、「既に實を識り已れば永

く権を用いずと云云。

一、破三顯一の事

方便品に云く、「一仏乘に於て分別して三と説く」と云云、玄義の九に云く「廢三顯実」と又云く「施権」方便品に云く「一も無く亦三も無し仏の方便説を除く」と云云涅槃經の二十三に云く「实には三乘無し顛倒心の故に三乘有りと言ふ、一実の道は真実にして虚ならず顛倒心の故に一実無しと言ふ」と云云、方便品に云く「尚二乘無し何に況や三有らんや」と云云。

一、入如来慧の事

法華經に云く「是の諸の衆生世世より已来常に我が化を受く此の諸の衆生始めて我が身を見て我が所説を聞いて即ち皆信受して如来の慧に入る先より修習して小乘を学する者を除く」と云云、文句の九に云く「根利にして徳厚く世世已来常に大化を受け始めて

我が身を見て即ち華嚴を稟けて如来慧に入る菓熟して零ち易し
云云、釈籤の十に云く「まさ当に知るべし法華は部に約するときは則ち
華嚴・般若を破す」云云。

一、余深法中の事

囑累品に云く「若し衆生有て信受せざらん者には当に如来の余の

深法の中に於て示教利喜すべし」文句の七に云く「示教利喜・示は

即ち示転・教は即ち勸転・利喜は即ち証転なり」、玄義の六に云く

「余とは方便を帯するなり深とは中道を明すなり方便を帯して

中道を明すは即ち別教なり」云云、又云く「但為に実を弘むるに

而も衆生信ぜ

ず須らく実の為に権を施すべし」釈籤の六に云く「有深復余とは

即ち別教の法なり入地を深と名け地前を余と名く」云云、文句の十

に云く「汝能く余深の法を以て仏慧を助申せば即ち善巧に仏の恩

を報ず」云云、疏記の十に云く「以偏助円は則ち此の意なり此の経

の上下一切皆然なり人之を見ずして三乗有りと謂うは謬れり」云

云。

一、三種教相の事

玄義に「教相を三と為す一に根性の融不融の相・二に化導の始終不始終の相・三に師弟の遠近不遠近の相」と云云、釈籤の一に云く「前の両意は迹門に約し後の一意は本門に約す」と云云、寂滅道場を以て元始と為す方便以下の五品の意なり。

第一、根性融「法華」不融「爾前」の相

華嚴・阿含・方等・般若・法華・各得道有り種熟脱を論ぜず、釈籤

の一に云く「又今文の諸義は凡そ一の科皆先ず四教に約して以て麤妙を判ずるときは則ち前三を麤と為し後一を妙と為す次に五

味に約して以て麤妙を判ずるときは則ち前四味を麤と為し醍醐を

妙と為す、全く上下の文意を推求せずして直ちに一語を指して法華

は華嚴より劣れりと謂えるは幾許のりぞや、りぞや」と云云。

華嚴は一麤一妙

相待妙

麤妙を判ず

阿あ含ごんは单だん麁そ

無む妙めう

ほうとう 方等は三麁一妙

はんにか 般若は二麁一妙

ほっけ 法華は二妙有り

そつたいみょう 相待妙

そつたいみょう 相待妙

そつたいみょう 相待妙は

ぜつたいみょう 絶待妙は

そみょう 麁妙を判ず

そみょう 麁妙を判ず

そみょう 麁妙を判ず

そ 麁を開して妙を顕わす

しゃくせん 釈籤の十に云く「唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を顕わ

す、玄義の二に云く「此の妙・彼の妙・妙の義殊なること無し 約教

相待前 三を麁と為し後 二を妙と為す但方便を帯すると方便を帯せざるを以

て異と為すのみ云云、約部相前四味を麁と為し醍醐を妙と為す 同十に云く「初後の仏慧・円頓の

義齋し「一往の釈、文句の五に云く「今の如く始の如く今の如し二

無く異無し云云、弘決の五に云く「惑者未だ見ず尚華嚴を指す唯

華嚴円頓の名を知つて彼の部の兼帯の説に味し全く法華絶待の意

を失う云云、釈籤の二に云く「故に諸味の中・円融有りと雖も全

く二妙無し」と同三に云く「若し

但四教しきようの中の円を判じて之これを名けて妙と為す諸經しききように皆是みなかくのごとの如き
の円の義なん有り何ぞ妙と称せざる故ゆえに復更またに部に約し味に約して方まさに
今經こんききようの教も円部も円なることを顕あらわすべし、若し教に約せざれば
則すなわち教の妙を知らず若し味に約せざれば則すなわち部の妙を知らず、
爾前にぜんの相待妙そつたいみきようとは前三ぜんさんを蔵ぞう通別とつべつ麁そと為し後な・一円を妙と為す云云、
法華ほつけの相待妙そつたいみきようとは前四味華嚴ぜんしほみ・阿含あくわん・方等ほうとう・般若ぼんげを麁そと為し醍醐だいごを妙と
為す三千塵点大通さんぜんじんてんだいとうを以て元始げんじと為す。

第二、化導始けどう・中間終ちゆうげん・靈山の初住不始終りやうざんのかしゆじゆの相さう 化城喻品けじやうゆほんの意いなり

種熟脱しゆじゆくだつを論ず種は大通だいつうなり熟は中間ちゆうげん乃至今日ないしききようの四味しほみなり脱は

今の法華ほつけなり玄げんの一いつに云く「異いとは余教よききようは当機とうき益物えきぶつにして如来にょらい施化せけ

の意いを説かず此の經は仏の教を設け給たまう元始げんじ巧たくみに衆生しゆじやうの為ために頓とん・

漸ぜん・不定ふじやう・顯けん・密みつの種子しゆしを作なす

を明あきらす云云、釈籤しやくせんの一いつに云く「漸ぜん及び不定ふじやうに寄よすと雖いえども余教よききようを以

て種と為さず故に巧為と云う「止觀の三に云く若し初業に常を知
るを作さずんば三蔵の歸戒羯磨悉く成就せず」と、弘決の三に云く
「きょう しょうもん きんかい
今日の声聞・禁戒を

具ぐすることは良よに久遠くおんの初業しよに常じょうを聞きくに由よる若もし昔聞しよきんかずんば
小尚なほ具ぐせず況いはんやまたや復大ふたをやこ云い云い、弘決くけつの三さんに云いく「若もし全ぜんく未いまだ
曾かつて大乘だいじようの常じょうを聞きかずんば既すでに小果せうくわ無なし誰たれか禁戒きんかいの具ぐ不ふ具ぐを論ろん
ぜんやこ云い云い、又また云いく「羯磨かつま不成ふじやうと言いうは所謂いわけ久遠くおん必かならず大無だいむんば
則すなわち小乘しよじようの乗のりる法ほふを成なぜざらしめん本無ほんむきを以もつての故ゆゑに諸行しよぎやう成な
ぜざること樹じゆの根無こんむければ華果けかを成なぜざるが如ごとし、時機じき未いまだ熟じやくせ
ずんば権けんに小せうの名なを立たつ汝等なんじの行ぎやうずる所是これ菩薩ぼさつの道だう、始はじめて記き
を得えて方まさに大人だいじんと名なくるに非あらずこ「釈籤しやくせんの一いつに云いく「法譬ほふび二周にしゆ得益とくやくの
徒やからは往日やうじつ結縁けちえんの輩やからに非あらずなこと莫なしこ云い云い。

五百塵点久遠を以て元始と為す寿量品の意なり

五百塵点靈山の間

第三に師弟の遠近不遠近の相

種熟脱を論ず

種は久遠熟は過去脱は近く世世番番の成道今日の法華なり
玄義の一に云く「又衆經に咸く云く道樹に師の実智始めて満じ道
樹を起て始めて權智を施す今の經は師の權実・道樹の前に在て久久
に已に満すと明かす、諸經に明かす二乗の弟子は実智に入ること
を得ず亦權智を施すこと能わず、今の經に明かす弟子の入実は
甚だ久し、亦先より解して權を行ず、又衆經は尚道樹の前の師
と弟子との近近
の權実を論ぜず況や復た遠遠をや、今の經は道樹の前の權実長遠
なることを明かす補処世界を数うるに知らず況や其の塵数をや」經
に云く「昔未だ曾て説ざる所今皆當に聞くことを得べし慇懃に
稱讚すること良に所以有るなり、當に知るべし此の經は諸經に異
ることを「釈籤の一に云く「二乗猶小果に住す故に不入と云う豈に
能く他

を化せんや、故ゆえに権けんを施ほどこさず、次つぎに今経こんきやうを明あきらかす満願まんがん等の如ごとき先まへに已すでに実じつに入る説法せっぽう第一だいいちなり、故ゆえに先まへより解げして権けんを行なずることことを弘くわの七しちに云いく「過か去こに種しゆを下くだすは現げん在ざいに重かさねて聞きいて成じやう熟じゆくの益えきを得え、未いまだ曾かつて種しゆを

下さざるは現在に種を成し未来に方に益す故に三世の益皆法輪に
因る」と薬草喻品に云く「汝等が所行は是れ菩薩の道なり漸漸に
修学して悉く当に成仏すべし」と云云、記の一に云く「一時・一説・
一念の中・三世・九世・種熟脱の三あり」弟子品に云く「諸の比丘
諦かに聴け仏子所行の道善く方便を学ぶが故に思議することを得
可からず衆の小法を樂つて而して大智を畏るることを知る、是の故
に諸の菩薩・声聞・縁覺と作る無数の方便を以て諸の衆生の
類を化す」と云云、又云く「内に菩薩の行を秘し外に是れ声聞なるこ
とを現す小欲にして生死を厭えども實には自ら仏土を淨む、衆に
三毒有ることを示し又邪見の相を現す我が弟子是くの如く方便し
て衆生を度す」と云云、
ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん
「願わくば我未来に於て長寿を以て衆生を度せん」と云云、玄義の七

に云く「但本極の法身・微妙深遠なり仏若し説かずんば弥勒尚暗し
何に況や下地をや何に況や凡夫をや」云云、伝教大師の秀句の下に
云く「浅は易し深は難し釈迦の所判なり浅を去つて深に就くは
丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に
敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」
云云、又云く「謹みて法華經・法師品の偈を案ずるに云く薬王今汝
に告ぐ我か所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり
當に知るべし斯の法華經は諸經の中の最為第一なり」と、釈迦世尊
宗を立つるの言は法華を極と為す金口の校量なり深く信受す
可きか。

八七

一代五時継図

658P

だいろん 大論に云く

百卷竜樹菩薩の造如来滅後七百年出世の人なり

しゅっけ 十九出家

じょうどう 三十成道

ねはん 八十涅槃

ねはんぎょう 涅槃經に云く

いっしゅうにん 八十人滅

あこんぎょうまた 阿含經亦此の說有り云云、

せつじよ 兼 説処は中天竺

てんじくじやくめつどうじょうぼ 寂滅道場菩提樹下

ごんだいじょう 権大乘

べっきょう 別教

六十卷

くやくぶつだ 旧訳仏陀跋多

さんぞう 羅三蔵の訳

三七日

八十卷

しんやく 新訳実叉難陀

さんぞう 三蔵の訳

けこんぎょう 華嚴經

えんきょう 円教

四十卷

にゅうみ 乳味

けつきょう 結經は梵網經

撰せん
す

教主きょうしゅ

他受用報身如来たじゅゆうほうしんにょらい

旧説くやくの説

毘盧遮那如来びるしゃなにょらい

新説しんやくの説

所居しようこの土は仮立実報土かりゆうじつほうど又は蓮華蔵世界れんげぞうせかいと云う

愚法ぐぼう二乗經にじやうきやう

一いちに小乗教しよじやうきやう

一切いっさいの小乗經しよじやうきやうを

空

華嚴宗五教を立つ

二に大乘始教

方等部の經を撰す

不空

三に大乘終教

般若・涅槃經を撰す

三乗の中の絶言の理を説く

四に頓教

一切經中の頓悟成仏の旨

を撰す

別教一乗

五に円教

華嚴・法華を撰す

馬鳴菩薩

起信論を造る

竜樹菩薩

十住毘婆沙論を造る

天親菩薩

十地論を造る

杜順和尚

終南山の住文殊の化身云云

智儼法師

至相寺の住

天竺

唐土 もろこし

法蔵大師 ほうぞうだいし

京兆涼山大華寺の住「又賢首 けんしゅ

大師 だいしと云い又康蔵大師 だいしと云う」

祖師 そし

澄観法師 ちようかんほっし

「清涼山 せいりよう大華寺の住又清涼 せいりよう

国師と云う」

審祥大和尚 しんじようわじよう

「大安寺 だいあんじの住新羅国 しらぎの人」

日本最初伝 にほんさいしよ

慈訓小僧都 そうず

明哲律師 りっし

良弁僧正 りようべんそうじよう

東大寺 とうだいじの本願 ほんがん

日本 にほん

等定大僧都そうず

道雄僧都どうゆうそうず

海印寺の住

一向小乘いっこうしょうじょう

波羅奈国・鹿野園はらな ろくやおん

一に増一阿含あこん

人天の因果を明すにんてん いんが

十二年説

二に中阿含あこん

真寂の深義を明すしんぎ

阿含經あこんきょう

酪味らくみ

三に雑阿含あこん

諸の禪定を明すもろもろぜんじょう

但三蔵教さんぞう

四に長阿含あこん

諸の外道を破すもろもろげどう は

結經は遺教經けつきょう ゆいきょうきょう

有部顯宗六百頌うぶ げんそう りくはくじゆ

天竺の人なりてんじく

四阿含經あこんきょう

俱舍宗 くしゃしゆう

如来滅後九百年の人なり にょらいめつご

俱舍論「三十卷・三乘法を明かす」 くしゃろん さんじゅうさん さんじょう

世親菩薩の造 せしんぼさつ

新訳 しんやく

経部密宗十万頌・天親菩薩の造天竺には婆藪畔豆と てんじんぼさつ てんじく

云うなり

玄奘三蔵 げんじょうさんぞう

旧訳 くやく

光法師 こうぼうし

宝法師 ほうぼうし

唐土 たうど

神泰

円暉

祖そ師し

惠暉

道麟

善報

日本にほん

伝灯満位の勝貴「延暦廿五年法相宗に付えんりやく

す私ひそかに云いわく余抄いに云いう延暦えんりやく十三年官付云云」

訶梨跋摩三蔵さんぞう・天竺てんじくの人ここ此こに師子しし鎧よろいと云いう

成実宗じょうじつ

成実論十六卷「二十七賢聖けんせいの位を明す二百二品」

如来滅後九百年にょらいめつご

羅什三蔵らしやくさんぞう

唐土もろこし

僧叡

智蔵ちぞう・開善寺の僧

日本にほん

伝灯満位の賢融えんりやく延暦えんりやく二十五年三論さんろん宗東大寺僧しゅうとうだいじ

祖そ師し

に付す余抄いに云いく延暦えんりやく十三年云云

律宗 りっしゅう

如来成道 にょらいじょうだう

五年の後律を説く、僧祇律之を説く、或は十
二年の後須提によつて戒律を制す四分律之を説く

一 曇無徳部

二 薩婆多部 あつぽ

三 弥沙塞部

四 婆龕富羅部

五 迦葉遺部 かしょう

五部を明かす あきら

五篇七聚を立つ

一には波羅夷

二には僧殘

三には偷蘭遮

四には波逸提

五には波羅提提舍尼

六には突吉羅

七には惡說

一には波羅夷篇

二には僧伽婆尸沙篇

三には波逸提篇

四には波羅提提舍尼篇

五には突吉羅篇

多三藏 さんぞう

仏滅後三百年 ぶつめつごさん

道宣律師 どうせんりつし

弟子鑒真和尚 でしがんじんわじょう

鑒真和尚は唐土の人なり、東大寺戒壇院を

祖師 そし

天竺 てんじく

唐土 もろこし

日本 にほん

立てし人なり。

方等部
ほうとうぶ

蔵通別円
ぞうつうべつえん

十六年説時不定
じゅうろくねんせつじふじょう

対

権大乘
ごんだいじょう

生蘇味
しょうそみ

結経は瓔珞経
けつきょうようらく

又有相宗と云う

法相宗

「惣じては一切経に依り別し

教とも云う

ては六経十一部に依る」

教とも云う

教とも云う

解深密經

瑜伽論百卷弥勒說無著筆

唯識論

有初 又有相

三時教を立つ 空昔 又無相

中今 又中道

如来滅後九百年に出づ

弥勒菩薩

無著菩薩

世親菩薩

護法菩薩

天竺

祖そ
師し

唐もろこし
土こし

戒かい賢けん論ろん師し

玄げん奘じょう三さん蔵そう

慈じ恩おん大だい師し

智ち周しゅう法ほつ師し

智ち鳳ほう

義ぎ淵えん

摩ま訶か陀だ国こくの
大だい那な爛らん陀だ寺じの
人ひと

弟で子し四し人にん

法ほつ師し

尚しょう法ほつ師し

光こう法ほつ師し

基き法ほつ師し

日本 にほん

空晴

真喜

善議 ぜんぎ

勤操 こんそう

観經一卷 かんきょう

良耶舎の訳

宋の代

雙観經二卷 そうかんきょう

康僧鎧の訳 ようい

魏の代

浄土宗 じょうどしゅう

阿弥陀經一卷 あみだ

鳩摩羅什の訳 くまらじゅう

後秦代 こうしん

浄土論一卷 じょうどろん

天親菩薩の造菩提流支三蔵の訳 てんじんぼさつ

天竺の人なり てんじく

天竺 てんじく

菩提流支三蔵 ぼだいりゅうしさんそう

曇鸞法師 どんらんほっし

難行 なんぎょう

易行を立てて一切の いぎょう

経論を撰するなり きょうろん

道綽禅师 どうしゆくぜん

聖道 しやうどう

浄土の二門を立てて じょうど

一切の経論を撰するなり いっさい

祖師そし

唐土もろこし

善導ぜんどう和尚わじょう

正しやう雜ざつ

の二行を立てて一切いっさいの

經論きやうろんを撰せんするなり

懷感えかん禪師ぜん

群疑うたがい論を造つて一代いちだいの

聖教しやうきやうを判はんずるなり

小康こくわう法師ほふし

已上もろこし、五人唐土もろこしの人なり

日本にほん

法然ほうねん上人しやうにん

選せん択ちやく集しゆ「一卷」

「捨しや閉へい閣かく拋ほう

入開入販にっかいにっはん」

禪宗ぜんしゆ

如來にょらい禪

楞伽りやうが經きやう

金剛こんごう般若はんにや經きやう等に依よる、又は教禪

とも云いふ

祖師そし禪

教外きやうがい別べつ伝でん不立ふりちゆう文字もんじ云云

西天せいてんの二十八祖

別紙これあに之有り

菩提達磨ぼだいだるま禪師ぜん

天竺てんじくの人なり

祖そ師し

僧ぞう
惠可けい禪師ぜん

東土とうど六祖

道信だうしん

弘忍こうにん

惠能えいねい

真言宗しんごんしゅう

胎藏界たいざう

七百よそん余尊

金剛界こんごう

五百よそん余尊

大日經だいにちぎきょう「六卷卅一品」善無畏ぜんむい三藏さんざうの訳「開元かいげん四年中てんじく天竺てんじくの人なり」

供養法くじやうほうの巻を加えて七卷なり、一卷いちほん・五品

金剛頂經こんごうちやうぎきょう「三卷・一品」金剛智こんごうち三藏さんざうの訳「開元かいげん八年南天竺てんじくの人な

り」

蘇そ悉しつ地ち經きょう「三卷卅四品」善ぜん無む畏い三藏さんぞうのし記き
菩ぼ提だい心しん論ろん「一卷七丁」竜りゅう猛もう菩ぼ薩さつのし造ぞう不ふ空くうのし記き 或あるはふ不く空うのし造ぞう

大日如来だいにちによらい

金剛薩捶こんごうさつち

竜猛菩薩りゅうもうぼさつ

竜智

已上天竺てんじくの人ひとなり

天竺てんじく

祖そ
師し

日に
本ほん

唐もろこし
土し

善ぜん無むい畏い三さん蔵ぞう

金こん剛ごう智ち

不ふ空くう

惠え果くわ

弘こう法ぼう

真しん雅が

源げん仁じん

聖せい宝ぼう

淳ちん祐ゆう

元げん杲こう

仁にん海かい

成せい尊そん

義ぎ範はん

又また空くう海かいと云いう

結集 けつじゆつ

迦旃延 かせんねん

華嚴 けごん

方等 ほうとう

般若 はんにや

法華 ほっけ

涅槃經 ねはんぎよう

四に般若波羅蜜多蔵を撰するなり せつ

四に般若波羅蜜多蔵「熟蘇味文殊」

範俊

五蔵

一に娑多覽蔵「乳味経蔵」阿難の

二に毘奈耶蔵「酪味律蔵」優婆利

三に阿毘達磨蔵「生蘇味論蔵」

五に陀羅尼蔵「醍醐味・金剛蔵」

大いにちきよう こんごうちょうきよう
大日經・金剛頂經 蘇悉地經を撰す

弘法大師・義立 一 異生羝羊

住心「凡夫悪人」

二 愚童持斎住

心「凡夫善人」

十住心

三 嬰童無畏

住心「外道」

四 唯蘊無我住

心「声聞」

五 拔業因種住

心「縁覚」

理趣般若經「一卷」惣じて八部の般若有り

六 他縁大乘

住心「法相宗」

大品般若「四十卷」羅什三蔵の訳「旧訳」

七覚心不生

住心「三論宗」

大般若経「六百卷」玄奘三蔵の訳「新訳」

八如実一道

住心「法華宗」

般若部
通別円

九極無自性住

心「華嚴宗」

帯

十秘密莊嚴住

心「真言宗」

権大乘

十四年の説・或は三十年の説

熟蘇味

結経は仁王経

さんろんしゅう
三論宗

百論「二卷」提婆菩薩の造

中論「四卷」竜樹菩薩の造

十二門論「一卷」竜樹菩薩の造

大論だいろんを加えて四論宗とも云う。

二蔵

一に声聞蔵しょうもん

二に菩薩蔵ぼさつくそう

三転法論

一に根本法論こんぽん

二に枝末法論しまつ

三に撰末歸本法論きほん

天竺てんじく

提婆だいば

竜樹りゅうじゆ

馬鳴めみょう

文殊もんじゆ

竜智

清弁しやうべん

智光ちこう

羅什らじゆつ

道朗

法朗

祖師そし

唐土もろこし

日本にほん

吉蔵きちぞう「亦嘉祥大師と云う嘉祥寺の僧なり」
観勒かんろく僧正そうじょう 百济国くだらの人なり
惠えい 高麗国こまの人なり
善議ぜんぎ
勤操ごんそう

法華經 ほけきょう

妙法蓮華經 みょうほうれんげきょう

羅什三蔵の訳 らかじゅうさんぞう

正法華經 ほけきょう

法護三蔵の訳 まもさんぞう

添品法華經 てんぽんほけきょう

闍那笈多の訳 じゃな

薩咩分陀梨法華 さつ

新訳 しんやく

八箇年の説 はちかねん

実大乘 じつだいじょう

醍醐味 だいごみ

純円の説 じゆんえん

結経は普賢經 けつきょう ふげん

曇無蜜多の訳 「宋代」

法華宗 ほつげしゅう

仏立宗 ぶつりゅうしゅう

四教五時を立てて一代教を撰す しきよつ いちだい

天台宗 てんだいしゅう

依憑宗 えびょう

寅時

卯時

辰時

巳時

午時

一
に三蔵教さんぞう

諸部しよ小乘しようじよ
の実有の所説しよせつを撰せつす

華嚴けごん

阿含あごん

方等ほうとう

般若はんにや

法華ほっけ

祖そ師し

師

涅槃ねはんぎよう經きやう

二つうきように通教つうきよう
三べつきように別教べつきよう
四えんきように円教えんきよう

天竺てんじく

唐土もろこし

日本にほん

諸部しよの如幻そく即空そくの旨むねを撰せつす

諸部しよの大乗だいじよう並びに歴劫りやくこつ行ぎやうの所説しよせつを撰せつす

諸部しよの大乗だいじよう經きやうの速疾そくしつ頓とん成じやうの所説しよせつを撰せつす

大覺だいかく世尊せそん

竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつ

天台てんだい大師だいし

章安しやうあん大師だいし

妙樂みやうらく大師だいし

伝教でんきやう大師だいし

一日一夜いちにちいっやの説せつ

醍醐だいご味み

結經けつきやうは像法ぞうほう決疑けつぎきやう經きやう

一北地

涅槃宗の祖師ねはんそし

流支師るし

一 虎丘の岌法師ほっし

二 菩提ぼだい

三 光統こうず

法師ほっし

二 愛法師ほっし

北七

四 護身まもの

南三法師ほっし

三 法雲法師ほううんほっし

「光宅寺の僧なり」こうたく

五 耆闍の

法師ほっし

六 北地の

禪師ぜんし

七 北地の

禪師ぜんし

法華の外は小乗の事

壽量品じゆりようぽんに云くい小法いを樂ねがう徳薄垢重とくはつくじゆうの者こ是この人の為ために我少わきより
出家しゆつげして阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを得とたりと説とく云云。

文句もんく九くに云くい始成しじようを説ときたもうことは皆みな小法いを樂ねがえる者なと為す
のみ云云。

疏記しよきに云くい但ただし近成こんじようを樂ねがう者な・樂小れくせうの者なと為すは華嚴けこんの頓部とんぶ・
諸味しよみの中ちゆうの円えんなり文。

天親菩薩てんじんぼさつの法華論ほっけろんに云くい一往三蔵いちおうさんぞうを名なけて小乘せうじようと為なし再往さいおうは
三教さんけうを名なけて小乘せうじようと為なす文。

文句もんくの九くに云くい小せうを樂ねがう者しは小乘せうじようの人にに非あざるなり、乃すち是これ近
説とを樂ねがう者なを小せうと為なすのみ文。

疏記しよきの九くに云くい樂れく小法せうぽうとは久近きうこんを以もて相望さうぼうして小せうと為なす文。
秀句しゆくの下したに云くい仏滅度ほとけめつどの後の六七百年ろくしちひゃくねんの經宗論宗きようしゆろんしんしゆ九百年きうひゃくねんの中

の法相ほつそうの一宗いちしゅうは歴劫りきやく修行しゆぎやうを説しいて衆生しゆじやうを引擧いんしやうす是かくのゆえの故みけんに未頭しんじつ眞実しんじつなり云云。

伝でん教大師きやうだいしの依憑えびよう集じふに云いく新来しんらいの眞言家しんごんは則すなわち筆受ひつじゆの相承そうじやうを混みんし旧到くとうの華嚴家けごんは則すなわち影響えいぎやうの規模きもを隠かくし空くうの三論宗さんろんししゆうは彈呵だんかの屈耻くつちを忘れて称心しやうしんの心醉しんすいを覆くつがえし、著有じやくうの法相宗ほつそうししゆうは僕陽ぼくようの帰依きえを非ひして青竜せいりゆうの判經はんぎやうを撥はつす云云。

秀句しゆくの下したに云いく誠まことに願ねがは一乘いちじやうの君子くんし仏説ぶつせつに依憑えびようして口伝くでんを信しんずること莫なれ、仰あおいで誠文まことを信しんじて偽会ぎえを信しんずること莫なれ、天台てんだい所しよ釈しやくの法華宗ほつけししゆうは諸宗しよししゆうに勝まさる寧むしろ所伝しよでんを空むなしゆうせんや、又また云いく謹つしみて無量むりやう義經ぎぎやうを案あずるに云いく次に方等ほうとう十一部經じふいちぶぎやう・摩訶般若まかはんにか・華嚴けごん海空かいくうを説しいて菩薩ぼなつの歴劫りきやく修行しゆぎやうを宣説せんせつす經文已上だいたう大唐だいとうの伝いわに云いく方等ほうとう十二部經じふにぶぎやうとは法相宗ほつそうししゆう

の所依しよえの經ぎやうなり、摩訶般若まかはんにかとは三論宗さんろんししゆうの所依しよえの經ぎやうなり、華嚴けごん海空かいくう

とは華嚴宗けごんしゅうの所依しよえの經きやうなり俱ともに歴劫りやく修行しゆぎやうを説いいて未いまだ大直道じきどうを知ららず文ぶん。

妙樂みょうらく大師だいしの弘決くけつの九くに云いく法華ほっけ以前いぜんは猶なお是これ外道げどうの弟子でしなり文ぶん。

傳でん教ぎょう大師だいしの守しゅ護ご章しょうの上じやうに云いく妙みょう法ほうの外ほか更いっくに一句いっくの經きやう無なし文ぶん。

智ち証じやう大師だいし授じゆ決けつ集じゆの上じやうに云いく經きやうに大小だいしやう無なく理りに偏へん円えん無なからん

一切いっさい・人ひとに依よらば仏ぶつ說せつ無む用ようならん、若もし然しからずんば文ぶんに擲ちやくて伝でんう

可べし己おのが父ちちは国こく王おうに勝まさると執しゆすること莫なれ、又また他たに劣せうると謂おもうこと

莫なれ、然しかも家か家かの尊そん勝しやう・国こく国こくの高た貴き大だい小しやう各かく分ぶん齊さい有あり、土つちを以もつて金かね

と為なせば家か家かに之これ有あり金かねを以もつて金かねと為なせば有あ無む処ちよを異いにす、久く成じやうの

本ほん・開かい權けんの妙みょう・法ほつ華け独どり妙みょうに独ひとり勝まさる、強しいて抑おさえて之これを喪そうし仏ぶつ說せつ

を哽こう塞そくす如に來らいを咎とがむ合あし伝でん者しやを非ひすること莫なれ、又また云いく国こく国こくとは

五ご味み、家か家かとは四し教きやう八はつ教きやうなり文ぶん。

天てん台だいの玄げん義ぎの十じゆに云いく若もし余よ教きやうを弘ひろむるには教きやう相そうを明あかさざれど

も義ぎに於おいて傷いたむこと無なし、法ほつ華けを弘ひろむるには教きやう相そうを明あかさざれば

文もん義ぎ闕かくること有あり、但た聖せい意い幽ゆう隱いんにして教きやう法ほう弥い難なんし前ぜん代だいの諸しよ師し

或あるは名な匠じやうに祖そ承じやうし、或あるは思しい袖しゆ衿きんより出でず阡せん陌はく縱じやう横かうなりと雖いえども

孰れか是なることを知ること莫し、然るに義雙び立たず理兩つながら存する無し、若し深く所以有りて復修多羅と合する者は録して之を用ゆ文無く義無きは信受す可からずと。

一、開会の事

壽量品に云く諸の経方に依つて好き薬草の色香美味皆悉く具足するを求めて擣 和合す文。

文句の九に云く経方とは即ち十二部経なり薬草は即ち教の所詮の八万の法門なり、香美味とは戒定慧なり、空観は擣くが如く仮観はうが如く中観は合するが如し文。

大經に云く衆流海に入りて同一鹹味故に海味と云う文。玄の三に云く諸水・海に入れば同一鹹味なり、諸智・如実智に入れば本の名字を失すと文。

一、是諸經之王と云う事

信^{しん}解^げ品^{ひん}に云^いく並^{なら}びに親^{しん}族^{ぞく} 国^{こく}王^{おう}・大^{だい}臣^{しん}を会^えす。

もんく
文句の六に云く國王とは一切漸頓の諸経なり。

じよき
疏記の六に云く諸の小王を廢して唯一の王を立つ是の故に法華
おうちゆつ

を王中の王と名く文。

一、法華已前の説を権と云う事

げんぎ
玄義の三に云く涅槃の聖行品に云く追つて衆経を分別す故に
つぶさ
具に四種の四諦を説くなり、徳王品に追つて衆経を泯す文。

しやくせん
釈籤の三に云く涅槃に追と言うは退なり劫つて更に前の諸味を
ぶんべつ
分別す、泯とは合会なり法華より已前の諸経皆泯す此の意は則ち
ほっけ
法華の部に順ずるなり文。

ぐ
弘の三に云く彼の経の四教皆常住を知る故に本意は円に在りと
げんぎ
玄義の四に云く法華の意を得る者は涅槃に於て次第の五行を
もち
用いざるなり文。

一、常好坐禅と云う事

安らくきようぼん
安楽行品に云く亦師と同ずることを樂わず常に坐禅を好む文。
ふげん
普賢經に云く専ら大乘を誦し三昧に入らず文、又云く其の
だいじょうきようてん
大乘經典を讀誦するもの有らば諸悪永く滅して仏惠より生ずる
なり文。

一、天台宗阿弥陀の事

ぐけつ
弘決の二に云く諸經の讚する所多く弥陀に在り故に西方を以て
いちじゆん
一准と為す文、私に云く此の釈・文殊説・文殊問の両經に依るな
り、常坐三昧の下。

しかん
止觀の二に云く弥陀を唱うるは即ち是れ十方の仏を唱うる
くどく
功德と等し但専ら弥陀を以て法門の主と為す、要を挙げて之を
のたま
言わば步步・声声・念念・唯阿弥陀仏に在り文、私に云く此の釈般舟
さんまい
三昧經に依るなり常行三昧の下・

くせつともく
口説 の下。

又云く意に止観を論ぜば西方阿弥陀仏を念ず此れを去ること
十萬億仏刹と文、此の釈般舟三昧の經の文に依るなり常行三昧
の下。

又云く陀羅尼咒を誦し三宝十仏を請じ摩訶祖持陀羅尼を思惟
せよ文、此の釈は方等陀羅尼經に依る半行半坐の三昧の下。

又云く三宝・七仏・釈尊・弥陀・三陀羅尼・二菩薩・聖衆を礼せ
よ、此の釈は諸經に依る非行・非坐三昧の下。

玄義の九に云く諸行は傍の真相を以て躰と為し体行俱に麁なり
文、又云く諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て体と為す
体行俱に麁なり文。

已上四十余年の經釈

止觀の二に云く別に一卷有り法華三昧と名く是れ天台大師の

著す所なり、世に流伝して行者之を宗ぶ、此れ則ち説を兼ね復別に論ぜざるなり文。

法華三昧に云く道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦未だ必ず形像舍利並に余の經典を安ずることを須いず唯法華經を置け文。

止觀の二に云く意の止觀とは普賢觀に云く専ら大乘を誦して三昧に入らず日夜六時に六根の罪を懺す、安樂行品に云く諸法に於て行ずる所無く亦不分別を行ぜざれ文。

法華經に云く乃至余經の一偈をも受けざれ文。

又云く復舍利を安ずることを須いず文。

一、天台念仏の事

止観しかんの六むに云いく見思けんじの惑わく即すなわち是これ仏法界ぶつぽうかいなりと覺さとして法身ほっしんを破やぶせざるを念仏ねんぶつと名なくと文ぶん。

止観しかん二にに云いく意止観いしとは普賢觀ふげんに云いく専もつら大乘だいじようを誦じゆし三昧さんまいに入いらず日夜六時ろくじに六根ろくこんの罪つみを懺さんす安樂行品あんらくぎやうぽんに云いく諸法しよほうに於おいて行いずる所なく無またく亦ぶん不べつ分別ぶんべつを行いぜざれ。

秀句しゆきうの下したに云いく能化のうけの竜女りゆうにょ歷劫りやくの行無しよし所化しよけの衆生しゆじやうも亦また歷劫りやく無なし文ぶん。

一、法華成仏ほつげじやうぶつの人数にんずうの事こと

二の卷舎利弗しゃりほつは華光げかう如来にょらい。三の卷迦葉かしようは光明こうみやう如来にょらい。須菩提しよぼだいは名相みやうそう如来にょらい。迦旃延かせんねんは閻浮那えんぶな提金光だいこんこう如来にょらい。目連もくれんは多摩羅跋旃檀香たまらばせんたんかう如来にょらい。四の卷富楼那ふるなは法明ほうみやう如来にょらい。陳如等ちんによの千二百せんにひゃくは普明ふみやう如来にょらい。阿難あなんは山海慧さんかいえい自在通王じざいとうおう佛ぶつ。羅らは蹈七宝華とうしつほうげ如来にょらい。五の卷提婆達多たいばだたは天王てんのう如来にょらい。摩訶波闍波堤まかはじゃはだい比丘尼びくには一切衆生いっさいしゆじやう。喜見きけん佛ぶつ。耶輸陀羅やしゆたら女にょは

具足ぐそく千万光相せんまんこうそう如來にょらい・娑竭羅しゃかくら龍王りゅうおうの女むすめの八歲はつさいの龍女りゅうにょは無照光如來にょらい

正法華經の説なり提婆品たいばに云いわく當時とうじの衆會しゅうえ皆みな龍女りゅうにょを見るみる忽然こつねんの間にまに變かへじて男子なんし

と成なて菩薩ぼさつの行ぎやうを具ぐして即すなわち南方なんぽう無垢むく世界せかいに往ゆき宝蓮華ほうれんげに坐まして

等じょうかく正覺しょうかくを成なじ三十二相さんじふにさう・八十種好普しちじゅうはちしうこうふねく十方じゅうぽう一切衆生いっさいしゆじやうの為ために

妙法みょうぽうを演說えんせつす文ぶん。

又いわ云いく爾その時ときに娑婆世界しゃばせかいの菩薩ぼさつ・声聞しやうもん・天龍てんりゅう・八部はちぶ・人ひとと非人ひにんと

皆みな遙はるかに彼かの龍女りゅうにょの成な仏ぶつして普あまねく時ときの會かいの人にん天てんの為ために法はふを説せつく

を見て心こころ大おほいに歡喜かんぎして遙はるかに敬禮きやうらいす文ぶん。

一、四十余年よんじゆうよねんの諸もろもろの經論きやうろんに女人にょにんを嫌きらう事こと

華嚴經けこんきやうに云いわく女人にょにんは地獄じじやくの使つかなり能よく仏ぶつの種子しゆしを断たつ外面うへんは

菩薩ぼさつに以もつて内心ないしんは夜叉やしやの如ごとしと文ぶん。

又いわ云いく一ひとび女人にょにんを見みれば能よく眼まなこの功徳くどくを失うしなう縦たとい大蛇だいじやを見みる

と雖いえども女人にょにんを見みる可べからずと文ぶん。

銀色女経ごんじきにきように云いわく三世さんぜの諸仏しよぶつの眼まなこは大地だいちに墮落だらくすとも法界ほっかいの諸もろもろの

女人にょにんは永とこく成仏じやうぶつの期き無ならんと文ぶん。

華嚴經けごんきやうに云いわく女人にょにんを見れば眼まなこ大地だいちに墮落だらくす何いかに況いわんやや犯はんすこと

一度ひとたびせば三惡道さんあくどうに墮おつ文ぶん。

十二仏名經に云く仮使法界に遍する大悲の諸菩薩も彼の女人の極業の障を降伏すること能わず文。

大論に云く女人を見ること一度なるすら永く輪廻の業を結ぶ、何に況や犯すこと一度せば定んで無間獄に墮すと文。

往生礼讚に云く女人と及び根欠と二乗種とは生せず文。

大論に云く女人は悪の根本なり一たび犯せば五百生彼の所生の処六趣の中に輪廻すと文。

華嚴經に云く女人は大魔王能く一切の人を食す現在には纏縛と作り後生は怨敵と為る文。

一、真言を用いざる事

伝教大師の依憑集の序に云く新来の真言家は則ち筆受の相承を泯す文。

安然の教時義の第二に云く問う天台宗の遺唐の決義に云く此の

大盧遮那經は天台五時の中に於て第三時方等部の撰なり彼の經の中に四乗を説くを以ての故に云云、此の義云何ん答う彼の決義に云く伝え聞く疏二十卷有り但未だ披見せず云云、此は是れ未だ經意を知らざる誤判なり、何なれば天台第三時の方等教は四教相對して大を以て小を斥い円を以て偏を弾ず、今大日經は応供正遍知衆生の樂に随つて四乗の法及び八部法を説きたもう是は一切智智一味云云、若し爾らば法華と同じと謂う可し何に方等弾斥の教に撰するや文。

広修維の唐決に云く問う大毘盧遮那一部七卷・薄伽梵・如来加持広大金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に之を演説す、大唐の中天竺国の三蔵・輸婆迦羅・唐には言う善無畏と訳す、今疑う如来の所説始め華嚴より終り涅槃に至るまで五時四教の為に統撰せざる所無し、今此の毘盧遮那經を以て何の部・何の時・

何いづれの教なにか之これを撰せつせん又法華ほっけの前説まへとや為なさん当まさに法華ほっけの後説ごと
や為なさん此こゝの義い云かん何、答こたへう謹つしみて經文きやうもんを尋たずぬるに方等部ほうとうぶに属ぞくす
声聞しやうもん・縁覚えんかくに被こごむらしむるが故ゆゑに不空羅索ふくうけんさく・大宝積だいほうしやく・大集だいしつ・大方等ほうとう・
金光明こんこうみやう・維摩ゆいま・楞伽りやうが・思益等しやくの經きやうと同味どうみなり、四教しきやう・四仏しぶつ

四土を具す今毘盧遮那經法界宮に於て説くことを顕す、乃ち是れ
法身寂光土なり勝に従つて名を受くるなり前後詳明す可し云云。

一、法華と諸經との勝劣の事

法華經第一

本門第一

已今当第一なり、葉王金汝に告ぐ諸經の中に於て最も其の上在り又云く
我が所説の諸經此の經の中に於て法華最第一なり云云

迹門第二

是經出世

涅槃經第二
無量義經第三「次に方等十二部經を説く」

華嚴經第四

般若經第五

蘇悉地經第六あるざればある或は復大般ある若ある經を転読すること七遍ある或は一百遍せよ

大日經第七 三国に未だ弘通せざる法門なり

一、鎮護国家の三部の事

法華經 ほけきょう

密嚴經 みつごんきょう

中央に法華經 ほけきょう

仁王經 にんのうきょう

法華經 ほけきょう

浄名經 じよつみやうきょう

勝鬘經 しょうまん

不空三蔵大曆に法華寺に之を置く ふくうさんぞうだいいき ほつけじ これ

唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立て とう だいいき こまてら あらた ほつけじ

脇士に両部の大日なり きょうじ だいにち

人王三十四代推古天王の御宇聖徳太子 すいこ きょうう しょうとくたいし

四天王寺に之を置く撰津国・難波郡 してんのう これ せつつ なにわぐん

仏法最初の寺なり ぶつぽうさいしよ

法華經 ほけきょう

金光明經 こんこうみょうきょう

仁王經 にんのうきょう

人王五十代桓武天皇の御宇伝 教大師 かんむてんのう ぎょうでんぎょうだいし

比叡山延曆寺止観院に之を置かる ひえいざんえんりやくじしかん これを置く

年分得度者二人 とくとどしや

一人は遮那業 しやな

一人は止観業 しかん

大日經 だいにちきょう

金剛頂經 こんこうちやうきょう

五十四代仁明天王之御宇 じんみょうてんわうのぎょう

慈覚大師比叡山東塔の西惣持院に之を置 じかくだいしひえいざん さいそうぢいんこれ

かる

蘇悉地經 そしつちきょう

御本尊は大日如来金蘇二疏十四卷之を安置 ごほんぞん だいにちによらいきんそ じよ これをあんち

せらる

一、悲華經の五百の大願等の事並びに示現等 ひげきょうのいほひのたいがんのじの事並びにしげん

第一百三願に云く我来世穢悪土の中に於て当に作仏すること だいじゅうさんごんにいづくらいせえあくどのおいまささぶつ

を得べし則ち十方浄土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべし をうすなわじゆつぽうじやうどひんずいしゆじやうをまさこれ

と文。

第一百十四願に云く我無始より來かた積集せる諸の大善根
一分我が身に留めず悉く衆生に施さんと文。

第一百十五願に云く十法界の諸の衆生無始より來かた造作する
所の極重五無間等の諸罪合して我が一人の罪と為す大地獄等に入
つて大悲代つて苦を受けんと文。

悲華經に云く我が滅度の後末法の中に於て大明神と現じて広く
衆生を度せんと文。

涅槃經の二に云く爾の時に如來・棺の中より手を出して阿難を招
き密かに言く汝悲泣すること勿れ我還つて復閻浮に生じて大明神
と現じて広く衆生を度せんと文。

又云く汝等悲泣すること莫れ遂に瞻部州に到つて衆生を度せん
が為の故に大明神と示現せんと文。

悲華經に云く第五百願に我來世穢惡土の中に於て大明神と現じ

てま当みに衆し生ゆを度じすべし文。み
う

大隅正八幡の石の銘に云く昔靈鷲山に在つて妙法華經を説く衆生を度せんが爲の故に大菩薩と示現すと文。

行教 和尚の夢の記に云く阿弥陀三尊

えんりやく

きのえさる

でんぎようだいしとかい

と

ためちくぜん

延暦二十三年甲申春、伝教大師渡海の願を遂げんが爲に筑前

うさ じんぐうじ

みずか

ほけきよう

こう

すなわ たくせん

いわ

宇佐の神宮寺に向つて自ら法華經を講ず、即ち託宣して云く我此の

ほうせい

さいねん

へ

わじよう

ちくう

せいきよう

法音を聞かずして久しく歳年を歴たり幸に和尚に値遇して正教を

ほうせい

さいねん

へ

わじよう

ちくう

せいきよう

聞くことを得て至誠に隨喜す何ぞ徳を謝するに足らん苟くも我が

しよじ

ほうえ

すなわ

たくせん

ずいき

なん

な

ぞ

徳

を謝

するに

足らん

苟くも

所持の法衣有り即ち託宣の主・齋殿を開いて手に紫の袈裟一を捧げ

わじよう

たてまつ

すなわ

たくせん

の主

さいでん

を開いて

手に

紫の

袈裟一

を捧げ

て和尚に上る、大悲力の故に幸に納受を垂れたまえ、是の時

ねぎ・はふりとう

これ

ずいき

元來

此く

の如き

の奇事

見ず

聞かざる

か

禰宜・祝等各各之を隨喜す元來此くの如きの奇事見ず聞かざるか

なと、彼の施す所の法衣は山王院に在り文。

なと、彼の施す所の法衣は山王院に在り文。

元慶元年丁酉十一月十三日

権大宮司

藤原実元

女七歳にして

託宣して云く我日本国をもちて大明神と示現す本躰は是れ釈迦

たくせん

いわ

にほんこく

たも

だいまいじん

じげん

本躰は是れ釈迦

たくせん

いわ

にほんこく

たも

だいまいじん

じげん

本躰は是れ釈迦

たくせん

いわ

にほんこく

たも

だいまいじん

如来なり。

延喜二年四月二日二歳計りの小児に託宣して云く我無量劫自り
以来度し難き衆生を教化す未度の衆生の為に此の中に在つて大
菩薩と示現すと文。

一、北野の天神法華經に歸して真言等を用いざる事

天神の託宣に云く吾円宗の法門に於て未だ心に飽かず仍つて
遠忌追善に當て須く密壇を改めて法華八講を修すべきなり、所以に
曼陀羅供を改めて法華八講を始め吉祥院の八講と号す是なり、彼
の院は北野天神の御旧跡なり。

一、賀茂大明神法華を信ずる事

一条院の御時代記に之有り

恵心の僧都加茂社に七箇日參籠して出離生死の道は何れの經に
か付く可きと祈誠有れば、示現して云く釈迦の説教は一乘に留り

諸しよ仏ぶつの成じよ道どうは妙みよ法ほうに在にり菩ぼ薩さつの六ろく度どは蓮れん華げに在にり二に乘じよの作さ仏ぶつは此こゝの經きやうに在にり文ぶん。

伝でんぎょうだいし教大師加茂大明神かもだいみょうじんに参詣さんけいして法華經ほけきょうを講こうず甲冑かっちゅうをぬいで
自らみずか布施ふせし給たまい畢おわんぬ。

文句もんくの十じゅうに云いわく得聞とくもん是經ぜきょう不老不死ふろうふしとは此これ須すべらく觀解かんげすべし不

老らうは是これ樂らく不死ふしは是これ常じょう此この經きょうを聞きいて常樂じょうらくの解げを得え文ぶん。

涅槃經ねはんぎょうの十三じゅうさんに云いわく是この諸もろもろの大乗だいじょう方等ほうとう經典きょうてんは復また無量むりょうの功德くどくを

成就じゅうじゆすと雖いえども是この經きょうに比ひせんと欲ほす喩たとえと為なることを得えず百倍千

倍せんまん百千万億倍なにしさんじゆひ乃至あた算數さんじゆ譬喩ひゆも及あぶこと能あたわざる所ななり、善男子ぜんなんし

譬たとえば牛うしより乳ちゆうを出だし乳ちゆうより酪たうを出だし酪たうより生蘇しやうそを出だし生蘇しやうそより

熟蘇じゆくそを出だし熟蘇じゆくそより醍醐だいごを出だし醍醐だいご最上さいじやうなり、若もし服ふくすること

有ある者は衆病しゆびやう皆除みなく所有しやうの諸藥しよやく悉ことごとく其この中ちゆうに入いるが如ごとし、善男子ぜんなんし

・仏またも亦是かくの如ごとし仏ぶつより十二部經じふにぶきやうを出生しゆつじやうし十二部經じふにぶきやうより修多羅しゆたら

を出だし修多羅しゆたらより方等經ほうとうきやうを出だし方等ほうとうより般若波羅蜜はんにやほらみつを出だし般若

波羅蜜はらみつより大涅槃ねはんを出だす猶な醍醐だいごの如ごとし、醍醐だいごと言たうは仏性ぶつじやうを喩たとう

仏性とは即ち是れ如来なり文。

一、金剛峯寺建立修業縁記に云く、吾入定の間・知足天に往いて

慈尊御前に参仕すること五十六億七千余歳の後慈尊下生の時必ず

随従して吾が旧跡を見る可し此の峯・等閑にすること勿れと文。

一、弘決に云く若し衆生・生死を出でず仏乘を慕わずと知らば魔・

是の人に於て猶親想を生ずと文。

五百問論に云く大千界塵数の仏を殺すは其の罪尚輕し、此の経

を毀謗すれば罪彼より多し永く地獄に入つて出期有ること無から

ん、読誦の者を毀皆する亦復是くの如し文。

一、広宣流布す可き法華の事

伝教大師の守護章に云く正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り

法華一乗の機今正しく是れ其の時なり何を以て知ることを得ん

安樂行品に云く末世法滅時と文。

唐とうの東とう・羯かつの西せい・人ひとを原たずぬれば則すなわち五濁ごじよくの生なま・
秀句しゅうくの下したに云いわく代しろを語ことばれば則すなわち像さうの終はつり末まつの初はつめ地ちを尋たずぬれば

闘争の時なり、經に云く如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや、此の言良に所以有るなり文。

道暹和尚の輔正記に云く法華の教興れば権教即ち廃す日出れば星隠れ功なるを見て拙を知る文。

法華經の安樂行品に云く一切世間怨多くして信じ難し文。

薬王品に云く我滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん文。

勧発品に云く我今神通力を以ての故に是の經を守護して如来滅後閻浮提の内に於て広く流布せしめて断絶せざらしめんと文。

文句の一に云く但当時大利益を獲るのみに非ず後、五百歳遠く妙道に沾わんと文。

一乗要決に云く日本一州・円機純一・朝野遠近・同く一乘に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す、安然の広釈に云く彼の天竺国には外道

有つて仏道を信ぜず亦小乗有つて大乘を許さず、其の大唐国には
道法有つて仏法を許さず亦小乗有つて大乘を許さず、我が日本国
には皆大乘を信じて一人として成仏を願わざること有ること無
し、瑜伽論に云く東方に小国有つて唯大乘の機のみ有り豈我が国
に非ずや文。

一、不謗人法の事

安楽行品に云く人及び經典の過を説くことを樂わざれ亦諸余
の法師を輕慢せざれ文。

止觀の十に云く夫れ仏説に兩説あり一に撰・二に折・安楽行の
長短を称ぜざるが如きは是れ撰の義なり、大經の刀杖を執持し
乃至首を斬る是れ折の義なり、与奪途を殊にすと雖も俱に利益せ
しむ文。

弘決の十に云く夫れ仏法兩説等は大經の執持刀杖等は第三に

云く善男子正法を護持する者五戒を受けず威儀を修せず乃至下の文は仙預国王等の文なり文。

文句の八に云く大経には偏に折伏を論じ一子地に住す何ぞ曾て撰受無からん、此の経には偏に撰受を明せど

も頭こづへ七分しちぶんに破やぶる折伏しやくぶく無なきに非あらず、各各おのづから一端いちたんを挙あげて時ときに適かなうのみ文。

顕戒論けんかいろんの中に云いわく論ろんじて曰いわく持品ぢひんの上位じゆうげは四行しぎやうを用もちいず安樂あんらくの

下位げんくは必ずかならず四行しぎやうを修しゆす摩訶薩まかさつの言定ごんぢやうんで上下じゆうじやうに通とほずと文。

文句もんくの八はちに云いわく持品ぢひんは八万はちまんの大士だいし忍力にんりき成じやうずる者もの此この土つちに弘経くきやうす

新得記しんとくぎの者ものは他土たつちに弘経くきやうす安樂行あんらくぎやうの一品いちひん文。

疏記しよきの八はちに云いわく持品ぢひんは即すなわち是これ悪世あくせの方軌ほうき安樂行あんらくぎやうは即すなわち是これ

始行しぎやうの方軌ほうきなり故ゆゑに住忍辱地にんにく等と云いう、安樂行品あんらくぎやうひんに云いわく他人たにん及びおよ

經典きやうてんの過あやまりを説とかざれ、他人たにんの好悪ちやうたん長短ちやうたんを説とかざれと文。

一、念仏ねんぶつの一切衆生いっさいしゆじやうの往生おつじやうせざる事こと六ろく道輪廻だうりんの事こと

善導ぜんどう和尚わじやうの玄義げんぎ分に云いわく問いうて曰いわく未審定いぶかしじやうぢやう散さんの二善出にぜんしゆでて何いれ

の文ぶんにか在ある今既すでに教備そなわつて虚むしからず何いれの機きか受うくることを得いずれ

る、答こたえて曰いわく解いするに二義にぎ有あり一いちには謗法ぼうぽうと無信むしん八難なん及および非人ひにん

と此等は受けざるなり斯れ乃ち朽林頑石生潤の期有る可からず
此等の衆生は必ず受化の義無し、斯れを除いて已外は一心に信樂
して求めて往生を願ずれば上み一形を尽し下も十念を収む仏の願
力に乗じて皆往かざると云うこと莫し文。

往生礼讚に云く女人と及び根欠と二乗種とは生ぜずと文。

一、八難処の事

弘決の四に云く北州と及び三悪に長寿天と並びに世智弁聡と
仏前仏後と・諸根不具を加う、是を八難と為すと文。

善導の遺言に云く我・毎日阿弥陀經六十卷・念仏六万返・懈怠
無く三衣は身の皮の如く瓶鉢は両眼の如く諸の禁戒を持ち一戒
をも犯さず未来の弟子も亦然り、設い念仏すと雖も戒を持たざる
者は往生即ち得難し、譬えば小舟に大石を載せ大悪風に向つて去
るが如し、設い本願の船有りと雖も破戒の大石重きが故に岸に就く

こと
万が
一な

り文。

観念法門經かんねんほうもんに云いわく酒肉五辛誓しゅにくごしんつて発願ほつがんして手に捉とらざれ口に喫くらわざれ若もし此ことばの語ことばに違たがいせば即すなわち身しん口く俱ともに惡瘡あくそう著あかんと願ねがせよ文。

法然上人ほうねんしょうにんの起請文きしょうぶんに云いわく酒肉五辛しゅにくごしんを服ねんぶつして念仏ねんぶつを申もうさば予もが門弟もんていに非あらずと文。

観念法門經かんねんほうもんに云いわく戒たいもを持ちさて西方さいほう弥陀みだを思念しんねんせよと文。

無量壽經むりょうじゆに云いわく三心さんしんを具くする者は必かならず彼の国かのくにに生なずと文。

善導ぜんどうの釈しやくに云いわく若もし一心いっしんも少すなわければ即すなわち生なずることを得えずと

明あきらかに知しんぬ一少いっせうは是これ更さらに不可ふかなることを、茲ここに因よつて極樂ごくらくに生なぜんと欲ほするの人は全ぜんく三心さんしんを具く足そくす可べきなり。

月藏經がつざうきやうに云いわく我われが末法まつほうの時の中ちゆうの億億いふいふの衆生しゆじやう行ぎやうを起おこし行ぎやうを修しゆすとも未いまだ一人ひとりも得える者もの有あらず、当とう今こんは末法まつほうなり現げんに是これ五濁ごじよく惡世あくせ

なり唯浄土の一門のみ有つて通入す可きの路なり文。

遺教經に云く浄戒を持つ者は販売貿易し田宅を安置し人民奴婢畜生を畜養することを得ざれ一切の種植及び諸の財宝・皆當に遠離すること火坑を避るが如くすべし草木を斬伐し墾土掘地することを得ざれ文。

善導和尚の所釈の觀念法門經の酒肉五辛を禁ずる事の依經をいわば、無量壽經一に依り二卷十六觀經一に依り一卷・四紙の阿彌陀經三に依り一卷般舟三昧四に依り十往生經五に依り一卷浄土三昧經六に依る一卷

雙觀經の下に云く無智の人の中にして此の經を説かざれ文。

一、觀經と法華經との説時各別の事

善導和尚の疏の四に云く仏・彼の經を説きたまいし時・処別時別・教別對機別・利益別なり又彼の經を説きたもう時は即ち觀經・

彌陀經等を説き給う時に非ず文。

阿弥陀經あみだにんてんこに云いわく況いわんやさんあくどうや三惡道さんあく無なし文ぶん、無な三惡さんあくと説いくと雖いえども修羅しゆら・
人天にんてんこ之のれ有あり。

四十八願しじゅうはちがんの第一だいいちに云いわく無なし設もし我れ仏ぶつを得えんに国くにに地獄じじく・餓鬼がき・
畜生ちくじやう有あらば正覺しやうかくを取とらじ。

第二だいにの願がんに云いわく三惡道さんあくどうに更さらえらず極樂ごくらくに於おて又死またしす可べしと云いう設もし我れ仏ぶつを得えるも十方じゅうぽうの無量むりやう・
不可思議ふかしのぎの諸しよ三惡道さんあくどうには正覺しやうかくを取とらじ文ぶん。

第三十五だいじゅうごの願がんに云いわく聞名もんめい轉女人てんにょにん往生おんじやうせざる事こと設もし我れ佛ぶつを得えんに十方じゅうぽうの無量むりやう・
不可思議ふかしのぎの諸しよ佛ぶつの世界せかいに其それ女人にょにん有あて我が名号みやうごうを聞きいて歡喜かんき信樂しんぎやう・
して菩提心ぼだいしんを發おこして女身にょみを厭惡えんおせん寿じゆう・終またの後復また女像にょざうと為ならば
正覺しやうかくを取とらじ文ぶん。

一、黒衣こくいな並びに平念珠ねんじゆじしゆく地獄おに墮べつ可べき事こと

法鼓經ほつこきやうに云いわく黒衣こくいの謗法ほうほうなる必じず地獄じじくに墮だす文ぶん。

勢至經せいしに云いわく平形ひらがたの念珠ねんじゆを以もゆる者ものは此これは是これ外道げどうの弟子でしな

り我が弟子でしに非あらずぶつし仏子ぶつし我が遺弟ゆいてい必ず円形ねんじゆの念珠もんぢゆを用もちゆ可べし次第しだいを超越ちやうえつする者は妄語もうごの罪つみに因よつて必ず地獄じごくに墮だせん文。

一、天台てんだいの念仏ねんぶつの事

一 大意たいい

常坐さんまい三昧もんじゆ一文もんじゆ殊説經文もんじゆ殊問經もんじゆに依よる

二 釈名

一 発大心

二

本尊は阿彌陀はんじゆさんまい
常行三昧一般 舟三 昧經に依よる

三 躰相

二 修大行しゆうだいぎやう

四種三昧ししゆせんまい

三

本尊は別有
半行半坐三昧 ほうとう ほうきやう
方等 經法 華經に依よる
しかん えつほう

止觀十章者

四 撰法

五略者

三 感大果

四

本尊は觀音
非行・非坐三昧 説經・説善・説惡・説無記

五 偏円へんえん

四 裂大綱

右四種三昧ししゆぜんまいの次ついででは先段これに之これを注つす

七 六

正 方^{ほう}
観 便^{べん}

五

帰
大
処

八 果報
九 起教

十 指歸

止觀の七に云く若し四種三昧修習の方便は通じて上に説くが
如し、唯法華懺法のみ別して六時五悔に約して重ねて方便を作す今
五悔に就いて其の位相を明す文。

弘決の七に云く四種三昧は通じて二十五法を用いて通の方便と
為す、若し法華を行ずるには別して五悔を加う余行に通ぜず文。

第七の正修止觀とは止の五に云く前の六重は修多羅に依つて以
て妙解を開き今は妙解に依つて以て正行を立つ文。

十疑の第四に云く釈迦大師一代の説法処処の聖教に唯衆生
心を專にして偏に阿弥陀仏を念じて西方極樂世界に生ぜんことを
求めよと勧めたまえり文。

七 疑うたがいに云く又聞く西国の伝いに云く三りの菩薩ぼさつ有り一むちやくを無著むちやくと名け一せじんを世親うたがいと名け三ししかくを獅子なす覺かくと名く文。

八 疑うたがいに云く雜集論いに云く若もし安樂國あんらくこく土どに生なぜんと願ねがわば即すなわち

往生おうじやうを得る等文。

一、天台御臨終てんだい りんじゆうの事

止觀しかんの一いに云く安禪あんぜんとして化くす位ごぼん五品ごに居こす文。

弘決くけつの一いに云く安禪あんぜんとして化くす位ごぼん五品ごに居こす等とは此これ臨終りんじゆうの

行位いを出いだすなり、禪定ぜんじゆうを出いでずして端坐たんざして滅めつを取とる故ゆえに安禪あんぜんと

して化くすと云う文、又云く法華ほっけと觀無量壽むりやうじゆうの二部ふたぶの經題きやうだいを唱となえし

む文、又云く香湯かうとうを索もとめて口くちを漱すすぎ竟おわつて十如じゆじゆ・四不生ふしやう・十法界ほっかい・

四教しきやう・三觀さんかん・四悉しつたい・四諦しだい・十二緣じふにゑんを説せつくに一一いちいちの法門ほうもん・一切いっさいの法ほ

撰せんす、吾今さいこ最後さいご

に觀を策まし玄を談ず最後善寂なり 跏趺して三宝の名を唱えて
三昧に入るが如し即ち其の年十一月二十四日未の時・端坐して滅
に入りたもう文。

又云く大師生存に常に兜率に生ぜん事を願う 臨終に乃ち觀音
来迎すと云う、当に知るべし物に軌とり機に随い縁に順じて化を設
く一准なる可からざることを文、又云く汝善根を種うるに懶くし
て他の功德を問う盲の乳を問い蹶きたる者の路を訪うが如し実を
告げて何の益かあらん文。

選択集の上に云く願くは西方の行者各其の意樂に随い・或は
法華を讀誦して以て往生の業と為し、或は華嚴を讀誦し以て
往生の業と為し・或は遮那教主及び諸尊の法等を受持し讀誦し
て往生の業と為し・或は般若・方等及び涅槃經等を解説し書寫し
て以て往生の業と為す是れ則ち淨土宗觀無量壽經の意なり文。

又云く問うて曰く爾前經の中何ぞ法華を撰するや、答えて曰く今言う所の撰とは権実偏円等の義を論ずるに非ず、読誦大乘の言は普く前後の大乗諸經に通ず文。

観無量壽經に云く爾の時に王舎大城に一りの太子有す阿闍世と名く、調達悪友の教に随順して父の王の頻婆沙羅を収執して幽閉して七重の室内に置く文。

法華經の序品に云く韋提希の子阿闍世王・若干百千の眷屬と俱なり文。

惠心の往生要集の上に云く夫れ往生極樂の教行は濁世未代の目足なり道俗貴賤誰か歸せざらん、但顯密の教法其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難と為さず、予が如き頑魯の者・豈敢てせんや、是の故に念仏の一門に依つて聊か經論の要文を集め之を披らき之を修するに覺り易く行じ易し

文。

惠心往生要集を破し二十三年已後に一乘要決を作る、一乘
要決の上に云く諸乗の権実は古来の諍なり俱に經論に拠つて
互に是非を執す、余寛弘丙午の歳冬十月病中に歎じて曰く仏法に
遇うと雖も未だ仏意を了せず若し

終つひに手てを空むなしうせば後こう悔かい何なんぞ追おばん、爰こゝに經きやう論ろんの文もん義ぎ賢けん哲てつの章しやう疏しゆ
或あるは人にんをして尋たずねしめ、或あるは自みら思し忤やくす、全ぜんく自じ宗しゆ他た宗しゆの偏へん党とうを
捨すてて専せんら權もん智ち實じつ智ちの深しん奥おうを探たんるに遂いに一いち乘じやうは真しん實じつの理り・五ご乘じゆは
方ほう便べんの說せつなることを得とる者ものなり、既すで今こん生じやうの蒙もうを開ひらく何なんぞ夕しゆ死しの
恨うらみを遺なさん文ぶん。

一、念ねん仏ぶつは末まつ代だいに流る布ふす可べき事こと

雙そう觀くわん經きやうの下したに云いく当とう來らいの世せに經きやう道どう滅めつ尽じんせんに我じ慈じ悲ひを以もつて哀あい愍みん
して特とくに此この經きやうを留とどめて止とどますること百ひゃく歲さいならん、其それ衆しゆ生じやう有うつて
斯この經きやうに値あう者ものは意いの所しよ願がんに隨したがつて皆みな得と度とす可べし文ぶん。

往おう生じやう礼らい讚ざんに云いく万まん年ねんに三さん宝ぼう滅めつして此この經きやう住じゆすること百ひゃく年ねん、爾その
時ときに聞きいて一いち念ねんもせば皆みな當たうに往おう生じやうをう得とべし文ぶん。

慈じ恩おん大だい師しの西さい方ほう要やう決けつに云いく末まつ法ぼう万まん年ねんに余よ經きやう悉しつく滅めつして弥み陀たの

一經いつきやうのみと文ぶん。

方便品に云く深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つ可からず
かくのこと
是くの如き人度し難しと文。

堅惠菩薩の宝性論に云く過去謗法の障り不了義に執著すと

文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了するこ
ほうべん
いとを得んと文。

玄の七に云く南岳師の云く初依を余仏と名く無明未だ破せず
これ
之を名けて余と為す、能く如来秘密の蔵を知つて深く円理を覺す
これを名けて仏と為す文。

涅槃經疏十一に云く人正法を得るが故に聖人と云つと文。

像法決疑經に云く常施菩薩・初成道より乃至涅槃其の中間に
ぞうほうけつぎきよう
おい
於て如来の一句の法を説くを見ず、然るに諸の衆生は出没
せつぽつ
説法度人有りと見ると文。

一 二五三昧・二五有の略頌りやくしゆに曰いわく四州・四惡趣しあくしゆ・六欲な並びらびに梵
世・四禪・四無色・無想・五那含なごん文。

一、漢土・南北の十師・天台大師に歸伏する事

国清百録の第四に云く千年と復五百と復実に今日に在り南岳の

叡聖天台の明哲昔は三業を住持し今は二尊に紹繼す豈止だ甘露

を振旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を天竺に振うべし、生知妙悟な

り魏晋より以来典籍風謡實に連類無し云云、乃至禅衆一百余僧と

共に智者大師を請し奉る。 穎川の人なり、後則ち南荊州華容県に遷居す。

一、伝教大師の一期略記に云く

桓武天皇の御宇、延暦廿一年壬午正月十九日伝教大師最澄高尾寺に於て、六宗と争い責め破り畢ぬ。漢明の年

・教震旦に被り礪島の代に訓本朝に及ぼす、聖徳の皇子は靈山の

聖衆にして衡岳の後身なり経を西隣に

請い道を東域に弘む、智者・禅師は亦共に靈山に侍し迹を台岳に降

し同く法華三昧を悟り以て諸仏の妙旨を演ぶる者なり、竊に天台

の玄疏を見れば釈迦一代の教を惣括して悉く其の趣を顕わし処と

して通ぜざること無し、独り諸宗に逾え殊に一道を示す、其の中の
所説の甚深の妙理・七箇の大寺・六宗の学匠、昔未だ聞かざる所。
曾て未だ見ざる所三論・法相の久年の諍い、渙焉として氷の如く、釈け
昭然として既に明かなり、雲霧を披いて三光を見るが猶し、
聖徳の弘化より以降、今に二百余年の間、講ずる所の経論、其の数
惟れ多し、彼此理を争つて其の疑、未だ解けず、此の最妙の円宗、猶
未だ闡揚せず、蓋し以れば、此の間の群生未だ円味に、応ぜざるか、伏
して惟れば、聖朝久しく如来の付嘱を受け、深く純円の機を結ぶ一妙
の義理、始めて乃ち興顯す、六宗の学衆初めて至極を悟る、謂つべし
此の
界の含靈、而今而後、悉く妙円の船に載つて、早く彼岸に済ることを
得と、如来の成道四十余年の後、乃ち法華を説いて、悉く三乗の侶を
して共に一乗の車に駕せしむるが猶し、善議等慶躍の至りに堪えず

敢て表を奉つて陳謝以て聞す云云。
あえて たてま

秀句の下に云く当に知るべし已説の四時の經今説の無量義經。
しゅうくく いわ まさ いせつ こんせつ むりょうぎきょう

当説の涅槃經は易信易解なることを隨他意の故に、此の法華經は
とうせつ ねはんぎょう いしんいげ ずいたい ゆえ ずいたい ほけきょう

最も為れ難信難解なり隨自意の故に、隨自意の説は隨他意に勝る、
もっともこれ なんしんなんげ ずいじい ゆえ ずいじい ずいたい まさ

但し無量義を隨他意と云う
ただ むりょう ずいたい

は未合の一边を指す余部の隨他意に同じからざるなり文。

もんく 文句の八に云く已とは大品以上の漸頓の諸説なり今とは同一の

ざせきいわ 座席謂く無量義経なり当とは謂く涅槃なり、大品等の漸頓は皆

ほうべん 方便を帯すれば信を取ること易しと為す今無量義は一より無量を

生ずれども無量未だ一に還らず是亦信し易し、今の法華は法を論

ずれば一切の差別融通して一法に歸す人を論ずれば則ち師弟の本

・迹俱に皆久遠なり、二門悉く昔と反すれば信じ難く解し難し、鋒

に当る難事をば法華已に説く涅槃は後に在れば則ち信ず可きこと

易し、秘要の蔵とは隠して説かざるを秘と為し一切を惣括するを

要と為す真如実相の包蘊せるを蔵と為す、

ふか 不可分布とは法妙にして信じ難し深智には授く可し無智は罪を

やく 益す故に妄りに説く可らず、昔より已来未だ曾て顕説せずとは

さんぞう 三蔵の中に於ては二乗の作仏を説かず、亦師弟の本・迹を明かさ

ず、方等ほうとう般若はんにゃには実相じつそうの蔵くらを説くと雖も亦未だ五乘ごじやうの作仏さぶつを説かず、亦未だまたいま発迹はつしやく顯本けんほんせず頓漸とんぜんの諸經しよきやう皆未みないま融會ゆうえせず故ゆえに名けて秘と為す、此の經には具つぶさに昔秘つひみつする所の法を説く即ち是れ秘密蔵を開するに亦即ち是れ秘密蔵なり、此くの如きの秘蔵は未だ曾て顯説せず、如来在世猶多怨嫉おんしつといわば四十余年には即ち説くことを得ず今説かんと欲すと雖も而も五千尋いで即ち座を退く仏世すら尚爾り、何に況や未來をや理化し難きに在り。

楞伽經に云く我得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず文。

止觀しかんの五に云く是の故に二夜一字を説かずと文、又云く仏二法に因つて此くの如きの説を作したもう緣自法えんじほうと及び本住ほんじゆの法を謂う、自法とは彼の如来の得る所我亦之を得文、又云く文字を離るるとは仮名を離るるなり文。

法華ほっけに云いく但仮いの名字みょうじを以もて衆生しゅじやうを引導しんどうしたもう文。
玄義げんぎの五ごに云いく惠能えんく惑わくを破はし理りを顯あらわす理りは惑わくを破はすこと能あたわ
ず、理も若もし惑わくを破はせば一切衆生いっさいしゅじやう悉ことごとく理り性を

具ぐす何が故ゆえぞ破やぶせざる、若もし此この惠めぐみを得えれば則すなわち能よく惑まどを破やぶす故ゆえに智ちを用もつて乘じょう体たいと為なす文ぶん。

弘くわうの五ごに云いく何いずれの密みつ語ごに依よつて此かくの如ごとき説せつを作なしたもつ、仏ぶつの言いく二にの密みつ語ごに依よる。謂いく自じ証じやう法ぽう。及および本ほん住じゆう法ぽうなり、然しかるに一いち代だいの施せ化け。豈あに権ごん智ち被ひ物ぶつの教きやう無なからんや、但たゞ此この二にに約やくして未いまだ曾かつて説せつ有あらざる故ゆえに不ふ説せつと云いうのみ文ぶん。籤せんの一いちに云いく三さんに廢はい迹しやくとは後ごの

如ごとく前ぜんの如ごとし文ぶんを引ひく中ちゆう。初しよに諸しよ仏ぶつの下げ同どうを引ひく。為い度どの下げ正まさしく廢はい迹しやくを明めいす、廢はいし已おれば迹しやく無なし故ゆえに皆みな実じつと云いう、実じつは只ただ是これ本ほん権ごんは只ただ是これ迹しやく若もし同どう異いを弁べんぜば広ひろく第七だいななの卷くわんの如ごとし文ぶん、籤せんの一いちに云いく捨すては只ただ是これ廢はい。故ゆえに知ちんぬ開ひらくと廢はいは名な異い躰たい同どうなることを文ぶん。止とどの六むに云いく和わ光くわう同どう塵じんは結け縁えんの始はじめ八はち相しやう成じやう道どうは以もつて其その終しゆうりを論ろんずと文ぶん。

弘くわうの六むに云いく和わ光くわうの下げ。身みを現げんずるを釈しゃくするなり四し住じゆうの塵ちんに同どうじ

処しよ処しよに縁えんを結び浄土じよつどの因いんを作なし利物りもつの始はめと為なす、衆生しゆじよつ機熟きじよくして

八相はつしやう成道せいだうす身みを見み法ほふを聞きき終つひに実益じつえきに至いたる文ぶん。

天照大神てんしやうだいじんの託宣たくせんに云いく

往昔むかし勤修こんしゆして仏道ぶつだうを成なじ求願ぐがん円満えんまん遍照へんしよ尊そん閻浮えんぶに在あつては王位わうゐ
を護まもり衆生しゆじよつを度たせんが為ために天照神てんしよ。

八九

三論宗御書

691P

三論宗の始めて日本に渡りしは三十四代推古の御宇治す十年
壬戌の十月・百済の僧・觀勒之を渡す、日本記の太子の伝を見る
に異義無し、但し三十七代との事は流布の始めなり、天台宗・律宗
の渡れる事は天平勝宝六年 甲午 二月十六日 丁未 乃至四月に
京に入り東大寺に入る天台止觀等云云、諸伝之に同じ、人王第四十
六代孝謙天皇
の御宇なり聖武は義謬りなり書き直す可きか、戒壇は以て前に同
じ、大日経の日本に渡れる事は弘法の遺告に云く「件の経王は大
日本国高市郡久米道場の東塔の下に在り」云云、此れ又元政天皇
の御宇なり、法華経の渡り始めし事は人王第三十四代推古の四年
なり、太子・惠慈法師に謂つて曰く「法華経の中に此の句・落字」と

云云、太子

使を漢土に遣わし已前の法華經・此の国に有るか、惟れ知んぬ欽明

の御宇に渡る所の經の中に法華經有るなり、但し自ら御不審有る

大事は所謂日本記に云く「欽明天皇十三年壬申冬十月十三日

辛酉百濟国聖明王始めて金銅釈迦像一軀を献ず」等云云、善光寺

流記に云く「阿弥陀並びに觀音・勢至・欽明天皇の御宇治天下十三

年壬申十月十三日辛酉・百濟国の明王・件の仏・菩薩・頂戴」と

云云、相違欲「已下欠」

八九 十宗判名の事

692P

拙度宗

華嚴宗

迷經宗

俱舍宗

半字宗

真言宗

范宗

下劣宗

法華宗

仏立宗

成実宗

驢牛和合乳宗

律宗

驢乳宗

禪宗

趙高宗

殺二世王

法相宗

逆路宗

浄土宗

破鏡宗

獸

背上向下宗

梟鳥宗

禽

三論宗

捨本附末宗

不孝宗

九〇 五行御書ごしよ

不殺生戒ふさつしょうかい

肝臟

眼根がんこん

不飲酒戒おんじゆ

舌根ぜつこん

不妄語戒もうご

脾臟ひ

酢味

苦味

甘味

東方とうほう

南方なんぼう

中央

木

青色

火

赤色

土

黄色

春

夏

土用

青雲

赤雲

黄雲

魂

神

意

歳星

惑星

鎮星

金

不偷盜戒
ちゆうとうかい

鼻根

辛味

西方
さいほう

白色

秋

白雲

魄

大白星

肺臟

耳根

味

北方

黑色

冬

黒雲

志

辰星

不邪淫戒
ふじやいんかい

九一 浄土九品の事

695P

なんぎよういぎよう しようてうじきうて そうきようしきうきよう しきようねんぶつ

難行易行・聖道浄土・雑行 正行・諸行念仏、

ほうねんぼう りきうけん しきうてうじきうて ねんぶつ そうたい
法然房の料簡は諸行と念仏と相對なり、

二義、一には勝劣・一には難易 廢立

一に諸行を廢して念仏に歸せんが為に而も

諸行を説くなり

助正

二に念仏を助成せんが為に而も諸行を説く

なり

傍正

三に念仏諸行の二門に約して各三品を立て

んが為に而も諸行を説くなり

若善導に依らば初を以て正と為すのみ

読誦大乘

至誠心深心廻向發願心なり

六念

上品じょうぼん

上品じょうぼん上生じやうじやう
天施てんじ僧法そうぼう仏ぶつ

三種さんしゆの心しんをおこ發はつしてすなわ即すなわちあうじやう往生おうじやうす
復また三種さんしゆの衆生しゆじやう有ありまさ當あたにおんじやう往生おうじやうをう得えべし

一には慈心じしんにして殺ころさもろず諸しよの戒行かいぎやうを具ぐす

二には大乘だいじやう方ほう等とう經典きやうてんを讀誦どくじゆす

三には六念りくねんを修行しゆぎやうす

法然の料簡に云く

華嚴經・楞嚴經・大方等經・般若經・法華經・涅槃經・大日經・深密

經・楞嚴經等の一切の大乘經は誦誦

大乘の一句に撰尽す

解第一義

上品中生

善く義趣を解し第一義に於て一法然の料簡に云く一

華嚴の唯心・法界法相の唯識・三論の八

不・真言の五相成身天台の一念三千・皆解第一義の一句

に撰尽す

上品下生

法然の料簡一深信の因果に十界の因果を撰尽す

中品上生

五戒・八戒乃至諸戒を撰尽す

四阿含經・俱舍・成實・律宗は此の二品に

撰しやうじん尽じんす

中品

ちゆうぼん

中品中生

ちゆうぼん

八齋戒

儒教じゆきやう道教は此の一品に撰しやうじん尽じんす

中品下生

ちゆうぼん

孝養父母の行なり仁慈

こうやうふぼ

外典三千余卷

げてんさんぜん

下品上生

げぼん

老子經

らうし

孝經

こうきやう

觀經

かんきやう

此くの如きの愚人多く衆悪を造るも十念せば往生

す

下品中生

或は衆生有て五戒・八戒及び具足戒を毀犯

す、此くの如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧

下品

物を盗む不浄に法を説いて懺愧有ること無し

下品下生は五逆重罪の者なり而かも能く逆罪を除滅

するは余行に堪えざる所なり、唯念仏の力

のみ能く重罪を滅するに堪る有り、故に極悪最下の人

の為に而かも極善最上の説を説く等云云

下品下生

五逆罪の人・十念往生

撰択に云く「念仏三昧は重罪すら消滅す何に

況や軽罪をや余行は然らず、或は軽を滅し

て重を滅せざる有り、或は一を消して二を消

せざる有り」等云云

捨しゃ閉へい閣かく拋ほう

ほけきよう

法華經等の一切經

いっさいきよう

しゃかぶつ

釈迦仏等の一切諸仏

いっさいしよぶつ

てんだいしゆう

天台宗等の八宗・九宗の世天等

はっしゆう

せてん

じよつぽさんぶきよう

浄土三部經・阿彌陀仏よりの外なり

あみだぶつ

あんらくしゆう

安樂集に

いま

未だ一人も得る者有らず唯浄土の一門のみ有て通入の路なる

ただじよつぽ

いちもん

べし

おうじよつうれいなん

往生礼讚に云く

いわ

せんちゆうむいつじゆっそくじゆつしよ

千中無一十即十生・百即百生

ひやくそくひやくしよ

建仁年中
後鳥羽院御宇

詩殿の御師
源空

法然房

顕真座主
八人の碩徳

一弟子

一弟子

一弟子

法蓮

法本

覚明

嵯峨

聖心
成覚

法本

頼顯僧上の御師
蘭城寺の長吏

長樂寺南無

隆寛 多念

故嵯峨法皇の御師

善惠 小坂 道観

聖光 故打宮入道修観

極楽

念阿弥陀仏

諸行往生

一条 道阿弥

一念

択集を破す、
公胤大貳僧上浄土決疑集三卷を造て法然房の撰
隨機の諸行皆往生を為すべし等云云

故宝地房法印証真の弟子
上野清井者

定真ていしん 豎者けんじや

彈撰だんせん 拵ぢう 二卷にまゝ を造るつく 隨機き 諸行しよぎやう 往生おうじやう

下輩げはい 下三品げさんひん

証真ていしん の嫡弟ていと 竹中たけなか 法師ほふし

值あ 惡人あくにん

宗源そうげん 法印ほふいん

隆真ろうしん 法印ほふいん

証義ていぎ 者

大和やまと の莊

俊鏝しゆんいん 法印ほふいん

相生さうせい

善人ぜんにん

三塔さんたつ の總學頭そうがくとう

小乘しょうじやう 凡夫ぼんぷ

三千さんぜん 人の大衆たいしじゆ

中輩

五人ごにん 探題たんだい

聖覺しやうかく

中三品

貞雲

竜証

值小

華嚴けごん 宗しゆ

とがのをの

値大

明惠房ほつ

摧邪輪さいじやりん

三卷を造る隨機諸行往生きしんぎふじゆおつじゆ

大乘凡夫だいじようほんぶ

深密經に依るじんみつよ

上輩

法相宗ほつそうしゆ

三時教をもて一代を撰いちだいしゅうじん尽し返て

深密經じんみつ

を以て法華經を下すほけきよう

三論宗さんろんしゆ

一藏三時をもて一代を撰いちだいしゅうじん尽し返て

妙智經みょうち

を以て法華經を下すほけきよう

上三

華嚴宗けこんしゆ

五教をもて一代を撰いちだいしゅうじん尽し返て華嚴經けこんきよう

を以て法華を下すほつけ

だいじょう

大乘五宗

しんこんしゅう
真言宗

いちだい
五蔵をもて一代を撰尽し返て

だいにちきよう

大日経等を以て法華経を下す

てんだいしゅう

天台宗

しきよう
四教五時をもて一代を撰尽す

あと
県の額を州に打ち牛跡を大海に入る

でんぎようだいし

伝教大師・此の義を許すや不や

そ
夫れ三時の教は勝義の領解一部の聞は義生の機宜猶三部

か
を闕く何ぞ一代を撰せん、華嚴

いわ
云く・三論云く真言等二云云

九二 御義口伝目録 おんぎくでん

701P

南無妙法蓮華經 なむ みよほうれんげきよつ

七〇八

卷上

序品七箇の大事 じよぼん だいじ

〇九

第一 如是我聞の事 だいいち によぜがもん

第二 阿若・陳如の事 あにやちんによ

第三 阿闍世王の事 あしやせ

第四 仏所護念の事 ぶつしよじねん

七一一

七

第五 下至阿鼻地獄の事 げしあびじごく

七一一

第六 導師何故の事 どうし

七二一

第七 天鼓自然鳴の事 てんこじねん

七二二

方便品八箇の大事 ほうべん だいじ

一三

第一 方便品の事 だいいち ほうべん

七二三

第二 諸仏智慧甚深無量 しよぶつちえ じんじんむりよう

其智慧門の事 こちえもん

第三 唯以一大事因縁の ゆいいちだいじいんねん

七二六

第四 五濁の事 ごじよく

七二七

第五 比丘・比丘尼 びく びくに

有懷増上慢
優婆塞我慢
優婆夷不信の事

第七八
如我等無異如我昔

所願の事 第七〇
於諸菩薩中

正直捨方便の事 七二〇
當來世惡人聞

第八
當來世惡人聞

不信受破法墮
惡道の事 七

譬喻品九箇の大事 二二一

七二一

第一 譬喻品の事

第二 即起合掌の事

第三 身意泰然快得安穩

第四 得仏法分の事

第五 而自廻轉の事

第六 一時俱作の事

第七 以譬喻得解の事

第八 唯有一門の事

第九 今此三界等の事

信解品六箇の大事

七二五

第一 信解品の事

七二五

第二 捨父逃逝の事

七二六

第三 加復窮困の事

七二六

第四 心懷悔恨の事

七二六

第五 無上宝聚不求自得

七二七

第六 世尊大恩の事

七二七

葉草喩品五箇の大事

七二八

第一 葉草喩品の事

七二八

第二 此の品述 成段の事

七二九

第三 雖一地所

生一雨所潤等の事

第四 破有法王出現世間

七二九

第五 我觀一切

普皆平等無有

彼此愛憎之心

我無貪著

亦無限礙の事

七三〇

授記品四箇の大事

七三〇

七

第一 だいいち 授記の事 じゆき

第二 七三〇 迦葉光明の事 かしょうくわうみょう

第三 七三一 捨是身已の事 しやせしんい

第四 七三二 宿世因縁吾今当説 すくせいゐんねん とうせつ

三三二 化城喩品七箇の大事 けしやう ゆほん だいじ

第一 だいいち 化城の事 けしやう

第二 七三三 大通智勝仏の事 だいつうちしやうぶつ

第三 七三二 諸母涕泣の事 しよもていじゆう

第四 七三三 其祖轉輪聖王の事 こそくせんりんじやうおう

第五 七三三 十六王子の事 じゅうろくおうじ

第六 七三三 即滅化城の事 そくめつげじやう

第七 七三四 皆共至宝処の事 みなほうしよ

三四 五百弟子品三箇の大事 でし だいじ

第一 だいいち 衣裏の事 えり

第二 七三四 醉酒而臥の事 しゆしゆ

第三 七三四 身心遍歡喜の事 しんしん かんき

三五 人記品二箇の大事 にんきほん だいじ

第一 だいいち 学無学の事 がくむがく

第二 七三五 山海慧自在通王仏 さんかいえじざいつうおうぶつ

の事 七三五

法師品十六箇の大事 ほうしほん だいじ 七

三六

第一 だいいち 法師の事 ほっし

第二 七三六 成就大願愍 しほじょうだいがんみん

衆生故生於 しゆじやうこじやう
惡世広演此經 あくせくわうえんしききやう
の事

第三 七三六 如来所遣行如来事 にらいしよせんぎやうにらいじ

の事

第四 七三六 与如来共宿の事 いふにらいしよぐしゆく

第五

七三六 是法華經藏 ぜほけきやうぞう
深固幽遠 じんこゆうえん
無人能到の事 むにんのたう

の事

第六 七三七 聞法信受随順不逆 もんほうしんじゆすいじゆん

第七 七三七 衣座室の事 えざしつ

第八 七三七 欲捨諸懈怠应当 よくしやしよけたい
聽此經の事 もんほう

第九 七三八 不聞法華經去仏智 もんほう
甚遠の事 はなはだ

第十 若説此經時 あそひにらう

有人惡口罵 あそひにらう

加^{とう}刀^{じょう}杖^が瓦^{しゃく}石^{くわ}
念^{ねん}仏^{ぶつ}故^こ応^{おう}忍^{にん}
の事

七三九

及^し清^じ信^{しん}士^し女^{にょ}供^く養^{よう}

七三九

宝^{ほう}塔^{とう}品^{ぽん}甘^{かん}箇^この^{だい}大^{だい}事^じ

第十六 得^{とく}見^{けん}恒^{こう}沙^{しゃ}仏^{ぶつ}の^じ事^じ

七三九

於^お法^{ほつ}師^しの^じ事^じ

第十二

七三八

若^も人^し欲^{よく}加^か惡^{あく}

刀^と杖^{じょう}及^が瓦^が石^{くわ}

則^{すなは}遣^は变^{へん}化^か人^{にん}

為^な之^の作^ま衛^{まも}護^も

の事

七三八

若^{しん}親^{こん}近^{ぼつ}法^{ほつ}師^し速^{すく}得^{とく}

菩^ぼ薩^{さつ}道^{だう}の^じ事^じ

第十三

随^{ずい}順^{じゆん}是^し師^し学^{がく}の^じ事^じ

七三八

第十五 師^しと^と学^{がく}と^の事^じ

第一

宝^{ほう}塔^{とう}の^じ事^じ

第二

有^あ七^{しち}宝^{ぼう}の^じ事^じ

第三

四^し面^{めん}皆^{みな}出^での^じ事^じ

第四

出^{おん}大^{だい}音^{いん}声^{しょう}の^じ事^じ

七四〇

見^{けん}大^{だい}宝^{ぼう}塔^{とう}住^{じゅう}在^{ざい}

空^{くう}中^{ちゆう}の^じ事^じ

七四〇

国^{こく}名^{めい}宝^{ぼう}淨^{じやう}彼^か中^{ちゆう}有^{ゆう}

仏^{ぶつ}号^{ごう}日^{にち}多^た宝^{ぼう}の^じ事^じ

七四〇

第七 於十方国土有

說・法華經

処我之塔廟

為聽是經故

涌現其前為

作証明讚

言善哉の事

七四〇

南西北方四惟

七四一

各齋宝華滿掬の

事

上下の事

第八

第九

七四一

第十

門の事

第十一

虚空の事

第十二

吹小樹枝の事

第十三

仏身の事

第十四

此經難持の事

第十五

我則歡喜諸仏亦

第十六

讀持此經の事

第十七

是真仏子の事

第十八

是諸天人・世間

如却関鑰開大城

七四一

撰諸大衆皆在

七四二

譬如大風

七四二

若有能持則持

七四二

此經難持の事

七四二

我則歡喜諸仏亦

七四二

讀持此經の事

七四二

是真仏子の事

七四二

是諸天人・世間

之眼の事

七四三

第十九

能須臾説の事

七四三

第二十

此経難持の事

七四三

提婆達多品八箇の大事

七四四

七四四

第一

提婆達多の事

七四四

第二

若不違我当為

宣説の事

七四四

第三

採菓汲水拾薪設

食の事

七四四

第四

情存妙法故身

心無懈怠の事

七四五

第五

我於海中唯常

宣説の事

七四五

第六

年始八歳の事

七四五

第七

言論未訖の事

七四六

第八

有一宝珠の事

七四七

勸持品十三箇の大事

七四七

七四七

第一

勸持の事

七四七

第二

不惜身命の事

七四七

第三

心不実故の事

七四八

第四

敬順仏意の事

七四八

第五

作師子吼の事

七四八 しゆきやう

第六 如法修行の事

七四八 しよむち

第七 有諸無智人の事

七四八

第八 惡世中比丘の事

七四九

第九 或有阿練若の事

七四九

第十 自作此經典の事

七四九

第十一 為斯所輕言汝等

七四九

第十二 惡鬼入其身の事

七四九

第十三 但惜無上道の事

七四九

あんらくぎやうぼん 安樂行品五箇の大事 だいじ

七五〇

第一

あんらくぎやうぼん 安樂行品の事

七五〇

第二

一切法空の事

七五〇

第三

有所難問不以

小乘法答等の事

七五〇

第四

無有怖畏加刀杖

等の事

七五〇

第五

有人来欲難問者

諸天昼夜等の事

七五〇

七五〇

涌出品一箇の大事

七五〇

第一 だいいち

唱導之師の事

七五一

三界之相無有生さんがい死じの事

卷下

壽量品廿七箇の大事じゆりようぼん

七

七五二

第一 だいいち

南無なむ

第五

五三

若わ久住くじゆう於世

妙法蓮華經みょうほうれんげき
如來壽量品にょらいじゆりようぼん

薄はく德とく之人びん不け種せ
善ぜん根こん貧ひん窮けう下げ賤せん
貪こん著しやく五欲入

第十六の事

於憶想妄見網

七五

中の事

第二

如來秘密神通之にょらいひみつじんつう

七五四

力の事

七五二

第六

飲他毒藥藥發悶乱

第三

我實成仏已來がじつじょうぶついらい

宛あ轉る于地ちの事七五四

無量無辺等むりようむへん

の事七五三

第七

或ある失あ本心ほんしん或ある不ふ

第四

如來如實知見にょらいにじよしつちけん

失者ししやの事

七五五

第八

擣・和合与子令

服の事

七五五

第九

毒氣深入失本心

故の事

七五五

第十

是好良藥
今留在此汝

可取服勿憂不

差の事

七五六

第十一 自我得仏來の事

七五六

第十二 為度衆生故方便

現涅槃の事七五六

第十三 常住此説法の

七五六

第十四 時・我及衆僧俱

出靈鷲山の事七五六

第十五

衆生見劫尽 而

衆見焼尽の事

七五七

第十六

我亦為世父の事

七五七

第十七

放逸著五欲墮於

惡道中の事七五八

第十八

行道不行道の事

七五八

第十九

每自作是念の事

七五八

第二十

得人無上道等の

七五九

第二十一

自我偈の事

七五九

第二十二

自我偈始終の事

七五九

第廿三 久遠おんの事

七五九

第廿四 此じのじゆり量品ようほん

のけ所け化げのの

国土こくどと修行けうぎよ

との事

七六〇

第一だい

其有しゅう衆しゅう生じゆう聞もん

仏ぶつ壽じゆう命めい

長ちやう遠おん如に是ぜ

乃な至い能し生せい

一いち念ねん信しん解げ所しよ

得とく功こう徳とく無む有ゆう

限げん量りやうの事

七五

九く

第廿五 建立けんりゆう御本ごほん尊等ぞんとうの

七六〇

寿量じゆうりやう品ほんの

対告たいこう衆しゆうの事

第廿七 無作むさ三身さんしんの事

七六〇

分別ぶんべつ功徳くどく品ひん三箇さんかの大事だいじ

諸人しよにん等頂受とうじゆう此經典きんてんの事

第二だい

七六一

仏受用ぶつじゆうの事七六一 仏子ぶつし住此じゆ地則ちよく是

七六〇

是則しよく能信じゆう受如じゆう是

随喜品二箇の大事ずいき だいじ

七

六一

第一だいいち

妙法蓮華経随喜みょうほうれんげきようずいき

功德の事くどく

七六一

第二

口氣無穢

優鉢華之香

常従其口出

の事

七六二

法師功德品四箇の大事ほっしくどくく だいじ

七六一

第一だいいち

法師功德の事ほっしくどくく

七六一

第二

六根清浄の事ろっこんしじょうじよう

七六一

第三

又如浄明鏡の

七六三

事

第四

是人持此经安住

希有地の事けう ちの じ 七六二

常不轻品三十箇の大事じょうぶけいほん だいじ

七六三

第一だいいち

常不轻の事じょうぶけい

七六三

第二

得大勢菩薩の事たいせいぼさつ

七六四

第三

威音王の事いおん

七六四

第四

凡有所見の事ほんぬ しよけん

七六四

第五

我深敬汝等がしんきよつなんじ

不敢輕慢がくえん ぎんまん

所以者何汝ゆえん なるが

等皆行菩薩みな ぼさつ

道当得作仏みち とうとく ぶつ

の事七六四

第六 但行礼拝の事

七六四

第七 乃至遠見の事

七六四

第八 心不浄者の事

七六五

第九 言は無智比丘の

七六五

第十 隨從の事 聞其所説皆信伏

七六五

第十一 於四衆中説法

心無所畏の事七六五

第十二 常不輕菩薩豈異

人乎則我身是の

事

七六六

第十三 常不值仏不聞法

不見僧の事七六六

第十四 畢是罪已復遇常

不輕菩薩の事

七六六

第十五 於如来滅後等の

事 第十六 此品の時の不輕

菩薩の体の事

七六七

第十七 不輕菩薩の礼拝

七六七

第十八 開示悟入礼拝

住処の事 六七

住処の事 六七

住処の事 七六七

第十九 礼拝住処の事 每自作是念の文

七六七

第二十

我本行菩薩道の

文礼拝住処の事

七六八

第二十一

生老病死礼拝

住処の事

七六八

第二十二

法性礼拝住処の

事

七六八

第二十三

無明礼拝住処の

事

七六八

第二十四

蓮華の二字礼拝

住処の事

七六八

第二十五

実報土礼拝住処

の事

七六九

第二十六 慈悲の二字礼拝

住処の事 七六九

第二十七

礼拝住処分真即

の事

七六九

第二十八

究竟即礼拝住処

の事

七六九

第二十九

法界礼拝住処の

事

七六九

第三十

礼拝住処忍辱地

の事

七七〇

神力品八箇の大事

七

七〇

第一 妙法蓮華経如来

神力の事

七七〇

第二

出広長舌の事

七七〇

第三 十方世界衆宝樹下

師子座上の事七七一

第四 滿百千歳の事

七七一

第五 地皆六種

震動其中

衆生

衆宝樹下の

事

決定無有

疑の事

七

嘱累品三箇の大事

七二

七

従法座起の事

七二

七二

如来是一切衆生

之大施主の事七二

三世尊勅当具

奉行の事

七二

薬王品六箇の大事

七

七三

不如受持此法華經

乃至一四句偈の事

第八

畢竟住一乘

是人於仏道

釈迦牟尼仏の事七七一

第七

斯人行世間能滅

衆生闇の事七七一

第八

畢竟住一乘

是人於仏道

七七三

第二 十喻の事

七七三

第三

一切苦

一切病痛能

解一切生死

之縛の事

七七

三

第四

火不能烧水不能

漂の事

七七三

諸余怨敵皆悉

摧滅の事

第六

七七四

第六

若人有病

得聞是經病

即消滅の事
不老不死の事

七七四

妙音品三箇の大事

七

七四

第一 妙音菩薩の事

七七四

第二

肉髻白毫の事

七七四

第三

八万四千七宝鉢

の事

七七五

普門品五箇の大事

七

七五

第一 無尽意菩薩の事

七七五

第二 観音妙の事 かんのん

七七六

第三 念念勿生疑の ねんねん

七七八

第四 二求両願の事

七七六

第五 三十三身利益の さんじんりやく

七七七

陀羅尼品六箇の大事 だらにほん

七七

第一 陀羅尼の事 だらいち

七七七

第二 安爾曼爾の事 あんなん

七七七

第三 鬼子母神の事 きしもじん

七七八

第四 受持法華 じゆじ ほうけ

名者福不可量の事 めいしやふくふかりよう

第五 皐諦女の事 こたけにむすめ

七七八

第六 五番神呪の事 ごばんしんじゆ

七七八

嚴王品三箇の大事 げんおうひん

七九

第一 妙莊嚴王の事 みよづせうおう

七七九

第二 浮木孔の事 うきぎ

七七九

第三 当品邪見即正の たうひんじゃけんそく

七七九

普賢品六箇の大事 ふげん

八〇

第一 普賢菩薩の事 ふげんぼさつ

七八〇

第二

若法華經行 ほけきょう

閻浮提の事 えんぶだい

七八〇 はちまん

第三

八万四千天女の

事

七八〇

第四

是人命終為千 みょうじゆう

仏授手の事

七八〇

第五

閻浮提内広令 えんぶだい

流布の事 るふ

七八一

第六

此人不久当詣 とうけい

道揚の事 どうじやう

七八一

無量義經六箇の大事 むりやうぎぎきょう

七

八三

第一無量義經德行品第一 だいいち むりやうぎぎきょうとくぎやう

の事

七八三

第二

量の字の事

七八四

第三義の字の事

七八四

第四処の一字の事

七八四

第五無量義処の事 むりやう

七八四

第六無量義処の事 むりやう

七八五

普賢經五箇の大事 ふげん

七

八五

第一普賢經の事 だいいち

七八五

第二不断煩惱不離五 ふだんぼんのう

七八五

欲の事

六念の事

七八五

第三

九三 御義口伝

708P

南無妙法蓮華經

御義口伝に云く南無とは梵語なり此には歸命と云う、人法之れ

有り人とは釈尊に歸命し奉るなり法とは法華經に歸命し奉るなり

又歸と云うは迹門不變真如の理に歸するなり命とは本門隨縁真如

の智に命くなり歸命とは南無妙法蓮華經是なり、釈に云く隨縁

不變・一念寂照と、又歸とは我等が色法なり命とは我等が心法な

り色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に歸せしむ故に

仏乘と云うと、又云く南無妙法蓮華經の南無とは梵語・

妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり、又

云く梵語には薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覽と云う此には妙法蓮華經と

云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覽

は経なり、九字は九尊の仏体なり九界即仏界の表示なり、妙とは

法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり

蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり経とは一切衆生の言語

音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて経と為す

と、或は三世常恒なるを経と云うなり、法界は妙法なり法界は

蓮華なり法界は経なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり能く能く之を

思う可し已上。

伝云序品七箇の大事

方便品八箇の大事

譬喩品九

箇の大事

信解品六箇の大事

薬草喩品五箇の大事授記品四箇の

大事

化城喩品七箇の大事

五百品三箇の大事

人記品二

箇だいじの大事

法師品ほうしほん

十六箇だいじの大事

箇だいじの大事

宝塔品ほうとうほん

二十箇だいじの大事

提婆品だいば八

勸持品十三箇の大事かんじほん 安樂行品五箇の大事あんらくぎょうほん 涌出品一箇の大事ゆじゅつほん

壽量品二十七箇の大事じゅりょうほん 分別功德品三箇の大事だいじぶんべつくどく 隨喜品二箇の大事だいじずいき

大事だいじ

法師功德品四箇の大事ほっしくどく 不輕品三十箇の大事だいじふぎょう 神力品八箇の大事だいじじんりきほん

囑累品三箇の大事ぞくるい 藥王品六箇の大事だいじやくおうほん 妙音品三箇の大事だいじみょうおん

普門品五箇の大事ふもんほん 陀羅尼品六箇の大事だいじたらにほん 嚴王品三箇の大事だいじげんおうほん

普賢品六箇の大事ふげん 無量義經六箇の大事だいじむりょうぎきょう 普賢經五箇の大事だいじふげん

已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有り具さに之を記し訖べつでんこれあ ぬ。

御義口伝卷上おんぎくでん

序品七箇の大事じよほん

第一如是我聞の事だいいちによぜがもん 文句の一に云く如是とは所聞の法体を掌ぐ我もんく

聞とは能持の人なり記の一に云く故に始と末と一經を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞の同は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり語法の心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華經なり、伝教云く法華經を讚むると雖も還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理會し順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の

類を以つて如是我聞と云うべきなり云云。

第二阿若 陳如の事 疏の一に云く・陳如は姓なり此には火器と

翻ず婆羅門種なり其の先火に事こう此れに従て族に命く、火に

二義有り照なり暎なり照は則ち聞生ぜず焼は則ち物生ぜず・

此には不生を以て姓と為す。

御義口伝に云く火とは法性の智火なり、火の二義とは一の照は

隨縁真如の智なり一の焼は不變真如の理なり照焼の二字は本

迹二門なり、さて火の能作としては照焼の二徳を具うる南無

妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは

生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり生死即涅槃と開覺す

るを照則闇不生とは云うなり、煩惱の薪を焼いて菩提の慧火

現前するなり煩惱即菩提と開發するを焼別物不生とは云うな

り、爰を以て之を案ずるに陳如は我等・法華經の行者の煩惱即

菩提・生死即涅槃を顕したり云云。

第三阿闍世王の事 文句の一に云く阿闍世王とは未生怨と名く、又云く大経に云く阿闍世世とは未生怨と名く又云く大経に云く阿闍を不生と名く世とは怨と名く。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華経の母を害するなり、無量義経に云く諸仏の国王と是の経の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法の人は今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈未生怨に非ずや、其の上日本国当世は三類の強敵なり世者名怨の四字に心を留めて之を案ず可し。

日蓮等の類此の重罪を脱れたり謗法の人人法華経を信じ釈尊に歸し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらんや、但し父母なりとも法華経不信の者ならば殺害す可きか、其の故

は権教ごんきょうの愛あいを成なす母ぼ・方便ほうべん眞実しんじつを明あめざる父ちちをば殺害さつがいす可べしと
見みえたり、仍よつて文句もんくの二ふたに云いく「観解かんげは食愛とんあいの母ぼ・無明むみょうの父ちち・此これ
を害がいする故ゆえに逆さかと称しす逆即順さかすまなり非道ひどうを行なじて仏道ぶつどうに通達つうだつす」
と、観解かんげとは末法まっぽう・当今とうこんは題目だいもくの観解かんげなる可べし子ことして父母ふぼを
殺害さつがいするは逆さかなり、然しかりと雖いえども法華經ほけきょう不信ふしんの父母ふぼを殺ころしては順
となるなり爰こゝをを以もつて逆即是順さかすまと釈しゃくせり、今日蓮等いまにちれんの

類たぐいは阿闍世王あじゃせなり其そのの故ゆえは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの劍けんを取とつて食愛とんあい。
無明むみょうの父位ふちゐを害がいして教主きょうしゅ釈尊しやくそんの如ごとく仏身ぶつしんを感得かんとくするなり、貧愛とんない
の母ははとは勸持品かんじほん三類さんるいの中ちゆう第一だいいちの俗衆ぞくしゅうなり無明むみょうの父ちちとは第二だいに。第
三さんの僧そうなり云云。

第四だい仏ぶつ所しよ護ご念ねんの事こと

文句もんくの三さんに云いく仏ぶつ所しよ護ご念ねんとは無量義むりやうぎ処こは是これ

仏ぶつの証得しやうとくし給たまう所ところ是こゝの故ゆえに如來にょらいの護念ごねんし給たまう所ところなり、下したの文ぶんに

仏ぶつ自住じゆうだい大乘だいじやうと云いえり開示かいじせんと欲ほすと雖いへども衆生しゆじやうの根鈍こんどんなれば久く

しく斯この要ようを默もくして務いそぎて速すみやかに説たまき給たまわず故ゆえに護念ごねんと云いう記きの

三さんに云いく昔未いまだ説たまかず故ゆえに之これを名なけて護ごと為なす法ほふに約やくし機きに約やくし

て皆護念みなごねん

する故ゆえに乃至ないし機き仍なお未いまだ發おこせず隱かくして説たまかず故ゆえに護念ごねんと云いう、

乃至ないし末説まふたまを以もつての故ゆえに護ごし未暢みちやうを以もつての故ゆえに念ねんず、久默くもくと云いうは

昔むかしより今いまに至いたるなり斯要等しやうとうの意い之これを思おもうて知しる可べし。

御義口伝に云く此の護念の体に於ては本・迹二門首題の五字なり、此の護念に於て七種の護念之れ有り一には時に約し二には機に約し三には人に約し四には本・迹に約し五には色心に約し六には法体に約し七には信心に約するなり云云、今日蓮等の類いは護念の体を弘むるなり、一に時に約するとは仏・法華經を四十余年の間未だ時
至らざるが故に護念し給うなり、二に機に約するとは破法不信故墜於三惡道の故に前四十余年の間に未だ之を説かざるなり、三に人に約するとは舍利弗に対して説かんが為なり、四に本・迹に約するとは護を以て本と為し念を以て迹と為す、五に色心に約するとは護を以て色と為し念を以て心と為す、六に法体に約するとは法体とは
本有常住なり一切衆生の慈悲心是なり、七に信心に約するとは

信心しんじんを以て護念ごねんの本と為すななり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無なむ
妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱え奉るたてまつは併しかしながら護念ごねんの体を開くなり、護ごとは
仏見ぶつけんなり、念とは仏知ぶつちなり此の知見ちけんの二字本・迹兩門ぶつちなり仏知ぶつちを
妙と云うなり仏見ぶつけんを法と云うなり此の知見ちけんの体を修行しゆぎやうするを
蓮華れんげと云うなり、因果いんがの体
なり因果いんがの言語ごんごは經ごんごなり加之しかのみならず法華經ほけきようの行者ぎやうじやをば三世さんぜの諸佛しよぶつ
護念ごねんし給たまうなり、普賢品ふげんに云いわく一者いっしやう為諸佛しよぶつ護念ごねんと護念ごねんとは
妙法蓮華經みようほうれんげきようなり諸佛しよぶつの法華經ほけきようの行者ぎやうじやを護念ごねんしたもうは
妙法蓮華經みようほうれんげきようを護念ごねんしたもうなり機法きき一同護ご

念一體なり、記の三の釈に約法約機・皆護念故と云うは此の意なり、又文句の三に云く「ぶつしよこねん 仏所護念とは前の地動瑞を決定するなり、又文句の三に云く」ちどうずい 地動は六番破惑を表するなり、みょうほうれんげききょう 妙法蓮華經を受持する者は六番破惑はわくうたがい 疑い無きなり、じんりきぼん 神力品に云く「めつど 於我滅度後・じゆじ 心受持斯經・しきょう 是人於仏道・けつじょう 決定無有疑」ぶつじじゅうだいじょう 仏自住大乘とは是なり、又た一義に仏の衆生を護念したもう事は護とは唯我一人能為救護・念とは毎さぜんこれ 自作是念是なり、ふげん 普賢品に至つて一者為諸仏護念と説くなり、にちれん 日蓮は生年三十二より南無妙法蓮華經を護念するなり。

第五下至阿鼻地獄の事

おんぎくでん 御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏・此の文にて分明ぶんみょう なり、ほりつたのほん 宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫曉かんきょう の分なり、だいば 提婆は此の文の時成仏せり此の至の字は白毫びやくごう の行く事なり、びやくごう 白毫の光明は南無妙法蓮華經なり、じょうしあかにだてん 上至阿迦尼咤天は空諦・

下至阿鼻地獄は仮諦・白毫の光は中道なり、之に依つて十界
同時の成仏なり天王仏とは

宝号を送るまでなり、去て依正二報の成仏の時は此の品の下至
阿鼻地獄の文は依報の成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の
成仏を説く依報・正報共に妙法の成仏なり、今日蓮等の類い
聖靈を訪う時・法華経を誦誦し南無妙法蓮華経と唱え奉る時・

題目の光無間に至りて即身成仏せしむ、廻向の文此れより事
起るなり、法華不信の人は墮在無間なれども、題目の光を以て
孝子法華の行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば
下至阿鼻地獄の文は仏・光を放ちて提婆を成仏せしめんが為な
りと日蓮推知し奉るなり。

第六導師何故の事 疏に云く良に以みれば説法入定して能く人
を導く既に導師と称す。

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義經
にゆじよう むりようぎしよさんまい
入定とは無量義処三昧に入りたもう事なり、所詮導師に於て二
あり悪の導師善の導師之れ有るなり、悪の導師とは法然・弘法
じかく ちしよう
慈覚・智証等なり善の導師とは天台・伝教等是なり、末法に入つ
いまにちれん
ては今日蓮等の類いは善の導師なり、説法とは南無妙法蓮華經
にゆじよう
入定とは

法華受持の決定心に入る事なり能導於人の能の字に心を留めて
之を案ず可し涌出品の唱導之師と同じ事なり、所詮日本国の
一切衆生を導かんが為に説法する人は是なり云云。

第七天鼓自然鳴の事 疏に云く天鼓自然鳴は無間・自説を表する
なり。

御義口伝に云く此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長出
せり、無間・自説とは釈迦如来 妙法蓮華經を無間・自説し給う
なり、今日蓮等の類いは無間・自説なり念仏・無間・禅天魔・真言
亡国・律国賊と喚ぶ事は無間・自説なり三類の強敵来る事は此の
故なり、天鼓とは南無妙法蓮華經なり自然とは無障碍なり鳴と
は唱うる所の音声なり、一義に一切衆生の語言音声を自在に
出すは無間・自説なり自説とは獄卒の罪人を呵責する音・餓鬼
飢饉の音声等・一切衆生の貪・瞋・癡の三毒の念念等を自説とは

云うなり此の音声おんじやうの体とは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、本・迹両門
妙法蓮華經みやうほうの五字ごじは天鼓なり天とは第一義天だいいちなり自説とは
自受用の説法じじゆゆうなり、記の三せっぽうに云く無間・自説を表するとは方便ほうべんの
初に三昧より起つて舍利弗しやりほつに告げ広く歎たんじ略して歎たんず、此土他土
言に寄せ言を絶す若は境若は智もし此乃ち一經すなわの根本こんぽん五時の要津ようしんな
り此の事輕からずと、此釈いっきやうに一經こんげんの根源こんげん五字の要津ようしんとは南無
妙法蓮華經みやうほうれんげきやう是なり云云。

方便品ほうべん八箇の大事だいじ

713P

第一方便品だいいちほうべんの事もんく 文句の三もんくに云く方とは秘いなり便とは妙いなり妙に
方まさに達するに即すなわち是真まの秘ひなり、內衣裏ないえりの無価たの珠たまを点たまずるに王
の頂上ちやうじやうの唯一ただ珠有ると二無なくく別無なくし、客作かくさの人を指すに是
長者ちやうじやの子にして亦また二無なくく別無なくし、此の如ごときの言は是秘ま是妙めいなり、
經の唯我知是相じゆつぱう・十方じやくねん仏亦然やくねん・止止不須説ふしゆせつ・我法妙難思なんしの如ごとし

故ゆえに秘ひを以て方かたを積しやくし妙めうを以て便べんを積しやくす正まさしく是これ今いまの品しんの意い
なり故ゆえに方便ほうべんと言いうなり記きの三さんに云いく第三だいさんに秘妙ひめうに約やくして

積しやくするとは妙めうを以もつての故ゆゑに即そくなり円えんを以もつて即そくと為なし三さんを不ふ即そくと為なす故ゆゑに更さらに不ふ即そくに對たいして以もつて即そくを積しやくす。

御おん義ぎ口く伝でんに云いく此この積しやくの中なかに一いち珠しゆとは衣えり裏じゆ珠しゆ・即そく頂ちやう上じやう珠しゆなり、

客かく作さくの人にんと長ちやう者じやの子こと全ぜんく不ふ同どう之これ無なし、所しよ詮せん謗ほう法ほう不ふ信しんの人にんは

体たい外がいの権けんに以もつて法ほふ用ゆう能ねい通つうの二に種しゆの方ほう便べんなり爰こゝを以もつて無な二に無な別べつに

非あらるなり、今いま日にち蓮れん等どうの類たぐい南なん無む妙めう法ほう蓮れん華げき經きやうと唱となえ奉たてまつるは是これ秘ひ妙めう

方ほう便べんに以もつて体たい内ないなり故ゆゑに妙めう法ほう蓮れん華げき經きやうと題だいして次つぎに方ほう便べん品ひんと云いえ

り、妙めう樂らくの記きの三さんの積しやくに本ほん疏しよの即そく是ぜ真しん秘ひの即そくを以もつて圓えん為なり即そくと消しよ積じやく

せり、即そくは圓えんなれば法ほふ華げき經きやうの別べつ名ななり即そくとは凡ぼん夫ぶ即そく極ごく・諸しよ法ほう実じつ相さう

の仏ぶつなり、円えんとは一いち念ねん三さん千せんなり即そくと圓えんと言いは替かれども妙めうの別べつ名な

なり、一いつ切さい衆しゆ生じやう実じつ相さうの仏ぶつなれば妙めうなり不ふ思し議ぎなり謗ほう法ほうの人にん今いま

之これを不ふ知ちらざる故ゆゑに之これを秘ひと云いふ、又また云いく法ほふ界がい三さん千せんを秘ひ妙めうとは云い

うなり秘ひとはきびしきなり三さん千せん羅ら列れつなり是こゝより外ふに不ふ思し議ぎ

これなし、大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華經を受持し奉る所
を妙法蓮華經方便品とは

云うなり今末法に入つて正しく日蓮等の類の事なり、

妙法蓮華經の体内に爾前の入法を入るを妙法蓮華經方便品とは

云うなり、是を即身成仏とも如是本末究竟等とも説く、又方便

とは十界の事なり又は無明なり妙法蓮華經は十界の頂上なり

又は法性なり煩惱即菩提・生死即涅槃是なり、以円為即とは

一念三千なり妙と即とは同じ物なり一字の一念三千と云う事は

円と妙とを云うなり円とは諸法実相なり、円とは釈に云く円を

円融・円満に名く

と円融は迹門・円満は本門なり又は止觀の二法なり又は我等が

色心の二法なり一字の一念三千とは慧心流の秘蔵なり、口は

一念なり員は三千なり一念三千とは不思議と云う事なり、此の

妙は前三教に未だ之を説かず故に秘と云うなり、故に知ぬ南無
妙法蓮華經は一心の方便なり妙法蓮華經は九識なり十界は八
識已下なり心を留めて之を案ず可し、方とは即十方・十方は即
十界なり便とは不思議と云う事なり云云。

第二諸仏智慧甚深無量其智慧門の事 文句の三に云く先ず実を
歎じ次に権を歎ず、実とは諸仏の智慧なり三種の化他の権実に
非ず故に諸仏と云う自行の実を顕す故に智慧と云う、此の智慧
の体即ち一心の三智なり、甚深

無量とは即ち称歎の辞なり仏の実智の豎に如理の底に徹すること
とを明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言う
無量甚深にして豎に高く横に広し、譬えば根深ければ則ち条茂く
源遠ければ則ち流長きが如し実智既に然り権智例して爾り云云、
其智慧門は即ち是れ権智を歎ずるなり蓋し是れ自行の道前の
方便進趣の力有り故に名けて門と為す、門より入つて道中に到る
道中を實と称し道前を権と謂うなり、難解難入とは権を歎ずる
の辞なり不謀にして了し無方の大用あり、七種の方便測度するこ
と能わず十住に始めて解す十地を入と為す初と後とを挙ぐ
中間の難示難悟は知る可し、而るに別して声聞・縁覚の
所不能知を挙ぐることは執重きが故に別して之を破するのみ、記
の三に云く豎高横広とは中に於て法譬合あり此れを以て後を例
す、今実を釈するに

既にす周くあまね横おうじゆ豎じゆを窮きわめたり下にす権けんを積しやくするに理り深しん極ごくなるべし、下に
当まさにま権けんを積しやくすべし予あらかじそめ其この相あひまを述じゆつす故ゆえに云い云いと註しるす、其こ智慧ちえもん門もんと
は其ことは乃すなわち前まへの实じつ果くわの因いん智ちを指さす若もし智慧ちえ即そく門もんならば門もんは
是これ権けんなり若もし智慧ちえの門もんならば智ち即すなわち果くわなり、蓋けだし是これら等らとは此
の中なかに須すべからく十じゆ地ちを以もつて道みち前まへと為なし妙みよ覺かくを道みち中なかと為なし証しやう後ごを道みち後ご
と為なすべし、故ゆえに知しんぬ文ぶんの意いは因いんの位ゐに在あり。と。
御おん義ぎ口く伝でんに云いく此この本ほん末まつの意い分ぶん明みやうなり、中ちゆうに豎じゆに高たかく横こゝろに広ひろし
とは豎じゆは本ほん門もんなり横こゝろは迹しやく門もんなり、根こんとは草そう木もくなり草そう木もくは上うへへ登のぼる
此これは迹しやく門もんの意いなり、源みなもととは本ほん門もんなり源みなもとは水みづなり水みづは下した
へくだる此これは本ほん門もんの意いなり、条えだ茂しげとは迹しやく門もん十四じゆしゆ品ひんなり流りゆう長ちやうと
は本ほん門もん十四じゆしゆ品ひんなり智慧ちえとは一いつ心しんの三さん智ちなり門もんとは此この智慧ちえに入い
る処ところの能よ入いるの門もんなり
三さん智ちの体たいとは南な無む妙みよ法ぽう蓮れん華げ経きやうなり門もんとは信しん心しんの事ことなり、爰こゝを以もつ

て第二の巻に以信得入と云う入と門とは之れ同じきなり、今日蓮
等の類たくい南無なむ妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうと唱となえ奉たてまつるを智慧ちえとは云うなり、
譬喻品ひゆぼんに云いわく「唯有一門ゆいいういちもん」と門かどに於おて有門・空門・亦有亦空門・非
有非空門あるなり、有門は生ななり空門は死しなり亦有亦空門は
生死しうじ一念いちねんなり非有非空門は生なに非あらず死しに非あらず有門は題目だいもくの文字もんじ
なり空門は此この五字ごじに万法ばんぽうを具足ぐそくして一方いっぽうにとどこうらざる義
な

り、亦有亦空門は五字に具足する本迹なり非有非空門は一部の
意なり、此の内証は法華已前の二乗の智慧の及ばざる所なり、
文句の三に云く「七種の方便測度すること能わず」と、今日蓮等の
類いは此の智慧に得入するなり、仍て偈頌に除諸菩薩衆信力
堅固者と云うは我等行者の事を説くなり云云。

第三唯以一大事因縁の事 文句の四に云く一は即ち一実相なり五

に非ず三に非ず七に非ず九に非ず故に一と言うなり、其の性広博
にして五三七九より博し故に名けて大と為す、諸仏出世の儀式な
り故に名けて事と為す、衆生に此の機有つて仏を感じ故に名けて
因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁となす、是を出世
の本意と為す。

御義口伝に云く一とは法華経なり大とは華嚴なり事とは中間の
三昧なり、法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざる

が如し云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此の大事を釈迦如来四十余年の間隱密したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世したもう我等が一身の妙法五字なりと開仏知見する時即身成仏するなり、開とは信心の異名なり信心を以て妙法を唱え奉らば聽て開仏知見するなり、然る間信心を開く時南無妙法蓮華經と示すを示仏知見と云うなり、示す時に靈山浄土の住处と悟り即身成仏と悟るを悟仏知見と云うなり、悟る当体・直至道場なるを入仏知見と云うなり、然る間信心の開仏知見を以て正意とせり、入仏知見の字は迹門の意は実相の理内に歸入するを入と云うなり本門

の意は理り即そく本ほん覺がくと入いるなり、今日けふ蓮れん等とうの類たぐい南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうと
唱となえ奉たてまつる程ほどの者ものは宝ほう塔とうに入いるなり云い云い、又また云いく開かい仏ぶつ知ち見けんの仏ぶつと
は九く界かい所しょ具ぐの仏ぶつ界かいなり知ち見けんとは妙みょう法ほうの二に字じ止し觀くわんの二に字じ寂じやく 照しょうの
二に德とく生しょう死じの二に法ほうなり色しき心しん因いん果がなり、所しょ詮せん知ち見けんとは妙みょう法ほうなり九く界かい
所しょ具ぐの仏ぶつ心しんを法ほう華げ經きょうの知ち見けんにて開ひらく事ことなり、爰こゝをを以もつて之これを思おもう

に仏とは九界の衆生の事なり、此の開覚顕れて今身より仏身に
至るまで持つや否やと示す処が妙法を示す示仏知見と云うな
り、師弟感応して受け取る時如我等無異と悟るを悟仏知見と云
うなり、悟つて見れば法界三千の己己の当体法華経なり此の
内証に入るを入仏知見と云うなり秘す可し云云、又云く
四仏知見とは八相なり開とは生の相なり入とは死の相なり中間
の示悟は六相なり下天託胎等は示仏知見なり出家降魔成道
転法輪等は悟仏
知見なり、權教の意は生死を遠離する教なるが故に四仏知見に
非ざるなり、今経の時生死の二法は一心の妙用有無の二道は
本覚の真徳と開覚するを四仏知見と云うなり、四仏知見を以て
三世の諸仏は一大事と思召し世に出現したもうなり、此の
開仏知見の法華経を法然は捨閉閣抛と云い弘法大師は第三の劣

戲論けろんの法とののしれり、五仏道ぶつどう同の舌をきる者に非あらずや、慈覺じかく
大師だいし・智証ちしょう等は悪子に劍を与えて我が親の頭こぶしをきらする者に
非あらずや

云云、又云く一とは中諦ちゆうたい・大とは空諦くうたい・事とは仮諦けたいなり此の円融えんゆう
の三諦さんたいは何物なにものぞ所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう是なり、此の五字ごじ日蓮出世にちれんしゅつせ
の本懐ほんかいなり之これを名けて事と為なす、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうの中に日蓮にちれん
が弟子でし・檀那だんなと成る人は衆生しゅじょう有あり此機しき感かん仏ぶつ故名ごみょう為い因いんの人ひとなり、夫れそ
が為ために法華經ほけきょうの極理ごくりを弘ひろめたるは承機しょうき而おうこみよういえん縁えんに非あらずや、
因げしゆは下種げしゆなり縁えんは三五さんごの宿縁しゆくえんに歸かへするなり、事ことの一念いちねん三千さんぜんは、
日蓮にちれんが身みに当あたりての大事だいじなり、一いちとは一念いちねん・大だいとは三千さんぜんなり此の
三千さんぜんときたるは事ことの因縁いんえんなり事こととは衆生しゅじょう世間せけん・因いんとは五陰ごおん世間せけん・
縁えんとは国土こくど世間せけんなり、国土こくど世間せけんの縁えんとは南閻えんぶ浮提ふだいは妙法蓮華經みょうほうれんげきょう
を弘ひろむべき本縁ほんえんの国くになり、經きやうに云く「閻浮提えんぶだい内うち広ひろ令しる流布りゅうふ

あら
非ざるなり、正しやうじき捨しや方便ほうべん・但たんせつ説せつ無む上じやう道どうの行者ぎやうじやなれば見濁みじやくに非あらざるなり、所詮しよせん南な無む妙みやう法ほう蓮れん華げ経きやうを境きやうとして起おこる所の五濁ごじやくなれば、
日本にほん国こくの一切いっさい衆じゆ生じやう五濁ごじやくの正意せいぎなり、されば文句もんく四しに云いく、「相あひとは
四濁しじやく増劇じやうにして此こゝの時ときに聚じゆ在ざいせり瞋しん恚に増劇じやうにして刀兵たうへい起おこり貪欲とんよく
増劇じやうにして飢餓きが起おこり愚癡ぐち増劇じやうにして疾疫しつえき起おこり三災さんさい起おこるが故ゆゑに
煩惱ぼんのう倍ばい隆りゆうんに諸見しよ転うたた熾さかんなり「経きやうに如來にやうらい現げん在ざい猶多ゆた怨嫉おんしつ・
況滅きやうめつ度ど後ごと云いふ是こゝなり、法華ほけきやう經きやう不ふ信しんの者ものを以もつて五濁ごじやく障重じやうじゆうの者ものと
す經きやうに云いく、「以もつて五濁ごじやく惡世あくせ但樂たんにらく著ちやく諸欲しよよく如に是ぜ等とう衆生じゆじやう終しゆう不ふ求きう仏道ぶつどう」云いふ、
云いふ、仏道ぶつどうとは法華ほけきやう經きやうの別名べつめいなり天台てんだい云いく「仏道ぶつどうとは別べつして今經こんきやうを
指さす」と。

第五び比び丘きう比び丘きう尼に有あ懷わい増上じやうじやう慢まん優婆塞うぱそく我が慢まん優婆夷うぱい不ふ信しんの事こと 文句もんくの
四しに云いく上慢じやうまんと我慢がまんと不信ふしんと四衆ししじゆう通つうじて有あり、但ただし出家しゆつけの二衆にじゆう
は多く道だうを修しゆし禅ぜんを得えて謬あやまつて聖果せいこと謂おもい偏ひとえに上慢じやうまんを起おこす、在俗ざいぞく

は矜高にして多く我慢を起す女人は智浅くして多く邪僻を生ず
自ら其の過を見ずとは三失心を覆う、疵を蔵くし徳を揚げて
自ら省ること能わざるは是れ無慙の人なり、若し自ら過を見れ
ば是れ有羞の僧なり記の四に云く疵を蔵くす等とは三失を積す
るなり疵を蔵くし徳を揚ぐは上慢を積す、自ら省ること能わざ
るは我慢を積す、無慙の人とは不信を積す、若し自ら過を見るは
此の三失無し未だ果を証せずと雖も且らく有羞と名く。
御義口伝に云く此本末の積の意は五千の上慢を積するなり委く
は本末を見る可きなり、比丘・比丘尼の二人は出家なり共に
増上慢と名く疵を蔵くし徳を揚ぐるを以て本とせり、優婆塞は
男なり我慢を以て本とせり優婆夷は女人なり無慙を以て本とせ
り、此の四衆は今・日本国に盛んなり経には其数有五千と有れど
も日本国に四十九億九万四千八百廿八人と見えたり、在世には

五千人・仏の座を立てり今末法にては日本国の一切衆生悉く日蓮
が所座を立てり、比丘比丘尼増上慢とは道隆・良観等に非ずや
又鎌倉中の比丘尼等に非ずや、優婆塞とは最明寺優婆夷とは
上下の女人に非ずや敢て我が過を知る可からざるなり、今日蓮
等の類いを誹謗して悪名を立つ豈

不自見其過の者に非ずや大謗法の罪人なり法華の御座を立つ事
疑無き者なり、然りと雖も日蓮に値う事は併ら礼仏而退の義
なり此の礼仏而退は輕賤の義なり全く信解の礼退に非ざるなり
此等の衆は於戒有欠漏の者なり、文句の四に云く「於戒有欠漏と
は律義失有るをば欠と名け定共道共失有るをば漏と名く」と此の
五千の上慢とは我等所具の五住の煩惱なり、今法華經に値い
奉る時慢即法界と開きて礼仏而退するを仏威徳故去と云うな
り、仏とは我等所具の仏界なり威徳とは南無妙法蓮華經なり、
故去とは而去不去の意なり普賢品の作礼而去之を思う可きな
り、又云く五千の退座と云う事・法華の意は不退座なり其の故は
諸法実相略開三顯一の開悟なり、さて其の時は我慢増上慢とは
慢即法界と開きて本有の慢機なり、其数有五千とは我等が五住
の煩惱なり若し又

五住の煩惱無しと云うは法華の意を失いたり、五住の煩惱有り
乍ら本有常住ぞと云う時其数有五千と説くなり、断惑に取り合
わず其の儘本有妙法の五住と見れば不自見其過と云うなり、さ
て於戒有欠漏とは小乗 権教の対治衆病の戒法にては無きな
り是名持戒の妙法なり故に欠漏の当体其の儘是名持戒の体な
り、然るに欠漏を其の儘本有と談ずる故に護惜其瑕疵とは説く
なり、元より一乗の妙戒なれば一塵含法界一念遍十方する
故に是小智已出と云うなり、糟糠とは塵塵法法・本覺の三身なり
故にすくなき福德の当体も本覺無作の覺体なり、不堪受是法と
は略開の諸法実相の法体を聞きて其の儘開悟するなりさて身子
尊者鈍根のために分別解説したまえと請う広開三の法門をば
不堪受是法と説く、さて法華の実義に歸りて見れば妙法の法体
は更に能受所受を忘るるなり不思議の妙法なり、本法の重を悟

りて見る故に此衆無枝葉と云うなり、かかる内証は純一実相。
実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり所詮貞実とは色心を
妙法と開く事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
処を唯有諸貞実と説くなり、諸とは諸法実相の仏なり諸は十界
なり貞実は十界の色心を妙法と云うなり今經に限る故に唯と
云うなり、五千の上慢の外全く法華經之れ無し五千の慢人とは
我等が五大なり五大即妙法蓮華經な

り、五千の上慢は元品の無明なり故に礼仏而退なり此れは九識八識六識と下る分なり流転門の談道なり、仏威徳故去とは還滅門なり然らば威徳とは南無妙法蓮華経なり本迷本悟の全体なり能く能く之を案ず可し云云。

第六如我等無異如我昔所願の事 疏に云く因を挙げて信を勧むと。

御義口伝に云く我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり、如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等なり、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱うる者はなり、爰を以て之を思うに釈尊の惣別の二願とは我等衆生の為に立てたもう処の願なり、此の故に南無妙法蓮華経と唱え奉りて

日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうを我が成仏じょうぶつせしめんと云う所の願ねがひ併しら
如我にやが昔しやく所願しよがんなり、終ついに引導いんどうして己身こしんと和合わごうするを今者こんじゃい已満足まんぞくと
意得いごころ可べきなり、此この今者こんじゃい已満足まんぞくの己この字じすずでにと読よむなり何いずれの
処ところを指さして已すにとは説すけるや、凡おほそ所しよ積じやくの心こころは諸法しよほつ実相じつじやうの文ぶんを
指さして已すにとは云いえり、爾しかりと雖いえども当り家つぎの立り義ぎとしては南無なむ
妙法蓮華經みよほつれんげきよを指さして今者こんじゃい已満足まんぞくと説すかれたりと意得いごころ可べきなり、
されば此この如我にやが等無異とうむいの文ぶん肝要かんようなり、如我にやが昔しやく所願しよがんは本因妙ほんにんみよう
如我にやが等無異とうむいは本果妙ほんくわうなり妙覺みよがくの積尊じやくそんは我等われらが血肉けつにくなり因果いんがの
功德骨髓くどくこつすいに非あらずや、釈しやくには拳こいん因いん勸信くわんしんと拳こいん因いんは即すなわち本果ほんくわうなり、
今日蓮けふのれんが唱となうる所ところの南無妙法蓮華經なむみよほつれんげきよは末法まつぽう一まん年ねんの衆生しゅじょうまで
成仏じょうぶつせしむるなり、豈あに今者こんじゃい已満足まんぞくに非あらずや、已ことは建長けんちやう五年ごねん四
月廿八日しがつにじはちにちに初めて唱となえ出いだす処ところの題目だいもくを指さして已こと意得いごころ可べきな
り、妙法みよほつの大良薬だいりやうやくを以もつて一切衆生いっさいしゅじょうの無明むみよの大病たいびやうを治うたせん事こと疑うたが

い無きなり此れを思い遣る時んば満足なり満足とは成仏と云う
事なり、釈に云く「円は円融・円満に名け頓は頓極頓足に名く」と
之を思ふ可し云云。

第七於諸菩薩中正直捨方便の事 文句の四に云く於諸菩薩中の
下の三句は正しく実を顯すなり、五乗は是れ曲にして直に非ず通
別は偏傍にして正に非ず今皆彼の偏曲を捨てて但正直の一道を
説くなり」と。

御義口伝おんぎくでんに云いく此この菩薩ぼさつとは九界くこの第九こに居ゐしたる菩薩ぼさつなり又一切衆生いっさいしゅじょうを菩薩ぼさつと云いうなり今日蓮等けふれんとうの類たぐいなり、又諸天善神等しよてんぜんじん迄こも是これ菩薩ぼさつなり正直しよつじきとは煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しようじ即そく涅槃ねはんなり、さて一道いどうとは南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうなり今末法いままつぽうにして正直しよつじきの一道いどうを弘ひろむる者は日蓮等にちれんの類たぐいに非あらずや。

第八とつち当来世あくるよ惡人聞仏説おんぎくでん一乘迷惑不信受破法墮惡道いっせむいふく しんじゆはほう だあくどうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく当来世とうらいせとは末法まつぽうなり惡人あくにんとは法然ほうねん・弘法こうぼう・慈覺じかく智証等ちしやうなり、仏ぶつとは日蓮等にちれんの類たぐいなり一乘いっせとは妙法蓮華經みよほうれんげきやうなり不信ふしんの故ゆえに三惡道さんあくどうに墮だす可べきなり。

譬喻品九箇の大事ひゆほん だいいじ

第一だいいち譬喻品ひゆほんの事こと 文句もんくの五ごに云いく譬ひとは比況ひきやうなり喻たとえとは曉訓たうんなり

大悲息だいいひまず巧智こうち無辺むへんなれば更さらに樹じゆを動うごかして風かぜを訓しんえ扇あを拏あげ

て月を喩すと。

御義口伝に云く大悲とは母の子を思ふ慈悲の如し今日蓮等の

慈悲なり、章安云く「彼の為に悪を除くは即是れ彼の親」と、

巧智とは南無妙法蓮華経なり諸宗無得道の立義なり巧於難

問答の意なり更とは在世に次で滅後の事と意得可きなり、樹を

動すとは煩惱なり風を訓るとは即菩提なり扇を拵ぐとは生死な

り月を喩すとは即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と

唱え奉る時大白牛車に乗じて直至道場するなり、記の五に云く

「樹と

扇と風と月とは唯円教の理なり」と又云く「法説の実相は何ぞ隠

れ何ぞ顕れんや長風息むこと靡く空月常に懸れり」と此釈之を思

ふ可し、隠とは死なり顕とは生なり長風とは我等が息なり空月と

は心月なり法華の生死とは三世常恒にして隠顕之無し我等が息

風とは吐く処ところの言語ごんごなり是南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、一心法界いっしんほっかいの
覚かく月常住げつじょうじゅうにして懸かがれり是これを指して唯ただ円教えんきょうの理りと釈しゃくせり円とは
法界ほっかいなり教とは三千羅列さんぜんなり理とは実相じつそうの一理いちりなり云云。

第二即起合掌の事 文句の五に云く外義を敍するとは即起合掌は

身の領解と名く昔は権実二と為す 掌の合するが如し、今は

権即実と解る二の掌の合するが如し、向仏とは昔は権・仏因に

非ず実・仏果に非ず今権即実と解して大円因を成ず因は必ず果に

趣く故に合掌向仏と言つと。

御義口伝に云く合掌とは法華經の異名なり向仏とは法華經に

値い奉ると云うなり合掌は色法なり向仏は心法なり、色心の二

法を妙法と開悟するを歡喜踊躍と説くなり、合掌に於て又二の

意之れ有り合とは妙なり 掌とは法なり、又云く合とは

妙法蓮華經なり 掌とは廿八品なり、又云く合とは仏界なり

掌とは九界なり九界は権・仏界は実なり、妙樂大師の云く「九

界を権と為し仏界を實と為す」と十界悉く合掌の二字に納まつて

森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり、惣じて三種の

法華の合掌之れ有り今の妙法蓮華經は三種の法華未分なり、
爾りと雖も先ず顯說法華を正意と為すなり、之に依つて傳教
大師は於二仏乘とは根本法華の教なり 妙法の外更に一句の
余經無しと、向仏とは二文文皆金色の仏体と向い奉る事なり
合掌の二字に法界を尽したるなり、地獄 餓鬼の己己の当体
其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり而る間法界悉く舍利弗な
り舍利弗とは法華經なり、
舎とは空諦利とは仮諦弗とは中道なり円融三諦の妙法なり
舍利弗とは梵語此には身子と云う身子とは十界の色心なり身と
は十界の色法子とは十界の心法なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く舍利弗なり、舍利弗は即釈迦
如来・釈迦如来は即法華經・法華經は即我等が色心の二法なり、
仍て身子此の品の時聞此法音と領解せり、聞とは名字即法音とは

諸法の音なり諸法の音とは妙法なり、爰を以て文句に釈する
時長風息むこと靡しと長風とは法界の音声なり、此の音声を
信解品に以て仏道声令一切聞と云えり一切とは法界の衆生の事な
り此の音声とは南無妙法蓮華經なり。

第三云く身意泰然快得安穩の事 文句の五に云く從仏は是れ身の
喜を結するなり聞法は此れ口の喜を結するなり

断諸疑悔とは是れ意の喜を結すと。

御義口伝おんぎくでんに云くい身意泰然しんたいぜんとは煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生死即涅槃しじうじそくねはんなり、身とは生死即涅槃しじうじそくねはんなり意とは煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいなり従したが仏とは日蓮にちれんに従したがう類たぐい等の事なり口くちの富とみとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり意の喜とは無明むみょうの惑障わくしょう無なき故ゆゑなり、爰こゝをを以もつて之これを思おもうに此の文は一心三觀いっしんさんかん・一念三千我等いちねんさんぜんわれらが即身成仏そくしんじょうぶつなり方便ほうべんの教は泰然たいぜんに非あらず安穩あんゑんに非あらざるなり行於險逕けんぎやうたるとる多留難故なんこの教なり。

第四得仏法分の事

御義口伝おんぎくでんに云くい仏法ぶつぽうの分ぶんとは初住しよじゆう一分いちぶんの中道ちゆうどうを云うなり、迹門しやくもん初住本門しよじゆうほんもん二住にじゆう已上いじゆうと云う事ことは此の分の字あじより起おこるなり、所詮しよせん此の分の一字いちじは一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんなり其の故そのゆゑは地獄じごくは地相じさうの分ぶんで仏実ぶつじつを証あかしし乃至な二千にせんの諸法しよぽう己己こゝこゝの当体とうたいの分ぶんで仏果ぶつかを証あかししたるなり真実しんじつの我等われらが即身成仏そくしんじょうぶつなり、今日きよう連等れんどうの類たぐい南無なむ

妙法蓮華經と叫うる分で仏果を証したるなり、分とは權教は無
得道・法華經は成仏と分つと意御可きなり、又云く分とは本門
寿命品の意なり己己本分の分なり、惣じて迹門初住分証と云
うは教相なり眞實は初住分証の処にて一經は極りたるなり。
第五而自廻轉の事 記の五に云く、或は大論の如し經に而自廻轉と
云うは身子の得記を聞きて法性自然にして轉じ因果依正自他
悉く轉ずるを表すと。
御義口伝に云く草木成仏の証文に而自廻轉の文を出すなり是れ
一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり、草木成仏の証
人とは日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを指すなり、廻
轉とは題目の五字なり自とは我等行者の事なり記の五の釈能く
能く之を思うべし云云。

第六一時俱作の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ一時いちじとは末法まつぼうの一時いちじなり俱作ぐくさとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり俱ぐとは畢竟住ひつきょう一乘いちじょうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐ所作しよさに
は題目だいもくの五字ごじなり余行よぎょうを交まじえざるなり、又云く十界じゅっかいの語言ごげんは一
返だいまくの題目だいもくを俱ぐ作くさしたり、是れ豈あにかんのう感あ應あに非あらずや。

第七ひ以譬喻ひゆとくげ得解とくげの事 止觀しかんの五いに云く智いとは譬たとえに因よるに斯この意しる徴しるし有りと。

御義口伝おんぎくでんに云くいわ此の文を以て鏡像えんゆう円融えんゆうの三諦さんたいの事を伝つたうるなり、
惣そうじて鏡像えんゆうの譬たとえとは自浮じふじよう自影じえいの鏡かみの事ことなり此の鏡かみとは一心いっしんの鏡かみ
なり、惣そうじて鏡かみに付て重重そうでんの相伝さうでん之これ有り所詮しよせん鏡かみの能徳のうとくとは万像ばんざうを
浮うぶるを本ほんとせり妙法華華經みょうほうの五字ごじは万像ばんざうを浮うべて一法いつぽうも残のこる
物もの之これ無なし、又云く鏡かみに於おいて五鏡ごかみ之これ有り妙の鏡かみには法界ほっかいの
不思議ふしぎを浮うべ・

法の鏡ほっかいには法界ほっかいの体たいを浮うべ・蓮の鏡れんには法界ほっかいの果くわを浮うべ・華の鏡けに

は法界の因を浮べ・経の鏡には万法の言語を浮べたり、又云く妙の鏡には華嚴を浮べ・法の鏡には阿含を浮べ・蓮の鏡には方等を浮べ・華の鏡には般若を浮べ・経の鏡には法華を浮ぶるなり、順逆次第して意得可きなり、我等衆生の五体五輪妙法蓮華経と浮び出でたる間宝塔品を以て鏡と習うなり、信謗の浮び様能く能く之を案ず可し自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華経是なり云云。

第八唯一門の事

文句の五に云く唯一門とは上の以種種法門

宣示於仏道に譬う、門に又二あり宅門と車門となり宅とは生死なり門とは出ざる要路なり、此は方便教の詮なり車とは大乘の法なり門とは円教の詮たりと。
御義口伝に云く一門とは法華経の信心なり車とは法華経なり牛とは南無妙法蓮華経なり宅とは煩惱なり自身法性の大地を生死・生死と転ぐり行くなり云云。

第九今此三界等の事 文句の五に云く次に今此三界より下 第二に
一行半は上の所見諸衆生為生老病死之所燒煮を頌して第二の
所見・火の譬を合す、唯我一人より下 第三に半偈は上の仏見
此已便作是念と頌し、驚入

火宅を合するなりと。

御義口伝おんぎくでんに云いわく此この文ぶんは一いち念ねん三さん千せんの文ぶんなり一いち念ねん三さん千せんの法ほう門もんは迹しやくもん門もんには生せい陰いん二に千せんの世せ間けんを明あかし本ほん門もんには国こく土ど世せ間けんを明あかすなり、又いわ云いく今こん此こ三さん界がいの文ぶんは国こく土ど世せ間けんなり其こちゆうしゆじゆう中ちゆう衆じゆう生せいの文ぶんは五ご陰いん世せ間けんなり而い今こん此こ處こ多た諸しよ患げん難なん唯ただ我われ一ひと人にんの文ぶんは衆しゆじゆう生せい世せ間けんなり、又い云わく今こん此こ三さん界がいは法ほう身しん如に来らいなり其こちゆうしゆじゆう中ちゆう衆じゆう生せい悉しつ是ぜ吾わ子こは報ほう身しん如に来らいなり而い今こん此こ處こ等とうは応おう身しん如に来らいなり。

信解品しんげ六箇だの大事だいじ

第一だいいち信解品しんげの事こと 記きの六ろくに云いく正しやう法ほう華わには信しん樂ぎやう品ひんと名なく其その義ぎ通つうずと雖いも樂らくは解かいに及およばず今いまは領解りやうげを明あかす何なにを以もてか樂らくと云いわんや。

御義口伝おんぎくでんに云いく法華ほつげ一ひと部ぶ廿八品にじはちひんの題号だいごうの中ちゆうに信解しんげの題号だいごう此この品ひんに之これ有あり、一いち念ねん三さん千せんも信しんの一字いちじより起おこり三さん世ぜの諸しよ仏ぶつの成道じやうだうも

信の一字より起るなり、此の信の字元品の無明を切る利剣なり
其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり解とは
智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の諸仏の智慧を
かうは信の一字なり

智慧とは南無妙法蓮華経なり、信は智慧の因にして名字即なり
信の外に解無く解の外に信無し信の一字を以て妙覚の種子と定
めたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と信受領納する故に
無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種なり不信は
墮獄の因なり、又云く信は不变真如の理なり其の故は信は知
一切法皆是仏法と体達して実相の一理と信ずるなり解は
随縁真如なり自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを
信と曰い明了

なるを解と曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞き

て、初めて疑惑を破して大乘の見道に入る故に名けて信と為す進
んで大乘の修道に入る故に名けて解と為す、記の六に云く大を
以て之に望むるに乃ち両手を分ちて以て二道に属す疑を破する
が故に信なり進んで入るを解と名く、信は二道に通じ解は唯修
に在り故に

修道しゆどうを解なすと名なくと云いつと。

第二捨父逃逝しゃぶじようぜいの事 文句もんくの六ろくに云いく、捨父逃逝しゃぶじようぜいとは大だいを退たいするを

捨なと為なし無明むみやう自みら覆おほうを逃いと日い生死しやうじに趣しゆこ向こするを逝なと為なすと。

御義口伝おんぎくでんに云いわに於おいて三さん之これれ有あり法華經ほけきやう・釈尊しゃくそん・日蓮にちれん是これなり、

法華經ほけきやうは一切衆生いっさいしゆじやうの父ちちなり此この父ちちに背そむく故ゆえに流轉りうてんの凡夫ぼんぶとな

る、釈尊しゃくそんは一切衆生いっさいしゆじやうの父ちちなり此この父ちちに背そむく故ゆえに備つぎさに諸道しよを

輪めぐるなり、今日蓮いまにちれんは日本にほん国こくの一切衆生いっさいしゆじやうの父ちちなり、章安大師しやうあんだいしの

云いわく「彼たが為ために悪あくを除すく即すなわち是これ彼こが親おやなり」と、退大たいだいの大だいは

南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり無明むみやうとは疑惑ぎわく謗法ほうぼうなり、自みら覆おほうとは法然ほうねん

弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしやう・道隆どうりゆう・良觀りやうかん等らうの悪あく比丘びく・謗法ほうぼうの失とがを恣ほしままに

覆おほいかくすなり。

第三加復窮困またぐうこんの事 文句もんくの六ろくに云いく、出要しゆやうの術じゆつを得えざるを又窮またぐうと

為なし、八苦はつこの火かに焼やかるるが故ゆえに困こと為なすと。

御義口伝に云く出要とは南無妙法蓮華經なり術とは信心なり、
今日蓮等の類い窮困を免離する事は法華經を受持し奉るが故な
り、又云く妙法に値い奉る時は八苦の煩惱の火自受用報身の智
火と開覚するなり云云。

第四心懷悔恨の事 文句の六に云く悔を父に約し恨を子に約すと、

記の六に云く父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、
法華不信の失に依つて無間・大城に墮ちて返つて日蓮を恨みん、
又日蓮も声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを靈山
にて悔ること之れ有る可きか、文句の六に云く「心懷悔恨とは昔・
勤に教詔せず訓うること無くして逃逝せしむることを致すこ
とを悔い子の恩義を惟わずして我を疎んじ他に親しむるを恨む」

と。

第五無上宝聚不求自得の事

御義口伝おんぎくでんに云いく無上むじょうに重重じゅうじゅうの子細しさいあり、外道げどうの法ほに対すれば三蔵さんぞう・
教きょうは無上むじょう外道げどうの法ほは有上うじょうなり又三蔵さんぞう教きょうは有上うじょう・通教つうきょうは無上むじょう・
通教つうきょうは有上うじょう・別教べつきょうは無上むじょう・別教べつきょうは有上うじょう・円教えんきょうは無上むじょう、又爾前にぜんの
円えんは有上うじょう・法華ほっけの円えんは無上むじょう・又迹門しやくもんの円えんは有上うじょう・本門ほんもんの円えんは無上むじょう、
又迹門しやくもん十三品じゅうじゅうさんひんは有上うじょう・方便品ほうべんひんは無上むじょう・又本門ほんもん十三品じゅうじゅうさんひんは有上うじょう・一品
二半にはんは無上むじょう、又天台大師てんだいだいし所弘しよくの止観しかんは無上むじょう・玄文げんもん二部にぶは有上うじょうな
り、今日蓮等けんにちれんたうの類たぐいの心こころは無上むじょうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう・無上むじょうの中ちゆうの
極無上むじょうなり、此こゝの妙法みょうほを指さして無上むじょう・宝聚ほうじゆと説たまき給たまうなり、宝聚ほうじゆ
とは三世さんぜの諸仏しよぶつの万行まんぎやう万善ばんぜんの諸波羅蜜しよはらみつの宝たからを
聚あつめたる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり、此こゝの無上むじょう宝聚ほうじゆを辛勞なくも無なく行功ぎやうく
も無なく一言いちごんに受取うけとる信心しんじんなり不ふ求く自得じとくとは是こゝれなり、自この字じは
十界じゅうがいなり十界じゅうがい各各かくかく得えるなり諸法しよほ実相じつじやう是こゝなり、然しかる間かん・此こゝの文ぶん・

妙覺みょうかくの釈尊しゃくそん・我等衆生われらしじょうの骨肉こつにくなり能く能く之これを案ず可べし云云。

第六世尊大恩の事せそん

御義口伝おんぎくでんに云く世尊せそんとは釈尊しゃくそん・大恩だいおんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり、

釈尊しゃくそんの大恩だいおんを報はらげんと思おもわば法華經ほけきょうを受持じゆじす可べき者しやなり是これ

即すなわち釈尊しゃくそんの御恩ごおんを奉たてまつじ奉たてまつるなり、大恩だいおんを題目だいもくと云いう事ことは次下つぎしもに

以い稀有事いけうじと説しく、希有けううの事こととは題目だいもくなり、此この大恩だいおんの妙法蓮華經みょうほうれんげきょう

を四十余年よんじゅうよねんの間秘たまいし給たまいて後八箇年はちかねんに大恩だいおんを開たまき給たまうなり、文句もんく

の一いに云いく「法王運ほうおうを啓ひらくく」と運うんとは大恩だいおんの妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり云

云いまにちれん今日蓮等こんにんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつりて日本にほん国こくの一切いっさい

衆生しじょうを助たすけんと思おもうは豈あに世尊せそんの大恩だいおんに非あらずや、章安大師しやうあん十種だいしの

恩おんを挙あげたりしなり第一だいいちには慈悲逗物じひとうもつの恩おん・第二だいにには最初下種さいしよげしゆの

恩おん・第三だいにには中間隨逐ちゆうげんずいぢくの恩おん・第四だいにには隱徳示拙いんとくじせつの恩おん・第五だいにには

鹿苑施小ろくおんせしやうの恩おん・第六だいにには耻小慕大ちしやうの恩おん・第七だいにには領地家業りやうぢかごうの恩おん・第

八には父子決定の恩・第九には快得安穩の恩・第十には還用利多
の恩なり此の十恩即ち衣座室の三軌なりと云云、記の六に云く
「宿萌しゆくみょう稍割せうわりけて尙未なおいまだ敷榮ふえいせず長遠ちようおんの恩何いかに由よりてか報へず可べき

と、又云く「注家は但物として施を天地に答えず子として生を父母に謝せず感報斯に亡するを以てなり、と云えり」、輔正記の六に云く「物は施を天地に答えずとは謂く物は天地に由て生ずと雖も而も天地の沢を報ずと云わず子も亦之の如し」と、記の六に云く「況や復只だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じきを」と、輔正記に云く「只縁令我報亡とは意に云く只如来の声聞をして等しく亡報の理を得せしむるに縁るなり理は謂く一大涅槃なり」と。

御義口伝に云く此くの如く重重の所釈之れ有りと雖も所詮南無妙法蓮華經の下種なり下種の故に如影随形し給うなり、今日蓮も此くの如きなり妙法蓮華經を日本国の一切衆生等に与え授くる豈釈尊の十恩に非ずや、十恩は即ち衣座室の三軌なりとは

第一・第二・第三は大慈為室の御恩なり第四・第五第六第七は柔

和忍辱衣にんにくえの恩なり第八第九第十は諸法空為座しよほうくういざの恩なり、第六の耻ちしょう小慕大の恩を記の六に云く「ゆえ」故に頓とんの後に於て便すなわち小化を垂れ弾だんしょう斥淘汰し槌砧鍛鍊す」と。

薬草やくそう喻品ゆほん五箇ごの大事だいじ

第一だいいち薬草やくそう喻品ゆほんの事 記の七に云く無始むしの性徳しょうとくは地の如ごとく大乘だいじようの

心を発はつするは種の如ごとく二乗にじようの心を発はつするは草木そうもくの芽茎げきようの如ごとく今いま初住しゆじゆに入るは同じく仏乘ぶつじゆの芽茎げきよう等を成じゆずるが如ごとく。

御義おんぎ口伝くでんに云く法華ほっけの心を信しんずるは種しゆなり諸法しよほう実相じつそうの内証ないしように入いれば仏果ぶつかを成じゆずるなり、薬やくとは九界しゆの衆生じゆじゆの心法しんぽうなり其そのの故ゆえは

権教ごんきようの心は毒草どくそうなり法華ほっけに値あいぬれば三毒さんどくの煩惱ぼんのうの心地しんじを三身さんじん果満かまんの種くさねなりと開覺かいかくするを薬やくとは云いうなり、今日けふ蓮れん等の類たぐい

妙法みょうほうの薬やくを煩惱ぼんのうの草くさに受うくるなり煩惱ぼんのう即すく菩提ぼだい・生死しじゆ即すく涅槃ねはんと

覺らしむるを喩とは云うなり、
積に云く「喩とは曉訓なり」と薬
草喩とは我等行者の事なり。

第二此の品述 成段の事

御義口伝おんぎくでんに云く述じゆつじやうとは迦葉かしようなり成せいとは釈尊しゃくそんなり、述じゆつじやう成せいの二字は
迦葉かしよう・釈尊しゃくそん一致いっしする義ぎなり、所詮しよせん述じゆつじやうは所化しよけの領解りやうげ、成せいは仏ぶつの印加いんか
なり、今日蓮けふにちれん等の類たぐい南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと領りやうするは述じゆつじやうなり日蓮にちれんが
贊嘆さんたんするは成せいなり我等われらが即身成仏そくしんじやうぶつを説せつき極ごくめたる品ひんなり、
述じゆつじやう成一せい致符契しちふけいするは述じゆつじやう成不二せいふじの即身成仏そくしんじやうぶつなり此こゝの述じゆつじやう成せいは
法界三千ほっかいさんぜんの皆成みなじやうぶつ仏道ぶつだうの述じゆつじやう成せいなり。

第三雖一地所生一雨所潤等の事

御義口伝おんぎくでんに云く随縁不変ずいえんふへんの起おこる所ところの文ぶんなり、妙樂みやうらく大師だいし云く
「随縁不変ずいえんふへんの説せつは大教だいけうより出いで木石無心ぼくせきの言ことばは小宗せうしゆより生なず」と、
此こゝの大教だいけうとは一經いっけいの惣体しゆたいに非ず此こゝの雖一地所生等すいいちじせしやうの十七字じゆしちじを指さ
すなり、一地所生一雨所潤しやういちぢゆしよにんは無差別譬むしやべつひ・而諸草木各有差別しよしよそくは有差別うしや
別譬べつひなり無差別譬むしやべつひの故ゆゑに妙たなり有差別譬うしやべつひの故ゆゑに法ほなり云云、

いまにちれん 類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有差を置くなり廿
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有差を置くなり廿
八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり、一地とは迹門の
大地一雨とは本門の義天・一地とは從因至果・一雨とは
從果向因、末法に至つて從果向因の一雨を弘通するなり
一雨とは題目に余行を交えざるなり、序品の時は雨大法雨と説
き此の品の時は一雨所潤と説けり一雨所潤は序品の雨大法雨を
重ねて仏説き給うなり、一地とは五字の中の經の一字なり一雨
とは五字の中の妙の一字なり法蓮華の三字は三千万法・中にも
草木なり三乘・五乘・七方便・九法界なり云云。

第四破有法王出現世間の事

御義口伝に云く有とは謗法の者なり破とは折伏なり法王とは
法華經の行者なり世間とは日本国なり、又云く破は空・有は仮・
法王は中道なり、されば此の文をば釈迦如来の種子と伝うるな

り惣そつじて三世さんぜの諸しよ仏ぶつの出世しゅっせは此の文ぶんに依よるなり、有うとは三界さんがい廿五
有うなり破はとは有執うしゆを破はするなり法王ほうおうとは十界じゆっかいの衆生しゆじやうの心法しんぽうなり
王わうとは心法しんぽうを

云うなり諸法実相と開くを破有法王とは云うなり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは謗法の有執を断じて釈迦法王
と成ると云う事なり、破有の二字を以て釈迦如来の種子とは云う
なり、又云く有と云うは我等が煩惱生死なり此の煩惱生死を捨
てて別に菩提涅槃有りと云うは權教權門の心なり、今經の心は
煩惱生死を其の儘置いて菩提涅槃と開く所を破と云うなり、有と
は煩惱・破とは南無妙法蓮華經なり有は所破なり破は能破なり
能破・所破共に実相の一理なり、序品の時は尽諸有結と説き此の
品には破有法王と説き譬喩品の時は皆是我有と宣べたり云云。
第五我觀一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・亦無限礙

の事

御義口伝に云く此の六句の文は五識なり我觀一切・普皆平等とは
九識なり無有彼此とは八識なり愛憎之心とは七識なり我無貪著

とは六識なり亦無限礙とは五識なり我等衆生の觀法の大体なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は豈我觀一切、普皆平等の九識の修行に非ずや爾らば無有彼此に非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙に非ずや。

授記品四箇の大事

第一授記の事

文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。

御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華經なり授とは日本國の一切衆生なり不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の記を受くるなり、又云く授記とは法界の授記なり地獄の授記は悪因なれば悪業の授記を罪人に授くるなり余は之に准じて知る可きなり、生の記有れば必ず死す死の記あれば又生ず三世常恒の授記なり、所詮中根の四大

老の
声聞しよもんとは我等われらが生老病死しよろうびびようしの四相なり、
迦葉かしようは生の相
迦旃延かせんねんは

相・日連は病の相・須菩提は死の相なり、法華に来つて生老病死の四相を四大声聞と顕したり是れ即ち八相作仏なり、諸法実相の振舞なりと記を授くるなり妙法の授記なるが故に法界の授記なり、蓮華の授記なるが故に法界清浄なり經の授記なるが故に衆生の語言音声は三世常恒の授記なり、唯一言に授記すべき南無妙法蓮華經なり云云。

第二迦葉光明の事

御義口伝に云く光明とは一切衆生の相好なり光とは地獄の灯燃猛火此れ即ち本覺自受用の智火なり乃至仏果之れ同じ、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の光明を謗法の闇冥の中に指し出だす此れ即ち迦葉の光明如来なり、迦葉は頭陀を本とす頭陀は爰に抖と云うなり、今末法に入つて余行を抖して、専ら南無妙法蓮華經と修するは此經難持行頭陀者是なり云云。

第三捨是身已の事

御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨
に非ず転捨は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩惱即
菩提・生死即涅槃の旨に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉るは捨是身已なり不惜身命の故なり云云、
又云く此の身を捨すと読む時は法界に五大を捨すなり捨つる処
の義に非ず、是の身を捨てて仏に成ると云うは権門の意なりか
かる執情を捨つるを捨是身已と説くなり、此の文は一念三千の
法門なり捨是身已とは還歸本理・一念三千の意なり、妙楽大師
の当知身土・一念三千・故成道時・称此本理・一心一念・遍於法界
と釈するは此の意なり云云。

第四宿世因縁吾今当説の事

御義口伝に云く宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり下根の

為^{ため}に宿世^{すくせ}の因縁^{いんねん}を説かんと云う事なり、
因縁^{いんねん}と

是因は種なり縁は昔に歸る義なりもとづくくと訓だいつつぜり、大通結縁けちえんの
下種げしゅにもとづくくと云う事を因縁いんねんと云うなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無たぐ
妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは過去かこの因にもとづきたり、爰ここをを以て
妙樂大師みようりやくだいしの云いわく「故ゆえに知んぬ
末代まつだい一時いちじ聞きくことを待まちて聞きき已おわつて信しんを生なず・事須すべからく宿種しゆくしゅなるべ
し」と、宿しゆくとは大通だいつつの往時わうじなり絶げつとは下種げしゅの南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきようなり
此この下種げしゅにもとづくくを因縁いんねんと云うなり、本門ほんもんの意いは五百塵点じゆふじんでんの
下種げしゅにもとづくくべきなり真実妙法しんじつみようほうの因いんに縁えんくもとずを成じよぶつ仏ぶつと云うな
り。

化城喻品七箇の大事けじようゆほん
だいじ

732P

第一化城の事だいいちけじよう
だいじ

御義口伝おんぎくでんに云いわく化けとは色法しきほうなり城じやうとは心法しんほうなり、此この色心しきしんの二法にほう

を無常と説くは権教の心なり法華經の意は無常を常住と説く
なり化城即宝処なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者は色心妙法と開くを化城即宝処と云うなり、十界皆
化城・十界各各宝処なり化城は九界なり宝処は仏界なり、化城
を去つて宝処に至ると云うは五百由旬の間なり此の五百由旬と
は見思・塵沙・無明なり、此の煩惱の五百由旬を妙法の五字と開
くを
化城即宝処と云うなり、化城即宝処とは即の一字は南無
妙法蓮華經なり念念の化城念念の宝処なり、我等が色心の二法
を無常と説くは権教なり常住と説くは法華經なり無常と執す
る執情を滅するを即滅化城と云うなり、化城は皮肉・宝処は骨
なり色心の二法を妙法と開覚するを化城即宝処の实体と云うな
り、实体とは無常常住・俱時相即・隨縁不變・一念寂照なり

いちねん
一念とは南無妙法蓮華經・無
とど
疑 曰信の一念なり即の一字心を
これ
留めて之を思ふべし云云。

だいじつちしよぶつ

第二大通智勝仏の事

御義口伝に云く大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門智勝
は本門なり大通智勝は我等が一身なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は大通なり題目を唱うるは智勝なり、
法華經の行者の智は権宗の大智よりも百千万倍勝れたる所を
智勝と心得可きなり、大は色法通は心法なり我等が生死を大通
と云うなり、此の生死の身心に振舞う起念を智勝とは云うなり、
爰を以て之を思うに南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は大通智勝
仏なり十六王子とは我等が心数なり云云。

第三諸母涕泣の事

御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義には
母とは元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云うな
り、流転の時は無明の母とつれて出で還滅の時は無明の母を殺す
なり、無明の母とは念仏・禅・真言等の人人なり而隨送之とは

謗人ほうじんを指すなり、然りと雖も終に法華經ほけきょうの広宣流布こうせんるふ顕れて天下てんが一同に法華經ほけきょうの行者ぎぎょうじやと成る可きなり、隨至道場ずいしどうじょう還欲親近げんよくしんこん是なり。

第四其祖轉輪聖王の事ごそてんりんじょうおう

御義口伝おんぎくでんに云く本地身ほんちの仏とは此文このもんを習うなり、祖とは法界ほっかいの異名いみょうなり此れは方便品ほうべんの相性体さうじやうたいの三如是によげを祖と云うなり、此の三如是によげより外に轉輪聖王てんりんじょうおう之れ無きなり轉輪とは生住異滅しやうじゆういめつなり聖王とは心法しんぽうなり、此の三如是によげは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る者となたてまつるものは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼにして其祖轉輪聖王ごそてんりんじょうおうなり、金銀銅鉄きんぎんとは金は生、銀は白骨びやくこつにして死なり銅は老の相、鉄は病なり此れ即ち開示悟入かいじこにゆうの四仏しぶつ知見ちけんなり、三世常恒さんぜじやうじやうに生死しじゆとめぐるを轉輪聖王てんりんじょうおうと云うなり、此の轉輪聖王出現てんりんじょうおうしゆげんの時の

輪宝わんぼうとは我等われらが吐く所の言語ごんご音声おんじやうなり此の音声おんじやうの輪宝わんぼうとは南無なむ
妙法蓮華經みよほうれんげきやうなり爰ここをを以て平等びやうどう大慧だいえとは云うなり。
じゅうろくおうじ

第五十六王子の事

御義口伝おんぎくでんに云く十じゅうとは十界じゅうかいなり六ろくとは六根ろくこんなり王わうとは心王しんのうなり
子ことは心数しんすなり此これ即すなわち実相じつそうの一理いちりの大通だいつうの子こなり、今日けふ蓮等れんどう
の類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものは十六じゅうろく王子おうじなり八方はつぱう作さぶつ仏ぶつと
は我等われらが八苦はつくの煩惱ぼんのう即すなわち菩提ぼだいと開ひらくなり云云。

第六即滅化城の事

御義口伝おんぎくでんに云く我等われらが滅めつする当体とうたいは化城けじょうなり、此この滅めつを滅めつと見み
れば化城けじょうなり不滅ふめつの滅めつと知見ちけんするを宝处ほうじょとは云うなり、是これを
寿量品じゅうりょうほんにしては而実にじつ不滅度めつどとは説めつくなり、滅めつと云う見みを滅めつする
を滅めつと云うなり三権さんけん即すなわち一実いちじつの法門ほうもん之これを思おもう可べし、或あるは即すなわち滅化城めつけじょう
とは謗法ぼうぼうの寺塔じとうを滅めつする事ことなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐい南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものは化城けじょう即すなわち宝处ほうじょなり我等われらが居住けいじゅうの山谷せんごく
曠野くわうや 皆みな皆みな常寂光じょうじやくくわうの宝处ほうじょなり云云。

第七皆共至宝処の事

御義口伝おんぎくでんに云いく皆みなとは十界じゅうがいなり共ともとは如我等にやがとうむい無異むいなり至いたとは
極果ごくかの住処じゅうしょなり宝処ほうしょとは靈山りょうぜんなり、日蓮等にちれんの類たぐい南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものは一同みなぎょうしほうしよに皆共至宝処みなぎょうしほうしよなり、共ともの一字いちじは
日蓮にちれんに共ともする時ときは宝処ほうしょに至いたる可べし不共ふともならば阿鼻あび大城だいじょうに墮お
可べし云云。

五百弟子品三箇の大事でし だいじ

第一衣裏の事だいいち えり

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品ひんには無価むげの宝珠ほうしゆを衣裏えりに繫かぐる事ことを説とく
なり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものは一乘いちじょう
妙法みょうほうの智宝ちほうを信受しんじゆするなり信心しんじんを以もて衣裏えりにかくと云いうなり。

第二醉酒而臥の事にが

御義口伝おんぎくでんに云いく酒しゆとは無明むみょうなり無明むみょうは謗法ほうほうなり臥がとは謗法ほうほうの家い

に生るる事なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を呑みて五道六道に
酔い廻りて今謗法の家に臥したり、酔とは不信なり覺とは信な
り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の酒醒め
たり、又云く酒に重重之れ有り權教は酒・法華經は醒めたり、本

・迹相對する時

迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本・
迹二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり酒と醒むるとは相離
れざるなり、酒は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は
醒めたり妙法と唱うれば無明法性体一なり、止の一に云く無明
塵勞即是菩提と。

第三身心遍歡喜の事

御義口伝に云く身とは生死即涅槃なり心とは煩惱即菩提なり、
遍とは十界同時なり歡喜とは法界同時の歡喜なり、此の歡喜の

内には三世諸仏の歡喜納まるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉れば我則歡喜とて釈尊歡喜し給うなり、歡喜とは善惡共に歡喜なり十界同時なり深く之を思ふ可し云。

人記品二箇の大事

第一学無学の事

御義口伝に云く学とは無智なり無学とは有智なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは学無学の人に如我等無異の記を授くるに非ずや、色法は無学なり心法は学なり又心法は無学なり色法は学なり学無学の人とは日本国の一切衆生なり、智者愚者をしなべて南無妙法蓮華經の記を説きて而強毒之するなり。

第二山海慧自在通王仏の事

御義口伝おんぎくでんに云いく山さんとは煩惱ぼんご即すなはち菩提ぼだいなり海かいとは生死しやうじ即すなはち涅槃ねはんなり慧えとは我等われらが吐つく所ところの言語ごんごなり自在じざいとは無障碍しやうげなり通王つうわうとは十界互具じゆつかいごぐ・百界千如ひやつかいせんじよ・一念三千いちねんさんぜんなり、又云いく山さんとは迹門しやくもんの意いなり海かいとは本門ほんもんの意いなり慧えとは妙法みようほうの五字ごじなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは山海さんかい慧え自在じざい通王つうわう仏ぶつなり全ぜんく外ぐわいに非あらざるなり我等われら行者ぎやうじやの外ぐわいに阿難あなん之これれ無なきなり、阿難あなんとは歡喜かんぎなり一念三千いちねんさんぜんの開覚かいかくなり云云。

法師品ほうしほん十六箇だいじの大事だいじ

第一法師だいいちほつしの事こと

御義口伝おんぎくでんに云いく法ほうとは諸法しよほうなり師しとは諸法しよほうが直ちちに師しと成なるなり森羅三千しんらさんぜんの諸法しよほうが直ちちに師しと成なり弟子でしとなるべきなり、今日けふ蓮れん等どうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは法師ほつしの中ちゆうの大法師ほつしなり

り、諸法実相の開覚顕れて見れば地獄の灯燃猛火乃至仏果に至る迄悉く具足して一念三千の法師なり、又云く法とは題目師とは日蓮等の類いなり。

第二成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の事

御義口伝に云く大願とは法華弘通なり愍衆生故とは日本国の一切衆生なり生於惡世の人とは日蓮等の類いなり広とは南閻浮提なり此經とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

第三如来所遣行如来事の事

御義口伝に云く法華の行者は如来の使に來れり、如来とは釈迦如来事とは南無妙法蓮華經なり如来とは十界三千の衆生の事なり今日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは眞実の御使なり云云。

第四 与如来によらい共宿の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく法華ほっけの行者ぎやうじやは男女なんによ共に如来にょらいなり煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・
生死しやうじ即そく涅槃ねはんなり、今日いまにちれん蓮等れんとうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者もの
是与にょらい如来にょらい共とも宿しゆくの者ものなり、傳ふだ大士だいしの釈しやくに云いわく「朝朝ちやうちやう 仏ぶつと共に起たき
せきせき
夕ゆふ 仏ぶつと共に臥ふし時じ時に成道じやうだうし時じ時に顯本けんぽんす」と云い云い。

第五是法華經藏深固幽遠無人能到の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく是法華經藏ぜほっけきやうぞうとは題目だいもくなり深固ほんもんとは本門ほんもんなり幽遠しやくもん

とは迹門しやくもんなり無人能到むにんのうたうとは謗法ほうぼうなり、今日いまにちれん蓮等れんとうの類たぐい南無なむ

妙法蓮華經みよほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは無人能到むにんのうたうの者ものに非あざるなり云い云い。

第六聞法信受随順不逆の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく聞きとは名字みようじそく即そくなり法ほとは題目だいもくなり信受しんじゆとは受持じゆじ

なり随順ずいじゆん不逆ふぎやくとは本ほん・迹二門じやくにもんに随順ずいじゆんするなり、今日いまにちれん蓮等れんとうの類たぐい

南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものの事ことなり。

第七衣座室の事

御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦
身口意の三業なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者は此の三軌を一念に成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣当著
忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり
室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり、豈
一念に三軌を具足するに非ずや。

第八欲捨諸懈怠应当聽此經の事

御義口伝に云く諸の懈怠とは

四十余年の方便の經教なり悉く皆懈怠の經なり此經とは題目
なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは是れ即ち
精進なり应当聽此經は是なり、応に日蓮に此の經を聞くべしと
云えり云云。

第九不聞法華經去仏智甚遠の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく不聞ふもんとは謗法ぼうぼうなり成仏じょうぶつの智ちを遠とほざかるべきなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉となる者たてまつは仏智開悟かいちの者ものにして成仏じょうぶつの近ぢかき故ゆゑなり。

第十若説此経時有人悪口罵加刀杖瓦石念仏故応忍の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく此経このきやうとは題目だいもくなり悪口あくくとは口業くごうなり加刀杖かたうじやうは身業しんごうなり此このの身口しんくの二業にごうは意業いごうより起おこるなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉となる者ものは仏勅ぶつちよくを念おぼずるが故ゆゑに応忍おうにんとは云いうなり。

第十一及清信士女供養於法師の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく士女しにょとは男女なんによなり法師ほっしとは日蓮等にちれんの類たぐい清信せいしんとは法華經ほけきやうに信心しんじんの者ものなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉となる者もの是これなり云云いんいん、此これ諸天善神等しよてんぜんじん男女なんよと顕あらわれて法華經ほけきやう

の行者ぎふじやを供養くようす可べしと云いう経文きょうもんなり。

第十二若人にやくにん欲加とつじょう惡刀がしやく杖及瓦石がしやく則遣へんか变化人へんか為之たつのくちしゅご作衛護はちまんだいぼさつの事こと

御義おんぎ口伝くでんに云いく变化へんか人じんとは竜口たつぐち守護しゆごの八幡大菩薩はちまんだいぼさつなり、今日蓮いまにちれん

等の類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものを守護しゆごす可べしと云いう経文きょうもん

なり。

第十三若親しんこん近法師こんほつし速得すみとく菩薩道ぼさつどうの事

御義おんぎ口伝くでんに云いく親近しんこんとは信受しんじゆの異名いみょうなり法師ほつしとは日蓮にちれん等の類たぐい

なり菩薩ぼさつとは仏果ぶつかを得える下地げじなり、今日蓮いまにちれん等の類たぐい南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものの事ことなり。

第十四随順ずいじゆん是師学ししがくの事

御義口伝おんぎくでんに云いわく是師これしとは日蓮等にちれんの類たぐいなり学がくとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり随順ずいじゆんとは信受しんじゆなり云云。

第十五師と学との事

御義口伝おんぎくでんに云いわく日蓮等にちれんの類たぐいの南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうは学者がくしやのいちねんさんぜん一念三千いっねんさんぜんなり師しも学がくも共に法界三千ほっかいさんぜんの師学しがくなり。

第十六得見恒沙仏の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく見恒沙仏みこうしゃぶつとは見宝塔けんほうとうと云う事ことなり、恒沙仏こうしゃぶつとは多宝たぼうの事ことなり多宝たぼうの多たとは法界ほっかいなり宝たぼうとは一念三千いっねんさんぜんの開悟かいごなり法界ほっかいを多宝たぼう仏ぶつと見るみるを見恒沙仏みこうしゃぶつと云うなり、故ゆえに法師品ほうしほんの次に宝塔品ほうとうぼんは来るくるなり解行証げぎやうしの法師ほうしの乗物のりものは宝塔ほうとうなり云云、今日蓮けふにちれん等の類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつるは妙解みょうげ妙行みょうぎやう妙証みょうしゆの不思議ふしぎの解げ不思議ふしぎの行ぎやう不思議ふしぎの証得しゆとくなり真実しんじつ一念三千いっねんさんぜんの開悟かいごなり云云、此こゝの恒沙こうしゃと云うは悪あくを滅めつし善ぜんを生なずる河がなり、恒沙こうしゃ仏ぶつとは一

一文文皆金色の仏体なり見の字之を思う可し仏見と云う事なり、随順とは仏知見なり得見の見の字と見宝塔の見とは依正の二報なり得見恒沙の見は正報なり見宝塔の見は依報なり云云。

宝塔品廿箇の大事

739P

第一宝塔の事

文句の八に云く前仏已に居し今仏並に座す当仏も亦然なりと。御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は見宝塔なり。

第二有七宝の事

御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慚なり、又云く頭

上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有
七宝の行者なり云云。

第三四面皆出の事

文句の八に云く四面出香とは四諦の道風四徳の香を吹くなり。と。
御義口伝に云く四面とは生老病死なり四相を以て我等が一身の
塔を莊嚴するなり、我等が生老病死に南無妙法蓮華經と唱え
奉るは併ら四徳の香を吹くなり、南無とは樂波羅蜜・妙法とは
我波羅蜜・蓮華とは浄波羅蜜・經とは常波羅蜜なり。

第四出大音声の事

御義口伝に云く我等衆生の朝夕吐く所の言語なり、大音声と
は権教は小音声・法華經は大音声なり廿八品は小音声題目は
大音声なり、惣じて大音声とは大は法界なり法界の衆生の言語
を妙法の音声と沙汰するを大音声とは云うなり、今日蓮等の

たぐ類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大音声なり、又云く大とは
くうたいおんじょう空諦・音声とは仮諦なり出とは中道なり云云。

第五見大宝塔住在空中の事

おんぎくでん御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住在空中とは
われらしゅじょうついで我等衆生終に滅に歸する事なり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきょう妙法蓮華經と唱え奉りて信心に住する処に住空中なり虚空
会に住するなり。

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

おんぎくでん御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは
しゅほうじつそつ諸法実相の仏なり爰を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩惱を
云うなり煩惱の淤泥の中に真如の仏あり我等衆生の事なり、
いまにちれん今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを当体蓮華の仏と云
うなり云云。

第七於十方国土有説法華經
処我之塔廟為聽是經故
涌現其前為作証
明讚言善哉の事

おんぎくでん いわ じゅつほう じゅつかい ほんじょう われらしゅじょうてん
御義口伝に云く十方とは十界なり法華経とは我等衆生流転の
十二因縁なり仍て言語の音声を指すなり善哉とは善悪不二
じやしゅういちにょ いまにちれん たく なむ みょうほうれんげきょう とな たてまつところ
邪正一如なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る処を
たほうゆげん
多宝涌現と云うなり。

第八南西北方四惟上下の事

おんぎくでん いわ じほう じょうげ すなわ じゅつかい
御義口伝に云く四方四惟上下合して十方なり即ち十界なり、
じゅつかい しゅじょう さんどく こと びやくじょう
十界の衆生共に三毒の光之れ有り是を白毫と云うなり
いっしんちゅうどう ちえ いまにちれん たく なむ みょうほうれんげきょう とな
一心中道の智慧なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え
たてまつ じゅつかいどうじ じょほうじつそう こうみょう
奉るは十界同時の光指なり諸法実相の光明なるが故なり。

第九各齋宝華滿掬の事

おんぎくでん いわ ほうげ がつしゅういちねんさんぜん じゅつかい
御義口伝に云く宝華とは合掌一念三千の所表なり各とは十界な
り満の一字を一念三千と心得可し、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきょう とな たてまつ ほうげ いたまにちれん たく なむ
妙法蓮華経と唱え奉るは仏に宝華を奉るなり宝華即宝珠なり

宝珠即一念三千なり合掌以敬心欲聞具足道是なり云云。

第十如却関鑰開大城門の事 補註の四に云く此の開塔見仏は蓋し

所表有るなり、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顕実

なり是れ亦前を証し復將さに後を起さんとするのみ、如却関鑰

とは却是除なり障除こり機動くことを表す謂く法身の大士惑を

破し理を顕し道を増し生を損するなりと。

御義口伝に云く関鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成仏な

り大城門とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とは口

なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の惑障

却けて己心の釈迦・多宝住するなり、関鑰とは無明なり開とは

法性なり鑰とは妙の一字なり天台の云く「秘密の奥蔵を発らく

之を称して妙と為す」と、妙の一字を以て鑰と心得可きなり、此

の經文は謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くと云う事なり

開^{これ}仏知見之を思^べう可^べし云^べ云^べ。

！

第十一 撰諸大衆皆在虚空の事

御義口伝おんぎくでんに云いく大衆たいしゅうとは聴衆ちようしゅうなり皆在虚空みなこくうとは我等われらが死しの相さうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは生死しやうじそく即涅槃ねはんと開かい覺かくするを皆在虚空みなこくうと説まくなり生死しやうじそく即涅槃ねはんと被ひ撰しょうするなり、大地だいちは色法じきうなり虚空こくうは心法しんぽうなり色心不二しきしんふにと心得こころうべ可べきなり虚空こくうとは寂光土じやくくわうなり、又云いく虚空こくうとは蓮華れんげなり經きやうとは大地だいちなり妙法みょうほうは天てんなり虚空こくうとは中ちゆうなり一切衆生いつさいしゆじやうの内菩薩蓮華ぼさつれんげに座ざするなり、此これを妙法蓮華經みょうほうれんげきようと説まかれたり、經きやうに云いく「若在ぶつぜん仏前れんげ蓮華け化生しやう」と。

第十二 譬如大風吹小樹枝の事

御義口伝おんぎくでんに云いく此この偈頌げじゆの如ごとく清凉池しやうりやうと譬如大風ひによたいふうと燃大炬火すいしやうじゆえとは三身さんじんなり、其その中に譬如大風ひによたいふうとは題目だいもくの五字ごじなり吹小樹枝すいしやうじゆえとは折伏門しゃくぶくもんなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは大風たいふう

の吹くが如くなり。

第十三 若有能持則持仏身の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ法華經ほけきょうを持ち奉るとは我が身ぶっしんと持つなり、則の一字は生なま仏ぶつ不二ふじなり上かみの能持のうじの持は凡夫ほんぶなり持つもては妙法みょうほうの五ご字じなりぶっしん仏身ぶつじんを持つと云うは一一いちいち文ぶん皆みな金色こんじき仏体ぶつたいの故ゆゑなり、さてぶつじん仏身ぶつじんを持つとは我が身みの外ほかに仏ぶつ無むしと持つを云うなり、理り即そくの凡夫ほんぶと究竟くきょう即そくの仏ぶつと二無ふたにきなり即そくの字じは即故そく初後しよご不二ふじの故ゆゑなり云云。

第十四 此經難持の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ此この法華經ほけきょうを持つ者ものは難なんに遇あわんと心こころ得えて持つなり、されば即すく為い疾しつ得とく無む上じやう仏道ぶつどうの成じやう仏ぶつは今日けふ蓮れん等たうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる是これなり云云。

第十五 我則歡喜諸仏亦然の事

御義口伝に云く我とは心王なり諸仏とは心数なり法華經を持ち奉る時は心王心数同時に歡喜するなり、又云く我とは凡夫なり諸仏とは三世諸仏なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱えて歡喜する是なり云云。

第十六讀持此經の事

御義口伝に云く五種の修行の讀誦と受持との二行なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは讀なり此の經を持つは持なり此經とは題目の五字なり云云。

第十七是真仏子の事

御義口伝に云く法華經の行者は真に釈迦法王の御子なり、然る間王位を継ぐ可きなり悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く心得合す可きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は釈迦法王の御子なり。

第十八是諸天人・世間之眼の事

御義口伝に云く世間とは日本国なり眼とは仏知見なり法華経は諸天・世間の眼目なり、眼とは南無妙法蓮華経なり是諸天人・世間之眼又云く是諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禅・念佛・真言宗等なり眼等とは目を閉づるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは諸天・世間の眼に非ずや云云。

第十九能須臾説の事

御義口伝に云く能の一字之を思う可し説とは南無妙法蓮華経なり、今日蓮等の類いは能須臾説の行者なり云云。

第二十此経難持の事

御義口伝に云く此の经文にて三学俱伝するなり、虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧・三学俱に伝うるを名け

て妙法みょうほうと曰いうと、戒けいとは色法しきぼうなり定じやうとは心法しんぼうなり慧えいとは色心しきしん二ふるまい法の振舞ふるまいなり、俱くの字じは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの一念三千いちねんさんぜんなり伝でんとは末法まつぽう万年まんねんを指さすなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつり権教ごんきやうは無得道とくどう・法華經ほけきやうは真実しんじつと修行しゆぎやうする是こゝは戒けいなり防非止ぼうひし悪あくの義ぎなり、持もつ所ところの行者ぎやうじや・決定けつじやう無有疑むうぎの仏体ぶつたいと定じやうむ是こゝは定じやうなり、三世さんぜの諸仏しよぶつの智慧ちえを一返いちへんの題目だいもくに受持じゆじする是こゝは慧えいなり、此こゝの三学さんがくは皮肉骨さんじん・三身さんじん・三諦さんたい・三軌さんたい・三智さんち等らなり。

提婆達多品八箇の大事だいばだつただいじ

第一だいいち 提婆達多だいばだつたの事こと 文句もんくの八はちに云いく本地ほんちは清涼しよつりやうにして迹こゝに天てん

熱ねつを示しすと。

御義口伝おんぎくでんに云いく提婆だいばとは本地ほんちは文殊もんじゆなり、本地ほんち清涼しよつりやうと云いうなり迹こゝには提婆だいばと云いうなり天熱てんねつを示しす是こゝなり、清涼しよつりやうは水みづなり此こゝれは

生死しやうじそく即ねはん涅槃ねはんなり天熱てんねつは火かなり是こゝは煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだいなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる

過去かこの時に阿私あし仙人せんじんなり阿私あし仙人せんじんとは妙法みょうほうの異名いみやうなり阿あとは無むの義ぎなり私無しそくきの法ほうとは妙法みょうほうなり、文句もんくの八はちに云いわく無私むし法ほうを以もつて衆生しゆじやうに灑そそぐと云いわえり阿私あし仙人せんじんとは法界ほうがい三千さんぜんの別名べつめいなり故ゆゑに私無しそくきなり一念いちねん三千さんぜん之これを思おもう可べし云いわふ。

第二 若不違我当為宣説の事

御義おんぎ口伝くでんに云いわく妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを宣説せんぜつする事ことを汝なんじは我わがに違たがはずして宣説せんぜつすべしと云いわふ事ことなり、若しの字じは汝なんじなり、天台てんだいの云いわく「法ほうを受うけて奉行ぶぎやうす」と、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは日蓮にちれんに違たがはずして宣説せんぜつす可べきなり阿私あし仙人せんじんとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり云いわふ。

第三採菓汲水拾薪たきぎ設食の事

御義口伝おんぎくでんに云いく採菓さいくわとは癡煩惱ちぼんのうなり汲水きくすいとは貪煩惱ぼんのうなり拾薪たきぎとは瞋煩惱ぼんのうなり設食じやくじきとは慢煩惱まんぼんのうなり、此この下したに八種はつしゆの給仕くじ之れ有り此この外ほかに妙法蓮華經みようほうれんげきようの伝受でんじゆ之れ無なきなり、今日蓮等けふれんとうの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは即すなわち千歳せんさい給仕くじなり是これ即すなわち一念三千いちねんさんぜんなり貪とん・瞋じん・癡慢ちまを対治たいじするなり。

第四 情存妙法故身心無懈倦みやうほうの事こと

御義口伝おんぎくでんに云いく身心しんしんの二字にじ色心しきしん妙法みようほうと伝受でんじゆするなり、日蓮等にちれんとうの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつりて即身成仏そくしんじやうぶつす身心無倦しんしんむけんとは一念三千いちねんさんぜんなり云云。

第五 我於海中唯常宣說がいちちゆうの事こと

御義口伝おんぎくでんに云いく我わがとは文殊もんじゆなり海うみとは生死しやうじの海うみなり唯ただとは唯有ゆいゆう一乘法いちじゆほうなり常じやうじゆとは常住じやうじゆ此説法せつぽうなり妙法蓮華經みようほうれんげきようとは法界ほっかいの言語ごんご音声おんじやうなり、今日蓮等けふれんとうの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる是こなり、

生死しやうじの海うみ即すく真如しんによの大海たいかいなり我われとは法界ほっかいの智慧ちえなり文殊もんじゆなり云。

第六 年始八歳の事

御義おんぎ口伝くでんに云いわく八歳はちさいとは八卷はちまきなり提婆だいばは地獄界じじくなり竜女りゆうにょは仏界ぶつがいなり然しかる間ま十界じゅうかい互具がいこ・百界ひゃくかい千如せんにょ・一念いちねん三千さんぜんなり、又云いわく八歳はちさいとは法華經ほけきよつ八卷はちまきなり我等われら八苦はつくの煩惱ぼんのうなり、惣そうじて法華經ほけきよつの成仏じやうぶつは八歳はちさいなりと心得こころえ可べし八苦はつく即すく八卷はちまきなり八苦はつく八卷はちまき即すく八歳はちさいの竜女りゆうにょと顯あらわるるなり一義いちぎに云いわく、八歳はちさいの事はたまをひらくと読よむなり、歳さいとは竜女りゆうにょの一心いっしんなり八とは三千さんぜんなり三千さんぜんとは法華ほっけの八卷はちまきなり、仍よつて八歳はちさいとは開仏かいぶつ知見ちけんの所表しよへうなり智慧ちえ利根りこんより能至ぼだい菩提ぼだいまで法華ほっけに歸入きにゅうするなり、此こゝの中に心念しんねん口演くげんとは口業くごうなり志意しぎ和雅わげとは意業いごうなり悉能受持しつじゆ深入しんじゆ禅定ぜんじやうとは身業しんごうなり三業さんごう即すく三徳さんとくなれば三諦さんたい法性ほっしやうなり、又云いわく心念しんねんとは一念いちねんなり口演くげんとは三千さんぜんなり悉能

受持じゆじとは竜女りゆつにょ法華ほけき經受持じゆじの文ぶんなり、
り八はちとは色心しきしんを妙法みようほうと開ひらくなり。
歳さいとは如意宝珠にょいほうじゆなり妙法みようほうな

第七 言論未訖の事

御義口伝おんぎくでんに云いく此この文ぶんは無明むみょう即そく法性ほつしやうの明文めいぶんなり、其そのの故ゆえは智積ちしゃく難問なんもんの言未いまだ訖おわらざるに竜女りゆうにょ三行半さんぎょうはんの偈げを以もつて答こたへるなり、難問なんもんの意いは別教べつぎやうの意いなり無明むみょうなり竜女りゆうにょの答こたは円教えんぎやうの意いなり法性ほつしやうなり、智積ちしゃくは元品げんぽんの無明むみょうなり竜女りゆうにょは法性ほつしやうの女人にょにんなり仍またて無明むみょうに即そくする法性ほつしやう法性ほつしやうに即そくする無明むみょうなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは

言論未訖ごんごんむきくなり、時ときとは上かみの事ことの末末まつまつの事ことの始はじめなり時ときとは無明むみょう法性ほつしやう同時どうじの時ときなり南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時ときなり、智積ちしゃく菩薩ぼさつを元品げんぽんの無明むみょうと云いふ事はこと不信ふしん此女ここのにょの不信ふしんの二字ふたごなり不信ふしんとは疑惑ぎわくなり疑惑ぎわくを根本こんぽん無明むみょうと云いふなり、竜女りゆうにょを法性ほつしやうと云いふ事はこと我闡がせん大乘教だいじやうの文ぶんなり竜女りゆうにょとは竜りゆうは父ちちなり女にょは八歳はつさいの娘むすめなり我闡がせんの二字ふたごは父子ふしどうじ同時どうじの成仏じやうぶつなり、其そのの故ゆえは時竜りゆうりゆう王女おうにょの文ぶん是これな

り既に竜王の女と云う間竜王は父なり女とは八歳の子なり、
されば女

の成仏は此の品にあり父の竜の成仏は序品に之れ在り、有八
竜王の文是なり、然りと雖も父子同時の成仏なり序品は一經
の序なる故なり、又聞成菩提とは竜女が智積を責めたる言なり
されば唯我が成仏をば仏御存知あるべしとて又聞成菩提唯仏当
証知と云えり苦の衆生とは別して女人の事なり、此の三行半の偈
は一念三千の法門

なり遍照於十方とは十界なり、殊には此の八歳の竜女の成仏
は帝王持經の先祖たり、人王の始は神武天皇なり神武天皇は
地神五代の第五の鵜萱葺不合尊の御子なり此の葺不合尊は豊玉
姫の子なり此の豊玉姫は沙竭羅竜王の女なり八歳の竜女の姉な
り、然る間先祖法華經の行者なり甚深甚深云云、されば此の

提婆だいばの一品いっぴんは一天いつてん

の腰刀こしやいばなり無明煩惱むみょうぼんのうの敵てきを切り生死しじゆうじ愛着あいしやくの繩なはを切る秘法ひほうなり、

漢高三尺かんさんしちの劍けんも一字いちじの智劍ちけんに及およばざるなり妙めうの一字いちじの智劍ちけんを以もつ

て生死しじゆうじ煩惱ぼんのうの繩なはを切るなり、提婆だいばは火炎かえんを躡あつしりゆうじよ竜女りゆうによは大蛇だいじやを示しめ

しもんじゆ文殊もんじゆは智劍ちけんを躡あつすなり仍よつて不動ふどう明王みやうおうの尊形そんぎようと口伝くでんせり、

提婆だいばは我等われらが煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだいを躡あつすなり、竜女りゆうによは生死しじゆうじ即そく涅槃ねはんを躡あつす

なり、文殊もんじゆをば

此には妙徳と翻ずるなり煩惱生死具足して当品の能化なり。

第八 有一宝珠の事 文句の八に云く一とは珠を献じて円解を得ることを表すと。

御義口伝に云く一とは妙法蓮華經なり宝とは妙法の用なり珠とは妙法の体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法は珠なり心法は宝なり妙法とは色心不二なり、一念三千を所表して竜女宝珠を奉るなり、釈に表得円解と云うは一念三千なり、竜女が手に持てる時は性得の宝珠なり仏受け取り給う時は修得の宝珠なり、中に有るは修性不二なり、甚疾とは頓極・頓速・頓証の法門なり即為疾得無上仏道なり、神力とは神は心法なり力とは色法なり觀我成仏とは舍利弗竜女が成仏と思うが僻事なり、我が成仏ぞと觀ぜよと責めたるなり、觀に六則觀之れ有り爰元の觀は名字即の觀と心得可きなり、其の故は南無

妙法蓮華經と聞ける処を一念坐道場成仏不虛也と云えり、變成男子とは竜女も本地南無妙法蓮華經なり其の意經文に分明なり。

勸持品十三箇の大事

747P

第一 勸持の事

御義口伝に云く勸とは化他持とは自行なり南無妙法蓮華經は自行化他に亘るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を勧めて持たしむるなり。

第二 不惜身命の事

御義口伝に云く身とは色法命とは心法なり事理の不惜身命之れ有り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たるを事の不惜身命と云うなり、今日蓮等の類い南無

妙みよ法う蓮れん華げき經きょうと唱となえ奉たてまつる者ものは事じ理り共どもに

値うなり。

第三 心不実故の事

御義口伝に云く心不実故とは法華最第一の経文を第三と読み最爲其上の経文を最爲其下と讀みて法華經の一念三千を華嚴・大日等に之れ有りと法華の即身成仏を大日經に取り入るるは此等は皆心不実故なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は心実なるべし云云。

第四 敬順仏意の事

御義口伝に云く法華經に順ずるは敬順仏意なり意とは南無妙法蓮華經是なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは敬順仏意の意なり。

第五 作師子吼の事

御義口伝に云く師子吼とは仏の説なり説法とは法華別しては

南無妙法蓮華經なり、師とは師匠授くる所の妙法子とは弟子受くる所の妙法吼とは師弟共に唱うる所の音声なり作とはおこすと読むなり、末法にして南無妙法蓮華經を作すなり。

第六 如法修行の事

御義口伝に云く如法修行の人とは天台・妙楽・伝教等なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは如法修行なり云云。

第七 有諸無智人の事

御義口伝に云く一文不通の大俗なり悪口罵詈等分明なり日本国の俗を諸と云うなり。

第八悪世中比丘の事

御義口伝おんぎくでんに云いく悪世あくせ中ちゆう比丘びくの悪世あくせとは末法まつぽうなり比丘びくとは謗法ぼうぽうたる弘法こうぼう等らう是これなり、法華ほつげの正智しやちを捨すて權教ごんきやうの邪智じやちを本もととせり、今日けふ蓮等れんらうの類たぐい南無なむ妙法みよほう蓮華れんげ経きやうと唱となえ奉たてまつる者は正智しやちの中ちゆうの大正たいしやち智ちなり。

第九、或有阿練若の事

御義口伝おんぎくでんに云いく第三だいさんの比丘びくなり良觀りやうかん等らうなり如上じゆくじゆう六通ろくつう羅漢らかんの人ひとと思おもうなり。

第十自作此經典の事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華ほつげ経きやうを所作なして読よむと謗べす可べしと云いう經文きやうもんなり。

第十一為斯所輕言汝等皆是仏の事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華ほつげ雜ざの行者ぎやうじやを蔑あなづり生仏しやうぶつと云いうべしと云いう

経文なり、是は輕心を以て誇るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を云う可きなり。

第十二悪鬼入其身の事

御義口伝に云く悪鬼とは法然・弘法等是なり入其身とは国王・大臣・万民等の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを怨むべしと云う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪功德者と云うなり、法華經は三世諸仏の命根なり此の經は一切菩薩の功德を納めたる御經なり。

第十三但信無上道の事

御義口伝云く無上道とは南無妙法蓮華經是れなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を惜しむ事は命根よりも惜しき事なり、之に依つて結ぶ処に仏自知我心と説かれたり法華經の行者の心中をば教主釈尊の御存知有る可きなり、仏とは釈尊我心と

は今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

安樂行品五箇の大事

第一

安樂行品の事

御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難來るを以て安樂と意得可きなり。

第二 一切法空の事

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無妙法蓮華經是なり十八空は何れも妙法の事なり。

第三 有所難問不以小乘法答等の事

御義口伝に云く対治の時は權教を以て会通す可からず。一切種智とは南無妙法蓮華經なり一切は万物なり種智は万物の種なり妙法蓮華經是なり、又云く一切種智とは我等が一心なり一心とは万法の惣体なり之を思う可し。

第四 無有怖畏加刀杖等の事

御義口伝おんぎくでんに云いく迹化しやくけの菩薩ぼさつに刀杖とうじょうの難なん之こ有ある可べからずと云うう
經文きやうもんなり、勸持かんじ品ほんは末法まっぼう法華ほっけの行者ぎやうじやに及加刀杖とうじょう者さく数さく数さく見けん擯ひん出し
と此この品ほんには之これ無なし、彼まは末法まっぼうの折伏しやくぶくの修行しゆぎやう此この品ほんは像法ぞうぼう毘舍婆那しやうじや受じゆ
の修行しゆぎやうなるが故ゆゑなり云云。

第五 有人来欲難問者諸天昼夜等の事

御義口伝おんぎくでんに云いく末法まっぼうに於おいて法華ほっけを行まずる者しよてんをば諸天しよてん守護しゆご之あ有ある
可べし常じやう為ゐ法故ほつこの法ほつことは南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやう是こなり。

涌出品一箇の大事

第一 唱導之師の事

御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を靈山淨土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり、此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云く「經に四導師有りとは今四徳を表す

上行は我を表し無辺行は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と稱し五住の垢累を越ゆる故に淨行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなり」と今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉る者は皆地涌の流類なり、又云く火

は物を焼くを以て行とし水は物を浄むるを以て行とし風は塵垢
を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四
菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、俱に
妙法蓮華經の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に
「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住处とす下方と
は真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在る
なり」と云云、此の理の住处より顯れ出づるを事と云うなり、又
云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地涌の
菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として
無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは
南無妙法蓮華經なり、此の題目は必ず
地涌の所持の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法の体よ
り用を出して止觀と弘め一念三千と云う、惣じて大師人師の

所しよ積じやくも此こゝの妙みよ法ほうの用ひろを弘ひろめ給たまうなり、此こゝの本ほん法ほうを受じゆ持じするは信しん
の一字いちじなり、元がん品ぽんの無む明みよを対たい治じする利り剣けんは信しんの一字いちじなり無む疑ぎ
曰わつしん信しんの積これ之これを思おもふ可べし云い云い。

御おん義ぎ口く伝でん卷くわん上じやう

弘こう安あん元げん年ねん 戊つち寅のえ 正しやう月げつ一いつ日にち

執しつ筆びつ

日にっ興こう

九五 御義口伝 卷下 日蓮所立自寿量品至開

結二經

752P

寿量品廿七箇の大事

第一 南無妙法蓮華經如来 寿量品第十六の事 文句の九に云く

如来とは十方三世の諸仏二仏三仏本仏迹仏の通号なり別して

は本地三仏の別号なり、寿量とは詮量なり、十方三世二仏三仏

の諸仏の功德を詮量す故に寿量品と云うと。

御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり神力品

の付属是なり、如来とは釈尊惣じては十方三世の諸仏なり別し

ては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来と

は一切衆生なり別しては日蓮の弟子・檀那なり、されば無作の

三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無

妙法蓮華經と云う

なり、じゅりょうぼん 寿量品の事の三大事とは是なり、六即そくの配立の時は此の

品の如来にょらいは理即りそくの凡夫ぼんぶなり頭に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうを頂戴ちやうだいし奉るたてまつ

時名字みょうじそく即なり、其の故は始めて聞く所の題目だいもくなるが故なり聞き

奉りて修行しゅぎょうするは觀行即かんぎょうそくなり此の觀行即かんぎょうそくとは事の一念三千いちねんさんぜんの

本尊ほんぞんを觀ずるなり、さて惑障わくしょうを伏するを相似即そうじそくと云うなり化他けた

に出づるを分真即ぶんしんそくと

云うなり無作むさの三身さんじんの仏ぶつなりと究竟くきやうしたるを究竟即くきやうそくの仏ぶつとは云

うなり、惣そうじて伏惑ふくを以て寿量品じゅりょうぼんの極ごくとせず唯凡夫ただぼんぶの当体とうたい・本有ほんぬ

の儘ままを此の品の極理ごくりと心得こころえ可きなり、無作むさの三身さんじんの所作しよさは何物なにものぞ

と云う時南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり云云。

第二如來秘密神通之力の事

御義口伝おんぎくでんに云く無作むさ三身さんじんの依文いぶんなり、此の文ぶんに於て重重そうでんの相伝そうでん

これあり、神通之力とは我等衆生の作作発発と振る舞う処を神通
と云うなり獄卒の罪人を苛責する音も皆神通乃力生住異滅の
森羅三千の当体悉く神通之力の体なり、今日蓮等の類いの意は
即身成仏と開覚するを如来秘密神通之力とは云うなり、成仏す
るより外の神通と秘密とは之れ無きなり、此の無作の三身をば
一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍つて経に云く「我等当
信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

第三我実成仏已来無量无边等の事会

御義口伝に云く我実とは釈尊の久遠実成道なりと云う事を説か
れたり、然りと雖も当品の意は我とは法界の衆生なり十界己己
を指して我と云うなり、実とは無作三身の仏なりと定めたり此れ
を實と云うなり成とは能成所成なり成は開く義なり法界無作

の三身の仏なりと開きたり、仏とは此れを覚知するを云うなり
已とは過去なり来とは未来なり已来の言の中に現在には有るなり、
我実と成けたる仏にして已も来も無道なり無辺なり、百界千如
・一念三千と説かれたり、百千の二字は百は百界千は千如なり
此れ即ち事の一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者は寿量品の本主なり、惣じては迹化の菩薩此の品に
手をつけいろいろすべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏此れは本面
迹裏然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の
品は在世
の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益
滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

第四如来如実知見三界之相無有生死の事

御義口伝おんぎくでんに云いく如来にょらいとは三界さんがいの衆生しゆじやうなり此この衆生しゆじやうを寿量品じゆりやうぼんの
眼まなこ開あけてみれば十界じゆつかい本有ほんぬと実ことの如ごとく知見ちけんせり・三界さんがい之相しやうとは
生老病死しやうじやうびやうしなり本有ほんぬの生死しやうじとみれば無有生しやうじ死しなり生死しやうじ無なければ退
出だも無なし唯ただ生死しやうじ無なきに非あらざるなり、

生死しじゆうじを見て厭離おんりするを迷まよいと云いい始覺しかくと云いうなりさて本有ほんぬの生死しじゆうじ
と知見ちけんするを悟いと云いい本覺ほんがくと云いうなり、今日蓮等いまにちれんの類たくい南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる時本有ほんぬの生死しじゆうじ本有ほんぬの退出しゅつじと開覺かいがくするな
り、又い云いく無むも有あり生せいも死しも若退わくたいも若出わくしゅつも在世ざいせも滅後めつごも悉ことごとく皆みな
本有ほんぬ常住じやうじゆうの振舞ふるまいなり無むとは法界ほっかい同時どうじに妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの振舞ふるまいより外
は無むきなり有あとは
地獄じじくは地獄じじくの有ある儘まま十界じゅうがい本有ほんぬの妙法みょうほうの全体ぜんたいなり、生せいとは妙法みょうほうの
生せいなれば随緣ずいえんなり死しとは寿量じゆりやうの死しなれば法界ほっかい同時どうじに責如せきになり若
退わくたいの故ゆえに滅後めつごなり若出わくしゅつの故ゆえに在世ざいせなり、されば無死退滅むしつたいめつは空くうな
り有生出在じゆうしゅつざいは仮かなり如来にょらい如実じゆじつ
は中道ちゆうどうなり、無死退滅むしつたいめつは無作むさの報身ほうしんなり有生出在じゆうしゅつざいは無作むさの心身おんじん
なり如来如実にょらいにじゆじつは無作むさの法身ほっしんなり、此この三身さんじんは我が一身いつじんなり、一身いつじん
即三身じつさんじん名為秘ひとは是これなり、三身さんじん即一身じついつじん名為密ひも此この意いなり、然しから

ば無作の三身の当体の蓮華の仏とは日蓮が弟子・檀那等なり南無妙法蓮華經の宝号を持ち奉る故なり云云。

第五 若仏久住於世薄徳之人不種善根貧窮下賤貪著五欲入於憶想妄見網中の事

御義口伝に云く此の經文は仏世に久住したまわば薄徳の人は善根を殖ゆ可からず然る間妄見網中と説かれたり、所詮此の薄徳とは在世に漏れたる衆生今滅後日本国に生れたり、所謂念仏

禅・真言等の謗法なり、不種善根

とは善根は題目なり不種とは未だ持たざる者なり、憶想とは捨閉閣抛第三の劣等此くの如きの憶想なり、妄とは權教妄語の經教なり見は邪見なり法華最第一の一を第三と見るが邪見な

り、網中とは謗法不信の家なり、今

日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はかかる妄見の經網

中の家を離れたる者なり云云。

第六 飲他毒藥藥発悶乱宛転于地の事

御義口伝おんぎくでんに云く他いわとは念仏ねんぶつ・禅しん・真言しんごんの謗法ほうほうの比丘びくなり、毒藥どくやくとは権教ごんきょう方便ほうべんなり法華ほっけの良藥りょうやくに非あらず故ゆえに悶乱もんらんするなり悶もんとはいきたゆるなり、寿量品じゆりやうぼんの命いのちなきが故ゆえに悶乱もんらんするなり宛転于地宛転于地とは阿鼻地獄あびじごくへ入るなり云云。諸子しよ

飲毒の事は釈に云く「邪師の法を信受するを名けて飲毒と爲す」と、諸子とは謗法なり飲毒とは弥陀大日等の権法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは毒を飲まざるなり。

第七 或矢本心 或不失者の事

御義口伝に云く本心を失うとは謗法なり本心とは下種なり不失とは法華經の行者なり失とは本有る物を失う事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは本心を失わざるなり云云

第八擣符和合与子令服の事

御義口伝に云く此の經文は空仮中の三諦戒定慧の三字なり、色香美味の良薬なり擣は空諦なりは仮諦なり和合は中道なり与は投与なり子は法華の行者なり服すると云うは受持の義なり、是を此大良薬色香美味皆悉具足と説かれたり、皆悉の二字万行方善・諸波羅蜜を具足したる大良薬たる南無妙法蓮華經

なり、色香等とは一色

一番・無非中道にして草木成仏なり、されば題目の五字に一法と

して具足せずと云う事なし若し服する者は速除苦惱なり、され

ば妙法の大良薬を服するは貪・瞋・癡の三毒の煩惱の病患を除

くなり、法華の行者南無妙法蓮華經と唱え奉る者は謗法の供養

を受けざるは貪欲の病を除くなり、法華の行者は罵詈せらるれ

ども忍辱を

行ずるは脹意の病を除くなり、法華經の行者は是人於仏道決定

無有疑と成仏を知るは愚痴の煩惱を治するなり、されば大

良薬は末法の成仏の甘露なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經

と唱え奉るは大良薬の本主な

り。

第九毒氣深入矢本心故の事

おんぎくでん いわ どっけ こんきょうほつぼう しゅうじょう
御義口伝に云く毒氣深入とは権教謗法の執情深く入りたる者
なり、之に依つて法華の大良薬を信受せざるなり服せしむると
いへど
雖も吐き出だすは而謂不美とてむまからずと云う者なり、
いまにちれん なむ みょうほうれんげきょう たてまつ
今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは而謂不美の者に
非ざるなり。

第十 是好良薬今留在此汝可取服勿憂不差の事

おんぎくでん いわ ぜこうりょうやく ある きょうぎょう ある しやり
御義口伝に云く是好良薬とは或は経教或は舍利なりさて
まつぼう なむ みょうほうれんげきょう たてまつ
末法にては南無妙法蓮華経なり、好とは三世諸仏の好み物は
だいもく ごとじ とど まつぼう せんぜしよぶつ
題目の五字なり、今留とは末法なり此とは一閻浮提の中には
にほんこく なんじ まつぼう いっさいしじょう えんぶだい
日本国なり、汝とは末法の一切衆生なり取は法華経を受持する
時の儀式なり、服するとは唱え奉る事なり服するより無作の
さんじん しじょう しょうかく げんいゆ たてまつ むさ
三身なり始成正覚の病患差るなり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきょう とな たてまつこれ
妙法蓮華経と唱え奉る是なり。

第十一 自我得仏來の事

御義口伝おんぎくでんに云いく一句三身いっくさんじんの習ならいの文と云いうなり、自とは九界くかいなり

我とは仏界ぶつがいなり此この十界じゅうがいは本有無作ほんぬむさの三身さんじんにして來るきるらるる仏ぶつなりと

云いえり、自も我も得えたるる 仏來ぶつらいれり十界じゅうがい本有ほんぬの明文めいぶんなり、我は

法身ほっしん・仏は報身ほうしん・來は応身おうじんなり此この三身さんじん・無始無終むしむしゆうの古こ仏ぶつにして

自得じとくなり、無上宝聚むじょうぼうじゆ不求自得ふくじとく之これを思おもう可べし、然しからば即すなわち

顯本遠寿けんほんおんじゆの説せは永えいく諸教しよきやうに絶たえたり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは自我得ごがく佛來ぶつらいの行者ぎやうなり云いふ。

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事

御義口伝おんぎくでんに云いく涅槃ねはん經ぎやうは法華經ほけきやうより出いでたりと云いふ 經文きやうもんなり、

既すでに方便ほうべんと説せかれたり云いふ。

第十三 常住此説法の事

御義口伝おんぎくでんに云いく常住じやうじゆとは法華經ほけきやうの行者ぎやうの住処じゆじよなり、此とは

娑婆世界しやばせかいなり山谷曠野せんごくこうやを指して此とは説き給たまう、説法せっぽうとは一切いっさい
衆生の語言しゅじょうごげんの音声おんじょうが本有ほんぬの自受用智じじゆうちの説法せっぽうなり、末法まつぽうに入いつて
説法せっぽうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり今日蓮等いまにちれんの類たぐいの説法せっぽう是これなり。

第十四 時・我及衆僧俱出靈鷲山の事しゆじそつりょうじゆせん

おんぎくでん いわ りょうぜん
御義口伝に云く靈山一会儼然未散の文なり、時とは感応末法の
時なり我とは釈尊及とは菩薩聖衆を衆僧と説かれたり俱とは
じゅうかい りょうじゅうぜん
十界なり靈鷲山とは寂光土なり、時に我も及も衆僧も俱に
りょうじゅうせん い
靈鷲山に出ずるなり秘す可し秘す可し、本門事の一念三千の
めいぶん ごほんぞん
明文なり御本尊は此の文を顕し出だし給うなり、されば俱とは
ふへん しんによ
不變真如の理なり出とは隨縁真如の智なり俱とは一念なり出と
さんぜん
は三千なり云云。

いわ
又云く時とは本時娑婆世界の時なり下は十界宛然の曼陀羅を
あらわ
顕す文なり、其の故は時とは末法第五時の時なり、我とは釈尊
ぼさつじゅうぞう にじゅう
及は菩薩衆僧は二乗俱とは六道なり出とは靈山浄土に列出す
りょうぜん
るなり靈山とは御本尊並びに日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
とな たてまつ
唱え奉る者の住所を説くなり云云。

第十五 衆生見劫尽 而衆見焼尽の事

おんぎくでん いわ ほんもんじゆりょう いちねんさんぜん じゆ
御義口伝に云く本門寿命の一念三千を頌する文なり、大火所焼
時とは実義には煩惱の大火なり、我此土安穩とは国土世間なり、
衆生所遊樂とは衆生世間なり、宝樹多華菓とは五陰世間なり
是れ即ち一念三千を分明に説かれたり、又云く上の件の文は
十界なり大火とは地獄界なり天鼓とは畜生なり人と天とは人天
の二界なり、天と

人と常に充滿するなり、雨曼陀羅華とは声聞界なり園林とは
縁覚界なり菩薩界とは及の一字なり仏界とは散仏なり修羅と
餓鬼界とは憂怖諸苦惱如是悉充滿の句に撰するなり、此等を是
諸罪衆生と説かれたり、然りと雖も此の寿命品の説顕われて
は、則皆見我身とて一念三千なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は是なり云云。

第十六 我亦為世父の事

御義口伝おんぎくでんに云いく我わとは釈尊しゃくそん一切衆生いっさいしゆじやうの父ちちなり主師親しゆししんに於おいていはに
約やくし経きやうに約やくす、仏ぶつに約やくすとは迹門しやくもんの仏ぶつの三徳さんとくは今こん此し三界さんがいの文ぶん
是これなり、本門ほんもんの仏ぶつの主師親しゆししんの三徳さんとくは主しゆの徳とくは我わ此し土安穩どあんのんの文ぶんなり
師しの徳とくは常説法教化せつほうきやうけの文ぶんなり

親の徳は此の我亦為世父の文是なり、妙樂大師は寿量品の文を知らざる者は不知恩の畜生と釈し給えり經に約すれば、諸經中王は主の徳なり能救一切衆生は師の徳なり又如大梵天王一切衆生之父の文は父の徳なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一切衆生の父なり無間地獄の苦を救う故なり云云、涅槃經に云く

「一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如来一人の苦」と云云、日蓮が云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦なるべし。

第十七 放逸著五欲墮於惡道中の事

御義口伝に云く放逸とは謗法の名なり入阿鼻獄疑無き者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の經文を免離せり云云。

第十八 行道不行道的事

御義口伝に云く十界の衆生の事を説くなり行道は四聖不道
は六道なり、又云く行道は修羅・人天不道は三惡道なり、
所詮末法に入つては法華の行者は行道なり謗法の者は不道な
り、道とは法華経なり、天台云く「仏道とは別して今の経を指す」
と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは行道なり唱え
ざるは不道なり云云。

第十九 每自作是念の事

御義口伝に云く每とは三世なり自とは別しては釈尊惣じては
十界なり、是念とは無作本有の南無妙法蓮華経の一念なり、作
とは此の作は有作の作に非ず無作本有の作なり云云、広く十界
本有に約して云わば自とは方法己己の当体なり、是念とは地獄の
呵責の音其の外一切衆生の念念皆是れ自受用報身の智なり是を

念とは云うなり、今日いまにちれん蓮等の類たくい南無なむ妙法蓮華みょうぼうれんげきょう經と唱となえ奉たてまつる念
は大慈じひ悲の念なり云云。

第二十 得入無上道等の事

御義口伝おんぎくでんに云くいく無上道むじやうだうとは寿量品じゆりやうほんの無作むさの三身さんじんなり此の外この外に成就じやうじゆぶつしん之れ無し、今日いまに蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は成就じやうじゆぶつしん疑うたがい無なきなり云云。

第廿一 自我偈の事

御義口伝おんぎくでんに云くいく自とは九界くわなり我とは仏身ぶつしんなり偈ことわりとはことわるなり本有ほんぬとことわりたる偈頌げじゆなり深く之これを案べず可べし、偈様ことわりとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり云云。

第廿二 自我偈始終の事

御義口伝おんぎくでんに云くいく自とは始はなり速成就そくじやうじゆぶつしん佛身ぶつしんの身みは終はりなり始終しじゆう自身じしんなり中の文字もんじは受用じゆようなり、仍よつて自我偈じがげは自受用身じじゆゆうしんなり法界ほっかいを自身じしんと開ひき法界ほっかい自受用身じじゆゆうしんなれば自我偈じがげに非あらずと云う事ことなし、自受用身じじゆゆうしんとは一念三千いちねんさんぜんなり、伝教でんぎやう云く「一念三千いちねんさんぜん即そく。」

自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは
無作の三身と云う事なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
と唱え奉る者は是なり云云。

第廿三 久遠の事

御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらか
さずつくるわすもとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて
成ぜず是れ働かざるなり、卅二相・八十種好を具足せず是れ繕わ
ざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、
久遠とは南無妙法蓮華經なり実成無作と開けたるなり云云。

第廿四 此の寿量品の所化の国土と修行との事

御義口伝に云く当品流布の国土とは日本国なり惣じては南
閻浮提なり、所化とは日本国の一切衆生なり修行

とは無疑うたがいわつしん 曰信いひしんの信心しんじんの事なり、授与じゅよの人とは本化ほんげ地涌じゆの菩薩ぼさつなり云云。

第廿五建立御本尊等の事ごんりゆうごほんぞん

御義おんぎ口伝くでんに云いく此この本尊ほんぞんの依文いぶんとは如来秘密神通にょらいひみつじんつう之力りきの文ぶんなり、戒定慧かいじょうえの三学さんがくは寿量品じゅうりょうぼんの事ことの三大秘法ひほうこ是これなり、日蓮にちれん慥たしかに靈山りゅうざんに於おいて面受めんじゆ口決くけつせしなり、本尊ほんぞんとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじの一身いつしんの当体とうたいなり云云

第廿六寿量品の对告衆の事じゅうりょうぼんたいこうしゆ

御義おんぎ口伝くでんに云いく經文きやうもんは弥勒菩薩みろくぼさつなり、然しかりと雖いえども滅後めつごを本もととする故ゆゑに日本にほん国こくの一切いっさい衆生しゆじやうなり、中なにも日蓮にちれん等の類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者これ是これなり、弥勒みろくとは末法まつぽう法華ほっけの行者ぎやうじやの事ことなり、弥勒みろくをば慈氏じしと云いふ法華ほっけの行者ぎやうじやを指さすなり、章安しやうあん大師だいし云いく「為なる彼除惡そくぜ即是こ彼親あにみろくぼさつ」と是これ豈あに弥勒菩薩みろくぼさつに非あらずや云云

第廿七無作三身の事 種子尊形三摩耶

御義口伝おんぎくでんに云いく尊形そんぎようとは十界本有じゅうかいほんぬの形像ぎようぞうなり三摩耶まやとは十界じゅうかい所持しよじの物なり種子しゆじとは信の一字いちじなり、所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうあらた改めざるを云いうなり三摩耶まやとは合掌がっしょうなり秘へす可べし秘へす可べし云云。

分別功德品三箇の大事

第一だいいち其有衆生しゆじやう聞仏寿命じゆみやうちやうおんによ長遠ぜ如是ないし乃至能生のうしやういちねんしんげ一念信解いちねんしんげ所得功德くどく無有限量むげんりやうの事だいじ

御義口伝おんぎくでんに云いく一念信解いちねんしんげの信の一字いちじは一切智慧いっさいちえを受得じゆとくする所の因種いんしゆなり、信の一字いちじは名字即みやうじそくの位ゐなり仍なほつて信の一字いちじは最後品さいごひんの無明むみやうを切る利剣りけんなり、信の一字いちじは寿量品じゆりやうぼんの理頭本りだうほんを信しんずるなり解げとは事頭本じだうほんを解げするなり

此の事理の顯本を一念に信解するなり、一念とは無作本有の
一念なり、此くの如く信解する人の功德は限量有る事有る可か
らざるなり、信の処に解あり解の処に信あり然りと雖も信を以
て成仏を決定するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る者はなり云云。

第二是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

御義口伝に云く法華經を頭に頂くと云う明文なり、如是諸人
等の文は広く一切衆生に亘るなり、然らば三世十方の諸仏は
妙法蓮華經を頂き受けて成仏し給う、仍つて上の寿量品の
題目を妙法蓮華經と題して次に如来と題したり秘す可し云云、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは此の故なり云云。

第三仏子住此地則是仏受用の事

御義口伝に云く此の文を自受用の明文と云えり、此地とは無作の

三身の依地なり仏子とは法華の行者なり仏子は菩薩なり法華の行者は菩薩なり住とは信解の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は妙法の地に住するなり仏の受用の身なり深く之を案ず可し云云。

随喜品二箇の大事

第一妙法蓮華經隨喜功德の事

御義口伝に云く随とは事理に随順するを云うなり喜とは自他共に喜ぶ事なり、事とは五百塵点の事蹟本に随順するなり理とは理蹟本に随うなり所詮寿量品の内証に随順するを随とは云うなり、然るに自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云うなり所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時必ず無作三身の仏に成るを喜とは云うなり、然る間随とは法に約し喜とは人に約す

るなり、人とは五百塵点じんてんの古仏こぶつたる釈尊しゃくそん法とは寿量品じゅうりょうほんの南無なむ

妙法蓮華經なり、是に随したがい喜よろこぶを随喜ずいきとは云うなり惣そうじて随とは信いみの異名ななり云云、唯信ただしん心の事を隋たと云うなりされば二卷には随順ずいじゆん此經こ非己ちぶん智分ちぶんと説りかれたり云云。

第二口氣無 優鉢華之香常徒其口出の事

御義おんぎ口伝くでんに云いく口氣くわいとは題目だいもくなり、無む 稼しゅうえとは弥陀みだ等の權教ごんきやう方便ほうべん無得道とくどうの教まじを交まじえざるなり、優鉢華之香ほうべんとは末法まつぽうの今だいもくは題目だいもくなり、方便品ほうべんに如優量いぢねん鍬華さんせの事をうごご一念三千いちねんさんぜんと云いえり之これを案べず可べし、常さんせとは三世常住さんぜじゆじゆなり其口くちとは法華ほっけの行者ぎやうの口くちなり出でとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり、今日蓮等いまちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまるは常從其口出じやうじゆんなり云云。

法師功德品四箇の大事

第一法師功德の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく法師ほつしとは五種ごしゆほつし法師ほつしなり功德くどくとは六根ろくこん清淨しやうじやうの
果報かほうなり、所詮しよせん今日いま蓮等れんたうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは
六根ろくこん清淨しやうじやうなり、されば妙法蓮華經みよほうれんげきやうの法ほふの師しと成なつて大おほなる徳とく
有あるなり、功こうは幸さいと云いふ事ことなり又は悪あくを滅めつするを功こうと云いふ善ぜんを
生なずるを徳とくと云いふなり、功德くどくとは即身成仏そくしんじやうぶつなり又六根ろくこん清淨しやうじやうな
り、法華經ほけきやうの説文せつもんの如ごとく修行しゆぎやうするを六根ろくこん清淨しやうじやうと得意とくい可べきなり
云云。

第二六根清淨の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく眼まなこの功德くどくとは法華不信ほつけふしんの者ものは無間むげんに墮だざい在ざいし信しんず
る者ものは成仏じやうぶつなりと見るを以もつて眼まなこの功德くどくとするなり、法華經ほけきやうを
持たち奉たてまつる処ところに眼まなこの八百やっぴやくの功德くどくを得えるなり、眼まなことは法華經ほけきやうなり
此こゝの大乗經典だいじやうきんは諸仏しよぶつの眼目がんもくと、今日いま蓮等れんたうの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきやう
と唱となえ奉たてまつる者ものは眼まなこの功德くどくを得えるなり云云、耳みみ・鼻はな・舌した・身み・意い又又

此くの如きなり云云。

第三又如淨明鏡の事

御義口伝に云く法華經に鏡の譬を説く事此の明文なり、六根
清淨の人は瑠璃明鏡の如く三千世界を見ると云う經文なり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は明鏡に万像を浮
ぶるが如く知見するなり、此の明鏡とは法華經なり別しては
宝塔品なり、又は我が一心の明鏡なり、所詮瑠璃と明鏡との二
の譬を説かれたり身根清淨の下なり、色心不二なれば何れも
清淨の徳分なり淨とは不淨に對して淨と云うなり明とは無明に
對して明と説くなり、鏡とは一心なり淨は仮諦・明は空諦・鏡は
中道なり悉見諸色像の悉は十界なり、所詮冲明鏡とは色心の
二法、妙法蓮華經の体なり淨明鏡とは信心なり云云、又三千
大子世界を知見するとは三世間の事なり。

第四是人持此經安住希有地の事

御義口伝おんぎくでんに云いく是人いとは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうの中には法華ほっけの行者ぎょうじやなり希有地けうとは寿量品じゆりやうぼんの事理じりの顯本けんぽんを指すなり、是これを又分別品ぶんべつには「仏説希有法」と説かれたり別しては南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者たてまつの希有地けうとは末法弘通まつぽうくわうの明鏡めいきやうたる本尊ほんぞんなり、惣そつじては此の品の六根ろくこん清淨じやうじやうの功德くどくは十信相似じゆしんそうじそく即すくなり对告衆たいこうしゆの常精進じやうじんほさつ菩薩ぼさつは十信じゆしんの第三信だいさんしんと云いえり、然しかりと雜ま末法まつぽうに於おいては法華經ほっけきやうの行者ぎやうじやを指して常精進じやうじん菩薩ぼさつと心得こころえ可べきなり此の經このきやうの持者じしやは是則精進しやうじんの故ゆゑなり。

常不輕品三十箇の大事

第一常不輕の事

763P

御義口伝おんぎくでんに云く常じょうの字じは三世さんぜの不ふ輕ぎょうの事ことなり、不ふ輕ぎょうとは一切いっさい衆生しゆじょうの内証ないしやう所具しよぐの三因さんいん仏性ぶつじやうを指さすなり、佛性ぶつじやうとは法性ほつじやうなり、法性ほつじやうとは妙法蓮華經みようほうれんげきやうなり云云。

第二得大勢菩薩の事

御義口伝おんぎくでんに云く得とくとは応身おうじんなり、大だいとは法身ほつしんなり、勢せいとは報身ほうしんなり、又得またとくとは仮諦けたいなり、大だいとは中道ちゆうどうなり、勢せいとは空諦くうたいなり、円融えんゆうの三諦さんたい三身さんじんなり。

第三威音王の事

御義口伝おんぎくでんに云く威いとは色法しきほふなり、音おんとは心法しんほふなり、王わうとは色心不二しきしんふにを王わうと云いふなり、末法まつぽうに入いつて南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうと唱なえ奉ほうる是こゝろれ併いら威音王いおんわうなり云云、其そのの故ゆゑは音おんとは一切いっさい權教こんきやうの題目だいもく等らうなり、威いとは首題しゆだいの五字ごじなり、王わうとは法華ほつけの行者ぎやうじやなり云云、法華ほつけの題目だいもくは獅子ししの吼こゝろゆるが如ごとく余經よきやうは余獸よじゆの音おんの如ごとくなり、諸經しよきやう中王ちゆうわうの故ゆゑに

王と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る威音
おうぶつ
王仏なり云云。

第四凡有所見の事

御義口伝おんぎくでんに云く今日いまほんこく日本国いっさいしゅじょうの一切衆生ほけきょうを法華經だいもくの題目きの機きなりと
ちけん
知見するなり云云。

第五我深敬汝等不敢輕慢がじんきよう所以者何汝等みな皆行菩薩道ぼさつ当得さぶつ作仏の事

御義口伝おんぎくでんに云く此の廿四字みょうほうと妙法ごじの五字ごじは替われども其の意は
こ
之れ同じ廿四字ほけきょうは略法華經なり。

第六但行礼拜の事

御義口伝おんぎくでんに云く礼拝がっしやうとは合掌がっしやうなり合掌ほけきょうとは法華經ほけきょうなり此れ即ち
いちねんさんぜん
一念三千ないしなり、故に不專読誦經典どくじゆきやうでん但行礼拜がっしやうと云うなり。

第七乃至遠見の事

御義口伝に云く上の凡有所見の見は内証所具の仏性を見るなり、此れは理なり遠見の見は四衆と云う間事なり仍つて上は心法を見る今は色法を見る色法は本門の開悟四一開会なり、心法を見るは迹門の意又四一開会なり、遠の一字は寿量品の久遠なり故に故往礼拝といえり云云。

第八心不浄者の事

御義口伝に云く謗法の者は色心二法共に不浄なり、先ず心法不浄の文は今・此の心不浄者なり、又身不浄の文は譬喩品に「身常臭処垢穢不浄」と云えり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心共に清浄なり、身浄は法師功德品に云く「若持法華經其身甚清浄」の文なり、心浄とは提婆品に云く「淨心信敬」と云云、浄とは法華經の信心なり不浄とは謗法なり云云。

第九言は無智比丘の事

御義口伝に云く此の文は法華經の明文なり、上慢の四衆不輕菩薩を無智の比丘と罵詈せり、凡有所見の菩薩を無智と云う事は第六天の魔王の所為なり、末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無智の比丘と謗ぜられん事經文の明鏡なり、無智を以て法華經の機と定めたり。

第十聞其所説皆信伏隨從の事

御義口伝に云く聞とは名字即なり所詮は而強毒之の題目なり、皆とは上慢の四衆等なり信とは無疑 曰信なり伏とは法華に歸伏するなり隨とは心を法華經に移すなり從とは身を此の經に移すなり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は末法の不輕菩薩なり。

第十一於四衆中説法心無所畏の事

御義口伝に云く四衆とは日本国の中的一切衆生なり説法とは

南無妙法蓮華經なり、心無所畏とは今日蓮等の

たぐい なむ 妙法蓮華經と呼ばる所の折伏なり云云。

第十二常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事

御義口伝に云く過去の不輕菩薩は今日の釈尊なり、釈尊は
壽量品の教主なり 壽量品の教主とは我等・法華經の行者な
り、さては我等が事なり今日蓮等の類いは不輕なり云云。

第十三常不值仏不聞法不見僧の事

御義口伝に云く此の文は不輕菩薩を輕賤するが故に三宝を拜見
せざる事二百億劫地獄に堕ちて大苦惱を受くと云えり、今末法に
入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を輕賤せん事
は彼に過ぎたり、彼は千劫此れは至無數劫なり末法の仏とは
凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏
とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり、深覺・円理名之為仏の故
なり円理とは法華經なり云云。

第十四畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

御義口伝おんぎくでんに云く若し法華誹謗ほっけの失を改めて信伏あたらた隨從しんぷくすいじゆうする共あ浅く有りては無間むげんに墮だつ可きなり、先せん謗強きが故に依よるなり千劫せんごう無間むげん地獄じじくに墮だちて後に出づる期有つて又日蓮にちれんに値あう可きなり復遇日蓮にちれんなるべし。

第十五於如来滅後等の事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎょうぼさつの修行しゆぎようは此の如ごとくなり仏の滅後めつごに五種ごしゆに妙法蓮華經みよほうれんげきようを修行しゆぎようすべしと見えたり、正まさしく是故まより下した廿にじふ五字ごじは末法日蓮等まつぽうにちれんの類たぐいの事なるべし、既かに是の故かのゆえにとおさえて於如来滅後にょらいめつごと説とかれたり流通りゆうつうの品なる故なり、惣そうじては流通りゆうつうとは未来みらい当今の為ためなり、法華經ほっけきよう一部いちぶは一往いちおうは在世ざいせいの為ためなり再往さいおうは末法まつぽう当今の為ためなり、其の故そのゆえは妙法蓮華經みよほうれんげきようの五字ごじは三世さんぜの諸しよ仏ぶつ共に許ゆるして未来滅後みらいめつごの者の為ためなり、品品ほんほんの法門ほつもんは題目だいもくの用もちなり体の

妙法みよほう末法まつぽうの用もちたらば何なにぞ用の品しやう別べつならむや、此この法門ほうもん秘ひす可べし
し秘ひす可べし、天台てんだいの「綱維こういを提ひぐるに目めと

して動かざること無きが如し」等と釈する此の意なり、
妙樂大師は「略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む」と、
此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

第十六此品の時の不輕菩薩の体の事

御義口伝に云く不輕菩薩とは十界の衆生なり、三世常住の礼拝の行を立つるなり吐く所の語言は妙法の音声なり、獄卒が杖を取つて罪人を呵責するが体の礼拝なり敢えて輕慢せざるなり、罪人・我を責め成すと思えば不輕菩薩を呵責するなり折伏の行是なり。

第十七不輕菩薩の礼拝住处の事之に付て十四箇所の礼拝住处の事之有り

御義口伝に云く礼拝の住处とは多宝塔中の礼拝なり、其の故は塔婆とは五大の所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝の

塔とも云うなり、ほっかい法界たっちゅう広しと雖も此の五大には過ぎざるなり故に
塔中の礼拝と相伝するなり秘す可し秘す可し云云。

第十八開示悟入礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く開示悟入かいじしにゆうの四仏知見しぶつちけんを住処じゆつしよとするなり、然る間
方便品ほうべんの此の文を礼拝の住処と云うなり此れは内に不軽ふぎようの解を
懐いだくと釈せり、解とは正因せいじん仏性を具足ぐそくすと釈するなり開仏知見かいぶつちけん
とは此の仏性ぶつじようを開かぶつしよしめんとて仏は出現しゆつげんし給うなり。

第十九每自作是念の文礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く毎の字は三世さんぜなり念いんとは一切衆生の仏性ぶつじようを念じ
給いしなり、仍よつて速成就じゆじゆじゆ仏身ぶつしんと皆当作みなさぶつ仏とは同じき事なり仍つ
て此の一文を相伝そうでんせり、天台大師てんだいだいしは「開三顯かいさんけんいつ一 開近顯遠かいこんけんのん」と釈
せり秘す可し秘す可し云云。

第二十我本行菩薩道の文礼拝住処の事

おんぎくでん
御義口伝に云く我とは本因妙の時を指すなり、本行菩薩道の文
は不輕菩薩なり此れを礼拝の住処と指すなり。

第廿一生老病死礼拝住処の事

おんぎくでん
御義口伝に云く一切衆生生老病死を厭離せず無常遷滅の当体に
迷うに依つて後世菩提を覚知せざるなり、此を示す時煩惱即
菩提生死即涅槃と教うる当体を礼拝と云うなり、左右の両の手
を開く時は煩惱生死上慢不輕各別なり、礼拝する時両の手を合
するは煩惱即菩提生死即涅槃なり、上慢の四衆の所具の仏性も
不輕所具の仏性も一種の妙法なりと礼拝するなり云云。

第廿二法性礼拝住処の事

おんぎくでん
御義口伝に云く不輕菩薩法性真如の三因仏性南無妙法蓮華經
の廿四字に足立て無明の上慢の四衆を拜するは蘊在衆生の仏性

を礼拝するなり云云。

第廿三無明礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く自他の隔意きやくいを立て彼は上慢じょうまんの四衆ししゅう我は不軽ぶぎょうと云う、不軽ぶぎょうは善人上慢ぜんにんじょうまんは悪人あくにんと善悪ぜんあくを立つるは無明むみょうなり、此こゝに立つて礼拝の行を成す時善悪不二ぜんあくふに・邪正じゃしょう一如いちによの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと礼拝するなり云云。

第廿四蓮華の二字礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く蓮華れんげとは因果いんがの二法にぽうなり、悪因あくいんあれば悪果あくくわを感じ善因ぜんいんあれば善果ぜんくわを感じず内証ないしやうには汝等なんぢら三因さんいん仏性ぶつじやうの善因ぜんいんあり、事に顕あらわす時は善果ぜんくわと成つて皆当作みなさぶつ仏ぶつす可べしと礼拝らいはいし給たまうなり云云。

第廿五実報土礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く実報土じつほうどは豎たての時は菩薩ぼさつの住処じゅうしよなり、仍なほつて不輕ふきよう菩薩ぼさつの住処じゅうしよを实報土じつほうどと定めて此こゝにて礼拝行らいはいぎやうを立て給たまう間ま実報土じつほうどは礼拝らいはいの住処じゅうしよなり云云。

第廿六慈悲の二字礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕ふきよう礼拝らいはいの行ぎやうは皆みな当作さぶつ仏ぶつと教しゆうる故ゆゑに慈悲じひなり、既に杖木瓦石じやうぼくわしやくを以もつて打擲うちなげすれども而しかん強毒じやうどく之をするは慈悲じひより起たれり、仏心ぶつしんとは大慈悲だいじひ心こゝろ是これなりと説とかれたれば礼拝らいはいの住処じゅうしよは慈悲じひなり云云。

第廿七礼拝住处分真即の事

御義口伝おんぎくでんに云く菩薩ぼさつは分真即ぶんしんじやくの位ゐと定さだむるなり、此こゝの位ゐに立つて理即りじやくの凡夫ぼんぶを礼拝らいはいするなり之これに依よつて理即りじやくの凡夫ぼんぶなる間ま・此こゝの授記じゆきを受けずして無智むちの比丘びくと謗わうじたり云云。

第廿八究竟即礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く凡有所見しよけんの見は仏知見ぶつちけんなり、仏知見ぶつちけんを以て上慢じょうまんの四衆ししゅうを礼拝する間究竟即くきようそくを礼拝の住処じゆじよと定むるなり云云。

第廿九法界礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く法界ほっかいに立て礼拝するなり法界ほっかいとは広きに非ず狭せうきに非ず惣そうじて法ほつとは諸法しよほつなり界かいとは境界きやうがいなり、地獄界じじく乃至ないし仏界ぶつがい各界がいを法ほつる間不輕菩薩ふぎようぼさつは不輕菩薩ふぎようぼさつの界かいに法ほつり上慢じょうまんの四衆ししゅうは四衆ししゅうの界かいに法ほつるなり、仍よつて法界ほっかいが法界ほっかいを礼拝するなり自他不じたふ二の礼拝ししゆつなり、其そのの故ゆえは不輕菩薩ふぎようぼさつの四衆ししゅうを礼拝すれば上慢じょうまんの四衆ししゅう所具しよぐの仏性ぶつじやう又不輕菩薩ふぎようぼさつを礼拝するなり、鏡きやうに向つて礼拝ししゆつを成なす時浮うべる影かげ又我われを礼拝するなり云云。

第卅礼拜住処忍辱地の事

御義口伝おんぎくでんに云く既に上慢じょうまんの四衆罵詈瞋恚ししゅうを成して虚妄じゆきの授記じゆきと
謗ぼうずと云えども不生瞋恚ふしょうと説く間忍辱地にんじゆくぢに住して礼拜らいはいの行を立
つるなり云云、初の一の住処じゆつしよは世流布るふの学者がくしや知れり後の十三箇
所ところは当世とうせの学者がくしや知らざる事なり云云。已上十四箇条の礼拜らいはいの
住処じゆつしよなり云云。

神力品八箇の大事じんりきほん だいじ

第一妙法蓮華經如来神力の事だいいちみょうほうれんげきようにょらいじんりき

文句もんくの十じゆに云く神じんは不測ふしきに名け力は幹用かんゆうに名く不測ふしきは即ち天然すなわ
の体たい深く幹用かんゆうは則ち轉變すなわの力大なり、此の中じんぼう深法じんぼうを付属ふそくせんが
為ために十種じゆしゆの大力だいりきを現げんず故ゆえに神力品じんりきほんと名くと。
御義口伝おんぎくでんに云く 此こゝの妙法建華經みょうほうけんげきは釈尊しゃくそんの妙法みょうほうには非あらざるな

り既に此の品の時上行菩薩に付属し給う故なり、惣じて
妙法蓮華經を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り。
壽量品の時事顕れ・神力属累の時事竟るなり、如来とは上の
壽量品の如来なり神力とは十種の神力なり所謂妙法蓮華經の
五字は神と力となり、神力とは上
の壽量品の時の如来秘密神通之力の文と同じきなり、今日蓮等
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る所の題目なり此の十種の神力
は在世滅後に亘るなり然りと雖も十種共に滅後に限ると心得
可きなり、又云く妙法蓮華經如来と神との力の品と心得可きな
り云云、如来とは一切衆生なり壽量品の如し、仍って釈にも
如来とは上に釈し畢ぬと云えり此の神とは山王七社等なり此の
旨之を案ず可きなり云云。

第二出広長舌の事

御義口伝おんぎくでんに云く広いとは迹門しやくもん・長ちやうとは本門ほんもん・舌したとは中道ちゆうどう法性ほうじやうなり

十法界じゅうほくがい妙法みょうほうの功德くどくなれば広いと云うなり豎たてに高たかければ長ちやうと云うなり

り・広いとは三千重点さんぜんじゆうてんより已来このかたの妙法みょうほう・長ちやうとは五百塵点じんでん已来このかたの

妙法みょうほう・同じく広長舌ちやうちやうじつなり云云。

第三十方世界衆宝樹下師子座上の事

御義口伝おんぎくでんに云く十方じゅうじつとは十界じゅうがいなり此この下したに於おて草木成仏そつもくじやうぶつ分明みやうめい

なり、師子ししとは師しは師匠ししやう子は弟子でしなり座上じやうざとは寂光土じやくくわうどなり十界じゅうがい

即本有そくほんゆの寂光じやくくわうたる国土こくどなり云云。

第四満百千歳の事

御義口伝おんぎくでんに云く満まんとは法界ほっかいなり百ひやくは百界ひやくがいなり千せんは千如せんじゆなり

一念三千いちねんさんぜんを満百千歳まんひやくせんさいと説いくなり云云、一時いちじも一念いちねんも満百千歳まんひやくせんさいに

して十種じゅうしゆの神力じんりきを現げんずるなり十種じゅうしゆの神力じんりきとは十界じゅうがいの神力じんりきなり、

十界じゅうがいの各各かくかくの神力じんりきは一種いちじゆの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり云云。

第五地皆六種震動其中衆生 衆宝樹下の事

御義口伝おんぎくでんに云く地いわとは国土世間こくどせけんなり其中衆生ごちゆうしゆじようとは衆生世間しゆじようせけんなり衆宝樹下しゆうほうじゆげとは五陰世間ごおんせけんなり一念三千分いちねんさんぜんぶんみゆう明みなり云云。

第六娑婆是中有仏名釈迦牟尼仏の事

御義口伝おんぎくでんに云く本化弘通ほんげくつうの妙法蓮華經みようほうれんげきようの大忍辱にんにくの力を以て弘通くつうするを娑婆しゃばと云うなり、忍辱にんにくは寂光土じやくこうどなり此の忍辱にんにくの心を釈迦牟尼仏しやくかむにぶつと云えり娑婆しゃばとは堪忍世界かんにんせかいと云うなり云云。

第七新人行世間能滅衆生闇の事

御義口伝おんぎくでんに云く斯人いわとは上行菩薩じようぎようぼさつなり世間せけんとは大日本国にほんこくなり衆生闇しゆじゆうあんとは謗法ぼうぼうの大重病じゆうびんなり、能滅にんめつの件けんは南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようなり今日蓮等けふにちれんの類たぐ是これなり云云。

第八畢竟住一乘 是人於仏道決定無有疑の事

御義口伝に云く畢竟とは広宣流布なり住一乗とは南無

妙法蓮華經の一法に住す可きなり是人とは名字即の凡夫なり

仏道とは究竟即なり疑とは根本疑惑の無明を指すなり、末法

当今は此の經を受持する一行計りにして成仏す可しと定むるな

り云云。

嘱累品三箇の大事

第一從法座起の事

御義口伝に云く起とは塔中の座を起ちて塔外の儀式なり三摩の

付嘱有るなり、三摩の付嘱とは身口意三業三諦三觀と付嘱し

給う事なり云云。

第二如来是一切衆生之大施主の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく如来にょらいとは本法ふし不思議ぎの如来にょらいなれば此こゝの法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを指さす可べきななり、大施主せしゆの施せとは末法まつぼう当今とうこん流布るふの南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょう主しゆとは上行菩薩じやうぎやうぼさつの事ことと心得こころづ可べきななり、然しかりと雖いえども当品じやくもんは迹門ふぞく付嘱ふぞくの品しんなり上行菩薩じやうぎやうぼさつを首くびとして付屬ふぞくし給たまう間ま上行菩薩じやうぎやうぼさつの御本意ごほんいと見たるなり云云。

第三如世尊せそん勅しやく当具たうぐ奉行ぶぎやうの事

御義口伝おんぎくでんに云いわく諸もろもろの菩薩等ぼさつの誓言せいごんの文ぶんなり、諸天善神しよてんぜんじん菩薩等ぼさつをにちれん日蓮等たぐの類かんぎ諫きんぎ曉きやうするは此こゝの文ぶんに依よるなり云云。

第一不如受持此法華經乃至一四句偈の事

御義口伝に云く法華經とは一經廿八品なり一四句偈とは題目の五字と心得可きなり云云。

第二十喩の事

御義口伝に云く十喩とは十界なり、此の山の下に地獄界を含めり、川流江河餓鬼・畜生を撰せり。日月の下に修羅を収めたり。帝釈梵天は天界なり。凡夫人とは人間なり、声聞とは四向四果の阿羅漢なり。縁覚とは辟支仏中と説かれたり、菩薩は菩薩為第一と云えり。仏界は如仏為諸法王と見えたり、此の十界を十喩と挙げて教相を分別してさて妙法蓮華經の於一仏乘より分別説三する時此くの如く挙げたり、仍つて一念三千の法門なり一念三千は拔苦与樂なり。

第三離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

御義口伝に云く法華の心は煩惱即菩提・生死即涅槃なり離解の
二字は此の説相に背くなり然るに離の字をば明とよむなり、本門
寿量の慧眼開けて見れば本来本有の病痛苦惱なりと明らめたり
仍つて自受用報身の智慧なり、解とは我等が生死は今始めたる
生死に非ず本来本有の生死なり、始覚の思縛解くるなり云云、
離解の二字は南無妙法蓮華経なり云云。

第四火不能烧水不能漂の事

御義口伝に云く火とは阿鼻の炎なり水とは紅蓮の氷なり、今日蓮
等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は此くの如くなるべし云
云。

第五諸余怨敵皆悉摧滅の事

御義口伝おんぎくでんに云いく怨敵おんてきとは念仏ねんぶつ・禅しんこん・真言等しんごんの謗法ほうぼうの人ひとなり摧滅さいめつとは法華折伏ほつげしやくぶく・破権門理はこんもんりなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる是これなり云云。

第六若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

文句もんくの十じゆに云いく此こゝに觀解かんげを須もちゆべしと。

御義口伝おんぎくでんに云いわ若人にやくにんとは上仏果ぶつがより下地獄げじごくの罪人ざいにんまで之これを撰せつす可べきなり、病やまとは三毒さんどくの煩惱ぼんのう・菩薩ぼさつに於おいても亦また之こゝれ有あるなり、不老しやくそんは釈尊しやくそん不死ふじは地涌じゆうの類たぐい、是こゝは滅後めつご当今とうこんの衆生しゆじやうの為ために説そくかれたり、然しからば病やまとは謗法ほうぼうなり、此こゝの經きやうを受持じゆじし奉たてまつる者ものは病即そく消滅しやうめつ疑ぎ無なきなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者もの是これなり云云。

妙音品三箇の大事

第一 妙音菩薩の事

御義口伝に云く妙音菩薩とは十界の衆生なり、妙とは不思議なり音とは一切衆生の吐く所の語言音声こげんおんじょうが妙法の音声おんじょうなり三世常住の妙音みょうおんなり、所用に随つて諸事を弁ずるは慈悲なり是を菩薩と云うなり、又云く妙音とは今日蓮等の類たくい南無妙法蓮華經と唱え奉る事たままつは末法まつぼう当今の不思議ふしぎの音声おんじょうなり、其の故は煩惱即菩提・生死即涅槃の妙音みょうおんなり云云。

第二 肉髻白毫の事

御義口伝に云く此の二の相好そうごうは孝順師長より起れり法華經ほけきょうをもち奉るを以て一切の孝養の最頂とせり、又

云く此の白毫とは父の姪なり肉髻とは母の姪なり赤白二・今經
に來つて肉髻白毫の二相と顕れたり、又云く肉髻は隨緣真如の
智なり白毫は不變真如の理なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉るは此等の相好を具足するなり、我等が生
の始は赤色肉髻なり死後の白骨は白毫相なり、生の始の赤色は
隨緣真如の智死後の白骨は不變真如の理なり秘す可し秘す可し
云云。

第三八万四千七宝鉢の事

御義口伝に云く此の文は妙音菩薩雲雷音王仏に奉る所の供養の
鉢なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は八万四
千の鉢を三世の諸仏に供養し奉るなり、八万四千とは我等が八万
四千の塵勞なり南無妙法蓮華經と唱え奉る處にて八万四千の
法門と顕るるなり、法華經の文字は開結二經を合しては八万四

千なり、又云く八とは八苦なり四とは生老病死なり七宝とは頭上の七穴なり鉢とは智者なり妙法の智水を受持するを以て鉢とは心得可きなり云云。

普門品五箇の大事

775P

第一無尽意菩薩の事

御義口伝に云く無尽意とは円融の三諦なり、無とは空諦尽とは
仮諦意とは中道なり、觀世音とは觀は空諦世は仮諦音は中道
なり、妙法蓮華經とは妙とは空諦法蓮華は仮諦經とは中道な
り、三諦法性の妙理を三諦の觀世音と三諦の無尽意に対して
説き給うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は
末法の無尽意なり、所詮無とは我等が死の相なり尽とは我等が
生の相なり意とは我等が命根なり、然る間一切の法門・境智

冥合等の法門意の一字に之を撰入す此の意とは中道法性なり
法性とは南無妙法蓮華經なり、仍つて意の五字なり我等が胎内
の五位の中には第五番の形なり、其の故は第五番の姿は五輪なり
五輪即ち妙法等の五字なり、此の五字又意の字なり仏意とは
妙法の五字なり此の事別に之無し、仏の意とは法華經なり是を
壽量品にして是好良藥とて三世の諸仏の好もの良藥と説かれ
たり森羅三千の諸法は意の一字には過ぎざるなり、此の仏の意を
信ずるを信心とは申すなりされば心は有分別なり俱に妙法の
全体なり云云。

第二観音妙の事

御義口伝に云く妙法の梵語は薩達摩と云うなり、薩とは妙と
翻す此の薩の字は観音の種子なり仍て観音・法華眼目異名と釈せ
り、今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は

観音の利益より天地雲泥せり、所詮観とは円観なり世とは
不思議なり音とは仏機なり観とは法界の異名なり既に円観なる
が故なり、諸法実相の観世音なれば地獄・餓鬼・畜生等の界界を
不思議世界と知見するなり、音とは諸法実相なれば衆生として
実相の仏に非ずと云う事なし、寿命品の時は十界本有と説いて
無作の三身なり、観音既に法華経を頂受せり然らば此の経受持
の行者は観世音の利益より勝れたり云云。

第三念念勿生疑の事

御義口伝に云く念念とは一の念は六凡なり一の念は四聖なり六
凡四聖の利益を施すなり疑心を生ずること勿れ云云、又云く
念念とは前念後念なり、又云く妙法を念ずるに疑を生ず可
らず云云、又三世常住の念念なり之に依つて上の文に是故衆生
念と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉りて念念勿生

疑うたがの信心しんじんに住す可べきなり煩悩ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅槃ねはん疑うたが有ある可べからざるなり云云。

第四二求両願の事

御義口伝おんぎくでんに云いく二求にせうとは求男せうなん求女せうにょなり、求女せうにょとは世間せけんの果報かほう求男せうなんとは出世しゅっせの果報かほう仍なほつて現世げんせ安穩あんゑんは求女せうにょの徳とくなり後生ごしょう善処ぜんじょは求男せうなんの徳とくなり、求女せうにょは竜女りゅうにょが成仏じょうぶつ生死じふじ即涅槃じくねはんを顯あらわすなり求男せうなんは提婆だいばが成仏じょうぶつ煩惱ぼんご即菩提じくぼだいを顯あらわすなり我等われらが即身じくしん成仏じょうぶつを顯あらわすなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐひ南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる行者ぎやうじやは求男せうなん求女せうにょを満足まんぞくして父母ふぼの成仏じょうぶつ決定けつじやうするなり云いふ。

第五三十三身利益の事

御義口伝おんぎくでんに云いく三十さんじゅうとは三千さんぜんの法門ほうもんなり、三身さんじんとは三諦さんたいの法門ほうもんなり云いふ、又また云いく卅さんじゅう三身さんじんとは十界じゅうがいに三身さんじんづつ具ぐすれば十界じゅうがいには三身さんじんの本ほんの三身さんじんを加くわうれば卅さんじゅう三身さんじんなり、所詮しよせん三さんとは三業さんごふなり十じゅうとは十界じゅうがいなり三さんとは三毒さんどくなり身みとは一切いっさい衆生しゆじやうの身みなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐひ南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものは卅さんじゅう三身さんじんの利益りやくなり云いふ。

陀羅尼品六箇の大事

777P

第一陀羅尼の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ陀羅尼だらにとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、其の故は陀羅尼だらには諸仏しよぶつの密語みつこなり題目だいもくの五字三世ごじさんぜの諸仏しよぶつの秘密ひみつの密語みつこなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉るとなは陀羅尼だらにを弘通ぐつうするなり捨惡持善の故なり云云。

第二安爾曼爾の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ安爾あにとは止なり・曼爾まにとは觀なり、此の安爾あに・曼爾まにより止觀しかんの二法にほふを釈しゃくし出せり、仍よつて此の咒まじなは藥王菩薩やくおうぼさつの咒まじななり藥王菩薩やくおうぼさつは天台てんだいの本地ほんちなり、安爾あには我等われらが心法しんぽうなり妙なり曼爾まには我等われらが色法しきぽうなり法なり

しきしんみょうほう
色心妙法と呪する時は即身成仏なり云云。

第三鬼子母神の事

おんぎくでん
御義口伝に云く鬼とは父なり子とは十羅刹女なり母とは

かりたいも
伽利帝母なり、逆次に次第する時は神とは九識なり母とは八識へ

むみょう
出づる無明なり子とは七識六識なり鬼とは五識なり、流転門の

あつき
時は悪鬼なり還滅門の時は善鬼なり、仍つて十界互具・

ひゃつかいせんによ
百界千如の一念三千を鬼子母神十羅刹女と云うなり、三宝荒神

じゆつらせつによ
とは十羅刹女の事なり所謂飢渴神貪欲神障碍神なり、今法華經

ぎょうじゃ
の行者は三毒即三徳と転ずる故に三宝荒神に非ざるなり荒神と

ほっけふしん
は法華不信の人なり法華經の行者の前にては守護神なり云云。

第四受持法華名者福不可量の事

おんぎくでん
御義口伝に云く法華の名と云うは題目なり、者と云うは日本国の

いっさいしゆじゆり
一切衆生の中には法華經の行者なり、又云く者の字は男女の中

には別して女人を讃めたり女人を指して者と云うなり、十羅刹女は別して女人を本とせり例せば竜女が度脱苦衆生とて女人を苦の衆生と云うが如し薬王品の是經典者の者と同じ事なり云云。

第五皐諦女の事

御義口伝に云く皐諦女は本地は文殊菩薩なり、山海何かなる処にても法華經の行者を守護す可しと云う經文なり、九悪一善とて皐諦女をば一善と定めたり、十悪の煩惱の時は偷盜に皐諦女は当れり逆次に次第するなり云云。

第六五番神呪の事

御義口伝に云く五番神呪とは我等が一身なり、妙とは十羅刹女なり法とは持国天王なり蓮とは増長天王なり

り華とは広目天王なり經とは毘沙門天王なり、此の妙法の五字は五番神呪なり、五番神呪は我等が一身なり、十羅刹女の呪は妙の一字を十九句に並べたり經文には寧上・我頭上の文是れなり、持国天は法の一字を九句に並べたり經文には四十二億と云えり、四とは生老病死・十とは十界・二とは迷悟なり、持国は依報の名なり法は十界なり、增長天は蓮の一字を十三句に並べたり經文には「亦皆隨喜」と云えり隨喜の言は仏界に約せり、広目天は華の一字を四十三句に並べたり經文には「於諸衆生多所饒益」と云えり、毘沙門天は經の一字を六句に並べたり經文には「持是經者」等の文是なり云云。

嚴王品三箇の大事

第一妙莊嚴王の事 文句の十に云く妙莊嚴とは妙法功德をもつ

て諸根を莊嚴するなりと。

御義口伝に云く妙とは妙法の功德なり、諸根とは六根なり此の妙法の功德を以て六根を莊嚴す可き名なり、所詮妙とは空諦なり莊嚴とは仮諦なり王とは中道なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く妙莊嚴王なり云云。

第二浮木孔の事

御義口伝に云く孔とは小孔大孔の二之れ有り、小孔とは四十年の經教なり大孔とは法華經の題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大孔なり、一切衆生は一眼の龜なり梅檀の浮木とは法華經なり、生死の大海に南無妙法蓮華經の大孔ある浮木は法華經に之在り云云。

第三当品邪見即正の事

御義口伝に云く嚴王の邪見二人の教化に依り功德を得て邪を

改^{あらた}めて正とせり、止のーに^{みな}辺邪皆中正と云う

是なり、今日本国^{にほんこく}の一切衆生^{いっさいしゆじやう}は邪見^{じゃけん}にして蔽王^{にぢれん}なり、日蓮等^{にぢれん}の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經^{なむほうれんげきやう}と唱え奉る者^{とな たてまつ}は二人^{ふたり}の如^{ごと}し終^{つい}に畢竟住^{ひつきやう}一乘^{いちじやう}して邪見^{じゃけん}即正^{すなはち}なる可^べし云云。

普賢品六箇の大事^{ふげん だいじ}

第一普賢菩薩^{ふげんぼさつ}の事^{こと} 文句^{もんく}の十^{じゆ}に云^いく勸発^{かんぱつ}とは恋法^{れんぽう}の辞^{ことば}なりと。

御義口伝^{おんぎくでん}に云^いく勸発^{かんぱつ}とは勸^{かん}は化他^{けた}・発^{はつ}は自行^{じぎやう}なり、普^ふとは

諸法^{しよぽう}実相^{じつじやう}迹門^{じやくもん}の不变^{ふへん}真如^{しんによ}の理^りなり、賢^{けん}とは智慧^{ちえ}の義^ぎなり本門^{ほんもん}の

随縁^{ずいえん}真如^{しんによ}の智^ちなり、然^{しか}る間^ま経末^{きやうまつ}に來^きつて本^{ほん}・迹^{じやく}二門^{にもん}を恋法^{れんぽう}し給^{たま}え

り、所詮^{しよせん}今日^{こんにち}蓮等^{れんとう}の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經^{なむほうれんげきやう}と唱^{とな}え奉^{たてまつ}る者^{もの}は普賢^{ふげん}

菩薩^{ぼさつ}の守護^{しゆご}なり云云。

第二若法華經行閻浮提^{ほけきやう えんぶだい}の事^{こと}

御義口伝^{おんぎくでん}に云^いく此^{こゝ}の法華經^{ほけきやう}を閻浮提^{えんぶだい}に行^いずることは普賢菩薩^{ふげんぼさつ}の

威神いしんの力ちからに依よるなり、此この經きやうの広こう宣せん流る布ふすることは普ふ賢げん菩ぼ薩さつの
守しゆ護ごなるべきなり云い云い。

第三八万四千天女の事はちまん

御義おんぎ口く伝でんに云いく八はち万まん四し千せんの塵じん勞ろう門もんなり、是これ即すなわち煩ぼん惱のう即そく菩ぼ提だい・
生しやう死じ即そく涅ね槃はんなり七しち宝ぼうの冠かんむりとは頭あたま上うへの七しち穴あななり、今いま日にち蓮れん等とうの類たぐい
南な無む妙みやう法ほう蓮れん華げ經きやうと唱となえ奉たてまつる者もの是これなり云い云い。

第四是人命終為千仏授手の事みやうじゆう

御義おんぎ口く伝でんに云いく法ほ華け不ふ信しんの人ひとは命み終まつの時とき地じ獄ごくに墮だ在ざいす可べし、經きやう
に云いく「若に人やく不ふ信しん毀き謗ぼう・此し經きやう即そく斷だん・一いつ切せ世せい間けん・仏ぶつ種しゆ其こ人にん命み終まつ・
入に阿あ鼻び獄ごくと、法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやは命み終まつして成じやう仏ぶつす可べし是これ人にん命み終まつ
為なる千せん仏ぶつ授じゆ手ての文ぶん是これなり、千せん仏ぶつとは千せん如にょの法ほ門もんなり謗ほう法ほの人ひとは
獄ごく卒そつ来らい迎いようし法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやは千せん仏ぶつ来らい迎いようし給たまうべし、今いま日にち蓮れん等とうの
類たぐい南な無む妙みやう法ほ華げ經きやうと唱となえ奉たてまつる者ものは千せん仏ぶつの来らい迎いよう疑ぎ無なき者ものなり

云云。

第五閻浮提内広令流布の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく此この内の字は東西北の三方を嫌きらえる文なり、広令流布ひろにゅうふとは法華經ほけきょうは南閻浮提計えんぶだいばかりに流布るふす可べしと云いう經文きょうもんなり、此この内の字之を案べず可べし、今日蓮等いまにちれんの類たくい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者は深こく之を思おもう可べきなり云云。

第六此人不久当詣道場の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく此人ことは法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなり、法華經ほけきょうを持たもち奉たてまつる處ところを当詣道場とうけいどうじょうと云いうなり此こを去かつて彼かれに行くには非あざるなり、道場どうじょうとは十界じゅうがいの衆生しゆじやうの住處じゆじよを云いうなり、今日蓮等いまにちれんの類たくい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者の住處じゆじよは山谷曠野さんやこうや皆寂光土みなじゃうこうどなり此これを道場どうじょうと云いうなり、此こ因無易故しきし云直至これの釈しやく之を思おもう可べし、此この品の時さいじょう最上第一さいじやうだいいちの相伝そうでんあり、釈尊しやくそん八箇年はちかねんの法華經ほけきょうを八字はちじに留とどめ

て末代まつだいの衆生しゆじやうに譲りゆず給うたまなり八字とは当起遠迎当如敬仏の文なり、

此の文までにて経は終るなり当そのの字は未来みらいなり当起遠迎とは必ず仏ごとの如ほけきやうくに法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを敬うやもべには於きやうかん此經卷敬視如仏と云えり、八年の御説法せつぽうの口開きは南無なむ妙法蓮華經方便品みやうりやうれんげきやうほうべんの諸仏智慧しよびつちえ終りは当起遠迎当如敬仏の八字なり、但此の八字を以て法華ほけけ一部の要路とせりされば文句もんくの十に云く、「当起遠迎当如敬仏そよりは其その信者の功德くどくを結することを述す」と、法華ほけけ一部は信の一字を以て本とせり云云。

尋ねて云く今の法華經ほけきやうに於て序品じよほんには首はじめに如の字を置き終りの普賢品ふげんには去の字を置く羅什三蔵らじゆうさんぞうの心地しんじいか何なる表事ほうもんの法門ほうもんぞや、答て云く今の經ほつたいの法体ほつたいは実相じつそつと久遠くおんとの二義を以て正体なと為すなり始の如の字は実相じつそつを表し終りの去の字は久遠くおんを表するなり、

其そのの故ゆえは実相じっそうは理りなり久遠くおんは事ことなり理りは空くうの義ぎなり空くうは如ごとの義ぎ
なり之これに

依よつてて如ごとをば理り空くうに相配さうはいするなり、釈しやくに云いく、「如ごとは不ふ具ぐに名なく即すなち空くうの義ぎなり」と久遠くおんは事ことなり其そのの故ゆゑは本門ほんもん寿量じゆりやうの心こころは事円じげんの三千さんぜんを以もつて正意せういと為なすなり、去こは久遠くおんに当あるなり去こは開ひらの義ぎ如ごとは合あの義ぎなり開ひらは分別ぶんべつの心こころなり合あは無分別むぶんべつの意いなり、此こゝの開合かいあを生仏じふつに配当はいたうする時は合あは仏界ぶつがい開ひらは衆生じゆじやうなり、序品じよほんの始はじめに如ごとの字じを顯あらわしたるは生仏じふつ不二ふじの義ぎなり、迹門しやくもんは不二ふじの分ぶんなり不ふ變へん真しん如にょなる故ゆゑなり、此こゝの如ごと是我聞によぜがもんの如ごとをば不ふ變へん真しん如にょの如ごとと習ならうなり、空仮中くうけちゆうの三諦さんたいには如ごとは空くう・是ぜは中ちゆう・我聞がもんは仮諦けたい・迹門しやくもんは空くうを面おもてと為なす故ゆゑに不二ふじの上かみの而しかこなり、然しかる間かん而にの義ぎを顯あらわす時とき・同聞衆どうもんしゆうを別べつに列つらぬるなり、さて本門ほんもんの終しゆうりの去こは隨緣真如ずいえんしんによにして而にの分ぶんなり仇あつて去この字じを置おくなり、作礼さらい而に去この去こは隨緣真如ずいえんしんによと約やく束そくするなり、本門ほんもんは而にの上かみの不二ふじなり而に不二ふじ・常同常別じやうどうじやうべつ・古今ここん法爾ほうにの釈しやく之これを思おもう可べし、此こゝの去この字じは彼かの五千起去ごせんきこの去こと習ならうな

り、其の故は五千とは五住の煩惱と相伝する間五住の煩惱が己心の仏を礼して去ると云う義なり、如去の二字は生死の二法なり、伝教云く、「去は無来之如来無去之円去」等と云云。

如の字は一切法是心の義。去の字は心は一切法の義なり、一切法是心は迹門の不变真如なり心は一切法は本門の随縁真如なり、然る間法界を一心に縮むるは如の義なり法界に開くは去の義なり三諦三觀の口決相承と意同じ云云。

一義に云く如は実なり去は相なり実ハ心王相は心数なり、又諸法は去なり実相は如なり今經一部の始終諸法実相の四字に習うとは是なり、釈に云く「今經は何を以て体と爲るや諸法実相を以て体と爲す」と、今一重立ち入つて日蓮が修行に配当せば如とは如説修行の如なり其の故は結要五字の付属を宣へ給う時・宝塔品に事起り声徹下方し近令有在・遠令有在と云うて有在の二

字を以て本化ほんげ・迹化しゃつけの付属ふぞくを宣のぶるなり仍よつて本門ほんもんの密序みしゆと習ならう
なり、さて一仏いつぶつ・並座びやうざ・分身ぶんじんの諸仏しよぶつ集あまつて是好ぜこう良藥りやうやくの
妙法蓮華經みょうほうれんげききやうを説とき顯あらわし釈尊しゃくそん十種じゆしゆの神力じんりきを現げんじて四句しきうに

結び上行菩薩に付属し給う英の付属とは妙法の首題なり惣別の
付属塔中塔外之を思ふ可し、之に依つて涌出寿命に事顕れ神力
属累に事竟るなり、此の妙法等の五字を末法・白法隱没の時
上行菩薩・御出世有つて五種の修行の中には四種を略して但受持
の一行にして成仏す可しと經文に親り之れ有り、夫れば神力品
に云く「於我滅度後・応受持斯經・是人於仏道・決定無有疑」云云
此の文明白なり、仍つて此の文をば仏の廻向の文と習うなり、
然る問此の經を受持し奉る心地は如説修行の如なり此の如の
心地に妙法等の五字を受持し奉り南無妙法蓮華經と唱え奉れば
忽ち無明煩惱の病を悉く去つて妙覺極果の膚を瑩く事を顕す
故にさて去の字を終りに結ぶなり、仍つて上に受持仏語と説けり
煩惱惡覺の魔王も諸法実相の光に照されて一心一念・遍於法界と
觀達せらる、然る間還つて己心の仏を礼す故に作礼而去とは説き

給うなり、彼彼三千互遍亦爾の積之を思う可し秘す可し秘す
可し唯受一人の相承なり、口外す可からず然らば此の去の字は
不去而去の去と相伝するを以て至極と為すなり云云。

無量義經六箇の大事

第一無量義經德行品第一の事

御義口伝に云く無量義の三字を本・迹・觀心に配する事、初の無
の字は迹門なり其の故は理円を面とし不變真如の旨を談ず、
迹門は無常の摺属なり常住を談ぜず但し「是法住法位世間相
常住」と明かせども是れは理常住にして事常住に非ず理
常住の相を談ずるなり、空は無の義なり但し此の無は断無の無
に非ず相即の上の空なる処を無と云い空と云うなり、円の上に
て是を沙汰するなり、本門の事常住無作の三身に対して迹門を

無常と云うなり、守護章には有為の報は夢中の権果無作の三身
は覚前の実仏と云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經

とな たてまつ
と唱え奉る者は無作の三身覚前の実仏なり云云。

第二量の字の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く量の字を本門に配当する事は量とは権撰の義
なり、本門の心は無作三身を談ず此の無作三身とは仏の上ばかりにて之を云わず、森羅万法を自受用身の自体顕照と談ずる故に迹門にして不変真如の理円を明かす処を改めずして己が当体無作三身と沙汰するが本門事円三千の意なり、是れ即ち桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は無作三身の本主なり云云。

第三義の字の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く義とは観心なり、其の故は文は教相義は観心なり所説の文字を心地に沙汰するを義と云うなり、就中無量義は

一法より無量の義を出生すと談ず、能生は義所生は無量なり
是は無量義經の能生所生なり、法華經と無量義經とを相對する
能所に非ざるなり無相・不相名為実相の理より万法を開出すと
云う、源が実相なる故に觀心と云うなり、此くの如く無量義の
三字を迹門・本門觀心に配当する事は法華の妙法等の題と今の
無量義の題と一体不二の序正なりと相承の心を相伝せむが為なり。

第四処の一字の事

御義口伝に云く処の一字は法華經なり、三藏教と通教とは無の
字に撰し別教は量の字に撰し円教は義の字に撰するなり、此の
爾前の四教を所生と定めさて序分の此の經を能生と定めたり、
能生を且く処と云い所生を無量義と定めたり、仍つて權教に
相對して無量義処を沙汰するなり云云。

第五無量義処の事むりょうぎょ

御義口伝おんぎくでんに云くいわ法華經八卷は処なりむりょうぎきょう無量義經は無量義なり、
無量義は三諦三觀三身三乘三業なりむりょう法華經に於い一仏乗分別說
三と説いて法華の為の序分と成るなり、爰を以て隔別の三諦は無
とくどうえんゆう さんたい 得道円融の三諦は得道と定むる故に四十余年・未顕眞実と破し
給たまえり云云。

第六無量義処の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ無量義処とは一念三千なり、十界各各無量むりょうに義
処たり、此の当体其の儘実相の一理より外は之れ無きを
諸法実相と説かれたり、其の為の序なる故に一念三千の序として
無量義処と云うなり、処は一念無量義は三千なり、我等衆生
朝夕吐く所の言語も依正二法共に無量むりょうに義処りたり、此れを
妙法蓮華經とは云うなり然る間法華の為の序分開經なり云云。

普賢經五箇の大事だいじ

第一普賢經の事 題号に云く仏説觀普賢菩薩行法經と云云。

御義口伝に云く此の法華經は十界互具三千具足の法体なれば
三干十界悉く普賢なり、法界一法として漏るる義之れ無し故に
普賢なり、妙法の十界蓮華の十界なれば依正の二法悉く法華經
なりと結し納めたる經なれば此の普賢經を結經とは云うなり、
然らば十界を妙法蓮華經と結し合せたり云云。

第二不断煩惱不離五欲の事

御義口伝に云く此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり、
法華の行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡の
まま普賢菩薩の行法なりと心得可きなり云云。

第三六念の事

念仏 念法 念僧 念戒 念施 念天

おんぎくでん 御義口伝に云く念仏とは唯我一人の導師なり、念法とは滅後は
だいもく 題目の五字なり念僧とは末法にては凡夫僧なり、念戒とは是名
じかい 持戒なり、念施とは一切衆生に題目を授与するなり、念天とは
しよてん 諸天昼夜常為法故而衛護之の意なり、末法当今の行者の上なり
これ 之を思う可きなり云云。

第四一切業障海皆從妄想生若欲懺悔者端坐思実相衆罪如霜露
えにち 慧日能消除の事

おんぎくでん 御義口伝に云く衆罪とは六根に於て業障降り下る事は霜露の
こと 如し、然りと雖も慧日を以て能く消除すと云えり、慧日とは末法
とうこん 当今日蓮所弘の南無妙法蓮華経なり、慧日とは仏に約し法に約
しやくそん するなり、釈尊をば慧日大聖尊と申すなり法華経を又如日天子
しよ 能除諸闇と説かれたり、末法の導師を如日月光明等と説かれた
り。

第五正法治国不邪枉人民の事

御義口伝おんぎくでんに云いく末法まつほうの正法しょうほうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、此この五字ごじ

は一切衆生いっさいしゆじようをたばらかさぬ秘法ひほうなり、正法しょうほうを天下てんが一同いっとうに信仰しやうぎやうせ

ば此この国安穩あんのんならむ、されば玄義げんぎに云いく「若もし此この法ほけきように依よれば

即すなわち天下てんが泰平たいへいと、此この法ほけきようとは法華經ほけきようなり法華經ほけきようを信仰しやうぎやうせば天下てんが

安全あんぜんたらむ事こと疑うたがい有ある可べからざるなり。

已上二百三十一箇条の大事だいじ

廿八品じゅうはちひんに一文充いちぶんちゆうの大事だいじ 合あせて廿八箇条じゅうはちかんじょうの大事だいじ秘ひす可べし

云云

序品じよほん

十界也じゅうかい 始覺しかく

於無漏実相むろじつそう 心已得通達こころいじとくずう

妙法みょうほう 不変ふへん 隨緣ずいえん

此いわゆるの文・我なが心本むより覺みなりと始みめて覺よるを成ほう仏ぶつと云いうなり
所謂い南無な妙法蓮華經みと始めて覺さる題だい目もくなり。

方便品 ほうべん

俗諦 ぞくたひ

世間相常住 せけんさうじやうじゅう

本門 ほんもん

真諦 しんたい
是法住法位 ぜほしほつほうい

迹門 しゆじやう

此の文衆生の心は本来仏なりと説くを常住と云うなり万法元より覚の体なり。

譬喻品 ひゆぼん

受持人 大白牛車 だいびや

乘此宝乘 なむこ

題目 だいもく

凡夫即極 ほんぶ
直至道場 しきしじやうじやう

極果ノ処也 ごくが

此の文は自身の仏乗を悟つて自身の宮殿に入るなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは自身の宮殿に入るなり。

信解品 しんげ

一念三千 いちねんさんぜん

無上宝珠 むじやうほうしゆ

題目 だいもく

不求自得 ふぐじとく

此の文は無始色心本是理性妙境・妙智なれば己心より外に実相

を求む可べからず所謂いわゆる南な無む妙みよつ法ほつ蓮れん華げき經きやうは不ふ求ぐ自じ得とくなり。

藥草喻品

三世さんぜ題目だいもく一切いっさい衆生しゆじやう

又また諸しよ仏ぶつ子こ尊そん心しん仏ぶつ道だう常じやう行ぎやう慈じ悲ひ自じ知ち作さ仏ぶつ
此の文は当来とうらいの成じやう仏ぶつ顯けん然ねんなり所謂いわゆる南な無む妙みよつ法ほつ蓮れん華げき經きやうなり。

授記品 じゆき

十界実相仏 じゆつかいじつそう

三世常住 さんぜじやうじゆう

煩惱即菩提 ぼんのうそくぼだい

生死即涅槃 しやうじそくねはん

於諸仏所常修梵行於無量劫奉持佛法 しよぶつしよじやうしゆうぼんぎやうおむりやうこうほうじぶつほう

一切業障 いっさいごうじやう

此の文に常と云い無量劫と云う即ち本有所具の妙法なり所謂 むりやうこうすなわほんぬしよぐみやうほういわゆる

南無妙法蓮華経なり。 なむみよごほうれんげきやう

化城喻品 けじやうゆほん

三千塵点 さんぜんしんぢん

觀彼久遠猶如今日 くおんくわんぜんぢんなほけんじゆんじゆん

在世 ざいせい

此の文は元初の一念一法界より外に更に六道四聖とて有る可か
らざるなり所謂南無妙法蓮華経は三世一念なり今日とは末法を
指して今日と云うなり。

五百品 ごひやくひん

日本国一切衆生 にほんこくいつさいしじゆう

題目御本尊 だいもくごほんそん

心法色法

煩惱即菩提・生死 ぼんのうそくぼだいしやうじ

即涅槃 そくねはん
貧人 びんじん

見此珠

其心大歡喜 かんき

此の文は始めて我心本來の仏なりと知るを即ち大歡喜と名く
所謂南無妙法蓮華經は歡喜の中の大歡喜なり。

人記品 にんきほん

題目 たいもく

安住於弘道 あんじゆくこうどう

以求無上道 いしゆむじやうどう

一部 いぶ
廣略 くわうりやく

要

此の文は本来相即の三身の妙理を初めて覚知するを求無上道とは云うなり所謂南無妙法蓮華經なり。

法師品
寂光

当知如是人自在所欲生

此の文は我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち自在なり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉る即ち自在なり。

宝塔品

受持也

則為疾得

無上弘道

此の文は持者即ち凡夫御極也の妙戒なれば等妙二覚一念開悟なれば疾得と云うなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは疾得なり。

提婆品

忽然之間 戒男子

此の文の心は三惑の全体三諦と悟るを變と説くなり所謂南無

妙法蓮華經と唱え奉るは三惑即三徳なり。

勸持品

色法心去

我不愛身命がふあいしんのみ但惜無上道ただんじやくむじょうどう

此の文は色心じようゆゑ幻化しわゆるなむ四大ほつだい五陰ごおん元もとより悪習あくしゆなり然しかるに本覺ほんがく真如しんによは
常住じやうぢゆなり所謂しわい南無妙法蓮華經なんぶみょうほつれんげきやうなり。

安樂行品 あんらくぎょうひん

一切諸法空無所有無有常住亦無起滅 いっさいしよほう しようむすぶあらず じやうじゆうやくむ

此の文は元より常住の妙法なる故に六道の生滅本来不生と
談ず故に起滅無し所謂南無妙法蓮華經本来無起滅なり云云。
だん ゆえ いわゆる なむ みようほうれんげきやう

涌出品 ゆじゆっぴん

昼夜常精進 為求仏道故 じゆちやうじゆん ぶつだうがため

此の文は一念に億劫の辛勞を尽せば本来無作の三身念念に起る
なり所謂南無妙法蓮華經は精進行なり。
いちねん いわゆる なむ みようほうれんげきやう しじゆん

寿量品 じゆりやうひん

如来如実知見三界之相無有生起 にょらいによじつちけんさんがい しようじ

此の文は方法を無作の三身と見るを如実知見と云う無作の覺体
なれば何に依つて生死有りと云わんか。
いかに よ しじゆ さんじん によじつちけん むさ かくたい

分別功德品 ぶんべつくどく

持此一心福いっしん 願求無上道がんぐむじょうどう

此の文は一切いっさいの万行万善まんぎょうばんぜん但一心いっしん本覚ほんがくの三身さんじんを顕あらわさんが為なり、
善悪ぜんあく一如いっなれば一心福いっしんとは云うなり所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうは一心いっしん
福なり。

随喜功德品ずいきくどく

言此經深妙

せんまん 千万劫難遇

此の文は、一切即妙法なれば一心の源底を顕す事甚妙無外なり所謂南無妙法蓮華經不思議なり。

ほつしくどく 法師功德品

静散

入禅出禅者 聞香悉能知

ふへん 不变死 ずいえん 随縁生 じゆつかい 十界

此の文は一心静なる時は入禅、一心散乱する時は出禅、静散即本覚と知るを悉く知るとは云うなり所謂南無妙法蓮華經は入禅

出禅なり云云。

ふぎょう 不輕品

应当一心広説此經世世值仏疾成仏道

此の文は法界皆本来三諦一心に具わる事を顕せば己心の念念・仏

に値う事を即ち世世値仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經是なり。

神力品 じんりきほん

斷破元品無明 がんばんむみょう

是人於仏道 ぜにんのうぶつどう

決定無有疑 けつじむぎ

十如是

此の文は十界各各本有本覺の十如是なれば地獄も仏界も一如なれば成仏決定するなり所謂南無妙法蓮華經の受持なり云云。

囑累品

信にょらい如ら來い知ち慧え者しや當にょらい演えん說ぜつ此こ法ほけ華き經きょう

此この文ぶんは釈しや迦か如にょらい來いの悟ごの如ごとく一切いっさい衆しゆ生じやうの悟ごと不ふ同どう有あること無なし故ゆえに如にょらい來いの智ち慧えを信しんずるは即すなわち妙みよ法ほうなり所謂いわゆる南な無む妙みよ法ほう蓮れん華げ經きょうの智ち慧えなり云い云い。

藥やく王おう品ほん

是こゝ真しん精じやう進しん是こゝ名な真しん法ぽう供く養じやう如にょらい來い

此この文ぶんは色しき香かう中ちゆう道どうの觀かん念ねん懈おこたること無なし是これを即すなわち真しん法ぽう供く養じやう如にょらい來いと名なくするなり所謂いわゆる南な無む妙みよ法ほう蓮れん華げ經きょう唯ゆい有いう一いち乘じやうの故ゆえに真しん法ぽうなり世せ間けんも出しゅ世しぜも純じん一いつ實じつ相そうなり云い云い。

妙みよ音おん品ほん

久く遠おん 寂じやく光かう土ど

身み不ふ動どう搖じやう而に入い三さん昧まい

此この文ぶんは即すなわち久く遠おんを悟ごるを身み不ふ動どう搖じやうと云いうなり惑わく障しやうを尽つくさず

して寂光じやくこうに入るを三昧さんまいとは云うなり所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきようの三昧さんまいなり云云。

普門品ふもんぼん

福智

慈眼視衆生しじゆじゆう福聚海無量むりよう

此の文は法界ほっかいの依正妙法えしやうみょうほうなる故ゆえに平等びやうどう一子の慈悲じひなり依正福えしやう智共むりように無量むりようなり所謂南無妙法蓮華經福智いわゆるなむみょうほうれんげきようの二法ふたぽうなり云云。

陀羅尼品だらにぼん

未來顯 みらい

修行是經者 しゆぎやうぜきやうしや

令得安穩 あんのん

現在顯 げんざい

此の文は五種妙行を修すれば悟の道に入つて嶮路に入らざるなり
此れは安穩と云う事なり、所謂南無妙法蓮華經即安穩なり云云。

嚴王品

宿福深厚生値仏法 じんとくしんじゆしちぶつぽう

此の文は一句妙法に結縁すれば億劫にも失せずして大乘無価の
宝珠を研き顯すを生値仏法と云うなり所謂南無妙法蓮華經の
仏法なり。

勸発品 かんほつぽん

是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣 みやうじゆう

此の文は妙法を悟れば分段の身即常寂光と顕るるを命終と云うなり千仏とは千如御手とは千如具足なり故に不墮悪趣なり所謂南無妙法蓮華經の御手なり。
已上品別伝畢

一廿八品悉南無妙法蓮華經の事

疏の十に云く惣じて一經を結するに唯四のみ其の枢柄を撮つて之を授与すと。

御義口伝おんぎくでんに云くいわ一經いっきやうとは本・迹二十八品たなり唯四ただとは名用体宗の四すうなり枢柄すうへいとは唯題目ただだいもくの五字ごじなり授与じゅよとは上行菩薩じやうぎやうほさつに授与じゅよするなり之これとは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり云云、此この积分ふんみやう明あなり今日蓮等いまにちれんのくつう弘通なむの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうは体たいなり心こころなり廿八品じゅうはちひんは用もちなり廿八品じゅうはちひんは助行すけぎやうなり題目だいもくは正行しやうぎやうなり正行しやうぎやうに助行すけぎやうを撰せんす可べきなり云云。

一 無量義經の事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ妙法みやうほうの序分じよぶん・無量義經むりやうぎきやうなればじゅつかい十界じゅうがい悉ことごとく妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの序分じよぶんなり。

一 序品

御義口伝おんぎくでんに云くいわ如是によぜ我聞がもんの四字よを能よく能よく心得こころえればいっきやう一經いっきやう無量むりやうの義ぎは知しられ易やすきなり十界じゅつかい互具いごくさんぜん三千具足さんぜんしよくの妙みよと聞きくなり此この所聞しよもんは妙法蓮華みやうほうれんげと聞きく故ゆえに妙法みやうほうの法界互具ほっかいごくにして三千さんぜん清淨しやうじやうなり此この四字しじゆうを以もつて一經いっきやうの始終しじゆうに亘わたるなり廿八品じゅうはちひんの文文ぶんぶん・句句きくくの義理ぎり

我が身の上の法門と聞くを如是我聞とは云うなり、其の聞物は南無妙法蓮華經なりされば皆成仏道と云うなり此の皆成の二字は十界三千に亘る可きなり妙法の皆成なるが故なり又仏とは我が一心なり是れ又十界三千の心心なり、道とは能通に名くる故に十界の心心に通ずるなり此の時皆成仏道と顯るるなり皆成仏道の法は南無妙法蓮華經なり。

方便品

御義口伝に云く此の品には十如是を説く此の十如是とは十界なり此の方便とは十界三千なり。既に妙法蓮華經を頂く故に十方仏土中唯一乘法なり妙法の方便蓮華の方便なれば秘妙なり清浄なり妙法の五字は九識方便は八識已下なり九識は悟なり八識已下は迷なり、妙法蓮華經方便品と題したれば迷悟不二なり森羅三千の諸法此の妙法蓮華經方便に非ずと云う事無き

なり品は義類ぎるい同なり、義とは三千さんぜんなり類たぐいとは互具ごぐなり同とは
一念いちねんなり此こゝの一念いちねん三千さんぜんを指して品と云うなり此こゝの一念いちねん三千さんぜんを三
仏ぶつ合がてん点たまたまし給たまえり仍よつて品品ひんひんに題だいせり南無なむ妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうの信しん

一念より三千具足と聞えたり云云。

譬喩品

御義口伝に云く此の品の大白牛車とは「無明癡惑本是法性」の
明闇 一体の義なり、即ち三千具足の一乗をかけたる車なれば
明闇 一体にして三千具足の義を顕すなり、法界に満したれども
一法なるを一乗と云うなり、此の一乗とは諸乘具足の一乗な
り諸法具足の一法なり故に一の白牛なり又白牛は一なりといえ
ども無量の白牛なり一切衆生の体大白牛車なるが故なり、然ら
ば妙法の大白牛車に妙法の十界三千の衆生乗じたり蓮華の
大白牛車なれば十界三千の衆生も蓮華にして清浄なり南無
妙法蓮華經の法体此くの如し。

信解品

御義口伝に云く此の信解は中根の四大声聞の領解に限るに非ず

妙法みょうほうの信解しんげなるが故ゆえに十界三千じゅうかいさんぜんの信解しんげなり、蓮華れんげの信解しんげなるが故ゆえに十界三千じゅうかいさんぜんの清淨しょうじょうの信解しんげなり此この信解しんげの体たいとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきよじゆ是これなり云云。

一 藥草喻品やくそうゆほん

御義口伝おんぎくでんに云いわく妙法みょうほうの藥草れんげなれば十界三千じゅうかいさんぜんの毒草どくそう・蓮華れんげの藥草れんげなれば本来ほんらい清淨しょうじょうなり、清淨しょうじょうなれば仏ぶつなり此この仏ぶつの説法せっぽうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよじゆなり云云、されば此この品ひんには種相体性しゆゑいじゆの種しゆゑいじゆの字じゆゑいじゆに種類種しゆゑいじゆ・相体種さうたいしゆゑいじゆの二にの開會かいえ之これ有り、相對種さうたいしゆゑいじゆとは三毒即三徳さんどくそくさんどくなり種類種しゆゑいじゆとは始はじめの種しゆゑいじゆの字じゆゑいじゆは十界三千じゅうかいさんぜんなり、類たぐいとは互具ごぐなり下したの種しゆゑいじゆの字じゆゑいじゆは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよじゆなり種類種しゆゑいじゆなり、十界三千じゅうかいさんぜんの草木各各そうもくかくなれども只南無妙法蓮華經ただなむみょうほうれんげきよじゆの一種いっしゆなり、毒草どくそうの毒どくもなきなり清淨しょうじょうの草木そうもくにして藥草やくそうなり云云。

授記品じゆきひん

御義口伝に云く十界已已の当体の言語は妙法蓮華の授記なれば
清淨の授記なり、清淨の授記なれば十界三千の仏なり、爰を
以て仏南無妙法蓮華經と授記するなり云云。

化城喩品

御義口伝に云く妙法の化城なれば十界同時の無常なり、蓮華の
化城なれば十界三千の開落なり、常住無常俱に妙法蓮華經の
全体なり、化城宝処は生死本有なり生死本有の体とは南無
妙法蓮華經なり、釈に云く「起は是れ法性の起滅は是れ法性の
滅」と。

五百品

御義口伝に云く此の品には五百弟子授記作仏すと現文に見えた
り、然りと雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百の弟子なり、
蓮華の弟子なれば又清淨なり、所詮十界三千南無妙法蓮華經

の弟子に非ずと云う事なし此の經の授記是なり云云。

人記品

御義口伝に云く此の品には学無学の聖者来つて成仏するなり、
既に妙法頂戴の学無学なれば十界互具三千具足の学無学なり
妙法の学無学なるが故に不思議の十界に煩惱未だ尽くさざるな
り蓮華の学無学なれば十界三千清淨の開落なり、此の学無学
何物ぞや学とは法なり無学とは妙なり所謂南無妙法蓮華經なり
云云。

法師品

御義口伝に云く妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句一偈
の法師なり、蓮華の法師なれば十界三千清淨の法師なり、十界
衆生の色法は能持の人なり十界の心性は所持の法なり、仍つて
色心共に法師にして自行化他を

あらわ
顕すなり所謂南無妙法蓮華經の法師なるが故なり云云。

一
宝塔品

おんぎくでん
御義口伝に云く此の宝塔は宝浄世界より涌現するなり、其の
ほうじょうせかい
宝浄世界の仏とは事相の義をば且らく之を置く、証道觀心の時
は母の胎内是なり故に父母は宝塔造作の番匠なり、宝塔とは
われら
我等が五輪・五大なり然るに託胎の胎を宝浄世界と云う故に
しゅつたい
出胎する処を涌現と云うなり、凡そ衆生の涌現は地輪より
しゅつげん
出現するなり故に従地湧出と云うなり、妙法の宝浄世界なれば
じゅつかい
十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり、蓮華の宝浄なれば
じゅつかい
十界の胎内
悉く無垢清浄の世界なり、妙法の地輪なれば十界に亘るなり
れんげ
蓮華の地なれば清浄地なり、妙法の宝浄なれば我等が身体は
しゅつたい
清浄の宝塔なり妙法蓮華の涌出なれば十界の出胎の産門本来

しやうじやう

清淨の宝塔なり、法界の搭婆にして十法界即塔婆なり妙法の二

仏なれば十界三千皆境智の二仏なり、妙法的一座には三千の

心性皆以て二尊の所座

なり妙法蓮華二仏一座なれば不思議なり清淨なり、妙法蓮華

の見なれば十界の衆生三千の群類皆自身の塔婆を見るなり、

十界の不同なれども己が身を見るは三千具足の塔を見るなり己

の心を見るは三千具足の仏を見るなり、分身とは父母より相続

する分身の意なり、迷う時は流転の分身なり悟る時は果中の

分身なり、さて分身

の起る処を習うには地獄を習うなり、かかる宝塔も妙法蓮華經

の五字より外は之れ無きなり妙法蓮華經を見れば宝塔即一切

衆生一切衆生即南無妙法蓮華經の全体なり云云。

提婆品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品ひんには積尊しやくそんの本師ほんし・提婆達多だいばだつたの成仏じやうぶつと文殊もんじゆ
師利しり・教化きやうけの竜女りゆうにょ成仏じやうぶつとを説とくくなり、是これ又また妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの提婆だいば
竜女りゆうにょなれば十界じゆつかい三千さんぜん皆みな調達ちやうだつ竜女りゆうにょなり、法界ほっかいの衆生しゆじやうの逆さかの辺へは
調達ちやうだつなり法界ほっかいの貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちの方かた

は悉く竜女なり、調達は修徳の逆罪・一切衆生は性徳の逆罪
なり一切衆生は性徳の天王如来調達は修徳の天王如来なり、
竜女は修徳の竜女・一切衆生は性徳の竜女なり、所詮釈尊も
文殊も提婆も竜女も一つ種の妙法蓮華經の功能なれば本来
成仏なり、仍つて南無妙法蓮華經と唱え奉る時は十界同時に
成仏するなり、是を妙法蓮華經の提婆達多と云うなり、十界
三千竜女なれば無垢世界に非ずと云う事なし、竜女が一身も本
来成仏にして南無妙法蓮華經の当体なり云云。

勸持品

御義口伝に云く此の品の姨母・耶輸の記は十界同時の授記なり
妙法の姨母・妙法の耶輸なる故なり、十界の衆生の心性は所持
の經の体なり是れ即ち勸持の流通なり、心性所持の經を勸持して
自行化他に趣くなり、姨母耶輸は女人の成仏なり二万の大士は

男子の流通なり此の文・陰陽一体にして南無妙法蓮華經の当体なり云云。

安樂行品

御義口伝に云く妙法の安樂行なれば十界三千悉く安樂行なり、自受用の当体なり身口意誓願悉く安樂行なり、蓮華の安樂行なれば三千十界清淨の修行なり、諸法実相なれば安樂行に非ざること莫し、本門の意は十界の色心本来本有として眞実の安樂行なり、安樂行の体とは所謂上行所伝の南無妙法蓮華經是なり云云、靈山淨土に安樂に行詣す可きなり云。

涌出品

御義口伝に云く此の品は迹門流通の後・本門開顯の序分なり、故に先ず本地無作の三身を顯さんが為に釈尊所具の菩薩なるが

故^{ほんち}本地^{ほんげ}本化^での弟子^しを召^めすなり、是^これ又^{みよ}妙法^{ほう}の從^じ地^ゆなれば十^じ界^ゆの
大^{だい}地^ちなり、妙^{みよ}法^{ほう}の涌^ゆ出^{じゆ}なれば十^じ界^ゆ

皆涌出なり、十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲深重
の大地なり、蓮華の大地なれば十界の大地も十界涌出の菩薩も
本来清浄なり、所詮悟道に約する時は従地とは十界の衆生の
大種の所生なり、涌出とは十界の衆生の出胎の相なり菩薩とは
十界の衆生の本有の慈悲なり、此の菩薩に本法の妙法蓮華経を
付属せんが為に従地涌出するなり、日蓮等の類い南無
妙法蓮華経と唱え奉る者は従地涌出の菩薩なり外に求むること
莫かれ云云。

一 寿量品

御義口伝に云く寿量品とは十界の衆生の本命なり、此の品を
本門と云う事は本に入る門と云う事なり、凡夫の血肉の色心を
本有と談ずるが故に本門とは云うなり、此の重に至らざるを始覚
と云い迹門と云うなり、是を悟るを本覚と云い本門と云うなり、

いわゆるなむみょうほつれんげきょう 所謂南無妙法蓮華經は一切衆生の本有の在処なり爰を以て經に
がじつじょうぶつじらい 我実成仏已来とは云うなり云云。

分別品

おんぎくでん 御義口伝に云く此の品は上の品の時本地無作の三身如来の寿を
いわ 聞く故に今品にして上の無作の三身を信解するなり、其の功德を
ゆえ 分別するなり功德とは十界己己の当体の三毒の煩惱を此の品の
ぶんべつ 時其の儘妙法の功德なりと分別するなり、其の功德とは本有の
そ 南無妙法蓮華經是なり云云。

隨喜品

おんぎくでん 御義口伝に云く妙法の功德を隨喜する事を説くなり、五十展転
いわ とは五とは妙法の五字なり十とは十界の衆生なり展転とは
みょうほう 一念三千なり、教相の時は第五十人の隨喜の功德を校量せり
いちねんさんぜん 五十人とは一切衆生の事なり、妙法の五十人妙法蓮華經を展転
いっさいしじゆじょう

するが故なり、所謂南無妙法蓮華經を展転するなり云云。

一 法師功德品

御義口伝おんぎくでんに云いく無作むさの三身さんじんも如来にょらいの寿命じゆんも分別ぶんべつ功德とくも隨喜ずいきも我が身みの上うへの事ことなり、然しからば父母ふぼ所生しよしよの六根ろくこんは清淨しようじよにして自在じざい無碍むがいなり妙法みよほうの六根ろくこんなれば十界じゆつかい三千さんぜんの六根ろくこん皆みな清淨しようじよなり、蓮華れんげ所具しよくの六根ろくこんなれば全ぜんく不淨ふじよに非あらざるなり、此この六根ろくこんにて南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきよと見開覺知けんかいかくちする時は本来ほんぬ本有ほんゆの六根ろくこん清淨しようじよなり云。

一 不輕品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この菩薩ぼさつの礼拝らいはいの行ぎやうとは一切いっさい衆生しよじよの事ことなり、自他じたい一念いちねんの礼拝らいはいなり父母ふぼ果縛かばくの肉身みよほうれんげきよを妙法蓮華經みよほうれんげきよと礼拝らいはいするなり、仏性ぶつじよも仏身ぶつしんも衆生しよじよの当体とうたいの色心しきしんなれば直ちちに礼拝らいはいを行いずるなり、仍よつて皆みな当作さぶつ仏ぶつの四字しじは南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきよの種子しゆしに依よるなり。

神りきほん
神力品

御義口伝おんぎくでんに云いく十種じゆんしゆの神力じんりきを現げんじて上行じやうぎやう菩薩ぼさつに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの
五字ごじを付屬ふぞくし給たまう此この神力じんりきとは十界じゆっかい三千さんぜんの衆生しゆじやうの神力じんりきなり、
凡夫ほんぶは体の神力じんりき三世さんぜの諸仏しよぶつは用の神力じんりきなり神じんとは心しん法力ふりきとは色
法ほふなり力りきは法ほふ神じんは妙みやうなり妙法みやうほふの神力じんりきなれば十界じゆっかい悉じつく神力じんりきなり、
蓮華れんげの神力じんりきなれば十界じゆっかい清淨しやうじやうの神力じんりきなり、惣そつじて三世さんぜの諸仏しよぶつの
神力じんりきは此この品ひんに尽じんくせり釈尊しやくそん出世しゆつせの神力じんりきの本意ほんいも此この品ひんの神力じんりき
なり、所謂いわゆる妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの神力じんりきなり十界じゆっかい皆みな成じやうと談だんずるより外ほかの
諸仏しよぶつの神力じんりきは之これ有ある可べからず、一切いっさいの法門ほふもん神力じんりきに非あらずと云いう
事ことなし云いふ。

囑累品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品ひんには摩頂まちやう付屬ふぞくを説ときて此この妙法みやうほふを滅めつ後に
留め給たまうなり、是これ又また妙法みやうほふの付屬ふぞくなれば十界じゆっかい三千さんぜん皆みな付屬ふぞくの菩薩ぼさつ

なり、又三摩まする事は能化のうけ所具しよぐの三觀さんかん三身さんじんの御手みてを以て所化しよけの
頭上ちゆうじやうに明珠みんじゆを譲ゆずり与えたる心なり、凡そ頂上ちゆうじやうの明珠みんじゆは覺悟かくご
知見ちけんなり頂上の明珠みんじゆとは南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうこれ是なり云云。

薬王品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品ひんは薬王菩薩やくおうぼさつの仏ぶつの滅後めつごに於おいて法華ほつけを弘通くつうするなり、所詮しよせん燒身しようひ燒臂しよひとは燒やは照てんの義ぎなり照てんは智慧ちえの義ぎなり智能よく煩惱ぼんのうの身生死しじうじの臂ひを燒やくなり、天台大師てんだいだいしも本地薬王菩薩ほんちやくおうぼさつなり、能説にんげつに約やくする時ときは釈迦しやくかなり衆生しゆじようの重病じゆうびようを消除しよくじよする方かたは薬王やくおう・薬師やくし如来にょらいなり又利物りもつの方かたにて薬王やくおうと云いう自悟じこの方かたにては薬師やくしと云いう、此この薬王やくおう・薬師やくし出世しゆつせの時ときは天台大師てんだいだいしなり薬王やくおうも滅後めつごに弘通くつうし薬師やくし如来にょらいも像法ぞうぼう暫時ざんじの利益りやく有情うじようなり、時ときを以もつて身体しんたいを顕あらわし名なを以もつて義ぎを顕あらわす事ことを仏ぶつ顕あらわし給たまうなり、薬王菩薩やくおうぼさつは止觀しがんの一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもんを弘ひろめ給たまう、其その一念いちねん三千さんぜんとは所謂いわゆる南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきやう是これなり云云。

妙音品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この菩薩ぼさつは法華ほつけ弘通くつうの菩薩ぼさつなり故ゆえに卅四身しやくしを現げん

じて十界互具を顕し給い利益説法するなり、是れ又妙法の妙音
なれば十界の音声は皆妙音なり、又十界悉く卅四身の所現の
妙音なり、又蓮華の妙音なれば十界三千の音声皆無染清淨
なり、されば慈覺大師をば妙音の出世と習うなり之に依つて
唐決の時・引声妙音をば伝え給えり何故有りてか法華を誹謗し
て大日経等に劣りたりと云うや云云、所謂法界の音声・南無
妙法蓮華經の音声に非ずと云う事なし云云。

観音品

御義口伝に云く此の品は甚深の秘品なり息災延命の品なり当途
王経と名く、されば此の品に就て職位法門を継ぐぞと習うなり、
天台も三大部の外に観音玄という疏を作り章安大師は兩卷の疏
を作り給えり能く能くの秘品なり、観音・法華・眼目異名と云い
て観音即ち法華の体なり所謂南無妙法蓮華經の体なり云云。

陀羅尼品

御義口伝に云く此の品は二聖・二天王・十羅刹女・陀羅尼を説きて持経者を擁護し給うなり、所詮妙法・陀羅尼の真言なれば十界の語言音声皆陀羅尼なり、されば伝教大師の云く「妙法の真言は他経に説かず普賢常護は他経に説かず」陀羅尼とは南無妙法蓮華經の用なり、此の五字の中には妙の一字より陀羅尼を説き出すなり云云。

嚴王品

御義口伝に云く此の品は二子の教化に依つて父の妙莊嚴王邪見を翻し正見に住して沙羅樹王仏と成るなり、沙羅樹王とは梵語なり此には熾盛光と云う、一切衆生は皆是れ熾盛光より出生したる一切衆生なり、此の故に十界衆生の父なり、法華の心にては自受用智なり忽然火起焚燒舍宅とは是なり、煩惱の一念の火起

りて迷悟不二の舍宅を焼くなり邪見とは是なり、此の邪見を
邪見即正と照したる南無妙法蓮華經の智慧なり所謂六凡は父な
り四聖は子なり四聖は正見六凡は邪見故に六道の衆生は皆是れ
我が父母とは是なり云云。

勸発品

御義口伝に云く此の品は再演法華なり本迹二門の極理此の品に
至極するなり、慈覺大師云く十界の衆生は発心修行と積し給う
は此の品の事なり、所詮此の品と序品とは生死の二法なり序品は
我等衆生の生なり此の品は一切衆生の死なり生死一念なるを
妙法蓮華經と云うなり品品に於て初の題号は生の方終の方は死
の方なり、此の
法華經は生死・生死と轉りたり、生の故に始に如是我聞と置く如
は生の義なり死の故に終りに作礼而去と結したり、去は死の義な

り作礼の言は生死しようじの間に成しと成す処ところの我等衆生われらしゆじやうの所作しよさなり、
此の所作しよさとは妙法蓮華經みよほうれんげきやうな

り、礼とは不乱ふらんの義ぎなり法界ほっかい妙法みょうほうなれば不乱ふらんなり、天台大師てんだいだいしの云いわく「体の字あざなは礼らいに訓くんず礼らいは法ほつなり各々それぞれ其そのの親おやを親おやとし各々それぞれ其そのの子こを子ことす出世しゅつせの法ほつ体たいも亦また復たか是のの如ごとし」と、体たいとは妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの事ことなり先まづづ体げん玄義ぎを釈しやくするなり、体たいとは十界じゅうかいの異い体たいなり是これを法華經ほけきょうの体たいとせり此等これらを作さ礼らい而去にとは説とかれたり、法界ほっかいの千草せんそう万木ばんぼく地獄ぢじく・餓鬼がき等何いずれの界がいも諸法しよほつ実相じつじやうの作さ礼らいに非あらずといふ事ことなし是れ即すなわち普賢菩薩ふげんぼさつなり、普ほつとは法界ほっかい・賢けんとは作さ礼らい而去に此れすなわすなわち妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり、爰ここを以もつて品しん品の初はつめにも五字ごじを題だいし終はつりにも五字ごじを以もつて結むすし前後ぜんご中間ちゆうけん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの七字しちじなり、末法まつほう弘通くわつうの要法ようほう唯此ただの一段いつだんに之これ有あるなり、此等これらの心こころを失うしなうて要法ようほうに結むすばずんば末法まつほう弘通くわつうの法ほつには不足ふそくの者ものなり剩あまつさにちれんが本意ほんいを失うしなふべし、日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな別の才覚さいかく無益むやくなり、妙樂みょうらくの釈しやくに云いわく「子父こふの法ほつを弘ひろむ世界せかいの益えき有あり」と、子ことは地涌じゆの菩薩ぼさつなり父ふと

は釈尊なり世界とは日本国なり益とは成仏なり法とは南無
妙法蓮華経なり、今又以て此くの如し父とは日蓮なり子とは
日蓮が弟子檀那なり世界とは日本国なり益とは受持成仏なり
法とは上行所伝の題目なり

御義口伝卷下

弘安元年 戊寅 正月一日

執筆

日興

御講聞書

九六 御講聞書目録

804p

已上九十ヶ条

一、序品じよぼんの事

八〇

一、妙法蓮華經序品第一みよほうれんげきようじよぼんだいいちの事

九

八〇七

一、品と云う事

八〇

一、妙法みよほう

八〇

九

八

一、如是によぜ我聞がもんの事

八一

一、蓮華れんげ

八〇

〇

八

一、如是この二字

八一

一、本因ほんいん・本果ほんがの事

八〇

〇

九

一、耆闍崛山ぎしゃくつせんの事

八一

一、爾前にぜん無得道とくどうの事

八〇

一

九

一、与大比丘衆びびくの事

八一

二 一、我始坐道場たじざうじやう 觀樹くわんじゆ亦また經行けいぎやうの

一、爾時に・世尊せそんの事 八一

事八一六

三 一、今いま・我喜無畏がきむゐの事 八一

一、淨飯王じよふはん摩耶夫人まやふじん成なり・仏証文ぶつしやうもん

六 一、我聞がもん是こゝろ法音ほうせい疑網ぎもう皆みな已除いじよの

の事八一三

一、方便品ほうべんの事 八一 事八一六

三 一、以もつ本願ほんがん故說こせつ三乘法さんじやうの事

一、仏所成就ぶつしよじゆじゆ第一だいいち希有けうう難解なん之なん

八一七

法唯ゆい・仏ぶつの事八一四

一、十如是じゆじゆの事 八一 一、有大長者ちやうじやうの事 八一

五 一、多有たふ田宅でんたくの事 八一

一、自証むじやう無上道むじやうどう大乘だいじやう平等法びやうどうぽうの

九 一、等一大車たういちやうの事 八二

事 八一五

○

一、無上宝聚むじょうほうじゆ不求自得ふぐじとくの事

八二二

八二四

○

一、其車高広の事

一、薬草喻品やくそうゆほんの事

八二二

一、是朽故宅ぞくう属于一人の事

四

八二〇

一、現世安穩げんせあんのん・後生善处ごしょうぜんじよの事

一、諸鬼神等しよきぎん揚声やうせい大叫たいけうの事

八二五

八二一

一、皆悉かいしつ到於一切智地いっさいちちの事

一、乘此宝乘じきしどうじやう直至道場の事

八二五

八二一

一、此の一切智地いっさいちちの四字八二六

一、若人にやくにん不信ふしん毀謗きぼう此經則断

一、根茎枝葉しんじょうの事

一切世間いっさいせけん・仏種ぶつしゆの事八二二

八二七

一、捨悪知識あくちしき親近しんこん善友ぜんゆうの事

一、枯槁衆生からしじやうの事

八二三

八二七

一、等雨法雨の事ほうう

八二七

一、如從飢国来忽遇大王の事けこく だいおう

八二八

一、大通智勝仏 不得成仏道だいつう ちしやうぶつ ふとく じやうぶつ

の事八二九

一、貧人見此珠其心大歡喜のひんじん かんき

事八三〇

一、如甘露見灌の事かんろ けんかん 八三

一、若有惡人以不善心等の事にやくう あくにん ふぜんしん

八三二

一、如是如是の事によぜ こ 八三

五

二

一、是真仏子住淳善地の事ぜしんぶつし

八三二

一、非口所宣非心所測の事

八三三

一、不染世間法如蓮華在水從せけん によれんげざいすい

地而涌出の事八三三

一、願仏為未來演説令開解のみらい えんぜつ

事八三四

一、譬如良医智慧聰達の事ひにょりやうい ちえ

八三四

一、一念信解の事いちねん しんげ 八三

五

一、見聞法信受教誨の事 もんぼう しんじゆ

八三五

八三五

一、若復有人以七宝滿是人所 またあるひと しつぼう

一、六万八千人の事

八三

得其福最多の事八三五

一、妙音菩薩の事 みよおん ぼさつ

八三

七

一、妙莊嚴王の事 みよつそういん

八三

六

一、爾時無尽意菩薩の事八三 むじんい ぼさつ

一、華嚴・大日觀經等の凡夫の けこん だいにち かんきよう ぼんぶ

得道の事八三七 とくどう

六

一、觀音妙智力の事 かんのん みようち

一、題目の五字を以て下種の だいもく ごじ げしゆ

証文と為す可き事八三七 しょうもん な べ

六

一、自在之業の事 じざい

一、題目の五字末法に限りて持つ だいもく ごじ まっぽう

六

一、妙法蓮華經陀羅尼の事 みよほうれんげきよう だらに

一、天台云く是我弟子 てんだい いわ これわが でし

一、應弘我法之事八三八 おうぐがほう

一、色心しきしんを心法と云う事八三

八

一、無作むさの応身おうじん我等われら凡夫ぼんぶ也と

云う事八三八

一、諸河しよ無鹹しよの事

八三

八

一、妙樂みよらく大師だいしの釈しやくに末法まっぽう之初

冥利みょうり不無ふむの釈しやくの事八三九

一、爾前にぜん経きん瓦礫がりがく国こくの事

八三

九

一、無明むみょう惡酒あくしゆの事

八三

九

一、日蓮にちれん己証こしやうの事

八四

〇

一、釈尊しやくそんの持言ぢごん秘法ひほうの事八四

〇

一、日蓮にちれん門家もんか大事だいじの事 八四

〇

一、日蓮にちれんが弟子でし臆病おくびょうにては

叶かなう可べからざる事八四〇

一、妙法蓮華みょうほうれんげき經きんの五字ごじを眼がんと

云う事 八四〇

一、法華ほけきやう經きんの行者ぎやうじやに水火すいかの

行者ぎやうじやの事 八四一

一、女人にょにんと妙せうと釈尊しやくそんと一体いつたいの

事八四一

一、置不呵責かしやくの文の事 八四二

一、異念なく無く靈山淨土りょうぜんじょうどへ参る

可べき事

八四二

一、不可失ふか本心ほんしんの事 八四

二

一、天台大師てんだいだいしを魔王障礙まおうしょうがいせし

事八四三

一、法華經極理ほけきょうごくりの事 八四

四

一、妙法蓮華經みよほつれんげきょう五字ごじの蔵の事

八四四

一、我等衆生われらしゅじょうの成仏じふつは打かた

めたる成仏じふつと云う証文しもんの事八

四五

一、爾前にぜん・法華ほつけの能よくらべの事

八四五

一、授職ほつたいの法体ほつたいの事 八四五

一、末代まつだい讓狀じやうじやうの事 八四

五

一、本有ほんぬ止觀しかんと云う事 八四

五

一、入末法まつぼう四弘誓願しぐせいがんの事八四

五

一、四弘誓願しぐせいがん応報如理おうほうにりと云う

事八四六

一、本来しんらいの四弘しぐの事 八四六

右日向記の目録は、現行板本の目録に脱せる。「如是我聞の事」及び「法華經の行者に水火の行者の事」の二条を加え、新曾本に明かに「已上九十ヶ条」とあるに合せて、新たに作製せり。現行板本に八十八箇条とあるは誤なり、但し巻頭の「総」は新曾本にも数えず、故に本目録にも記載せず。なお同一箇条にして、別条に御講示ある場合、即ち「等雨法雨の事」「根茎枝葉の事」等は、新曾本も現行板本も、共に一条に数うるを以て、本目録も亦た其れに従えり。

已上四行の附記は全く日宗社本に依る、編者。

自二弘安元年三月十九日一連連御講至二同三年五月二十
 八日一也仍テ記シレ之畢

日向 記之

凡そ法華經と申すは一切衆生・皆成仏道の要法なり、されば
 大覺世尊は説時未至故と説かせ給いて説く可き時節を待たせ給い
 き、例せば郭公の春をおくり鶏鳥の暁を待ちて鳴くが如くなり、
 此れ即ち時を待つ故なり、されば涅槃經に云く以知時故名大法師
 と説かれたり、今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益
 あるべき時な

り、されば此の題目には余事を交えれば僻事なるべし、此の妙法の

曼荼羅を身に持ち心に念じ口に唱え奉るべき時なり、之に依つて一

部二十八品の頂上に南無妙法蓮華經序品第一と題したり。

一妙法蓮華經序品第一の事玄旨伝に云く、一切經の惣要とは謂く

妙法蓮華經の五字なり、又云く、一行一切行恒修二此三味一文、

云う所の三味とは即ち法華の有相無相の二行なり、此の道理を以

て法華經を讀誦せん行者は即ち法具の一心三觀なり云云、此の釈

に一切經と云うは近くは華嚴・阿含・方等・般若等なり、遠くは

大通仏

より已來の諸經なり、本門の意は寿命品を除いて其の外は一切經

なり、惣要とは天には日月・地には大王・人には神・眼目の如くな

りと云う意を以つて釈せり、此れ即ち妙法蓮華經の枝葉なり、一行

とは妙法の一行に一切行を納めたり、法具とは題目の五字に万法

を具足すと云う事なり、然る間三世十方の諸仏も上行菩薩等

も・大梵天王だいぼんてんのう

帝釈たいしやく・四王しおう・十羅刹女じゅうらせつにょ・天照太神てんしょうたいじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつ・山王さんのう二十一社・

其の外そ・日本国中にほんこくじゅうの小神こがみ・大神等おほがみら・此の經の行者こゝのきやうじやを守護しゆごすべしと・

法華經ほけきやうの第五卷ごごくわんに分明ぶんめいに説とくかれたり、影かげと・身みと・音ねと・響ひびきとの

如ごとし、法華經ほけきやう二十八品にじゅうはちひんは影かげの如ごとく

響びびきの如ごとし、題目だいもくの五字ごじは体ことの如ごとく音おとの如ごとくなり、題目だいもくを唱となえ奉たてまつる音おとは十方じゅうほう世界せかいにとずかなずと云とう所ところなし、我等われらが小音せうおんなれども、題目だいもくの大音だいおんに入れて唱となえ奉たてまつる間ま、一大いちだ三千さんぜん界かいにいたらざる所ところなし、譬たとえば小音せうおんなれども貝ばいに入れて吹ふく時とき遠ひびきく響びびきくが如ごとく、手ての音おとはわなずかなれども鼓こを打うつに遠ひびきく響びびきくが如ごとく、一念いちねん三千さんぜんの大事だいじの法ほう門もん是これなり、かかる目め出で度どき御ご經きやうにて渡わたらせ給たまえるを、謗そしる人なん何なにぞ無む間げんに墮だ在ざいせざらんや、法ほう然ぜん弘こう法ほう等とうの大だい悪あく知ち識しき是これなり。

一 妙法みょうほうの二字にじは一切いっさい衆生しゆじやうの色しき心しんの二法にぽうなり、一代いちだい説教せつきやうの

中ちゆうに法ぽうの字じの上じやうに妙めうの字じを置おきたる經きやうは一いっ經きやうもなし、涅槃ねはん經きやうの題目だいもくにも大だい涅槃ねはん經きやうと云いいて大だいの字じあれども妙めうの字じなし、但ただし大だいは只ただ是これ妙めうと云いえり然しかれども大だいと妙めうとは不ふ同どうなり、同どうじ大だいなれども華け嚴こん經きやうの大方だいぽう広くわう仏ぶつ華け嚴こん經きやうと云いえる題号だいごうの大だいと、涅槃ねはん經きやうの大だいと天地てんち雲泥うんでいなり、華嚴けこん

經の大は無得道の大なり。涅槃經の大は法華同醍醐味の大なり、
然れども然涅槃尚劣と云う時は法華經には劣れり、此の事は
涅槃經に分明に法華經に劣ると説かれたり、涅槃經に云く如下
法華中八千声聞得レ受二記べつ一成中大果舞上如三秋收冬蔵更
無二所作二云云此の文分明に我と法華經に劣れりと説かせ給え
り。

一蓮華

とは本因・本果なり、此の本因・本果と云うは

一念三千なり、本有の因・本有の果なり、今始めたる因果に非ざる
なり、五百塵点の法門とは此の事を説かれたり、本因の因と云うは
下種の題目なり、本果の果とは成仏なり、因と云うは信心領納の
事なり、此の經を持ち奉る時を本因とす其の本因のまま成仏なり
と云うを本果と

は云うなり、日蓮が弟子・檀那の肝要は本果より本因を宗とするな

り、本因なくしては本果有る可からず、仍て本因とは慧の因にして
名字即の位なり、本果は果にして究竟即の位なり、究竟即とは九識
本覚の異名なり、九識本法の都とは法華の行者の住所なり、
神力品に云く若しは山谷曠野等と説けり即ち是れ道場と見えたり
豈法華の行者の住所は生処・得道・転法輪・入涅槃の諸仏の四処の
道場に非ずや。

一本因・本果の事

法界悉く常住不滅の為体を云うなり、

されば妙楽大師・此の事を釈する時・弘決に云く当七知身土

一念三千・故成道時称二此本理二身一念遍二於法界一云云、此の

积分明に本因・本果を釈したり、身と云うは一切衆生なり、土と

云うは此の一切衆生の住处なり一念とは此の衆生の念念の作業

なり、故成道時称二此本理一とは本因・本果の成道なり、本理と

本因・本果とは同じ事なり法界とは五大なり、所詮法華經を持ち

奉る行者は若在仏前蓮華化生なれば称此本理の成道なり、本理

に称うとは妙法蓮華經の本理に称うと云う事なり、法華經の本理

に叶うとは此の經を持ち奉るを云うなり、若有能持則持仏身とは

是なり。

一爾前無得道の事

此の法門は蓮華の二字より起れり、

其の故は蓮華の二字を以て云うなり、三世の諸仏の成道を唱うる

は蓮華れんげの二字より出でたり、権教ごんきょうに於て蓮華れんげの沙汰さた無し若もしありと云うとも有名無実ゆうめいむじつの蓮華れんげなるべし、三世さんぜの諸仏しよぶつの本時ほんじの下種げしゆを指して華けしゆと名け、此の下種げしゆの華けしゆによつて成仏じやうぶつの蓮れんを取る、妙法蓮華みようほうれんげすなわげしゆ即ち下種げしゆなり

り、下種げしゆ即ち南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうなり、華けしゆは本因ほんいん・蓮れんは本果ほんくわなれば華けしゆの本国ほんこくを不信謗法ふしんぼうほうの人豈あに具足ぐそくせんや、經きやうに云く若人にやくにん不信毀謗ふしんきぼう此經則こゝ断一切世間いつさいせけん・仏種ぶつしゆ云云、此の蓮華れんげに迷まよう故ゆゑに十界具足じゆつかいぐそく無し、十界具足じゆつかいぐそくせざれば一念三千跡形いちねんさんぜんあとかた無なきなり、一切いつさいの法門ほうもんは蓮華れんげの二字より起れり、一代説教いちだいせつきやうに於て無得道とくどうと云うも蓮華れんげの二字より起れり深く之これを案あず可べし。

一序品じよほんの事こと 此の事は、教主きやうしゆしやくそん釈尊ほけきやう・法華經ほけきやうを説とき給たまわんとて

先ずず瑞相ずいそうの顯あられたる事ことを云たまうなり、今末法いまつぽうに入まつて南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきやうの顯あらわれ給たまうべき瑞相ずいそうは彼かには百千万倍勝ひやくせんまんばいまさるべきな

り、其そのの故ゆえは雨は竜だいらの大小だいしやうにより蓮華れんげは池いけの浅深せんじんに随したがつて其そのの色いろ不同ふどうなるが如ごとくなるべし。

一品と云う事

品とは、釈いわに云く義類ぎるい同と云えり、此このの法華經ほけきやうは

三仏寄合たまいい給いて定判たまたし給えり、三仏とは釈迦しゃか・多宝たほう・分身ぶんじん是これなり、

此このの三仏ひやうじやう・評定ひやうじやうしてのたまわく一切衆生いっさいしゆじやう・皆かい成じやう仏道ぶつどうは法華經ほけきやうに限

りて有りと、皆是かいげしんじつ眞実

の証明・舌相梵天の誠証・要當說眞実の金言・此等を義類同して題したる品の字なり、天竺には跋渠と云う此には品と云えり、釈迦多宝・分身の三仏の御口を以て指し合せ同音に定判し給える我等衆生の成仏なり、譬えば鳥の卵の内より卵をつつく時・母又同じくつつきあくるに・同じき所をつつきあくるが如し、是れ即ち念慮の感応する

故なり、今法華經の成仏も此くの如くなり、三世諸仏の同音に同時に定め給える成仏なり、故に經に云く從仏口生如從仏等云。

一 如是我聞の事 仰に云く如と云うは衆生の如と仏の如と一

如にして無二如なり、然りと雖も九界と仏界と分れたるを是と云うなり、如は如を不具に名く即ち空の義なりと釈して少しもことならざるを云うなり、所詮法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃・

生仏不二・迷悟一体といえり、是を如とは云うなり、されば如は
実相・是は

諸法なり、又如は心法・是は色法・如は寂・是は照なり、如は一念・

是は三千なり、今經の心は文文・句句・一念三千の法門なり、惣じ

て如是我聞の四字より外は今經の体全く無きなり 如と妙とは同

じ事・是とは法と又同じ事なり、法華經と釈尊と我等との三・全く

不同無く・如我等無異なるを如と云うなり、仏は悟り・凡夫は迷な

りと云う

を是とは云うなり、我聞と云うは、我は阿難なり、聞とは耳の主と

釈せり、聞とは名字即なり、如是の二字は妙法なり、阿難を始めて

靈山一会の聴衆・同時に妙法蓮華經の五字を聴聞せり仍つて我

も聞くと云えり、されば相伝

の点には如は是なりきと我れ聞くといえり、所詮末法当今には南無

みよつほつれんげきよ

こころ

しんによほつじよ

妙法蓮華經を我も聞く^{てんだいだいし}と心得べきなり、我は眞如法性の我なり、

天台大師は同聞衆と判ぜり同じ事を聞く衆と云うなり、同とは

妙法蓮華經なり、聞は即身成仏そくしんじようぶつ・法華經ほけきよに限ると聞くなり云云。

一如是の二字こを約教やうきやうの下しもに釈する時・文句もんくの一に又一時いちじに

四箭しせんを接して地に墮だせしめざるも未いまだ敢あえてて捷しと称せず、鈍驢どんろに

策むちうつて跋はべつを駟なる尚なおし一をも得ず何いかに況いわんや四をや云云、記の一に

云いわく、大經だいきよに云いわく迦葉菩薩かしようぼさつ

問うて云く云何か智者・念念の滅を觀ずと、仏の言く譬えば四人
皆射術を善し満つて一処に在りて・各一方を射るに念言すらく・
我等は四の箭・俱に射て俱に墮せんと、復人有りて念すらく・其の
未だ墮せざるに及んで我れ能く一時に手を以て接取せんと
如し、仏の言く、捷疾鬼は復是の人よりも速なり是くの如く、
飛行鬼・四天王・

日月神・堅疾天は展転して箭よりも疾し、無常は此れに過ぎたり
と、此の本末の意は他師・此の經の如是に付て釈を設くと云えども・
更に法蓮華の理に深く叶わざるなり、一二だも義理を尽さざるな
り況や因縁をや、何に況や約教・觀心の四をやと破し給えり、所詮
法華經は速疾頓成を以て本とす、我等衆生の無常のはやき事は
捷疾鬼よ

りもはやし、爰を以て出ずる息は入る息を待たず、此の經の如是は

爾前の諸經の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐の如是とは
速疾頓成の故なり、妙樂大師云く若し超八の如是に非ずんば、
安ぞ此の經の所聞と為さん

と云云。

一 耆闍崛山の事

仰に云く耆闍崛山とは靈鷲山なり、靈とは

三世の諸仏の心法なり必ず此の山に佛法を留め給う、鷲とは鳥な

り此の山の南に當つて詩だ戸陀林あり死人を捨つる所なり、鷲此の

屍を取り食うて、此の山に住むなり、さて靈鷲山とは云うなり、

所詮今の經の心は迷悟一体と談ず、靈と云うは法華經なり、三世の

諸仏の心法

にして悟なり、鷲と云う卵は畜生にして迷なり、迷悟不二と開く

中道即法性の山なり、耆闍崛山中と云うは迷悟不二・三諦一諦・

中道第一義空の内証なり、されば法華經を行ずる日蓮等が弟子・

檀那だんなの住所じゅうしょはいかなる山野さんやなりとも 靈鷲山りょうじゆせんなり行者ぎやうじや遠とほ積つ迦か如来にょらい
に非あらずや、日本にほんこく国こくは耆闍崛山ぎしゃくつせん・日蓮にちれん等の類たぐいは釈迦しゃか如来にょらいなるべし、
惣そうじて一乘いちじやう南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうを修行しゆぎやうせん所しよはいかなる所しよなりとも
常寂光じやうじやくかうの都みやこ・靈鷲山りやうじゆせんなるべし、此こゝの耆闍崛山ぎしゃくつせん中ちゆうとは煩惱ぼんのうの山やまな
り、仏菩薩ぼつぼつ等は菩提ぼだいの果はつなり・煩惱ぼんのうの山やまの中ちゆうにして法華經ほけきやうを三世さんぜの
諸しよぶつと仏ぶつ説たまき給たまへり、諸しよぶつ仏ぶつは法性ほふじやうの依地えじ・衆生しゆじやうは無明むみやうの依地えじなり、此こゝの
山やまを寿量品じゆりやうぼんにしては本有ほんぬの靈山りやうぜんと説たまかれたり、本有ほんぬの靈山りやうぜんとは
此こゝの娑婆世界しやばせかいなり、中ちゆうにも日本にほんこく国こくな

り、法華經の本国土妙・娑婆世界なり、本門寿量品の未曾有の大
曼荼羅建立の在所なり云云、瑜伽論に云く東方に小国有り、其の
中唯大乘の種姓のみ有り、大乘の種姓とは法華經なり法華經を
下種として成仏すべしと云う事なり、所謂南無妙法蓮華經なり
小国とは日本国なり云云。

一与大比丘衆の事

仰に云く文句の一に云く釈論に明す、大

とは亦是多と言ひ亦是勝と云う、遍く内外の經書を知る故に多と

言う、又数一万・二千に至る故に多と云う、今明さく大道有るが

故に・大用有るが故に・大知有るが故に・故に大と云う、勝とは道

勝れ・風勝れ・知勝る、故に勝と云う、多とは道多く・用多く・知多

し故に多と言

う、又云く含容一心・一切心なり、故に多と名くるなり、記の一に

云く一心一切心と云うは心境俱に心にして各一切を撰す、一切

三千さんぜんを出いでざるが故ゆゑなり、具つぶさしかんに止とど観かんの第五ごの文ぶんの如ごとし、若もし円心えんしんに非あらざれば三千さんぜんを撰せんせず、故ゆゑに

三千さんぜん

惣別くわいけちゆう

威いく空くう仮け中ちゆうなり、一文いちぶん既すでに爾しかなり他みなこは皆みな此これに准あせよ、此

の本末ほんまつの心こころは心境しんきやう義ぎの一念いちねん三千さんぜんを積しやくするなり、止し観かんの第五ごの文ぶんと

一念いちねん

三千さんぜん

積しやく

止し観かん

の第五ごの文ぶん

は夫おの一心しんく具ぐ十じゅう法界ほっかい乃なほ至いた不可ふか思議しぎ境きやうの文ぶんを指さすなり、心境しんきやう義ぎの

一念いちねん三千さんぜん

とは此この与よ大だい比ひ丘きゆう和わが

大だいの字じより積しやくし出しだせり、大多勝たうたつせう

の三字さんざい・三諦さんたい・三觀さんかんなり、円頓えんどん行者ぎやうじや起念きねんの当体とうたい・三諦さんたい三觀さんかんにして大

多勝たつせうなり、

此この積しやくに惣くわいと云いうは一心いっしんの事じなり、別べつとは三千さんぜんなり、一文いちぶんとは大だいの

一字いちじなり、今末いままつ法ほに入いつては法華ほっけ經きやうの行者ぎやうじや・日蓮にちれん等たうの類るい、正まさしく大

多勝たつせうの修行しゆぎやうなり、法華ほっけ經きやうの行者ぎやうじやは釈迦しやくか如來にょらいを始たてまつめ奉たてまつりて悉ことごとく大人

の為ために敬たてまつい奉たてまつるなり誠まことに以もつて大曼だいまん荼羅たらの同共どうきやうの比丘びく衆しゆなり、本門ほんもんの

事ことの一念いちねん三千さんぜん・南無なむ妙みやう法ほ蓮れん華げ經きやう・大多勝たうたつせうの比ひ丘きゆう衆しゆなり、文ぶん文ぶん・句く句く・

多勝たつせうなり、

此この積しやくに惣くわいと云いうは一心いっしんの事じなり、別べつとは三千さんぜんなり、一文いちぶんとは大だいの

一字いちじなり、今末いままつ法ほに入いつては法華ほっけ經きやうの行者ぎやうじや・日蓮にちれん等たうの類るい、正まさしく大

多勝たつせうの修行しゆぎやうなり、法華ほっけ經きやうの行者ぎやうじやは釈迦しやくか如來にょらいを始たてまつめ奉たてまつりて悉ことごとく大人

の為ために敬たてまつい奉たてまつるなり誠まことに以もつて大曼だいまん荼羅たらの同共どうきやうの比丘びく衆しゆなり、本門ほんもんの

事ことの一念いちねん三千さんぜん・南無なむ妙みやう法ほ蓮れん華げ經きやう・大多勝たうたつせうの比ひ丘きゆう衆しゆなり、文ぶん文ぶん・句く句く・

九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり、人法一体にして
 即身成仏なり、されば釈に云く大は是れ空の義・多は是れ仮の義・
 勝は是れ中の義と、一人の上にも大多勝の三義・分明に具足す、大
 とは迹門しやくもん 多とは本門ほんもん 勝とは題目だいもくなり、法華經の本尊ほんぞんを大多
 勝の大曼荼羅まんだらと云うなり、是れ豈あに与大比丘衆びくに非あらずや、二界・八番
 の雜衆こご悉ことごとく法華ほっけの会座かいざの大曼荼羅まんだらなり、法華經ほけきょうの行者ぎやうじやは二法にぽうの情じやう
 を捨てて唯妙法ただみよほうと信しんずるを大だいというなり、此この題目だいもくの一心いっしんに一切いっさい

心がんようを含容するを多と云うなり、諸經しよきやう・諸人しよにんに勝すぐれたるが故ゆえに勝と云うなり、一切心いっさいに法界ほっかいを尽す一心いっしんとは法華經ほけきやうの信心しんじんなり、信心しんじん即そく一念いちねん三千さんぜんなり云云。

一爾時いつじよ・世尊せそんの事 仰いわに云く世尊せそんとは釈迦しやくかによらい如来しよせんせそん・所詮しよせんせそん世尊せそんとは

孝養かうやうの人を云うなり、其そのの故ゆえは不孝ふこうの人をば世尊せそんとは云わず教主きやうしゆ

釈尊しやくそんこそ世尊せそんの本ほんにては御座おわしまし候しやうちえ、父淨ふじやう飯王はんわう・母摩耶まや夫人ふじんを

成道じやうどうせしめ給たまうなり、されど今經こんきやうの座ざには父母ふほ御座おわしまさざれば方便ほうべん

土ほけきやうへ法華經ほけきやうをば送たまらせ給たまうなり、彼土かど得聞とくもんとは是これなり、但ただし法華經ほけきやう

の心こころは十方じゆっほう

仏土中ぶつちゆう・唯ゆい有一いち乘法じやうほうなり切利夫せつりふに母摩耶まや夫人ふじん生たまじ給たまえり、仰利天おうれんてん

に即そくしたる寂光土じやくかうどなり、方便土ほうべんに即そくしたる寂光土じやくかうどなり、四土いちねん一念いちねん

皆みな常寂光じやうじやくかうなれば、何いずれれも法華經ほけきやうの説せつしよ処しよなり、虚空会こくうの時の説ほけき

法華ほけきに岩切利天いがんせつりてんもるべきや寂光土じやくかうどの説ほけき・法華ほけきに遠方便土えんほうべんもるべき

や、何れも法華經の説所なれば同聞衆の人数なり云云。

一 淨飯王座耶夫人成仏証文の事

仰に云く方便品に云く我

始坐道場・觀樹亦經行の文是なり、又壽量品に云く、然

我実成仏已來の文是なり、教主釈尊の成道の時・淨飯王も摩耶

も得道するなり、本・迹二門の得道の文是なり云云、此の文日蓮が

己心の大事なり、我始と我実との文能く能く之を案ず可し、其の故

は爾前經の心は父子

各別の談道なり、然る開成仏之れ無し、今の經の時・父子の天性を

定め父子一体と談ぜり・父母の成仏即ち子の成仏なり、子の成仏

即ち父母の成仏なり、釈尊の我始坐道場の時・淨飯王・摩耶

夫人も同時に成道なり、釈尊の我実成仏の時・淨飯王・摩耶夫人

同時なり始本共に同時の成道なり、此の法門は天台・伝教等を除

いて知る人一人も

これ有る可からず、末法に入つて日蓮等の類、堅く秘す可き法門なり、譬えば蓮華の華果の相離せざるが如くなり、然れば法華經の行者は男女悉く世尊に非ずや、薬王品に云く於一切衆生中亦為第一文、此れ即ち世尊の經文に非ずや、是真仏子なれば法王の子にして世尊第一に非ずや。

一方便品の事 妙法蓮華經の五字とは名体宗用教の五重玄義なり、されば止觀に十章を釈せり此の十章即ち

妙法蓮華經の能積なり、夫れとは積名は名玄義なり、体相撰法の

二は体玄義なり、偏円の一は教玄義なり、方便・正觀・果報の三は

宗玄義なり、起教の一は用玄義なり、始の大意の章と終の旨歸との

二をば之を除く、此の意は止觀一部の所詮は大意と旨歸とに納れ

り無明即明の大意なる故なり、無明とも即明とも分別せざるが

旨歸なり、

今妙法蓮華經の五重玄義を修行し奉れば・煩惱即菩提・生死即

涅槃の開悟を得るなり、大意と旨歸とは法華の信心の事なるべし、

以信得入・非己智分とは是なり、我等衆生の色心の二法は妙法の

二字なり無始色心・本是理性・妙境・妙智と開覺するを大意と云う

なり、大は色法の徳・意は心法の徳なり大の字は形に訓ぜり、

今日蓮等の類・南無

妙法蓮華經と唱え奉る男女・貴賤・等の色心本有の妙境・妙智な

り、父母果縛の肉身の外に別に三十二相・八十種好の相好之れ無し
そくしんじょうぶつこれ
即身成仏是なり、然る間・大の一字に法界を悉く収むるが故に
ほけきょう だいじょう
法華經を大乘と云うなり、一切の仏・菩薩・聖衆・人畜・地獄等の
しゆじょうり
衆生・の智慧を具足し給うが故に・仏意と云うなり、大乘と云うも
ちえ ぐそく たま ゆえ ぶつ い
同じ事なり是れ即ち妙法蓮華經の具徳なり、されば九界の衆生の
こ すなわ みようほうれんげきょう
意を以て仏の意とす、一切經の心を以て法華經の意とす、於一仏乘
いっさいきょう ぼけきょう
分別説三とは是なり、かかる目出度き法華經を謗し奉る事・三世の
ぶんべつ ぶんべつ ぶんべつ ぶんべつ ぶんべつ ぶんべつ
諸仏の御舌を切るに非ずや、然るに此の妙法蓮華經の具徳をば仏
しよぶつ ちえ
の智慧にてもはかりがたく何に況や菩薩の智力に及ぶ可けんや、之
よ たつちゆう たまたま
に依つて大聖塔中 偶の相伝に云く、一家の本意は只一言を以て本
な と為す云云、此の一言とは寂照不二の一言なり、或は本末究竟等
じやくしやう ほんい ただ
の一言と

も云うなり、眞実の義には南無妙法蓮華經の一言なり、本とは

ほんぶ

凡夫なり、末とは仏なり、究竟とは生仏一如なり、生仏一如の如の

体は所謂南無妙法蓮華經是なり云云。

ぶつしよじよつじゆだいいち けうなん ゆいぶつよぶつ

一仏所成就第一希有難解之法唯仏与仏の事

仰に云く仏とは

しやくそん おんこと

釈尊の御事なり、成就とは法華經なり、第一は爾前の不第一に對

じやくそん おんこと じやくじゆ ほうけきやう だいいち にぜん

し・希有は爾前の不希有に對し・難解之法は爾前の不難解に對した

けう けう にぜん けう なん じやくかい しやくじゆ

り、此の仏と申すは諸法実相なれば十界の衆生を仏とは云うな

じゆっかい しゆくじゆう こげん おんじよつじよつじゆ ほうけきやう さんぜ

り、十界の衆生の語言音声成就にして法華經なり、三世の諸仏の

しゆくじゆ ほんかい

出世の本懐の

妙法にして、優曇華の妙文なれば第一希有なり、九界の智慧は
及ばざれば難解の法なり、成就とは我等衆生の煩惱即菩提・生死
即涅槃の事なり、權教の意は終に不成仏なれば成就には非ず、
迹門には二乗成仏顯れたり、是れ即ち成就なり、是を仏所成就
とは説かれたり、されば唯仏とは釈迦・与仏とは多宝なり、多宝
涌現なければ与仏
とは云いがたし、然りと雖も終には出現あるべき故に・与仏を多宝
というなり、所詮日蓮等の類いの心は・唯仏は釈尊・与仏は日蓮等
の類いの事なるべし、其の故は唯仏の唯を重ねて譬喩品には
唯我一人と説けり、与仏の二字を重ねて、方便品の末に至つて若遇
余仏と説けり、釈には深く円理を覚るは、之れを名けて仏と為すと
釈せり、
是れ即ち与仏と云うは法華經の行者男女の事なり、唯我一人の

釈尊しゃくそんに与くみし上たてまつる仏ぼつなり、此この二に仏ぼつ寄より合あひて、乃な能のう究く尽じんする所ところの諸しよ法ほつ実じつ相そうの法ほつ体たいなり、されば十じゆ如のぜ是ぜと云いうは十じゆ界かいなり、十じゆ界かい即そく十じゆ如のぜ是ぜなり、十じゆ如のぜ是ぜは即すなわち法ほつ華け經きやうの異い名みやうなり云い云い。

一十如是じゆのぜの事こと

仰いに云いく此この十じゆ如のぜ是ぜは法ほつ華け經きやうの眼がん目もく。一い切い經きやう

の惣そう要ようたり、されば此この十じゆ如のぜ是ぜを開かい覺かくしぬれば語ご法ほつに於おいて迷めい悟ご無なく、実じつ相そうに於おいて染せん淨じやう無なし、之これに依よつて天てん台だい大だい師しは止し觀かんの十じゆ章ぢやうも此この十じゆ如のぜ是ぜより釈しやく出しやくせり、然しかる間かん。十じゆ如のぜ是ぜに過あやまる法ほつ門もん更さらに以もて之これ無なし、爰こゝを以もて和わ尚じやう授じゆけて云いく十じゆ大だい章ぢやうは是これ全ぜんく十じゆ如のぜ是ぜ。若もし大たい意いを覺さる

時とき。性じやう如のぜ是ぜの意いを以もて下したの玄げん如のぜの圖ずを分ぶん別べつす可べし、十じゆ如のぜ是ぜを十じゆ大だい章ぢやうに習ならふ事ことは性じやう如のぜ是ぜはたい意い。和わ如のぜ是ぜはたい意い。積じやく名みやう。体たい如のぜ是ぜはたい意い。力りき如のぜ是ぜはたい意い。撰えん法ほつ。作さく如のぜ是ぜはたい意い。偏へん円えん。縁えん如のぜ是ぜはたい意い。方かた使し。因いん如のぜ是ぜはたい意い。正しやう觀くわん。果か報ほう如のぜ是ぜはたい意い。定ぢやうは果か報ほう。本ほん末まつ究きう竟じやう如のぜ是ぜはたい意い。旨し歸きなり、此この中ちゆうに起き教きやうの章ぢやうは化け他た利り物もつ果か上じやう化け用じやう

と云うなり云云。

一 自証無上道大乘平等法の事

仰に云く末法当今に於て大乘

平等の法を証せる事・日蓮等の類に限りされば此の經文は

教主大覺世尊・法華經の極理を証して番番に出世し給いて説き

給うなり、所詮此の自証と云うは三十成道の時を指すなり、

其の故は教主釈尊は十九出家・三十成道なり、然る間・自証

無上道等文、所詮此の品の

心は十界皆成の旨を明せり、然れば自証と云うは十界を諸法実相のいしむつ一仏ぞと説かれたり、地獄も餓鬼も悉く無上大乗の妙法を証得したるなり、自は十界を指したり、恣ままに証すと云う事なり、權教は不平等の経なり、法華経は平等法の経なり、今日蓮等の類いは眞実自証無上道・大乘平等法の行者なり、所謂南無妙法蓮華經の大乗平等の広宣流布の時なり云云。

一我始坐道場觀樹亦經行の事

仰に云く、此の文は教主

釈尊・三十成道の時を説き給えり、觀樹の樹と云うは十二因縁の事なり、所詮十二因縁を觀じて經行すと説き給えり、十二因縁は法界の異名なり又法華經の異名なり、其の故は樹木は枝葉華菓あり是れ即ち生住異滅の四相なり、大覺世尊・十二因縁の流轉を觀じ經行し給え

り、所詮末法当今も一切衆生・法華經を謗じて流轉す可きを

観じて日本国を日蓮経行して南無妙法蓮華経と弘通する。又又此の如くなり、法華の行者は悉く道場に坐したる人なり云云。

一今・我喜無畏の事

仰に云く此の文は権教を説き畢らせ

給いて法華経を説かせ給う時なれば喜びておそれなしと觀じ給え

り、其の故は爾前の間は一切衆生を畏れ給えり、若し法華経を説

かずして空しくやあらんずらんと思召して畏れ深くありと云う文

なり、さて今は恐るべき事なく時節・来つて説く間・畏れなしと喜び

給えり、今日蓮

等の類も是くのごとく日蓮も三十二までは畏れありき、若しや此の

南無妙法蓮華経を弘めずして・あらんずらんと畏れありき、今は

即ち此の恐れ無く既に末法当時・南無妙法蓮華経の七字を日本国

に弘むる間恐れなし、終には一閻浮提に広宣流布せん事一定なるべ

し云云。

一我聞是法音疑網皆已除の事 仰に云く法音とは南無

妙法蓮華經なり、疑網とは最後品の無明を云うなり、此の經を

持ち奉れば悉く除くと説かれたり、此の文は舍利弗が三重の無明

一時俱尽する事を領解せり、今日日本の一切衆生・法華經の法音

を聞くと云えども未だ能く信ぜず豈疑網皆已に除かんや、除かざ

れば入阿鼻獄は疑

無きなり、疑うたがいの字は元品がんぼんの無明むみょうの事なり此の疑うたがいを断つを信とは
云うなり、釈いわに云く無うたがい疑うたがい曰信うたがいと云えり身子しんしは此の疑うたがい無き故ゆえに
華光げこう仏にまにちれんと成れり、今日蓮等いまにちれんの類たぐいは題目だいもくの法音ほうせいを信受しんじゆする故ゆえに疑網ぎもつ
更に無し、如我等にやがとうむい無異ぎもつとて釈迦しやか同等の仏にやすやすとならん事疑うたがい
無きなり、疑網ぎもつと云うは色心しきしんの二法あに有る惑障わくしょうなり、疑うたがいは心法うたがいに
あり・網うたがいは色法うたがいに
あり、此の経たもを持ち奉たてまつり信しんずれば色心しきしんの二法ごうごつ共に悉ごうごつく除くと云う
事なり、此の皆かい已いの已いの字は身子しんし尊者そんじや・広開こうかい三頭さんけん一いつを指して已いとは
云うなり、今は領解りようげの文段ぶんだんなり、身子しんし・妙法みょうほう実相じつじやうの理りを聴聞ちやうもんして
心懷しんかい大歡喜かんきせしなり、所詮しよせん舍利弗しやりほつ尊者そんじや程ちやの智者ちしや・法華ほけきやう經きやうへ來つて
華光げこう仏にまにちれんとなり、疑網ぎもつを断除だんじよせり、何いかに況いわんや末法まつほう當時とうじの權人ごんじん謗法ほうほうの
人ひと・此の經あに値あわずんば成じやうぶつ仏ぶつあらんや云云。
一以ほんがん本願ほんがん故說さんじやう三乘法さんじやうの事
仰いに云く此の經文きやうもんは身子しんし尊者そんじや・

成道の国・離垢世界にて三乗の法は悪世には非ず、然りと雖も
身子本願の故に説くと云えり、其の本願と云うは身子菩薩の行を
立てしに乞眼の婆羅門に眼を抉じられて、其の時・菩薩の行を退転
したり、此の菩薩の行を百劫立てけるに、六十劫なして今四十劫た
らざりき、此

の時・乞眼に眼を抉じられて其の時・菩薩の行を退して願成仏・日
・開三乘法の願を立てたるなり、上品浄土・不須開漸なれば三乗
の法を説く事は更に以てあるまじけれども以本願故の故にて三乗
の法を説くなり、此の行は禅多羅仏の所にして立つるなり、此の事
は身子が六住退とて大なる沙汰なり、重重的義勢之れ在り輒く
心得難きの事なり、或は欲怖地前の意、或は権者退云云、所詮は
六住退とは六根・六道に菩薩の行を取られたりと云う事な
り、之を以て之を思うに末法当今・法華經を修行せんには、必ず

身子しんしが退転たいてんの如ごとくなるべし、所詮しよせん身子しんしが眼まなこを取らるるは菩薩ぼさつの
智慧ちえの行を取らるるなり、今日いまにちれん蓮等たぐの類たぐい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの眼まなこ
を持たもち奉たてまつるに謗法ほうぼうの諸人しよにんに障さわり觀まなこせらるる・宝眼ぼらもんを抉まなこり取らるるに
非あらずや、所詮しよせん彼の乞眼ための婆羅門ばらもん・眼まなこを乞たいしは身子しんしが菩薩ぼさつの行を
退轉たいてんせしめんが為ために乞たいて踏ふみつぶして捨すてたり、全く菩薩ぼさつの供養くよう
の方かたを本まなことして眼まなこをば乞たわざりしなり、只ただ退轉たいてんせしめん為ためな

り、身子しんしは一念菩薩いちねんぼさつの行を立てて・かかる事に値あえり、向後こうごは菩薩ぼさつの行をば立つ可べからず二乗にじょうの行を立つ可べしと云つて後悔こうかいせし故ゆえに成仏じやうぶつの日・説三乘法せつさんじやうほうするなり、所詮しよせん乞眼婆羅門びらもんの責たを堪たえざるが故ゆゑなり、法華經ほけきやうの行者ぎやうじや・三類さんるいの強敵かうてきを堪忍かんにんして妙法みやうほうの信心しんじんを捨すつ可べからざる見り信心しんじんを以て眼まなことせり云云。

一有大長者ちちやうじやの事 仰いに云いく此ちの長者ちちやうじやに於おいて天台大師てんだいだいし・三の

長者ちちやうじやを釈しやくし給たまえり、一には世間せけんの長者ちちやうじや・二には出世ししゆせの長者ちちやうじや・三に

は觀心かんじんの長者ちちやうじや是これなり、此こゝの中ちゆうに出世觀心ししゆせかんじんの長者ちちやうじやを以て、此こゝの品ひんの

長者ちちやうじやとせり、長者ちちやうじやとは釈迦しやくか如來にやうらいの事ことなり、觀心かんじんの長者ちちやうじやの時ときは

一切衆生いっさいしゆじやうなり、所詮しよせん法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは男女なんによ共に長者ちちやうじやなり、文句もんくの

五ごに委くわしく釈しやくせり、

末法まふほう當今とうこんの長者ちちやうじやと申もうすは日蓮等にちれんの類たぐい・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ

奉たてまつる者ものなり、されば三の長者ちちやうじやを釈しやくする時とき、文句もんく五ごに云いく、二に位

号ごうを探たづするに三さんと為なす、一いちは世間せけんの長者ちやうじや・二には出世しゅつせの長者ちやうじや・三さんは観心かんじんの長者ちやうじやなり、世よに十德じゅうとくを備そなう、一いちには姓貴せいぎ・二にには位高いこう・三さんには大富たいふ・四しには威猛ゐまう・五ごには智深ちしん・六ろくには年耆ねんぎ・七しちには行淨ぎやうじやう・八はちには礼備らいび・九くには上歎じやうたん

・十じゅうには下歸げきなり云云、又云いく、出世しゅつせの長者ちやうじやは、仏ぶつは三世さんせの真如実しんによ際さいの中ちゆうより生なず、功成こうせいり、道著だうちやくわれて、十号じゅうごう極きくり無なし、法財ほふざい万德ばんとく、悉しつく皆具けいぐに満まんせり、十力じゅうりき雄猛ゆうまうにして、魔まを降くだし外げを制せいす、一心いっしんの三智さんち通達つうだつせずと云いうこと無なし、早はやく正覚しやうかくを成なじて、久遠くおんなること斯かくの如ごとし、三業さんごふ智ちに随したがつて、運動うんどうして矢無やなし、仏ぶつの威儀ゐぎを具ぐして、心大こころおほなること海うみの如ごとし、十方じゅうぽうの種しゆ覺かく・共ともに称しやう譽ぎする所ところなり、七種しちしゆの方便ほうべん・而しかも来きつて依止えしす、是これを出世しゅつせの仏大長者ぶつちやうじやと名なく、三さんに觀心かんじんとは、觀心かんじんの智実相ちじつそうより出いで生なじて仏家ぶつかけにあり、種性しゆじやう真正しんじやうなり、三惑さんかく起おこらず、未いまだ真まことを發おこさずと縮ちぢも是これ如來にょらいの衣いを着きれば、寂滅じやくめつ忍にんと

稱す、三諦に一切の功德を含蔵す、正觀の慧・愛見を降伏す、中道

双べ

照して権実並に明なり、久く善根を積みて能く此の觀を修す、此

の觀七方便の上に出でたり、此の觀・心性を觀ずるを上定と名くれ

ば、即ち三業過無し、歴縁对境するに成儀失無し、能く此くの如く

觀ず、是れ深信解の相諸仏皆歡喜して持法の者を歎美したもう、

天竜・四部・恭敬供養す、下の文に云く、仏子是の地に住すれば、

即ち

是れ仏受用し給い、経行し及び坐臥し給わんと、既に此の人を称して仏と為す、出田観心の長者と名けざらんやと此の積分明に観心の長者に十徳を具足すと釈せり、所謂引証の文に、分別功德品の則是仏受用の文を引けり、経文には仏子住此地とあり、此の字を是の字にうつせり、経行若坐臥の若を及の字にかえたり、又法師品の文を引けり、所詮仏子とは法華経の行者なり、此地とは実相の大地なり、経行若坐臥とは法華経の行者の四威儀の所作の振舞、悉く仏の振舞なり、我等衆生の振舞の当体、仏の振舞なり、此の当体のふるまいこそ長者なれ、仍つて

観心の長者は我等凡夫なり、然るに末法当今の法華経の行者より外に、観心の長者無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者、無上宝緊不求自得の長者に非ずや、既称此人為仏の

六字に心を留めて案ずべきなり云云。

一多有田宅の事

仰に云く田宅とは、長者の財宝なり、所詮

田と云うは命なり、宅とは身なり、文句の五に田宅をば身命と

釈せり、田は米なり、米は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、

身命の二を安穩にするより外に財宝は無きなり、法門に約すれば

田は定・宅は慧なり、仍つて定は田地の如し、慧は万法の如し、我等

一心の田地

より諸法の万法は起れり、法華一部方寸知るべしと釈して八年の

法華も一心が三千と開きたるなり、所詮田は定なれば妙の徳、宅

は慧の徳なれば法の徳、又は本・迹同門なり、止観の二法なり、

教主釈尊本・迹両門の田宅を以つて一切衆生を助け給えり、田宅

は我等衆生の色心の二法なり、法華經に低い奉りて、南無

妙法蓮華經と唱え

たてまつ 奉る時 煩惱ぼんのう即菩提しようじそく・生死しようじそく即涅槃ねはんと体達たいだつするなり、山扁さんぺん多有田宅たたくの

ちようじや

長者ちやうじやに非あひずや、多有たつと云う心こころは心法しんぽうに具足ぐそくする心数しんずなり、色法しきぽうに

ぐそく

具足ぐそくする所作しよさなり、然しからば多有田宅たたくの文ぶんは一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもんなり、

そのゆえ

其の故ゆゑは一念いちねんは定じやうなり、三千さんぜん

すで

は慧えなり、既すでに积いに云いく、田宅たたくは別べつ譬ひなり、田でんは能よく命いのちを養やしなう、

べんじじや

禅定ぜんじやうの般若ぼんげを資すけするに譬たとう、宅たくは身みを栖すます可べし、実境じつきやうの智ちの所しよ

すなわ

託たくと為なるに誓ちかう云いふ、此こゝの积分ふんみ明めいなり、田宅たたくは身命しんみなり、身命しんみは

すなわ

即すなわち南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきようなり、此こゝ

題目だいもくを持ち奉たてまつる者は宝多有田宅ちようじやの長者あらに非あらずや、今末法まつぼうに入いつて日蓮等にちれんの類たぐい・多有田宅ちようじやの本主ほんしゆとして如説修行によせつしゆきようの行者ぎようじやなり云云。
一 等一大車いちだうじやの事
仰いに云いく此の大車このだいじやとは直至道場じきしどうじようの大白牛車だいびやくしやにして其その疾はやきこと風の如ごとし、所詮南無妙法蓮華經しよせん なむ みよつほうれんげきようを等一大車いちだうじやと云いふなり、等と云いふは諸法実相しよほうじつそうなり、一とは唯有一乘法ゆいいう いちじようなり、大とは大乘だいじようなり、車じやとは一念三千いちねんさんぜんなり、仍よつて釈しやくには等の字じを子等車しとうじや等しやくと釈しやくせり、子等しとうの等とうと如我等無異によがとうむいの等とうとは同どうなり、車等じやとうの等とうは平へい等大慧だいえの等とうなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい・南無妙法蓮華經なむ みよつほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者ものは男女なんよ・貴賤きせん共ともに無上宝聚むじようほうじゆ・不ふ求く自得じとくの金言きんげんを持もつ者ものなり、智者ちしや愚者ぐしやををきらわず共ともに即身成仏そくしんじゆぶつなり云云、疏しよの五ごに云いく一いつに等子とうし二にに等車とうじや・子等しとうしきを以もつての故ゆえに則すなち心等しんとうし、一切衆生いつさいしゆじよう等とうしく仏性ぶつじよう有あるに譬たとう、仏性ぶつじよう同どうじきが故ゆえに等とうしく是れ子こなり、第二にに車等じやとうとは法等ほふとうしきを以もつての

故に仏法に非ざることを無し、一切法皆摩訶えんなるに誓う、摩訶えん同じきが故に等しく是れ大車なり、而して各賜と言ふは各々本習に隨う、四諦六度無量の諸法、各各旧習に於て眞実を開示す、旧習同じからず故に各と言ふ、皆摩訶えんなり故に大車と言ふ云。

一其車高広の事

仰に云く此の車は南無妙法蓮華經なり、

即ち我等衆生の体なり、法華一部の總体なり、高広とは仏知見な

り、されば此の車を方便品の時は諸仏智慧と説き其の智慧を甚深

無量と称歎せり、歎の言には甚深無量とほめたり、爰には其車と説

いて高広とほめたり、されば文句の五に云く其車高広の下は如来の

知見深遠

なるに譬う、横に法界の辺際に周く、堅に三諦の源底に徹す故に高

広と言ふなりと、所詮此の如来とは一切衆生の事なり既に

諸法実相の仏なるが故なり、知見とは色心の二法なり知は心法・見

は色法なり、色心二法を高広と云えり、高広そく即本・迹二門なり此れ
即すなわち南無妙法蓮華經なり云云。

一是朽故宅属干一人の事 仰いに云く此の文をば文句もんくの五に云く出
火よしの由を明す文、此の宅とは三界さんがいの火宅な

り、火と云うは煩惱の火なり、此の火と宅とをば属于一人とて釈迦
一仏の御利益なり、弥陀・薬師・大日等の諸仏の救護に非ず、教主
釈尊一仏の御化導なり、唯我一人能為救護とは是なり、此の属于
一人の文を重ねて、五卷提婆品に説いて云く觀二三十大千世界一
乃至無し有下如芥子許非是菩薩捨二身命一処上為二衆生一故文、
妙樂大師・此の属于一人の經文を釈する時・記の五に云く、咸く
長者に歸す・一番一切皆然なりと判ぜり、既に咸歸長者と
釈して、法界に有りとある一切衆生の受くる苦惱をば、釈尊一人
の長者に歸すと釈せり、一色一番一切皆然なりとは、法界の千草
万木・飛華落葉の為體、是れ皆無常遷滅の質と見て仏道に歸する
も、属于一人の利益なり、此
の利益の本源は南無妙法蓮華經の内証に引入れしめんが為なり、
所詮末法に入つて属于一人の利益は日蓮が身に当りたり、日本国の

一切衆生の受くる苦惱は、悉く日蓮一人が属于一人なり、教主
釈尊は唯我一人能為救護、日蓮は一人能為救護に云云、文句の五
に云く、是朽故宅属于一人の下、第二に一偈有り、失火の由を明
す、三界は

是れ仏の化応の処発心已来誓つて度脱せんと願う、故に属于一人と
云うと、此の釈に発心已来誓願度脱の文、豈日蓮の身に非ずや云

云。

一 諸鬼神等揚声 大叫の事 仰に云く諸鬼神等と云うは親類

部類等を鬼神と云うなり、我等衆生死したる時、妻子、眷属あつま

りて悲歎するを揚声 大叫とは云うなり、文句の五に云く諸鬼神等

の下、第四に一行半は被焼の相を明す、或云く親属を鬼神と為し、

哭泣を揚声と為すと。

一 乘此宝棄直至道場の事 仰に云く此の経文は我等衆生の

煩悩ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しょうじ即涅槃そくねはんを明せり、其そのの故ゆえは文句もんくの五ごに云いく、此このの
因か易わること無なきが故ゆえに直じ至きと云いう、此このの、釈しゃくの心こころは爾前にぜんの心こころは煩悩ぼんのう
を捨すてて生しょう死じを厭いとうて別べつに菩ぼ提だい涅ね槃はんを求もとめたり、法ほ華け經きょうの意いは煩悩ぼんのう
即そく菩ぼ提だい・生しょう死じ即そく涅ね槃はんと云いえり、直そくと即そくとは同どうじ事じなり、所しよ詮せん日に蓮れん等とう
の・類たぐい南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうと唱となえ奉たてままつる者ものの、住じゅう処しよ即そく寂じやく光こう土どと心こころ得とく
可べきなり、然しかれば此このの实乘じつじやうに乗のりて、忽たちちまに妙覺みょうかく極ごく果か

の位に至るを直至道場とは云うなり、直至と云う文の意は、四十
二位を爰にて極めたり、此の直の一字は、地獄即寂光・餓鬼即
寂光土なり、法華經の行者の住処、山谷曠野なりとも、直至道場
なり、道場とは究竟の寂光なり、仍つて乘此宝乗の上の乗は法華の
行者、此の品の意にては中根の四大声聞なり、惣じて一切衆生の
事なり、今末法
に入つては日蓮等の類いなり、宝乗の乗の字は大白牛車の
妙法蓮華經なり、然れば上の乗は能乗・下の乗は所乗なり、宝乗は
蓮華なり、釈迦・多宝等の諸仏も、此の宝乗に乘じ給えり、此れを
提婆品に重ねて説く時、若在仏前蓮華化生と云云、釈迦・多宝の二
仏は我等が己心なり、此の己心の法華經に値い奉つて成仏するを
顕わさんと
して釈迦・多宝・二仏・並座して乘此宝乗・直至道場を顕わし給え

り、此の乗とは車なり、車は蓮華なり、此の蓮華の上の妙法は、
我等が生死の二法・二仏なり、直至の至は此れより彼へいたるの
至るには非ず住処即寂光と云うを至とは云うなり、此の宝乗の宝
は七宝の大車なり、七宝即ち頭上の七穴・七穴即ち末法の要法・
南無妙法蓮華經

是なり、此の題目の五字、我等衆生の為には、三途の河にては船と
なり、紅蓮地獄にては寒さをのぞき、焦熱地獄にては涼風となり、
死出の山にては達華となり、渴せる時は水となり、飢えたる時は食
となり、裸かなる時は衣となり、妻となり、子となり、眷屬となり、
家となり、無窮の応用を施して一切衆生を利益し給うなり、直至
道場

とは是なり、仍つて此の身を取りも直さず寂光土に居るを直至
道場とは云うなり、直の字心を留めて之を案ず可し云云。

一若人にやくにんふしん不信毀謗きぼう此經則新いっさいせけん一切世間ぶつしゆ・仏種の事 仰いわに云く此の
經文きやうもんの意は小善成仏しやうぜんじやうぶつを信ぜずんば一切世間の仏種ぶつしゆを断ずと云う
事なり、文句もんくの五ごに云く、今經こんきやうに小善成仏しやうぜんじやうぶつを明す、此これは縁因えんいんを
取とつて仏種ぶつしゆと為なす、若もし小善しやうぜんの成仏じやうぶつを信ぜずんば、即そくと一切世間いっさいせけん
の仏種ぶつしゆを断たざるなり文、爾前經にぜんきやうの心は小善成仏しやうぜんじやうぶつを明あかさざるなり、
法華經ほけきやうの意は一・華・一香しやうげんの小善しやうぜんも法華經ほけきやうに歸かへすれば大善だいぜんとなる、
縦たとい法界ほっかいに充満じゆうまんせる大善だいぜんなりとも此の經きんに値あわずんば善根ぜんこんとは

ならず、譬たとえば諸河の水・大海たいかいに入りぬれば鹹かんの味となる、入らざれば本の水なり、法界ほっかいの善根ぜんこんも、法華經ほっけきょうへ歸入きにゆうせざれば善根ぜんこんとはならざるなり、されば釈いわに云く、断一切いつさいぶつしゆ仏種ぶつしゆとは淨名じようみやうには煩惱ぼんのうを以て如來にょらいの種しゆと為す、此れ境界きやうがいししやう性しやうを取るなり、此の釈いわの心こころは淨名經じようみやうきやうの心こころならば我等衆生われらしゆじゆうの一日一夜いちにちいっやに作なす所の罪業ざいごう・八億四

千の念慮ねんりよを

起おこす、余經よきやうの意いは皆みな三途さんずの業因ごういんと説とくくなり、法華經ほっけきやうの意いは、此このの業因ごういん・即すなわち仏ぶつぞと明あせり、されば煩惱ぼんのうを以て如來にょらいの種子しゆしとすと云いうは此このの義ぎなり、此このの淨名經じようみやうきやうの文ぶんは、正ただしく文在爾前にぜん・義在法華ほっけの意いなり、此このの境界きやうがいししやう性しやうと云いうは、末師しやく釈しやくする時とき、能生煩惱のうしゆぼんのう・名境界きやうがいししやう性しやうと判わぜり、我等衆生われらしゆじゆうの眼耳等げんにの六根ろくこんに妄執もうしゆを起おこすなり、是こを境界きやうがいししやう性しやうと云いう

なり、權教けんきやうの意いは此このの念慮ねんりよを捨すてよと説とくけり、法華經ほっけきやうの心こころは、此この

境界性の外に、三因仏性の種子なし、是れ則ち三身円満の仏果となるべき種性なりと説けり、此の種性を、權教を信ずる人は之を知らず此の経を謗るが故に、凡夫即極の義をも知らず、故に一切世間の仏種を断ずるなり、されば六道の衆生も三因仏性を具足して、終に

三身円満

尊容を顯す

可き所に、此の経を謗ずるが故に、

六道の

六道の

三身円満

の尊容を顯す可き所に、

此の経を謗ずるが故に、

六道の六道の

仏種をも断ずるなり、

されば妙樂大師云く、

此の経は遍く

六道の

仏種を開す、

若し此の経を謗ずるは、

義断に当るなりと、

所詮

日蓮が意は一切の言は

十界をさす、

此の経を謗ずるは

十界の仏種

を断ずるなり、されば、誹謗の二字を大論に云く、口に謗るを誹と

云い、

心に背くを謗と云うと、

仍って色心三業に経て、

法華経を謗じ奉る

人は入阿鼻獄疑い無きなり、

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・

だるま 達磨等の大謗法の者なり、いまにちれん今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
たてまつ、あに奉る、あに豈二世の諸仏の仏種を継ぐ者に非ずや云云。

一捨悪知識親近善友の事 あくちしきしんこんぜんゆう 仰に云く悪知識とは在世にては

善星・瞿伽利・提婆等是なり、善友とは迦葉・舍利弗・阿難・目連等

是なり、末法当今に於て悪智識と云うは法然・弘法・慈覚・智証等の

権人謗法の人人なり、善智識と申すは日蓮等の類の事なり、惣じ

て知識に於て重重之れ有り、外護の知識・同行の知識・実相の知識

是なり、

所詮しよせん実相じつそうの知識ちしきとは所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう是これなり、知識ちしきとは形かたちをしり、心こころをしるを云いうなり、是これ即すなわち色心しきしんの二法ふたつなり、謗法ほうぼうの色心しきしんを捨てて法華經ほけきょうの妙境みょうぢ・妙智みょうちの色心しきしんを顯あらわすべきなり、悪友あくゆうは謗法ほうぼうのひとびと人人ひとなり、善友ぜんゆうは日蓮等にちれんの類たぐいなり。

一 無上宝聚むじょうほうじゆ不求自得ふくじとくの事こと 仰いわに云いく、此こゝの無上宝聚むじょうほうじゆに於おいて

には釈尊しゃくそんの因行いんぎやう・果徳かとくの万行まんぎやう・万善ばんぜんの骨髓こつすいを宝聚ほうじゆと云いうなり、二

には妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの事ことなり、不求ふくとは中根ちゆうこんの四大声聞しようもんは此こゝくの如ごとき

宝聚ほうじゆを任運自在にんうんじざいと得えたり此こゝ実我子我実其父じつがこがじつがふの故ゆゑなり、総くわじては

一切衆生いっさいしゆじやうの事ことなり、自得じとくと云いうは自じは十界じゆつかいの事ことなり、此こゝれは自我ご

得え仏来ぶつらいの自じと

同じ事ごとなり、得えも又また同じ事ごとなり末法まつぽうに入いつては自得じとくとは日蓮等にちれんの

類たぐいなり、自じとは法華經ほけきょうの行者ぎやうじや、得えとは題目だいもくなり、得えの一字いちじには

師弟していを含ふみたり、与よつると得えるとの義ぎを含ふめり、不ふ求くとは仏法ぶつぽうに入い

るには修行しゆぎやう・覚道の辛勞あり、釈迦しやくか如来にょらいは往来娑婆しやば八千反の御辛勞ほげきやうにして求め給う功德くどくなり、さて今の釈迦牟尼しやくかむにぶつ仏ぶつと成り給えり、
法華經ほふけきやうの

行者ぎやうじやは求めずして此の功德くどくを受得じゆとくせり仍よつて自得じとくとは説かれたり、此の自の字いちねんは一念いちねんなり得は三千さんぜんなり、又自は三千さんぜん・得は一念いちねんなり、又た自は自なり得は他なり、総じて自得じとくの二字ふたごに法界ほふかいを尽ことごとくせり、所詮しよせん此の妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを自よ

り得たり、自とは釈尊しやくそんなり、釈尊しやくそんは即ち我が一心いっしんなり、一心いっしんの釈迦しやくかより受得じゆとくし奉る南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、日蓮にちれんも生年三十二じとくにして自得じとくし奉る題目たてまつだいもくなり云云。

一 藥草喻品の事やくそうゆほん

仰いわに云く藥とは是ぜ好良藥りやうやくの南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり、妙法みやうほつを頂上ちやうじやうにいただきたる草くさなれば、藥あに非あらずと云う事なし、草は中根ちゆうこんの声聞しやうもんなれども、惣そつじては一切衆生いっさいしゆじやうなり、

たと 譬えなむば土器に薬をかけたるが如ごとし、我等衆生・父母果縛ふぼ かばくの肉身に
南無妙法漣華經の薬をかけたなむり、煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんは是これな
り云云、此の分を教まうう
るを喻たとえとは申もつすなり、釈いわに云く、喻たとえとは曉訓ぎやうくんなりと、提婆だいば・竜女りゆうにょ
の畜生ちくしよう・人間にんげんも、天帝てんたい・羅漢らかん・菩薩ぼさつ等も、悉ことごとく薬草の仏あに非あらずと云う
事いっさいなし、末法まつぽう当今の法華ほっけの行者ぎやうじやの日蓮にぢれん等の類たぐい、薬草やくそうにして日本にほん国こく
の一切衆生の薬王やくおうなり

云云。

一 現世安穩・後生善処の事 仰に云く所詮此の妙法蓮華經を

聴聞し奉るを現世安穩とも後生善処とも云えり、

既に上に聞是法已と説けり聞は名字即の凡夫なり妙法を聞き奉る

所にて即身成仏と聞くなり、若有能持即持仏身とは是なり、聞く

故に持ち奉るの故に三類の強敵来る来るを以て現世安穩の記文

顕れたり、法華の行者なる事疑無きなり、法華の行者はかかる

大難に値うべしと見えたり、大難に値うを以て後生善処の成仏は

決定せり是れ豈

現世にして安穩なるに非ずや、後生善処は提婆品に分明に説けり、

所詮現世安穩とは法華經を信じ奉れば三途八難の苦をはなれ善悪

上下の人までも皆教主 積尊 同等の仏果を得て自身本覚の如來な

りと顕す、自身の当体 妙法蓮華經の葉草なれば現世安穩なり、

愛こころを開ひらくを後ご生しょう善ぜん処じょと云いうなり、妙みょう法ほう蓮れん華げき経きょうと云いうは妙みょう法ほうの薬やく草そう

なり、所しよ詮せん現げん世せ安あん穩んは色しき法ぽう・後ご生しょう善ぜん処じょは心しん法ぽうなり、十じゆつ界かいの色しき心しん・

妙みょう法ほうと開かい覺かくするを現げん世せ安あん穩ん・後ご生しょう善ぜん処じょとは云いうなり、所しよ詮せん法ほけき華きやう經きやう

を弘ひろむるを以もつて現げん世せ安あん穩ん・後ご生しょう善ぜん処じょと申もうすなり云い云い。

一いっ皆さい悉しつ到たう於ち一切いっさい智ち地ちの事じ 仰いに云いく一切いっさい智ち地ちと云いうは法ほけき華きやう經きやうな

り、譬たとえば三さん千せん大だい千せん世せ界かいの土と地ち・草そう木もく・人じん畜ちく等とう 皆みな大だい地ちに備そりたるが

如ごとくなり、八はち万まん法ほう蔵ざう・十じゆつ二に部ぶ經きやう・悉しつく法ほけき華きやうに歸き入にゅうせしむるなり、

皆がい悉しつの二に字じをば善ぜん人にんも悪あく人にんも迷まよいも悟いつも一切いっさい衆しゆ生じやうの悪あく業ごうも善ぜん業ごうも

其その外やく薬やく師し・大だい日にち・弥み陀だ並ならびに地じ蔵ざう・觀かん音のん・横よこに十じゆつ方ぽう・豎さんに三さん世ぜ有あり

とある諸しよ仏ぶつ

の具しよ徳とく・諸しよ菩ぼ薩さつの行ぎやう徳とく・惣そうじて十じゆつ界かいの衆しゆ生じやうの善ぜん悪あく・業ぎやう作さく等とうを皆がい悉しつと

説これけり、是ほを法ほけき華きやう經きやうに歸き入にゅうせしむるを一切いっさい智ち地ちの法ほけき華きやう經きやうと申もうすな

り、されば文もん句くの七しちに云いく皆がい悉しつ到たう於ち一切いっさい智ち地ちとは、地ちとは実じつ相そうな

り、究竟くきようして二に非あらず故ゆえに

一と名なくるなり、其その性じよう広博はくなり、故ゆえに名なけて切きと為なす、寂じやくにして

常照じようじゆなり、故ゆえに名なけて智ちと為なす、無住むじゆの本ほんより一切いっさいの法はふを立たす、

故ゆえに名なけて地ちと為なす、此これ円教えんきやうの実説じつせつなり、凡おほそ所説しよせつ有あるは皆みな

衆生しゆじやうをして此この智地ちちに到いたらしむ云云いんいん、此この釈しやくは一切いっさい智地ちちの四字しやくを

委くわしく判はんぜり、一いをば究竟くきようと云い切きをば広博くわうはくと釈しやくし智ちをば寂而常じやくにじやう

照じゆと云い

地をば無住之本と判ぜり、然るに凡有所説は約教を指し・皆令衆生は機縁を納るるなり、十界の衆生を指して切と云い凡有所説を指して、究竟非二故名一也と云えり、一とは三千大千世界・十方法界を云うなり、其の上に人畜等あるは地なり、記の七に云く、切を衆に訓ずと文、仍って一切の二字に法界を尽せりなり、諸法は切なり実相は

一なり、所詮・法界実相の妙体・照而常寂の一理にして十界三千一法性に非ずと云う事なし是を一と説くなり、さて三千の諸法の己己に本分なれば切の義なり、然らば一は妙・切は法なり、妙法の二字・一切の二字なり、無住之本は妙の徳・立一切法は法の徳なり、一切智地とは南無妙法蓮華経是なり一切智地・即一念三千なり、今末法に入つて一切智地を弘通するは日蓮等の類是なり、然るに一とは一念なり切とは三千なり、一心より松よ桜よと起る

は切なり、是は心法に約する義なり、色法にては手足等は切なり、一身なるは一切なり、所詮色心の二法・一切智地にして南無妙法蓮華経なり云云。

一此の一切智地の四字に法華経一部八卷文文・句句を収め

たり、此の一切智地とは三諦・一諦・非三非一なり、三智に約すれ

ば空智なり、さては三諦とは云い難し、然りと雖も三諦・一諦の中

の空智なり、されば三諦に於て三三九箇の三諦あり、先ず空諦にて

三諦を云う時は空諦と呼出だすが仮諦・空諦なるは空諦なり・不二

するは

中道なり、三諦同じく此くの如く心得可きなり、所詮此の一切

智地をば九識法性と心得可きなり、九識法性をば、迷悟不二・

凡聖一如なれば空と云うなり、無分別智光を空と云うなり、此の

九識法性とは、いかなる所の法界を指すや、法界とは十界なり、

じゆつかいそくしよほつ

十界即諸法なり、此の語法の当体・本有の妙法蓮華經なり、此の

重に迷う衆生の

ため

いちぶつげん

ぶんべつ

為に、一仏現じて分別説三するは、九識本法の都を立出ずるなり、

さて終に本の九識に引入する、夫れを法華經とは云うなり、一切

智地とは是れなり、一切智地は我等衆生の心法なり心法即ち妙法

なり一切智地とは是なり

云云。

一 根茎枝葉の事

仰いに云いく此この文ぶんをば積しには信しん戒がい定じやう慧えと云

云、此この積しの心しんは草木そうもくは此この根茎枝葉こんきやうしやうを以もつて増長ぞうちやうと云いうなり、

仏法修行ぶつぽうしゆぎやうするも又斯かくの如ごとし、所詮しよせん我等われら衆生しゆじやう・法華經ほけきやうを信しし奉たてまつる

は根ねをつけたるが如ごとし、法華經ほけきやうの文ぶんの如ごとく是こ名持戒じがいの戒体けたいを本もととし

て、正直捨方便しやうじきしやほうべん・但説無上道たんせつむじやうどうの如ごとくなるは戒けいなり、法華經ほけきやうの文相ぶんさうに

まかせて、

法華三昧ほつげさんまいを修しゆするは定じやうなり、題目だいもくを唱となえ奉たてまつるは慧えなり、所謂い法界わくがい

悉しつく生住異滅しやうじゆいじゆつめつするは信しん・己こ己こ本分ほんぶんは戒けい・三世不改さんぜふがいなるは定じやうなり、各

各かくの徳義とくぎを顯あらわしたるは慧えなり、是これ即すなわち法界平等ほつがいびやうどうの根茎枝葉こんきやうな

り、是これ即すなわち真如実相しんによじつそうの振舞ふるまいなり、所謂い戒定慧けいじやうえの三学さんがく・妙法蓮華經みようほうれんげきやう

なり、此これを信しんずるを根ねと云いうなり、積しに云いく三学さんがく俱くに伝でんうるを

名なけて妙法みようほうと曰いうと云いふ。

一 根茎枝葉の事

仰いに云いく此これは我等われらが一身いつしんなり、根ねとは心法しんぽう

なり茎とは我等が頭より足に至るまでなり、枝とは手足なり、葉とは毛なり、此の四を根茎枝葉と説けり、法界三千此の四を具足せずと云う事なし、是れ即ち信戒定慧の体にして実相一理の南無妙法蓮華經の体なり、法華不信の人は根茎杖葉ありて增長あるべからず枯塙の衆生なるべし云云。

一 枯塙衆生の事 仰に云く、法華經を持ち奉る者は、枯塙の

衆生に非ざるなり、既に法華經の種子を受持し奉るが故なり、謗法不信の人は下種無き故に枯塙の衆生なり、されば、妙樂大師の云く、余教を以て種と為さず文。

一 等雨法雨の事 仰に云く等とは平等の事なり、善人・悪人、

二 乘・闡提、正早・邪見等の者にも、妙法の雨を惜まず平等にふらすと云う事なり、されば法の雨を雨すと云う時は、大覺世尊ふらしに成り給えり、さて、の雨ふりてとよむ時は、本より実相平等の

法雨ほううは、常住じやうじゆう本有ほんぬの雨なれば、今始めてふるべきに非あらず、されば、
諸法しよほう実相じつそうを、譬喻ひゆほん品の時は風月に譬たとえたり、妙楽みょうらく大師だいしは何ぞ隠れ
何ぞ顕なんれんと釈あらかせり、実相じつそうの法雨ほううは三世常恒さんぜじやうこうに

して、おんけん 隠顕更に無きなり、しよせん 所詮、等の字はひとしくとよむ時は、しやく 釈迦
によらい 如来の平等の慈悲なり、さて、ひとしきとよむ時は、びやうどうだいえ 平等大慧の
みやうほうれんげきやう 妙法蓮華経なり、ひとしく法の雨をふらすとは、のうぐ 能弘につけたり、
ひとしき法の雨ふり、にりと読む時は、しよぐ 所弘の法なり、しよせん 所詮法と云
うは、じゅつかい 十界の語法なり、雨とはじゅつかい 十界の言語・おんじやう 音声の振舞なり、ふ
ると

はじざい 自在にしてじじく 地獄はみやうか 洞燃猛火、乃至ないしぶつかい 仏界の上の所作しよさ 音声を、等雨
ほうう 法雨とは説けり、此の等雨法雨はほつたい 法体の南無妙法蓮華経なり、今
まっぽう 末法に入つて、にちれん 日蓮等の類のたく 弘通する題目は、ほうう 等雨法雨の法体な
り、此の法雨ほうう 地獄の衆生・がき 餓鬼・ちくじやう 畜生等にいた 至るまで同時にほうう 法雨は題目の
法雨なり、にほんこく 日本国の一切衆生のため 為にふぞく 付属し給うほうう 法雨は題目の
ごじ 五字なり、

いわゆる 所謂日蓮建立のごほんぞん 御本尊・なむ 南無妙法蓮華経是なり云云、ほうべん 方便品には

ほんまつつきよう
本末究竟等と云えり、譬喩品には等一大事と云えり、此の等の字を
かさ
重ねて説かれたり、或は如我等無異と云えり、此の等の字は
ほうとうほん
宝塔品の如是如是と同じなり、
しよせん
所詮等とは南無妙法蓮華経なり、法雨をふらすとは今身より仏身
にいた至るまで打つや否やと云う受持の言語なり云云。

一等雨法雨の事 仰に云く此の時は妙法実相の法雨は十界

さんぜん
三千下は地獄・上は非想非非想まで横に十方・豎に三世に亘つて

みよほう
妙法の功德をふるを等とは云うなり、さてふるとは一切衆生の

しきしん
色心妙法蓮華経と三世常住ふるなり云云、一義に云く、此の

みよほう
妙法の雨は九識本法の法体なり、然るに一仏現前して説き出す所

みよほう
の妙法なれば、法

の雨をふらすと云うなり、其の故は、ふらすと云うは上より下へ

ふるを云うなり、しよつかこういんのつて従果向因の義なり、仏に約すれば、第十の

仏見ぶつけんより九界へふらす、法体ほつたいにてはふる処ところもふらす処ところも、真如しんによ
の一理なり識分にては八識

へふり下りたるなり、然しからば今日蓮等いまにちれんの類たくい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを
日本国にほんこくの一切衆生いっさいしじゆじやうの頂上ちやうじやうにふらすを法の雨をふらすと云うなり
云云。

一如いごとく從飢国けこく来忽遇こつぐ大王膳だいおうの事 仰いに云いく此の文は中根の四大声聞しようもん
法華ほつげに来れる事、譬たとえばうえたる国より

来りて大王だいおうのそなえに値あうが如ごとくの歡喜かんぎなりと云えり、然しからば此この文ぶんの如ごとくならば法華ほっけ已前いぜんの人は餓鬼界がきの衆生しゅじょうなり、既すでに飢国けこく来くと説だいけり、大王膳だいおうとは醍醐味だいごみなり、中根ちゅうこんの声聞しょうもん・法華ほっけに來きつて一乘いちじょう醍醐だいごの法味ほうみを得えて忽たちまちに法王ほうおうの位ゐに備そなはりたり、忽たちまちの字じは爾前にぜんの迂迴道いこうだうの機きに對たいして忽たちまちと云いうなり、速疾頓成そくしつとんじょうの義ぎを忽たちまちと云いうなり、仮令たとい外用とくわう

の八相とんを唱となうる事は所化しよけをして仏道ぶつどうに進しんめんが為なり、所詮しよせん末法まつぽうに入いつては謗法ぼうぼうの人人ひとびとは餓鬼界がきの衆生しゅじょうなり、此この經きやうに値あい奉たてまつり・南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうに値あい奉たてまつる事は併しかしながら大王膳だいおうたり、忽遇こつぐの遇ぐの字じ肝要かんようたり、釈いわに云いく、成仏じやうぶつの難がたきには非あらず、此この經きやうに値あうをかたしとすと云いえり、不輕品ふぎやうに云いく復遇常不輕ふぎやうと云いふ、嚴王品げんおうひんに云いく生値しやうち佛法ぶつぽう云いふ、大王だいおうの膳ぜんに値あいたり、最さいも以もつて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを信受しんじゆし奉たてまつる可べきなり、此この經文きやうもんの如ごとくならば法華ほっけより外ほかの一切衆生いっさいしゅじやうはいかに

高貴の人なりとも餓鬼道の衆生なり、十羅刹女は餓鬼界の羅刹なれども法華經を受持し奉る故に餓鬼に即する一念三千なり、法華へ来らずんば何れも餓鬼飢餓の苦みなるべし、所詮必ず中根の
声聞領解の言

に我身を餓鬼に類する事は餓鬼は法界に食ありと云えども食する事を得ざるなり、諸法実相の一味の醍醐の妙法あれども終に開覺に能えざる間、四十余年食にうえたり云云、一義に云く序品方便より諸法実相の甘露頭れて南無妙法蓮華經あれども広略二重の譬説段まで悟らざるは餓鬼の満満とある食事をくらわざるが如し、
所詮日本国
の一切衆生は餓鬼界の衆生なり、大王膳とは所謂南無妙法蓮華經是なり、遇の字には人法を納めたり、のつて未に如飢須
教食と云えり、うえたるとも大王のをしえを待ちて醍醐を食する

が如しと云えり、今南無妙法蓮華經有れども、今身より仏身に至る
までの受持をうけずんば成仏は之れ有るべからず、教とは爾前無
とくどう 法華成仏の事なり、此の教をうけずんば法華經を讀誦すと
得道・法華成仏の事なり、此の教をうけずんば法華經を讀誦すと
も大王の位に登る事、之れ有る可からず醍醐は題目の五字なり云
云。

一 大通智勝仏十劫坐道場 仏法不現前 不得成仏道の事 仰に
云く此經文は一切衆生の本法流轉を説かれたり、されば釈にも
出世以前と判ぜり、此は大通仏出世し給えども十小劫の間、一經
も説給わずと云う經文なり、

仍つうてぶつ仏ぼん法ぽうも現げん前ぜんせざる故ゆえに不得ふとく成じやう仏ぶつと云いえり、されども釈しやくを見る
に出しゅつ世せい以前いぜんと云いう時は、此この經きやう文もんは何いかなる事ことぞ此こは本ほん法ぽうの重じゆうを説せつ
かれたり、一いち仏ぶつ出しゅつ世せいすれば流る轉てん門もんとなる、一いち仏ぶつも出しゅつ世せい無むき時じは、本ほん
法ぽう不ふ思し議ぎの体たいなり、迷めい悟いもなく、生じやう仏ぶつもなく、成じやう仏ぶつもなく、不じやう成ぶつ仏ぶつ
もなきなり、仍つうつて不得ふとく成じやう仏ぶつ道だうと云いえり、抑そもも本ほん法ぽうと申もうすは水みづが
あつくな

り、火かがつめたくくならば流る轉てん門もんなるべし、水みづはいつもつめたく、火かは
いいつもあつく、地じ獄じやくは何なにも火か焰えん・餓が鬼きはいつも飢け渴かつ・其その外がわ・万まん法ぽう
己こ己この当たう位い・当たう位いの儘ままなるを本ほん法ぽうの体たいと云いうなり、此この重じゆうを説せつき
顯あらわしたる經きやう文もんなり、此この本ほん法ぽうの重じゆうは法ほ華け經きやうなり、權ごん教きやうは流る轉てんな
り、此この流る轉てんの衆しゆ生じやうを本ほん法ぽうの重じゆうに引いん入にせられんとての仏ぶつの出しゅつ世せいな
り、其その

本ほん法ぽうと云いうは此この經きやうなり、所しよ詮せん此この經きやう文もん本ほん法ぽうとは大だい通つう智ち勝しやう仏ぶつと云い

うは我等衆生の色心なり、十劫と云うは十界なり、坐道場と云うは十界の住所其の儘道場なり、道場なれば寂光土なり、法界寂光土にして、十界の衆生悉く諸法実相の仏なれば一仏現すべきに非ず、迷の衆生無ければ説く可き法も無し、仍つて仏法不現前と云えり、不得成仏道とは始覺本覺の成仏と云う事も無し、本法不思議の体にして万法本有なり、之れに依つて釈には出世以前と判ぜり、然らば、其の本法の体とは、所詮南無妙法蓮華経なり、此の本法の内証に引入せんが為に、住は四十余年誘引し、終に第五時の本法を説き給えり、今末法に入つて上行所伝の本法の南無妙法蓮華経を弘め奉る、

日蓮・世間に出世すと云えども、三十二歳までは、此の題目を唱え出さざるは、仏法不現前なり、此の妙法蓮華経を弘めて、終には本法の内証に引入するなり日蓮・豈大通智勝仏に非ずや、日本国の

いっさいしゆじょう
一切衆生こそ十劫坐道場とて十界其の儘・本法の南無妙法蓮華經
いんにゆう
へ引入するなり、所詮信心を出だして南無妙法蓮華經と唱え奉る
べ
可き者なり云云。

ひんじん
一貧人見此珠其心大歡喜の事 仰に云く此珠とは一乘無価の
ほうしゆ
宝珠なり、貧人とは下根の声聞なり、惣じて

いっさいしゅじょう

一切衆生なり、所詮末法に入つて此珠とは南無妙法蓮華經なり、

貧人とは日本国の一切衆生なり、此の題目を唱え奉る者は心大

歡喜せり、されば見宝塔と云う見と此珠とは同じ事なり所詮此珠

かんき

とは我等衆生の一心なり、一念三千なり此の經に値い奉る時、

われら しゅじょう

一念三千と開くを珠を見るとは云うなり、此の珠は広く一切衆生

いちねんさんぜん

の心法なり此の珠

たま

は体中にある財用なり、一心に三千具足の財を具足せり、此の珠を

ほうべん

方便品にして諸法実相と説き、譬喩品にては大白牛車・三草二木・

ひやくゆじゆん

五百由旬の宝塔、共に皆一珠の妙法蓮華經の宝珠なり、此の經文

しきしん

色心の実相歡喜を説けり。見此珠の見は色法なり、其心大と云うは

しきしん

心法なり、色心共に歡喜なれば大歡喜と云うなり、所詮此珠と云

うは我

等衆生の心法なり、仍つて一念三千の宝珠なり、所謂妙法蓮華經

うは我

等衆生の心法なり、仍つて一念三千の宝珠なり、所謂妙法蓮華經

うは我

等衆生の心法なり、仍つて一念三千の宝珠なり、所謂妙法蓮華經

なり、今末代に入つて此の珠を顕す事は日蓮等の類いなり所謂
未曾有の大曼荼羅こそ正しく一念三千の宝珠なれ、見の字は
日本国の一切衆生、広くは一閻浮提の衆生なり、然りと雖も其心
大歡喜と云う時は、日蓮が弟子・檀那等の信者をさすなり、所詮
煩惱即菩提・生死即

捏槃と体達する、其心大歡喜なり、されば、我等衆生・五百塵点の
下種の珠を失いて、五道・六道に輪廻し・貧人となる、近くは三千
塵点の下種を捨てて備輪諸道せり、之れに依つて貧人と成る、今・
此の珠を釈尊に値い奉りて見付け得て本の如く取り得たり、此の
故に心大歡喜せり、末法当今に於いて妙法蓮華經の宝珠を受持し
奉りて、己心を見るに、十界互具・百界千如・一念三千の宝珠を
分明に具足せり、是れ併ら末法の要法たる題目なり云云。
一如甘露見灌の事
仰に云く甘露とは天上の甘露なり、され

ば妙樂大師云く実相常住は甘露の如し是れ不死の薬云云、此の
釈の心は諸法実相の法体をば甘露に譬えたり、甘露は不死の薬と
云えり、所詮妙とは不死の薬なり、此の心は不死とは法界を指すな
り、其の故は森羅三千の万法を不思議と歎じたり、生住異滅の当位
当位・三世常恒なるを不死と云う、本法の徳として水はくだりつめ
たく火はのぼりあつし、此れを妙と云う、此れ即ち

不思議なり、此の重を不死とは云うなり、甘露と妙とは同じ事なり、然らば法界の儘に閣いて妙法なりと説くを本法とも甘露とも云えり、火は水にきゆる本法にして不死なり、十界己己の当位当位の振舞・常住本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮末法に入つて甘露とは南無妙法蓮華経なり、見灌とは受持の一行なり云云。

一若く有悪人以不善心等の事

仰に云く悪人とは在世にては

提婆瞿伽利等なり、不善心とは悪心を以て仏を罵詈し奉る事を説くなり、滅後には悪人とは弘法・慈覚・智証・善導・法然等是なり、不善心とは謗言なり此の謗言を書写したる十住心等選択集等の謗法の書どもなり、さて末法に入て善人とは日蓮等の類いなり善心とは法華弘通の信心なり所謂南無妙法蓮華経是なり云云。

一如是如是の事

仰に云く釈に云く法相の是に如し根性の是

に如するなり文、法相の是に如すとは諸法実相を重ねて如是と説かれたり、根性の是に如すとは、九法界を説かれたり、然れば機法共に釈迦如来の所説の如く眞実なりと証明し給えり、始の如是は教一開会なり次の如是は人一開会なり、權教の意は諸法を妄法とせらるし

隔別不融の教なり、根性に於ては性欲不同なれば種種に説法し給えり、仍つて人も成仏せず、今の經の心は諸法実相の御經なれば十界平等に授くる所の妙法なり、根性は不同なれども同じく如是性の一性なり、所詮今末法に

入つての如法相是は塔中相承の本尊なり如根性は也と云うは十界宛然の尊像なり法相は南無妙法蓮華經なり、根性は日本国の一切衆生広くは一閻浮提の衆生なり云云。

一是眞仏子住淳善地の事

仰に云く末法当今に於て釈迦如来

の眞實しんじつの御子と云うは法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなり、其そのの故ゆえは上かみの文ぶんに能あた於まる
来世らいせ読持よみもち此經こゝろと説まけり来世らいせとは末法まっぽうなり、読よむと云いうは法華經ほけきょうの
如説にみせつしゆ修行ぎやうぎやうの行者ぎやうじやなり、弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしやう・善導ぜんどう・法然ほうねん等ら讀よみて云いく第
三さんの劣けろん・戲論ぎろんの法ほ・捨閉閣しやへいかく抛ほう・理同事りどうじ勝等しょうとうと讀よむは謗法ぼうぼうにして三仏さんぶつの
御舌ごぜつ

を切るに非ずや何に況や持たんをや、伝教大師云く法華經を讚む
ると雖も還つて法華の心を死すとは是なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る人は、読持此經の人なり、豈是真仏子に
非ずや淳善地は寂光土に非ずや、是真仏子の子の字は十界の衆生
なり、所詮此の子の字は法華經の行者に限る、悉是吾子の子は孝
不孝を分別
せざる子なり、我等皆似仏子の子は中根の声聞仏子に似たりと説
かれたり、為治狂子故の子は、久遠の下種を忘れたれば物にくるう
子なり、仍つて釈尊の御子にも物にくるう子もあり、不孝の子もあ
り、孝養の子もあり、所謂法華經の行者眞実の釈尊の御子なり
と、釈迦・多宝分身三千三百万億那由他の世界に充滿せる諸仏の
御前にして孝不孝の子を定めをき給えり、父の業をつぐを以て子と
せり、三世の諸仏の業とは南無妙法蓮華經是なり、法師品に行

如来事にょらいと説いわけり云い云い、法華經ほけきょうは母ははなり釈尊しゃくそんは父ちちなり我等衆生われらしゆじやうは子こなり、無量義經むりやうぎきやうに云いく諸仏しよぶつ
の国王こくおうと是この經きやうの夫人ふじんと和合わごうして共ともに是この菩薩ぼさつの子こを生なみ給たまう文ぶん、
菩薩ぼさつとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、法師品ほうしほんに云いく在家ざいけ・出家行しゆつげ菩薩道ぼさつ云い。

一 非口所宣しよしき非心所測しよしきの事
所測しよしきは心法しんぽうなり、色心しきしんの二法にぽうを以もつて大海たいかいにして教化きやうげしたる衆生しゆじやうを
宣測せんしきするに非あらずと云いえり、末すえに至いたつては広導くわうだう諸群生しよぐんじやうと説いわかれたり云い。

一 不染世間法せけん如蓮華にょれんげ在水すい從地而涌出ゆじゆつの事
とは全ぜんく貪欲とんよく等らに染せんせられず、譬たとえば蓮華れんげの水みづの中なかより生なずれど
も淤泥おでいにそまざるが如ごとし、此この蓮華れんげと云いうは地涌じゆゆの菩薩ぼさつに譬たとえた
り、地ちとは法性ほつじやうの大地だいちなり所詮しよせん法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは蓮華れんげの泥水れんげに染せんま

ざるが如し、但だ唯一大事の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり、世間の

法とは国王・大臣より所領を給わり官位を給うとも夫には染せられず、謗法の供養を受けざるを以て不染世間法とは云うなり、所詮蓮華は水をはなれて生長せず水とは南無妙法蓮華經是なり、本化の菩薩は蓮華の如く過去久遠より已来本法所持の菩薩なり蓮華在水とは是なり、所詮此の水とは我等行者の信心なり、蓮華は本因・本果の

妙法なり信心の水に妙法蓮華は生長せり、地とは我等衆生の心地
なり涌出とは広宣流布の時一閻浮提の一切衆生法華經の行者と
なるべきを涌出とは云うなり云云。

一願仏為未來演說令開解の事 仰に云く此の文は弥勒菩薩等

末法當今の為に我從久遠來教化是等衆の言を演說令開解せしめ

給えと請じ奉る經文なり、此の請文に於て壽量品は顯れたり五

百塵点の久遠の法門是なり、開解とは教主釈尊の御内証に此の分

ををさえ給うを願くは開かしめ給え同じく一会の大衆の疑を

も解かしめ給え

と請するなり、此の開解の語を壽量品にして汝等當信解と誠め

給えり、若し開解し給わずんば大衆皆法華經に於て疑惑を生ず

べしと見給えり、疑を生ぜば三惡道に墮つべしと既に弥勒菩薩

申されたり、此の時壽量品顯れずんば即當墮惡道すべきなり

じゅりようほん 寿命品の ほうもん 法門 大切なるは是なり、さて此の開解の開に於て二あり、迹門の意は諸法を

じつそつ 実相の一理と会したり、さては諸法を じつそつ 実相と開きて見れば じゅつかい 十界 悉く 妙法実相の一理なりと開くを開仏智見と説けり、さて本門の 意は じゅつかいほんぬ 十界本有と開いて始覚のきづなを解きたり、此の重を開解と 申されたり仍つて演説の二字は

しやくそんかいげ 釈尊開解の たいしゅう 両字は大衆なり、此の演説とは じゅりようほん 寿命品の 久遠の事なり、終に じやくそんじゅりようほん 釈尊 寿命品を説かせ給いて一切大衆の疑惑を破り給えり云云。

ひによりようい ちえ 一 譬如良医智慧聰達の事 仰に云く良医とは ぎょうしやくそん 教主釈尊 ちえ 智慧

はちまんほうそつ とは 八万法蔵 じゅうたつ 十二部経なり 聡達とは さんぜ 三世了達なり 薬とは みょうほう 妙法の

りようやく 良薬なり、さて じゅりようほん 寿命品の 意は じゅつかいほんぬ 十界本有と談ぜりされば ちやくし 此の薬師 とは 一切衆生の事なり、 ちえ 智慧とは こと 万法己己の じじゅゆうほうしん 自受用報身の ふるまい 振舞な

りそつだつ 聡達とは自在自在にじざいじざい 振舞うをふるまい 聡達とは云うなり、所詮しよせん 末法まつぽう 当今とうこん の為じゆりようほん の寿量品

なればほけきよう 法華經ぽうぎやうじや の行者ぎやうじや の上の事なり、此の智慧ちえ とは南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきよう なり、聡達そつだつ とは本有無作三身ほんぬむささんじん なりと云う事なり、元品がんほん の無明むみょう の大りようやく 良藥りようやく は南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきよう なり、智ち とは一切衆生いっさいしゆじよう の力りき なり、慧ゑ とは一切衆生いっさいしゆじよう の言語音声ごんごおんじよう なり、故ゆえ に偈頌げじゆ に云く我智力にょぼ 如是にょぼ 慧光照無量むりよう と云えり云云。

一 一念信解の事 仰に云く此の經文は一念三千の宝珠を納めた

る函なり此れは現在の四信の初の一念信解なり、さて滅後の五品

の初の十心具足初随喜品も一念三千の宝を積みたる函なり、

法華經の骨髓・末法に於て法華經の行者の修行の相貌分明なり、

所詮信と随喜とは心同じなり随喜するは信心なり信心するは随喜

なり一念三千

の法門は信心随喜の函に納りたり、又此の函とは所謂南無

妙法蓮華經是なり又此の函は我等が一心なり此の一心は万法の總

体なり總体は題目の五字なり、一念三千と云うが如く一心三千も

あり釈に云く介爾も心有れば即ち

三千を具すと、又宝函とは我等が色心の二法なり。本・迹兩門・

生死の二法・止觀の二法なり所詮信心の函に入れたる南無妙法蓮

華經の函なり云云。

一見もんぼうしんじゆ仏ぶつ聞もん法ぽう信しん受じゆ教きやう誨ゑの事こと 仰おほに云いく此この經きやう文ぶんは一念いちねん隨ずい喜ぎの人は

五十ごじゆの功く徳とくを備そなうべし、然しかる間ま見けん仏ぶつ聞もん法ぽうの功く徳とくを具ぐ足そくせり、此この

五十ごじゆ展てん轉てんの五十ごじゆ人の功く徳とくを隨ずい喜ぎ功く徳とく品ひんには説せつかれたり、仍よつて世せ世せ

・生生じじゆの間ま見けん仏ぶつ聞もん法ぽうの功く徳とくを備そなえたり、所しよ詮せん末まつ法ぽうに入いつては仏ぶつを見

るとは壽じゆ量りやう品ひんの積じやく尊そん・法ぽうを聞もんくとは南な無む妙みやう法ぽう蓮れん華げき經きやうなり、教きやう誨ゑと

は

日にち蓮れん等たうの類るいい教きやう化けする所しよの諸しよ宗しゆ無む得とく道だうの教きやう誨ゑなり、信しん受じゆするは

法ぽう華げき經きやうの行ぎやう者じやなり、所しよ詮せん・壽じゆ量りやう開かい顯けんの眼まなこの顯あわ

無む作さの三さん身しんなり、開かい法ぽうは万ま法ぽう己こ己この音おん声じやうなり、信しん受じゆ教きやう範はんは本ほん有ぬ

隨ずい緣えん真しん如にょの振ふる舞まいなり、是これ即すなち

色しき心しんの二に法ぽうなり、見けん聞もんとは色しき法ぽうなり、信しん受じゆは信しん心じん領りやう納なうなれば心しん法ぽう

なり、所しよ謂い色しき心しんの二に法ぽうに備なえたる南な無む妙みやう法ぽう蓮れん華げき經きやう是こなりニ云いふ。

一若また復ある有ひと人以しつ七ぽう宝ぼう滿まん是人しよ所しよ得とく其こ福ふく最さい多たの事こと 仰おほに云いく此この

きょうもん 経文は七宝を以て三千大千世界に満てて四聖を供養せんよりは
ほげきょう 法華經の一偈を受持し奉らんにはをとれりと説かれたり、
てんだいだいし 天台大師は生養成栄の四の義を以て、
ほげきょう 法華經の功徳を釈し給えり、所詮末法に入つては題目の五字即ち
これ 是なり、此の妙法蓮華經の五字は万法能生の父母なり、生養成栄
またかくのごとく も亦復是くの如きなり、仍て釈には法を以つて本と為すと釈せり、
さんぜじゅつぽう 三世十方の諸仏は、妙法

蓮華經を以て父母とし給えり、此の故に四聖を供養するよりも

法華經を持つは勝れたり、七宝は世間の財宝なり、四聖は滅に歸す

る仏・菩薩羅漢なり、さて妙法の功德は一得永不失なれば朽失せ

ざる功德なり、此の故に勝れたり云云。

一 妙音菩薩の事 仰に云く妙音菩薩とは、十界の語言音声

なり、此の音声悉く慈悲なり、菩薩とは是れなり。

一 爾時無尽意菩薩の事 仰に云く此の菩薩は空仮中の三諦な

り、意の一字には一切の法門を撰得するなり意と云うは中道の事

なり無は空諦なり尽とは仮諦なり、所謂意と云うは南無

妙法蓮華經なり、一切諸經の意三世の諸仏の題目の五字なり所詮

法華の行者は信心を以て意とせり云云。

一 觀音妙智力の事 仰に云く妙とは不思議なり、智とは

隨緣真如の智力なり、森羅三千の自受用智なり、觀音は円觀なり、

えんかん 円観とは一念三千なり、観音とは法華の異名なり、観音と法華とは
がんもく 眼目の異名と釈する間・法華經の異名なり、観とは円観・音は仏機
なり、仍つて観音の二字は人法一体なり、所謂一心三觀・一念三千
是なり云云。

一 自在之業の事 仰に云く此の自在之業とは自受用報身の智

力なり、森羅三千の諸法作業をさして云うなり、其の所作のまま

法華經の意は不思議の自在之業なりと説けり、此の自在之業の本

は南無妙法蓮華經是なり云云。

一 妙法蓮華經陀羅尼の事 仰に云く妙法蓮華經陀羅尼とは

正直捨方便・但説無上道なり、五字は体なり陀羅尼は用なり妙法

の五字は我等が色心なり、陀羅尼は色心の作用なり、所詮陀羅尼と

は呪なり、妙法蓮華經を以て煩惱即菩提・生死即涅槃と呪いたるな

り、日蓮等の類い南無妙法蓮華經を受持するを以て呪とは云うな

り、
若^に有^{やく}
有^う

能持のうじ即持ぶつしん仏身ぶつしんとまじないたるなり、釈いわに云く陀羅尼だらにとは諸仏しよぶつの密号と判しよせんぜり、所詮しよせん法華折伏ほつげしやくぶく・破権門理はこんもんりの義遮い惡持善いの義なり云云。

一六万八千人の事

仰いに云く六いとは六根ろくこんなり、万いとは六根ろくこんに

具とこわる処ほんのうの煩惱ぼんのうなり八いとは八苦ぼんのうの煩惱ぼんのうなり千いとは八苦ぼんのうに具足ぐそくする

煩惱ぼんのうなり、是これ即すなわち法華經ほけきよに値あい奉たてまつりて六万八千の功德くどくの法門ほうもんと

顯あらわるるなり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきよと唱となえ奉たてまつる外たてまつに六

万八千の功德くどくの法門ほうもん之これ無ほきなり云云。

一妙莊嚴王みようそごんの事 仰いに云く邪見じゃけん即正てほんの手本てほんなり、所詮しよせん

森羅三千しんらさんぜんの万法まんぽう・妙みよを以もつて莊嚴そごんしたる王わうなり妙みよとは称歎しょうたんの語ことばなり

莊嚴そごんとは色法しきぽうなり王わうとは心法しんぽうなり諾法だくぽうの色心しきしんを不思議ふしぎとほめたり、

然しかれば、妙莊嚴王みようそごんの言こと・三千さんぜんの諸法しよほう・三諦さんたい法性ほつしよの当位たういなり、所詮しよせん

日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきよを以もつて色心しきしんを莊嚴そごんしたり、此この莊嚴そごんと

は別あしてかざり立たてたるには非あらず当位たうい即妙そごんの莊嚴そごんなり、煩惱ぼんのう即菩提ぼだい

生死即涅槃是なり云云。

一華嚴・大日觀經等の凡夫の得道の事 仰に云く彼等の衆皆各

各其の経經の得道に似たれども眞實には法華の得道なり、所謂三

五下種の輩なり經に云く始見我身聞我所説文、妙樂大師云く脱

は現に在りと雖も具に本種を騰ぐと云えり本種と云うは南無

妙法蓮華經是なり云云。

一題目の五字を以て下種の証文と為すべき事 仰に云く經に

云く教無量菩薩畢責任一乘文、妙樂大師の云く余教を以て程と

為さず文、無量の菩薩とは日本国の一切衆生を菩薩と開会して

題目を教えたり、畢竟とは題目の五字に畢竟するなり住一乗とは

乘此宝乘直至道場是なり文、下種とはたねを下すなり種子とは

成仏の種の事な

り、上の経文に教無量菩薩の教の一字は下種の証文なり教とは

題目だいもくを授さずくる時の事ことなり、權教ごんきょう無得道とくどう・法華得道ほっけとくどうと教あうるを下種げしゆ
とは云いうなり、末法まっぼうに入いつて此こゝの經文きょうもんを出いださん人は有ある可べから
ざるなり慥たしかたつちゆうそじじゆうに塔中相承たつちゆうそじじゆうの秘文ひぶんなり下種げしゆの証文しゅうもん秘ひす可べし云云。

一題目の五字末法に限つて持つ可きの事

仰に云く経に云く、

悪世末法時能持是經者文、此の經とは題目の五字なり、能の一字に

心を留めて之れを案ずべし云云、末代悪世・日本国の一切衆生に

持てと云う經文なり云云。

一天台云く是我弟子応弘我法の事 仰に云く我が弟子とは

上行菩薩なり我が法とは南無妙法蓮華經なり、權教乃至始覺等

は隨他意なれば他の法なり、さて此の題目の五字は五百塵点より

已來、証得し給える法体なり故に我が法と釈せり、天台云く此の

妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり、三世の如來の証得し給える所

とは是れなり。

一色心を心法と云う事 仰に云く玄の十に云く請を受けて説

く時只だ是れ教の意を説く教意は是れ仏意なり仏意は即ち是れ仏

智なり仏智至つて深し是の故に三止四請す此くの如きの艱難・余經

に比するに余経は則ち易し云云、此の釈の意分明なり教意と仏意
と仏智とは何れも同じ事なり、教は二十八品なり意は題目の五
なり惣じて仏意とは法華經の異名なり、法華經を以て一切經の心
法とせり又題目の五字を以て一代説教・本・迹二門の神とせり、經
に云く妙法蓮華經如来寿量品是なり、此の題目の五字を以て三世
の諸仏の命根とせりさて諸經の神
法華經なりと云う証文は妙法蓮華經方便品と題したる是なり云
云。

一 無作の応身我等凡夫也と云う事 仰に云く釈に云く凡夫も亦
三身の本を得たりと云云、此の本の字は応身の事なりされば
本地無作本覺の体は無作の応身を以て本とせり仍つて我等凡夫な
り、応身は物に応う身なり其の上寿量品の題目を唱え出し奉るは
眞実に応身如来の慈悲なり云云。

一 諸河無鹹の事

仰に云く此無鹹の事をば諸教無得道に譬え

たり大海のしをはゆきをば法華經の成仏得道に譬えたり、又諸經

に一念三千の法門無きは、諸河にうしをの味無きが如く死人の

如し、法華經に一念三千の法門

有るはうしをの大海にあるが如く生きたる人の如し、法華經を浅く信ずるはあわのうしをの如し、深く信ずるは、海水の如し、あわはきえやすし、海水は消えざるなり、如説修行最も以て大切なり、然りと雖も、諸經の大河の極深なるも、大海のあわのしをの味をば具足せず、權教の仏は法華經の理即の凡夫には百千万倍劣るなり云云。

一 妙樂大師の釈に末法之初冥利不無の釈の事 仰に云く此の

釈の心は末法に於て冥の利益迹化の衆あるべしと云う事なり、此の釈は藥王品の此經即為閻浮提人病之良藥若人有病得聞是經病即消滅不老不死云云、此の經文の意を底に含めて釈せり、妙樂云く然るに後・五百は、且らく一往に従う、末法の初冥利無きにあらず、

且く大教の流行す可き時に拠る、故に五百と云う文、仍つて本化の

菩薩は顯の利益迹化は冥の利益なるべし云云。

一 爾前經瓦礫国の事

仰に云く法華經の第三に云く、如從

飢国来忽遇大王・と云云、六の卷に云く我此土安穩天人常充滿我

浄土不毀云云、此の両品の文の意は權教は悉く瓦礫の旅の国な

り、あやまりて本国と思いて都と思わん事迷の故なり、一往四十二

年住したる国なれば衆生・皆本国と思えり、本国は此の法華經な

り、

信解品に云く遇向本国と、三五の下種の所を指して本国とも浄土と

も大王・とも云うなり、下種の心地即ち受持信解の国なり云云。

一 無明悪酒の事

仰に云く無明の悪酒に酔うと云う事は弘法

・慈覚・智証法然等の人人なり、無明の悪酒と云う証文は勸持品に

云く、悪鬼入其身是なり、悪鬼と悪酒とは同じ事なり悪鬼の鬼は

第六天の魔王の事なり悪酒とは無明なり無明即魔王魔王即無明な

り、其身の身とは日本にほんこく国の謗ほう法ほうの一切いっさい衆生しゆじやうなり、入ると吞むとは
同じ事ななり、此この悪鬼あくき入る人は阿鼻あびに入る、さて法華ほけきやう經きやうの行者ぎやうじやは
入にゆうぶつちけん仏ぶつ知見ちけん道故どうこと見えて仏道ぶつどうに入る得入とくにゆうむじやうどう無上道むじやうどうとも説け

り、相構え相構えて無明の悪酒を恐るべきなりニ云云。

一日蓮己証の事

仰に云く寿量品の南無妙法蓮華經是れな

り、地涌千界の出現末代の当世の別付属の妙法蓮華經の五字を一

閻浮提の一切衆生に取次ぎ給うべき仏勅使の上行菩薩なり云云、

取次とは取るとは釈尊より上行菩薩の手へ取り給うさて上行菩薩

又末法当今の衆生に取次ぎ給えり是を取次ぐとは云うなり、広く

は末法万年

までの取次なり、是を無令断絶とは説かれたり、又結要の五字と

も申すなり云云、上行菩薩取次の秘法は所謂南無妙法蓮華經なり

云云。

一釈尊の持言秘法の事

仰に云く持言の秘法の經文とは

寿量品に云く、每自作是念の文是なり、毎の字は三世常住なり、

是念の念とは、わすれ給わずして内証に具足し給えり故に持言な

り、秘法ひほうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう是これなり秘す可し秘す可しべ云云。

一日蓮門家の大事だいじの事

仰いわに云く此の門家の大事だいじは涌出品ゆじゅつほんの

前三後三ぜんさんごさんの釈なくなり、此の釈なく無くんば本化ほんげ・迹化しやくけの不同ふどう・像法付属ぞうほうふぞく・

末法付属まつほうふぞく・迹門しやくもん・本門等ほんもんの起尽きじん之れ有る可べからず、既すでに止善男子ぜんなんしの

止の一字いちじは日蓮門家の大事だいじなり秘す可べし秘す可べし、総じて止の一

字まさは正しく日蓮門家の明鏡めいきやうの中の明鏡めいきやうなり口外くわいも詮無し、

上行菩薩等じやうぎやうぼさつを除いては総じて余の菩薩ぼさつをば悉こつとく止の一字いちじを以て成

敗せり云云。

一日蓮いちれんが弟子臆病でしおくびやうにては叶かなう可べからざる事 仰いわに云く此の意

は問答対論もんどうたいろんの時は爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそんをも用べう可べからざるなり、

此これは臆病おくびやうにては釈尊しやくそんを用もちいまじきかなんと思おもうべき故ゆゑなり、

釈尊しやくそんをさえ用べう可べからず何いかに況いわんやや其そのの以下したの等覺とうかくの菩薩ぼさつをやまし

て謗法ぼうほうの人人ひとびとに於おいておや、所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの大音声おんじやうを出いだし

て諸經・諸宗を対治すべし、巧於難問答其心無所畏とは是なり云云。

一妙法蓮華經の五字を眼と云う事 仰に云く法華第四に云く、
仏滅度後能解其義是諸天人世間之眼と云云、

此の經文の意は、法華經は人天・二乘・菩薩・仏の眼目なり、此の眼目を弘むるは日蓮一人なり、此の眼には五眼あり、所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の眼をくじりて別に眼を入れたる人あり、所謂弘法大師是なり、法華經の一念三千即身成仏諸仏の開眼を止めて、真言經にありと云えり、是れ豈法華經の眼を抽れる人に非ず

や、又此の眼をとしふさぐ人あり所謂法然上人是れなり、捨閉の閉の文字は、閉眼の義に非ずや、所詮能弘の人に約しては、日蓮等の類い世間之眼なり、所弘の法に随えば、此の大乗經典は、是れ諸仏の眼なり、所詮眼の一字は一念三千の法門なり、六万九千三百八十四字を此の眼の一字に納めたり、此の眼の字顕われて見れば煩惱即菩提・生死即涅槃なり、今末法に入つて、眼とは所謂未會有の大曼荼羅なり、此の

御本尊より外には眼目無きなりニ云。

一法華經の行者に水火の行者の事 仰に云く總じて此の經を信じ奉る人に水火の不同あり、其の故は火の如きの行者は多く水の如き行者はまれなり、火の如しとは此の經のいわれをききて火炎のもえ立つが如く貴く殊勝に思いて信ずれどもやがて消失す、此れは当座は大信心と見えたれども其の信心の灯きゆる事やすしさて水の如きの行者と申すは水は昼夜不退に流るるなり少しもやむ事なし、其の如く法華經を信ずるを水の行者とは云うなり云。

一女人と妙と釈尊と一体の事 仰に云く女人は子を出生す、此の出生の子又子を出生す此くの如く展転して無数の子を出生せり、此の出生の子に善子もあり悪子もあり端嚴美麗の子もあり醜陋の子もあり長のひくき子もあり大なる子もあり男子もあり

・女子もあり云云、所詮しよせん・妙の一字より万法は出生しゆつせり地獄じじくもあり・餓鬼がき

もあり・乃至ないし仏界ぶつがいもあり・權教ごんきやうもあり・実教じつきやうもあり・善もあり悪も

あり・諸法しよほうを出生しゆつせり云云、又釈迦しゃか一仏いちぶつの御身おんみより一切いっさいの仏・

菩薩ぼさつ等悉ことごとく出生しゆつせり、阿弥陀あみだ・薬師やくし・大日だいにち等は悉ことごとく釈尊しゃくそんの一月よ

り万水ばんすいに浮ぶ所の万影ばんえいなり、然しからば

女人にょにんと妙しやくそんと釈尊しやくそんとの三さん全くぶどう不同ふどう無みきなり、妙樂みょうらく大師だいしの云いわく妙そく即そく三千さんぜん・三千さんぜん即そく法ほふ云云ふん、提婆品だいばに云いわく有あ二に一いつ宝殊ほうじゆ一いつ価直けち二に三千さんぜん大千だいせん世界せかい一いつ是これなり云云。

一置かしかく不呵責ふかの文もんの事こと 仰いわに云いく此きやうもんの經文おに於あては日蓮にちれん等たぐいの類たぐい

のおそるべき文字もんじ一字いち之これ有あり、若もし此この文字もんじを恐おそれざれば縦たい

当座とうざは事ことなしとも未み来らい無間むげんの業ごうたるべし、然しからば無間むげん地獄じごくへ引ひき入い

る獄卒ごくそつなるべし夫それは置おの一字いち是これなり云云、此この置おの一字いちは獄卒ごくそつ

なるべし謗法ほうぼう不信ふしんの失とがを見みながら聞ききながら云いわずして置おかんは

必むず無間むげん

地獄じごくへ墮だ在ざす可べし、仍よつて置おの一字いち・獄卒ごくそつ・阿防羅刹あぼうらせつなるべし尤もも以もつ

て恐おそる可べきは置おの一字いちなり云云、所詮しよせん此この經文きやうもんの内うちに獄卒ごくそつの一字いち

を恐おそるべきなり云云、此この獄卒ごくそつの一字いちを深こく之これを思おもう可べし、日蓮にちれんは

此この字あを恐おそる故ゆえに建長けんちやう五年ごねんより今いま弘安こうあん年中ちゆうねんまで在ざ在所ざいしよしよ所しよにて申もうし

はりしなりただひとえ只偏ただひとえに此この獄卒ごくそつを脱まぬかれんが為なり、法華經ほけきょうには
若人にやくにんふしん不信ふしんとも

生疑うたがいふしん不信者ふしんとも説とき給たまえり、法華經ほけきょうの文文ふんぶん・句句くくをひらき捏槃經ねつぱんきやう

の文文ふんぶん・句句くくをひらきたりとも置いておいていわずんば叶かなう可べからざるは

此この置おの一字いちじより外ぐわいに獄卒ごくそつは無なきなり云云。

一異念いねん無なく靈山りやうざん淨土じやうとへ參まる可べき事こと 仰おほいに云いく異念いねんとは不信ふしんの

事ことなり若もし我が心こころなりとも不信ふしんの意い出来しゅつたいせば忽たちまちに信心しんじんに住すべし、

所詮しよせん不信ふしんの心こころをば師しとなすべからず信心しんじんの心こころを師匠ししやうとすべし淨心じやうしん

信敬しんけいに法華經ほけきょうを修行しゆぎやうし奉たてまるべきなり、されば能持のうじ二是經にぜきやう一能説にんげつ二

此經こけい一と説ときて能のうの字じを説たま給たまえり靈山りやうざんここにあり四土しと一念一念皆みな

常寂光じやうじやくかうとは是これなり云云。

一不可失ふか本心ほんしんの事こと 仰おほいに云いく此この本心ほんしんと云いうは法華經ほけきょうの信心しんじんの

事ことなり、失とがと申もうすは謗法ぼうぽうの人ひとにすかされて法華經ほけきょうを捨すつる心の

出来しゅつたいするを云いうなり、されば天台てんだいだいし大師だいし云いく若もし悪友あくゆうに値あえば則すなわち
本心ほんしんを失うしなうと云いふ、此この釈あくゆうに悪友あくゆうとは謗法ぼうほうの人の事ことなり、本心ほんしんとは
法華ほけきよ経きょうなり、法華ほけきよ経きょうを本心ほんしんと云いふ意いは諸法しよほう実相じつそうの御經ごきょうなれば十界じゅつかい
の衆生しゅじやうの心法しんぽうを法華ほけきよ経きょうとは申もうすなり、而しかるに此この本心ほんしんを引きかえ
て迷妄めいもうの法ぽうに着ちやくするが故ゆえに本心ほんしんを失うしなうなり、此この本心ほんしんに

於ては三五の下種の法門なり、若し善友に値う時んば失う所の本心を忽に見得するなり、所謂迦葉・舍利弗等是なり、善友とは釈迦如来・悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門是なり、所詮末法に入つて本心とは日蓮弘通の南無妙法蓮華經是なり、悪友とは法然・弘法・慈覚・智証等是なり、若し此の題目の本心を失せんに於ては又三五塵点を経べきなり、但、如是展転至無數劫なるべし、失とは無明の酒に酔いたる事なり仍て本心を失うと云うなり、此の酔をさますとは権教を捨てしむるを云うなり云云。

一天台大師を魔王障礙せし事

仰に云く此の事は随分の秘蔵

なり、其の故は天台大師・一心三觀・一念三千の觀法を説き顯さんとし給いしかば父母左右の膝に住して悩まし奉り障礙し給いしなり、是れ即ち第六天の魔王が父母の形を現じて障礙せしなり、終に魔王に障礙せられ給わずして摩訶止觀の法門起れり、何に況や

いまにちれん ひろ 今日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は三世の諸仏の成道の師・十方
さった とくどう ししやう 薩 の得道の師匠たり、其の上正像二千年の仏法は爾前・迹門
なれば、魔王自身・障礙をなさずともなるべし、今末法の時は、
しよく 所弘の法は、法華經本門の事の一念三千の南無妙法蓮華經なり、
のうぐ のうぐ どうし ほんげじゆ ぼさつ 能弘の導師は本化地涌の大菩薩にてましますべし、然る間魔王自身
下りて障礙せずんば叶う可からざるなり、仍つて自身下りたる事
ぶんみよう 分明なり、所謂道隆・良觀最明寺等是なり、然りと雖も諸天善神
にちれん 等は日蓮に力を合せ給う故に竜口までもかちぬ、其の外の大難を
まぬか も脱れたり、今は魔王もこりてや候うらん、日蓮死去
の後は殘党ども軍を起すべきか、故に夫れも落居は叶う可からざ
るなり、其の故は第六天の魔王の眷屬日本国に四十九億九万四千
八百二十八人なりしが今は日蓮に降参したる事多分なり、經に
いわ 云く悪鬼入其身とは是なり、此の合戦の起りも、所詮南無

妙法蓮華經是なり、魔王に於て体の魔王・用の魔王あり、体の魔王

とは法性同共の

魔王なり妙法の法是なり、用の魔王とは此れより出生する

第六天の魔王なり、用の魔王は障礙をなす、然れども体用同共の

諸法実相の一理なり、唯一門の智慧の門に入り、無明法性一体

なるべきなり云云、所謂摩訶止觀の

だいじ 大事の法門是なり、法華經の一代説教に勝れたるは此の故なり、

いちねんさんぜん 一念三千とは是なり、法華經第三に云く魔及魔民皆護佛法云云。

ほけきょうごくり 一法華經極理の事 仰に云く迹門には二乗作仏本門には久遠

じつじょう 実成此をさして極理と云うなり、但し是も未だ極理にたらず、

しやくもん 迹門にして極理の文は諸仏智慧甚深無量の文是れなり、其の故は

きわ 此の文を受けて文句の三に云く豎に如理の底に徹し横に法界の辺を

しやく 窮むと釈せり、さて本門の極理と云うは如来秘密神通之力の文

これ 是なり、

しよせん 所詮日蓮が意に云く法華經の極理とは南無妙法蓮華經是なり、

いっさい 一切の功德法門・釈尊の因行果徳の二法・三世十方の諸仏の修因

かんか 感果・法華經の文・句句の功德を取り聚めて此の南無妙法蓮華經

たま と成し給えり、爰を以て釈に云く惣じて一經を結するに唯だ四の

そ 其の枢柄を撮つて之を授与す云云、上行菩薩に授与し給う題目

の外に法華經の極理は無きなり云云。

一 妙法蓮華經五字の蔵の事

仰に云く此の意は妙法の五字の中

には一念三千の宝珠あり五字を蔵と定む、

天台大師玄義の一に判

ぜり、所謂此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり云云、

法華經の

第四に云く是れ法華經蔵と云云、

妙華嚴法阿含蓮方等華般若經涅槃

又云く妙涅槃法般若蓮方等華阿含經華嚴、已上妙法蓮華經の五字

には十界三千の宝珠あり、三世の諸仏は此の五字の蔵の中より、或

は華嚴の宝を取り出だし、或は阿含方等般若の宝を取り出だし

種種説法し給えり、加之論師・人師等の疏釈も悉く此の五字の

中より取り出だして一切衆生に与え給えり、此等は皆五字の中よ

り取り出だし給えども妙法蓮華經の袋をば持ち給わず、所詮五字

は上行菩薩の付属にして更に迹化の菩薩諸論師いろはざる題目な

り、仍つて上行所伝の南無妙法蓮華經は蔵なり、金剛不壞の袋な

り此の袋をそのまま日本にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうには与え給たまえり、信心しんじんを以て此の財宝を受取るべきなり、今末法まっぽうに入つては日蓮等にちれんの類たぐい受取る所の如意宝珠にょいほうじゆなり云云。

一 我等衆生の成仏は打かためたる成仏と云う証文の事 仰に
云く經に云く無上宝聚不求自得の文是なり、我等凡夫即極とはた
と打かためたる成仏なり所謂不求自得する所の南無妙法蓮華經
なればなり云云。

一 爾前法華の能くらべの事 仰に云く爾前の經にして十悪・五逆等
の成仏の能なし、今法華經に十界皆成・分明なり、爾前の經の無
能と云う証文とは方便品に云く但似仮名字引導於衆生の文是なり、
さて法華經は能と云う証文は諸法実相の文是なり、今末法に
入つて第一の能たる南無妙法蓮華經是なり云云。

一 授職の法体の事 仰に云く此の文は唯仏与仏の秘文なり輒く云
う可からざる法門なり、十界三千の諸法を一言を以て授職する所
の秘文なり、其の文とは神力品に云く皆於此經宣示顯説の文是なり、
此の五字即十界同時に授職する所の秘文なり十界己己の当体

ほんぬみよつほんれんげきよつ
本有妙法蓮華經なりと授職したる秘文なり云云。

まつだいゆずりじょう
一末代讓 状の事 仰に云く末代とは末法五百年なり、讓 状とは
ゆずりじょう

てつぎ しよつもん
手継の証文たる南無妙法蓮華經是なり此れを讓るに二義之れ有
こ

り、一には跡をゆずり二には宝をゆずるなり、一に跡を讓ると云う
あと

しやかによらい あと ほげきよつ ぎようじや
は釈迦如来の跡を法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く
しよつもん

によがとうむい これ
如我等無異の文是なり、次に財宝をゆずると云うは釈尊の智慧
しやくそん ちえ

かいとく
戒徳を

ほげきよつ げきよつじや
法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く無上宝聚不求自得
むじょうほつじゆふくじとく

これ
の文是なりと云云、さて此の題目の五字は讓 状なり云云。
ゆずりじょう

ほんぬしかん
一本有止觀と云う事 仰に云く本有の止觀と云うは大通を以て
だいこつ

なら
習うなり、久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏を次の
だいこつ ちしよつぶつ しやくそん

ごと ぶつぼう
如く仏法僧の三宝と習うなり、此の故に大通は本有の止觀なれば
ほんぬ しかん

すなわ さんぜ じよぶつ
即ち三世の諸仏の師範と定めたり、仍つて大通仏を法と習う、此の
だいこつ

法は妙法蓮華經是なり、仍つて証文に云く大通智勝仏十劫坐
道場の文是なり十劫は即ち十界なり云云。
一入末法四弘誓願の事 仰に云く四弘誓願をば一文に口伝せ
り、其の一文とは所謂神力品に云く於我滅度

後おつじゆ心受持斯經是人於ぶつどう仏道決定無有疑むつぎと云云、此の經文きやうもんは法華經ほけきやうの序品じよほんより始はじめて四弘誓願せいがんの法門ほうもんを説き終りてさて上行菩薩じやうぎやうぼさつに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを付屬ふぞくし給たまう時とき・妙法みやうほうの五字ごじに四弘誓願せいがんを結びて結句けつこに説かせ給たまえり滅後めつごとは末法まうほうの始はじめの五百年ごひゃくねんなり、衆生無辺誓願度じゆじやうむへんせいがんどと云うは是人の人の字じなり、誓願せいがんは地涌じゆの本化ほんげの上行菩薩じやうぎやうぼさつの誓願せいがんに入らん

と此これ即すなわち仏道ぶつどうの二字ど度脱だつなり、煩惱無辺ほんのうむへんなれども煩惱即菩提ほんのうそくぼだい・生死しやうじそく即涅槃ねはんと体達たいだつす、仏道ぶつどうに入いつては煩惱更ほんのうになし受持斯經じゆじの所ところにほうもん法門無尽誓願ほうもんむじんせいがん知分ふんみやう明あり無上菩提誓願むじやうぼだいせいがん証しゆと云うは是人於ぜにんのう仏道ぶつどうはけつじやう決定無有疑けつじやうむつぎと定めたる四弘誓願せいがん分明ふんみやうなり、教主きやうしゆ釈尊じやくそん・末法まうほうに入いつて四弘誓願せいがんも此の文ぶんなり、上行菩薩じやうぎやうぼさつの四弘誓願せいがんも此の文ぶんなり深くこれこれを思案しあんす可べし云云。

一四弘誓願しぐせいがん・心報如理しんぽうにりと云う事 仰おほに云いく衆生無辺誓願度じゆじやうむへんせいがんどは心身おうじんな

り、煩惱無辺誓願断は報身なり、法門無尽誓願知は智法身なり、
無上菩提誓願証は理法身なり、所詮誓願と云うは題目弘通の誓願
なり、釈に云く彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なりと是なり
云云。

一本來の四弘の事

仰に云く諸法の当體本來四弘なり、

其の故は衆生と云うは法界なり、所詮法界に理智慈悲の三を具足
せり、応報法の三身諸法の自体なり、無作の応身を以て衆生無辺
誓願度と云うなり、無作の報身には智徳断徳の一徳を備えたり、
煩惱無辺誓願断を以て本有の断徳とは定めたり、法門無尽誓願知
を以て本有の

智徳とす、無上菩提誓願証を以て無作の法身と云うなり、所詮
四弘誓願の中には衆生無辺誓願度を以て肝要とするなり、今日蓮
等の類いは南無妙法蓮華經を以て衆生を度する此より外は所詮な

きなり、速成就そくじょうじゆうぶつしん此これなり云云、所詮しよせん四弘誓願しごせいがんは一念三千いちねんさんぜんなり、
さて四弘しごくの弘くとは何物なにものぞ、所謂いわゆる上行じやうぎやう所伝しよてんの南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうなり、
釈いわに云く
四弘しごく能所混のうじよみんすと云云、此この釈しやくは止觀しつかんに前三教ぜんさんけうを釈しやくせり、能と云う
は如來にやらいなり所しよとは衆生しゆじやうなり能所各別かくべつするは權教けんきやうの故ゆゑなり、法華經ほけきやう
の心こころは能所一體みんなり混みすと云うは權教けんきやうの心こころは機法きほふ共に一同いどうなれば
能所混のうじよみんすと云うなりあえて能所一同じゆいどうして成仏じやうぶつする所しよを混みすと云う
には非あらざるなり、今末法まごほうに入いつて法華經ほけきやうの行者ぎやうじは四弘しごく能所感応かんのうの
即身成仏そくしんじやうぶつの四弘しごくなり云云。

御講聞書
終

駿河するがの国蒲原かんばらの庄・四十九院の供僧等謹んで申す。

寺務・二位律師嚴譽りっしこんよの為に日興にっくう並に日持・承賢・賢秀等・所学ほっけしゆうの法華宗を以て外道げどう大邪教じやくきようと称し往古の住坊並に田畠でんぱたを奪い取り寺内を追い出さしむる謂れ無き子細しさいの事。

右釈迦しゃかいちだい一代教の中には天台てんだいを以て宗匠と為す、如来にょらい五十年の間は法華を以て真実しんじつと為す、是れ則ち諸仏しよぶつの本懐ほんかいなり抑亦多宝たほうの証誠じようせいなり、上一人より下万民ばんみんに至るまで帰敬きけい年旧ふり渴仰かつじう日に新なり。

而るに嚴譽こんよの状に云く「四十九院の内日蓮にちれんが弟子等居住せしむるの由・其の聞え有り、彼の党類とうるいぶつぼう佛法を学し乍ら外道げどうの教に同じ正見せいけんを改あらためて邪義じやくぎの旨むねに住せしむ以ての外しだいの次第しだいなり、大衆等たいしゆう評定ひやうじやうせ

しめ寺内に住せしむべからざるの由の所に候なりと云云。

茲に因つて日興等 忽に年来の住坊を追い出され已に御祈 便

宜の学道を失う、法華の正義を以て外道の邪教と称するは何の経

何れの論文ぞや、諸経多しと雖も未だ両眼に触れず法華の中に

諸経を破るの文之有りと雖も諸経の裏に法華を破るの文全く之

無し、所詮已今当の三説を以て教法の方便を破推するは更に日蓮

聖人の莠言に非ず皆是れ釈尊出世の金口なり。

爰に真言及び諸宗の人師等 大小乗の浅深を弁えず権実教の

雑乱を知らず、或は勝を以て劣と称し、或は権を以て実と号し

意樹に任せて砂草を造る、仍て愚癡の輩、短才の族、経経 顯然

の正説を伺わず 徒に師資相伝の口決を信じ秘密の法力を行ずと

雖も真実の驗証無し、天地之が為に妖孽を示し国土之が為に災難

多し、是れ併ら 仏法

の邪正を糺さず僧侶の賢愚を撰ばざる故なり、夫れ仏法は王法の
崇尊に依つて威を増し王法は仏法の擁護に依つて長久す、正法を学
ぶの僧を以て外道と称せらるるの条理豈然る可けんや外道か外道
に非ざるか早く嚴誉律師と召し合わせられ真偽を糺されんと欲
す。

且去る文応年中・師匠日蓮聖人・仏法の廃れたるを見・未来の災
を鑒み諸経の文を勘え一卷の書を造ると号す、異国の来難果して
以て符合し畢んぬ未萌を知るを聖と謂つ可きか、大覚世尊・靈山・
虚空・二処・三会・二門・八年の間三重の秘法を説き窮むと雖も仏滅
後二千二百二十余年の間・月氏の迦葉・阿難・竜樹・天親等の大
論師・漢土の天台・妙楽・日本の伝教大師等内には之を知ると雖も
外に之を伝えず第三の秘法今に残す所なり、是偏に末法鬪争の始
他国来難の刻・一閻浮提の中の大合戦起らんの時・国主此の法を

用いて兵乱ひょうらんに勝つ可きの秘術なり、經文きやうもん赫赫たり所説明明たり、
彼れと云い此れと云い国の為・世の為・尤も尋ね聞し食さるべき者
なり、仍よつて款状かんじやうを勒ろくして各言上件ごんじやうくだんの如し。

承賢

賢秀

弘安元年三月

日

日持

日興ひきう

九九 竜泉寺申状

弘安二年十月 五十八歳御代

作

849P

駿河するがの国・富士下方滝泉寺の大衆たいしゅう・越後房ほつ日弁びん・下野房ほつ日秀等謹
んで弁言べんごんす。

当寺院主代・平左近入道行智・条条の自科を塞ぎ遮らんが為に
不実の濫訴を致す謂れ無き事。

訴状に云く日秀・日弁・日蓮房の弟子と号し法華經より外の余經
或は真言の行人は皆以て今世後世叶う可からざるの由・之を申す
云云取意。

此の条は日弁等の本師日蓮聖人・去る正嘉以来の大彗星大地動
等を觀見し一切經を勘えて云く当時・日本国の体たらく権小に執
著し実經を失没せるの故に当に前代未有の二難を起すべし所謂
自界叛逆難・他国侵逼難なり、仍て治国の故を思い兼日彼の大
災難を対治せらる可きの由、去る文応年中・一卷の書を上表す
立正安国論と号す勘え申す所皆以て符合す既に金口の未来記に同
じ宛も声と響との如し、外書に云く「未萌を知るは聖人なり」内典
に

云く「ちじん智人は起を知り蛇は自ら蛇を知る」云云、之を以て之を思うに本師はほんし豈聖人なるかなきやうじゆ巧匠内に在り国宝外に求む可からず、外書に云く「りんじく隣国に聖人有るは敵国の憂なり」云云、内経に云く「しやうじん国に聖人有れば天必ず守護す」云云、外書に云く「世必ず聖智の君有り而して復賢明の臣有り」云云、此の本文を見るにしやうじん聖人・国に在るは

にほんこく日本国の大喜にして蒙古国の大憂なり諸竜をか驅りもよお催して敵舟を海に沈めほんしやく梵釈に仰せ付けて蒙王を召し取るべし、君既にけんじん賢人に在さばしやうじん豈聖人を用いずして徒に他国の逼を憂えん。

だいかく抑大覺世尊・遙に末法鬪争堅固の時をかんが鑒み此くの如きのだいなん大難をたいじ対治す可きの秘術を説き置かせらるるのきやうもん経文明明たり、然りと雖も如來のめつじ滅後二千二百二十余年の間・身毒・戸那・扶桑等・一閻浮提にやらいの内に未だ流布せず、随つて四依のかんが大士内に鑒みて説かず天台

傳でんぎ教ぎょう而のも演えんべんず時とき未なだらざらざるの故ゆゑなり、法ほけき華ぎ經きょうに云いく

「このこひやくさい
後の五百歳の中に

えんぶ

閻えんぶ浮ぶ提ていに広こう宣せん流る布ふすの云い云い、天台てんだい大師だいし云いく、後の五百歳ひやくごさい妙みょう樂らく云いく

「五ご五ご百ひやく歳さい傳でんぎ教ぎょう大師だいし云いく、代しろを語かたれば則すなはち像ざうの終しゆうり末まつの初しゆめ地ちを

尋たづぬれば唐たうの東とう・羯かの西せい・人にんを原もとぬれば則すなはち五ご濁じやくの生なま・鬪とう諍じやうの時とき云いく

云い、東とう勝しやう西せい負ふの明めい文ぶんなり。

しやうにん

法ほふ主しゆ聖せい人にん時ときを知しり国こくを知しり法ほふを知しり機きを知しり君きみの為ため臣しんの為ため神かみ

の為ため仏ぶつの為ため災さい難なんを対たい治じせらる可かきの由よし勸かんえ

申すと雖も御信用無きの上・剩さえ謗法人等の讒言に依つて聖人・
頭に疵を負い左手を打ち折らるる上・兩度まで遠流の責を蒙むり
門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・流罪・打擲・
擯出・罵詈等の大難勝げて計う可からず、茲に因つて大日本国・皆
法華經の大怨敵と成り万民悉く一闡提の人と為るの故に天神・
国を捨て地神・

所を辞し天下静ならざるの由・粗伝承するの間其の仁に非ずと雖
も愚案を顧みず言上せしむる所なり、外經に云く「奸人朝に在れ
ば賢者進まず」云云、内經に云く「法を壞る者を見て責めざる者は
仏法の中の怨なり」云云。

又風聞の如くんば高僧等を崛請して蒙古国を調伏す云云、其の
状を見聞するに去る元曆・承久の兩帝・叡山の座主・東寺・御室・
七大寺・園城寺等・檢校・長吏等の諸の真言師を請い向け内裏の紫

宸殿にして咒咀し奉る故源 右將軍並に故平右虎牙の日記なり、
此の法を修するの仁は敬つて之を行えば必ず身を滅し強いて之を
持てば定めて主

を失うなり、然れば則ち安德天皇は西海に沈没し叡山の明雲は流
矢に当り後鳥羽法皇は夷島に放ち捨てられ東寺・御室は自ら高山
に死し北嶺の座主は改易の恥辱に値う、現罰・眼に遮り後賢之を畏
る聖人山中の御悲みは是なり。

次ぎに阿弥陀経を以て例時の勤と為す可きの由の事、夫れ以み
れば花と月と水と火と時に依つて之を用ゆ必ずしも先例を追う可
からず、仏法又是くの如し時に随つて用捨す、其の上・汝等の執す
る所の四枚の阿弥陀経は四十余年未顕真實の小経なり、一閻浮提
第一の智者たる舍利弗尊者は多年の間・此の経を誦するも終に
成仏を遂げ

ず然る後、彼の經を抛ち、末に法華經に至つて華光如来と爲る、況や
未代悪世の愚人、南無阿彌陀仏の題目計りを唱えて順次往生を遂
ぐ可しや、故に仏之を誡めて言く法華經に云く、「正直に方便を捨て
但無上道を説く」と云云、教主釈尊正しく阿彌陀經を抛ちたまう云
云又涅槃經に云く、「如来は虚妄の言無しと雖も、若し衆生の虚妄の
説に因るを知れば」と云云、正しく阿彌陀念仏を以て虚妄と称する
文なり、法華經に云く、「但樂て大乘經典を受持し乃至余經

の一偈げをも受けざれ云云、妙楽みょうらく大師だいし云く「況かや彼の華嚴けこん但以たて称しょう比ひせん此この經きやうの法ほふを以もつて之これを化くわするに同おなじからず故ゆゑに乃至ないし不受ふじゆ余よ經きやう一げ偈げと云いふ云いふ、彼の華嚴けこん經きやうは寂滅じやくめつ道場どうじやうの說ほつ・法界ほっかい唯心じゆいの法門ほふもんなり、上本じゆうまんげは十三せかい世界みじん微塵ちゆうぼん品ちゆうぼん中ちゆうぼん品ちゆうぼんは四十九せかい萬まん八千ぱつせん偈げ・下本じゆうまんげは十萬じゆうまんげ偈げ四十八しじゆうはち品へん今現げんに一切いっさい經藏きやうざうを觀みるに唯ただ八十六はちじゅうろく十四じゅうし等の經きやうなり、其そのの

外ほつの方等ほうとう・般若はん若にや・大日だい經にちきやう・金剛こんこう・頂經ちやうきやう等とうの諸しよの顯密けんみつ・大乘だいじやう經等きやうとうを尚なほほけきよつ・法華ほふけ經きやうに對當たいとうし奉ほうりて仏ぶつ自じらみずか・或あるは末ま顯けん真しん實じつと云いふ・或あるは留りう難なん多たきとどなんが故ゆゑに・或あるは門もんを閉しじよ・或あるは抛なげて等とう云いふ、何なんに況いわんや阿あ彌み陀だ經きやうをあみだや、唯ただ大だい山さんと蟻ぎ岳がくとの高下こうげ・師し子し王わうと狐こ兔ととの力ちからなり。

今日こんにち秀等しゆとう專せんら彼等かれら小經せうきやうを抛なげち專せんら法華ほふけ經きやうを讀誦どくじゆし法界ほっかいに勸進こんじんして南無なむ妙法みやうほふ蓮華れんげ經きやうと唱なえ奉ほうる豈いかで殊しゆ忠ちゆうに非ひずや、此等こゝろの子細しさい御ご不審ふしんを相貽さういさば高僧こうそう等を召めいされ是ぜ非ひを決けつせらる可かきか、仏法ぶつほふの

優劣ゆうれつを糺明致す事は月氏がつし・漢土かんと日本の先例せんれいなり、今明時に當つて何ぞ三國の旧規きうきに背そむかんや。

訴状そじょうに云く今月二十一日数多あまたの人勢を催し弓箭たいを帶し院主分の御坊内に打ち入り下野坊は乗馬相具じようめあいぐし熱原の百姓・紀次郎男・点札たてふだを立て作毛を苅り取り日秀の住房ぼうに取り入れ畢んぬ云云「取意」。

此の条あとかた・跡形も無なき虚誕こたんなり日秀等は損亡そんもうせられし行者ぎやうじやなり不安堵あんどの上は誰の人か日秀等の点札たてふだを叙用じようようせしむ可べき將はた又また弱おうにやくなる土民どみんの族やから・日秀等に雇やい越こされんや、然らば弓箭たいを帶あくぎ・悪行あくぎようを企くわつるに於ては行智ぎ云く近隣ひとびとの人人争つて弓箭たいを奪あけ取り其の身に召し取ると云うが如ごとき子細しさいを申さざるや、矯飾きようじきの至り宜べしく賢察けんさつに足るべし。

日秀・日弁等は当寺代代の住侶じゆうろとして行法の薰修くんじゆうを積み天長地久てんぢちゆうの御祈ぎとうを致いたすの処ところに行智ぎは乍たちまちに当寺靈地の院主代に

補し寺家・三河房頼円並に少輔房・日禅・日秀・日弁等に行智より仰
せて、法華經に於ては不信用の法なり速に法華經の読誦を停止し
一向に阿弥陀經を読み念仏を申す可きの由の起請文を書けば安堵
す可きの旨下知せし

むるの間、頼円は下知げちに随したがつて起請きしょうを書いて安堵あんどせしむと雖も日禅等きしょうは起請きしょうを書かざるに依よつて所職しやくの住坊ぢゆうぼうを奪うばひ取るの時、日禅は即ち離散りさんせしめ畢おわんぬ、日秀・日弁は無頼むらいの身たるに依よつて所縁しよえんを相憑あいたのみ猶なほ寺中じぢゆうに寄宿きしやくせしむるの間、此こゝの四箇年しよげんねんの程、日秀等の所職しやくの住坊ぢゆうぼうを奪うばひ取り嚴重じゆうじゆうの御祈ぎとうを打ち止むるの余あり悪行あくぎやう猶なほ以もて飽あき足あらず為なるに法華ほけきやう經行者きやうぢやの跡あとを削けり謀案ぼうあんを構かまえて種しゆじゆ種しゆじゆの不實ふじつを申し付つくるの条、豈ざいせ在世ちやうだつの調達ちやうだつに非ひずや。

凡しづかみそ行智しづかみの所行しよぎやうは法華ほけきやう三昧さんまいの供僧くうそう・和泉房ほう蓮海れんかいを以もて法華ほけきやう經きやうを柿紙しづかみに作り紺形こんぎやうを彫うり堂舎だうしゃの修治しゆぢいを為なす、日弁にっぺんに御書ごしよ下げを給たまひ構かまえ置おく所しよの上うへ葺つく一いっ万まん・二に千せん寸すんの内うち八はち千せん寸すんを之これを私用しじんせしむ、下方まんどうの政所せいしよ代だいに勸すすめ去いぬる四月しがつ御神事ごじんじの最中もなかに法華ほけきやう經信心しんじんの行人ぎやうじん・四郎男しりやうおとこを刃傷にんじやうせしめ去いぬる八月はちがつ弥よ四郎坊男しりやうぼうおとこの頸くびを切きらしむ、日秀等にっしゆうに頸くびを刎はぬる事

を擬して此の中に書き入れ無智無才の盗人・兵部房静印より過料を
取り器量の仁と称して当寺の供僧に補せしめ、或は寺内の百姓等
を催し・鶉狩・狸殺・狼落の鹿を取りて別当の坊に於て之を食らい
ある。或は毒物を仏前の池に入れ若干の魚類を殺し村里に出して之を売
る、見聞の人・耳目を驚かさざるは莫し仏法破滅の基悲んで余り
有り。

此くの如き不善の悪行・日日相積るの間・日秀等愁歎の余り依
つて上聞を驚かさんと欲す、行智条条の自科を塞がなが為に種種
の秘計を廻らし近隣の輩を相語らい遮つて跡形も無き不実を申
し付け日秀等を損亡せしめんと擬するの条言語道断の次第なり、
冥に付け頭けんに付け戒めの御沙汰無からんや、所詮仏法の権実沙汰
の真偽・淵底
を究めて御尋ね有り且は誠諦の金言に任せ且は式条の明文に准し

禁遏きんあつを加えられれば守護しゆごの善神ぜんじんは変を消し擁護まもの諸天しよてんは咲を含ま
ん、然れば則ち不善ぜんあく悪行の院主代・行智かうちを改易かいえきせられ將た又本主此
の重科どうりを脱のがれ難なんからん何ぞ実相じつそうじ寺に例如あやまりせん、誤あやまりまらざるの
道理どうりに任せて日秀まか・日弁等あんどは安堵あんどの御成敗ごせいばいを蒙かこむむり堂舎どうしゃを修理しゆりせ
しめ天長地久御祈てんちようちきゆうの忠勤きとうを抽ぬきんでんと欲す、仍よつて状を勒ろくし披陳ひちん
言上ごんじやう件の如し。

弘安二年十月

日

沙門

日秀日弁等上

一〇〇 百六箇抄

(血脈抄) 弘安三年

854P

与日興

五十九歳

ぐとう

具勝本種・正法の実義・本・迹勝劣正伝、本因妙の教手本門の

だいし にちれんつし

大師・日蓮謹んで之を結要す・万年救護写瓶の弟子日異に之を

じゅよ

授与す云云、脱種合して一百六箇之れ在り、

りょうぜんじょうど たほう たつちゅう くおんじつじょう むじょうかくおう

靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上覚王・直授相承本・迹勝劣

くけつ そうでん

の口決相伝譜、久遠名字より已来た本因・本果の主・本地自受用

ほうしん すいじゃくじょうぎょうぼさつ

報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要す。

いちねんさんぜん いっしんさんかん

理の一念三千・一心三觀本・迹

じゅりょう

益寿量の義理の三千は釈迦諸仏の仏

三世諸仏の出世成道の脱

心と妙法蓮華經の理觀の一心

とに蘊うんざい在ざいせる理りなり。

大通だいつう今日けふ・法華ほっけ本ほん・迹せき

て中間ちゆうげん・今日けふ・下種げしゆする故ゆえに久成くじやうを本ほんと為なし中ちゆう

久遠くおん名字みょうじ本ほん因にん妙みょうを本ほんとし

間かん・今日けふの本ほん・迹せきを俱ともに迹せきと

為なる者ものなり。

応おん仏ぶつ一代いちだいの本ほん・迹せき

値遇ちくうの衆生しゆじやうを利ためせん為ために無作むさ三身さんじん・寂光じやくこう淨土じやうど従じゆり三さん

久遠くおん下種げしゆ・靈山りやうぜん得脱とくだつ・妙法みょうほう

眼三智がんさんぢをもつて九界くきを知見ちけんし迹せき

を垂たれ権けんを施ほどこす後ごに説みよく妙經みやうきやうの故ゆえに今日けふの本ほん

迹せき共どもに迹せきと之これを得える者ものなり。

松しょう柏はく風波ふうぱ・万声まんしやう一如いちにょ・

迹門しやくもん為理ゐり円えんの一いつ致ちの本ほん・迹せき
諸法しよほう実相じつしやうの理り上じやうの觀心くわんしんは応おん佛ぶつの域いきを引ひかえた

る故ゆえに本ほん・迹せきとは別わかれども唯ただ

理の上の法ほっそう相なれば本・迹理觀の妙法みょうほうと

顯あらわす、迹化しやつけは付屬ふぞく無きが故ゆえに

之これを弘ひろめず。

そくしんじょうぶつ

心法即身成仏の本・迹

じょうぶつ

成仏なれば華嚴阿含方等般若法華の安

けこん

あこん

ほうとう

はんじゃ

ほっけ

ちゅうげん

中間・今日も迹門は心法の

ちゅうげん

今日も迹門は心法の

しやくもん

樂行品に至るまで円理に同ずる

いた

が故に迹は劣り本は勝るる者なり。

ゆえ

まさ

心法妙法蓮華経の本・迹

みょうほうれんげきょう

山家云く一切諸法・従本已来

このかた

不生不滅・性相凝然・釈迦口を閉ぢて身

ふしやうぶめつ

しやうじやう

しやうか

子言を絶す云云、方便品には理

ほうべん

具の十界互具を説く本門に至つて顕

じゅうかいご

ほんもん

いた

本理上の法相なれば久遠に対し

ほんり

くおん

て之を見るに実相は久遠垂迹の本門

これ

じつじやう

くおんすいじやく

ほんもん

なる故に色法に非るなり。

ゆえ

あひ

従困至果・中間今日の本・迹

ししか

ちゅうげん

今日の本・迹

像法の修行は天台・伝教弘通

ぞうほう

しゆぎやう

てんだい

でんぎやうぐつう

の本・迹は中間・今日の迹門を因と

ちゅうげん

しやくもん

本果の妙法蓮華經の本・迹

本の本果には劣るなり、寿量の脱益・

為し本門修行を果と為るなり。

今日の本果は從因至果なれば

の声開の為の觀心なり、我等が為

在世一段の一品二半は舍利弗等

なり、又滅後・像法相似・觀行解了の

には教相なり、情は迹劣本勝

天台・伝教の修行の如く末法に入つ

行益も以て是くの如し、南岳・

つて我等が為には虚戲の行と成る可

て修行せば帶權隔歴の行と成

一向迹・能く能く之を問う可し。

きなり、日蓮は一向本・天台は

疏じよの九くに云いわく爾に前ぜん皆みな虚こにして実じつならず迹しやくもん門もんは一いち虚こ一いち実じつ。
本ほん門もんは皆かい実じつ不ふ虚こ云い云い、爾に前ぜん二に種しゆの失とがの事こと。一いちには存じん行ぎやう布ふ故こ仍じやう。
未み聞もん權けんとて迹しやくもん門もんの理りの一いち念ねん三さん千せんを隱いんせり、二にには言ごん始し成じやう故こ尚じやう。
未み發はつ迹しやくもんとて本ほん門もんの久く遠おんを隱いんせり迹しやくもん門もん方ほう便べん品へん一いち念ねん三さん千せん。二に乗じやう。
作さ仏ぶつを説せついて爾に膳ぜん。二に種しゆの失とが一いちつ脱だつがれたり、本ほん門もんに至いたりて
迹しやくもん門もんの十じゆつ界がい因いん果がを打うち破ぱ

是即ち本因・本果の法門なり、実の一念三千も顕れず二乗
作仏も定らず云云、世間の罪に依つて悪道に墮ちん者は爪上の
土・仏法に依つて悪道に墮ちん者は十方の土の如し、故は信心
の根本は本勝迹劣余の信心は枝葉なり。

余行に渡る法華經の本・迹

一代八万の諸法は

本因妙の下種を受けて説く所の教なるが故に一

部八卷乃至一代五時

次第梯 は名字の妙法を下種して熱脱せし

本・迹なり。

在世觀心法華經の本・迹 一品二半は在世一段の

觀心なり天台の本門なり、日蓮が為には教相

の迹門なり云云。

脱益の妙法の教主の本・迹

所説の正法は本門な

り能説の教主釈尊は迹門なり、法自ら弘まら

ず人・法を弘むる故に人

法ともに尊し。

脱益の今此三界の教主本・迹

天上・天下唯我独尊は

迹身門・密表寿量品の今此三界は即本身

門なり。

天台の本・迹は俱に日蓮

脱益像法時剋弘經の本・迹
が迹門なり時剋亦天地の不同之在り・

正法一千年の修行の

徳より像法一日の徳は勝れたるなるべし。

熱益は迹・脱益は本な

脱益迹門自解仏乗修行の本・迹
り之に就いて之を思惟す可し。

脱の五大尊の本・迹

他受用応仏は本・普賢・

文殊^{もんじゆ}

・
弥勒^{みろく}

・
薬王^{やくおう}

は迹なり。

脱の真俗二諦の本・迹

天台大師弘通の本・迹前十

四品は迹門しやくもんに約し後十四品は本門ほんもんに約す云云、

是法住法位世間相常住

文。

前十四品悉く流通分の本・迹

如來の内証は序品より滅後

正像末しやうまゝの為なり、藥王菩薩やくおうぼさつは像法ぞうほう

の主天台是なり、密表の

法師品ほうしほんに云く今此三界文。脱益理觀いっち一致の本・迹

脱益理觀いっち一致の本・迹 本・迹殊ことなりと雖も不思議いえどふしぎ一と云

うは今日乃至中間ないしちゆうげんの本・迹は本・迹と分別ぶんべつす

れども本因妙ほんにんみょうを下種げしゆとして

説く所の本・迹なれば迹の本は本に非あらず云云。

脱益戒體の本・迹 爾前にぜん・迹門しやくもん・熱益ねつぎの戒躰かいたいを迹とし

脱益の戒躰かいたいを本と為なるなり、迹門しやくもんの或あるは爾前にぜん

大小だいしやうの戒すくに勝ほんもんれ本門あるの或にぜんは爾前

・迹門しやくもんの戒まさに勝まさるるなり。

脱しやくつけの迹化しやくつけ七面てんだいの本な・迹

像法ぞうほうには理觀りくわんを本と用もちうるなり

故ゆえに天台てんだいは迹なを本と為なし本なを迹なと行なず

るなり。

脱しやくつけの迹化しやくつけ本尊ほんぞんの本な・迹

一部いっぶを本尊ほんぞんと定さだむるに前十四品

は迹しやくつけ・後十四品は本と云云、是は一部八

卷まきなり云云。

脱益だつえき守護神しゆごじんの本な・迹

守護しゆごする所ところの法華ほっけは本な・守番しゆばんし

奉たてまつる処ところの神等しんどうは迹しやくつけなり、本因ほんにん妙みょうの影かげを万水ばんすい

に浮うべたる事ことは治定ちじやうと云云。

脱益山王だつえきさんの本な・迹

久遠くおん・中間ちゆうげんに受うくる処ところの法華ほっけは

本・夫^それより守り来る所は垂^{すい}迹^{じやく}なり、下^げ種^{しゆ}は本
因^{いん}妙^{めう}なり云云。

脱迹じゆうつらせつ十羅刹女じゅうらせつにょの本・迹

ちゆうげん

だいつう

中間ちゆうげん・大通だいつう・今日出世冥守けふしゅつせする処ところは垂迹すいじゃくなり

くおん　ちゆうげん

久遠くおん・中間ちゆうげん・今日の理事りじは本

り、下種げしゆは前まへの如ごとし云云。

脱迹ふそく付属ふそくの本・迹

脱益しゃつけの迹化ふそく付属ふそくは中間ちゆうげん・大通だいつうを

本とし今日初任けふしつにんの終はつを迹あととするなり、受うくる

正法しやうぽうは本ほん・持もつ方かたは迹あとなり。

脱迹かいえ開会かいえの本・迹

大通だいつうの初はつを開ひらくと云いい今日初任けふしつにんの

終はつりを会あいと云いうなり、本ほんは大通だいつう・迹あとは初任しつにんなり

り、初頭しつとうを開ひらくと云いい終合しゆうがを会あいと云いう

う云云、案位あんゐも理上りじやうの案位あんゐなり。

脱益じやうぶつ成仏じやうぶつの本・迹

じじゆじじゆ

無作むさ三身さんじん寂光土じやくかうどに任まかして三眼さんげん・三智さんぢをもつて九界くがい

をを知見ちけんす云云。

脱迹三種教相の本・迹
開会なり、一種は開顯・二種は不開會・

二種は迹・無開會・一種は本有の

所從者属の教相なり云云。

脱の五味所從の本・迹

天台・伝教の五味は横豎ともに

所從なり、五味は本・修行の人は迹た

り、在世以て此くの如し云云。

脱迹父子の本・迹

応仏は本・迹 仏は迹なり、子・父

の法を弘むるに世界の益ありと云云。

義理共に上に同じ是れ我が弟子

脱迹師弟の本・迹
應に我が法を弘む可し弘む可し云云。

脱益感応の本・迹

久遠の天月の影を中間・今日の

脱益の水に移すなり、衆生久遠に仏の善巧を

蒙るとは是なり。

脱益寂照の本迹じやくしやう

理の上の寂照は妙覺・乃至じやくしやう

観行等の解了なり、理即の凡夫は無躰有用の本迹かんぎやう

なり。

脱益随縁不变の本迹ずいえんふへん

在世と像法と之同じ真如の義理ざいせい

なり、随縁も不变も共に理の一段の本迹ずいえん

迹なり。

脱益九法妙の本迹

三法妙に各三法妙を具すれば九く

法妙なり、法中の心法妙より起る所の生仏おこ

二妙なり本迹知るべし。

脱益八相・八苦習合の本迹

八相は本・八苦は迹・同躰の権実ごんじつ

是なり。

脱益灌頂等の本迹

灌頂とは至極なり後世・仏菩薩ごしやう

の灌頂は法華経なり、迹門の灌頂は方便読かんちやう

誦・欲令衆生開仏知見なり、本門

の港項は寿量品読誦・然我実成仏已来なり。

脱益説所戒壇本・迹

靈山は本・天台山は迹・久遠と

末法とは事行の戒・事戒・理戒・今日と像法と

は理の戒躰なり。

脱益三世三仏利の本・迹
世世番番の教主は本・所化の

衆生は迹なり、世世已来常に我が化を

受け番番に出世し師と俱に生ず。

脱益証明・多宝仏塔の本・迹
妙法蓮華経皆是眞実は本・

多宝仏は迹・迹門八品乃至本門之を指

すなり云云。

脱益序正流通現文の本・迹
経文釈義の如く理の上の正宗

流通るつう序じょ文ぶんなれども本ほんは勝すぐれ迹あとは劣せう

るなり、然るに迹は本無今有なれ

ば久遠くおんの迹を脱として今日の本

を説くなり云云。

脱益しよじゆじゆじちやくぶく撰受折伏の本・迹
天台は撰受を本とし折伏を迹

とす、其の故は像法は在世ざいせの熟益冥利じゆくやくみりの

故なり福智具足ぐそくの故と云えり。

脱益二妙の本・迹
相待妙そうたいみようは迹・絶待妙ぜったいみようは本・妙法みようほう

の外いづくに更に一句いっくの余経よきよう無し云云、
独一ぼっかい法界ほっかいの故

に絶待ぜったいと名なくるの釈こ之これを思しう

可べし。

脱益十妙の本・迹
本果妙ほんかみょうは本・九妙くみょうは迹ざいなり在世ざいせと

天台てんだいとは機上きじやうの理りなり、
仏ほんは本因ほんにん妙みょうを本ほんと

為なし所化しよけは本果妙ほんかみょうを本ほんと思しえり。

脱益六重所説の本・迹しよせつ

已今を本と為し余は迹なり本・迹

殊ことなりと雖も不思議一と云云、理具の

本・迹なれば一部俱ともに迹の上の本・

迹なり。

脱益六即所判の本・迹そくしよはん

妙覚みょうかくは本・余は迹なり。

十行を果と為す十行を因とし十廻向えこうを果とし十

廻向えこうを因とし十地じちを果とし十地じちを

因なと為し等覚とうかくを果とし等覚とうかくを因とし妙覚みょうかくを果

と為すな云云。

脱益十不二門の本・迹

理の上の不变ふへんの不二にして事行の

不二門ふにもんには非あらざるなり。

脱益十界互具じゅつかいこくの本・迹

理具りぐの十界互具じゅつかいこくにして事行の互

具つには非ふざるなり、九界の理を仏界ぶつのかい

るなり。

理に押し入るる方ならでは脱せざ

脱益十二因縁四諦の本・迹

經に云く無明乃至老死云云、苦集

滅は迹なり道諦は本なり。脱益

三土の本・迹 報土は本・同居・

方便は迹なり。

妙楽云く雖脱在現本・迹理上の一致なり心は寿量品も文は現量なれ

ども上行所伝の本因妙を唱え顯して後は只久遠の教相にて戒弘肝要

の觀心には非ずと云云。籤一に云く本中体等迹と殊ならず脱益の妙覺乃至

觀行相似等の妙法蓮華經は理に即して事を含む、然も本・迹一致に非ず

破廢立本云云。玄七に云く樞實は智に約し教に約す 化他不定の時施す

所の樞實八教なり兩所殊ならず久遠の本・今日の脱益と兩所なり。

籤七に云く理浅深無し故に不殊と曰う本因・本果の理を今日中間にも

寿量顯本の理に推し入れて顯すと釈するなり。

籤七に云く經に約すれば是れ本門と雖も既に是れ今世迹中の本名本門と

為す故に知んぬ、今日正く迹中利益に當る、乃至本成已後俱に中間と名く

中間本を顯すに利益を得る者尚迹益を成ず況や復今日をや文。

ちゅうげん

すいじやく

ゆえ

じゆりよう

しやうこ

中間 今日に垂迹する故に下種に対して脱益 寿量を迹と得たる証拠に
積する是なり。

疏の「に云く衆生久遠に仏の善巧を蒙る久遠下種靈山得脱。」

籤十に云く故に知んぬ今日の逗会は昔の成熟の機に赴くことを靈山下種

久遠得脱の益。記二に云く本時の自行は唯円と合す本時とは本周妙の時

なり。化他は不定亦八教有り中間今日化導の儀式なり。

玄七に云く迹の本は本に非ず今日の本果妙の事なり。

本の迹は迹に非ず本因妙の事なり。本・迹殊なりと雖も不思議一なり

本因妙の外全く迹無きなり迹門は即ち顯本の後は本無今有の方便無

得道なりと中島の証俊何にと問われし時、俊範法印答えて云く不思議一

と、求めて云く其の義如何、答えて云く文在迹門義在本門云云と、会して

云く迹門既に益無し本門益有り本・迹勝劣不思議一と云云。

妙樂云く権実は理なり本・迹は事なり天台云く本・迹を二経と為すと云え

り如来の本・迹は理上の法相なり日蓮の本・迹は事行の法相なり

以上・脱の上の本・迹勝劣口決畢んぬ

事いちねんさんぜんの一念三千・一心三觀いつしんさんかんの本迹ほんしやく

・声聞しょうもん・縁覺えんかく・人天にんてんの唱る方は迹あとなり、南無なむ

釈迦しやくさ三世さんぜの諸仏しよぶつ

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうは

本ほんなり。

久遠くおん元初げんしゅ直行じきやうの本迹ほんしやく

名字みょうじ本因ほんにん妙みょうは本種ほんしゆなれ

ば本門ほんもんなり、本果ほんくわ妙みょうは余行よぎやうに渡わたる故ゆえに本ほんの上うへの

迹あとなり、久遠くおん釈尊しやくそんの

口唱くしやうを今日けふ蓮直れんじきに唱となうるなり。

久遠くおん実成じつじやう直体じきたいの本迹ほんしやく

久遠くおん名字みょうじの正法しやうほうは本

種子しゆしなり、名字みょうじ童形どうけいの位ゐ、釈迦しやくさは迹あとなり

我が本行ほんぎやう菩薩ぼさつ道どう是これなり、

日蓮にちれんが修行しゆぎやうは久遠くおんを移うつせり。

久遠くおん本果ほんくわ成道じやうどうの本迹ほんしやく

名字みょうじの妙法みょうほうを持もつ

ところ じきたい ほんもん ただち とな たてまつ われら
処は直躰の本門なり直に唱え奉る我等は迹なり。

くおんじじゆゆうほうしん ほんしやく
久遠自受用報身の本迹

がた しじゆうれつ よよ ぐけつ べ
難き勝劣なり。能く能く伝流口決す可き者な

男は本・女は迹・知り

じじゆきじゆしよでん みじゆほう
り 上行 所伝の妙法は

みじゆじほんぬ みじゆほうれんげきじゆ
名字本有の妙法蓮華経なれば事理俱勝の本なり

くじじゆほんもん ほんしやく
久成本門為事円の本迹

にちれん でし
日蓮並に弟子檀袖郡

等は迹なり。

そくしんじじゆじぶつ ほんしやく
色法即身成仏の本迹

親の義なり父の義な

ゆじゆつほん いご われら じじゆぶつ ふど
り、涌出品より已後・我等は色法の成仏なり不渡

よきじゆ みじゆほう われら
余行の妙法は本・我等

は迹なり。

みじゆほうれんげきじゆ ほんしやく
色法妙法蓮華経の本迹

みじゆじ だいほう
男子と成つて名字の大法

ここ こと ありわ
を聞き己己・物物・事事・本・迹を顕す者なり、

又今日の二十八品・品品の内の勝劣しょうれつは通号

は本なり勝なり・別号は

迹なり劣なり云云。

妙樂みょうらく疏記じょき九に云くいわ故に知んぬ迹ゆえの実は本おに於て猶虚ななり、籤十に

云く、今日は初成を以て元始なと為し

爾前にぜん・迹門しやくもんは大通だいつうを以て元始なと為し 迹門しやくもん 本門ほんもんは本因を以て元始

と為す本門ほんもん

此の釈は元始本・迹・遠近勝劣を判ずるなり、本果妙は然
がじつじょうぶついらいなおしやくもん
我実成仏已来猶迹門なり、迹の本は本に非ざるなり、本因妙は
がほんぎようぼさつせうしんじつ
我本行菩薩道真実の本門なり、本の迹は迹に非ず云云、我が内証の
じゆりようほん しやくけ
寿量品は迹化も知らず云云、重位秘蔵の義なり本・迹と分別する上
しじうれつ
は勝劣は治定なれども末代には知り難き故云云。

くおんじゆうかこういん ほんしやく
久遠従果向因の本迹
じじみほさつ くおん みようほう
は上行菩薩・久遠の妙法は果・今日の寿量品は

しやくかぶつ ほんにんみよう
本果妙は釈迦仏・本因妙

ゆえ じゆうかこういん
花なるが故に従果向因

の本・迹と云うなり。

みようほうれんげきよう ほんしやく
本因妙法蓮華経の本迹
みじほう とな にちれん
し妙法は本・唱うる日蓮は迹なり、

てほん
手本には不

よぎよう わか
全く余行に分たざり

ほんまつ
輕菩薩の二十四字是な

り、又其の行儀是なり云云。

不ふ渡ど余よ行ぎ法ほう華け經きょうの本ほん迹しやく

義ぎ理り上じやうに同どうじ・直じき達たつの

法ほう華けは本ほん門もん・唱となうる釈しゃ迦かは迹しやくなり、

今日けふ蓮れんが修しゆ

行くは久く遠おん名み字じの振ふる舞まいに

芥け爾に計けいも違たがわざるなり。

下げ種しゆの法ほう華け經きょう教きやう主しゆの本ほん迹しやく

自じ受じゆ用ゆう身しんは本ほん・上じやう行ぎやう

日にち蓮れんは迹しやくなり、我われ等らが内ない証しやうの寿じゆ量りやう品ぽんとは脱だつ益いやく

寿じゆ量りやうの文ぶん底ていの本ほん因いん妙みやうの

事じなり、其そのの教きやう主しゆは某それがしなり。

下げ種しゆの今こん此し三さん界がいの主しゆの本ほん迹しやく

久く遠おん元げん始じやうの天てん上じやう・天てん下が・

唯ゆい我が独どく尊そんは日にち蓮れん是これなり、久く遠おんは本ほん・今けふ日にち

は迹しやくなり、三さん世ぜ常じやう住じゆの

日にち蓮れんは名み字じの利り生じやうなり。

げしゆ
下種得法觀心の本迹 かんじん ほんしゃく

くおんげしゆ
久遠下種の得法は本な

り、今日中間等の得法觀心は迹なり、
ちゆうげん かんじん
分別功德 ぶんべつくとく

品の名字初隨喜の文の
みょうじしよずいき

こと
如し云云。

下種げしゅ自解じげ仏乘ぶつじょうの本迹ほんしやく

所伝しょでんと聞き得る方じげぶつじょうは自解じげ仏乘ぶつじょうの本ほんなり、

名字みょうじの妙法みょうほうを上じょう行ぎょう

聞き得て後

受持じゆじする我等われらは迹しやくなり、

故ゆえに伝教でんぎょうより日蓮にちれんは勝まさるなり云云。

末法まつぽう時刻じこくの弘通くつうの本迹ほんしやく

本因ほんにん妙みょうを本ほんとし今日けふ

寿量じゆりやうの脱益だつえきを迹しやくとするなり、久遠くおんの釈尊しやくそんの修行しゆぎやう

と今日蓮けふにちれんの修行しゆぎやうとは芥子けし

計たがも違ちがわざる勝劣しやくじやくなり云云。

本門ほんもん修行しゆぎやうの本迹ほんしやく

正像しやうざう二千年にせんねんの修行しゆぎやうは

迹門しやくもんなり、末法まつぽうの修行しゆぎやうは本門ほんもんなり、

又中間ちゆうげん今日の仏けふのぶつ

の修行しゆぎやうより日蓮にちれんの修行しゆぎやうは

勝まさるる者ものなり。

本門ほんもん五大尊ごおんの本迹ほんしやく

久遠くおん本果ほんくわの自受用じじゆゆう報身ほうしん

如來にょらいは本ほんなり、上行じやうぎやう等の四菩薩ぼさつは迹あとなり。

日蓮にちれん本門ほんもん弘通くわうつうの本迹ほんしやく

我本行菩薩道がほんぎやうぼさつどうは迹あとなり云云。

本化事行ほんげ一致いっちの本迹ほんしやく

一云云、本因妙ほんにんみやうの外ほかに並ならに迹あととて別わかして之無な

し故ゆえに一ひとと釈しゃくする者ものなり、

真実しんじつの勝劣しょうれつの手本てほんの義ぎなり云云。

後十四品ごじゅうしよひん皆流通みなるつうの本迹ほんしやく

上行菩薩じやうぎやうぼさつを召めし出いす事ことは一向いっごうに滅後めつご末法まつぽう利り

本果妙ほんくわうの釈尊しゃくそん・本因妙ほんにんみやうの

益えきの為ためなり、然しかる間ま・日蓮にちれん

修行じゆぎやうの時ときは後のちの十四品じゅうしよひん皆滅後みなめつごの流通るつう分ぶんなり

下種戒体げしゆの本迹ほんしやく

爾前にぜん・迹門しやくもんの戒躰かいたいは権實ごんじつ

雜乱ぞうらん、本門ほんもんの戒躰かいたいは純一じゆんいつ無雜むざの大戒だいかいなり。

勝劣天地水火尚及ばず

具つぶさかいたいに戒躰抄ごとの如し云云。

本化ほんげ七面ほんしやくの本迹

在世ざいせと像法ぞうぼうとは理觀てんだいを本とするなり、天台てんだいの本

末法まつぼうには事行まじりを本とし
書は理りの上の事ことなれば一向いっこう

迹門しやくもんの七決、我家の本書は事の上の本なり。

下種三種法華の本迹げしゆ ほんしやく

二種は迹なり一種は本な

り、迹門は隱密法華・本門は根本法華・迹本文しやくもん おんみつほっけ ほんもん こんほんほっけ

底の南無妙法蓮華經はなむ みょうほうれんげきょう

顯說法華なり。けんせつ ほっけ

本化本尊の本迹ほんげほんぞん ほんしやく

七字は本なり・余の十界はじゅうかい

迹なり、諸經・諸宗中王の本尊万物下種の種子無上しよきょう しよしゆおう げしゆ しゆしむじょう

の大曼陀羅なり。だいまんだら

下種守護神の本迹げしゆしゆごしん ほんしやく

守護し奉る所の題目は本しゆご たてまつ だいもく

護る所の神明は迹なり、諸仏救世者・現無量神まも しんみょう しよぶつ げんむりょう

力云云。ちからいんいん

下種山王神の本迹げしゆさんのおん ほんしやく

久遠に受くる所の妙法はくおん みょうほう

本・中間・今日・未来までも守り来る所の山王明ちゆうげん きんぴつ みらい さんのおん

神は即迹なり。そく

げしゆ じゆうらせつによ ほんしやく
下種十羅刹女の本迹

ぎり
此の義理上に同じ唯神明
ただしんみよう

と十女を本・迹に対する時・十羅刹女は本・神明

は迹なり。

ほんもん ふぞく
本門付属の本迹

くおん みようじ
久遠名字の時・受る所の

みようほう じようぎよう
妙法は本・上行等は迹なり、

くおん
久遠元初の結要付属は

にちれん じゆりよう
日蓮今日寿量の付属と

どうい
同意なり云云。

ほんもん かいえ ほんしやく
本門開会の本迹

くおん
久遠の本会を本と為す、今

じゆりよう
日寿量の脱を迹と為るなり。

みようらく いわ
妙楽云く始頭を開と云い

けしゆ じゆうばつ ほんしやく
終合を会と云う文。

げしゆ じゆうばつ ほんしやく
下種成仏の本迹

ほんにん みよう じじゆゆうしん
本因妙は本・自受用身は

じゆい じゆい じゆい
迹・成仏は難きに非ず此の経を持つこと難けれ

ばなり云云。

下種三種教相の本迹げしゆ きよつそう ほんしやく

なり、本門の教相は教相の主君なり、二種はほんもん きよつそう きよつそう しゆくん

二種は迹門・一種は本門しやくもん ほんもん

二十八品・一種は題目なだいもく

り、題目は觀心の上の教相なり。だいもく かんじん きよつそう

五味主の中の主の本迹ほんしやく

日蓮が五味は横豎共にちれん おうじゆ

五味の修行なり、五味は即本門・修行は即迹しゆぎよう そくほんもん しゆぎよう そく

門なり。

本種師弟不変の本迹ほんしやく

久遠実成の自受用身は本くおんじつじよう じじゆゆうしん

・上行菩薩は迹なり、三世常恒不変の約束なりさんぜじようこうふへん やくそく

本種父子常住の本迹ほんしやく

義理上に同じ、久遠のぎり くにん

名字即の俗諦常住の父子は今日蓮が修行に殊なまざいそく そくたいじようじゆう ふし いまにちれん しゆぎよう

ならず、世間相常住是なせけん じやうじゆつ これ

り。

四土具足の本迹ぐそく ほんしやく

り、四土即常寂光そくじょうじやうこく・寂光即四土の浄土じやうこくは唯本門ただほんもん

三土は迹じち・常寂光土は本ほんな

弘経の道場くわきやう だうじやうなり。

下種げしゆ感応日月の本迹かんのうにちがつ ほんしやく

下種げしゆの仏は天月てんげつ・脱仏は池

月つきなり。天台云てんだいいわく不識天月てんげつ但觀池月云云。

下種げしゆ随縁ずいえん不変ふへんの本迹ほんしやく

体用同時たいゆうどうじの眞実しんじつ・眞如しんによ・一

口の首題くちのうづだてなり、本有ほんぬの迹しるし・本有ほんぬの一念いちねん三千さんぜん是これなり

り、随縁ずいえん不変ふへん一念いちねん寂照じやくしやうの

本迹ほんしやくなり。

下種げしゆ九法妙くこふたせうの本迹ほんしやく

久遠くおん下種げしゆの妙法みやうほうは本ほん・

已来このかたの九法くこふたせうは迹しるしなり。

下種げしゆ人天にんてんの本迹ほんしやく

久遠くおん下種げしゆの妙法みやうほうは本ほんな

り、已来このかたの人天にんてんは迹しるしなり。

下種八相・八苦習合実勝の本迹げしゆ
は本脱の八苦は迹・種の八苦は本ほんしやく

獎・常在此不滅と云えり。じやうじこふめつ

脱の八相は迹・種の八相

なり煩惱即菩提・生死即涅槃ぼんのうそくぼだい
しよつじそく

下種げしゅ最後さいご直授ちくじゆ摩頂まていの本迹ほんしやく

け頂けいく事は最極むじやう無上むじやうの灌頂かんちやうなり法は本

くおんいちねん
久遠くおん一念いちねん元初げんしゆの妙法みやうほうを受
人は迹しやくなり。

下種げしゅ弘通くわうちゆう戒壇かいだん実勝じつしやうの本迹ほんしやく

富士山ほんもん本門ほんもん寺本堂じほんだうなり。

ひほうこんりゆう
三箇さんかんの秘法ひほう建立こんりゆうの勝地しやうちは

所は総じて院号いんごうなるべし云云

下種げしゅ寂照じやくじやう・実事じつじ・体用たいゆう無上むじやうの本迹ほんしやく

ほんがく
生仏せいぶつ一如いちにょの事の上の本覚ほんがくの

寂照じやくじやうなり人は迹しやく・仏は本ほんなり

云云。

下種げしゅ三世さんぜ・三仏さんぶつ実益じつやくの本迹ほんしやく

世しよ・種熟しゆじゆく脱だつ・本有ほんゆう一念いちねんの利益りやくなり、天

にちれん
日蓮にちれんは下種げしゅの利益りやく・三世さんぜ・九

いわ
台云いわく若もしは破も若もしは立みな皆みな

是ほつ法華けの意いの修行しゆの利益りやくなり。

下種げしゆ証しょう明みょう多宝たほう仏塔ぶつたうの本迹ほんしやく

の妙法みょうほう蓮華れんげ経きやう皆是かいせしんじつ眞実しんじつは本ほんなり、久遠くおん

久遠くおん実成じつじやう・無始むし無終むしゆう・本法ほんぽう

の本師ほんしは妙法みょうほうなり、本有ほんぬ

実成じつじやう釈迦しやくか多宝たほうは迹あとなり。

下種げしゆ序しゆ正流しやうりゆう通つう・文底ぶんていの本迹ほんしやく

二半にはんを本門ほんもんと定め現文げんぶんの勝劣しやうれつ、報仏ほうぶつと

応仏おうえんと天台てんだいとは正宗しやうしん一品いひん

日蓮にちれんとは流通りゆうつうを本ほんと定む文ぶん

底ていの勝劣しやうれつなり。

下種げしゆ折摂せつせつ二門にもんの本迹ほんしやく

を迹あとと定む法華ほつけしやく折伏せつぷく・破権門はこんもん理りとは是これなり。

日蓮にちれんは折伏せつぷくを本ほんとし撰受せんじゆ

下種げしゆ二妙にめう実行じやくぎんの本迹ほんしやく

為なし種しゆの二妙にめうを本ほんと定む、然しかるに相待じやうたいは迹あと・絶待ぜつたい

日蓮にちれんは脱だつの二妙にめうを迹あとと

は本云云。

下種十妙実体の本迹げしゆほんしやく

為し、余を迹と為すなり、

是れ真実の本因・本果の

日蓮は本因妙を本とにちれんほんにんみょう

法門ほうもんなり。

下種げしゆ六重具膳の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の六重を迹と

為し、種なの六重を本と為るななり云云。

下種げしゆ六即実去の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の六即そくを迹と

為し種なの三世一即そくの六即そく・案位の理即りそくは開会かいえの

妙覺みょうかく・開会かいえの理即りそくは本覺ほんかくの

極果ごつかを本と為るななり。

下種げしゆ十二因縁いんねんの本迹ほんしやく

日蓮にちれんは応仏所説しよせつの十二

因縁いんねんを迹と為し、久遠報仏所説しよせつの十二因縁いんねんを本

と定むるなり。

下種げしゆ十不二門の本迹ほんしやく

日蓮にちれんが十不二門は事上極

極じりの事理一躰用いこくの不二門なり。

下種げしゆ十界互具ほんしやくの本迹ほんしやく

唱となえ奉たてまつる妙法みょうほう・仏界ぶつがいは本

とな
唱うる我等九界は迹なり、妙覺より理即の凡

夫までなり、実の十界互具

の勝劣とは是なり。

下種境智俱実の本迹

脱の境智は迹・種の境智は

本なり、名字即の境智は境智俱に本・觀行即

の境智は境智俱に迹なり云

云。

意は十界の仏性只一口に呼び顯すなり、本因口唱の勝る南無

妙法蓮華經なり、初心成仏抄の如きなり、弘一に云く理造作に

非ざる故に天真と曰い証智円明の故に独朗と云う云云、久遠の理

と今日の理と理に浩作無し、然れも久遠は事上の理なり今日は理上

の理なり故に知んぬ本因妙の理は勝れ今日日本果妙の理は劣るなり

是理の本・迹なり是の故に独朗と云うなり、又云く独一法界の故に

ぜったい
絶待と名く云云。

天台は唯大綱を存して綱目を事とせず此の釈の意は大綱は本綱目
は迹なり、天台・伝教の修行は綱目・日蓮日興等の修行は大綱な
り云云。如来秘密神通之力意得可し是事理の如来の本迹なり、
秘密の如来は理性の如来なり、我等なり、神通の如来は世尊なり
秘密は本地神通は垂迹なり、世世以来常受我化。我本行菩薩道所
成寿命今猶未盡復倍上数云云。

本迹勝劣其理甚遠なり、仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に
況や下地をや何に況や凡夫をや、本仏本化乃能究尽云云、妙樂
云く具騰本種 本勝迹劣 故に但名に於て以て本迹を分つ下種
名字妙法事行の勝劣なる所を判ずるなり本迹は身に約し位に約
す 久遠名字即の身と位との判なり本従り迹を垂れ迹は本に依る
迹は究責に非ず、玄の一に開示悟入是れ迹の要なりと雖も若し顯本

し已れば即ち本要と成るなり、籤の一に若し迹中の事理乃至権実
無くんば何ぞ能く長寿の本を顕さん云云。

已上程の本・迹勝劣畢んぬ

右此の血脈は本・迹勝劣其の數一百六箇之を注す數量に就て
表事有り之を覺知すべし・釈迦諸仏出世の本懐・真実真実・唯
為一大事の秘密なり、然る間・万年救護の為に之を記し留む。
就中六人の清弟を定むる表事は先先に沙汰するが如し云云、但し直
授結要付属は一人なり、白蓮阿闍梨日興を以て惣貫首と為して日蓮
が正義悉く以て毛頭程も之を残さず悉く付属せしめ畢んぬ、上首
已下並に末弟等異論無く尽未來際に至るまで予が存日の如く日興
嫡嫡 付法の上人を以て惣貫首と仰ぐ可き者なり。

又五人並に已下の諸僧等日本乃至一閻闍浮捏の外・万国に之を流布
せしむと雖も日興 嫡嫡相承の臯茶羅を以て本堂の正本尊と為す
可きなり所以は何ん在世滅後殊なりと雑も付属の儀式之同じ曹えば四
大六万の直弟の大昔属有りと維も上行儀棒を以て結要の大導師と定
むるが如し、今以つて是くの如し六人以下数輩の弟子有りと維も日興

を以て結要けつちよう付属ふぞくの大将と定むる者なり。

又弘長こうちやう配流はいりゆうの日も文永ぶんえい流罪りゆうざいの時も其その外語ことば処たの大難だいなんの折節おりふしも先

陣じんをかけ日蓮にちれんに影かげの形かたちに随したがうが如ごとくせしなり誰たれか之これを疑うたわんや、又延

山さん地頭じとう発心はつしんの根元こんげんは日興にっこう教化きやうの力用りきようなり、遁世とんせいの事こと甲斐かひの国くに三牧さんぼくは

日興にっこう衆志しゆしの故ゆゑなり。

又御本ごほん尊書そんしよ写しゃの事こと予あが顕あらし奉たてまつるが如ごとくなるべし、若もし日蓮にちれん御判ごはんと

書しよかずんは天あ禰み地ち舐ねもよも用もちい給たまわじ上行じやうぎやう・無む辺へん行ぎやうと持も持も国くにと

浄じやう行ぎやう・安あん立り行ぎやうと毘ひ沙しゃ門もんとの間まには若わ惱のう乱らん者しや・頭ず破は七しち分ぶん・有あ供く養やう者しや・

福ふく過か十じゆ号ごうと之これを害がいす可べきなり、経きやう中ちゆうの明めい文ぶん等とう意いに任まかす可べきか。

又立たつ浪なみ・吹ふく風かぜ・万物ばんぶつに洗せんいて本ほん・迹あとを分わかけ勝劣しやうれつを弁べんず可べきなり。

法華本門宗血脈相承事

本因妙の

行者日蓮之を記す。

予が外用の師・伝教大師生歳四十二歳の御時・仏立寺天台山・大和尚
 に値あい奉り義道を落居し生死一大事の秘法を決したもうの日、
 大唐の貞元二十一年太歳乙酉五月三日・三大章疏を伝え各七面七重
 の口決を以て治定し給えり、所謂玄義七面の決とは正釈五重列名
 に約して決したもう。

一に依名判義の一面・名とは法の分位に於いて施設す・体とは宰主
 を義と為す・宗とは所作の究竟なり、受持本因の所作に由つて口唱
 本果の究竟を得、用とは証体本因・本果の上の功能徳行なり、教
 とは誠を義と為す誠とは本の為の迹為れば迹は即ち有名無実無

とくどう 得道なるを じつそう 実相の名題は 本・迹同じければ 本・迹一致と思惟す可き
事をおおいに 誠ん

が為に三種の教相を起て種熟脱の論不論を立つる者なり、經文解
釈明白なり、此くの如く文・句句の名・妙正の深義・本・迹勝劣の
本意を顕し給う者なり、然りと雖も天台伝教の御弘通は偏に理の
上の法相・迹化付属・像法の理位・觀行五品の教主なれば迹を表と
為して衆を救い、本を隠して裏に用る者なり甚深甚深秘す可し秘す
可し。

二に仏意・機情・二意の一面、仏意は觀行・相似を本と為し機情は
理即・名字を本と為す、何れも体用を離れず体用は法華の心智に依
つて一代五時の次第浅深を開拓す、次に機情とは大通結縁の衆の為
に四味の調養を設け法華に入入す、本・迹二門乃至文・句句此の
二意を以て分別す可き者なり。

三しじゅうに四重しじゅう淺深しんしんの一面いっぺん、名なの四重しじゅう有あり・一いちには名体なたい無常むじょうの義ぎ・爾前にぜんの諸經しよきやう・諸宗しよしゅうなり、二にには体実たいじつ名仮なみか・迹門しやくもん・始覺しかく無常むじょうなり、三さんには名体なたい俱實きじつ・本門ほんもん本覺ほんかく常住じょうじゅうなり、四しには名体なたい不思議ふしぎ是れ觀心かんじん直達じきたつの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、湛然たんねんの云く

「雖脱在現・具騰本種」云次に体の四重とは一に三諦隔歴の体・
爾前權教なり、二に理性円融の体・迹門十四品なり、三に三千
本有の体・本門十四品なり、四に自性不思議の体・我が内証の
寿命品事行の一念三千なり、次に宗の四重とは一に因果異性の宗
・方便權教なり、二に因果同性の宗・是れ迹門なり、三に因果
並常の宗・即ち本門なり、四に因果一念の宗・文に云く「芥爾も
心有れば即ち三千を具す」と、是れ即ち末法純円・結要付属の
妙法なり云云、

次に用の四重とは一に神通幻化の用・今經已前に明かす所の仏・
菩薩・出仮利生の事、二に普賢色身の用・即ち一身の中に於て十界
を具する事なり本・迹一代五時に亘る、三に無作常住の用・証道
八相有り無作自在の事なり、四に一心の化用・或説己身等なり、
次に教の四重とは一には但顯隔理の教・權小なり、二には教即実理

の教・迹門しやくもんなり、

三には自性会中の教・応仏の本門ほんもんなり、四には一心法界いつしんほっかいの教・
寿量品じゅうりょうぽんの文の底の法門ほつもん・自受用報身如來じじゅゆうほうしんにょらいの眞實しんじつの本門ほんもん・久遠くおん一念いちねん
の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう・雖脫在現具騰本種の勝劣しゅうれつこれ是なり。

第四に八重浅深の一面なり、名の八重とは一に名体永別ようべつの名・二に
名体不離の名・三に従体流出るしゆつの名・四に名体具足くそくの名・五に本分ほんぶん
常住じょうじゆつの名・六に果海妙性くわかいめうじやうの名・七に無相不思議むそうふしぎの名・八に自性己己じじここ

の名・乃至教知なにしる可し云云、文に任せて思惟まかす可きなり。

第五に還住当文げんじゆつの一面、四八の浅深を以て本・迹勝劣しゅうれつを知る可し。

第六に但入己心たんにゆつしんの一面、始め大法東漸だいほうぜんより第十の判教いたに至るまで

文の生起なまを閣さしおき一向いっかうに心理しんりの勝劣しゅうれつに入れて正意じやういを成なず可し、

謂いわく大法だいほうとは即ち行者ぎやうじやの己心こしんの異名いみょうなり云云、釈しやくの意は文義ぶんぎの

広博くわいはくを離れて首題しゆだいの理を專せんにすと釈しやくし給たまうなり。

第七しちゆつりしやうじに出離生死しゆつりしやうじの一面いちめん、心こころは一代いちだい応仏おんぶつの寿量品じゆりやうぼんを迹あとと為なし内証ないしやうの
寿量品じゆりやうぼんを本もとと為なし釈尊しゃくそん久遠くおん名字みやうじ即すなはちの身みと位ゐとに約やくして南無なむ
妙法蓮華經みやうほつれんげきやうと唱なえ奉ほうる是こゝろを出離生死しゆつりしやうじの一面いちめんと名なく、本もと・迹あと約やく身み約やく
位ゐの釈しゃく・之これを思おもう可たき者ものなり已上いじやう。

玄文畢る。おわ

文句もんくの七面の決とは、一に依名の一面其の義上かみの如し、二に感応かんのうの一面・三時弘経くぎように亘わたる可し、爾前にぜん・迹門しやくもんの正像しちうぞう二千年弘経くぎようの感応かんのうより本門末法弘通ほんもんまつぽうくつうの感応かんのうは眞実眞勝しんじつしんじつなり、三に四教しきようの一面・四に五時の一面・五に本・迹の一面・六に体用たいゆうの一面・七に入己心こしんの一面・悉ことごとみなく皆其の心前に同じ、智威大師だいしの伝には玄義げんぎ・文句もんくの兩部には爾前にぜん・迹門しやくもんに各三十重の浅深を以て口決くつくわつし給たまえり、具には伝教でんぎよう大師だいし七面決の如し。

又摩訶止觀まかしかん一部には十重顕觀を立てて是を通じ給たまえり、一は待教立觀にぜん・爾前にぜん・本・迹の三教を破して不思議実理ふしぎの妙法蓮華經みょうほうれんげきようの觀を立つ、文に云く円頓者初縁実相とんと云云、迹門しやくもんを理具いちねんさんぜんの一念三千と云う脱益げしやくの法華ほっけは本・迹共に迹なり、本門ほんもんを事行いちねんさんぜんの一念三千と云う下種げしゆくの法華ほっけは独一の本門ほんもんなり、是を不思議実理ふしぎの妙觀みょうかんと申すな

り、一に廃教立観・心は権教並に迹執を捨て本門首題の理を取つて事行に用いよとなり、三に開教顕観文に云く一切諸法・

ぶつぼう

ぶつぼう

いっさいしよほう

本是仏法三諦の理を具するを名けて仏法と為す云何んぞ教を除か

もんい

いちねんさんぜん

みょうじ

いちねんさんぜん

ん云云文意は観行理観の一念三千を開して名字事行の一念三千を

あらわ

だいし

しやくそん

じひ

じょうぎょうしよでん

これ

はなり、四に会

顕す、大師の深意・釈尊の慈悲・上行所伝の秘曲・是なり、四に会

きふ

ほつけ

かんじん

ほつけ

これ

はなり、四に会

教顕観・教相の法華を捨てて観心の法華を信ぜよと、五に住不思議

きふ

ほつけ

かんじん

ほつけ

えんみょう

ふしぎ

顕観・文に云く理は造作に非ず故に天真と曰う・証智円明なるが故

どくろう

そうさく

てんしん

い

・証智円明なるが故

に独朗と云う云云、釈の意は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の

どくろう

そうさく

くおんみょうじ

そうさく

今日熟脱の

本・迹二門を迹と為し久遠名字の本門を本と為す、信心強盛にして

ただよねんなく

なむみょうほつれんげきょう

信心強盛にして

唯余念無く南無妙法蓮華経と唱え奉れば凡身即仏身なり、是を

てんしんどくろう

そくしんじょうぶつ

なす

是を

天真独朗の即身成仏と名く。

ぜんだい

ほうもん

これあ

これあ

之有り、

問うて曰く前代に此の法門を知れる人之有りや、答えて曰く之有り、

ぜんだい

ほうもん

これあ

これあ

之有り、

求めて云く誰人ぞや、示して云く釈尊是なり、尋ねて云く仏を除き奉

だれびと

しやくそん

これ

しやくそん

是なり、尋ねて云く仏を除き奉

つて余に之を知れる人師論師有りや、答えて曰く天台の云く「天親
りゅうじゆ ないがんれいねん げちやくぎぎ 竜樹・内鑒冷然・外適時宜」と、今日南無妙法蓮華経は南岳・天台・
みょうらく だんぎよう ないがんれいねん げちやくぎぎ 妙楽・伝教の内鑒冷然・外適時宜なり、内鑒冷然・外適時宜の修行
の日は本・迹一致なり、有智無智を嫌わず円頓者初縁実相の理は造作
に非ざる故に天真と曰う・証智円明の故に

独朗と曰うと云つて理位觀行に趣かきしめ利益を爲し末法の時を待つ者なり、故に天台云く「但當時大利益を獲るのみに非ず後五百歳遠く妙道に霑う」と云云、天台・章安・妙楽・伝教等の大聖は内証は本迹勝劣・外用は本迹一致なり、其の故は教相も觀心も相似觀行解了の大師・時機亦像法なり、付属は即妄授余人・御身も亦迹化の衆・觀音・妙音・文殊・藥王等の化身なり、今末法は本化の薩・上行等の出世の境・本門流宣の時尅なり、何ぞ理觀を用いて事行を修せざらんや、予が所存は内証・外用共に本迹勝劣なり、若し本迹一致と修行せば本門の付属を失う物怪なり。

本迹の不同は処処に之を書す、然りと雖も宿習拙き者本迹に迷倒せんか若し本迹勝劣を知らずんば未来の惡道最も不便なり宿業を恥じず還つて予を恨む可きか、我が弟子等の中にも天台伝教の解了の理觀を出でず、本迹に就て一往勝劣再往一致の謬義を存して自他を迷

惑せしめんの条・宿習の然らしむる所か、閻浮提第一の秘事為りと雖も
万年救護の為に之を記し留る者なり、我が未来に於て予が仏法を破ら
ん為に一切衆生の元品の大石・大六天の魔王・師子身中の蝗蟲と成つ
て名を日蓮に仮りて本・迹一致と云う邪義を申し出して多の衆生を当
に悪道に引くべし、若し道心有らん者は彼等の邪師を捨てて宜く予が
正義に随うべし、正義とは本・迹勝劣の深秘具騰本種の実理なり、
日蓮一期の大事なれば弟子等にも朝な夕なに教え亦一期の所造等
悉く此の義なり、然りと雖も迹執を出でず・或は輕見惑・或は蔑思惑
・或は癡塵沙惑・或は迷無明惑、故に日蓮が立義を用いざるか、予が
教相・觀心は理即・名字・愚悪愚見の為なり。
日蓮は名字即の位・弟子檀那は理即の位なり、上行所伝結要付属の
行儀は教觀判乘・皆名字即・五味の主の修行なり、故に教相の次第要
用に依る可し唯大綱を存する時は余は綱目を事とせず彼は綱目・此れ

は大綱たいこう・彼は綱目の教相きょうそうの主・此れは大綱首題たいこうしゅだいの主・恐くは日蓮にちれんの
行儀ぎょうぎには天台伝てんだいでんぎょう教も及ばず、何に況や他師たしの行儀ぎょうぎに於てをや、

たださいせはちかねん
唯在世八箇年の儀式を移して滅後末法の行儀と為す、然りと雖も仏は
熟脱の教主某は下種の法主なり、彼の一品二半は舍利弗等の為には
観心たり、我等・凡夫の為には教相たり、理即・短妄の凡夫の為の観心
は余行に渡らざる南無妙法蓮華經是なり、是くの如く深義を知らざ
る僻人・出来して予が立義は教相辺外と思う可き者なり、此等は皆宿
業の拙き修因感果の至極せるなるべし、彼の天台大師には三千人の
弟子ありて章安一人朗然なり、伝教大師は三千人の衆徒を置く義真
已後は其れ無きが如し、今以て此くの如し数輩の弟子有りと雖も疑
心無く正義を伝うる者は希にして一二の小石の如し秘す可きの法門な
り。

第六に住教顕観七に住教非観八に覆教顕観九に住教用観十に住観
用教此の五重は上の五重の如し思惟す可し。

問うて云く本・迹雖殊不思議一・本・迹の教に於て別して不思議の観理

を顕わす故に と云云、機情きけいに約すれば本・迹しやくに於て久近きうきんの異有る可
し、是れ一往いちおうの浅義せんぎなり、内証ないしやうに約して之を論ずれば勝劣しょうれつ有る可
らず再往さいおうの深義じんぎは不思議ふしぎ一なり云云如何が意を得可けんや、答えて云
く住教顯觀は煩惱ぼんのう即菩提ぼだい・住教非觀は法性ほつしやう寂然じやくぜん・覆教顯觀は名字みょうじ判教
・住教用觀は不思議ふしぎ一・住觀用教は以顯みょう妙円えんと申す大事だいじ是これなり、教觀
不思議ふしぎ・天然本性てんぜんほんじやうの処ところに独ひとり一法界ほつがいの妙觀みょうかんを立つ是これを不思議ふしぎの本・迹
勝劣しょうれつと云う亦絶対ふしぎ不思議ふしぎの内証ないしやう・不可得ふかたく・言語道断ごうだんの勝劣しょうれつは天台てんだい・
妙樂みょうりやく・伝でん教の残す所我が家の秘密ひみつ觀心直達かんじんじきたつの勝劣しょうれつなり、迹と云う名
ありといえども有名無実ゆうめいむじつ・本無今有ほんむこんぬの迹門しやくもんなり、實に不思議ふしぎの妙法みょうほうは
唯ただ壽量品じゆりやうほんに限る故に不思議ふしぎ一と積するなり、迹門しやくもんの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの
題号だいごうは本門ほんもんに似ると雖も義理いゑど・天地てんちを隔つ成仏じやうぶつ亦水火すいかの不同ふどうなり、
久遠名字くおんみょうじの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの朽木書くちきがきなる故を顕さんが為に一と積するな
り末学まつがく疑網ぎやうを残すこと勿れな、日蓮にちれん・靈山会上りやうざんかうじやう・多宝塔中たほうたつちやうに於て親た

りしゃくそん釈尊より直授し奉るひほう秘法なり、甚深甚深秘す可し秘す可し伝う可し伝う可し。

摩訶止観七面口決とは依名判義・附文元意・寂照一相・修行証

六九二識・絶諸思慮・出離生死の一面已上、一切諸法・従本已来

不生不滅・性相凝然・釈迦閉口・身子絶言云云、是は迹門天台

止観の内証なり、本門日蓮の止観は釈迦は口を開き文殊は言語す

迹門不思議不可説・本門不思議可説の証拠の釈是なり、亦三大部

に於て一同十異

四同六異之有り、伝教仏立寺より之を口決す、一同とは名同な

り、十異とは名同義異・所依異・観心異・傍正異・用教異・対機異

顕本理異・修行異・相承異・元旨異、四同とは名同・義同・所依・同

所・顕同なり、六異とは釈異・大綱綱目異・本末異・観心異

教内外観異・自行化他異・是なり、今要を以て之を言わば迹本観心

同名異義なり始終・本末共に修行も覚道も時機も感応も皆勝劣な

り。

此の下・二十四番勝劣なり、彼の本門は我が迹門・彼の勝は此の劣彼の深義は予が浅義・彼の深理は此の浅理・彼が極位は此の浅位・彼の極果は此の初心・彼の觀心は此の教相・彼の台星の国に出生す・此れは日天の国に出世す・彼は藥王・此れは上行・彼は解了の機を利す・此れは愚悪の機を益す・彼の弘通は台星所居の高嶺なり・此の弘経は日王・能住の高峰なり・彼は上機に教え・此れは下機を訓ず・彼は一部を以て本尊と為し・此れは七字を本尊と為す・彼は相對開会を表と為し・此れは絶對開会を表と為す・彼は熟脱此れは下種・彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し・此れは万機の為に南無妙法蓮華經と勸む・彼は悪口怨嫉・此れは遠島流罪・彼は一部を讀誦すと雖も一字を讀まざること之在り・此れは文文句句・悉く之を讀む・彼は正直の妙法の名を替えて一心三觀と名く・有の儘の大法に非ざれば帶權の法に似たり此れは信謗彼此・決定成菩提・

南無妙法蓮華經と唱えかく、彼は諸宗の謬義を粗書き頭すと雖も
未だ言説せず此れは身命を惜まず他師の邪義を糺し三類の強敵を
招く。彼は安樂普賢の説相に依り此れは勸持不輕の行相を用ゆ。彼
は一部に勝劣を立て。此れは一部を迹と伝う。彼は応仏のいきをひ
かう。此れは寿量品の文底を用ゆ。彼は応仏昇進の自受用報身の
一念三千一心三觀。此れは久遠元初の自受用報身無作本有の妙法
を

直に唱う。

此れ等の深意は迹化の衆・普賢・文殊・觀音・藥王等の大菩薩にも
付屬せざる所の大事なれば知らざる所の秘法なり況や凡師に於て
をや。

若し末法に於て本・迹一致と修行し所化等に教ゆる者ならば我が身も
五逆罪を造らずして無間に墮ち其れに隨從せんともがらも阿鼻に沈
まん事疑無き者なり、此の書一見の人人は理普賢智文殊一言の薩
・生死絶断の際・定光覚悟の大菩薩なり、伝教云く「文殊の利劍は六輪
に通じ十二の生類を切断す、一刀を下して妙法万方に勅するに自然
に由お三諦を出だす見聞覚知に明なり」此の一言の三際を示すに一言
に如かず、若し未達の者も一頌を開くに題目三般三諦同じく通知せざる
こと無し、生仏自ら一現なる是を一言の妙旨一教の玄義と謂う云云、
天台の云く「一言三諦・刹那成道・半偈成道」と云云、伝教の云く

「ぶつがい」
仏界の智は九界を境と為し九界の智は仏界を境と為す境智互に冥薫
して凡聖常恒なる是を刹那成道と謂う、三道即三徳と解れば諸悪
たちまち
に真善なる是を半偈成道と名く、今会釈して云く諸仏菩薩の定
光三昧も凡聖一如の証道刹那半偈の成道も我が家の勝劣修行の
南無妙法蓮華經の一言に摂し尽す者なり、此の血脈を列ぬる事は
未代浅学の者の予が仮字の消息を蔑如し天台の漢字の止観を見て
眼目を迷わし心意を驚動し、或は仮字を漢字と成し、或は止観明静
前代未聞の見到に耽り本迹一致の思を成す、我が内証の寿量品を知
らずして止観に同じ但自見の僻見を本として予が立義を破失して悪道
に墮つ可き故に天台三大章疏の奥伝に属す、天台伝教等の秘し給え
る正義・生死一大事の秘伝を書き顕し奉る事は且は恐れ有り且は憚り
有り、広宣流布の日公亭に於て心に之を披覽し奉るべし、会通を加える
事は且は広宣流布の為且は未代浅学の為なり又天台伝教の釈等も予

が真実しんじつの本懐ほんかいに非ざるか、未来みらい嬰兒えいじの弟子でし等彼かを本懐ほんかいかと思おもうべきも
のか。

去いぬる文永ぶんえいの免許めんきよの日に・爾前にぜん・迹門しゃくもんの謗法ほうほうを対治たいじし本門ほんもんの正義せいぎを立て被ひ
れば不日ふじつに豊歳ほうざいならむと申まをせしかば聞きく人每ひとごと

に舌を振り耳を塞ぐ、其そのの時方人一人も無く唯我にちれんと日蓮にちれん与我にじゅう日興計りなり。

問うて云く、じゆりようほん寿量品文底の大事だいじと云う秘法ひほう如何、答えて云く唯密の正法しじゆほうなり秘す可し秘す可し一代いちだい応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相ほつそうなれば一部共に理の一念いちねんさんぜん三千迹の上の本門ほんもんじゆりよう寿量じゆりようぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申もうすなり、文の底とは久遠くおんじつじよう実成の名字みょうじの妙法みょうほうを余行よぎようにわたさず直達じきたつの正觀しやうくわん事行の一念いちねんさんぜん三千さんぜんの南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきよう是なり、ごんじつ権実ごんじつは理にほん今日本にほん迹理じゆりなり本ほん迹じゆは事くおん久遠くおん迹事じゆじなり、ごんじつ亦ごんじつ権実ごんじつは約智約教やつきよう一いちだい代だい応おん仏ぶつ本ほん迹じゆ本ほん迹じゆは約身約位みょうじ名な字じ身み久く遠おん迹じゆ亦ごんじつ云ごんじつく雖ごんじつ脱ごんじつ在ごんじつ現具騰本種げんぐとうほんしゆといへり、しやくそんくおんみょうじそく釈尊しやくそん久遠くおん名字みょうじ即ごんじつの位いの御身おんみの修行しゆぎようを末法まつほう今時にちれん日蓮にちれんが名字みょうじ即ごんじつの身みに移うつせり理りは造作ぞうさくに非ひず故こに天真てんしんと日にち証智じゆち円明えんみようの故こに独朗どくろうと云うの行儀ぎようぎ本門ほんもん立行たちぎやうの血脈けちみやく之これを注つす秘ひす可かし秘ひす可かし。

又日文字の口伝・産湯の口決・二箇は両大師の玄旨にあつ、本尊七箇の
口伝は七面の決に之を表す教化弘經の七箇の伝は弘通者の大要なり、
又此の血脈並に本尊の大事は日蓮嫡嫡座主伝法の書・塔中相承
の稟承唯授一人の血脈なり、相構え相構え秘す可し秘す可し伝う可
し、法華本門宗血脈相承畢んぬ。

弘安五太歳壬午十月十一日

日蓮 在御判

一〇二一 産湯相承事 そとうじょうじ

878

日興之を記す にっこうこれしる

御名みな乗りの事、始めは是生・実名は蓮長と申し奉る後には日蓮と
御名みな乗り有る御事おんことは悲母梅菊女ひもめきくむすめの童女の御名なり平の皇山殿の二類にて御座す云云法号みよつれんぜんに妙蓮禅尼の
御物語り御座す事には、我に不思議の御夢想あり、清澄寺に通夜
申したりし時汝なんじが志こころざし真に神妙なり一閻浮提第一の宝を与えん
と思ふなり、東条片海に三国の太夫と云う者あり是を夫と定めよ
と云云、其の歳の春三月廿四日の夜なり正に今も覚え侍るなり。
我父母に後れ奉りて已後詮方なく遊女の如くなりし時御身の父
に嫁げり、或夜の靈夢に日く叡山の頂に腰をかけて近江の湖水
を以て手を洗うて富士の山より日輪の出でたもうを懐き奉ると思

うて打ち驚おどろいて後・月水留とどると夢物ものがたり 語りを申し侍はべれば、父の太夫
我ふしも不思議ぎなる御夢想ごむそうを蒙こうむるなり、虚空こくう蔵菩薩ぼさつ貌吉よき児を御肩
に立たまて給たまう

、此この少人まかさつは我が為ためには上行じょうぎよう 菩提薩ぼだいざつ なり日ひの下したの人の為ためには生
財摩訶薩まかさつ・なり、亦また一切有情いっさいいうじようの為ためには行く末すえ三世常恒さんぜじょうこうの大導師どうしな
り、是これを汝なんじに与たまえんとのたもうと見て後御事おんこと懷妊かいにんの由よしを聞くと
語かたり相あいたりき、さてこそ御事おんことは聖人しようにんなれ。

又産生うぶなままるべき夜の夢ゆめに富士山ふじさんの頂いただきに登のぼつて十方じゅうぽうを見るに明
なる事こと 掌たなこころ の内うちを見るが如ごとし三世明白さんぜみやくなり、梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四大天
王しよてん等の諸天しよてん悉ことごとく来下らいげして本地自受用報身ほんちじじゆゆうほうしんによらい如來にょらいの垂迹すいじやく・上行菩薩じょうぎようぼさつの
御身おんみを凡夫地ぼんぷに謙下けんげし給たまう御誕生ごたうじんは唯今ただなり、無熱池むねつちの主阿那婆
達多竜だつたりゆう 王八おうはち・功德水くどくを応まさに汲あみ来きるべきなり、当まさに産湯うぶゆに浴あし
奉たまるべしと

諸天しよてんに告げ給たまえり、仍よつて竜神りゆうじん王わう即時そくじに青蓮華せいれんげを一本荷にい来きれり、
其その蓮れんより清水しみづを出だして御身おんみを浴あゆみし進まいらせ侍はべりけり、其その余あまれる
水みづをば四天下してんげに灑そそぐに其その潤うるおいを受うくる人畜じんちく・草木そうもく・国土こくど世間せけん・
悉ことごとく金色こんぎの光明こうみょうを放はなち四方しほう

の草木花発らき菓成る。

男女座を並べて有れども煩惱無く淤泥の中より出れども塵泥に

染まず、譬えば蓮華の泥より出でて泥に染まざるが如し、人天・竜

畜・共に白き蓮を各手に捧げて日に向つて今此三界・皆是我有・其中

衆生・悉是吾子・唯我一人・能為救護と唱え奉ると見て驚けば則

聖人出生し給えり、每自作是念・以何令衆生・得人無上道・

速成就仏身と苦我・き給う。

我少し寐みし様なりし時・梵帝等の諸天一同・音に唱えて言く

善哉善哉・善日童子・末法教主釈迦仏と三度唱えて作礼して去し

給うと寤に見聞きしなりと慥に語り給いしを聞き食しさては某

は日蓮なりとの給いしなり。

聖人重ねて曰う様は日蓮が弟子檀那等・悲母の物語りと思ふべ

からず即ち金言なり其の故は予が修行は兼ねて母の靈夢にありけ

り・日蓮にちれんは富士山ふじさん自然しぜんの名号なごうなり、富士は郡名ぐんななり実名じつなをば
大日蓮華山だいにびやくれんげさんと云うなり、我中道わちゆうぢゆうぢを修行しゆぎようする故ゆえに是かくの如ごとく国くにを
ば日本にほんと云いい神かみをば日神にちかみと申もうし仏ぶつの童名どうなをば日種太子にちしうたいしと申もうし予まが
童名どうなをば善日ぜんにち・仮名かみは是生ぜいせい・実名じつなは即すなわち日蓮にちれんなり。

久遠下種くおんげしゆの南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきようの守護神しゆごしんは我國あまくだに天下あまくだり始めし国くには
出雲いづみなり、出雲いづみに日にちの御崎みさきと云いう所ところあり、天照太神てんしやうだいじん始めて天下あまくだり
給たまう故ゆえに日にちの御崎みさきと申もうすなり。

我が釈尊しやくそん・法華經ほけきようを説とき顯あらわし給たまいしより已来このかた十羅刹女じゅうらせつにょと号なづす、
十羅刹じゅうらせつと天照太神てんしやうだいじんと釈尊しやくそんと日蓮にちれんとは一い体みようの異名いみよう本地垂迹ほんちすいじやくの利益りやく
広大くわうだいなり、日神にちかみと月神げつかみとを合あして文字もんじを訓くんずれば十じゅうなり、十羅刹じゅうらせつと
申もうすは諸神しよかみを一いっ体たいに束たばね合あはせたる深義じんぎなり、日蓮にちれんの日にちは即そく日神にちかみ・昼
なり蓮れんは即そく月神げつかみ・夜よなり、月つきは水みづを縁えんとす蓮れんは水みづより生なずる故ゆえな
り、又是生またせいとは日にちの下したの人ひとを生なむと書かけり。

にちれん てんじょう てんか いっさいしじょう
日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり師匠なり、今

くおんげしゅ じゅりょうほん いわ こんしさんがい かいぜがう しゅくん
久遠下種の寿量品に云く「今此三界・皆是我有主君の義なり其中衆生

しつぜごし ふほ しこんししよ しょげんなん こんどうもく ただわれひとりのおいくご
悉是吾子父母の義なり而今此処・多諸患難国土草木唯我一人能為救護

ししょう さんぜじょういっつ にちれん こんしさんがい にちれん
師匠の義なり」と云えり、三世常恒に日蓮は今此三界の主なり、日蓮は

けう れんみんきょうけりやく われらむりょう
大恩以事希有・憐愍教化利益・我等無量億劫誰能報者なるべし。

も にちれん げんざい でしなら みらい でし もんじ
若し日蓮が現在の弟子並びに未来の弟子等の中に日文字を名乗

の上的字に置かずんば自然の法罰を蒙ると知るべし、予が一期の

くどく もんじ とど せっぽう まま にうこうつし これ しる
功德は日文字に留め置くと御説法ありし儘・日興謹んで之を記し

奉る。

しゅじんにん いわ そつじょう にちれん ちやくちやく ぐ けつ ただ
聖人の言く此の相承は日蓮嫡嫡一人の口決・唯授一人の秘伝

なり神妙神妙とのたまいて留め畢んぬ。

善無畏三蔵抄

文永七年 四十九歳御作

与義浄房浄顕房

於鎌倉

法華経は一代聖教の肝心八万法蔵の依りどころなり、大日経・華嚴経・般若経・深密経等の諸の顕密の諸経は震旦・月氏・竜宮天上十方世界の国土の諸仏の説教恒沙塵数なり、大海を硯の水とし三千大千世界の草木を筆としても書き尽しがたき経経の中をも、或は此れを見、或は計り推するに法華経は最第一におはします、而るを印度等の

宗日域の間に仏意を窺はざる論師・人師多くして、或は大日経は法華経に勝れたり、或る人人は法華経は大日経に劣れるのみならず華嚴経にも及ばず、或る人人は法華経は涅槃経・般若経・深密

経等には劣る、或る人人は辺辺あり互に勝劣ある故に、或る人の云く機に随つて勝劣あり時機に叶へば勝れ叶はざれば劣る、或る人の云く有門よ

り得道すべき機あれば空門をそしり有門をほむ余も是を以て知るべしなどと申す、其の時の人人の中に此の法門を申しやぶる人なければおろかなる国王等深く是を信ぜさせ給ひ田畠等を寄進して徒党あまたになりぬ、其の義久く旧ぬれば只正法なんめりと打ち思つて疑ふ事もなく過ぎ行く程に末世に彼等が論師・人師より智慧賢き人

出来して、彼等が持つところの論師・人師の立義一一に或は所依の経に相違するやう或は一代聖教の始末浅深等を弁へざる故に専ら经文を以て責め申す時、各各宗宗の元祖の邪義扶け難き故に陳し方を失ひ、或は疑つ

て云く論師・人師定めて経論に証文ありぬらん我が智及ばざれば
扶けがたし、或は疑つて云く我が師は上古の賢哲なり今我等は
末代の愚人なりなんと思ふ故に有徳高人をかたらひえて怨のみな
すなり。

しかりといへども予自他の偏党をなげすて論師・人師の料簡を
闇いて専ら経文によるに法華経は勝れて第一におはすと意得て
侍るなり、法華経に勝れておはする御経ありと申す人出来候はば
思食べし、此れは相似の経文を

見たがえて申すか又人の私に我と経文をつくりて事を仏説によせて候か、智慧おろかなる者弁へずして仏説と号するなどと思食すべし、慧能が壇經善導が觀念法門經天竺震旦日本国に私に経を説きをける邪師其の数多し、其の外私に経文を作り経文に私の言を加へなんとせる人人是れ多し、然りと雖も愚者は是を真と思ふなり、譬えば天に日月にすぎたる星有りなんと申せば眼無き者はさもやなんと思はんが如し、我が師は上古の賢哲

汝は末代の愚人なんと申す事をば愚なる者はさもやと思ふなり、此の不審は今に始りたるにあらず陳隋の代に智・法師と申せし小僧一人侍りき後には二代の天子の御師・天台智者大師と号し奉る、此の人始いやりし時但漢土五百余年の三蔵・人師を破るのみならず月氏・一千年の論師をも破せしかば南北の智人等・雲の如く起り

東西の賢哲等星の如く列りて雨の如く難を下し風の如く此の義を
 破りしかども終に論師・人師の偏邪の義を破して天台一宗の正義を
 立てにき、日域の桓武の御宇に最澄と申す小僧侍りき後には伝教
 大師と号し奉る、欽明已来の二百余年の諸の人師の諸宗を破りし
 かは始は諸人いかりをなせしかども後には一同に御弟子となり
 にき、此等の人人の難に我等が元祖は四依の論師上古の賢哲なり
 汝は像末の凡夫愚人なりとこそ難じ侍りしか、正像末には依るべ
 からず実經の文に依るべきぞ人には依るべからず専ら道理に依る
 べきか、外道仏を難じて云く「汝は成劫の末住劫の始の愚人なり
 我等が本師は先代の智者二天三仙是なり」なんと申せしかども終に
 九十五種の外道とこそ捨てられしか。

日蓮八宗を勸へたるに法相宗・華嚴宗・三論宗等は権經に依つ
 て或は実經に同じ、或は実經を下せり、是れ論師・人師より誤り

ぬと見えぬ、俱舍・成実は子細ある上律宗などは小乗最下の宗
なり、人師より論師権大乘より実大乘経なれば真言宗・
大日経等は未だ華嚴経等に及ばず何に況や涅槃・法華経等に及ぶ
べしや、而るに善無畏
三蔵は華嚴・法華・大日経等の勝劣を判ずる時、理同事勝の謬、
を作りしより已来、或はおごりをなして法華経は

けこんきよう 華嚴經にも劣りなん何に況や真言經に及ぶべしや、或は云く印・
しんこん 真言のなき事は法華經に諍ふべからず、或は云く天台宗の祖師多
く真言宗を勝ると云い世間の思いも真言宗勝れたるなんめりと
思へり、日蓮此の事を計るに人多く迷ふ事なれば委細にかんがへた
るなり、粗余処に注せり見るべし又志あらん人人は存生の時
習い伝ふべし人の

多くおもふにはおそるべからず、又時節の久近にも依るべからず
専ら經文と道理とに依るべし、浄土宗は曇鸞道綽善導より誤り
多くして多くの人人を邪見に入れけるを日本の法然是をうけ取つて
人ごとに念仏を信ぜしむるのみならず天下の諸宗を皆失はんとす
るを叡山三千の大衆南都興福寺東大寺の八宗より是をせく故に
代代の国王勅宣を下し將軍家より御教書をなしてせけどもとどま
らず、弥弥繁昌して返つて主上・上皇・万民等にいたるまで皆信状

せり。

而るに日蓮は安房の国・東条片海の石中の賤民が子なり威徳な
うとく

く有徳のものにあらず、なににつけてか南都北嶺のとどめがたき

天子の虎牙の制止に叶はざる念仏をふせぐべきとは思へども経文

を龜鏡と定め天台・伝教の指南を手ににぎりて建長五年より今年

文永七年に至るまで十七年が間是を責めたるに日本国の念仏大体

留り了ぬ

眼前に是れ見えたり、又口にすてぬ人人はあれども心計りは念仏

は生死をはなるる道にはあらざりけると思ふ、禅宗以て是くの如

し一を以て万を知れ真言等の諸宗の誤りをだに留めん事手ににぎ

りておぼゆるなり、況や当世

の高僧真言師等は其の智牛馬にもおとり螢火の光にもしかず只死

せるものの手に弓箭をゆひつけねことするものに物をとふが如し、

手に印を結び口に眞言は誦すれども其の心中には義理を弁うる事
なし、結句慢心は山の

ごとく如く高く欲心は海よりも深し、是は皆自ら経論の勝劣に迷ふよ

り事起り祖師の誤りをたださざるによるなり、所詮智者は八万

法蔵をも習ふべし十二部経をも学すべし、末代濁悪世の愚人は

念仏等の難行・易行等をば抛つて一向に法華経の題目を南無

妙法蓮華経と唱え給うべし、日輪東方の空に出でさせ給へば南浮の

空皆明かなり

大光を備へ給へる故なり、螢火は未だ国土を照さず宝珠は懐中に

持ぬれば万物皆ふらさずと云う事なし、瓦石は財をふらさず念仏

等は法華經の題目に対すれば瓦石と宝珠と螢火と日光との如し。

我等が昧き眼を以て螢火の光を得て物の色を弁ふべしや、旁

凡夫の叶いがたき法は念仏・真言等の小乗権教なり、又我が師

釈迦如来は一代聖教乃至八万法蔵の説者なり、此の娑婆無仏の

世の最先に出でさせ給いて一切衆生の眼目を開き給ふ御仏なり、

東西十方の諸仏・菩薩も皆此の仏の教なるべし、譬えば皇帝已前

は人父をしらずして畜生の如し、堯王已前は四季を弁へず牛馬の

癡なるに同じかりき、仏世に出でさせ給はざりしには比丘・

比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候いき、今比丘・比丘尼の

真言師等大日如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し念仏者等が

阿弥陀仏を一向に持つて釈迦如来を抛てたるも教主釈尊の比丘・

比丘びくになり元祖がんそが誤あやまりを伝え来るなるべし。

此この釈迦しゃか如来にょらいは三さんの故ゆゑましまして他た仏ぶつにかはらせ給たまひて娑婆世界しゃばせかい一切いっさい衆生しゆじやうの有縁うゑんの仏ぶつとなり給たまふ、一いちには此この娑婆世界しゃばせかい一切いっさい衆生しゆじやうの世尊せそんにておはします、阿弥陀仏あみだぶつは此この国くにの大王だいおうにはあらず
釈迦しゃか仏ぶつは譬たとえば我が国くにの主上しゆじやうのごとし先まづず此この国くにの大王だいおうを敬たつて後あと
に他国たこくの王わうをば敬たふべし、天照太神てんしやうだいじん・正八幡宮等しやうはちまんぐうは我が国くにの本主ほんしゆなり迹化しやくけ

の後神あらわと顕あらわれさせ給たまふ、此この神かみにそむく人ひと・此この国くにの主ぬしとなるべからず、されば天照太神てんしやうだいじんをば鏡かがみにうつし奉たてまつりて内侍所ないじどころと号なづす、八幡大菩薩はちまんたいぼさつに勅使有ちやくしありつて物申ものまうしあはさせ給たまいき、大覺世尊だいかくせそんは我等われらが尊主そんしゆなり先まづづ御本尊ごほんそんと定さだむべし、
二にには釈迦しゃか如来にょらいは娑婆世界しゃばせかい一切いっさい衆生しゆじやうの父母ふぼなり、先まづづ我が父母ふぼを孝こし後に他人たにんの父母ふぼには及およばすべし、例れいせば周しゆの武王ぶわうは父ちちの形かたちを

木像に造つて車にのせて戦の大將と定めて天感を蒙り殷の紂王をう
つ、舜王は父の眼の盲たるをなげきて涙をながし手をもつてのご
ひしかば本のごとく眼あきにけり、此の仏も又是くの如く我等
衆生の眼をば開き給いしか、いまだ他仏は開き給はず、三には此の仏は娑婆世界の一切衆生の本師な

り、此の仏は賢劫第九人壽百歳の時中天竺淨飯大王の御子十九にして出家し三十にして成道し五十余年が間・一代聖教を説き八十にして御入滅舍利を留めて一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿彌陀如来薬師・仏大日等は他土の仏にして此の世界の世尊にてはましまさず、此の娑婆世界は十方世界の中の最下の処譬えば此の国土の中

の獄門の如し、十方世界の中の十悪・五逆誹謗正法の重罪逆罪の者を諸仏如来擯出し給いしを釈迦如来此の土にあつめ給ふ、三悪並びに無間・大城に墮ちて其の苦をつぐのひて人中天上には生れたれども其の罪の余残ありてややもすれば正法を謗し智者を罵り罪つくりやすし、例せば身子は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり、畢陵は

見思を断ぜしかども慢心の形みゆ、難陀は婬欲を断じても女人に交

る心あり、煩惱ぼんのうを断じたれども余残よざんあり何いかに況ほんぶや凡夫ぼんぶにをいてを
や、されば釈迦しゃかによらい如来によらいの御名みなをば能忍のうにんと名けて此この土ちに入り給たまうに
一切衆生の誹謗ひぼうをとがめずよく忍しのび給たまふ故ゆゑなり、此等これらの秘術ひじゆつは
他仏たぶつのかけ給たまへるところなり、阿弥陀仏等あみだぶつの諸仏しよぶつ・世尊せそん悲願ひがんをおこ
させ給たまい

て心にははぢをおぼしめして還かえつて此この界かいにかよひ四十八願しじゅうはちがん十二大
願だいたんなどは起させ給たまふなるべし、觀世音等かんぜおんの他土たどの菩薩ぼさつも亦復また
是この如ごとし、仏ぶつには常平等じやうびやうとうの時ときは一切諸仏いっさいしよぶつは差別さべつなけれども常
差別さべつの時ときは各各じやくじやくに十方世界じつぱうせかいに土ちをしめて有縁無縁うゑんむゑんを分わち給たまふ、
大通智勝だいつうちしよつの十六王子じゅうろくおうじ十方じつぱうに土ちをしめて一一いちいちに我われが弟子でしを救たひ
給たまふ、其その中ちゆう
に釈迦しゃかによらい如来によらいは此土こちに当あたり給たまふ我等衆生われらしゆじやうも又また生なまを娑婆世界しやばせかいに受け
ぬ、いかにも釈迦しゃかによらい如来によらいの教化きやうけをばはなるべからず而しかりといへども人

みなこれ 皆是を知らず委く尋ねあきらめば唯我一人能為救護と申して釈迦
にょらい 如来の御手を離るべからず、而れば此の土の一切衆生・生死を厭ひ
ごほんぞん 御本尊を崇めんとおぼしめさば必ず先ず釈尊を木画の像に顕わし
ごほんぞん て御本尊と定めさせ給いて其の後力おはしまさば弥陀等の他仏にも
及ぶべし。

然るを当世聖行なき此の土の人人の仏をつくりかかせ給うに先
ず他仏をさきとするは其の仏の御本意にも釈迦如来の御本意にも
叶ふべからざる上世間の礼儀にもはづれて候、されば優填大王の赤
梅檀いまだ他仏をばきざ

ませ給はず、千塔王の画像も釈迦如来なり、而るを諸大乘経によ
る人人。我が所依の経経を諸経に勝れたりと思ふ故に教主釈尊
をば次さまにし給ふ、一切の真言師は大日経は諸経に勝れたりと
思ふ故に此の経に詮とする大日如来を我等が有縁の仏と思ひ念仏
者等は観経等を信ずる故に阿弥陀仏を娑婆有縁の仏と思ふ、当世
はことに善導・法然等が邪義を正義と思ひて浄土の三部経を指南と
する故に十造る寺は八九は阿弥陀仏を本尊とす、在家・
出家一家十家百家千家にいたるまで持仏堂の仏は阿弥陀なり、
其の外木画の像一家に千仏万仏まします大旨は阿弥陀仏なり、
而るに当世の智者とおぼしき人人是を見てわざはひとは思はずして
我が意に相叶ふ故に只称美讚歎の心のみあり、只一向悪人にして
因果の道理をも弁へず一仏をも持たざる者は還つて失なきへんも
あり

ぬべし、我等が父母世尊は主師親の三徳を備えて一切の仏に擯出せ
られたる我等を唯我一人能為救護とはげませ給ふ、其の恩大海よ
りも深し其の恩大地よりも厚し其の恩虚空よりも広し、二つの眼を
ぬいて仏前に空の星の数備ふとも身の皮を剥いで百千万天井にはる
とも涙を闕伽の水として千万億劫仏前に花を備ふとも身の肉血を
無量劫仏前に山の如く積み大海の如く湛ふとも此の仏の一分の
御恩を報じ尽しがたし。

而るを当世の僻見の学者等設ひ八万法蔵を極め十二部経を諳ん
じ大小の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも此の道理に背かば悪道
を免るべからずと思食すべし、例せば善無畏三蔵は真言宗の元祖
烏菟奈国の大王・仏種王の太子なり、教主釈尊は十九にして出家
し給いき此の三蔵は十三にして位を捨て月氏七十箇国九万里を歩
き回り

て諸経諸論諸宗を習い伝へ北天竺金粟王の塔の下にして天に仰ぎ
祈請を致し給えるに虚空の中に大日如来を中央として胎蔵界の
曼荼羅顕れさせ給ふ、慈悲の余り此の正法を辺土に弘めんと
思食して漢土に入り給ひ玄宗
皇帝に秘法を授け奉り旱魃の時雨の祈をし給いしかば三日が内に
天より雨ふりしなり、此の三蔵は千二百余尊の種子尊形三摩耶一
事もくもりなし、当世の東寺等の一切の真言宗一人も此の御弟子
に非るはなし、而るに

此の三蔵一時に頓死ありき数多の獄卒来つて鉄繩七すぢ懸けたてまつり閻魔王宮に至る此の事第一の不審なり、いかなる罪あつて此の責に値い給ひけるやらん、今生は十悪は有りもやすらん五逆罪は造らず過去を尋ぬれば大国の王となり給ふ事を勤うるに十善戒を堅く持ち持ち五百の仏陀に仕へ給ふなり何の罪かあらん、其の上十三にして

位を捨て出家し給いき閻浮第一の菩提心なるべし、過去・現在の軽重の罪も滅すらん其の上月氏に流布する所の經論諸宗を習い極め給いしなり何の罪か消えざらん、又真言密教は他に異なる法なるべし一印一真言なれども手

に結び口に誦すれば三世の重罪も滅せずと云うことなし、無量俱低劫の間作る所の衆の罪障も此の曼荼羅を見れば一時に皆消滅すところぞ申し候へ況や此の三蔵は千二百余尊の印・真言を諳に浮べ

そくしんじょうぶつ かんどうきょう
即身成仏の觀道鏡に懸り兩部灌頂の御時大日覺王となり給いき、
いかん えんま
如何にして閻魔の責に豫り給いけるやらん、日蓮は顯密二道の中に
すぐ
勝れ

たまひ われら
させ給いて我等易易と生死を離るべき教に入らんと思ひ候いて真言
しんごん
の秘教をあらあら習ひ此の事を尋ね勘づるに一人として答をする
あくとつ まぬか
人なし、此の人悪道を免れずば当世の一切の真言並びに一印一
しんごん どうぞくさんあくどう つみ まぬら
真言の道俗三悪道の罪を免るべきや。

にちれん
日蓮此の事を委く勘づるに二つの失有つて閻魔王の責に予り給へ
だいにちきよう ほけきよう
り、一つには大日経は法華経に劣るのみに非ず涅槃経・華嚴経・
はんによきよう およ
般若経等にも及ばざる経にて候を法華経に勝れたりとする謗法の
とが
失なり、二つには大日如来は釈尊の分身なり而るを大日如来は
きようしゆしゃくそん すく
教主釈尊に勝れたりと思ひし僻見なり、此の謗法の罪は無量劫の
よそん
間千二百余尊の法を行ずとも悪道を免るべからず、此の三蔵此の
あくどう まぬら
さんぞう

とがまぬか 失免れ難き故に諸尊の印・真言を作せども叶はざりしかば

法華經第二譬喩品の今此三界・皆是我有其中衆生悉是吾子

而今此処・多諸患難唯我一人能為救護の文を唱へて鉄の繩を免れ

させ給いき、而るに善無畏已後の真言師等は 大日經は一切經に

勝るるのみに非ず法華經に超過せり、或は法華經は華嚴經にも劣

るなんと申す人もあり此等は人は異なれども其の謗法の罪は同じ

きか、又善無畏三蔵法華經と大日經と大事とすべしと深理をば同

ぜさせ給いしかども印と真言とは法華經は大日經に劣りけるとお

ぼせし僻見計りなり、其の已後の真言師等は大事の理をも法華經

は劣れりと思へり、印・真言は又申すに及ばず謗法の罪遙にかさみ

たり、閻魔の責にて墮獄の苦を延ぶべしとも見え直に阿鼻の炎を

や招くらん、大日經

には本一念三千の深理なし此の理は法華經に限るべし、善無畏三蔵

てんだいだいし 天台大師の法華經の深理を読み出でさせ給いしを盗み取つて
だいにちきよう 大日經に入れ法華經の莊嚴として説かれて候大日經の印・真言を
彼の經の得分と思へり、理も

同じと申すは僻見なり真言・印契を得分と思ふも邪見なり、譬え
ば人の下人の六根は主の物なるべし而るを我が財と思ふ故に多く
の失出で来る、此の譬を似て諸經を解るべし劣る經に説く法門は
勝れたる經の得分と成るべきなり。

而るを日蓮は安房の国・東条の郷清澄山の住人なり、幼少の時
より虚空蔵菩薩に願を立てて云く日本第一の智者となし給へと云
云、虚空蔵菩薩眼前に高僧とならせ給いて明星の如くなる智慧の
宝珠を授けさせ給いき、其のしるしにや日本国の八宗並びに禅宗
・念仏宗等の大綱粗伺ひ侍りぬ、殊には建長五年の比より今文永
七年に至る

まで此の十六七年の間、禅宗と念仏宗とを難ずる故に、禅宗・念仏宗の学者蜂の如く起り雲の如く集る、是をつむる事一言二言には過ぎず、結句は天台・真言等の学者自宗の廃立を習ひ失いて我が心と他宗に同じ在家の信をなせる事なれば、彼の邪見の宗を扶けんが為に天台・真言は念仏宗・禅宗に等しと料簡しなして、日蓮を破するなり、此れは日蓮を破する様なれども、我と天台・真言等を失ふ者なるべし、能く能く恥ずべき事なり。

此の諸経諸論諸宗の失を弁つる事は、虚空蔵菩薩の御利生本師道善御房の御恩なるべし。龜魚すら恩を報ずる事あり、何に況や人倫をや、此の恩を報ぜんが為に清澄山に於て、佛法を弘め、道善御房を導き奉らんと欲す、而るに此の人愚癡におはする上、念仏者なり、三悪道を免るべしとも見え、而も又日蓮が教訓を用ふべき人にあらず、

然れども文永元年十一月十四日西条華房の僧坊にして見参に入り
し時・彼の人の云く我智慧なければ請用の望もなし、年老いていら
へなければ念仏の名僧をも立てず世間に弘まる事なれば唯南無
阿弥陀仏と申す計りなり、又我が心より起こらざれども事の縁有
つて阿弥陀仏を五体まで作り奉る是れ又過去の宿習なるべし、此
の科に依つて地獄に墮つべきや等云云、爾時に日蓮意に念はく別して中違ひま
いらする事無けれども東条左衛門入道蓮智が事に依つて此の十余
年の間は見奉らず但し中不和なるが如し、穩便の義を存じおだや
かに申す事こそ礼儀なれとは思ひしかども生死界の習ひ老少不定
なり又二度見参の事難かるべし、此の人の兄道義房義尚此の人に向
つて
むげんじごく
無間地獄に墮つべき人と申して有りしが臨終思ふ様にもましまさ

ざりけるやらん、此の人も又しかるべしと哀れに思いし故に思い切
つて強強に申したりき、阿弥陀仏を五体作り給へるは五度無間地獄
に墮ち給ふべし其の故は正直捨方便の法華經に釈迦如来は我等が
親父阿弥陀仏は伯父と説かせ給ふ、我が伯父をば五体まで作り
供養せさせ給いて親父をば一体も造り給はざりけるは豈不孝の人
に非ずや、中中山人海人などが東西をしらず一善をも修せざる
者は還つて罪浅き者なるべし、当世の道心者が後世を願ふとも
法華經・釈迦仏をば打ち捨て阿弥陀仏念仏などを念念に捨て
申さざるはいかがあるべかるらん、打ち見る処は善人とは見え
れども親を捨てて他人につく失免るべしとは見えず、一向悪人は
まだ仏法に帰せず釈迦仏を捨て奉る失も見えず縁有つて信ず
る辺もや有らんずらん、善導・法然並びに当世の学者等が邪義に
就いて阿弥陀仏を本尊として一向に念仏を申す人人は多生曠劫を

ふるとも此こゝの邪見じやけんをひるがえり翻ひるがえりへして釈迦しやかぶつ仏ぶつ・法華ほけき經きやうに歸かへりすべしとは見え
ず、されば雙林そうりん最後さいごの涅槃ねはん經きやうに十惡じゆうあく・五逆ごぎやくよりも過すぎておそろし
き者ものを出だださせ給たまふに謗法ぼうぼう闡提せんたいと申もうして二百五十戒にひゃくごじゆうを持たもち三衣さんね
一鉢いちぱつを身みに纏ちぢへる智者ちしや共ともの中ちゆうにこそ有あるべしと見え侍はべれとこまごま
と申もうして候まちいしかば此こゝの人もこころえげに思おもひて・おはしき、傍座ぼうざ
の人人ひとびともこころえげにをもはれしかども其その後承たまわりしに法華ほけき經きやうを
持もたるとるの由承たまわりしかば此こゝの人ひと

邪見じゃけんを 翻ひるがえり し給たまふか善人ぜんにんに成り給たまいぬと悦よろこび思おもひ候こう処ところに又此またこのの
釈迦しやくか仏ぶつを造つくらせ給たまう事こと申もうす計はかりなし、当座とうざには強つよなる様ように有ありし
かども法華ほけき經きやうの文ぶんのままに説とき候こういしかばかうおれさせ給たまへり、忠
言ちゆうげん耳みみに逆さからい良藥りやうやく口くちに苦くるしと申もうす事ことは是これなり。

今いま既に日蓮にちれん・師しの恩おんを報むかはず定さだめて仏神ぶつじん・納受のうじゆし給たまはんか、各各此それぞれこの
の由よしを道善房どうぜんぼうに申もうし聞きかせ給たまふべし、仮令たと強言かうげんなれども人をたすく
れば実語じつご・語ごなるべし、設たとひ・語ごなれども人を損こずるは妄語もうご・
強言かうげんなり、当世とうせ・学がく匠等しやうとうの法門ほうもんは 語ご・実語じつごと人人ひとびとは思食おほしめしたれど
も皆強言みなかうげん妄語もうごなり、仏ほとけの本意ほんいたる法華ほけき經きやうに背そむく故ゆゑなるべし、日蓮にちれんが
念仏ねんぶつ申もうす
者ものは無間地獄むげんじごくに墮おつべし禅宗ぜんしゆう・真言宗しんこんしゆうも又あやまり謬まちがひの宗しゆなりなると
申もうし候こうは強言かうげんとは思食おほしめすとも実語じつご・語ごなるべし、例たとせば此このの道善どうぜん
御房ごぼうの法華ほけき經きやうを迎むかへ釈迦しやくか仏ぶつを造つくらせ給たまう事ことは日蓮にちれんが強言かうげんより起おこる、

にほんこく 日本国の一切衆生も亦復是くの如し、当世此の十余年已前は一向念仏者にて候いしが十人が一二人は一向に南無妙法蓮華経と唱へ

二三人は

両方になり、又一向念仏申す人も疑をなす故に心中に法華経を

信じ又釈迦仏を書き造り奉る、是れ亦日蓮が強言より起る、譬え

ば梅檀は伊蘭より生じ蓮華は泥より出でたり而るに念仏は無間

地獄に墮つると申せば当世牛馬の如くなる智者どもが日蓮が法門

を仮染にも毀るは糞犬が師子王をほへ癡猿が帝釈を笑ふに似たり。

文永七年

日蓮 花押

義浄房 浄頭房

一〇四 佐渡御勘気抄

ぶんえい 文永八年十月 五十

歳御作 891P

与円浄房 於佐渡

九月十二日に御勘気を蒙て今年十月十日佐渡の国へまかり候なり、本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり恩ある人をもたすけんと思ふ、仏になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏にはなり候らめとをしはからる、既に経文のごとく悪口罵詈・刀杖・瓦礫・数数見擯出と説かれてかかるめに値い候こそほげきょう法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり後生もたのもし候、死して候はば必ず各各をもたすけたてまつるべし、天竺に師子尊者と申せし人は檀弥羅王に頸をはねられ提婆菩薩は外道につきころさる、漢土に竺二の道生と申せし人は蘇山と申す所へながさ

る、ほつてうさんぞう法道三蔵は面かおにかなを・やかれて江南と申もつす所へながされき、

是れ皆みな

ほけきよつ

法華經ぶつぽうのとく仏法のゆへなり、日蓮にちれんは日本国にほんこく・東夷とうじやう・東条あわ・安房の国

・海辺せんだらの旃陀羅が子なり、いたづらに・くちん身を法華經ほけきよつの御故ゆえに捨

てまいらせん事たまあに石に金を・かふるにあらずや、各各なげかせ

給たまうべからず、道善だうぜんの御房ごぼうにも・かう申もうしきかせまいらせ給たまうべし、

領家あまこぜんの尼御前あまこぜんへも御ふみと存じ候へども先かか身みのふみなれば・

なつかしやと・おぼさざるらんと申もうしぬると便宜びんぎあらば各各

おんものがたり御物語もうり申もうさせ給たまい候へ。

十月 日

にちれんかおう日蓮花押

御ほうもん法門ほうもんの事くわ委くわしく承そうらはり侯おわい畢おわんぬ、法ほけき華き經ようの功く徳とくと申もうすは
 唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつの境きよう界かい・十じゆつ方ほう分ぶん身じんの智ち恵えも及およぶか及およばざるかの内ない証しやうな
 り、されば天台てんだい大師だいしも妙めうの一字いちじをば妙めうとは妙めうは不可ふか思し議ぎと名なくと
 釈しゃくし給たまひて侯しやくなるぞ前さき前さき御ご存ぞん知じの如ごとし、然しかれども此この經きやうに於おいて重ちゆう重ちゆう
 の修しゆ行ぎやう分ぶんれたり天台てんだい・妙めう樂らく・伝でん教ぎやう等とう計けいりしらせ給たまう法ほう門もんなり、
 就な中なかく伝でん教ぎやう大師だいし・天台てんだいの後ご身みんにて渡わたらせ給たまへども人ふしんの不ふ審しんを晴はさ
 んとや思しし食じしけん大だい唐とうへ決けつをつかはし給たまふ事こと多たし、されば今こん經ぎやう
 の所しよ詮せんは十じゆつ界かい互ご具ぐ・百ひゃつ界かい千せん如によ・一いち念ねん三さん千せんと云いふ事ことこそゆゆしき
 大だい事じにては侯しやくなれ、此この法ほう門もんは摩ま詞し止しかん觀かんと申もうす文ぶんにしるされて侯しやく、
 次じに寿じゆり量りやう品ほんの法ほう門もんは日に蓮ちれんが身みんに取とつてたのみあることぞかし、天台てんだい
 ・伝でん教ぎやう等とうも粗ぼしらせ給たまへども言ごんに出いして宣のべべ給たまはず竜りゆう樹じゆ・天てん親じん等とうも

またかくのごと
亦是くの如し、寿命品の自我偈に云く、「一心に仏を見たてまつらんと欲し

て自ら身命を惜しまず云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依つて顯はすなり、其の故は寿命品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事・此の経文なり秘す可し秘す可し、叡山の大師・渡唐して此の文の点を相伝し給う処なり、一とは一道清浄の義心とは諸法なり、されば天台大師心の字を釈して云く、「一月三星・心果清浄」云云、日蓮

云く一とは妙なり心とは法なり欲とは蓮なり見とは華なり仏とは経なり、此の五字を弘通せんには不自惜身命是なり、一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏なり、無作の三身の仏果を成就せん事は恐くは天台・伝教にも越へ竜樹・迦葉にも勝れたり、相構へ相構へて心の師とはなるとも心を師とすべからず

と仏は記し給ひしなり、法華經の御為に身をも捨て命をも惜しまざ
れと強情に申せしは是なり、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

ぶんえい
文永十年五月二十八日

にちれんかおう
日蓮花押

ほうごへんじ
義浄房御返事

一〇六

きよすみでら たいしゅう
清澄寺大衆中

建治二年正月

五十五歳御作

893p

新春の慶賀じ た こうじんこうじん自他幸甚幸甚、こそ去年来らず如何いかん定めて子細しさい有らんか、
抑そもそもさんけい参詣くわだを企て候わば伊勢いせ公の御房ごぼうに十住じゅうじゅう心論ひそうぼうやく・秘蔵宝鑰ひそうぼうやく二教論ひそうぼうやく
等の真言しんごんの疏じよを借用候へ、是かくのごとくの如きは真言しんごん師蜂起ほうきの故ゆえに之これを
申もうす、又止観しかんの第一だいいち第二御隨身ずいしん候へ東春輔正記ふしよつきなんどや候らん、円
智房ぼうの御弟子おんでしに観智房かんちぼうの持たもちて候なる宗要ようしゅう集あつかしたび候へその
み

ならずふみの候由も人人申し候いしなり早々に返すべきのよし申させ給へ、今年は殊に仏法の邪正たださるべき年か浄頭の御房義城房等には申し給うべし、日蓮が度度殺害せられんとし並びに二度まで流罪せられ頸を刎られんとせし事は別に世間の失に候はず、生身の虚空蔵菩薩より大智慧を給わりし事ありき、日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思し食しけん明星の如くなる大宝珠を給いて右の袖にうけとり候いし故に一切経を見候いしかば八宗並びに一切経の勝劣粗是を知りぬ、其の上真言宗は法華経を失う宗なり、是は大事なり先ず序分に禅宗と念仏宗の僻見を責めて見んと思ふ、其の故は月氏・漢土の仏法の邪正は且らく之を置く日本国の法華経の正義を失うて一人もなく人の悪道に墮つる事は真言宗が影の身に随うがごとく山山・寺寺ごとに法華宗に真言宗をあひそひて如

法の法華經ほけきょうに十八道じゅうはちだうをそへ懺法ぜんぼうに阿彌陀經あみだを加へ天台宗てんだいしゅうの學者がくしゃの
灌頂くわんぢょうをして真言宗しんごんしゅうを正とし法華經ほけきょうを傍とせし程ほどに、真言經しんごんと申もうす
は爾前にぜんぜん權教ごんきょうの内の華嚴けごん般若はんによにも劣おとれるを慈覺じかく・弘法こうぼうこれに迷惑めいわくし
てある或あるは法華經ほけきょうに同じある或あるは勝すぐれたりすくなりすくなど申もうして、仏ぶつを開眼かいげんするに
もぶつげんだいにち仏眼ぶつげん大日だいの印いん・真言しんごんをもつて開眼かいげん供養くようするゆへに日本にほん国こく

の木画の諸像皆無魂無眼の者となりぬ、結句は天魔入り替つて檀那をほろぼす仏像となりぬ王法の尽きんとするこれなり、此の悪真言かまくらに來りて又日本国をほろぼさんとす。

其の上禅宗・浄土宗などと申すは又いうばかりなき僻見の者なり、此れを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかども虚空

蔵菩薩の御恩をほうぜんがために建長五年四月二十八日安房の国

・東条の郷清澄寺道善の房持仏堂の南面にして浄円房と申す者

並びに少少の大衆にこれを申しはじめて其の後二十余年が間退転

なく申す、或は所を追い出され、或は流罪等、昔は聞く不輕菩薩

の杖木等を今は見る日蓮が刀劍に当る事を、日本国の有智・無智

上下万人の云く日蓮法師は古の論師・人師大師先徳にすぐるべから

ずと、日蓮この不審をはらさんがために

正嘉文永の大地震大長星を見て勘えて云く我が朝に二つの大難あ

るべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、自界は鎌倉に権の大夫殿
御子孫どしうち出来すべし、他国侵逼難は四方よりあるべし、其の
中に西よりつよくせむべし、是れ偏に仏法が一国挙りて邪なるゆ
へに梵天帝釈の他国に仰せつけてせめらるるなるべし。

日蓮をだに用いぬ程ならば將門・純友・貞任・利仁・田村のやうな
將軍百千万人ありとも叶ふべからず、これまことならずば眞言
と念仏等の僻見をば信ずべしと申しひろめ候いき、就中清澄山の
大衆は日蓮を父母にも三宝にもをもひをとさせ給はば今生には
貧窮の乞者とならせ給ひ後生には無間地獄に墮ちさせ給うべし故・

いかにと

なれば東条左衛門景信が悪人として清澄のかいしし等をかりとり
房房の法師等を念仏者の所従にし・なんとせしに日蓮敵をなして
領家のかたうどとなり清澄・二間の二箇の寺東条が方につくなら

ば日蓮にちれん・法華經ほけきょうをすてんと、せいじやうきしやうの起請きしやうをかいて日蓮にちれんが御本尊ごほんそんの手にゆいつけていのりて一年が内に両寺りやうじは東条とうじやうが手をはなれ候いしな

り、此の事は虚空蔵菩薩こくうぼさつもいかでかすてさせ給たまうべき、大衆たいしゆうも日蓮にちれんを心へずに・をもはれん人人ひとびとは天にすてられ・たてまつらざるべしや、かう申せば愚癡ぐちの者は我をのろうと申もうすべし後生ごしやうに無間地獄むげんじごくに墮おちんが不便ふびんなれば申もうす

なり。

領家の尼ごぜんは女人にょにんなり愚癡ぐちなれば人人ひとびとのいひをどせば。さこそとましまし候こしよらめ、されども恩をしらぬ人となりて後生あくだうに悪道あくどうに墮おちさせ給たまはん事こそ不便ふびんに候へども又一つには日蓮にちれんが父母ふぼ等に恩をかほらせたる人なれば。いかにしても後生ごしよをたすけたてまつらんと。こそいのり候へ、法華經ほけきよと申もうす御經ごきよは別べちの事も候はず我は過去かこ五百塵点劫ごひやくじんてんこより先の仏ぶつなり、又舍利弗しゃりほつ等は未来みらいに仏ぶつになるべしと、これを信ぜざらん者は無間地獄むげんじごくに墮おつべし、我のみかう申すにはあらず多宝仏たぼうぶつも証しょう明みょうし十方じゅうほうの諸仏しよぶつも舌をいだしてかう候、地涌じゆせんがいもんじゆ・観音かんのん・梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・十羅刹じゆらせつ・法華經ほけきよの行者ぎやうじやを守護しゆごし給たまはんと説ためられたり、されば仏ぶつになる道みちは別べちのやうなし過去かこの事こと未来みらいの事を申もうしあてて候がまことの法華經ほけきよにては候なり。

日蓮にちれんはいまだつくしを見ずえぞしらず、一切經いっさいきよをもつて勘かんへて候

へばすでに値いぬ、もし・しからは各各不知恩の人なれば無間地獄
に墮ち給うべしと申し候はたがひ候べきか、今はよし後をござらんぜ
よ日本国は当時のゆき対馬のやうになり候はんずるなり、其の時
安房の国にむこが寄せて責め候はん時・日蓮房の申せし事の合うた
りと申すは偏執の法師等が口すくめて無間地獄に墮ちん事不便な
り不便なり。

正月十一日

日蓮花押

安房の国清澄寺大衆中

このふみはさど殿とすけあさり御房と虚空蔵の御前にして大衆ご
とによみきかせ給へ。

一〇七 聖密房御書

建治三年 五十六歳御

作 896P

大日経だいにちきようをば善無畏ぜんむい・不空ふくう・金剛智等こんごうちの義ぎに云いく「大日経だいにちきようの理りと

ほけきよう

法華経ほけきようの理りとは同じ事ことなり但印いんと真言しんごんとが法華経ほけきようは劣せうなり」と立たて

たり、良りやう・和尚わじやう・広修くわうしゆ・維い・なんど申もうす人は大日経だいにちきようは華嚴経けこんきやう・

ほけきよう

法華経ほけきよう・涅槃経ねはんきやう等らには及およばず但方等部ほうとうぶの经きやうなるべし、日本にほんの弘法くわうぼう

だいし

大師だいし云いく「法華経ほけきようは猶華嚴経なわけこんきやう等らに劣せうれりまして大日経だいにちきようには及およぶべか

らず」等云云、

又い云わく「法華経ほけきようは釈迦しゃかの説せつ・大日経だいにちきようは大日如来だいにちによらいの説せつ・教主きやうしゆ既にこと

なり、又釈迦しゃか如来によらいは大日如来だいにちによらいの御使おんつかいとして顕教けんきやうをとき給たまうこれは

みつきよう

密教みつぎようの初門じよもんなるべし、或あるは云いく「法華経ほけきようの肝心かんじんたる寿量品じゆりやうぼんの仏ぶつは

顕教けんきょうの中にしては仏ぶつなれども密教みつぎょうに対すれば具縛くばくの凡夫ほんぶなり」と云云。

にちれんかんが 日蓮にちれん勸かんえて云いく大日だい経にちぎょうは新しん訳やくの経きょう唐とうの玄宗げんそう皇帝こうていの御時おんとき開元かいげん四年しんに天竺てんじくの善無畏ぜんむい三蔵さんそうもて来きる、法華ほけき経きょうは旧く訳やくの経きょう・後秦こうしんの御宇ぎぎょうにらじゅうさんそう羅什らじゅう三蔵さんそうもて来きる其その中間ちゅうげん三百余年さんひゃくねんなり、法華ほけき経きょう亘わたて後ご百余年ひゃくねんをへ経てんて天台てんたい智者ちしや大師だいし・教門きょうもんには五時ごじ四教しきょうを立たてて上じやう五百余年ごひゃくねんの学者がくしやの教相きやうそうをやぶり觀門くあんもんには一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもんをさとりて始はめて法華ほけき経きょうの理りを得えたり、天台てんたい大師だいし已前いぜんの三論宗さんろんしゅう・已後いごの法相宗ほうそうしゅうには八界はつがいを立たて十界じゅうがいを論ろんぜず一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもんをば立たつべきやうなし、華嚴宗けこんしゅうは天台てんたい・已前いぜんには南北なんぼくの諸師しよし華嚴經けこんきやうは法華經ほけききやうに勝すぐれたりとは申もうしけれども華嚴宗けこんしゅうの名なは候まうはず、唐とうの代たに高宗こうそうの後ご・則すくてん天皇てんこう后こうと申もうす人おんときの御時ほうそう・法藏ほつぞう法師ほふし・澄觀ちやうかんなど申もうす人けこんしゅう・華嚴宗けこんしゅうの名なを立たてたり、此この宗きやうそうは教相きやうそうに五教ごきやうを立たて觀門くあんもんには十玄じしゆ・六相りくさうなど申もうす法門ほうもん

なり、をびただしきやうに・みへたりしかども澄観ちようかんは天台てんだいをはするやうに

てなてんだいを天台いちねんさんぜんの一念三千ほうもんの法門ほうもんをかりとりて我が経しんによくの心如工画師えしの

文けこんしゆうの心とす、これは華嚴宗てんだいは天台てんだいに落ちたりというべきか又

一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを盗みとりたりというべきか、澄観ちようかんは持戒じかいの人・

大小だいしほうの戒いぢじんを一塵いちじんをもやぶらざれ

ども一念三千の法門をばぬすみとれりよくよく口伝あるべし、
真言宗の名は天竺にありやいなや大なる不審なるべし、但真言經
にてありけるを善無畏等の宗の名を漢土にして付けたりけるかよ
くよくしるべし、就中善無畏等法華經と大日經との勝劣をはん
ずるに理同事勝の釈をばつくりて一念三千の理は法華經・大日經こ
れ同じ

なんどいへども印と真言とが法華經には無ければ事法は大日經に
劣れり、事相かけぬれば事理俱密もなしと存ぜり、今日本国及び
諸宗の学者等並びにことに用ゆべからざる天台宗共にこの義をゆ
るせり例せば諸宗の人人をばそねめども一同に弥陀の名をとなへ
て自宗の本尊をすてたるがごとし天台宗の人人は一同に真言宗に
落ちたる者なり。

にちれん 日蓮・理のゆくところを不審して云く善無畏三蔵の法華經と
だいにちきよう 大日經とを理は同じく事は勝れたりと立つるは天台大師の始めて
たまた 立て給へる一念三千の理を今大日經にとり入れて同じと自由に判
いちねんさんぜん ずる条ゆるさるべしや、例せば先に人丸がほのぼのとあかしのう
らのあさぎりにしまかくれゆくふねをしぞをもうとよめる
を、紀のしく

みなもと ばう源のしたがつうなんどが判じて云く「此の歌はうたの父うた
の母」等云云、今の人我うたよめりと申してほのぼのと乃至船を
しぞをもうと一字をもたがへずよみて我が才は人丸にをとらずと
もち 申すをば人これを用ゆべしや、やまかつ海人などは用ゆる事もあ
てんだいだいし りなん、天台大師の始めて立て給へる一念三千の法門は仏の父
の

母なるべし、百年已後の善無畏三蔵がこの法門をぬすみとりて

だいにちきよう 法華経とは理同なるべし、理同と申すは一念三千なりと
かけるをば智慧かしこき人は用ゆべしや、事勝と申すは印・真言な
しなんど申すは天竺の大日経・法華経の勝劣か漢土の法華経・
大日経の勝劣か、不空三蔵の法華経の儀軌には法華経に印・真言
をそへて訳

せり、仁王経にも羅什の訳には印・真言なし不空の訳の仁王経には
印・真言これあり、此等の天竺の経経には無量の事あれども月氏
漢土・国をへだてて・とをく・ことごとく・もちて来がたければ経を
略するなるべし、法華経

には印・真言しんごんなけれども二乗にじょう作仏さぶつ・劫国名号こくごくみょうごう・久遠実成くおんじつじょうと申もうすきばの事ことあり、大日經等だいにちぎょうには印・真言しんごんはあれども二乗にじょう作仏さぶつ・久遠実成くおんじつじょうこ
れなし、二乗にじょう作仏さぶつと印・真言しんごんとを並ぶるに天地てんちの勝劣しょうれつなり、
四十余年よんじゅうごねんの經經けいけいには二乗にじょうは敗種はいしゆの人ひとと一字いちじ・二字にじならず無量無辺むりょうむへん
の經經けいけいに嫌きらはれ、法華經ほけきょうにはこれこを破はして二乗にじょう作仏さぶつを宣のたまべたり、
いづれの經經けいけいにか印・
真言しんごんを嫌きらうことばあるや、その言ことばなければ又大日經だいにちぎょうにも其その名なを
嫌きらはず但印・真言しんごんをとけり、印いんと申もうすは手ての用もちなり手て仏ぶつにならずは
手ての印いん・仏ぶつになるべしや、真言しんごんと申もうすは口くちの用もちなり口くち仏ぶつにならずば
口くちの真言しんごん・仏ぶつになるべし
や、二乗にじょうの三業さんごうは法華經ほけきょうに値あいたてまつらずは無量劫むりょうじつ・千二百余尊よそん
の印・真言しんごんを行おこなはずとも仏ぶつになるべからず、勝すぐれたる二乗にじょう作仏さぶつの事法じふほ
をばとかずと申もうして劣おとれる印・真言しんごんをとける事法じふほをば勝すぐれたりと

申すは理によれば盗人なり

事によれば劣謂勝見の外道なり、此の失によりて閻魔の責めをばか

ほりし人なり、後にくいかへして天台大師を仰いで法華にうつりて

悪道をば脱れしなり。

久遠実成などは大日経にはをもひもよらず、久遠実成は一切

の仏の本地・譬へば大海は久遠実成・魚鳥は千二百余尊なり、久遠

実成なくば千二百余尊はうきくさの根なきがごとし夜の露の日輪

の出でざる程なるべし、天台宗の人人この事を弁へずして真言師に

たばらかされたり、真言師は又自宗の誤をしらず・いたづらに

悪道の邪念

をつみをく、空海和尚は此の理を弁へざる上華嚴宗のすでにやぶら

れし邪義を借りとりて法華経は猶華嚴経にをとれりと僻見せり、

亀毛の長短・兎角の有無・亀の甲には毛なしなんぞ長短をあらそ

い兔の頭には角なし・なんの有無を論ぜん、理同と申す人いまだ
閻魔のせめを脱れず、大日経に劣る華嚴經に猶劣ると申す人・謗法
を脱るべしや、人はかはれども其の謗法の義同じかるべし、弘法の
第一の御弟子かきのもときの僧正・紺青鬼となりし・これをもつて
しるべし、空海悔改なくば悪道疑うべしとも・をばへず其の流をう
けたる人人又いかん。

問うて云わく法師一人・此の悪言をばく如何、答えて云く日蓮は
此の人人を難ずるにはあらず但不審する計りなり、いかりをばせ
ば・さでをはしませ、外道の法門は一千年・八百年・五天にはびこり
て輪王より万民かうべをかたぶけたりしかども九十五種共に仏に
やぶられたりき、撰論師が邪義・百余年なりしもやぶれき、南北の
三百余年の邪見もやぶれき、日本・二百六十余年の六宗の義もや
ぶれき、其の上此の事は伝教大師の或書の中にやぶ

られて候を申すなり、日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴・
 真言・天台、小乗に三宗あり俱舎・成実・律宗なり、真言・華嚴・
 三論・法相は大乗よりいでたりといへども、くわしく論ずれば皆
 小乗なり、宗と申すは戒・定・慧の三学を備へたる物なり、其の中
 に定・慧をさてをきぬ、戒をもて大・小のばうじをうちわかつものな
 り、東寺の真言
 ・法相・三論・華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗・律宗の
 乳驢・臭糞の戒を持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗な
 るべし、比叡山には天台宗・真言宗の二宗・伝教大師習いつたへ
 給いたりしかども天台円頓の円定・円慧・円戒の戒壇立つべきよし
 申させ給いしゆへに天台宗に対しては真言宗の名あるべからずと・
 をぼして天台法華宗の止観・真言とあそばして公家へまいらせ給い
 き、伝教より慈覚たまはらせ給いし誓戒の文には天台

法華宗の止観・真言と正くのせられて真言宗の名をけづられたり、
天台法華宗は仏立宗と申して仏より立てられて候、真言宗の
真言は当分の宗・論師・人師始めて宗の名をたてたり、而るを事を
大日如来・弥勒菩薩等によせたるなり、仏御存知の御意は但法華經
一宗なるべし小乗には二宗十八宗二十宗候へども但所詮の理は
無常の一理なり、法相宗は唯心有境・大乘宗・無量の宗ありとも
所詮は唯心有境とだにいはば但一宗なり三論宗は唯心無境・
無量の宗ありとも所詮唯心無境ならば但一宗なり、此れは大乘
の空・有の一分か、華嚴宗・真言宗あがらば但中・くだらば大乘の
空・有なるべし、經文の説相は猶華嚴・般若にも及ばず但しよき人
とおぼしき人人の多く信じたるあいだ、下女を王のあいするにた
り、大日經等は下女のごとし理は但中にすぎず、論師・人師は王の
ごとし人のあいするによて、いばうがあるなるべし、上の問答等は

当とう時じは世すえになりて人の智ち浅せんく慢まん心しん高たかきゆへに用もちゆ

る事はなくとも、聖人しやうにん・賢人けんじんなんども出でたらん時は子細しさいもやあら
んずらん、不便ふびんにをもひまいらすれば目安めやすに注せり、御ひまにはな
らはせ給たまうべし。

これは大事だいじの法門ほうもんなり、こくうざう菩薩ぼさつにまいりてつねによみ
奉らせ給たまうべし。

聖密房ほふに之これを遣つかわす

日蓮にちれん花押かおう

一〇八 華果成就御書けかじょうじゆごしよ

弘安元年こうあんがねん四月 五十七歳

御作 900P

与淨顯房ほふ・義淨房ほふ 於身延

其その後ごに事こともうちたへ申もうし承うけたまわらず候こう、さては建治けんぢの比ひ・故こ
道善房どうぜんぼう聖人せいじんのために二札にせつかきつかはし奉たてまつり候こうを嵩たかが森もりにてよませ

給たまいて侯よりこよし悦よろこび入いつて侯、たとへば根ねふかきときんば枝し葉ようかれず、
源みなもとに水みづあれば流ながかはかず、火かはたきぎ・かくればたへぬ、草木そうもくは
大地だいちなくして生長せいじやうする事ことあるべからず、日蓮にちれん・法華ほけきやう經きやうの行ぎやう者じやとなつ
て善ぜん惡あく

につけて日蓮にちれん房ぼう・日蓮にちれん房ぼうとつたはるる此この御ご恩おんさながら故ししやう師じ匠じやう道どう善ぜん
房ぼうの故ゆえにあらずや、日蓮にちれんは草そう木もくの如ごとく師し匠じやうは大だい地ちの如ごとく、彼あなりゆうきやうの地じ涌ゆ
の菩ぼ薩さつの上じやう首しゆ四し人にんにてまします、一名いちめい上行じやうぎやう乃ない至し四し名めい安あなりゆうきやう立りゆう行ぎやう菩ぼ薩さつ
云うん云うん、末まつ法ぽうには上じやう行ぎやう・出しゅつ世せし給たまはば安あなりゆうきやう立りゆう行ぎやう菩ぼ薩さつも出しゅつ現げんせさせ
給たまうべきか、さればいねは華はな果み成じやう就じゆすれども必かならずず米こめの精じやう・大だい地ちにを
さまる、

故ゆえにひつぢおひいでて二に度ど華け果か成じやう就じゆするなり、日蓮にちれんが法ほ華け經きやうを弘ひろむ
る功く徳とくは必かならずず道どう善ぜん房ぼうの身みに歸かへりすべしあらたうとたうと、よき弟で子しを
もつときんば師してい弟てい・仏ぶつ果かにいたり・あしき弟で子しをたくはひぬれば

師弟・地獄じごくをつとしといへり、師弟相違そういせばなに事も成なべからず委くわくは
又も又申もうすべく候、常にかたりあわせて出離しゅつり生死しやうじして同心どうしんに靈山りやうぜん
浄土じやうどにてうなづきかたり給たまへ経きやうに云いく、衆しゆんに三毒さんどく有あることを示しし又
邪見じゃけんの相さうを現げんず我が弟子でし是かくの如ごとく方便ほうべんして衆生しゆじやう

度すごと云いふ 前まへ前まへ申まうす如ごとく御ご心こころ得えあるべく候こう、穴あな賢けん 穴あな賢けん

弘安元年こうあんがんねん 戌寅卯月 日

日蓮にちれん花か押お

浄じやう頭とう房ぼう

義ぎ浄じやう房ぼう

一〇九 別べつ当とう御ご房ぼう御ご返へん事じ

901P

聖せい密みつ房ぼうのふみにくはしくかきて候こうよりあいてきかせ給たまい候こうへ
ななに事ことも二に間ま清せい澄じやうの事ことをば聖せい密みつ房ぼうに申まうしあわせさせ給たまうべく候こうか、
世せ間けんのりをしりたる物ものに候こうへばかう申まうすに候こう、これへの所ところ当あたりなど

の事は・ゆめゆめをもはず候、いくらほどの事に候べき、但なばかりにてこそ候はめ、又わせいつをの事をそれ入つて候、いくほど

なき事に御心ぐるしく候らんと・かへりてなげき入つて候へども・我が恩をば・しりたりけりと・しらせまつらんために候、大名を計るものは小耻にはぢらずと申して、南無妙法蓮華經の七字を日本国にひろめ震旦高麗までも及ぶべきよしの大願をはらみて其の願の満すべきしるしにや、大蒙古国の牒状しきりにありて此の国の人ごとの大

な
歎なげきとみへ候、日蓮にちれん又先きより・この事をかんがへたり閻浮第一えんぶ だいいちの高名なり、先きよりにくみぬるゆへにままこのかうみやうのやうに専心もちとは用い候はねども終ついに身のなげき極まり候時は辺執へんしゆうのものどもも一定とかへぬとみへて候、これほどの大事だいじをはらみて候もの少事をあながちに申し候べきか、但ただし当時とうじ・日蓮心にちれんざす事は生処なまぢな

り日本^{にほんこく}国よりも大切にをもひ候、例せば漢王の沛郡を・をもくをば
しめししがごとし・かれ生処なるゆへなり、

聖智が跡あとの主となるをもつてしろしめせ、日本国にほんこくの山寺の主ともなるべし、日蓮にちれんは閻浮第一えんぶだいいちの法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなり。天のあたへ給たまうべきことわりなるべし。

米一斗・六升あはの米二升・やき米はふくろへ。それのみならず
ひとひとおんこころざしもう人人の御心おんこころざしざし申まうしつくしがたく候、これはいたみをもひ候、これより後は心ぐるしく。をぼしめすべからず候、よく人人ひとひとにしめすべからず候、よく人人ひとひとにもつたへさせ給たまい候へ。

乃時

べつとうごぼうごへんじ
別当御房御返事

一一〇

寂日房御書ぼうごしよ

弘安二年九月 五十八

歳御作

902P

与寂日房日家ぼう 於

身延

是まで御をとかたじけなく候、夫れ人身をうくる事はまれなるなり、已にまれなる人身をうけたり又あひがたきは仏法。是も又あへり、同じ仏法の中にも法華經の題目にあひたてまつる結句題目の行者となれり、まことにまことに過去十萬億(じゅうまんおく)の諸仏を供養する者なり。

日蓮は日本第一の法華經の行者なり。すでに勸持品の二十行の偈の文は日本国の中には日蓮一人よめり、八十万億那由他の菩薩は口には宣たれども修行したる人一人もなし、かかる不思議の日蓮をうみ出だせし父母は日本国の一切衆生の中には大果報のとなり、父母となり其の子となるも必ず宿習なり、若し日蓮が法華經・釈迦如来の

御使ならば父母あに其の故なからんや、例せば妙莊嚴王。

浄徳夫人・浄蔵・浄眼の如し、釈迦・多宝の二仏・日蓮が父母と變じ給うか、然らずんば八十万億の菩薩の生れかわり給うか、又上行菩薩等の四菩薩の中の垂迹か不思議に覚え候、一切の物にわたりて名の大切なるなり、さてこそ天台大師・五重玄義の初めに名玄義と釈し給へり。

日蓮となのである事自解仏乗とも云いつべし、かやうに申せば利口げに聞えたれども道理のさすところさもやあらん、經に云く「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人・世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ斯人行世間の五の文字は上行菩薩・末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさして無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり、日蓮は此の上行菩薩の御使として日本国の一切衆生に法華經をうけたも

てと勧めしは是なり、此の山にしてもをこたらず候なり、今の經文
の次下に説いて云く「我が滅度の後に於て応に此の經を受持すべし
是の人・仏道に於て決定して疑い有ること無けん」と云云、かかる
者の弟子・檀那とならん人人は宿縁ふかしと思つて日蓮と同じく
法華經を弘むべきなり、法華經の行者といはれぬる事
はや不祥なりまぬかれがたき身なり、彼のはんいちやうりやうまさ
すみといはれたる者は名ををしむ故にはぢを思う故に・ついに臆し
たることはなし、同じはぢなれども今生のはぢは・もののかずなら
ず・ただ後生のはぢこそ大切なれ、獄卒・だつえば懸衣翁が三途河
のはたにて・いしうをはがん時を思食して法華經の道場へまいり
給うべし、法華經は後生のはぢをかくす衣なり、經に云く「裸者の
衣を得たるが如し」と云云。

此の御本尊こそ冥途のいしやうなれ・よくよく信じ給うべし、を

とこのはだへをかくさざる女あるべしや・子のさむさをあわれまざるをやあるべしや、釈迦しゃか仏ぶつ・法華ほけ経きょうはめやとの如ごとくましまし候ぞ、
日蓮にちれんをたすけ給たまう事こと・今生こんじょうの恥はじをかくし給たまう人ひとなり後生ごじょうは又日蓮にちれん
御身おんみのはぢをかくし申もうすべし、昨日は人の上・今日は我が身の上なり、

花さけばこのみなり・よめのしうとめになる事候ぞ、信心しんじんをこたらずして南無なむ妙法蓮華みょうほうれんげ経きょうと唱となえ給たまうべし、度たび度の御音信おとずれ申しつくしが
たく候ぞ、此の事寂日房ぼつくわしくかたり給たまへ。

九月十六日

にちれんかおつ
日蓮花押

一一一
新尼御前御返事

あまごぜんごへんじ
ぶんえい
文永十二年二月 五

十四歳御作

904P

あまのり一ふくる送り給ひ畢おわんぬ、又大尼御前あまごぜんよりあまのり畏かしこ
まり入つて候、此の所をば身延たけの嶽と申もうす駿河するがの国は南にあたりた
り彼の国の浮島うきしまがはらの海ぎはより此の甲斐かいの国・波木井はきりの郷・身
延みねの嶺へは百余里に及ぶ、余の道せんり・千里よりもわづらはし、富士河と
申もうす日本第一にほんだいいちのはやき河・北より南へ流れたり、此の河は東西は
高山こうせん

なり谷深く左右さうは大石にして高き屏風を立て並べたるがごとくな
り、河の水は筒の中に強兵がっぴようが矢を射出したるがごとし、此の河の
左右さうの岸をつたい・或あるは河を渡りわた・或時あるは河はやく石多ければ舟

破れて微塵みじんとなる、かかる所をすぎゆきて身延の嶺と申す大山あり、東は天子てんしの嶺・南は鷹取りたかとりの嶺・西は七面の嶺・北は身延の嶺なり、高き屏風

を四ついたてたるがごとし、峯に上つてみれば草木そうもく森森たり谷に下つてたづぬれば大石連連たり、大狼の音こえ・山に充滿じゅうまんし 猴ましらのなき谷にひびき鹿のつまをこつる音あはれしく蝉のひびきかまびすし、春の花は夏にさき秋の葉このみは冬になる、たまたま見るものはやまかつがたき木をひろうすがた時時よりよりとぶらう人は昔なれし同朋ともどちなり、彼の商山しょうざんの四皓ししりうが世を脱れし心ち竹林の七賢あちが跡を隠せし山もかくやありけむ、峯に上つて・わかめやをいたると見候へば・さにてはなくして・わらびのみ並び立ちたり、谷に下つてあまのりや・をいたると尋ぬれば、あやまり

てや・みるらん・せりのみしげり・ふしたり、古郷の事はるかに思い

わすれて候いつるに今・此のあまのりを見候いてよしなき心をもひ
いでて・うくつらし、かたうみいちはこみなとの磯のほとりにて昔
見しあまのりなり、色形あぢわひもかはらず、など我が父母ふぼかはら
せ給たまいけんと・かたちがへなる・うらめしさ・なみだをさへがたし。

此これは・さて・とどめ候いぬ、但大尼御前あまごぜんの御本尊ごほんぞんの御事おんことおほせつ
かはされて・おもひわづらひて候、其そのの故ゆえは

此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候いし・あまたの三蔵漢土より
月氏へ入り候いし人人の中にもしるしをかせ給はず、西域慈恩伝
燈録等の書どもを開き見候へば五天竺の諸国の寺寺の本尊皆しる
し尽して渡す、又漢土より日本に渡る聖人日域より漢土へ入る
賢者等のしるされて候、寺寺の御本尊皆かんがへ尽し日本国最初の
寺・

元興寺・四天王寺等の無量の寺寺の日記、日本紀と申すふみより始
めて多くの日記にのこりなく註して候へば其の寺寺の御本尊又かく
れなし、其の中に此の本尊はあへてまします。

人疑つて云く経論になきかなければこそそこばくの賢者等は
画像にかき奉り木像にもつくりたてまつらざるらめと云云、而れど
も経文は眼前なり御不審の人人は経文の有無をこそ尋ぬべけれ、
前代につくりかかぬを難せんと・をもうは僻案なり、例せば釈迦仏

は悲母孝養のために 利天に隠れさせ給いたりしをば一閻浮提の一切

の諸人しる事なし、但目蓮尊者一人此れをしれり此れ又仏の御力なりと云云、仏法は眼前なれども機なければ顕れず時いたらざればひろまらざる事・法爾の道理なり、例せば大海の潮の時に随つて増減し上天の月の上下にみちかくるがごとし。

今・此の御本尊は教主釈尊・五百塵点劫より心中にをさめさせ給いて世に出現せさせ給いても四十余年・其の後又法華経の中にもやくもん
迹門はせすぎて宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し神力品・
ぞくろい
属累に事極りて候いしが、金色世界の文殊師・利兜史多天宮の弥勒
ぼさつ ぶたらくさん かんぜん きちがつ
菩薩・補陀落山の觀世音・日月・浄明・徳仏の御弟子の薬王菩薩等の
しよだい
諸大士・我も我もと望み給いしかども叶はず、是等は智慧いみじく
才学ある人人とはひびけども ーいまだ法華経を学する日あ

さし学も始なり、末代の大難忍びがたかるべし、我五百塵点劫より
大地の底にかくしをきたる真の弟子あり、此れにゆづるべしとて、
上行菩薩等を涌出品に召し出させ給いて、法華経の本門の肝心た
る妙法蓮華経の五字をゆづらせ給いて、あなかしこ・あなかしこ・我
が滅度の後・正法一千年・像法一千年に弘通すべからず、末法の始
に

ほうぼう 謗法の法師一閻浮提に充滿して諸天いかりをなし彗星は一天にわたらせ大地は大波のごとくをどらむ、大旱魃・大火・大水・大風・大疫病・大飢饉・大兵乱等の無量の大災難並びをこり、一閻浮提のひとびと 人人・各各・甲冑をきて弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力の及ばせ給わざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮ること雨のごとくしげからん時、此の五字の大曼荼羅を身に帶し心に存せば諸王は国を扶け万民は難をのがれん、乃至後生の大火炎を脱るべしと仏記しをかせ給いぬ、而るに日蓮上行菩薩にはあらねどもほぼ兼てこれをしれるは彼の菩薩の御計らいかと存じて此の二十余年が間此れを申す、此の法門弘通せんには如来現在猶多怨嫉・況滅度後・一切世間・多怨難信と申して第一のかたきは国主並びに郡郷等の地頭・領家・万民等なり、此れ又第二・第三の僧侶がうつたへについて行者を、或は悪口し

或は罵詈あるし。或は刀杖等とつじょう云云。

而るを安房の国・東条の郷は辺国なれども日本国の中心のごと

し、其の故は天照太神・跡を垂れ給へり、昔は伊勢の国に跡を垂れ

させ給いてこそありしかども、国王は八幡・加茂等を御帰依深くあ

りて天照太神の御帰依浅かりしかば、太神・瞋りおぼせし時・源

右將軍と申せし人・御起請文をもつてあをかの小大夫に仰せつけて

頂戴し。

伊勢の外宮にしのびをさめしかば太神の御心に叶はせ給いけるか

の故に日本を手ににぎる將軍となり給いぬ、此の人東条の郡を

天照太神の御栖と定めさせ給う、されば此の太神は伊勢の国には

をはしまさず安房の国・東条の郡にすませ給うか、例えば八幡大

菩薩は昔は西府にをはせしかども、中比は山城の国男山に移り

給い、今は相州鎌倉鶴が岡に栖み給うこれもかくのごとし。

にちれん 日蓮は一閻えんぶだい浮提の内日本にほんこく安房の国・東条とうじょうの郡に始めて此の
しょうほう 正法を弘通し始めたり、随したがつて地頭じとう敵かたきとなる彼の者すでに半分ほ
るびて今半分あり、領家はいつわりをろかにて・或ある時は信じし・或ある時は
やぶる不定ふじょうなりしが日蓮にちれん御勘ごかん氣を蒙こおむりし時すでに法華ほけき經をすて
たまひ 給いき、日蓮にちれん先よりけさんのついでごとに難信なんしん難解なんげと申せしはこれ
なり、

にちれん 日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらなために此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師とをぼしめされなん、又経文のごとく不信の人にわたしまいらせずば日蓮偏頗はなけれども尼御前我が身のとがをばしらせ給はずしてうらみさせ給はんずらん、此の由をば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ召して尼御前の見参に入れさせ給うべく候。

御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて候、さどの国と申し此の国と申し度度の御志ありてたゆむけしきはみへさせ給はねば御本尊はわたしまいらせて候なり、それも終にはいかんがとをそれ思ふ事薄氷をふみ太刀に向うがごとし、くはしくは又又申すべく候、そのみならずかまくらにも御勘氣の時・

千が九百九十九人は墮ちて候人人もいまは世間やわらぎ候かのゆ

へにくゆる人^{ひと}人も候^{もと}と申^{まう}すげに候^{もと}へども此^これはそれには似^にるべくも
なくいかにもふびんには思^{おも}いまいらせ候^{もと}へども骨^こに肉^{にく}をばかへぬ事^{こと}
にて候^{もと}へば法^ほ華^け経^{きょう}に相^{そう}違^いせさせ給^{たま}い候^{もと}はん事^{こと}を叶^{かな}うまじき由^{よし}いつま
でも申^{まう}し候^{もと}べく候^{もと}、恐^{きょう}恐^{きょう}謹^{きん}言^{げん}。

二月十六日

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

新尼^{あまご}御前^{ぜん}御返^{ごへん}事^じ

一一二 大尼御前御返事

あまごぜんごへんじ

908

P

ごくそつえんま王の長は十丁ばかり面はすをさしまなこ眼は日月にちがつのご
とく齒はまんぐわのねのやうにくぶしは大石のごとく大地だいちは舟を海
にうかべたるやうにうごき声はらいのごとくはたはたとなりわ
たらむにはよも南無なむ妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうとはをほせ候はじ、日蓮にちれんが弟子でし
にもをはずよくよく内をしたためてをほせをかほり候そうちはん、
なづきをわりみをせめていのりてみ候そうちはん、たださきのいのりと
をぼしめせ、これより後はのちの事をよくよく御かため候へ、
恐恐きょうきょう。

九月二十日

日蓮にちれん在

御判

大尼あまごぜん御前ごへん御返事じ

一一三 種種御振舞御書 建長二年五十五歳御作

与光日房 於 身延 909P

去ぬる文永五年後の正月十八日西戎・大蒙古国より日本国を
をそうべきよし牒状をわたす、日蓮が去ぬる文応元年庚申に勘えた
りし立正安国論今すこしもたがわず符合しぬ、此の書は白樂天が
樂府にも越へ仏の未来記にもをとらず末代の不思議なに事かこれに
すぎん、賢王・聖主の御世ならば日本第一の権状にもをこなわれ
現身に大師号も・あるべし定めて御たづねありていくさの僉義をも
いるあわせ調伏なんども申しつけられぬらんと・をもひしに其の義
なかりしかば其の年の末十月に十一通の状をかきて・かたがたへを
どろかし申す、国に賢人なんども・あるならば不思議なる事かな・

これはひとへにただ事にはあらず、天照太神・正八幡宮の此の僧に
ついで日本国の

たすかるべき事を御計らいのあるかと。をもわるべきに。さはなくて
或は使を悪口し。或はあざむき。或はとりも入れず。或は返事もな
し。或は返事をなせども上へも申さずこれひとへにただ事にはあら
ず、設い日蓮が身の事なりとも国主となりまつり事をなさん人人は
取りつぎ申したらんには政道の法ぞかし、いわうや。この事は上の御
大事いで

きらむのみならず各各の身にあたりて。をほいなるなげき出来すべ
き事ぞかし、而るを用うる事こそなくとも悪口まではあまりなり、
此れひとへに日本国の上下万人。一人もなく法華經の強敵となりて
としひさしくなりぬれば大禍のつもり大鬼神の各各の身に入る上へ
蒙古国の牒状に正念をぬかれてくるうなり、例せば段の紂王。

ひかん
比干と

いゝし者いさめをなせしかば用もちいずして胸をほり周の文武王にほろ
ぼされぬ、呉王は伍子しょがいさめを用もちいず自害じがいをせさせしかば越
王勾踐こうせんの手にかかる、これもかれがごとくなるべきかと。いよいよ。
ふびんに。をばへて名をもをしまず命をもすてて強盛じやうせいに申まうしはりし
かば風・大なれば波・大なり竜・大なれば雨たけきやうに。いよいよ。
あだを

なし・ますますいひまうじゅうにくみて御評定せんぎに僉議あり、頸をはぬべきか鎌倉を
をわるべきか弟子・檀那等をば所領しりょうあらん者は所領を召して頸
を切れ、或あるはろうにてせめ・あるいは遠流おんるすべし等云云。

日蓮悦んで云く本より存知の旨むねなり、雪山童子は半偈のために

身をなげ常啼菩薩は身をうり善財童子は火に入り樂法梵士は皮

をはぐ薬王菩薩は皆をやく不輕菩薩は杖木をかうむり師子尊者は

頭をはねられ提婆菩薩は外道にころさる、此等はいかなりける時

ぞやと勘かんうれば天台大師は「時に適かなうのみ」とかかれ章安大師は

「取捨宜しゆじやきを

得て一向いっじうにすべからず」としるされ、法華経は一法なれども機きにし

たがひ時によりて其その行万差なるべし、仏記しるして云く「我が滅後めつご・

正像二千年しほじゆふすぎて末法の始に此の法華経の肝心題目の五字計りを

弘ひろめんもの出来しゆつたいすべし、其そのの時悪王・悪比丘等・大地微塵より多く

して或大乗あるだいじやう。或は小乗せうじやう等をもつて、きそはんほどに、此の題目だいもくの行者ぎやうじやに

せめられて在家ざいけの檀那だんな等をかたらひて、或はのり、或はうち、或はるうに入れ、或は所領しやうりやうを召し、或は流罪りゆうざい、或は頸あたまをはぬべし、などいふとも退転たいてんなく、ひろむるほどならば、あだをなすものは国主こくしゆは、どし打ちをはじめ餓鬼がきのごとく身をくらひ後には他国たこくよりせめらるべし、これひとへに梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん等の法華經ほけきやうの敵なる国こくを他国たこくより責め

させ給たまうなるべし」とかかれて候ぞ、各各、我が弟子でしとなのならん人人ひとびとは一人もをくしをもはるべからず、をやををもひ、めこををもひ、所領しやうりやうをかへりみることもなかれ、無量劫むりやうじやくより、このかた、をやこのため所領しやうりやうのために命いのちすてたる事は大地微塵だいちみじんよりも、をほし、法華經ほけきやうのゆへには、いまだ一度ひとたびもすてず、法華經ほけきやうをばそこばく行ぜしかども、

かかる事出来せしかば退転してやみにき、譬えばゆをわかして水に入れ火を切るにとげざるがごとし、各各思い切り給へ此の身を法華經にかうるは石に金をかへ糞に米をかうるなり。

仏滅後・二千二百二十余年が間・迦葉・阿難等・馬鳴・竜樹等・

南岳・天台等・妙樂・伝教等だにも・いまだひろめ給わぬ法華經の

肝心・諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字・末法の始に一閻浮提にひ

るまらせ給うべき瑞相に日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣

つづきて迦葉・阿難にも勝ぐれ天台・伝教にもこへよかし、わづかの

小島のぬしらがをどさんを・をぢては閻魔王のせめをばいかんがす

べき、仏の御使と・なのりながら・をくせんは無下の人人なりと

申しふくめぬ、さりし程に念仏者・持斎・真言師等・自身の智は及ば

ず訴状も叶わざれば上郎・尼ごぜんたちに・

とりつきて種種にかまへ申す、故最明寺入道殿・極楽寺入道殿を

むげんじごく 無間地獄に墮ちたりと申し建長寺・寿福寺・極樂寺・長樂寺・大仏寺
等をやきはらへと申し道隆上人・良觀上人等を頸をはねよと
申す、御評定になにとなくとも日蓮が罪禍まぬかれがたし、但し上
件の事・一定申すかと召し出たつねらるべしとて召し出だされぬ、
奉行人の

云く上のをほせ・かくのごとしと申せしかば・上件の事・一言もたが
はず申す、但し最明寺殿・極樂寺殿を地獄という事は・そらごと
り、此の法門は最明寺殿・極樂寺殿・御存生の時より申せし事な
り。

詮ずるところ、上件の事どもは此の国を・をもひて申す事なれば
世を安穩にたもたんと・をばさば彼の法師ばらを召し合せて・きこ
しめせ、さなくして彼等にかわりて理不尽に失に行わるるはどなら
ば国に後悔あるべし、日蓮・御勘気をかほらば仏の御使を用いぬに

なるべし、梵天・帝釈・日月・四天の御とがめありて遠流・死罪の後・百日・

一年・三年・七年が内に自界叛逆難とて此の御一門どしうちはじまるべし、其の後は他国侵逼難とて四方より・ことには西方よりせめられさせ給うべし、其の時後悔あるべしと平左衛門尉に申し付けしかども太攻入道のくるひしやうにすこしもはばかる事なく物にくるう。

去文永八年太歳庚申辛 未九月十二日 御勘氣をかはる、其の時の御勘氣のやうも常ならず法にすぎてみゆ、了行が謀反ををこしたゆゑ、大夫の律師が世をみださんとせしをめしとられしにもこえたり、平左衛門尉 大将として数百人の兵者にどうまるきせてゑぼうしかけて眼をいからし声をあらうす、大体 事の心を案ずるに太政入道の世をとりながら国をやぶらんとせしにいたり、ただ事ともみ

へず、日蓮にぢれんこれを見てをもうやう日ごろ月ごろをもうひまう

けたりつる事はこれなり、さいわひなるかなほけきょう法華經のために身をす
てん事よ、くさきかうべをはなたればいさい沙こがねに金をかへ石たまに珠をあき
なへるがごとし、さて平左衛門尉さえもんが一の郎さうじゆう従しちゆうぼう・少輔房と申まうす者はし
りよりて日蓮にちれんが懐かいいちゆう中ほけきょうせる法華經の第五の巻を取り出しておもてを
三度さいなみて・さんざんとうちちらす、又九巻ほけきょうの法華經を兵者つわものど
も

打ちちらして・あるいは足にふみ・あるいは身にまとひ・あるいはい
たじき・たたみ等・家の二三間にちらさぬ所もなし、日蓮にちれん・大高声を
放ちて申もうすあらをもしろや平左衛門尉さえもんが・ものにくるうを見よ、と
のばら但今にほんこく・日本国の柱をたをすと・よばはりしかば上下万人じゆうげばんにんあわ
てて見えし、日蓮にちれんこそ御勘気ごかんきをかほれば・をくして見ゆべかりしに・
さはな

くして・これはひがことなりとや・をもひけん、兵者つわものどものいろこそ・

へんじて見へしか、十日並びに十二日の間・真言宗の失・禅宗・念仏
等・良観が雨ふらさぬ事・具さに平左衛門尉に・いゝきかせてあり
しに・或はどつとわらひ・或はいかりなんと・せし事どもはしげけれ
ば・しるさず、せんずるところは六月十八日より七月四日まで良観
が雨の

いのりして日蓮に支へられてふらしかね・汗をながし・なんだのみ
下して雨ふらざりし上・逆風ひまなくてありし事・三度まで・つかひ
をつかわして一丈のほりを・こへぬもの十丈・二十丈のほりを・こうべ
きか、いづみしきぶいろこのみの身にして八斎戒にせいせるうたをよ
みて雨をふらし、能因法師が破戒の身として・うたをよみて天雨
を下らせしに、いかに二百五十戒の人人・百千人あつまりて七日二
七日せめさせ給うに雨の下らざる上に大風は吹き候ぞ、これをもつ
て存せさせ給へ各各の往生は叶うまじきぞとせめられて良観がな

きし事・人人ひとびとにつきて通せし事・二に申せしかば、平左衛門尉等さえものじょうかた
うどし・かなへずして・つまりふしし事どもはしげければかかず。

さては十二日の夜・武蔵守殿むさしのかみのあづかりにて夜半に及び頸およを切ら
んがために鎌倉かまくらをいでしに・わかみやこうぢにうちいでて四方しほうに兵の
うちつつみて・ありしかども、日蓮にちれん云く各各さわがせ給たまうなべちの事
はなし、八幡大菩薩はちまんたいぼさつに最後さいごに申もうすべき事ありとて馬よりさしをりて
高声もうに申すやう、いかに八幡大菩薩はちまんたいはまことの神か和氣清丸きよまるが

頸を刎られんとせし時は長一丈の月と頸われさせ給い、伝教大師の法華經をかうぜさせ給いし時はむらさきの袈裟を御布施にさづけさせ給いき、今日蓮は日本第一の法華經の行者なり其の上・身にいちぶん一分のあやまちなし、日本国は一切衆生の法華經を謗じて無間・大城におつべきを・たすけんがために申す法門なり、又大蒙古国より・この国をせむるならば天照太神・正八幡とても安穩におはすべきか、其の上・釈迦仏・法華經を説き給いしかば多宝仏・十方の諸仏・菩薩あつまりて日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とをならべたるがごとくなりし時、無量の諸天並びに天竺・漢土・日本国等の善神・聖人あつまりたりし時、各各・法華經の行者にをろかなるまじき由の誓状まいらせよと・せめられしかば一一に御誓状を立てられしぞかし、さるにては日蓮が申すまでもなし・いそぎいそぎこそ誓状

の宿願をとげさせ給うべきに、いかに此の処には、をちあわせ給はぬぞと、たかだかと申す、さて最後には日蓮・今夜・頸切られて靈山浄土へまいりてあらん時はまづ天照太神・正八幡こそ起請を用いぬかみにて候いけれとさしきりて教主釈尊に申し上げ候はんずるぞいたしと、おぼさば、いそぎいそぎ御計らいあるべしとて又馬にのりぬ。

ゆいのはまに、うちいでて御りやうのまへに、いたりて又云くしばしとのばら、これにつぐべき人ありとて、中務三郎左衛門尉と申す者のもとへ熊王と申す童子を、つかわしたりしかば、いそぎいでぬ、今夜頸切られへ、まかるなり、この数年が間、願いつる事これなり、此の袈婆世界にして、きじとなりし時は、たかにつかまれ、ねずみとなりし時は、ねこにくらわれき、或はめこのかたきに身を失いし事、大地微塵より多し、法華經の御ためには一度だも失うことなし、

されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養・心にたらず国の恩を報ず
べき力なし、今度頸を法華經に奉りて其の功德を父母に回向せん
其のあまりは弟子・檀那等にはぶくべしと申せし事これなりと申せ
しか

ば、左衛門尉・兄弟四人・馬の口にとりつきて・こしごへたつの口に
ゆきぬ、此にてぞ有らんずらんと・をもうとところに案にたがはず兵
士どもうちまはり・さわぎしかば、左衛門尉申すやう只今なりとな
く、日蓮申すやう不かく

のとのばらかな。これほどの悦よろこびをば。わらへかし、いかにやくそくをば。たがへらるるぞと申せし時、江のしまのかたより月のごとく。ひかりたる物まりのやうにて辰巳のかたより戌亥いぬいのかたへ。ひかりわたる、十二日の夜のあげくれ人の面も。みへざりしが物のひかり月よのやうにて人人ひとびとの面もみなみゆ、太刀取目くらみ。たふれ臥ふし兵共おぢ怖れ。けうさめて一町計ほかりはせのき、或あるは馬よりをりて。かしこまり。或あるは馬の上にて。うずくまれるもあり、日蓮申すやう。いかにとのばら。かかる大根ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれやと。たかだかと。よばわれども。いそぎよる人もなし、さてよあけば。いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐるしかりなんとすすめしかども。とかくのへんじもなし。

はるか計ほかりありて云いわくさがみのえちと申もうすところへ入らせ給たまへと申まうす、此これは道知る者なし。さきうちすべしと申せどもうつ人もな

かりしかば・さてやすらうほどに・或^{ある}如来^{にょらい}の云^いく・それこそその道^{みち}にて候^{まう}へと申^{まを}せしかば道^{みち}にまかせてゆく、午^{ひる}の時計^{ばか}りにえちと申^{まを}すところへゆきつきたりしかば本間^{ほんま}六郎^{ろくろ}左衛門^{ざゑもん}がいへに入りぬ、さけとりよせて・ものふどもに・のませてありしかば各^{おのづか}かへるとて・かうべをうなたれ手をあさへて申^{まを}すやう、このほどは・いかなる人^{ひと}にてや・をはずらん・我等^{われら}がたのみて候^{まう}・阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}をそしらせ給^{たま}うと・うけ給^{たま}われば・にくみまいらせて候^{まう}いつるに・まのあたりをがみまいらせ候^{まう}いつる事^{こと}どもを見て候^{まう}へば・たうとさに・としごろ申^{まを}しつる念^{ねん}仏^{ぶつ}はすて候^{まう}いぬとて・ひうちぶくるよりすずとりいだして・すつる者^{もの}あり、今は念^{ねん}仏^{ぶつ}申^{まを}さじと・せいじやうをたつる者^{もの}もあり、六郎^{ろくろ}左衛門^{ざゑもん}が郎^{らう}従^{じゆう}等^{とう}・番^{ばん}をばうけとりぬ、さえもんのじようも・かへりぬ。

其^その日の戌^しの時計^{ばか}りにかまくらより上の御使^{おんつかい}とてたてぶみをも

ちて来ぬ、頸切れという・かさねたる御使おんつかいかと・もののふどもは・を
もひてありし程に六郎左衛門さえもんが代官右馬のじようと申もうす者・立ぶみ
もちて・はしり来りひざま・つひて申もうす、今夜にて候べし・あらあさま
しやと存じて候そうぢいつるに・かかる御悦よろこびの御ふみ来りて候、武蔵守殿むさしのかみ
は

今日・卯の時にあたみの御ゆへ御出で候へば・いそぎ・あやなき事も
やと・まづこれへはしりまいりて候と申す、かまくらより御つかいは
二時にはしりて候、今夜の内にあたみの御ゆへはしりまいるべしと
て・まかりいでぬ、追状に云く此の人はとがなき人なり今しばらく
ありてゆるさせ給うべし・あやまちしては後悔あるべしと云云。

其の夜は十三日・兵士ども数十人・坊の辺り並びに大庭になみゐ
て候いき、九月十二百の夜なれば月・大にはれてありしに夜中に大
庭に立ち出でて月に向ひ奉りてこ自我偈少少よみ奉り諸宗の勝劣
・法華經の文あらあ申して抑今の月天は法華經の御座に列りま
します名月天子ぞかし、宝塔品にして仏勅をうけ給い囑累品にして
仏に頂をなでられまいらせ「世尊の勅の如く当に具に奉行すべし」
と誓状をたてし天ぞかし、仏前の譬は日蓮
なくば虚くてこそをはすべけれ、今かかる事出来せばいそぎ悦びを

なして法華經の行者にも。かはり仏勅をも。はたして誓言のしるし
をばとげさせ給うべし、いかに今しるしのなきは不思議に侯ものか
な、何なる事も国になくしては鎌倉へもかへらんとも思はず、しるし
こそなくとも。うれしがをにて澄渡らせ給うはいかに、大集經には
「日月明を現ぜず」ととかれ、仁王經には「日月度を失う」とかか
れ、最勝王經には「三十三天各隕恨を生ず」と
とこそ見え侍るに。いかに月天いかに月天とせめしかば、其のしるし
にや天より明星の如くなる大星下りて前の梅の木の杖に。かかりて
ありしかば。もののふども皆えんより。とびをり。或は大庭にひれふ
し。或は家のうしろへにげぬ、やがて即ち天かきくもりて大風吹き来
りて江の島のなるとて空のひびく芋大なるつづみを打つがごとし。
夜明れば十四日卯の時に十郎入道と申すもの来りて云く。昨日
の夜の戌の時計りにかうどのに大なるさわぎあり、陰陽師を召して

御うらなひ候へば申せしは大に国みだれ候べし。此の御房御勘氣の
ゆへなり、いそぎいそぎ召しかえさずんば世の中いかが候べかるら
と申せば、ゆりさせ給へ候と申す人もあり、又百日の把に軍あるべ
しと申しつれば、それを待つべしとも申す、依智にして二十余日・
其の間鎌倉に或は火をつくる事・七八度・或は人

をころす事ひまなし、讒言ざんげんの者共いわの云いく日蓮にちれんが弟子でし共いの火いをつくる
なりと、さも・あるらんとて日蓮にちれんが弟子でし等を鎌倉かまくらに置くべからずと
て二百六十余人みなしるさる、皆遠島みなへ遺すべしろうにある弟子でし共いをば
頸くびをはねらるべしと聞きふ、さる程ほどに火いをつくる等は持齋念仏じさいねんぶつ者が計はかり
事ことなり其その余あまはしげげればかかず。

同十月十日に依智えちを立つて同十月二十八日に佐渡さどの国くにへ著つぬ、十
一月一日に六郎左衛門さえもんが家のうしろ塚原むらと申まうす山野やまのの中に洛陽らくようの
蓮台野れんだいののやうに死人しにんを捨すつる所に一間四面しめんなる堂だうの仏ぶつもなし、上うへは
いたまあはず四壁よっぺはあばらに雪ゆきふりりて消きゆる事ことなし、かかる所に
しきが打うちしき蓑みのうちきて夜よをあかし日ひをくらす、夜よは
ゆきあられいなすま

雪電雷電

ひまなし昼ひるは日ひの光ひかりもささせ給たまはず心細こころこまかるべきすまゐなり、彼の
りりよう
李陵りりようが胡国ここくに入りて巖窟いんくつに・せめられし法道三蔵ほうどうさんざうの徽宗皇帝きそうこうていに・せ

められて面かおにかなやきをさされて江南にはなたれしも只今ただとおぼ
ゆ、あらうれしや檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんに・せめられて法華經ほけきょうの功德くどくを得
給たまいき、不輕菩薩ふぎようぼさつは上慢じょうまんの比丘等びくの杖じょうにあたりて一乘いちじょうの行者ぎみうじやとい
はれ給たまふ、今日蓮いまにちれんは末法まつぽうに生れて妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじを弘ひろめて・かか
るせめにあへり、仏滅度後ぶつめつご・二千二百余年が間・恐らくは
天台智者大師てんだいちしやだいしも一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしんの經文きょうもんをば行たまじ給たまはず
数数見擯出さくさくけんひんすいの明文めいぶんは但日蓮一人にちれんなり、一句一偈いっくいちげ・我皆与授記みなじゆきは我
なり阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいは疑うたがいいなし、相模守殿さがみのかみこそ善知識ぜんちしきよ平
左衛門さえもんこそ提婆達多だいばだつたよ念仏者ねんぶつは瞿伽利尊者くぎやりそんじや・持齋等じさいは善星比丘ぜんしやうびくな
り、在世ざいせは今にあり今は在世ざいせなり、法華經ほけきょうの肝心かんじんは諸法実相しよほうじつそうと・と
かれて本末究竟等ほんまつくきやうとのべられて侯そうちは是なり、摩訶止觀まかしかん第五ごに云いわく
「行解ぎやうげ既に勤つとめぬれば三障さんしやう・四魔ふんぜん・紛然ふんぜんとして競きそい起おこる」文、又云いわく
「猪の金山いのけみやまを摺すり衆流しゆりうの海に入り薪たきぎの火を熾さかんにし風の求羅ぐらを益やくす

が如きのみ、等云云、釈の心は法華經を教のごとく機に叶ひ時に
かなげきよう
叶うて解行すれば七つの大事出来ず、其の中に天子魔とて第六天の
まおうあるこくしゅある
魔王・或は国主・或は父母・或は妻子・或は檀那・或は悪人等について
あるしたがほけきよう
或は随つて法華經の行をさえ、或は達してさうべき事なり、何れの
経をも行ぜよ仏法を行ずるには分分に随つて留難あるべし、其の中
ほけきよう
に法華經を行ずるには強盛にさうべし、法華經ををしへ

の如く時機に當つて行ずるには殊に難あるべん、故に弘決の八に
云く「若し衆生・生死を出でず仏乘を慕わずと知れば魔・是の人に
於て猶親の想を生す」等云云、釈の心は人・善根を修すれども念仏・
真言・禅・律等の行をなして法華經を行ぜざれば魔王親のおもひを
なして人間につきて其の人をもてなし供養す世間の人に実の僧と思
はせんが為なり、例せば国主のたとむ僧をば諸人供養するが如し、
されば国主等のかたきにするは既に正法を行ずるに
であるなり、釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識な
れ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたうどよりも強敵が
人をばよくなしけるなり、眼前に見えたり此の鎌倉の御一門の御
繁昌は義盛と隠岐法皇まし
まさずんば争か日本の主となり給うべき、されば此の人人は此の御
一門の御ためには第一のかたうどなり、日蓮が仏にならん第一のか

たうどは景信・法師には良観・道隆・道阿弥陀仏と平左衛門尉・
守殿ましまさずんば争か法華經の行者とはなるべきと悦ぶ。

かくてすこす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあらし

風より外は・をとづるものなし、眼には止観・法華をさらし口に

は南無妙法蓮華經と唱へ夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と

法華經の深義を談ずる程に年もかへりぬ、いづくも人の心のはかな

さは佐渡の国の持齋・念仏者の唯阿弥陀仏・生喻房・印性房・慈道房

等の数百人より合いて僉議すと承る、聞ふる阿弥陀仏の大怨敵・

一切衆生の悪知識の日蓮房・此の国にながされたり・なにと

なくとも此の国へ流されたる人の始終いけらるる事なし、設ひいけ

らるるともかへる事なし、又打ちころしたりとも御とがめなし、塚

原と云う所に只一人ありいかにがうなりとも力つよくとも人なき

処なれば集りていころ・せかすと云うものもありけり、又なにと

くとも頸を切らるべかりけるが守殿（まもりどの）の御台所（みだいどころ）の御懷妊（かいにん）なれば・しばらく

きられず終（つい）には一定ときく、又云く六郎左衛門尉殿（さえもんのかみ）に申（まう）してきらずんば・はからうべしと云う、多くの義（ぎ）の中に・これについて守護所（しゆごしょ）に数百人集りぬ、六郎左衛門尉（さえもんのかみ）云く上より殺しまうすまじき副状下りてあなづるべき流人

にはあらず、あやまちあるならば重連が大なる失なるべし、それよりはただほうもん只法門にてせめよかしと云いければ念仏者等・或は浄土のさんぶぎよう三部経・或は止観・或は真言等を小法師等が頸にかけさせ・或はわきにはさませて正月十六日にあつまる、佐渡の国のみならず越後・越中・出羽・奥州・信濃等の国国より集れる法師等なれば塚原の堂の大庭・山野

に数百人・六郎左衛門尉・兄弟一家さならぬもの百姓の入道等か
ずをしらず集りたり、念仏者は口口に悪口をなし真言師は面
色を失ひ天台宗ぞ勝つべきよしをののしる、在家の者どもは聞
る阿弥陀仏のかたきよとののしり・さわぎ・ひびく事・震動雷電の
如し、日蓮は暫らくさはがせて後各各しつまらせ給へ法門の御
為にこそ御渡りあるらめ悪口等よしなしと申せしかば六郎左衛門
を始めて諸人然るべしとて悪口せし念仏者をばそくびを

つきいだしぬ、さて止観・真言・念仏の法門一一にかれが申す様を。
でつしあげて承伏せさせてはちやうとはつめつめ・一言一言にはす
ぎず、鎌倉の真言師・禅宗・念仏者・天台の者よりもはかなきもの
どもなれば只思ひやらせ給へ、利剣をもてうりをきり大風の草を
なびかすが如し、仏法のおろかなるのみならず、或は自語相違し
或は経

をわすれて論と云ひ釈をわすれて論と云ふ、善導が柳より落ち
弘法大師の三鈷を投たる大日如来と現じたる等をば、或は妄語、或
は物にくるへる処を一一にせめたるに、或は悪口し、或は口を閉
ぢ、或は色を失ひ、或は念仏ひが事なりけりと云うものもあり、或
は当座に袈裟・平念珠をすてて念仏申すまじきよし誓状を立つる者
もあり。

皆人立ち帰る程に六郎左衛門尉も立ち帰る一家の者も返る、

にちれんふしぎ
日蓮不思議一云はんと思おもいて六郎左衛門尉を大庭よりよび返して
云いくいつか鎌倉かまくらへのぼり給たまうべき、かれ答こたえて云いく下人共に農のせさ
せて七月の比と云云、日蓮にちれん云いく弓きゅう箭せんとる者は・を・をやけの御ご大事だいじ
にあひて所領しよりやうをも給たまわり供をこそ田畠でんぱたつくるとは申ませ、只今ただいくさ
のあらん

ずるに急いそぎうちのぼり高名して所知しよちを給たまらぬか、さすがに和殿原は
さがみの国には名ある侍ぞかし、田舎いなかにて田いつくり・いくさにはづ
れたらんは恥はじなるべしと申ませしかば・いかにや思おもいけめあはててもの
もいはず、念仏ねんぶつ者・

持齋・在家の者どもも・なにと云う事ぞやと恠しむ。

さて皆歸りしかば去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二
巻造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思ひて勘えた
り、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に
柱なければ・たもたず人に魂なければ死人なり、日蓮は日本の人の
魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ、只今世乱れてそれと
もなく・ゆめの如くに妄語出来して此の御一門どしうちして後には
他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが如し、かやう
に書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ、つきたる弟子等も
あらぎかなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に
島に船つく、鎌倉に軍あり京にもあり・そのやう申す計りなし、六
郎左衛門尉・其の夜にはやふねをもつて一門相具してわたる日蓮に
たな心を合せて・たすけさせ給へ去る正月十六日の御言いかによと

此程このほど 疑うたがい申まうしつるに、いくほどなく三十日そいうちが内にあひ候まういぬ、又

蒙古国もんこくも一定わた渡り候まういな

ん、念仏ねんぶつ・無間地獄むげんじごくも一定じようにてぞ候まうはんずらん永ねんぶつく念仏ねんぶつ申し候まうまじ

と申まうせしかば、いかに云いうとも相模守殿等さがみのかみの用もちひ給たまはざらんには

日本国にほんこくの人用もちうまじ用もちゐらずば国くに必ず亡なぶべし、日蓮にちれんは幼若ちやうじやくの者ものな

れども法華經ほけきようを弘ひろむれば釈迦しやくか仏ぶつの御使おんつかいぞかし、わづかの天照てんしやう太神たいじん

・正八幡しょうはちまんなどと申まうすは此この国くにには重おもけれども梵釈ぼんしやく・日月にちがつ・四天してんに

対たいすれば小神こがみぞかし、されども此この神人かみなどをあやまちぬれば

只ただの人ひとを殺ころせるには七人半しちにんはんなどと申まうすぞかし、太政入道たいていりゆう・

隱岐法皇等おきほうこうのほろび給たまいしは是これなり、此これはそれにはにるべくもな

し教主きやうしゆ釈尊しやくそんの御使おんつかいなれば天照てんしやう太神たいじん・正八幡宮しょうはちまんぐうも頭こづかをかたづけ手

を合あせて地に伏ふし給たまうべき事ことなり、法華經ほけきようの行者きやうじやくをば梵釈ぼんしやく・左右さう

に侍はんべり月げんこ・前後ぜんごを照てらし給たまふ、

かかる日蓮にちれんを用もちいぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何いかに況や
数百人ににくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事うたが疑いいなる
べけれども且しばらく禁をなして国をたすけ給たまへと日蓮にちれんがひかうればこそ
今までは安穩あんのんにありつれどもはうに過すぐれば罰あたりぬるなり、
又此の度も用もちひずば大蒙だいもう古国より打手を向けて日本にほん国ほろぼさる
べし、

ただ平左衛門尉が好むわざわざひなり、和殿原とても此の島とても
安穩なるまじきなりと申せしかば、あさましげにて立帰りぬ、さて
在家の者ども申しけるは、此の御房は神通の人にてましますか。あ
らおそろし。おそろし、今は念仏者をもやしなひ持齋をも供養す
まじ、念仏者・良觀が弟子の持齋等が云く此の御房は謀叛の内に入
りたりけるか、さて且くありて世間しつまる。

又念仏者集りて僉議す、かうてあらんには我等かつえしぬべし。い
かにもして此の法師を失はばや、既に国の者も大体つきぬ。いかんが
せん、念仏者の長者の唯阿弥陀仏・持齋の長者の性諭房・良觀が
弟子の道觀等・鎌倉に走り登りて武蔵守殿に申す、此の御房・島に
侯ものならば堂塔一宇も侯べからず僧一人も侯まじ、阿弥陀仏を
ば。或は火に入れ。或は河にながす、夜もひるも高き山に登りて
日月に向つて大音声を放つて上を呪咀し奉る、其の音声。

一國に聞ふと申す、武蔵前司殿。是をきき上へ申すまでも。あるまじ、先ず國中のもの日蓮房につくならば。或は国をおひ。或はろうに入れよと私の下知を下す、又下文下るかくの如く三度其の間の事申さざるに心をもて計りぬべし、或は其の前をとをれりと云うて。ろうに入れ。或は其の御房に物をまいらせけりと云うて国をおひ。或は妻子をとる、かくの如くして上へ此の由を申されければ案に相違して去る文永十一年二月十四日の御赦免の状。同三月八日に島につきぬ、念仏者等。僉議して云く此れ程の阿弥陀仏の御敵。善導和尚。法然上人をのるほどの者が。たまたま御勘氣を蒙りて此の島に放されたるを御赦免あるとていけて歸さんは心うき事なりと云うて、やうやうの支度ありしかども何なる事にや有りけん、思はざるに順風吹き来りて島をば。たちしかばあはいあしければ百

十日にもわたらず、順風には三日なる所を須臾しゆゆの間に渡りぬ、越後
のこう・信濃ほっしの善光寺の念仏者ねんぶつ・持斎じさい・真言等しんこんは雲集うんしゅうして僉議せんぎす、
島の法師原ほっしは今まで・いけてかへすは人かつたいなり、一我等われらはいか
にも生身しょうしんの阿弥陀仏あみだぶつの御前おんまえをば・とをすまじと僉議せんぎせしかども、又
越後のこうより兵者どもつわもの・あまた日蓮にちれんにそひて善光寺をとをりしか
ば力

および、三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉へ打ち入りぬ。

同四月八日平左衛門尉に見参しぬ、さきには・にるべくもなく威儀を和らげて・ただしくする上・或る入道は念仏をとふ・或る俗は真言をとふ・或る人は禅をとふ・平左衛門尉は爾前得道の有無をとふ・一一に経文を引いて申しぬ、平の左衛門尉は上の御使の様に大蒙古国はいつか渡り候べきと申す、日蓮答えて云く今年は一定なりそれにとつては日蓮已前より勘へ申すをば御用ひなし、譬えば病の起りを知らざる人の病を治せば弥よ病は倍増すべし、真言師だにも調伏するならば弥よ此の国軍にまくべし、穴賢穴賢、真言師・総じて当世の法師等をもつて御祈り有るべからず、各各は仏法をしらせ給うておわさばこそ申すともしらせ給め、又何なる不思議にやあるらん他事には・ことにして日蓮が申す

事は御用いなし、後に思い合せさせ奉らんが為に申す隠岐法皇は天子なり

ごんのたゆう

権大夫殿は民ぞかし、子の親をあだまんをば天照太神うけ給いな

しよじゆう

しよほうちまん

てんしゆうだいじん

たま

んや、所従が主君を敵とせんをば正八幡は御用いあるべしや、い

かなりければ公家はまけ給いけるぞ、此れは偏に只事にはあらず

弘法大師の邪義・慈覚大師・智証大師の僻見をまことと思ひて叡山

とうじ

おんじようじ

ひとびと

かまくら

たま

げんちやくおほんにん

えいざん

東寺・園城寺の人人の鎌倉をあだみ給いしかば還著於本人とて

其の失還つて

公家はまけ給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざればか

ちぬ今又かくの如くなるべし、ゑぞは死生不知のもの安藤五郎は

因果の道理を弁えて堂塔多く造りし善人なり、いかにとして頸をば

ゑぞにとられぬるぞ、是をもつて思うに此の御房たちに御祈あ

らば入道穀事にあひ給いぬと覚え候、あなかしこ・あなかしこ・さ

いはざりけると・おほせ候なと・したたかに申し付け候いぬ。

さてかへりききしかば同四月十日より阿弥陀堂法印に仰付られ
て雨の御いのりあり、此の法印は東寺第一の智人をむる等の御師・
弘法大師・慈覚大師・智証大師の・真言の秘法を鏡にかけ天台・華嚴
等の諸宗を・みな胸にうかべたり、それに随いて十日よりの祈雨に
十一日に大雨下りて風ふかず雨しつかにて一日一夜ふりしかば・
守殿御感

のあまりに金三十両むまやうやうの御ひきで物ありと・きこぶ、
鎌倉中の上下かまくら 万人じょうげ 手をたたき口をすくめてわらうやうは日蓮にちれん
ひが法門申してほうもん すでに頸をきられんとせしが・とかうしてゆりたらば
・さではなくして念仏ねんぶつ 禅をそしるのみならず、真言しんごんの密教みつぎょうなんど
をも・そしるゆへに・かかる法のしるしめでたしと・ののしりしかば、

日蓮にちれんが

弟子等でしけうさめて・これは御あら義と申せし程に・日蓮にちれんが申すやう
はしばしまて弘法こうぼう大師だいしの悪義あくぎまことにて国の御いのりとなるべくば
隠岐おき法皇ほうじょうこそ・いくさにかち給たまはめ、をむる最愛の児せいたかも頸
をきられざるらん、弘法こうぼうの法華ほけき経きょうを華嚴けこん経きょうにとれりとかける状
は十住じゅうじゆ心論しんろんと申す文もんにあり、寿量じゆりやう品の釈迦しゃか仏ぶつをば凡夫ほんぶなりとし
るされたしる文もんは秘蔵ひぞう宝鑰ほうやくに候、天台てんだい大師だいしをぬす人とかける状は
二教論にけうろんにあり、一乘法華いちじゆほうほけき経きょうをとける仏ぶつをば真言しんごん師しのはきもの

とりにも及ばずとかける状は正覚房が舍利講の式にあり、かかる
ひがごとひがごと 懺事を申す人の弟子・阿弥陀堂の法印が日蓮にかつならば竜王は
法華經のかたきなり、梵釈・四王にせめられなん子細しさいぞあらんず
らんと申せば、弟子どものいはく、いかなる子細しさいのあるべきぞとをこ
つきし程に、日蓮古く善無畏も不空も雨のいのりに雨はふりたりし
かども大風吹きてありけるとみゆ、弘法は三七日すぎて雨をふらし
たり、此等これらは雨ふらさぬがごとし、三七・二十
一日にふらぬ雨やあるべき設たといふりたりとも、なんの不思議ふしぎがある
べき、天台のごとく千観せんくわんなんのごとく一座いざなんどこそたうとけ
れ、此れは一定やうあるべしと、いゝるもあはせず大風吹来たいふうきらいる、大小
の舎宅しゃたく・堂塔どうとう・古木こぼく・御所等ごじょらうを、或あるは天に吹きのぼせ、或あるは地に吹き
入れ、そらには大なる光り物とび地には棟梁むねりやうみだれたり、人人ひとびとを
もふきころし牛馬ぎうまを、をくたふれぬ、悪風あくふうなれども秋は時なれば、

なをゆるすかたもあり此れは夏四月なり、其の上・日本国には
ふかず但かんとう関東・八箇国なり八箇国にも武蔵・相模の兩國なりりょうこく兩國
の中には相州そうしゅうにつよくふく、相州にも・かまくらにそしゅうも御
所・若宮・建長寺けんちやうじ・極楽寺等ごくらくじにつよくふけり、ただ事ともみへず・ひと
へにこのいのりのゆへにやと・おぼへて・わらひ口すくめせし人ひと人も
けうさめてありし上・我が弟子でしどももあら不思議ふしぎやと舌をふるう。

本よりごせし事なれば三度・国をいさめんにもちみずば国をさ
るべしと、されば同五月十二日にかまくらをいでて此の山に入る、
同十月に大蒙古国よせて壹岐・対馬の二箇国を打ち取らるのみな
らず、太宰府もやぶられて少弐入道・大友等ききにげにげ其の
外の兵者ども其の事ともなく大体打たれぬ、又今度よせくるなら
ば、いかにも此の国よはよはと見ゆるなり、仁王経には「聖人去る
時は七難必ず起る」等云云、最勝王経に云く「悪人
を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて国人
喪乱に遇わん」等云云、仏説まことならば此の国に一定悪人のある
を国主たつとませ給いて善人をあだませ給うにや、大集経に云く
「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是くの如く不善業の悪王・悪比丘我
が正法を毀壞せん」云云、仁王経に云く「諸の悪比丘多く名利を求
め國王・

太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く、其の
王別わきまえずして此の語を信聴せん是を破仏法・破国の因縁と為す等
云云、法華經ほけきょうに云く「濁世じよくせの悪比丘あくびく」等云云、經文きょうもんまことならば此
の国に一軍あくびく悪比丘のあるなり、夫れ宝山には曲林をきる大海には
死骸をとどめず、仏法ぶつぽうの大海たいかい二乗の宝山には五逆ごぎやくの瓦礫がりやく・四重しじゅうの濁
水を

ば入るれども誹謗ひぼうの死骸と一闡提いつせんたいの曲林をばをさめざるなり、さ
れば仏法ぶつぽうを習ならわん人・後世ごしやうをねがはん人は法華誹謗をおそるべし。
皆人みなをばするやうはいかでか弘法こうぼう・慈覺じかく等をそしる人を用うべ
きと、他人たにんはさてをきぬ安房あわの国の東西の人人は此の事を信ずべ
き事なり、眼前がんぜんの現証げんじょうありいのもりの円頓房えんどんぼう・清澄せいじやうの西堯房せいじやう・道義どうぎ
房ぼうかたうみの実智房じつちぼう等は年とかりし僧ぞかし、此等これらの臨終りんじゆうはいかん
がありけんたすと尋ぬべし、これらはさてをきぬ、円智房えんちぼうは清澄の大堂

にして三箇年が間・一字三礼の法華經ほけきょうを我とかきたてまつりて十卷
を諳そらに・をばへ五十年が間・一日一夜に二部づつよまれしぞかし、
かれをば哲人は仏になるべしと云云、日蓮にちれんこそ念仏者ねんぶつよりも道義房どうぎぼう
と円智房えんちぼうとは無間地獄むげんじごくの底そこにつべしと申もつしたりしが此この人人ひとびとの御
臨終りんじゆうはよく候いけるか・いかに、日蓮にちれんなくば此この人人ひとびとをば仏になり
ぬ

らんとこそおぼすべけれ、これをもつて・しろしめせ弘法こうぼう・慈覚等じかくは
あさましき事どもはあれども弟子でしども隠せしかば公家くげにもしらせ
給たまはず未の代は・いよいよあをぐなり、あらはす人なくば未来永劫みらいえいこつ
までも・さであるべし、拘留外道とどげどうは八百年ありて水となり、迦毘羅
外道げどうは一千年すぎてこそ其その失とがはあらわれしか。

夫それ人身じんしんをうくる事は五戒の力による、五戒を持たてる者をば二十
五の善神ぜんじんこれをまほる上同生同名と申もうして二つの天生れしより・こ
のかた左右さうのかたに守護しゅごするゆへに失とがなくて鬼神きじんあだむことなし、
しかるに此の国の無量むりょうの諸人しよにんなげきを・なすのみならず、ゆきつし
まの両国りょうこくの人みな・皆事みなにあひぬ太宰府又申もうすばかりなし、此の国はい
かな

るとがのあるやらん・しらまほほしき事なり、一人・二人こそ矢も・
あるらめ・そこばくの人人ひとびといかん、これひとへに法華經ほけきょうをさぐる弘法こうぼう

慈覚・智証等の末の台空白師・善導・法然が末の弟子等・達磨等の
人人の末の者ども国中に充滿せり、故に梵釈・四天等の法華經の
座の誓状のごとく頭破作七分の失にあてらるるなり。
疑つて云く法華經の行者をあだむ者は頭破作七分ととかれて侯
に日蓮房をそしれども頭もわれぬは日蓮房は法華經の行者には
あらざるかと申すは道理なりとをばへ候はいかん、答えて云く
日蓮を法華經の行者にてなしと申さば法華經をなげすてよとかけ
る法然等・無明の辺域としるせる弘法大師・理同事勝と宣たる
善無畏・意覚等が
法華經の行者にてあるべきか、又頭破作七分と申す事はいかなる
事ぞ刀をもてきるやうにわるとしれるか、經文には如阿梨樹枝
とこそとかれたれ、人の頭に七滴あり七鬼神ありて一滴食へば頭
をいたむ三滴を食へば寿絶えんとす七滴皆食えば死するなり、今の

世の人人は皆頭阿梨樹の枝のごとくにわれたれども悪業ふかくしてしら

ざるなり、例せばてをおいたる人の或は酒に負い或はねいりぬればをばえざるが如し、又頭破作七分と申すは或は心破作七分とも申して頂の皮の底にある骨のひびたふるなり、死ぬる時はわゆる事もあり、今の世の人人は去ぬる正嘉の大地震・文永の大彗星に皆頭われて候なり、其の頭のわれし時ぜひせひやみ・五臓の損ぜし時あかき

腹をやみしなり、これは法華經の行者をそしりしゆへにあたりし罰とはしらずや。

されば鹿は味ある故に人に殺され龜は油ある故に命を害せらる
女人はみめ形よければ嫉む者多し、国を治る者は他国の恐れあり
財有る者は命危し法華經を持つ者は必ず成仏し候、故に第六天の
魔王と申す三界の主此の經を持つ人をば強に嫉み候なり、此の
魔王疫病の神の目にも見えずして人に付き候やうに古酒に人の酔
い侯如く国主

父母・妻子に付きて法華經の行者を嫉むべしと見えて候、少しも
違わざるは当時の世にて候、日蓮は南無妙法蓮華經と唱うる故に
二十余年所を追はれ二度まで御勘気を蒙り最後には此の山にこも
る、此の山の体たらくは西は七面の山・東は天子のたけ北は身延の
山・南は鷹取の山・四つの山高きこと天に付き・さがしきこと飛鳥も

とびがた

し、中に四つの河あり所謂・富士河・早河・大白河・身延河なり、其その中なに一町ばかり間はざまの侯はうに庵室あんしつを結びて侯、昼は日のみず夜は月を拝せず冬は雪深く夏は草茂り問う人希まれなれば道をふみわくることかたし、殊ことに今年ことは雪深くして人問うことなし命を期として法華經ほけきょう計ばかりをたのみ奉り侯たてまつに御音信おとずれありがたく侯、しらず釈迦しやくかぶつ仏ぶつの御使おんつかいか過去かこの父母ふぼの御使おんつかいかと申もうすばかりなく侯、南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょう。

去るいぬ文永八年太歳辛かのとひつじ 未九月のころより御勘氣ごかんきをかほりて北国
の海中かいちゆう佐渡の嶋にはなたれたりしかば、なにとなく相州鎌倉そうしゅうかまくらに住
しには生国なれば安房あわの国はこひしかりしかども我が国ながらも人
の心もいかにとやむつびにくくありしかば、常にはかよう事もなく
してすぎしに御勘氣ごかんきの身となりて死罪しざいとなるべかりしが、しばらく
く国の外にはなたれし上はをぼろげならではかまくらへはかへるべ
からず、かへらずば又父母ふぼのはかを見る身となりがたしとをもひつ
づけしかば、いまさらとびたつばかりくやくしてなどかかかかる身と
ならざりし時。日にも月にも海もわたり山をもこえて父母ふぼのはかを
もみ師匠うししのありやうをもとひをとづれざりけんとなげかしくて、彼

の蘇武そぶが胡国ここくに入りて十九年かりの南へとびけるをうらやみ、仲丸にほんこくが日本国の朝使として・もろこし

にわたりてありしがかへされずしてとしを経へしかば月の東に出いでたるをみて、我が国みかさの山にも此の月は出いでさせ給たまいて故里の人ただも只今月に向いてながむらんと心をすましてけり、此れもかくをもひやりし時・我が国より・或人あるのびんにつけて衣をたびたりし時・彼の蘇武そぶがかりのあし此れは現げんに衣ありにるべくもなく・心な

ぐさみて候しに、日蓮にちれんはさせる失とがあるべしとはをもはねども此の国のならひ念仏者ねんぶつと禅宗ぜんしゅうと律宗りっしゅうと真言宗しんごんしゅうにすかさねぬるゆへにほけきょう法華経をば上にはたうとむよしをふるまい心には入らざるゆへに、
日蓮にちれんが法華経ほけきょうをいみじ

きよし申せば威音王仏いおんおうぶつの末の末法まっぽうに不輕菩薩ふぎょうぼさつをにくみごとくかみいちにん上一人より下万人ばんにんにいたるまで名をも・きかじ・まして形をみる事

はをもちよらず、さればたとひ失^{とが}なくともかくなさるる上はゆる
しがたし、ましていわう

や日本国の人の父母よりをもく日月よりもたかくたのみたまへる
念仏を無間の業と申し禅宗は天魔の所為・真言は亡国の邪法念仏
者・禅宗・律僧等が寺をばやきはらひ念仏者どもが頸をはねらるべ
しと申す上、故最明寺極楽寺の両入道殿を阿鼻地獄に墮ち給いた
りと申すほどの大禍ある身なり、此れ程の大事を上下万人に申し
つけられぬる上は設ひそらごとなりとも此の世にはうかびがたし、
いかにいわうやこれはみな朝夕に申し昼夜に談ぜしうへ平左衛門尉
等の数百人の奉行人に申しきかせいかにとがに行わるとも申しやむ
まじきよし・したたかにいゝきかせぬ、されば大海のそのちびきの
石はうかぶとも天よりふる雨は地にをちずとも日蓮はかまくら
へは還るべからず、但し法華經のまことにおはしまし日月我をすて
給はずばかへり入りて又父母のはかをもみるへんもありなんと心づ
よくをもひて梵天・帝釈・日月・四天はいかになり給いぬるやらん、

てんしゅうだいじん

天照太神・正八幡宮は此の国にをはせぬか、仏前の御起請はむなし

くて法華經の行者をばすて給うか、もし此の事叶わずば日蓮

が身のなにともならん事はをしからず、各各現に教主釈尊と多宝

如来と十方の諸仏の御宝前にして誓状を立て給いしが今日蓮を

守護せずして捨て給うならば正直捨方便の法華經に大妄語を加へ

給へるか、十方三世の諸仏をたばらかし奉れる御失は提婆達多が

大妄語にもこへ瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされたり設ひ大梵天と

して色界の

頂に居し千眼天といはれて須弥の頂におはすとも日蓮をすて

給うならば阿鼻の炎にはたきぎとなり無間・大城にはいづるごおは

せじ、此の罪をそろしとおぼさばいそぎいそぎ国土にしるしをいだ

し給え、本国へかへし給へと高き山にのぼりて大音声をはなちてさ

けびしかば、九月の十二日に御勘氣十一月に謀反のもの・いできた

り、かへる年の二月十一日に日本にほんこく国のかためたるべき大将どもよ
なく打ちころされぬ、天のせめという事あらはなり、此これにやをど
ろかれけん弟子でしどもゆるされぬ。

而しかれどもいまだゆりざりしかば、いよいよ強盛じやうせいに天に申せしかば
頭こぶしの白き鳥からすとび来りぬ、彼の燕つばきのたむ太子たいし

の馬鳥からすのれい日蔵上人しやうじんの山がらす。かしらもしろく・なりにけり、
我がかへるべき時やきぬらんながめし此これなりと申もうしもあへず、
文永十一年二月十四日の御赦免状しやめん同三月八日に佐渡さどの国につきぬ
同十三日に国を立ちて

まうらというつにをりて十四日はかのつにとどまり、同じき十五日
に越後の寺どまりのつにつくべきが大風たいふうにはなたれさいわひにふつ
かちをすぎてかしはざきにつきて、次の日はこうにつき中十二をへて

三月二十六日

に鎌倉かまくらへ入りぬ、同じき四月八日に平左衛門尉さえものじように見参す、本よりご
せし事なれば日本国にほんこくのほろびんを助けんがために三度いさめんに御
用もちいなくば山林さんりんにまじわるべきよし存ぜしゆへに同五月十二日に
鎌倉かまくらをいでぬ。

但ただし本国たにいたりて今一度ひとたび父母ふぼのはかをもみんと・をもへどもに

しきをきて故郷へはかへれといふ事は内外ないげのをきてなり、させる
面目めんもくもなくして本国へいたりなば不孝ふこうの者にてやあらんずらん、こ
れほどのかたかりし事だにもやぶれてかまくらへかへり入る身なれ
ば又にしきをきるへんもやあらんずらん、其そのの時とき父母ふぼのはか

をもみよかすとふかくおもうゆへにいまに生国へはいたらねどもさ
すがこひしくて吹く風立つくもまでも東のかたと申せば庵をいでて
身にふれ庭に立ちてみるなり、かかる事なれば故郷の人は設たい心いよ
せにおもはぬ物なれども我が国の人といへばなつかしくてはんべる
ところところに此の御ふみを給びて心もあらずしていそぎい

そぎひらきてみ候へばをとしの六月の八日にいや四郎にをくれて
とかかれたり、御ふみもひらかざりつるまではうれしくてありつる
が、今此のことはをよみてこそなにしかくいそぎひらきけんうら
しまが子のはこなれやあけてくやしきものかな、我が国の事はうく

つらくあたりし人のすへまでもをろかならずをもつ

にことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへうちをもひたるけし
きもかたくなにもなしと見えしかども、さすが法華經ほけきようのみざなれば
しらぬ人人ひとひとあまたありしかば言もかけずありしに、経はてさせ給たまい
て皆人みなも立ちかへる、此の人も立ちかへりしが使を入れて申せしは
安房あわの国のあまつと申もつすところの者にて候が、をさなくより

御心ざしをもひまいらせて候上母にて候人もをろかならず申しな
れなれしき申し事にて候へども・ひそかに申すべき事の候、さきざき
まひりて次第になれまいらせてこそ申し入るべきに候へどもゆみや
とる人に・みやづ

かひてひま候はぬ上事きうになり候いぬる上はをそれをかへりみず
申すところまときこえしかば、なにとなく生国の人なる上そのあ
たりの事ははばかるべきにあらずとて入れたてまつりてこまごまと
こしかたゆく

すへかたりてのちには世間無常なりいつと申す事をしらず、其の上
武士に身をまかせたる身なり又ちかく申しかけられて候事のがれ
がたし、さるにては後生こそをそろしく候へたすけさせ給へときこへ
しかば経文をひいて

申しきかす、彼のなげき申せしは父はさてをき候いぬ、やもめにて

候は・わをさしおきて前に立ち候そうつはん事こそ不孝ふこうに・をばへ候へも
しやの事候ならば御弟子おんでしに申もうしつたへてたび候へとねんごろにあつ
らへ候いしが、そのた

びは事ゆへなく候へけれども後にむなしくなる事のいできたりて候
いけるにや、人間にんげんに生をうけたる人上下じょうげにつけてうれへなき人はな
けれども時にあたり人人ひとひとにしたがひてなげきしなじななり、譬たとへば
病のならひは何の病

も重しげくなりぬれば是にすぎたる病なしとをもうがごとし、主のわか
れをやのわかれ夫妻のわかれ・いづれか・

おろかなるべきなれども主は又他の主もありぬべし、夫妻は又かは
りぬれば心をやすむる事もありなん、をやこのわかれこそ月日のへ
だつるままにいよいよなげきふかかりぬべくみへ候へ、をやこのわか
れにもをやはゆきて子はとどまるは同じ無常むじょうなれどもことはりにも

や、をひたるは・わはとどまりてわきき子のさきにたつ

なさけなき事なれば神も仏もうらめしや、いかなればをやに子をか

へさせ給たまいてさきにはたてさせ給たまはず・とどめをかせ給たまいてなげかさ

せ給たまうらんと心うし、心なき畜生ちくしょうすら子のわかれしのびがたし、

竹林精舎しんじやの金鳥こんちやう

はかひこのために身をやき鹿野苑ろくやおんの鹿は胎内たいないの子を・をしみて王の

前にまいれり、いかにいわうや心あらん人にをいてをや、されば王陵

が母は子のためになつきをくだき、神堯皇帝こうていの後は胎内たいないの太子たいしの御

ために腹をやぶらせ給たまいき、此等これらを・をもひつづけさせ給たまはんには火

にも入り頭こづをもわりて我が子の形をみるべきならばをしからずと

こそおぼすらめと・おもひやられてなみだもとどまらず。

又御消息ごそくに云いく人をもころしたりし者なればいかやうなるとこ

ろにか生れて候らんをほせをかほり候そはんと云云、夫れ針は水にし

ずむ雨は空にとどまらず、蟻子を殺せる者は地獄に入り死にかばねを切れる者は悪道をまぬかれず、何に況や人身をうけたる者をこるせる人をや、但し大石も海にうかぶ船の力なり大火もきゆる事水の用にあらずや、小罪なれども懺悔せざれば悪道をまぬがれず、大逆なれども懺悔すれば罪きへぬ、所謂る粟をつみたりし比丘は五百生が間牛となる、をつみし者は三悪道に墮ちにき、羅摩王・拔提王・毘楼真王・那沙王・迦帝王・毘舍王・月光王・光明王・日光王・愛王持多人王等の八万余人の諸王は皆父を殺して位につく、善知識にあはざれば罪きへずして阿鼻地獄に入りき、波羅奈城に悪人あり其の名をば阿逸多という母をあひせしゆへに父を殺し妻とせり、父が師の阿羅漢ありて教訓せしかば阿らかむを殺す、母又他の夫にとつぎしかば又母をも殺しつ、具に三逆罪をつくりしかば隣里の人うとみしかば、一身たもちがたくして祇・精舎にゆい

て出家をもとめしに諸僧許さざりしかば悪心強盛にして多くの僧坊をやきぬ、然れども釈尊に値い奉りて出家をゆるし給にき、北天竺に城あり細石となづく彼の城に王あり竜印という、父を殺してありしかども後に此れをおそれて彼の国をすてて仏にまいりたりしかば仏懺悔を許し給いき、阿闍世王はひととなり三毒熾盛なり十悪ひまなし、其の上父をころし母を害せんとし提婆達多を師として無量の仏弟子を殺しぬ、悪逆のつもりに二月十五日仏の御入滅の日にあたりて無間地獄の先相に七処に悪瘡出生して玉体しづかならず、大火の身をやくがごとく熱湯をくみかくるがごとくなりしに六大臣まいりて六師外道を召されて悪瘡を治すべきやう申し、今の日本国の人人の禪師・律師・念佛者・真言師等を善知識とたのみて蒙古国を調伏し後生をたすからんとをもうがごとし、其の

上提婆達多だいばだつたは阿闍世王あじゃせの本師ほんしなり、外道げどうの六万蔵ぶつぼう仏法はちまんの八万蔵はちまんを
そらにして世間せけん出世しゅつせのあきらかなる事にちがつ日月にちがつと明鏡めいきやうとに向うがごと
し、今の世の天台宗てんだいしゆうの碩学せきがくの顕密けんみつ二道にどうを胸むねにうかべ一切いっさい経きやうをそら
んぜしがごとし、此れ等この人人ひと諸との大臣ひと阿闍世王あじゃせを教訓きやうくんせしかば
仏きえに帰依たてまつし奉る事たてまつなかりし程ほどに摩竭堤たもくたいに天変てんべん度度たびたびかさなり地天ちようし
きりな

る上大風たいふう・大旱たいかんばつ飢饉ききん疫癘えきれいひまなき上他国たこくよりせめられてすで
にかうとみえしに悪瘡あくそうすら身みに出でししかば国土こくど一時いちじにほろびぬとみ
えし程ほどに俄ぶつぜんに仏前ぶつぜんにまいり懺悔ざんげして罪つみきえしなり。

これらはさてをき候いぬ人のをやは悪人あくにんなれども子善人ぜんにんなれば
をやの罪つみゆるす事あり、又子悪人あくにんなれども親善人ぜんにんなれば子の罪つみゆる
るさるる事あり、されば故弥いよいよ四郎殿しろうだんは設たい悪人あくにんなりともうめる
母釈迦しやくか仏ぶつの御宝前ごほうぜんにして昼夜しゆくやなげきとぶらはば争いかでか彼人かひとうかばざ

るべき、いかにいわうや彼の人は法華經を信じたりしかば、をやをみ
ち

びく身とぞなられて候らん、法華經を信ずる人はかまへてかまへて

法華經のかたきを、をそれさせ給へ念仏者と持齋と眞言師と一切

南無妙法蓮華經と申さざらん者をば、いかに法華經をよむとも

法華經のかたきとしろしめすべし、かたきをしらねばかたきにたば

らかされ候ぞ、あはれあはれけさんに入りてくわしく申し候はば

や、又

これよりそれへわたり候三位房佐度公等にたびごとこのふみをよ

ませてきこしめすべし、又この御文をば明慧房にあづけさせ給うべ

し、なにとなく我が智慧はたらぬ者が、或はをこづき、或は此文をさ

いかくとしてそしり候なり、或はよも此の御房は弘法大師にはま

さらじよも慈覚大師にはこへしなんと人くらべをし候ぞかし、かく

申すもう人をばものしらぬ者とをばすべし。

建治二年太歳ひのえね丙子三月 日

花押かおう

甲州南部波木井はきりの郷山中

日蓮にちれん

十歳御作

932P

法華經二の巻に云く「ほけきよう其の人命終みようじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」云云、
 阿鼻地獄あびじごくと申すは天竺てんじくの言唐土日本もろこしにほんには無間むげんと申す無間むげんはひまな
 しとかけり、一百三十六の地獄じごくの中に一百三十五はひま候、十二時
 の中にあつけれども又すずしき事もありたへがたけれども又ゆるく
 なる時もあり、此の無間地獄むげんじごくと申すは十二時に一時いちじかた時も大苦
 なら
 ざる事はなし故ゆえに無間地獄むげんじごくと申す、此の地獄じごくは此の我等われらが居て候
 大地だいちの底二万由旬ゆじゆんをすぎて最下さいかの処ところなり、此れ世間せけんの法にもかる
 き物は上に重き物は下にあり、大地だいちの上には水あり地よりも水かる

し、水の上には火あり水よりも火かるし、火の上に風あり火よりも風かるし、風の上に空あり風よりも空かるし、人をも此の四大を以て

造れり悪人は風と火と先ず去り地と水と留まる故に人死して後重きは地獄へ墮つる相なり、善人は地と水と先ず去り風火留る重き物は去りぬ軽き物は留まる故に輕し人天へ生まるる相なり、地獄の相重きが中の重きは無間地獄の相なり、彼の無間地獄は縦横二万由旬なり八方は八万由旬なり、彼の地獄に墮つる人人は一人の身大に

して八万由旬なり多人も又此くの如し、身のやはらかなる事綿の如し火のこわき事は大風の焼亡の如し、鉄の火の如し、詮を取つて申さば我が身より火の出ずる事十三あり、二の火あり足より出でて頂をとをる。又二の火あり頂より出でて足をとほる又二の火

あり背そむより入りて胸より出ず又二の火あり胸より入りて背そむへ出ず。
又二の火あり左の脇より入りて右の脇へ出ず又二の火あり右の脇よ
り入りて左の脇へ出ず亦また一の火あり首かしらより下に向いて雲の山を巻
くが如ごとくして下る、此の地獄じじくの罪人ざいにんの身は枯かられたる草を焼くが如ごと
くとうざいなんほくが如ごとくして下る、此の地獄じじくの罪人ざいにんの身は枯かられたる草を焼くが如ごと
東西南北とうざいなんほくに走れども逃去にげさる所なし、他の苦は且しばらく之これを置く大火だいかの
一苦みななり此の大地獄だいじじくの大苦を仏委くわしく説とき給たまうならば我等衆生われらしゆじやう聞
いて皆死みなす

べし故に仏委しくは説き給う事なしと見えて候。

今・日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人人は皆此の地獄へ墮ちさせ給うべし、されども一人として墮つべしとはおぼさず、例せば此の弘安四年五月以前には日本の上下万人・一人も蒙古の責めにあふべしとおぼさざりしを日本国に只日蓮一人計りかか

る事此の国に出来すべしとする、其の時・日本国の四十五億八万九千六百五

十八人の一切衆生一人もなく他国に責められさせ給いて、其の大

苦は譬へばほうろくと申す釜に水を入れてざつこと申す小魚をあまた入れて枯れたるし木をたかむが如くなるべしと申せば、あらお

そろしいまいまし打ち

はれ所を追へ流せ殺せ信ぜん人人をば田はたをとれ財を奪へ所領をめせと申せしかども、此の五月よりは大蒙古の責めに値いてあき

れ迷ふ程にさもやと思う人人も・あるやらん、にがにがしうしてせ
めたくはなけれども有る事なればあたりたりあたりたり、日蓮が
申せし事はあたりたりばけ物のもの申す様にこそ候めれ。

去る承久の合戦に隠岐の法皇の御前にして京の二位殿などと

申せし何もしたらぬ女房等の集りて王を勧め奉り戦を起して義時に

責められあはて給いしが如し、今今御覽ぜよ法華経誹謗の科と云ひ

日蓮をいやしみし罰と申し経と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて

現生には此の国に修羅道を移し後生には無間地獄へ行き給うべし、

此れ

又偏に弘法・慈覚・智証等の三大師の法華経誹謗の科と達磨善導

律僧等の一乗誹謗の科と此れ等の人人を結構せさせ給う国主の科

と、国を思ひ生処を忍びて兼て勸へ告げ示すを用いずして還つて怨

をなす大科、先例を思へば呉王夫差の伍子胥が諫を用いずして越王

勾こ踐せんにほろぼされ、殷いんの紂ちゆう王わうが比ひ干かんが言ごんをあなづりて周しゆうの武ぶ王わうに責せきめられしが如ごとし。

而しかるに光あま日ご尼ぜん御ご前ぜんはいかなる宿しゆく習じゆくにて法ほ華け經きやうをば御ご信しん用ようありけるぞ、又故いよ弥よ四し郎りやう殿でんが信しんじて候こうしかば子すの勸くめか此この功く徳とく空くうしからざれば子こと俱ともに靈りやう山せん淨じやう土どへ参まり合あせ給たまわん事じ疑うたがいなかるべし、烏お竜りゆうと云いいし者ものは法ほ華け經きやうを

ほうじ 謗じて地獄に墮ちたりしかども其の子に遺童と云いし者。法華經を
書いて供養せしかば親仏に成りぬ、又妙莊嚴王は悪王なりしかど
も御子の淨蔵・淨眼に導かれて娑羅樹王仏と成らせ給う、其の故は
子の肉は母の肉母の骨は子の骨なり、松栄れば柏悦ぶ芝かるれば
蘭なく情無き草木すら友の喜び友の歎き一つなり、何に況や親と
子との
ちぎ 契り胎内に宿して九月を経て生み落し数年まで養ひき、彼になは
かしこ れ彼にとぶらはれんと思ひしに彼をとぶらふうらめしさ、彼如何が
あらんと思ふところぐるしさ・いかにせん・いかにせん、子を思ふ
こんぢよう 金鳥は火の中に入りనికి、子を思ひし貧女は恒河に沈みき、彼の
こんぢよう 金鳥は今の弥勒菩薩なり彼の河に沈みし女人は大梵天王と生まれ
たま 給えり、何に況や今の光日上人は子を思ふあまりに法華經の行者
たま と成り給ふ、母と子と俱に靈山淨土へ参り給うべし、其の時御対面

いかにうれしかるべきいかにうれしかるべき、きよつきよつ恐恐。

八月八日

にちれん日蓮

かおう花押

じょうじょうにんごへんじ光日上人御返事

一一六 光日尼御返事

9

34P

なきなをながさせ給たまうにや、三つのつなは今生こんじょうに切れぬ五つのさ
わりはそくしんすでははれぬらむ、心の月くもりなく身のあかきへはてぬ、
即身そくしんの仏なりたうとしたうとし、くはしく申まうすべく候へどもあまり
ふみをきよつきよつをくかき候ときにかきたりて候ぞ恐恐謹言きんげん。

九月十九日

にちれん日蓮在御判

光日尼^ごごぜん^ご御返^{へん}事^じ

935P

与工藤左近尉

吉隆

於伊豆伊東

そもそも

抑此の流罪るざいの身になりて候につけて二つの大事だいじあり、一には大なる悦よろこびあり其そのの故ゆえは此このの世界せかいをば娑婆しゃばと名なく娑婆しゃばと申もうすは忍もと

もう

申もうす事ことなり故ゆえに仏ぶつをば能忍のうにんと名なけたてまつる、此このの娑婆世界しゃばせかいの内に

しゅみせん

百億ひゃくおくの須弥山しゅみせん百億ひゃくおくの日月にちがつ百億ひゃくおくの四州ししゅうあり、其そのの中の中央ちゅうおうの須弥山しゅみせん・

にちがつ

日月にちがつ四州ししゅうに仏ぶつは世よに出いでまします、此このの日本国にほんこくは其そのの仏ぶつの世よに出いでまします国くによりは丑寅うしとらの角かくにあたりたる小島こじまなり、此このの娑婆世界しゃばせかいより外ほかの十方じゅうぽうの国土こくどは皆浄土みなじょうどにて候まをへば人の心こころもやはらかに賢聖けんせいをのり悪にくむ事ことも候まをはず、此このの国土こくどは十方じゅうぽうの浄土じょうどにすてはてられてをのり悪にくむ事ことも候まをはず、此このの国土こくどは十方じゅうぽうの浄土じょうどにすてはてられてをのり悪にくむ事ことも候まをはず、此このの国土こくどは十方じゅうぽうの浄土じょうどにすてはてられてをのり悪にくむ事ことも候まをはず、此このの国土こくどは十方じゅうぽうの浄土じょうどにすてはてられて

候・十悪・五逆・誹謗賢聖・不孝父母・不敬沙門等の科の衆生が
さんあくどう お むりようこう へ かえ せかい せんしやう
三悪道に堕ちて無量劫を経て還つて此の世界に生れて候が、先生の
あくこう しゆうけ
悪業の習気失せ

ずしてややもすれば十悪・五逆を作り賢聖をのり父母に孝せず
しゃもん じゆうあくく じぎやく けんせい ふぼ
沙門をも敬はず候なり、故に釈迦如来世に出でましませしかば、或
は毒薬を食に雑て奉り、或は刀杖・悪象・師子・悪牛・悪狗等の方便
を以て害し奉らんとし、或は女人
たてまつ たいまつ ある ある によにん

を犯すと云い、或は卑賤の者、或は殺生の者と云い、或は行き合い
い ある ひせん ある せつじやう ある
奉る時は面を覆うて眼に見奉らじとし、或は戸を閉じ窓を塞ぎ、
たてまつ たてまつ おお まなこ ある
ある かくおう だいじん しょにん

或は国王・大臣の諸人に向つては邪見の者なり高き人を罵者なん
ど申せしなり、大集経涅槃経等に見えたり、させる失も仏にはおは
だいしつきやう ねはんぎやう じやけん のるもの とが
しまさざりしかども只此の国のくせかたわとして悪業の衆生が生
ただ たが
れ集りて

候上、第六天の魔王が此の国の衆生を他の浄土へ出さじとたばかり

を成してかく事にふれてひがめる事をなすなり、此のたばかりも

詮する所は仏に法華経を説かせまいらせじ料と見えて候、其の故は

魔王の習として三悪道

の業を作る者をば悦び三善道の業を作る者をばなげく、又三善道

の業を作る者をばいたうなげかず三乗とならんとする者をばいた

うなげく、又三乗となる者をばいたうなげかず仏となる業をなす

者をば強になげき事

にふれて障さわりをなす、法華経は一文いっく一句なれども耳みみにふるる者は
既すでに仏になるべきと思ひて、いたう第六天だいろくてんの魔王まおうもなげき思ゆえう故に
方便ほうべんをまはして留難るなんをなし経を信ずる心をすてしめんとたばかる、
而しかるに仏の在世ざいせの時は濁世じよくせなりといへども五濁ごじよくと始はじめたりし上かみ仏の
御力おんちからをも恐れ人の貪とん・瞋じん・癡ち・邪見じゃけんも強盛こつじようならざりし時ときだにも
竹杖ちくじよう外道げどうは神通じんつう第一だいいちの目連尊者もくれんそんじゃを殺し、阿闍世王あじゃせは悪象あくぞうを放はなて
三界さんがいの独尊どくそんををどし奉たてまつり、提婆達多たいばだつたは証果しょうかの阿羅漢あらかん・蓮華れんげ
比丘尼びくにを害くぎやりそんじゃ、智慧ちえ第一だいいちの舍利弗しゃりほつに悪名あくみやうを立てき、
何いかに況ほけきや世漸ようちく五濁ごじよくの盛さかんになりて候まっだいをや、況ほけきや世末代まつだいに入りて
法華経ほけきをかりそめにも信まことぜん者ものの人にそねみねたまれん事ことはおび
ただしかるべきか、故ゆえに法華経ほけきに云いわく「如来にょらいの現在げんざいにすら猶なお怨嫉おんしつ多おほ
し況めつとや滅度めつとの後のちをや」と云云、始はじめに此こゝの文を見候みこいし時はさしもや
と思おもい候まこといしに今いまこそ仏の御言みことばは違ちがはざりけるものかなと殊ことに身に

當つて思ひ知れて候へ。

日蓮は身に戒行なく心に三毒を離れざれども此の御経を若しや

我も信を取り人にも縁を結ばしむるかと思つて随分世間の事おだ

やかならんと思いき、世末になりて候へば妻子を帯して候比丘も人

の帰依をうけ魚鳥を服する僧もさてこそ候か、日蓮はさせる妻子

をも帯せず魚鳥をも服せず只法華経を弘めんとする失によりて

妻子を帯せずして犯僧の名四海に満ち螻蟻をも殺さざれども悪名

一天に弥れり、恐くは在世に釈尊を諸の外道が毀り奉り

しに似たり、是れ偏に法華経を信ずることの余人よりも少し経文

の如く信をもむけたる故に悪鬼其の身に入つてそねみをなすかと、

をばえ候へば是れ程の卑賤・無智・無戒の者の二千余年已前に説か

れて候法華経の文にの

せられて留難に値うべしと伝記しをかれまいらせて候事のうれしさ

申し尽くし難く候、此の身に学文つかまつりし事やうやく二十四五年にまかりなるなり、法華經を殊に信じまいらせ候いし事はわづかに此の六七年よりこ

のかたなり、又信じて候いしかども懈怠の身たる上、或は学文と云

ひ、或は世間の事にさえられて一日にわづかに一卷・一品題目計な

り、去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで二百四十余

日の程は昼夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候、其の故は

法華經の故にかかる身となりて候へば修行坐臥に法華經を読み行ず

るにてこそ候へ人間に生を受けて是れ程の悦びは何事か候べき。

凡夫の習い我とはげみて菩提心を発して後生を願うといへども

自ら思ひ出し十二時の間に一時・二時こそははげみ候へ是は思ひ

出さぬにも御經をよみ読まざるにも法華經を行ずるにて候か、

無量劫の間六道四生を輪回し候いけるには、或は謀叛をおこし強

盜夜打等の罪にてこそ国主より禁をも蒙り流罪・死罪にも行はれ候
らめ、是

は法華經を弘むるかと思つ心の強盛なりしに依つて悪業の衆生に
讒言せられて・かかる身になりて候へば定て後生の勤にはなりなん
と覚え候、是れ程の心ならぬ昼夜十二時の法華經の持經者は未代
には有がたくこそ候らめ、又止事なくめでたき事侍り無量劫の間
六道に回り候けるには多くの国主に生れ値ひ奉りて・或は寵愛の
大臣・関白

等ともなり候けん、若し爾らば国を給り財宝官祿の恩を蒙けるか
法華經流布の国主に値ひ奉り其の国にて法華經の御名を聞いて
修行し是を行じて讒言を蒙り流罪に行われまいらせて候国主には
未だ値いまいらせ候はぬか、
法華經に云く「是の法華經は無量の国中に於て乃至名字をも聞くこ

とを得べからず何に況んや見ることを得て受持し読誦せんをやと云云、されば此の讒言の人・国主こそ我が身には恩深き人にはをわしまし候らめ。

仏法を習う身には必ず四恩を報すべきに候か、四恩とは心地観經に云く一には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無辺誓願度の願を発し難し、又悪人無くして菩薩に留難をなさずばいかでか功德をば増長せしめ候べき、二には父母の恩、六道に生を受くるに必ず父母あり、其の中に或は殺盜・悪律儀・謗法の家に生れぬれば我と其の科を

犯さざれども其の業を成就す、然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり、梵天・帝釈・四天王・轉輪聖王の家に生まれて三界・四天をゆづられて人天・四衆に恭敬せられんよりも恩重きは今の某が父母なるか、三には国王の恩、天の三光に身

をこのたびあたため地の五ご穀こくに神を養ふこと皆みな是これ国王こくおうの恩なり、其その上

今度・法華経

を信じ今度生死を離るべき国主に値い奉れり、争か少分の怨に依つておろかに思ひ奉るべきや、四には三宝の恩、釈迦如来無量劫の間菩薩の行を立て給いし時一切の福德を集めて六十四分と成して功德を身に得給へり、其の一分をば我が身に用ひ給ふ、今六十三分をば此の世界に留め置きて五濁雜亂の時非法の盛ならん時、謗法の者・国に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日月光りを失ひ天竜雨をくださず地神地味を減ぜん時、草木根茎枝葉華菓藥等の七味も失せん時、十善の国王も貪・瞋・癡をまし父母・六親に考せずしたしからざらん時、我が弟子無智・無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨てられて活命のはかりごとなからん比丘・比丘尼の命のささへとせんと誓ひ給へり、又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、仏

の寿命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る所の四十年の寿命を留め置きて我等に与へ給ふ恩をば四大海の水を硯の水とし一切の草木を焼て墨となして一切のけだものの毛を筆とし十方世界の大地を

紙と定めて注し置くとも争か仏の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば法は諸仏の師なり諸仏の貴き事は法に依る、されば仏恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報ずべし、次に僧の恩をいはば仏宝法宝は必ず僧によりて住す、譬えば薪なければ火無く大地無ければ草木生ずべからず、仏法有りといへども僧有りて習伝へずんば正法・像法・

二千年過ぎて末法へも伝はるべからず、故に大集経に云く五箇の五百歳の後に無智・無戒なる沙門を失ありと云つて是を悩すは此の人、仏法の大燈明を滅せんと思えと説かれたり、然れば僧の恩を報

じ難し、されば三宝の恩を報じ給うべし、古の聖人は雪山童子
常啼菩薩藥王大士普明王等此等は皆我が身を鬼のうちかひとなし
身の血髓

をうり臂をたき頭を捨て給いき、然るに末代の凡夫三宝の恩を
蒙りて三宝の恩を報ぜず、いかにしてか仏道を成ぜん、然るに心地
觀經梵網經等には佛法を學し円頓の戒を受けん人は必ず四恩を
報ずべしと見えたり、某は愚癡の凡夫血肉の身なり三惑一分も
断ぜず只法華經の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加えられ流罪せら
れたる

を以て大聖の臂を焼き髓をくだき頭をはねられたるになぞらへんと思ふ、是れ一つの悦びなり。

第二に大なる歎きと申すは、法華經第四に云く「若し悪人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し、若し人・一つの悪言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀皆せん其の罪甚だ重し」と等と云云、此等の經文を見るに信心を起し身より汗を流し兩眼より涙を流すこと雨の如し我、一人此の

国に生れて多くの人をして一生の業を造らしむることを歎く、彼の不輕菩薩を打擲せし人現身に改悔の心を起せしだにも猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ、今我に怨を結べる輩は未だ一分も悔る心もおこさず、是体の人の受くる業報を大集經に説いて云く「若し人あつて千万億の仏の所にして仏身より血を出さん意に

於て如何此

の人の罪をうる事寧ろ多しとせんや否や、大梵王言さく若し人只
一仏の身より血を出さん無間の罪尚多し、無量にして算をおきても
数をしらず阿鼻大地獄の中に墮ちん、何に況や万億の仏身より血
を出さん者を見んをや、終によく広く彼の人の罪業果報を説く事
ある事なからん但し如来をば除き奉る、仏の言はく大梵王若し我
が為に
髪をそり袈裟をかけ片時も禁戒をうけず欠犯をうけん者をなやま
しのり杖をもつて打ちなんどする事有らば罪をうる事彼よりは多
し。

弘長二年 壬戌 正月十六日

日蓮

花押

工藤左近尉殿

一一八

法華經題目抄

根本大師門人

日蓮撰

文永三年一月六日四十五歳御作

940P

南無妙法蓮華經

問うて云く法華經の意もしらず只南無妙法蓮華經と計り五字七

字に限りて一日一遍一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど

唱えても軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかずついに不退

の位にいたるべしや、答えて云くしかるべきなり、問うて云く火火と

いえども手にとらざればやけず水水といえども口にのまざれば水の

ほしさもやまず、只南無妙法蓮華經と題目計りを唱うとも義趣を

まぬかれん事いがあるべかるらん、答えて云く獅子の筋を琴の絃

として一度奏すれば余の絃悉くきれ梅子のすき声をきけば口につ
たまりう

るをう世間の不思議すら是の如し況や法華經の不思議をや小乘

の四諦の名計りをさやづる鸚鵡なを天に生ず三歸計りを持つ人・大

魚の難をまぬかる何に況や法華經の題目は八万聖教の肝心一切

諸仏の眼目なり汝等此れを唱えて四惡趣をはなるべからずと疑

うか、正直捨方便の法華經には「信を以つて入ることを得」と云い

雙林最後の涅槃經には「是の菩提の因は復無量なりと雖も若し信心

を説けば即ち已に撰尽す」等云云

夫れ仏道に入る根本は信をもて本となす五十二位の中には十信

の位には信心初めなりたとひさとりなければども信心あらん者は

鈍根も正見の者なりたとひさとりあるとも信心なき者は誹謗闡提

の者なり善星比丘は二百五十戒を持ち四禪定を得十二部經を諳

にせし者・提婆達多は六万八万の宝蔵をおぼへ十八変を現ぜしかども此等これらは有解無信げなの者今に阿鼻大城あびだいじょうにありと聞く、迦葉舍利弗等かしようしやりほつは無解有信むげうしんの者なり仏に授記じゆきを蒙りて華光如来げこうにょらい

・光明如来といはれき。仏説いて云く、「疑いを生じて信ぜざらん者は即ち当に悪道に墮つべし」等云云、此等は有解無信の者を説き給う、而るに今の代に世間の学者の云く只信心計りにて解する心なく南無妙法蓮華經と唱うる計りにて争か悪信をまぬかるべき等云云、此の人人は經文の如くならば阿鼻大城まぬかれがたし、さればさせる解り

なくとも南無妙法蓮華經と唱うるならば悪道まぬかるべし譬えば蓮華は日に随つて回る蓮に心なし芭蕉は雷によりて増長す此の草に耳なし、我等は蓮華と芭蕉の如く法華經の題目は日輪と雷との如し、犀の生角を身に帯して水に入りぬれば水五尺身に近ずかず梅檀の一葉開きぬれば四十由旬の伊蘭を変ず我等が悪業は伊蘭と水との

如く法華經の題目は犀の生角と梅檀の一葉の如し、金剛は堅固にし

て一切の物に破られずされども羊の角と亀の甲に破らるに尼俱類樹
は大鳥にも枝おれざれどもかのまつげに巢くうせうれう鳥にやぶら
る、我等が悪業は金剛

の如くごと尼俱類樹にの如しごと法華經の題目は羊の角のごとくせうれう鳥
の如しごと琥珀は塵をとりちり磁石は鉄をすうくろがね我等が悪業は塵と鉄の
如くごと法華經の題目は琥珀と磁石の如し。

かくをもひて常に南無妙法蓮華經と唱うべし、法華經の第一の卷
に云くい無量無数劫にも是の法を聞かんこと亦難しまた第五の卷に
云くい是の法華經は無量の国中に於て乃至名字を聞くことも得可べ
らずら等云云法華經の御名を聞く事はをぼるげにもありがたき事
なり、されば須仙多仏多宝仏は世にいでさせ給いたりしかども
法華經

の御名をだびも説き給わず釈迦如来は法華經のために世にいでさ

せ給たまいたりしかども四十二年が間は名をひしてかたりいださせ給たまわ
ず仏の御年七十二と申せし時はじめて妙法蓮華經みょうほうれんげきょうとなえいでさ
せ給たまいたりき、しかりとい

えども摩訶ま訶か尸し那な日本にほんの辺国の者は御名みなをもきかざりき一千余年す
ぎて三百五十余年に及びてこそわずかに御名計みなばかりをば聞きたりしか、

さればこの経あに値あいたてまつる事をば三千年に一度華ひとたびさく優曇華うどんげ・
無量無辺劫むりょうむへんに一度値ひとたびうなる一眼の龜にもたとへたり、大地だいちの上に針はり
を立てて大梵天王宮だいぼんてんのうより芥子けしをなぐるに針はりのさきに芥子けしの・つらぬ
かれ

たるよりも法華經の題目に値う事はかたし、この須弥山に針を立ててかの須弥山より大風のつよく吹く日いとをわたさんにいたりてはりの穴にいとのおさきのいりたらんよりも法華經の題目に値い奉る事かたし、さればこの經の題目をとなえさせ給はんにはをしめすべし、生盲の始めて眼をあきて父母等をみんよりもうれしく強きかたきにとられたる者のゆるされて妻子を見るよりもめずらしとをばすべし。

問うて云く題目計りを唱うる証文これありや、答えて云く妙法蓮華經の第八に云く「法華の名を受持せん者・福量る可からず」正法華經に云く「若し以の經を聞いて名号を宣持では特量可からず」添品法華經に云く「法華の名を受持せん者・福量る可からず」等云云、此等の文は題目計りを唱うる福齒計るべからずとみへぬ、

八卷・二十八品を受持読誦し隨喜護持等するは広なり、方便品・
じゆりようほん 寿量品を受持し乃至護持するは略なり、但一四句偈乃至題目
ばか 計りを唱えとなうる者を護持するは要なり、広略要の中には題目
は要の内なり。問うて云く妙法蓮華經の五字にはいくばくかの功德
をかおさめたるや、答えて云く大海は衆流を納めたり大地は有情
ひじょう 非情を持てり如意宝珠は万財を雨ふらし梵王は山界を領す
みようほうれんげきよう 妙法蓮華經の五字また是の如し一切の九界の衆生並に仏界を納
む、十界を納むれば亦十界の依報の国土を収む、先ず妙法蓮華經
の五字に一切の法を納むる事をいは
ば經の一字は諸經の中の王なり一切の諸經を納む、仏世に出でさ
せ給いて五十余年の間八万聖教を説きをかせ給いき、仏は人壽
百歳の時・壬申の歳・二月十五日の夜半に御入滅あり、其の後四
月八日より七月十五日に至るまで一夏九旬の間・一千人の阿羅漢・

けつじやう
結集堂にあつまりて一切経をかきをかせ給いき、其の後正法一
いっさいきやう
年の間は五天竺に一切経ひろまらせ給いしかども震旦国には渡ら
そつぽう
ず、像法に入つて一十五年と申せしに後漢の孝明皇帝・永平
ひのとう
十年丁卯歳・仏教始めて渡つて唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午の歳
わた
に至るまで渡れる訳者・一百七十六人・持ち来る経・律・論一千七十
やくしゃ
六部・五千四十八卷・四百八十帙・是れ皆法華経の経の一字の眷属
しゆたら
の修多羅なり。

先みよず妙法蓮華經ほうれんげきょうの以前いぜん・四十余年よんじゅうよねんの間の經きやうの中に大方たうほう・華嚴げんぎやう經きやうと申もうす經きやうまします。竜宮城りゆうくうじやうには三本あり上本じやうまんげは十三世界せかい微塵じんじゆ數ずの品ひん・中本ちゆうほんは四十九万八千八百偈げ・下本げほんは十萬偈じゆまんげ四十八品しじゅうじやうきやう・此この三本の外ぐわいに震旦しんたん・日本にほんには僅わずかに八十卷はちじゆうけん・六十卷だいにちきやう等とうあり、阿含あこん・小乘經しやうじやうきやう・方等ほうとう・般若はんんにやの諸大乗經しよだいじやうきやう等とう、大日經だいにちきやうは梵本ほんほんには阿あ・ばらばら詞ことばきやの五字ごじ計ばかりを三千五さんぜん百ひゃくの偈げをもつてむすべり、況しかや余よの諸尊しよそんの種子しゆし・尊形そんぎやう三摩耶まや・其その數すうをしらず、而しかるに漢土かんとには但ただわずかに六卷七卷ろくけんしちけんなり、涅槃經ねはんぎやうには雙林そうりん最後さいごの說ご・漢土かんとには但ただ四十卷しじゆうけん是こも梵本ほんほん之これ多おほし、此等これらの諸經しよきやうは皆みな釈迦しやくか如來にょらいの所說しよせつの法華經ほけきやうの眷屬けんぞくの修多羅しゆたらなり、この外ぐわい過去かこの七しち仏ぶつ・千仏せんぶつ・遠おん・遠ん劫のんの諸佛しよぶつの所說しよせつ・現げん在ざい十萬じゆまんの諸佛しよぶつの說經みなほけきやう皆みな法華經ほけきやうの經きやうの一字いっさいの眷屬けんぞくなり、されば藥王品やくおうひんに仏ぶつ・宿王華菩薩ほくわつに對たいして云いくたとた譬たとえば一切いっさいの川流江河せんるかうかの諸水しよすいの中ちゆうに海こ為なれ第一だいいちなるが如ごとく衆山しゆつさん

の中に須弥山しゅみせんこ為れ第一だいいち・衆星しゅうせいの中に月天子がつてんし最も為れ第一だいいち等云云、
妙楽みょうらく大師だいしの釈いに云く、「巳今当説とうせつ最さい為第一だいいち」等云云、以の經の一字の
中に十方じゅうぼう法界ほっかいの一切いっさい經納いきようおさめたり、譬たとえば如意宝珠にょいぼうじゆの一切いっさいの財を
納おさめ虚空こくうの万象ばんざうを
含こめるが如ごとし、經の一字は一代いちだいに勝まさる故ゆえに妙法蓮華みょうほうれんげの四字も又
八万宝蔵はちまんほうぞうに超過ちやうかするなり、妙とは法華經ほけきよつに云く「方便ほうべんの門を開いて
眞実しんじつの相さうを示しす、章安大師しょうあんだいしの釈いに云く「秘密ひみつの奥蔵おうぞうを發ひらく之を
稱しょうして妙と為なす、妙楽大師みょうらくだいし此の文を受けて云く「發とは開なり」
等云云、妙と申もうす事は開と云う事なり世間せけんに財を積める蔵くらに鑰かぎな
ければ開くことかたし開かざれば蔵の内の財を見ず、華嚴經は仏
説とき給たまいたりしかども經を開く鑰かぎをば仏・彼の經に説とき給たまわず、
阿含あしん・方等ほうとう・般若はんんにや・觀經くわんきよつ等の四十余年も仏説ぶつせつき給たまいたりしかども彼
の經經せうじょうじょうの意をば開たまき給たまわず、門を閉じて・をかせ給たまいたりしかば

人・彼の経きんをさとる者一人もなかりき、たとひ・さとれりとを
もひしも僻見びやくけんにてありしなり、而しかるに仏・法華経ほけきょうを説かせ給たまいて
諸経しよきんの蔵くらを開かせ給たまいき、此の時に四十余年よんじゅうよねんの九界しゅじょうの衆生しゆじょう始めて
諸経しよきんの蔵くら

の内の財たをば見しりたりなり譬たとえば大地だいちの上に人畜じんちく・草木等そうもくあれど
も日月にちがつの光まなこなければ眼まなこある人も人畜じんちく・草木そうもくの色彩しきをしらず、日月にちがつ
出たまで給たまいてこそ始めてこれをば知る事なれ、爾前にぜんの諸経しよきんは長夜しやうやの闇
の如ごとく法華経ほけきんの本・迹しゆ

二門は日月の如し、諸の菩薩の二目ある二乗の眇目なる凡夫の
盲目なる闡提の生盲なる共に爾前の経経にてはいろかたちをば
わきまえずありし程に、法華経の時・迹門の月輪始めて出で給いし
時・菩薩の両眼先にさとり二乗の眇目次にさとり凡夫の盲目次に
開き生盲の一闡提未来に眼の開くべき縁を結ぶ是れ偏に妙の一
字の得なり。

迹門十四品の一妙・本門十四品の一妙合わせて二妙、迹門の十
妙合わせて二十妙、迹門の三十妙・本門の三十妙合わせて六十妙、
迹門の四十妙・本門の四十妙・観心の四十妙合せて百二十重の妙な
り六万九千三百八十四字一の字の下に一の妙あり総じて六万九
千三百八十四の妙あり、妙とは天竺には薩と云い漢土には妙と云う
妙

とは具の義なり具とは円満の義なり、法華経の一一の文字・一字一

字に余の六万九千三百八十四字を納めたり、譬えば大海の一タイの水に一切の河の水を納め一の如意宝珠の芥子計りなるが一切の如意宝珠の財を雨らすが如し、譬えば秋冬枯れたる草木の春夏の日に値うて枝葉・華菓・出来するが如し、爾前の秋冬の草木の如くなる九界

の衆生・法華經の妙の一字の春夏の日輪にあひたてまつりて菩提心の華さき成仏往生の菓なる、竜樹菩薩の大論に云く「譬えば大薬師の能く毒を以つて薬と為すが如し」云云、此の文は大論に法華經の妙の徳を釈する文なり、妙楽大師の釈に云く「治し難きを能く治す所以に妙と称す」等云云、総じて、成仏往生のなりがたき者・四人あり第一には決定性の二乗・第二には一闍提人・第三には空心の者・第四には謗法の者なり、此等を法華經にをいて仏になさせ給う故に法華經は妙と云うな

り。

提婆達多だいばだつたは斛飯王こくはんのうの第一だいいちの太子たいし・淨飯王じょうばんにはをひ・阿難尊者あなんそんじやがこ
のかみ・教主きようしゅ釈尊しゃくそんにはいとこに当る・南閻浮提えんぶだいにかるかざる・人な
り須陀比丘びくを師しとして出家しゅっけし阿難尊者あなんそんじやに十八變じゅうはちへんをならひ外道げどうの六
万蔵はちまん・仏はちまんの八万蔵はちまんを胸むねにうかべ五法ごぽうを行じて殆どほとん仏ほとんよりも尊たつきけし
きなり、両頭りやうとうをたてて破僧罪はそうざいを犯かさんために象頭山じやうとうざんに戒壇かいだんを築たき
仏弟子ぶつでしを招まねき取り、阿闍世太子あせんたいしをかたらいて云いく我われは仏ほとんを殺ころして
新仏しんぶつとなるべし太子たいしは父ちちの王おうを殺ころして新王しんおうとなり給たまへ

阿闍世太子あせん たいし・すでに父の王を殺せしかば提婆達多だいばだつたは又仏をうかがい
大石をもちて仏の御身おんみより血をいだし阿羅漢あらかんたる華色比丘尼びくにを打
ちころし五逆ごぎやくの内三逆をつぶさにつくる、其の上その上 伽梨尊者かきりそんじやを弟子でし
とし阿闍世王あじゃせを檀那だんなとたのみ五天竺てんじく・十六の大国・五百の中国等ちゆうごく
一逆・二逆・三逆等をつくれる者は皆提婆みなだいばが一類いちるいにあらざる事これ
なし、譬たとえば大海たいかいの諸河しよをあつめ大山の草木そつもくをあつめたるがごと
し、智慧ちえの者は舍利弗しやりほつにあつまり神通じんつうの者は目連もくれん
にしたがひ悪人あくにんは提婆だいばにかたらいしなり、されば厚さ十六万八千
由旬ゆじゆん・其の下に金剛こんかうの風輪ふうりんある大地だいちすでにわれて生身しやうしんに無間むげん・大城だいじやう
に墮おちにき、第一だいいちの弟子でしく伽梨かきりも又生身しやうしんに地獄じじくに入る施遮婆羅門せだばらもん
女むすめも・おちにき・波瑠璃王はるりもをちぬ善星ぜんしやう比丘びくもおちぬ、又此等ここれらの
人人ひとびとの生身しやうしんに墮おちしをば五天竺てんじく・十六の大国・五百の中国・十干ちゆうごくの
小国せうこくの人人ひとびとも皆みなこれをみる、六欲ろくよく・四戦中丁無争梵字音釈だいりくてん・第六天

の魔王も閻魔法王等も皆御覽ありき、三千大千世界・十方世界の衆生も皆開きしなり、されば大地微塵劫はすぐとも無間・大城を

出づべからず、劫石はひすらぐとも阿鼻大城の苦はつきじとこそ

思い合いたりしに、法華經の提婆品にして教主釈尊の昔の師・

天王如来と記し給う事こそ不思議にをばゆれ、爾前の經經・実な

らば法華經は大妄語・法華經実ならば爾前の諸經は大虚誑罪な

り、提婆が三逆

を具に犯して其の外無量の重罪を作りし天王如来となる、況や二

逆・一逆等の諸の悪人の得道疑いなき事譬えば大地をかへすに

草木等のかへるがごとく堅石をわる者・草をわるが如し、故に此

の経をば妙と云ふ。

女人をば内外典に是をそしり三皇・五帝の三墳・五典に諂曲の者

と定む、されば災は三女より起ると云へり国の亡び人の損ずる源

は女人にょにんを本もととす、内典ないてんの中には初成道しよじやうどうの大法だいほうたる華嚴經けこんきやうには女人にょにんは地獄じごくの使つかなり能よく仏ぶつの種子しゆしを断つつ外面がいめんは菩薩ぼさつに似にて内心ないしんは夜叉やしやの如ごとしと云いい、雙林そうりん最後さいごの大涅槃經だいねはんきやうには一切いっさいの江河かうか必かならずず回曲えこく有あり一切いっさいの女人にょにん必かならずず諂曲てんこく有あり」と、又云いわく「所有あらずる三千界さんぜんかいの男子なんしの諸もろもろの煩惱ぼんのう・合集ごうしふして一人ひとりの女人にょにんの業障ごうじやうと為なる」と等云云とんがうごんごん、大華嚴經たいけこんきやうの文ぶんに「能よく仏ぶつの種子しゆしを断つつ」と説せつかれて侯そうらは女人にょにんは仏ぶつになるべき種子しゆしをいれり、譬たとえば大旱魃たいかんぱつの時とき・虚空こくうの

中に大雲をこり大雨を大地に下すに・かれたるが如くなる無量無辺
の草木・花さき菓なる、然りと雖もいれる種はをひずして結句・
雨しげければ・くちうするが如し、仏は大雲の如く・説教は大雨の
如く・かれたるが如くなる草木を一切衆生に譬えたり、仏教の雨
に潤い五戒・十善・禅定等の功德を修するは・花さき菓なるが
如し、一雨・ふれどもいりたる種のをひずかへりて・くちうするは
女人の仏教にあひて生死を・はなれずして・かへりて佛法を失ひ
悪道に墮つるに譬ふべし、是を「能く仏の種子を断つことは申すな
り、涅槃経の文に一切の江河のまがれるが如く女人
も又まがれりと説かれたるは、水はやわらかなる物なれば石山な
んどの・こわき物にさへちれて水のさき・ひるむゆへに・あれへ・これへ
行くなり、女人も亦是くの如く女人の心をば水に譬えたり、心よわ
くして水の如くなり、

道理どうりと思う事も男のこわき心に値あいぬればせかれてよしなき方へをもむく、又水みづにゑがくにとどまらざるが如ごとし、女人にょにんは不信ふしんを体とするゆへに只ただ今いまさあるべしと見る事も又しばらくあればあらぬさまになるなり、仏ぶつと申もうすは正直しやうじきを本もととす故ゆゑにまがれる女人にょにんは仏ぶつになるべからず五障ごしやう三従さんじゆうと申もうして五つのさはり三つしたがふ事あり、されば銀色女経ぎんじきにょきやうには「三世さんぜの諸仏しよぶつの眼まなこは大地だいちに落つとも女人にょにんは仏ぶつになるべからず」と説だいかれ大論だいろんには「清風せいふうはとると云えども女人にょにんの心こころはとりがたし」と云へり。

此こゝの如ごとく諸経しよきやうに嫌きらはれたりし女人にょにんを文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつの妙めうの一字いちじを説たまい給たまひしかば忽たちまちに仏ぶつにりき、あまりに不審ふしんなりし故ゆゑに宝浄世界ほうじやうせかいの多宝たほつ仏ぶつの第一だいいちの弟子でし智積菩薩ちしやくぼさつ、釈迦しやくか如来にょらいの御弟子おんでしの智慧ちゑ第一だいいち舍利弗しやりほつ尊者そんじや、四十余年よんじゆうよねんの大小乘だいしやうじやう経きやうの経文きやうもんをもつて竜女りゆうにょの仏ぶつになるまじき由よしを難なんぜしかども終つひに叶なはず仏ぶつにたりにき、初成道しよじやうじだうの

「よ
能く仏の

種子しゆしを断つそくりんさいご「雙林最後の一切いっさいの江河こうか必ず回曲えこく有り」の文も破われぬ、

銀色女経ごんじきごききょう

並に大論だいろん

の龜鏡きききやう

も空むな

しくなりぬ智積ちしゃく

・舍利弗しゃりほつは舌を卷

きて口を閉ぢにんてんたいえ人天大会かんきは歡喜たなこころせしあまりに掌てのひらを合せたりき、

是れ偏ひとえに妙ひとえの一字の徳たり、此この南閻浮提えんぶだいの内うちに二千五百の河あり

一一みなに皆みなまがれり、南閻浮提えんぶだいの女人にょにんの心のまがれるが如ごとし、但ただし

娑婆耶しゃばやと

娑婆耶しゃばやと

申す河あり繩を引きはえたるが如くして直に西海に入る、法華經
を信ずる女人亦復是の如く直に西方淨土へ入るべし此れ妙の一字の
徳なり、妙とは蘇生の義なり蘇生と申すは蘇る義なり、譬えば黄鵠
の子・死せるに鶴の母・子案となけば死せる子・還つて活り、鳩鳥・
水に入れば魚蚌悉く死す犀の角これに・ふるれば死せる者皆
よみがえる如く爾前の經經にて仏種をいりて死せる二乗・闡提・
女人等・妙の一字を持ちぬれば・いれる仏種も還つて生ずるが如し、
天台云く「闡提は心有り猶作仏すべし二乗は智を威す心生ず可か
らず法華能く治す復稱して妙と為す」と、妙樂云く「但大と云いて
妙と名づけざるは一には有心は治し易く無心は治し治し難きを
能く
治す所以に妙と稱す」等云云、此等の文の心は大方広仏華嚴經・
大集經・大品經・大涅槃等は題目に大の字のみありて妙の字なし、

但生る者を治して死せる者をば治せず、法華經は死せる者をも治するが故に妙と云ふ釈なり、されば諸經にしては仏になる者も仏になるべからず其の故は法華は仏になりがたき著すら尚仏になりぬ、なりやすき者は云ふにや及ぶと云う道理立ちぬれば法華經をとかれて後は諸經にをもむく一人もあるべからず。

而るに正像一千年過ぎて末法に入つて当世の衆生の成仏往生のとげがたき事は、在世の二乘闡提等にも、百千万億倍すぎたる衆生の觀經等の四十余年の經經によりて生死をはなれんと思ははかなし、はかなし、女人は在世、正像末総じて一切の諸佛の一切經の中に法華經を、はなれて、仏になるべからず、靈山の聽衆、道場開悟たる天台智者大師、定めて云く、諸經は但男に記して女に記せず、今經は皆記す、等云云。釈迦如来、多宝佛、十方諸佛の御前に

して摩まか提た国王おうじやじょう舎しや城じょうの良うしとらわし・鷲うしとらわしの山うしとらわしと申もうす所ところにて八はち箇か年ねんの間と・説とき
給たまいし法ほ華け經きょうを智ち者しゃ大だい師しまのあたり聞きこしめしりるに我われ五ご十じゅう余よ年ねん
の一代いちだい聖しょう教きょうを説ときをく事ことは皆みな衆しゅ生じょう利り益やくのためなり、但ただし其その中ちゆう
に四し十じゅう二に年ねんの經きょう經きょうには女にょ人にん・仏ぶつに
なるべからずと説ときたまひしなり、今いま法ほ華け經きょうにして女にょ人にん・仏ぶつに成なる
と・とくと・ななのらせ給たまいしを仏ぶつ滅めつ後ご・一いち千せん五ご百ひゃく余よ年ねんに当あたつて鷲うしとらわしの山うしとらわし
より東とう北ほく・十じゅう方ぽう八はち千せん里りの山せんり海かいをへだてて摩ま詞し戸こ那なと申もうす国こくあり
震しん旦たん国こく是これなり、此こゝの国こくに仏ぶつの

おんつかい
御使に出でさせ給ひ天台智者大師となのりて女人は法華經をば
なれて仏になるべかるずと定めさせ給いぬ。

しな
尸那国より三千里をへだてて東方に国あり日本国となづけたり、

てんだいだいし
天台大師・御入滅・二百余年と申せしに此の国に生れて伝教大師と

な のらせ給いて秀句と申す書を造り給いしに能化・所化俱に歴劫

無し妙法經の力にて即身に成仏すと竜女が成仏を定め置き給い

たり、而るに当世の女人は即身成仏こそ・かたからめ往生極樂は

ほっけ
法華を憑ま

ば疑いなし、譬えば江河の大海に入るよりもたやすく雨の空より

落つるよりもはやくあるべき事なり、而るに日本国の一切の女人は

なむ
南無妙法蓮華經とは唱へずして女人の往生成仏をとげざる雙觀・

かんきよう
觀經等によりて弥陀の名号を一日に六万遍・十万遍などとなう

るは、仏の名号なれば巧なるには似たれども女人不成仏・不往生

の経

によれるが故ゆえにいたずらに他の財を数えたる女人にょにんなり、これひとえ
に悪知識あくちしきにたばらかされたるなり、されば日本国にほんこくの一切の女人にょにんの
御かたきは虎狼ころうよりも山賊さんぞく・海賊かいぞくよりも父母ふぼの敵てき・とわり等よりも
法華経ほけきょうをばをしえずして念仏ねんぶつををしゆるこそ一切いっさいの女人にょにんのかたき
なれ。

南無妙法蓮華経なむみょうほうれんげききょうと一日いちじつに六万じゅうまん・十万じゅうまん・千万等せんまんも唱となえて後に暇ああ
らば時時阿弥陀等よりのあみだの諸仏しよぶつの名号みょうごうをも口くちずさみ・なるやうに申もうし
給たまはんこそ法華経ほけきょうを信しんずる女人にょにんにては・あるべきに当世とうせいの女人にょにんは
一期いちじの間の間・弥陀みだの名号みょうごうをば・しきりに・となへ念仏ねんぶつの仏事ぶつじをば・ひま
なくをこなひ法華経ほけきょうをばつやつや唱なへず供養くじやうせず・或あるはわづかに
法華経ほけきょうを持経者じきやう

によますれども念仏者ねんぶつをば父母ふぼ・兄弟きょうだいなんどのやうにをもひなし

じきよう

しよじゆうけんぞく

持経者をば所従眷属よりもかろくをもへり、かくして・しかも

ほけきよう

よし

そもそも

じょうとくふじん

たいし

法華経を信ずる由を・なのるなり、抑も浄徳夫人は二人の太子の

しゅつけ

ゆる ほけきよう

りゆうによ

がせんだいじよう

どだつ

どだつ

出家を許して法華経をひろめさせ竜女は「我闍大乘教・度脱苦

しゅごう

とこそ誓ひしが全く他経計りを行じ・て比の経を行ぜじとは

たきようばか

たきよう

衆生」とこそ誓ひしが全く他経計りを行じ・て比の経を行ぜじとは

しゅごう

とこそ誓ひしが全く他経計りを行じ・て比の経を行ぜじとは

たきようばか

たきよう

誓はず、今の女人は偏に他経を行じて法華経を行ずる方をしらず、

にょにん

ひとえ

たきよう

ほけきよう

ほけきよう

とくとく心を・ひるがへすべし・心を・ひるがへすべし、南無

みようほうれんげきよう

なむ みようほうれんげきよう

妙法蓮華経・南無妙法蓮華経

にちれん

かおう

日蓮 花押

文永三年五月六日清澄寺に於て末の時書し畢んぬ。

一一九 富木殿御消息 文永六年六月 四十八歳御作

949P

大師講の事今月明性房にて候が此月はさしあい候又余人の申せ
んと候人候はば申させ給えと候、貴辺より仰を蒙り候へ御指合に
て候はば他処へ申すべく候、恐々。

六月七日

日蓮花押

土木殿

白米しらよね一ほかひ本斗六升たしかに給侯、ときれうも侯そうらはざりつるに

悦よろこび入り侯、何事なにごとも見参もつにて申すべく侯。

乃時

花押かおう

富木殿とぎどの

一一一 真間・釈迦仏御供養逐状 文永七年九月

四十九歳御作 950P

釈迦しやかぶつ仏御造立おんことの御事むし、無始曠劫むしこうじゆうよりいまだ顕あらわれましまさぬ己心こしん
の一念三千いちねんさんぜんの仏造りつく顕あらわしますか、はせまいりてをがみまいらせ
候ただわばや、「欲令よくりようしゆじゆう衆生開仏知見かいぶつちけん乃至然ないし我実成がじつじようぶつ仏已来らい」は是これなり、
但し仏の御開眼かいげんの御事おんことはいそぎいそぎ伊ほうよ房ぼうをもてはたしまいらせ
させ給たまい候そうちへ法華經ほけきよう一部御仏みほとけの御六根むろっこんによみ入れまいらせて生身しょうしん
の教主けしう

釈尊しゃくそんになしまいらせてかへりて迎むかい入れまいらせさせ給たまへ自身じしん並
に子こにあらずばいかんがと存ぞんじ候そうち、御所領しりようの堂どうの事等じとうは大進だいしんの
阿闍梨あじやりがききて候そうち、かへすがへすをがみ結縁けちえんしまいらせ候そうちべし、いつ

ぞや大黒くろうを供養そんごうして侯そうらいし其後そのちより世間せけんなげかずしておはするか、
此度たいかいは大海たいかいのしほの満みつるがごとく月の満みずるが如ごとく福ふきたり命いのち
ながく後生ごしょうは靈山りょうぜんとおぼしめせ。

九月二十六日

にちれんかおう
日蓮花押

しんじょう
進上 富木殿御返事

一一二二一 土木殿御返事 文永八年九月 五十歳御

作 於相模依智 950P

上のせめさせ給たまうにこそ法華經ほけきょうを信じたる色いろもあらわれ侯そうらへ月
はかけてみちしをはひてみつる事こと疑うたがいなし

此れも罰あり必ず徳あるべし。なにしにか。なげかん。

此の十二日酉の時。御勘気。武蔵守殿御あづかりにて十三日丑の時にかよくらをいでて佐土の国へながされ侯が、たうじはほん雀のえちと申すところにてえちの六郎左衛門尉殿の代官。右馬太郎と申す者あづかりて侯が、いま四五日はあるべげに侯、御嘆きはさる事に侯へども。これには一定と本よりごして侯へば。なげかず侯、いままで

頸の切れぬこそ本意なく侯へ、法華経の御ゆへに過去に頸をうしな
いたらば。かかる少身のみにて候べきか、又数数見擯出ととかれて
たびたびとが
度度失にあたりて重罪をけしてこそ仏にもなり侯はんずれば我と
苦行をいたす事は心ゆへ
なり。

九月十四日

日蓮花押

土木殿御返事ごへんじ

一一三 寺泊御書ごしよ

文永八年十月 五十歳ぶんえい

御作

951P

与富木常忍ときじょうにん 於越後寺

泊

鷺目がもくひとゆい一結給び了ぬ、心ざしあらん諸人しよこんは一処いっしょにあつまりて御おわん聴聞ちようもんあるべし。

今月十月なり十日そつしゆう相州そうしゆう愛京郡依智えちの郷を起つて武蔵むさしの国久目河の宿に付き十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ、此れより大海たいかいを亘わたつて佐渡さどの国に至いたらんと欲ほするに順風定まらず其その期を知らず、道の間の事心も及ぶこと莫く又筆にも及およばず但暗に推おし度る

可^べし、又本より存知の上なれば始めて嘆^{なげ}く可^べきに非^{あら}ざれば之^{これ}を止^むむ。

法^{ほけ}華^き經^{よう}の第四^いに云^わく「而^{しか}も此^この經^{けい}は如^に來^よの現^{げん}在^{ざい}す^ら猶^な怨^{おん}嫉^{しつ}多^しし況^いん^わや滅^め度^{つど}の後^のを^や「第五^いの卷^{わん}に云^わく「一^い切^{つさい}

世間せけん怨あだ多くして信じ難がたし、涅槃ねはん經ぎょうの三十八さんじゅうはちに云いく、「爾その時ときに一切いっさいの外道げどうの衆しゅう咸ことごとく是この言ことを作なさく、大王だいおう今は唯一ただの大悪人あくにん有り瞿曇くどう沙門しゃもんなり、一切いっさいの世間せけんの悪人あくにん利養りようの爲ための故ゆえに其その所ところに往ゆき集あり而しかも眷属けんぞくと爲もつて善ぜんを修しゆすること能あたわず呪術じゆじゆ力の故ゆえに迦葉かしょう及びおよ舍利弗しゃりほつ・目蓮もつけん等を調伏じゆうぶくす云云、此この涅槃ねはん經ぎょうの文ぶんは一切いっさいの外道げどう我が本師ほんしたる

二天三仙にてんさんせんの所説しよせつの經典きやうてんを仏陀ぶつたに毀やぶられて出いだす所ところの悪言あくげんなり、法華ほふけ經きやうの文ぶんは仏ぶつを怨あだと爲なす經文きやうもんには非あらず、天台てんだいの意いに云いく、「一切いっさいの聲聞しやうもん・緣覺えんかく並ならびに近成こんじやうを樂ねがう菩薩ぼさつ等とう云云、聞きかんと欲ほつせず信しんぜんと欲ほつせず其その機きに當あたらざるは言ことを出して謗そしること莫なきも皆みな怨嫉おんしつの者ものと定おめ了わんぬ、在世ざいせを以もつて滅後めつこを推おすに一切いっさい諸宗しよしゆうの学者がくしや等は皆みな外道げどうの如ごとし、彼等かれらが云いう一大悪人あくにんとは日蓮にちれんに當あたり、一切いっさいの悪人あくにん之これに集あまると

は日蓮が弟子等是なり、彼の外道は先仏の説教流伝の後之を謬つて後・仏を怨と為せり、今諸宗の学者等も亦復是くの如し、所詮仏教に依つて邪見を起す目の転ずる者大山転ずと欲う、今八宗・十宗等多門の故に諍論を至す、涅槃經の第十八に贖命重宝と申す法門あり、天台大師の料簡に云く命とは法華經なり重宝とは涅槃經に説く所の前三教なり、但し涅槃經に説く所の円教は如何、此の法華經に説く所の仏性常住を重ねて之を説いて歸本せしめ涅槃經の円常を以て法華經に撰す、涅槃經の得分は但前三教に限る、天台の玄義の三に云く「涅槃は贖命の重宝なり重ねて掌を抵つのみ」文、籤の三に云く「今家の引意は大經の部を指して以て重宝と為す」等云云、天台大師の四念処と申す文に法華經の「雖示種種道」の文を引いて先ず四味を又重宝と定め了んぬ、若し爾らば法華經の

せんご 先後の諸経しよきやうは法華経ほけきやうの爲の重宝おもむくなり、世間せけんの学者がくしゃの想おもむくに云く
こ 此れは天台一宗てんだいの義ぎなり諸宗しよしゆうは之これを用もちいず等云云にちれんこれ、日蓮にちれん之これを案あじ
て云くいわ八宗はつしゆう・十宗等みなぶつめつは皆みな仏滅後ぶつめつより之これを起おこし論師ろんし・人師にんし之これを立たつ
めつこ 滅後めつこの宗しゆを以もつて現在げんざいの経きやうを計はかる可べからず天台てんだいの所判しよはんは一切いっさい経きやうに
かな 叶かなうに依よつて一宗いっしゆうに属ぞくして之これを弃すつ可べからず、諸宗しよしゆうの学者がくしゃ等ら自師じしの
あやま 誤あやまりを執しゆつする故ゆゑに・或あるは事ことを機きに寄よせ・或あるは前師ぜんしに譲ゆずり・或あるは賢王けんおう
かた を語かたらい結句けつこ最後さいごには悪心あくしん強盛かうじやうにして鬪争とうじやうを起おこし失無しつむき者ものを之これを
損そんうて楽らくと為なす、諸宗しよしゆうの中なかに真言宗しんごんしゆう殊ことに僻案びやくあんを至いたす

善無畏・金剛智等の想に云く一念三千は天台の極理一代の肝心なり
顯密二道の詮たる可きの心地の三千は且く之を置く、此の外印
と真言とは仏教の最要等云云、其の後真言師等事を此の義に寄せ
て印・真言無き經經をば之を下すこと外道の法の如し、或る義に
云く大日經は釈迦如來の外の説なりと、或る義に云く教主釈尊
第一の説な

りと、或る義には釈尊と現じて顯經を説き大日と現じて密經を
説くと、道理を得ずして無尽の僻見之を起す、譬えば乳の色を
弁えざる者種種の邪推を作せども本色に当らざるが如く又象の譬
の如し、今汝等知る可し大日經等は法華經已前ならば華嚴經等の
如く已後ならば涅槃等の如し。

又天竺の法華經には印・真言有れども訳者之を略して羅什は
妙法經と名づけ、印・真言を加えて善無畏は大日經と名づくるか、

たと 譬えば 正法華添品法華 法華三昧 薩云分陀利等の如し、仏の滅後
てんじく 天竺に於いて此の詮を得たるは竜樹菩薩、漢土に於いて始めて之を
てんだいちしゃだいし 得たるは天台智者大師なり、真言宗の善無畏等 華嚴宗の澄観等
さんろんしゅう さんろんしゅう

三論宗の

かじょう 嘉祥等 法相宗の慈恩等 名は自宗に依れども其の心は天台宗に
ほうそうしゅう ほうそうしゅう じおん じしゅう せ
落ちたり其の門弟等 此の事を知らず如何ぞ謗法の失を免れんや、
ある ちちれん なる いか 機を知らずして 議を立て難に値うと、
ある 日蓮を難じて云く 或る人云く 勸持品の如きは深位の菩薩の義なり安楽行品に違す
ある いか かんじほん こと ぼさつ あんらくぎょうほん い
と、或る人云く我も此の義を存すれども言わずと云云、或る人
いわ ただきまじもんばか 存すれども言わずと云云、
云く唯教門計りな
つぶさ 此れ 存す いえど べんか
りと、具に我之を存すと雖も卞和は足を切られ清丸は穢丸と云う
たま 死罪に及ばんと欲す時の人之を睨う、然りと雖も其の
いままよ 人未だ善き名を流さず汝等が邪難も亦爾る可し。

勸持品かんじほんに云いわく「諸もろの無智むちの人ひと有あつて悪口あくぐち罵詈めりし」等ら云いふ日蓮にちれん此この
經文きやうもんに当あたり汝等なんじ何なんぞ此この經文きやうもんに入いらざる、「及びおよ刀杖とうじやうを加くう
る者もの」等ら云いふ、日蓮にちれんは此この經文きやうもんを讀よめり汝等なんじ何なんぞ此この經文きやうもんを讀よ
まざる「常たいしゆつに大衆だうしゆの中なかに在あつて我等われらが過あやまちを毀こらんと欲ほす」等ら云いふ、
國王こくおう・大臣だいじん婆羅門ばらもん・居士こじに向むかつて「等ら云いふ、「悪口あくぐちして顰蹙ひんじゆくし
数しばしば擯ひんずい出しせられん」数しばしば數ずとは度たび度たびなり日蓮にちれん擯ひんずい出し衆しゆ度ど流りゅう罪ざいは二に度どな
り、法華ほけきやう經きやうは三さん世ぜの説せつ法ぽうの儀ぎ式しきなり、過か去この不ふ輕ぎやう品ひんは今いまの勸持品かんじほん

今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未來は不輕品為るべし、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し、一部八卷・二十八品天竺の御經は一由旬に布くと承わる定めて數品有る可し、いま漢土日本の二十八品は略の中の要なり、正宗は之を置く流通に至つて宝塔品の三箇の勅宣は靈山虚空の大衆に被らしむ、勸持品の二万・八万・八十万億等の大菩薩の御誓言は日蓮が浅智には及ばず但し恐怖惡世中の經文は末法の始を指すなり、此の「恐怖惡世中」の次下の安樂行品等に云く「於末世」等云云、同本異訳の正法華經に云く「然後末世」又云く「然後來末世」、添品法華經に云く「恐怖惡世中」等云云、時に当り当世三類の敵人は之れ有るに但八十万億那由他の諸菩薩は一人も見えたまわず乾たる湖の満たず月の虧け

て満ちざるが如し水清めば月を浮かべ木を植うれば鳥棲む、日蓮
は八十万億那由他の諸の菩薩の代官として之を申す彼の諸の菩薩
の加被を請う者なり。

此の入道佐渡の国へ御共為す可きの由之を申す然る可き用途と
云いかたがた煩有るの故に之を還す、御志し始めて申すに
及ばず候人人に是くの如く申させ給え、但し圀僧等のみ心に懸り候
便宜の時早早之を聴かす可し、穴賢穴賢。

十月二十二日 酉の時

日蓮花押

一一一四

富木入道殿御返事

文永八年十一月

五十歳御作

於佐渡塚原

955P

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候し時の思には四節の轉變は万国・皆同じかるべしと存候し処に此北国佐渡の国に下著候て後二月は寒風頻に吹て霜雪更に降ざる時はあれども日の光をば見ることなし、八寒を現身に感ず、人の心は禽獸に同じく主師親を知らず何に況や仏法の邪正・師の善悪は思もよらざるをや、此等は且く之を置く。

去十月十日に付られ候し入道・寺泊より還し候し時法門を書き遣わし候き推量候らむ、已に眼前なり仏滅後・二千二百余年に月氏漢土・日本・一閻浮提の内に天親・竜樹・内鑑冷然・外適時宜云云、

てんだい 伝教は粗釈し給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此国
に初めて之を弘む日蓮豈其の人に非ずや。

前相已に顕れぬ去正嘉の大地震前代未聞の大瑞なり神世十二人王
九十代と仏滅後・二千二百余年未曾有の大瑞なり神力品に云く正
滅度の後に於て能く是の経を持つが故に諸仏皆歡喜して無量の神力
を現ず等云云、「如来一切所有之法」云云、但此の大法弘まり給
ならば爾前・迹門の経教は一分も益なかるべし、伝教大師云く
「日出て

星隠る」云云、遵式の記に云く「末法の初西を照す」等云云、法已に
顕れぬ、前和先代に超過せり日蓮粗之を勸うるに是時の然らしむ
る故なり経に云く「四導師有り一を上行と名く」云云又云く
「悪世末法時能持是経者」又云く「若接須弥擲置他方」云云。

又貴辺に申付し高経の要文智論の要文五帖一処に取り集め被る

可く候、其外論釈ろんしやくの要文散ようぶん在あるべからず候、
又小僧こそう達談義あるべしと仰らるべく候流罪るざいの事痛く歎せ給たまふべから
ず、勸持品かんじほんに云く不輕品ふきょうに云く、命限り有り

惜む可からず遂に願う可きは仏国也云云。

日蓮 花押

文永八年十一月二十三日

富木入道殿御返事

小僧達少少還えし候此国為体在所の有様御問い有る可く候筆端に載せ難く候。

一一一五 佐渡御書

文永九年三月五十一歳御作 与

弟子檀那 956P

此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵たうのつじ十郎入道殿等さじきの尼御前一一に見させ給べき人人の御中へなり、京鎌倉に軍に死る人人を書付けたび候へ外典抄文句のこ玄の四

の本末勘文宣旨等これへの人人もちてわたらせ給へ。

世間に人の恐るる者は火炎の中と刀劍の影と此身の死するとな

るべし牛馬猶身を惜む況や人身をや瀬人猶命を惜む何に況や杜人

をや、仏説て云く「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも手の小

指を以て仏經に供養せんには如かず」取意、雪山童子の身をなげし

樂法梵志が身の皮をはぎし身命に過たる惜き者のなければ是を

布施と

して仏法を習へば必仏となる身命を捨る人。他の宝を仏法に惜べし

や、又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨てべきや、世間の法に

も重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はす

くなきやうなれども其数

多し男子ははぢに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む

故に池にすむに池の浅き事を嘆きて池の底に穴をほりてすむしかれ

どもゑにばかされて釣つりをのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の
上枝かくのこにすむしかれどもゑにばかされて網せけんにかかる、人も又
是かくのこの如し世間の浅き事には身命しんみょうを失へども大事だいじの仏法ぶつぽうなどに
は捨る事

難し故に仏になる人もなかるべし。

仏法は摂受・折伏時によるべし 譬ば世間の文武二道の如しされ

ば昔の大聖は時によりて法を行ず 雪山童子・薩王子は身を布施

とせば法を教へん菩薩の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほ

しがらざる時身を捨つ可きや紙なからん世には身の皮を紙とし筆

なからん時は骨を筆とすべし、破戒・無戒を毀り持戒・正法を用ん

用には諸戒を堅く持べし 儒教・道教を以て 釈教を制止せん日には

道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽う

すべし、釈教の中に小乗・大乘・権経・実経・雑乱して明珠と

がりやく 瓦礫と牛驢の二乳を弁へざる時は天台大師・伝教大師等の如く

大小・确实・顕密を強盛に分別すべし、畜生の心は弱きをおどし

強きをおそる 当世の学者等は畜生の如し 智者の弱きをあなづり王

法の邪をおそる 諛臣と申すは是なり 強敵を伏して始て力士をしる、

悪王あくおうの正法しょうぼうを破るやぶに

邪法じゃぼうの僧等そうどうが方人かたうぢをなして智者ちしやを失はん時は師子王ししの如ごとくなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮にちれんが如ごとし、これおごれるにはあらず正法しょうぼうを惜む心の強盛じやうじやうなるべしおごれる者は必ず強敵じやうてきに値あておそるる心出来しゅつたいするなり

例せば・修羅しゆらのおごり帝釈たいてしやくに・せめられて無熱池むねつちの蓮の中に小身せうしんと成て隠れしが如ごとし正法しょうぼうは一字いっく・一句いっくなれども時機じきに叶かないぬれば必ず得道とくどうなるべし千経せんけい・万論ばんろんを習学しゆがくすれども時機じきに相違そういすれば叶かなうべからず。

宝治ほうぢの合戦がくせんすでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道げどう・悪人あくにんは如来にょらいの正法しょうぼうを破りがたし仏弟子等ぶつでし・必ず仏法ぶつぽうを破るべし師子身中の虫の獅子ししを食等しょくどう云云、大果報かほうの人をば他の敵てきやぶりがたし親しみより破るべし、薬師経やくしきやうに云く「自界叛逆じかいほんぎやくなん難」と是これなり、

仁王經にんのうきやうに云いく、「聖人しやうにん去さる時ひちなん七難しちなん必ず起おこらん」と云いふ、金光明經こんくわうみやうみやうきやうに云いく、「三十

三天各瞋恨つちみを生なずるは其その国王こくおう悪あくを縦ほしにし治しせざるに由よる」等云いふ、日蓮にちれんは聖人しやうにんにあらざれども法華經ほけきやうを説ことの如ごとく受持じゆじすれば聖人しやうにんの如ごとし又世間せけんの作法か兼かねて知しるに由よて注し置くこと是違ちがう可べからず現世げんせに云いふ言ことの違ちがはざらんをもて後生ごしやうの疑うたがいをなすべからず、日蓮にちれんは此関東かんとうの御一門いちもんの棟梁とうりやうなり、日月にちがつなり、龜鏡きつきやうなり、眼目がんもくなり、日蓮にちれん捨すて去さる

時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音声
を放てよばはりし事これなるべしに六十日乃至百五十日に此事
起るか是は華報なるべし実果の成ぜん時いかなげかはしからんず
らん、世間の愚者の思に云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なん
と申す日蓮来ての存知なり父母を打子あり阿闍世王なり仏・
阿羅漢を殺し

血を出す者あり提婆達多是なり六臣これをほめく伽利等これを悦
ぶ、日蓮当世には此御一門の父位なり仏阿羅漢の如し然を流罪し
主従共に悦びぬるあはれに無慙なる者なり誘法の法師等が自ら禍
の既に頼るるを欺きしがかく

なるを一旦は悦ぶなるべし後には彼等が欺き目迎が一門に劣るべか
らず、例せば泰衡がせうとを討九郎判官を討て悦しが如し既に
一門を亡す大鬼の此国に入なるべし法華經に云く「悪鬼入其身」と

是なり。

日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず不軽品に云く「其
罪畢已と等云云、不軽菩薩の無量の謗法の者に罵詈打ちやくせられ
しも先業の所感なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生
れ施陀羅が家より出たり心こそすこし法華經を信じたる様なれど
も身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二滯とせり其中に
識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊に金をつつめるなる
べし、心は法華經を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず身は
畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり心も又身
に對すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰かし
る勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不輕輕毀の流類なるか失心
の余残なるか五千上慢
の眷屬なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし

くろがね 鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度
ごかんき 御勘気は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して
ごしょう 後生の三悪を脱れんずるなるべし、般泥垣経に云く「とうらい 当来の世か 返り
に袈裟を被て我が法の中に於て出家学道しらんだけたい 懶惰懈怠にして此等これらの
ほうとう 方等契経を誹謗すること有らん当に知るべし此等これらは皆是今日の
もろもろ 諸の異道の輩なり」等云云、此経文を見ん者自身じしんをはづべし今・
われら 我等が出家して袈裟をかけらんだけたい 懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道が
でし 弟子なりと伝記し給へり、法然がいちるいだい 一類大日

が一類念仏宗・禅宗と号して法華經に捨閉閣抛の四字を副へて
制止を加て權教の弥陀称名計りを取立教外別伝して法華經を月
をさす指只文字をかぞふるなど笑ふ者は六師が末流の仏教の
中に出来せるなるべし、うれへなるかなや涅槃經に仏光明を放て
地の下一百三十六地獄を照し給うに罪人・一人もなかるべし法華經
の寿命品にして皆
成仏せる故なり但し一闡提人と申て謗法の者計り地獄守に留られ
たりき彼等がうみげて今の世の日本国の一切衆生となれるなり。
日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば今生に念仏者にて数年が
間・法華經の行者を見ては未有一人得者千中無一等と笑しなり今
謗法の醉さめて見れば酒に酔る者父位を打て悦しが醉さめて後歎
しが如し欺けども甲斐なし此罪消がたし、何に況や過去の謗法の
心中にそみけんをや經文を見候へば烏の黒きも鷲の白きも先業の

つよくそみけ

るなるべし外道げどうは知らずして自然じねんと云い今の人は謗法ほうほうを躪あらわし扶たすけん
とすれば我身わがみに謗法ほうほうなき由よしをもながちに陳答ちんとうして法華經ほけきょうの門を閉
よと法然ほうねんが書けるをとかくあらかひなんどす念仏者ねんぶつはさてをきぬ
てんだい しんごん
天台・真言等の人人彼が方人ひとびと

をあながちにするなり、今年正月十六日十七日に佐渡さどの国の念仏ねんぶつ

者等数百人印性房いんせうぼうと申すは念仏者ねんぶつの棟梁とうりやうなり

日蓮にちれんが許もとに来て云く法然ほつねん上人しやうにんは法華經ほけきやうを抛なげうてよとかかせ給たまには非あらず

一切衆生いっさいしゆじやうに念仏ねんぶつを申もうさせ給たまいて候此あうじやうの大功德たいくどくに御往生おうじやう疑たがなしと

書付て候を山僧等さんそうとうの流ながされたる並ならに寺法師等てらぼうし・善哉善哉よきかなよきかなとほめ候を

いかかこれを破はし給たまと申もうしき鎌倉かまくらの念仏者ねんぶつよりもはるかにはかなく

候ぞ無慙むざんとも申もうす計はかりなし。

いよいよ日蓮にちれんが先生せんしやう今生こんじやう先日せんじつの謗法ほうほうおそろしかかりける者の

弟子でしと成なげんかかる国くにに生なれけんいかになるべしとも覺おぼえず、
はつないおんきよう
般泥垣はんねいげん経きやうに云いく「善男子ぜんなんし過去かこに無量むりやうの諸罪しよざい・種種しゆじゆの悪業あくじゆを作つくらんに
こもるもろざいほう
是この諸もの罪報ざいほう・或あるは輕易きやういせられ・或あるは形状ぎやうじやう・醜陋しゆらう衣服いふく足たらず飲食おんじき
そそ
疎そ・財さいを求もとめて利りあらず貧賤ひんせんの家いへ及びおよ邪見じゃけんの家いへに生なれ・或あるは王難わうなん
に遇あうこ等云云とんぐんぐん、又云いく「及びおよ余よの種種しゆじゆの人間にんげんの苦報くほう現世げんせに軽かく受う
くるは斯これ護法ごほうの功德力くどくに由よる故ゆなり」等云云とんぐんぐん、此こ経文きやうもんは日蓮にちれんが
身み

なくば殆ど仏の妄語となりぬべし、一には或被輕易二には或
形状醜陋三には衣服不足四には飲食疎五には求財不利六には
生貧賤家七には及邪見家八には或遭王難等云云、此八句は只
日蓮が身に感ぜり、高山に登る者は必ず下り我人を軽しめば還て
わがみに輕易せられん形状端巖をそしれば醜陋の報いを得人の
我身人に輕易せられん形状端巖をそしれば醜陋の報いを得人の
えぶくおんじき衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる持戒尊貴を笑へば貧賤の家に
生ず正法の家をそしれば邪見の家に生ず善戒を笑へば国土の民と
なり王難に遇ふ是は常の因果の定れる法なり、日蓮は此因果には
あらず法華經の行者を過去に輕易せし故に
法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉
と玉とをつらねたるが如くなる御經を或は上げ或は下て嘲弄せ
し故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未來際が間一づつこ
そ現ずべかりしを日蓮つよく法華經の敵を責るによて一時に聚り起

せるなりたとえ譬たとば民の郷郡たとなんどにあるにはいかなる利銭しとを地頭じと等に
おほせたれど

もいたくせめず年年にのべゆく其所こゝを出る時に競起ごが如ごとし斯これ護法ごほう
の功德くどく力よに由る故ゆなり等は是これなり、法華經ほけきょうには「諸もろもろの無智むちの人ひと有り
悪口あくぐち罵詈めり等らし刀杖とうじやう瓦石がしやくを加くうる乃至な國王こくわう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじに向
つて乃至な至數しすう數すう摸ま出しせられんら等ら云云いひしし、獄卒ごくそつが罪人ざいにんを責せずば地獄じじやくを出
る者ものかたかりなん当世とうせの王臣おうしんなくば日蓮にちれんが過去かこ謗法ぼうぼうの重罪じゆうざい消いし
難がたし日蓮にちれんは過去かこの不輕ふぎやうの如ごとく当世とうせの人人ひとびとは彼の輕毀きやうきの四衆ししゆうの如ごとし
人は替かれども因いんは是これ一ひとなり、父母ふぼを殺ころせる人ひと異ことなれど
も同じむげん無間地獄じじやくにおつついかなれば不輕ふぎやうの因いんを行なじて日蓮にちれん一人
釈迦しやくか仏ぶつとならざるべき又また彼諸人しよにんは跋陀婆羅門ばつだばらもん等らと云いはれざらんや
但せん千劫せんごう阿鼻地獄あびじやくにて責せられん事ことこそ不快ふくにはおぼゆれ是これをいかんと
すべき、彼輕毀きやうきの衆しゆは始はつは謗ぼうぜしかども後ごには信伏しんぷく隨從ずいじゆうせりき罪つみ

多分たぶんは滅しょうして少分しょうぶん有あしが父母ふぼ千人せんじん殺ころしたる程ほどの大苦だいこをうく当世とうせいの諸人しよじんは翻ひるがえりす心こころなし譬喻品ひゆほんの如ごとく無数劫むしゆこつをや経たんずらん三五さんごの塵点じんてんをやおくらんずらん。

これはさてをきぬ日蓮にちれんを信まずるやうなりし者どもが日蓮にちれんがかくなれば疑うたがいをこして法華經ほけきやうをすつるのみならずかへりて日蓮にちれんを教訓きよつくんして我賢わがけんしと思おもはん僻人びやくにん人等にんどうが念佛ねんぶつ者ものよりも久ひさく阿鼻地獄あびじごくにあらん事こと不便ふびんとも申ます計はかりなし、

修羅しゆらが仏ぶつは十八界じゅうはちがい我われは十九界じゅうくがいと云いひ外道げどうが云いく仏ぶつは一ひと究竟道くきやうだう我われは九十五究竟道くきやうだうと云いいしが如ごとく日蓮御房にちれんごぼうは師匠ししやうにておはせども余あまにこはし我等われらはやはらかに法華經ほふけきやうを弘ひろむべしと云いんは螢火ほたるびが日月にちがつをわらひ蟻塚あきづかが華山くたを下くだし井江せいこつが河海かかいをあなづり烏鵲かささぎが鸞鳳らんほうをわらふなるべしわらふなるべし。

南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやう

文永九年太歳ぶんえい 壬申みずのえさる 三月二十日

日蓮

花押かおう

日蓮弟子にちれんでし・檀那等だんな御中おんちゆう

佐渡さどの国くには紙侯せひはぬ上面うへめんに申まをせば煩わずらいあり一人ひとりももるれば恨うらみありぬべし此文このもんを心こころざしあらん人人ひとびとは寄合よひあひて「御覽ごらんじ料簡りょうけん侯こうて心こころなぐさませ給たまへ世間せけんにまさる欺あやまきだにも出来しゅつすれば劣せうる欺あやまきは物ものならず当時とうじの軍いくさに死しする人人ひとびと実まこと不実ふじつは置おく幾いくか悲かなし

かるらん、いざはの入道にちどうさかべの入道にちどういかになりぬらんかはこの
べ山城やましろ得行寺殿等の事こといかにと書付かきつて給たまべし、外典げてん書の貞観じょうかん
政要せいようすべて外典げてんの物語ものがたり八宗はっしゅうの相伝そうでん等此等これらがなくしては消息しゅうそく
もかかれ候そつらはぬにかまへてかまへて給たま候たまべし。

一一一六 富木殿御返事

文永 〇 年 4 月 5 1 歳御作

於佐渡一の谷

962P

御返事

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悅

有るべし、大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思ふ可きか。

驚目員数の如く給ひ候い畢ぬ御志申し送り難く候、法門の

事先度四条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覽有る

可し、粗経文を勘え見るに日蓮・法華經の行者為る事疑無きか

但し今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の悪国を去る故

か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三には大

悪鬼三類の心中に入り梵天・帝釈も力及ばざるか等、二の証文

道理追て進せしむ可く候、但生涯本より思い切て候今に翻返ること

無く共の上又遺恨無し諸の悪人は又善知識なり、撰受・折伏の二
義ぶつせつ仏説よに依る、敢あえてて私曲しきよくに非あらず万事ばんじり靈山りやうぜん浄土じやうどを期こすす、恐きよう恐きよう謹言きんげん。

卯月十日

日蓮

花押かおう

土木殿

一一七 土木殿御返事 文永十年七月 五十二歳

御作

963P

鷲目二貫給侯い畢んぬ、太田殿と其れと二人の御心喜び侯、伊与
房は機量物にて侯ぞ今年留め候い畢んぬ、御勘気ゆりぬ事・御欺き
侯べからず侯、当世・日本国子細之れ有る可き由之を存ず定めて
勘文の如く侯べきか、設い日蓮死生不定為りと雖も妙法蓮華經の
五字の流布は疑い無き者か伝教大師は御本意の円宗を日本に弘
めんとす、
但し定慧は存生に之を弘め円・或は死後に之を顕す事法為る故に
一重大難之れ有るか、仏滅後・二千二百二十余年今に寿量品の仏
と肝要の五字とは流布せず、当時果報を論ずれば恐らくは伝教・

てんだい 天台にも超え竜樹・天親にも勝れたるか、文理無くんば大慢豈之に
過んや、章安大師・天台を褒めて云く、「天竺の大論尚其の類に非ず
震旦の人師何ぞ劣しく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らし
むるのみ」等云云、日蓮又復是くの如し竜樹・天親等尚其の類に
非ず等云云、此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ、故に天台大師
日蓮を指して云く、「このごひやくさい 後の五百歳遠く妙道に結わん」等云云、伝教
大師当世を恋いて云く、「末法太はだ近きに有り」等云云、幸いなる
かな我が身「数数見擯出」の文に当ること悦ばしいかな悦ばしいか
な、諸人の御返事に之を申す故に委細、恐恐。

七月六日

にちれんかおう
日蓮花押

ごへんじ
土木殿御返事

一一八

富木殿御書

文永十一年五十三歳御作

964P

けかち申すばかりなし米一合もうらずがししぬべし、此の御房
たちも・みなかへして但一人侯べし、このよしを御房たちにもか
たりさせ給へ。

十二日さかわ十三日たけのした十四日くるまがへし十五日を
みや十六日なんぶ、十七日このところ・いまださだまらずといえど
も、たいしはこの山中・心中に叶いて侯へば・しばらくは侯はんずら
む、結句は一人になりて日本国に流浪すべきみにて侯、又たちとど
まるみならば・けさんに入り侯べし、

恐恐 謹言。

十七日

日蓮 在御判

ときどの

一一一九

土木殿御返事ごへんじ

964P

仕候なり。

褒美ほうびに非ず、実に器量者きりょうなり。来年正月大進阿闍梨と越中に之を遣つかし去るべく候、白小袖一つ給ひ候ひ畢おわんぬ、今年日本にほん国一同に飢と雨等にて一時いちじに稻穀損し。其の上疫病えきびょう処しよ処しよに遍満へんまんし、方方死難かたがたなん脱れ難なんきか、事事紙上に尽し難なんく候、恐恐謹言きょうきょうきんげん。

十一月三日

日蓮にちれん在御判

一一三〇 法華行者逢難事 文永十一年正月 五十三歳

御作与富木常忍 965P

河野辺殿等中

やまとあじやりごほうおんちゆう

大和阿闍梨御房御中

いっさい

一切我弟子等中

さえもんのじよう

三郎左衛門尉殿

謹上

日蓮

富木殿

追て申す、竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乘を申べて

法華経をば心に存して口に吐きたまわず、天台・伝教は之を

宣べて本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字と之を

残したもう、所詮しよせん一には仏・授与じゅよしたまわざるが故ゆえに、二には時機じき未熟みじくの故なり、今既に時来れり四菩薩出現したまわんか日蓮にちれん此の事先じきず

之これを知りぬ、西王母せいおうぼの先相せんそうには青鳥せいちよう・客人の来相きやくじんには鵲かんにやく是なり、各各かくかく・我が弟子でしたらん者は深く此の由よしを存ぜよ設たといしんみようい身命しんみんに及ぶとも退転たいてんすること莫なかれ。

富木・三郎左衛門の尉さえもん・河野辺やまとあじやり・犬和阿闍梨等いんあせり・殿原てんげん・御房達各各ごぼう互たがいに読聞けまいらせさせ給え、かかる濁世じよくせには互たがいにつねに・いゝあわせてひまもなく後世ごしよねがわせ給たまい候そうへ。

法華經ほけきよの第四よんに云く、如来にょらいの現在げんざいすら猶な怨おん嫉しつ多し況めつどや滅度めつどの後をのちやら等ら云云いひ、同第五ごに云く、「一切いっさい世間せけん怨あだ多おほくして信がたじ難がたし」等ら云云いひ、涅槃經ねはんきよの三十八さんじちはちに云く、「爾その時ときに外道げどうに無量むりようの人ひと有り、心瞋しんに恚にを生なず」等ら云云いひ、又また云いく

「爾その時に多く無量むりょうの外道げどう有りわ和合わごうして共に摩伽陀まがたの王わう・阿闍世あじゃせの前まへに往ゆきぬ 今いまは唯一ただ一大悪人あくにん有りく瞿曇沙門くどんしゃもんなり王未いまだ檢校けんぎょうせず我等われらはなはだ甚おそだ畏おそる、一切世間いっさいせけんの悪人あくにん利養りようの爲ゆえの故ゆえに其その所に往集ゆして眷属けんそくと爲なる乃至迦葉ないしかしやう・舍利弗しゃりほつ・目連もつけんれん等ら云云に如来に現在に猶多よ怨嫉おんしつの心こ是これなり、得だい一大徳天台智者だいたくてんだいちしやだいし大師のを罵のりして日いわく「智公汝ちこうなんじは是これ誰でし弟子さんずんぞ三寸さんすんに足たらざる舌根ぜつこんを以ふて覆面舌ふめんぜつの所説しよせつの教時しよせつを謗ほうず」、又云いわく「豈あ是これてんきよう狂あの人にに不あらずや」等云云な、南都なんと・七しち大寺こつとくの高徳等ごみようそうず・護命僧都かげのぶりつし・景信律師等かぎのぶりつし三百余人でんぎようだいし・伝教大師でんぎようだいしを罵のりして日いわく「西夏せいしやに鬼弁婆羅門きべんばらもん有りと東土とうどに巧言ぎやうげんを吐とく秃頭沙門とくずしゃもんあり此これ乃すち物類冥もつるいみようしやう 召せして世間せけんを誑惑おおわくす」等云云し、秀句しゆくに云いわく「浅あきは易やすく深ふかきは難がたしとは釈迦しやかの所判しよはんなり浅あきを去すつて深ふかきに就つくは丈夫じやうぶの心こなり、天台大師てんだいだいしは釈迦しやかに信順しんじゆんし法華宗ほつけしゆうを助ほけて震旦しんたんに敷揚ふようし、叡山えいざんの一家てんだいは天台そつじやうに相承ほつけしゆうし法華宗ほつけしゆうを助ほけて日本にほんに弘通くつうす」

云云。

夫れ在世と滅後と正像二千年の間に法華經の行者唯三人有り
所謂仏と天台・伝教となり、眞言宗の善無畏・不空等・華嚴宗の
杜順・智儼等・三論・法相等の大師等は実經の文を会して權の義に
順ぜしむる人人なり、竜樹・天親等の論師は内に鑒みて外に発せざ
る論師なり、經の如く宣伝すること正法の四依も天台・伝教には
如かず、而るに仏記の如くんば末法に入つて法華經の行者有る
可し其の時の大難・在世に超過せんと云云、仏に九横の大難有り
所謂孫陀利の謗と金鏑と馬麦と琉璃の積を殺すと乞食空鉢と
旃遮女の誘と調達が山を謗すと寒風に衣を索むるとなり、其の上
一切外道の讒奏上に引くが如し記文の如くんば天台・伝教も仏記
に及ばず。

之を以て之を案ずるに末法の始に仏説の如く行者世に出現せん

か、而るに文永十年十二月七日・武蔵の前司殿より佐土の国へ下す
状に云く自判之在り。

佐渡の国の流人の僧日蓮弟子等を引率し悪行を巧むの由其の聞
え有り所行の企て甚だ以て奇怪なり今より以後・彼僧に相い随わ
ん輩に於ては炳誠を加えしむ可し、猶以て違犯せしめば交名を
注進せらる可きの由の所に候な

り、何て執達件の如し。

文永十年十二月七日
上る

沙門観恵

依智六郎左衛門尉等云云。

此の状に云く悪行を巧む等云云、外道が云く瞿曇は悪人なり等
云云、又九横の難一一に之在り、所謂琉璃殺釈と乞食空鉢と寒風
索衣とは仏世に超過せる大難なり、恐くは天台・伝教も未だ此の

難なんに値あいたまわずまさ当まさに知なんるべし三人にちれんに日蓮にちれんを入いれ四人にちれんと為なして
法華ほけき經ぎょうの行ぎょう者じや・末法まつぽうに有あるか、喜よろこばしいかなききょうめつつどこ
哉かな國中しよにんの諸人あび阿鼻び獄ごくに入いらんこと茂しげきを厭いとうて之これを子細しさいに記きさ
ず心こころを以もつて之これを推すいせよ。

文永ぶんえい十一年じゆいちねん甲戌きのえいぬ正月しげつ十四日じゆじふにち日蓮にちれん花押かおう
一切いっさいの諸人しよにん之これを見聞けんもんし志こころざし有あらん人人ひとびとは互たがいに之これを語ことばれ。

一三二 富木殿御返事

文永十二年五十四歳御作

968P

富木殿御返事

日蓮

富木殿御返事
ときどのごへんじ
富木殿御返事
ときどのごへんじ
文永十二年五十四歳御作
ふんえい
968P
富木殿御返事
にちれん
唯 一領給ひ候い畢んぬ、夫れ仏弟子の中・比丘一人はんべり、
飢饉の世に仏の御時事かけて候いければ比丘袈裟をうて其のあた
を仏に奉る、仏其の由来を問い給いければしかじかとありのまま
に申しけり、仏云く「袈裟はこれ三世の諸仏・解脱の法衣なり、この
あたひをば我報じがたし」と辞退しまししかば此の比丘申すは
「この袈裟あたひをばいかんがせん」と申しければ、仏の云く「汝
悲母有りや不や」答えて云く「有り」仏云く「此の袈裟をば汝母に
供養すべし」此の比丘・仏に云く「仏は此れ三界の中第一の特尊なり
一切衆生の眼目にてをはず、設い十方世界を覆う衣なりとも大地

にしく袈裟けさなりとも能く報じ給うべし、我が位は無智むちなる事牛のごとし羊よりもはかなしいかでか袈裟けさの信施しんせをほうぜん」と云云、仏返して告げて云く「汝なんじが身をば誰か生みしぞや

汝なんじが母これを生む此の袈裟けさの恩報おんほうじぬべし」等云云、此これは又齡よわい九旬きゅうじゆんにいたれる悲母ひもの愛子あいこにこれをまいらせさ給たまえる我わがと両眼りやうげんを誕しんみょうり身命しんみょうを尽くせり、我が子の身として此このか帷かたびらの恩かたしとをばしてづかわせるか日蓮にちれん又はうじがたし、しかれども又返すべきにあらず此この帷かたびらをきて日天にってんの御前おんまえにして此この子細しさいを申し上げば定めて

釈梵しよてん諸天しよてんしろしめすべし、帷かたびらは一なれども十方じゆつぽうの諸天しよてん此れをしり給たまうべし、露つゆを大海たいかいによせ土つちを大地だいちに加るがごとし生生しんじに失せじ世世せせにくちざらむかし、恐恐おそおそ謹言きんげん。

二月五日

日

蓮

花押かおう

一三二一 富木殿御書

建治元年五十四歳御作

969P

与富木常忍

妙法蓮華經の第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗し經
を誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん
其人命終して阿鼻獄に入らん乃至是の如く展轉して無數劫に至ら
ん」第七に云く「千劫阿鼻獄に於てす」第三に云く「三千塵点」第六
に云く「五百塵点劫」等云云、涅槃經に云く「悪象の為に殺されては
三悪
に至らず悪友の為に殺されては必ず三悪に至る」等云云、賢慧菩薩
の法性論に云く「悪にして正法を信ぜず邪見及び慢なるは
過去の謗法の障りなり不了義に勒着して供養恭敬に著し唯邪法を

見て善知識ぜんちしきに遠離おんりして謗法者ほうぼうの小乘しょうじょうの法ほふに樂ぎょうちやく著ちやくする是かくのの如ごとき等の衆生しゆじょうに親近しんこんして大乘だいじょうを信しんぜず故ゆえに諸仏しよぶつの法ほふを謗ほうず、智者ちしやは怨家おんけ

蛇・火毒・

因陀羅いんだら・霹靂へきれき・刀杖とうじょう諸もろの惡獸おそ・虎狼ころう・師子しし等を畏おそるべからず、彼は但ただ能あたく命いのちを断たじて人ひとをして畏おそるべき阿鼻獄あびごくに入いらしむること能あたわず、畏おそるべきは深法じんぼうを謗ほうずると及び謗法ほうぼうの知識ちしきとなり決定けつじようして人ひとをして畏おそるべき阿鼻獄あびごくに入いらしむ、惡知識あくちしきに近づちかづきて惡心あくしんにして仏ぶつの血ちを出いだし及び父母ふぼを殺害さつがいし諸もろの聖人しょうにんの命いのちを断たじ和合僧わごうそうを破壊はえし及び諸もろの善根ぜんこんを断たずると雖いえども念ねんを正法しやうぼうに繫つなぐるを以もつて能よく彼の處ところを解脱げだつせん、若もし復また余人じんじん有あつて甚深じんじんの法ほふを誹謗ひぼうせば彼かの人ひと無量劫むりやうこつにも解脱げだつを得うべからず、若もし人衆生しゆじょうをして是かくのの如ごときの法ほふを覺信かくしんせしめば彼かは是かくのが父母ふぼ亦また是かくのれ善知識ぜんちしきなり、彼かの人ひとは是ちしや智者ちしやなり如來にょらいの滅後めつごに

邪見顛倒を廻して正道に入らしむるを以ての故に三宝清淨の信。

菩提

功徳の業なり」等云云、竜樹菩薩の菩提資糧論に云く「五無間の業

を説きたもう乃至許し未解の深法に於て執着を起せるは 彼の前

の五無間等の罪緊に之を比するに百分にしても及ばず」云云。

未れ賢人は安きに居て危きを欺き佞人は危きに居て安きを欺く

大火は小水を畏怖し大樹は小鳥に値いて枝を折らる 智人は恐怖す

べし大乘を謗する故に、天親菩薩は舌を切らんと云い馬鳴菩薩は

頭を刎ねんと願い吉蔵大師は身を肉橋と為し玄奥三蔵は此れを

靈地に占い不空三蔵は疑いを天竺に決し伝教大師は此れを異域

に求む皆上に挙ぐる所は経論を守護する故か。

今・日本国の八宗並びに浄土・禅宗等の四衆上主上・上皇より

下臣下万民に至るまで皆一人も無く弘法・慈覚・智証の三大師の

末孫・檀越なり、円仁・慈覚大師云く「故に彼と異り」円珍・智証
大師云く「華嚴・法華を大日経に望むれば戲論と為す」空海弘法
大師云く「後に望むれば戲論と為す」等と云云、此の三大師の意は
法華経は已・今・当の譜経の中の第一なり然りと雖も大日経に相對
すれば戲論の法なり等云云、此の義心有らん人信を取る可きや
不^{いな}や。

今・日本国の諸人・悪象・悪馬・悪牛・悪狗・毒蛇・悪刺・懸崖
険崖・暴水・悪人・悪国・悪城・悪舎・悪妻・悪子・悪所従等よりも
此に超過し以て恐怖すべきこと百千万億倍なれば持戒・邪見の高僧
等なり、問うて云く上に挙ぐる所の三大師を謗法と疑うか叡山
第二の円澄寂光大師・別当光定大師・安慧大樂大師・慧亮和尚・
安然和上・浄観僧都・檀那僧・正・慧心先徳・此等の数百人、弘法の
御弟子実慧・真濟・真雅等の数百人並びに八宗・十宗等の大師先徳

日と日と・月と月と・星と星と・並びに出でたるが如し、既に四百
余年を經歷するに此等の人人・一人として此の義を疑わず汝
何なる智を以て之を難ずるや云云。

此等の意を以て之を案ずるに我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇
を止めて之を案ぜよ一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ、恐恐
謹言。

八月二十三日

日蓮花押

富木殿

鷺目一結給ひ候畢んぬ、志有らん諸人は一処に踏集して御
聴聞有るべきか。

一三三三 御衣並単衣御書

建治元年

五十四歳御作

971P

御衣の布なら並びに御単衣給そちらひ俟おわい畢せんんぬ鮮びやく白びく比丘に尼と申せし人は
生なれさせ給たまいて御衣をたてまつりたりけり、生長するほどに次第しだいに
この衣大になりけり、後に尼とならせ給たまいければ法衣ほうえとなりけ
り、ついに法華經ほけきの座にして記ををさづかる一切衆生いっさいしゆじう喜見きけん如来にやういこれ
なり、又法華經ほけきを説く人は柔和忍辱衣にんにくと申もうして必ず衣あるべし、物
たね

と申もうすもの一なれども植えぬれば多くとなり竜は小水を多雨とな
し人は小火を大火だいかとなす、衣かたびらは一なれども法華經ほけきにまい
らせ給たまいぬれば法華經ほけきの文字もんじは六万九千三百八十四字・一字は

いちぶつ 一仏なり、此の仏は再生敗種を心符とし顕本遠寿を其の寿とし
じょうじゅうぶつじょう 常住 仏性を咽喉とし一乗妙行を眼目とせる仏なり、応化非真仏
と申して三十二相

・八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にては。わたらせ
たまひ 給いて仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に
ほけき 法華經を信ずる人は無一不成仏如来の金言なり、この衣をつくり
てかたびらをきそえて法華經を

よみて候わば日蓮は無戒の比丘なり法華經は正直の金言なり、
どくじゃ 毒蛇の珠をはき伊蘭の梅檀をいだすがごとし、
たま 恐恐謹言。

九月二十八日御返事日蓮 花押

一三四 観心本尊得意抄

建治元年十一月 五十四

歳御作

972P

鷺目一貫文厚綿の白小袖一つ筆十管墨五丁給び畢んぬ。

身延山は知食如く冬は嵐はげしくふり積む雪は消えず極寒の処

にて候間昼夜の行法もはだうすにては堪え難く辛苦にて候に此の小

袖を著ては思ひ有る可からず候なり、商那和修は付法蔵の第三の

聖人なり、此の因位を仏

説いて云く「乃往過去に病の比丘に衣を与うる故に生生世世に

不思議自在の衣を得たり、今の御小袖は彼に似たり此の功德は

日蓮は之を知る可からず併ながら釈迦仏に任せ奉り畢んぬ。

抑も今の御状に云く教信の御房 観心本尊抄の未得等の文字に

付て迹門しやくもんをよまじと疑うたがい心の候なる事不相伝そうでんの僻見びやくけんにて候か、
去る文永年中ぶんえいに此の書の相伝そうでんは整足せいそくして貴辺きへんに奉り候しが其その通
りを以て御教訓きようくん有る可く候、所詮しよせん・

在在しよしよ処処しやくもんに迹門しやくもんを捨てよと書きて候事は今・我等われらが読む所の迹門しやくもん
にては候はず、叡山天台宗えいざんてんだいしゅうの過時かじの迹を破はし候なり、設たいて天台てんだい・
伝教でんぎょうの如く法このままありとも今末法まつぽうに至いたつは去年こぞの曆ことの如いかし何いに
況じかくや慈覚じかく自こり已来このかた大小だいしゅう・権実ごんじつに迷まよいて大謗法ほうぼうに同おじきをや、然しかる
間像法まうぼうの時の利益りやくも之これ無し増まして末法まうぼうに於あけるをや。

一 北方ほくけの能化のうけ難なんじて云いく爾前にぜんの経きやうをば末顕みけん真実しんじつと捨なげて乍なら
安国論あんこくろんには爾前にぜんの経きやうを引き文証もんしゅうとする事じ自語相違じごそういと不審ふしんの事前さきざき前
申ませし如ごとし、総いじて一代いちだい聖教しやうきやうを大おおに分わかつて二ふたと為なす一ひとには大綱たいこう二
には綱目たいこうなり、初はの大綱たいこうとは成仏得道じやうぶつとくどうの教きやうなり、成仏じやうぶつの教きやうとは
法華經ほけきやうなり、次に綱目たいこうとは法華ほけ已前いぜんの諸經しよきやうなり、彼の諸經しよきやう等は不

成仏じょうぶつの教きょうなり、

成仏得道じょうぶつとくどうの文言ごんごう之これを説くと雖いえども但みょうじ名字なづなのみ有あて其その實義じつぎは法華ほっけに
之これ有あり、伝でん教きょう大師だいしの決ごんじつ權けん實論じつろんに云いく、權智ごんちの所作しよさは唯ただ名なのみ有あて
實義じつぎ有あること無なしと云いふ、但ただし權教ごんきょうに於おいても成仏得道じょうぶつとくどうの外ほかは説相せつそう
空くうしかる可べからず法華ほっけの為ための

網目なるが故に、所詮成仏の大綱を法華に之を説き其の余の網目は衆典に之を明す、法華の為の網目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり、其の上法華經にて実義有る可きを爾前の經にして名字計りのしる事全く法華の為なり、然る間尤も法華の証文となるべし。

問う法華を大綱とする証如何、答う天台は当に知るべし此の經は唯如來說教の大綱を論じて綱目を委細にせざるなりと、問うにぜん爾前を綱目とする証如何、答う妙樂の云く「皮膚毛綵衆典に出在せり」云云、問う成仏は法華に限ると云う証如何、答う經に云く「唯一乗の法のみ有て二も無く亦三も無し」文問う爾前は法華の為との証如何答う經に云く「種種の道を示すと雖も仏乗の為なり」委細申し度く候と雖も心地違例して候程に省略せしめ候、恐恐謹言。

十一月二十三日

にちれんかおう

日蓮花押

ときどのごへんじ

富木殿御返事

そこの

帥殿の物語りしは下総しもふさに目連樹もくれんと云う木の候よし申し候し、

そ其の木の根をほりて十両ばかり両方の切目には焼金やきがねを宛てて紙にあ

つくつつみて風ひかぬ様にこしらへて大夫次郎たゆうが便宜びんぎに給ひ候べきよ

し御伝えあるべく候。

一三五

聖人知三世事

建治元年

五十四歳御作

与

富木常忍

974P

聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云う、儒家の
 三皇・五帝並びに三聖は仏説在を知つて過・未を知らず外道は過去
 八万・未来八万を知る一分の聖人なり、小乗の二乗は過去・未来
 の因果を知る外道に勝れたる聖人なり、小乗の菩薩は過去三僧
 祇菩薩、通教の菩薩は過去に動踰塵劫を經歷せり、別教の菩薩
 は一一の位の中に多俱低劫の過去を知る、法華經のの迹門は過去
 の三千塵点劫を演説す一代超過是なり、本門は五百塵点劫・過去
 遠遠劫をも之を演説し又未来無數劫の事をも宣伝し、之に依つて
 之を案ずるに委く過未を知るは聖人の本なり、教主釈尊既に近

くは去つて後三月の湮槃之を知り遠くは後・五百歳・広宣流布疑
い無き者か、若し爾れば近きを以て遠きを推し現を以て当を知る
によせそうないしほんまつくきよう
如是相乃至本末究竟等是なり。

後・五百歳には誰人を以て法華經の行者と之を知る可きや予は
未だ我が智慧を信ぜず然りと雖も自他の返逆・伝道之を以て我が
智を信ず敢て他人の為に非ず又我が弟子等之を存知せよ日蓮は
是れ法華經の行者なり不輕の跡を紹繼するの故に輕毀する人は
頭七分に破・信ずる者は福を安明に積まん、問うて云く何ぞ汝を
毀る人頭破七分無きや、答えて云く古昔の聖人は仏を除いて已外
之を毀る人・頭破但一人・二人なり今日蓮を毀皆する事は非一人・
二人に限る可らず日本一國・一同に同じく破るるなり、所謂正嘉の
大地震・文永の長星は誰か故ぞ日蓮は一閻浮提第一の聖人なり、
上一人より下万民に至るまで之を輕毀して刀杖を加え流罪に処す

るが故ゆえに梵と釈と日月にちがつ・四天してんと隣国りんこくに仰せ付けおほて之これを遍責ひっせきするなり、大集經だいしつきょうに云いわく・仁王經にんのうきょうに云いわく・涅槃經ねはんきょうに云いわく・法華經ほけきょうに云いわく・たといばんき設ない万祈まんにせきを作なすとも日蓮にちれんを用もちいずんば必ず此この国こ今の志岐いぎ・对馬つしまの如ごとくならん、我が弟子でし仰あおいで之これを見みよ此これ偏ひとえに日蓮にちれんが貴尊きそんな

るにあら非ほずけ法華經ほうけきょうの御力おんちからの殊勝しゆじやうなるに依よるなり、身あをまぐぐれば慢まず
と想すいい身みを下くだせば經きやうを頗すこぶる松高まつたかければ藤長ふじながく源深げんしんければ流ながれ遠とほし、
幸さいなるかな楽らくしいかな穢えい土どに於おいて喜き樂らくを受うくるは但にちれん日蓮にちれん一人ひとりなる
而のみ已ま。

一三六 富木尼御前御返事あまごぜんごへんじ

建治二年 五十五

歳御作

975p

驚がもく目く一貫なら並びにつつひとつ給たまい候まい了おんぬわ・やのはしる事は弓ゆみのち
からくものゆくことはりうのちから、をとこ

のしわざはめのちからなり、いまときどののこれへ御ごわたりある事
尼おんちからごぜんの御力ごんちからなり、けぶりをみれば火を

みるあめをみればりうをみる、をとこをみればめをみる、今ときど

のにけさんつかまつれば尼ごぜんをみたてま

つると・をぼう、ときどのの御物がたり候はこのは・わのなげきのな
かにりんずうのよくをはせしと尼がよくあたり

かんびやうせし事のうれしさ・いつのよにわするべしともをぼえずと
・よろこばれ候なり、なによりも・をぼつかな

き事は御所勞なり、かまえてさもと三年はじめのごとくに・きうじ

せさせ給へ、病なき人も無常まぬかれがたし但しとしのはてにはあ

らず、法華經の行者なり非業の死にはあるべからずよも業病にて

は候はじ、設い業病なりと

も法華經の御力たのもし、阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命

をのべ陳臣は十五年の命をのべたり、尼ごぜん

又法華經の行者なり御信心月のまさるがごとく・しをのみつがごと

し、いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強

盛にをぼしめし身を持し心に物をなげかざれ、なげき出来いできる時は
ゆきつしまの事。だざひふの事。かまくらの人ひと人の

天の樂のごとにありしが、当時とつじつくしへむかへばとどまる。めこゆく
をとこ、はなるるときはかわをはぐがごとく

かをと・かをとをととりあわせ目と目をあわせてなげきしが、次第しだい
にはなれてゆいのはま・いなぶらこしこえさかわはこねさか一日・二
日すぐるほどに、あゆみあゆみ・とをさかる・あゆみをかわも山もへ
だて雲もへだつれば・うちそつ

ものはなみだなり・ともなうものはなげきなり、いかにかなしかる
らむ・かくなげかんほどに・もうこのつわものせめきたらば山か海も
いけとりか・ふねの内か・かうらいかにて・うきめにあはん、これ・ひ
とへに失とがもなくにほんこくて日本国
の一切衆生の父母となる法華經の行者日蓮をゆへもなく・或あるはの
り・或あるは打ち・或あるはこうじをわたし、ものにくるい
しが十羅刹のせめをかほりてなれる事なり、又又これより百千万億
倍たへがたき事どもいで来るべし、不思議を
目の前に御らんあるぞかし、我れ等は仏に疑うたがいいなしと・をばせば・
なにのなげきか有あるべき、きさきになりても・
なにかせん天に生れても・ようしなし、竜女りゅうにょがあとをつぎ摩訶波舍
波提比丘尼はだいびくにのれちにつらなるべし、あらうれし・あらうれし、南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えさせ給へ、恐恐謹言。

三月二十七日日蓮にちれん 花押尼かおうごぜんへ

一三七 忘持經事じきょうじ 建治二年 五十五歳御作 与

ときじょうにん
富木常忍

976p

忘れ給たまう所の御持經追じきょうて修行者しゅうぎょうじやに持たせ之これを遣つかわす。

魯ろの哀公あいこう云いく人好すなわく忘わる者有わたましり移宅すなわに乃すなわち其その妻はんどくを忘そんじれたり云けつちゆう

云こうし、孔子こうし云いく又好すなわく忘わるること此これより甚はなはしき者有けつちゆうり桀げつちゆう紂じゆうの君きみ

は乃すなわち其その身みを忘われたり等と云いふ、夫それ桀はんどく特とく尊そん者は名なを忘わる此これ

閻えん浮ぶ第一だいいちの好すなわく忘わる者ものなり今いま常忍じょうにん上人じょうにんは持じき經きょうを忘わる日本にほん第一だいいち

の好すなわく忘わるるの仁にか、大通だいつう結縁けちえんの輩やからは衣珠えじゆを忘われ三千さんぜん塵劫ちんせつを經へて

貧路ひんろに踟ちゆう 久遠くおん下種げしゆの人は良藥りょうやくを忘われ五百じんでん塵点ちんてんを送おくりて三途さんずの

嶮地けんじに顛倒てんどうせり、今いま真言宗しんごんしゅう・念仏宗ねんぶつしゅう・禅宗ぜんしゅう・律宗りつしゅう等の学者がくしや等は
仏陀ぶつだの本意ほんいを忘失もうしつし未来みらい無数劫むしゆけつを経歴きやうりやくして阿鼻あびの火坑かきように沈淪ちんりんせ
ん、此これより第一だいいちの好こく忘わするる者ものあり所謂いわゆる今の世よの

てんだいしゅうつ かくしや
天台宗の学者等と持経者等との日蓮を誹謗し念仏者等を扶助する
こ
是れなり、親に背いて敵に付き刀を持ちて自を
破る此等は且く之を置く。

そ
夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め善財童子は南に向いて
けしん せつせん しょうに はんげ
華嚴を得る雪山の小児は半偈に身を投げ樂法梵志は一偈に皮を
は 剥ぐ、此等は皆上聖大人なり其の迹を うるに地・住に居し其の
たす
本を尋ぬれば等妙なるのみ・身は八熱に入つて火坑三昧を得・心は
はちかん せいりょうさんまい しんしん かと
八寒に入つて清涼三昧を証し身心共に苦無し、譬えば矢を放つて
こくう
虚空を射・石を握つて水に投ずるが如し。

じょうにんきへん まつたたい ぐしや
今常忍貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり、身は俗に
あら
非ず道に非ず禿居士心は善に非ず悪に非ず羝羊のみ、然りと雖も
あら
一人の悲母・堂に有り朝に出で主君に詣で夕に入て私宅に返り営む
あら
所は悲母の爲め存する所は孝心のみ、而るに去月下旬の比・生死の
ひも ぞん しょうじ

ことわり

理をため示さんがため為にこうせん黄泉の道におもむ趣く此にきへん貴辺となげ歎いていわ言くよわい齡既に

九旬およに及び子こを留めて親いとの去ることしだい次第たりといへど雖も情事の心こころを案

ずるに去つてべ後来る可からず何れの月日いづれをかこ期せん二母

国くにに無し今より後誰たれをかべ拜す可き、離別しの忍びがた難きの間・舍利しゃりを頸くびに

懸かけ足あしに任まかせて大道だいどうに出いで下州げしゅうより甲州かうしゅうに至いたる其その中間ちゆうげん往復せんり千里

に及およぶ国くに皆みな飢饉ききんし山野さんやまに盜賊ぞくじゆう充満ちゆうまんし宿宿しゆくしゆく糧米りやうまい乏ぼう少しゆうなり我身わがみ

羸弱えいじやく・所しよ従じゆう亡むしきが若もく牛馬ぎゆうば合期あいきせず峨峨ががたる大山おほやま重重じゆうじゆうとして漫漫まんまん

たる大河おほがは多た多たなり高山こうざんに登のぼれば頭こぶしを天あまに ち幽谷ゆうこくへ下くだれば足雲あしぐもを

踏ふむ鳥とりに非あらねば渡わたり難かたく鹿かに非あらねば越こえ難がたし眼眩まなこくらき足冷あしひやゆ、羅什らじゆう

三蔵さんざうの葱嶺そうれい・役えんの優婆塞うばそくの大峰おほたけも只ただ今いまなりと云い云い、然しかる後のち深洞しんどうに

尋たずね入りて一菴あんしつ室むろを見みる法華ほつげ読誦どくじゆの音こゑ・青天せいてんに響ひびき一乘いちじゆう談義だんぎの言こと

山やま中に聞きゆ、案内あんないを触ふれて室むろに入りいりき教主きゆうしゆう釈尊しゃくそんの御宝ごほう前ぜんに母ははの骨ほねを

安置あんちし五躰ごたいを地ちに投なげ合掌がっしやうして両眼りやうげんを開ひき尊容そんようを拜はいし歡喜かんき身に余あま

り心の苦み忽ち息む、我が頭は父母の頭。我が足は父母の足。我が
十指は父母の十指。我が口は父母の口なり、譬えば種子と菓子と
身と影との如し。教主・釈尊の成道は淨飯・摩耶の得道。吉占師子
青提女・目尊者は同時の成仏なり、是の如く觀ずる時。

無始むしの業障ごうじやう忽ちたちまに消えしんじやう心性しんじやうの妙蓮みようれん忽ちたちまに開きたま給うしかか然しかして後ごに
随分ずいぶん仏事ぶつじを為なし事故じこ無くなく還かえり給たまう云云うんうん、恐恐きようきよう謹言きんげん。
富木とみき
入道殿にゅうだうだん

一三八

富木殿御返事とみきのごへんじ

建治二年十萬五十五歳御作

978p

鷲目がもく一結ひとゆいて天台大師てんだいだいしの御宝前ほうぜんを莊嚴そうごんし侯そうら了おんぬ、經いに云わく
「法華ほっけさいだいいち最第一さいだいいちなり」と、又い云わく「能よく是この經典きよつてんを受持じゆじすること有らら
ん者またも亦復また是またの如ごとし一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦またこれ第一だいいちなり」と、又
云いく「其その福復また彼またれに過すぐ」妙樂みよらく
云いく「若もし悩乱のうらんする者ものは頭こぶし七分しちぶんに破われ供養くようすること有らん者ものは

ふくじゆうに過ぐ伝教大師も「讚者は福を安明に積み誇者は罪を
むげん無間に開く」等云云、記の十に云く「方便の極位に居る菩薩猶尚第
五十人に及ばず」等云云、華嚴經の法慧功德林大日經の金剛薩捶
等尚法華經の博地に及ばず何に況や其の宗の元祖等法蔵善無畏等
に於てをや、
これは且く之を置く、尼ごぜんの御所勞の御事我身一身の上とを
もひ候へば昼夜に天に申し候なり、此の尼ごぜんは法華經の行者を
やしなう事灯に油をそへ木の根に土をかさぬるがごとし、願くは
日月天共の命にかわり給へ
と申し候なり、又をもいわする事もやといよ房に申しつけて供
そ、たのもしとをばしめせ、恐恐。

十一月二十九日

日蓮花押

ときどのごへんじ
富木殿御返事

一一三九 道場神守護事

建治二年十二月

五

十五歳御作

979p

鷺目がもく五貫文たしか慥たしかに送り給たまひ候まをいたぬ、且かつつ知食しるしめすが如ごとく此この所ところは里中ちゆうを離はなれたる深山みやまなり衣食いしょく乏ぼう少しょうの間ま読経どくぎょうの声こゑ続つき難かたく談義だんぎの勤ととめ廃へしつ可べし、此この託宣たくせんは十羅刹じゅうらせつの御計おんけいにて檀那だんなの功こうを致いたさしむるか、止觀しかんの第八はちに云いく「帝釈堂たいしやくだうの小鬼こゝろ敬おそい避よくるが如ごとく道場だうじやうの神かみ大おほなれば妄みだりに侵しんじこうごう すること無なし、又また城しろの主ぬし剛たければ守まもる者ものも強つよし城しろの主ぬし剛たければ守まもる者もの忙いそがる、心こゝろは是これ身みの主ぬしなり同名どうみ同生どうじやうの天あま是これ能よく人ひとを守まも護ごす心こゝろ固かたければ則すなわち強つよし身みの神かみ尚なほ爾になり況いはや道場だうじやうの神かみをや弘決くわくけつの第八はちに云いく「常つねに人ひとを護まもると雖いえども必かならず心こゝろの固かたきに仮かりて神かみの守まもり則すなわち強つよし又また云いく「身みの両肩りやうけんの神かみ尚なほ常つねに人ひとを護まもる況いはや道場だうじやうの神かみをや云いふ、人ひと所生しよじやうの時ときより二神にしん守まも護ごす所謂いわゆる同

生天同名天是を俱生神と

云う華嚴經の文なり、文句の四に云く「賊南無仏と称して尚天頭を

得たり況や賢者称せば十方の尊神敢て当らざらんや但精進せよ

懈怠すること勿れ」等云云、釈の意は月氏天を崇めて仏を用いざる

国あり而るに寺を造り第六天の魔王を主とす頭は金を以てす大賊

年来之を盗まんとして得ず有時・仏前に詣で物を盗んで法を聴く、

仏説いて

云く南無とは驚覺の義也盗人之を聞いて南無仏と称して天頭を得

たり、之を糾明する処盗人上の如く之を申す一国皆天を捨てて

仏に歸せり云云、彼を以て之を推するに設い科有る者も三宝を信

ぜば大難を脱れんか、而るに今示し給える託宣の状は兼て之を知

る之を案ずるに難を卻て福の来る先兆ならんのみ、妙法蓮華經の

妙の一字は竜樹菩薩の大論に釈して云く「能く毒を変じて薬と

為す」と云云、天台大師の云く「今經に記を得る即ち毒を變じて藥
と為すなり」と云云、災來るとも變じて幸と為らん何に況や十羅刹
之を兼るをや、薪火を熾にし風・求羅を益すとは是なり、言は紙上
に尽し難し心を以て之を量れ、恐恐謹言。

十二月十三日

日蓮にちれん

花押かおう

御返事ごへんじ

一四〇 常忍抄じょうにん

建治三年十月 五十六歳御

作 980p

御文粗拜見仕り候おんふみほほはいけん了おわんぬ。

御状いわに云く常忍じょうにんの云く記いの九いに云く「権うを稟うけて界いを出いづるを名なれて虚出いと為なす」云云、了性房ぼうい云く全いく以そて其その积い無いし云云、記いの九いに云くいわわの疏しゆ「無有虚出いより昔虚い為い実故じゆに至いたるまでは為の字去い権いを稟うけて界いを出いづるを名なけ

て虚出いと為なす三乘さんじやうは皆みな三界さんがいを出いでずと云うこと無いし人天にんてんは三途さんずを出いでんが為なならずと云うこと無いし並ならに名なけて虚いと為なす」云云、文句もんく

の九に云く「虚より出でて而も実に入らざる者有ること無し、故に
知んぬ昔の虚は声実の為の故なり」と云云、寿命品に云く「諸の
善男子・如来諸の衆生小法を樂う徳薄垢重の者を見て乃至
以諸衆生乃至未會暫廢」云云、此の經の文を承けて、天台・妙樂は
釈せしなり、此の經文は初成道の華嚴の別円より乃至法華經
の迹門十四品を、或は小法と云い・或は徳薄垢重・或は虚出等と
説ける經文なり、若し然らば華嚴經の華嚴宗・深密經の法相宗
般若經の三論宗・大日經の真言宗・觀經の浄土宗・楞伽經の
禅宗等の諸經の諸宗は依經の如く其の經を讀誦すとも三界を
出でず三途を出でざる者なり何に況や・或は彼を實と稱し・或は勝
ぐる等云云、此の人人天に向つて唾を吐き地をんで忿を為す者
か。

此の法門に於て如来滅後・月氏・一千五百余年・付法蔵の二十四

人・竜樹・天親等知つて未だ此れを顕さず、漢土一千余年の余人も
未だ之を知らず但天台・妙楽等粗之を演ぶ、然りと雖も未だ其の
実義を顕さざるか、伝教大師以て是くの如し、今日蓮粗之を勸う
るに法華經の此の文を重ねて涅槃經に演べて云く「若し三法に於て
異の想を修する者は当に知るべし是の輩は清淨の三歸則ち依処
無く所有の禁戒皆具足せず終に声聞・緣覺・菩薩の果を証すること
を得ず」等云云、此の經文は正しく法華經の壽量品を顕説せるな
り壽量品は木に譬え爾前・迹門をば影に
譬うる文なり、經文に又之有り、五時・八教・当分・跨節・大小の
益は影の如し本門の法門は木の如し云云、又壽量品
已前の在世の益は闇中の木の影なり過去に壽量品を聞きし者の
事なり等云云、又不信は謗法に非ずと申す事、又云く不信の者
地獄に墮ちずとの事、五の卷に云く「疑を生じて信ぜざらん者は

すなわまさ あくどつ
則ち当に悪道に墮つべしと云云。

総じて御心へ候へ法華經と爾前と引き向えて勝劣・浅深を伴ずる
に当分跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門なり、世間
に粗夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は
天台・妙楽・伝教も粗之を示せども未だ事了えず所詮末法の今に
譲り与えしなり、五五百歳は是なり、但し此の法門の御論談は余は
承らず候彼は広学多聞の者なりはばかりはばかりみたみた候い
しかば此の方のまけなんども申しつけられなば・
いかんがし候べき、但し彼の法師等が彼の釈を知り候はぬはさてを
き候いぬ、六十巻になしなんど申すは天のせめなり謗法の科の
法華經の御使に値うて顕れ候なり、又此の沙汰の事を定めてゆへあ
りて出来せり、かしまの大田次郎兵衛大進房又本院主もいかにとや
申すぞよくよくきかせ給い候へ此れ等は經文に子細ある事なり、

法華經の行者をば第六天の魔王の必ず障うべきにて候、十境の中
の魔境此れなり魔の習いは善を障えて悪を造らしむるをば悦ぶ事
に候、強いて悪を造らざる者をば力及ばずして善を造らしむ又二乗
の行をなす物をば・あながちに怨をなして善をすすむるなり、又
菩薩の行をなす物をば遮つて二乗の行をすすむ是後に純円の行を
一向になす者をば兼別等に墮すなり止觀の八等を御らむあるべし。

又彼が云く止観の行者は持戒等云、文句の九には初二三の
行者の持戒をば此れをせいす經文又分明なり、止観に相違の事
は妙樂の問答之有り記の九を見る可し、初隨記に二有り利根の
行者は持戒を兼ねたり鈍根は持戒之を制止す、又正像末の不同も
あり摂受折伏の異あり伝教大師の市の虎の事思い合わすべし。
此れより後は下総にては御法門候べからず了性思念をつめつる上
は他人と御論候わばかへりてあさくなりなん、彼の了性と思念とは
年来・日蓮をそしるとうけ給わる、彼等程の蚊虻の者が日蓮程の
師子王を聞かず見ずしてうはのそらにそしる程のをこじんなり、
天台法華宗の者ならば我は南無妙法蓮華經と唱えて念仏なんど
申す者をばあれはさる事なんど申すだにもきくわいなるべきに
其の義なき上・偶申す人をそしる・でう・あらふしぎ
ふしぎ、大進房が事さきざきかきつかわして候やうにつよづよとか

き上もつ申たまさせ給たまい候いへ、大進房ほつには十羅刹じゅうらせつ

のつかせ給たまいて引きかへしせさせ給たまうと、をばへ候いぞ、又また魔王まおうの使者しや
なんどがつきて候いけるが、はなれて候いと、をばへ候いぞ、悪鬼あくき入い其身み
はよも、そら事ことにては候いはじ、事事しじ重しげく候いへども、此この使しいそぎ候いへ
ばよるかきて候いぞ、恐きよう恐きよう謹言きんげん。

十月一日

日蓮にちれん

花押かおう

一四一 始聞はつしやう仏乘義ぶつじやう

建治四年二月 五十七歳御作

与富木常忍ときじやうにん

982p

青島せいふ七結下州より甲州に送そらる其その御志ごし悲母ひもの第三年に相あい当あたる

御孝養ごうようなり、問う止観しかん明静めいじやう前代ぜんだい未聞みもんの心こころ如何いかに、答う円頓えんどん止観しかんなり、
問う円頓えんどん止観しかんの意い何なにん、答う法華ほつげ三昧さんまいの異名いみやうなり、問う法華ほつげ三昧さんまい
の心こころ如何いかに、答う夫それ末代まつだいの凡夫ぼんぶ法華ほつげ経きやうを修行しゆぎやうする意いに二有ふたり一いつに
は就類種じゆるいしゆの開会かいえ二ふたには相对種そうたいの開会かいえなり、問う此こゝの名なは何なにより出
る

や、答う法華經第三葉草喩品に云く「種相体性の四字なり其の四字
の中に第一の種の一字に二あり、一には就類種二には相對種なり」
其の就類種とは釈に云く「凡そ心有る者は是れ正因の種なり随つて
一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ縁因の種なり」等
云云、其の相對種とは煩惱と業と苦との三道其の当体を押えて法身
と般若と解脱と稱する是なり、其の中に就類種の一法は宗は
法華經に有りと雖も少分又爾前の經經にも通ず、妙樂
云く「別經は唯就類の種有つて而も相對無し」と云云、此の釈の
別教と云うは本の別教には非ず爾前の円・或は他師の円なり、又
法華經の迹門の中・供養舍利已下二十余行の法門も大体就類種の
開會なり、問う其の相對種の心如何、答う止觀に云く「云何なるか
聞円法なる生死即法身・煩惱即般若・結業即解脱なりと聞くなり三
の名有り

と雖も而も三の体無し是れ一体なりと雖も而も三の名を立つ是の
三即ち一相にして其れ実に異有ること無し、法身究竟すれば般若も
解脱も亦究竟な般若清淨なれば余亦清淨なり解脱自在なれば
余亦自在なり一切の法を聞くこと亦是の如し皆佛法を具して減少
する所無し是を聞円と名く等云云、此の釈は即ち相對種の手法な
り其の意

如何、答う生死とは我等が苦果の依身なり所謂五陰・十二入・十八
界なり煩惱とは見思・塵沙・無明の三惑なり結業とは五逆・十惡・
四重等なり、法身とは法身如来・般若とは報身如来・解脱とは応身
如来なり我等衆生無始曠劫より已來此の三道を具足し今法華經に
値つて三道即三徳となるなり。

難じて云く火より水出でず石より草生ぜず惡因・惡果を感じ善
因善報を生ずるは仏教の定れる習なり而るに我等其の根本を尋ね

究きわむれば父母ふぼの精血しやく・赤白せきやく二に和合わごうして一身いつしんと為なる悪あくの根本こんぽん
不ふ浄じようの源みなもとなり、設たい大たい海かいを傾かけて之これを洗せんうとも清しやう浄じようなる可べからず
又こ此これ苦く果かの依そ身しんは其その根こん本ぽんを探たづね見みれば貧ひん・瞋ぜん・癡ちの三さん毒どくより
出いずるなり、此この
煩ぼん悩のう苦く果かの二に道どうに依よつて業ごうを構かう此この業ごう道どう即すなわち是これ結けつ縛ばくの法ぽうなり、
譬たとえば籠かごに入いれる鳥とりの如ごとし如何なんぞ此この三さん道どうを以もつて三ぶつ仏ぶつ因いんと称しょうする
や、譬たとえば糞ふんを集あめて梅せ檀だんを造つくれども終つひに香かしからざるが如ごとし、答こた
う汝なんじが難なん大だいいに道どう理りなり

我此の事を弁えず但し付法蔵の第十三天台大師の高祖・竜樹菩薩・

妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが

如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬と

は何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ

三道を変じて三徳と為すのみ、天台云く妙は不可思議と名づく等

云云、又

云く一心乃至不可思議境界意此に在り等云云、即身成仏と申すは

此れ是なり、近代の華嚴・真言等・此の義を盗み取りて我が物と

為す大偷盗天下の盗人は是なり。

問うて云く凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや、答う私の答は

詮無し竜樹菩薩の大論に云く九十三なり「今漏尽の阿羅漢還つて作仏

すと云うは唯仏のみ能く知るしめす、論議とは正しく其の事を論ず

可し測り知ること能わず是の故に戲論すべからず若し仏を求め得

る時乃ち能く了知す余人は信ずべく而も未だ知るべからず」等云

云、此の釈は爾前の別教の十一品の断・無明円教の四十一品の断・

無明の大菩薩普賢・文殊等も未だ法華經の意を知らず

何に況や蔵通二教の三乗をや何に況や末代の凡夫をやと云う論文

なり、之を以て案ずるに法華經の唯仏与仏・乃能究尽とは爾前の

灰身滅智の二乗の煩惱・業・苦の三道を押えて法身・般若・解脱と説

くに二乗還つて作仏す菩薩・凡夫も亦是くの如しと釈するなり、

故に天台の云く二乗根敗す之を名けて毒と為す今經に記を得る

即ち是れ毒を

変じて薬と為す、論に云く余經は秘密に非ず法華は是れ秘密なり

等云云、妙樂云く論に云くとは大論なりと云云、問う是くの如し

之を聞いて何の益有るや、答えて云く始めて法華經を聞くなり、

妙樂云く若し三道即是れ三徳と信ぜば尚能く二死の河を渡る況や

さんがい
三界をやと云云、末代まつだいの凡夫ほんぶ此この法門ほうもんを聞きかば唯我ただわれ一人ひとりのみ成しょう仏ぶつ
するに非あらず父母ふぼも又また即身そくしん成じょう仏ぶつせん此これ第一だいいちの孝養こうやうなり病身びやうしん為なるの
故ゆえに委細いさいならず又また申もうす可べし。

建治四年太歳つちのえとし 戊寅つちのえとし 二月二十八日

日蓮花押にちれんかおう

ときどの
富木殿

と きじょうにん
富木常忍妻

985p

そ
夫れ病に二あり一には軽病二には重病・重病すら善医に値う

急に対治すれば命猶存す何に況や軽病をや、業にこあり一には定業

二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や

不定業をや、法華経第七に云く、「此の経は則為閻浮提の人の病の

良薬なり」等云云、此の経文は法華経の文なり、一代の聖教は皆

如來

の金言・無量劫より已來不妄語の言なり、就中此の法華経は仏の

正直捨方便と申して真実が中の真実なり、多宝・証明を加え諸仏

舌相を添え給ういかでか・むなしかるべき、其の上最第一の秘事は

んべり此の經文きやうもんは後・五百歳・二千五百余年の時女人にょにんの病あらんと

とかれて侯文しゆつたいなり、阿闍世王あじゃせは御年五十の二月十五日に大惡瘡あくそう・

身みに出来しゆつたいせり、大医耆婆ぎばが力ちからも及およばず三月七日必ず死むげんして無間・

大城だいじやうに墮おつべかりき、五十余年が間の大樂いちじ一時に滅めつして一生の大苦

・三七日にあつまれり、定業じやうごう限りありしかども仏ほとけ・法華經ほけきやうをかさねて

演説えんげつして涅槃經ねはんきやうとなづけて大王だいおうにあ

たい給たまいしかば身の病びやう・忽たちまちに平愈へいゆし心の重罪じゆうざいも一時いちじに露つゆと消えに

き、仏滅ぶつめつ後・一千五百余年・陳臣ちんしんと申もうす人ありき命知命めいぢめいにありと

申もうして五十年に定まりて侯そうらいしが天台大師てんだいだいしに伴ともいて十五年の命を

宣のべべて六十五までをはしき、其その上うへ不輕菩薩ふぎやうぼさつは更增きやうぞうじゆみやう壽命じゆみやうととかれ

て法華經ほけきやうを行おこなじて定業じやうごうをのべ給たまいき、彼等かれらは皆男子みななり女人にょにんにはあ

らざれども

法華經ほけきやうを行おこなじて壽をのぶ、又陳臣ちんしんは後・五百歳にもあたららず冬の

とうまい 稲米・夏の菊花のごとし、とうじ 当時の女人の法華經を行じて定業を転ず
ることは秋の稲米冬とうまいの菊花誰か・をどろくべき。

されば日蓮悲母をいのりて侯しかばげんしん現身に病をいやすのみならず

四箇年の寿命じゆみょうをのべたり、にょにん 今女人の御身として病を身にうけさせ

給う・心みに法華經ほけきょうの信心しんじんを立てて御らむあるべし、しかも善医ぜんいあ

り中務三郎左衛門尉殿は

法華經ほけきょうの行者ぎきょうじやなり、命めいと申もうす物は一身だいいち第一ちんぼうの珍宝ちんぼうなり一日いちだいなりとも・これを延のるならば千万せんまん両りやうの金きんにもすぎたり、法華經ほけきょうの一代いちだいの聖教しやうきやうに超過ちやうかしていみじきと申もうすは寿量品じゆりやうぼんのゆへそかし、鬪浮第一だいいちの太子たいしなれども短命たんめいなれば草くさよりもかるし、日輪にちりんのごとくなる智者ちしやなれども天死わかににあれば生犬いけるに劣せうる、早く心こころざしの財さいをかさねていそぎいそぎ

御対治たいじあるべし、此これよりも申もうすべけれども人ひとは申もうすによて吉事きちじもあり又また我が志しのうすきかと・をもう者ものもあり人の心こころしりがたき上かみ先まへ先に少少せうせうかかる事候こと、此この人は人の申もうせばすこそ心こころへずげに思おもう人ひとなり、なかなか申もうす

はあしかりぬべし、但たゞなかうどもなく・ひらなさけに又また心こころもなくうちたのませ給たまえ、去年こぞの十月じゅうがつこれに來きりて候まちいしが御所ごしょ勞らうの事ことをよくよくなげき申もうせしなり、当事たいじ大事だいじのなければ・をどろかせ給たまわぬ

にや、明年正月二月のころをひは必ずをこるべしと申せしかば、これにもなげきは入つて候。

富木殿も此の尼ごぜんをこそ杖柱とも恃たるになんど申して候いしなり随分にわび候いしぞ。きわめてまけじたましの人にて我がかたの事をば大事と申す人なり、かへすがへす身の財をだにをしませ給わば此の病治がたかるべし、一日の命は三千界の財にもすぎて候なり先ず御志をみみへさせ給うべし、法華經の第七の巻に三千大千世界の財を供養するよりも手の一指を焼きて仏法華經に供養せよと。とかれて候はこれなり、命は三千にもすぎて候。而も齡もいまだたけさせ給はず、而して法華經にあわせ給いぬ一日もいきてをせば功德つもるべし、あらをしの命やをしの命や、御姓名並びに御年を我とかかせ給いてわざとつかわせ大日月天に申しあぐべし、いよどのもあながちになげき候へば日月天に自我偈をあ

て候そつらはんずるなり、恐きょうきょう。
日蓮にちれん花押かおう 尼にごぜん御返事ごへんじ

一四三 富城殿御返事ごへんじ

987p

あまごぜん じゆみやうぢやうおん
尼御前御寿命長遠の由天もつに申し候ぞ其そのゆえおんものがたりの故御物語り候へ。
ふだんほけきよう
不断法華経来年三月の料の分錢三貫文米二斗送り給び畢おわぬ。

十一月二十五日

にちれん
日蓮

在御判

ごへんじ
富城殿御返事

一四四 四菩薩造立抄ほさつ

こうあん
弘安二年五月

五十

八歳御作

987p

白小袖一薄墨染衣一。同色の袈裟一帖。鷲目一貫文給び候、今に
始めざる御志言を以て宣べがたし何れの日を期してか対面を遂げ
心中の朦朧を申し披や。

一御状に云く本門久成の教主釈尊を造り奉り脇士には久成
地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聴聞仕り候いき、然れば
聴聞の如くんば何の時かと云云、夫れ仏世を去らせ給いて二千余
年に成りぬ、其の間・月氏・漢土・日本国一閻浮提の内に仏法の流布
する事・僧は稲麻のごとく法は竹葦の如し、然るにいまだ本門の
教主釈尊・並に本化の菩薩を造り奉りたる寺は一処も無し三朝の
間に未だ聞かず、日本国に数万の寺寺を建立せし人人も本門の
教主脇士を造るべき事を知らず上宮太子仏法最初の寺と号して
四天王寺を造立せしかども阿弥陀仏を本尊として脇士には観音等・
四天王を造り副えたり、伝教大師・延暦寺を立て給うに中堂には

東方とうほうの鷲王じうおうの相貌そうみょうを造りつくて本尊ほんぞんとして

くじょう 久成の教主・脇士をば 建立し給はず、南京七大寺の中にも此の事を未だ聞かず 田舎の寺寺以て爾なり、かたがた不審なりし間、法華經の文を拜見し奉りしかば其の旨顯然なり、末法・鬪諍堅固の時にいたらずんば造るべからざる旨分 明なり、正像に出世せし論師・人師の造らざりしは仏の禁を重んずる故なり、若し正法・像法の中に
くじょう 久成の教主 釈尊並びに脇士を造るならば夜中に日輪出で日中に月輪の出でたるが如くなるべし、末法に入つて始めの五百年に上行菩薩の出でさせ給いて造り給うべき故に正法・像法の四依の論師・人師は言にも出させ給はず、竜樹・天親こそ知らせ給いたりしかども口より外へ出させ給はず、天台智者大師も知らせ給いたりしかども迹化の菩薩の一分なれば一端は仰せ出させ給いたりしかども其の実義をば宣べ出させ給はず、但ねざめの枕に

ほととぎす
時鳥の一音を聞きしが如くにして夢のさめて止ぬるやうに弘め
給い候ぬ、夫れより已外の人師はまして一言をも仰せ出し給う事な
し、此等の論師・人師は靈山にして迹化の衆は末法に入らざらん
し、正像二千年の論師・人師は本門久成の教主釈尊並に久成の脇士
地涌上行等の四菩薩を影ほども申出すべからずと御禁ありし故
ぞかし。

今末法に入れば尤も仏の金言の如くんば造るべき時なれば本仏
本脇士造り奉るべき時なり、当時は其の時に相当れば地涌の菩薩
やがて出でさせ給はんずらん、先ず其れ程に四菩薩を建立し奉る
べし尤も今は然るべき時なりと云云、されば天台大師は後の五百歳
遠く妙道に沾わんとしたひ、伝教大師は正像稍過ぎ已て末法
はなは
太だ近き

に有り法華一乗の機今正に是れ其の時なりと恋いさせ給う、日蓮

は世間せけんには日本にほん第一だいいちの貧えんぶしき者だいいちなれども仏法ぶつぼうを以て論ずれば一

閻浮提えんぶだい第一だいいちの富ふる者ものなり、是これ時の然しからしむる故ゆゑなりと思おもへば喜よろこび

身みにあまり感涙かんでい押おへ難かたく教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御恩報おんぼんじ奉たてまつり難かたし、恐おそらくは

付法蔵ふほつぞうの人人ひとびとも日蓮にちれんには果報かほうは劣たまいらせ給たまいたり天台智者大師てんだいちしやだいいし・

伝教大師等だんきやうだいいしも及および

給たまうべからず最ほも四菩薩しよぼうもんこを建こんりゆう立りゆうすべき時ときなり云い云わ、問いうて云いく四

菩薩ぼさつを造立しよぼうもんこすべき証文じやうもん之これれ有ありや、答こたえて云いく涌出品ゆじゆつぽんに云いく「四しの

導師どうし有あり一いちをば上行じやうぎやうと名なけ二にをば無边行むへんぎやうと名なけ三さんをば浄行じやうぎやうと

名なけ四しをば安立行あんりゆうぎやうと名なく」

等云云、問うて云く後・五百歳に限るといへる経文之れ有りや、答えて云く薬王品に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」と等云云。

一御状に云く大田方の人人・一向に迹門に得道あるべからずと申され候由・其の聞え候とは以ての外の謬なり、御得意候へ本・迹二門の浅深・勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし、一代聖教を弘むべき時に三あり機もつて爾なり、仏滅後・正法の始の五百年は一向・小乗後の五百年は権大乘像法一千年は法華経の迹門等なり、末法の始には一向に本門なり一向に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず、法華経一部に於て前の十四品を捨つべき経文之れ無し本・迹の所判は一代聖教を三重に配当する時にぜん・迹門は正法・像法・或は末法は本門の弘まらせ給うべき時なり、今の時は正には本門傍には迹門なり、迹門無得道と云つて

迹門しやくもんを捨てて一向本門いっこうほんもんに心を入れさせ給うたま人人ひとびとはいまだ日蓮にちれんが
本意ほんいの法門ほうもんを習はせ給はざるたまにこそ以ての外ほかの僻見びやくけんなり、私なら
ざる法門ほうもんを僻案びやくあんせん人は偏ひとえに天魔波旬てんまはじゆんの其その身に入り替りて人を
して自身じしんともは無間むげん・大城だいじょうに墮おつべきにて候つたなしつたなし、此この
法門ほうもんは年来貴辺きへんに申し含めたる様に人人ひとびとにも披露ひろうあるべき者なり
総じて日蓮にちれんが弟子でしと云つて法華經ほけきよつを修行しゆぎようせん人人ひとびとは日蓮にちれんが如ごとくに
し候へさだにも候はば釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱうの分身ふんじん・十羅刹じゅうらせつも御守り
候べし、其それさへ尚なお人人ひとびとの御心中しんちゆうは量りがたし。

一日行房死去ほうしきよの事不便ふびんに候、是にて法華經ほけきよつの文讀み進まいらせて南無
妙法蓮華經みよつほうれんげきよつと唱へ進まいらせ願くは日行にちぎを釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつ
靈山りやうぜんへ迎へ取らせ給へたまと申し上げ候いぬ、身の所労きよつきよいまだきらきら
しからず候間省略こうあんせしめ候、又又申す可く候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安二年五月十七日

日蓮花押

一四五 富木殿女房尼御前御書

弘安二年十一月

五十八歳御作

990p

いよ房ほつは学生になりて候ぞつねに法門ほつもんきかせ給へたま。

はるかに見まいらせ候はねばをぼつかなく候、たうじとてまたの
しき事は候はねどもむかしはことにわび

しく候いし時よりやしなはれまいらせて候へばことにをんをもくを
もいまいらせ候、それについてはいのち

はつるかめのごとくさいはいは月のまさりしをのみつがごとくこ
そ法華経ほけきょうにはいのりまいらせ候へさては

えち後房ほつしもつけ房ほつと申す僧をいよどのにつけて候ぞ、しばらくふ
びんにあたらせ給へたまととき殿には申させもつ

給へたま。

十一月二十五日
富城殿女房にようぼうあまごぜん尼御前

日蓮にちれん花押かおう

一四六 諸経と法華経と難易の事

弘安三年五月 五十九

歳御作

991p

問うて云く法華経の第四法師品に云く難信難解と云云いかなる事ぞや、答えて云く此の経は仏説き給いて後二千余年にまかりなり候、月氏に一千二百余年漢土に二百余年を経て後に日本国に渡りてすでに七百余年なり、仏滅後に此の法華経の此の句を読みたる人但三人なり、所謂月氏には竜樹菩薩の大論に云く「たとえば大薬師の能く

毒を以て薬と為すが如し」等云云、此れは竜樹菩薩の難信難解の四字を読み給いしなり、漢土には天台智者大師と申せし人読んで云く「已今当説最も為れ難信難解」と云云、日本国には伝教大師読んで

云く「已説の四時の経今説の無量義経当説の涅槃経は易信易解な
 り随他意の故に此の法華経は最も為れ難信難解なり随自意の故に
 等云云、問うて云く其の意如何、答て云く易信易解は随他意の
 故に難信難解は随自意の故なり云云、弘法大師並びに日本国東寺
 の門人をもわく法華経は顕教の内の難信難解にて密教に相對すれ
 ば易信易解なり云云、慈覚・智証並びに門家思うよう法華経と
 大日経は俱に難信難解なり但し大日経と法華経と相對せば
 法華経は難信難解・
 大日経は最も為れ難信難解なり云云、此の二義は日本一同なり、
 日蓮讀んで云く外道の経は易信易解・小乗経は難信難解
 小乗経は易信易解大日経等は難信難解大日経等は易信易解
 般若経は難信難解なり般若と華嚴と華嚴と涅槃と涅槃と法華
 と・迹門と本門と・重重の難易あり。

問うて云く此の義を知つて何の詮か有る答えて云く生死の長夜を
照す大燈・元品の無明を切る利剣は此の法門に過ぎざるか随他意
とは真言宗・華嚴宗等は随他意の易信易解なり仏九界の衆生の
意樂に随つて説く所の経経を随他意という譬えば賢父が愚子に
随うが如し、仏・仏界に随つて説く所の経を随自意という、譬へば
聖父が愚子

を随つえたるが如ごときなり、日蓮にちれん此この義ぎに付たて大日だいにち經ぎょう・華嚴けこん經ぎょう・涅槃ねはん經ぎょう
 等を勘かんえ見み候ごうに皆みな隨ず他いた意いの經き經ぎょうなり、問もんうて云いく其その隨ず他いた意いの
 証しょう掘こ如何いかん、答こたえて云いく勝しょう鬘まん經ぎょうに云いく、「非ひ法ほうを聞きくこと無むき衆しゅ生じょうに
 は人にん天てんの善ぜん根こんを以もて之これを成じょう熟じくす声しゅう聞もんを求もとむる者ものには声しゅう聞もん乘ぜんを授さ
 け縁えん覺かくを求もとむる者ものには、縁えん覺かく乘ぜんを授さけ大だい乘じょうを求もとむる者ものには授さず
 に大だい乘じょうを以もてす」と云いふ、易い信しん易い解げの心こころ是これなり、華け嚴こん・大だい日にち・般はん若にゃ・
 涅ね槃はん等たう又また是かくの如ごとし、爾その時ときに世せ尊そん・藥やく王おう菩ぼ薩さつに因よせて八はち万まんの大だい士し
 に告こげたまわく藥やく王おう汝なんじ是この大だい衆しゅうの中ちゆうの無む量りょうの諸しよ天てん・竜りゅう王おう・夜や叉しゃ・
 乾けん闍だつ婆ば・阿あ修しゆ羅ら・迦か楼る羅ら・緊きん那な羅ら・摩ま羅ら伽か・人ひとと非お人よと及および比ひ丘く・
 比ひ丘く尼に・優う婆ば塞そく・優う婆ば夷いの声しゅう聞もんを求もとむる者もの・辟ひやく支し仏ぶつを求もとむる者もの・
 仏ぶつ道どうを求もとむる者ものを見みるや、是かくの如ごとく等たう類るい咸ことごとく仏ぶつ前ぜんに於おいて
 妙みょう法ほふ華け經ぎょうの一いち偈げ・一い句くを聞きいて一いち念ねんも隨ず喜きする者ものには我み皆みな記ぎを与よす
 授さく当たうに阿あ・菩ぼ提だいを得うべし、文ぶん、諸しよ經ぎょうの如ごとくんば人ひとは五ご戒かい・天てんは

十善・梵は慈悲喜捨・魔王には一無遮・比丘の二百五十・比丘尼の五百戒・声聞の四諦・緣覺の十二因縁・菩薩の六度・譬へば水の器の方円に随い象の敵に随つて力を出すのごとし、法華經は爾らず八部・四衆皆一同に法華經を演説す、譬へば定木の曲りを削り師子王の剛弱を嫌わずして大力を出すのごとし。

此の明鏡を以て一切經を見聞するに大日の三部・浄土の三部等隠れ無し、而るをいかにやしけん弘法・慈覺・智証の御義を本としける程に此の義すでに隠没して日本国四百余年なり、珠をもつて石にかへ梅檀を凡木にうれり、仏法やうやく顛倒しければ世間も又濁乱せり、仏法は体のごとし世間はかげのごとし体曲れば影ななめなり、幸なるは我が一門仏意に随つて自然に薩般若海に流入す、世間の学者の若きは随他意を信じて苦海に沈まんことなり、委細に旨又又申す可く候、恐恐。

花押かおう五月廿六日

日蓮にちれん

一四七 富城入道殿御返事

弘安四年十月 六十

歳御作

693a

与富木胤継 於身延

今月十四日の御札同じき十七日到来、又去ぬる後の七月十五日の御消息同じて二十比到来せり、其の外度度の貴札を賜うと雖も老病為るの上又不食氣に候間未だ返報を奉らず候条其の恐れ少からず候、何よりも去ぬる後の七月御状の内に云く鎮西には大風吹き候て浦浦・島島に破損の船充滿の間乃至京都には思円上人・又云く理豈然らんや等云云、此の事別して此の一門の大事なり総じて日本国の凶事なり仍つて病を忍んで一端是れを申し候はん、是偏に日蓮を失わんと為て無かるう事を造り出さん事兼て知る、其の故は日本国の真言宗等の七宗・八宗の人人の大科今に始めざ

る事なり然りと雖も且く一を挙げて万を知らしめ奉らん、去ぬる
承久年中に隱岐の法皇義時を失わしめんが為に調伏を山の座主
東寺・御室・七寺・園城に仰せ付けられ、仍つて同じき三年の五月

十五日

鎌倉殿の御代官・伊賀太郎判官光末を六波羅に於て失わしめ畢ん
ぬ、然る間同じき十九日二十日鎌倉中に騒ぎて同じき二十一日・山

道・海道・北陸道の三道より十九万騎の兵者を指し登す、同じき六
月十三日其の夜の戌亥の時より青天俄に陰りて震動雷電して武士
共首の上に鳴り懸り鳴り懸りし上・車軸の如き雨は篠を立つるが
如し、爰に

十九万騎の兵者等・遠き道は登りたり兵乱に米は尽きぬ馬は疲れ
たり在家の人は皆隠れ失せぬ冑は雨に打たれて懸の如し、武士共・
宇治勢多に打ち寄せて見ければ常には三丁四丁の河なれども既に

六丁・七丁・十丁に及ぶ、然る間・一丈・二丈の大石は枯葉の如く浮
び五丈・六丈の大木流れ塞がること間無し、昔利綱・高綱等が渡せ
し時には

似る可くも無し武士之を見て皆臆してこそ見えたりしが、然りと
似る可くも無しいへと武士之を見て皆臆してこそ見えたりしが、然りと
雖も今日を過さば皆心みなをひるがえお翻し墮ちぬ可べし去いぬる故ゆえに馬うまい筏かだを作りて
之これを渡わたす処ところ・或あるは百騎ある・或あるは千せん万まん騎ある・此かくの如ごとく皆みな我わも我わもと度
ると雖もいへと・或あるは一丁ある・或あるは二丁三丁

わた 渡る様なりと雖も彼の岸に付く者は一人も無し、然る間・緋綴・
あかおどし 赤綴等の甲其の外弓箭・兵杖・白星の冑等の河中に流れ浮ぶ事
な お は猶長月神無月の紅葉の吉野・立田の河に浮ぶが如くなり、爰に
えいざん 叡山・東寺・七寺・園城寺等の高僧等之を聞くことを得て真言の
ひほう 秘法・大法の験とこそ悦び給いける、内裏の紫宸殿には山の座主・
とうじ とうじ 東寺・御室・五壇・十五壇の法を 弥盛んに行われければ法皇の御
えい 叡感極り無く玉の巖を地に付け大法師等の御足を御手にて摩給い
だいじん しかば大臣・公卿等は庭の上へ走り落ち五体を地に付け高僧等を敬
たてまつ いて奉る。

又宇治勢田にむかへたる公卿・殿上人は冑を震い挙げて大音声
い わ を放つて云く義時・所従の毛人等慥に承われ昔より今に至るまで
よしとき 王法に敵を作し奉る者は何者か安穩なるや、
な たてまつ 王法に敵を作し奉る者は何者か安穩なるや、
なんもの 狗犬が師子を吼えて
あんのん 其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼
しゅら なく 修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼
にちがつ 其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼
そ 其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼
かえ 其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼
そ 其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼
まなこ 其の腹破れざること無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼

に中らざること無し遠き例は且く之を置く、近くは我が朝に代始

まつて人王八十余代の間・大山の皇子・大石の小丸を始と為て二十

余人王法に敵を為し奉れども一人として素懐を遂げたる者なし皆

頸を獄門に懸けられ骸を山野に曝す関東の武士等・或は源平・

或は高家等先祖相伝の君を捨て奉り伊豆の国

の民為る義時が下知に随う故にかかる災難は出来するなり、王法

に背き奉り民の下知に随う者は師子王が野狐に乗せられて

東西南北に馳走するが如し今生の恥之れを何如、急ぎ急ぎ胃を

脱ぎ弓弦をはづして参参と招きける程に、何に有りけん申酉の時に

も成りしかば関東の武士等・河を馳せ渡り勝ちかかりて責めし間

京方の武者共一人も無く山林に逃げ隠るるの間、四つの王をば四つ

の島へ放ちまいらせ又高僧・御師・御房達は或は住房を追われ

或は恥辱に値い給いて今に六十年の間いまだ・そのはぢをすすがず

とこそ見え候に、今亦彼の僧侶の御弟子達御祈承はられて候げに
候あひだいつもしやうぐんの事なれば秋風にわすか纏の水に敵船賊船などの破損
仕りて候を大將軍生取たりなんと申し祈り成就じやうじゆの由を申し候げに
候なり、又蒙古もうこの大王だいおうの頸の参りて候かと問い給うべし、其の外は
いかに申し候とも御返事あるべからず御存知のためにはあらあら申し
候なり。

乃至此の一門の人人にも相触れ給ふべし又必ずしいぢの四郎が
事は承り候い畢んぬ、予既に六十に及び候へば天台大師の御恩報じ
奉らんと仕り候あひだみぐるしげに候房をひきつくり候ときに、
さくれうにおろして候なり、錢四貫をもちて一閻浮提第一の法華
堂造りたりと靈山浄土に御参り候はん時は申しあげさせ給うべ
し、恐恐。

十月二十二日

日蓮花押

一四八

治病大小権実違目

富木入道殿御返事

日蓮

995p

さへもん殿の便宜の御かたびら給い了んぬ。

このたびひとびと
今度の人人のかたがたの御さいども佐衛門尉殿の御日記のご
とく給い了んぬと申させ給い候へ。

太田入道殿のかたがたのものときどのの日記のごとく給い候
了んぬ此の法門のかたづらは佐衛門尉殿にかきて候、こわせ
給いて御らむ有るべく候。

御消息に云く凡そ疫病 弥興盛等と云云、夫れ人に二の病あ

り一には身の病 所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已
上四百四病なり、此の病は設い仏に有らざれども之を治す所謂
治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬此れを治するにゆいて愈えずとい
う事なし、二には心の病所謂三毒乃至八万四千の病なり、此の病は

二天・三仙・

六師等も治し難し何に況や神農・黄帝等の方薬及ぶべしや、又心の
病重重に浅深勝劣分れたり、六道の凡夫の三毒八万四千の心病は

小仏・小乘^{しよぼうじよぼう}・阿含經^{あこんきやう}・俱舍^{くしゃ}・成実^{じやうじつ}・律宗^{りつしゆう}の論師^{ろんし}・人師^{にんし}此れを治する
にゆいて愈えぬべし、但^{ただ}し此

の小乗しやうじやうの者等しやうじやう・小乗しやうじやうを本としてある・或はある大乘だいじやうを背そむき・或はある心には背そむかざれども大乘だいじやうの国くにに肩かたを並ならべなんとする其その国くに其その人に諸病しよびやう起おこる、小乗しやうじやう等らをもつて此これを治ちすれば諸病しよびやうは増ますとも治ちせらるる事ことなし、諸大乗しよだいじやう經きやうの行者ぎやうじやうをもつて此これを治ちすれば則すなわち平愈へいゆす、又またけこんきやう じんみつ はんによきやう だいにちきやう こんだいじやう ひとびと 華嚴經けわんきやう・深密經しんみつ 般若經はんによきやう・大日經だいにちきやう等の權大乘こんだいじやうの人人ひとびと・各各れついで劣謂勝見しやういしやうけんを起おこして我が宗しゆはある・或はある法華經ほけきやうと齊等ひとし・或は勝すぐれたりなんど申もうす人多おほく出来しゅつし・或は国主こくしゆ等ら此これを用もちいぬれば此これによつて三毒さんどく八万四千はちまんの病起おこる、返かへつて自みづかの依經えきやうをもつて治ちすれどもいよいよ倍増ばいぞうす、設たとい法華經ほけきやうをもつて行ぎやううとも驗しるなし經きやうは勝すぐれたれども行者ぎやうじやう・僻見びやくけんの者ものなる故ゆゑなり。
 法華經ほけきやうに又また二經にあり所謂いわゆる迹門しやくもんと本門ほんもんとなり本迹ほんしやくの相違さういは水火すいか天地てんちの違目いもくなり、例たとせば爾前にぜんと法華經ほけきやうとの違目いもくよりも猶なほ相違さういあり爾前にぜんと迹門しやくもんとは相違さういありといへども相似さうじの辺へも有ありぬべし、所説しよせつに

はつきょう 八教あり爾前の円と迹門の円は相似せり爾前の仏と迹門の仏は
劣応・勝応・報身・法身異れども始成の辺は同じきぞかし、今本門と
迹門とは教主已に久始のかわりめ百歳のをきなと一歳の幼子のご
とし、弟子又水火なり土の先後いづばかりなし、而るを本迹
を混合すれば水火を弁えざる者なり、而るを仏は分明に説き分け
給いたれども仏の御入滅より今に二千余年が間三国並びに一
閻浮提の内に分明に分けたる人なし、但漢土の天台日本の伝教此
の二人計りこそ粗分け給いて候へども本門と迹門との大事に円戒い
まだ分明ならず、詮ずる処は天台と伝教とは内には鑒み給うと
いへども一には時来らず二には機なし三には譲られ給はざる故な
り、今末法に入りぬ地涌出現して弘通有るべき事なり、
今末法に入つて本門のひろまらせ給うべきには小乗・権大・乘
迹門の人人・設い科なくとも彼れ彼れの法にては験有るべからず、

譬へば春の葉は秋の葉とならず設いなれども春夏のごとくならず
何に況や彼の小乗・権大乘・法華經の迹門の人人・或は大小・
権実に迷える上・上代の国主彼れ彼れの經經に付きて寺を立て
田畠を寄進せる故に彼の法を下せば申し延べがたき上・依怙すでに
失るかの故に大瞋恚を起して・或は実經を謗じ・或は行者をあだむ
国主も

又一には多人につき、或は上代の国主の崇重の法をあらため難き故、或は自身の愚癡の故、或は実教の行者を賤しむゆへ等の故彼の訴人等の語を、をさめて実教の行者をあだめば実教の守護神の梵釈・日月・四天等其の国を罰する故に先代未聞の三災・七難起るべし、所謂去今年去ぬる正嘉等の疫病等なり。

疑つて云く汝が申すがごとくならば此の国法華經の行者をあたむ故に善神此の国を治罰する等ならば諸人の疫病なるべし何ぞ汝が弟子等又やみ死ぬるや、答えて云く汝が不審最も其の謂有るか但し一方を知りて一方を知らざるか、善と悪とは無始よりの左右の法なり權教並びに諸宗の心は善悪は等覺に限る若し爾ば等覺までは互に失有るべし、法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覺の位に猶備われり元品の法性は梵天帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり、善神は悪人をあだむ悪鬼は

善人ぜんじんをあだむ、末法まつぽうに入りぬれば自然じねんに悪鬼あくきは国中こくちゆうに充満ちゆうまんせり
がしやくそつもく なら しげき ぜんき てんか
瓦石草木がしやくそつもくの並びなら滋しげきがごとし善鬼ぜんきは天下てんかに少しせいけん聖賢せいけんまれなる故ゆゑなり、此こゝの疫病えきびようは念仏者ねんぶつ・真言師しんごんし・禅宗ぜんしゆつ・
りつそつ
律僧等りつそつよりも日蓮にちれんが方まなにこそ多くやみ死ぬべきにて候か、いかにと
して候やらん彼等かれらよりもすくなくやみすくなく死に候は不思議ふしぎに、
をばへ候、人のすくなき故か又御信心しんじんの強盛かうじやうなるか。

問うて云くいわ日本国にほんこくに此こゝの疫病えきびよう先代せんたいに有りや、答えて云くいわ日本国にほんこく

は神武天皇てんのうよりは十代じゅうだいにあたらせ給たまいし崇神天皇てんのうの御代ごだいに疫病えきびよう起おこ

りて日本国にほんこくやみ死ぬる事半なかばにすぐ、王始やまめて天照太神等てんしやうだいじんの神を国

国あがめに崇えきびようしかば疫病えきびようやみぬ故ゆゑに崇神天皇てんのうと申もうす、此これは仏法ぶつぽうのいま

だわたらざりし時の事なり、人王第三十代にんおうだいじゅうじゅう並びならに一二いちにの三代さんだいの

国主こくしゆ並びならに

臣下等しんか庖瘡ほうそうと疫病えきびように御崩去等ごほんしやうなりき、其そのの時は神かみにいのれども

叶かなわざりき、去いぬる人王三十代・欽きん明めい天てん皇のうの御ぎ宇うに百く濟だ国らより經。
論。僧。等。をわたすのみならず金銅きんどうの教主きょうしゅ・釈しやく尊そんを渡わたし奉たてまつる、蘇そ我がの
宿すく禰ね等。崇あがむべしと申もうす物部ものべの大連おほむらじ等。の諸臣しよ並ならびに万民ばんみん等。は一同いっとうに
此。の仏ぶつは崇あがむべからず若もし崇あがむるならば必かならずず我わがが国くにの神かみ・瞋いかりをな
して国くにやぶれなんと申もうす、王わうは両方りやうほう弁べんまえがたくをはせしに三災さんさい・
七難ひちなん先代せんたいに超こえて起おこり万民ばんみん皆みな疫死えきしす、大連おほむらじ等。便たよりを得えて

奏問そうもんせしかば僧尼そうに等をはじに及ぼすのみならず金銅しんどうの釈迦しゃか仏ぶつをす

みををこして焼き奉たてまつる寺てら又同じ、爾その時に大連おおむらじやみ死ぬ王わうも隠かくれ

させ給たまい仏ぶつをあがめし蘇そ我がの宿禰すくねもやみぬ、大連おおむらじが子こ守屋もりやの大だい臣じん

云いわく此こゝの仏ぶつをあがむる故ゆゑに三代さんだいの国主こくしゅすでにやみかくれさせ給たまう

我が父ちちもやみ死ぬ、まさを知るべし仏ぶつをあがむる聖徳しやうとく太子たいし馬子まこ等

はをやのかたき公こうの御ごかたきなりと申まをせしかば穴部あなべの王子みこ宅部たくべの

王子みこ等ら並びに諸臣しよしん已下いか数千せんぢゆう人にん一同いどうによりきして仏ぶつと堂だう等らをやき

はらうのみならず、合戦くわせんすでに起おこりぬ結句けつこは守屋もりや討うたれ了あわぬ、

仏法ぶつぽう渡わたりて三十五年さんじゆうごが間ま年年さんざいに三災さんさい

七難しちなん疫病えきびやう起おこりしが守屋もりや馬子まこに討うたるのみならず神かみもすでに仏ぶつ

にまけしかば災難さいなん忽たちまちに止とどみ了あわぬ、其その後の代代さんざいの三災さんざい七難しちなん等は

大体だいたいは仏法ぶつぽうの内の乱みだれより起おこるなり、而しかれども或あるは一いち人にん二人にん

或あるは一國いちこく二國にこく或あるは一類いちるい二類にるい或あるは一処いちじよ二処にじよの事ことなれば神かみのた

たりも有り謗法の故もあり民のなげきよりも起る。

而るに此の三十余年の三災・七難等は一向に他事を雑えず日本・

一同に日蓮をあだみて国・郡・郷・村・人ごとに上一人より

下万民にいたるまで前代未聞の大瞋恚を起せり、見思未断の凡夫の

元品の無明を起す事此れ始めなり、神と仏と法華經にいのり奉ら

ばいよいよ増長すべし、但し法華經の本門をば法華經の行者につ

けて除き

奉る結句は勝負を決せざらん外は此の災難止み難かるべし、止觀の

十境・十乗の觀法は天台大師説き給いて後・行ずる人無し、妙樂・

傳教の御時少し行ずといへども敵人ゆわきゆへにさてすぎぬ、止觀

に三障四魔と申すは権經

を行ずる行人の障りにはあらず今日蓮が時具さに起れり、又天台・

傳教等の時の三障四魔よりもいまひとしをまさりたり。一念三千

の観法かんぼうに二つあり一には理二には事なり天台・伝教等の御時おんときには
理りなり今は事ことなり観念かんねんすでに勝まさる故ゆえに大難だいなん又色いろまさる、彼しやくもんは迹門しやくもん
の一念いちねん三千さんぜん此これは本門ほんもんの一念いちねん三千さんぜんなり天地てんちはるかに殊ことなりことな
りと御臨終りんじゆうの御時おんときは御心おんこころへ有あるべく候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

六月二十六日

日蓮花押にちれんかおう

一四九 金吾殿御返事

文永七年十一月 四十九

歳御作 与大田金吾 999p

止観しかんの五正月一日よりよみ候いて現世安穩げんせあんのおん・後生善処ごしようぜんじょと祈請仕きしやうり候、便宜びんぎに給わり候本末ほんまつは失うせて候いしかどもこれにすりさせ候多く本入るべきに申し候。

大師講だいしに鵜目がもく五連給候たびそちらい了んぬ、此の大師講だいし・三四年に始めて候が今年だいいちは第一だいいちにて候いつるに候。

抑おさ此の法門ほうもんの事こと・勘文かんもんの有無うむに依よつて弘ひろまるべきか弘ひろまらざるか・去年こぞ方かた方に申もうして候いしかども・いなせの返事候はず候、今年十月の比方かたがた方かたがたへ申もうして候へば少少返事あるかたも候、をほかた人の心もやわらぎて・さもやと・をぼしたりげに候、又上のけさんにも入

りて候やらむ、これほどの僻事申して候へば流・死の二罪の内は一定
と存ぜしがいままでなにと申す事も候はぬは不思議とをばへ候、い
たれる道理にて候やらむ、又自界叛逆難の經文も値べきにて候や
らむ、山門なんどもいにしへにも百千万億倍すぎて動揺とうけ
給わり候、それならず子細ども候やらん震旦・高麗すでに禅門・
念仏になりて守護の善神の去るかの間彼の蒙古に聳い候いぬ、我が
朝も又

此の邪法弘まりて天台法華宗を忽諸のゆへに山門安穩ならず師檀
違叛の国と成り候いぬれば十が八・九はいかながとみへ候、人身す
でにうけぬ邪師又まぬがれぬ、法華經のゆへに流罪に及びぬ、今
死罪に行われぬこそ本意ならず候へあわれ・さる事の出来し候へ
かしとこそはげみ候いて方方に強言をかきて挙げてき候なり、す
でに年五十に及びぬ余命いくばくならず、いたづらに曠野にすてん

身を同じくは
一乗いちじょう法華ほっけのかたになげ
て雪山せつせん童子どうじ・

やくおうぼさつ 薬王菩薩の跡をおひせんよ仙予・有徳の名を後代に留めてほっけ法華・涅槃経ねはんぎように
と 説き入れられまいらせんと願うところなり、南無妙法蓮華経なむみょうほうれんげきよう。

十一月二十八日 日蓮花押にちれんかおう

御返事ごへんじ

一五〇 転重軽受法門ほんもん 文永八年十月 五十歳御作

与大田左衛門曾谷入道金原法橋 1000p

しゆり ほんどく 修利槃特と申すは兄弟二人なり、一人もありしかばすりはんど
と申すなり、各各三人は又かくのごとし一人も来らせ給たまへば三人
と存じ候なり。

ねはんぎよう 涅槃経に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生こんじようにつきずし
みらい 未来に地獄の苦を受くべきが今生こんじにかかる重苦あに値あい候へば地獄じじく

の苦みぱつときへて死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候、

不輕菩薩の悪口罵詈せられ杖木瓦礫をかほるもゆへなきにはあら

ず過去の誹謗正法のゆへかと・みへて其罪畢已と説れて候は不輕

菩薩の難に

値うゆへに過去の罪の滅するかとみへはんべり是、又付法蔵の二十

五人は仏をのぞきたてまつりては皆仏のかねて記しをき給える権者

なり、其の中に第十四の提婆菩薩は外道にころされ第二十五師子

尊者は檀彌栗王に頸を刎られ其の外仏陀密多・竜樹菩薩なんど

も多くの難にあへり、又難なくして王法に御帰依いみじくて法をひ

るめ

たる人も候、これは世に悪国善国有り法に摂受折伏あるゆへかと

みへはんべる、正像猶かくのごとし中国又しかなり、これは辺土な

り末法の始なり、かかる事あるべしとは先にをもひさだめぬ期をこ

そまち候えんぎよういづれ是二、この上の法門ほうもんはいにしえもう申しをき候いきめづら
しからしんぎようず円教えんぎようの六即そくの位かんぎように観行かんぎよう即そくと申もうすは所行しよぎよう如所言・所言如
所行と

云云、理即名字りそく みょうじの人は円人えんじんなれども言のみありて真なる事かたし、
例せば外典げてんの三墳さんぶん・五典には読む人かずをしらず、かれがごとくに
世を・をさめふれまう事千万せんまんが一つもかたしされば世のをさまる事
も又かたし、法華経ほけきょうは紙付こえに音をあげてよめども彼の経文きょうもんのごと
くふれまう事かたく候か、譬喻品ひゆほんに云く、「経を誦誦どくじゆし書持しよじすること
有ら

ん者なを見て軽賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懐いだかんほうしほん法師品いわに云く、「如来現在にょらいげんざいす
ら猶怨嫉な多し況や滅度めつどの後をや勸持品かんじほんに云く、「刀杖とうじやうを加え乃至ないし
しばしばひんずい数数あんらくぎやうほん擯出いせられん、安楽行品いに云く、「一切世間怨多いっさいせけんあだおくして信じ
がたがた難し」と、此等これらは経文きやうもんには候へども何世にかかるべしともしられず、
かこかこ過去の不輕菩薩ふぎやうぼさつ・覺徳比丘かくとくびくなんどこそ身しんにあたりてよみまいらせて
候いけるとみへはんべれ、現在げんざいには正像しやうざう二千年はさてをきぬ、末法まっぽう
に入つては此の日本国にほんこくには当時とうじは日蓮にちれん一人みへ候か、昔あくおうの悪王あくおうの

御時おんとき多くの聖僧せいそうの難なんに値あい候いけるには又しよじゆう所従けんぞく・眷属等でし・弟子檀那だんな
等いまにちれんいくぞばくか・なげき候いけんと今いっくをもちてをしはかり候、
今日蓮ほけきよう・法華經いっく一部よみて候いちげ一句一偈なほに猶受記こくとをかほれり何いかに況や
一部をやと、いよいよたのもし、但おほけなく国土こくとまでとこそをもひ
て候へども我もちと用もちいられぬ世なれば力およ及ばず、しげきゆへにとどめ
候おわ了わんぬ。

文永八年辛ぶんえい未十月五日かのとひつじ

日蓮花押にちれんかおう

大田左衛門尉殿さえもんじょう

蘇谷入道殿すやにりだう

金原法橋御房ごほう

一五一 大田殿許御書 文永十二年正月 五十四歳御作

1002p

新春の御慶賀自他幸甚幸甚。

抑俗諦・真諦（そもそもぞくたい しんたい）の中には勝負を以て詮と為し世間出世とも甲乙を
以て先と為すか、而るに諸経・諸宗の勝劣は三国の聖人共に之を
存し兩朝の群賢同じく之を知るか、法華経と大日経と天台宗と
真言宗との勝劣は月支日本未だ之を弁ぜず西天東土にも明らめ
ざる物か、所詮天台・伝教の如き聖人・公場に於て是非を決せず
明帝桓武の如き国主之を聞かざる故か、所謂善無畏三蔵等は
法華経と大日経とは理同事勝等と慈覚・智証等も此の義を存する

か、弘法大師は法華經を華嚴經より下す等此等の二義共に經文に
非ず同じく自義を存するか將た又慈覺・智証等表を作つて之を奏
す申すに随つて勅宣有り、聞くが如くんば真言・止觀兩教の宗をば
同じく醍醐と号し俱に深秘と稱す乃至譬えば猶人の両目・鳥の雙翼
の如き者なり等云云、又重誠の勅宣有り、聞くが如くんば山上の
僧等専ら先師の義に違して偏執の心を成ず殆んど以つて余風を
扇揚し旧業を興隆することを顧みず等云云、余生れて末の初に
居し学諸賢の終りを稟く慈覺・智証の正義の上に勅宣方方之れ有
り疑い有るべからず一言をも出さべからず然りと雖も円仁・円珍
の両大師・先師・伝教大師の正義を劫略して勅宣を申し下すの
疑い之れ有る上、仏誠遁れ難し、随つて又亡国の因縁・謗法の源初
之れに始まるか、故に世の謗を憚からず用不用を知らず身命を捨
てて之を申すなり。

三大師だいし・二經にきやうに相對そつたいして勝劣しょうれつを判はずるの時とき或あるは疑うたがひつて云いく善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくうの三三藏さんぞう・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしようの

りどうじしよう。あるけごんきよう
理同事勝。或は華嚴經より下る等云云、随つて又聖賢の鳳文之れ有
り、諸徳之を用いて年久し此の外に汝一義を存して諸人を迷惑し
あまつてんかじもくおどろあにぞうじょうまん
剩さえ天下の耳目を驚かす豈増上慢の者に非ずや如何、答えて
いわなんじふしんにいよろんしせじんぼさつへいかい
曰く汝等が不審尤最もなり如意論師の世親菩薩を炳誠せる言は
これ
是なり、彼の状に云く「党援の衆と大義を競うこと無く群迷の中に
正論を弁ずること無かれと言い畢つて死す」云云、御不審之れに当
るか、然りと雖も仏・世尊は法華經を演説するに一經の内に二度
の流通之れ有り重ねて一經を説いて法華經を流通す、涅槃經に
いわ「も」若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し拳処
云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し拳処
せすんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等云云、善無畏・
金剛智の両三蔵・慈覚・智証の二大師・大日の権經を以つて法華の
じつきようはえ
実經を破壊せり。

而るに日蓮世を恐て之を言わずんば仏敵と為らんか、随つて章安

だいしまつだい　がくしゃ　かんぎょう　いわ　ぶつぼう　えらん　ぶつぼう
大師末代の学者を諫曉して云く「仏法を懷乱するは仏法の中の
あだ　なく　いっ　こ　あだ　よ　きゆうじ
怨なり慈無くして詐わり親しむは是れ彼の人の怨なり能く糾治す
すなわ　こ
る者は即ち是れ彼が親なり」等云云、余は此の釈を見て肝に染むる
ゆえ　しんみょう
が故に身命を捨てて之を糾明するなり、提婆菩薩は付法蔵の第十
し　し　そんじゃ　ある　ある　うしな　ある　こうへ　はね
四・師子尊者は二十五に当る。或は命を失い。或は頭を刎らる等
これ　つたがい　いわ　きまつぎょう　じざん　しききょう　なら
是なり、疑つて云く経経の自讃は諸経常の習いなり、
いわゆる　こんこうみょうきょう　いわ　しよきょう　みつこんきょう　いっさいきょう
所謂金光明経に云く「諸経の王」密蔵経の「一切経中の勝」
そしつちきょう　いわ　おい　な　ほけきょう　いわ
蘇悉地経に云く「三部の中に於て此の経を王と為す」法華経に云く
「こ　しよきょう　したが　しえ　ぼさつ　りようこく　さんぞう
是れ諸経の王」等云云、随つて四依の菩薩・両国の三蔵も
かくのごと　いかん　いわ　たいこく　しよこく　だいおう
是くの如し如何、答えて曰く大国・小国・大王・小王・大家・小家・尊
主・高貴・各各分齊有り然りと雖も国国の万民・皆大王と号し同じ
てんし　しよう
く天子と称す詮を
これ　ほんのう　だいおう　な　ほけきょう　てんし　しよう
以つて之を論ぜば梵王を大王と為し法華経を以て天子と称するな

り、求めて云く其の証如何、答えて曰く金光明經の是諸經之王の
文は梵釈の諸經に相對し密嚴經の一切經中勝の文は次上に十地
經・華嚴經・勝鬘經等を挙げて彼の經經に相對して一切經の中
に勝ると云云、蘇悉地經の文は現文之れを見るに三部の中に於て王
と為す等云云、蘇悉地經は大日經・金剛頂經に相對して王と云
云、而るに善無畏等或は理同事勝或は華嚴經より下ると

等云云、此れ等の僻文は螢火を日月に同じ大海を江河に入るるか。

疑つて云く経經の勝劣之れを論じて何か為ん、答えて曰く

法華經の第七に云く「能く是の經典を受持する者有れば亦復

是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經の

兼ねて上の文に有り所詮仏の意の如くならば經の勝劣を詮ずるの

みに非ず法華經の行者は一切の諸人に勝れたるの由之れを説く、

大日經等の行者は諸山・衆星・江河・諸民なり、法華經の行者は

須弥

山・日月・大海等なり、而るに今の世は法華經を輕蔑すること土の

如し民の如し真言の僻人等を重崇して国師と為ること金の如し王

の如し之に依つて増上慢の者・国中に充滿す青天瞋を為し

黄地天を致す涓聚りて塹を破るが如く民の愁い積りて国を

亡す等是なり、問うて曰く内外の諸積の中に是くの如きの例之れ有りや、答え

て曰く史臣呉兢が太宗に上つる表に云く「竊かに惟れば太宗・文武皇帝の政化・曠古より之れ求むるに未だ是くの如くの盛なる者有らず唐堯・虞舜・夏禹・殷湯・周の文武・漢の文景と雖も皆未だ逮ばざる処なり」云云、今此の表を見れば太宗を慢ぜる王と云う可きか

政道の至妙先聖に超えて讚ずる所なり、章安大師・天台を讚めて云く「天竺の大論尚其の類に非ず真丹の人師何ぞ劣く語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、從義

法師重ねて讚めて云く「竜樹・天親未だ天台には若かず」伝教大師自讚して云く「天台法華宗の諸宗に勝ることは所依の經に拠るが故に自讚毀他ならず庶くば有智の君子・經を尋ねて宗を定めよ」云云、又云く「能く法華を持つ者は亦衆生の中の第一なり已に仏説に

抛よる豈あに自讚じさんならんやと云云、今愚見ぐけんを以つて之これを勘かんうるに善無畏ぜんむい
・弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしょう等は皆みな仏意ぶつぎに違ちがうのみに非あらず、或あるは法ほふの盗人ぬすびと、或ある
は伝教でんぎょう大師だいしに逆さかえる僻人びやくにんなり、故ゆえに、或あるは閻魔王えんまおうの責せきを蒙こむり、或あるは
墓墳ぼふん無なく、或あるは事ことを入定にゆうじょうに寄よせ、或あるは度たび度たび・大火だいか・大兵たいへいに値あえり
権者ごんしゃは辱はじを死骸しがいに与よえざる処ところの本文ほんぶんに違ちがひするか、疑うたがひつて云いわく
六宗ろくしゅうの如ごとく真言しんごんの一宗いちしゅうも天台てんだいに落おたる状じやう之これれ有ありや、答こたう記きの十
の末すえに之これを載のせたり、

したが でんぎようだいしえびよう
随つて伝教大師依憑集を造つて之を集む眼有らん者は開いて之を
見よ、ねがわしきかなまつだい 冀哉 末代の学者妙楽・伝教の聖言に随つて善無畏・慈覚
の凡言を用ゆること勿れ、予が門家等深く此の由を存ぜよ、今生
に人を恐れて後生に悪果を招くこと勿れ、まね 恐恐謹言。

正月廿四日

にちれんかおう
日蓮花押

大田金吾入道殿

一五二 太田殿女房御返事

建治元年 五十四

歳御作於身延

やつきぶん
八月分の八木一石給候了んぬ、
そくしんじようぶつ
即身成仏と申す法門は諸

だいじょうぎょうなら だいにちぎょう きょうもん ぶんみょう
大乘 経並びに大日経等の経文に分明に候ぞ、爾ればとて彼の

きょうぎょう ひとびと そくしんじょうぶつ とうじょうまん お
経經の人人の即身成仏と申すは一の増上慢に墮ちて必ず無間

じじく 地獄へ入り候なり、記の九に云く「然して二の上慢深淺無きなら

ず如と謂うは乃ち大無慙の人と成る」等云云、諸大乘經の煩惱即

ぼだい しじょうじそくねはん そくしんじょうぶつ ほつもん
菩提・生死即涅槃の即身成仏の法門はいみじくをそたかきやうなれ

ども此れはあえて即身成仏の法門にはあらず、其の心は二乗と

申す

ろくおん 者は鹿苑にして見思を断じて、いまだ塵沙・無明をば断ぜざる者が

すで ぼんのう 我は已に煩惱を尽したり無余に入りて灰身滅智の者となれり、灰身

そくしん なれば即身にあらず滅智なれば成仏の義なし、されば凡夫は煩惱

か 業もあり苦果の依身も失う事なければ煩惱業を種として報身・

おうじん 応身ともなりなん、苦果あれば生死即涅槃とて法身如来ともなり

なんとな乗

をこそ弾呵だんかせさせ給たまいしか、さればとて煩惱ぼんのう・業ごう・苦くが三身さんじんの種しゆとは
なり候あははず、今法華經ほけきようにして有あ余よ・無余むよの二乗にじやうが無なき煩惱ぼんのう・業ごう・苦くを
とり出だして即身成仏そくしんじやうぶつと説とき給たまう時とき二乗にじやうの即身成仏そくしんじやうぶつするのみならず
凡夫ぼんぶも即身成仏そくしんじやうぶつするなり

此このの法門ほうもんをだにもくはしく案あじほどかせ給たまわば華嚴けごん・真言しんごん等の人人ひとびと
の即身成仏そくしんじょうぶつと申し候もうは依經えきょうに文ぶんは候もうへども其その義ぎはあえてなき事こと
なり僻事ひがごとの起こり此これなり。

弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょう等は此このの法門ほうもんに迷惑めいわくせる人ひとなりとみ候もう、何いかに況き
や其その已下いげの古徳こくとく・先徳せんとく等は言ことうに足たりらず、但た天台てんだいの第四十六だいじゅうろくにんの
座主ざす東陽とうやうの忠尋ちゆんと申まをす人ひとこそ此このの法門ほうもんはすこしあやぶまれて候事こうじは
候もうへ然しかれども天台てんだいの座主ざす慈覺じかくの末すえをうくる人ひとなれば・いつわりを
ろかにて・さてはてぬるか、其その上うへ・日本国にほんこくに生なまを受うくる人ひとはいか
か心こころにはをもうとも言ことに出いし候もうべき、しかれども釈迦しゃか・多宝たぼう・十方じゅうぽう
の諸仏しよぶつ・地涌じゆ・竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつ・天台てんだい・妙樂みょうがく・伝でん教大師きやうだいしは即身成仏そくしんじょうぶつは
法華經ほけきやうに限かぎると・をばしめされて候もうぞ、我われが弟子でし等らは此このの事ことを・を
もひ出いにせさせ給たまえ。

妙法蓮華經の五字の中に諸論師・諸人師の積まちなちに候へども
皆諸經の見を出でず、但竜樹菩薩の大論と申す論に「譬えば大
薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」と申す釈こそ此の一字を心へ
させ給いたりけるかと思へて候へ、毒と申すは苦集の二諦・生死の
因果は毒の中の毒にて候ぞかし、此の毒を生死即涅槃・煩惱即菩提
となし候を妙の極とは申しけるなり、良薬と申すは毒の變じて薬
となりけるを良薬とは申し候いけり、此の竜樹菩薩は大論
と申す文の一百の卷に華嚴・般若等は妙にあらざ法華經こそ妙にて
候へと申す釈なり、此の大論は竜樹菩薩の論羅什三蔵と申す人の
漢土へわたして候なり、天台大師は此の法門を御らむあつて南北を
ばせめさせ給いて候ぞ、而るを漢土唐の中・日本弘仁已後の人人
の出来し候いける事は唐の第九代・宗皇帝の御宇・不空三蔵

と申すもう

人の天竺てんじくより渡わたして候論あり菩提心論ぼだいしんろんと申す、此の論は竜樹りゆうじゆの論
となづけて候、此の論このろんに云いわく「唯真言法ただしんごんの中にのみ即身成仏そくしんじやうぶつする
故ゆゑに是れ三摩地さんましの法を説く諸教しよきやうの中に於おいて闕かいて書せず」と申す文
あり、此の釈しやくにばかされて

弘法・慈覚・智証等の法門はさんざんの事にては候なり、但し大論は竜樹の論たる事は自他あらそう事なし、菩提心論は竜樹の論・不空の論と申すあらそい有り、此れはいかにも候へさてをき候ぬ、但不審なる事は大論の心ならば即身成仏は法華經に限るべし文と申し道理きわまれり、菩提心論が竜樹の論とは申すとも大論にそむいて真言

の即身成仏を立つる上唯の一字は強と見へて候、何の經文に依りて唯の一字をば置いて法華經をば破し候いけるぞ証文尋ぬべし、竜樹菩薩の十住毘婆娑論に云く「經に依らざる法門をば黒論」と云云自語相違あるべからず、大論の一百に云く「而も法華等の阿羅漢の授決作仏・乃至譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」等云云、

此の釈こそ即身成仏の道理はかかれて候へ、但菩提心論と大論とは

同じ竜樹大聖の論にて候が水火の異をばいかんせんと見候に此れ
は竜樹の異説にはあらず訳者の所為なり、羅什は舌やけず不空は
舌やけぬ、妄語は、やけ実語は、やけぬ事顯然なり、月支より漢土へ
経論わたす人・一百七十六人なり其の中に羅什一人計りこそ教主
釈尊の経文に私の言入れぬ人にては候へ一百七十五人中・羅什
より先後・一百六十四人は羅什の智をもつて知り候べし、
羅什来らせ給いて前後・一百六十四人が　も顕れ新訳の十一人が
あやまり　も顕れ又こそかしくなりて候も羅什の故なり、此れ私の義には
あらず感通伝に云く「絶後光前」と云云、前を光らすと申すは後漢
より後秦までの訳者、後を絶すと申すは羅什已後・善無畏・金剛智・
不空等も羅什の智をうけてすこそかしく候なり、感通伝に云く
「已下の諸人並びに皆俟つ事」されば此の菩提心論の唯の文字は
設い竜樹の論なりとも不空の私の言なり、何に況や次下に「諸教の

中に於て闕おひいて書せずとかがかれて候ぞんがい。存外のあやまりなり。

そくしんじょうぶつ

てほん

ほけきょう

さし

しんごん

即身成仏の**手本**たる**法華經**をば**指**をいて・あとかたもなき**真言**に

そくしんじょうぶつ

あまつさただ

てんかだいいち

びやつけん

即身成仏を立て**剩**え**唯**の一字ををかるる条**天下第一**の**僻見**なり

こ

ひとえ

しゅらこんじょう

ほうもん

てんだいちしやだいし

もんく

此れ**偏**に**修羅根性**の**法門**なり、**天台智者大師**の**文句**の九に

じゅりょうほん

しやく

いわ

さんぜ

おい

さんじん

しよきょう

寿量品の心**を**積して云く「**仏三世**に於て**等**しく**三身**有り**諸教**の

めいぶん

おい

これ

さんぜ

おい

さんじん

そくしんじょうぶつ

中に於て之を秘して伝えずとかがかれて候、此れこそ**即身成仏**の

明文にては候へ

不空三蔵此の釈を消さんが為に事を竜樹に依せて「唯真言の法の中にのみ即身成仏するが故に是の三摩地の法を説く諸教の中に於て闕いて書せず」とかかれて候なり、されば此の論の次下に即身成仏をかかれて候が、あへて即身成仏にはあらず生身得忍に似て候、此の人は即身成仏は、めづらしき法門とはきかれて候へども即身成仏の義はあへてうかがわぬ人人なり、いかにも候へば二乗成仏・久遠実成を説き給う経にあるべき事なり、天台大師の「於諸教中秘之不伝」の釈は千且千且 恐恐。

外典三千余卷は政当の相違せるに依つて代は濁ると明す、内典五千・七千余卷は仏法の僻見に依つて代濁るべしとあかさされて候、今の代は外典にも相違し内典にも違背せるかのゆへにこの大科一國に起りて已に亡國とならむとし候か、不便不便。

七月二日

日蓮花押

太田殿女房御返事

一五三 太田入道殿御返事 建治元年十一月 五十四

歳御作

1009p

貴札之を開いて拜見す、御痛みの事一たびは歎き二たびは悦びぬ、維摩詰経に云く「爾の時に長者維摩詰自ら念ずらく寝ねて牀に疾む云云、爾の時に仏・文殊師利に告げたまわく、汝維摩詰に行詣して疾を問え」云云、大涅槃経に云く「爾の時に如来乃至身に疾有るを現じ、右脇にして臥したもう彼の病人の如くす」云云、法華経に云く

「少病少惱」云云、止観の第八に云く「若し毘耶に偃臥し疾に託いて教を興す、乃至如来滅に寄せて常を談じ病に因つて力を説く」云云、又云く「病の起る因縁を明すに六有り、一には四大順ならざる故に

病む・二には飲食節ならざる故に病む・三には坐禅調わざる故に病む・四には鬼便りを得る・五には魔の所為・六には業の起るが故に病む・云云、大涅槃經に云く、「世に三人の其の病治し難き有り・一には大乘を誇ず・二には五逆罪・三には一闍提是くの如き三病は・世の中の極重なり」云云、又云く、「今世に悪業成就し乃至必ず地獄なるべし乃至三宝を供養するが故に地獄に墮せずして現世に報を受く所謂頭と目と背との痛み」等云云、止觀に云く、「若し重罪有つて乃至人中に軽く償うと此れは是れ業が謝せんと欲する故に病むなり」云云、竜樹菩薩の大論に云く、「問うて云く若し爾れば華嚴經・乃至般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華は秘密なり等、乃至譬えば大藥師の能く毒を変じて藥と為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く「譬えば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く乃至今經の

得記は

すなわこ

即ち是れ毒を變じて藥と為すなり」云云、故に論に云く「余經は

秘密ひみつに非あらず法華ほっけを秘密ひみつと為なすなり」云云、止觀しかんに云く「法華ほっけ能く治

す復また稱しょうして妙めいと為なす」云云、妙樂みょうらく云く「治ちし難がたきを能く治ちす所以ゆえんに

妙めいと稱しょうす」云云、大經だいきょうに云く「爾その時に王舍大城だいじょうの阿闍世王あじゃせ其その性

弊へい惡あくにして乃至ないし父を害あわし已おわつて心に悔熱げねつを生なず乃至ないし心悔熱げねつするが

故ゆえに

故ゆえに

偏ひとへ体てい瘡そうを生なず其そのの瘡そう臭きず穢しゆうえにして附近きんじんすべからず、爾そのの時ときに其そのの母はは韋い提だい希けいと字なすく種しゆじゆ種しゆじゆの薬やくを以もつて而しかも為ために之これを傳そく其そのの瘡きず遂すいに増まして降あ損そん有あること無なし、王すなわ即すなわち母ははに白もつす是かくの如ごときの瘡きずは心こころよりして生なず四大しだいより起おこるに非あらず若もし衆しゆじゆ生じやう能よく治ちする者もの有ありと言いわば是この処ところ有あること無なけん云いふ、爾そのの時ときに世せ尊そん・大だい悲ひ導どう師し・阿あ闍じゃ世せ王わうのために月げつ愛あい三さん昧まいに入いりたもう三さん昧まいに入いり已おつて大だい光こう明めいを放はなつ其そのの光こうり清せい涼りやうにして往ゆいて王わうの身みを照ていすに身みの瘡きず即すなわち愈いえぬ云いふ、平へい等とう大だい慧えい・妙めう法ぽう蓮れん華げ經きやうの第だい七しちに云いふ、此この經きやうは則すなわち為なれ閻えん浮ぶ提だいの病びやうの良りやう藥やくなり若もし人にん病びやう有あらんに是この經きやうを聞きくことを得えば病びやう即すなわち消しょう滅めつして不ふ老らう不ふ死しならん云いふ。

已い上じやう・上じやうの諸しよ文ぶんを引ひいて惟ただに御ご病びやうを勘かんづるに六ろく病びやうを出いでず其そのの中ちゆうの五ご病びやうは且しばらく之これを置おく第だい六ろくの業ごう病びやう最さいも治ちし難がたし、將はた又また業ごう病びやうに輕かろき有あり重おもき有ありて多おほ少すく定さだまらず就なかんずく中ちゆう・法ほ華け誹はい誘ゆうの業ごう病びやう最さい第だい一いちな

り、神農・黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き持水・流水・耆婆・維摩も口
を閉ず、但し釈尊一仏の妙經の良薬に限つて之を治す、法華經に
云く上の如し、大涅槃經に法華經を指して云く「若し是の正法を毀
誘するも能く自ら改悔し還りて正法に歸すること有れば
乃至此の正法を除いて更に救護すること無し是の故に正法に還歸
すべし」云云、荊溪大師の云く「大經に自ら法華を指して極と為す」
云云、又云く「人の地に倒れて還つて地に従りて起つが如し故に正の
謗を以て邪の墮を接す」云云、世親菩薩は本小乗の論師なり五竺
の大乗を止めんが為に五百部の小乗論を造る後に無著菩薩に
値い奉りて
忽に邪見を翻えし一時此の罪を滅せんが為に著に向つて舌を切ら
んと欲す、著止めて云く汝其の舌を以て大乘を讚欺せよと、親
忽に五百部の大乘論を造つて小乗を破失す、又一の願を制立せ

り我わが一生いっせいの間ま小乘しょうじょうを舌したの上に置おかじと、然しかして後ご罪滅つみして弥勒みろくの
天あまに生なず、馬鳴菩薩めみょうぼさつは東印度いんどの人ひと、付法蔵ふぼうぞうの第十三じゅうさんに列られり本外道もとげどう
の長ながたりし時とき

勒びく比丘びくと内外ないげの邪正じゃせいを論ろんずるに其その心言下しんごんげに解とけて重科じゅうかを遮しやせん
が為ために自みづから頭こづへを勿はねんと探たす所謂いわゆる我わが・我わがに敵たして墮獄だごくせしむ、勒
比丘びく・諫いさめ止とどめて云いわく汝頭なんじこづへを切きること勿なかれ其その頭こづへと口くちとを以もて
大乘だいじょうを讚歎さんたんせよと、鳴急みょうきゅうに

起信論を造つて外小を破失せり月氏の大乘の初なり、嘉祥寺の
吉蔵大師は漢土第一の名匠・三論宗の元祖なり呉会に独歩し慢幢
最も高し天台大師に対して已今当の文を諍い立処に邪執を翻破し
謗人・謗法の重罪を滅せんが為に百余人の高德を相語らい智者
大師を屈請して身を肉橋と為し頭に両足を承く、七年の間・薪
を採り水を汲み講を廃し衆を散じ慢幢を倒さんが為法華経を誦せ
ず、大師の滅後随帝に往詣し足を撰し涙を流して別れを告げ
古鏡を觀見して自影を慎辱す業病を滅せんと欲して上の如く懺悔
す、夫れ以みれば一乗の妙経は三聖の金言・已今当の明珠諸経
の項に居す、経に云く「諸経の中に於て最も其の上に在り」又云く
「法華最第一なり」伝教大師の云
く「仏立宗」云云。

予随分・大金・地等の詣の真言の経を勘えたるに敢えて此の文の

会通えつうの明文めいぶん無し但畏おそ智ち空くう法ぽう覺かく証等しやうとうの曲会まげに見えたり是こゝに知

んぬしやくそん釈尊だいにち・大日ほんいの本意ほんいは限かつて法華ほつげの最上さいじやうに在あるなり、而しかるに

本朝ほんちやう真言しんこんの元祖がんそたる法ぽう覺かく・証等しやうとうの三大師だいにしゆたう入唐にちゆうたうの時とき・畏おそ智ち空くう等の

三三蔵さんそうの誑惑おほわくを果は・全等ぜんとうに相承そうじやうして帰朝きちやうし了おんぬ、法華ほつげ・真言しんこん弘通くつう

の時三説超過ちやうか

の一乗いちじやうの明月めいげつを隠かくして真言しんこん両界りやうがいの螢火ほたるびを顕あらわし刺あまつさえ法華ほつげ經きやうを罵ののしり

して曰いわく戲論けろんなり無明むみやうの辺域へんいきなり、自害じがいの謬みやうごに曰いわく大日だいにちきやう經きやうは

戲論けろんなり無明むみやうの辺域へんいきなり本師ほんし既に曲まれり末葉まつよう豈あ直ちならんや源濁みなもと

れば流清りゆうせいからず等是こゝれ之これを謂いうか、之こゝに依よつて日本にほん久くしく闇夜やみやと

為なり扶桑ふそう終つひに他国たこくの霜からに枯かれんと欲ほす。

抑おさ貴辺きへんは嫡嫡ちやくちやくの末流まつりゆうの一分いちぶんに非あらずと雖いえども將はた又檀那だんなの所從しよじゆう

なり身みは邪家じやけに処しよして年久ねんくしく心こゝろは邪師じやしに染そみて月重げつじゆうなる設たい大山たいさん

は頹くずれ設たい大海たいかいは乾かくとも此こゝの罪つみは消けえ難がたきか、然しかりと維いも宿縁しゆくえん

の催す所もよお又今生こんじょうに慈悲じひの薰くんずる所しよぞん存ぞんの外ひんどうに貧道ちんどうに値遇ちくうして改悔かいげを
發起けいする故ゆえに未来みらいの苦くを償つくなうも現在げんざいに輕瘡しゆつげん出現しゆつげんせるか、彼の闍王じゃおう
の身瘡こぎやくは五逆ごぎやく誹法ひぼうの二罪ざいの招まねく所ところなり、仏・月愛げつあい三妹さんまいに入いつて其その
身みを照びてしたまえば惡瘡あくそう忽たちまちに消くえ三七日さんじつの短寿たんじゆを延のべて四十年しじゆの宝
算ぼんざんを保おち發おしては又千人せんじんの羅漢らかんを屈請くつじゆうして一代いちだいの金言きんげんを書かき顯あらわし、
正像しやうざう未みに流布りゆうふせり、此こゝの禪門ぜんもんの惡瘡あくそう

は但ほんほん謗ぼう法ぽうのとが一科いっかなり、所持しよじのみよ妙法ほうは月愛ちよつかに超過ちよつかす、宝輕たうけい瘡そうを愈いし
て長寿ちやうじゆを招まねかざらんや、此こゝの語ご徴てい無むくんば声こゑを発はつして一切いっさい世間せけん
眼まなこは大妄語だいぼうごの人ひと・一乘いちじやう妙經みよきやうは綺語きごの典てんなり・名なを惜おししみ給たまわば
世尊せそん驗しるしを顯あはし・誓ちかを恐おそれ給たまわば諸もろの賢聖けんせい来きり護まもり給たまえと叫喚きやうかんした
まえと爾しか云いう書しよは言ごを尽つさず言ごは心こゝろを尽つさず事こと事こと見み参まゐの時ときを
期こゝろせん、恐おそれ。

十一月三日

日蓮にちれん

花押かおう

太田入道たうだにんどう殿御返事ごへんじ

一五四 乘明聖人御返事しようにんごへんじ 建治三年四月五十六歳御作

与大田乘明

1012p

そうじゆう

かまくら

せいふ

つが

そうら
あわ

相州の鎌倉より青島二結甲州身延の嶺に送り遣わされ候了ん

こんじゆにょ

はく

いっごう

ぬ、昔金珠女は金銭一文を木像の薄と為し九十一劫金色の身と

な

そ

かしょつ

みらい

こうみやうにょらいこれ

為りき其の夫の金師は今の迦葉・未来の光明如来是なり、今の乘明

ほっし

なら

ほけきやう

くやう

法師・妙日並びに妻女は銅銭二千枚を法華經に供養す彼は仏なり

こ

でし

ねはんぎやう

いわ

しよぶつ

此れは経なり経は師なり仏は弟子なり、涅槃經に云く「諸仏の師と

する所は所謂

いわゆる

法なり乃至是の故に諸仏恭敬供養す」と、法華經の第七に云く

「もし復人有つて七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・

も

また

しつぽう

さんぜんだいでんせかい

ほけきやう

い

わ

辟支仏・阿羅漢を供養せし、是の人の得る所の功德は此の法華經の

ひやくしぶつ

らかん

くやう

こ

い

く

どく

ほ

けきやう

乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きに如かず「夫れ劣る仏

ないし

く

げ

じゆじ

そ

な

すく

し

そ

ほ

を供養する尚九十一劫に金色の身と為りぬ勝れたる経を供養する

せしゆ

な

お

い

く

な

すく

を

く

やう

施主・一生に仏位に入らざらんや、但真言・禅宗・念仏者等の謗法

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を帰敬す

るが如きのみ、
恐恐謹言。

卯月十二日

花押かおう

乘明しやうめい 聖人しやうにん 御返事ごへんじ

日蓮にちれん

一五五 大田殿女房御返事

建治三年十一月 五十六歳

御作 与大田入道女房 於身延 1013p

柿のあをうらの小袖わた十両に及んで候か、此の大地の下は二の
地獄あり一には熱地獄すみををこし野に火をつけせうまうの火
鉄のゆのごとし、罪人のやくる事は大火に紙をなげ大火になく
づをなぐるがごとし、この地獄へはやきとりと火をかけてかたきを
せめ物をねたみて胸をこがす女人の墮つる地獄なり、二には寒地獄

此の地獄に八あり、涅槃経に云く「八種の寒冰地獄あり所謂阿波
波地獄・阿地獄・地獄・阿羅羅地獄・阿婆婆地獄・優鉢羅地獄・波頭摩
地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云、此の八大かん地獄は或はか

んに・せめられたるこえ、或は身のいろ等にて候、此の国のすわの御
いけ、或は越中のたて山のかへし加賀の白山のれいのとりのはねをと
ぢられ、

やもめをうなのすそのひゆる、ほろろの雪に・せめられたるをもて
しろしめすべし、かんに・せめられて・をとがいのわなめく等を阿波
波・阿あたた・阿羅羅等と申すかんに・せめられて身のくれないにた
るを紅蓮ぐれん・大紅蓮等と申す

なり、いかなる人の此の地獄じじくにをつるぞと申せば此の世にて人の
衣服えぶくをぬすみとり父母ふぼ・師匠ししょう等のさむげなるを・みまいらせて我は
あつくあたたかにして昼夜をすごす人人の墮おつる地獄じじくなり。

六道ろくだうの中に天道と申すは其の所に生ずるより衣服えぶくととのをりて
生るところなり、人道の中にも商那和修鮮白比丘尼等しょうなわしゅうせんびやくには悲母ひもの
胎内たいないより衣服えぶくととのをりて生れ給へり、是これはたうとき人人ひとびとに衣服えぶく

をあたへたるのみならず父母・主君・三宝にきよくあつき衣をまいら
せたる人なり、商那和修と申せし人は裸形なりし辟支仏に衣をまい
ら

せて世世・生生に衣服身に随ふ、曇弥と申せし女人は仏にきんば
ら衣をまいらせて一切衆生喜見仏となり給う、今法華經に衣をま
いらせ給う女人あり後生にはちかんだ獄の苦をまぬかれさせ給う
のみならず、今生には大難

をはらひ其その功徳くどくのあまりを男女なんよのきんだち・きぬにきぬをかさね
いろにいろをかさね給たまうべし、穴賢あなかしこあなかしこ穴賢あなかしこ。

建治三年丁丑ひのつし十一月十八日 日蓮にぢれん在御判

一五六 大田左衛門尉御返事さえもんのじょうごへんじ

弘安元年四月 五こうあんがんねん

十七歳御作 1014p

当月十八日の御状、同じき二十三日の午うまのこくの剋計りに到来とつらい、驢やがて
拜見はいけん仕り候おわんひ畢ぬ、御状ごとの如く御布施ふせ・鳥目がもく十貫文・太刀・五明一
本・焼香二十両給ひ候、抑そもそも専もつぱら御状に云く某今年は五十七に
罷まかり成り候へば大厄の年かと覚おぼえ候、なにやらんして正月の下旬の
比より卯月の此の比に至り候まで身心しんしんに苦勞多く出来候、本より

人身を受くる者は必ず身心に諸病相續して五体に苦勞あるべしと
申しながら更に云云。

此の事最第一の歎きの事なり、十二因縁と申す法門あり、意は
我等が身は諸苦を以て体と為す、されば先世に業を造る故に諸苦
を受け、先世の集・煩惱が諸苦を招き集め候、過去の二因・現在の五
果・現在の三因・未来の両果とて三世次第して一切の苦果を感ずる
なり、在世の二乗が此等の諸苦を失はんとて、空理に沈み灰身滅智
して、菩薩の勤行精進の志を忘れ、空理を証得せん事を真極と思
ふなり、仏・方等の時・此等の心地を彈呵し給ひしなり、然るに
生を此の三界に受けたる者苦を離るる者あらんや、羅漢の応供す
ら猶此くの如し、況や底下の凡夫をや、さてこそいそぎ生死を離る
べしと勧め申し候へ。

此等体の法門はさて置きぬ、御辺は今年は大厄と云云、昔伏羲の

御宇に、黄河と申す河より亀と申す魚・八卦と申す文を甲に負て浮
出たり、時の人・此の文を取り挙げて見れば、人の生年より老年の
終りまで厄の様を明したり、厄年の人の危き事は、少水に住む魚を
鴟鵂とびからすなどが伺ひ、灯の辺に住める夏の虫の火中に入らんとする
が如くあやうし、鬼神やもすれば此の人の神を伺ひなやまさん
とす、神内と申す時は諸の神・身に在り万事心に叶ふ、神外と
申す時は諸の神・識の家を出でて万事を見聞するなり、当年は御
辺は神外と申して諸神他国へ遊行すれば慎んで除災得樂を祈り給
ふべし、又木性の人にて渡らせ給へば、今年は大厄なりとも春夏の
程は何事か渡らせ給ふべき、至門性経に云く、「木は金に遇て抑揚し、
火は水を得て光滅し、土は木に値て時に瘦せ、金は火に入て消え失
せ、水は土に遇て行かず」等云云。

指して引き申すべき経文にはあらざれども、予が法門は四悉檀

を心に懸けて申すならば、強ちに成仏の理に違はざれば、且らく
世間普通の義を用ゆべきか、然るに法華経と申す御経は身心の諸
病の良薬なり、されば経に云く、「此の経は則ち為閻浮提の人の病の
良薬なり、若し人病有らんには是の経を聞くことを得ば、病即消滅
して不老不死ならん」等云云、又云く、「現世は安穩にして、後生には
善処ならん」等云云、又云く、「諸余の怨敵、皆悉く摧滅せん」等云
云、取分奉る御守り方便品・寿量品、同じくは一部書て進らせ度候
へども、当時は去り難き隙ども入る事候へば略して二品奉り候、相
構へ相構へて御身を離さず重ねつつみて御所持有るべき者なり、此の
方便品と申すは迹門の肝心なり、此の品には仏・十如実相の法門を
説て十界の衆生の成仏を明し給へば、舍利弗等は此れを聞て無明
の惑を

断じ真因の位に叶ふのみならず、未来華光如来と成て、成仏の覚月

を離垢世界の曉の空に詠ぜり、十界の衆生の成仏の始めは是なり、当時の念仏者・真言師の人人・成仏は我が依經に限れりと深く執するは、此等の法門を習学せずして、未顕真実の經に説く所の名字計りなる授記を執する故なり。

貴辺は日來は此等の法門に迷ひ給ひしかども、日蓮が法門を聞て、賢者なれば本執を忽に翻し給て、法華經を持ち給ふのみならず、結句は身命よりも此の經を大事と思食す事・不思議が中の不思議なり、是れは偏に今の

事に非ず、過去の宿縁開發せるにこそ、かくは思食すらめ、有り難し有り難し、次に寿量品と申すは本門の肝心なり、又此の品は一部かんじんの肝心、一代聖教いちだいしやうきやうの肝心のみならず、三世の諸仏しよぶつの説法の儀式の大要なり、教主釈尊きやうしゆしやくそん、寿量品の一念三千いちねんさんぜんの法門を証得し給ふ事は、三世の諸仏しよぶつと内証等しきが故なり、但し此の法門は釈尊しやくそん一仏の己証こしやうのみに非ず諸仏しよぶつも亦然なり、我等衆生の無始已来六道むし ろくどう生死の浪に沈没せしが、今教主釈尊きやうしゆしやくそんの所説の法華經に値ひ奉る事は、乃往過去に此の寿量品の久遠実成の一念三千いちねんさんぜんを聴聞せし故なり、有り難き法門なり。

華嚴・真言の元祖、法蔵・澄觀・善無畏・金剛智・不空等が、釈尊しやくそん一代聖教いちだいしやうきやうの肝心なる寿量品じゆりやうほんの一念三千いちねんさんぜんの法門を盗み取て、本より自の依經えきやうに説かざる華嚴經けこんきやう・大日經だいにちきやうに一念三千いちねんさんぜん有りいと云て取り入るる程の盗人ぬすびとにばかされて、末学まつがく深く此の見を執す、墓無はかなし墓無はかな

し、結句は真言の人師の云く「争て醍醐を盗て、各自宗に名く」云云、又

云く「法華經の二乗作仏・久遠実成は無明の辺域、大日經に説く所

の法門を明の分位」等云云、華嚴の人師云く「法華經に説く所の

一念三千の法門は枝葉、華嚴經の法門は根本の一念三千なり」云

云、是跡形も無き僻見なり、真言・華嚴經に一念三千を説きたらば

こそ、一念三千と云ふ名目をばつかはめ、おかしおかし、龜毛兎角

の法門なり。

正しく久遠実成の一念三千の法門は前四味並に法華經の迹門

十四品まで秘させ給て有りしが、本門正宗に至て寿量品に説き

顯し給へり、此の一念三千の宝珠をば妙法五字の金剛不壞の袋に

入れて、末代貧窮の我等衆生の為に残し置かせ給ひしなり、正法・

像法に出でさせ給ひし論師・人師の中に此の大事を知らず、唯竜樹

・天親てんじんこそ心の

底てんに知らせ給ひしかども色にも出ださせ給はず、天台大師てんだいだいしは玄・文・止觀しかんに秘せんと思召ししかども、末代まつだいの為にや止觀しかん十章第七正觀の章いたつに至て粗書かせ給ひたりしかども、薄葉うすはに積うすはを設けてさて止み給ひぬ、但理觀てんの一分を示して事の三千さんぜんをば斟酌しんしゃくし給ふ。

彼の天台大師てんだいだいしは迹化しゃつけの衆なり、此の日蓮にちれんは本化ほんげの一分なれば盛さかんに本門ほんもんの事の分ぶんを弘ひろむべし、然しかるに是かくの如ごとき

大事だいじの義理ぎりの籠こもらせ給たまふ御經ごぎやうを書かて進すすらせ候まをへば、弥い信しんを取とらせ給たまふべし、勸かん発はつ品ぽんに云いく、「当あたに起おて遠とほく迎むかへて、当あたに仏ぶつを敬うやまふが如ごとくすべし」等ら云いふ、安あん樂らく行ぎやう品ぽんに云いく、「諸しよ天てん昼じゆ夜やに、常とこに法はふの為ための故ゆゑに、而しかも之これを衛まも護ごす、乃な至いた天てんの諸しよ童どう子じ、以もつて給たま使しを為なさん」等ら云いふ、譬ひ喻よ品ぽんに云いく、「其その中ちゆうの衆しゆ生じやうは、悉しつく是これれ吾わが子こなり」等ら云いふ、法はふ華け經ぎやうの持ぢ者しや

は教主きやうしゆ釈しやく尊そんの御ご子こなれば、争いかて梵ぼん天てん・帝たい釈しやく・日にち月がつ・衆しゆ星せいも昼じゆ夜や朝あさ暮くれに守まもらせ給たまはざるべきや、厄やくの年さい災なん難なんを払はらはん秘ひ法はふには法はふ華け經ぎやうに過すぎず、たのもしきかな、たのもしきかな。

さては鎌かま倉くらに候まをひし時ときは細こ細こ申まをし承うけはり候まをひしかども、今いまは遠えん国こくに居い住ぢゆう候まをに依よつて面めん謁えつを期まをする事こと更さらになし、されば心しん中ちゆうに含くみたる事ことも使たま者ずさ玉たま章しやうにあらざれば申まをすに及およばず、歎なげかし歎なげかし、当あた年の大だい厄やくをば日にち蓮れんに任まかせ給たまへ、釈しやく迦か・多た宝ほう・十じゆ方ぽう分ぶん身しんの諸しよ仏ぶつの法はふ華け經ぎやうの御ご

やくそく

約束やくそくの実不実ふじつは是れにて量るべきなり、又又申もうすべく候、

弘安元年こうあんがんねん

戊寅つちのえとら

四月二十三日

日蓮花押にちれんかおう

太田左衛門尉殿御返事さえもんのじょう

ごへんじ

八木一石付十合者ていれは大旱魃かんぱつの代に、かはける物に水をほどこしては、大竜王りゅうおうと生れて雨をふらして人天にんてんをやしなう、うえたる代に、食をほどこせる人は国王こくおうと生れて其の国ゆたかなり、過去かこの世に金色もろと申す大王だいおうましましき其の国をば波羅奈国はらなと申す、十二年が間、旱魃かんぱつゆきて人民じんみんうえ死ぬ事おびただし。宅中には死人しにん充滿じゅうまんし、道路がいのちうには骸骨がいこつ充滿じゅうまんせり、其の時そのとき、大王だいおう一切衆生いっさいしゆじやうをあはれみて、おおくの蔵くらをひらきて施をほどこし給ひき、蔵の中の財つきて唯一日の御供のみのこりて候ひし、衆僧しゆそうをあつめて供養をなし、王と后しゆこうと衆僧しゆそうと万民ばんみんと皆みなうえ死なんとせし程に、天より雨のごとくふりて大國たいこく一時いちじに富貴せりと、金色王経きんしきおうきやうにとかれて候、此れも又かくのごとし此の供養

によりて現世げんせには福人となり、後生ごしょうには靈山淨土じよつどへまいらせ給ふべし。
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

九月二十四日

日蓮にちれん

花押かおう

大田入道にゆうどう殿女房にようぼう御返事ごへんじ

一五八 慈覚大師事

弘安三年正月 五十九歳御作与

大田入道 於身延

1014p

鷲眼三貫・絹の袈裟一帖給い候い了んぬ、法門の事は秋元太郎
兵衛尉殿の御返事に少少注して候・御覧有るべく候、なによりも
受け難き人身・値い難き仏法に値いて候に五尺の身に一尺の面あり
其の面の中三寸の眼二つあり、一歳より六十に及んで多くの物を
見る中に悦ばしき事は法華最第一の経文なり、あさましき事は
慈覚大師の金剛頂經の頂の字を釈して云く、「言う所の頂とは
諸の大乗の法の中に於て最勝にして無過上なる故に頂を以て
之れに名づく乃至人の身の頂最も為勝るが如し、乃至法華に
云く是法住法位と今正しく此の秘密の理を顕説す、故に

金剛頂と云うなり云云、又云く「金剛は宝の中の宝なるが如く此の経も亦爾なり諸の経法の中に最為第一にして三世の如來の髻の中の宝なる故に」等云云、此の釈の心は法華最第一の経文を奪い取りて金剛頂經に付くるのみならず、如人之身頂最為勝の釈の心は法華經の頭を切りて真言經の頂とせり、此れ即ち鶴の頸を切つて蝦の頸

に付けけるか真言の蝶も死にぬ法華經の鶴の御頸も切れぬと見え候、此れこそ人身つけたる眼の不思議にては候へ三千年に一度花開くなる優曇花は転輪聖王此れを見る。

究竟円満の仏にならざらんより外は法華經の御敵は見しらさんなり、一乗のかたき夢のごとく勘へ出して候、慈覺大師の御はかはいづれのところの有りと申す事きこへず候、世間に云う御頭は出羽の国・立石寺に有り云云、いかにも此の事は頭と身とは別の所に

有るか、明雲座主は義仲に頸を切られたり、天台座主を見候へば
伝教大師はさてをきまいらせ候いぬ、第一義真・第二円澄・此の両
人は法華経を正とし真言を傍とせり、第三の座主・慈覚大師は真言
を正とし法華経を傍とせり、其の已後代代の座主は相論にて思い定
むる事無し、第五十五並びに

五十七の二代は明雲大僧正座主なり、此の座主は安元三年五月日
院勘を蒙りて伊豆の国へ配流、山僧・大津にて奪い取りて後治承三
年十一月に座主となりて源の右將軍頼朝を調伏せし程に寿永二
年十一月十九日義仲に打たれさせ給う、此の人・生けると死ぬると二
度大難に値えり、生の難は仏法の定例・聖賢の御繁盛の花なり死の
後の恥辱は悪人・愚人・誹謗正法の人招くわざわいなり、所謂大慢
ばら門・須利等なり。

粗此れを勘えたるに明雲より一向に真言の座主となりて後・今三
十余代一百余年が間・一向・真言の座主にて法華經の所領を奪える
なり、しかれば此等の人人は釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・
梵釈・日月・四天・天照太神・正八幡大菩薩の御讎敵なりと見えて
候ぞ、我が弟子等・此の旨を存じて法門を案じ給うべし、
恐

正月二十七日

日蓮花押

太田入道殿御返事

に
お
う
ぢ
う

ご
へ
ん
じ

一五九 三大秘法稟承事 弘安四年四月 六十歳

御作 与大田金吾 1021p

夫それ法ほけき華き經きやうの第七しち神じん力りき品ほんに云いく「要いを以もつて之これを言いはば如に來よら一切いっさいの法ほけき・如に來よら一切いっさいの自じ在ざいの神じん力りき・如に來よら一切いっさいの秘ひ要ようの藏ざう・如に來よら一切いっさいの甚じん深じんの事じ・皆みな此こゝ經きやうに於おいて宣せん示じ顯けん說せつす」等な云に云もつ、釈いに云いく「經きやう中ちゆうの要い說せつの要い・四し事じに在あり」等な云に云もつ、問とう所しよ說せつの要い言げんの法ほけきとは何なに物ものぞや、答こたて云いく夫それ釈しやく尊そん初しよ成じやう道どうより四し味み三さん教きやう乃ない至し法ほけき華き經きやうの廣くわう開かい三さん頭とう一いつの席せきを立たちて略りやく開かい近こん顯けん遠えんを説せかせ給たまいし涌ゆ出しゅつ品ほんまで秘ひせさせ給たまいし実じつ相そう証じやう得とくの当その初かみ修しゆ行ぎやうし給たまいし処ところの寿じゆ量りやう品ほんの本ほん尊そんと戒がい壇だんと題だい目もくの五ご字じなり、教きやう主しゆ釈しやく尊そん此こゝの秘ひ法ほふをば三さん世ぜに隱いんれ無なき普ふ賢げん・文もん殊じゆ等とうにも讓ゆずり給たまはず況そや其そのの以い下げをや、されば此こゝの秘ひ法ほふを

説かせ給いし儀式は四味三教並に法華經の迹門十四品に異なり
き、所居の土は寂光本有の国土なり能居の教主は本有無作の三身
なり所化以て同体なり、かかる砌なれば久遠称揚の本眷属上行
等の四菩薩を

寂光の大地の底よりはるばると召し出して付属し給う、道暹律師
云く「法是れ久成の法なるに由る故に久成の人に付す」等云云、問
て云く其の所属の法門仏の滅後に於ては何れの時に弘通し給う可き
か、答て云く經の第七葉王品に云く「後の五百歳の中に閻浮提に
広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云、謹んで經文を拜見
し奉る

に仏の滅後正像二千年過ぎて第五の五百歳・鬪諍堅固・白法隱没
の時云云、問て云く夫れ諸仏の慈悲は天月の如し機縁の水澄めば
利生の影を普く万機の水に移し給べき処に正像末の三時の中に

末法まつぼうに限ると説き給わば教主きよつしゆ・積尊しやくそんの慈悲じひに於て偏頗へんげんあるに似たり
如何いかん、答う諸仏しよぶつの和光わくわう・利物りもつの月影げつえいは九法界くわうかいの闇を照すと雖もいえど・謗法ぼうぼう
一闡提いつせんたいの濁水

には影を移さず正法しやうぼう一千年の機きの前には唯ただ小乘しょうじやう・權大乘こんだいじやう相叶へ
り、像法ぞうぼう一千年には法華經ほけきやうの迹門しやくもん・機感きかん相応そうおうせり、末法まつぼうの始の五百
年には法華經ほけきやうの本門ほんもん前後十三品を置きて只ただ・壽量品じゆりやうぼんの一品を弘通くわつう
すべき時なり機法きぼう相応そうおうせり。

今・此の本門寿量の一品は像法の後の五百歳・機尚堪えず況や始

めの五百年をや、何に況や正法の機は迹門尚日浅し増して本門を

や、末法に入て爾前・迹門は全く出離生死の法にあらず、但専ら

本門寿量の一品に限りて出離生死の要法なり、是を以て思うに

諸仏の化導に於て全く偏頗無し等云云、問う仏の滅後正像末の三

時に於て本化・

迹化の各各の付属分明なり但寿量の一品に限りて末法濁悪の

衆生の為なりといへる經文未だ分明ならず慥に經の現文を聞かん

と欲す如何、答う汝強ちに之を問う聞て後堅く信を取る可きな

り、所謂寿量品に云く、「是の好き良薬を今留めて此に在く汝取て

服す可し差じと憂うる勿れ」等云云。

問て云く寿量品専ら末法惡世に限る經文顯然なる上は私に

難勢を加う可らず然りと雖も三大秘法其の体如何、答て云く予が

己心の大事之に如かず汝が志無二なれば少し之を云わん
じゆりようほん こんりゆう ほんそん じんでん そのかみ いらいしどうえん
寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁
じんこうほんぬむささんじん きようしゅしゃくそんこ じゆりようほん
深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり、寿量品に云く「如来
ひみつじんつう じよ いくわ いくわ いくわ
秘密神通之力」等云云、疏の九に云く「一身即三身なるを名けて秘
と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所を名
な さんじんそく な
けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏三世に於て等
さんじん しよきよう おい これ
しく三身有り諸経の中に於て之を秘して伝えず」等云云、
だいもく いわゆるしよきよう まつぼう しよぼう てんじんぼさつ
題目とは二の意有り所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩
りゆうじゆぼさつ だいもく とな たまい じぎよう
竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いしかども自行ばかりにしてさて止
ぞつぼう なんがく てんだい またなむ みようほうれんげきよう とな たまい じぎよう
ぬ、像法には南岳・天台等亦南無妙法蓮華経と唱え給いて自行の
ため ため
為にして広く他の為に説かず是れ理行の題目なり、末法に入て今日
だいもく ぜんだい じぎよう けた わた なむ みようほうれんげきよう
連が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経
なり名体宗用

教こしゅうげんの五重玄ごじゅうげんの五字ごじなり、戒壇かいだんとは王法ぶつぽう佛法ぶつぽうに冥むじ仏法ぶつぽう王法ぶつぽうに合あして
王臣おうしん一同いっどうに本門ほんもんの三秘密ひみつの法たもを持もちて有徳王うとく・覺徳比丘かくとくびくの其その乃むかし往むかし
を末法まつぽう濁悪じよくあくの未来みらいに移うつさん時勅ちよくせん宣並みきよつしよに御教書もくを申まうし下くだして靈山りょうぜん
浄土じょうどに似にたらん最勝さいしょうの地たすを尋たずねて戒壇かいだんを建立こんりゅうす可べき者べか時べを待べつ
可べきのみ事かいほうの戒法かいほうと申もうすは是これなり、三國えんぶだい並いに一閻浮提えんぶだいの人えんぶだい・懺悔ざんげ
滅罪めつざいの戒法かいほうのみならず大梵天王だいぼんてんのう・帝釈たいしゃく等らも来下らいげして給ふみたまうべき
戒壇かいだんなり、此かいほうの戒法かいほう立たちて後えんりやくじ・延曆寺えんりやくじの戒壇かいだんは迹門しやくもんの理戒しやくもんなれ

ば益あるまじき処ところに、叡山えいざんに座主ざす始まつて第三・第四の慈覚じかく・智証ちしょう存の外ほんしに本師でんぎょう・伝教ぎしん・義真そむに背きて理同事勝りどうじしょうの狂言を本として我が山の戒法かいほうをあなづり戯論けろんとわらいし故ゆえに、存の外えんりやくじに延曆寺えんりやくじの戒けい・清淨じよんじゆう・無染むせんの中道ちゆうだうの妙戒みょうかいなりしが徒いたすらに土泥つちぬいとなりぬる事云うても余あまりあり歎なげきても何かはせん、彼の摩黎山まりの瓦礫がりがくの土つちとなり梅檀林せんだの荆棘いばらとなるにも過すぎたるなるべし、夫それ一代いちだい・聖教しようきよの邪正偏円じゃせいへんえんを弁わきまえたらん学者がくしやの人をして今の延曆寺えんりやくじの戒壇かいだんを　ましむべきや、此こゝの法門ほうもんは義理ぎりを案じて義をつまびらかにせよ、此の三大秘法ひほうは二千年にちねんたしかの当初そのかみ・地涌千界じゆせんがいの上首じようしゆとして日蓮にちれん・慥たしかかに教主大覚世尊きよしゆだいかくせそんよりぐけつそつじゆう・承しょうせしなり、今日蓮いまにちれんが所行しよぎやうは靈鷲山りよじゆせんの稟承ほんじように芥爾けにばか計りの相違そつゐなき色も替かわらぬ寿量品じゆりやうほんの事ことの三大事だいじなり。

問もんう一念三千いちねんさんぜんの正ただしき証文しよもん如何いかに、答こたへう次に出し申もうす可べし此こゝに於おいて二種ふたしゆ有り、方便品ほうべんに云いく「諸法実相しよほうじつそつ・所謂いわゆる諸法しよほう・如是相によぜそつ・乃至ないし・

よくりようしゅじょうかいぶつちけん
欲令衆生開仏知見ていげ等云云、底下の凡夫・理性所具の一念三千か、
じゆりょうほん
寿命品に云く「然我実成仏已来・無量無辺むりょうむへん」等云云、大覺世尊・
くおんじつじょう
久遠実成の当初証得の一念三千なり、今日蓮が時に感じて此の
ほうもんこうせんるふ
法門広宣流布するなり予年来己心に秘すと雖も此の法門を書き付
とど
て留め置ずんば門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加う可し、其の
後は何と悔ゆとも叶うまじきと存ずる間・貴辺きへんに対し書き送り候、
一見の後・秘して他見有る可からず口外も詮無し、法華經を諸仏
しゅつせ
出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡
たま
らせ給えばなり、秘す可し秘す可し。
べ
べ

弘安四年卯月八日 日蓮花押
こうあん
にちれんかおう

一六〇 曾谷入道殿御書

文永十一年 五十三歳

御作 於身延 1024p

自界叛逆難・他方侵逼の難既に合い候い畢んぬ、之を以て思うに
じかいほんぎやくなん たほうしんびつ なんすで おわ これ
 「多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地に
たほう おんぞく こくない しんりやく じんみんもろもろくのう とち
 所楽の処有ること無けん」と申す経文合い候いぬと覚え候、当時
しよらく とこしんあ もつ きようもん おぼ とうじ
 吉岐・対馬の土民の如くになり候はんずるなり、是れ偏に仏法の
いき つしま どみん ごと そつら こ ひとえ ぶつぼう
 邪見なるによる仏法の邪見と申すは真言宗と法華宗との違目な
じゃけん ぶつぼう じゃけん もつ しんごんしゆう ほうけしゆう いもく
 り、禅宗と念仏宗とを責め候しは此の事を申し顕さん料なり漢土
ぜんしゆう ねんぶつしゆう ねんぶつしゆう もつ せんさんりょう かんど
 には善無畏・金剛智・不空三蔵の誑惑の心・天台法華宗を真言の
ぜんむい こんごうち ぶくうさんぞう おおわく てんだい ほうけしゆう しんごん
 大日経に盗み入れて還つて法華経の肝心と天台大師の徳とを隠せ
だいにちきよう かえ ほけきよう かんじん てんだいだいし
 し故に漢土滅するなり、日本国は慈覚大師が大日経・金剛頂経・
ゆえ かんど にほんこく じかくだいし だいにちきよう こんごうちようきよう

そしつちきよう ちんごこつか
蘇悉地経を鎮護国家の三部と取つて伝教大師の鎮護国家を破せし
より叡山えいざんに悪義あくぎ・出来しゅつたいして終ついに王法わうぽう尽じんきにき、此この悪義あくぎ・鎌倉かまくらに下つ
て又また日本国にほんこくを亡もうすべし弘法大師こうぼうだいしの邪義じゃぎは中なか中なか顯けん然ねん
らかされぬ者ものもあり、慈覚大師じかくだいしの法華經ほけきよう・大日經だいにちきようの理り同どう事じ勝しょうの積せき
は智人ちじん既すでに許ゆるしぬ愚者ぐしゃ争いでか信しんぜざるべき慈覚大師じかくだいしは法華經ほけきようと
大日經だいにちきようとの勝劣しょうりつを祈請きしやうせしに箭やを以て日を射ると見しは此の事な
るべし、是これは慈覚大師じかくだいしの心中しんちゆうに修羅しゆらの入いつて法華經ほけきようの大日輪だいにちりんを
射るにあらざや、此この法門ほうもんは当世とうせい叡山えいざん其その外にほんこく日本国にほんこくの人用もちゆべき
や、若もし此この事じ・実事じつじならば日蓮にちれん豈あ須しゆ弥山みせんを投なる者ものにあらざや、我
が弟子でしは用もちゆべきや如何いかに最後さいごなれば申もうすなり恨うらみみ給たまべからず、
きようきようきんげん
恐恐きようきよう謹言きんげん。

十一月二十日

曾谷入道殿

日蓮花押

一六一 曾谷入道殿御返事

025p

方便品ほうべんの長行書進せ候先に進せ候し自我偈じがげに相副て讀みたまうべし、此の經の文字もんじは皆悉く生身妙覺みなこととしょうしんみょうかくの御仏みほとけなり然れども我等われらは肉眼にくげんなれば文字もんじと見るなり、例せば餓鬼がきは恒河じょうがを火と見る人は水と見る天人てんにんは甘露かんろと見る水は一なれども果報かほうに随つて別別したがなり、此の經の文字もんじは盲眼めくらめの者は之これを見ず、肉眼にくげんの者は文字もんじと見る二乗にじょうは虚空こくうと

見る菩薩ぼさつは無量むりょうの法門ほうもんと見る、仏は一一の文字もんじを金色しやくそんの釈尊しゃくそんと御覽みあるべきなり即持ぶっしん仏身ぶつじんとは是これなり、されども僻見びやくけんの行者ぎやうじやは加様に目出度たく渡わたらせ給たまうを破はし奉たてまつるなり、唯相ただ構かまえて相構かまえて異念

なく 一心いっしんに 靈山りょうぜん淨土じょうどを 期こせらるべし、心の師とはなるとも心を師
とせざれとは六波羅ろくはら蜜經みつぎょうの文ぞかし、委細いさいは見參みさんの時を期し候、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

ぶんえい

文永十二年三月

日

にちれんかおう
日蓮花押

そや にゅうじょう
曾谷入道殿

一六二 曾谷入道殿許御書 文永十二年三月 五十

四歳御作与曾谷入道 太田金吾 1026p

夫れ以れば重病を療治するには良薬を構築し逆謗を救助する

には要法には如かず、所謂時を論ずれば正像末教を論ずれば小大

偏円・権実・顕密・国を論ずれば中辺の両国・機を論ずれば已逆

と未逆と已謗と未謗と師を論ずれば凡師と聖師と二乗と菩薩と

他方と此土と迹化と本化となり、故に四依の菩薩等滅後に出現し

仏の付属に随つて妄りに経法を演説したまわず、所詮無智の者

未だ大法を謗ぜざるには忽ちに大法を与えず悪人爲る上已に実大

を謗ずる者には強て之を説く可し、法華經第二の巻に仏・舍利弗に

対して云く「無智の人の中にして此の経を説くこと莫れ」と又第四の巻

に薬王菩薩等の八万の大士に告げたまわく、「此の経は是れ諸仏秘要の蔵なり分布して妄りに人に授与す可からず」云云、文の心は無智の者の而も未だ正法を謗ぜざるには左右無く此の経を説くこと莫れ、
法華経第七の卷不輕品に云く、「乃至遠く四衆を見ても亦復故に往いて」等云云、又云く「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り悪口罵詈して言く是の無智の比丘何れの所従り来りてか」等云云、又云く「或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、第二第四の卷の経文と第七の卷の経文と天地水火せり。
問うて曰く「一経二説何れの義に就いて此の経を弘通すべき、答えて云く私に会通すべからず靈山の聴衆為る天台大師並びに妙樂大師等処処に多くの釈有り先ず一両の文を出さん、文句の十に云く「問うて曰く釈迦は出世して跏して説かず今は此れ何の意ぞ

造次にして説くは何ぞや答えて曰く本已に善有るには釈迦小を以て
これこれ之を將護しょうご

し本未だ善有らざるには不輕・大を以て之を強毒す等云云、釈の

いま

ぜんあ

には

ふぎよう

大を

以て

これ

を

強毒す

等

云云

釈の

心は寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・権実の諸経四教

はつきよう

の

所被

の

機縁

・

彼等

が

過去

を

尋ね

見れば

久遠

大通

の

時に

於て

じゆんえん

純円の種を下せしかども諸衆

くだ

しか

ども

しよ

衆

いちじょう 一乗経を謗せしかば三五の塵点を経歴す然りと雖も下せし所の
げしゆ 下種・純熟の故に時至つて自ら繫珠を躪す但四十余年の間過去に
すで 已に結縁の者も猶謗の義有る可きの故に且らく権小の諸経を演説
して根機を練らしむ。

問うて曰く華嚴の時別円の大菩薩乃至觀經等の諸の凡夫の
得道は如何、答えて曰く彼等の衆は時を以て之を論ずれば其の經の
得道に似たれども実を以て之を勘うるに三五下種の輩なり、問う
て曰く其の証拠如何、答えて曰く法華經第五の卷涌出品に云く
「是の諸の衆生は世世より已來常に我が化を受く乃至此の諸の
衆生は始め我が身を見我が所説を聞いて即ち皆信受して如来の慧
に入りなき」等云云、天台釈して云く「衆生久遠」等云云、妙樂
大師の云く「脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐ」又云く「故に知ん
ぬ今日の逗会は昔成熟するの機に赴く」等云云、

経釈 顕然の上は私の料簡を待たず例せば王女と下女と天子の
種子を下さざれば国主と為らざるが如し。

問うて曰く大日経等の得道の者は如何、答えて曰く種種の異義
有りと雖も繁きが故に之を載せず但し所詮彼れ彼れの経経に
種熟脱を説かざれば還つて灰断に同じ化に始終無きの経なり、
而るに真言師等の所談の即身成仏は譬えば窮人の妄りに帝王と号
して自ら誅滅を取るが如し王莽・趙高の輩外に求む可からず今の
真言家なり、此等

に因つて論ぜば仏の滅後に於て三時有り、正像二千余年には猶
下種の者有り例せば在世四十余年の如し根機を知らずんば左右
無く実経を与う可からず、今は既に末法に入つて在世の結縁の者
は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼の不軽菩薩末世に
出現して毒鼓を撃たしむるの時なり、而るに今時の学者時機に

迷惑めいわくして、或あるは小乘しやうじやうを
弘通くつうし、或あるは権大乘こんだいじやうを授与じゆよし、或あるは一乘いちじやうを演説えんぜつすれども題目だいもくの
五字ごじを以て下種げしゆと為す可べきの由来ゆらいを知らざるか、殊ことに真言宗しんごんしゆうの
学者がくしや迷惑めいわくを懐おもいて三部經さんぶきやうに依憑えびやうし、単たんに会二破二えにはにの義ぎを宣のぶ猶なほ三
相對そうたいを説そくかず、即身頓悟そくしん とんこの遺跡あとを削り、草木成仏そうもくじやうぶつは名をも聞かざるの
み、而しかるに善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空等ぶくうの僧侶そうりよ・月氏がつしより漢土かんどに來臨らいりんせし
時、本國おのくにに於て未だ存せざる天台てんだいの大法盛だいほうさかんに此の國このくにに流布るふせしむる
の間、自愛所持しよじの經ひる弘ひろめ難がたきに依り、一行阿闍梨あじやりを語かたらい得て天台てんだい

の智慧ちえを盗み取り大日経等に摂入だいにちきようして天竺てんじくより有るの由これ之を偽いつわる、然るに震旦しんたん一国の王臣等並びに日本にほんの弘法こうぼう・慈覚じかくの両大師だいにし之を弁わかえずして信を加う已下いかの諸学しよは言うに足らず、但漢土かんど・日本にほんの中に伝教でんぎよう大師一人之を推おしたまえり、然れども未だ分明ふんみようならず所詮しよせん善無畏三蔵ぜんむいさんぞう・閻魔王えんまおうの責を蒙りて此の過罪かさいを悔い不空三蔵ふくうさんぞうの還かえつて天竺てんじくに渡つて真言しんごんを捨てて漢土かんどに來臨らいりんし天台てんだいの戒壇かいだんを建立こんりゆうして両界りやうがいの中央ちゆうじゆうの本尊ほんぞんに法華經ほけきようを置きし是これなり。

問いうて日いく今時しんごんじゆうの真言宗がくしやの学者等何ぞ此の義を存せざるや、答こえて日いく眉まゆは近けれども見えず自の禍を知らずとは是この謂か、嘉祥かじよう大師だいにしは三論宗さんろんじゆうを捨てて天台てんだいの弟子でしと為る今の末学等まつがく之を知らず、法蔵ほうぞう・澄觀ちようかん・華嚴宗けこんしゆうを置いて智者ちしやに歸す彼の宗の学者がくしや之を存せず、玄奘げんじゆう・三蔵さんぞう・慈恩じおん大師だいにしは五性の邪義じしやぎを廢して一乘いちじゆうの法に移る法相ほっそうの学者がくしや堅く之を諍あらそう。

問うて曰く其の証如何、答えて曰く或は心を移して身を移さず

或は身を移して心を移さず或は身心共に移し或は身心共に移さ

ず其の証文は別紙に之を出す可し此の消息の詮に非ざれば之を

出さず、仏滅後に三時有り、所謂正法一千年前の五百年には迦葉

阿難・商那和修・末田地・脇比丘等一向に小乗の薬を以て衆生の

輕病を対治す

四阿含經・十誦・八十誦等の諸律と相續解脱經等の三蔵を弘通して

後には律宗・俱舍宗・成実宗と号する是なり、後の五百年には馬鳴

菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の諸の大論師初

には諸の小聖の弘めし所の小乗經之を通達し後には一一に彼の

義を破失し了つて諸の大乗經を弘通す是れ又中薬を以て衆生の

中病を対治す所謂華嚴經・般若經・大日經・深密經等・三輪宗・

法相宗・真言陀羅尼・禅法等なり。

問うて曰く迦葉・阿難等の諸の小聖何ぞ大乘經を弘めざるや、
答えて曰く一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に
三には仏より譲り与えられざるが故に四には時来らざるが故なり、
問うて曰く竜樹・天親等何ぞ一乘經を弘めざるや、答えて曰く四
つの義有り先の如し、問うて曰く諸の真言師の云く「仏の滅後八百
年に相

當つて 竜猛菩薩・月氏に出現して 釈尊の 顯經たる 華嚴・法華等
を馬鳴菩薩等に相伝し 大日の密經をば自ら南天の鉄塔を開拓し
面り 大日如来と金剛薩 とに對して之を口決す、 竜猛菩薩に二人
の弟子有り 提婆菩薩には 釈迦の 顯教を伝え 竜智菩薩には 大日の
密教を授く 竜智菩薩は 阿羅苑に隱居して 人に伝えず 其の間に 提婆
菩薩の伝うる所の 顯教は 先づ 漢土に渡る 其の後 數年を 經歴して
竜智菩薩の伝うる所の 秘密の教を 善無畏・金剛智・不空漢土に渡
す 等云云 此の義如何、 答えて 日く 一切の真言師是くの如し 又天台
・華嚴等の諸家も 一同に之を信ず、 抑 竜猛已前には 月氏国の中
には 大日の三部經無しと云うか 釈迦よりの外に 大日如来世に出現
して 三部の經を説くと云うか、 顯

を提婆に伝え 密を竜智に授くる 証文何れの經論に出でたるぞ、 此
の大妄語は 提婆の欺誑罪にも 過ぎ 瞿伽利の誑言にも 超ゆ 漢土・日本

の王位の尽き兩朝の僧侶の謗法と為るの由来専ら斯れに在らずや、
然れば則ち彼の震旦既に北蕃の為に破られ此の日域も亦西戎の
為に侵されんと欲す此等は且らく之を置く。

像法に入つて一千年・月氏の仏法・漢土に渡来するの間・前四百年

には南北の諸師・異義蘭菊にして東西の仏法未だ定まらず、四百年

の後・五百年の前其の中間・一百年の間に南岳・天台等漢土に出現

して粗法華の実義を弘宣したまう然而円慧・円定に於ては国師たり

と雖も円頓の戒場未だ之を建立せず故に国を挙つて戒師と仰が

ず、六百年の

已後法相宗西天より来れり太宗皇帝之を用ゆる故に天台法華宗

に帰依するの人漸く薄し、茲に就いて隙を得て則天皇后の御宇に先

に破られし華嚴亦起つて天台宗に勝れたるの由之を称す、太宗よ

り第八代・玄宗皇帝の御宇に真言始めて月氏より来れり所謂開元

四年には善無畏三蔵の大日経・蘇悉地経・開元八年には金剛智
ふくう さんそう こんごうちょうきょうか だいにとちきょうか こと
不空の両三蔵の金剛頂経 此くの如く三経を天竺より漢土に持ち
てんたい けんもん だいにとちきょう だいにとちきょう ほんごうちょう
来り、天台の釈を見聞して智発して釈を作つて大日経と法華経とを
いっきょう な そ しんこん みつきょう
一経と為し其の上印・真言を加えて密教と号し之に勝るの由、
けっくごんきょう じつきょう かんど がくしゃ まさ
結句権教を以て実教を下す漢土の学者・此の事を知らず。

像法の末・八百年に相当つて伝教大師・和国に託生して華嚴宗等の六宗の邪義を糾明するのみに非ずしかのみならず南岳・天台も未だ弘めたまわざる円頓戒壇を叡山に建立す、日本一州の学者一人も残らず大師の門弟と為る、但天台と真言との勝劣に於ては誑惑と知つて而も分明ならず、所詮末法に贈りたもうか此等は傍論為るの故に且らく之を置く、吾が師・伝教大師三国に未だ弘まらざるの円頓の大戒壇を叡山に建立したもう此れ偏に上菓をもち用いて衆生の重病を治せんと為る是なり。

今末法に入つて二百二十余年五濁強盛にして三災頻りに起り衆見の二濁国中に充滿し逆謗の二輩四海に散在す、専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃怙謗法の者を尊重して国師と為す、孔丘の孝経之を提げて父母の頭を打ち釈尊の法華経を口に誦しながら教主に違背す。不孝国は此の国なり勝母の閻他境に求めじ、故に青天。

まなこ

眼を瞋らして此の国を睨み黄地は憤りを含んで大地を震う、

去る正嘉元年の大地動・文永元年の大彗星・此等の天災は仏滅後

・二千二百二十余年の間・月氏・漢土・日本の内に未だ出現せざる

所の大難なり、彼の弗舎密多羅王の五天の寺塔を焼失し漢土の

会昌天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すること百千倍なり

大謗法の輩國中に充満し一天に弥るに依つて起る所の天災なり、

大般涅槃經に云く「末法に入つて不孝謗法の者大地微塵の如し」

法滅尽經に

「法滅尽の時は狗犬の僧尼・恒河沙の如し」等云云意、今親り此の国

を見聞するに人毎に此の二の悪有り此等の大悪の輩は何なる秘術

を以て之を扶救せん、大覺世尊仏眼を以つて末法を鑒知し此の逆・

謗の二罪を対治せしめんが為に一大秘法を留め置きたもう、所謂

法華經本門久成の釈尊・宝淨世界の多宝仏・高さ五百由旬広さ二

百五十由旬ゆじゆんの大宝塔ほうたうの中に於おいて二仏座にぶつざを並べしこと宛あたかも日月にちがつの
如ごとく十方分身じゆつぽうふんじんの諸仏しよぶつは高さ五百由旬ひやくゆじゆんの宝樹ひやくゆじゆんの下に五由旬ゆじゆんの師子しし
の座ざを並べ敷しゆふせいき衆星しゆせいの如ごとく列座れつざしたもう、四百万億なゆた那由他なゆたの大地だいち
に三仏さんぶつ二会にかいに充満じゆうまんしたもうの儀式けいしは華嚴けこん寂寂じやくじやく場じやうの華藏けそう世界せかいにも
勝すぐれ真言しんごん両界りやうがいの千二百余尊よそんにも超こえたり一切いっさい世間せけんの眼まなこなり、此の
大会たいえに於おいて六難なん九易くいを拏あげ

て法華経を流通せんと諸の大菩薩に諫曉せしむ、金色世界の文殊師利・兜史多宮の弥勒菩薩・宝浄世界の智積菩薩・補陀落山の観世音菩薩等・頭陀第一の大迦葉・智慧第一の舍利弗等・三千世界を統領する無量の梵天・須弥の頂に居住する無辺の帝釈・一四天下を照耀せる阿僧祇の日月・十方の仏法を護持する恒沙の四天王・大地微塵の諸の竜王等我にも我にも此の経を付嘱せられよと競い望みしかども世尊都て之を許したまわず、爾の時に下方の大地

より未見今見の四大菩薩を召し出したもう、所謂上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩なり、此の大菩薩各各六万恒河沙の眷属を具足す形貌威儀言を以て宣べ難く心を以て量るべからず、初成道の法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵等の四菩薩各各十恒河沙の眷属を具足し仏会を莊嚴せしも大集経の欲・色二界の

ちゅうげん

中間 大宝坊に於て来臨せし十方の諸大菩薩乃至大日經の八葉の

中の四大菩薩も金剛頂經の三十七尊の中の十六大菩薩等も此の

四大菩薩に比すれば猶帝釈と猿猴と華山と妙高との如し、弥勒

菩薩衆の疑を挙げて云く「乃一人をも識らず」等云云、

天台大師云く「寂場より已降今座より已往十方の大士来会絶え

ず限る可からずと雖も我れ補処の智力を以て悉く見・悉く知る

而も此の衆に於ては一人をも識らず」等云云、妙楽云く「今見るに

皆識らざる所以は乃至智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、

天台又云く「雨の猛きを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池

の深きを

知る」云云、例せば漢王の四将の張良・樊・陳平・周勃の四人を

商山の四皓・綺里积・角里先生・東園公・夏黄公等の四賢に比する

が如し天地雲泥なり、四皓が為体頭には白雪を頂き額には四海

の波を畳み眉には半月を移し腰には多羅枝を張り惠帝の左右に侍
して世を治められたる事。堯舜の古を移し一天安穩なりし事。神
農の昔にも異ならず、此の四大菩薩も亦復是くの如し法華の会に
出現し三仏を莊嚴し謗人の慢幢を倒すこと大風の小樹の枝を吹く
が如く衆会の敬心を致すこと諸天の帝釈に従うが如く提婆が仏を
打ちしも舌を出して掌を合せ瞿伽梨が無実を構えしも地に臥し
て矢を悔ゆ、文殊等の大聖は身を慙ぢて言を出さず舍利弗等の小
聖は智を失して頭を低る、

爾その時に大覺世尊・壽量品を演說えんぜつし然しかして後に十神力じんりきを示現じげんして
四大菩薩ぼさつに付屬ふぞくしたもう、其その所屬しよぞくの法は何物なにものぞや、法華經ほけきようの中に
も広を捨て略を取り略を捨てて要を取る所謂いわゆる妙法蓮華經みようほうれんげきようの五字ごじ・
名・体・宗・用・教の五重こじゆづげん玄げんなり、例せば九苞淵ほうえんが相馬そうばの法には玄黃げんこう
を略して駿逸しゆんいつを取り史陶林しとうりんが講經かうけいの法には細科さいかを捨て元意げんいを取る
が如ごとし等、此この四大菩薩ぼさつは釈尊しやくそん成道じやうだうの始はじめ、寂滅道場じやくめつだうじやうの砌みぎりにも来
らず如來入滅にょらいにゆめつの終りに抜提河はつたひの辺にも至いたらずしかのみならず靈山りやうぜん
八年はちねんの間に進んでは迹門序正しやくもんじよせいの儀式ぎしきに文殊もんじゆ・彌勒みろく等の發起よつこつ影向えいけうの
諸聖衆しよしやうしゆうにも列ついでならず、退しりぞいては本門流通ほんもんるつうの
座席ざせきに觀音かんのん・妙音みよおん等の發誓弘經はつせきかうけいの諸大士しよだいたいにも交まじわらず、但此ただこの一
大秘法ひほうを持して本処ほんこに隱居いんきよするの後・仏の滅後正像めつごしよざう二千年の間に
於おいて未いまだ一度ひとたびも出現しゆつげんせず、所詮しよせん・仏専ぶつせんら末法まつぽうの時に限こつて此等これらの大
士ふぞくに付屬ふぞくせし故ゆゑなり、法華經ほけきようの分別功德品ぶんべつくとくに云いく「惡世末法あくせまつぽうの時

能く是の経を持つ者ニ云云、涅槃経に云く「譬えば七子の父母平等ならざるに

非ず然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」云云、法華経の薬王品

に云く「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり」云云、七子

の中に上の六子は且らく之を置く第七の病子は一闍提の人・五逆

謗法の者・末代悪世の日本

国の一切衆生なり、正法一千年の前五百年には一切の声聞涅槃

了んぬ、後の五百年には他方來の菩薩・大体本土に還り向いん

ぬ、像法に入つての一千年には文殊・觀音・薬王・弥勒等・南岳・天台

と誕生し傳大士・行基・伝教等と示現して衆生を利益す。

今末法に入つて此等の諸大士も皆本処に隱居しぬ、其の外・閻浮

守護の天神・地祇も、或は他方に去り、或は此の土に住すれども悪

国を守護せず、或は法味を嘗めざれば守護の力無し、例せば法身の

大士あらに非あらざれば三惡道さんあくどうに入いられざるが如ごとし大苦忍しのび難がたきが故ゆなり、而しかるに地涌千界じゆせんがいの大菩薩ほさつ・一ひとには娑婆世界しゃはせかいに住すること多塵劫たじんこうなり二ふたには釈尊しゃくそんに随したがつて久遠くおんより已來このかた初しよ発心ほつしんの弟子でしなり三さんには娑婆世界しゃはせかいの衆生しゆじやうの最初さいしよ下種げしゆの菩薩ほさつなり、是かくの如ごときの如ごときの等との宿縁しゆくえんの方便ほうべん・諸大菩薩しよだいほさつに超過ちやうかせり。

問うて曰く其の証拠如何、法華第五涌出品に云く「爾の時に他方の国土より諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる乃至爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく・止みね善男子汝等が此の經を護持せんことを須いじ」等云云、天台云く「他方は此の土結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無し」云云、妙樂云く「尚」
偏に他方の菩薩に付せず豈独り身子のみならんや」云云、又云く「告八万大士とは乃至今の下の文に下方を召すが如く尚本眷屬を待つしるし
驗し余は未だ堪えざることを」云云、經釈の心は迦葉舍利弗等の一切の聲聞・文殊・藥王・觀音・弥勒等の迹化・他方の諸大士は末世の弘經に堪えずと云うなり、經に云く「我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り」一の菩薩に各六万恒河沙の眷屬有り是の諸人等能く我が滅後に於て護持し誦誦し広く

此の経を説かん、仏是を説きたもう時、娑婆世界の三千大千の国土
地皆震裂して其の中より無量千万億の菩薩摩訶薩有り同時に涌出
せり、乃至是の菩薩衆の中に四たり導師有り一をば上行と名け二
をば無辺行と名け三をば淨行と名け四をば安立行と名く其の
衆の中に於て最も為上首唱導の師なり」等云云、天台云く「是れ我
が弟子心に我が法を弘むべし」云云、妙樂云く「子父の法を弘む」
云云道暹云く「付属とは此の経は唯下方涌出の菩薩
に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に
付す」等云云、此等の大菩薩末法の衆生を利益したもうこと猶魚の
水に練れ鳥の天に自在なるが如し、濁悪の衆生此の大地に遇つて
仏種を殖うること例せば水精の月に向つて水を生じ孔雀の雷の
声を聞いて懷妊するが如し、天台云く「猶百川の海に潮すべきが
如し縁に牽れて応生するも亦復是くの如し」云云。

慧え日大聖尊ぶつげん仏眼を以て兼かねて之これを鑒かんみたもう故ゆえに諸もろもろの大聖を
捨しゃ棄ぎし此しの四聖ししやうを召まし出して要法ようほうを伝まえ末法まつほうの弘通くつうを定さだむるなり、
問いうて日いく要法ようほうの經文きやうもん如何いかん、答こたえて日いく口伝くでんを以て之これを伝たえん
釈尊しゃくそん然後そのち正像しやうざう二千年の衆生しゆじやうの為ために宝塔ほうとうより出いでて虚空こくうに住立じゆうりゆし
右みぎの手を以て文殊もんじゆ・觀音かんのん・梵帝ぼんたい・日月にちがつ・四天してん等の頂いただきを摩なでて
是かくの如ごとく三反さんべんして

法華經の要よりの外の広略二門並びに前後の一代の一切經を此等の大士に付属す正像二千年の機^きの爲なり、其の後涅槃經の會に至つて重ねて法華經並びに前四味の諸經を説いて文殊等の諸大菩薩に授与したもう、此等は拾の遺属なり。

愛を以て滅後の弘經に於ても仏の所属に随つて弘法の限り有り然れば則ち迦葉・阿難等は一向に小乘經を弘通して大乘經を申べず、竜樹・無著等は権大乘經を申べて一乘經を弘通せず、設い之を申べしかども纒かに以て之を指示し或は迹門の一分のみ之を宣べて全く化道の始終を談ぜず、南岳・天台等は觀音・藥王等の化身と爲て小大・
権実・迹本二門・化道の始終・師弟の遠近等悉く之を宣べ其の上に已今当の三説を立てて一代超過の由を判ぜること天竺の諸論にも勝れ真丹の衆釈にも過ぎたり旧訳・新訳の三蔵も宛かも此の師に

は及ばず、顕密二道の元祖も敵対に非ず、然りと雖も広略を以て
本と為して未だ肝要に能わず。自身之を存すと雖も敢て他伝に及ば
ず。此れ偏に付屬を重んぜしが故なり、伝教大師は仏の滅後・一千
八百年・像法の末に相当つて日本国に生れて小乗・大乘・一乗の
諸戒一一に之を分別し、梵網・瓔珞の別受戒を以て小乗の二百
五十戒を破失し又法華・普賢の円頓の大王の戒を以て諸大乘經の
臣民の戒を責め下す、此の大戒は靈山八年を除いて一閻浮提の内
に未だ有らざる所の大戒場を叡山に建立す、然る間八宗共に
偏執を倒し一國を挙げて弟子と為る、觀勒の流の三論・成実道昭
の渡せる法相・俱舍・
良弁の伝うる所の華嚴宗・鑒真和尚の渡す所の律宗・弘法大師の
門弟等誰か円頓の大戒を持たざらん此の義に違背するは逆路の人
なり、此の戒を信仰するは伝教大師の門徒なり日本一州・

えんきじゆんいつ 円機純一・朝野遠近・同歸一乘とは是の謂か、此の外は漢土の
さんろんしゆう さんろんしゆう 三論宗の吉蔵大師並びに一百余人・法相宗の慈恩大師・華嚴宗の
ほうぞう ちようかん しんこんしゆう ぜんむい こんごうち ふくう けいかにほん こうぼう じかく
法蔵・澄観・真言宗の善無畏・金剛智・不空・慧果日本の弘法・慈覚
さんぞう さんぞう 等の三蔵の諸師は四依の大士に非ざる暗師なり愚人なり、経に於て
だいしやう ごんじつ むね わきま だいしやう 権実の旨を弁えず顕・密両道の趣を知らず論に於ては通申
べっしん ただ べっしん と別申とを糾さず申と不申とを曉めず、然りと雖も彼の
あきら しか いえど

宗宗の末学等・此の諸師を崇敬して之を聖人と号し之を国師と尊ぶ今先ず一を挙げんに万を察せよ。

弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論等に云く「かくの如き乗乗自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」又云く「無明の

辺域」又云く「震旦の人師等諍つて醍醐を盗み各自宗に名く」等云

云、釈の心は法華の大法を華嚴と大日経とに對して・戲論の法と

蔑り無明の辺域と下し・剩え震旦一国の諸師を盗人と罵る、此れ等

の謗法

・謗人は慈恩得一の三乘眞実・一乘方便の誑言にも超過し善導・

法然が千中無一・捨閉閣抛の過言にも雲泥せるなり、六波羅蜜経を

ば唐の末に不空三蔵・月氏より之を渡す後漢より唐の始めに至るま

で未だ此の経有らず南三北七の碩徳未だ此の経を見ず三論・天台・

法相・華嚴の人師誰人か彼の経の醍醐を盗まんや、又彼の経の中に

法華経は醍醐に非ずというの文之有りや不や、而るに日本国の東寺の門人等堅く之を信じて種種に僻見を起し非より非を増し、暗より暗に入る不便の次第なり。

彼の門家の伝法院の本願たる正覚の舍利講式に云く「尊高なる

者は不二摩訶衍の仏・驢牛の三身は車を扶くること能ず秘奥なる

者は両部曼陀羅の教・顕乗の四法の人は履をも取るに能えず」云

云、三論・天台・法相・華嚴等の元祖等を真言の師に相對するに牛飼

にも及ばず力者にも足らずと書ける筆なり、乞い願わくは彼の門徒

等心在らん人は之を案ぜよ大悪口に非ずや大謗法に非ずや、所詮

此等の誑言は弘法大師の望後作戲論の悪口より起るか、教主釈尊

・多宝・十方の諸仏は法華経を以て已今当の諸説に相對して

皆是真實と定め然る後世尊は靈山に隱居し多宝諸仏は各本土に

還りたまひぬ、三仏を除くの外誰か之を破失せん。

就なかんずく中弘法所覽の真言經の中に三説を悔くい還すの文之有これありや
不いなや、弘法既に之これを出いださず末学まつがくの智いかん如何せん而しるに弘法大師一人
のみ法華經を華嚴けこん・大日だいにちの二經に相對そつたいして戲論けろん盜人ぬすびとと為なす所詮しよせん
釈尊しやくそん・多宝たほう・十方じゆつほうの諸仏しよぶつを以もつて盜人ぬすびとと稱しょうするか末学等眼まつがくを閉じて
之これを案あぜよ。

問うて曰く昔より已來未だ曾て此くの如きの謗言を聞かず何ぞ
上古清代の貴僧に違背して寧ろ当今濁世の愚侶を帰仰せんや、答え
て曰く汝が言う所の如くば愚人は定んで理運なりと思わんか然れ
ども此等は皆人の偽言に因つて如来の金言を知らざるなり、大覺
世尊・涅槃經に滅後を警めて言く「善男子我が所説に於て若し疑
を生ずる

者は尚受くべからず」云云、然るに仏尚我が所説なりと雖も不審有
らば之を叙用せざれとなり、今予を諸師に比べて謗難を加う、然り
と雖も敢て私曲を構えず専ら釈尊の遺誡に順つて諸人の謬・釈を
糾すものなり。

夫れ齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間・南北の碩徳・
光宅・智誕等の二百余人涅槃經の「我等悉名邪見之人」の文を引い
て法華經を以て邪見之經と定め一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せ

しむ、陳隋の比智者大師之を糾明せし時始めて南北の僻見を破り
了んぬ、唐の始めに太宗の御宇に基法師・勝鬘經の「若如来随彼所
欲而方便

説・即是大乘無有二乗の文を引いて一乘方便・三乘眞実の義を
立つ此の邪義・震旦に流布するのみに非ず、日本の得一が称徳天皇
の御時盛んに非義を談ず、爰に伝教大師悉く彼の邪見を破し了ん
ぬ、後鳥羽院の御代に源空・法然觀無量壽經の読誦大乘の一句を
以て法華經を摂入し「還つて称名念仏に対すれば雑行方便なれ
ば捨閉閣抛せよ」等云云。

然りと雖も五十余年の間・南都・北京・五畿・七道の諸寺・諸山の
衆僧等・此の悪義を破ること能はざりき予が難破分明為るの間・
一国の諸人忽ち彼の選択集を捨て了んぬ根露るれば枝枯れ源
乾けば流竭くとは蓋し此の謂なるか、加之ならず唐の半

げんそうこうてい
玄宗皇帝の御代に善無畏・不空等大日經の住心品の如実一道心の
いっく
一句に於て法華經を撰入し返つて權經と下す、日本の弘法大師は
ろくはらみつぎよう
六波羅蜜經の五藏の中に第四の熟蘇味の般若波羅蜜藏に於て
ほけきよう　ねはんぎよう
法華經・涅槃經等を撰入し第五の陀羅尼藏に相對して争つて醍醐
を盗む等云云、此等の禍咎は日本一州の内・四百余年・今に未だ
これ
之を糾明せし人あらず予が所存の難勢　く一國に満つ必ず彼の
じゃぎ
邪義を破られんか此等は且らく之を止む。

迦葉・阿難等・竜樹・天親等・天台・伝教等の諸大聖人知つて
 而も未だ弘宣せざる所の肝要の秘法は法華經の文赫赫たり論釈等
 の載せざること明明なり生知は自ら知るべし賢人は明師に値遇して
 これを信ぜよ罪根深重の輩は邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず
 しばら且く耳に停め本意に付かば之を諭さん、大集經の五十一に大覺
 世尊・月蔵菩薩に語つて云く「我が滅後に於て五百年の中は解脱
 堅固・次の五百年は禪定堅固、一千年次の五百年は読誦多聞堅固・次
 の五百年は多造塔寺堅固二千年次の五百年は我が法の中に於て鬪諍
 言訟して白法隱没せん」等云云、今末法に入つて
 二百二十余年・我法中鬪諍言訟・白法隱没の時に相当れり、
 法華經の第七葉王品に教主釈尊・多宝仏と共に宿王華菩薩に語つ
 て云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に
 於て断絶して悪魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便を得せ

しむこと無けん」大集經の文を以て之を案ずるに前四箇度の五百年

は仏の記文の如

く既に符合せしめ了んぬ、第五の五百歳の一事豈唐捐ならん、随つ

て当世の体為る大日本国と大蒙古国と鬪争合戦す第五の五百に

相当れるか、彼の大集經の文を以て此の法華經の文を惟うに後・五

百歳中広宣流布・於閻浮提の鳳詔・豈扶桑国に非ずや、弥勒菩薩の

瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乘の種姓のみ有り」云

云、

慈氏菩薩・仏の滅後九百年に相当つて無著菩薩の請に赴いて中印度

に來下して瑜伽論を演説す、是れ或は権機に随い或は付屬に順い

或は時に依つて権經を弘通す、然りと雖も法華經の涌出品の時・

地涌の菩薩を見て近成を疑うの間・仏・請に赴いて寿量品を

演説し分別功德品に至つて地涌の菩薩を勸奨して云く「惡世末法の

時能く是の経を持たん者」と、弥勒菩薩自身の付属に非ざれば之を
ひろ弘めずと雖も親り靈山会上に於て悪世末法時の金言を聴聞せし
ゆえ故に瑜伽論を説くの時末法に日本国に於て地涌の菩薩・法華經の
かんじん肝心を流布せしむ可きの由・兼ねて之を示すなり、肇公の翻經の
記に云く「大師須梨耶蘇摩左の手に法華經を持し右の手に鳩摩羅什
の頂を摩で授与して云く仏・日西に入つて遺耀將に東に及ばんと
す此の經典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」と云云、予此の記の文
を拜見して両眼滝の如く一身悦びをくす、「此の經典東北に縁
有り」と云云西天の月支国は未申の方・東方の日本国は丑寅の方な
り、天竺に於て東北に縁有りとは豈日本国に非ずや、遵式の筆に
云く「始め西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の
昇るが如し」と云云、正像二千年には西より東に流る暮月の西空よ
り始まるが如し末法五百年には東より西に入る朝日の東天より

出ずるに似たり、根本大師の記に云く「代を語れば則ち像の終り
末の初・地を

尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・鬪諍の時な

り、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るが故に「云云、

又云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機・今

正しく是れ其の時なり何を以て知る事を得ん安樂行品に云く

末世法滅の時なり「云云此の釈は語美しく心隠れたり、読まん人

之を解し難き

か、伝教大師の語は我が時に似て心は末法を樂いたもうなり、

大師出現の時は仏の滅後・一千八百余年なり、大集經の文を以て

之を勘うるに大師存生の時は第四の多造塔寺堅固の時に相当る全

く第五鬪諍堅固の時に非ず、而るに余処の釈に末法太有近の言は

有り定めて知んぬ鬪諍堅固の筆は我が時を指すに非ざるなり。

予情事の情を案ずるに大師薬王菩薩として靈山会上に侍して
仏・上行菩薩出現の時を兼ねて之を記したもつ故に粗之を諭す
か、而るに予地涌の一分に非ざれども兼ねて此の事を知る故に地涌
の大土に前立ちて粗五字を示す例せば西王母の先相には青鳥・客
人の来るには 鵲の如し、此の大法を弘通せしむるの法には必ず
一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし然れば則ち予
所持の聖教 多多之有り、然りと雖も兩度の御勘気・衆度の大難の
時は 或は一卷・二巻散失し 或は一字・二字脱落し 或は魚魯の
謬 或は一部二部損朽す、若し黙止して一期を過ぐるの後には
弟子等定んで謬乱出来の基なり、爰を以つて愚身老耄已前に之を
糾調 せんと欲す、而るに風聞の如くんば貴辺並びに大田金吾殿・
越中の御所領の内並びに近辺の寺寺に数多の聖教 あり等云云、
兩人共に大檀那為り所願を成ぜしめたまえ、涅槃經に云く「内には

智慧ちえの弟子でし有つて甚深じんじんの義ぎを解さとり外ぐわいには清淨しょうじょうの檀越だんのつ有つて佛法ぶつぽう久住くじゅうせんん云云、天台大師てんだいだいしは毛喜もうき等を相語かたらい伝教大師でんぎょうだいしはくにみちひろよ国道弘世等くくにみちひろよを恃怙じこむ云云。

仁王經にんのうきやうに云くいわ千里せんりの内うちをして七難ひちなん起おこらざらしむん云云、法華經ほけきやう

に云くいわ百由旬ひやくじゆんの内うちに諸もろの衰患さういげん無なからしむん云云、国主こくしゆ正法しょうほうを弘通くつう

すれば必ず此この徳とくを備そなへう臣民しんみん等ら此この法ほを守護しゆごせんんに豈あに家内けいだいの

大難だいにんを払はらわざらんや、又法華經ほけきやうの第八はちやうに云くいわ所願しよがん虚むしからず亦また

現世げんせいに於おいて其その福報ふくほうを得えんん又云くいわ当まさに今世いませいに於おいて現げんの果報かほうを

得えべしん云云、又云くいわ此この人は現世げんせいに白癩びやくらいの病びやういを得えんん又云くいわ

頭破づつべれて七分しちぶんと作つくらんん又第二卷に云くいわ經きやうを誦とく誦じゆ

し書持しよじすること有あらん者ものを見て輕賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懷いだかん乃至ないし

其その人ひと命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入いらんん云云、第五ごの卷まきに云くいわ若もし人ひと

惡にくみ罵ののらば口則くすなわち閉塞へいそくせんん云云、伝教大師でんぎょうだいしの云くいわ讚さんする者ものは福

を安明あんみょうに積み謗ほうずる者は罪つみを無間むげんに開く、等云云、安明あんみょうとは須弥山しゆみせんの名なり、無間むげんとは阿鼻あびの別名なり、国主持者こくしゆじしやを誹謗ひほうせば位うしなを失しんい臣民しんみん

行者ぎやうじやを毀きすれば身みを喪ほろす一國いこくを挙いりて用もちいざれば定さだめて
自反じたん他逼たひつ出来しゆせしむべきなり、又上品じやうほんの行者ぎやうじやは大おほの七難しちなん中品ちゆうほんの
行者ぎやうじやは二十九難なんの内うち下品げほんの行者ぎやうじやは無量むりやうの難なんの随したがひなり、又大おほの
七難しちなんに於おて七人しちにん有り第一だいいちは日月にちがつの難なんなり第一だいいちの内に又五ごの大難だいなん有あり
所謂い日月度にちげつどを失うし時節じせつ反逆はんぎやくし、或あるは赤日せきじつ出いで、或あるは黒日こくじつ出いで二三
四五しよごの日出いず、或あるは日蝕にちしょく

して光ひかり無なく、或あるは日輪にちりん一重いちじゆう二三にさん四五ご重輪じゆうりん現あらぜん、又経いに云いく、「二の
月つき並ならび出いでんと、今いま此この国土こくどに有あらざるは二の日ふたひの月つき等らの
大難だいなんなり余あの難なんは大體だいたい之これ有あり、今いま此この龜鏡きつきやうを以もて日本にほん國こくを浮うべ見
るに必ず法華經ほけきやうの大行者だいやうじや有あるか、既すでに之これを謗そる者ものに大罰だいばつ有あり之これを

信ずる者何ぞ大福無からん。

今兩人微力を励まし予が願に力を副え仏の金言を試みよ経文の
如く之を行ぜんに徴無くんば釈尊正直の经文多宝証 明の誠言・
十方分身の諸仏の舌相・有言無実と為らんか、提婆の大妄語に
過ぎ瞿伽利の大誑言に超えたらん日月地に落ち大地反覆し天を
仰いで声を発し地に臥して胸を押う殷の湯王の玉体を薪に積み戒
日大王の竜顔を火に入れしも今・此の時に当るか、若し此の書を
見聞して宿習有らば其の心を発得すべし、使者に此の書を持た

しめ早早北国に差し遣しつかわ金吾殿の返報を取りて速速是非を聞かし
めよ、此の願若し成ぜもば崑崙山の玉鮮かに求めずして蔵に収まり
大海の宝珠招かざるに掌たなごころに在らん、恐惶謹言。

下春十日

日蓮花押

曾谷入道殿

大田金吾殿

一六三

法蓮抄

建治元年

五十四歳御作

与曾谷

法蓮日礼

1040p

夫れそ以れば法華経第四の法師品に云く「若し悪人有つて不善の心
を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚
軽し若し人・一つの悪言を以て在家・出家の法華経を讀誦する者を

毀きし せん其その罪つみ甚はなはだ だ重おもしと等みよ云云、妙樂みよらく大師だいし云く「然しかも此この經きやうの功こう高く理り絶ぜつえたるに約やくして此この説せつを作なすことを得える余よ經きやうは然しからず」等云云、此この經文きやうもんの心こころは一劫いつくわうとは人壽にんじゆう八万歳はちまんありしより百年ひゃくねんに一歳さいをすて千年せんねんに十歳じゆうさいをすつ此この如ごとく次第しだいに減へずる程ほどに人壽にんじゆう十歳じゆうさいになりぬ、此この十歳じゆうさいの時ときは当時とうじの八十はちじゆうの翁おきなのごとし、又人壽にんじゆう十歳じゆうさいより百年ひゃくねんありて十一歳じゆういちさいとなり又百年ひゃくねんありて十二歳じゆうにさいとなり乃至な一千年せんねんあらば二十歳にじゆうさいとなるべし乃至な八万歳はちまんとなる、此この一減いつげん一増いちぞうを一劫いつくわうとは申もうすなり、又種しゆ種くわの劫くわありといへども且しかく此この劫くわを以もつて申もうすべし、此この一劫いつくわうが間ま・身しん口くち意いの三業さんごうより事ことおこりて仏ぶつをにくみた

てまつる者ものあるべし例たとせば提婆達多だいばだつたがごとし、仏ぶつは淨飯王じやうはんの太子たいし・提婆達多だいばだつたは斛飯王こくはんのうの子こなり、兄弟きやうだいの子息しそくなる間ま・仏ぶつの御ごいとこにてををはせしかども今いまも昔むかしも聖人しやうにんも凡夫ぼんぶも人ひとの中ちゆうをたがへること女人にょにん

よりして起りたる第一だいいちのあだにてはんべるなり、
積迦しやか如来にょらいは
悉達しつた太子たいしとしてをはしし時提婆達多だいはだつたも同じ太子たいしなり、
耶輸やしゆ大臣だいじんに
女あり耶輸多羅女あしゆたら

となづく五天竺第一の美女・四海名譽の天女なり、悉達と提婆と共に後にせん事をあらそひ給いし故に中あしくならせ給いぬ、後に悉達は出家して仏とならせ給い提婆達多・又須陀比丘を師として出家し給いぬ、仏は二百五十戒を持ち三千の威儀をととのへ給いしかば諸の天人これを渴仰し四衆これを恭敬す、提婆達多を人たとまざりしかば、いかにしてか世間の名譽・仏にすぎんとはげみしほどにとかう案じいだして仏にすぎて世間にたとまれぬべき事五つあり、四分律に云く一には糞掃衣・二には常乞食・三には一座食・四には常露座・五には塩及び五味を受けず等云云、仏は人の施す衣をうけさせ給う提婆達多は糞掃衣、仏は人の施す食をうけ給う提婆は只常乞食、仏は一日に一二三反も食させ給い提婆は只一座食、仏は塚間・樹下にも処し給い提婆は日中常露座なり、

仏は便宜にはしを復は五味を服し給い提婆はしを等を服せず、かうありしかば世間・提婆の仏にすぐれたる事・雲泥なり、かくのごとくして仏を失いたてまつらんとうかがひし程に頻婆舎羅王は仏の檀那なり日日に五百輛の車を数年が間・一度もかかさずおくりて仏・並びに御弟子等を供養し奉る、これをそねみ・とらんがために未生怨太子

をかたらいて父・頻婆舎羅王を殺させ我は仏を殺さんとして・或は石をもつて仏を打ちたてまつるは身業なり、仏は誑惑の者と罵詈せしは口業なり、内心より宿世の怨とをもひしは意業なり三業相応の大悪此れにはすぐべからず、此の提婆達多ほどの大悪人・三業相応して一中劫が間・釈迦仏を罵詈・打杖し嫉妬し候はん大罪はいくらほど

か重く候べきや、此の大地は厚さは十六万八千由旬なりされば四

たいかい
大海の水をも九山の土石をも三千の草木をも一切衆生をも頂戴

して候へども落ちもせず・かたぶかず破れずして候ぞかし、しかれど

も提婆達多が身は既に五尺の人身なりわづかに三逆罪に及びしか

ば大地破れて地獄に入りぬ、此の穴・天竺にいまだ候・玄奘三蔵・

かんど
漢土より

がっし
月支に修行して此れをみる西域と申す文に載せられたり、而るに

ほけきよう
法華經の末代の行者を心にも・をもはず色にもそねまず只たわふ

れてのりて候が上の提婆達多がごとく三業相應して一中劫仏を

めり
罵詈し奉るにすぎて候と

とかれて候、何に況や当世の人の提婆達多がごとく三業相應しての大悪心をもつて多年が間・法華經の行者を罵詈・毀辱・嫉妬・打擲・讒死・歿死に当てんをや。

問うて云く末代の法華經の行者を怨める者は何なる地獄に墮つるや、答えて云く法華經の第二に云く、「經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば復死し展轉して無数劫に至らんと等云云、此の大地の下・五百由旬を過ぎて炎魔王宮あり、その炎魔

王宮より下・一千五百由旬が間に八大地獄並びに一百三十六の地獄あり、其の中に一百二十八の地獄は輕罪の者の住処・八大地獄は重罪の者の住処なり、八大地獄の中に七大地獄は十惡の者の住処なり、第八の無間地獄は五逆と不孝と誹謗との三人の住処な

り、今法華經の末代の行者を戲論にも罵詈・誹謗せん人人はおつべ
しと説き給へる文なり、法華經の第四法師品に云く「人有つて仏道
を求めて一劫の中に於て乃至持經者を歎美せんは其の福復彼に
過ぎん」等云云、妙樂大師云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ
く供養する有らん者は福十号に過ぐ」等云云、夫れ人中には
転輪聖王第一なり此の輪王出現し給うべき前相として大海の中
に優曇華と申す大木生いて華さき実なる、金輪王出現して四天の
山海を平になす大地は縣の如くやはらかに大海は甘露の如くあま
く大山は金山・草木は
七宝なり、此の輪王須臾の間に四天下をめぐる、されば天も守護し
鬼神も来つてつかへ竜王も時に随つて雨をふらす、劣夫なんども
これに従ひ奉れば須臾に四天下をめぐる、是れ偏に転輪王の十善
の感得せる大果報なり、毘沙門等の四大天王は又これには似るべく

もなき四天下の自在の大王なり、帝釈は利天の主・第六天の

魔王は欲界

いただいたき

ここに

さんがい

こ

じょうぼん

じゅうぜんかい

むしゃ

だいぜん

の頂に居して三界を領す、此れは上品の十善戒・無遮の大善の所

だいぼんてんのう

さんがい

しつかい

いただき

こ

まおう

たいしゃく

感なり、大梵天王は三界の天尊・色界の頂に居して魔王・帝釈を

さんぜんだいせんかい

さんぜんだいせんかい

しつかい

いただき

こ

まおう

たいしゃく

したがへ三千大千界を手ににぎる、有漏の禅定を修行せる上に慈

さんぜんだいせんかい

むりょう

うろ

ぜんじょう

しゆきょう

しゆきょう

悲・喜・捨の四無量心を修行せる人なり、声聞と申して舍利弗・

かしよう

さんがい

むりょう

しゆきょう

しゆきょう

しゆきょう

しゆきょう

む

が

迦葉等は二百五十戒・無漏の禅定の上に苦・空・無常・無我の觀をこ

さんがい

むりょう

むろ

ぜんじょう

く

くう

むじょう

む

が

らし三界の

けんじ 見思を断尽し水火に自在なり故に梵王と帝釈とを眷属とせり、
えんかく 縁覚は声聞に似るべくもなき人なり仏と出世をあらそふ人なり、
りょうし 昔獵師ありき飢えたる世に利と申す辟支仏にひえの飯を一盃
くよう 供養し奉りて彼の獵師九十一劫が閻人中天上の長者と生る、
こんじよう 今生には阿那律と申す天眼第一の御弟子なり、此れを妙楽大師
しゃく 釈して云く「穉飯輕し
いえど と雖も所有を尽し及び田勝るるを以ての故に勝るる報を得る」等
しゃく 云云、釈の心はひえの飯は輕しといへども貴き辟支仏を供養する
ゆえ 故にかかる大果報に度度生るとこそ書かれて候へ又菩薩と申すは
もんじゆ 文殊・弥勒等なり、此の大菩薩等は彼の辟支仏に似るべからざる
だいにん 大人なり、仏は四十二品の無明と申す闇を破る妙覚の仏なり、八
まんげつ 月十五夜の満月のごとし、此の菩薩等は四十一品の無明をつくして
とうかく 等覚の山の頂にのぼり十四夜の月のごとし、仏と申す

は上の諸人かみ しよにんには百千万億倍せんまんすぐれさせ給たまへる大人だいにんなり、仏には必ず
三十二相そあり其の相もうと申まうすは梵音声ぼんおんじよう・無見頂相むけんちようそう肉にく・白毫相びやくごう・
乃至ないし・千輻輪相ぶくりん等らなり、此の三十二相の中の一相をば百福を以て成
じ給たまへり、百福と申まうすは假令たとい大医ありて日本国にほんこく・漢土かんど・五天竺てんじく十六
の大国たいこく・五百の中国ちゆうこく・十千の小国しよこく・乃至ないし・一閻浮提えんぶだい・四天下してんげ・六欲天
・乃至ないし・三千大千世界さんぜんだいせんせかいの一切衆生いっさいしよじようの眼まなこの盲こたるを本の如ごとく一時いちじに
開そけたらんほどの大功德くだくを一つの福として此の福・百をかさねて
候そうらはんを以て三十二相の中の一相を成ぜり、されば此の一相の
功德くだくは三千大千世界さんぜんだいせんせかいの草木そうもくの数かずよりも多く四天下してんげ
の雨の足よりもすぎたり、設たといえこうい壞劫そうぎやだの時とき・僧そうぎやだ・陀もつと申まうす大風たいふうありて
須弥山しよみせんを吹き抜ぬいて色究竟天しきくきよつてんにあげて・かへつて微塵みじんとなす大風たいふうな
り、然しかれども仏おんみの御身おんみの一毛ひとこをば動かさず仏の御胸おんむねに大火だいかあり
平等大慧びようどうだいえ・大智光明だいぢみよう・火坑三昧かきようさんまいと云いう、涅槃ねはんの時ときは此の大火だいかを胸むねよ

り出して一身を焼き給たまいしかば六欲・四海しかいの天神てんじん・竜衆等・仏を惜おしみ
奉たてまつる故ゆえにあつまりて大雨だいうを下くだし三千さんぜんの大地だいちを水となし須弥しゆみは流る
といへども此こゝの大火だいかはきへず、仏にはかかる大徳だいとくましますゆへ
に阿闍世王あじゃせは十六大国たいこくの悪人あくにんを集め一四天下してんげの外道げどうをかたらひ
提婆だいばを師として無量むりようの悪人あくにんを放ちて仏弟子ぶつでしをのりうち殺害さつがいせし
みならず、賢王けんおうにてとがもなかりし父の大王だいおうを一尺の釘をもつて七
処までうちつけ、はつけ

にし生母をば王のかんざしをきり刀を頭くびにあてし重罪じゅうざいのつもりに
悪瘡あくそう七処しちくに出いでき、三七日さんじつを経て三月さんげつの七日なな日に大地だいち破われて無間むげん
地獄じごくに墮おちて一劫いつくわうを経ふべかりしかども仏ぶつの所ところに詣もつで悪瘡あくそういゆるのみ
ならず無間むげん地獄じごくの大苦だいくをまぬかれ四十年しじゅうねんの寿命じゆめい延のびびたりき、又
耆婆きば大臣だいじんも御ごつかひなりしかば炎えんの中なかに入いって瞻婆せんば長者ちやうじゃが子こを取
り出いしたりき、之これを以もつて之これを思おもうに一度ひとたびも仏ぶつを供養くやうし奉たてまつる人ひとはいか
なる悪人あくにん・女人にょにんなりとも成仏じやうぶつとくどうたがい疑ぎ無なし、提婆だいばには三十相さんじうさう
あり二相にさうかけたり所謂いわゆる白毫びやくこうと千輻輪せんぷくりんとなり、仏ぶつに二相にさう劣せうりたりし
かば弟子でし等ら軽かろく思おもいぬべしとて螢火ほたるびをあつめて眉間みけんにつけて白毫びやくこうと
云いひ千輻輪せんぷくりんには鍛冶たんぎに菊形きくがたをつくらせて足あしに付けて行くいくほどに足焼あしや
て大事だいじになり結句けつこ死しせんとせしかば仏ぶつに申もうす、仏御手ぶつてを以もつてなで
給たまいしかば苦痛くつうさりき、ここに改悔かいげあるべきかと思おもいしにさはな
くし

瞿曇が習ふ医師はござかしかりけり又術にて有るなど云ひしなり、かかる敵にも仏は怨をなし給はず何に況や仏を一度も信じ奉る者をば争でか捨て給うべきや。

かかる仏なれば木像・画像にうつし奉るに優填大王の木像は歩をなし摩騰の画像は一切経を説き給ふ、是れ程に貴き教主釈尊を一時・一時ならず一日・二日ならず一劫が間 掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水ををもひ飢えて食を思うがごとく間無く供養し奉る功德よりも戯論に

一言継母の継子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讚め供養せん功德は彼の三業相應の信心にて一劫が間・生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候、これを妙楽大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十

の御名みななり十号くようを供養くようせんよりも末代まつだいの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを供養くようせん
功德くどくは勝まさると

かかれたり、妙樂みょうらく大師だいしは法華經ほけきょうの一切經いっさいきょうに勝すぐれたる事を二十あつ

むる其その一いちなり、已上いじやう・上じやうの二につの法門ほつもんは仏説ぶつせつにては候あへども心え

られぬ事ことなり争いかでか仏ぶつを供養くようし奉たてまつるよりも凡夫ほんぶを供養くようするがまさる

べきや、而しかれども是これを妄語もうごと云いはんとすれば釈迦しやくか如来にょらいの金言きんげんを疑うたがい

い多宝たほう仏ぶつの証しょう明みやうを輕かろしめ十方じゅうぽう諸佛しよぶつの舌相ぜつそうをやぶるになりぬべし、

若もし爾しからば

現身げんしんに阿鼻地獄あびじごくに墮おつべし、巖石いがんにのぼりて・あら馬うまを走はらするが
如ごとし心肝こゝろしづかならず、又信まことぜば妙覺みょうかくの仏ぶつにもなりぬべし如何いかにして
か今度このたび・法華經ほけきょうに信心しんじんをとるべき信まことなくして此こゝの經きやうを行いぜんは手てな
くして宝山ぼんざんに入り足あしなくして千里せんりの道みちを企くつるが如ごとし、但ただし近ちかき
げんしよう
現証げんじやうを引ひいて遠とほき信まことを取るべし仏ぶつの御歳ごさい八十はちじゅうの正月しょうげつ一日いちにち・法華經ほけきょう
を説ときおはらせ給たまへて御物語おんものがたりあり、「阿難あなん・弥勒みろく・迦葉かしょう・我世いせいに出いでし
事ことは法華經ほけきょうを説とかんがためなり我既すでに本懐ほんかいをとげぬ今は
世よにありて詮まことなし今三月こんさんげつありて二月十五日にがつごじゅうごにちに涅槃ねはんすべし云云、
いっさいないげ
一切内外いっさいないげの人人ひとびと疑うたがひをなせしかども仏語ぶつごむなしからざればついに二
月十五日にがつごじゅうごにちに御涅槃ねはんありき、されば仏の金言きんげんは実まことなりけるかと少し
信心しんじんはとられて候まち、又仏記ぶつぎし給たまふ「我滅度めつどの後のち・一百年ももねんと申まうさんに
あそかだいおう
阿育大王あいうだいおうと申まうす王出現しゅつげんして一閻浮提えんぶだい三分さんぶんの一いちが主しゅとなりて八万四
千せんの塔たつを立て我われが舍利しやりを供養くやうすべし云云、人疑うたがひい申まうさんほどに

案の如くごとし出現しゆつげんして候まういき是こゝよりしてこそ信心しんじんをばとり

て候まういつれ、又また云いく「我滅後めつごに四百年しうひゃくねんと申まうさんに迦か式しき色しき迦か王わうと申まうす

大王だいおうあるべし五百ごひゃくの阿羅漢あらかんを集めて婆沙論ばしやろんを造るべし」と是又また仏記ぶつぎ

のごとくなりき、是等これらをもつてこそ仏の記文きもんは信まをぜられて候まうへ若もし

かみあ上に挙あぐる所の二ふたの法門ほうもん・妄語もうごならば此こゝの一いつ経きやうは皆みな妄語もうごなるべし、

寿量品じゆりやうぼんに我は過去かこ五百塵点劫ごひゃくじんでんじやくのそのかみの仏ぶつなりと説とき給たまう我等われら

は凡夫ほんぶなり過すぎにし方は生なれてより已来このかたすらなをおぼへず況いはや一

生二生じふにじやうをや況いはや五百塵点劫ごひゃくじんでんじやくの事をば争いかでか信まをず

べきや、又また舍利弗等しやりほつに記しるして云いく「汝なんじ未来世みらいせに於おいて無量無辺むりやうむへん

不可思議劫ふかしぎを過すぎ及および至当まに作さ仏ぶつすることを得うべし号ごうを華光如来げこうにょらいと

曰いわんんと云いふ、又また摩訶迦葉まかしょうに記しるして云いく「未来世みらいせに於おいて乃至最後ないしさいご

の身に於おいて仏ぶつと成なる為なることを得うん名なけて光明如来くわうみやうにょらいと曰いわんんと云いふ、

此等これらの経文きやうもんは又また未来みらいの事ことなれば我等われら凡夫ほんぶは信まをずべしともおぼえ

ず、されば過去かこ

未来みらいを知らざらん凡夫ぼんぶは此の経は信じがたし又修行しゆぎやうしても何の詮
かあるべき是これを以て之これを思しうに現在げんざいに眼前がんぜんの証拠しよつこあらんずる人此
の経を説かん時は信ずる人もありやせん。

今法蓮上人しやうにんの送り給たまえる諷誦ふじゆの状じやうに云いく「慈父幽靈じふ第十三年の
忌辰きしんに相当あひあたり一乗いちじやう・妙法蓮華經みやうほうれんげきよつ五部を転読てんどくし奉たてまつる」等云云、夫れ
教主きよしゆしやくそん釈尊しやくそんをば大覺世尊だいかくせそんと号なづきたてまつる、世尊せそんと申まうす尊の一字を
高かうと申まうす高と申まうす一字は又孝と訓くんずるなり、一切いっさいの孝養かうやうの人の中
に第一だいいちの孝養かうやうの人なれば世尊せそんと号なづし奉たてまつる、釈迦しやくか如來にょらいの御身おんみは金色
にして三十二相を備へ給たまふ、彼の三十二相の中に無見頂相むけんちやうそうと申まうすは
仏ぶつは丈六じやうろくの御身おんみなれども竹杖ちくじやうげどう外道げだうも其その御長みたけをはからず梵天ぼんてん
も其その頂いただきを見みず故ゆえに無見頂相むけんちやうそうと申まうす是れ孝養かうやう第一だいいちの大人だいにんなれば
かかる相を備へまします、孝經かうぎやうと申まうすに二あり一には外典げてんの孔子かうしと

申せし聖人の書に孝経あり、一には内典今の法華経是なり、内外
異なれども其意は是れ同じ、釈尊塵点劫の間修行して仏にならん
とはげみしは何事ぞ孝養の事なり、然るに六道・四生の一切衆生は
皆父母なり

孝養おへざりしかば仏にならせ給はず、今法華経と申すは一切
衆生を仏になす秘術まします御経なり、所謂地獄の一人・餓鬼の
一人・乃至・九界の一人を仏になせば一切衆生・皆仏になるべきこ
とはり顕る、譬えば竹の節を一つ破ぬれば余の節亦破るるが如し、
困暮と申すあそびにしちようと云う事あり一の石死しぬれば多の
石死ぬ、法華経

も又此くの如し金と申すものは木草を失う用を備へ水は一切の火
をけす徳あり、法華経も又一切衆生を仏になす用おはします、
六道・四生の衆生に男女あり此の男女は皆我等が先生の父母な

り、一人ももれば仏になるべからず故に二乗をば不知恩の者と定め
て永不成仏と説かせ給う孝養の心あまねからざる故なり、仏は
法華經をさとらせ給いて六道・四生の父母孝養の功德を身に備へ
給へり、此の仏の御功德をば法華經を信ずる人にゆづり給う、例せ
ば
悲母の食う物の乳となりて赤子を養うが如し、今此の三界は皆
是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」等云云、
教主釈尊は此の功德を法華經の文字となして一切衆生の口にな
めさせ給う、赤子の水火をわきまへず毒藥を知らざれども乳を含
めば身命をつぐが如し、阿含經を習う事は舍利弗等の如くならざ
れども華嚴經を
さとの事解脱月等の如くならざれども乃至一代聖教を胸に浮べ
たる事文殊の如くならざれども一字一句をも之を聞きし人、仏に

ならざるはなし、彼の五千の上慢じょうまんは聞きてさとらず不信ふしんの人なり、
然しかれども謗ほうぜざりしかば三月

を経て仏になりనికి「若しは信じ若しは信ぜざれば即ち不動国に生ぜん」と涅槃經に説かるるは此の人の事なり、法華經は不信の者すら謗ぜざれば聞きつるが不思議にて仏になるなり、所謂七步蛇に食れたる人一步乃至七步をすぎず毒の用の不思議にて八歩をすぎぬなり、又胎内の子の七日の如し必ず七日の内に転じて余の形となる八日をすぎさず、今の法蓮上人も又此くの如し教主釈尊の御功德・御身に入りかはらせ給いぬ、法蓮上人の御身は過去聖靈の御容貌を残しおかれたるなり、たとへば種の苗となり華の菓となるが如し其華は落ちて菓はあり種はかくれて苗は現に見ゆ、法蓮上人の御功德は過去聖靈の御財なり、松さかふれば柏よろこぶ芝かるれば蘭なく情なき草木すら此くの如し何に況や情あらんをや又父子の契をや。

彼の諷誦に云く「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで

釈迦如来の御前に於て自ら自我偈一卷を誦読し奉りて聖靈に
回向す等云云、当時日本国の人、仏法を信じたるやうには見へて
候へども古いにしへいまだ仏法のわたらざりし時は仏と申す事も法と申す
事も知らず候しを守屋と上宮太子と合戦の後、信ずる人もあり又
信ぜざるもあり、漢土も此くの如し摩騰・漢土に入つて後、道士と
諍論あり道士まけしかば始めて信ずる人もありしかども不信の人
多し、されば烏竜と申せし能書は手跡の上手なりしかば人之を
用ゆ、然れども仏經に於てはいかなる依怙ありしかども書かず最後
臨終の時、子息遺童を召して云く汝我が家に生れて芸能をつぐ我
が孝養には仏經を書くべからず殊に法華經を書く事なかれ、我が
本師の老子は天尊なり天に二つの日なし而に彼の經に唯我一人と
説くきくわい第一なり、若し遺言を違へて書く程ならば忽に悪靈
となりて命を断つべしと云つて舌八つにさけて頭七分に破れ

五根より血を吐いて死し畢おわんぬ、されども其その子善悪ぜんあくを弁わへざれば
我が父の謗法ほうほうのゆへに悪相現げんじて阿鼻地獄あびじこくに墮おちたりともしらず
遺言ゆいごんにまかせて仏經ぶつきょうを書く事なし況や口に誦ずする事あらんをや、か
く過すぎ行く程に時の王を司馬氏しばしと号し奉たてまつる御仏事ぶつじのありしに書写しょしゃ
の經あるべしとて漢土第一かんどだいいちの能書たずを尋ねらるるに遺童いりゆうに定まりぬ、
召し

て仰せ付けらるるに再三辞退申せしかば力及ばずして他筆にて一部
の経を書かせられけるが、帝王心よからず尚遺竜を召して仰せに
云く汝親の遺言とて朕が経を書かざる事其の謂無しと雖も且く
之を免ず但題目計りは書くべしと三度勅定あり、遺竜猶辞退申す
大王竜顔心よからずして云く天地尚王の進退なり、然らば汝が親
は即ち我が家人にあらずや、私をもつて公事を軽んずる事あるべか
らず、題目計りは書くべし若し然らずんば、仏事の庭
なりといへども速に汝が頭を刎ぬべしとありければ題目計り書け
り、所謂妙法蓮華経巻第一、乃至巻第八等云云、其の暮に私宅に
歸りて歎いて云く我親の遺言を背き王勅術なき故に仏経を書きて
不孝の者となりぬ天神も地祇も定んで瞋り不孝の者とおぼすらん
とて寝る、夜の夢の中に大光明出現せり朝日の照すかと思へば
天人・一人庭上に立ち給へり又無量の眷属あり、此の天人の頂上

の虚空に仏・六十四仏まします、遺竜・合掌して問うて云く如何なる天人ぞや、答えて云く我は是れ汝が父の烏竜なり仏法を謗せし故に舌八つにさけ五根より血を出し頭七分に破れて無間地獄に墮ちぬ、彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしともおぼへざりしに無間の苦は尚百千億倍なり、人間にして鈍刀をもて爪をはなち鋸をもて頸をきられ炭火の上を歩ばせ棘にこめられなんどせし人の苦を此の苦にたとへばかずならず、如何してか我が子に告げんと思ひしかどもかなはず、臨終の時・汝を誡て仏經を書くことなかれと遺言せし事のくやしさを申すばかりなし、後悔先にたたず我が身を恨み舌をせめしかども・かひなかりしに昨日の朝より法華經の始の妙の一字・無間地獄のかなへの上に飛び来つて變じて金色の釈迦仏となる、此の仏三十二相を具し面貌満月の如し、大音声を出して説て云く「仮令法界に遍く善を断ちたる諸の衆生も

一たびほけきよう法華經を聞かば決定けつじようして菩提ぼだいを成じようぜんと云云、此の文字もんじの中よりだいりう大雨降りて無間地獄むげんじごくの炎をけす閻魔王えんまおうは冠かんむりをかたづけうやまて敬ごくそつひ獄卒は杖をすてて立てり、一切いっさいの罪人ざいにんはいかなる事ぞとあはてたり、又法の一字来れり前の如ごとし又蓮・又華・又經・此かくの如ごとし六十四字来つて六十四仏となりぬ、無間地獄むげんじごくに仏・六十四体ましませばにちがつ日月の六十四そらが天に出

たるごとし、天より甘露をくだして罪人に与ふ、抑此等の大善は
何なる事ぞと罪人等・仏に問い奉りしかば六十四の仏の答に云く
我等が金色の身は栴檀・宝山よりも出現せず是は無間地獄にある
烏竜が子の遺竜が書ける法華經八卷の題目の八八・六十四の文字な
り、彼の遺竜が手は烏竜が生める処の身分なり、書ける文字は
烏竜が書くにてあるなりと説き給いしかば無間地獄の罪人等は
我等も娑婆にありし時は子もあり婦もあり眷属もありき、いかに
と

ぶらはぬやらん又訪へども善根の用の弱くして来らぬやらんと歎け
ども歎けども甲斐なし、或は一日・二日・一年・二年・半劫・一劫に
なりぬるにかかる善知識にあひ奉つて助けられぬるとて我等も眷属
となりて 利天にのぼるか、先ず汝をおがまんとて来るなりとか
たりしかば、夢の中にうれしさ身にあまりぬ、別れて後又いつの世

にか見んと思ひし親のすがたをも見奉り仏をも拝し奉りぬ、六十四
仏の物語に云く我等は別の主なし汝は我等が
檀那なり、今日よりは汝を親と守護すべし汝をこたる事なか
れ、一期の後は必ず来つて都率の内院へ導くべしと御約束ありしか
ば遺棄ことに畏みて誓いて云く今日以後外典の文字を書く可からず
等云云、彼の世親菩薩が小乗経を誦せじと誓い日蓮が弥陀念仏
を申さじと願せしがごとし、さて夢さめて此の由を王に申す、大王
の勅宣に云く此の仏事已に成じぬ此の由を願文に書き奉れとあり
しかば勅宣の如くにし、さてこそ漢土・日本国は法華経にはならせ
給いけれ、此の状は漢土の法華伝記に候。

是は書写の功德なり、五種法師の中には書写は最下の功德なり、
何に況や読誦など申すは無量無辺の功德なり、今の施主十三年
の間・毎朝読誦せらるる自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべ

し、夫れそ法華経ほけきょうは一代いちだい聖教しやうきやうの骨髓こつずいなり自我じがけ偈げは二十八品のたましひなり、三世さんぜの諸仏しよぶつは寿量品じゆりやうほんを命いのちとし十方じゆっほうの菩薩ぼさつも自我じがけ偈げを眼目がんもくとす、自我じがけ偈げの功德くどくをば私ひそかに申もうすべからず次下つきしもに分別ぶんべつ功德品くどくに載のせられたり、此こゝの自我じがけ偈げを聴聞ちやうもんして仏ほとけになりたる人人ひとびとの数をあげ候まをには小千せうせん・大千さんぜん・三千世界さんぜんせかいの微塵みじんの数をこそあげて候へ其その上やくおう薬王品やくおうほん已下いかの六品得道とくだうのもの自我じがけ偈げ

の余残なり、涅槃經四十卷の中に集りて候いし五十二類にも自我偈の功德をこそ仏は重ねて説かせ給いしか、されば初め寂滅道場に十方世界微塵数の大菩薩・天人等・雲の如くに集りて候いし大集・大品の諸聖も大日經・金剛頂經等の千二百余尊も過去に法華經の自我偈を聴聞してありし人人、信力よはくして三五の塵点を經しかども今度釈迦仏に値い奉りて法華經の功德すむ故に靈山をまたずして爾前の經經を縁として得道なると見えたり。

されば十方世界の諸仏は自我偈を師として仏にならせ給う世界の人の父母の如し、今法華經・寿量品を持つ人は諸仏の命を續ぐ人なり、我が得道なりし經を持つ人を捨て給う仏あるべしや、若し此れを捨て給はば仏還つて我が身を捨て給うなるべし、これを以て思うに田村利仁なんどの様なる兵を三千人生みたらん女人あるべし、此

の女人にょにんを敵てんとせん人は此こゝの三千人さんぜんの將軍しゆみへんをかたきに・うくるにあらずや、法華經ほけきようの自我偈じがげを持つ人を敵てんとせんは三世さんぜの諸仏しよぶつを敵てんとするなるになるべし、今の法華經ほけきようの文字もんじは皆生身みなしようしんの仏ぶつなり我等われらは肉眼にくげんなれば文字もんじと見るなり、たとへば餓鬼がきは恒河こうがを火かと見る・人は水みづと見みる・天人てんにんは甘露かんろと見る、水みづは一ひとなれども果報かほうにしたがつて見るところ各別かくべつな

り、此こゝの法華經ほけきようの文字もんじは盲目もうもくの者は之これを見ず肉眼にくげんは黒色くろしきと見る二乗にじようは虚空こくうと見みる・菩薩ぼさつは種種しじゆじゆくの色いろと見みる・仏種ぶつしゆ・純熟じゆんじゆくせる人は仏ぶつと見奉たてまつる、されば經文きやうもんに云いく「若もし能よく持もつこと有あるは即すなわち仏身ぶつしんを持つもつなり」等と云いふ、天台てんだいの云いふ

「稽首妙法蓮華經一帙・八軸・四七品・六万九千三八四・一一文文・
是眞仏・眞仏説法利衆生」等と書かれて候まう。

之これを以もつて之これを案あずるに法蓮法師ほつしは毎朝まいあ口くちより金色こんじきの文字もんじを出現しゆつげん

す此の文字もんじの数は五百十字なり、一一の文字もんじ変じて日輪にちりんとなり
日輪にちりん変じて釈迦しやくか如来にやらいとなり大光明だいこうみょうを放はなつて大地だいちをつきとをし
さんあくどう さんあくどう さんあくどう さんあくどう さんあくどう
三悪道さんあくどう・無間むげん・大城だいじょうを照てらし乃至ないし東西南北とうざいなんぼく・上方じょうほうに向つては非想ひそう・非
非想ひそうへものぼりいかなる処ところにも過去かこ聖靈しょうりょうのおはすらん処ところまで
尋たずね行き給たまいて彼の聖靈しょうりょうに語たまり給たまうらん、我われをば誰たれとか思食おほしめす我
は是これ汝なんじが子息しそく・法蓮ほけきんが毎朝まいしゆ誦じゆする所の法華經ほけきんの自我じがげ偈ぎの文字もんじな
り、此の文字もんじは汝なんじが眼まなことならん耳みみとならん足あしとならん手てとならん
とこそねんごろに語かたらせ給たまうらめ、其そのの時とき・過去かこ聖靈しょうりょう

は我が子息しそく・法蓮は子にはあらず善知識ぜんちしきなりとて娑婆世界しゃばせかいに向つて
おがませ給たまうらん、是こそ実の孝養じうぎようにては候なれ。

そもそもほけきよう

抑おさ法華經ほけきようを持つと申もうすは經は一なれども持つ事は時に随したがつて色

色なるべし、或あるは身肉をさひて師しに供養くようして仏になる時もあり、又
身を牀ゆかとして師しに供養くようし又身を薪たきぎとなし、又此の經のために杖木じようもく
をかほり又精進しじゆんし又持戒じかいし上の如ごとくすれども仏にならぬ時もあり
時に依よつて不定ふじようなるべし、されば天台大師てんだいだいしは適時ちやくじにい而已いと書かれ、章
安だいし大師だいしは「取捨得宜不可かいつつう一向いつう」等云云。

問いうて云いく何いかなる時ときか身肉くようを供養くようし何いかなる時ときか持戒じかいなるべき、

答いえて云いく智者ちしやと申もうすは此かくの如ごとき時ときを知りて法華經ほけきようを弘通ぐつうする

だいいち

が第一だいいちの秘事ひじなり、たとへば渴者かつしやは水こそ用もちうる事ことなれ弓きゆう箭兵せんひやう杖じよう

はよしなし、裸なる者は衣を求む水は用なし一をもつて万を察すべ
し、大鬼神きじんありて法華經ほけきようを弘通ぐつうせば身みを布施ふせすべし余の衣食いしょくは詮せんな

し、悪王あつて法華經を失わば身命をほろぼすとも随うべからず、

持戒精進の大僧等・法華經を弘通するやうにて而も

失うならば是を知つて責むべし、法華經に云く、「我身命を愛せず

但だ無上道を惜しむ」云云、涅槃經に云く「寧ろ身命を喪うとも

終に王の所説の言教を匿さざれ」等云云、章安大師の云く

「寧喪身命不匿教とは身は軽く法は重し身を死して法を弘む」等云

云。

然るに今日蓮は外見の如くば日本第一の僻人なり我が朝六十六

箇国・一の島の百千万億の四衆・上下万人に怨まる、仏法・日本国に

渡つて七百余年いまだ是程に法華經の故に諸人に悪まれたる者な

し、月氏・漢土にもありともきこえず又あるべしともおぼへず、され

ば一閻浮提第一の僻人ぞかし、かかるものなれば上には一朝の威

を

恐れ下には万民の嘲を顧みて親類もとぶらはず外人は申すに
及ばず出世の恩のみならず世間の恩を蒙りし人も諸人の眼を恐れ
て口をふさがんためや心に思はねどもそしるよしをなす、数度
事にあひ兩度御勘気を蒙りし

かば我が身の矢とがに当るのみならず、行通人々の中にも、或あるは御勘気
或あるは所領しよりようをめされ、或あるは御内を出され、或あるは父母・兄弟ふぼ・きょうだいに捨てら
る、されば付きし人も捨てはてぬ今又付く人もなし、殊ことに今度このたびの
御勘気ごかんきには死罪しざいに及ぶべきがいかが思はれけん佐渡さどの国につかはさ
れしかば彼の国へ趣おもむく者は死は多く生は稀まれなり、からくして行きつ
きたりしかば殺害謀叛さつがいむほんの者よりも猶重なおしげく思はれたり、鎌倉かまくらを出で
しより日に強敵じょうてきかさなるが如ごとし、ありとある人は念仏ねんぶつの
持者じしやなり、野を行き山に行くにもそばひらの草木そうもくの風に随したがつてそよ
めく声も、かたきの我を責せむるかとおぼゆ、やうやく国にも付きぬ
北国の習なれば冬は殊ことに風はげしく雪ふかし衣薄いはくく食ともし、根を
移されし橘たちばなの自然じねんにからたちとなりけるも身の上につみしられた
り、栖すみかにはおばな・かるかや・おひしげれる野中の三昧さんまいばらにおち
やぶれた

る草堂の上は雨もり壁は風もたまらぬ傍あたりに昼夜・耳に聞く者はまくらにさゆる風の音、朝あしたに眼まなこに遮さえぎる者は遠近おちこちの路を埋む雪なり、現身げんしんに餓鬼道がきを経・寒地獄じごくに墮おちぬ、彼の蘇武そぶが十九年の間・胡国ここくに留とどめられて雪を食し李陵りりょうが巖窟いんくつに入つて六年蓑みのをきてすこしけるも我が身の上なりき。

今適御ごかんき勘気かまくらゆりたれども鎌倉中かまくらにも且しばらも身をやどし迹しやくをとどむべき処ところなければ・かかる山中の石のはざま松の下に身を隠かくし心を静しずむれども大地だいちを食とし草木そうもくを著つざらんより外は食もなく衣も絶とえぬる処ところにいかなる御心ごこころにて・かく・かきわけて御訪ごといのあるやらん、知らず過去かこの我が父母ふぼの御神みたましいの御身おんみに入りかはらせ給たまうか、又また知らず大覺だいかく世尊せそんの御めぐみにやあるらん涙なみだこそ・おさへがたく候まうへ。

問いうて云いく抑おさ正嘉しょうかの大地震だいいじしん・文永ぶんえいの大彗星すいせいを見て自他じたの叛逆はんぎやく・

我が朝あしたに法華經ほけきょうを失うしなう故ゆゑとしらせ給たまうゆへ如何いかに、答こたえて云いわく此この
二にの天災ちんさい・地天ちてんは外典げてん三千余卷さんぜんせきにも載のせられず三墳さんぶん・五典ごてん・史記しき等
に記しるする処ところの大長星だいじしん・大地震だいじしんは、或あるは一尺二尺・一丈二丈・五丈六
丈じゆうなりいまだ一天いつてんには見みへず地震ちしんも又また是かくの如ごとし、内典ないてんを以もつて之これを
勘かんうるに仏御入滅ぶつごにゅうめつ已い後はかかると大瑞だいずい出来しゅつせず、月支がつしには弗沙ふつさ
密多羅王みつたらおうの五天ごてんの仏法ぶつぽうを亡なし十六大国たいこくの寺塔じとうを焼やき払はい僧尼そうにの頭こうべ

をはねし時も・かかる瑞はなし、漢土には会昌天子の寺院・四千六百余所をとどめ僧尼・二十六万五百人を還俗せさせし時も出現せず、我が朝には欽明の御宇に仏法渡りて守屋・仏法に敵せしにも清盛法師・七大寺を焼き失い山僧等・園城寺を焼亡せしにも出現せざる大彗星なり。

当に知るべし是よりも大事なる事の一閻浮提の内に出現すべきなりと勘えて立正安国論を造りて最明寺入道殿に奉る、彼の状に云く詮此の大瑞は他国より此の国をほろぼすべき先兆なり、禅宗・念仏宗等が法華経を失う故なり、彼の法師原が頸をきりて鎌倉ゆゑの浜にすてずば国正に亡ぶべし等云云、其の後文永の大彗星の時は又手ににぎりて之を知る、去文永八年九月十二日の御勘氣の時重ねて申して云く予は日本国の棟梁なり我を失うは国を失うなるべしと今は用いまじけれども後のためにとて申しに

き、又去年の四月八日に平左衛門尉に対面の時蒙古国は何比かよ
せ候べきと問うに、答えて云く経文は月日をささず但し天眼のい
かり頻りなり今年をばすぐべ
からずと申したりき、是等は如何にして知るべしと人疑うべし予
不肖の身なれども法華経を弘通する行者を王臣人民之を怨む間・
法華経の座にて守護せんと誓をなせる地神いかりをなして身をふる
ひ天神身より光を出して此の国をおどす、いかに諫むれども用いざ
れば結局は人の身に入つて自界叛逆せしめ他国より責むべし。
問うて云く此の事何たる証拠あるや、答う経に云く「悪人を
愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行
わず」等云云、夫れ天地は国の明鏡なり今・此の国に天災地天あり
知るべし国主に失ありと云う事を鏡にうかべたれば之を争うべから
ず国主・小禍のある時は天鏡に小災見ゆ今の大災は当に知るべし大

禍ありと云

う事を、仁王経にんのうきようには小難なんは無量むりようなり中難なんは二十九・大難だいなんは七とあ

り此の経をば一には仁王にんのうと名づけ二には天地鏡てんじきようと名づく、此の国主こくしゆ

を天地鏡てんじきように移して見るに明白なり、又此の经文ききうもんに云く「いわわ聖人しやうにん去ら

ん時は七難ひちなん必ず起るおこ」等云云、当まさに知るべし此の国に大聖人しやうにん有り

と、又知るべし彼の聖人しやうにんを国主こくしゆ信まぜずと云う事を。

問うて云く先代に仏寺を失ひし時何ぞ此の瑞なきや、答えて云く
瑞は失の軽重によりて大小あり此の度の瑞は怪むべし、一度二
度にあらず一返二返にあらず年月をふるままに弥盛なり、之を
以て之を察すべし先代の失よりも過ぎたる国主に失あり、国主の身
にて万民を殺し又万臣を殺し又父母を殺す失よりも聖人を怨む事
彼に過ぐ

る事を、今日本国の王臣並びに万民には月氏・漢土総じて一
閻浮提に仏滅後・二千二百二十余年の間いまだなき大科・人ごとに
あるなり、譬えば十方世界の五逆の者を一処に集めたるが如し、
此の国の一切の僧は皆提婆・瞿伽利が魂を移し国主は阿闍世王・
波瑠璃王の化身なり、一切の臣民は雨行大臣・月称大臣・刹陀耆利
等の悪人をあつめて日本国の民となせり、古は二人・三人・逆罪
不孝の者ありしかばこそ其の人の在所は大地も破れて入りぬれ、今

は

此の国に充滿せる故に日本国の大地・一時にわれ無間に墮ち入らざらん外は一人・二人の住所の墮つべきやうなし、例せば老人の二の白毛をば抜けども老耄の時は皆白毛なれば何を分けて抜き捨つべき只一度に剃捨る如くなり、問うて云く汝が義の如きは我が法華經の行者なるを用いざるが故に天変地天等ありと、法華經第八に云く「頭

破れて七分と作らんと、第五に云く「若し人悪み罵れば口則ち閉塞す」等云云、如何ぞ数年が間罵とも怨とも其の義なきや、答う反詰して云く不輕菩薩を毀し罵詈し打擲せし人は口閉頭破ありけるか如何、問う然れば經文に相違する事如何、答う法華經を怨む人に二人あり、一人は先生に善根ありて今生に縁を求めて菩提心を發し

て仏になるべき者は、或は口閉ぢ、或は頭破る、一人は先生に謗人
なり今生にも謗じ生生に無間地獄の業を成就せる者あり是はのれ
ども口則ち閉塞せず、譬えば獄に入つて死罪に定まる者は獄の中に
て何なる僻事あれども死罪を行ふまでにて別の失なし、ゆりぬべき
者は獄中にて僻事あれば、これをいましむるが如し、問うて云く此
の事第一の大事なり委細に承わるべし、答えて云く涅槃經に云く
法華經に云く云云。

花押かおう

日蓮にちれん

一六四 曾谷殿御返事

建治二年五十五歳御作

1055p

そ
夫れ法華經第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云
云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量
と云う」と、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあ
らずや、されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の
姿を云うなり、而るに境の淵ほとりなく、ふかき時は智慧の水なが
るる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり、法華
以前の経は境智各別にして而も権教方便なるが故に成仏
せず、今法華經にして境智一如なる間開示悟入の四仏知見をさと
りて成仏するなり、此の内証に声聞・辟支仏更に及ばざるところ

を次下つぎしもに一切いっさい声聞しやうもん・辟支仏ひやくしぶつ所不能知しよふのちと説かるるなり、此の境智きやうちの二法は何物なにものぞ但南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの五字ごじなり、此の五字ごじを地涌じゆの大士だいしを召し出して結要けつやう付屬ふぞくせしめ給う是これを本化ほんげ付屬ふぞくの法門ほうもんとは云うなり。

然しかるに上行菩薩じやうぎやうぼさつ等まじ・末法まつほうの始まじの五百年ごひゃくねんに出生しゆつじやうして此の境智きやうちの二法にほふたる五字ごじを弘ひろめさせ給たまうべしと見えたり經文きやうもん赫赫かくかくたり明明めいめいたり誰たれか是これを論ろんぜん、日蓮にちれんは其その人ひとにも非あらず又また御使おんつかいにもあらざれども先まず序分じよぶんにあらあら弘ひろめ候こうなり、既すでに上行菩薩じやうぎやうぼさつ・釈迦しゃか如来にょらいより妙法みやうほうのちすい智水ちすいを受けて末代まつだい惡世あくせの枯槁ここうの衆生しゆじやうに流れかよはし給たまう是これ智慧ちえの義ぎなり、

釈尊しやくそんより上行菩薩じやうぎやうぼさつへ譲ゆずり与たまへ給たまう然しかるに日蓮にちれん又また日本にほん国こくにして此この法門ほうもんを弘ひろむ、又是またには總別そうべつの二義にぎあり總別そうべつの二義にぎ少すくしも相あひそむけば成仏じやうぶつ思しもよらず輪廻りんね生死しよつじのもといたらん、例たとせば大通だいつう仏ぶつの第十

六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・薬師に遇て成仏
せず譬えば大海の水を家内へくみ来らんには家内の者皆縁をふるべ
きなり、然れども汲み来るところの大海の一滴を闇きて又他方の
大海の水を求めん事は大僻案なり大愚癡なり、法華經の大海の
智慧の水を受けたる根源の師を忘れて余へ心をうつさば必ず輪廻
生死のわざはいなるべし、但し師なりと

も誤あやまり ある者をば捨つべし又捨てざる義あもあるべし世間・仏法の道理どうりによるべきなり、末世の僧等は仏法の道理どうりをば・しらずして我慢がまんに著こやくして師をいやしみ檀那だんなをへつらふなり、但正直しんじきにして少欲知足ちそくたらん僧こそ眞実しんじつの僧なるべけれ、文句もんくの一ひとに云く「既に未だ眞まことを發おこさざれば第一だいいち義天ぎてんに慙はじ諸もろの聖人せいじんに愧はず即是そこれ有羞うしゆうの僧なり觀慧くわんえ若もし

發おこするは即眞実そくしんじつの僧なり云云、涅槃經ねはんぎやうに云く「若もし善比丘ぜんびくあつて法はふを壞やぶる者ものを見て置いて呵責かしゃくし駈遣くけんし拳処こんじよせずんば当まさに知るべし是この人は仏法ぶつぽうの中の怨あだなり、若もし能よく駈遣くけんし呵責かしゃくし拳処こんじよせんは是これ我が弟子でし其その声聞しやうもんなり云云、此この文ぶんの中なかに見壞けんね法者はふしやの見けんと置ち不ふ呵責かしゃくの置おきとを能よく能よく心腑しんぶに染せんむ可べきなり、法華經ほけきやうの敵てきを見けんながら置おいてせめずんば師檀しだんともに無間地獄むげんじこくは疑うたがいなかるべし、南岳なんがく大師だいしの云いく「諸もろの惡人あくにんと俱ともに地獄じこくに墮おちん云云、謗法ぼうはふ

を責めずして成仏じよぶつを願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬる
が如ごとくなるべしはかなし・はかなし、何いかに法華經ほけきよを信じ給たまうとも
謗法ほうほうあらば必ず地獄じごくにをつべし、うるし千ばいに蟹かにの足一つ入れた
らんが如ごとし、毒氣どっけ深入ほんしん・矢本心ほんしん故は是これなり、經きやうに云く、「在在諸もろもろの仏
土に常に師しと俱ともに生ぜん」と又云く、「若もし法師ほっしに親近しんこんせば速すみかに菩薩ぼさつ
の道を

得ん是この師しに隨順ずいじゆんして学せば恒沙じゆしやの仏ぶつを見たてまつることを得ん」と
釈いに云く、「本もと此この仏ぶつに従つて初めて道心どうしんを發おこし亦また此この仏ぶつに従つて
不退ふたい地に住す」と又云く、「初め此この仏ぶつ・菩薩ぼさつに従つて結縁けちえんし還また此この仏ぶつ
菩薩ぼさつに於て成就じゆじゆす」と云云、返す返すも本從ほんじゆたがへずして成仏じよぶつせしめ
給たまうべし、釈尊しゃくそんは一切衆生いっさいしゆじやうの本從ほんじゆの師しにて而しかも主親しゆしんの徳とくを備へ
給たまう、此法門こつぽうもん

を日蓮申にちれんもつす故ゆえに忠言耳ちゆげんみみに逆さからう道理どうりなるが故ゆえに流罪りゆうざいせられ命いのちにも

及およびしなり、然しかれどもいまだこりず候ほ。法華經ほけきよつは種たねの如ごとく仏ほとけはうへての
如ごとく衆生しゆじやうは田いの如ごとくなり、若もし此これ等の義ぎをたがへさせ給たまはば日蓮にちれん
も後生ごじやうは助け申まうすまじく候候、恐恐ききょう謹言きんげん。

建治二年ひのえね丙子八月三日

曾谷殿そや

日蓮花押にちれんかおう

一六五 曾谷入道殿御返事

057p

妙法蓮華經みようほうれんげきよ一部一卷小字經、御供養のために御布施ふせに小袖・二重・鷲目十貫・並に扇百本、文句もんくの一に云く「如是我聞によぜとは所聞しよもんの法体をほつたい挙ぐ」と、記の一に云く「若し超八の如是によぜに非ずんば安いずくんぞ此の經の所聞しよもんと為さん」云云、華嚴經の題に云く「大方広仏・華嚴經、如是我聞によぜがもん」云云、「摩訶般若波羅蜜經・如是我聞によぜがもん」云云、大日經の題に云く「大毘盧遮那・神變加持經・如是我聞によぜがもん」云云、一切經の如是によぜは何なる如是によぜぞやと尋ぬれば、上の題目を指して如是によぜとは申すなり、仏、何の經にても・とかせ給ひし其の所詮の理をさして題目とはせさせ給ひしを、阿難・文殊・金剛手等・滅後に結集し給ひし時、題目

をうちをいて、如是我聞と申せしなり、一經の内の肝心は題目にお
さまれり、例せば天竺と申す国あり、九万里・七十箇国なり、然れ
ども其中の人畜・草木・山河・大地・皆月氏と申す二字の内にれきれ
きたり、譬へば一四天下の内に四洲あり、其の中の一切の万物は月
に移て、すこしもかくる事なし、經も又是くのごと、其
の經の中の法門は其の經の題目の中にあり、阿含經の題目は一經
の所詮・無常の理をおさめたり、外道の經の題目のあうの二字にす
ぐれたる事百千万倍なり、九十五種の外道・阿含經の題目を聞て
みな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ、般若經の題目を聞て
は体空・但中・不但中の法門をさとり、華嚴經の題目を聞く人は
但中・不但中のさとりあり、大日經・方等・般若經の題目を聞く人
は或は析空、或は体空、或は但空、或は不但空、或は但中、不
但中

の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・三千世間の妙覺みょうかくの功德をばきかず、その詮を説かざれば、法華經より外は理即りそくの凡夫なり、彼の經經きょうきょうの仏・菩薩はいまだ法華經の名字即みょうじそくに及ばず、何いかに況や題目をも唱へざれば觀行即かんぎょうそくにいたるべしや、故に妙樂みょうりやく大師だいしの記きに云く、「若し超八の如是によぜに非ずんば、安んぞ此の經いずくんの所聞しょもんと為さん」云云、

かれが彼しききょうの諸經だいまくの題目はつきょうは八教たいていの内なりなり、網目の如し、此の經の題目ははつきょう
八教はつきょうの網目に超こえて大綱たいこうと申もうす物なりなり、今みょう妙ほうれんげきょう法蓮華經と申もうす人ひと人びと
はその心をしらざれども、法華經ほけきょうの心をうるのみならず、一いち代だいの
大綱たいこうを覺さとり給り給へり、例せせば一、二、三歳さいの太子たいし位につき給ひぬれ
ば、国は我が所領しりょうなり、攝政せつしょう関白かんぱく已下いかは我が所従しじゆうなりとは、しら
せ給はねども、なにも此の太子たいしの物なり、譬たとへば小兒しよゐは分別ぶんべつの心な
けれども、悲母ひもの乳を口にのみぬれば自然に生長するを、趙高てうかうが様
に心おごれる臣下しんかありて、太子たいしをあなづれば身をほろばす、諸經しききょう
諸宗しよしゆうの学者がくしや等、法華經ほけきょうの題目だいまくばかりを唱なふる太子たいしをあなづりて、
趙高てうかうが如ごとくして無間地獄むげんじごくに墮おつるなり、又ほけきょう法華經ほけきょうの行者ぎやうの、心もし
らず題目だいまく計けいりを唱なふるが、諸宗しよしゆうの智者ちしやにおどされて退心たいしんをおこす
は、ここがこいと申ませし太子たいしが趙高てうかうにおどされころされしが如ごとく。

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと申もうすは一代いちだいの肝心かんじんたるのみならず、法華經ほけきょうの

心なり、体なり、所詮なり、かかるいみじき法門なれども仏滅後・

二千二百二十余年の間・月氏がっしに付法蔵ふほうぞうの二十四人弘通くつうし給はず、

漢土かんどの天台てんだい・妙楽みょうらくも流布るふし給はず、日本国にほんこくには聖徳太子しょうとくたいし・伝教大師でんぎょうだいし

も宣説し給はず、されば和法師わっしが申すは僻事もつにてこそ有るらめと

諸人疑しよにんうたがいて信ぜず、是れ又第一だいいちの道理どうりなり、譬たとへば昭君しょうくんなどを、

あやしつわものの兵つわものなんどがおかしたてまつるを・みな人よも・さはあらし

と思へり、大臣公卿だいじんくぎょうなんどの様なる天台てんだい・伝教でんぎょうの弘通くつうなからん

法華經ほけきょうの肝心かんじん・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうを、和法師程わっしのものがいかで唱ふべ

しと云云、汝等是を知るや・鳥からすと申す鳥は無下のげす鳥なれども、

驚わしくまたかの知らざる年中きつきょうの吉凶きつきょうを知れり、蛇もつと申す虫は竜象りゅうぞうに及ば

ずとも、七日の間の洪水たを知るぞかし、設たい竜樹天台りゅうじゆてんだいの知り給はざ

る法門ほうもんなりとも

経文きょうもん顕然けんねんならばなにをか疑うたがいはせ給ふべき、日蓮にちれんをいやしみて南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱なへさせ給たまはぬは、小兒しょうにが乳ちちをうたがふて・なめず病
人が醫師くすしを疑うたがいて薬くすりを服のせざるが如ごとし、竜樹りゅうじゆ・天親てんじん等は是こゝろを知り給
へども、時ときなく機きなければ弘通くわつうし給たまはざるか、余人よりのひとは又またしらずして
宣伝せんでんせざるか、仏法ぶつぽうは時ときにより機きによりて弘ひろまる事ことなれば、云いふに
かひなき日蓮にちれんが時ときにこそあたりて候まをらめ。

所詮みょうほうれんげきょう妙法蓮華經の五字ごじをば當時とうじの人人ひとびとは名なと計はかりと思おもへり、さ
にては候まうはず・体げんいなり・体げんいとは心じゆつにて候、章安しやうあん云いく「けだ蓋ふたし序王じやおうは經きやうの
玄意げんいを叙じよし、玄意げんいは文ぶんの心こころを述じゆつす」云いふ、此こゝの釈しやくの心こころは妙法蓮華經みょうほうれんげきやう
と申まうすは文ぶんにあらず、義ぎにあらず、一經いつきやうの心こころなりと釈しやくせられて候、
されば題目だいもくをはなれて法華經ほけきやうの心こころを尋たづぬる者は、さるをはなれて肝きも
をたづねし・はかなき龜かめなり、山林さんりんをすてて菓くだを大海たいかいの辺へにもとめ
しえんこ猴さるなり、はかなし・はかなし。

建治三年丁丑霜月二十八日

日蓮花押にちれんかおう

曾谷次郎入道殿そやじらうにちゆう

一六六 曾谷殿御返事そやごへんじ

弘安二年八月 五十八歳御

燒米二俵給畢ぬ、米は少と思食し候へども人の寿命を継ぐ者にて

候、命をば三千大千世界にても買はぬ物にて候と仏は説かせ給へ

り、米は命を継ぐ物なり譬えば米は油の如く命は燈の如し、

法華経は燈の如く行者は油の如し檀那は油の如く行者は燈の

如し、一切の百味の中には乳味と申して牛の乳第一なり、涅槃経の

七に云く「猶諸味の中に乳最も為れ第一なるが如し」と云云、乳味を

せんずれば酪味となる酪味をせんずれば乃至醍醐味となる

醍醐味は五味の中の第一なり、法門を以て五味にたとへば儒家の

三千・外道の十八大経は衆味の如し、阿含経は醍醐味なり、

阿含経は乳味の如く觀経等の一切の方等部の経は酪味の如し、

一切の般若経は生蘇味・華嚴経は熟蘇味・無量義経と法華経と

涅槃経とは醍醐のごとし又涅槃経は醍醐のごとし法華経は五味の

主の如し、妙樂大師

云く「いわ^な若し教旨を論ずれば法華は唯開權顯遠を以つて教の正主と
為すな独り妙の名を得る意此に在り云云、又云く「いわ^{ひと}故に知んぬ法華
は為れ醍醐の正主と等云云、此の釈は正こく法華経は五味の中にはあ
らず此の釈の心は五味はこくまさしほけきようゆえほっけ

じゆみやう

じゆみやう

てんだいしゆう

壽命をやしなふ壽命は五味の主なり、天台宗には二の意あり一に
 は華嚴・方等・般若・涅槃・法華は同じく醍醐味なり、此の釈の心は
 爾前と法華とを相似せるにいたり世間の学者等・此の筋のみを知り
 て法華経は五味の主と申す法門に迷惑せるゆへに諸宗にたぼらか
 さるるなり、開未開・異なれども同じく円なりと云云是は迹門の
 心なり、

しよきやう

ほけきやう

もつ

ほうもん

ほんもん

ほうもん

この

ほうもん

てんだい

みよつらくほほ

たまひ

ぶんみやう

明ならざる間

がくしや

の

ほうもん

てんだい

みよつらくほほ

たまひ

ぶんみやう

明ならざる間

がくしや

の

知すくなし

此の釈に若論

教旨とかかれて候は法華経の題目を

かかれて候は五字の中の蓮の一字なり

独得妙名とかかれて候は妙

の一字なり

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

教旨とはかかれて候、開権と申すは五字の中の華の一字なり

顕遠と

かかれて候は五字の中の蓮の一字なり

独得妙名とかかれて候は妙

の一字なり

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

かかれて候は五字の中の蓮の一字なり

独得妙名とかかれて候は妙

の一字なり

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

の一字なり

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

り、意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なり

の

とかかれて候ぞ、此れを以て知んぬべし法華經の題目は一切經の
たましい 一切經の眼目なり、大日經等の一切經をば法華經にてこそ
神・一切經の眼目なり、大日經等の一切經をば法華經にてこそ
かいげん 開眼供養すべき処に大日經等を以て一切の木画の仏を開眼し候へ
にほんこく ば日本国の一切の寺塔の佛像等形は仏に似れども心は仏にあらず
九界の衆生

の心なり、愚癡の者を智者とすることは是より生まれり、国のついでへの
み入て祈とならず還て仏變じて魔となり鬼となり国主乃至万民を
わづらはす是なり、今法華經の行者と檀那との出来する故に百獸
の師子王をいとひ草木の寒風をおそるるが如し、是は且くをく
ほげきよう 法華經は何故ぞ諸經に勝れて一切衆生の為に用いる事なるぞと
申すに譬え
そつもく ば草木は大地を母とし虚空を父とし甘雨を食とし風を魂とし日月
をめのととして生長し華さき菓なるが如く、一切衆生は実相を

大地とし無相を虚空とし一乗を甘雨とし已今当第一の言を大風と
し定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を生長し大慈大悲の華さか
せ安樂仏果の菓なつて一切衆生を養ひ給ふ、一切衆生又食するに
よりにて壽命を持つ、食に多数あり土を食し水を食し火を食し風を
食する衆生もあり、求羅と申す虫は風を食す。うぐるもち
と申す虫は土を食す、人の皮肉・骨髓等を食する鬼神もあり、尿糞
等を食する鬼神もあり、壽命を食する鬼神もあり、声を食する
鬼神もあり、石を食するいをくろがねを食するばくもあり、地神・
天神・竜神・日月・帝釈・大

梵王ほんのう・二乗にじょう・菩薩ぼさつ・仏ぶつは仏法ぶつぽうをなめて身みとし魂たまとし給たまふ、例むかしせば乃むかし往むかし過去かこに輪陀王りんだおうと申もうす大王だいおうましましき一閻浮提えんぶだいの主ぬしなり賢王けんおうなり、此この王おうはなに物ものをか供御ともとし給たまうと申まをせば白馬はくばの鳴声いななくこえをきこしめして身みも生長しんしんし身心あんのんも安穩あんのんにしてよをたもち給たまう、れいせば蝦蟇かえると申もうす虫むしの母ははのなく声こゑを聞いて生長しんしんするがごとし、秋あきのはぎのしかの鳴なくに華はなのさくがごとし、象牙草じやくろのいかづちの声こゑにはらみ柘榴じやくろの石いしにあふてさかうるがごとし、されば此この王おう・白馬はくばを

・をほくあつめて・かはせ給たまふ、又また此この白馬はくばは白鳥はくばをみてなく馬うまなれば、をほくの白鳥はくばをあつめ給たまいしかば我が身みの安穩あんのんなるのみならず百官ひやくくわん・万乗まんじやうもさかへ天下てんかも風雨ふうう・時ときにしたがひ他国たこくもかうべをかたぶけてすねんすごし給たまうにまつり事ことのさをいにやはむべりけん又宿業むりようによつて果報かほうや尽つきけん・千万せんまんの白鳥いちじ一時いちじにうせしかば又無量むりようの白馬はくばもなく事ことやみぬ、大王だいおうは白馬はくばの声こゑをきかざりしゆへに華はなのしほ

めるがごとく月のしよくするがごとく、御身おんみ

の色かはり力よはく六根ろっこんもうもうとしてほれたるがごとくありしかば、きさきももうもうしくならせ給たまい百官万乗もいかんがせとなげき、天もくもり地もふるひ大風たいふうかんぱちしけかちやくびように人の死する事肉はつか骨はかはらとみへしかば他国たこくよりもをそひ来れり、此の時大王たいおういかんがせんとなげき給たまいしほどにせんする所は仏神ぶっしんにいのるにはしくべからず、此の国にもとより外道げどうをほく国国をふさげり、又仏法ぶつぽうという物ををほ

くあがめをきて国の大事だいじとす、いづれにてもあれ白鳥をいだしてはくば白馬をなかせん法をあがむべし、まづ外道げどうの法にをほせつけて数日をこなはせけれども白鳥一疋もいでこず白馬はくばもなく事なし、此の時外道げどうのいのりをとどめ

て仏教ぶつぎょうにをほせつけられけり、其の時馬鳴菩薩まめいぼさつと申もうす小僧こぞう一人あり

めしいだされければ此の僧の給はく国中に外道の邪法をとどめて
ぶっほう ぐつう たま
仏法を弘通し給うべくば馬をなかせん事やすしといふ、勅宣に云く
をほせのごとくなるべしと、其の時に馬鳴菩薩・三世十方の仏にき
しやうし申せしかば、たちまちに白鳥出来せり、白馬は白鳥を見て
一こへなきけり、大王・馬の声を一こへきこしめして眼を開き給い
ないし だいおう
白鳥二ひき乃至百千いできたりければ百千の

はくばいちじ 白馬一時に悦びなきけり、大王の御いろなをること日しよくのほ
んにふくするがごとし、身の力心のはかり事先先には百千万ばい
こへたり、きさきもよろこび大臣公卿いさみて万民もたな心をあ
はせ他国もかうべをかたぶけたりとみへて候。

今のよも又是にたがうべからず、天神七代地神五代已上十二
代は成劫のごとし先世のかいりきと福力とによつて今生のはげみ
なけれども国もおさまり人の寿命も長し、人王のよとなりて二十
九代があひだは先世のかいりきもすこしよはく今生のまつり事も
はかなかりしかば国にやうやく三災七難をこりはじめたり、なを
かんど
より三皇五帝の世ををさむべきふみわたりしかば其をもつて神
をあげて国の災難をしづむ、人王第三十代欽明天王の世となりて
国には先世のかいふくうすく悪心がうじやうの物をほく出来て

善心ぜんしんをろかに悪心あくしんはかしこし、外典げてんのをしへはあさしつみをもき
ゆへに外典げてんすてられ内典ないてんになりしなり、れいせばもりやは日本にほんの

天神七代てんじんしちだい

地神五代ちじんごだいが間の百八十神をあがめたてまつりて仏教ぶつぎょうをひろめずし

て・もとの外典げてんとなさんといのりき、聖徳太子しやうとくたいしは教主きやうしゆ釈尊しやくそんを

御本尊ごほんぞんとして法華經ほけきやう・一切經いっさいきやうをもんしよとして両方のせうぶありし

に・づいには神はまけ仏はかたせ給たまいて神国しんこくはじめて仏国ぶつこくとなりぬ、

天竺漢土てんじくかんどの例のごとし、今此三界こんしさんがい・皆是我有かいてがうの經文きやうもんあらはれさせ

給たまうべき

序ついでなり、欽明きんめいより桓武かんむにいたるまで二十よ代・二百六十余年が間・

仏だいおうを大王とし神を臣として世を・をさめ給たまいしに仏教ぶつぎやうはすぐれ神は

をとりたりしかども未いまだよをさまる事なし。

いかなる事にやとうたがはりし程に桓武かんむの御宇ぎやうに伝教でんぎやう大師だいしと

申すもう 聖人出来して勘かんえて云いく神はまけ仏はかたせ給たまいぬ、仏は
大王だいおう・神は臣かなれば上下じょうげあひついで・れいぎただしければ国中を
さまるべしと・をもふに国のしづかならざる事ぶつふしんなるゆへに
一切いっさい経をかながへて候むかへば道理どうりにて候むかけるぞ、仏教ぶつぎょうに・をほきなる
とがけありけり、一切いっさい経の中に法華ほけ経と申もうす大王だいおうをはします、ついで
華嚴けごん経・大品だいほん経・深密じんみつ経・阿含あこん経等はあるいは臣の位あるいは

さぶらいのくらい・あるいはたみの位なりけるを・或は般若経は
法華経にはすぐれたり三論宗・或は深密経は法華経にすぐれたり
法相宗・或は華嚴経は法華経にすぐれたり華嚴宗・或は律宗は
諸宗の母なりなんと申して一人として法華経の行者なし、世間に
法華経を讀誦するは還つてをこつきうしなうなり、「之に依つて天
もいかり守護の善神も力よはし」云云、所謂「法華経を・ほむといえ
ども返つて法華の心をころす」等云云、南都・七大寺・
十五大寺・日本国中の諸寺・諸山の諸僧等・此のことばを・ききて・
をほきにいかり天竺の大天・漢土の道士・我が国に出来せり所謂
最澄と申す小法師是なり、せんする所は行きあはむずる処にてか
しらをわれ・かたをきれ・をとせ・
うてのれと申せしかども桓武天皇と申す賢王たづね・あきらめて
六宗はひが事なりけりとして初めてひへい山をこんりうして天台

法華宗とさだめをかせ円頓の戒を建立し給うのみならず、七大寺・
十五大寺の六宗の上に法華宗をそへをかる、せんする所六宗を
法華經の方便となされしなり、れいせば神の仏にまけて門まほりと
なりしが

ごとし、日本国も又かくのごとし法華最第一の經文初めて此の
国に顕れ給い能竊為一人・説法華經の如来の使初めて此の国に入り
給いぬ、桓武・平城・嵯峨の三代二十余年が間は日本一州皆法華經
の行者なり、しかれば梅檀には伊蘭釈尊には提婆のごとく伝教
大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり、漢土にわたりて
大日經・真言宗をならい日本国にわたりてありしかども伝教大師
の御存生の御時はいたう法華經に大日經すぐれたりといふ
事はいはざりけるが、伝教大師去ぬる弘仁十三年六月四日にかく
れさせ給いてのちひまをえたりとやをもひけん、弘法大師去ぬる

弘仁十四年正月十九日に真言第一・華嚴第二・法華第三・法華經は
戲論の法・無明の辺域・天台宗等は盗人なりなんと申す書どもをつ
くりて、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて七宗に真言宗を
申しくはえて七宗を方便とし真言宗は眞実なりと申し立て畢ん
ぬ。

其の後・日本一州の人ごとに真言宗になりし上其の後又伝教
大師の御弟子慈覚と申す人漢土にわたりて天台

・真言しんごんの二宗の奥義をきはめて帰朝きちようす、此の人金剛頂經こんごうちようぎやう。
蘇悉地經そしつちきやうの二部の疏じよをつくりて前唐院ぜんとういんと申もうす寺てらを叡山えいざんに申もうし立て
畢おわんぬ、此これには大日經だいにちきやう第一法華經だいいちほけきやう第二其その中に弘法こうぼうのごとくな
る過言かごんかざうべからず、せむぜむにせうせう申し畢おわんぬ、智証大師ちしやうだいし
又此またの大師だいしのあとをついでをんじやう寺てらに弘通くつうせり、たうじ寺てらとて
国のわざはいとみゆる寺てら是これなり、叡山えいざんの三千人さんぜんは慈覺じかく・智証ちしやうをはせ
ずば真言しんごんすぐれたりと申もうすをばもちいぬ人もありな
ん、円仁大師えんにんだいしに一切いっさいの諸人しよにんくちをふさがれ心をたばらかされてこと
ばをいだす人なし、王臣おうしんの御ごきえも又また伝教でんぎやう・弘法こうぼうにも超過ちやうかしてみへ
候まうへばえい山七寺にほん日本一州にほん一同いっどうに法華經ほけきやうは大日經だいにちきやうにをとりと云云、
法華經ほけきやうの弘通くつうの寺てらごとごとに真言しんごんひろまりて法華經ほけきやうのかしらとなれ
り、かくのごとくしてすでに四百余年しよひやくねんになり候まういぬ、やうやく此この
邪見じゃけんぞうじやうして八十一やちじゅういち乃至五なの五王ごおうすでにうせぬぶつほう仏法ぶつほううせし

かば王法すでにつき畢おわんぬ。

あまつさへ禅宗ぜんしゅうと申もうす大邪法念仏宗じゃほうねんぶつしゅうと申もうす小邪法真言じゃほうしんごんと申もうす

だいあくほう

大悪法此の悪宗はなをならべて一國にさかんなり、天照太神はた

はちまんだいぼさつ

いりやく

ましいをうしなつてうぢごをまほらず八幡大菩薩は威力よはくして

しゅご

たこく

にちれん

國を守護せずけつくは他國の物とならむとす、日蓮此のよしを見る

ぶつぼうじゆおん

ぐだじしく

ほほこくしゅ

ゆへに仏法中怨・俱墮地獄等のせめをおそれて粗國主にしめせど

じやぎ

たま

かえ

おんてき

も、かれらが邪義にたばらかされて信じ給う事なし還つて大怨敵と

たま

ほけきよう

じゅうまん

なり給いぬ法華經をうしなふ人國中に充満せり

ほけき

ほけき

ひとびとあるか

と申せども人しる事なければただぐちのとがばかりにてある事今は

ほけき

ほけき

にほんこく

ひとびとあるか

又法華經の行者出来せり日本國の人人癡の上にいかりををこす

じゃほう

しじゆほう

さんどく

邪法をあいし正法をにくむ、三毒がうじやうなる一國いかでか

あんのん

えいこう

さんさい

安穩なるべき、壞劫の時は大の三災をこる、いはゆる火災水災風災

なり、又滅劫の時は小の三災をこる、ゆはゆる飢渴疫病合戦なり、

飢渴けかち

は大貪おほおんよりをこりやくびやうはぐちよりをこり合戦あせんは瞋恚しんによりを
こる、今いま日本国にほんこくの人人ひとびと四十九億九万四千八百二十八人の男女人人にょにん
ことなれども同じく一の三毒さんどくなり、所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうを境とし
てをこれる三毒さんどくなれば人ごとに釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつを一時いちじにの
りせめ流しうしなうなり、是これ即すなわち小の三災さんさいの序ついでなり。

しかるに日蓮にちれんが一いちるいいかなる過去かこの宿しゆくしうにや法華經ほけきょうの題目だいもく
のだんなとなり給たまうらん、是これをもつてをばしめせ今梵天ほんてん・帝釈たいしやく・
日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしょうだいじん・八幡大菩薩はちまんたいほさつにほんこく・日本國さんぜんの三千一百三十二社の
大小だいしやうのじんぎは過去かこの輪陀王りんだおうのごとし、白馬はくばは日蓮にちれんなり白鳥はくばは我
らが一門いちもんなり白馬はくばのなくは我等われらが南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうのこえなり、此
の声をきかせ給たまう梵天ほんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん等いかでか色をましひか
りをさかんになし給たまはざるべき、いかでか我等われらを守護しゆごし給たまはざるべ
きとつよづよとをばしめすべし。

抑そもそも貴辺きへんの去ぬる三月ぶつじの御仏事がもくそに鷲目ぶつじ其の數有しりしかば今年一

百よ人の人を山中にやしなひて十二時の法華經ほけきょうをよましめ談義して
候ぞ、此これらは末代悪世まつだいあくせには一えんぶだい第一だいいちの仏事ぶつじにてこそ候へ
いくそばくか過去かこの聖靈しょうりやうもうれしくをばすらん、釈尊しゃくそんは孝養こうようの人
を世尊せそんとなづけ給たまへり貴辺きへんあに世尊せそんにあらずや、故大進阿闍梨あじやりの事

なげかしく候へども此れ又法華經の流布の出来すべきいんえんにて
や候らんとをばしめすべし、事事命ながらへば其の時申すべし。

弘安二年己卯八月十七日 日蓮花押

曾谷道宗御返事

一六七 曾谷二郎入道殿御返事

1065

p

去る七月十九日の消息、同三十日到来す、世間の事は且らく之
を置く、専ら仏法に逆ふこと法華經の第一に云く「其人命終
入阿鼻獄」等云云、問て云く、其の人とは、何等の人を指すや、答て
云く、次上に云く「唯我一人能為救護・雖復教詔・而不信受」と、

又云く「若人^{にやくにんふしん}不信」と、又云く「或復^{ある}顰蹙」と、又云く「見有^{ぞくじゆ}誦誦書
持^{じきよう}經者・輕賤憎嫉・而懷結恨」と、又第五に云く「生疑^{しやうぎふしん}不信者・即^{そく}当
墮^だ惡道」と、第八に云く「若有人^{にやくあるひと}輕毀之言・汝狂人耳・空作是行終無
所獲^{すく}」等云云、「其人^{ひと}」とは、此れ等の人人^{ひとひと}を指すなり、彼の震旦国
の天台大師^{てんだいだいし}は、南北十師等を指すなり、此の日本国^{にほんこく}の伝教大師^{でんぎようだいし}は、
六宗^{ろくしゆう}の人人^{ひとひと}と定めたるなり、今日^{いま}蓮^{にれん}は弘法^{こうぼう}・慈覺^{じかく}・智証^{ちしやう}等の三
大師^{だいいし}、並に三階^{さんかい}・道綽^{だうてつ}・善導^{ぜんどう}等
を指して其の人と云ふなり、入阿鼻獄^{にゆうあびごく}とは、涅槃經^{ねはんぎよう}第十九に云く
「仮使^かひ一人^{ひと}独り是の獄^{ごく}に墮^おち、其の身長大にして八万由延^{ゆじゆん}なり、
其の中間^{へんまん}に満して空しき処^{ところ}無し、其の身周^{しんしゆ}匝^{まわ}して種種^{ししゆしゆ}の苦を受
く設^たひ多人^た有て、身亦^{へんまん}満すとも相^あい妨碍^{ぼうがい}せず」、同三十六に云く
「沈没^{ちんぼつ}して阿鼻地獄^{あびじごく}に在て、受くる所の身形^{しんぎやう}・縦広八万四千由旬^{じゆん}な
らん」等云云、普賢經^{ふげん}に云く「方等經^{ほうとうきやう}を謗^{ぼう}ずる是^この大惡報惡道^だに墮^だ

つべきこと暴雨にも過ぎ必定して当に阿鼻地獄に墮つべし」等とは、
阿鼻獄に入る文なり。

日蓮云く、夫れ日本国は、道は七、国は六十八箇国、郡は六百

四、郷は一万余、長さは三千五百八十七里、人数は四十五億八万九

千六百五十九人、或は云く四十九億九万四千八百二十八人なり、

寺は一万一千三十七所、社は三千一百三十二社なり、今法華経の

「入阿鼻獄」とは、此れ等の人人を指すなり、問て云く、衆生に於て

悪人善人の二類有り、生処も又善悪の二道有るべし、何ぞ日本国の

一切衆生、一同に入阿鼻獄の者と定むるや、答て云く、人数多しと

雖も業を造ることは是れ一なり、故に同じく阿鼻獄と定むるなり。

疑て云く日本国の一切衆生の中に或は善人、或は悪人あり

善人とは五戒・十戒、乃至二百五十戒等なり、悪人とは、殺生・偷

盗、乃至五逆・十悪等是なり、何ぞ一業と云ふや、答て云く、夫れ

しょうぜん
小善・小悪は異なりと雖も、法華經ほけきょうの誹謗ひぼうに於ては、善人悪人・
ちしゃくしゃ
智者愚者、俱こに妨げ之れ無し、是かくのゆえの故ゆゑに同じく入阿鼻獄にゅうあびじくと云ふな
り、問て云く、何を以てか日本にほんこくの一切衆生いっさいしじゆうを、一同いっとうに法華誹謗ほっけの
者と言ふや、答て云く、日本にほんこくの一切衆生いっさいしじゆう衆多しゆたなりと雖も四十五
億八万九千六百五十九人にすに過ぎず、此等この人人ひとびと貴賤きせん上下じやうげの勝劣しやうれつ有
りかと雖も是かくのこの如ごときの人人ひとびとの憑たむ所しよは唯ただ三大師だいしに在あり

師とする所三大師を離る事無し余残の者有りと雖も信行・善導等の家を出ずべからざるなり、問て云く三大師とは誰人ぞや、答て曰く、弘法・慈覚・智証の三大師なり、疑て云く此の三大師は何なる重科有るに依て、日本国の一切衆生於經文の其の人の内に入るや、答て云く、此の三大師は大小乘持戒の人、面には八万の威儀を備へ、或は三千等之を具す、顯密兼学の智者なり、然れば則ち、日本国四百余年の間、上一人より下万民に至るまで、之を仰ぐことにちがつ、日月の如く、之を尊むこと世尊の如し、猶徳の高きこと須弥にも超え、智恵の深きことは蒼海にも過ぎたるが如し但恨むらくは法華經を大日真言經に相對して勝劣を判ずる時は、或は戲論の法と云ひ、或は第二第三と云ひ、或は教主を無明の辺域と名け、或は行者をば盗人と名く彼の大莊嚴仏の末の六百四万億那由佗の四衆の如き、各各

の業ごういん因異りと雖も、師の苦岸等の四人と俱に同じく無間地獄に入りぬ、又師子音王ししおうぶつ仏の末法の無量無辺の弟子等の中にも貴賤きせんの異有りと雖も同じく勝意が弟子と為るが故に一同に阿鼻大城あびだいじょうに墮だちぬいまほんこく今日日本国亦復是くの如し。

去る延曆弘仁年中、伝教大師六宗の弟子檀那等を呵責かしゃくする

語に云く、「其の師の墮おつる所弟子亦墮おつ、弟子の墮おつる所檀越亦

墮おつ、金口きんくの明説慎めいせつつしまざるべけんや、慎つしまざるべけんや」等云云、うたがい疑うたがいて云く、汝が分齊何を以て三大師を破するや、答て云く、予は

敢て彼の三大師だいしを破せざるなり、問て云く、汝が上かみの義は如何、答

て云く、月氏がし

より漢土本朝かんどほんちように渡る所の經論は五千七十余卷なり、予粗之を見

るに、弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしように於ては、世間の科は且く之を置く、仏法ぶつぼうに

入ては、謗法第一ぼうぼうだいいちの人人と申すなり、大乘だいじようを誹謗する者は、箭を射

るより早く地獄に墮すとは如来の金言なり、将又謗法罪の深重は
弘法・慈覚等一同定め給ひ畢ぬ、人の語は且く之を置く、釈迦・多宝
の二仏の金言虚妄ならずんば、弘法・慈覚・智証に於ては定めて無間
・大城に入らん、十方分身の諸仏の舌墮落せずんば、日本国中の
四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生は、彼の苦岸等の弟子
檀那等の如く阿鼻地獄に墮て熱鉄の上に於て仰ぎ臥して九百万億
歳伏臥して九百万億歳・左脇に臥して九百万億歳・右脇に臥して九
百万億歳、是くの如く熱鉄

の上うへに在あて三千さんぜん六百萬りくひゃくまん億いっぴやく歳さいなり、然しかして後のち、此この阿鼻あびより転まじて
他方たほうに生なれて大地獄だいじごくに在あて、無数むすう百千萬億ひゃくせんまん那由他なゆた歳さい大苦惱だいくのうを受け
ん、彼かは小乘經しょうじょうきょうを以もつて權大乘こんだいじょうを破やぶせしも、罪つみを受うくること
是この如ごとし、況いかや今いま三大師だいしは未顯真実みけんしんじつの經きょうを以もつて、三世さんぜの仏陀ぶつたの
本懷ほんかいの說ごうを破やぶするのみに非あらず、剩あまつさえ一切衆生いっさいしゅじょうじょうぶつ成な仏ぶつの道みちを失うふ、
深重じんじゅうの罪つみは、過あや現げん・未み來らいの諸しよ佛ぶつも、争あか之をを窮きうむべけんや、争あか之を
を救きうふべけんや。

法華經ほけきょうの第四だいじに云いく、「已說今說こんせつとつせつ當說とうせつ而於其中ほけきょう此法華經こほけきょう最た為き
難信難解なんしんなんげ」、又また云いく、「最在さいざい其上そのかみ」、並ならに「藥王十喻やくおうじゆ」等ら云いふ、他經たきょうに於お
ては、華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんにや・深密じんみつ・大雲だいこん・密嚴みつごん・金光明經こんくわうみんぎやう等らの諸教しよきょうの中
に、經經ききょうの勝劣しょうりつ之をを説とくと雖なも、或あるは小乘經しょうじょうきょうに對たいして此この經きょう
を第一だいいちと曰いひ、或あるは真俗二諦しんじよくにたいていに對たいして中道ちゆうどうを第一だいいちと曰いひ、或あるは印
真言等しんごんを説とくを以もつて第一だいいちと為なす、此等この說ごう有ありと雖なも、全ぜんく已今當いこんたう

の第一だいちに非ひざるなり、然而しかんるに末すえの論師ろんし人師にんし等、謬執びやくしつの年積ねんじくり、
門徒もんた又また繁多はんたなり。

爰こゝに日蓮にちれん彼の依經えきように無なきの由よしを責せむる間ま・弥いよいよよ瞋恚しんゑを懷いだて

是非ぜひを糾明きゆうめいせず唯ただ大妄語だいぼうごを構かまへて国主こくしゆ・国人こくにん等を誑惑おうわくし、日蓮にちれんを損

ぜんと欲ほす、衆千しゆせんの難なんを蒙こうむらしむるのみに非ひず両度りやうどの流罪りゆうざい剩あまつさへ

頸くびの座ざに及およぶ是これなり、此等こゝらの大難だいなん忍しのび難なんき事こと不輕ふきやうの杖木じやうぼくにも過すぎ、

将かんじ又また勸持くんぢの刀杖たうじやうにも越こえたり、又また法師品ほうしほんの如ごときは「末代まつだいに法華經ほけきやうを

弘通くわつうせん者は、如来にょらいの使つかひなり此こゝの人ひとを輕賤けいせんするの輩たぐひの罪つみは、教主きやうしゆ

釈尊しゃくそんを一ひと中劫ちゆうじやく蔑如めつじやくするに過すぎたり」等ら云いふ、今日けふ日本ほんこくには

提婆達多だいばだつた・大慢婆羅門だいまんばらもん等らが如ごとく無間地獄むげんじじやくに墮おつべき罪人ざいにん、国中こくちゆう三千さんぜん

五百八十七里ごひやくはちじゅうしちりの間に、満みつる所ところの四十五億八万九千六百五十九人しよじゆうごひやくごじゅうご

の衆生しゆじやう之これれ有あり彼の提婆だいば・大慢だいまん等の無極むぎやくの重罪じゆうざいを、此こゝの日本ほんこく四

十五億八万九千六百五十九人じふごひやくはちじゆうごひやくごじゅうごに對たいせば、輕罪けいざい中ちゆうの輕罪けいざいなり問とふ其

の理如何答ふ彼等かれらは、悪人あくにん為りと雖も全く法華ほっけを誹謗する者には
非ざるなり又提婆だいば達多だつたは恒河第二の人にして第二いっせんに一闡だいいち提だいなり
今日本国いまほんこく四十五億八万九千六百五十九人は皆恒河第一だいいちの罪人ざいにんな
り、然れば則ち提婆だいばが三逆罪さんぎやくは軽毛かやうの如し日本国にほんこくの上にあ挙ぐる所
の人人ひとびとの重罪じゆうざいは猶大石おほいしの如し定めて梵釈ぼんしゃくも日本国にほんこくを捨て

同生同名も国中の人を離れ、天照太神・八幡大菩薩も争か此の国を守護せん。

去る治承等の八十一二三四五代の五人の大王と頼朝・義時と此の国を御諍ひ有て天子と民との合戦なり猶鷹駿と金鳥との勝負の如くなれば、天子頼朝等に勝たんこと必定なり、決定なり、然りと雖も五人の大王は負け畢ぬ、兔、師子王に勝ちしなり、負くるのみに非ず、剩へ。或は蒼海に沈み、或は島島に放たれ、誹謗法華未だ年歳を積まざる時、猶以て是くの如し、今度は彼に似るべからず、彼は但国中の災い許りなり、其の故は粗之を見るに、蒙古の牒状已前に、去る正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げに依て、再三之を奏すと雖も、国主敢て信用無し、然るに日蓮が勘文粗仏意に叶ふかの故に、此の合戦既に興盛なり、此の国の人人今生には一同に修羅道に

墮し、後生には皆阿鼻大城に入らん事、疑ひ無き者なり。

爰に貴辺と日蓮とは師檀の一分なり、然りと雖も、有漏の依身は
国主に随ふが故に、此の難に値はんと欲するか、感涙押へ難し、何れ
の代にか対面を遂げんや、唯一心に靈山浄土を期せらるべきか、
設ひ身は此の難に値ふとも、心は仏心に同じ、今生は修羅道に交は
るとも、後生は必ず仏国に居せん、恐恐謹言。

弘安四年閏七月一日

日蓮

花押

曾谷二郎入道殿御返事

一六八

秋元殿御返事

文永八年正月

五十歳

御作

1070p

於安房保田

おんぶみくわし たまわ そうら おわ
御文委く承り候い畢んぬ、御文に云く末法の始・五百年にはいか
なる法を弘むべしと思ひまいらせ候しに聖人の仰を承り候に
ほけきょう だいまく ひろ
法華經の題目に限つて弘むべき山・聴聞申して御弟子の一分に定ま
り候、殊に五節供はいかなる由来・何なる所表・何を以て正意として
まつり候べく候や云云、夫れ此の事は日蓮委しく知る事なし、
然りと雖も
しか いえど
ほぼこころう
粗意得て候、根本大師の御相承ありげに候、総じて真言・天台両宗
の習なり、委くは曾谷殿へ申候次での御時は御談合あるべきか、先

ず五節供の次第を案ずるに妙法蓮華經の五字の次第の祭なり、正月は妙の一字のまつり天照太神を歳の神とす、三月三日は法の一字のまつりなり辰を以て神とす、五月五日は蓮の一字のまつりなり午を以て

神とす、七月七日は華の一字の祭なり申を以て神とす、九月九日は經の一字のまつり戌を以て神とす、此くの如く心得て南無妙法蓮華經と唱へさせ給へ現世安穩・後生善処疑なかるべし、法華經の行者をば一切の諸天不退

に守護すべき經文分明なり、經の第五に云く「諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護す」云云、又云く「天の諸の童子以て給使を為し刀杖も加えず毒も害する能わず」云云、諸天とは梵天・帝釈・日月・四大天王等なり、法とは法華經なり、童子とは七曜・二十八宿・摩利支天等なり、「臨兵闘者皆陳列在前」是又刀杖不

加の四字なり、此等は随分の相伝なり能く能く案じ給うべし、第六に云く「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」云云、五節供の時も唯南無妙法蓮華経と唱へて悉地成就せしめ給へ、委細は又申す可く候。

次に法華経は末法の始め五百年に弘まり給ふべきと聴聞仕り御弟子となると仰せ候事、師檀となる事は三世の契り種熟脱の三益別に人を求めんや、「在在諸の仏土常に師と俱に生れん若し法師に親近せば速かに菩提の道を得ん、是の師に随順して学ばば恒沙の仏を見奉る事を得ん」との金言違ふべきや、提婆品に云ふ「所生の処常に此の経を聞くしの人にはあに貴辺にあらずや、其の故は次上に「未来世中若有善男子・善女人」と見えたり、善男子とは法華経を持つ俗の事なり、弥信心をいたし給うべし、信心をいたし給うべし、恐恐謹言。

正月十一日

日蓮花押

秋元殿御返事

保国 安房のほた 保田

より出す

一六九

秋元御書

弘安三年一月 五十九

歳御作 於身延

1071p

筒御器一具付三十並に蓋付六十送り給ひ候い畢んぬ、御器と申すはうつはものと読み候、大地くぼければ水たまる青天浄ければ月澄めり、月出でぬれば水浄し雨降れば草木昌へたり、器は大地のくぼきが如し水たまるは池に水の入るが如し、月の影を浮ぶるは法華経の我等が身に入らせ給うが如し、器に四の失あり一には覆と申してうつぶけるなり又はくつがへす又は蓋をおほふなり、二には

漏ろと申もうして水もるなり、三にはうと申もうしてけがれたるなり水淨けれ
ども糞あるの入りたる器の水をば用もちゆる事なし、四には雜まじなり。飯に
或あるは糞ある。或あるは石ある。或あるは沙ある。或あるは土あるなどを雜まじへぬれば人食ふ事なし、
器われらは我等しんしんが身心しんしんを表す、我等われらが心は器ごとの如し口も器。耳も器なり、
法華經ほけきょうと申もうすは仏ちえの智慧ちえの法水ほつすいを我等われらが心に入れぬれば。或あるは打ち
返しある。或あるは耳あるに聞かじと左右さうの手を二つの耳おほに覆おほひ。或あるは口あるに唱へじ
と吐き出しぬ、譬たとえば器あるを覆するが如し、或あるは少し信あるずる様なれ
ども又あくえん悪縁あに値あうて信心しんじんうすくなり。或あるは打ち捨て。或あるは信あるずる日
はあれども捨あるつる月あるもあり是は水あるの漏あるが如し、或あるは法華經ほけきょうを行あるず
る人の一口は

南無妙法蓮華經一口は南無阿弥陀仏なんど申すは飯に糞を雑へ沙石を入れたるが如し、法華經の文に「但大乘經典を受持することを樂うて乃至余經の一偈をも受けざれ」等と説くは是なり、世間の学匠は法華經に余行を雑えても苦しからずと思へり、日蓮もさこそ思ひ候へども經文は爾らず、譬えば後の大王の種子を妊めるが又民と・

とつげば王種と民種と雜りて天の加護と氏神の守護とに捨てられ其の国破るる縁となる、父二人出来れば王にもあらず民にもあらず人非人なり、法華經の大事と申すは是なり、種熟脱の法門法華經の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へり、南無阿弥陀仏は仏種にはあらず真言五戒等も種ならず、能く能く此の事を習い給べし是は雜なり、此の覆漏・雑の四の

とが
失を離れて候器をば完器と申して・またき器なり、塹つつみ漏ら
ざれば水失る事なし、信心のこころ全ければ平等大慧の智水乾く
事なし、今此の筒の御器は固く

厚く候上・漆淨く候へば法華經の御信力の堅固なる事を顕し給う

か、毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて四天下第一の福天と云はれ

給ふ、淨徳夫人は雲雷音王仏に八万四千の鉢を供養し進らせて

妙音菩薩と成り給ふ、今法華經に筒御器三十盞六十進らせて争か

仏に成らせ給はざるべき。

そもそもにほんこく

もう

抑 日本国と申すは十の名あり扶桑・野馬台・水穂・秋津洲等な

り、別しては六十六箇国島二つ長さ三千余里広さは不定なり、或

は百里・或は五百里等、五畿・七道・郡は五百八十六・郷は三千七百

二十九・田の代は上田一万一千二百二十町・乃至八十八万五千五百

六十七町・人数は四十九億八万九千六百五十八人なり、神社は

十二・社寺は一万一千三十七所。男は十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千八百三十人なり、其の男の中に只日蓮第一の者なり、何事の第一とならば男女に悪まれたる第一の者なり、そのゆえにほんこく其の故は日本国に国多く人多しと云へども其の心一同に南無阿弥陀仏を口ずさみとす、阿弥陀仏を本尊とし九方を嫌いて西方を願う、設い法華經を行ずる人も真言を行ふ人も、戒を持つ者も、智者も愚人も余行を傍として念仏を正とし罪を消さん謀は

名号なり、故に或は六万・八万・四十八万返、或は十返・百返・千返なり、而るを日蓮一人阿弥陀仏は無間の業・禅宗は天魔の所為・眞言は亡国の悪法・律宗・持斎等は国賊なりと申す故に上一人より下万民に至るまで父母の敵宿世の敵謀叛夜討強盜よりも或畏れ或は瞋り或は詈り或は打つ、是をる者には所領を与へ是を讃むる者をば其の内を出だし或は過料を引かせ殺害したる者をば褒美なんどせらるる上兩度まで御勘気を蒙れり、当世第一の不思議の者たるのみならず人王九十代仏法渡りては七百余年なれどもかか不思議の者なし、日蓮は文永の大彗星の如し日本国に昔より無き天変なり、日蓮は正嘉の大地震の如し秋津洲に始めての地天なり、日本国に代始まりてより已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は

頼朝第二十六人は義時なり、二十四人は朝は責められ奉り獄門に首を懸けられ山野に骸を曝す、一人は王位を傾むけ奉り國中を手に拳る王法既に尽きぬ、此等の人人も日蓮が万人に悪まるるに過ぎず、其の由を尋ねれば法華經には最第一の文あり、然るを弘法大師は法華最第三・慈覚大師は法華最第一・智証大師は慈覚の如し、今叡山・東寺・園城寺の諸僧・法華經に向いては法華最第一と読めども其の義をば第二・第三と読むなり、公家と武家とは子細は知るしめさねども御帰依の高僧等皆此の義なれば師檀一同の義なり、其の外禅宗は教外別伝と云云・法華經を蔑如する言なり、念仏宗は千中無一・未有一人得者と申す心は法華經を念仏に對して挙げて失ふ義なり、律宗は小乘なり正法の時すら仏免し給う事なし況や末法に是を行じて国主を誑惑し奉るをや、妲己・妹喜・褒似の三女が三王を誑らかして代を失いが如し、かかる

悪^{あく}法^{ほう}国^{こく}に流^る布^ふして法^ほ華^け經^{きやう}を失^う故^{ゆえ}に安^あ德^{とく}・尊^{たか}成^{なり}等^らの大^{だい}王^{おう}・天^{てん}照^{しょう}
太^{たい}神^{しん}・正^{しょう}八^{はち}幡^{まん}に捨^すてられ給^{たま}いて・或^{ある}は海^{うみ}に沈^{しず}み・或^{ある}は島^{しま}に放^{はな}たれ給^{たま}い
相^{そう}伝^{でん}の所^{しょ}従^{じゆう}等^らに傾^{かた}けられ給^{たま}いしは天^{てん}に捨^すてられさせ給^{たま}う故^{ゆえ}ぞか
し、法^ほ華^け經^{きやう}の御^ご敵^{てき}を御^ご歸^き依^え有^ありしかども是^{これ}を知^しる人^{ひと}なれば其^その
失^{とが}を知^しる事^{こと}もなし、「知^し人^{ひと}は起^たを知^しり蛇^{じゃ}は自^みら蛇^{じゃ}を識^しる」とは是^{これ}なり。

にちれん ちじん あら じや
日蓮は智人に非ざれども蛇は竜の心を知り烏の世の吉凶を計る
が如し、此の事計りを勘へ得て候なり、此の事を申すならば須臾に
失に当るべし申さずば又大阿鼻地獄に墮つべし。

ほけきよう なら
法華經を習うには三の義あり一には謗人、勝意比丘・苦岸比丘・

むくろんし だいまんばらもん ごと
無垢論師・大慢婆羅門等が如し、彼等は三衣を身に纏い一鉢を眼

あたりに当てて二百五十戒を堅く持ちて而も大乘の讎敵と成りて無間・

だいじよう お
大城に墮ちにき、今・日本国の弘法・慈覚・智証等は持戒は彼等が

ごと ちえ びく だいちきよう しんこんだいいち ほけきよう
如く智慧は又彼比丘に異ならず、但大日經・真言第一・法華經第二

第三と申す

事百千に一つも日蓮が申す様ならば無間・大城にやおはすらん、此

の事は申すも恐れあり増して書き付くるまでは如何と思ひ候へども

ほけきよう さいだいいち
法華經最第一と説かれて候に是を二三等と読まん人を聞いて人を

恐れ国を恐れて申さずば即是彼怨と申して一切衆生の大怨敵なる

べき由・経と釈とにのせられて候へば申し候なり、人を恐れず世を
憚はばか

らず云う事我不愛身命がふあいしんみょう但惜無上道たんしやくむじょうどうと申すは是なり、不輕菩薩ふぎょうぼさつの
悪口杖石も他事たじに非ず世間せけんを恐れざるに非ず唯法華經ただほけきょうの責めあらくの
苦ねんころなればなり、例せば祐成すけなり・時宗が大将殿の陣の内を簡えらばざりし
は敵の恋しく恥はじの悲はしかりし故ぞかし、此これは謗人ほうじんなり。

謗家もうと申すは都すて一期いちごの間・法華經ほけきょうを謗むげんせず昼夜十二時に行おず
れども謗家に生れぬれば必ず無間地獄むげんじごくに墮おつ、例せば勝意比丘しょういびく・
苦岸比丘くがんびくの家に生まれて或あるは弟子でしとなり或あるは檀那だんなと成りし者共
が心ならず無間地獄むげんじごくに墮おちたる是これなり、譬たとえば義盛が方の者・軍を
せし者はさて置きぬ腹の内に有りし子も産を待たれず母の腹を裂
かれしが如ごとし

今日蓮いまにちれんが申もうす弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしょうの三大師だいしの法華經ほけきょうを正まさしく無明むみょうの

へんいき　こもつ
辺域・虚妄の法と書かれて候は若し法華經の文実ならば叡山・東寺
おんじょうじ　ななだいじ　にほん
・園城寺七大寺日本一万一千三十七所の寺の僧は如何が候はん
ずらん、先例せんれいの如ごとくならば無間むげん・大城だいじょう疑たがい無し、是これは謗家ぼうかなり。
謗国もうこくと申もうすは謗法ぼうぼうの者そ・其その国こくに住すれば其その一いつ国こく・皆みな無間むげん。
だいじょう
大城だいじょうになるなり、大海たいかいへは一切いっさいの水みづ集あり其その国こくは

一切いっさいの禍集まる、譬たとえば山に草木そうもくの滋しきが如ごとし、三災さんさい月月いづれに重かさなり
七難ひちなん日日にちじつに来る、飢渴けかち発れば其その国こく餓鬼道がきどうと変かじ疫病えきびょう重かさなれば
其その国地獄道じじくとなる軍起れば其その国修羅道しゆらどうと変かず、父母ふぼ・兄弟姊妹きょうだい
をば簡かんず妻さいとし夫たのみと憑たのみめば其その国畜生道ちくじょうとなる、死しして三惡道さんあくどうに
墮おつるにはあらず現身げんしんに其その国四惡道あくどうと變かずるなり、此これを謗国ぼうこくと
申もうす。

例だいせば大莊嚴だいそうごん仏ぶつの末法師ぼつし子音王おうぶつ仏ぶつの濁世じよくせの人人ひとびとの如ごとし、又報恩ほうおん
經きやうに説とくかれて候こうが如ごとくんば過去かこせる父母ふぼ・兄弟姊妹きょうだい一切いっさいの人死しせる
を食じし又生せいたるを食じす、今いま日本にほん国亦復また是この如ごとし真言しんごん師し・禪宗ぜんしゅう
持齋じさい等人ひとらを食じする者もの・国中こくちゆうに充満じゆうまんせり、是偏ひとえに真言しんごんの邪法じゃほうより事
起おこれり、竜象房りゅうじやうぼうが人ひとを食じいしは万あたらが一頭あたられたるなり、彼かに習ならいて人
の肉にくを

或あるは猪鹿ちちろくに交あへ、或あるは魚鳥ぎよちょうに切きり雑まじへ、或あるはたたき加かへ、或あるはすしと

して売る、食する者数を知らず皆天に捨てられ守護の善神に放されたるが故なり、結句は此の国・他国より責められ自国どし打ちして此の国変じて無間地獄と成るべし、日蓮此の大なる失を兼て見し故に与同罪の失を脱れんが為め仏の呵責を思う故に知恩報恩の爲め国の恩を報ぜんと思いて国主並に一切衆生に告げ知らしめしなり。

不殺生戒と申すは一切の諸戒の中の第一なり、五戒の初めにも不殺生戒八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網の十重禁戒・華嚴の十無尽戒・瓔珞經の十戒等の初めには皆不殺生戒なり、儒家の三千の禁の中にも大辟こそ第一にて候へ其の故は「満三千界・無有直身命」と申して三千世界に満つる珍宝なれども命に替る事はなし、

蟻子を殺す者尚地獄に墮つ況や魚鳥等をや青草を切る者猶地獄に

墮つ況や死骸を切る者をや、是くの如き重戒なれども法華經の敵に
成れば此れを害するは第一の功德と説き給うなり、況や供養を
展ぶ可けんや、故に仙予國王は五百人の法師を殺し覺徳比丘は
無量の謗法の者を殺し阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき、
此等の

國王比丘等は閻浮第一の賢王持戒第一の智者なり、仙予國王は
釈迦仏覺徳比丘は迦葉仏阿育大王は得道の仁なり、今日本国も
又是くの如し持戒・破戒・無戒王臣万民を論ぜず一同に法華經誹謗
の国なり、設い身の皮

をはぎて法華經を書き奉り肉を積んで供養し給うとも必ず国も滅
び身も地獄に墮ち給うべき大なる科あり、唯真言宗・念仏宗・
禅宗持齋等を禁めて身を法華經によせよ、天台の六十卷を空に浮
べて国主等には智人と思われたる人人の或は智の及ばざるか、或
は知れども世を恐るるかの故に、或は真言宗をほめ、或は念仏・禅
・律等に同ずれば彼等が大科には百千超えて候、例せば成良義村等
が如し、慈恩大師は玄賛十卷を造りて法華經を讚めて地獄に墮つ
、此の人は太宗皇帝の御師玄奘三蔵の上足十一面觀音の後身と
申すぞかし、音は法華經に似たれども心は爾前の經に同ずる故な
り、嘉祥大師は法華玄十卷を造りて既に無間地獄に墮つべかりしが
法華經を読む事を打ち捨てて天台大師に仕えしかば地獄の苦を
脱れ給いき、今法華宗の人人も又是くの如し、比叡山は法華經の御
住所。

日本国は一乗の御所領なり、而るを慈覚大師は法華經の座主を奪
い取りて真言の座主となし三千の大衆も又其の所従と成りぬ、
弘法大師は法華宗の檀那にて御坐ます嵯峨の天皇を奪い取りて
内裏を真言宗の寺と成せり、安德天皇は明雲座主を師として頼朝
の朝臣を調伏せさせ給いし程に、右大將殿に罰せらるるのみなら
ず安德は西海

に沈み明雲は義仲に殺され給いき、尊成王は天台座主・慈円僧正
とうじおむろ
東寺御室並に四十一人の高僧等を請下し奉り内裏に大壇を立てて
よしとき
義時右京の権の大夫殿を調伏せし程に、七日と申せし六月十四日
に洛陽破れて王は隱岐の国、或は佐渡の島に遷され座主御室は、或
は責められ、或は思い死に死に給いき、世間の人人、此の根源を知る
事なし

此れ偏に法華經・大日經の勝劣に迷える故なり、今も又日本国

だいもうここく
大蒙古国の責を得て彼の不吉の法を以て御調伏を行わると承わる
にっきふんみょう
又日記分明なり、此の事を知らん人争か歎かざるべき。

悲いかな我等誹謗正法の国に生れて大苦に値はん事よ、設い謗
われらひぼうしほうほう
身は脱ると云うとも謗家謗国の失如何せん、謗家の失を脱れんと
のが
思はば父母・兄弟等に此の事を語り申せ、或は悪まるるか或は信
ふぼ・きようだい
ぜさせまいらするか、謗国の失を脱れんと思はば国主を諫曉し
たてまつ
奉りて死罪か流罪かに行わるべきなり、我不愛身命但惜無上道と
しざい
るざい
とが
まぬか
あ
ある
にく
とが
まぬか
あ
こくしゆ
かんぎよう
がふあいしんみょうたんしやくむじようどう
説かれ

身軽法重・死身弘法と釈せられし是なり、過去遠遠劫より今に仏に
成らざりける事は加様の事に恐れて云い出さざりける故なり、未来
も亦復是くの如くなるべし今日蓮が身に当りてつみ知られて候、
設い此の事を知る弟子等の中にも当世の責のおそろしさと申し露の
身の消え難きに依りて・或は落ち・或は心計りは信じ・或はとかう
す、御経の文に難信難解と説かれて候が身に当つて貴く覚え候ぞ、
謗ずる人は大地微塵の如し信ずる人は爪上の土の如し、謗ずる人
は大海進む人は一。

天台山に竜門と申す所あり其の滝百丈なり、春の始めに魚集りて
此の滝へ登るに百千に一つも登る魚は竜と成る、此の滝の早き事矢
にも過ぎ電光にも過ぎたり、登りがたき上に春の始めに此の滝に漁
父集りて魚を取る網を懸くる事百千重・或は射て取り・或は酌んで
取る、鷲・鴟梟虎狼・犬・狐集りて昼夜に取りふなり

十年・二十年に一つも竜となる魚なし、例せば凡下の者の昇殿を望み下女が后と成らんとするが如し、法華經を信ずる事此にも過ぎ候と思食せ、常に仏禁しめて言く何なる持戒智慧高く御坐して一切經並に法華經を進退せる人なりとも法華經の敵を見て責め罵り国主にも申さず人を恐れて黙止するならば必ず無間・大城に墮つべし、

たと 譬えば我は謀叛を發さねども謀叛の者を知りて国主にも申さねば
よどうざい 与同罪は彼の謀叛の者の如し、南岳大師の云く「法華經の讎を見て
かしやく 呵責せざる者は謗法の者なり無間地獄の上に墮ちんと、見て申さ
ちしや ぬ大智者は無間の底に墮ちて彼の地獄の有らん限りは出ずべから
にちれん ず、日蓮此の禁めを恐るる故に國中を責めて候程に一度ならず
るざい 流罪・死罪に及びぬ、今は罪も消え過も脱れなんと思いて鎌倉を去
りて此の山に入つて七年なり。

此の山の為ていたらくにほんこく体日本国の中には七道しちどうあり七道しちどうの内に東海道十五箇
国、其その内に甲州・飯野・御牧・波木井はきりの三箇郷の内波木井はきりと申もうす、
此の郷の内戌亥いぬいの方に入りて二十余里の深山みやまあり、北は身延山・南
は鷹取山たかとり・西は七面山・東は天子山てんしなり、板を四枚つい立てたるが
如ごとし、此の外を回めぐりて四つの河あり北より南へ富士河・西より東へ早
河

此れは後なり、前に西より東へ波木井河の内に一つの滝あり身延河
と名けたり、中天竺の鷲峰山を此の処へ移せるか将又漢土の天台
山の来れるかと覚ゆ、此の四山四河の中に手の広さ程の平かなる
処あり、爰に庵室を結んで天雨を脱れ木の皮をはぎて四壁とし、
自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折りて身を養ひ秋は果を拾いて命
を支へ候つる程に、去年十一月より雪降り積て改年の正月今に絶る
事なし、庵室は七尺・雪は一丈・四壁は氷を壁とし軒のつらは
道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり、内には雪を米と積む、本より人も
来らぬ上雪深くして道塞がり問う人もなき処なれば現在に八寒
地獄の業を身につくのへり、生きながら仏には成らずして又寒苦鳥
と申す
鳥にも相似たり、頭は剃る事なければうづらの如し、衣は氷にと
ぢられて鶯鴛の羽を氷の結べるが如し、かかる処へは古へ昵びし

人も問わず弟子等にも捨てられて候いつるに此の御器を給いて雪を
盛りて飯と觀じ水を飲んでこんずと思う、志のゆく所・思い遣ら
せ給へ又又申すべく候、恐恐謹言。

弘安三年正月二十七日

日蓮花押

秋元太郎兵衛殿御返事

一七〇

兄弟抄 きょうだいでい

文永十二年四月 五十四歳御

作 1079p

与池上兄弟 きよつうだいでい 於身延

夫それ法華經ほけきょうと申もうすは八万法蔵はちまんほうぞうの肝心かんじん十二部經じふにぶきょうの骨髓こつずいなり、三世さんぜ
 の諸仏しよぶつは此こゝの經きょうを師しとして正覺しよかくを成なじ十方じゆつぽうの仏陀ぶつだは一乘いちじやうを眼目がんもく
 として衆生しゆじやうを引導いんどうし給たまふ、今現げんに經蔵きやうぞうに入いつて此これを見るみるに後漢ごかん
 の永平えいへいより唐とうの末まつに至いたるまで渡わたれる所ところの一切經論いっさいきやうろんに二本にほんあり、
 所謂いわゆる旧訳くやくの經きょうは五千四十八卷ごせんしよじふはちまゐなり、新訳しんやくの經きょうは七千三百九十九卷しちせんしよひやくしゆじふ
 なり、彼かの一切經いっさいきやう
 は皆みな各各かくかく分分ぶんぶんに随したがつて我第一だいいちなりとななのれり、然しかるに而ほけきやう法華經ほけきやうと彼かの
 經經きやうきやうとを引ひき合あはせて之これを見るみるに勝劣しやうれつ天地てんちなり高下かうげ雲泥うんでいなり、彼
 の經經きやうきやうは衆星しゆせいの如ごとく法華經ほけきやうは月げつの如ごとく彼の經經かゝのきやうきやうは燈炬とうこ・星月せいげつの

ごと ほけきょう だいにちりん ごと
如く法華経は大日輪の如し此れは総なり。

別して経文に入つて此れを見奉れば二十の大事あり、第一第二
の大事は三千塵点劫五百塵点劫と申す二つの法門なり、其三千
塵点と申すは第三の卷化城喩品と申す処に出でて候、此の
三千大千世界を抹して塵となし東方に向つて千の三千大千世界を
過ぎて一塵を下し又千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し此くの
如く三千大千世界の塵を下はてぬ、さてかえつて下せる
三千大千世界と下さざる三千大千世界をともおしふさねて又塵
となし、此

の諸の塵をもてならべをきて一塵を一劫として経尽しては、又始め
又始めかくのごとく上の諸塵の尽し経たるを三千塵点とは申すな
り、今三周の声聞と申して舍利弗・迦葉・阿難・羅云など申す
人人は過去遠遠劫・三千塵点劫

のそのかみ大通智勝仏と申せし仏の第十六の王子にてをばせし菩薩ほさつ
ましましき、かの菩薩ほさつより法華經ほけきょうを習ならいけるが悪縁あくえんにすかされて
法華經ほけきょうを捨はなつる心つきにけり、かくして、或あるは華嚴經けこんきょうへをち、或あるは
般若經はんぎやくきょうへをち、或あるは大集經だいしゅうきょうへをち、或あるは涅槃經ねはんきょうへをち、或あるは大日經だいにてんきょう
或あるは深密經じんみつ、或あるは觀經くわんきょう等へをち、或あるは阿含あこん・小乘經しょうじょうきょうへをち、
しけるほどに次第しだいに

墮ちゆきて後には人天の善根。後に悪にをちぬ、かくのごとく墮ち
ゆく程に三千塵点劫が間、多分は無間地獄少分は七大地獄また
まには一百余の地獄まれには餓鬼・畜生・修羅などに生れ大塵点
劫なんどを経て人天には生れ候けり。

されば法華經の第二の巻に云く「常に地獄に処すること園觀に遊
ぶが如く余の悪道に在ること己が舍宅の如し」と等云云、十悪をつく
る人は等活黒繩なんど申す地獄に墮ちて五百生。或は一千歳を
經、五逆をつくれる人は無間地獄に墮ちて一中劫を経て後は又かへ
りて生ず、いかなる事にや候らん法華經をすつる人はすつる時はさ
しも父母を殺すなんどのやうにをびただしくはみへ候はねども無間
地獄に墮ちては多劫を経候、設父母を一人・二人・
十人・百人・千人・万人・十万人・百万人・億万人なんど殺して候と
もいかんが三千塵点劫をば経候べき、一仏・二仏・十仏・百仏・千仏

万仏ないし乃至・億万仏を殺したりともいかんが五百塵点劫ごひやくじんでんごうをば経候へそうちうべき、しかるに法華経ほけきやうをすて候いけるつみによりて三周の声聞しやうもんが三千塵点劫さんぜんじんてんごうを経諸大菩薩しよだいぼさつの五百塵点劫ごひやくじんでんごうを経候へそうちうけることをびただしくをばへ

候、せんするところはをもつて虚空こくうを打てばくぶしいたからず石を打てばくぶしいたし、悪人あくにんを殺すは罪つみあさし善人ぜんにんを殺すは罪つみふかしある或は他人たにんを殺すはをもつて泥を打つがごとし父母ふぼを殺すはをもつて石を打つがごとし、鹿をほうる犬は頭うづへわれず師子ししを吠る犬は腸はらわたくさる日月にちがつをのむ修羅しゆらは頭うづへ七分にわれ仏を打ちし提婆だいばは大地だいちわれて入りにき、所対しよたいによりて罪つみの軽重けいちやうはありけるなり。

さればこの法華経ほけきやうは一切いっさいの諸仏しよぶつの眼目がんもく教主きやうしゆ釈尊しやくそんの本師ほんしなり、一字いちじ一点もすつる人あれば千万の父母ふぼを殺せる罪つみにもすぎ十方じゆっぽうの仏の身より血いを出す罪つみにもこへて候けるゆへに三五の塵点じんてんをば経候へそうちうけ

るなり此の法華經はさてをきたてまつりぬ又此の經を經のごとくに
とく人に値あうことは難かたきにて候、設たい一い眼の龜の浮木うきぎには値あうとも・
はちすのいとをもつて須弥山しゅみせんをば虚空こくうにかくとも法華經ほけきようを經のごと
く説く人にあひがたし。

されば慈恩大師と申せし人は玄奘三蔵の御弟子太宗皇帝の御師
なり、梵漢を空にうかべ一切経を胸にたたへ仏舍利を筆のさきより
雨らし牙より光を放ち給いし聖人なり、時の人も日月のごとく
恭敬し後の人も眼目とこそ渴仰せしかども伝教大師これをせめ
給うには雖讚法華経・還死法華心等云云、言は彼の人の心には
法華経をほむと

をもへども理のさすところは法華経をころす人になりぬ、善無畏
三蔵は月支国うぢやうな国の国王なり、位をすて出家して天竺五
十余の国を修行して顕密二道をきわめ、後には漢土にわたりて
玄宗皇帝の御師となる、尸那日本の真言師誰か此人のながれにあ
らざる、かかるたうとき人なれども一時に頓死して閻魔のせめに
あはせ給う、いかなりけるゆへとも人しらず。

日蓮此れをかんがへたるに本は法華経の行者なりしが大日経を

見て法華經にまされりといふしゆへなり、されば舍利弗・目連等が
三五の塵点を経しことは十悪・五逆の罪にもあらず謀反・八虐の失
にてもあらず、但悪知識に値うて法華經の信心をやぶりて權經に
うつりしゆへなり、天台大師釈して云く「もし悪友に値えば則ち
本心を失う」

云云、本心と申すは法華經を信ずる心なり、失うと申すは法華經
の信心を引きかへて余經へうつる心なり、されば經文に云く
「ねんよろうやくにふこうぶく
然と良薬而不肯服」等云云、天台の云く「其の心を失う者は良薬
を与うと雖も而かも肯て服せず生死に流浪し他国に逃逝す」云云。

されば法華經を信ずる人のをそるべきものは賊人・強盜・夜打ち
虎狼師子等よりも当時の蒙古のせめよりも法華經の行者をなやま
す人人なり、此の世界は第六天の魔王の所領なり一切衆生は無始
已來彼の魔王の眷属なり、六道の中に二十五有と申するををかまへ

て一切衆生いっさいしゆじやうを入るるのみならず妻子めこと申すもうほだしをうち父母ふぼ・
主君しゆくんと申すもう

網あみをそらにはり貪とん・瞋じん・癡ちの酒をのませてぶつしやう仏性のほんしん本心をたばらか
す、但あくのさかなのみをすすめてさんあくどう三悪道の大地だいちに伏臥ふくがせしむ、た
またま善の心あればしやうげ障碍をなす、法華経ほけきやうを信ずる人をば、いかにも
して悪へ墮ださんとをもう

に叶かなわざればやうやくすかささんがために相似そうじせる華嚴經けこんきょうへをとし
つ杜順としゆん・智儼ちごん・法蔵ほうぞう・澄觀ちようかん等是これなり、又般若經はんによぎょうへすかしをとす悪友あくゆう
は嘉祥僧詮等是これなり、又深密經じんみつへすかしをとす悪友あくゆうは玄奘げんじょう・慈恩じおん
是これなり、又大日經だいにちきょうへすかしをとす悪友あくゆうは善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくう・
弘法こうぼう・慈覺じかく・智証是これなり、又禪宗ぜんしゅうへすかしをとす悪友あくゆうは達磨だるま・慧可えか
等是これなり、又觀經かんきょうへすかしをとす悪友あくゆうは善導ぜんどう・法然是これなり、此は
第六天だいろくてんの魔王まおうが智者ちしやの身に入つて善人ぜんんにんをたばらかすなり、法華經第
五の卷に「悪鬼あくきそ其の身に入ること説かれて候は是これなり。
設たとひ等覺とうかくの菩薩ぼさつなれども元品がんぼんの無明むみょうと申もうす大悪鬼身あくきに入つて
法華經ほけきょうと申もうす妙覺みょうかくの功德くどくを障さやへ候なり、何いかに況いわんや其その已下いかの
人人ひとびとにをいてをや、又第六天だいろくてんの魔王まおう・或あるは妻子さいしの身に入つて親おやや夫
をたばらかし、或あるは国王こくおうの身に入つて法華經ほけきょうの行者ぎやうじやををどし、或あるは
父母ふぼの身に入つて孝養こうじやうの子をせむる事あり、悉達太子しつたたいしは位を捨てん

とし給たまいしかば

羅ら 羅らはらまれてをはしませしを浄飯王此の子生れて後しゅつ出家けし

給たまえといさめられしかば魔まが子をををさへて六年なり、舎利弗しゃりほつは昔

禅多羅ぜんた仏ぶつと申まをせし仏ぶつの末ま世せに菩薩ぼさつの行ぎやうを立たてて六十劫を経へたりき、

既すでに四十劫かちかづきしかば百劫ひやくにてあるべかりしを第六天の魔王・

菩薩ぼさつの行ぎやうの成じやうぜん事じをあぶなしとや思おもいけん、婆羅門ばらもんとなりて眼まなこ

を乞こい

しかば相違そうゐなくとらせたりしかども其そのより退たいする心こころ出来できて舎利弗しゃりほつ

は無量劫むりやうこつが間ま・無間地獄むげんじごくに墮おちたりしぞかし、大莊嚴だいそうごん仏ぶつの末まの六百

八十億はちじゅうひやくの檀那だんな等はは苦岸くがん等の四よ比丘びくにたばらかされて普事ふじ比丘びくを

怨あだみてこそ大地だいち微塵みじん劫こつが間ま・無間地獄むげんじごくをへ経へしぞかし、師子音王ししおんおう仏ぶつの

末まの男女なんによ等はは勝意しょうい比丘びくと申まをせし持戒じかいの僧そうをたのみて喜根きこん比丘びくを笑

うてこそ無量劫むりやうこつが間ま地獄じごくに墮おちつね。

今又日蓮が弟子・檀那等は此にあたり、法華經には「如来の
げんざい 現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又云く「一切世間怨多く
して信じ難し」涅槃經に云く「横に死殃に羅り呵嘖・罵辱・鞭杖・
へいけい 閉繫・飢餓・困苦・是くの如き等の現世の輕報を受けて地獄に墮ち
ず」等云云、般泥・經に云く「衣服不足にして飲食・疎なり財を求め
るに利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ・或いは王難及び余の
しゅじゅ 種種の人間の苦報に遭う現世に軽く受くるは斯れ護法の功德力に
よ 由る故なり」等云云、文の心は我等過去に正法を行じける者にあだ
をなしてありけるが今かへりて信受すれば過去に人を障る罪にて
みらい 未来に大地獄に墮つべきが、今生に正法を行ずる功德強盛なれば
みらい 未来の大苦をまね
ぎこして少苦に値うなり、この經文に過去の誹謗によりてやうやう
かほう の果報をうくるなかに、或は貧家に生れ、或は邪見の家に生れ、或は

王難なんに値あう等云、この中に邪見じやけんの家と申もうすは誹謗正法ひぼうしやうほうの家なり
王難なん等と申もうすは悪王あくおうに生れあうなり、此二つの大難だいなんは各各の身に当
つてをばへつべし、過去かこの謗法ほうほうの罪つみを滅せんとて邪見じやけんの父母ふぼにせめ
られ

させ給たまう、又法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだむ国主こくしゆにあへり經文明明きやうもんたり
經文きやうもん赫赫かくかくたり、我身わがみは過去かこに謗法ほうほうの者ものなりける事こと疑うたがひい給たまうこと
なかれ、此れこを疑うたがひつて現世げんせの輕苦しゆ忍しのびがたくて慈父じふのせめに随したがい
て存外ぞんがいに法華經ほけきやうをすつるよしあるならば我身わがみ地獄じごくに墮おつるのみなら
ず悲母ひもも慈父じふも大阿鼻地獄あびじごくに墮おちてともになしまん事こと疑うたがひいな
かるべし、

大道心どうしんと申もうすはこれなり。

各各ずいづい随分ずいぶんに法華經ほけきやうを信しんぜられつるゆへに過去かこの重罪じゆうざいをせめいだ
し給たまいて候、たとへばくろがねをよくよくきたへばきずのあらわる

るがごとし、石はやけばはいとなる金は・やけば真金となる、此の度
こそ・まことの御信用は・あらわれて法華經の十羅刹も守護せさせ
給うべきにて候らめ、雪山童子の前に現ぜし羅刹は帝釈なり
尸毘王

のはとは毘沙門天ぞかし、十羅刹・心み給わんがために父母の身に
入らせ給いてせめ給うこともや・あるらん、それにつけても、心あさ
からん事は後悔あるべし、又前車のくつがへすは後車のいましめぞ
かし、今の世には・なにとなくとも道心をこりぬべし、此の世のあり
さま厭うともよも厭われじ日本の人人定んで大苦に値いぬと見へて

候

眼前の事ぞかし、文永九年二月の十一日にさかなりし華の大風に
をるるがごとく清絹の大火に・やかるるがごとくなりしに・世をい
とう人のいかでかなかるらん文永十一年の十月ゆきつしまのものど

も
一^{いち}
時^じ
に
死^し
人^{にん}

となりし事は、いかに人の上とを、をぼすか當時も、かのうてに向か
いたる人人ひとびとのなげき老たるをやをさなき子わかき妻めづらしかり
し。すみかうちすてて、よしなき海をまほり雲の、みうればはたかと
疑うたがいい、つりぶねの、みゆれば兵船かと肝心かんじんをけす、日に一二度山え
のぼり夜に三四度馬にくらを、をく、現身げんしんに修羅道しゅらどうをかんぜり、各
各のせめられさせ給たまう事も詮せんするところは国主こくしゅの法華經ほけきょうのかたき
となれるゆへなり、国主こくしゅのかたきとなる事は持齋等じさい、念仏ねんぶつ、真言師しんごんし
等が謗法ほうぼうよりをこれり、今度このたびねうしくらして法華經ほけきょうの御利生心りじょうしんみさ
せ給たまへ日蓮にちれんも又強盛かうじょうに天に申し上げ
候なり、いよいよ、をづる心ねすがた、をはずべからず、定んで女人にょにん
は心よはくをはすれば、こぜたちは心ひるがへりてやをはずらん、
がうじやうに、はがみをして、たゆむ心なかれ、例せば日蓮にちれんが平
左衛門さえもんの尉がもとにて、うちふるまいいゝしがごとく、すこしもをづ

る心なかれ、わだが子となりしもの・わかさのかみが子となりし・将門・

貞当まこととうが郎従等らうじゆとうとなりし者、仏になる道には・あらねども・はぢを・をもへば命をしまぬ習ならいなり、なにと・なくとも・一度ひとたびの死は一定なり、いろばしあしくて人に・わらはれさせ給たまうなよ。

あまりにをぼつかなく候へば大事だいじのものがたり一つ申もつす、白伯夷叔叔音せいと申せし者は胡竹国の王の二人の太子たいしなり、父の王弟の叔せいに位をゆづり給たまい、父して後叔せい位につかざりき、白いひが云いく位につき給たまえ叔せいが云いく兄位を継たま給たまえ白いひが云いくいかに親の遺言ゆいごんをばたがへ給たまうぞと申せしかば親の遺言ゆいごんはさる事なれども

いかんが兄を・をきては位には即くべきと辞退せしかば、二人共に父母ふぼの国をすてて他国たこくへわたりぬ、周の文王につかへしほどに文王

殷いんのちゆうの紂王に打たれしかば武王百箇日が内にいくさををこしき、白
ひ叔ごさんせいは武王の馬の口にとりつきていさめて云いわく・をやのしして
後三箇年が内にいくさををこすはあに不孝ふこうにあらずや、武王いか
り

て白ひ叔せいを打たんとせしかば大公望たいこうぼうせいして打たせざりき、二
人は此の王をうとみてすやうと申もうす山にかくれるてわらびををり
て命をつぎしかば、麻子あさのみと申もうす者ゆきあひて云いわくいかにこれには
をはするぞ二人

かみくだん
上件の事をかたりしかば麻子が云くさるにては・わらびは王の物に
あらずや、二人せめられて爾の時よりわらびをくわず、天は賢人を
すて給わぬならひなれば天白鹿と現じて乳をもつて二人をやしなひ
き、白鹿去つて後に

叔せいが云く此の白鹿の乳をのむだにもうましまして肉をくわんと
いゝしかば白ひせいしかども天これを・

ききて来らず、二人うへて死ににき、一生が間賢なりし人も一言に
身をほろぼすにや、各各も御心の内はしらず候へば・をぼつかなしを
ぼつかなし。

釈迦如来は太子にてをはせし時父の浄飯王太子を・をしみたて
まつりて出家をゆるし給はず、四門に二千人のつわものをすへてま
ほらせ給ひしかども、終にをやの御心をたがへて家をいでさせ給
き、一切は・をやに随うべきにてこそ候へども仏になる道は随わぬが

孝養の本にて候か、されば心地観経には孝養の本をとかせ

給うには棄恩入無為眞実報恩者等云云、言はまことの道に入るには

父母の心に随わずして家を出て仏になるがまことの恩をほうずるに

てはあるなり、世間の法にも父母の謀反などををこすには随わ

ぬが孝養とみへて

候ぞかし、孝経と申す経に見へて候、天台大師も法華経の三昧に入

らせ給いてをはせし時は父母左右のひぎに住して仏道をさえんとし

給いしなり、此れは天魔の父母のかたちをげんじてさうるなり。

白ひすくせいが因縁はさきにかき候ぬ、又第一の因縁あり、

日本国の人王第十六代に王をはしき心神天王と申す今の八幡大

菩薩これなりこの王の御子二人まします嫡子をば仁徳・次男は宇

治王子天王・次男の宇治の王子に位をゆづり給いき、王ほうぎよな

らせ給いて後・宇治の王子の云く兄位につき給うべし、兄の云く、い

かに・をやの

御ゆづりをばもちゐさせ給^{たま}わぬぞ、かくのごとくたがい^たにろむじ
て、三箇年が間位に王をはせざりき、万民^{ばんみん}のなげきいうばかりなし
天下^{てんか}のさいにてありしほどに、宇治の王子^{みこ}云く我^わいきてあるゆへに
あに位に即^たき給^{たま}わずといつて死させ給^{たま}いにき、仁徳これをなげかせ
給^{たま}いて又ふししづませ給^{たま}いしかば、宇治の王子^{みこ}い

きかへりて・やうやうに・をほせをかせ給いて・又ひきいらせ給いぬ、
さて仁徳・位につかせ給いたりしかば国を
だやかなる上しんら・はくさひ・がうらいも日本国にしたがひて・ね
んぐを八十そうそなへけると・こそみへて候

へ。

賢王けんおうのなかにも兄弟きょうだいをだやかならぬれいも・あるぞかし・いかな

るちぎりにて兄弟きょうだいかくはをはするぞ浄蔵・浄眼の二人の太子たいしの生

れかはりてをはするか薬王薬上やくおうの二人か、大夫志殿たゆうのさかんどの御をやの

御勘気ごかんきはうけ給たまわりしか

どもひやうへの志殿さかんどの事は今度このたびはよもあには・つかせ給たまはじさる

にてはいよいよ大夫志殿たゆうのさかんどのをやの御不審ふしんはをぼるげにてはゆりじな

んどをもつて候へばこのわらわの申し候もうはまことにてや候らん、御同

心もうと申し候へば・あまりの・ふしぎさに別べちの御文おんふみをまいらせ候、未来みらい

までのものがたり・なに事かこれにすぎ候べき。

西域さいいきと申もうす文にかきて候は月氏がっしに婆羅はらなつしこく 斯国せろくりん・施鹿林せろくりんと申もうすとこ
ろに一の隠士じんちくあり仙の法を成じょうせんとをもう、すでに瓦礫がりやくを変じて宝
となし人畜じんちくの形をかえけれどもいまだ風雲にのつて仙宮にはあそば
ざりけり、此の事を成じょうせんがために一の烈士をかたらひ長刀をもた
せて壇の隅に立てて息をかくし言をたつ、よひよりあしたにいたる
まで・ものいはずば仙の法じょう成じょうずべし、仙を求る隠士は壇の中に坐し
て手に長刀をとつて口に神呪じんしゆをずうす約束やくそくして云いわく設たひ死しなんとす
る事ありとも物言ことう事なかれ烈士いわ云いわく死すると物いはじ、此の
如ごとくして既すでに夜中を過すぎて

夜まさにあけんとする時、如何いかんが思いけん烈士おおい大に声をあげて呼は
る、既すでに仙の法成じょうぜず、隠士烈士に言いわつて云いわく何いかに約束やくそくをばたがふ
るぞ口惜くちおししき事なりと云う、烈士なげ歎なげいて云いわく少し眠いつてありつれば

昔し仕へし主人しゅじん自ら来りて責めつれども師の恩厚ければ忍で物いはず、彼の主人しゅじん怒つて頸をはねんと云う、然而しかるに又ものいはず、遂に頸を

切りつ中陰おもむに趣く我が屍しかばねを見れば惜おしく歎なげかし然而しかるに物いはず、遂に南印度いんどの婆羅門ばらもんの家に生れぬ入胎しゅつたいするに大苦忍しのびがたし然而されど息を出さず、又物いはず已すでに冠者いとなりて妻をとつぎぬ、又親死ぬ又子をまうけたり、か

なしくもありよろこばしくもあれども物いはず此くの如くして年六十有五になりぬ、我が妻かたりて云く汝若し物いはずば汝がいとをしみの子を殺さんと云う、時に我思はく我已に年衰へぬ此の子を若し殺されなば又子をまうけがたしと思いつる程に声をおこすとをもへばをどろきぬと云いければ、師が云く力及ばず我も汝も魔に

たばらかされぬ終に此の事成ぜずと云いければ、烈士大に歎きけりわがこころ我心よはくして師の仙法を成ぜずと云いければ、隠士が云く我がとが失なり兼て誠めざりける事をと悔ゆ、然れども烈士師の恩を報ぜざりける事を歎きて遂に思ひ死にししぬとかかれて候、仙の法と申すは漢土には儒家より出で月氏には外道の法の一分なり、云うにかひ無

き仏教の小乗・阿含経にも及ばず況や通別円をや況や法華経に及

ぶべしや、かかる浅き事だにも成じょうぜんとすれば四魔競て成じかたし、何いかに況や法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を始めて持たんにほんこくぐつう日本国の弘通の始ならん人の弟子檀那だんなとならん人人の大難だいなんの来らん事をば言をもつて尽し難がたし心をもつてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止觀と申す文は天台一期の大事一代てんだいいちご聖教の肝心ぞかし、仏法漢土に渡つて五百余年・南北の十師・智は

日月に齊く徳は四海に響ひびききしかどもいまだ一代聖教の浅深せんじん勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教を

あきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華經の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を

取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり、此の法門は漢土に始はつもとるのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安あか大師の釈に云く「止觀の明静なる前代に未だ聞かず」云云、又云く

「てんじく だいろんなおそ
天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止觀の第五の卷
いちねんさんぜん
の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには
しゅつたい
必ず魔出来

すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の卷に云く「行解既に
つと
勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る
べか
可らず之に随えば將に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を
しゅう
修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず
もんか
門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ。

此の釈に三障と申すは煩惱障・業障・報障なり、煩惱障と申すは
とん・じん・ち 貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等により
て障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来す
べし、又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今・日本国に我も
しかん 止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人
あるや、之に随え

ば将に人をして悪道に向わしむと申すは只三悪道のみならず人天
まさ 九界を皆悪道とかけり、されば法華経を除きて華嚴・阿含・方等・
はんにや 般若・涅槃・大日経等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を
あくどう 悪道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華経を信ず
るやうにて人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり。

今二人の人人は隠士と烈士とのごとし一もかけなば成ずべから
ず、譬えば鳥の二つの羽人の両眼の如し、又二人の御前達は此の
たと

ひとびと 人人の檀那ぞかし女人となる事は物に随つて物を随える身なり夫
たのしくば妻もさかふべし夫盗人ならば妻も盗人なるべし、是れ
偏に今生計りの事にはあらず世生生に影と身と華と果と根と葉
との如く

にておはするぞかし、木にすむ虫は木をはむ水にある魚は水をくら
ふ芝かるれば蘭なく松さかうれば柏よろこぶ、草木すら是くの如
し、比翼と申す鳥は身は一つにて頭二つあり二つの口より入る物一
身を養ふ、ひほくと申す魚は一目づつある故に一生が間はなる事
なし、夫と妻とは是くの如し此の法門のゆへには設ひ夫に害せらる
るとも悔ゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば童女が跡をつ
ぎ末代悪世の女人の成仏の根本と成り給うべし、此くの如くおは
さば設ひいかなる事ありとも日蓮が二聖・二天・十羅刹釈迦・多宝
に申して順次生に仏になしたてまつるべし、心の師とはなるとも心

を師とせざれとは六波羅蜜經の文なり。

設たとひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只ただ法華經の
事のみさはぐらせ給たまうべし、中にも日蓮にちれんが法門ほつもんは古へこそ信じかた
かりしが今は前前ひまひまいひをきし事す既すでにあひぬればよしなく謗ぼうぜし人ひと人びと
も悔くゆる心あるべし、設たとひこれより後に信ずる男女なんよありとも各各には
かへ思ふべからず、始は信じてありしかども世間せけんのをそろしさにす

つ

る人人かずをしらず、其の中に返つて本より謗ずる人人よりも
強盛にそしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘等は始は信じ
てありしかども後にすつるのみならず返つて仏をはうじ奉りしゆへ
に仏も叶い給はず無間地獄にをちにき、此の御文は別してひやうへ
の志殿へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によく
よく申しきかせさせ給うべしきかせさせ給うべし南無妙法蓮華經。

文永十二年四月十六日

日蓮 花押

一七一 兵衛志殿御返事

建治元年八月五十四歳

御作 於身延

1089p

驚目二貫文・武蔵房円日を使にて給ひ俣い畢んぬ、人王三十六代

皇極天皇と申せし王は女人にてをはしき、其の時入鹿の臣と申す

者あり、あまり・おごりのものぐるわしさに王位をうばはんと・

ふるまいしを、天皇王子等不思議とはをばせしかども・いかにも力

及ばざりしほどに、大兄の王子・軽の王子等なげかせ給いて中臣の

鎌子と申せし臣に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく・いかにも

人力はかなうべしとは・みへ候はず、馬子が例をひきて教主釈尊の

御力ならずば叶がたしと申せしかば・さらばとて釈尊を造り奉り

て・いのりしかば入鹿ほどなく打れにき、此の中臣の鎌子と申す人

は後には姓をかへて藤原の鎌足と申し内大臣になり大職冠と申す人

藤原 今の一の人の

御先祖なり、此の釈迦仏は今の興福寺の本尊なり、されば王の王た

るも釈迦仏・臣の臣たるも釈迦仏・神国の仏国となりし事もえもん

のたいう殿の御文おんふみと引き合せて心へさせ給へたま今代きんだいの他国たこくにうばわれんとする事・釈尊しゃくそんを・いるがせにする故なり神の力も及ぶべからずと申すもうはこれなり、各各は二人は・すでにとこそ人はみしかども・かくいみじくみへさせ給うはたま・ひとえに釈迦しゃかぶつ・法華經ほけきょうの御力おんちからなりと・をばすらむ、又此これにもをもひ候、後生ごじょうのた

のもしさ申すばかりなし、此れより後も、いかなる事ありとも、すこ
しもたゆむ事なかれ、いよいよ、はりあげてせむべし、設ひ命に及ぶ
とも、すこしも、ひるむ事なかれ、あなかしこ、あなかしこ、恐恐
謹言。

八月二十一日

日蓮花押

兵衛志殿御返事

一七二 兵衛志殿御返事

建治元年十一月 五十四

歳御作 於身延 1090P

かたがたのものふ二人を、もつて、をくりたびて候、その心ざし弁
殿の御ふみに申すげに候、さてはなによりも御ために第一の大事を
申し候なり、正法・像法の時は世もいまだをとるへず、聖人・賢人も

つづき生れ侯き天も人をまほり給いき、末法になり侯へば人のとん
よく貪欲とんよく やうやくすぎ侯て主と臣おみと親と子と兄と弟と諍論じょうろんひま
なし、まして他人たにんは申もつすに及およばず、これによりて天もその国をす
つれば三災さんさい・七難ひちなん乃至ないし一・二・三・四・五・六・七の日いいでて草木そうもくかれうせ小大
河もつき大地だいちはすみのごとくをこり大海たいかいはあぶらのごとくになり。
けつくは無間地獄むげんじじくより炎えんいでて上梵天ぼんてんまで火炎くわえん・充滿じゅうまんすべし、これ
ていの事こといでんとてやうやく世間せけんはをとへ侯みなり、皆人みなのをもひて
侯そうらは父ちちには
子こしたがひ臣おみは君きみにかなひ弟子でしは師しにゐすべからずと云云、かしこ
き人もいやしき者ものもしれる事ことなり、しかれども貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちと
申もつすさけにえいて主に敵たてし親おやをかるしめ師しをあなづるつねにみへて
侯、但師しと主ぬしと親おやとに払はらいてあしき事をば諫いんば孝養こうようとなる事はさき
の御ごふみにかきつけて侯そうらいしかばつねに御ごらむあるべし。

ただこのたびも、おんまえ志じどのかさねて親のかんだうあり。どの
御前おんまえにこれにて申せしがごとく一定かんだうあるべし。ひやうへの
志殿さかんのをぼつかなし。ごせんかまへて御心へあるべしと申まうして供きやうしなり
今度このたびはとのは一定をち

給いぬと・をぼうるなりをち給はんをいかにと申す事はゆめゆめ
侯はず但地獄にて日蓮をうらみ給う事なかれしり候まじきなり千
年のかるかやも一時にはひとなる百年の功も一言にやぶれ候は法の
ことわりなり、さえもんの大夫殿は今度・法華經のかたきに・なり
さだまり給うとみへて侯、えもんのたいの志殿は今度・法華經の
行者になり侯はんずらん、とは現前の計なれば親につき給はんず
らむ、ものぐるわしき人人はこれをほめ侯べし、宗盛が親父
入道の悪事に随いてしのわらにて頸を切られし重盛が随わずして
先に死せしいづれか親の孝人なる、法華經のかたきになる親に随い
て一乗の行者なる兄をすてば親の孝養となりなんや、せんすると
ころひとすぢにをもひ切つて兄と同じく仏道をなり給へ、親父は
妙莊嚴王のごとし兄弟は淨蔵・淨眼なるべし、昔と今はかわると
も法華經のこ

とわりは・たがうべからず・当時も武蔵の入道そこばくの所領
所従等をすてて遁世あり、ましてわどのばらがわづかの事をへつら
ひて心うすくて悪道に堕ちて日蓮をうらみさせ給うな、かへすがへ
す今度とのは堕べしとをぼうるなり。

此の程心ざしありつるがひきかへて悪道に堕ち給はん事がふび
んなれば申すなり、百に一つ千に一つも日蓮が義につかんとをぼさ
ば親に向つていい切り給へ親なればいかにも順いまいらせ候べきが
法華経の御かたきになり給へばつきまいらせては不孝の身となり
ぬべく候へばすてまいらせて兄につき候なり、兄をすてられ候わば
兄と一同とをぼすべしと申し切り給へすこしもをそるる心なか
れ過去遠遠劫より法華経を信ぜしかども仏にならぬ事これなり、
しをのひるとみつと月の出づるといとると夏と秋と冬と春とのさ
かひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず

三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり、

此の事は・わざとも申し又びんぎにと・をもひつるに御使ありがたし、墮ち給うならば・よもこの御使は・あらじと・をもひ候へば・もしやと申すなり。

仏になり候事は此の須弥山にはりをたてて彼の須弥山より熊を
はなちて、そのいとすくにわたりてはりのあなに入るよりもか
たし、いわうや・さかさまに大風のふきむかへたらんは、いよいよか
たき事ぞかし、経に云く「億億万劫より不可議に至る時に乃ち是の
法華経を聞くことを得・億億万劫より不可議に至る諸仏・世尊時に
是の

経を説きたもう・是の故に行者・仏滅後に於て是くの如きの経を開
いて疑惑を生ずること勿れな等云云、此の经文は法華経二十八品の
中に・ことにめづらし、序じ仰より法師品にいたるまで等覚とうかく已下いか
人天・四衆・八部・其のかずありしかども仏は但釈迦如来一仏なり
重しげくてかろきへんもあり、宝塔品より囑累品にいたるまでの十二品
は殊ことに重

きが中の重きなり、其の故は釈迦仏の御前に多宝の宝郡部現せり

月の前に日の出でたるがごとし、又十方の諸仏は樹下に御はしま
す十方世界の草木の上に火をともせるがごとし、此の御前にてせ
んせられたる文なり。

涅槃經に云く、「昔無數無量劫より来た常に苦惱を受く、一一の

衆生一劫の中に積む所の骨は王舎城の毘富羅山の如く飲む所の

乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く

父母・兄弟・妻子・眷属の命終に哭泣して出す所の目涙は四大海

より多く、地の草木を尽くして四寸の籌と為し以て父母を数うも

亦尽くすこと能わじ云云、此の經文は仏最後に雙林の本に臥てか

たり給いし御言なりもつとも心をとどむべし、無量劫より已来生と

ころの父母は十方世界の大地の草木を四寸に切りてあてかそうと

も・たるべからずと申す經文なり、此等の父母にはあひしかども

法華經にはいまだ・あわず、されば父母はまうけやすし法華經はあ

ひがたし、今度あひやすき父母のことばを・そむきて・あひがたき
法華経のともにはなれずば我が身・仏になるのみならず・そむきし
をやをもみちびき

なん、例せば悉達太子は浄飯王の嫡子なり国をもゆづり位にもつ
けんと・をぼして・すでに御位につけまいらせたりしを御心をやぶり
て夜中城をにげ出でさせ給いしかば不孝の者なりと・うらみさせ
給いしかども仏にならせ給うては・まづ浄飯王・麻耶夫人をこそ・み
ちびかせ給いしか。

をや親という。をやの世をすてて仏になれと申もつす。やは一人もなきなり、これはとによせ。かくによせてわど和殿のばらを持齋じさい。念仏者等が・つくり・をとさんために・をやを・すすめをとすなり、両火房は百万反の念仏ねんぶつをすすめて人人の内をせきて法華經のたねを。たとんとはかるときくなり、極楽寺殿はいみじかりし人ぞかし、念仏者等に

たばらかされて日蓮にちれんを怨あだませ給たまいしかば我が身みといい其その一門いちもん皆ほろびさせ給たまう。ただいまは・へちこの守殿しゅどの一人計ばかりなり、両火房をしんしょう御信用ある人はいみじきと御らむあるか、なごへの一門いちもんの善光寺・長楽寺ちやうらくじ・大仏殿だいぶつでん立てさせ給たまい

て其その一門いちもんのならせ給たまう事をみよ、又守殿しゅどのは日本国にほんこくの主にてをはするが、一閻浮提えんぶだいのごとくなる。かたきをへさせ給たまへり。

わどの見をすてて・あにがあとを・ゆづられたりとも千万年せんまんのさ

かへがたかるべし、しらず又わづかの程にや・いかんが・このよなら
んずらん、よくよくをもひ切つて一向いっこうに後世ごしやうをたのまるべし、かう
申もうすともいたづらのふみなるべしと・をもへば、かくも・ものうけれ
ども・のちのをもひでに・しるし申もうすなり、きようきようきんげん恐恐謹言

十一月二十日

にちれんかおう日蓮花押

兵衛志殿御返事さかんだのこへんじ

先度仏器まいらせさせ給ひ候しが、此度此の尼御前大事の御馬に
 のせさせ給て候由承はり候、法にすぎて候。御志かな。これは殿はさ
 る事にて、女房のはからひか、昔儒童菩薩と申せし菩薩は、五茎の
 蓮華を五百の金錢を以て、かいとり、定光菩薩を七日七夜供養し給
 ひき、女人あり、瞿夷となづく、二茎の蓮華を以て自ら供養して云
 く、凡夫にてあらん時は世世・生生・夫婦とならん、仏にならん時は
 同時に仏になるべし。此のちかひくちずして、九十一劫の間・夫婦と
 なる、結句、儒童菩薩は今の釈迦仏。昔の瞿夷は今の耶輸多羅女。
 今法華經の勸持品にして具足千万光相如来是なり、悉達太子
 檀特山に入り給しには、金泥駒・帝釈の化身、摩騰迦・竺法蘭の經

を漢土かんどに渡せしには十羅刹じゅうらせつ・化して白馬はくばとなり給ふ、此馬も法華經ほけきょう
の道なれば百二十年御さかへの後・靈山淨土じょうとへ乗り給ふべき御馬な
り、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

建治三年丁丑三月二日

日蓮花押にちれんかおう

兵衛志殿女房さかんどのにょうぼう

久しくうけ給たまわり候はねばよくおぼつかなく候、何よりもあはれ
にふしぎなる事は大夫志殿たゆうのさかんだのと殿との御事おんこと不思議ふしぎに候、常さまには
世末になり候へば聖人しよじん・賢人けんじんも皆みなかくれただざんじむねいじんわざ
んきよくりの者のみこそ国には充満じゆうまんすべきと見へて候へば、喩たとええば
水すくなくなれば池さはがしく風ふけば大海たいかいしづかならず、代
の末になり候へばかんばち・えきれい大雨大風だいうたいふうふきかさなり候へば
広き心もせばくなり道心どうしんある人も邪見じゃけんになるとこそ見へて候へさ
れば他人たにんはさてをきぬ父母ふぼと夫妻と兄弟きょうだいと諍あらそう事れつしと・しかと
・ねこと・ねずみと・たかと・きじとの如ごとしと見へて候、良観りようかん等の天魔てんま
の法師ほっしらが親父左衛門さえもんの大夫殿たゆうどのをすかし、わどのばら二人を失は

んとせし

に、殿の御心賢くして日蓮にちれんがいさめを御もちゐ有りしゆへに二のわの車をたすけ二の足の人をになへるが如くごと二の羽のとぶが如くごと日月にちがつの一切衆生いっさいしじゆじゆうを助くるが如くごと、兄弟きょうだいの御力おんちからにて親父おんちちちを法華經ほけきやうに入いれまいらせさせ給たまいぬる御計おんけいらい偏ひとえに貴辺きへんの御身おんみにあり、又眞実しんじつの經の御ことはりを代末たいまになりて仏法ぶつぽうあながちにみだれば大聖人だいしやうにん・世に

出いずべしと見へて候、たとえ喩へば松のしもの後に木の王と見へ菊は草の後に仙草せんそうと見へて候、代のおさまれるには賢人けんじん見えず代の乱みだれたるにこそ聖人しやうにん愚人いふじんは顕あらわれ候へあはれ平さへもの左衛門殿ざゑもんさがみ殿の日蓮にちれんをだに用もちいられて候いしかば、すぎにし蒙古国もうちこの朝使あそしのくびはよも切きせまいらせ候はじ、くやくしくおはすらなん。

人王いちだい八十一代安徳天皇てんのうと申もうす大王だいおうは天台てんだいの座主ざす明雲めいうん等の眞言師しんごんし

等数百人かたらひて源みなもとの右將軍頼朝を調伏じょうぶくせしかば還著げんちゃく於本人
とて明雲は義仲に切られぬ安徳天皇てんのうは西海に沈み給う、人王八十
二三四隱岐おきの法皇ほうこう・阿波の院いん・佐渡さどの院いん・当今とうこん・已上四人よじにん・座主ざす・慈円じえん
僧正そうじょう・御室みむろ・三井等みいの四十余人よじにんの高僧等こうそうとうをもて平の將軍義時しやうぐんよしときを
調伏じょうぶくし給う程たまに又還著げんちゃく於本人おほんにんとて上の四王島しおうに放たれ給いき、
此の大悪法だいあくほうは弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょうの三大師だいし・法華經最第一ほけきやうさいだいいちの釈尊しゃくそんの
金言きんげんを破りて法華最第二ほっけ・最第三さいだいだいち・大日經最第一だいにちきやうさいだいいちと讀み給たまいし僻見びやくけん
を御信用ごしんよう有りて今生こんじやうには国と身とをほろぼし後生ごじやうには無間地獄むげんじじくに
墮おち給たまいぬ、今度このたびは又此の調伏じょうぶく三度なり、今いま・我が弟子等でし死したら
ん人人ひとびとは仏眼ぶつげんをもて是これを見給たまうらん、命まなこつれなくて生たらん眼まなこに
見よ、国主等こくしゅとうは他国たこくへ責めわたされ調伏じょうぶくの人人ひとびとはある或は狂死あゝ・或は
他国たこく・或は山林ある・或は山林さんりんにかくるべし、教主きやうしゆしやくそん・釈尊おんつかいの御使おんつかいを二度までこうぢ
をわたし弟子等でしをろううに入れ、或は殺あるし・或は害あるし・或は所国あるをおひ

し故ゆえに其その科とが必ず其その国ばんみん国民ばんみんの身みに一一いちいちにかかるべし、或あるは又また白癩びやくらい・黒癩くろらい・諸悪しよあく・重病じゆうびようの人人ひとびとおほかるべし、我が弟子等でし此この由よしを存ぞんぜさせ給たまへ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

九月九日

にちれんかおう
日蓮花押

此この文ぶんは別わかしては兵衛べいゑの志殿しかんどのへ総すべじては我われが一門いちもんの人人ひとびと御覽ごらん有あるべし、他人たにんに聞きかせ給たまうな。

銅の御器二給び畢おわぬ、釈迦しゃかぶつ仏三十の御年・仏になり始てをはし候時・牧牛女もくごと申せし女人・乳のかいをにて仏にまいらせんとし候し程にいれて・まいらすべき器なし、毘沙門びしゃもんてんのう天王等の四天王してんのう・四鉢を仏にまいらせたりし、其その鉢をうちかさねて・かいをまいらせしに仏にはならせ給たまう、其その鉢後には人も・もらざりしかども常に飯いひのみちしなり後に馬鳴菩薩めみよつと申せし菩薩ぼさつ・伝へて金銭三貫にほうじたりしなり、今御器二を千里せんりにをくり釈迦しゃかぶつ仏にまいらせ給たまへば、かの福のごとくなるべし、委くわしくは申もつさず候。

建治三年丁丑十一月七日

日蓮花押

兵衛志殿女房御返事

みそをけ一給ひ畢ぬ。はらのけ(下痢)は左衛門どのの御薬になを
 りて候。又このみそ(味噌)をなめて、いよいよこちなをり候ぬ。あ
 われあわれ今年御つつがなき事をこそ、法華経ほけきょうに申し上げまいらせ
 候へ。恐恐謹言。

弘安元年六月二十六日

日蓮 花押

兵衛志殿御返事

一七七

兵衛志殿御返事

弘安元年十一月五十七

歳御作

於身延

1098p

錢六貫文の内一貫次郎の分白厚綿小袖一領四季にわたりて財を三宝に
くよう供養し給たまういたがいづれもいづれもくどく功德にならざるはなし、但ただし時に
 随したがいて勝劣しょうれつ・浅深せんじんわかれて候、うへたる人には衣をあたへたるより
 も食をあたへて候はくどくいますこし功德くどくまさるこへたる人には食をあ
 たへて候よりも衣は又しゅんかまさる春夏しゅんかに小袖をあたへて候よりも秋冬しゅうとう
 に

あたへぬれば又くどく功德一倍なり、これをもつて一切いっさいはしりぬべし、た
 だし此の事ににちがつをいては四季を論ぜず日月をたださずこめにこめか
 たびら頻婆沙羅王きぬこそで日日月月にひまなし、例せばびんばびんばしやらわう

の教主きよしゆしやくそん釈尊に日日に五百輛の車を・をくり阿育大王あそかだいおうの十億の沙金を鶏頭魔寺にせせしがごとし、大小だいしやうことなれども志しつは彼かにもすぐれたり。

其その上今年しは子細しさい候、ふゆと申もうすふゆいづれのふゆかさむからざる、なつと申もうすなついつれのなつかあつからざる、ただし今年しは余国あまのくにはいかんが候らんこのはきぬは法はうにすぎてかんじ候、ふるき・をきなどもに・とひ候へば八十九十一百になる者の物ものがたり語り候はすべていにしへ・これほどさむき事候はず、此のあんじちより四方しほうの

山の外十町二十町人かよう事候はねばしり候はず、きんぺん一町のほどはゆき一丈二丈五尺等なり、このうるう十月卅日ゆきすこしふりて候しがやがてきへ候ぬ、この月の十一日たつの時より十四日まで大雪おほゆきふりて候しに両三日へだててすこし雨ふりてゆきかたくなる事こと金剛こんかうのごとし・いまにきゆる事なし、ひるも・よるも・さ

むくつめたく候事法にすぎて候、さけはこをりて石のごとく、あぶらは金ににたり、なべかまは少し水あればこおりてわれかんいよいよかさなり候へば、きものうすく・食ともしくして・さしいづるものもなし。

坊ははんさくにてかぜゆきたまらず・しきものはなし、木はさしいづるものもなければ・火もたかず、ふるき

あかづきなんどして候こそで・なんどきたるものは其身のいろ紅蓮ぐれん
大紅蓮だいぐれんのごとし、こへははは大ばば地獄じごくにことならず、手足かんじて
きれさけ人死ぬことかぎりなし、俗のひげをみれば・やうらくをか
けたり、僧のはなをみればすすをつらぬきかけて候、かかるふしぎ
候はず候に去年こぞの十二月の卅日より・はらのけの候しが春夏しゅんかやむ
ことなし、あきすぎて十月のころ大事だいじになりて候しがすこして平愈へいゆ
つかまつりて候へども・ややもすればをこり候に、兄弟きょうだい二人のふたつ
の小袖わた四十両をきて候が、なつのかたびらのやうにかろく候ぞ
・ましてわたうすく・ただぬのものばかりのもの・をもひやらせ給へたま
此の二のこそでなくば・今年はこごへしに候なん。

其上兄弟きょうだいと申し右近の尉もつの事と申し食もあいついて候、人はなき
時は四十人ある時は六十人、いかにせき候へどもこれにある人人ひとびと
あにとて出来しゅつたいし舎弟しやていとてさしいでしきゐ候ぬれば・かかはやさにい

かにも申しへず心

にはしずかに、あじちむすびて小法師と我が身計り御経よみまいら
せんとこそ存じて候に、かかるわづらはしき事候はず、又としあけ
候わばいづくへもにげんと存じ候ぞ、かかるわづらわしき事候はず
又又申すべく候。

なによりもえもんの大夫志ととの御事ちちの御中と申し上
のをばへと申し面にあらずば申しつくしがたし、恐恐謹言。

十一月廿九日

日蓮

花押

兵衛志殿御返事

御親父御逝去の由・風聞真にてや候らん、貴辺と大夫志の御事は
代末法に入つて生を辺土にうけ法華の大法を御信用候へば悪鬼定め
て国主と父母等の御身に入りかわり怨をなさん事疑なかるべき
ところに、案にたがふ事なく親父より度度の御かんだうをかうほら
せ給ひしかども兄弟ともに浄蔵・浄眼の後身か將た又薬王薬上の
御計ら

いかのゆへについに事ゆへなく親父に御かんきをゆりさせ給いて前に
たてまいらせし御孝養心に任せさせ給いぬるはあに孝子にあらず
や、定めて天よりも悦びをあたへ法華經十羅刹も御納受あるべし。
其の上貴辺の御事は心の内に感じをもう事候、此の法門經のごと

くひろまり候わば御悦び申すべし、あなかしこあなかしこきよつだい 穴賢おんちゅうふわ 兄弟の御中不和に
わたらせ給ふべからず不和にわたらせ給ふべからず、たゆうのさかんど 大夫志殿の
御文おんふみにくわしくかきて候きこしめすべし、きようきようきんげん 恐恐謹言。

弘安二年二月二十一日

日蓮

花押

一七九 兩人御中御書

おんちゆうごしょ

弘安二年 五十八歳御

作 於身延 1101p

大國阿闍梨たいこくあじゃりえもんのたいさかんどの志殿等に申もうす、故大進阿闍梨あじゃりの坊は各各の御計おんけいらいに有あるべきかと存じ候に今に人も住せずなど候なるはいかなる事ぞ、ゆづり状じょうのなくばこそ人人ひとびとも計けいらい候はめ、くはしくうけ給たまわり候へば べんの阿闍梨あじゃりにゆづられて候よしうけ給たまわり候たまき、又いぎあるべしともをばへず候、それに御用もちいなきは別べちの子細しさいの候か其その子細しさいなくば大國阿闍梨たいこくあじゃり大夫殿たゆうどのの御計おんけいらいとして弁あじゃりの阿闍梨あじゃりの坊へこぼちわたさせ給たまい候へ心けんなる人に候へばいかんがとこそをもち候らめ、弁あじゃりの阿闍梨あじゃりの坊をすりしてひろくもらずば諸人しよにんの御ために御たからにてこそ候そうじはんずらむめ、ふゆはせ

うまうしげし、もしやけなばそむと申し人もわらいなん、このふみ
ついて両三日が内に事切て各各御返事給ひ候はん、恐恐謹言。

十月廿日

日蓮にちれん

花押かおう

両人御中おんちゆう

ゆづり状をたがうべからず

一八〇 右衛門太夫殿御返事

1102P

抑そもそも久しく申し承うけたまわらず候ところの処おんふみとうらいに御文到来候おわい畢ことんぬ、殊ことにあを
きうらの小袖一ばうし一をび一すぢ鷲目一貫文くり一籠たしかに
うけとりまいらせ候とつじん、当今は末法の始の五百年に当りて候、かかる
時刻じこくに上行菩薩御出現しゅつげんあつて南無妙法蓮華經の五字ごじを日本にほんこくの
一切衆生いっさいしゅじゆにさづけ給たまうべきよし經文分明きやうもんぶんめいなり、又流罪るざい・死罪しざいに行
わるべきよし明あきらかなり、日蓮にちれんは上行菩薩じやうぎやうぼさつの御使おんつかいにも似たり此の
法門ほうもんを弘ひろむる故ゆえに、神力品じんりきほんに云く「日月にちがつの光明こうみょうの能よく諸もろもろの幽冥ゆうみやうが
除とくが如ごとく斯この人せけん・世間せけんに行よじて能よく衆生しゅじゆの闇くらを滅めす」等云云、此
の經文きやうもんに斯し人行世間しにんぎやうせけんの五の文字もんじの中の人の文字もんじをば誰たれとか思おもし食
す、上行菩薩じやうぎやうぼさつの再誕さいたんの人ひとなるべしと覺おぼえたり、經いに云いく「我が滅度めつど

の後に於て応に斯の経を受持すべし是の人・仏道に於て決定して
疑有ること無けん云云、貴辺も上行菩薩の化儀をたすくる人な
るべし。

弘安二年己卯十二月三日

日蓮花押

右衛門太夫殿御返事

一八一 大夫志殿御返事

弘安三年

五十九歳御作

1103p

小袖一つ直垂三具同じく腰三具等云云、小袖は七貫直垂並びに腰は十貫已上十七貫文に当れり、夫れ以れば天台大師の御位を章安大師顕して云く「止観の第一に序文を引いて云く安禅として化す、位五品に居したまえり、故に経に云く四百万億那由佗の国の人に施すに一一に皆七宝を与え又化して六通を得しむるすら初随喜の人に如ざること百千万倍せり況や五品をや、文に云く即如来の使なり如来の所遣として如来の事を行ず」等云云、
伝教大師・天台大師を釈して云く「今吾が天台大師は法華経を

と 説き法華経を釈し群に特秀し唐に独歩す云云、又云く「明かに知

んぬ如来の使なり讚むる者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に

開く」と云云、是の如きは且らく之を置く、滅後・一日より正像二

千余年の間・仏の御使二十四人なり、所謂第一は大迦葉・第二は

阿難・第三は

未田地・第四は商那和修・第五は多・第六は提多迦・第七は弥遮迦

・第八は仏駄難提・第九は仏駄密多・第十は脇比丘・第十一は富那奢

・第十二は馬鳴・第十三は毘羅・第十四は竜樹・第十五は提婆・第十

六は羅・第十七は僧・難提・第十八は僧・耶奢・第十九は

鳩摩羅駄・第二十は闍夜那・第二十一は盤駄・第二十二は摩奴羅・

第二十三は鶴勒夜奢・第二十四は師子尊者、此の二十四人は金口の

記する所の付法蔵経に載す、但し小乗・権大乘経の御使なりい

まだ法華経の御使にはあらず、三論宗の云く「道朗吉蔵は仏の使

なり「法相宗の云く「玄奘慈恩は仏の使なり」華嚴宗の云く「法蔵
澄観は仏の使なり」真言宗の云く「善無畏・金剛智・不空慧果
弘法等は仏の使なり」

日蓮之を勘えて云く全く仏の使に非ず全く大小乗の使にも

非ず、之を供養せば災を招き之を謗せば福を至さん、問う汝の

自義か答えて云く設い自義為りと雖も有文有義ならば何の科あら

ん、然りと雖も積有り伝教大師云く「誰か福を捨て罪を慕う者あ

らんや」云云、福を捨てるとは天台大師を捨てる人なり、罪を慕う

とは上に挙ぐる所の法相・三論・華嚴・真言の元祖等なり、彼の諸師

を捨て一向に天台大師を供養する人の其の福を今申すべし、

三千大千世界と申すは東西南北一須弥山六欲梵天を一四天下とな

づく、百億の須弥山四州等を小千と云う、小千の千を中千と云う、

中千の千を大千と申す、此の三千大千世界を一にして四百万億

那由佗国の六道の衆生を八十年やしなひ法華経より外の已今当の
一切経を一一の衆生に読誦せさせて三明六通の阿羅漢・辟支仏
等覚の菩薩となせる一人の檀那と、世間出世の財を一分も施さぬ
人の法華経計りを一字・一句一偈持つ人と相對して功德を論ずる
に、法華経の行者の功德勝れたる事百千万億倍なり、天台大師
此れに勝れたる事五倍なり、かかる人を供養すれば福を須弥山に
つみ給うなりと伝教大師ことはらせ給ひて候、此の由を女房には
申させ給へ、恐恐謹言。
大夫志殿御返事 花押

一八二 兵衛志殿御返事

青^{せい}鼻^び五貫文送り給び了^おんぬ、
唱^{とな}え奉^{たてまつ}る南無妙法蓮華經一返の
事、恐^{きょう}恐^{きょう}。

六月十八日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

兵衛志殿御返事^{さかんどのごへんじ}

一八三 大夫志殿御返事

弘安四年十二月六

十歳御作

1105p

聖人しようにん一つつ味文字みもじ一なまわかめをけ生和布しょうにん一しょうにんこ聖人と味文字もんじはさてをき候
いぬ生和布は始めてにて候、将又病はたまたの由聞かせ給たまいて不日ふじつに此の物
して御使おんつかいをもつて脚力あしぢかりにつかわされて候事心ざし大海たいかいよりふかく
善根ぜんこんは大だい地ちよりも厚あつし、かうじんかうじん、恐恐おそおそ。

十二月十一日日蓮花押にちれんかおう

大夫志殿御返事たゆうのさかんどのごへんじ

一八四 八幡宮造营事

弘安四年五月六十歳御作

1105p

此こゝろの法門ほうもん申し候事こうじすでに廿九年にじゅうきゅうねんなり、日日にちじつの論義ろんぎ月月げつげつの難なん兩度りやうど
の流罪るさいに身みつかれ心こゝろいたみ候こういし故ゆゑにや此こゝろの

七八年間しちぱちねんが間ま年年ねんねんに衰病おとろえをこり候こういつれどもななのめにて候こういつる
が、今年ことしは正月しょうげつより其その気分けふん出来しゅつして既すでに一期いちき

をわりになりぬべし、其その上うへ齡ねん既すでに六十むそくにみちぬ、たとひ十じゅうに一いち今

年はすぎ候こうとも一いち二にをば、いかでかすぎ候こうべ

き、忠言ちゆうげんは耳みみに逆さかい良藥りやうやくは口くちに苦くるしとは先賢せんけんの言ことなりや世病よわづらひの者ものは
命いのちをきらう佞人ねいじんは諫いさめを用もちいずと申もうすなり、此

の程ほどは上下じやうげの人人ひとびとの御返事ごへんじ申もうす事ことなし心こゝろもものううく手てもたゆき故ゆゑ
なり、しかりと申もうせども此こゝろの事こと大事だいじなれば苦くる

を忍しのんで申もうすものううしとおぼすらん一篇いっぺんきこしめすべし、村上むらかみ天皇てんのう
の前まへ中書王ちゆうしやうおうの書かきを投なげ給たまいしがごとく・なる

ことなかれ。

はちまん

さては八幡宮の御造営につきて一定さむそうや有らんずらむと

うたがい

疑うたがいいまいらせ候なり、をやと云ひ我が身もうと申し二代が間きみにめ

しつかはれ奉りたてまつてあくまで御恩ごおんのみなり、設そつ一事相違すともなむの

あらみかあるべき、わがみ賢人けんじんならば設上よりつかまつるべきよし

仰おおせ下さるとも一往いちおうはなに事につけても辞退すべき事ぞかし、

幸に讒臣等がことを左右さうによせば悦よろこんでこそあるべきに望まるる事

一の失とがなり、此これはさてをきぬ五戒ごかいを先生せんしやうに持ちて今生こんじやうに人身じんしんを

得たり、されば云うに甲斐かいなき者なれども国主等謂こくしゆなく失とがにあつ

れば守護しゆごの天あまいかりをなし給たまう況や命をうばわるる事は天の放ち

給たまうなり、いわうや日本国にほんこく四十五億八万九千六百五十九人の男女なんよ

をば四

十五億八万九千六百五十九の天まほり給たまうらん、然しかるに他国たこくより

せめ来る大難だいなんは脱のがるべしとも見え候はぬは、四十五億八万九千六

はちまん

百五十九人の人人の天にも捨てられ給う上六欲四禅梵釈・日月・
四天等にも放たれまいらせ給うにこそ候いぬれ、然るに日本国の
国主等八幡大菩薩をあがめ奉りなばなに事のあるべきと思はるる
が、八幡
は又自力叶いがたければ宝殿を焼きてかくれさせ給うか、然るに自
の大科をばかへりみず宝殿を造りてまほらせまいらせむとおもへ
り。

日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生が釈迦・
多宝・十方分身の諸仏・地涌と娑婆と他方との諸大士十方世界の
梵釈・日月・四天に捨てられまひらせん分齊の事ならばはづかなる
日本国の小神天照太神・八幡大菩薩の力及び給うべしや、其の時
八幡宮はつくりたりとも此の国・他国にやぶらればくぼきところに
ちりたまりひきき

ところに水あつまると、日本国の上一人より下万民にいたるまでさ
たせむ事は兼て又知れり、八幡大菩薩は本地は阿弥陀ほとけにまし
ます、衛門の大夫は念仏・無間地獄と申す阿弥陀仏をば火に入れ水
に入れ其の堂をやきはら
ひ念仏者のくびを切れと申す者なり、かかる者の弟子・檀那と成り
て候が八幡宮を造りて候へども八幡大菩薩用いさせ給はぬゆへに此
の国はせめらるるなりと申さむ時はいかがすべき、然るに天かねて
此の事をしろしめすゆへ

に御造営の大ばんしやうをはづされたるにやあるらむ 神宮寺じんぐうじの

事のはづるも天の御計おんはからいか。

其そのゆえの故は去ぬる文永十一年四月十二日に大風たいふうふきて其その年の

他たこく国よりおそひ来るべき前相なり風は是れ天地てんちの使なりまつり事

あらければ風あらしと申もうすは是これなり、又今年四月廿八日を迎むかえて

此の風ふき来る、而しかるに四月廿六日は八幡はちまんのむね上と承う承はる、三日

の内の大風たいふうは疑うたがいなかるべし、蒙もうこ古の使者の貴き辺へんが八幡宮はちまんを造つくりて

此の風ふき

たらむに人わらひさたせざるべしや。

返す返す穩便おんびんにして・あだみうらむる気色なくて身をやつし下人

をもぐせずよき馬にもならず、のこぎりかなづち手にもちこしにつ

けてつねにえめるすがたてにておわすべし、此の事一事もたがへさせ

給たまうならば今生こんじょうに

は身をほろぼし後生ごしようには悪道あくどうに墮おち給たまうべし、返す返す法華經ほけきょううら
みさせ給たまう事なかれ、恐恐きょうきょう。

五月廿六日

在御判

たゆのさかんの

大夫志殿

さかんの

兵衛志殿

一八五

兵衛志殿女房御返事

110

兵衛志殿さかんだのによぼう女房絹片裏給たまい候、此の御心は法華經ほけきようの御宝前ほうぜんに申もうし
 上げて候、まこととはをぼへ候はねども此こぼうの御房ごぼうたちの申もうし候は御
 子どもはなしよにせけんふつふつとをはすると申もうされ候こそなげか
 しく候へどもさりともとをぼしめし候へ 恐きまつきまつ。

十一月廿五日

日蓮にちれん

在御判

兵衛志殿さかんだのによぼう女房御返事

一八六

兵衛志殿御返事

1108

我が法華経も本・迹和合して利益を無量にあらはす、各各二人又かくのごとし二人同心して大御所・守殿・法華堂・八幡等つくりまいらせ給うならば此れは法華経の御利生とをもわせ給わざるべき、二人・一同の儀は車の二つのわの如し鳥の二つの羽のごとし、設い妻子等の中のたがわせ給うとも二人の御中不和なるべからず、恐れ候へども

日蓮をたいとしとをもひあわせ給へもし中不和にならせ給うならば二人の冥加いかながあるべかるらめと思しめせ、あなかしこ・あなかしこ、各各みわきかたきもたせ給いたる人人なり、内より論出来れば鷓蚌の相扼も漁夫のをそれ有るべし、南無妙法蓮華経と御唱えつつしむべし、と恐

十一月十二日

日蓮在御判

ひやうえの志殿御返事

さかんだのこへんじ

懷胎のよし承り候い畢んぬ、それについては符の事仰せ候、日蓮
 相承の中より撰み出して候・能く能く信心あるべく候、たとへば秘
 薬なりとも毒を入れぬれば薬の用すくなし、つるぎなれども・わる
 びれ「臆病」たる人のためには何かせん、就中夫婦共に法華の持者
 なり法華経流布あるべきたねをつぐ所の玉の子出で生れん目出度
 覚え候ぞ、色心

二法をつぐ人なり争か・をそなはり候べき、とくとくこそ・うまれ
 候はむずれ、此の薬をのませ給はば疑いなるべきなり、闇なれ
 ども灯入りぬれば明かなり濁水にも月入りぬればすめり、明かな
 る事・日月にすぎんや浄き事・

蓮華にまさるべきや、法華経は日月と蓮華となり故に妙法蓮華経
と名く、日蓮又日月と蓮華との如くなり、信心の水すまば利生の月
・必ず心を垂れ守護し給うべし、とくとくうまれ候べし法華経に
云く「如是妙法」又云く「安楽」

産福子と云云、口伝相承の事は此の弁公にくはしく申しふくめて候
・則如来の使なるべし返す返すも信心候べし。

天照大神は玉をそさのをのみことにさづけて玉の如くの子をまふ
けたり、然る間日の神我が子となづけたり、さてこそ正哉吾勝と
は名けたれ、日蓮うまるべき種をさづけて候へば争か我が子にをと
るべき、「有一宝珠」

価直三千」等、「無上宝聚不求自得・釈迦如来皆是吾子」等云云、
日蓮あに此の義にかはるべきや、幸なり幸なり

めでたしめでたし。又又申すべく候、あなかしこ。あなかしこ。

ぶんえい
文永

八年五月七日

しじょうきんご
四條金吾殿
にようぼうごへんじ
女房御返事

にちれんかおう
日蓮花押

十歳御作

1110p

わかわらへ

若童生れさせ給たまいし由承たまわり候目出たく覚おぼへ候、殊ことに今日は八日

にて候、彼れと云い此れと云い所願しよがんしをの指す

が如ごとく春の野に華の開けるが如ごとし、然しかればいそぎいそぎ名をつけ

奉たてまつる月満御前と申もうすべし、其その上此の国の主

八幡大菩薩は卯月八日に生まれさせ給たまふ娑婆世界しゃばせかいの教主きようしゆ釈尊しゃくそんも

又卯月八日に御誕生なりき、今の童女又月は替れども八日にうま

れ給たまふ釈尊しゃくそん八幡はちまんのうまれ替りとや申もうさん、日蓮にちれんは凡夫ほんぶなれば能よく

は知らず是れ併しかしながら日蓮にちれんが符ふを進まいらせし故なり、さこそ父母ふぼ

も悦よろこび給たまうらん、殊ことに御祝として餅酒鳥目がもく一貫文送り給たまひ候い

おわ
畢んぬ是ま

た御本尊ごほんそん十羅刹じゅうらせつに申し上げて候、今日の仏生れさせまします時に三十二の不思議ふしぎあり此の事周書の異記と云う

文にしるし置けり。

釈迦しやくが仏は誕生たまいし給いて七歩し口を自ら開いて、天上・天下てんじやう・てんか唯我独尊・三界皆苦我当度之の十六字を唱へ給ふ、今の月満御前つきまるごぜんはうまれ給いてうぶごゑに南無妙法蓮華經と唱へ給ふか、法華經ほけきやうに云く「諸法実相しよほつじつじやう」天台の云く「声為いわ」
仏事ぶつじ」等云云、日蓮にちれん又かくの如く推し奉る、譬えば雷いかずちの音耳しいの為ために聞く事なく日月の光り目くらの為ために見る事なし、定めて十羅刹女じゅうらせつにょは寄り合つてうぶ水をなで養ひ給うらん
あらめでたやあらめでたや御悦よろこび推量もつ申し
候、念頃じゆうらせつにやに十羅刹女てんじやうにょ天照太神等にも申し候、あまりの事に候間

委くわしくは申もうさず、是かさより重かさねて申もうすべく候、
穴あな賢かしこ穴あな賢かしこ。

花か押おう

日にち蓮れん

一八九 四條金吾殿御書

文永八年七月 五十

歳御作 1111p

雪のごとく白く候白米一斗古酒のごとく候油一筒御布施一貫
文、態使者を以て盆料送り給い候、殊に御文の趣有難くあはれに
覚え候。

抑 孟蘭盆と申すは源目連尊者の母青提女と申す人慳貪の業に
よりて五百生 餓鬼道にをち給いて候を目連救ひしより事起りて
候、然りと雖も仏にはなさず其の故は我が身いまだ法華經の行者
ならざる故に母をも仏になす事なし、靈山八箇年の座席にして
法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱えて多摩羅跋耨檀香仏となり
給い此の時母も仏になり給う、又施餓鬼の事仰せ候、法華經第三に

云く「如從飢国来忽遇大王膳」云云、此の文は中根の四大声聞
醍醐の珍膳をおとにもきかざりしが今經に來つて始めて醍醐の味
をあくまでになめて昔しうへたる心を忽にやめし事を説き給う文な
り、若し爾らば餓鬼供養の時は此の文を誦して南無妙法蓮華經と
唱えてとぶらひ給うべく候。

総じて餓鬼にをいて三十六種類相わかれて候、其の中に身餓鬼
と申すは目と口となき餓鬼にて候、是は何な

る修因ぞと申すに此の世にて夜討強盜などをなして候によりて候、
食吐餓鬼と申すは人の口よりはき出す物

を食し候是も修因上の如し、又人の食をうばふに依り候、食水
餓鬼と云うは父母孝養のために手向る水などを

呑む餓鬼なり、有財餓鬼と申すは馬のひずめの水をのむがきなり
是は今生にて財ををしみ食をかくす故なり、無財がきと申すは

生れてよりいらい以来おんじき飲食の名をもきかざるがきなり、食法がきと申すもつ
は出家しゅっけとなりてぶつぼう佛法を弘ひろむる

人。我は法を説けば人尊敬するなんど思ひてみよつもん名聞みよつり名利の心を以て
人にすぐれんと思つてこんじやう今生をわたりしやうじ衆生をたすけずふぼ父母をすくふ
べき心もなき人を食法がきとて法をくらふがきと申すもつなり、当世とうせの
僧を見るに人にかくし

て我、一人ばかり供養をうくる人もあり是は狗犬の僧と涅槃經に見えたり、是は未來には牛頭と云う鬼となるべし、又人にしらせて供養をうくるとも欲心に住して人に施す事なき人もあり是は未來には馬頭と云う鬼となり

候、又在家の人人も我が父母地獄・餓鬼・畜生におちて苦患をうくるをばとぶらはずして我は衣服飲食にあきみち牛馬眷属充滿して我が心に任せてたのしむ人をば、いかに父母のうらやましく恨み給うらん、僧の中にも父

母師匠の命日をとぶらふ人はまれなり、定めて天の日月地の地神いかりいぎどをり給いて不孝の者とおもは

せ給うらん形は人にして畜生のごとし人頭鹿とも申すべきなり、日蓮此の業障をけしはてて未來は靈山淨土に

まいるべしとおもへば種種の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき

候へども法華經の御故なれば苦をも苦と

もおもはず、かかる日蓮が弟子・檀那となり給う人人殊に今月十二

日の妙法 聖靈は法華經の行者なり日蓮が檀那なりいかでか餓鬼

道におち給うべきや、定めて釈迦・多宝仏・十方の諸仏の御宝前に

まします、是こそ四條金吾殿

の母よ母よと同心に頭をなで悦びほめ給うらめ、あはれいみじき

子を我はもちたりと釈迦仏とかたらせ給うら

ん、法華經に云く「若し善男子・善女人有つて妙法華經の提婆達多

品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・

畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、所生の処には常に此の

経を聞かん、若し人天の中に生れば勝妙の樂を受け、若し仏前に

在らば蓮華より化生せん」と云云、此の經文に善女人と見へたり

妙法 聖靈の事にあらず

んば誰が事にやあらん、又云く、「此の経は持つこと難し若し暫も持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如き
の人は諸仏の歎めたもう所」と云云、日蓮讚歎したてまつる事はもののかずならず、諸仏所歎と見えたり、あら

たのもしやあらたのもしやと信心をふかくとり給うべし信心をふかくとり給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

七月十二日

日蓮 花押

四條金吾殿御返事

たびたび 度度の御音信申しつくしがたく候、さてもさても去る十二日の難
 のとき貴^{きへん}辺^{へん}たつのくちまでつれさせ給^{たま}い、

しかのみならず腹を切らんと仰^{おお}せられし事こそ不思議とも申^{もう}すば
 かりなけれ、日蓮過去に妻子所領眷属等の故^{ゆえ}に身命^{しんみょう}を捨てし所い
 くそばくかありけむ、或^{ある}は山にすて海にすて、或^{ある}は河、或^{ある}はいそ等
 路のほとりか、然^{しか}れども法華経
 のゆへ題目^{だいもく}の難^{なん}にあらざれば捨てし身も蒙^{こむ}る難^{なん}等も成仏^{じょうぶつ}のためな
 らず、成仏^{じょうぶつ}のためならざれば捨てし海・河
 も仏土にもあらざるか。

このたび 法華經の行者として流罪・死罪に及ぶ、流罪は伊東死罪は
たつのくち相州のたつのくちこそ日蓮が命を
捨てたる処なれ仏土におとるべしや、其の故はすでに法華經の故
なるがゆへなり、經に云く「十方仏土中唯有
一乘法」と此の意なるべきか、此の經文に一乘法と説き給うは
法華經の事なり、十方仏土の中には法華經より
外は全くなきなり除仏方便説と見えたり、若し然らば日蓮が難に
あう所ごとに仏土なるべきか、娑婆世界の中
には日本国日本国の中には相模の国相模の国の中には片瀬片瀬の
中には竜口に日蓮が命をとどめをく事は法
華經の御故なれば寂光土ともいうべきか、神力品に云く「若於林中
若於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃」と
は是か。

かかる日蓮にちれんにともなひて法華經ほけきよつの行者ぎょうじやとして腹を切らんとの
給たまう事かの弘演こうえんが腹をさいて主の懿公いこうがきもを

入れたるよりも百千万倍ひやくせんまんばいすぐれたる事なり、日蓮靈山にちれんりょうぜんにまいりて

まづ四条金吾しじょうきんごこそ法華經ほけきよつの御故ゆえに日蓮にちれんとをな

じく腹切らんと申し候もつなりと申し上げ候もつべきぞ、又かまくらどのの

仰おおせとて内内佐渡さどの国へつかはすべき由

承り候、三光天子の中に月天子は光物とあらはれ竜口の頸をたす
け、明星天子は四五日已前に下りて日蓮に見参し給ふ、いま日天子
ばかりのこり給ふ定めて守護あるべきかと・たのもしたのもし、
法師品に云く「則遣变化人為之作衛護」疑あるべからず、
安樂行品に云く「刀杖不加」普門品に云く「刀尋段段壞」此等の
經文よも虚事にて

は候はじ、強盛の信力こそありがたく候へ 恐恐謹言。

文永八年九月二十一日

日蓮

花押

四条金吾殿

一九一

同生同名御書

文永九年四月

五十一

歳御作

此の御文は藤四郎殿の女房と常によりあひて御覽あるべく候。

大闇をば日輪やぶる女人の心は大闇のごとし法華経は日輪のごと

し、幼子は母をしらず母は幼子をわすれず、

釈迦仏は母のごとし女人は幼子のごとし、二人たがひに思へばすべ

てはなれず一人は思へども一人思はざれば。

あるときはあひあるときはあわず、仏はをもふもののごとし

女人はをもはざるもののごとし、我等・仏をを

もはばいかでか釈迦仏見え給はざるべき、石を珠といへども珠とな

らず珠を石といへども石とならず、権経の

当世の念仏等は石のごとし、念仏は法華経ぞと申すとも法華経等

にあらず、又法華経をそしるとも珠の石とならざるのごとし。

昔唐国に徽宗皇帝と申せし悪王あり、道士と申すものにすかさ

れて仏像・経巻をうしなひ僧尼を皆還俗せしめ
しに一人として還俗せざるものなかりき、其の中に法道三蔵と申せ
し人こそ勅宣をおそれずして面にかなを・

やかれて江南と申せし処へ流されて候いしが、今の世の禅宗と
申す道士の法門のやうなる悪法を御信用ある世に生れて、日蓮が
大難に値うことは法道に似たり、おのおの・わずかの御身と生れて
鎌倉にゐながら人目をも・はばかりせず命をも・おしままず法華経を
御信用ある事ただ事とも・おぼえず、但おしはかるに濁水に玉を入
れぬれば水のすむがごとし、しらざる事を・よき人におしえられて
其のままに信用せば道理に・きこゆるがごとし、釈迦仏・普賢菩薩
薬王菩薩(やくおうぼさつ)・宿王華菩薩等の各各の御心中に入り
給へるか、法華経の文に閻浮提に此の経を信ぜん人は普賢菩薩の
御力なりと申す是なるべし、女人は・たとへば藤のごとし・をとこは
松のごとし須臾も・はなれぬれば立ちあがる事なし。
はかばかしき下人もなきに・かかる乱れたる世に此のとのを・つか
はされたる心ざし大地よりも・あつし地神定めてしりぬらん・虚空

よりも・たかし梵天ぼんでん・帝釈たいしゃくもしらせ給たまいぬらん、人の身には同生同名と申もうす二のつかひを天生るる時よりつけさせ給たまいて影の身にしたがふがごとく須臾しゆゆもはなれず、大罪たいざい・小罪しょうざい・大功徳くどく・小功徳くどくすこしも・おとさずかはる・かはる天にのぼて申もうし候と仏説とき給たまう、此の事ははや天も・しろしめしぬらん、たのもしし・たのもしし。

四月 日

日蓮花押にちれんかおう

四條金吾殿女房御返事しじょうきんご にようぼうご へんじ

一九二 四條金吾殿御返事

文永九年五月五十一

歳 御作

1116p

日蓮にちれんが諸難しよなんについて御とぶらひ今にはじめざる 志しづこ ありがたく
侯そうび、法華經ほけきやうの行者ぎやうじとしてかかる大難だいなんにあひ侯はくやくしくおもひ
侯そうびはず、いかほど生をうけ死にあひ侯とも是そつらうほどの果報かほうの生死しやうじは
侯そうびはじ、又三悪さんあく・四趣そつちにこそ侯そつちいらめ、今は生死切断しやうじし仏果ぶつかをうべ
き身となればよろこばしく侯。

天台てんだい・伝教でんぎやう等は迹門しゃくもんの理いちねんさんぜんの一念三千ほつもんの法門ひろを弘め給たまうすら・な
を怨嫉おんじつの難なんにあひ給たまいぬ、日本にほんにしては伝教でんぎやうより義真ぎしん・円澄えんちやう・慈覚じかく
等そうでん・相伝そうでんして弘ひろめ給たまふ、第十八代じちはちだいの座主ざす・慈慧じけい大師だいしなり御弟子おんでしあま
たあり、其その中に檀那だんな・慧心えしん・

僧賀・禅諭等と申して四人まします、法門又二つに分れたり、檀那だんな僧正は教を伝ふ、慧心僧都は觀をまなぶ、されば教と觀とは日月にちがつのごとし教はあさく觀はふかし、されば檀那だんなの法門はひろくしてあさし、悪心の法門はせばくしてふかし。

今日蓮が弘通する法門はせばきやうなれどもはなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘しよくの法よりは

一重立入りたる故なり、本門ほんもん寿量品の三大事とは是なり、南無なむ妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせばきが如し、されども三世の諸仏の師範・十方薩睡の導師・一切衆生・皆成仏道の指南しなんにてましますなれば、ふかきなり、經に云く「諸仏智慧・甚深無量」

云云、此の經文に諸仏とは十方三世の一切の諸仏・真言宗の大日如来・浄土宗の阿弥陀・乃至諸宗・諸經の仏・菩薩・過去・未來・現在の總諸仏・現在の釈迦如来等を諸仏と説き挙げて次に智

憲といへ

り、此の智慧ちえとはなにもものぞ諸法実相しよほうじつそう・十如果成の法体ほったいなり、其その
法体ほったいとは又なにもものぞ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり、釈いわに云く「実相じつそうの
深理じんり・本有ほんぬの妙法蓮華經みょうほうれんげきやう」といへり、其その諸法実相しよほうじつそうと云うも釈迦しゃかの
多宝たほうの二仏ふつとならうなり、

諸法しよほうをば多宝たほうに約じつそつし実相じつそうをば釈迦しゃかに約こす、是れ又境智きょうちの二法になり
多宝たほうは境しやかなり釈迦しゃかは智ちなり、境智きょうち而に二ににして、しかも境智きょうち不二ふたの
内証ないしやうなり、此等これらはゆゆしき大事だいじの法門ほうもんなり煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅
槃ねはんと云うもこれなり、まさし

く男女なんによ交會かうかいのとき南無なむ妙法蓮華みょうほうれんげきやう經きやうと・となふるところを煩惱ぼんのう即そく
菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅槃ねはんと云うなり、生死しやうじの当体たうたい不生ふしやう不滅ふめつとささるより外
に生死しやうじ即そく涅槃ねはんはなきなり、普賢ふげん經きやうに云く「煩惱ぼんのうを断だんぜず五欲ごよくを離りれ
ず諸根しよこんを淨きよむることを得て諸罪しよざいを滅除めつじよす」止觀しかんに云く「無明むみやう度勞どらうは
そくぜ即そく是こ菩滿ぼまん生死しやうじは即そく涅槃ねはんなり」寿量品じゆりやうぼんに云く「毎みずかに自こら是この念ねんを
作なす、何を

以てか衆生しゆじやうをして無上道むじやうだうに入り、速すみやに仏身ぶつしんを成就じやうじゆすることを得せ
しめん」と方便品ほうべんに云く「世間の相常住じやうじゆちやうなり」等は此の意なるべ
し、此かくの如ごとく法体ほつたいと云うも全く余には非あらずただ南無なむ妙法蓮華みょうほうれんげきやう經きやう

の事なり、かかる・いみじく・

たうとき法華經を過去にて勃ごのしたに・をきたてまつり・或はあ

なづりくちひそみ、或は信じ奉らず、或は法華經の法門をならう

て一人をも教化し法命をつぐ人を悪心をもつて・とによせ・かくによ

せ・おこつきわらひ、或は

後生のつとめなれども郎今生かなひがたければ・しばらく・さしを

けななどと無量にいひうとめ謗ぜしによつて今生に日蓮種種の大難

にあうなり。

諸經の頂上たる御經を鵬きくをき奉る故によりて現社に又人に紆

げられ用いられざるなり、譬喩品に「人にしたしみつくとも人山が

いれて不便とおもふべからず」と説きたり、然るに血月辺法華經の

行者となり結句大難にも

あひ日蓮をもたすけ給う事、法師品の文に「造化四衆・比丘比丘佗

優婆塞優婆襲うばそくうばと説き給ふ此の中の優婆塞とは貴辺きへんの事にあらずんば、たれをかささむ、すでに法を聞いて信受しんじゆして逆はざればなり
不思議ふしぎや不思議ふしぎや、若し然しから
ば日蓮にちれん・法華經ほけきよつの法師ほつしなる事疑うたがいなきか、則ち如来すなわにもにたるらん
行如来事にょらいをも行ずるになりなん。

多宝塔中たほうたうちゆうにして二仏・並坐の時・上行菩薩じやうぎやうぼさつに譲り給たまいし題目だいもくの
五字ごじを日蓮粗にちれんひろめ申もうすなり、此れ即ち上行菩薩じやうぎやうぼさつの御使おんつかいいか、
貴辺きへん又日蓮にちれんにしたがひて法華經ほけきよつの行者ぎやうぎやうとして諸人しよじんにかたり給たまふ
是れ豈流通あにるつうにあらずや、法華經ほけきよつの信心しんじんを・とをし給たまへ・火をきるに・
やすみぬれば火をえず、強盛じやうせいの大信力しんりきをいだして法華宗ほつげしゆうの
四条金吾しじょうきんご・四条金吾しじょうきんごと鎌倉中かまくらの上下万人じやうげばんにん・乃至日本国ないしにほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの
口くちにうたはれ給たまへ、あしき名さへ流す況やよき名をや何いかに況や
法華經ほけきよつゆへ

の名をや、女房にょぼうにも此こゝの由よしを云いひふくめて日月にちがつ・両眼りょうげん・さうのつば
さと調ととのひ給たまへ日月にちがつあらば冥途めいどあるべきや両眼りょうげんあらば三仏さんぶつの顔貌げんぼう
はいけんうたがい
拝見はいけん 疑ぎなし、さうのつばさあらば寂光じやくかうの宝刹ほうせつへ飛ばん事こと・須臾しゆゆ
せつな
刹那せつななるべし、委くわしくは又また又また申のべく侯の、恐惶きようかう謹言きんげん。

五月二日

日蓮にちれん花押かおう

四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

一九三 四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ 文永九年九月 五十一

歳御作

1118p

夫それ齊せいの桓公かんこうと申まをせし王わう・紫むらさきをこのみて服給たまいき、楚その莊王しやうわうと言いひし王わうは女の腰こしのふとき事をことにくみしかば一

切きの遊女腰うぶめこしをほそからせんがために餓死がししけるものおほし、しかれ

ば一人の好む事をば我が心にあはざれど

も万民ばんみん随したがいしなり、たとへば大風たいふうの草木そうもくをなびかし大海たいかいの衆流しゅうるをひ

くが如ごとし、風にしたがはざる草木そうもくはをれう

せざるべしや、小河たいかい大海たいかいにおさまらずばいづれのところにおさまる

べきや、国王こくおうと申もうす事は先生せんしやうに万人ばんにんにすぐ

れて大戒だいかいを持ち天地てんち及び諸神しよゆるし給たまいぬ、其その大戒だいかいの功德くどくをも

ちて其その住すむべき国土こくどを定さだむ、二人ふにん・三人さんにん等を

王おうとせず地王じおう・天王てんおう海王かいおう山王さんおう等ら悉ことごとく来臨らいりんしてこの人をまほる、いか

にいはんや其その国中こくちゆうの諸民しよ其その大王だいおうを

背そむくべしや、此こゝの王おうはたとひ悪逆あくぎやくを犯とすとも一二三度等いちにさんどらうには左右さう

なく此こゝの大王だいおうを罰ばつせず、但しか諸天等しよてんの御心おんこゝろに叶かなわざるは一往いちおうは天変てんべん

地天等ちてんらうをもちてこれをいさむ、事過分じよわぶんすれば諸天善神等しよてんぜんじんらう其その国土こくど

を捨離しやりし給たまう、若もしは此

の大王の戒力つき期来つて国土のほろぶる事もあり、又逆罪多くにかさまれば隣国に破らるる事もあり、善悪に付て国は必ず王に随うものなるべし。

世間此くの如し仏法も又然なり、仏陀すでに仏法を王法に付し給うしかればたとひ聖人賢人なる智者なれど

も王にしたがはざれば仏法流布せず、或は後には流布すれども始

めには必ず大難来る、迦式志加王は仏の滅後四百余年の王なり

健陀羅国を掌のうちのにぎれり、五百の阿羅漢を歸依して

婆沙論二百巻をつくらしむ、國中総て小乘なり其の国に大乘弘め

がたかりき、発舎密多羅王は五天竺を随へて仏法を失ひ衆僧の頸

をきる、誰の智者も叶わず。

太宗は賢王なり玄奘三蔵を師として法相宗を持ち給いき誰の

臣下かそむきし、此の法相宗は大乘なれども五性各別と申して

ぶつきょう

仏教中のおほきなるわざはひと見えたり、なを外道の邪法にもす

ぎ悪法なり、月支・震旦・日本・

三国共にゆるさず、終に日本国にして伝教大師の御手にかかりて

此の邪法止め畢んぬ、大なるわざはひなれども太宗これを信仰し

給いしかば誰の人かこれをそむきし。

真言宗と申すは大日経・金剛頂教・蘇悉地経によるこれを大日

の三部と号す、玄宗皇帝の御時・善無畏三蔵・金剛智三蔵天竺より

将ち来れり、玄宗これを尊重し給う事天台・華嚴宗等にもこへた

り、法相・三論にも勝れて思し

食すが故に漢土は総て大日経は法華経に勝るとおもひ日本国

当世にいたるまで天台宗は真言宗に劣るなりと

おもふ、彼の宗を学する東寺・天台の高僧等慢過慢をおこす、但し

大日経と法華経とこれをならべて偏党を捨

て是を見れば大日経は螢火の如く法華経は明月の如く真言宗は
衆星の如く天台宗は日輪の如し、偏執の者の云く汝未だ真言宗
の深義を習いきはめずして彼の無尽の科を申す、但し真言宗漢土
に渡つて六百余年日本に弘ま

りて四百余年此の間の人師の難答あらあらこれをしれり、伝教
大師一人此の法門の根源をわきまへ給う、し

かるに当世とうせい・日本国第一にほんこくだいいちの科是とがこれなり、勝を以て劣と思ひ劣を以て勝
と思うの故ゆえに大蒙古国だいまうここくを調伏じょうぶくする時かえ・還かえつて襲おそわれんと欲ほす是これな
り。

華嚴宗けこんしゅうと申もうすは法蔵法師ほうぞうほっしが所立しよりりの宗しゅうなり、則すくてんここう天皇てんこう后こうの御歸依ごきえあ
りしによりて諸宗しよしゅう肩かたをならべがたかりき、しかれば王おうの威勢いせいにより
て宗しゅうの勝劣しょうりつはありけり法ほに依よつて勝劣しょうりつなきやうなり。

たとひ深義じんぎを得たる論師ろんし・人師にんしなりといふとも王法おうほふには勝かがたき
ゆへにたまたま勝かんとせし仁にんは大難だいなんにあへり、所謂いわゆる師し子そん尊者じゃは
檀弥羅王だんみらおうのために頸くびを刎はねらる、提婆菩薩だいばぼさつは外道げどうのために殺害さつがいせ
らる、竺の道生じくのだうしゅうは蘇山そざんに流ながされ法道ほつどう三蔵さんざうは面かおに火印かなやきをされて江南
に放はなたれたり、而しかるに日蓮にちれんは法華經ほけきょうの行者ぎやうじやにもあらず又また僧侶そうりよの数
にもいらす。

然しかり而しかして世よの人に随まつて阿弥陀仏あみだぶつの名号なごうをもちしほどに

あみだぶつ けしん
阿弥陀仏の化身とひびかせ給う善道和尚の云く「十即十生・百即
ひやくしょうないしせんちゅうむいつ
百生乃至千中無一」と、勢至菩薩の化身とあをがれ給う法然上人
りょうけん
此の釈を料簡して云く「末代に念仏の外の法華経等を雑ふる念仏
せんちゅうむいついっこう
においては千中無一向に念仏せば十即十生」と云云、日本国の
うち むち あお
有智・無智仰いで

此の義を信じて今に五十余年一人も疑を加へず、唯日蓮の諸人に
あみだぶつ ほんがん
かはる所は阿弥陀仏の本願には「唯五逆と誹謗正法とを除く」とち
ほけきょう
かひ、法華経には「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切
せけん ぶつしゆ ないし
世間の仏種を断ず、乃至
そ みょうじゅう
其の人 命終して阿鼻獄に入らんと説かれたり、此れ善導・法然
ほうほう
謗法の者なればたのむところの阿弥陀仏にすてられをはんぬ、余仏
よきょう
余経においては我と抛ちぬる上は救い給うべきに及ばず、法華経の
なげう
文の如きは無間地獄・疑

なしと云云、而るを日本国はをしなべて彼等が弟子たるあひだ此の大難だいなんまぬかれがたし。

無尽むじんの秘計をめぐらして日蓮にちれんをあだむ是これなり先先の諸難しよなんはさておき候いぬ、去年こぞ九月十二日御勘氣ごかんきをかほりて其その夜のうちに頭くびをはねらるべきにてありしがいかなる事にやよりけん彼の夜は延びて此の国に來りていま

まで候に世間せけんにもすてられ仏法ぶつぽうにもすてられ天もとぶらはれず二途にかけたるすてもものなり、而るを何いかなる

御志ごしにてこれまで御使おんつかいをつかはし御身おんみには一期いちごの大事だいじたる悲母ひもの御追善ごいぜん第三年の御供養ごくようを送りつかはされたる両三日はうつつともおぼへず、彼の法勝寺ほつじょうじの修行しゆぎやうがいはをが嶋にてとしごろつかひける童にあひたりし心地しんじ

なり、胡国ここくの夷陽公といひしもの漢土かんどにいけどられて北より南へ出けるに飛びまひける雁を見てなげきけんも・

これにはしかじとおぼへたり。

但し法華經ほけきやうに云く「若し善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊ひそかに一人の爲ためにも法華經ほけきやうの乃至一句を説かん、当まさに知るべし是この人はすなわち如来にょらいの使如来にょらいの所遣しよけんとして如来にょらいの事を行ずるなり」等云云、法華經ほけきやうを一字・一句も唱え又人にも語り申さんものは教主きやうしゆしゃくそん釈尊しやくそんの御使おんつかいなり、然れば日蓮にちれん賤身いやしみなれども教主きやうしゆしゃくそん釈尊しやくそんの勅宣ちやくせんを頂戴ちやうだいして此の国こに來れり、此れを一言もそしらん人人ひとびとは罪つみを無間むげんに開き一

字・一句も供養せん人は無数の仏を供養するにも・すぎたりと見えたり。

教主釈尊は一代の教主一切衆生の導師なり、八万法蔵は皆金言十二部経は皆眞実なり、無量億劫より以来持ち給いし不妄語戒の所詮は一切経是なり、いづれも疑うべきにあらず、但是は総相なり別してたづぬれば如来の

金口より出来して小乘・大乘・顕密権経・実経是あり、今この法華経は「正直捨方便等乃至世尊法久後・要当説眞実」と説き給う事なれば誰の人が疑うべきなれども多宝如来証明を加へ諸仏舌を梵天に付け給う、されば此の御経は一部なれども三部なり一句なれども三句なり一字なれども三字なり、此の法華経の一字の功德は釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字におさめ給う、たとへば如意宝珠の如し一珠も百珠も同じき事なり一珠も無量の

宝を雨す百珠も又無尽の宝あり、たとへば百草を抹りて一丸乃至百丸となせり一丸も百丸も共に病を治する事これをなじ、譬へば大海の一も衆流を備へ一海も万流の味をもてるが如し。

妙法蓮華經と申すは総名なり二十八品と申すは別名なり、月支と申すは天竺の総名なり別しては五天竺是なり、日本と申すは総名なり別しては六十六州これあり、如意宝珠と申すは釈迦仏の御舎利なり竜王にこれを給いて頂上に頂戴して帝釈是を持ちて宝をふらす、仏の身骨の如意宝珠となれるは無量劫来持つ所の大戒身に薰じて骨

にそみ一切衆生をたすける珠となるなり、たとへば犬の牙の虎の骨にとく魚の骨の氣に消ゆるが如し、乃至。

師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば余の一切の獸の筋の絃皆きらざるにやぶる、仏の説法をば師子吼と申

す乃至法華経は師子吼の第一なり。

仏には三十二相そなはり給う一一の相皆百福莊嚴なり、肉髻にくけいびやくこうびやくこう白毫びやくこうなど申すは菓の如し因位の華の功德等と

成つて三十二相を備え給う、乃至無見頂相と申すは釈迦仏の御身おんみは丈六なり竹杖外道は釈尊の御長をはからず御頂を見奉らんとせしに御頂を見たてまつらず、応持菩薩も御頂を見たてまつらず、大梵天王も御頂をば見たて

まつらず、これはいかなるゆへぞとたづぬれば父母・師匠主君をふぼ頂いただきを地につけて恭敬し奉りしゆへに此の相かんとくを感得せり。

乃至梵音声と申すは仏の第一の相なり、小王大王轉輪王等此の相を一分備へたるゆへに此の王の一言に国

も破れ国も治まるなり、宣旨と申すは梵音声の一分なり、万民の

万言一王の一言に及ばず、則ち三墳・五典など申すは小王の御言
なり、此の小国を治め乃至大梵天王三界の衆生を随ふる事仏の
大梵天王・帝釈等をしたがへ
給う事もこの梵音声なり、此等の梵音声一切経と成つて一切衆生
を利益す、其の中に法華経は釈迦如来の書き顕して此の御音を
文字と成し給う仏の御心はこの文字に備れり、たとへば種子と苗と
草と稻とはかはれども心は

たがはず。

釈迦仏と法華経の文字とはかはれども心は一つなり、然れば
法華経の文字を拜見せさせ給うは生身の釈迦如来にあひ進らせた
りとおぼしめすべし、此の志 佐渡の国までおくりつかはされたる
事すでに釈迦仏知し食し畢ん

ぬ、実に孝養の詮なり、恐恐謹言。

文永九年 月 日

日蓮在御判

四条三郎殿御返事

一九四

経王御前御書

文永九年五十一歳 御作

1123p

種種御送り物給ひ候い畢んぬ、法華経第八・妙莊嚴王品と申すに
は妙莊嚴王・淨徳夫人与申す后は淨蔵・淨眼と申す太子に導かれ
給うと説かれて候、経王御前を儲させ給いて候へば現世には跡をつ
ぐべき孝子なり後生には又
導かれて仏にならせ給うべし、今の代は濁世と申して乱れて候な
り、其の上・眼前に世の中乱れて見え候へば

みな 今(こんじょう)生(しょう)には弓(きゅう)箭(せん)の難(なん)に値(あ)いて修羅道(しゆらどう)におち後生(ごしょう)には惡道(あくどう)疑(うたが)い
なし。

而(しか)かに法華經(ほけきょう)を信(ひとびと)ずる人人(ひとびと)こそ仏(ほとけ)には成(な)るべしと見え候(まを)へ御覽(ごらん)あ

る様(よう)にかかる事(こと)出来(しゅつたい)すべしと見(み)へて候(まを)、

故(ゆえ)に昼夜(じゆや)に人(ひと)に申(まう)し聞(き)かせ候(まを)いしを(もち)用(もち)いらる事(こと)こそなくとも科(とが)に

行(い)はるる事(こと)は謂(いわ)れなき事(こと)なれども、古(ふる)も今(いま)も人(ひと)の損(こ)げんとては

善言(ぜんげん)を用(もち)いぬ習(なら)いなれば終(つひ)には用(もち)いられず世(よ)の中(なか)亡(な)びんとするな

り、是(こ)れ偏(ひとえ)に法華經(ほけきょう)・釈迦(しゃか)仏(ぶつ)の

御使(おんつかい)いを責(せ)むる故(ゆえ)に梵天(ぼんてん)・帝釈(たいしゃく)・日月(にちがつ)・四天(してん)等(とう)の責(せ)めを蒙(かう)つて候(まを)な

り、又(また)世(よ)は亡(な)び候(まを)とも日本(にほん)国(こく)は南無妙法蓮華經(なむみょうほうれんげきょう)とは人(ひと)ごと(ごと)に唱(とな)え

候(まを)はんずるにて候(まを)ぞ、如何(いかん)に申(まう)さじと思(おも)うとも毀(こ)らん人(ひと)には弥(いよいよ)

申(まう)し聞(き)かすべし、命(いのち)生きて

御坐(ござ)ば御覽(ごらん)有(あ)るべし、又(また)いかに唱(とな)うとも日蓮(にちれん)に怨(あだ)をなせし人人(ひとびと)は必(かならず)

ず無間地獄むげんじごくに堕ちて無量劫むりょうこうの後に日蓮にちれんの弟子でしと成なつて成仏じょうぶつす可べし、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

日蓮にちれん 花押かおう

一九五

経王殿御返事きょうおうとのごへんじ

文永十年八月 五十二歳ぶんえい

御作

1124p

其その後御おとづれきかまほしく候いつるところに・わざと人を・を
くり給候、又なによりも重宝たるあし山海を尋たずねるとも日蓮にちれんが身
には時に当たりて大切に候。

夫きょうおうごうじぜんについて経王御前のこと・二六時中に日月天にちがつに祈り申し候、先日せんじつの
まほり暫時ざんじも身を・はなさずたもち給たまへ其その本尊ほんそんは正法しょうぼう・像法ぞうぼう・二
時には習ししおへる人だにもなし・ましてかき顕あらわし奉たてまつる事たえたり、
獅子王ししおうは前三後ぜんさん・一と申もうして・

ありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時ときもい
きをひを出いだす事は・ただをなじき事なり、日蓮守護にちれんしゆごたる処ところの

御本尊を・したため参らせ候事も獅子王に・をとるべからず、經に

云く「獅子奮迅之力」とは是なり、

此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給ふべし、南無妙法蓮華經は獅子吼

の如し、いかなる病さわりをなすべきや、鬼子母神・十羅刹如・

法華經の題目を持つものを守護すべしと見えたり、幸いは愛染の

如く福は毘沙門の如くなる

べし、いかなる処にて遊びたはふるとも・つつがあるべからず遊行し

て畏れ無きこと獅子王の如くなるべし、十羅刹如の中にも皇諦女の

守護ふかかるべきなり、但し御信心によるべし、つるぎなんども・す

すまざる人のためには

用る事なし、法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用る事なれ鬼

に・かなぼうたるべし、日蓮がたましひをすみにそめながして・かき

て候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮がたましひは南無

みよつほうれんげきよつ

妙法蓮華經にすぎた

るはなし、妙樂云く「みよつらくいわ 顕本遠寿を以て其の命と為すと釈し給う。

きよつおつこぜん

經王御前には、わざはひも転じて幸いとなるべし、あひかまへて御

しんじん

信心出し此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就せざるべき、

「じゅうまんごがん

充満其願・如清涼池・現世安穩・後生善処」疑なからん、又申し

候当国の大難ゆり候はば・

いそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし、法華經の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りな天たすけ給へと強盛に申し候、淨徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、あなかしこ、あなかしこ

八月十五日

日蓮花押

経王殿御返事

一九六 呵責謗法滅罪抄

文永十年 五十二

歳御作 1125p

御文委く承り候、法華經の御ゆへに已前に伊豆の国に流され候いしもかう申せば謙ぬ口と人はおぼすべけれど心ばかりは悦ば入つて候いき、無始より已来法華經の御ゆへに実にても虚事にても科に

当るならば争かかか

るつたなき凡夫とは生れ候べき、一端はわびしき様なれども

法華經の御為なればうれしと思ひ候いに少し

先生の罪は消えぬらんと思しかども無始より已來の十惡・四重六

重八重十重五無間誹謗正法一闡提の種種

の重罪大山より高く大海より深くこそ候らめ、五逆罪と申すは一

逆を造る猶一劫無間の果を感ず。

一劫と申すは人壽八万歳より百年に一を減し是くの如く乃至十

歳に成りぬ、又十歳より百年に一を加うれば次第に増して八万歳に

なるを一劫と申す、親を殺す者・此程の無間地獄に墮ちて隙もなく

大苦を受くるなり、法華經誹謗の者には思はざれども色にも

嫉み戯れにもる程ならば經にて無けれども法華經に名を寄たる人

を輕し

めぬれば上の一劫を重ねて無数劫無間地獄に墮ち候と見えて候、
不輕菩薩を罵打し人は始こそさありしかども
後には信伏随従して不輕菩薩を仰ぎ尊ぶ事諸天の帝釈を敬ひ我等
が日月を畏るるが如くせしかども始めり

し大重罪消えかねて千劫大阿鼻地獄に入つて二百億劫三宝に捨てられ奉りたりき。

五逆と謗法とを病に対すれば五逆は霍乱の如くして急に事を切る、謗法は白癩病の如し始は緩に後漸漸に大事なり、謗法の者は多くは無間地獄に生じ少しは六道に生を受く、人間に生ずる時は貧窮・下賤等・白癩病等と見えたり、日蓮は法華經の明鏡をもつて自身に引き向かへたるに都てくもりなし、過去の謗法の我が身にある事疑い

なし此の罪を今生に消さずば未来争か地獄の苦をば免るべき、過去遠遠の重罪をば何にしてか皆集めて今生に消滅して未来の大苦を免れんと勘えしに当世・時に當つて謗法の人人国に充滿せり、其の上国主既に第一の誹謗

の人たり、此の時・此の重罪を消さずば何の時をか期すべき、日蓮

が小身を日本国に打ち覆うてののしらは無量無辺の邪法の四衆等
無量無辺の口を以て一時にるべし、爾の時に国主は謗法の僧等が
方人として日蓮を怨み

或は頸を刎ね。或は流罪に行ふべし、度度かかる事、出来せば
無量劫の重罪。一生の内に消なんと謀てたる大術。少も違う事なく
かかる身となれば所願も満足なるべし。

然れども凡夫なれば動すれば悔ゆる心有りぬべし、日蓮だにも
是くの如く侍るに前後も弁へざる女人などの各仏法を見ほどかせ
給わぬが何程か日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦しかりし
に、案に相違して日蓮

よりも強盛の御志。どもありと聞へ候は偏に只事にあらず、教主
積尊の各の御心に入り替らせ給うかと思へば感涙押え難し、妙楽
大師の釈に云く記七。故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞き已つて

信を生ずる事宿種なるべし」等云云、又云く弘二「運像末に在つて此の真文を矚る宿に妙因を殖うるに非ざれば実に値い難しと為す」等云云。

妙法蓮華經の五字をば四十余年これを秘し給ふのみにあらず
迹門十四品に猶是を抑へさせ給ひ寿量品にし

て本果本因の蓮華の二字を説き顯し給ふ、此の五字をば仏・文殊・普賢・弥勒・薬王等にも付属せさせ給はず、地涌の上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩等を寂光の大地より召し出して此れを付属し給ふ、儀式ただ事

ならず宝浄世界の多宝如来大地より七宝の塔に乗じて涌現せさせ

給ふ、三千大千世界の外に四百万億那由他の国土を浄め高さ五

百由旬の宝樹を尽一箭道に殖え並べて宝樹一本の下に五由旬の

師子の座を敷き並べ十方分身

の仏尽く来り坐し給ふ、又釈迦如来は垢衣を脱で宝塔を開き多宝

如来に並び給ふ、譬えば青天に日月の並べるが如し帝釈と頂生王

との善法堂に在すが如し、此の界の文殊等他方の観音等十方の

虚空に雲集せる事星の虚空に

充滿するが如し、此の時・此の土には華嚴經の七処・八会十方

世界の台上の盧舎那仏の弟子法慧・功德林・金剛幢

・金剛蔵等の十方刹土塵点数の大菩薩雲集せり、方等の大宝坊

雲集の仏・菩薩般若經の千仏・須菩提・帝釈等・大日經の八葉九尊

の四仏四菩薩金剛頂經の三十七尊等涅槃經の俱尸那城へ集会せ

させ給たまいし十方じゅつぽう法界ほっかいの仏ぼつ・菩薩ぼさつを

ば文殊もんじゆ・弥勒みろく等互たがいに見知みりて御物語おんものがたりり是ありしかば此等これらの大菩薩ほさつ

は出仕しやかに物狎なれたりと見え候、今・此この四菩薩ほさつ出いでさせ給たまうて後

釈迦しやか如来によらいには九代くの本師ほんし三世さんぜの仏ぼつの御母おんぼにておはする

文殊もんじゆ師利菩薩しりぼさつも一生いっしよ補処ふじよと・ののしらせ

給たまうふ弥勒みろく等らも此この菩薩ぼさつに値あいぬれば物とも見えさせ給たまはず、譬たとえ

ば山やまかつが月卿げつけいに交まじり 猴えんこうが師子ししの座ざに列らるが如ごとし、此この人人ひとびとを召ま

して妙法蓮華經みよほうれんげきやうの五字ごじを付属ふぞくせさせ給たまいき、付属ふぞくも只ただならず十

神力じんりきを現げんじ給たまふ、釈迦しやかは広長舌こうちやうぜつを色界しっかいの頂いただきに付たま

亦復また是かくの如ごとく四百萬億よひやくまん那由他なゆたの国土こくどの虚空こくうに諸仏しよぶつの御舌おんし赤虹せきこうを

百千萬億ひやくせんまん・

並ならべたるが如ごとく充満じゆつまんせしかばおびただしかりし事ことなり、是かくの如ごと

く不思議ふしぎの十神力じんりきを現げんじて結要けつちやう付属ふぞくと申もうして法華經ほけきやうの肝心かんじんを抜き

出して四菩薩ぼさつに譲りゆず、我が滅後めつごに十方じゅうぽうの衆生しゅじょうに与へよと慇懃おんごんに

付属ふぞくして其その後又一またつの神力じんりきを

現げんじて文殊もんじゆ等の自界たほう他方ぼさつの菩薩ぼさつ・二乘にじょう・天人てんにん・竜神りゅうじん等には一經いつきやう乃至ないし

一代いちだい聖教しょうきょうをば付属ふぞくせられしなり、本より影かげの身に随したがつて候様こうさまにつ

かせ給たまひたりし迦葉かしょう舍利弗しゃりふ等にも此この五字ごじを譲りゆず給たまはず此これはさ

てをきぬ、文殊もんじゆ・弥勒みろく等に

は争いかでか惜おしみ給たまうべき器量きりやうなくとも嫌きらい給たまうべからず、方方かたがた不審ふしんなる

を、或あるは他方たほうの菩薩ぼさつは此この土ちに縁少えんせうしと嫌きらひ、或あるは此この土ちの菩薩ぼさつな

れども娑婆しゃば世界せかいに結縁けちえんの日浅ひあしし、或あるは我が弟子でしなれども初発心しょほつしんの

弟子でしにあらずと嫌きらはれさせ

給う程に、四十余年並びに迹門十四品の間は一人も初発心の御弟子なし、此の四菩薩こそ五百塵点劫より已来教主釈尊の御弟子として初発心より又他仏につかずして二門をもふまざる人人なりと見えて候、天台の云く「但

下方の発誓を見る」等云云、又云く「是れ我が弟子なり応に我が法を弘むべし」等云云、妙樂の云く「子父の法

を弘む」等云云、道暹云く「法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云、此の妙法蓮華經の五字をば此の四人に譲られ候。

而るに仏の滅後・正法一千年・像法一千年・末法に入つて二百二十余年が間・月氏・漢土・日本一閻浮提の内に未だ一度も出でさせ給はざるは何なる事にて有るらん、正くも譲らせ給はざりし文殊師利菩薩は仏の滅後四百五十年まで此の土におはして大乘經

を弘めさせ給ひ、其の後も香山・清涼山より度度来つて大僧等と成つて法を弘め、

薬王菩薩は天台大師となり觀世音は南岳大師と成り、弥勒菩薩は傳大士となれり、迦葉・阿難等は仏の滅後二十年四十年法を弘め給ふ、嫡子として譲られさせ給へる人の未だ見えさせ給はず、二百余年が間・教主釈尊の

繪像・木像を賢王・聖主は本尊とす、然れども但小乘・大乘・華嚴

・涅槃・觀經・法華經の迹門普賢經等の仏・真言・大日經等の仏

宝塔品の釈迦・多宝等をば書けどもいまだ寿量品の釈尊は山寺

精舎にましまさず何なる事とも量りがたし、釈迦如来は後五百歳

と記し給ひ正像二千年をば法華經流布の時とは仰せられず、

天台大師は「このごひやくさい妙道に沾わん」と未來に譲り、伝教

大師は「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」と書き給いて、

像法ぞうぼう

の末いまは未いまだ法ほけき華き經きょう流りゅう布ふの時ときならずと我われと時ときを嫌きらひ給たまふ、さればを
しはかるに地じ涌ゆ千せん界がいの大ほ菩さ薩つは釈しゃ迦か・多た宝ほう・十じ方ふの諸しよ仏ぶつの御ゆず讓り御ご
約やく束そくを空むなしく黙もく止してはてさせ給たまうべきか。

外げ典てんの賢けん人じんすら時ときを待まちつ郭くわく公こうと申もうす畜ちく鳥ちうは卯みづ月げつ五ご月げつに限かぎる、此
の大ほ菩さ薩つも未ま法ぼうに出いずべしと見みえて候あ、いかんと候あべきぞ瑞ずい相そうと
申もうす事ことは内ない典てん・外げ典てんに付ついて必かならず有あるべき事ことの先まに現げんずるを云いうな
り、蜘蛛ちぢゅうかかつて喜よろこ事こと来きり

かささぎ

まろつと

もう

しょうじ

しるし

げん

いか

だいじ

鵲鳴いて客人来ると申して小事すら驗先に現ず何に況や大事をや、されば法華經序品の六瑞は一代超過の大瑞なり、涌出品は又此れには似るべくもなき大瑞なり、故に天台の云く「雨の猛きを見

ては竜の大きな事を知り

華の盛なるを見ては池の深き事を知る」と書かれて候、妙楽云く

「智人は起を知り蛇は自ら蛇を知る」と云云、

今日蓮も之を推して智人の一分とならん、去る正嘉元年「太歳

丁巳」八月二十三日戌亥の刻の大地震と、文永元年甲子七月四日の

大彗星、此等は仏滅後・二千二百余年の間未だ出現せざる大瑞な

り、此の大菩薩の此の大法を持ちて出現し給うべき先瑞なるか、尺

の池には丈の浪たたず驢吟ずるに風鳴らず、日本国の政事乱れ

万民歎くに依つ

ては此の大瑞現じがたし、誰か知らん法華經の滅不滅の大瑞なり

と。

二千余年の間、悪王の万人にらるる謀叛の者の誰人にあだまる等日蓮が失もなきに高きにも下きにも罵詈毀辱刀杖瓦礫等ひまなき事二十余年なり、唯事にはあらず過去の不軽菩薩の威音王仏の末に多年の間、罵詈せられしに相似たり、而も仏彼の例を引いて云く我が滅後の末法にも然るべし等と記せられて候に近くは日本遠くは漢土等にも法華經の故にかかる事有りとは未だ聞かず人は悪んで是を云はず、我と是を云はば自讚に似たり、云わずば仏語を空くならず過あり、身を軽んじて法を重んずるは賢人にて候なれば申す、日蓮は彼の不軽菩薩に似たり、国王の父母を殺すも民が考妣を害するも上下異なれども一因なれば無間におつ、日蓮と不軽菩薩とは位の上下はあれど

も同業なれば彼の不輕菩薩成仏し給はば日蓮が仏果疑うべき
や、彼は二百五十戒の上慢の比丘に罵られたり、日蓮は持戒第一
の良觀に讒訴せられたり、彼は歸依せしかども千劫阿鼻獄におつ、
これは未だ渴仰せず知らず無数劫をや経んずらん不便なり不便な
り。

疑つて云く正嘉の大地震等の事は去る文応元年太歳庚甲七月十六日
宿屋の入道に付けて故最明寺入道殿へ奉る所の勘文立正安国論に
は法然が選択に付いて日本国の仏法を失ふ故に天地瞋をなし
自界叛逆難と他国侵遍難起こる

べしと勘へたり、此には法華經の流布すべき瑞なりと申す先後の
相違之有るか如何、答えて云く汝能く之を問えり、法華經の第四
に云く「而も此の經は如来現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」
等云云、同第七に況滅度後を重ねて説いて云く「我が滅度の後・
後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布せん」等云云、仏滅後の多怨は
後・五百歳に

妙法蓮華經の流布せん時と見えて候、次ぎ下に又云く「悪魔・魔民・
諸天竜・夜叉・鳩槃荼」等云云、行滿座主伝教大師を見て云く「聖
語朽ちず今・此の人に遇えり我れ披閱する所の法門・日本国の
阿闍梨に授与す」等云云、今も又
かくのこと
是くの如し末法の始に妙法蓮華經の五字を流布して日本国の一切
衆生が仏の下種を懷妊すべき時なり、例せば下女が王種を懷妊す
れば諸女賤りをなすが如し、下賤の者に王頂の珠を授与せんに

大難来らざるべしや、一切世間

多怨難信の経文是なり、涅槃経に云く「聖人に難を致せば他国よ

り其の国を襲う」と云云、仁王経も亦復是くの如し取意、日蓮をせめ

て弥よ天地四方より大災雨の如くふり泉の如くわき浪の如く寄せ

来るべし、国の大蝗虫

たる諸僧等近臣等が日蓮を讒訴する弥よ盛ならば大難倍来るべ

し、帝釈を射る修羅は箭還つて己が眼にた

ち阿那婆達多竜を犯さんとする金翅鳥は自ら火を出して自身をや

く、法華経を持つ行者は帝釈・阿那婆達多竜に劣るべきや、章安

大師の云く「仏法を壊乱するは仏法の中の怨なり慈無くして詐わり

親むは則ち是れ彼が怨なり

」等云云、又云く「彼が為に悪を除くは則ち是れ彼が親なり」等云

云。

にほんこく いたさいしゆじよう
日本国の一切衆生は法然が捨閉閣抛と禅宗が教外別伝との
おうげん たぶら
誑言に誑かされて一人もなく無間・大城に墮つべしと勘へて国主・
ばんみん はば
万民を憚からず大音声を出して二十余年が間よばはりつるは竜逢
とひかん
と比干との直臣にも劣るべきや、
だいひ かんのおん いちじ むげんじこく しゆじよう
大悲千手観音の一時に無間地獄の衆生を取り出すに似たるか、火
のちの敷子を父母が一時に取り出さんと思ふに手少なければ慈悲
ぜんごあ
前後有るに似たり、故に千手万手億手ある父母にて在すなり、爾前
きんじつ
の経経は一手・二手等に似たり法華経は「一切衆生を化して皆
ぶつどう
仏道に入らしむ」と無数手の菩提是なり、日蓮は法華経並びに章安
しやく
の釈の

ごとく如くならば日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうの慈悲じひの父母ふぼなり、天高あまたかけれども耳とければ聞かせ給たまうらん地厚ちこうけれども眼まなこ早はやければ御覽ごらんあるらん天地てんち既に知しし食くしぬ、又一切衆生いっさいしゅじょうの父母ふぼを罵ののしりするなり父母ふぼを流罪るざいするなり、此の国此の両三年が間の乱政は先代せんだいにもきかず法に過ぎすてこそ候へ。

抑おさ悲母ひもの孝養こうようの事仰おほせ遣きされ候感涙かんでい押おへ難がたし、昔元重等の五童

は五郡ごぐんの異性たにんの他人たにんなり兄弟きょうだいの契ちぎりをなして

互たがいに相背そむかざりしかば財たから三千さんぜんを重かさねたり、我等われら親ちちと云いう者ものなしと歎なげきて途中ちゆうちゆうに老女らうにょを儲もつけて母ははと崇あがめめて一分いちぶんも心こころに違ちがはずして二十四年じゅうにじゅうよんねんなり、母忽たちまちに病やまひに沈しづんで物ものいはず、五子ごし天あまに仰あおいで云いく我等われら孝養こうようの感なく無くして母ははもの云いわ

ざる病やまひあり、願ねがは天孝てんこうの心こころを受け給たまはば此の母ははに物ものいはせ給たまへと申もうす、其そのの時ときに母五子ははごしに語かたつて云いわ我われは本もと是これ大原おほはらの陽猛やうまうと云いうも

のの女なり、同郡の張文堅ちやうぶんけんに嫁す文堅死にき、我に一人の児あり名をば烏遺ういと云いき彼が

七歳の時乱らんに値あうて行く処ところをしらず、汝等なんじ五子に養はれて二十四年此の事を語かたらず、我が子は胸に七星の文あり右の足の下に黒子ありと語り畢おわつて死す、五子葬をなす途中にして国令の行くにあひぬ、彼の人物記しるする囊ふくろを

落せり此の五童が取れるになして禁め置いましかれたり、令来つて問うて云いわく汝等なんじは何いずくの者ぞ、五童答えて云いわく上に言えるが如ごとし、爾その時に令上よりまるび下くだして天に仰あおぎ地に泣く、五人の繩をゆるして我が座に引き上せて物語ものがたりり

して云いわく我は是れ烏遺ういなり、汝等なんじは我が親を養いけるなり此の二十四年の間多くの楽みに値あへども非母の事を

のみ思いい出いでて楽みも楽しみならず、乃至ないしだいおう大王の見参に入れて五

の主と成せりき、他人集つて他の親を養ふに是くのごとし、何に況や同父同母の舎弟妹女等がいろいろたるを顧みば天も争か御納受なからんや。

淨蔵・淨眼は法華經をもつて邪見の慈父を導びき、提婆達多は仏の御敵四十余年の経經にて捨てられ臨終悪くして大地破れてむげんじしく無間地獄に行きしかども法華經にて召し還して天王如来と記せらる、阿闍世王は父を殺せども仏・涅槃の時・法華經を聞いて阿鼻の大苦を免れき。

例せば此の佐渡の国は畜生の如くなり又法然が弟子充滿せり、
鎌倉に日蓮を悪みしより百千万億倍にて候、一日も寿あるべしとも
見えねども各御志ある故に今まで寿を支へたり、是を以て計る
に法華経をば釈迦・多宝・十方の諸仏大菩薩供養恭敬せさせ給へ
ば此の仏菩薩は各各の慈父慈母に日日夜夜十二時にこそ告げさせ
給はめ、

当時主の御おぼえのいみじくおはするも慈父悲母の加護にや有る
らん、兄弟も兄弟とおぼすべからず只子とおぼせ、子なりとも
梟鳥と申す鳥は母を食ふ破鏡と申す獸の父を食わんとうかがふ、
わが子四郎は父母を養ふ

子なれども悪くばなにかせん、他人なれどもかたらひぬれば命にも
替るぞかし、舍弟等を子とせられたらば今生の方人・人目申す
計りなし、妹等を女と念はばなどか孝養せられざるべき、是へ流さ

れしには一人も訪う人も

あらしとこそおぼせしかども同行七八人よりは少からず、上下のくわても各の御計ひなくばいかげせん、是れ偏に法華經の文字の各の御身に入り替らせ給いて御助けあるとこそ覚ゆれ。

何なる世の乱れにも各各をば法華經十羅刹助け給へと湿れる木より火を出し乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり、事繁ければとどめ候。

四条金吾殿御返事

日蓮花押

一九七 主君耳入此法門免与同罪事 文永十一年九

月 五十三歳御作 与四条金吾 1132p

銭二貫文給び畢んぬ。

有情つじょうの第一だいいちの財たからは命いのちにすぎず此これを奪うう者は必ず三途さんずに墮おつ、
然しかれば輪王りんおうは十善じゅうぜんの始はじめには不殺生ふさつじょうぶつのの小乘經しょうじょうきょうの始はじめには五戒ごかい其そのの
始はじめには不殺生ふせつじょう、大乘だいじょうぼん梵網經ぼんもつぎょうの十重禁じゅうじんの始はじめには不殺生ふせつじょう、法華經ほけきょうの
壽量品じゅうりょうぼんは釈迦如来しやくかにょらいの不殺生戒ふさつじょうかい

の功德くどくに當つて候品ぞかし、されば殺生せつじやうをなす者は三世さんぜの諸仏しよぶつにす
てられ六欲ろくよく天てんも是これを守る事なし、此の由よしは世間せけんの学者がくしやも知れり
にちれん
日蓮にちれんもあらあら意得こころうて候、但し殺生せつじやうに子細しさいあり彼の殺ころさるる者の
とが けいちやう
失とがに軽重けいちやうあり、我が父母ふぼ・主君しゅくん・

我が師匠ししやうを殺せる者をかへりて害せば同じつみなれども重罪じゆうざいかへり
て軽罪けいざいとなるべし、此れ世間せけんの学者がくしや知れる処ところなり、但し法華經ほけきやうの
御かたきをば大慈だいじ大悲だいひの菩薩ぼさつも供養くやうすれば必ず無間地獄むげんじごくに墮おつ、
五逆ごぎやくの罪人ざいにんも彼あだを怨うらと

すれば必ず人天にんてんに生を受く、仙予せんよ国王こくおうとくこくおう
ほけきやう
法華經ほけきやうのかたきを打ちて今は釈迦しゃか仏ぶつとなり給たまう、其その御弟子おんでし迦葉かじやう・
あなんしやうほつ もくれん
阿難あなん舎利弗しやりふつ・目連もくれん等の無量むりやうの眷属けんそくは彼の時に先かを懸かけ陣じんをやぶり
ある
或あるは殺ころし・或あるは害あやし・或あるは随喜ずいきせ

し人人ひとびとなり、覺德かくとく比丘びくは迦葉かじやう仏ぶつなり、彼の時に此の王王すすを勧すすめて

法華經ほけきょうのかたきをば父母宿世ふぼすくせ叛逆はんぎの者の如ごとくせし大慈大悲だいじだいひの
法華經ほけきょうの行者ぎやくじやなり。

今の世は彼の世に当れり、国主日蓮こくしゅにちれんが申す事もうを用ゆるならば彼
がごとくなるべきに用いざる上うえかへりて彼

がかたうどとなり一國ばんみんこそりて日蓮にちれんをかへりてせむ、上一人かみいちにんより下
万民ばんみんにいたるまで皆五逆みなしぎやくに過ぎたる謗法ぼうぼう

の人となりぬ、されば各各も彼が方ぞかし、心は日蓮にちれんに同意どういなれど
も身は別なれば与同罪よどうざいのがれがたきの御事おんことに

候しゅくんに主君しゅくんに此この法門ほうもんを耳みみにふれさせ進しんせけるこそありがたく候へ
今は御用もちいなくもあれ殿とのの御失ごがは脱だつれ給たまひ

ぬ、此これより後ごには口くちをつつみておはすべし、又天あまも一定殿いちていをば守
らせ給たまうらん、此これよりも申もうすなり。

かまへてかまへて御用心ごしんしん候まうべし、いよいよにくむ人人ひとびとねらひ候まうら

ん、御さかもり夜は一向いっこうに止め給へたま只女房ただにようぼう
と酒うち飲んでなにの御不足ふそくあるべき、他人たにんのひるの御さかもりお
こたるべからず、酒を離れてねらうひま
有るあべからず、返す返す、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

九月二十六日

左衛門尉殿御返事さえもんのかみごへんじ

日蓮にちれん

花押かおう

一九八 四條金吾殿女房御返事

文永十二年

正月 五十四歳御作 1134p

所詮しょせん日本にほん国こくの一切いっさい衆生しゅじやうの目めをぬき神かみをまどはかす邪法じゃほう真言しんごん師しに
はずぎず是こゝは且しばしばらく之これを置く、十喻じゆゆは一切いっさい經きやうと法華ほけ經きやうとの勝劣しょうれつを
説たまかせ給たまうと見えたれども仏ぶつの御心ごしんはさには候あははず、一切いっさい經きやうの
行者ぎやうじやと法華ほけ經きやうの行者ぎやうじやとをな

らべて法華ほけ經きやうの行者ぎやうじやは日月にちがつ等とうのごとし諸經しよきやうの行者ぎやうじやは衆星しゆせい燈炬とうこの
ごとしと申もうす事ことを詮せんと思おもひ食くされ候あはれ、なにをもつてこれをしると
ならば第八たつたえの譬たとへの下したに最大だいじ事じの文ぶんあり、所謂いわゆる此こゝの經文きやうもんに云いく「有
能受持じゆじ是經きやう典てん者しや亦復また如に是よ於せ一切いっさい
衆生しゆじやう中ちゆう亦また為た第一だいいち等とう云いふ、此こゝの二十二にじに字じは一經いっきやう第一だいいちの肝心かんしんなり

いっさいしゆじょう

がんもく

ほけきょう

ぎょうじや

にちがつ

ほんのう

ご

一切衆生の眼目なり、文の心は法華經の行者は日月大梵王仏のごとし、大日經の行者は衆星・江河凡夫のごとしとかれて候經文

なり、されば此の世の中の

なんよそうに

きら

ほけきょう

たま

いっさいしゆじょう

男女僧尼は嫌うべからず法華經を持たせ給う人は一切衆生のしう

とこそ仏は御らん候らめ、梵王・帝釈はあをがせ給うらめとうれ

しさ申すばかりなし、又この經文を昼夜に案じ朝夕によみ候へば

もう

ほけきょう

ぎょうじや

きょうもん

ちゆうせき

きょうもん

常の法華經の行者にては候

ほけきょう

ぎょうじや

きょうもん

ちゆうせき

きょうもん

きょうもん

きょうもん

きょうもん

候

はぬにはんべり、是經典者とて者の文字はひとよみ候へば此の世

の中の比丘・比丘尼うば塞うばいの中に法華經を信じまいらせ候

ひとびと

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

候

人人かと見えまいらせ候へばさにては候はず、次下の經文に此の者

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

もんじ

候

の文字を仏かさね

てとかせ給うて候には若有女人ととかれて候、日蓮・法華經より

ほか

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

候

外の一切經をみ候には女人とはなりたくも候はず、或經には女人

ほか

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

いっさいしゆじょう

候

外

一切經をみ候には女人とはなりたくも候はず、或經には女人

外

一切經をみ候には女人とはなりたくも候はず、或經には女人

をば地獄じじくの使と定められ、或経あるには大蛇だいじやととかれ、或経あるにはまがれ
木のごとし、或経あるには仏種ぶつしゆをい
れる者とこそとかれて候へ、仏法ぶつぽうならず外典げてんにも榮啓期えいけいきと申せし者
の三樂をうたひし中に無女樂むじよびくと申して天地てんちの中女人にょにんと生れざる事
を一の樂とこそたてられて候へ、わざわひは三女にょにんよりをこれりと定
められて候に、此の法華經計りほけきようばかに此の経を持つ女人にょにんは一切いっさいの女人にょにんに
すぎたるのみならず一切いっさいの男子にこえたりとみえて候、所詮しよせん・

一切いっさいの人にそしられて候まうよりも女人にょにんの御ごためにはいとをしとをも
はしき男おとこにふびんとをもはれたらんにはす
ぎじいっさい、一切いっさいの人はにくまばにくめ、釈迦しやくわ仏ぶつ・多宝たぼう仏ぶつ・十方じゅうぼうの諸しよ仏ぶつ・
乃至ないし梵王ぼんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ等とうにだにもふびんとをも
はれまいらせなばなにかくるしかるべき、法華ほけき經きやうにだにもほめられ
たてまつりなばなにかくるしかるべき。

今いま三十三の御ごやくとて御布施ぶせ送りたびて候まうへば釈迦しやくわ仏ぶつ・法華ほけき經きやう
日天にってんの御ごまへに申もうし上うて候まう、又また人の身みには左右さう

のかたあり、このかたに二つの神かみをはします一ひとをば同名どうみ二ふたをば同生どうじやう
と申もうす、此この二つの神かみは梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつの

人をまほらせんがために母ははの腹はらの内うちに入りしよりこのかた一生いっしやうを
わるまで影かげのごとく眼まなこのごとくつき随したがいて候まう

が、人の悪あくをつくり善ぜんをなしなむどし候まうをばつゆちりばかりものこ

さず天にうたへまいらせ候なるぞ。

華嚴經けこんきょうの文にて候を止觀しかんの第八てんだいだいしに天台大師てんだいだいしよませ給たまへり、但ただし

信心しんじんのよはきものをば法華經ほけきょうを持つ女人にょにんなれどもすつるとみえて

候、例せば大將軍だいしゅうぐんよはければしたがうものもかひなし、弓よはけれ

ば絃いとゆるし・風ゆるけ

れば波ちゐさきは自然じねんの道理どうりなり、而しかるにさえもん殿は俗の中

日本にほんにはかたをならぶべき者もなき法華經ほけきょうの信

者なり、是にあひつれさせ給たまいぬるは日本第一にほんだいいちの女人にょにんなり、法華經ほけきょう

の御ためには竜女りゅうにょとこそ仏はをぼしめされ

候らめ、女と申もうす文字もんじをばかかるとよみ候、藤の松にかかり女の男

にかかるも今は左衛門殿さえもんを師とせさせ給たまい

て法華經ほけきょうへみちびかれさせ給たまい候へ。

又三十三のやくは転じて三十三のさいはひとならせ給たまうべし、

ひちなんそくめつ ひちふくそくしよつ
七難即滅・七福即生とは是なり、年は・わかうなり福はかさなり候
べし、あなかしこ・あなかしこ。

五月二十七日

にちれん
日蓮

かおう
花押

しじよきんご にきうぼうご へんじ
四条金吾殿女房御返事

一九九

四条金吾殿御返事

文永十二年三月

五十四歳御作 一一三六頁

此しきようなんじ経難持しきようなんじの事、抑そもそも弁阿闍梨あじやりが申もうし候は、貴辺きへんのかたらせ給たまふ様

に持もちつらん者は現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしやうぜんじよと承うけつて・すでに去年こぞより今日

まで・かたの如ごとく信心しんじんをいたし申もうし候処ところに、さにては無なくくして大難だいなん

雨この如ごとく来り候と云云、真まことにてや候らん、又弁公がいつはりにて候

やらん、いかさま・よきついでに不審ふしんをはらし奉たてまつらん、法華経ほけきようの文に

難信難解なんしんなんげ

と説とき給たまふは是これなり、此の経をききうくる人は多し、まことに聞き

受うくる如ごとく大難だいなん来れども憶持おくじ不忘わすれの人は希まれなるなり、受うくるは・

やすく持もちつはかたし・さる間まじ・成仏ぶつは持もちつにあり、此の経を持もちたん人

は難なんに値あうべしと心得こころえ

て持つなり、「即そく為い疾しつ得とく・無む上じょう仏ぶつ道どう」は疑うたがなし、三さん世ぜの諸しよ仏ぶつの大事だいじ

たる南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きやうを念ねんずるを持とは云いうなり、經きやうに云いく「護ご持じ

仏ぶつ所しよ属じよといへり、天てん台だい大だい師しの云いく「信しん力りきの故ゆえに受うけ念ねん力りきの故ゆえに持ちつ

云い云い、又また云いく「此この經きやうは持ち難がたし若もし暫しばくも持ちつ者ものは我すな即わち歡かん喜きす

諸しよ仏ぶつも亦また然しかなりと云い云い、火かにたきぎを加える時ときはさかんなり、大たい風ふう

吹ふけくらば求ばい羅じやうは倍ばい増じやうするなり、松まんは万まん年ねんのよはひを持つ故ゆえに枝えをまげら

る、法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやは火くと求く羅らとの如ごとし薪たきと風かぜとは大だい難なんの如ごとし、

法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやは久く遠おん長ちやう寿じゆの如ごと来らいなり、修し行ぎやうの枝えをきられまげら

れん事うたが疑いなかるべし、此これより後ごは此し經きやう難なん持ちの四し字じを暫ざん時じもわす

れず案たまじ給たまうべし、恐おそ恐おそ。

文ぶん永えい十じゆ二に年ねん乙おつ亥がい三さん月げつ六ろく日にち

日に蓮れん

花押 かお

四條金吾殿 しじょうきんご

一一〇〇

しじょうきんこ

与四条金吾

おうしゃじょう

王舎城事

建治元年四月

がんねん

五十四歳御作

1137p

銭一貫五百文給び候い畢んぬ、焼亡の事委く承つて候事悦び入
つて候、だいか大火の事は仁王経にんのつきようの七難ひちなんの中の第三の火難なん・法華経ほけきようの七難ひちなん
の中には第一だいいちの一の火難なんなり、夫れ虚空こくうをば剣にてきることなし水
をば火焼くことなし、しやうにん聖人・けんじん賢人・ちしや福人・ちしや智者をば火やくことなし、
例せば月氏がつしに王舎城おうしゃじょうと申す大城だいじようは在家ざいけ・九億万家なり、七度まで
だいか大火をこり

てやけほろびき、万比なげきて逃亡せんとせしに大王だいおうなげかせ給うたま
事かぎりなし、そのときけんじん其の時賢人ありて云く七難ひちなんの大火だいかと申す事しやうにんは聖人
のさり王の福の付くる時をこり候なり、然るしかに此の大火だいか・万民ばんみんをば

やくといえとも内裏には

火ちかづくことなし、知んぬ王のとがにはあらず万民の失なりさ
れば万民の家を王舎と号せば火神・名にをそれてやくべからずと申
せしかば、さるへんもとて王舎城とそなづけられしかば、それより
火災とどまりぬ、されば

大果報の人をげ大火はやかざるなり。

これは国王已にやけぬ知んぬ日本国の果報のつくるしるしなり、
然りに此の国は大謗法の僧等が強盛にいのりをなして日蓮を降伏
せんとする故に弥弥わざはひ来るにや、其上名と申す事は体を
顕し候に両火房と申す謗法の

聖人・鎌倉中の上下の師なり、一火は身に留まりて極楽寺焼て地獄
寺となりぬ、又一火は鎌倉にじやなちて御所やけ候ぬ、又一火は
現世の国をやきぬる上に日本国の師弟ともに無間地獄にはちて

阿鼻あびの炎にもえ候さぶべき先表せんびょうなり、

愚癡ぐちの法師ほっし等が智慧ちえある者の申もうす事ことを用もちい候さぶはぬは是これ体ていに候さぶなり、
不便ふびん不便ふびん、先おん先ふみ御文おんぶんまいらせ候さぶしなり。

御馬ごまのがいて候さぶへば又またともびきしてくり毛けなる馬うまをこそまうけて
候さぶへ、あはれ・あはれ見みせまいらせ候さぶはばや、名越なごえの事ことは是これにこそ多おほ
くの子細しさいどもをば甲かえて候さぶへ、ある人の・ゆきあひて理具りぐの法門ほうもん
自讚じざんしけるを・さむざむに

せめて侯けると承り候。

又女房にようぼうの御いのりの事。法華經ほけきょうをば疑うたがいひまいらせ候そうちはねども御信心しんじんやよはくわたらせ給たまはんずらん、如法に信じたる様なる人ひとびとも実にはさもなき事とも是にて見て候、それにも知しるしめされて候、まして女人にょにんの御心・風をばつ

なぐとも・とりがたし、御いのりの叶かない候そうちはざらんは弓のつよくしてつるよはく・太刀つるぎにてつかう人の臆病おくびょうなるやうにて候べし、あへて法華經ほけきょうの御とがにては候べからず、よくよく念仏ねんぶつと持齋じさいとを我もすて人をも力の

あらん程はせかせ給たまへ譬たとへば左衛門殿さえもんの人にくまるるがごとしとこまごまと御物語おんものがたりり候そうちへいかに法華經ほけきょうを御信用ごしんようありとも法華經ほけきょうのかたきを・とわりほどには・よもおぼさじとなり、一切いっさいの事は父母ふぼにそむき国王こくおうにしたが

はざれば不孝ふこうの者にして天のせめをかうふる、ただし法華經ほけきょうのかたきになりぬれば父母ふぼ・国主こくしゅの事をも用ひざるが孝養こうようともなり国の恩を報ずるにて侯。

されば日蓮にちれんは此の經文きょうもんを見侯しかば父母手ふぼをすりてせいせしかども師にて侯し人かんだうせしかども・鎌倉殿かまくらの御勘氣ごかんきを二度までかほり・すでに頸となりしかども・ついにをそれずして侯すむへば、今は日本国にほんこくの人人ひとびとも道理どうりかもちと申すへんも・あるやらん、日本国にほんこくに国主こくしゅ・父母ふぼ・師匠ししょうの申す事ことを用いずしてついに天のたすけをかほる人は日蓮にちれんよ

り外は出しがたくや侯すむはんずらん、是より後も御覽ごらんあれ日蓮にちれんをそしる法師原ほっしが日本国にほんこくを祈いのらば弥弥国亡いよいよぶべし、結句けっくせめの重おもからん時とき・上かみ一人いちにんより下万民ばんみんまで・もとどりをわかつやつことなりはぞをくうためしあるべし、後生ごせい

今(こん)生(じやう)に法(ほ)華(け)經(きやう)の敵(てき)とな(な)りし人(ひと)をば梵(ぼん)天(てん)・帝(たい)釈(しゃく)・日(に)月(げつ)・

四(してん)天(てん)・罰(たまい)し給(たま)いて皆(みな)人(ひと)に・みこりさせ給(たま)へと申(もう)しつけて候(こう)、日(に)蓮(れん)・

法(ほ)華(け)經(きやう)の行(ぎやう)者(じゃ)にてあるなしは是(こ)れにて御(ご)覽(らん)あるべし、かう申(もう)せば

国(こく)主(しゆ)等(とう)は此(こ)の法(ほ)師(し)のをどすと思(おも)へるか、あへてにくみては申(もう)さず

大(だい)慈(じ)大(だい)悲(ひ)の力(りき)・無(む)間(かん)地(じ)獄(ごく)の大(だい)苦(く)を今(こん)生(じやう)にけさしめんとなり、章(ぢやう)安(あん)

大(だい)師(し)云(い)く「彼(か)が

為(ため)に悪(あく)を除(す)くは即(すな)ち是(こ)れ彼(か)が親(おや)なり」等(とう)云(い)ふ、かう申(もう)すは国(こく)主(しゆ)の

父(ふ)母(ぼ)・一(いっ)切(さい)衆(じゆ)生(じやう)の師(し)匠(じやう)なり、事(じ)多(た)く候(こう)へども

とど
留侯ぬ、又麦の白米一だはしかみ送り給び侯い畢んぬ。

がねんきのと
建治元年乙亥卯月十二日

しじょうきんご
四条金吾殿御返事

しじょうきんご
二〇一 四条金吾殿御返事

1139

p

わざ
態と御使喜び入つて侯、又柑子五十・鷺目五貫文給び侯い畢ん

くよう
ぬ、各各御供養と云云、又御文の中に云く去る十六日に有る僧と寄

しよほうじつそつ
合つて侯時・諸法実相の法門を申し合いたりと云云、今経は出世の

ほんかい
本懐・一切衆生・皆成仏道の根元と申すも只此の諸法実相の四字

より外は全くなきなり、されば伝教大師は万里の波濤をしのぎ

たま
給いて相伝し

いっく
まします此の文なり、一句万了の一言とは是なり、当世・天台宗の

開かい会いの法ほう門もんを申もうすも此この經きやう文もんを悪いく意い得とくて邪じや義ぎを云いい出だし候ぞぞ、
只ただ此この經きやうをもちて南な無む妙みやう法ほう蓮れん華げ經きやうと唱となえて正しやう直じき捨しや方ほう便べん・但たん説せつ
無む上じやう道どうと信しんずるを諸しよ法ほう実じつ相そうの開かい会いの法ほう門もんとは申もうすなり、其そのの故ゆえは
釈しやく迦か仏ぶつ・多た宝ほう如に来よらい・十じゆ方つ三さん世ぜの諸しよ仏ぶつを証しよ人にんとし奉たてり候なり、相か構まえ
てかこの如ごとく
心こころ得えさせ給たまひて諸しよ法ほう実じつ相そうの四もんの文もん字じを時じ時じあぢわへ給たまうべし・良りやう薬やく
に毒どくをまじうる事あ有あるべきや・うしほの中ちゆうより河かの水みづを取り出いだす事こと
ありや、月げつは夜やに出い・日にちは昼ひる出いで給たまう此この事あ争あらふべきや、此これより
後ごには加か様ごうに意い得とく給たまひて御おん問もん答たうあるべし、但ただし細さい細さいは論ろん難がたし給たまうべ
からず、猶なほも申もうさばそれがしの師しにて侯に日にち蓮れん房ぼうに御おん法ほう門もん侯ぞうへとうち
咲わらうて打うち返かへし打うち返かへし仰おほせ給たまうべく候ぞ。
法ほう門もんを書かきつる間かん・御おん供く養やうの志しは申もうさず供く、有あり難がたし有あり
難がたし委くわくは是こよりねんごろに申もうすべく候ぞ。

建治元年乙亥七月二十二日
が ねん きの と い
日蓮花押
に ち れん か お う
四条中務三郎左衛門尉殿御返事
さ え も ん の じ ょ う
ご えん じ

一一〇二 瑞相御書

建治元年

五十四歳御作

1140p

与四条金吾

夫れ天変は衆人をおどろかし地天は諸人をうごかす、仏・
法華経をとかんとし給う時五瑞六瑞をげんじ給う、其の中に
地動瑞と申すは大地六種に震動す六種と申すは天台大師文句の三
に釈して云く「東涌西没とは東方は青・肝を主どる肝は眼を主どる
西方は白肺を主どる肺は鼻を主どる此れ眼根の功德生じて鼻根の
煩惱互に滅するを表するなり鼻根の功德生じて眼の中の煩惱互に
滅す余方の涌没して余根の生滅を表するも亦復云云、妙樂大師
之を承けて云く「表根と言うは眼鼻已に東西を表す耳舌理として南
北に対す中央は心なり四方は身なり身四根を具す心く四を縁

す故に心を以て身に対して涌没を為す云云、夫十方は依報なり
衆生は正報なり譬へば依報は影

のごとし正報は体のごとし身なくば影なし正報なくば依報なし又

正報をば依報をもつて此れをつくる、眼根を

ば東方をもつてこれをつくる、舌は南方鼻は西方耳は北方身は四方

心は中央等これを・もつて・しんぬべし、

かるがゆへに衆生の五根やぶれんとせば四方中央をどろうべし・さ

れば国土やぶれんとするしるしには・まづ山

くづれ草木かれ江河つくるしるしあり人の眼耳等驚そうすれば

天変あり人の心をうごかせば地動す・抑何の経

経にか六種動これなき一切経を仏とかせ給いしみなこれあり、しか

れども仏・法華経をとかせ給はんとて六種震動

ありしかば衆も・ことにおどろき弥勒菩薩も 疑い文殊師利菩薩も

こたへしは諸經しよきやうよりも瑞おおいも大おおいに久しくありし
かば疑うたがいも大おおいに決こころしがたかりしなり、故ゆえに妙樂みょうらくの云いわく「何れいすれの
大乘だいじよ經きやうにか集衆ほこ放光ほうこう雨花動地うげあらざらん但だい大疑ぎ
を生なずること無し」等云云、此この釈しやくの心こころはいかなる經經きやうきやうにも序しよは
候こへども此これほど大おおいなるはなしとなり・されば天台てんだい大師だいしの云いわく「世よ
人以ちち蜘蛛掛ちちゆうれば喜こび来きり・鵲こ鳴なげば行人い至いたると小こすら尚な徴ちゆう有あり大
焉やぞ瑞無おおいからん近ちかきを以もつて

遠きを表す」等云云。

夫一代いちだい四十余年よんじゅうねんが間なかりし大瑞だいずいを現げんじて法華經ほけきょうの迹門しゃくもんをとか

せ給たまいぬ、其その上本門ほんもんと申もうすは又爾前にぜんの経経ききょう

の瑞しゃくもんに迹門しゃくもんを対するよりも大なる大瑞だいずいなり、大宝塔ほうとうの地ちよりをど

りいでし地涌千界大地じゆせんがいだいちよりならび出いでし大震動しんどうは大風たいふうの大海たいかいを吹

けば大山のごとくなる大波のあしのはのごとくなる小船のをひほに

つくがごとくなりしな

り、されば序品じよぼんの瑞みろくをば弥勒もんじゆは文殊もんじゆに問もんい涌出品ゆじゆつぽんの大瑞だいずいをば慈氏じし

は仏ぶつに問もんいたてまつるこれを妙楽釈みょうらくしゃくして云いわく

「迹事じやくもんは浅近文殊せんじんもんじゆに寄よすべし久本くほんは裁ことわり難がたし故ゆえに唯ただ仏ぶつに託たくす」云云

迹門じやくもんのことは仏説ぶつとき給たまはざりしかども文殊もんじゆほ

ぼこれをしれり、本門ほんもんの事は妙徳みょうとくすこしもはからず、此この大瑞だいずいは

在ざい世せいの事ことにて候まう、仏神ぶつじん力品りきほんにいたつて十神じゅうじん力りき

を現げんず此これは又またさきの二瑞ににはにるべくもなき神力じんりきなり、序品じよほんの放光ほうこうは東方とうほう万八千土ばんぱっせんち、神力品じんりきほんの大放光ほうこうは十方じゅうぱうせかい、序品じよほんの地動ちどうは但ただ三千界さんぜんかい神力品じんりきほんの大地動だいちは諸仏しよぶつの世界せかい地皆みな六種しんどうに震動しんどうす、此の瑞も又かくのごとし、此

の神力品じんりきほんの大瑞だいずいは仏の滅後めつご正像しやうざう二千年にせんねんすぎて末法まつぽうに入いつて法華經ほけきやうの肝要かんようのひろまらせ給たまうべき大瑞だいずいなり、經文きやうもんに

云いわく「仏の滅度めつどの後に能よく是この經きやうを持もつを以もての故ゆえに諸佛しよぶつ皆歡喜みなかんきして無量むりやうの神力じんりきを現げんず」等云云とく、又云いわく「惡世末あくせ

法の時はふのとき」等云云とく。

疑うたがいつて云いわく夫れ瑞そは吉凶きつきやうにつけて、或あるは一時いちじ・二時にじ・或あるは一日いちじつ・

二日にじつ・或あるは一年いちねん・二年にねん・或あるは七年しちねん十二年じふにねんか・如何いかんぞ二千

余年いこ已後いごの瑞みづからあるべきや、答こたへえて云いわく周しうの昭王しやうやうの瑞みづからは一千十五年いちせんごじゅうごねんに始めてあえり、訖利季王しつりきの夢ゆめは二万二千年にばんにせんねん

に始めてあいぬ、豈あに二千余年の事の前にあらはるるを疑うたがうべきや、問うて云いわく在世ざいせよりも滅後めつこの瑞大ずだいなる如何いかん、

答えて云いわく大地だいちの動ずる事は人の六根ろくこんの動くによる、人の六根ろくこんの動

きだいしやうの大小だいしやうによつて大地だいちの六種ろくしゆも高下こうげあり、爾

前きやうきやうの経経きやうきやうには一切衆生いっさいしゆじやうほんのう煩惱ぼんノウをやぶるやうなれども實にはやぶら

ず、今法華経ほけきやうは元品がんぽんの無明むみやうをやぶるゆへに大動

あり、末代まつだいは又在世ざいせよりも悪人あくにん多々なり、かるがゆへに在世ざいせの瑞に

もすぐれてあるべきよしを示現しげんし給たまう。

疑うたがいつて云いわく証文しょうもん如何いかに、答こたえて云いわく而しかも此この経けいは如來にょらいの現在げんざい

すら猶なほ怨嫉おんしつ多おほし況めつどや滅度めつどの後のちをや等いぬ云云しょうかぶんえい、去いぬる正嘉文永しょうかぶんえいの大地震だいちしん

大天変てんべんは天神七代てんじん・地神五代ちじんごだいはさてをきぬ、人王九十代二千余年が

間にほんこく・日本国にほんこくにいまだなき天変地天てんべんなり、人の悦よろこび多おほ多おほなれば天あまに吉

瑞みづきをあらはし地に帝釈しやくの動うごきあり、人の悪心あくしん盛さかなれば天あまに凶変地きうへんちに

凶天きうてん

出来しゅつたいす、瞋恚しんにの大小だいしやうに随したがいて天変てんべんの大小だいしやうあり地天ちやうも又またかくのごと

し、今いま・日本国にほんこく上かみ一人ひとりより下万民ばんみんにいたるまで大悪心あくしんの衆生しゆじやうじゆうまん充満ちゆうまん

せり、此この悪心あくしんの根本こんぽんは日蓮にちれんによりて起おこれるところなり、守護国界しゆごこ

経もうと申まうす経けいあり法華経ほけきやう以後いごの経けいなり阿闍世王あじゃせおうぶつにまいりて云いわく我

国くにに大早魃たいさう・大風たいふう・大水飢饉たいすいききん疫病えきびやう年年おとに起おこる上他国たこくより我が国くにを

せむ、

而しかるに仏ぶつの出現しゆつげんし給たまえる国くになりいかなと問といまいらせ候まうしかば仏ぶつ

答えて云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの
逆罪あり其の中に父を殺し提婆を師として我を害せしむ、この二罪
大なる故かかる大難来る
ことかくのごとく無量なり、其の中に我が滅後に末法に入つて提婆
がやうなる僧国中に充滿せば正法の僧一
人あるべし、彼の悪僧等正法の人を流罪・死罪に行いて王の後乃至
万民の女を犯して謗法者の種子の国に充滿
せば国中に種種の大難をこり後には他国にせめらるべしととかれ
て候、今の世の念仏者かくのごとく候上・眞言
師等が大慢提婆達多に百千万億倍すぎて候、眞言宗の不思議あら
あら申すべし、胎蔵界の八葉の九尊を画にかきて其の上のぼりて
諸仏の御面をふみて灌頂と申す事を行うなり、父母の面をふみ
てんし天子の頂をふむがごとくなる者・国中に充滿して上下の師となれ

り、いかでか国ほろびざるべき。

此の事余がいちだいじ一大事のほうもん法門なり又又もう申すべし、さきにすこしかきて候、いたう人におほせあるべからず、びんごとの心ざしひとたび一度二度ならねば、いかにとも。

いっさいしじゅう
 一切衆生・南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に
 云く「衆生所遊樂と云云、この文あに自受法樂にあらずや、衆生の
 うちに貴殿もれ給うべきや、所とは一閻浮提なり日本国は閻浮提
 の内なり、遊樂とは我等が色心依正ともに一念三千・自受用身の仏
 にあらずや、法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし現世安穩・後生
 善処とは是なり、ただ世間の留難来るとも・とりあへ給うべからず、
 賢人・聖人も此の事はもがれず、ただ女房と酒うちのみて南無
 妙法蓮華經ととなへ給へ、苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき苦
 樂ともに思い合わせて南無妙法蓮華經とうちとなへぬさせ給へこ

れあに自受法樂にあらずや、いよいよ強盛じつじょうの信力しんりきをいたし給へたま
恐恐きょうきょう 謹言きんげん

建治二年丙子ひのえね 六月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

一一〇四 四条金吾釈迦仏供養事 建治二年七月

五十五歳御作

1144p

御日記の中に釈迦仏の木像一体等云云、開眼の事普賢經に云く
「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり」等
云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼
を具することを得たもう」云云、此の經の中に得具五眼とは一には
肉眼二には天眼三には慧眼四には法眼五には仏眼なり、此の五眼を
ば

法華經を持つ者は自然に相具し候、譬へば王位につく人は自然に国
のしたがうがごとし、大海の主となる者の自然に魚を得るに似た
り、華嚴・阿含・方等・般若・大日經等には五眼の名はありといへど

も其の義なし、今の法華經

には名もあり義も備わりて候、設ひ名はなけれども必ず其の義あり。

三身の事、普賢經に云く「仏三種の身は方等より生ず是の大法印

は涅槃海を印す此くの如き海中より能く三種の仏の清淨の身を

生ず此の三種の身は人天の福田にして応供の中の最なり」云云、

三身とは一には法身如来・二には報身如来・三には応身如来なり、

此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす譬へば月の体は法身月

の光は報身・月の影は応身にたとふ、一の月に三のことわりあり

一仏に三身の徳まします、この五眼三身の法門は法華經

より外には全く候はず、故に天台大師の云く「仏三世に於て等しく

三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」云云、此の釈の中に於

諸教中とかかれて候は華嚴・方等・般若のみならず法華經より外の

一切経なり、秘之不伝とかかれて候は法華經の寿量品より外の一切経には教主釈尊秘めて説き給はずとなり。

されば画像・木像の仏の開眼供養は法華經・天台宗にかぎるべし、其の上一念三千の法門と申すは三種の世間よりをこれり、三種の世間と申すは一には衆生世間二には五陰世間三には国土世間なり、前の二は且らく之を置

く、第三の国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色の糸のぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、此の画木に魂魄と申す神を入るる事は法華經の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり、止觀の明静なる前代いまだきかず

とかかれて候と無情仏性・惑耳驚心等とのべられて候は是なり、此の法門は前代になき上・後代にも又あるべからず、設ひ出来せば此の法門を偷盜せるなるべし、然るに天台以後二百余年の後・善無畏・金剛智・不空等・大日經

に真言宗と申す宗をかまへて仏説の大日經等にはなかりしを法華經・天台の釈を盗み入れて真言宗の肝心とし、しかも事を天竺によせて漢土・日本の末学を誑惑せしかば皆人・此の事を知ら

ず一同に信伏して今に五百余年なり、然る間・真言宗 已前の木画の像は靈驗・殊勝なり真言已後の寺塔は利生うすし、事多き故に委く注さず。

此の仏こそ生身の仏にて・おはしまし候へ、優填大王の木像と影顕王の木像と一分もたがうべからず、梵・帝・日月・四天等必定して影の身に随うが如く貴辺をばまほらせ給うべし。是一。

御日記に云く毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間・大日天子に仕えさせ給ふ事、大日天子と申すは宮殿七宝なり其の大きは八百十六里五十一由旬なり、其の中に大日天子居し給ふ、勝無勝と申して二人の後あり左右には七曜九曜つらなり前には摩利支天女まします七宝の車を八匹の駿馬にかけて四天下を一日一夜にめぐり

四州の衆生の眼目と成り給う、他の仏・菩薩天子等は利生のいみじ

くまします事耳にこれをきくとも愚眼ぐがんに未だ見えず、是は疑うたがうべきにあらず眼前がんぜんの利生りしようなり教主きょうしゅ釈尊しゃくそんにましまさずば争いかでかかくのごと
是くの如くあらたなる事候べき、

一乗いちじょうの妙経みょうきょうの力にあらずんば争いかでか眼前がんぜんの奇異をば現す可べき
不思議ふしぎに思ひ候、争いかでか此の天の御恩ごおんをば報ずべきと・もとめ候に
仏法ぶつぽう以前の人人ひとびとも心ある人は皆みな・或は礼拝らいはいをまいらせ・或は供養くようを
申もうし皆みなしるしあり、又逆をなす人は皆みなばつあり、今内典ないてんを以てかん
がへて候に金光明経こんくわうみやうきやうに云く「日天子及以月天子是の経を聞くが
故ゆえに精気充実せいきじゆうじつす」等云

云、最勝王経に云く、「此の経王の力に由つて流暉四天下を遶る」等

云云、当に知るべし日月天の四天下をめぐり給うは仏法の力なり彼

の金光明経・最勝王経は法華経の方便なり勝劣を論ずれば乳と

醍醐と金と宝珠との如し、

劣なる経を食しましたして尚四天下をめぐり給う、何に況や法華経

の醍醐の甘味を嘗させ給はんをや、故に法華経の序品には普香天子

とつらなりまします、法師品には阿耨多羅三藐三菩提と記せられ

させ給う火持如来是なり、其の上慈父よりあひつたはりて二代我が

身となりてとしひさし争かすてさせたまひ候べき、其の上日蓮も又

此

の天を恃みてたてまつり日本国にたてあひて数年なり、既に日蓮か

ちぬべき心地す利生のあらたなる事・外にもとむべきにあらず、是

より外に御日記たうとさ申す計りなければども紙上に尽し難し。

なによりも日蓮にちれんが心にたつとき事候、父母御孝養ふぼごうようの事度度たびたびの御文おんぶん
に候上に今日の御文おんぶんなんだ更にとどまらず、我が父母地獄ふぼじごくにやおは
すらんとなげかせ給たまう事のあわれさよ、仏の弟子でしの御中おんちゆうに目
尊者そんじやと申しけるは父をばきつせん師子ししと申し母をば青提女しやうだいによと申し
けるが餓鬼道がきにおちさせ給たまいけるを凡夫ほんぶにてをはしける時は、しら
せ給たまわ

ざりければなげきもなかりける程に、仏の御弟子おんでしとならせ給たまいて後
阿羅漢あらかんとなりて天眼てんげんをもつて御らんあり

ければ餓鬼道がきにおはしけり、是これを御らんありて飲食おんじきをまいらせしか
ば炎えんとなりていよいよ苦をましさせまいら

せ給たまいしかば、いそぎはしりかへり仏に此よしの由もつを申させ給たまいしぞか
し、爾その時の御心ごこころをおもひやらせ給たまへ今

貴辺きへんは凡夫ほんぶなり肉眼にくげんなれば御らんなければどももしもさもあらばと

なげかせ給うたまこは孝養こつようの一分いちぶんなり梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してんも定めて
あはれとおぼさんか、華嚴經けこんきょうに云く、「恩を知らざる者は多く横死おうしに
遭うあ」等云云、觀仏相海經くわんぶつそうかいきょうに云く、「是れ阿鼻あびの因なり」等云云、今
既に孝養すての志し あつし定めて天も納受のうじゆあらんか是二。

御消息しようそくの中に申しあはさせ給うたま事くはしく事の心を案ずるにあ
るべからぬ事なり、日蓮にちれんをば日本国にほんこくの人あだ

む是はひとへにさがみどののあだませ給うたまにて候ゆへなき御政りご
となれどもいまだ此の事にあはざりし時よ

りかかる事あるべしと知りしかば今更いかなる事ありとも人をあ
だむ心あるべからずとをもち候へば、此の

心のいのりとなりて候やらんそこばくのなんをのがれて候、いまは
事なきやうになりて候、日蓮にちれんがさどの国に

てもかつえしなず又これまで山中にして法華經ほけきょうをよみまいらせ候は
たれかたすけんひとへにとの御たすけな

り又殿の御たすけはなにゆへそとたづぬれば入道殿にゅうどうの御故ぞかし、
あらわにはしろしめさねども定めて御い

のりともなるらんかうあるならばかへりて又との御いのりとなる
べし父母ふぼの孝養こじょうも又彼の人の御恩ごおんぞかし、

かかる人の御内いかにを如何なる事有あれればとてすてさせ給たまうべきやかれ
より度度たびたびすてられんずらんはいかがすべき・

又いかなる命になる事なりともすてまいらせ給たまうべからず、上にひ

きぬる経文きょうもんに不知恩ふちおんの者は横死おうし有と見えぬ・

孝養こうようの者は又横死おうし有る可べからず、鵜うと申もうす鳥とりの食くする鉄くろがねはとく

れども腹はらの中なかの子こはとけず、石いしを食くする魚ういあり又腹はらの中なかの子こはしな
ず、梅檀せんだの木きは火ひに焼やけず浄居じやうきの火ひは水みづに消けへず仏ぶつの御身おんみをば三十

二人ふたりの力士りきし・火ひをつけし

かどもやけず、仏ぶつの御身おんみよりいでし火ひは三界さんがいの竜神雨りゅうじんをふらして消

しかどもきえず、殿どのは日蓮にちれんが功德くどくをたすけ

たる人ひとなり悪人あくにんにやぶらるる事ことかたし、もしやの事ことあらば先生せんしやうに

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだみたりけるが今生こんじやうにむく

ふなるべし、此こゝの事ことは如何いかになる山やまの中海ちゆうかいの上うへにてもものがたし、

不輕菩薩ぶきやうぼさつの杖木じやうもくの責せも目め 尊者そんじやの竹杖ちくじやうに殺

されしも是こゝなり、なにしにか歎なげかせ給たまうべき。

但ただし横難なんをば忍しのにはしかじと見みへて候まち此こゝの文ぶん御覽ごらんありて後はけつ

して百日が間をぼろげならでは・どうれい

並に他人たにんと我が宅たくならで夜中の御さかもりあるべからず主の召さ
ん時は昼ならばいそぎ参らせ給たまうべし、夜な

らば三度までは頓病とんびょうの由よしを申もつさせ給たまいて三度にすぎば下人又他人たにん
をかたらひてつじを見せなんどして御出仕あるべし、かうつつしませ
給たまはんほどにむこの人もよせなんどし候はば人の心又さきにひきか
へ候べし、かたきをう

つ心とどまるべしと申もつさせ給たまう事は御あやまちありとも左右さうなく
御内を出いでさせ給たまうべからず、まして・なから

んにはなにとも人申せくるしかるべからず、おもひのままに入道にゅうどうにもなりておはせばさきさきならばくるし

からず、又身にも心にもあはぬ事あまた出来しゅつたいせばなかなか悪縁あくえん度度たびたび来るべし、このごろは女は尼になりて人を

はかり男は入道にゅうどうになりて大悪をつくるなり、ゆめゆめあるべからぬ事なり、身に病なくともやいとを一二箇所

やいて病の由あるべし、さわぐ事ありともしばらく人をもつて見せをほせさせ給たまへ。

事事くはしくはかきつくしがたし、此の故ゆえに法門ほうもんもかき候はず、御経の事はすずしくなり候いてかいてまいらせ候そつひはん、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

建治二年丙子七月十五日

日蓮にちれん

花押かおう

四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

1480p

正法しょうぼうをひろむる事は必ず智人ちじんによるべし、故ゆえに釈尊しゃくそんは一切経いっさいきやうを
 とかせ給たまいて小乗経しょうじやうきやうをば阿難大乘経あなんだいじやうきやうをば文殊もんじゆ
 師利法華経しりほけきやうの肝要かんようをば一切いっさいの声聞しやうもん・文殊等もんじゆの一切いっさいの菩薩ぼさつをきらひ
 て上行菩薩じやうぎやうぼさつをめして授けさせ給たまいき、設たい正法しょうぼうを持たてる智者ちしやあり
 とも檀那だんななくんば争いか弘ひろまるべき然しかれば釈迦しゃか仏ぶつの檀那だんなは梵王ほんのう帝てい
 釈しやくの二人ふたりなりこれは二人ふたりなが
 ら天てんの檀那だんななり、仏ぶつは六道ろくだうの中には人天人にんてんにんてんの中ちゆうには人にんに出いでさせ
 給たまう人にんには三千世界さんぜんせかいの中央ちゆうやう・五天竺てんじく・五天竺てんじくの中ちゆうには摩竭堤国まがつていこくに
 出いでさせ給たまいて候まちしに、彼かの国こくの王わうを檀那だんなとさだむべき処ところに彼かの国こく
 の阿闍世王あじゃせわうは悪人あくにんなり、

しょうにん あくおう
聖人は悪王に生れあふ事第一の怨にて候しぞかし、阿闍世王は
けんおう
賢王なりし父をころす、又うちそふわざはひと堤婆達多を師とせ
り、達多は三逆罪をつくる上仏の御身より血を出だしたりし者ぞか
し、不孝の悪王と謗法の師とよりあひて候しかば人間に二のわざは
ひにて候しなり、一年・二年ならず数十年が間・仏にあだを・なしま
いらせ

仏おんでしの御弟子を殺せし事数をしらず、かかりしかば天てんべんいかりをなして
天変もつしきりなり、地神あきふついかりをなして地天ちよう
申およすに及ばず、月月あきふつに悪風あきふつ年年に飢饉ききん疫癘えきれい来りて万民ばんみんほとんどつき
なんとせし上、四方しほうの国より阿闍世王あじゃせ
を責せむ、既すでに危あやく成りて候し程に阿闍世王あじゃせ 或あるは夢のつげにより 或ある
は耆婆ぎばがすすめにより 或あるは心にあやしむ事
ありて提婆達多だいばだつたをばうち捨て仏おんまえの御前にまいりてやうやうにたいほ
う申せしかば身の病忽たちまちにいゑ 他方たほうのいく
さも留とどまり国土安穩こくどあんのんになるのみならず三月の七日に御崩ほうぎよ御なるべ
かりしが命をのべて四十年なり、千人の阿羅漢あらかんをあつめて一切いっさい経こ
とには法華経ほけきよつをかきをかせ給たまいき、今 我等われらがたのむところの
法華経ほけきよつは阿闍世王あじゃせのあたへ
させ給たまう御恩ごおんなり。

是はさてをきぬ仏の阿闍世王にかたらせ給いし事を日蓮申すな

らば日本国の人は今つくれる事どもと申さんずらんなれども我が

弟子・檀那なればかたりたてまつる、仏言わく我が滅後末法に入つ

て又調達がやうなる・た

うとく五法を行ずる者・国土に充滿して悪王をかたらせて但一人

あらん智者を・或はのり・或はうち・或は流罪・或は死に及ぼさん時

昔にも・すぐれてあらん天変地天・大風・飢饉・疫癘・年年にありて

他国より責べしと説かれて候、

守護経と申す経の第十の巻の心なり。

当時の世にすこしもたがはず、然るに日蓮は此の一分にあたり

日蓮をたすけんと志す人人少少ありといへども・或は心ざしうす

し・或は心ざしはあつけれども身がうごせずやうやうにをはするに

御辺は其の一分なり・心

ざし人にすぐれてをはする上わづかの身命しんみょうをささうるも又御故なり、天もさだめてしろしめし地ちもしらせ給たまいぬらん殿どのいかなる事にもあはせ給たまうならばひとへに日蓮にぢれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は山海・空市

まぬかれがたき事と定めて候へども又定業また亦能転またの経文きょうもんもあり又天台てんだいの御釈にも定業をのぶる釈もあり、前に申せしやうに蒙古国もうここのよするまでつつしませ給たまうなるべし、主の御返事ごへんじをば申もうさせ給たまうべし身に病ありては

かな
叶せけんいがたき上世間すでにかうと見え候それがしが身は時によりて憶
病そつちはいかんが候はんずらん、只ただ今の心は・いかなる事も出来候はば
入道殿にゆうだいの御前おんまえにして命をすてんと存じ候、若もしやの事候ならば越
後よりはせ上らんは・

はるかなる上不定ふじょうなるべし、たとひ所領しよりょうをめさるるなりとも今年
はきみをはなれまいらせ候べからず。

是より外はいかに仰おおせ蒙こむるともをそれまいらせ候べからず、是よ
りも大事だいじなる事は日蓮にちれんの御房ごぼうの御事おんことと過去かこに候父母ふぼの事なりとの
のしらせ給たまへ、すてられまいらせ候とも命はまいらせ候べし後世ごしやうは
日蓮にちれんの御房ごぼうにまかせまいらせ候と高声こゑにうちなのり居させ給たまへ。

建治二年丙子ひのえね九月六日

日蓮にちれん

花押かおづ

四条金吾殿しじょうきんご

Op

はるかに申し承り候はざりつればいぶせく候いつるにかたがたの
物と申し御つかいと申しよるこび入つて

候又まほりまいらせ候、所領の間の御事は上よりの御文ならびに
御消息引き合せて見候い畢んぬ、此の事は御文

なきさきにすいして候、上には最大事とおぼしめされて候へども御
きんずの人人のざんそうにてあまりに所領

をきらい上をかるしめたてまつり候、ごうあうの人こそを・をく候
にかくまで候へば且らく御恩をば・おさへさせ

給うべくや候らんと申しぬらんとすいして候なりそれにつけては御

心えあるべし御用意あるべし、我が身と申しをやるいしんと申しか
たがた御内に不便といはれまいらせて候大恩の主なる上すぎにし
日蓮が御かんきの時・日本一同にくむ事なれば弟子等も・或は
所領を・ををかたよりめされしかば又方方の人人も・或は御内内を
いだし

ある しくはよう
或は所領をおいなんどせしに其の御内になに事もなかりしは御身
にはゆゆしき大恩と見へ候。

このうへはたとひ一分の御恩なくともうらみまいらせ給うべき主
にはあらず、それにかさねたる御恩を申し所領をきはせ給う事
御とがにあらずや、賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを
賢人と申すなり、利・

おとろえ
衰 毀・誉・称・譏・苦楽なり、をを心は利あるによるこばずをとる
うるになげかず等の事なり、此の

八風にをかされぬ人をば必ず天はまほらせ給うなりしかるをひり
に主をうらみなんどし候へば、いかに申せども天まほり給う事なし、
訴訟を申せど叶いぬべき事もあり、申さぬに叶うべきを申せば叶わ
ぬ事も候、夜めぐりの

殿原の訴訟は申すは叶いぬべきよしをかんがへて候しにあながちに

なげかれし上日蓮にぢれんがゆへに・めされて候へ

ば・いかでか不便ふびんに候はざるべき、ただし訴訟そつごだにも申し給たまはずばいのりてみ候そつごはんと申せしかば、さうけ給たまわ

り候いぬと約束やくそくありて又をりかみをしきりにかき人ひと人訴訟ひとごとろんなんどありと申せし時に此の訴訟そつごよも叶かなわじとをもひ候いしがいままでのびて候。

だいがくどのゑもんのたいうどのの事ことどもは申もうすままにて候あいだいのり叶かないたるやうにみえて候、はきりどのの事は法門ほつもんの御信用ごしんようあるやうに候へども此の訴訟そつごは申もうすままには御用もちいなかりしかばいかんがと存じて候

いしほどにさりとはと申もうして候いしゆへにや候けんすこししるし候か、これにをもうほどなかりしゆへに又をもうほどなし、だんなと師とをもひあわぬいのりは水の上に火をたくがごとし、又だんなと

師とをもひあひ

て候へども大法だいほうを小法をもつてをかしてとしひさしき人人ひとびとの御いのりは叶かない候はぬ上、我が身もだんなもほろび候なり。

天台てんだいの座主ざす明雲と申せし人は第五十代の座主ざすなり、去いぬる安元二年五月に院勘いんかんをかほりて伊豆国はいるへ配流はいりゅう・山僧大津よりうばいかへす、しかれども又かへりて座主ざすとなりぬ又すぎにし壽永二年十一月に義仲に・からめとられ

し上頸うちきられぬ是はながされ頸きらるるをとがとは申さず
賢人・聖人もかかる事候、但し源氏の頼朝と平家の清盛との合
戦の起りし時清盛が一類二十余人起請をかき連判をして願を立て
て平家の氏寺と叡山をたのむべし三千人は父母のごとし山のなげきは我等がなげき山の悦び
は我等がよろこびと申して、近江の国・二十四郡を一向によせて候
しかば、大衆と座主と一同に内には真言の大法をつくし外には悪僧
どもをもつて源氏をい

させしかども義仲が郎等ひぐちと申せしをのこ義仲とただ五六人
計り叡山中堂にはせのぼり調伏の壇の上でありしを引き出してな
わをつけ西ざかを大石をまるばすやうに引き下して頸をうち切り
たりき、かかる事あれども

日本の人人真言をうとむ事なし又たづぬる事もなし去ぬる承久

かのとみ

三年辛巳五六七の三箇月が間・京・夷の合戦ありき、時に日本国
第一の秘法どもをつくして叡山・東寺・七大寺・園城寺等・天照太神

正八幡・山王等に一一に御いの

りありき、其の中に日本第一の僧四十一人なり所謂前の座主・慈円

大僧正・東寺・御室・三井寺の常住院の僧正等は度度・義時を

調伏ありし上、御室は紫宸殿にして六月八日より御調伏ありし

に、七日と申せしに同じく十四日にいくさにまけ勢多迦が頸きら

れ御室をもひ死に死しぬ、かかる事候へども真言はいかなるとがと

も・あやしむる人候はず、をよそ真言の大法をつくす事明雲第一度

慈円第二度に日本国の王法ほろび候い畢んぬ、今度第三度

になり候、当時の蒙古調伏此れなり、かかる事も候ぞ此れは秘事

なり人にいはずして心に存知せさせ給へ。

されば此の事御訴訟なくて又うらむる事なく御内をばいせず我

かまくらにうちいてさきざきよりも出仕とをきやうにてときどきさ
しいでおはするならば叶かなう事も候なん、あながちにわるびれてみ
へさせ給たまうべからず、よくと名聞みよもん曠との。

二一〇七

頼基陳狀 よりもと

建治三年六月 五十六歳御御

作 1153p

去ぬる六月二十三日の御下文・島田の左衛門入道殿・山城の
民部入道殿・両人の御承りとして同二十五日謹んで拜見仕り候い
畢んぬ、右仰せ下しの状に云く竜象御房の御説法の所に参られ候
いける次第をほかた穩便ならざる由、見聞の人遍く一方ならず同
口に申し合ひ候事驚き入つて候、徒党の仁其の数兵杖を帯して出
入すと云云。

此の条跡形も無き虚言なり、所詮誰人の申し入れ候けるやらん
御哀憐を蒙りて召し合せられ実否を糾明され候はば然るべき事に
て候、凡そ此の事の根源は去る六月九日日蓮聖人の御弟子三位公

よりもと
頼基が宿所に来り申して云く近日竜象房と申す僧京都より下りて
だいぶつ
大仏の門の西桑か谷に止住して日夜に説法仕るが申して云く現当の
為

ぶつぼう
仏法に御不審存ぜむ人は来りて問答申す可き旨説法せしむる間、
かまくら
鎌倉中の上下釈尊の如く貴び奉るしかれども問答に及ぶ人なしと
風聞し候、彼へ行き向いて問答を遂げ一切衆生の後生の不審をは
らし候はむと思ひ候、聞き給はぬかと申されしかども折節官仕に
いとまなく
隙無く候いし程に思い立たず候いしかども、法門の事と承りてたび
たび罷り向いて候えども頼基は俗家の分にて候い一言も出さず候し
上は悪口に及ばざる事厳察足る可く候。
りゆうぞう
ここに竜象房説法の中に申して云く此の見聞満座の御中に御
ふしん
不審の法門あらば仰せらる可くと申されし処に、日蓮房の弟子三
位公問うて云く生を受けしより死をまぬかるまじきことはり始めて

をどろくべきに候はねども、ことさら当時・日本国の災さいげきに死亡する者数を知らず眼前がんぜんの無常人毎むじょうひとごとに思いしらずと云ふ事なし、然しかる

所に

京都きょうとより上人しやうにん・御下りあつて人人ひとびとの不審ふしんをはらし給たまうよし承たまわりて参りて候つれども御説法せつぽうの最中もなか骨無なくくも候なばと存じ候し処ところに問うべき事有らむ人は各各ははか憚はばらず問たまい給たまへと候し間悦よろこび入り候、先づ不審ふしんに候事は末法まっぽうに生を

受けて辺土のいやしき身に候へども 中国の仏法幸に此の国にわたれ

り是非信受す可き処に経は五千・七千数多なり、然而一仏の説な

れば所詮は一經にてこそ候らむに華嚴・真言乃至八宗浄土・禅と

て十宗まで分れてをはします、此れ等の宗宗も門はことなりとも

所詮は一かと推する処に、弘法大師は我が朝の真言の元祖・

法華経は華嚴

經・大日經に相對すれば門の異なるのみならず其の理は戲論の法

無明の辺域なり、又法華宗の天台大師等は諍盜醍醐等云云、

法相宗の元祖慈恩大師云く「法華経は方便深密経は眞実無性有情

永不成仏云云、華嚴宗の澄観

云く「華嚴経は本教法華経は末教・或は華嚴は頓頓法華は漸頓」等

云云、三論宗の嘉祥大師の云く「諸大乘経の中には般若教第一」

云云、浄土宗の善導和尚云く「念仏は十即十生・百即百生・

法華經等は千中無一と云云、法然上人

云く「法華經を念仏に對して捨閉閣拋・或は行者は群賊」等云云、

禅宗の云く「教外別伝・不立文字」云云、教主釈尊は法華經をば

世尊の法は久しくして後に要當に眞實を説きたもつべし、多宝仏は

妙法華經は皆是眞實なり十方分身の諸仏は舌相梵天に至るとこそ

見えて候に弘法大師は法華經をば戲論の法と書かれたり、釈尊・

多宝・十方の諸

仏は皆是眞實と説かれて候、いづれをか信じ候べき、善導和尚・

法然上人は法華經をば千中無一・捨閉閣拋・釈尊・多宝・十方

分身の諸仏は一として成仏せずと云う事無し皆仏道を成ずと云

云、三仏と導和尚然上人とは水火なり雲泥なり何れをか信じ候べ

き何れをか捨て候べき就中彼の導然兩人の仰ぐ所の雙觀經の法蔵

比丘の四十八願の

中に第十八願に云く「たとい設い我れ仏を得るとも唯ただ五逆と誹謗ひぼう正法と
を除く」と云云、たとひみ弥陀の本願ほんがん実にしておうじょう往生すべくとも、正法しょうぼう
を誹謗ひぼうせむひとびと人人はみ弥陀みだ仏のおうじょう往生には除かれたてまつ奉るべきか又ほけきょう法華經の
二の巻には「も若し人信ぜざれば其その人みょうじゅう命終して阿鼻あびこく獄に入らんと
云云、念ねんぶつしゅう仏宗に詮とする導然の兩人は經文きょうもん実ならば阿鼻あび大城を
まぬかれ給たまふべしや、彼の上人じょうじんの地獄じごくに墮おち給たまわせば末学まつがく弟子・
檀那だんな等自然じねんに悪道あくどうに墮おちん事うたがい疑うたがいいなるべし、此等これらこそ不審ふしんに候
へ上人じょうじんは如何いかにと問たまい給たまはれしかば。

竜上人りゅうじゆうじん答こたへて云いく上古じやうこの賢哲けんてつ達たつをば、いかでか疑うたがひい奉たてまつるべき、
竜象りゅうじやう等らが如ごとくなる凡僧ちんじや等は仰あおいで信たてまつじ奉たてまつり候まうと答こたへえ給たましを、をし
返かへして此こゝの仰あおせこそ智者ちしやの仰あおせとも覺おぼえず候まうへ、誰人だれびとか時ときの代しろにあ
をがる人師にんし等をば疑うたがひい候まうべき、但ただし涅槃ねはんぎやう經きやうに仏ぶつ最後さいごの御遺言ゆいごんと
して「法よに依よつて人にに依よらざれ」と見みえて候まう、人師にんしにあやまりあらば
經きやうに依よれ

と仏ぶつは説せつかれて候まう、御辺ごへんはよもあやまりましまさじと申まうされ候まう、
御房ごぼうの私こゝろの語ごと仏ぶつの金言きんげんと比くらべには三位にんざいは如来にょらいの金言きんげんに付きまい
らせむと思おもひ候まうなりと申まうされしを。

象上人じやうじゆうじんは人師にんしにあやまり多おほしと候まうは、いづれの人師にんしに候まうぞと問とは
れしかば、上かみに申まうしつる所ところの弘法こうぼう大師だいし・法然ほうねん上人じゆうじん等の義ぎに候まうはずや
と答こたへえ給たまい候まうしかば象上人じゆうじんは嗚呼ああ叶あい候まうまじ我が朝あしたの人師にんしの事ことは
忝かたじけなくも問と答こたへ仕つかるまじく候まう、満座まんざの聴衆ちやうしゆう皆みな其そのの流ながにて御座おわす

鬱憤うつげんも出来しゅたいせば定めてみだりがはしき事候なむ恐れあり恐れあり
と申もうされし処ところに、三位房いわたの云いく人師にんしのあやまり誰ぞと候へば経論きょうろん
に背そむく人師達にんしをいだし候し憚はばかりあり。かなふまじと仰おほせ候に
こそ進退しんたいきはまりて覚え候へ法門ほうもんと申もうすは人を憚はばかりり世を恐れて仏
の説とき給たまうが如ごとく经文きよもんの実義じつぎを申もうさざらんは愚者ぐしゃの至極しごくなり、
智者ちしやしよげんにん上人おほとは覚え給たまはず悪法世あくほうに弘ひろまりて人悪道あくどうに墮おち国土滅こくどす
べしと見へ候はむに法師ほうしの身として争いかでかいさめず候べき、然しかれば
すなわほけきょう則すなち法華經ほけきょうには「我身命しんみょうを愛ねはんぎょうまず」涅槃經ねはんぎょうには「寧むしろ身命しんみょうを喪うしなうと
も」等も二云ふた云ふた、

実じつの聖人せいじんにてをはせば何が身命しんみょうを惜おしみて世にも人にも恐れ給たまうべ
き、外典げてんの中にも竜蓬りゅうほうと云いいし者ひかん、比干ひかんと申もうせし賢人けんじんは頸けんをはねら
れ胸むねをさかれしかども夏かの袷けつ・殷いんの紂ちゆうをばいさめてこそ賢人けんじんの名なを
ば流ながし候しか、内典ないてんには

ふぎようぼさつ 不軽菩薩は杖木をかほり師子尊者は頭をはねられ竺の道生は
そざん 蘇山にながされ法道三蔵は面に火印をさされて江南にはなたれし
かども正法を弘めてこそ聖人の名をば得候しかと難ぜられ候しか
ば。

しょうにん 竜上人の云くさる人は末代にはありがたし我我は世をはばかり
人を恐るる者にて候、さやうに仰せらるる人とてもことばの如くに
はよもをはしまし候はじと候しかば。

此の御房は争か人の心をば知り給うべき某こそ當時・日本国に
聞え給う日蓮聖人の弟子として候へ、某が師匠の聖人は末代の
僧にて御坐候へども当世の大名僧の如く望んで請用もせず人をも
たがはず聊か異なる悪名もたたず只此の国に真言・禅宗・浄土宗
等の悪法並に謗法の諸僧満ち満ちて上一人をははじめ奉りて下万民
に至るまで御帰依ある故に法華経教主釈尊の大怨敵と成りて現世
には天神地祇にすてられ他国のせめにあひ、後生には阿鼻
大城に墮ち給うべき由・经文にまかせて立て給いし程に此の事申さ
ば大なるあだあるべし申さずんば仏のせめのがれがたし、いはゆる
涅槃経に「若し善比丘あつて法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し
拳刃せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」と云云、
世に恐れて申さずんば我が身悪道に墮つべきと御覧じて身命をす
て

て去る建長年中より今年建治三年に至るまで二十余年が間あえて
をこたる事なし、然れば私の難は数を知らず国王の勘気は兩度に
及びき、三位も文永八年九月十二日の勘気の時供奉の一人にて
有りしかば同罪に行はれて頸をはねらるべきにてありしは身命を
惜むものにて候かと申されしかば。

竜象房口を閉て色を変え候しかば此の御房申されしは是程の御
智慧にては人の不審をはらすべき由の仰せ無用に候けり苦岸比丘
勝意比丘等は我れ正法を知りて人をたすくべき由存ぜられて候し
かども我が身も弟子檀那等も無間地獄に墮ち候き、御法門の分齊
にてそこばくの人を救はむと説き給うが如くならば師檀共に無間
地獄に
や墮ち給はんずらむ今日より後は此くの如き御説法は御はからひ
あるべし、加様には申すまじく候へども悪法を以て人を地獄にをと

さん邪師じやしをみなながら責め頭あだはさずば返ふつつて仏法ぶつぽうの中の怨あだなるべしと
仏の御おほいましめおほのがれがたき上ちようもん聴聞じようげの上下みなあくどう皆ちしや悪道ちしやにをち給たまはん事
不便ふびんに覚おほえ候おほへば此かくの如ごとく申もうし候もうなり、智者ちしやと申もうすは国のあやう
き

をいさめ人の邪見じゃけんを申もうしとどむるこそ智者ちしやにては候もうなれ、是ちはいか
なるひが事およありとも世それの恐おそしければいさめじと申もうされむ上おほは力
及およばず、某それがしは文殊もんじゆの智慧ちえも富楼那ふるなの弁説べんぜつも詮候せんこうはずとて立たれ
候こうしかば、諸人しよじん歡喜かんきをなし

たなごころ

掌を合せ今暫く御法門候へかしと留め申されしかどもやがて歸

り給いたんぬ、此の外は別の子細候はず且つは御推察あるべし

法華經を信じ參らせて仏道を願ひ候はむ者の争か法門の時悪行を

企て悪口を宗とし候べき、しかしながら御ぎやうさく有る可く候其

上日蓮聖人の弟子となのりぬる上罷り歸りても御前に参りて法門

問答の様かたり申し候き、又た其の辺に頼基しらぬもの候はず只

頼基をそねみ候人のつくり事にて候にや早早召し合せられん時其の

隠れ有る可らず候。

又仰せ下さるる状に云く極樂寺の長老は世尊の出世と仰ぎ奉る

と此の条難かむの次第に覚え候、其の故は日蓮聖人は御經にとか

れてましますが如くば久成如来の御使上行菩薩の垂迹法華本門

の行者五五百歳の大導師にて御座候聖人を頸をはねらるべき由の

申し状を書きて殺罪に申し行はれ候しが、いかが候けむ死罪を止て

佐渡さどの

島しままで遠流おんるせられ候こうしは良觀りょうかん上人しやうじんの所行しよぎやうに候こうはずや其その訴状そじやうは

別紙べつしに之これ有り、抑おさ生草せいそうをだに伐つみるべからずと六齋ろくさい日夜にちや説法せっぽうに

給たまわれながら法華ほっけしやうほう正法せいほうを弘ひろむる僧そうを断罪つみに行いわる可べき旨ねもつ申し立たて

らるるは自語じご相違そういに候こうはずや如何いかん此僧こし豈あにてんま天魔てんまの入れいる僧そうに候こうはず

や、但ただし此この事ことの起おこは良觀りょうかん房常ぼうじやうの説法せっぽうに云いく日本にほん国こくの一切いっさい衆生しゆじやうを

皆持齋みなじさいにな

して八齋はつさい戒がいを持たせて国中せつしやうの殺生うてん天下てんかの酒しゆを止とどめむとする処ところに

日蓮にちれん房ぼうが謗法ぼうほうに障ささえられて此この願叶かない難がたき由なげ歎なげき給たまい候まい間かん・日蓮にちれん

聖人しやうじん・此この由よしを聞き給たまいていかがして彼かが誑惑おあわくの大慢心だいまんをたをして

無間地獄むげんじごくの大苦だいくをたすけむ

と仰おほせありしかば、頼基よりもと等は此この仰おほせ法華ほけきやう經きやうの御方かとう人大慈悲じひの仰おほせ

にては候こうへども当時とうじ・日本にほん国こく別べつして武家ぶけ領食りやうじきの世よきらざる人ひとにてを

はしますをたやすく仰せある事いかかと弟子共同口に恐れ申し候
し程に、去る文永八年

太歳辛かのとひつじ 未六月十八日大旱魃かんばつの時・彼の御房祈雨ごぼうきうの法を行いて万民ばんみん
をたすけんと申し付け候由日蓮聖人にちれんしょうにん聞き給たまいて此体は小事しょうじなれど
も此の次ついでに日蓮にちれんが法験ぽんにんを万人に知らせばやと仰せありて、良観りようかん
房の所へつかはずに云いわく七日の内にふらし給たまはば日蓮にちれんが念仏ねんぶつ・無間むげん
と申もうす法門ほうもんすてて良観りようかん上人しょうにんの弟子でしと成りて二百五十戒持つべし、
雨あめふらぬほどな

らば彼の御房の持戒げなるが大誑惑なるは顕然なるべし、上代も
あまこい 祈雨に付て勝負を決したる例これ多し、所謂護命と伝教大師と。
しゅびん 守敏と弘法なり、仍て良観房の所へ周防房・入沢の入道と申す
ねんぶつ 念仏者を遣わす御房と入道は良観が弟子又念仏者なりいまに
にちれん 日蓮が法門を用うる事なし是を以て勝負とせむ、七日の内に雨降
るならば本の八斎戒・念仏を以て往生すべしと思ふべし、又雨ら
ずば一向に法華經になるべしといはれしかば是等悦びて極樂寺
の良観房に此の由を申し候けり、良観房悦びないて七日の内に雨
ふらすべき由にて弟子百二十余人頭より煙を出し声を天にひびか
し。或は念仏。或は請雨經。或は法華經。或は八斎戒を説きて種種に
祈請す、四五日まで雨の氣無ければたましゐを失いて多宝寺の弟子
等数百人呼び集めて力を尽し祈りたるに七日の内に露ばかりも雨
降ら

ず其のとき・日蓮聖人使を遣す事三度に及ぶ、いかに泉式部と云いし
姪女・能因法師と申せし破戒の僧・狂言綺語の三十一字を以て忽に
ふらせし雨を持戒持律の良観房は法華・真言の義理を極め慈悲
第一と聞へ給う上人の数百人の衆徒を率いて七日の間にいかにふら
し給はぬやらむ、是を以て思ひ給へ一丈の堀を越えざる者二丈三丈
の堀を

越えてんややすき雨をだにふらし給はず況やかたき往生成仏を
や、然れば今よりは日蓮怨み給う邪見をば是を以て翻えし給へ
後生をそろしくをばし給はば約束のままにいそぎ来り給へ雨ふら
す法と仏になる道をしへ奉らむ七日の内に雨こそふらし給はざら
め、旱魃弥興盛に八風ますます吹き重りて民のなげき弥弥深し、
すみや

かに其のいのりやめ給へと第七日の申の時使者ありのままに申す処

に良観房は涙を流す弟子・檀那同じく声をおしまず口惜しがる
にちれんごかんき こおむ
日蓮御勘気を蒙る時・此の事御尋ね有りしかば有りのままに申し
たまい
給いき、然れば良観房・身の上の恥を思はば跡をくらまして山林に
しゃか りようかん
もまじはり約束のままに日蓮が弟子ともなりたらば道心の少にて
やくそく
も・ある

べきにさはなくして無尽の讒言を構えて殺罪に申し行はむとせしは
とうと
貴き僧かと日蓮聖人かたり給いき又頼基も見聞き候き、他事に
にちれんしようにん
於てはかけはくも主君の御事畏れ入り候へども此の事はいかに思い
しゆくん おんことおそ
候ともいかでかと思は

れ候べき。

仰せ下しの状に云く竜象房・極楽寺の長老見参の後は釈迦・

弥陀とあをぎ奉ると云云、此の条又恐れ入り候、彼の竜象房は洛

中にして人の骨肉を朝夕の食物とする由露顕せしむるの間、山門

の衆徒蜂起して世末代に及びて悪鬼国中出现せり、山王の御力

を以て対治を加えむとて住所を焼失し其の身を誅罰せむとする

処に自然に逃失

し行方を知らざる処にたまたま鎌倉の中に又人の肉を食の間情

ある人恐怖せしめて候に仏・菩薩と仰せ給う事所従の身として

争か主君の御あやまりをいさめ申さず候べき、御内のをとなしき

人人いかにこそ存じ候へ。

同じき下し状に云く是非につけて主親の所存には相随わんこそ

仏神の冥にも世間の礼にも手本と云云、此の事最第一の大事にて候

へば私の申し状恐れ入り候間本文を引くべく候、孝経に云く「子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず」、鄭玄曰く「君父不義有らんに臣子諫めざるは則ち亡国破家の道な

り」新序に曰く「主の暴を諫めざれば忠臣に非ざるなり、死を畏れのたまて言わざるは勇士に非ざるなり」、伝教大師云く「凡そ不誼に當つすなわては則ち子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず当に知るべし君臣父子師弟以て師に争わずんばあるべからず」文、法華経に云く「我れ身命を愛まず但無上道を惜む」文、涅槃経に云く「譬えば王の使の善能談論し方便に巧にして命を他国に奉ずるに寧ろ身命を喪うとも終に王の所説の言教を匿さざるごとが如し智者も亦爾り」文、章安大師云く「寧ろ身命を喪うとも教をかく匿さざれとは身は軽く法は重し身を死して法を弘む」文、又云く

「ぶつぼう 仏法を壊乱するは仏法の中の怨なり慈無くして詐り親むは則ち
こ 是れ彼が怨なり能く糾治する者は彼の為めに悪を除く則ち是れ彼
が親なり」文、頼基をば傍輩こそ無礼なりと思はれ候らめども世の
事にをき候ては是非父母・主君の仰せに随い参らせ候べし。
其にとて重恩の主の悪法の者にたばらかされましまして悪道に
お 墮ち給はむをなげくばかりなり、阿闍世王は

提婆六師を師として教主釈尊を敵とせしかば摩竭提国・皆仏教の
敵となりて闍王の眷属・五十八万人・仏弟子を敵とする中に耆婆
大臣計り仏の弟子なり、大王は上の頼基を思し食すが如く仏弟子
たる事を御心よからず思し食ししかども最後には六大臣の邪義を
すてて耆婆が正法にこそつかせ給い候しが其の如く御最後をば頼基
や救い参ら

せ候はんずらむ此の如く申さしめ候へば阿闍世は五逆罪の者なり
彼に對するかと思し食しぬべし、恐れにては候へども彼には
百千万倍の重罪にて御座すべしと御經の文には顯然に見えさせ
給いて候、所謂「今・此の三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く
是れ吾子なり」文文の如くば教主釈尊は日本国の一切衆生の父母
なり師匠なり主君
なり阿弥陀仏は此の三の義ましまさず、而るに三徳の仏を闇いて

たぶつ 他仏を昼夜朝夕に称名し六万八万の名号を唱えましますあに
ふこう 不孝の御所作にわたらせ給はずや、弥陀の願も釈迦如来の説かせ
たまい 給いしかども終にくひ返し給いて唯我一人と定め給いぬ、其の後は
全く二人・三人と見え候はず、随つて人にも父母一人なし何の經に
みだ 弥陀は此の国の父何れの論に母たる旨・見へて候觀經等の念仏の
ほうもん 法門は法華經を説かせ給はむ為の・しばらくの・しつらひな
り、塔くまむ為の足代の如し、而るを佛法なれば始終あるべしと思
う人・大僻案なり、塔立てて後・足代を貴ぶほどのはかなき者な
り、又日よりも星は明と申す者なるべし、此の人を經に説いて
いわ 云く「復教詔すと雖も而も信受せず其の人命終して阿鼻獄に入
らん」、当世・日本国の一切衆生の釈迦仏を抛つて阿弥陀仏を念じ
ほけきょう 法華經を抛つ
かんきょう 觀經等を信ずる人・或は此くの如き謗法の者を供養せむ俗男・

ぞくじよ ぞんがい じぎきく
俗女等・存外に五逆七逆・八虐の罪を・をかせる者を智者と謁仰す
もろもろ なら にくしゆ
る諸の大名僧並びに国主等なり、如是展転至無数劫とは是なり、
此の如き僻事をなまじるに承りて候間次を以て申せしめ候、宮仕
をつかまつる者上下ありと申せども分分に随つて主君を重んぜざる
は候は

ず、上の御ため現世後生あしくわたらせ給うべき事を秘かにも承り
て候はむに傍輩・世に憚りて申し上ざらむは与同罪にこそ候まじき
か。

したが よりもと ふし
随つて頼基は父子二代・命を君に・まいらせたる事顕然なり・故親
父^{中務} 故君の御勘気かふらせ給いける時・数百人の御内の臣等心かは
りし候けるに中務一人・最後の御供奉して伊豆の国まで参りて候
き、頼基は去る文永十一

年二月十二日の鎌倉の合戦の時、折節伊豆の国に候しかば十日の

さるのとき たまわ 申の時に承りて唯一人 菅根山を一時に馳せ越えて御前に自害すべ
き八人の内に候き、自然に世しづまり候しかば今に君も安穩にこそ
わたらせ給い候へ爾来。

だいじしゅうじ 大事小事に付けて御心やすき者にこそ思い含まれて候頼基が今更
いかにつけて疎縁に思いまいらせ候べき、後生までも随従しまいらせ
よりもと 頼基成仏し候はば君をもすくひまいらせ君成仏しましませ
頼基も たすけられまいらせむとこそ存じ候へ。

そ 其れに付ひて諸僧の説法を聴聞仕りて何れか成仏の法とうかが
ひ候処に日蓮聖人の御房は三界の主一切衆生の父母釈迦如来の
おんつかいじょうぎやうほみつ 御使上行菩薩にて御坐候ける事の法華經に説かれてましましける
を信じまいらせたるに候、今こそ真言宗と申す悪法・日本国に渡り
て四百余年去る延暦二十四年に伝教大師・日本国にわたした
りしかども此の国にあしかりなむと思し食し候間宗の字をゆるさ

てんだいほつしゅう

ほうべん

たまいあわ

そ

てんぎょう

ず天台法華宗の方便となし給い畢んぬ、其の後・伝教

だいしにゆうめつ

こうぼうだいし

てんぎょう

へんしゅう

大師御入滅の次をうかがひて弘法大師・伝教に偏執して宗の字を

えいざん

じかく

ちしゅう

加えしかども叡山は用うる事なかりしほどに慈覚・智証短才にして

だいいし

そむ

えいざん

しんこんしゅう

こうぼう

どうい

ゆえ

二人の身は当山に居ながら心は東寺の弘法に同意するかの故に我

だいいし

そむ

えいざん

しんこんしゅう

こうぼう

にほんぼうこく

が大師には背いて始めて叡山に真言宗を立てぬ日本亡国の起り

これ

ある

しんこんすく

ほつけすく

じょうろん

是なり、爾来三百余年、或は真言勝れ法華勝れ一同なむど諍論・事

き

れざりしかば王法も左右なく尽きざりき、人王七十七代後白河

ほうこう

ぎょう

てんだい

ささう

つ

き

法皇の御宇に天台の座主明雲一向に真言の座主になりしかば明雲

ほうこう

ぎょう

てんだい

ざす

いっこう

しんこん

ざす

き

は義仲にころされぬ頭破作七分是なり、第八十二代隱岐の法皇の

おんとき

ぜんしゅう

ねんぶつしゅうしゅつたい

しんこん

だいたくほう

こくど

るふ

ほうこう

御時禅宗・念仏宗出来つて真言の大悪法に加えて国土に流布せし

おんとき

ねんぶつしゅうしゅつたい

しんこん

だいたくほう

こくど

るふ

き

かば、天照太神・正八幡の百王百代の御誓やぶれて王法すでに

てんしょうだいじん

しょうはちまん

ひやくおう

だいたくほう

こくど

るふ

き

尽きぬ、関東の権の大夫義時に天照太神・正八幡の御計いとして国

かんとう

けん

よしとき

てんしょうだいじん

しょうはちまん

おんはから

尽きぬ、関東の権の大夫義時に天照太神・正八幡の御計いとして国

務をつけ給い畢たまいおわんぬ、
爰ここに彼の三の悪あくほう法
・関かんとう東に落ち下りて

存外ぞんがいに御歸依ごきえあり、故ゆえに梵釈ぼんしゃく・二天にちがつ・日月にちがつ・四天してんいかりを成せいし先代せんたい

未有むいうの天変てんべん地天ちようを以もていさむれども用もちい給たまはざれば鄰国りんこくに仰おほせ付

けて法華經ほけきよう誹謗ひぼうの人ひとを治罰ちばつし給たまう間ま、天照太神てんしょうだいじん・正八幡しょうはちまんも力ちから及び

給たまはず、日蓮聖人にちれんしょうにん・一人ひとり・此この事ことを知しし食くせり、此この如ごとき嚴重じゆうじゆうの

法華經ほけきようにてををはして候間しゆくん、主君しゆくんをも導しゆくんきまいらせむと存ゆえじ候故ゆえに・

無量むりようの

小事しょうじをわすれて今いまに仕つかわれまいらせ候よりもと、頼基よりもとを讒言ざんげん申もうす仁には君きみの

御ご為ため不忠ふちゆうの者ものに候よりもとはずや、御内ごうちを罷まり出でて候よりもとはば君きみたちたちままちに無間むげん

地獄じごくに墮おちさせ給たまうべし、さては頼基よりもと・仏ぶつに成なり候よりもとても甲斐かひなしと

なげき存ゆえじ候ゆえ。

抑おさ彼のしやうじよう小乘しょうじよう戒がいは富楼那ふうるなと申ませし大阿羅漢あらかん諸天しよてんの為ために二百五

十戒じうがいを説とき候よりもとしを・浄名居士じようみゆうこじたんじて云いく「穢食えじきを以もて宝器ほうきに置

くこと無なれ」等と云いふ、鶯岨おうくつ摩羅まらは文殊もんじゆを呵責かしゃくし・嗚呼あ蚊蚋もんぜいの行いは

だいじょう

大乘空の理を知らずと、又小乘戒をば文殊は十七の失を出だし

如来は八種の譬喩を以て是をそしり給うに驢乳と説き蝦蟆に譬え

られたり、此れ

等をば鑒真の末弟子は伝教大師をば悪口の人とこそ嵯峨天皇には

奏し申し候しかども経文なれば力及び候はず、南都の奏状やぶれ

て叡山の八戒壇立ち候し上は、すでに捨てられ候し小乗に候はず

や、頼基が良観房を蚊蚋蝦蟆の法師なりと申すとも経文分明に

候はば御とがめあるべからず。

剩へ起請に及ぶべき由仰せを蒙むるの条存外に歎き入て候、頼基

不法時病にて起請を書き候程ならば君忽に法華経の御罰を蒙らせ

給うべし、良観房が讒訴に依りて釈迦如来の御使日蓮聖人を流罪

し奉りしかば聖人の申し給いしが如く百日が内に合戦出来して

若干の武者滅亡せし中に、名越の公達横死にあはせ給いぬ、是れ

ひとえりようかん
偏に良観

房うしなが失なひ奉たりたるに候はずや、今又竜象良観が心に用意せさせ

給たまいて頼基よりもとに起請きしょうを書か

しめ御座おわしまさば君又其その罪つみに当らせ給たまはざ

るべしや、此かくの如ごとき道理どうりを知らざる故か、又君をあだし奉らむと

思おもう故か、頼基よりもとに事を寄せて大事だいじを出いださむと

尋たずねあつて召よし合あわせらるべく候、恐惶きょう謹言こんげん。

建治三年丁丑ひのとつし六月二十五日

条中務尉頼基・請文

一一〇八 四糸金吾殿御返事

116

3 p

去月二十五日の御文・同月の二十七日の酉の時に来りて候、仰せ
下さるる状と又起請かくまじきよしの御せいじやうとを見候へば
優曇華のさきたるをみるか赤梅檀のふたばになるをえたるか、めづ
らしかうばし、三明六通を得給う上法華經にて初地・初住にのぼら
せ給へる証果の大阿羅漢得無生忍の菩薩なりし舍利弗・目連・迦葉
等だにも娑婆世界の末法に法華經を弘通せん事の大難こらへかねけ
ればかなふまじき由辞退候いき、まして三惑未断の末代の凡夫が
争か此經の行者となるべき、設い日蓮一人は杖木瓦石悪口王難を
も忍ぶとも妻子を帯せる無智の俗なんどは争か叶うべき、中中信
ぜざらんはよかりなんすへとをらずしばしならば人に・わらはれ

なんと不便ふびんにをもひ候たまいしに、たびたび度度の難なん二箇度の御勸ご氣かんに心きざしを
あらはし給たまうだにも不思議ふしぎなるに、かく・おどさるるに二所の所領しよりょう
をすてて法華經ほけきょうを信じまとをすべしと御起請候事きしょういかにも申もうす計ばかり
なし、普賢ふげん・文殊等もんじゆなを末代まつだいはいかんがと仏思ぶつしし食くして妙法蓮華經みょうほうれんげきょう
の五ご字じをば地涌千界じゆせんがいの上首じょうしゆじょうしゆ上行等じやうじやうじやうの四人にこそ仰おほせつけられて
候ただへ只事ただの心こころを案あずるに日蓮にちれんが道みちをたすけんと上行菩薩じやうじやく貴辺きへんの
御身おんみに入りかはらせ給たまへるか又また教主きやうしゆ釈尊しやくそんの御計おんはからいか、彼の御内おんうちの
人ひと人ひとうちはびこつて良觀りやうかん竜象りゆうじやうが計はかりひにてやぢやうあるらん、起請きしょう
をかかせ給たまいなば、いよいよかつばらをごりてかたがたにふれ申もうさ
ば鎌倉かまくらの内うちに日蓮にちれんが弟子等でし一人もなくせめうしなひなん、凡夫ほんぶのな
らひ

身の上みづかみははからひがたし、これをよくよくしるを賢人けんじん・聖人しやうにんとは
申もうすなり、遠とほきをばしばらくをかかせ給たまへ近ちかきは武蔵むさしのかう殿との所ところ

をすてて入道にゆうどうになり結局は多くの所領男女しよりょうなんによのきうだち御ぜん等を
すてて御遁世とんせいと承うけたまわる、とのは子なしたのもしき兄弟きょうだいなしわづかの
二所の所領しよりょうなり、一生はゆめの上明日をごせぜいかなる乞食こっじきには
なるとも法華經ほけきょうにたまきずをつけ給たまうべからず、されば同くはなげきた
るけしきなくて此の状に・かきたるが・

ごとくすこしもへつらはず振舞ふるまい仰せあるべし、中中へつらふならば、あしかりなん、設たとひ所領しよりょうをめされ追おい出し給たまうとも十羅刹女じゅじつにょの御計おんはからいにてぞあるらむとふかくたのませ給たまうべし。

日蓮にちれんはながされずしてかまくらにだにも・ありしかば・有りしいくさに一定打ち殺されなん、此これも又御内にてはあしかりぬべければ釈迦しやくかぶつ仏ぶつの御計おんはからいにてやあるらむ、陳状ちんじょうは申もうして候へども又それに僧そうは候へども・あまりのおぼつかなさに三位房をつかはすべく候にいまだ所労きらきらしく候はず候へば同事に此この御房ごぼうをまいらせ候、だいがくの三郎殿かたきの太郎殿かとき殿かにいとまに随したがいてかかせてあげさせ給たまうべし、これはあげなば事こときれなむいたういそがずとも内内うちをしたため・又ほかの・かつばらにも・あまねく・さはがせて・さしいだしたらば・若わや此この文かまくら内にもひるうし上へもまいる事こともやあるらん、わざはひの幸はこれなり。

法華經ほけきょうの御事おんことは已前いぜんに申しふりぬ、しかれども小事しょうじこそ善よりは
をこて候へ、大事だいじになりぬれば必ず大なる。さはぎが大なる幸とな
るなり、此の陳状人ちんじやうじんごとにみるならば彼等かれらがはぢあらわるべし、只
一口いちくちに申し給へ我われとは御内ごうちを出て所領しやうりやうをあぐべからず、上よりめさ
れいださむは法華經ほけきょうの御布施幸ごふせきやうと思ふべしとのしらせ給へ
かへすがへす奉行人ぶぎやうじんにへつらうけしきなかれ、此の所領しやうりやうは上より給
たるにはあらず、大事だいじの御所勞ごしやうらうを法華經ほけきょうの薬くすりをもつてたすけまいら
せて給て候所領ごしやうりやうなれば召すならば御所勞ごしやうらうこそ又かへり候はむずれ、
爾時そのときは頼基よりもとに御たいじやう候とも用ひまいらせ候まじく候とうちあ
てにくさうげにてかへるべし。

あなかしこ・あなかしこ御よりあひあるべからず、よるは用心しんじんき
びしく夜廻よまわの殿原どのはらかたらいて用ひ常にはよりあはるべし今度このたび御内を
だにもいだされずば十に九は内のものねらひなむかまへてきたなき

しにすべからず。

建治三年丁丑ひのととし七月

日蓮にちれん花押かおう

四条金吾殿しじょうきんご御返事ごへんじ

二〇九 四條金吾殿御返事 建治三年 五十六歳御

作 1165p

御文おんふみあらあらうけ給たまわりて長き夜のあけとをき道をかへりたる
がごとし、夫それ仏法ぶつぽうと申もうすは勝負しやうぶをさきとし、王法もうと申もうすは賞罰を
本ほんとせり、故ゆえに仏ぶつをば世雄よゆうと号なづし王おうをば自在じざいとなづけたり、中ちゆうにも
天竺てんじくをば月氏がつしという我國わがくにをば日本にほんと申もうす一閻浮提えんぶだい八万はちまんの国くにの中に
大なる国くには天竺てんじく小なる国くには日本にほんなり、名なのめでたきは印度いんど第一だいいち・
扶桑ふそう
第一だいいちなり、仏法ぶつぽうは月の国くにより始めて日の国くににとどまるべし、月は西
より出いで東あづまに向むかひ日は東あづまより西にしへ行く事こと天然てんぜんのことはり、磁石じしやくと
鉄てつと雷らいと象華しやうかとのごとし、誰たれか此こゝのことはりをやぶらん。

此の国に仏法わたりし由來をたづぬれば天神七代・地神五代す
ぎて人王の代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せ
し王をはしき、位につかせ給いて三十二年治世し給いしに第十三年
壬申十月十三日辛酉に此の国より西に百済国と申す州あり
日本国の大王の御知行の国なり、其の国の大王・聖明王と申せし
國王あり、年貢
を日本国にまいらせしついでに金銅の釈迦仏・並に一切經・法師・尼
等をわたしたりしかば天皇大に喜びて群臣に仰せて西蕃の仏をあ
がめ奉るべしやいなや、蘇我の大いなる大臣いなるの宿禰と申せし人の云く
西蕃の諸国みな此れを礼すとよあきやまとあに独り背やと申す、
物部の大むらじをこし中臣のかまこ等奏して曰く我が国家天下
に君たる人はつねに天地しやそく百八十神を春夏秋冬にさいはい
するを事とす、しかるを今更あらためて西蕃の神を拜せばおそら

くは我が国の神いかりをなさんと云云、爾その時に天皇てんのつわかちがたくして勅宣ちよくせんす、此の事を

只ただ心みに蘇我そがの大臣だいじんにつけて一人にあがめさすべし、他人たにんもち用いる事なかれ、蘇我そがの大臣おとどうけ取りて大おおに悦よろこび給たまいて此この釈迦しやくか仏ぶつを我が居住いぢのおはたと申もうすところに入いまいらせて安置あんちせり、物部ものべの大連おほむらじ・不思議ふしぎなりとていきどを

りし程に日本国に大疫病おこりて死せる者大半に及ぶすでに国民
尽きぬべかりしかば、物部の大連・隙を得て此の仏を失うべきよし
申せしかば勅宣なる、早く他国の仏法を棄つべし云云、物部の
大連御使として仏をば取りて炭をもつてをこしつちをもつて打ち
くだき仏殿をば火をかけてやきはらひ僧尼をばむちをくわう、
其の時

天に雲なくして大風ふき雨ふり、内裏天火にやけあがつて大王並に
物部の大連蘇我の臣三人共に疫病あり・きるがごとくやくがごと
し、大連は終に寿絶えぬ蘇我と王とはからくして蘇生す、而れども
仏法を用ゆることなくして十九年すぎぬ。

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子治十四年なり左右の兩
臣は一は物部の大連が子にて弓削の守屋父のあとをついで大連に
任ず蘇我の宿禰の子は蘇我の馬子と云云、此の王の御代に聖徳太子

生給へり用明の御子・敏達のをいなり御年二歳の二月東に向つて無
名の指を開いて南無仏と唱へ給へば御舍利掌にあり、是れ日本国

の

釈迦念仏の始めなり、太子八歳なりしに八歳の太子云く「西国の

聖人釈迦牟尼仏の遺像末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る

之を蔑れば則ち災を招き寿を縮む」等云云、大連物部の弓削宿禰

の守屋等いかりて云く「蘇我は勅宣を背きて他国の神を礼す」等云

云、又疫病未だ息まず人民すでにたえぬべし、弓削守屋又此れを

間奏す云云、勅宣に云く「蘇我の馬子仏法を興行す宜く仏法を卻

ぞくべし」等云云、此に守屋中臣の臣勝海大連等両臣

と、寺に向つて堂塔を切たうし仏像をやきやぶり、寺には火をはな

ち僧尼の袈裟をはぎ笞をもつてせむ。又天皇並に守屋馬子等疫病

す、其の言に云く「焼くがごとしきるがごとし」又瘡をこるはうそ

といふ、馬子歎なげいて云いわく、「尚なお三宝さんぼうを仰あおがん」と勅ちよくせん宣せんに云いわく、「汝なんじ独ひとり
行ただえ但ただし余人さんぼうを断あがめてよ」等云云、馬子欣悦しんえつし精舍しやうじやを造つくりて
三宝さんぼうを崇あがめめぬ。

天皇てんのうは終はつ八月十五日崩御ほうぎよ云云、此の年は太子たいしは十四なり第三十
二代用明天皇ようめいてんのうの治二年欽明きんめいの太子たいし・聖徳

太子たいしの父なり、治二年ひのとひつじ丁未四月てんのう えきびょうに天皇てんのう疫病あり、皇勅みかどして云く
「三宝さんぼうに帰せんと欲す」云云、蘇我そがの大臣だいじん詔しつに随したがう可べしとて遂ほつしに法師ほつし
を引だいて内裏だいりに入る豊国の法師ほつし是なり、物部の守屋もりや大連おおい等大に
瞋いかり横よこに睨まんで云く天皇てんのうを厭魅いすと終ついに皇隱みかどれさせ給たまう五月に物
部の守屋もりやが一族い族むらじ洪河の家いにひきこもり多勢たせいをあつめぬ、太子たいしと馬子まこ
と押

し寄せてたたかう、五月・六月・七月の間に四箇度・合戦す、三度は
太子たいしまけ給たまう第四度たいしめに太子願たいしを立てて云く「釈迦しゃか如来にょらいの御舍利しやり
塔たを立て四天王寺してんのうを建立こんりゆうせんと馬子願まこて云く「百濟くだらより渡わたす所
の釈迦しゃか仏ぶつを寺てらを立てて崇重すうちゆうすべし」と云云、弓削ゆきぞのなのつて云く
「此これは我が放はなつ矢やにはあらず我が先祖すうちゆう崇重すうちゆうの府都ふとの大明神だいみょうじんの放
ち給たまふ矢やな

り」と、此の矢やはるかに飛たんで太子たいしの鎧よろいに中ちゆうる、太子たいしなるる「此は我

が放つ矢にはあらず四天王の放ち給う矢なり」とて迹見の赤袴と申す舎人にいさせ給へば矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ、はだのかはかつをちあひて頸をとる、此の合戦は用明崩御崇峻未だ位に即き給わざる其の中間なり。

第三十三・崇峻天皇位につき給う、太子は四天王寺を建立す此れ釈迦如来の御舍利なり、馬子は元興寺と申す寺を建立して百済国よりわたりて候いし教主釈尊を崇重す、今の代に世間第一の不思議は善光寺の阿弥陀如来という誑惑これなり、又釈迦仏にあだをなせしゆへに三代の天皇並に物部の一族むなしくなりしなり又太子・教主釈尊の像一体つくらせ給いて元興寺に居せしむ今の橘寺の御本尊これなり、此れこそ日本国に釈迦仏つくりしはじめなれ。

漢土には後漢の第二の明帝永平七年に金神の夢に見て博士蔡

王おうじゆん尊等のの十八人をを月氏がっしにつかはして仏法ぶつぽうを尋ねたずさせ給たまいしかば中ちゆう天竺てんじくの聖人しやうにん摩騰迦まとうか・竺法蘭じくほうらんと申まをせし二人にんの聖人しやうにんを同永平十年丁卯ひのとうの歳迎すうちやうへ取りて崇重すうちやうありしかば、漢土かんどにて本より皇の御みいのりせし儒家道家じゆけの人人にんずう数千せん人。此この事ことをそねみて、うつたへしかば、同永平十四年正月十五日じゆうしよに召まをし合せられしかば漢土かんどの道士どうし悦よろこびをなして唐土もろこしの神百靈ほんぞんを本尊ほんぞんとしてありき、二人にんの聖人しやうにん

は仏の御舍利と釈迦仏の画像と五部の経を本尊と恃怙み給う、
道士は本より王の前にして習いたりし仙經・三墳・五典・二聖・三王
の書を薪につみこめてやきしかば古はやけざりしがはいとなりぬ、
先には水にうかびしが水に沈みぬ、鬼神を呼しも来らず、あまりの
はづかしさに善信・費叔才など申せし道士等はおもい死にしし
ぬ、

二人の聖人の説法ありしかば舍利は天に登りて光を放ちて日輪み
ゆる事なし、画像の釈迦仏は眉間より光を放ち給う、呂慧通等の
六百余人の道士は帰伏して出家す、三十日が間に十寺立ちぬ、され
ば釈迦仏は賞罰ただしき仏なり、上に挙ぐる三代の帝・並に二人
の臣下・釈迦如来の敵とならせ給いて今生は空く後生は悪道に墮ち
ぬ。

今の代も又これに・かはるべからず、漢土の道士信費等日本の

守屋等は漢土・日本の大小の神祇を信用して教主釈尊の御敵となりしかば神は仏に随い奉り行者は皆ほろびぬ、今の代も此くの如く上に挙ぐる所の百濟国の仏は教主釈尊なり、名を阿弥陀仏と云つて日本国をたばらかして釈尊を他仏にかへたり、神と仏と仏と仏との差別

こそあれども釈尊をすつる心はただ一なり、されば今の代の滅せん事又疑いなるべし、是は未だ申さざる法門なり秘す可し秘す可し、又吾一門の人人の中にも信心もつすく日蓮が申す事を背き給はば蘇我が如くなるべし、其の故は仏法・日本に立ちし事は蘇我が宿禰と馬子との父子二人の故ぞかし、釈迦如来の出世の時の梵王帝釈の如くにてこそあらまじなれども、物部と守屋とを失いし故に只一門になりて位もあがり国をも知行し一門も繁昌せし故に高拳をなし

てすしゅん崇峻天皇をうしな失いたてまつりみこ王子を多く殺しけつく結句はたいし太子の御子二
十三人をなかとみ馬子がかまこまご入鹿のしんかうしな臣下失ひゆえまいらせし故に、皇極天皇は
中臣のかまこ鎌子がおみ計いとしてきやうしゆしやくそん教主つく積尊を造りたてまつ奉りてあながちに申せし
かばいるか入鹿の臣並におみ父等の一族いちじ一時に滅びぬ。

此れをもつてこ御推察あるべし、又我が此のいちもん一門の中にももつ申しとを
らせたま給はひとびとざらん人人は、かへりてとが失あるべし、日蓮をにちれんうらみさせ
給たまうなしょうぼう少輔房能登房等を御覽あるべし、かまへてかまへて此の間は
よの事なりともきしやう御起請か

かせ給たまうべからず火はをびただしき様なれども暫しばらくあればしめる
水はのろき様なれども左右さうなく失うしないがたし、御辺は腹あしき人な
れば火の燃るがごとし一定人にすかさねなん、又主のうらうらと言
和やわらかにすかさ給たまうならば火に水をかけたる様に御わたりありぬ
と覚おぼゆ、きたはぬかねはさかなる火に入るればとくとけ候、氷こおり
ゆに入るがごとし、剣などは大火たいかに入るれども暫しばらくはとけず是き
たへる故どうりなり、まへにかう申もうすはきたうなるべし仏法ぶつぽうと申もうすは道理どうり
なり道理どうりと申もうすは主に勝つ物なりいかにいとをしはなれじと思おもうめ
なれども死しぬればかひなしに所領しりょうををししとをぼすとも
死しては他人たにんの物、すでにさかへて年久しすこしも惜おしむ事なかれ、又
さきざき申もうすがごとくさきざきよりも百千万億倍御用心せんまん ぶつじんあるべ
し。

日蓮にぢれんは少こより今生こんじょうのいのりなし只ただ仏ぶつにならんとをもふ計ばかりな

り、されども殿の御事をばひまなく法華經・釈迦仏・日天に申すな

り其の故は法華經の命を継ぐ人なればと思ふなり。穴賢穴賢あ

らかるべからず吾が家にあらずんば人に寄合事なかれ、又夜廻の

殿原はひとりもたのもしき事はなけれども法華經の故に屋敷を取

られた

る人人なり、常はむつばせ給うべし、又夜の用心の為と申しかたが

た殿の守りとなるべし、吾方の人人をば少少の事をばみずきかずあ

るべしさて又法門などを聞ばやと仰せ候はんに悦んで見え給うべ

からず、いかんが候はんずらん、御弟子共に申してこそ見候はめと

やわやわとあるべしいかにもうれしさにいろに頭われなんと

覚え聞かんと思ふ心だにも付かせ給うならば火をつけてもすがごと

く天より雨の下るがごとく万事をすてられんずるなり。

又今度いかなる便も出来せばしたため候し陳状を上げらるべし、

大事だいじの文ぶんなればひとさはぎはかならずあるべし、
穴賢あなかしこあなかしこ穴賢あなかしこあなかしこ。

四條金吾殿しじょうきんご

日蓮花押にちれんかおう

一一〇 四條金吾殿御返事

1170

p

法華經本・迹相對して論ずるに迹門は尚始成正覺の旨を明す
故にいまだ留難かかれり、本門はかかる留難を去りたり然りと雖も
題目の五字に相對する時は末法の機にかなはざる法なり、眞實
一切衆生色心の留難を止むる秘術は唯南無妙法蓮華經なり。
四條金吾殿御返事

日蓮

- 3210 -

一一一 崇峻天皇御書

建治三年九月 五十六歲御

作 与四條金吾

1170p

白小袖一領錢一ゆひ又富木殿の御文のみなによりもかきなしな

まひじきひるひじきやうやうの物うけ取りしなじな御使おんつかいにたび候
いぬ、さてはなによりも上の御いたはりなげき入つて候、たとひ上は
御信用ごしんようなき様に

候へどもとの其その内に・をはして其その御恩ごおんのかけにて法華経ほけきようをやしな
ひまいらせ給たまい候へば偏ひとえに上の御祈とぞな

り候らん、大木の下その小木大河の辺の草は正まさしく其その雨にあたらず
其その水をえずといへども露つゆをつたへいきを
えてさかうる事に候。

此これもかくのごとし、阿闍世王あじゃせは仏の御かたきなれども其その内に
ありし耆婆大臣きばだいじん仏ぶつに志こころありて常に供養くようありしかば其その功大王だいおうに
帰すとこそ見へて候へ、仏法ぶつぽうの中に内薰外護ないくんげこと申す大なる大事だいじあり
て宗論しゆろんにて候、法華経ほけきようには「我深く汝等なんじを敬うやまう」涅槃経ねはんぎようには「一切いっさい
衆生しゆじやう悉く仏性ぶつじやう有り」馬鳴菩薩めみうぼさつの起信論きしんろんには「真如しんによの法常ほふじやうに薰習くんじゆうす

以ての故に妄心即滅して法身顕現す。弥勒菩薩の瑜伽論には見えた
り、かくれたる事のあらはれたる徳となり候なり、されば御内の
人人には天魔ついて前より此の事を知りて殿の此の法門を供養する
をささえんがために今度の大妄語をば造り出だしたりしを御信心
深ければ十羅刹たすけ奉らんがために此の病はをこれるか、上は我
がか

たきとはをばさねども一たんかれらが申す事を用い給いぬるによ
りて御しよらうの大事になりてながしらせ給うか、彼等が柱とた
のむ竜象すでにたうれぬ、和讒せし人も又其の病にをかされぬ、
良観は又一重の大科の者なれば大事に値うて大事をひきをこして、
いかにもなり候はんずらん、よもただは候はじ。

此れにつけても殿の御身もあぶなく思いまいらせ候ぞ、一定かた
きにねらはれさせ給いなんすぐろくの石は二つ並びぬればかけられ

ず車の輪は二あれば道にかたぶかず、敵も二人ある者をばいぶせが
り候ぞ、いかにとがありとも弟ども且しばらくも身をはなち給たまうな、殿は
一定腹あしき相かをに顕あらわれたり、いかに大事だいじと思へども腹あ

しき者をば天は守らせ給たまはぬと知らせ給へ殿の人にあだまれてをは
さば設たといい仏にはなり給たまうとも彼等かれらが悦よろこびと云う、此れこよりの歎なげきと
申し口惜もうしかるべし、彼等かれらがいかにもせんとはげみつるに、古よりも

上に引き付けられまいらせてをはすれば外ほかのすがたはしづまりたる
様かれらにあれども内の胸はもふる計はかりにや有らん、常には

彼等かれらに見へぬ様にて古よりも家のこを敬うやまひきうだちまいらせ給たまいて
をはさんには上かみの召よびしありとも且しばらく・つつしむべし、入道殿にゅうだういかにも
ならせ給たまはば彼の人人ひとびとはまどひ者になるべきをばかへりみず、物を
ばへぬ心にとののいよいよ来るを見ては一定ほのを・を胸にたきい
きをさかさまにつくらん、若もしきうだちきり者の女房にようぼうたちい

かに上の御そろうはと問もい申まうされば、いかなる人にても候へひざ・膝をか
がめて手を合せそれがし某おが力の及ぶべき御所勞には候はず候をいかに辞
退申せどもただと仰おせ候へば御内の者にて候間かくて候とてびむを
もかかずしばらひたたれこはからず、さはやかなる小袖色ある物なんども
きずして且しばらくねうじて御覽あれ。

返す返す御心への上なれども末代まつだいのありさまを仏の説かせ給たまいて候まうには濁世じよくせには聖人しやうにんも居こしがたし大火だいかの中の石いしの如ごとし、且しくはこらふるやうなれども終つひにはやけくだけで灰はいとなる、賢人けんじんも五常ごじやうは口くちに説ときて身みには振舞ふるまいいがたしと見みへて候まうぞ、かうの座ざをば去まれと申まうすぞかし、そこばくの人の殿とんを造つくり落おさんとしつるにをとされずしてはやかちぬる身みが穩便おんびんならずして造つくり落おされなば世間せけんに申まうすこぎこひでの船ふねこぼれ又食くの後に湯ゆの無なきが如ごとし、上かみよりへやを給たまいて居こしてをばせば其処そこにては何事ことな無なくとも日ひぐれ暁あけなんど入り返かへりなんどに定さだめてね

らうらん、又我が家の妻戸つまどの脇わき・持仏堂ぢぶつだう・家の内うちの板敷いたじきの下したか・天井てんけいなんどをば、あながちに心こころえて振舞ふるまいい給たまへ、今度このたびはさきよりも彼等かれらはたばかり賢かみかるらん、いかに申まうすとも鎌倉かまくらのえがら夜廻よまわりの殿原とのはらにはすぎじ、いかに

心にあはぬ事有りとも。がたらひ給へ。

義経よしつねはいかにも平家へいけをばせめおとしがたかりしかども。成良しげよしをかたらひて平家へいけをほろぼし、大将殿は。おさだを親のかたきと。をぼせしかども平家へいけを落さざりしには頸を切り給はず、況や此の四人は遠くは法華経ほけきょうのゆへ近くは日蓮にちれんがゆへに命を懸けたるやしきを上へ召されたり、日蓮にちれんと法華経ほけきょうとを信ずる人人ひとびとをば前前彼の人人ひとびといかなる事ありともかへりみ給うべし、其の上殿の家へ此の人人ひとびと常にかようならばかたきはよる行きあはじと。をぢ

るべし、させる親のかたきならねば顕あらわれてとはよも思はじ、かくれん者は是れ程の兵士はなきなり、常にむつばせ給へ殿は腹悪き人にてよも用ひさせ給はじ、若しさるならば日蓮にちれんが祈りの力及びがたし、竜象りゅうじやうと殿の兄とは殿の御ためにはあしかりつる人ぞかし天の御計おんはからいに殿の御心の如くなるぞかしいかに天の御心に背かんとは

・をばするぞ設たといい千万よろずの財たからをみちたりとも上にすてられまいらせ
給たまいては何の詮たまかあるべき已すに上にはをやの様に思はれまいらせ水
の器したがに随したがうが如ことくこうしの母を思ひ老者の杖をたのむが如ことく主のと
のを思食おほしめされたるは法華經ほけきょうの御たすけにあらずや、あらうらやまし
やとこそ御内ひとびとの人人は思はるるらめとくとく此の四人かたらひて

日蓮にちれんにきかせ給たまへさるならば強盛じやうじやうに天てんに申もうすべし、又殿とのの故御父御母おんことの御事ごんごとも左衛門さえもんの尉ゑいがあまりに歎なげき候こうぞと天てんにも申もうし入れて候こうなり、定めて釈迦しやくか仏ぶつの御前おんまえに子細しさい候こうらん。

返かへす返かへす今いまに忘れぬ事は頸切くびきりれんとせし時殿ときどのはともして馬うまの口くちに付つきてなきかなしみ給たまいしをばいかなる世よにか忘れなん、設たい殿どのの罪つみふかくして地獄じじくに入り給たまはば日蓮にちれんをいかに仏ぶつになれと釈迦しやくか仏ぶつこしらへさせ給たまうとも用もちひまいらせ候こうべからず同じく地獄じじくなるべし、日蓮にちれんと殿どのと共に地獄じじくに入るならば釈迦しやくか仏ぶつ・法華ほけきやう経きやうも地獄じじくにこそ。ををはしまさずらめ、暗くらに月の入いるがごとく湯ゆに水みづを入いるがごとく氷こおりに火ひをたくがごとく日輪にちりんにやみをなぐるが如ごとくこそ候こうはんずれ、若もしすこしも此この事をたがへさせ給たまうならば日蓮にちれんうらみさせ給たまうな。

此この世間せけんの疫病えきびやうはとののまうすがごとく年とし帰かへりなば上あへあがり

ぬと・をばえ候ぞ、十羅刹じゅうらせつの御計おんはからいか今いま且しばらく世よに・をはして物を御覽
あれかし、又世間せけんのすぎえぬやうばし歎なげいて人に聞かせ給たまうな、
若もしさるならば賢人けんじんに

ははづれたる事なり、若もしさるならば妻子さいしがあとにとどまりてはぢ
を云うとは思はねども、男のわかれのおしさに他人たにんに向いて我が夫
のはぢをみなかたるなり、此これ偏ひとえにかれが矢とがにはあらず我がふるま
ひのあしかりつる

故なり。

人身じんしんは受けがたし爪の上の土人身じんしんは持たもちがたし草の上の露つゆ、百二
十たもまで持たもちて名をくたして死せんよりは生きて一日なりとも名を
あげん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉さえもんじょうは主の御ためにも仏法
の御ためにも世間せけんの心

ねもよかりけりよかりけりと鎌倉かまくらの人人ひとびとの口くちにうたはれ給たまへ、

あなかしこあなかしこ

穴賢穴賢、蔵の財たからよりも身の財たからすぐれたり身の財たからより心の財たから

第一だいいちなり、此の御文おんふみを御覧おんらんあらんよりは心の財たからつませ給たまうべし。

第一だいいち秘蔵ひぞうの物ものがたり語ことばあり書かきてまいらせん、日本にほん始はじりて国王こくおう二人ひとびと

に殺ころされ給たまう、其その一人ひとりは崇峻すしゆんてんのう天皇てんのうなり、此の王わうは欽明きんめいてんのう天皇てんのうの御

太子たいし聖徳しょうとく太子たいしの伯父ちやくふなり、人王にんおう第三十三代だいさんじゅうさんの皇みかどにてををはせしが

聖徳しょうとく太子たいしを召よして勅ちやく宣せん下くださ

る、汝は聖智の者と聞く朕を相してまいらせよと云云、太子三度
まで辞退申させ給いしかども頻の勅宣なれば止みがたくして敬い
て相しまいらせ給う、君は人に殺され給うべき相ましますと、王の
御気色かはらせ給いて・なにと云う証拠を以て此の事を信ずべき、
太子申させ給はく御眼に赤き筋とをりて候人にあだまるる相なり、
みかど
皇帝

勅宣を重ねて下しいかにしてか此の難を脱れん、太子の云く免脱が
たし但し五常と申すつはものあり此れを身に離し給わずば害を
まぬかたま
脱れ給はん、此のつはものをば内典には忍波羅蜜と申して六波羅蜜
の其の一なりと云云、且くは此れを持ち給いてをはせしがややもす
れば腹あしき王にて是を破らせ給いき、或時人猪の子をまいらせ
たり

しかばこうがいをぬきて猪の子の眼をづぶづぶとささせ給いていつ

かにかくしと思つやつをかくせんと仰せありしかば、太子其の座にを

はせしが、あらあさましや・あさましや・君は一定人にあだまれ給い

なん、此の御言は身を害する剣なりとて太子多くの財を取り寄せ

て御前に此の言を聞きし者に御ひきで物ありしかども、有人蘇我

の大臣・馬子と申せし人に語りしかば馬子我が事なりとて

東漢直駒・直磐井と申す者の子をかたらひて王を害しまいらせつ、

されば王位の身なれども思つ事をばたやすく申さぬぞ、孔子と申

せし賢人は九思一言とてここのたびおもひて一度申す、周公旦と申

せし人は沐する時は三度握り食する時は三度はき給いき、たしか

にきこしめせ我ばし恨みさせ給うな仏法と申すは是にて候ぞ。

一代の肝心は法華經法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり、

不輕菩薩の人を敬いしは、いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は

人の振舞にて候けるぞ、穴賢穴賢、賢きを人と云いはかなきを畜

といふ。

建治三年丁丑ひのとうし九月十一日

花押かおう

四条左衛門尉殿御返事さえもんのじょうごへんじ

日蓮にちれん

一一一一 四条金吾御書 しじょうきんごごしよ

建治四年一月 五十七

歳御作

1175p

鷹取たかとりのたけ身延のたけなないたがれのたけいいだにと申し、木の

もとかやのねいわの上土の上いかにたづね候へどもをひて候ところ
なし、されば海にあらざればわかめなし山にあらざればくさびら
なし、法華経ほけきょうにあらざれば仏になる道なかりけるかこれはさてをき
候いぬ、なによりも承りたまわてすずしく候事はいくばくの

御にくまれの人の御出仕に人かずにめしぐせられさせ給たまいて、一日
・一日ならず御ひまもなきよし・うれしさ申もすばかりなし、えもん
のたいうのをやに立ちあひて上の御一言にてかへりてゆりたると殿
のすねんが間まのにくまれ去年こぞのふゆはかうとききしにかへりて日日

の御出仕の御ともいかなる事ぞ、ひとへに天の御計おんはからい法華經ほけきょうの

御力おんちからにあらずや、其その上えんきょう円教房えんきょうの来りて候いしが申し候は、えま

の四郎殿の御出仕に御ともそのさふらい二十四・五其その中にしうはさてをきたてまつりぬ、ぬしのせいといひかをたましひむま下人までも中務のさえもんだいいちのじやう第一だいいちなり、あはれをとこやをとこやとかまくらわらはべはつじちにて申しあひて候しとかたり候。

これにつけてもあまりにあやしく候、孔子こうしは九思一言周公旦しゅうこうたんは

浴あゆみする時は三度にぎり食する時は三度はかせ給たまう、古の賢人いにしえけんじんなり

今の人のかがみなり、されば今度このたびはことに身をつつしませ給たまうべし、

よるはいかなる事ありとも一人そとへ出いでさせ給たまうべからず、たと

ひ上の御めし有りとまづ下人をこそへつかわして、なひなひ一定

をききさだめてはらまきをきてはちまきし、先後せんじさう左右に人をたてて

出仕し御所のかたわらに・心よせの・やかたか又我がやかたかにぬぎ

をきてまいらせ給^{たま}うべし、家へかへらんにはさきに人を入れてとのわ
きはしのしたむまやのしりたかどの一切^{いっさい}くらきところをみせて入
べし。せうまうには我が家よりも人の家よりもあれた

からを・をしみてあわてて火をけすところへつとよるべからず、まして走り出る事なかれ、出仕より主の御ともして御かへりの時はみかどより馬よりをりて、いとまのさしあうよしはうくわんに申して、いそぎかへるべ

し、上のを・をせなりともよに入りて御ともして御所にひさしかるべからず、かへらむには第一心にふかきえうじんあるべし、ここをばかならずかたきのうかがうところなり。

人のさけたばんと申すともあやしみてあるひは言をいだしあるひは用いることなかれ、又御をとどもには常はふびんのよしあるべし、つねにゆせにぎうりのあたいなんど心あるべし、もしやの事あらむには・かたきはゆるさじ、我がためにいのちをうしなはんずる者ぞかしと・をぼして、とがありともせうせうの失をば・しら

ぬやうにてあるべし、又女るひはいかなる失ありとも一向に御けう

くんまでも・あるべからず、ましていさかうことなかれ、涅槃經ねはんぎょうに
云いく「つみ罪極て重しと雖いえど女人にょにんに及およばさず」等云、文の心はいかなる
失とがありとも女のとがを・をこなはざれ、此これ賢人けんじんなり此これぶつでし仏弟子ぶつでしな
りと申もうす文なり、此の文は阿闍世あじやせ王父を殺すのみならず母をあや
ま

たむとせし時ぎ耆婆がう月光がうの兩臣おみがいさめたる經文きょうもんなり、我が母心ぼしんく
るしくをもひて臨終りんじゆうまでも心こころにかけし・いもうとともなければ失とがを
めんじて不便ふびんというならば母の心こころやすみて孝養こようとなるべしとふかく
おぼすべし、他人たにんをも不便ふびんというぞかしいわうやをとをとどもを
や、もしやの事ことの有あるには一所いにていかにもなるべし、此等これらこそ
とどまりゐてなげかんずればをもひでにとふかくをぼすべし、かや
う申もうすは他事たじはさてをきぬ、雙六すじろくは二ある石いしはかけらず、鳥の一の
羽うにてとぶことなし、將門しょうもんさだたふがやうなりしいふしやうも一人

は叶かなわらず、されば舎弟等しやていを子とも郎等ともうちたのみてをはせば、
もしや法華經ほけきようもひろまらせ給たまいて世にもあらせ給たまわば
一方いっぽうのかたうどたるべし。

すでにきやうのだいいり院のごそかまくらの御所並に御うしろみの
御所一年が内に二度正月と十二月とに

やけ候いぬ、これ只事にはあらず謗法の真言師等を御師とたのませ給う上かれら法華經をあだみ候ゆへに天のせめ法華經十羅刹の御いさめあるなり、かへりて大ざんげあるならばたすかるへんもあらんずらん、いたう天

の此の国ををしませ給うゆへに大なる御いさめあるか、すでに他国が此の国をうちまきて国主国民を失はん上仏神の寺社百千万がほろびんずるを天眼をもつて見下してなげかせ給うなり、又法華經の御名をいいうたるものどもの唱うるを誹謗正法の者どもがをどし候を天にくませ給う故なり。

あなかしこ・あなかしこ、今年かしこくして物を御らんぜよ、山海空市まぬかるところあらばゆきて今年はすぎぬべし、阿私陀仙人が仏の生れ給いしを見て、いのちををしみしがごとしをしみしがごとし、
恐恐謹言。

花押かおう 正月二十五日

中務左衛門尉殿さえもんのかみ

日蓮にちれん

一一一三 陰徳陽報御書ごしよ

780

いよいよかない候べし、いかにわなくともきかぬやうにてをはすべし、此の事をみ候もつに申すやうにだにふれまわせ給たまうならばなをも所領しよらうもかさなり人のをばへもいできたり候べしとをばへ候、さきざき申もつし候いし

やうに陰徳あれば陽報ありと申もつして、皆人みなは主にうたへ主もいかんぞをばせしかどもわたの正直しよじきの心に主の後生ごしよをたすけたてまつらむとをもう心がうじやうにしてすれんをすすればかかるりしやうにもあづからせ給たまうぞ

かし此は物のはしなり大果報かほうは又来るべしとおぼしめせ、又此の法門ほうもんの一行いかなる本意ほんいなき事ありともみずきかずいわずしてむ

つばせ給へ^{たま}大人^{だいにん}にはいのりなしまいらせ候べし、上に申^{もつ}す事私の事
にはあらず外典^{げてん}三千^{さんぜん}・内典^{ないてん}五千の肝心^{かんじん}の心をぬきてかきて候、あ
なかしこ・あなかしこ恐恐^{きょうきょう}謹言^{きんげん}。

卯月二十三日

日蓮在^{にちれん}

御判

御返事^{ごへんじ}

一一四 中務左衛門尉殿御返事^{さえもんのじょうごへんじ}

弘安元年^{こうあんがねん}

六月 五十七歳御作 1178p

夫^それ人に二病あり、一には身の病所謂^{いわゆる}地大百一水・大百一火・大
百一風・大百一已上四百四病・此の病は治水・流水・耆婆^{へんじやく}等

の方薬をもつて此れを治す、二には心の病所謂三毒・乃至八万四千
の病なり、仏に有らざれば二天三仙も治しがたし何に況や神農・
黄帝こうていの力及ぶべしや、又心の病に重重の浅深せんじん分れたり 六道ろくどうの凡夫ほんぶ
の三毒さんどく・八万はちまん

四千の心の病をば小乗の三蔵俱舎・成実・律宗の仏此れを治す
大乘の華嚴・般若・大日經等の經經をそしりて起る三毒八万の
病をば小乗をもつて此れを治すればかへりては增長すれども
へいゆ平愈全くなし、大乘をもつて此れを治すべし、又諸大乘經の
行者の法華經を背きて起る三毒八万の病をば華嚴・般若・大日經・
真言三論等をもつて此れを

治すればいよいよ增長す、譬へば木石等より出でたる火は水をもつ
て消しやすし水より起る火は水をかくればいよいよ熾盛に炎上り
て高くあがる、今の日本国去今年の疫病は四百四病にあらざれば
華陀偏鵲が治も及ばず小乗・權大乘の八万四千の病にもあらざ
れば諸宗の人人のいのりも叶はずかへりて增長するか、設い今年
はとごま

るとも年年に止がたからむか、いかにも最後にも最後に大事出来して後定ま

る事も候はんずらむ、法華經に云く、「若し医道を修して方に順つて病を治せば更に他の疾を増し、或は復死を至さん而も復増劇せん、涅槃經に云く、「爾の時に王舎大城の阿闍世王、偏体に瘡を生じ乃至是くの如き創は心に從て生ず、四大より起るに非ず、若し衆生能く

治する者有りと言はば是の処有ること無けん」云云、妙樂の云く

「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」云云、此の疫病は阿闍世王

の瘡の如し彼の仏に非ずんば治し難し此の法華に非ずんば除き

難し、将又日蓮下痢去年十一月卅日事起り今年六月三日四日日に度をまし月月に倍增す定業かと存ずる処に貴辺の良薬を服

してより已来

日日月月に減じて今百分の一となれり、しらず教主釈尊の入りか

わりまいらせて日蓮をたすけ給うか、地涌の菩薩の妙法蓮華經の

良薬りょうやくをさづけ給たまえるかと疑うたがい候いなり、くはしくは筑後房申もうすべく候。
又追つて申もうすきくせんは今月二十五日戌の時来りて候。種しゅじゆ種じゆの物かにようぼうずへつくしがたし、ときどのかたびらの申もうし給たまわるべし、
又女房にようぼうの御おんをことをちの御事おんことなげき入つて候よし申もうし給たまふべし、
恐きよう恐きよう。

六月廿六日

日蓮花押にちれんかおう

中務佐衛門尉殿御返事ごへんじ

一一一五 四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ 弘安元年九月 五十

七歳御作 1180p

錢一貫文給たまいいて頼基よりもとがまいらせ候そうろうとて法華經ほけきょうの御宝前ほうぜんに申し上げ候、定めて遠くは教主きよづしゆじやくそん釈尊しやくそん・並に多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつ・近くは日月にちがつの宮殿にわたらせ給たまうも御照覽しやうらん侯ぬらん、さては人のよにすぐれんとするをば賢人けんじん・聖人しやうじんとをばしき人人も皆みなそねみ・ねたむ事に侯、いわうや常の人をや、漢皇の王昭君しやうくんをば三千のきさき是これをそねみ帝釈たいしやく

の九十九億那由佗なゆたのきさきは 戸迦きやうしかをねたむ、前の中書王をばをのの宮の大臣だいじん是これをねたむ、北野の天神てんじんをば時平の大臣だいじん是これをざんそうして流し奉たてまつる、此等これらをもてをばしめせ、入道殿にゅうだうの御内は広かり

し内なれども・せばく

ならせ給たまいきうだちは多くわたらせ給たまう、内のとしごろの人人ひとびと・あまたわたらせ給たまへば池の水すくなくなれば魚さわがしく秋風立てば鳥こずえをあらそう様に候事そうじに候まへば、いくそばくそ御内ひとびとの人人ひとびとそねみ候まらんまに度度たびたびの仰おおせをかへし・よりよりの御心ごころにたがはせ給たまへばいくそばくのざんげんこそ候まらんまに、度度たびたびの御所領ごしょりょうをかへして今いま又所領しりょう給たまはらせ給たまうと云云こ、此れ程この不思議ふしぎは候まはず此れ偏ひとえに陰いん徳とくあれば陽報やうほうありとは此これなり。

我が主ぬしに法華經ほけきょうを信じさせまいらせんと・をばしめす御心ごころのふかき故ゆゑか、阿闍世王あじゃせは仏の御怨おたなりしが耆婆大臣ぎばだいじんの御ますすめによつて法華經ほけきょうを御信ごしんじありて代たを持ち給たまう、妙莊嚴王みょうそうごんは二子の御ますすめによつて邪見じゃけんをまひるがへし給たまう、此れ又こしかるべし貴辺きへんの御ますすめによつて今は御心ごころも・やわらがせ給たまいてや候まらんま・此れ偏ひとえに貴辺きへんの

法華ほっけ

經しんじんの御信心しんじんのふかき故なり、根ねふかければ枝えださかへ源遠みなもととおければ流長なが

しと申もうして一切いっさいの經は根あさく流ちかく法華ほけきょう經は根ふかく頂いただきと

をし、末代まつだい・悪世あくせまでも・つきず・さかうべしと天台大師てんだいだいしあそばし

給たまへり、此こゝの法門ほうもんにつきし人あまた候いしかども・をほやけかたくし

の大難だいなん・度度たびたび重なり候いしかば一年・二年こそつき候いしが後後には

皆みな

にのせて・かくれなし、漢土一千年・日本七百年・又目錄にのせて
候そうちいし

かども仏のごとく大難だいなんに値あえる人人少ひとびとし、我も聖人しよつじんにん・我も門人もんじんとは
申まをせども況滅度きやうめつど後の記文きもんに値あえる人・一人も候まをはず、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつ・
天台てんだい・伝教でんぎやうこそ佛法ぶつぽうの大難だいなんに値あえる人人ひとびとにては候まをへども此等これらも仏説ぶつせつ
には及まをぶ事なし、此これ即代そくのあがり法華經ほけきやうの時に生まれ候まをはせ給たまはざ
る故ゆゑなり。

今は時すでに後・五百歳まっぼつ・末法まっぽうの始はじなり、日には五月十五日・月に
は八月十五夜てんだいに似たたり、天台てんだい・伝教でんぎやうは先まづに生まれ給たまへり今より後は又
のちぐへなり、大陣だいじんすでに破われぬ余党よとうは物もののかずならず、今こそ仏
の記しるしをき給たまいし後・五百歳まっぼうのはじめ・末法まっぽうめつどの初はつめ・況滅度きやうめつど後の時ときに当ありて候そうちへ
ば仏語ぶつごむなしからずば一閻浮提えんぶだいの内うちに定さだめて聖人しよにん出現しゆげんして候まをら
ん、聖人しよにんの出いずるしるしには一閻浮提えんぶだい第一だいいちの合戦がっせんをこるべしと説せつか

れて候にすでに合戦も起りて候にすでに聖人しよじんや一閻浮提えんぶだいの内に
出でさせ給たまいて侯らん、きりん出でしかば孔子こうしを聖人しよじんとする鯉社
なつて聖人しよじん出で給たまう事うたが疑がいなし、仏には
梅檀せんだの木をひて聖人しよじんとする、老子ろうしは二五の文を結んで聖人しよじんとする、
末代まつだいの法華經ほけきようの聖人しよじんをば何を用つてかするべき、經きやうに云いく「能説此
經きやう・能持此經のうじしきようの人・則すなはち如来にょらいの使つかなり」八卷・一卷・一品いちげ・一偈いちげの人・
乃至題目なを唱となうる人・如来にょらいの

使なり、始中終すてずして大難を・とをす人。如来の使なり。

日蓮が心は全く如来の使にはあらず凡夫なる故なり、但し三類

の大怨敵にあだまれて二度の流難に値へば如来の御使に似たり、心

は三毒ふかく一身凡夫にて候へども口に南無妙法蓮華經と申せば

如来の使に似たり、過去を

尋ぬれば不輕菩薩に似たり、現在を・とぶらうに加刀杖瓦にたがう

事なし、未来は当詣道場 疑いなからんか、

これをやしなはせ給う人人は豈浄土に同居するの人にあらずや、事

多しと申せどもとどめ候心をもて計らせ給うべし。

ちこのそらうよくなりたり悦び候ぞ、又大進阿闍梨の死去の事・

末代のぎば・いかでか此れにすぐべきと皆人・舌をふり候なり、さに

て候いけるやらん、三位房が事さう四郎が事・此の事は宛も符契

符契と申しあひて候、日蓮が死生をば・まかせまいらせて候、全く他

のくすしをば用いまじく候なり。

弘安元年戌寅九月十五日

花押

四条金吾殿

日蓮

驚目がもく一貫文給たまい候あい畢おわぬ、御所領しよりょう上より給たまわらせ給たまいて候あな
 る事こともとも覺おぼへず候あ夢かとあまりに不思議ふしぎに覺おぼへ候あ、御返事ごへんじな
 んどもいかやうに申もうすべしとも覺おぼへず候あ、其そのの故ゆえはとの御身おんみは
にちれん日蓮ほつもんが法門の御ゆへに日本にほんこく並にかまくら中御内の人人ひとびときうだち
 までうけずふしぎにをもはれて候あへば其その御内ごうちにをはせむだにも不
 思

議ごに候あに御恩ごおんをかうほらせ給たまへばうちかへし又うちかへしせさせ給たまへ
 ばいかばかり同れいどももふしぎとをもひ上もあまりなりとをば
 すらむ、さればこのたびはいかんが有あるべかるらんとうたがひ思い

候つる上・御内の数十人の人人うつたへて候へばさればこそいかにも
かなひがたかるべし、あまりなる事なりと疑候いつる上。
兄弟にもすてられてをはするにかかる御をん面目申すばかりな
し、かの処はとのをか三倍とあそばして候上さどの国のものこ
れに候がよくよく其の処をしりて候が申し候は三箇郷の内にか
だと申すは第一の処なり、田畠はすくなく候へどもとくははかり
なしと申し候ぞ、一所はみねんぐ千貫一所は三百貫と云云、かかる
処なりと承はる、なにとなくともどうれいといひしたしき人人と
申しすてはてられてわらひよろこびつるにとのをかにをとりて候処
なりとも御下し文は給たく候つるぞかしまして三倍の処なりと候、
いかにわろくともわろきよし人にも又上へも申させ給うべからず
候、よきところ・よきところと申し給はば又かさねて給はらせ給
べし、わろき処・徳分なしなむど候はば天にも人にもすてられ

給たまい候はむずるに候ぞ、御心へあるべし。

阿闍あじゃせ世王は賢けんじん人なりしが父をころせしかば即時そくじに天にもすてられ大地だいちもやぶれて入りぬべかりしかども・殺されし父の王一日に五百りやう五百りやう数年が間・仏を供養くようしまいらせたりし功德くどくと後に法華經ほけきようの檀那だんなとなる

べき功德くどくによりて天もすてがたし地もわれずついに地獄じじくにをちずし
て仏になり給たまいき、とのも又かくのごとし・兄弟きょうだいにもすてられ同れ
いにもあだまれきうだちにもそばめられ日本国にほんこくの人にもにくまれ
給たまいつれども、去いぬる文永八年ぶんえいの九月十二日の子丑うしの時・日蓮にちれんが
御勘気ごかんきをかほりし時馬の口にとりつきて鎌倉かまくらを出いでてさがみのえち
に

御ともありしが、一閻浮提第一えんぶだい だいいちの法華經ほけきょうの御かたうどにて有りしか
ば梵天ぼんてん・帝釈たいしゃくもすてかねさせ給たまへるか、仏にならせ給たまはん事もかく
のごとし、いかなる大科だいかありとも法華經ほけきょうをそむかせ給たまはず候たまいし、
御ともごともの御ほうごうに

て仏にならせ給たまうべし、例せば有徳国王うとくこくおうの覚徳比丘かくとくびくの命にかはりて
釈迦しゃかぶつ仏とならせ給たまいしがごとし、法華經ほけきょうはいのりとはなり候たまいける
ぞ。

あなかしこ・あなかしこ、いよいよ道心堅固にして今度仏になり

給へ、御一門の御房たち又俗人等にも、かかるうれしき事候はず、

かう申せば今生のよくとをぼすか、それも凡夫にて候へばさも候

べき上慾をもはなれずして仏になり候ける道の候けるぞ、普賢經

に法華經の肝心を説きて候、煩惱を断ぜず五欲を離れず」等云云、

天台

大師の摩訶止觀に云く「煩惱即菩提・生死即涅槃」等云云、竜樹

菩薩の大論に法華經の一代にすぐれていみじきやうを釈して云く

「譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」等云云、「小薬師

は薬を以て病を治す大医は大毒をもつて大重病を治す」等云云。

弘安元 戊寅 年十月 日

日蓮花押

四条金吾殿御返事

一一一七 四條金吾殿御返事しじょうきんじごへんじ 弘安元年十月こうあんがんねん 五十七

歳御作

1185p

今月二十二日信濃より贈られ候いし物の日記につぎ 錢三貫文・白米

能米俵一・餅五十枚・酒大筒一・小筒一・串柿五把じやくろ・柘榴十そ、夫れ王

は民を食とし民は王を食とす衣は寒温をふせぎ食は身命しんみょうをたす

く、たとえ 譬ば油の火を継ぎ水の魚を助くるが如しごと、鳥は人の害せん事

を恐れて木末に巢くふ、然れども食のために地にをりてわなにかか

る、魚は淵ふちの

底に住みて浅き事を悲しみて穴を水の底に掘りてすめども餌にはか

されて鉤をのむ、飲食おんじきと衣薬すとに過ぎたる人の宝や候べき。

而しかるに日蓮にちれんは他人たにんにことなる上山林さんりんの栖就なかんずく 中今年なかつしは疫癘えきれい飢渴けかちに

春夏は過越し秋冬は又前にも過ぎたり、又身に当りて所勞大事に
なりて候つるをかたがの御薬と申し小袖彼のしなじなの御治法にや
うやう驗し候て今所勞平愈し本よりもいさぎよくなりて候、弥勒
菩薩の瑜伽論竜樹菩薩の大論を見候へば定業の者は薬変じて毒と
なる法華経は毒変じて薬となると見えて候、日蓮不肖の身に法華経
を弘めんとし候へば天魔競ひて食をうばはんとするかと思ひて歎か
ず候いつるに今度の命たすかり候は偏に釈迦仏の貴辺の身に入り
替らせ給いて御たすけ候か。

是はさてをきぬ、今度の御返りは神を失いて歎き候いつるに事故
なく鎌倉に御帰り候事悦びいくそばくぞ、余りの覺束なさに鎌倉よ
り来る者ごとに問ひ候いつれば、或人は湯本にて行き合せ給うと
云い或人はこうづにと或
人は鎌倉にと申し候いしにこそ心落居て候へ、是より後はおぼろげ

ならずば御渡りわたあるべからず大事だいじの御事候おんことはば御使おんつかいにて承うけたまわり候
べし、返もす返もす今度このたびの道は・あまりに・おぼつかなく候もいつるなり、
敵もと申もす者は・わすれさせ

てねらふものなり、是より後に若やの御旅には御馬をおしましませ給ふべからず、よき馬にのらせ給へ、又供の者どもせんにあひぬべからんもの又どうまるもちあげぬべからん御馬にのり給うべし、摩訶止觀第八に云く弘決

第八に云く、「必ず心の固きに仮つて神の守り則ち強しと云云、神の護ると申すも人の心つよきによるとみえて候、法華經はよきつるぎなれどもつかう人によりて物をきり候か。

されば末法に此の經をひろめん人人舍利弗と迦葉と觀音と妙音と文殊と藥王と此等程の人やは候べき、一乗は見思を断じて六道を出でて候菩薩は四十一品の無明を断じて十四夜の月の如し、然れども此等の人人には、ゆづり給はずして地涌の菩薩に譲り給へり、されば能く能く心をきたはせ給うにや、李広將軍と申せしつはものは虎に母を食れて虎に似たる石を射しかば其の矢羽ぶくらまでせ

めぬ、後に石と見ては立つ事なし、後には石虎將軍と申しき、貴邊せつきょうぐんも申しき、貴邊きへんも又かくのごとく敵はねらふらめども法華經ほけきょうの御信心しんじん強盛なれば大難だいなんもかねて消え候か、是につけても能く能く御信心しんじんあるべし、委くわしく紙には尽しがたし、恐恐きょうきょう謹言。

弘安元年こうあんがんねん 戊寅つちのえとら 後十月二十二日

日蓮花押にちれんかおう

四條左衛門殿御返事さえもんごへんじ

一一一八 日眼女造立釈迦仏供養事 弘安二年二月

五十八歳御作 1187p

御守書てまいらせ候三界の主教主釈尊一体三寸の木像造立の

檀那日眼女御供養の御布施前に二貫今一貫云云。

法華經の寿量品に云く、或は己身を説き、或は他身を説く、等

云云、東方の善徳仏、中央の大日如来、十方の諸仏、過去の七仏、

三世の諸仏、上行菩薩等、文殊師利、舍利弗等、大梵天王、第六天の

魔王、釈提桓因王、日天、月天、

明星天、北斗七星、二十八宿、五星七星、八万四千の無量の諸星、

阿修羅王、天神、地神、山神、海神、宅神、里神、一切世間の国国の主

とある人何れか教主釈尊ならざる天照太神、八幡大菩薩も其の

本地は教主釈尊なり、例せば釈尊は天の一月諸仏、菩薩等は万水

に浮べる影なり、しやくそん 釈尊 一体を造立する人は 十方世界の諸仏を作り
奉る人なり、たと 譬えば 頭こつべをふればかみゆるぐ心はたらけば身うご
く、たいふう 大風吹けば草木そうもくしづかならず大地だいちうごけば大海たいかいさはがし、
教主きようしゆしやくそん 釈尊をうごかし奉ればたてまゆるがぬ草木そうもくやあるべきさわがぬ水や
あるべき。

今日眼女は三十七のやくと云云、やくと申すは譬たとえばさいには
かどますにはすみ人にはつきふし方まさには四維よすみの如ごとし、風は方よりふ
けばよはく角より吹けばつよし病は肉より起れば治しやすし節より
起れば治しがたし、家にはかきなければ盗人ぬすびといる人にはとがあれば
敵便てきべんをうく、やくと申すはふしぶしの如ごとし、家にかきなく人に
科とがあるがごとし、よきひやうしを以てまほらすれば盗人ぬすびとをからめと
る、ふしの病をかぬて治すれば命ながし、今教主きようしゆしやくそん 釈尊を造立し
奉ればたてま下女が太子たいしをうめるが如ごとし国王尚此こくおうなおの女を敬つやまひ給たまふ何いかに況

や大臣だいじん已下いをや、大梵天王だいぼんてんのう・釈提桓因王しゃくだいかにん・日月等にちがつ・此の女人にょにんを守り
給たまふ況だいしょうや大小だいしょうの神祇じんぎをや、昔優填大王うでんだいおう・釈迦しゃか仏ぶつを造立たてまつし奉りしかば
大梵天王だいぼんてんのう・日月等にちがつ・木像うでんだいおうを礼くようしに参り給たまいしかば木像うでんだいおう説いわいて云くく「我
を供養くようせんよりは優填大王うでんだいおうを供養くようすべし」等云云とうぐんぐん、影堅王ようげんの画像えがの
釈尊しゃくそんを書き奉りたてまつしも又また是かくくの如ごとし、法華經ほけきょうに云いわく「若もし人・仏の
為ゆえの故もとに諸もろの形像かたちを建立こんりゆうす是かくくの

ごと 如き諸人等皆已に仏道を成じき云云、文の心は一切の女人釈迦仏
をつく 造り奉れば現在には日日・月月の大小の難を払ひ後生には必ず
を 仏になるべしと申す文なり。

抑 女人は一代五千・七千余巻の経経に仏にならずときらはれ

まします、但法華経ばかりに女人・仏になると説かれて候、天台

智者大師の釈に云く、「女に記せず」等云云、釈の心は一切経には

女人・仏にならずと云云、次下に云く、「今経は皆記す」と云云、今の

法華経にこそ竜女仏になれりと云云、天台智者大師と申せし人は

仏滅度の後・一千五百年に漢土と申す国に出でさせ給いて一切経を

十五返まで御覧あそばして候いしが法華経より外の経には

女人・仏にならずと云云、妙楽大師と申せし人の釈に云く、「一代に

絶えたる所なり」等云云、釈の心は一切経にたえたる法門なり、

法華経と申すは星の中の月ぞかし人の中の王ぞかし山の中の

須弥山水の中の大海の如し、是れ程いみじき御経に女人・仏になる
と説かれぬれば一切経に嫌はれたるになにかくるしかるべき、譬え
ば盗人・
ぬすびと

夜打・強盗・乞食・渴体にきらはれたらんと国の大王に讃られたら
んと何れかうれしかるべき、日本国と申すは女人の国と申す国な
り、天照太神と申せし女神のつきいだし給える島なり、此の日本に
は男十九億九万四千八百二十八人女は二十九億九万四千八百三十
人なり、此の男女は皆・念仏者にて候ぞ皆・念仏なるが故に
あみだぶつ ほんぞん
阿弥陀仏を本尊
げんせ
とす現世の祈りも又是くのごと
かくのごと
の如し、設い釈迦仏をつくりかけども
あみだぶつ じょうど
阿弥陀仏の浄土へゆかんと置いて本意の様には思い候はぬぞ、中中
つくりかかぬにはをとりの候なり。

今日眼女は今生の祈りのやうなれども教主釈尊をつくりまい
こんじょう
きょうしゆじやくぞん

らせ給たまい候しへば後ご生しょうも疑うたがなし、二十九億九万四千八百三十人の
女人にょにんの中の第一だいいちなりとおぼしめすべし、委くわくは又また又また申もうすべく候、
恐きょう恐きょう謹言きんげん。

弘安二年己卯二月二日

日蓮にちれん 花押かおう

日眼女御返事ごへんじ

一一一九

聖人御難事

弘安二年十月五十八歳御作

与門人等

1189p

去ぬる建長五年癸丑四月二十八日に安房の国・長狭郡の内東条の

郷今は郡なり、天照太神の御くりや右大將家の立て始め給いし日本

第二のみくりや今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の

諸仏坊の持仏堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめて今に二

十七年弘安二年「太歳己卯」なり、仏は四十余年天台大師は三十余

年・

伝でん教きょう大師だいしは二十余年に出世しゅっせの本懐ほんかいを遂げ給う、其中ごちゆうの大難だいなん申す

計りばかなし先先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難だいなんは各

各かつしろしめせり。

法華經ほけきょうに云くいわ「而も此の經は如来にょらいの現在げんざいにすら猶怨嫉多し、況や

滅度の後をやと云云、釈迦如来の大難はかずをしらず、其の中に馬の麦をもつて九十日・小指の出仏身血・大石の頂にかかりし、善生比丘等の八人が身は仏の御弟子・心は外道にともないて昼夜十二時に仏の短をねらいし、無量の釈子の波瑠璃王に殺されし・無量の弟子等

が悪象にふまれし阿闍世王の大難をなせし等、此等は如来現在の小難なり、況滅度後の大難は竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給はず法華經の行者ならずといわば、いかでか行者にてをはせざるべき、又行者といはんとすれば仏のごとく身より血をあやされず、何に況や仏に過ぎたる大難なし経文むなしきがごとし、仏説すで

に大
虚妄となりぬ。

而るに日蓮二十七年が間弘長元年辛酉五月十二日には伊豆の

国るざいへ流罪、文永元年ぶんえいがんねん十一月十一日頭こつべにきずをかほり左の手を打ち
をらる、同文永八年ぶんえい辛かのとひつじ未九月十二日佐渡さどの国へ配流はいる又頭こつべの座に
望そむ其の外でしに弟子を殺され切られ追出くわれう等てんじんかずをしらず仏
の大難だいなんには及ぶか勝すぐれたるか其は知らず、竜樹りゆうじゆ・天親てんじん・天台てんだい・伝教でんぎよう
は余に肩を

並べがたし、日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人多宝・十方の諸仏
は大虚妄の証明なり、仏滅後・二千二百三十余年が間・一閻浮提
の内に仏の御言を助けたる人但日蓮一人なり、過去・現在の末法の
法華經の行者を輕賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろ
びざるは候はず、日蓮又かくのごとし、始めはしるしなきやうなれ
ども今二十七年が間、法華經守護の梵釈・日月・四天等さのみ守護
せずば仏前の御誓むなしくて無間・大城に墮つべしとお
そろしく想う間今は各各はげむらむ、大田の親昌・長崎次郎兵衛の
尉時綱・大進房が落馬等は法華經の罰のあらわるるか、罰は総罰・
別罰・顯罰・冥罰・四候、日本国の大疫病と大けかちとどしうちと
他国よりせめらるるは総ばちなり、やくびやうは冥罰なり、大田
等は現罰なり別ばちなり、各各師子王の心を取り出していかに人を
どすと

もをづる事なかれ、師子王は百獸にをぢず師子の子又かくのごと
し、かれら彼等は野干やかんのほうるなり日蓮にちれんが一門いちもんは師子の吼ほうるなり、故
さいみよつじ
最明寺殿の日蓮をゆるししと此の殿の許ゆるししは禍なかりけるを人
のざんげんと知りて許ゆるししなり、今はいかに人申もうすとも聞きほどか
ずしては人のざんげんは用もちい給たまうべからず、設たといい大鬼神きじんのつける人
なりと

も日蓮にちれんをば梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天等してん・天照太神てんしょうだいじん・八幡はちまんの守護しゆごし給たまうゆへに
ばつしがたかるべしと存たまたじ給たまうべし、月月・日日につより給たまへすこし
もたゆむ心あらば魔たよりをうべし。

われらぼんが我等凡夫のつたなさは経論きょうろんに有ある事と遠き事はおそるる心な
し、一定として平等びやうどうも城等もいかりて此の一門いちもんをさんざんとなす
事も出来しゅつたいせば眼まなこをひさいで観念かんねんせよ、当時とうじの人人ひとびとのつくしへかささ
れんずらむ、又ゆく人又か

しこに向える人人ひとびとを我が身にひきあてよ、当時とうじまでは此こゝの一門いちもんに此こゝのなげきなし、彼等かれらはげんはかくのごとし殺されば又地獄じじくへゆくべし、我等われら現げんには此こゝの大難だいなんに値あうとも後生ごしょうは仏ぶつになりなん、設たとえば灸治やいとのごとし当時とうじはいたけれども後の薬くすりなればいたくしていたからず。

彼かれらのあつわらの愚癡ぐちの者ものどもいゝはげましてをどす事ことなかれ、彼等かれらにはただ一えんにおもい切れ・よからん

は不思議ふしぎわるからんは一定とをもへ、ひだるしとをもわば餓鬼道がきををしへよ、さむしといわば八じゅうかん地獄じごくををしへよ、をそろししといわばたかにあへるきじねこにあえるねずみを他人たにんとをもう事なかれ、此これはこまごまと

かき候事きこうじはかくとしどし月月・日日にちじつに申もうして候へどもなごへの尼せう房ぼうのと房三位房ぼうさんいぼうなどのやうに候、をくびやう物をぼへずよくふかくうたがい多おほき者ものどもはぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ。

三位房さんいぼうが事は大不思議だいふしぎの事ことども候いしかどもとのばらのをもちにちえは智慧ちえある者をそねませ給たまうかと、ぐちの人ひとをもいなんとをもちて物ものも申もうさで候いしが、はらぐるとなりて大難だいなんにもあたりて候ぞ、なかなかさんざんと・

だにも申せしかばたすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに

申さざりしなり、又かく申せばおこ人どもは死もうの事を仰せ候と
申すべし、鏡のために申す又此の事は彼等の人人も内内はおぢおそ
れ候らむとおぼへ候ぞ。

人のさわげばとてひやうじなんと此の一門にせられば此れへかき
つけてたび候へ 恐恐 謹言。

十月一日

日蓮

花押

人人御中

さぶらうぎへもん殿のもとにとどめらるべし。

十八歳御作

1192p

先度強敵こつてきととりあひについて御文給おんふみたまいき委くわく見まいらせ候、さても・さても・敵人てきじんにねらはれさ給たまいしか、前前さきざきの用心ようじんといひ又けなげといひ又法華經ほけきょうの信心しんじんつよき故ゆえに難なんなく存命ぞんめいせさせ給たまい目出たし目出たし、夫それ運うんきはまりぬれば兵法へいぽうもいらす・果報かほうつきぬればしよじゆつ所従しよせんもしたがはず、所詮しよせん運うんものこり果報かほうもひかゆる故ゆゑなり、ことにほけきょう法華經ほけきょうの行者ぎやうじやをば諸天しよてん・善神ぜんじん・守護しゆごすべきよし属累品ぞくゑいぼんにして誓状せいじやうをたて給たまい一切いっさいの守護神しゆごしん・諸天しよてんの中なかにも我等われらが眼まなこに見みへて守護しゆごし給たまうはうは日月天にちがつなり争いか言いをとらざるべき、ことに、ことに日天にってんの前に摩利支天まろしてんまします。日天にってん・法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを守護しゆごし

給はんに所従の摩利支天尊すで給うべしや、序品の時・名月天子・
普光天子・宝光天子・四大天王与其眷属・万天子俱と列座し給ふ、
まりし天は三万天子の内なるべし、もし内になくば地獄にこそおは
しまさんずれ、今度の大事は此の天のまほりに非ずや、彼の天は劍
形を貴辺にあたへ此へ下りぬ、此の日蓮は首題の五字
を汝こそづく、法華經受持のものを守護せん事疑あるべからず、
まりし天も法華經を持ちて一切衆生をたすけ給う、「臨兵闘者皆
陣列在前」の文も法華經より出でたり、「若説俗間經書治世語言
資生業等皆順正法」とは是なり、これにつけてもいよいよ強盛に
大信力をいだし給へ、我が運命つきて諸天守護なしとすらむる事あ
るべ
からず。

將門はつわもの名どとり兵法の大事をきはめたり、されども

王命にはまけぬ、はんくわひ・ちやうりやうもよしなし・ただ心こそ
大切なれ、いかに日蓮にぢれんいのり申もうすとも不信ふしんならばぬれたる・ほくち
に火をうちかくるがごとくなるべし、はげみをなして強盛じやうじやうに信力
をいだし給たまうべし、すぎし存命ふ不思議しぎとおもわせ給たまへなにの兵法よ

りも法事經の兵法をもちひ給うべし、「諸余怨敵・皆悉摧滅」の金言
むなしかるべからず、兵法劍形の大事も此の妙法より出でたり、ふ
かく信心をとり給へ、あへて臆病にては叶うべからず候、恐
謹言。

十月二十三日 日蓮花押

四條金吾殿御返事

一 一 一 一 一
四條金吾殿御返事

弘安三年十月五十九

歳御作

1193p

殿岡より米送り給び候、今年七月・孟蘭盆供の僧膳にして候、
自恣の僧・靈山の聴衆・仏陀・神明も納受随喜し給うらん、尽
せぬ志・連連の御訪い言を以て尽くしがたし。

何となくとも殿の事は後生菩提ごしょうぼだい疑うたがなし、何事なにごとよりも文永八年
の御勘気ごかんきの時既に相模さがみの国竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は
馬の口に付いて足歩赤足かちはだしにて泣き悲み給たまいし事実じじつにならば腹きらん
との気色なりしをば、いつの世にか思い忘るべき、そのみならず
佐渡さどの島に放たれ北海の雪の下もとに埋もれ北山の嶺の山下風に命助
かる

べしともをばへず、年来の同朋ともどちにも捨てられ故郷へ帰らん事は大海たいかい
の底のちびきの石の思ひしてさすがに凡夫ほんぶなれば古郷の人人ひとびとも恋し
きに在俗さいぞくの官仕隙みやすかえひまなき身に此の経を信ずる事こそ稀有さんごうなるに山河
を凌しのぎ蒼海そうかいを経て遙はるかに尋ね来り給たまいし志こころざし 香城かうじょうに骨を碎くだき雪嶺せつりやうに
身を投げし人人ひとびとにも争いでか劣り給たまうべき、又我が身はこれ程に浮うび
難なんか

りしがいかなりける事にてや同十一年の春の比赦免しよめんせられて鎌倉かまくらに

歸り上りけむ、情事の情を案ずるに今は我身わがみに過あやまちあらじ、或あるは
命いのちに及およばんとし弘長こうじやうには伊豆の国ぶんえい文永には佐渡さどの島しま諫かんぎ暁再三きやうさいさんに及
べば留難重るなんちゆうじやう 置おせり、仏法中怨ぶつぽうちゆうおんの誠責かいしやくをも身みにははや免まぬれぬらん。

然るに今山林に世を遁れ道を進まんと思ひしに人人の語様なりしかども旁存ずる旨ありしに依りて当国・当山に入りて已に七年の春秋を送る、又身の智分をば且らく置きぬ法華經の方人として難を忍び疵を蒙る事は漢土の天台大師にも越え日域の伝教大師にも勝れたり、是は時の然らしむる故なり、我が身法華經の行者ならば靈山の教主釈迦宝浄世界の多宝如来・十方分身の諸仏本化の大士迹化の大菩薩梵釈竜神十羅刹女も定めて此の砌におはしますらん、水あれば魚すむ林あれば鳥来る蓬莱山には玉多く摩黎山には梅檀生ず麗水の山には金あり、今此の所も此くの如し仏・菩薩の住み給う功德聚の砌なり、多くの月日を送り読誦し奉る所の法華經の功德は虚空にも余りぬべし、然るを毎年度度の御参詣には無始の罪障も定めて今生一生に消滅すべきか、弥はげむべしはげむべし。

十月八日

日蓮にちれん

花押かおう

四条中務三郎左衛門殿御返事さえもんごへんじ

一一二二

四条金吾許御文 しじょうきんご おんふみ

弘安三年十二月 五

十九歳御作

与四条金吾女房 しじょうきんごにようぼう

1195p

白小袖一つ・わた懸十両たしかたびそうら慥に給候い畢おわんぬ、歳もかたぶき候又ところ処は山
の中風はげしく庵室あんしつはかこの目の如ごとし、うちしく物は草の葉きたる
物はかみぎぬ身のひゆる事は石の如ごとし、食物は冰こおりの如ごとくに候へば此
の御小袖給候て頓やが

身をあたたまらんと・をもへども明年の一日とかかれて候へば迦葉かしよう
尊者そんじやの・足山にこもりて慈尊じそんの出世しゅつせ・五十六億七千万歳せんまんをまたるる
もかくやひさしかるらん。

ほうもん法門の事うけ給たまわり候こそ・よに・すずしくおほ覺え候へ此の御引出物
これはさてをき候ぬ、しぬぢの四郎がかたり申もうし候・御前ごぜんの御

に大事だいじの法門ほうもん一つかき付けてまいらせ候、八幡大菩薩はちまんだいぼさつをば世間せけんの
智者ちしゃ愚者ぐしゃ大体だいたいは阿弥陀あみた仏ぶつの化身けしんと申し候もうぞ、其それもゆへなきにあら
ず中古ちゆうこの義ぎに、或あるは八幡はちまんの御託宣たくせんとて阿弥陀あみた仏ぶつと申しける事こと少少
候、
此これはをのをの心の念ねん仏者ぶつにて候故ゆえにあかき石いしを金かねと思おもひくひせを
うさぎと見るが如ごとし、其それ実まことには釈迦しゃか仏ぶつにて、おはしまし候もうぞ、
其そのの故ゆえは大隅だいごの国くにに石体いしの銘めいと申もうす事ことあり、一つの石いしわれて二つに
なる、一つの石いしには八幡はちまんと申もうす二字にじあり、一つの石いしの銘めいには「昔むかし
りょうじゅうせん 霊鷲山りじゅうざんに於おいて妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを説とき今正宮いませいぐうの中に在ありて大菩薩だいぼさつと
しげん 示現しげんすに云いふ、
是これ釈迦しゃか仏ぶつと申もうす第一だいいちの証文しょうもんなり、此これよりもことにまさしき事こと
候、此この八幡大菩薩はちまんだいぼさつは日本国にほんこく人王にんおう第十四代じゅうしだい・仲哀天皇ちゆうあいてんは父ちちなり、第
十五代神功皇后しんこうこうごうは母ははなり、第十六代応神天皇おうじんてんのうは今いまの八幡大菩薩はちまんだいぼさつ

是なり、父の仲哀天皇は天照太神の仰せにて新羅国を責めんが
為に渡り給いしが新羅の大王に調伏せられ給いて仲哀天皇ははか
たにて

崩御ありしかば、きさきの神功皇后は此の太子を御懷妊ありなが
らわたらせ給いしが、王の敵をうたんとて数万騎のせいをあい具し
て新羅国へ渡り給いしに、浪の上船の内にて王子御誕生の氣いでき
見え給う、其の時

神功皇后ははらの内の王子にかたり給ふ、汝は王子か女子か王子
ならばたしかに聞き給へ我は君の父仲哀天皇の敵を打たんが為に
新羅国へ渡るなり、我が身は女の身なれば汝を大将とたのむべし、
君日本国の主となり給うべきならば今度生れ給はずして軍の間腹
の内にて数万騎の大将となりて父の敵を打たせ給へ是を用ひ給は
ずして只今生れ給うほどならば海へ入れ奉らんずるなり、我を恨
みに思い給うなと有りければ、王子・本の如く
胎内にをさまり給いけり、其の時石のをびを以て胎をひやし新羅国
へ渡り給いて新羅国を打ちしたがへて還つて豊前の国うさの宮につき
給いここに王子誕生あり、懐胎の後三年六月三日と申す甲寅の
年四月八日に生れさせ給う是を応神天皇と号し奉る、御年八十と
申す壬申の年二月十五日にかくれさせ給ふ、男山の主・我が朝の
守護神正体めづらしからずして靈験新たにおはします今の八幡大

菩薩ぼさつ是これなり。

又しやく釈迦かに如来によらいは住劫にんじゆう第九の滅・人壽じんじゆう百歳の時淨じゆうばん飯王ばんを父とし摩耶まや夫人ふじんを母として中天竺てんじく伽毘羅衛国びららんに蘭らんと申もうす処ところにて甲寅きのえとらの年四月八日に生れさせ給たまいぬ、八十年を経て東天竺てんじく俱尸那城くしなじょう跋提へ河の辺にて二月十五日壬みずのえさる申まにかくれさせ給たまいぬ、今の八幡大菩薩はちまんたいぼさつも又是かくのことくの如ごとし、月氏がっしと日本にほんと父母ふぼはかわれども四月八日きのえとらと甲寅きのえとらと

二月十五日と壬みずのえさる申まとはかわる事なし、仏滅度ほとけめつどの後・二千二百二十余年ねんが間がっし・月氏がっし漢土かんど・日本にほん・一閻浮提えんぶだいの内に聖人しやうにん・賢人けんじんと生るる人ひとをば皆釈迦如来みなしやくかによらいの化身けしんとこそ申せども・かかる不思議ふしぎは未だ見聞いま けんもんせず。

かかる不思議ふしぎの候上八幡大菩薩はちまんたいぼさつの御誓ごちかいは月氏がっしにては法華經ほけきやうを説しいて正直捨方便しちゆうじきしやほうべんとなのらせ給たまい、日本国にほんこくにしては正直しちゆうじきの頂いただきに

やどらんと誓い給ふ、而るに去ぬる十一月十四日の子の時に御宝殿
をやいて天にのぼらせ給いぬる故をかながへ候に此の神は正直の人
の頂いただきにやどらんと誓へるに正直しょうじきの人の頂いただきの候はねば居処なき
故ゆえに

栖しやかなくして天にのぼり給いけるなり、日本国の第一だいいちの不思議ふしぎには
釈迦如来しやかの国うえんに生れて此の仏しやかをすてて一切衆生いっさいしゆじやう皆みな一同あみだぶつに阿弥陀仏あみだぶつ
につけり、有縁うえんの釈迦しやかをばすて奉り無縁むえんの阿弥陀仏あみだぶつをあをぎたてま
つりぬ、其その上親父

釈迦しやくが仏ぶつの入滅にゅうめつの日ひをば阿弥陀あみだ仏ぶつにつけ又誕生あみだぶつの日ひをば薬師やくしになし
ぬ、八幡はちまん大菩薩だいぼさつをば崇あがむるやうなれども又本地ほんちを阿弥陀あみだ仏ぶつになし
ぬ、本地ほんち垂迹すいじやくを捨すつる上に此この事ことを申まうす人ひとをばかたきとする故ゆえに
力ちから及およばせ給たまはずして此この神かみは天あめにのぼり給たまいぬるか、但ただし月つきは影かげを
水みづにうかぶる濁にごれる水みづには栖すむことなし、木きの上草のうさの葉はなれども澄あめ
る露つゆには移うつる事ことなれば、かならず国主くにぬしならずとも正直しんじきの人ひとのかう
べにはやどり給たまうなるべし。

然しかれば百王ひゃくおうの頂いただきにやどらんと誓ちかい給たまいしかども人王いちだいに八十一代
安徳あんとく天皇てんのう・二代にだい隱岐いんぎの法皇ほうおう・三代さんだい阿波あわ・四代よんだい佐渡さど・五代ごだい東とう一条いちじょう等とうの
五人ごにんの国王こくおうの頂いただきにはすみ給たまはず、諂曲てんじくの人ひとの頂いただきなる故ゆえなり、
頼朝よりともと義時よしときとは臣下しんかなれども其その頂いただきにはやどり給たまふ正直しんじきなる故ゆえ
か、此これを以もつて思おもうに法華ほけ經きやうの人人ひとびとは正直しんじきの法ほふにつき給たまふ故ゆえに
釈迦しやくが仏ぶつ・猶是なほこれをまほり給たまふ、況いはや垂迹すいじやくの八幡はちまん大菩薩だいぼさつ争あはれは是これをまほり

給はざるべき、浄き水なれども濁りぬれば月やどる事なし、糞水なれどもすめば影を惜み給はず、濁水は清けれども月やどらず糞水はきたなければもすめば影ををしまず、

濁水は智者学匠の持戒なるが法華經に背くが如し、糞水は愚人の無戒なるが貪欲ふかく瞋恚強盛なれども法華經計りを無二無三に信じまいらせて有るが如し、涅槃經と申す經には法華經の得道の者を列ねて候に、
蝮蠍と申して糞虫を挙げさせ給ふ、竜樹菩薩は法華經の不思議を書き給うに、虫と申して糞虫を仏になす等云、又

涅槃經に法華經にして仏になるまじき人をあげられて候には「一闍提の人の阿羅漢の如く、大菩薩の如き」等云云、此等は濁水は浄けれども月の影を移す事なしと見えて候、されば八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼり給うとも、法華經の行者を見ては

争いかでか其その影うをばをしみ給たまうべき、我いちもんが一門はは深く此このの心こころを信まぜさせ
給たまうべし、八幡大菩薩はちまんたいぼさつは此こゝにわたらせ給たまうなり、疑うたがいい給たまう事ことな
れ疑うたがいい給たまう事ことなかれ、恐きよつきよ恐きよつきよ謹言けんげん。

十二月十六日

日蓮にちれん 花押かおう

四条金吾殿しじよきんご 女房御返事にようぼうごへんじ

一一一三 四条金吾殿御返事

弘安五年正月六十一

歳御作 1198p

満月まんげつのごとくなるもちゐ二十かんろのごとくなる。せいす一つ。
給候たひそうらい畢おわんぬ、春のはじめの御悦よろこびは月のみつるがごとく。しをのさ
すがごとく草くさのかこむが如ごとく雨あめのふるが如ごとくと思し食すべし。

そもそも

抑おさ八日は各各の御父・釈迦しやくが仏ぶつの生なれさせ給たまい候し日なり、彼の

日に三十二のふしぎあり。一には一切いっさいの草木そうもくに花さき・みなる。二に
は大地だいちより一切いっさいの宝たからわきいづ。三には一切いっさいのでんばたに雨あめふらずし
て水みづわきいづ。四には夜よ変かへ

じてひるの如ごとし。五には三千世界さんぜんせかいに欺あやまのこゑなし、是かくの如ごとく吉
瑞きずの相あひのみにて候し、是より已この来かた今いまにいたるまで二千二百三十余年

が間・吉事には八日をつかひ給たまい候なり。

然しかるに日本にほんこく・皆みな釈迦しやくか仏ぶつを捨すてさせ給たまいて候なに・いかなる過か去この

善ぜん根こんにてや・法ほ華け經きやうと釈しやく迦か仏ぶつとを御おん信しん心しんありて・各おの各おのあつまらせ

給たまいて八日やっぴつをくやう申もうさせ給たまうのみならず・山やま中なかの日ひ蓮れんに華はなかうを

・をくらせ候なやらん、たうとし・たうとし、恐きやう恐きやう。

正月七日

日に蓮れん花か押お

人人ひとびと御ご返へん事じ

一一四 月水御書

ぶんえいがんねん
文永元年四月四十三歳御作

1199a

伝え承はる御消息しやうそくの状いわに云く法華經ほけきやうを日ごとごとに一品づつ二十八
日まいにちが間に一部をよみまいらせ候しが当時とうじは薬王品やくおうほんの一品を毎日まいにちの
所作しよさにし候、ただもとの様に一品づつをよみまいらせ候べきやら
んと云云ほけきやう、法華經ほけきやうは一日の所作しよさに一部八卷・二十八品ある・或は一卷
ある・或は一品いちげ・一偈いっく・一句二字ある・或は題目だいもくばかりを南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと
只一遍ただいっぺんとなへある・或は又一期いちよこの間に只一度ただひとたびとなへある・或は又一期いちよこの間に
ただ一遍いっぺんとな唱うるを聞いて随喜ずいきしある・或は又随喜ずいきする声こゑを聞いて
随喜ずいきしこゝろ・是体こゝろに五十展転ごじゅうてんでんして末すゑになりなば志こゝろもうすくなり
随喜ずいきの心の弱き事ずいき・二三歳の幼穉こゝろの者もののはかなきが如くごと・牛馬ぎまなん

どの前後を弁へざるが如くなりとも、他経を学する人の利根にして
智悪かしこく・舍利弗・目連・文殊・弥勒の如くなる人の諸経を胸の
内にうかべて御坐まさん人人の御功德よりも勝れたる事・百千万億
倍なるべきよ

し・経文並に天台・妙楽の六十巻の中に見え侍り、されば経文に
は「仏の智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得ず」と説かれて

仏の御智慧すら此の人の功德をばしろしめさず、仏の智慧のあり
がたさは此の三千大千世界に七日・若しは二七日など・ふる雨の
数をだにも・しろしめして御坐候なるが只法華経の一字を唱えたる
人の功德

をのみ知しめさずと見えたり、何に況や我等逆罪の凡夫の此の功德
をしり候いなんや、然りと云えども如来滅後二千二百余年に及んで
五濁さかりになりて年久し事にふれて善なる事ありがたし、設ひ善

を作人も一の善に十の悪を造り重ねて結句は小善につけて大悪を造り心には大善を修したりと云ふ慢心を起す世となれり、然るに如来

の世に出でさせ給いて侯し国よりしては二十万里の山海をへだてて東によれる日域辺土の小嶋に生まれ五障の雲厚うして三従のきづなにつながれ給へる女人などの御身として法華経を御信用侯はありがたしなんど。

とも申すに限りなく候、凡そ一代聖教を扱き見て顕密二道を
究め給へる様なる智者学匠だにも近來は法華經を捨て念仏を
申し候に何なる御宿善ありてか此の法華經を一偈・一句もあそば
す御身と生れさせ給いけん。

されば此の御消息を拜し候へば優曇華を見たる眼よりもめづらし
く一眼の龜の浮木の穴に値へるよりも乏き事かなと心ばかりは有
がたき御事に思いまいらせ候間、一言・一点も隨喜の言を加えて
善根の余慶にもやとばげみ候へども只恐らくは雲の月をかくし塵
の鏡をくもらすが如く短く拙き言にて殊勝にめでたき御功德を
申し隠しくもらす事にや候らんといたみ思ひ候ばかりなり、然りと
云えども貴命もだす黙止べきにあらず一滴を江海に加へ
火を日月にそへて水をまし光を添ふると思し食すべし、先法華經
と申すは八卷・一卷・一品・一偈・一句・乃至題目を唱ふるも功德

は同じ事と思し食すべし、譬えば大海の水は一滴なれども無量の
江河の水を納めたり、如意宝妹は一珠なれども万宝をふらす、百
千万億の滴珠も又これ同じ法華経は一字も一の滴珠の如し、乃至
万億の字も

又万億の滴珠の如し、諸経・諸仏の一字一名号は江河の一滴の永
山海の一石の如し、一滴に無量の水を備えず一石に無数の石の徳を
そなへもたず、若し然らば此の法華経は何れの品にても御坐しませ
只御信用の御坐さん品こそめづらしくは候へ。

総じて如来の聖教は何れも妄語の御坐すとは承り候はねども。
再び仏教を勸えたるに如来の金言の中にも大小・権実・顕蜜なん
ど申す事・经文より事起りて候、随つて論師・人師の釈義にあらあ
ら見えたり、詮を放つて申さば釈尊の五十余年の諸教の中に先
四十年の説教は猶うたがはしく候ぞかし、仏、自ら無量義経に

「よんじゅうよねんいま
四十余年未だ真実

をあらわ顯あらわさず」と申もうすきようもん經文きようもんまのあたり説たまかせ給たまへる故たまなり、法華經ほけきように
於おいてはみずか仏いっく、自もんじらもんじ一句の文字もんじを「正しやうじき直しやうじきに方便ほうべんを捨たてて但ただ無むじようどう上道むじようどうを説
く」と定たまいめさせ給たまいいぬ、其その上たほうぶつ多宝たほうぶつ・大だいち地だいちより涌い出いでさせ給たまいいて
「妙みやうほけきよう法華經ほけきよう 皆かいぜしんじつ是真しんじつ實じつ」と証しやうみやう明みやうを加たへ十じゆっぼう方ぼうの諸しよぶつ仏ぶつ・皆みなほけきよう法華經ほけきようの座ざに
あつまりて舌しやうを出だして法華經ほけきようの文字もんじは一字いちじなりとも妄語もうごなるまじ
きよし

助成をそへ給へり、譬えば大王と后と長者等の一味同心に約束を
なせるが如し、若し法華經の一字をも唱えん男女等・十悪・五逆・
四重等の無量の重業に引かれて悪道におつるならば日月は東より
出でさせ給はぬ事はありとも・大地は反覆する事はありとも・大海
の潮はみちひぬ事はありとも、破たる石は合うとも江河の水は大海
に入らず

とも・法華經を信じたる女人の世間の罪に引かれて悪道に墮つる事
はあるべからず、若し法華經を信じたる女人・物をねたむ故・腹の
あしきゆへ・食欲の深きゆへなどに引れて悪道に墮つるならば・
釈迦如来・多宝仏・十方の
諸仏・無量曠劫より・このかた持ち来り給へる不妄語戒忽に破れて
調達が虚誑罪にも勝れ瞿伽利が大妄語にも超えたらん争か・しか
るべき也。

法華經を持つ人・悪しく有りがたし、但し一生が間二悪をも犯さ
 ず・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち
 一切經をそらに浮べ・一切の諸仏・菩薩を供養し無量の善根をつま
 せ給うとも、法華經計りを御信用なく又御信用はありとも諸經・
 諸仏にも並べて思し食し・又並べて思し食さずとも他の善根をば隙
 なく行じ
 て時時・法華經を行じ・法華經を用ひざる謗法の念仏者なんども
 語らひをなし、法華經を末代の機に叶はずと申す者を科とも思し
 食さずば・一期の間・行じさせ給う処の無量の善根も忽にうせ・並
 に法華經の御功德も且く隠れ
 させ給いて、阿鼻大城に墮ちさせ給はん事・雨の空にとどまらざる
 が如く・峰の石の谷へころぶが如しと思し食すべし、十悪・五逆を造
 れる者なれども法華經に背く事なければ往生成仏は疑なき事

に侍り、一切経をたもち諸仏・菩薩を信じたる持戒の人なれども
法華経を用る事無ければ悪道に墮つる事疑なしと見えたり。

予が愚見をもつて近来の世間を見るに多くは在家・出家・誹謗の
者のみあり、但し御不審の事・法華経は何れの品も先に申しつる様
に愚かならねども殊に二十八品の中に勝れてめでたきは方便品と
寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作に
は方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候へ又別に書
き出

しても・あそばし候べく候、余の二十六品は身に影の随したがひ玉たからに財そらの
そな備つとわるが如ごとし、じゆりようほん寿量品・ほうべん方便品をよみ候へば自然じねんに余品じようぶつはよみ候は
 ねども備はり候なり、やくおうほん薬王品・だいば提婆品は女人にょにんの成仏じようぶつ往生を説かれ
 て候品にては候へどもだいば提婆品は方便品ほうべんの枝葉しやう・やくおうほん薬王品は方便品と
じゆりようほんじゆりようほんしやうの枝葉にて候、されば常には此の方便品ほうべん・じゆりようほん寿量品の二品を
 あそばし候て余の品をば時時じじ・御いとまのひまに・あそばすべく候。
 又御消息しようそくの状いわに云く日ごとに三度づつ七つの文字もんじを拜はいしまいら
 せ候事と、南無なむ一乗いちじやう妙具と一万遍もつ申し候事とをば日ごとにし候が、
 例の事に成つて候程は御経をばよみまいらせ候はず、拜はいしまいらせ
いちじやうみよつてん候事も一乗いちじやう妙典みよつてんと申し候事も・そらにし候は苦くしかるまじくや候
 らん、それも例の事の日数の程は叶かなうまじくや候らん、いく日ばか
 りに

てよみまいらせ候はんずる等と云云、此の段は一切いっさいの女人にょにんごとの

御不審ふしんに常に問せ給たまい候御事おんことにて侍りはべ、又古いにしえへも女人にょじんの御不審ふしんに付ついて申もうしたる人も多く候へども一代いちだい聖教しょうきょうにさして説とかれたる処ところのなきかの故ゆえに証文しょうもん分明ぶんめいに出したる人もおはせず、日蓮にちれん粗ほ聖教しょうきょうを見候いまにも酒肉しゅにく・五辛ごしん・婬事いんじなんどの様に不浄ふじょうを分明ぶんめいに月日をさして禁いまめたる

様に月水をいみたる経論きょうろんを未だ勘かんへず候なり、在世ざいせいの時多く盛さかんの女人にょじん・尼にになり仏法ぶつぽうを行ぜしかども月水の時と申もうして嫌きらはれたる事なし、是これをもつて推おし量り侍るはべに月水と申もうす物は外より来れるふじょう不浄ふじょうにもあらず、只女人ただにょじんのくせ癖くせかたわ生死しじょうじの種を継つぐべき理ことわりにや、又長病ながわづらいの様なる物なり例せば屎尿しりょうなどは人の身より出れども能よく浄よくなしぬれば別にいみもなし是体これていに侍るはべ事か。

されば印度いんど・戸那しななんどもいたくいむよしも聞えず、但ただし日本国にほんこくは神国しんこくなり此の国の習として仏ぼん・菩薩ぼさつの垂迹すいじやく不思議ふしぎに経論きょうろん

にあひにぬ事も多く侍るに・是をそむけば現に当罰あり、委細に
経論を勘へ見るに仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当れ
り、此の戒の心はいたう事かけざる事をば少少仏教にたがふとも
其の国の風俗に違うべからざるよし仏一つの戒を説き給へり、此の
由を知らざる智者共神は鬼神なれば敬ふべからずなんと申す

強義いじぎを申まうして多くの檀那だんなを損こずる事ありと見えて候あなり、若もし然しからば此この国の明神みょうじん・多分たぶんは此この月水げつすいをいませ給たまへり、生なまを此この国くににひとびとつけん人人ひとびとは大おおいに忌いみ給たまうべきか、但ただし女人にょにんの日ひの所作しよさは苦くるしかるべからずと覺おぼえ候あか、元もとより法華經ほけきょうを信ませざる様さまなる人人ひとびとが經きやうをいかにしても云いうとめんと思おもうが、さすがに、ただちに經きやうを捨すてよとは

云いいえずして、身みの不淨ふじようなどにつけて法華經ほけきょうを遠とほざからしめんと思おもう程ほどに、又不淨ふじようの時とき・此これを行なずれば經きやうを愚おろかにしまいらする・なんど、おどして罪つみを得えさせ候あなり、此この事ことをば一切いっさい御心ごころ得えて月水げつすいの御時おんときは七日ななひまでも其その氣いきの有あらん程ほどは御經ごきやうをば、よませ給たまはずして暗くらみに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえさせ給たまい候あへ、礼拜らいはいをも經きやうにむかは

給たまはずして拜たませさせ給たまうべし、又不慮りんじゆうに臨終りんじゆうなんどの近ちかづき候あはん

には魚鳥などを服せさせ給うても侯へよみぬべくば経をもよみ
および南無妙法蓮華経とも唱えさせ給い侯べし、又水などは
申すに及び侯はず又南無一乗妙具と唱えさせ給う事 是れ同じ事
には侍れども天親菩薩・天台大師等の唱えさせ給い侯しが如く只
南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべきか、是れ子細ありてかくの
如くは申し候なり、穴賢穴賢。
文永元年甲子四月十七日
花押

大学三郎殿御内御報

一一二五 大学三郎殿御書 建治元年七月五十四

歳御作

1203p

日蓮

外道げどうには天・人・畜さんぜんどうの三善道さんぜんどうを明あかし鬼道きどうの有無うむ之これを論ろんじて地獄道じごくは其その沙汰さた無し、小乗經しょうじょうきょうには六道ろくどうの因果いんがを明あかして四聖ししやうの因果いんが以もつてぶんみよう分明ぶんめいならず、俱舍くしゃ・成実じやうじつ・律りつの三宗さんしゆはしょうじょうきょう小乗經しょうじょうきょうに依憑えひようして但ただ六道ろくどうを明あかす是これなり、三論宗さんろんしゆは天台宗てんだいしゆ已前いぜんに天竺てんじくより之これを渡わたす八界はつがいを立たててて十界じゆっかいを明あかさず、法相宗ほうそうしゆは又また天竺てんじくの宗しゆなり天台てんだい已後いごに唐とうの太宗たいそうの世よに之これを渡わた

す、又八界を立つ大乘為りと雖も五性各別を立て無性有情は永く成仏せずと之を立つ殆んど外道の法に似たり自他宗の歎きなり、華嚴宗・真言宗の両宗は天台已後に之有り、華嚴宗は唐の則天皇后の御宇に之を立つ、真言宗は玄宗の時善無畏三蔵之を渡す但し天竺に真言宗の名之無し無畏三蔵・大日経を以て宗と為すの故に猥りに天竺の宗と称するか、此の二宗共に十界を立つ但し天台宗已後なり智者大師の巧智を偷盜して自身の才能と

号するか。

ぶつせつ ごと これ かんが ほけきょう けごんきょう だいしつきょう はんにやきょう
仏説の如く之を勘うれば法華経の外華嚴経・大集経・般若経・
だいにおちきょう じんみつ しよきょう しょうえんそうたい ほけきょう ばか
大日経・深密経等の諸経は但小衍相對なり但法華経計りに限つて
いこんとう けんぞく しゆたら な いかど てんだい いぜん
已今当を以て眷属の修多羅と為す、然りと雖も天台已前の諸師
ほけきょう いっさい だいじょうきょう しょうえんそうたい これ しゃく おうしん
法華経等の一切の大乗経を小衍相對を以て之を釈す、王臣の

差別無く上下之を混すぶつぼういまだ 顕れず愚癡の失之有り、天台已後てんだい に諸宗小衍相對の經經を以て権実相對之を定む、天台の智之をこれ 盗めり、日月に背いて灯に向い丘塚を華恒に比する是なり、仏はつね 十八界修羅は十九界天台は四智真言は五智天台は九識十識真言はしんこん 十識十一識而るを天台の學者之に誑惑おほわく せられ悉く実義なりと思ひ、法華經は釈尊の所説にて民の万言のごと 如く大日經は天子の鳳文にて王の一言の如し等云云、善無畏三蔵ぜんむいさんぞう 事を天竺に寄せ法華經と大日經と理同事勝と立つ是れ一の謬言なり、日蓮は論師・人師の添言を捨てて専ら經文を勸うるに大日經だいにちきよう 一部六卷並びに供養法の卷・一卷・三十一品之を見聞するに声聞しやうもん 乗と縁覺乗と大乘の菩薩と仏乘の四乘之を説く、其の中の大乘のだいじよう 菩薩乗とは三蔵教の三祇の菩薩乘なり仏乘は実大乘なりじつだいじよう 法華經に及ばざるの上華嚴般若にも劣り但だ阿含と方等との二ほうとう

經なり、大日經の極理は未だ天台の別教・通教の極理にも及ばざるなり。

弘法大師延暦二十三年に入唐し大同二年に歸朝す、三箇年の間
慧果和尚に値いて真言の秘教を學習し歸朝の後十住心二教論
これを注して世間に流布す、釈迦牟尼仏並びに大日經二仏の所説の
勝劣之を定む、第一大日經・

第二・華嚴經・第三法華經・浅きより深きに至る義なり華嚴經・

法華經に勝るとは南北の二義を取るなり又華嚴宗の義なり、南北

並びに弘法大師は無量義經・法華經・涅槃經の三經を見ざる愚人な

り、仏既に分明に華嚴經と無量義經との勝劣之を説く、何ぞ聖言

を捨てて南北の凡謬に付かんや、近きを以て遠きを察するに將た又

大日經と法華經との勝劣之を知らず、大日經には四十余年の文

之無く又已今当の言之を削る一乗作仏・久遠実成之無し、法華經

と大日經との勝劣之を論ぜば民と王と石と珠との勝劣高下是な

り、而るに安然和尚粗之を顕す然りと雖も但だ華嚴經と法華經と

の勝劣は之を明むるに似たれども法華・大日經の勝劣之に闇うし

て闇と漆との如くなり、

慈覚大師は本伝教大師に稟くと雖も本を捨て末に付き入唐の間・

真言家の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云

云、賢きに似たれども但だ善無畏の僻見を出でざるのみ。

而るに日蓮末代に居し粗此の義を疑う遠きを尊み近きを賤み死せるを上げ生けるを下す、故に当世の学者等之を用いず、設い堅く三帰五戒・十善戒・二百五十戒・五百戒十無尽戒等の諸戒を持つる比丘・比丘尼等も愚癡の失に依つて小乗経を大乘経と謂いこんだいじよつきよう権大乘経をじつだいじよつきよう実大乘経なりと執する等の謬義出来ず、大妄語大殺生大偷盗等の大逆罪の者なり、愚人は之を知らずして智者と尊む、設い世間の諸戒之を破る者なりとも堅く大小・権実等の経をわきま弁えせけんば世間の破戒はぶつぽう仏法の持戒なり、涅槃経に云く「戒に於て緩なる者を名けて緩と為さず乘に於て緩なる者を乃ち名けて緩と為す」等云云、法華経に云く「是を持戒と名く」等云云、重き故に之を留む、事事靈山を期す、恐恐謹言。

七月二日

日蓮

花押

一一二六 星名五郎太郎殿御返事

文永四年十二

月 四十六歳御作

1206p

漢の明夜夢みしより迦竺二人の聖人初めて長安のとぼそに臨み
しより以来唐の神武皇帝に至るまで天竺の仏法震旦に流布し、梁の
代に百済国の聖明王より我が朝の人王三十代欽明の御宇に仏法初
めて伝ふ、其れより已来一切の経論諸宗皆日域にみたり、幸なる
かな生を末法に受くるといへども靈山のきき耳に入り身は辺土に
居せりといへども大河の流れ 掌 に汲めり、但し委く尋ね見れば
仏法に於て大小・権実前後のおもむきあり、若し
此の義に迷いぬれば邪見に住して仏法を習ふといへども還つて
十悪を犯し五逆を作る罪よりも 甚 しきなり、爰を以て世を厭ひ

道を願はん人先ず此の義を存ずべし、例せば彼の苦岸比丘等の如し、故に大經に云く「若し邪見なる事有らんに命終の時正に阿鼻獄に墮つべし」と云へり。

問う何を以てか邪見の失を知らん予不肖の身たりといへども随分後世を畏れ佛法を求めんと思ふ、願くは此の義を知らん、若し邪見に住せばひるがへして正見におもむかん、答う凡眼を以て定むべきにあらず浅智を以て明むべきにあらず、經文を以て眼とし仏智を以て先とせん、但恐くは若し此の義を明さば定めていかりをなし憤りを含まん事を、さもあらばあれ仏勅を重んぜんにはしからず、其れ世人は皆遠きを貴み近きをいやしむ但愚者の行ひなり、其れ若し非ならば遠とも破すべし其れ若し理ならば近とも捨つべからず、人貴むとも非ならば何ぞ今用いん、伝え聞く彼の南三・北七の十流の学者威徳ことに勝れて天下に尊重せられし事既に五百余

年まで有り

しかども陳隋ちんずい二代の比天台てんだいだい大師だいし是これを見て邪義じゃぎなりと破はす、天下てんかに

此の事をよつて聞いて大きに是これをにくむ、然しかりといへども陳王隋帝の賢王けんおう

たるに依よつてて彼の諸宗しよしゆうに天台てんだいを召し決せられ、邪正じゃせいをあきらめて前

五百年の邪義じゃぎを改あらため

みなことごとく大いに
皆悉く大師に歸す。

又我が朝の叡山の根本大師は南都北京の碩学と論じて仏法の
邪正をただす事。皆經文をさきとせり、今当世の道俗貴賤皆人を

あがめて法を用いず心を師として經によらず、之に依て。或は念仏

權教を以て大乘妙典をなげすて。或は真言の邪義を以て一実の

正法を謗す、是等の類豈大乘誹謗のやからに非ずや、若し經文

の如くならば争か那落の苦みを受けざらんや、之に依て其の流をく

む人もかくの如くなるべし、疑つて云く念仏・真言は是れ

或は權。或は邪義又行者。或は邪見。或は謗法なりと此の事甚だ

以て不審なり、其の故は弘法大師は是れ金剛薩の化現第三地の

菩薩なり、真言は是れ最極甚深の秘密なり、又善導和尚は西土の

教主弥陀如来の化身なり、法然上人は大勢至菩薩の化身なりかく

の如きの上人を豈に邪見の人と云うべきや、答えて云く此の事本よ

り私の語を以

て是を難ずべからず經文を先として是をただすべきなり、真言の

教は最極の秘密なりと云うは三部經の中に於て蘇悉地經を以て王

とすと見えたり、全く諸の如來の法の中に於て第一なりと云う事を

見ず、凡そ佛法と云うは善悪の人をゑらばず皆仏になすを以て

最第一に定むべし、是れ程の理をば何なる人なりとも知るべきこと

なり、若し

此の義に依らば經と經とを合せて是を×すべし、今法華經には二乘

成仏あり真言經には之無しあまつさへ・あながちに是をきらへり、

法華經には女人成仏之有り真言經にはすべて是なし、法華經には

悪人の成仏之有り真言經には全くなし、何を以てか法華經に勝れ

たりと云うべき、又若し其の瑞相を論ぜば法華には六瑞あり、所謂

雨華地動し白毫相の光り上は有頂を極め下は阿鼻獄を照せる是な

り、又多宝の塔大地より出て分身の諸仏・十方より来る、しかのみならず上行等の菩薩の六万恒沙五万四万三万乃至一恒沙半恒沙等大地よりわきいでし事此の威儀不思議を論ぜば何を以て眞言・法華にまされりと云わん、此等の事委くのぶるにいとまあらず・はづかに大海の一滴を出す。

愛いとに菩提心論ぼだいしんろんと云う一卷の文あり、竜猛菩薩りゅうもうぼさつの造と号す、此の書いに云く「唯真言法ただしんごんの中に即身成仏そくしんじょうぶつす故に是れ三摩地さんまじの法を説くに依て經文きやうもんに就てこれを見るに即身成仏そくしんじょうぶつの語は有れども即身成仏そくしんじょうぶつの人全くなし、たとひありとも法華經ほけきやうの中に即身成仏そくしんじょうぶつあらば諸教しよきやうの中にをい

てかいて而もかかずと云うべからず此の事はなはだ甚だ以て不可なり、但し此の書は全く竜猛りゅうもうの作にあらず委き旨は別に有るべし、設たとひ竜猛菩薩りゅうもうぼさつの造なりともあやまりなり、故に大論だいろんに一代いちだいをのぶる肝要かんようとして「般若はんやは秘密ひみつにあらず二乗作仏にじやうさぶつなし法華ほつげは是秘密ひみつなり二乗作仏にじやうさぶつあり」と云えり、又云く「二乗作仏にじやうさぶつあるは是秘密ひみつ二乗作仏にじやうさぶつなきは是顯教けんきやう」と云えり、若し菩提心論ぼだいしんろんの語ことばの如くならば別しては竜樹りゅうじゆの大論だいろんにそむき総じては諸仏出世しよぶつしゆつせの本意ほんい・一大事いちだいじの

因縁をやぶるにあらざや、今竜樹・天親等は皆釈尊の説教を弘めんが爲に世に出ず、付法蔵二十四人の其の一なり何ぞ此の如き妄説をなさんや、彼の真言は是れ般若経にも劣れり何に況や法華に並べんや、爾るに弘法の秘蔵宝鑰に真言に一代を撰ずるとして法華を第三番に下し、あまつさへ戯論なりと云えり、謹んで法華經を披きたるに諸の如来の所説の中に第一なりと云えり、又已今当の三説に勝れたりと見えたり、又薬王の十喩の中に法華を大海にたとへ日輪にたとへ須弥山にたとへたり、若し此の義に依らば深き事何ぞ海にすぎん・明かなる事何ぞ日輪に勝れん高き事何ぞ須弥山に越ゆる事有らん、喩を以て知んぬべし何を以てか法華に勝れたりと云はんや、大日経等に全く此の義なし但己が見に任せて永く仏意に背く、妙楽大師曰く「請う眼有らん者は委悉に之を

尋ねよ」と云へり、法華經を指て華嚴に劣れりと云うは豈眼ぬけた
るものにあらずや、又大經に云く「若し仏の正法を誹謗する者あ
らん正に其の舌を断べし」と、嗚呼誹謗の舌は世世に於て物云うこ
となく邪見の眼は生生にぬけて見ること無らん加之らず若し
人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終えて阿鼻獄に入
らんこの文の如くならば定めて無間・大城に墮ちて無量億劫のくる
しみを受けん、善導・法然も是に例して知んぬべし、

誰か智慧有らん人。此の謗法の流を汲んで共に阿鼻の焰にやかれん、行者能く畏るべし此れは是れ大邪見の輩なり、所以に如来誠諦の金言を按ずるに云く「我が正法をやぶらん事は譬えば獵師の身に袈裟をかけたるが如し、或は須陀・斯那含阿那含阿羅漢・辟支仏及び仏の色身を現じて我が正法を壊らん」といへり。

今・此の善導・法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらか

し如来の正法を滅す、就中彼の真言等の流れ偏に現在を以て旨と

す、所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる、

是くの如き少分のしるしを以て奇特とす、若し是を以て勝れたりと

いはば彼の月氏の外道等にはすぎじ、彼の阿闍多仙人は十二年の間

恒河の水を耳にただへたりき、又耆菟仙人の四大海を一日の中に

すひほし、留外道は八百年の間石となる豈是

にすぎたらんや、又瞿曇仙人が十二年の程積身と成り説法せし、

弘法こうぼうが刹那せつなの程ほどにびる毘盧舎那さなの身みと成りし、其そのの威徳いとくを論ろんぜば如何いかに、
若もし彼かの变化へんかのしるしを信しんぜば即すなわち外道げどうを信しんずべし当まさに知るべし彼
れ威徳いとくありといへども猶なほ阿鼻あびの炎えんをまぬがれず、況いはやはづかの变化へんか
にをいてをや況だいじょうひや大乘だいじょうひ誹謗ひぼうにをいてをや、是いっさいいしゆじょう一切衆生いっさいしゆじょうの悪知識あくちしき
なり近付おそくべからず畏おそる可おそし畏おそる可おそし、仏いわの曰いわく「悪象等あくぞうに於おいては
畏おそる心こころなかれ悪知識あくちしきに於おいては畏おそる心こころをなせ、何を以ゆえての故ゆえに
悪象あくぞうは但身たみをやぶり意いをやぶらず悪知識あくちしきは二共ふたにやぶる故ゆえに、此この
悪象等あくぞうは但たみ一身いしんをやぶる悪知識あくちしきは無量むりょうの身み無量むりょうの意いをやぶる、
悪象等あくぞうは但たみ不淨ふじょうの臭くさき身みをやぶる悪知識あくちしきは淨身じょうしん及び淨心じょうしんをやぶ
る、悪象あくぞうは但たみ肉身ごうしんをやぶる悪知識あくちしきは法身ほふしんをやぶる、悪象あくぞうの為ためにころ
されては三悪さんあくに至いたらず悪知識あくちしきの為ために殺ころされたるは
必さんあくず三悪さんあくに至いたる、此このの悪象あくぞうは但身たみの為ためのあだなり、悪知識あくちしきは善法ぜんぽうの
為ためにあだなり」と、故ゆえに畏おそる可おそきは大毒蛇どくじゃ悪鬼神あくきじんよりも弘法善導こうぼうぜんどう・

ほうねん
法然等の流の悪知識を畏るべし、略して邪見の失を明すこと畢んぬ。

此の使あまりに急ぎ候ほどにとりあへぬさまにかたはしばかりを
申し候、此の後又便宜に委く経釈を見調べてかくべく候、
あなかしこあなかしこ
穴賢穴賢、外見あるべからず候若命つれなく候はば仰せの如く明
年の秋下り候て且つ申すべ

く候、きょうきょう 恐恐。

十二月五日

にちれんかおう
日蓮花押

星名五郎太郎殿御返事ごへんじ

二二二七

大豆御書ごしよ

ぶんえい
文永七年十月 四十九歳御作

1210p

大豆一石かしまつて拜領しおわ畢ほけきょうぬ法華經の御宝前ほうぜんに申もう上候、
一の水たいかいを大海たいかいになげぬれば三災さんさいにも失せず一華いっけを五淨ごじゆんによせぬれ
ば劫火ごうかにもしぼまず、一豆いちとうを法華經ほけきょうになげぬれば法界ほっかいみな蓮れんなり、
恐惶きょうきょう謹言きんげん。

十月二十三日

にちれんかおう
日蓮花押

御所御返事ごへんじ

一一二八

寿量品得意抄じゅうりょうぽん とくいしやう

文永八年四月五十歳ぶんえい

御作

1210p

教主きやうしゅ釈尊しゃくそん 寿量品じゅうりょうぽん を説き給うとたまに爾前にぜん・迹門しゃくもんのききをあげて云く
一切世間いっさいせけんの天人てんにん及び阿修羅あしゅらは皆今みなの釈迦牟尼しゃかむに仏ぶつは釈氏しゃくしの宮を
出でて伽耶城がやじやうを去ること遠からず道場どうじやうに坐して
あのかたらさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提あうたらかさんみやくさんぼだいを得たりと謂えり云云、此の文の意は初め
華嚴經けこんきやうより終り法華經安樂行品ほけきやう あんらくぎやうぽんに至るまで一切いっさいの仏ぶつの御弟子おんでし大
菩薩等ぼさつの知る処ところの思いの心中しんちゆうをあげ
たり、爾前にぜんの經きやうに二つの失とがあり、一には「行布こんを存ぞんする故ゆえに仍いま未だ

権を開せずと申して迹門方便品の十如是の一念三千開権顕実
にじょうさぶつほうもんを説かざる過なり、二には始成を言う故に尙未だ
迹を發わずと申して

くおんじつじょう じゆりようほん

久遠実成の寿命品を説かざる過なり、此の二つの大法は一代

じようきょう

の綱骨一切経の心髓なり、

迹門には二乗作仏を説いて

にじようさぶつ

を説いて

よんじゆうよねん

四十余年の二つの失一つを脱したり、

然りと雖も

未だ寿命品を説

かざれば

いちなんさんぜん

一念三千もあらはれず

二乗作仏も定まらず、

水にや

どる月の如く根無し草の浪の上に浮べるに異ならず、又云く「然る

に善男子

我実に成仏してより

已来無量无边百千万億那由佉劫

等に

云云、此の文の心は華嚴経の始成正覚と申して始めて仏になると

説き

たま あこんきょう

給ふ阿含経の初成道

浄名経

の始坐仏樹大集経の始十六年

大日経の我昔坐道場

仁王経の二十九年、無量義経の我先道場

法華経方便品の我始坐道場等を一言に大虚妄なりと打破る文なり、

本門寿命品に至って始成正覚やぶるれば四教の果やぶれ四教

の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ、

因とは修行弟子の位なり、

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

爾前・迹門の因果を

打破つて本門の十界因果をときあらはす是れ則ち本因・本果の

法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界にそなへて実

の十界互具・百界千如・一念三千なるべし、かうしてかへてみるとき

は華嚴經の台上盧舍那・阿含經の丈六の小釈迦方等・般若

金光明經・阿弥陀經・大日經等の權仏等は此の壽量品の仏の

天月のしばらくかげを

大小のうつはものに浮べ給つを、諸宗の智者学匠等は近くは自宗

にまどひ遠くは法華經の壽量品を知らず水中の月に実月のおもひ

をなして或は入つて取らんとおもひ或は繩をつけてつなぎとど

めんとす、此れを天台大師釈して云く「天月を識らずして但池月を

観ず」と、心は、爾前・迹門に執着する者はそらの月をしらずして

但池の

月をのぞみ見るが如くなりごとくと釈せられたり、又僧祇律の文に五百の
×山より出でて水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが実に
は無き水月なれば月とられずして水に落ち入つて×は死にけり、×
とは今の提婆達多だいばだつた・六群比丘等びくなりとあかし給へりたま。

一切経いっさいききょうの中に此の寿量品じゅうりょうほんましまさずは天に日月にちがつ無く国だいおうに大王な
く山海に玉なく人にたましゐ無からんがごとし、されば寿量品じゅうりょうほんな
くしては一切経いっさいききょういたづらごととなるべし、根無き草はひさしからず
みなもとなき河は遠から

ず親無き子は人にいやしまる、所詮しよせん 寿量品じゆほうさんぜの肝心かんじん南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやう
こそ十方三世の諸仏しよぶつの母にて御坐おわし候へ 恐恐きようきよう 謹言きんげん。

四月十七日

日蓮にちれん 花押かおう

一一二一九 五人士籠御書ごしよ

文永八年十月 五十歳ぶんえい

御作 於相模依智作さがみえち

与日朗・日心・坂部入道にゅうべい
伊沢入道・得業寺いざわいどう

五人御中参おんちゆう

日蓮にちれん

せんあくてご房をばつけさせ給へ 又またし四郎ら奴うめが一人あらんす

るがふびんに候へば申す。

今月七日さどの国へまかるなり、各各は法華經一部づつあそばし
て候へば我が身並びに父母・兄弟・存亡等に回向しまし申し候らん、
今夜のかんずるにつけていよいよ我が身より心くるしさ申すばかり
なし、ろうをいで

させ給いなば明年のはるかならずきたり給えみみへまいらすべし、
せうどのの但一人あるやつをつけよかしとをもう心心なしとをもう
人一人もなければしぬまで各各御はぢなり。

又大進阿闍梨はこれにさたすべき事かたがたあり、又をのをの
御身の上をもみはてせんがれうにとどめをくなり、くはしくは
申し候わんずらん、恐恐謹言。

十月三日

にちれんかおう
日蓮花押

五人御中おんちゆう

一一三〇

土籠御書ごしよ

文永八年十月

与日郎

1213p

日蓮にちれんは明日・佐渡さどの国へまかるなり、今夜のさむきに付けてもろ

うのうちほけきようのありさま思いやられて・いたはしくこそ侯へそつらあはれ殿は

法華經一部を色心しきしん二法共にあそばしたる御身おんみなれば・父母ふぼ・六親ろくしん・

一切衆生いっさいじゆじゆをも・たすけ

給たまうべき御身おんみなり、法華經ほけきようを余人のよみ候は口はかり・ことばはか

りは・よめども心はよまず・心はよめども身によまず、色心しきしん二法共

にあそばされたるこそ貴く侯へそつら天諸童子しよとじ・以為給使きゆうじ・刀杖たうじやう不加毒

不能害と説かれて侯へそつら別べちの事はあるべからず、籠かこをばし出いでさせ

給たまい候はば・とくとくとく・きたり給へたま見たてまつり見えたてまつらん、

きょうきょうきんげん
恐 謹言。

ぶんえい ぶんえい
文 永 八 年 辛 未 十 月 九 日
にちれんかおう
日 蓮 花 押

筑後殿

一一三一 日 妙 聖 人 御 書

ぶんえい
文 永 九 年 五 月 五 十

一 歳 1 2 1 3 p

御 作 過 去 に 樂 法 梵 志 と 申 ず 者 有 り ぎ、 十 二 年 の 間 多 くの 国 を めぐりて 如 來 の 教 法 を 求 む、 時 に 總 て 仏 法 僧 の 三 宝 一 つ も な し、 此 の 梵 志 の 意 は 渴 して 水 を も と め 飢 えて 食 を も と む る が ご と く 仏 法 を 尋 ね 給 い き、 時 に 婆 羅 門 有 り 求 め て 云 く 我 れ 聖 教 を 一 偈 持 て り 若 し 実 に 仏 法 を 願 は ば 当 に あ た ふ べ し、 梵 志 答 えて 云 く し か な り、

婆羅門ばらもんの云いく実じつに志こころざし あらば皮かわをはいで紙かみとし骨ほねをくだいて筆ふでとし髓すいをくだいて墨すみとし血ちをいだして水みづとして書かかんと云

はば仏の偈げを説かん、時に此の梵志ぶつご悦よろこびをなして彼が申もうすごとくして皮かわをはいで乾して紙かみとし乃ないし至いた一言いちごんをもたがへず、時に婆羅門ばらもん・忽然こつねんとして失なぬ、此の梵志・天あまにあふぎ・地ちにふす、仏陀ぶつだ此れを感じて下した万まんより涌ゆ出でて・説いわて云いく「如法まじは心しんに修行しゆぎやうすべし非法ひぼうは行なずべからず今世いま若もしは後世ごしやう・法ほふを行なずる者は安穩あんのんなり」等云云、此の梵志・須臾しゆゆに仏ぶつになる・此これは二十字じふごなり、昔しや釈迦か菩薩ぼさつ・轉輪王てんりんおうたりし時とき「夫生ちやうし輒ちやく死し此滅こく為な樂らく」の八字はちを尊たび給たまう故ゆえに身みをかへて千燈せんとうにともすして此の八字はちを供養くやうし給たまい人ひとをすすめて石壁いっぺき・要路ようろに・かきつけて見る人ひとをして菩提心ぼだいしんをおこさしむ、此の光明こうみやう・とう利天りてんに至いたる天てんの帝釈たいしやく並ならびに諸天しよてんの燈とうとなり給たまいき。

昔しや釈迦か菩薩ぼさつ・仏法ぶつぽうを求ため給たまいき、癩人らいにんあり此の人ひとにむかつて我われれ正法しやうぽうを持たてり其その字じ・二十じふなり我われが癩病らいびやうをさすりいだきねぶり日に兩三斤りやうさんしんの肉にくをあたへば説いわくべしと云いう、彼かが申もうすごとくして二十

字を得て仏になり給う、所謂「如来は涅槃を証し永く生死を断じ給う、若し至心に聴くこと有らば当に無量の樂を得べし」等云。

昔雪山童子と申す人ありき、雪山と申す山にして外道の法を
通達せしかども、いまだ仏法をきかず、時に大鬼神ありき説いて
云く「諸行無常是生滅法」等云云、只八字計りを説いて後をとかず
時に雪山童子・此の八字を得て悦きはまなけれども半なる如意珠
を得たるがごとく華さき菓ならざるにいたり、残の八字を。きか
んと申す、
時に大鬼神の云、我れ数日が間・飢えて正念乱るゆへに後の八字を
ときがたし食をあたへよと云う、童子問うて云く何をか食与る、鬼
答えて云く我は人のあたたかなる血肉なり、我れ飛行自在にして
須臾の間に四天下を回つて尋ぬれどもあたたかなる血肉得がし、人

をば天守り給う故に失なければ殺害する事かたし等云云、童子
の云く我が身を布施として彼の八字を習い伝えんと云云、鬼神の
云く智慧甚だ賢し我をやすかさんずらん、童子答えて云く瓦礫
に金銀をかへんに是をかえぎるべしや我れ徒に此の山にして死しな
ば鴟梟虎狼に食はれて一分の功德なかるべし、後の八字にかえなば
糞を飯にかふるがごとし、鬼の云く我いまだ信ぜず、童子の云く証
人

あり過去かこの仏も・たて給たまいし大梵天王・釈提桓因・日月・四天も証人
にたち給たまうべし、此の鬼神きじん後の偈げをとかんと申もうす、童子どうじ身にきたる
鹿の皮を・ぬいで座にしき踞こ跪が合掌がつしやうして此の座につき給たまへと請しす、
大鬼神きじん・此の座について説いわて云く「生滅滅已・寂滅為樂」等云云、此
の偈げを習ならひ学がくして若もしは木・若もしは石等に書き付けて身を大鬼神きじんの
になげいれ給たまう、彼の童子どうじは今の釈尊しゃくそん　彼の鬼神きじんは今の帝釈たいしゃく
なり。

薬王菩薩やくおうぼさつは・法華經ほけきやうの御前おんまえに臂ひじを七万二千歳せんさいが間まともし給たまい、
不輕菩薩ふぎやうぼさつは多年ふが間ま・二十四字じゅうにじやくの故ゆえに無量無辺むりやうむへんの四衆ししゆうに罵詈めり・毀辱きにく
杖木じやうもく・瓦石がしやく・而ちやうちやく打擲ちやうちやく之せられ給たまいき、所謂いわゆる二十四字じゅうにじやくと申もうすは「我
深く汝等なんじを敬うやむ敢あえてて輕慢きやうまんせず所以ゆえんは好なんじん汝等みなぼさつ皆菩薩みなぼさつの道みちを行なじ
て当まさに作さぶつ仏ぶつすることを得うべし」等云云、かの不輕菩薩ふぎやうぼさつは今の教主きやうしゆ
釈尊しゃくそんなり、昔むかしの須頭檀王だんおうは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじの為ために千歳せんさいが間ま・

阿私仙人にせめつかはれ身を床となさせて給いて今の釈尊となり給う。

然るに妙法蓮華経は八巻なり・八巻を読めば十六巻を読むなるべし、釈迦・多宝の二仏の経なる故へ十六巻は無量無辺の巻軸なり、十方の諸仏の証明ある故に一字は二字なり釈迦・多宝の二仏の字なる故へ一字は無量の字なり十方の諸仏の証明の御経なる故に、譬えば如意宝珠の玉は一珠なれども二珠乃至无量珠の財をふらすこと。

これをなじ・法華経の文字は一字は一の宝・無量の字は無量の宝珠なり、妙の一字は二つの舌まします釈迦・多宝の御舌なり、この二仏の御舌は八葉の蓮華なり、この重なる蓮華の上に宝珠あり妙の一字なり。

此妙の珠は昔釈迦如来の檀波羅密と申して身をうえたる虎にか

ひし功德・鳩にかひし功德・戸羅波羅密と申して須陀摩王としてそ
らごとせざりし功德等、忍辱仙人として・歌梨王に身をまかせし
功德・能施太子・尚闍梨仙人等の六度の功德を妙の一字にをさめ
給いて末代悪世の我等衆生に一善も修せざれども六度万行を満足
する功德をあたえ給う、今此三界・皆是我有・其中衆生・悉是吾子
これなり、我等具縛の凡夫忽に教主釈尊と功德ひとし彼

の功德くどくを全体ぜんたい受け取る故ゆゑなり、経きやうに云いく「如に我等が無む為むい」等とう云々、
法華經ほけきやうを心得こころえるものは釈尊しゃくそんと齊等さいとうなりと申もうす文ぶんなり、譬たとえば父ふ母ぼ
和合わがくわして子こをうむ子の身みは全体ぜんたい父ふ母ぼの身みなり誰たれか是これを争あらそうべき、
牛王ぎゆうわうの子こは牛王ぎゆうわうなりいま獅子王ししおうとならず、獅子王ししおうの子こは獅子王ししおうと
なる・いまだ人王にんわう・天王てんわうよならず、今いま法華經ほけきやうの行ぎやう者は其中こちゆう衆生じゆうじやう
悉是しつぱい吾子ごしと申もうして教主きやうしゆう釈尊しゃくそんの御子ごしなり教主きやうしゆう釈尊しゃくそんのごとく法王ほうわうと
ならん事こと・難なんかるべからず、但ただし不孝ふこうの者は父ふ母ぼの跡あとをつがず
堯王ぎやうわうには丹朱たんしゆと云いふ太子たいしあり舜王しゆんわうには商均しやうきんと申もうす王子みこあり、二
人ふた共に不孝ふこうの者ものなれば父ちちの王わうにすてられて現身げんしんに民たみとなる、重華ちやうがと
禹うとは共に民たみの子こなり・孝養きやうやうの心こころふかかりしかば堯ぎやう・舜しゆんの二王にわう・召まし
て位ゐをゆづり給たまいき、民たみの身み・忽たちち玉体たまにならせ給たまいき、民たみの現身げんしんに
王わうとなると凡夫ぼんぶの忽たちに仏ぶつとなると同じ事ことなるべし、一念いちねん三千さんぜんの肝心かんじん
と申もうすはこれなり、なをいかにとしてか此こ功德くどくをばうべきぞ、

ぎょうぼうほんじ
樂法梵志・雪山童子等のごとく皮をはぐべきか・身をなく

べきか臂ひじをやくべきか等云云、章安大師だいいし云く「取捨宜しゆしゃしきを得て

一向いっこうにすべからず」等これなり、正法しやうぽうを修しゆして仏ぶつになる行は時によ

るべし、日本国にほんこくに紙しなくば皮かわをはぐべし、日本国にほんこくに法華經ほけきやうなくて知

れる鬼神きじん一人出来しゆつたいせば身をなくべし、日本国にほんこくに油あぶらなくば臂ひじをもと

もすべし、あつき紙し・国くにに充満じゆうまんせり皮かわを・はいで・なにかせん、然しか

に玄奘げんじやうは西天さいてんに法ほふを求めて十七年じゆうまん・十万里じゆうまんにいたれり、伝教御人でんきやう

唐とう但二年たんになり波濤はとう三千里さんぜんをへだてたり。

此等これらは男子なんしなり・上古じやうこなり・賢人けんじんなり・聖人しやうにんなり・いまだきかず

女人にょにんの仏法ぶつぽうをもとめて千里せんりの路ぢをわけし事ことを竜女りゆうにょが即身そくしん成じやう仏ぶつも

摩訶まか波闍はじゃ波提はだい比丘びく尼にの記きべつにあづかりしも、しらず権化こんげにやあり

けん、又在世さいせの事ことなり、男子なんし・女人にょにん其そのの性本じやうほんより別わかれたり・火ひはあた

たかに・水みづはつめたし海人あまは魚いさなをとるに・たくみなり・山人やまかつは鹿しかをと

るに・かしこし、女人は物をそねむに・かしこしとこそ経文には・あ
かされて候へ、いまだきかず仏法に・かしこしとは、女人
の心を清風に譬えたり風はつなぐとも・とりがたきは女人の心な
り、女人の心をば水にゑがくに譬えたり、水面には文字とどまらざ
るゆへなり、女人をばおう人にたとへたり、或時は実なり、或時は
虚なり、女人をば河に譬え

たり一切いっさいまがられるゆへなり、而しかるに法華經ほけきょうは、正直捨方便しょうじきしゃほうべん等、
 皆是かいぜんしんじつ真實等、質直意柔軟にゆうなん等、柔和質直者等もうと申もうして正直しょうじきなる事、
 弓の弦のはれるがごとく、墨のなはをうづがごとくなる者の信じま
 いらする御經もうじなり、糞せんたを梅檀もうたと申もうすとも梅檀せんたの香かなし、妄語もうじの者を
 不妄語もうじと申もうすとも不妄語もうじにはあらず、一切經いっさいきょうは皆みな仏ぶつの金口きんくの説、不
 妄語もうじ
 の御言みことばなり、然しかれども法華經ほけきょうに對し、まいらすれば妄語もうじのごとし、椅
 語ごのごとし、惡口あくくのごとし、兩舌りゅうじのごとし、此の御經ごこそ実語じつごの中の
 実語じつごにて候まごへ、実語じつごの御經ごをば、正直ちうじつの者もの心得こころえ、候まごなり、今実語じつごの
 女人にょにんにて、おはずか当まさに知るべし須弥山しゆみせんを戴いたきて大海たいかいをわたる人
 をば見るとも此の女人にょにんをば見るべからず、砂をむして飯となす人を
 ば見るとも此の女人にょにんをば見るべからず、当まさに知るべし釈迦しゃか仏ぶつ、
 多宝たほう仏ぶつ、十方分身じゅうぽうぶんじんの諸しよ仏ぶつ、上行じやうぎやう、無辺行むへんぎやう等らの大菩薩だいぼさつ、大梵天王だいぼんてんのう、

たいしやく しおう 帝釈・四王等・此女人をば影の身に・そうがごとく・まほり給うら
ん、日本第一の法華經の行者の女人なり、故に名を一つつけたてま
つりて不輕菩薩の義になぞらへん・日妙聖人等云云。

そうじゆうかまくら 相州鎌倉より北国佐渡の国・其の中間二千余里に及べり、山海

はるかに・へだて山は蛾蛾・海は濤濤・風雨・時にしたがつ事なし、

さんぞく かいぞく 山賊・海賊克満せり、宿宿とまり・とまり・民の心・虎のごとし・犬の

ごとし、現身に三悪道の苦をふるか、其の上当世は世乱れ去年より

むほん 謀叛の者・国に充満し今年二月十一日合戦、其れより今五月のす

ゑい 今まだ世間安穩ならず、而れども一の幼子あり・あづくべき父

も・たのもしからず・離別すでに久し。

かたがた筆も及ぼさず心弁へがたければとどめ畢んぬ。

ぶんえい 文永九年太歳壬 申五月二十五日

にちれん 日蓮 花押

日
妙
聖しよ
人にん

一三二二 乙御前御消息

建治元年八月 五十四歳

御作 1218p

漢土かんどにいまだ仏法ぶつぽうのわたり候そうらはざりし時ときは三皇・五帝・三王・乃至
大公望たいこうぼう・周公旦しゅうこうたん・老子ろうし・孔子こうしをつくらせ給たまいて候そうらいし文ぶんをある・或あるは経とな
づけある・或あるは典等となづく、此この文ぶんを披ひらいて人ひとに礼儀れいぎをおしへ・父母ふぼを
しらしめ・王臣おうしんを定めて世よをおさめしかば人ひともしたがひ天あまも納受のうじゆを
たれ給たまふ、此これに・たがいし子こをば不孝ふこうの者ものと申し臣おみをば逆臣ぎやくしんの者もの
とて失とがにあてられし程ほどに、月氏がつしより仏経ぶつきようわたりし時とき・或ある一類いちるいは用もちふ
べからずと申し・或ある一類いちるいは用もちふべしと申せし程ほどに・あら
そひ出来しゅつたいて召よし合せたりしかば外典げてんの者もの・負おけて仏弟子ぶつでし勝ちにき、
其そのの後は外典げてんの者ものと仏弟子ぶつでしを合せしかば・冰こおりの日に・とくるが如ごとく

火の水に滅するが如く・まくるのみならず・なにともなき者となり
しなり、又仏経漸くわたり来りし程に仏経の中に又勝劣・浅深俟
けり、所謂小乗経・大乘経・頭経・密経・権経・実経なり、譬え
ば一切の石

は金に対すれば一切の金に劣れども・又金の中にも重重あり、一切
の人間の金は閻浮檀金には及び俟はず、閻浮檀金は梵天の金には
およびざるがごとく、一切経は金の如くなれども又勝劣・浅深ある
なり、小乗経と申す経は世間の小船のごとく・わづかに人の二人
・三人等は来すれども百千人は乗せず、設ひ二人・三人等は来すれ
ども此岸につけて彼岸へは行きがたし、又すこしの物をば入るれど
も大なる物をば入れがたし、大乘と申すは大船なり人も十・二十
人も来る上・大なる物をも・つみ鎌倉より・つくしみちの国へもいた
る。

じつきょう

もう

だいじょうきょう

実經と申すは又彼の大船の大乗經には・にるべくもなし、大な

ちんぼう

る珍宝をも・つみ百千人のりて・かうらいなんどへも・わたりぬべし、

いちじょうほけきょう

もう

一乗法華經と申す經も又是くのごと

、提婆達多と申すは閻浮第一

もう

えんぶだいいち

の大悪人なれども法華經にして天王如来となりぬ、又阿闍世王と

あくにん

ほけきょう

てんのうによらい

あじゃせ

申せしは父をころせし悪王なれども法華經の座に列りて一偈・一句

あくおう

ほけきょう

つらな

いちげ

いっく

の結縁

けちえん

の結縁

衆となりぬ、竜女と申せし蛇体の女人は法華經を文殊師利菩薩
と説き給ひしかば仏になりぬ、其の上仏説には悪世末法と時をささせ
給いて末代の男女にをくらせ給いぬ、此れこそ唐船の如くにて侯。
一乗經にてはおはしませ、されば一切經は外典に対すれば石と金
との如し、又一切の大乗經・所謂華嚴經・大日經・觀經・阿弥陀經
・般若經等の諸の經經を法華經に対すれば螢火と日月と華山と
蟻塚との如し、經に勝劣あるのみならず大日經の一切の眞言
師と法華經の行者とを合すれば水に火をあはせ露と風とを合する
が如し、犬は師子をほつれば腸くさる。修羅は日輪を射奉れば頭
七分に破る、一切の眞言師は犬と修羅との如く。法華經の行者は
日輪と師子との如し、泳は日輪の出でざる時は堅き事金の如し、火
は水のなき時はあつき事・鉄をやけるが如し、然れども夏の日に
あひぬれ

ば堅泳のとけやすさ・あつき火の水にあひて・きへやすさ、一切の
真言師は気色のたうとげさ・智慧のかしこげさ・日輪をみざる者の
堅き泳をたのみ・水をみざる者の火をたのめるが如し。

当世の人人の蒙古国をみざりし時のおごりは御覧ありしやうに・
かぎりもなかりしぞかし、去年の十月よりは・一人も・おごる者な
し、きこしめしし・やうに日蓮一人計りこそ申せしが・よせてだに・き

たる程ならば面をあはする人も・あるべからず、但さるの犬を・を
それ・かゑるの蛇を・をそるるが如くなるべし、是れ偏に釈伽仏の
御使

たる法華經の行者を・一切の真言師・念佛者・律僧等に・にくませて
我と損じ、ことさらに天のにくまれを・かほれる国なる故に皆人・
臆病になれるなり、譬えば火が水をおそれ・木が金をおぢ・雉が鷹
をみて魂を失ひ・ねずみが猫に・せめらるるが如し、一人も・たすか

る者あるべからず、其の時は、いかがせさせ給うべき、軍には大
將軍しょうぐんを魂とす大將軍しょうぐんをくしぬれば歩兵臆病つわものおくびょうなり。

女人にょにんは夫を魂とす。夫なければ女人魂なし、此の世に夫ある女人にょにん
すら世の中渡りわたがたふみえて侯に、魂もなくして世を渡らせ給うが
魂ある女人にょにんにも、すぐれて心中しんちゆうかひがひしくおはする上、神にも
心を入れ仏をもあがめさせ

給へば人に勝れておはする女人なり、鎌倉に候いし時は念仏者等は
さてをき候いぬ、法華経を信ずる人人は志あるもなきも知ら
れ候はざりしかども御勘気をかほりて佐渡の鳥まで流されしか
ば問い訪う人もなかりしに女人の御身としてかたがた御志あ
りし上我と来り給いし事うつつならざる不思議なり、其の上いま
の事つで又申すばかりなし、定めて神もまほらせ給ひ十羅刹も御
あはれみましますらん、法華経は女人の御ためには暗きにと
もしび海に船おそろしき所にはまほりとなるべきよしちかは
せ給へり、羅什三蔵は法華経を渡し給いしかば毘沙門天王は無量の
兵士をして葱嶺を送りしなり、道昭法師野中にして法華経をよみ
しかば無量の虎来りて守護しき、此れも又彼にはかはるべからず、
地には三十六祇天には二十八宿まほらせ給う上人には必ず二つ
の天影の如くにそひて候、所謂一をば同生天と云い二をば同名天

と申す左右の肩にそひて人を守護すれば、失な

き者をば天もあやまつ事なし。況や善人におひてをや、されば妙楽

大師のたまはく、「必ず心の固きに仮りて神の守り則ち強し」等云云、

人の心かたければ神のまほり必ずつよしとこそ候へ。是は御ために

申すぞ古への御心ざし申す計りなし。其よりも今一重強盛に御

志あるべし、其の時は弥弥十羅刹女の御まほりも。つよかるべし

と。おぼ

すべし、例には他を引くべからず、日蓮をば日本国の上一人より下

万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども。今までかう

のて侯事は一人なれども心のつよき故なるべしと。おぼすべし、一つ

船に乗りぬれば船頭のはかり事わるければ一同に船中の諸人損じ。

又身つよき人も心かひなければ多くの能も無用なり、日本国には。

か

しひとびとき人人はあるらめども大将のはかり事つたなければ・かひなし、い岐つしま・対馬・九ヶ国のつはもの並に男女多く・或はあるころされ・或はあるとらはれ・或はある海に入り・或はあるがけよりおちしもの・いくせんまんと云う事なし、又このたび今度よせなば先には・にるべくも・あるべからず、京と鎌倉とはかまくら但い岐つしま・対馬の如くなるべし、前にしたくして・いづくへも・にげさせ給へたま其の時はそのとき苦し日蓮を見じ聞かじと申せしひとびと人人もたなごころ掌をほけきあはせほうき法華經を信ずべし、念仏者・禅宗までも

南無妙法蓮華經と申すべし、抑法華經をよくよく信したらん
男女をば肩になひ背におうべきよし經文に見えて侯上くまら
ゑん三蔵と申せし人をば木像の釈迦をわせ給いて侯いしぞかし、
日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給いぬ昔と今と一同なり、各各は
日蓮が檀那なり争か仏にならせ給はざるべき。

いかなる男をせさせ給うとも法華經のかたきならば随ひ給うべか
らず、いよいよ強盛の御志あるべし、氷は水より出でたれども
水よりもすさまじ、青き事は藍より出でたれども、かさぬれば藍よ
りも色まさる、同じ法華經にては、をはすれども志をかさぬれば
他人よりも色まさり利生もあるべきなり、木は火にやかるれど
も梅檀の木

は、やけず、火は水にけさるれども仏の涅槃の火はきえず、華は風
にちれども淨居の華はしばまず、水は大旱魃に失れども黄河に入

りぬれば失せず、檀弥羅王と申せし悪王は月氏の僧の類を切りしに・とがなかりしかども・師子尊者の頸を切りし時・刀と手と共に一時に落ちにき、弗沙密多羅王は鷄頭摩寺を焼し時・十二神の棒にかふべわ

られにき、今・日本国の人人は法華經の・かたきと・なりて身を亡ぼし国を亡ぼしぬるなり、かう申せば日蓮が自訟なりと心えぬ人は申すなり、さには・あらず是を云わずば法華經の行者にはあらず、又云う事の後にあへばこそ人も信ずれ、かうただ・かきをきなばこそ未来の人は智ありけりとは・しり候はんずれ、又身軽法重・死身弘法と

のべて候ば身は軽ければ人は打ちはり悪むとも法は重ければ必ず弘まるべし、法華經弘まるならば死かばね還つて重くなるべし、かばね重くなるならば此のかばねは利生あるべし、利生あるならば

今の八幡大菩薩といははるるやうにいはうべし、其の時は日蓮を
供養せる男女は武内・若宮なんどのやうにあがめらるべしとおぼ
しめ

せ、抑一人の盲目をあけて候はん功德すら申すばかりなし、況や
日本国の一切衆生の眼をあけて候はん功德をや、何に況や一
閻浮提・四天下の人の眼のしゐたるを、あけて候はんをや、法華経
の第四に云く「仏滅度の後に能く其の義を解せんは是諸の天人
世間之眼なり」等云云、法華経を持つ人は一切世間の天人の眼な
りと説かれて

侯、日本国の人の日蓮をあだみ候は一切世間の天人の眼をくじ
人なり、されば天もいかり日日に天変あり地もいかり月月に地天か
さなる、天の帝釈は野干を敬いて法を習いしかば今の教主釈尊と
なり給い。雪山童子は鬼を師とせしかば今の三界の主となる、大聖
・上人は形を摘みて法を捨てざりけり、今日蓮おろかなりとも野干
と鬼

とに劣るべからず、当世の人いみじくとも帝釈・雪山童子に勝るべ
からず、日蓮が身の賤きについて巧言を捨てて侯故に国既に亡びん
とする。かなしさよ、又日蓮を不便と申しぬる弟子どもをも。たす
けがたからん事こそ。なげかしくは覚え候へ。

いかなる事も出来候はば是へ御わたりあるべし見奉らん。山中に
て共にうえ死にし候はん、又乙御前こそおとなしくなりて侯らめ、
いかにさかしく候らん、又又申すべし。

八月四日

にちれん かおう
日蓮 花押

おとごぜん
乙御前へ

一一三三三

おとごぜん
乙御前母御書

1222p

をとごぜんのはは

いまは法華経ほけきょうをしらせ給たまいて仏ぶつにならせ給たまうべき女人にょにんなり、かへすがへすふみものぐさき者ものなれども・たびたび申もうす、又御房ごぼうたちをも・ふびんにあたらせ給たまうとうけ給たまわる・申もうすばかりなし。

なによりも女房にょぼうのみとしてこれまで来りて候まういし事・これまでながされ候まういける事は・さる事にて御心おんこころざしの・あらわるべきにや・ありけん・ありがたくのみをばへ候まう、釈迦如来しやくかにょらいの御弟子おんでしあまた・をわ

ししなかに十大弟子でし

とて十人ましまししがなかに目・連尊者と申せし人は神通第一にて
をはしき、四天下と申して日月のめぐり給うところをかみすぢ一す
ぢきらざるにめぐり給いき、これはいかなるゆへぞと・たづぬれば・
せんしやうに千里ありしところをかよいて仏法を聴聞せしゆへな
り、又天台大師の御弟子に章安と申せし人は万里をわけて法華經
をきかせ給へり、伝教大師は二千里をすぎて止觀をならい玄奘
三蔵は二十万里をゆきて般若經を得給へり、道のとをきに心ざしの
あらわるるにやかれば皆男子なり権化の人のしわざなり、今御身
は女人なりごんじちはしりがたし・いかなる宿善にてやをはすら
ん、昔女人すいをとをしのびてこそ・或は千里をもたづね・石となり
・木となり・鳥となり・蛇となれる事もあり。

十一月三日

にちれん
日蓮在御判

をとごぜんのはは

をとごぜんが、いかに尼となり候いつらん、法華經ほけきょうにみやづかわせ候ほうこうをば、をとごぜんの尼は、のちさいわいなり候に。

一一三四

辨殿御消息べんどのしようそく

文永九年七月五十

一歳御作

1223p

不審ふしん有らば、諍論じょうろん無く書き付けて一日進まいらしむべし。

此このの書は随分ずいぶんの秘書ひそなり、已前いぜんの学文の時もいまだ存ぜられざる事粗ほぼ之これを載のす、他人たにんの御聴聞ちようもんなからん已前いぜん

に御存知有るべし、総じてはこれよりぐしていたらん人にはよりに
法門御聴聞有るべし互に師弟と為らんか、恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮花押

辨殿・大進阿闍梨御房・三位殿

一二三五 辨殿尼御前御書

文永十年九月 五十二歳

御作 与日昭母妙一 1224p

しげければとどむ、辨殿に申す大師講ををこなうべし・大師とて
まいらせて候、三郎左衛門尉殿に候、御文のなかに涅槃經の後分
二卷・文句五の本末・授決集の抄の上卷等・御隨身あるべし。

貞当は十二年にやぶれぬ・将門は八年にかたふきぬ、第六天の
魔王・十軍のいくさををこして法華經の行者と生死海の海中にし
て同居穢土をえととられじうばはんと・あらそつ、日蓮其の身にあひ
あたりて大兵ををこして二十余年なり、日蓮一度もしりぞく心な
し、しかりといえども弟子等・檀那等の中に臆病のもの大体だいたい或は
をちある或は
退転たいてんの心あり、尼にごぜんの一文不通いちもんぶつうの小心にいままでしりぞかせ
給たまわぬ事申すばかりなし、其の上自身じしんのつかうべきところところに下人を
一人つけられて候事定めて釈迦しゃか・多宝たほう・十方分身じゅうぽうふんじんの諸仏しよぶつも御知見ちけんあ
るか、恐恐おそおそ謹言きんげん

九月十九日

べんどのあまごぜん
辨殿尼御前に申させ給へ

にちれん
日蓮
かおう
花押

一一三六

辨殿御消息べんどのしよじぞく

建治二年七月

五十五歳御

作 与日昭

1225p

たきわうをばいゑふくべきよし候けるとてまかるべきよし申し候へばつかわし候、ゑもんのたいうどののかへせにの事は大進の阿闍梨あじゃりのふみに候らん。

一 十郎入道殿じゆじやうにゆうだうの御けさ悦よろこび入つて候よしかたらせ給たまえ。

一 さぶらうさゑもんのこのほど人をつかわして候しが、をほせ給たまいし事あまりに・かへすがへすをぼつかなく候よし、わざと御わたりありて・きこしめして・かきつかはし候べし、又さゑもんのにもかくと候へかわのべどの等の四人の事はるかにうけ給たまはり候はずおぼつかなし、かの辺になに事か候らん一一にかきつか

はせ、たびたび 度度この人人ひとびとの事はことに一大事と天をせめまいらせ候なり、さだめて後生ししやうはさてをきぬ今生こんじやうにしるしあるべく候と存ずべきよししたたかにかたらせ給たまへ伊東の八郎ざゑもん今はしなののかみはげんに、しに

たりしをいのりいけて念仏者等ねんぶつになるまじきよし明性房にをくりたりしがかへりて念仏者ねんぶつ・真言師しんごんしになりて無間地獄むげんじごくに墮たぬ、のと房はげんに身かたで候しが世間せけんのをそろしさと申もうしよくと申もうし日蓮にちれんをすつるのみならず・

かたきとなり候ぬ、せう房もかくの如ごとし。

おのおのは随分ずいぶんの日蓮にちれんがかたうどなり、しかるをなづきをくだきていのるにいままでしるしのなきは・し

の中に心のひるがへる人の有あると・をばへ候ぞ、をもちあわぬ人をいのるは水の上に火をたき空にいゑを・つく

るなり、此の由よしを四人にかたらせ給たまうべし、むこり国の事のあうを
もつておぼしめせ、日蓮にちれんが失とがにはあらず、ちくご房三位そつ等をば
いとまあらばいそぎ来るべし大事だいじの法門ほうもん申もうすべしとかたらせ給たまえ、
十住じゅうじゆ毘婆沙びばしゃ等の

要文を大帖にて候と真言の表のせうそくの裏にさど房のかきて候
と・そうじて・せせと・かきつけて候ものの・かるき・とりてたび候へ
紙なくして一紙に多く要事を申すなり。

七月二十一日

日蓮花押

辨殿

一一三七

弥源太殿御返事

1226p

抑日蓮は日本第一の僻人なり、其の故は皆人の父母よりもた
かく主君よりも大事におもはれ候ところの阿弥陀仏大日如来薬師
等を御信用ある故に、三災・七難先代にこえ天変地天等昔にもすぎ
たりと申す故に・結句は今生には身をほろぼし国をそこない後生に
は大阿鼻地獄に堕ち給うべしと、一日片時もたゆむ事なく・よ

ばわりし故ゆえにかかると大難だいなんにあへり、譬たとえば夏の虫の火にとびくばり
ねずみがねこのまへに出いでたるが如ごとし、是こゝにあに我が身を知つて用心まうじん
せざる畜生ちくじやうの如ごとくにあらずや、身命しんみやうを事失うしなふ・併しかしなら心より出ずれ
ば僻人びやくにんなり、但ただし石

は玉をふくむ故ゆえにくだかれ鹿は皮肉の故ゆえに殺され魚はあぢはひあ
る故ゆえにとらるすいは羽ある故ゆえにやぶらる・女人にょにんはみめかたちよけれ

ば必ずねたまる此の意なるべきか、日蓮にちれんは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなる故ゆえに
三種さんしゆの強敵きやうてきあつて種種しゆしゆの大難だいなんにあへり然しかるにかかると者ものの弟子でし・檀那だんな
とならせ給たまう事こと不思議ふしぎなり定めて子細しさい候らん相構かまえて能よくよく能よくよく御信心しんじん
候

て靈山りやうぜん浄土じやうどへまいり給たまへ。

又御祈ぎとうのために御太刀おほ同く刀あはせて二つ送り給たまはて候、此の
太刀はしかるべきかぢ作り候かと覺おぼへ候、あまくに・或あるは鬼あまきり・或ある

はやつるぎ異朝いちようにはかむしやうばくやが剣に争いかでかことなるべきや
此これを法華經ほけきよつにま

いらせ給う、殿の御もちの時は悪の刀今・仏前へまいりぬれば善の刀
なるべし、譬えば鬼の道心をおこしたらんが如し、あら不思議や
不思議や、後生には此の刀をつえとたのみ給うべし、法華経は三世
の諸仏発心のつえにて候ぞかし、但し日蓮をつえはしらともたのみ
給うべし、けはしき山あしき道つえを・つきぬれば・たをれず、
殊に手をひかれぬればまるぶ事なし、南無妙法蓮華経は死出の山
にてはつえはしらとなり給へ 釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は
手を取り給うべし日蓮さきに立ち候はば御迎にまいり候事もやあ
らんずらん、又さきに行かせ給はば日蓮必ず閻魔法王にも委く
申すべく候、此の事少しもそら事あるべからず、日蓮・法華経の文
の如くな
らば通塞の案内者なり、只一心に信心おはして靈山を期し給へぜ
にと云うものは用にしたがつて変ずるなり、法華経も亦復是くの如

し、やみには燈となり渡りには舟となり。或は水ともなり。或は火ともなり。給うなり、若し然らば法華經は現世安穩。後生善処の御經なり。

其上日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて彼国は天照太神のすみそめ給いし国なりといへり。かして日本国をさぐり出し給ふあはの国御くりやなりしかも此国の一切衆生の慈父悲母なりかかるといみじき国な

れば定んで故ぞ候らんいかなる宿習にてや候らん日蓮又彼国に生れたり第一の果報なるなり此消息の詮にあらざれば委しくはかかず。但おしはかり給うべし。

能く能く諸天にいのり申べし、信心にあかなくして所願を成就し給へ。女房にもよくよく。かたらせ給へ。恐恐謹言。

二月二十一日

日蓮にちれん
花押かおう
弥源やげん
大殿たいだん
御返事ごへんじ

別の事候まじ憑み奉り候上は最後はかうと思し食し候へ河野辺
 の入道殿のこひしく候に漸く後れ進らせて其のかたみと見まいらせ
 候はん、さるにても候へば如何が空しかるべきやさこそ覚え候へ。
 但し当世は我も法華経をしりたりと人毎に申し候、時に法華経の
 行者はあまた候、但し法華経と申す経は転子病と申す病の様に
 候、転子と申すは親の様なる子は少く候へども此の病は必ず伝わり
 候なり、例せば犬の子は母の吠を伝への子は母の用を伝えて鼠を
 取る、日本国は六十六箇国・嶋二つ、其の中に仏の御寺は一万一千
 三十
 七所其の内に僧尼・或は三千・或は一万・或は一千一百・或は十人

或は一人候へども其の源は弘法大師・慈覚大師・智証大師・此の
三大師の御弟子にて候、山の座主・東寺・御室・七大寺の検校、
園城寺の長吏・伊豆・箱根・日光・慈光等の寺寺の別当等も皆此の三
大師の嫡嫡なり、此の人人は三大師の如く読むべし、其れ此の三
大師・法華經と
一切經との勝劣を読み候しには弘法大師は法華經最第三と慈覚・
智証は法華經最第一・或は戲論などこそ読み候いしか今又
是くの如し。

但し日蓮が眼には僻目にてや候らん、法華經最第一皆是眞実と
釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏は説いて証明せさせ給へり此の三
大師には水火の相違にて候、其の末を受くる人人彼の跡を継で彼の
所領の田畠を我が物とせさせ給いぬれば何に争はせ給うとも三
大師の僻事ならば此の科遁れがたくやおはすらんと見え候へども・

にちれん
日蓮は怯弱「こつじやく」

の者にて候へばかく申もうす事をも人御用もちいなし、されば今日本にほんこく国のの
人ひと人びとの我も我も経を讀むといへども申もうす事用もちゆべしとも覺おぼえず候。

是はさて置き候ぬ御音信も候はねば何にと思いて候つるに御使
うれしく候、御所勞の御平愈の由うれしく候うれしく候、尚仰せを
蒙る可く候 恐恐謹言。

九月十七日

日蓮

花押

弥源太入道殿御返事

一三三九 弥源太入道殿御消息

299p

一日の御帰路をぼつかなく候つる処に御使悦び入つて候、御用
事の御事共は伯耆殿の御文に書かせて候、然るに道隆の死して身

の舍利しゃりとなる由の事、是は何とも人知らず用もちいまじく候へば兎角とこう申もうして詮せんは候はず、但ただし仏ぶつの以前いぜんに九十五種きゅうじゅうごしゆの外道げどうありき各各かくかく是これを信じて仏ぶつに成ると申もうす、又また皆人みなも一同いどうに思おもひて候し程に仏世ぶつぜに出いでさせ給たまい

て九十五種きゅうじゅうごしゆは皆地獄みなじごくに墮おちたりと説かせ給たまいしかば五天竺てんじくの国王こくおう

大臣だいじん等は仏ぶつは所詮しよせんなき人なりと申もうす、又外道げどうの弟子でしども我われが師しの上を云いれて悪心あくしんをかき候、竹杖ちくじやう外道げどうと申もうす外道げどうの目連尊者もくれんそんじやを殺ころせし事こと是これなり、苦得外道くたくげどうと申もうせし者を仏記しるして云いく七日にちの内に死しして食吐鬼じきどきと成るべしと説かせ給たまいしかば外道げどう瞋いかりをなす、七日にちの内うちに

食吐鬼じきどきと成りたりしかば其それを押し隠かくして得道とくどうの人の御舍利しやり買かうべしと云いひき、其そのより外ほかに不思議ふしぎなる事数を知らず。

但ただし道隆どうりゆうが事は見ぬ事にて候へば如何様いかにに候やらん、但ただし弘通くつうす

るところの説法せつぽうは共に本権教こんきやうより起りて候しを今は教外別伝きやうげべつでんと
申もうして物にくるひて我われと外道げどうの法と云うか、其その上建長寺けんちやうじは現げんに
眼前がんぜんに見へて候、日本国にほんこくの山寺さんじの敵とも謂いいつべき様なれども事を
御威ぎよゐによせぬれば皆人みな恐れて云わず、是は今生こんじやうを重しげくして後生ごじやうは
軽くす

る故なりされば現身げんしんに彼の寺の故に亡国ぼつこくすべき事当りぬ、日蓮にちれんは
たびたび度度知つて日本にほんの道俗どうぞくの科とがを申せば是は今生こんじょうの禍わざはひ後生の福ふくな
り、但し道隆どうりゅうの振舞ふるまいは日本にほんの道俗どうぞく知りて候へども上かみを畏おそれてこそ
尊たうみ申せ又内心ないしんは皆みなうとみて候らん、仏法ぶつぽうの邪正じやせいこそ愚人ぐにんなれば知
らずとも世間せけんの事は眼前がんぜんなれば知りぬらん、又一は用もちいずとも人の
骨こつ

の舍利しゃりと成る事は易やすく知れ候事にて候、仏の舍利しゃりは火にやけず水に
ぬれず金剛こんごうのかなづちにてうてども摧くだけず、一くだきして見よか
しあらずしあらずし、建長寺けんちやうじは所領しやうりやうを取られてまどひたる男
どもの入道にゅうだうに成りて四十五十六なんどの時走り入りて候が用は
こ
之これ無なく道隆どうりゅうがかけにしてすぎぬるなり、云いうに甲斐かいなく死しぬ
れば不思議ふしぎにて候をかくして暫しばしくもすぎき。

又は日蓮房にちれんぼうが存知ぼんじの法門ほうもんを人に疎そませんとこそたばかりて候ら

め、あまりの事どもなればおおわくあら誑惑ただ顕われなんとす、但ただしばらくねうじ
て御覽あらわぜよ、根露あらわれぬれば枝かれみなもと源みなもと 渴ことごとけば流ことごと尽ことごとくると申もうす事あ
り、恐きょう恐きょう謹言きんげん。

弘安元年 戊寅 八月十一日

日蓮 花押

弥源太入道殿

二四〇 さじき女房御返事

建

治元年五十四歳御作

1231p

女人は水のごとし。うつは物にしたがう。女人は矢のごとし。弓につがはさる。衆人はふねのごとし。かぢのまかするによるべし、しかるに女人はをとこ。ぬす人なれば女人ぬす人となる。をとこ王なれば女人きさきとなる。をとこ善人なれば女人。仏になる、今生のみならず後生も。をとこによるなり、しかるに兵衛のさゑもんどのは法華経

の行者なり、たとひ。いかなる事ありとも。をとこのめなれば法華経の女人とこそ仏は。しろしめされて供らんに。又我とこころを。をこして法華経の御ために御かたびらをくりたびて候。

法華經ほけきょうの行者ぎぎょうじやに一人あり・聖人しよじんは皮かわをはいで文字もんじをうつす・凡夫ほんぶは・ただ・ひとつきて焼かたびら・などを法華經ほけきょうの行者ぎぎょうじやに供養くやうすれば皮かわをはぐうちうちに仏ぶつをさめさせ給たまうなり、此この人のかたびらは法華經ほけきょうの六万九千三百八十四の文字もんじの仏ぶつにまいらせさせ給たまいぬれば・六万九千三百八十四のかたびらなり、又六万九千三百八十四の仏ぶつ・一一・六

万九千三百八十四の文字もんじなれば・此このかたびらも又かくのごとし、たとへばはるの野せんりの千里せんりばかりに・くさのみちて侯そうりはんんに・すこしの豆まめばかりの火ひを・くさ・ひとつにはなちたれば一時いちじに無量無辺むりやうむへんの火ひとなる、此このかたびらも又かくのごとし、ひとつのかたびら・なれども法華經ほけきょうの一切いっさいの文字もんじの仏ぶつにたてまつるべし。

この功德くどくは父母ふぼ・祖父母そふ・乃至無辺ないしむへんの衆生しゆじやうにも・をよぼしてん、ましてわが・いとをしと・をもふ・をとこは申まうすに及およばずと、おぼしめ

すべし、おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮にちれん

花押かおう

さじき女房御返事にようぼうごへんじ

一四一

棧敷女房御返事

建治四年

二月五十七歳御作

1232p

白かたびら布一給い畢んぬ、法華経を供養申しまいらせ候に十種
くやうと申す十のやう候、其のなかに衣服と申し候はなににても候
へ、僧のき候物をくやうし候、其の因縁をとかれて候には過去に十
万億の仏をくやうせる人、法華経に近づきまいらせ候とこそとかれ
て候へ、あらあら申すべく候へども、身にいたはる事候間こまやかな
らず候、恐恐謹言。

二月十七日

日蓮 花押

さじきの女房御返事

二四二

善無畏抄

建治元年五十四歲御

作

1232P

善無畏三歲は月氏烏菴奈国の仏種王の太子なり、七歳にして位
に即き給う十三にして国を兄に譲り出家遁世し五天竺を修行し
て五乗の道を極め三学を兼ね給いき、達磨掬多と申す聖人に値い
奉りて真言の諸印契一時に頓受し即日御灌頂なし人天の師と定
まり給いき、足山に入りては迦葉尊者の髪を剃り王城に於て雨を
祈り給い
しかば観音日輪の中より出て水瓶を以て水を灌ぎ、北天竺の金粟
王の塔の下にして仏法を祈請せしかば文殊師利菩薩大日經の胎蔵

の曼茶羅まんだらを現して授け給うたま、其その後開元四年丙辰ひのえたつに漢土かんどに渡るわた
げんそうこうていこれ
玄宗皇帝げんそうこうてい之を尊むこと日月にちがつの如ごとし、又大旱魃かんぱつあり皇帝こうてい勅宣ちよくせんを下
さんぞういちばつ
す、三蔵一鉢さんぞういちばつに水を入れ暫しばらく加持かじし給たまいに水みづの中に指許さかりの物有
り変じて竜

と成る其の色赤色なり、白氣立ち昇り鉢より竜出でて虚空に昇り
忽に雨を降す、此の如くいみじき人なれども一時に頓死して有り
き、蘇生りて語つて云く我死つる時獄卒来りて鉄の繩七筋付け
くろがね
鉄の杖を以て散散にさいなみ閻魔宮に到りにき、八万聖教一字
一句も覚えぬ唯法華經の題名許り忘れざりき題名を思いしに鉄
の繩少し許ぬ息続いて高声に唱えて云く今此三界皆是我有其中
衆生悉是吾子而今此処多諸患難唯我一人能為救護等云云、七つ
の鉄の繩切れ砕け十方に散す閻魔冠を傾けて南庭に下り向い
給いき、今度は命尽きずとて歸されたるなりと語り給いき、今日蓮
不審して云く善無畏三蔵は先生に十善の戒力あり五百の仏陀に仕
えたり、今生には捨て難き王位をつばきを捨てるが如く之を捨て
幼少十三にして出家し給い、月支国を廻りて諸宗を習い極め天の
感を蒙り化道

の心深くして震旦国に渡りて真言の大法を弘めたり、一印一真言を
結び誦すれば過去・現在の無量の罪滅しぬらん何の科に依りて閻魔
の責をば蒙り給いけるやらん不審極り無し、善無畏三蔵真言の力
を以て閻魔の責を脱れずば天竺震旦日本等の諸国の真言師地獄の
苦を脱る可きや、委細に此の事を勘えたるに此の三蔵は世間の軽
罪

は身に御せず諸宗並びに真言の力にて滅しぬらん、此の責は別の故
無し法華経誹謗の罪なり、大日経の義釈を見るに此の経は是れ
法王の秘宝妄りに卑賤の人に示さず、釈迦出世の四十余年に
舍利弗慇懃の三請に因つて方に為に略して妙法蓮華の義を説くが
如し、今・此の本地の身又是れ妙法蓮華最深秘処なり、故に
寿命品に云く、「常に靈鷲

山及び余の諸の住処に在り、乃至我が浄土は毀れざるに而も衆は

焼き尽くと見ること、即ち此の宗瑜伽の意なるのみ、又「補処の菩薩の慇懃三請に因つて方に為に之を説く」等云云、此の釈の心は大日経に本迹二門・開三

顕一・開近顕遠の法門有り、法華経の本迹二門の如し、此の法門は

法華経に同じけれども此の大日経に印と真言と相加わりて三密

相応せり、法華経は但意密許りにて身口の二密闕けたれば法華経

をば略説と云い大日経をば広説と申す可きなりと書かれたり、此

の法門第一の 謗法の根本なり、此の文に二つの 有り、又

義釈に云く

「此の経横に一切の仏教を統ぶ」等云云、大日経は当分随他意の経なるをあやまりて随ず自意い跨節いの経と思えり、かたがた・りたるをじつぎ実義じつぎと思し食す故に閻魔の責をば蒙りたりしか智者にて御座せし故に此の謗法を悔い還えして法華経に翻りし故に此の責を免がるるか、
天台大師釈して云く「法華は衆経を総括す乃至輕慢止まざれば舌口中くちゆう

に爛る」等云云、妙楽大師云く「已今当の妙此に於て固く迷えりただ舌爛止まざるは猶華報と為す、謗法の罪苦長劫に流る」等云云、
天台・妙楽の心は法華経に勝れたる経有りと云はむ人は無間地獄おに墮つ可しと書かれたり善無畏三蔵は法華経と大日経とは理は同じけれども事の印・真言は勝れたりと書かれたり、然るに二人の中に一人は必

悪道に墮つ可しと・をばふる処に天台の釈は経文に分明なり、

善無畏の釈は経文に其証拠見え、其の上閻魔王の責の時。我が
内証の肝心と思食す大日経等の三部経の内の文を誦せず、法華経
の文を誦して此の責を免れぬ、疑無く法華経に真言勝ると思ふ
を翻したるなり其の上善無畏三蔵の御弟子不空三蔵の法華経の
儀軌には大日経

金剛頂経の両部の大日をば左右に立て法華経多宝仏をば不二の
大日と定めて両部の大日をば左右の巨下の如くせり。

伝教大師は延暦二十三年の御入唐靈感寺の順 暁和尚に真言
三部の秘法を伝う、仏滝寺の行満座主に天台止観宝珠を請け取り
顕密二道の奥旨を極め給いたる人、華嚴・三論・法相律宗の人人の
自宗我慢の辺執を倒して天台大師に帰入せる由を書かせ給いて候、
依憑・集守護章・秀句なむと申す書の中に善無畏・金剛智・不空等は
天台宗に帰入して智者大師を本師と仰ぐ由のせられたり、各各思

えらく宗を立つる法は自宗をほめて他宗を嫌うは常の習
なりと思えり、法然なむどは又此例を引きて曇鸞の難易道・綽の
聖道・浄土善導が正雜二行の名目を引きて天台・真言等の大法を
念仏の方便と成せり、此等は牛跡に大海を入れ県の額を州に打つ者
なり、世間の法には下剋上・背上向下は国土亡乱の因縁なり、仏法
には権小の経経を本として実経をあなづる、大謗法の因縁なり
恐る可し恐る

可^べし。

嘉^か祥^{じょう}寺^うの吉^{きち}蔵^{ぞう}大^{だい}師^しは三^{さん}論^{ろん}宗^{しゅう}の元^{がん}祖^そ・或^{ある}時^{とき}は一^{いち}代^{だい}聖^{しょう}教^{きょう}を五^ご時^{とき}に分^{わか}け・或^{ある}時^{とき}は二^に蔵^{ぞう}と判^{はん}ぜり、然^{しか}りと雖^{いえど}も竜^{りゅう}樹^{じゆ}菩^ぼ薩^{さつ}の造^{ぞう}の百^{ひゃく}論^{ろん}・中^{ちゅう}論^{ろん}十二^{じふに}門^{もん}論^{ろん}大^{だい}論^{ろん}を尊^たんで般^{はん}若^{にや}經^{きよう}を依^え憑^{びよう}と定^ため給^{たま}い、天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^しを辺^{へん}執^{じゅう}して過^すぎ給^{たま}いし程^{ほど}に智^ち者^{しゃ}大^{だい}師^しの梵^{ぼん}網^{もう}等^{とう}の疏^{しよ}を見^みて少^{せう}し心^{しん}とけやうやう近^{ちか}づきて法^{ほう}門^{もん}を聴^{ちやう}聞^{もん}せし程^{ほど}に結^け句^くは一^{いち}百^{ひゃく}余^よ人^{にん}の弟^で子^しを捨^すて般^{はん}若^{にや}經^{きよう}並^びびに法^ほ華^け經^{きよう}をも講^{こう}ぜず七^{しち}年^{ねん}に至^{いた}つて天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^しに仕^{てん}えさせ給^{たま}い、高^{こう}僧^{そう}伝^{でん}には「衆^{しゆ}を散^{さん}じ身^みを肉^{にく}橋^{きょう}と成^なす」と書^かれたり、天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^し高^{こう}坐^ざに登^{のぼ}り給^{たま}えば寄^よりて肩^{かた}を足^{あし}に備^たえ路^ろを行^たまひ給^{たま}えば負^お奉^{ほう}り給^{たま}うて堀^{ほり}を越^こえ給^{たま}いき、吉^{きち}蔵^{ぞう}大^{だい}師^し程^{ほど}の人^{ひと}だにも謗^{ぼう}法^{ぽう}を恐^{おそ}れてか^かくこそ仕^たまへ給^{たま}いしか、然^{しか}るを真^{しん}言^{ごん}三^{さん}論^{ろん}・法^ほ相^{そう}等^{とう}の宗^{しゅう}宗^{しゅう}の人人^{ひとびと}今^{いま}未^み末^{まつ}に成^なりて辺^{へん}執^{じゅう}せさせ給^{たま}うは自^じ業^{ごう}自^じ得^{とく}果^かなるべし。

今^{いま}の世^よに浄^{じやう}土^ど宗^{しゅう}・禅^{ぜん}宗^{しゅう}なんど申^{まう}す宗^{しゅう}宗^{しゅう}は天^{てん}台^{だい}宗^{しゅう}にを^をとされし

真言・華嚴等に及ぶ可からず、依経既に楞伽經・觀經等なり此等の経経は仏の出世の本意にも非ず一時一会の小経なり一代の聖教を判ずるに及ばず、而も彼の経経を依経として一代の聖教を聖道・浄土・難行・易行・雜行・正行に分ち教外別伝なむどののしる、譬えば民が王をしえたげ小河の大海を納むるが如し、かかる謗法の人師どもを信じて後生を願う人人は無間地獄脱る可きや、然れば当世の愚者は仏には釈迦牟尼仏を本尊と定めぬれば自然に不孝の罪脱がれ法華経を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。

其の上女人は五障三従と申して世間出世に嫌われ一代の聖教に捨てられ畢んぬ、唯法華経計りにこそ童女が仏に成り諸の尼の記はさづけられて候ぬれば一切の女人は此の経を捨てさせ給いは何の経をか持たせ給うべき、天台大師は震旦国の人・仏滅後・

一千五百余年に仏の御使として世に出でさせ給いき、法華經に三十卷の文を注し給い文句と申す文の第七の卷には「他經には但男に記して女に記せず」等云云、男子も余經にては仏に成らざれども且らく与えて其をば許してむ、女人に於ては一向諸經に於ては叶う可からずと書かれて候、縦令千万の經經に女人成る可しと許され為りと雖も法華經に嫌われなば何の憑か有る可きや。

教主釈尊我が諸經四十余年の經經を未顕眞実と悔い返し涅槃經等をば当説と嫌い給い無量義經をば今説と定め置き、三説に秀でたる法華經に「正直に方便を捨て但無上道を説く世尊の法は久しくして後要当に眞実を説くべし」と釈尊宣べ給いしかば、宝浄世界の多宝仏は大地より出でさせ給いて眞実なる由の証明を加え、十方分身の諸仏広長舌を梵天に付け給う、十方世界微塵数の諸仏の舌相

は不妄語戒の力に酬いて八葉の赤蓮華に生出させ給いき、一仏・二
仏三仏・乃至十仏・百仏・千・万・億・仏の四百萬億那由他の世界に充滿
せる仏の御舌を以て定め置き給える女人成仏の義なり、謗法無く
して此の経を持つ女人は十方虚空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・
十惡・五逆なりとも草木の露の大風にあえるなる可し三冬の氷の
夏の日に滅するが如し、但滅し難き者は法華經謗法の罪なり、譬え
ば三千大千世界の草木を薪と為すとも須弥山は一分も損じ難し、
縱令七つの日出でて百千日照すとも大海の中をばかわかしがたし、
たといはちまんしょうきよう
設い八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て大小乗の戒行を尽
じゅつぽうせかい しゅじよう
し十方世界の衆生を一子の如くに為すとも法華經謗法の罪はき
ゆべからず、我等過去・現在・未來の三世の間に仏に成らずして六道
の苦を受くるは偏に法華經謗法の罪なるべし、女人と生れて百惡身
に備ふるも根本此の経誹謗の罪より起れり。

然者此の経に値い奉らむ女人は皮をはいで紙と為し血を切りて墨
と為し骨を折りて筆と為し血の涙を硯の水と為して書き奉ると
雖も飽く期あるべからず、何に況や衣服・金銀・牛馬・田畠等の布施
を以て供養せむは・ものの
かずにてかずならず。

二四三

妙密上人御消息

建治二年三月

五十五

歳御作 与 谷妙密

1237p

青鳧せいふ五貫文たまい給たまい候あい畢おんぬ、夫それ五戒ごかいの始はは不殺生戒ふさつしょうかい六波羅蜜はらみつ
 の始は檀波羅蜜だんはらみつなり、十善戒じゅうぜんかい・二百五十戒にひゃくごじゅうごかい・十重禁戒等じゅうじゅうきんがいの一切いっさいの
 諸戒しよの始はめは皆不殺生戒みなふさつしょうかいなり、上大聖おほたまより下蚊虻しもむしに至いたるまで命いのちを
 財たからとせざるはなし、これを奪うばへば又第一だいいちの重罪じゅうざいなり、如来世にょらいに
 出いで給たまいては生なまをあわれむを本もととす、生なまをあわれむしるしには命いのちを
 奪うばはず施食せじき
 を修しゆするが第一だいいちの戒かいにて候あなり、人に食けを施ほすに三さんの功德くどくあり・一
 には命いのちをつぎ・二には色いろをまし・三には力ちからを授さず、命いのちをつぐは人中にんちゆう
 天上てんじゆうに生なまれては長命ながいのちの果報かほうを得え仏ぶつに成なりては法身如来ほっしんにょらいと顕あれ其そのの

身こくう虚空と等し、力を授さずく

故ゆえに人中にんちゆうてんじよう天上てんじように生れては威徳いとくの人と成りて眷属けんぞく多し、仏に成り

ては報身ほうしん如来にやらいと顕あらわれて蓮華れんげの台うてなに居こし八月十五夜の月の晴天に

出でたるが如ごとし、色をます故ゆえに人中にんちゆうてんじよう天上てんじように生れては三十二相を

具足ぐそくして端正なる事華ごとの如く、仏に成りては応身おうしん如来にやらいと顕あらわれて

釈迦しゃかぶつ仏の如ごとくなるべし、夫それ須弥山しゆみせんの始たずを尋たずぬれば一塵いちじんなり大海たいかい

の初は一露な

り一を重ぬれば二となり二を重ぬれば三乃至ないし十百千万億阿僧祇あそぎの

母は唯一なるべし。

されば日本国にほんこくには仏法ぶつぽうの始まりし事は天神七代・地神五代の後

人王百代そ其の初めの王をば神武天皇てんのうと申もつす、神武より第三十代に

当りて欽明天皇きんめいてんのうの御宇ぎように百济国くだらより経なら並びに教主きようしゆしやくそん釈尊そくにの御影そうに僧尼

等を渡わたす、用明天皇ようめいてんのうの太子たいしの上宮じようぐうと申せし人、仏法ぶつぽうを読み初め

法華經を漢土よりとりよせさせ給いて疏を作りて弘めさせ給いき、
それより後人王三十七代孝徳天皇の御宇に觀勒僧正と申す人新羅
国より三論宗・成実宗を渡す、同じき御代に道昭と申す
僧漢土より法相宗・俱舎宗を渡す、同じき御代に審祥大徳・
華嚴宗を渡す、第四十四代元正天皇の御宇に天竺の上人・大日經
を渡す、第四十五代聖武天皇の御宇に鑑真和尚と申せし人漢土よ
り日本国に律宗を渡せし・

ついでに天台宗の玄義・文句・円頓止観・浄名疏等を渡す、然れども
しんこんしゅう

真言宗と法華宗との二宗をばいまだ弘め給はず、人王第五十代
かんむてんのう

桓武天皇の御代に最澄と申す小僧あり後には伝教大師と号す、此
さいちやう

の人人唐已前に真言宗と天台宗の二宗の章疏を十五年が間・但
にゆうとう

一人見置き給いき、後に延暦二十三年七月に漢土に渡りかへる年
えんりやく

の六月に

本朝に著かせ給いて、天台・真言の二宗を七大寺の碩学数十人に授
ほんちやう

けさせ給いき、其の後于今四百年なり、総じて日本国に仏法渡りて
たまい

于今七百余年なり、或は弥陀の名号、或は大日の名号、或は釈迦
いまに

の名号等をば一切衆生に勧め給へる人人はおはすれども、いまだ
みちのう

法華経の題目・南無妙法蓮華経と唱へよと勧めたる人なし、日本国
ほけきやう

に限ら

ず月氏等にも仏滅後・一千年の間・迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・

がし

ぶつめつ

かしよう

あなん

めみやう

りゆうじゆ

むちやく

てんじん 天親等の大論師・仏法を五天竺に弘通せしかども・漢土に仏法渡りて数百年の間・摩騰・迦竺・法蘭・羅什三蔵・南岳・天台・妙楽等・或は疏を作り・或は経を釈せしかどもいまだ法華経の題目をば弥陀の名号の如く勧められず、唯自身一人計り唱へ・或は経を講ずる時・講師計り唱る事あり、然るに八宗・九宗等其の義まちまちなれども多分は弥陀の名号次には観音の名号次には釈迦仏の名号・次には大日・薬師等の名号をば唱へ給へる高祖先徳等はおはすれども何なる故有りてか一代諸教の肝心たる法華経の題目をば唱へざりけん、其の故を能く能く尋ね習い給ふべし、譬えば大医の一切の病の根源薬の浅深は弁へたれども故なく大事の薬をつかふ事なく病に随ふが如し。

されば仏の滅後正像二千年の間は煩惱の病・軽かりければ一代第一の良薬の妙法蓮華経の五字をば勧めざりけるか、今末法に入

りぬ人毎ひとごとに重病じゅうびょう有り阿弥陀あみた・大日だいにち・釈迦しゃか等の軽薬けいやくにては治なし難がたし、
又月またつきはいみじけれども秋あきにあらざれば光あかりを惜おしむ・花はなは目め出でけれども
春はるにあらざれば・さかず、一切いっさい・時ときによる事ことなり、されば正像しやうぞう二千
年ねんの間まは題目だいもく

の流布るふの時ときに当あたらざるか、又また仏教ぶつぎょうを弘ひろるは仏ぶつの御使おんつかいなり随したがつて仏
の弟子でしの譲ゆずりを得える事こと各別かくべつなり、正法しやほう千年せんねんに出いでし論師ろんし像法ぞうほう千年
に出いづる人師にんし等は多くは小乘しょうじやう・権大乘こんだいじやう・法華ほけきやう經きやうの或あるは迹門しやくもん・或あるは
枝葉しやうを譲ゆずられし人人ひとびとなり、

いまだ本門ほんもんの肝心かんじんたる題目だいもくを譲たられし上行菩薩じやうぎふつぼさつ世よに出現しゆつげんし給たまは
ず、此この人末法まつぽうに出現しゆつげんして妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを一閻浮提えんぶだいの中うち・国
ごと人ひとごとに弘ひろむべし、例たとせば当時とうじ・日本国にほんこくに弥陀みだの名号みやうごうの流布るぶし
つるが如ごとくなるべきか。

然しかるに日蓮にちれんは何いずれの宗がんとその元祖げんそにもあらず又末葉まつようにもあらず持戒じがい・
破戒はかいにも闕かけて無戒むかいの僧有智うちむち・無智むちにもはづれたる牛羊ぎやうようの如ごとくなる
者ものなり、何いかにしてか申もうし初はつめけん上行菩薩じやうぎやうぼさつの出現しゆつげんして弘ひろめさせ
給たまうべき妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを先立さきたちてねごとの様ように心こころにもあらず
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと申もうし初はつて候そめし程ほどに唱となうる者ものなり、所詮しよせんよき事ことに
や候まをらん・

又悪あくき事ことにや侍はべるらん我われもしらず人ひともわきまへがたきか、但ただし
法華經ほけきやうを開ひらいて拜はいし奉たてまつるに此この經きやうをば等覺とうかくの菩薩ぼさつもんじゆ文殊もんじゆ・弥勒みろく觀音かんのん
普賢ふげんまでも輒たやすく一句いっく一偈いちげをも持もつ人ひとなし、「唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつ」と説とき給たまへ

り、されば華嚴經は最初の頓説円満の經なれども法慧等の四菩薩に説かせ給ふ、般若經は又華嚴經程こそなければも当分は最上の經ぞ

かし、然れども須菩提これを説く、但法華經計りこそ三身円満の釈迦の金口の妙説にては候なれ、されば普賢・文殊なりとも輒く一句一偈をも説かせ給うべからず、何に況や末代の凡夫我等衆生は一字・二字なりとも自身には持ちがたし、諸宗の元祖等法華經を読み奉れば各各其の弟子等は我が師は法華經の心を得給へりと思へり、然れ

ども詮を論ずれば慈恩大師は深密經唯識論を師として法華經をよみ、嘉祥大師は般若經中論を師として法華經をよむ、杜順法蔵等は華嚴經十住毘婆沙論を師として法華經をよみ、善無畏・金剛智不空等は大日經を師として法華經をよむ、此等の人人は各法華經

をよめりと思へども未だ一句一偈もよめる人にはあらず、詮を論ず

れ

ば伝でんぎよう教だいし大師ことことはりて云いわく「法ほけきよう華きよう経さんを讚さんすと雖いえども還かえつて法ほつ華けの心こころを死しすニ云いふ、例れいせば外げどう道どうは仏ぶつ経きようをよめども外げどう道どうと同じおなじ・蝙蝠へんぷくが昼ひるを夜よると見るみるが如ごとし、又また赤あかき面おもての者ものは白しろき鏡かがみも赤あかしと思おもひ太たい刀とうに顔かほをうつせるもの円まかなる面おもてをほそながしと思おもふに似にたり。

今日けふ蓮れんは然しからず已い今こん当とうの経きよう文もんを深ふかくまほり一いっ経きようの肝かん心じんたるだいもく
題目だいもくを我われも唱となへ人ひとにも勸すすむ、麻あしの中なかの蓬よもぎ・墨すみうつる

木の自体は正直しんじつならざれども自然じねんに直ただくなるが如ごとし、経きやうのままに
唱となうればまがれる心こころなし、当まさに知るべし仏ぶつの御心ごころの我等われらが身みに入いら
せ給たまはずば唱となへがたきか、又またそれ他人たにんの弘ひろめさせ給たまふ仏ぶつ法ぽうは皆みな師しよ
り習ならひ伝たへ給たまへり、例たとせば鎌倉かまくらの御家人ごおん等の御知行ごちぎ所領しやうりやうの地頭じとう・或ある
は一町二町いちぢうにぢうなれども皆みな故大將家こおんの御恩ごおんなり、何いかに況いはや百町・千町・
一國・二國いちこくにこくを知行ちぎやうする人人ひとびとをや、賢人けんじんと申もうすはよき師しより伝たへたる
人しやうにん聖人しやうにんと申もうすは師し無なくして我われと覺さとれる人ひとなり、仏滅ぶつめつ後ご・月氏がつし・漢土かんど
日本國にほんこくに二人ふたりの聖人しやうにんあり所謂いわゆる天台てんだい・伝教でんぎやうの二人ふたりなり、此こゝの二人ふたりを
ば聖人しやうにんとも云いうべし又また賢人けんじんとも云いうべし、天台てんだい大師だいしは南岳なんがくに伝たえ
たり是こゝは賢人けんじんなり、道場どうじやうにして自解じげ仏乘ぶつじやうし給たまいぬ又また聖人しやうにんなり、
伝教でんぎやう

大師だいしは道邃どうすい・行滿ぎやうまんに止觀しこくと円頓えんどんの大戒だいかいを伝たへたりこれは賢人けんじんなり、
入唐にっぽんこく已前いぜんに日本國にほんこくにして真言しんごん・止觀しこくの二宗ふたしゆを師しなくしてさと

きわ てんだいしゅう 極め、天台宗の智慧を以て六宗・七宗に勝れたりと心得給いしは

こころえたま

是れ聖人なり、然れば外典に云く「生れながらにして之を知る者は

上なりの名なり上とは聖人学んで之を知る者は次なり次とは賢人」内典に云く

「我が行師の保無し」等云云、夫れ教主釈尊は娑婆世界第一の

聖人なり、天台・伝教の二人は聖賢に通ずべし、馬鳴・竜樹・無著・

天親等・老子・孔子等は、或は小乘、或は権大乘、或は外典の聖賢

なり、法華經の聖賢には非ず。

今日蓮は聖にも賢にも非ず持戒にも無戒にも有智にも無智も当

らず、然れども法華經の題目の流布すべき後、五百歳二千二百二十

余年の時に生れて近くは日本国遠くは月氏・漢土の諸宗の人人唱へ

始めざる先に、南無妙法蓮華經と高声によばはりて二十余年をふ

る間、或は罵られ打たれ、或は疵をかうほり、或は流罪に二度死罪

に一度

定められぬ、其その外ほかの大難だいなん数をしらず。譬たとへば大湯たいゆに大豆だいずを漬ひたし小
水みづに大魚おほいしづの有あるが如ごとし、経けいに云いわく「而しかも此この経けいは如来にょらいの現在げんざいにすら
猶なほ怨おん嫉しつ多おほし況ごとや滅度めつどの後のちをや「又また云いわく「一切いっさい世間せけん怨あだ多おほくして信し
難がたし「又また云いわく「諸もろもろの無智むち
の人ひと有ありて悪口あくぐち罵詈めりす「或あるは云いわく「刀杖とうじょう瓦石がしやくを加くえ。或あるは
数数しばしば擯ひん出しせらる「等と云いふ、此等これらの经文きよつもんは日蓮にちれん・日本国にほんこくに生なぜずんば
但ただ仏ぶつの御言みことばのみ有ありて其その義空ぎこくしかるべし、譬たとへば花さき菓このみみなら
ず雷いかずちなりて雨あめふらざらんが如ごとし

、仏の金言空くして正直の御経に大妄語を雑へたるなるべし、此等を以て思ふに恐くは天台・伝教の聖人にも及ぶべし又老子・孔子を

も下しぬべし、日本国の中に但一人南無妙法蓮華経と唱えたり、こ

れは須弥山の始の一塵大海の始の一露なり、二人・三人・十人・百人

・一國・二國・六十六箇國・已に島二にも及びぬらん、今は謗ぜし

人人

も唱へ給うらん、又上一人より下万民に至るまで法華経の神力品の

如く一同に南無妙法蓮華経と唱へ給ふ事もやあらんずらん、木は

しづかならんと思へども風やまず春を留んと思へども夏となる、

日本国の人人は法華経は尊とけれども日蓮房が悪ければ南無

妙法蓮華経とは唱えまじとことはり給ふとも今一度も二度も

大蒙古国より

押し寄せて壹岐対馬の様に男をば打ち死し女をば押し取り京鎌倉

に打ち入りて国主並びに大臣百官等を搦め取り牛馬の前にけたて
つよく責めん時は争か南無妙法蓮華經と唱へざるべき、法華經の
第五の巻をもつて日蓮にちれん

が面を数箇度打ちたりしは日蓮は何とも思はずうれしくぞ侍り
し、不輕品の如く身を責め勸持品の如く身に當つて責し貴し。

但し法華經の行者を悪人に打たせじと仏前にして起請をかきた

りし梵王・帝釈・日月・四天等いかに口惜かるらん、現身にも天罰を

あたらざる事は小事ならざれば始中終をくくりて其の身を亡すの

みならず議せらるるか、あへて日蓮が失にあらざらず謗法の法師等をた

すけんが為に彼等が大禍を自身に招きよせさせ給うか。

此等を以て思ふに便宜ごとの青鳧五連の御志は日本国の

法華經の題目を弘めさせ給ふ人に当れり、國中の諸人一人一人

乃至千万億の人・題目を唱うるならば存外に功德身にあつまらせ

給^{たま}うべし、其^その功德^{くどく}は大海^{たいかい}の露^{つゆ}をあつめ須弥山^{しゅみせん}の微塵^{みじん}をつむが
如^{ごと}し、殊^{こと}に十羅刹女^{じゅうらせつにょ}は法華經^{ほけきょう}の題目^{だいもく}を守護^{しゆご}せんと誓^{ちか}わせ給^{たま}う、此^こを
推^{すい}するに妙密^{めうみつ}

上人^{じやうじん}並びに女房^{にやぼう}をば母^{はは}の一子^{いちこ}を思^{おも}ふが如^{ごと}く、牛^{うし}の尾^びを愛^{あい}するが
如^{ごと}く昼夜^{くわし}にまほらせ給^{たま}うらん、たのもしたのもし、事^{こと}多^{おほ}しといへども
委^{くわし}く申^{もう}すにいとまあらず、女房^{にやぼう}にも委^{くわし}く申^{もう}し給^{たま}へ此^こは諂^{へん}へる言^{ことば}には
あらず、金^{かね}はやけば弥^{いよいよ}

色まさり剣はとげばいよいよと弥利くなるほげきょう法華經の功徳はほむればいよいよくとく弥功徳
まさる、二十八品はまさし正き事は・わずかなり讚ほむる言こそ多く候へと
おほしめ思食すべし。

閏三月五日

日蓮 にちれん 花押 かおう

くわがやつ 谷妙密上人御返事 しやうにんごへんじ

二四四 道妙禅門御書「四種祈御書」

1
2

42p

御親父祈 きとう の事承り候間、仏前ぶつぜんにて祈念申すべく候、祈 きとう に於て
は、顕祈けんしん・顕祈冥応・冥祈冥応・冥祈顕応の祈 きとう 有りと雖も、只
かんよう肝要は、此の經の信心しんじんを致し給ひ候はば、現当げんとうの所願しょがん満足有るべく

候、法華第三に云く、「魔及び魔民有りと雖、皆仏法を護る」と、第七に云く、「病即消滅して不老不死ならん」との金言之を疑ふべからず、妙一尼御前当山参詣有難く候、巻物一卷之を進らせ候、披見有るべく候、南無妙法蓮華經。

建治二年丙子八月十日

日蓮

花押

道妙禅門

二四五

日女御前御返事

建治三年八月 五十六歳

御作

1243p

御本尊供養の御為に鷲目五貫・白米一駄・菓子其の数送り給ひ
候い畢んぬ、抑此の御本尊は在位五十年の中には八年・八年の間
にも涌出品より属累品までに八品に顕れ給うなり、さて滅後には
正法・像法・末法の中には正像二千年にはいまだ本門の本尊と
申す名だにもなし、何に況や顕れ給はんをや又顕すべき人なし、
天台・妙楽・伝教等は内にはかんがみ給へども故こそあるらめ言に
は出だし給はず、彼の顔淵が聞きし事・意にはさとるといへども、言
に出していはざるが如し、然るに仏滅後・二千年過ぎて末法の始の
五百年に出現せさせ給ふべき山経文赫赫たり明明たり・天台・

みょうらく

妙楽等の解釈分明なり。

ここに日蓮にちれんいかなる不思議ふしぎにてや候らん竜樹りゅうじゆ・天親等てんじん・天台てんだい・妙楽みょうらく

等らだにも顕あらわし給たまはざる大曼荼羅まんだらを・末法まつぽう二百余年の比はじめて法華ほっけ

弘通くつうのはたじるしとして顕あらわし奉たてまつるなり、是全く日蓮にちれんが自作にあらざ

多宝塔たぼう中の大牟尼むに世尊せそん分身ぶんじんの諸仏しよぶつすりかたぎたる本尊ほんぞんなり、され

ば首題こじの五字は中央ちゆうじゆうにかけり・四天王しほうは宝塔ほうとうの四方しほうに坐し・釈迦しゃか・

多宝・

本化ほんげの四菩薩ほさつ肩かたを並ならべ普賢ふげん・文殊等もんじゆ・舍利弗しゃりほつ・日蓮等にちれん坐まを屈まし・日天にってん

・月天がつてん・第六天だいろくてんの魔王まおう・竜王りゆうおう・阿修羅あしゆら・其その外不動あいぜん・愛染あいぜんは南北なんぼくの二

方に陣まさを取り・悪逆あくぎやくの達多だつた・愚癡ぐちの竜女りゆうにょ一座いざをはり・三千世界さんぜんせかいの人

の寿命じゆみょうを奪うばふ悪鬼あくきたる鬼子母神きしもじん・十羅刹女等じゆうらせつにょ・加之しかのみならず・日本国にほんこくの

守護神しゆごしんたる天照太神てんしやうだいじん・八幡大菩薩はちまんたいほさつ・天神七代てんじん・地神五代ちじんごだいの神神・総

じて大小だいしやうの神祇等じんぎ・体ていの神かみつらなる・其その余あにの用の神かみ豈あにもるべきや、

ほうとうほん 宝塔品いに云く「もろもろたいしゅう諸の大衆を接して皆みな虚空こくうに在り」と云云、此等これらの仏菩薩ぼさつ・大聖等・総じて序品じよほん列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此の御本尊ごほんぞんの中に住し給たまい妙法みょうほう五字ごじの光明あきらかにてらされて本有ほんぬの尊形そんぎょうとなる是これを本尊ほんぞんとは申もうすなり。

經いわに云く「諸法しよほう実相じつそう」是これなり、妙樂みょうらく云く「実相じつそうは必ず諸法しよほう・諸法しよほうは必ず十如じしよ乃至ないし十界じじゆかいは必ず身土しんど」云云、又云く「実相じつそうの深理じんり本有ほんぬの妙法蓮華經みょうほうれんげきよう」等と云云、伝教大師でんぎやうだいし云く「いちねんさんぜんそくじじゆゆうしんじじゆゆうしん自受用身じじゆゆうしんとは出尊形しゆんぎやうの仏ぶつ」文、此の故ゆえに未曾有みそうの大曼荼羅まんだらとは名付なづけ奉るたてまつなり、仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年ふたごひにふたごひにふたごひには此の御本尊ごほんぞんいまだ出現しゆつげんし給たまはずと云う事ことなり。

かかる御本尊ごほんぞんを供養くやうし奉り給ふ女人にょにん・現在げんざいには幸さいわいをまねぎ後生ごしやうには此の御本尊ごほんぞん左右前後さうぜんごに立ちそひて闇くらに燈とうの如ごとく險難けんなんの処ところに強こゝろ力を得たるが如ごとく・彼かこへまはり此こゝへより・日女御前にちによごぜんをかこみ・まほり給たまうべきなり、相構あいかまええ相構あいかまええてとわりを我が家いへへよせたくもなき様さまに誘法すゐはふの者をせかせ給たまうべし、悪知識あくちしきを捨てて善友ぜんゆうに親近しんこんせよとは是これなり。

此こゝの御本尊ごほんぞん全く余所よそに求る事ことなかれ・只ただ我れ等衆生しゆじやうの法華經ほけきようを

打ちて南無妙法蓮華經と唱うる 胸中の肉団におはしますなり、
是を九識心王責如の都とは申すなり、十界具足とは十界一界もか
けず一界にあるなり、之に依つて曼荼羅とは申すなり、曼荼羅と云
うは天竺の名なり此には輪円具足とも功德聚とも名くるなり、此
の御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入とは是なり。

日蓮が弟子・檀那等・正直捨方便・不受余經一偈と無二に信ずる

故によつて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり・たのもし・たの
もし、如何にも後生をたしなみ給ふべし・たしなみ給ふべし、穴賢・
南無妙法蓮華經とげかり叫へて仏になるべき事尤も大切なり、信心
の厚薄によるべきなり仏法の根本は信を以て源とす、されば止觀の
四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入ると、弘決の四に云く
「仏法は海の如し唯信のみ能く入るとは孔丘の言

尚信を首と為す況や仏法の深理をや信無くして寧ろ入らんや、

故に華嚴に信を道の元・功德の母と為す等、又止の一に云く「何が
円の法を開き日の信を起し円の行を立て円の位に住せん」弘の一に
云く「円信と二つは理

に放つて信を起す信を行の本と為す云云、外典げてんに云く「漢王位の説を信ぜしかば河上の波忽たちまちに冰こおりり李広父

あだのを思ふんみょういしかば草中の石羽を飲むと云えり、所詮しよせん天台てんだい・妙楽みょうらくの

積分ふんみょう明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑うたがはずして大臣だいじんのことは

を信ぜしかば立波たつなみこほり行くぞかし、石に矢のたつ是れ又父のかた

きと思いし至信の故なり、

何いかに況ぶつぼうや仏法ぶつぼうにおいてをや、法華經ほけきょうを受け持たもちて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと

唱となうる即五種そくごしゆの修行しゆぎょうを具足ぐそくするなり、比ひの事伝でんぎょう教大師くわいだいし入朽にりくして

道邃どうずい和尚わじょうに値あい奉たてまつりて五種ごしゆ頓修とんしゆうの妙行めうぎょうと云う事を相伝そうでんし給たまふな

り、日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんなの肝要かんよう是より外あなかしこに求る事なかれ、神力品じんりきほんに

云いわく、委くわしくは又又もう申す可あなかしこく狭あなかしこ、穴賢あなかしこ穴賢あなかしこ。

建治三年八月二十三日

日蓮にちれん

花押かおう

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

一二四六 日女御前御返事 にちによごぜんごへんじ
弘安元年六月 五十七歳 こうあんがねん

御作 1245p

御布施七貫文送り給ひ畢んぬ、属累品の御心は仏・虚空に立ち
給いて四百万億那由佗の世界にむさしののすすきのごとく富士山の
木のごとくぞくぞくとひざをつめよせて頭を地につけ身をまげ
掌をあはせあせを流し、つゆしげくおはせし上行菩薩等・文殊
等・大梵天王・帝釈・日月・四天王・竜王・十羅刹女等に法華経をゆ
づらん
がために、三度まで頂をなでさせ給ふ、譬えば悲母の一子が頂
のかみをなづるがごとし、爾の時に上行乃至・日月等忝き仰せ

を蒙^{こむ}りて法華^{ほけき}經^{きょう}を末代^{まつだい}に弘通^{くつう}せんとちかひ給^{たま}いしなり、薬王^{やくおう}品^{ほん}と
申^{もう}すは昔喜見^{きけん}菩薩^{ぼさつ}と申^{もう}せし菩薩^{ぼさつ}・日月淨明^{にちがつじょうみょう}徳^{とく}仏^{ぶつ}に法華^{ほけき}經^{きょう}を習^{なら}わせ
給^{たま}いて其^その師^しの恩^{おん}と申^{もう}し法華^{ほけき}經^{きょう}のたうとさと申^{もう}しかんにたへかねて
万^{よろず}の重宝^{じゆうぼう}を尽^つくさせ給^{たま}いしかどもなを心^{こころ}ゆかずして身^みに油^{あぶら}をぬりて
千二百^{せんにひゃくにじゅう}歳^{さい}の間^ま・当^{とう}時^じの油^{あぶら}にとうしみを入れてたく

がごとく身をたいて仏を供養し後に七万二千歳が間ひぢをともし
びとしてたきつくし法華經を御供養候き。

されば今法華經を後・五百歳の女人供養せば其の功德を一分も

のこさずゆづるべし、譬えば長者の一子に一切の財宝をゆづるが

ごとし、妙音品と申すは東方の淨華宿王智仏の国に妙音菩薩と申

せし菩薩あり、昔の雲雷音王仏の御代に妙莊嚴王の后淨徳夫人な

り、昔法華經を供養して今妙音菩薩となれり、釈迦如来の

娑婆世界にして法華經を説き給ふにまいりて約束申して末代の女人

の法華經を持ち給うをまもるべしと云云。觀音品と申すは又

普門品と名く、始は觀世音菩薩を持ち奉る人の功德を説きて候、

此を觀音品と名づく後には觀音の持ち給へる法華經を持つ人の功德

をとけり此を普門品と名く、陀羅尼品と申すは二聖・二天・

十羅刹女の法華經の行者を守護す

べき様を説きけり、一聖と申すは薬王と勇施となり。二天と申すは毘沙門と持国天となり。十羅刹女と申すは十人の大鬼神女。四天下の一切の鬼神の母なり。又十羅刹女の母あり。鬼子母神是なり、鬼のならひとして人を食す、

人に三十六物あり。所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と毛と氣と命等なり、而るに下品の鬼神は糞等を食し。中品の鬼神は骨等を食す。上品の鬼神は精気を食す。此の十羅刹女は上品の鬼神として精気を食す。疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり。一には善鬼。二には悪鬼なり、善鬼は法華經の怨を食す。悪鬼は法華經の行者を

食す、今日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき。此を答ふべき様は一には善鬼なり。梵王・帝釈・日月・四天の許されありて。法華經の怨を食す、一には悪鬼が第六天の魔王のすすめによりて

ほけきょう 法華經を修行する人を食す、ぜんき 善鬼が法華經の怨を食ふことは官兵
の朝敵を罰するがごとし、悪鬼が法華經の行者を食ふは強盜夜討
等が官兵を殺

すがごとし、例せば日本国に仏法の渡りてありし時・仏法の敵たり
し物部の大連守屋等も疫病をやみき蘇我・宿禰の馬子等もやみ
き、欽明・敏達用明の三代の国王は心には仏法釈迦如来を信じまい
らせ給いてありしかども外には国の礼にまかせて天照太神熊野山等
を仰ぎまいらせさせ給ひしかども仏と法との信はうすく神の信は

あ

つかりしかば強きにひかれて三代の国王・疫病疱瘡にして崩御なら
せ給いき、此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人人の疫病をも
日蓮が方のやみしぬをも心うべし、されば身をすてて信ぜん人人は
やまぬへんも・あるべし・

又やむともたすかるへんも・あるべし、又大悪鬼に値いなば命を奪
はるる人も・あるべし、例せば畠山重忠は日本第一の大力の大將な
りしかども多勢には終にはほろびぬ。

又日本国の一切の真言師の悪霊となれると並に禅宗・念佛者等
が日蓮をあだまんがために国中に入り乱れたり、又梵釈・日月
十羅刹の眷属日本国に乱入せり、両方互に責めとらんとはげむな
り、而るに十羅刹女は総じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ
給いて候へば一切の法華經を持つ人人をば守護せさせ給うらんと思
い候

に法華經ほけきょうを持つ人人もひとびと、或は大日經だいにちきょうはまされりなど申もうして真言師しんごんしが法華經ほけきょうを讀誦どくじゆし候は、かへりてそしるにて候なり、又余の宗宗も此を以て押し計るべし、又法華經ほけきょうをば經のごとく持つ人人も法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを、或は貪あゐ・瞋とん・癡じん・癡ちにより、或は世間の事あゐにより、或はしなじなのふるまひによつて憎む人あり、此は法華經ほけきょうを信まずれども信まずる功德くどくな

しかへりて罰をかほるなり、例せば父母ふぼなどには謀反等より外は子息等の身として此に背そむけば不孝ふこうなり、父が我がいとをしきめをとり母が我がいとをしきおとこを奪うばふとも子の身として一分いちぶんも違ちがはば現世げんせには天に捨てられ

後生ごしょうには必ず阿鼻地獄あびじごくに墮おつる業なり、何に況いかや父母ふぼにまされる賢王けんおうに背そむかんをや、何に況いかや父母國王ふぼこくおうに百千万億倍せんまんまされる世間の師せんをや、何に況いかや出世間の師せけんをや、何に況いかや法華經ほけきょうの御師おんしをや。

黄河は千年に一度すむといへり、聖人は千年に一度出ざるなり、
仏は無量劫に一度出世し給ふ、彼には値うといへども法華經には
値いがたし、設ひ法華經に値い奉るとも末代の凡夫法華經の行者に
は値いがたし、何ぞなれば末代の法華經の行者は法華經を説ざる
華嚴・阿含・方等・般若・大日經等の千二百余尊よりも末代に
法華經を説く行者は勝れて候なるを、妙樂大師釈して云く、「供養
すること有る者は福十号に過ぎ若し悩乱する者は頭七分に破れ

んニ云、今、日本国の者去年今年の疫病と去正嘉の疫病とは人
王始まりて九十余代に並なき疫病なり、聖人の国にあるをあだむ
ゆへと見えたり、師子を吼る犬は腸切れ日月をのむ修羅は頭の
破れ候なるはこれなり、日本国の一切衆生すでに三分が二はやみ
ぬ又半分は死しぬ今一分は身はやまざれども心はやみぬ、又頭も
頭にも冥
にも破ぬらん、罰に四あり総罰・別罰・冥罰・頭罰なり、聖人をあ
だめは総罰一国にわたる又四天下・又六欲・四禪にわたる、賢人を
あだめば但敵人等なり、今日本国の疫病は総罰なり定めて聖人
の国にあるをあだむか、山は玉をいだけば草木かれず国に聖人あ
れば其の国やぶれず、山の草木のかれぬは玉のある故とも愚者はし
らず、国のやぶるるは聖人をあだむ故とも愚人は弁へざるか。
設ひ日月の光ありとも盲目のために用ゆる事なし、設ひ声ありと

も耳しひのためになにの用かあるべき、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうは盲目もつせくと耳しひのごとし、此の一切いっさいの眼まなこと耳とをくじりて一切いっさいの眼まなこをあけ一切いっさいの耳に物をきかせんはいか程の功德くどくかあるべき、誰の人か此の功德くどくをば計るべき、設たとひ父母子ふぼをうみて眼耳げんに有りとも物を教ゆる師

なくば畜生ちくじやうの眼耳げんににてこそあらましか、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうは十方じつぱうの中には西方さいほうの一方一切いっほういっさいの仏ぶつの中には阿弥陀仏あみだぶつ一切いっさいの行ぎやうの中には弥陀みだの名号みまう此の三を本として余行よぎやうをば兼かねたる人もあり一向いっこうなる人もありしに、某それがし去ぬる

けんちやう 建長五年より今に至るまで二十余年の間・遠くは一代聖教いちだいいしやうぎやうのしょうれつせんごせんじん 勝劣先後浅深を立て近くは弥陀念仏みだねんぶつと法華経ほけきやうの題目だいもくとの高下こうげを立て申もうす程ほどに上一人かみいちにんより下万民ばんみんに至るまで此の事を用ひず、或あるは師しに問とい、或あるは主主に訴あへ、或あるは傍輩ほうはいにかたり、或あるは我が身みの妻子さいし・

眷属けんぞくに申もうす程ほどに、国くに・郡ぐん・郷きょう・村むら・寺てら・社しゃに沙汰さたある程
に、人ひとごとに日蓮にちれんが名なを知しり法華經ほけきょうを念仏ねんぶつに對たいして念仏ねんぶつのいみじき
様さま法華經ほけきょうの叶はひがたき事こと諸人しよじんのいみじき様さま・日蓮にちれんわるき様さまを
申もうす程ほどに上かみもあだみ下しもも悪にくむむ日本にほん一同ひとびとに法華經ほけきょうと行者ぎやうじやとの大怨敵おんてき
となりぬ、かう申もうせば日本にほんの人人ひとびと並ならに日蓮にちれんが方かたの中なかにも物ものにおば
えぬ者は人ひとに信まをぜられんとあらぬ事ことを云いうと思おもへり、此こゝは仏法ぶつぽうの
道理どうりを信まをじたる男女なんによ

に知らせんれうに申す、各各の心にまかせ給うべし。

妙莊嚴王品と申すは殊に女人の御ために用る事なり、妻が夫を
すすめたる品なり、末代に及びても女房の男をすすめんは名こそ
かわりたりとも功德は但淨徳夫人のごとし、いはうや此は女房も
男も共に御信用あり、鳥の二の羽そなはり車の二つの輪かかれり
何事が成ぜざるべき、天あり地あり日あり月あり日てり雨ふる
功德の草木花さき菓なるべし。

次に勸発品と申すは釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしか
ども迦葉・阿難左右におはしき王の左右の臣の如し、此は小乗經
の仏なり、又普賢・文殊と申すは一切の菩薩多しといへども教主
釈尊の左右の臣なり、而るに一代超過の法華經八箇年が間十方の
諸仏・菩薩等大地微塵よりも多く集まり候しに左右の臣たる普賢
菩薩のお

はせざりしは不思議なりし事なり、而れども妙莊嚴王品をとかれ
てさておはりぬべかりしに東方宝威徳浄王仏の国より万億の伎楽を
奏し無数の八部衆を引率して、おくればせして参らせ給いしかば、
仏の御きそくや・あし

からんずらんと思ひし故にや色かへて末代に法華經の行者を守護す
べきやうを・ねんごろに申し上られしかば、仏も法華經を閻浮に
流布せんことにねんごろなるべきと申すにやめでさせ給いけん、
返つて上の上位よりもことにねんごろに仏ほめさせ給へり。

かかる法華經を末代の女人・二十八品を品品ごとに供養せばやと
おぼしめす但事にはあらず、宝塔品の御時は多宝如来釈迦如来・
十方の諸仏・一切の菩薩あつまらせ給いぬ、此の宝塔品はいづれの
ところにか只今ましますらんとかながへ候へば、日女御前の御胸の
間・八葉の心蓮華の内におはしますと日蓮は見まいらせて候、例せ

ば

蓮のみに蓮華の有るがごとく、後の御腹に太子を懐妊せるがごと
し、十善じゅうぜんを持てる人太子たいしと生んとして、後の御腹にましませば、諸天しよてん
此を守護しゆごす故に太子たいしをば天子てんしと号す、法華經ほけきよう二十八品の文字もんじ・六
万九千三百八十四字・一一の

文字は字ごとに太子のごとし字母に仏の御種子なり、闇の中に影あり人・此をみず虚空に鳥の飛跡あり人・此をみず・大海に魚の道あり人これをみず月の中に四天下の人物一もかけず人・此をみず、而りといへども天眼は此をみる。

日女御前の御身の内心に宝塔品まします凡夫は見ずといへども釈迦・多宝・十方の諸仏は御らんあり、日蓮又此をすいすあらたうとしたうとし、周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、

其の末・三十七代・八百年の

間すゑずゑはひが事ありしかども根本の功によりてさかへさせ給ふ、阿闍世王は大悪人たりしかども父びんばさら王の仏を数年やしなひまいらせし故に九十年の間位を持ち給いき、当世も又かくの如く法華経の御かたきに成りて候代なれば須臾も持つべしとはみえねども・故権の大夫殿武蔵の前司入道殿の御まつりごと・いみじ

くしばらて暫あんく安穩のんなるか、其も始しじゆう終はは法華經ほけきようの敵てきと成なりりなば叶かなうまじきにや。

此ひとびとの人人びやくあんの御ねんぶつ僻案ねんぶつには念仏ほけきよう者等ほけきようは法華經にちれんにちいんにちれんなり日蓮にちれんは念仏ねんぶつの敵てきなり、我等われらは何いすれれをも信しんじたりと云い云わ、日蓮にちれんつめて云いく代だいに大禍ほけきようなくば古こにすぎたる疫病えきびよう・飢饉ききん・大兵乱ひようらんはいかに、召めしも決けつせずして法華經ほけきようの行者ぎゃくじやを二に度たまで大科だいに行いひしはいかに、不ふ便びん・不ふ便びん、而しかるに女人にょにんの御身おんみとして法華經ほけきようの御命ごめいをつがせ給たまうは釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの御父母ごふぼの御命ごめいをつがせ給たまうなり此この功徳くどくをもてる人ひと・閻浮提えんぶだいに有あるべしや、恐恐きようきよう謹言きんげん。

六月二十五日日蓮花押にちれんかおう

日女御前御返事にちによごぜんごへんじ

二四七 出家功德御書 弘安二年五月 五十八歳御

作 1251p

近日誰やらん承りて申し候は内内還俗の心中出来候由・風聞候
ひけるは実事にてや候らん虚事にてや候らん心元なく候間・一筆啓
せしめ候、凡父母の家を出でて僧となる事は必ず父母を助くる道に
て候なり、出家功德経に云く「高さ三十三天に百千の塔婆を立つる
よりも一日出家の功德は勝れたり」と、されば其の身は無智無行に
も

あれかみをそり袈裟をかくる形には天魔も恐をなすと見えたり、
大集経に云く「頭を剃り袈裟を著くれば持戒及び毀戒も天人供養
す可し則ち仏を供養するに為りぬ」と云云、又一経の文に有人海辺

をとをる一人の餓鬼あつて喜び踊れり、其の謂れを尋ぬれば我が七世の孫今日出家になれり其の功德にひかれて出離生死せん事喜ばしきなり

と答へたり、されば出家と成る事は我が身助かるのみならず親をも助け上無量の父母まで助かる功德あり、されば人身をうくること難く人身をうけても出家と成ること尤も難し、然るに悪縁にあふて還俗の念起る事浅ましき

次第なり金を捨てて石をとり薬を捨てて毒をとるが如し、我が身悪道に墮つるのみならず六親眷属をも悪道に引かん事不便の至極なり。

其の上在家の世を渡る辛勞一方ならずやがて必ず後悔あるべし、只親のなされたる如く道をちがへず出家にてあるべし、道を違へずは十羅刹女の御守り堅かるべし、道をちがへたる者をば神も捨てさ

せ給へる理りにて候なり、大勢至経に云く「衆生五の失有り必ず
悪道に墮ちん一には出家還俗の失なり」、又云く「出家の還俗は
其の失

五逆に過ぎたり、五逆罪と申すは父を殺し母を殺し仏を打ち奉り
なんどする大なる失を五聚めて五逆罪と云うなり、されば此の
五逆罪の人は一中劫の間無間地獄に墮ちて浮ぶ事なしと見えたり。

然るに今宿善薰発して出家せる人の還俗の心付きて落つるならば彼の五逆罪の人よりも罪深くして大地獄に墮つべしと申す経文なり、能く能く此の文を御覽じて思案あるべし、我が身は天よりもならず地よりも出でず父母の肉身を分たる身なり、我が身を損ずるは父母の身を損ずるなり、此の道理を弁へて親の命に随ふを孝行と云う

親の命に背くを不孝と申すなり、所詮心は兎も角も起れ身をば教の如く一期出家にてあらば自ら冥加も有るべし、此の理に背きて還俗せば仏天の御罰を蒙り現世には浅ましくなりはて後生には三悪道に墮ちぬべし、能く能く思案あるべし、身は無智無行にもあれ形出家にてあらば里にも喜び某も祝著たるべし、況や能き僧にて候はんをや、委細の趣・後音を期し候。

弘安二年五月日

日蓮 にちれん

花押 かおう

二四八

妙一尼御前御消息 あまごぜん しちうそく

1252p

妙一尼御前 あまごぜん

夫れ天そに月なく日なくば草木そつもくいかでか生なずべき、人に父ふ母ぼあり一人

もかけば子息等こどもそだちがたし、其その上過去かこ

の聖靈しちうりやうは或あるは病子あり、或あるは女子あり、とどめをく母もかいがい

しからず、たれにゐるあつてか冥途めいどにをもむき給たまいけん。

大覺世尊だいかくせそん・御捏盤あじやせの時なげいてのたまはく、我涅槃ねはんすべし但心に

かかる事は阿闍世王あじやせのみ、迦葉童子菩薩かしようどうじぼさつ・仏もうに申まうさく仏は平等びやうたうの

慈悲じひなり一切衆生いっさいしゆじやうのためにいのちを惜おしみ給たまうべし、いかにかきわけ

て阿笹吾人と・をほせあるやらんと問といまいらせしかば、其その

御返事ごへんじに云いく「譬たとえば一人にして七子有り是この七子の中に一子病に
遇え

り、父母の心平等びやうどうならざるには非あらず、然しかれども病子びやうしに於おいては心
すなわひとえ 則すなわち偏ひとえに重こときが如ことし、等こと云云、天台摩訶止觀てんだいまかしかんに此このの經文きやうもんを釈しゃくして
いいわく「たと譬たとえば七子の父母平等びやうどうならざるには非あらず然しかれども病者びやうしやに
云いく」おい 於おては心則すなわち偏ひとえに重こときが如ことし、等こと云云・とこそおんは答たえさせ給たまひし
か、文の心は人にはあまたの子あれども父母ふぼの心は病する子にあり
となり、おん

の御おんためには一切衆生いっさいしゆじやうは皆みな子こなり其その中罪ちゆうみふかくして世間せけんの父母ふぼ
をおころしおんごのかたきとなる者ものは病子びやうしのごとし、しかるに阿闍世王あじゃせ
は摩竭提国まかたこくの主ぬしなり、我が大檀那だんなたりし頻婆舍羅王びんばしやらをおころし我がて
きとなりしかば天もすてて日月にちがつに変いで地も頂いただきかじとふるひ。
万民ばんみんみなおんご法ぽうにそむき、他国たこくより摩竭国まかつをせむ、此等これらは偏ひとえに悪人あくにん。
提婆達多だいばだつた

を師とせるゆへなり、結句けつこは今日けふより悪瘡身あくそうみに出て三月の七日。

無間地獄むげんじごくに墮おつべし、これがかなしければ我涅槃ねはんせんこと心にかかるといふなり、我阿闍世王あじゃせをすくひなば一切いっさいの罪人ざいにん。阿闍世王あじゃせのごとしと。なげかせ給たまいき。

しかるに聖靈せいりやうは。或あるは病子あまあり。或あるは女子あまあり。われすて冥途めいどにゆきなばかれたる朽木のやうなるとしより尼が一人とどまり此の子どもをいかに心ぐるしかるらんと。なげかれぬらんとおぼゆ、かの心の。かたがたには又は日蓮にちれんが事。心にかからせ給たまいけん、仏語ぶつごむなしからせれば法華經ほけきやうひろまらせ給たまうべし、それについては此の御房ごぼうは

いかなる事もありて。いみじくならせ給たまうべしとおぼしつらんに、いづかひなく。ながし失うししかば。いかにや。いかにや法華經ほけきやう十羅刹じゆうらせつはとこそ。をもはれけん、いままでだにも。ながらえ給たまいたりしかば日蓮にちれんがゆりて侯そつちいし時よろこいかに悦たまばせ給たまはん。

又いぬし事むなしからずして・大蒙古国もよせて国土もあやをし
げになりて侯へば・いかに悦び給はん、これは凡夫の心なり、法華經
を信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかず・
みず冬の秋とかへれる事を、いまだきかず法華經を信ずる人の凡夫
となる事を、經文には「若有開法者無二小成仏」とかかれて侯。
故聖靈は法華經に命をすてて・をはしき、わづかの身命をささ
えしところを法華經のゆへにめされしは命をす

つるにあらざや、彼の雪山童子の半偈のために身をすて薬王菩薩の
臂ひじをやき給たまいしは彼は聖人しょうにんなり火に水を入るるがごとし、此これは
凡夫ほんぶなり紙を火に入るるがごとし。此これをもつて案ずるに聖靈しょうりやうは
此の功德くどくあり、大月輪の中

か大日輪だいにちりんの中か天鏡をもつて妻子さいしの身を浮べて十二時に御らんある
らん、設たい妻子は凡夫ほんぶなれば此これをみずきかず、譬たとへば耳しゐたる
者の雷いかずちの声をきかず目つぶれたる者の日輪にちりんを見ざるがごとし、
御疑おんうたがいあるべからず定めて御まほりとならせ給たまうらん。其その上さこ
そ御わたりあるらめ。

力あらばとひまひらせんと。をもつところところに衣を一つ給たまぶでう
存外ぞんがいの次第しだいなり、法華経ほけきやうはいみじき御経にてをはずれば。もし今生こんじやう
にいきある身ともなり候そうらいなば尼にごぜんごぜんの生きてをわしませ、んあ
れ、をさなききんだち等をばかへり見たてまつるべし。

さどの国と申しこれと申し下人・一人つけられて候は、いつの世にかわすれ候べき、たてまつり候べし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經・恐恐謹言。

五月 日

日蓮

花押

妙一尼御前

あまごぜん

二四九 妙一尼御前御返事 弘安三年五月 五十九

歳御作 1255p

夫信心しんじんと申もつすは別にこれなく候、妻のをとこをおしむが如ごとくをとこの妻に命をすつるが如ごとく、親の子をすてざるが如ごとく子の母にはなれざるが如ごとくに、法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心しんじんとは申もつし候なり、しかのみならず正直捨方便・不受余經一偈の經文きょうもんを女のかがみをすてざるが如ごとく男の刀をさすが如ごとく、すこしもすつる心なく案じ給たまうべく候、あなかしこ・あなかしこ。

五月十八日 日蓮花押 妙一尼御前御返事

にちれんかおう

あまごぜんごへんじ

一一五〇 妙一女御返事 弘安三年七月 五十九

歳御作 1255p

問うて云く、日本国に六宗・七宗八宗有り何れの宗に即身成仏
を立つるや、答えて云く伝教大師の意は唯法華經に限り弘法大師
の意は唯真言に限れり、問うて云く其の証拠如何、答えて云く
伝教大師の秀句に云く「当に知るべし他宗所依の經には都て即身入
無し一分即入すと雖も八地已上に推して凡夫身を許さず天台
法華宗のみ具に

即入の義有り」云云、又云く「能化所化俱に歴劫無し妙法経力
即身成仏す」等云云、又云く「当に知るべし此の文に成仏する所の
人を問うて此の經の威勢を顕すなり」と等云云、此の釈の心は

そくしんじょうぶつ 即身成仏は唯法華經に限るなり。

問うて云く弘法大師の証拠如何、答えて云く弘法大師の二教論
に云く「菩提心論に云く唯真言法の中に即身成仏する故は是れ
三摩地の法を説くなり諸教の中に於て闕いて書さず、諭して曰く
此の論は竜樹大聖の所造千部の

論の中に秘藏肝心の論なり此の中に諸教と謂うは他受用身及び變化身等の所説の法諸の顯教なり、是れ三摩地の法を説くとは自性法身の所説秘密真言の三摩地の行是なり金剛頂十万頌の經等と謂う是なり

問うて云く此の両大師所立の義水火なり何れを信ぜんや、答えて云く此の二大師は俱に大聖なり同年に入唐して兩人同じく真言の密教を伝受す、伝教大師の両界の師は順・曉和尚・弘法大師の両界の師は慧果和尚・順・曉・慧果の二人俱に不空の御弟子なり、不空三蔵の大日如来六代の御弟子なり、相伝と申し本身といひ世間の重んずる

事日月のごとし、左右の臣にことならず末学の膚にうけて是非がたし、定めて悪名天下に充滿し大難を其の身に招くか然りと雖も試に難じて両義の是非を糾明せん、問うて云く弘法大師の

そくしんじようぶつ 即身成仏は真言に限ること何れの經文何れの論文ぞや、
いわ 云く弘法大師は竜樹菩薩の菩提心論に依るなり、
しょうこ 証拠如何、
いかに 答えて

いわ 云く弘法大師の二教論に菩提心論を引いて云く「唯真言法の中のみ
ないししよきよう 乃至諸教の中に於て闕いて書さず」云云、
いわ 問うて云く經文有りや、
いわ 答えて云く弘法大師の即身成仏義に云く「六大無礙にして常に瑜伽
なり四種の曼荼各離れず三密加持すれば速疾に踰る重重にして帝
網の如くなるを即身と名く、法然として薩般若を具足す心王心数
刹塵

いわ 疑つて云く此の釈は何れの經文に依るや、
いかに 答えて云く金剛頂經
いかに 大日經等に依る、
いかに 求めて云く其の經文如何、
いかに 答えて云く弘法大師
いかに 其の証文を出して云く「此の三昧を修する者は現に仏菩提を証す」

文、又云く、「此の身を捨てずして神境通を速得し大空位に遊歩して身秘密を成す」文、又云く、「我本より不生なるを覺る」文、又云く「諸法は本より不生なり」云云。

難じて云く此等の經文は大日經・金剛頂經の文なり、然りと雖も經文は或は大日如來の成正覺の文或は眞言の行者の現身に五通を得るの文或は十回向の菩薩の現身に歡喜地を証得する文にして猶生身得忍に非ず何に況や即身成仏をや、但し菩提心論は一には經に非ず論を本とせば背上向下の科・依法不依人の仏説に相違す。

東寺の眞言師日蓮を悪口して云く汝は凡夫なり弘法大師は三地の菩薩なり、汝未だ生身得忍に非ず弘法大師は帝の眼前に即身成仏を現ず、汝未だ勅宣を承けざれば大師にあらず日本国の師にあらず等云云は一、慈覺大師は傳教・義眞の御弟子智証

大師は義真・慈覚の御弟子安然和尚は安慧和尚の御弟子なり、此の三人の云く法華天台宗は理秘密の即身成仏真言宗は事理俱密の即身成仏と云云、伝教・弘法の両大師何れもをろかならねども聖人は偏頗なきゆへに慈覚・智証安然の三師は伝教の山に栖むといへども其の義は弘法東寺の心なり、随つて日本国・

四百余年は異義なし汝不肖の身としていかんが此の悪義を存ずるや是二、答えて云く悪口をはき悪心をこそさば汝にをいては此の義申すまじ、正義を聞かんと申さば申すべし、但し汝等がやうなる者は物をいはずば、つまりぬとをもうべし、いうべし悪心をこそさんよりも悪口をなさんよりもきらきらとして候経文を出して、

汝が

信じまいらせたる弘法大師の義をたすけよ、悪口悪心をもてをもうに経文には即身成仏無きか、但し慈覚・智証安然等の事は此れ又

覚証かくしょうの両大師だいいし・日本にほんにして教大師だいいしを信ずといへども、漢土かんどにわたりて有りし時げんじょう・元政げんじょう・法全等ほっぜんとうの義を信じて心には教大師だいいしの義をすて、身そは其の山に住すれどもいつわりてありしなり。

問うて云くいわ汝なんじが此の義はいかにしてをもひいだしけるぞや、答えて云くいわ伝教大師でんぎょうだいいしの釈しやくに云く「ま當に知るべし此の文は成仏じょうぶつする所の人を問うて此の經の威勢いせいを顯あらわすなり」とかかれて候は、上の提婆品たいばの我於海中がいちゆうの經文きょうもんをかきのせてあそばして候、釈しやくの心はいかに人申すとも即身成仏そくしんじょうぶつの人なくば用もちゆべからずと・かかせ給たまへり、いかにも純円一実じゆんえんいちじつの經きょうにあらずば即身成仏そくしんじょうぶつはあるまじき道理どうりあり、大日經だいにちぎょう・金剛頂經こんごうぢょうぎょう等の真言經しんごんには其その人なし又・經文きょうもんを見るに兼・但た・対たい・帶たいの旨むね分明ぶんめいなり、二乗成仏にじょうじょうぶつなし久遠実成くおんじつじょうあとをけづる、慈覺じかく・智証ちじょうは善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空三藏ふくうさんざうの釈しやくにたばらかされて・をはするか、此の人人ひとびとは賢人けんじん・聖人しょうにんとは・をもへども遠きを

貴とんで近ちかきをあなづる人ひとなり、彼の三さん部ぶ経きょうに印いんと真しん言ごんとあるにばか
されだて大だい事じの即そく身しん成じょう仏ぶつの道みちをわすれたる人ひと人ひとなり、然しかるを当とう時じ・
叡えい山ざんの

ひとびと 法華經の即身成仏のやうを申すやうなれども慈覚大師安然
等の即身成仏の義なり、彼の人人の即身成仏は有名無実の
即身成仏なり其の義専ら伝教大師の義に相違せり、教大師は分段
の身を捨てても捨てずしても法華經の心にては即身成仏なり、覺
大師の義は分段の身をすつれば即身成仏にあらずとをものはれたる
があへて即身成仏の義をしらざる人人なり。

求めて云く慈覚大師は伝教大師に値い奉りて習い相伝せり汝は
四百余年の年紀をへだてたり如何、答えて云く師の口より伝うる人
必ずあやまりなく後にたづねあきらめたる人をろそかならば經文
をすてて四依の菩薩につくべきか、父母の譲り状をすてて口伝を
用ゆべきか、伝教大師の御釈無用なり慈覚大師の口伝眞実なるべ
き

か、伝教大師の秀句と申す御文に一切經になき事を十いだされて

候に第八に即身成仏化導勝とかかれて次下に「当に知るべし此の文

成仏する所の人を問うて此の經の威勢を顕すなり、乃至当に知る

べし他宗所依の經には都て即身入無し」等云云、此の釈を背きて覺

大師の事理俱密の大日經の即身成仏を用ゆべきか。

求めて云く教大師の釈の中に菩提心論の唯の字を用いざる釈有

りや不や、答えて云く秀句に云く「能化所化俱に歴劫無く妙法經

力即身成仏す」等云云、此の釈は菩提心論の唯の字を用いずと見へ

て候、問うて云く菩提心論を用いざるは竜樹を用いざるか答えて

云く但恐くは訳者の曲会私情の心なり、疑つて云く訳者を用いざ

れば法華

經の羅什をも用ゆ可からざるか、答えて云く羅什には現証あり

不空には現証なし、問うて云く其の証如何、答えて云く舌の焼けざ

る証なり具には聞くべし、求めて云く覺証等は此の事を知らざる

か、い答えて云く此の兩人は無畏等の三蔵さんぞうを信ずる故ゆえに伝でん教大師きょうだいしの正義せいぎを用もちいざるか、此これ則すなわち人を信じて法をすてたる人ひとなり。

問いうて云く日本にほん国こくにいまだかくく覚証かくしやう然等ぜんとうを破はしたる人ひとをきかず如何いかん、い答えて云く弘法大師こうぼうだいしの門家もんかはかくく覚証かくしやうを用もちゆべしやかくく覚証かくしやうの門家もんかは弘法大師こうぼうだいしを用もちゆべしや。

問うて云く両方の義相違すといへども汝が義のごとく水火なら
ず誹謗正法とはいわず如何、答えて云く誹謗正法とは其の相貌
如何外道が仏教をそしり小乗が大乗をそしり・権大乘が実大乘
を下し実大乘が権大乘に力をあわせ詮ずるところは勝を劣という
法にそむくがゆへに謗法とは申すか、弘法大師の大日経を法華経・
華嚴経に勝れたりと申す証文ありや、法華経には華嚴経・大日経
等を下す文分明なり、所謂已今当等なり、弘法尊しと雖も
釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く大科免れ難し事を権門に寄せて
日蓮を・をどさんより但正しき文を出だせ、汝等は人をかたうど
とせり日蓮は日月・帝釈・梵王をかたうどとせん、日月・天眼を開い
て御覧あるべし、将又日月の宮殿には法華経と大日経と華嚴経と
をはすとけうしあわせて御覧候へ弘法・慈覚・智証安然の義と日蓮
が義と

は何れがすぐれて候、日蓮が義もし百千に一つも道理に叶いて候は
ば、いかにたすけさせ給はぬぞ彼の人人の御義もし邪義ならば、いかに
日本国の一切衆生の無眼の報をへ候はんをば不便とはをばせ候
はぬぞ。

日蓮が二度の流罪結句は頸に及びしは釈迦・多宝・十方の諸仏の

御頸を切らんとする人ぞかし日月は一人にてをはせども四天下の

一切衆生の眼なり命なり、日月は仏法をなめて威光勢力を増し

給うと見へて候、仏法のあぢわいをたがうる人は日月の御力をう

ばう人一切衆生の敵なり、いかに日月は光を放ちて彼等が頂をて

らし寿命

と衣食とをあたへてやしなひ給うぞ、彼の三大師の御弟子等が

法華経を誹謗するは偏に日月の御心を入れさせ給いて謗ぜさせ

給うか、其の義なくして日蓮がひが事ならば日天もしめし彼等にも

めしあはせ其その理にまけてありとも其その心ひるがへらずば天寿をも
めしとれかし。

其その義はなくしてただ理不尽りふじんに彼等かれらにさるの子を犬にあづけねづ
みの子を・にたぶやうにうちあづけて・さんざんにせめさせ給たまいて
彼等かれらを罰たし給たまはぬ事心へられず、日蓮にちれんは日月にちがつの御おんためにはをそらく
は大事だいじの御かたきなり、教主きやうしゆしやくそん釈尊おんまえの御前おんまへにてかならずうたへ申もう
べし、其そのの時ときうらみさせ給たまうなよ、日月にちがつにあらざとも地神も海神

もきかれよ日本の守護神もきかるべし、あへて日蓮が曲意はなきなり、いそぎいそぎ御計らいあるべし、ちちせさせ給いて日蓮をうらみさせ給うなよ、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経、恐恐。

七月十四日

日蓮 にちれん 花押 かおう

妙一女御返事 ごへんじ

一五二 妙一女御返事 ごへんじ 弘安三年十月 五十九歳御

作 1260p

去る七月中旬の比、真言・法華の即身成仏の法門・大体註し進らせ候、其の後は一定法華経の即身成仏を御用い候らん、さなく候ては当世の人人の得意候無得道の即身成仏なるべし不審なり、先日

は果分を知らず、えんきよう円教の心

を以て奪つていへば六即そくの中の名字みょうじ観行かんぎようの一念いちねんに同じ、与えて云う

時は観行かんぎよう即そくの事理じり和融わじゆにして理慧りゑ相応そうおうの観行かんぎように及およばず、ある或は

菩提心論ぼだいしんろんの文ぶんにより、ある或はだいにちきよう大日経だいにくぎようの三部さんぶの文ぶんによれども即身成仏そくしんじやうぶつ

にこそあらざらめ生身得忍しやうしんとくにんに

だにも云いよせざる法門なり。

されば世間の人人は菩提心論の唯真言法中の文に落されて

即身成仏は真言宗に限ると思へり、之に依つて正しく即身成仏を

説き給いたる法華經をば戲論等云云、止觀五に云く「設し世を厭う

者も下劣の乗を翫んで枝葉に攀附す狗作務に狎れ猴を敬いて

帝釈と爲し瓦礫を崇めて是れ明珠とす此の黒闇の人豈道を論ず

可けんや」等云云、此の意なるべし、歎かわしきかな華嚴・真言法相

の学者徒にいとまをついやし即身成仏の法門をたつる事よ、

夫れ先ず法華經の即身成仏の法門は竜女を証拠とすべし、提婆品

に云く「須臾の頃に於て便ち正覺を成ず」等云云乃至「變じて男子

と成る」と、又云く「即ち南方無垢世界に往く」云云、伝教大師云く

「能化の竜女も歴劫の

行無く所化の衆生も亦歴劫無し能化所化俱に歴劫無し妙法経力

即身成仏す^{そくしんじょうぶつ}等云云、又法華經の即身成仏に二種あり^{ほけきょう}迹門は理具^{しやくもん}の即身成仏本門は事の即身成仏なり、今本門の即身成仏は^{ほんもん}とういそくみょうほんぬふかい^{そくしんじょうぶつ}当位即妙本有不改と断ずるなれば肉身を其のまま本有無作の三身^{ほんぬむむさ}如来と云える是なり、此の法門は一代諸教の中に之無し文句に^{にょらい}云く「諸教の中に於て之を秘して伝えず」等云云。

又法華經の弘まらせ給うべき時に二度有り所謂在世と末法となり、修行に又二意有り仏世は純円一実滅後末法の今の時は一向^{しゆきぎょう}本門の弘まらせ給うべき時なり、迹門の弘まらせ給うべき時は^{ほんもん}すでに過ぎて二百余年になり、天台・伝教こそ其の能弘の人にてまし^すまし候いしかどもそれもはや入滅し給いぬ、日蓮は今時を得たり豈^{にちゆめつ}此の所囑の本門を弘めざらんや、本・迹二門は機も法も時も遙に^{ほんもん}かくべつ^{ひろ}各別なり。

問うて云く日蓮計り此の事を知るや、答えて云く「天親・竜樹

ないがんれいねん
内鑑冷然^に等云云、天台大師云く、「このごひやくさい
でんぎょうだいしいわ
傳教大師云く、「しょうぞうややす
機^き今^{いま}正^{ただ}しく是^これ其^{その}の時^{とき}なり、何を以て知ることを得んや、
あんらくぎょうほん
安樂行品に云く末世法滅の時と云云、此等の論師・人師末法鬪諍
けんご
堅固の時地涌出現

し給いて本門の肝心たる南無妙法蓮華經の弘ませ給うべき時を
知りて恋させ給いて是くの如き釈を設けさせ給いぬ、尚尚即身成仏
とは迹門は能入の門本門は即身成仏の所詮の実義なり、迹門にし
て得道せる人人・種類種・相對種の成仏・何れも其の実義は本門
じゆりようぼん 寿量品に限れば常にかく観念し給へ正觀なるべし。

然るにさばかりの上代の人人だにも即身成仏には取り煩はせ
給いに、女人の身として度度此くの如く法門を尋ねさせ給う事は
偏に只事にあらず、教主釈尊御身に入り替らせ給うにや竜女が跡
を継ぎ給うか又、曇弥女の二度来れるか、知らず御身は忽に五障
の雲晴れて寂光の覚月を詠め給うべし、委細は又又申す可く候。

弘安三年十月五日

日蓮

花押

妙一女御返事

一二五二

日敵尼御前御返事

弘安三年十一月 五

十九歳御作

1262p

弘安三年十一月八日、尼日敵の立て申す立願の願書並びに御
布施の錢一貫文又たふかたびら一つ法華經の御宝前並びに日月天
に申し上げ候い畢んぬ、其の上は私に計り申すに及ばず候叶ひ叶は
ぬは御信心により候べし全く日蓮がとがにあらず、水すめば月うつ
る風ふけば木ゆるぐごとくみな御心は水のごとし信のよは
きはにごるがごとし、信心のいさぎよきはすめるがごとし、木は
道理のごとし風のゆるがすは経文をよむがごとしとをぼしめせ、
恐恐。

十一月二十九日

日にち蓮れん
日あま蓮ご
日あま蓮ご御ぜ前ん御ご返へん事じ
日あま蓮ご御ぜ前ん御ご返へん事じ

一五三

おうにちによ
王日女殿御返事こうあん
弘安三年

五十九歳御

作

1263p

弁房べんのぼうの便宜びんぎに三百文このたび今度二百文給おわび畢おわんぬ、仏は真まことに尊たてまつくして
 物ものによらず、昔むかしの得勝童子とうじは沙いさごの餅もちいを仏くように供養たてまつし奉たてまつりて阿育大王あそかだいおう
 と生なまれて一閻浮提えんぶだいの主ぬしたりき、貧女ひんによの我がかしらをおろして油あぶらと成な
 せしが須弥山しゅみせんを吹ふきぬきし風かぜも此こゝの火かをけさず、されば此こゝの二三二三
 の鷲目じゆめくは日本国にほんこくを知る人ひとの国くにを寄よせ七宝しちほうの塔とうりてんを 利天りてんにくみあげ
 たらん

にももすすぐるべし、法華經ほけきやうの一字いちじは大地だいちの如ごとし万物ばんぶつを出生しゅつじゆす、一字
 は大海たいかいの如ごとし衆流しゆりうを納おさむ一字いちじは日月にちがつの如ごとし四天下してんげを照てらす、此こゝの一
 字いちじ変なじて仏ぶつとなる、稻いな変なじて苗なえとなる、苗なえ変なじて草くさとなる、草くさ変なじて

米となる。米変じて人となる。人変じて仏となる。女人にょにん変じて妙の一字となる。妙みよの一字変じて台上の釈迦しゃか仏となるべし、南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきよう、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

王日おうにち殿どの

日蓮にちれん

花押かおう

二五四 御輿振御書 文永元年三月 四十三歳御作

与三位公日行 1264p

御文並びに御輿振の日記給ひ候いぬ悦び入つて候、中堂炎上の
事其の義に候か山門破滅の期其の節に候か、此等も其の故無きに
非ず天竺には祇園精舎・頭摩寺・漢土には天台山・正像二千年の内
に以て滅尽せり、今末法に当つて日本国計りに叡山有り三千界の中
の但此の処のみ有るか、定めて悪魔一跡に嫉を留むるか、小乗
権教の輩も之を妬むか、随つて禅僧・律僧・念仏者・王臣に之を訴
へ三千人の大衆は我が山・破滅の根源とも知らず師檀共に
破国・破仏の因縁に迷えり、但恃む所は妙法蓮華経第七の巻の後・
五百歳・於閻浮提・広宣流布の文か、又伝教大師の「正像稍過ぎ

おわ
已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり
の積なり、滅するは生ぜんが為下るは登らんが為なり、山門繁昌
の為ために是かくのことの如るき留難なんを起すか、事事紙面に尽し難がたし早早見参を
期こすす、謹言きんげん。

三月一日

日蓮にちれん

花押かおう

御返事ごへんじ

一一五五

法門申さるべき様の事

文永六年 四十八

歳御作

与三位公日行

1265p

法門申さるべきやう、選択をばうちをきて先ず法華經の第二の卷の今此三界の文を開いて釈尊は我等が親父なり等定め了るべし、何の仏か我等が父母にてはをはします、外典三千余巻にも忠孝の二字こそせんにて候なれ忠は又孝の家より出ずとこそ申し候なれ、されば外典は内典の初門此の心は内典にたがわず候か、人に尊卑・上下はありといえども親を孝するにはすぎずと定められたるか、釈尊は我等が父母なり一代の聖教は父母の子を教えたる教経なるべし、其の中に天上竜宮天竺などには無量無辺の御経ましますなれども、漢土・日本にはわづかに五千・七千余巻なり、此等の

経経きょうぎょうの次第しだい勝劣しょうれつ等はひそか私にはわきま弁えがたう候、而るしかに論師ろんし大師だいし先徳せんとくにはまつだい末代まつだいの人

の智慧ちえこへがたければ彼の人人ひとびとの料簡りょうけんを用ゆべきかのところに、
華嚴宗けこんしゅうの五教四教法相しきようほつそう・三論さんろんの三時二蔵あ・或は三転法輪てんほんりんせ世尊せそん法久後ほうくご
・要当説真實ようとうせつしんじつの文は又法華經ほけきょうより出いて候金口きんくの明説めいせつなり、仏説ぶつせつす
に大おおいに分れて二途たとえなり、譬

へば世間せけんの父母ふぼの讓ゆずりの前判後判ぜんぱんごぱんのごとし、はた又世間せけんの前判後判ぜんぱんごぱん
は如来にょらいの金言きんげんをまなびたるか、孝不孝ふこうの根本こんぽんは前判後判ぜんぱんごぱんの用不用ようぶよう
より事をこれり、かう立て申すもうならば人人ひとびとさもやとをばしめした
らん時申すべし。

抑おさ浄土じょうどの三部經等さんぶきょうの諸宗しよしゅうの依經えきょうは当分とうぶん四十余年よんじゅうよねんの内なり、
世尊せそんは我等われらが慈父じふとして未顕真實みけんしんじつぞと定めさせ給たまふ御心ごしんはかの
四十余年よんじゅうよねんの経経きょうぎょうに付けとをばしめし候か、又説真實しんじつの言ことばにうつれ

とをぼしめし候か、心あらん人人ひとびと御賢察候べきかとしばらくあぢ
わひてよも仏程の親父の一切衆生いっさいしゆじやうを一子とをぼしめすが眞実しんじつな
る事をすてて

未顕みけん眞実しんじつの不実ふじつなる事に付けとはをぼしめさじ、さて法華經ほけきやうにうつ
り候そうじはんは四十余年よんじゆうよねんの經經きやうきやうをすてて遷うつり候べきか、はた又かの
經經きやうきやう並びに南無阿弥陀なむあみだぶつ仏等ぶつをばすてずして遷うつり候べきかとおぼし
きところに凡夫ほんぶの私の

はからいぜひにつけてをそれあるべし、仏と申す親父の仰を仰ぐべしとまつところに仏定めて云く「正直捨方便」等云云、方便と申すは無量義經に未顕真実と申す上に以方便力と申す方便なり、以方便力の方便の内に浄土三部經等の四十余年の一切經は一字一点も漏るべからざるか、されば四十余年の經經をすてて法華經に入らざら

ん人人は世間の孝不孝はしらず仏法の中には第一の不孝の者なるべし、故に第二譬喩品に云く「今此三界乃至雖復教詔而不信受」等云云、四十余年の經經をすてずして法華經に並べて行ぜん人人は主師親の三人のをほせを用いざる人人なり。

教と申すは師親のをしへ詔と申すは主上の詔勅なるべし、仏は閻浮第一の賢王・聖師・賢父なり、されば四十余年の經經につきて法華經へうつらず、又うつれる人人も彼の經經をすててうつらざ

さんたく

るは三徳備えたる親父の仰を用いざる人天地の中に住むべき者に

もち

にんてん

いわ

にやくにんふしん

はあらず、この不孝の人の住処を經の次下に定めて云く「若人不信

ないしこにんみよじゆうにゆうあびこく

たといほけきよう

乃至其人命終入阿鼻獄と等云云、設い法華經をそしらずともうつり

ひとびと

ふこつ

とがうたがい

なかるべし、

ふこつ

不孝の者

付ざらん人人不孝の失疑なかるべし、不孝の者

あくどうつたがい

疑なし

ゆえ

にゆうあびこく

たまい

いかに

いかに

にぜん

爾前の

は又悪道疑なし故に仏は入阿鼻獄と定め給いぬ、何に況や爾前の

きんちゆうぎ

しゆうしん

ほけきよう

つうひ

のみならず、

善導が

經經に執心を固なして法華經へ遷らざるのみならず、善導が

せんちゆうむい

ほうねん

しやへいかくほう

あに

あびじこく

のが

を脱るべしや、

其の所化並びに檀那は又申すに及ばず、

すいびきようしようにふしんじゆ

申す

其の所化並びに檀那は又申すに及ばず、雖復教詔而不信受と申す

そしよけなら

だんな

もう

およ

すいびきようしようにふしんじゆ

申す

は孝に二つあり世間の孝の不孝は外典の人人これをしりぬべし、

ないてん

せけん

ふこつ

げてん

ひとびと

これをしりぬべし、

内典の孝

ふこつ

たといろんし

じつきよう

わきま

ごんきよう

ろんし

を受け

不孝は設い論師等なりとも実教を弁えざる権教の論師の流を受け

ふこつ

たといろんし

じつきよう

わきま

ごんきよう

ろんし

を受け

たる末の論師などは後生しりがたき事なるべし、何に況や末末の

ろんし

ごしよう

がたき事なるべし、

いかに

何に況や末末の

人人をや。

ひとびと

を

や。

ねはんぎよう
涅槃經の三十四に云く、「じんしん
お
墮ちん事は十方世界の土・四重・五逆・乃至涅槃經を謗ずる事は
じゅっぽうせかい
十方世界の土四重五逆乃至涅槃經を信ずる事は爪の上の土・なん
しじゅうごぎやくないしねはんぎよう
どととかれて候、末代には五逆の者と謗法の者は十方世界の土
まつだい
ごとしとみへぬ、されども当時五逆罪つくる者は爪の上の土・つくら
とうじごぎやくざい
ざる者は

じゅっぽうせかい
十方世界の土と説かれ候へば経文そらごととなるやうにみへ候をく
はしくかんがへみ候へば不孝の者を五逆罪の者とは申し候か、又
そつじ ごぎやく もつ
相似の五逆と申す事も候、さるならば前王の正法・実法を弘めさ
たまた
せ給えと候を今の王の権法・相似の法を尊んで天子本命の道場た
しよつぽう
る正法の御寺の御帰依うすくして、権法・邪法の寺の国国に多くい
できたれ

くしゃ まなこ
るは、愚者の眼には仏法繁盛とみへて仏天智者の御眼には古き
しよつぽう
正法の寺寺やうやくうせ候へば一には不孝なるべし賢なる父母の
氏寺をすつるゆへ一には謗法なるべし、若ししからは日本国当世は
ふごつ ほうぽう
国一同に不孝謗法の国な
しやか によらい
るべし、此の国は釈迦如来の御所領仏の左右臣下たる大梵天王・
だいろくてん まおう
第六天の魔王にたはせ給いて大海の死骸をとどめざるがごとく宝山
の曲林をいとうがごとく此の国の謗法をかへんとおぼすかと勘え

申すなりと申せ。

この上捨てられて候四十余年の経経の今に候はいかになんと俗の難せば返詰して申すべし、塔をくむあししろは塔くみあげては切りすつるなりなんと申すべし、此の譬は玄義の第二の文に、「今の大教若し起れば方便の教絶すと申す釈の心なり、妙と申すは絶という事絶と申す事は此の経起れば已前の経経を断止ると申す事なる

べし、正直捨方便の捨の文字の心。又嘉祥の日出ぬるに星かくるの心なるべし、但し爾前の経経は塔のあししろなれば切りすつるとも。又塔をすりせん時は用ゆべし又切りすつべし、三世の諸仏の説法の儀式かくのごとし。

又俗の難に云く慈覚大師の常行堂等の難これをば答うべし、内典の人外典をよむ得道のためにはあらず才学のためか、山寺の

小児しょうじの俱舎くしゃの頌しょうをよむ得道とくだうのためか、伝教でんぎょう慈覚じかくは八宗はつしゅうを極きわめ給たまへり一切いっさい經きょうをよみ給たまう、これみな法華ほけきょう經きょうを詮せんと心こころへ給たまはん梯磴かいはしなるべし。

又俗なんの難なんに云いわく何いかにさらば御房ごぼうは念仏ねんぶつをば申もうし給たまはぬ、答たまえて云いわく伝教でんぎょう大師だいしは二百五十にひゃくごじゅうご戒かいをすて給たまいぬ時ときにあたりて法華ほっけ円頓えんどんの戒かいにまぎれしゆへなり、当世とうせは諸宗しよしゆしゅうの行多ちかけれども時ときにあたりて念仏ねんぶつをもてなして法華ほけきょう經きょうを謗ぼうずるゆえに金石きんせき迷まよいやすければ唱となえ候なまはず、例たとせば仏ぶつ・十二年じふにねんが間ま・常樂じやうらく我淨がじやうじやうの名なをいみ給たまいき、外典げてんにも寒食かんじき

のまつりに火をいみあかき物をいむ、不孝ふこうの国と申す国をば孝養こうようの人はとをらず、此等これらの義なるべし、いくたびも選択せんちやくをばいろへずして先ずかうたつべし。

又御持仏堂にて法門ほうもん申したりしが面目めんもくななどかかれて候事かへすがへす不思議ふしぎにをばへ候、そのゆへは僧となりぬ其その上一閻浮提えんぶだいにありがたき法門ほうもんなるべし、設たいとうかくくの菩薩ぼさつなりともなにとかをもうべき、まして梵天ぼんてん・帝釈たいしやく等は我等われらが親父釈迦しやくかにやらい如来の御所領しりようをあづかりて正法しやうほうの僧をやしなうべき者につけられて候、毘沙門びしゃもん等は四天してん下の主これら此等これらが門まほり又四州の王等は毘沙門びしゃもん天てんが所従しよじゆうなるべし、其の上そ・日本秋津嶋は四州の輪王りんおうの所従しよじゆうにも及ばず・但嶋の長おさなるべし、長おさななどにつかへん者どもに召されたり上ななどかく上めんもく・面目めんもくななど申すは・旁かたがたせんずるところ日蓮にちれんをいやしみてかけるか、総じて日蓮にちれんが弟子でしは京

にのぼりぬれば始は・わすれぬやうにて後には天魔てんまつきて物にくる
うせう房ぼうがごとし、わ御房ごぼうもそれていになりて天のにくまれかほる
な。

のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし、定めて
ことばつき音なども京なめりになりたるらん、ねずみがかわほり
になりたるやうに鳥にもあらずねずみにもあらず・田舎法師いなかほしにもあ
らず京法師みやこほしにもにず・せう房がやうになりぬと・をばゆ、言をば但
いなかことばにてあるべしなかなか・あしきやうにて有あるなり、尊成たかなり
とかけるは隱岐おきの法皇ほうじうの御実名かかたがた不思議ふしぎなるべし。

かつ・しられて候やうに当世とうせの高僧真言こうそうしんごん・天台等てんだいの人人ひとびとの御いのり
は叶かなうまじきよし、前前ぜんぜんに申し候上もう・今年鎌倉かまくらの真言師しんごんし等は去年こそよ
り変成男子へんせいなんしの法をこなはる、隆弁りゅうべんなどは自歎じたんする事かぎりなし、
七八百余人しちやっぴやくにんの真言師しんごんし・東寺とうじ・天台てんだいの大法秘法だいほうひほう尽して行ぜしがついに

むなしくなりぬ、禅宗ぜんしゅう・律僧等りつそう又一同に行いしかどもかなはず、

日蓮にちれん

が叶かなうまじと申もうすとて不思議ふしぎなりなんどをどし候まをいしかども皆みなむ
なしくなりぬ、小事しょうじたる今生こんじょうの御ごいのりの叶はぬを用もちつてしるべし
大事だいじたる後生ごしょう叶かなうべしや。

真言宗しんごんしゅうの漢土かんどに弘ひろまる始てんだいは天台いちねんさんぜんの一念三千てんだいを盗ぬすみ取とつて真言しんごんの

教相きょうそうと定さだめて理りの本ほんとし枝葉しじやうたる印いん・真言しんごんを宗しゆと立たて宗しゆとして

天台宗てんだいしゅうを立たて下くだす条じょう謗法ぼうぼうの根源こんげんたるか、又また華嚴けごん・法相ほっそう・三論さんろんも

天台宗てんだいしゅう日本にほんになかりし時ときは謗法ぼうぼうともしられざりしが伝でん教大師でんぎようだいし

円宗えんしゅうを勘かんえいがだたし給たまいて後ご謗法ぼうぼうの宗しゆともしられたりしなり、当世とうせ

真言等しんごんの七宗しちしゆの

者しやしかしながら謗法ぼうぼうなれば大事だいじのいのり叶かなうべしともをばへず、

天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとは我が宗しゆは正ただなれども邪たしなる他宗たししゅうと同おなずれば我が宗しゆ

の正ただをもしたらぬ者たなるべし、譬たとへば東あづまに迷まよう者しゆは対当たいとうの西にしに迷まよい

東西とうせいに迷まようゆへに十方じゅうぱうに

迷まようなるべし。

外道げどうの法ほうと申まうすは本内道もとないどうより出いでて候しか、而しかれども外道げどうの法ほをもつ

て内道ないどうの敵てきとなるなり、諸宗しよしゆは法華經ほけきやうよりいで天台宗てんだいしゅうを才学さいがくとし

て而も天台宗を失うなるべし、天台宗の人人は我が宗は実義とも
知らざるゆへに我が宗のほろび我が身のかるくなるをばしらずして
他宗を助けて我が宗を失うなるべし、法華宗の人が法華經の題目
南無妙法蓮華經とはとなえずして南無阿彌陀仏と常に唱えば
法華經を失う者なるべし、例せば外道は三宝を立つ其の
中に仏宝と申すは南無摩醯修羅天と唱えしかば仏弟子は翻邪の三
歸と申して南無釈迦牟尼仏と申せしなり、此れをもつて内外のしる
しとす、南無阿彌陀仏とは浄土宗の依經の題目なり、心には
法華經の行者と存すとも南無阿彌陀仏と申さば傍輩は念仏者とし
りぬ、法華經をすてたる人とをもうべし、叡山の三千人は此の旨を
弁えずして王法にもすてられ叡山をもほろぼさんとするゆへに自然
に三宝に申す事叶わず等と申し給うべし。
人不審して云く天台・妙楽・伝教等の御釈に我がやうに法華經

並びに一切経を心えざらん者は悪道に墮つべしと申す釈やあると
申さば、玄の三籤の三及び已今当等をいだし給うべし、伝教大師
六宗の学者・日本国の十四人を呵して云く、「顕戒論の下に云く昔
齊朝の光統を聞き今は本朝の六統を見る、実なるかな法華の何況
や」等云云、華嚴・真言・法相・三論の四宗を呵して云く、「依憑集に
云く新来の真言家は即ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華嚴家

すなわち影響の軌模を隠す。沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れ称心の醉を覆う、著有の法相宗は僕陽の帰依を非し青竜の判経を撥う、等云云、天台・妙楽・伝教等は眞言等の七宗の人人は設い戒定はまつたくとも謗法のゆへに悪道脱るべからずと定められたり、何に況や禅宗・浄土宗等は勿論なるべし、されば止観は偏に達磨をこそはして

候めれ、而るに当世の天台宗の人人は諸宗に得道をゆるすのみならず諸宗の行をうばい取つて我が行とする事いかん、当世の人人ことに眞言宗を不審せんか立て申すべきやう、日本国は八宗あり眞言宗大に分れて二流あり所謂東寺・天台なるべし、法相・三論・華嚴・東寺の眞言等は大乘宗設い定慧は大乘なれども東大寺の小乗戒を持つ

ゆへに戒は小乗なるべし、退大取小の者小乗宗なるべし、叡山の

真言宗しんごんしゅうは天台てんだい円頓えんどんの戒まじかりをうく全まったく真言宗しんごんしゅうの戒まじかりなし、されば天台宗てんだいしゅうの円頓戒えんどんにをちたる真言宗しんごんしゅうなり等もつ申まうすべし、而しかるに座主ざす等ごうそつの高僧名こうそうを天台宗てんだいしゅうにかりて一向いっこう・真言宗しんごんしゅうによて法華經ほけきょうをさぐるゆへに・叡山えいざん皆謗法みなほうほうになりて御ごいのりにしるしなきか。

問いうて云いわく天台法華宗てんだいほうけしゅうにたいして真言宗しんごんしゅうの名なをけづらるる証文しょうもん如何いかん、答こたえて云いわく学生式がくせいしきに云いわく傳教大師でんきょうだいし作なり天台法華宗てんだいほうけしゅう年分ねんぶん学生式がくせいしき一い首年しゅねん

分度者ぶんどしゃの人ひと傳法でんぽう者しやに加くえらる凡おほそ法華宗ほうけしゅう天台てんだいの年分ねんぶんは弘仁こうにん九年くわんねんより叡山えいざん

に住すせしめて一十二年じふにねん山門さんもんを出いださず兩業りやうごふを修しゅう学がくせしめん、凡おほそ

止觀業しこんごふの者しや凡おほそ遮那業しゃなごふの者しや等ごう云云ごうごんごふ、顯戒論けんがいろん緣起えんぎの上うへに云いわく「新しん

法華宗ほうけしゅうを加くえんことを請こつう表ひょう一首いっしゅ、沙門しゃもん最澄さいちやう華嚴宗けこんしゅうに二人ふたり天台てんだい

法華宗ほうけしゅうに二人ふたり等ごう云云ごうごんごふ、又また云いわく「天台てんだいの業ごふに一人ひとり一人まかし摩訶止觀まかしを讀よましむ」

此等こゝらは天台宗てんだいしゅうの内に真言宗しんごんしゅうをば入いれて候まをこそ候まをめれ、嘉祥元年かじやうがんねん六む

月十五日げつじふごにちの格いわに云いわく「右入唐ごにやう廻まわて請益しやうす伝灯法師でんとうほふし位い円仁えんにんの表いわ

く、伏して天台宗の本朝に伝わることを尋ねれば 延暦廿四

年 廿五年特天台の年分度者二人を賜う一人は真言の業を習わ

し一人は止観の業を学す 然れば則ち天台宗の止観と真言との両

業は是れ桓武天皇の崇建する所と等云云、叡山にをいては天台宗に

たいしては真言宗の名をけづり天台宗を骨とし真言をば肉となせ

るか。

而るに末代に及びて天台・真言・両宗中あしうなりて骨と肉と分
け座主は一向に真言となる骨なき者のごとし・大衆は多分天台宗
なり肉なきもののごとし、仏法に諍いあるゆへに世間の相論も出来
して叡山静ならず朝下にわづらい多し、此等の大事を内内は存すべ
し、此の法門はいまだをしえざりきよくよく存知すべし。

又念仏宗は法華経を背いて浄土の三部経につくゆへに阿弥陀仏
を正として釈迦仏をあなづる、真言師・大日をせんとをもうゆへに
釈迦如来をあなづる、戒にをいては大小殊なれども釈尊を本とす
よぶつ 余仏は証 明なるべし、諸宗殊なりとも釈迦を仰ぐべきか、師子の
中の虫師子をくらう、仏教をば外道はやぶりがたし内道の内に事
いできた

りて仏道を失うべし仏の遺言なり、仏道の内には小乗をもつて
大乘を失い権大乘をもつて実大乘を失うべし、此等は又外道のご

とし、又小乗・権大乘よりは実大乘法華經の人人がかへりて
法華經をば失はんが大事にて候べ

し、仏法の滅不滅は叡山にあるべし、叡山の仏法滅せるかのゆえに

異国我が朝をほろぼさんとす、叡山の正法の失するゆえに大天魔

日本国に出来して法然・大日等が身に入り、此等が身を橋として

王臣等の御身にうつり住み

、かへりて叡山三千人に入るゆえに師檀中不和にして御祈しるし

なし、御祈請しるしなれば三千の大衆等檀那にすてはてられぬ。

又王臣等・天台・真言の学者に問うて云く念仏・禅宗等の極理は

天台・真言とは一つかとはせ給へば、名は天台真言にかりて其の心

も弁えぬ高僧天魔にぬかれて答えて云く、禅宗の極理は天台・真言

の極理なり・弥陀念仏は法華經の肝心なりなんと答え申すなり、

而るを念仏者・禅宗等のやつばらには天魔乗りうつりて当世の天台

真言しんごんの

僧しんごんよりも智慧ちえかしくきゆえに全くしからず、禅ぜんははるかに天台てんだい・
真言しんごんに超こえたる極理ごくりなり、或あるは云いわく「諸教しよきやうは理深我等衆生りじんわれらしゆじやうは解微
なり、機教ききやう相違そくいせり得道とくどうあるべからず、なんど申もうすゆへに、天台てんだい・
真言しんごん等の学者がくしや・王臣等おうしん・檀那だんな皆奪みないとられて御歸依ごきえなければ現身げんしんに
餓鬼道がきだうに墮おちて友の肉をはみ、仏神ぶつしんにいかりをなし檀那だんなをすそし年
年に災

を起しある。或は我が生身しよつしんの本尊ほんぞんたる大講堂だいこうどうの教主きよつしやく釈尊しゃくそんをやきはらい
あるしよつしん。或は生身しよつしんの弥勒菩薩みろくぼさつをほろぼす、進んでは教主きよつしやく釈尊しゃくそんの怨敵おんてきとな
しりぞしりぞ。退いては当来弥勒とうらいみろくの出世しゅつせを過あやまたんとする候か、この大罪たいざいは経論きやうろん
にいまだとかれず、又此の大罪たいざいは叡山えいざん三千人さんぜんの失とがにあらず公家くげ。
武家ぶげの失とがとなるべし。

日本にほん一州じちゆう上下万人じふばんにん・一人もなく謗法ぼうほうなれば大梵天王だいぼんてんのう帝桓なら並びに
てんしようだいじん。天照大神等隣国りんこくの聖人しやうにんに仰せつけられて謗法ぼうほうをためさんとせらる
るか、例せば国民こくみんたりし清盛入道きよもりにゆうどう王法おうほうをかたぶけたてまつり結句けっく
さんのう。だいぶつでん。は山王さんおう・大仏殿だいぶつでんをやきはらいしかば天照大神てんしようだいじん正八幡山王しやうはちまんさん等よりき
せさせ給たまいて源みなもとの頼義よりとよが末の頼朝よりとよに仰せ下くだして平家へいけをほろぼされ
て

国土安穩こくどあんゑんなりき、今一国こぞ挙りて仏神ぶつしんの敵てきとなれり、我が国くにに此の国こ
を領すべき人なきかのゆへに大蒙古国だいもうこくは起るとみへたり、例せば

震旦高麗等は天竺については仏国なるべし、彼の国国禅宗・念仏宗
になりて蒙古にほろぼされぬ、日本国は彼の二国の弟子なり二国の
ほろぼされんにあに此の国安穩なるべしや、国をたすけ家を・をも
は
人人はいそぎ禅念がともがらを經文のごとくいましめらるべき
か、經文のごとくならば仏神・日本国にまします、かれを請しま
いらせんと術はおぼろげならでは叶いがたし、先ず世間の上下万人
云く八幡大菩薩は正直の頂にやどり給い別のすみかなし等云云、
世間に正直の人なければ大菩薩のすみかまします、又仏法の中
に法華經計りこそ正直の御經にてはおはしませ、法華經の行者な
ければ大菩薩の御すみか・おはせざるか。
但し日本国には日蓮一人計りこそ世間出世正直の者にては候へ
其の故は故最明寺入道に向つて禅宗は天魔のそいなるべしのちに

勘文もつてこれをつけしらしむ、日本国の皆人無間地獄に墮つべし、
これほど有る事を正直に申すものは先代にもありがたくこそ、これ
をもつて推察あるべしそれより外の小事曲ぐべしや、又聖人は言
をかざらずと申す、又いまだ顕れざる後をしるを聖人と申すか、
日蓮は聖人の一分にあたり、此の法門のゆへに二十余所をわれ
結句流罪に及び身に多くのきずをかをほり弟子をあまた殺させた
り、比干にもこえ伍しそ

にもをとらず、提婆菩薩の外道に殺され師子尊者の檀弥利王に頸
をはねられしにもをとるべきか、もししからは八幡大菩薩は日蓮が
いたなき
頂をはなれさせ給いてはいつれの人の頂にかすみ給はん、日蓮
を此の国に用いずばいかんがすべきとなげかれ候なりと申せ、又
にちれん
日蓮房の申し候・仏菩薩並びに諸大善神をかへしまいらせん事は
べちすべ
別の術
なし、禅宗・念仏宗の寺寺を一つもなく失い其の僧らをいましめ
えいざん
叡山の講堂を造り靈山の釈迦牟尼仏の御魂を請し入れたてまつら
ざらん外は諸神もかへり給うべからず、諸仏も此の国を扶け給はん
事はかたしと申せ。

一二五六

十章抄

ぶんえい
文永八年五月 五十歳御作

華嚴宗けこんしゅうと申もうす宗しゅうは華嚴經けこんきょうの円えんと法華經ほっけきょうの円えんとは一いっなり而しかれども

法華經ほっけきょうの円えんは華嚴けこんの円えんの枝末しまつと云いふ、法相ほっそう・三論さんろんも又またかくのごと

し、天台宗てんだいしゅう彼の義ぎに同どうぜば別宗べつしゅうと立たてなにかせん、例れいせば法華ほっけ・

涅槃ねはんは一いっつ円えんなり先せん後に依よつて涅槃ねはん尚なほをとるとさだむ、爾前にぜんの円えん・

法華ほっけの円えんを一いっとならば先せん後ごによりて法華ほっけ豈あに劣あらざらんや、詮せんずる

ところ・

この邪義じゃぎのをこり此妙しみょう彼妙ひみょう・円実えんじつ不異ふい・円頓えんどん義齊ぎさい・前ぜん三さん為い 等どうの釈しやくに

ばかされて起おこる義ぎなり、止觀しがんと申もうすも円頓えんどん止觀しがんの証文しょうもんには華嚴經けこんきょう

の文ぶんをひきて候こうぞ、又また二にの卷まきの四修しゅう三昧さんまいは多分たぶんは念仏ねんぶつと見みへて候こうな

り、源みなもと濁なれば流清りゅうせいからずと申もうして爾前にぜんの円えんと法華經ほっけきょうの円えんと一いっつと

申もうす者ものが止觀しがんを人ひとによませ候こうえば但念仏者ねんぶつのごとくにて候こうなり、但

止觀しがん

は迹門しやくもんより出たり本門ほんもんより出たり本・迹に亘わたると申す二つの義ぎいに
しえよりこれあり、これは且しばらくこれををく、故ゆえに知る一部いちぶの文ぶん共に
円乗えんじやう開権かいこんの妙観みやうかんを成すと申して止観しかん一部いちぶは法華經ほけきやうの開会かいえの上に
建立こんりゆうせる文ぶんなり、爾前にぜん
の経經きやうきやうをひき乃至ないしげてん外典もちを用いて候も爾前にぜん・外典げてんの心こころにはあらず、
文ぶんをばかれども義ぎをばけづりすてたるなり、「境きやうは昔むかしに寄よると雖いえども
智ちは必ず円えんに依よる」と申もうして文殊問方等請觀音等もんじゆほうとうくわんおんとうの諸經しよきやうを引ひいて
四種ししゆを立たつれども心こころは必ず

法華經なり「諸文を散引して一代の文体を該れども正意は唯二經に歸すと申す。これなり。」

止觀に十章あり大意・釈名・体相・撰法・偏円・方便・正觀・果報・起教・旨歸なり、前六重は修多羅に依ると申して大意より方便までの六重は先四巻に限る、これは妙解迹門の心をのべたり、今妙解に依つて以て正行を立つと申すは第七の正觀・十境・十乗の觀法本門の心なり、一念三千此れよりはじまる、一念三千と申す事は迹門にすらな

を許されず何に況や爾前に分たへたる事なり、一念三千の出処は略開三の十如实相なれども義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文迹門は本門の依義判文なり、但真實の依文判義は本門に限るべし、されば円の行まちまちなり沙をかすへ大海をみるなを円の行なり、何に況や爾前の經をよみ弥陀等の諸仏の名号を唱うるをや。

但しこれらは時じ時の行ぎやうなるべし、真しん実に円えんの行ぎやうに順じゆんじて常じやうに口くちずさ
みにすべき事は南な無む妙みやう法ぽう蓮れん華げ経きやうなり、心しんに存ぞんすべき事はいちねんさんぜん一念三千の
観かん法ぽうなり、これは智ち者しゃの行ぎやう解げなり日本にほん国こくの在ざい家がいの者しやには但いっごう一向いっごうに
南な無む妙みやう法ぽう蓮れん華げ経きやうととな

へさすべし、名なは必ず体たいにいたる徳とくあり、法ほ華け経きやうに十七種しちしゆの名なあり
これ通つう名ななり別べつ名なは三さん世ぜの諸しよ仏ぶつ皆みな南な無む妙みやう法ぽう蓮れん華げ経きやうとつけさせ給たまい
しなり、阿あ弥み陀だ・釈しゃ迦か等の諸しよ仏ぶつも因いん位いの時ときは必ず止し観かんなりき口くちずさ
みは必ず南な無む妙みやう法ぽう蓮れん華げ経きやうなり、此これ等らをしらざる天てん台だい・真しん言ごん等ら
念ねん仏ぶつ者しや口くちずさみには一向いっごうに南な無む阿あ弥み陀だ仏ぶつと申もうすあひだ在家ざいけの者しやは
一向いっごうに
念おもうやう天てん台だい・真しん言ごん等らは念ねん仏ぶつにてありけり、又また善ぜん導どう・法ほう然ねんがいちもん一門いちもんは
すなわち天てん台だい・真しん言ごんの人人ひとびとも実じしゆに自じ宗しゆが叶かないがたければ念ねん仏ぶつを申もうす
なり、わづらわしくかれを学まなせんよりは法ほ華け経きやうをよまんよりは一向いっごう

に念ねんぶつ仏ぶつを申もうして浄じょう土どにし

て法ほけき華き經きょうをもさとるべしと申もうす、此この義ぎ日本にほん國こくに充じゅう満まんせし故ゆえに
天てん台だい・真しん言ごんの学がく者しゃ在ざい家がいの人人ひとびとにすてられて六十ろくじゅう余よ州しゅうの山さん寺じはうせは
てぬるなり。

九く十六じゅうろく種しゆの外げ道どうは仏ぶつ慧て比び丘くの威い儀ぎよりをこり、日本にほん國こくの謗ほう法ほうは
爾に前ぜんの円えんと法ほつ華けの円えんと一つひとつといいう義ぎの盛せいなりしよりこれこれははじまれ
り、あわれなるかなや、外げ道どうは常じょう樂らく我が浄じょうと立たてしかばは仏ぶつ世せいにいいでま
させ給たまいてはは苦く・空くう・無む常じょう・

無我と・とかせ給いき、二乗は空觀に著して大乘にすすまざりしかば、いまし 仏誠めて云く五逆は仏のたね塵勞の疇は如来の種二乗の善法は永不成と嫌わせ給いき、常樂我淨の義こそ外道はあしかりしかども名はよかりしぞかし、
而れども仏名をいみ給いき、悪だに仏の種となるましてぜんはとこそをばうれども仏二乗に向いては悪をば許して善をばいましめ給いき。

当世の念仏は法華經を国に失う念仏なり、設いぜんたりとも義分あたれりというとも先ず名をいむべし、其の故は仏法は国に隨うべし、天竺には一向小乘一向大乘大小兼学の国ありわかれたり、震旦亦復是くのこと、
日本国は一向大乘の国大乘の中の一乗の国なり、華嚴・法相・三論等の諸大乘すら猶相応せず何に況や小乗の三宗をや、而る

とつせ

ねんぶつしゅう

ぜんしゅう

もとほうとうぶ

ほつそう

さんろん

けこん

けん

い

べからず

なむ

あみだぶつ

は

爾前

にかぎる、

ほけきよう

をいては

往生

の行に

あらず

開会

の後

・仏因

となるべし、

なむ

みよほうれんげきよう

南無

妙法蓮華

經

は

四十余年

にわたらず

但法華

八箇年

にかぎる、

南無

阿彌陀

仏に

かいえ

開会

せられず

法華

經は

能開

・念仏

は

所開

なり、

法華

經の行者

いちよご

なむ

あみだぶつ

と申さず

とも

南無

阿彌陀

仏

並び

に

十方

の諸

くどく

の功德

を備えたり、

譬えば

如意

宝珠

の如し

金銀

等の財

を備え

たり、

念仏

ねんぶつ

は

一期

申す

とも

法華

經の

功德

を

ぐす

べからず、

譬

ねんぶつ

は

一期

申す

とも

法華

經の

功德

を

ぐす

べからず、

譬

きんぎん

等の

如意

宝珠

をか

ねざる

が

ごとし、

譬

へば

三千

大

きんぎん

等の

財

も

一つの

如意

宝珠

を

ば

かう

べからず、

設

とれる

念仏

なり

とも

猶

体内

の

権

なり

体内

の

実

当世

に

開

会

を

心

得

たる

智

者

も

少

なく

こそ

を

は

す

ら

め、

設

い

さ

る

人

ありとも弟子でし・眷属けんぞく・所従しよじゆうなんどはいかんがあるべかるらん、愚者ぐしや
は智者ちしやの念仏ねんぶつを申し給たまうをみては念仏者ねんぶつとぞ見候もうらん、法華經ほけきようの
行者ぎやうじやとはよも候はじ、又南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと申もうす人をばいかなる
愚者ぐしやも法華經ほけきようの行者ぎやうじやとぞ申もうし候はんずらん、当世とうせに父母ふぼを殺す人
よりも謀反ぼうはんををこす人よりも天台てんだい・真言しんごんの学者がくしやと云はれ
て善公ぜんこうが礼讚らいさんをうたひ然公ねんぶつが念仏ねんぶつをさえづる人人ひとびとはをそろしく候
なり。

この文を止観しかんよみあげさせ給たまいて後たまいふみのざの人ひとにひろめてわた
らせ給たまうべし、止観しかんよみあげさせ給たまはばすみやかに御ごわたり候こうへ。
沙汰さたの事は本ほんより日蓮にちれんが道理どうりだにもつよくば事こと切れん事ことかたし
と存ぞんじて候こういしが人ひとごとに問注もんしゆは法門ほうもんにはににずいみじうしたりと
申もうし候こうなるなるときに事こと切るべしともをばへ候こうはず、少弼しょうひつ殿でんより平三
郎さへもん左衛門さゑもんのもとにわたりて

候こうとぞうけ給たまわり候こう、この事ことのび候こうわば問注もんしゆはよきと御心ごころえ得とく候こうへ
又またいつにてもよも切れぬ事ことは候こうはじ、又また切れずば日蓮にちれんが道理どうりとこそ
人ひと人はををもい候こうはんずらめ、くるしく候こうはず候こう、当時とうじはことに天台てんだい
・真言しんごん等らの人ひと人の多おほく来きて候こうなり、事こと多おほき故ゆえに留とどめ候こうい了おわんぬ。

一一五七

教行証御書きょうぎょうしやうごしよ

文永ぶんえい十二年三月五十四歳

御作 与三位房日進於身延

1276p

夫れ正像二千年に小乗・権大乘を持依して其の功を入れて修行せしかば大体其の益有り、然りと雖も彼れ彼れの経経を修行せし人人は自依の経経にして益を得ると思へども法華経を以て其の意を探れば一分の益なし、所以は何ん仏の在世にして法華経に結縁せしが其の機の熟否に依り円機純熟の者は在世にして仏に成れり、根機微劣の

者は正法に退転して権大乘経の浄名・思益・觀経・仁王般若経等にして其の証果を取れること在世の如し、されば正法には教行証の三つ俱に兼備せり、像法には教行のみ有つて証無し、

今末法に入りては教のみ有つて行証無く

在世結縁の者一人も無し権実の二機悉く失せり、此の時は濁悪たる当世の逆謗の二人に初めて本門の肝心寿量品の南無妙法蓮華経

を以て下種と為す「是の好き良薬を今留めて此に在く汝取つて服
す可し差えじと憂る勿れ」とは是なり、乃往過去の威音王仏の像法
に三宝を知る者一人も無かりしに不輕菩薩出現して教主説き置
き給い

し二十四字を一切衆生に向つて唱えしめしがごとし、彼の二十四字を聞きし者は一人も無く亦不輕大士に値つて益を得たり、是れ則ち前の聞法を下種とせし故なり、今も亦是くの如し、彼は像法此れは濁悪の末法・彼は初隨喜の行者此れは名字の凡夫彼は二十四字の下種此れは唯五字なり、得道の時節異なりと雖も成仏の所詮は全体是れ同じかるべし。

問うて云く上に挙ぐる所の正像末法の教行証各別なり何ぞ妙樂大師は「末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行すべき時に拠ると釈し給うや如何、答えて云く得意に云く正像に益を得し人人は顕益なるべし在世結縁の熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし已に小乘・權大乘爾前・迹門の教行証に似るべくもなし現に証果の者之無し、妙樂の釈の如くんば、冥益なれば人は是を知らず見ざるなり。

問うて云く末法に限りて冥益と知る経文之有りや、答えて云く
法華經第七葉王品に云く「此の経は則ち為閻浮提の人の病の良薬
なり若し人病有らんには是の経を聞くことを得ば病即ち消滅して
ふるうふし
不老不死ならん」等云云、妙樂大師云く「然も後の五百は且く一往
に従う末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行す可き時に拠る
が故に五百と云う」等云云。

問うて云く汝が引く所の経文釈は末法の初五百に限ると聞き
たり 権大乘經等の修行の時節は尚末法万年と云へり如何、答え
て曰く前釈已に且従一往と云へり再往は末法万年の流行なるべし、
天台大師上の経文を釈して云く「但当時大利益を獲るのみに非ず
後の五百歳遠く妙道に沾わん」等云云、是れ末法万年を指せる
経釈に非ずや、

法華經第六分別功德品に云く「悪世末法の時能く是の経を持てる

者あんらくぎょうほんと安樂行品いわに云く末法まつぽうの中に於おいて是この經を説かんと欲ほす等云

云此等これらは皆末法みなまつぽう万年まんねんと云う經文きょうもんなり、彼れ彼れの經經きょうきょうの説は

四十余年よんじゅうよねん未顕みけん眞実しんじつなり、或あるは結集けつじゅう者の意いに拠よるか依用えようし難がたし、拙つたな

いかな諸宗しよしゅうの学者がくしや・法華經ほけきょうの下種げしゆを忘れ三五塵点じんてんの昔を知らず

純円じゆんえんの妙經みょうきょうを捨てて亦生死またしじうじの苦海くかいに沈えんまん事よ、円機えんき純熟じゆんじゆくの

国くにに生を受けて徒いたに無間むげん・大城だいじょうに還かえらんこと不便ふびんとも申もうす許ほかり無

し、崑崙山こんろんに入りし者ものの一の玉たまをも取とらずして貧国ひんくにに歸かへり梅檀林せんだに

入いつて瞻蔔せんぷくを踏ふまずして瓦礫がりがくの本国こくにに歸かへる者に異ちがなら

ず、第三の卷くわんに云く「飢国けこくより来きたりて忽たちまち大王だいおうの膳ぜんに遇あうが如ごとし」

第六だいごに云く「我が此こゝの土ちは安穩あんゑん 我われが淨土じよつどは

毀これず」等云云。

状じやうに云く難問なんもんに云く爾前にぜん当分とうぶんの得道とくどう等云云、涅槃經ねはんぎやう第三に

善男子ぜんなんし应当修習おうとうしゆじゆ」の文ぶんを立たつ可べし之これを受けて弘決くけつ第三に「所謂しよゐ

くおん ひつむ 久遠必無大者と会して、爾前の諸經にして得道せし者は久遠の初業に依るなるべし」と云つて一分の益之無き事を治定して、其の後滅後の弘經に於ても亦復是くの如く正像の得益証果の人は在世の結縁に依るなる

べし等云云、又彼が何度も爾前の得道を云はば無量義經に四十余年の經經を仏・我れと未顕真実と説き給へば・我等が如き名字の凡夫は仏説に依りてこそ成仏を期すべく候へ人師の言語はむよつ 無用なり、涅槃經には依法不依人と説かれて大に制せられて候へば なんと立てて未顕真実と打ち捨て打ち捨て正直捨方便・世尊法久後などの經釈をば秘して左右無く出すべからず。

又難問に云く得道の所詮は爾前も法華經もこれ同じ、其の故は觀經の往生・或は其の外・例の如し等云云と立つ可し、又未顕真実其の外但似仮名字等云云と、又同時の經ありと云はば法師品の

已今当の説をもつて会す可きなり、玄義の三籤の三の文を出す可し、経釈能く能く料簡して秘す可し。

一状に云く真言宗云云等、答う彼が立つる所の如き弘法大師の戲論無明の辺域何れの経文に依るやと云つて彼の依経を引かば云うべし大日如来は三世の諸仏の中には何れぞやと云つて善無畏三蔵・金剛智等の偽りをば

汝は知れるやと云つて其の後一行筆受の相承を立つ可し、大日経には一念三千跡を削れり漢土にして偽りしなり、就中僻見有り毘廬の頂上を蹈む証文は三世の諸仏の所説に之有りや、其の後彼云く等云云、立つ可し

だいまんばらもんが高座の足等云云、彼れ此れ是くの如き次第何なる
大慢婆羅門が高座の足等云云、彼れ此れ是くの如き次第何なる
きょうもんろんぶんこれを出すやと等云云、其の外常に教へし如く問答対論
経文論文に之を出すやと等云云、其の外常に教へし如く問答対論
あるべし、設ひ何なる宗なりとも真言宗の法門を云はば真言の
びやっけんせ
僻見を責む可く候。

次に念仏の曇鸞法師の難行・易行道綽が聖道・浄土善導が雑行
・正行法然が捨閉閣拋の文、此等の本経・本論を尋ぬべし、経に
於て権実の二経有ること例の如し、論に於ても又通別の二論有り、
おいごんじつあ
こくびやくくあ
かくのごとく深く習うべし、彼の依経の浄土三部経の中に
黑白の二論有ること深く習うべし、彼の依経の浄土三部経の中に
かくのごとく深く習うべし、彼の依経の浄土三部経の中に
是くの如き等の所説ありや、又人毎に念仏・阿弥陀等之を讚す又前
是くの如き等の所説ありや、又人毎に念仏・阿弥陀等之を讚す又前
の如し、
しよせんわかんりようこくねんぶつしゆうほけきようぞうぎよう
所詮和漢両国の念仏宗法華経を雑行なんど捨閉閣拋する本経・
ほんろんたすもたしかなる経文なくんば是くの如く権経より
本論を尋ぬべし、若し慥なる経文なくんば是くの如く権経より
じつきようほつほつかぬいほけきようひゆほんかくごとあびだいじようたらく
実経を謗ずるの過罪、法華経の譬喩品の如くば阿鼻大城に墮落し

てんでんむじゆつて展転無数劫を經歷し給はんずらん、彼の宗の僻謬を本として此の三世諸仏の皆是真實の証文を捨つる其の罪実と諸人に評判せさすべし、心有

らん人誰か実否を決せざらんや、而して後に彼の宗の人師を強に破すべし、一經の株を見て万經の勝劣を知らざる事未練なる者かな、其の上我と見明らめずとも釈尊並びに多宝分身の諸仏の定判し給へる經文法華經許り皆是真實なるを不真實・未顯真實を已顯真實と僻める眼は牛羊の所見にも劣れる者なるべし、法師品の已今当・無量義經の歴劫修行未顯真實何なる事ぞや五十余年の諸經の勝劣ぞかし、諸經の勝劣は成仏の有無なり、慈覺・智證の理同事勝の眼・善導・法然の余行非機の目・禪宗が教外別伝の所見は東西動転の眼目・南北不弁の妄見なり、牛羊よりも劣り蝙蝠鳥にも異ならず、依法不依人の經文毀謗此經の文をば如何に

恐れさせ給はざるや、悪鬼入其身して無明の悪酒に酔ひ沈み給うらん。

一切は現証には如かず善無畏・一行が横難横死弘法・慈覚が死去の有様・実に正法の行者是くの如くに有るべく候や、觀仏相海經等の諸經並びに竜樹菩薩の論文如何が候や、一行禪師の筆受の妄語・善無畏のたばかり・弘法の戲論慈覚の理同事勝・曇鸞道綽が余行非機・是くの如き人人の所見は権經権宗の虚妄の仏法の習いにてや候らん、

それほどに浦山敷もなき死去にて候ぞやと和らかに又強く両眼を
細めに見・顔貌に色を調へて閑に言上すべし。

状に云く彼此の経経 得益の数を挙ぐ等云云、是れ不足に候と先

ず陳ぶべし、其の後汝等が宗宗の依経に三仏の証 誠之有りや未だ

聞かず、よも多宝分身は御来り候はじ、此の仏は法華経に來り給い

し間・一仏二言はやはか御坐候べきと次に六難九易何なる経の文に

之有りや、若し仏滅後の人人の偽経は知らず、釈尊の実説五十年

の説法の内には一字・一句も有るべからず候なんど立つ可し、五百

塵点の顕本之有りや三千塵点の結縁説法ありや・一念

信解・五十展転の功德何なる経文に説き給へるや、彼の余経には一

二三乃至十功德すら之無し五十展転まではよも説き給い候はじ、

余経には一二の塵数を挙げず何に況や五百三千をや、二乗の

成・不成竜畜下賤の即身成仏今

の經に限れり、華嚴・般若等の諸大乘經に之有りや、二乗作仏は
始めて今經に在り、よも天台大師程の明哲の弘法・慈覺の如き無文
無義の偽りはおはし給はじと我等は覺え候、又悪人の提婆天道国の
成道法華經に並びて何なる經にか之有りや、然りと雖も万の難を
さしお 閣いて何なる經にか十法界の開會等草木成仏之有りや、天台・
妙樂の無非

中道 惑耳驚心の積は慈覺・智証の理同事勝の異見に之を類す可く

候や、已に天台等は三国伝灯の人師・普賢開發の聖師・天真・發明の

権者なり、豈經論になき事を偽り積し給はんや、彼れ彼れの

經經 に何なる一大事か之有るや、此の經には二十の大事あり

就中五百塵点顯本の寿量に何なる事を説き給へるとか人人は思召

し候、我等が如き凡夫無始已來生死の苦底に沈輪して仏道の彼岸

を夢にも知らざりし衆生界を・無作本覺の三身と成し實に

いちねんさんぜん
一念三千

の極理ごくりを説くなんと浅深せんじんを立つべし、但し公場こうじょうならば然しかるべし私ひそかに
問註しるすべからず、慥たしかに此こゝの法門ほうもんは汝等なんじが如ごとき者は人毎ひとごとに座毎ざごとに日
毎たんに談だんずべくんば三世諸仏さんぜしよぶつの御罰ごおむを蒙かこむるべきなり、日蓮にちれん己証こじようなりと
常に申まをせし是これなり、大日だいにち

經これあに之これ有りや、浄土三部經じようどさんぶきようの成仏じようぶつ已来こゝ凡歴ぼんりやく十劫じゆじやく之これに類るいす可べきや、
なんど前後ぜんごの文乱みだれず一一いっに会えす可べし、其その後ご又云またいうべし、諸人しよにんは
推量しゆりやうも候まをへ是これくの如ごとくいみじき御經ごきやうにて候まをへばこそ多宝遠来たぼうして
証しやうじよう 誠まことを加くわえ分身来集ふんじんらいじゆうし

て三仏の御舌を梵天に付け不虛妄とはのしらせ給たまいしか、地涌千界じゆせんがい出現しゆつげんして濁悪末代の当世じよくあくまつだいとうせに別付属ふぞくの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを一閻浮提えんぶだいのいっさいしじゆじやう

一切衆生いっさいしゆじやうに取り次ぎ給たまうべき仏の勅使たつしなれば、八十萬億じやちやうの諸大

菩薩ぼさつをば止善男子ぜんなんしと嫌きらはせ給たましか等云云、又彼の邪宗じやしやうの者どもの

習ならいとして強あながちしやうもんに証文たすを尋ぬる事これあ之有ゆじゆつほんならり、涌出品ゆんしゆつぽん並びに文句もんくの九の記

の九ぜんさんごさんの前ぜん三後三ごさんの釈いたを出いすべし、但日蓮にちれんが門家もんかの大事だいじ之しに如たてばかず。

又諸宗しよしゆうの人だいろん・大論だいろんの自法愛染あいぜんの文りゆつじゆを問難なんとせば、大論だいろんの立所たてばを

尋たすねて後執權ごしやくけん謗実ぼうじつの過罪かびいをば竜樹りゆじゆは存知なく無く候ないけるか、「余經よきやうは

秘密ひみつに非あらず法華ほつげこ是ひみつれ秘密ひみつと仰おおせられ、譬如大藥師ひによやくしと此この經計げいり

成仏じやうぶつの種子しゆしと定さだめて又悔くい返かへして、「自法愛染あいぜん・不免墮惡道だあくどう」と仰おおせ

られ候なべきか、さで有あらば仏語ぶつごには「正直捨方便しじゆつじきしやほうべん・不受余經ふじゆよきやう一偈いちげ」

なんど法華經ほけきやうの実語じつごには大おおいに違背いはいせり、よもさにては候なはじ、若もし

末法まふほうの当世とうせ時剋じこく相応そうおうせる法華經ほけきやうを謗ほうじじたる弘法曇鸞こうぼうどんらんなんどを

付法蔵の論師釈尊の御記文にわたらせ給う菩薩なれば鑒知してや
記せられたる論文なるらん、覺束無しなんとあざむくべし、御辺や
不免墮惡道の末学なるらん、痛敷候、未来無数劫の人数にてや
有るらんと立つ可し。

又律宗の良觀が云く法光寺殿へ訴状を奉る其の状に云く、忍性
年来歎いて云く当世・日蓮法師と云える者世に在り齋戒は墮獄す云
云、所詮何なる經論に之有りや是一、又云く当世・日本国上下誰か
念仏せざらん念仏は無間の業と云云、是れ何なる經文ぞや慥な
る証文を日蓮房に対して之を聞かん是二、總じて是体の爾前得道の
有無の法門六箇条云云、然るに推知するに極樂寺良觀が已前の
如く日蓮に相値うて宗論有る可きの由る事有らば目安を上げて
極樂寺に対して申すべし、某の師にて候者は去る文永八年に
御勘氣を蒙り佐州へ遷され給うて後、同じき文永

十一年正月の比御免許を蒙り鎌倉に歸る、其の後平金吾に對して
様様の次第申し含ませ給いて甲斐の国の深山に閉籠らせ給いて後
は、何なる主上女院の御意たりと云えども山の内を出で諸宗の
学者がくしゃに法門ほうもんあるべからざる由仰せ候、随つて其の弟子でしに若輩わくぱいのもの
にて候へども師の日蓮にちれんの法門ほうもん九牛が一毛をも学び及ばず候といへど
も

法華經ほけきょうに付ついて不審ふしん有ありと仰おほせらるる人ひとわたらせ給たまはば存ぞじ候なんど云いつて、其その後は随問而答ほうもんもつの法門ほふもん申ます可べし、又前六箇条ぜんろくかんじょう一いの難門なんかねがね・兼兼申かねがねせしが如ごとく日蓮にちれんが弟子等でしは臆病おくびょうにては叶かなうべからず、彼れ彼れの經經きんぎんぎんぎんと法華經ほけきょうと勝劣しょうれつ・浅深成仏不成仏せんじんじょうぶつを判はげん時にぜん・爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそんなりとも物の数かずならず何いかに況そや其その以下とうかくの等覺ぼさつの菩薩ぼさつをや、まして權宗ごんしゅうの者ものどもをや、法華經ほけきょうと申もつす大梵王ほんのうの位ゐにて民たみとも下くだし鬼畜きしゆくなんどと下くだしても其その過有あやまらんやと意いを得えて宗論しゅうろんすべし。

又彼の律宗りつしゅうの者ものどもが破戒はかいなる事山川さんせんの類ぐずるるよりも尚無戒なおむかいなり、成仏じょうぶつまでは思おももよらず人天にんてんの生なまを受うくべしや、妙樂大師みょうらくだいし云いく「若もし一戒いっかいを持たてば人中にんちゆうに生なまずることを得え若もし一戒いっかいを破われば還かえりて三途さんずに墮だす」と、其その外齋法經しじょうほう正法ねんきょう念經ねんきょう等の制法阿含經あこんきょう等の大小乘經だいじつじょうの齋法齋戒じさいじさい今程けいの律宗りつしゅう忍性にんじやうが一党誰かいっかい一戒いっかいを持たてる還かえり

墮だ三途さんずは疑うたがい無し、若もしは無間地獄むげんじごくにや落ちんずらん不便ふびんなんど立

てて宝塔品ほうたつほんの持戒行者ぢがいぎょうじやと是これをのしるべし、其その後良有やや

つて此この法華經ほけきよつの本門ほんもんの肝心かんじん妙法蓮華經みよほうれんげきよつは三世さんぜの諸仏しよぶつの万行まんぎょう万善ばんぜん

の功德くどくを集めて五字ごじと為せり、此この五字ごじの内に豈あに万戒まんがいの功德くどくを納め

ざらんや、但ただし此この具足ぐそくの妙戒みよがいは一度ひとたび持つて後行者ぎょうじや破らんとすれ

ど破れわず是これを金剛宝器戒こんごうぼうきがいとや申しけんなんど立つ可べし、三世さんぜの諸仏しよぶつ

は此この戒がいを持つて法身ほっしん・報身ほうしん・応身おうじんなんど何れいずれも無始無終むしむしゆうの仏ぶつに成

ら
せ給たまう、此これを「諸教しよきょうの中に於おいて之これを秘ひして伝でんへず」とは天台大師てんだいだいしは

書き給たまへり、今末法当世まっぽうとうせの有智うち・無智むち・在家ざいけ・出家しゅっけ上下万人じやうげばんにん・此この

妙法蓮華經みよほうれんげきよつを持つて説とくの如ごとく修行しゆぎょうせんに豈あに仏果ぶつがを得えざらんや、さ

てこそ決定けつじよう無有疑むうぎとは

滅後濁悪めつごじよくあくの法華經ほけきよつの行者ぎを定判ぢやうはんせさせ給たまへり、三仏さんぶつの定判ぢやうはんに漏もれ

たる権宗ごんしゅうの人人ひとびとは決定けつじょうして無間むげんなるべし、是これの如ごとくいみじき戒くわいなれば爾前にぜん・迹門しやくもんの諸戒しよは今いま一分いちぶんの功德くどくなし、功德くどく無なからんに一日いちじつの齋戒さいがいも無用むようなり。

但此ほんもんの本門ほんもんの戒くわいを弘ひろまらせ給たまはんには必ずぜんだいみもん前代未聞ぜんだいみもんの大瑞だいずいあるべし、所謂いわゆる正嘉しょうかの地動ぶんえい文永ぶんえいの長星これ是これなるべし、抑そもそも当世とうせの人人ひとびと何いずれの宗宗ほんもんにか本門ほんもんの本尊ほんぞん戒壇かいだん等を弘ひろ通くつうせる、仏滅ぶつめつ後ご・二千二百二十余年きんめいてんのうに一人ひとりも候あはず、日本にほん人王じんおう・三十代さんじゅうだい欽明天皇きんめいてんのうの御宇ぎように仏法ぶつぼう渡わたつて今いまに七百余年前ぜんだいみもん代未聞だいぼうの大法だいほう此こゝの国くにに流布るふして月氏がつし・漢土かんど・一閻えんがだい浮提うたいの内うちの一切いっさい衆生しゆじょう・仏ぶつに成なるべき事ことこそ有あり難なんけれ有あり難なんけれ、又また已前いぜんの重末まっぼう法ぽうには教行証きやうぎやうしじょうの三さんつ俱ともに備そなわれり例れいせば正法しやうぽうの如ごとし等どう云いふ、地涌じゆの大菩薩だいぼさつ上行じやうぎやう出いでさせ給たまいぬ結要けつちやうの大法だいほう亦また弘ひろまらせ給たまうべし、日本にほん・漢土かんど・万国いっさいしじゆうの一切いっさい衆生しじゆうは金輪こんりん聖王せいおうの出現しゆげんの先兆せんせうの優曇うとん華げに値あえるなるべし、在世ざいせ四十二年しにじゅうにねん並びに

ほけきょう 法華經の しまくもん 迹門 じゅうしゅう 十四品に之を秘して説かせ給はざりし大法本門

しょうしゅう 正宗 いたと に至つて説き顯し給うのみ。

りょうかん 良觀 房が義に云く彼の良觀が日蓮遠国へ下向と聞く時は諸人に

向つて急ぎ急ぎ鎌倉へ上れかし為に宗論を遂げて諸人の不審を晴

さんなんど 自讚毀他する由其の聞え候、此等も戒法にてや有らん

あながたず 強ち尋ぬ可し、又日蓮鎌倉に罷上る時は門戸を閉じて内へ入るべ

からずと之を制法し或は風気なんと虚病して罷り過ぎぬ、某は

にちれん 日蓮に非ず

そでし 其の弟子にて候まま少し言のなまり法門の才覚は乱れがはしくと

も 律宗国賊替るべからずと云うべし、公場にして理運の法門申し

候へばとて雑言・強言・自讚気なる体・人目に見すべからず浅・しき

事なるべし、弥身口意を調べ謹んで主人に向うべし主人に向うべ

し。

三月二十一日

日蓮にちれん

花押かおう

三位阿闍梨御房あじやりごぼうへ之これを遣はす

三月十九日の和風並びに飛鳥同じく二十一日戌の時到来す、
 日蓮一生の間の祈請並びに所願忽ちに成就せしむるか、将又五五
 百歳の仏記宛かも符契の如し、所詮真言・禅宗等の謗法の諸人等
 を召し合せ是非を決せしめば日本国一同に日蓮が弟子・檀那と
 為り、我が弟子等の出家は主上・上皇の師と為らん在家は左右の
 臣下に列ならん、将又一閻浮提皆此の法門を仰がん、幸甚幸甚。

弘安元年三月二十一日

日蓮 花押

諸人御返事

小蒙古の人、大日本国に寄せ来るの事、我が門弟並びに檀那等の
中に若し他人に向い將又自ら言語に及ぶ可からず、若し此の旨に
違背せば門弟を離すべき等の由存知せる所なり、此の旨を以て
人人に示す可く候なり。

弘安四年 太歳 辛巳 六月十六日

花押

人人御中

二六〇 さだしげ殿御返事ごへんじ

1285p

さきざきに申しつるがごとし、世間の学者・仏法を学問して智恵を明めて我も我もと・おもひぬ、一生のうちにもなしくなりて・ゆめのごとくに申しつれども唯一大事を知らずよくよく心得させ給うべし、あなかしこ・あなかしこ。

十二月二十日

日蓮にちれん 在御判

さだしげ殿御返事ごへんじ

二六一 霖雨御書ごしよ

1285p

山中のながきあめつれづれ申すばかり候はず、えんどうかしこま

りて給たまい候いし、ことによろこぶよし玄性房申もうしあげさせ給たまい候いへ
恐きよう恐きよう。

五月廿二日

日蓮にちれん 在御判

御返事ごへんじ

一一六二

玄性房御返事ごへんじ

1286p

いやげんだ入道にやういどうのなげき候いしかばむかはきと玄性御房ごぼうこのよしをかみへ申もうさせ給たまい候へきようきよう。恐恐。

七月十八日

日蓮にちれん

花押かおう

玄性御房ごぼう

一一六三

智妙房御返事ちみょうぼうごへんじ

弘安三年十二月

五

十九歳御作

1286p

鷲目一貫送り給たまいて法華經の御宝前に申もうし上げ了あわぬ。

なによりも故右大将家の御廟と故権太夫殿の御墓とのやけて候
由承わりてなげき候へば又八幡大菩薩並びに若宮のやけさせ給う
事いかんが人のなげき候らむ。

世間の人人は八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と申ぞ、それも
中古の人人の御言なればさもや、但し大隅の正八幡の石の銘には
一方には八幡と申す二字一方には昔靈鷲山に在つて妙法蓮華經
を説き今正宮の中に在つて大菩薩と示現す等云云、月氏にては
釈尊と顯れて法華經を説き給い日本国にしては八幡大菩薩と示現
して正直の二

字を誓いに立て給う、教主釈尊は住劫第九の滅・人寿百歳の時四
月八日甲寅の日中天竺に生れ給い・八十年を経て二月十五日
壬申の日御入滅なり給う、八幡大菩薩は日本国第十六代応神
天皇四月八日甲寅の日生れさせ給いて御年八十の二月の十五日

みずのえさる
王 申に隠れさせ給う、
たま
しゃかぶつ
釈迦仏の化身と申す事はたれの人かあらそ
いをなすべき、
けしん
もつ

しかるに今、日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生。
善導・慧心・永觀・法然等の大天魔にたばらかされて、釈尊をなげ
すてて阿弥陀仏を本尊とす、あまりの物のくるわしさに十五日を奪
い取つて阿弥陀仏の日となす八日をまぎらかして薬師・仏の日と云
云、あまりにをやをにくまんとて八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と
云、大菩薩をもてなすやうなれども八幡の御かたきなり、知らずわ
さでもあるべきに日蓮此の二十八年が間、今此三界の文を引いて
此の迷をしめせば信ぜずはさでこそ有るべきに、いつき・つころし。
つながしつ・おうゆへに八幡大菩薩・宅をやいてこそ天へはのぼり
給いぬらめ日蓮がかんがへて候し立正安国論此れなり、あわれ他国
よりせめ来りてたかのきじをとるやうに、ねこのねずみをかむやう
にせめられん時、あまや女房どものあわて

候そうじはんずらむ、日蓮にちれんが一あるるいを二十八ある年が間せめ候いしむくいに
或あるはいころし・切りころし・或あるはいけどり・或あるは他方たほうへわたされ。
むねもり
宗盛むねもりがなわつきてさらされしやうに・すせんまんの人人ひとびとのなわつき
てせめられんふびんさよ、しかれども日本にほんこく国あるの一切いっさい衆生しゅうじょうは皆みな
五逆罪ごぎやくざいの者なれば・かくせめられんをば天よるこも悦よろこび仏もゆるし給たまは
じ、あわれあわれはぢみぬさきに阿闍世王あじゃせの提婆たいばを・いましめしや
うに・真言師しんごんし・念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅうの者どもをいましめて・すこし・つみをゆる
くせさせ給たまえかし、あらをかし・あらふびん・ふびん・わわくのや
つばらの智者ちしやげなれば・まこととて・もてなして事にあはんふびんさ
よ、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十二月十八日

にちれん

かおう

日蓮

花押

ちめう房御返事ごへんじ

昨日武蔵前司殿の使として念仏者等召相せられて候いしなり、又
十郎の使にて候はんずるか、十住毘婆娑論を内内見る可き事候、
万事を抛ちて尋ね出だし給い候え。

十月十四日

日蓮在御判

武蔵公御房

十住毘婆娑論十四卷拜上せしむ、今一卷は求め失せ候なり、
御要以後は早早返し給わる可く候、愚身も必ず必ず参り候い
て承わる可く候、昨日の論談五十展転の随喜誠に以て有難く
候、又袴品賜わる可し、穴賢穴賢、恐恐。

十月十一日

判

にちれんあじやりごぼう
日蓮阿闍梨御房

二六五

むさし
武蔵殿御消息

1288p

撰論じょうろん三卷は給候へども釈論等の各疏候はざるあひだ事ゆかず
候、をなじくは給たまい候いてみあわすべく候、見参の事いつにてか候べ
き、仰をかほり候はん。

八講はいつにて候やらん。

七月十七日

にちれん

日蓮在御判

むさし ごほう

武蔵殿御房

二六六

破良観等御書

りょうかん

ごしよ

1289p

りょうかん

良観・道隆

ひがんにしん

悲願聖人等が極楽寺

けんちようじ

・建長寺・寿福寺・普門寺等を

ふもん

立てて叡山の円頓大戒を蔑如するが如し、此れは第一には破僧罪

えいざん

えんどん

べつじよ

ごと

こ

だいいち

はそうざい

なり二には仏の御身より血を出だす、今の念仏者等が教主釈尊の

おんみ

ねんぶつ

きやうしやくそん

御入滅の二月十五日ををさへとり、阿弥陀仏の日とさだめ仏生日

にちめつ

あみたぶつ

の八日をば薬師・仏の日といひ、一切の真言師が大日如来をたのみ

やくし

いっさい

しんごんし

だいにち

にやらい

て教主釈尊

しやくそん

は無明むみやうに迷まよえる仏ぼつ・我等われらが履くつとりにも及およばず結句けつこは灌頂かんぢやうして
釈迦しやくか仏ぶつの頭かうをふむ、禪宗ぜんしゆの法師ほふし等はきやうげ教外べつてん別伝べつてんとののしりて一切いっさい經きやう
をば・ほんぐには・をとり我等われらは仏ぼつに超過ちやうかせりと云云、此は南印度いんどの
大慢だいまんばら門もんがながれ出すい仏身血ぶつしんけつの

一分いちぶんなり、第三に蓮花れんげ比丘尼びくにを打ちころす・これ仏の養母やうぼにして
阿羅漢あらかんなり、此これは阿闍世王あじゃせの提婆達多たいぼだつたをすてて仏ぼつにつき給たまいし時
いかりをなして大火だいか・むねををやきしかば・はらをすへかねて此の尼のゆ
きあひ候あひまうたりしを打ち殺

せしなり、今の念仏ねんぶつ者等ねんぶつが念仏ねんぶつと禪ぜんと律りつと真言しんごんとをせめられて・の
ぶるかたわなし、結句けつこは檀那だんな等をあひかたらひて日蓮にちれんが弟子でしを殺ころさ
せ・予こゝろが頭等かうとうにきずをつけ・さんそうをなして二度にどまで流罪るゐざい・あわ
せて頸くびをきらせんと・くわだて・弟子でし等ら數十人そくじゅうにんをろうに申まうし入いる
のみならず、かまくら内に火をつけて日蓮にちれんが弟子でしの所為しよゐなりとふれ

まわして一人もなく失わんとせしが如し。

而るに提婆達多が三逆罪は仏の御身より血をいだせども爾禪の

仏・久遠実成の釈迦にはあらず、殺羅漢も爾前の羅漢法華經の

行者にはあらず、破和合僧も爾前小乗の戒なり法華円頓の大戒

の僧にもあらず、大地われて無間地獄に入りしかども法華經の三逆

ならざればいたうも深くあらざりけるかのゆへに・提婆は法華經に

して天王如来とならさせ給う、今の真言師・念仏者・禪・律等の人人

・並に此れを御帰依ある天子並びに將軍家・日本国の上

下方人は法華經の強敵となる上一乗の行者の大怨敵となりぬ、さ

れば設い一切経を覺り十方の仏に帰依し一国の堂塔を建立し

一切衆生に慈悲を・をこすとも・衆流大海に入りかんみとなり

衆鳥・須弥山に近ずきて同色となるがごとく、一切の大善變じて

大悪となり七福かへりて七難をこり現在眼前には他国のせめきびし

く・自身は兵にやぶられ妻子は敵にとられて後生には無間・大城に墮つべし。

此れをもんてをもうに故弥四郎殿は設い大罪なりとも提婆が逆にはすぐべからず、何に況や小罪なり法華経を信ぜし人なれば無一不成仏疑なきものなり。

疑て云く今の真言師等を無間地獄と候は心へられぬ事なり、今の真言は源弘法大師・伝教大師・慈覚大師・智証大師・此の四大師のながれなり、此の人人地獄に墮ち給はずば今の真言師いかで墮ち候べき、答えて云く地獄は一百三十六あり一百三十五の地獄へは墮つる人雨のごとし其の因やすきゆへなり、一の無間・大城へは墮つる人

かたし五逆罪を造る人まれなるゆへなり、又仏前には五逆なし但殺父殺母の二逆計りあり、又二逆の中にも仏前の殺父殺母は決定

として無間地獄へは墮ちがたし畜生の二逆のごとし、而るに今、日本国の人人は又一百三十五の地獄へはゆきがたし、日本国の人人はことなれども同じく法華経誹謗の輩なり、日本国異なれども同じく法華誹謗の者となる事は源伝教より外の三大師の義より事をこれり。

問うて云く三大師の義如何、答えて云く弘法等の三大師は其の義ことなれども同じく法華経誹謗は一同なり、所謂善無畏三蔵金剛智三蔵・不空三蔵の法華経誹謗の邪義なり。

問うて云く三大師の地獄へ墮つる証拠如何、答えて云く善無畏
三蔵は漢土・日本国の真言宗の元祖なり彼の人士すでに頓死して
閻魔のせめにあへり、其のせめに値う事は他の失ならず法華経は
大日経に劣ると立てしゆへなり、而るを此の失を知らずして其の義
をひろめたる慈覚・智証地獄を脱るべしや、但し善無畏三蔵の閻魔
のせめにあ

づかりし故をだにもたづねあきらめば此の事自然に顕れぬべし
善無畏三蔵の鉄の縄七すぢつきたる事は大日経の疏に我とかか
れて候上・日本醍醐の閻魔堂・相州鎌倉の閻魔堂にあらわせり、
此れをもつて慈覚・智証等の失をば知るべし。

問うて云く法華経と大日の三部経の勝劣は经文如何、答えて
曰く法華経には諸経の中に於て最も其の上^そに在りと説かれて此の
法華経は一切経の頂上の法なりと云云、大日経七卷・金剛

ちようきよう

頂経 三卷・蘇悉地経三卷・已上十三卷の内法華経に勝ると申す

きようもん

経文は一句一偈もこれなし、但蘇悉地経計りにぞ三部の中に於て

な

此の経を王と為すと申

こ

す文候、此れは大日の三部経の中の王なり全く一代の諸経の中の

だいおう

大王にはあらず、例せば本朝の王を大王といふ此れは日本国の内

だいおう

の大王なり、全く漢土・月支の諸王に勝れたる大王にはあらず、

ほけきよう

法華経は一代の一切経の中の王たるのみならず三世十方の一切の

しよぶつ

諸仏の所説の中の大王なり、例せば大梵天王のごときんば諸の小

てんりんおう

王・転輪王・

してんのう

四天王釈王魔王等の一切の王に勝れたる大王なり、金剛頂経と

もう

申すは真言教の頂王・最勝王経と申すは外道・天仙等の経の中の

だいおう

大王・全く一切経の中の頂王にはあらず、法華経は一切経の頂上

ほうしゆ

の宝珠なり、論師・人師をすてて専ら経文をくらべばかくのごと

し、而るしかを天台宗てんだいしゅう・出来しゅつたいの後が・月氏がよりわたれる経論きょうろん並なに天竺てんじく
漢土かんとにして立て

たる宗宗がんその元祖等しゅら・修羅心しゅらをさしはさめるかのゆへに・或あるは経論きょうろんに
わたくしの言をまじへて事をぶつせつ仏説ぶつせつによせ・或あるは事をが月氏がの経しによせ
なんどして私の筆をそへぶつせつ仏説ぶつせつのよしを称しょうす、善無畏ぜんむいさんぞう三蔵等ほけきょうは法華経
と大日経だいにちきょうとの勝劣しょうれつを定むるに理同事勝りどうじしやうと云云こ、此これはぶつ仏意いにはあ
らず、仏説ぶつせつのごとくならば大日経等だいにちきょうは四十余年よんじゅうよねんの内・四十余年よんじゅうよねんの
内

にも華嚴・般若等には及ぶべくもなし、但阿含・小乘經にすこしい
さてたる経なり、而るを慈覚大師等は此の義を弁えずして善無畏
三蔵を重くをもつゆへに理同事勝の義を實義とをもえり、弘法大師
は又此等には・にるべくもなき僻人なり、所謂法華經は大日經に
劣るのみならず華嚴經等にもをとれり等云云、而を此の邪義を人
に信

ぜさせんために・或は大日如来より写瓶せりといふ・或は我まのあ
たり靈山にしてきけりといふ・或は師の慧果和尚の我をほめし・或
は三鉢をなげたりなど申し種種の誑言をかまへたり、愚な者は
今信をとる、又天台の眞言師は

慈覚大師を本とせり、叡山の三千人もこれを信ずる上墮つて代代の
賢王の御世に勅宣を下す、其の勅宣のせんは法華經と大日經とは
同醍醐・譬へば鳥の両翼・人の左右の眼等云云、今の世の一切の

真言師しんごんしは此こゝの義ぎをすぎず、此等こゝらは螢火ほたるびを日月にちがつに越ゆとをもひ蚯蚓きゅういんを花山はなさんより高しという義ぎなり、其その上うへ一切いっさいの真言師しんごんしは灌頂かんちようとなづけて釈迦しやくか

仏ぶつを直ちよくちにかきてしきまんだらとなづけて弟子でしの足あしにふませ、或あるは法華經ほけきようの仏ぶつは無明むみように迷まよえる仏ぶつ・人ひとの中なかのいそのごとし真言師しんごんしが履くつとりにも及およばずなんどふみにつくれり、今いまの真言師しんごんしは此こゝの文ぶんを本疏ほんじょとなづけて日日にちじつ・夜夜よよに

談義だんぎして公家くげ・武家ぶげのいのりと・がうしてを・をくしよの所領しよりやうを知行ちぎやうし檀那だんなをたばらかす、事ことの心こゝろを案あずるに彼かの大慢だいまんばら門かどがごとく無垢論師むくろんしにことならず、此等こゝらは現身げんしんに阿鼻あびの大火だいかを招まねくべき人人ひとびとなれども強敵きやうてきのなければ・さてすぐるか、而しかりといへども其そのしるし眼前がんぜんにみへたり、慈覚じかくと智証ちしやうとの門家等もんか・鬪諍とうじやうひまなく・弘法こうぼうと聖覚しやうかくが末孫まつそん

が本寺と伝法院・叡山と園城との相論は修羅と修羅と猿と犬との
ごとし、此等は慈覚の夢想に日をいるとみ・弘法の現身妄語のすへ
か、仏末代を記して云く謗法の者は大地微塵よりも多く正法の者
は爪上の土よりすくなかるべし、仏語まことなるかなや今・日本国
かの記にあたれり。

予はかつしろしめされて候がごとく幼少の時より学文に心をか
けし上・大虚空蔵菩薩の御宝前に願を立て日本第一の智者となし
給へ十二のとしより此の願を立つ其の所願に子細あり今くはしく・
のせがたし、其の後先ず

浄土宗・禅宗をきく・其の後叡山・園城・高野・京中・田舎等処
に修行して自他宗の法門をならひしかども我が身の不審はれがた
き上・本よりの願に諸宗何れの宗なりとも偏党執心あるべからず・
いづれも仏説に証拠分明に道理現前ならんを用ゆべし・論師・訳者
・人師等にはよるべからず専ら經文を詮とせん、又法門によりては
設い王のせめ

なりともはばかるべからず何に況や其の已下の人をや、父母・師兄
等の教訓なりとも用ゆべからず、人の信不信はしらずありのまま
に申すべしと誓状を立てしゆへに三論宗の嘉祥華嚴宗の澄観
法相宗の慈恩等をば天台

・妙楽・伝教等は無間地獄とせめたれども真言宗の善無畏三蔵
弘法大師慈覚・智証等の僻見は・いまだ・せむる人なし、善無畏
不空等の真言宗をすてて天台による事は妙楽大師の記の十の後

序並に伝でんぎ教大師だいいしの依憑集えびょうにのせられたれどもいまだくはしからざればにや慈覺じかく・智証ちしやうの謬びよは出来しゅつせるかと強盛じやうじやうにせむるなり。

かく申まうす程ほどに年卅二けんちやう・建長五年けんちやうの春はるの比ひより念仏宗ねんぶつしゆうと禅宗ぜんしゆうと等らう

をせめはじめて後に真言宗しんこんしゆう等をせむるほどに念仏者ねんぶつ等始はじめにはあ

なづる、日蓮にちれんいかにかしくくとも明円房めいゑんぼう・公胤僧上こういんそうじやう・顕真座主けんしんざす等に

はは・すぐべからず、彼の人人ひとびとだにもはじめは法然上人ほつねんしやうじんをなんぜしが

後におみな墮おちて、或あるは上人しやうじんの弟子でしとなり、或あるは門家もんかとなる、日蓮にちれんは

かれがこ

とし我われつめん我われつめんとはやりし程ほどにいにしへの人人ひとびとは但ただ法然ほつねんをな

んじて善導ぜんどう道みち・綽等せつたうをせめず、又また經きやうの権実こんじつをいわざりしかばこそ

念仏者ねんぶつはををこりけれ、今日蓮けふにちれんは善導ぜんどう・法然ほつねん等ををば無間地獄むげんじごくにつきを

として専せんら浄土じやうどの三部さんぶ

經きやうを法華經ほけきやうにをしあはせて、せむるゆへに、螢火ほたるびに日月にちがつ・江河かうかに

たいかい
大海のやうなる上念仏ねんぶつは仏のしばらくの戯論けろんの法実たいかいに・これをもつて生死しじふじを・はなれんとをもわば大石を船つくに造り大海たいかいをわたり・大山をになて嶮難けんなんを越ゆるがごとしと難なんぜしかば面おもてをむかうる念仏者ねんぶつなし。

後てんだいしゅうには天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとを・かたらひて・どしうちてんだいしゅうにせんとせしかども・それもかなはず、天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとも・せめられしかば在家ざいけ・出家しゅつけの心ひとびとある人人ねんぶつ・少少念仏ぜんしゅうと禅宗ぜんしゅうとをすつ、念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅう・律僧等りつそう我が智力かな叶かなわざるゆへに諸宗しよしゅうに

入りあるきて種種しじゆじゆの讒奏ざんそうをなす、在家ざいけの人人ひとびとは不審ふしんあるゆへに各各
の持僧等あゐ・或は真言師しんごんし・或は念仏者ねんぶつ・或はふるき天台宗てんだいしゆう・或は禅宗ぜんしゆう
・或は律僧等あゐをわきにはさみて・或は日蓮にちれんが住处じゆうしよに向い・或はかしこ
へよぶ、而れども一言一言にはすぎず迦旃延かせんねんが外道げどうをせめしがごと
く徳慧菩薩とくえぼさつが摩沓婆まこつをつめしがごとくせめしゆへに其その力ちから及およばず、
人は智か

しこき者ものすくなきかのゆへに結句けっくは念仏者等ねんぶつをばつめさせてかなは
ぬところには大名だいめいしてものをぼへぬ侍どもものたのしくて先後せんごも弁わきまえ
ぬ在家ざいけの徳人等あけ挙あげて日蓮にちれんをあだするほどに・或は私ひそかに狼藉ろうぜきをいたし
て日蓮にちれんが・かたの者を打ち・或は所あゐを・をひ・或は地あゐをたて・或はかん
だうをなす事ことかずをしらず、上に奏そうすれども人の主ぬしとなる人は・さ
す

が戒力かいちからといひ福田ふくでんと申し子細しさいあるべきかとをもひて左右さうなく失とがも

なされざりしかば・きりものども・よりあひてまちうど等をかたら
ひて数万人ばんにんの者をもつて夜中にをしよせ失わんとせしほどに・
十羅刹じゅうしやくの御計らいにてやあ

りけん日蓮にちれんそ其の難なんを脱まぬかれしかば・両国りょうこくの吏・心をあわせたる事な
れば殺されぬを・とがにして伊豆の国へながされぬ、最明寺さいみょうじ殿計り
こそ子細しさいあるかともわかれていそぎゆるされぬ。

さりし程に最明寺さいみょうじ入道殿隠れさせ給たまいしかば・いかにも此の事あ
しくなりなんぞ、いそぎかくるべき世なりとは・をもひしかどもこ
れにつけても法華經ほけきょうのかたうど・つよくせば一定事いで来るならば
身命しんみょうを・すつるにてこそあらめと思おもい切りしかば讒奏ざんそうの人人ひとびといよいよ・か
よ・かふずをしらず、上下万人じょうげばんにん・皆みな父母ふぼのかたきとわりをみるがごと
し、不ふ軽菩薩ぎょうぼさつの威音王いおんおう仏ぶつのすへにすこしもたがう事なし。

二六七

檀越某御返事だんのつそれがしごへんじ

弘安元年四月五十七歳御作こうあんがんねん

1294p

御文おんぶみうけ給たまわ良あいわ了おんぬ、日蓮流罪にちれんるざいして先先にわざわいども重かさなり
て候に又なにと申もうす事か候べきとはをも

へども人のそんぜんとし侯には不可思議の事の侯へば。さが侯はんず
らむ、もしその義侯わば用いて侯はんには百千万億倍のさいわいな
り、今度ぞ三度になり侯、法華経も。よも日蓮をば。ゆるき行者と
はをばせじ、釈迦。多宝。十方の諸仏。地涌千界の御利生。今度みは
て侯はん、あわれ。あわれ。さる事の侯へかし、雪山童子の跡を。を
ひ
ふぎようばさつ
不軽菩薩の身になり侯はん、いたづらに。やくびやうにや。をかされ
侯はんずらむ、をいじににや死に侯はんずらむあらあさましあさま
し、願くは法華経のゆへに国主にあだまれて今度。生死をはなれ侯
わばや、天照太神。正八幡。日月。帝釈。梵天等の仏前の御ちかい
今度心み侯わばや、事事さてをき侯いぬ、各各の御身の事は此れよ
り申し
はからうべし、さで。をはするこそ法華経を十二時に行ぜさせ給う

にては侯らめ、あなかしこ・あなかしこ、御みやづかいを法華經と。
をぼしめせ、「いっさいせけん一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」とは
此れなり、かへすおんふみがへす御文の心こそをもちやられ侯へ、恐恐謹
厳。

四月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

御衣布並に単衣布給候たびそうら了おんぬ、抑そもそも食は命をつぎ衣は身をかくす、食を有情うじょうに施ほどこすものは長寿ちやうじゆの報をまねぎ人の食を奪うもものは短命たんめいの報をうく、衣を人にほどこさぬ者は世ぜん世じゆ存生ぞんじゆに裸形からがたの報をかんず、六道ろくどうの中に人道いなか已下みなは皆形裸みなにして生る天てんは随生衣ずいじやうえなり、其その中の鹿等は無衣にして生るのみならず、人の衣をぬすみしゆへに身の皮を人にはがれて盗し衣をつぐのうほうをえたり、人の中にも鮮白せんびやく比丘びくには生ぜし時・衣を被て生れぬ、仏法ぶつぽうの中にも裸形らぎようにして法を行なざる道なし、故ゆえに釈尊しゃくそんは摩訶まか大母だいぼ比丘尼びくにの衣を得て正覚しょうかくをなり給たまいき、諸もろもろの比丘びくには三衣さんねをゆるされき、鈍根どんこんの比丘びくは衣食いしよくととのわざれば阿羅漢果あらかんを証せずとみへて候、殊ことに法華經ほけきやう

には

柔和にんにく忍辱衣もつと申して衣をこそ本として候へ、又法華經ほけきよつの行者ぎようじやをば衣

をもつて覆おおわせ給たまうと申すもねんごろなるぎ

なり。

日蓮にちれんは無戒むかいの比丘びく・邪見じゃけんの者なり故ゆえに天これをにくませ給たまいて食

衣いともしき身みにて候、しかりといえども法華經ほけきよつを口に誦じゆし・とき・ど

き・これをとく、譬たとへば大おろちの珠たまを含みいらんよりせんだんを生ず

るがごとし、いらんをすてて・せんだん・まいらせ候・形ちがひをかくして

珠たまを授けたてまつる、天台大師てんだいだいし云く「他經たきよつは但男しるに記して女に記せ

ず・等云云ほけきよつ、法華經ほけきよつにあらざれば女人にょにん成仏じようぶつは許ゆるされざるか、具足ぐそく

千万光相如来せんまんこうそうと申すは摩訶大比丘尼まかびくにのことなり、此れ等もつてをし

はかり候に女人にょにんの成仏じようぶつは法華經ほけきよつにより候べきか、要當説真實ようとうせつしんじつは

教主きようちゆう釈尊しやくそんの金言きんげん・皆是真實かいぜしんじつ是多宝仏たほうぶつの証明しやうみやう・舌相ぜつそう至梵天ほんてんは諸仏しよぶつ

の誓せいじょう状じょうなり、日月にちがつは地に落おつべしや須弥山しゅみせんはくづるべしや・大海たいかいの
潮しほは増減ぞうげんせざるべしや大地だいちは翻覆ほんぷくすべしや、此この御衣ごいの功德くどくは
法華經ほけきょうにとかれて候こう、但心だんしんをもつて・をもひやらせ給たまい候こうへ、言ことには
のべがたし。

二六九

慧日天照御書

1297p

もつて一閻浮提えんぶだいの者の眼まなこを抉えくるべきか、釈迦しやくか仏ぶつの御名みなをば幼稚ようちにては日種ひむねという、長大ちやうだいの後の異名いみょうをば慧日えにちという、此の国を日本にほんという主ぬしをば天照てんしやうと申まうす。

二七〇

釈迦御所領御書

1297p

是こゝれ我が有あり其そのの中の衆生しゆじやうは悉しつじゆく是こゝれ吾子わがこなり」等云云、この文いのごとくならばこの三界さんがいは皆みな釈迦しやくか如来にょらいの御所領しよりやうなり、寿量品じゆりやうぼんに云いく「我常わがじやうに此こゝの娑婆世界しやばせかいに在あり」等云云、この文いのごとくならば乃な至いた過去こくわく五百塵点劫ごひやくじんてんこつよりこのかた此こゝの娑婆世界しやばせかいは釈迦しやくか菩薩ぼさつの御

進退しんたいの国土こくどなり、其の上その仏の滅後めつご・一百年あそかだいおうに阿育大王あそかだいおうと申もうす王おうを
しき此この南閻浮提えんぶだいを三度さんどまで僧そうに付属ふぞくし給たまいき、又此またの南閻浮提えんぶだいの
内うちの大日本国にほんこくをば尸那国しなの南岳なんがく大師だいし・此この国くにの上宮じょうぐう太子たいしと生なれて
この国くにの王おうとなり給たまいき、しかれば聖徳太子しょうとくたいし已後いごの諸王しよは皆みな南岳なんがく
大師だいしの末葉まつようなり、桓武天皇かんむ已下いかの諸王しよは又山王さんかう。

一一七一 大果報御書

1298d

者どもをば少少はをひだし、或^{ある}はきしやうかかせてはうにすぎ
て候いつるが、七月末八月の始に所領^{しよりょう}かわり一万余束の作毛をさへ
かられて山やにまとひ候ゆへに、日蓮^{にちれん}なをばうじつるゆへかとの
のしり候上、御かへり

の後七月十五日より上下^{じゆじげ}いしはいと申^{もう}す虫ふりて国^{だいたい}大体三分のうへ
そんじ候いぬ、をほかた人のいくべしともみへず候、これまで候をも
いたたせ給^{たま}う上なに事もともひ候へども、かさねての御心^{おんこころ}ざしは
うにもすぎ候か。

なによりもおぼつかなく候いつる事はとののかみの御気色^{みけしき}いかん
がとをぼつかなく候いつるになに事もなき事^{もの}申すばかりなし。

かうらいむこの事うけ給わり候ぬ、なにとなくとも釈迦如来しやくかにょらい法華經ほけきようを失うしない候ういつる上は大果報かほうならば三年はよもとをもひ候ういつるにいくさけかちつづき候ういぬ、国くにはいかにも候うへ法華經ほけきようのひろまらん事こと疑うたがなかるべし。

御母おんことへの御事ごじ經きやうをよみ候事ごうじに申し候うなり、此この御使おんつかいいそぎ候うへばくはしく申まさず候う、恐恐おそおそ。

一一七二

除病御書じゆびやうごしよ

1298a

其その上日蓮にぢれんの身並みならびに弟子でし又過か去こ謗法ぼうほうの重罪じゆうつうざい未まだ尽つきざるの上うへ現在げんざい在あり多年たの間謗法ぼうほうの者ものと為なり亦また謗法ぼうほうの国くにに生なる、当時とうじ信心しんじん深こからざらんか豈あにこれ之を脱まぬれんや、但ただし貴辺きへん此この病びやうを受うくるの理ことわり或ある人之これを告つぐ予ま日夜朝暮ちやうぼに法華經ほけきように申まし上げ朝暮ちやうぼに青天せいてんに訴う除病じゆびやうの由よし今いま

日^{これ}之^をを^聞く^喜悦^な何^に事^{ごと}か^之に^過ぎ^すん、事^見参^をを^期せ^ん、恐^き恐^よう^き恐^よう[。]。

三論宗も分別ならざる証文をもつて立てたりしかば・盲目の
 衆生に値うて誑惑せしかども・明眼の智者に値うて邪義顕れぬ、
 此れ即根露るれば枝枯れ源乾けば流竭く自然の道理なり、
 念仏宗・禅宗と真言とは其の根本謬を
 本とし誑惑を源とせり、其の根源顕れなば設い日蓮はいやしくと
 天のはからひ大法流布の時来るならば・彼の悪法やぶれて此の眞実
 の法立つ事疑なかるべし。
 すでに此の悪法消えんとするは汝知るやいなや、日蓮をいやし
 て・さんざんとするほどにするほどに。

堂塔どうたうつくらず布施ふせまいらせずらん、をしき物は命ばかりなり、こ
 れを法華經ほけきようにまいらせんとをもし、三世さんぜの仏は皆凡夫みなほんぶにてをはせし
 時命ときのみことを法華經ほけきようにまいらせて仏になり給うたま、此こゝの故ゆゑに一切いっさいの仏の始はじめに
 は南無なむと申もうす南無なむと申もうすは月氏がつしの語ことば。此こゝの土ちにては歸命きみょうと申もうすな
 り、歸命きみょうと申もうすは天台てんだいの釈いわに云く、「命ことばを以もつて自ら歸かへす」等云云みずか、命ことばを
 法華經ほけきようにまいらせて仏にはならせ給うたま、日蓮にちれん今この度たび命ことばを法華經ほけきようにまい
 らせて。

一七五

題目功德御書

1300p

くどく 功德は先の功德にたくらぶれば、前の功德は爪上の土のごとし、
ほけきよう 法華經の題目の功德十方の土のごとし、先の功德は一の水のごと
だいもく し・題目の功德は大海のごとし、先の功德は瓦礫のごとし・過日の
くどく 功德は金銀のごとし、先の功德は螢火のごとし・題目の功德は日月
のぐとしと申す經文なり。

一七六

大悪大善御書

1300p

だいじ 大事には小瑞なし、大悪をきれば大善きたる、すでに大謗法・国
にあり大正法必ずひろまるべし、各各なにをかなげかせ給うべき、

伽葉尊者にあらずとも・まいをも・まいぬべし、舍利弗にあらねども
立つてをどりぬべし、上行菩薩の大地よりいで給いしには・をどり
てこそいで給いしか、普賢菩薩の来るには大地を六種にうごかせり、
事多しといへども・しげきゆへにとどむ、又文申すすべし。

二七七

来臨曇華御書

1300p

追つて申す、御器の事は越後
由・内房へ申させ給い候へ。

房申し候べし、御心ざしふかき

春の始の御悦び自他申し籠め候い畢んぬ、抑去年の來臨は曇華の如し、将又夢か幻か疑いまだ晴れず候処に。

二七八

常樂我淨御書

1301p

出でさせ給いて諸大乘經をかながへ出し十方の淨土を立て一切の諸法は常樂我淨と云云、其の時・五天竺の十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国の諸の小乘經の無量無辺の寺の衆僧一同に蜂のごとく蜂起

し・蟻のごとく緊集し・雷のごとくなりわたり、一時に緊集して頭をあわせてなげいて云く仏在世にこそ五大の外道は我等が本師・教主釈尊とわ・あらそいしが・仏は一人なり・外道は多勢なりし

かども・外道げどうはありのごとし・

仏は竜のごとく・師し子し王のごとくましませしかばこそせめ責めかたせ
給たまいぬ、此これはそれには・にるべくもなし、馬鳴めみよは一人なれども・
我等われらは多人なれども・代たすへになれば・悪はつよく善はゆわし、仏の
在ざい世せの外道げどうと仏法ぶつぽうとは水火すいかなり。

一七九

歸伏きふく正法しやうぽう御書ごしよ

1301p

上かみ一人いちにん下げ万民ばんみん一同いどうに歸伏きふくする正法しやうぽうなり始めて勝劣しやうれつを立てて
慈覚じかく・智証ちしやう・弘法こうぼうそむかんとをほせある　べかりしと・をぼすか強敵かうてき
を仏法ぶつぽうの中ちゆうにあらそい出来しゅつすべきたね国くにのみだるべきせんてうなり
いかなる聖人せいじんの御ごことばなりとも用もちゆべからず各各日遮にっしやをいやし

みて

真言宗しんごんしゅうと法華経宗ほけきょうと叡山末寺えいざんまつじ蘭城らんじょうなら。
良。

或あるはくびをきり・或あるはながさればととかれて此この法門ほうもんを涅槃經ねはんぎょう
しゅご守護經等の法華經ほけきょうの流通りゅうつうの御經ごきょうにときをかせ給たまいて候まちは此この国くにをば
ほんのう梵王たいしやく・帝釈たいしやくに仏ぶつをほせつけてよりせめさせ給たまうべしととかれて候まちさ
 れば此この国くには法華經ほけきょうの大怨敵おんてきなれば現世げんせに無間地獄むげんじごくの大苦おほすこし
 心こころみさせ給たまうか教主きょうしゅ・釈尊しやくそんの日蓮にちれんがかたうどをしてつみしらせ給たまう
 にやよもさるならば天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しょうはちまんは此この国くにのかたうどには
 なり給たまはし日蓮房にちれんのかたきなりすずにてなをわかし候そつらはんとぞは
 やり候まちらむいのらばいよいよあしかりなんあしかりなん、恐恐きょうきょう
 謹言きんげん。

二月十三日

にちれん

日蓮在御判

ごへんじ
御返事

二八一

いしよくごしよ
衣食御書

1302p

あまこぜん
尼御前へ参る

がもく
鷲目一貫給い畢んぬ、
たまいおわ

ちをのぶ、ころもはさむさをふせぎあつさ

をさえはぢをかくす、人にものをせする人は人のいろをましちか
らをそえいのちをつくなり。

二八二

釈迦如来御書

1303p

釈迦如来は正しく法華經に「悪世末法の時能く是の經を持つ者」
等云云、善導云く千中無一等云云、いづれを信ずべしや、又云く
日蓮がみる程の經論を善導・法然上人は御覽なかりけるかと申す
か、若しこの難のごとくならば、昔の人の謬をば後の人のいかにあ
らわすべからざるか。

二八三

破信墮惡御書

1303p

かたきはを・をく・かたきはつよく、かたうどは・こわくして・しま
け候へば悪心を・をこして・かへつて法華經の信心をも・やぶり惡道に

をち候なり、あしきところをば・ついしさりてあるべし、釈迦しやくか仏ぶつは三
十二相そなわつて身は金色面は満月まんげつのごとし、しかれども・或あるは
悪人あくにんはすみとみる・或あるは悪人あくにんははいとみる・或あるは悪人あくにんはかたきとみ
る。

二八四

阿仏房御書

或文永九年三月十三日

五十一歳御作

与阿仏房

1304p

御文委おんふみくわしく披見ひけんいたし候あい了わんぬ、抑そも宝塔そもほうとうの御供養くようの物銭ものせん一貫文

白米あかしなしろじなこなまをめくり物ものたたしかかににううけけとり候あい了わんぬ、此この趣おもむき

御本尊ごほんそん法華經ほけきょうにもねんねんごろごろろにに申もうし上あげ候あ御心ごこころやすやすくおおぼしめめし候

へ

一御文おんふみにに云いく多た宝ほう如にょ来らい・涌現ゆげんの宝塔ほうとう・何事なにごとを表あらわし給たまうやと云云、

此この法門ほうもんゆゆしきしき大だい事じなりなり宝ほう塔とうををここととわわるるにに天台てんだい大だい師し文もん句くの八はちに

釈しゃくし給たまいし時とき証しょう前ぜん起き後ごの二重にじゅうの宝ほう塔とうあり、証しょう前ぜんはは迹しやく門もん・起き後ごは

本門ほんもんなりなり・或あるは又また閉へい塔とうはは迹しやく門もん・

開塔かいとうはは本門ほんもん是これ即すなわち境智きょうちの二法にぽうなりししげきげゆゆへへにに・これこれををく、

所詮しよせん・三周しやうもんの声聞ほけきやう・法華經ほけきやうに来て己心こしんの宝塔ほつたうを見ると云う事なり、
今日蓮いまにちれんが弟子でし・檀那だんな又又かくのごとし、末法まつぽうに入つて法華經ほけきやうを持つ
男女なんよのすがたより外には宝塔ほつたう

なきなり、若もし然しかれば貴賤きせんじふつげ上下をえらばず南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうと・と

なうるものは我が身ほつたう宝塔ほつたうにして我が身ほつたう又多たほう宝に如来によらいなり、

妙法蓮華經みようほうれんげきやうより外ほつたうに宝塔ほつたうなきなり、法華經ほけきやうの題目だいもく宝塔ほつたうなり宝塔ほつたう又

南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうなり。

今阿仏上人しよぶつにんの一身すいかは地水火風空ちすいかくうの五大だいもくなり、此この五大だいもくは題目だいもくの

五字ごじなり、然しかれば阿仏房あぶつぼうさながら宝塔ほつたう・宝塔ほつたうさながら阿仏房あぶつぼう此これ

より外ほかの才覚さいかくむやく無益むやくなり、聞きこ・信しん・戒がい・定ぢやう・進しん・捨しつ・慚ぜんの七宝しちぽうを以てかぎ

りたる宝塔ほつたうなり、多宝たほう如来によらいの宝塔ほつたうを供養くやうし給たまうかとおもへばさにて

は候こゝろはず我が身を供養くやうし給たまう我が身さんじん又三身さんじん即一しやくいちの本覚ほんがくの如来によらいな

り、かく

信じ給たまいて南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやうと唱となえ給たまへここさながら宝塔ほつたうの住じゆう処じよなり、經いに云いく「法華經ほけきやうを説とくこと有あらん処ところは我が此こゝの宝塔ほつたう其そのの前に涌現ゆげんす」とはこれなり、あまりにありがたく候まうへば宝塔ほつたうをかきあらはし・まいらせ候

ぞ、子こにあらずんばゆづる事ことなかれ信心強盛しんじんかうじやうの者ものに非あらずんば見みする事ことなかれ、出世しゆつせの本懐ほんかいとはこれなり。

阿あ仏ぶつ房ぼうしかしなあぶつぼうながら北国きたくにの導師どうしとも申もうしつべし、淨行じやうぎやう菩薩ぼさつうまれれかわり給たまいてや日蓮にちれんを御ごとふらい給たまうか

不思議ふしぎなり不思議ふしぎなり、此こゝろの御志ごしをば日蓮にちれんはしらず上行菩薩じやうぎやうぼさつの御出現ごしゆげんの力ちからにまかせたてまつり候まうぞ、別べちの故ゆゑはあるべからずあるべからず、宝塔ほうたうをば夫婦ふうふひそかにをがませ給たまへ、委くわしくは又又またまた申まうすべく候まう、恐恐きようきよう謹言きんげん。

文永九年壬申ぶんえい みにずのえさる 三月十三日

日蓮にちれん 花押かおう

阿仏房上人所へあぶつぼう じやうにん

一一八五 妙法曼陀羅供養事みようほう まんだら ぐやう

文永十年 五十二

歳御作 与千日尼 1305p

妙法蓮華經みようほうれんげきやうの御本尊ごほんぞん供養ぐやう候まういぬ、此こゝろの曼陀羅まんだらは文字もんじは五字七字ごじしちじにて候まうへども三世さんぜの諸仏しよぶつの御師おんし一切いっさいの女人にょにんの成仏じやうぶつの印文いんぶんなり、冥途めいど

にはともしびとなり死出の山にては良馬となり。天には日月の如し
地には須弥山の如し。生死海の船なり成仏得道の導師なり。

此の大曼陀羅は仏滅後・二千二百二十余年の間・一閻浮提の内に
は未だひろまらせ給はず、病によりて薬あり軽病には凡薬をほどこ
し重病には仙薬をあたうべし、仏滅後より今までは二千二百二十
余年の間は人の煩惱と罪業の病軽かりしかば智者と申す医師たち
つづき出でさせ給いて病に随つて薬をあたえ給いき、所謂俱舍宗
成実

宗・律宗・法相宗・三論宗・真言宗・華嚴宗・天台宗・浄土宗・
禅宗等なり、彼の宗宗に一一に薬あり、所謂華嚴の六相十玄・三論

の八不中道・法相の唯識觀・律宗の二百五十戒・浄土宗の弥陀の
名号・禅宗の見性成仏・真言宗の五輪觀・天台宗の一念三千等
なり。

今の世は既に末法にのぞみて諸宗の機にあらざる上、日本国一同に一闡提大謗法の者となる、又物に譬うれば父母を殺す罪謀叛ををこせる科・出仏身血等の重罪等にも過ぎたり、三千大千世界の一切衆生の人の眼をぬける罪よりも深く十方世界の堂塔を焼きはらへるよりも超えたる大罪を一人して作れる程の衆生日本国に充滿せり、されば天は日日に眼をいからして日本国をにらめ、地神は忿りを作して時時に身をふるうなり、然るに我が朝の一切衆生は皆我が身に科なしと思ひ必ず往生すべし成仏をとげんと思へり、赫赫たる日輪をも目無き者は見ず知らず、譬えばたいこの如くなる地震をもねぶれる者の心にはおぼえず、日本国の一切衆生も是くの如し女人よりも男子の科はををく男子よりも尼のとがは重し尼よりも僧の科はををく破戒の僧よりも持戒の法師のとがは重し、持戒の僧よりも智者の科はを

もかるべし、此等は癩病の中の白癩病、白癩病の中の大白癩病なり。

末代の一切衆生はいかなる大医いかなる良薬を以てか治す可きとかんがへ候へば、大日如来の智拳の印並びに大日の真言・阿弥陀如来の四十八願・薬師如来の十二大願・衆病悉除の誓も、此の薬には及ぶべからず、つやつや病消滅せざる上、いよいよ倍増すべし、此等の末法の時のために、教主釈尊・多宝如来・十方分身の諸仏を集めさせ

給うて、一の仙薬をとどめ給へり、所謂妙法蓮華經の五の文字なり、此の文字をば法慧・功德林・金剛薩・普賢・文殊・薬王・観音等にもあつらへさせ給はず、何に況や迦葉舍利弗等をや、上行菩薩等と申して、四人の大菩薩まします、此の菩薩は釈迦如来・五百塵点劫よりこのかた御弟子とならせ給いて、一念も仏をわすれず、まします大

菩薩ぼさつ

を召し出して授けさせ給たまへり、されば此りの良薬りょうやくを持たん女人にょにん等を
ば此ぼさつの四人の大菩薩ぜんごさう・前後左右に立そひて・此にょにんの女人にょにんたたせ給たまへば此
の大菩薩ぼさつも立たせ給たまふ乃至此ないしの女人にょにん・道を行く時は此ぼさつの菩薩ぼさつも道
を行き給たまふ、譬たとへば・かげ

と身と水と魚と声と声とひびきと月と光との如ごとし、此ぼさつの四大菩薩なむ南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえたてまつる女人にょにんをはなるるならば釈迦しゃか・多宝たほう・

十方分身じゅうっぽうふんじんの諸仏しよぶつの御勘氣ごかんきを此ぼさつの菩薩ぼさつの身に蒙こうむらせ給たまうべし、提婆だいば・

よりも罪つみ深く瞿迦利くつかりよりも大妄語もうごのものたるべしと・をばしめすべ

し、あら悦よろこばしやあら悦よろこばしや、南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやう・南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきやう。

にちれんかおつ
日蓮花押

一一八六

阿仏房尼御前御返事

建治元年九月三日

五十四歳御作

与千日尼

1307p

おんぶみ 御文に云く 謗法の浅深軽重に於ては罪報如何なりや云云、夫れ
 ほげきよう 法華經の意は一切衆生・皆成仏道の御經なり、然りといへども信ず
 じようぶつ する者は成仏をとく謗する者は無間・大城に墮つ、「も
 こ 斯の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人
 みようじゆう 命終して阿鼻獄に入らん」とは是なり、謗法の者にも浅深軽重の
 ほげきよう 異あり、法華經を持ち信ずれども誠に色心相應の信者能持此經の
 けんちりじぎ 行者はまれなり、此等の人は介爾ばかりの謗法はあれど
 じんじゆう も深重の罪を受くる事はなし、信心はつよく謗法はよはき故なり、
 たいすい 大水を以て小火をけすが如し、涅槃經に云く「もし善比丘法を壊る

者を見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば当に知るべし、是の人は
佛法中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真
の声聞なり云云、此の經文にせめられ奉りて日蓮は種種の大難
に値うといへども佛法中怨のいましめを免れんために申すなり。

但し謗法に至つて浅深あるべし、偽り愚かにしてせめざる時もあ
るべし、真言・天台宗等は法華誹謗の者いたう呵責すべし、然れど
も大智慧の者ならでは日蓮が弘通の法門分別しがたし、然る間ま
づまづ・さしをく事あるなり立正安国論の如し、いふと・いはざると
の重罪免れ難し、云つて罪のまぬがるべきを見ながら聞きながら置
い

ていましめざる事眼耳の二徳忽に破れて大無慈悲なり、章安の云く
「慈無くして詐り親むは即ち是れ彼が怨なり」等云々、重罪消滅し
がたし彌利益の心尤も然る可きなり、軽罪の者をばせむる時モ・

あるべし。又せめずしてをくも候べし、自然じねんになをる辺あるべしせめて自他じたの罪つみを脱まぬかれてさてゆるすべし、其そのの故ゆえは一向いっこう謗法ほうほうになればまされる大重罪じゅうざいを受くるなり、彼が為ために悪を除けば即すなわち是これ彼が親これなりとは是なり。

にちれん
日蓮が弟子・檀那の中にも多く此くの如き事共候、さだめて
あまごぜん
尼御前もきこしめして候らん、一谷の入道の事日蓮が檀那と内に
は候へども外は念仏者にて候ぞ後生はいかんとすべき、然れども
ほけきょう
法華經十卷渡して候いしなり。

いよいよしんじん

彌信心を上げみ給うべし、仏法の道理を人に語らむ者をば男女

そくに

僧尼必ずにくむべし、よしくまばにくめ法華經・釈迦仏天台・

みょうらく

でんぎょう

妙楽・伝教章安等の金言に身をまかすべし、如説修行の人とは

こ

是れなり、法華經に云く「恐れ

おい

よしゆゆ

の世に於て能く須臾も説く」云云、悪世末法の時三毒強盛の悪人

しゅうほう

ざんじ

等集りて候時正法を暫時も信じ持ちたらん者をば天人供養あるべ

きょうもん

しと云う経文なり。

ごしゅう

此の度大願を立て後生を願はせ給へ少しも謗法不信のとが候は

むげん

だいじょうたがい

は無間・大城疑いなかるべし、譬ば海上を船にのるに船おろそか

たとえ

にあらざれどもあか入りぬれば必ず船中の人人・一時に死するなり、なはて堅固なれども蟻の穴あれば必ず終に湛へたる水のたまらざるが如し、謗法不信のあかをとり信心のなはてをかたむべきなり、浅き

罪ならば我よりゆるして功德を得さすべし、重きあやまちならば信心をはげまして消滅さすべし、尼御前の御身として謗法の罪の浅深軽重の義をとほせ給う事まことにありがたき女人にておはすなり、竜女にあにをとるべ

きや、「我大乘の教を闡いて苦の衆生を度脱せん」とは是なり、其の義趣を問うは是れ則ち難しと為すと云つて法華經の義理を問う人はかたしと説かれて候、相構えて相構えて力あらん程は謗法をばせめさせ給うべし、日蓮が義を助け給う事不思議に覚え候ぞ不思議に覚え候ぞ、穴賢穴賢。

九月三日

にちれん
日蓮

かおう
花押

あぶつぼうあまごぜんごへんじ
阿仏房尼御前御返事

一一八七 千日尼御前御返事 あまごせんごへんじ
弘安元年七月二十八 こうあんがねん

日 五十七歳御作 与阿仏房尼 あぶつぼう 1309p

弘安元年太歳 こうあんがねん 戊寅 つちのえとら 七月六日佐渡の国より千日尼と申す人、同
じく日本国甲州・波木井郷の身延山と申す深山へ同じき夫の阿仏房 あぶつぼう
を使として送り給う御文に云く、女人の罪障はいかがと存じ候へど ほうもん
も御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候いしを万事は ばんじ
たのみまいらせ候いて等云云。

夫れ法華経と申し候。御経は誰れ仏の説き給いて候ぞとをもひ候 そ
へば此の日本国より西漢土より又西・流沙・葱嶺と申すよりは又は にほんこく
るか西・月氏と申す国に浄飯王と申しける大王の太子・十九の年、
位をすてさせ給いて檀どく山と申す山に入り御出家三十にして仏と たま

ならせ給いたまい身は金色と変じ神は三世さんぜをかがみさせ給たまう、すぎにし

事来るべき事かがみにかけてさせ給たまいておはせし仏の五十余年が間

一代・一切の経経きようぎようを説きおかせ給たまう、此の一切の経経きようぎよう 仏の滅後

一千年が間月氏国にやうやくひろまり候いしかどもいまだ漢土かんと

日本国等へは来り候はず、仏滅度後・一千十五年と申せしに漢土かんとへ

仏法渡りはじめて候いしかども又いまだ法華経は・わたり給たまはず。

仏法漢土ぶつぽうかんどにわたりて二百余年に及んで月氏がっしと漢土かんどとの中間ちゆうげんに龜

茲国もつと申す国あり、彼の国の内に鳩摩羅くまえん三蔵さんぞうと申せし人の

御弟子おんでしに鳩摩羅くま什と申せし人彼の国より月氏がっしに入り・須利耶蘇磨しゆりやそま

三蔵と申せし人に此の法華経ほけきよう

をさづかり給たまいき、其の経を授けし時の御語おんことばに云く此の法華経ほけきようは

東北の国に縁ふかしと云云、此の御語おんことばをもちて月氏がっしより東方漢土とうほうかんど

へは・わたし給たまいしなり。

かんど 漢土には仏法わたりて二百余年後秦王の御宇に渡りて候いき、
にほんこく 日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇治十三年・壬申十月十
とり 三日辛酉の日・此れより西・百済国と申す国より聖明皇・日本国に
ぶつぼう 仏法をわたす、此れは漢土に仏法わたりて四百年・仏滅後・一千四
そ 百余年なり、其の中にも法華経はましまししかども人王第三十二
よつめいてんのう 代・用明天皇の太子聖徳太子と申せし人・漢土へ使を・つかわして
ほけきょう 法華経を・とりよせまいらせて日本国に弘通し給いき、それよりこ
にほんこく のかた七百余年なり、仏滅度後すでに二千二百三十余年になり候
ぶつめつとて 上・月氏・漢土・日本の山・山・河・河・海・海・里
ひとびと 里・遠くへだたり人人・心心・国・国・各各・別別にして語かわりしな
ことなれば、いかでか仏法の御心をば我等凡夫は弁え候べき、ただ
きょうぎょう 経経の文字を引き合せてこそ知るべきに一切経はやうやうに候へ
もんじ ども法華経と申す御経は八巻まします流通に普賢経序文の
ほけきょう ども法華経と申す御経は八巻まします流通に普賢経序文の
もつ ども法華経と申す御経は八巻まします流通に普賢経序文の
ふげん ども法華経と申す御経は八巻まします流通に普賢経序文の
じょうぶん ども法華経と申す御経は八巻まします流通に普賢経序文の

むりようぎきょう
無量義經各一卷已上此の御經を開き見まいらせ候へば明かなる鏡
をもつて

我が面を見るがごとし、日出でて草木の色を弁えるにたり、序品

の無量義經を見まいらせ候へば「よんじゅうよねんいまだ四十余年未だ眞實を顕わさず」

と申す經文あり、法華經の第一の卷方便品の始めに「せそん世尊の法は久

しき後に要らず当に眞實を説きたもうべし」と申す經文あり、第四

の卷の宝塔品には「みょうほげきょう妙法華經・かいせいしんじつ皆是眞實」と申す明文あり、第七

の卷には「ぜっそうほんてん舌相梵天に至る」と申す經文赫赫たり、其の外は此の經

より外のさきのちならべる經經をば星に譬へ江河に譬へ小王に

譬へ・小山に譬へたり、法華經をば月に譬へ・日に譬へ・大海・大山・

大王等に譬へ給へり、

此の語は私の言には有らず皆如来の金言なり十方の諸仏の

御評定の御言なり、一切の菩薩・二乘梵天・帝釈今の天に懸りて

めいきょう
明鏡のごとくにまします、日月も見給いき聞き給いき其の日月の
おんことば
御語も此の経にのせられて候、月氏・漢土・日本国のふるき神たち
みなそ
も皆其の座につらなり給いし神神なり、天照太神・八幡大菩薩・熊
野・すずか等の

にほんこく
日本国の神神もあらそひ給うべからず、此の経文は一切経に勝れ
たり地走る者の王たり師子王のごとし・空飛ぶ者の王たり鷲のごと
し、南無阿弥陀仏経等はきじのごとし兎のごとし鷲につかまれては
涙をながし・師子にせめられては腸わたをたつ、念仏者・律僧・禪
僧・真言師等又かくのごとし、法華経の行者に値いぬれば・いろを
うしな
失い魂をけすなり。

かかるいみじき法華經と申す御經はいかなる法門ぞと申せば、一

の巻方便品よりうちはじめて菩薩・二乘凡夫皆仏になり給うやうを

とかれて候へどもいまだ其のしるしなし、設えば始めたる客人が

相貌うるわしくして心もいさぎよくよく口もきいて候へばいう事

疑なけれどもさきも見ぬ人なればいまだあらわれたる事なけ

れば語のみにては信じがたきぞかし、其の時語にまかせて大なる

事度度あひ候へばさては後の事もたのもしなると申すぞかし、一切

信じて信ぜられざりしを第五の巻に即身成仏と申す一經第一の

肝心あり、譬へばくるき物を白くなす事漆を雪となし不浄を

清浄になす事濁水に如意珠を入れたるがごとし、竜女と申せし

小蛇を現身

に仏になしてましましき、此の時こそ一切の男子の仏になる事をば

疑う者は候はざりしか、されば此の經は女人成仏を手本として

とかれたりと申す、されば日本国に法華經の正義を弘通し始めま
しませし叡山の根本伝教大師の此の事を釈し給うには「能化所化
俱に歴劫無し妙法經力即身成仏す」等、漢土の天台智者大師・
法華經の正義

をよみはじめ給いしには「他經は但男に記して女に記せず乃至今經
は皆記す」等云云、此れは一代聖教の中には法華經第一法華經の
中には女人成仏第一なりとことわらせ給うにや、されば日本の
一切の女人は法華經より外の一切經には女人成仏せずと嫌うとも
法華經にだにも女人成仏ゆるされなばなにかくるしかるべき。

しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ値いがたくして仏法に
値い奉る、一切の仏法の中に法華經に値いまいらせて候、其の恩徳
ををもへば父母の恩国主の恩一切衆生の恩なり、父母の恩の中に
慈父をば天に譬へ悲母をば大地に譬へたりいづれもわけがたし、

其の中にも悲母の大恩ことにほうじがたし、此れを報ぜんとをも
う

に外典の三墳・五典孝経等によて報ぜんとをもへば現在をやしな
いて後世をたすけがたし、身をやしない魂をたすけず内典の仏法に
入りて五千・七千余巻の小乗・大乘は女人成仏かたければ悲母の
恩報じがたし・小乗は女人成仏一向に許されず、大乘経は或は
成仏・或は往生を許たるやうなれども仏の仮言にて実事なし、但
法華経

計りこそ女人成仏悲母の恩を報ずる実の報恩経にて候へと見候いし
かば悲母の恩を報ぜんために此の経の題目を一切の女人に唱えさ
せんと願す、其れに日本国の一切の女人は漢土の善導日本の慧心
永観・法然等にすかされて詮とすべきに南無妙法蓮華経をば一国の
一切の女人・一人も唱うることなし、但南無阿弥陀仏と一日に一返
・十返・百千万億反・乃至三万・十万反・一生が間・昼夜十二時に又
他事なし、道心堅固なる女人も又悪人なる女人も弥陀念仏を本と
せり、わづかに法華経をこととするやうなる女人も月まつまでのて
ずさびをもわしき男のひまに心ならず心ざしなき男にあうがごと
し。

されば日本国の一切の女人・法華経の御心に叶うは一人もなし、
我が悲母に詮とすべき法華経をば唱えずして弥陀に心をかけば
法華経は本ならねばたすけ給うべからず、弥陀念仏は女人たすく

るの法にあらざれば必ず地獄に墮ち給うべし、いかながせんとなげきし程に我が悲母をたすけんがために弥陀念仏は無間地獄の業なり。
五逆

にはあらざれども五逆にすぎたり、父母を殺す人は其の肉身をばやぶれども父母を後生に無間地獄には入れず、今日本国の女人は必ず法華經にて仏になるべきを、たばらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ、悪ならざればすかされぬ、仏になる種ならざれば仏にはならず弥陀念仏の小善をもつて法華經の大善を失う小善の念仏は大悪の五逆にすぎたり、譬へば承平の将門は関東八箇国をうたへ天喜の貞任は奥州をうちとどめし民を王へ通せざりしかば朝敵となりてついにほろぼされぬ、此等は五逆にすぎたる謀反なり。

今日本国の仏法も又かくのごとし色かわれる謀反なり、法華經は大王大日經觀無量寿經真言宗浄土宗・禅宗・律僧等は彼れ彼

れの小経ほけきによて法華經ほけきの大怨敵おんてきとなりぬるを日本にほんの一切いっさいの女人等にょにん
は我が心のをろかなるをば知らずして我をたすくる日蓮にちれんをかたき
とをもひて大怨敵おんてきたる念仏者ねんぶつ・禅ぜん・律りつ・真言師等しんごんしを善知識ぜんちしきとあやま
てり、たすけんとする日蓮にちれんかへりて大怨敵おんてきとをもわるるゆへに女人にょにん
こぞりて国主こくしゅに讒言ざんげんして伊豆の国へながせし上・

又佐渡の国へながされぬ。

ここに日蓮願つて云く日蓮は全くなし設い僻事なりとも

日本国の一切の女人を扶けんと願せる志はすてがたかるべし、

何に況や法華經のままに申す、而るを一切の女人等信ぜずばさで

こそ有るべきにかへりて日蓮をうたする、日蓮が僻事か釈迦・多宝

・十方の諸仏・菩薩・二乗梵釈・四天等いかに計らい給うぞ、日蓮

僻事な

らば其の義を示し給へことには日月天は眼前の境界なり、又仏前

にしてきかせ給える上法華經の行者をあだまんものをば頭破れ

て七分と作らん等と誓わせ給いて候へばいかなが候べきと日蓮

強盛にせめまいらせ候ゆへに天此の国を罰すゆへに此の疫病出現

せり、他国より此の国を天をほせつけて責めらるべきに、両方の人

あ

また死ぬべきに天の御計らいとしてまづ民を滅ぼして人の手足を切るがごとくして大事の合戦なくして・此の国の王臣等をせめかたぶけて法華經の御敵を滅ぼして正法を弘通せんとなり。

而るに日蓮・佐渡の国へ流されたりしかば彼の国の守護等は国主の御計らいに随いて日蓮をあだむ・万民は其の命に随う、念仏者・律・真言師等は鎌倉よりも・いかにもして此れへわたらぬやう計ると申しつかわし・極楽寺の良觀房等は武蔵の前司殿の私の御教書を申して弟子に持たせて日蓮をあだみなんとせしかば・いかにも命たすかるべきやうはなかりしに天の御計らいはさてをきぬ、地頭・地頭・念仏者・念仏者等・日蓮が庵室に昼夜に立ちそいてかよう人もあるをまどわさんとせめしに阿仏房に・ひつを・しおわせ夜中に度度・御わたりありし事いつの世にか・わすらむ、只悲母の佐渡の国に生れかわりて有るか。

漢土かんとに沛公はいこうと申せし人王の相有りとして秦の始皇ちよくせんの勅宣くたを下して
云く沛公はいこう打ちて・まいらせん者には不次の賞を行ふべし、沛公はいこうは里
の中には隠れがたくして山に入りて七日・二七日あなど有るなり、
其そのときの時命すでに・をわりぬべかりしに沛公はいこうの妻女呂公りょこうと申せし人こ
そ山中を尋ねたずて時命よりよりをたすけしが彼は妻なればなさけすてがた
し、此これ

は後世をごじょうをぼせずばなにしかかくはおはすべき、又其そのの故ゆえにある・
は所をあるをいある或はくわれうをひきある或は宅をとられなんどせしにつ
いにとをらせ給たまいぬ、法華経ほけきょうには過去かこに十万億の仏を供養くようせる人こ
そ今生こんじょうには退せぬとわみへて候へ、されば十万億供養くようの女人にょにんなり、
其その上・人は見るまなこ眼まなこの前には心ざし有りありと・もさしはなれぬれば・
心

はわすれずともさでこそ候いに去ぬる文永ぶんえい十一年より今年弘安元年
までは・すでに五箇年が間・此の山中に候さどに佐渡の国より三度まで
夫をつかはす、いくらほどの御心おんこころざしぞ大地だいちよりもあつく大海たいかいより
もふかき御心おんこころざしぞかし、

釈迦しゃか如来にょらいは我が薩さつ王子みこたりし時うへたる虎に身をかいし功德くどく
尸毘しび王おうとありし時鳩はとのために身をかへし功德くどくをば我が末すえの代かくの
ごとく法華経ほけきょうを信ぜん人にゆづらむとこそ多宝たぼう・十方じゅうぽうの仏おんまえの御前おんまえ

にては申させ給いしか。

其の上・御消息に云く尼が父の十三年は来る八月十一日又云く

ぜに一貫もん等云云、あまりの御心ざしの切に候へばありえて御は

しますに随いて法華經十巻をくりまいらせ候、日蓮がこいしくをは

せん時は学乗房によませて御ちやうもんあるべし、此の御經をしる

しとして後生には御たづねあるべし、抑 去年今年のありさまはい

か

にかならせ給いぬらむと・をぼつかなさに法華經にねんごろに申し

候いつれどもいまだいぶかしく候いつるに七月二十七日の申の時に

阿仏房を見つけて尼ごぜんはいかにこう入道殿はいかにとまづとい

て候いつればいまだやまず、こう入道殿は同道にて候いつるがわせ

はずでにちかづきぬこわなしいかんがせんとてかへ

られ候いつるとかたり候いし時こそ盲目の者の眼のあきたる死し

給^{たま}える父母^{ふぼ}の閻魔宮^{えんま}より御をとづれの・夢の内^あに有るをゆめにて悦ぶがごとし、あわれあわれふしぎなる事かな、此^これもかまくらも此の方の者は此の病にて死ぬる人はすくなく候、同じ船にて候へばいづれもたすかるべしとも・をばへず候いつるに・ふねやぶれて・たすけふねに値^あえるか、又竜神^{りゅうじん}のたすけにて事なく岸へつけるかとこそ不思議^{ふしぎ}がり候へ。

さわの入道^{にゅうどう}の事なげくよし尼ごぜんへ申^{もう}したへさえ給^{たま}え、ただし入道^{にゅうどう}の事は申^{もう}し切り候いしかば・をもち合

せ給^{たま}うらむ、いかに念^{ねんぶつ}仏堂ありとも阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}は法^{ほけき}華^き經^{きょう}のかたきをば
たすけ給^{たま}うべからず、かえりて阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の御^ごかたきなり後^ご生^{しょう}惡^{あく}道^{どう}に
墮^おちてくいられ候^{こう}らむ事^{こと}あさまし。

ただし入^{にようじゆう}道^{どう}の堂^{どう}のらうにていのちをたびたびたすけられたりし
事^{こと}こそいかにすべしとも・をばへ候^{こう}はね、学^{がく}乘^{じやう}房^{ぼう}をもつてはかにつね
づね法^{ほけき}華^き經^{きょう}をよませ給^{たま}えとかたらせ給^{たま}え、それも叶^{かな}うべしとはをば
えず、さても尼^にのいかにたよりなかるらむとなげくと申^{もう}したへさ
せ給^{たま}い候^{こう}へ又^{また}又^{また}申^{もう}すべし。

七月二十八日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

佐渡^{さど}国^{くに}府^ふ阿^あ仏^{ぶつ}房^{ぼう}尼^に御^ご前^{ぜん}

二八八

千日尼御前御返事

弘安元年十月十九日

五十七歳御作

与阿仏房尼

1315

青鳥一貫文・干飯一斗・種種の物給い候あつぼう了しゆじゆんぬ、仏に土の餅を

供養せし徳勝童子は阿育大王と生れたり、仏に漿をまひらせし老

女は辟支仏と生れたり、法華経は十方三世の諸仏の御帥なり、

十方の仏と申すは東方善徳仏・東南方無憂徳仏・南方栴檀徳仏・西

南方宝施仏・西方無量明仏・西北方華徳仏・北方相徳仏・東北方

三乘行仏・上方広衆徳仏・下方明徳仏なり、三世の仏と申すは

過去・莊嚴劫の千仏・現在・賢劫の千仏・未来・星宿劫の千仏・乃至

華嚴経・法華経・涅槃経等の大小・権実・顕密の諸経に列り給へる

一切の諸仏・尽十方世界の微塵数の菩薩等も皆悉く法華経の妙

の一字より出生し給へり、故に法華経の結経たる普賢経に云く

「**仏三種の身は方等より生ず**」等云云、**方等**とは**月氏の語**・**漢土**に
は**大乘と翻ず**・**大乘と申すは法華經の名なり**、**阿含經は外道の經**
に**対すれば大乘經、華嚴・般若・大日經等は阿含經に對すれば**
大乘經、法華經に對すれば小乘經なり、**法華經に勝れたる經な**
き故に一

大乘經なり、例せば南閻浮提・八万四千の国国の王王は其の国
にては大王と云う・轉輪聖王に対すれば小王と申す、乃至六欲・四
神の王王は大小に破る、色界の頂の大梵天王独り大王にして小
の文字をつくる事なきが如し、仏は子なり法華經は父性なり、譬え
ば一人の父母に千子有りて一人の父母を讚歎すれば千子悦びをな
す、一人の父母を供養すれば千子を供養するになりぬ。
又法華經を供養する人は十方の仏・菩薩を供養する功德と同じ
きなり、十方の諸仏は妙の一字より生じ給へる故なり、譬えば一
の師子に百子あり・彼の百子諸の禽獸に犯さるるに・一の師子王
吼れば百子力を得て諸の禽獸皆頭七分にわる、法華經は師子王の
如し一切の獸の頂きとす、法華經の師子王を持つ女人は一切の
地獄・餓鬼・畜生
等の百獸に恐るる事なし、譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草

の如しごと法華經ほけきょうの妙せうの一字いちじは小火しょうかの如しごと、小火しょうかを衆草しゆそうにつきぬれば衆草しゆそう焼け亡なぶるのみならず大木たいぼく大石たいせき照焼てりやけ失なせぬ、妙せうの一字いちじの智ち火か以もて此こゝくの如しごと諸罪しよざい消くゆ

るのみならず衆罪しゆざいかへりて功德くどくとなる毒藥どくやく變かじて甘露かんろとなる是これなり、譬たとえば黒漆くろしつに白物おしろいを入れぬれば白色はくしきとなる、女人にょにんの御罪つみは漆しつの如しごと南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきょうの文字もんじは白物おしろいの如しごと人は臨終りんじゆうの時とき地獄じじくに墮おつる者は黒色くろしきとなる上そ其そのの身重みぢかき事こと・千引ちびきの石いしの如しごと善人ぜんにんは設たひ七尺八尺しちせきぱちせきの女人にょにんなれども色黒しきくろき者ものなれども臨終りんじゆうに色變しきかじて白色はくしきとなる又また輕かろき事こと・鷲毛じゆまうの如しごと軟ななる事こと・兜羅縣わたりんの如しごと。

佐渡さどの国くにより此こゝの国くにまでは山海さんかいを隔へて千里せんりに及びおよび侯こうに女人にょにんの御身おんみとして法華經ほけきょうを志ししましますによりて年とし年に夫おんつがいを御使おんつかいとして御訪ごむらいあり定さだめて法華經ほけきょう・釈迦しゃか・多宝たぼう・十方じゅうぽうの諸しよ仏ぶつ・其そのの御心おんこゝろをしるしめすらん、譬たとえば天月てんげつは四万由旬しよじゆんなれども大地だいちの池いけには須臾しゆゆに

影浮び雷門の鼓は千万里遠けれども打ちては須臾に聞ゆ、御身は
佐渡の国にをせども心は此の国に來れり、仏に成る道も此くの
如し、我等は穢土に候へども心は靈山に住べし、御面を見てはなに
かせん心こそ大切に候へ、いつかいつか釈迦仏のをします靈山會
上にまひりあひ候はん、南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

弘安元年後十月十九日

日蓮 花押

千日尼御前御返事

二八九 阿仏房御返事

1317p

御状の旨、委細承り候了んぬ、大覚世尊説いて曰く「生老病死・
生住異滅」等云云、既に生を受けて齡六旬に及ぶ老又疑い無し只
残る所は病死の二句なるのみ、然るに正月より今月六月一日に至
り連連此の病息むこと無し死ぬる事疑い無き者か、經に云く
「生滅滅已・寂滅為樂」云云、今は毒身を棄てて後に金身を受けれ

ばあにあざむ欺あくあべあけんあやあ。

建ひの治と三う年し丁ひ丑の六と月う三し日

阿あ仏ぶ房ぼう

日に蓮ち

花か押おう

一一九〇 千日尼御返事ごへんじ 弘安三年七月二日 五十九

歳御作 与阿仏房尼あぶつぼう 1318p

追伸、絹の染袷けさ一つまいらせ候、豊後房に申し候べしすで既に法門ほうもん・
日本国にほんこくにひろまりて候、北陸道をば豊後房なびくべきに学生な
らでは叶かなうべからず・九月十五日いぜん已前に・いそぎいそぎまいるべ
し、こつ入道殿にゅうだうだんの尼にごぜんの事なげき入つて候、又こいしこい
しと申もうしたへさせ給たまへかすの聖教しやうきやうをば日記にっきのごとくたんば
房にいそぎいそぎつかわすべし、山伏房をばこれより申もうすにし
たがいてこれへは・わたすべし、山伏の現げんにあだまれ候事悦よろこび入
つて候。

鷺目がもく一貫五百文のりわかめほしいしなじなの物給び候あわ了んぬ、

法華經の御宝前に申し上げて候、法華經に云く「若し法を聞く者有らば一として成仏せざること無し」云云、文字は十字にて候へども法華經を一句よみまいらせ候へば釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ、故に妙樂大師の云く「若し法華を弘むるは凡そ

一義を消するも皆一代を混じて其の始末を窮めよ」等云云、始と申すは華嚴經・末と申すは涅槃經・華嚴經と申すは仏最初成道の時法慧・功德林等の大菩薩・解脱月菩薩と申す菩薩の請に趣いて仏前にてとかれて候、其の經

は天竺・竜宮城・兜率天等は知らず日本国にわたりて候は六十卷・八十卷・四十卷候、末と申すは大涅槃經・此れも月氏・竜宮等は知らず我が朝には四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり、此れより外の阿含經・方等經・般若經等は五千・七千余卷なり、此れ等の經經

は見ず・きかず候へども但ほけき法華經の一字・一句いっくよみ候へば彼れ彼れの
經經きょうきょうを一字

もをとさずよむにて候なるぞ、譬たとへば月氏がっし日本にほんと申もうすは二字・二字
に五天竺てんじく十六の大国たいこく・五百の中国ちゆうごく・十千の小国しょうこく・無量むりょうの粟散国ぞくさんの
大地だいち大山だいしん草木人畜等そうもくじんちくをさまれるがごとし、譬たとへば鏡は・わづかに一
寸・二寸・三寸さんずん・四寸・五寸と候へども一尺・五尺の人をもつかべ一丈
・二丈・十丈・百丈の大山をもうつすがごとし。

されば此の經文をよみて見候へば此の經をきく人は一人もかけず仏になると申す文なり、九界・六道の一切衆生各各心かわれり、譬へば二人・三人・乃至百千人候へども一尺の面の内しちにたる人・一人もなし、心のにざるゆへに面もにず、まして二人十人六道九界の衆生の心いがかわりて候らむ、されば花をあいし・月をあいしすきをこのみにがきをこのみちいさきをあいし大なるをあいしいろいろなり、善をこのみ悪をこのみしなじななり、かくのごとく・いろいろに候へども法華經に入りぬれば唯一人の身一人の心なり、譬へば衆河の大海に入りて同一の鹹味なるがごとく衆鳥の須弥山に近ずきて一色なるがごとし、提婆が三逆も羅羅が二百五十戒も同じく仏になりぬ、妙莊嚴王の邪見も舍利弗が正見も同じく授記をかをほれり、此れ即ち無一不成仏のゆへぞかし、
四十余年の内の阿弥陀經等には舍利弗が七日の百万反大善根をと

かれしかども未顕眞実みけんしんじつときらわれしかば七日ゆをわかして大海たいかいに
なげたるがごとし、いだいけゐ提希がかんきよう觀經をよみて無生忍むじょうにんを得しかども
しょうじきしやほうべん

正直捨方便

とすてられしかば法華經ほけきようを信ぜずば返つて本の女人にょにんなり、大善だいぜんを用
うる事なし法華經ほけきように値あわざればなにかせん、大悪なげをもことな歎く事無か
れ一乘いちじようを修行しゆぎようせば提婆だいばが跡あとをもつぎなん、此等これらは皆無みなむい一不成いっふじよう仏の
きようもん
經文きようもんのむなしからざるゆへそかし。

されば故阿仏房あぶつぼうの聖靈しやうりやうは今いづくにかをはすらんと人は疑うたがう

とも法華經ほけきようの明鏡めいきやうをもつて其その影かげをうかべて候へば靈鷲山りやうじゆせんの山の

中に多宝仏たほうぶつの宝塔ほうとうの内に東むきにをはずと日蓮にちれんは見まいらせて候、

若し此もの事ことそらごとにて候わば日蓮にちれんがひがめにては候はず、釈迦しゃか

如來にやらいの世尊せそん法久後ほうくご・要當說眞實やうとうせつしんじつの御舌みごも多宝たほう仏ぶつの妙法華經みやうほけきよう・

皆是眞實かいせしんじつの舌相ぜつそう

も四百万億那由他の国土にあさのごとくいねのごとく星のごとく竹
のごとくぞくぞくとすきまもなく列なつてをはしましし諸仏如来の
一仏もかけ給はず、広長舌を大梵王宮に指し付けてをはせし御舌
どものくぢらの死にてくされたるがごとく、いわしのよりあつまり
てくされたるがごとく、皆一時にくちくされて十方世界の

諸しよ仏ぶつ如に來よらい大もつ妄し語つみの罪つみにをとされて寂じやく光かうの淨じゆん土つちの金かねるり大だい地ちはたと
われて提だい婆いはがごとく無む間げん・大だい城じやうにかつぱと入いり法ぽう蓮げん香かう比ひ丘く尼にがごと
く身みより大もつ妄し語つみの猛みやう火かぱといでて実じつ報ぽう華け王おうの花はなのその一いち時じに灰かい燼じんの
地ちとなるべし、いかでかさる事ことは候あべき、故あ阿ぶつ房ぽう一いち人にんを寂じやく光かうの
淨じゆん土つちに入いれ給たまはずば諸しよ仏ぶつは大苦くに墮おち給たまうべし、ただ・をいて
物ものを見みよただをいて物ものを見みよ、仏ぶつのまことそら事ことは此これにて見たて奉まつる
べし、さてはをとこははしらのごとし女によはなかわのごとし、をとこは
足あのごとし女によ人にんは身のごとし、をとこは羽はのごとし女によはみのごとし、
羽はとみと・べちべちになりなばなにをもつてかとぶべき、はしらたう
れなばなかは地ちに墮おちなん、いへにをとこなければ
人にんのたましみなきがごとし、くうじをたれにかいるあわせん、よき
物ものをばたれにかやしなうべき、一いち月げつ二に日にちたがいしをだにもをぼつか
なくをもいしに、一いちづの三さん月げつの二に十じゆ一じち日にちにわかれにしがこぞもまち

くらせどまみゆる事なし、今年もすでに七つきになりぬ、たといわれこそ来らずともいかにをとづればなかるらん、ちり

し花も又さきぬおちし菓このみも又なりぬ、春の風もかわらず秋のけしきもこそのごとし、いかにこの一事のみ・かわりゆきて本のごとくなかるらむ、月は入りて又いでぬ雲はきへて又来る、この人人ひとひとの出いでてかへらぬ事」

そ天もうらめしく地もなげかしく候へさこそをばすらめいそぎほけきょういそぎ法華経をらうれうとたのみまいらせ給たまいて、りやうぜん浄土へじよつとまいらせ給たまいてみまいらせさせ給たまうべし。

抑おさ子はかたきと申もうす経文きやうもんもあり「世人た子の為ために衆つみの罪を造る」

の文なり、くまたか鷲じゆと申もうすとりはをやは慈悲じひをもつて養へば子はかへりて食とす梟きやうちやう鳥と申もうすとりは生まれては必ず母をくらう、畜生ちくじやう

かくのごとし、人の中に

もはるり王は心もゆかぬ父の位を奪い取る、阿闍世王は父を殺せり、安祿山は養母をころし安慶緒と申す人は父の安祿山を殺す安慶緒は又史師明に殺されぬ史師明は史朝義と申す子に又ころされぬ、此れは敵と申すもことわりなり、善星比丘と申すは教主釈尊の御子なり、苦得外道をかたらいて度度父の仏を殺し奉らんとす、又

子は財と申す経文もはんべり所以に経文に云く「其の男女追つて福を修すれば大光明有つて地獄を照し其の父母に信心を顕さしむ」等と申す、設い仏説ならずとも眼の前に見えて候。

天竺に安足国王と申せし大王はあまりに馬をこのみてかいしほどに後にはかいなれて鈍馬を竜馬となすのみならず牛を馬ともなす。結句は人を馬となしてのり給いき、其の国の人あまりになげきしかば知らぬ国の人を馬となす、他国の商人のゆきたりしかば菓をかいて馬となして御まやうに。つなぎつけぬ、なにとなければども我が国はこいしき上妻子ことにこいしくしのびがたかりしかどもゆるす事なかりしかばかへる事なし、又かへりたりともこのすがたにては由なかるべし、ただ朝夕にはなげきのみにしてありし程に一人ありし

子父のまちどきすぎしかば人にや殺されたるらむ又病にや沈むら

む子の身としていかでか父をたづねざるべきといでたちければ母な
げくらく男も他国たこくよりかへらず一人の子もすててゆきなば我いかな
がせんとな

げきしかども子ちちのあまりにこいしかりしかば安足国へ尋たずねゆき
ぬ、ある小屋にやどりて候しかば家の主申もうすやうあらふびんやわど
のはをさなき物なり而もしかみめかたち人にすぐれたり、我に一人の子
ありしが他国たこくに

ゆきてしにやしけん又いかにてやあるらむ、我が子の事ををもへば
わどのをみてめもあてられず、いかにと申せば此の国は大なるなげ
き有り、此の国の大王だいおうあまり馬をこのませ給たまいて不思議ふしぎの草を用もちい
給たまへり、一葉せば

き草をくわすれば人馬となる、葉の広き草をくわすれば馬人とな
る、近くも他国たこくの商人の有りしを、この草をくわせて馬となして

第一だいいちの御まやに秘蔵ひぞうしてつなげたりと申もつす、此の男これをきいて
さては我が父は馬と成りてけりとをもちて返つて問そう其の馬は毛は
いかにとといければ家の主答えて云いわく栗毛なる馬の肩白いわく・
ぶちたりと申もつす、此の物此の事をききてとかうはからいて王宮おうぐうに近
づき葉の広き草をぬすみとりて、我が父の馬になりたりしに食せし
かば本のごとく人となりぬ、其その国の大王だいおう不思議ふしぎなるおもひをなし
て孝養いっやうの者なりと

て父を子にあづけ給へり、其れよりついに人を馬となす事はとどめられぬ。

子ならずば、いかでか尋ねゆくべき、目連尊者は母の餓鬼の苦を
すくひ淨蔵・淨眼は父の邪見を、ひるがいます、此れよき子の親の財
となるゆへぞかし、而るに故阿仏聖靈は日本国・北海の島のいびす
のみなりしかども後生を、をそれて出家して後生を願ひしが此の人。
日蓮に値いて法華經を持ち去年の春仏になりぬ、戸陀山の野干は
仏法に

値いて生をいとひ死を願いて帝釈と生れたり、阿仏・上人は濁世の
身を厭いて仏になり給いぬ、其の子藤九郎守綱は此の跡をつぎて
一向法華經の行者となりて去年は七月二日、父の舍利を頸に懸け、
一千里の山海を経て甲州・波木井身延山に登りて法華經の道場に
此れをおさめ、今年は又七月一日身延山に登りて慈父のはかを

拝見す、子にすぎたる財なし子にすぎたる財なし南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

七月二日

日蓮

花押

故阿仏房尼御返事

一一九一

国府入道殿御返事こへんじ

文永十二年

五十

四歳御作

1323p

あまのりのかみぶくろ二つわかめ十でうこものかみぶくろ一つたこひとかしら。

人の御心は定めなきものなればうつる心さだめなし、さどの国に候いし時御信用ごしんようありしだにもふしぎにをぼへ候いしに、これまで入道殿にりしゆいをつかわされし御心おんこころざし又国もへだたり年月ねんげつもかさなり候へばたゆむ御心もやとうたがい候にいよいよいろをあらわしこうをつませ給たまう事但一生二生の事にはあらざるか、此の法華経ほけきようは信じがたければ仏人の子となり父母ふぼとなり女となりなんとしてこそ信ぜさせ給たまうなれ、しかるに御子もをはず但をやばかりなり、

其中衆生悉是吾子の經文のごとくならば教主釈尊は入道殿
尼御前の慈父ぞかし、日蓮は又御子にてあるべかりけるが、しばらく
日本国の人をたすけんと中国に候か、宿善たうとく候、又蒙古
国の日本にみ

だれ入る時はこれへ御わたりあるべし、又子息なき人なれば御とし
のすへにはこれへとをぼしめすべし、いづくも定めなし、仏になる事
こそつみのすみかにては候いしとをもひ切らせ給うべし、恐恐。

卯月十二日

日蓮 花押

ことう 入道殿御返事

二九二 国府尼御前御書

建治元年

五十四歳御

作 1324p

阿仏御房ごぼうの尼ごぜんよりぜに三百文、同心なれば此の文を二人して人によませてきこしめせ。

単衣たびそうら一領お佐渡さどの国ほけきようより甲斐かいの国ほうしほん波木井はきりの郷いわの内の深山みやままで送り給候たびそうらいお了わんぬ、法華經ほけきよう第四法師品ほうしほんに云く「人有いつて仏道ぶつどうを求めていっとう一劫おの中に於あて合掌がっしょうして我が前に在あつて無数の偈げを以て讚ほめん、是この讚ほ仏ぶつに由よるが故ゆえに無量むりようの功德くどくを得ん、持經じきよう者を歎美たんびせんは其その福復またた彼かに過かぎんす等ら云云、文の心しやくそんは釈尊じやくそんほどの仏ぶつを三業さんごう相あ応おうして一いつ中劫ちゆうけつが間まねんごころに供養くようし奉たてまつるよりも末代まつだい悪世あくせの世よに法華經ほけきようの行者ぎやうじゃを供養くようせんくどくはすぐれたりととかかれて候まことしからぬ事ことにては候まへども仏の金言きんげんにて候まへば疑うたがうべきにあらず、其その上うへ

妙樂大師と申す人此の

經文を重ねてやわらげて云く「若し毀謗せん者は頭七分に破れ
若し供養せん者は福十号に過ぎん」等云云、釈の心は末代の法華經
の行者を供養するは十号を具足します如來を供養したてまつ
るにも其の功德すぎたり、又濁世に法華經の行者あらんを留難を
なさん人は頭七分にわるべしと云云。

夫れ日蓮は日本第一のゑせものなり、其の故は天神七代はさて
おきぬ、地神五代も又はかりがたし、人王始まりて神武より今に
至るまで九十代欽明天王より七百余年が間世間につけ仏法により
ても日蓮ほどあまねく人にあだまれたるものは候はじ、守屋が
寺塔をやき清盛入道が東大寺興福寺を失せし彼等が一類は彼がに
くま

ず、將門貞たうが朝敵と成りし伝教大師の七寺にあだまれし彼等

もいまだ日本一州の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆にはにくま
れず、日蓮は父母・兄弟師匠同法上一人下万民一人ももれず父母
のかたきのごと

く謀反強盗にもすぐれて人ごとにあだをなすなり、されば或時
は数百人にのられ或時は数千人に取りこめられて刀杖の大難にあ
う、所ををはれ国を出さる結句は国主より御勘気二度一度は伊
豆の国今度は佐渡の嶋

なり、されば身命みことぢをつぐべきかつてもなし形体を隠すべき藤の衣も
もたず、北海の嶋にはなたれしかば彼の国の道俗だうじやくは相州そうしゅうの男女なんによよ
りもあだをなしき、野中に捨てられて雪にはだへをまじえくさをつ
みて命をささえたりき、彼の蘇夫が胡国ここくに十九年雪を食くらうて世を
わたりし、李呂が北海に六ヶ年がんくつにせめられし。我は身にて
しられぬ、これはひとえに我が身には失とがなし日本国にほんこくをたすけんとを
もひしゆへなり。

しかるに尼あまごぜん並なびに入道殿にちどうでんは彼の国あに有る時は人めを。
それで夜中に食ををくり、或あるる時は国のせめをもはばからず身に
もかわらんとせし人人ひとびとなり、さればつらかりし国なれどもそりたる
かみをうしろへひかれすすむあしもかへりしぞかし、いかなる過去かこ
のえんにてやありけんとおぼつかなかりしに。又いつしかこれま
でさしも大事だいじなるわが夫を御つかいにてつかはされて候、ゆめかま

ぼろしか尼ごぜんの御すがたをば・みまいらせ候はねども心をばこ
れにとどめをばへ候へ日蓮にちれんをこいしくをはしせば常に出いずる日ゆ
うべにいづる月を・をがませ給たまえ、いつとなく日月にちがつにかげをうかぶ
る身なり、又後生ごしょうには靈山りょうぜん浄土じょうどにまいりあひまひらせん、南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょう。

六月十六日

日蓮にちれん 花押かおう

さどの国のこのの尼御前あまごぜん

一一九三

一谷入道御書

建治元年五月八日 五十

四歳御作 与一谷入道日学女房

1326p

去る弘長元年いぬ太歳辛酉五月十二日に御勘氣を蒙つて伊豆の国伊東

の郷と云う処ところに流罪るざいせられたりき、兵衛の介頼朝よりとものながされてあ

りし処ところなり、さありしかども程ほど無く同三年太歳癸亥二月二十二日に召

し返されぬ、又文永八年ぶんえい太歳辛未九月十二日重ねて御勘氣を蒙りしが

忽たちまちに頸を刎はらるべきにてありけるが子細しさいありけるかの故ゆえに・しばらく

く

のびて北国佐渡さどの嶋しまを知行ちぎょうする武蔵むさしの前司ぜんじ預りて其その内うちの者ども

の沙汰さたとして彼の嶋しまに行き付いてありしが彼の島の者ども因果いんがの

理ことわりをも弁わきまへぬあらゑびすなればあらくあたりし事は申もうす計はかりな

し、然しかれども一分いちぶんも恨うらむる

心なし、其の故は日本国の主として少しも道理を知りぬべき相模殿
だにも国をたすけんと云う者を子細も聞ほどかず理不尽に死罪に
あてがう事なれば・況や其の末の者どもの事はよきもたのまれず
あしきもにくからず。

此の法門を申し始めしより命をば法華經に奉り名をば十方世界
の諸仏の浄土にながすべしと思ひ儲けしなり、弘演と云いし者は
主衛の懿公の肝を取りて我が腹を割いて納めて死にき、予讓と云い
し者は主の知伯が恥をすすがながために劔を呑んで死せしぞかし、
是は但わづかの世間の恩を報ぜんがためぞかし。

況や無量劫より已來六道に流転して仏にならざりし事は法華經
の御ために身を惜み命を捨てざる故ぞかし、されば喜見菩薩と申せ
し菩薩は千二百歳の間・身を焼いて日月淨明德仏を供養し、七万
二千歳の間臂を焼いて法華經を供養し奉る其の人は薬王菩薩ぞか

し、不ふ輕ぎ菩よ薩うは法ほ華け經きの御おんたためめに多た劫くわの間ま・罵のの詈のち毀くわ辱く・杖じょう木もく瓦が石しやくに
せめられき、今いまの釈しやく迦か仏ぶつにあらずや、されば仏ぶつになる道みちは時ときによ
り品しん品しんに替かつて行いずべきにや、今いまの世よには法ほ華け經きは・さる事ことにておは
すれども時ときによりて事こととなるなれば山さん林りんに交まわりて読よ誦じゆすとも
將は又また里りに住すして演えん説ぜつすとも・持じ戒かいにして行いずとも臂ひじを焼やいて供く養ようす
とも仏ぶつにはなるべからず、日本にほん国こくは仏ぶつ法ぽう盛さかなるやうなれども仏ぶつ法ぽうに
ついて

不思議あり人是を知らず、譬えば虫の火に入り鳥の蛇の口に入る
が如し真言師華嚴宗法相・三論禪宗・淨土宗・律宗等の人人は我
も法を得たり我も生死を離れたる人とは思へども立始めし本師等
依經の心をも弁えず、但我が心の思い付いて有りしままに其の經を
取り立てんと思へる慕無き心計りにて法華經に背けば又仏意にも
叶わざる事をば知らずして弘め行く程に國主・万民是を信じぬ又
他國へ渡り又年久しく成りぬ、末学の者共本師の誤をば知らずし
て弘め習ひし人人をも智者とは思へり、源濁りぬれば流淨からず
身曲りぬれば影直から
ず、真言の元祖善無畏等は既に地獄に墮ちぬべかりしが或は改悔
して地獄を免れたる者もあり、或は唯依經を弘めて法華經の讚歎
をもせざれば生死は離れねども惡道に墮ちざる人もあり、而るを
末末の者・此の事を知らずして諸人・一同に信をなしぬ、譬えば破

たる船に乗つて大海に浮び酒に酔る者の火の中に臥せるが如し。

日蓮是を見し故に忽に菩提心を発して此の事を申し始めしなり、

世間の人人何に申すとも信ずる事はあるべからず、還つて流罪・

死罪せらるべしとは兼て知つてありしかども今の日本国は法華經に

背き釈迦仏を捨つる故に後生は必ず無間・大城に墮ちん事はさて

おきぬ今生にも必ず大難に値うべし、所謂他国より責め来つて

上一人より

下万民に至るまで一同の歎きあるべし、譬えば千人の兄弟が一人

の親を殺したらんに此の罪を千に分ては受くべからず、一一に皆

無間・大城に墮ちて同じく一劫を経べし、此の国も又是くの如

し、娑婆世界は五百塵点劫より已来教主釈尊の御所領なり、大地

虚空山海草木一分も他仏の有ならず、又一切衆生は釈尊の御子な

り、

たと 譬えば成劫じょうこつの始め一人の梵王ぼんのう下つて六道ろくどうの衆生しゅじやうをば生おいて候ぞかし、梵王ぼんのうの一切衆生いっさいしゅじやうの親ことたるが如く、釈迦しゃか仏ぶつも又一切衆生いっさいしゅじやうの親なり、又此の国の一切衆生いっさいしゅじやうのためには教主きやうしゅ釈尊しゃくそんは明師めいしにておはするぞかし、父母ふぼを知るも師しの恩おんなり黒白こくびやくを弁わきまうも釈尊しゃくそんの恩おんなり、而しかるを天魔てんまの身みに入いつて候善導ぜんどう・法然ほうねんなどが申もうすに付ついて、国土こくどに阿弥陀堂あみだだうを造つくり、或あるは一郡いっくん・一郷いっけう・一村いっくん等に阿弥陀堂あみだだうを造つくり、或あるは百姓ひやくせい万民ばんみんの宅たくのごとに阿弥陀堂あみだだうを造つくり、或あるは宅宅いえいえ・人人ひとびとのごと

に阿弥陀仏を書造り。或は人ごとに口口に。或は高声に唱へ。或は一
万遍。或は六万遍。なんと唱うるに。少しも智慧ある者はいよいよこ
れをすすむ。譬へば火にかれたる草をくわへ水に風を合せたるに似
たり。此の国の人人は一人もなく。教主釈尊の御弟子御民ぞかし、
而るに阿弥陀等の他仏を一仏もつくらずかかず念仏も申さず。ある
者は悪人なれども釈迦仏を捨て奉る色は未だ顕れず、一向に
阿弥陀仏を念ずる人人は既に釈尊仏を捨て奉る色顕然なり、彼の
人人の墓無き念仏を申す者は悪人にてあるぞかし、父母にもあら
ず主君・師匠にてもおはせぬ仏をばいとをしき妻の様にもてなし、
現に国主父母明師たる釈迦仏を捨て乳母の如くなる法華経をば口
にも誦し奉らず是れ豈不孝の者にあらずや、此の不孝の人人。一人
・一人。百人。千人ならず。一国。二国ならず。上一人より
下万民に至るまで日本国。皆こぞりて一人もなく。三逆罪の者なり、

されば日月は色を変じて此れをにらめ・大地も瞋りてをどりあがり
大彗星天にはびこり大火国に充滿すれども僻事ありともおもは
ず、我等は念仏にひまなし其の上念仏堂を造り阿弥陀仏を持ち
奉るなど自讚するなり、是は賢き様にて墓無し、譬えば若き夫妻
等が夫は女を愛し女は夫をいとおしむ程に父母のゆくへをしらず、
父母は衣薄けれども我はねや熱し、父母は食せ
ざれども我は腹に飽きぬ、是は第一の不孝なれども彼等は失とも
しらず、況や母に背く妻父にさかへる夫・逆重罪にあらずや、
阿弥陀仏は十億のあなたに有つて此の娑婆世界には一分も縁な
し、なにと云うとも故もなきなり、馬に牛を合せ犬にををかたらひ
たるが如し。

但日蓮一人計り此の事を知りぬ、命を惜みて云はずば国恩を報
ぜぬ上・教主釈尊の御敵となるべし、是を恐れずして有のままに

申すならば死罪となるべし、設ひ死罪は免るとも流罪は疑なかるべしとは兼て知つてありし

かども仏の恩重きが故に人をはばからず申しぬ、案にたがはず両度まで流されて候いし中に文永九年の夏の比佐渡の国石田の郷一谷と云いし処に有りしに預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ父母の敵よりも宿世

の敵よりも悪げにありしに宿むかしの入道にゆうどうと云ひ妻と云ひつかう者と云ひ始はおぢをそれしかども先世せんぜの事にやありけん、内内ふびん不便と思ふ心付きぬ、預りよりあづかる食は少し付ける弟子でしは多くありしに僅の飯の二口三口

ありしをある或はおしきに分けある或は手に入て食しに宅主内内ないしん心あつて外にはをそるる様なれども内には不便ふびんにありし事何いすれの世にかわすれん、我を生みておはせし父母ふぼよりも当時は大事だいじとこそ思いか、何いかなる恩おもはげむべしまして約束やくそくせし事たがうべしや。

然しかれども入道にゆうどうの心は後世ごしやうを深く思いてある者なれば久しく念仏ねんぶつを申もうしつもらぬ、其その上阿弥陀堂あみだを造り田畠でんばたも其その仏の物なり、地頭じとうも又をそろしななど思いて直ちに法華經ほけきやうにはならず、是は彼の身には第一だいいちの道理どうりぞかし、然しかれども又無間むげん・大城だいじやうは疑うたがい無し、設たとひ是より法華經ほけきやうを遣つかわしたりとも世間せけんもをそろしければ念仏ねんぶつすつべか

らずな

んど思はば、火に水を合せたるが如し、謗法の大水・法華經を信ずる小火をけさん事うたがい疑ななかるべし、入道にちれん・地獄に墮おつるならば還かえつて日蓮が失とがになるべし、如何いかにんがせん如何いかにんがせんと思いわづらひて今まで法華經を渡わたし奉たまらず、渡わたし進すすせんが為ためにまうけまいらせて有りつる法華經をば鎌倉かまくらの焼亡やうに取り失うしなひ參ませて候由申す、旁かたがた

入道

の法華經ほけきよつの縁ゆかりはなかりけり、約束申やくそくもつしける我が心こころも不思議ふしぎなり、又我とはすすまざりしを鎌倉かまくらの尼あまの還かえりの用途もちに歎なげきし故ゆゑに口入くちいりし事ことなげかし、本錢もとせんに利分りぶんを添そえて返かえさんとすれば又弟子でしが云いく御約束やくそく違ちがひなんど

申す、旁かたがた進退極しんたいりて候へども人の思おもはん様さまは狂惑きやうかくの様ようなるべし、力ちから及およばずして法華經ほけきよつを一部十卷いちぶじゅう・渡わたし奉たまつ、入道にちれんよりもうばにてあ

りし者は内ない心しんよせなりしかば是これをたも持たまち給たまへ。

日蓮にちれんが申もうす事は愚おろかなる者の申もうす事なれば用いぬひず、されども去いぬる

文永ぶんえい十一年甲戌十月もっこに蒙古国もんこより筑紫つくしによせて有りしに对馬つしまの者か

ためて有りしに・宗総そうそう馬尉まのじょう逃にげければ百姓ひやくせい等は男おとこをば・或あるは殺ころし・或ある

は生取せいとにし・女むすめをば・或あるは取り集あめて手てをとをして船ふねに結むすい付け・或ある

は生取せいとにす・一人ひとりも助たすかる者ものなし、壹岐いっきによせても又また是これの如ごとし、

船ふねおしよ

せて有りけるには奉行入道・豊前前司は逃げて落ちぬ、松浦党は数
百人打たれ、或は生け取にせられしかば寄せたりける浦浦の百姓
ども壹岐対馬の如し、又今度は如何が有るらん彼の国の百千万億
の兵・日本国を引回らして寄せて有るならば如何に成るべきぞ、
北の手は先ず佐渡の島に付いて地頭守護をば須臾に打ち殺し百姓
等は北山

へにげん程に、或は殺され、或は生け取られ、或は山にして死ぬべし、
抑是れ程の事は如何として起るべきぞと推すべし、前に申しつる

が如く此の国の者は一人もなく三逆罪の者なり、是は梵王・帝釈・
日月・四天の彼の蒙古国の大王の身に入らせ給いて責め給うなり。

日蓮は愚なれども釈迦仏の御使法華経の行者なりとなのり候
を用いざらんだにも不思議なるべし、其の失に依つて国破れなんと
す、況や或は国国を追ひ、或は引はり、或は打擲し、或は流罪し

あるでし。或は弟子を殺し、或は所領を取る、現の父母の使をかくせん人人よかるべしや、日蓮は日本国の人人の父母ぞかし。主君ぞかし。明師ぞかし。是を背ん事よ、念仏を申さん人人は無間地獄に墮ちん事決定なるべし、たのもしたのもし。

そもそももつこ

抑 蒙古国より責めん時は如何がせさせ給うべき、此の法華経を

いただき頸にかけさせ給いて北山へ登らせ給うとも年比念仏者を養

ひ念仏を申して、釈迦仏・法華経の御敵とならせ給いて有りし事は

久しし、又若し命ともなるならば法華経ばし恨みさせ給うなよ、又

えんまおうきゆう

閻魔王宮にしては何とか仰せあるべき、おこがましき事とはおぼす

と

も其の時は日蓮が檀那なりとこそ仰せあらんずらめ、又是はさてを

きぬ、此の法華経をば学乗房に常に開かさせ給うべし、人如何に云

うとも念仏者・真言師持斎などにはし開かさせ給うべからず、又

にちれん
日蓮が弟子となのるとも日蓮が判を持ざらん者をば御用いあるべ
からず、きょうきょうきんげん 恐恐 謹言。

五月八日日蓮花押にちれんかおう

一谷入道女房いちやうにゅうだうにようぼう

二九四

中興入道消息

弘安二年十一月三十日

五十八歳御作

与中興入道女房

1331p

鷲目一貫文送り給い候おわ了んぬ妙法蓮華經の御宝前に申し上げ

候おわ了んぬ、抑おも日本国と申す国は須弥山よりは南一閻浮提の内

縦たいく広七千由旬なり、其の内に八万四千の国あり、所謂五天竺十六

の大国五百の中国これら・十千の小国無量の粟散国微塵の島島あり、

此等の国国は皆大海の中にありたとへば池にこのはのちれるが

如し、

此にほんこくの日本国は大海たいかいの中の小島なりしほみてば見へずひればすこしみ

ゆるかの程にて候いしを神のつき出させ給たまいいて後人王のはじめ神武

天皇と申せし大王だいおうをはしましき、それよりこのかた三十余代は仏

と經と僧とはまし

まさずただ人と神とばかりなり、仏法をはしまさねば地獄じじくもしらず、浄土じょうどもねがはず、父母ふぼ・兄弟きょうだいのわかれありしかどもいかながるらん、ただ露つゆのきゆるやうに日月にちがつのかくれさせ給たまうやうにうちをもいてありけるが然しかる

に人王第三十代欽明天皇きんめいてんのうと申もうす大王だいおうの御宇ぎように此の国より戌亥いぬいの角くに当りて百済国くだらと申もうす国あり、彼の国よりせいめい王と申せし王金銅しやがぶつの釈迦しやがぶつ仏と此の仏の説かせ給たまへる一切いっさい経きやうと申もうすふみと此をよむ僧をわたししてありし

かば仏と申もうす物もいきたる物にもあらず、経きやうと申もうす物も外典げてんの文にもにず、僧そうと申もうす物も物はいへども道理どうりもきこへず形かたちも男女なんよにもにざりしかばかたがたあやしみをどろきて左右さうの大臣だいじん大王だいおうの御前おんまえにしてとかう僉議せんぎ

ありしかども多分たぶんはもちうまじきにてありしかば、仏はすてられ僧

はいましめられて候いしほどに・用よ明め天てん皇のうの御子し聖德よ太子とくと申せし
人しびだつの二年二月十五日東なに向いて南無む釈迦しゃ牟尼か仏むと唱とえて御
舎利しを御手みより出し給たいて同六年ほに法華け経きを讀ど誦くし給たふ、それより
・このかた七百余年王は六十余代に及ぶまでやうやくぶ仏法ぼひろま
り候にいて日本ほ六十六箇国・二つの島にいたらぬ国もなし、国こ国こ・郡ぐん郡ぐん
・郷郷・里里・村村にに堂塔たと申もし寺寺じと申もし仏法ぶの住所じすでに十七万
一千三十七所なり、日月にの如ごとくあきらかなる智者ち代代じに仏法ぶをひ
ろめ衆星しのごとく・がが

やくけんじん国に充滿せり、かの人人は自行には、或は真言を行
じ・或は般若・或は仁王・或は阿弥陀仏の名号・或は観音・或は
地藏・或は三千仏・或は法華経読誦しをるとは申せども無智の道俗
をすすむるにはただ南無阿弥陀仏と申すべし、譬えば女人の幼子
をまうけたるに、或はほり・或はかわ・或はひとりなるには母よ母よ
と申せば・

ききつけぬればかならず他事をすてたすくる習なり、阿弥陀仏も
又是くの如し我等は幼子なり阿弥陀仏は母なり地獄のあな餓鬼の
ほりなんとにをち入りぬれば南無阿弥陀仏と申せば音と響きとの
ごとく
如く必ず来りてすくひ給うなりと一切の智人ども教へ給いしかば我
が日本国かく申しならはして年ひさしくなり候。

然るに日蓮は中国都の者にもあらず辺国の將軍等の子息にも
あらず遠国の者民が子にて候いしかば、日本国七百余年に一人もい

まだ唱へまいらせ候はぬ南無妙法蓮華經と唱え候のみならず、皆人の父母のごとく日月の如く主君の如くわたりに船の如く渴して水のごとくうえて飯の如く思いて候南無阿弥陀仏を無間地獄の業なりと申し候ゆへに食に石をたひたる様にがんせきに馬のはねたるやうに渡りに大風の吹き来たるやうにじゆ

らくに大火のつきたるやうに俄にかたきのよせたるやうにとわりの

きさきになるやうにをどろき・そねみ・ねたみ・候ゆへに去ぬる

けんぢゅう
建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間

退転なく申しつより候事月のみつるがごとく・しほのさすがごとく・

はじめは日蓮只一人・唱へ候いしほどに、見る人値う人聞く人・耳を

ふさぎ眼をいからかし・口をひそめ・手をにぎり・はをかみ・

父母・兄弟・師匠ぜんうも・かたきとなる、後には所の地頭・領家か

たきとなる後には一國さはぎ後には万民をどろくほどに、或は人

の口まねをして南無妙法蓮華經となへ。或は悪口のためになへ

或は信ずるに似て唱へ。或はそしるに似て唱へなんとする程に、す

でに日本国

十分が一分は一向南無妙法蓮華經のこりの九分は。或は両方。或は

うたがひ。或は一向念佛者なる者は父母のかたき主君のかたき宿世

のかたきのやうにののしる、村主郷主国主等は謀叛の者のごとくあ

だまれたり、かく

の如く申す程に大海の浮木の風に隨いて定めなきが如く輕毛の虚空
にのぼりて上下するが如く日本国ををはれあるく程に、或時は
うたれ、或時はいましめられ、或時は疵をかほふり、或時は遠流、或
時は弟子をころされ、或時はうちをはなれなんとする程に、去ぬる
文永八年九月十二日には御かんきをかほりて北国佐渡の島にうつ
されて候い
しなり、世間には一分のとがもなかりし身なれども故最明寺入道
殿極樂寺入道殿を地獄に墮ちたりと申す法師なれば謀叛の者にも
すぎたりとて相州・鎌倉・竜口と申す処にて頸を切らんとし候い
しが科は大科なれども法華經の行者なれば左右なくうしなひなば
いかんがとやをもはれけん、又遠国の島にすてをきたるならば、
いかにもなれかし。

上にくまれたる上万人も父母のかたきのやうにおもひたれば

道にても又国にても若しはころすか若しはかつえしぬるかになら
ずらんとあてがはれて有りしに、法華經・十羅刹の御めぐみにやあ
りけん、或は天とがなきよしを御らんずらんにやありけん、島にて
あだむ者は多かりしかども中興の次郎入道と申せし老人あり

き、彼の人は年ふりたる上心かしく身もたのしくて国の人にも人
とをものはれたりし人の此の御房はゆへある人にやと申しけるか
ゆへに子息等もいたうもにくまず、其の已下の者どもたいし彼等の
人人の下人にてありしかば内内あやまつ事もなく唯上の御計いのま
まにてありし程に、水は濁れども又すみ月は雲かくせども・

又はることほりなれば、科なき事すであらわれていゝし事もむ
なしからざりけるかのゆへに、御一門諸大名はゆるすべからざる
よし申されけれども相模守殿の御計らひばかりにてついにゆりて候
いてのぼりぬ、ただし日蓮は日本国には第一の忠の者なり肩をなら

ぶる人は先代せんだいにもあるべからず後代にもあるべしとも覚おぼえず。
其そのの故ゆえは去ぬる正嘉年しょうか中の大地震だいじしん文永元年ぶんえいがんねんの大長星の時内外ないげの
智人ちじん其そのの故ゆえをうらなひしかどもななにのゆ

へいかなる事の出来すべしと申す事をしらざりしに、日蓮一切経
蔵に入りて勘へたるに真言・禅宗・念仏律等の権小の人人をもつて
法華経をかるしめたてまつる故に梵天・帝釈の御とがめにて西なる
国に仰せ付けて日本国をせむべしとかんがへて、故最明寺入道殿に
まいらせ候いき、此の事を諸道の者、をこつきわらひし程に・九箇
年すぎて去ぬる文永五年に大蒙古国より日本国ををそうべきよし
牒状わたりぬ、此の事のおふ故に念仏者・真言師等あだみて失は
んとせしなり、例せば漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に上陽
人と申せし美人あり、天下第一の美人にてありしかば楊貴妃と申す
きさきの御らんじて此の人王へまいるならば我がをぼへをとりなん
とて

せんじ
宣旨なりと申しかすめて、父母・兄弟をば或はながし或は殺し上
陽人をばろううに入れて四十年までせめたりしなり、此れもそれに

にて候、日蓮にちれんが勘文かんもんあらわれて大蒙古国だいもつここくを調伏じょうぶくし日本国にほんこくかつならば此こゝの法師ほふしは日本第一にほんだいいちの僧そうとなりなん、我等われらが威徳いとくをとろうべしと思おもうかのゆへに讒言ざんげんをなすをばしろしめさずして、彼等かれらがことばを用もちい

て国ほろぼを亡ほろさんとせらるるなり、例せば二世王ちふうおうは趙高ざんげんが讒言ざんげんによりて李斯りしを失うしひかへりて趙高ちやうこうが為ために身みをほろぼされ、延喜えんぎの御門みかどはし

へいのをとどの讒言ざんげんによりて菅丞相かんじやうしやうを失うしなうしなりて地獄じごくにおち給たまいぬ、此これも又またかくの如ごとし、法華經ほけきやうのかたきたる真言師しんごんし・禅宗ぜんじゆう・律僧りつそう・

持齋じさい・念仏者等ねんぶつが申もうす事を御用もちいありて日蓮にちれんをあだみ給たまうゆへに、日蓮にちれん

はいやしけれども所持しよじの法華經ほけきやうを釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつ・梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・竜神りゆうじん・天照太神てんしやうだいにじん・八幡大菩薩はちまんたいぼさつ・人の眼まなこをおしむ

がごとく諸天しよてんの帝釈たいしやくをうやまうがごとく母の子を愛するがごとく

まほりおもんじ給うゆへに、法華經の行者をあだむ人を罰し給う
事父母のかたきよりも朝敵よりも重く大科に行ひ給うなり。

然るに貴辺は故次郎入道殿の御子にて、をはするなり御前は又
よめなり、いみじく心かしこかりし人の子とよめとにをはすればや、
故入道殿のあとをつぎ国主も御用いなき法華經を御用いあるのみ
ならず法華經の行者をやしなはせ給いてとしどしに千里の道をお
くりむかへ去ぬる幼子のむすめ御前の十三年に丈六のそとばを

たてて其の面に南無妙法蓮華經の七字を顕してをはしませば、北風吹けば南海のいろくづ其の風にあたりて大海の苦をはなれ東風きたれば西山の鳥鹿其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生れん、況やかのそとばに隨喜をなし手をふれ眼に見まいらせ候人類をや、過去の父母も彼のそとばの功德によりて天の日月の如く浄土をてらし孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事水すめば月うつりつづみをうてばひびきのあるがごとしとをばしめし候へ等云云、此れより後後の御そとばにも法華經の題目を顕し給へ。

弘安二年己卯十一月卅日

身延山

日蓮 花押

中興入道殿女房

二九五 是日尼御書

1335p

さどの国より此の甲州まで入道にゅうだうの来りたりしかば・あらふしぎ
とをもひしに又今年来りなつみ水くみたきぎこりだん王おんの阿志仙人あしせん
につかへしがごとくして一月に及びぬる不思議ふしぎさよ、ふでをもちてつ
くしがたし、これひ

とへに又尼にぎみの御功德ごどくなるべし、又御本尊ごほんぞん一ふくかきてまいらせ
候りょうぜんじょう、靈山浄土にては・かならずゆきあひ・たてまつるべし、
謹言きんげん。恐恐きょうきょう

卯月十二日

日蓮にちれん

尼是日

にちれん 日蓮此の度赦免を被むり鎌倉へ登るにて候、如我昔所願
 こんじゃいまんぞく 今者已満足此の年に当るか、遠藤殿御育み無くんば命永らう可し
 またしやめん や亦赦免にも預かる可しや、日蓮一代の行功は偏に左衛門殿等遊し
 ところ 候処なり、御経に「天諸童子以て給使を為し刀杖も加えず毒も害
 あた すること能はず」と候得ば有難き御経なるかな、然ば左衛門殿は
 ほんてん 梵天釈天の御使にてましますか、靈山えの契約に此の判を参せ
 おんつかい 候、一流は未来え持せ給え靈山に於て日蓮日蓮と呼び給え、
 みらい そのとき 其の時御迎えに罷り出ず可く候、猶又鎌倉より申し進す可く候な
 り。

ぶんえい 文永十一年甲戌三月十二日
 きのえいぬ

日蓮にちれん

遠藤左衛門尉殿さえもんのかみ

二九七

生死しやうじ一大事いちだいじ血脈抄けちみやく

文永九年二月十一日ぶんえい

五十一歳御作

与最蓮房日淨さいれんぼう

1336p

日蓮記之にちれん

御状委細披見いさいひけんせしめ候い畢おわんぬ、夫れ生死しやうじ一大事いちだいじ血脈けちみやくとは所謂いわゆる

妙法蓮華經みょうぼうれんげきやう是これなり、其そのの故ゆえは釈迦しやくか・多宝たほうの二仏にぶつ宝塔ほうとうの中なかにして

上行菩薩じやうぎやうぼんに譲ゆずり給たまいて此この妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうの五字ごじ過去かこ遠おん遠のん劫こうより已来このかた

寸時じゆつかいも離とれざる血脈けちみやくなり、妙たは死法しほうは生しやうなり此この生死しやうじの二法にほうが

十界じゆつかいの当体とうたいなり又また此これを当体蓮華とうたいれんげとも云いうなり、天台てんだい云いく「当まさに

知るべしえしやう依正いせいの因果いんがは悉ことごとこく是れ蓮華れんげの法はうなり」と云云此の釈えしやうに依正いせいと云うは生死しやうじなり生死しやうじ之有これあれば因果いんが又蓮華れんげの法はうなる事明あけし、
伝でんきやう教だいいし大師い云く「生死しやうじの二法にほうは一心いっしんの妙用みやうゆう・有無うむの二道にどうは本覺ほんがくの真ま徳とくと文、天地てんち・陰陽いんやう・日月にちがつ・五星ごせう・地獄じごく・乃至な仏果ぶつが・

生死しやうじの二法にに非あらずと云ううことなし、是かくの如ごとく生死しやうじも唯ただ
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの生死しやうじなり、天台てんだいの止觀しかんに云いく「起きは是これ法性ほつしやうの起き滅めつ
は是これ法性ほつしやうの滅めつ云云、釈迦しゃか・多宝たほうの二仏にぶつも生死しやうじの二法になり、然しかれ
ば久遠くおんじつじやう実成じやくそんの釈尊しやくそんと皆かいじやうぶつどう成仏じやくそん道の法華經ほけきやうと我等われら衆生しゆじやうとの三さんつ全ぜんく
差別さべつ無しと解さりて妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる處ところを生死しやうじ一大事いちだいじの血脈けちみやく
とは云ううなり、此この事こと

但日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等の肝要かんやうなり法華經ほけきやうを持もつとは是これなり、所詮しよせん
臨終りんじゆう只今ただいまにありと解さりて信心しんじんを致いたして南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となうる人ひと
を「是人命終みやうじゆう為千仏授手令不恐怖不墮惡趣くふだあくしゆ」と説とかれて候まう、悦よろこば
しい哉いぢがひ一仏いちぶつ・二仏にぶつに非あらず百仏ひやくぶつ・二百仏にひやくぶつに非あらず千仏せんぶつまで來迎らいいづし手てを取り
給たまはん事こと歡喜かんきの感涙かんだい押おえ難がたし、法華ほつけ不信ふしんの者ものは「其人命終ごにんみやうじゆう
にゆうあびごく入阿鼻獄にゆうあびごく」と説とかれたれば定さだめて獄卒ごくそつ迎むかえに來きつて手てをや取り
候まうはんずらん浅あさまし、浅あさまし、十王じゆわうは裁斷さいだんし俱生神くしやうしんは呵責かしゃくせんか。

いまにちれん でし 檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は千仏の

手を授け給はん事譬えば 夕顔の手を出す如くと思し食せ、

過去に法華經の結縁強盛なる故に現在に此の經を受持す、未来に

仏果を成就せん事疑有るべか

らず、過去の生死現在の生死未来の生死三世の生死に法華經を離

れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり、謗法不信の者は「即

断一切世間・仏種」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に

生死一大事の血脈之無きなり。

総じて日蓮が弟子・檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して

異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の

血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し

然らば広宣流布の大願も叶うべき者か、剩え日蓮が弟子の中に異

体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し、日本国の

一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとする
に還つて日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺
日蓮に随順し又難に値い給う事心中思い遣られて痛しく候ぞ、金
は大火にも焼けず大水にも漂わず朽ちず 鉄は水火共に堪えず
賢人は金の如く愚人は鉄の如し貴辺真金に非ずや法華經の金
を持つ故か、經に云く「衆山の中に須弥山為第一此の法華經も亦復
是くの如し」又云く「火も焼くこと能わず水も漂わすこと能わ

ずニ云云、過去の宿縁追い來つて今度日蓮が弟子と成り給うか釈迦
多宝こそ御存知候らめ、「在在諸仏土常与師俱生」よも虚事候は
し。

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此
の文に委悉なり能く能く心得させ給へ只南無妙法蓮華經・釈迦・
多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ火は焼照を以て行と為し水
は垢穢を淨るを以て行と為し風は塵埃を払ふを以て行と為し又
人畜・草木の為に魂となるを以て行と為し大地は草木を生ずるを
以て行と
為し天は潤すを以て行と為す妙法蓮華經の五字も又是くの如し
本化地涌の利益是なり、上行菩薩末法今の時・此の法門を弘めんが
為に御出現之れ有るべき由・經文には見え候へども如何が候やら
ん、上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん、日蓮先ず粗弘め

候なり、相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經
臨終正念と祈念し給へ生死一大事の血脈此れより外に全く求む
ることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈
無くんば法華經を持つとも無益なり、委細の旨又又申す可く候、
恐恐謹言。

文永九年壬申二月十一日桑門

日蓮 花押
最蓮房上人御返事

二九八 草木成仏口決 文永九年二月二十日

五十一歳御作 与最蓮房日浄 2338p
問うて云く草木成仏とは有情非情の中何れぞや、答えて云く

草木成仏とは非情の成仏なり、問うて云く情非情共に今經に於て
成仏するや、答えて云く爾なり、問うて云く証文如何、答えて
云く妙法蓮華經是なり・妙法とは有情の成仏なり蓮華とは非情の
成仏なり、有情は生の成仏非情は死の成仏生死の成仏と云うが
有情非情の成仏

の事なり、其の故は我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは
 死の成仏にして草木成仏なり、止観の一に云く「一色一香中道に
 非ざること無し」妙楽云く「然かも亦共に色香中道を許す無情
 仏性・惑耳驚心す」此の一色とは五色の中には何れの色ぞや、青黄
 赤白黒の五色を一色と釈せり一とは法性なり、爰を以て妙楽は
 色香中道
 と釈せり、天台大師も無非中道といへり、一色一香の一は二三相對
 の一には非ざるなり、中道法性をさして一と云うなり、所詮・
 十界・三千・依正等をそなへずと云う事なし、此の色香は草木成仏
 なり是れ即ち蓮華の成仏なり、色香と蓮華とは言はかはれども
 草木成仏の事なり、口決に云く「草にも木にも成る仏なり」云云、
 此の意
 は草木にも成り給へる寿量品の釈尊なり、経に云く「如来秘密

神通之力と云云、法界は釈迦如来の御身に非ずと云う事なし、理の

顕本は死を表す妙法と顕る。事の顕本は生を表す蓮華と顕る、理

の顕本は死にて有情をつかさどる事の顕本は生にして非情をつかさ

どる、我等衆生のために依怙・依託なるは非情の蓮華がなりたるな

り・我等

衆生の言語・音声・生の位には妙法が有情となりぬるなり、我等

一身の上には有情非情具足せり、爪と髪とは非情なりきるにもいた

まず其の外は有情なれば切るにもいたみくるしむなり、一身所具の

有情非情なり此の有情非情十如是の因果の二法を具足せり、衆生

世間・五陰世間・国土世間・此の三世間・有情非情なり。

一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり、当世の

習いそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり、天台・妙楽・伝教

内にはかがみさせ給へどもひろめ給はず、一色一香とののしり

惑耳驚心わくにきょうしんとささやき給たまいて・

妙法蓮華みょうほうれんげと云うべきを円頓止觀えんどんしかんとかへさせ給たまいき、されば草木成仏そうもくじょうぶつ

は死人しにんの成仏じょうぶつなり、此等これらの法門ほうもんは知る人ひとすくなきなり、所詮しよせん

妙法蓮華みょうほうれんげをしらざる故ゆえに迷まようところの法門ほうもんなり、敢あえてて忘失もうしつする事

なかれ、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

二月二十日

日蓮にちれん 花押かおう

最蓮房御返事さいれんぼうごへんじ

夕ざりは相構え相構えて御入り候へ得受職人功德法門委細
あいかまえそうかまえ
 申し候はん。
もうそうち

御礼の旨委細承り候い畢んぬ、都よりの種種の物慥かに給ひ候い
むねいさいたまわ
 畢んぬ、鎌倉に候いし時こそ常にかかる物は
おわ
かまくら

見候いつれ此の島に流罪せられし後は未だ見ず候、是れ体の物は辺
るざい
いま
こ
 土の小島にてはよによに目出度き事に

思ひ候。

御状に云く去る二月の始より御弟子となり帰伏仕り候上は自今
いわ
いぬ
おんでし
おんでし
いちぶん
きぶく
いご
ひとかず
 以後は人数ならず候とも御弟子の一分と思し食され候はば恐悦に
おんでし
いちぶん
しよぶつ
とも
 相存ず可く候云云、経の文には「在在諸仏の土に常に師と俱に生れ

ん」とも。或は「若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん。是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん」とも云へり、
釈

には「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて不退地に住せん」とも、或は云く「初此の仏・菩薩に従つて結縁し還つて此の仏・菩薩に於て成就す」とも云えり、此の経釈を案ずるに過去無量劫より已來師弟の契約有りしか、我等末法濁世に於て生を南閻浮提大日本国につけ忝くも諸仏出世の本懐たる南無妙法蓮華経を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事。是れ偏に過去の宿習なるか。

予日本の体を見るに第六天の魔王智者の身に入りて正師を邪師となし善師を悪師となす、経に「悪鬼入其身」とは是なり、日蓮智者に非ずと雖も第六天の魔王我が身に入らんとするに兼ての

用心ようじん深ひければ身みによせつけず、故ゆえに天魔てんま力ちから及およばずして、王臣おうしんを始はじと
して良觀りょうかん等の愚癡ぐちの法師ほっし原はらに取り付ついて日蓮にちれんをあだむなり、然しかる
に今時いまときは師しに於おいて正師しょうし・邪師じゃし・善師ぜんし・惡師あくしの不同ふどうある事ことを知しつて邪惡じゃあく
の師しを遠離おんりし正善しょうぜんの師しに親近しんこんすべきなり、設たい徳とく

は四海しかいに齊ひとしく智慧ちえは日月にちがつに同ひとしくとも法華經ほけきょうを誹謗ひぼうするの師しをば
悪あくくししじじゃゃしし 悪師あくし邪師じやしと知ちつて是こゝに親近しんこんすべからざる者ものなり、或あるる經きやうに云いく
「若もし誹謗ひぼうの者ものには共住きぢゆうすべからず若もし親近しんこんし共住きぢゆうせば即すなわち阿鼻獄あびごく
に趣おもむかん」と禁いまめ給たまう是これなり、いかに我が身みは正直しよくちじきにして世間せけん出世しゅつせ
の賢人けんじんの名なをとらんと存ぞんずれども悪人あくにんに親近しんこんすれば自然じねんに十度じゅうどに
二度・三度

其その教きやうに随したがひ以もつて行くほどに終つひに悪人あくにんになるなり、釈いわに云いく「若もし
人本あくにん悪無あくにんきも悪人あくにんに親近しんこんすれば後あき必ず悪人あくにんと成なり悪名あくみやう天下てんかに遍あまか
らんに云いふ、所詮しよせん其その邪惡じやあくの師しとは今いまの世よの法華誹謗ほつけひぼうの法師ほつしなり、
ねはんぎよういわ「菩薩ぼさつ悪象あくざう等に於おいては心こゝろに恐怖くふすること無あかれ悪智識あくちしき
涅槃經ねはんぎやうに云いく、菩薩ぼさつ悪象あくざう等に於おいては心こゝろに恐怖くふすること無あかれ悪智識あくちしき
に於おいては怖畏ふいの心こゝろを生あげよ、悪象あくざうの為ために殺ころされては三趣さんしゆに至いたら
ず、悪友あくゆうの為ために殺ころされるれば必ず三趣さんしゆに至いたらん、法華經ほけきやうに云いく「悪世あくせ
の中の比丘びくは邪智じやちにして心諂曲てんこく」等ら云いふ、先先もつ申し候こと如ごとく善無畏ぜんむい・

こんごうちだるま 金剛智達磨・慧可善導・法然東寺の弘法園城寺の智証山門の慈覚
かんとう 關東の良觀等の諸師は今の正直捨方便の金言を読み候には正直
じつきょう たんせつほうべん 捨実教但説方便教と読み、或は於諸經中最在其上の經文をば
しよめくわう 於諸經中最在其下と、或は法華最第一の經文をば法華最第一・第
三等と読む、故に此等の法師原を邪惡の師と申し候なり。
さて正善の師と申すは釈尊の金言の如く・諸經は方便法華は
しんじつ 眞実と正直に読むを申す可く候なり、華嚴の七十七の入法界品
これ を見る可し云云、法華經に云く「善知識は是れ大因縁なり所謂
けどう 化導して仏を見たてまつり阿耨菩提を發することを得せしむ」等云
云、仏説の如きは正直に四味三教・小乘・權大乘の方便の諸經・
ねんぶつ 念仏・眞言・禪・律等の諸宗並びに所依の經を捨て但唯以一大事
いんねん 因縁の妙法蓮華經を説く師を正師善師とは申す可きなり、然るに
にちれんまつほうのはじめ 日蓮末法の初の五百年に生を日域に受け如来の記文の如く三類の

強敵を蒙り種種の災難に相値つて身命を惜まずして南無
妙法蓮華經と唱え候は正師か邪師か能能御思惟之有る可く候。
上に挙ぐる所の諸宗の人人は我こそ法華經の意を得て法華經を
修行する者よと名乗り候へども予が如く弘長

には伊豆の国に流され・文永には佐渡嶋に流され・或は
たつのくちのくびのざ
竜口の頸の座等・此の外種種の難数を知らず、経文の如くならば
予は正師なり善師なり・諸宗の学者は悉く邪師なり悪師なりと
覚し食し候へ此の外善悪二師を分別する

経論の文等は是れ広く候へども兼て御存知の上は申すに及ばず候。

只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの

仰せは不審に覚へ候、我等が本師・釈迦如来法華経を説かんが為に

出せましませしには他方の仏・菩薩等来臨影響して釈尊の行化を

助け給う、されば釈迦・多宝・十方の諸仏等の御使として来つて化

を日域に示し給うにもやあるらん、経に云く、「我於余国遣化人・為

其集聴法衆亦遣化随順不逆」此の経文に比丘と申すは貴辺の事な

り、其の故は聞法信受随順不逆眼前なり争か之を

疑い奉るべきや、設い又在在諸仏土常与師俱生の人なりとも三周

の聲聞しやうもんの如ごとく下種げしゆの後に退大取小たいだいしゆしやうして五道ごどう・六道ろくだうに沈輪ちんりんし給たまいしが成仏じやうぶつの期来至きらいしして順次とくだつに得脱とくだつせしむべきゆへにや、念仏ねんぶつ・真言しんごん等の邪法じやほう・邪師じやしを捨てて日蓮にちれんが弟子でしとなり給たまうらん有り難がたき事ことなり。

何いすれれの辺へに付ついても予こが如ごとく諸宗しよしゆの謗法ぼうほうを責せめ彼等かれらをして捨邪しや

歸正きせいせしめ給たまいて順次じゆんじに三仏座さんぶつざを並ならべたもう常寂光土じやうじやくかうどに詣よりて釈迦しやく

多宝たほうの御宝前ごほうぜんに於おいて我等無始われらむしより已来このかたして師弟しでいの契約けいやく有りけるか無なか

りけるか又釈尊しやくそんの御使おんつかいとして来きつて化くわし給たまへるかさぞと仰おほせを蒙かうむ

つてこそ我が心こころにも知らしられ候そうらはんずれ、何様いかようにもはげませ給たまへは

げませ給たまへ。

何なにとなくとも貴辺きへんに去いぬる二月にがつの比ひより大事だいじの法門ほうもんを教たてまつへ奉たてまつりぬ、

結句けっくは卯月うづき八日やち・夜半よなか・寅とらの時に妙法みやうほうの本円戒ほんえんがいを以もつて受職かんちよう灌頂くわんていせ

しめ奉たてまつる者ものなり、此こゝの受職うじやくを得えるの人争いかでか現在げんざいなりとも妙覚みやうかくの仏ぶつ

を成なぜざらん、若もし今生こんじやう妙覚みやうかくならば後生ごじやう豈あに等覚とうかく等の因分いんぶんならん

や、むし實に無始曠劫けいやくの契約常じょう与師俱生しきうじやうの理りならばにちれん日蓮このたびじょうぶつ今度成仏きんぶつせん
にきへん貴あに辺あいはな豈あ相離あれてあくしゆ悪趣だざいに墮だ在ざいしたべもう可べきべや、に如に來よのら記き文もん仏ぶつ意いのに辺へん
におい於おてはし世せ・しゆつせ出し世せにつ就ついてもつこ更もにし妄わ語ご無むし、し然かるかに

法華經には「我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし、是の人・
仏道に於て決定して疑有ること無けん」或は「速為疾得・無上
仏道」等云云、此の記文虚くして我等が成仏今度虚言ならば諸仏
の御舌もきれ多宝の塔も破れ落ち二仏並座は無間地獄の熱鉄の
牀となり方実寂の三土は地餓畜の三道と変じ候べし、争か・さる事
候べきやあらたのもしやたのもしや是くの如く思いつづけ候へば
我等は流人なれども身心共にうれしく候なり。

大事の法門をば昼夜に沙汰し成仏の理をば時時刻刻にあぢは
う、是くの如く過ぎ行き候へば年月を送れども久からず過ぐる
時刻も程あらず、例せば釈迦・多宝の二仏塔中に並座して法華の
妙理をうなづき合ひ給いし時・五十小劫仏の神力の故に諸の大衆
をして半日の如しと謂わしむと云いしが如くなり、劫初より以来
父母・主君等

の御勘氣を蒙り遠国の島に流罪せらるるの人我等が如く悦び身に
余りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乘を修行せん
の処は何れの処にても候へ常寂光の都為るべし、我等が弟子檀那
とならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見本有の寂光土へ昼
夜に往復し給ふ事うれしとも申す計り無し申す計り無し。

余りにうれしく候へば契約一つ申し候はん、貴辺の御勘氣疾疾
許させ給いて都へ御上り候はば日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ
候とも諸天等に申して鎌倉に帰り京都へ音信申す可く候、又日蓮先
立つてゆり候いて鎌倉へ帰り候はば貴辺をも天に申して古京へ歸し
奉る可く候、恐恐謹言。

四月十三日

にちれん かおう

日蓮 花押

さいれんぼうごへんじ

最蓮房御返事

三〇〇

祈抄

文永九年

五十一歳御作

本朝

沙門 日蓮撰

1344p

問うて云く華嚴宗・法相宗・三論宗・小乗の三宗真言宗

天台宗の祈をなさんにいづれかするしあるべきや、答て云く仏説な

ればいづれも一往は祈となるべし、但法華經をもつていのらむ祈は

必ず祈となるべし、問うて云く其の所以は如何、答えて云く二乗は

大地微塵劫を経て先四味の經を行ずとも成仏すべからず、法華經

は須臾の間

此れを聞いて仏になれり、若爾らば舍利弗迦葉等の千二百万二千

総じて一切の二乗界の仏は必ず法華經の行者の祈をかなふべし、又

行者の苦にもかわるべし、故に信解品に云く「世尊は大恩まします

けう 希有の事を以て憐愍教化

して我等を利益し給う無量億劫にも誰れか能く報ずる者あらん、

手足をもて供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも皆

報ずること能わず、若しは以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て

心を尽して恭敬し、又美膳無量の宝衣及び諸の臥具種種の湯薬を

以てし牛頭栴檀及び諸の珍宝以つて塔廟を起て宝衣を地に布き

斯くの如

き等の事もつて供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わ

じし等し云ん、此の経文は四大声聞が譬喩品を聴聞して仏になるべ

きよ由しを心得て、仏と法華経の恩の報じがたき事を説けり、されば

二乗の御為には此の経を行ずる者をば父母よりも愛子よりもり両眼

よりもし身命よりも大事にこそおぼしめすらめ、舍利弗・目連等の

諸大声聞

は一代聖教いちだいしゅうきょう いづれも讚歎さんたんせん行者ぎやうじやをすておぼす事は有あるべからずとは思おもへども爾前にぜんの諸経しよきやうはすこしうらみおぼす事も有あらん「於お仏法ぶつぽう中ちゆう已い如敗種はいしゆ」なんどしたたかにいましめられ給たまいし故こなり、今の華光げこう如來にょらい・名相みやうしやう如來にょらい・普明ふみやう如來にょらいなんどならせ給たまいたる事は・おもはざる外ほかの幸しあなり、例れいせば崑崙山こんろんのくづれて宝たからの山やまに入りたる心地しんじしてこそおはしぬらめ、されば領解りやうげの文ぶんに云いく「無上むじやう宝珠ほうしゆ不求ふぐ自得じとく等とく」ニ云いふ。

されば一切の二乗界法華經の行者をまほり給はん事は疑あるべからず、あやしちくしゅうの畜生ちくしゅうなんども恩をば報ずる事に候ぞかし、かりと申す鳥あり必ず母の死なんとする時孝をなす、狐は塚を跡あとにせず畜生猶此ちくしゅうくの如ごとし況や人類をや、されば王寿おうじゆと云ひし者・道を行きしにうえつかれたりしに、路の辺に梅の樹あり其その実多し寿とりて食し

てうへやみぬ、我れ此の梅の実を食して氣力をます其その恩を報ぜずんば・あるべからずと申もつして衣をぬぎて梅かに懸けてさりぬ、王尹おういんと云いし者は道を行くに水に渴しぬ、河をすぐるに水を飲んで錢を河に入れて是これを水の直あたえと

す、竜は必ず袈裟けさを懸けたる僧を守る、仏より袈裟けさを給て竜宮城の愛子かに懸かけさせて金翅鳥こんじちようの難なんをまぬがる故なり、金翅鳥こんじちようは必ず父母孝養ふぼこうようの者を守る、竜は須弥山しゆみせんを動かして金翅鳥こんじちようの愛子かを食す、

金翅鳥は仏の教によつて

父母の孝養をなす者僧のとりさんばを須弥の頂にきて竜の難をまぬかるる故なり、天は必ず戒を持ち善を修する者を守る、人間界に戒を持たず善を修する者なければ人間界の人死して多く修羅道に生ず、修羅多勢なれば

をこりをなして必ず天ををかず、人間界に戒を持ちて善を修するの者多ければ人死して必ず天に生ず、天多ければ修羅をそれをなして天ををかず、故に戒を持ち善を修する者をば天必ず之を守る、何に況や一乗は六凡より戒徳も勝れ智慧賢き人人なり、いかでか我が成仏を遂げたらん法華經を行ぜん人をば捨つべきや。

又一切の菩薩並に凡夫は仏にならんがために、四十余年の經經を無量劫が間行ぜしかども仏に成る事なかりき、而るを法華經を行じて仏と成つて今十方世界におはします仏・仏の三十二相・八十

種好しゅこうをそなへさせ給たまいて九界しゅじょうの衆生しゅじょうにあをがれて、月つきを星ほしの回めぐれる
がごとく須弥山しゅみせんを八山はつさんの回めぐるが如ごとく、日輪にちりんを四州ししゅうの衆生しゅじょうの仰あおぐが
如ごとく輪王りんおう
を万民ばんみんの仰あおぐが如ごとく、仰あおがれさせ給たまうは法華經ほけきょうの恩徳おんとくにあらずや、
されば仏ぶつは法華經ほけきょうに誠いましめて云いわく「須すらく復またた舍利しゃりを安やすんずることをも
ちいざれ」涅槃經ねはんぎょうに云いわく「諸しよ仏ぶつの師しとする所いわゆる所謂い法ほなり是かくの故ゆえに
如来にょらい恭敬きやうけい供養くやうす」等と云いふ、法華經ほけきょうには我わが舍利しゃりを法華經ほけきょうに並ならぶべから
ず、涅槃經ねはんぎょうには諸しよ仏ぶつは法華經ほけきょうを恭敬きやうけい供養くやうすべしと説たませ給たまへり、仏ぶつ此

の法華經ほけきょうをさとりて仏に成りしかも人に説き聞かせ給はずばぶつしゆ仏種
をたたせ給ふ失あり、此の故に釈迦如来は此の娑婆世界に出でて説
かんとせさせ給いしを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切
衆生の身に入つて、仏をあだみて説かせまいらせじとせしなり、
所謂波瑠璃王の五百人の釈子を殺し、鳶崛摩羅が仏を追、提婆が
大石を放はなち・

旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて仏の御子と云いし、婆羅門城には仏
を入れ奉る者は五百兩の金をひきき、されば道にはうばらをたて
井には糞を入れ門にはさかむきをひけり食には毒を入れし、皆是れ
仏をにくむ故に、華色

比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れ
し皆仏をあだみし故なり、而れども仏さまさまの難をまぬかれて御
年七十二歳、仏法を説き始められて四十二年と申せしに中天竺

おうしやじょう とうしとら 王舎城の丑寅 耆闍崛山

と申す山にして、法華經を説き始められて八年まで説かせ給いて、

東天竺俱尸那城跋提河の辺にして御年八十と申せし、二月十五日

の夜半に御涅槃に入らせ給いき、而りといへども御悟りをば法華經

と説きをかせ給へば、此の經の文字は即釈迦如来の御魂なり、一一

の文字は仏の御魂なれば此の經を行ぜん人をば釈迦如来、我が御

眼の如くまほり給うべし、人の身に影のそへるがごとくそはせ給う

らん、いかでか祈とならせ給はざるべき。

一切の菩薩は又始め華嚴經より四十余年の間、仏にならんと願ひ

給いしかどもかなはずして、法華經の方便品の略開三頭一の時、仏

を求むる諸の菩薩大数八万有り、又諸の万億国の轉輪聖王の至れ

る合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲すと願ひしが、

広開三頭一を聞いて「菩薩是の法を聞いて疑網皆已に断ちぬ」と説

かせ給たまい

ぬ、其その後た自ほう界た他ほう方たの菩薩ぼさつ雲うんの如ごとく集つらり星なの如ごとく列つらり給たまい

宝塔ほうとう品の時じ十方じゅうほうの諸しよ仏ぶつ各む各へん無む辺へんの菩薩ぼさつを具ぐ足そくして集つらり給たまい

文殊もんじゆは海うみより無む量りょうの菩薩ぼさつを具ぐ足そくし、又また八やち十じゅう万まん億いっ那な由ゆ他たの諸しよ菩薩ぼさつ又

過こ八はち恒こう河が沙しゃの菩薩ぼさつ地ぢ涌ゆう千せん界がい

の菩薩ぼさつ分ぶん別べつ功く徳とく品ひんの六む百ひゃく八はち十じゅう万まん億いっ那な由ゆ他た恒こう河が沙しゃの菩薩ぼさつ又また千せん倍ばいの

菩薩ぼさつ復また一せ世かい界がいの微じん塵じゆ数すうの菩薩ぼさつ復また三さん千せん大だい千せ世かい界がいの微じん塵じゆ数すうの菩薩ぼさつ

復また二に千せん中ちゆう国こく土どの微じん塵じゆ数すうの菩薩ぼさつ復また小こ千せん国こく土どの微じん塵じゆ数すうの菩薩ぼさつ復また四し天てん下げ二に四し天てん下げ一いつ四し天てん下げの微じん塵じゆ数すうの

四し天てん下げの微じん塵じゆ数すうの菩薩ぼさつ三さん四し天てん下げ二に四し天てん下げ一いつ四し天てん下げの微じん塵じゆ数すうの

菩薩ぼさつ復また八はち世せ界かい微じん塵じゆ数すうの衆しゆ生じゆう薬やく王おう品ひんの八はち万まん四し千せんの菩薩ぼさつ妙みよ音おん品ひんの

八はち万まん四し千せんの菩薩ぼさつ又また四し万まん二に千せんの天てん子し普ふ門もん品ひんの八はち万まん四し千せん陀だ羅ら尼に品ひんの

六む万まん八はち千せん人にん妙みよ莊そう嚴ごん王わう品ひんの八はち万まん四し千せん人にん勸かん發はつ品ひんの恒こう河が沙しゃ等とうの菩薩ぼさつ

三さん千せん大だい千せん世せ界かい微じん塵じゆ数すう等とうの菩薩ぼさつ此これ等とうの菩薩ぼさつを委くわく数すうへば十じゅう方ほう世せ界かい

の微塵みじんの如ごとし、十方世界じゅつぽうせかいの草木そうもくの如ごとし、十方世界じゅつぽうせかいの星せいの如ごとし、
十方世界じゅつぽうせかいの雨アメの如ごとし、此等これらは皆法華經みなほけきょうにして仏たまいにならせ給たまいて、此
の三千大千世界さんぜんだいせんせかいの地上ちじょう・

地下虚空こくうの中ちゆうにまします、迦葉尊者かしょうそんじゃは足山けいそくざんにあり、文殊師利もんじゅしりは
清涼山せいりょうざんにあり、地藏菩薩じぞうぼさつは伽羅陀山からだせんにあり、觀音かんのんは補陀落山ふだらくさんにあ
り、彌勒菩薩みろくぼさつは兜率天とそつてんに、難陀等なんだの無量むりょうの竜りゅう王おう阿修羅王あしゅらは海底海
畔たにしやくにあり、帝釈たいしやくはとうりてん 利天ほんのうに梵王ぼんのうは有頂天まけいしゅらに・魔醯修羅まけいしゅらは第六むろの佉化ちゆうじょう
天してんのうに・四天王しゆみは須弥しゆみの腰こしに・日月にちがつ・衆星しゅうせいは我等われらが眼まなこに見みへて 頂上ちゆうじょう
を照てらし給たまふ、

江神えがみ・河神かがみ・山神等やまがみも皆法華經みなほけきょうの会上じゆうの諸尊しよそんなり。

仏ほけき・法華經ほけきをとかせ給たまいて年数ねんすう二千二百余年にんげんなり、人間にんげんこそ寿も
短ゆえき故ゆえに仏ほけきをも見奉たてまつり候人たてまつも待まちらぬ、天上てんじょうは日数にちすうは永とこく寿も長ながけ
れば併ひらながら仏ほけきをおがみ法華經ほけきを聴聞ちゆうもんせる天人てんにんかぎり多くおはす

るなり人間の五十年は四王・天の一日一夜なり、此れ一日一夜をは
じめとして三十日は一月十二月は一年にして五百歳なり、されば
人間の二

千二百余年は四王・天の四十四日なり、されば日月並びに
毘沙門天王は仏におくれたてまつりて四十四日いまだ二月にたら
ず、帝釈・梵天などは仏におくれ奉りて一月一時にもすきず、わ
づかの間にいかでか仏前の御誓並びに自身成仏の御経の恩をばわ
すれて、法華経の行者をば捨てさせ給うべきななど思いつらぬれば
たのもし

き事なり、されば法華経の行者の祈る祈は響の音に應ずるがごと
し影の体にそえるがごとし、すめる水に月のうつるがごとし方諸の
水をまねくがごとし磁石の鉄をすうがごとし琥珀の塵をとるが
ごとし、あきらかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし世間の法には

我がおもはざる事も父母・主君・師匠妻子をろかならぬ友なんどの
申す事は恥ある者は意にはあはざれども名利をもうしなひ、寿と
もなる事も侍るぞかし、何に況や我が心から

をこりぬる事は、父母・主君・師匠などの制止を加うれどもなす事あり。

さればはんよきと云いし賢人は我頸を切つてだにこそけいかと申せし人には与へき、季札と申せし人は約束の剣を徐の君が塚の上に懸けたりき、而るに靈山会上にして即身成仏せし童女は小乗經には五障の雲厚く三従のきづな強しと嫌はれ、四十余年の諸大乘經には或は歴劫修行にたへずと捨てられ、或は初発心時便成正覺の言

も有名無実なりしかば女人成仏もゆるさざりしに設い人間天上の女人なりとも成仏の道には望なかりしに童畜下賤の身たるに女とだに生れ年さへいまだたけずわづかに八歳なりき、かたがた思ひもよらざりしに文殊の教化によりて海中にして法師提婆の中間わづかに宝塔品を説かれし時刻に仏になりたりし事はありがたき

事なり、一代超過の法華經の御力にあらざば、いかでかかくは候べき、されば妙樂は「行浅功深以顯經力」とこそ書かせ給へ、竜女は我が仏になれる経なれば仏の御諫なくともいかでか法華經の行者を捨てさせ給うべき、されば自讚歎仏の偈には「我大乘の教を闡いて苦の衆生を度脱せん」等とこそすすませさせ給いしか、竜女の誓は其の所従の「非口所宣非心所測」の一切の竜畜の誓なり、娑竭羅竜王は竜畜の身なれども子を念う志深かりしかば大海第一の宝如意宝珠をもむすめにとらせて即身成仏の御布施にせさせつれ此の珠は直三千大千世界にかふる珠なり。

提婆達多は師子類王には孫釈迦如来には伯父たりし斛飯王の御子阿難尊者の舎兄なり、善闍長者のむすめの腹なり、転輪聖王の御一門南閻浮提には賤しからざる人なり、在家にましましし時は夫妻となるべきやすたら女を悉達太子に押し取られ宿世の敵と思

しに、出家しゅっけの後に人天大会にんてんたいえの集まりたりし時・仏ぶつに汝なんじは癡人ちじん・唾つばきを
食くへる者とのられし上名聞利養みょうもんりやう深かりし人なれば仏の人にもてな
されしをそねみて我が身には五法ごぽうを行じて仏よりも尊そんげになし鉄くろがね
をのして千輻輪ぶくりんにつけ螢火ほたるびを集めて白毫びやくこうとなし・六万宝蔵ほうぞう・八万
宝蔵ほうぞうを胸むねに浮うべ、象頭山じやうとうざんに戒場けいじやう

を立て多くのぶつでしのぶつでしの弟子をさそひとり、爪に毒を塗り仏の御足にぬらむ
と企て蓮華比丘尼を打殺し・大石を放て仏の御指をあやまちぬ、
具に三逆を犯し結句は五天竺の悪人を集め仏・並びに御弟子檀那
等にあだをなす程に、頻婆娑羅王は仏の第一の御檀那なり、一日に
五百輛の車を送り日に仏・並びに御弟子を供養し奉りき、提婆そ
ねむ心

深くして阿闍世太子を語かたらいて父を終つひに一尺の釘七つをもつてはりつ
けになし奉りき、終つひに王舎城の北門の大地破われて阿鼻大城に墜おち
にき、三千大千世界の一人も是を見ざる事なかりき、されば
大地微塵劫は過ぐとも無間大城をば出づべからずとこそ思ひ候に
法華經にして天王如来とならせ給たまいけるにこそ不思議ふしぎに尊たげられ、
提婆達多・

仏になり給たまはば語かたらはれし所の無量むりようの悪人あくにん、一業所感みなれば皆みな

むげんじごく 無間地獄の苦ははなれぬらん、是れ偏に法華經の恩徳なり、されば
だいはだつたなら 提婆達多並びに所従の無量の眷属は法華經の行者の室宅にこそ住
せ給うらめとたのもし。

もろもろ 諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等覺の位までせめて元品の

むみょうばか 無明計りもちて侍るが釈迦如来に値い奉る元品の大石をわらんと

思ふに、教主釈尊四十余年が間は「因分可説果分不可説」と申して

妙覺の功徳を説き顯し給はず、されば妙覺の位に登る人・一人も

なかりき本意なかりし事なり、而るに靈山八年が間に「唯一仏乘

名為果分」と説き顯し給いしかば諸の菩薩皆妙覺の位に上りて

釈迦如来と悟り等しく須弥山の頂に登つて四方を見る

が如く長夜に日輪の出でたらんが如くあかなくならせ給いたりしか

ば仏の仰せ無くとも法華經を弘めじ・又行者に替らじとはおぼしめ

すべからず、されば「我不愛身命但惜無上道・不惜身命当広説此

経そ等とこそ誓たまひ給たまいしか。

其その上慈父じふの釈迦しゃ仏ぶつ悲母ひもの多宝たほう仏ぶつ慈悲じひの父母ふぼ等同どうじく助証じゆじゆの

十方じゆつぽうの諸しよ仏ぶつ一座いざに列れつらせ給たまいて、月つきと月つきとを集あつめたるが如ごとく日ひと

日ひとを並ならべたるが如ごとくましましし時とき、諸もろの大衆たいしゆに告つぐ我が滅度めつどの

後誰ごたれか能よく此この経きやうを護持ごじし読誦どくじゆせんものなる、今いま・仏前ぶつぜんに於おいて自みづから

誓言せいごんを説せつけと三度さんどまで諫ごんさせ給たまいしに、八方はつぱう・四百万億しよばんいふく那由他なゆたの

国土こくど

に充滿じゅうまんせさせ給たまいし諸大菩薩しよだいぼさつ身を曲低頭合掌がっしやうし俱ともに同時どうじに声をあげて「世尊せそんの勅しよくの如ごとく当まに具くわさに奉行ぶぎやうしたてまつるべし」と三度まで声を惜おしまずよばわりしかば、いかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにはかわらせ給たまはざるべき、はんよきと云いいしものけいかに頭かぶを取せきさつと云いいしもの徐じゆの君きみが塚つかに刀やぐそくをかけし、約束やくそくを違たがへしがためなり、此これ等は震旦しんたん辺土へんのえびすの如ごとくなるものどもだにも友の約束やくそくに命いのちをも亡なし身に代かへて思おもふ刀やぐそくをも塚つかに懸かくるぞかし、まして諸大菩薩しよだいぼさつは本もとより大悲だいひ代受だいじゆ苦くの誓ちかひ深ふかし仏ぶつの御諫ごごんなしともいかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを捨すて給たまうべき、其その上うへ・我われが成仏じやうぶつの経きやうたる上うへ仏ぶつ慇懃おんじんに諫いさめ給たまいしかば仏前ぶつぜんの御誓ごちか丁寧ていねいなり行者ぎやうじやを助け給たまう事こと疑うたがうべからず。

仏ぶつは人天にんてんの主ぬし・一切衆生いっさいしゆじやうの父母ふぼなり而しかも開導かいだうの師しなり、父母ふぼな

れども賤いやしき父母ふぼは主君しゅくんの義ぎをかねず、主君しゅくんなれども父母ふぼならざればおそろしき辺へもあり、父母ふぼ・主君しゅくんなれども師匠ししやうなる事ことはなし諸仏しよぶつは又世尊せそんにてましませば主君しゅくんにてはましませども娑婆世界しやばせかいに出いでさせ給たまはざれば師匠ししやうにあらず、又「其中衆生ちゆうじゆうしやう悉しつ是吾子ぜこし」とも名乗ならせ給たまは

ず釈迦しやくか・仏ぶつ・独どく・主しゅ・師し・親しんの三義さんぎをかね給たまへり、しかれども四十余年よんじゆうよねんの間まは提婆達多だいばだつたを罵ののし給たまひ諸しよの声聞しやうもんをそしり菩薩ぼさつの果分かうぶんの法門ほうもんを惜おしみ給たましかば、仏ぶつなれどもよりよりは天魔てんま・破旬はじゆんばしの我等われらをなやますかの疑うたがひひ・人ひとには・いはず

れども心こころの中なかには思おもひしなり、此こゝの心こころは四十余年よんじゆうよねんより法華經ほけきやうの始はじめまで失なせず、而しかるを靈山りやうぜん八年はちねんの間まに宝塔ほうとう・虚空こくうに現げんじ二仏にぶつ・日月にちがつの如ごとく並び・諸仏しよぶつ大地だいちに列つらなり大山おほやまをあつめたるがごとく、地涌じゆせん千界せんがいの菩薩ぼさつ・虚空こくうに星ほしの如ごとく列つらなり給たまひて、諸仏しよぶつの果分かうぶんの功德くどくを吐たき給たまひしかば

宝蔵ほうぞうをかたぶけて貧人ひんじんにあたうるがごとく崑崙山こんろんのくづれたる
にいたりき、諸人しよにん此の玉をのみ拾しようが如ごとく此の八箇年はちかねんが間珍まぢんしく
貴たうとき事心髓ことしんずいにもとをとりしかば諸菩薩しよぼさつ・身命しんみょうも惜おしまず言ことをはぐ
くまず誓ちかをなせし程ほどに属累品ぞくるいぼんにして釈迦如来しやくかにょらい宝塔ほうとうを出いでさせ給たまい
てとびらを押したたて給たまいしかば諸仏しよぶつは国国こくこくへ返り給たまひき、諸の菩薩しよぼさつ
等らも諸仏しよぶつに随したがひ奉たてまつりて返らせ給たまひぬ。

やうやう心ぼそくなりし程に「卻後三月当般涅槃」と唱えさせ

給いし事こそ心ぼそく耳をどろかしかりしかば諸菩薩・二乘人天等

ことごとく法華經を聴聞して仏の恩徳心肝にそみて、身命をも

法華經の御ために投て仏に見せまいらせんと思ひしに仏の仰の如く

若し涅槃せさせ給はばいかにあさましからんと胸さはぎしてあ

りし程

に仏の御年満八十と申せし二月十五日の寅卯の時・東天竺・舎衛国

・俱尸那城・跋提河の辺にして仏御入滅なるべき由の御音上は有頂

横には三千大千界までひびきたりしこそ目もくれ心もきえはてぬ

れ、五天竺・十六の大

国五百の中国十千の小国無量の粟散国等の衆生一人も衣食を

調へず上下をきらはず、牛馬・狼狗・鷲・等の五十二類の

一類の数大地微塵をもつくしぬべし況や五十二類をや、此の類皆華

香衣食いしよくをそなへて最後さいごの

供養くわんりやうとあてがひき、一切衆生いっさいしゆじやうの宝の橋おれなんとす一切衆生いっさいしゆじやうの眼まなこ

ぬけなんとす一切衆生いっさいしゆじやうの父母ふぼ・主君しゆくん・師匠ししやう死なんとすなんと申まうすこ

えひびきしかば身の毛のいよ立のみならず涙を流す、なんだをなが

すのみならず頭かぶをたたき胸ををさへ音こえも惜おしまず叫こゑびしかば血の

涙血なみだちのあせ俱尸くしな那城なじやうに大雨たいうよりもしげくふり大河よりも多く流れ

たりき、是こゝれ偏ひとえに法華經ほけきやうにして仏になりしかば仏の恩の報ずる事

かたかりしなり。

かかるなげきの庭にても法華經ほけきやうの敵をば舌をきるべきよし座につ

らなるまじきよしののしり侍はべりき、迦葉童子かしようどうじ菩薩ぼさつは法華經ほけきやうの敵の国

には霜電そうぼくとなるべしと誓ちかい給たまいき、爾その時・仏は臥ふよりをきてよろこ

ばせ給たまいて善哉善哉よきかなよきかなと讚ほめ給たまいき、諸菩薩しよぼさつは仏の御心ごしんを推すいして

法華經ほけきやうの敵をうたんと申まうさば、しばらくもいき給たまいなんと思おもいて一

一の誓はなせしなり、されば諸菩薩・諸天人等は法華經の敵の出来
せよかし仏前の御誓はたして釈迦尊並びに多宝仏諸仏如来にもげ
に仏前ぶつぜんにして誓いしが如く、法華經ほけきょうの御ためには名をも身命しんみょうをも惜
まざりけりと思はれまいらせんとこそおぼすらめ。

いかに申もうす事はをそきやらん、大地だいちはささばはづるとも虚空こくうを
つなく者ありとも潮のみちひぬ事あり

とも日は西より出づるとも法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあ
るべからず、法華經の行者を諸の菩薩・人天八部等二聖・二天・
十羅刹等・千に一も来つてまほり給はぬ事侍らば、上は釈迦諸仏を
あなづり奉り下は九界をたばらかす失あり、行者は必ず不実なり
とも智慧はをろかなりとも身は不浄なりとも戒徳は備へずとも・
南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給うべし、袋きたなしとて金
を捨る事なかれ伊蘭をにくまば梅檀あるべからず、
谷の池を不浄なりと嫌はば蓮を取らざるべし、行者を嫌い給はば
誓を破り給いなん、正像既に過ぎぬれば持戒は市の中の虎の如し
智者は麟角よりも希ならん、月を待つまでは灯を憑べし宝珠のな
き処には金銀も宝なり、白鳥の恩をば黒鳥に報ずべし聖僧の恩を
ば凡僧に報ずべし、とくとくとく利生をさづけ給へと強盛に申すならば
いかでか祈りのかなはざるべき。

問うて云く上にかかせ給ふ道理・文証を拝見するにまことに日月の天におはしますならば大地に草木のおふるならば、昼夜の国土にあるならば大地だにも反覆せずば大海のしほだにもみちひるならば、法華經を信ぜん人現世のいのり後生の善処は疑いなかるべし、然りと雖も此の二十余年が間の天台・真言等の名匠・多く大事のいのり

をなすにはかばかしくいみじきのりありともみえず、尚外典の者どもよりもつたなきやうにうちをばへて見ゆるなり、恐らくは經文のそらごとなるか行者のをこなひのをろかなるか・時機のかなはざるかと、うたがはれて後生もいかと・をぼう。

それはさてをきぬ御房は山僧の御弟子とうけ給はる父の罪は子にかかり師の罪は弟子にかかるとうけ給はる、叡山の僧徒の園城山門の堂塔佛像經卷数千をやきはらせ給うが、ことにおそる

しく世間せけんの人人ひとびともさわぎうとみあへるはいかに前まへにも少少せうせううけ給たまは
り候こうぬれども今度このたびくわしくききひらき候そうらはん、但ただし不審ふしんなることは
かかる悪僧あくそうどもなれば三宝さんぼうの御意みこころにもかなはず天地てんちにもうけられ
給たまはずして、祈いのりも叶かなはざるやらん

とをばへ候はいかに、答て云くせんぜんも少少申しぬれども今度又
あらあら申すべし、日本国にをいては此の事大切なり、これをしら
ざる故に多くの人口に罪業をつくる、先づ山門はじまりし事は此の
国に仏法渡つて二百余年、桓武天皇の御宇に伝教大師立て始め
給いしなり、当時の京都は昔聖徳太子王氣ありと相し給いしかども
天台宗の渡らん時を待ち給いし間都をたて給はず、又上宮太子の
記に云く「我が滅後二百余年に仏法・日本に弘まる可し」云云、
伝教大師延暦年中に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の京都をたて
給いき、太子の記文たがはざる

故なり、されば山門と王家とは松と栢とのごとし、蘭と芝とにた
り、松かるれば必ず栢かれらんしほめば又しばしばむ、王法の栄へ
は山の悦び王位の衰へは山の歎きと見えしに既に世・関東に移り

し事なにとか思食しけん。おほしめ

秘法ひほう四十一人の行者・承久三年辛巳四月十九日・京夷みだ乱れし時

関東調伏かんとうてうぶくの為め隠岐おきの法皇ほうこうの宣旨せんじに依つて始めて行はれ御修法しゆう十

五壇ひほうの秘法、一字金輪法てんりんじゆうおう、四字天王法してんのう、不動明王法ふどうみょうおう、大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく

大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく、不動明王法ふどうみょうおう、大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく

大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく、不動明王法ふどうみょうおう、大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく

行儀ぎょうぎは如法あいぜん愛染王法あいぜん、不動法ふどう、大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく

愛染王法あいぜん、不動法ふどう、大威徳法たいいく、如意輪法じゆうぶく

壇だんの法了れり、五月十五日伊賀太郎判官光季京にして討たれ、同十

九日鎌倉かまくらに聞え、同二十一日大勢軍兵上ると聞えしかば残る所の

法六月八日之れこを行ひ始めらる、尊星王法そんせいおうぼう、天元法てんげんぼう、五壇法ごだんぼう

僧都しゆどう猷ゆ僧しゆ都どう行遍僧ぎふせん都どう守護しゆご經法きやうぼう、我朝二度之を行わがみくにうを五月二十一日武蔵むさしの守殿しうだんのが海道

大政僧正だいせいそうじやう永信えいしん法印ぼういん全尊ぜんそん、僧都しゆどう猷ゆ僧しゆ都どう行遍僧ぎふせん都どう守護しゆご經法きやうぼう、我朝二度之を行わがみくにうを五月二十一日武蔵むさしの守殿しうだんのが海道

より上洛し甲斐源氏

は山道たてまつを上る式部殿は北陸道を上り給たまう、六月五日大津をかたむ
る手甲か斐源氏いげんじに破られ畢おわんぬ、同六月十三日十四日宇治橋の合戦。
同十四日に京方かみがた破られ畢おわんぬ、同十五日に武蔵守殿六条へ入り給たまふ
諸人しよにん入り畢おわんぬ、七月十一日に本院は隱岐おきの国へ流され給ひ中院は
阿波の国へ流され給ひ第三院は佐渡さどの国へ流され給ふ、殿上人しよにん七人
誅殺せられ畢おわんぬ、かかる大悪法年だいくほうを経て漸漸ぜんぜんに關東かんとに落ち下りて
諸堂しよべつどうの別当べつどう・供僧くじやうとなり連連れんれんと之これを行なう、
本もとより教法きふぽうの邪正勝劣じやせいしじゆりやくをば知食しじゆくさず、只三宝たださんぽうをば・あがむべき事
とばかり・おぼしめす故ゆえに自然じねんとして是これを用ひきたれり、關東かんとの国
国のみならず叡山えいざん・東寺とうじ・園城寺おんじやうじの座主ざす・別当べつどう・皆關東みなかんとの御計みけいと成り
ぬる故ゆえに彼の法の檀那だんなと成り給たまいぬるなり。
問いて云いく真言しんごんの教あながちを強じやきやうに邪教じやくきやうと云いう心い如何いか、答こたえて云いく弘法こうぽう
大師だいし云いく第一だいいち大日經だいにちきやう第二だいにかきやう・華嚴經けこんきやう第三ほけきやう法華經ほけきやうと能よくよく能よくよく此この次第しだいを案

ずべし、仏は何なる経にか此の三部の経の勝劣を説き判じ給へる
や、若し第一大日経第二華嚴経第三法華経と説き給へる経あるな
らば尤も然るべし、其の義なくんば甚だ以て依用し難し、法華経
に云く「薬王今汝に告ぐ我所説の諸経而かも此の経の中に於て
法華最も第一なり」云云、仏正く諸教を挙げて其の中に
於いて法華第一と説き給ふ、仏の説法と弘法大師の筆とは水火の
相違なり尋ね究むべき事なり、此筆を数百年が間凡僧高僧是を
学し貴賤上下是を信じて大日経は一切経の中に第一とあがめける
事仏意に叶はず、心あらん人は能く能く思い定むべきなり、若し
仏意に相叶はぬ筆ならば信ずとも豈成仏すべきや、又是を以て
国土を祈ら
んに当に不祥を起さざるべきや、又云く「震旦の人師等争て醍醐を
盗む」云云、文の意は天台大師等真言教の醍醐を盗んで法華経の

醍醐だいがと名なけ給たまへる事は、此この筆ふで最さい第だい一いちの勝かち事ことなり、法ほ華け經きょうを醍だ醐ごと名なけ給たまへる事は、天てん台だい大だい師し・涅ね槃はん經きょうの文ぶんを勘かんへて一切いっさい經きょうの中ちゆうには法ほ華け經きょうを醍だ醐ごと名なずと判はんじ給たまへり、真しん言ごん教きょうの天てん竺じくより唐たう土どへ渡わたる事ことは天てん台だい出しゅつ世せの以い後ご二に百ひゃく余よ年ねんなり、されば二に百ひゃく余よ年ねんの後のちに渡わたるべき真しん言ごんの醍だ醐ごを盗ぬすみて法ほ華け經きょうの醍だ醐ごと名なけ給たまひけ

るか此の事不審なり不審なり、真言未だ渡らざる以前の二百余年
 の人人を盗人とかき給へる事証拠何れぞや、弘法大師の筆をや信ず
 べき、涅槃經に法華經を醍醐と説けるをや信すべき、若し天台大師
 盗人ならば涅槃經の文をば云何がこころうべき、さては涅槃經の文
 眞實にして弘法の筆邪義ならば邪義の教を信ぜん人人は云何、只
 弘法大師の筆と仏の説法と勘へ合せて正義を信じ侍るべしと申す
 計りなり。

疑て云く大日經は大日如来の説法なり若し爾らば釈尊の説法
 を以て大日如来の教法を打ちたる事都て道理に相叶はず如何、答
 えて云く大日如来は何なる人を父母として何なる国に出で大日經
 を説き給けるやらん、もし父母なくして出世し給うならば釈尊
 入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七千万歳が中間に仏出でて
 説法すべしと云う事何なる經文ぞや、若し証拠なくんば誰人か信

ずべきや、かかる僻事ひがごとをのみ構へ申す間邪教じゃきやうとは申すなり、
其その迷謬めいびやう尽しがたし纒わすかか一二を出いだすなり、加しか之のみ並ならびに禅宗ぜんしゆう・
念仏等ねんぶつを是これを用こる、此これ等の法みは皆未顕真実みなみけんしんじつの權教ごんきやう不成じやうぶつ仏ぶつの法ほ
むげんじこく無間地獄むげんじこくの業ごなり、彼の行人ほうほう又また謗法ぼうほうの者ものなり争いでか御祈きと 叶こふべき
や、然しかかに国主こくしゆと成なり給たまふ事は過去かこに正法しやうほうを持たち仏ぶつに仕つかふるに
依よつて大小だいしやうの王み皆梵王みなほんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天等してんの御計あきらひとして郡郷ぐんかうを
領たまし給たまへり、所謂いわゆる経きやうに云いく、「我今五眼あきらをもて明あきらに三世さんぜを見るみに一切いっさい
の国王こくおう皆過去みな世かに五百ごの仏ぶつに侍まするに由よつて帝王主ていおうしゆと為なるこ
とを得えたり、等ら云いふ、然しかかに法華經ほけきやうを背そむきて真言しんごん・禅ぜん・念仏等ねんぶつの邪師じゃし
に付ついて諸もろの善根ぜんこんを修しゆうせらるるとも、敢あえてて仏意ぶつゐに叶あはず神慮しんりょにも
違いする者ものなり能よく能よく案あんあるべきなり、人間にんげんに生なを得える事こと都すべ
まれたまたまり適たまたま生なを受けて法ほの邪正じゃせいを極きわめて未来みらいの成仏じやうぶつを期こせざらん
事こと返返ほんい本意ほんいに非あらざる者ものなり、又また慈覺大師じかくだいし・御入唐にゆうとういこ以後いご・本師ほんし・伝教でんきやう

だいし
そむ
大師に背か

せ給たまいて叡山えいざんに真言しんごんを弘ひろめんが為ために御祈請きしやうありしに・日を射るに

にちりん

日輪にちりん動転すと云う夢想を御覧じて、四百余年の間諸人しよにん是これを吉夢と

思へり、日本国にほんこくは殊ことに忌むべき夢なり、殷いんのちゆうの紂王しゆうわう・日輪にちりんを的てきにして射

るに依よつて身亡びたり、此の御夢想は権化ごんげの事なりとも能よく能よく

思惟しゆいあるべきか、仍よつて九牛の一毛しゆうのいちもう註しるする所件くだんの如ごとし。

与最蓮房日淨

1356p

御礼の旨委細承はり候畢おわんぬ、兼ては又末法に入つて法華經を

持ち候者は三類の強敵を蒙り候はん事は面拜の時大概申し候畢おわん

ぬ、仏の金言にて候上は不審を致すべからず候か、然らば則日蓮も

此の法華經を信じ奉り候て後は或は頭に疵を蒙り或は打たれ

或は追はれ或は頸の座に臨み或は流罪せられ候し程に結句は此

の嶋まで遠流せられ候ぬ。

何なる重罪の者も現在計りこそ罪科せられ候へ、日蓮は三世の

大難に値い候ぬと存し候、其の故は現在の大難は今の如し、過去の

難は当世の諸人等が申す如くば、如来在世の善星俱伽利等の大

悪人が重罪の余習を失せずして如来の滅後に生れて是くの如く

仏法に敵をなすと申し候是なり、次に未来の難を申し候はば当世の諸人の部類等謗じ候はん様は此の日蓮房は存在の時は種種の大難にあひ死門に趣むくの時は自身を自ら食して死る上は定めて大阿鼻地獄に墜在して無辺の苦を受くるらんと申し候はんずるなり、古より已来世間出世の罪科の人、貴賤上下持戒毀戒凡聖に付けて多く候へども但其は現在計りにてこそ候に日蓮は現在に申すに及ばす過去・未来に至るまで三世の大難を蒙り候はん事は只偏に法華經の故にて候なり、日蓮が三世の大難を以て法華經の三世の御利益を覚し食され候へ、過去久遠劫より已来未来永劫まで妙法蓮華經の三世の御利益尽くすべからず候なり、日蓮が法華經の方人を少分仕り候だにも加様の大難に遭い候、まして釈尊の世世番番の法華經の御方人を思い遣りまいらせ候に道理申す計りなくこそ候へ、されば勸持品の説相は暫時も廃せず

ことならことなら
殊更殊更貴く覚え候。

一 御山籠の御志いじゆめしの事、凡そ末法折伏の行に背くと雖も病者
にて御座候上天下の災国土の難強盛に候はん時、我が身につみ知り
候はざらんより外はいかに申し候とも国主信ぜられまじく候へば
にちれんなおいじゆめし
日蓮尚籠居の志候、

まして御分の御事はさこそ候はんずらめ、仮使山谷に籠居候とも御病も平癒して便宜も吉候はば身命を捨て弘通せしめ給ふべし。

一 仰せを蒙りて候末法の行者、息災延命の祈の事、別紙に一巻

註し進らせ候、毎日一返闕如無く読誦せらるべく候、日蓮も信じ始

め候し日より毎日此れ等の勸文を誦し候て仏天に祈誓し候により

て、種種の大難に遇うと雖も法華經の功力釈尊の金言深重なる

故に今まで相違無くて候なり、其れに付いても法華經の行者は

信心に退転無く身に詐親無く、一切法華經に其の身を任せて金言の

如く修行せば慥に後生は申すに及ばず今生も息災延命にして

勝妙の大果報を得広宣流布大願をも成就す可きなり。

一 御状に十七出家の後は妻子を帯せず肉を食せず等云云、権教

を信ぜし大謗法の時の事は何なる持戒の行人と申し候とも、

法華經に背く謗法罪の故に正法の破戒の大俗よりも百千万倍劣り

候なり、彼の謗法の比丘は持戒なりと雖も無間に墜す、正法の大俗は破戒なりと雖も成仏疑い無き故なり、但今の御身は念仏等の権教を捨てて正法に歸し給う故に誠に持戒の中の清淨の聖人なり、尤も比丘と成つては権宗の人すら尚然る可し況や正法の行人をや、仮使権宗の時の妻子なりとも、かかる大難は遇はん時は振りす、振捨て正法を弘通すべきの処に地体よりの聖人尤も吉し尤も吉し、相構え相構え向後も夫妻等の寄来とも遠離して一身に障礙無く国中の謗法をせめて釈尊の化儀を資む奉る可き者なり、猶猶向後は此の一卷の書を誦して仏天に祈誓し御弘通有る可く候但此の書は弘通の志有らん人に取つての事なり、此の經の行者なればとて器用に能はざる者には左右無く之を授与すべからず候か、あなかしこあなかしこ、きょうきょうきんげん。

穴賢穴賢、

恐恐 謹言。

ぶんえい

文永十年癸酉正月二十八日

にちれん

日蓮

かおう

花押

さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事

与最蓮房日淨

日蓮之を記す

1358p

問うて云く法華經の第一方便品に云く「諸法実相乃至本末究竟

等と云云、此の經文の意如何、答えて云く下地獄より上仏界までの

十界の依正の当体悉く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと

云ふ經文なり依報あるならば必ず正報住すべし、釈に云く「依報

正報常に妙經を宣ぶ」等云云、又云く「実相は必ず諸法・諸法は

必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」、又云く「阿鼻の依正

は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を

逾えずと云云、此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば

法界のすがた妙法蓮華經の五字にかはる事なし、釈迦・多宝の二仏

と云うも妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時事相に二仏と
あらわ ほうとう ほうもん にちれん
顯れて宝塔の中にしてうなづき合い給ふ、かくの如き等の法門日蓮
を除きては申し出す人・一人も・あるべからず、天台・妙楽・伝教
等は心に

は知り給へとも言に出し給ふまではなし胸の中にしてくらし給へり、
そ どもり けい けい
其れも道理なり、付嘱なきが故に・時のいまだいたらざる故に・仏の
くおん けい けい
久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行
むへんぎよう ぼさつ まつぼう しゅつげん じょうぎよう
無辺行等の菩薩より外は、末法の始の五百年に出現して法体の
みようほうれんげきよう ころじ ひろ たま ほうとう びようざ
妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏・並座の
儀式を

作り顯すべき人なし、是れ即本門寿量品の事の一念三千の法門な
あらわ ころ すぐほんもんじゆりようほん いちねんさんぜん ほうもん
るが故なり、されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、
みようほうれんげきよう ほんぶつ しゃか たほう 二ぶつ と云う も用の ぶつ なり、
妙法蓮華經こそ本仏にては御座候へ経に云く「如来秘密神通之力」

これ
是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身
にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の
三身にし

て迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳
を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかふらせ
奉るは凡夫なり、其の故は如来と云うは天台の釈に「如来とは
十方三世の諸仏・二仏・三仏・

ほんぶつしやくぶつ
本仏迹仏の通号なり」と判じ給へり、此の釈に本仏と云うは凡夫な
り迹仏と云ふは仏なり、然れども迷悟の不同にして生仏異なるに
よ
依つて俱体俱用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり、さてこそ
諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候へ、実相と云うは
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經の異名なり諸法は妙法蓮華經と云う事なり、地獄は
じじく
地獄のすが

たを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには
あら
非ず、仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり、天台
いわ
云く「実相の深理本有の妙法蓮華經」と云云、此の釈の意は実相の
みょうごん
名言は迹門に主づけ本有の妙法蓮華經と云うは本門の上の法門
なり、此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ。

にちれんまほつ
日蓮末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗

ひろめ、つくりあらはし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏
しやくもんほうとうほん
迹門宝塔品の時涌出し給う多宝仏涌出品の時出現し給ふ地涌の
ぼさつ
菩薩等を先作り顕はし奉る事、予が分齊にはいみじき事なり、日蓮
をこそにくむとも内証にはいかが及ばん、さればかかる日蓮を此の
嶋

まで遠流しける罪無量劫にもきへぬべしとも覺へず、譬喩品に云く
「もそつみむりようこう
若し其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を
くよつ
供養し又日蓮が弟子・檀那となり給う事、其の功德をば仏の智慧に
てもはかり尽し給うべからず、経に云く「仏の智慧を以て籌量す
るも多少其の辺を得ず」と云へり、地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人
な
り、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に
あに
入らば豈に日蓮が弟子・檀那地涌の流類に非ずや、経に云く「よく

竊ひそかに一人の爲めに法華經ほけきょうの乃至ないし一句いっくを説まかば當まさに知るべし是この人
は則すなわち如來にょらいの使にょらい・如來にょらいの所遣しよけんとして如來にょらいの事を行なずるなり」と、豈あにに
別人との事を説まき給たまうならんや、されば余りに人の我をほむる時は
如何いかよう様にもなりたき意しゆつたいの出来しゆつたいし候なり、是こほむる処ところの言ことよりをこ
り候なりぞかし、末法まつぽうに生なれて法華經ほけきょうを弘ひろめん行者ぎようじやは、三類さんるいの敵人てきじん有あつ
て流罪るざい・死罪しざいに及およばん、然しかれどもたえて弘ひろめん者をば衣もつを以もつて
釈迦しやかぶつ仏ぶつをほひ給たまうべきぞ、諸天しよてん

は供養をいたすべきぞ。かたにかけせなかにをふべきぞ。大善根の者にてあるぞ。一切衆生のためには大導師にてあるべしと。釈迦仏。多宝仏。十方の諸仏。菩薩。天神七代。地神五代の神神。鬼子母神。十羅刹女。四大天王。梵天。帝釈。閻魔法王。水神。風神。山神。海神。大日如来。普賢。文殊。日月等の諸尊たちにほめられ奉る間、無量の大難をも堪忍して候なり、ほめられぬれば我が身の損ずるをもかへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるるをもしらず、ふるまふ事は凡夫のことはざなり。

いかにも今度信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや、經に云く「我久遠より来かた是等の衆を教化す」とは是なり、

末法まつぽうにして妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじを弘ひろめん者は男女なんよはきらふべからず、
皆みな地涌じゆ

の菩薩ぼさつの出現しゆつげんに非あらずんば唱なへがたき題目だいもくなり、日蓮にちれん一人はじめは

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱なへしが、二人・三人百人と次第しだいに唱なへつたふる

なり、未來みらいも又またしかるべし、是こゝに地涌じゆの義ぎに非あらずや、剩あまつさへ広宣こうせん

流布るふの時は日本にほん一同いどうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱なへん事は大地だいちを的まととす

るなるべし、ともかくも法華經ほけきょうに名なをたて身みをまかせ給たまうべし、

釈迦しやくが仏ぶつ

・多宝たぼう仏ぶつ・十方じゆつぽうの諸しよ仏ぶつ・菩薩ぼさつ・虚空こくうにして二仏にぶつうなづき合あひ、定めさ

せ給たまいしは別べつの事ことには非あらず、唯ただひとへに末法まつぽうの令りよう法ぽう久住くじゆうの故ゆゑなり、

既すでに多宝たぼう仏ぶつは半座はんざを分わけて釈迦しやくが如来にょらいに奉たてまつり給たまいし時とき、妙法蓮華經みょうほうれんげきょう

の旛はたをさし顯あらわし、釈迦しやくが・多宝たぼうの二仏にぶつ大将だいじやうとしてさだめ給たまいし事ことあに

いつはりなるべきや、併しかしながわれらししゆじゆう我等衆生われらしゆじゆうを仏ぶつになさんとの御談合だんごうなり。

にちれん そ
日蓮は其の座には住し候はねども 經文を見候にすこしもくもり
なし、又其の座にもやありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見
へて法華經の行者なり又未来は決定として当詣道場なるべし、
過去をも是を以て推する

こくう
に虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず、此くの如く思
ひつづけて候へば流人なれども喜悦はかりなしうれしきにもなみだ
つらきにもなみだなり涙は善悪に通ずるものなり彼の千人の
阿羅漢の事を思ひい

でて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱へさ

せ給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は、なきながら如是我聞と

答え給う、余の九百九十人はなく、なみだを硯の水として、又

如是我聞の上に妙法蓮華經とかきつけしなり、今日蓮もかくの

如し、かかる身となるも妙法蓮華經の五字七字を弘むる故なり、

釈迦仏・多宝仏

・未来・日本国の一切衆生のためにとどめをき給ふ処の

妙法蓮華經なりと、かくの如く我も聞きし故ぞかし、現在の大難を

思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思うて喜ぶにもなみだせき

あへず、鳥と虫とはなけどもなみだをちぎ、日蓮は、なかねども、な

みだひまなし、此のなみだ世間の事には非ず但偏に法華經の故な

り、若しか

らば甘露のなみだとも云つべし、涅槃經には父母・兄弟・妻子・眷属

にはかれて流すところの涙は四大海たいかいの水よりもをしといへども、
仏法ぶつぽうのためには一滴をもこぼさずと見えたり、法華經ほけきょうの行者ぎょうじやとな
る事は過去かこの宿習しゆくじゆうなり、同じ草木そうもくなれども仏とつくらるるは
宿縁しゆくえんなるべし、仏なりとも権仏こんぶつとなるは又宿業しゆくごうなるべし。

此文このもんには日蓮にちれんが大事だいじの法門ほうもんどもかきて候ぞ、よくよく見ほどかせ
給へ意得たまさせ給うべし、一閻浮提えんぶだい第一だいいちの御本尊ごほんぞんを信じさせ給へあ

ひかまへてあひかまへて信心しんじんつよく候て三仏さんぶつの守護しゆごをかうむらせ
給うべし、行学たまたの二道にとうをはげみ候べし、行学たまたたへなば仏法ぶつぽうはあるべか
らず、我もいたし人をも教化きやうけ候へ、行学しんじんは信心しんじんよりをこるべく候、
力ちからあらば一文いっく一句いっくなりともかたらせ給うべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう・
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

五月十七日

日蓮にちれん 花押かおう

追申候、日蓮が相承の法門等前前かき進らせ候き、ことに此の
文には大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ不思議なる契約なる
か、六万恒沙の上首上行等の四菩薩の变化か、さだめてゆへあ
らん、総じて日蓮が身に当ての法門わたしまいらせ候ぞ、日蓮も
しや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん、南無
妙法蓮華経と唱へて日本国の男女をみちびかんとおもへばなり、
経に云く一名上行乃至唱導之師とは説かれ候はぬ

か、まことに宿縁しゆくえんのをふところ予が弟子でしとなり給たまう、此の文あひ
かまへて秘たまし給へ、日蓮にちれんが己証こじょうの法門ほうもん等かきつけて候おわぞ、とどめ
畢さいれんんぬ。
最蓮房御返事さいれんぼうごへんじ

二〇三 十八円満抄

日蓮之を記す

136

2p

問うて云く十八円満えんまんの法門ほうもんの出処いかん如何、答えて云く源蓮の一字
より起れるなり、問うて云く此の事しよしやく所釈これに之を見たりや、答えて
云く伝でんぎ教大師だいいしの修禅寺相伝しゆぜんじそつでんの日記にっきに之在り此法門ほうもんは当世天台宗
の奥義おくぎなり秘すべし秘すべし。

問うて云く十八円満えんまんの名目みょうもく如何、答えて云く一に理性円満りしやうえんまん・二に

修行円満しゆぎよう えんまん・三に化用円満えんまん・四に果海円満えんまん・五に相即円満そうそく えんまん・六に諸教しよきよう円満えんまん・七に一念円満いちねん えんまん・八に事理円満じり えんまん・九に功德円満くどく えんまん・十に諸位円満しよ えんまん・十一に種子円満しゆし えんまん・十二に権実円満ごんじつ えんまん・十三に諸相円満しよ えんまん・十四に俗諦ぞくたい円満えんまん・十五に内外円満ないげ えんまん・十六に觀心円満かんじん えんまん・十七に寂じやくしよく照円満えんまん・十八に不思議円満ふしぎ えんまん上已。

問うて云く意如何いかに、答えて云く此の事伝でんぎよう教大師だいしの釈いに云く次に蓮えんまんの五重ごじゆうげん玄なすとは蓮をば華因成果の義なすに名く、蓮の名は十八円満の故ゆえに蓮と名く、一に理性円満りしよく えんまん謂く万法悉ことごとく真如法性しんによほつしよくの実理じつりに歸すな実性の理じに万法円満えんまんす故に理性りしよくを指して蓮と為す、一に修行円満しゆぎよう えんまん謂く有相無相ゆうそうむそうの二行じゆうを修まして万行円満まんぎよく えんまんす故に修行しゆぎようを蓮と為す、三に化用円満えんまん謂く心性しんしよの本理ほんりに諸法しよほうの因分いんぶん有り此の因分いんぶんに由よつて化他けたの用もちを具ぐす故に蓮ゆえと名く、四に果海円満えんまんとは諸法しよほうの自性じしよくを尋たずねて悉ことごとく本性ほんじつを捨すて無作むさの三身さんじんを成なす法ほうとして無作むさの三身さんじんに

あらざ
非ること無し故に蓮と名く、五に相即円満謂く煩惱の自性全く菩提
にして一体不二の故に蓮と為す、六に諸教円満とは諸仏の内証の
本蓮に諸教を具足して更に闕減なきが故に、七に一念円満謂く根
塵相對して一念の心起るに三千世間を具するが故に、八に事理
円満とは

一法の当体而二不二にして闕減無く具足するが故に、九に功德円満
謂く妙法蓮華經に万行の功德を具して三力の勝能有るが故に、十
に諸位円満とは但だ一心を点ずるに六即円満なるが故に、十一に
種子円満とは一切衆生の心性に本より成仏の種子を具す權教は
種子円満無きが故に皆成仏道の旨を説かず故に蓮の義無し、十二
に權実円満謂く法華実証の時は実に即して而かも權權に即して
而かも實權實相即して闕減無き故に円満の法にして既に
三身を具するが故に諸仏常に法を演説す、十三に諸相円満謂く一
一の相の中に皆八相を具して一切の諸法常に八相を唱う、十四に
俗諦円満謂く十界・百界乃至三千の本性常住不滅なり本位を動
せず当体即理の故に、十五に内外円満謂く非情の外器に内の六情
を具す有情数の中に亦非情を具す、余教は内外円満を説かざるが
故に草木成仏

すること能わらず草木非成仏の故に亦蓮と名けず十六に觀心円満と
は六塵六作常に心相を觀ず更に余義に非るが故に、十七に寂照
円満とは文に云く法性寂然なるを止と名く寂にして而かも常に照
すを觀と名くと、十八に不思議円満謂く細しく諸法の自性を尋ね
るに非有非無にして諸の情量を絶して亦三千三觀並びに寂照等の
相無く大分の深義本来不思議なるが故に名けて蓮と為るなり、此
の十八円満の義を以て委く經意を案ずるに今經の勝能並に觀心の
本義良とに蓮の義に由る、一乘悪人草木等の成仏並びに久遠塵点
等は蓮の徳を離れては余義有ること無し、座主の伝に云く玄師の正
決を尋ねるに十九円満を以て蓮と名く所謂当体円満を加う、当体
円満とは当体の
蓮華なり謂く諸法自性清淨にして染濁を離るるを本より蓮と
名く、一經の説に依るに一切衆生の心の間に八葉の蓮華有り男子

は上に向い女人にょにんは下に向う、成仏じゆつづつの期いたに至ればたとい設たい女人にょにんなりと雖もいえど
心の間の蓮華速れんげすみやかに還かえりて上に向う、然しかるに今の蓮ぶつ仏意いに在るの時
は本性しじゆじゆつじゆつじゆつじゆつじゆつじゆつ清淨じゆじゆつじゆつじゆつじゆつじゆつ当体じゆつじゆつじゆつじゆつじゆつじゆつの蓮れんげと成る若もし機情きじゆつに就ついては此この蓮華れんげ譬喻ひゆの蓮
と成る。

次に蓮の体とは体おに於おて多種た有り、一には徳体とくたいの蓮れんげ謂いく本性ほんじやうの
三諦さんたいを蓮の体たいと為なす、二には本性ほんじやうの蓮体れんげたい三千さんぜんの諸法しよほう本ほんより已来このかた
ととうたい
当体とうたい不動ふどうなるを蓮の体たいと為なす、三には果海くわかい真善しんぜんの体たい一切いっさい諸法しよほうは本
こ
是れ三身さんじんにして寂光土じやくかうどに住す設たい一法いつぽうなりと雖もいえど三身さんじんを離りれざる
ゆえゆえ三身さんじん
故ゆゑに三身さんじんの果ぐわを以もつて蓮の体たいと為なす、四には大分たいぶん真如しんじよの体たい謂いく不ふ変へん
ずいずいえん
随縁ずいゑんの二種にしゆの真如しんじよを並ならびに証分しゆぶんの真如しんじよと名なく本ほん・迹寂じやくじやく 照等しよとうの相さうを
わか
分わかたず諸法しよほうの自性じじゆじゆつ不可ふか思議しぎなるを蓮の体たいと為なす。

次に蓮の宗しゆとは果海くわかいの上うへの因果いんがなり、和尚わじやうの云いく六即ろくじやくの次位そくは
妙法蓮華經みよほうれんげきやうの五字ごじの中なかには正ましく蓮れんげの字じに在あり蓮門れんもんの五重ごじゆづげん玄げんの中なか

には正しく蓮の字より起る、所以何ん理即は本性と名く本性の真如
理性円満の故に理即を蓮と名け果海本性の解行証の位に住するを
果海の次位と名く、智者大師自解仏乗の内証を以て明に経旨を見
給うに

蓮の義に於て六即の次位を建立し給えり故に文に云く此の六即の
義は一家より起れりと、然るに始覚の理に依て在纏真如を指して
理即と為し妙覚の証理を出纏真如と名く、正く出纏の爲めに諸の
万行を修するが故に法性の理の上の因果なり故に亦蓮の宗と名く
蓮に六の勝能有り一には自性清淨にして泥濁に染まず理即、二には

華・台・実の

三種具足して減すること無し名字即諸法即是れ三諦と解了するが故に、三には初め種子より実
を成ずるに至るまで華・台・実の三種相続して断ぜず観行即念念相續して、修し廢するなき故に、
四には華葉の中に在つて未熟の実真の実に似たり相似即、五には花

開き蓮現れんげんず分真ぶんしん即そく、六には花落ちて蓮成れんじょうず究竟くきょう即そく、此の義を以ての故ゆえに六即そくの深義じんぎは源蓮の字より出いでたり。

次に蓮の用とは六即そく円満えんまんの徳とくに由よつて常に化用ほじこを施せすが故ゆえに。

次に蓮の教とは本有ほんぬの三身果海さんじんの蓮性に住して常に浄法じやうぽうを説とき

八相成道じやうじやうし四句成利しきうじやうす、和尚わじやう云く証道じやうだうの八相は無作三身むささんじんの故ゆえに四

句の成道じやうじやうは蓮教れんきやうの処ところに在り只無作三身ただむささんじんを指して本覺ほんがくの蓮と為なす、

此の本蓮に住して常に八相を唱へ常に四句の成道じやうじやうを作す故ななり已

上しゆぜん、修しゆ禅ぜん寺相伝じそつでんの日記にっき之これをみるに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじに於おて各各

五重ごじゆう玄げんなり蓮の字の五重玄義此く、日蓮案にちれんじて云く此の相伝そつでんの義ごの如ごとくんば

万法まんぽうの根源こんげん、一心三觀いっしんさんかん・一念三千三諦いちねんさんぜんさんたい・六即そく・境智きやうちの円融えんゆう・本迹ほんしやくの

所詮源蓮しよせんの一字おより起おこる者ものなり云云。

問いうて云く総説ごじゆうげんの五重玄ごじゆうげんとは如何いかん、答こたえて云く総説ごじゆうげんの五重玄ごじゆうげんとは

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじ即そく五重玄ごじゆうげんなり、妙は名。

法は体蓮は宗華は用經は教なり、又總説の五重玄に二種有り一に

は仏意の五重玄二には機情の五重玄なり。

仏意の五重玄とは諸仏の内証に五眼の体を具する即ち

妙法蓮華經の五字なり、仏眼は妙法眼は法慧眼は蓮天眼は華

肉眼は經なり、妙は不思議に名く故に真空冥寂は仏眼なり、法は

分別に名く法眼は仮なり分別の形なり、慧眼は空なり果の体は蓮

なり、華は用なる故に天眼と名く神通化用なり、經は破迷の義に

在り迷を以て所対

と為す故に肉眼と名く、仏智の内証に五眼を具する即ち五字なり

五字又五重玄なり故に仏智の五重玄と名く、亦五眼即五智なり、

法界体性智は仏眼大円鏡智は法眼平等性智は慧眼妙觀察智は

天眼成所作智は肉眼なり、問う一家には五智を立つるや、答う既に

九識を立つ故に五智を立つべし、前の五識は成所作智第六識は

妙みょう観くわん察さつ智ち第七識だいしちしきは平等びやうどう性じやう智ち第八識だいはちしきは大円鏡だいえんきやう智ち第九識だいくうしきはほつかいたいしやうち法界ほふかい体たい性じやう智ちなり。

次にき機情こじゆうげんの五重ごじゆうげん玄げんとは機きの為ために説せつく所ところの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうは即すなわち是これ機情きの五重ごじゆうげん玄げんなり首題しゆだいの五字ごじに付ついて五重ごじゆうげんの一心三觀いつしんさんかん有あり、伝でんに云いく、

妙みょう 不思議ふしぎの一心三觀いつしんさんかん 天真独朗てんしんどくろうの故ゆえに不思議ふしぎなり。

法ほふ 円融えんゆうの一心三觀いつしんさんかん 理性りしやう円融えんゆうなり総すべじて九箇くうを成なす。

蓮れん 得意とくいの一心三觀いつしんさんかん 果位くわいなり。

華け 複疎ふくその一心三觀いつしんさんかん 本覺ほんがくの修行しゆぎやうなり。

經きやう 易解いげの一心三觀いつしんさんかん 教談きやうだんなり。

玄文げんもんの第二だいじに此この五重ごじゆうを挙あぐ文ぶんに随したがつて解かいすべし、不思議ふしぎの

一心三觀いつしんさんかんとは智者ちしや己証こじやうの法体ほつたい理非りひ造作ぞうさくの本有ほんぬの分ぶんなり三諦さんたいの名相みやうそう

無なき中ちゆうに於おいて強しいて名相みやうそうを以もつて説せつくを不思議ふしぎと名なず、円融えんゆうとは

りしようほっかい
理性法界の処ところに本より已来このかた三諦さんたいの理有り互たがいに円融えんゆうして九箇くと成
る、得意じじゆとは不思議ふしぎと円融えんゆうとの三観さんかんは凡心の及ぶ所に非あらず但ただ聖
智じじゆの自受用

の徳を以て量知すべき故に得意と名く、複疎とは無作の三諦は一切法に遍して本性常住なり理性の円融に同じからず故に複疎と名く、易解とは三諦円融等の義知り難き故に且らく次第に附して其の義を分別す故に易解と名く、此れを附文の五重と名く、次に本意に依て亦五重の三観有り、一に三観一心入寂門、の機、二に一心三観

三に住果還の一心三観上の機有りて知識の一切の法は皆是れ仏法なりと説くを聞いて真理を開す入真已後観を極めんが為に一心三観を修す、四に為果行因の一心三観謂く果位究竟の妙果を聞いて此の果を得んが為に種種の三観を修す、五に付法の一心三観五時八教等の種種の教門を聞いて此の教義を以て心に入れて観を修す故に付法と名く、山家の云く塔中の言なり亦立行相を授く三千三観の妙行を修し解行の精微に由つて深く自証門に入る我汝が

証相を領するに法性寂然なるを止と名け寂にして常に照すを觀と名くと。

問うて云く天真独朗の止觀の時一念三千・一心三觀の義を立つる

や、答えて云く両師の伝不同なり、座主の云く天真独朗とは

一念三千の觀是なり、山家師の云く一念三千而も指南と為す

一念三千とは一心より三千を生ずるにも非ず一心に三千を具する

にも非ず並立にも非ず次第にも非ず故に理非造作と名く、和尚の

云く天真独朗に於ても亦多種有り乃至迹中に明す所の不變真如も

亦天真なり、但し大師本意の天真独朗とは三千三觀の相を亡し

一心一念の義を絶す此の時は解無く行無し教行証の三箇の次第

を経るの時行門に於て一念三千の觀を建立す、

故に十章の第七の処に於て始めて觀法を明す是れ因果階級の意な

り、大師内証の伝の中に第三の止觀には伝轉の義無しと云云、故に

知んぬ証分の止観には別法を伝えざることを、今止観の始終に録する所の諸事は皆是れ教行の所撰にして実証の分に非ず、開元符州の玄師相伝に云く言を以て之を伝うる時は行証共に教と成り心を以て之を觀ずる時は教証は行の体と成る証を以て之を伝うる時は教行亦不可思議なりと、後学此の語に意を留めて更に忘失すること勿れ宛かも此の宗の本意立教の元旨なり和尚の貞元の本義源此れより出でたるなり。

問うて云く天真独朗の法滅後に於て何れの時か流布せしむべき
や、答えて云く像法に於て弘通すべきなり、問うて云く末法に於て
流布の法の名目如何、答えて云く日蓮の己心相承の秘法此の答に
顯すべきなり所謂南無妙法蓮華經是なり、問うて云く証文如何、
答えて云く神力品に云く「爾の時・仏・上行等の菩薩に告げたまわ
く要を以て之を言わば乃至宣示顯説す」云云、天台大師云く
「爾時・仏告上行の下は第三結要付属なり」又云く「經中の
要説要は四事に在り総じて一經を結するに唯四ならくのみ其の
枢柄を撮つて之を授与す」問うて云く今の文は上行菩薩等に授与す
るの文なり汝何んが故ぞ己心相承の秘法と云うや、答えて云く
上行菩薩の弘通し給うべき秘法を日蓮先き立つて之を弘む身に当
るの意に非ずや上行菩薩の代官の一分なり、所詮末法に入つて天真
独朗の法

門むやく無益むやくなり助行しゆくぎやうには用もちゆべきなり正行しゆくぎやうには唯ただ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、伝教でんぎやう大師だいし云いく「天台てんだい大師だいしは釈迦しゃかに信順しんじゆんして法華宗ほつげしゆうを助けて震旦しんたんに敷揚ふやうし叡山えいざんの一家いかには天台てんだいに相承そうじやうして法華宗ほつげしゆうを助けて日本にほんに弘通くつうす、今日いま蓮には塔中たつちゆう相承そうじやうの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの七字ななを末法まつぽうの時とき、日本にほんくに弘通くつうす是れ豈あに時国そつお相応ぶつぽうの仏法ぶつぽうに非あらずや、末法まつぽうに入まっつて天真てんしん独朗どくろうの法ぽうを

弘ひろめて正行しゆくぎやうと為なさん者は必むげんず無間だじじやう・大城おほに墜おちんこと疑うたが無いし、貴き辺へん年来ごんしじゆうの権宗ごんしじゆうを捨すてて日蓮にちれんが弟子でしと成なり給たまう真実しんじつ・時国そつお相応そうおの智人ちじんなり総すべじて予よが弟子でし等は我ごとが如ごとく正理しゆくぎやうを修行しゆくぎやうし給たまえ智者ちしやがくしがくしやう学匠がくしやうの身みと為なりても地獄じじくに墜おちて何あの詮あか有あるべき所詮しよせん時時ねんねん念念ねんねんに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうべし。

上あに挙あぐる所ほつもんの法門ごぞんは御存知ごぞん為なりいえど雖いも書まき進まらせ候なり、十じゆ八はち円えん満まん等とうの法門ほつもん能よく能よく案たまじ給たまうべし並ならびに当体とうたい蓮華れんげの相承そうじやう等とう

にちれん こしやう ほうもん さきざき まい ごとく くわし しゅぜんじそつでん

日蓮が己証の法門等前前に書き進らせしが如く委くは修禅寺相伝

につき ごとく てんだいしゆう す いかん いっしんさんかん

日記の如し天台宗の奥義之に過ぐべからざるか、一心三観・

いちねんさんぜん ごくり みようほうれんげきやう い あえて もうしつ

一念三千の極理は妙法蓮華經の一言を出でず敢て忘失すること

なか あえて もうしつ

勿れ敢て忘失するこ

と勿れ、伝教大師云く「和尚慈悲有つて一心三観を一言に伝う」

げんじ いわ だんぎよう だいし いわ わじよう じ ひ いっしんさんかん

玄旨伝に云く「一言の妙旨なり一教の玄義なり」と云云、寿量品に

いわ 「つね みずか こ な むね げんぎ じゆりよつぼん

云く「毎に自らは是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入り

すみや ぶつしん じようご ちゆ ちゆじよう むじようどう

速に仏身を成就することを得せしめん」と云云、每自作是念の念と

いちねんさんぜん ほんぬ いちねん べく べく きようきようきんげん

は一念三千生仏本有の一念なり、秘す可し秘す可し、恐恐謹言。

こうあん

弘安三年十一月三日

にちれん かのう

日蓮 花押

さいれんぼう これ

最蓮房に之を送る

歳御作 与南部六郎恒長

於安房

1368p

所詮念仏を無間地獄と云う義に二つ有り、一には念仏者を無間

地獄とは日本国一切念仏衆の元祖法然上人の選択集に浄土三

部を除いてより以外一代聖教所謂法華経・大日経・大般若経等

一切大小の経を書き上げて捨閉閣抛等云云、之に付いて上人

亀鏡と拳られし処の浄土三部経の其の中に、雙観経・阿弥陀仏の

因位法蔵比丘の四十八願に云く唯五逆と誹謗正法とを除くと云

云、法然上人も乃至十念の中には入れ給ふといえども、法華経の門

を閉じよと書かれ候へば阿弥陀仏の本願に漏れたる人に非ずや、

其の弟子其の檀那等も亦以て此くの如し、法華経の文には若し人信

ぜずして、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、阿弥陀仏

の本願ほんがんと法華經ほっけきょうの文ぶんと眞実しんじつ

ならば法然上人ほうねんしやうにんは無間地獄むげんじごくに墮おちたる人ひとに非あらずや、一切いっさいの經きやうの性相しやうさうに定いめて云いく師墮しおつれば弟子墮でしおつれば檀那墮だんなおつと云いふ、譬たとえば謀叛むほんの者ものの郎從らうじゆう等の如ごとし、御不審おふしん有あらば選せん択たくを披見ひけんあ
るべし是こゝは一い。

二にには念仏ねんぶつを無間地獄むげんじごくとは法華經ほっけきょうの序分じよぶん・無量義經むりやうぎききょうに云いく「方便ほうべんの力を以もつて四十年しじゅうねんには未いまだ眞実しんじつを顯あらさず」云いふ、次下つぎしもの文ぶんに云いく「無量無辺むりやうむへんを過すぐるとも乃至終ないしつひに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得えじ」云いふ、仏ぶつ初しよ成道じやうどうの時ときより白鷺池びやくろちの辺へんに至いたるまで年ねん紀きをあげ四十余年しじゅうよねんと指さして其その中ちゆうの一切いっさい經きやうを挙あぐる中に大部たいぶの經きやう四部しよぶ・其その四部しよぶの中ちゆうに次に方等ほうとう十二部經じふにぶきやうを説とくと云いふ、是こゝれ念仏ねんぶつ者ものの御信用候ごしんじゆう三部經さんぶきやうなり、此こゝれを挙あげて眞実しんじつに非あらずと云いふ、次に法華經ほっけきょう

に云く「世尊せそんの法は久しくして後要のちかならずまき 当しんじつに真実を説くべし」とは念仏ねんぶつ等の不真実しんじつに対し南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうを真実しんじつと申す文なり、次下つきしもに云く「仏は自ら大乘だいじょうに住したまへり乃至若し小乘しょうじょうを以て化するこ
と乃至一人おひに於てせば我即ち慳貪けんどんに墮だす此の事は為て不可ふかなり」云云、此の文の意は法華經ほけきょうを仏むね・胸むねに秘しをさめて觀經かんきょう・念仏ねんぶつ等の四十余年よんじゅうよねん
の經計げいりを人人ひとびとに授けて法華經ほけきょうを説かずして默止もくしするならば我は慳貪けんどんの者なり三惡道さんあくどうに墮だすべしと云う文なり、仏すら尚唯念仏なあたねんぶつを行じて一生まっだいをすごし法華經ほけきょうに移らざる時は地獄じじくに墮だすべしと云云、況や末代まつだいの凡夫ぼんぷ一向いっこうに南無阿彌陀仏なむあみだぶつと申して一生まっだいをすごし法華經ほけきょうに移つて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱えざる者三惡道さんあくどうを免まぬらるべきや、第二の卷まきに云く今此三界等こんしさんがいと云云、此の文は日本国六十六箇国嶋二つの大地だいちは教主きょうしゅ釈尊しやくそんの本領ほんりやうなり娑婆しゃは以て此この如ごとく全く阿彌陀あみだの領りやうに

あらず、其中衆生悉是吾子と云云、日本国の四十九億九万四千八百二十八人の男女各父母有りといへども其の詮を尋ねれば教主釈尊の御子なり、三千余社の大小の神祇も釈尊の御子息なり全く阿弥陀仏の子に非ざるなり。〃 文永元年甲子九月 日

日蓮 花押

南部六郎恒長殿

三〇五 波木井三郎殿御返事 文永十年八月 五

十二歳御作 与南部六郎三郎 1369p

鎌倉に筑後房弁阿闍梨大進阿闍梨と申す小僧等之有り之を召して御尊び有る可し御談義有る可し大事の法門等粗ぼ申す、彼等は

日本に未だ流布せざる大法少少之を有す随つて御学問注るし申す可きなり。

鳥跡飛び来れり不審の晴ること疾風の重雲を巻いて明月に向うが如し、但し此の法門当世の人上下を論ぜず信心を取り難し其の故は仏法を修行するは現世安穩・後生善処等と云云、而るに日蓮法師法華經の行者と称すと雖も留難多し当に知るべし仏意に叶わざるか等云云、但し此の邪難先業の由御勘氣を蒙るの後始めて驚く可きに非ず、其の故は法華經の文を見聞するに末法に入つて教の如く法華經を修行する者は留難多かる可きの由・經文赫赫たり眼有らん者は之を見るか、所謂法華經の第四に云く如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや、又五の卷に云く一切世間怨多くして信じ難し、等云云又云く「諸の無智の人の悪口罵詈等し刀杖瓦礫を加うる有らん」等云云、又云く「悪世の中の

比丘びくと等と云い云わ、又また云いく、「或あるは阿蘭若あらんじやくに納衣のうえにして空閑くうげんに在ある有あらん
乃ない至し白衣びやくえ

の与ために法ためを説たいて世よに恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくならん」

等と云い云わ、又また云いく、「常たいしゆうに大衆たいしゆうの中あに在あつて我等われらを毀そしらんと欲ほする故ゆえに

国王こくおう・大臣だいじん波羅門おらもん居士こじ及び余おのれの比丘衆びくじゆうに向むかつて誹謗ひぼうして我が悪あくを説た

かん」等と云い云わ、又また云いく、「惡鬼あくき其そのの身みに入いつて我われを罵詈めり毀辱きにくせん」等と云い

云い、又また云いく「数数しばしば擯出ひんしゆいせらる」等と云い云わ、大涅槃經だいねはんきやうに云いく「闍提いっせんたい

羅漢らかんの像かたちを作なし空閑くうげんの処ところに住まし方等ほうとう大乗經典だいじやうきやうてんを誹謗ひぼうすること

有あるを諸もろもろの凡夫人ぼんぷ見あ已おつて皆真みなの阿羅漢あらかんなり

是これ大菩薩ぼさつなりと謂おもわんと等と云い云わ、又また云いく「正法滅しやうぽうして後ご・像法ぞうぽうの

中ちゆうに於おいて當まさに比丘びく有あるべし持律じりつに似像じぞうして少すくしく經きやうを誦讀どくじゆし飲食おんじきを

貪嗜とんしし其そのの身みを長養ちやうようし乃ない至し袈裟けさを服はすと雖いえども猶獵師なかりやうしの細こめに視みて

徐しゆに行いくが如ごとく猫ねずみの鼠ねずみを

うかが
伺ふが如しごと等云云、又般泥はつないおん・経きやうに云く「阿羅漢あらかんに似たるいつせんだい一闍提有いちせんだいり、乃至ないし」等云云、予此の明鏡めいきやうを捧げ持つて日本国にほんこくに引き向けて之これを浮べたるに一分いちぶんも陰れ無し惑有阿蘭若あれんにや・納衣のうえ在空閑からかんとは何人ぞや為世所恭敬きやうけい如六通羅漢ろくつうらかんとは又何人ぞや、諸凡夫見已しよほんぶ・皆謂真みな阿羅漢あらかん・是大菩薩ほさつとは此れ又誰ぞや、持律少じりつ読誦經どくじゆとは又如何いかん、是の經文ききふもん

の如くごと仏ぶつ眼げんを以てもつ末法まつぽうの始しやうを照見しやうけんしたまい当世とうせに當つて此等これらのひととびとなく
人人無くんば世尊せそんの謬乱びやうらんなり、此の本ほん・迹二門そじもんと雙林じゆじゆの常住じやうぢゆうと誰人だれびとか之これを信用しんようせん今日蓮いまにちれん仏語ぶつごの眞実しんじつを顕あらわさんが為日本にほんに配当はいたうして此の經きやうを讀誦どくじゆするに、或有阿蘭若あれんにや住於空処くうじよ等と云うは、建長寺けんちやうじ・寿福寺じゆふくじ・極樂寺ごくらくじ・建仁寺けんにんじ・東福寺とうふくじ等の日本国にほんこくの禅ぜん・律念仏ねんぶつ等の寺寺じじなり、是等これらの

魔寺は比叡山等の法華天台等の仏寺を破せん爲に出来するなり、
納衣持律等とは当世の五・七・九の袈裟を着たる持斎等なり、爲世
所恭敬是大菩薩とは道隆・良觀・聖一等なり、世と云うは当世の
国主等なり、有諸無智人諸凡夫人等とは日本国中の上下万人な
り、日蓮凡夫たる故に仏教を信ぜず但し此の事に於ては水火の
如く手に当てて之を知れり、但し法華經の行者有らば悪口・罵詈・
刀杖・擯出等せらる可し云云、此の經文を以て世間に配当するに
一人も之れ無し誰を以てか法華經の行者と爲さん敵人は有りと
雖も法華經の持者は無し、譬えば東有つて西無く天有つて地無きが
如し仏語妄説と成るを如何、予自讚に似たりと雖も之を勘え出し
て仏語を扶持す所謂日蓮法師是なり、其の上仏・不輕品に自身の
過去の現証を引いて云く爾の時に一りの菩薩有り常不輕と名く等
云云、又云く悪口罵詈等せらる、又云く・或は杖木瓦石を以て之を

ちよつちやく
打擲す等云云、釈尊我が因位の所行を引き載せて末法の始を
きんれい 勧励したもう不輕菩薩既に法華經の為に杖木を蒙りて忽に妙覺の
きよくい 極位に登らせたまいぬ、日蓮此の經の故に現身に刀杖を被むり二
おんる 度遠流に當る当來の妙果之を疑う可しや、如來の滅後に四依の大
しよぞう 士正像に出世して此の經を弘通したもうの時にすら猶留難多し、
いわゆるふほうぞう 所謂付法藏第二十の提婆菩薩第二十五の師子尊者等・或は命を断
たれ頸を刎らる、第八の仏駄密多第十三の竜樹菩薩等は赤き幡を
ささ たも 捧げ持ちて七年十二年王の門前に立てり、竺の道生は蘇山
ほつし に流され法祖は害を加えられ法道三藏は面に火印を捺され、慧遠
かしゃく 法師は呵責せられ天台大師は南北の十師に對当し、伝教大師は
てんだいだいし 六宗の邪見を破す、此等は皆王の賢愚に當るに依つて用取有るの
は 六宗の邪見を破す、此等は皆王の賢愚に當るに依つて用取有るの
あえて み敢て仏意に叶わざるに非ず正像猶以て是くの如し何に況や末法
ぶつゝい 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸
かな 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸
すで 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸
ほけきよう 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸
ため 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸
ごかんき 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸
こつむ 及びにおいてをや、既に法華經の為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸

なり瓦礫を以て金銀に易ゆるとは是なり、但し歎くらくは仁王經
に云く「いわ 聖人しやうにん去る時七難必ず起る」等云云、七難とは所謂大旱魃
大兵乱等是なり、最勝王經に云く「あくにん 悪人を愛敬し善人を治罰す
るに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、愛
悪人とは誰人ぞや上に挙ぐる所の諸人なり治罰善人とは誰人ぞや
上に挙ぐる所の数数見擯出

の者なり、せいしゆく星宿とは此の二十余年の天変地天等是なり、てんべん ちよう経文の
ごと如くならば日蓮を流罪するは国土滅亡の先兆なり、こくと其の上御勘気
いぜん已前に其の由之を勘え出す所謂立正安国論是なり誰か之を疑わん
これ之を以て歎と為す、な但し仏滅後今に二千二百二十二年なり、た正法
りゆうじゆ一千年には竜樹・天親等・仏の御使と為て法を弘む然りと雖も但
てんじん小・権

の二教を弘通して実大乘をば未だ之を弘通せず像法に入つて五百
ぐつう年てんだいだいしに天台大師・漢土に出現して南北の邪義を破失して正義を立てた
かんもんもう、い所謂教門の五時觀門の一念三千是なり、い国を挙げて小釈迦
しかと号す、い然りと雖も円定・円慧に於ては之を弘宣して円戒は未だ
これ之を弘めず、ひろ仏滅後・一千八百年に入りて日本の伝教大師世に
しゆつげん出現してきんめい欽明

より已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、このかた其の上天台の未だ
ろくしゆうより已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、じゃぎこれ其の上天台の未だ
はしつより已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、そ其の上天台の未だ
てんだいより已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、いま其の上天台の未だ

ひろ
弘めたまわざる円頓戒之を弘宣したもう所謂叡山円頓の大戒是なり、但し仏滅後二千余年三朝の間数万の寺々之有り、然りと雖も本門の教主の寺塔地涌千界の菩薩の別に授与したもう所の妙法蓮華經の五字未だ之を弘通せず弘むべしと云う經文は有つて
国土には無し時

機きの未いまだ至いたらざる故か、仏記きして云く「我が滅度めつどの後・後このごひやくさいの五百歳
の中に広宣流布こうせんるふし閻浮提えんぶだいに於いて断絶だんぜつせしむること無けん」等云云、
天台記てんだいしるして云く「後このごひやくさいの五百歳遠く妙道みょうどうに沾つるおわん」等云云、伝教でんきやう
大師記だいししるして云く「正像しょうざう稍過ややすぎ已あわつて末法まつぽう太はなはだ近ちかきに有り法華ほっけ一乘いちじやう
の機き今正まさしく是これ其そのときの時ときなり」等云云、此これ等このごひやくさいの經きやう釈しやくは末法まつぽうの始はじめ
を指さし示しすなり、外道げどう記しるして云く「我が滅後めつご・一いち百年ひゃくねんに當あつて仏世ぶつせいに
出いでたもう」と云云、儒家じゆけに記しるして云く「一いち千年せんねん
の後・仏法漢土ぶつぽうかんどに渡わたる」等云云、是かくのこの如ごとき凡人きもんの記文きもんすら尚なおもつ以もつて

符契ふけいの如ごとし況でんぎや伝よう教てん天台だいをや何いかに況しゃや釈迦か・多宝たほうの金口きんくの明記めいきを
や、当まさに知るべし残のこる所の本門ほんもんの教主きょうしゅ妙法みょうほうの五字ごじ一閻浮提えんぶだいに流布るふ
せんこと疑うたがい無なき者ものか、但ただし日蓮にちれん法師ほっしに度たび度たび之これを聞きける人ひと人びと猶な此
の大難だいなんに値あつての後これ之を捨すつるか、貴き辺へんは之これを聞ききたもうこと一兩
度いちじ・一時

・一時しか然しかりと雖いえども未いまだ捨すてたまわず御信心しんじんの由これ之を聞きく偏ひとえに
今生こんじょうの事ことに非あらじ、妙樂みょうらく大師だいしの云いく「故ゆえに知しんぬ未代まっだい一時いちじ聞きくこと
を得え聞きき已おつて信しんを生なずること宿種しゆくしゆなるべし」等な云い云わ、又また云いく
「運像末うんそうまつに居こし此この真文しんもんを矚みる

妙因みょういんを植うえたるに非あらざるよりは實まことに遇あひ難がたしと為なす、等云云、
法華經ほけきょうに云いく「過か去こに十じゅう萬まん億いっぴやくの仏ぶつを供養くやうせん人にん人げん間に生なれて此この
法華ほっけを信しんぜん、又また涅槃經ねはんぎょうに云いく「熙連きれん一恒くわう供養くやうの人にん、此この惡世あくせに生
れて此この經きやうを信しんぜん、等云云取意あじやせ、阿闍世王あじやせは父ちちを殺害ころし母ははを禁固さつがい
せし惡人あくにんなり、然しかりと雖いえども涅槃經ねはんぎょうの座ざに來きつて法華經ほけきょうを聽聞ちやうもんせし
かば現世げんせの
惡瘡あくそうを治ちするのみに非あらず四し十年じゆみやうの壽命じゆみやうを延引のびしたまひ結句けっくは無根むこん
初住しよじゆうの仏記ぶつぎを得えたり、提婆達多だいばだつたは閻浮えんぶ第一だいいちの一闡提いつせんたいの人にん、一代いちだい
聖教しやうきやうに捨すて置おかれしかども此この經きやうに値あひ奉たてまつりて天王てんのう如來にょらいの記きを
授じゆ与よせらる彼かを以もつて之これを推すいするに末代まつだいの惡人あくにん等らの成じやう仏ぶつ不ふ成じやう佛ぶつは罪つみ
の輕重けいちゆうに依よらず但ただ此經この信しん不ふ信しんに任まかす可べきのみ、而しかるに貴き辺へんは
武士ぶしの家の
仁にん昼夜じゆじや殺生ころ生の惡人あくにんなり、家いへを捨すてずして此所こゝに至いたつて何いかなる術じゆつを

もつ 以てか三悪道を脱る可きか、能く能く思案有る可きか、法華經の心
とういそくみよう 不改性と申して罪業を捨てずして仏道を成ずるな
り、天台の云く「他経は但善に記して悪に記せず今経は皆記す」等
云云、妙樂の云く「唯円教の意は逆即是順なり自余の三教は
逆順 定まる

が故に「等云云、爾前分分の得道有無の事之を記す可しと雖も
名目を知る人に之を申すなり、然りと雖も大体之を教る弟子之れ
有り此の輩等を召して粗之を聞くべし、其の時之を記し申す可し、
恐 恐 謹言。

文永十年 太歳癸酉 八月三日

日蓮 花押

甲斐国南部六郎三郎殿御返事

眠れる師子ししに手を付けざれば瞋いからず流にさを・を立てざれば浪
 立たず謗法ほうほうを呵嘖かしゃくせざれば留難るなんなし、若善比丘けん見壞ね法者置不呵嘖かしゃく
 の置の字を・をそれずんば今は吉よし後を御らんぜよ無間地獄むげんじごく疑うたが無
 し、故ゆえに南岳大師なんがくだいしの四安樂行あんらくぎょうに云く「若もし菩薩ぼさつ有りて悪人あくにんを將護しょうごし
 て治罰ちばつすること能あたわず、其それをして悪を長ぜしめ善人ぜんにんを惱乱のうらんし
 正法しょうぼうを敗壞せば此の人は実に菩薩ぼさつに非あらず、外には詐侮げんを現げんじ常に
 是この言ことばを作なさん、我われは忍辱にんにくを行なすと、其その人ひと命終みょうじゆうして諸もろもろの悪人あくにんと
 俱ともに地獄じじくに墮おちなん云云、十輪經じゆしりんきやうに云く「若もし誹謗ひぼうの者ものならば共
 住すますべからず亦親近またしんこんせざれ、若もし親近しんこんし共住すませば即すなわち阿鼻地獄あびじじくに
 趣おもむかん云云、梅檀せんだの林に入りぬればたをらざるに其身くんに薰くんず誹謗ひぼう

の者に親近すれば所修

の善根悉く滅して俱に地獄に墮落せん、故に弘決の四に云く「若し

人本悪無けれども悪人に親近すれば後に必ず悪人と成りて悪名

天下に遍し凡そ謗法に内外あり国家の二是なり、外とは日本六十

六ヶ国の謗法是なり、内とは王城九重の謗是なり、此の内外を禁制

せずんば宗廟社稷の神に捨てられて必ず国家亡ぶべし、如何と云

うに宗廟

とは国王の神を崇む社とは地の神なり稷とは五穀の総名五穀の

神なり、此の両の神法味に飢えて国を捨て給う故に国土既に日日

衰減せり、故に弘決に云く「地広くして尽く敬す可からず封じて社

と為す稷とは謂く五穀

の総名にして即五穀の神なり故に天子の居する所には宗廟を左に

社稷を右にし四時・五行を布き列ぬ故に国の亡ぶるを以て社稷

を失^{うしな}うと為^なす、故^{ゆえ}に山家大師^{さいし}は「国^{くに}に謗法^{ぼうぼう}の声有^あるによつて万民^{ばんみん}数を減^{ひちなん}じ家に讚教^{つと}の勤^{つと}めあれば七難^{ひちなん}必ず退散^{たいさん}せん」と、故^{ゆえ}に分分^{ぶんぶん}の内^{ない}外^げ有^あるべし。

五月十六日

日蓮^{にちれん}在御判

南部六郎殿

三〇七

地引御書

弘安四年十一月

六十歳御作

与南部六郎

1375p

坊は十間四面しめんにまたひさしさしてつくりあげ二十四日に大師講
並びならに延年心のごとくつかまつりて二十四日の戌亥いぬいの時御所にすゑ
して三十余人をもつて一日経いひつひかきまいらせ並びならに申酉さるとりの刻に御
供養くわんすこしも事ゆへなし、坊は地ひき山づくりし候いしに山に二十
四日一日もかた時も雨ふる事なし、十一月ついたちの日せうぼう
つくり馬やつくる八日は大坊だいうのはしらだて九日十日ふき候あい了わ
ぬ、しかるに七日は大雨だいう八日九日十日はくもりてしかもあたたかな
る事春の終りのごとし、十一日より十四日までは大雨だいうふり大雪下
りて今に里にきへ

ず、山は一丈二丈雪こほりてかたき事かねのごとし、二十三日四日

は又そらははれてさむからず人のまいる事洛中かまくらのまちの
申酉さるとしの時のごとし、さだめて子細しさいあるべきか。

次郎殿等の御きうだちをやのをほせと申し我が心にいれてをはし
ます事なればわれと地をひきはしらたて、とうひやうえむまの
入道にゅうだう三郎兵衛尉等ひつゑのじやう已下いかの人人ひとびと一人もそらくのぎなし、坊はかま
くらにては一十貫いちじちきやうにても大事だいじとこそ申し候へ。

ただし一日経いちにちきやうは供養くやうしさして候、其そのの故ゆえは御所念ごじゆえんの叶かなわせ給たまいて
候ならば供養くやうしはて候はん、なにと申もうして候とも御きねんかなはず
ば言のみ有りて実なく華さいてこのみなからんか、いまも御らんぜ
よ此このの事叶ことびはずば今度

法華經ほけきやうにては仏になるまじきかと存ぞうじ候はん、叶かないて候はば二人
よりあひまいらせて供養くやうしはてまいらせ候はん、神たましいならばすはねぎ
からと申もうす、此このの事叶ことびはずば法華經ほけきやう信じてなにかせん、事事又又

申すもうべく候恐きょう恐きょう。

十一月廿五日

花押かおう

南部六郎殿

日蓮にちれん

三〇八

波木井殿御報 はきり

弘安五年九月 六十一歳 こうあん

御作

1376p

畏かしこみ申もうし候、みちのほどべち事候はでいけがみまでつきて候、みちの間山まもと申もうしかわと申もうしそこばく大事だいじにて候いけるをきうだちにす護まもせられまいらせ候いて難なんもなくこれまでつきて候事をそれ入り候ながら悦よろこび存し候、さてはやがてかへりまいり候そうらはんずる道にて候へども所らうのみにて候へば不ぢやうなる事も候そうらはんずらん。

さりながらも日本にほんこく国にそこばくもてあつかうて候みを九年まで御おんこころ心ざし申もうすばかりなく候へばいづくにて死に候ともはかをばみのぶさわにせさせ候べく候。

又くりかげの御馬はあまりをもしろくをばへ候程にいつまでもう

しなふまじく候、ひたちのゆへひかせ候はんと思そい候がもし人にも
ぞとられ候はん、又そのほかいたはしくをばへばゆよりかへり候はん
ほどがづさの

もばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候にしらぬとねりをつ
けて候ては、をばつかなくをばへ候、まかりかへり候はんまで此のと
ねりをつけをき候はんとぞんじ候、そのやうを御ぞんぢのために
申もうし候、恐恐謹言。

九月十九日 日蓮にぢれん

進上しんじょう 波木井殿はきり 御報

所らうのあひだはんぎやうをくはへず候事恐れ入り候。

三〇九

大井莊司入道御書

建治二年

五十五

歳御作

1377p

柿三本酢一桶・くぐたち・土筆給い候い畢んぬ、唐土に天台山と云う山に竜門と申して百丈の滝あり、此の滝の麓に春の初より登らんとして多くの魚集れり、千万に一も登ることを得れば竜となる、魚・竜と成らんと願うこと民の昇殿を望むが如く貧なるものの財を求むるが如し、仏に成ることも亦此くの如し彼の滝は百丈早き事合張

の天より箭を射徹すより早し、此の滝へ魚登らんとすれば人集りて羅網をかけ釣をたれ弓を以て射る左右の辺に間なし、空には・鷺鷥烏夜は虎・狼・狐・狸・何にとなく集りて食い噬む、仏になるをも

是を以て知りぬべし、有情輪廻生死六道と申して我等が天竺に於て
師子と生れ漢土・日本に於て虎狼野干と生れ天には鷲・地に
は鹿蛇と生れしこと数をしらず、或は鷹の前の雉・の前の鼠と
生れ、生ながら頭をつつき・しむらをかまれしこと数をしらず、
一劫が間の身の骨は須弥山より高く大地よりも厚かるべし、惜き身
なれども云うに甲斐なく奪われてこそ候いけれ、然れば今度・
法華經の為に身を捨て命をも奪われ奉れば無量無数劫の間の思ひ
出なるべしと思ひ切り給うべし、穴賢穴賢、又又申すべし、恐恐
謹言。

建治二年丙子

日蓮花押

大井莊司入道殿

柑子ことうじ一籠かじ・種種しゆじゆの物送り給候、法華經第七卷ほけきよう藥王品やくおうほんに云く衆星しゆうせい
 の中に月天子がつてんし最も為第一もつともこれだいいちなり此の法華經ほけきようも亦復またかくの是くことの如し、千万せんまん
 億種もろもろきよつほうの諸の經法ちゆうほうの中に於て最も為照明ちゆうめいなり云云、文の意は虚空こくうの
 星あゐるは或は半里あゐる・或は一里あゐる・或は八里あゐる・或は十六里あゐるなり、天の満月輪まんげつりん
 は八百里はちひゃくりにててをはします、華嚴經六十卷けこんきよう・或は八十卷あゐる・般若經六
 百卷ほうとう・方等經六十卷ねはんぎよう・涅槃經四十卷だいにちきよう・三十三卷こんこうちきよう・大日經だいにかきよう・金剛頂經こんこうちきよう
 ・蘇悉地經そしつちきよう觀經かんきよう・阿彌陀經あみだ等の無量無辺むりようむへんの諸經しゆきようは星こゝの如し、法華經ほけきよう
 は月の如しこゝと説かれて候經文きようもんなり、此れは竜樹菩薩りゆうじゆぼさつ無著菩薩むぢやくぼさつ・
 天台大師てんだいだいし善無畏ぜんむい三蔵等さんざうとうの論師ろんし・人師にんしの言にもあらず、教主きようしゆ釈尊しゃくそんの
 金言きんげんなり譬たとへば天子てんしの一言いちごの如し、又法華經ほけきようの藥王品やくおうほんに云く能く

是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一等云云、文の意は法華經を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四天王・轉輪聖王乃至・漢土・日本の国主等にも勝れたり、何に況や日本国の大臣・公卿源平の侍・百姓等に勝れたる事申すに及ばず、女人ならば女・戸迦・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候、案ずるに經文の如く申さんとすればをびただしき様なり人もちゐん事もかたし、此れを信ぜじと思へば如来の金言を疑ふ失は經文明かに阿鼻地獄の業と見へぬ、進退わづらひ有り何がせん、此の法門を教主釈尊は四十余年が間はの内にかくさせ給う、さりとてはとて御年七十二と申せしに南閻浮提の中天竺王舎城の丑寅耆闍崛山にして説かせ給いき、今・日本国には仏御入滅一千四百余年と申せしに來りぬ、夫より今

七百余年なり、先き一千四百余年が間は日本^{にほん}國^{こく}の人^{こく}國^{おう}王^{だい}・大^{だい}臣^{しん}乃^{ない}至^し万^{ばん}民^{みん}一人も此の事を知らず。

今・此ほけきょうの法華經せんじゅうじさいわたらせ給たまへども、或あるは念仏ねんぶつを申もうし、或あるは真言しんごんにい
とまを入れ、禪宗ぜんじゅう持齋ぢさいなどと申もうし、或あるは法華經ほけきょうを讀よむ人は有ありしか
ども南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となうる人は日本にほんこくに一人も無なし、日蓮にちれん始め
て建長五年けんちやうの夏の始はじより二十余年たが間唯一人た当時の人とうじの念仏ねんぶつを
申もうすやうに唱となうれば人ひとごとに是これを笑わらひ結句けっくはのりうち切り流ながし
頸くびをはねんと

せらるること一日・二日・二月・一年・二年ならざればこらふ
べしともをばえ候たはねども、此この經きやうの文ぶんを見候みまへば檀王だんおうと申ませし王わう
は千歳せんさいが間阿私仙人あしせんじんに責せめつかはれ身みを牀ゆかとなし給たまふ、不輕菩薩ふきやうぼさつと
申ませし僧そうは多年たが間ま。

悪口罵詈あくくめりせられ刀杖瓦礫とうじやうがりやくを蒙こおむり、薬王菩薩やくおうぼさつと申ませし菩薩ぼさつは千二百
年ねんが間ま、身みをやき七万二千歳せんさいひぢを燒やき給たまふ、此これを見みはんべるに
何いかなる責せめ有ありともいいかでかかさてせき留とどむべきと思おもふ心に今いままで

退たいてん転候こうはず。

然しかるに在ざい家の御身おんみとして皆人みなにくみ候に、而しかもいまだ見参けんさんに入り

候はぬに何と思し食して御信用ごしんようあるやらん、是これ偏ひとえに過去かこの宿植しゆくせきな

るべし、来生らいしように必ず仏に成らせ給たまうべき期の来りてもよをすこころ

なるべし、其その上きやうもん経文きやうもんには鬼神きじんの身に入る者は此の経を信ぜず

釈迦しゃかぶつ仏の御魂みたまの入りかはれる人は此の経を信ぜずと見へて候へば・水

に

月の影の入りぬれば水の清むがごとく御心の水に教主きやうしゆ釈尊しゃくそんの月の

影の入り給たまふかと・たのもしく覚おぼへ候、法華ほけきやう経の第四ほうし法師ほふし品ほんに云いわく

「人有にんつて仏道ぶつどうを求めて一劫いつくわうの中に於おいて合掌がっしやうして我が前に在あつて無

数の偈げを以もつて讚ほめん、是この

讚よ仏に由よるが故ゆえに無量むりやうの功德くどくを得ん、持経じきやう者を歎美たんびせんは其その福

復またた彼かれに過すぎんん等云云、文の意は一劫いつくわうが間ま教主きやうしゆ釈尊しゃくそんを供養くやうし

奉るより末代の浅智なる法華經の行者の上下万人にあだまれて
餓死すべき比丘等を供養せん功德は勝るべしとの經文なり。

一劫と申すは八万里なんど候はん青めの石をやすりを以て
無量劫が間するともつきまじきを、梵天三鉢の衣と申してきはめて
ほそくうつくしきあまの羽衣を以て三年に一度下てなづるになでつ
くしたるを一劫と申す、此の間無量の財を以て供養しまいらせん
よりも濁世の法華經の行者を供養したらん功德はまさるべきと
申す文なり

、此の事信じがたき事なれども法華経はこれていにをびただしく、

ことごとしき事どもあまた侍べり、又信ぜじと思へば多宝仏は

証明を加へ教主釈尊は正直の金言となのらせ給ふ、諸仏は

広長舌を梵天につけ給いぬ、父のゆづりに母の状をそゑて賢王の

宣旨を下し給うが如し、三つ是一同なり誰か是れを疑はん、されば

是れを疑いし

無垢論師は舌五つに破れ嵩法師は舌ただれ三階禅師は現身に大蛇

となる徳一は舌八つにさげにき、其れのみならず此の法華経並に

行者を用ひずして身をそんじ家をうしない国をほろぼす人人月支

・震旦に其の数をしらず、第一には日天朝に東に出で給うに大光明

を放ち天眼を開きて南閻浮提を見給うに法華経の行者あれば心に

歡喜し

行者をにくむ国あれば天眼をいからして其の国をにらみ給い、始終

用もちいずして国の人にくめば其そのの故ゆえと無なくくいくさをこり他た国こくより其その国こくを破やぶるべしと見えて候。

昔とくしし徳じやう勝じやう童子じやうと申せしをさなき者は土の餅しやを釈か迦ぶつ仏ぶつに供養くやうし奉たてりて阿あ育そ大王だと生あれて閻えん浮ぶ提だいの主しゆと成なりて結け句くは仏ぶつになる、今いまの施せ主しゆの菓くわ子じ等を以もつつて法ほ華け經きやうを供養くやうします、何なにかに十じゆ羅うら刹せつ女にょ等とうも悦よろこび給たまらん、悉ことごとく尽つしがたく候、南な無む妙みやう法ほ蓮れん華げ經きやう・南な無む妙みやう法ほ蓮れん華げ經きやう。

二月十七日

松野殿御返事

日蓮花押

鷲目一結がもくひとゆい白米一駄おわん白小袖一送り給畢おもぬ、抑そもそもも此の山と申すは

南は野山漫漫として百余里に及べり、北は身延山高く峙そばだちて白根しらねが

嶽たけにつづき西には七面おもてと申す山峨峨ががとして白雪絶えず、人の住家すみか一

宇もなし、適たまたま問いくる物とては梢こすえを伝みふ 猴みなれば少しばらくも留とどま

る事なく還かえるさ急ぐ恨みなる哉、東は富士河漲みぎりて流沙りゅうじやの浪に異

ならず、かかる所なれば訪う人も希まれなるに加た様に度度音信たびたびおとすれせさせ

給たまふ事不思議ふしぎの中の不思議ふしぎなり。

実相寺じつそうじの学徒日源にちれんは日蓮きふくに帰伏しして所領しよりょうを捨て弟子でし檀那だんなに放

され御座わがみて我身わがみだにも置き処ところなき由承たまわり候にちれんに日蓮とむらを訪しゅうそうい衆僧しゅうそうを

哀あはみさせ給たまう事誠まことの道心どうしんなり聖人しよにんなり、已すでに彼の人は無雙むそうの学生

ぞかし然るに名聞名利を捨てて某が弟子と成りて我が身には
がふあいしんみょう 修行を致し仏の御恩を報ぜんとな面々までも教化申し
我不愛身命の修行を致し仏の御恩を報ぜんとな面々までも教化申し
此くの如く供養

等まで捧げしめ給う事不思議なり、末世には狗犬の僧尼は恒沙の
如しと仏は説かせ給いて候なり、文の意は末世の僧比丘尼は名聞
名利に著し上には袈裟衣を著たれば形は僧比丘尼に似たれども
内心には邪見の剣を提げて我
が出入する檀那の所へ余の僧尼をよせじと無量の讒言を致す、余の
僧尼を寄せずして檀那を惜まん事譬えば犬が前に人の家に至て物
を得て食ふが、後に犬の来るを見ていがみほへ食合が如くなるべし
と云う心なり、是くの如きの僧尼は皆皆悪道に墮すべきなり、此学
徒日源は学生なれば此の文をや見させ給いけん、殊の外に僧衆を訪
ひ顧み給う事誠に有り難く覚え候。

御文おんふみに云いく此この經きやうをも持もち申まうして後退たいてん轉てんなく十じゆ如の是ぜ自我じがげ偈げをよみ
奉たてまつり題目だいもくをう唱なへ申まうし候こうなり、但ただし聖人しょうにんの唱となえさせ給たまう題目だいもくの功徳くどく
と我われ等らが唱なへ申まうす題目だいもくの功徳くどくと何程なの多少たう候こうべきやと云いふ、更さらに
勝劣しょうれつあるべからず候こう、其その

故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も愚者の然せる火も
智者の然せる火も其の差別なきなり、但し此の經の心に背いて唱へ
ば其の差別有るべきなり、此の經の修行に重重のしなあり其大概
を申せば記の五に云く

「愚の数を明かすことをば今の文には説不説と云ふのみ」、有る人
此れを分つて云く、「先きに悪因を列ね次ぎに悪果を列ぬ愚の因に十
四あり・一に慢・二に懈怠・三に計我・四に浅識・五に著欲・六に不解
・七に不信・八に顰蹙・

九に疑惑・十に誹謗・十一に輕善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に
恨善なり」此の十四誹謗は在家・出家に亘るべし恐る可し恐る可し、
過去の不輕菩薩は一切衆生に仏性あり法華經を持たば必ず成仏
すべし、彼れを輕んじては仏を輕んずるになるべしとて禮拜の行を
ば立てさせ給いしなり、法華經を持たざる者をさへ若し持ちやせん

ずらん

仏性ありとてかくの如く礼拝し給う何に況や持てる在家・出家の者

をや、此の經の四の巻には「若しは在家にてもあれ出家にてもあれ、

法華經を持ち説く者を一言にても毀る事あらば其の罪多き事、

釈迦仏を一劫の間直ちに

毀り奉る罪には勝れたり」と見へたり、或は「若実若不実」とも説

かれたり、之れを以つて之れを思ふに忘れても法華經を持つ者をば

互に毀るべからざるか、其故は法華經を持つ者は必ず皆仏なり仏を

毀りては罪を得るなり。

加様に心得て唱うる題目の功德は釈尊の御功德と等しかるべし、

釈に云く阿鼻の依正は全く極聖の自身に処し毘盧の身土は凡下の

一念を逾えず云云、十四誹謗の心は文に任せて推量あるべし、加様

に法門を御尋ね候事誠に後世を願はせ給う人が能く是の法を聴く

者は斯この人亦復難またがたしとて此経は正ただき仏ぶつの御使世おんつかいに出いでずんば仏ぶつの御本意ごほんいの如ごとく説とくく事難がたき上かみ、此の経のいはれを問たずい尋たずねて不審ふしんを明あきらめ能よく信しんずる者難なんかるべしと見みえて候あき、何いかに賤いやしき者ものなりとも少すくし我われより勝すぐれて智慧ちえある人ひとには此の経のいはれを問たずい尋たずね給たまうべし、然しかるに悪世あくせの衆生しゆじやうは我慢がまん・偏執へんしゆつ名聞みやうもん名利みやうりに著じゃくして彼かれれが弟子でしと成なるべきか彼かれれに物ものを習しはば人ひとにや賤いやしきく思おもはれんずらんと、不断ふだん悪念あくねんに住すまして悪道あくどうに墮だすべしと見みえて候あき、法師品ほうしほんには「人有ひとりて八十億劫むじやくの間無量むりやうの宝たからを尽つくして仏ぶつを供養くやうし奉たてまつらん
功德くどく

よりも法華經を説かん僧を供養して後に須臾の間も此の經の法門
を聴聞する事あらば我れ大なる利益功德を得べしと悦ぶべし」と
見えたり、無智の者は此の經を説く者に使れて功德をうべし、何な
る鬼畜なりとも法華經の一偈・一句をも説かん者をば「当に起ちて
遠く迎えて当に仏を敬うが如くすべし」の道理なれば仏の如く互に
敬うべし、例せば宝塔品の時の釈迦・多宝の如くなるべし。

此の三位房は下劣の者なれども少分も法華經の法門を申す者な
れば仏の如く敬いて法門を御尋ねあるべし、依法不依人此れを思ふ
べし、されば昔独りの人有りて雪山と申す山に住み給き其の名を
雪山童子と云う、蕨をおり菓を拾いて命をつぎ鹿の皮を著物とし
しらへ肌をかくし閑に道を行じ給いき、此の雪山童子おもはれける
は情

世間を觀ずるに生死無常の理なれば生ずる者は必ず死す、されば

憂世うれきよの中なかのあだはかなき事こと譬たとえば電光でんこうの如ごとく朝露あさつゆの日ひに向むひて消くる
に似にたり、風かぜの前まえの灯ともしびの消くへやすく芭蕉ばしやうの葉はの破ややすきに異いなら
ず、人みな皆みな此こゝの無常むじやうを遁のがれず終ついに一度ひとたびは黄泉こうせんの旅りに趣おもむくべし、然しかれば
冥途めいどの旅りを思おもうに闇闇くらとしてくらければ日月にちがつ・星宿せいしゆくの光ひかりもなく、せ
めて灯燭ともしびとてともす火ひだにもなし、かかる闇くらき道みちに又またともなふ人も
なし、娑婆しゃばにある時ときは親類しんるい兄弟けいだい・妻子さいし・眷属けんぞく集ありて父ちちは慈あわれみの志こころざし
高く母ははは悲かなしみの情深こころく、夫婦ふうふは海老かいろう同穴どうけつの契ちぎりとて大海たいかいにあるえ
びは同じおなじ畜生ちくじやうながら夫妻ふうさいちぎり細こかに、一生いっしやう一処いっしょにともなひて離わか
れ去いぬる事ことなきが如ごとく・鴛鴦えんおうの衾ふすまの下したに枕まくらを並ならべて遊あそび戯たわむる中なかなれ
ども・彼かれ

の冥途めいどの旅りには伴ともなふ事ことなし、冥冥めいめいとして独ひとり行いく誰たれか来きりて是非せひ
を訪たずはんや、或あるは老少ふじやう不定ふじやうの境さかいなれば老おいいたるは先立わか若わかきは留とどま
る是こゝれは順次じゆんじの道理どうりなり歎なげきの中なかにもせめて思おもいなくさむ方も有あ

りぬべし、老いたるは留まりとど若きは先立つされば恨の至いたつて恨めし
きは幼くして親に先立つ子、嘆きの至いたつて歎かしきは老いて子を先
立

つる親なり、是かくの如ことく生死無常老少不定ふじょうの境あだにはかなき世の
中に但昼夜こんじょうに今生たくわえの貯たくわえをのみ思ひ朝夕ちようせきに現在げんざいの業をのみなし
て、仏をも敬はず法をも信ぜず無行無智むぎょうむちにして徒いたずらに明あかし暮して、
閻魔えんまの庁庭に引き迎へ

られん時は何を以つてか資糧として三界の長途を行き、何を以て船
筏として生死の曠海を渡りて実報・寂光の仏土に至らんやと思ひ、
迷へば夢覺れば寤しかし夢の憂世を捨てて寤の覺りを求めんには
と思惟し、彼の山に籠りて觀念の牀の上に妄想顛倒の塵を払ひ偏に
仏法を求め給う所に。

帝釈遙に天より見下し給いて思し食さるる様は、魚の子は多け
れども魚となるは少なく菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少
なし、人も又此くの如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実
の道に入る者は少し、都て凡夫の菩提心は多く悪縁にたばらかされ
事にふれて移りやすき物なり、鎧を著たる兵者は多けれども戦に
恐れ

をなさざるは少なきが如し、此の人の意を行て試みばやと思いて
帝釈鬼神の形を現じ童子の側に立ち給う、其の時・仏世にましまさ

ざれば雪山童子普く大乘経を求むるに聞くことあたはず、時に

諸行無常是生滅法と云う音ほのかに聞ゆ、童子驚き四方を見

給うに人もなし但鬼神近付て立ちたり、其の形けはしくをそろしく

て頭のか

みは炎の如く口の齒は劍の如く目を瞋らして雪山童子をまほり

奉る、此れを見るにも恐れず偏に仏法を聞かん事を喜び怪しむ

事なし、譬えば母を離れたるこうしほのかに母の音を聞きつるが

如し、此事誰か誦しつるぞ。いまだ残の語あらんとて普なく尋ね求

るに更に人もなければ、若しも此の語は鬼神の説きつるかと思へ

どもよも

もあらじと思ひ彼の身は罪報の鬼神の形なり此の偈は仏の説き給へ

る語なり、かかる賤き鬼神の口より出づべからずとは思へども、亦

殊に人もなければ若し此の語汝が説きつるかと思へば、鬼神答て

云う我れに物ない云いそ食せずして日数を経ぬれば飢え疲れて正念しんねんを覚えおぼず、既すでにあだごと云いいつるならん我うつける意にて云へば知る事

もあらしと答ふ、童子どうじの云いわく我れは此の半偈はんげを聞きつる事半なる月を見るが如ごとく半なる玉を得るに似たり、慥たしかに汝なんじが語ことばなり願くは残れる偈げを説とき給たまへとのたまふ、鬼神きじんの云いわく汝なんじは本より悟あれば聞かずとも恨は有あるべからず吾は今飢に責められたれば物を云うべき力なし都すべ我に向いて物ないそと云う、童子どうじ猶物なほを食ては説かんやと

問う、鬼神答て食ては説きてんと云う、童子悦びてさて何物をか食
とするぞと問へば、鬼神の云く汝更に問うべからず此れを聞きては
必ず恐を成さん、亦汝が求むべき物にもあらずと云へば童子猶責
めて問い給はく其の物をとだにも云はば心みにも求めんと給えは
鬼神の云く我れ但人の和らかなる肉を食し人のあたたかなる血を
飲

む、空を飛び普ねく求めども人をば各守り給う仏神ましませば心
に任せて殺しがたし、仏神の捨て給う衆生を殺して食するなりと云
う、其時雪山童子の思い給はく我れ法の為に身を捨て此の偈を聞
き畢らんと思いて、汝が食物ここに有り外に求むべきにあらず、我
が身いまだ死せず其の肉あたたかなり我が身いまだ寒ず其の血あ
たたか

ならん、願くは残の偈を説き給へ此の身を汝に与えんと云う、時に

鬼神大に瞋て云く誰か汝が語を突とは憑むべき、聞いて後には誰をか証人として糾さんと云う、雪山童子の云く此の身は終に死すべし徒に死せん命を法の為に投げばきたなくけがらはしき身を捨てて後生は必ず覺りを開き仏となり清妙なる身を受くべし、土器を捨て

て宝器に替るが如くなるべし、梵天・帝釈・四大天王十方の諸仏・菩薩を皆証人とせん我れ更に偽るべからずとの給えり、其の時鬼神少し和で若し汝が云う処実ならば偈を説かんと云う其の時雪山童子大に悦んで身に著たる鹿の皮を脱いで法座に敷頭を地に付け掌を合せ跪き、但願くは我が為に残の偈を説き給へと云うて至

心に深く敬

い給ふ、さて法座に登り鬼神偈を説いて云く生滅滅已・寂滅為楽と此の時雪山童子是を聞き悦び貴み給う事限なく後生までも忘れじ

と度度誦して深く其の心にそめ、悦ばしき処はこれ仏の説き給へる
にも異ならず歎かわ敷き処は我れ一人のみ聞きて人の為に伝へざ
らん事をと深く思いて石の上・壁の面・路の辺の諸木ごとに此の偈
を書き

付け願くは後に来らん人必ず此の文を見其の義理をさとり実の道
に入れと云い畢つて、即高き木に登りて鬼神の前に落ち給へり、いま
だ地に至らざるに鬼神俄に帝釈の形と成りて雪山童子の其身を受
取りて平かなる所にすえ奉りて恭敬礼拝して云く我れ暫く如来の
聖教を惜みて試に菩薩の心を悩し奉るなり、願くは此の罪を許し
て後世

には必ず救ひ給へと云ふ、一切の天人又來りて善哉善哉實に是れ
菩薩なりと讚め給ふ、半偈の爲めに身を投げて十二劫生死の罪を
滅し給へり此の事涅槃經に見えたり、然れば雪山童子の古を思へば
半偈の爲に猶命を捨て給ふ

、何に況や此の經の一品・一卷を聴聞せん恩徳をや何を以てか此れ
を報ぜん、尤も後生を願はんには彼の雪山童子の如くこそあらまほ
しくは候へ誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば我が身命を捨
て仏法を得べき便あらば身命を捨てて仏法を学すべし。

とても此の身は徒に山野の土と成るべし惜みても何かせん惜むと
も惜みとぐべからず・人久しといえども百年には過ず其の間の事は
但一睡の夢ぞかし、受けがたき人身を得て適ま出家せる者も・仏法
を学し謗法の者を責めずして徒らに遊戯雑談のみして明し暮さん者
は法師の皮を著たる畜生なり、法師の名を借りて世を渡り身を養

う

といへども法師ほっしとなる義は一もなし法師ほっしと云う名字みょうじをぬすめる
ぬすびと
盗人たうじんなり、恥はづべし恐るべし、迹門しやくもんには「我身命しんみょうを愛せず但た
無上道むじょうどうを惜おししむ」ととき本門ほんもんには「自ら身命しんみょうを惜おしまず」ととき
ねはんぎょう
涅槃經ねはんぎょうには「身は軽く法は重し

身を死して法を弘ひろむ」と見えたり、本・迹兩門ねはんぎょう涅槃經ねはんぎょう共に身命しんみょうを捨
てて法を弘ひろむべしと見えたり、此等これらの禁を背そむく重罪じゅうざいは目には見えざ
れども積りて地獄じごくに墮おつる事こと譬たとえば寒熱かんねつの姿形すがたかたちもなく眼まなこには見え
ざれども、冬は寒来りて草木人畜そうもくじんちくをせめ夏は熱来りて人畜じんちくを熱惱
せしむるが如ごとくなるべし。

然しかるに在家ざいけの御身おんみは但余念よねんなく南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと御唱とえありて
僧そうをも供養くようし給たまうが肝心かんじんにて候まうなり、それも經文きょうもんの如ごとくならば随
力演説えんげつも有あるべきか、世の中ものうからん時も今生こんじょうの苦さへかなし

し、況や来世らいせいの苦をやと思し食しても南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱へ悦よろこば
しからん時こんじょうも今生こんじょうの悦よろこびは夢の中の夢・靈山淨土りょうせんじょうどの悦よろこびこそ実よろこの
悦よろこびなれ

と思し食し合せて又南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱へ退轉たいてんなく修行しゅぎょうして
さいごりんじゅう
最後臨終さいごりんじゅうの時を待つて御覽みかんぜよ、妙覺みょうかくの山に走り登のぼつて四方しほうをき
つと見るならばあら面白おもしろや法界ほっかい寂光土じやくこうどにして瑠璃るりを以つて地とし金
の繩なはを以つて八の道さかを界

へり、あ天より四種の花ふり虚空こくうに音楽聞えて、諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつは常樂じょうらく
がじょう我淨の風にそよめき娛樂ごらく・快樂かいらくし給うたまぞや、我れ等も其その數つらに列つらな
りて遊戯ゆうげし樂むべき事はや近づけり、信心しんじん弱くしてはかかる目出た
き所あなかしこあなかしこに行くべからず行くべからず、不審ふしんの事をば尚なお尚承なはるべく
候、あなかしこあなかしこ穴賢あなかしこ賢あなかしこ。

建治二年丙子十二月九日

日蓮にちれん 花押かおう

松野殿御返事ごへんじ

三三二二 松野殿御消息しようそく

1387

p

昔むかし乃往過去かこの古いにしえへ珊瑚提嵐国さんだいらんと申もうす国あり彼の国だに大王だいおうあり

無^{むじょうねん}諍^{しやうねん}念^{ねん}王^{わう}と申^{もう}しき、彼^かの王^{わう}に千^{せん}の王^{わう}子^しあり又^{また}彼^かの王^{わう}の第^{だい}一^{いち}の大^{だい}臣^{しん}を
宝^{ほう}海^{かい}梵^{ぼん}志^しと申^{もう}す。彼^かの梵^{ぼん}志^しに子^しあり法^{ほう}蔵^{ざう}と申^{もう}す、彼^かの無^{むじょうねん}諍^{しやうねん}念^{ねん}王^{わう}の千^{せん}
の太^{たい}子^しは穢^{えい}土^どを捨^すてて浄^{じやう}土^どを取^とり給^{たま}ふ、其^{その}の故^{ゆえ}は此^{こゝ}の娑^{しや}婆^ば世^せ界^{かい}は
何^{いか}なる所^{しよ}と申^{もう}せば十^{じゆ}方^{ほう}の国^{こく}土^どに父^ふ母^ぼを殺^{ころ}し正^{じやう}法^{ほう}を誹^ひ謗^{ぼう}し聖^{しやう}人^{にん}を
殺^{ころ}せる者^{もの}彼^かの
国^{こく}土^どより此^{こゝ}の娑^{しや}婆^ば世^せ界^{かい}へ追^おい入^いれられて候^{こう}、例^{れい}せば此^{こゝ}の日^に本^{ほん}国^{こく}の人^{にん}
大^{だい}科^か有^ある者^{もの}の獄^{ごく}に入^いれらるるが如^{ごと}し、我^{わが}が力^{ちから}に叶^あはざれば哀^{あい}愍^{みん}せ
ずして捨^すて給^{たま}ふ、宝^{ほう}海^{かい}梵^{ぼん}志^し一^{いつ}人^{にん}請^うけ取^とりて娑^{しや}婆^ば世^せ界^{かい}の人^{にん}の師^しと成^なり
給^{たま}ふ、宝^{ほう}海^{かい}梵^{ぼん}志^しの願^{がん}に云^いく我^{わが}未^み来^{らい}世^せの穢^え悪^{あく}土^どの中^{なか}に当^{まさ}に作^さ仏^{ぶつ}するこ
とを得^うべし、即^{すなわ}ち十^{じゆ}方^{ほう}浄^{じやう}土^どより擯^{ひん}出^{しゆ}せる衆^{しゆ}生^{じやう}を集^{じゆ}めて我^{わが}れ当^{まさ}に
之^これを
度^たすべしと誓^かひ給^{たま}ひき、無^{むじょうねん}諍^{しやうねん}念^{ねん}王^{わう}と申^{もう}すは阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}なり、其^{その}の千^{せん}の
太^{たい}子^しは今^{いま}の觀^かん音^{おん}・勢^{せい}至^し普^ふ賢^{けん}・文^{もん}殊^{じゆ}等^{とう}なり、其^{その}の宝^{ほう}海^{かい}梵^{ぼん}志^しと申^{もう}すは今

の釈迦しやくか如来にょらいなり、此こゝの娑婆しやば世界せかいの一切いっさい衆生しゆじやうは十方じゆつぽうの諸仏しよぶつに抜き捨
てられしを釈迦しやくか一人ひとり計りばかして扶たすけさせ給たまうを唯我ただわれ一人ひとりと申もうすなり。

日蓮にちれん
花押かおう

松野殿

驚目一貫文・油一升・衣一・筆十管給い候、今に始めぬ御志申し尽
しがたく候へば法華經・釈迦仏に任せ奉り候。

先立より申し候、但在家の御身は余念もなく日夜朝夕・南無
妙法蓮華經と唱え候て最後臨終の時を見させ給へ妙覺の山に走
り登り四方を御覽ぜよ、法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし
金繩を以て八の道をさかひ、天よ

り四種の花ふり虚空に音楽聞え、諸仏・菩薩は皆常樂我淨の風にそ
よめき給へば、我れ等も必ず其の數に列ならん、法華經はかかるい
みじき御經にて、をはいしまいらせ候、委細はいそぎ候間申さず候、
恐恐謹言。

建治三年丁丑九月九日

にちれんかおう
日蓮花押

松野殿御返事

追て申し候目連樹十両計り給はり候べく候

二二四

松野殿御返事

13888p

種種しゆじゆの物送り給たまい候畢おわんぬ山中おもいやらのすまる思遣たませ給たまうて雪の中しらしめふみ
分とむらけて御訪ごんざしい候事御志じ定めて法華經ほけきやうじゆうらせつ十羅刹じろしめも知しし食くし候らんさ
ては涅槃經ねはんぎやうに云いく、「人命にんめいの停とどまらざることすは山水さんすいにも過すぎたり今日
存ぞんすと雖いえども明日保たもち難がたし「摩耶經まやきやうに云いく「譬たとえば旃陀羅せんたらかの羊やうを駈かて
屠家とろけに至いたるが如ごとく人命にんめいも亦是またかくの如ごとく歩あ歩ふ死地しじに近ちかく「法華經ほけきやうに
云いく「三界さんがいは安やすきこと無なし猶火宅なほの如ごとく衆苦しゆくまん充じゆ満まんして甚はなはだだ怖ふ畏い

すべし」等云云、此れ等の経文は我等が慈父・大覚世尊・末代

の凡夫ほんぶをいさめ給たまい、いとけなき子どもをさし驚おどろかし給たまへる経文きょうもん
なり、然しかりと雖いえども須臾しゆゆも驚おどろく心なく刹那せつなも道心どうしんを發おこさず、野辺に
捨てられなば一夜の中にはだかになるべき身をかざらんがために、
いとまを入れ衣かさを重ねんとはげむ、命終みよつじゆうりなば三日の内に水と成
りて流れ塵ちりと成りて地にまじはり煙と成りて天にのぼりあともみえ
ずなる

べき身を養はんとて多くの財たからをたくはふ、此のことはりは事ふり候
ぬ但ただし当世とうせの体こそ哀れに候へ、日本にほん国数年の間打ち続きけかちゆ
きて衣食いしよくたへ畜るひをば食いつくし結句けっく人をくらう者出来しゅつたいして、或ある
は死人しにん・或あるは小児しょうに・或あるは病人等の肉を裂取さきどりて魚鹿等に加へて売りし
かば人是これを買いくへり此の国存の外に大悪鬼あつきとなれり、又去年こその春
より

今年の二月中旬まで疫病えきびょう国こくに充満じゅうまんす、十家に五家・百家に五十家

皆やみ死し。或は身はやまねども心は大苦に値へりやむ者よりも怖
し、たまたま生残たれども。或は影の如くそいし子もなく眼の如く
面をならべし夫婦もなく。天地の如く憑し父母もはせず生きて
も何にかせん。心あらん人人争か世を厭はざらん、三界無安とは仏
説き給て候へども法に過ぎて見え候。

然るに予は凡夫にて候へども。かかるべき事を仏兼て説きをかせ
給いて候を国王に申しきかせ進らせ候ぬ、其れにつけて御用は無く
して弥怨をなせしかば力及ばず此の国既に謗法と成りぬ、法華經
の敵に成り候へば三世十方の仏神の敵と成れり、御心にも推せさ
せ給い候へ日蓮何なる大科有りと法華經の行者なるべし、南無
阿弥陀仏
と申さば何なる大科有りと念仏者にて無しとは申しがたし、南無
妙法蓮華經と我が口にも唱へ候故に罵られ打ちはられ流され命に

およびしかども、勧め申せば法華經の行者ならずや、法華經には
行者を怨む者は阿鼻地獄の人と定む、四の卷には仏を一中劫罵る
よりも末代の法華經の行者を悪む罪深しと説かれたり、七の卷に
は行者を
輕しめし人人千劫阿鼻地獄に入ると説き給へり、五の卷には我が末
世末法に入つて法華經の行者有るべし、其のとき其の国に持戒・破戒
等の無量無辺の僧等集りて国主に讒言して流し失ふべしと説かれた
り、然るにかかる經

文かたがた符合し候畢おわんぬ未来みらいに仏ぶつに成なり候そうらはん事うたがい 疑うたがい いたく覺おぼえ候まう、委細いさいは見参みさんの時申まうすべし。

建治四年 戊寅 二月十三日

日蓮にちれん 花押かおう

松野殿御返事ごへんじ

三二五 松野殿御返事ごへんじ

1390p

日月にちがつは地ちにおち須弥山しゅみせんはくづるとも、彼の女人にょにん・仏ぶつに成ならせ給たまわん事うたがい 疑うたがい いたし、あらたのもしや・たのもしや。

干飯かんぱん一斗いっとう・古酒こしゆ一筒いっとう・ちまき・あうざし・たかなかたがたな方かた方の物送ものくわり給たまいて候草たまいにさける花はな・木の皮かわを香かぐとして仏ぶつに奉たてまつる人ひと靈鷲山りやうじゆせんへ参まゐら

ざるはなし、況や民のほねをくだける白米・人の血をしぼれるが
ごと
如くなるふるさけを仏・法華經にまいらせ給へる女人の成仏得道
うたがい
疑うべしや。

五月一日

にちれん かおう
日蓮 花押

みちのほじ ごへんじ
妙法尼御返事

三二一六

松野殿後家尼御前御返事

1390P

法華經第五の卷安樂行品に云く文殊師利此法華經は無量の国の
ほけきょう あんらくぎょうほん いわ もんじゆしり ほけきょう むりょう
中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず云云、此の文の心は
おい ないし みょうじ
われらしゆじょう さんがいろくどう
我等衆生の三界六道に輪回せし事は、或は天に生れ、或は人に生れ
ある ある
或は地獄に生れ、或は餓鬼に生れ、畜生に生れ、無量の国に生をうけ
ある ある ちくじょう むりょう

て無^む辺^{へん}の苦^くし^しみ^みを^をう^うけ^けて^て・た^たの^のし^しみ^みに^にあ^あひ^ひし^しか^かど^ども^も一^ひ度^とも^た法^ほ華^け經^きの
国^こに^には^は生^なぜ^ぜず^ず、

たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず、となふる事はゆめにもなし人の申すをも聞かず、仏のたとへを説かせ給うに一眼の龜の浮木の穴に値いがたきにたとへ給うなり、心は大海の中に八万由旬の底に龜と申す大魚あり、手足もなくひれもなし腹のあつき事はくろがねのやけるがごとし、せなかのこうのさむき事は雪山にいたり、此の魚の昼夜朝暮のねがひ時時刻刻の口ずさみには腹をひやしこうをあたためんと思ふ、赤梅檀

と申す木をば聖木と名づく人の中の聖人なり、余の一切の木をば凡木と申す愚人の如し、此の梅檀の木は此の魚の腹をひやす木なり、あはれ此の木にのぼりて腹をば穴に入れてひやしこうをば天の日にあてあたためばやと申すなり、自然のことはりとして千年に一度出る龜なり、しかれども此の木に値事かたし、大海は広し龜は

ちい

さし浮木うきぎはまれなり、たとひよのうききにはあへども梅檀せんだにはあはず、あへども亀の腹をえりはめたる様に、がい分に相応そうおうしたる浮木うきぎの穴にあひがたし我が身をち入りなばこうをもあたためがたし誰か又とりあぐべき、又穴せばくして腹を穴に入れえずんば波にあらひをとされて大海たいかいにしづみなむ、たとひ不思議ふしぎとして梅檀せんだの浮木うきぎ

の穴にたまたま行きあへども我一眼のひがめる故ゆえに浮木うきぎ西にながれば東と見る故ゆえにいそいでのらんと思おもいておよげば弥弥いよいよとをざかる、東に流るを西と見る南北も又か此こくの如ごとし云云、浮木うきぎにはとをざかれども近づく事はなし、是かくのこの如むりようく無量無辺劫むへんにも一眼の亀うきぎの浮木うきぎの穴にあひがたき事を仏説とき給たまへり、此の喩をとりて法華經ほけきようにあ

ひがたきに譬たとふ、設たひあへどもとなへがたき題目だいもくの妙法みょうほうの穴にあひがたき事を心うべきなり、大海たいかいをば生死しじうじの苦海くかいなり亀をば我等われら

衆生にたとへたり、手足のなきをば善根の我等が身にそなはらざる
にたとへ腹のあつきをば我等が瞋恚の八熱地獄にたとへ背のこうの
さむきをば貧欲の八寒地獄にたとへ千年大海の底にあるをば我等
が三悪道

に堕ちて浮びがたきにたとへ、千年に一度浮ぶをば三悪道より
無量劫に一度人間に生れて釈迦仏の出世にあひがたきにたとへ、余
の松木ひの木の浮木にはあひやすく梅檀にはあひがたし、一切経に
は値いやすく法華経

にはあひがたきに譬へたり、たとひ梅檀には値うとも相応したる穴
にあひがたきに喩うるなり、設ひ法華經には値うとも肝心たる南無
妙法蓮華經の五字をとなへがたきにあひたてまつる事のかたきにた
とう、東を西と見・

北を南と見る事をば我れ等衆生かしこがほに智慧有る由をして勝
を劣と思ひ劣を勝と思ふ、得益なき法をば得益あると見る機にか
なはざる法をば機にかなう法と云う、真言は勝れ法華經は劣り
真言は機にかなひ法華經は機に叶はずと見る是なり。

されば思いよらせ給へ仏・月氏国に出でさせ給いて一代聖教を
説かせ給いしに四十三年と申せしに始めて法華經を説かせ給ふ、
八箇年が程・一切の御弟子皆如意宝珠のごとくなる法華經を持ち
候き、然れども日本国と天竺とは二十万里の山海をへだてて候しか
ば法華經の名字をだに聞くことなかりき、釈尊御入滅ならせ給い

て一千二百余年と申せしに漢土へ渡し給ふ、いまだ日本国へは渡らず、仏滅後・一千五百余年と申すに日本国の第三十代・
欽明天皇と申せし御門の御時百済国より始めて仏法渡る、又上宮太子と申せし人唐土より始めて仏法渡させ給いて其れより以来今に七百余年の間・一切経並に法華経はひろまらせ給いて、上一人より下万人に至るまで心あらむ人は法華経を一部・或は一卷・或は一品持ちて・或は父母の孝養とす、されば我等も法華経を持つと思ふ、しかれども未だ口に南無妙法蓮華経とは唱へず信じたるに似て信ぜざるが如し、譬えば一眼の亀のあひがたき梅檀の聖木にはあいたれどもいまだ亀の腹を穴に入れざるが如し、入れざればよしなし須臾に大海にしづみなん、我が朝七百余年の間・此の法華経弘まらせ給いて・或は読む人・或は説く人・或は供養せる人・或は持つ人稲麻竹葦

よりも多

し、然しかれどもいまだ阿あ弥み陀だの名号みょうごうを唱となうるが如ごとく南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょう
とすすむる人もなく唱となうる人もなし、一切いっさいの經きょう・一切いっさいの仏ぶつの名号みょうごう
を唱となうるは凡木ぼんぼくにあうがごとし、未いまだ梅せんだ檀だんならざれば腹はらをひやさ
ず日に天てんならざれば甲かをもあたたためず、但たゞ目をこやし心を悦よろこばしめ
て実まことなし華はなさいて菓このみなく言ことのみ有りてしわざなし。

但日蓮一人ばかり日本国に始めて是を唱へまいらする事、去ぬる

けんちよう

建長五年の夏のころより今に二十余年の間・昼夜朝暮に南無

みようほうれんげきよう

これと

を唱うる事は一人なり、念仏申す人は千万なり、

せんまん

妙法蓮華經と是を唱うる事は一人なり、念仏申す人は千万なり、

むえん

ねんぶつ

かとうど

うえん

予は無縁の者なり念仏の方人は有縁なり高貴なり、然れども師子

の声には一切の獸・声を失ふ虎の影には犬恐る、日天東に出でぬれ

いっさい

けもの

うしな

にってん

い

ば万星の光

あとかた

ほけきよう

は跡形もなし、法華經のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかど

も南無妙法蓮華經の声・出来しては師子と犬と日輪と星との光く

なむ みようほうれんげきよう

しゅつたい

しし

にちりん

く

らべのごとし、譬えば鷹と雉との・ひとしからざるがごとし、故に

たと

たか

きじ

故に

四衆とりどりにそねみ上下同くにくむ讒人国に充滿して奸人士に

ししゆう

じようげ

ざんにん

じゆうまん

に

多し故に劣を取りて勝をにくむ、譬えば犬は勝れたり師子をば

ゆえ

たと

すく

しし

劣れり星

おと

すく

にちりん

をば勝れ日輪をば劣るとそしるが如し然る間邪見の悪名世上に

をば勝れ日輪をば劣るとそしるが如し然る間邪見の悪名世上に

すく

にちりん

をば勝れ日輪をば劣るとそしるが如し然る間邪見の悪名世上に

ごと

しか

じゃけん

あくみようせじよう

流布し・ややもすれば讒訴し・或は罵詈せられ・或は刀杖の難をか
ふる・或は度度流罪にあたる、五の卷の經文にすこしもたがはず、
さればなむだ左右の眼につかび悦び一身にあまれり。

ここに衣は身をかくしがたく食は命をささへがたし、例せば蘇武
が胡国にありしに雪を食として命をたもつ、伯夷は首陽山にすみし
蕨ををりて身をたすく父母にあらざれば誰か問うべき三宝の御
助にあらずんばいかでか一日片時も持つべき未だ見参にも入らず
候人のかやうに度度御をとづれの・はんべるは・いかなる事にや・あ
やしくこそ候へ法華經の第四の卷には釈迦仏・凡夫の身にいりかは
らせ給いて法華經の行者をば供養すべきよしを
説かれて候、釈迦仏の御身に入らせ給い候か又過去の善根のもよを
しか、竜女と申す女人は法華經にて仏に成りて候へば末代に此の經
を持ちまいらせん女人をまほらせ給うべきよし誓わせ給いし、其の

御ゆかりにて候か、とおととおと貴し貴し。

弘安二年己卯三月二十六日

日蓮にちれん花押かおう

松野殿ごけあま後家尼ごぜん御前ごへん御返事じ

麦一箱いゑのいも一籠うり一籠かたがたの物六月三日に給候しを今
 まで御返事申し候はざりし事恐れ入つて候、此の身延の沢と申す
 処ところは甲斐かいの国の飯井野御牧波木井はきりの三箇郷の内波木井はきりの郷の戌亥
 の隅にあたりて候、北には身延の嶽天たけをいただき南には鷹取たかとりが嶽雲
 につづき東には天子てんしの嶽日とたけをなじ西には又峨峨ががとして大山
 つづきてしらねの嶽たけにわたれり、ましらのなく音天こえに響ひびきき蝉せみのさゑづ
 り地ちにみてり、天竺てんじくの靈山りょうぜん此こゝの処ところに來れり唐土もろこしの天台てんだい山まのあた親まりこ
 に見る、我が身みは釈迦しゃか仏ぶつにあらず天台てんだい大師だいしにてはなけれども、まか
 るまかる昼夜しゅうじに法華ほけき經きやうをよみ朝暮ちやうぼに摩訶まか止し觀かんを談だんずれば靈山りょうぜん淨土じやうど
 にも相似そっじたり天台てんだい山さんにも異ならず。

但有待の依身なれば著ざれば風身にしみ食ざれば命持ちがたし、灯に油をつがず火に薪を加へざるが如し命いかでかつぐべきやらん、命続がたくづぐべき力絶えては、或は一日乃至五日既に法華經読誦の音も絶えぬべし止觀のまどの前には草しげりなん、かくの如く候にいかにして思い寄らせ給いぬらん、兎は經行の者を供養せしかば天帝哀みをなして月の中にをかせ給いぬ。今天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。

されば女人の御身としてかかる濁世末代に法華經を供養しましませば、梵王も天眼を以て御覽じ帝釈は掌を合わせてをがませ給ひ地神は御足をいただきて喜び釈迦仏は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給うらん、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、
恐恐謹言。

弘安二年己卯六月二十日

松野殿
女房御返事
日蓮にちれん
花押かおう

白米一斗・芋一駄・梨子一籠・名荷みょうが・はじかみ・枝大豆・ゑびねかたがた 旁

の物給び候ぬ、濁れる水には月住まず枯からたる木には鳥なし、心なき

女人にょにんの身には仏住み給はず、法華經ほけきょうを持つ女人にょにんは澄める水の如しごと

釈迦しゃかぶつ仏の月宿らせ給うたま、譬たとへば女人にょにんの懐み始めたるには吾身おぼには

覚えねども、月漸ようやく重なり日も屡過すぐれば初にはさかと疑うたがいひ後に

は一定と思

ふ、心ある女人にょにんはをのこごをんなをも知るなり法華經ほけきょうの法門ほうもんも亦また

かくの如しごと、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと心に信じぬれば心を宿として

釈迦しゃかぶつ仏懐まれ給うたま、始はしらねども漸ようやく月重なれば心の仏夢に見

え悦えつこばしき心漸しんじゆつたく出来し候べ

し、ほうもん法門多しといへども止とどめ候、ほけきょう法華經は初は信ずる様なれども後
遂とくる事かたし、譬たとへば水の風にうごき花の色の露つゆに移るが如ごとし、何
として今までは持たせ給たまうぞ是偏へに前生の功力の上しゃかぶつ・まも釈迦仏の護
り給たまうか、たのもししたのもしし、委くわしくは甲斐殿申もうすべし。

九月一日

日蓮にちれん

花押かおう

松野殿女房御返事にようぼうごへんじ

三一九

松野尼御前御返事

1396p

日本国にほんこくの人にはにくまれ候ぬ、みちふみわくる人も候はぬにをも
いよらせ給たまいての御心おんこころざし、石いしの中の火のごとし火の中の蓮のごと
し、ありがたしありがたし、恐おそ恐おそ。

正月二十一日

日蓮にちれん在御判%

松の尼御前御返事

三二一〇

浄蔵浄眼御消息

1396p

きごめの俵一うりこひとつ・瓜籠一うりこひとつ・根芋品品の物給たまい候畢おわんぬ、楽徳と名付
ける長者ちやうぢやに身を入れて我が身も妻も子も夜も昼も責め遣はれけ

る者が、余りに責められ堪えがたさに隠れて他国に行きて其の国の
大王に官仕へける程にきりものに成りて関白と成りぬ、後に其の
国を力として我が本の主の国を打ち取りぬ、其の時本の主・此の
関白を

見て大に怖れ前に悪く当りぬるを悔ひかへして官仕へ様様の財を
引きける、前に負けぬる物の事は思ひもよらず今は只命のいきん事
をはげむ、法華経も又斯の如く法華経は東方の薬師・仏の主・南方
西方・北方・上下の一切の仏の主なり、釈迦仏等の仏の法華経の
文字を敬ひ給ふことは民の王を恐れ星の月を敬ふが如し、然るに
我等衆生は

第六天の魔王の相伝の者地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて気も
つかず朝夕獄卒を付けて責むる程に、兎角して法華経に懸り付き
ぬれば釈迦仏等の十方の仏の御子とせさせ給へば、梵王・帝釈だ

にも恐れて寄り付かず何いかに

況や第六天の魔王をや、魔王は前には主なりしかども今は敬ひ畏れ
て、あしうせば法華經十方の諸仏の御見参にあしうや入らんずら
んと恐れ畏て供養をなすなり、何にしても六道の一切衆生をば
法華經へうつけじと・はげむ

なり、然るに何なる事にや・をはすらん皆人の憎み候日蓮を不便と
おぼして、かく遥遥と山中へ種種の物送りたび候事一度二度なら
ず、ただごとにあらず偏へに釈迦仏の入り替らせ給へるか、又をく
れさせ給ひける御君達の御仏にならせ給いて父母を導かんために御
心に入り替らせ給へるか。

妙莊嚴王と申せし王は悪王なりしかども御太子淨蔵・淨眼の
導かせ給いしかば父母二人共に法華經を御信用有りて仏にならせ
給いしぞかし、是もさにてや候らんあやしく覚え候、甲斐公が語り
しは常の人よりもみめ形も勝れて候し上・心も直くて智慧賢く、

なにごと
何事に付けてもゆゆしかりし人の疾はかなく成りし事の哀れさよと
思ひ候

しが、又倩つらひ思へば此の子なき故ゆえに母も道心者どうしんしゃとなり父も後世者ごしやうに
成りて候は只ただとも覚え候はぬに、又皆人みなの悪にくみ候法華經ほけきやうに付かせ
給たまへば偏へこれに是なき人の二人の御身おんみに添すすうて勸め進まいらせられ候にや
と申せしが、さもやと覚え

候、前前は只ただ荒増さきさきの事かと思ひて候へば是程御志これほど じころおしの深く候ひける
事は始めて知りて候、又若もしやの事候はばくらき闇くらに月の出づるが
ごとくみようほうれんげきやう如く妙法蓮華經ごじの五字・月と露あらわれさせ給たまうべし、其その月の中には
しやかぶつじゅつぼう釈迦仏しよぶつ・十方じよぶつの諸仏ないし・乃至前なに立たせ給ひし御子息しそくの露あらわれさせ給たまふ
べしと思し召せ、委くわしくは又又申もうすべし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月七日

にちれん
日蓮 花押
かおう

三三二一 刑部左衛門尉女房御返事

139

7p

今月飛来の雁書がんしよに云いわく此の十月三日母にて候もの十三年に相当あいあたり
り錢二十貫文等云云、夫外典三千余卷げてんさんぜんには忠孝の二字を骨とし
ないてん
内典五千余卷には孝養かうようを眼まなことせり、不孝ふこうの者をば日月にちがつも光を
しみ地神も瞋あをなすと見へて候、或経あるに云いわく六道ろくどうの一切衆生いっさいしゆじやう
ぶつぜん
仏前に参り集りたりしに仏彼れ等が身の上の事を一一に問たい給まいいし
中に仏地神なんじだいちに汝大地だいちより重きものありやと問たい給まいいしかば地神敬
んで申もうさく大地だいちより重き物候と申もうす、仏の曰いわくいかに地神
へんげ
偏頗へんげをば申もうすぞ此の三千大千世界さんぜんだいせんせかいの建立こんりゆうは皆大地みなだいちの上うへにそなわれ
り、所謂須弥山いわゆるしゆみせんの高さは十六万八千由旬横ゆじゆんは三百三十六万里ばんりなり

たいかい 大海は縦横 八万四千由旬なり、其の外ほかの一切衆生・草木等は皆みな大地だいちの上にそなわれり、此れこを持てるが大地だいちより重き物有らんやと問たまいい給たまいしかば、地神答いわて云く仏しろしめは知食しながら人に知らせんとて問たまい給たまう

か、我地神となること二十九劫なり其の間そ・大地だいちを頂戴ちやうだいして候に頸くびも腰も痛むことなし、虚空こくうを東西南北へ馳走するにも重きこと候はず、但不孝ふこうの者のすみ候所そのつとこが身にあまりて重しげく候なり、頸くびもいたく腰もおれぬべく膝もたゆく足もひかれず眼まなこもくれ魂もぬげべく候、あわれ此の人の住所の大地だいちをばなげすてばやと思おもう心たびたび出来しゆ

し候へば不孝ふこうの者の住所は常に大地だいちゆり候なり、されば教主きやうしゆ釈尊しゃくそんの御いとこ提婆達多だいばだつたと申せし人は閻浮提えんぶだい第一だいいちの上じやうさう・臍王種姓すじやうなり、然れども不孝ふこうの人なれば我等われら彼の下の大地だいちを持つことなくして

大地破れて無間地獄に入り給いき、我れ等が力及ばざる故にて候と、かくの如く地神こまごまと仏に申し上げ候しかば仏はげにもげにもと合点させさせ給いき、又仏歎いて云く我が滅後の衆生の不孝ならん事。提婆にも過ぎ瞿伽利にも超えたるべし等云云取意、涅槃經に末代悪世に不孝の者は大地微塵よりも多く孝養の者は爪上の土よりもすくなからんと云云。

今日蓮案じて云く此の經文は殊にさもやとをばへ候、父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども母の御恩の事に心肝に染みて貴くをばへ候、飛鳥の子をやしなひ地を走る獣の子にせめられ候事。目もあてられず魂もきえぬべくをばへ候、其につきても母の御恩忘れがたし、胎内に九月の間の苦み腹は鼓をはれるが如く頸は針をさげたるが如し、気は出づるより外に入る事なく色は枯れたる草の如し、臥ば腹もさけぬべし坐すれ

ば五体やすからず、かくの如くして産も既に近づきて腰はやぶれて
きれぬべく眼はぬけて天に昇るかと。をぼゆ、かかる敵をうみ落し
なば大地にもふみつけ腹をもさきて捨つべきぞかし、さはなくして
我が苦を忍びて急ぎいだきあげて血をねぶり不浄をすすぎて胸に
かきつけ懐きかかへて三箇年が間慇懃に養ふ、母の乳をのむ事。一百
八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界
にかへぬべし、されば乳一升のあたひをへて候へば米に当れば一万
一千八百五十斛五升稻には二万一千七百束に余り布には三千三百
七十段なり、何に況や一百八十斛三升五合のあたひをや、他人の物
は錢の一文米一合なりとも盗みぬればろうのすもりとなり候ぞか
し、而るを親は十人の子をば養へども子は一人の母を養ふことな
し、あたたかなる夫をば懐きて臥せどもこころへたる母の足をあたた
むる女房はなし、給孤独園の金鳥は子の為に火に入り。戸迦

夫人は夫の為に父を殺す、仏

の云く父母は常に子を念へども子は父母を念はず等云云、影現王の云く父は子を念ふといえども子は父を念はず等是れなり、設ひ又今生には父母に孝養をいたす様なれども後生のゆくへまで問う人はなし母の生てをはせしには心には思はねども一月に一度一年に一度は問いしかども死し給いてより後は初七日より二七日乃至第三

三年ま

では人目の事なれば形の如く問い訪ひ候へども、十三年四千余日が間の程はかきたえ問う人はなし、生てをはせし時は一日片時のわかれをば千万日とこそ思はれしかども十三年四千余日の程はつやつやをとづれなし如何にきかまほしくましますらん夫外典の孝経には唯今生の孝のみををして後生のゆくへをしらず身の病をいやして心の歎きをやめざるが如し内典五千余卷には人天・二乗の道に入れ

ていまだぶつどう仏道へ引導する事なし。

夫もくれんそんじゃ目連尊者の父をば吉占きっせんしし師子・母をば青提しやうだいによ女と申せしなり、母

死して後がき餓鬼道に墮おちたり、しかれども凡夫ほんぶの間は知る事なし、

証果しょうかの二乗にじようとなりて天眼てんげんを開きて見しかば母がき餓鬼道に墮おちたりき、

あらあさましやといふ計ばかりもなし、餓鬼がき道に行きて飯をまいらせし

かば纒わずかに口に入るかと見えしが飯変じて炎となり・口はかなへの

ごとく
如く飯

は炭をおこせるが如し、身は灯炬の如くもえあがりしかば神通を現
じて水を出だして消す処に、水変じて炎となり、弥火炎のごとくも
ゑあがる、目連自力には叶はざる間、仏の御前に走り参り申してあ
りしかば、十方の聖僧を供養し、其の生飯を取りて纒に母の餓鬼道
の苦をば救い給へる計りなり、釈迦仏は御誕生の後、七日と申せしに
母の

摩耶夫人にをくれまいらせましましき、凡夫にてわたらせ給へば母
の生処を知しめすことなし、三十の御年に仏にならせ給いて父浄飯
王を現身に教化して証果の羅漢となし給ふ、母の御ためには、利天
に昇り給いて摩耶経を説き給いて父母を阿羅漢となしまいらせ給い
ぬ、此れ等をば爾前の経經の人人は孝養の二乗孝養の仏とこそ思
い候へども、立ち還つて見候へば不孝の声聞不孝の仏なり、
目連尊者程の聖人が母を成仏の道に入れ給はず、釈迦仏程の大聖

の父母を二乗の道に入れ奉りて永不成仏の歎きを深くなさせまい
らせ給いしをば・孝養とや申す、べき不孝とや云うべき、而るに
浄名居士目連を毀て云く六師外道が弟子なり等云云、仏自身を
責めて云く我則ち

慳貪に墮ちなん此の事は為めて不可なり等云云、然らば目連は知
らざれば科浅くもやあるらん、仏は法華經を知ろしめしながら生
てをはする父に惜み・死してまします母に再び値い奉りて説かせ
給はざりしかば大慳貪の人をばこれより外に尋ぬべからず。

つらつら事の心を案ずるに仏は二百五十戒をも破り十重禁戒を
も犯し給う者なり、仏・法華經を説かせ給はずば十方の一切衆生
を不孝に墮し給ふ大科まぬかれがたし、故に天台大師・此の事を
宣べて云く「過則ち仏に属す」云云、有人云く是れ十方三世の御
本誓に違背し衆生を欺誑すること有るなり等云云、夫四十余年の

だいしやう

大小・顕密けんみつの

いっさいきやう

一切経並に真言・華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律淨土・禅宗等の

仏・菩薩・二乘・梵釈・日月及び元祖等は法華経に随ふ事なくば

何なる孝養をなすとも我則墮慳貪の科脱るべからず、故に仏本願

に趣いて法華経を説き給いき、而るに法華経の御座には父母ましま

さざりしかば親の生れてまします方便土と申す国へ贈り給て候な

り、其その御言みことば

に云く「而かも彼の土に於いて仏の智慧を求めて是の経を聞くことを得ん」等云云、此の経文は智者ならん人人は心をとどむべし、教主釈尊の父母の御ために説かせ給いて候経文なり、此の法門は唯天台大師と申せし人計りこそ知りてをはし候ひけれ、其の外その諸宗の人人知らざる事なり、日蓮が心中に第一と思ふ法門なり。父母に御孝養の意あらん人人は法華経を贈り給べし、教主釈尊の父母の御孝養には法華経を贈り給いて候、日蓮が母存生しておはせしに仰せ候し事もあまりにそむきまいらせて候しかば、今をくれまいらせて候が、あながちにくやくしく覚おほへて候へば一代聖教をかんがへて母の孝養を仕らんと存じ候間、母の御訪い申させ給う人人をば

我が身の様に思ひまいらせ候へば、あまりにうれしく思ひまいらせ候間あらあらかきつけて申し候なり、定めて過去聖靈も忽たちまちに六道

の垢穢くえを離りれて靈山りょうぜん淨土じやうどへ御参ごさんり候こうらん、此この法門ほうもんを知識ちしきに値あわ
せ給たまいて度度たびたびきかせ給たまうべし、日本にほん国こくに知しる人ひとすくなき法門ほうもんにて候
ぞ、くはしくは又又またまた申もうすべく候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十月二十一日

にちれん

日蓮

かおう

花押

尾張おわりぎやう刑部ぎやうぶ左衛門さゑもん尉殿じやう女房にようぼう御返事ごへんじ

三三二二

春麦御書はるむぎごし

1401p

女房にようぼう御参詣ごさんけいこそゆめとも・うつつとも・ありがたく候しか、心ざ
しいちのはせ申もうす、当時とうじの御ごいもふゆのたかうなのごとしあになつ
のゆきにことならむ。春麦一俵はるむぎ・芋一籠かこ・筍たかなな・二丸たま給たまい畢おわんぬ。

五月廿八日

先法華經につけて御不審をたてて其趣を御尋ね候事ありがたき
 大善根にて候、須弥山を他方の世界へつづてになぐる人よりも、
 三千大千世界をまりの如くにけあぐる人よりも無量の余の經典を
 受け持ちて人に説ききかせ聴聞の道俗に六神通をえせしめんより
 も、末法のけふこのごろ法華經の一句一偈のいはれをも尋ね問う人
 はありが

たし、此の趣を釈し給いて人の御不審をはらさすべき僧もありがた
 かるべしと、法華經の四の巻宝塔品と申す処に六難九易と申して
 大事の法門候、今此の御不審は六の難き事の内なり、爰に知んぬ
 若し御持ちあらば即身成仏の人なるべし、此の法華經には我等が

身をば法身如来ほつしんにょらい。我等が心をば報身如来ほつしんにょらい。我等がふるまひをば応身おうじん如来にょらいと

説かれて候へば、此の經の一句一偈いっくいちげを持ち信ずる人は皆此の功德くどくをそなへ候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと申すは是れ一句一偈いっくいちげにて候、然れども同じ一句の中にも肝心かんじんにて候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となうる計ばかりにて仏になるべしやと、此の御不審所詮ふしんしよせんに候一部いっぶの肝要かんよう八軸はちじくの骨髓こつずいにて候。

人の身の五尺六尺のたましひも一尺の面かおにあらはれ。一尺のかほのたましひも一寸の眼まなこの内におさまり候、又日本にほんと申す二の文字もんじに六十六箇国じんちくの人畜でんばた・田畠じょうげ・上下きせん・貴賤きせん・七珍万宝しちしんばんぼう・一もかくる事候おさはず収めて候、其そのごとく南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの題目だいもくの内には一部八卷はつけん・二十八品にじゅうはちひん・六万九千三百八十四の文字もんじ・一字ももれず。かけずおさめて

候、されば經には題目だいもくたり仏には眼まなこたりと楽天ものべられて候、記
の八に略して經題きょうだいを挙あぐるに玄はるかに一部を収おさむと妙楽みょうらくも釈しゃくしおはし
まし候、心は略して經の名計なばかりを挙あぐるに一部を収おさむと申もうす文な
り、一切いっさいの事につけて所詮しよせん・肝要かんようと申もうす事あり、法華經ほけきょう一部いっぶの肝心かんじん
は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの題目だいもくにて候、朝夕ちようせき御唱となえ候はば正まさしく法華經ほけきょう一
部を真読

にあそばすにて候、二返唱となうるは二部乃至ないし・百返は百部・千返は千部・加様に不退ふたいに御唱となえ候はば不退ふたいに法華經ほけきょうを読む人にて候べく候、天台てんだいの六十巻と申す文には此のやうを釈しゃくせられて候、かかる持ちやすく行じやすく法にて候を末代まつだい惡世あくせの一切衆生いっさいしゆじやうのために説たまきをかせ給たまいて候、經文きやうもんに云いわく「於末法中まつぼう於後末世おごまつせ法欲滅時ほうよくめつじ受持読誦じゆじどくじゆ・惡世あくせ

末法時まつぼう・能持是經者のうじせきやうしや後ご・五百歳中ごうせんる広宣流布ふと、此れ等の文の心はこ當時末法の代には法華經ほけきょうを持ち信たもずべきよしを説かれて候、かかるめいぶん明文めいぶんを学がくしあやまりて日本にほん・漢土かんど・天竺てんじくの謗法ほうぼうの学がく匠達がくしやう・皆みな・念仏者ねんぶつ
真言しんごん・禅ぜん・律りつの小乘しよつじやう・權教ごんきやうには

随したがい行ほけきやうじて法華經ほけきやうを捨てはて候ぬ、仏法ぶつぼうにまどへるをばしろしめされず、形かたちまことしげなれば云いう事ことも疑うたがひあらじと計ばかり御信用ごしんよう候間、をもはざるに法華經ほけきやうの敵てき・釈迦しやくか仏ぶつの怨あだとならせ給たまいて今生こんじやうには

祈しよる所願がんも虚むしく命いのちもみじかく後生ごしよには無間むげん・大城だいじよをすみかとするべしと正まさしく経文きよもんに見えて候。

さて此こゝの経だいもんの題目だいもんは習ならい読よむ事ことなくして大おほなる善根ぜんこんにて候、悪人あくにんも女人にょにんも畜生ちくじやうも地獄じじくの衆生しゆじやうも十界じじうかいともともに即身成仏そくしんじやうぶつと説とかれて候は、水みづの底そこなる石いしに火かのあるが如ごとく百千万年せんまんくらき所ところにも燈あかりを入いれぬればあかくなる、世間せけんのあだなるものすら尚なほ加か様にふしぎ不思議ふしぎあり、何いかに況あや仏法ぶつぽうの妙みよなる御法おんちからの御力おんちからをや、我等われら衆生しゆじやう・悪業あくごう・煩惱ぼんのう・生死しじ・果縛かばくの

身みが、正ただ了り・縁えんの三仏性ぶつじようの因いんによりて即そく・法ほふ・報ほう・心しんの三身さんじんと顕あらわれん事こと疑うたがひなかるべし、妙法経力みよほう即身成仏そくしんじやうぶつと伝でん教きやう大師だいしも釈しゃくせられた候、心こゝろは法華経ほふけきよの力ちからにてはくちなはの竜女りゆうにょも即身成仏そくしんじやうぶつしたりと申もうす事ことなり御疑おんうたが候まうべからず委くわくは見参けんさんに入り候まうて申もうすべく候と申もうさせ給たまへ。

弘安元年 戊寅 七月三日

日蓮 花押

妙法尼御前御返事

御消息しようそくに云くいわ・めうほうれんくゑきやうを・よるひるとなへまい
 らせ、すでにちかくなりて二声かうしやうとなへ、乃至ないしいきて候し
 時よりもなを・いろもしろく・かたちもそむせずと云云。

法華經ほけきよに云くいわ「如是相によぜそう乃至本末究竟等ないしほんまつくきよう」云云、大論だいろんに云くいわ「臨終りんじゆう

の時・色黒き者は地獄じじくに墮おつ」等云云、守護經しゆごに云くいわ「地獄じじくに墮おつる

に十五の相・餓鬼がきに八種の相・畜生ちくじゆうに五種の相ごしゆ」等云云、天台大師てんだいだいしの

摩訶止觀まかしかんに云くいわ「身の黒色は地獄じじくの陰いたに譬たとう」等云云、夫それ以おもみれば

にちれんようしよ

日蓮幼少にちれんようしよの時より仏法ぶつぽうを学び候しが念願ねんがんすらく人の寿命じゆみゆうは無常むじゆう

なり、出る氣いきは入る氣いきを待つ事なし風の前の露尚つゆ譬たとえにあらず、か

しこきもはかなきも老いたるも若わかきも定め無なき習ならいなり、

されば先臨終ますりんじゆうの事を習ならうて後に他事たじを習ならうべしと思いて、一代いちだい

聖教しんぎょうの論師ろんし・人師にんしの書積しよじやくあらあらかんがへあつめて此こゝを明鏡めいきやうとして、一切いっさいの諸人しよにんの死しする時ときと並ならに臨終りんじゆうの後のちとに引き向むかえてみ候まゐへばすこしもくもりなし、此こゝの人ひとは地獄じごくに墮おち給たまう乃至なにし人天にんてんとはみへて候まゐを、世間せけんの人人ひとびと・或ある師匠ししやう父母ふぼ等の臨終りんじゆうの相あひだをかくして西方淨土さいほうじやうど往生おつじやうと

のみ申し候まう、悲かないかな師匠ししやうは悪道あくだうに墮おちて多くの苦くるしみのびがたければ、弟子でしはとどまりゐて師しの臨終りんじゆうをさんだんし地獄じごくの苦くるしみを増長ぞうちやうせしむる、譬たとへば・つみふかき者を口くちをふさいで・きうもんし・はれ物の口くちをあけずしてやまするがごとし。

しかるに今の御消息しようそくに云いく・いきて候まゐし時ときよりも・なを・いろしるく・かたちもそむせずと云い云わ、天台てんだいの云いく白はく白はくは天てんに譬たとふ、大論だいろんに云いく「赤せき白びやく端正てんじやうなる者は天てん上じやうを得える」云い云わ、天台大師てんだいだいし・御臨終りんじゆうの

記いわに云いろく色白しろし、玄奘げんじょう三蔵御臨終さんぞうりんじゅうを記しるして云いわく色白しろし、一代いちだい聖教しょうきょうを定みむる名目なごもくに云いわく「黒業くろくごうは六道ろくどにとどまり白業しやくごうは四聖しじょうとなる」此等これらの文証もんじょうと現証げんじょうをもんてかんがへて候に、此の人このひとは天てんに生なぜるか、はた又また法華經ほけきょうの名号なごうを臨終りんじゅうに二反にへんとなうと云云いふこと、法華經ほけきょう

の第七の巻に云く、「我滅度の後に於て応に此の經を受持すべし、
是の人・仏道に於て決定して疑有ること無けん」と云云、一代の
聖教 いづれもいづれもをろかなる事は候はず、皆我等が親父大
聖教 主釈尊の金言なり皆真実なり皆実語なり、其の中にをいて
又小乗・大乘・顕教・密教・權大乘・実大乘あいわかれて候、仏説
と申すは二天・三仙・
外道・道士の経經にたいし候へば此等は妄語仏説は実語にて候、此
の実語の中に妄語あり実語あり綺語もあり悪口もあり、其の中に
法華經は実語の中の实語なり真実の中の真実なり、真言宗と
華嚴宗と三論と法相と俱舍・成実と律宗と念仏宗と禅宗等は
実語の中の妄語より立て出だせる宗宗なり、法華宗は此れ等の宗
宗にはにるべ
くもなき実語なり、法華經の実語なるのみならず一代妄語の

経経きょうぎょう すら法華經ほけきょうの大海たいかいに入りぬれば法華經ほけきょうの御力おんちからにせめられ
て実語じつごとなり候、いわうや法華經ほけきょうの題目だいもくをや、白粉うるしの力は漆うるしを變
じて雪いのごとく白いくなす。須弥山しゆみせんに近づく衆色しゆみせんは皆みな金色きんいろなり、
法華經ほけきょうの名号なごうを持つ人は一生いっせい・乃至な・過去かこ・遠劫おんのんごうの黒業くろごうの漆うるし變じ
て白業だいぜんの大善だいぜんとなる、いわうや無始むしの善根ぜんこん皆變じて金色きんいろとなり候な
り。

しかれば故しよりり聖靈しょうり最後さいご臨終りんじゅうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうととなへさせ給たまい
しかば、一生いっせい乃至な無始むしの悪業あくごう變じて仏ぶつの種たとなり給たまう、煩惱ぼんのう即すく菩提ぼだい
・生死しやうじ即すく涅槃ねはん即すく身成しんじやう仏ぶつと申もうす法門ほうもんなり、かかる人のえんの夫婦ふうふにな
らせ給たまへば又また女人にょにん成じやう仏ぶつも疑うたがなかるべし、若もし此この事こと虚事そごならば
釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぱう分身ふんじんの諸仏しよぶつは妄語もうごの人ひと・大妄語もうごの人ひと・悪人あくにんなり、
一切いっさい衆生しゆじやう
一切衆生

をたばらかして地獄じごくにおとす人なるべし、提婆達多だいばだつたは寂光淨土じやくくわうじやうどの主ぬし

となりきよつしゆしやくそん教主だいち釈尊あびは阿鼻だいじょう大城さかしまのほのをにむせび給たまうべし、日月にちがつは地に落ちにちれん大地もうちはくつがへり河じゅつほうさんぜは逆しよぶつに流れ須弥山しゆみせんはくだけをつべし、日蓮にちれんが妄語もうちにはあらずもうち十方三世もうちの諸仏もうちの妄語もうちなりいかでか其その義候もつべきとこそをばへ候へくわし委くわしくは見参の時申もつすべく候。

七月十四日

日蓮花押にちれんかおう

妙法尼御前申みちほつにのみづかみまうさせ給たまへ

御文おんふみに云いわくたふかたびら一つあによめにて候女房にようぼうのつたうと云

云、又おはりの次郎兵衛殿六月二十二日に死なせ給たまうと云云。

付法蔵經ふほうぞうきょうと申もうす經は仏。我が滅後めつごに我が法ひろを弘ひろむべきやうを説たまか

せ給たまいて候、其その中に我が滅後めつご・正法しょうぼう一千年が間次第しだいに使をつかは

すべし、第一だいいちは迦葉尊者かしょうそんじや二十年第二は阿難尊者あなんそんじや二十年第三は

商那和修しょうなわしゅう二十年乃至第二十三は師子尊者ししそんじやなりと云云、其その第三の

商那和修しょうなわしゅうと申もうす人の御事おんことを仏の説たまい給たまいて候やうは、商那和修しょうなわしゅうと

申もうすは衣

の名なり、此の人生れし時衣ときえをきて生れて候いき不思議ふしぎなりし事な

り、六道ろくどうの中に地獄道じじくより人道いたに至るまでは何いかなる人も始ははあかは

だかにて候に天道てんどうこそ衣えをきて生れ候へ、たとひ何いかなる賢人けんじん・聖人せいじん

も人に生るるなららひは皆あかはだかなり、一生補処の菩薩すら尚
はだかにて生れ給へり何かに況や其の外をや、然るに此の人は
商那衣と

申すいみじき衣にまとはれて生れさせ給いしが、此の衣は血もつか
ずけがるる事もなし、譬えば池に蓮のをひをしの羽の水にぬれざる
が如し、此の人次第に生長ありしかば又此の衣次第に広く長くな
る、冬はあつく夏はうすく春は青く秋は白くなり候し程に長者に
てをはせしかば何事もともしからず、後には仏の記しをき給いし事
た

がふ事なし、故に阿難尊者の御弟子とならせ給いて御出家ありしか
ば此の衣変じて五条七条九条等の御袈裟となり候き、かかる
不思議の候し故を仏の説かせ給いしやうは、乃往過去・阿僧祇劫の
当初・此の人は商人にて有り

しが、五百人の商人と共に大海に船を浮べてあきなひをせし程に海
辺に重病つづしびやうの者あり、しかれども辟支仏ひやくしぶつと申もうして貴人きじんなり、先業せんごうに
てや有りけん、病にかかりて身やつれ心をぼれ不浄ふじようにまとはれてを
はせしを、此の商人あきひとあは

たてまつ

れみ奉りてねんごろに看病して生しまいらせ、不浄をすすぎすて

そふの商那衣をきせまいらせてありしかば、此聖人悦びて願して

云く汝我を助けて身の恥を隠せり此の衣を今生後生の衣とせんと

いわなんじ

てやがて涅槃に入り給いき、此の功德によりて過去・無量劫の間・

にんちゆうてんじよう

人中天上に生れ生るる度ごとに、此の衣・身に隨いて離るる事な

し、乃至

今生に釈迦如来の滅後第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人と

なり、摩突羅国の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生

を教化して佛法を弘通し給いし事二十年なり、所詮商那和修比丘

の一切のたのしみ不思議は皆彼の衣より出生せりとこそ説かれて

候へ。

而るに日蓮は南閻浮提日本国と申す国の者なり、此の国は仏の

世に出でさせ給いし国よりは東に当りて二十万余里の外遙なる

かいちゆう

海中かいちゆうの小島なり、而しかるに仏御入滅にゆうめつありては既に二千二百二十七年

なり、月氏がつし・漢土かんどの人の此の国の人人ひとびとを見候へば此の国の人の伊豆

の大島奥おつしゆう州の東のえぞなんどを見るやうにこそ候らめ、而しかるに

日蓮にちれんは日本国安房の国と申もつす国に生れて候しが、民の家より出いでて

頭こづへをそり袈裟けさをきたり、此の度いかにもして仏種ぶつしゆをもうへ

生死しじゆうじを離るる身とならんと思おもひて候し程に、皆人みなの願ねがひを給たまはせ給たまはう事な

れば阿弥陀あみだぶつ仏をたのみ奉たてまつり幼少ようしゆうより名号みょうごうを唱となえ候し程に、いささ

かの事ありて、此の事を疑うたがひし故ゆゑに一の願をおこす、日本国にほんこくに渡わた

れる処ところの仏經ぶつきやう並ならびに菩薩ぼさつの論ろんと人師にんしの釈なを習ならひ見候はばや、又

俱舍宗くしゃじゆう・成実宗じやうじつ・律宗りつじゆう・法相宗ほうそうじゆう・三論宗さんろんじゆう・華嚴宗けこんじゆう・真言宗しんごんじゆう法華ほっけ

天台宗てんだいじゆうと申もつす宗ど

もあまた有りとせきく上に、禪宗ぜんじゆう・浄土宗じやうどじゆうと申せつす宗も候なり、此等これら

の宗宗しじゆう枝葉しやうをばこまかに習しはずとも所詮しよせん肝要かんようを知る身とならばや

と思ひし故に、随分に・はしりまはり十二・十六の年より三十二に
至るまで二十余年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の
国・寺・寺・寺あらあら習い回り候し程に・一の不思議あり、我れ等が・
はかなき

心に推するに仏法は唯一味なるべし、いづれもいづれも・心に入れて
習ひ願はば生死を離るべしとこそ思いて候に、仏法の中に入りて
悪しく習い候ぬれば謗法と申す大なる穴に墮ち入つて、十悪・五逆
と申して日日・夜夜に

せつじょうちゅうたうじやいんもじう

殺生偷盜邪淫妄語等をおかす人よりも五逆罪と申して父母等を

あくにん

殺す悪人よりも、比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく

はちまんほうぞう

持ち心には八万法蔵をうかべて候やうなる、智者聖人の一生が間

ちしやしうじん

に一悪をもつくらず人には仏のやうにをもはれ、我が身も又さなが

あくどう

らに悪道にはよも墮ちじと思う程に、十悪・五逆の罪人よりもつ

じゆうあく

よく

じじく

地獄に墮ちて阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候けるぞ、

お

譬えば人ありて世にあらんがために国主につかへ奉る程に、させる

た

あやまちはなけれども我心のたらぬ上・身にあやしきふるまひか

わがこころ

さなるを、猶我身にも失あ

なわがみ

りともしらず又傍輩も不思議ともをものはざるに后等の御事により

ほうはい

てあやまつ事はなけれども自然にふるまひあしく王などに不思議

じねん

に見へまいらせぬれば、謀反の者よりも其の失重し、此の身とがにか

そ

かりぬれば父母・兄弟・所従なんども又かるからざる失にをこなは
るる事あり。

謗法と申す罪をば我れもしらず人も失とも思はず但仏法をなら

へば貴しとのみ思いて候程に此の人も又此の人にしたがふ弟子・

檀那等も無間地獄に墮つる事あり、所謂勝意比丘・苦岸比丘などと

申せし僧は二百五十戒をかたく持ち三千の威儀を一もかけずあり

し人なれども、無間・大城に墮ちて出づる期見へず、又彼の比丘に

近づきて弟子となり檀那となる人人存の外に大地微塵の数よりも

多く地獄に墮ちて師と・ともに苦を受けしぞかし、此の人後世のた

めに衆善を修せしより外は又心なかりしかども・かかる不祥にあひ

て候しぞかし。

かかる事を見候しゆへにあらあら経論を勤へ候へば、日本国の

当世こそ其に似て候へ代末になり候へば世間のまつり事のあらきに

つけても世の中あやうかるべき上、此の日本国は他国にもにほんこく たこくにぶつぽうずひる弘ひるまりて国をさまるべきかと思ひて候へば、中中・仏法弘まりて世もおとろえいたく衰へ人も多く悪道に墮つべしと見へて候、其の故は日本国はがっし月氏・漢土かんどよりも堂塔等の多き中に大体は阿弥陀堂なり、其の上家ごごとに阿弥陀仏を木像に造り画像に書き人毎に六万八万等の念仏ねんぶつを申す、又他方を抛うちて西方を願う愚者の眼にも貴しと見え候上、一切の智人も皆いいっさい上、一切の智人も皆いちじん上、一切の智人も皆いみな上、一切の智人も皆い

みじき事なりとほめさせ給う。

又人王五十代桓武天皇の御宇に弘法大師と申す聖人。此の国に生れて、漢土より真言宗と申すめずらしき法を習い伝へ平城嵯峨淳和等の王の御師となりて東寺・高野と申す寺を建立し、又慈覚大師・智証大師と申す聖人同じく此宗を習い伝えて叡山・園城寺に弘通せしかば日本国の山寺一同に此の法を伝へ今に真言を行ひ鈴をふりて公家・武家の御祈をし候、所謂二階堂・大御堂・若宮等の別当等是れなり、是れは古も御たのみある上当世の国主等家には柱天には日月河には橋海には船の如く御たのみあり。

禪宗と申すは又当世の持斎等を建長寺等にあがめさせ給うて父母よりも重んじ神よりも御たのみあり、されば一切の諸人頭をかたづけ手をあさふ、かかる世にいかなればにや候らん、天変と申して彗星長く東西に渡り地天と申して大地をくつがへすこと大海

の船を大風の時・大波のくつがへすに似たり、大風吹いて草木をから
し飢饉も年年にゆき疫病・月月におこり大旱魃ゆきて河池・田畠・皆
かはきぬ、此くの如く三災・七難・数十年起りて民半分
に減じ残りは或は父母・或は兄弟・或は妻子にわかれて歎く声・秋
の虫にことならず、家家のちりうする事冬の草木の雪に・せめられ
たるに似たり、是は・いかなる事ぞと経論を引き見候へば仏の言
法華経と申す経を謗じ我れを用いざる国あらばかかる事あるべし
と、仏の記しをかせ給いて候・御言にすこしもたがひ候はず。
日蓮 疑て云く日本には誰か法華経と釈迦仏をば謗すべきと
疑ふ、又たまさか謗する者は少少ありとも信ずる者こそ多くあ
るらめと存じ候、爰に此の日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏
を申す、其の根本を尋ぬれば道・綽・善・導・和・尚・法・然・上・人・と
申す三人の言より出でて候、是れは浄土宗の根本今の諸人の御師

なり、此の三人の念仏ねんぶつ

を弘ひろめさせ給たまいし時にのたまはく未み有う一人得者ひととくしゃ・千中無一せんちゅうむいつ・捨閉しゃへい

閣かく抛ほう等云云、いふところは阿あ弥み陀だ仏ぶつをたのみ奉たてまつらん人は一切いっさいの經きやう・

一切いっさいの仏ぶつ・一切いっさいの神かみをすてて但あ阿あ弥み陀だ仏ぶつ・南無なむ阿あ弥み陀だ仏ぶつと申もうすべし、

其の上そことに法華經ほけきやうと

釈迦しやかぶつ仏を捨てまいらせよとすすめしかばやすきままに案もなくばらばらと付き候ぬ、一人付き始めしかば万人ばんにん。皆付き候いぬ、万人ばんにん付きしかば上は国主こくしゅ。中は大だい臣じん。下は万民ばんみん一人も残る事なし、さる程に此の国存の外に釈迦しやかぶつ仏ほけきょう。法華經の御敵人てきじんとなりぬ。

其故は「今こん此し三さん界がいは皆是れ我わが有あなり其の中の衆生しゅじょうは悉ことごとく是れ吾わが子こなり而しかも今こん此こ處こは諸もろもろの患難げんなん多たし唯我れ一人のみ能よく救護くごを為なす」と説いて、此の日本にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうのためには釈迦しやかぶつ仏は主しゅなり

師しなり親おやなり、天神てんじん七代しちだい。地神ちじん五代ごだい。人王にんおう九十代の神と王とすら猶なほ釈迦しやかぶつ仏の所従しよじゆうなり、何かに況や其その神と王との眷属けんぞく等をや、今、

日本にほんこくの

大地だいち山河大海さんごうたいかい草木等そうもくは皆みな釈尊しやくそんの御財みなしかくそんぞかし、全たからく一分いちぶんも薬師やくし仏ぶつ。阿弥陀あみだぶつ等たぶつの他た仏ぶつの物にはあらず、又日本にほんこくの天神てんじん。地神ちじん。九十余くじゅうしよ代の国主こくしゅ並ならに万民ばんみん牛馬ぎゆうば。生いきと生いける生しやうある者は皆みな教主きやうしゅ釈尊しやくそんの一子いっし

なり、又日本国の天神・地神・諸王・万民等の天地・水火・父母・主君
男女・妻子・黑白等を弁え給うは皆教主釈尊・御教の師なり、全
く薬師・阿弥陀

等の御教にはあらず、されば此の仏は我等がためには大地よりも厚
く虚空よりも広く天よりも高き御恩まします仏ぞかし、かかる仏
なれば王臣万民俱に人ごとに父母よりも重んじ神よりもあがめ
奉るべし、かくだにも候はば何なる大科有りとも天も守護してよ
もすて給はじ。地もいかり給うべからず。

然るに上一人より下万人に至るまで阿弥陀堂を立て阿弥陀仏を
本尊ともてなす故に天地の御いかりあるかと思え候、譬えば此の国
の者が漢土・高麗等の諸国の王に心よせなりとも、此の国の王に
背き候なば其の身はたもちがたかるべし、今日本国の一切衆生も
是くの如し、西方の国主阿弥陀仏には心よせなれども我国主

釈迦しゃか仏ぶつに背そむき

奉たてまつる故ゆえに此この国こくの守しゆ護ご神しんいかり給たまうかと愚ぐ案あんに勘かんへ候が、而しかるを此この

国こくの人人ひとびと阿あ弥み陀だ仏ぶつをある或あるは金あ或あるは銀あ或あるは銅あ或あるは木も画くえ等らに志こころざし

をつ尽つくし仏ぶつ事じをあるなし、法ほ華け經きやうと釈しゃ迦か仏ぶつをあるば或あるは墨ぼく画くわ或あるは木も像ざうに

はくをあるひかず或あるは草くさう堂だうに造つくりなんどす、例れいせば他た人にんをあるば志こころざしを

重かさね妻さい子しをあるばもてあるなして父ふ母ぼにおろかなるが如ごとし。

又真言宗と申す宗は上一人より下万民に至るまで此れを仰ぐ
事日月の如し、此れを重んずる事珍宝の如し、此の宗の義に云く
大日経には法華経は二重三重の劣なり、釈迦仏は大日如来の眷属
なりなると申す此の事は弘法・慈覚・智証の仰せられし故に今四百
余年に叡山・東寺・園城・日本国の智人・一同の義なり。
又禅宗と申す宗は真実の正法は教外別伝なり法華経等の
経経は教内なり、譬えば月をさす指・渡りの後の船・彼岸に到り
てなにかせん月を見ては指は用事ならず等云云、彼の人人謗法と
もをもはず習い伝えたるままに存の外に申すなり、然れども此の言
は釈迦仏をあなづり法華経を失ひ奉る因縁となりて、此の国の
人人・皆一同に五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら而も罪ともし
らず。

此大科・次第につもりて人王八十二代・隱岐の法皇と申せし王

並びに佐渡の院等は我が相伝の家人にも及ばざりし、相州鎌倉の
義時と申せし人に代を取られさせ給いしのみならず、島島にはなた
れて歎かせ給いしが、終には彼の島島にして隠れさせ給いぬ、神ひは
悪霊となりて地獄に墮ち候いぬ、其の召仕はれし大臣已下は、或は
頭をはね

られ、或は水火に入り、其の妻子等は、或は思い死に死に、或は民の
妻となりて今五十余年、其外の子孫は民のごとし、是れ偏に真言と
念仏等をもてなして法華經・釈迦仏の大怨敵となりし故に天照太神
・正八幡等の天神・地祇・十方の三宝にすてられ奉りて、現身には
我が所従等にせめられ後生には地獄に墮ち候ぬ。

而るに又代東にうつりて年をふるままに彼の国主を失いし、
真言宗等の人人・鎌倉に下り相州の足下にくぐり入りてやうやう
にたばかる故に、本は上臆なればとてすかさされて鎌倉の諸堂の別当

となせり、又念仏者をば善知識とたのみて大仏・長樂寺・極樂寺等
とあがめ、禪宗をば寿福寺・建長寺等とあがめをく、隱岐の法皇の
果報の尽き
給いし失より百千万億倍すぎたる大科鎌倉に出来せり、かかる
大科ある故に天照太神・正八幡等の天神・地祇・釈迦・多宝・十方
の諸仏・一同に大にとがめさせ給う故に、隣国に聖人有りて万国の
兵のあつめたる大王に仰せ付け

て、日本国の王臣万民を一同に罰せんとたくませ給うを、日蓮かねて経論を以て勘へ候いし程に、此れを有りのままに申さば国主もいかり、万民も用ひざる上、念仏者・禅宗・律僧・真言師等定めて忿りをなして・あだを存じ王臣等に讒奏して我が身に大難おこりて、弟子乃至檀那までも少しも日蓮に心よせなる人あらば科になし、我が身もあやうく命にも及ばんずらん、いかが案もなく申し出すべきとやすらひし程に、外典の賢人の中にも世のほろぶべき事を知りながら申さぬは諛臣とて・へつらへる者不知恩の人なり、されば賢なりし竜逢比干なんと申せし賢人は、頸をきられ胸をさかれしかども国の大事なる事をばはばからず申し候いき、仏法の中には仏いましめて云く法華経のかたきを見て世をはばかり恐れて申さずば、釈迦仏の御敵いかなる智人・善人なりとも必ず無間地獄に墮つべ

し、譬へば父母を人の殺さんとせんを、子の身として父母にしらせず、王をあやまち奉らんとする人のあらむを、臣下の身として知りながら代をおそれて申さざらんがごとしなんど禁られて候。

されば仏の御使たりし提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に頭をはねられ、竺の道生は蘇山へ流され、法道は面になやきをあてられき、此等は皆仏法を重んじ王法を恐れざりし故ぞかし、されば賢王の時は仏法をつよく立つれば王両方を聞あきらめて勝れ給う智者を師とせしかば国も安穩なり、所謂陳・隋の大王桓武・

嵯峨等は天台智者大師を南北の学者に召し合せ、最澄和尚を南都の十四人に対論せさせて論じかち給いしかば寺をたてて正法を弘通しき、大族王・優陀延王・武宗・欽宗・欽明・用明・或は鬼神・外道を崇重し・或は道士を帰依し・或は

神を崇めし故に、釈迦仏の大怨敵となりて身を亡ぼし世も安穩な
らず、其の時は聖人たりし僧侶大難にあへり、今日本国すでに大
謗法の国となりて他国にやぶらるべしと見えたり。

此れを知らながら申さずば縦ひ現在は安穩なりとも後生には
無間・大城に墮つべし、後生を恐れて申すならば流罪・死罪は一定
なりと思ひ定めて去ぬる文応の比故最明寺入道殿に申し上げぬ、
されども用い給う事なかりしか

ば、念仏者等。此の由を聞きて上下の諸人をかたらひ打ち殺さんとせし程にかなはずりしかば、長時武蔵の守殿は極楽寺殿の御子なりし故に親の御心を知りて理不尽に伊豆の国へ流し給いぬ、されば極楽寺殿と長時と彼の一門は皆ほろぶるを各御覧あるべし、其の後何程もなくして召し返されて後又経文の如く弥よ申しつよる、又去ぬる

文永八年九月十二日に佐渡の国へ流さる、日蓮御勘氣の時申せしが如くどしうちはじまりぬ、それを恐るるかの故に又召し返されて候、しかれども用ゆる事なければ万民も弥弥悪心盛んなり。

縦ひ命を期として申したりとも国主用いずば国やぶれん事疑なし、つみしらせて後用いずば我が失にはあらずと思ひて、去ぬる文永十一年五月十二日相州鎌倉を出でて六月十七日より此の深山に住して門一町を出でず既に五箇年をへたり。

本は房州の者にて候いしが地頭東条左衛門尉景信と申せしもの
極楽寺殿・藤次左衛門入道・一切の念仏者にかたらはれて度度の問
註ありて結句は合戦起りて候上・極楽寺殿の御方人理をまげられ
しかば東条の郡ふせがれて入る事なし、父母の墓を見ずして数年
なり、又国主より御勘気二度なり、第二度は外には遠流と聞こへし
かども内

には頸を切るべしとて、鎌倉竜の口と申す処に九月十二日の丑の
時に頸の座に引きすへられて候いき、いかがして候いけん月の如くに
をはせし物江の島より飛び出でて使の頭へかかり候いしかば、使お
それてきらず、と

かうせし程に子細どもあまたありて其の夜の頸はのがれぬ、又佐渡
の国にてきらんとせし程に日蓮が申せしが如く鎌倉にどうち始ま
りぬ、使はしり下りて頸をきらず結句はゆるされぬ、今は此の山に

ひとりすみ候。

佐渡さどの国くににありし時は里さとより遙はるかにへだたれる野のと山のとの中間ちゆうげんにつかはらと申もうす御三昧さんまい所ところあり、彼処あそこに一間いっかん四面しめんの堂どうあり、そらはいたまあわず四壁しへきはやぶれたり・雨あめはそとの如ごとし雪ゆきは内に積たももる、仏ぶつはおはせず筵むしろ畳たたみは一枚まいまいもなし、然しかれども我われが根本こんぽんより持たもちまいらせ候まう・教主きよしゆ釈尊しゃくそんを立てまいらせ法華ほけき経きやうを手ににぎり衰みのをき笠かさをさ

して居たりしかども、人もみへず食もあたへずして四箇年なり、彼の蘇武が胡国にとめられて十九年が間蓑をき雪を食としてありしが如し。

今又此山に五箇年あり、北は身延山と申して天にはしだて・南は・たかとりと申して鷄足山の如し、西はなないたがれと申して鉄門に似たり・東は天子がたけと申して富士の御山にたいしたり、四の山は屏風の如し、北に大河あり早河と名づく早き事・箭をいるが如し、南に河あり波木井河と名づく大石を木の葉の如く流す、東には富士

河北より南へ流れたりせんのはこをつくが如し内に滝あり身延の滝と申す白布を天より引くが如し此の内に狭小の地あり日蓮が庵室なり深山なれば昼も日を見奉らず夜も月を詠むる事なし峯にははかうのかまびすしく谷には波の下る音鼓を打つがごとし地にはし

かざれども大石多く山には瓦礫がりがくより外には物もなし国主こくしゆはにくみ
給たまふ

万民ばんみんはとぶらはず冬は雪道を塞ふさぎ夏は草をひしげり鹿の遠音とんうら
めしく蝉の鳴く声かまびすし訪う人なければ命もつぎがたしはだへ
をかくす衣も候はざりつるにかかる衣ををくらせ給たまえるこそいか
にとも申もうすばかりなく候へ。

見し人聞きし人だにもあはれとも申もうさず、年比なれし弟子でしつかへ
し下人だにも皆みなにげ矢とがとぶらはざるに聞きもせず見もせぬ人の御
志こころざし哀あわれなり、偏ひとえに是れ別れし我が父ふ母ぼの生れかはらせ給たまいけるか、
十羅刹じゆつらせつの人の見に入りかはりて思いよらせ給たまうか、唐とうの代宗皇帝こうていの
代ほに蓬子將軍ほうししょうくんと申せし人の御子りじよせん・李如暹將軍しろうけんと申せし人勅定ちくじやうを
蒙こゝろりて

北の胡地こくくを責めし程に、我が勢数十万騎は打ち取られ胡国こくくに生け

取られて四十年漸くへし程に、妻をかたらひ子をまうけたり、胡地のなら習い生取をば皮の衣を服せ毛帯をかけさせて候が、只正月一日ただ計り唐の衣冠をゆるす、一ばか年ごとに漢土を恋いて肝をきり涙をながす、而る程に唐の軍おこりて唐の兵胡地をせめし時ひまをえて胡地の妻子をふりすててにげしかば、唐の兵は胡地のえびすとて捕へて頸をきらんとせし程に、とかうして徳宗皇帝とくそうこうてい

にまいらせてありしかば、いかに申せども聞も・ほどこせ給はずして
・南の国・呉越と申す方へ流されぬ、李如暹りじよせん歎なげいて云く進ては涼原の
本郷ふるさとを見ることを得ず退ては胡地の妻子さいしに逢ふことを得ず云云、此
の心は胡地の妻子さいしをもすて又唐もろこしの古き栖すみかをも見ず・あらぬ国に
流されたりと歎なげくなり、我が身には大忠ありしかども・かかる歎なげき
あり。

日蓮にちれんも又此かくの如ごとし日本国にほんこくを助けばやと思おもう心に依よりて申もうし
出いだす程に、我が生れし国をもせかれ又流されし国をも離れぬ、すで
に此の深山みやまにこもりて候が彼の李如暹りじよせんに似にて候なり、但ただし本郷にも
流されし処ところにも妻子さいしなけ
れば歎なげく事はよもあらず、唯父母ただふぼのはかとなれし人人ひとびとのいかが・な
るらんと・をばつかなしとも申す計ばかりなし、但うれしき事は武士ぶしの
習ならひ君の御為ために宇治勢多を渡わたし前を・かけなんどして・ありし人は、

たとひ身は死すれども名を後代に挙げ候ぞかし、日蓮は法華經の
ゆへに度度所をおはれ戦をし身に手をおひ弟子等を殺され兩度ま
で遠流せられ既に頸に及べり、是れ偏に法華經の御為なり、法華經
の中に仏説かせ給はく我が滅度の後、後の五百歳・
二千二百余年すぎて此の經閻浮提に流布せん時、天魔の人の身に入
りかはりて此の經を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば、或は
のり打ち所をうつし、或はころしなんどすべし、其の時先さきをして
あらん者は三世十方の仏を供養する功德を得べし、我れ又因位の
難行・苦行の功德を譲るべしと説かせ給う取意。
されば過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給いしに、比丘・比丘尼
等の智慧かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集まりて優婆塞・
優婆夷をかたらひて不輕菩薩をのり打ちせしかども、退轉の心なく
弘めさせ給いしかば終には仏となり給う、昔の不輕菩薩は今の

釈迦しやか仏ぶつなり、それをそねみ打ちなんどせし大僧だいそうどもは千劫せんごう阿鼻あび地獄じごくに墮おち

ぬ、彼の人人ひとびとは觀經かんきやう・阿彌陀經あみだ等の数千の經いっさい・一切いっさいの仏名あみだ・阿彌陀あみだ念仏ねんぶつを申し法華經ほけきやうを昼夜もつに讀みしかども、實まことの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだみしかば法華經ほけきやう・念仏ねんぶつ・戒等かいとうも助け給たまはず千劫せんごう阿鼻地獄あびじごくに墮おちぬ、彼の比丘等びくは始はじには不輕菩薩ふぎやうぼさつをあだみしかども後のちには心をひるがへして、身みを不輕菩薩ふぎやうぼさつに仕つかうる事ことやつこの主しやうに隨したがうがごとく有りしかども

無間地獄をまぬかれず、今又日蓮にあだをせさせ給う日本国の
人人も此くの如し、此は彼には似るべくもなし彼は罵り打ちしかど
も国主の流罪はなし杖木瓦石はありしかども疵をかほり頸までに
は及ばず、是は悪口杖木は二十余年が間・ひまなし疵をかほり
流罪・頸に及ぶ、弟子等は、或は所領を召され、或はろうに入れ、或
は遠流し、或は其の内を出だし、或は田畠を奪ひなんどする事・夜
打・強盗・海賊・山賊・謀叛等の者よりもはげしく行はる、此れ又
偏に
真言・念仏者・禅宗等の大僧等の訴なり、されば彼の人人の御失は
大地よりも厚ければ此の大地は大風に大海に船を浮べるが如く動
転す、天は八万四千の星暎をなし昼夜に天変ひまなし、其の上日月
大に變多し仏滅後既に二千二百一十七年になり候に大族王が五天
の寺をやき十六の大国の僧の頸を切り武宗皇帝の漢土の寺を失ひ

ぶつぞう
仏像

をくだき、日本にほんこくの守屋もりやが釈迦しやくか仏ぶつの金銅こんどうの像ぞうを炭火もつを以てやき

僧尼そうにを打ちせめては還俗げんぞくせさせし時こも是れ程ほどの彗星すいせい大地震だいじしんはいま

だなし、彼かには百千万倍ひゃくせんまんばい過ぎて候す大悪おおくにてこそ候まじいぬれ、彼は王わう

人の悪心あくしん大臣だいじん以下以下は心こころより起おこる事ことなし、又また権仏ごんぶつと権経ごんきやうとの敵てきなり

僧そうも法華経ほけきやうの行者ぎやうにはあらず、是こゝは一向いっこうに法華経ほけきやうの敵てき・王わう・一人ひとりの

みなら

ず一國いちこくの智人ちじん並びに万民ばんみん等の心こころより起おこれる大悪心あくしんなり、譬たとえば

女人物にょにんをねためば胸むねの内に大火たいかもゆる故ゆゑに、身み変かじて赤あかく身みの毛けさ

かさまにたち五体ごたいふるひ面かほに炎えんあがりかほは朱しゆをさしたるが如ごとし

眼まなこまるになりてねこの眼まなこのねづみを見るが如ごとし、手てわななきてか

しわの葉はを風かぜの吹ふくに似にたりかたはらの人ひと是これを見れば大鬼神きじんに異こと

ならず。

日本にほんの国こく主しゅ諸僧しよそう比丘びく比丘びく尼等にも又また是この如ごとし、たのむところの
弥陀みだ念ねん仏ぶつをば日蓮にちれんが無間むげん地獄じごくの業ごうと云いうを聞き真言しんごんは亡国ぼうこくの法ほうと
云いうを聞き持齋じさいは天魔てんまの所為そいと云いうを聞いて念珠ねんじゆをくりながら齒は
をくひちがへ鈴すずをふるにくびをどりたり戒たもを持ちながら悪心あくしんをいだ
く極楽ごくらく寺てらの生仏りやうかんの良觀りやうかん聖人しょうにん折紙せしをささげて上かみへ訴けんちへ建長けんちやうじ寺てらの道隆どうりゆう
聖人しょうにんは輿こしに乗りて奉行ぶぎやう人にひざまづく諸もろの五百ごひゃく戒がいの尼御前あまごぜん等はは
くをつかひてでんそうをなす、是これ偏ひとえに法華ほけき經きやうを讀よみてよまず聞きい
てきかず善導ぜんどう・法然ほうねんが干中せんちゆう無む一いつと弘法こうぼう・慈覺じかく達磨だるま等の皆みな是こ戲論けろん教外きやうげ
別伝べつでんのあまきふる酒さけにえはせ給たまい

てさかぐるひにておはするなり、法華最第一の経文を見ながら
大日経は法華経に勝れたり禅宗は最上の法なり律宗こそ貴けれ
念仏こそ我等が分にはかなひたれと申すは酒に酔える人にあらず
や星を見て月にすぐれたり石を見て金にまされり東を見て西と云い
天を地と申す物ぐるひを本として月と金は星と石とには勝れたり
東は東天は天なんど有りのままに申す者をばあだませ給はば勢の
多きに付くべきか只物ぐるひの多く集まれるなり、されば此等
を本とせし云うにかひなき男女の皆地獄に堕ちん事こそあはれに候
へ涅槃経には仏説き給はく末法に入つて法華経を謗じて地獄に墮つ
る者は大地微塵よりも多く信じて仏になる者は爪の上の土よりも
少しと説かれたり此れを以つて計らせ給うべし日本国の諸人は爪の
上の土日蓮一人は十方の微塵にて候べきか、然るに何なる宿習に
てをはずれば御衣をば送らせ給うぞ爪の上の土の数に入らんとお

ぼすか又涅槃經ねはんぎょうに云くいわ「大地だいちの上に針を立てて

大風たいふうの吹かん時大梵天ぼんてんより糸を下さんに糸のはしすぐに下りて針の

穴に入る事はありとも、末代まつだいに法華經ほけきょうの行者ぎょうじやにはあひがたし

法華經ほけきょうに云くいわ「大海たいかいの底に龜ありさんぜん三千年に一度海上ひとたひにあがる梅檀せんだの

浮木うきぎの穴にゆきあひてやすむべししか而るに此の龜一目なるがしか而も僻目ひがめ

にて西の物を東と見東の物を西と見るなり」末代まつだい悪世あくせに生れて

法華經並

びなむに南無妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの穴に身を入るる男女なんによにたとへ給たまへり何いかなる

過去かこの縁にてをはずれば此の人をとおほしめふらんと思食す御心はつかせ

給たまいけるやらん、法華經ほけきょうを見まいらせ候へば釈迦しゃかぶつの其その人の御身おんみ

に入らせ給たまいてたまたかかると心はつくべしと説かれて候たと譬へばなにとも思

はぬ人の酒をのみてえいぬればあらぬ心出来り人に物をとらせば

や・なんと思つ心しゅつたい出来る、此これは一生慳貪けんどんにして餓鬼がきに墮おつべきを

其の人の酒の縁に菩薩の入りかはらせ給うなり、濁水

に珠を入れぬれば水すみ月に向いまいらせぬれば人の心あこがる、

画にかける鬼には心なけれどもおそろし、とわりを画にかけば我が夫をばとらねどもそねまし、錦のしとねに蛇をおれるは服せんと

も思はず、身のおつきにあたたかなる風いとはし、人の心も此くの

如し、法華経の方へ御心をよせさせ給うは女人の御身なれども

りゆうによ
竜女

が御身おんみに入らせ給たまうか。

さては又尾張おわりの次郎兵衛尉殿ひょうえのじょうの御事見参おんことに入りて候いし人な

り、日蓮にちれんは此こゝの法門ほうもんを申し候へば他人たにんにはにず多くの人に見て候へ

どもいとをしと申もうす人は千人に一人もありがたし、彼の人はよも心

よせには思はれたらじなれども、自体人たいたいがらにくげなるふりなく、

よろづの人に・なさけあらんと思ひし人なれば、心の中は・うけずこ

そ・

をぼしつらめども、見参の時はいつはりをろかにて有りし人なり、又

女房にょぼうの信じたるよしありしかば実とは思ひ候はざりしかども、又い

たう法華経ほけきょうに背く事そむはよもをはせじなればたのもしきへんも候、さ

れども法華経ほけきょうを失ふ念仏うしな ねんぶつ・並びに念仏者ねんぶつを信じ我が身たぶんも多分たぶんは

念仏者ねんぶつにてをはせしかば後生ごしょうはいかがと・をぼつかなし、譬たとえば国主こくしゅ

は

みやづかへのねんごろなるには恩のあるもあり又なきもあり、少しもをろかなる事候へばとがになる事うたがい疑なし、法華経ほけきょうも又此かくの如ごとし、いかに信ずるやうなれども法華経ほけきょうの御かたきにも知れ知らざれ、まじはりぬれば無間地獄むげんじこくは疑うたがいなし。

是はさてをき候ぬ、彼の女房にちりほりの御なげ歎いかがとをしはかるに・あはれなり、たとへばふじのはなのさかんなるが松にかかりて思う事もなきに松のにはかにたふれ、つたのかきにかかれるが・かきの破われたるが如ごとくに・をぼすらん、内へ入れば主なし・やぶれたる家の柱なきが如ごとし、客人来れども外に出いでて・あひしらうべき人もなし、夜のくらきには・ねやすさまじく・ほかをみれば・しるしはあれども声もきこへず、又思おもいやる死出の山・三途の河をば誰とか越え給たまうらん只ただひと独なげり歎なげき給たまうらん、とどめをきし御前ごぜんたち・いかに我をば・ひとりやるらん、さはちぎらざりとや歎なげかせ給たまうらん、かたがた秋の夜

のふけゆくままに冬の嵐のをとづるる声につけても
弥弥御歎き重いよいよ なげ

り候らん、南無妙法蓮華經なむ みようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。なむ みようほうれんげきよう

こうあんがんねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 九月六日

にちれん
日蓮

かおう
花押

P

明衣ゆかたびら一つ給び生んぬ、女人にょにんの御身おんみ・男にもをくれ親類しんるいをも・はな

れ一二人ある・むすめもはかばかしからず便たよりなき上・法門ほうもんの故ゆえに

人にも・あだまれさせ給たまふ女人にょにん、さながら不ふぎ軽よ菩薩ぼさつの如ごとし、仏の御

姨母おば・摩訶まか波闍はじや波提はだい比丘尼びくは女人にょにんぞかし、而しかるに阿羅漢あらかんとならせ

給たまいて声聞しょうもんの御名みなを得させ給ひ永不成仏ようふじょうぶつの道に入らせ給たまいしかば、

女人にょにんの姿をかへ・きさきの位を捨てて仏の御すすめを敬うやまひ、

四十余年が程よんじゅうよねん・五百戒たもを持ちて昼は道路じゅうぶつにたたずみ・夜は

樹下に坐ごしして後生ごしやうをねがひしに、成仏じやうぶつの道を許ゆるされずして永不成仏ようふじょうぶつ

のうきをなを流させ給たまいし、くちをしかりし事ぞかし、女人にょにんなれば

過去遠劫の間有るに付けても無きに付けても・あだなを立てし、
はづかしく口惜かりしぞかし、其の身をいとひて形をやつし尼と成
りて狭へば・かかる・なげきは離れぬとこそ思ひしに、相違して二乗
と

なり永不成仏と聞きしは・いかばかり・あさましくをわせしに、
法華經にして三世の諸仏の御勘氣を許され、一切衆生喜見仏と成
らせ給いしは・いくら程か・うれしく悦ばしくをはしけん、さるにて
は法華經の御為と申すには何なる事有りとも背かせ給　うまじきぞ
かし、其に仏の言わく大音声を以て普く四衆に告げたまわく誰れ
か能く此の
袈裟国土に於て広く妙法華經を説かん等云云、我も我もと思うに
諸仏の恩を報ぜんと思はん尼御前女人達、何事をも忍びて我が
滅後に此の袈裟世界にして法華經を弘むべしと三箇度まで・いさめ

させ給たまいしに、御用ひなくして他方たほうの国土こくどに於おいて広く此の経のへを宣のべ
んと申もうさせ給たまいしは能よく能よく不得こころえ心の尼いぞかし、幾いくくか仏ぼ悪さつしと。
をぼしけん、されば仏はそばむきて八十万億邪由佗の諸しよ菩薩ぼさつをこそ
つくづくと御覽ごらんぜしか。

されば女人にょにんは由なき道には名を折り命を捨つれども成仏じゆぶつの道は
よはかりけるやと。をばへ侯に、今末代まつだいあくせ悪世にょにんの女人にょにんと生れさせ給たまいて
かかものものをばえぬ島のえびすにのられ打たれ責られねび法華經ほけきやう
を弘ひろめさせ給たまう彼の比丘尼びくにには雲泥勝うんでいすくれてありと仏は靈山りやうぜんにて御
覽あるらん、彼の比丘尼びくにの御名みなを一切衆生喜見仏いっさいしゆじやうきけんぶつと申もうすは別の事べち
にあ

らず、今の妙法みやうほう尼御前あまごぜんの名にて侯べし、王となる人は過去かこにても
現在げんざいにても十善じじゆぜんを持つ人の名なり名は。かはれども師子ししの座は一
なり、此の名も。かはるべからず、彼の仏の御言みことばをさかがへす尼だにも
也、一切衆生喜見いっさいしゆじやうきけんぶつ仏となづけらる、是は仏の言をたがへず此の袈婆しゃば
世界せかいまで名を失うしなひ命をすつる尼なり、彼は養母として捨たまて給たまはず是
は他人たにん

として捨たまてさせ給たまはば偏頗へんげの仏なり、争いでかさる事は侯べき、況や

其中衆生悉是吾子の經文の如くならば今の尼は女子なり彼の尼
は養母なり、養母を捨てずして女子を捨つる仏の御意みこころやあるべき、
此の道理どうりを深く御存知ごぞんじあるべし、しげければとどめ候そうぢい畢おわぬ。

日蓮にちれん

花押かおう

妙法尼御前みよほうにあまごぜん

三二一七 内房女房御返事にやうぼうごへんじ

1420

p

内房よりの御消息しようそくに云く八月九日父にてさふらひし人の百箇日
に相あい当あたりてさふらふ、御布施ふせ料りょうに十貫じゆまいらせ候な乃至いしあなかしこ、
あなかしこ、御願文がんもんの状じやうに云く「読誦どくじゆし奉たてまつる妙法蓮華經みよほうれんげきよつ一部いぶ読誦どくじゆし

たてまつ ほうべん じゅうりょうほん 三十卷 読誦し 奉る 自我 偈三百卷 唱え 奉る
みょうほうれんげきょう 妙法蓮華經の題名 五万返に云云 同状に云く「伏して 惟れば 先考の 幽
でしはるか せんり さんが しの まのあたみょうほう だいめい おもんみ
靈生存の時 弟子遙に千里の山河を凌ぎ 親子 妙法の題名を受け 然る
後三十日を経ずして 永く一生の終りを告ぐ」等云云、

又云く「嗚呼閻浮の露庭に白骨仮りに塵土と成るとも靈山の界上に亡魂定んで覺蕊を開かん」又云く「弘安三年女弟子大中臣氏敬白す」等云云。

夫れ以れば一乗妙法蓮華經は月氏国にては一由旬の城に積み日本国にては唯八卷なり、然るに現世後生を祈る人、或は八卷、或は一卷、或は方便寿量、或は自我偈等を讀誦し讚歎して所願を遂げ給ふ先例之多し此は且らく之を置く、唱へ奉る妙法蓮華經の題名五万返と云云、此の一段を宣べんと思いて先例を尋ぬるに其の例少なし、或は一返二返唱へて利生を蒙る人粗これ有るか、いまだ五万返の類を聞かず、但し一切の諸法に亘りて名字あり其の名字皆其の体徳を顯はせし事なり、例せば石虎將軍と申すは石の虎を射徹したりしかば石虎將軍と申す、的立の大臣と申すは鉄的を射とをしたりしかば的立の大臣と名く、是皆名に徳を顯はせば今

妙法蓮華經と申し候は一部八卷・二十八品の功德を五字の内に
収め候、譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し、一塵に
三千を尽す法門是なり、南無と申す字は敬う心なり随う心なり、
故に阿難尊者は一切經の如是の二字の上に南無等云云、
南岳大師云く南無妙法蓮華經云云、天台大師云く稽首南無
妙法蓮華經云云、阿難尊者は斛飯王の太子・教主釈尊の御弟子な
り、釈尊御入滅の後六十日を過ぎて迦葉等の一千人・文殊等の
八万人・大閣講堂にして集会し給いて仏の別を悲しみ給ふ上、我等
は多年の間・随逐するすら六十日の間の御別を悲しむ、百年千年
乃至末法の一切衆生

は何をか仏の御形見とせん、六師外道と申すは八百年以前に二天
・三仙等の説き置きたる四韋陀・十八大經を以てこそ師の名残と
は伝へて候へいざさらば我等五十年が間・一切の声聞・大菩薩の聞

き持ちたるたも 経経きぎぎ を書き置き

て未来みらいの衆生しゅじょうの眼目がんもくとせんと僉議せんぎして、阿難尊者あなんそんじゃを高座こうざに登せて仏

を仰あおぐ如ごとく、下座げざにして文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱へたり

しかば、阿難尊者あなんそんじゃ此れを承うけ取りて如是によぜ我聞がもんと答ふ、九百九十九人

の大阿羅漢等あらかんは筆を染めて書き留とどめ給たまいぬ、一部八卷・二十八品の

功德くどくは此の五字ごじに収おさめて候へばこそ文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつかくは唱へさせ

給たまう

らめ、阿難尊者又さぞかしとは答え給うらめ、又万二千の声聞
はちまん 八万の大菩薩二界八番の雜衆も有りし事なれば合点せらるらめ、
てんだいちしゃだいし 天台智者大師と申す聖人・妙法蓮華經の五字を玄義十卷・一千丁
たまい に書き給いて候、其の心は華嚴經は八十卷・六十卷・四十卷・阿含經
だいしつほうとう 数百卷・大集方等数十卷・小品般若四十卷・六百卷・涅槃經四十卷・
なしいがっし 三十六卷、乃至月氏・竜宮・天上・十方世界の大地微塵の一切經
みょうほうれんげきょう は妙法蓮華經の經の一字の所従なり、妙樂大師重ねて十卷造る
しやくせん を釈籤と名けたり、天台以後に渡りたる漢土の一切經新訳の諸經
みなほけきょう は皆法華經の眷屬なり云云、日本の伝教大師重ねて新訳の經經
だいにちきょう の中の大日經等の真言の經を皆法華經の眷屬と定められ候い畢ん
ただ ぬ、但し弘法・慈覺・智証等は此の義に水火なり此の義後に粗書き
たと たり、譬へば五畿・七道・六十六箇国・二つの島・其の中の郡と莊と村
 と田と

畠と人と牛馬と金銀等は皆日本国の三字の内に備りて一つも闕く
る事なし、又王と申すは三の字を横に書きて一の字を豎さまに立て
たり、横の三の字は天・地・人なり、豎の一文字は王なり、須弥山と
申す山の大地をつきとをして傾かざるが如し、天・地・人を貫きて少
しも傾かざるを王とは名けたり、王に二つあり一には小王なり人王
天王是なり二には大王なり大梵天王是なり、日本国は大王の如し
国国の受領等は小王なり、華嚴經・阿含經・方等經・般若經・
大日經・涅槃經等の已今当の一切經は小王なり、譬へば日本国中の
国王受領等の如し、法華經は大王なり天子の如し、然れば華嚴宗・
真言宗等の諸宗の人人は国主の内の所従等なり、国国の民の身
として天子の徳を奪ひ取るは下剋上背上向下破上下乱等これなり、
設いいかに世間を治めんと思ふ志ありとも国も乱れ人も亡
びぬべし、譬へば木の根を動さんに枝葉静なるべからず大海の波あ

らからんに船おだやかなるべきや、華嚴宗・真言宗・念仏宗律僧・
禅僧等我が身持戒正直に智慧いみじく尊しといへども、其の身既に
下剋上の家に生れて法華經の大怨敵となりぬ、阿鼻大城を脱るべ
きや、例せば九十五種の外道の内には正直有智の人多しといへど
も、二天三仙の邪法を承けしかば終には悪道を脱るる事なし。

然るに今の世の南無阿弥陀仏と申す人、南無妙法蓮華經と申す人を、或は笑ひ、或はあざむく、此れは世間の譬に稗の稻をいとひ家主の田苗を憎む是なり、是国将なき時の盗人なり日の出でざる時のなり、夜打強盜の科めなきが如く地中の自在なるが如し、南無妙法蓮華經と申す国将と日輪とにあはば大火の水に消へみ猴が犬に値うなるべし、当時南無阿弥陀仏の人人南無妙法蓮華經の御声の聞えぬれば、或は色を失ひ、或は眼を瞶らし

或は魂

を滅し、或は五体をふるふ、伝教大師云く日出れば星隠れ巧を見て拙きを知る、竜樹菩薩云く謬辞失い易く邪義扶け難し、徳慧菩薩云く面に死喪の色有り言に哀怨の声を含む、法歳云く昔の義虎今は伏鹿なり等云云、此等の意を以て知ぬべし、妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし、毒藥変じて薬となる妙法蓮華經の五字は

悪変じて善と

なる、玉泉と申す泉は石を玉となす此の五字は凡夫を仏となす、
されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば
即身成仏の人なり、石変じて玉と成るが如し孝養の至極と申し候
なり、故に法華經に云く、「此の我が二りの子已に仏事を作しぬ」又
云く、「此の二りの子は是我が善知識なり」等云云。

乃往過去の世に一の大王あり名を輪陀と申す、此の王は白馬の
鳴くを聞きて色もいつくしく力も強く供御を進らせざれども食に
あき給ふ他国の敵も胃を脱き掌を合す、又此の白馬鳴く事は
白鳥を見て鳴きけり、然るに大王の政や悪しかりけん又過去の
悪業や感じけん、白鳥皆失せて一羽もなかりしかば白馬鳴く事な
し、白馬鳴か

ざりければ大王の色も変じ力も衰へ身もかじけ謀も薄くなりし

故に国既に乱れぬ、他国よりも兵者せめ来らん、何とかせんに歎き
し程に、大王の勅宣に云く、国には外道多し、皆我が帰依し奉る仏法
も亦かくの如し、然るに外道と仏法と中悪し何にしても白馬を鳴か
せん方を信じて一方を我が国に失ふべしと云云、爾の時に一切の
外道集りて

白鳥を現じて白馬を鳴かせんとせしかども白鳥現ずる事なし、昔は
雲を出だし霧をふらし風を吹かせ波をたて身の上に火を出だし水
を現じ人を馬となし馬を人となし一切自在なりしかども、如何が
しけん白鳥を現ずる事なし

かりき、爾その時に馬鳴菩薩めみょうぼさつと申もつす仏子ぶつしあり十方じゅうほうの諸仏しよぶつに祈願しんげんせしかば白鳥はくばう則すなはち出いで来きりて白馬はくば則すなはち鳴なけり、大王たいおう此こゝを聞食きこしめし色いろも少すくし出いで来きり力ちからも付つきはだへもあざやかなり、又白鳥はくばう又白鳥はくばうと千ちの白鳥はくばう出現しゆつげんして千ちの白馬はくばう一時いちじに鷄にわとりの時ときをつくる様ように鳴なきしかば、大王たいおう此こゝの聲こゑを聞食きこしめし色いろは日輪にちりんの如ごとし膚くわは月つきの如ごとし力ちからは那羅延ならえんの如ごとし謀まうは梵王ぼんのうの如ごとし、爾その時に綸言汗りんげんの如ごとく出いでて返かへらざれば一切いっさいの外道等げどう其その寺てらを仏寺ぶつてらとなしぬ。

今いま日本国にほんこく亦またかくの如ごとし、此こゝの国くには始めは神代かみよなり漸ようやく代よの末すえになる程ほどに人の意曲とんじんちり貪瞋癡しうじゆう・強盛きやうじやうなれば神かみの智浅ちせんく威いも力ちからも少すくし、氏子共うぢこどもをも守護しゆごしがたかりしかば漸ようやく仏法ぶつぽうと申もつす大法だいほうを取り渡わたして人の意いも直ただちに神かみも威勢強いせいかりし程ほどに、仏法ぶつぽうに付つき謬あやまり多おほく出来しゆつたせし故ゆゑに国くにあやうかりしかば、伝教大師でんきやうだいし・漢土かんどに渡わたりて日本にほんと漢土かんどと月氏がつし

との聖教を勸へ合せて、おろかなるをば捨て賢きをば取り偏頗もなく勸へ給いて、法華經の三部を鎮護國家の三部と定め置き候しを、弘法大師・慈覺大師・智証大師と申せし聖人等、或は漢土に事を寄せ・或は月氏に事を寄せて法華經を・或は第三・第二・或は戲論・或は無明の辺域等と押し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候

いし程に、代漸く下剋上し此の邪義既に一国に弘まる、人多く悪道に落ちて神の威も漸く滅し氏子をも守護しがたき故に八十一乃至八十五の五主は・或は西海に沈み・或は四海に捨てられ今生には大鬼となり後生は無間地獄に落ち給いぬ、然りといえども此の事知れる人なければ改る事なし、今日蓮此の事をあらあら知る故に國の恩を報ぜんとするに日蓮を怨み給ふ。

此等はさて置きぬ氏女の慈父は輪陀王の如し氏女は馬鳴菩薩の

ごと
如し、白鳥は法華經の如し白馬は日蓮が如し・南無妙法蓮華經は
はくば
白馬の鳴くが如し、大王の聞食して色も盛んに力も強きは、過去の
ごと
慈父が氏女の南無妙法蓮華經の御音を聞食して仏に成せ給ふが
ごと
如し。

こうあん
弘安三年八月十四日

にちれんかお
日蓮花押

白米一斗・荷みやうがの子はじかみ一つと送り給ひ候い畢おわんぬ。

仏には春の花秋の紅葉・夏の清水・冬の雪を進まいらせて候人人皆ひとびとみな仏に成らせ給たまふ、況や上一人は寿命じゆみやうを持たせ給ひ下万民ばんみんは珠たまよりも重しげくし候稻米よねを法華經ほけきやうにまいらせ給う人争いかにか仏に成らざるべき、其の上世間せけんに人の大事だいじとする事は主君しゅくんと父母ふぼとの仰せなり、父母ふぼの仰せを背そむけば不孝ふこうの罪つみに墮おちて天に捨てられ、国主こくしゅの仰せおほを用もちいざれば違勅いちよくの者と成りて命をめさる、されば我等われらは過去遠遠劫かこおんのんこうより菩提ぼだいをねがひしに、或あるは国をすて、或あるは妻子さいしをすて、或あるは身をすてなんどして、後生菩提ごしやうぼだいをねがひし程にすでに仏になり近づきし時は、一乘いちじやう・妙法蓮華經みよつほつれんげきやうと申もうす御經あに値あいまいらせ候いし時

は、第六天だいろくてんの魔王まおうと申すもう三界さんがいの主ぬしをはします、すでに此こゝのものものの仏ぶつに
ならんとするに二の失とがあり、一には此こゝのものものの三界さんがいを出いざるならば
我が所従しよじゆうの義ぎをはなれなん、二には此こゝのものものの仏ぶつになるならば此こゝの
もの

が父母ふぼ・きようだい・兄弟等あにいもうとも又娑婆世界しゃばせかいを引き越こしなん、いかがせんとして身を
種種しゆじゆに分けて、或あるは父母ふぼにつき、或あるは国主こくしゆにつき、或あるは貴きき僧そうとな
り、或あるは悪あくを勧めすすめ、或あるはおどし、或あるはすかし、或あるは高僧こうそう、或あるは大僧だいそう
・或あるは智者ちしや、或あるは持斎じさい等に成りて、或あるは華嚴けごん、或あるは阿含あこん、或あるは念仏ねんぶつ、或ある
は真言等しんごんを以て法華經ほけきようにすすめかへて、仏ぶつになさじとたばかり候まをな
り、法華經ほけきよう第五

の卷まきには末法まつぽうに入りては大鬼神きじん第一だいいちには国王こくおう・大臣だいじん・万民ばんみんの身みに入
りて法華經ほけきようの行者ぎやうじやを、或あるは罵ののしり、或あるは打ち切りて、それに叶あはずん
ば無量無辺むりやうむへんの僧げんと現げんじて一切經いっさいきようを引ひいてすかすべし、それに叶あはず

んば二百五十戒・三千さんぜんの威儀いぎを備へたる大僧と成りて国主こくしゆをすかし
国母をたばらかして、或あるはながし・或あるはころしなんとすべしと説か
れて候。

又七の卷の不軽品・又四の卷の法師品・或は又二の卷の譬喩品、
或は涅槃經四十卷・或は守護經等に委細に見へて候が、当時の世間
に少しもたがひ候はぬ上、駿河の国賀島の莊は殊に目の前に身にあ
たらせ給いて覺へさせ給い候らん、他事には似候はず、父母国主等
の法華經を御制止候を用い候はねば還つて父母の孝養となり国主
の祈りとなり候ぞ、其の上・日本国はいみじき国にて候神を敬ひ仏
を崇むる国なり、而れども日蓮が法華經を弘通
し候を上一人より下万民に至るまで御あだみ候故に、一切の神を
敬ひ一切の仏を御供養候へども其の功德還つて大悪となり、やいと
の還つて悪瘡となるが如く薬の還つて毒となるが如し、一切の仏神
等に祈り給ふ御祈りは還つて科と成りて此の国既に他国の財と成
り候、又大なる人人皆平家の亡びしが様に百千万億すぎて御歎き
たるべきよし、兼てより人人に申し聞せ候畢んぬ、又法華經をあだ

む人の科とがにあたる分齊ぶんざいをもつて還かえつて功德くどくとなる

分齊ぶんざいをも知らせ給たまうべし、例せば父母ふぼを殺す人は何いかなる大善根ぜんこんを

なせども天是これを受け給たまう事なし、又法華經ほけきょうのかたきとなる人をば

父母ふぼなれども殺しぬれば大罪たいざい還かえつて大善根ぜんこんとなり候、設たいじゅつぼう

三世さんぜの諸仏しよぶつの怨敵おんてきなれども法華經ほけきょうの一句いっくを信じぬれば諸仏しよぶつ捨て

給たまう事なし、是これを以もつて推すいせさせ給たまへ、御使おんつかいいそぎ候へば委くわしくは

申もうさず候、又又申もうすべく候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

八月二十二日

日蓮にちれん 花押かおう

こめ 牙一俵やいごめうりなすび等・仏前ぶつぜんにささげ申し上候畢おわんぬ。
 うらぼん 孟蘭盆と申し候事こうじは仏おんてしの御弟子ごだうしの中に目連尊者もくれんそんじゃと申し、舍利弗しゃりほつ
 ちえ 智慧第一ちゐだいいち・神通第一じんつうだいいちと申し須弥山しゆみせんに日月にちがつのならば大王だいおう
 さう にならびて左右さうの臣おみのごとくにをはせし人なり、此この人の父をば吉懺きっせん師子ししと
 もう 申し母をば青提女しよくだいによと申し、其その母の慳貪けんどんの科とがによつて餓鬼道がきだうに墮おち
 もくれんそんじゃ 候しを目連尊者もくれんそんじゃのすくい給たまうより事をこりて候、其その因縁いんねんは母は
 お 餓鬼道がきだうに墮おちてなげき候けれども目連もくれんは凡夫ほんぶなれば知ることなし、
 ようしちやう 幼少ようしちやうにして外道げだうの家に入り四し大だい經じやう・十八じゅうはち大だい經じやう
 もう と申す外道げだうの一切いっさい經きやうをならいつくせども、いまだ其その母の生所なまところをし
 しゃりほつ らず、其その後のち十三じゅうさんのとし舍利弗しゃりほつとともに釈迦しゃか仏ぶつにまいりて御弟子おんてしと

なり、見惑をだんじて初果の聖人となり修惑を断じて阿羅漢となりて三明をそなへ六通をへ給へり、天眼をひらいて、三千大千世界を明鏡のかげのごとく御らむありしかば、大地をみとおし三悪道を見る

事氷の下に候魚を朝日にむかいて我等がとをしみるがごとし、其の中に餓鬼道と申すところに我が母あり、のむ事なし食うことなし、皮はきんてうをむしれるがごとく骨はまるき石をならべたるがごとし、頭はまりのごとく頸はいとのごとし腹は大海のごとし、口をはり手を合せて物をこへる形はうへたるひるの人のかを・かげるがごとし、先生の子をみて、なかとするすがたうへたるかたちたとへをとるに及ばず、いかんがかなしかりけん。

法勝寺の修行舜觀がいわうの嶋にながされてはだかにてかみくびつきにうちをい・やせをとるへて海へんにやすらいてもくづをとり

てこしにまき魚を・みつけて右の手にとり口にかみける時、本つか
いしわらわの

たづねゆきて見し時と、目連尊者もくれんそんじゃが母を見しといづれかをろかなるべきかれはいますこしかなしさわまさりけん。

目連尊者はあまりのかなしさに大神通じんつうをげんじ給ひはん飯をまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははん飯をにぎり左の手にてははん飯をかくして口にをし入れ給たまいしかば、いかんがしたりけんはん飯変じて火となり・

やがてもへあがり、とうしびをあつめて火をつけたるがごとくぱともへあがり、母の身のごごことやけ候しを目連見もくれん給たまいて、あまりあわてさわぎ大神通じんつうを現げんじて大なる水をかけ候しかば、其その水たきぎとなりていよいよ母の身のやけ候し事こそあはれには候しが、其そのの時とき目連もくれんみずからの神通じんつうかなわざりしかばはしりかへり須臾しゆゆに仏

にまいりてなげき申せしやうは、我が身は外道げどうの家に生れて候しが仏おんの御弟子でしになりて阿羅漢あらかんの身をへて、三界さんがいの生をはなれ三明六通さんみようろくつう

の羅漢らかんとはなりて候へども、乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦にあわせて候は、心うしとなげき候しかば、仏いけ説いわいて云く汝なんじが母はつみふかし汝なんじ一人が力及ぶべからず、又何いずれの人なりとも天神てんじん・地神邪魔外道道士四天王・帝釈梵王の力も及ぶべからず、七月十五日に十方じゅつぽうの聖僧せいそうをあつめて百味をんじきをととのへて母のくをはすくうべしと云云、目連もくれんの仰おほせのごとく行いしかば其その母は餓鬼道がき いじう一劫いつじうの苦を脱まぬかれ給たまいきと、盂蘭盆經うらぼんと申もうす經にとかれて候、其によつて滅後末代めつごまつだいの人人ひとひとは七月十五日に此の法を行い候なり、此は常のごとし。

にちれん
日蓮案いちわじて云く目連尊者もくれんそんじやと申ませし人は十界じじうかいの中に声聞道しやうもんの人。
二百五十戒をかたく持つ事石のごとし、三千さんぜんの威儀いぎを備えてかけざる事は十五夜の月のごとし、智慧ちえは日ににたり神通じんつうは須弥山しゆみせんを十四さうまき大山をうごかせし人ぞかし、かかる聖人しやうにんだにも重報の乳

母の恩ほうじがたし、あまさへほうぜんとせしかば大苦をまし給たまい
き、いまの僧等の二百五十戒は名計ぼかりにて事をかいによせて人をた
ぼらかし一分いちぶんの神通じんつうもなし、大石の天にのぼらんとせんがごとし、
智慧ちえは牛うしにるいし羊ひつぎにことならず、設たい千万人ばんにんをあつめたりとも
父母ふぼの一苦すくうべし

や、せんするところは目連尊者が乳母の苦をすくわざりし事は、

小乗しよじゆの法を信じて二百五十戒と申す持齋じさいにてありしゆへそかし、

されば浄名経じようみやうきよと申す経には浄名居士じようみやうこじと申す男目連房もくれんをせめて

云く汝なんじを供養くやうする者は三悪道さんあくどうに墮おつ云云、文の心は二百五十戒の

たうとき目連尊者もくれんそんじやをくやうせん人は三悪道さんあくどうに墮おつべしと云云、此又

ただ目連一人もくれん

がきくみみにはあらず、一切いっさいの声聞しよもん乃至末代ないしまつだいの持齋等じさいがきくみみ

なり、此じよの浄名経じようみやうきよと申すは法華経ほけきよの御ごためには数十番じゆじゆの末すゑへの

郎らう従じゆにて候ゆう、詮せんするところは目連尊者もくれんそんじやが自身じしんのいまだ仏ぶつにならざ

るゆへそかし、自身じしん仏ぶつにならずしては父母ふぼをだにもすくいがたしい

わうや他人たにんをや。

しかるに目連尊者もくれんそんじやと申す人は法華経ほけきよと申す経きよにて正直捨方便しようちきしやほうべんと

て、小乗しよじゆの二百五十戒にひやくごじゆ立ちどころになげすて南無妙法蓮華経なむみようれんげきよと

申せしかば、やがて仏になりて名号をば多摩羅跋栴檀香仏と申す、
此の時こそ父母も仏になり給へ、故に法華経に云く我が願既に満ち
衆の望も亦足る云云、目連が色身は父母の遺体なり目連が色身仏
になりしかば父母の身も又仏になりぬ。

例せば日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に平氏の太
将安芸の守清盛と申せし人をはしき、度度の合戦に国敵をほろぼし
て上太政大臣まで官位をきわめ当今はまごととなり、一門は雲客
月卿につらなり、日本六十六国島二を掌の内にかいにぎりて候い
しが、人を順うこと大風の草木をなびかしたるやうにて候しほど
に、心を

ごり身あがり結句は神仏をあなづりて神人と諸僧を手ににぎらむ
とせしほどに、山僧と七寺との諸僧のかたきとなりて、結句は去る
治承四年十二月二十二日に七寺の内の東大寺・興福寺の両寺を焼

きはらいてありしかば其の大重罪・入道の身にかかりてかへると
し養和元年潤二月四日身はすみのごとく面は火のごとくすみのを
これる

がやうにて結句は炎身より出でてあつちじにに死ににき、其の大
重罪をば一男宗盛にゆづりしかば西海に沈むとみへしかども東天
に浮び出でて、右大将頼朝の御前に縄をつけてひきすへて候き、三
男知盛は海に入りて魚の

糞となりぬ、四男重衡は其の身に繩をつけて京かまくらを引かれて
結句なら七代寺にわたされて、十万人の大衆等我が仏のかたき
なりとて一刀づつきざみぬ、悪の中の大悪は我が身に其の苦をう
くるのみならず子と孫と末へ七代までもかかり候けるなり、善の中
の大善も又かくのごとし、目蓮尊者が法華経を信じまいらせし
大善

は我が身仏になるのみならず父母仏になり給う、上七代下七代上
無量生下無量生の父母等存外に仏となり給う、乃至子息夫妻
所従檀那無量の衆生三悪道をはなるのみならず皆初住
妙覚の仏となりぬ、故に法華経の第三に云く「願くは此の功德を
以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

されば此等をもつて思うに貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち
給へり、此僧は無戒なり無智なり二百五十戒一戒も持つことなし

さんぜん
三千の威義一も持たず、智慧は牛馬にるいし威儀は猿猴にて候へども、あをぐところは釈迦しゃか・仏信ずる法は法華經ほけきょうなり、例せば・の珠たまをにぎり竜の舍利しゃりを戴くがごとし、藤は松にかかりて千尋せんじんをよぢ鶴は

羽たのを待みて万里ばんりをかける此は自身じしんの力にはあらず、治部房も又かくのごとし、我が身は藤のごとくなれども法華經ほけきょうの松にかかりて妙覺みょうかくの山にもものぼりなん、一乗いちじょうの羽をたのみて寂光じやくかうの空にもかけりぬべし、此の羽をもつて

ふぼ・祖父そふ・祖母そぼ乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり、あわれ・いみじき御たからは・もたせ給たまいてをはします女人にょにんかな、彼の竜女りゆうにょは珠たまをささげて仏となり給ふ、此女人は孫を法華經ほけきょうの行者ぎょうじやとなして・みちびかれさせ給たまうべし、事事じじそうそうにて候へば・くはしくは申もうさず、又又申もうすべく候、恐きょう恐きょう。

七月十三日

にちれんかおう
日蓮花押

治部殿うばごぜん御返事こへんじ

四歳御作

1431P

細美帷かたびら 一つ送り給ひ候い畢おわんぬ、善導ぜんどう和尚わじょうと申もうす人は漢土かんどに
 臨りんしと申もうす国の人なり、幼少ようしょうの時・密州みしゅうと申もうす国の明勝めいしょうと申もうす人
 を師とせしが、彼の僧そうは法華經ほけきょうと 浄名經じょうみやうきょうを尊重そんちゆうして我も読誦どくじゆし
 人をもすすめしかば善導ぜんどうに此れを教ゆ、善導ぜんどう此れを習ならいて師しの如ごとく
 行ぜし程かに過去かこの宿習しゆくじゆにや有りけん、案いじて云いわく仏法ぶつぽうには無量むりやうの
 行あり機きに随したがいて皆利益みなりやくあり・教ならいみじと・いへども機きにあたらざれ
 ば虚ききがごとし、されば我れ法華經ほけきょうを行なずるは我が機き
 に叶あはずは、いかんが有あるべかるらん、教よには依よるべからずと思おもいて
 一切いっさい経蔵きやうざうに入り両眼りやうげんを閉しめて経きやうをとる觀無量寿經くわんむりやうじゆきやうを得えたり、披見ひけん

すれば此の経に云く「未来世の煩惱の賊に害せらるる者の為清淨の業を説く」等云云、華嚴経は二乗のため法華経・涅槃経等は五乘に・わたれども・たいしは聖人のためなり、末法の我等が為なる経は
ただかんきよう
唯観 経にかぎれり、釈尊最後の遺言には涅槃経にはすぐべから
ず、彼の経には七種の衆生を列ねたり、第一は入水則没の一闍提
人なり生死の水に入りしより已来いまに出でず譬へば大石を大海に
投入たるがごとし、身重くして浮ぶことを習はず常に海底に有り
此れを常没と名く、第二をば出已復没と申す譬へば身に力有りと
も浮ぶこ

とをならはざれば出で已つて復入りぬ此れは第一の一闍提の人には
有らねども一闍提のごとし又常没と名く、第三は出已不没と申す。
生死の河を出でてより・このかた没することなし、此れは舍利弗等

のしやうせん声聞なり、第四は出已そく即住第五は觀方へい第六は浅処せん第七は到
彼岸等ひがなり、第四だい第五ご第六ろく第七しちは縁覺えんかく菩薩ぼさつなり、釈迦しやか如来にょらい世
に出いでさ

せ給たまいて一代いちだい五時ごじの經經きやうぎやうを説とき給たまいて第三だいさん已上いじやうの人人ひとびとを救すくい
給たまい畢おわんぬ、第一だいいちは捨すてさせ給たまいぬ、法蔵ほうぞう比丘びくこ阿彌陀あみだ仏ぶつ此これをう
けとつて四十八願しじゅうはちがねを發おこして迎むかえとらせ給たまう、十方三世じゅうぽうさんぜの仏ぶつと
釈迦しやか仏ぶつとは第三だいさん已上いじやうの一切衆生いっさいしじやう

を救い給う、あみだ仏は第一第二を迎えとらせ給う、而るに今末代の凡夫は第一第二に相当れり、而るを淨影大師・天台大師等の他宗の人師は此の事を弁えずして九品の淨土に聖人も生ると思へりりが中のりなり、一向末代の凡夫の中に上三品は遇大始めて大乘に値える凡夫、中の三品は遇小始めて小乘に値へる凡夫、下の三品は遇悪一生成悪無間非法の荒凡夫、臨終の時始めて上の七種の衆生を弁えたる智人に行きあひて岸の上の経經をうちすてて水に溺るるの機を救はせ給う、觀經の下品下生の大あくしう悪業に南無阿弥陀仏を授けたり、されば我れ一切經を見るにほけきよう法華經等は末代の機には千中無一なり、第一第二の我等衆生は第三已上の機の為に説かれて候、法華經等を末代に修行すれば身は苦しんで益なしと申して善導和尚は立所に法華經を抛げすてて觀經を行ぜしかば三昧發得して阿弥陀仏に見參して重ねて此の

法門を渡し給う四帖の疏是なり、導の云く「然るに諸仏の大悲は苦なる者に於て心偏に常没の衆生を愍念す是を以て勧めて浄土に歸せしむ亦水に溺るる人の如く急に須く偏に救うべし岸上の者何ぞ用いて濟うことを為さんと云云、又云く「深心と言えるは即ち是れ深信の心なり、亦二種有り、一には決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁有ること

無しと深信す」又云く「一には決定して彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受したもうこと疑無く慮り無く彼の願力に乗ずれば定めて往生を得ると深信す」云云、此の釈の心は上にかき顯して候・浄土宗の肝心と申すは此れなり、我等末代の凡夫は涅槃經の第一・第二なり、さる時に釈迦仏の教には出離の縁有ること無し、法蔵比丘の本願にては「定得往生と知るを三心の中の深心とは

申すなり」と等云云、此又導和尚の私儀には非ず、綽禪師と
申せし人の涅槃經を二十四反かうぜしが曇鸞法師の碑の文を見て
立所に涅槃經を捨てて觀經に遷りて後此の法門を導には教えて候
なり、鸞法師と申せし人は齊の代の人なり漢土にては時に独歩の人
なり、初には四論と涅槃經とをかうぜしが菩提流支と申す三蔵に
値いて四論と涅槃經を捨て觀經に遷りて往生をとげし人なり、三代
が間

伝え候法門なり、漢土・日本には八宗を習う智人も正法すでに
過ぎて像法に入りしかば、かしこき人人は皆自宗を捨てて浄土の
念仏に遷りし事此なり、日本国のいろはは天台山の慧心の往生
要集此なり、三論の永観が十因・往生講の式・此等は皆此の法門
をうかがい得たる人人なり、法然上人も亦爾なり云云。

日蓮云く此の義を存ずる人人等も但恒河の第一第二は一向浄土
の機と云云、此れ此の法門の肝要か、日蓮・涅槃經の三十二と三十
六を開き見るに第一は誹謗正法の一闡提常没の大魚と名けたり、
第二は又常没其の第二の人を出ださば提婆達多・瞿伽梨・善星等
なり、此れは誹謗五逆の人人なり、詮する所第一第二は謗法と
五逆なり、法蔵比丘の「設い我仏を得んに十方衆生至心に信樂
して我が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺
を取らじ唯五逆と誹謗正法とを除く」云云、此の願の如きんば

ほうぞう びく ごと 法蔵比丘は恒河の第一第二を捨てはててこそ候いぬれ、導和尚の
如くならば末代の凡夫阿弥陀仏の本願には千中無一なり、法華経
の結経たる普賢経には五逆と誹謗正法は一乗の機と定め給いた
り、されば末代の凡夫の為には法華経は十即十生・百即百生な
り、善導和尚が

義に付いて申す詮は私案にはあらず阿弥陀仏は無上念王たりし時
娑婆世界は已にすて給いぬ、釈迦如来は宝海梵志として此の忍土を
取り給い畢んぬ、十方の浄土には誹謗正法と五逆と一闡提とをば
迎うべからずと阿弥陀仏・十方の仏誓い給いき、宝海梵志の願に
云く「即ち十方浄土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべし」
云云、法華経に云く「唯我一人のみ能く救護を為す」等云云。
唯我一人の経文は堅きやうに候へども釈迦如来の自義にはあら
ず、阿弥陀仏等の諸仏・我と娑婆世界を捨てしかば教主釈尊・

唯我一人と誓つて・すでに娑婆世界に出で給いぬる上はなにをか
疑い候べき・鸞・綽・導・心・觀・然等の六人の人人は智者なり日蓮
は愚者なり非学生なり、但し上の六人は何れの国の人ぞ三界の
外の人か六道の外の衆生か、阿弥陀仏に値い奉りて出家受戒して
沙門となりたる僧か、今の人人は將門・純友・清盛・義朝等には種性

も及およばず威徳いとくも足らず、心のがうさは申もうすばかりなけれども朝敵あそびとなりぬれば其その人ならざる人ひと人も將門つとむとか純友よしたもかと舌したにうちからみて申もうせども・彼の子孫しそん等も・とがめず、義朝よしたもなんと申もうすは故ゆゑ右大將家うちぎみの慈父ちちぎみなり、子を敬やぶいまいらせば父をこそ敬やぶいまいらせ候まうべきに・いかなる人ひと人も義朝よしたも為朝まうなんと申もうすぞ、此これ則すなはち王法しげの重おもく逆臣つみの罪つみ

のむくみなり、上の六人も又かくのごとし、釈迦しやくか如来にやらい世よに出いでさせ給たまいて一代いちだいの聖教しやうきやうを説ときをかせ給たまう、五十年ごじゅうねんの説法せつぽうを我われと集あめて浅深せんじん勝劣しょうれつ虚妄こもう眞実しんじつを定じやうめて四十余年よんじゅうよねんは未いまだ眞実しんじつを顕あらわさず已い今こん当とう第一等だいいちと説たまかせ給たまいしかば多宝たぼう・十方じゅうぽうの仏ぶつ眞実しんじつなりと加判かはんせさせ給たまいて定じやうめをかれて候まうを・彼の六人は未み顕けん眞実しんじつの觀くわん經きやうに依よりて皆みな是これ眞実しんじつ

の法華經ほけきやうを第一だいいち第二だいいちの惡人あくにんの為ためにはあらずと申もうさば・今いまの人ひと人は

彼にすかされて数年を経たるゆへに・將門・純友等が所従等彼を
用いざりし百姓等を・或は切り・或は打ちなんどせしがごとし、彼
をおそれて従いし男女は官軍に・せめられて彼の人人と一時に水火
のせめに値いしなり。

今・日本国の一切の諸仏・菩薩・一切の經を信ずるやうなれども・

心は彼の六人の心なり身は又彼の六人の家人なり、彼の將門等は
官軍の向はざりし時は大将の所従知行の地且らく安穩なりしやう
なりしかども違勅の責め近づきしかば、所は修羅道となり男子は
厨者の魚をほふるがごとし、炎に入り水に入りしなり、今・日本
も又かく

のごとし、彼の六人が僻見に依つて今生には守護の善神に放されて
三災・七難の国となり後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城の
炎に入るべし、法華經の第五の卷に末代の法華經の強敵を仏記し置

き給たまえるは如ごと六通羅漢ろくつうらかんと云云、上の六人は尊貴そんきなること六通ろくつうを現げんずる羅漢らかんの如ごとし。

然しかるに淨蓮上人じよつにんの親父は彼等かれらの人人ひとびとの御檀那だんななり、仏教実ぶつぎようならば無間むげん・大城だいじょう疑たがいいなし、又君の心を演のぶるは臣おみ・親の苦をやすむるは子なり、目尊そんじゃ者は悲母ひもの餓鬼がきの苦を救い淨蔵・淨眼は慈父じふの邪見じゃけんを翻ひるがえりし給たまいき、父母ふぼの遺体いたいは子の色心しきしんなり、淨蓮上人じよつにんの法華經ほけきようを持ち給たまう御功德くどくは慈父じふの御力おんちからなり、提婆達多だいばだつたは阿鼻地獄あびじこくに墮おちしかども

てんのうによらい
天王如来の記を送り給いき彼は仏と提婆と同性一家なる故なり、
こ
此れは又慈父なり子息なり、浄蓮上人の所持の法華経いかで彼
しよつりよう
の故 聖霊 の功德とならざるべき、事多しと申せども止め畢んぬ
さんべん
三反人によませてきこしめせ、恐恐謹言。

六月二十七日

にちれん
日蓮 花押

返す返すするがの人人みな同じ御心と申させ給い候へ。

三三三

新池殿御消息

こうあん
弘安二年五月

五十八歳御作

1435p

八木三石送り給い候、今一乗 妙法蓮華経の御宝前に備へ奉りて
いちじよう みようほうれんげきよう
なむ 南無妙法蓮華経と只一遍唱えまいらせ候い畢んぬ、いとをしみの御
なむ みようほうれんげきよう ただいっべんとな おわ

子を靈山淨土へ決定無有疑と送りまいらせんがためなり。

そもそもいんが

抑因果のことはりは華と果との如し、千里の野の枯れたる草に

ほたるび

螢火の如くなる火を一つ付けぬれば須臾に一草・二草・十・百・千万

草につきわたりてもゆれば十町・二十町の草木・一時にやけつきぬ、

竜は一の水を手に入れて天に昇りぬれば三千世界に雨をふらし

しずく

候、小善なれども法華經に供養しまいらせ給いぬれば功德此くの

如し、

仏滅後・一百年と申せしに月氏國に阿育大王と申せし王ましましき

ぶつめつ

・一閻浮提・八万四千の國を四分が一御知行ありき、竜王をしたが

えんぶだい

へ鬼神を召し仕はせ給う、六万の羅漢を師として八万四千の石塔を

きじん

立て十萬億の金を仏に供養し奉らんと誓はせ給いき、かかる大王に

はちまん

てをはせし其の因位の功德をたづぬればただ土の餅一・釈迦仏に

そ

供養

くみじ

供養

くみじ

し奉りし故ぞかし、釈迦仏の伯父に斛飯王と申す王をはします、彼の王に太子あり阿那律となづく此の太子生れ給いしに御器一つ持ち出でたり、彼の御器に飯あり食すれば又出でき又出でき終に飯つくる事なし、故にかの

太子たいしのをさな名なをば如意にょいとなづけたり、法華經ほけきょうにて仏ぶつに成り給ふ
普明ふみょう如来にょらい是これなり、此こゝの太子たいしの因位いんいを尋たずぬればうへたる世よにひえの飯いひ
を辟支仏ひやくしぶつと申もうす僧そうに供養くようせし故ゆゑぞかし、辟支仏ひやくしぶつを供養くようする功德くどくす
ら此こゝくの如ごとし、況いはや法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを供養くようせん功德くどくは無量無辺むりょうむへんの仏ぶつ
を供養くようし進まいらする功德くどくにも勝すぐれて候まをなり。

そもそもにちれん

抑おさ日蓮にほんは日本にほんの者ものなり、此こゝの国くには南閻浮提えんぶだい七千由旬しちせんゆうじゆんの内に

はちまん

八万四千はちまんの国くにあり、十六じゅうろくの大国たいこく・五百ごひゃくの中国ちゆうこく・十千じゅうせんの小国しょうこく・無量むりょうの

ぞくさん

粟散国ぼくさんこくあり、其そのの中に月氏国がつしと申もうす国くには大国たいこくなり、彼かのの国くにに五天竺てんじく

あり、其そのれより東海とうかいの中に小島しょうじまあり日本にほん国こく是これなり、中天竺てんじくよりは十

万余里ばんにじゆの東ひがしなり、仏教ぶつぎやうは仏滅ぶつめつ度ど後ご正法しやうぽう一千年いちせんねんが間まは天竺てんじくにとどま

りて余国よこくに

にわたらず、正法しやうぽう一千年いちせんねんの末すえ像法ざうぽうに入いつて一十五年いちじゅうごねんと申まをせしに

漢土かんとへ渡わたる、漢土かんとに三百年さんひゃくねんすぎて百济国ひやくこくに渡わたる、百济国ひやくこくに一百年いちひゃくねん已

りて余国よこくに

にわたらず、正法しやうぽう一千年いちせんねんの末すえ像法ざうぽうに入いつて一十五年いちじゅうごねんと申まをせしに

漢土かんとへ渡わたる、漢土かんとに三百年さんひゃくねんすぎて百济国ひやくこくに渡わたる、百济国ひやくこくに一百年いちひゃくねん已

りて余国よこくに

にわたらず、正法しやうぽう一千年いちせんねんの末すえ像法ざうぽうに入いつて一十五年いちじゅうごねんと申まをせしに

漢土かんとへ渡わたる、漢土かんとに三百年さんひゃくねんすぎて百济国ひやくこくに渡わたる、百济国ひやくこくに一百年いちひゃくねん已

りて余国よこくに

上一千四百十五年と申せしに・人王三十代・欽明天皇の御代に

日本国に始めて釈迦仏の金銅の像

と一切経は渡りて候いき、今七百余年に及び候、其の間一切経は

五千余巻、或は七千余巻なり、宗は八宗・九宗・十宗なり、国は六

十六箇国・二つの島・神は三千余社・仏は一万余寺なり、男女よりも

僧尼は半分に及べり、仏法の繁昌は漢土にも勝れ天竺にもまされ

り。

但し仏法に入つて諍論あり、浄土宗の人人は阿弥陀仏を本尊と

し・真言の人人は大日如来を本尊とす・禪宗の人人は経と仏とをば

闇いて達磨を本尊とす、余宗の人人は念仏者・真言等に随へられ

何れともなければも・つよきに随ひ多分に押されて阿弥陀仏を本尊

とせり、現在の主師親たる釈迦仏を闇きて他人たる阿弥陀仏の十

万億の他

国へにげ行くべきよしをねがはせ給たまい候、阿弥陀仏は親ならず主ならず師ならず、されば一經いっけいの内・虚言そごしごの四十八願を立て給たまいたりしを愚おろかなる人人実ひとびとと思いて物狂はしく金拍子かねぼしをたたきおどりはねて念仏ねんぶつを申し親もつの国をば

いとひ出いでぬ、来迎らいじうせんと約束やくそくせし阿弥陀仏あみだぶつの約束やくそくの人は来らずちゅうつう中有ちゆうのたびの空まよに迷まよいて謗法ぼうぽうの業ごうにひかれて三悪道さんあくどうと申もつす獄屋ごくへおもむけば・獄卒ごくそつ・阿防あぼう・羅刹らせつ悦よろこびをなし・とらへからめてさひなむ事限りなし、これをあらあ

ら経文きょうもんに任せてまかかたり申せば日本にほんこくの男女なんよ四十九億九万四千八百二十八人まましますが某それがし一人を不思議ふしぎなる者に思おもいて余あの四十九億九万四千八百二十七人は皆敵みなと成りて、主師親しゅししんの釈尊しゃくそんをもちひぬだに不思議ふしぎなるに、かへりて或あるはのり或あるはうち或あるは処ところを追おひ或あるは讒言ざんげんして流罪るざいし死罪しざいに行いはるれば、貧あなる者は富あめるをへつらひ賤いやしき者は貴とつときを仰あおぎ無勢むじやうは多勢たせいにしたがう事ことなれば、適たまたま法華經ほけきょうを信まずる様ようなる人ひとも世間せけんをばばかり人ひとを恐おそれて多分たぶんは地獄じじくへ墮おつる事こと不便ふびんなり、但ただし日蓮にちれんが愚眼ぐがんにてやあるらん又また宿習しゆくじゆうにてや候まらん法華經ほけきょう最さい第一だいいち已い今こん当とう説難信難解唯我一人能為なんしんなんげただわれひとりのおうい救護くごと説まかれて候文まは如来にょらいの金言きんげんなり敢あえて私あの言ことにはあらず、当世とうせの人ひとは人師にんしの言ことを如来にょらいの金言きんげんと打うち思おもひ或あるは法華經ほけきょうに肩かたを並ならべて齊ひとしと思おもひ或あるは勝すぐれたり或あるは劣あるなれども機きにかなへりと思おもへり、し

かるに如來の聖教に隨他意隨自意と申す事あり、譬えば子の心に親の隨うをば隨他意と申す親の心に子の隨うをば隨自意と申す、諸經は隨他意なり仏一切衆生の心に隨ひ給ふ故に、法華經は隨自意なり一切衆生を仏の心に隨へたり、諸經は仏説なれども是を信ずれば衆生の心にて永く仏にならず、法華經は仏説なり仏智なり一字一点

も是を深く信ずれば我が身即仏となる、譬えば白紙を墨に染むれば黒くなり黒漆に白き物を入れるれば白くなるが如し毒藥變じて藥となり衆生變じて仏となる故に妙法と申す、然るに今の人人は高きも賤きも現在の父たる釈迦仏をばかるしめて他人の縁なき阿弥陀・大日等を重んじ奉るは是れ不孝の失にあらずや是れ謗法の人にあらず

や、と申せば日本國の人一同に怨ませ給うなり、其れもことはり

なりまがれる木はすなをなる繩をにくみいつはれる者はただしき
政りごとをば心にあはず思うなり。

我が朝人王九十一代いちだいの間に謀叛むほんの人人ひとびとは二十六人なり、所謂大
山の王子みこ・大石の小丸さんりん・乃至将門ないしすみとも悪左府等わくさふらうなり、此等これらの
人人ひとびとは吉野とつ河の山林さんりんにこもり筑紫つくし・鎮西の海中かいちゆうに隠るれば・島
島のえびす浦浦のものもののふどもうたんとす、然れどもしかそれは貴きとうと
聖人しやうにん・山山さんざん・寺寺じじ・社社の法師ほっし・尼女人にょにんはいたう敵と思ふ事なし、
日蓮にちれんをば

上下じょうげの男女なんよ・尼ひ・法師ほつし貴とつとき聖人しやうじんなんど伝つたはるる人人ひとびとは殊ことに敵てきとなり候う、其そのの故ゆえはいづれも後生ごしやうをば願ねがへども男女なんよよりは僧尼そうにこそ願ねがふ由よしはみえ候うへ、彼等かれらは往生おうじやうはさてをきぬ今生こんじやうの世よをわたるなかだちとなる故ゆゑなり、智者ちしや聖人しやうじん又我好我勝またわがよがよがまさりたりと申まうし本師ほんしの跡あとと申まうし・所領しよりやうと申まうし・名聞みやうもん利養りやうを重しげくして・まめやかに道心どうしんは軽かろし、仏法ぶつぽうはひがさま

に心得こころえて愚癡ぐちの人ひとなり、謗法ほうぼうの人ひとなりと言ことをも惜おしまず人ひとをも憚はばからず、当知あた是人ひと、仏法ぶつぽう中怨ちゆうおんの金言きんげんを恐おそれて我是わが世尊せそん使つか処衆じゆしゆ無所むしよ畏おそと云いう文ぶんに任まかせていたくせむる間ま・未得みとく謂い為得い・我慢がまん心しん充満じゆうまんの人人ひとびと争いかかにくみ嫉ねたまざらんや。

されば日蓮にちれん程てん天神てんじん七代しちだい・地神ちじん五代ごだい・人王にんおう九十くじゅう余よ代だいにいまだ此これ程てい法華ほけき經きやうの故ゆゑに三類さんるいの敵てき人じんにあだあたまれたる者ものなきなり、かかかる上じやう下げ万人ばんにん・一同いつどうのいくまくまれ者ものにて候うに此これまで御渡わたり候ういし事ことおぼおるらげ

の縁にはあらず宿世の父母か昔の兄弟にておはしける故に思い付
かせ給うか、又過去に法華經の縁深くして今度仏にならせ給うべき
たねの熟せるかの故に在俗の身として世間ひまなき人の公事のひま
に思い出ださせ給いけるやらん。

其の上遠江の国より甲州波木井の郷身延山へは道三百余里に及べ
り、宿宿のいぶせさ嶺に昇れば日月をいただき谷へ下れば穴へ入る
かと覚ゆ、河の水は矢を射るが如く早し大石ながれて人馬むかひ
難し、船あやうくして紙を水にひたせるが如し、男は山かつ女は山
母の如し、道は繩の如くほそく、木は草の如くしげし、かかる所へ
尋ね入らせ給いて候事、何なる宿習なるらん、釈迦仏は御手を引
き帝釈は馬となり梵王は身に随ひ日月は眼となりかはらせ給いて
入らせ給いけるにや、ありがたしありがたし、事多しと申せども此
の程風おこりて身苦しく候間留め候い畢んぬ。

弘安二年己卯五月二日

日蓮花押

新池殿御返事

三三三三 新池御書

弘安三年二月 五十九歳御作

1439p

うれしきかな末法流布まつほうに生れあへる我等われらかなしきかな今度このたび此の
経を信ぜざる人人ひとびと、抑そもそもにんかい人界じんがいに生を受くるもの誰か無常むじょうを免れん、
さあらんに取つては何ぞ後世なんごしようのつとめをいたさざらんや、倩世間せんせけん
の体を観ずれば人皆みな口には此の経を信じ手には経卷きんまじりかんをにぎるとい
へども経の心にそむく間悪道あくどうを免れ難し、譬たとえば人に皆五臓みなごあり一
臓も損ずれば其その臓より病出て来て余の臓を破り終ついに命を失うしなうが
如ごとし、爰ここをもちを以て伝教大師でんぎょうだいしは「法華経ほけきょうを讚さんすと雖いえども
還かえつて法華ほっけの心を死す」等云云、文の心は法華経ほけきょうを持ち読み奉り
讚ほむれども法華ほっけの心に背そむきぬれば還かえつて釈尊しゃくそん・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつを殺す

に成りぬと申す意なり、終に世間の悪業衆罪は須弥の如くなれども此の経にあひ奉りぬれば・諸罪は霜露の如くに法華経の日輪に値い奉りて消ゆべし、然れども此の経の十四謗法の中に一も二もをかしぬれば

其の罪消えがたし、所以は何ん一大三千界のあらゆる有情を殺したりとも争か一仏を殺す罪に及ばんや、法華の心に背きぬれば十方の仏の命を失ふ罪なり、此のをきてに背くを謗法の者とは申すなり、地獄おそるべし炎を以て家とす、餓鬼悲むべし飢渴にうへて子を食ふ、修羅は鬪争なり畜生は残害とて互に殺しあふ、紅蓮地獄と申す

はくれなゐのはちすとよむ、其の故は余りに寒につめられてごごむ間せなかわれて肉の出でたるが紅の蓮に似たるなり、況や大紅蓮をや、かかる悪所にゆけば王位將軍も物ならず獄卒の呵責にあへる

姿は猿をまはすに異ならず、此の時は争か名聞名利・我慢偏執有るべきや。

思食すべし法華経をしれる僧を不思議の志にて一度も供養し

なば悪道に行くべからず、何に況や十度・二十度乃至五年・十年・

一期生の間供養せる功德をば仏の智慧にても知りがたし、此の経の

行者を一度供養する功德は釈迦仏を直ちに八十億劫が間無量の宝

を尽して供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は説かせ給いて候、

此の経にあひ奉りぬれば悦び身に余り左右の眼に涙浮びて釈尊の

御恩報じ尽しがたし、かやうに此の山まで年度の御供養は法華経並

に釈迦尊の御恩を報じ給うに成るべく候、弥はげませ給うべし

懈ることなかれ、皆人の此の経を信じ始むる時は信心有る様に見え

候が中程は信心もよはく僧をも恭敬せず供養をもなさず自慢して

悪見をな

す、これ恐るべし恐るべし、始より終りまで 弥信心をいたすべしさ
なくして後悔こうかいやあらんずらん、譬たとえば鎌倉かまくらより京へは十二日の道な
り、それを十一日余り歩をはこびて今一日に成りて歩をさしをきて
は何として都の月をば詠ながめ候べき、何としても此の経の心をしれる
僧そうに近づき 弥いよいよ法の道理どうりを聴聞ちようもんして信心しんじんの歩を運ぶべし。

噫す過ぎし方の程なきを以て知んぬ我等われらが命今幾程もなき事を春の
朝に花をながめし時ともなひ遊びし人は花と共に無常むじようの嵐に散り
はてて名のみ残りて其その人はなし花は散りぬといへども又こん春も
発ひらくべしされども消えにし人は亦またいかならん世にか来るべき秋の暮
に月を詠ながめし時戯れむつびし人も月と共に有う為いの雲に入りて後面影
ばかり身にそひて物いふことなし月は西山にしやまに入るといへども亦またこん
秋も詠むべし然しかれどもかくれし人は今いづくに

か住みぬらんおぼつかなし無常むじようの虎のなく音は耳にちかづくといへ

ども聞いて驚くことなし屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん
雪山の寒苦鳥は寒苦にせめられて夜明なば栖つくらんと鳴くとい
へども日出でぬれば朝日のあたたかなるに眠り忘れて又栖をつくら
ずして一生虚く鳴くことをう一切衆生も亦復是くの如し地獄に
墮ちて炎に

むせぶ時は願くは今度人間に生れて諸事を闇ひて三宝を供養し
後世菩提をたすからんと願へどもたまたま人間に来る時は名聞
名利の風はげしく仏道修行の灯は消えやすし、無益の事には財宝
をつくすにおしからず、仏法僧にすこしの供養をなすには是をもの
うく思ふ事これただことにあらず、地獄の使のきをふものなり寸善
尺魔と申すは是なり、其の上此の国は謗法の土なれば守護の善神
は法味にうへて社をすて天に上り給へば社には悪鬼入り

かはりて多くの人を導く、仏陀化をやめて寂光土へ歸り給へば堂塔
寺社は徒に魔縁の栖と成りぬ、国の費民の歎きにていらかを並べた
る計りなり、是れ私の言にあらす経文にこれあり習ふべし。
諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず況や人間とし
てこれをうくべきや、春日大明神の御託宣に云く飯に銅の炎をば食
すとも心穢れたる人の物をうけじ、座に銅の焰には坐すとも心汚
れたる人の家にはいたらじ、草の廊・萱の軒にはいたるべしと云へ
り、縦令千日のしめを引くとも不信の所には至らじ、重服深厚的家
なりとも有信の所には至るべし云云、是くの如く善神は此の謗法の
国をばなげきて天に上らせ給いて候、心けがれたると申すは法華經
を持たざる人の事なり、此の經の五の卷に見えたり、謗法の供養を
ば銅焰とこそおほせられたれ、神だにも是くの如し況や我等凡夫
としてほむらをば食すべしや、人の子として我が親を殺したらんも

のの我に物をえさせんに是を取るべきや、いかなる智者聖人も無間地獄を遁るべからず、又それにも近づくべからず

与同罪恐るべし恐るべし。

釈尊は一切の諸仏一切の諸神人天大会一切衆生の父なり主な

り師なり、此の釈尊を殺したらんに争か諸天善神等うれしく

思食すべき、今此の国の一切の諸人は皆釈尊の御敵なり、在家の

俗男俗女等よりも邪智心の法師ばらは殊の外の御敵なり、智慧に

於ても正智あり邪智あり智慧ありとも其の邪義には随ふべからず、

貴僧・高僧

には依るべからず、賤き者なりとも此の経の謂れを知りたらんもの

をば生身の如来のごとくに礼拝供養すべし是れ経文なり、されば

伝教大師は無智破戒の男女等も此の経を信ぜん者は小乗二百五

十戒の僧の上に座席に居よ末座すべからず況や大乘此の経の僧を

やとあそばされたり、今生こんじょう身の如来にょらいの如ごとくにみえたる極樂寺ごくらくの
良觀房りょうかんより

も此の経を信じたる男女なんよは座席ざせきを高く居することこそ候へ彼の二百
五十戒りょうかんの良觀房りょうかんも日蓮にちれんに会いぬれば腹をたて眼まなこをいからす是ただ
ごとにはあらず、智者ちしやの身に魔の入りかはればなり、譬たとえば本性よ
き人なれども酒に酔い

ぬればあしき心出来し人の為にあしきが如し、仏は法華以前の
迦葉・舍利弗・目連等をば是を供養せん者は三悪道に墮つべし、彼が
心は犬野干の心には劣れりと説き給いて候なり、彼の四大声聞等
は二百五十戒を持つことは金剛の如し、三千の威儀具足する事は十
五夜の月の如くなりしかども、法華經を持たざる時は是くの如く
仰せられたり、何に況やそれに劣れる今時の者共をや。

建長寺・円覚寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが
如く、威儀の放埒なることは猿に似たり、是を供養して後世を助か
らんと思ふは、はかなし、はかなし、守護の善神此の国を捨つる事
疑あることなし、昔釈尊の御前にして諸天善神・菩薩・声聞・
異口同音に誓をたてさせ給いて若し法華經の御敵の国あらば、或は
六月に霜霰と成りて国を飢饉せさせんと申し、或は小虫と成りて
五穀をはみ失はんと申し、或は旱魃をなさん、或は大水と成り

て田園でんえんをながさんと申し、或あるは大風たいふうと成りて人民じんみんを吹き殺さんと申し、或あるは悪鬼あくきと成りてなやまさんと面面めんめんに申もうさせ給たまふ、今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつも其その座ざにおはせしなり争いかでか靈山りょうぜんの起請きしょうの破やぶるるをそれ給たまはざらん、起請きしょうを破やぶらせ給たまはば無間地獄むげんじごくは疑うたがいなき者なり恐れ給たまうべし恐れ給たまうべし、今までは正まさく仏ぶつの御使出世おんつかいしゅつせして此の経きやうを弘ひろめず国主こくしゅもあながちに御敵ごてきにはならせ給たまはず但ただいづれも貴とあとしとのみ思おぼふ計はかりなり。

今いま某それがし仏おんつかいの御使ごしとして此の経きやうを弘ひろむるに依よりて上かみ一人いちにんより下した万民ばんみんに至いたるまで皆みな謗法ぼうぼうと成り畢おわんぬ、今までは此の国くにの者ものども法華經ほけきやうの御敵ごてきにはなさじと一子いっしのあひにくの如ごとく捨てかねておはせども靈山りょうぜんの起請きしょうのおそろしさに社やしろを焼やき払はいて天あまに上あらせ給たまいぬ、さはあれども身命しんみよつをおしまぬ法華經ほけきやうの行者ぎやうじやあれば其その頭こつべには住すむべし、天照太神てんしょうたいじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつ・天あまに上あらせ給たまはば其その余あまの諸神しよ

争か社いかでに留とどるべき、縦たとひ捨おほしめてじと思食りょうぜんすとも靈山のやくそ
くのまそれがしまに某かしやく呵責たし奉らば一日もやはかおはすべき、譬たとえば
盗人ぬすびとの候ぬすびとに知れぬ時は・かしこやここに住み候へども能よく案内知り
たる者の是ぬすびとこそ盗人とののしりどめけば・おもはぬ外すみかに栖すを去るが
如ごとく、某それがしにささへられて社を

ば捨て給ふ、然るに此の国思いの外に悪鬼神の住家となれり哀なり
哀なり。

又一代聖教を弘むる人多くおはせども是れ程の大事の法門を

ば伝教天台もいまだ仰せられず、其も道理なり末法の始の五百年

に上行菩薩の出世あつて弘め給ふべき法門なるが故なり、相構へて

いかにしても此の度此の経を能く信じて命終の時千仏の迎いに預

り靈山浄土に走りまいり自受法樂すべし、信心弱くして成仏のの

びん時・

某をうらみさせ給ふな、譬えば病者に良薬を与ふるに毒を好ん

でくひぬれば其の病愈えがたき時。我がとがとは思はず還つて医師

を恨むるが如くなるべし、此の経の信心と申すは少しも私なく

経文の如くに人の言を用ひず法華一部に背く事無ければ仏に成り

候ぞ、仏に成り候事は別の様は候はず、南無妙法蓮華経と他事な

く唱へ申して

候へば天然と三十二相・八十種好を備うるなり、如我等無異と申し
て釈尊程の仏にやすやすと成り候なり、譬えば鳥の卵は始は水な
り其の水の中より誰かなすとも・なけれども鶯よ目よと齧り出来
て虚空にかけるが如し、我

等も無明の卵にして・あさましき身なれども南無妙法蓮華經の唱へ

の母にあたためられ・まいらせて三十二相の鶯出でて八十種好の鎧

毛生そろひて実相真如の虚空にかけるべし、爰を以て經に云く

「一切衆生は無明の卵に処して智慧の口ばしなし、仏母の鳥は分段

同居の古栖に返りて無明の卵をたたき破りて・一切衆生の鳥をす

だてて法性真如の大虚にとばしむ」と説けり取意。

有解無信とて法門をば解りて信心なき者は更に成仏すべから

ず、有信無解とて解はなくとも信心あるものは成仏すべし、皆此の

經の意なり私の言にはあらずされば二の卷には「信を以て入ること
を得・己が智分に非ず」とて智慧第一の舍利弗も但此の經を受け
持ち信心強盛にして仏になれり己が智慧にて仏にならずと説き
給へり、
舍利弗だにも智慧にては仏にならず、況や我等衆生少分の法門を
心得たりとも信心なくば仏にならんことおぼつかなし、末代の衆生
は法門を少分こころえ僧をあなづり法をいるかせにして悪道におつ
べしと説き給へり、法を

こころえたる・しるしには僧を敬つやまひ法をあがめ仏を供養くようすべし、今
は仏ましまさず解悟の智識を仏と敬つやまふべし争いかでか徳分なからんや、
後世ごじょうを願はん者は名利名聞みやうりみょうもんを捨てて何いかに賤せんしき者なりとも法華經
を説かん僧を生身じふしんの如来にょらいの如ごとくに敬つやまふべし、是これ正まさしく經文きやうもんなり。
今時の禅宗ぜんしゅうは大段仁義礼智信の五常ごじやうに背そむけり、有智うちの高徳こうとくをお
それ老いたるを敬つやまひ幼きを愛するは内外典ないげてんの法はふなり、然しかるを彼の
僧家の者を見れば昨日・今日まで田夫野人にして黒白くろくわくを知らざる
者も・かちんの直綴ちくじゆをだにも著ちやくつればうち慢まんじて天台てんだい・真言しんごんの有智うち
高徳こうとくの人をあなづり礼をもせず其その上うへに居ゐらんと思おもうなり、是これ
傍若無人ぼうじやくにんにして畜生ちくじやうに劣おとれり、爰こころもつを以もつて伝教大師でんきやうだいしの御釈いわに云いく川
獺祭魚たがひのこころざし・林鳥父祖りんうの食を通とほず鳩きゆう・三枝さんしの礼あり
行雁連かうがんづらを乱みだらず・羔羊かうじやう踞すくりて乳を飲いむ・賤いやしき畜生ちくじやうすら礼を知るこ
とかくのくの如ごとし、何なんぞ人倫じんりんに於おいて其その礼らいなからんやとあそばされたり

取意、彼等が法に迷ふ事道理なり、人倫にしてだにも知らず是れ
天魔破旬のふるまひにあらざや。

是等の法門を能く能く明らめて一部八巻・廿八品を頭にいただき

懈らず行ひ給へ、又某を恋しくおはせん時は日日に日を拝ませ

給へ・某は日に一度・天の日に影をうつす者にて候、此の僧によま

せまひらせて聴聞あるべし、此の僧を解悟の智識と憑み給いてつね

に法門御たづね候べし、聞かずんば争か迷闇の雲を払はん足なく

して争か千里の道を行かんや、返す返す此の書をつねによませて御

聴聞あるべし、事事面の次を期し候間・委細には申し述べず候、

穴賢穴賢、

弘安三年二月 日

日蓮 御判

新池殿

御作

1445p

わざと使を以てちまきさけほしひさんせうかみしなじな給侯い
 畢んぬ、又つかひ申され侯は御かくさせ給へと申し上げ侯へと日蓮
 心得申べく侯、日蓮去る五月十二日流罪の時その津につきて供しに
 ・いまだ名をもききをよびまいらせず侯ところに・船よりあがりく
 るしみ侯いきところに・ねんごろにあたらせ給い侯し事は・いかなる
 宿習なるらん、過去に法華經の行者にて・わたらせ給へるが今
 末法にふなもりの弥三郎と生れかわりて日蓮をあ
 われみ給うか、たとひ男は・さも・あるべきに女房の身として食を
 あたへ洗足てうづ其の外さも事ねんごろなる事・日蓮はしらず

不思議とも申すばかりなし、ことに三十日あまりありて内心に
法華經を信じ日蓮を供養し給う事いかなる事のよしなるや、かかる
地頭・万民・日蓮をにくみねだむ事・鎌倉よりもすぎたり、みるもの
は目をひき・

きく人はあだむ、ことに五月のころなれば米もとぼしかるらんに
日蓮を内内にてはぐくみ給いしことは日蓮が父母の伊豆の伊東か
わなと云うところに生れかわり給うか、法華經第四に云く「及清信
士女供養於法師」と云云、法華經を行ぜん者をば諸天善神等、或は
をとことなり、或は女となり形をかへさまさまに供養してたすくべ
しと云う經文なり、弥三郎殿夫婦の士女と生れて日蓮法師を供養
する事疑なし。

さきにまいらせし文につぶさにかきて供し間・今はくはしからず、
ことに当地頭の病悩について祈せい申すべきよし仰せ供し間・案に

あつかひて候、然れども一分信仰の心を日蓮に出し給へば法華経へ
そせうとこそをもひ候へ

此の時は十羅刹女もいかでか力をあわせ給はざるべきと思ひ候いて
法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏・並に天照・八幡・大小の神紙等
に申して候、定めて評議ありてぞ・しるしをばあらはし給はん、よも
日蓮をば捨てさせ給は

じ、いたきとかゆきとの如くあてがわせ給はんとをもち候いしに
いに病悩なをり・海中いろくづの中より出現の仏体を日蓮にたま
わる事・此れ病悩のゆへなり、さだめて十羅刹女のせめなり、此の
功德も夫婦一人の功德となるべし、我等衆生無始よりこのかた
生死海の中にありしが法華經の行者となりて無始色心・本是理性
妙窮妙智・金剛不滅の仏身とならん事あにかの仏にかわるべきや、
過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生
の事なり、法華經の一念三千の法門・常住此説法のふるまいなり、
かかるたうとき法華經と釈尊にてをはずども凡夫はしる事なし。
寿命品に云く「顛倒の衆生をして近しと雖も和も見えざらし
む」とはこれなり、迷悟の不同は沙羅の四見の如し、一念三千の仏
と申すは法界の成仏と云う事にて候ぞ。

せつせんとうじ

きじん たいしやく へんさ

しびおう

雪山童子のまへにきたりし鬼神は帝釈の変作なり、戸毘王の所へ

にげ入りし鳩はとは毘首羯摩天ぞかし、班足王城へ入りし普明王は

きようしゆしやくそん

はんそく

ぶつげん こ

教主釈尊にてまします、肉眼にくげんはしらず仏眼ぶつげんは此れをみる、虚空こくうと

たいかい

これら きようもん

大海たいかいには魚鳥の飛行するあとあり此等これらは経文きようもんにみえたり、木像そく

即金色そくなり金色そく即木像そくなり、あぬ阿ぬ樓駄樓駄だが金はうさぎ兎となり死人しにんと

なる、釈摩男ほんぶがたなごころ掌にはいさ沙こも金となる、此等これらは思議しぎすべ

からず、凡夫ほんぶ即仏そくなり・仏そく即凡夫ほんぶなり・一念いちねん三千我実成がじつじようぶつ仏ぶつこれな

り。

しからば夫婦二人は教主大覺世尊きようしゆだいかくせそんの生れかわり給たまいて日蓮にちれんをた

すけ給たまうか、伊東とかわなのみちのほどはちかく候そうらへども心はとを

し。後のためにふみをまいらせ候ぞ、人にかたらずして心付させ給たまへ

すこしも人しるならば御ためあしかりぬべし、むねのうちなにをき

てかたり給たまう事なれ・あなかしこ・あなかしこ、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう。

弘長元年六月二十七日
船守弥三郎殿許へ之を遣わす

日蓮花押

夫れ味に六種あり・一には淡・二には鹹しおからき・三には辛・四には酸・
 五には甘六には苦なり、百味の飭膳を調ふといへども一つの鹹しおの味
 なければ大王の膳とならず、山海の珍物も鹹しおなければ気味なし、
 大海に八の不思議あり、一には漸漸に転深し・二には深くして底を
 得難し三には同じ一鹹いっかんの味なり・四には湖限りを過ぎず・五には
 種種の宝蔵有り・六には大身の衆生中に在つて居住す・七には死屍
 を宿めず・八には万流大雨之を収めて不増不減なり、漸漸
 に転探しとは法華経は凡夫無解より聖人有解に至るまで皆仏道を
 成ずるに譬うるなり、深くして底を得難しとは法華経は唯仏与仏
 の境界にして等覚已下は極むることなきが故なり、同じ一鹹いっかんの味

なりとは諸河に鹹なきは諸教に得道なきに譬ふ、諸河の水・大海に入つて鹹となるは諸教の機類・法華經に入つて仏道を成ずるに譬ふ、潮限り

を過ぎずとは妙法を持つ入牢る身命を和するとも不退転を得るに譬ふ、種種の宝蔵有りとは諸仏・菩薩の万行方善・諸波羅蜜の功德・妙法に納まるに譬ふ、大身の衆生所居の住处とは仏・菩薩・大智慧あるが故に大身衆生と名く大身・大心・大莊嚴・大調伏大説法・大勢・大神通・大慈・大悲・おのづから法華經より生ずるが故なり、死屍を

宿めずとは永く謗法一闡提を離るるが故なり、不増不減とは法華の意は一切衆生の仏性同一性なるが故なり、蔓草漬たる桶の中の鹹は大海の鹹に随つて満干ぬ、禁獄を被る法華の持者は桶びよりの中の鹹の如く・火宅を出で給へる釈迦如来は大海の鹹の如し、

法華ほっけの持者じしやを禁いましむるは釈迦しゃか如来にょらいを禁いましむるなり、梵ぼん釈しゃく・四してん天てんも如何いかに
頂いたき給たまわざらん、十羅刹じゅうらせつ女の頭こぶし破やぶ七分しちぶんの誓ちかひ此こゝの時に非あらずんば
何いずれの時ときか果たまし給たまふべき、頻婆娑羅びんばしやらおう王おうを禁きん獄ごくせし阿あ世じゃ早せく鋭えい身に大だい
悪瘡あくそうを感かん得とくしき、法華ほっけの持者じしやを禁きん獄ごくする人ひと何なんぞ現身げんしんに悪瘡あくそうを感かんぜ
ざらんや。

日蓮花押にちれんかおう

三三五

椎地四郎殿御書

弘長元年四月

四十

歳御作

1448p

せんじつおんものがたり

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いし処、仰せ候い

しごと

しが如く少しもちがはず候いき、これにつけても、いよいよはげま

ほけきよう

して法華經の功德を得給うべし、師曠が耳離婁が眼のやうに聞見

たま

させ給へ、末法には法華經の行者必ず出来すべし、但し大難来りな

しんじんいよいよ

ば強盛の信心、喜びをなすべし、火に薪をくわへんにさかな

たいかい

る事なかるべしや、大海へ衆流入る。されども大海は河の水を返す

ほけたいかい

事ありや、法華大海の行者に諸河の水は大難の

ごとく

如く入れども、かへす事とがむる事なし、諸河の水入る事なくば

たいかい

大海あるべからず、大難なくば法華經の行者にはあらし、天台の

いわく「衆流海に入り薪火を熾んにす」と云云、法華經の法門を一文
いづく
一句なりとも人に・かたらん

は過去の宿縁ふかしとおぼしめすべし、經に云く「亦不開正法如是
かこしゆくえん

人難度」と云云、此の文の意は正法とは法華經なり、此の經をきか
なん

ざる人は度しがたしと云う文なり、法師品には若是善男子・善女人
ほうしほんにやくぜぜんなんしぜんによにん

・乃至則・如来使と説かせ給いて僧も俗も尼も女も一句をも人に
ないしによらい

たらん人は如来の使と見えたり、貴辺すでに俗なり善男子の人な
によらいきへんぜんなんし

るべし、

此の經を一文一句なりとも聽聞して神にそめん人は生死の大海を
いづくちようもんしょうじたいかい

渡るべき船なるべし、妙楽大師云く「一句も神に染ぬれば成く彼岸
わたひがん

を資く、思惟・修習永く舟航に用たり」と云云、生死の大海を渡
たすしゆいしゆじしゆじ

らんことは妙法蓮華經の船にあらずんば・かなふべからず。

抑法華經の如渡得船の船と申す事は・教主大覺世尊・巧智
そもそもほけきようによとくとくせんきようしゆだいかくせそんこうち

むへん 無辺の番匠ばんしやうとして四味八教はつきやうの材木を取り集め・正直捨権じゆくじやけんとけづり
なして邪正じやしやう一如いちによときり合せ・醍醐だいこ一実いちじつのくぎを丁と・うつて生死しやうじの
大海たいかいへをしうかべ・中道ちゆうどう一実いちじつのほばしらに界如かいによ三千の帆をあげて・
諸法しよほう実相じつそうのおひでをえて・以信得入いしんとくにゆうの一切衆生いっさいしゆじやうを取りのせて・釈迦しやか
如来にょらいはかぢを

取り多宝如来はつなでを取り給へば・上行等の四菩薩は函蓋相応
してきりきりとこぎ給う所の船を如渡得船の船とは申すなり、是
にのるべき者は日蓮が弟子・檀那等なり、能く能く信じさせ給へ
四条金吾殿に見参候はば能く能く語り給い候へ委くは又又申すべ
く候、恐恐謹言。

四月二十八日

日蓮

花押

椎地四郎殿え

三三三六 弥三郎殿御返事 建治三年 五十六歳御作

1449p

是は無智の俗にて候へども承わり候いしに貴く思ひ進らせ候いし

は法華の第二の巻に今此三界とかや申す文にて候なり、此の文の意
は今・此の日本国は釈迦仏の御領なり、天照太神・八幡大菩薩・神
武天皇等の一切の神・国主並に万民までも釈迦仏の御所領の内な
る上此の仏は我等衆生に三の故御坐す大恩の仏なり、一には国主
なり・二には師匠なり・三には親父なり、此の三徳を備へ給う事は
十方の仏の中に唯釈迦仏計りなり、されば今の日本
国の一切衆生は設い釈迦仏に・ねんごろに仕ふる事当時の阿弥陀仏
の如くすとも又他仏を並べて同じ様にもてなし進らせば大なる失
なり、譬えば我が主の而も智者にて御坐さんを他国の王に思ひ替え
て・日本国にすみなながら漢土高麗の王を重んじて・日本国の王にお
ろそかならんをば・此の国の大王いみじと申す者ならんや、況や
日本国
の諸僧は一人もなく釈迦如来の御弟子として頭をそり衣を著た

り、阿弥陀仏あみだぶつの弟子でしにはあらぬぞかし、然しかるに釈迦堂しゃかどう法華堂ほっけ画像がざう。
木像そうぼう法華經ほっけ一部いちぶも持たもち候こうはぬ僧共そうどうが・三徳さんとく全ぜんく備びはり給たまへる釈迦しゃか仏ぶつ。
をば閣おきて・一徳いちとくもなき阿弥陀あみだ仏ぶつを国くにこそりて郷きょう・村むら・家いえごとに人の
数かずよりも多く立たてなれば阿弥陀あみだ仏ぶつの名号なごうを一向いっこうに申まうして一日いちにちに六
万まん・

はちまん

八万なんどす、打ち見て候所そうちうとこはあら貴や貴やと見へ候へども。

ほけきよう

法華経を以て見進まいらせ候へば中中日日に十悪じゅうあくを造る悪人あくにんよりは過

重おもきは善人ぜんにんなり、

悪人あくにんは何れの仏いずれにもよりまいらせ候はねば思おもい

かわ

替る辺もなし、若し又善人ぜんにんとも成らば法華経ほけきように付き進まいらす事も

や有りなん、

日本国にほんこくの人人ひとびとは何いかにも阿弥陀あみだぶつ仏ぶつより釈迦しゃかぶつ仏ぶつ・念仏ねんぶつより

も法華経ほけきようを重しげくしたしく心よせに思おもい進まいらせぬる事難なんかるべし、さ

れば此こゝの人人ひとびとは善人ぜんにんに似にて悪人あくにんなり、悪人あくにんの中には

一閻浮提えんぶだい第一だいいちの大謗法ほうぼうの者大闡提せんたいの人ひとなり、

釈迦しゃかぶつ仏ぶつ・此こゝの人ひとをば

ほけきよう

法華経ほけきようの二の巻まきに「其その人ひと命終みょうじゅうして阿鼻あび獄ごくに入らんと定めさせ

給たまへり、されば今いまの日本国にほんこくの諸僧しよそう等は提婆達多だいばだつた・瞿伽梨くぎやり尊者そんじやにも

過すぎたる大悪人あくにんなり、又在家ざいけの人人ひとびとは此等これらを貴とうとみ供養くやうし給たまう故ゆゑに

此こゝの国眼前がんぜんに無間地獄むげんじごくと變かじて諸人しよにん現身げんしんに大飢渴けかち大疫病えきびょう先代せんだいにな

き大苦を受

受うる

受うる

受うる

受うる

受うる

受うる

受うる

受うる

受うる

くる上他国たこくより責めらるべし、此れは偏ひとえに梵天ぼんでん・帝釈たいしゃく・日月等の御にちがつはからひなり、かかる事をば日本国にほんこくには但日蓮にちれん一人計り知わかって始はは云うべきか云うまじきかとうらおもひけれども・さりとは何いかにすべき、一切衆生の父母ふぼたる上仏の仰おほせを背そむくべきか、我が身こそ何様いかようにも・ならめと思おもいて云いい出いせしかば二十余年・所をおはれ弟子でし

等を殺され、我が身も疵きずを蒙こむり・二度まで流され結句けっくは頸切られんとす、是れ偏ひとえに日本国にほんこくの一切衆生の大苦にあはんを兼かねて知りてなげ歎なげき候こゝろなり、されば心あらん人人は我等われらが為ためにと思食おほしめすべし、若もし恩おんを知り心有こころある人人は二当らん杖には一は替かわるべき事ぞかし、さこそ無なからめ還かえつて怨あだをなしなんと・せらるる事は心得こころえず候、又また在ざい家けの人ひと

人の能よくも聞ききほどかずして・或あるは所を追おひ・或あるは弟子等でしを怨あだまる

る心えぬさよ、設たい知らずとも誤ありて現げの親を敵ぞと思ひたがへて
のある。或あるは打ち殺したらんは何いかに科とがを免まぬらべき、此ひとびとの人人は我があ
らぎをば知らずして日蓮にちれんがあらぎの様に思へり、譬たとえば物ねたみす
る女の眼まなこを瞋いからかしてとわりをにらむれば己おのが気色のうとまし
きをば知ら

ずして還かえつてとわりの眼まなこおそろしと云いうが如ごとし、此これら等の事は偏ひとえに
国主こくしゅの御尋たずねなき故なり、又何いかなれば御尋たずねなきぞと申もうすに此この
国ひとびとの人人余とがり科とが多くして一定こんじょう今生こんじょうには他国たこくに責ためられ後生しごじょうには
むげんむげんじごくじごくに墮おつべき悪業あくごう
無間地獄むげんじごくに墮おつべき悪業あくごう

の定まりたるが故なりと、きょうもんれきれき 經文 歴歴と候いしかば信じ進まらせて候、
此の事は各各たといわれら設ことい我等が如くなる云うにかひなき者共を責めおど
し、ある或は所を追わせ給たまい候ともよも終ついには只ただは候はじ、此の御房の
御心をば設たといてんしょうだいじんい天照太神・正八幡もよも随へさせ給ひ候はじ、まして
ほんぶ 凡夫をや、されば度度の大事にもおおくする心なく弥いよいよよ強盛じつじょうに
ましま 御坐すと承たまわり候と加様のすぢに申もうし給たまうべし。

さて其その法師物申もうさば取り返してさて申もうしつる事は僻事ひがごとかと返し
て釈迦しゃかぶつ仏は親なり・師なり・主なり・と申もうす文・法華經には候かと問
うて有りと申もうさばさて阿弥陀あみだぶつ仏は御房ごぼうの親・主・師もうと申もうす經文きょうもんは候
かと責めて・無しと云わんずるか又有りと云はんずるか若もしさる
經文きょうもん有りと申もうさば御房ごぼうの父は一人かと責め給たまへ又無しといはば・
さては御房ごぼうは親をば捨てて何いかに他人たにんをもてなすぞと責め給たまへ、其その
上法華經ほけきょうは他經たきょうには似させ給たまはねばこそとて四十

余年等の文を引かるべし、即往安楽の文にかからば・さて此れには
先ずつまり給へる事は承伏かと責めてそれもとて又申すべし、構へ
て構へて所領を惜み妻子を顧りみ又人を憑みて・あやぶむ事無かれ
但偏に思い切るべし、今年の世間を鏡とせよ若干の人の死ぬるに今
まで生きて有りつるは此の事にあはん為なりけり、此れこそ宇治川
を渡せし所よ是こそ勢多を渡せし所よ・名を揚るか名をくだすかな
り、人身は受け難く法華経は信じ難しとは是なり、釈迦・多宝・
十方の仏・来集して我が身に入りかはり我を助け給へと観念せさ
せ給うべし、地頭のもとに召さるる事あらば先は此の趣を能く能く
申さるべく候、恐恐謹言。

建治三年丁丑八月四日

日蓮花押

弥三郎殿御返事

三三七

新田殿御書

1452p

使ひ御志しよぶつだいいち限り無き者か、経は法華経・顯密第一の大法なり、仏

は釈迦仏・諸仏第一の上仏なり、行者は法華経の行者に相似たり、

三事既に相應せり檀那の一願必ず成就せんか、恐恐謹言。

五月二十九日

日蓮在御判

新田殿御返事

並に女房の御方

三三八

実相寺御書

建治四年正月十六日

五十

七歳御作

1452p

新春の御札の中に云く駿河の国実相寺の住侶尾張阿闍梨と申す者・玄義四の巻に涅槃經を引いて、小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗を破するは、盲目の因なりと釈せる由申し候なるは実に候やらん不審に候。

反詰して云く小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗を破する者盲目とならば弘法大師・慈覚大師・智証大師等はされば盲目となり給いたりけるか、善無畏・金剛智・不空等は盲目と成り給うとの給うかとつめよ、玄義の四に云く「問う法華に・を開して・皆妙に入る涅槃何の意ぞ更に次第の五行を明すや、答う法華は仏世の人の為に権を破して実に入れ復・有ること無く教意整足せり、涅槃は末代の凡夫の見思の病重く一実を定執して方便を誹謗

し甘露を服すと雖も事に即して真なる能わず命を傷つけて早夭するが為の故に戒定慧を扶けて大涅槃を顕す、法華の意を得れば涅槃に於て次第の行を用いざるなり「釈籤の四に云く、次の料簡の中、扶戒定慧と言ふは事戒事定前三教の慧並びに事法を扶くるが為の故なり具には止觀の対治助開の中に説くが如し、今時の行者或は一向に理を尚ぶときは則ち己れ聖に均しと謂い及び實を執して権を謗ず、或は一向に事を尚ぶときは則ち功を高位に推り及び實を謗じて権を許す、既に末代に処して聖旨を思わず其れ誰か斯の一の失に墮せざらん、法華の意を得れば則ち初後俱に頓なり、請う心を揣り臆を撫で自ら浮沈を曉れ」と等云云、此の釈に迷惑する者か、此の釈の所詮は或は一向尚理とは達磨宗に等しきなり、及び執実謗權とは華嚴宗・真言宗なり、或は一向尚事とは浄土宗・律宗なり、及び謗実許權とは法相宗なり。

夫れ法華經の妙の一字に二義有り一は相待妙・を破して妙を
顯す二は絶待妙・を開して妙を顯す、爾前の諸經並びに法華
已後の諸經は破・顯妙の一分之を説くと雖も・開・顯妙は全く
之無し、爾るに諸經に依憑する人師・彼れ彼れの經經に於て破顯
の二妙を存し・或は天台の智慧を盗み・或は民の家に天下を行うの
み、設い開を存すと雖も破の義免れ難きか、何に況や上に挙ぐる
所の一向執權・或は一向執実等の者をや、而るに彼の阿闍梨等は
自科を顧みざる者にして嫉妬するの間・自眼を回轉して大山を
眩ると觀るか、先ず実を以て權を破し權執を絶して実に入るは
釈迦・多宝・十方の諸仏の常儀なり、実を以て權を破する者を盲目
と為せば釈尊は盲目の人か乃至天台・伝教は盲目の人師なるか
如何、笑う可し返す返す。

四十九院等の事、彼の別当等は無智の者たる間・日蓮に向かつて

これ之を恐る小田一房等怨を為すか弥彼等が邪法滅す可き先兆なり、根露るれば枝枯れ源竭れば流れ尽くと云う本文虚しからざるか、弘法・慈覚・智証三大師の法華経誹謗の大科四百余年の間隠せる根露れ枝枯る、今日蓮之を糾明せり拘留外道が石と為つて数百年、陳那菩薩に責められ石即ち水と為る、尼が立てし塔は馬鳴之を頹す、臥せる師子に手を触れば瞋りを為す等是なり。

建治四年正月十六日

日蓮

花押

駿河国実相寺豊前公御房御返事

三三三九 石本日仲聖人御返事

1454P

同時に二仏に亘るか將た又一方は妄語なるか、
近來念佛者天下を誑惑するか、
早早御存知有る可きか。
抑駿馬一疋追い遣わさる事存外の次第か
事事見參の時を期す、
恐恐謹言。

九月二十日

日蓮在

御判

石本日仲聖人御返事

今月十五日酉時御文同じき十七日酉時到来す、彼等御勘氣を蒙る
 の時・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱え奉ると云云、偏に只
 事に非ず定めて平金吾の身に十羅刹入り易りて法華經の行者を試
 みたもうか、例せば雪山童子・戸毘王等の如し將た又悪鬼其の身に
 入る者か、釈迦・多宝・十方の諸仏・梵帝等・五五百歳の法華經の
 行者を守護す可きの御誓は是なり、大論に云く能く毒を変じて薬
 と為す、天台云く毒を変じて薬と為す云云、妙の字虚しからずんば
 定めて須臾に賞罰有らんか。

伯耆房等深く此の旨を存じて問注を遂ぐ可し、平金吾に申す

可^べき様は文永^{ぶんえい}の御勘^{ごかん}氣の時^{とき}聖人^{しょうじん}の仰^{おほ}せ忘れ給^{たま}うか、其^その殃^い未^まだ畢^ひらず重^{かさ}ねて十羅刹^{じゅうらせつ}の罰^{ばつ}を招^{まね}き取るか、最後^{さいご}に申^{もう}し付けよ、恐^{きょう}恐^{きょう}。

十月十七日戌時

日蓮^{にちれん}

在御判

聖人^{しょうじん}等御返事^{ごへんじ}

この事のぶるならば此方^{このかた}にはとがなしとみな人^{もつ}申^{まう}すべし、又大進房^{おほしんぼう}が落馬^{らくま}あらわるべし、あらわれば人人^{ひとびと}ことにおづべし、天^{あま}の御計^{ごけい}らいなり、各^{おのづか}にはおづる事^{こと}なかれ、つよりもてゆかば定^{さだ}めて子細^{しさい}いできぬとおぼふるなり、今度^{このたび}の使^{つか}にはあわぢ房^{ぼう}を遣^{つか}すべし。

五十八歳御作

1456p

大体此の趣を以て書き上ぐ可きか、但し熱原の百姓等安堵せし
 めば日秀等別に問注有る可からざるか、大進房・弥藤次入道等の
 狼藉の事に至つては源は行智の勧めに依りて殺害刃傷する所な
 り、若し又起請文に及ぶ可き云云の事之を申さば全く書く可から
 ず、其の故は人に殺害刃傷せられたる上・重ねて起請文を書き失
 を守るは古今未會有の沙汰なり、其の上行智の所行・書かしむる
 如くならば身を容るる処なく行う可きの罪・方無きか、
 穴賢六賢、此の旨を存じ問注の時・強強と之を申さば定めて上聞
 に及ぶ可きか、又行智・証人立て申さば彼等の人人行智と同意して

百姓等ひやくせいが田畠でんぱた數十じゅう疇ちゆうり取る由これ之これを申せ、若し又証文しやうもんを出さば謀
書しよの由これ之これを申せ、事事証人の起請文きしやうぶんを用ゆべからず、但し現証げんしやうの
殺害さつがい刃傷にんじやう而已のみ、若し其の義ぎに背く者そむは日蓮にちれんの門家もんかに非ず日蓮にちれんの
門家もんかに非ず候あら、恐恐きやうきやう。

弘安二年十月十二日

日蓮にちれん 在御判

伯耆殿

日秀

日弁等 下

三二四二

高橋殿御返事ごへんじ

建治元年七月がねん

五十四歳

御作

1457p

瓜一籠かこささげひげこえだまめねいもかうのうり給ひ候い畢おわんぬ、
付法蔵經ふほうぞうきょうと申もうす經にはいさこのもちるを仏くように供養くようしまいらせしわら
は百年申もうすしに一閻浮提えんぶだいの四分が一の王もうとなる所謂阿育大王いわゆるあそかだいおうこれ
なり、法華經ほけきょうの法師品ほうしほんには而於一劫中いつこうと申もうして一劫が間いつこう・釈迦しやかぶつ仏を
種種しゅじゆに供養くようせる人の功德くどくと・末代まつだいの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを須臾しゆゆも供養くようせ
る
功德くどくと・たくらべ候またかしこに其福復彼すに過もうぐと申もうして法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを供養くよう
する功德くどくすぐれたり、これを妙楽みょうらく大師釈だいししやくして云いわく「供養くようすること有
らん者は福十号ぶくじゅうごうに過すぐ」と云云、されば仏くようを供養くようする功德くどくよりも・

すぐれて候なれば仏にならせ給はん事たまた疑うたがいなし。

其その上よにん女人おんみの御身おんみとして尼ねんぶつとならせ給たまたいて候まいなり・いよいよ申もうす
に及およばず但ただしさだめて念ねんぶつ仏者ねんぶつにてやはすらん、たうじの念ねんぶつ仏者ねんぶつ・
持じ斎さいは国こくをほろぼし他た国こくの難なんをまなくものにて候、日本にほんこく国こくの人人ひとびとは
一人ひとりもなく日蓮にちれんがかたきとなり候いぬ、梵王ぼんのう・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してんのせ
めをかほりて・たうじのゆきつしまのやうになり候そうちはんずるに・いか
がせさせ給たまたうべきいかげさせさせ給たまたうべき、なによりも入道にゅうどう殿どのの御所ごしょ
勞ろうなげき入いつて候、しばらくいきさせ給たまたいて法華ほけ經きょうを謗ぼうずる世よの中なか
御覽ごらんあれと候へ、日本にほんこく国こくの人人ひとびとは大体だいたいはいけどりにせられ候そうちはんず
るなり、日蓮にちれんを二度にどまでながし法華ほけ經きょうの五ごの卷まきをもてかうべを打ち
候そうちいしは・こり候そうちはんずらむ。

七月二十六日

日蓮にちれん 花押かおう

御返事

三三三

高橋入道殿御返事

建治元年七月 五

十四歳御作

1458p

進上

高橋入道殿御返事

日蓮

我^{われ}等^らが慈^じ父^ふ・大^{だい}覺^{かく}世^せ尊^{そん}は人^{にん}寿^{じゆう}百^{ひゃく}歳^{さい}の時^{とき}・中^{ちゆう}天^{てん}竺^{じく}に出現^{しゆつげん}しましま
して一切^{いっさい}衆^{しゆう}生^{じゆう}のため^{ため}に一^{いち}代^{だい}聖^{しやう}教^{きやう}を^をと^{たま}給^{たま}う、仏^{ぶつ}在^{ざい}世^{せい}の一切^{いっさい}衆^{しゆう}生^{じゆう}
は過去^{かこ}の宿^{しゆく}習^{じゆう}有^うつて仏^{ぶつ}に縁^{えん}あつかりしかば、すで^すに得^{とく}道^{だう}成^{じやう}りぬ、我^{われ}
が滅^{めつ}後^ごの衆^{しゆう}生^{じゆう}をば、い^いか^かん^んが^がせ^{せい}ん^んと・な^なげ^げき^き給^{たま}い^いしかば八^{はち}万^{まん}聖^{しやう}教^{きやう}
を^を文^{もん}字^じとな^なして、一^{いち}代^{だい}聖^{しやう}教^{きやう}の中^{ちゆう}に小^{しやう}乘^{じゆう}經^{きやう}を^をば迦^か葉^{しやう}尊^{そん}者^{じや}にゆ^ゆづ^づり
を^を大^{だい}乘^{じゆう}經^{きやう}並^びびに法^{ほふ}華^け經^{きやう}涅槃^{ねはん}等^{たう}を^をば文^{もん}殊^{じゆ}師^し利^り菩^ぼ薩^{さつ}にゆ^ゆづ^づり給^{たま}う、但^た
八^{はち}万^{まん}聖^{しやう}教^{きやう}の肝^{かん}心^{しん}・法^{ほふ}華^け經^{きやう}の眼^{がん}目^{もく}たる妙^{みやう}法^{ほふ}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}の五^ご字^じを^をば迦^か葉^{しやう}・
阿^あ難^{なん}にもゆ^ゆづ^づり給^{たま}はず、又^{また}文^{もん}殊^{じゆ}・普^ふ賢^{けん}・觀^{くわん}音^{おん}・弥^み勒^{りく}・地^じ蔵^{ざう}・竜^{りゆう}樹^{じゆ}等^{たう}の大^{だい}

菩薩にもさづけ給はず、此等の大菩薩等のぞみ申せしかども仏

ゆるし給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人を召しいだして

多宝仏・十方の諸仏の御前にして釈迦如来・七宝の塔中にして

妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給う。

其の故は我が滅後の一切衆生は皆我が子なりいづれも平等に不便

にをもうなり、しかれども医師の習い病に随いて薬をさづくる事な

れば我が滅後五百年が間は迦葉・阿難等に小乗經の薬をもつ

て一切衆生にあたへよ、次の五百年が間は文殊師利菩薩・弥勒菩薩

・竜樹菩薩・天親菩薩に華嚴經・大日經・般若經等の薬を一切衆生

にさづけ

よ、我が滅後一千年すぎて像法の時には薬王菩薩・觀世音菩薩等

法華經の題目を除いて余の法門の薬を一切衆生にさづけよ、末法に

入りなば迦葉・阿難等・文殊・弥勒菩薩等・薬王・觀音等のゆづられ

しところの 小乗經・大乘

經・並びに法華經は文字はありとも衆生の病の薬とはなるべから
ず、所謂病は重し薬はあさし、共の時上行菩薩出現して
妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生にさづべし、共の時一切
衆生此の菩薩をかたきとせん、

所謂しよいさるのいぬをみたるがごとく・鬼神きじんの人をあだむがごとく・
過去かこの不ふぎ輕りやう菩薩ぼさつの一切いっさい衆生しゆじやうにのりあだまれしのみならず杖じやう木もく瓦がり礫やく
にせめられしがごとく覺德かくとく比丘びくが殺害さつがいに及およばれしがごとくなるべ
し。

其そのの時ときは迦葉かしよう・阿難あなん等も・或あるは靈山りやうぜんにかくれ恒河じやうがに没みろく・
彌勒みろく・
文殊もんじゆ等も・或あるは都率とそつの内院ないえんに入り・或あるは香山かんとくに入らせ給たまい、觀世音かんぜおん
菩薩ぼさつは西方さいほうにかへり・普賢ふげん菩薩ぼさつは東方とうほうにかへらせ給たまう、諸經しよきやうは行しよず
る人はありとも守護しゆごの人なれば利生りしやうあるべからず、諸仏しよぶつの名号みやうごう
は唱となうるものありとも天神てんじんこれをかごすべからず、但ただし小牛せうごの母ぼを
はなれ金鳥きじのたかにあえるがごとくなるべし、其そのの時とき十方じゆっほう世界せかいの
大鬼神きじん・閻浮提えんぶだいに充満じゆまんして四衆ししゆの身みに入いつて・或あるは父母ふぼ
をがいし・或あるは兄弟きやうだい等を失しはん、殊ことに国中こくしゆの智者ちしやげなる持戒じかいげなる
僧尼そうにの心に此この鬼神きじん入いつて国主こくしゆ並びに臣下しんかをたばらかさん、此この時とき

上行菩薩の御かびをかほりて法華經の題目南無妙法蓮華經の五字
計りを一切衆生にさづけば彼の四衆等並びに大僧等此の人を
あだむ事父母のかたき宿世のかたき朝敵怨敵のごとくあだむべし、
其の時

大なる天変あるべし、所謂日月蝕し大なる彗星天にわたり大地震
動して水上の輪のごとくなるべし、其の後は自界叛逆難と申して
国主・兄弟並びに国中の大人をうちころし後には他国侵逼難と
申して郷国よりせめられて或はいけどりとなり或は自殺をし国
中の上下方民皆大苦に値うべし、此れひとへに上行菩薩のかびを
かをほり

て法華經の題目をひろむる者を・或はのり或はうちはり或は
流罪し或は命をたちなんどするゆへに仏前にちかひをなせし梵天
帝釈・日月・四天等の法華經の座にて誓状を立てて法華經の行者

をあたまん人をば父母のかたきよりもなをつよくいましむべしと。
ちかうゆへなりとみへて侯に、今日蓮日本国に生れて一切経並びに
法華経の

明鏡をもて日本国の一切衆生の面に引向たるに寸分もたがはぬ
上・仏の記し給いし天変あり地天あり、定んで此の国・亡国となるべ
しとかねてしりしかば、これを国主に申すならば国土安穩なるべく
も・たづねあきらむべし、亡国となるべきならば・よも用いじ、用い
ぬ程ならば日蓮は流罪・死罪となるべしとしりて候いしかども・仏い
まし

めて云く此の事を知りながら身命ををしみて一切衆生にかたらずば我が敵たるのみならず一切衆生の怨敵なり、必ず阿鼻大城に墮つべしと記し給へり。

此に日蓮進退わづらひて此の事を申すならば我が身いかにもなるべし我が身はさてをきぬ父母・兄弟並びに千万人の中にも一人も随うものは国主・万民にあだまるべし、彼等あだまるるならば仏法はいまだわきまへず人のせめはたへがたし、仏法を行ずるは安穩なるべしとこそをもうに・此の法を持つによつて大難出来するはしんぬ此の

法を邪法なりと誹誘して悪道に墮つべし、此れも不便なり又此れを申さずは仏誓に違する上・一切衆生の怨敵なり大阿鼻地獄疑いなし、いかんがせんとをもひしかどもををもひ切つて申し出しぬ、申し始めし上は又ひきさす

べきにもあらざれば、いよいよつより申せしかば、仏の記文のごとく
国主もあだみ万民もせめき、あだをなせしかば天もいかりて日月に
大變あり大せいせいも出現しぬ大地もふりかえしぬべくなりぬ、ど
しうちもはじまり他国よりもせめるなり、仏の記文すこしもたがわ
ず、日蓮が法華經の行者なる事も疑はず。

但し去年かまくらより此のところへにげ入り候いし時、道にて候へ
ば各各にも申すべく候いしかども申す事もなし、又先度の御返事も
申し候はぬ事はべちの子細も候はず、なに事にか各各をばへだてま
いらせ候べき、あだをなす念仏者・禅宗・真言師等をも並びに国主
等をもたすけんがためにこそ申せ、かれ等のあだをなすはいよ
いよ不便にこそ候へ、まして一日も我がかたとて心よせなる人人は
いかでかをろかなるべき世間のをそろしさに妻子ある人人のとをざ
かるをば、ことに悦ぶ身なり、日蓮に付てたすけやりたるかたわな

き上・わづかの所領しむらひをも召さるるならば子細しさいもしらぬ妻子さいし・所従しよじゆう
等らがいかになげかんずらんと心ぐるし。

而しかも去年こぞの二月に御勘気ごかんきをゆりて三月の十三日に佐渡さどの国を立
ち同月の二十六日にかまくらに入る、同四月の入日平さへもんのじょう左衛門尉じゆうに
あひたりし時・やうやうの事ども・とひし中に蒙古国もうこは、いつよすべ
きと申せしかば、今年よす

べし、それにとて日蓮にぢれんはなして日本国にほんこくにたすくべき者一人もなし、
たすからんとをもひしたうならば日本国にほんこくの念仏者ねんぶつと禅ぜんと律僧等りつそうが
頸くびを切つてゆいのはまにかくべし、それも今はすぎぬ。但ただし皆人みなのを
もひて侯そつちは日蓮にぢれんをば念仏師ねんぶつと禅ぜんと律りつをそしるとをもひて侯、これは
物もののかずにてかずならず・真言宗しんごんしゅうと申もうす宗しゅうがうるわしき日本国にほんこくの
大なる呪咀あくほうの悪法あくほうなり、弘法大師こうぼうだいしと慈覚大師じかくだいし・此この事にまどひて此
の国ほろほを亡ほろさんとするなり、設たい二年三年にやぶるべき国なりとも
真言師しんごんしにいのらする程ほどならば一年半年に此このくに・せめらるべしと
申もうしきかせて侯そつちいき。

たすけんがために申もうすを此程ここのほどあだまるる事ことなれば・ゆりて候まういし
時ときさどの国くにより・いかなる山中海辺さんちゅうかいにもまぎれ入いるべかりしかども
・此この事ことをいま一度ひとたび平左衛門さへもんに申もうしきかせて日本国にほんこくにせめのこされ
ん衆生しゆじやうをたすけんがためにのぼりて候まういき、又また申もうしきかせ候そつちいし後のち

は・かまくらに有るべきならねば足にまかせていでしほどに便宜にて
候いしかば設たといい各各は・いとはせ給たまうとも今一度はみたてまつらんと
千度をもひしかども・心に心をたたかいて

すぎ候いき、そのゆへはするがの国は守殿のりの御領ごりやうことにふじなんど
は後家尼ひとびとごぜんの内うちの人人多し、故最明寺殿さいみやうじ・極楽寺殿ごくらくのかたきと
いきどをらせ給たまうなればききつけられれば各各の御なげきなるべし
と・おもひし心計ばかりなり、いまにいたるまでも不便ふびんにをもひまいらせ
候そうじへば御返事ごへんじまでも申もうさず候いき、この御房ごぼうたちのゆきすりにも・
あなかしこ・あなかしこ・ふじかじまのへんへ立ちよるべからずと申
せども・いかが候らんと・をぼつかなし。

ただし真言しんごんの事ぞ御不審ふしんにわたらせ給たまい候らん、いかにと法門ほうもんは
申もうすとも御心ごしんへあらん事かたし但眼前がんぜんの事をもつて知ししめせ、隱岐おき
の法皇ほうわうは人王にんわう入十二代・神武かみむすよりは二千余年・天照てんしやう太押たいおし入りかわ

らせ給たまいて人王とならせ給たまう、いかなる者かてきすべき上きんめい欽明より
隠岐おきの法皇ほうこうにいたるまで漢土かんど・百濟くだら・新羅しらぎ・高麗こまよりわたり来る
大法秘法だいはうひほうを

叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじょう・七寺なら並びに日本国にほんこくにあがめをかれて候、此これは
皆国みなを守護しゅごし国主こくしゅをまほらんだためなり、隠岐おきの法皇世ほうこうをかまくら
にとられたる事を口をしと・をぼして叡山えいざん・東寺とうじ等の高僧等こうそうをかた
らひて義時よしときが命をめしと

れと行ぜしなり、此の事一年・二年ならず数年調伏せしに・権の
大夫殿はゆめゆめしろしめさざりしかば一法も行じ給はず・又行ず
とも叶うべしともおぼへずありしに・天子いくさにまけさせ給いて
隠岐の国へつかはされさせ給う、日本国の王となる人は天照太神の
御魂の入りかわらせ給う王なり、先生の十善戒の力といひいかに
か國中

の万民の中にはかたぶくべき、設いとがありともつみあるをやをと
がなき子のあだむにてこそ候いぬらめ、たとい親に重罪ありとも子
の身としてとがに行はん天うけ給うべしや、しかるに隠岐の法皇
のはじにあはせ給いしはいかなる大禍ぞ・此れひとへに法華經の怨敵
たる日本国の真言師をかたらはせ給いしゆへなり。

一切の真言師は灌頂と申して釈迦仏等を八葉の蓮華にかきて
此れを足にふみて秘事とするなり、かかる不思議の者ども諸山・諸

寺の別当べつとうとおおぎてもてなすゆへに・たみの手にわたりて現身げんしんには
ぢにあひぬ、此の大悪法だいあくほう又かまくらに下つて御一門いちもんをすかし日本国にほんこく
をほろぼさんとするなり、此の事最大事だいじなりしかば弟子等でしにもかた
らず・

只ただいつはり・をろかにて念仏ねんぶつと禅等ぜんとう計りばかをそしりてきかせしなり、今
は又用もちいられぬ事なれば身命しんみょうもおしまず弟子どもにも申もうすなり、
かう申せば・いよいよ御不審ふしんあるべし、日蓮にちれんいかにいみじく尊くとも
慈覚じかく・弘法こうぼうにすぐるべきか、この疑うたがひすべてはるべからず・いかにとか
すべき。

但し皆人ただみなはにくみ侯こうにすこしも御信用ごしんようのありし上・此これまでも御
たづねの侯そうらは只今生計りただこんじょうばかの御事おんことにはよも侯そうらはじ定めて過去かこのゆへ
か、御所だいじの大事だいじにならせ給たまいて侯たまいなる事あさましく侯た、但しつづ
るぎはかたきのため薬は病のため、阿闍世王あじゃせは父をころし仏の敵と

なれり、悪瘡あくそう身に出いで後に仏きぶくに帰伏きふくし法華經ほけきょうを持ちたもしかば悪瘡あくそうも
平癒へいゆし

寿じゆをも四十年そつちゆうのべたりき、而しかも法華經ほけきょうは閻浮捏人病えんぶだいじんやまい之良藥のりょうやくとこそ
とかれて侯そつちゆうへ閻浮えんぶの内うちの人は病びやうの身みなり法華經ほけきょうの藥くすりあり、三事さんじす
でそつちゆうに相応そうおうしぬ一身いつしんいかでかたすからざるべき、但ただし御疑おんうたがいのわたり
侯そつちゆうはんをば力をよばず、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう。

覚乗房は・わき房に度度よませてきこしめせ・きこしめせ。

七月十二日

進上

高橋六郎兵衛入道殿

御返事

日蓮

花押

二三四

異体同心事

1463p

白小袖一つあつわたの小袖は・わき房のびんぎに鷲目一貫並びに
うけ給たまわる、は・わき房さど房等の事あつわらの者どもの御心おんこころざし
異体同心いたいどうしんなれば万事ばんじを成し同体異心どうたいいしんなれば諸事しよじ叶かなう事なしと申もうす
事は外典げてん三千余巻に定りて候、殷いんの紂王ちゆうは七十万騎なれども
同体異心どうたいいしんなればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども
異体同心いたいどうしんなればかちぬ、一人の心なれども二つの心あれば其その心

たがいて成じよずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事

を成にほんこくず、日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成しよじじよせん

事かたし、日蓮にちれんがいちるい一類は異体同心なれば人人ひとびとすくな　く候へども

大事だいじを成じて一定法華經ほけきよひろまりなんと覚おぼへ候、悪は多けれども

一善いちぜんにかつ事なし、譬たとへば多くの火あつまれども一水にはきゑぬ、

此いちもんの一門も又かくのごとし。其の上貴きへん辺は多年としつもりて奉

公法華經ほけきよにあつくをはする上今度このたびはいかにも・すぐれて御心おんこころざし見

えさせ給たまう　よし人人ひとびとも申し候、又かれらも申し候、一一たまわに承りて

日天にってんにも大神にも申し上げて候ぞ。

御文おんふみはいそぎ御返事ごへんじ申すべく候ひつれどもたしかなるびんぎ候

はでいまままで申し候はず、べんあさがびんぎあまりそうそうにて

かきあへず候いき、さては各各おんこころとしのころいかんがと・をぼしつる、

もうこの事　すでにちかづきて候か、我が国のほろびん事はあさまし

けれども、これだにもそら事になるならば日本にほんこくの人人ひとびと　いよいよ

法華經を謗して万人無間地獄に墮つべし、
国はほろぶとも謗法はうすくなりなん、
いやし針治にて人をなをすがごとし、
なり、日蓮は法華經の御使い日本国の人人は大族王の一閻浮提の
仏法を失いがごとし、蒙古国は雪山の下王のごとし天の御使として
法華經の行者をあだむ人人を罰せらるるか、
をこしてあるならば阿闍世王の仏に歸して白癩をやめ四十年の寿
をのべ無根の信と申す位にのぼりて現身に無生忍をえたりしがご
とし、
恐恐謹言。

八月六日

日蓮

花押

三四五

六郎次郎殿御返事ごへんじ

建治三年三月

五十六歳御作

1464p

白米三斗油一筒給ひ畢おわぬいまにはじめぬ御心おんこころざし申まうしつくしが
たく候にぢれん日蓮よるこが悦よろこび候のみならず釈迦しやくか仏ぶつ定めて御悦よるこび候らん、我則われすなは
歡喜かんき諸しよ仏ぶつ亦然または是これなり、明日三位房をつかはすべく候、その時委細いさい
申もうすべく候、恐きよつ恐きよつ。

建治三年丁丑三月十九日

日蓮

花押かおう

六郎次郎殿

次郎兵衛殿

減劫と申すは人の心の内に候、貪・瞋・癡の三毒が次第に強盛になりもてゆくほどに次第に人のいのちもつづまりせいもちいさくなりもつてまかるなり、漢土・日本国は仏法已前には三皇・五帝三聖等の外経をもつて民の心をととのへてよをば治めしほどに次第に人の心はよきことははかなく・わるき事は・かしくなりしかば・外経の智あさきゆへに悪のふかき失をいましめがたし、外経をもつて世をさまらざりしゆへにやうやく仏経をわたして世間ををさめしかば世をだやかなりき、此れはひとへに仏教のかしこきによつて人民の心をくはしくあかせるなり、当時の外典と申すは本の外経の心にはあらず、仏法のわたりし時は外経と仏経とあらそいしかど

もやうやく外経まけて王と民と用いざりしかば、外経のもの内経の
所従しよじゆつとなりて立ちあうことなくありしほどに外経の人人内経の心
をぬきて智慧ちえをまし外経に入れて候を、をろかなる王は外典げてんのかし
こきかともう。

又人の心やうやく善の智慧ちえは、はかなく悪の智慧ちえかしくくなりし
かば仏経ぶつぎょうの中にも、小乗経じょうじゆぎょうの智慧世間せけんを、をさむるに代をさまる
ことなし、其の時大乘経だいじゆぎょうをひろめて代を、をさめしかば、すこし代
をさまりぬ、其の後大乘経だいじゆぎょうの智慧及およばざりしかば、一乗経いちじゆぎょうの智慧
をとりだして代を、をさめしかば、すこししばらく代をさまりぬ、
今の代は外経も、小乗経じょうじゆぎょうも、大乘経だいじゆぎょうも、一乘法華経いちじゆほうけきょう等もかなわぬよ
となれり、ゆえいかなとなれば衆生の貪しゆじゆじゆ・瞋とん・癡じんの心のかしこきこ
と大覚世尊だいかくせそんの大善だいぜんにかしこきがごとし、譬たとへば犬は鼻のかしこき事
人にすぎたり、又鼻の禽獸きんじゆつをかくことは大聖の鼻通にもをとらず、

ふくろうがみみのかしこきとびの眼まなこのかしこき・すずめの舌のかろ
き・りうの身のかしこきみな皆かしこき人にも・すぐれて候、そのやうに
末代まつだい濁世じよくの心の貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちのかしこきは・いかなる賢人けんじん・聖人しょうにん

も治めがたき事なり、其の故は貪欲をば仏不淨觀の藥をもて治し
しんに
瞋恚をば慈悲觀をもて治し愚癡をば十二因縁觀をもてこそ治し
給うに・いまは此の法門をとひて人を・をととして貪欲・瞋恚・愚癡を
たま
ますなり、譬へば火をば水をもつてけす・悪をば善をもつて打つ・し
たる
かるにかへりて水より出ぬる火をば水をかくればあぶらになりてい
よいよ大火となるなり。

今末代悪世に世間の悪より出世の法門につきて大悪 出生 せり、
まっ
これをば・しらずして今の人人・善根をすすればいよいよ代のほろぶ
しゅ
る事出来せり、今の代の天台・真言等の諸宗の僧等をやしなうは・
しゅ
外は善根とこそ見ゆれども内は十悪・五逆にもすぎたる大悪なり、
ぜん
しかれば代のをさまらん事は大覺世尊の智慧のごとくなる智人・世
だ
に有り

て仙予国王のごとくなる賢王とよりあひて・一向に善根をとどめ大
せん
けん

悪をもつて八宗はっしゅうの智人ちじんとをもつものを、或あるはせめ、或あるはながし、或あるはせをとどめ、或あるは頭こづへをはねてこそ代はずこし、をさまるべきにて候へ。

法華經ほけきょうの第一だいいちの巻の「諸法実相しよほうじつそう乃至唯仏ないしただと仏と乃すなわち能く究尽きうじんし

給たまう」ととかれて候はこれなり、本末究竟ほんまつくきょうと申もうすは本とは悪のね善

の根・末と申もうすは悪のをわり善の終りぞかし、善悪ぜんあくの根本こんほん枝葉しよくをさ

とり極きわめたるを仏とは申もうすなり、天台てんだい云く「そ夫れ一心いっしんに十法界ほっかいを

具くす」等云云、章安いわ云く「な仏尚な此れを大事だいじと為なす易解いげを得うべきなり」

妙樂みょうらく云く

「ないししゅううくきょう乃至終窮究竟ないししゅううくきょうの極説きよくせつなり」等云云、法華經ほけきょうに云く「みなじつそう皆実相みなじつそうと相違背そういそむ

せず」等云云、天台てんだい之を承うけて云く「いっさいせけん一切世間の治生ちせい産業さんぎょうは皆実相みなじつそう

と相違背そういそむせず」等云云、智者ちしやとは世間せけんの法ほふより外ぶつぽうに仏法ぶつぽうを行いず、

世間せけんの治世ちせいの法ほふを能よく能よく心こころへて候まをを智者ちしやとは申もうすなり、殷いんの代しろの

濁りて民のわづらいしを大公望出世して殷の紂が頸を切りて民の
なげきをやめ、二世王が民の口にながかりし張良出でて代を・をさ
め民の口をあまくせし、此等は仏法已前なれども教主釈尊の御使
として民をたすけしなり、外経の人人は・しらざりしかども彼等の
人人の智慧は内心には仏法の智慧をさしはさみたりしなり。

今の代には正嘉しょうかの大地震文永だいにしんぶんえいの大せひせひの時智慧ちえかしこき国主こくしゅ
あらましかば日蓮にちれんをば用もちいつべかりしなり、それこそなからめ文永ぶんえい
九年のどしうち・十一年の蒙古もうこのせめの時は周の文王の大公望たいこうぼうをむ
かへしがごとく・殷の高丁王の傳悦ふえつを七里より請しょうせしがごとくすべ
かりしぞかし、日月にちがつは生盲いきめくらの者には財たからにあらず賢人けんじんをば愚王ぐおうの
くむとはこれなり、しげきゆへにしるさず、法華經ほけきょうの御心ごこころと申まうすは
これてひの事にて候・外ほかのこととをばすべからず、大悪だいぜんは大善だいぜんの来き
るべき瑞相ずいそうなり、一閻浮提えんぶだいうちみだすならば閻浮提えんぶだい内うち広令流布くわうりゅうふは
よも疑うたがいい候はじ。

此の大進阿闍梨あじゃりを故六郎入道殿にせつにだいどのの御はかへつかわし候、むかし。
この法門ほうもんを聞いて候人人ひとびとには関東かんとうの内ならば我われとゆきて其そののはかに
自我じがげ偈じよみ候そうらはんと存ぞんじて候、しかれども当時とうじのありさまは日蓮にちれんか
しこへゆくならば其そのの日に一國いっこくにきこへ又またかまくらまでもさわぎ

候はんか、心ざしある人なりともゆきたらんところの人人めをを
それ

ぬべし、いままでとぶらい候はねば 聖靈いかにこひしくを。はすら
んと。をもへば。あるやうもありなん、そのほど。まづ弟子をつかわ
して御はかに自我偈をよませまいらせしなり、其の由御心へ候へ
恐恐。

三三七 高橋殿御返事

1467p

米穀も又かくの如し、同じ米穀なれども謗法の者をやしなう
は仏種をたつ命をついで弥弥強盛の敵人となる、又命をたすけて
終に法華経を引き入るべき故か、又法華の行者をやしなうは慈悲
の中の大慈悲の米穀なるべし、一切衆生を利益するなればなり、
故に仏舎利変じて米と成るとは是なるべし、かかる今時分人をこれ

までつかはし給う事うれしさ申すばかりなし、釈迦・地涌の菩薩
御身に入りかはらせ給うか。

其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ、仏種は縁に従つて
起る是の故に一乗を説くなるべし、又治部房・下野房等来り候は
ばいそぎいそぎつかはすべく候、松野殿にも見参候はばくはしくか
たらせ給へ。

三三八

三三蔵祈雨事

建治元年六月五十四歳

御作 与西山入道

1468p

夫れ木をうえ候には大風吹き候へどもつよきすけをかひぬればた
うれず、本より生いて候木なれども根の弱きはたうれぬ、甲斐無き
者なれどもたすくる者強ければたうれず、すこし健の者も独なれ
ば悪しきみちにはたうれぬ、又三千大千世界のなかには舍利弗迦葉
尊者をのぞいては仏よにいで給はずば一人もなく三悪道に墮つ
べかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて一切衆生はをほく
仏になりしなり、まして阿闍世王・あうくつまらなんど申せし悪人
どもはいかにもかなうまじくて必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども
・教主釈尊と申す大人にゆきあはせ給いてこそ仏にはならせ給いし
か、されば仏になるみちは善知識にはすぎず、わが智慧なに

にかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識
たいせちなり、而るに善知識に値う事が第一のかたき事なり、され
ば仏は善知識に値う事をば一眼のかめの浮木に入り、梵天よりいと
を下て大地のはりのめに入るにたとへ給へり、而るに末代悪世には
悪知識は大地微塵よりもをほく善知識は爪上の土よりもすくな
し、

ふだらくさん かんぜおんぼさつ ぜんざいどうじ ぜんちしきべつえん
補陀落山の観世音菩薩は善財童子の善知識別円二教ををしへて
いまだ純円ならず、常啼菩薩は身をうて善知識をもとめしに
曇無竭菩薩にあへり、通別円の三教をならひて法華経ををしへず、
舍利弗は金師が善知識、九十日と申せしかば闍提の人となしたり
き、ふるなは一夏の説法に大乘の機を小人となす、大聖すら
ほけきょう
法華経をゆるされ

ず証果のらん機をしらず、末代悪世の学者等をば此をもつてすひ

しぬべし、天を地といひ東を西といひ、火を水とをし、星は月にすぐ
れたり、ありづかは須弥山しゅみせんにこへたり、なんと申もうす人人ひとびとを信じて
候そうぢはん人人ひとびとは、ならはざらん悪人あくにんにはるかをとりてをしかりぬべし。
日蓮にちれん佛法ぶつぽうをこころみるに道理どうりと証文しょうもんにはすぎず、又道理証文
よりも現証げんしょうにはすぎず、而しかるに去るいぬ文永五年ぶんえいの比、東には俘囚えびすをこ
り西には蒙古もつこよりせめつかひつきぬ、日蓮案にちれんじて云いわく佛法ぶつぽうを信ぜざ
ればなり定めて調伏じょうぶくをこなはれずらん、調伏じょうぶくは又真言宗しんこんしゅうにてぞ
あらんずらん、月支がつし・漢土かんど・日本にほん・三箇国さんかこくの間に且しばらがかつし月支がつしはをく、
漢土かんど・日本にほんの二国にこくは真言宗しんこんしゅうにやぶらるべし、善無畏ぜんむい三蔵さんそう・漢土かんど
亘わたりてありし時は唐とうの玄宗げんそうの時なり、大旱魃かんぱつありしに祈雨きうの法
ををほせつけられて候しに、大雨だいうふらせて上かみ一人いちにんより下万民ばんみんにいた
るまで大おおいに悦よろこびし程ほどに須臾しゅゆありて大風たいふう吹き来りて国土こくどをふきやぶ
りしかば、けをさめてありしなり、又そ其の世よに金剛智こんこうち三蔵さんそうわたる、

又雨の御いのりありしかば七日が内に大雨下り上のごとく悦んでありし程に、前代未聞の大風吹きしかば・真言宗はをそろしき悪法なり

とて月支へをわれしが・とかうしてとどまりぬ、又同じ御世に不空さんぞう三蔵・雨をいのりし程三日が内に大雨下る悦さきのごとし、又大風吹きてさき二度よりも・をびただし数十日とどまらず、不可思議の事にてありしなり、此は日本国の智者愚者一人もしらぬ事なり、しらんと・をもはば日蓮が生きてある時くはしくたづねならへ、
日本国に

は天長元年二月に大旱魃あり、弘法大師も神泉苑にして祈雨あるべきにてありし程に守敏と申せし人すすんで云く「弘法は下臈なり
我は上臈なり・まづをほせを・かほるべし」と申す、こうに随いて
守敏をこなう、七日と申すには大雨下りしかども京中計りにて田舎

にこつぼつふらず、弘法こうぼうにをほせつけられてありしかば七日ににふらず二七日

ふらず三七日にふらざりしかば、天子てんし我わがといのりて雨をふらせ給たまい
き、し而かるを東寺とうじの門人もんじん等我が師の雨とがうす、くわしくは日記にっきをひ
きて習ならうべし、天下てんか第一だいいちのわうわくのあるなり、これより外ぐわいに弘仁こうにん
九年の春のえきれい又三古なげたる事ふに不可思議ふかしぎの誑惑おおわくあり口伝くでん
すべし。

てんだいだいし天台大師は陳の世かんばつに大旱魃ほけきようあり法華經しゆゆをよみて須臾しゆゆに雨下り
おうしん王臣おうしんかうべをかたづけ万民ばんみんたなごころをあはせたり、しかも大雨だいうに
もあらず風もふかず甘雨かんうにてありしかば、陳王大師だいいしの御前おんまえにをは
しまして内裏だいりへかへらんことをわすれ給たまいき、此の時三度の礼拝らいはいは
ありしなり。

いぬ 去る弘仁九年の春・大旱魃ありき・嵯峨の天王真綱と申す臣下を
もつて冬嗣のとり申されしかば・法華経・金光明経・仁王経をもつ
て伝教大師祈雨ありき、三日と申せし日ほそきくもほそきあめし
づしづと下りしかば天子あまりによるこばせ給いて、日本第一の
たことたりし大乘の戒壇はゆるされしなり、伝教大師の御師・
護命と申せし聖人は南都第一の僧なり、四十人の御弟子あいぐし
て仁王経をもつて祈雨ありしが五日と申せしに雨下りぬ、
五日はいみじき事なれども三日にはをとりにて而も雨あらかりしか
ばまけにならせ給いぬ、此れをもつて弘法の雨をばすひせさせ給う
べし、かく法華経はめでたく真言はをろかに候に日本のほろぶべき
にや一向・真言にてあるなり、隠岐の法王の事をもつてをもうに
真言をもつて蒙古とえぞとをでうぶくせば日本国やまけんずらんと
すひせしゆへに此の事のちをすてて・いゐて・みんとをもひしな

り、いゝし時はでしらせいせしかどもいまは

あひぬれば心よかるべきにや、漢土かんど・日本にほんの智者ちしや・五百余年の間・一人もしらぬ事をかんがへて候なり、善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空等ぶくうの祈雨きうに雨は下りて而も大風たいふうのそひ候は、いかに心へさせ給うべき、外道げどうの法なれども、いにかひなき道士どうしの法にも雨下る事あり、まして仏法ぶつぽうは小乗じょうなりとも法のごとく行うならば、いかにか雨下らざるべき、

いわうや大日経だいにちぎきょうは華嚴けごん・般若はんにやにこそをよばねども阿含あしんにはすこしまさりて候ぞかし、いかでか、いのらんに雨下らざるべき、されば雨は下りて候へども大風たいふうのそいぬるは大なる僻事ひがごとのかの法の中にまじわれるなるべし、弘法大師こうぼうだいしの三七日に雨下らずして候を天子てんしの雨を我が雨と申すは又、善無畏ぜんむい等よりも大おおにまさる失とがのあるなり。

第一だいいちの大妄語もうごには弘法大師こうぼうだいしの自筆じひつに云く、「弘仁九年こうにんの春疫れい

をいのりてありしかば夜中に日いいでたり」と云云、かかるそらごとを
いう人なり、此の事は日蓮にちれんが門家もんか第一だいいちの秘事ひじなり本文をとりつめて
いうべし、仏法ぶつぽうはさてをきぬ上にかきぬる事天下てんか第一だいいちの大事だいじなり、
つてに・をほせあるべからず御心おんこころざしのいたりて候へばをどろかしま
いらせ候、日蓮にちれんをばいかながあるべかるらんと・をぼつかなしと・を
ぼしめすべきゆへにかかる事ども候、むこり

国だにも・つよくせめ候わば今生にもひろまる事も候いなん、あま
りにはげしくあたりし人人は・くゆるへんもや・あらんずらん。

外道と申すは仏前・八百年よりはじまりて、はじめは二天三仙に

てありしが・やうやく・わかれて九十五種なり、其の中に多くの

智者神通のもの・ありしかども一人も生死をはなれず、又帰依せし

人人も善につけ悪につけて皆三悪道に墮ち候いしを・仏出世せさせ

給いてありしかば、九十五種の外道十六大国の王臣諸民をかたら

ひて

或はのり・或はうち・或は弟子・或はだんな等無量無辺ころせしか

ども仏たゆむ心なし、我此の法門を諸人にをどさされているやむほど

ならば一切衆生地獄に墮つべしとつよくなげかせ給いしゆへに・退

する心なし、この外道と申すは先仏の経經を見て・よみそこないて

候いしより事をこれり。

今も又かくのごとし、日本の法門多しといへども源は八宗・九宗

・十宗よりをこれり、十宗のなかに華嚴等の宗宗はさてをきぬ、
真言と天台との勝劣に弘法・慈覚・智証のまどひしによりて日本
の人人・今生には他国にもせ

められ後生にも悪道に墮つるなり、漢土のほろび又悪道に墮つる事
も善無畏・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり、又天台宗の
人人も慈覚・智証より後はかの人人の智慧にせかれて天台宗のご
とくならず、されば・さのみやはあるべき。

いわうや日蓮はかれにすぐべきとわが弟子等をばせども・仏の
記文にはたがはず、末法に入つて仏法をばうじ無間地獄に墮つべき
ものは大地微塵よりも多く、正法をへたらん人は爪上の土よりも
すくなしと涅槃経にはとかかれ、法華経には設い須弥山をなぐるも
のはありとも・我が末法に法華経を経のごとくにとく者ありがたし

と

しる 記しをかせ給へり、大集経・金光明経・仁王経・守護経はちなひを
ん経・最勝王経等に末法に入つて正法を行ぜん人出来せば邪法の
もの王臣等おうしんにうたへて・あらんほどに彼の王臣等おうしん・他人がたにんことばに
つひて一人の正法しょうぼうのものを

ある
或はのり 或はせめ 或はながし 或はころさば 梵王・帝釈・無量の
しよてん てんじん
諸天・天神・地神等りんごくの賢王の身に入りかはりてその国をほ
るぼすべしと記し給へり、今の世は似て候者かな。

抑 各各はいかなる宿善にて日蓮をば訪はせ給へるぞ、能く能く
過去を御尋ね有らばなにと無くとも此度生死は離れさせ給うべし、
すりはむどくは三箇年に十四字を暗にせざりしかども仏に成りぬ
提婆は六万蔵を暗にして無間に墮ちぬ是れ偏に末代の今の世を表
するなり、敢て人の上と思し食すべからず事繁ければ止め置き候い
畢んぬ、抑 当時の忽忽に御志申す計り候はねば大事の事あら
あらをどろかしまひらせ候、ささげ青大豆給い候いぬ。

六月二十二日

にちれん かおう
日蓮 花押

にしやま
西山殿御返

二四九

蒙古使御書

建治元年五十四歳御作

与西山高橋入道

1472p

かまくら

鎌倉より事故なく御下りの由承り候いてうれしさ申す計りなし、

もうこ

又蒙古の人の頸を刎られ候事承り候日本国の敵にて候念仏・真言・

禅・律等の法師は切られずして科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける

事こそ不便に候へ子細を知ざる人は勘へあてて候をおごりて云うと

思ふべし此の二十余年の間私には昼夜に弟子等に歎き申し公には

度度申せ

たびたび

し事はなり一切の大事の中に国の亡びるが第一の大事にて候なり

最勝王経に云く「害の中の極めて重きは国位を失うに過ぎたるこ

と無し」等云云、文の心は一切の悪の中に国王と成りて政悪くし

て我が国を他国に破らるるが第一の悪にて候と説れて候又

金光明経こんこうみょうきょうに云くいわ「悪人を愛敬し善人を治罰するによるが故に乃至あくにん あいぎょう ぜんにん ちばつ ゆえ ないし」
他方の怨賊来りてたほう おんぞく

国人喪乱そつらんに遇うあひまひ等云云、文の心は国王こくおうと成りて悪人を愛し善人を
科とがにあつれば必ず其その国・他国たこくに破らるると云う文なり、法華経第
五いに云くいわ「世に恭敬きやうけいせらるるを為ること六通ろくつうの羅漢らかんの如くならん」
等云云、文の心は法華経ほけきょう

の敵の相貌そうみょうを説きて候に・二百五十戒を堅く持ち迦葉舍利弗の如ごとくなる人を・国主こくしゅこれを尊みて法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを失なはむとするなりと説れて候ぞ。

夫それ大事だいじの法門ほうもんと申もうすは別に候はず、時に当あたりて我が為め国の為め大事だいじなる事を少しも勘かんへたがへざるが智者ちしやにては候なり、仏のいみじきと申もうすは過去かこを勘かんへ未来みらいをしり、三世さんぜを知しめすに過ぎすて候・御智慧ちえはなし、設たい仏ぶつにあらねども竜樹りゆうじゆ・天親てんじん・天台てんだい・伝教でんぎやうなど申もうせし聖人しょうにん・賢人けんじん等は仏程ぶつじやうこそ・なかりしかども・三世さんぜの事を粗ほぼ知しめされて

候しかば名をも未来みらいまで流されて候き、所詮しよせん・方法こしんは己心おさに収おさまりて一塵いちじんもかけず九山くしやん・八海はつかいも我が身に備そなわりて日月にちがつ・衆星しゆせいも己心こしんにあり、然しかりといへども盲目もうもくの者の鏡かがみに影かげを浮うべるに見えず・嬰兒えいじの水すい火かを怖おそれざるが如ごとし、

げてん げどう ないてん しょうじゅう こんだいじゅう
外典の外道内典の小乗・権大乘等は皆己心の法を片端片端説き
て候なり、然りといへども法華經の如く説かず、然れば經經に
勝劣あり人人にも聖賢分れて候ぞ、法門多なれば止め候い畢ん
ぬ。

かまくら くだ
鎌倉より御下りそうそうの御隙に使者申す計りなし、其の上
しゅじゅ よろこ
種種の物送り給候事悦び入つて候、日本は皆人の歎き候に日蓮が
いちるい なげ
一類こそ歎きの中に悦び候へ国に候へば蒙古の責はよも脱れ候は
じなれども・国のために責られ候いし事は天も知しめして候へば
ごしょう
後生は必ずたすかりなんと悦び候に・御辺こそ今生に蒙古国の恩
を蒙らせ給い

おこ さいみょうじ
て候へ此の事起らずば最明寺殿の十三年に当らせ給いては御かり
しじょう
は所領にては申す計りなし、北条六郎殿のやうに筑紫にや御坐な
ん、是は各各の御心のさからせ給うて候なり、人の科をあてるには

あらず、又一には法華經ほけきょうの御故ゆえにたすからせ給たまいて候いぬるか・ゆ
ゆしき御僻事ひがことなり、是程これほどの御悦よろこびまいりても悦よろこびまいらせ度たく候へ
ども人聞ひときつつましく候まいてとどめ候まい畢おわぬ。

乃時

にちれん

日蓮

かおう

花押

にしやま

西山殿

ごへんじ

御返事

青鼻せいぶ五貫文ごくわんもん給たまい候い畢おわんぬ、夫それ雪ゆき至いたつて白しろければそむるにそめられず・漆うるし至いたつてくるければしろくなる事ことなし、此これよりうつりやすきは人の心こころなり、善ぜん悪あくにそめられ候い、真まこと言ことば・禅ぜん・念ねん仏ぶつ宗しゆ等とうの邪じゃ悪あくの者にそめられぬれば必ず

地獄じごくにをつ、法華ほけきやう經きやうにそめられ奉たてまれば必ず仏ぶつになる、經きやうに云いく「諸法しよほう実相じつそう」云云、又また云いく「若人にやくにん不信ふしん乃至ないし入阿鼻にゅうあび獄ごく」云云、いかにも御信心ごしんじんをば雪漆うるしのごとくに御おもち有あるべく候い、恐恐きやうきやう。

建治二年けんぢにねん丙子ひのえね

日蓮にちれん花押かおつ

にしやま じへんじ
西山殿御返事

三五一

宝軽法重事

こつあん
弘安二年五月

五十八歳御

作 与西山入道

1474p

たかなな

笈 百本又二十本追給い畢んぬ、妙法蓮華経第七に云く「も若し復

人有つて七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・

阿羅漢に供養せん、是の人の所得の功德も此の法華経の乃至一四

句偈を受持する其の福の最も多きには如かじ」云云、文句の十に

「七宝を四聖に奉るは一偈を持つに如かずと云うは法は是れ聖の師

なり能生能養能成能栄法に過ぎたるは莫し故に人は軽く法は重き

なり」云云、記の十に云く「父母必ず四の護を以て子を護る

が如し、今発心は法に由るを生と為し始終随逐するを養と為し

極果ごっかを満ぜしむるを成なと為なし能よく法界ほっかいに応おずるを栄なと為なす、四つ
同じいっさいししゅじょうからずと雖いへども法もつを以もつて本なと為なす云云、経並てんだいに天台みょうらく・妙楽みょうらくの心
は一切衆生いっさいししゅじょうを供養くようせんと

阿羅漢あらかんを供養くようせんと乃至ないし一切いっさいの仏ぶつを尽つくして七宝しつぼうの財たからを
三千大千世界さんぜんたいせんせかいにもりみてて供養くようせんよりは法華經ほけきょうを一偈いちげ・或あるは
受持じゆじし・或あるは護持ごじせんはすぐれたりと云云經いわに云く、「此この法華經ほけきょうの
乃至ないし一四句偈くげを受持じゆじする其その福ふくの最も多おほきには如しかず、天台てんだい云く
「人は軽く法ほは重おもきなり」妙樂みょうらく云く、「四よつ同じおなじからずと雖いえども法ほを
以もつて本もとと為なす」云云、九界くかい
の一切衆生いっさいしゆじやうを仏ぶつに相對そつたいして此これをはかるに一切衆生いっさいしゆじやうのふくは一毛
のかるく仏ぶつの御ごふくは大山だいざんのをもきがごとし、一切いっさいの仏ぶつの御ごふくは
梵天ぼんてん三銖しゆの衣いのかるきがごとし、法華經ほけきょうの一字いちじの御ごふくの重おもき事は
大地だいちのをもきがごとし、人輕かるしと申もうすは仏ぶつを人と申もうす法重ほうじゆうしと申もうす
は法華經ほけきょうなり夫それ法華ほけき已前いぜんの諸經しよきやう並ならびに諸論しよろんは仏ぶつの功德くどくをほめて
候まを仏ぶつのごとし、此この法華經ほけきょうは經きやうの功德くどくをほめたり仏ぶつの父母ふぼのごと
し、華嚴經けこんきやう・大日經だいにちきやう等の法華經ほけきやうに劣おとる事は一毛いちぼうと大山だいざんと三銖さんしゆと大地だいち

とのごとし、乃至法華經の最下の行者と華嚴・真言の最上の僧とくらぶれば帝釈たいしゃくとさる猴さると師子ししと兔うとの勝劣しょうれつなり、而しかるをたみが王わうとののしればかならず命めいとなる、諸經しよきやうの行者ぎやうじやが法華經ほけきやうの行者ぎやうじやに勝すぐれたりと申せば必ず国もほろび地獄じじくへ入り候まうなり。

但たかたきのなき時はいつわりをろかにて候まう、譬たとへば将門さだとう・貞任さだとうも

貞盛さだもり

・頼義らいぎがなかりし時は・国くにをしり妻子さいしあんのん安穩あんゑんなり云云、敵たかなき時

そら

はつゆも空そらへのぼり雨も地に下り逆風の時は雨も空そらへあがり日出ひでの時

そら

はつゆも地にをちぬ、されば華嚴けこん等の六宗ろくしゆうは伝教でんぎやうなかりし時は

しんこん

つゆのごとし真言しんこんも又かくのごとし、強敵かうてきしゆつげん出現しゆげんして法華經ほけきやうをもつて

・

つよくせむるならば叡山えいざんの座主ざす・東寺とうじの小室こむつ等も日輪にちりんに露つゆのあへる

がごとしとをばしめすべし、法華經ほけきやうは仏滅後ぶつめつ・二千二百余年ふたにひゃくにふたひゃくねんにいま

だ経のごとく説とききわめてひろむる人なし、天台てんだい・伝教でんぎやうもしろしめ

さざるにはあらず。時も来らず。機もなかりしかば。かききわめずして。をわらせ給へり、日蓮が弟子とならむ人人は。やすくしりぬべし。

一 閻浮提えんぶだいの内に法華經ほけきょうの寿量品じゅうりょうぼんの釈迦仏しやくかぶつの形像ぎやうぞうをかきつくればとどめ候。

たけのこは百二十本法華経ほけきょうは二千余年にあらわれ候ぬ、布施ふせは
かるけれども志しつね重き故なり、当時とうじはくわんのうと申し大宮づく
りと申しかたがた民のいとまなし、御心おんこころざしふかければ法もあらわ
れ候にや、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

五月十一日

日蓮にちれん 花押かおつ

西山殿御返事にしやまごへんじ

二五二 西山殿御返事にしやまごへんじ

弘安四年こうあん 六十歳御作

1467p

あまざけ一をけやまのいも・ところせうせう給了おわんぬ、梵網経ぼんもつぎょう
と申す経には一紙・一草と申してかみ一枚くさひとつ大論だいろんと申す
んにはつちのもちゐを仏にくやうせるもの閻浮提えんぶだいの王となるよしを

とかれて候。

これはそれには・にるべくもなし・そのうへをとこにもすぎわか
れ・たのむかたもなきあまのするがの国西山にしやまと申すところより
甲斐国かいのくにのはきゐの山の中にをくられたり、人にすてられたるひじり
の寒さに・せめられて・いかに心ぐるしかるらんとをもひやらせ給たま
て・をくられたるか、父母ふぼにをくれしより・このかた・かかるねんご
ろの

事にあひて候事こそ候はね、せめての御心おんこころざしに給たまうかとおぼえて
なみだもかきあへ候はぬぞ、日蓮にちれんは・わるき者にて候へども法華経ほけきょうは
・いかでか・おろそかにおわすべき、ふくろはくさけれども・つつめる
金はきよし・池はきたなけれどもはちすしやうじやうなり、日蓮にちれんは
日本第一にほんだいいちのえせものなり、法華経ほけきょうは一切経いっさいきょうにすぐれ給たまへる経な
り、心あらん人金をとらんとおぼさばふくろをすつる事なかれ、蓮

をあひせば池をにくむ事なかれ、わるくて仏になりたらば法華經ほけきょうの
力あらはるべし、よつて臨終りんじゅうわるくば法華經ほけきょうの名をりなん、さるに
ては日蓮にちれんは・わるくてもわるかるべしわるかるべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

月 日 御 返 事

二五三

西山殿御返事にしやまごへんじ

1477p

としごろ後生ごしやうをぼしめして御心おんこころざしをはすれば名計なばかり申し候、
同行どうじやうどもにあらあきこしめすべし、やすき事なれば智慧ちえの入る事
にあらず智慧ちえの入る事にあらず、恐恐おそおそ。

一月廿三日

日蓮にちれん

在御判

西山殿御返事にしやまごへんじ

二五四

妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

建治元年八月がんねん

五十四歳御作

1477p

すずの御志ごし 送り給こび候まい了おんぬ、おさなき人の御ために御ま

ほりさづけまいらせ候、この御まほりは法華經のうちのかんじん
一切經のげんもくにて候、たとへば天には日月・地には大王・人には
心・たからの中には如意宝珠のたまいえにははしらのやうなる事に
て候。

このまんだらを身にたもちぬれば王を武士のまほるがごとく子
ををやのあいするがごとくいをの水をたのむがごとく草木のあめ
をねがうごとく・とりの木をたのむがごとく・一切の仏神等のあつま
り・まほり昼夜に・かげのごとく・まほらせ給う法にて候、よくよく
御信用あるべし、あなかしこ・あなかしこ、恐恐謹言。

八月二十五日

日蓮 にちれん 花押 かおう

妙心尼御前御返事 みょうしんあまごぜんごへんじ

三三五

窪尼御前御返事

あまごぜんごへんじ

弘安元年五月 五十

七歳御作

1478p

ちまき
粽五把は・たかな筭十本・さけ千日ひとつつ給たまい畢おわぬ、いつもの事に候へども・ながあめふりてなつの日ながし、山はふかく・みちしげければ・ふみわくる人も候はぬに・ほととぎすにつけての御ひとこへありがたし・ありがたし。

さてはあつわらの事こんどもつて・をぼしめせ・さきもそら事なり、かうのとは人のいゝしに・つけて・くはしくも・たづねずして此こほつの御房をながしける事あさましと・をぼしてゆるさせ給たまいてのちは・させるとがもなく

てはいかんが・又あだせらるべき、すへの人人ひとびとの法華經ほけきょうの心にはあだ

めども・うへにそしらば・いかんがと・をもひて・事にかづけて人をあ
だむほどに・かへりてさきざきのそら事のあらわれ候ぞ、これはそら
みげうそと申す事せうはみぬさきよりすいして候、さどの国にてもそら
みげうそを三度までつくりて候しぞ、これにつけても上と国と

の御ためあはれなり、木のしたなるむしの木をくらひたうし・師子
の中のむしの師子ししを食らいうしなふやうに守殿しゆ殿の御をんにてすぐる
人人ひとびとが守殿しゆ殿の御威ぎいをかりて一切いっさいの人人ひとびとを・をどし・なやまし・わづら
はし候うへ、上の仰せおおとて法華経ほけきょうを失うしないて国もやぶれ主をも失うしなうて
返つて各各が身をほろぼさんあさましさよ、日蓮にちれんはいやしけれども
経は梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしょうたいじん・八幡大菩薩はちまんたいぼさつのまほらせ給たまう
御経なれば・法華経ほけきょうのかたをあだむ人人ひとびとは・剣をのみ火を手ににぎ
るなるべし、これにつけても・いよいよ御信用ごしんようのまさらせ給たまう事、た
うとく候ぞたうとく候ぞ。

五月三日

日蓮にちれん

花押かおう

窪尼御返事ごへんじ

三五六

窪尼御前御返事

弘安元年六月

五十七歳

御作

1479p

すずの御供養送り給くよういたし了たまぬ、大風おわの草をなびかしかづちの人
をををどろかすやうに候、よの中にいかにいままで御しんようの候い
けるふしぎさよ、ねふかければはかれず・いづみに玉あれば水たえ
ずと申もうすやうに・御信心しんじんのねのふかく・いさぎよき玉の心のうちに・
わたらせ給たまうか、たうとしたうとし、恐恐きょうきょう。

六月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

くぼの尼御前御返事

三五七

妙心尼御前御返事

弘安元年八月

五十七

あわしかき二籠なすび一こ給い候たまい了おわぬ、入道殿にゅうどうの御所ごしょ勞らうの事こと、唐土たうどに黄帝わうてい・扁鵲へんこくと申せしくすしあり天竺てんじくに持水ぢすい耆婆ぎばと申せしくすしあり、これらはその世のたから末代まつだいのくすしの師しなり、仏と申せし人はこれには

にるべくもなきいみじきくすしなり、この仏不死の薬をとかせ給たまへり。今の妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじ是これなり、しかもこの五字ごじをば閻浮提人えんぶだいじん病びやう之良薬りやうやくとこそとかれて候へ。

入道殿にゅうどうは閻浮提えんぶだいの内日本にほん国こくの人ひとなり、しかも身に病をうけられ候まう病びやう之良薬りやうやくの経文きやうもん顕然けんねんなり、其その上うへ蓮華經れんげは第一だいいちの薬やくなり、はるり王おうと申せし悪王あくわう仏ぶつのしたしき女人にょにん五百余人ごひやくにんを殺して候まういしに、
仏阿難あなんを靈山りやうぜんにつかはして青蓮華せいれんげをとりよせて身にふれさせ給たまいしかばよみかへりて七日ななにちありて、利天りてんに生なまれにき、蓮華れんげと申まうす花はなは

かか

るいみじき徳ある花にて候へばみよぼう仏妙法にたとへ給たまへり、又人の死ぬ
る事は・やまひにはよらず・とうじ当時のゆきつしまのものどもは病なけれ
ども・みなみなむいちじこ人に一時にうちころされぬ・病あれば死ぬべし
といふ事不定ふじようなり、又

このやまひは仏の御はからひか。そのゆへは 浄名経・涅槃経には

病ある人。仏になるべきよしとかれて候、病によりて道心はをこり

候なり、又一切の病の中には五逆罪と一闍提と謗法をこそおもき

病とは仏はいたませ給へ今の日本

国の人は一人もなく極大重病 あり所謂大謗法の重病 なり今の

禅宗・念仏宗・律宗真言師なりこれらはあまりに病おもきゆへに

我が身にもおぼへず人もしらぬ病なりこの病のこうずるゆへに四海

のつわものただいま来りなば王臣万民みなしづみなんこれをいきて

み候はんまなここそあたあたしく候へ。

入道殿は今生にはいたく法華経を御信用ありとは見え候はねど

も過去の宿習のゆへのもよをしによりてこのなが病にしづみ日

日夜夜に道心ひまなし、今生につくりをかせ給ひし小罪はすでに

きへ候いぬらん、謗法の大悪は又法華経に歸しぬるゆへに。きへさせ

給うべしただいまに靈山にまいらせ給いなば日いでて十方をみる
が。

ごとくうれしく、とくしにぬるものかなとうちよろこび給い候はん
ずらん、中有の道にいかなる事もいできたり候はば日蓮がでしなり
となのらせ給へ、わずかの日本国なれどもさがみ殿のうちのものと
申すをば・さうなく

おそるる事候、日蓮は日本第一のふたうの法師ただし法華經を信
じ候事は一閻浮提第一の聖人なり、其の名は十方の浄土にきこえ
ぬ、定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子となのらせ給はば、いかな
る悪鬼なりともよもしらぬよしは申さじとおぼすべし、さては度
の御心ざし申すばかりなし、恐恐謹言。

さるは木をたのむ魚は水をたのむ。女人はおとこをたのむ。わ
かれのをしきゆへにかみをそり。そでをすみにそめぬ、いかでか

じゅっぽう
十方の仏もあはれませ給たまはざるべき、法華経ほけきようもすてさせ給たまう
べきとたのませ給たまえ・たのませ給たまえ。

八月十六日

日蓮にちれん

花押かおう

みょうしんあまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

五十八歳御作

1481p

御供養くようの物数のままに慥たしかに給たまい候まい、当時とうじは五月の比おひにて民のいとまなし其その上宮じやうみやうの造営にて候なり、かかる暇なき時・山中の有り様思ひやらせ給たまいて送りたびて候事御志殊ことにふかし。

阿育大王あそかだいおうと申せし王はこの天の日のめぐらせ給たまう一閻浮提えんぶだいをだいたいしろしめされ候いし王なり、此の王は昔徳勝とくしょうとて五になる童にたい候いしが釈迦しゃか仏ぶつにすなのもちゐをまいらせたりしゆへにかかる大王だいおうと生れさせ給たまう、此の童はさしも心ざしなしたわふれなるやうにてこそ候いしかども仏のめでたくをはすればわづかの事も・ものとなり

てかかる。めでたき事候、まして法華経は仏にまさらせ給う事星と月ともしびと日のごとし、又御心ざしもおんこころざしもすぐれて候。

されば故人道殿も仏にならせ給うべし、又一人をはする。ひめ御前も、いのちもながく、さひわひもありて、さる人の、むすめなりと、きこえさせ給うべし、当てもおさなければ、母をかけてすこす女人なれば父の後世をもたすくべし。

から国にせいしと申せし女人は、わかかなを山につみて、をひたるは、わをやしなひき、天あはれみて越王と申す大王のかりせさせ給いしが、みつけてきさきとなり、これも又かくのごとし、をやをやしなふ女人なれば、天もまほらせ給うらん、仏もあはれみ候らん、一切の善根の中に孝養父母は第一にて候なれば、まして法華経にては、す、金のうつわものに、きよき水を入れたるがごとく、すこしももるべからず候、めでたし、めでたし、
恐恐謹言。

五月四日

日蓮にちれん

花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

このなかの御くやうのものは・ところところ略して法門ほうもんを書写しよしゃし畢おわんぬ。

三三九九

妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

弘安二年十一月

五十

八歳御作

1482p

御そうぜんれう送り給たまい了あわんぬ、すでに故入道殿にゅうどうのかくるる日にて・おはしけるか、とかうまぎれ候いけるほどに・うちわすれて候いけるなり、よもそれには・わすれ給たまはしじ。

蘇武そぶと申せし男は漢王の御使おんつかいに胡国ここくと申す国もうに入りて十九年め

もおとこをはなれ。おとこもわするる事なし、あまりのこひしさに、
おとこの衣を秋ごとにきぬたのうへにて、うちけるが、おもひやとを
りて、ゆきにけん。おとこのみみにきこへたり、ちんしといいしものは
め。おとこはなれけるに、かがみをわりて、ひとつづつ、とりにけり、
わするる時はとりとび去りけり、さうしといゐしものは、おとこを
こひてはかにいたりて木となりぬ、相思樹そしじゆ

と申すもうはこの木なり、大唐だいたうへわたるにしがの明神みょうじんと申すもう神をはす。
おとこのもろこしへ、ゆきしをこひて神となれり。しまのすがたおう
なににたり、まつらさよひめといふこれ是なり、いにしへより、いまにいた
るまでをやこのわかれ主従のわかれ、いづれかつらからざる、され
ども、おとこをんなのわかれほど、たとげなかりけるはなし、過去かこ遠
遠より女の身となりしが、このおとこ娵婆しやば最後のぜんちしきなりけ
り。

ちりしはな・をちしこのみも・さきむすぶ・いかにこ人の・返らざる
らむ。

こぞもつくことしもつらき・月日かな・おもひはいつも・はれぬも
のゆへ。

ほけきょう だいもく
法華經の題目をとなへまいらせてまいらせ候。

十一月二日

にちれん

日蓮

かおう

花押

みょうしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

三六〇

窪尼御前御返事

弘安二年十二月

五十八

歳御作

1483p

十字五十まい・くしがき一れん・あめをけ一・送り給たまい了あんぬ、
御心おんこころざしざしさきざきかきつくしてふでもつひゆびもたため、
三千大千世界に七日ふる雨のかずは・かずへつくしてん、十方世界
の大地だいちのちりは知る人もありなん、法華經ほけきょうの一字供養くようの功德くどくは知

りがたしとこそ仏は・とかせ給たまいて候へ、此れをもつて御心へあるべし、恐恐謹言。

十二月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

三六一 妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

弘安三年五月 五十九

歳御作

1483p

すずのもの給たまいて候、たうじはのう時にて人のいとまなき時・かやうに・くさぐさのものどもをくり給たまいて候事いかにも申もうすばかりなく候、これもひとへに故入道殿じだうどのの御わかれの・しのびがたきに

後世ごしやうの御ためにてこそ候らんめ、ねんごろにごせをとぶらはせ給たまい
候へば、いくそばくうれしくおはしますらん、とふ人もなき草むら

に露あらわしげきやうにて・さばせかいにとどめをきしをさなきものなん
どのゆくへきかまほし。

あの蘇そぶ武が胡国ここくに十九年ふるさとの妻と子とのこひしさに雁の足
につけしふみ、安部の中麻呂が漢土かんどにて日本にほんへかへされざりし時・東
にいでし月をみてかのかすがの月よと・ながめしも身にあたりてこ
そ・おはすらめ。

しかるに法華經ほけきょうの題目だいもくをつねは・となへさせ給たまへば此の妙の文じ御
つかひに変ぜさせ給たまい・或あるは文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ・或あるは普賢菩薩ふげんぼさつ・或あるは
上行菩薩じょうぎょうぼさつ・或あるは不輕菩薩ふぎょうぼさつ等とならせ給たまうなり、譬たとえばちんしがが
みのとりの・つねにつげしがこ

とく蘇そぶ武がめのきぬたのこえのきこえしがごとくさばせかいの事を
冥途めいどにつげさせ給たまうらん、又妙の文字もんじは花のこのみとなるがごとく
半月まんげつの満月となるがごとく変じて仏とならせ給たまう文字もんじなり。

されば経いに云いく、「能よく此この経こを持つすは則すち仏ぶ身つを持つつなり」と、天台大師てんの云いく、「一文い文わ是これ真ま仏ぶなり」等と云いふ、妙もの文字んは三十じ二相に・八十種じ好じ円い備いせさせ給たまう釈迦し如に来よららひて・おはしますを我等われが眼まつたなくして文字もんじとは・みまいらせ候たなり、譬たとへばはちすの子この池いの中ちに生おひいて候たがやうに候たはちすの候たをとしよりて候ま人は眼まくらくし

てみず、よるはかげの候たをやみにみざるがごとし、されども此この妙もの字じは仏ぶにて・おはし候たなり、又また此この妙もの文字んは月げなり日ひなり星ほしなりかがみなり衣いなり食くなり花はななり大地だいなり大海たいなり、一切いの功こう徳とくを合あせて妙もの文字んとならせ給たまう、又または如意に宝ほう珠じゆのたまなり、かくのごとくしらせ給たまうべし、くはしくは又また申もうすべし。

五月四日

日連

花押かおう

はわき殿もつ申させ給たまへ

三六二

窪尼御前御返事

弘安三年六月

五十九歳

御作

1485p

仏の御弟子おんでしの中にあなりちと申せし人はこくぼん王の御子いえに
たからをみてておはしき、のちに仏の御でしとなりては天眼第一てんげんだいちの
あなりちとて三千大千世界を御覽ありし人、法華經ほけきょうの座にては
普明如来ふみょうにょらいとならせ給う、そのさきのよの事をたづぬればひえのはん
を辟支仏ひやくしぶつと申すもう仏の弟子でしにくやうせしゆへなり、いまの比丘尼びくにはあ
わのわさごめ山中たまたにをくりて法華經ほけきょうにくやうしまいらせ給う、いか
でか仏にならせ給はざるべき、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

六月二十七日

日蓮にちれん

花押かおう

くぼの尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

三六三 窪尼御前御返事 あまごぜんごへんじ 弘安四年十二月 六十歳

御作 1485p

しなじなのものをくり給て候。

善根ぜんこんと申もうすは大なるによらず又ちいさきにもよらず。国により人により時により。やうやうにかわりて候、譬たとへばくそをほしてつきくだきふるいてせんだんの木につくり又女人にんてん天女・仏につくりまいらせ候へども火をつけてやき候へばべちの香なくそくさし、そのやうに・ものをころし・ぬすみをしてそのはつを・をとりて功德善根くどくぜんこんをして候へども・かへりて悪となる。

すだつちちよつじや
須達長者と申せし人は月氏第一の長者ぎをん精舎をつくりて仏
を入れまいらせたりしかども彼の寺焼けてあとなし、この長者も
といををころしてあきなへて長者となりしゆへにこの寺つゐにう
せにき、今の人人の善根も又かくのごとく大なるやうなれどもあ
るひはいくさをして所領を給。或はゆへなく民をわづらはしてた
からをまうけて善根をなす、此等は大なる仏事とみゆれども仏に
もならざる上其の人人あともなくなる事なり。

又人をもわづらはさず我が心もなをしく我とはげみて善根をし
て候も仏にならぬ事もあり、いはくよきたねをあしき田にうえぬれ
ばたねだにもなき上かへりて損となる、まことの心なれども供養
せらるる人だにもあしければ功德とならず、かへりて悪道におつる
事候。

こ
此れは日蓮を御くやうは候はず法華經の御くやうなれば釈迦仏

たほうぶつ じゅつほう しょうぶつ
多宝仏・十方の諸仏に此の功德はまかせまいらせ候、抑^{そもそも}今年の
事^{もつ}は申しふりて候上^{とうじ}當時はとしのさむき事生れて已^{このかた}来^{きた}いまだおぼへ
候^{もつ}わず、ゆきなんどのふりつもりて候事^{もつ}おびただし、心ざしある人
もとぶらひがたし、御をとづれをぼろげの御心^{おんこころ}ざしにあらざるか、
きょうきょうきんげん
恐^{おそ}恐^{おそ}謹言^{きんげん}。

十二月二十七日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

くぼの尼御前御返事^{あまごぜんごへんじ}

三六四 三沢御房御返事^{ごぼうごへんじ} 文永十二年 五十四歳御

作 与三沢小次郎 1468p

佐渡^{さど}の国^{くに}の行者^{ぎやうじや}数多^{あまた}此^この所^{ところ}まで下向^{げこう}ゆへに今^{いま}の法門^{ほうもん}説^{とく}き聞^きかせ

候えみらいば未来までのぶつしゆの仏種になる事是れこ皆みな積しゃく尊そんの法恩ありがたし、越
後にて此の歌詠じ候ゆへ書き送り候なり。

おのづから・よこしまに降雨はあらし風こそ夜の・をうつらめ。

二十一日

三六五 三沢抄

建治四年二月 五十七歳

御作 与三沢小次郎

1487p

かへすがへす・するがの人人ひとびとみな同じ御心と申もうさせ給たまい候そうらへ。

柑子こうじ一百・ごぶのりをご等の生の物ものはるばると・わざわざ山

中ちゆうへをくり給たまいて候ま、ならびに・うつぶさの尼にごぜんの御ごこそで

一 給たまい候そうらい了あぬ。

さては・かたがたのをほせくはしくみほどき候。

そもそもぶつぼう

抑 仏法だいちみじんをかくする者は大地微塵だいぢみじんよりをほけれども・まことに仏

になる人は爪つめの上うへの土つちよりも・すくなしと・大覚だいかく・世尊せそん・涅槃ねはんぎよう経きやうにた

しかに・とかせ給たまいて候まいしを、日蓮にちれんみまいらせ候まて・いかなれば・か

くわ・かたかるらむと・かんがへ候そうらいしほどに・げにも・さならむと

をもう事候、ぶっほう 仏法をばがくすれども、ある 或は我が心のをろかなるにより、ある 或はたとひ智慧は、かしこきやうなれども師によりて我が心のまがるをしらず、ぶじゆ 仏教をなをしくならひうる事かた

し、たとひ明師並に実經に値い奉りて正法をへたる人なれども、しょうじ 生死をいで仏にならむとする時には、かならず影の身にそうがごとく、さんしょうしま 雨に雲のあるがごとく、せう 三障四魔と申して七の大事出現す、

たと 設ひ、からくして六は、すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、そ 其の六は且くをく第七の大難は天子魔と申す物なり、た 設い末代の凡夫、ほんぶ 一代聖教の御心をさとり、ま 摩訶止観と申す大事の御文の心を心えて仏になるべきになり候いぬれば、だいろくてん 第六天の

まおう 魔王、此の事を見て驚きて云く、いわ あらあさましや此の者、此の国にあと 跡を止ならば、かれが我が身の生死をいづるかは、さてをきぬ、又人を導くべし、又此の国土を、こくど をさへとりて我が土を浄土となす、いか

んがせんとして欲・色・無色の三界の一切の眷属をもよをし仰せ下し
て云く、各各ののうのうに随つてかの行者をなやましてみよそ

れに・かなわすば・かれが弟子だんな並に国土の人の心の内に入り
かわりて・あるひはいさめ・或はをどしてみよ・それに叶はずは我み
づから・うちくだりて国主の身心に入りかわりて・をどして見むに・
いかでか・とどめざるべきとせんぎし候なり。

日蓮さきより・かかるべしと・みほどき候いて末代の凡夫の今生
に仏になる事は大事にて候いけり釈迦仏の仏にならせ給いし事を
経經にあまたとかれて候に第六天の魔王のいたしける大難いかに
も忍ぶべしとも・みへ候はず候、提婆達多・阿闍世王の悪事は・ひとへ
に第六天の魔王のたばかりとこそみて候へ、まして如来現在・
猶多怨嫉・況滅度後と申して大覚世尊の御時の御難だにも凡夫の身
にちれん
・日蓮にかやうなる者は片時一日も忍びがたかるべし、
まして五十余年が間の種種の大難をや、まして末代には此等は百
せんまん
千万億倍すべく候なる大難をば・いかでか忍び候べきと心に存し

て候いしほどに・聖人は未萌を知ると申して三世の中に未来の事を
知るを・まことの聖人とは申すなり、而るに日蓮は聖人にあらざ
れども日本国の今の代にあたりて・此の国亡亡たるべき事をかねて
知りて
候いしに・此れこそ仏のとかせ給いて候・況滅度後の経文にあたり
て候へ・此れを申しいだすならば仏の指させ給いて候未来の法華経
の行者なり、知りて而かも申さずば世世・生生の問・をうしことど
もり生ん上・教主釈尊の大怨敵其の国の国主の大讎敵・他人にあ
らず、後生は又無間・大城の人・此れなりとかんがへみて・或は
衣食にせめられ・或は父母・兄弟・師匠・同行にもいさめられ・或は
国主・万民にも・をどされしに・すこしもひるむ心あるならば一度に
申し出ださじと・としごろひごろ心をいましめ候いしが・抑過去
遠遠劫より定めて法華経にも値い奉り菩提心もをこしけん、なれど

も設たといい一難なん二難なんには忍しのびけれども大難だいなん次第しだいにつづき来りければ退たいし
けるにや、今度このたびいかなる大難だいなんにも退たいせぬ心ならば申もうし出いだすべしとて
申もうし出いだして侯そうらいしかば・経文きょうもんにたがわず此この度たびの大難だいなんにはあいて
侯そうらいしぞかし。

今は一こうなり、いかなる大難だいなんにも、こらへてんと我が身にあたり当てて心みて候へば、不審ふしんなきゆへに此の山林さんりんには栖すみ候なり、各各は又たといすてさせ給たまうとも一日かたときも我が身命しんみょうをたすけし人人ひとびとなれば、いかでか他人たにんにはにさせ給たまうべき、本より我、一人いかにもなるべし、我いかにしなるとも心に退転たいてんなくして仏になるならば、

とのばらをば導ぶつきたてまつらむとやくそく申もうして候いき、各各は日蓮にちれんほども仏法ぶつぽうをば知らせ給たまわざる上俗なり、所領しりょうあり、妻子さいしあり、所従しよじゆうあり、いかにも叶かないがたかるべし、只ただいつわりをろかにて、をばせかしと申もうし候そうちいき、こそ候そうちへけれ、なに事につけてか、すてまいらせ候べき、ゆめゆめをろかのぎ候べからず。

又法門ほうもんの事はさどの国へながされ候そうちいし已前いぜんの法門ほうもんは、ただ仏にぜんの經と、をばしめせ、此の国の国主こくしゆ我が代をも、たもつべくば真言師等しんごんしにも召し合せ給たまはんずらむ、爾その時まことの大事だいじをば申もうす

べし、弟子等にもなひなひ申すならばひろうしてかれらしりな
ず、さらばよもあわじとをもひて各各にも申さざりしなり。

而るに去る文永八年九月十二日の夜たつの口にて頸をはねられ
んとせし時より、のちふびんなり、我につきたりし者どもにまこと
の事をいわざりけるとをもうて、さどの国より弟子どもに内申す
法門あり、此れは仏より後迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙樂・
伝教・義真等の大論師・大人師は知りてしかも御心の中に秘せさせ
給いし、口

より外には出し給はず、其の故は仏制して云く「我が滅後・末法に入
らずば此の大法いづべからず」とありしゆへなり、日蓮は其の
御使にはあらざれども其の時剋にあたる上・存外に此の法門をさ
とりぬれば・聖人の出でさせ給うまでまづ序分にあら申すな
り、而るに此の法門出現せば正法・像法に論師・人師の申せし法門

は皆日出みないで

て後の星の光・巧匠たくみの後に拙を知るなるべし、此の時には正像しょうぞうの寺堂ぶつどうの仏像・僧等の靈驗れいけんは皆みなきへうせて但此ただの大法だいほうのみ一閻浮提えんぶだいに流布るふすべしとみへて候、各各はかかる法門ほうもんにちぎり有ある人なれば・たのもしと・をばすべし。

又うつぶさの御事おんことは御としよらせ給たまいて御わたりありしいたわしくをもひまいらせ候そうらいしかども・うぢがみへ

まいりてあるついでと候しかば、けさんに入るならば、定めてつみふ
かかるべし、其の故は神は所従なり法華経は主君なり、所従のつ
いでに主君への、けさんは世間にも、をそれ候、其の上尼の御身にな
り給いては、まづ仏をさきとすべし、かたがたの御とがありしかば
けさんせず候、此の又尼ごぜん一人にはかぎらず、其の外の人人も
し。も

べのゆのついでと申す者をあまた、をひかへして候、尼ごぜんは、をや
のごとくの御としなり、御なげきいたわしく候いしかども此の義を
しらせまいらせんためなり。

又とのは、をととしかのけさんの後そらごとにてや候いけん御そら
うと申せしかば、人をつかわして、きかんと申せしに、此の御房たち
の申せしはそれはさる事に候へども、人をつかわしたらば、いぶせく
やをもはれ候はんずらんと申せしかば、世間のならひは、さもやあ

るらむ、げんに御心ざしまめなる上・御所劣ならば御使も有りな
んと・をもひしかども・御使もなかりしかば・いつわりをろかにて・
をぼつかなく候そつちいつる上無常むじょうは常のならひなれ

ども・ごぞことしは世間せけんはうにすぎて・みみへまいらすべしとも・をば
へず、こひしくこそ候そつちいつるに御をとづれ あるうれしとも申もうす計ばかり
なし、尼ごぜんにも・このよしをつぶつぶとかたり申もうさせ給たまい候そつちへ
法門ほうもんの事こまごまと・かきつへ申もうすべく候そつちへども事ひさしくなり候そつちへ
ばとどめ候。

ただし禅宗ぜんしゅうと念仏宗ねんぶつしゅうと律宗りっしゅう等の事は少少前にも申もうして候、
真言宗しんごんしゅうがことに此の国とたうどとをば・ほろぼして候ぞ、善無畏ぜんむい
三蔵さんぞう・金剛智三蔵こんこうちさんぞう・不空三蔵ふくうさんぞう・弘法大師こうぼうだいし・慈覚大師じかくだいし・智証大師ちしょうだいし・此の六
人が大日の三部経だいにちさんぶきょうと法華経ほけきょうとの優劣めいわくに迷惑せしのみならず、三
三蔵さんぞう・事をば天竺てんじくによせて両界をつくりいだし狂惑しけるを・三

大師だいしうちぬかれて

にほん

日本へならひわたし国主こくしゆ並に万民ばんみんにつたへ漢土かんどの玄宗皇帝げんそうこうていも代を

にほんこく

ほろぼし日本国にほんこくもやうやくをとろへて八幡大菩薩はちまんだいぼさつの百王ひやくおうのちかい

もやぶれて八十二代おき隱岐ほつおうの法王あずま代たまいを東あずまにとられ給たまいしはひとへ

に三大師だいしの大僧等だいにんがいのりしゆへに還著げんちやく於本人おほんにんして侯かんとう、関東かんとうは此の

悪法あくほう悪人あくにんを対治たいじせしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王ひやくおうにて侯そつらべく侯そつらいつる

悪法あくほう悪人あくにんを対治たいじせしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王ひやくおうにて侯そつらべく侯そつらいつる

悪法あくほう悪人あくにんを対治たいじせしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王ひやくおうにて侯そつらべく侯そつらいつる

悪法あくほう悪人あくにんを対治たいじせしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王ひやくおうにて侯そつらべく侯そつらいつる

悪法あくほう悪人あくにんを対治たいじせしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王ひやくおうにて侯そつらべく侯そつらいつる

を、又かの悪法の者どもを御歸依有るゆへに一国には主なければ。
梵釈・日月・四天の御計いとじて他国にをほせつけてをどして御ら
むあり、又法華經の行者をつかわして御いさめあるを。あやめずし
て彼の法師等に心をあわせて世間出世の政道をやぶり、法にすぎ
て法華經の御かたきにならせ給う、すでに時すぎぬれば此の国やぶ
れなんとす。

やくびやうは。すでにいくさにせんふせわまたしるしなり、あさ
まし。あさまし。

二月二十三日 日蓮 花押

みさわどの

三六六 十字御書

十字一百まい・かしひとこ給たまい了おんぬ、正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め此これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく・とくもまさり人にもあいせられ候なり。

そもそも

抑おさ地獄じごくと仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或あるは地の下

と申もうす

経文きょうもんもあり

或あるは西方ほうとう等と申もうす

経も候、しかれども委細いさいに

たづね候へば我等われらが五尺の身の内に候とみへて候、さもやをばへ候事は我等われらが心の内に父をあなづり母を・をろかにする人は地獄じごく其の人の心の内に候、譬たとへば蓮のたねの中に花と菓このみとのみゆるがごとし、
仏と

申もうす

事も我等われらの心の内に・をはします

譬たとへば石の中に火あり珠たま

の中に財たからのあるがごとし、我等われら凡夫ぼんぶはまつげのちかきと虚空こくうのとを

きとは見候事なし、我等^{われら}が心の内に仏はをはしましけるを知り候は
ざりけるぞ、ただし疑^{うたがい}ある

事は我等は父母の精血変じて人となりて候へば三毒の根本婬欲のみなもと

源なり、いかでか仏はわたらせ給うべきと疑うたがいい候へども又うち

かへしうちかへし案じ候へば其そのゆわれもやとをばへ候、蓮はきよ
きもの泥よりいでたり、

せんだんはかうばしき物大地だいちよりをいたり、さくらはをもしろき物

・木の中よりさきいづ、やうきひは見めよきもの下女のはらよりむ
まれたり、月は山よりいでて山をてらす、わざわいは口より出いでて
身をやぶる。さいわいは心よりいでて我をかざる。

今正月の始に法華經ほけきょうをくやうしまいらせんとをぼしめす御心は

・木より花のさき・池より蓮のつぼみ・雪山せつせんのせんだんのひらけ・月の
始めて出るなるべし、今日本国にほんこくの法華經ほけきょうをかたきとしてわざわい
を千里せんりの外よりまねき

よせぬ、此これをもつてをもうに今又法華經ほけきょうを信ずる人はさいわい

を万里ばんりの外よりあつむべし、影は体より生ずるもの法華經ほけきょうをかたき
とする人の国は体に・かげのそうがごとく・わざわい来るべし、
法華經ほけきょうを信ずる人は・せんだんに・かをばしさのそなえたるがごと
し、又又もう申し候べし。

正月五日

日蓮にちれん 在御判

をもんすどのの女房御返事にようぼうごへんじ

三六七 南条兵衛七郎殿御書 文永元年十二月 四

十三歳御作 与南条兵衛七郎 1493p

御所勞の由承り候はまことにてや候らん、世間の定なき事は病なき人も留りがたき事に候へば、まして病あらん人は申すにおよばず。但心あらん人は後世をこそ思いさだむべきにて候へ、又後世を思い定めん事は私にはかなひがたく候、一切衆生の本師にてまします釈尊の教こそ本にはなり候べけれ。

しかるに仏の教へ又まぢまぢなり人の心の不定なる故か。しかれども釈尊の説教五十年にはすぎず、さき四十余年の間の法門に華嚴經には心仏及衆生、是三無差別・阿含經には苦・空・無常・無我大集經には染淨融通・大品經には混同無二・雙觀經・觀經・阿弥陀經等には往生極樂、此等の説教は皆正法・像法・

末法まっぼうの一切衆生いっさいしゆじやうをすくはんがためにこそとかれはべりけんめ、しか
れども仏いまいかんが**おぼしけん無量義經むりやうぎきやう**に「**方便ほうべんの力を以て四十余年よんじゅうよねん**
には**未だ真実しんじつを顕あらわさず**」と説かれて先**四十余年よんじゅうよねんの往生極樂等おうじやうごくらく**の
一切經いっさいきやうは親ついでの**先判せんぱんのごとく**くひかへされて「**無量無辺不可思議むりやうむへんふかしぎ**・
阿僧祇劫あそぎこうを過すぐるとも終ついに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得えず」といみき
らせ給たまいて**法華經ほけきやうの方便品ほうべんに重かさねて**「**正直しやうじきに方便ほうべんを捨すて但無上むじやうの道**
を説たまく」と説かせ給たまへり、
方便ほうべんをすてよととかれてはべるは**四十余年よんじゅうよねんの念仏等ねんぶつ**をすてよとと
かれて候こゝろ、かうたしかにくひかへして**実義じつぎを定さだむるには**「**世尊せそんの法ほは久**
くして**後要ごよう当たうに真実しんじつを説たまくべし**」といひ「**久こしく斯この要ようを黙もくして務いそ**
いで速すみかに説たまかず」等と定められしかば、**多宝仏たほうぶつは大地だいちよりわきい**
でさせ給たまいてこの事**真実しんじつなりと証しやうじやう 誠まことをくわへ**、**十方じゆつぱうの諸仏しよぶつは八**
方に

あつまりてこうちようぜつそう広長舌相を大梵ほんてん天宮につけさせ給たまふ、二処三會二界八
番の衆生しゆじやう一人もなくこれをみ候いき、此等これらの文をみ候にぶつきやう仏教を信
ぜぬ悪人あくにんげどう外道はさておき候いぬ、ぶつきやう仏教の中に入り候てもにぜんごんきやう爾前・權教
・念ねんぶつ仏等を厚く信じて十遍・百遍・千遍・一万乃至ないし・六万等を一日に
はげみて十年・二十年のあひだにも南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきやうと一遍いっぺんだにも

申さぬ人人は先判に付いて後判をもちぬ者にては候まじきか、
此等は仏説を信じたりげには我身も人も思いたりげに候へども仏説
の如くならば不孝の者なり。

故に法華經の第二に云く「今此の三界は皆是れ我が有なり其の

中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今此の処は諸の患難多し
唯我一人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず」等

云云、此の文の心は釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主な
り、我等衆生のためには阿弥陀仏薬師・仏等は主にてはましませど

も親と師とはましまさず、ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は
釈迦一仏にかぎりたてまつる、親も親にこそよれ釈尊ほどの親・師

も師にこそよれ主も主にこそよれ釈尊ほどの師主はありがたくこ
そはべれ、この親と師と主との仰せをそむかんもの天神・地祇にすて

られたてまつらざらんや、不孝第一の者なり故に雖復教詔而不

信受等と説かれたり、たとひ爾前の經につかせ給いて百千万億劫行
ぜさせ給うとも法華經を一遍も南無妙法蓮華經と申させ給はずば
不孝の人たる故に三世十方の聖衆にもすてられ天神・地祇にも
あだまれ給はんか是一。

たとひ五逆・十悪無量の悪をつくれる人も根だにも利なれば
得道なる事これあり、提婆達多・鳶崛摩羅等これなり、たとひ根鈍
なれども罪なければ得道なる事これあり須利槃特等是なり、我等
衆生は根の鈍なる事すりはんどくにもすぎ物のいろかたちをわき
まへざる事羊目のごとし、貪・瞋・癡きわめてあつく十悪は日日にを
かし五逆

をばおかさざれども五逆に似たる罪又日日におかす、又十悪
五逆にすぎたる謗法は人毎にこれあり、させる語を以て法華經を
謗ずる人はすくなけれども人ごとに法華經をばもちゐず、又もち

みたるやうなれども念仏ねんぶつ等のやうには信心しんじんふかからず、信心しんじんふかき
ものも法華經ほけきようのかたきをばせめず、いかなる大善だいぜんをつくり法華經ほけきようを
千

万部まんぶ読み書写しよしゃし一念三千いちねんさんぜんの觀道くわんどうを得たる人なりとも法華經ほけきようの敵を
だにもせめざれば得道とくどうありがたし、たとへば朝につかふる人の十年
二十年の奉公ほうこうあれども君の敵をしりながら奏そうもせず私ひそかにもあだま
ずば奉公ほうこう皆みなうせて還かえつ

てとがに行はれんが如し、当世の人人は謗法の者としろしめすべし是
二。

仏入滅にふつうめつの次の日より千年をば正法しほほうと申もうして持戒じかいの人多く得道とくどうの人これあり。正法しほほう千年の後は像法ぞうほう千年なり破戒はかいの者は多く得道とくどうすくなし、像法ぞうほう千年の後は末法まつほう万年なり持戒じかいもなし破戒はかいもなし無戒むかいの者のみ国こくに充滿じゅうまんせん、而も濁世じよくせと申もうしてみだれたる世なり、清世しようせいと申もうしてすめる世には直繩じきじようのまがれる木をけづらするやうに非ひをすて是これを用もちうるなり、正像しほぞうより五濁ごじよくやうやういできたりて末法まつほうなり候まうへば五濁ごじよくさかりにすぎて、大風たいふうの大波たいはを起おこして岸きしを打うつのみならず又波またなみと波なみとをうつなり、見濁みじよくと申もうすは正・像しほぞうやうやうすぎぬれば、わづかの邪法じほほうの一つをつたへて無量むりょうの正法しほほうをやぶり世間せけんの罪つみにて悪道あくどうにおつるものよりも仏法ぶつほうを以もつて悪道あくどうに墮おつるもの多しとみへはんべり。

しかるに当世は正・像二千年すぎて末法に入つて二百余年、見濁
さかりにして悪よりも善根にて多く悪道に墮つべき時刻なり 悪は
愚癡の人も悪としればしたかはぬ辺もあり火を水を以てけすが
如し、善は但善と思ふほどに小善に付いて大悪の起る事をしらず、
所以に伝教・慈覚等の聖跡ありすたれあばるれども念仏堂にあ
らずと

いひてすてをきてそのかたはらにあたらしく念仏堂をつくり彼の
寄進の田畠をとりて念仏堂によす、此等は像法決疑經の文の如くな
らば功德すくなしとみへはべり、これらをもつてしるべし善なれど
も大善をやぶる小善は悪道に墮つるなるべし、今の世は末法のはじ
めなり、小乗經の機・権大乘經の機・皆うせはてて唯
実大乘經の

機のみあり、小船には大石をのせず悪人愚者は大石のごとし、

しょうじょうきょう

小乗経 並にごんだいじょうきょう権大乘経 念仏等ねんぶつは小船なり、大悪瘡あくそうの湯治等は

病・大なれば小治こごおよばず、末代濁世まつだいじよくせの我等われらには念仏等ねんぶつはたとへば

冬田を作るが如しごと時があはざるなり是三知。

国くにをしるべし国くにに随したがつて人の心不定ふじょうなり、たとへば江南かんのの橘たちばなの

淮北わいほくにうつされてからたちとなる、心なき

そつもく

草木すらところによる、まして心あらんもの何ぞ所によらざらん、

されば玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国を多く記したるに国

の習として不孝なる国もあり孝の心ある国もあり瞋恚のさかな

る国もあり愚癡の多き国もあり、一向に小乗を用る国もあり

一向大乘を用る国もあり大小兼学する国もありと見侍り、又

一向に殺生の国一向に偷盗の国又穀の多き国又粟等の多き国不定

あり、抑日本国はいかなる教を習つてか生死

を離るべき国ぞと勘えたるに法華経に云く「如来の滅後に於て

閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ」等云云、此の文の心

は法華経は南閻浮提の人のための有縁の経なり、弥勒菩薩の云く

「東方に小国有り唯だ大機のみ有り」等云云、此の論の文の如きは

閻浮提の内にも東の小国に大乘経の機あるか、肇公の記に云く

茲の典

は東北のとうほく小国しょうこくに有縁うえんなり」等云云、法華經ほけきょうは東北の国とうほくに縁ありとか
かれたり、安然あんねん和尚わじょうの云く「我が日本にほんこく・皆大乘みなだいじょうを信ず」等云云、
慧心えしんの一乗いちじょう要決ようけつに云く「日本にほん一州えんきじゆんいつ・円機えんき純じゆん」等云云、釈迦しゃか如來にょらい・
彌勒みろく菩薩ぼさつ・須梨しゆり耶蘇やそ摩まさ三蔵さんぞう・羅什らじゆ三蔵さんぞう・僧肇そうじつ法師ほふし・安然あんねん和尚わじょう・慧心えしんの
先德せんたく等の心こころならば日本にほんこくは純じゆんに法華經ほけきょうの機きなり、一句いっく一偈いちげなりと
も行ともぜば必ず得道とくどうなるべし有縁うえんの法ほふなるが故ゆゑなり、たとへばくろか
ねを磁石じしやくのすうが如ごとし方諸もろもろの水みづをまねくにいたり、念仏ねんぶつ
等の余善よぜんは無縁むえんの国くになり磁石じしやくのかねをすわす方諸もろもろの水みづをまねかざ
るが如ごとし、故ゆゑに安然あんねんの釈しゃくに云く「如實乘もじじつじょうに非あらずんば恐おそらくは自他じたを
欺あざむかん」等云云、此こゝの釈しゃくの心こころは日本にほんこくの人ひとに法華經ほけきょうにてなき法ほふをさ
ずくるもの我が身みをもあざむき人ひとをもあざむく者と見えたり、さ
れば法ほふは必ず国くにをかんがみて弘ひろむべし、彼の国くにによかりし法ほふなれば
必ず此こゝの国くににもよかるべしと思おもうべからず是四しよ。

又ぶつぽう仏法流布ふの国においても前後ぜんごを勘かんうべし、仏法ぶつぽうを弘ひろむる習ならい必ずさきに弘ひろめける法ほの様やうを知るべきなり、例れいせば病人びやうじんに薬やくをあたふるにはさきに服ふくしたる薬やくの様やうを知るべし、薬やくと薬やくとがゆき合あいてあらそひをなし人ひとをそんずる事ことあり、仏法ぶつぽうと仏法ぶつぽうとがゆき合あいてあらそひをなし人ひとを損こずる事ことのあるなり、さきに外道げどうの法ほ弘ひろまれる

国ならば仏法をもつて・これをやぶるべし、仏の印度にいでて外道を
やぶり・まとうか・ちくほうらんの震旦に來つて道士をせめ上宮
太子・和国に生れて守屋をきりしが如し、仏教においても小乗の
弘まれる国をば大乘經をもつてやぶるべし、無著菩薩の世親の
小乗をやぶりしが如し、權大乘の弘まれる国をば実大乘をもつて
これを

やぶるべし、天台智者大師の南三・北七をやぶりしが如し、而るに
日本国は天台・真言の二宗のひろまりて今に四百余歳、比丘・
比丘尼・うばそく・うばひの四衆・皆法華經の機と定りぬ、善人・
悪人・有智・無智・皆五十展轉の功德をそなふ、たとへば崑崙山に石
なく蓬萊山に毒なきが如し、而るを此の五十余年に法然といふ大
謗法の者いでき

たりて、一切衆生をすかして珠に似たる石をもつて珠を投させ石

をとらせたるなり、止観しかんの五いに云く「瓦礫がりがくを賣とんで明珠みょうじゆなりと申もうす」は是これなり、一切衆生いっさいしゆじやう石いしをにぎりて珠たまとおもふ、念仏ねんぶつを申もうして法華經ほけきやうをすてたる是これなり、此この事をば申せば還かえつてはらをたち法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをのりて・ことに無間むげんの業ごふをますなり。是これ五。

但たとのはこのぎをきこしめして念仏ねんぶつをすて法華經ほけきやうにならせ給たまいてはべりしが、定めてかへりて念仏ねんぶつ者にぞならせ給たまいてはべらんと、法華經ほけきやうをすてて念仏者ねんぶつとならせ給たまはんは峯たの石いしの谷やへころび空くうの雨あめの地ちにおつると・おぼせ大阿鼻地獄おびじごく疑うたがなし、大通結縁だいつうけちえんの者ものの三千塵点劫さんぜんじんてんごうを久遠下種くおんげしゆの者ものの五百塵点じんでんを經へし事こと、大悪知識あくちしきにあいて法華ほけき

經きやうをすてて念仏等ねんぶつの權教ごんきやうにうつりし故ゆゑなり、一家ひとびとの人人ひと念仏者ねんぶつにてましましげに候まいしかばさだめて念仏ねんぶつをぞすすめまいらせ給たまい候まらん、我が信まじたる事ことなればそれも道理どうりにては候まへども悪魔あくまの法然ほつねんが

一類いちるいにたばらかさ

れたる人ひとなりとおぼして大信心しんじんを起し御用もちいあるべからず、大あくま悪魔は貴とうとき僧そうとなり父母ふぼ・きやうだい・兄弟等けいだいにつきて人の後世ごしやうをば障さわるなり、いかに申もうすとも法華經ほけきやうをすてよとたばかりげに候そうぢはんをば御用もちいあるべからず、まづ御ごきやうさくあるべし。

念仏ねんぶつ実まことに往生おうじやうすべき証文しやうもんつよくば此こゝの十二年じふにねんが間ま念仏ねんぶつ者もの無間むげん地獄じごくと申もうすをばいかなるところへ申もうしいだして

もつめずして候べきか、よくよくゆはき事なり、法然・善導等が、か
きをきて候ほどの法門は日蓮らは十七八の時よりしりて候いき、こ
のごろの人の申すもこれにすぎず、結句は法門はかなわずしてよせ
てたたかひにし候なり、念佛者は数千万かたうど多く候なり、日蓮
は唯一人かたうどは一人もこれなし、今までもいきて候はふかしぎ
なり、今年も十一月十一日安房の国・東条の松原と申す大路にし
て、申酉の時数百人の念佛等にまちかけられて候いて、日蓮は唯一
人十人ばかりものの要にあふものは、わづかに三四人なり、いるや
はふるあめのごとし、うつつたちはいなづまのごとし、弟子一人は当座
にうちとられ二人は大事のてにて候、自身もきられ打たれ結句
にて候いし程に、いかが候いけんうちもらされていままでいきてはべ
り、いよいよ法華經こそ信心まさり候へ、第四の巻に云く、而も此の
経は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや、第五の巻に云く

「一切世間怨多く」

して信じ難し^{がた}」等云云、日本国^{にほんこく}に法華經^{ほけきょう}よみ学する人これ多し、人の妻をねらひぬすみ等にて打はらるる人は多けれども法華經^{ほけきょう}の故^{ゆえ}にあやまたるる人は一人もなし、されば日本国^{にほんこく}の持經者^{じきょう}はいまだ此の經文^{きょうもん}にはあわせ給はず唯日蓮^{ただにちれん}一人こそよみはべれ我不愛身命^{がふあいしんみょう}。但惜無上道^{たんしやくむじょうどう}是なりされば日蓮^{にちれん}は日本第一^{にほんだいいち}の法華經^{ほけきょう}の行者^{ぎょうじや}なり。

もしさきにたたせ給^{たま}はば梵天^{ぼんてん}・帝釈^{たいしやく}・四大天王^{えんまだいおう}・閻魔大王^{えんまだいおう}等にも申^{もう}させ給^{たま}うべし、日本第一^{にほんだいいち}の法華經^{ほけきょう}の行者^{ぎょうじや}日蓮房^{にちれん}の弟子^{でし}なりとなのらせ給^{たま}へ、よもはうしんなき事は候^{ひとたび}はじ、但一度^{ひとたび}は念仏^{ねんぶつ}一度^{ひとたび}は法華經^{ほけきょう}となへつ。一心^{いちじん}ましまし人の聞^{きこ}にはばかりなれど。だにも候^{ひとたび}はばよも日蓮^{にちれん}が弟子^{でし}と申^{もう}すとも御用^{ごよう}る候^{ひとたび}はじ後にうらみさせ給^{たま}うな、

但し又法華經^{ほけきょう}は今生^{こんじょう}のいのりともなり候^{ひとたび}なれば。もしやとしてい

きさせ給たまい候はば・あはれ・とくとく見参してみづから申もうしひらかば
や、語ことばはふみにつくさず・ふみは心をつくしがたく候へばとどめ候い
ぬ、恐恐きょうきょう謹言。

文永元年十二月十三日

日蓮 花押

なんでうの七郎殿

三六八

薬王品得意抄

文永二年

四十四歳御作

与上野時光妻

1499p

此の薬王品の大意とは此の薬王品は第七の八巻・二十八品の中に
 は第二十三の品なり、此の第一巻に序品方便品の二品有り序品は
 二十八品の序なり、方便品より人記品に至るまで八品は正には
 二乗作仏を明し傍には菩薩・凡夫の作仏を明かす、法師宝塔提婆
 勸持安樂の五品は上の八品を末代の凡夫の修行す可き様を説く
 り、又涌出品
 は寿量品の序なり、分別功德品より十二品は正には寿量品を
 末代の凡夫の行ず可き様を傍には方便品等の八品を修行す可き様
 を説くなり、然れば此の薬王品は方便品等の八品並びに寿量品を
 修行す可き様を説きし品なり。

此の品に十の譬有り、第一大海の譬、先ず第一の譬を粗申す

可し、此の南閻浮提に二千五百の河あり、西俱耶尼に五千の河あり

總じて此の四天下に二万五千九百の河あり、或は四十里乃至百里

・二里・一町・一尋等の河之有り、然りと雖も此の諸河は總じて深淺

の事大海に及ばず、法華已前の華嚴經・阿含經・方等經・般若經・

深密經・

阿彌陀經・涅槃經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦

如来の所説の一切經・大日如来の所説の一切經・阿彌陀如来の所説

の一切經・薬師如来の所説の一切經過去・現在・未来三世の諸仏

所説の一切經の中に法華經第一なり、譬えば諸經は大河・中河・小

河等の如し法華經は大海の如し等と説くなり、河に勝れたる大海に

十の徳有り、

一に大海は漸次に深し河は爾からず、二に大海は死屍を留めず河は

爾しからず、三に大海たいかいは本の名字みょうじを失うしなう河しかは爾しからず、四に大海たいかいは一いち味みなり河しかは爾しからず、五に大海たいかいは宝等たう有り河しかは爾しからず、六に大海たいかいは極きわめて深しかし河しかは爾しからず、七に大海たいかいは広大無量むりようなり河しかは爾しからず、八に大海たいかいは大身しゆじうの衆生等しゆじう有り河しかは爾しからず、九に大海たいかいは潮そうげんの増減そうげん有り河しかは爾しからず、十に大海たいかいは大雨だいう・大河たうを受けて盈溢よういつ無し河しかは爾しからず。

此こゝの法華經ほけきやうには十じゆの徳とく有り諸經しよきやうには十じゆの失たが有り、此こゝの經きやうは漸次ぜんじ深多しんたにして五十展轉ごじゆうてんでんなり諸經しよきやうには猶なほ一も無し

況や二三四乃至五十展転をや河は深けれども大海の浅きに及ばず
 諸経は一字・一句・十念等を以て十悪・五逆等の悪機を撰すと雖も
 未だ一字・一句の随喜五十展転には及ばざるなり、此の経の大海に
 死屍を留めずとは法華経に背く謗法の者は極善の人為りと雖も猶
 之を捨つ何に況や悪人なる上謗法を為さん者をや、設い諸経を
 謗すと雖も法華経に背かざれば必ず仏道を成ず、設い一切経を信
 ずと雖も法華経に背かば必ず阿鼻大城に墮つ、乃至第八には大海
 は大身の衆生あり等と云うは大海には摩竭大魚等大身の衆生之有
 り、無間地獄と申すは縦 広八万由旬な
 り五逆の者無間地獄に墮ちては一人にて必ず充滿す、此の地獄の
 衆生は五逆の者大身の衆生なり、諸経の小河・大河の中には摩竭
 大魚之無し法華経の大海には之有り、五逆の者 仏道を成す是れ実
 には諸経に之無し諸経に之有りと云うと雖も實には未顕眞実な

り、故に一代聖教を諳し天台智者大師の釈に云く他経は但菩薩に記して二乗に記せず乃至但善に記して悪に記せず、今経は皆記す等云云、余は且く之を略す。

第二には山に譬う、十宝山等とは、山の中には須弥山第一なり、

十宝山とは一には雪山・二には香山・三には軻梨羅山・四には

仙聖山・五には由乾陀山・六には馬耳山・七には尼民陀羅山・八には

斫伽羅山・九には宿慧山・十には須弥山なり、先の九山とは諸経

諸山の如し、但し一一に財あり須弥山は衆財を具して其の財に

勝れたり、例せば世間の金の閻浮檀金に及ばざるが如し、華嚴経の

法界唯心般若の十八空・大日経の五相成身・觀経の往生より

法華経の即身成仏勝れたるなり、須弥山は金色なり、一切の牛馬

人天衆鳥等・此の山に依れば必ず本色を失つて金色なり余山は

爾らず一切の諸経は法華経に依れば本の色を失う例せば黒色の物

の日月にちがつの光あに値あえば色うしなを失うしなうが如ごとし諸經しよきやうの往生おうじやう成仏じふぶつ等の色いろは法華經ほけきやうに値あえば必そず其そのの義うしなを失うしなう。

第三だいさんには月つきに譬たとう衆星しゆせいは或あるは半里はんり或あるは一里いちり或あるは八里はちり或あるは十六里じゅうろくには過すぎず、月つきは八百余里はちひやくじゆりなり衆星しゆせいは光有ありと雖いえども月に及およばず、設たとい百千万億せんまん乃至ないし一四天下してんげ三千大千さんぜん十方世界じゅうぼうせかいの衆星しゆせい之これを集あむとも一の月いつげつの光あに及およばず、何いかに況いはや一の星月いつせいげつの光あに及および可べきや、華嚴經けこんきやう・阿含經あこんきやう・方等ほうとう・般若はんによ・涅槃經ねはんきやう・大日經だいにちきやう・觀經等くわんきやうの一切いっさいの經きやう之これを集あむとも法華經ほけきやうの一字いつじに及およばじ、一切衆生いっさいしゆじやうの心中しんちゆうの見思けんじ・塵沙じんじや・無明むみやうの三惑さんかく並なに十惡じじゆあく・五逆等ごぎやくの業やみよは暗夜やみよのごとし華嚴經等けこんきやうの一切いっさい經きやうは闇夜やみよの星ほしのごとし法華經ほけきやうは闇夜やみよの月つきのごとし法華經ほけきやうを信しんずれども深く信しんぜざる者ものは半月はんげつの闇夜やみよを照てらすが如ごとし深く信しんずる者ものは満月まんげつの闇夜やみよを照てらすが如ごとし月無なくくして但星あのみ有ある夜よには強力きやうりきの者ものかたましき者ものなどは行歩ぎんぷすと

いへども老骨の者よにん女人よにんなむどは行歩かなに叶あわず、満月まんげつの時は女人よにん老骨
なむども、或あるは遊宴ゆうえんのため、或あるは人に値あわんが如ごとき行歩じざい自在じざいなり、
諸經しよきやうには菩薩ぼさつ大根性こんじやうの凡夫ほんぶは設たい得道とくとくどうなるとも二乘にじやう凡夫ほんぶ悪人あくにん・
女人よにん乃至ないしまつた末代まいだいの老骨らうこつの懈怠けたい・無戒むかいの人人ひとびとは往生おうじやう成仏じやうぶつ不定ふじやうなり、
法華經ほけきやうは爾しからず、一乘にじやう悪人あくにん・女人よにん等なほ猶なほ仏ぶつに成いる何いかに況ばさつや菩薩ぼさつ・大
根性こんじやうの凡夫ほんぶ

をや、又月またつきはよいよりも暁あけは光ひかりまさり春夏しゆんかよりも秋冬しゆとうは光ひかりあり、
法華經ほけきやうは正像しやうざう二千年にせんねんよりも末法まふほうには殊ことに利生りしやう有ある可べきなり、問とう
て云いわく証文しやうもん如何いかん答こたえて云いわく道理どうり顯然けんねんなり、其その上つぎ次しぎ下しもの文ぶんに
云いわく「我が滅度めつどの後ご・後ごの五百歳ごひゃくさいの中に広宣かうせん流布るふして閻浮提えんぶだいに於おて
断絶だんぜつせしむること無し」等云云とんげん、此この經文きやうもんに二千年にせんねんの後ご南閻浮提えんぶだい
広宣かうせん
流布るふすべし・ととかれて候たえは・第三だいさんの月つきの譬たとえの意いなり、此この意いを

こんほんでんぎょうだいししやく
根本伝 教大師釈して云く「正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り
ほつけいちじょう
法華一乗の機今正しく是れ其の時なり」等云云、正法千年も像法
ほけきょう りやくしよきょう
千年も法華經の利益諸經に之れ勝る可し然りと雖も月の光の春夏
の正像二千年・末法の秋冬に至つて光の勝るが如し。

第四に日の譬は星の中に月の出でたるは星の光には月の光は
まさとも未だ星の光を消さず、日中には星の光消ゆるのみに非ず又
月の光も奪いて光を失う、爾前は星の如く法華經の迹門は月の
ごと じゅりょうほん
如し寿量品は日の如し、寿量品の時は迹門の月未だ及ばず何に
にぜん
況や爾前の星をや、夜は星の時・月の時も衆務を作さず、夜暁て必
しゅつむ な
ず衆務を作す、
にぜん しゃくもん
爾前・迹門にして猶生死を離れ難し本門寿量品に至つて必ず生死
を離る可し、余の六譬之を略す、此の外に又多くの譬此の品に有
り、其の中に渡りに船を得たるが如しと此の譬の意は生死の大海

には爾にぜん前の経は或あるは筏 或あるは小船

なり、生死しやうじの此岸しがんより生死しやうじの彼岸ひがんには付くと雖も生死しやうじの大海たいかいを渡わたり極楽ごくらくの彼岸ひがんにはとつきがたし、例せば世間せけんの小船せうせん等が筑紫つくしより坂東さかとうに至り鎌倉かまくらよりいの嶋しまなどへとつけども唐土たうどへ至らず唐船たうせんは必ず日本にほんより震旦しんたん国に至るに障さわり無きなり又云く、「貧いきに宝たからを得たるが如ごとし」等云云、爾前にぜんの国は貧国ひんくになり爾前にぜんの人は餓鬼がきなり法華ほけきやう経は宝たからの山やまなり人は富人ふくになり。

問いうて云く爾前にぜんは貧国ひんくにといふ経文きやうもん如何いかん答こたえて云く授記じゆき品ひんに云く「飢うえたる国くにより来きつて忽たちまちに大王だいおうの膳ぜんに遇あへるが如ごとく」等云云、女人にょにんの往生おうじやうじ成仏じやうぶつの段ぶつは経文きやうもんに云く「若もし如来にょらいの滅後めつご・後ごの五百歳ごひゃくさいの中ちゆうに若もし女人にょにん有あつて是この

經典きやうてんを聞きいて説ごの如ごとく修行しゆじやうせば此こに於おいて命終みやうじゆつして即すなわち安楽あんらく世界せかい阿弥陀あみだ仏ぶつの菩薩ぼさつ・大衆たいしゆうに困遶いにようせられて住すする処ところに往ゆいて蓮華れんげの中

宝座の上に生じ」等云云。

問うて曰く此の経・此の品に殊に女人の往生を説く何の故か
有るや、答えて曰く仏意測り難し此の義決し難きか但し一の料簡
を加えば女人は衆罪の根本破国の源なり、故に内典・外典に多く
之を禁しむ其の中に外典を以て之を論ずれば三従あり三従と申す
は三したがうと云ふなり、一には幼にしては父母に従う嫁して夫に
従う老いて子に従う此の三障有りて世間自在ならず、内典を以て
之を論ずれば五障有り五障とは一には六道輪回の間男子の如く
大梵天王と作らず二には帝釈と作らず三には魔王と作らず四には
転輪聖王と作らず五には常に六道に留まりて三界を出でて仏に成
らず超日月三昧、銀色女経に云く「三世の諸仏の眼は大地に墮落すと
も法界の諸の女人は永く成仏の期無し」等云云、但し凡夫すら
賢王聖人は妄語せずはんよきといひし者はけいかに頸をあたいき

さつと申せし人は徐君が塚に剣をかけたりきこれ約束やくそくを違えず
妄語もうご無き故なり何いかに況や声聞しょうもん・菩薩ぼさつ・仏をや、仏は昔凡夫ほんぶにてまし
ましし時し小乗經じょうぎょうきょうを習ならい給たまいし時し五戒ごかいを受け始め給たまいし時し五戒ごかいの中
の第四もうちの不妄語もうごの戒を固たもく持たもち給たまいき財たからを奪たわれ命をほろぼされ
し時たもも此の戒をやぶらず大乗だいじょうきょう經きょうを習ならい給たまいし時し又十重じゅうきん禁戒を
持たもち其その十重禁戒きんかいの中の

第四の不妄語戒もつじを持ち給たまいき、此の戒を堅く持ちて無量劫之むりょうじつこれを破りたまわず終ついに此の戒力に依よつててぶつしん成なじ三十二相の中にこうちようぜつそつ広長舌相を得たまえり、此の舌うすくひろくながくして或は面あるにかおをあるをいある或は髮際ぼんてんにいたり、或は梵天ぼんてんにいたる舌の上に五の画あり印文のごとし其の舌の色は赤銅のごとし舌の下に二の珠たまあり甘露かんろを涌出いだす此れ不妄語戒の徳の至いたす所なり、仏此の舌を以もつて三世さんぜの諸仏しよぶつの御眼まなこは大地だいちに落つとも法界ほっかいの女人にょにんは仏になるべからずと説か

れしかば一切いっさいの女人にょにんは何なる世にも仏には成らせ給たまうまじきこそ覚おぼえて候へさるにては女人にょにんの御身おんみも受けさせ給たまいては設たひ后きさき三公の位おほにそなはりても何かはすべき善根ぜんこん仏事ぶつじをなしてもよしなしとこそ覚おぼえ候へ、而しかるを此の法華經ほけきようの薬王品やくおうほんに女人にょにんの往生おうじようをゆるされ候ぬる事又不思議ふしぎに候、彼の經の妄語もうごか此の經の妄語もうごかいかにも

いっぽう
一方

は妄語たるべきか、若し又一方妄語ならば一仏に一言あり信じ
難し但し無量義經の四十余年には未だ眞實を顕さず涅槃經の如來
には虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の說に因ると知しめすの文
を以て之を思えば仏は女人は往生成仏すべからずと説かせ給いけ
るは妄語と聞えたり、妙法華經の文に世尊の法は久くして後に要す
当に眞實

を説くべし妙法華經乃至皆是眞實と申す文を以て之を思うに女人
の往生成仏決定と説かるる法華經の文は実語不妄語戒と見えた
り、世間の賢人も但一人ある子が不思議なる時、或は失ある時は永
く子為るべからざるの理・起請を書き、或は誓言を立てると雖も
命終の時に臨めば之を許す、然りと雖も賢人に非ずと云わず又
妄語せる者とも云わず仏も亦是くの如し、爾前四十余年が間は

菩薩ぼさつの得道とくどう凡夫ぼんぶの得道とくどう善人ぜんにん男子なんし等の得道とくどうをば許ゆるすやうなれども、
二乘にじょう悪人あくにん・女人にょにんなどの得道とくどう此これをば許ゆるさず 或あるは又許ゆるすににたる
事こともあり、いまだ定めがたかりしを仏ぶつの説教せつぎょう・四十二年しにじゅうにねんすでに過ぎ
て八年はつねんが間ま・摩謁提国王まぎやくていこわう舎城しゃじょう・耆闍崛山きしゃくくつせんと申もうす山さんにして法華經ほけきょうを説
かせ給たまうとおぼせし時とき先まづづ無量義經むりょうぎきょうと申もうす經きょうを説かせ給たまふ
無量義經むりょうぎきょうの文ぶんに云いわく四十余年よんじゅうしよねん云いふ。

月日

日蓮にちれん

花押かおう

三六九

上野殿後家尼御返事うえのとのごへんじ

文永十一年七月ぶんえい

五十三歳御作

1504p

御供養くようの物種種給しゅじゆ畢おわんぬ、抑そもそもも上野殿死去うえのとのしきよの後はをとづれ
冥途めいどより候やらんきかまほしくをぼへ候、ただしあるべしともをぼ
へず、もし夢にあらずんばすがたをみる事よもあらじ、まぼろしに
あらずんばみみえ給たまう事いかが候はん、さだめて靈山淨土りやうぜんじよつどにてさば
の事をばちうやにきき御覧じ候らむ、妻子等さいしは肉眼にくげんなればみさせ、
きかせ給たまう事なしついに一所とをぼしめせ、生生世世しようじよよよの間ちぎ
りし夫は大海たいかいのいさごのかずよりもをくこそをはしまし候いけ
ん、今度このたびのちぎりこそまことのちぎりのをとこよ、そのゆへはをとこ
のすすめによりて

法華經の行者とならせ給へば仏とをがませ給うべし、いきてをはし
き時は生の仏今は死の仏生死ともに仏なり、即身成仏と申す大事
の法門これなり、法華經の第四に云く、「若し能く持つこと有れば
即ち仏身を持つなり」と云云。

夫れ淨土と云うも地獄と云うも外には候はずただ我等がむねの
間にあり、これをさとるを仏といふ。これにまよふを凡夫と云う、こ
れをさとるは法華經なり、もししからは法華經をたもちたてまつる
ものは地獄即寂光とさとり候ぞ、たとひ無量億歳のあひだ權教を
修行すとも、法華經をはなるならばただいつも地獄なるべし、
此の事日蓮が申すにはあらず釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏の
定めをき給いしなり、されば權教を修行する人は火にやくるもの
又火の中へいり、水にしづむものなをふちのそこへ入るがごとし、
法華經をたもたざる人は火と水との中にいたるがごとし、法華經

ひぼう 誹謗の悪知識たる法然・弘法等をたのみ阿弥陀經・大日經等を信じ
たま 給うはなを火より火の中水より水のそこへ入るがごとし、いかでか
くかん 苦患をまぬかるべきや、等活・黒繩・無間地獄の火坑・

紅蓮・大紅蓮の氷の底に入りしづみ給はん事疑なかるべし、
法華經の第二に云く「其の人命終して阿鼻獄に入り是くの如く
展転して無数劫に至らん」云云。

故聖靈は此の苦をまぬかれ給いすでに法華經の行者たる日蓮
が檀那なり、經に云く「設い大火に入るも火も焼くこと能わず、
若し大水に漂わされ為も其の名号を称れば即ち浅き処を得ん」又
云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」云云、あらたのも
しや・たのもしや、詮するところ地獄を外にもとめ獄卒の鉄杖阿防
羅刹のかし

やくのこゑ別にこれなし、此の法門ゆゆしき大事なれども、尼にた
いしまいらせておしへまいらせん、例せば竜女にたいして文殊菩薩
は即身成仏の秘法をとき給いしがごとし、これをきかせ給いて後は
いよいよ信心をいた

させ給へ、法華經の法門をきくに付けて、なをなを信心をはげむを。
まことの道心者とは申すなり、天台云く「從藍而青」云云、此の釈の
心はあいは葉のときよりも、なをそむれば、いよいよあをし、法華經
はあいのごとし修行のふかきは、いよいよあをきがごとし。

地獄と云う二字をばつちをほるとよめり、人の死する時つちをほ
らぬもの候べきか、これを地獄と云う、死人をやく火は無間の火炎
なり、妻子・眷属の死人の前後にあらそひゆくは獄卒阿防羅刹な
り、妻子等のかなしみなくは獄卒のこゑなり、二尺五寸の杖は鉄杖
なり馬は馬頭・牛は牛頭なり、穴は無間・大城八万四千のかまは
八万
四千の塵勞門家をきりいづるは死出の山・孝子の河のほとりにたた
ずむは三途の愛河なり、別に求むる事はかなしはかなし、此の
法華經をたもちたてまつる人は此れをうちかへし、地獄は寂光土。

火焰ほつしんは報身ほうしん如来にょらいの智火ちか・死人しにんは法身ほうしん如来にょらい火坑かきようは大慈だいじ悲ひ為い室しつの心身おうじん
如来にょらい、又またつえは妙法みょうほう実相じつそうのつえ、三途さんずの愛河あいがは生死しょうじ即そく涅槃ねはんの大海たいかい・

死出ししゅつの山さん

は煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだいの重山じゆうざんなり、かく御心ごしん得とくさせ給たまへ・即身そくしん成じやう仏ぶつとも
開かい仏ぶつ知ち見けんともこれこれをさとり・これをひらくを申もうすなり、提婆だいば達だつ多たは
阿鼻あび獄じやくを寂光じやくくわう極樂じやくらくとひらき、竜女りゆうにょが即身そくしん成じやう仏ぶつもこれより外がいは候こうは
ず、逆ぎやく即そく是ぜ順じゆんの法華ほけき經きやうなれば

なりこれ妙の一字の功德なり。

竜樹菩薩の云く「譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが

如し」云云、妙楽大師云く「豈伽耶を離れて別に常寂を求めん

寂光の外別に娑婆有るに非ず」云云、又云く「実相は必ず諸法・

諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土なり」云云、

法華經に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、寿量品に云く「我

實に成仏してよ

り已来無量無辺なり」等云云、此の經文に我と申すは十界なり

十界本有の仏なれば浄土に住するなり、方便品に云く「是の法は

法位に住して世間の相常住なり」云云、世間のならひとして三世

常恒の相なればなげくべきにあらずをどろくべきにあらず、相の

一字は八相なり八相も生死の二字をいはず、かくさとるを法華經

の行者の即身

成じやうぶつ仏ぶつと申もうすなり、故しよ聖しよ靈りやうぶつは此こゝの經きやうの行ぎやう者じやなれば即そく身しん成じやうぶつ仏ぶつ疑ぎい
なし、さのみなげき給たまうべからず、又またなげき給たまうべきが凡ほんぶ夫ぶのこと
わりなり、ただし聖しよ人にんの上うへにもこれあるなり、釈しやく迦か仏ぶつ御ご入にやうめつ滅めつのと
き諸しよだい大だい弟てい子し等とうのさとりついでしのなげき凡ほんぶ夫ぶのふるまひをたま示し給たまうか。

いかにもいかについでんも追つい善ぜん供く養やうを心しんのしんじをよぶほどはたまげみ給たまうべし、古
徳たかのことばにも心しん地じを九しゆ識じにもち修しゆ行ぎやうをたまば六りく識じにせよとをしへ
給たまうことわりにもや候こうらん、此こゝの文ぶんには日にち蓮れんが秘ひ蔵ざうの法ほう門もんかきて候
ぞ、秘たかしさたかせ給たまへ秘たかしさたかせ給たまへあなかしこ・あなかしこ。

七月十一日

日蓮にちれん 花押かおう

上野うゑの殿との後ご家け尼あま御ご前ぜん御ご返へん事じ

二七〇 上野殿御返事

ぶんえい 文永十一年七月 五十三

歳御作

1507p

鷺がもくとつる目十連・がわのり二帖・じやうかう二十束・給候たびそちらい畢おわぬかまくらにてかりそめの御事おんこととこそ・をもひまいらせ候いしに、をもひわれさせ給たまわざりける事申もうすばかりなし、こ故う上へのどのだにもをはせしかばつねに申もうしうけ給たまわりなんとなげきをもひ候いつるに、御をんかた遣みに御みをわか愛くして・とどめをかれけるか・すがたのたがわせ給たまわぬに、御心さひにたまいられける事もういづばかりなし、法華ほけき経よにて仏たまいにならせ給たまいて候たまいとうけ給たまわりて、御はかにまいりて候いしなり、又この御心おんこころざし申もうすばかりなし、今年ことしのけかちにはじめたる山中やまなかに木きのもとに・このはうちしきたるやうなるす

みか・をもひやらせ給え、このほどよみ候・御経の一分をことのへ
廻向えこうしまいらし候、あわれ人はよき子はもつべかりけるものかな
と、なみだかきあえずこそ候いし、妙莊嚴王みょうそうごんは二子ふたりこにみちびかる、
かの王は悪人あくにんなり、こうへのどのは善人ぜんにんなり、かれにはにるべくもな
し、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

七月二十六日

日蓮にちれん

花押かおう

御返事ごへんじ

人にあながちにかたらせ給うべからず、若き殿わかが候へば申すべし。

十三歳御作 与南条七郎次郎

1508p

聖人二管・柑子一籠・
 十枚・薯蕷一籠・牛房一束・種種の物
 送り給ひ候。

得勝・無勝の二童子は仏に沙の餅を供養したてまつりて閻浮提三分が一の主となる所謂阿育大王これなり、儒童菩薩は錠光仏に五茎の蓮華を供養したてまつりて仏となる今の教主釈尊これなり、法華經の第四に云く、「人有つて仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無数の偈を以て讚めん、是の讚仏に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは其の福復彼れに過ぎんと等云云、文の心は仏を一中劫が間供養したてまつる

より、末代悪世まつだいあくせの中に人のあながちにほけきょうにくむ法華經ぎょうじやの行者くようを供養する功德くどくはすぐれたりと。とかせ給たまう、たれの人のかかるひが事をばおほせらるるぞと疑うたがいいおもひ候へば教主きみうしゆしやくそん釈尊しやくそんの我とおほせられて候なり、疑うたがはんとも信うたがぜんとも御心ごこころにまかせまいらする、仏の御舌ごしたは、或あるは面かおに覆おおひ。或あるは三千大千世界さんぜんたいせんせかいに覆おおひ。或あるは色究竟天しきくきょうてんまでたまに付け給たまう

、過去かこ遠劫おんのんこうより。このかた一言いちごんも妄語もうごのましまさざるゆへなり、されば、或あるは經いわに云いく「須弥山しゆみせんはくづるるとも。大地だいちをばうちかへすと。も仏ぶつには妄語もうごなし」とみことばかかれたり、日は西よりいづとも大海たいかいの潮うしほはみちひずとも。仏の御言ごごんはあやまりなしとかや、其その上うへ此こゝの法華經ほけきょうは他經たきやうにも。すぐれさせ給たまへば。多宝たほうぶつ仏ぶつも証しょうみょう明しょうみょうし諸しよぶつ仏ぶつも舌したを梵天ぼんてんにつけ給たまう、一字いちじ一点いちてんも妄語もうごは候まじまじきにや。

其その上うへ殿どのはをさなくをはしき、故親父こせふは武士ぶしなりしかどもあな

かちにほけき法華經を尊たまいみ給いしかば・臨終りんじゆう正念しやうねんなりけるよしうけ給たまわ
りき、其その親あとの跡あとをつがせ給たまいいて又此の經を御信用ごしんようあれば・故
しやうりやう聖靈しやうりやう いかいかに草くさのかげにても喜よろこびおぼおすららん、ああわれれいいきてをははせ
ば・いいかにうれしかるべき、此の經きんを持もつひ人ひと人びとはた他た人にんなれども同どうじ
靈山りやうぜんへまいり

あはせ給^{たま}うなり、いかにいはんや故^{しよつりよう} 聖靈^{しよつりよう} も殿も同じく法華經^{ほけきよう}を信
じさせ給^{たま}へば同じところに生れさせ給^{たま}うべし、いかなれば他人^{たにん}は五
六十までも親と同じしらがなる人もあり、我がわかき身に親にはや
くをくれて教訓^{きようくん}をもつけ給^{たま}はらざるらんと御心のうちをしはかる
こそなみだもとまり候はね。

そもそもにちれん

にほんこく

抑^{おさ} 日蓮^{にちれん}は日本国^{にほんこく}をたすけんとふかくおもへども日本国^{にほんこく}の上下^{じょうげ}

ばんにん

万人^{ばんにん}・一同に国のほろぶべきゆへにや用^{もち}いられざる上^{たびたび}度^{たびたび}あだをな

さるれば力をよばず山林^{さんりん}にまじはり候いぬ、大蒙古国^{だいもうこく}よりよせて候

と申せば、申せし事を御用^{もち}いあらば、いかになんど・あはれなり、皆^{みな}

人の当時^{とうじ}のいきつしまのやうにならせ給^{たま}はん事おもひやり候へば、な

みだもとまらず。

ねんぶつしゅう

もう

ほうこく

あくほう

念仏宗^{ねんぶつしゅう}と申すは亡国^{ぼうこく}の悪法^{あくほう}なり、このいくさには大^だ体^{たい}人^{ひと}人^{びと}の自^じ害^{がい}

そうじ

ぜんどう

もう

ぐち

ほっし

をし候はんずるなり、善導^{ぜんどう}と申す愚癡^{ぐち}の法師^{ほっし}がひろめはじめて自^じ害^{がい}

をし候はんずるなり、善導^{ぜんどう}と申す愚癡^{ぐち}の法師^{ほっし}がひろめはじめて自^じ害^{がい}

をして候ゆへに念仏ねんぶつをよくよく申せば自害じがいの心出来しゅつたいし候ぞ。

禪宗ぜんしゅうと申し当時の持齋法師じさいほっし等は天魔てんまの所為しよゐなり、教外別伝きょうげべつでんと

申もうして神も仏もなしなど申もうすものくるはしき悪法あくほうなり。

真言宗しんこんしゅうと申もうす宗は本は下劣げれつの経にて候いしを誑惑おおわくして法華經ほけきょうに

も勝まさるなど申もうして多くの人人ひとびと・大師だいし僧正そうじょうなどになりて日本にほん国こく

に大体だいたい充満じゅうまんして上一かみいちにん人ひとより頭こづへをかたづけたり、これが第一だいいちの邪事じゃじ

に候を昔より今にいたるまで知る人なし、但伝でんぎょう教大師だいいしと申せし人

こそしりて候いしかども・くはしくもおほせられず、さては日蓮にちれんほぼ

この事

をしれり、後白河ごしろがわの法皇ほふの太政たいていの入道にゅうどうに・せめられ給たまいし、隠岐おきの

法王ほうおうのかまくらにまけさせ給たまいし事ことみな真言しんこん悪法あくほうのゆへなり、漢土かんと

にこの法ほうわたりて玄宗げんそう皇帝こうていほろびさせ給たまう、この悪法あくほうかまくらに下

つて当時とうじかまくらにはやる僧正そうじ法印ほふいん等は是これなり、これらの人人ひとびとこの

いくさを調伏たうじやくせば百日たたかふべきは十日につづまり・十日のいくさは一日にせめらるべし。

今始めて申すもつにあらず二十余年が間音こえもをしまはずよばはり候いぬるなり、あなかしこ・あなかしこ、この御文おんふみは大事だいじの事どもかきて候、よくよく人によませてきこしめせ、人もそしり候へものともおもはぬ法師等ほつしなり、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

ぶんえい
文永十一年太歳甲戌十一月十一日
きのえいぬ

にちれん
日蓮
かおう
花押

ごへんじ
南条七郎次郎殿御返事

三七二 春の祝御書ごしよ

1510p

春のいわいわすでに事ふり候いぬ、さては故ななん条でう殿どのはひさしき事には候はざりしかどもよろず事にふれてなつかしき心あり

しかば・をろかならずをもひしに・よわひ盛さかんなりしに・はかなかり
し事わかれかなしかりしかばわざとかまくらよりうちくだかり御
はかをば見候いぬ、それよりのちはするがのびんにはと・をもひし
にこのたびくだしには人にしのびてこれへきたりしかばにしやまの
入道にゅうどう殿にもしられ候はざりし上は力をよばずとをりて候いしが心
にかかりて候その心をとげんがために此の御房ごぼうは正月の内につかわ
して御はかにて自我じがけ偈一卷よませんとをもひてまいらせ候、御との
の御かたみもなしなんとなげきて候へば・とのをとどめをかれ
ける事よろこび入つて候、故殿は木のもと・くさむらのかげ・かよう
人もなし、仏法ぶつぽうをも聴聞ちやうもんせんず、いかにつれづれなるらん、をもひ
やり候へばなんだもとどまらず、とのの法華ほけきやう經の行者ぎやうじうちくして御
はかにむかわせ給たまうには、いかにうれしかるらんいかによれしかる
らん。

三七三

上野殿御返事うえのとのごへんじ

建治元年五月がねん

五十四歳

御作 与上野次郎時光

1511p

さつきの二日にいものかしらいしのやうにほされて候を一駄、ふ
じのうへのよりみのぶの山へをくり給たまいて候。

仏おんでしの御弟子にあなりちと申せし人は天眼第一てんげんだいいちのあなりちとて十

人の御弟子おんでしのその一迦葉舍利弗かしようしやりほつ・目連阿難もくれんあなんにかたをならべし人な

り、この人のゆらひをたづねみれば・師し子しき類よ王おうと申せし国王こくおうの第二

の王子みこに・こくぼん王と申せし人の御子釈迦しゃかにやらい如来のいとこにて・おは

しましき、この人の御名みな三つ候、一には無貧・二には如意にょい・三にはむ

れう

と申もす一一にふしぎの事候、昔うえたるよにりだそんじやと申せし

たうとき辟支仏ありき、うえたるよに七日ときもならざりけるが

山里にれうしの御器に入れて候いけるひえのはんをこひてならせ

給う、このゆへにこのれうし現在には長者となりのち九十一劫が間

人中天上にたのしみをうけて今最後にこくぼん王の太子と

むまれさせ給う、金のごきにはんとこしなへにたえせずあらかんと

ならせ給う、御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじくを

はせしが法華經第四の巻にして普明如来と成るべきよし仏に仰せを

かほらせ給いき、

妙楽大師・此の事を釈して云く「稗飯軽しと雖も所有を尽し、及び

田勝るるを以ての故に故に勝報を得る」と云云、釈の心かるきひえ

のはんなれども此れよりほかには・もたざりしを・たうとき人のう

えておはせしに・まいらせてありしゆへに・かかるめでたき人となれ

りと云云。

此の身のぶのさわは石なんどはおほく候されども・かかるものなし、その上夏のころなれば民のいとまも候はじ、又御造営と申しさこそ候らんしよせんに山里の事を・をもひやらせ給たまいて・をくりたびて候、所詮は・わがをやのわかれ

をしさに父の御ために釈迦しやくか仏ぶつ・法華經ほけきやうへまいらせ給たまうにや孝養こうようの御心か、さる事なくば梵王ぼんのう・帝釈たいしやく・日月いちがつ・四天してんその人の家をすみかかせんとちかはせ給たまいて候いはいふにかひなきものなれども約束やくそくと申もうす事はたがへぬ事にて候いに、さりともこの人人ひとびとはいかでか仏前ぶつぜんの御約束やくそくをばたがへさせ給たまい候いべき、もし此の事まことになり候いはば、わが大事だいじとおもはん人人ひとびとのせいし候い、又おほきなる難なん来きるべし、その時すでに此の事かなうべきにやとおぼしめしていよいよ強盛かうじやうなるべし、さるほどならば聖靈せいりゆう・仏ぶつになり給たまうべし、成なり給たまうならば来きりてまほり給たまうべし、其の時一切そのときいっさいは心にまかせんずるなり、かへすがへす人のせいしあらば心にうれしくおぼすべし、恐恐きんきん謹言きんげん。

五月三日

にちれん

日蓮

かおう

花押

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

二七四 上野殿御返事

建治元年七月 五十四歳

御作 1512p

むぎひとひとつ・かわのり五条・はじめ六十給了んぬ、いつもの
御事おんことに候へばをどろかれずめづらしからぬやうにうちをばへて候は
ぼむぶの心なり、せけんそうそうなる上を・をみやつくられさせ給へ
ば百姓ひやくせいと申し我が内の者と申しけかちと申しものつくりと申しいく
そばくいとまなく御わたりにて候らむに山のなかのすまゐ
さこそと思ひやらせ給いて鳥のかい子をやしなふが如く灯に油をそ
ふるがごとく・かれたる草に雨のふるが如くうへたる子に乳をあた
ふるが如く法華經の御命をつがせ給う事三世の諸仏を供養し給へ
るにてあるなり、十方の衆生の眼を開く功德にて候べし、尊しと
も申す計りなし、あなかしこ・あなかしこ 恐恐 謹言。

七月十二日

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

にちれんかおう
日蓮花押

しんじょう
進上

三二七五

なんじょうときみつ

上野殿御書

建治元年八月

五十四歳御作

与南条時光

1513p

態わざと御使おんつかいい有難かたく候そ、夫れについては屋形造の由目出度たくこそ候へ、何か参り候わたましいて移徙申し候はばや、一つ棟札むなだの事承り候書たまわき候いて此の伯耆公に進せ候。

此の経文きょうもんは須達長者祇園精舍すだつちやうじやぎおんじょうじやを造りき、然しかるに何いかなる因縁いんねんにやよりけん須達長者七度まで火災にあひ候時ちちやうじや・長者・此の由よしを仏に問たてまつい奉る、仏答えて曰く汝のたまわんじけんぞくとんよくが眷属貪欲深き故ゆえに此の火災の難なん起るなり、長者申ちやうじやまうさくさていかんして此の火災の難なんをふせぎ申もすべきや、仏たまの給たまはく辰巳の方より瑞相ずいそうあるべし汝なんじしやうじん精進して彼まさの方まに向へ

あなた
彼方

より光ささば鬼神三人来りて云わん、南海に鳥あり鳴忿と名く此の鳥の住処に火災なし、又此の鳥一つの文を唱うべし、其の文に云く「聖主天中天迦陵頻伽声哀愍衆生者我等今敬礼」云云、此の文を唱へんには必ず三十万

里が内には火災をこらじと此の三人の鬼神かくの如く告ぐべきなり云云、須達・仏の仰せの如くせしかば少しもちがはず候いき、其の後火災なきと見えて候、これに依りて滅後・末代にいたるまで此の経文を書いて火災をやめ候、今以てかくの如くなるべく候、返す返す信じ給うべき経文なり、是は法華経の第三の卷化城喻品に説かれて候、委しくは此の御房に申し含めて候、恐恐謹言。

八月十八日

にちれん

かおう

日蓮

花押

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

三二七六 单衣抄

建治元年八月 五十四歳御作

1514p

单衣一領送り給い候い畢んぬ。

棄老国には老者をすて日本国には今法華經の行者をすつ、抑

此の国開闢より天神七代・地神五代人王百代あり、神武より已後

九十代欽明より仏法始まりて六十代七百余年に及べり、其の中に

父母を殺す者朝敵となる者山賊海賊数を知らざれどもいまだきか

ず法華經の故に日蓮程人に悪まれたる者はなし、或は王に悪まれ

たれども民には悪まれず、或は僧は悪めば俗はもれ、男は悪めば

女はもれ、或は愚人は悪めば智人はもれたり、

此れは王よりは民男女よりは僧尼愚人よりは智人悪む悪人よりは

善人悪む、前代未聞の身なり後代にも有るべしともおぼえず、故に

生年三十一より今年五十四に至るまで二十余年の間、或は寺を追
出され、或は処をおわれ、或は親類を煩はされ、或は夜打ちにあひ
或は合戦にあひ、或は悪口数をしらず、或は打たれ、或は手を負う
或は弟子

を殺され、或は頸を切られんとし、或は流罪兩度に及べり、二十余
年が間、一時片時も心安き事なし、頼朝の七年の合戦もひまやあり
けん、頼義が十二年の鬪争も争か是にはすべき。

法華經の第四に云く、「如来の現在にすら猶怨嫉多し」等云云、第
五に云く、「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、天台大師も恐ら
くはいまだ此の經文をばよみ給はず、一切世間皆信受せし故なり、
伝教大師も及び給うべからず況滅度後の經文に符合せざるが
ゆえ、日蓮日本国に出現せずば如来の金言も虚くなり多宝の
証明もなに

かせん十方じゅうほうの諸仏しよぶつの御語おんごも妄語もうごとなりなん、仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年がっし月氏かんど・漢土にほん・日本いっさいに一切世間せけん・多怨難信たおんなんしんの人なし、日蓮にちれんなくば仏語ぶつご既に絶えなん、かかる身なれば蘇武そぶが如く雪を食として命を継ぎむなし・李陵りりょうが如くこと箶みのをきて世をすごす、山林さんりんに交つて果なき時は空むなしくして両三日を過すぐ鹿の皮破わりぬれば裸にして三四月に及べり、かかる者

をば何としてか哀とおぼしけん、未だ見参にも入らぬ人の膚を隠す衣を送り給候こそ何とも存じがたく候へ此の帷をきて仏前に詣でて法華經を読み奉り候いなば、御經の文字は六万九千三百八十四字・一一の文字は皆金色の仏なり、衣は一つなれども六万九千三百八十四仏に一一にきせまいらせ給へるなり、されば此の衣を給て候わば

夫妻二人ともに此の仏御尋ね坐して我が檀那なりと守らせ給うらん、今生には祈りとなり、財となり、御臨終の時は月となり、日となり、道となり、橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となり二人を靈山浄土へ迎え取りまいらせ給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

建治元年乙亥八月 日

日蓮 花押

此の文は藤四郎殿女房と常により合いて御覽あるべく候。

三七七 上野殿母尼御前御返事

515p

母尼ごぜんにはことに法華經の御信心のふかくましまし候なる事
悦び候と申させ給候へ。

止観第五の事正月一日辰の時此れをよみはじめ候、明年は世間
忽忽なるべきよし皆人申すあひだ一向後生のために十五日まで
止観を談ぜんとし候が、文あまた候はず候。御計らい候べきか、白
米一斗御志申しつくしがたう候、鎌倉は世間かつして候、僧はあ
またをはします過去の餓鬼道の苦をばつくのわせ候ひぬるか。

法門の事、日本国に人ごとに信ぜさせんと願して候いしが願や
成熟せんとし候らん、当時は蒙古の勘文によりて世間やわらぎて

候なりしさい子細ありぬと見へ候、本より信じたる人ひと人はことに悦ぶげに候か、恐きょう恐きょう。

十二月二十二日

日蓮にちれん花押かおう

上野うえの殿母との尼あま御前ごぜん御返事ごへんじ

夫れそ以れば日本国おもんみればにほんこくを亦水穂またの国と云い亦野馬台またやまと又秋津島あきつしま又扶桑ふそう
 等云云、六十六ヶ国二つの島已上、六十八ヶ国、東西三千余里さんぜん、南北
 は不定ふじようなり、此の国に五畿ごき・七道しちどうあり、五畿ごきと申すは山城やましろ・大和やまと・河
 内わ・和泉せつづ・摂津せつづ等なり、七道しちどうと申すは東海道十五箇国、東山道八箇
 国、北陸道七箇国、山陰道八ヶ国、山陽道八ヶ国、南海道六ヶ国、西
 海道十一ヶ国、亦また鎮西ちんせいと云い、又太宰府と云云、已上こ此れは国なり、
 国主こくしゆをたづぬれば神世十二代は天神七代、地神五代なり、天神七
 代だいいちの第一は国常立尊こくじようだいてんじん乃至ないし第七は伊奘諾尊いざなぎのみこと男なり、伊奘册尊いざなみのみこと妻な
 り、地神五代ちじんごだいの第一は天照太神てんしょうだいてんじん、伊勢太神いせだいてんじん宮日の神みやひのかみ是これなりいざなぎ
 いざなみの御女みめなり、乃至ないし第五は彦波瀲武ひこなぎさたけ、草葺不合尊うがやぶきあえずのみこと、此の神

は第四のひこほの

御子なり母は竜の女なり、已上ちじんごだい地神五代・已上十二代は神世かみよなり、

人王は大體だいたい百代なるべきか其その第一だいいちの王は神武天皇此れはひこな

ぎさの御子なり、乃至第十四は仲哀天皇てんのう父八幡御なり第十五は神功皇后しんこうこうごう母八幡御なり

第十六は応神

天皇にして仲哀と神功の御子今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつなり、乃至第二十九

代は宣化天皇てんのうなり、此の時までは月支漢土には仏法ぶつぽうありしかども

日本国にはいまだわたららず。

第三十代は欽明天皇きんめいてんのう此の皇は第二十七代の継体の御敵子なり治

三十二年、此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百濟国の聖明皇金銅

の釈迦しゃかぶつ仏を渡し奉る、今日本国にほんこくの上下万人・一同に阿弥陀あみだぶつ仏と

申す此れなり、其の表の文に云く臣聞おみく万法の中には仏法最善し

世間の道にも仏法最上ぶつぽうさいじょうなり天皇陛下てんのう亦修行またしゆぎょうあるべし、故ゆえに敬つて

ぶつぞう きよつぎょう ほつし ささ
仏像 経教 法師を捧げて使に附して貢獻す宜く信行あるべき者なり
り 已上、然りといへども 欽明 敏達 用明の三代 三十余年は 崇め給う
事なし、其の間の事さまざまなりといへども 其の時の天変地天は今
の代にこそにて候へども 今は亦其の

代にはにるべくもなき変天なり、第三十三代崇峻天皇の御宇より
仏法我が朝に崇められて、第三十四代推古天皇の御宇に盛にひろま
りき、此の時三論宗と成実宗と申す宗始めて渡りて候いき、此の
三論宗は月氏にても漢土にても、日本にても大乘宗の始なり、故に
宗の母とも宗の父とも申す、人王三十六代・皇極天皇の御宇に
禪宗わた

る、人王四十代・天武の御宇に法相宗わたる、人王四十四代元正
天皇の御宇に大日経わたる、人王四十五代に聖武天皇の御宇に
華嚴宗を弘通せさせ給う、人王四十六代・孝謙天皇の御宇に律宗
と法華宗わたる、しかりといへども唯律宗計りを弘めて天台法華宗
は弘通なし。

人王第五十代に最澄と申す聖人あり、法華宗を我と見出して
俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗等の六宗をせめ

をとし給うのみならず、漢土に大日宗と申す宗有りとしろしめせり、同じき御宇に漢土にわたりて四宗をならいわたし給う、所謂法華宗・真言宗・禅宗大乘の律宗なり、しかりといへども法華宗と律宗とをば弘通ありて禅宗をば弘め給はず、真言宗をば宗の字をけづり七大寺等の諸僧に灌頂を許し給う、然れども世間の人人は・いかなるという事をしらず、当時の人人の云く此の人は漢土にて法華宗をば委細にならいて真言宗をばくはしくも知ろし食し給はざりけるかとすいし申すなり。

同じき御宇に空海と申す人漢土にわたりて真言宗をならう、しかりといへどもいまだ此の御代には帰朝なし、人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝あり、五十二代嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年癸卯正月十九日に・真言宗の住処東寺を給いて護国教王院とが

うす、でんぎようだいし伝教大師御入滅にゆうめつの一年の後なり。

人王五十四代・仁明にんみ天皇の御宇ぎように円仁和尚えんにんわじよう・漢土かんどにわたりて重かさね

て法華ほっけ・真言しんごんの二宗をならいわたす、人王五十五代・文徳もんとく天皇の

御宇ぎように仁寿にんじゆと斉衝さいしゆうとに金剛こんかう頂經ちようきようの疏じよ・蘇悉そしつ地經ちきようの疏じよ・已上ひえいざん十四卷

を造りて大日經だいにちきようの義釈ぎしゃくに並べて真言宗しんごんしゆうの三部とがうし、比叡山ひえいざんの

内そうじいんに総持院こんりゆうを建立し真言宗しんごんしゆうを弘通ぐつうする事此の時なり、叡山えいざんに

真言宗しんごんしゆうを許ゆるされし

かば座主ざす両方を兼ねたり、しかれども法華宗ほっけしゅうをば月のごとく
真言宗しんごんしゅうをば日のごとくといひしかば、諸人等しよにんは真言宗しんごんしゅうはすこし
勝すぐれたりとををもへけり、しかれども座主ざすは両方を兼ねて兼学けんがくし
給たまいけり大衆たいしゅうも又かくのごとし。

同じき御宇ぎように円珍えんちん和尚わじょうと申もうす人御入唐漢土にゆうとうかんどにして法華ほっけ・真言しんごん
両宗りょうしゅうをならう、同じき御宇ぎように天安二年てんあんにんに帰朝きちようす、此の人は本朝ほんちように
しては叡山えいざん第一だいいちの座主ざす・義真ぎしん第二だいにの座主ざす・円澄えんちよう・別当光定べつとうみつだ第三だいにの座主ざす
円仁えんにん等に法華ほっけ・真言しんごん

の両宗りょうしゅうをならいきわめ給たまうのみならず又東寺とうじの真言しんごんをも習ならい給たまへ
り、其その後に漢土かんどにわたりて法華ほっけ・真言しんごんの両宗りょうしゅうをみがき給たまう今いまの
三井寺みいでらの法華ほっけ・真言しんごんの元祖智証大師げんそちしやうだいし此これなり、已上四大師だいにしなり。

総すべじて日本国にほんこくには真言宗しんごんしゅうに又八家はっけあり、東寺とうじに五家ごけ・弘法大師こうぼうだいし
を本もととす天台てんだいに三家さんけ・慈覚大師じかくだいしを本もととす。

人王八十一代をば安徳天皇と申す父は高倉院の長子。母は太政
入道の女建礼門院なり、此の王は元暦元年乙巳三月二十四日八島に
して海中に崩じ給いき、此の王は源ノ頼朝將軍にせめられて
海中のいろくづの食となり給う、人王八十二代は隱岐の法王と
申す高倉の第三の王子。文治元年丙午御即位、八十三代には阿波
の院隱岐の法皇の長子建仁二年に位を継ぎ給う、八十四代には
佐渡の院・隱岐の法皇の第二の王子。承久三年辛巳二月二十六日
に王位につき給う、同じき七月に佐渡の島にうつされ給う、此の一
三・四の三王は父子なり鎌倉の右大将の家人。義時にせめられさ
せ給へるなり。

此に日蓮大いに疑つて云く仏と申すは三界の国主。大梵王。
第六天の魔王。帝釈。日月。四天。轉輪聖王。諸王の師なり主なり親
なり、三界の諸王は皆は此の釈迦仏より分ち給いて諸国の総領。別

領等の主となし給へり、故に梵釈等は此の仏を、或は木像、或は画像等にあがめ給う、須臾も相背かば梵王の高台もくづれ帝釈の喜見もやぶれ輪王も

かほり落ち給うべし、神と申すは又国国の国主等の崩去し給えるを
生身のごとくあがめ給う、此れ又国王・国人のための父母なり。
主君なり・師匠なり・片時もそむかば国安隱なるべからず、此れを
崇むれば国は三災を消し七難

を払い人は病なく、長寿を持ち、後生には人天と三乗と仏となり
給うべし。

しかるに我が日本国は一閻浮提の内、月氏・漢土にも、すぐれ
八万の国にも超えたる国ぞかし、其の故は月氏の仏法は西域等に
載せられて候、但だ七十余国なり、其の余は皆外道の国なり、漢土の
寺は十万八千四十所なり、我が朝の山寺は十七万一千三十七所な
り、此の国は月氏・漢土に対すれば、日本国に伊豆の大島を對せるが
ごとし、寺をかざうれば、漢土・月氏のも雲泥すぎたり、かれは又
大乘の国、小乗の国、大乘も権大乘の国なり、此れは寺ごとに
八宗・十宗をならい、家家宅宅に大乘を讀誦す、彼の月氏・漢土等
は仏法を用ゆる人は千人に一人なり、此の日本国は外道一人もな
し、其の上神は又第一天照太神、第二八幡大菩薩、第三は山王等の
三千余社、昼夜に我が国をまほり、朝夕に國家を見そなわし給う、

其の上てんじょうだいじん天照太神は内侍所ないじどころと申す明鏡めいきやうにかげをうかべ内裏だいりにあがめられ給たまい

八幡大菩薩はちまんだいぼさつは宝殿ほうでんをすてて主上の頂いただきを栖すみかとし給たまうと申す、仏の

加護かこと申し神の守護しゆごと申しいかなれば彼の安徳あんとくと隱岐おきと阿波佐渡さど

等の王そうてんは相伝しやうでんの所従しよじゆう等にせめられて、或あるは殺され、或あるは島あまに放れ

・或あるは鬼おにとなり、或あるは大地獄だいちじやくには墮おち給たまいしぞ、日本国にほんこくの叡山えいざん七寺

東寺とうじ・園城等おんじやうの十七万一千三十七所の山山寺やまやまじに、いささかの御

仏事ぶつじを行うに

は皆みな天長地久てんぢちきゆう玉体安穩あんのんとこそ、いのり給たまい候へ、其の上そ八幡大菩薩はちまんだいぼさつ

は殊ことに天王守護しゆごの大願たいがんあり、人王第四十八代にんおうだいじゅうはちじゅうはちだいに高野天皇こうやてんのうの玉体たまに

入り給たまいて云いわく、我が国家開闢こっかかいびやくより以来いらい臣おみを以もつて君きみと為なすこと

未だ有いまらざる事ことなり、天之日嗣あまひつひ必ず皇緒こうちよを立つ等云云、又太神たいじん

行教ぎやうきやうに付ついて云いわく我われに百王守護ひやくおうしゆごの誓ちかい有り等云云。

されば神武天皇てんのうより已来百王ひやくおうにいたるまではいかなる事有りとも玉体はつつがあるべからず・王位を傾くる者も有るべからず、一生補処ふしよの菩薩ぼさつは中天ちゅうようなし・聖人しょうにんは横死おうしせずと申すもう、いかにとして彼れ彼の四王しおうは王位を・をいとされ国をうばはるのみならず・命を海にすて身を島島に入れ給たまいけるやらむ、天照太神てんしょうだいじんは玉体に入りかわり給たまはざりけるか・八幡大菩薩はちまんたいぼさつの百王ひやくおうの誓ちかはいかにとなりぬるぞ、其その上安徳天皇てんのうの御宇ぎようには明雲の座主ざす・御師おんしとな

り太上入道並びに一門怠状を捧げて云く、「彼の興福寺を以て藤氏の氏寺と為し春日の社を以て藤氏の氏神と為すが如く、延暦寺を以て平氏の氏寺と号し日吉の社を以て平氏の氏神と号す」云云、叡山には明雲座主を始めとして三千人の大衆五檀の大法を行い、大臣以下は家家に尊勝陀羅尼不動明王を供養し、諸寺・諸山には奉幣し大法秘法を尽くさずという事なし。

又承久の合戦の御時は天台の座主・慈円仁和寺の御室三井等の高僧等を相催して、日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行われ給う、所謂承久三年辛巳四月十九日に十五檀の法を行わる、天台の座主は一字金輪法等五月二日は仁和寺の御室如法愛染明王法を紫宸殿にて行い給う、又六月八日御室守護經法を行い給う、已

十一人の高僧こうそう十五壇の大法だいほう此の法を行ふ事は日本にほんに第二度なり、
権の大夫殿たゆうどのは此の事を知り給う事なければ御調伏じょうぶくも行い給はず、
又いかに行い給うとも彼の法ほう法彼の人人ひとびとにはすぐべからず、仏法の
御力おんちからと申し王法の威力いりよくと申し彼は国主こくしゆなり三界さんがいの諸王しよ守護しゆこし
たま給う、此れは日本にほんの民なりわづかに小鬼こゝろぞまほりけん代代の
所従しよじゆつ・重

重の家人たとなり、譬たとへば王威おういを用いて民をせめば鷹たかの雉きじをとり、のね
ずみを食じやい蛇のかへるをのみ師し子王の兔を殺すにてこそ有るべけれ、
なにしにかかるがろしく天神地祇てんじんちぎには申すべき、仏・菩薩ぼさつをばをど
ろかし奉たてまつるべき、師し子王が兔をとらむには精進しよじゆんすべきか、たかがき
じを食たんにはいのり有るべしや、いかにいのらずとも大王だいおうの身
として民を失たわんには大水たいたいの小火をけし大風たいふうの小雲を巻まくにてこそ
有るべけれ、其その上だい大火たいに枯木からを加かうるがごとく大河だいに大雨たいを下くだす

がごとく・王法の力に大法を行い合せて頼朝と義時との本命と元神
とをば梵王と帝釈等に抜き取らせ給う、譬へば古酒に酔る者のご
とし・蛇の蝦の魂を奪うがごとし・頼朝と義時との御魂・御名・御姓
を

ばかきつけて諸尊諸神等の御足の下にふませまいせていのりしかば・
いかにもこらうべしともみへざりしに・いかにとして一年・一月も延
びずして・わづか二日一日にはほろび給いけるやらむ、仏法を流布
の国主とならむ人人

は能く能く御案ありて後生をも定め御いのりも有るべきか。

而るに日蓮此の事を疑いしゆへに幼少の比より随分に顕密

二道・並びに諸宗の一切の経を・或は人にならい・或は我れと開見

し勘へ見て候へば故の候いけるぞ、我が面を見る事は明鏡によるべ

し国土の盛衰を計ることは仏鏡にはすぐべからず、仁王経・

金光明経・最勝王経・守護経・涅槃経・法華経等の諸大乘経を

開き見奉り候に・仏法に付

きて国も盛へ人の寿も長く又仏法に付いて国もほろび人の寿も短か

かるべしとみへて候、譬へば水は能く船をたすけ水は能く船をやぶ

る、五穀は人をやしない人を損ず、小波小風は大船を損ずる事かた

し大波・大風には小船

をやぶれやすし、王法の曲るは小波小風のごとし大國と大人をば

失いがたし、仏法の失あるは大風・大波の小船をやぶるがごとし國

のやぶる事 疑 いなし、仏記に云く我滅するの後末代には悪法。
悪人の国をほろぼし仏法を失には失すべからず譬へば三千大千世界
の草木を薪として須弥山をやくにやけず劫火の時須弥山の根より
大豆計りの火出でて須弥山やくが如く。我が法も又此くの如し悪人
外道・天魔・波旬・五通等にはやぶられず、仏の
ごとく六通の羅漢のごとく三衣を皮のごとく身に紆い・一鉢を両眼
にあてたらむ持戒の僧等と・大風の草木をなびかすがごとくなる
高僧等我が正法を失うべし、其の時梵釈・日月・四天いかりをなし
其の国に大天変・大地天等
を發していさめむにいさめられずば其の国の内に七難ををこし
父母・兄弟王臣万民等互に大怨敵となり梟 鳥が母を食い破鏡が父
をがいするがごとく自国をやぶらせて結句他国より其の国をせめ
さすべしとみへて候。

いまにちれん いちだいししゅうきょう
今日蓮・一代聖教の明鏡をもつて日本国を浮べ見候に。此の鏡

に浮んで候人人は国敵・仏敵たる事疑いなし、一代聖教の中に

法華経は明鏡の中の神鏡なり、銅鏡等は人の形をばうかぶれども

・いまだ心をばうかべず、法華経は人

の形を浮ぶるのみならず。心をも浮べ給へり、心も浮ぶるのみなら

ず。先業をも未来をも鑒み給う事くもりなし、法華経の第七の巻を

見候へば「如来の滅後において仏の所説の経の因縁及び次第を知り

義に随つて実の如く説か

ん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人・世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云、文の心は此の法華經を一字も一句も説く人は必ず一代聖教の浅深と次第とを能く能く弁えたらむ人の説くべき事に候、譬へば曆の三百六十日をかながうるに一日も相違せば万日俱に反逆すべし、三十一字を連ねたる一句・一字も相違せば

三十一字共に歌にて有るべからず、謂る一經を讀誦すとも始め寂滅道場より終り雙林最後にいたるまで次第と浅深とに迷惑せば其の人は我が身に五逆を作らずして無間地獄に入り此れを帰依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし何に況や智人・一人・出現して一代聖教の浅深勝劣を弁えん時・元祖が迷惑を相伝せる諸僧等・或は国師となり或は諸家の師となりなんどせる人人・自のきずが顕るる上人にかろし

められん事をなげきて、上に挙ぐる一人の智人を、或は国主に訴へ

あるばんにん
或は万人にそしらせん、其のとき守護の天神等の国をやぶらん事は

ばしよう
芭蕉の葉を大風のさき小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。

むりようぎきよう
無量義経は始め寂滅道場より終り般若経にいたるまでの

いつさいきよう
一切経を、或は名を挙げ、或は年紀を限りて未顕真実と定めぬ、

ねはんぎよう
涅槃経と申すは仏最後の御物語に初め初成道より五十年の諸教

おんものがたりよんじゅうよねん
の御物語四十余年をば無量義経のごとく邪見の経と定め法華経を

しゆくん
ば我が主君と号し給う、中に法華経ましまして已今当の勅宣を

くだ
下し給いしかば、多宝

じゆくぼう
十方の諸仏加判ありて各各本土にかへり給いしを、月氏の付法蔵

しょうじよう
の二十四人は但小乗、権大乘を弘通して法華経の実義を宣べ給う

たと
事なし、譬へば日本国の行基菩薩と鑒真和尚との法華経の義を知り

たまい
給いて弘通なかりしがごとし、漢土の南北の十師は内にも仏法の

勝劣しょうれつを弁わえきず外ぐわいにも浅深せんじんに迷惑めいわくせり、又また三論宗さんろんしゆうの吉蔵きちぞう・華嚴宗けこんしゆうの澄觀じやうくわん・

法相宗ほうそうしゆうの慈恩じおん・此これ等との人人ひとびとは内うちにも迷まよい外ぐわいにも知らざりしかども・道心堅固どうしんけんこの人人ひとびとなれば名聞みょうもんをすてて天台てんだいの義ぎに付きにき、知らずされば此この人人ひとびとは懺悔ざんげの力ちからに依よりて生死しじゆうやはなれけむ、將はた又また謗法ぼうぼうの罪つみは重しげく懺悔ざんげの力ちからは弱よわくして阿闍世王あじやせ無垢論師むくろんし等らのごとく地獄じじくにや墮おちちにけん。

善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏等の三三藏は一切の真言師の
申すは大日如来より五代六代の人人即身成仏の根本なり等云云、
日蓮勸えて云く法偷の元祖なり盗人の根本なり、此れ等の人人は
月氏よりは大日經・金剛頂經・蘇悉地經等を齎し来る、此の
經經は華嚴經・般若經・涅槃經等に及ばざる上・法華經に対すれ
ば七重の下劣なり、經文に見へて赫赫たり明明たり、而るを漢土に
來りて天台大師の止觀等の三十卷を見て舌をふるい心をまよ
わして此れに及ばずば我が經弘通しがたし、勝れたりといはんと
すれば妄語眼前なり、いかにせんとな案ぜし程に一つの深き大妄語
を案じ出だし給う、所謂大日經の三十一品を法華經二十八品並に
無量義經に腹合せに合せて三密の中の意密をば法華經に同じ其の
上に印と真言とを加えて法華經は略なり大日經は広なり已にも
入れず・

今にも入れず当にもはづれぬ、法華經をかたうどとして三説の難を
脱れ結句は印と真言とを用いて法華經を打ち落して真言宗を立て
て侯、譬へば三女が后と成りて三王を喪せしがごとし、法華經の
流通の涅槃經の第九に我れ滅して後の悪比丘等我が正法を滅すべ
し、譬へば女人のごとしと記し給いけるは是なり、されば善無畏
三蔵は
閻魔王にせめられて鉄の繩七脉つけられてからくして蘇りたれ
ども又死する時は黒皮隱隠として骨甚だ露焉と申して無間地獄
の前相其の死骨に顯れ給いぬ、人死して後色の黒きは地獄に墮つ
とは一代聖教に定むる所な
り、金剛智不空等も又此れをもつて知んぬべし、此の人人は改悔
は有りと見へて候へども強盛の懺悔のなかりけるか、今の真言師は
又あへて知る事なし、玄宗皇帝の御代の喪いし事も不審はれて候。

にほんこく
日本国は又弘法・慈覚・智証此の謗法を習い伝えて自身も知るし
めさず人は又をもひもよらず、且くは法華宗の人人・相論有りしか
ども終には天台宗やうやく衰えて・叡山五十五代の座主・明雲・人
王八十一代の安徳天皇より已来は叡山一向に真言宗となりぬ、第
六十一代の座主顕真権僧正は天台座主の名を得て真言宗に遷る
のみならず、然る後・法華・真言をすてて一向謗法の法然が弟子と
なりぬ、承久調伏の上衆・慈円僧正は第六十二代並びに

五・九・七十一代いちだいの四代の座主ざす隱岐おきの法皇ほうこうの御師おんしなり、此等これらの人人ひとびとは善無畏三蔵ぜんむいさんそう・金剛智三蔵こんこうちさんそう・不空三蔵ふくうさんそう・慈覚じかく・智証等ちしょうの真言しんごんをば器は
かわれども一の智水ちすいなり、其その上天台宗てんだいしゅうの座主ざすの名を盗みて
法華經ほけきょうの御領ちぎょうを知行ちぎょうして三千さんぜんの頭こうべとなり一国の法の師あおと仰あおがれて
大日經だいにちきょうを本として七重しげくだれる真言しんごんを用いて八重勝やくれりとをもへ
るは天を

地とをもち民を王とあやまち石を珠たまとあやまつのみならず珠たまを石
という人なり、教主きゅうしゅ釈尊じやくそん・多宝仏たぼうぶつ・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの御怨敵おんてきたるのみ
ならず一切衆生の眼目がんもくを奪い取り三善道さんぜんどうの門を閉ぢ三悪道さんあくどうの道を
開く、梵釈ぼんしやく・日月にちがつ・四天等してんの
諸天善神しよてんぜんじんいかでか此の人を罰せさせ給たまはざらむ、いかでか此の人の
仰あおぐ檀那だんなをば守護しゆごし給たまうべき、天照太神てんしやうだいじんの内侍所ないじどころも八幡大菩薩はちまんたいぼさつの
百王守護ひやくおうしゆごの御ちかいも、いかでか叶はせ給たまうべき。

余よし此この由よしを且かつつ知りしより已この来かた一分いちぶんの慈悲じひに催うながされて粗ほぼ随ずい分ぶん
の弟子でしにあらあら申まをせし程ほどに次第しだいに増ぞう長ちやうして国こく主しゆまで聞きえぬ、
国こく主しゆは理りを親おんとし非ひを敵てきとすべき人ひとにてををはすべきかかいいかかががしたたり
けん諸しよ人にんの讒ざん言げんををををささめめて一人ひとりの余よをすすて給たまう、彼たの天てん台だい大だい師しは
南北なんぼくの諸しよ人にんああだだみみしかかども陳ちん隋ずい二に代だいの帝てい重じゆうんんじ給たまいしかかば諸しよ人にんの怨あだ
も

ううすすかりりき、此この伝でん教ぎやう大だい師しは南なん都と七なな大だい寺じ讒ざん言げんせしかかども桓かん武む

平へい城ぎやう・嵯さ峨がの三さん皇こう用もちい給たまいしかかば怨おん敵てきももおおかかししががたたし、今いま日にち蓮れんは
ににほほんんここく

日にっ本ぽん国こく十じゆ七しち万まん一いつ千せん三さん十じゆ七しち所しよの諸しよ僧そう等とうのああだだするするののみみなららず国こく主しゆ

用もちい給たまわわざざれば万ばん民みんああだだををななす事ふ父ぼ母ぼの敵てきにも超こえ宿すく世せののかかたたき

にもも・すすぐぐれれたたり、結け句くは二に度どの遠おん流りゆう一いつ度どの頭こ頭づに及およぶ、彼たの

大だい莊そう嚴ごん仏ぶつの末まつ法ぽうの

四し比ひ丘きゆう並なに六ろく百ひやく八はち十じゆ万まん億いっ那な由ゆ佗たの諸しよ人にんが普ふ事じ比ひ丘きゆう一いつ人にんををああだだみみし

にも超へ師子音王仏の末の勝意比丘・無量の弟子等が喜根比丘をせ
めしにも勝れり、覺徳比丘がせめられし不輕菩薩が杖木をかをほ
りしも・限りあれば此れにはよもすぎじとぞをばへ候。

若し百千にも一つ日蓮・法華經の行者にて候ならば日本國の
諸人後生の無間地獄はしばらくをく、現身には國を失い他國に取ら
れん事彼の徽宗・欽宗のごとく優陀延王・訖利多王等に申せしがご
とくならん、又其の外は・或は其の身は白癩黒癩・或は諸悪重病
疑いなかるべきかもし其の義なくば又日蓮・法華經の行者にあら
じ此の身現身には白癩黒癩等の諸悪重病を受け取り後生には
提婆瞿伽利等がごとく無間・大城に墮つべし日月を射奉る修羅は
其の矢還つて我が眼に立ち師子王を吼る狗犬は我が腹をやぶる積
子を殺せし波琉璃王は水中の大火に入り仏の御身より血を出だせ
し提婆達多是現身に阿鼻の炎を感じり金銅の積尊をやきし守屋は

してんのう
四天王の矢にあたり東大寺興福寺を焼きし清盛入道は現身に其身
もうる病をうけにき彼等は皆大事なれども日蓮が事に合すれば
小事なり小事すら猶しるしあり大事いかでか現罰なからむ。

悦ばしいかな経文に任せて五五百歳広宣流布をまつ悲いかな
闘争堅固の時に當つて此の国修羅道となるべし、清盛入道と頼朝
とは源平の両家本より狗犬と猿猴とのごとし、少人・少福の頼朝を
あだせしゆへに宿敵たる入道の一門ほろびし上科なき主上の西海
に沈み給いし事は不便の事なり、此れは教主釈尊・多宝・十方の
諸仏の

御使として世間には一分の失なき者を一国の諸人にあだますの
みならず両度の流罪に當てて日中に鎌倉の小路をわたす事朝敵の
ごとし、其の外小菴には釈尊を本尊とし一切経を安置したりし
其の室を刎ねこぼちて・仏像経巻を諸人にふまするのみならず糞

泥にふみ入れ日蓮が懐にちれん 中に法華經を入れまいらせて候いしをとり
りいだして頭かいいちゆうをさんざんに打ちさいなむ、此の事如何ほけきようなる宿意も
なし当座とうざの科とがもなし、ただ法華經を弘通ほけきようする計りくつうの大科ばかなり。
日蓮天にちれんに向つて声をあげて申もうさく法華經の序品じよほんを拜見はいけんし奉たてまれば
梵釈ぼんしゃくと日月にちがつと四天してんと竜王りゆうおうと阿修羅あしゆらと二界八番の衆むりようと無量むりようの国土こくど
の諸神しよじんと集會しゆうえし給たまいたりし時已今当まさに第一だいいちの説を聞きし時我とも
雪山童子せつせんどうじの如く身を供養くやうし薬王菩薩やくおうぼさつの如く臂ひじをもやかんとをもち
しに、教主きよしゆしやくそん釈尊たほう・多宝じゆつぽう・十方じよぶつの諸仏しよぶつの御前おんまえにして今ぶつぜん・仏前ぶつぜんに於おいて
自らみずか誓言せいごんを説かけと諫かんぎよう暁たまいし給たまいしかば幸あきに順風じゆんぷうを得えて世尊せそんの勅ちやくの
如く当ごとに具まさに奉行ぶぎようすべしと二処三會の衆おんじゆう・一同いどうに大音声おんじゆうを

放ちて誓い給いしは・いかんが有るべき、唯仏前にては是くの如く
申して多宝・十方の諸仏は本土にかへり給う、釈尊は御入滅なら
せ給いて・ほど久くなりぬれば・末代辺国に法華經の行者有りとも
梵釈・日月等・御誓いをうちわすれて守護し給う事なくば日蓮がた
めには一旦のなげきなり、無始已来・鷹の前のきじ・蛇の前のかへる
・の前のねずみ・犬の前のさると有りし時もありき、ゆめの代なれ
ば仏・菩薩・諸天にすかされ・まいらせたりける者にてこそ候はめ。
なによりも・なげかしき事は梵と帝と日月と四天等の南無
妙法蓮華經の法華經の行者の大難に値をすてさせ給いて現身に天
の果報も尽きて花の大風に散るがごとく雨の空より下るごとく
其の人命終入阿鼻獄と無間・大城に墮ち給はん事こそあはれには
をばへ候へ・設い彼の人人は三世十方の諸仏をかたうどとして知ら
ぬよしのべ申し

給^{たま}うとも日蓮^{にちれん}は其^その人人^{ひとびと}には強^{ひとびと}きかたきなり、若^もし仏^{ぶつ}の返^{へん}頗^ぽをはせ
ずば梵^{ぼん}釈^{しやく}・日月^{にちがつ}・四天^{してん}をば無^む間^{げん}・大^{だい}城^{じやう}には必^{ひつ}ずつ^つけたてまつるべし、
日蓮^{にちれん}が眼^{まなこ}をそろしくば・いそぎいそぎ仏^{ぶつ}前^{ぜん}の誓^{ちか}いをばはたし給^{たま}へ
日蓮^{にちれん}が口^{くち}、。

又^{また}むぎひとひつ鷲^{じゆ}目^め両^{りやう}貫^{くわん}・わかめ・かちめ・みな一^{ひと}俵^{たわ}給^{たま}い畢^{おわ}ん
ぬ、干^{かわ}い・やきこめ・各^{かく}各^{かく}一^{ひと}かうぶくる給^{たま}い畢^{おわ}んぬ、一一^{ひと}の御^{おん}
志^しはかきつくすべしと申^{まを}せども法^{ほう}門^{もん}巨^こ多^たに候^{まを}へば留^{とど}め畢^{おわ}ん
ぬ、他^た門^{もん}にきかせ給^{たま}うなよ大^{だい}事^じの事^{こと}どもかきて候^{まを}なり。

三七九

上野殿御消息^{うえのとのしようそく}

建治元年^{がんねん}

五十四歳御

作 与南条時光^{なんじようときみつ}

1526p

三世さんぜの諸しよ仏ぶつの世せいに出いでさせ給たまいても皆みな皆みな四恩しおんを報むかへよと説とき。
三皇さんこう・五帝ごてい・孔子こうし・老子らうし・顔回がんかい等の古いにしえの賢人けんじんは四徳しとくを修しゆせよとなり、
四徳しとくとは一いちには父母ふぼに孝こあるべし・二にには主しゆに忠ちゆうあるべし・三さんには友と
に合あつて礼れいあるべし・四しに

は劣おとれるに逢あうて慈じ悲ひあれとなり、一に父ふ母ぼに孝こあれとはたとひ親
はものおほに覺おぼえずとも悪あくさまなる事ことを云いうとも聊いささかかも腹はらも立たてず
あやまり
誤あやまりる顔かほを見みせず親おやの云いう事ことに一分いちぶんも違たがへず親おやによき物ものを与たまへんと
思おもいてせめてする事ことなくば一日いちにちに二三度さんじゆえみて向むかへとなり、二に主しゆ
に合あうて忠ちゆうあるべしとはいささかも主しゆにうしろめたなき心こころある
べからず、たとひ我が身みは失うしないはるとも主しゆにはかまへてよかれと
思おもうべし、かくれての信しんあればあらはれての徳とくあるなりと云いふ、三
には友ともにあふて礼れいあれとは友とも達の一日いちにちに十度じゆ・二十度にじゆ来きれる人ひとなり
とも千里せんり・二千里にせんり来きれる人ひとの如ごとく思おもふて礼れい儀ぎいささかをろかに思おも
うべからず、四よに劣おとれる者ものに慈じ悲ひあれとは我われより劣おとりたらん人ひとを
ば我が子この如ごとく思おもいて一切いっさいあはれみ慈じ悲ひあるべし、此これを四よ徳とくと云い
うなり、是かくの如ごとく振ふる舞まいうを賢けん人じんとも聖しよ人にんとも云いうべし、此この四よ
事ことあれば余あまの事ことにはよからねどもよき者ものなり、是かくの如ごとく四よの得とくを

振舞ふ人は外典三千巻をよまねども読みたる人となれり。

一に仏教ぶつぎょうの四恩いっさいしゆじやうとは一には父母ふぼの恩を報ぜよ・二には国主こくしゅの恩を

報ぜよ・三には一切衆生の恩を報ぜよ・四には三宝さんぼうの恩を報ぜよ、

一に父母ふぼの恩を報ぜよとは父母ふぼの赤白せきびやく一たい・和合わごうして我が身とな

る、母の胎内たいないに宿る事・二百七十日・九月の間・三十七度死るほどの

苦みあり、生落うみおとす時たへがたしと思ひ念ずる息うなじ・頂うなじより出づる煙り

梵天ぼんてんに

至る、さて生落うみおとされて乳をのむ事一百八十余石・三年が間は父母ふぼの

膝ひざに遊び人となりて仏教ぶつぎょうを信ずれば先づ此の父と母との恩を報ず

べし、父の恩の高き事須弥山しゆみせん・猶なほひきし・母の恩の深き事大海たいかい還つて

浅し、相構かまえて父母ふぼの恩を報ずべし、二に国主こくしゅの恩を報ぜよとは・生

れて已来このかた・衣食いしよくのたぐひより初めて・皆是れ国主こくしゅの恩を得てある者

な

れば現世安穩・後生善処と祈り奉るべし、三に一切衆生の恩を報ぜよとは、されば昔は一切の男は父なり・女は母なり・然る間・生生世世に皆恩ある衆生なれば皆仏になれと思ふべきなり、四に三宝の恩を報ぜとは、最初成道の華嚴経を尋ねれば経も大乘・仏も報身如来にて坐ます間・二乗等は昼の梟・夜の鷹の如くして、これを聞くとい

へども耳しる。目しるの如し、然る間・四恩を報ずべきかと思ふに
女人をきらはれたる間・母の恩報じがたし、次に仏阿含・小乗經
を説き給いし事・十二年・是こそ小乗なれば我等が機にしたがふべ
きかと思へば、男は五戒・女は十戒・法師は二百五十戒・尼は五百戒
を持ちて三千の威儀を具すべしと説きたれば末代の我等かなふべし
とも。

おぼえねば母の恩報じがたし、況や此の經にもきらはれたり、方等
般若・四十余年の經經に皆女人をきらはれたり、但天女成仏經
・觀經等にすこし女人の得道の經文有りといへども、但名のみ有つ
て実なきなり、其の上未顕真實の經なれば如何が有りけん、
四十余年の經經に皆女人を嫌われたり、又最後に説き給いたる
涅槃經にも女人を
嫌はれたり、何れか四恩を報ずる經有りと尋ぬれば法華經こそ

によにんじよつじつ

女人成仏する経なれば、八歳の竜女・成仏し・仏の姨母・曇弥女

・耶輸陀羅比丘尼記 記にあづかりぬ、されば我等が母は但女人の

体にてこそ候へ・畜生にもあらず蛇身にもあらず・八歳の竜女だに

も仏になる、如何ぞ此の経の力にて我が母の仏にならざるべき、さ

れば法華経を持つ人は父と母との恩を報ずるなり、我が心には報ず

ると思はねども此の経の力にて報ずるなり。

然る間・釈迦・多宝等の十方無量の仏・上行・地涌等の菩薩も

普賢・文殊等の迹化の居士も舍利弗等の諸大声聞も・大梵天王・

日月等の明主諸天も・八部王も・十羅刹女等も・日本国中の大小の

諸神も・総じて此の法華経を強く信じまいらせて余念なく一筋に

信仰する者をば影の身にそふが如く守らせ給ひ候なり、相構て

相構て心を翻へさず・一筋に信じ給ふならば・現世安穩・後生

善処なるべし、恐恐謹言。

上野殿
うえのとの

日蓮花押
にちれんかおう

三二八〇 南条殿御返事ごへんじ

建治二年正月 五十

五歳御作 与南条七郎次郎

1529p

はるのはじめの御つかひじ自他申たもうしこめまいらせ候、さては給たまはるところのすずの物の事、もちゐ・七十まい・さけひとつつ・いもいちだ・河のりひとかみぶくろ・だいこんふたつ・やまのいも七ほん等なり、ねんごろの御心おんこころざしは・しなじなおんこころのものに・あらはれ候いぬ。

法華經ほけきょうの第八の巻まきに云いく「所願しょがん虚むしからず亦また現世げんせに於おて其その福報ふくほうを得うん」又云いく「当まさに現世げんせに於おて現げんの果報かほうを得うべし」等云云、天台大師てんだいだいし云いく「天子てんしの一言いちごん虚むしからず」又云いく「法王ほうおう虚むしからず」等云云、賢王けんおうとなりぬれば・たとひ身をほろぼせどもそら事せず、いわうや釈迦しやくか如来にょらいは普明王ふみょうとおはせし時ははんぞく王のたてへ入らせ

給たまい

き不妄語戒もつごを持たせ給たまいしゆへなり、かり王とおはせし時は実語少じつご

人・大妄語入地獄もつごとこそおほせありしか、いわうや法華經ほけきょうと申もつすは

仏・我と要よう当説とうせつ眞実しんじつとなのらせ給たまいし上・多宝たほう仏ぶつ・十方じゅうほうの諸しよ仏ぶつあつ

まらせ給たまいて日月にちがつ・衆星しゅうせいの

ならばせ給たまうがごとくに候まちいしぎせきなり、法華經ほけきょうにそら事あるな

らばなに事をか人信くずべき、かかる御經くように一華しやく一香かをも供養くようする

人は過去かこに十萬億くようの仏ぶつを供養くようする人なり、又釈迦しやくか如來にょびの末法まっぽうに世

のみだれたらん時とき・王臣おうしん・万民ばんみん・心こころを一ひとにして一人ひとりの法華經ほけきょうの行者ぎようじや

をあだまん時とき・此こゝの行者ぎよくかんばちの小水せうすいに魚いさなのすみ・万人ばんにんにかこま

れたる鹿かのごとくならん時とき、一人ひとりありて・とぶらはん人は生身しやうしんの

教主きようちう釈尊しやくそんを一劫いつくわうが間ま・三業さんごう相応さうおうして供養くようしまいらせたら

んよりなを功德くどくすぐるべきよし・如來にょらいの金言きんげん・分明ぶんみやうなり、日は赫赫かくかく

たり月は明明たり・法華經ほけきょうの文字もんじはかくかく・めいめいたり・めいめい・かくかくたり、あきらかなる鏡にかを・をうかべ、すめる水に月のうかべるがごとし。

しかるに亦また於現世げんせ得其福報ちよくせんの勅宣ちよくせん・当於現世げんせ得現果報げんかほうの鳳詔ほうしよく・南条の七郎次郎殿にかぎりて・むなしかるべしや、日は西よりいづる世月は地よりなる時なりとも・仏の言むなしからじとこそ定めさせ給たまいしか、これをもつて・おもうに慈父じふ過去かこの聖靈しょうりよくは教主きよくしやくそん釈尊しやくそんの御前おんまえにわたらせ給たまい・だんなは又現世げんせに大果報かほうをまねかん事うたが疑がいあるべからず、かうじんかうじん。

建治二年正月十九日

日蓮にちれん 花押かおう

三八一 南条殿御返事 南条殿御返事 建治二年三

月 五十五歳御作 1530p

いものかしら・河のり又わさび・一一人人の御志承り候いぬ、
鳥のかいこをやしなひ・牛の子を牛のねぶるが如し、夫れ衣は身をつ
つみ・食は命をつぐ、されば法華經を山中にして読みまいらせ候人
を・ねんごろに・やしなはせ給ふは、釈迦仏をやしなひまいらせ
法華經の命をつぐにあらずや、妙莊嚴王は三聖を山中にやしなひて
・
沙羅樹王・仏となり、檀王は阿私仙人を供養して釈迦仏とならせ
給ふ、されば必ずよみかかねども・よみかく人を供養すれば仏にな
る事疑ひなかりけり、經に云く「是の人・仏道に於て決定して疑

有ること無けん、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

建治二年三月十八日

日蓮 にちれん 花押 かおう

謹上 きんじょう 南条殿御返事 ごへんじ

橘三郎殿・太郎大夫殿たゆうどの・一紙に云云恐れ入り候、返す返すははき

殿読み聞かせまいらせ給へ。たま

十五歳御作

1531p

かたびら一つしをいちだ・あぶら五そう・給び候あわい了んぬ、ころもはかんをふせぎ又ねつをふせぐ・みをかくし・みをかざる、法華經ほけきょうの第七やくわうぼんに云いわく「如裸者得衣」等云云、心ははだかなるものゝころもをへたるがごとし、もんの心はうれしき事をとかれて候。

ふほうぞうの人のなかに商那和衆もうと申す人あり衣をきてむまれさせ給たまう、これは先生せんしやうに仏法ぶつぽうにころもをくやうせし人なり、されば法華經ほけきょうに云いわく「柔和忍辱衣」等云云、こんろん山には石なしみのぶのたけにはしをなし、石なきところにはたまよりもいしすぐれた

り、しをなきところには・しを・こめにも・すぐれて候、こくおう国王のたから
は左右さうの大臣だいじんなり左右さうの大臣だいじんをば塩梅あんばいと申もうす、みそしを・なければ
よわたりがたし左右さうの臣おみなければ国をさまらず、あぶらと申もうすは
涅槃ねはん經ぎょうに云いわく風のなかに・あぶらなし・あぶらのなかに・かぜなし・
風をぢする第一だいいちのくすりなり、かたがたのものをくり給たまいて候・
御心おんこころざしおしのあらわれて候事申もうすばかりなし、せんするところはこ
んでうどのの法華ほけ經ぎょうの御しんようのふかかりし事のあらわるる
か、王の心こころざしをば臣おみのべ・をやの心こころざしをば子の申もうしのぶるとはこ
れなり、あわれことこのうれしと・をばすらん。

つくしにを・をはしの太郎と申もうしける大名ありけり、大将どのの
御かんきを・かほりて・かまくらゆひのはまつちのろうにこめられて
十二年めしはじしめられしときつくしをうちいでしに・ごぜんにむか
ひて申せしは・ゆみやとるみとなりてきみの御かんきを・かほらんこ

とはなげきならず、又ごぜんにをさなくよりなれしかいまはなれ
ん事いうばかりなし、これはさてをきぬ、なんしにてもによしにて
も一人なき事なげきなり、ただしくわいにん

のよし・かたらせ給^{たま}う・をうなごにてやあらんずらん・をのこごにて
や候^{そつひ}はんずらん、ゆくへをみざらん事くちおし、又かれが人となり
て・ちちというものも・なからんなげき・いかがせんと・をもへども・
力^{およ}及ばずとていでにき。

かくて月ひすぐ・れことゆへなく生れにき・をのこごにてありけ
り、七歳のとし・やまでらにのぼせてありければ・ともだちなりける
ちごども・をやなしとわらひけり、いへにかへりて・ははにちちをたづ
ねけり、ははのぶるかたなくしてなくより外^{ほか}のことなし、此のちご
申^{もつ}す天なくしては雨ふらず地なくしてはくさをいず、たとい母

ありとも・ちちなくばひととなるべからず、いかに父のありどころを
ば・かくし給^{たま}うぞとせめしかば・母せめられて云うわちごをさなけ
れば申^{もつ}さぬなり・ありやうはかうなり、此のちごなくなく申^{もつ}すやう
・さてちちのかたみはなきかと申せしかば、これありとて・ををはし

のせんぞの日記にっき

ならびにはらの内なる子に・ゆづれる自筆じひつの状な

り、

いよいよをやこひしくてなくより外ほかの事なし、さて・いかがせんとい
みしかば・これより郎なつじん従あまた・ともせしかども・御かんきをかほ
りければ・みなちりうせぬ、そののちは・いきてや又しにてや・をとづ
る人なしと・かたりければ・ふしころび・なきて・いさむるをも・も
ちぬざりけり。

ははいわく・をのれをやまでらにのぼする事は・をやのけうやうの
ためなり、仏に花をもまいらせよ・経をも一巻よみて孝養じょうじやうとすべし
と申せしかば・いそぎ寺にのぼりて・いえへかへる心なし、昼夜に
法華経ほけきょうをよみしかば・よみわたりけるのみならず・そらに・をぼへて
ありけり、さて十二のとし出家しゅつげをせずして・かみをつつみ・とかくし
てつくしをにげいでて・かまくらと申すもうところへたづねいりぬ。

はちまん 八幡の御前おんまえにまいりて・ふしをがみ申もつしけるは・八幡大菩薩はちまんだいぼさつは
にほん 日本第十六の王・本地ほんちは靈山りょうぜん淨土じょうどに法華經ほけきょうをとかせ給たまいし教主きょうしゅ
しやくそん 釈尊しやくそんなり、衆生しゆじやうのねがいをみて給たまわんがために神とあらわれさせ
たま 給たまう、今わがねがいみてさせ給たまえ

、をやは生きて候か・しにて候かと申して・いぬの時より法華經をは
じめて・とらの時まで・に・よみければ・なにとなき・をさなきこへはう
でんに・ひびきわたり・こころすごかりければ・まいりてありける
人人も・かへらん事をわすれにき、皆人いちのやうに・あつまりてみ
ければ・をさなき人にて法師ともをばえず・をうなにてもなかりけ
り。

をりしも・きやうのにゐどの御さんけいありけり、人めをしのば
せ給いてまいり給いたりけれども御經のたうとき事つねにも・すぐ
れたりければはつるまで御聴聞ありけりさてかへらせ給いて・おは
しけるがあまりなごりをしさに人をつけてをきて大将殿へかかる事
ありと申させ給いければめして持仏堂にして御經よませまいらせ
給いけり。

さて次の日又御聴聞ありければ西のみかど人さわぎけり、いか

なる事ぞとききしかば・今日はめしうどの・くびきらると・ののし
りけり、あわれ・わがをやは・いままで有る^あべしとは・を・もわねども・
さすが人のくびをきらると申せば我が身のなげきとをもひて・な
みだぐみたりけり、大将殿あやしと・ごらんじて・わちごはいかなる
も

のぞ・ありのままに申せとありしかば・上くだんの事・一一に申しけ
り、をさふらひにありける大名・小名・みすの内みな・そでをしぼり
けり、大将殿・かぢわらをめして・をほせありけるは・大はしの太郎
という・めしうど・まいらせよとありしかば・只^{ただ}今くびきらんとて・ゆ
いのはまへ・つかわし候いぬ、いまはきりてや候らんと申せしかば・こ
のちご御まへなりけれども・ふしころびなきけり、を・をせのありけ
るは・かぢわらわれとはしりて・いまだ切らずばぐしてまいれとあ
りしかば・いそぎいそぎゆいのはまへはせゆく、いまだいたらぬに・よ

ばわりければすでに頸切らんとて刀をぬきたりけるときなりけり。
さてかじわらを・をはしの太郎をなわつけながらぐしてまいりて・
ををにはにひきすへたりければ・大将殿こ

のちごに・とらせよとありしかば・ちごはしりをりて・なわをときけり、大はしの太郎は・わが子ともしらず・いかなる事ゆへに・たすかるともしらざりけり、さて大將殿又めして・このちごに・やうやうの御ふせたびて・ををはしの太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

大將殿をほせありけるは法華經の御事は昔よりさる事とわききつたへたれども・丸は身にあたりて二つのゆへあり、一には故親父の御くびを大上入道に切られてあさましとも・いうばかりなかりしに、いかなる神・仏にか申すべきとおもいしに走湯山の妙法尼より法華經をよみつたへ千部と申せし時、たかをのもんがく房をやのく

をもて来りて・みせたりし上・かたきを打つのみならず・日本国の武士の大將を給いてあり、これひとへに法華經の御利生なり、二つに

は・このちごが・をやをたすけぬる事不思議なり、大橋の太郎という
やつは頼朝よりともきくわいなりとをもつたとい勅宣ちよくせんなりとも・かへし申し
て・くびをきりてん、あまりのにくさにこそ十二年まで・土のろうに
は入れてありつるに・かかる不思議あり、されば法華經ほけきょうと申す事は
ありがたき事なり、頼朝よりともは武士ぶしの大将まさにて多くのつみを・つもりて
あれども法華經ほけきょうを信じまいらせて候へば・さりとともと・こそをもへと
・なみだぐみ給たまいけり。

今の御心おんこころざしみ候へば故なんでうどのは・ただ子なれば・いとをし
とわ・をぼしめしけるらめども・かく法華經ほけきょうをもて我がけうやうを
すべしとは・よもをぼしたらじ、たとひつみありて・いかなるところ
に・おはすとも・この御けうやうの心ざしをば・えんまほうわう・ぼ
んでん・たひしやく・までも・しろしめしぬらん、釈迦しやくか仏ぶつ・法華經ほけきょうもい
かでか・すてさせ給たまうべき、かのちごのちちのなわを・ときしと・この

御心おんこころざし・かれにたがわず、これはなみだをもちて・かきて候なり。

又むくりのおこれるよし・これにはいまだうけ給たまわらず、これを

申せば日蓮にちれん房はむくり国のわたるといへば・よろこぶと申まうす・これゆ

われなき事なり、かかる事あるべしと申せしかば・あだがたきと人

ごとにせめしが・経文きょうもんかぎり

あれば来るなり。いかにいうとも。かなうまじき事なり、失とがもなくして国をたすけんと申せし者を用いこそあらざらめ、又法華經ほけきょうの第五の巻をもつて日蓮にちれんがおもてをうちしなり、梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・是これを御覽ありき、鎌倉かまくらの八幡大菩薩はちまんたいぼさつも見させ給たまいき、いかにも今は叶かなうまじき世にて候へば。かかる山中にも入りぬるなり、各各も不便ふびんとは思へども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華經ほけきょうに申し候なり、御信用ごしんようの上にも力もをしまし申もうさせ給たまえ、あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあらず、各各の御信心ごしんじんのあつくうすきにて候べし、たいは日本国にほんこくのよき人人ひとびとは一定いけどりにぞなり候そうじはんずらん、あらあさましや。あさましや、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

後三月二十四日

にちれんかおう
日蓮花押

ごへんじ
南条殿御返事

二八三

九郎太郎殿御返事こへんじ

建治二年九月 五

十五歳御作

1535p

いゑの芋一駄・送り給び候、こんろん山と申す山には玉のみ有り
て石なし、石ともしければ玉をもつて石をかう、はうれいひんと
申す浦には木草なし・いをもつて薪をかう、鼻に病ある者はせんだ
ん香・用にあらず、眼なき者は明なる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処は甲斐国・波木井の郷の内の深山なり、
西には七面のかれと申す・たけあり・東は天子のたけ・南は鷹取のた
け・北は身延のたけ・四山の中に深き谷あり・はこのそののごとし、
峯にははここのの音かまびすし、谷にはたいかいの石多し。

然れどもするがのいものやうに候石は一も候はず、いものめづら

しき事くらき夜のもしびにもすぎかはけ

る時の水にもすぎて候ひき、いかにめづらしからずとはあそばさ
れて候ぞ、されば其には多く候か。あらこひしあらこひし、法華經ほけきょう・
釈迦しやくか仏にゆづりまいらせ候いぬ、定めて仏は御志ごしをおさめ給たまう
なれば御悦ごえつび候らん、靈山りゅうざん淨土じやうどへまひらせ給たまいたらん時、御尋ごたずねあ
るべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

建治二年丙子九月十五日

日蓮にちれん

花押かおう

九郎太郎殿御返事ごへんじ

三三四 本尊供養御書ほんぞん くよう ごしよ

建治二年十二月 五十

五歳御作 与南条平七郎 1536p

法華經ほけきょう御本尊ごほんぞん御供養くようの御僧膳料ごそうぜんりやうの米一駄いへのいも・蹲鴟いへのいも一駄・送り給たまひ
候あい畢おんぬ、法華經ほけきょうの文字もんじは六万九千三百八十四字・一一の文字もんじは

われら我等が目には黒き文字と見え候へども仏の御眼には一一に皆御仏なり、譬たとえば金粟王と申せし国王は沙を金となし・釈摩男と申せし人は石を珠たまと成し給ふ、玉泉に入りぬる木は瑠璃るりと成る・大海に入りぬる

水は皆鹹みなしおばゆし、須弥山に近づく鳥は金色となるなり、阿伽陀薬は毒を薬となす、法華經の不思議も又是くの如し凡夫を仏に成し給ふ、蕪かぶらは鶉うずいとなり・山の芋はうなぎとなる・世間の不思議以て是くの如し。

何に況や法華經の御力をや、犀の角を身に帯すれば大海に入るに水・身を去る事五尺、梅檀と申す香を身にぬれば大火に入るに焼くこと無し、法華經を持ちまいらせぬれば八寒地獄の水にもぬれず八熱地獄の大火にも焼けず、法華經の第七に云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」等云云、事多しと申せども年せまり

御使おんつかい急いぎ候けへば筆ひを留とど候けい畢おわんぬ。

建治二年ひのえね丙子十二月 日

日蓮にちれんかおう花押

南条平七郎殿御返事ごへんじ

三三五

上野殿御返事うえのとのごへんじ

建治三年五月

五十六歳御作

1537p

五月十四日にいものかしら一駄・わざとおくりたびて候、当時の
いもは人のいとまと申し珠たまのごとしくすりのごとし、さてはおほせつ
かはされて候事うけ給たまわり候いぬ。

尹吉甫いんきつぽと申せし人は・ただ一人子あり・伯奇はくきと申す、をやも賢な
り・子もかしこし・いかなる人かこの中をば申もつしたがふべきと・おも
ひしかども・継母けいぼよりより・よりうたへしに用もちいざりしほどに・継母
すねんが間・やうやうのたばかりを・なせし中に、蜂と申もつすむしを我
がふところに入れて・いそぎいそぎ伯奇はくきにとらせて・しかも父にみせ・
われをけそうすると申もつしなして・うしなはんとせしなり。

びんばさら王と申せし王は賢王なる上仏の御だんなの中に閻浮
第一なり、しかもこの王は摩竭提国の王なり、仏は又此の国にして
法華経を・とかんとおぼししに・王と仏と一同なれば一定法華経と
かれなんとみへて候しに、提婆達多と申せし人・いかんがして此の事
をやぶらんと・おもひしに・すべて・たよりなかりしかば・とかうはか
り

しほどに・頻婆沙羅王の太子阿闍世王をとしごとかくかたらひて
・やうやく心をとり・をやと子とのなかを申したがへて・阿闍世王を
すかし父の頻婆沙羅王をころさせ・阿闍世王と心を一にし提婆と
阿闍世王と一味となりしかば・五天竺の外道・悪人・雲かすみのごと
くあつまり・国をたび・たからをほどこし・心をやわらげすかししか
ば・一

国の王すでに仏の大怨敵となる、欲界・第六天の魔王・無量の眷属

を具足ぐそくしてうち下り、摩竭まかた提国たいてこくの提婆たいば・阿闍世あじゃせ・六大臣だいろくてん等の身みに入いりかはりしかば、形かたちは人なれども力は第六天だいろくてんの力なり、大風たいふうの草木そうもくをなびかすよりも、大風たいふうの大海たいかいの波なみをたつるよりも、大地震だいじしんの大地だいちをうごかすよりも、大火だいかの連宅れんたくをやくよりも、さはがしくをぢわななきし事

なり。

さればはるり王と申せし王は阿闍世王にかたらはれ釈迦仏の御身おんみしたしき人数にんずう百人切りころす、阿闍世王は醉象を放ちて弟子でしを無量無辺むりょうむへんふみころさせつ、或は道に兵士をすへ、或は井に糞を入あるれ、或は女人にょにんをかたらひて、そら事いひつけて仏弟子ぶつでしをころす、舍利弗・目連もくれんが事にあひ、かるだいが馬のくそにうづまれし、仏はせめられて一夏いちげ

九十日、馬のむぎをまいりしこれなり、世間の人のおもはく、悪人あくにんには仏の御力おんちからもかなはざりけるにやと思ひて信じたりし人人ひとびとも音をのみて、もの申さず眼まなこをとぎてものを、みる事なし、ただ舌をふり手をかきし計りなり、
けつく だいばだつた しゃかによらい
結句は提婆達多・釈迦如来の養母・蓮華比丘尼を打ちころし、仏の御身おんみより血を出せし上、誰の人か、かたうどになるべき、かくやうや

うになりての上・いかがしたりけん法華經をとかせ給いぬ、此の
法華經ほけきょうに云いく「しか而も此の經きやう」
は如来にょらいの現在げんざいにすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云云、文の心
は我が現在いましして候だにも此の經の御かたきかくのごとし、いかにい
わうや末代まつだいに法華經ほけきょうを一字一点もとき信ぜん人をやと説かれて候
なり、此れこをもつておもひ候へば仏・法華經ほけきょうをとかせ給たまいて今にいた
るまでは二千二百二十余年になり候へどもいまだ法華經ほけきょうを仏のごと
くよみたる人は候はぬか、大難だいなんをもちてこそ・法華經ほけきょうしりたる人と
は申もうすべきに、天台大師てんだいだいし・伝教大師でんぎょうだいしこそ法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとは・みへて
候しかども在世ざいせのごとくの大難だいなんなし、ただ南三なんさん・北七ほくひち・南都なんと・七大寺ななだいじ
の小難なんなり、いまだ国主こくしゅ
かたきとならず・万民ばんみんつるぎをにぎらず・一国あつく悪口あくぐちをはかず、滅後めつご
に法華經ほけきょうを信ぜん人は在世ざいせの大難だいなんよりもすぐべく候なるに同じほ

どの難なんだにも来きらず。何いかに況いはやすぐれたる大難だいなん多難たなんをや。

虎こうそぶけば大風たいふうふく・竜りゅうぎんずれば雲うんをこる。野兔のうのうそぶき

驢馬ろまのいはうるに・風かぜふかず雲うんをこる事ことなし、愚者ぐしゃが法華經ほけきょうをよみ

賢者けんじゃが義ぎを談だんずる時は国くにもさわかず事こともをこらず、聖人しょうにん出現しゅつげんして

仏ぶつのごとく法華經ほけきょうを談だんぜん時とき・一國いっくにもさわぎ在ざい世せいにすぎたる大難だいなん

をこるべしとみえて候まう、今日けふ蓮れんは賢人けんじんにもあらず・まして聖人しょうにんは・お

もひも

よらずてんか天下第一だいいちの僻人びやくにんにて候が。但きょうもんばか經文計りにはあひて候やうなれば大難だいなん来り候へば父母ふぼのいきかへらせ給たまいて候よりもにくきものことにあふよりも。うれしく候なり、愚者ぐしやにて而もしか仏に聖人しやうにんとおもはれまいらせて候はん事こそ。うれしき事にて候へ。智者ちしやたる上二百五十戒かたくたもちて万民ばんみんには諸天しよてんの帝釈たいしやくをうやまふよりも。う

やまはれて釈迦しやくかぶつ仏ほけきやう。法華經ほけきやうに不思議ふしぎなり提婆だいばがごとしとおもはれまいらせなば。人目はよきやうなれども後生ごしやうはおそろし。おそろし。さるにては殿ほけきやうは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやににさせ給たまへりと。うけ給たまはれば。もつてのほかにちれんに人のしたしきも。うときも日蓮房にちれんを信じては。よもまどいなん。上の御気色みけしきもあしかりなんと。かたうどなるやうにて御けうくむ候なれば。賢人けんじんま

でも人のたばかりは。おそろしき事なれば。一定ほけきやう法華經ほけきやうすて給たまいな

ん、なかなか色みへでありせば・よかりなん、大魔のつきたる者どもは一人をけうくんしをとしつればそれをひつかけにして多くの人をせめをとすなり。

日蓮にちれんが弟子でしにせう房ぼうと申し・のと房ぼうといふ。なごえの尼になんど申

せし物どもは・よくふかく・心をくびやうに・愚癡ぐちにして・而しかも智者ちしやとなのりし・やつばらなりしかば・事のことをこりし時・たよりをえて・おほくの人を・おとせしなり、殿たみもせめをとされさせ給たまうならば・するがにせうせう信しんずるやうなる者も・又また信しんぜんとおもふらん人人ひとびとも皆みな

法華經ほけきやうをすつべし、さればこの甲斐かいの国くににも少少せうせう信しんぜんと申もうす人人ひとびと候まうへども・おぼろげならでは入れまいらせ候まうはぬにて候まう、なかなかしき人の信しんずるやうにて・なめりて候まうへば人の信心しんじんをも・やぶりて候まうなり。

ただをかせ給へたま・梵天ぼんてん・帝釈等たいしやくの御計として、日本国にほんこく・一時いちじに信ずる事あるべし。爾時そのとき・我も本より信じたり信じたりと申す人こそおほくをはずせざらんとおぼえ候。御信用ごしんようあつくをはずするならば・人たれにあらざ我が故父の御ため・人は我がをやの後世ごしようには・かはるべからず・子なれば我こそ故をやの後世ごしようをばとぶらふべけれ、郷一郷・知るならば半郷は父のため半郷は妻子さいし・眷属けんぞくをやしなふべし、我が命は事出いできたならば上に・まいらせ候べしと・ひとへ

におもひきりて何事なにごとにつけても・言をやわらげて法華經ほけきょうの信を・うす
くなさんずる・やうを・たばかる人出来しゅったいせば我が信心しんじんを・こころむ
るかとおぼして各各これを御けうくんあるは・うれしき事なり、た
だし御身おんみのけうくんせ

させ給たまへ上の御信用ごしんようなき事は・これにもしりて候を上をもつて・お
どさせ給たまうこそかしく候へ参りてけうくん申もうさんと・おもひ候つる
に・うわてうたれまいらせて候、閻魔王えんまおうに我が身と・いとをしとおぼ
す御めと・子とを・ひつぱられん時は・時光に手をやすらせ給たまい
候そうらはんずらんと・にくげに・うちいひて・おはすべし。

にいた殿の事まことにてや候らん、をきつの事きこへて候、殿もび
んき候はば其その義ぎにて候べし、かまへておほきならん人申もうしいだした
るらんはあはれ法華經ほけきょうのよきかたきよ、優曇華うとんげか盲龜もうきの浮木うきぎかと、
おぼしめして・したたかに御返事ごへんじあるべし。

千丁・万丁しる人もわづかの事にたちまちに命をすて所領しよりょうを
めさるる人もあり、このたび今度・法華經ほけきょうのために命をすつる事ならば・なに
はをしかるべき、やくおうぼさつ薬王菩薩は身を千二百歳が間・やきつくして仏に
なり給たまい・檀王だんおうは千歳せんさいが間・身をゆかとなして今の釈迦しやくか仏ぶつといはれ
させ給たまうぞかし、されば・ひが事をすべきにはあらず、今はすてな
ば・かへりて人わらはれになるべし、かたうどなるやうにて・つくり
おとして、我もわらひ人にもわらはせんとするがきくわい
なるに・よくよくけうくんせさせて人のおほくきかんとするにて・人
をけうくんせんよりも我が身をけうくんあるべしとて・かつぱとた
たせ給たまへ、一日・二日が内にこれへきこへ候べし、事おほければ申もうさ
ず又又申もうすべし、きょうきょうきんげん恐恐謹言。

建治三年五月十五日

にちれんかおう日蓮花押

うえのとのごへんじ上野殿御返事

白麦一俵・小白麦一俵・河のり五でふ・送り給び了んぬ。

仏の御弟子に阿那律尊者と申せし人は・をさなくしての御名をば如意と申す、如意と申すは心のおもひのたからをふらししゆへなり、このよしを仏にとひまいらせ給いしかば・昔うえたるよに縁覚と申す聖人をひゑのはんをもつて供養しまいらせしゆへと答えさせ給う。

迦葉尊者と申せし人は仏にいつでも閻浮提第一の僧なり、俗にてをはせし時は長者にて・からを六十そのくらに金を百四十こくづつ入れさせ給う、それより外のたから申すばかりなし、この人のせんじやうの御事を仏にと

ひまいらせさせ給いしかば・むかしうえたるよにむぎのはんを一ぱ

ひ供養くようしたりしゆへに・利天とつりてんに干反せん生れて今釈迦しやくか仏ぶつに値あいまいら
せ僧そうの中の第一だいいちとならせ給たまい法華ほふけ經きやうにて光明くわうみやう如来にょらいと名なをさづけら
れさせ給たまうと天台てんだい大師だいし・文句もんくの第一だいいちにしるされて候。

かれをもつて此これをあんずるに迦葉かしやう尊者そんじやの麦むぎのはんは・いみじく
て光明くわうみやう如来にょらいとならせ給たまう、今のだんなの白麦はくばくはいやくして仏ぶつになら
ず候あきべきか、在世ざいせの月つきは今いまも月つき・在世ざいせの花はなは今いまも花はな・むかしの功德くどくは
今の功德くどくなり、その上上かみいちにん一人ひとりより下万ばんみん民たみまでに・にくまれて山中さんちゆうに
うえしにゆべき法華ほふけ經きやうの行者ぎやうなり、これをふびんと・をぼして山河さんか
をこえわたり・をりくたびて候・御心おんこころざしは麦むぎにはあらず金かねなり・
金かねにはあらず法華ほふけ經きやうの文字もんじなり、我等われらが眼まなこにはむぎなり・十じゆらせ
つには此このむぎをば仏ぶつのたねとこそ御おんらん候あきらめ、阿那律あなりつがひゑの
はんはへんじてうさぎとなる、
うさぎ・へんじて死人しにんとなる・死人しにんへんじて金かねとなる・指さきをぬきてう

りしかば又いできたりぬ、王のせめのありし時は死人しにんとなる、かく
のごとく・つきずして九十一劫いっじゅうなり、積まなんと申せし人の石をと
りしかば金こがねとなりき、

金ぞく王は、いさごを金となし給いき。

今のむぎは法華經のもんじなり、又は女人の御ためには、かがみとなり、身のかざりとなるべし、男のためには、よろひとなり、かぶとなるべし、守護神となりて弓箭の第一の名をとるべし、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

このよの中は、いみじかりし時は何事かあるべきとみえしかども、當時はことにあぶなげに、みえ候ぞ、いかなる事ありともなげかせ給うべからず、ふつと、おもひきりてそりやうなんども、たがふ事あらば、いよいよ悦びとこそおもひて、うちうそぶきて、これへわたらせ給へ所地しらぬ人もあまりにすぎ候ぞ、當時つくしへ、むかひて、なげく人人は、いかばかりとか、おぼす、これは皆日蓮を、かみのあなづらせ給いしゆへなり。

七月二日

にちれんかおう
日蓮花押

ごへんじ
南条殿御返事

二八七

あんしつ
庵室修復書

建治三年

五十六歳御作

1542p

去文永^{ぶんえい}十一年六月十七日に・この山のなかに・きをうちきりて・か

りそめにあじちをつくりて候いしが・やうやく四年がほど・はしらくちかきかべをち候へども・なをす事なくて・よるひを・とぼさねども月のひかりにて・聖教^{しんぎょう}をよみまいらせ・われと御経をまきまいらせ候はねども・風をのづから・ふきかへし・まいらせ候いしが、今年は十

二

のはしら^{しほう}四方にかふべをなげ・四方^{しほう}のかべは・一そにたうれぬ、うだいたもちがたければ・月はすめ雨はとどまれとはげみ候いつるほど

に・人ぶなくして・がくしやうどもをせめ・食なくして・ゆきをもち
て命をたすけて候ところに・さきに・うへのどのよりいも二駄これ一
だは・たまにもすぎ。

二二八八

大白牛車書 だいびやくこしゃ

建治三年十二月十七日 五十

六歳御作

与南条七郎次郎

1543p

夫それ法華經第二の巻に云く「此の宝乘ほうじょうに乗り直ちに道場どうじょうに至る」

と云云、日蓮にちれんは建長五年四月二十八日初めて此の大白牛車だいびやくこしゃの一乗いちじょう

法華ほっけの相伝そうでんを申し顯もうはせり、而しかるに諸宗しよしゅうの人師にんし等とう・雲霞うんかの如ごとくよせ

来きり候こう、中ちゆうにも真言しんごん・浄土じょうど・禅宗ぜんしゅう等とう・蜂ちゆうの如ごとく起たりせめたたかふ、

日蓮にちれん大白牛車だいびやくこしゃの牛うしの角かく最第一さいだいいちなりと申もうしてたたかふ、両りやうの角かくは本ほん・

迹二門

の如ごとく二乗にじよう作さつぶつ・久遠くおん実成じつじよう是これなり、すでごとに弘法こうぼう大師だいしは法華ほっけ最第一さいだいいちの

角かくを最第三さいだいさんとなをしし・一念いちねん三千さんぜん・久遠くおん実成じつじよう・即身そくしん成じやう仏ぶつは法華ほっけに限けれ

り・是これをも真言しんごんの經きやうにありとなをせり、かからるら謗法ぼうぼうの族やからを責せめんと

するに返つて、いよいよ弥怨をなし候、たと譬えば角を・なをさんとて牛をころし
たるが如ごとくなりぬべく候ひしかども、いかでさは候べき。

そもそも

抑此の車と申すは本・迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、

さんがい

三界の火宅を生死・生死とぐるりぐるりとまはり候ところの車な

り、ただ信心のくさびに

志

のあぶらをささせ給いて靈山淨土へ

まいり給うべし、又心王は牛の如し・生死は両の輪の如し、でんきょう傳教

大師云く「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覺の真徳な

り云云、天台云く「十如は只是れ乃至今境は是れ体」と云云、此の

文釈能案じ給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮

花押

三八九 上野殿御返事 建治四年二月二十五日

五十七歳御作 与南条七郎次郎 1544p

蹲いへのいも鴟がくしがき・焼米・栗・たかなな・すづつ給び候おい了んぬ。

月氏あそかだいおうに阿育大王もうと申す王をはしき、一閻浮提えんぶだい四分の一を・たなご

ころりゅうおうににぎり・竜王りゅうおうをしたがへて雨を心にまかせ・鬼神きじんをめしつかひ

給たまいき、始あくおうは悪王あくおうなりしかども後には仏法ぶつぼうに歸し・六万人ばんにんの僧を日

日に供養くようし・八万四千はちまんの石の塔をたて給たまう、此だいおうの大王だいおうの過去かこをたづ

ぬれば仏ざいせの在世ざいせに徳勝童子とくしょうどうじ・無勝童子むしょうどうじとて一人ひとりのをさなき人あり、

土

の餅もちを仏くように供養くようし給たまいて一百年ひゃくねんの内に大王だいおうと生なれたり、仏ぶつはいみじ

しといへども法華經ほけきょうにたいしまいらせ候まへば・螢火ほたるびと日月にちがつとの勝劣しょうれつ・

天てんと地ちとの高下こうげなり、仏くようを供養くようして・かかくどくる功德くどくあり・いわうや

ほけきょう
法華經をや、土のもちぬ

を・まいらせて・かかる不思議ありいわうやすずのくだ物をや、かれはけかちならず・いまはうへたる国なり、此をもつて・をもふにしやかぶつ たほうぶつ じゅうちせつにょ釈迦仏・多宝仏・十羅刹女いかでかまほらせ給はざるべき。

そもそも

抑今の時・法華經を信ずる人あり・或は火のごとく信ずる人も

あり・或は水のごとく信ずる人もあり、聴聞する時は・もへたつばかりをもへども・とをざかりぬれば・すつる心あり、水のごとくともう申すは・いつも・たいせず信ずるなり、此れはいかなる時も・つねは・たいせずとわせ給えば水のごとく信ぜさせ給へるかたうとし・たうとし。

まことやらむ・いえの内に・わづらひの候なるは・よも鬼神のそゐには候はじ、十らせち女の信心のぶんざいを御心みぞ候らむ、まことの鬼神ならば法華經の行者をなやまして・かうべをわらんとをも

ふ鬼神きじんの候きべきか、又しや釈迦かぶつ・法華ほけ經きようの御ごそら事じの候きべきかと・ふか
くをきばしめし候ごへ 恐きよう恐きよう謹きん言げん。

二月廿五日

日蓮にちれん花押かおう

御返事ごへんじ

三九〇 上野殿御返事うえのとのごへんじ 弘安元年四月一日 五十七

歳御作 与南条七郎次郎 1545p

白米一斗・いも一駄・こんにやく五枚・わざと送り給ひ候い畢おわんぬ、なによりも石河の兵衛入道殿へいゑいりだうゑんのひめ御前ごぜんの度度御ふみをつかはしたりしが、三月の十四五やげにて候しやらむ御ふみありき、この世の中をみ候に病なき人

も・こねんななどをすぐべしともみへ候はぬ上・もとより病ものにて候が・すでにきうになりて候さいこの御ふみなりと・かかれて候いしが、されば・つゐに・はかなくならせ給たまいぬるか。

臨終りんじゆうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申しあはせて候人は・仏の金言きんげんなれば一定の往生おしりじゆうとこそ人も我も存じ候へしかれども・いかなる事にてや

候いけん、仏のくひかへさせ給いて未顕眞実・正直捨方便と・とかせ
給いて候が・あさましく候ぞ、此れを日蓮が申し候へばそら事うわ
のそらなりと日本国にはいかられ候、此れのみならず仏の小乗経
には十方

に仏なし一切衆生に仏性なしと・とかれて候へども・大乘経には
十方に仏まします一切衆生に仏性ありと・とかれて候へば・たれか
小乗経を用い候べき皆大乘経をこそ信じ候へ此れのみならず
ふしぎのちがひめども候ぞ

かし、法華経は釈迦仏・已今当の経経を皆くひかえしうちやぶり
て・此の経のみ眞実なりと・とかせ給いて候いしかば御弟子等用ゆる
事なし、爾の時・多宝仏・証明をくわへ十方の諸仏・舌を梵天につ
け給いき、さて多宝仏はとびらをたて十方の諸仏は本土にかへら
せ給いて後は・いかなる経経ありて法華経を釈迦仏やぶらせ給う

とも他人たにん

わゑになりてやぶりがたし、しかれば法華經ほけきょう已後いごの經經きょうぎょう・普賢經ふげん
ねはんぎょう
・涅槃經等ねはんぎょうには法華經ほけきょうをば・ほむる事はあれどもそしる事なし、
しか
而るを真言宗しんこんしゅうの善無畏等ぜんむい・禅宗ぜんしゅうの祖師等そし・此れをやぶれり、
にほんこく
日本國みな・皆此の事を信じぬ、例せば將門さだとう・貞任さだとうなどに・かたらはれ
ひとびと
し人人のごとし、日本國にほんこくすでに釈迦しゃか・多寶たほう・十方じゅつぱうの仏の大怨敵おんてきとな
りて数年になり

候へば・やうやく・やぶれゆくほどに・又かう申す者を御あだみあり、わざはひにわざはひのならざるゆへに・此の国土すでに天のせめをかほり候はんずるぞ。

此の人は先世の宿業か・いかなる事ぞ、臨終に南無妙法蓮華經と唱えさせ給いける事は・一眼のかめの浮木の穴に入り・天より下いとの大地のはりの穴に入るがごとし、あらふしぎふしぎ、又念仏は無間地獄に墮つると申す事をば經文に文明なるをば・しらずして皆人・日蓮が口より出でたりとおもへり、天はまつげのごとしと申すはこれなり、虚空の遠きと・まつげの近きと人みなみる事なきなり、此の尼御前は日蓮が法門だにひが事に候はば・よも臨終には正念には住し候はじ。

又日蓮が弟子等の中に・なかなか法門しりたりげに候人人はあしく候げに候、南無妙法蓮華經と申すは法華經の中の肝心・人の中の

神のごとし、此れにものをならぶれば・きさきのならべて二王をお
とことし、乃至きさきの大^{おみ}臣^{いか}已下になひなひとつぐがごとし、わざ
はひのみなもとなり、正^{しゅう}法^{ほう}・像^{ぞう}法^{ほう}には此の法^{ほう}門^{もん}をひろめず余^よ經^{きやう}を
失^あわじがためなり、今^{いま}末^{まつ}法^{ほう}に入りぬれば余^よ經^{きやう}も法^{ほう}華^け經^{きやう}もせんなし、
但^な南^な無^む妙^{みやう}法^{ほう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}なるべし、かう申^{もう}し出^でだして候^{こう}も・わたくしの
計^{ばたり}にはあらず、釈^{しゃ}迦^か・多^た宝^{ほう}・十^{じゅう}方^{ほう}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}・地^じ涌^ゆ千^{せん}界^{がい}の御^ご計^{けい}なり、此
の南^な無^む妙^{みやう}法^{ほう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}に余^よ事^じを

まじへば・ゆゆしきひが事なり、日出^いでぬれば・とほしびせんなし・
雨^{あめ}のふるに露^{つゆ}なにのせんかあるべき、嬰^{えい}兒^じに乳^{ちち}より外^{ほか}のものをやし
なうべきか、良^り薬^{やく}に又^{また}薬^{やく}を加^くえぬる事なし。

此^この女^{にょ}人^{にん}は・なにとなければども自^じ然^{ねん}に義^ぎにあたりてし・ををせる
なり、たうとし・たうとし、恐^き恐^ふ謹^{きん}言^{げん}。

弘安元年四月一日

日蓮にちれん
蓮れん
花押かおう
上野殿御返事うえのとのごへんじ

三九一 南条殿女房御返事 弘安元年五月二十四日

五十七歳御作 与南条七郎次郎女房 1547p

八木二俵送り給ひ候い畢おわんぬ、たびたび度度の御志こころざしもう申し尽し難かたく候。
夫それ水は寒積つもれば氷と為なる。雪は年累なつて水精すいしやうと為なる。悪積つもれば
地獄じごくとなる。善積つもれば仏となる。女人にょにんは嫉妬しつとかさなれば毒蛇どくじゃとな
る。法華経供養ほけきやうくやうの功德くどくかさならば。あに竜女りゆうにょがあとを。つがざらん、
山といひ。河といひ。馬といひ。下人げにんといひ。かたがた。かんなんのこ
ろに。度度たびたびの御志こころざしもう申すばかりなし。
御所ごしょ勞らうの人の臨終りんじゆう正念しょうねん。靈山りやうぜん淨土じやうど疑うたがなかるべし。疑うたがなかる
べし。

五月二十四日

にちれん
日蓮

かおう
花押

三九二

しゅじゅ
種種物御消息

こうあんがんねん
弘安元年七月七日

五十七

歳御作

与南条平七郎

しなしなのものをくり給びて法華經にまいらせて候。

そもそものにほんこく

抑 日本国の人を皆やしなうて候よりも父母一人やしなうて候は

くどく

功德まさり候、日本国にほんこくの皆人みなをころして候は七大地獄だいちごくに墮おち候、

ふぼ

父母をころせる人は第八はちの無間地獄むげんじごくと申もうす地獄じごくに墮おち候、人あり

ふぼ

て父母をころし釈迦しゃか仏ぶつの御身おんみよりちをいだして候人は父母ふぼをころす

むげんじごく

つみにては無間地獄むげんじごくに墮おちず、仏おんみの御身おんみよりちをいだすつみにて

むげんじごく
無間地獄

に墮おち候なり、又じゅうあく十悪・五逆ごぎやくをつくり十方じゅうぽう・三世さんぜの仏の身より・ちをいだせる人の法華經ほけきょうの御かたきとなれるは・十悪じゅうあく・五逆ごぎやく・十方じゅうぽうの仏おんみの御身おんみより・ちをいだせるつみにては阿鼻地獄あびじごくへは入る事なし・ただ法華經ほけきょう不信ふしんの大罪たいざいにより

て無間地獄へは墮ち候なり、又十悪・五逆を日日につくり・十方の諸仏を月月にはうずる人と・十悪・五逆を日日につくらず十方の諸仏を月月にはうぜず候人・此の二人は善悪はるかにかわりて候へども・法華經一字一点もあひそむきぬれば・かならず・おなじやうに無間地獄へ入り候なり。

しかればいまの代の海人・山人・日日に魚鹿等をころし・源家平家

等の兵士等のとしどしに合戦をなす人人は・父母をころさねば・よ

も無間地獄には入り候はじ、便宜候はば法華經を信じて・たまたま

仏になる人も候らん、今の天台の座主・東寺・御室・七大寺の検校・

園城寺の長吏等の真言師・並びに禅宗・念佛者・律宗等は眼前には

法華經

を信じよむにたれども・其の根本をたづぬれば弘法大師・慈覺

大師・智証大師・善導・法然等が弟子なり、源にこりぬれば流きよ

からず・天くもれば地くらし、父母謀反をおこせば妻子ほろぶ・山くづるれば草木たふるなら

ひなれば・日本六十六ヶ国の比丘・比丘尼等の善人等・皆無間地獄に墮つべきなり、されば今の代に地獄に墮つるものは悪人よりも善人・善人よりも僧尼・僧尼よりも・持戒にて智慧かしこき人人の阿鼻地獄へは墮ち候なり。

此の法門は当世・日本国に一人もしりて候人なし、ただ日蓮一人計りにて候へば・此れを知って申さずば・日蓮・無間地獄に墮ちて・うかぶ期なかるべし、譬へば謀反のものを・しりながら国主へ申さぬとがあり、申せばかたき雨のごとし風のごとし・むほんのもののごとし・海賊・山賊のもののごとし、かたがた・しのびがたき事なり、例せば威音王仏の末の不軽菩薩のごとし・歡喜仏のすえの覚徳比丘のごとし、天台のごとし・伝教のごとし、又かの人人よりも・かたきすぎ

たり、かの人人ひとびとは諸人しよじんにくまれたりしかども、いまだ国主こくしゆにはあだまれず、これは諸人しよじんよりは国主こくしゆにあだまるる事父母ふぼのかたきよりも、すぎたるをみよ。

かかるふしぎの者をふびんとて御くやう候は、日蓮にちれんが過去かこの父母ふぼか又先世せんぜの宿習しゆくじゆうか、おぼろげの事にはあらじ、某それがしの上雨うらふりかぜふき人のせいするにこそ心させしはあらわれ候へ、此これも又かくのごとし、ただなる時だに

も・するがとかいとさかひは山たかく河ふかく石おほくみちせば
し、いわうやたうじは・あめはしのをたてて三月におよびかわはまさ
りて九十日、やまくづれ・みちふさがり人も・かよはずかつてもたえ
て・いのちかうにて候いつるに・このすずのもの給いて法華經の御う
えをもつぎ釈迦仏しゃかぶつの御いのちをも・たすけまいらせ給いぬ、御功德
ただをしはからせ給うべし、くはしくは又又申すべし、恐恐。七
月七

日蓮花押
にちれんかおう

三九三

時光御返事
こへんじ

弘安元年七月八日 五十七
こうあんがんねん

歳御作 与南条時光 1549p
なんじょうときみつ

むぎのしろきこめ一駄はじかみ送り給び畢んぬ。
おわ

こくぼんわう斛飯王の太子たいしあなりち阿那律と申もうす人は家いへにましましし時は俗じやく性は月氏国がつしの本主ほんしゆてんりん天聖王せいおうのすえ師子ししけう王のまご浄飯王じやうばんのおひこくぼん王おうには太子たいしなり、天下てんかにいやしからざる上じやう・家中じやうちゆうには一日の間・一万・二千人の人出入す、六千人はたからをかりき六千人はかへりなす、かかる富人ふみゆうににておはする上天眼てんげんだい第一だいいちの人・法華經ほけきやうにては普明如来ふみゆうにとなるべきよし仏記ぶつぎし給たまう。

これは過去かこの行ぎやうは、いかなる大善だいぜんぞとたづぬるに、むかしれうしあり山のけだものをとりて、すぎけるが又ひえをつくり食とするほどに飢えたる世なればものもなし、ただ、ひえのはん一ありけるを、くひければ、りだと申もうす辟支佉ひやくしごの聖人しょうにん来たりて云いわく我七日の間食なし汝なんじが食者たなんじえさせよとこわせ給たまいしかば、きたなき俗じやくのごきに入れ
て・

けがしはじめて候もうと申しければ、ただえさせよ今食せずば死ぬべし

と云う、おそれながら・まいらせつ、此の聖人しよつにんまいり給たまいしがただひ
え一つびを・とりのこして・ねうしにかへし給たまいき、ひえへんじていの
ことなる、いのこ

変じて金こがねとなる金こがね変じて死人しにんとなる死人しにん変じて又金人こがねとなる指
をぬいて売れば本のごとし、かくのごとく九十一劫こじゅういちじやく長者ちやうに生れ今
はあなりちと申まうして仏の御弟子おんでしなり、わづかのひえなれども飢え
たる国に智者ちしやの御いのちをつぐゆへにめでたきほうをう。

迦葉尊者かしようそんじやと申せし人は仏の御弟子おんでしの中には第一だいいちにたとき人なり、
此の人の家をたづぬれば摩かだい国の尼くりだ長者ちやうの子なり、宅
にたたみ千でうあり一でうはあつさ七尺下品げほんのたたみは金千両な
り、からすき九百九十九のからすきは金千両、金三百四十石入
れたるくら六十・かかる大長者ちやうなり、めは又身は金色にして十六
里をて
らす、日本国にほんこくの衣通姫そとおりひめにもすぎ漢土かんどのりふじんにもこえたり、此の
夫婦道心どうしんを発おこして仏の御弟子おんでしとなれり、法華経ほけきやうにては光明如来こうみやうにょらいと
いはれさせ給たまう、此の一人の人人ひとびとの過去かこをたづねれば麦飯むぎいひを辟支仏ひやくしぶつ

に供養せしゆへに迦葉尊者と生れ、金のぜに一枚を仏師にあつらへ

て毘婆尸仏の像の御はくにひきし貧人は此の人のめとなれり。

今日蓮は聖人にはあらざれども法華經に御名をたてり、国主に

にくまりて我が身をせく上弟子かよう人をも或はのり或はうち

或は所領をとり或はところをおふ、かかる国主の内にある人人

なればたとひ心ざしあるらん人人もとふ事なし、此の事事ふり

ぬ、なかにも今年は疫病と申し飢渴と申しとひくる人人もすくな

し、たとひ

やまひなくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに麦の御とぶら

い金にもすぎ珠にもこえたり、彼のりだがひゑは変じて金人とな

る、此の時光が麦何ぞ変じて法華經の文字とならざらん、此の

法華經の文字は釈迦仏となり給い時光が故親父の左右の御羽とな

りて靈山浄土へとび給へかけり給へかへりて時光が身をおほひは

ぐくみ給へ 恐恐 謹言。

弘安元年七月八日

日蓮花押

上野殿御返事

三九四

上野殿御返事

弘安元年九月十九日

五十

七歳御作

与南条時光

1551p

塩一駄はじかみ送り給ひ候。

金多こがねくして日本にほんこくの沙のごとくならば誰か・たからとして・はこ

のそこにおさむべき、餅多くして一閻えんぶだい浮提だいちの大地のごとくならば誰か米の恩を・おもくせん。

今年は五月より日に雨ふり・ことに七月より大雨だいうひまなし、このところは山中なる上・南は波木井はきり・河北かほくは早河東は富士河・西は深山みやまなれば長雨だいう・時時・日にづく間・山さけて谷をうづみ・石ながれて道をふせぐ・河たけくして船わたらず、富人なくして五穀ごこくともし商人あきひとなくして人あつまる事なし、七月などは・しほ一

升を・

ぜに百しほ五合を麦一斗にかへ候しが今はぜんたいしほなし、何を
以てかかうべき、みそもたえぬ、小児のちをししむつにのぶがごとし。

かかるところにこのしほを一駄給びて候・御志ごんざし・大地だいちよりもあ

つく虚空こくうよりもひろし、予が言は力及ぶべからずただ法華ほけきょう経と

釈迦しやくか仏ぶつとにゆづりまいらせ候、事多しと申せども紙上にはつくし

がたし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安元年九月十九日
こうあんがんねん

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事
うえのとのごへんじ

三九五

上野殿御返事

弘安元年十月十二日

五十

七歳御作

与南条時光

1552p

いゑのいも一駄・かうじ一こぜに六百のかわり御ざのむしろ十枚
給び畢おわんぬ。

去今年は大えき此の国にをこりて人の死ぬ事大風たいふうに木のたうれ
大雪に草のおるるがごとし一人ものこるべしともみへず候いき、し
かれども又今年の寒温時にしたがひて五穀ごこくは田畠でんばたにみち草木そうもくはやさ
んにおひふさがりて堯ぎょうしゆん舜しゆんの代のごとく成劫じやうこつのはじめかとみへて候
いしほどに八月九月の大風たいふうに日本にほん一同不熟ふじゆくゆきてのこれる
万民ばんみん冬をすごしがたし、去ぬる寛喜かんき・正嘉しょうかにもこえ来らん三災さんさいにも
・おとらざるか、自界叛逆じかいほんぎやくして盜賊国ぞくに充満じゆうまんし他界たがいきそいて合戦がっせんに

心をつひやす、民の心不孝にして父母を見る事他人のごとく僧尼は
邪見にして狗犬とえんこう猴さる

のあへるがごとし、慈悲なければ天も此の国をまほらず邪見なれば

三宝にもすてられたり、又疫病もしばらくはやみてみえしかども

鬼神かへり入るかのゆへに北国も東国も西国も南国も一同にやみな

げくよしきこへ候、かかるよにいかなる宿善にか法華經の行者をや

しなわせ給う事ありがたく候ありがたく候、事事見参の時申すべ

し、恐恐謹言。

弘安元年後十月十二日

日蓮花押

上野殿御返事

三九六

九郎太郎殿御返事ごへんじ

弘安元年十一月一日こうあんがねん

五十七歳御作

与南条九郎太郎

1553p

これにつけてもこうえのどのの事こそをもひいでられ候へ。

いも一駄・くり・やきごめ・はじめかみ給び候いぬさてはふかき山にはいもつくる人もなし・くりもならず・はじめかみもをひず・ましてやきごめみへ候はず、たとえくりなりたりともさるのこずへからす、いえのいもはつくる人なし・たとえつくりたりとも・人にくみてたび候はず、いかにしてか・かかるたかき山へは・きたり候べき。

それ山をみ候へば・たかきよりしだいにしもえくだれり、うみをみ候へば・あそきより・しだいにふかし、代をみ候へば三十年・二十年・五年・四三二一しだい・次第しだいにをとるへたり、人の心もかくのごとし、これ

はよのすへになり候へば山にはまがれるきのみとどまりのにはひききくさのみをひたり、よにはかしこき人はすくなくはかなきものはをほし、牛馬ぎゆうばのちちをしらず兎羊の母をわきまえざるがごとし。

仏御入滅にゆうめつありては二千二百二十余年なり代すへになりて智人ちじん

次第しだいにかくれて山のくだれるがごとくくさのひききにいたり、

念仏ねんぶつを申しもうかいたもちなんどする人はををけれども法華經ほけきょうをた

のむ人すくなし、星は多けれども大海たいかいをてらさず草は多けれども

大内の柱とはならず、念仏ねんぶつは多けれども仏と成る道にはあらず戒

は持たもて

ども浄土じよつどへまひる種とは成らず、但南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの七字のみこそ

仏になる種には候へ、此これを申せば人はそねみて用ひざりしを故

上野殿信うえのとのじ給たまいしによりて仏に成らせ給たまいぬ、各各そは其の末にて此

の御志ごころざしをとげ給たまうか、竜馬につきぬる。だには千里をとぶ、松にかかれる。つたは千尋せんじんをよづと申もうすは是か、各各主の御心なり、つちのもちるを仏に供養くようせし人は王となりき、法華経ほけきょうは仏にまさらせ給たまう法なれば供養くようせさせ給たまいて、いかでか今生こんじょうにも

利生りしようにあづかり後生ごしようにも仏ぶつにならせ給たまはざるべき、その上みひんに
してげにんなし、山河さんかわづらひあり、たとひ心ざしありともあらは
しがたきにいまいろをあらわさせ給たまうにしりぬ、をぼろげならぬ
事なり、さだめて法華經ほけきょうの十羅刹じゅうらせつまほらせ給たまいぬらんと。たのもし
くこそ候へ事つくしがたし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安元年十一月一日

日蓮にちれん 花押かおう

九郎太郎殿御返事ごへんじ

三九七 上野殿御返事うえのとのごへんじ

弘安二年一月三日 五十八

歳御作

1554p

餅九十枚・やまのいも五十本・わざと御便を以って正月三日羊の

時に駿河するがの国・富士郡上野郷より甲州は波木井はきりの郷身延山のほらへ
おくりたびて條。

夫れ海辺には木を財たからとし山中には塩を財たからとす、旱魃かんばつには水を
財たからとし闇中あんちゆうには灯を財たからとし女人にょにんは夫を財たからとし夫は女人にょにんを命と
し、王は民を親としは民は食を天とす、此の両三箇年は日本国にほんこくの中
に大疫だいえき起りて人半分減じて候か、

去年こぞの七月より大なるけかちにて里市とをき無縁むえんの者と山中の僧
等は命存じしがたし、其その上日蓮にぢれんは法華経誹謗の国に生れて威音いおん
王おうぶつ仏まっぼうの末法の不輕菩薩ふぎようぼさつの如ごとし、将又歡喜增益かんきぞうやく仏の末の覚悟かくこ比丘びくの
如ごとし、王もにくみ民もあだむ

衣もうすく食もとぼし・布衣はにしききの如ごとし・草葉をば甘露かんろと思
ふ、其その上去年こぞの十一月より雪つもりて山里路たえぬ、年返れども
鳥の声ならずは・をとづるる人なし、友にあらざばたれか問うべき

と心ばそくて過し候に

元三の内に十字九十枚、満月まんげつの如ごとし、心中しんちゆうもあきらかに生死しやうじのやみ
もはれぬべし、あはれなり、あはれなり、こつへどのをこそ、いろあ
るをとこと人は申せし、其その御子なればくれないの、こきよしをつた
へ給たまえるか、あいよ

りもあをく・水よりもつめたき氷かなと・ありがたし・ありがたし、
きょうきょうきんげん
恐恐 謹言。

正月三日

上野殿御返事

三九八

上野殿御返事

弘安二年四月二十日

五十八歳御作

1555p

抑日蓮種種の大難の中には竜口の頸の座と東条の難にはすぎ
ず、其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり、或は
のりせめ或は処をおわれ無実を云いつけられ或は面をうたれし
などは物のかずならず、されば色心の二法よりをこりてそしられた
る者は日本国の中には日蓮一人なり、ただしありとも法華経の故に

はあらし、さてもさても・わすれざる事はせうばうが法華經の第五の巻を取りて日蓮にちれんがつらをうちし事は三毒さんどくよりをこる処ところのちやうちやくなり。

天竺てんじくに嫉妬しつとの女人にょにんあり男をにくむ故ゆえに家内の物をことごとく打

ちやぶり、其その上にあまりの腹立にや・すがた・けしきかわり眼まなこはにちがつ

日月の光のごとくかがやきくちは炎をはくがごとし・すがたは青鬼

赤鬼のごとくにて年来男のよみ奉たてまつる法華經の第五の巻をとり両の足

にてさむざむにふみける、其その後命ごつきて地獄じじくにをつ両の足

ばかり地獄じじくにいらず獄卒鉄杖をもつてつてどもいらず、是は法華經

をふみし逆縁ぎやくえんの功德くどくによる、いま日蓮にちれんをにくむ故ゆえにせうぼうが第

五の巻を取りて予がをもてを・うつ是も逆縁ぎやくえんとなるべきか、彼は

天竺てんじく此れは日本にほん・かれは女人にょにんこれはをとこ・かれは両のあし・これは

両の手・彼は嫉妬しつとの故こ此れは法華經の御故なり、されども法華經第

五の巻は・をなじきなり、彼の女人にょにんのあし地獄じじくに入らざらん此の
両の手・無間むげんに入るべきや、ただし彼は男をに

くみて法華經をば・にくまず、此れは法華經と日蓮とを・にくむれば一身無間に入るべし、經に云く「そ其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云々、手ばかり無間に入るまじとは見へず不便なり不便なり、ついに日蓮にあひて仏果をうべきか不輕菩薩の上慢の四衆のごとし。

夫れ第五の卷は一經第一の肝心なり竜女が即身成仏あきらかなり、提婆はこころの成仏をあらはし竜女は身の成仏をあらはす、一代に分絶たる法門なり、さてこそ伝でんぎ教大師は法華經の一切經に超過して勝れたる事を十あつめ給いたる中に即身成仏そくしんじょうぶつ化導勝とは此の事なり、此の法門は天台宗の最要にして即身成仏そくしんじょうぶつ義と申して文句の義科なり真言・天台の両宗の相論なり、竜女が成仏も法華經の功力なり、文殊師利菩薩は唯常宣說妙法華經とこそかたらせ給へ唯

常の二字は八字の中の肝要なり、菩提心論の唯真言法中の唯の字と今の唯の字といづれ

を本とすべきや、彼の唯の字はをそらくはあやまりなり、無量義經むりょうぎきょうに云く「四十余年未だ真実しんじつを顯あらわさず、法華經ほけきょうに云く「世尊せそんの法は久しくして後に要当まさに真実しんじつを説きたもうべし、多宝たほうは皆是真実かいぜしんじつとして法華經ほけきょうにかぎりて即身成仏そくしんじょうぶつありとさだめ給へり、爾前經にぜんきょうにいかように成仏じょうぶつありともとけ權宗ごんしゅうの人人ひとびと無量むりょうにいひくるふとも。ただほうろく千につち一つなるべし、法華折伏ほつけしやくぶく・破權門理はごんもんりとはこれなり、尤もつともいみじく秘奥ひおくなる法門ほうもんなり。

又天台の学者てんだい がくしゃ・慈覺じかくより・このかた玄・文・止の三大部たいぶの文をとか・くれうけんし義理ぎりをかまうとも去年こぞのこよみ昨日だいもくの食のごとしけうの用にならず、末法まつぽうの始の五百年ほけきょうに法華經ほけきょうの題目だいもくをはなれて成仏じょうぶつありといふ人は・仏説ぶつせつなりとも用もちゆべからず、何いかに況や人師にんしの

義をや、こゝにちれん爰に日蓮思ふやう提婆品を案ずるに提婆は釈迦如来の昔の師な

り、昔の師は今の弟子なり今の弟子はむかしの師なり、古今能所不二にして法華經の深意をあらわす、されば悪逆の達多には慈悲の釈迦如来師となり愚癡の竜女には智慧の文殊師となり・文殊・釈迦如来にも日蓮をとり奉るべからざるか、日本国の男は提婆がごとく女は竜女にあひにたり、逆順とも成仏を期すべきなり是れ提婆品

の意なり。

次に勸持品かんじほんに

八十万億那由佗なゆたの菩薩ぼさつの異口同音の二十行の偈げは

日蓮にちれん一人よめり、誰か出いでて日本にほん唐土こくもろこ天竺してんじく・三国にして仏めつこの滅後

によみたる人やある、又我よみたりと・なるべき人なし又あるべ

しとも覺おぼへず、及加刀くわとう杖じょうの刀杖とうじょうの二字の中に・もし杖の字にあう人

はあるべし刀の字に・あひたる人をきかず、不輕菩薩ぶきやうぼさつは杖じょう木瓦石もくがしやく

と見えたれば杖の字に・あひぬ刀の難なんはきかず、天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教でんぎやう

等は刀杖とうじょう不加くわと見えたれば是又かけたり、日蓮にちれんは刀杖とうじょうの二字とも

に・あひぬ、剩あまじへ刀の難なんは前に申もうすがごとく、東条とうじょうの松原まつくわと竜口たつのくちとな

り、一度もひとたび・あう人なきなり日蓮にちれんは二度あひぬ、杖の難なんには・すでに

せうばうにつらをうたれしかども第五の巻をもつてうつ、うつ杖も

第五の巻

うたるべしと云う経文きやうもんも五の巻・不思議ふしぎなる未来記みらいきの経文きやうもんなり、

されば・せうばうに日蓮にちれん數十人の中にしつてうたれし時の心中しんちゆうには
法華經ほけきょうの故とは・をもへども・いまだ凡夫ほんぶなればうたてかりける間・
つえをもうばひ・ちからあるならば・ふみをりすつべきことぞかし、
然しかれども・つえは法華經ほけきょうの五の巻にてまします。

いまをもひ・いでたる事あり、子を思ふ故ゆえにや・をやつぎの木の弓
をもつて学文せざりし子にをしへたり、然しかる間・此の子うたてかりし
は父にくかりしは・つぎの木の弓、されども終ついには修しゅう学増進がくして
自身得脱じしんとくだつをきわめ・又人を利益りやくする身となり、立ち還かえつて見れば・
つぎの木をもつて我をうちし故なり、此の子そとばに此の木をつく
り父の供養くようのためたててむけりと見へたり、日蓮にちれんも又かくの如ごとく
あるべきか、日蓮にちれん仏果ぶつがをえむに争いかでかせうばうが恩をすつべきや、
何いかに況ほけきょうや法華經ほけきょうの御恩ごおんの杖をや、かくの如ごとく思ひつづけ候いかでへば感涙かんるい
をさへがたし。

又涌出品は日蓮がためにはすこしよしみある品なり、其の故は
上行菩薩等の末法に出現して南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと
見へたり、しかるに先日蓮一人出来す六万恒沙の菩薩より、さだめ
て忠賞をかほるべしと思へば、たのもしき事なり、とにかくに法華經
に身をまかせ信ぜさせ給へ殿一人にかぎるべからず信心をすすめ

給いて過去の父母等をすくわせ給へ。

日蓮生れし時より、いまに一日片時も、こころやすき事はなし、此の法華經の題目を弘めんと思うばかりなり、相かまへて相かまへて自他の生死はしらねども御臨終のきざみ生死の中間に日蓮かならず、むかいにまいり候べし、三世の諸仏の成道はねうしのをわり、とらのきざみの成道なり、仏法の住処・鬼門の方に三國ともたつなり此等は相承の法門なるべし委くは又申すべく候、恐恐謹言。かつへて食をねがひ渴して水をしたうがごとく恋いて人を見たきがごとく病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人、べにしるいものをつくるがごとく法華經には信心をいたさせ給へさなくしては後悔あるべし、云云。

弘安二年己卯卯月二十日

日蓮 花押

上野殿御返事
うえのとのごへんじ

三九九 上野殿御返事うえのとのごへんじ

弘安二年こうあん 五十八歳御作

1559p

鷲目がもく一貫・しほ一たわら蹲いへのいも鴟一俵・はじかみ少少使者をもつて送り給おわび畢んぬ、あつきには水を財たからとす・さむきには火を財たからとす・けかちには米を財たからとす、いくさには兵ひょうじょう杖を財たからとす・海には船を財たからとす・山には馬をたからとす・武蔵下総むさししもふさに石を財たからとす、此の山中にはいへのいも・海のしほを財たからとし候ぞ、竹の子木の子等候へどもしほなければそのあぢわひつちのごとし、又金こがねと申もうすもの国王こくおうも財たからとし民たからも財とす、たとへば米のごとし一切衆生いっさいしゆじょうのいのちなり。

ぜに又かくのごとし、漢土もろこしに銅山どうざんと申もうす山あり彼の山よりいでて候まうぜになれば一文もみな三千里さんぜんの海をわたりて来るものなり、

万人ばんにん・皆みなたまとおもへり、此これを法華經ほけきょうにまいらせさせ給たまう、釈たま
なんと申せし人のたな心には石變じて珠たまとなる金ぞく王は沙こがねを金
となせり、法華經ほけきょうは草木そうもくを仏となし給たまういわうや心あらん人をや、
法華經ほけきょうは焼種にじょうの二乗を仏となし給たまういわうや生種の人をや、法華經ほけきょう
は一闡提いつせんたいを仏となし給たまういわうや信ずるものをや、事事つくしがた
候もち、又又申すべし、恐恐きんぎん謹言きんげん。

八月八日

にちれんかおう 日蓮花押

うえのとのごへんじ 上野殿御返事

四〇〇 上野殿御返事

弘安二年 五十八歳御

作 1560p

唐土もろこしに竜門りゆうもんと申すもうたきありたかき事十丈・水の下ることがつひや
うが・やをいとすよりもはやし、このたきにを・をくのふなあつま
りてのぼらむと申すもう、ふなと申すもういをののぼりぬれば・りうとなり
候、百に一・千に一・万に一・十年二十年に一・ものぼる事なし、
或あるははやきせにかへり、或あるははしたか・とび・ふくろうにくらわれ、
或あるは十丁のたきの左右さうに漁人ども・つらなりみて、或あるはあみ網をかけ
はくみとり、或あるはいてとるものもあり、いをの・りう
となる事かくのごとし。

日本にほん国の武士ぶしの中に源平二家と申すもうて門守もんまほりの犬二足候、二家と
もに王を守りたてまつる事やまかつが八月十五夜のみねより・いづ

るを・あいするがごとし、でんじやうの・なんによの・あそぶをみては
月と星との・ひかりをあわせたるを木の上にて・さるのあいするがこ
とし、かかる身にてはあれども・いかんがして我等われらでんじやう

の・まじわりをなさんと・ねがいし程に平氏の中に貞盛さだもりと申せし者將
門を打ちてありしかども昇でんをゆるされず、其その子正盛又かな
わず其その子忠盛が時・始めて昇でんをゆるさる、其その後清盛きよもり・重盛
等でんじやうにあそぶ

のみならず、月をうみ日をいたくみとなりにき、仏になるみち・これ
にをとるべからず、いを・をの竜門をのぼり・地下の者の・でんじや
うへ・まいるがごとし。

身子しんしと申せし人は仏にならむとて六十劫が間・菩薩ぼさつの行をみてし
かども・こらへかねて二乗にじようの道に入りなき、大通結縁だいづつ けちえんの者は
三千塵点劫久遠下種の人の五百塵点劫生死ごひやくじんでんこう しょうじに
しづみし此等これらは

ほけきょう
法華經を行ぜし程に第六天の魔王・国主等の身に入りて・とかうわ
づらわせしかば・たいしてすてしゆへに・そこばくの劫に六道にはめ
ぐりしぞかし。

かれは人の上とこそ・みしかども今は我等がみにかかれり、願くは我が弟子等・大願ををこせ、去年去去年のやくびやうに死にしひとびと人人の・かずにも入らず、又当時・蒙古のせめに・まぬかるべしともみへず、とにかくに死は一定なり、其の時のなげきは・たうじのごとし、をなじくは・かりにも法華經のゆへに命をすてよ、つゆを大海にあつらへ・ちりを大地にうづむと・をもへ法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」と云云、恐恐謹言。

十一月六日

日蓮 花押

上野賢人殿御返事

御返事なり。

此れはあつわらの事の・ありがたさに申す

白米一だをくり給び了んぬ。

一切いっさいの事は時による事に候か、春は花・秋は月と申す事も時なり、仏も世にいでさせ給たまいし事は法華經ほけきょうのためにて候いしかども・
四十年よんじゅうねんはとかせ給たまはず、其そのの故ゆえを經文きょうもんにとかれて候には説時せつじ
未至みしこ故等と云云、なつあつわたのこそで冬かたびらをたびて候はう
れしき事なれども・ふゆのこそで・なつのかたびらには・すぎず・うへ
て候時のこがね・かつせる時のこれ・うはうれしき事なれども・は
んと水とにはすぎず、仏に土をまいらせて候人・仏となり玉をまいら
せて地獄じじくへゆくと申もうすことこれか。

日蓮にちれんは日本国にほんこくに生れてわわくせず・ぬすみせず・かたがたのどが

なし、末代まつだいの法師ほっしには・とがうすき身なれども・文をこのむ王に武の
すてられ・いろをこのむ人に正しょうじき直物のにくまるるがごとく・念仏ねんぶつと
禅しんごんと真言しんごんと律とを信ずる代に値あうて法華経ほけきょうを・ひろむれば王臣おみ・
万民ばんみんににくまれて・結句けっくは山中に候へば天いかんが計らわせ給たまうら
む、五尺のゆきふりて本よりも・かよわぬ山道ふさがり・といくる人
もなし、衣もうすくて・かんふせぎがたし・食たへて命

すでに・をはりなんとす、かかるきざみに・いのちさまたげの御とぶ
らひ・かつはよろこびかつはなけかし、一度ひとたびにをもひ切つて・うへしな
んと・あんじ切つて候いつるに・わづかの・ともしびに・あぶらを入そ
へられたるがごとし、あわれあわれたうとく・めでたき御心かな、
釈迦しやくか仏ぶつ・法華経ほけきょう定めて御計たまらい給たまはんか、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安二年十二月廿七日

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事

四〇二

上野殿御返事

1562p

十字六十枚・清酒一筒・薯蕷五十本・柑子二十・串柿一連・送り
給び候い畢んぬ、法華經の御宝前にかざり進らせ候、春の始め三日
種種の物・法華經の御宝前に捧げ候い畢んぬ。

花は開いて果となり月は出でて必ずみち燈は油をさせば光を増
し草木は雨ふればさかう人は善根をなせば必ずさかう、其の上元
三の御志元一にも超へ十字の餅・満月の如し、事事又又申すべ
く候。

弘安三年庚辰正月十一日

に
ち
れ
ん
日蓮

う
え
の
と
の
上野殿

か
お
う
花押

四〇三 上野殿御返事

15

630

故上野殿・御忌日の僧・料米一たはら・たしかに給び候い畢んぬ、
御仏に供しまいらせて自我偈一卷よみまいらせ候べし。

孝養と申すは・まづ不孝を知りて孝をしるべし、不孝と申すは西
夢と云う者父を打ちしかば天雷身をさく班婦と申せし者・母をのり
しかば毒蛇来りてのみき、阿闍世王・父をころせしかば白癩病の人
となりなき、波瑠璃王は親をころせしかば河上に火出でて現身に
無間にをちにき、他人をころしたるには・いまだかくの如く例な
し。

不孝をもつて思ふに孝養の功德のおほきなる事も・しられたり、

外典三千余卷は他事なし。ただ父母の孝養ばかりなり、しかれども
現世をやしなひて後生をたすけず、父母の恩のおもき事は大海のご
とし現世をやしなひ後生をたすけざれば。一のごとし、内典五
千余卷又他事なし。ただ孝養の功德をとけるなり、しかれども如来
四十

余年の説教は孝養にたれども。その説いまだあらはれず孝が中の
不孝なるべし、目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくひしは。わづかに
人天の苦をすくひて。いまだ成仏のみちにはいれず、釈迦如来は御
年三十の時、父浄飯王に法を説いて第四果をえせしめ給へり、母の
摩耶夫人をば御年三十八の時、阿羅漢果をえせしめ給へり、此等は
孝養

ににたれども還つて仏に不孝のとがあり、わづかに六道をば。はな
れしめたれども父母をば永不成仏の道に入れ給へり、譬へば太子を

凡^{ほん}下^げの者となし王女を匹夫に・あはせたるが如^{ごと}し、されば仏^{ぶつ}説^{せつ}いて
云^{いわ}く「我^{すなわ}則^{けんどん}ち慳^{けん}貪^{どん}に墮^だせん此の事は為^{もつ}て不^ふ可^かなり」云云、仏は父^ふ母^ぼ
に甘^{かん}露^ろをおしみて麦飯を与へたる人・清酒をおしみて濁酒をのま

せたる不孝第一の人なり、波瑠璃王のごとく現身に無間・大城にお
ち阿闍世王の如く即身に白癩病をも・つぎぬべかりしが、四十二年
と申せしに法華經を説き給いて「是の人滅度の想を生じて涅槃に入
ると雖も而も彼の土に於て仏の智慧を求めて是の經を聞くことを
得んと、父母の御孝養のため法華經を説き給いしかば、宝淨世界
の

多宝仏も実の孝養の仏なりと・ほめ給い・十方の諸仏もあつまりて
一切諸仏の中には孝養第一の仏なりと定め奉りき。

これをもつて案ずるに日本国の人は皆不孝の仁ぞかし、涅槃經の
文に不孝の者は大地微塵よりも多しと説き給へり、されば天の日月
八万四千の星・各いかりをなし眼をいからかして日本国をにらめ
給ふ、今の陰陽師の天変・頻りなりと奏し申す是なり、地天・日に
起りて大海の上の小船をうかべたるが如し、今の日本国の小児は魄

事いままでかかへをかせ給たまいて候事ありがたくをぼへ候、ただし・ないないは法華經ほけきょうをあだませ給たまうにては候へども・うへには・たの事に
よせて事かづけにく

まるるかのゆへに・あつわらのものに事をよせて・かしこ・ここをもせ
かれ候こそ候いめれ、さればとて上に事をよせて・せかれ候はんそつひに御
もちる候はずは物をばへぬ人に・ならせ給たまうべしをかせ給たまいて・あし
かりぬべきやうにて候わば・しばらく・かうぬし等をば・これへとを
ほせ候べしめこなんどはそれに候とも・よも御たづねは候
はじ、事のしづまるまで・それに・をかせ給たまいて候わば・よろしく候い
なんと・をばへ候。

よのなか上につけ下によ・せてなげきこそををく候へ・よにある
人人ひとびとをば・よになき人人ひとびとは・きじの・たかをみ・がきの毘沙門びしゃもんをたの
しむがごとく候へども・たかは・わしにつかまれ、びしやもんは・すら
に・せめらる、そのやうに当時とうじ・日本にほん国こくのたのしき人人ひとびとは蒙古もうこ国この事
をききては・ひつじの虎の声を聞くがごとし、また筑紫つくしへおもむきて

いとをしきめを・はなれ子をみぬは皮をはぎ肉をやぶるが・ごとく
にこそ候らめ、いわうや・かの国より・おしよせなば蛇じの口のかえる
・はうちやうしがまないたに・をける・こゝろふなのごとくこそおもは
れ候らめ、今生こんじょうはさて

をきぬ命ほけききえなば一百三十六の地獄じじくに墮おちて無量劫むりょうこつふべし、我等われらは
法華經ほけきをたのみまいらせて候へば・あさきふちに魚のすむが天くも
りて雨のふらんとするを魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候とも・ついには・たのしかるべし、国王こくおう一人の
太子たいしのごとし・いかでか位につかざらんと・おぼしめし候へ、恐恐きょうきょう
謹言きんげん。

弘安三年七月二日こうあん

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし。

四〇五

上野殿御返事うえのとのごへんじ

1566p

女子は門をひらく男子は家をつぐ日本国にほんこくを知つても子なくは誰にかづがすべき、財たからを大千にみてても子なくば誰にかゆづるべき、されば外典げてんさんぜん三千余巻には子ある人を長者ちよつじゃといふ、内典ないてん五千余巻には子なき人を貧人ひんじんといふ、女子一人・男子一人・たとへば天には日月にちがつのごとく地には東西にかたどれり、鳥の二つのはね車の二つのわなり、さればこの男子をば日若御前こぜんと申もうさせ給たまへ、くはしくは又又申もうすべし。

弘安三年八月二十六日こうあん

日蓮花押にちれんかおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

四〇六

南条殿御返事ごへんじ

1566p

はくまいひとふくろいも一だ給おび了わんぬ、抑そもそも故なんでうの七ら
うごらうどのの事、いままでは・ゆめかゆめか・まぼろしか・まぼろ
しかとうたがいて・そらごととのみをもひて候へば・此の御ふみにも・
あそばされて候、さては、まことかまことかとはじめて・うたがいに
できたりて候。

四〇七

上野殿御書

1567p

大海たいかいの一たいは五味ごみのあぢわい江河こうかの一たいは一つひとつの薬いすなり、大海たいかいの一たいは万種ばんしゆの瓦わのごとし、南無阿弥陀なむあみだぶつ仏ぶつは一河いちがの一たい・南無なむ妙法蓮華みょうほうれんげきやう經きやうは大海たいかいの一たい・阿弥陀あみだ經きやうは小河せうがの一たい・法華ほけきやう經きやうの一いちじやう乘じやうは大海たいかいの一たい、故五郎殿ごごろうだんの十六年じゅうろくにんが間まの罪つみは江河こうかの一たい、須臾しゆゆの間の南無妙法蓮華なむみょうほうれんげきやう經きやうは大海たいかいの一たいのごとし、夫それ以もれば華はなはつばみさいて菓こなる、をやは死しにて子こになわる、これ次第しだいなり。

四〇八

上野殿御書

1567p

南条七郎五郎殿なんじやちしやぶしやごろうだんの御死去おんしきよの御事おんこと、人は生なれて死しするならいといとは智者ちしやも愚者ぐしやも上下一じやうげ一同いどうに知りて候まをへば始はめてなげくべしをどろくべしとわをばへぬよし我われも存ぞんじ人ひとにもをしし候まをへども時ときにあたりてゆ

めかまぼろしか。いまだわきまへがたく候、まして母のいかなげ
げかれ候らむ、父母ふぼにも兄弟きょうだいにもをくれはてていとをしきをとこ
にすぎわかれたりしかども子どもあまたをはしませば心なくさ
みてこそをはしつらむ、いとをしきてごごしかもをのごごみめか
たちも人にすぐれ心もかいがいしくみへしかばよその人人ひとびともす
ずしくこそみ候い

しにあやなくつばめる花の風にしばみ満つる月のにわかとがに失た
るがごとくこそをぼすらめ、まこととをぼへ候はねばかきつく
るそらもをぼへ候はず、又又申もうすべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安三年九月六日こうあん

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

追申、此の六月十五日に見奉たてまつり候いしにあはれ肝ある者かな

男や男やと見候いしに。又見候はざらん事こそかなしくは候へさは候へども釈迦しやくかぶつ仏ぼつ・法華經ほけきよつに身を入れて候いしかば臨終りんじゆう・自出じしゅつたく候いけり、心は父君と　一所いしょに靈山りやうぜん淨土じやうどに参りて手をととり頭かぶを合せてこそ悦よろこばれ候らめ、あはれなり・あはれなり。

四〇九

上野殿母御前御返事

1

598a

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提ぼだいのために送り給たまう物の日記にっきの事、鷲目がもく両ゆひ・白米一駄・芋一駄・すりだうふ・こんにやく・柿一籠・ゆ五十等云云御菩提ぼだいの御ために法華經一部・自我じがげ偈ぎ数度・題目だいもく百千返唱たてまつへ奉り候い畢おわんぬ。

抑おさ法華經ほけきよつと申す御經は一代いちだい聖教しやうきやうには似にるべくもなき御經にて而かも唯し仏ぶつ与ゆ仏ぶつと説かれて仏と仏とのみこそ・しろしめされて等とう覚かく

いかないしほんぶ
已下乃至凡夫は叶はぬ事に候へ。

されば竜樹菩薩の大論には仏已下はただ信じて仏になるべしと
見えて候、法華經の第四法師品に云く「薬王今汝に告ぐ我が所説の
諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」等云云、第五の
卷に云く「文殊師利此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり諸經の
中に於て最も其の上在り」等云云、第七の卷に云く「此の法華經
も亦

またかくのごと
復是くの如し諸經の中に於て最も其の上たり」又云く「最も照明た
り最も其の尊たり」等云云、此等の經文私の義にあらざる仏の誠言に
て候へば定めてよもあやまりは候はじ、民が家に生れたる者我は侍
に齊しなると申せ

ば必ずとが来るまして我れ国王に齊しまして勝れたりなんと申せ
ば我が身のとがとなるのみならず父母と申し妻子と云ひ必ず損ず

る事だい火の宅を焼き大木の倒るる時・小木等の損こずるが如ごとし。
仏教ぶつぎょうも又かくの如ごとく華嚴・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんによ・大日經だいにちぎょう・阿彌陀經あみだ等
に依よる人人ひとびとの我が信しんじたるまままに勝劣しょうれつも弁わきまえへずして我が阿彌陀經あみだ
等は法華經ほけきょうと齊等さいとうなり將はた又勝すぐれたりなんど申せば其その一類いちるいの
人人ひとびとは我が經をほめられうれしと思へども還かえつてとがとなりて師
も弟子でしも檀那だんなも悪道あくどうに墮おつること箭やを射るが如ごとし、但ただし法華經ほけきょうの
一切經いっさいぎょう

に勝れりと申して候は、くるしからず還つて大功德となり候、経文の如くなるが故なり。

此の法華經の始に無量義經と申す經おはします、譬えば大王の行幸の御時・將軍前陣して狼籍をしづむるが如し、其の無量義經に云く「四十余年には未だ真実を顕さず」等云云、此れは將軍が大王に敵する者を大弓を以て

射はらひ又太刀を以て切りすつるが如し、華嚴經を読む華嚴宗阿含經の律僧等觀經の念仏者等・大日經の真言師等の者共が法華經にしたがはぬをせめなびかす利劍の勅宣なり、譬えば貞任を義家が責め清盛を頼朝の打ち失せしが如し、無量義經の四十余年の文は不動明王の劍索愛染明王の弓箭なり。

故南条五郎殿の死出の山三途の河を越し給わん時・煩惱の山賊・罪業の海賊を静めて事故なく靈山浄土へ参らせ給うべき御供の

つわもの 無量義經の四十余年・未顕眞実の文ぞかし。

法華經第一の卷・方便品に云く「世尊の法は久くして後要らず

当に眞実を説きたもうべし」と云く「正直に方便を捨てて但無上道

を説く」と云云、第五の卷に云く「唯髻中の明珠」と又云く「ひとり王の

頂上すなわこれに此の一珠有り」と又云く「彼の強力の王の久しく護れる明珠

を今乃ち之をすなわこれ与うるが如し」と等云云、文の心は日本国に一切経わた

れり七千三

百九十九卷なり彼れ彼れの経経は皆法華經の眷属なり、例せば

日本国の男女の数・四十九億九万四千八百二十八人候へども皆一人

の国王の家人たるが如し、一切経の心は愚癡の女人などの唯

一時に心うべきやうはたとへ

ば大塔をくみ候には先ず材木より外に足代と申して多くの小木を

集め一丈二丈計りゆひあげ候なり、かくゆひあげて材木を以て

だいとう 大塔をくみあげ候あししろいづれば返あししろつて足代を切り捨て大塔は候だいとうなり、
あししろ 足代と申もうすは一切いっさいきよう経なり大塔と申もうすは法華経ほけきようなり、仏一切いっさいきよう経を
と 説たまいき給たまいし事は法華経ほけきようを説たまいかせ給たまはんための足代あししろなり、
しょうじきしやほうべん 正直捨方便もうと申もうして法華経ほけきようを信あずる人は阿弥陀あみだ経等の南無
あみだぶつ 阿弥陀あみだ仏大日だい経等の真言宗しんごんしゅう阿含あ経等の律宗りつしゅうの二百五十戒等を切
なげう りすて抛なげちてのち法華経ほけきようをば持たもち候だいとうなり、大塔をくまんがためには
あししろ 足代だいとう大切だいとうなれども大塔をくみあげぬれば足代あししろを切り落

すなり、正直捨方便しよくじきしやほうべんと申す文の心是なり、足代より塔は出来しゆつたいして候へども塔を捨てて足代あししろををがむ人なし、今の世の道心者等どうしんしや一向いっこうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと唱えて一生をすこし南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと一返も唱へぬ人人は大塔だいとうをすてて足代あししろををがむ人人ひとびとなり、世間せけんにかしこくはかなき人と申すは是なり。

故七郎五郎殿は当世とうせの日本国にほんこくの人人ひとびとには、にさせ給はず、をさなき心なれども賢き父の跡あとをおひ御年ごねんいまだはたちにも及およばぬ人が、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱えさせ給たまいて仏ぶつにならせ給たまいぬ無む一いつ不成じょうぶつは是なり、乞こい願ねんわくは悲母ひも我が子を恋おほしめしく思食おほしめし給たまいなば南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱えさせ給たまいて、故南条殿・故五郎殿と一所いしょに生れんと願は

せ給へ一つ種は一つ種、別の種は別の種、同じ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの種を心にばらませ給たまいなば同じ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの国へ生れさせ給たまうべし、三

人面をならべさせ給はん時御悦びいかがうれしくおぼしめすべきや。

そもそも

ほけきょう

はいけん

にやらいすなわため

もつ

抑此の法華經を開いて拜見仕り候へば如来則ち為に衣を以て

これを覆いたもう

たほうげんざい

しよぶつ

ごねん

な

等云云、

經文の心は東西南北八方並びに三千大千世界の外四百萬億

那由他の国土に十方の諸仏ぞくぞくと充滿させ給う、天には星

の如く地には稻麻のやうに並居させ給ひ、法華經の行者を守護せ

させ給ふ

たまたま

しよぶつ

しよぶつ

事、譬えば大王の太子を諸の臣下の守護するが如し、但四天王

一類のまほり給はん事の

かたじけなく候に、一切の四天王

星宿

一切の日月

帝釈

梵天等の守護

せさせ給うに足るべき事

なり、其の上

一切の二乗

一切

の菩薩

兜率

内院

の弥勒菩薩

迦羅陀山

の地蔵

補陀落山

の觀世音

せりょうざん 清涼山の文殊師利菩薩等 各各眷屬を具足して法華經の行者を
しゆご 守護せさせ給うに足るべき事に候に又かたじけなくも釈迦・多宝・
じゆつぼう 十方の諸仏のてづからみづから来り給いて昼夜十二時に守らせ
たま 給はん事のかたじけなさ申す計りなし。

かかるめでたき御経を故五郎殿は御信用ありて仏にならせ給い
たま 今日は四十九日にならせ給へば一切の諸仏靈山浄土に集まらせ
給いて 或は手にすへ 或は 頂をなで 或はいだき 或は悦び月の始
めて出でたるが如く。

花の始めてさけるが如くいかに愛しまいらせ給うらん、抑いかな
れば三世・十方の諸仏はあながちに此の法華經をば守らせ給ふと
勘へて候へば道理にて候けるぞ法華經と申すは三世十方の諸仏の
父母なり・めのとなり・主にてましましけるぞや、かえると申す虫は
母の音を食とす母の声を聞かざれば生長する事なし、からぐらと
申す

虫は風を食とす風吹かざれば生長せず、魚は水をたのみ鳥は木を
すみかとす仏も亦かくの如く法華經を命とし・食とし・すみかとし
給うなり、魚は水にすむ仏は此の経にすみ給う鳥は木にすむ仏は此
の経にすみ給う月は水にやどる仏は此の経にやどり給う、此の経な
き国には仏まします事なしと御心得あるべく候。

古昔輪陀王と申せし王をはしき南閻浮提の主なり、此の王はな
にをか供御とし給いしと尋ぬれば白鳥のいななくを聞いて食とし

給^{たま}う、此の王は白馬^{はくば}のいななけば年^{とし}も若^{わか}くなり色^{いろ}も盛^{さか}んに魂^{たま}もいさ

ぎよく力^{ちから}もつよく又^{また}政事^{まつりごと}も明^{あき}らかなり、故^{ゆえ}に其^{その}の国^{くに}には白馬^{はくば}を多

くあつめ飼^かいしなり、譬^{たと}えば魏王^{たい}と申^{まを}せし王^{わう}の鶴^{つる}を多くあつめ

徳宗^{とくそう}

皇帝^{こうてい}のほたるを愛^{あい}せしが如^{ごと}し、白馬^{はくば}のいななく事^{こと}は又^{また}白鳥^{はくちう}の鳴^なきし

故^{ゆえ}なり、されば又^{また}白鳥^{はくちう}を多く集^あめしなり、或^{ある}時^{とき}如何^{いかん}しけん白鳥^{はくちう}皆^{みな}

うせて白馬^{はくば}いなななかざりしかば、大王^{だいおう}供御^{くご}たえて盛^{さか}んなる花^{はな}の露^{つゆ}に

しほれしが如^{ごと}く満月^{まんげつ}の雲^{うん}におほはれたるが如^{ごと}し、此^{こゝ}の王^{わう}既^{すで}にかくれ

させ給^{たま}はんとせしかば、后^{きさき}・太子^{たいし}・大臣^{だいじん}・一^{ひと}国^{くに}・皆^{みな}母^{はは}に別^{わか}れたる子^この

如^{ごと}く皆^{みな}色^{いろ}をうしなひて涙^{なみだ}を袖^{そで}におびたり如何^{いかん}せん如何^{いかん}せん、其^{その}の国^{くに}

に外道^{げどう}多^{おほ}し当^{とう}時^じの禅宗^{ぜんしゅう}・念^{ねん}仏^{ぶつ}者^{しや}・真^{しん}言^{ごん}師^し・律^{りつ}僧^{そう}等^{どう}の如^{ごと}し、又^{また}仏^{ぶつ}の

弟^で子^しも有^あり当^{とう}時^じの法^{ほつ}華^{けし}宗^{しゅう}の人人^{ひとびと}の如^{ごと}し、中^{ちゆう}悪^{あく}き事^{こと}水^{すい}火^かなり胡^こと越^{えつ}

とに似^にたり、大王^{だいおう}勅^{ちやく}宣^{せん}を下^{くだ}して云^{いわ}く、一^{いっ}切^{さい}の外^げ道^{どう}・此^{こゝ}の馬^{うま}をいなな

かせばぶつきょう仏教を失うしないて一向いっこうに外道げどうを信しよてんぜん事・諸天しよてんの帝釈たいしやくを敬うやもうが
如ごとく

ならん、ぶつでし仏弟子此ぶつでしの馬をいななかせば一切いっさいの外道げどうの頸けいを切り其その所
をうばひ取りてぶつでし仏弟子につくべしと云云、外道げどうも色しきをうしなひ
ぶつでし仏弟子も歎なげきあへり、而しかれども・さてはつべき事ことならねば外道げどうは先
に七日ななひを行なひき、白鳥はくばも来きらず白馬はくばもいななかず、後ご七日ななひをぶつでし仏弟子
に渡わたして祈いのらせしに馬鳴めみょうと申もうす小僧こそう一人ひとりあり、諸しよぶつ仏ぶつの御本尊ごほんぞんとし
給たまう

ほけきょう もつ

法華經を以て七日祈りしかば白鳥壇上に飛び来る、此の鳥一声鳴

きしかば一馬・一声いなく、大王は馬の声を聞いて病の牀よりを

き給う、后より始めて諸人馬鳴に向いて礼拝をなす、白鳥・二

三乃至十百千・出来して国中に充滿せり、白馬しきりにいな

なき一馬・二馬・乃至百千の白馬いなきしかば大王此の音を聞

こ

し食し面貌は三十計り心は日の如く明らかに政正直なりしか

ば、天より甘露降り下り、勅風万民をなびかして無量百歳代を

治め給いき。

仏も又かくの如く多宝仏と申す仏は此の経にあひ給はざれば御

入滅此の経をよむ代には出現し給う、釈迦仏十方の諸仏も亦

復かくの如し、かかる不思議の徳まします経なれば此の経を持つ

人をばいかでか天照太神八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ

給うべきと・たのもしき事なり、又此の経にあだをなす国をば・いかに正直つちうじごころ

に祈り候へども必ず其の国に七難起りて他国に破られて亡国となり候事大海の中の大船の大風に値うが如く・大旱魃の草木を枯らすが如しと・をばしめせ、当時・日本国のいかなる・いのり候とも日蓮いちもんほけきようの行者を

あなづらせ給へばさまざまの御いのり叶はずして大蒙古国に・せめられてすでに・ほろびんとするが如し、今も御覽ぜよただかくては候まじきぞ是れ法華経をあだませ給う故と御信用あるべし。

抑故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり、無常はつねの習いなれども此の事うち聞く人すら猶忍びがたし、況や母となり妻となる人をや心の中をしはかられて候、人の子には幼きもあり長きもありみにくきもありかたわなるも・ある物をすら思いに・なるべか

りけるにや、をのこごたる上よろづに・たらひなさけあり、故上野殿うえのとの
には壮なりし時をくれて歎なげき浅からざりしに此の子を懐妊かいにんせずば
火にも入り水にも入らんと思ひしに此の子すでに平安なりしかば誰
にあつらへて身をも・なくべきと思つて、此こごに心をなくさめて此の十
四五年はすぎぬ、いかにいかにとすべき、一人のをのこごにこそ・に
なわれめと・たのもしく思ひ候いつるに・今年九月五日・月を雲

にかくされ花を風にふかせてゆめかゆめならざるかあわれひさ
しきゆめかなとなげきをり候へばうつつににてすでに四十九日
はせすぎぬまことならばいかんがせんさける花はちらずしてつぼ
める花のかれたるをいたる母はとどまりてわかきこはさりぬな
さけなかりける無常かな無常かな

かかるなさけなき国をばいといすてさせ給いて故五郎殿の
御信用ありし法華經につかせ給いて常住不壞のりやう山浄土へと
くまいらせ給うちちはりやうぜんにまします母は娑婆にとどまれ
り二人の中間にをはします故五郎殿の心こそをもひやられて
あわれにをばへ候へ事多しと申せどもとどめ候い畢んぬ恐

謹言。十月二十四日

日蓮 花押

上野殿母尼御前御返事

しらよね

なら

いものかしら

ごへんじ

ほけきよう

牙二石並びに

鷄

一だ・故五郎殿百ヶ日等云云、

法華經の第

七に云く、

川流江河諸水の中に海これ第一なり此の法華經も亦復

かくのごと

是くの如し

等云云、此の經は法華經をば大海に譬へられて候、

大海と申すは

ふかき事八万四千由旬広きこと又かくのごとし、此

の大海の中にはなになにのすみ有りと申し候へば阿修羅王・凡夫に

てをは

せし時不妄語戒を持ちて

まなこをぬかれ

かわをはがれ

ししむら

をやぶられ血をすはれ骨かれ子を殺され

めをうばわれなんどせし

かども無量劫が間

一度もそら事なくして其の功に依りて

仏となり

給いて候が無一不成仏と申して南無妙法蓮華經を只一度申せる人

一人として

仏にならざるはなしと

とかせ給いて候、

釈迦一仏の

-

4345

-

仰おおせなりとも疑うたがうべきにあらざるに十方じゅっぽうの仏ぶつの御前おんまえにて・なにの
ゆへにかそら事ことをばせさせ給たまうべき、其その上じや釈迦かぶつ仏ぶつと十方じゅっぽうの仏ぶつと
同時どうじに舌したを大梵天ぼんてんに。

四二一

上野殿御返事

1574p

驚目がもく一貫文送り給たまい了おわんぬ、御心おんこころざしの候さしへば申もうし候ぞ・よくふ
かき御房ごほうとおぼしめす事なかれ。

仏にやすやすとなる事の候ぞ・をしへまいらせ候はん、人のものを
・をしふると申もうすは車のおもけれども油をぬりてまわり・ふねを水
にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり、仏になりやすき事は
別べちのやう候はず、旱魃かんばつにかわけるものに水をあたへ寒氷かんびようにこごへた
るものに火をあたふるがごとし、又二つなき物を人にあたへ命のた
ゆるに人のせにあふがごとし。

金色王と申せし王は其その国に十二年の大旱魃かんばつあつて万民ばんみん飢え死
ぬる事かずをしらず、河には死人しにんをはしとし陸にはがいこつをつか
とせり、其そのの時とき・金色大王だいおう・大菩提心ほだいしんを・をこしておほきに施をほど

こし給たまいき、せすべき物みなつきて蔵の内にただ米五升ばかりのこ
れり、大王だいおうの一日の御くごなりと臣下しんか申せしかば大王五升の米をと
り出だして一切いっさいの飢えたるものに或あるは一りう・二りう・或あるは三りう
・四りうなど・あまねくあたへさせ給たまいてのち

天に向わせ給たまいて朕は一切衆生のけかちの苦に・かはりて・うえじに
候ぞと・こえをあげて・よばはらせ給たまいしかば天きこしめして甘呂の
雨を須臾しゆゆに下し給たまいき、この雨を身にふれ・かをにかりし人皆食みな
にあきみちて一国の万民ばんみん・せちなほほどに命よみかへりて候いけり。
月氏国がっしにす達長者ちちやうじやと申せし者は七度貧になり七度長者ちひやうじやとなり
て候いしが最後の貧さいこの時は万民皆ばんみんみなにげうせ死しにをはりて・ただ・めお
とこ二人にて候いし時・五升の米あり五日のかつてとあて候いし時・
迦葉かしよう・舍利弗しゃりほつ・阿難羅あなん・羅ら・釈迦しゃかの五人・次第しだいに入らせ給たまいて五升
の米をこひとらせ給たまいき、其その日より五天竺第一てんじくだいいちの長者ちやうじやとなりて

祇園精舎をばつくりて候ぞ、これをもつてよろづを心へさせ給へ。
きおんしようじや
たま

貴^き辺^{へん}は・すでに法華^{ほけきょう}經^{ぎょう}の行者^{ぎゃくじや}に似^にさせ給^{たま}へる事^{こと}さるの人^{ひと}に似^にもち
ゐの月^{つき}に似^にたるがごとし、あつはらのものどもの・かくをしませ給^{たま}へ
る事は承平^{じやうへい}の将門^{しやうもん}・天喜^{てんき}の貞当^{さだその}のやうに此^{こゝ}の国^{くに}のものどもは・おも
ひて候^{こう}ぞ、これひとへに法華^{ほけきょう}經^{ぎょう}に命^{いのち}をすつるがゆへなり、まつたく
主君^{しゆくん}にそむく人^{ひと}とは天御覽^{あまのみらん}あらし、其^その上^{うへ}わづかの小郷^{せうごう}に・をほく
の公事^{くじ}せめあてられて・わが身^みは・のるべき馬^{うま}なし・妻子^{さいし}はひきかく
べき衣^いなし。

かかる身^みなれども法華^{ほけきょう}經^{ぎょう}の行者^{ぎゃくじや}の山中^{やまのちゆう}の雪^{ゆき}に・せめられ食^たとも
しかるらんと・おもひやらせ給^{たま}いて・ぜに一貫^{いちくわん}をくらせ給^{たま}へるは・
貧女^{ひんによ}がめおとこ二人^{ふたり}して一つの衣^いをきたりしを乞食^{こつじき}にあたへりだ
が合子^{がご}の中^{ちゆう}なりし・ひえを辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}に・あたへたりしがごとし、たうと
し・たうとし、くはしくは又又申^{もう}すべく候^{こう}、恐恐^{きょうきょう}謹言^{きんげん}。

弘安^{こうあん}三年十二月二十七日

にちれん
日蓮

かおう
花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

四一二 上野尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

1573p

にんじゆん

聖人ひとつつひさげ十か十字百・あめひとをけ二升か柑子こうじひと

こ串柿十くし・ならびにおくり候おわい了んぬ春のはじめ御喜び花のご
とくひらけ月のごとくみたせ給たまうべきよしうけ給たまわり了んぬ。

そもそも

おんこと

抑故五らうどのの御事こそ・をもいいでられて候へちりし花も

さかんとす・かれしくさもねぐみぬ、故五郎殿もいかでかかへらせ
給たまはざるべき、あわれ無常むじょうの花とくさとのやうならば人丸にはあ
らずとも花のもともはなれじ、いはうるこまにあらずとも草のも
とをばよもさらじ。

経文きょうもんには子をばかたきととかれて候、それもゆわれ候か梟ふくろうと
申もうすとりは母をくらう破鏡はけいと申もうすけだものは父をがいす、あんろく
山と申せし人は師史明と申もうす子にころされぬ、義朝よしともと申せしつはも
のためよしは為義と申もうすちちを

ころす、子はかたきと申す経文ゆわれて候、又子は財と申す経文あり、妙壯嚴王は一期の後無間・大城と申す地獄へ堕ちさせ給うべかりしが淨蔵と申せし太子にすくわれて大地獄の苦をまぬがれさせ給うのみならず娑羅樹王仏と申す仏とならせ給う、生提女と申せし女人は慳貪のたがによつて餓鬼道に堕ちて候いしが目連と申す子にたすけられて餓鬼道を出で候いぬ、されば子を財と申す経文たがう事なし。

故五郎殿はとし十六歳・心ね・みめかたち人にすぐれて候いし上男のうそなわりて万人にほめられ候いしのみならず、をやの心に随うこと水のうつわものに・したがい・かげの身に・したがうがごとし、いへにてははしらとたのみ道にては・つへとをもいき、はこのたからも・この子のため・つかう所従もこれがため、我しなば・になわれて・のぼへゆきなんのちの・あとをもいをく事なしとふかくを

ぼしめしたりしに・いやなくさきにたちぬれば・いかにや・いかに
や・ゆめか・まぼろしか・さめなん・さめなんと・をもへどもさめずし
て・としも又かへりぬ、いつとまつべしとも・をぼへず、ゆきあうべき・
ところだにも申しもつをきたらば・はねなくとも天へものぼりなん、ふ
ねなくとも・もろこしへも・わたりなん、大地だいちのそこに・ありときか
ば・いかでか地をもほらざるべきと・をぼしめすらむ。

やすやすとあわせ給たまうべき事候、釈迦しゃか仏ぶつを御使おんつかいとして・りやうぜ
ん浄土じゆつどへまいりあわせ給たまへ 若有にやくもんぼつ聞もん法ぽう者む無い一つ不成ふじやうぶつ仏ぶつと申もうして大地だいちは
ささば・はづるとも日月にちがつは地ちに墮おち給たまうとも・しをはみちひぬ世は
ありとも花はなつにならずとも南無なむ妙みよ法ぽう蓮れん華げ経きやうと申もうす女人にょにんの・を
もう子にあわずという事はなしととかれて候ぞ、いそぎいそぎつと
めさせ給たまへつとめさせ給たまへ 恐きやう恐きやう謹きん言げん。

正月十三日

上野
日蓮にちれん
御前あまごぜん
御返事ごへんじ
花押かおう

四一三 上野殿御返事うえのとのごへんじ

1577p

蹲いへのいも鴟一俵給び了おわんぬ。

又かうぬしのもとに候・御乳塩一疋なら並びに口付一人候、さては故五郎殿の事は・そのなげきふりずとおもへども御けさんははるかなるやうにこそおぼえ候へなをもなをも法華經ほけきょうをあだむ事はたえつとも見え候はねば・これよりのちも・いかなる事か候そつらはんずらめども・いままでこらへさせ給たまへる事まことしからず候、仏の説いての給たまはく火に入りて・やけぬ者はありとも大水たいすいに入りてぬれぬものはありとも大山そらは空へ・とぶとも大海たいかいは天へあがるとも末代まつだい悪世あくせに入れば須臾しゆゆの間も法華經ほけきょうは信じがたき事にて候ぞ。

徽宗皇帝きそうこうていは漢土かんどの主もつこじ蒙古国もんこくに・からめとられさせ給たまいぬ、隱岐おき

の法王は日本国のあるじ右京の権大夫殿に・せめられさせ給いて島
にてはてさせ給いぬ、法華經のゆへにてだにも・あるならば即身に仏
にもならせ給いなん、わづかの事には身をやぶり命をすつれども、
法華經の御ゆへに・あやしのがに・あたらんとおもふ人は候はぬ
ぞ、身にて心みさせ給い候いぬらん、たうとし・たうとし、
恐
謹言。

弘安四年三月十八日

日蓮

花押

上野殿御返事

御使おんつかいの申し候もうを承り候たまわ、是この所勞難儀なんぎのよし聞え候、いそぎ療治りょうじをいたされ候もういて御參詣さんけいあ有るべく候。

塩一駄大豆一俵とつさか一袋酒一筒給び候、上野の国より御歸宅候後いまは未だ見参いまに入らず候、牀敷存じ候ゆかしくいし処ところに品品の物ども取り副そえ候もういて御音信おとずれに預り候事申し尽し難がたき御志こころざしにて候。

今申せば事新しきに相似にて候へども徳勝童子とくしょうどうじは仏に土の餅を奉りたてまつて阿育大王あそかだいおうと生れて南閻浮提えんぶだいを大体知行だいたいちぎようすと承り候たまわ、土の餅は物ならねども仏のいみじく渡わたらせ給たまへば・かくいみじき報くわいいを得たり、然しかるに釈迦しゃか仏は我われを無量むりようの珍宝ちんぼうを以て億劫おくせきの間・供養くやうせんよりは末代まつだいの法華經ほけきやうの行者ぎやうを一日なりとも供養くやうせん功德くどくは百千万億せんまん

倍・過ぐべしとこそ説かせ給いて候に、法華經の行者を心に入れて
数年供養し給う事有り難き御志かな、金言の如くんば定めて
後生は靈山淨土に生れ給うべしいみじき果報なるかな。

其の上此の処は人倫を離れたる山中なり、東西南北を去りて里

もなし、かかるいと心細き幽窟なれども教主釈尊の一大事の

秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し

持てり、されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処なり、舌の上は

転法輪の所・喉は誕生の処・口中は正覺の砌なるべし、かかる

不思議なる法華經の行者の住処なればいかでか靈山淨土に劣る

べき、法妙なるが故に人貴し・人貴きが故に所尊しと申すは是な

り、神力品

に云く「若しは林の中に於ても若しは樹の下に於ても若しは僧坊に

於ても乃至而般涅槃したもう」と云云、此の砌に望まん輩は無始

の罪障ざいしょう忽たちまちに消滅しょうめつし三業さんごうの悪転あくてんじて三徳さんとくを成じょうぜん、彼の中天てんじく竺ちくの
無熱池むねつちに臨のぞみし惱者のうしゃが心中しんちゆうの熱氣ねつきを除愈じゆして其その願ねがいを充満じゆうまんする
事清涼池しじやうりやうちの如ごとしとうそぶきしも彼れ此れこ異なりといへども、其その意
は争いでか

替かわるべき。

彼の月がつし氏の靈鷲山りょうじゅうせんは本朝ほんちよう此の身延の嶺なり、参詣さんけい遙はるかに中絶
せり急急らいらんに來臨くわだを企くつべし、是にて待ち入まつて候もべし、哀哀も申しつ
しがたき御志じかな御志じかな。

弘安四年九月十一日

日蓮にちれん 花押かおう

南条殿御返事ごへんじ

四一五 上野殿御返事うえのとのごへんじ

1579p

いゑのいも一駄ごばう一つと・大根六本、いもは石のごとし・ご
ばうは大牛の角のごとし大根は大仏堂だいぶつどうの大きくぎのごとしあぢわひ
は利天とつりてんの甘露かんろのごとし、石を金にかうる国もあり土をこめにうる

ところもあり、千金の金をもてる者もうえてしぬ、一飯をつとにつづめる者にこれをとれり、経いっさいに云いわく、「うえたるよにはよねたつとし」と云云、一切いっさいの事は国により時ときによる事なり、仏法ぶつぽうは此こゝの道理どうりをわきまうべきにて候、又又もう申すべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安四年九月廿日

日蓮花押

上野殿御返事

四一六

上野尼御前御返事

1580p

しらよね

牙一駄四斗定あらひいも一俵・送り給びて南無妙法蓮華經と唱へ

まいらせ候い了んぬ。

みようほうれんげきよう

もう

たと

てんじよう

まかまんだらけ

妙法蓮華經と申すは蓮に譬えられて候、天上には摩訶曼陀羅華

にんげん

人間には桜の花・此等はめでたき花なれども此れ等の花をば

ほけきよう

たとえ

たまと

たまた

いっさい

この花の中に取分けて此の

法華經の譬には仏取り給う事なし、一切の花の中に取分けて此の

ほけきよう

たと

たまた

そのゆえ

ある

このみ

花を法華經に譬へさせ給う事は其の故候なり、或は前花後菓と

もう

申して花は前に菓は後なり

ある

もう

このみ

花は前に花は

後なり、或は一花

ある

一花

多菓・或は多花一菓・或は無花有菓と品品に候へども蓮華と申す花

このみ

どうじ

ある

いっさいきよう

くどく

ぜんこん

な

れんげ

もう

花

は菓と花と同時なり、一切經の功德は先に善根を作して後に仏と

このみ

どうじ

いっさいきよう

くどく

ぜんこん

な

れんげ

もう

花

は成ると説くかかる故に不定なり、法華經と申すは手に取れば其の

ゆえ

ふじよう

ある

いっさいきよう

くどく

ほけきよう

もう

その

れんげ

もう

花

は成ると説くかかる故に不定なり、法華經と申すは手に取れば其の

ゆえ

ふじよう

ある

いっさいきよう

くどく

ほけきよう

もう

その

れんげ

もう

花

手やがて仏に成り口に唱ふれば其の口即仏なり、譬えば天月の東の山の端に出ずれば其の時即水に影の浮かぶが如く音とひびきとの同時なるが如し、故に経に云く「若し法を聞くこと有らん者は一として成仏せざることを無し」云云、文の心は此の経を持つ人は百人は百人ながら千人は千人ながら一人もかけず仏に成ると申す文なり。

そもそも

しようにそく

あまごぜん

おんちち

さえもん にゆうどう

抑御消息を見候へば尼御前の慈父・故松野六郎左衛門入道殿

きじつ

しそく

こうりゆう

しか

も必ず

の忌日と云云、子息多ければ孝養まぢまぢなり、然れども必ず

法華経に非ざれば謗法等云云、釈迦仏の金口の説に云く「世尊の法

は久しくして後要らず当に眞実を説きたもうべし」と、多宝の

証明に云く、妙法蓮華経は皆是れ眞実なりと十方の諸仏の誓に

云く舌相梵天に至る云云、これよりひつじさるの方に大海をわたり

て国あり漢土と名く、彼の国には或は仏を信じて神を用いぬ人も

あり、或^{ある}は神を信じて仏を用^{もち}いぬ人もあり、或^{ある}は日本^{にほんこく}も始^ははさそ
そ候^{しか}いしか、然^{しか}るに彼の国^{くに}に烏^{おり}竜^{りゅう}と申^{もう}す手書^{てしよ}ありき漢^{かん}土^ど第^{だい}一^{いち}の手^てな
り、例^{れい}せば日本^{にほんこく}の道^{みち}風^{ふう}・行^{ぎやう}成^{じやう}等^{とう}の如^{ごと}し、此^{こゝ}の人^{ひと}、仏^{ぶつ}法^{ぽう}をいみて経^{きやう}を
かかじと申^{もう}す願^{がん}

を立てたり、此の人・死期来りて重病をうけ臨終にをよんで子に
遺言して云く汝は我が子なり・その跡絶ずして又我よりも勝れた
る手跡なり、たとひいかなる悪縁ありとも法華経をかくべからずと
云云、然して後・五根より血の出ずる事・泉の涌くが如し・舌八つに
さけ身くだけけて十方にわかれぬ、然れども一類の人人も三悪道を
知らざれば地獄に墮つる先相ともしらず。

其の子をば遺竜と申す又漢土第一の手跡なり、親の跡を追うて
法華経を書かじと云う願を立てたり、其のとき大王おはします
司馬氏 仏法を信じ殊に法華経をあふぎ給いしが同じくは我が国
の中に手跡第一の者に此の経を書かせて持経とせんとて遺竜を
召す、竜申さく父の遺言あり是れ計りは免し給へと云云、大王父の
遺言と申す故に他の手跡を召して一経をうつし畢んぬ、然りといへ
共御心に叶い給はざりしかば又遺竜を召して言はく

汝親なんじの遺言ゆいごんと申せば朕われまげて経を写させず但八卷の題目だいもく計りを勅したに随したがうべしと云云、返す返す辞じし申もうすに王い瞋かりて云いわく汝なんじが父と云うも我が臣おみなり親の不孝ふこうを恐れて題目だいもくを書かずば違勅いちよくの科とがありと勅定たびたひ度度重かりしかば不孝ふこうはさる事なれども当座とうざの責をのがれがたかりしかば法華經ほけきょうの外題げだいを書きて王みへ上げ宅させに歸りて父のはかに向いて血の涙を流して申もうす様は天子てんしの責重もつきによつて亡なき父の遺言ゆいごんをたがへて既すでに法華經ほけきょうの外題げだいを書きぬ。

不孝ふこうの責免まぬかれがたしと歎なげきて三日の間墓おわを離れず食を断すち既に命に及ぶ、三日と申もうす寅の時に已すでに絶死たいしやくし畢おわつて夢の如ごとし、虚空こくうを見れば天人てんにん一人おはします帝釈たいしやくを絵ゑにかきたるが如ごとし無量むりようの眷属けんぞく天地てんちに充満じゅうまんせり、爰こゝに竜問りゆうもんうて云いわく何いかなる人ぞ答こたえて云いわく汝なんじ知らずや我われは是こゝれ父の烏竜おりのりゆうなり、我人間にんげんにありし時とき外典げてんを執しし仏法ぶつぽうを

かたきとし、殊ことに法華經ほけきょうに敵をなしまいらせし故ゆえに無間むげんに墮おつ、日
日に舌をぬかるる事・数百度・或あるは死し・或あるは生き天に仰き地に伏し
てなげけども叶かなう事なし、人間にんげんへ告げんと思へども便たよりなし、汝なんじ我
が子として遺言ゆいごんなりと申せしかば其その言炎と成つて身を責め・剣と
成つて天より雨り下る、汝なんじが不孝ふこう極きり無かりしかども我が遺言ゆいごんを
違たがへ

ざりし故ゆえに自業じごう自得果じとくうらみがたかりし所に金色の仏むげん一体無間むげん
地獄じごくに出現しゅつげんして仮使たとい遍法界ほんかい断善諸衆生だんぜんしよじゆじやう一聞もんぼう法華經決定けつじやう成菩提ぼだいと
云云、此の仏むげん無間地獄じごくに入り給たまいしかば大水たいすいを大火だいかになげたるが
如ごとし、少し苦みやみぬる処ところに我合掌がっしやうして仏むげんに問たてまつりて何いかなる仏
ぞと申せば、仏答えて我は是これ汝なんじが子息遺しそく竜いりゆうが只今ただ書くところの
法華經ほけきやうの題目だいもく六十四字の内の妙の一字なりと言ふ、八巻の題目だいもくは
八八六十四の仏そく・六十四の満月まんげつと成り給たまへば、無間むげん
地獄じごくの大閻おん即大明じやくだいめいとなりし上うへ・無間地獄むげんじごくは当位とうい即妙じやくめい・不改ふかい本位ほんいと
申もうして常寂光じやうじやくかうの都みやこと成りぬ、我およ及び罪人ざいにんとは皆蓮みなはちすの上の仏むげんと成り
て只今ただ都率とそつの内院ないえんへ上り参り候まゐが先まづ汝なんじに告たまぐるなりと云云、
遺いりゆう竜りゆうが云いわく、我が手てにて書きけり争いかか君きみたすかり給たまうべき、而しかも
我が心こころよりかくに非あらず、いかにいかにと申せば、父ちち答えて云いわく、汝なんじは
か

なし汝が手は我が手なり汝が身は我が身なり汝が書きし字は我が書きし字なり、汝心に信ぜざれども手に書く故に既にたすかりぬ、譬えば小児の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如し、法華経も亦かくの如し存外に信を成せば必ず仏になる、又其の義を知りて謗ずる事無かれ、但し在家の事なればいひしこと故大罪なれども懺悔しやすしと云云、此の事を大王に申す、大王の言く我が願既にしるし有りとて遺童 弥 朝恩を蒙り国又こそつて此の御経を仰ぎ奉る。

然るに故五郎殿と入道殿とは尼御前の父なり子なり、尼御前は彼の入道殿のむすめなり、今こそ入道殿は都率の内院へ参り給うらめ、此の由をはわきどのよみきかせまいらせ給うべし、事そうそうにててくはしく申さず候。

きょうきょうきんげん
恐恐 謹言

十一月十五日

日蓮にちれん

花押かおう

上野尼御前御返事あまごぜんごへんじ

83p

乃米一だ・聖人しやうにん一つつ二十ひさげか・かつかう・ひとかうぶくる
おくり給び候あわ了んぬ。

このところの・やう・せんぜんに申もうしふり候いぬ、さては去いぬる
ぶんえい
文永十一年六月十七日この山に入り候いて今年十二月八日にいた
るまで此の山出いずる事一步も候はずただし八年が間やせやまいと
申もうしとしと申もうしとしどしに身ゆわく・心をぼれ候いつるほどに、今年
は春より此のやまい・をこりて秋すぎ・冬にいたるまで日日にをとる
へ・

夜夜にまさり候いつるが・この十余日は・すでに食も・ほとをととど

まりて候上・ゆきはかさなり・かんはせめ候、

身のひゆる事石のごとし胸のつめたき事氷のごとし、しかるにこの
さけはたたかに・さしわかして、かつかうを・はたと・くい切りて一度
のみて候へば火を胸に・たくがごとし、ゆに入るにいたり、あせに・あ
かあらい・しづくに足をすずぐ、此の御志ごおんこころは・いかんがせんと・う
れしくをもひ候ところところに両眼ふたばしめよりひとつのなんだをうかべて候。

まことやまことや去年こぞの九月五日こ五郎殿のかくれにしはいかに
なりけると胸うちさわぎて・ゆびををりかずへ候へばすでに二ヶ年
十六月四百余日にすぎ候が、それには母なれば御をとづれや候ら
む、いかに・きかせ給たまはぬやらむ、ふりし雪も又ふれり・ちりし花も
又さきて候いき、無常むじょうばかり・またも・かへりきこへ候はざりけ

るか、あらうらめし・あらうらめし余所よそにても・よきくわんざかな
よきくわんざかな玉のやうなる男かな男かないくせ・をやのうれし

く・をぼすらむと見候いしに、満月まんげつに雲のかかれるが・はれずして山
へ入り・さかんなる花のあやなく・かぜのちらせるがごとしと・あさ
ましくこそをぼへ候へ。

にちれん
日蓮は所らうのゆへに人人の御文の御返事も申さず候いつるがこ
の事はあまりに・なげかしく候へば・ふでをとりて候ぞ、これもよ
もひさしくもこのよに候はじ、一定五郎殿にいきあいぬと・をぼへ
候、母よりさきにけさんし候わば母のなげき申したへ候はん、事
事又又申すべし、きょうきょうきんげん恐恐謹言。

十二月八日

にちれん
日蓮 かおう花押

うえのとははごぜんごへんじ
上野殿母御前御返事

四一八

だいびやくごしや
大白牛車御消息

1584p

そもそもほけきよう
抑法華經の太白牛車と申すは我も人も法華經の行者の乗るべ
き車にて候なり、彼の車をば法華經の譬喩品と申すに懇に説かせ
給いて供、たまた但し彼の御經は羅什・存略の故に委しくは説き給はず、

てんじく 天竺の梵品には車の莊り物・其の外・聞信戒定進捨懺の七宝まで
くわ 委しく説き給ひて候を日蓮あらあら披見に及び候、先ず此の車と
もつ 申すは縦広五百由旬の車にして金の輪を入れ・銀の棟をあげ・金
もつ の縄を以て八方へつり縄をつけ・三十七重のきだはし
もつ をば銀を以てみがきたて八万四千の宝の鈴を車の四面に懸けられ
はちまん たり、三百六十ながれの・くれなひの錦の旗を玉のさほにかけなが
らんかん し、四万二千の欄干には四天王の番をつけ、又蜜の内には六万九千
ぼさつ 三百人十余体の仏・菩薩・宝蓮華に坐し給へり、帝釈は諸の眷属を
しやう 引きつれ給ひて千二百の音楽を奏し、梵王は天蓋を指し懸け・地神
は山
だいち 河・大地を平等に成し給ふ、故に法性の空に自在にとびゆく事をこ
だいびやくしや だいびやくしや
もつ そ・大白牛車とは申すなれ、我より後に来り給はん人人は此の車に
りやうぜん めされて靈山へ御出で有るべく候、日蓮も同じ事に乗りて御迎いに

まかり向ふべく供、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮にちれん

花押かおう

四一九 春初御消息しゅうそく

1585p

ははき殿かきて候事よろこびいりて候。

春の初の御悦よろこび木に花のさくがごとく山に草の生い出するがごとし
と我も人も悦よろこび入つて候、さては御送り物の日記にっき 八木一俵・白塩

一俵・十字二十枚・いも一俵・給おわび候い畢おわんぬ。

深山みやまの中に白雪・三日の間に庭は一丈につもり谷はみねとなり・

みねは天にはしかけたり、鳥鹿は庵室あんしつに入り樵牧は山にさしいら
ず、衣はうすし食はたえたり夜はかんく鳥にことならず、昼は里へ
いでんとおもふ心ひまなし、すでに読経とつきやうのこえもたえ観念かんねんの心もう
すし、今生退転こんじやうたいてんして未来みらい三五を経ん事をなげき候いつるところに此
の御とぶらひに命いきて又もや見参そつらに入り候はんずらんと・うれし
く候。

過去かこの仏ぼんぶは凡夫ぼんぶにて・おはしまし候こしいし時とき五濁乱漫ごじよくらんまんの世よにかかる
飢うえたる法華經ほけきょうの行者ぎやうじやをやしなひて仏ぼんぶにはならせ給たまうぞとみえて
候うたがいへば法華經ほけきょうまことならば此この功德くどくによりて過去かこの慈父じふは成仏じちゆうぶつ
疑うたがいなし。

故五郎殿りよつぜんじちゆうへも今は靈山淨土りよつぜんじちゆうへにまいりあはせ給たまいて故殿こてんに御かうべ
をなでられさせ給たまうべしと・おもひやり候こへば涙なみだかきあへられず、
恐恐きようきよう謹言きんげん。

正月二十日にちれんかおう 日蓮花押

上野殿御返事うえのとのごへんじ

申もうす事恐れ入つて候、返返ははき殿一一いっによみきかせまいらせ

候へ。

四二一〇

にちれんかおう
日蓮花押

法華証明抄

1586p

法華經の行者

末代まつだいあくせ悪世ほけきように法華經ほけきようを經たのごとく信まじまいらせ候者ほけきようをば法華經ほけきようの御鏡みかきにはいかんがうかべさせ給たまうと拜見はいけんつかまつり候ほへば、過去かこに十じゆ万億まんいつくの仏ぶつを供養くようせる人ひとなりとたしかに釈迦しやくか仏ぶつの金口きんくの御口ごくちより出いでさせ給たまいて候こうを・一いち仏ぶつなれば末代まつだいの凡夫ぼんぶはうたがいや・せんずらんとて、此こより東方とうほうにはるかはるかの国くにをすぎさせ給たまいて・おはしますはうじようせかい宝浄世界たほうじゆの多宝たぼう仏ぶつわざわざと行幸ぎやうきやうならせ給たまいて釈迦しやくか仏ぶつにをり向むかひまいらせて妙法華經みやうほけきよう・皆是かは眞実しんじつと証しやう明みやうせさせ給たまいて候こういき、此この上うへはなにの不審ふしんか残のこるべき・なれども・なをなを末代まつだいの凡夫ぼんぶは・をぼつかなしと・をぼしめしや有りけん、十方じゆっほうの諸仏しよぶつを召ましあつめ

させ給たまいて広長舌相こうちようぜつそうと申もうして無量劫むりようこつより・このかた永くそらごとなきひろくながく大なる御舌ごしほを須弥山しゆみせんのごとく虚空こくうに立てならべ給たまいし事は・をびただしかりし事なり、かう候まへば末代まつだいの凡夫ほんぶの身としてほけき法華經ほけきの一字・二字を信じまいらせ候まへば十方じふぱうの仏の御舌ごしほを持つ物ぞかし、いかなる過去かこの宿習しゆくじゆうにて・かかる身とは

生るらむと悦よろこびまいらせ候ま・上の經文きんぶんは過去かこに十萬億じゆばんの仏にあいまいらせて供養くやうをなしまいらせて候まいける者ものが法華經計ほけきけいりをば用もちいまいらせず候まいけれども仏ぶつくやうの功德くどく莫ななりければ謗法ぼうぽうの罪つみに依よりて貧賤ひんせんの身みとは生なれて候まへども又此またの經を信まずる人となれりと見みへて候ま、此これをば天台てんたいの御釈ごしやくに云いく、「人の地に倒たれて還かえつて地より起おつが如ごとし」等云と云、地ちにたうれたる人ひとは・かへりて地ちよりをく、ほけき法華經謗法ほけきぼうぽうの人ひとは三惡さんあく並ならびに人天にんてんの地ちには・たうれ候まへどもかへりて法華經ほけきの御手ごてにかかりて仏ぶつになるとことわられて候ま。

しかるにこの上野の七郎次郎は末代の凡夫武士の家に生れて悪人
とは申すべけれど心は善人なり、其の故

は日蓮にちれんが法門ほうもんをば上かみ一人いちにんより下した万民ばんみんまで信じた給たまはざる上たまたま
信しんずる人ひとあれば、或あるは所領しりょう、或あるは田畠でんぱた等にわづらひをなし結句けっくは命
に及ひとびとぶ人人ひとびともあり信じしんじがたき上した、はは故上野しんちゆうは信じしんじまいらせ候い
ぬ、又此またの者敵子しやくしとなりて人もすすめぬに心中しんちゆうより信じしんじまいらせて
上下じゆうげ万人ばんにんにあるいは、いさめ、或あるはをどし候あいつるに、ついに捨すつる心
なくて

候あへばすでに仏ぶつになるべしと見みへ候あへば天魔てんま、外道げどうが病びやうをつけてをど
さんと心こころみ候あか、命いのちはかぎりある事ことなり、すこしも、をどろく事ことな
かれ、又鬼神きじんめらめ此こゝの人ひとをなやますは剣けんをさかさまにのむか又
大火だいをいいたくか、三世さんぜ十方じゅうほうの仏ぶつの大怨敵おんてきとなるか、あなかしこ、あ
なかしこ、此こゝの人ひとのやまいを忽たちまちになをして、かへりてまほりとなりて
鬼道きどうの大苦だいこをぬくべきか、其その義ぎなくして現在げんざいには頭破ずはしちぶん七分しちぶんの科とがに
行いわれ後生ごじゆうには大無間地獄むげんじじくに墮おつべきか、永とこくとどめよ、とどめよ、

にちれん
日蓮が言をいやしみて後悔あるべし・後悔あるべし。

こうあん
弘安五年二月廿八日

下伯耆房

四二一

蕙三枚御書

1587p

蕙三枚・生和布一籠かご・給たまい了おわぬ。

抑そもそも 三月一日より四日にいたるまでの御あそびに心なくさみて・

やせやまいもなをり虎とるばかりをばへ候上此の御わかめ給びて
師子ししにのりぬべくをばへ候。

さては財たからはところにより人によつてかわりて候、此の身延の山に
は石は多けれども餅なし、こけは多けれどもうちしく物候はず、木
の皮をはいでしき物とす。むしろいかで財たからとならざるべき。

億耳居士と申せし長者は足のうらに・けのをいて候いし者なり、ありきのところ・いへの内は申すにをよばず・わたを四寸しきて・ふみし人なり、これは・いかなる事ぞと申せば先世に・たうとき僧に・くまのかわをしかせしゆへとみへて候。

いわうや日本国は月氏より十万よりをへだてて候辺国なる上へびすの島・因果のことはりも弁えまじき上・末法になり候いぬ、仏法をば信ずるやうにてそしる国なり、しかるに法華經の御ゆへに名をたたせ給う上・御むしろを法華經にまいらせ給い候いぬれば。

四二二 芋一駄御書

15880p

いも一駄はじかみ五十ぱをくりたびて候。

このみのぶのやまと申し候は・にしはしらねのたけ・つねにゆきを

みる、ひんがしにはてんしのたけ・つねにひをみる、きたはみのぶの
たけ・みなみはたかとりなたけ四山のおひ・はこのそこのごとし、い
ぬるのすみより・かはながれてたつみのすみにむかう・かかるいみじ
きところみねには・せひのこへ・たには・さるのさげび木は・あしの
ごとし・くさは・あめにいたり、しかれども・かかるいもはみへ候は
ず、はじかみはをひず、いしにて少しまもりやわらかなり、くさに
にて・くさよりもあぢあり。法華經ほけきょうに申もうしあげ候いぬれば
御心おんこころざしはさだめて釈迦しゃか仏ぶつしろしめしぬらん、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

八月十四日

日蓮にちれん在御判

御返事ごへんじ

閻浮提えんぶだい中飢餓きが示現閻浮提じげん えんぶだい中、又云く又示現じげん閻浮提えんぶだい中劫起等こうき云云、人王三十代国の聖明王せいめいおう

国にわたす王此れを用いずして三代仏罰にあたる

釈迦しゃかぶつ仏を申し隠すとが 念ねんぶつ仏者等善光寺の阿弥陀あみだぶつ仏云云、上一人より下万民ばんみんにいたるまで皆人 此れをあらわす、日蓮にちれんにあだをなす人は惣て日蓮にちれんを犯す、天は惣て此国を言いわく「経を讀誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見て輕賤きやうせん憎嫉ぞうしつして結恨けつこんを懐いだかん」等云云、又云く「多病たびやう 瘦しゆう」第八はちに云く「諸惡しよあく重病じゆうびやう」又第二にに云く「若し医道いどうを修しゆうし方に順まさて病を治せば更に他の疾を増し、或は復死またを致いたす」又云く「若し自ら病有みずか

らん人に人の救療すること無く設たい良薬を服すとも而しかも復増劇またせん
等云云、弘法大師は後に望んで戯論と作す、東寺の一門上御室より
下一切の東寺の門家は法華経を戯論と云云、叡山の座主並びに
三千の大衆 日本国・山寺一同の云く 大日経等云云、
智証大師の云く法華尚及ばず等云云、園城の長吏並びに一国の
末流等の云く法華経は真言経に及ばずと云云、此の三師を用ゆる
国主終に法皇尽了んぬ、明雲座主の義仲に殺されし、承久に御室
思い死にせし是なり。

願くは我が弟子等は師子王の子となりて群狐に笑わるる事なか
れ、過去遠遠劫より已来日蓮がごとく身命をすてて強敵の科を
顕せ・師子は値いがたかるべし、国主の責め・なををそろし・いわう
や閻魔のせめをや、日本国のせめは水のごとし・ぬるるを・をそるる
事なかれ、閻魔のせめは火のごとし・裸にして入ると・をもへ、

だいねはんきよう
大涅槃經の文の心は仏法ぶつぽうを信じて今度生死このたびしじゆうじをはなるる人のすこし
心のゆるなるをすすめむがために疫病えきびようを仏のあたへ給たまうはげます
心なりすすむる心なり。

にちれん 日蓮は凡夫なり天眼なければ一紙をもみとをすことなし、宿命
なれば三世を知ることなし、而れども此の経文のごとく日蓮は
肉眼なれども天眼宿命 日本国七百余歳の仏眼の流布せしや
う、八宗・十宗の邪正漢土・月氏の論師・人師の勝劣八万十二の
仏経の旨趣をあらあらずいちし 我が朝の亡国となるべき事先
に此れをかながへて宛も符契のごとし、此れ皆法華経の御力なり、
而るを国主は讒臣等が凶言ををさめてあだをなせしかば、凡夫な
れば道理なりとをもつて退する心なかりしかども度度あだをな。

四二四

衆生身心御書

1590p

衆生の身心をとかせ給う其の衆生の心にのぞむとてとかせ給へ
ば人の説なれども衆生の心をいでず、かるがゆへに随他意の経とな

づけたり、譬へばさけもこのまぬをやのきわめてさけをこのむいとをしき子あり、かつはいとをしみ。かつは心をとらんがために。かれにさけをすすめんがために。父母も酒をこのむよしをするなり、しかるをはかなき子は父母も酒をこのみ給うとをもへり。

提謂經と申す經は人天の事をとけり、阿含經と申す經は二乗の事をとかせ給う、華嚴經と申す經は菩薩の事となり、方等般若經等は。或は阿含經。提謂經にいたり、或は華嚴經にもいたり、此れ等の經經は末代の凡夫これをよみ候へば仏の御心に叶うらんとは行者は。をもへども。くはしく。これをるむずれば己が心をよむなり、己が心は

本よりつたなき心なれば。はかばかしき事なし、法華經と申すは。随自意と申して仏の御心をとかせ給う、仏の御心はよき心なるゆへに。たとい。しらざる人も此の經をよみたてまつれば利益はかりな

し、麻の中のよもぎ・つつの中のくちなは・よき人にむつぶもの・な
となけれども心も・ふるまひも言も・なをしくなるなり、法華^{ほけき}経^{よう}も
かく

のごとし・なにとなければども・この経を信じぬる人をば仏のよき物と
をばすなり、此の法華經ほけきょうにをひて又機きにより時により国によりひ
るむる人により・やうやうにかわりて候をば等覺とうかくの菩薩ぼさつまでも・この
あわひをば・しらせ給たまわずとみへて候、まして末代まつだいの凡夫ほんぶは・いかで
か・ちからひを・ををせ候べき。

しかれども人のつかひに三人あり、一人はきわめてござかしき、
一人ははかなくもなし又ござかしからず、一人はきわめて・はかな
くたしかなる、此の三人に第一だいいちはあやまちなし、第二は第一だいいちほどこ
そ・なければども・すこしござかしきゆへに主の御ことばに私の言をそ
うるゆへに第一だいいちのわるきつかいとなる、第三はきわめて・はかなく
あるゆへに私の言をまじへず・きわめて正直しょうじきなるゆへに主の言ばを・
たがへず、第二よりもよき事にて候あやまつて第一だいいちにも・すぐれて候
なり、第一だいいちをば月支がっしの四依しえにたとう、第二をば漢土かんどの人師にんしにたと

う、第三をば末代の凡夫の中に愚癡にして正直なる物にたとう。

仏在世はしばらく此れを、をく仏の御入滅の次の日より一千年

をば正法と申す、この正法一千年を二つにわかつ、前の五百年が

間は小乗経ひろまらせ給う、ひろめし人人は迦葉・阿難等なり、

後の五百年は馬鳴・竜樹・無著・天親等権大乘経を弘通せさせ

給う、法華経をばかたはし計りかける論師もあり、又つやつや申し

いださぬ人もあり、正法一千年より後の論師の中には少分を仏説

ににたれども多分をあやまりあり、あやまりなくして而も

たらざるは迦葉馬鳴・阿難・竜樹・無著・天親等なり、像法に入り一

千年・漢土に仏法わたりしかば始めは儒家と相論せしゆへにいとま

なきかのゆへに仏教の内の大小・権実の沙汰なし、やうやく仏法

流布せし上・月支よりかさねがさね仏法わたり来るほどに・前の

人人はかしこきやうなれども後にわたる経論をもつてみればは

かなき事も出来す、又はかなくをもひし人人もかしくみゆる事
もありき、結句は十流になりて千万の義ありしかば愚者はいづれに
つくべしともみへず、智者とをぼしき人は辺執かぎりなし、而れど
も最極は一同の義あり。

いわゆるいちだいいち
所謂一代第一は華嚴經・第二は涅槃經・第三は法華經此の義は
かみいちにん
上一人より下万民にいたるまで異義なし、大聖とあうぎし法雲
ほつし ちぞうほつし
法師・智蔵法師等の十師の義一同なりしゆへなり。

し か ぞうほう
而るを像法の中の陳隋の代に智と申す小僧あり後には智者
だいし
大師とがうす、法門多しといへども詮するところ法華・涅槃華嚴經
の勝劣の一つ計りなり、智・法師云く仏法さかさまなり云云、陳主
此の事をたださんがために南北の十師の最頂たる恵僧上・恵光
そうず けいえいほうさいほつし
僧都・恵栄法歳法師等の百有余人を召し合わせられし時・法華經の
中には

「諸經の中に於て最も其の上在り」等云云、又云く「已今当説
さいい なんしんなげ
最爲難信難解」等云云、已とは無量義經に云く「摩訶般若・華嚴
かいこう
海空」等云云、当とは涅槃經に云く「般若はら蜜より大涅槃を出だ
す」等云云、此の經文は華嚴經・涅槃經には法華經勝ると見ゆる事

かくかく 赫赫たり明明たり御会通あるべしと・せめしかば、ある或は口をとぢ

ある或は悪口をはきある或は色をへんじなんと・せしかども、ちんしゅ陳主立つて

はい三拝し百官たなごころ掌をあわせしかば力及ばずまけにき。

いちだい一代の中には第一だいいちほけきょう法華經にてありしほどにぞうほう像法の後の五百にしんやく新訳

のきようろんかき經論重ねてわたるだいそうこうてい大宗皇帝のじょうかん貞觀三年にげんじょう玄奘と申す人あり

がっし月支に入りて十七年・五天のぶつほう佛法をなら習いきわめてじょうかん貞觀十九年に

かんど漢土へわたりしが・じんみつ深密經・ゆいが瑜伽論・ゆいしきろん唯識論・ほうそうしゅう法相宗をわたす、

げんじょういわ玄奘云く「がっし月支に宗多しといへども此の宗・だいいち第一なり」だいそうこうてい大宗皇帝は

又かんどだいいち漢土第一のけんおう賢王なりげんじょう玄奘を師とす、此の宗のしよせん所詮に云く「ある或は

さんじょうほうべん三乘方便・いちじょうしんじつ一乘眞実」ある或はいちじょうほうべん一乘方便・さんじょうしんじつ三乘眞実・又云く「いわ五性は

かくべつ各別なりかつじょう決定性とむしやう無性のうじやう有情はつじやう永くい仏に成らず」等と云云、此の義

はてんだいしゅう天台宗とすいか水火なりしか而もてんだいだいし天台大師とだいし章安大師はにゅうめつ御入滅なりぬ

そ其のい已下のひとびと人人はにんびにん人非人なりてんだいしゅうすでに天台宗破れてみへしなり。

其その後そくてんこうごう則すなは天てん皇だい后だいしの御世に華け嚴こん宗き立ようつ前てんに天だ台だい大だい師しにせめられし
六十卷けこんきようの華け嚴こん經きをばさしをきて後ごに日に照しょう三さん蔵そうのわたせる新しん訳やくの
華け嚴こん經き八十卷をもつて立たてたり、此この宗そうのせんにいわく華け嚴こん經きは
根本こんぽん法ほう輪りん法ほ華け經きは枝しま末つ法ほう輪りん等を云いふ、則すなは天てん皇だい后だいしは尼ににてをはせしが
内外ない典げにこざかしき人まんなり、慢まん心しんたかくして天てん台だい宗しゅうをさげをぼし
てあり

しなり、法相ほつそうといひる華嚴宗けこんしゅうといひる二重ふたへに法華經ほけきょうかくれさせ給たまう。

其その後ご玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎよに月支がっしより善無畏ぜんむい三蔵さんそう・金剛智こんこうち三蔵さんそう・不空ふくう

三蔵さんそう・大日經だいにちきょう・金剛頂經こんこうちやうききょう・蘇悉地經そしつちききょうと申もうす三經さんきやうをわたす、此この三

人は人がらといひる法門ほつもんといひる前前さきさきの漢土かんどの人師にんしには対たいすべくもなき

ひとひとひとひとなり、而しかも前まへになかりし印いんと真言しんごんとをわたすゆへに仏法ぶつぽうは已前いぜん

には此この国くにになかりけりとをばせしなり、此この人人ひとひとの云いわく天台宗てんだいしゅう

は華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろんには勝すぐれたりしかれども此この真言經しんごんには及およばず

と云いふ、其その後ご妙樂大師みょうらくだいしは天台大師てんだいだいしのせめ給たまはざる法相宗ほつそうしゅう

華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんごんしゅうをせめ給たまひて候たまへども天台大師てんだいだいしのごとく公場こうじやうにて

せめ給たまはざれば、ただ闇夜やみよのにしきのごとし、法華經ほけきょうになき印いんと

真言しんごんと現前げんぜんなるゆへに皆人みな・一同いっとうに真言しんごんまさりにて有りしなり。

像法ぞうぽうの中に日本国にほんこくに仏法ぶつぽうわたり所謂いわゆる欽明天皇きんめいてんのうの六年くわんねんなり、欽明きんめい

より桓武かんむにいたるまで二百余年にひゃくにじゅうごねんが間は三論さんろん・成実じやうじつ・法相ほつそう・俱舍くしゃ・華嚴けこん

律ろくしゅうの六宗ろくしゅう弘通くわうちゅうせり、真言宗しんごんしゅうは人王てんのう四十四代しじゅうよんたい・元正げんしょう天皇てんのうの御宇ぎようにわたる、天台宗てんだいしゅうは人王てんのう第四十五代だいごじゅうご聖武しやうむ天王てんのうの御宇ぎようにわたる、しかれどもひろまる事なし、桓武かむむの御代ぎだいに最澄さいちやう法師ほふし・後ごには伝てんぎやう教だいいし大師だいしとがうす、

入唐にゆうとう已前いぜんに六宗ろくしゅうを習ならいきわむる上うへ・十五年ごじゅうごねんが間ま・天台てんだい・真言しんごんの二宗にしゅうを山やまにこもり給たまいて御覽ごらんありき、入唐にゆうとう已前いぜんに天台宗てんだいしゅうをもつて六宗ろくしゅうをせめしかば七大寺ななだいじ皆みなせめられて最澄さいちやうの弟子でしとなりぬ、六宗ろくしゅうの義ぎやぶれぬ、後ご延暦えんりやく廿三年にじゅうさんねんに御入唐にゆうとう・同じおなき廿四年にじゅうごねん御歸朝ぎきやう・天台てんだい・真言しんごんの宗しゅうを日本国にほんこくにひろめたり、但ただし勝劣しょうれつの事ことは内心ないしんに此これを存ぞんじて人ひとに向つてとかざるか。

同代どうだいに空海くわうかいという人ひとあり後ごには弘法こうぼう大師だいしとがうす、延暦えんりやく廿三年にじゅうさんねんに御入唐にゆうとう・大同たいとう三年さんねん御歸朝ぎきやう但真言しんごんの一宗いちしゅうを習ならいわたす、此この人の義ぎに云いく法華ほふけきやう経きやうは尚華なほけこん嚴げん経きやうに及およばず何いかに況しかや真言しんごんにをひてをや。

伝でんぎよう教だいし大師の御おん弟子でしにえんにん円えん仁にんという人あり後に慈じ覚かく大師だいしとがうす、
去いぬる承じょう和わ五ご年ねんの御に入にゅう唐たう・同どう十じゅう四し年ねんに御おん歸き朝ちよう・十じゅう年ねんが間ま・真しん言ごん・
天てん台だいの二に宗しゅうをがくす、日に本ほん国こくにて伝でんぎよう教だいし大師の・義ぎ真しん・円えん澄ちように天てん台だい・
真しん言ごんの二に宗しゅうを習ならいきわめたる

上・漢土かんどにわたりて十年が間・八箇だいたくの大徳にあひて真言しんごんを習ならい宗叡しんごん・志遠等しおんに値あい給たまいて天台宗てんだいしゅうを習ならう、日本にほんに帰朝きちょうして云いわく天台宗てんだいしゅうと真言宗しんごんしゅうとは同じく醍醐だいごなり俱ともに深秘じんみつなり等云云、宣旨せんじを申もうして、これにそふ。

其その後円珍えんちんと申もうす人あり後には智証大師ちしょうだいしとがうす、入唐にゅうとう已前いぜんには義真ぎしん和尙わじょうの御弟子おんでしなり、日本国にほんこくにして義真ぎしん・円澄えんちよう・円仁えんにん等の人人ひとびとに天台てんだい・真言しんごんの二宗にそう習ならいきわめたり、其その上去いぬる仁嘉三年にげさんに御入唐にゅうとう同貞じょうかん観元年くわんげねんに御帰朝きちょう七年が間・天台てんだい・真言しんごんの二宗にそうを法全良ほつぜんりやう・等の人人ひとびとに習ならいきわむ、天台てんだい・真言しんごんの二宗にそうの勝劣しょうれつは鏡をかけたたり、後代に一定

あらそひありなん定むべしと云つて天台てんだい・真言しんごんの二宗にそうは譬たとへば人の両りやうの目め・鳥とりの二にの翼よくのごとし、此この外い異義いぎを存ぞんぜん人人ひとびとをば祖師そし・伝教大師でんぎょうだいしにそむく人なり山に住むべからずと宣旨せんじを申もうしそへて

弘通せさせ給いき・されば漢土・日本に智者多しといへども此の義を
やぶる人はあるべからず、此の義まことならば習う人人は必ず仏に
ならせ給いぬらん、あがめさせ給う國王等は必ず世安穩になりぬら
んとをばゆ。

但し予が愚案は人に申せども、御もちあるべからざる上・身の
あだとなるべし、又きかせ給う弟子・檀那も安穩なるべからずとを
もひし上其の義又たがわず、但此の事は一定仏意には叶わでもや
あるらんとをばへ候、法華經一部八卷・二十八品には此の經に勝れ
たる經をせば此の法華經は十方の仏あつまりて大妄語をあつめ
させ
給えるなるべし、随つて華嚴・涅槃・般若・大日經・深密等の經經
を見るに「諸經の中に於て最も其の上在り」の明文をやぶりたる
文なし、随つて善無畏等玄奘等弘法・慈覺・智証等種種のたくみあ

れども法華經を大日經に對してやぶりたる經文はいだし給わず、
但印・真言計りの有無をゆへとせるなるべし、數百卷のふみをつくり
漢土・日本に往復して無尽のたばかりをなし宣旨を申しそへて人を
をどされんよりは經文分明ならばたれか疑をなすべき、つゆつ
もりて河となる河つもりて大海となる塵つもりて山となる山かさな
りて須弥山となれり小事つもりて大事となる何に況や此の事は最
も大事なり、疏をつくられけるにも兩方の道理・文証をつくさるべ

かりけるか、又せんじ宣旨も両方を尋ね極めて分明ぶんみやうの証文しやうもんをかきのせて
いましめあるべかりけるか。

已いこんとう今当の経文きやうもんは仏すらやぶりがたし何いかに況や論師ろんし・人師にんし・国王こくおうの
威徳いとくをもつて・やぶるべしや、已いこんとう今当の経文きやうもんをば梵王ほんのう・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・
四天等してん・聽聞ちやうもんして各各の宮殿にかきとどめて・をはするなり、まこと
に已いこんとう今当の経文きやうもんを知らぬ人の有ある時は先の人人ひとびとの邪義じやぎは・ひろま
りて失とがなきやうにては・ありとも・此の経文きやうもんを・つよく立て退転たいてんせざ
る

こわ物出来しゆつたいしなば大事出来だいじしゆつたいすべし、いやしみて・或あるはのり・或あるは打ち
・或あるはながし・或あるは命をたたんほどに・梵王ほんのう・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してんをこり
あひて此この行者ぎやうじやのかたうどを・せんほどに・存外そんがいに天のせめ来りて
民もほろび国もやぶれんか、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやはいやしけれども守護しゆごす
る天てんこわし、例せば修羅しゆらが日月にちがつをのめば頭かぶ七分ななぶんにわる犬は師子ししを

ほゆれば・はらわたくさる、今予みるに日本国かくのごとし、又
此れを供養せん人人は法華経供養の功德あるべし、伝教大師釈し
て云く「讚めん者は福を安明に積み謗せん者は罪を無間に開かん」
等云云。

ひへのはんを辟支仏に供養せし人は宝明如来となり・つちのもち
ゐを仏に供養せしかば閻浮提の王となれり、設いこうをいたせども
・まことならぬ事を供養すれば大悪とは・なれども善とならず、
設い心をろかに・すこしきの物なれども・まことの人に供養すれば・
こう大なり、何に況や心ざしありて・まことの法を供養せん人人を
や。

其の上当世は世みだれて民の力よわし、いとまなき時なれども心
ざしのゆくところ山中の法華経へ・まうそうか・たかなををくらせ
給う福田によきたねを下させ給うか、なみだもとどまらず。

白米一俵・けいもひとたわら・こふのりひとかご・御つかいを・もつてわざわざをくられて候。

人にも二つの財たからあり一には衣二には食なり経いわに云く「有情うじょうは食に依よつて住す」と云云文の心は生ある者は衣と食によつて世にすむと申もうす心なり、魚は水にすむ水を宝とす木は地の上にをいて候・地ちを財たからとす、人は食によつて生あり食を財たからとす、いのちと申もうす物は一切いっさいの財たからの中に第一だいいちの財たからなり、遍満へんまん三千界無有直身命しんみょうととかれ

三千大千世界さんぜんだいせんせかいにみて候財たからも・いのちには・かへぬ事に候なり、されば・いのちは・ともしびのごとし食はあぶらのごとし、あぶらつくれ

ば・ともしびきへぬ食なければ・いのちたへぬ、一切いっさいのかみ・仏をうや
まいたてまつる。始の句には南無なむと申す文字を・をき候なり、南無なむと
申すは・いかなる事ぞと申すに・南無なむと申すは天竺てんじくのことばにて
候、漢土かんど・日本にほんには歸命きみょうと申す歸命きみょうと申すは我が命を仏に奉ると
申す事なり、我が身には分に随したがいて妻子さいし・眷属けんぞく・所領しりょう・金銀等きんぎんをもて
る人人ひとびともあり又財たからなき人人ひとびともあり、財たからあるも財たからなきも命と申す
財たからにすぎて候財たからは候はず、さればいにしへの聖人しょうにん・賢人けんじんと申すは
命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。

いわゆる雪山童子せつせんどうじと申せし人は身を鬼にまかせて八字をならへ
り、薬王菩薩やくおうぼさつと申せし人は臂ひじをやいて法華經ほけきょうに奉る、我が朝にも
聖徳太子しょうとくだいしと申せし人は手のかわをはいで法華經ほけきょうをかき奉り、天智
天皇てんのうと申せし国王こくおうは無名指むななむさしと申すゆびをたいて釈迦しゃか・仏ぶつに奉る、比れ
等は賢人けんじん・聖人しょうにんの事なれば我等われらは叶かないがたき事にて候。

ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏に
なり候なり、志ざしと申すはなに事ぞと委細にかんがへて候へば
観心の法門なり、観心の法門と申すはなに事ぞとたづね候へばただ
一つきて候衣を法華経に

まいらせ候が身のかわをわぐにて候ぞ、うへたるよに・これはなして
は・けうの命をつぐべき物もなきに・ただひとつ候これうを仏にまい
らせ候が身命を仏にまいらせ候にて候ぞ、これは薬王のひぢをやき
雪山童子の身を鬼にたびて候にも・あいをとらぬ功德にて候へば
聖人の御ためには事供やう凡夫のためには理くやう止観の第七の
観心の檀ばら蜜と申す法門なり、まことの・みちは世間の事法にて
候、金光明経には「若し深く世法を識らば即ち是れ仏法なり」とと
かれ涅槃経には「一切世間の外道の経書は皆是れ仏説にして外道の
説に非ず」と仰せられて候を妙楽大師は法華経の第六の巻の「一切
世間の治生産業は皆実相と相違背せず」との经文に引き合せて
心をあらわされて候には彼れ彼れの二経は深心の経経なれども
彼の経経はいまだ心あさくして法華経に及ばざれば世間の法を
仏法に依せてしらせて候、法華経はしからず・やがて世間の法が

仏法の全体と釈せられて候。

爾前の經の心心は、心より万法を生ず、譬へば心は大地のごとし
草木は万法のごとしと申す、法華經はしからず心すなはち大地・
大地即草木なり、爾前の經經の心は心のすむは月のごとし心のき
よきは花のごとし、法華經はしからず月こそ心よ花こそ心よと申す
法門なり。

此れをもつてしろしめせ、白米は白米にはあらずすなはち命なり。

美食を・をさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候いぬ、さ
れども凡夫なればかんでも忍びがたく熱をもふせぎがたし、食とも
し表 目が万里の一食 忍びがたく 思子孔が十旬 九飯堪ゆべきに
あらず、読經の音も絶えぬべし觀心の心をろそかなり。

しかるに・たまたまの御とぶらいただ事にはあらず、教主釈尊の

御すすめか將又過去宿習の御催か、
方方紙上に尽し難し、
恐恐
謹言。

かゆへに大國たいこくの王は民を・をやとし民は食を天とすとかかれたり、食には三の徳あり、一には命をつぎ二にはいろをまし三には力をそ
う、人に物をほどこせば我が身のたすけとなる、譬たとへば人のために火をともしば我がまへあきらかなるがごとし、悪をつくるものを・や
しなへば命をますゆへに氣いきながし、色をますゆへに眼まなこにひかりあり、力をますゆへに・あしはやく・てきく、かるがゆへに食をあたへたる人かへりて・いろもなく氣いきもゆわく力もなきほうをうるなり。

一切いっさい経きやうと申もうすは紙かみの上に文字もんじをのせたり、譬たとへば虚空こくうに星月せいげつのつらなり大地だいちに草木そうもくの生なぜるがごとし、この文字もんじは釈迦しゃか如来にょらいの氣いきにも候あやうなり、氣いきと申もうすは生氣せいきなり・この生氣せいきに二あり、一には九界。

四二七 一定証伏御書ごしよ

1598p

一定と証伏せられ候いしかば其その後の智人ちじんかずをしらず候へども
今に四百歳が間さで候なり、かるがゆへに今に日本にほんこくの寺寺・一万
余さんぜん三千余の社だ・四十九億九万四千八百二十八人の一切衆生いっさいしじゅう・皆みな
彼の三大師だの御弟子おんでしとなりて法華最第一ほつけさいだいいちの經文最第二最第三きょうもんを
とされて候なり、されども始とがは失なきやうにて候へども・つゆつもり
て大海たいかいとなり・ちりつもりて大山となる。

四二八

初穂御書

1599p

石給たまいて御はつをたるよし、法華經ほけきょうの御宝前ほうぜんへ申もうし上げて候かし
こまり申もうすよし、けさんに入らさせ給たまい候へ、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十月二十一日

日蓮にちれん

在御判

御所御返事ごへんじ

四二九

五大の許御書ごしこ

1599p

りげなくなに事もかくの事 不沙汰さたあるか す御尋たずねある
べし、経はある或は前後ぜんごし、或は落経あるにても候はず。 ものくるわしき
とはこれなり法門ほうもんもかしこきやうにて候へばわるかるべし。

追申

五大のもとへは三伊房も申して候・他所に於いて之を聞かしめ
將又事に依り子細有るべきか、伯耆阿闍梨事は但我祖なるやうな
るべし、設ひ件の人見參為と雖も其の義を存じて候へ。

四三〇

いちだいじごしよ
一 大事御書

1599p

あなかちに申させ給へ日蓮が身のうえの一大事なり、あなかし
こ・あなかしこ。

五月十三日

にちれん
日蓮在御判

四三二 身延相承書

〔総付囑書〕

1600p

日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付囑す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状を守るべきなり。

弘安五年壬午九月 日 日蓮在御判血脈の次第 日蓮日興

四三二 池上相承書

〔別付囑書〕

1600p

釈尊・五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家・出家どもの輩は非法の衆たるべき

なり。

弘安五年壬午十月十三日

武州池上

日蓮にちれん

在御判

先ず日蓮聖人の本意は法華本門に於ては曾つて異義有るべからざるの処、其の整足の弟子等忽に異趣を起して法門改変す況や末学等に於ては面面異轍を生ぜり、故に日興の門葉に於ては此の旨を守つて一同に興行せしむべきの状仍つて之を録す。

一、聖人・御在生の時弟子六人を定むる事、弘安五年十月 日 之を定

む

- | | | |
|---|----|-------|
| 一 | 日昭 | 弁阿闍梨 |
| 二 | 日朗 | 大國阿闍梨 |
| 三 | 日興 | 白蓮阿闍梨 |

四 日向 佐渡阿闍梨

五 日頂 伊予阿闍梨

六 日持 蓮華阿闍梨

此の六人の内五人と日興一人と和合せざる由緒条条の事。

一、五人・一同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、仍つて公

所に捧ぐる状に云く天台沙門と云云、又云く先師日蓮聖人天台の

余流を汲むと云云、又云く桓武聖代の古風を扇いで伝教大師の余

流を汲み法華宗を弘めんと欲す云云。

日興が云く、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり今日蓮聖人

の弘宣し給う法華は本門なり、此の旨具に状に載せ畢んぬ、此の

相違に依つて五人と日興と堅く以て義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、諸の神社は現当を祈らんが為なり仍つて

伊勢太神宮と二所と熊野と在在所所に参詣を企て精誠を致し二世

の所望を願う。

日興一人云く、謗法の国をば天神・地祇並びに其の国を守護するの善神捨離して留らず、故に悪鬼神其の国土に乱入して災難を致す云云、此の相違に依つて義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、如法経を勤行し之を書写し供養す仍つて在在所所に法華三昧又は一日経を行ず。

日興が云く、此くの如き行儀は是れ末法の修行に非ず、又謗法の代には行ずべからず、之に依つて日興と五人と堅く以て不和なり。

一、五人・一同に云く、聖人の法門は天台宗なり仍つて比叡山に於て出家授戒し畢んぬ。

日興が云く、彼の比叡山の戒は是は迹門なり像法所持の戒なり、日蓮聖人の受戒は法華本門の戒なり今末法所持の正戒なり、

之に依つて日興と五人と義絶し畢んぬ。

已前の条条大綱此くの如し此の外巨細具に注し難きなり。

一、甲斐の国・波木井郷・身延山の麓に聖人の御廟あり而るに日興彼の御廟に通ぜざる子細は彼の御廟の地頭南部六道入道法名日円は日興最初発心の弟子なり、此の因縁に依つて聖人・御在所九箇年の間歸依し奉る滅後其の年月義絶する条条の事。

釈迦如来を造立供養して本尊と為し奉るべし是一。

次に聖人・御在所九箇年の間・停止せらるる神社参詣其の年に之を始む二所三島に参詣を致せり是二。

次に一門の勧進と号して南部の郷内のフクシの塔を供養奉

加之有り是三。

次に一門仏事の助成と号して九品念佛の道場一宇之を造立し
莊嚴せり、甲斐国其の処なり是四。

已上四箇条の謗法を教訓するに日向之を許すと云云、此の義に
依つて去る其の年月、彼の波木井入道の子孫と永く以て師弟の義絶
し畢んぬ、よつて御廟に相通ぜざるなり。

一、聖人の御例に順じ日興六人の弟子を定むる事。

一日目

二日華

三日秀

聖人に常随給仕す

四日禅

五日仙

六日乘

聖人に値い奉らず。

已上の五人は詮ずるに聖人給仕の輩なり、一味和合して異義有るべからざるの旨・議定する所なり。

一、聖人・御影像の事。

或は五人と云い・或は在家と云い絵像・木像に図し奉る事
在在所所に其の数を知らず而るに面面不同なり。

爰に日興が云く、御影を図する所詮は後代に知らしめん為なり
是に付け非に付け有りの儘に図し奉る可きなり、之に依つて日興
門徒の在家・出家の輩聖人を見奉る仁等一同に評議して其の年月
図し奉る所なり、全体異らずと雖も大概麁相に之を図す仍つて裏に
書き付けを成すなり、但し彼の面面の図像一も相似ざる中に去る

正和

二年日順図絵の本有り、相似の分なけれども自余の像よりも少し面影有り、而る間後輩に彼此是非を弁せしめんが為裏書に不似と付け置く。

一、聖人御書の事 付けたり十一ヶ条

彼の五人・一同の義に云く、聖人・御作の御書釈は之無き者なり、縦令少少之有りと雖も、或は在家の人の為に仮字を以て仏法の因縁を粗之を示し、若は俗男・俗女の一毫の供養を捧ぐる消息の返札に施主分を書いて愚癡の者を引摺したまえり、而るに日興、聖人の御書と号して之を談じ之を読む、是れ先師の恥辱を顕す云々、故に諸方に散在する処の御筆を、或はスキカエシに成し、或は火に焼き畢んぬ。

此くの如く先師の跡を破滅する故に具に之を註して後代の亀鏡

と為すなり。

一、立正安国論一卷。

此れに兩本有り一本は文応元年の御作是れ最明寺殿宝光寺殿へ奏上の本なり、一本は弘安年中身延山に於て先本に文言を添えたもう、而して別の旨趣無し只建治の広本と云う。

一、開目抄一卷、今開して上下と為す。佐土国の御作しじょうきんごよりもと四条金吾頼基に賜う、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以てこれを校えず。

一、報恩抄一卷、今開して上下と為す。身延山に於て本師道善房聖靈の為に作り清澄寺に送る日向が許に在りと聞く、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、撰時抄一卷、今開して上中下と為す。

するが 駿河国西山由井 某に賜る、正本日興に上中二卷之れ在り
此中に面目 俄に開く事 下巻に於いては日昭が許に之在り。

一、下山抄一卷。

甲斐の国・下山郷の兵庫五郎光基の氏寺・平泉寺の住僧因幡房日
永追い出さるる時の述作なり、直に御自筆を以て遣さる、正本の在
所を知らず。

一、観心本尊抄一卷。

一、取要抄一卷。

一、四信五品抄一卷。「法門不審の条条申すに付いての御返事な
り仍つて彼の進状を奥に之を書く。」

已上の三卷は因幡国富城荘の本主今は常住下総国五郎入道
日常に賜わる、正本は彼の在所に在り。

一、本尊問答抄一卷。

一、唱題目抄一卷。

此の書最初の御書文応年中常途天台宗の義分を以て且く爾前・法華の相違を註し給う、仍つて文言義理共に爾なり。

一、御筆抄に法華本門の四字を加う、故に御書に之無しと雖も日興今義に従つて之を置く、先例無きに非ざるか。

一、本尊の事四箇条

一、五人一同に云く、本尊に於ては釈迦如来を崇め奉る可しとて既に立てたり、随つて弟子・檀那等の中にも造立供養の御書之れ在りと云云、而る間・盛に堂舎を造り・或は一躰を安置し・或は普賢・文殊を脇土とす、仍つて

聖人御筆の本尊に於ては彼の仏像の後面に懸け奉り又は堂舎の廊に之を捨て置く。

日興が云く、聖人御立の法門に於ては全く絵像・木像の仏・菩薩を以て本尊と為さず、唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊是なり。

一、上の如く一同に此の本尊を忽緒し奉るの間、或は曼荼羅なりと云つて死人を覆うて葬る輩も有り、或は又沽却する族も有り、此くの如く輕賤する間、多分は以て失せ畢んぬ。

日興が云く、此の御筆の御本尊は是れ一閻浮提に未だ流布せず正像末に未だ弘通せざる本尊なり、然れば則ち日興門徒の所持の輩に於ては左右無く子孫にも譲り弟子等にも付嘱すべからず、同一所に安置し奉り六人・一同に守護し奉る可し、是れ偏に広宣流布

の時本化国主御尋有らん期まで深く敬重し奉る可し。

一、日興弟子分の本尊に於ては一一皆書き付け奉る事。誠に凡筆を以て直に聖筆を贖す事最も其の恐れ有りと雖も。或は親には強盛の信心を以て之を賜うと雖も子孫等之を捨て、或は師には常随給仕の功に酬いて之を授与すと雖も弟子等之を捨つ、之に依つて。或は以て交易し。或は以て他の為に盗まる、此くの如きの類い其れ数多なり故に所賜の本主の交名を書き付くるは後代の高名の為なり。

一、御筆の本尊を以て形木に彫み不信の輩に授与して輕賤する由諸方に其の聞え有り所謂日向日頂日春等なり。

日興の弟子分に於ては在家。出家の中に。或は身命を捨て。或は疵を被り若は又在所を追放せられ一分信心の有る輩に忝くも書写し奉り之を授与する者なり。

本尊ほんぞん人数等にんずう又追放人等ついはう、頸切られ、死を致いたす人等。

一、本門寺を建つ可き在所の事。

五人一同に云く、彼の天台・伝教は存生に之を用いらるるの間・
直に寺塔を立てたもう、所謂大唐の天台山本朝の比叡山是なり
而るに彼の本門寺に於ては先師何の国何の所とも之を定め置かれ
ずと。

爰に日興云く、凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例
なり、然れば駿河国富士山は是れ日本第一の名山なり、最も此の
砌に於て本門寺を建立すべき由・奏聞し畢んぬ、仍つて広宣流布の
時至り国主此の法門を用いらるるの時は必ず富士山に立てらるべ
きなり。

一、王城の事。

右、王城に於ては殊に勝地を撰ぶ可きなり、就中仏法は王法と

本源ほんげん一たいいつなり居きよ処しよ随したがつて相あひ離はなるべからざるか、仍よつて南なん都と・七なな大だい寺じ。
北ほく京きやう比ひ叡えい山ざん・先せん蹤しやう之の同どうじ後ご代だい改かまらず、然しかれば駿するが河がの国くに富ふ士し山さんは
広こう博はくの地ちなり一いつには扶ふ桑そう国こくなり二にには四そ神しん相そう応おうの勝かつ地ちなり、尤もつとも
本ほん門もん寺じと王わう城じやうと一いつ所しよなるべき由ゆ且かつは往わう古この佳か例れいなり且かつは日に蓮ち大だい
聖しやう人にんの本ほん願がんの所しよなり。

一、日興集むる所の証文の事。

御書ごしよの中に引用せらるる若もしは経論書きやうろんしやく積しやくの文ぶん若もしは内外典籍ないげてんせきでん傳でんの文ぶん
等ある、或あるは大綱随義たいこうずいぎてんよう転用てんようし、或あるは粗意ほほを取とつて述用じゆようし給たまえり、之これに
依よつて日興にちきやう散引さんきんの諸しよ文ぶん典てん籍じやく等どうを集あめて次第しだいに証しやう拠こを勘かん校こうす、其その
功い未まだ終しまらず且しほらく集あむる所しよなり。

一 内外論ないげの要文やうぶん上下じやうげ二卷に開目抄かいもくしやうの意いに依よつて之これを撰せんぶ。

一 本・迹弘経要文上 中 下三卷撰時抄の意に依つて之を撰ぶ。
一 漢土の天台・妙楽邪法を対治して正法を弘通する証文一卷。
一 日本にほんの伝教大師南都の邪宗を破失して法華ほっけの正法しょうぼうを弘通ぐつうする証文しょうもん一卷。

已上七卷之を集めて未だ再治せず。

一、奏聞状の事。

- 一 先師聖人文永五年申状一通。 一同八年申状一通。
一 日興其の年より申状一通。
一 漢土の仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。
一 本朝仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。
一 三時弘経の次第並びに本門寺を建つ可き事。
一 先師の書釈要文一通。

一、追加八箇条。

近年きんねん以来いらい日興にっこう所立しよりゆうの義ぎを盗ぬすみ取り己おのが義ぎと為なす輩やから出来しゅつする
由緒ゆいぢよ条条じょうじょうの事こと。

一、寂仙房にじしやうぼう日澄にじやう始はじめて盗ぬすみ取とつて己おのが義ぎと為なす彼かの日澄にじやうは民部みんぶ
阿闍梨あじゃりの弟子でしなり、仍よつて甲斐国かひのくに下山郷しもやまごうの地頭じとう左衛門さえもん四郎しろう光長みんちやうは
聖人しようにんの御弟子おんでしなり御遷化おんせんげの後のち民部みんぶ阿闍梨あじゃりを師しと為なす僧そうなり、而しかるに
去いぬる永仁年中えいにちゆう・新堂しんどうを

造立し一躰仏を安置するの刻み、日興が許に來臨して所立の義を難ず、聞き已つて自義と為し候処に正安二年民部阿闍梨彼の新堂並びに一躰仏を開眼供養す、爰に日澄本師民部阿闍梨と永く義絶せしめ日興に歸伏して弟子と為る、此の仁盜み取つて自義と為すと雖も後改悔歸伏の者なり、

一、去る永仁年中越後国に摩訶一と云う者有り天台宗の学匠なり日興が義を盜み取つて盛んに越後国に弘通するの由之を聞く。

一、去る正安年中以来浄法房天目と云う者有り聖人に値い奉る日興が義を盜み取り鎌倉に於て之を弘通す、又祖師の添加を蔑如す。

一、弁阿闍梨の弟子少輔房日高去る嘉元年中以来日興が義を盜み取つて下総の国に於て盛んに弘通す。一、伊予阿闍梨の下総国真間の堂は一躰仏なり、而るに去る年月日興が義を盜み取

つて四脇士きよつじを副たづなう彼の菩薩ぼさつの像は宝冠形なり。

一、民部阿闍梨みんぶあじやりも同く四脇士きよつじを造つくり副たづなう、彼の菩薩ぼさつ像は比丘形びくにして納衣のうえを著じやくす、又近年きんねん以来諸神しよに詣よずる事を留とどむるの由聞きくなり。

一、甲斐国かいのくにに肥前房日伝いぜんぼうにつでんと云う者有あり寂日房向じやくにぼうかう背せいの弟子でしなり日興にっこうが義ぎを盗ぬすみ取とつて甲斐国かいのくにに於おいて盛さかんに此この義ぎを弘通くわつうす是これ又四脇士きよつじを造つくり副たづなう彼の菩薩ぼさつの像は身皆みな金色剃髮きんいろしほの比丘形びくなり、又神詣かみよを留とどむるの由之これを聞きく。

一、諸方しよほうに聖人しよじゆんの御書ごしよ之これを讀よむ由よしの事こと。此この書札しよさつの抄別状しよべつじやう有あり之これを見みるべし。

夫れおもんみればは諸仏懸遠しよぶつけんえんの難がたきことは譬たとえを曇華どんげに仮かり妙法みょうほう値遇ちぐうの
 縁うきぎは比るいを浮木うきぎに類るいす、塵数じんじゆ三五さんごの施化せけに猶漏なおもれて正像しょうぞう二千にせんの弘經くきやう
 も稍過ややすぎ已やんぬ、鬪諍たうじやうけんてい堅固けんこの今は乘戒じやうかい俱ともに緩ゆるうして人ひとには弊惡へいあくの
 機きのみ多おほし何なにの依憑えひようしきこと有あらんや、設たい内外ないげ兼包けんぱうの智ちは三祇さんぎに
 積たみ大小だいしやうくんじゆう薰習くんじゆうの行ぎやうは百劫ひやくけつを満みつとも時ときと機きとを弁わぜず本ほんと迹せきとに
 迷倒めいとうせば其それも亦また信しんじ難なんからん。
 爰こゝに先師せんし聖人しやうにん親まり大聖だいせいの付つを受けて末法まっぽうの主な為なりいと雖いえども、早いく
 無常むじやうの相さうを表あらわして円寂えんじやくに歸入きにゆうするの刻ごじ五字ごじを紹繼しやうけいするが為ために六人
 の遺弟ゆいていを定さだめたもう。

日昭にっしやうと日朗にっらうと日興にっくわうと日向にっけうと日頂にっていと日持にっぢと已上いじやう六人りくじんなり。

五人武家ぶげに捧ささぐる状じやうに云いく未いまだ公家こうけに奏そうせず。

天台てんだいの沙門しゃもん日昭にっしょう謹こんんで言ごん上じやうす。

先師せんし日蓮にちれんは忝かたじけなくも法華ほっけの行者ぎやうじやと為もつて専もつら仏果ぶつがの直道じきどうを顕あらわし

天台てんだいの余流よりゅうを酌しやくみ地慮ぢりよの研精けんしやうを尽つくすと云い々。

又また云いく、日昭にっしょう不肖ふしやうの身み為なりと雖いえども兵火へいこ永息えいそくの為ため副将ふくしやう安全あんぜんの為ために

法華ほっけの道場どうじやうを構かまえ、長日ちやうじつの勤行ごんぎやうを致いたし奉たてまつる、已すでに冥冥めいめいの志し有あり

豈あに昭昭しやうしやうの感無かむからんや詮せんを取る。

天台てんだい沙門しゃもん日朗にっらう謹こんんで言ごん上じやうす。

先師せんし日蓮にちれんは如來にょらいの本意ほんいに任まかせ先判せんきやうの権經ごんきやうを閣さしおいて後判ごきやうの実教じつきやうを

弘通くわうつうせしむるに、最要さいま未いまだ上聞じやうもんに達たつせず愁鬱しゆううつを懷おもいて空むなしく多年としな

の星霜せいそうを送おくる玉たまを含こみて寂しやくに入るが如ごとく逝去しやくしせしめ畢おわんぬ、然しかして

日朗にっらう忝かたじけなくも彼かたの一乘いちじやう妙典みやうてんを相伝そうてんして鎮とこしなえに国家こくがを祈たてまつり奉たてまつる詮せんを取る。

天台てんだい法華宗ほっけしゆづうの沙門しゃもん日向にっけい頂てい謹こんんで言ごん上じやうす。

桓武聖代の古風を扇ぎ伝教大師の余流を汲み立正安国論に准じて法華一乘を崇められんことを請うの状。右謹んで旧規を檢えたるに祖師・伝教大師は延暦年中に始めて叡山に登り法華宗を弘通したもう云云。

又云く法華の道場に擬して天長地久を祈り今に断絶すること無し註を取る。

日興公家に奏し武家に訴えて云く。

日蓮聖人は忝くも上行菩薩の再誕にして本門弘經の大権なり、

所謂大覺世尊未來の時機を鑒みたまい世を三時に分ち法を四依に

付して以来、正法千年の内には迦葉・阿難等の聖者先ず小を弘めて

大を略す竜樹・天親等の論師は次に小を破りて大を立つ、像法千年

の間異域には則ち陳隋両主の明時に智者は十師の邪義を破る、

本朝には亦桓武天皇の聖代に伝教は六宗の僻論を改む、今末法

に入つては上行出世の境本門流布の時なり正像已に過ぎぬ
何ぞ爾前・迹門を以て強いて御帰依有る可けんや、就中天台・
伝教は像法の時に當つて演説し日蓮聖人は末法の代を迎えて恢弘
す、彼は薬王の後身此れは上行の再誕なり經文に載する所・解釈
炳焉たる者なり。

凡そ一代教籍の濫觴は法華の中道を解かんが為三国伝持の流布
は盍ぞ真実の本門を先とせざらんや、若し瓦礫を費んで珠玉を棄て
燭影を捧げて日光を暁せば只風俗の迷妄に趁いて世尊の化導を
謗ずるに似るか、華の中に優曇有り木の中に梅檀有り凡慮覃び難し
併ながら冥鑑に任す云云、本と迹と既に水火を隔て時と機と亦
天地の如し、何ぞ地涌の菩薩を指して苟も天台の末弟と称せんや。
次に祈国の段亦以て不審なり、所以は何ん文永免許の古先師素
意の分既に以て顕れ畢んぬ、何ぞ僭聖道門の怨敵に交り坐して

とこしなえてんちようちぎゆう
鎮に天長地久の御願を祈らんや、況や三災さんさいいよいよ弥起り一分も徴しるし無
しただ啻そしに祖師の本懐ほんかいに違いする

のみにあらず還つて己身の面目を失うの謂いか。

又五人一同に云く凡そ倭漢兩朝の章疏を披いて本・迹二門の元意を探るに判教は玄文に尽し弘通は残る所無し、何ぞ天台一宗の外に胸臆の異義を構えんや、拙いかな尊高の台嶺を徧して辺鄙の富山を崇み、明静の止觀を闇いて仮字の消息を執する、誠に是れ愚癡を一身に招き耻辱を先師に及ぼす者か、僻案の至りなり甚だ以て然るべからず、若し聖人の製作と号し後代に伝えんと欲せば宜く卑賤の倭言を改め漢字を用ゆべし云云。

日興が云く、夫れ竜樹・天親は即ち四依の大士にして円頓一実の中道を申ぶと雖も而も権を以て面と為し実を隠して裏に用ゆ、天台・伝教は亦五品の行位にして専ら本・迹二門の不同を分ち而も迹を弘め衆を救い本を残して末に譲る、内鑒は然りと雖も外は時宜に適うかの故に、或は知らざるの相を示し、或は知つて而も未だ

闡揚せず、然るに今本・迹 両經 共に天台の弘通と称するの条は
經文に違背し解釈は拠を失う、所以は宝塔三箇の鳳詔に驚き
勸持二万の勅答を挙げて此土の弘經を申ぶと雖も迹化の菩薩に
許さず、過八恒沙の競望を止めて不須 汝等護持此經と示し
地涌千界の菩薩を召して如来・一切所有の法を授く、迹化他方の
極位すら尚劫数の塵点に暗し止善男子の金言に豈幽微の実本を
許さんや、本門五字の肝要は上行菩薩の付囑なり誰か胸臆なりと
称せんや委細文の如し經を。

次に天台大師經文を消したもうに、「如来之を止むるに凡そ三
義有り汝等各各自ら己が住有り若し此の土に住すれば彼の利益を
廃せん、又他方は此土に結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず
巨益無からん、又若し之を許さば則ち下を召すことを得ず下若し
来らずんば迹も破することを得ず遠も顯すことを得ず是を三義と

な
為す、如来之を止めて下方を召して来らずに亦三義有り、是れ我が
でしまさ
弟子心に我が法を弘むべし、縁深厚なるを以て能く此土に遍して
やく ふんじん
益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益し、又開近顕遠する
かくのゆえ
ことを得、是の故に彼を止めて下を召すなり、又云く「爾前仏告
じょうぎょう
上行の下是れ第三に結要付嘱」と云々、伝教大師は本門を慕いて
「しよ
正像稍過ぎ已つ

て末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり」文、
又云く「代を語れば則ち像の終り末の初め地を原ぬれば則ち唐の
東・羯の西・人を尋ぬれば則ち五濁の生・鬪諍の時・経に云く
猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」云云。

加之 大論の中に「法華は是れ秘密なれば諸の菩薩に付す」と
宣ぶ、今の下文に下方を召すが如く尚本眷属を待つ驗けし余は
未だ堪えず、輔正記に云く「付嘱を明せば此の経をば唯下方涌出の
菩薩に付す、何を以ての故に爾る、法是れ久成の法なるに由るが
故に久成の人に付す」論釈 一に非ず繁を恐れて之を略す。

観音・薬王は既に迹化に居す南岳・天台誰人の後身ぞや、正像
過ぎて二千年未だ上行の出現を聞かず末法も亦二百余廻なれば
本門流布の時節なり何ぞ一部の総釈を以て猥に三時の弘経を難ぜ
んや、次に日本と云うは惣名なり亦本朝を扶桑国と云う富士は郡

の号すなわ即ち大日蓮華山だいびやくれんげさんと称しょうす、爰こゝに知しんぬ先師せんし自然じねんの名号なごうと
妙法蓮華の経題きようだいと山州共そうちゆうに相応そうおうす弘通くつう此の地ちに在あり、遠いく異朝いちちゆうの
天台山てんだいを訪たえば台星たいせいの所居しやうきなり大師だいし・彼の深洞しんどうをトして迹門しやくもんを
建立こんりゆうす、近ちく我が国くにの大日山だいにちを尋たずぬれば日天にってんの能住のうじゆうなり聖人しやうにん・此
の高峰こうほうを撰せんんで本門ほんもんを弘ひろめんと欲ほす、閻浮えんぶ第一だいいちの富山ふみやまなればなり
五人争いでか辺鄙へんびと下くださんや。

次に上行菩薩じやうぎやうぼさつは本極法身微妙深遠ほんしんみみやうしんえんにして寂光じゃくこうに居こすと雖いえども未了みりやう
の者の為ために事を以もつて理あを顕あらわし地ちより涌出ゆじゆつしたまいて以来いらい付つを本門ほんもんに
承うけ時ときを末法まつぽうに待まちち生せいを我朝わがに降くだりし訓しんを仮字かなじに示しす、祖師そしの鑿機さくき
失なくくんば遺弟ゆいていの改転かいてん定ていめて恐おそれ有あらんか、此等これらの所勸よに依よつて浅
智ちゆうしんの仰信かうしんを致いたすのみ、抑そも梵漢ふんかんの両字りやうじと扶桑ふそうの一点いっとは時ときに依より機
に随したがつて互たがいに優劣ゆうれつ無なしと雖いえども倩つらつらじやうしやう上聖じやうせい被下ぜんきよの善巧ぜんきやうを思おもうに殆たんど
天竺てんじく震旦しんたんの方便ほうべんに超こえたり、何なんぞ倭国わこくの風俗ふうぶくを蔑如こして必かなずしも

漢家の水露を崇重せん、但し西天の仏法東漸の時既に梵音を翻じて倭漢に伝うるが如く本朝の聖語も広宣の日は亦仮字を訳して梵震に通ず可し、遠沾の翻譯は諍論に及ばず雅意の改変は独り悲哀を懐く者な

り。

又五人一同に云く、先師所持の釈尊は忝くも弘長配流の昔

これを刻み、弘安歸寂の日も隨身せり何ぞ輒く言うに及ばんや云云。

日興が云く、諸仏の莊嚴同じと雖も印契に依つて異を弁ず如来の

本・迹は測り難し眷属を以て之を知る、所以に小乘三蔵の教主は

迦葉・阿難を脇士と為し伽耶始成の迹仏は普賢・文殊左右に在り、

此の外の一躰の形像豈頭陀の応身に非ずや、凡そ円頓の学者は広

く大綱を存して綱目を事とせず倩聖人出世の本懐を尋ぬれば

源と権実已過

の化導を改め上行所伝の乗戒を弘めんが為なり、図する所の

本尊は亦正像二千の間・一閻浮提の内未曾有の大漫荼羅なり、今

に当つては迹化の教主既に益無し況や 婆和の拙仏をや、次に

隨身所持の俗難は只是れ継子

一旦の寵愛月を待つ片時の螢光か、執する者尚強いて歸依を致さんと欲せば須らく四菩薩を加うべし敢て一仏を用ゆること勿れ云云。
又五人一同に云く、富士の立義の体為らく畜に法門の異類に擬するのみに匪ず剩え神無の別途を構う、既に以て道を失う誰人か之を信ぜんや。

日興が云く、我が朝は是れ神明和光の塵仏陀利生の境なり、然りと雖も今末法に入つて二百余年御帰依の法は爾前・迹門なり、誹謗の国を棄捨するの条は経論の明文にして先師の勸うる所なり、何ぞ善神聖人の誓願に背き新に悪鬼乱入の社壇に詣でんや、但し本門流宣の代、垂迹還住の時は尤も上下を撰んで鎮守を定む可し云云。

又五人一同に云く、如法・一日の両経は共に以て法華の真文なり、書写・読誦に於ても相違有るべからず云云。日興が云く、如

法・一日の両経は法華の真文為りと雖も正像転時の往古・平等
撰受の修行なり、今末法の代を迎えて折伏の相を論ずれば一部
読誦を専とせず但五字の題目を唱え三類の強敵を受くと雖も諸師
の邪義を責む可き者か、此れ則ち勸持不輕の明文上行弘通の
現証なり、何ぞ必ずしも折伏の時・撰受の行を修すべけんや、
但し四悉の廢立・二門の取捨宜く時機を守るべし敢て偏執するこ
と勿れ云云。

又五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破を論ず云云。

日興が云く、夫れ波羅提木叉の用否行住四威儀の所作平嶮の
時機に随い持破に凡聖有り、爾前・迹門の尸羅を論ずれば一向に制
禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。

但し本門の戒躰委細の経釈面を以て決す可し云云。

身延の群徒猥に疑難して云く、富士の重科は専ら当所の離散に

有り、縦い地頭非例を致すとも先師の遺跡を忍ぶ可し既に御墓に参詣せず争か向背の過罪を遁れんや云云。

日興が云く、此の段顛倒の至極なり言語に及ばずと雖も未聞の

族に仰せて毒鼓の縁を結ばん、夫れ身延興隆の元由は聖人・御座

の尊貴に依り地頭発心の根源は日興教化の力用に非ずや、然るを

今下種結縁の最初を忘れて劣謂勝見の僻案を起し師弟有無の新義

を構え理非顯然の諍論を致す、誠に是れ葉を取つて其の根を乾か

し流を酌んで未だ源を知らざる故か、何に況や慈覚・智証は即

伝教入室の付弟・叡山住持の祖匠なり、若宮八幡は亦百王鎮護の

大神日域朝廷の本主なり、然りと雖も明神は仏前に於て謗国捨離

の願を立て先聖は慈覚を指して本師違背の仁と称す、若し御廟を

守るを正と為さば円仁所破の段頗る高祖の誤謬なり、非例を

致して過無くんば其の国・棄捨の誓い都べて垂迹の不覚か、料り知

んぬあつきげどう悪鬼外道の災なを作し宗廟社稷そつびようしゃしよくの処ところを辞す善神聖人の居は
即ちすなわ正直正法の頂いただきなり、抑そもそも身延一沢なんじの余流未だいま法水の清濁を
分たずわか強しいて御廟ごびようの参否を論ぜば汝等まさ將まさに碎身くだの舍利しゃりを信ぜんと
す何ぞなん法華ほっけの持者じしやと号せんや、迷暗まよい尤もつと甚はなはだし之しに准じゆんじて知る
可べし伝え聞てんく天台大師てんだいだいしに三千余さんぜんの弟子でし有り章安朗然しやうあんらうぜんとして独ひとり
之これを達たつす、伝でん教大師きやうだいしは三千侶さんぜんの衆徒しゆうとを安やすく義真ぎしん以後いごは其それ無なきが
如ごとし、今日けふ蓮聖人れんじやうじんは万年まんねん救護きうごの為ために

六人の上首を定む然りと雖も法門既に二途に分れ門徒亦一准ならず、宿習の至り正師に遇うと雖も伝持の人自他弁じ難し、能く是の法を聴く者・此の人亦復難しと此の言若し墮ちなば将来悲む可し、經文と解釈と宛かも符契の如し迹化の悲歎猶此くの如し本門の墜墮寧ろ愁えざらんや、案立若し先師に違わば一身の短慮もつと尤も恐れ有り言う所亦仏意に叶わば五人の謬義甚だ憂う可し取捨正見に任す思惟して宜しく解すべし云云。

此の外支流異義を構え詔曲稍数多なり、其の中に天目の云く、已前の六人の談は皆以て嘲哂すべきの義なり但し富山宜しと雖も亦過失有り迹門を破し乍ら方便品を読むこと既に自語相違せり信受すべきに足らず、若し所破の為と云わば弥陀經をも誦すべけんや云云。

日興が云く、聖人の炳誠の如くんば沙汰の限りに非ずと雖も

慢幢まんどうを倒たさんが為ために粗ほぼ一端いつぱんを示しさん、先まず本ほん・迹せういの相違なんじたしかは汝なんじ慥たしかに
自おこ発はつするや去いぬる
二年ににねんの比ひ天目てんもく当所とうじよに來きつて問答もんとうを遂とぐるの
刻こくみ日興にっこうが立義りつきぎ・一証いつしやう伏おし畢おんぬ、若もし正見せいけんを存ぞんせば尤もつとも歸敬きけいを
成なすべきの処ところに還かえつて方便ほうべん読誦どくじゆの難なんを致いたす誠まことに是これ無慚むざん無愧むきの
甚はなはだしきなり、夫それ狂言綺語きやうぎごの歌仙かせんを取とつて自作じやくに備そなうる卿相けいしやうす
ら尚な短才たんだいの耻辱ちじよくと為なす、況なほや終窮究竟しゆくよくきやうの本門ほんもんを盗ぬすみ己おのが徳とくと称しやうす
る逆人争いかにてむげんか無間むげんの大苦だいこを免まぬかれんや、照覽冥しやうらんに在あり慎つしまずんばある
べからず。

次つぎに方便品ほうべんの疑難うたがひなんに至いたつては汝なんじ未いまだ法門ほうもんの立破りつぱを弁べんぜず恣ほしいに
祖師そしの添加てんかを蔑如べつじよす重科じゆうか一いつに非あらず罪業上ざいごうじやうの如ごとし、若もし知しらんと
欲ほつせば以前いぜんの如ごとく富山ふさんに詣もつて尤もつとも習学しゆうがくの為ため宮仕みやつかえを致いたす可べきなり、
抑おさめ彼等かれらが為ために教訓きやうくんするに非あらず正見せいけんに任まかせて二義にぎを立たつ、一いつには
所破しよぱの為ため二にには文証もんしやうを借かるなり、初まに所破しよぱの為ためとは純一じゆんいつ無雜むざつの

序分には且く権乗の得果を挙げ廢迹顯本の寿量には猶伽耶の近情
を明す、此れを以て之を思うに方便稱読の元意は只是れ牒破の一
段なり、若し所破の為と云わば念仏をも申す可きか等の愚難は誠
に四重の興廢に迷い未だ三時の弘經を知らず重疊の狂難嗚呼の
至極なり、夫れ諸宗破失の基は天台・伝教の助言にして全く先聖
の正意に非ず何ぞ所破の為に読ま

ざるべけんや、きようじやく経釈めいきようすでの明鏡にちがつ既に日月ごとの如し天目あんじゃやうんの暗者おほ邪雲おほに覆おほわ
るる故あらわなり、次これらに迹じんぎの文証しよつにんを借りて本じつそうの実相おほを
顕あらわすなり、此等これらの深義じんぎは聖人しよつにんの高意おほにして浅智しよつぎの覃あぶ所あらに非あらず正機しよつぎ
には將まさに之これを伝つべし云いふ。

嘉曆三戊辰年七月草案す

日順

四三五 日興遺誠置文

1617p

そ夫おもんれ以まみれば末法まつぽう弘通くわつうの恵日こくあくは極惡くわく謗法ぼうぼうの闇くらを照くし久遠くおん寿量じゆりようの
みようふう妙風がは伽耶が始成しじようの権門こんもんを吹ふき払はう、於あ戲あ仏法ぶつぼうに値あうこと希まれにして
たとえ喻どんげを曇華はなしの萼はなしに仮かり類うきぎを浮木うきぎの穴あなに比ひせん、尚なおも以もて足たらざる者もの
こゝか、爰われに我等われら宿縁しゆくえん深厚じんこうなるに依よつて幸よに此こゝの經きやうに遇たて奉まつることを

得、随したがつて後学ための為じょうもくに条目ひったんを筆端ひつたんに染ひとえむる事、偏こうせんに広宣流布るの金言きんげんを仰あおがなが為なりなり。

一、富士りつぎの立義いささか 聊せんしも先師せんしの御弘通ぐつうに違いせざる事。

一、五人りつぎの立義いささか 一先師せんしの御弘通ぐつうに違いする事。

一、御書ごしょ何いすれれも偽書いつらに擬なし当門流きぼうを毀謗きぼうせん者これあ之有べる可べし、若もし加あくりよしゆつたい様の悪侶しんじん出来べせば親近しんじんす可べからざる事。

一、偽書ごしょを造ごしょつて御書ごしょと号ほんしやくし本迹いっち一致しゆぎの修行いたを致しす者は師子身しし中しの虫いんむと心得うけ可べき事。

一、謗法ほうほうを呵責かしゃくせずして遊戯ゆげ雑談ぞうだんの化儀けぎ並なに外書歌道げんかだうを好べむ可べからざる事。

一、檀那だんなの社参物詣しゃさんぶつぎを禁べず可べし、何いかに況そや其その器きにして一見いっけんと称しょうし

て謗法ほうほうを致あせる悪鬼あくき乱入らんにゅうの寺社てらに詣べず可べけんや、返かへす返かへすも

口惜くちおししき次第しだいなり、是これ全ぜんく己義こぎに非あらず經文御抄等きやうもんに任まかす云

云。

一、器用の弟子でしに於おいては師匠ししやうの諸事しよじを許ゆるしお閣おき御抄ごしょう以下の諸しよ聖教しやうきやうを教学がくじやうす可べき事。

一、学問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事。

一、予が後代の徒衆等権実を弁えざる間は父母・師匠の恩を振り捨て出離証道の為に本寺に詣で学文す可き事。

一、義道の落居無くして天台の学文す可からざる事。

一、当門流に於ては御書を心肝に染め極理を師伝して若し間有らば

台家を聞く可き事。

一、論議講説等を好み自余を交ゆ可からざる事。

一、未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。

一、身軽法重の行者に於ては下劣の法師為りと雖も当如敬仏の道理に任せて信敬を致す可き事。

一、弘通の法師に於ては下輩為りと雖も老僧の思を為す可き事。

一、下劣の者為りと雖も我より智勝れたる者をば仰いで師匠とす

可^べき事。

一、時の貫首^な為^なりと雖^{いえど}も仏法^{ぶつぼう}に相違^{そうい}して己義^{こぎ}を構^{かま}えば之^{これ}を用^うう可^べからざる事。

一、衆議^な為^なりと雖^{いえど}も仏法^{ぶつぼう}に相違^{そうい}有^らば貫首^{これ}之^{これ}を推^{くだく}く可^べき事。

一、衣^いの墨^{ぼく}黒^くくすべからざる事。

一、直綴^{じきとつ}を着^きす可^べからざる事。

一、謗法^{ほうぼう}と同座^{どうざ}す可^べからず与^よ同罪^{どうざい}を恐^{おそ}る可^べき事。

一、謗法^{ほうぼう}の供養^{くよう}を請^うく可^べからざる事。

一、刀杖^{とうじょう}等^らに於^おては仏法^{ぶつぼう}守護^{しゆご}の為^{ため}に之^{これ}を許^{ゆる}す。

但^{ただ}し出仕^{だし}の時節^{じせつ}は帯^{おび}す可^べからざるか、若^もし其^それ大衆^{たいしゅう}等^らに於^おては之^{これ}を許^{ゆる}す可^べきかの事。

一、若輩^な為^なりと雖^{いえど}も高位^{こうい}の檀那^{だんな}自^{みづか}り末座^{まつざ}

に居^ゐる可^べからざる事

一、先師せんしの如ごとく予げが化儀けぎも聖僧せいそう為なる可べし、但ただし時の貫首ある或しゅうは習学がくの仁おいに於おては設たといいつたん

一、巧ぎょう於お難問なんもん答どうの行者ぎょうじやに於おては先師せんしの如ごとく賞しょう翫がんす可べき事こと。

右の条目じょうもく大略た此ことの如ごとし、万年まんねん救護くごの為ために二十六箇条にじゅうろくにんじょうを置おく後のち代あて疑惑ぎわくを生なずる事こと勿なれ、此この内うち一箇条いちじょうに於おても犯おす者は日興にっこうが末流まつりゅうに有ある可べからず、仍よつて定さむる所ところの条条じょうじょう件くだんの如ごとし。

元弘三年癸酉正月十三日

日興 判

全文字数 〃 一一二二万〇八三三文字